旅人提督の世界征服までの道程

ハードオン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です。（ホモじゃないので本当）

至らないところが多いので、大目に見て、どうぞ。

主人公の頭がおかしいこと以外はいたって普通のブラック鎮守府立て直しものです。

ギャグｓｓであることを理解した上でお楽しみ下さい。

目次

1話　プロローグ　1
2話　ながいたびが　はじまる　7
3話　KARATE　12
4話　旅人無双　17
5話　ジョブチェンジ　23
6話　働きたくない　30
7話　本格的なインドカレーのお店は美味しいしサービスもいい　35
8話　現代社会の闇　40
9話　オリョクルはいやでち　46
10話　石油のアルカナ　53
11話　もふ　62
12話　涙色のビーナス　70
13話　どう思う？　82
14話　今明かされる衝撃の真実ゥ！　89
15話　バキボキ☆メモリアル　94
16話　マイ・フェア・レディ　101
17話　マスコミ　105
18話　オーガニック・クリスマス　112
19話　黒井鎮守府の愉快な一日　121
20話　星屑ロンリネス　129
21話　おせちもいいけどカレーもね　136
22話　海域開放大作戦　前編　142
23話　海域開放大作戦　後編　151

２４話　祝！大勝利！　157
２５話　事後スパーク　163
２６話　建造の涙　170
２７話　サメ殴りセンター　177
２８話　ぐるぐるニャー　187
２９話　音成鎮守府　193
３０話　なお、このテープは機密保持の為、１０秒後に爆発する　前編　201
３１話　なお、このテープは機密保持の為、１０秒後に爆発する　後編　207
３２話　黒井鎮守府の痛快な一日　211
３３話　神域の女　219
３４話　孤独の叢雲　225
３５話　南方海域攻略作戦　前編　234
３６話　南方海域攻略作戦　中編　239
３７話　南方海域攻略作戦　後編　247
３８話　南方海域攻略作戦　裏編　256
３９話　おい、酒飲まねぇか　263
４０話　発情期の始まり　271
４１話　スカートは捲られる為に存在していると言っても過言ではない　276
４２話　誰が為に戦う　283
４３話　ハイル・ブロッケン　288
４４話　見敵必殺　294
４５話　黒井鎮守府へようこそ　301

46話　パルパルパルパル妬まスィ　308
47話　演習、黒井対音成　前編　313
48話　演習、黒井対音成　後編　320
49話　湯煙伝説　327
50話　二つの思惑　335
51話　キス島侵攻作戦　前編　341
52話　キス島侵攻作戦　中編　347
53話　キス島侵攻作戦　後編　352
54話　旅人の飲むコーヒーは、甘い　358
55話　あなたは毒に強い免疫がある　364
56話　相反する最大戦力　371
57話　たっぽいたっぽい　376
58話　おねショタ疾風伝　天　384
59話　おねショタ疾風伝　地　390
60話　おねショタ疾風伝　人　396
61話　黒井鎮守府の奇怪な一日　402
62話　侵入者　前編　410
63話　侵入者　後編　416
64話　ホットライン鎮守府　423
65話　新人研修　427
66話　KanPixel　433
67話　オーバード建造　441
68話　海の旅人ン　448
69話　近海掃討作戦　会議編　456
70話　近海掃討作戦　前編　462

71話　近海掃討作戦　中編　467
72話　近海掃討作戦　後編　473
73話　修羅場の修羅　480
74話　ハラスメントの帝王　甲　487
75話　ハラスメントの帝王　乙　495
76話　ハラスメントの帝王　丙　502
77話　ハラスメントの帝王　丁　510
78話　ハラスメントの帝王　戊　520
79話　ハラスメントの帝王　己　525
80話　ハラスメントの帝王　庚　534
81話　鉄血のカンムス（ハラスメントの帝王　辛）　541
82話　ハラスメントの帝王　壬　548
83話　ハラスメントの帝王　癸　554
84話　音成インザ旅人　563
85話　音成オンザ旅人　569
86話　音成オブザ旅人　575
87話　イキの良い海パン少女　前編　582
88話　イキのいい海パン少女　後編　588
89話　海での一幕　593
90話　ノムリッシュ旅人　600
91話　無職教官　607
92話　可愛い子は攫ってこよう　613
93話　雨と風　618
94話　白露型はガチ（でヤバい）　625
95話　いあ！いあ！黒井鎮守府!!　633

96話　病みにのまれよ！ ―― 639
97話　黒井鎮守府ふたぐん！ ―― 646
98話　のけものフレンズ ―― 653
99話　開け、冥府の門 ―― 661
100話　ケッコンカッコカリ ―― 666
101話　公開処刑 ―― 675
102話　黒井鎮守府では、常識にとらわれてはいけないのですね！ ―― 681
103話　レッツパーリー ―― 687
104話　黒井鎮守府夏祭り　一日目 ―― 693
105話　黒井鎮守府夏祭り　二日目 ―― 700
106話　深海棲艦が攻めてきた！　前編 ―― 709
107話　深海棲艦が攻めてきた！　中編 ―― 715
108話　深海棲艦が攻めてきた！　後編 ―― 722
109話　さてはギャングだなオメー ―― 728
110話　深海棲艦が出やがった!! ―― 733
111話　い・ま・に！ ―― 738
112話　裏社会 ―― 745
113話　イタリアンカチコミ ―― 750
114話　普通の、少し臆病な提督の日記 ―― 755
115話　一択の選択肢 ―― 763
116話　その頃の黒井鎮守府の楽しいお留守番 ―― 768
117話　旅人の帰還 ―― 776
118話　イタリアのチーズはガチ ―― 783
119話　旅人ンラプソディー ―― 790

120話　世界征服は実益を兼ねる趣味　795
121話　デート・ア・艦これ　その一　801
122話　どこもかしこも、けものばかりだ（デートその二）　806
123話　黒井鎮守府のちいさな魔女（デートその三）　813
124話　君の姿は僕に似ている（デートその四）　819
125話　お前さんなら、できるできる！（デートその五）　826
126話　何でも斬れる剣でバラバラに引き裂いてやろうか?!（デートその六）　833
127話　艦娘の信条（デートその七）　840
128話　廃人冒険者と一緒（デートその八）　849
129話　矢矧です、よろしくおねがいします（デートその九）　857
130話　艦娘達は思春期　864
131話　どう頑張ってもイケメン　871
132話　疾風伝説特攻の霧島　877
133話　深刻な収容違反　882
134話　出来ましたよ提督！　890
135話　狩人の夜　897
136話　クラウドブレイカー　905
137話　地中海奪還作戦　強行偵察編　912
138話　地中海奪還作戦　夜間警備編　919
139話　地中海奪還作戦　深海会議編　926
140話　地中海奪還作戦　鉄血開戦編　932
141話　地中海奪還作戦　鬼虎侵攻編　940

142話　地中海奪還作戦　銃墓殲滅編　948
143話　ミカネキ、丸洗いされるの巻　955
144話　でれもっちー　963
145話　祝い酒は高級品　970
146話　バカとカジキと召艦娘　977
147話　勝手に助かれ　984
148話　居酒屋鳳翔　前編　992
149話　居酒屋鳳翔　後編　1001
150話　料理人の心得　1008
151話　旅人強度１０００万パワー　1015
152話　黒井鎮守府お料理コンテスト　1022
153話　世界で一番綺麗な黒　1030
154話　でっちの暇潰し　1038
155話　旅人がいない日　前編　1045
156話　旅人がいない日　中編　1051
157話　旅人がいない日　後編　1057
158話　ただいま　1064
159話　うーちゃんのいたずら大作戦　1071
160話　熱く激しく求めてくれ　1079
161話　のじゃロリといっしょ　1085
162話　アサシン型　1091
163話　菱餅とほっぽちゃん　前編　1097
164話　菱餅とほっぽちゃん　中編　1103
165話　菱餅とほっぽちゃん　後編　1110
166話　黒井鎮守府ギャルゲ化計画　1116

167話　黒井鎮守府ギャルゲ化計画　改　―――――――

190話　星に願いを　その6　―― 1288
191話　バブみの殿堂　―― 1295
192話　ハロウィンの一幕　―― 1301
193話　妹と……　―― 1306
194話　秋刀魚漁　―― 1311
195話　フランス旅行、そして救済　―― 1321
196話　サンドラ直撃、そして粉砕　―― 1328
197話　同志よ　―― 1335
198話　帰宅後　―― 1340
199話　黒井鎮守府の爽快な一日　―― 1346
200話　旅人二周年パーティ　―― 1354
201話　エクシーズ召喚　―― 1360
202話　ベーリング海奪還作戦　前編　―― 1366
203話　ベーリング海奪還作戦　後編　―― 1373
204話　戦慄のＲＪ　―― 1380
205話　私のハートを貫いた!!!!　―― 1389
206話　ロボットだから、マシーンだから　―― 1397
207話　ラッキースケベと因果律　―― 1403
208話　絶対島風領域　―― 1411
209話　ｊｉｎｇｌｅ，ｊｉｎｇｌｅ，ｊｉｎｇｌｅ　前編　―― 1416
210話　ｊｉｎｇｌｅ，ｊｉｎｇｌｅ，ｊｉｎｇｌｅ　後編　―― 1422
211話　お正月とお仕事　―― 1430
212話　むらさめむらむら　―― 1435

213話　トランスジェンダー論　443
214話　必殺技開発日誌　451
215話　バレンタイン　458
216話　修羅場を作る程度の能力　465
217話　ドキドキ！エロトラップダンジョン！　473
218話　衝撃！挨拶回り編　その1　481
219話　衝撃！挨拶回り編　その2　488
220話　衝撃！挨拶回り編　その3　496
221話　衝撃！挨拶回り編　その4　504
222話　衝撃！挨拶回り編　その5　512
223話　衝撃！挨拶回り編　その6　520
224話　衝撃！挨拶回り編　その7　527
225話　衝撃！挨拶回り編　その8　534
226話　インド洋攻略作戦　会議編　542
227話　インド洋攻略作戦　開戦編　548
228話　インド洋攻略作戦　戦闘編　555
229話　インド洋攻略作戦　終戦編　561
230話　戦勝パーティ　568
231話　乱痴気騒ぎ後の騒ぎ　576
232話　ホワイトデー　584
233話　ダイエットしろ、赤城　591
234話　特技：酔わせてお持ち帰り　598
235話　自分を卑下する男はモテない　604
236話　艦キャバ　前編　611
237話　艦キャバ　中編　619

238話　艦キャバ　後編 ―― 1626
239話　ジビエとか結構好きな方です ―― 1633
240話　音成提督と一緒 ―― 1640
241話　建造もて王サーガ ―― 1646
242話　花見回 ―― 1653
243話　ドキドキ！健康診断！ ―― 1660
244話　ガチキャン ―― 1671
245話　エイプリルフールは騙される方が悪い ―― 1683
246話　バニ淀 ―― 1691
247話　私物回収と服 ―― 1698
248話　旅人しゃちょー ―― 1705
249話　カウンタードッキリ ―― 1714
250話　カウンタードッキリ　セカンドライド ―― 1722
251話　金の使い所 ―― 1729
252話　神罰下れ ―― 1738
253話　チスイスイってキャラどこかで……、あっ、ボーボボか ―― 1745
254話　旅人ホスト　前編 ―― 1751
255話　旅人ホスト　後編 ―― 1759
256話　将来的に役に立つから ―― 1766
257話　心覗いて事もなし ―― 1773
258話　怖い話 ―― 1780
259話　未来へダイブ　その1 ―― 1786
260話　未来へダイブ　その2 ―― 1793
261話　未来へダイブ　その3 ―― 1800

262話　未来へダイブ　その4　……807
263話　未来へダイブ　その5　……818
264話　未来へダイブ　その6　……821
265話　未来へダイブ　その7　……827
266話　未来へダイブ　その8　……834
267話　未来へダイブ　その9　……841
268話　お誕生日おめでとう　……848
269話　黒井鎮守府修学旅行ハワイ編　前編　……855
270話　黒井鎮守府修学旅行ハワイ編　後編　……864
271話　黒井鎮守府修学旅行ローマ編　前編　……871
272話　黒井鎮守府修学旅行ローマ編　後編　……878
273話　黒井鎮守府修学旅行パリ編　前編　……885
274話　黒井鎮守府修学旅行パリ編　後編　……893
275話　黒井鎮守府修学旅行ロンドン編　前編　……899
276話　黒井鎮守府修学旅行ロンドン編　後編　……906
277話　黒井鎮守府修学旅行幻想郷編　前編　……913
278話　黒井鎮守府修学旅行幻想郷編　後編　……920
279話　怒って欲しいの　……928
280話　ゴールデン神威　……935
281話　黒井鎮守府大運動会　……942
282話　映画を見よう　……951
283話　大西洋攻略作戦　会議編　……957
284話　大西洋攻略作戦　開戦編　……963
285話　大西洋攻略作戦　蹂躙編　……969
286話　祝杯はわかめ酒　……977

287話　黒井鎮守府大食い大会　――――――

312話　ウォースパイトの満腹な冬の日　後編 ―― 165
313話　お正月（母乳） ―― 174
314話　冬コミ ―― 180
315話　謎の義務感により正月っぽいことをやらされる悲しい男 ―― 186
316話　旅人の体内 ―― 193
317話　あなたは神を信じますか？ ―― 199
318話　軍事演習でありますの巻　前編 ―― 206
319話　軍事演習でありますの巻　中編 ―― 214
320話　軍事演習でありますの巻　後編 ―― 221
321話　漫画家に会いに行こうッ!! ―― 227
322話　死の楽団 ―― 235
323話　たびびととあそぼ ―― 241
324話　喫煙話 ―― 249
325話　息抜きしよう ―― 257
326話　息抜きの裏側 ―― 263
327話　ガングートと一緒 ―― 270
328話　セッツブーン ―― 276
329話　グロみ ―― 282
330話　メスガキ分からせマン ―― 288
331話　ガチ登山 ―― 295
332話　異世界転移これくしょん　その1 ―― 302
333話　異世界転移これくしょん　その2 ―― 311
334話　異世界転移これくしょん　その3 ―― 318
335話　異世界転移これくしょん　その4 ―― 325

336話　異世界転移これくしょん　その5　―――― 232
337話　異世界転移これくしょん　その6　―――― 233
338話　イート・ザ・深海棲艦　―――― 234
339話　旅人、シリア行き　―――― 235
340話　深海棲艦島での一幕　―――― 236
341話　嵐の日常　―――― 237
342話　マッシヴ　―――― 238
343話　夢の中　―――― 239
344話　人外フェチの殿堂　―――― 240
345話　異世界テンプレファンタジー　その1　―――― 241
346話　異世界テンプレファンタジー　その2　―――― 242
347話　異世界テンプレファンタジー　その3　―――― 243
348話　異世界テンプレファンタジー　その4　―――― 244
349話　異世界テンプレファンタジー　その5　―――― 245
350話　異世界テンプレファンタジー　その6　―――― 246
351話　海原守子、回顧しつつ語る　―――― 247
352話　仕事やろうぜ　―――― 248
353話　女誑しの旅人と2018の技を持つ冒険家と明日のパンツの旅人　―――― 249
354話　黒井鎮守府避難訓練　―――― 251
355話　初心者向け旅体験その1　前編　―――― 252
356話　初心者向け旅体験その1　後編　―――― 253
357話　初心者向け旅体験その2　前編　―――― 254
358話　初心者向け旅体験その2　後編　―――― 255
359話　初心者向け旅体験その3　前編　―――― 256

360話　初心者向け旅体験その3　後編 ―― 2488
361話　艦娘格付けチェック ―― 2495
362話　艦娘探索者　準備 ―― 2503
363話　艦娘探索者　その1 ―― 2509
364話　艦娘探索者　その2 ―― 2515
365話　艦娘探索者　その3 ―― 2521
366話　艦娘探索者　その4 ―― 2528
367話　救急時の対応を学ぼう ―― 2536
368話　バンディット・ザ・ガンマン　その1 ―― 2544
369話　バンディット・ザ・ガンマン　その2 ―― 2549
370話　バンディット・ザ・ガンマン　その3 ―― 2555
371話　バンディット・ザ・ガンマン　その4 ―― 2560
372話　偽善作戦　前編 ―― 2566
373話　偽善作戦　中編 ―― 2574
374話　偽善作戦　後編 ―― 2581
375話　偽善作戦　蛇足編 ―― 2587
376話　くずおとこ道草日記　前編 ―― 2593
377話　くずおとこ道草日記　後編 ―― 2599
378話　くずおとこ逃亡日記 ―― 2604
379話　サバゲやろうぜ！ ―― 2611
380話　ネルソン、建造 ―― 2617
381話　旅人、レッドグレイブ市へ ―― 2624
382話　出張、聖帝軍 ―― 2630
383話　規約変更によってこの話は消えるかもしれないです ―― 2636

384話　ネルソンの満腹な一日　前編　――――――

409話　艦息これくしょん、始まります！　―――― 2804
410話　魔法理論　―――― 2811
411話　裏世界　―――― 2819
412話　白露型の楽しい外敵始末法　―――― 2826
413話　テクノブレイクで死ぬ前に　―――― 2832
414話　旅人の親友　―――― 2838
415話　5ちゃんの様子　―――― 2844
416話　ハイスピード食道楽週間　―――― 2853
417話　鎮守府正面海域防衛　―――― 2859
418話　ナチスシャークVS黒井鎮守府　―――― 2865
419話　かんむすずのみなさんのおかげでした　―――― 2872
420話　邪魔だゴッ太郎　―――― 2879
421話　旅人、困惑　―――― 2885
422話　SCP―XXXX　旅人　―――― 2891
423話　SCP―XXXX　脱走記録　―――― 2896
424話　SCP―XXXZ　艦娘　―――― 2901
425話　性癖ひん曲がり御殿　―――― 2906
426話　ファンタジーVRMMO　その1　―――― 2912
427話　ファンタジーVRMMO　その2　―――― 2919
428話　ファンタジーVRMMO　その3　―――― 2925
429話　ファンタジーVRMMO　その4　―――― 2930
430話　東北バイオハザード　その1　―――― 2935
431話　東北バイオハザード　その2　―――― 2940
432話　東北バイオハザード　その3　―――― 2944
433話　東北バイオハザード　その4　―――― 2948

434話　東北バイオハザード　その5　―――― 2953
435話　はい、サイドチェスト～！　―――― 2960
436話　甲虫王者　前編　―――― 2966
437話　甲虫王者　後編　―――― 2973
438話　黒井バトルシップランド　―――― 2980
439話　先生「裕太くん、夏休みはどこに行ったのかな？」　―――― 2986
440話　黒井鎮守府牧場の警備強化　―――― 2993
441話　シチューをご飯にかけるのかどうかで旅人が悩むだけの話　―――― 2999
442話　オクトーバーフェスト　―――― 3006
443話　黒井モール開店　―――― 3013
444話　黒井モール　前編　―――― 3017
445話　黒井モール　中編　―――― 3022
446話　黒井モール　後編　―――― 3027
447話　黒井モール　裏編　―――― 3031
448話　デビルサマナー旅人　前編　―――― 3038
449話　デビルサマナー旅人　後編　―――― 3044
450話　台風コロッケ　―――― 3050
451話　海原守子、出張する　―――― 3057
452話　黒井鎮守府ＰＶ　―――― 3064
453話　禁酒　―――― 3070
454話　リフォーム　―――― 3075
455話　プライドを捨てろ　―――― 3081
456話　黒井モール裏オークション　―――― 3087

457話　義体　―――― 3093
458話　企業としての黒井鎮守府　―――― 3099
459話　艦娘参観　その1　―――― 3103
460話　艦娘参観　その2　―――― 3109
461話　艦娘参観　その3　―――― 3116
462話　艦娘参観　その4　―――― 3121
463話　艦娘参観　その5　―――― 3126
464話　久し振りの召喚　―――― 3130
465話　ほげーっ！　―――― 3134
466話　ほげーっっ！　―――― 3139
467話　ほげーっっっ！　―――― 3144
468話　りゅーほー!!!　―――― 3148
469話　クリスマス苦しみます　―――― 3152
470話　正月だよ！　―――― 3156
471話　お歳暮の時期　―――― 3163
472話　読み上げろ！ゆかりんボイス！　―――― 3168
473話　電波を受信　―――― 3173
474話　異種族をレビュー　前編　―――― 3179
475話　異種族をレビュー　後編　―――― 3186
476話　黒井鎮守府ロボットコンテスト　―――― 3191
477話　わんころ　―――― 3197
478話　バレンタインデーキス　―――― 3202
479話　暗殺者現る！　―――― 3208
480話　ロリロリパラダイス　―――― 3214
481話　ドヤ　―――― 3220

482話　コロナ　227
483話　被食者旅人　313
484話　レズとホワイトデー　327
485話　保育園　323
486話　ポーラ酒浸り日誌　324
487話　大食いクイーンの日常　332
488話　裏社会と会合　325
489話　秘書艦チェンジ！　その1　326
490話　秘書艦チェンジ！　その2　327
491話　秘書艦チェンジ！　その3　328
492話　秘書艦チェンジ！　その4　329
493話　秘書艦チェンジ！　その5　330
494話　久し振りのバトル　329
495話　青葉のインタビュー！　301
496話　青葉のインタビュー！　その2　306
497話　青葉のインタビュー！　その3　310
498話　青葉のインタビュー！　その4　315
499話　青葉のインタビュー！　その5　319
500話　木曾可愛いよ木曾　325
501話　神州丸　331
502話　特に山場はない　337
503話　一ヶ月1万円生活　341
504話　違うんすよ……、作者の好みなんすよ……　347
505話　値札がない商品は全品百円なんだけど、商品の中には百円じゃない商品も混ざってるので、百円の商品を買い取れるように目利　334

きを利かせるやつ ―――――――

529話　友人との電話　463
530話　もちもちの女体　468
531話　洋物ロリの犯罪臭　473
532話　掌の上で踊る旅人　477
533話　大天使フルタカエル　482
534話　サミット　488
535話　とある対魔忍の独白　493
536話　旅人サブストーリー　498
537話　仕事する旅人　503
538話　Q：どうしてスーパーロボットがいるんですか？　508
539話　一匹見たら三十匹いると思え　514
540話　いつもの犯人　520
541話　事後処理と汁　524
542話　マスコミからの風評被害　530
543話　労働ベイ　535
544話　殺した程度じゃ死なない　542
545話　映画を観に行ったオタク　547
546話　梅雨バージョン加古可愛すぎんか？　552
547話　火薬庫は黒井鎮守府以外にもあるんだよ　556
548話　雑魚相手には強キャラムーブできるマン　560
549話　女の子の手作りだと基本的に倍美味い　565
550話　ぼのたんはとてもかわいいなあ　570
551話　アライアンス　575
552話　天龍ちゃんと龍田さん　580
553話　催眠アプリ　その1　585

554話　催眠アプリ　その2　―― 590
555話　催眠アプリ　その3　―― 635
556話　催眠アプリ　その4　―― 607
557話　催眠アプリ　その5　―― 613
558話　催眠アプリ　その6　―― 618
559話　催眠アプリ　その7　―― 624
560話　催眠アプリ　その8　―― 630
561話　友達！　―― 635
562話　旅人の過去　前編　―― 639
563話　旅人の過去　後編　―― 643
564話　ＱＭＫ　―― 650
565話　迎春！黒井鎮守府隠し芸大会！　―― 655
566話　前掛けと前貼り　―― 660
567話　しぐにゃん　―― 665
568話　ひみつひみつひみつひみつ　―― 671
569話　メスガキの極み　その1　―― 676
570話　メスガキの極み　その2　―― 681
571話　メスガキの極み　その3　―― 686
572話　突発！真紅のリボン！　―― 692
573話　だめだね　―― 696
574話　駄目なのは俺なんだよなあ　―― 701
575話　エルデの王　―― 705
576話　旅人は墓地に送られターンエンドだ！　―― 710
577話　月刊！終末到来！　―― 715
578話　集結！奇人変人！　―― 371

５７９話　英雄！一転攻勢！　―――――――

1話　プロローグ

ーーーこの物語は！

「っしゃぁ!!押さえたぞー!!狩人さんはやく！オルゴール!!オルゴール鳴らして!!!」
「グルルオォオォオ!!き、貴様も、貴様も獣にィイイィイ!!!」
「パパ!!頑張って!!病気になんて負けないで!!」
「貴方！お願い!!正気に戻って!!」
「狩人さん、輸血!!輸血して!!もう総入れ替えするカンジで!!っーか喋れ!!」

「すまない、助かった。お前達のお陰で、獣に成り下がらず済んだよ」
「じゃあ、近場の教会の警備頼めます？一応安全なんで。黄色い服の人とカラスっぽい服の人が目印です。おい狩人さん、次は下の方に行くぞー。あと喋れ」

ーーー世界各国を旅した、

「あんたのせいで新車がメチャクチャだよ！このハゲ!!タコ警官!!そんなんだから嫁に逃げられんだよ!!」
「うるせぇ!!黙ってろ若白髪!!テロリストに国をメチャクチャにされるよりはマシだぁ!!」
「……ちょっと待て、何か聞こえないか？」
「……そういや、何か落ちてくる様な音が……」
「……ミ、ミサイルぅぅぅ!!?!」

「ウギャー!!痛え！背中打った!!思いっきり打った!!」
「畜生、今夜はクリスマスだぞ?!何で俺ばっかりこんな目にぃ?!ホリィィィ!!……」

ーーー世界一破茶滅茶な旅人が、

「あっ、お久しぶりです若先生。先週中国に寄ったんすけど、海皇さんメッチャ怪我してましたよ。あっ、そう言えば、会長は元気ですかって、ええっ！何で片腕ないの?!!俺が居ない間に一体何が?!!」

「おォ！久しぶりだなァ……新台ィ！腕はチョット前の立会いでなァ……。親父は今いるぜ、顔見せてやんなァ……」

「貴様とは闘争(たたか)っていなかったッッッ!!」

「うわぁぁぁぁ!!!何であの化け物がいるんすか?!!聞いてないよ若先生いぃぃぃ!!!」

ーーー日本へ里帰りし、

「こんにちは教授。まーたヒトデの研究っすか?あっ、これお土産の酒です。あとコーヒーガムとさくらんぼ。あの人にはエジプトで直接お土産を押し付けてきました」

「ああ、日本に来てたのか、真央。お土産はありがたく貰っておこう。あいつらも喜ぶ」

「で、ちょっとお願いが……」

「……何だ？」

「ちょっと東北まで船回して下さらない？」

「……お前も良い加減定職に就け。俺が受け持った学生の中で、進路希望書に世界征服なんて書いたのは、お前が最初で最後だ。幸い、お前は頭がいいし、器用で、身体も丈夫だ。何より、人間関係を築くことに長けている。良ければスピードワゴン財団に渡りを付けて……」

「やめて！正論はやめて!!その術は俺に効く!!」

ーーー世界征服を目標に旅していたところ、

「おお！久しぶりだな！マオ！相変わらずデカイな!!まあ、兄者程

じゃないがな」
「あっ、お久しぶりですねぇ～。でぇ、弟さんは結婚したらしいですけどぉ、貴方はぁ～？」
「やっ、やめてくれぇ！あ、兄より優れた弟など存在しねぇ!!」
「ジャギ様ぁ、いい加減アンナさんにプロポーズしましょうよぉ」
「姉さん、ずっと待ってるんすよ？」
「だっ、黙れぇお前らぁ!!」

「南斗獄屠拳!!」
「うわぁぁぁぁ!!!」
「天才の俺が何故こんな目にぃ?!」
「馬鹿野郎！何であいつを煽った!!「初恋の人がご結婚なされたらしいですけど、ねえどんな気持ち？ねえどんな気持ち？」じゃねえよ!!!」
「煽りは基本！そして対策は万全!!すいませんＫＩＮＧ!!違うんです!!こいつがＫＩＮＧを煽らないと木偶にするって俺を脅したんです!!」
「貴様かぁ!!アミバぁぁぁ!!」
「な、何ぃ?!!」
「よし今だ逃げろ!!」
「ちょ、ちょっと待て、俺はそんなこと、うわらば!!!」

ーーー最近巷を賑わしている艦娘に出会い、

「おい、大丈夫か、お嬢さん?!」
「榛名は、うぅ、榛名は大丈夫です……」
「いや、駄目だよ!!微塵も大丈夫じゃないよ!!ちょっと待って、直ぐに手当てするから!!」

「榛名は、榛名はぁ、こっ、こんなに、こんなに人に優しくして貰ったのは初めてです！うっ、ううぅ」

「えぇ……、紅茶とお茶菓子程度でマジ泣きって、君んとこキツすぎない？」

ーーー何だかんだで、所謂ブラック鎮守府を救い、

「何だあの白服ヤロー。裸同然の女の子をぶん殴ってるぞ。メッチャ許せんよなぁ～!!」
「やめて下さい！あの人は……!!」
「や、やめて下さい提督!!殴るなら僕を!!」
「やめて時雨!!私は大丈夫だから!!」
「貴様ら、碌な戦果も出せないゴミの分際で!!「うおおおお!!覇王翔吼拳!!」ホギャァァァ?!!」

「悪は去った!!」

ーーー何だかんだで、提督になり、

「貴様が殴ったのは阿志岐大将のご子息だぞ!!」
「何てことを……！」
「貴様、この国でまともに生きていけると思うな!!」
「あっ、じゃあまた海外に旅に出るんで」

「提督適合率測定不能だと?!!」
「異例だ！こんなことは……!!」
「ありえん……!!」

「どうせなら、あの鎮守府を引き継がせればどうでしょう？これ程の逸材、有効活用せねば……」
「……そうだな、よし、貴様には罰として黒井鎮守府への着任を命じる!!」
「えっ、なにそれこわい」

ーーー持ち前のＤＩＹ精神と、数々の苦難で手にした経験、そして溢れんばかりのバイタリティで、ブラック鎮守府を立て直し、

「なにこれぇ、あもりにも酷すぐるでしょう？直さなきゃ……!!（使命感）」
「すみません、提督……。資金が無くて……」
「大本営の嫌がらせぇ？なーに、大丈夫だ！安心しろ！俺が直す!!（ＴＯＫＩＯ感）」
「おっ、良い山だなぁ、こーんなに豊富な自然の資源があれば、金なんていらないんじゃないかな？」

「雨漏りが直りましたわ!!」
「新しい提督がお部屋を直してくれたでち！お休みもくれたでち！やったでち!!」
「採れたて野菜の浅漬け、産地直送の牛肉と畑で採れたジャガイモを使った肉じゃが、食後の手作りアップルパイ……。流石に気分が高揚します」
「お代わりもあるぞ!!」

ーーーやがて、艦娘達の信頼を得て、

「私は貴様を信用していない！提督など、どうせ皆同じだ!!」
「今更優しくされたところで……！」

「しゅみです（秘密結社感）」

「どうやら私が間違っていたようだな……。この長門、提督の為に命を懸けて戦おう!!」

「貴方は本物の提督なのね～。天龍ちゃんにも優しいし、私も良くして貰ってるし……。お触りは禁止だけど、提督になら……??」

「あっ、そっかあ。晩ご飯はカレーだから。じゃ、よろしくぅ」

ーーー世界征服を成し遂げる、壮大な物語である!!

「ＨＥＹ！提督ぅー！大本営のクズ共を捕まえて来たネー!!今までの分をお返ししてＥＸＥＣＵＴＩＯＮ!!しまショー!!」

「自分が二重スパイをした甲斐がありますな。ゴミがいなくなって上層部の風通しが良くなりました。これを機に、一気に軍部を掌握しましょう、提督殿。提督殿こそ、この国の、いえ、世界の頂点に立つべきお方です」

「司令官の夢は、この鎮守府みんなの夢なんや！もうちょっとでみーんなの夢が叶うで！あは、あはははは!!アははハハハハはははは!!!」

「やべぇよ、やべぇよ……!!」←提督業もひと段落ついたので、また旅に出る気だった

ーーー……壮大な物語である!!!!

2話　ながいたびが　はじまる

と、言う訳で。
里帰りしました。何年ぶり？二、三年くらい？分からん。取り敢えず、日本にいる知り合いに挨拶をしつつ、国内をブラブラすることにした。
そう言えば、空条教授が艦娘がどうとかなんだとか言ってたし、海の方に向かうか。
まあ、俺がこうしてあてもなく彷徨うと……、
「ぐっ、うぅ、お姉さま達、みんな……。は、早く鎮守府に戻らないと……」
大体こう言うトラブルにめぐり逢う。いつものことだ、もう慣れた。それに……、
「おーい、大丈夫か？お嬢さん？」
面白おかしいトラブルは大好きだ。何と言うか、知り合いの何でも屋兼デビルハンターが言っていた、「刺激があるから人生は楽しい、そうだろ？」という言葉。これが一番しっくりくる。
「あ、貴方は？」
「そうさね、俺は気ままに彷徨う旅人ってとこか。お嬢さんは？」
「わ、私は、」
「おっと、立ち話もなんだから、あっちの俺の車の側で聞こう。椅子を出すからさ」
「は、榛名は大丈夫で、」
「そんなに砂まみれじゃ治療も出来ないな。シャワーでも浴びるといい。車の中にあるから」
「そ、そんなことは、」
「ああ、どうせ訳ありなんだろ？見りゃわかる。もう慣れっこさ。通報はしないよ。良いから早くついて来な、ホラホラホラ」
「は、はい」
早口でまくし立てられたお嬢さんは、力無い足取りで俺について来る。

×××××××××××

「じゃあ、俺はお茶でも淹れておくよ。ゆっくりしていってね！」

彼は、そう言うと、車の外へ出て行った。

車の中のシャワー室に押し込められてしまったので、観念してシャワーを浴びる。

こうしてゆっくりとシャワーを浴びるのはいつ以来だろうか、覚えていない。

シャワーを浴びながら、私は彼について考えた。

不思議な雰囲気の人だ。

今まで会った人間は、私達艦娘を見ると目を逸らし、話しかけてくることなどなかった。

提督に虐げられている私達を見て、憐れんでくれる人はいても、こうして手を差し伸べてくれる人はいなかった。

でも、彼は自分のことを旅人だと言っていた。きっと、私が黒井鎮守府の艦娘だと知らないのだろう。

だから、少しだけ休ませて貰ったら、直ぐに鎮守府に戻ろう。きっと、沢山怒鳴られて、沢山殴られるんだろう。けど、お姉さま達や、仲間のみんなが酷い目に遭うよりはマシだ。それに、私の手助けをしたことが提督に知られれば、彼は酷い目に遭うだろう。

「おーい、入るぞー。着替えとタオル置いとくからねー」

丁度上がろうとしたとき、彼がそう言って籠を置いて行った。

私は、籠のバスタオルで髪を拭き、着替えを見た。

「わぁ……！」

置いてあった着替えの服は沢山のフリルをあしらった可愛らしいもの。正直、この様なお洒落には憧れていた。もう、諦めていたけれど。

「そっ、その！こんな綺麗な服、着れません！さっきまで着ていた私の服は……」

私はバスタオルを巻いて、車の中から彼に言った。
「いやいやいや、あれはもうボロボロだから。和服用の生地もないし。って言うか全く原材料が分からんなあの生地。まあ、取り敢えずそれ着て。サイズは大き目に作ったから多分大丈夫だと思うけど」
は？つ、作った？私がシャワーを浴びていた時間で？
「あ、デザインが気に食わない？ズボンとジャケットとかがいい？セーターでも編む？」
「い、いえ！デザインの問題ではなくて！」
良く分からないが、服というのは十数分で作れるものなのだろうか？
「じゃあ早く着てね。お茶とパンケーキが冷めるからさ。お嬢さんみたいな弱った子にはパンケーキがいいって知り合いの医者が言ってた。勿論、味は保証する」
パンケーキ……。そう言えば、さっきから辺りに甘い匂いが漂っている。
思わず、涎が垂れそうになる。
普段私達が口にするのは、最低限の味と量の粗悪な糧食か、栄養剤だ。
甘いものやお茶なんて初めてだ。
それに、もう三日も食べてない。
「い、良いんですか？」
「良いも何も、君の為に作った訳だし」
その言葉を聞いて、私は直ぐに服を着て、車から降りた。
「お茶はハーブティで良かった？知り合いの医者から貰ったピンクの花で作ったんだけど」
「は、はい！あの、本当に良いんですか？」
「いいのいいの。卵と牛乳余ってるし」
「じゃ、じゃあ、いただきます！」
そして私は、蜂蜜のたっぷりかかったパンケーキを口にする。
「……おいしい……」
「うん、おいしく作ったからね」

噛みしめる度に、蜂蜜の優しい甘さと香りを感じる。ふっくらと焼かれたパンケーキ自体の食感もとてもいい。船の知識として、甘いものの存在は知っていたが、これ程のものとは。

そうして、夢中になって食べ進める内に、なんだか涙が溢れてきた。

「うっ、ひぐっ、お、お姉さま達にも、みんなにも、た、食べさせてあげたいです！いつもいつも、毎日毎晩！ずっと戦ってるのに！まともな食事も、お休みも！何もないなんて!!みんなが、みんなが可哀想です!!」

「戦う？海で？……ああ、もしかして君、艦娘ってやつか？」

「ッ!!」

つい、口を滑らせてしまった。こんな私に良くしてくれた旅人さんを怖がらせるのは嫌だ。

「……黙っていてごめんなさい。騙すつもりはなかったんです。貴方の言う通り、私は艦娘です。気持ち、悪いですよね……。直ぐにいなくなりますから」

「へぇー、噂と違って随分と可愛らしいもんだ。榛名って言ったっけ？じゃあ日本の戦艦だよな？凄いじゃん」

……え？

「……あ、貴方は、私が、怖く、ないんですか……？」

「別に？」

「……私は、艦娘。化け物、なんですよ……？」

そう、私は艦娘。「人間」とは違う、化け物だ。

けれど彼は、それを聞いても怖がるような素振りを見せず、語り出した。

「……なあ、お嬢さん。あんた、吸血鬼に会ったことは？」

「……え？」

「巨大でおぞましい生物兵器は？宇宙からやって来た捕食者は？人殺しをゲームとして楽しむ怪人は？」

「いっ、いえ、会ったことがありません」
「二足歩行する戦車は？二丁拳銃を操る死体は？不死身で饒舌な傭兵は？」
「そんなの、いるはずが……」
「いるよ。全部実在する。この目で見てきた。そんな俺からすれば、お嬢さんなんて化け物のスタートラインにすら立っちゃいないね」
そう言うと、彼は私にハンカチを差し出し、優しく頭を撫でてくれた。
初めて触れた人間の優しさ……。
「……あっ、……わ、私は、私はこんなに、人に優しくして貰ったのは初めてです……」
拭いても拭いても、涙が溢れてくる。
「そうかい、美人なのに運が無かったな」
「……ふふっ、美人と言われたのも、初めてです」
「……何だ、随分と可愛らしく笑う化け物もいるもんだ。ほら、送って行くから。何処までだい？」
彼の善意に負けた私は、鎮守府近くまで送ってもらうことにした。
「……分かりました、でも、黒井鎮守府の側までにして下さい。中に入ってはなりません。そして、もし提督に会ったら、直ぐに逃げて下さい」
「おう、よく分からんが、黒井鎮守府までな。おっ、グー〇ルマップで出るじゃん」
そう言って、彼は、私を手早く治療すると、鎮守府へ向かって車を走らせた。

因みに、何処からともなく包帯や絆創膏を取り出したり、やたらとよく効く塗り薬の出所などの件についてははぐらかされた。

3話　KARATE

「いやー、あの時は面白かったなぁ」
「そうなんですか？」
「いやまさかあいつがあそこでアレするとはなぁー」
「へぇ、そんなことが……。そのあとはどうなったんですか？」
色々あって、榛名ちゃんを乗せて黒井鎮守府とやらに向かう俺。
道中は暇なので、思い出話をしてみたところ、物凄い食いついてきた。
何でも、鎮守府とやらはクソブラック企業で、年中無休のフル稼動、福祉厚生一切無しの労災も真っ青な労働環境らしい。
恐らく、娯楽にも飢えているんだろう。幸い、話のネタには事欠かない。あとは単に榛名ちゃんが聞き上手ってのもあるけど。
「いやいや、本当にすげぇよ。なんせ、パルスのファルシのルシがコクーンからパージしてさ？」
「そ、それは凄いですね」
「それだけじゃなくてな、実は……ん？」
会話の最中、ふと、海岸を見ると、異様な集団が目に入った。
ボロボロの服装の女の子6人と、白い服を着た男1人だ。
車を停めてよく見ると、どうやら、白服は女の子達に暴力を振るっているようだ。女の子達はみんな泣きながらお互いを庇いあっている。
「……何だありゃあ、胸クソ悪りぃ」
「あ、あれは！駄目です！戻って下さい旅人さん!!」
榛名ちゃんに制止されたようだが、聞かなかったことにする。そもそも、あんなものを見て見ぬふりすれば男が廃る。俺が俺じゃなくなる。
「おおおおおおりゃあ!!!」
×××
×××
×××
「貴様らは資源すらまともに取ってこれんのかぁ?!!」
×××××
×××××

そう言って、提督は僕達に暴力を振るった。いつものことだ。でも、今回はみんな疲労のあまり遠征が捗らず、資源を殆ど拾えなかったから、いつもより厳しい。
「……何だぁ?その目は?!それが上官への態度かぁ?!!」
見ると、提督を睨み付けた木曾さんが提督の持つ軍刀の鞘で殴られている。
……木曾さんは優しい人だ。いつもこうして、提督を睨み付け、みんなの代わりに殴られるのだ。
でも、今回ばかりは木曾さんも限界だ。木曾さんはその態度のせいで、特に提督から目の敵にされている。だから、事あるごとに暴力を振るわれている。その上で他人を庇うのだから、いつも生傷が絶えない。
「グッ、どうした、殴るならもっと殴れ!このクズめ!!」
「言わせておけば!!」
「やめて下さい!」
先程から木曾さんに庇われていた軽空母の瑞鳳さんが前に出る。
「わ、私が悪いんです!遠征の途中で気を失った私がみんなの足を引っ張ったんです!だから、だから、殴るなら私を!!」
それを見た重巡の古鷹さんも、震えながら言う。
「違います!遠征中に倒れたのは私です!私が悪いんです!!」
「やめてよ古鷹!私はもう古鷹が傷つくところを見たくないよ!」
古鷹さんの妹の加古さんが悲痛な叫び声を上げる。しかし、
「もういい!貴様ら使えないゴミ共は処分してやる!!」
怒った提督は刀を抜いた。

不味い、いくら艦娘と言えど、陸の上で、尚且つこれだけ損傷して、疲労した今なら、斬りつけられれば死んでしまう。
だから、僕は……。
「待ってよ!ここで一番弱いのは僕だ!!処分するなら僕だけにして!!」
最後の力を振り絞って、両手を広げ、みんなの前に立つ。

「やめろ時雨！」
「時雨ちゃん！」
「いい度胸だな貴様ぁ!!!」
提督は怒鳴り声を上げ、刀を抜き放ち、思い切り振った。

……これで良いんだ。ここで僕が死んで、提督が落ち着けば、皆んなと、妹は助かる。酷い人生だったけど、皆んなを守って死ぬなら悔いはない。
そう思って、ゆっくりと目を閉じようとした。
だが、最後の瞬間、僕は突き飛ばされ、最愛の妹である夕立が僕のいた場所に立っているのを見た。

「ッ!!夕立ーーーー!!!」

時の流れが遅くなったように感じる。
夕立は、僕に微笑み、小さく、「ごめんね」と呟いた。
提督の刀がゆっくりと、だが確実に夕立の首へ向かうのが見える。
みんなは、咄嗟のことだったからか、身体が動いていない。
僕の身体は、さっき突き飛ばされた衝撃で動かない。

もう、駄目だ。
嫌だ、もう、仲間を失うのは、嫌だ。

最悪の結末が迫る、その時。

「あ、どっこいしょー!!!」

その時、鮮烈な「白」が妹に迫る白刃を蹴り上げた。

「グアァァァァ!!手が!!私の手がぁ!!」

×
×
「ンンンー、強姦致死、未遂とは言え死刑が妥当かね？妥当だな、俺が決めた。今決めた」
×
×
×
×
「なっ、何者だ！貴様は!!」
目前の白服の男は、腕を押さえながらも怒鳴りつけてきた。
「職業不定、住所不定の旅人さんだよ!!」
「何だと?!よく分からんが、貴様、私が誰だか分かっているのか?!!」
勿論知らない。知らないが、俺の中では有罪判決が出たので。
「あー、ブサイクは仕方ないかもしれんが、デブだな。折角浜辺にいるんだからジョギングでもしたらどうだ？」
「きっ、貴様!!言ってはならんことを!!もう我慢ならん!!」
そう言うと、提督と呼ばれた男は、銃を取り出した。
「やめて下さい!!」
俺を追いかけてきた榛名ちゃんが追いつく。おや、結構足が速いなぁ、榛名ちゃん。
「貴様は、榛名か！そうか、この男は貴様の差し金か!!許さん、許さんぞ!!この男を殺したあと、貴様は姉妹全員と同時に殺してやる!!」
「違います!!この人は」
うん、良し、殺す！榛名ちゃんは、少しの間しか話していないけど、とっても良い子だ。こんな良い子を姉妹共々殺すなんて、メッチャ許せんよなぁ～!!
「なるほど分かった、武器を持った奴が相手なら」
「あぁ？何か言ったか、貴様？」
「覇王翔吼拳を使わざるを得ない」

「何を言ってる?!貴様、この銃が見えないのか?!!」
知らぬ存ぜぬ。ただの拳銃を持っただけのチンピラなんて、旅の途中で何人も倒してきた。
そして今こそ、知り合いの下駄でバイクに乗る人から習った空手技を使う時。別に使わなくてもどうにかなるが、使いたい気分なのでぶっ放す。

「うおおお!!覇王!!!」

両手を身体の前で交差し、気力的なサムシングを集中させる。

「翔吼拳!!!!!」

そして、溜まった気力的なサムシングを、両手を突き出すと同時に放出する!!
「ホギャァァァ!!!!!」
提督は、覇王翔吼拳に当たると、十メートル程吹き飛び、砂浜に突き刺さった。まるでハリケーンミキサーを食らったウォーズマンみたいに。

「安心しろ　峰撃ちだ」

あー、すっきりした。

4話　旅人無双

　用事が済んだので、榛名ちゃんに声をかける。
「榛名ちゃーん、車乗っててー。俺はちょっとこの子達を治療しなきゃだからー」
「たたたた、大変です……！旅人さん、早く逃げて下さい!!」
「え、何で？」
「あ、貴方が今攻撃した人は、提督なんですよ!!早く逃げなきゃ、殺されちゃいます!!」
「へぇ、そうなの。まあ、本当にヤバくなったら逃げるけど、再起不能になるくらいの威力でやっといたから、そんなに急がなくても良いんじゃない？」
「へぇ、そうなの、じゃありませんよ！提督を怒らせたらどんな目に遭うか分かりません!!早く逃げて下さい！出来るだけ遠くに!!」
　あー、何かよく分からんけど、榛名ちゃん大変そうだな。とか思いながら、知り合いの天才外科医から分けてもらった謎の万能薬ヒールゼリーを女の子達に塗りたくる。勿論、乳首にはノータッチだ。因みに、女の子達は、一人を除いて皆気絶した。緊張の糸が切れたんだろう。
「そうだな、仲間の命を救ってくれたことは感謝する。ありがとう。だが、今この瞬間から、お前は追われる身になった。榛名の言う通り、早く逃げた方がいい。い、いや、俺の治療は良いから。」
　唯一気絶しなかったイケメンちゃん（仮名）の治療に取り掛かったところ、イケメンちゃんも俺に忠告してきた。
「分かった、分かった。取り敢えず、君らを治療して、無事に家まで送り届ける、と言う訳だろ？」
「何一つ分かってないです!!こうしている内にも、憲兵さんが迫ってきているかもしれないんですよ?!」
　うわぁ、何か凄い勢い。
「人に追われるくらい大した事ないのに、大袈裟だな。ただの兵隊程度で何を騒いでいるんだか」

少なくとも、この前みたいに地上最強の生物に追われるのと比べると、何に追われても別にって感じ。でも、イケメンちゃんは、神妙そうな声音で俺に言う。

「……腕に覚えがあるのは分かった。だが、鎮守府には数十人の武装した憲兵がいて、更に増援を呼ばれる可能性もある。いかにお前が強くても、限界はあるだろう？」

「……もしかして、その憲兵ってサイボーグだったりする？」

「い、いや、しないが」

「B．O．W．の配備は？」

「聞いた事がないな」

「えっ、じゃ、じゃあ、憲兵は実は人造悪魔とかそういうこと？」

「あ、悪魔？何を言ってる？」

「……ただの武装した人間？」

「そう言ってるだろ？」

「えっと、それってさ……、」

その時、怒声と共に憲兵が現れる。

「貴様！何者だ!!」

「提督閣下をよくも!!」

「発砲許可！撃ち殺せ!!」

「不味い！憲兵だ!!やはり監視されていたか！くっ、ここは俺が盾に……、オイ、何を!!」

俺は当たり前の様にイケメンちゃんの前に立つ。

「よし、撃てぇ!!」

多数の銃弾が俺に迫る。しかし、

「よっ」

廻ッッッ!!!

軽い掛け声とは裏腹に、恐ろしい速さで回し受け、否、「廻し受け」を行う。会長直伝の「完全防御」だ。会長曰く、矢でも鉄砲でも、火炎放射器でも防げる、らしい。まあ、何にせよ、

「……大した脅威じゃないなァ……！」

「な、何だぁ、あいつ?!」

「銃弾を、防いだ?!!」

「あ、ありえん！見間違いだ、よく狙え!!撃て、撃てぇ!!」

うん、防いでいる内に分かったけど、特殊な弾頭じゃない、ただの豆鉄砲だこれ。態々廻し受けを使うまでもねえやつだ。後ろに榛名ちゃん達がいるし、攻撃せず、唯一ぬにの盾になろうと思ったんだがな。

「参ったな、これじゃ、俺……防御に徹したくなくなっちまうよ」

と言う訳で、命と言う名の盾になるより、普通に殴って倒した方が速いと考え、攻勢に移る。

「きっ、消えた?!ぐあっ!!」

「な、何が起きていぎゃあ!!」

「いない、いないぞ?!一体どこにおっご!!」

ここで解説しておくが、俺のＫＡＲＡＴＥは実戦志向だが、敵を倒すより、防御と回避（と逃走）に特化した文字通りの護身術だ。

故に、火力に乏しいし、目立った技もない。

ただ、何処でも、何時でも、何者からでも逃げのび、生還する。それだけのものだ。

だからこそ、火力や特殊な技は、旅先で得た様々な武技と小細工でカバーする。

そしてこれも、旅先で得た技の一つだ。

「ナギッナギッハァーン!!ナギッ!ペシペシナギッ!カクゴォ!ナギッナギッ!」

×
×
×……北斗無想流舞。本家のロン毛医師の足下にも及ばないが、小細工の一つにしては充分だ。
×
×
×
「おい、榛名。何だ、アレは?」
「わ、分かりません」
いやいやいや、おかしい、おかしいにも程がある。目にも止まらぬ速さでステップを踏んでいるのは辛うじて分かるが、そもそも人間が出していいスピードじゃない。
「アレが人の動きか?艦娘の俺の目をもってしても、動きがまるで見えん」
「私にも、憲兵さんがいきなり宙に飛んでるとしか……」
狂気のスピードに加え、人間を一撃で倒す攻撃力を持ち、拳銃の一斉射撃を真っ正面から受ける防御力。
「……旅人、なのか?」
「……そう、らしいです」
と言うより、人間なのだろうか?ああ、何だか頭が痛くなってきた。
「こいつで終わりだ!鷹爪三角脚!!」
あの男はそう叫ぶと、一瞬で跳躍し、無数の蹴りで憲兵達の骨を砕きトドメに急降下し、着地点に衝撃を発し、全てを吹き飛ばした。
何処からか、ＦＡＴＡＬ　Ｋ．Ｏ．（パーフェクト）とか言う声が聞こえてきたが、きっと幻聴だろう。
×
×
×ハハハハ、やっぱり大した事ない!やれる!やれるんだ俺は!!
×
×
×まあ、予想通りだな。ただの人間じゃあ俺を殺せないよ。俺を殺る
×
×

ならスーパーロボットでも持って来るがいい!!
　さて、治療を再開せねば。いかにヒールゼリーが万能と言えど、これだけに頼るべきではない。患部を冷やす氷とか、ガーゼを当てたりとかも重要。
「……な、なあ、お前は一体何者なんだ？」
　イケメンちゃんが俺に聞く。何者って言われてもなぁ？
「旅人だよ」
　としか言いようがないんだよなぁ。
「嘘をつくな、ただの旅人にこんな芸当ができるか。お前は一体何者だ？何が目的なんだ？」
　おお、メッチャ警戒されてる。まあ、俺は常人よりはちょっとばかり強いかもだけど、そんなに警戒する程かな？
「まあ、職業不定住所不定なもんで、身分を証明するもんは特にないな。旅人な訳だし。目的は聞いて驚くな？俺の目的はな、旅をしながら、世界征服をすることだ!!」
　変な誤解をされない様に、正直に答えた。
「せっ、世界征服だと?!!（これだけの実力があれば不可能ではないな……！）」
「そうだ!!俺が世界征服をした暁には！」
「な、何をする気なんだ!!」
「えっと、農林水産業や畜産業、工業を推奨したり、自然環境の保護をしたり、あの、まあ、色々したいです。あとは、ほら、ロマンあるじゃん。夢は大きい方が良いって言うし」
「……お前、ひょっとして馬鹿なのか？」
「ば、馬鹿じゃないぞ！ただ、俺はな、自然環境全てを巨大なビオトープとして見た時、人はそれを調整するバランサーで在るべきだな、と思ってるだけで」
「……よく分からんが、それなら、世界征服の必要はないだろ」
「……いや、でも、カッコイイじゃん？」
「……はぁ、警戒している俺が馬鹿みたいじゃないか。本当の目的は？」

まぁ、世界征服は定職に就きたくない言い訳みたいなもんだし。
「いやいや、本当に世界征服くらいしか目的はないよ？強いて言えば、旅をして見聞を広げるとか？」
「それが、俺達を助け、海軍と敵対したこととどう繋がる？これだけのデメリットに対し、お前は今日何を得た？」

そんなものは決まってる。
「艦娘に会えたことかな」

「……それは、」
「メリットだよ、俺にとってはね」
「……まあ、いい。一応恩人だしな。疑うのも悪い。そういうことにしておこう」
まだ半信半疑だが、ある程度は信用してもらえたようだ。
「じゃあ、取り敢えず、鎮守府とやらに帰ろうか。君、本当は立っているのも辛いんだろ？」
「……流石に分かるか。正直、かなり、キツい。後は、頼ん、だ……」
そう言い残すと、イケメンちゃんは倒れ込んできた。身体をキャッチして、そのまま車に運び、後部座席に寝せておいた。
そして、残りの気絶している女の子達を車に押し込み、榛名ちゃんを乗せて、鎮守府に向けて出発した。

5話　ジョブチェンジ

「いやー、桃さんの息子かー！大きくなったなー!!」
「押忍！ご無沙汰しております、新台さん」
「うん、久しぶりー。前にアメリカで会ったときはまだまだ子供だったのになぁ。今じゃ親父さんにそっくりの男前だ」
「はは、ありがとうございます。前に会ってからもう何年も経ちましたからね」
　榛名ちゃん達を鎮守府に送り届けた次の日、俺は日本で知り合いへの挨拶回りを続けていた。
　まあ、一応追われる身らしいので、そろそろ海外に飛ぼうかな、とは思ってる。
　でも、あの調子じゃまだ大丈夫だろ。追っ手も来ないし、ゆっくり挨拶して回ろう。
「いたぞ!!」
「動くな！新台真央!!」
「お前は完全に包囲されている!!」

　あっれー？追っ手が来ちゃったなー？
　まだ大丈夫と思ったんだけどなー？

「……今度は何をしたんですか、新台さん」
「失礼な。人がいつも何かしでかしてるみたいに。うーん、海軍の提督とかいう奴に気功を放っただけなんだけどなー」
「……艦娘を指揮する提督のことですね？不味いですね、それは」
「そうなの？」
「ええ、提督は先天的な適合率がないものにはなれませんから。現在、深海棲艦に対抗出来るのは艦娘、そしてそれを指揮する者を提督と言います。言わば提督は要人の類です」
「……へぇ、要人なら無抵抗な女を殴っても許されるのか」
「……成る程、そう言う事ですか」

そう言って、息子さんは背中のダンビラを構えた。
「新台さんが見たのは、所謂ブラック鎮守府と言うものでしょう。聞けば、女子供である艦娘達に酷い扱いをしているとか。そんな奴らには、日の本の男児を名乗る資格はありません。……加勢します、新台さん。逃げて下さい」
やだ、カッコイイ。女だったら惚れてる。

だが俺は、今にも憲兵に飛びかからんとしている息子さんのダンビラを押さえる。
「やめなよ、桃さんに迷惑がかかっちまう」
「しかし……！」
「なーに、マジでヤバくなりゃ尻尾巻いて逃げるさ。それに、これ以上桃さんに借りは作れねえよ」
俺は両手を上げ、憲兵に言う。
「おーい、降参だ、降参。捕まってやるよー。あ、この青年は関係ないよ、道を聞いてただけだ」
「……良いだろう。オイ！早く拘束しろ!!」
すると、あっという間にまるで凶悪犯か何かみたいにぐるぐる巻きにされ、ごっつい護送車にぶち込まれた。

「×××……俺と親父だって、貴方に借りがあるんですよ、新台さん……！」
×××最後に聞いたのは、息子さんの悔しそうな呟きだった。
×××
「×××……きろ」
「×××起きろ！」
「×××イ！起きろ!!」
×××
「んあー!!なーんだよもー!!うるせーな!!」
「貴様ぁ、どういう神経をしている?!どうしてこの状況で居眠りなん

てできるんだ?!!」
「俺くらいの一流の旅人なら、いついかなるところでも寝れるんだよ」
　因みに、今の俺は拘束服を着せられて、その上から黒革のベルトでしっかりと椅子に固定されている。そして、頭には麻袋を被せられている。拘束服って厚手であったかいから眠くなるんだよね。
「訳の分からんことを……!」
「まあ、このくらいなら稀によくあるよ。モスクワの刑務所よりは悪いが、グルジアとベネズエラよりかはマシだな。待遇が」
　いやー、グルジアとベネズエラはキツかった。誤認逮捕だったせいか、一月くらいで出れたけど。モスクワではスパイの知り合いに会ったっけ。
「減らず口を!!」
　そのとき、急に偉そうな声が響いた。
「……もういい、退がれ」
「はっ!」
　喧しい方が退がると、偉そうな方が俺に話かけてきた。意識を集中すると、自分が広い部屋の中にいて、複数人に囲まれていることが分かった。
「……こんにちは、新台真央君。さて、君は自発的に逮捕された様だが、勿論、逮捕された理由は分かっているね?」
「あ、お茶くれない?」
「貴様!恐れ多くも元帥閣下の前で!!」
「よい、退がれ。二度は言わん」
「は、はっ!申し訳ございません!!」
「はっはっは、中々に肝が据わった男だな、君は」
「まあ、肝が据わっていなければ、あれだけのことは出来ますまい」
「或いは、ただ考える頭のない愚か者か、ですな」
　オイオイオイ、偉そうな声が増えたわ。
「どちらにせよ、結果は変わらん。君は、現在、国防の要である艦娘を唯一制御できる存在、提督を一人再起不能にした。この罪の重さは分かるだろう?」

「そして君が暴行した提督は、この海軍の幹部の一人、阿志岐大将の一人息子だ」
「つまり、君は、」
その時、俺のポケットに入っている携帯電話が震えた。きっと知り合いだろう、電話先の相手を待たせるのは悪いので、少々お行儀がよろしくないが、拘束服と拘束具を引き裂いて、ポケットから電話を取り出した。あと、話辛いので、頭の麻袋も取った。
「ごめん、ちょっと待って、電話かかってきた……。あー、もしもし、息子さん？どうしたの？え？大丈夫かって？いや、お茶頼んだのに一向に出てこないなーってくらいで。何？うん、はいはい、あー、悪いね、なんか。いやー、また借りが出来ちゃったなー。うんうん、はい、ありがとねー、じゃ、また。……あっ、ごめんごめん、続きどうぞ？」

「……う、撃てい!!」

なんか撃たれた。怖っ。当たっても死にはしないが、つい癖で迫る銃弾をブロッキング、威力を完全に殺す。
「オイオイオイ、危ねえな」
「馬鹿な!!」
「防いだだと?!!」
「ありえん！あの報告は本当だったと言うのか?!!」
何をそんなに驚いているのか理解不能状態。ただの銃弾なんてその気になればいくらでも防げるじゃん。
その時、部屋の片隅にある、黒電話が鳴り響く。
「……」
が、誰も出ない。
「誰か出てやれよ」
が、誰も出ない。
「……化け物め……!!」
などと、シリアスな雰囲気を出しているが、電話に出ない。
もうしょうがないので、俺が出ることにした。拘束具？ああ、スク

ラップになったよ。
「はい、もしもし」
『……遅い!!』
「ゲェーーーッ!!!そ、その声は!!も、桃さん!!」
『ん？新台か？何故お前が出たんだ？ここは海軍本部ではないのか？』
「さ、さぁ、俺はここに連れてこられただけなもんでして。何の説明もされてません、何も知りません、悪いことしてません」
『ほう、ではこの提督に暴行をした男、新台真央を逮捕、と言う報告は虚偽だと？』
「……いや、し、知らない系のやつです、はい」
『……はぁ、直ぐにバレる嘘を吐くな。詳しくは獅子丸から聞いている。さあ、元帥殿と代わってくれ』
「は、はーい、分かりましたー！オイゴラァ！元帥殿とか言うやつ!!電話代われ!!」
「なっ、何を、」
「早くしろ！死ぬぞ!!（俺が）」
「お、脅すつもりか?!」
「どうなっても知らんぞー!!」
　桃さんは怖い。それはもう怖い。桃さんの友人も怖い。何が怖いって、馬鹿みたいに強いのだ。特に、気功の扱いは俺の何枚どころか何十枚も上手なんじゃないかな？そして、軍国時代並の根性論で不可能を可能にするから始末に負えない。
「わ、分かった、代わろう、代わるからやめてくれ！……も、もしもし、私だ」
『もしもし、元帥殿か？私だ』
「あ、貴方は、剣総理！な、何の御用でしょうかな？」
『端的に言おう、その男の処遇についてだ。処刑は許さん。まず、提督の適性検査を行え。その結果を見てから、今後の処遇を決めろ』
「きゅ、急に何を仰る？貴方の命令にはいつも根拠がない！第一、何の権限があって、」

『防衛庁長官からの要請もある』
「な、何ですと?!この男は一体何者なのですか?!」
『……知り合いだ。兎に角、検査を行え、いいな』
桃さんってば、一方的に電話を切ったみたいだ。あの人、歳をとる毎に塾長に似てきてないか?
「……適性検査装置を」
「はっ?」
「適性検査装置を持ってこい!!命令だ!!」
「はっ、はっ、了解しました!」
「あ、ついでにお茶お願い」
「わ、分かった、分かったから暴れないでくれ」
×何だよ、人をB・O・W・みたいに。
×
×こいつ、爽健美茶買ってきやがった、信じられねぇ!急須で出せや!!せめて伊右衛門にしろや!!!
×まあ、予め言っておかなかった俺が悪いか。次からは急須で淹れてもらおう。
×そんなこんなで、俺は今、ガイガーカウンターみたいな機械で何かを計られてる。俺から放射能は出てないと思うぞ?
が、機械は、けたたましい音を上げると、小さな爆発音と共にスクラップになった。
「えっ、嘘、放射能出てたの?!」
「適合率測定不能だと?!」
「ありえん!!何かの間違いだ!!」
大騒ぎである。
お偉いさん達は難しい話をし始めるし、もう俺要らないんじゃないかな?帰りたいんだけど。
「いや、先程銃弾を防いだのも、妖精さんの力では?」
「これ程の適合率なら有り得るかもしれん、まだ仮定だが」
「しかし、危険過ぎる!」
「総理子飼いの者だろう、少なくとも損はしない!!」

「制御しきれるか？」
「いつもの手を使え！それにマスコミやネットは掌握済だ、最悪、大衆を利用すれば良い！」
白熱する議論、眠くなる俺。
俺の眠気が限界ラインに差し掛かる前に、元帥殿とか言う奴が俺に言った。
「では、明日から、君は特務大佐として、黒井鎮守府の提督になってもらう!!」
「えー」
「ふっ、新台君、確か君には妹がいたね？命令に従わないのは自由だが、その場合、妹さんの身の安全は保障できないな」
あっ、何だろうこれ、人質とかそう言うのだ。しかし、妹にどうこう出来るほどの力がこの連中にあるのだろうか？あの子はラップトップ一つで原子力空母を掌握するような、桃さん達とは別ベクトルの化け物だぞ？まあ、身体能力は小学生並みだし、万が一って事もあるだろうから、言う事聞いておくか。
「はーい」
「くっくっくっ、よろしい。我が国の為に全力で働いてくれ給えよ」
ん？あれ？俺、もしかして、就職先決まった？

6話　働きたくない

「ヒェー！働きたくない!!働きたくないよー!!!」

アルバイトならまだしも、定職に就くのはごめんだ。デメリットしかないもん。態々ちゃんと働かなくても、知り合いのヒーローみたいに女の子のヒモになったり、野山や海、川などの自然の中で生きれば、別に食うのには困らない。

「しかもこの勤務先の黒井鎮守府って、この前榛名ちゃんを送ってきたところじゃねーか!!出戻りとかかっこ悪いじゃんよー!!」

折角、旅人さんはクールに去るぜ、と言い残して帰ったのに、また行ったらいかんでしょ。

正直、妹の首根っこ捕まえて国外逃亡するつもりだったが、あのあと桃さんや教授を始めとする、所謂人格者の知り合いから一斉に就職おめでとうの電話とメールが来た。

チキショー、逃げ道を完全に塞がれた。ここで逃げたら殺されるんじゃないか俺？殺されるだろうな。いかん、泣きそうだ。

「くっ、ウゥ、ァァあ、働きたくない……！ウェェェン!!」

泣いた。八割くらい。そのまま俺は、黒井鎮守府へ向かった。

×××

提督がいなくなって二日が過ぎた。

私達、黒井鎮守府の艦娘は、束の間の休息を得た様に見えるが、実際は、いつまた提督が戻ってくるか、気が気じゃなくて、休めずにいる。

同室のお姉さま達も同じみたいで、皆、思う様に休めず、与えられた戦艦の部屋と言う名の倉庫で日がな一日座り込んでいる。

そんな中、ふと、この前に会った旅人さんのことを思い出した私は、正門を見ようと、部屋の外に向かった。

提督が言うには、私達が決して出ることのできない正門を惨めったらしく見つめる姿は、滑稽で良い、らしい。

「……榛名、また、正門を見に行くんデスか？」

「はい、今の所、提督もいらっしゃいませんし」
「……いつ、また戻って来るか分かりませンよ？だから、なるべく早く戻った方が良いネー」
心配してくれた金剛お姉さまに、一言お礼を言って、私は正門に向かった。

正門の前には、先日目を覚ました、駆逐艦の時雨ちゃんがいた。
「あ、榛名さん。おはようございます」
「おはようございます、時雨ちゃん。
怪我はもう大丈夫なんですか？」
「はは、あれくらい、いつものことじゃないか。今更、だよ」
「……そう、ですね」
確かに、気を失うほど酷い目に遭うことは何度か経験している。
「そ、そういえば、私達を助けてくれた、旅人さんの話なんですけど、」
あまり辛いことを思い出させるのも悪いので、努めて明るい話をしようとする。
「ああ、あの人のことかい？実はあんまり覚えてないんだ。でも、綺麗な「白」を見たのは印象に残っているよ」
「はい、綺麗な白髪の方でしたよ！その旅人さんが言っていたんですけど……」
私は、旅人さんの話をし始めた。少しでも皆んなに明るくなって欲しい。そうすれば、きっと、いつかは……。
「……って言う話をしてくれて……、とっても不思議で、面白い人でしたよ」
「へえ、それは面白いね。もっとも、話の続きは聞けそうにないけど……」
そう言って、時雨ちゃんは「首輪」に触れ、正門に目を向け、悲しそうな顔をした。
固く閉ざされた正門は、艦娘としての力を使えば簡単に壊せるが、この提督に付けられた「首輪」がある以上、近づくことらすらできないものだった。

この漆黒の「首輪」は、私達艦娘の力を提督の意思一つで抑えこみ、尚且つ発信器を埋め込まれた、私達にとっての「呪い」だ。艦娘の力を封じられれば、艤装も身体も満足に動かせず、動くことすらままならなくなる。

そして、この首輪の発信器は、門に近づくと警報を鳴らし、私達の逃亡を防いでいる。もしも警報が鳴ろうものなら、例え間違いであっても、全員が罰せられるのだ。

「これがある以上、僕達は恩人にお礼を言うことすら許されないんだろうね……」

……「うぇぇぇん！」

ふと、近くから泣き声が聞こえる。

「!!、泣かないでください、時雨ちゃん！」

時雨ちゃんが泣くところなんて見たことがない。ここまで追い詰められていたのか、と思い咄嗟に声をかけた。

「……僕じゃないよ？」

「あれ？」

見ると、時雨ちゃんは悲しそうな顔をしているが、泣いている訳ではなかった。

「じゃあ、さっきのは？」

「聞き間違いじゃないかな？」

……「うぇぇぇん!!」

「ほら、確かに聞こえましたよ？」

「で、でもこの辺りには僕と榛名さん以外は……」

「じゃあ、一体誰が「わぁぁぁん!!働きたくないよぉぉぉ!!」……え？」

「ぐす、ひっぐ、うう、うぇぇぇん!!働きたくないよぉ!!まだまだフラフラ旅してたいよぉ!!国外逃亡したいよぉ!!うわぁぁぁん!!」

た、旅人さんだ?!何故ここに?!そもそもどうやって侵入を?!

「た、旅人さん?!どうしてここに?!というか、大丈夫ですか?!どこか痛いんですか?!」

「か、彼が旅人さんかい？その、確かに、かなり、不思議な人だね？」

「ああ、榛名ちゃんとあの時の子か……、俺、就職先が決まっちゃった

んだ」
「は、はあ、それは、おめでとうございます？」
「目出度くねーよ!!目出度くねーんですよー!!あああ働きたくないいいい!!」
　め、めでたくないんでしょうか？よくわからないですけど、慰めてあげなくては。
「え、えっと、そう気を落とさないで下さい！就職先で面白いことがあるかもしれませんよ？」
「……そうかなぁ？」
「はい、きっとそうです！旅人さんなら、大丈夫です!!」
「そっかぁ、そうだなぁ。いい加減観念するかぁ。少なくとも、榛名ちゃんとならうまくやっていけそうだし」
「えっ？どういうことですか？」
「ああ、今日から俺、ここで提督やることになったから。よろしくね、榛名ちゃん。あ、あと君もよろしく」
「「……え？」」
「取り敢えずごはんにしようよ、泣いたらお腹減ったわ。何がいい？」
「「……えっ？」」
「えっ、じゃないが？」

「「えええええええ?!!」」
「何？どうしたの？」
「た、旅人さんが、提督に?!」
「いや、そんな、だってここには、既に提督が」
「んー、なんかねー、前の提督が駄目になったんだってー。だから、その代わりに俺が、元帥殿？とか言う奴から適性がどうこうとか言われてさー、来たんだよー」
　適性……、提督への適性のことでしょうか？この話が本当なら、大本営からの指令書があるはず……。
「あの、旅人さん、指令書はお持ちですか？」
「指令書？これ？」

そう言うと、旅人さんは、どこからともなくＡ４サイズの折りたたまれていない指令書を取り出し、私に差し出した。
「……い、今どこから紙を？」
「トップシークレットです」
「だ、だって、懐から急に書類が」
「トップシークレットです」
「あ、ああ！どこからともなくテーブルとまな板を?!お米に、お肉、人参、じゃがいも、玉ねぎ……か、カレー?!!カレーなのかい?!!」
「カレーです」
時雨ちゃんと旅人さんがお話している間に、私は指令書を読んだ。結果、この書類が大本営からの正式な指令書で、阿志岐提督の全権を新しい提督、新台真央に譲渡する、と言うことが分かった。海軍元帥の直接のサインもある。
「こ、これっ、本物です！本当に提督が旅人さんになるそうです!!」
「いや、それどころじゃないよ榛名さん！この人、いきなり大鍋でカレーを作り始めたよ?!!一体どこにこんなものを?!!」
「やっと、やっと解放されるんですね、私達!!」
「榛名さん！僕の話を聞いてよ!!あっ、凄く美味しそうな匂いする?!!榛名さん?!榛名さーん?!!」

7話　本格的なインドカレーのお店は美味しいしサービスもいい

「えっと、僕ももらって良かったのかい？」
「良いの、良いの。大体こんな量、一人で全部なんて無理でしょ？辛さは控えめにしといたから、食べて、どうぞ」
「そ、それじゃあ、いただきます……、こ、これは！美味しい、美味しいよ！」
「フフフ、当然よ！ほーら、牛乳もあるぞー！」
　俺、黒井鎮守府の中庭でカレーを作ってます。提督の仕事できてるなこりゃ。完璧だわ。
「ほーら、さっきからそこら辺に隠れてる君達？カレー、食べりゅ？」
「……だ、誰ですか？」
「あ、あまり近寄っちゃ駄目だ、新しい憲兵かも」
「……いい匂い、なのです」
　うーん、警戒されてる。女の子にはモテる方だと思ってんだけどなぁ。
「えーとね、ここの新しい提督の、新台真央だよー！よっろしくぅ！」
　明るく振る舞う。笑顔は大事。
「えっ、あ、新しいって？」
「前の提督は、ほら、アレだ、一身上の都合で引退したよ、うん。まあほら、いなくなった人のことは忘れて、ごはん食べましょ？ね？」
　餌付けである。今姿を見せた子達はどうやら（見た目は）子供だ。多分いける。
「あっ、カレー！」
「おー、確か海軍じゃ、金曜日はカレーなんだろ？これから毎週、カレーを作ろうぜ？」
　懐からテーブルと椅子を出し、カレーを配膳。
「わぁ……！」
「わ、罠とかかな？もしかして毒が入ってるとか？」

「でも、あの人も時雨も同じものを食べてるわよ？」
「うめ、うめ、うめ」
「引くほど沢山食べてるのです……」
「早く食べないと冷めるよ？あとデザートはこんなこともあろうかと量産しておいたプリンだから。カレー食べたら出すよ」
「「「……プリン！」」」
プリンが勝利の鍵だったか。前日に量産しておいて良かったな。本当は知り合いに配り歩く予定だったが。
「ほ、本当に食べても良いの？」
「うん、このやり取り飽きるくらいやったよ？食べて？料理には自信あるから！例の新聞記者にも文句は言わせないぜ？」
「（新聞記者？）そ、それじゃあ、い、いただきます」
「お、美味しいのです！」
「これは、中々だな」
「はむっ、はふはふ、はふっ！」
「暁、もっと落ち着いて食べて？」
「はっはっはっ、お代わりもいいぞ！」
何てことをやってると、匂いにつられたのか、鎮守府の中からどんどん人が出てきた。
全員で５０人くらいか？カレーを追加して、ブルーシートを敷いて、仮設テントを張らせねば。ちょっとした炊き出しだよね、これ。何故か恐縮したり、警戒したりする皆んなに「まあまあ、カレーどうぞ」と勧めて回ると、終わった頃にはもう昼過ぎ。お腹もいっぱいだし、もう眠い。そう言えば、俺、提督だったわ。と言うことは、お昼休みを伸ばせるのでは？
悪巧みをする俺に、対魔忍みたいな格好の黒髪の子が尋ねてきた。
「その、まともな食事をさせてくれたことには感謝するが、貴方は一体何者なんだ？この鎮守府には提督と憲兵以外は進入できないはずだが？」
「なんだかんだと聞かれたら、答えてやるのが世の情け。俺の名は新台真央！ラブリーチャーミーな元旅人の提督さ！なんか知らんけど

ここで提督をやることになったから、よろしくな!!」
「なっ、何?!!提督だと?!!」
「あと、これから三時くらいまでお昼寝タイムな！提督命令だからこれ!!おやつは餅と小豆が余ってるのでぜんざいになります。よしなに」
「待て、寝るな！どう言う意味だ！私に分かるように説明しろ!!」
「素晴らしいことだよ」
　眠い、もうだめだ、寝る。こんないい天気でお腹もいっぱいなら寝るでしょ、常識的に考えて。
「クソッ、話が通じん!!どうした榛名、その書類は？何、大本営の？……確かに、分かった。そういうことか……。では、本当に貴方がこの新しい提督……、ね、寝てる！」
「わぁ、ＺＺＺの文字が宙に浮いてますよ?!あからさまに寝てるって感じです！」
「ん？なんだ、このメモは？何々？『三時くらいになったら起こしてね。それまでは皆お昼寝タイム。そこの毛布は好きに使っていいよ。おやすみ。』だと？」
「そう言えば、私、こんなに食べたのは初めてで、眠くなってきちゃいました……、長門さん、私も少しおやすみしますね」
　ＺＺＺ……。
「お、おい、榛名？お、怒られるぞ？」
「大丈夫ですよ！提督は今、「休め」と命令したじゃないですか！」
「しかしだな……」
「……この人は、見ず知らずの行き倒れだった私を拾って、見ず知らずの艦娘の為に戦って、そして鎮守府まで送ってくれるような優しい人です。いきなりのことで皆んな驚いてるかもしれませんけど、信用はできると思います」
　ＺＺＺ……。
「成る程、この男が木曾の言っていた……。相当な益荒男らしいな。良いだろう。「休め」との命令、確かに承った。皆んな!!聞いた通りだ!!三時まで全員「休め」!!」

ん？何か大きい声がしたな、三時かな？
「ふぁあ、もう三時？」
「あっ、お、起こしてしまったか、すまない！責任はこの私にある、叱責するならば私を！」
「そっか、じゃあ、えっと、罰として……ＺＺＺ」
「提督？罰として、何を……、ね、寝てる！」
×
何なのだ?!この男は?!行動の原理が全く読めん！
そして、私は何をされるのだ?!罰として何だ？また、殴られるのか？分からん、何をされるのか全く分からん。
榛名に聞いてみるか？あっ、駄目だ、寝てる！
では時雨に、あっ、こっちも寝てる！というより、駆逐艦は全滅だ!!
ならば木曾に聞くか、木曾は、あっ、毛布にくるまってる！寝るつもりか！
「ちょ、ちょっと待ってくれ、木曾！その、私は、罰として何をされるんだ?!」
「……ん？長門か。知らん」
「知らんて、いや、その、予想できる限りで良いんだ、何をされるのか考えてみてくれ！」
「……うむ、分からん」
「そ、そこを何とか！何をされるのか皆目検討もつかん!!」
「冗談抜きで本当に分からん。あの男は俺達の常識の外側にいるからな。まあ、案外、起きた頃には忘れてるんじゃないか？」
「だ、だが、お前の話だと、謎の光で前提督を倒したとか。はっ?!も、もしかしたら呪い師の類いで、呪いをかけられるのでは?!」
そ、そしてお化けに取り憑かれたりとか?!いかん、考えれば考えるほど怖くなってきた！
「……あー、そうか。お前はそうだったな。まあ、お前が思っているようなことは起きんよ、多分」
「な、何のことだ？こ、この長門、決して、おおお化けがここ怖い

なんてことは」
「お、おう、そうか。良かったら手でも握っていてやろうか？」
「なっ、何だと！この長門を愚弄するな！」
「あ、ああ、すまん。（思いっきり握ってきた。凄く震えてるし。）」
　こここここのビッグセブンと謳われた長門が怖いなんてことは決してないのだ。

「あら？どうしたの長門？」
「!!、む、陸奥か！い、いやぁ、木曾が怖くて眠れんと言うからな！手を握ってやっているところだ!!」
「……あー、そうなの。あっ、じゃあ、私もなんだか怖くなってきたから、長門の隣で休んでも良いかしら？」
　た、助かる！ありがとう陸奥！
「は、ははは、陸奥は怖がりだなぁ！わ、私の隣で寝ると良い！で、出来るだけ近づいて！」
「はいはい、貴女は疲れを溜め込みやすいんだから、休めるときに休んでおきなさい、ね？」
「あ、ああ、そうだな！」
　なんて出来た妹なんだ！この長門、感動したぞ!!て、提督なんて怖くないんだからな!!た、例えお化けを出そうと、私は絶対に屈しない!!

８話　現代社会の闇

午後六時ごろ。
所謂定時、と言う時間で、世の中の真面目に働く人々が愛する家族の元へ帰る（はずの）時間帯。

「む～りぃ～!!定時だもん！お仕事おしまいの時間だもん!!旅人はお家に帰りま、いや、俺、家なかったわ」
「すまないが、この鎮守府に定時という概念はない」
そう返すのは、対魔忍みたいな格好の美女、長門さんだ。俺は今、長門さんに連れられて、鎮守府の案内をされている。
「なん……だと……？」
「２４：００までは勤務時間だ、表向きは」
「……は？」
「まあ、２４：００で仕事が終わったことはないがな。皆、夜通し戦っているよ」
「……ふっ、ふざけ、ふざけないで！そんなの仕事じゃないわ！ただの拷問よ!!」
「まあ、提督はいつ休もうが自由だがな。我々はただの道具だよ、時間がどうとか、気にする必要はない」
と、自嘲する長門さん。先ほどのおやつタイムで生き生きとぜんざいをお代わりしていた時と打って変わって、どこか諦めたような顔をしている。
「長門さん、向こう一週間ほどお休みにしちゃダメ？提督権限でできないの？」
「無理だな、大本営から叱られる」
「……叱られるだけ？」
「……まあ、良くは分からないが、減給とか、降格とか、そういったペナルティがあるだろうな、それに、深海棲艦が攻め入ればお休みどころじゃない」
成る程、減給や降格は怖くないが、深海棲艦（なんか化け物らしい）

が攻めてくるのは不味いな。お休みなので、防衛する人が居ませんとは言えないだろう。一応軍隊らしいし。
「うーん、でも、何とかして休みにしたい……、休みにしたくない？」
「……何だ、何故そうまでして休ませたい？私達への同情か？」
少し、怒ったような顔をする長門さん。おやつタイムに駆逐艦の小さい子達に混ざってぜんざいをお代わりをしていた姿と違い、迫力がある。
「いや、そうじゃないよ。単に俺が心置き無く、普通に休みたいってだけで」
「……どういうことだ？休みたいなら休めばいい」
「だって、皆が頑張ってるのに、俺だけ休んでたら何か悪いだろ？普通はそう考えるだろ？」
「……普通、普通か。そうだな、それが普通なんだろう。だが、私達艦娘は生憎だが普通ではない。護国の為、果てるまで戦う、そうあれかしと望まれたもの、それが艦娘だ……。まあ、まともな食事ができただけで充分幸せだよ私も、妹も、な」
そう言う長門さんの表情は、幸せとはかけ離れているように感じた。ちなみに、妹の陸奥さんはおやつタイム後に「姉がいやしんぼでごめんなさいね」と態々謝りに来た。
「さて、ここが執務室だ。貴方の仕事場所になる。仕事の内容は艦隊の指揮と書類整理が主となってい、ぴゃあああああ!!」
長門さんが変な悲鳴をあげて尻もちをつく。
「どったの？」
「し、執務室に、お、お化け！ゆ、幽霊がいる!!」
まさかのガチビビリである。ビッグセブンとはなんだったのか、と思いつつ、執務室を覗く。
「あー、長門さん、あれ人だよ。幽霊じゃないね」
「そ、そうなのか？いやでも、あの雰囲気は……、！、もしかして、大淀、か？」
そう言うと、長門さんは恐る恐る執務室にいる人影を覗き見る。

「やっぱり、大淀だ！大淀じゃないか！何があった?!数ヶ月前と全然違うぞ!!」
「……あ、お仕事ですか……。そこに置いて下さい、直ぐにやります……」
髪はボサボサ、瞳は死んでる、しかし手元はずっと動いている。現代社会の闇そのものみたいになっているこの大淀と言う子は、長門の声が聞こえていない様子だ。
「大淀！仕事じゃないぞ！新しい提督が着任したんだ、挨拶をしろ」
長門さんが呼びかけるが、
「……はい、お仕事ですね。分かりました今やります」
と、取り付く島もない。
「……ねえ、長門さん？この子ヤバイよ？目が真っ暗だよ？」
「ええい！大淀!!私だ、長門だ!!」
長門さんが大淀さんの肩を掴んで強引にこちらを向ける。
すると、大淀さんはペンを置いた。
「大淀、大丈夫か？」
「……はい、長門さんはこれから六回の出撃があります。任務の内容は……」
「だ、駄目だ、完全に仕事モードだ」
「うーん、これはいかんでしょ。……当て身！」
「あぐっ」
「お、おい！大淀に何を?!」
「いやこれ、これは休まなきゃ駄目だろ？意思疎通が取れないレベルは不味いよ」
「まあ、それはそうだが……」
「取り敢えずこの趣味の悪いソファに寝かせとくか」
全体的に成金っぽいてか趣味の悪いこの執務室のソファに大淀さんを寝かせる。軽い！めっちゃくちゃ軽い!!ほぼ骨だぞこれじゃ！
「……さて、長門さん？」
「……何だ？」
「ここに今日付の書類が沢山ある訳ですが」

「……ああ、そうだな」
「こ、今夜は寝かせないぞ??」
×そう言って俺は、長門さんに山盛りの書類の半分を押し付ける。
「か、勘弁してくれぇ……」
×ごめんな、俺、仕事チートはないんや。
×
×
×
×
「……はっ?!わ、私、寝ちゃってた?!外も真っ暗?!ま、不味い、提督に殺されちゃう!!」
×しかも、最悪なのは、提督用のソファで寝ていたこと。わ、私、本当に殺されるかも……!
「しっ、仕事を、お仕事をしないと!!私がお仕事をしないと!皆の分まで!!」
私が酷い目に遭うのはもう良いが、私の仕事が不出来だと、皆んなの命に関わる。
フラフラの足取りで仕事机まで向かう。大分寝たせいか、少しは体力が回復したようだ。
「す、すみません提督!!今直ぐお仕事をしますから!!いくら殴って頂いても構いません!!ですから、お仕事を!お仕事をさせて下さい!!」

……「だーかーらー!!そこは違うってー、長門さーん!!」
……「む、そうなのか?す、すまない」
……「はい、こっちは終わったわよ、長門の分も回して頂戴?」
……「は、榛名はまだまだ大丈夫です!!」
……「無理するな、榛名。俺に回せ」
……「お昼寝をしたからね、夜も平気さ。さあ、次の仕事はどれだい?」

?、おかしい。いつまでたっても、怒鳴り声も、鉄拳制裁もない。
それに、何だか、仲間達の声が聞こえて……?

「あー、ごめんね、起こしちゃった？」
顔を上げると、見たことのない男性が私に声をかけてきた。
「へ？えっと？だ、誰ですか？」
「ν提督、もといＮＥＷ提督だよ、よろしく。仕事はなんだかんだで集まった皆んなでやることになったから、君は休んでなよ」
「……へ？えっと、どういう？」
は？え？私達の提督は、もっと歳をとっていて、乱暴で、髪が薄くて、背が低くて、太っていて、嫌な顔で……、あれ？
「大淀、ここは私が説明しよう！」
この艦隊の主力、長門さんが、困惑する私に指令書を見せながら説明してくれた。何でも、この人が新しい提督になったらしい。

私は、新しい提督を覗き見る。
歳は、見た目は二十代後半くらい。
髪は、よく手入れされた癖のある白髪、男の人からすると長いが、女の人からすると短いくらい。
身長は、艦隊で一番大きい長門さんより、一回り大きい。
身体は、良く鍛えられいることが服の上からでも分かる、均整の取れたものだ。
顔は、男性的で、鼻が高く、少し彫りが深い。言うなれば美丈夫だ。
そして何より、
「ん？まだ休んでなかったの？書類は大丈夫だよ、何せ６人もいるんだし。この調子だと朝までには終わるし、大淀さんは休むといい」
戦うことのできない、出来損ないの私にも、優しい言葉をくれた。
「わ、私、私は、」
涙が、溢れてくる。
そして、提督は、優しく微笑み、私のことを撫でながらこう言った。
「嫌なことがあったなら、泣きなよ。仕事もストレスも、溜めずに吐き出すのが一番ってな！」

×私は、それを聞いて、提督の胸で泣いた。まるで、子供の様に。提督は、私が泣き止むまでずっと、私を優しく撫でてくれていた。まるで×父親の様に……。

×
×
×
×

「……ごめんなさい、提督。私ったら、見苦しいところを……」

「なーに、構わんよ。いいから休みな、ホラホラホラホラ」

「いえ、目が覚めちゃったことですし、私もお手伝いします！」

うーん、こういうワーカホリックさんに急に働くのをやめろって言っても駄目なんだよなぁ。徐々に減らしていくしかないか。

「んー、じゃ、ちょっとだけ手伝ってもらおうかな？でも、辛くなったら直ぐに休むんだよ？あっ、そうだ、夜食食べたくなったから、パパッと作ってくるね。」

「はいっ！」

そう言って、大淀さんは、ヨロヨロと仕事机に向かっていく。……本当に大丈夫か、アレ？

……「おお、大淀、大丈夫なのか？」

……「あら、久しぶりね」

……「こんばんは、大淀さん！」

……「ん、大淀か。休んでていいんだぞ？」

……「そうだよ。仕事は僕達が頑張るから」

……「皆さん……！お久しぶりです！心配しないで下さい！大淀、復活です!!」

んー、まあ、あの調子なら大丈夫か。さーて、昼に残った餡子と、カスタードと……たい焼きの出来上がり、っと。

「おーい、夜食出来たぞー！小休止入れよう!!小休止!!」

9話　オリョクルはいやでち

「あああああ!!!おーわった!!もう二度とやらねぇ!!」
　昨日の夜から、この鎮守府の溜まりに溜まった書類を処理していた俺と艦娘の皆さん。お外はもう明るくなってきている。
「ふぅ、これで溜まっていた分はどうにかなったな」
「戦闘ならまだしも、書類仕事で徹夜したのは初めてよ」
　と、あんまり役に立たなかった長門さんと、長門さんの分まで働いた陸奥さんが言う。
「……榛名は……大丈夫……です……」
「……雨は……いつか……止むさ……」
「はー、終わったか、予定より早いな。助かったぞ、大淀」
「はい、皆さんお疲れ様でした！」
　書類仕事お手伝い勢も、満身創痍と言ったところかな？
「はーい、解散！もう、（仕事は）やめにしませんか？皆んな疲れたよね？休んで、どうぞ」
　当たり前だ。流石に徹夜の後にまた働くなんてあってはならない。
「……何を言っている？本日の業務はこれからだぞ？」
「……は？」
「見ろ、０５：００、業務の開始時間だ」
「……あ、あああ、うわあああああああああああ!!!!」

　膝から崩れ落ちた俺。が、長門さんは我関せずと言った様子で、さっさと出撃してしまった。
　その際、長門さんは、木曾ちゃんに大本営からの提督変更のお知らせの書類を渡すと、潜水艦の部屋まで案内してやれ、と言っていた。何でも、顔合わせは早めにしておけ、だとか。

それを了承した木曾ちゃんは、俺についてこい、と言って、鎮守府の奥へと歩き出した。

「……ねえ、木曾ちゃん？」
「何だ？」
「……このへんって倉庫じゃないの？道、間違えてない？」
「いや、間違えていない。ここらが、俺達の部屋だ」
「ウッソだろお前！」
「いや、本当だか？お前がどう思っているかは分からんが、艦娘は兵器で、道具だ。「倉庫にしまう」ことの何がおかしい？」
この人達、頭おかしい……！常識が息してない！ここでは常識に囚われてはいけないとかっていうジンクスでもあるの？そんなの、知り合いの２Ｐカラー巫女だけで充分だよ!!
「そ、それは違うよ！常識的に考えて、女の子を倉庫にしまうかよ?!」
「……それはお前の常識であって、ここの常識ではないだろう。ほら、着いたぞ、潜水艦の部屋だ」
そして辿り着いたこの部屋。
まず廊下。窓はひび割れ、壁は朽ち、床は腐っている。ホラーゲームかな？
部屋の中は、立て付けの悪い扉、打ちっ放しのコンクリートの壁に、埃の積もった床。廃墟かな？
そして、部屋の片隅。ボロボロのスク水の女の子が４人。震えながら、オリョクルがどうとか呟いてる。イメクラかな？

「オリョクルはいやでちオリョクルはいやでちオリョクルはいやでちオリョクルはいやでちオリョクルはいやでちオリョクルはいやでちオリョクルはいやでちオリョクルはいやでちオリョクルはいやでち……」

違った、イメクラじゃねえ、社畜だ。

「ねえ、木曾ちゃん。アレ、大丈夫だと思う？」
「……大丈夫ではないが、いつものことだ」
大丈夫じゃない、問題だ。
「……え、酷くない？（疲労が）」
「潜水艦は、艦隊運用の要の一つ、燃料を拾得する仕事があるからな。恐らく、この鎮守府で最も忙しい艦娘だろう」

「ん？燃料？燃料って石油でいい？」
がこん、という音と共に、ドラム缶一杯の石油を懐から取り出した。
「あ、ああ、これだけあれば、艦隊の出撃一回分くらいにはなるな」
「じゃあ、伝手があるわ。あとで連絡しとく」
と言う訳で、潜水艦お休み券を書く。
燃料が手に入る以上、潜水艦の子達を酷使しちゃいかんでしょ。
「あの子達も休まなきゃならないやつだよ？大淀ちゃんと同じだ」
そして俺は、モップに箒、掃除機に雑巾と、掃除用品を出す。物は大切にしなきゃな。例え、建物でも。だから、こうして整備されてない建物は気にくわないのだ。
「……おい、今度は何をするつもりだ？」
×
×
「いやいや、ちょっとお手伝いをね！さてと、じゃ、一丁行きますか！」
×
×
×

でも、逃げることは許されない。
仮に、逃げたとして、どこへ？艦娘という化け物がどこへ逃げる？誰が受け入れてくれる？私が逃げたら皆んなはどうなる？私は、ゴーヤは、……どうすればいいの？

「あ、ポイーッと！」

その時、聞いたことのない声と共に、私達は部屋から廊下に放り出された。
「「「?!!、きゃあああ?!!」」」
じ、地面にぶつかる！と、思ったが、何故か廊下にはクッションが沢山あり、それが緩衝材となって怪我はしなかった。
見ると、手元には、「潜水艦は本日お休みです。（提督）」と書かれた紙切れが握らされていた。

り、理解が追いつかないでち。
見ると、聞いたことのない声の主である白髪の男の人は、
「まあ、やるんなら本気でやろうかぁ！そっちの方が楽しいだろ?!!ハハハッ!!!」
などと言って、部屋の掃除を始めた。
あまりのスピードにもう声も出ない。
というか、誰でち？何で掃除を？あのキチガイじみたスピードは？どうしてあんなにテンションが高いの？
「おい、どうしたお前ら。怪我でもしたのか？」
フリーズする私達に木曾さんが声をかけてきた。
何とか再起動した私は、木曾さんに問いかける。
「き、木曾さん、あ、アレは何でち？」
「新しい提督だ」
「……？」
ちょっと何言ってるか分からないでち。提督はもっと怖くて、いつも怒ってるはず。あんな、別方向に怖い変な白髪じゃない。

そんな私に、木曾さんは書類を見せた。内容は、前提督は事実上の退役、代わりに、新台って人が提督になると書いてある。じゃあ、あの変なのが……？
「信じられんだろうが、事実だ。受け入れろ」
木曾さんは遠い目でそう言った。いやいやいやいや、受け入れろと言われても、普通に困るでち。
そうこうしている内に、部屋の掃除を終わらせた白髪は、またもや奇行に走った。
「なんか足んねえよなぁ、おい……、!!、おおお！無空波!!」
「「「ヒィィィ!!」」」
きゅ、急にパンチで壁に穴を!!な、何やってるんでちこの変質者!!
「建築基準法第二章第二十八条ェ……!!」
こ、この人頭おかしいでち!!
「あっ、あの、新しい提督さん？お、お部屋を壊されると、イク達、困るかなって……？」
イクがおずおずと言う。もう手遅れだと思うんでちけど。（名推理）
「ちゃうねん、こんな採光面積じゃ、建築基準法にふれるんや……。居室として認められないんや……。法律怖い、超怖い」
そう言いつつ、どこからか取り出した窓を壁の大穴に取り付け始める提督。そ、そんなに大きなもの、どこに持ってたの？
「？、えっと、窓がないと、ほーりついはんなの？」
「うん、有効採光面積が床面積の1／7無いと、その部屋には住んじゃならないんだよ」
イク、違うでち、もっと根本的なところに疑問を持つでち。
「じゃ、じゃあ、イク達捕まっちゃうの?!大変なの!!」
「そこに気付くとは、やはり天才か……。その天才さに免じて、ジュースを奢ってやろう」
「わーい!!」
ああ、駄目だ、イクじゃ太刀打ちできない。速攻で言いくるめられた。こ、ここは私がガツンと言わなきゃ！怖いけど!!

「な、何のつもりでち！新しい提督がゴーヤ達をどうするつもりなんでち?!どうせまたオリョクルでち!!部屋をリフォームしたところで、毎日毎時オリョクルに行くんだから、どうせ帰ってこれないでち!!意味が無いでち!!」

い、言ってやった、言ってやったでち!!

そしたら、窓を付け終わった提督が、だんだん近づいてきて……。

「な、殴るんなら殴るでち!!提督なんか怖くな……い……？」

……あれ？おかしい、撫で、られてる？

「……お休みだよ」

「……ふぇ？」

「オリョクルはお休みだ、今後は燃料を他所から買ってくるよ。取り敢えず、今日はゆっくり休みなよ」

お、お休、み？

お休みって何だったっけ？

「×……お休み？何でちか？それは？」

×

「×……もういい……！もう……休めっ……！休めっ……！」

×××

×××

×

あまりの社畜っぷりに全俺が泣いた。お休みの存在そのものを忘れるって何だよ。もうね、他人にお休みの概要について説明するのは初めてだよ。

まあ、お休みを知った潜水艦の子達は、泣いて喜んでたけど。

「ゴーヤ、嬉しいでち！オリョクルに行かなくても良いなんて初めてでち!!新しい提督さんに一生ついていくでち!!」

とのこと。なんかもう、不憫でならない。

まあ、何にせよ、

「さーて、俺もお休みだぁー!!」

休む。

「全く、凄いもんだな、お前は」
木曾ちゃんが俺を褒める。
「それほどでもない（謙虚）」
「いや、正直言って有難いよ。潜水艦の奴らには常々休んでほしいと思ってたからな」
「でも、木曾ちゃんもどうせ休んでないんでしょ？」
「俺なんかまだ良い方さ。さて、俺はこれから三十分の仮眠をとる。そのあとは２７：００まで出撃と遠征だ。じゃあな」
そう言って、木曾ちゃんは倉庫の一室のドアを開ける。

そこには、
潜水艦の子達と同じ、
窓のない廃墟があった。

「あは、あはははははは!!こっ、この程度、想定の範囲内だよォ!!!」
俺は、泣きながら掃除道具を取り出した。

１０話　石油のアルカナ

雷よ！新しい司令官が来てから二週間。毎日食事は美味しいし、おやつもあるし、お仕事も減ったし、とっても助かってるわ！書類仕事が増えたのはちょっと慣れなくて大変だけどね。

そんな司令官は、「手持ちの建材が無くなるまでは、劇的ビフォーアフターおじさんに殉じる」（？）とか言って、とんでもない早さで、私達の部屋を直したり、使われてなかった会議室を食堂に作り変えたり、遊戯室や酒保を作ったり、大忙しだったわ。

でも、そんな忙しい中でも、私達を見かけると声をかけてくれて、頭を撫でて、労ってくれたわ！新しい司令官はとーっても素敵な人よ!!今日は、毎日頑張ってるご褒美だって、お休みをもらったの！だから今日は、第六駆逐隊のみんなで遊戯室に行くの!!

ん？アレ？あそこの廊下にある白いのって……？

「あ！し、司令官!!」

「はわわ！真っ白に燃え尽きてるのです!!」

「さ、流石にこれは、心配だな」

「し、司令官!!死んじゃ駄目!!」

「あ、暁、そんなに揺らしちゃ……」

「……あぅぅ、だから知りませんって……。あかつき号からは飛び降りたって言ってるじゃないですか……。アンノウンとか知らないですよ……つーかクウガさん呼べよ……」

「良かった、いつも通りだわ!!」

「ん？司令官の背中にメモが……、なになに？『俺を起こさないでくれ、死ぬほど疲れてる』だって？」

「あわわ、い、今ので起こしちゃったかもしれないのです?!」

「……ＺＺＺ……」

「よかった、大丈夫みたいだ」

「相当疲れてるのね……起こさないであげましょう」

にしても、廊下で寝ちゃうなんて。せめて、毛布くらい持って来てあげなきゃ……。

その時、

「て、てててて、提督ーーー!!!たたたた大変ですーーー!!!」

最近仕事が激減して、完全復活した大淀さんが血相を変えて走って来た。

「しーっ！駄目よ、大淀さん！司令官は今、疲れて眠ってるのよ！」

「で、でも、それどころじゃないんです!!大変なんです！鎮守府始まって以来の危機なんです!!」

大慌ての大淀さん。こんな姿は初めてだ。きっと、本当に大変な事が起きたんだ！

「こ、この鎮守府に、暴徒が攻め入って来たんです!!」

「「「ええー!!!」」」

ぼ、暴徒?!!な、何で?!

「し、しかも、その暴徒達は、提督を呼んでこいと、名指しして!!」

「そ、それは……」

どういうことかしら？

「……あっ、し、司令官!!お、起こしちゃったのです?!ご、ごめんなさい!!」

ゆらり、と立ち上がる司令官。
「……きょんにちょわ!!（白目）」
「し、司令官ーーー!!!」
「はわわ！はわわわわ!!」
明らかに駄目なやつじゃない、これ!!
「し、司令官、大丈夫なのかい？」
「あぁ……いや、大丈夫……何ともない……」
「で、でも、ふらふらよ？」
「大丈夫だと言ってるだろうが!!」
「どこ見て言ってるの?!私はこっちよ司令官!!」
「ロケットブースターを、命令だ！」
「司令官!!正気に戻って!!司令官！司令官ーーー!!!」
×××
×××
×
ああ、いつ眠って、いつ起きたんだっけ、俺。なんかこの二週間、一睡もしてなかった気がするぞぉ？
あれれー？おかしーなー？
先々週、徹夜明けのテンションで、艦娘達の部屋を改装して、飯炊きして、風呂の掃除して、飯炊きして、食堂がないから作って……そのあとも、徹夜特有のハイテンションで色々と部屋を作って、作って、作ってあそぼ状態だったのは何となく覚えてるな。
ああ、あと、出撃の内容を、新海域への侵攻ではなく、防衛ラインの維持にするように指示したっけ。武勲とか要らんし。で、あとは、出撃や遠征の報告書は各自で書くようにしたんだよな。
さて、暴徒だったか？
まあ、大体予想はつくけど、奴らだろう。そもそも、呼んだの俺だし。
取り敢えず、正門に向かおうかね。

「旅人の兄貴はどこだー!!」
「ヒャッハー!!」
「新台の兄貴ーーー!!」

おー、おるわおるわ。
「ほ、本当に大丈夫なんですか?!」
大淀ちゃん、ビビってるな。
「おーーーい、出てこいやヘタレメット!!」

「な、何だとぉ?!だ、誰がヘタレだぁ?!!」
よし、来た来た。

「鎮守府にようこそ!歓迎しよう!盛大にな!!」

「さあ、大淀ちゃん。紹介しよう。こちら、株式会社世紀末の社長、ジャギと、その秘書のアンナさんだ」
「よ、よろしくおねがいしましゅ……」
どうした大淀ちゃん、顔が青いぞ?
という訳で、暴徒、株式会社世紀末の連中をこの前作った応接室(仮)に案内した。

「き、貴様ぁ、このアミバ様の存在を忘れるとは何事だぁ?!!」
「……え?何で来たの?お前呼んでねぇよ?」
「はん、決まっている、お前のことだ、この天才である俺の力が必要なのだろう?」
「お呼びじゃないんだよなぁ」
偽医者との会話に、ヘタレメットが割り込む。
「おい、マオ、それで、仕事ってのは何だ?」

「株式会社世紀末を呼んだんだ、一つしかねぇだろ？」
「まあ、そうだな。良いだろう、お前の為だ、格安でやってやる！」
「タダにはしてくれんのな」
「ふん、今後も定期的に卸すんだろ？タダになんてしたら商売上がったりだ！まあ、次からはウチのタンク車を寄越す。今日は顔を見せに来ただけのことよ」
「別にお前の顔なんて見たくねぇんだけども？」
「うるせぇ！社会人としての基本だろうが！」
　といって、慣れた手つきで名刺を渡してくるヘタレメット。似合わねーな、おい。
「じゃあまずその服をどうにかしろよ」
　革ジャンとトゲ付きプロテクターってなんだよお前。
「いつもはスーツだ」
「ウッソだろお前?!!」

　そして、資材倉庫前に移動した俺達は、ヘタレメットの活躍を見た。
「ヒ―ッヒヒ！ヒ―ッヒヒ！ヒ―ッヒヒ！

タダレロー!!……よし、良いぞ、こんなもんか?」
「大淀ちゃん、こんなもんでいい?」
「す、凄いです、これだけあれば一ヶ月、いえ、二ヶ月は保ちますよ!」
「はーい、オッケーでーす。モヒカン共は燃料を運び込んで、今すぐに」
「「ヒャッハー!!」」
そうすると、モヒカン共は生き生きと燃料を運び始める。

「大淀の姐御!ここでよろしいでしょうか!!」
「ヒィ!は、はい、大丈夫です、そこに置いて下さい」
「大淀の姐御!このドラム缶はこっちですかい?!」
「ひっ!いっ、いえ、出来ればあちらの方に……」
大淀ちゃんがモヒカンに囲まれてる。見た目に反して悪い奴じゃないし、大丈夫だろ。
そして俺は、一番でかくて重い燃料タンクを、ヘタレメットと偽医者と運ぶ。が、しかし、
「ぬうーっ!!お、重い!!」
「おいアミバ、お前、鍛え方が足りねえんじゃねえのか?」
「だ、黙れジャギ!!いいか、よく見ていろ?!俺が開発したこの新しい秘孔を突くと……ふはははは!更に強靭になった身体!!よし、これで問題ない!!」
すると、偽医者の上半身が肥大化し、強大な筋肉が上着を突き破る。
「うわっ、キモっ」
「き、キモいとは何だ!これはアミバ流北斗神拳の真髄の一つだぞ!!」
いやー、キツイっす。あ、大淀ちゃんが気絶した。仕事増やしやがってこの馬鹿。

夜。ぶっ倒れた大淀ちゃんは、アンナさんに介抱してもらい、俺達は全員、酒保（仮）で一杯やっている。前提督が溜め込んでいた酒が山程あるんだ、飲まなきゃ勿体無い。
ちなみに、酒保（仮）は艦娘にも公開している。聞く話だと、軽空母が入り浸ってるとか。
「よっしゃ、ビール！ビール!!冷えてるかー？」
「「ヒャッハー!!」」
と、俺達が酒保（仮）に入った瞬間、悲鳴が上がったのは気にするな！

「え、ええと、その、て、提督？そちらの方達は？」
酒保（仮）の管理を買って出てくれた、軽空母の鳳翔さんが問いかけてくる。
「ああ、こいつらは、これからこの鎮守府に燃料を卸すことになった、株式会社世紀末の連中だ。あ、悪いけど、ビールくれる？一番安いので良いから」
「は、はあ、分かりました」
「おい、客にそれはどうなんだ？」
「お前ら、どうせ酒の味なんざ分からんだろ」
「まあ、そうだな」
そうこうしている内に、鳳翔さんがビールを持ってきてくれた。瓶のビールを2ケースだ。
「おら、野郎共！酒だー!!」
「「ヒャッハー!!!!」」
このモヒカン共、ノリノリである。
だが、約1名、文句を言う馬鹿がいた。
「おい、マオ！貴様、酒はまだしもつまみがないではないか!!」
偽医者である。
「ったく、図々しいなお前。しゃーない、今作るから待ってろ」
「そんなことをせずとも、そこの女将に作らせれば良いではないか？」
「えっ！わ、私ですか?!」

偽医者は、鳳翔さんを指差して言う。俺は少し考えて、こう返した。
「あー、じゃあ、お願いするか。たまには他人が作ったもの食べたいし。鳳翔さん、お願いできる？」
すると、鳳翔さんは、驚いたような顔で、
「わ、私は艦娘ですよ？艦娘が作ったものを食べるんですか？！」
などと言った。前々から思ってるが、ここの子達はやたらと自己評価が低いんだよなあ。
「ああ、またか。自分は艦娘という化け物だからー、って奴？大丈夫だって、ここにいる連中も化け物みたいな見た目してんだろ？」
「そ、そう言う問題じゃ……」
「あんたが何者か、なんて難しいこと、俺達には分からんよ。ただ、普通の人間よりちょっとばかし強いだけで、自分が化け物だなんて言うな。世の中には、もっと化け物らしい化け物が沢山いるさ（兄者とかな）」
と、ヘタレメットが口を挟む。
「女将さんのどこが化け物なんですかい？」
「すんげぇ美人さんじゃねぇか！」
「ヒャッハー！！」
モヒカン達もそう言った。
「つまみは刺身で頼むぞ、女将。……ん？！これは安酒ではないか？！マオ！もっと良い酒を持ってこい！！」
黙ってろ殺すぞ。
「……み、皆さん……！！」
感極まった、と言うような、晴れやかな表情になった鳳翔さんは、嬉しそうにつまみを作り始めた。
つまみはまさに絶品と言って良い代物で、あの偽医者ですら素直に褒めるほどの出来だった。
そして、この酒保（仮）の看板が、「居酒屋鳳翔」に変わることは、

そう遠くない未来の話だった。

11話　もふ

「建材が切れた」
「……は、はあ？」
「建材が、切れた」
「な、何ですか？急に？」

「この鎮守府ボロ過ぎィ!!手持ちの建材がなくなっちゃったよもう！まだ廊下とか治せてないし、壁紙もまだ、畳も足りないし、窓も足りない、ガラスもない、電気、ガス、水道も整備が済んでな・い・の!!!」
「そ、そうなんですか？」
「そうだよ（発狂）」
　つまり、そういうこと（世界レベル）。これマジ？鎮守府の面積に対して、手持ちの材料が足りな過ぎるだろ？おかしい、こんなことは許されない。最低限、直せるところは直したつもりだが、まだまだ直すべきところが山程ある。
　例えば、憲兵の詰所なんて最悪だ。ヤニが床や壁に染み付いて変色し、家具も匂いが移って使い物にならない。トイレや風呂なんかも、誰も掃除してないせいか、カビだらけだった。　ある程度の掃除はしたが、根本的にリフォームしなきゃならんところが多過ぎる。が、建材がない。流石の俺も、材料がなければ何もできやしない。これからの時期、寒くなるのは確定的に明らか。改装は必須……!!

「……あっ、そうだ（天啓）、大淀ちゃん、鎮守府の裏にある山って、使って良いのかな？」
「あ、あの山ですか？一応、鎮守府の敷地内になってますけど、手付かずで、獣も出ますし、使いようがないと思いますよ？」
「……一応聞いとくけど、獣って元は人間とか、聖職者は強い獣になるとかそう言うのじゃないよね？」
「？、えっと、獣は、イノシシとか、クマとか、そう言うのですよ？」

「だったら良いさ、良いんだよそれで……」
いやー、アレはキツかった。何回死にかけたか分からん。正直思い出したくない。そう言えば狩人さんは今どうしてるだろうか？最近は軟体生物になったせいで、勝手が違ってキツイって言ってたっけ。
それはさておき、建材だ。兎に角、木材。木材がない。しかし、安物を買い付けるのは嫌だし、知り合いから取り寄せるのも間に合わない。折角なので、俺自らが伐採する。加えて、今夜あたりは新月。新月ならば、木を切らずにはいられない！と、言う訳で、とある知り合いのメイド長に電話してから、山へ……!!

「……で、何で付いてきたの、榛名ちゃん？」
「はい！榛名はお休みでしたから！」
「あ、そっかあ、ごめんな、姉妹と同タイミングで休み取ってあげられなくて。戦艦には出撃が多い順から休んでもらってるから」
「い、いえいえ！良いんです！お休みがあるだけで充分です！」
優しみある。
と、言う訳で、何故か榛名ちゃんが付いてきた。かわいい。
「でもなー、付いてきてもあんまり面白くないと思うよ？」
「大丈夫です！私が提督をお守りします！」
と、力こぶを作って見せる榛名ちゃん。守るも何も、ただの獣にやられる程弱くは無いんだがなぁ。ま、いいか。デートかなんかだと思えば役得かね。
「そう言えば、榛名ちゃんはこの山について何か知らない？」
「すみません、あんまり……。でも、相当危険だとか」
「へー、クマかい？赤カブト以外ならどうにかなると思うよ」
「（赤カブト？）いえ、クマじゃなくって、何でも、白い獣が出る、らしいです」
「白？狼、じゃねえよな、日本だし。うーん、何だ？まあいいか」

そう言って周囲を見回した。そして、そこで俺が目にしたのは、異様な光景だった。

「オイオイオイ、どう言うことだ？おかしいぞこれ！」

「ど、どうかしましたか？」

「整備されてる!!」

「えっと、つまり？」

「アレはりんごの木、あっちは栗、あと杉、ここら辺はヒノキだな、で、アレは梨、地面にはイチゴ、ベリー、あそこの木には葡萄の蔦が絡みついてる。奥の方からは梅の匂いもするし、柿やミカンの香りもする」

「それは凄いですね！」

「ああ、凄いな、一体誰が管理してるんだろうな……？」

そう、あり得ないのだ。自然環境の中で、果物が群生する、と言うのはまず無い。虫害だの病気だの温度だの、そういったものから守らなければ、果物は育たない。仮に育っても、山の中なら野生の動物にやられるだろう。

しかし、だとすると、目の前の光景は何だ？粗雑ながらも、剪定や接木などの跡が見られることから、確実に、何者かがここに手を加えていることがわかる。

「まあ、考えたって分からんね、取り敢えず、必要なヒノキだけ頂いていくか」

そういって俺は、しっかりと谷向きにヒノキを切り倒す。

手刀で。

「そぉら、切れろ切れろぉ!!」

切る、切る、切る、切る、切る切る切る切る切る切る切る切る切切切切切切切切……。

「ふぅ、こんなもんかね？」

「あ、相変わらず提督は凄いですね……！」

かなり切ったが、環境保全的には大丈夫な量だろう。さて、知り合

いのメイド長を呼んで、葉枯らししたあと、製材して、天然乾燥だ。まあ、普通にやったら、葉枯らしで数ヶ月、天然乾燥は、木材の種類と大きさにもよるが、少なくとも年単位はかかる。いやー、時間を操れる知り合いっていいな！実に便利だ!!

ん？

ちょっと待て、これは……!!

「榛名、動くな!!」

「ひゃい?!!」

「おおお!!」

「白い何者か」は、急速に接近し、榛名ちゃんの盾になった俺に激突した。幸い、真っ正面からの体当たりであった為、ブロッキングが成功、威力を殺し、間合いをとった。

「へぇ……お前が、この山の管理者か……。成る程、リンクスだ……」

「もふ」『メインシステム、戦闘モードを起動します』

「白い何者か」の姿は、まさに白い何者かとしか言いようのない、犬とも、猫とも言えない獣だった。

「きゃあ！かわいいです!!」

榛名ちゃんは大喜びだが、残念ながらこの白い獣は、お世辞にもかわいいなどとは言えない、まさしく修羅だ。まるで、億単位の人間を殺しているかの様な眼光、先程見せた超高速移動、さっきからうっすらと見える球状のバリアなど、どれをとっても油断できない。
「榛名ちゃん、退がっててくれ。今回ばかりはヤバイ」
「えっ？あんなにかわいいのに、戦うんですか?!」
「見た目に惑わされちゃ駄目だ、アレはマジでヤバイ。洒落になってない。頼むから！退がっててて!!」
「は、はい……？」

そう俺が言った瞬間、獣は、瞬時に間合いを詰めた。
「ッ!!速いなッ!!」
突進。ただそれだけだが、常軌を逸したスピードから放たれるそれは、人体をバラバラにする程の威力があった。
防御して、衝撃を溜め込んだが、余波で腕が痺れる。
その後も、獣は、薄暗くなってきた空に、まるでＵＦＯのように、緑の光で出鱈目な軌道を描きながら、ヒットアンドアウェイを繰り返した。ちょっと速過ぎんよ～。
「もふもふ」
だが俺はこれを悉く防ぐ。スピードはとんでもないが、威力はどうにか防げる程度だ。そして何より、「単調」……、恐らく、こいつは今まで、戦闘らしい戦闘をしてこなかったのだろう。ただただ野生的なコンバットパターンは非常に読みやすい。

そして、業を煮やしたのか、獣は、俺の腕を咥えると、そのまま上空に跳んだ、否、「飛んだ」。
勿論、振り解くことは出来た。しかし、振り解いたところで防戦一方になるだけだ。だから、ここは賭けに出る。分の悪い賭けに。
まあ、
「分の悪い賭けは嫌いじゃない！」

そして、空中に放り出された俺は、ニュートンの法則に従って落下する。

その俺の目の前で、獣は、全エネルギーを圧縮し展開、小さな破壊の太陽と化した。

「もふっ！」

「この時を待っていた……!!」

瞬間、俺は、破壊の太陽に触れると同時に、知り合いの便利屋から習った奥の手の一つを放つ！

「ＦＵＣＫ　ＯＦＦ　!!!!」

破壊の太陽に、今まで溜め込んだ破壊力を、この身を閃光の鉄鎚とし、叩き込む!!

×
×
「もふっ」『ＢＲＥＡＫ　ＤＯＷＮ』
×
×
「ロイヤルリリース」……俺が知る、最強のカウンターだ。
×
×
×
×
×
怖い。ただただ怖い。
深海棲艦との戦いとはまるで違う、別の次元の戦いだ。
艦載機がお遊戯に思える程の速さで動く白い獣、その猛攻を戦艦以上の堅牢さで防ぐ提督。
そのどちらにも、私は敵わない。そう感じた。

……軽い気持ちだった。

初めて会った時のように、提督が私を助けてくれたみたいに、とま

では言わない。ただ、大恩ある提督に少しでもお返しをしたかった。
でも、駄目だった。
ここが陸の上であることと、前提督の首輪の呪いがまだ残っていることにより、私達は、海以外では、見た目通りの力しか出せない。
でも、それでも、提督の盾くらいにはなれたのではないか？囮くらいにはなれたのではないか、などと、そう言った考えが頭に浮かんでいた。
逃げたんだ、私は。
艦娘の力が使えないから、臆病にも逃げた、いや、何もできなかった……！
人々を、提督を守らなきゃならないのに……!!
そんな私に、提督はいつも通りの笑顔と、楽しげな声音で話しかけてくる。
「おーい、大丈夫かい？榛名ちゃん？怪我はない？」
「は、榛名、は、私、は……！」
……今は、それが、どうしようもなく惨めだ。

「……ああ、何を考えているか、大体分かるよ。マモレナカッタ……ってとこでしょ？」
「な、何で……？」
ボロボロになった提督は、
「顔に書いてある」
と言って笑った。
そして、提督は続けてこう問いかけてきた。
「艦娘は戦う為に生まれた、だから、戦って、人々を守らなきゃならない？そうかな？（ズアッ）」
「……当たり前です」
「うーん、この。お堅いんだよなぁ。折角の人生なんだ、肩の力抜いて楽しめよ！役割なんぞ気にするな！ポケモンじゃあるまいし」
「（ポケモン？）で、でも、役割を果たせない艦娘なんて！」
「役割なんざ、他人に貰うもんじゃないさ。自分がやりたいのを見つ

けなきゃ。大体な、俺なんかついこの間まで住所不定無職だったんだぞ？役割無しだぞ？でも、こうして楽しく生きてるだろ？」
「えっと、それは、そうですけど……。」
　それとはまた違うような……？
「いーのいーの！考えたって無駄無駄ァ！適当が一番！ラブアンドピース!!終わりっ！閉廷!!あっ、そうだ（更なる天啓）、今度は山じゃなくって街でデート、しよう！」
「ちょ、ちょっと、あっ、てっ、提督！」
　あうあう、大っきな犬にするみたいに、わしゃわしゃって撫でられてる……！
「よーしよしよし！ここを撫でるとね、喜ぶんですよ！（動物王国）」
　ふわぁ……!!何でだろう、すっごく気持ちいい……!!な、なんだか誤魔化された様な気がしますけど、でも……、
「……そうですね！私の役割は、私自身が探さなきゃ、ですね！」
　こんなにボロボロになっても、元気一杯の提督を見ると、私もなんだか元気になれる気がした。

　因みに、この後提督は、何処からともなく現れた銀髪のメイドさんに顔をグーで殴られて、「私を呼びつけておいて他の女と逢引なんていい度胸ね」と怒られてたのは、あえて言う必要のない話だろう。

１２話　涙色のビーナス

《旅人》

いやー、順調順調。提督って楽な仕事だなー！ＤＩＹ精神の赴くままに、改装工事を延々としてるだけでうん百万円だからね？給料明細見た時は笑っちまったよ。こりゃいいわ。

改装工事については、取り敢えず各部屋への電気工事と、空調の設置、廊下の窓と隙間風はどうにかなったな。このままの調子で行けば、年内に工事も終わるだろうよ。

知り合いの冒険屋に依頼して、当面の資材も確保したし、艦娘達の苦労も減って、皆ウルトラハッピーって感じ。

艦娘達も、休みが増えて心に余裕ができてきてるらしく、だんだんと俺に話しかけたり、スキンシップをとる様になってきたな（当社比）。

モテてる（確信）。

「おはようございます、提督！お料理ですか？私も手伝います！」
「おー、榛名ちゃんか、頼むわー。今日のご飯は中華だぞー」
「は、榛名、提督に迷惑をかけちゃ駄目デース!!」
「ひえー！榛名！畏れ多いですよ!!怒られちゃうかも！」
「私の分析では、司令は奇人変人の類です。あまり関わり合いにならない方がよろしいかと」

……モテてる（願望）!!

「……と、言う訳なんだよ、俺、そろそろ泣いていい？今、人生のピークでモテてない。死にそう」
「もふ？」
　余った料理は、先日鹵獲した裏山のあいつにくれてやる。あの戦いの後、山の整備を継続しながら、ウチの飼い犬になる契約を結んだ、白い獣改め、「首輪付き」だ。最近の俺の話し相手でもある。
「ホーンマにもー、俺が何やったって言うんだよ？女の子に怖がられるのは初めてだよ？」
「もふっもふっ」
「なー？おかしいよなあ？これよお？」
「もふもふ」
「えー？それはいかんでしょ？」
　と、俺が愚痴っていたところに、
「えっ、と？何してるんだい？提督？」
「て、提督さんは、動物とお話しできるっぽい？」
　天使降臨。
「んー？愚痴ってた」
「い、いや、通じてないと思うよ？」
「首輪付きは所詮獣っぽい？人の言葉は解さないっぽい！」
「え？普通に喋ってるじゃん、こいつ？（啓蒙１１４５１４）」
「「えっ？（啓蒙０）」」
「え？」
「「何それこわい（っぽい）」」
　アレ？聞こえないのかな？こんなにペラペラ喋ってるのに。
「（ゆ、夕立、多分、提督は艦娘から警戒されたり、辛く当たられたりし過ぎて頭が……）」
「（そ、そんな！かわいそうっぽい！提督さんはかなり変わってるけど、凄く優しい人なのに！）」
　うーん、聞こえてるんだよなあ。別に身も心も病んでないのに。
「提督！は、話なら僕達が聞くよ！」
「だ、だから、首輪付きはぽいするっぽい！」

わあ！露骨！優しさが痛い！

その後、その話が瞬時に広まり、多くのピュアな駆逐艦が俺を心配して話しかけてきた。泣きそう。

閑話休題。

そんなことはいいんだ、重要なことじゃない。今俺が気にすべきは、手元にあるこの書類と、目の前で真っ青になってる大淀ちゃんだ。

ええと、何々？『株式会社世紀末及び世界一の冒険屋からの資材買取は、経費外とする（大本営）』だってよ。

ガタガタと震える大淀ちゃんが、何とか、と言った様子で、口を開く。

「だ、大本営の嫌がらせみたいで……、その……、計算したところ、し、資金が、ゼロどころか、マイナスに……」

俺はいつもの微笑みを浮かべ、

「オイオイオイ」

吐血し、

「死ぬわオレ」

ぶっ倒れた。

「提督ーーー！！！」

×××

×××

×××

×××

《大淀》

×

「あ―逝キソ……」

「て、提督、しっかりして下さい！」
いつも以上に白くなっている提督を支えながら、この私、大淀は、提督に指示された都市「冬木市」に向かっている。何でも、お金を知り合いから借りるんだとか。にしても、大本営は酷いことをする。
鎮守府の噂では、前提督を退役に追い込んだのは提督だという話だが、実際は、暴力を振るわれている駆逐艦の子を助けた弾みで怪我をさせたのだと聞いている。
しかし、鎮守府の中では、提督の地位欲しさの犯行では？や、反政府組織の差し金では？などと、根も葉もない噂が実しやかに囁かれている。だけど私は、提督が心から艦娘のことを想ってくれている優しい人だということを知っている。今回だって、自分のお給料を全額経費に変えて、それでもなお不足する分を、恥を忍んで友人に借りると言うのだ。これが善人で無くて何になる！
「提督！着きましたよ！」
「わ、わくわくざぶーんに行くぞ、大淀ちゃん……」
「は、はい！あそこのリゾートですね？！……え？」
あれ？借金をしに……？アレ？なんでウォーターリゾートに？
「て、提督……？あの、ここで本当に合ってるんですか……？」
不安がる私を手で制すると、提督は施設に向かって、大きな声で呼びかけた。

「ＡＵＯくーん!!あーそびーましょー!!!!」

「喧しいぞ道化がぁ!!近所迷惑だろうが!!」
「ぶべらぁ!!!」
「提督ーーーー!!!!」
ああ！て、提督が！突然現れた金ピカの人にグーで殴られた!!!

「……で？何をしに来た、道化。呼んだ覚えは無いが。というか貴様、矢鱈と真っ白だな、どうかしたのか？」
私達は、そのままリゾート施設の奥にあるとても豪華絢爛な応接室に通され、これまた高級なお茶を出されて、もてなされていた。色々と疑問は尽きないが、少なくとも、提督はこの人からお金を借りるんだろう。あの金ピカの鎧はリゾートのイベント用か何かかしら？（適当）

「金貸してくれ」
「断る」
が、駄目っ……!!
「頼む！」
「断る」
「頼む!!」
「断る」
「お願いだからぁ！もぉ！さぁ!!」
「断る」
それでも駄目っ……!!!!提督は、土下座までしている……！提督……、私達の為に、ここまで……!!
提督だけにこんな真似をさせちゃ駄目だ、私も頭を下げなくては!!
しかし、私が頭を下げようとした時、またも提督がそれを制した。
「やめなよ、大淀ちゃん。お願いしてるのは俺だ」
「しかし!!」
「ところで、さっきから思っていたんだが、その神霊の出来損ないみた

いな女は何なのだ？」
「ーッ!!」
……出来損ない……。前提督に毎日のように言われた言葉だ。戦闘能力を持たないまま召喚された私は、出来損ないとして、鎮守府の全ての雑務を押し付けられた。辛かった記憶がフラッシュバックする。ああ、辛い、痛い、怖い、私は、最善を尽くしているのに……！
「やめなよ」
「……提督？」
「ウチの大淀ちゃんは出来損ないなんかじゃないよ、ＡＵＯ君。控えめに言って最高の人だ。勤勉で、真面目で、尚且つ美しく、有能だ。誰にも文句は言わせねえよ」
そう言って、提督は、震える私の頭を撫でた。まるで、怯える幼子を安心させるように……。
「て、てい、と、く……!!」
ああ、この手だ。この温かい手で私は救われたんだ。この優しい笑顔に私は助けられたのだ……。

「ふん、まあ、道化が何と踊ろうと構わん。……金は、タダでは出さん。その代わり、分かるな？」
「オーケー、いつもの、な」
×そう言うと、提督は私を退室させた。「休暇だよ、楽しんで来な」と言い残して……。
×××
×××
×××
《旅人》
「全く、来るなら来ると言わんか！歓迎の準備が出来んだろう!!そして×この我の顔を見て、第一声が金を貸せだと？この道化め、相当愉快な土産話を持って来ているんだろうな?!」

「まーねー。さーて、何から話そうかな、うん。あ、そうだ、ヤーナムの話とかどう？知り合いの偽医者に話したら、泡吹きながらぶっ倒れた話なんだけどさぁ」
「おお、良さそうだ、そう言う愉悦分を過分に含む話は大好物だ！」
×××
×××
《大淀》
リゾートの中に案内された私は、提督の帰りを待つ。あの趣味の悪い金ピカと何をしているのか気になるが、私はここであの人の無事を祈る事しかできない。
私は、無力だ……。
×××
×××
《旅人》
「ンフフ、でさぁ、その聖杯にね？儀式の素材が足りねえっつって、目玉の代わりに俺が持ってた、すっ、スーパーボール入れてさ、ンフフフフ、そしたら時空が歪んで、ロスリックとかいう変な世界に飛んじゃってね！」
「あーっはっはっはっ！戯けだ！神話クラスの戯けだ!!我、大爆笑!!」
「で、その時の聖杯がこれになりますンフフフフ」
「あーっはっはっはっ!!買った!!!あ、そうだ、さっき言峰からいい酒が届いてな？一杯どうだ？」
「ああ^〜、いいっすね〜！どうせなら親友さんも呼んでパーっとやりましょうよ〜！」
「おお、そうだな！もしもし、エルキドゥ？今いい？あっ、例の道化が遊びに来たから、一杯やらぬ？」
×××××××××××

《大淀》

三十分位だろうか、短い時間だが、焦りのせいか酷く長く感じる。

……こうして一人で考えていると、どれだけ提督が素晴らしい人か良く分かる。戦闘能力が無い故に、私は常に鎮守府にいる。だから、鎮守府で提督が何をやっているかは誰よりも知っているつもりだ。

提督はいつも、休まずに鎮守府の改装をしている。そして、食事を作り、掃除をして、その上、私の仕事も手伝ってくれる。素っ気ない態度をとる艦娘にも分け隔てなく接し、皆を労う。とても、とても優しい人だ。

私はいつも、そんな提督の力になりたいと願うけれど、提督は何でも一人でこなしてしまう。私の書類仕事もそうだが、最近は艦隊の指揮も学んだらしく、長門さんと戦術について話し合うところを良く見かけるようになった。

私は、提督に必要とされているのだろうか？

ただ救われるだけの、重荷になっていないだろうか？

×××

《旅人》

「いや、そんでさ？ンフフ、その巨人を倒せるのがストームルーラーって剣でさ？でも俺剣とかからっきしじゃん？だから取り敢えずぶん投げてみたのよ。ケツに」

「あーっはっはっはっ!!で？直撃したのか？」

「うん、ぶっ刺さった。キレーに穴にぶっ刺さった。で、そん時、その巨人の盟友の騎士が来てさ？いやすっげえよあの微妙な空気！笑っちゃうぜ!!」

「あーーーっはっはっはっ!!!」

「ははは、ひ、酷いな君は!!」

「いやだってあれはしゃーないでしょ?!!俺に剣を渡した不死者さんが悪いわ～！あいつ馬鹿じゃねえ？（本音）」

×××××××××××××××××××××××××××

《大淀》

×日が、落ちてきた。私の提督は、未だ姿を見せない。

×提督、どうしたのですか？

×何か、あったのですか？

私では、お力になれませんか？

×お願いします、神様。

×提督をお助け下さい、提督をお守り下さい。

×その為なら、この大淀、命すら惜しくありません……。

×××××××××××××

《馬鹿》

「×ワーッハッハッハッハ!!」

「×（グビグビ……）」

「×ワン・モア（おかわり）！」

×××××××××××××

《大淀》

×夜の帳が下りた。

×外は完全に真っ暗だ。

まるで、提督に出会ったあの日みたいに。

……思えば、神様は、どんなに祈っても、私のことを救ってはくれなかった。

前提督に虐げられる度、毎晩神様に祈ったのに。

私は、神様に見捨てられたのだろう。出来損ないであるが故に。

結局、私を救ってくれたのは、私の提督だった。

神様じゃない、私の提督だ。

私の提督が、私を、救って……。

だから、私の、神様は……。

「オオェッ!の、飲み過ぎた!馬鹿じゃねーの?!あの酒何度だよ?!!」
「はーっはっはっは!!じゃあな（じゃあね）!また来るがいい（来てね）!!」

提督が、私の前で、倒れた。
「あ、ああ……!あああああああ!!!提督!!!提督!!!提督!!!大丈ですか?!!提督!!!お願いです!提督!!!嫌!嫌嫌嫌嫌嫌!!!」
駄目、提督が、提督が、私の提督が!!!

「……うぅあ～、お、大淀？」
!!、良かった、生きてる!!
「はい!!貴方の大淀です!!大丈夫ですか!!何かされたんですか?!!」
あの金ピカが、提督に何かしたんだ……!許せない!
「ん～、なんかねぇ、お酒一杯飲んだなぁ、あっはっはっは」
お酒……?!、そう、そういうことね、嫌がる提督にお酒を無理やり、沢山……!!お酒だって、大量に飲めば毒になるのに!!
「いやー、道化よ、中々に楽しめたぞ!また来るがいい!!」
「あいよ～!あっはっはっは!!」
ああ、提督!こんなに、前後不覚になるまで……!おいたわしい……!
「お、大淀じゃん、ちょっと肩貸して～、もうフラッフラよ俺？早く帰

ろ～、もうなんか寝たい（酩酊）」
「は、はい！分かりました！」
それを聞いた私は、直ぐ様提督に肩を貸し、手を握り、足早にこの施設を去った。これ以上ここにいては提督の身が危ない。

私と提督は、逃げるようにこの街を去り、今は二人で電車に揺られている。提督とは、今も手を繋いだままだ。
提督の手も、あの時と同じ温かさのまま……。この手の温かさが、世界で一番安心する。
「……提督、私は、貴方の重荷になっていませんか？貴方のお役に立てていますか？」
「ん～？どったの急に～？」
提督の温かさのせいか、私は、提督に胸の内を明かしてしまう。
「……私、怖いんです。提督には助けてもらってばっかりで……。ただでさえ、戦闘行動が出来ず、鎮守府に貢献できていませんし……。私、要らない子なんじゃないかって……」
すると提督は私を強く抱きしめると、こう言ってくれた。
「そんなことないよお～！大淀ちゃんはとってもいい子だぞ～！俺はいっつも頑張ってる大淀を、ちゃんと見てんだからな～!!よ～し、ナデナデしてやろうな～！ナデナデ!!（泥酔）」

ああ、ああ……！やっぱり、貴方は、貴方だけは、私の側に居てくれる！どんな暗闇からも救い出してくれる!!神様に見捨てられた出来損ないの私を見ていてくれる!!私の祈りを聞いてくれる!!

提督、

貴方は、

私の、

神様です……！

13話　どう思う？

あー、頭痛え。二日酔いだ。昨日の昼に浴びるように飲んだからか、昼以降の記憶がねえ。

大淀ちゃんにゲットした金を押し付けて、鳳翔さんに明日の飯炊きを頼んで、あとはシャワーも浴びずに寝た、だけだと思う。思いたい。

昔は、ベロンベロンに酔っ払って、朝起きたら隣に知らない女の子が、とかザラだったしな。鎮守府とかいう女の園でそんなことやったら一発で死ねる。流石に、ピュアな駆逐艦の子達にゴミを見るような目で見られたら心が折れると思う。

まあ、段々と回復してきたけどね。身体は丈夫なんだよ、マジで。今は大体、昼過ぎくらいか？飯時ちょっと過ぎって感じ。まあ、残り物でも良いから、取り敢えず何か食いたいね。さあ、食堂へＧＯ（ｉｓ　ｇｏｄ）!!

「提督を悪く言わないで下さい!!」

「何よ！大淀さん!!あのクソ提督の肩を持つの?!!」

おおっと～？なーんだこれ？今流行りの修羅場ってやつ～？

ど、どうしよ。隠れとく？隠れとくか？なんか怖いし、食堂の入り口の隣で事が収まるのを待つか。ヤバそうになったら止めよう。そうしよう。

「おい」

「ギクーッ！」

「ここで何してる？入るなら早く入ったらどうだ？」
今俺に声をかけたこの女の子は、艦隊の一のイケメンと名高い、木曾ちゃんである。どうやら、食堂から出てきたらしい。
「いや、だって怖いじゃん？いっつもこんな感じなの？」
「いや、俺が見ていた限りでは、いつものように、提督に対して嫌悪感を抱くグループがお前のことをこき下していたところ、急に大淀が食ってかかった、と言う感じだな。そのあとは、売り言葉に買い言葉、といったところか」
「えっ、何それ？泣いて良い？」
嫌われてんの？俺？
「安心しろ、嫌悪感を抱いているのは一部だ。大井姉さんを含めて」
あ、やっぱり？嫌われてる感あったからな、あの子には。ま、まあ、一部だけだし？他の子にはモテモテだし？
「因みに、残りは皆、不信感を抱いている。俺を含めて、な」
あ、駄目だ、泣く。
「お、おい、泣くな。別に、お前のことを嫌っている訳じゃないさ。ただ、急に待遇が良くなり過ぎたんだ、警戒もするだろう？皆、お前のことを計りかねてるんだよ」
木曾ちゃん優しいな、天使かよ。
「うーん、いつも言ってるけど、趣味でやってるだけで他意はないんだよなぁ。まあ、少しづつ慣れてもらうしかないか」
言いたいことは何となくわかる。警戒するのも無理はない。けど、そろそろ一月くらい経つ訳だし、もうちょい打ち解けてくれよと思う。頼むから。
「にしても珍しいな」
「何が？」
「大淀だよ。……あいつはあんな風に、他人に噛み付く奴じゃないと思ったんだが」
「あー、そうね、確かにらしくないわ」
まだ一カ月、されど一カ月。大淀ちゃんの性格は何となくわかって

いたつもりだったが、違ったようだ。
　こうしている間にも、口論は続いていた。しかもなんか、人数が増えてる。何で食堂でダンガンロンパしてるんですかね（困惑）？
「提督をそんな風に言わないで下さい!!提督は、いつも私達のことを思ってくれています!!」
　榛名ちゃん、結構声が大きい。いや、普段はお淑やかな榛名ちゃんが大声を出すイメージが湧かなかっただけかね？
「はっ、本当にそうかしら？どうせ、こうして待遇を良くした後に、上げて落とすつもりなんでしょ？回りくどい」
「や、やめなよ、大井っち……！」
　対するは、俺に辛辣な艦娘の一人、大井さん。前に大井ちゃんって呼んでみたら物凄い舌打ちをされたぞ！と、それを嗜める北上ちゃん。
「提督は、前の提督とは違うと思いますよ？まともな食事も摂れますし、睡眠時間も充分にあります。まあ、お休みと言う制度は良く分かりませんけど」
「私達は護国の為の矛であり、盾である。ただそれだけです。提督は、私達をしっかりと「整備」できていて、好ましいですよ」
　そう返すのは、誇り高き一航戦、正規空母の赤城さんと加賀さん。一航戦の二人は何故か餌付けが通用した。ただ、月月火水木金金を地で行く人達だから、戦闘の十全に出来る環境があればいい、みたいに色々切り捨ててるみたい。
「何言ってるのよ！おかしいと思わないの?!皆んな騙されてるに決まってるわ！大体、あのクズが前の提督と違うって証拠はないでしょ?!」
　駆逐艦の中では数少ない辛辣勢の一人、霞ちゃん。パッと見小中学生くらいの外見から放たれる「このクズ」は、俺の心を折るには充分すぎるな。
「えー!!提督は良い人だよー?!だって、悪い人にはあんな良い音楽はできないよー!!那珂ちゃんはアイドルだから分かるもん!!」

反論するのは那珂ちゃん。艦隊のアイドルである。休日に、歌や踊りに励むところを目撃したので、伴奏を買って出てみたら食いついてきた。アイドルを自称するだけあって、中々歌が上手い。那珂だけに(激寒)。

「……皆んなの言い分は分かったわ～。じゃあ、聞かせてもらうけど、提督が「これ」を外さないのはどうしてかしら～？」

辛辣勢筆頭、龍田さんのエントリーだ！コワイ!!表情はニコニコ笑顔だけど、目が一切笑ってない。つーか、「これ」って何よ？

「何かお考えのあってのことでしょう。第一、外されたところで何か変わりますか？変わらないでしょう？……大体、提督が私達を思ってくださっているのは事実です。詳しい話は省きますが、昨日、提督は私達の為に借金をしました。それも、土下座までして。お給料だって、全額経費に注ぎ込んで、一円たりとも受け取っていないんですよ？」

大淀ちゃんは明らかにお怒りだ。かわいらしい顔を歪め、龍田さんを射抜く様な視線で見つめる。

だがな、大淀ちゃん。ごめん、俺、あいつには定期的に金借りてるんだわ……。いっつも土下座してるんだよね、うん。ちょっと前なんて、ピュアな人だけが入れると噂のキャバクラに入り浸るために合計で二、三千万以上は借りたよ……。因みに、返すつもりはない。見込みもない。

そんな感じで、心の中で大淀ちゃんに詫びている間に、議論はヒートアップしていた。

「だから、本当に思っているなら、こんな「首輪」は要らないでしょう?!これのせいで、いつ「解体」されるか、毎日怯えなきゃならない!!」

え？首輪？解体？何の話？

「提督は「解体」なんてしません！」

だから解体って何？

「言わば、首筋に刃物を添えられている状態よ?!安心なんてできないでしょう?!」
えっ、そうなの?誰が?
などと、呑気に考えていると、隣の木曾ちゃんから声がかかった。それも、とっても剣呑なふいんき（何故か変換できない）でだ。
「なあ、お前は、この鎮守府の誰かを「解体」しようと思うか?」
まただよ。解体解体って、何の話?
「解体って何?」
正直に聞く。知らぬは一生の恥って言うし。
「……は?（威圧）何を言ってる……?!」
木曾ちゃん、キレたッ!!
いや、今怒るポイントあった?
「え、な、何故お怒りに?」
「……お前、ここに来た時に渡した手引書はちゃんと読んだか?」
ああ、あれね?
「ラーメンの汁こぼして捨てたけど……?」
パッと見、大したこと書いてなかったしね。
「はあ?!お前は!本当に!!阿呆か!!」
「いや、あんなん真面目に読む訳ないじゃん。どうせスマホの利用規約みたいなもんでしょ?」
あんなクッソ長い文章読めるか?
「違うわ!!はぁ、良いか、良く聞け、解体ってのはな、俺達艦娘を処分することだ!」
「……は?」
「首輪に触れながら強く念じて身体機能を完全に奪い、艤装を剥ぎ取る。すると、俺達は死に、艤装が少しの資材となる」
「……は?」
「まあ、非効率だから滅多にやらんがな。要するにお前は、この首輪でいつでも俺達を殺せると言うことだ」
「いや、待って!ちょっと待って!!初耳!!その話初耳なんだけど?!!そ

んなん早く外せよ!!!」
「外せたら外してるわ!!!これは提督にしか外せないんだよ!!!」
「聞いてねーよ!!!」
「お前が聞かなかったんだろうが!!!!」

「「「……」」」
あっ、やべっ、バレた。
「……えっと?……ど、どこから聞いてたのかなーって?」
「「解体って何?」からですよ~?」
と、龍田さん。心なしか、目付きがさっきより鋭い。
「えっとね、これはほら、知らなかっただけだからね?俺悪くない、何も悪くない」
そう言って、龍田さんの首輪を外そうとする。
「……へえ?陰口を言われたら直ぐに解体、ですか~?随分と狭量なことね~」
ビクリ、と大きく震える龍田さん。だが、気丈に振る舞った。ちょっと待って、違うの、取る、取るから。
「私を解体するのは構いません。けど、天龍ちゃんに手を出したら、例え死んでも許しま「いや、そういうの良いから(食い気味)」……せん、よ?あ、あら?」
龍田さんの首輪ゲット。

いやー、俺、これのことドッグタグかなんかだと思ってたんだよね。まさかこんなからくりがあるとは。

「な、何で?」
あ、珍しい。龍田さんが目を見開いて固まった。こんな顔するんだ、龍田さん。まあいい、それより、とっととこの首輪を皆んなから外さないとな。何故か呆然とする皆んなから首輪を剥ぎ取ってまわり、未だに固まってる龍田さんに聞いてみる。

「ところで龍田さん？」
「は、はい？」

「この首輪って、燃えないゴミに出していいと思う？」

１４話　今明かされる衝撃の真実ゥ！

先日の一件から、艦娘の皆んなからの好感度が上がった気がする。
具体的に言えば、前と違って、話しかけると言葉を返してくれる、名前を呼んでも怒らない、挨拶をしてくれる、などといった感じ。モテモテですわ。
まあ、マイナスがゼロになったみたいなもんやし。多少はね？

ああ、もう一つ、前と変わったことがある。
「うおおおおおお!!!」
「ヒューッ！っぶねえ!!Ｆｏｏ→（回避）!!」
「クソッ！外した!!天龍、右から仕掛けろ!!」
「おうよ、摩耶！行くぜ!!」

挑戦者の登場である。
こうなった事の発端は何だったか、全く思い出せないが、多分俺は悪くない。
とか考えつつ、正面からくる摩耶ちゃんの蹴り、右から迫る天龍ちゃんの拳打を身を捩って避ける。パワーとスピードは人並み以上だが、それ以外は酷くお粗末だ。これじゃあ、俺に触れることすら叶わないね。
「お粗末過ぎる……。今流行りのお粗末さんかな？」
「テメェ!!オラオラァ!!」
摩耶のフック、右、左、左、右、左。欠伸が出る程スロー。スウェイで全弾回避。直後に、真後ろから天龍ちゃんの俺の胴へ向けての回し蹴り。これも遅い。大きく跳んで、摩耶ちゃんを飛び越え、回避。ついでに、俺を見失った摩耶ちゃんの耳に息を吹きかける。煽りも立派な戦闘スキルだから（震え声）。
「ひゃん!!?こ、コラ!!やめろ!!」
あらかわいい。振り向く瞬間、裏拳を放ってきたが、動揺しているせいか雑な一撃。軽く首を引いてやると、鼻先を通り過ぎて行く。

もういいかな、とっとと執務室に引っ込もう。あそこは戦えない大淀ちゃんがいつも居るせいなのか何なのか、挑戦者達も攻め込んで来ない。

……あと、最近大淀ちゃんがものすごーく献身的なんだけど、誰か何か知らない？ちょっと怖いよアレ。俺の仕事もやろうとするしさ。

「て、テメェこの！逃げんな!!オラ!!」

自棄になった天龍ちゃんが叫び、フェイントも何もない正直なストレートを放つ。逃げるな、とのことなので、ブロッキングをして防ぐ。

「え？うん。いいよ」

「おお?!な、何だこれ?!手応えが、ぬおっ?!!」

そのまま間合いを詰めて、足を引っ掛けて転ばせ、俺に掴みかかろうとする摩耶ちゃんにパス。摩耶ちゃんの柔らかそうな胸に天龍ちゃんがぶつかる。ずるい。

「うわあああ!!」

どんがらがっしゃん。漫画みたいな音がして、二人は組んず解れつ。

「……キマシタワー？」

「何も来てねえよ!!」

ネズではない（戒め）。

×
×
×
×
×

「だー!!畜生!!今日も勝てなかった!!」

「あー、クソ、ムカつく！触ることすらできねえのかよ!!」

これであの日から7回目の挑戦、今の今まで、一度たりとも勝てていない、いや、勝負にすらなっていない。

「本当に、何なんだあいつは？」

「実は艦娘ならぬ艦息だったって言われても驚かねぇぞ、オレは」

全くもって訳が分かんねえ、確かにここは陸の上だけど、それでも

艦娘の身体能力なら、人間一人くらい容易く倒せるはずなんだけどなあ。
「……力は、多分、あたしより強い。速さは、見えないくらい。技術は、手品みたいに、何をされたかわからない。……アレ？これ、あたし達、勝てなくないか？勝てる要素がないぞ？」
摩耶が一人でブツブツと何か言っているが、いつものことだ。こうして、適当にあしらわれた後、オレ達は必死にあいつの弱点を考えている。まるで見つからないが。
……どうして、そんなあいつに挑むのか、事の発端は、あの日だ。あいつが、オレ達の首輪を外したあの日……。

『あー、遠征終わりっ！今日の仕事終わりっ!!全く、新提督様様だな！ガキ共も楽させてやれるし、メシも美味いし、休みもあるし！』
『んあー、そーだなー、あたしとしては、甘いものが食えるのと、島風が喜んでるのと、……あと、首輪付きちゃんが可愛いのがなー』
『そういやお前、動物好きだったよな』
『ああ、誰にも言うなよ？恥ずかしいからなー』

『すまない、本当にすまない』
『『うおおおあ!!!』』
『おっ、おまっ！提督!!お前!!急に出てくるな!!』
『てっ、テメェ!!この野郎！いきなり背後から話しかける奴があるか?!!』
……あの時、あいつはオレ達から首輪を掏り取ったんだ。目にも止

まらぬ速さで。
『……？お前、その、手に持ってるのって……！まさか?!!……
な、ない！首輪がないぞ!!あのクソ忌々しい首輪が無くなってる!!』
……摩耶は、まるで馬鹿みたいに、自分の首をペタペタ触ってたっけ。
『……えっ？……あっ？……えっ??』
……もっとも、オレもあまりの事に理解が追いつかなかったけどな。そのあと、あいつは、「知らなかった」だの、「解体はしない」だの、「俺は悪くねぇ、嵌められたんだ！」だの……兎に角、オレ達に詫びを入れて最後にこう言ったんだ。
『いやもう、すまない。殴りたかったら殴ってくれて構わん（人間の鑑）』
……この時点では、軽く殴って終わりにするつもりだった。私も、摩耶も。だがあいつは……、
『……よし、それでこそ男だ！一発で許してやるよ！』
『そうだな！変な奴だと思ってたけど、意外と男らしいとこあるじゃねえか！』

『『せい!!……あれ？……な、何避けてんだテメー!!』』
……あの野郎、よりにもよって避けやがったんだ。

『いや、当たったら痛いじゃん？逆に、当てられない方が悪いって事で。はい、じゃ、ヨロシクゥ!!（人間の屑）』
『ほーう、そうかそうか。……大怪我じゃ済まさねぇぞ!!』
『……何だとテメェはこの馬鹿野郎!!』
……流石に悔しく思ったオレ達は、何とか一発ぶん殴ってやろうと躍起になったんだ。でも、あいつには指一本触れられなかった。
『はぁ、はぁ……、はっ、速え……?!お、お前、何だ？何なんだ?!』
『ありえねえ、このオレが……！』
『あららら……、天～龍ちゅわ～ん？摩～耶ちゅわ～ん？ちょっとイケてないんじゃなーい？いくら何でも駄目すぎるだろォ？はっずか

しい～』

『『……ぶっ殺す!!』』

……こうして、オレ達は提督に挑むようになった。この時の雪辱を果たす為に……。

まあ、でも……、

「……強い男って、カッコいいよな……」

……よ、嫁に行くなら、自分より強い男のところじゃなきゃ、な！

15話　バキボキ☆メモリアル

「……あのさぁ、君らにお休みをあげる度、毎回思ってるんだけど、外に遊びに行くとかないの？」
　本日お休みの鈴谷ちゃん、熊野ちゃん。どこに行くわけでもなく、二人で鎮守府の中をふらふら歩いている。
「「……は？」」
「だから、休みなのに、鎮守府から出ないの？買い物とか、食べ歩きとかさ、そういうの、ないの？」
「「……えっ？外出して良いの（良いんですの）？！」」
「そりゃ、良いでしょ。許可なんて要らんでしょ」
　あー、そういうことか。許可が欲しいと思ってたのか。成る程ね。どおりでお休みを与えた子が外に出ない訳だ。
「許可、要らないんですの？」
「うん。いいよ、遊んできな」
「えーっと、その、それは嬉しいけど、私達、お金とかないし……」
「は？給料どうしたの？」
「（出た試しが）ないですわ」
　えっ？ちょっと待って？給料出てないの？ノーギャラで働いてんのこの子ら？聖人君子か？
「……なんかごめん、頑張って経費から捻出するわ……。これ、お小遣い。遊んできなよ……」
　申し訳なさが凄い。二人に万札を十数枚握らせ、背を押す。え？金？俺の今月の給料は経費に溶けたけど、持ってない訳じゃないよ？まあ、最悪駅前とか、人の集まる場所で楽器の一つでも弾けば稼げるし（ノースティリス感）。
「いっ、いや！貰えないよ！私達ばっかり!!」
「いやいや、これでも足りないでしょ！傭兵だってもっと貰ってるよ!!」
「それに、艦娘が外を出歩いていたら、住民の方々が怯えてしまうでしょう？」

「いや、艤装しまって着替えれば良いだけの話じゃん」
「(着替え持って)ないです」
冗談はよしてくれ(タメ口)。道理であんなヤバイ格好の子(主に島風ちゃん)が放置されてるもんだ。着る物すらないとか、これマジ?
「はい、これ」
懐から、女性もののファッション雑誌を取り出し、二人に渡す。
「えっと、もしかして、買ってくれる、とか?」
二人は若干期待する様な目でこちらを見る。
「いや、作る」
「「作る?!」」
当たり前だよなぁ?機械に量産された製品よりハンドメイドの方が強い(確信)。まあ、デザインはあんまり得意じゃないから、本に頼るけど。
「で、出来るんですの?」
と、熊野ちゃん。疑われたからには証拠を見せねばなるまい。俺は、今自分が着ている服を作って見せた。
「ちょ、ちょっと!速い速い速い!!何それ!どうなってんの?!!」
「いや、逆に聞くけどさ、戦闘中に服破れた時とかどうすんのよ?これくらい出来なきゃ困るでしょ?」
「破れたら、帰投するまでそのままだけど?」
「えー」
痴女かな?一昔前の脱衣ブロック崩しじゃないんだぞ?
「分かった、分かった。何でも作ってあげるから、早く選ぶといい」
「ほ、本当に良いの?」
「ああ、何枚でも良いぞ」
すると、二人は嬉しそうに、ファッション雑誌を眺め始めた。そうだ、それでいい、女の子って言うのはそう言うもんだ。あんまりにも楽しそうなので、会話に参加する俺。
……「うーん、これとか良くない?」
……「足元がこの色では、太く見えませんこと?」
……「いや、熊野ちゃん、スリムだし似合うと思うよ?逆に鈴谷ちゃ

んはこれとか良いんじゃない？」

色々と話し込み、昼近くになった頃、やっと服が決まった。自室に戻って、着替えてきた二人は、どこにでもいる、いや、この可愛らしさではそうは言えないな、言わば、どこにいてもおかしくない、そんな女の子になっていた。

「提督、その、どう、かな？に、似合う……？」

鈴谷ちゃん、ハイソックスにミニスカ、カーディガンにマフラーと言う、完全に休日の女子高生だ。かわいい。

「少し、気恥ずかしいですわね……」

熊野ちゃん、タイツにブーツ、ミニスカ、ファーコート。気品がヤバイくてかわいさもヤバイ（語彙力ゼロ）。

「かーわーいーいー！」

「そ、そう？」

「超似合ってるー！」

「そう言われると、悪い気はしませんわね」

褒める。これ、人間関係の基本。

正門の前、鈴谷ちゃんが俺に言う。

「本当に、良いの？脱走とか、しちゃうかもよ？」

「ぜってえ嘘だわ。君ら、仲間をほっといて逃げるような子じゃないもんよ」

「何で、そう言い切れるの？」

「勘」

「勘って……」

「あと、君らの人となり」

「まだ一カ月と少しだよ？」

「分かるんだって、俺には。余裕の断言だ、人生経験が違いますよ。ほら、とっとと行った行った、時間なくなるぞ？それとも、俺も付いて行った方がいいの？デートがご所望って訳じゃないだろ？」

と、笑ってやる。
「そ、そんなこと「あら！是非お願いしますわ！」く、熊野?!」
熊野ちゃんは、鈴谷ちゃんに耳打ちする。
「（良いですこと？私達の知識と常識はもう何十年も昔のものでしてよ？今の社会で通用しないと思いませんこと？）」
「（提督に案内させるってこと？）」
「（ええ、多分、聞けば教えてくださるでしょう。いつか提督が言っていた、長期休暇なるものをいただいて、故郷の神戸まで帰るんですわ！）」
ああ、そういうことか。確か、資料で見たけど、「重巡熊野」は日本に帰れずに、帰路の途中で沈んだ、とか。だからこそ、望郷の念が強いのかね。

……でも、熊野ちゃん、割とヤバいレベルの方向音痴だからな。長期休暇のときはそれとなく誰かに言っておくか。
話は、どうやら、俺を連れて行く方向に決まったらしい。
「え、えっと！わ、私達、ちょうど、提督とデートしたいなー、って思ってたの！色んなところ案内して欲しいなー！」
ん？ああ！これ、鈴谷ちゃん、誘惑してるつもりか?!無い胸を全力で強調している……!!き、競うなッ！持ち味を活かせッ!!乳のデカさはこの鎮守府内でも最低ランクだろ鈴谷ちゃんェ……！もっと他の誘惑方法あるだろ!!
「ど、どうかな?!つ、付いてきてくれる?!」
「うん、良いよ、行くよ……」
「や、やった!!（ウソ？誘惑成功って感じ?!）」
「やりましたわ！（まさか鈴谷のアレが通用するとは……）」
もうさっきからこの子達が不憫でならない。悲し過ぎる。
「か、かわいい鈴谷ちゃんと熊野ちゃんを、ぜ、是非エスコートさせて欲しいなー!!」
いかん、泣くな、俺。

そのあとは、まあ、普通のデートだ。
二人は、昔と変わった道行く人々の姿や街並みを興味深そうに眺めていた。
……「提督！テレビに色が付いてますわ！」
……「熊野ちゃん、それ、パソコンだよ」
……「提督？何か、皆んな手元で何かを弄ってるけど、あれは？」
……「スマホだよ、鈴谷ちゃん。あとで買ってあげるからね」
……「きゃ、きゃらめるまきあーと？提督、これ、横文字が逆から書いてありますわよ？」
……「今は左から読むんだよ、熊野ちゃん。大きさはどうするの？」
まー、辛い。二人とも、見た目からして、こういうのに詳しいだろってなんの根拠もなく思っていたけど、全く何にも知らないんだもん。気の毒過ぎる。結局、街の観光はそこそこで、携帯とか、化粧品とか、思いつく限りの女の子っぽいものを買い、鎮守府に帰った。

「……何かごめんね、殆ど買い出しって感じで……。折角の休日だったのにね……。本当にごめん。なんなら、また直ぐに休みを、」
「提督！今日はありがとう！楽しかったよ!!」
「ええ！外出なんて初めてでした！また、一緒に遊びに行きましょうね!!」
あ、この子達、天使だ。大正義だ。心が、心が綺麗過ぎる。
「ごめんなぁぁぁ!!!ううっ、ぐすっ、これからは、いくらでも、いくらでも連れてってやるからなぁ!!!」
「?!、きゅ、急に泣き出して、どうしたの提督?!」
「いやもう、なんか、君ら本当にいい子だなぁ。俺もう、申し訳なくなっちまってよお」
「な、泣き止んで下さい?!貴方が悪い訳ではありませんのよ?!」
「大丈夫だよ、提督！ねっ?!ほ、ほら、よしよし」
鈴谷ちゃんに撫でられる。この子ら、あれだけ酷い扱いを受けてきたのに、性格が歪まないって何だよ。

×××××××××××
どうにか泣き止ませた提督を執務室まで送り、私達は部屋に戻った。
買ってもらったスマホ、なるものを弄りながら、私はふと思ったことを口にした。
「提督、本気で泣いてたね」
熊野は、今朝貰った雑誌をめくりながら、こう答える。
「そうですわね。何だか、今まで怖がっていたのが馬鹿らしくなってしまいましたわ」
そうなのだ、私達は今まで、無条件で提督を怖がり、近づかなかった。今朝だって、突然声をかけられたときは怒られるんじゃないかと思っていたくらいだ。でも、実際は違う。
「うん。他人の為に涙を流せる、優しい人なんだ、提督は」
思えば、提督は私達に会うたび、声をかけてくれたり、労ってくれたりしたっけ。前までは、何を考えてるのか分からずに怖がって避けていたけど、今なら分かる。
……前の提督は、私達のことを嫌っていたけど、その嫌悪の感情の中には、戦果を出せないから、という怒り以上に、私達が人外の化け物だからと言う畏怖の念があった。だからこそ、前の提督は必要以上に私達を虐げ、万が一にも反逆しないように、恐怖を植え付けたんだろう。
でも、提督は違う。提督は、私達艦娘を、普通の女の子として見ているんだ。
「……本当に、優しい人」
「まあ、ちょっと、子供っぽいですけど、殿方は皆、そう言ったところがありますからね」
熊野が、茶化すように言った。
「ま、何にせよ……」

「「あの人が提督になってくれて、良かった！」」

それと……、

「「（今度は二人きりのデートに誘おう）」」

16話　マイ・フェア・レディ

「「「ロンドン橋落ちるー！落ちるー！落ちるー！」」」

あー、駆逐艦うざい。

折角のお休みなんだし、一日中昼寝しようと思ってたのに、よりにもよって駆逐艦達に捕まるなんて……。早く帰って寝たい。切実に。

「き、北上さん？」

私の妹兼親友、大井っちが声をかけてきた。

「んー？何ー？どしたの大井っちー？」

「この列に、て、提督がいるんですけど、き、気のせいでしょうか？」

「……えっ？」

「ロンドン橋落ちるー！落ちるー！落ちるー！（成人男性）」

いる。見間違いじゃない。確実にいる。寝ぼけていて気付かなかったけど。

見つけてしまったからには、この私でも流石にスルーできない。は、話しかけよう……。

「……提督、何やってるの？」

「えっ？いや、雷ちゃんが遊ぼうって言うから」

「私が誘ったの！北上さんも大井さんも、司令官と仲良くなって欲しくて！」

雷め、正直言って余計なお世話だ。勘弁して欲しい。そんなことしなくていいから……（良心）。と言うより、子供に誘われたから遊びに来るって……。家族サービスができるお父さんか何か？

「雷はいい子だなぁ!!」

「うきゃー！司令官ー！」

「ずるーい！私も抱っこして欲しいっぽいー！」

「しれぇ！私もー！」

「お”うっ！」

何だあれ。駆逐艦に群がられてる。と言うより、目的が分からない。私達と遊んで何がしたいんだろう。まさか、本当に仲良くなりに来たの？……あの提督だとあり得る話だから困る。

……この前、提督が首輪を一斉回収した日、私は、あまり驚かなかった。提督がこの鎮守府を立て直しているのは、下心あってのことじゃないと、何となく分かっていたからだ。多分、首輪のことも、気付いていないとかそんなことだろうと思っていた。提督も私も、「直感」で動くタイプだし。

問題は、大井っちだ。大井っちは、ずっと提督のことを警戒して、敵視している。首輪が外された後は、ある程度態度も軟化したけれど、まだまだ嫌っているみたい。気持ちは分かるけど、この提督は悪い人じゃないんだから、もうちょい優しくしてあげればいいのに。

だからだろうか、こうして提督に会うたび、何となく申し訳ない気持ちになってしまう。

「て、提督？貴方、仕事は？」

大井っちが聞く。

「んー？ないよー？今日は夜に報告書読んでまとめるくらいかなー」

……この提督、実はかなり有能だ。元より、書類処理はかなり早いし、ここ一カ月くらいで最低限の指揮は覚えたし、私達が船だったころの性能も覚えてくれた。お陰で、前と違って、ちゃんとした仕事が回ってくる。前の提督は、ただただ強力な戦艦と空母でごり押しするばかりだったから、私達はその露払いだとか遠征だとかばっかりだった。

「……では、お部屋でお休みになられては？」

あーもう、大井っち、ケンカ売らないで、頼むから。

「ご、ごめんね、提督。大井っちも悪気がある訳じゃないんだよ？」

大井っちは、首輪が付けっ放しだった理由が、「忘れてた」というのは許せないらしい。結局、外されたんだしどうでもいいじゃん、と思うんだけどなぁ。私が提督だったら、多分同じようなこと言うと思う

んだけど。
「いーのいーの！怒ってないよ！北上ちゃんも大井ちゃんも、無理しなくていいよー！」
「だ、だから大井ちゃんはやめなさいって……、はぁ、もう良いです」
うーん、大井っち、何が気にくわないんだろう？などと思いながら、なんだかんだで提督と駆逐艦達と遊ぶことになり、解放されたのは夕方だった。

「あー、つ、疲れた……。なんであんなに元気なの？」
「北上さん、ご苦労様です」
「いやー、久しぶりに童心に帰ったわ」
提督が童心に帰ってないとこ、見た時ないんだけど。

……にしても、ロンドン橋、か。確か、『ロンドン橋落ちる』は、何度かけても落ちてしまうロンドン橋に人柱を捧げる歌だったっけ。……何を得るにも、人の命を「使わなきゃ」ならないんだろうか。船だったころに積まれたあの兵器のことを思い出して、少し、涙が出た。
「き、北上さん?!どうしました?!」
「あら、珍しい。嫌なことでもあった？悩みなら聞くよ？」

「……提督、私達も、この深海棲艦との戦いで「使われ」ちゃうのかな？誰も「消費」されずに、皆んなで勝つことって、出来ないのかな？」
私は、思わず、提督に聞いていた。
「あー……、はいはい、うん。別に気負わなくて良いんじゃない？誰も死なないし」
真剣に聞いたのに、提督から帰ってくるのは、いつも通りの軽い返事だ。ついつい、柄にもなくムキになってしまう。
「なんでそう言い切れるの?!私、嫌だよ！誰にも死んでほしくない!!」
すると提督は、いつもの飄々とした雰囲気のまま、私の手を握り、こう答えた。

「……ロンドン橋が落ちるなら、不壊の金属、超合金Zで作ればいい。寝ずの番が欲しいなら、監視カメラで、皆んなでシフト組んで、順番で見張りゃいい。……誰かが犠牲になる必要なんてないさ、皆んなで協力すりゃいい」

「……そんなこと、できるの？」

「やってみせるさ」

ああ、「直感」で分かる。この人は、提督は、私達を沈めない、と。

「提督!!」

「おっと、北上ちゃんどうした？急に抱きついてきて？」

提督は、思わず抱きついてしまった私を優しく受け止めてくれた。……ミントと、甘いお菓子の匂いだ。いい匂い……。何だか、凄く安心する。

「……提督？」

「待って、大井ちゃん待って、俺何もしてない」

提督はきっと、誰かを犠牲にしたりなんかしないだろう。今度こそ、きっと、みんな揃って、全員で、勝つ。そんな夢物語を、本当に実現するだろう。理屈じゃない、でも、そう思える。

……この人の元で、今度は、みんな一緒に……。

「大井ちゃん待って、蹴らないで」

「このっ！北上さんを放しなさいっ!!若しくは代われっ!!」

17話　マスコミ

昼過ぎ。飯炊きと食事を終わらせ、執務室で食休み。机の上に置いておいたミントガムを噛みつつ、大淀（呼び捨てがいいらしい）と世間話をする。

話の内容は、なんてことない、今日の飯はどうだったとか、晩飯どうするとかそんなもんだ。こういうゆっくりした時間もたまには良いだろう。

「ししししし司令官!!こここここれっ!!!よっ、よろしゅくおにぇがいしましゅ!!!」

「えっ？なんて？」

早速、長閑な昼休みを台無しにしたのは、重巡の青葉ちゃんだ。後ろには衣笠ちゃんもいる。

見ると、地震にあっている欠陥住宅みたいに震える青葉ちゃんは、何かを差し出している。因みに、衣笠ちゃんも高周波ブレードばりに震えてる。やばい。

「えっ、何？何これ？」

「ひゃあああああ!!ごめんなさいごめんなさい!!!ゆゆゆゆゆ許してえええええ!!!」

「えぇ……？」

ビビりすぎじゃん？差し出された何か……書類だこれ、差し出された書類を読んでみた。

「『嘆願書』……？」

成る程、口頭だと怖いから、文書で伝えるってことか？どれどれ？

「……んー？」

内容は、やたらと畏まっていて読みづらいが、要するに、「新聞の発行を許可してくれ」とのことだ。というより、普通に考えれば許可いらん内容なんだけど、これ。

……ん？じゃあ、援助してくれって事か？成る程、それなら納得は

いく。今月は給料が出せないし、新聞を作るための機材が手に入らないだろう。カメラとラップトップはあったな、でも印刷機は執務室にしかないし、スキャナもここにはない。つまり、この子達は機材をくれと言いたい訳だ。
「よし、分かった、用意しよう」
　取り敢えず、持っている機材はあげよう。足りないものは、例によって、作れば良い。
「大淀、ちょっと行ってくるわ。戻ってくるまで休んでて良いぞ」
「はい！提督のためにお仕事頑張りますね!!」
　あれれー？おっかしいなー？日本語が通じねえぞー？最近、大淀はこういうとこあるからなー。くれぐれも頑張りすぎないように伝え、バグったＮＰＣみたいに震える二人を連れ、工廠に向かう。

「あ!!提督!!おはようございます!!見てくださいこれ！昨日作ったんです!!今回のも自信作ですよ!!それと、こっちの装備は全部、整備が終わりました!!ああ、あと、この提督が作っていいと言ってくれた艦載機の試作型がこれです！あ！そう言えば、日経エレクトロニクスの最新刊読みました?!凄いですよね最近は!!月刊機械設計も良かったです！特に有澤重工の物質工学が前衛的で!!今度は有澤重工の装甲板を発注しますね!!それと、えっと、」
「お、おう」
　明石（こちらも呼び捨てがいいとのこと）の登場である。
　明石は、工廠で死んだ魚のような目で装備を整備していたところを発見し、保護した。本人が言うには、機械弄りは好きだが、休みなしはキツイとのこと。適切な休みを取るようになった今は、大淀と同じく生き生きしている。
　元々、ＤＩＹ精神があるもの同士気が合い、最終的に意気投合した結果、大淀みたいに俺にくっついて歩くようになった。
「（明石さんってこんな人だったっけ？）」
「（ち、違うと思う）」

ほーら言われてんぞ明石。くっつかないの、離れなさい、ね？
「あー、明石、工廠借りるよ」
「はい！お構いなく!!……今度は何を作るんですか？」
「んー？なんかね、青葉ちゃん達が新聞を作りたいんだって。だからその機材を作ろうと思って」
「お手伝いします!!（即答）」
本当に最近グイグイくるよな、明石。
「えっ?!いっ、いや！わ、私は許可が欲しいだけで!!」
青葉ちゃん、全力で恐縮。俺知ってるよ？君、かなりのお調子者で、面白い子でしょ？俺の前でもそう言うとこ見せて良いんだよ？
「いやいや、許可だけじゃ新聞は作れないでしょ？取り敢えず、カメラはこれでいい？あと、編集にはこれ使って」
そう言って、デジカメとラップトップを渡す。
「そんな！こんなもの、貰えないです!!」
「良いってば。新聞とかそう言うの、どんどん作って欲しいんだよ、俺は」
そう、娯楽が足りないのだ、この鎮守府には。取り敢えず、スマホとか当面の私服だとかは全員に与えたが、何か知らないけど皆んなあまり使わないのだ。例えば、駆逐艦の子供達なんかは、スマホ弄りより外で遊んだりする方が良いらしい。他にも、長門さんは筋トレ、金剛ちゃんは紅茶とか、皆それぞれ趣味があるとのこと。
皆、心にゆとりができ始めて大変よろしい。でも、個人や特定のグループでの趣味だけでなく、鎮守府の全員の共通の話題となる何かがあってもええやん、と思うのだ。
「と言うことだよ。分かった？」
「は、はあ……」
分かってくれたかな？分かってくれたってことにしておこう。
「じゃ、明石、適当に使えそうな材料くれる？プリンタとスキャナを作るんだけど」
「はーい!!」
明石は有能だ。曖昧な指示でも、自身で考えて最良の結果を出して

くれる。
「これと、これ、あとこれ、……これなんかも良いと思います！」
「おお、これ、去年のモデルのか、使えそうだな」
「はい、そうですね！……最近の人は、まだまだ全然使えるのに、ちょっと古いモデルだからって直ぐに捨てちゃうんですよねー」
　自分を道具と重ねて見ているのだろうか、少しばかり悲愴な面持ちを見せる明石。一つ撫でてやると、すぐさま元の笑顔に戻り、「頑張ります！（島村並感）」と一言。楽しそうに作業を始めた。何というか、扱い易いなー。

「……提督は、その、わ、私達を叱らないんですか？」
　衣笠ちゃんが小さく手を挙げて言った。
「んー？何でー？」
　俺は、明石と作業しながら、そう返す。相変わらず震えてんなー。
「だって、私達、提督にお仕事を中断させて、よりにもよってこんなことさせて……」
「良いんだって、こう言うの好きだし」
「でも……」
「ええんやで」
　ニッコリと笑って、そう言った。別に困ってないんだよなあ。大淀が有能なもんで、仕事なんて大した量ないし、日中は暇だから駆逐艦と遊ぶか鎮守府の改装かぐらいしかやることないんだよねー。こんな風に面白い面倒事を貰うと助かるわー。
「そもそも、物作りが趣味ですからね、私も提督も。作るだけでも楽しいし、作ったもので喜んでくれる人がいたらもっと楽しい。そんなもんです。ねー？提督ー？」
「ねー、そーだよねー」
　つまり、そういうこと。
「……そ、その気持ち、何となく分かります」
　若干だが、震えがおさまった青葉ちゃんが言う。
「わ、私も、何かを調べたりするのが好きで、その調べた物事で、誰か

が喜んでくれるのはもっと好きですから」
「おっ、そうだな」
段々緊張が解れてきたな、青葉ちゃん。
「そ、それに私は、今度こそ、正しくて、楽しいことを皆んなに伝えたいんです！……だ、だから、新聞を書いてみようと思って……、司令官、お願いします！私に新聞を書かせて下さい!!」
ああ、やっと目を合わせてくれた。真っ直ぐで、それでいて綺麗な目だ。
「良いよー。頑張って書いてねー。あ、最後に一つ」
出来上がった機材を渡して、一言付け加える。
「出来た新聞は俺にも頂戴ね？」
×
×
「……はい!!」
×何だ、可愛い顔で笑えるじゃないの。
×
×
×
×
「司令官、思ったより良い人でしたねー」
×
「まあ、大っきいし、見た目はちょっと怖いよね」
×もー、ガサはビビりだなー。……まあ、私もビビってたけど。
「でも、本当に鈴谷さんと熊野さんの言う通りでしたねー」
そうなのだ、少し前に、提督は鈴谷さん、熊野さんとデートをしたらしいのだ（要取材）。
「うん、あの二人が急に、提督は良い人だから避けないであげて、って言うから、試しに嘆願書を出してみたけど、まさかここまでやってくれるなんてね」
ガサは機材を部屋に運び込み、取扱説明書を読みながら、四苦八苦している。
「うーん、貰ったは良いけど、使い方が分からないよ、これ」
私も分かっていない。司令官から貰ったこの小さなカメラも、まるで使い方が分からない。どうしたものか、と思っていると、ふと、あ

る解決策が思い浮かんだ。
「……提督に聞いてみるって言うのはどうでしょう？」
「えー！だ、駄目だよ！流石にこれ以上迷惑はかけられないよ！明石さんに聞けばいいじゃん！」
「い、いえ、折角だから、取材も兼ねて、またお会いしてみたいんですよ！」
「しゅ、取材?!提督を?!」
「はい！司令官を取材して、皆さんに司令官の良いところを知ってもらいましょう！……大体、さっき言ったじゃないですか！正しくて楽しいことを皆んなに伝えるって！という訳で行きますよガサ!!」
「あっ、ちょっと！引っ張らないでよぉ!!」
そうだ、私達は今まで、知ろうとしなかったんだ。知らないからこそ、怖いと、勝手に思っていたんだ！憶測で物事を判断しちゃ駄目だ！しっかり調べて、その上で判断しないと!!
そうと決まれば執務室へ出発だ!!

「と、言う訳で、取材させて下さい！お願いします司令官!!」
「取材？俺にか？別に構わんよ？よく烏天狗のパパラッチに取材されるからな、慣れてるよ」
や、やった！引き受けてくれた！

「ありがとうございます!!その、じゃあ、早速！あ、ガサ！メモよろしく!!まず、年齢と、職業を!!」
「???歳、旅人兼提督です」
「（趣味の）どういう系統がお好きなんですか？」
「そうですねぇ……やっぱり僕は王道を征く、物作り系ですかね？」
「では、（噂に聞いた）服飾とかっていうのは？」
「やりますねぇ！」
……

……

……

「……はい！では、これくらいで！お付き合い頂き、ありがとうございました!!」

「おー、またおいでー」

驚いた、司令官が怖い人だというのは、全くの誤解だった。取材してみると、本当に面白い人だと分かったし、旅の話なんかは聞いていて飽きない、すごい話だった。どんな質問にも真摯に答えてくれて、機材の使い方もちゃんと教えてくれた。ついでに、わかりやすい教本もくれた。

そうだ！司令官の誤解を解くために、皆んなにもっと司令官のことを知って貰おう！よし、題して、『今週の司令官』コーナー!!これで、司令官の株も、私の新聞の人気も上昇間違いなしです!!

１８話　オーガニック・クリスマス

１２月２４日、クリスマス・イブ。なんでも、聖書の神が産まれた日の前夜なのだとか。まあ、私達日本の艦娘には全く関係がない日だな。

だが、ここの鎮守府の提督は……、ハジけた。

ことの発端は何だったか、確か、提督がクリスマスパーティ（？）なるものを催すと言い、何処から用意したのか、明石と共に機雷や自動砲台を持ち出し、私達に近海に設置するように指示し、その後、鎮守府の一斉休暇を宣言した。

勿論、私は反対した。だが、大凡完璧と言える防衛設備、防衛策、奇襲に備えたバックアップの作戦まで聞くと、頷かざるを得なかった。

観念して、休暇を楽しんでいた私と、妹の陸奥だが、ノリに乗った提督が全力で羽目を外して……。

「おい提督!!いい加減で熊野を下ろして投降しろ！そうすれば悪いようにしない！」

「そうよ、あんまり羽目を外し過ぎちゃ駄目よ？」

提督は、何故か熊野を取っ捕まえて、肩車すると、逃走した。まあ、悪いことはせんだろうが、心配ではある。私と陸奥は、提督を追って、正門の前まで来た。

「あ、あの、提督？そのですわね、こう言ったことは、もっと段階を踏んでからというか、何というか、だ、駄目なんですわよ?!（処女）」

「嘘をつけ！悪いようにしないなんてずーっと言ってきたじゃないか！だけどいつも裏切ってきたのが長門さんだ!!」

相変わらず訳が分からん。

「そんなことした覚えはない！」

「八歳と九歳と十歳のときと、十二歳と十三歳のときも君達はずっと！待ってた！」

いや、私達は召喚されてからまだ三年くらいなんだが。

「何をだ?!」

「クリスマスプレゼントだろ!!!!!」
「はぁ……？」
　もう訳が分からん。
「カードもだ！長門さんのクリスマス休暇だって待ってた!!」
「だから、何の話だ！良いから熊野を離さんか!!……ん？」
　何だこれは？……鎖？
「Ｌｏｖｅ　ｍｅ　Ｆｏｒｅｖｅｒ!!」
「ぬおお?!!」
「えっ、ちょっと?!私も?!!」
　提督は、私達の一瞬の隙を突いて、提督所有の大型の車に押し込んだ。

「……で？私達は何処に連れて行かれるんだ？」
「ふんふんふーん、あっかいふんふふんふふーん！（裏声）」
「答えんか！」
「んー？だから言ったじゃん、クリスマスプレゼントだよ？」
「何だ？それは？」
「あれ？知らない？今日の夜はね、良い子にしている人にサンタさんなるおっさんがプレゼントをくれることになっている日なんだよ？」
　ふむ、なんとなく、聞いたことはある。確か、駆逐艦の子供達が楽しみにしていたような……。成る程、そういうことか。
「私達に、プレゼントを選べ、ということか？」
「ご名答！そーいうことさ！こんなこともあろうかと、艦娘の皆んなの欲しいものは大体調べておいた！（青葉が）」
　そう言って提督は、懐から書類を取り出し、後部座席にいる私に見

せた。
「……成る程、全部買ったとしたら結構な値段になるな」
「あら、私達のもあるじゃない。買ってくれるのかしら？」
「勿論オッケー！」
　くっ、そういうことか、青葉に聞かれたからつい格好付けて「欲しいもの？ふむ、ベンチプレス辺りか」なんて言ってしまった！本当は２ｍくらいのやたらでかいティディベアが欲しいのに!!だ、だが、こんなこと誰にも言えんからな、かえって良かったな、うん。
「よーし、着いたぞー。まずは化粧品とアクセサリーだ」
　そうこうしているうちに、商店に着いたみたいだ。化粧品に、装飾品か、あまりそういうのは分からんな。

「あら、この香水良いわね」
「あ、それ結構良いやつだぞ？この前のドラマの主演女優が使ってた品のいいやつだな」
「本当ですわ……、巴里から輸入されたものみたいですわね」
「あら、ハイカラね？こっちのスワロフスキーのネックレスも素敵ね、うーん、こっちのこれなんて古鷹ちゃん辺りに似合いそう」
「そうですわね、あまり主張が激しくなくて、儚げな雰囲気の古鷹にはぴったりですわね」
「うーん、古鷹ちゃんは欲しいもの特に無し、らしいから何かアクセサリーでも買ってあげようか。んー、でも俺はこっちのティファニーのも行けると思うんだけどなー」
「あら素敵！」
　くっ、流石陸奥、流石熊野！全く分からん!!あと提督は何故話に入れる?!……と言うか、長い！早く買え!!
「な、なあ、提督？早く買ったらどうだ？他にも買い物をするんだろう？」
「ごめんちょっと待ってて、あと一時間、いや二時間」
「んなっ?!長過ぎないか?!」
「女の子は買い物に時間がかかるんだよ」

「お前は男だろ!!!」
「ンモー、分かった分かった。はい、これ、車の鍵ね。悪いけどまだかかるから、車で待ってて！テレビでも見てな！」
「あ、ちょっと!!」
　行ってしまった……。はぁ、全く、仕方がない。車の中で待つか。分からんが、そんなに時間がかかるものなのか？理解できんな……。

……。

……。

……。遅い、もう番組が一本終わったぞ?!

……。

「ごめーん、待ったー？」
「遅いっ!!!」
「ごめんね、長門」
「申し訳ありません、長門さん」
「はぁ、まぁ、いい。次はお前らだけで行けよ……」
　ああ、もう。こんなことなら無理にでも逃げ出せば良かったな。
「で？次はどこだ？」
「んー？おもちゃ屋さんだねー。服とかは帰ってから作るし、ここで終わりかなー」
「ふむ、そうか」
　移動の最中、暇潰しに提督が持っていた欲しいものリストを見る。
　ふむ、「金剛：ティーセット」まあ、だろうな。
「加古：ベッド」これはどうするんだ？まさか作るのか？
「明石：ＨＧデンドロビウム」何のことだ？
「望月：プレステＶＲ」ぷ、ぷれすて？

「赤城：おにぎり」お、おう。
「な、なあ、提督？こ、これはどうするつもりだ？」
「ああ、そのページは別枠でね。ティーセットは知り合いの検事局長のイチオシのを買っておいたし、ベッドはノースティリスで拾ったのがある。ＨＧデンドロビウムとプレステＶＲは通販で買ったし、おにぎりは食べてもなくならないやつがあるから、あげよう」
「色々と突っ込みどころはあるが、食べてもなくならないおにぎりとはなんだ？それは食べても大丈夫なのか？」
「大丈夫でしょ。妖怪の頭領からもらったやつだし」
　は？
「は、ははは、よ、妖怪なんて、い、いる訳ないじゃないかー、じょ、冗談は、や、やめろー」
　ななな、いきなり何を言い出すんだ提督は。妖怪なんてそんな恐ろしいものいる訳ないじゃないか!!いい加減にしろ!!
「え？嘘じゃないよ？遠野の方で妖怪の頭領と会ってさ、なんだかんだでおにぎりくれたし、いい人、いや、いい妖怪だったよ？大体にしてここら辺って結構「出る」じゃん、海も近いし」
「……はは っ」
　あ、駄目だ、乾いた笑いしか出ない。「出る」ってなんだ？何がだ？やめてくれ、頼むから。
「（提督？長門はそういう冗談は駄目なのよ！やめてあげて?!）」
「（マジなんだけどなぁ……）分かった、この話はやめよう。はい！やめやめ」
「もう！私は怖い話が苦手でしてよ？折角のクリスマスなんですから、何か明るい話をして下さいな？」
　でかした熊野ぉ!!伊達にお嬢様やってないな！（意味不明）
「うーん、クリスマスか、じゃあ、知り合いのニューヨーク市警と一緒にテロリストと戦った話する？」
「何をしたんですの?!」
「いやちょっと、ニューヨークでテロリストの集団とばったり会っちゃってさ？そこで知り合ったニューヨーク市警と協力して銃撃戦

やったんだよ。でも俺、銃とかからっきしでさ？奪い取ったカラシニコフをぶん投げて戦ったっけか」
「「えぇ……」」
　何やってんだこいつは……。
「最終的にミサイルが降ってきたっけ。あん時はヤバかったな、うん」
「はー、提督の話は、どこまでが冗談でどこまでが本当のことか分からないわね」
　陸奥の言う通りだ。提督はよく冗談を言って場を和ませるが、こういう話は真偽のほどが分からん。
「本当だよー？サンフランシスコでは、４４マグナム持った市警と一緒にマフィア相手にドンパチしたっけ。ありゃあ中々だったな」
　まーた訳の分からんことを言い始めたぞ、こいつ。

「お、着いたぞ」
　結局、商店に着いたことで、話は有耶無耶になった。
「で？何を買うんだ？もう待たされるのはごめんだぞ？」
「買うもんは決まってるよ、携帯ゲーム機と、スポーツ用品、あとぬいぐるみだ」
　ふむ、ぬいぐるみ。
「あ、長門さんはスポーツ用品を見に行くと良いよ。ベンチプレスでしょ？」
「そ、そうだが？」
　ぐぎぎ、そうだが？そうだが違う！
「じゃあ、俺はぬいぐるみ見てくるから、また後で」
　そう言い残し、ぬいぐるみコーナーへと消える提督。ああ、あの大きな大きなテディベア、良いなあ……。はあ、仕方がない、ベンチプレスを選ぶか。まあ、トレーニングも好きだし、な。

　……それと、しばらく後に、提督は両手一杯にぬいぐるみを抱えて帰ってきたが、ぬいぐるみを抱えて歩く成人男性は、なんというか、こう、かなりキツかった、とだけ言っておこう。

「……で、今度はプレゼントの配布を手伝え、だと？」
流石に、そこまでしてやる義理はないぞ。付き合ってられん、帰ろう。
「あれ？ビッグセブンともあろうお方が、皆んなに夢を見せることすらできないんですか？うわー、残念だなー、やっぱりながもんかー」
「何だと?!誰がながもんだ!!この長門に不可能などない!!!」
「（あちゃー、乗せられちゃってるわ、長門ったら。巻き込まれない内に帰ろ、）」
「陸奥！お前も来い!!」
「はぁ……、やっぱりこうなるのね」
「熊野ちゃんも良ければ手伝ってくれる？」
「ええ、勿論ですわ、提督の頼みとあらば！」
プレゼントを配ることくらい、この長門にも出来るぞ！侮るなよ提督!!
ということで、提督が目にも留まらぬ早さで作ったサンタ服を着て（陸奥にはトナカイ風の衣装を渡された）、私と陸奥は駆逐艦の部屋を回り始めた。途中、起こしてしまいそうになることもあったが、何とかやり遂げられたぞ。
取り敢えず今日は、部屋に帰って寝よう。流石に疲れた。
×
×××
×××
×
「あら？提督と、熊野ちゃん？どうかいたしましたか？お酒ですか？」
「んー？何やキミ、そんな変な格好してー？」
「提督ー！お休みなんだから飲みなよー！ひゃっはー！」
「こんばんは、提督。作戦会議でしょうか？」

居酒屋鳳翔に乗り込んだところ、いつもの軽空母、飲んだくれ勢、腹ペコ勢と、面子が揃っていた。面倒な駆逐艦や潜水艦、軽巡などは長門さんに押し付けたので、ここにいる子達と、あとは少人数の部屋にいる戦艦などに渡せばノルマ達成だ。

「メリークリスマス！いつも良い子にしてる君らに、サンタ提督からのプレゼントだよー！」

「は、はあ、え？これを、私にですか？……あら、良い包丁！ありがとうございます、提督。大切にしますね！」

鳳翔さんには包丁を。結構良いやつだ。

「おっ、私にもなんかくれるん？……って、何で鉄板やねーん?!!誰の胸が鉄板や!!ええ加減にせぇよホンマに!!!」

いや、そんなことは思ってないよ？ただ、粉物料理食べたいって書いてあったからさ？ということで、龍驤ちゃんには鉄板焼きセット。

「おっ、私にはー？……なにこれ？瓢箪？ひょっとして酒かい?!やったあ！嬉しいよ提督!!ごくっごくっ……っぷはあ！こ、これ、ものすっごく強いねぇ?!何の酒だい？」

隼鷹さんには酒虫入り瓢箪を。知り合いの鬼から貰った酒虫を手作りの瓢箪にぶち込んだ代物。水を入れると、酒虫が結構強い酒にしてくれる。

「提督？何かご用でも？……クリスマスプレゼント？はあ、よく分かりません。……おにぎりですか、ありがとうございます。え？食べてもなくならない？また得意の冗談ですか？……?!、ほ、本当ですねこれ、何でか食べてもなくなりません、どうなっているんですかこれ」

赤城さんには、例の食べてもなくならないおにぎりを。驚きながらもガンガン食べてる。気に入ってくれたようでなによりだ。

「提督、良かったのですか？」

戦艦の部屋周辺、金剛型にプレゼントを渡し終えたところ、熊野ちゃんが聞いてくる。

「どしたの熊野ちゃん？」

「長門さん達を駆逐艦の部屋に行かせるなんて。数が多くて難儀してるでしょう。手伝って差し上げては？」
「良いって、多分そろそろ終わると思うし。熊野ちゃんももう上がっていいよ、俺も直ぐに寝るから」
「そうですか？……では、おやすみなさい、提督」
熊野ちゃんと別れた俺は、急いで車に向かい、隠しておいた最後のプレゼントを取り出す。
「さーて、長門さんはまだ部屋に帰ってないな？本当は女性の部屋に無断で入るのはマナー違反だが、今の俺はサンタ、サンタに敵はない」
と言いつつ、長門型の部屋の鍵を素早くピッキング。よし開いた。
最後のプレゼント……、大きな大きなテディベアを、長門型の部屋に置き、「メリークリスマス！」と書かれたプレートを持たせると、俺は侵入の痕跡を消し、さっさと逃げることにした。

サンタが簡単に見つかって、捕まっちゃならない。だってサンタは、皆んなの夢なんだからさ。
夢はそう簡単に手に入らない、そうだろ？

１９話　黒井鎮守府の愉快な一日

《０６：００》

皆さんおはようございます！青葉です！今日は、「黒井鎮守府の一日」というテーマで、鎮守府中を取材して回る特集を作りたいと思います！

いつもより早起きして、まずは、人の気配がある食堂に向かいます！

「あら？青葉ちゃん、おはよう。早起きですね？」

「おー、おはよう青葉ちゃん。朝は目玉焼きとソーセージ、あとサラダだ。いつも通りパンとごはんの好きな方をお好みで、な」

はい、おはようございます！朝早くから食堂の厨房で料理をしているのは、軽空母の鳳翔さんと、司令官です！基本的に食堂を切り盛りしているのは鳳翔さんと司令官で、たまに榛名さんや大淀さんなどがお手伝いをしています。

パンかごはんか選べるのは司令官が朝はパン派だから、らしいです。私も朝はパンですね。

んー、そうですね、メニューは誰が決めてるんですか？

「メニュー？メニューは俺と鳳翔さんの二人で決めるけど、皆んなの意見も聞いてるぞ？」

ああ、司令官はよく今日の晩飯何がいい？とかって聞いて回ってますよね。

「まあな。ああ、そうだ、青葉ちゃん？今日の昼飯何がいい？」

うーん、煮物、ですかねぇ？

《０８：００》

０６：００頃に起床した艦娘達は、皆食堂に集まって食事を摂ります。０９：００からが業務の開始とのことなので、それまでは皆思い思いの行動をとっています。

おや、あそこで騒いでいるのは……？

「だーかーらー！どうやってそんなに大きくしたのか教えてって言っ

てるの!!」
「うーん、そんなこと言われても……」
鈴谷さんと愛宕さん、珍しい組み合わせですね。大きくって何の話でしょうか、詳しく聞いてみましょう！
「あ、青葉、何？今取り込んでるんだけど？」
鈴谷さん、おはようございます！大きく、とは何のことでしょうか？
「……胸のこと」
……はあ、胸、ですか？そこまで小さくないと思いますけど？私と同じくらいじゃないですか。
「いやいや、小さいわよ、もう！……はぁ、赤城さんも長門さんもかなり大きいし、ここにいる愛宕さんなんて、同じ重巡なのにこんなにも！こんなにも!!」
大きい人と比べてもどうしようもないじゃないですか。大体、愛宕さんは分かりますけど、赤城さんのは最近太って付いた脂肪、長門さんのは半分くらい大胸筋だと思うんですけど（名推理）。
「と、兎に角！もっと大きくしたいの!!……いっそのこと提督に揉んでもらって……」
あー、その、非常に言いづらいんですが、鈴谷さん？さっきから直ぐそこに司令官が……。
「……へ？」
「……あー、なんだ、その、す、鈴谷ちゃんはそのままでも、充分かわいいと思う、よ？」
「ーーーッッ!!!」
あーあ。真っ赤になっちゃいました。

《１０：００》
皆出撃しちゃいましたね。鎮守府にはあんまり艦娘が残っていません。え？私は今日お休みですよ？んー、司令官は大淀さんと普通にお仕事してるみたいですし、誰に取材をすれば……ん？
「よーしよし！かわいいなぁ、首輪付きー！わぁ、もふもふだぁ！もふ

もふだなお前ぇ！……ん？て、テメェ青葉!!み、見やがったな!!」
あ、青葉、見ちゃいました!!
ま、摩耶さんにあんな趣味があるとは、意外ですね。は、早く逃げよう!!
「青葉この野郎!!待ちやがれー!!」
う、うわあ！足が速い！かなり速い!!日頃から司令官を追っかけてるせいで鍛えられてるんだ!!

《１２：００》
午前の出撃や遠征を終えた艦娘達が昼休みをとる時間になりました。
今朝のリクエストの通り、昼食のメニューは煮物ですね。大根と豚肉、でしょうか、なんというか、お酒にも合いそうですね。
……あ、やっぱり美味しい。大根はしっかり煮込まれていて、味が染み込んでる。豚バラ肉も舌の上でとろけます。相変わらず凄いですね、鳳翔さんと司令官は。
味付けは鳳翔さんですね、和食は鳳翔の方が得意ですから。司令官は基本的に何でも作れますけど、洋食の方が得意、らしいです。
「……」
一航戦のお二人ですね。黙々と、凄い速さで食べています。うわぁ、赤城さんの茶碗、あれ、バケツか何かですか？加賀さんは普通の茶碗で、わんこそばみたいなペースでお代わりしてます。もうおひつごと食べればいいんじゃないですかね？（適当）
……見なかったことにしましょう。なんだか、見てるとお腹が一杯になってしまいます。さて、今日のデザートは、っと。

《１５：００》
おやつタイムです。司令官がおもむろに作ってしまったお菓子をみんなで食べる時間、という感じですね。
戦闘行動というのは、かなりのカロリーを消費しますから、皆んな

甘いものを欲しがります。世の中の女性はダイエットなどで悩むそうですが、艦娘はそう言ったものと縁がありませんね。
アレ？それでも太る赤城さんって一体……？いや、やめておこう、この話はしちゃいけない気がする。
あ、このタルト美味しそう。キラキラして綺麗ですし、折角ですから食べる前に写真を撮りましょう。
カメラは、クリスマスに司令官がくれた一眼レフです。いやー、ありがたい。

《１８：００》
業務終了の時間です。多くの艦娘が出撃や遠征から帰ってきます。これから大体、一、二時間後くらいに夕食があるので、皆さんは入浴したり、シャワーを浴びたり、ですね。
勿論、夜戦も多少は行っていますが、少数です。前任の司令官のように、一日中戦うということはありませんね。夜の出撃は近海に深海棲艦がいないかチェックする、ほぼパトロールみたいなものです。
さて、私もお風呂に入りましょう。
……ちなみに、司令官はさっき外でドラム缶風呂に入ってました。首輪付きちゃんと一緒に。外、雪降ってるのになぁ。でも、本人は平気みたいですし、まあいいでしょう。
え?!入浴中の司令官の取材?!!な、何を言っているんですか?!そんなことしません!!た、確かに、ちょっと気になって見に行きましたけど、あれは違うんですよ!!
その時の司令官の様子？司令官は、いつも通りご機嫌でしたよ。上手な鼻歌を歌いながら寛いでましたね。し、司令官の身体ですか？えっと、その、なんと言いますか、よく、鍛えられていましたね、はい。あと、傷だらけでした。い、いや、それしか見てませんよ?!う、後ろ姿だけです!!け、け、決して！ま、前は見ていませんよ?!!あんなの入るのかなとか、写真撮っておけば良かったとか思ってないです!!!

《２０：００》

夕食後、皆さんは部屋に戻ったり、遊戯室に行ってみたり、居酒屋鳳翔に行ったり、自由な行動を取っています。
駆逐艦のほとんどは、すでに眠くなってきているらしく、部屋に戻りましたね。でも、時雨さんみたいな、少し大人びた感じの駆逐艦は、休憩室の大型のテレビでドラマを見たりしてます。
あ、司令官もちゃっかり皆さんとドラマを見てますね。……私もあとで録画しておいたのを見ましょう。
……ん？『ホラーショック！寒い冬をもっと寒くしますスペシャル』？この季節にホラーですか？えー？
あっ、司令官の近くに座っていた長門さんが司令官に抱きついた!!う、羨まし、じゃない、い、いかがわしいです！駄目です！司令官から離れて下さい!!……ちょっと時雨さん？何ちゃっかり司令官の膝の上に座ってるんですか？「僕も怖くなっちゃった」？いやいや、怖くなっちゃった人はそんな嬉しそうな顔をしません!!司令官から離ーれーてー下ーさーいー!!!

《22：00》
あの番組、結構怖かったですね……。最終的に、全員で司令官に抱きついちゃいました。でも司令官は、いつもの笑顔で、「へー、よくできた合成映像だなー」とか言ってました。司令官、貴方精神状態おかしいんじゃないですか……！（正論）
あんまりにも怖かったので、司令官に着いてきちゃいました。なんでも、これから居酒屋鳳翔で少し飲むんだとか。ちなみに、長門さんと時雨さんも着いてきました。
「ギブミーアルコールゥゥゥ!!」
「おっ！提督ー！お酒だよー!!」
「ひゃっはー!!」
相変わらずのハイテンション。こんな風に楽しそうな司令官を見るとお化けも怖く……やっぱり怖いです。
「んー？この酒、なんか変な味だなぁ？おかしいな、昨日買った奴なの

になあ？」
　隼鷹さん、どうせ酔っ払って買いに行ったんでしょう？古いのを買わされたんじゃ？
「そんな訳ないだろー？私だって酒のことだけはちゃんとしてるぞー？」
「どれどれ？ああ、これ幽霊が飲んだんだろ。気が吸われちまってるな」

「「「……え？」」」
　居酒屋鳳翔が静まり返る。は、ははは、冗談きついですよ、司令官？
「ん？なんだ？皆んな知らないでここに住んでたのか？ここ、馬鹿みたいに強力な霊道だぞ？まあ、古くからある軍事施設だしな、推して知るべしってとこか。幽霊がそこら中にいるから、皆んな気づいてるもんだと思ってたわ」
「あ、あはははは、キ、キミィ、そういう冗談はおもろないで？」
　龍驤さんの言う通りですよ！イタズラにしても酷すぎます!!
「うーん、分かった。鳳翔さーん、塩持ってきてくれるー？」
「は、はい……どうぞ」
　鳳翔さんも震えている。流石の司令官といえども、これはいけない。
　すると司令官は、塩を手に取り、傍の何もいない空間に投げつけた。
『『『ギィィィャヤァァァァァァァ!!!!!!!!!』』』
「うん、ここにいるのは雑魚ばっかりだな。ただの塩でオーケーだわ」
「「「……い、いやぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」」」
　なななななな何ですか!!!!何ですか今の!!!その、今の!!!何ですか!!!
「何って、幽霊だろ？海軍の制服に全身火傷と身体の欠損、沈没した軍艦の船員だったんだろうな」
　ぴ、ぴゃあああああ!!!!何ですか何ですか何ですか!!!!やめて下さいよ!!!!何でそんな平然としてるんですか!!!!頭おかしいんじゃないですか!!!!!!

「いや、ただの雑魚幽霊なんて別に怖くも何ともないし。厄介なのは鬼とか天狗みたいな単純に強いのと、上級悪魔みたいに魂が丈夫な奴だなー」
「クゥーン（気絶）」
長門さーん！長門さんが倒れた!!ま、まさか本当に?!本当に幽霊が?!!
「じゃあ、鎮守府地下の使われていない牢屋に行くか？あそこのは結構強いし、見えるんじゃないか？」
いやいやいやいやいやいや!!!!絶対いやです無理です無理です!!!!

《２３：００》
「何で着いてくんの君ら？」
いや、だって、あんなもの見て眠れる訳ないじゃないですか!!
「俺に着いてきてどうすんのよ？」
一緒に寝て下さい!!!
「いやー、駄目じゃない？ほら、何か間違いがあったらとかさ、」
そんなもの！お化けよりは！怖く！ありません!!!
「まあ、良いけどさ？……いや、青葉ちゃん、時雨ちゃん、龍驤ちゃんはまだ分かるよ？けど、長門さん、鳳翔さん、隼鷹はいかんでしょ？」
「たたたた頼む提督！アレは駄目だアレは!!もうこのままじゃ一生寝られないぞ私!!」
「ご、ごめんなさい、私も怖くて……。実際にこの目で見てしまうと、やっぱり……」
「いやー、酔いが一瞬で醒めちまったね、アレは。……提督、責任取ってくれる？」
「……はぁ、分かった、分かった。布団は各自、自分のを持ってくること！はい、解散!!……どしたの？何で全員俺を掴んでるの？」
なーにが解散！ですか!!怖くて動けないんですよ!!着いてきて下さい!!

「怖くなんてないだろー？さっきからメッチャすれ違ってたのに、何が怖いんだ？」
その心底分からないみたいな顔をやめて下さい!!分かってましたけど!!ちらっと見えましたけど!!見なかったことにしてたんですよ!!!?
「はいはい、着いて行くよ」

《２４：００》
「さーて、寝るか」
……あの後、布団を取りに皆んなの部屋を回って歩いたが、途中で司令官は、突然何者かと格闘したり、「あっ、ここやべえ」とか言いながらおもむろにお札を貼ったりしていました。
生きた心地がしませんでしたね、ええ。
「じゃあ俺、こっちで離れて寝るから、ってちょっと待って、何で全員近付いてくるの？駄目だよ？Ｒ１８タグ付いちゃうよ？」
知りません、今を切り抜ける方が大事です。全員で司令官にくっつきます。
「いや、ちょっと待っていけない、君らは自分の見た目を客観的に見れないの？とってもかわいいのよ？襲っちゃうよ？やばいよ？」
そういうの良いですからもう！本当に怖いんですって!!
「いや、俺も我慢するのキツイって、本当に」
良いですから!!早く寝ますよ！はい、今日の取材終わりっ！特集終わりっ!!ああ！窓に！窓に!!な、何も見てない聞こえなーい!!!

２０話　星屑ロンリネス

……ん、そろそろ朝だ。起きなきゃな、朝飯は……シャケでも焼くか。

アレ？起き上がれねえぞ？

アレ？なんか、全身がこう、もちっとするものにつつまれてるっつーか、これ、あれ、あれだ。

女だ。

いかんいかん、ついにやっちまったか俺?!昨日はそんなに飲んでないはずだぞ?!あー、目を開くのが怖い!!

……ちらっとだけ、ちらっと見るだけなら、

「あ、おはよう提督。いい朝だね」

「えっ？」

時雨、ちゃん？いやいや、嘘だろ、ロリコンじゃないよ俺。

「うせやろ？」

「昨日は助かったよ、ありがとう」

……あ、そういや、添い寝してたんだっけ？よかった、俺無罪!!これで安心して起き、

「……なあ、時雨ちゃん？何で俺の右手は、鳳翔さんの胸の上にあるんだ？」

「起きたらそうなっていたよ」

うーん、時雨ちゃん、笑顔が怖い！

「左手が龍驤の股に挟まってるのは？」

「起きたらそうなっていたよ」

さらに笑みを深める時雨ちゃん。お化けなんかよりずっと怖い。

「隼鷹はなんで俺の股座で寝てるの？」

「起きたらそうなっていたよ」

あっ、やばい、死んだな俺。
「いや、あのね、俺ね、なんもやってないからね？我慢し「青葉、見ちゃいました！」貴公……!!」
パシャリ、という小気味良い音。即座に、写真を撮られたことを理解する。
「ちゃうねん」
「し、司令官！駄目です！そういうことはしちゃ駄目ですよ!!」
「してない」
「とぼけたって駄目ですよ！証拠はバッチリ掴みました!!」
あ、やばい、すごい変な汗が出てきた。
「いや、本当に、誓ってやってない。ヤッてない」
「提督、今正直に言えば怒らないよ、僕」
それ絶対怒る人の台詞じゃないですかー、やだー。なんと言って誤解を解くか、必死に考える。しかし、その間に皆んなが起きてしまった。
「て、提督？その、こう言ったことは困ります……。ど、どうしてもと言うなら、ふ、二人っきりの時に……」
と言って、顔を赤らめる鳳翔さん。かわいい、が、今それどころじゃない。
「な?!キ、キミィ、あかんってば～!!ちょっち、ムードってもんがないやん!!いきなりはあかんよ～！ま、まあ、やっちゃったもんはしゃあないけど……」
いや、下着も脱いでねえだろ、龍驤ちゃん。感触で分かるぞ。なに事後みたいな雰囲気出してるんですかね？
「んん～？なんか頬っぺたに硬いものが……、!!、て、提督～!!そ、そういう趣味なのかい？そ、その、初めてなんだから、最初は普通にしてくれない、かな？」
思いの外乙女してる隼鷹。違うって、朝だからだよ。
「あ、あわわ、へ、変態です！司令官は変態さんです!!スクープ！号外！」
真っ赤になりながらも、写真を撮りまくる青葉ちゃん。何故か俺の

下半身を重点的に撮っているのは気のせいだと思いたい。
「……」
で、さっきから笑顔のまま一言も喋らない時雨ちゃん。洒落になってない。勘弁してくれよもう。
「「提督！おはようございます！今日の朝食は私達もお手伝い、しま、す、ね……!!!?」」
入室してきたのは大淀、明石の二人。あー、そう言えば、昨日、夜に酒を飲むから一応起こしに来てくれって言ったっけか？昨日の俺死ね！
「「どういう……ことですか？」」
わぁ！目に光がない!!
「俺は何もやってません！本当です！」
あーもう滅茶苦茶だよ（呆れ）。
「提督、私は、私じゃ駄目だったんですか?!提督は、私のことが嫌いなんですか?!!私じゃ、提督を満足させられないのですか?!!」
「やっぱり、私みたいな、機械弄りばかりの女なんて、かわいくないですよね……。提督は、私なんか……」
半狂乱の大淀、青くなる明石。
「……提督、僕のこと、子供だと思ってるでしょ？だから、遠慮しちゃったんだよね？ふふ、違うよ、僕は艦娘、年齢なんてものはないんだよ。さあ、遠慮は要らないよ、早く僕を……」
暗く澱んだ目の時雨ちゃん。

駄目みたいですね（諦観）。

と、下北沢で会ったクッソ汚い野獣のような男ならば、そう断じるだろう。だが俺は違う。今まで生きてきた人生の中、この程度の修羅場、多々あった。恐れは、無い!!
「もー、誤解だよ大淀！大好きな大淀を差し置いて、そんなことする訳ないだろ？」

大淀を抱きしめ、撫でる。
「そ、そう、ですか……？そう、そうですね！私の提督は、私を裏切ったりしませんよね!!」
よし、次ィ！
「ほら、明石、顔を上げて？いつものかわいい笑顔を見せてくれよ！例え明石本人だって、俺の大切な明石を馬鹿にしちゃ許さないぞ？明石はとってもかわいいさ！」
明石の両手を包むように握る。
「本当、ですか？嬉しいです！大好きです、提督!!」
はいラストォ！
「ごめんな、時雨ちゃん。子供扱いしてるつもりはなかったんだ。でも、確かに遠慮はしちゃってた、かな？これからは時雨ちゃんともっと仲良くなりたいな！」
時雨ちゃんの頬に口付け。
「あっ、て、提督……。う、うん、僕もごめん！ちょっと我儘だったね。ぼ、僕も提督ともっと仲良くなりたいな！」
大勝利ィ!!丸く収めたぜ！

「……提督、私みたいな、貧相な身体の女は、お嫌いなのですね……。そうですよね、もっと若々しくて、綺麗な女の子じゃなきゃ、提督には釣り合いませんよね……」
「司令官、キミ！キミなぁ!!ウチとしておいて、他の女を口説くなんて!!ウチとは遊びやったんか?!」
「て、提督？嫌だよ？わ、私みたいな女を受け入れてくれるのは提督しかいないんだよ？も、もしかして、さっきので気を悪くしちゃった？ご、ごめんね？わ、私、提督のためならなんでもするから、お願い、私を、私を捨てないでおくれよ、お願いだよ！」
「あああああああああ!!!!!!（即死）」
「んむぅ～？うるしゃいぞ～陸奥～。私はまだねむ～い。むにゃむ

にゃ……」

×××××××××××××××

「あー、朝から酷い目に遭った。なんとか切り抜けられたぜ。鳳翔さんも、もう大丈夫？落ち着いた？」

「すみません、提督。私、取り乱しちゃいまして……」

柄にもないことをしてしまいました。嫉妬だなんて、そんなに若くないはずなんですが……。

でも、目の前で、提督が取られてしまうと、そう思ったら、寂しくて、寂しくて、寂しくて寂しくて寂しくて寂しくて寂しくて寂しくて寂しくて寂しくて寂しくて寂しくて寂しくて堪らなくなってしまって……。

私もまだまだ、ですね……。

……きっかけは、些細なことでした。

少し前、提督は、私に料理を作らせてくれて……、そして、美味しい、と、そう言ってくれたのです。本当に、それだけのちょっとしたことですが、私にとっては、何よりも嬉しい言葉で……。

その後、提督は私と二人でこの鎮守府の食堂を管理するようになりました。

やがて、お互いの料理を食べ比べてみたり、教えあったりしつつ、二人で料理をする時間は、私にとって、何物にも代え難いものになりました。

それだけでなく、提督は、こんな私のことを、一人の女として尊重してくれる。

……「鳳翔さん、相変わらず美人さんだねー！あ、そうだ（唐突）！着物作りたくなってきた！……はい！これ、今度着てくれると嬉しいな！」

……「鳳翔さん、貴女といると、なんだか落ち着くわー。ちょっとここで休憩していい？」
……「鳳翔さん、首輪付きが栗拾ってきてさ、沢山あるから栗ご飯にしようよ！鳳翔さんが作る和食、大好きなんだよねー！」
そんな提督の言葉を聞く度、私の胸が高鳴る。
……「鳳翔さん、洗い物は俺がやるよ。いいって、女の子は手が荒れて大変だろ？俺、防御力高いから任せときなって！」
……「鳳翔さん、弓道かい？俺は剣は振ったら折れるし、銃は撃ったら明後日の方向に飛んでくけど、弓はいけるんだよ、どれ……、ほら、皆中四連継矢。……ん？どうしたの、そんな顔して？」
……「鳳翔さん、いつもありがとう。感謝してるよ」
そんな提督の言葉を聞く度、私の心が揺れる。

……恋心。
この気持ちは、私をおかしくしてしまった。提督の声を聞く度、笑顔を見る度、触れられる度、えもいわれぬ昂揚感をもたらす。
先程、提督が私をなだめる為に抱きしめてくれたときは、あまりの多幸感で気が狂ってしまいそうだった。

……もう一度、抱きしめてもらいたい。あの快楽の海に浸りたい！
……これ以上提督にご迷惑はかけられない、我慢しなくては！
と、しばし、自問自答する。
だが、提督は、ほんのちょっとした仕草や、服装や髪型など、あらゆる変化に気づいてくれる方だ。
「うーん？まだちょっと、難しい顔してるね、鳳翔さん」
「……はぇ？」
あ、あら？私、また？また、抱きしめられて……？
「我慢しなくていいよ、辛いこととか、悲しいことがあったなら、力になるさ。俺にできることなら、なんでもしますから!!」
だ、駄目です、そんな、そんなことをされたら……!!
「わ、私、は、」

「……俺は、鳳翔さんじゃないから、鳳翔さんの気持ちは分からないよ。でも、元気付けることくらいは、できるつもりだよ？」

……ああ、ここで、ここで私の恋心は、「恋」は終わってしまいました……。

溢れるこの想い、我慢することができそうにありません……。

今、私の「恋」は、「愛」に……。

「……提督？今、なんでもすると仰りましたよね？では、一つ、許してほしいことがあります」

「え、それは……」

「……こうして、二人きりの時は、貴方のことを、旦那様と、そう呼ばせていただきたいのです……」

21話　おせちもいいけどカレーもね

「はーい、あけましておめでとうございますー」
1月1日、元旦。いやー、今年、いや去年もいろいろありました。
年始の辺りは、確か、梁山泊で知り合いの特A級エージェント十人と協力して、九人のエキスパート達と戦う羽目になったりしたっけ。サングラスのオッサンのパンチ、重かったなぁ……。
年央頃は、知り合いのヤクザと大暴れしたなー。堂島の龍の渾名は伊達じゃなかったな、うん。
その後はなんだかんだで鉄骨渡ったりカードゲームしたりする羽目になって、最終的に大金を手にしたけど、突然現れたワカメみたいな髪型の黒ずくめの男に、麻雀を差し馬握らされて打って、数千万が一時間で消し飛んだっけ。いやー、もう二度と麻雀打たねえ。何が御無礼だよ、泣くぞ。
で、年末はこれだ。提督。よく分からんが、提督なるものになっちまった。未だによく分かってないけど、まあ、かわいい女の子に囲まれて、美味い飯食って、日がな一日遊ぶだけの楽な仕事だ。ちょっと書類書いたりもするけど、まあ、無いようなもんよ。
「いやー、楽な仕事だなー!!!」
「て、提督?!大丈夫ですか?!!パソコン作業と電話応対と年賀状返礼を同時に……!!!」
有能な大淀もこればっかりは手伝わせられない。
……そう、俺は知り合いが多い。国内外どころか異世界霊界魔界天界外宇宙ありとあらゆるところに知り合いがいる。
……で、何が問題かって言うと……。
「あああああああ!!!年賀状!!年賀メール!!年賀お電話!!年賀テレパシーに年賀ポーション!!年賀輸血液に年賀丸太に年賀、年賀、年賀なんだこれ?!!」
馬鹿みたいに届いてる。量が、量が洒落になってない。正直言って、受け取りを拒否したいくらいだが、
「あー!テメー!!そんなとこにムーンゲート置くなや!!しかもなんで

アダマンタイト製なんだよ!!床に穴空いて……、いや、ハウスボードで直せば良いとかじゃなくって!!ちょ、ちょっと待て、ポ、ポーション投げんな!!て言うかこの年賀ポーションお前だろ!!!」

「提督、い、今のは？」

「知り合いだよ……、ああ、クソ、なんか身体が非伝導体になって脚がしなやかになったぞ……、アレ？普通にありがてえわ」

成る程、ノースティリス流のお祝いって訳ね？

その時、執務室の扉がノックされる。うん、足音とノックの仕方からして長門さんかな？

「入って、どうぞ」

「失礼する。提督、お歳暮だ。極めて多いぞ」

うわー、来たよ、お歳暮。もうね、とんでもない量。鎮守府で手が空いている子に手伝ってもらいながら、お歳暮を仕分ける。

「先ずはこれだ、ええと、何々？『悪の組織フロシャイム』？から、ぬか漬けが届いてるな」

「あー、将軍か、後で電話しなきゃ」

ぬか漬けのツボを懐に仕舞う。

「他にも、『ＢＦ団』、『秘密結社鷹の爪団』、『デストロン軍団』、『元マルハーゲ帝国一同』、『聖帝軍』、『ドクター剛の研究所』、『東城会』、『ミレニオン』、『ケロロ小隊』、『黒須組』……、気のせいだろうか、なんと言うか、これは、所謂反社会勢力なのでは？」

「うん、皆んなアレだ、俺が昔作った、『世界征服友の会』の加盟団体だね」

「何だそれは？」

「世界征服が夢のピュアなおっさん達が集まって愚痴ったりする会」

「何だそれは?!」

いや、マジで。愚痴ぐらいしかやることないし。正義の味方って強いんだよなぁ。

「まあ、良い、今に始まったことではないからな、次だ、えー、『仲町サーカス』……、おお、前にテレビに出ていたな。チケットが沢山と、

手紙だ。知り合いなのか？」
「あー、懐かしいな。自動人形さん達元気かねー？チケットは、そうだな、今度皆んなで行こうか」
「他には、えー、『ＳＯＳ団』、『アンツィオ高校』、『クロマティ高校』、『碧空高校ＯＢ一同』、『私立薔薇門高校』、『私立春風高校光画部』、『軟葉高校ＯＢ一同』、『わかめ高校セクシーコマンドー部』、『時定高校』、『桜才学園生徒会一同』、『陽昇学園元地球防衛組』、『童守小学校の鵺野』、『泥門高校アメフト部』、『区立友引高校ＯＢ一同』……、なあ、提督？何でこんなに沢山の学校からお歳暮が？」
「おっ、あいつと、あいつ、あとあの野郎も卒業かー、早いもんだなー」
「何をしたんだ、何を！」
「あ、俺、一応教員免許持ってるから」
「?!」
「まー、色々あったな、としか。あっ、クロマティのアホ共、またゴリラに丸投げしたな?!お歳暮の中身全部バナナじゃねえか!!」
「つ、続いて国内外からだ。えー、『喧嘩チームＤＲＡＫ』、『ＳＣＰ財団』、『スピードワゴン財団』、『桂木弥子魔界探偵事務所』、『３４６プロダクション』、『アサシン教団』、『天道道場』、『ＡＵＯ』、『心神会』、『Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ』、『マヴェリック社』、『株式会社世紀末』、『光子力研究所』、『海馬コーポレーション』、『特車二課』、『児童養護施設アサガオ』、『内閣総理大臣　剣桃太郎』、『合衆国大統領マイケル　ウィルソン』……、なにこの、何？」
「待って、探偵事務所からのお歳暮見せて？……、やっぱりか、これ、ハムに見せかけた魔界の虫だわ。危ねえな、逆に食われるところだったわ」
「ええ……？……あ、あとな、これはお歳暮なのかどうか分からんが、き、気が付いたら、鎮守府の敷地内にあった提督宛ての荷物だ、『幻想郷一同』、『機動六課』、『冒険屋ボルト・クランク』、『マジトピア一同』、『ユクモ村一同』、『グランサイファー騎空団』、『エンドレス・イリュージョン一同』、『ラクロア王国』……、本当に大丈夫なのか？」
「おお！秋の神様サイコー！南瓜にさつまいも、キャベツ、ごぼう、大

根……、ええやん！気に入った!!」
「……お歳暮？」
　良いじゃん、別に。助かってるんだしさ。
　あー、にしても、きっつい。お歳暮も年賀何かも馬鹿みたいに届いてる。続々届いてる。俺、死ぬかもしれん。

「て、提督!!大変です!!!」
　さっきまでどこかに行っていた大淀が血相を変えて戻って来た。嫌な予感しかしない。でもこれ聞かなきゃならんやつだよなぁ、忙しいから面倒ごとじゃありませんように……！
「大本営からの催促状です!!『大規模侵攻作戦開始、新たな海域の解放の為、進撃せよ』とのこと!!」
　なんだ、そんなもんか。
「見なかったことにしちゃえ。うち、警備会社みたいなもんやし」
　しかし、
「不可能です!!それが、戦果がでなければ、予算の大幅カットや最悪、職務怠慢として罰金を請求するそうです!!」
「んだよおおお!!もおおおお!!!死ねや大本営いいいい!!!!」
　頭おかしいんじゃねーの？金、ないっつってるよね？給料の殆どを経費に注ぎ込んでやっとやっとってレベルだよ、ウチは？

「いや、逆にこれはチャンスではないか？」
　長門さんが言う。
「ここで戦果を出すことが出来れば、例え大本営がどうであれ、武勲に応じた報酬を出すだろう。いや、出さざるを得ない。軍全体の士気に関わるからな」
「でも、出来るの？」
「やるさ。ここの鎮守府の規模からして、決して不可能なことではない」
　自信を持って断じる長門さん。
「大変でしょ？」

「何を言う?·今のこの艦隊は皆のモチベーションも高く、武装も充実している。新たな海域の解放も不可能ではないだろう。……提督、貴方が優しい人間だと言うことは、今までの行動で分かっている。だがな、艦娘というのは、どう取り繕っても、戦うものなのだ」
「はぁ、真面目だねぇ」
　正直、理解ができない。やらなくちゃならないこと、なんてありはしないのに。肩張りすぎ、鬱になるよ?
「誤解してくれるな、戦うのは他でもない、私達自身の意思だ。……守りたいんだよ、この国を、皆を、そして……、貴方を」
　あら、普段はアレなのに、今回は随分カッコいいこと。でもな、
「だが断る」
「……はあ?」
「女に守られる男なんて、かっこ悪いだろ?」
「あのなぁ……」
　当たり前だよなぁ?
「と言うわけで、明日から俺も出撃するわ」
「な?!何を言っている?!!許可できる訳ないだろう?!!」
「知らないもーん。俺提督だもーん、長門さんの許可なんていらないもーん」
「そういう訳にもいかん!·確かに、貴方が強いことは知っているが、万一と言うこともある!!戦場では何が起きるかわからんのだぞ?!それが分からん訳ではあるまい!!」
　でもなぁ、海域の警備くらいなら全然平気なんだけど、侵攻って聞くとなんとなーく嫌な予感がするんだよね。
「俺が死ぬ訳ねぇだろ（ゲッター並感）」
「……いや、駄目だ、考え直してくれ、頼む。貴方にいなくなられるのは困るんだ」
　んー、そう簡単には分かってくれないか。でも、俺が行かないと多分、長門さんが帰ってこないな。他にも、何人か大怪我しそうだ。勘だけど。でも、自身の勘より信頼できるモンはねぇ。
「……長門さんが何と言おうと、俺はついて行くよ?」

「……はぁ、まあ、だろうな、貴方はそういう人だ」
「大丈夫だって、大砲も魚雷もないけど、皆んなの盾にはなれるからさ」
「普通は逆だろう」
「それは長門さんの普通、だね」
　ここの艦娘達は常識知らずなところあるからなー。男なら女の子を守る、これ常識。
「しかし、それでも、安全の為に打てる手は打ちたい。よって、出撃組だけでなく、護衛を複数人付けてもらうぞ」
　んー、長門さんは頑固だからな、多分断っても、無理にでも付けるだろう。
「しょうがねえなぁ（悟空）」
「くれぐれも、怪我だけはしないでくれよ。……貴方は人間だ、艦娘と違って、怪我は簡単には治らんからな」
　確かに、流石の俺も臓器を失ったりすれば、再生に数日はかかるな。気をつけよう。
「分かった。じゃ、明日からね」
「ああ、決して、死ぬな。それだけは守ってくれ」
　心配されまくりだな、俺。
　正直、どこまでやれるかは分からない。けど、提督自身が出撃するメリットは確かにあるんだ。例えば、直接戦闘を見ることにより、艦娘による音声以外にも多くの情報が得られること、通信の距離が近いので、指揮のレスポンスが早くなることなどがある。って、知り合いの歴史好きな提督が言ってた。
　まあ、何にせよ、明日から、だな。

今日は仕事、あるし。

２２話　海域開放大作戦　前編

さて、出撃だ。船は鎮守府にあった古いのを、こんなこともあろうかと使えるようにしておいた。明石と。
さて、燃料を入れて、艦娘達の艤装の予備パーツを積めて、あとついでに食材も積めて、いつでも準備オーケー。
「その、提督？さっきの、出撃するって、冗談ですよね？」
そう言ったのは、良くデートしてくれる艦娘筆頭、古鷹ちゃん。
「いや、マジだけど？」
特に嘘をつく必要はない。正直に答える。
「だ、駄目だよ、提督！どう考えても危険だよ！」
古鷹ちゃんの妹、加古ちゃんを始めとする多くの艦娘が反対する。いかんのか？
「いやほら、艦娘と出撃する提督の前例はある訳だし？良くない？」
「「「駄目です！」」」
サンキューヤーマン。うーん、ちゃんと船を用意したというのに、何が不満なのか、私には理解に苦しむね（鬼畜）。
「提督、良いですか？確かに、他の鎮守府では、少数ですが提督自らが出撃したケースもあります……。ですが！それは！ちゃんとした戦艦に乗ってのことです！決して、型落ちでボロボロの輸送艦に乗ってなどではありません!!」
えー？見た目はアレだけど動くよ？外装とか塗装とかは時間無くてさー？
「大体、何で調理場をこんなにも充実させたんですか?!こんなことをするなら、せめて機銃の一つでも付けて下さいよ！」
機銃なんてどうせ当たんないし。そんなことより昼飯の方が大事じゃん？
「まあまあ、良いじゃないの。戦艦はほら、金剛ちゃんと榛名ちゃん、あと長門さん、陸奥さんがいるし」
「そういうことじゃありませんっ！」
古鷹ちゃん、おこなの？でも、怒ってる古鷹ちゃんもかわいいなー、

とか思いながら、めんどくさくなったので、古鷹ちゃんを横抱きにして海面を歩く。
「じゃ、出撃しまーす。今日は、新しい海域を取り戻したいと思います。皆んな頑張ろう！」
「あ！待て提督！護衛対象が護衛を横抱きにして先行する馬鹿がいるか?!!」
長門さんが他の子達を引き連れ、追いかけてくる。
……確か、報告によると、新しい海域には未確認の深海棲艦がいる、とのこと。極めて高い火力と装甲を持つ、とか。道中も、「エリート」と呼ばれる上位個体が出るらしい。故に、出撃の面子は、火力重視の長門さん、陸奥さん、金剛ちゃんと榛名ちゃん。そして一航戦の赤城さん、加賀さん。護衛には、古鷹ちゃんと加古ちゃんが着いてきた。ついでに、木曾ちゃんも何故か着いてきた。
さて、鬼が出るか蛇が出るか？……出来れば何も出ないでほしい。

「……なあ、提督？お前、どうやって海上に立っているんだ？」
「波紋だけど？」
教授のおじいさんに習った。健康になれるし、吸血鬼とかに強いし、皆んなにも推奨したい。
「そ、そうか、じゃあ、どうやって、艤装を展開した古鷹と加古を抱えていられるんだ？重くないのか？」
「え？女の子が重い訳ないじゃん？」
女の子に重いとか言っちゃ駄目でしょ？大体、波紋とかのブースト込みならこれくらい無いようなものよ。
「わ、分かった、もう良い。それじゃあ、その、船内に戻ってくれないか？」
「嫌だけど？」

メイン盾が退がってどうすんのよ？
「はぁ、頼む、提督。お前だって、流石に大砲は防げないだろ？」
「え？防げるよ？」
「いやいや、流石に無理だろ？」
「いけるって！見とけよ見とけよ～！」
いや、本当に、防御力なら誰にも負けないからね、俺は。
「ほら、妖精さん、賄賂（おやつ）だ！さあ、敵のいるところへ！」
はい、はいはい、成る程、……ボスまで連れて行ってくれる？やったぜ。
「いやいや、そんなもんでどうにかなる訳……」

その時、艦載機で周囲を警戒していた一航戦の二人が叫ぶ。
「敵影発見！」
「……な？」
「う、嘘だろ……？」
いや、正直俺も無理かなーって思ってたけど、何か出来ちゃった。妖精さんとは前から話せたけど、賄賂が通じるとは。
「む、あれは、軽巡ト級、エリート！三体だ！気を付けろ！って、提督！待て！ガンダッシュは止めろ!!」
「大丈夫大丈夫、昨日ひぐらし読んだから。今日の俺は口先の魔術師。多分説得できる」
いける！

「Ｈｅｌｌｏ？」
『『ガァァァァ!!!』』
「ぐわぁぁぁぁ!!!」
駄目でした！
「「「提督ーーー!!!」」」

「クッソ、何だあいつ！亡者とかと近い感じの奴だぞあれ!!話通じないじゃん!!聞いてない!!」

いきなり撃つのはマナー違反じゃん？
「て、提督!!無事か?!!」
「え？うん」
「馬鹿野郎！何故前に出た?!!」
「説得コマンド」
「出来るかそんなこと!!!」
「沈んだ敵も、できれば助けたいのです（笑）」
「はっ倒すぞ!!!」
いけると思ったんだけどなー。話が通じる相手なら、どうにか丸め込めば良いし。でもあれは、正真正銘の化けもんだわ。話が通じない。ただ、強烈な怨み以外、感情が無いみたいだ。
「んお？」
「提督、引っ込んでろ!!」
長門さんに後ろに投げられる。
が、空中で受け身をとり、空中ダッシュで投げられる前の位置に戻る。
「馬鹿、何で戻って、!!」
その時、目の前から砲弾が迫る。直撃コースだ。
長門さんは咄嗟に前に出て、俺の盾になろうとした。が、そんなことはさせない。メイン盾は俺だ。長門さんの肩を引っ張り、抱き寄せる。もう片方の手で、飛来する砲弾を受け流す。……成る程、それなりの威力だな、まともに当たったら結構痛いだろう。
「て、提督、何を」
「ほら長門さん！撃って！俺には攻撃手段がないんだ!!」
そう、俺には、数百メートル以上離れた敵に攻撃をする方法がない。弓も気功も、もちろん格闘も、どれも射程範囲外だ。逆に、俺が攻撃できる範囲まで近づくと、艦娘の皆んなはフレンドリーファイアを気にする必要が出てくるから、近づくべきじゃない。
「りょ、了解！主砲、斉射!!」
次だ、金剛ちゃんに砲弾が数発。全て「蹴り上げて」無効化する。驚く金剛ちゃんに砲撃を指示。

次、榛名ちゃんに雷撃。弾頭部分を手刀で「切り離して」無効化。榛名ちゃんにも砲撃を指示し、離脱。
最後、長門さんの砲撃が直撃し、砲を破壊された深海棲艦が、破れかぶれと言う様で突貫。馬鹿め、俺の間合いだ。竜狩りの大弓で迎撃。
一矢目、中央の頭部に命中。動きが止まる。
二矢目、頭部に突き刺さった大矢の筈に命中、一矢目の大矢を半分に割って、同じ場所に、より深く突き刺さる。
三矢目、駄目押しだ、先程と同じく二矢目の大矢の筈に命中させる。一矢目、二矢目によって穿たれた穴に正確に当たった三矢目の大矢は、深海棲艦の頭を貫き、後頭部から鏃が飛び出て、動きを完全に止めた。

「……これは、何と言う……！正直、予想以上だ、助かったよ、提督」
長門さんが驚いて、それでいてどこか嬉しそうに告げた。
「やりました」
褒められたっぽいのでドヤ顔を晒す。どう？俺のかっこいいところちゃんと見た？
「凄いです！かっこいいです！提督!!」
榛名ちゃん、素直に褒めてくれる。そう言うところ大好き。
「あの、あ、ありがとうございマス、提督！ｋｎｉｇｈｔみたいで、素敵デース!!」
金剛ちゃん、俺の手を握り一言。最近はだんだんと俺に慣れてきてくれたと思っていたが、ここまでとは。ありがたいなぁ。
「て、提督！さ、先程の弓の業、御見逸れしました！素晴らしい腕前です！その、よろしければ、ご教授願いたいのですが！」
「わ、私も是非」
赤城さん、加賀さん。そう言えば、二人も弓を使ってるんだっけ。今度、弓道場でも作ってあげよう。
「あら、モテモテね？提督？」

茶化す陸奥さん。まあ、俺カッコイイし？モテモテなのは当然かな？

ドヤ顔を晒しまくっていると、うしろから腰を叩かれる。何？

「どしたの、木曾ちゃん？」

「どしたの、じゃないわ！護衛を放っておいて前に出るな!!」

「まあまあ、良いじゃないの、上手く行ったんだしさ」

妖精さんがボスまで案内してくれるとのことなので、このまま進めば大丈夫だな。

「はーい、取り敢えず編成変えるよー！金剛ちゃん、榛名ちゃん、陸奥さんは一旦抜けて、古鷹ちゃん、加古ちゃん、木曾ちゃんが入って！」

「ん？何故だ？」

長門さんが聞いてくる。俺は資料をめくりながら答えた。

「なんかね、この辺にぃ、戦艦と重巡、出るらしいんすよ。じゃけん雷撃できる面子入れましょうねー」

「まあ、そうだな、そんなところか。陸奥と金剛、榛名は待機だな」

「いや、船の中に休憩室あるから、そこで休めば？」

「……なあ、休憩室と調理場を作る時間があれば、あの船も武装できたんじゃないか？」

「……？」

「はぁ、もういい、もういいさ……」

まあ、そんな感じで、ローテーションを組みながらどんどん進撃する。途中から、どう見ても人間にしか見えない深海棲艦が出たので、全員大破させた後、服を全部剥いで逃してやった。女は殴らない主義でして。

「キ、キサマ！私ノ服ヲ!!ナ、何ヲスル?!!……アアッ！ヤ、ヤメテクレ!!ウウ、覚エテイロ!!」

「キ、キャアアアア!!ヤ、ヤメテ！ソ、ソコハッ！イ、イヤッ！オ尻ペンペンイヤァ!!ゴメンナサイ！モウ悪イ事シマセンカラァ!!!」

「て、提督！その、服を脱がせたいなら、榛名が!!榛名は大丈夫ですから!!で、でも、お、お尻ぺんぺんは、その、優しくして下さい、ね？」

「あの、提督？提督には、重巡洋艦のいいところ、一杯知って欲しいんです……。だ、だから、その、深海棲艦だけじゃなくって、私達を見て欲しいなー、なんて……。その、て、提督にでしたら、私の、ぜ、全部を、お見せしちゃいますから……」

んんー？何故かお仕置きに反応する子達。えっと、まあ、うん。ノーコメントで。

「ふむ、大分奥まで来たな」

「提督、艦載機からの報告によれば、近くに敵影は発見できなかったそうです」

だろうね、ここら辺に敵の気配ないもん。

「うーん、俺も、ここら辺に敵が出ないのはなんとなく分かるな。……よし！皆んなは、二組に別れて補給と食事ね！」

「む、良いだろう」

そう言うと、艦娘は二組に分かれた。

「一組につき一時間、破損した武装を予備のパーツと付け替えてね。食事は、早めに済ませるようにサンドイッチとコンソメスープ、デザートは片手で食べられるスティックケーキだよ」

そう言って俺は船に戻る。どうやら、最初に休憩するのは陸奥さん×榛名ちゃん、加古ちゃん、加賀さん……、あ、全員、妹に先に休みなさいって言ったな？

×××

×××

×

「その、提督？随分と沢山作りましたね？」

『旅人号』とぞんざいに書かれた輸送船の中は、とても綺麗に整備されてました。

ここ、休憩室の大きなテーブルには、沢山のサンドイッチと、コンソメスープ、スティックケーキが並んでいます。

「このサンドイッチ、右に行けば行くほど重めだから。後、スープは具材小さめで消化しやすくなってるからね。熱いから気を付けて。分かってると思うけど、動けなくなるほど食べないように、ね！」
確かに、見てみると、右の方は大きなクラブハウスサンドやカツサンドなどの重いもの、左の方はエッグマヨネーズなどの軽いものが多いみたい。
「はーい、じゃあ、後はセルフサービスとなっております。後よろしく！」
そう言い放つと、提督は、ブラウンブレッドのＢＬＴサンドを取り、食べ始めました。……相変わらず、戦艦クラスの食欲です。
私は、指示された通り、適当に照り焼きチキンサンドをお皿に取り、コンソメスープを取ると、提督のいるテーブル席に座りました。
「えっと、提督、その、ご一緒しても？」
「いいよー。榛名ちゃん」
……今日の提督は素敵でした。雷撃から私を守ってくれて……、その、すごく、かっこよかったです。
そんな事を思いながら、食事をしました。なるべく急いで。
「……あ、これ、美味しいです！スープもあったかくて、暖まりますね！」
沢山の千切りのキャベツとタレ多めの照り焼きチキンに、マヨネーズをかけたものを、焼いた厚めの食パンで挟んだサンドイッチ。キャベツはシャキシャキで、タレとマヨネーズがパンに染み込んでいて美味しいし、お肉も柔らかい。
コンソメスープは、寒い冬の海を考慮してか、温度は熱め。優しい味がして、一口飲む度になんだか懐かしい気分になります。
「榛名ちゃんが喜んでくれて嬉しいよー！早起きして作った甲斐があったなー!!」
……提督は今日も笑顔です。最近は、鎮守府の皆んなも、段々と提督に慣れてきて、提督と仲良くなってきました。
最初の頃は、あれ程怖がっていた金剛お姉さまも、今日みたいに提督に声をかけたり、スキンシップしたりするようになりました。

……とっても、喜ばしいこと、なんです。……けど、何だか、胸が、痛くて。
……私は、皆んなに、嫉妬してしまっているんです。悪いことだって、分かってはいます。でも、大好きな提督が他の子と仲良くしているのを見ると、ずるいなって、そう思ってしまうんです。
「……榛名ちゃん？どうかした？悩み事かな？」
「はっ?!い、いえ、榛名は大丈夫です！」
あ、あれ？そんなに顔に出ていたんでしょうか？
「んー？ほんとぉ？」
「はい！榛名は大丈夫です!!」
提督に、ご迷惑はかけられません。
「……榛名ちゃん、別に、大丈夫じゃなくても良いのよ？無理しちゃ駄目だ」
「で、でも、我儘を言ったら、ご迷惑が……」
でも、私がしっかりしないと、皆んな困っちゃいます。嫉妬なんて、我儘なんて、しちゃ駄目です。
「榛名ちゃんが大丈夫じゃなくても、俺がどうにかするからさ、もっと肩の力抜きなよ。ほら、男は女の子の我儘を聞いてナンボだし、ね！俺、迷惑だなんて思わないからさ！」
……提督は、提督ならきっと、我儘な私も受け入れてくれる？私の、駄目なところも、許してくれる？
そ、それじゃあ、試しに、ちょっとだけ、ちょっとだけお願いしましょう。
「て、提督？その、あ、頭を、撫でてくれませんか？前、やったみたいに！」

23話　海域開放大作戦　後編

拝啓、妹様。
お兄ちゃんは、艦娘達を率いる提督になって、数ヶ月経ちました。最近は艦娘達とも仲良くなって、順風満帆な日々を過ごしています。
そしてある日、新たな海域の解放の為に進撃せよ、との命令があり、嫌々ですが、艦娘の皆んなと出撃しました。
妹よ、お兄ちゃんはな、今……、

「うおおおおおお!!!なんだあれなんだあれ!!お前航空攻撃と砲撃と雷撃っておかしいだろそれよぉ!!!」

……大ピンチです。
どうしてこうなったのかって言いますと、まあ、色々ありまして……。

……
……
……

「さて、お昼も艤装の整備も終わったことだし、進撃しますか。なんだか、深海棲艦とかって言うのも大したことねーなー!」
「まあ、確かに、かなり順調だが、油断はするなよ?」
そう忠告するのは、眼帯のイケメンな方こと、木曾ちゃんである。
「だが、防御力に優れる提督が私達の盾になってくれるお陰で、私達は攻撃に専念でき、結果として、異例の速さで敵を殲滅し、進撃出来ているからな。もしかしたら、この出撃だけで海域を解放できるやもしれん」
嬉しそうな様子で俺の肩を叩く長門さん。なんでも、こんなにも快調なペースで作戦が進行するのは初めてらしい。

事実、もう次には、この海域を支配する大ボス、未確認の深海棲艦がいる場所に着く。夜になる前には決着をつける予定だから、とっとととその未確認の深海棲艦とやらの下着を剥いで、お尻でも引っ叩いて終わりにするか。
とか考えつつ、小さな島の泊地の前に着いた。

「!、提督、敵影発見!例の未確認の深海棲艦です!!」
赤城さんが艦載機からの報告を聞き、そう言った。
数百メートル先に佇む件の深海棲艦は、白髪の女の子だが、背中に巨砲、左手は手甲のようなもの、下半身が巨大な黒い口のようなユニットで、そこから太い腕が生えている、という異様なフォルムだった。

『キタノカ……』

「……何あれ、巫山戯てるの?」
「……面妖な、深海棲艦だな。戦艦か?空母か?見当がつかん」
「……兎に角、制空権を確保します」
「第一次攻撃隊、発艦して下さい!!」
加賀さんと赤城さんが弓を射って、先制爆撃を狙う。
しかし、
「艦載機!!あの深海棲艦は空母か?!」
深海棲艦は、下半身の口の様なユニットから、沢山の艦載機を飛ばし、此方の艦載機を迎撃。制空権は確保できなかった。
「すみません提督!制空権確保ならず!爆撃隊も殲滅されました!!」
「此方も同じく!」
「くっ、ならば、近付こう!砲撃で決着を!!」
「!!、そおりゃあ!!」
近付こうとしたその時、深海棲艦は背中の巨砲を撃ってきた。咄嗟に裏拳で弾く。痛いな、威力は戦艦以上だ。
「ってえな!あの砲撃、並の戦艦以上の威力だぞ?!皆んな、絶対に当た

るなよ!!」
当たりどころが悪ければ死ねるだろう、強力な砲撃。回避を呼び掛ける。
「戦艦以上の砲撃に、艦載機だと?なんの冗談だ、これは!!」
長門さんが怒鳴りながら主砲をぶちかます。だが、深海棲艦は、巨大な腕を使って砲撃を防いでいる。
『効クカ……』
「おまけに装甲も並以上か!!」
「ならば、雷撃を!!」
木曾ちゃんが更に間合いを詰め、魚雷を発射する。
……!、駄目だ、危険だ!
全力で木曾ちゃんの方に走り、木曾ちゃんを抱き締め、飛び退く。
「て、提督?!お前、何を?!!」
そして数回の爆発。……深海棲艦の雷撃だ。しかも、かなり強力で、それでいて複数回の攻撃。
そのまま木曾ちゃんに命中していれば、確実に死んでいただろう。
「……す、すまない!助かった!!」
木曾ちゃんは、驚きのあまり一瞬固まっていたが、直ぐに再起動。流石、戦闘慣れしている。頼もしいね。木曾ちゃんと共に一旦引く。
「提督、どうする?近付けば多数の強力な雷撃、離れれば艦載機、この間合いなら砲撃……」
難しそうな顔の長門さん。いかんな、そんな顔しちゃ。弁護士はピンチの時こそふてぶてしく笑うもんだよ?知り合いの青くてツンツンした弁護士が言ってた。とか思いながら、ガンガン撃ってくる深海棲艦の攻撃を回避する。
い、いや、ちょっと待て!多い多い!波状攻撃は止めろ!!
「うおおおおおお!!!なんだあれなんだあれ!!お前航空攻撃と砲撃と雷撃っておかしいだろそれよぉ!!!」
クソ、見とけよ、あとで全裸にしてやる!!さて、どうするか、まず近付けないのがキツイな。逆に、無事に近付けばどうとでもなるだろ

う。あのやたらでかい下半身のユニットは、生命体じゃないみたいだし。要は、上半身の女の子の部分さえどうにか出来れば……。
　そうして、頭を捻る間にも、艦娘達は傷ついていく。俺一人ではカバーしきれない。今は取り敢えず、当たったらヤバイのを優先して防御している。
「クソ、何か手はないのか!!」
「ｓｈｉｔ!単装砲がやられマシタ!!」
「一航戦の誇り……、こんなところで失う訳には……!」
　……被害は、徐々に、だが確実に蓄積している。
　そして、考えがまとまる。結果、いつものギャンブル。
「長門さん、耳貸して……って感じで、いい？」
「そ、それは、その……分かった、やってみよう!」
　さあ、反撃だ……!!
×××
×××
×××
×××
　……『良いか、長門さん。あの深海棲艦の弱点は、上の人型の部分だ。あそこに当たりそうな攻撃はさっきから全部防いでるからな。下半身の巨大ユニットは所謂艤装みたいなもんだ』
　……『だから、巨大ユニットを無視して、トップアタックを仕掛ける。長門さんが』
　極めて突飛な作戦だ。だが、他に突破口はない。
「よし、陸奥さんは木曾ちゃんと一航戦と一緒に右へ、金剛ちゃん、榛名ちゃんは古鷹ちゃん、加古ちゃんと左へ!全力で走って、敵を引き付けてくれ!!」
「「「了解!!」」」
　二手に分かれた艦娘達は、十分に深海棲艦の注意を引き付けてた。しかし、あの様子だと、一分持つかどうか……。
　速やかに作戦を遂行せねば!!
「じゃあ、行くよ長門さん!!せーの、そりゃあ!!」
　提督が、私を深海棲艦に向けて投げる。

「おおおおおお!!!」
上半身の本体にさえ直撃させれば!!この私の火力を持ってすれば、不可能ではない筈だ!!
『貴様、何ヲ?!!』
不味い、此方に気付いた?!!迎撃され、
「長門!!目ぇ閉じろ!!」
その時、提督の声。……敵前で目を閉じるなど、自殺行為だ。だが、私は、提督を信じている……!!
意を決して目を閉じた瞬間、目を潰す閃光。……閃光弾か!!
『ガァァァァ?!!!』
深海棲艦はまともに光を浴び、大きな隙を晒す。私は、そんな深海棲艦の巨大ユニットの上に着地すると、本体の襟首を掴む！
「これで……、終わりだあああ!!!」
……接射。長門型の４１ｃｍ砲全門が火を吹いた。この距離だ、一発も外さん!!
『グ……ガ……ギィィィャヤァァァァァ!!!』
悲鳴を上げる深海棲艦。下半身の巨大ユニットは土塊のように崩れていき、砲撃が直撃した背部の大砲はひしゃげ、ボロボロになった本体は吹き飛んでいった。
「良くやった!!長門さん!!」
そう言いながら、吹き飛んだ深海棲艦の本体を回収した提督。何故かカメラ片手に、服を剥ぎ取り、色々と際どいメイド服を着せている。何やってんだこの人は。
「長門！大丈夫?!」
陸奥が声をかけてくる。どうやら、皆無事らしい。
「ああ、この作戦、大成功だ!!」
まるで夢のようだ！一人の犠牲も出さず、あれ程強大な深海棲艦を倒したとは！

……どれもこれも、提督のお陰だな。提督には、感謝してもしきれない。

……ありがとうございます、提督……。

「よーし、お次はバニーだ！オラオラー!!」

『ヤメロ！ソ、ソンナ破廉恥ナ服ヲキセルナ!!アッ！撮ルナ!!写真ハヤメロ!!!コ、コノ変態!!』

２４話　祝！大勝利！

「えー、ではー、作戦の成功を祝ってー、乾杯ー!!」
「「「乾杯ー!!」」」
ここ、黒井鎮守府は、先日の海域開放作戦の成功により、お祭りムードにあった。と言うことで、作戦成功ありがとうパーティを開催、食堂は大騒ぎとなっている。堅物の長門や木曾も、珍しく楽しそうにしているくらいには、皆んな喜んでるみたいだ。
ちなみに、あの作戦で一緒に出撃した子達は最近、俺への好感度が高くて嬉しい。皆んな呼び捨てにしてくれって言うし、金剛には愛してるって言われるし。木曾に至っては、「お前に救われたこの命、お前の為に使おう」とか言って俺にべったりだし。
「よう、提督！作戦成功おめでとう!!」
と、俺に話しかけて来たのは、眼帯のかわいい方こと、天龍ちゃん。下戸らしく、ジンジャエール片手に俺の肩を叩く。
「あら～、提督？作戦成功、おめでとうございます～。何でも、大活躍だったとか～？」
最近何となく優しい、龍田さんのエントリー。何でも、辛辣勢の皆さんはほぼ解散したらしい。今でも、霞ちゃんに罵られたりするけど。
「いや、俺は一回出撃しただけだし、大して頑張ってないよ？天龍ちゃんと龍田さんの方が頑張ったでしょ？遠征と偵察、助かったよ、本当に」
そうなのだ、今回の作戦、成功の要因は俺達出撃組だけじゃない。その裏側で、あらかじめあの海域を偵察してくれた子達、資源を集める為遠征をしてくれた子達など、皆んなが頑張った結果なのだ。どうやら、俺がこの作戦を発令する前から大本営の新海域開放の動きはあったらしく、みんな気を利かせて頑張ってくれていたらしい。
「……ふふふ、私、提督のそう言うところ、好きよ？」
「えっ、マジで？俺も龍田さん大好きー！」
「もう、調子に乗らないの～」

龍田さんに好きって言われるのは初めてだな、不覚にも堕ちそうになった。
「ははは、そう言ってもらえると、必死に働いた甲斐があるってもんだな！」
天龍ちゃん、かなり喜んでる。労いの言葉一つでここまで喜んでくれるとはなー。ボーナス、弾んであげよう。
とか何とか思いつつ、何故かオレンジジュースで酔った暁ちゃんに絡まれたので、介抱して天龍ちゃんに押し付けといた。すまぬ。

「おっ、ていとく～？れいとくら～!!あっはっはっはっは!!!」
呂律が回っていないレベルで酔っている隼鷹。俺を掴んで、無理矢理座敷の隣に座らせた。
「おー、隼鷹。ごくろーさん、頑張ってくれてありがとなー」
取り敢えず労う。実際、隼鷹は偵察を頑張ってくれた。こう見えて、やるときはやる女なのだ、隼鷹は。
「んも～！良いんらよ～!!ていとくとわたひの仲らろ～！」
隼鷹は酒の匂いを漂わせながら俺に頬ずりする。うーん、俺も飲みたいな。
「どうぞ、提督」
と、現れたのは鳳翔さん。酒とツマミを沢山持って来てくれた。神降臨。
「わーい！酒だー!!」
ラッパ飲みですわもう。っあー美味い。吟醸酒だわこれ。肴はっと、おお、甘鯛の酒蒸しだ！添えられたすだちを絞って、と。ああ～美味すぎる～!!良いねぇ、流石は鳳翔さんだ、分かってるね！吟醸酒には淡白な白身魚が合うんですよマジで!!でもでもー？俺はもっとパンチの効いた酒とツマミが欲しいかなー？
「ハラショー」
と、何の遠慮もなく、響が俺の膝の上に座る。
「司令官は辛口で強い酒が好きだと聞いたよ。はい、ウォッカ。あとサーロとペリメニを用意したよ。お肉、好きだよね？」

「いやったぁぁぁぁ!!!」
サーロとは、要するに塩漬けした豚の脂身だ。脂っこいじゃん？と思うかもしれないが、ウォッカとは良く合うんだよ。美味み!!凄い！凄く美味しい!!からの追いウォッカ。勿論ラッパ飲み。ゴクリ、と喉を鳴らして飲み込む。あー、もう死んでもいい。あー、美味い。ペリメニはロシアン水餃子ってとこか。サワークリームで頂こうそうしよう。ウワー！モチモチだー！美味いぞー!!
「あ、提督！作戦成功おめでとう！それと、お疲れ様!!」
「こんなに早く作戦が終わるなんて、助かりますわ！」
鈴熊シスターズの参上だ。こちらも、ナチュラルにテーブルの側面に座った。
鈴谷は、甘口のカクテルが好きらしく、カルーアミルクをゆっくりと飲みながらドライフルーツを食べてる。女の子だなぁ。
熊野ちゃん、居酒屋鳳翔に置いといたお高めのモエ・エ・シャンドンを飲みつつ、コンテチーズを食べる。流石はお嬢様、様になってるなあ。
「……て言うか、提督のそれ、お酒飲んでるんじゃなくて、殆ど食事だよね？」
「そ、それ、脂身ですか？そ、そんな脂っこいもの良く食べれますわね？胃もたれしませんの？」
いやいや、美味いんすよ、これが。でもまあ、女の子向きじゃないわなぁ。でもやめられん。

そうやってワイワイ騒いでいると、騒ぎを聞きつけた他の艦娘達(酒飲める奴ら)が集まって来た。ガタガタと音を立てながら、俺の目の前のテーブルに隣のテーブルを寄せた。
こやつら、何故か皆一品と酒を持って現れよった。何なの？
「……うむ」
無言で酒とツマミの美味さを噛み締めている長門。焼酎とアサリの酒蒸し、きゅうりの浅漬け、あたりめ、焼き鳥……、おっさんか?!!

と思ったが、何も言わない。多分俺も焼酎飲む時はあんな感じだし。
「あら、提督、ご一緒してよろしいかしら？」
一方、陸奥は白ワイン片手に、レモンを搾った生牡蠣を。美味そう。
……にしても、長門とどこで差がついたのか。姉に女子力を分けてあげなさいな。
「……お酒、最近提督に勧められて飲むようになりましたけど、美味しいですね」
「そうですね、赤城さん。提督の言っていた心のゆとりというもの……、最近、何となくですが、分かるようになった気がします」
一航戦、赤城と加賀。ちょくちょく飲みに誘ったり、美味いもの食わせたりしたら、段々と人生の楽しみ方みたいなものが分かってきたみたいだ。赤城は大盛りのちらし寿司を、加賀は沢山の握り寿司を食べながら、純米酒をお猪口で飲む。
「ふふ、皆さん、楽しそうで何より、ですね……」
感慨深かそうにそう言う鳳翔さん。ナチュラルに俺の隣に座った。普通の吟醸酒をぬる燗で、ゆっくりと飲んでいる。あんまり酔いたくないらしい。後片付けなんて明日やりゃ良いじゃん？ツマミは残り物のきんぴらごぼう、冷奴、アジの開きに茄子の煮浸しだ。……晩御飯まだだったのね。
「あー、ていとくー、私とお酒、飲む？」
瑞鳳ちゃんが泡盛を差し出す。……え？瑞鳳ちゃん飲めるの?!意外だな……。しかも泡盛。水割りにシークァーサーを絞ってる。ツマミは、いつも差し入れしてくれる卵焼き。
「こんなに美味い酒は初めてだ、ありがとう、提督」
そう言う木曾は、お高い純米大吟醸酒をチビチビ飲みながらあん肝を食べている。渋いなぁ。

そんなこんなで、ぞろぞろと艦娘達が集まってきて、酒盛りは危険な領域に突入する……！
「はらしょー！何でしれいかんは二人いるんだい？」
響ちゃん、見た目は変わらないがかなり酔ってる。

「うへへへ～、ていとく～、ほら、おっぱいだぞ～？」
隼鷹、その豊満な乳を押し付けてくる。モチモチだー！
「だんなさま??お慕いもうしあげます……??」
大胆にも俺に抱きつく鳳翔さん。そっとしておこう。
飲みすぎて、長門、赤城は眠ってしまった。それぞれを陸奥、加賀が面倒を見ている。
鈴熊シスターズは普通に帰った。もう飲めないらしい。……あの子達にとって、酒は嗜むものなんだろう。人間ができてるなぁ。ここに残っている連中は明日地獄を見るだろうな。二日酔いで。
俺？俺は大して酔ってねえよ？ソーマとか鬼の酒とかを一晩中飲むとかじゃないと二日酔いとかにはならないんだよね。
「何でだろうな、お前が俺を救ってくれたあの時から、お前の事が愛おしくて堪らないんだ……??」
後ろから木曾にあすなろ抱きされる俺。お前が俺を口説いていくのか(困惑)。でも、普段とは真逆の艶っぽい声でそんな事言われると惚れちゃいそうだ。
ヤバイな、収拾がつかなくなりそうだ。もうこうなったら爆発オチしか……。そう思いながら、懐からダイナマイトを取り出そうとすると……。

「提督のハートを掴むのは私デース！……んっ??」
いきなり酔っ払った金剛にキスされた。……ふむ、エール味か。英国淑女らしい。

あ、待って、俺は今までキスなんて数え切れないほどしてきたけど、ここ日本だよね？日本では、多数の女性と関係を持つと……。
「だ、だんなさま、浮気ですか?!だめですよ！……こうなったら、だんなさまをがんばってゆーわくするしか……」
待って鳳翔さん脱がないで。
「最後にお前と添い遂げるのは俺だ！」

首筋にキスマークを付ける木曾。
「ここは譲れません」
何故か俺の手を握っている加賀。
「……？、しれいかん？何だかおしりに固いものが……」
響ちゃん、見なかったことにしてくれない？
「ああ！ずるい!!私のていとくを返してくださーい!!!」
「嫁さんほっといてほかの女といちゃいちゃなんてさせへんでー!!」
「だめですー！ていとくは榛名のですー!!」
どうすんだよこれよぉ、この無残な姿よぉ!!マジで収拾がつかな、あっ、やめて、脱がさないで！下は駄目！ズボンは駄目でしょ!!ああ！あああああああ!!!!!

25話　事後スパーク

……さて、この惨状をどうするか。

先ずは俺、全裸、キスマークだらけ。
そこらへんで寝ている艦娘達、半裸。
目の前、カメラを持った青葉。
周囲、朝食を摂りに来た艦娘達、顔真っ赤。

……うむ、死んだな。

「あああああ青葉!!見ちゃいましたぁぁぁ!!!!」
激写。なんかもう、どうでもいいや。うん。今更ですわ。やった記憶はないが、言い逃れは不可能だもんよ。
「てててて提督の主砲が最大仰角っぽい?!!」
「ゆ、夕立、男の人は、朝はああなるらしいんだ。決して悪いことではないよ!……にしても、その、大きさが……!」
「こ、ここここここ、こんの!!クソ提督!!ちょっとは見直してやったのに!!!変態!変態!!ド変態ー!!!」
じっくり見られているが、気にしない。もう無我の境地。
「えー、今日の朝は、昨日の残り物を適当にあったためて食べて下さい!ご飯はジャーにあります。あと、パンはいつものところにあるから、各自好きにしてね。喧嘩しないように!」
と、伝えるべきことを伝える。全裸で。
「ま、待ちなさいよ!!何うまい具合にまとめたみたいな顔してんのよ!!人の妹をはじめとして、沢山の女と、その、し、しておいて!!最低よ!!」
大井ちゃんが怒鳴る。
「ん、……うるさいな、何だ?」

木曾、起床。ちなみに、服装は灰色のショーツだけだ。その色気の無さが逆にそそると俺の中で話題。
「助けて木曾」
と言うと、俺を見て、周りを見て、色々と理解してくれたのか、こう周りに呼び掛けた。
「……あー、良いか皆んな、よく聞け、提督は何もやってないぞ。その、アレだ、キスマークは酔った隼鷹がやったんだよ。脱がせたのも隼鷹だ。うん。ま、まあ、それで、酔っ払った俺達も前後不覚になって脱いだんだよ。……お前らが思っているようなことは一切ない！良いな！」
パンツ一枚だが、木曾の迫力でどうにかカバーできた。あまり納得していない様子の子もいたが、一応は許されたっぽい。
取り敢えず、手持ちの狩装束を装備。着替えずとも着れる服は便利だ。このままどっかに逃げよう。ほとぼりが冷めるまで。
……ちなみに、空母の皆さんは何故か全員サラシと褌だった。そっとしておこう。

「と、言う訳で、工廠に逃げてきたんですか？」
「Ｙｅｓ．」
「もー、……本当に何もやってないんですよね？」
「ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ．」
「うー、まだちょっと頭痛いですー」
逃亡先は工廠。ついてきた大淀。明石は結構飲んでいた筈だが、どうやら大丈夫みたいだ。
「ごめんねー、ほとぼりが冷めるまでここで匿ってー」
「まあ、良いですけど……」
まあ、そんなこんなで、工廠で暇を潰す。大淀には頭痛薬を渡しておいた。仕事も特に無いので、そこら辺に転がってる週刊ミリタリー

とか言う本をめくりながら、だらだらする。すると大淀と明石は当然のように俺に寄りかかり、寛ぎ始める。童貞なら死んでた。

そして、昼頃。食堂で飯炊き。大井ちゃんからの厳しい視線に耐えながらも、二日酔いした連中にしじみの味噌汁と卵粥、梅干しなど、効きそうなものを出す。鳳翔さんが謝ってきたので、勿論許す。他にも、隼鷹などが謝りに来た。「酒は飲んでも飲まれるな」みたいな、月並みの言葉をかけて許す。つーかもうかわいいから許す。

部屋に戻ろうとすると、何故か金剛型に待ち構えられていた。
金剛、渾身のバーニングラブ。俺は死ぬ。つまり、キスされた。
榛名、「榛名は愛人でも大丈夫です！」からのキス。何のこったよ？
比叡ちゃん。顔を赤くして「ひえー！」と、いつも通り、面食らっている。
霧島さ、あっ、ヤベぇ”!!不運”（ハードラック）と”踊”（ダンス）っちまったみたいな顔してる!!知り合いの不良少年達みたいな、女の子がしちゃいけない顔だ!!こ、殺される!!!に、逃げよう!!!

「はぁ、また、逃げて来たんですか？」
「ご、ごめん、怖かったからつい」
また来てしまった工廠。生きる為、仕方がなかった。
「まあ、会いに来てくれるのはとっても嬉しいので、別に良いですけど……。その、私もキスして、いいですか？」
「はは、構わんよ」
明石も冗談言うのか。かわいいもんだ。
「じゃ、じゃあ、屈んで下さい、その、提督は大きいですから」

……あれ？これは、その、マジなやつ？まあいいか、明石みたいないい女とキスできるんだ。やったれやったれ。
「こう？」
「は、はい、そうです。……で、では、失礼して……んっ??」
おお、唇が柔らかい。……結局、化粧とか云々以上に、健康的な子が一番良いんだよね。その点、艦娘の皆んなはとっても健康的で、元の素材がいいから、化粧なんか最低限でもめっちゃかわいいのよ。明石の唇は、特に何かでケアしている訳じゃないみたいだけど、そもそもが健康だからケアの必要がなく、ナチュラルな美しさを……ん？

「……提督？」
うあああああああ!!!大淀だあああああ!!!ナンデ?!大淀ナンデ?!!
アバーッ!!!
「良いんですよ、提督……。提督は長い間海外にいたらしいですから。海外では、キスは挨拶なんですよね？」
「う、うん、そうだよー！提督悪くないよー！」
不味いな、すっごく笑ってる。
「じゃあ、私と挨拶できない、なんてことはありませんよね……!!」
そう言うと、俺の襟を引っ張り思い切り抱き寄せる大淀。どこにそんな力が？
「お、大淀？ちょっと待っ」
「問答無用!!……んっ??……ちゅ??れる????」
大淀、それ挨拶ちゃう、エロや。思いっきりディープキスされる俺。いや、まあ、嬉しいけど。
「ちょ、待っ、待って下さい!!大淀さん、貴女分かってやっているでしょう!!」
明石、激おこ。大淀を俺から引き離す。
「さて、何のことですか？私はただ、親愛なる提督に挨拶をしたまでですよ？」
何故かキラキラした大淀が言う。あー、よく分からんが喧嘩はいか

んな。

「ほらほら、キスなんてしたけりゃいつでも、好きなだけしてあげるからさ、喧嘩しないの！」

「……いつでも？」

「……好きなだけ？」

え？なんか不味いこと言った？

「ま、まあ、それなら……」

「私も、仲間同士で喧嘩したくありませんし……」

良かった、丸く収まった。流石の人徳だな、俺。すかさず話をすり替える。

「あっ、そうだ（唐突）、今回の作戦の報酬って、何になるのかな？」

「え？えっと、無難にお金と資材、あと昇進ですかね？」

「そっかー、じゃあ、皆んなにボーナス出すぞー」

「本当ですか！」

「まあボーナスなんてね、出そうと思えば（王者の風格）」

「その、提督はお給料も殆ど受け取ってないですし、無理しないで良いんですよ？」

「いーのいーの、男なんてね、趣味にしか金使わないんだから。女の子は何かと入り用でしょ？遠慮しなくて良いんだよ！」

なければ知り合いにたかるか稼げばいいし。

そんなこんなで大淀と明石と楽しくいちゃいちゃしながら、晩飯の支度をする時間になった。俺は、食堂へ行こうと工廠の出口へ向かう。

その時、工廠の扉が乱暴に開かれた。

「……ここにいたのか、提督」

長門だ。しかも、ガチでキレてる。でも、俺にじゃない。何と言うか、行き場のない怒りを抱えているみたいな、そんな感じだ。

「……これを」
長門は、血が滲む位に強く拳を握り締めながら、書類を差し出してきた。
受け取って、血の付いた書類を読む。
『一度の出撃で、航空戦、砲撃戦、雷撃戦を同時にこなす深海棲艦を撃滅したという黒井鎮守府の報告は極めて疑わしく、到底認められない。しかし、音成鎮守府の報告から、音成鎮守府が主導で海域の解放に貢献したという事実を確認した。よって、今回の虚偽の報告は不問とする。……大本営』
「……成る程、ね」
まあ、認めたくなさ半分、本気で信じてない半分ってとこか?ま、罰金がなくって助かったな!
「あ、長門、今晩は長門の好物のカレイの煮付けとブリ大根だから楽しみにしとけよ~!!」

「貴方は!!」
「んあ?」
「貴方は、悔しくないのか!!!」
長門が俺に掴みかかって、怒鳴る。珍しく、少し涙まで流している。
「貴方の働きも、私達の働きも、全て!!認められないと!!そう言われたんだぞ!!!悔しくは、悔しくはないのか!!!!」
絞り出すような声に静かな怒気を滲ませ、長門さんが言う。まあ、悔しいか、悔しくないかで言うと……、別にどうでも良いわな。だって……。

「……長門、今晩の晩飯の材料はね、地元の漁師さんと海女さんから貰ったんだ」
「……それがどうした」
「鎮守府運営の資金の一部は、知り合いの貿易商の人達から寄付して貰ったりしてるよ」
「……何が、言いたい!」

涙を流しながらこちらを睨みつける長門を抱き締める。

「皆んな、ありがとう、ってさ」

「……何？」

「長門はこの前言ったよな？この国の人達を守りたいって。他でもない、この国の人達が、艦娘達皆んなに感謝してくれてるんだ。武勲やお金じゃなきゃ、不満か？」

そう、俺はこっそりと、食費削減のため、地元の漁業関係者などと友好関係を結んでおいたのだ。最初は皆、前提督のこともあり、警戒されていたが、今では定期的に海産物を届けてくれる仲になった。

「……て、提、督……、うう、うううう、うわぁぁぁぁ」

長門は、俺を力強く（一般的な成人男性なら脊髄が折れるレベルの強さ）抱き締めると、堰を切ったように泣き出した。

「……落ち着いたかい？」

「……ああ、その、見っともないところを見せてしまったな、すまない……」

「良いんだって、俺も何かと良く泣くしさ！ほら、泣くとお腹空くだろ？ご飯にしよう、な！」

そう言って俺が食堂に向かおうとすると、長門が背後から力強く（一般的な成人男性なら脊髄が折れ、内臓が破裂するレベル）抱きついてきた。

「……提督、ありがとう……。私は、貴方のことが……」

26話　建造の涙

工廠……。この鎮守府におけるものづくりの聖地。俺と明石の城。
先日の海域解放作戦が終わり、この黒井鎮守府は今、お仕事が激減。俺もいつにも増して大変暇だ。鎮守府の改装工事も無事終了し、本格的にやることがなくなってきた。
と言う訳で、今日も今日とて工廠で暇潰しだ。明石は俺を歓迎してくれるし、何故か着いてくる大淀も機嫌が良いし、皆んな幸せウルトラハッピー。

「ねぇ、明石？このデカイ機械って何なの？前から気になってたんだけど」
「え？ああ、それは建造ドックです。呼び出したい艦所縁のものと、鎮守府の資材を使って艦娘を召喚する装置です」
「ほーん」
まあ、俺の知り合いにも蛇の抜け殻で召喚された奴おるし。
「……そう言えばさ、予定よりずっと早く作戦終わった訳だし、資材、余ってるよね？」
……そう、今現在は暇だが、この鎮守府、人手が足りない!!出来れば、皆んな週二日以上は休ませてあげたい、と言う目標がある以上、艦娘はいて困るものじゃないんだよ！
「ですが、失敗すると、資材が無駄に消費されてしまいますよ？」
成る程、そう言う仕組みか。……じゃあ、失敗しなきゃいいって事か。
「俺はしくじらねぇぞ!!明石！どう使うのこれ!!」
「ええと、資材をここに置いて、中央に艦所縁のものを置くんですけど……、あるんですか？艦所縁のものなんて？」
「大丈夫大丈夫！まあ見とけよ!!」
まず一つ目のドック。スパナを入れる。二つ目は筆ペン。三つ目はメロン。四つ目は和風パフェ。
「よし！（適当）」

「いやいやいや!!」
「どう考えても駄目ですよ!!」
「絶対失敗しますって!!」
　いや、多分いける。勘だけど。
「イクゾオオオオ!オアッ!イエイエー!（ガンギマリ）」
　全力でボタンを押す。すると……。
「なっ!!」
　どこからともなく、大量の妖精さんが現れ、四つのドックが強烈な光に包まれる。そして、
「はーい、お待たせ?兵装実験軽巡、夕張、到着いたしました!」
「給糧艦、間宮です!よろしくお願いしますね!」
「……な?」
「えええええ?!!」
「貴方が私の提督?かっこいい人ね!」
「ええと、私は給糧艦で、戦闘はできませんが、お料理ならお任せ下さい!」
「あの、その、ふ、二人は、身体に異常とかは?」
「え?特に無いけど?」
「?、私も特には?」
「ええー?何だか、全国の提督が馬鹿みたいじゃないですかー!」
　大淀が文句を言う。ま、出来ちゃったもんはしゃーないじゃんよ。
アレ?一番と二番のドックは?
「なんだこれ?艤装、だけ?肉体はどうしたんだ?」
「え?……あ!!あああああ!!こ、これ、私の艤装です!!!」
「こっちは私のですよ!!!」
　明石、大淀が嬉しそうに言う。
「これで、もっと提督のお役に立てます!ありがとうございます、提督!」
「うーん、このクレーンの重み!やっぱりこれがないと!嬉しいです、提督!!」
　満面の笑みで俺に感謝する二人。……今更、結構適当にやったなん

て言えねぇ……。
「よ、よーし、この調子でどんどん建造、しよう!!」
誤魔化す。全力で。
「うーん、大丈夫でしょうか?」
「ええと、提督は、適合率が極めて高いので、なんと言うか、その、ぞんざいな触媒でも召喚が出来るのかと……。まあ、提督が出来ると言うなら、多分出来るんでしょう」
「そうですね、提督ですから」
と、言う訳で、明石と大淀のお許しも出た。さあ、回すぜ回すぜ超回すぜー!!
「一番ドック!HGガンダムバルバトス!二番ドック!シグルイ(全巻)!三番ドック!(昼の残り物の)スープ春雨!四番ドック!パンツ!おおおお!!建造!!!」

「……大淀さん、本当に大丈夫なんですか?」
「……ごめんなさい、駄目かもしれません」
そしてまた、四つのドックは光に包まれ、中から艦娘が現れる。
一番ドック、駆逐艦三日月。
二番ドック、給糧艦伊良湖。
三番ドック、駆逐艦春雨。
四番ドック、駆逐艦吹雪。

「……ええー?」
「貴方が司令官ですね?三日月です!どうぞお手柔らかにお願いします!!……司令官の髪、白くて綺麗ですね!素敵です!!」
「そうだろミカァ!!」
「えっ?!はい?!」
「給糧艦、伊良湖です!あっ、間宮さんもいるんですね!お料理、頑張ります!」
「助かるわ、よろしくね」
「白露型駆逐艦五番艦の春雨です、はい。輸送作戦はお任せください

……です！……司令官、かっこいい……!!あの、今度、私の手料理、食べてくれませんか?!」
「え、うん」
「初めまして、吹雪です！よろしくお願い致します!!……えっと、貴方が司令官さんですか？そ、その、なんと言うか、かっこいい人ですね！」
「おー、ありがと、よろしくね」
さて、次だ。
「まだまだぁ!!一番ドック！黒ひげ危機一髪！二番ドック！スペースコブラのＤＶＤＢＯＸ（無印）！三番ドック！餓狼伝説（ＳＦＣ）！四番ドック！ハグロトンボの標本！はい建造ォ!!!」
そして現れる妙高型重巡洋艦の四人。
重巡か、ありがたいな。
だが、まだ建造を続ける。あと八人くらいは欲しいな。それだけいれば週休一日プラス、シフトによっては朝か晩に休めるようになる。
手持ちの使えそうなものをドックに打ち込み、ボタンを連打。触媒と出てきた艦娘はこんな感じ。
クラウドブレイカー（プラモ）：駆逐艦叢雲
獣の槍の赤布の一部：駆逐艦潮
キラメキラリのＣＤ：駆逐艦弥生
アーマードコア３（ＰＳＰ）：駆逐艦如月
遊戯王カード、蒼眼の銀竜：正規空母蒼龍
光剣サイファー：正規空母飛龍
エロ同人誌：駆逐艦秋雲
トラック：軽巡洋艦五十鈴
「……ふう、こんなもんかね？」
大成功である。失敗は一度もなく、無駄な資材の消費は無かった。
「見なさい羽黒！イケメン！イケメンよ!!これは何としても手に……、あっ、妙高姉さん！いや、その、これは!!」
「空母戦ならお任せ！……あれ？なんで私赤いマフラーなんてしてるんだろう？まあ、あったかいからいいか！」

「如月と申します。お側に置いて下さいね。……ところで、私の武装に火炎放射器が付いてるのは何故かしら？」
「初めまして、弥生、着任……。あ、気を遣わないでくれていい……かなーって。……あれ？」
　おー、いい感じに混沌としてきたなぁ？キャラが濃い子が集まって満足だ。
「じゃあ、この鎮守府の案内をするから。皆んな着いて来てくれる？」
「「「はい！」」」
　おお、いい返事。と言うわけで、鎮守府を回って、各施設の案内をする。

「ここが食堂ですね！……今晩はカレーですか？」
　と、優しげな美人さんの間宮さん。
「いや、カレーだけじゃなく、豚カツとハンバーグもあるよ。あとはサラダ。デザートはカスタードプリン」
「後で伊良湖ちゃんとお手伝いしますね！……ちなみに、誰が作っているんですか？」
「俺と鳳翔さん」
「えっ?!提督もお料理するんですか？」
「おー、出来るぞー。でも、手が足りなかったからさ、間宮さんと伊良湖ちゃんに来てもらって助かるわー」
「そうなんですか！それじゃあ、これから頑張りますね!!」

「ここは、居酒屋鳳翔、だと？」
　凛とした雰囲気の美女、那智さんが言う。
「まあ、所謂酒保みたいなもんだね。鳳翔さんが管理してるから、迷惑かけないように。基本的に鳳翔さんが許す限りは飲み放題食べ放題だから。でも、あんまりにも高い酒が欲しけりゃ自分で買うように」
「酒、酒か……。いいな、艦の頃から常々飲んでみたいと思っていたん

だ」

「弓道場、ですか？」
蒼龍、飛龍の二人。そのうち合体して超龍神に……、いや、やめておこう。
「ああ、ちなみに隣は体育館だ。好きに使ってくれて構わないよ。スポーツ用品もあるから、暇な時は遊ぶといい」
「遊ぶといい、って、そんな暇あるんですか？」
「うち、週休一日はあるから」

「休憩室、ですか？」
別の世界線では主人公になってそうな少女、吹雪ちゃん。
「そう、休憩室。土足厳禁と備品の持ち出し厳禁。それ以外は特にルールなし。ちなみに、隣は和室だ」
「へー、なんだか、至れり尽くせりですねー」
「あ！望月だ！おーい、もっちー！私だよー、三日月だよー!!」
将来的に純粋無垢なキリングマシーンと化しそうな美少女、三日月ちゃんが、休憩室のソファーの上でダラダラとタブレットでガンダムを視聴している望月に声をかける。
「……んぁ？三日月……？、……!!、そうだろミカァ!!」
「?!!」
三日月ちゃん、何故か絶句。慰めておこう。
「すげぇよ、ミカは……」
「??!!」

「さて、まあこんなもんかな？じゃ、明日の朝7時までは好きにしてて

良いよ。部屋は、なるべく姉妹艦毎に分かれてね。はい、解散！」
「「「はい!!」」」
　鎮守府内の案内が終わり、解散を宣言。新たに建造された艦娘達は、皆思い思いの行動を取り始めた。そして俺は、休憩室に行こうとする三日月ちゃんを呼び止めた。
「あ、ちょっと待って、三日月ちゃん」
「え？はい？何でしょうか、司令官？」
「これ」
「……な、何ですか、これ？」

「メイス」
　オルフェーーーンズ!!!!

27話　サメ殴りセンター

どこか幻想的な空間、大きな湖のほとり。安っぽいベンチに座る、冷戦時代のビジネススーツの男。そいつが俺に話しかける。
『おや、久しぶり、旅人君』
『……あ!!おっ、お前!!ド腐れ予言おじさんじゃねーか!!』
『ははは、酷いな、トニーと、いや、リチャードと呼んでくれよ』
『うるせー!!もう財団のエージェントはやめたぞ俺は!!非常勤だ!!』
『いや、それは分かってるんだが、君には伝えなくちゃならない事があってね？』
『嫌だわ！どうせ碌でもねぇ話だろ?!あーあーあー!!聞きたくなーい!!』
『アベルが逃げた』
『……は？』
『好敵手である君の元に向かっているよ、もう、直ぐそこまで来ている』
『はぁぁぁぁぁぁぁぁ?!!!』
……「……とく、……ていとく、……提督！起きて下さい!!」
『おや、ミス・オオヨドの声だね』
『ちょっ、待て！待てやこの野「提督!!起きて下さい!!!!」

瞬間、俺は夢から覚める。
「提督！大変です!!未確認の人型の何かが、あらゆるものを蹴散らしながらこの鎮守府に向かって来ているとか!!現在、未確認の人型の何かは音成鎮守府を半壊させ、ここに真っ直ぐ向かっています!!」
「……あー、分かってるよ、今行くから」
「え？分かってるって……？」
「最悪の予言があったのさ、聞いたらショック死しちまいそうな予言がね……」

さて、ここら辺か？静かな海岸だ。人もいないしちょうど良いだろうよ。
「なあ、そう思うだろ？お前もよ！」
『ーーーーー!!!!』
叫び声を上げながら、真っ直ぐ襲い掛かる奴。……相変わらずクソ速えな!!常人なら視認することすら叶わないだろう、疾風迅雷の踏み込み。
そして拳打の嵐……。それも、速さだけでなく、正確さと威力を兼ね備えた死の連打。それを受ける、捌く、いなす、逸らす、弾く……。
クソ、あっち（米国）なら、こうして俺が引き付けておくうちに機銃なり爆撃なりで吹っ飛ばせるんだがな。いつも言ってるけど、俺には火力が無いんだよ!!おまけに奴は体力無限大……、飲まず食わず寝ずでずっと戦い続ける。つまり、こっちの体力が切れれば一巻の終わりだ。
「死ぃ、ねっ!!!」
左ストレートをパリィ、極小の隙。そこに掌底、吹き飛ばし、距離を取る。下手に隙の大きい攻撃をすると、怯むこともなく、痛みを感じることもないこいつは即座に反撃してくるからな。兎に角、間合いを取りたい。
『??????』
奴は、吹っ飛ばされながら、虚空から黒いブレードを取り出す。受け身を取り、ブレードの切っ先を此方に向け、そのまま突貫。
が、近づかせてなるものか、鬼討ちの大弓を連射しながら、ダッシュで退がる。勿論、射った大矢は全て切り落とされている。畜生、チートかよ。

「だぁぁぁぁぁ!!!面倒くせぇ!!!」
素早くスマホを取り出し、財団に連絡を取ろうとする。……だが、俺のスマホに届いていたメールは……。
『ごめん^　^；《Ｄｒ．冗談じゃないぜ》』
「あんのクソ野郎おおおおお!!!!」
望みが絶たれたー。どうすんだこれ、死にそう！
その時、砲撃の音が響いた。
『???????!!』
「???????……提督、そいつは、敵だな？提督に刃向かう敵だな?!」
キャー！木曾ーさーん!!カッコイイー!!どうやら、鎮守府で休んでいた木曾が俺を追ってきたらしい。
木曾のお陰で火力が確保できた。雷撃か砲撃か……、モロに当てれば殺せる。物理的な防御力はそこまでじゃないんだ、コイツは。ただ、スピード、パワー、技量が桁外れなだけで。
海面を走り、木曾の隣へ。奴は俺を追って真っ直ぐ此方に来る。
「木曾！主砲だ、撃て!!」
「くたばれ!!!」
気合の一声と共に、木曾の主砲が火を吹いた。発射された砲弾は直撃コース。アイツの頭に飛んで行く。
???だが、この程度でどうにかなる程、コイツは甘くない。
『???ーーーーー!!!!』
???奴は、黒いブレードで砲弾の側面を叩いた。ブレードは砕けるが、しかし同時に砲弾も逸れた。
「馬鹿な!!!」
木曾が驚きの声を上げる。
そして、その隙を見逃さず、奴は木曾の頭目掛けて手刀で突きを放つ。……木曾ごと俺を貫く気だな？させるかよ！

「おおおおおお!!!!」
「提督!!!」
……痛っってえ!!!奴の全力の突きを掌で受け止めた俺は、その掌が手首まで真っ二つに裂かれていた。
だが、これで……!!
「おーら捕まえたぞー!!オモシロ全身イレズミ君よぉ!!!木曾!!機銃だ!!遠慮なくぶっ放せ!!!」
掌に突き刺さった奴の手刀を、貫かれた方の手で掴む。
「う、うわあああああ!!!!」
木曾は、悲鳴と共に機銃を放つ。狙いはデタラメだが、この距離だ。外れない。
『ーーーーーー!!!!!』
??????????????
……流石の奴も、ガードが出来ない状態での機銃は良く効いたらしい。断末魔を上げながら、バラバラの肉片になった。はあ、死んでくれたか。
『……??????……!』
……チッ、アイツ、最後に笑っていやがった。「また会おう」だと？クソ迷惑だわ。二度と来るな！

「て、提督、すまない！すまない！お、俺が、俺が弱かったから!!提督を、守れなかった!!すまない!!」
「もー、良いって、こんなのほっときゃ治るからさー」
……あの後、木曾は俺に縋り付き、普段の凛とした佇まいとは一転、泣き崩れた。この程度の怪我、日常茶飯事なんだがなぁ。
「提督は、俺の、俺の所為で!!この命、お前の為に使うと誓ったのに!!!

俺は、俺は!!!」
「はいはい、自分を責めないの。むしろこれくらいで済んで良かったよ。木曾は、怪我してないかい？」
　実際、アイツには、腕を切り落とされて、腹にブレードを五、六本ぶっ刺された事がある。その時と比べりゃ、この程度で済んで嬉しいわ。
「だけど!!お前の、手が!!そ、それは、それはもう、二度と、戻らないじゃないか!!」
「治るって、ほら！」
　どうやら、木曾は、俺の怪我が治らないと思って、責任を感じているみたいだ。じゃあ、目の前で治せばいいか。知り合いの神父から教わった回復法術（ヒーリング）を使う。本家大元の瞬間再生には劣るが、少しばかり裂かれた骨肉くらいなら三分もかからない。
「……こ、れは？さ、再、生?!」
「そういう事！だからね、俺はある程度なら怪我なんて治せるの!!心配しなくても良いよ！俺にとってはさ、俺自身なんかより木曾の方が大事だしね！」
　すると、ポロポロと大粒の涙を流す木曾。あ、あれ？間違ったかな？
「そんな、そんなこと、言わないでくれ！お、俺は！俺だって!!俺自身なんかより！お前のことの方がずっと、ずっと大事なんだ!!例え、どんなに怪我を治せたって、お前に傷付いて欲しくないんだ!!大好きなお前に、傷付いて欲しくない!!!」
　まるで子供みたいにわんわん泣く木曾。……好きな人に傷付いて欲しくない、か。なんとなく、好かれているのは分かっていたけどなぁ、見た目がティーンだから、ちょっと甘く見てた。もうちょい、真剣に受け止めなきゃな。
「……木曾の気持ちは分かったよ、ごめんな、怪我しちまって」
「……いや、俺が弱いのが悪いんだ。お前は、何も悪くない」
　あーあ、落ち込んでらぁ。
「……次なら、木曾も強くなってるさ……。それに、信頼できる仲間達

だって沢山いるだろ？俺だって、今まで長い間旅をして、色々な経験を積んだから、こんなことをできる様になったんだよ。木曾だって、まだまだこれからだろ？」
「……そう、か？」
「あ、木曾なら大丈夫だ、俺が保証する！……俺に、最高の勝利をくれるんだろ？」
「……ああ、ああ！そうだ!!お前に、最高の勝利を与えてやる!!」
×
×
×
×
×
「……お前に最高の勝利を与えてやる、までは分かったよ？……で、これは？」
「……木曾さん？提督から離れては？」
……確かに、俺は提督に最高の勝利を与えてやると約束した。しかし、今の俺の力では、それは不可能だ。
それに、提督は俺の力を借りずとも、勝利を得られる強さがある。今の俺にできることは、提督の身の回りの些事を片付けてやることだ。その為には、提督の側にいなくてはならない。
「これからは、この俺が提督の身の回りの世話をする」
「い、いや、お気遣いなく」
「は？（威圧）」
何だ？大淀のやつ、機嫌が悪いな。提督の機嫌まで悪くするなら……。いや、まあ、暴力は駄目だな、提督が悲しむし、仲間同士で傷付け合いたく無い。
「と言うわけだ。何か手伝える事はあるか？何でも言ってくれ、提督」
「……木曾さんに手伝える事はありませんよ？」
「……お前に聞いた覚えはないぞ、大淀」
「はいはい、喧嘩しないの！じゃあ書類書こう書類！はい、木曾」
……まあ、良いか。他でもない提督の命令だ。

「はい、おしまい。じゃ、俺工廠に行くから」
「お伴します!!」
「ああ、分かった」
工廠、か。手先が器用な提督は、良く工廠で明石と装備などの整備や開発をしているそうだ。提督には、本当に頭が上がらないな。

「あ!こんにちは提督!……ちゅ??大淀さんも、こんにちは。あら?木曾さんですか?珍しいですね?」
「なっ!!?あ、明石ぃ!お前、提督に何を!!」
明石め!いきなり提督に口付けを?!どう言う事だ?!!
「チッ、こんにちは、明石さん」
「もー、怒らないで下さいよー!大淀さんだって毎朝提督にキスしてるじゃないですかー!!」
「今日はできなかったんですー!!」
ま、まるで意味が分からんぞ!!?
「て、提督?!ど、どう言う事なんだ?!」
「……あー、まあほら、挨拶だから」
あ、挨拶?!!馬鹿な!!明石のそれは完全に男を愛する女としての口付けだったぞ!!
「提督が良いって言いましたからねー?「いつでも」、「どこでも」、キスしてくれるそうですし!」
な、何だと?!提督とは、いつでも、どこでも、口付けができるのか?!!
「私にもして下さいね、提督!……ん、ちゅ??」
くっ、大淀まで……!
「……提督、本当なのか?」
「まあねー。言質取られちゃったし。ま、悪い気はしないからね、良いんじゃない?」
……お、俺も、して良いか?……などと、言える筈もない。女らしさのかけらもない俺に言い寄られても、迷惑なだけだろう。

「(……とか思ってるんだろうなー、顔に書いてあるわ。つーか、鏡見た事ないのか?超かわいいぞ君)ねえ、木曾?えーっと、良いかな?」
顔を近付けてそう言う提督。ま、まさか、俺に、するのか?
「あ、い、いや、俺は、その……、お、お前が、したいなら……」
……ふ、ふむ、初めての口付けは、ミントの味だった、な。

そうして俺は、今日一日ずっと提督に着いてまわった。そして……。
「あの、木曾?流石に、お風呂までついて来なくてもいいかなーって」
「そうこなくっちゃなぁ。スキンシップも大事だな」
「聞いて木曾、聞いて」
だ、大丈夫だ俺!す、少なくとも、口付けされるくらいには好いて貰っているんだ!背中を流すくらいなら、口付けよりはハードルが低い!!それに、貧相ではあるが、見られて困るようなだらしない身体ではないからな!
「何、背中でも流してやろうと思ってな!」
「そのね、俺、このドラム缶風呂使ってるんだよね。だから、背中流すとかそう言うのは良いよ」

「……何だと?いや、だって、大浴場はどうした?!」
「女の子が使う風呂に入れる訳ないじゃん」
てっきり、夜中にでも入浴してるもんだとばっかり……!
「じゃ、じゃあ、この寒い中ずっと外で?!」
「うん」
なんてことを……(憤怒)。俺達に気を遣う必要なんて無いぞ!
「じゃ、俺首輪付きとドラム缶風呂入るから」
……そして、犬(?)と一緒に入る、だと?そんなこと、あってはならない!……そう言えば、前に駆逐艦から聞いたが、提督は寂しさのあまりあの首輪付きとか言う獣に話しかけているらしいな。やは

り、寂しいのか、提督？……そうだろうな、長年旅を続けていたんだ、寂しく思うこともあるだろう。
「分かった、提督の寂しさは、私が埋めてやろう！」
「え？何の話？……あ、ちょっと！何で脱いでるの?!」
「何、一緒に風呂に入ろうじゃないか！態々犬（？）と入らずとも良い！」
「まあ、良いけどさぁ。木曾も女の子なんだし、恥じらいってもんが欲しいんじゃない？」
……そう言われてもな、提督になら別に見られても構わん。うう、にしても、やはり寒いな、早く入ろう。

「……木曾ーさん？なーんか、近くない？」
「気の所為だ」
ああ、良い湯だ。外のだからなのか？……いや、提督の隣だからだろうな。にしても、相変わらず提督は良い身体だな。分厚い胸板も、割れた腹筋も、逞しい腕も、俺好みだ。
「……なあ、触っても良いか？」
……目の前に、好いた男の身体があるんだ、触りたくなるのが女の性だろうよ。
「構わんよ」
成る程な、お互いに、見せて困るような身体ではないってことか。流石提督だ。
「では、失礼して……。おお、これは……、何とも。……良いな」
うむ、素晴らしい肉体美だ。多くの傷も男らしくて良いな。ふむふむ。……この傷は刀傷か……。長いな、指でなぞってみるか。……おお、肩にまで達しているな。背中はどうだろうか、ドラム缶風呂が狭いせいで、抱きつくような形になるが、まあ良いだろう。……撫でてみたが、背中も傷だらけだ。これは銃創、これは獣の歯型、これは爪痕だな。
「あっ、ヤバい、その、ヤバい」

「?、何がだ?良い身体じゃないか?」
「違う、そうじゃない、それ以上いけない」
何の問題がある?男と女のする、口付けの様な行為ではなく、ただ身体を触っているだけなんだが?
「まあ、やめろと言うならやめるが……。また、触っても良いか?」
「お、おう」
?、何故動揺している?……まあ、良い。「また触っても良い」とのことだ、言質は取った。……ふふふ、今日は良い一日になったな……。

２８話　ぐるぐるニャー

……いや、頑張ったよ、俺は。

昨日のあの後も、木曾は俺に着いてまわり、今隣で寝てる。いや、あれはヤバかった。俺は基本、外でドラム缶風呂に入ってるんだけど、何故か木曾も一緒が良いって言うからさ、うん。あの狭いドラム缶風呂に二人。……危うく狼さんになってしまうところだった。

鎮守府の皆んなは、言い方は悪いが地雷なのだ。例えば、木曾と致した場合、執務室に大井ちゃんの魚雷が飛んでくるだろう。金剛と致した場合、霧島さんが殴り込んでくるだろう。つまり、誰としても死ぬ。

普段は、夜の街に出てあんな事やこんな事をして発散（ｄｉｖ）しているが、これもバレたら大変なことになるだろうよ。気を付けなきゃな。

さて、結局寝室まで着いてきた挙句、俺と添い寝した木曾を起こし、厨房へ飯炊きに……。

そして朝飯の後。

「「提督！これから空いてますか？」」

と、工廠に入り浸るＤＩＹ精神同盟の仲間、夕張と明石。……夕張も距離が近いんだよなぁ、明石と同じくらいには。

「うん、暇だよ？」

「良かった！その、とある画期的な発明をしたんですよ！私達！」

「でも、どうしても未完成の部分があって……。提督に力を貸して欲しいんです!!」

へぇ、発明。興味深いね。何だろ？

「じゃ、工廠に行きましょー！」

テンションマックスの夕張が、俺の手を握って工廠に連れて行く。ナチュラルに恋人繋ぎなところが凄いよね。

「ふーん、『魂魄移転及び艤装適合率上昇装置』ねぇ……」
「はい！これがあれば、理論上、特殊な装備が無くとも、私達艦娘が強くなれるんですよ!!」
「私達は便宜上、『ロック装置』と呼んでいます！」
……この、魂魄移転及び艤装適合率上昇装置は、その名の通りに、「軍艦の神霊」である艦娘の魂魄を、本体である艤装から、肉体へ徐々に「移し換え」、「個体としての確立」と、それに伴う「個体別の進化」による「性能の向上」を行う装置、らしい。
ま、簡単に言えば、艦娘が人に近づいて、より強くなれる装置ってとこか。
……うん、良いことだ、良いことなんだが……。

「……なんで、よりにもよって首輪型なの？」
「私達の趣味です!!」
あ、そっかあ（諦め）……。

「はぁ～（クソデカ溜息）、まあ、確かに、魂魄移転の部分がまだできてないな。……あと、デザインは首輪以外も作ること。トラウマがある子もいるんですよ？」
「はーい！」
「じゃ、行くから、用意して」
「……行くって？」
「魂魄移転装置なんて、流石に専門外だ。知り合いの科学者に会いに行くんだよ」
「へぇ、何処に行くんですか？」
「北海道」
×
×
「×……え？」
×××××××××

「さささささ寒い!!寒いです、提督!!」
「かかかかか風邪引いちゃいますよぉ!!」
　私、夕張と、明石さんは、提督に連れられて、何故か北海道の桜町に来ている。何でも、凄腕の科学者がいる、とか。でも……。
「ここ、ゴミの島じゃないですかぁ!!こんな所、科学者どころか、人っ子ひとりいないですよぉ!!」
「いるってば、まあ、待ってな!」
　そう言うと、提督は、ボロボロの小屋の戸を叩き、叫んだ。
「おーい、博士ー!!ちょっと力を貸してくれー!!」

「!、……（どうするの、剛くん?旅人さんだよ?）」
「……（寒いから、居留守しちゃおうよ、ミーくん）」
「……（ドアを開けたら冷た〜い空気が入ってきちゃいますもんねー）」

　……返事が無い。
「ほら、やっぱりいないじゃないですかぁ!」
「うーん、折角、差し入れに食料を大量に持って来たのになぁー。旬の魚と、美味しいお肉と、新鮮な野菜、良いお米に、お高いお酒、うちで作ったお菓子も沢山……」
「「こんにちは!旅人くん（さん）!!!さあさあ、どうぞ中へ!!!」」

「……な?」
「な?って言われましても……」
　小屋から出てきたのは、背の低く、丸くて髪の薄いおじさん、黒猫を模した服を着た男の子、メタリックな猫……。科学、者?
「いやー、久しぶりだなぁ、旅人くん!何でも、提督になったとか?」
「凄いよねー、大出世ですね、旅人さん!」
「ところで、そっちのおねーさん達は?」
　ん?あれ?ちょっと待って?あのメタリックな猫、今、喋った?

「どしたの？緑のおねーさん？ボクの顔に何か付いてる？」
「……え？なにこの、何？」
本当に、何？ろ、ロボットかな？
「わぁ！かわいい！かわいいです!!」
「わぁ！は、離してよー、ピンクのおねーさん!!」
明石さん、猫好きなんだ……。いや、そもそも、猫？猫なの？
「夕張、あれはミーくん、サイボーグの猫だよ」
「さ、サイボーグ?!」
一部では実用化されてるらしいけど、猫をサイボーグに?!なんで?!
「さあ、紹介しよう、この子達はうちの鎮守府の技術担当、夕張と明石だ。今回は、二人の発明品の完成に手を貸して欲しいんだ」
「夕張？明石?!」
驚く男の子。
「じゃ、じゃあ、お姉さん達って、艦娘なの?!」
ああ、そっか、怖がらせちゃったかな？要は、軍艦が歩いているみたいなものだし、普通は驚くよね。なんとか、敵意がないことをアピールしなきゃ。
「凄いよ！じゃあ、お姉さんが、造船の神様と呼ばれた平賀譲さん設計の、あの重武装な軽巡洋艦なんだね!!そして、明石さんは、連合艦隊唯一の工作艦で、内部には１７の工場があったとか!!」
あ、あれ？
「おお！私も知っているぞー！どちらも、科学者として尊敬できる、素晴らしい設計思想の軍艦だ！」
「おねーさーん、いい加減離してよー！」
「その、怖く、無いんですか？」
「怖い？何が？」
お、おかしいな、だって、私達は、人間じゃないのに。
「あー、夕張？この人達はな、艦娘なんかよりもっとヤバいもんと関わってきたから。感覚が麻痺してるんだよ」
「なっ！君に言われたくは無い！」
「そーですよ！」

あー、そっか。非常識の知り合いも、また非常識ってことなのね……。

すると、自分を科学者と名乗るおじさんは、ゴホン、と咳払いをすると、私達に言った。

「それで、ええと、発明品だったね？流石の私も、現物を見ないことにはなんとも……」

「あ、はい、その、これなんですけど……」

未完成の装置を見せる。

「ふむ、どれどれ……？成る程、魂を移し換えるシステムで行き詰っているみたいだ。これなら、前にデビルと戦った時の装置の理論を応用すれば直ぐだ」

！、凄い！一瞬で見抜いた。見た目はアレだけど、提督の言った通り凄腕なのかな？

「コタローくん、あの装置、何処にやったかな？」

「こっちです、博士！あ、お姉さん達も、こちらにどうぞ！」

「あ、はい！」

と、私と明石さんは、部屋の奥に案内される。

「はい、じゃ、ミーくんもおいでー！」

「おっと！ミーくんはこっちで俺と料理だ。悪いが、解放してやってくれ、明石」

明石さん、ロボットとかサイボーグとか、そう言うの大好きだったっけ。この前は、ヒュッケバインをガンダムと間違えた望月ちゃんに小一時間くらい講釈してたような……。明石さんみたいな技術者は、夢中になると周りが見えなくなるからなぁ。

「はーい、また後でね、ミーくん！」

「あ、あはははは、またね、明石おねーさん！はぁ……」

「さて、ミーくん？博士達が発明を終わるまでに、晩飯作っておこうか！」

「そうだね！腕によりをかけて作るよー！」

え？猫のサイボーグが料理を?!……良いのかなぁ？

……あー、終わった！予想よりはるかに早く出来上がったわね。おじさん……剛博士の腕は素晴らしいもので、私達の知らない知識、技術、そして理論を持っていた。私達はそれを少しでもものにしようと、必死になって質問したり、メモを取ったりしていた。気がついたらもう陽が落ちている。……お腹、空いたなぁ。

「「終わったー？ご飯できたよー？」」

提督と猫のサイボーグが現れ、そう言った。……コック帽被ってる。

「「わーい！ご飯だー！」」

……コタロー君は分かるけど、剛博士まで……。いや、子供心を忘れないからこそ、既存のものに囚われない良い発明が出来る、のかな？

にしても、ここは本当に非常識な空間だ。早く鎮守府に帰りたい……。

「じゃ、ご飯食べたら近くのホテルに行くぞ、明石、夕張。次の日は、この辺の知り合いに挨拶してから鎮守府に帰るからね」

「……また、おかしな知り合いですか？」

「ん？もう一体のサイボーグ猫と、喋る猫とかだな」

ああ、もう、常識が通用しない!!

２９話　音成鎮守府

あれから一ヶ月、俺達の鎮守府は、『ロック装置』の恩恵により、かーなーり強くなった。なんでも、この装置は、平たく言うと、装備したまま戦闘行動などを行うと、艦娘を強化するものらしい。

更に、その強化の具合によっては、艦娘を一段上のステージに上げる『改造』を行えるのだ。

つまり……、

「司令官、次は何をすれば良いんですか？何体殺せば良いんですか？……え？ソードメイスの使い心地？はい、良好です」

「提督に改造されちゃった、スーパー北上さまだよー。えへへ、ちょっと大人にされちゃったなー」

「提督！私も熊野も、提督のお陰で航空巡洋艦になれたよー！最近、沢山活躍できて嬉しいな!!」

こんな感じ。明石と夕張が作った練度測定器によると、この艦隊の平均練度は、最大値を９９として、４０くらい、らしい。元から戦闘慣れしていたこともあり、瞬く間に練度が上昇した、とか。

この練度という数値は、『ロック装置』を装備した艦娘が、どれだけの進化を遂げたかの目安を表すものらしく、一定値に達すると『改造』ができる仕組みとのこと。

にしても……、

「……強化し過ぎたか（ハマーン並感）」

「勝利を！提督に!!」

深海棲艦の砲撃を見てから避けた榛名は、回避行動と同時に素早く撃ち返す。しかも一発で当てて、一撃で大破させる。

「酸素魚雷、２０発、発射です!!」

何発もの魚雷を放つ大井ちゃん。一度の攻撃で複数の深海棲艦を吹き飛ばす。

「さあ、素敵なパーティしましょ!!」

雷撃戦よりも近い距離、ダッシュで接敵し、深海棲艦に膝蹴りをか

ました後に、主砲を接射する夕立ちゃん。

つまり、だ。『ロック装置』がない頃は皆んな、人の形をしながらも「軍艦の戦い方」を行なっていたが、今では、軍艦の戦い方と人間の戦い方を融合させた、「艦娘の戦い方」をするようになったのだ。

艦娘の戦い方は多種多様で、高速戦艦であることを利用して、高火力、高防御、高機動で戦う金剛型、敵艦隊とマジで殴り合う長門、手持ち武器での近接戦闘を行う一部の軽巡と駆逐艦……。

このように、ウチの艦娘達は、他所の艦娘とは全く違い、そして格段に強い、特異な集団になったのだ。

それと、変わったことがもう一つ。

「提督ー！イク、今日も頑張ったの！ぎゅーってするの！」

「イクちゃーん？その身体でぎゅーってされちゃうと俺（の理性が）死んじゃうからさー、ちょーっと離れよっかー？」

「提督には、重巡洋艦の良いところも、私のことも知ってもらえましたし、今度は、私が提督の良いところを沢山知らなきゃ、ですね!!」

「うん分かったよ古鷹。でもね、俺の匂いは知る必要が無いんじゃないかなー？あっ、ちょっ、待って、身体擦り付けないで、マジやばいから」

「……提督、僕の前で他の女の子ばかり見るのはやめてよ、酷いじゃないか」

「ごめんね、時雨ちゃん。でもね、それだけの力で人を引っ張るのはやめようね？普通の人なら腕がもげてるからね？」

モテモテ、どころではなく、モテ過ぎるのだ。駆逐艦や潜水艦の殆どはべったり甘えてくるし、重巡や戦艦の子の多くはストレートに愛情を伝えてきて、一部軽巡や空母の子は、気が付いたらそばにいる、といった風に。ツンツンしてた子達も、今じゃ頭を撫でても怒らないくらいだ。

モテまくって大変嬉しいよ？けどな、そのモテまくりってのはどうやらタダじゃないみたいで……。

「チッ、あの野郎、オレ以外の女といちゃいちゃしやがって!!今日こそははっ倒してやる!!」

「……天龍、摩耶、また提督に挑むのかしら？不敬よ、直ぐにやめなさい」

「あ”？加賀さんには関係ねーだろ？すっこんでろよ」

「そうですね、私の提督に手を上げるのはやめてもらえませんか？不愉快です」

「……その、私としては、大淀さんの言う「私の提督」って言うのが一番不愉快なんですけど……」

「そうね、潮の言う通りだわ。クソ提督は大淀さんのものじゃないわね」

「ＨＥＹ……！曙！今、提督のことを何と言いマシタ?!返答によってはタダじゃおきまセーン!!」

……旅人ですが、鎮守府の雰囲気が最悪です。

と、こんな風に、鎮守府では修羅場が結構な頻度で起こるようになった。……チームワークなどには影響は出てないし、艦娘同士で仲良く談笑するところなどはよく見られるが、それでも、俺の話題になるとこれだ。皆んな一応、分別がある子達だから、暴力やイジメはないみたいだけど、やっぱり、見ていて気分の良いものではない。

いつも通り仲裁しようと、前に出たその時。

「提督、客だ」

長門が、お客さんを連れて、この休憩室までやってきた。あれ？また怒ってる？なんで？つーか、休憩室に通すのってどうなの？執務室に案内するべきじゃ？

「長門さん？お客様なら、執務室にお通しするべきでは？」

大淀が突っ込みを入れる。

「……確かに、普通の客ならばそうするさ。だが、私はこの連中を客だと思っていない……」
「……どう言うことですか？」
「礼を欠いた者に礼を尽くす必要は、ない。そう言うことだ。……さあ、入れ」
　すると、何故か真っ青な顔の、海軍の服を着込んだ女性と、これまた何故かどことなくドヤ顔の、恐らくは艦娘が入室してきた。
「……えーと？誰？」
　おかしいな、結構な美人だし、一度でも会っていたら忘れないと思うんだがな、記憶にない。
「……あ、あの、す、すいませんでしたぁ!!」
　長い黒髪が床に付くのも気にせず、土下座する女性。え、何？なんで？

「提督、こいつは、あの音成鎮守府の連中だそうだ」
　と、長門が言った瞬間、先程まで修羅場をしていたウチの艦娘達が一斉に此方を見る。
　ビシリ、というのは、加賀の持つ湯飲みにヒビが入った音か、それとも、この嫌な空気の音か……。
「……何の御用でしょうか？お呼びじゃないんですけどね？」
　さっきまで俺の背中ででれでれしていた古鷹は、聞いたことの無いような冷たい声で毒を吐く。あ、アレ？古鷹怖くね？
「い、いやその、私は、謝りたくって」
「あの作戦からは一ヶ月以上経ってマース？今更、謝りに来た、デスカー？……あまり、怒らせないで欲しいデース」
　いつも笑顔の金剛は、全く笑っていない。声も酷く冷淡だ。
「そ、それは、その、信じていただけないかもしれませんが、先月は、何者かに鎮守府を破壊され、復旧で忙しく……」
「聞いてねぇんだよ、んなことは……。こっちはお前に用なんざねぇ、とっとと失せろ……」
　天龍ちゃん、怖い。

「……も、勿論、失礼は承知の上です。それでも、謝りたいんです！私にできることなら、どんなことでも仰って下さい!!」
「あの、今更何が出来るんですか？作戦が終わって一ヶ月以上経っているんですよ？軽はずみになんでもしますなんて言われても、ただただ不愉快になるだけなんですけど……」
いつもよりはっきりとものを言う潮ちゃん。
「そ、そんな、わ、私は、私はただ……」
あーあ、泣いちゃったよ、この人。……多分、謝りたいってのはマジだろうよ。あの作戦は、音成鎮守府の保有戦力じゃどうやっても攻略出来ないものだったしな。多分、海域を軽く偵察したくらいだったんだろうよ。でも、気が付いたら、作戦を成功させたことにされていてビビったってとこかね。
まー、なんにせよ、怒る程のことじゃないね。さて、止めなきゃな……。
××××××××
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い!!!
私の知っている艦娘じゃない!!!
私の艦娘は、こんな風に、身も凍るような殺意は出さない！こんな風に、恐ろしい顔で私を睨まない!!
秘書艦の日向さんもドヤ顔のまま固まってるし!!
怖い、怖いよ……。
確かに、悪いことをしたのは分かっている。けど、誓って、わざとじゃない！
気が付いたら、海域開放の功労者にされていて、資材とかお金とか、沢山渡されちゃったの！
本当に頑張ったのは、ここ、黒井鎮守府だって、私は知ってるのに！資材とかお金とか、全部渡そうと思って、それで、ちゃんと謝ろうと思って、それなのに……。
誰か、助けてよ……。

「……わかった、この話はやめよう。ハイ!!やめやめ」

あ……、え？

「ほら、頭を上げて、これで涙を拭いて、ここ座って？」

「あ、その、は、はい」

なん、で？どうして私に優しく？

「バンホーテンのクォクォアでいいかい？」

「わ、私は、その」

「あっ、ごめん、もう淹れちゃったわ（疾走）。……俺は、この黒井鎮守府の提督、新台真央。本業は旅人だ。貴女は？」

ココアを差し出しながら名乗った彼。

「あ、その、ありがとうございます！わ、私は！音成鎮守府の提督、海原守子です！えっと、去年までは大学生で、高めの適性があったから、その、海軍に入らないかって言われて！こ、こんな私にも出来ることがあるならと思って!!」

「へぇ、偉いな！あ、ゆっくりでいいよ、焦らなくっても、俺は暇してるしね」

「あ、はい！その、それで、今回は……」

……私は、昔から人と話すのが苦手で、男の人なんてお父さん以外とは話した記憶がないくらいだ。なのに、この人は、なんでも安心して話せるような、そんな優しい雰囲気をしている。

だからだろうか、私は、彼に全てを、しっかりと話せた。

……音成鎮守府は偵察しかしていないこと、そう大本営に伝達したこと。

……それでも、申し訳ないと思っていて、出来ることならなんでもするということ。

……謝罪が遅れてしまったこと。

でも、彼は……。

「んー？良いよそんなの！別に困ってないし！そんなことより、これ

からよろしくね！」
「……え？ゆ、許してくれるんですか？」
「うん、俺は怒ってないし」
お、怒ってない?!こんなことをされて?!それは、優しいの範疇に収まるの?!
「だって、皆んな無事だし、街の人達からは感謝されたし、戦果や、金なんて（知り合いから借りればいいし）必要ないからさー」

……そっか、この人、多分、私と同じことを考えてるんだ。私も、艦娘の皆んなと一緒に、大切な人達を、綺麗な海を守りたくって、提督になったから。地位や名誉よりも大切なものを守りたい、そう思ってるんだ。
「多分、大本営に戦果を偽造されたんだろうね。……と、言う訳でさ、皆んなも許してあげよう？」
「まあ、提督がそう仰るなら……」
「私は、貴方の決断に従おう」
「まあ、良いでしょう」
そして、さっきから私を睨みつけていた彼の艦娘達の態度も軟化した。

……やっぱり、艦娘達からも慕われている、優しい人なんだ！他の提督みたいに、艦娘を使い捨てたり、虐げたりしない、本物の提督なんだ!!
「そうだ、折角だし、おやつ食べて行きなよ。美味しいイチゴがとれてさ、たくさんケーキを作ったんだ」
そう言って、私と日向さんにイチゴのショートケーキを差し出す。
「あ、ありがとうございます！」
そして彼は、色々なことを話してくれた。
……黒井鎮守府のこと、提督になった経緯。
……作戦の攻略方法、地元の人々との関係。
……そして、『ロック装置』。

そして彼との話が終わり、そろそろ日が沈みそうな頃……。

「あら？もう帰るのかい？折角だし、もっとゆっくりしていきなよ？」
「いえ！お気遣いなく!!……その、今日はありがとうございました!!わ、私、今の海軍は、艦娘を使い捨てるようなやり方には反対で、貴方みたいな強くて優しい人、尊敬します！……次からは！次からは本当に私達だけの力で海域を解放できるくらいに、強くなります!!」
「おっ、そうだな。頑張りなよ。……また、遊びにおいでよ、今度は、音成鎮守府の皆んなを連れて、さ」
「……はい!!」
私達は、一礼し、退室した。帰りは、黒井鎮守府の長門さんが送ってくれた。長門さんも、もう怒っていないらしく、最後に、「また来るといい」と言ってくれた。やっぱり、あの優しい提督の艦娘だけはある。

「……ふぅ、生きた心地がしなかったな」
日向さんがそう呟いた。
「でも、あの艦娘達は、それだけ彼を慕ってるってことなんだと思うよ。……この、ロック装置もくれたし」
「ふむ、使って大丈夫なのか？」
「うん、あの人のこと、信用してみるよ」
見ていてください、新台さん。私、頑張りますから……。

３０話　なお、このテープは機密保持の為、１０秒後に爆発する　前編

……先日、モテ過ぎて困ると言ったな。

アレはマジだ。

「……提督から、他の子の匂いがします。それも、沢山……。榛名は、金剛お姉さまの二番目で良いんです。……でも、二番目より下は……嫌ですよ」

まるでマーキングするかの様に、俺に身体を擦り付ける榛名。滅茶苦茶甘くて良い匂いするし、大型犬みたいで可愛いんだけど、目がヤバイ。漆黒の闇。

「あら？司令官どうしました？今日は取材を……、へえ、青葉、見ちゃいました……。榛名さん、私が欲しいのは司令官の写真「だけ」なんですよ……。どいて、貰えませんか？」

青葉ちゃん。何一つ青くない。寧ろ黒い。真っ黒。黒葉ちゃんの誕生である。（激寒）

「あ、司令官。……ああ、また絡まれてるんだ。……ねえ、今日は私とサボろうよー。そんな面倒な子はほっといてさ。如月は身体が「火照って」大変だって言うし、弥生と三日月は、司令官の命令なら「何でも」聞くってさ……。ね、至れりつくせりだよ？私達とゆっくりしよ？」

望月ちゃん。小さな手で俺の手を握る。しかしその力は、手の小ささに見合わない強さ。

んもー、普段はかなり仲良しなのになー。やっぱり、社会勉強の機会の無さが原因か？皆んな、愛情表現が愚直で下手過ぎる。あと、常識もない。

「はいはいはいはい、分かった、分かったから！仕事終わったら遊んであげるね！」

まあ、仕事なんて大した量ないけど。こうでも言わんと止まらん。
これでこの場は逃げるしかない。

「「じゃあ、お手伝いしますね（するよ）」」

はい、駄目でしたー。

「お仕事、終わりましたね！提督！」
「さあ、取材の時間ですよ！」
「は？司令官は私とだらけるんだよ？」
「提督！工廠でラジコン作りましょうよ！」
「あたしと勝負しろ！提督!!」
「ひゃっはー！」

ピャー！捕まったァー!!しかも増えとる!!もう、何と言うか、最近は人生のピークでモテてるなー。所謂モテ期かな？

……でもこれ、誰か一人だけ選んだら死ぬやつだよね？勿論、全部断っても死ぬ。時間をかけさえすれば上手く逃げられる自信はあるが、今回は断るための第三の選択肢がある。

こういうどっちを選んでも駄目な二択は大体、第三の選択肢が正解なんだよ。まあ見てな？

「いやー、皆んなからのお誘いは大変嬉しいんだけどさ？実は、大本営から、新しい艦娘が派遣されるらしくてさ？その子のお出迎えをしたいなーって！」

「「×××……大本営から？……そんな子、必要無い……!!×××」」

×××はい、駄目でしたー。

×××××××××

黒井鎮守府、正門前……。前までは、私達艦娘が決して出ることの許されない、暗く冷たい門でした。……でも今は、多くの仲間達と、大好きな提督がいる、暖かな我が家の象徴になりました……。

……でも、今日は、この門を、大本営からの犬が通る……。

とても、許せるものじゃ、ない……!!

提督はお優しい方ですから、きっと笑顔で許すんでしょう。でも、こればっかりは、提督が許しても榛名が許しません……!!

「あ、あのさ?皆んなでお出迎えは大変結構だよ?で、でも、ちょっと気合い入り過ぎじゃなーい?」

「……何だ?「あの」大本営からの犬なのだろう?相応の「出迎え」が必要かと思ってな……!!」

長門さんの言う通りです。結局、音成鎮守府は無罪だと調べがついた訳ですし、私達に不当な評価をした大本営が悪い、と言うのが、この黒井鎮守府の総意です。

「龍田ァ……、大本営からの犬っころが舐めた真似しやがったら、速攻で「バラバラ」にすんぞォ……!」

「ふふふ、そうね、天龍ちゃん。……でも、ここに来る事自体が、「舐めた真似」だと思うわ〜」

「天龍ちゃーん?龍田さーん?お出迎えに刃物は要らないなー?」

天龍さん、龍田さん、頼もしいです。……何が来るかはまだ分かりませんが、こちらに害意があるなら、直ぐに帰ってもらいましょう。……いえ、還ってもらいましょう。

「どうでもいいっぽい?提督さんに逆らう奴は、どの道、水底にぽいするっぽい!!」

「そうだね、暗く冷たい海の底なら、証拠は残らないだろうね」

「何で消す算段してるんすかねぇ……?大体にしてその武器は深海棲艦だけじゃなくって艦娘にも効くからね?やめてね?」

月光を束ねて作ったかの様な美しい聖剣を構える夕立ちゃんと、散り落ちる木の葉の様な意向の、特殊な形の日本刀を構える時雨ちゃん。……海に沈めれば、証拠は残らない、確かにそうですね。

そうこうしているうちに、大本営からの車が、この鎮守府の前にやって来ました。その車から降りてきたのは……。
「自分、あきつ丸であります。艦隊にお世話になります」
……え？艦娘？しかも、あきつ丸って陸の……？
「えーっと？そのさ、俺の記憶が確かなら、君って陸軍の船だよね？……なんでここに？」
「はっ、自分は、大本営からの命令で、この黒井鎮守府に転属することになりました」
……厄介払いを兼ねたスパイってところでしょうか？相変わらず、陸とは上手くいってないんですね。愚かしい。
まあ、少しは同情します。大本営に振り回されているんですから。
「なんでも、この鎮守府は、前回の作戦において虚偽の報告をしたと聞きました。ですから私は、憲兵の役割も兼ね、この鎮守府の戦力になるとともに監視を……」
……ああ、ああ、もう、謝罪も、命乞いも、聞きません……。
消えて下さい……!!

長門さんが地面に拳を叩きつける。
夕立ちゃんが月色の斬撃を飛ばす。
天龍さんが突貫する。
雷ちゃんが鎖に繋いだ錨を投げる。
島風ちゃんが飛び、踵落としをする。
蒼龍さんが大弓を射る。
羽黒さんが門の鉄棒を千切り、投げる。
私は大きく踏み込み、殴りつける。

「っぶねえ!!マジっぶねえ!!何すんの皆んな!!」
……振り向くと、提督が大本営の犬を抱えて、正門前に立っていました。
大本営の犬は、最初はただただ驚いていたようですが、自分の立っていた場所がひび割れ、裂かれ、貫かれているのを見て、青い顔をしながら震え上がりました。
「あら?司令官?駄目ですよ?「それ」は如月が風穴を開けるんですから……」
「待って、ＮＩＯＨ仕舞おう、如月ちゃん!仲間同士で争うのは止めよう?」
……仲間同士?何のことですか?
「Ｈｅｔ（いいや）、そいつは、仲間じゃないよ、司令官。……敵だ」
「ヤメロォ!!響ちゃんストップ!!まだ話聞いてないじゃん!!!」
……話?聞く必要、ありますか?
「提督……?何故、邪魔をするんですか?そんなの、要りませんよ?提督には、要りませんよ?……今すぐに消せば、証拠は残りません。さあ、早く、早く、処分してしまいましょう……」
「あー、確かに、榛名も、皆んなも大本営を嫌っているのは分かるよ?でもさ、悪いのは大本営「だけ」でしょ?大本営の下で、何も知らずに働いている人だっているんだよ?……何かを嫌いになるな、とは言わないけどさ、嫌いになるものは最小限の方がいいよ?その方が、人生楽しいからね」
「……では、提督は、その犬が大本営に良いように使われているだけ、だと?そう仰るのですか?」
……まあ、提督が言うことはいつも正しいし、そう言われてみると、やり過ぎたのかもしれない。
「そうそう、第一、本当に大本営の犬なら、態々監視するとか言わないでしょ?」
「……確かに」
……では、この女に罪はない、と?だけど、確証はない。
「ま、ほら、兎に角本人に……、あ、あら?気絶、しちゃってる?」

……まあ、保留、ですね。
「……分かりました。私達は、提督の言葉に従います」
「分かってくれて嬉しいよ、榛名！……君達は女の子なんだ、暴力は控えた方が良い。……じゃ、俺、この子を医務室まで運ぶから、よろしくぅ！」
女の子、ですか。ふふふ、やっぱり、提督は私達を女として見てくれている……。こんなに嬉しいことはありません。

でも……、
「提督、私が運びます。その子、こちらに渡して下さい！」
「え？ま、まあ、その、本当に大丈夫？痛くしない？」
「はい！榛名は大丈夫です!!」
……提督に抱きかかえてもらう、なんて勝手は、榛名が許しません……。

３１話　なお、このテープは機密保持の為、１０秒後に爆発する　後編

……あ、あれ？
こ、ここは？
ここはどこでありますか？
じ、自分は、大本営からの指示で、黒井鎮守府なるところへ転属されて……？
そして、その後……？

……『殺す』
……『ぶった斬るっぽい!!!』
……『島風からはぁ、逃げられないって!!!』
……『あの！死んじゃって下さい!!』

「あ、ああ、ああああああああ!!!!!」
悲鳴と共にベットから起き上がる。
……そうだ、自分は、殺されそうになったんだ!!凄まじい殺意に囲まれて、殺されるところだった!!!
……自分は、陸で喚ばれた艦娘で、だが不要と判断され、海軍の大本営に厄介払いされた。しかし、その大本営でも、陸の艦娘という理由で疎まれ、黒井鎮守府という悪徳鎮守府（と、聞いている）に転属させられた。……だから、今まで、殆ど実戦経験がない。
それでも、いや、だからこそ、あの殺気には耐えられない!!何だ、アレは？アレは何なんだ?!アレはまさに怪力乱神、いや、悪鬼羅刹そのものだ!!!
……しかし、何故、自分は生きている？……見るからに、医務室、といった感じの部屋にいる以上、あの世ではないだろう、多分。

その時、この部屋の扉が開かれる。
ま、まさか、あの時の奴らが追って来て……?!!
「あ、起きた?何か悲鳴聞こえたけど、大丈夫?」
「ひっ!!ごめんなさい!ごめんなさい!!……あ、あれ?」
訳も分からず、慌てて謝ってみたが、いつになっても害されることはなかった。恐る恐る、顔を上げてみると……。
「あ、貴方は?……あ、ああ!あの時の!!!」
そうだ、思い出した!あの時、私が殺されそうになった時、私を助けてくれた……!
「あー、大丈夫かい?落ち着いた?」
「は、はいっ!!あ、あの、先程は命を救っていただき、ありがとうございました!!」
……あの時、最初は、あまりの速さに、何が起こったか分からなかった。だが、凄まじい速さで迫る悪鬼羅刹共より先に、このお方にこの身を抱きかかえられ、間一髪で生き残れたのだ。……もっとも、その後すぐに、何が起こったか理解し、恐怖のあまり情けなくも気を失ってしまったが。
「いーの、いーの、気にしないで。そんなことより、ほら、飯にしよう!」
そう言うと、このお方は自分の手を優しく握り、部屋の外へと導いた。

「その、どこへ行くのでありますか?」
「食堂だよ。お腹、減ったろ?もうお昼だからね」
……確かに、空腹ではあるが、まだ限界ではない。そして、艦娘を食堂に?いつも通り、投薬と古いレーションでは?
「あの、何故食堂に?私は艦娘であります。軍規が乱れるでありますよ?」

「……あー、君も、そういうアレか。もうね、そういうやりとりは８１０回くらいやったから。着いてきて、どうぞ」
そう言って、このお方は自分の手を引いて歩いて行く。……あたたかい手だ。とても、落ち着く。こうして、このお方が側にいることを感じられれば、あの時の恐怖を忘れられる気がする。
「はい、着いた。じゃあ、取り敢えず飯にしよう。鳳翔さーん、この子の分、頼める？」
「はーい、ただいま！」
あ、い、いる！自分を殺そうとした奴らが沢山!!
「大丈夫？怖いかい？……信じられないかもしれないけど、もう誰も敵意を持っていないから、安心……、して欲しいなぁ」
「で、でも……」
思わず、このお方に抱きついてしまったその時、奴らはこちらを睨んできた。
「ひっ！」
「ほらほら！睨まないの！あきつ丸ちゃんは何も悪いことしてないダルルォ?!」
自分を庇うように前に立つこのお方。……なんと言う……！強く優しく、誰からも必要とされなかったこの自分すら守る……！素晴らしいお方だ!!
そしてその上、見たことのない様な伊達男!!この様な、絵に描いたようないい男が存在していいのか?!
「いいか皆んな？あきつ丸ちゃんはスパイじゃない、本当にただの艦娘だ」
「提督、そうは言うが、証拠はあるのか？」
色々と際どい服の長髪の女が言う。
「まあ、状況証拠だけどねー。目線や手先の動き、足運び、持ち物、話術……、どれも、一般人、若しくは軍人のそれだ。スパイらしさのカケラもないよ」
「何故分かる？」
「本職のスパイに知り合いがいてね……。まあ、名前は仮にＥさんと

しようか、そのEさんとは昔、モスクワの刑務所で出会ってね……。その後も色々と彼の仕事先で鉢合わせるようになって、スパイの動きは大体覚えたんだよ」
「だが」
「丸腰で、通信機も持っていないスパイがいるかい？……それに、仮にスパイだったところで、見られて困るものなんてないだろ？」
「……まあ、そう、だがな……」
「じゃ、良いね？……皆んなも、納得してくれた？」
方々から「はい」と言う返事。……成る程、彼がここの提督、鬼達を統べる王と言う訳か。納得できる強さだ。斯様な益荒男ならば、彼女らの様な妖魔の如き者共も頭を垂れるだろう。
……しかし、悪徳鎮守府と言うのは真っ赤な嘘だった。まあ、最初から信じてなどいなかったが。海軍の大本営などアテにならないものだ。大方、自分を厄介払いする為の方便だったのだろう。陸も海も、大戦の頃から全く変わっていない。
「……確かに、私達も頭に血が上っていたな。冷静に考えれば、やり過ぎたよ。済まなかった、あきつ丸殿。……だが、悪いが、まだ完全に信頼はできん」
敵意や殺意はないが、今度は訝しむような視線を向けられる。
「は、はっ、それは、これからの行動で信頼を得ていくであります!!」
「ふむ、その意気やよし！これからよろしく頼むぞ、あきつ丸殿！」

……確かに、恐怖はある。だが、あの大本営の様に、自らの出世と保身の為、足の引っ張り合いばかりの下卑た豚共の元に戻るくらいなら、例え鬼が隣にいたとしても、身を呈して他人を救える様な、勇猛果敢な男の下で戦いたい。
そうだ、どうせ、陸でも海でも、飼い殺しにされて緩やかに死ぬだけだ。ならば、自分の仕えたい人に仕えて死のう。
「それでは、提督殿！これから、よろしくお願い致します!!」

３２話　黒井鎮守府の痛快な一日

《０５：３０》

はい！おはようございます!!青葉です!!前回は、この黒井鎮守府全体の取材をしましたが、今回は、司令官への密着取材です!!

いやあ、良いですねぇ、「密着」取材！これを機に司令官との距離を……?!

……何で、司令官の部屋から大淀さんが……？

「あら？おはようございます、青葉さん」

あ、はい、おはようございます、大淀さん……、じゃなくて、何で司令官の部屋から出て来たんですか?!!

「ああ、提督を起こしにきただけですよ」

……本当ですか？何だか、肌がつやつやしているような……？

「さあ、気のせいでは？……ところで、取材をするんですよね？提督から聞きました。今、提督はお着替え中だそうですよ」

そうですか、分かりました、では早速取材を……。

「駄目です！」

くっ！離してください!!大淀さんは司令官のせくしーな裸体の写真が要らないと言うんですか?!!

「……わ、私は何も見てませんでした、はい。……写真は後で下さいね（小声）」

……よし！司令官、おはようございます！と同時に激写!!

「……え？あの、着替え中なんだけど？」

なるほどなるほど、司令官はトランクス派、と。んー、良いですねぇ！あ、後ろからの写真も欲しいんで、後ろ向いてもらえます？

「まあ、良いけどさぁ？……こう？」

あぁ～！良いですねぇ～!!広背筋が！肩が！あっ、髪を上げてうなじも見せてもらって良いですか?!!

「どこに需要があるんですかねぇ？」

ここに!!

《０６：３０》
「いやー、間宮さんと伊良湖ちゃんが来てから、料理が楽で良いわ」
　確かに、最近はおかずの種類が増えたりして、色々と充実してきましたねー。
「ふふ、そう言っていただけると嬉しいです、提督。……ドレッシングはこんな感じで良いですか？」
「……うん、オッケー、サラダは上がり。あとはホイル焼きと、トマトのオーブン焼き、ポークソテーだな」
「ホイル焼き、上がりましたよ、提督」
「あっ、どう、鳳翔さん？一つ開けて、味見してみて？」
「……はい、大丈夫、美味しいです！……提督もどうぞ、はい、あーん」
「あーん……、おお、やっぱりパプリカは入れて正解だったな」
「ええ、しめじもシャケも美味しいですね、相変わらず、洋食では敵いません。流石は提督です！」
　は？何、自然体で夫婦みたいなことをしてるんですか鳳翔さん？
「そうですよ！鳳翔さん、ずるいです！」
「間宮さんの言う通りですよ！」
「……あら？何か問題でも？」
　大有りですよ!!!
「はい、青葉ちゃん、あーん」
　はーい！司令官！あーん！……うん、美味しいです!!
「ほら、間宮さんも、伊良湖ちゃんも、あーん」
「「わーい!!」」

《０８：００》
　午前８時です。この時間帯は、食堂がもっとも混む時間。本来は、長門さんや一航戦の皆さんと食事を摂る提督の隣で、私も食事を摂っていますが……。
「もぐ……、もぐもぐ……、ふぅ、ポークソテー……、洋食も美味いものだな！提督!!」

「……このトマト、塩気が強めでご飯にも合いますね！」
「クリームシチュー……、流石に気分が高揚します」
し、食欲が！食欲が吸い取られる!!……そうなんですよ、こうなるから、皆んな司令官と食事を摂れないんですよ!!だって……、
「朝はパンだよなー、あんまり米に慣れないし。……あれ？青葉ちゃん、食べないの？」
だって、フランスパン一本丸ごとを、バケツ一杯くらいのクリームシチューに浸けて食べる人なんですから……。
……あ、シチュー美味しい。

《１０：００》
「あれー？どこやったっけかな、アレ」
ここは倉庫、鎮守府の改装が終わって、暇を持て余した司令官が作った新たな建物。司令官の長い旅の過程で手に入れたものが保管されているとか。司令官にとっては殆どが使えないものらしく、欲しければ艦娘達に譲る、とのこと。
この前は、夕立さんがおかしな剣を、時雨さんが変わった形の刀をもらったそうです。他にも、空母の皆さんは弓をもらって喜んでいましたね。
ところで、司令官は何を探してるんでしょう？
「ん？ああ、長門にお守りをあげようと……、あ、あったあった、『壊し屋のお守り』」
はあ、何のご利益があるんですか？
「壊し屋スタイルの攻撃力が１．２倍になる」
……その、確かに、長門さんの戦い方はかなり乱暴ですけど、壊し屋って言うのは酷くないですかね？
「そうかな？あ、あとこれもだ、陸奥に『ダンサーのネックレス』を渡さなきゃな」
ええ……？長門さんと差があり過ぎませんか？
「ああ、そうじゃなくって、戦闘スタイルの話。長門は壊し屋スタイル、陸奥はダンサースタイルに近いから、多分このアクセサリーで補

正が入るってこと」
……はあ、その、それを持っているだけで強くなれると？
「まあ、疑わしいのは分かるけど、ここに置いてあるものは、一応無害で、尚且つ有益なものだよ？……例えば、ほら、これ、『白い偽りの指輪』って言うんだけど、これを装備すると……」
?!、し、司令官!!?!!真っ白ですよ?!!何ですかそれ!!
「この指輪は、つけた奴を霊体の姿にするんだよ。まあ、使い道はまずないけど」
び、びっくりしました！怪しげなものばっかりなのであんまり信じてませんでしたけど、本物なんですね！……私も、何かもらっても良いですか？
「良いよー。青葉ちゃんには……、『太陽の王女の指輪』なんてどう？」
わあ、綺麗な指輪ですね！この指輪には、どんな効果が？
「毎秒ＨＰを２回復する」
……ＨＰ？
「まあ、ほんの少しずつ傷が治る、魔法の指輪だよ。……結構レアだから、なくさないでね？」
それはもう！司令官からいただいた指輪ですし!!
「あの、ナチュラルに左手の薬指にはめるのは止めよう？まだ所帯を持つ気はないよ俺は？」

《１２：００》
お昼です。司令官は今朝余ったシチューをマカロニグラタンにしていますね。司令官は、必ず余った料理は後日何らかのアレンジを加えて出すか、首輪付きさんに上げるかして、絶対に食材を無駄にしませんから。
「よーし、終わり！……今日は米食うか」
あ、珍しいですね。海外生活が長いから、お米には慣れないと今朝言っていたのに。
「いやぁ、皆んな美味しそうにご飯食べるからさ？俺もつい、ね？」
……なるほど、ですが、その、それはもう……、な、何合あるんで

すか？
「え？ああ、グラタンとかもあるし、少なめに三升だけだよ？」
……えっと、あの、その、失礼ですが、司令官はお腹の中に化け物でも飼っていらっしゃるんでしょうか？
「まあ、結構食う方だけどさー。……ほら、赤城、加賀なんてもう六升目だよ？長門も同じくらい食ってるし。普通じゃない？」
比較対象!!比較対象が駄目です!!
「それに、炭水化物はあんまり得意じゃなくてさ。肉なら、牛一頭くらい食べられるんだけど」
「あ、良いですね、私、焼肉が食べたいです、提督」
「焼肉ですか、たまには良いですね」
「ああ、そうだな、肉は良いぞ、肉は」
「ククク、そう来ると思って今晩は焼肉にします!!トン単位の肉!!という訳で今晩は汚れても良い服で食堂に来ること!!」
「あら、じゃあお昼は腹八分にしておきましょう」
「やりました」
「おお！それはいい！」
あーもう滅茶苦茶ですよ。

《１５：００》
おやつタイム、ですが、司令官は今晩の焼肉に向けて、乾燥させてある炭を集めています。……いつの間に炭なんて作ってたんでしょう？
「あ、青葉ちゃん、どう？」
そして私は、司令官が懐から取り出したテーブル席で、チョコレートケーキを食べている。……手伝おうとしたところ、「バレンタイン近いし、チョコ力（ぢから）を取り戻す為修行する」と言われ、さっきからチョコレートケーキの味見をさせられています。……何なんですかね、チョコ力って。底力みたいなものでしょうか。
……って言うか美味しい！なんですかこれ！美味しい!!
「どう？どれが一番いけそう？」

決められないですよぉ！世界各国のチョコレートケーキを食べさせられて、どれが一番か、なんて!!
……紅茶は少し濃いめのアールグレイ、柑橘系の香りがチョコレートとよく合います。
まずはジャーマンケーキ。アメリカのケーキらしいです。言わば、チョコスポンジのケーキと言ったところですかね。……チョコスポンジはふわふわ、間に挟まれたバタークリームは濃厚！文句無しの美味しさ!!
次にザッハトルテ。なんでも、チョコレートケーキの王様なんだとか。こちらもバターの風味がする濃厚なチョコレート味の一品ですけど、挟まれた甘酸っぱいジャムがいいアクセントになって……！
ドボシュトルタ……、少しビターなチョコクリームと生地を何層か重ね、その上にカラメルを、というケーキ。甘すぎず、くどくなく、素朴で安心する味です!!
……そのあとも、沢山の美味しいケーキを食べ、満ち足りた時間を過ごせた。……けど、一つ問題が。
……こんなに料理が上手い司令官に、バレンタインは何を渡すべきなんですかね?!!足元にも及ばないんですが!!!

《１９：００》
「肉だぁぁぁぁぁ!!!」
「「「わーーー!!!」」」
大盛況です。鎮守府全員がここで大騒ぎしてます。……最近は、この辺りの海域を解放したお陰で、パトロールの数すら減りました。夜通し見張ったりする必要はないので、皆さんも安心です。
まあ、でも、お肉が美味しいのでなんでも良いですね。……私も重巡とはいえ艦娘。人よりは食べますよ、そりゃ。んー、焼肉はご飯じゃなくてサンチュですかねー。
で、司令官は、というと……。
「さーて、メインディッシュはー？このー？分厚いステーキ肉（５ポンド）沢山をー？惜しげも無く！鉄板で!!焼く!!!」

「「うおおおおお!!!」」
ああ、またですか。
「更にィ!!特製のガーリックソース!!刻んだ玉ねぎ!!コーン!!付け合わせに焼き野菜もつけちゃう!!!」
「……んん～～～!!お、美味しいです～!!!」
「このソース、醤油ベースですね？ご飯との親和性が!!」
「うーまーいーぞー!!!」
「勿論……、お代わりもあるぞ!!!」
「「わああああああ!!!!」」
く、狂ってる!!もうあの空間は駄目だ、大人しく、ガサと一緒に食べておこう。
「うわぁ……。凄いね、あっち」
ガサ、見ちゃ駄目です。あれはなんか、こう、私達とは違う生き物です。

《２０：００》
お風呂です。……その、司令官？お風呂ですよ？あの、未だにドラム缶風呂なんですか？
「うん、好きなんだよね、ドラム缶風呂」
いや、まだまだ外も寒いですし、いっそ、私達と一緒に大浴場に……。
「いやいや、流石に駄目でしょ。常識的に考えて」
司令官に常識なんてあってないようなものでしょう？……少なくとも、私は構いませんよ？
「青葉ちゃんとならまだ許されるかもしれないけど、空母の子達とかとは一緒に入れないしなー。俺は外で良いよ。青葉ちゃんも入ってきなよ」
むぅ、今日は密着取材なのに！
「……じゃあ、ドラム缶風呂に一緒に入る？」
……え？えっと、その、は、はい。
「あ、うん（冗談のつもりだったんだけど）」

……あの、近く、ないですか？これってもう、抱きついちゃってると言うか、私、司令官の膝に座っちゃってると言うか……。
「そう？これでも特注の大型ドラム缶で、かなり広めなんだけどね」
……私、恥ずかしくて、頭がフットーしちゃいそうです。
「おっ、大丈夫か大丈夫か？」
ひゃああ！おでこ！くっつけられると！か、身体が密着してぇ!!!

《２２：００》
あ、あのあと私は、鼻血が出ちゃいまして、司令官に笑われちゃいました。うう、ウブなのは仕方ないじゃないですかー！
……でも、司令官のオールヌード写真は入手済みです！その辺りは抜かりありません!!
そして今は、寝室にいます。司令官の。
「あのさ、青葉ちゃん？密着取材は許可したよ？でもさ、寝る時まで密着するのは、違くない？」
いえ、密着取材ですから。
「いやほら、前も言ったけど、青葉ちゃんみたいなかわいい女の子が隣にいるとなると、男の人は狼さんになってしまうのですよ？」
いえ、密着取材ですから。
「そのね、足まで絡めてくるのはいけないよ？」
いえ、密着取材ですから。では、お休みなさい。
「青葉ちゃーん？これ、男にとっては拷問だよー？青葉ちゃーん？」

……もう。
……手を出しても、良いのに。

33話　神域の女

二月下旬、先日の青葉の密着取材から一週間が過ぎ、青葉ちゃんの新聞（何故か俺のグラビアばかりだった）も出た頃。ウチの優秀な（自称）猟犬、古鷹と加古は……。

「なーにやってるんですかね？古鷹、加古」

「あ、提督、お洗濯をしようと思いまして！」

あー、確かに、「何か手伝いたい」って言ってた二人に、洗濯を頼んだっけ？

……でも、俺の分は頼んでないんだけどなぁ？それに、

「何やってるの？」

「折角ですから、少し休憩をしてるんです。提督も一緒にどうですか？」

満面の笑みを浮かべる古鷹。かわいい。……けど、何で俺のシャツを羽織ってるんですかな？加古は俺のベッドで、俺の枕を抱いてお昼寝中。なにこれぇ？

「まあね？別に休憩するのは良いよ？でもね、その、何で俺の服を？あっ、待って、嗅がないで？」

「？」

「その、心底何言ってるかわからないみたいな顔やめて？いや、かわいいけどさ？」

だぼだぼの黒いシャツを羽織り、余った袖を鼻に押し当てている古鷹。成る程、これが日本の萌えというものか。最強かな？

「すんすん……、んっ、はあ……??」

こいつぁ、グレートですぜ？まるで麻薬でもキメたみたいに蕩けていやがる！そして古鷹は、服の匂いを嗅ぎながらも、俺の手を引くと、ベッドに押し倒す。

「ふぁあ、あ、提督？……起きたら隣に提督がいる……。えへへ、なんか、良いなぁ、こう言うの。さて、お昼寝再開、っと」

加古は、寝ぼけながらも俺の右手をがっちりホールド。反対側は古鷹がホールドしている。やばいやばいやばい、理性が、理性が!!

「……提督??大好きですよ??ずっーと一緒にいて下さいね??戦争が終わっても、ずっーと、ですよ??……私、お母さんになりたいんです??提督は、きっと素敵なパパになれると思います??」
「……むにゃ、私、提督の為なら、料理でも洗濯でも頑張っちゃうよ??だって、提督が大好きだから??……好きだよ、提督??大好き??一生一緒だよ??」
あ”あ”あ”あ”あ!!!ステレオ催眠音声あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!!!理性イイイイ!!!!!
「おあ”あ”あ”あ”!!!ヤメロォ!!狼さんになっちゃう~~!!」
「ふふふ、じゃあ、私達はワンちゃんですね??提督の忠実な犬です??いっぱい可愛がって下さいね??」
「……ふぁあ、提督はそう言うのが好きなのか?もー、しょうがないなぁ??提督の為なら、犬にでもなんでもなってあげちゃうからね??」
!!!!あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!!!

……泣きたくなるような状況だ、ミスらしいミスはしてないのに。
どうして……。
この据え膳を食うとオワリ。鎮守府での立場とか色々と。
なんとか避妊、てか（穏便に）逃げなきゃ……！
頼む……！
……こない……！
変えてくれっ！
誰でもいい……！
このすけべな空気、流れを変えてくれっ！
誰でもいい……！
悪魔でも……!!
「……ん？」

「……もう、誰ですか？そこのドアのところ」
「んむぅ、折角提督と良いところだったんだ、さあ、帰った帰った！」
「待ってくれ、赤城は俺が呼んだんだ！これから弓の稽古をするって約束で!!と言うことで、また後でな、古鷹、加古!!」
「もう、分かりました、また後で、ですからね！ほら、加古！起きて!!」
「ふぁあーあ、はいはい、起きますよー、っと」
そう言うと、俺の服を洗濯カゴに入れて持って行った古鷹。……あのカゴ、古鷹と加古の服も一緒に入ってるよな、アレ。……そっとしておこう。

「……提督、何だか、気配が死んでますよ？」
「……いつものことだよ」

「……で、稽古だっけ？俺程度に教わることなんてなくない？」
赤城に連れてこられたのは弓道場。何でも、倉庫から引っ張り出してきた弓に慣れないので、稽古をつけて欲しい、とのこと。
「いえ、提督の弓の腕は神懸かり的ですから。是非、ご教授願いたいです」
と、加賀が言う。そうか？俺より上手い奴なんて一杯いるぞ？アメリカで会った弓使いのヒーローなんて凄かったよ、この世界最高の腕前だった。
「私も、噂の弓の腕を見てみたいです！」
「私も！」
蒼龍ちゃん、飛龍ちゃん、我が鎮守府が誇るおっぱいドラゴン。……相変わらず、正規空母の皆んなはむちむちで良い身体してるな。言い寄られたら１０秒で堕ちる自信がある。気を付けねば。
「その、出来れば私も……」
鳳翔さん。すらりとした日本人女性らしい身体。この前着物を着てもらった時は、あまりの美しさに膝から崩れ落ちた。俺が。
だが、俺が本気で大弓を射ったら、弓道場の壁を貫く自信がある。

そうならないよう、予め的の後ろに大盾を配置しておく。
「よし！（適当）じゃ、今から射るから。見てろよ見てろよ～？」
懐からアーロンの大弓を取り出し、構え、放つ。
一射目、的のど真ん中を貫き、後ろに配置した黒鉄の大盾に突き刺さる。
二射目、先程射った一射目の大矢の筈に当てる。威力は、大矢を割らないように注意して控えめ。
三射目、四射目も同様。
最後に出来たのは、四本の大矢が一本の棒になったもの。大盾から棒を引っこ抜き、修理の光粉を振りかけ、懐に仕舞う。
「……と、まあ、こんなもん」
「……相変わらずの腕前ですね……！」
感嘆する赤城。このくらい、ちょっと練習すれば誰にでもできるのにな。
「凄い！凄いです!!」
「提督、かっこいい!!」
よせやい、照れるぜ。ダブルドラゴンに囃し立てられる。
「はい！じゃ、やってみて？」
「「「あ、それは無理です」」」
？、何で？
「提督、その心底分からない、と言った顔をおやめ下さい。いかに艦娘といえども、可能不可能はあります」
そうか？これくらい普通じゃん？
「あ、あの、提督？この黒弓の使い方ですけど……」
的に向かって、ファリスの黒弓を構える鳳翔さん。
「ああ、それはちょっと使いづらいけど、構え方を……」
「あ、分かりづらいので、私の後ろに立ってもらえますか？できるだけ密着して。……あっ、はい、そうです、そんな感じです??」
黒弓を構える鳳翔さんの背中にくっ付き、構えている手を上から握る。……いいのかなぁ、こんなことして。
そうして、適当に指導したところ……。

「提督、次は私達を」
　加賀、ちょっと待って、握力強い。肩掴まないで？
「あはは、次は私達ですよ、加賀さん。……まだここに来たばかりで、あまり戦闘慣れしていませんからね？」
　蒼龍ちゃん？痛いよ？肩掴まんといて？
「は？」
「何か？」
　うーん、この。最早日常の一コマとなりつつある修羅場。加賀、蒼龍ちゃん、二人とも至近距離で睨み合っている。……けど、二人とも、かなり巨乳なせいで、おっぱいがくっつかって、こう、ね？目福ですわ。……よし、そろそろ止めるか。
「やめなされ、やめなされ……」
「ひゃわあ!!」
　脇腹つーん。
「きゅ、急に突っつかないで下さいよ！」
「あ、頭にきました！」
「仲間外れは良くないなぁ？俺も入れてくれないと！じゃあ、じゃんけんで勝った方からね！時間は先でも後でも一緒、五時には終了、良いね？」
「……はい」

「ではまず、私達、一航戦からですね」
　とのことで、じゃんけんに勝った加賀が、期待に満ち溢れた目でこちらを見る。
「うん、よろしくね。……じゃあまず、大弓はかなりの筋力と技量が要求されるから……という訳。分かった？」
「……そうですね、口頭だけでは少し分かりづらいので、私の後ろに立って、密着して……、はい、そうです、気分が高揚してきました。はい、はい、そうです、妻手を力強く握っていただいて、……はい??」
　ええ？良いのかなぁ？いや、俺はまあ、ただ後ろから抱きついてる

みたいなもんだし、理性も生き残っているけど。
　まあ、そんな感じで……、
「私の番、ですか？は、はい、よろしくお願いしますね。……成る程、祈りを込めて……?!、その、着弾した矢が爆発したんですけど……？」
「よーし、次は私です！飛龍には負けないから!!……え？これ、竜狩りの大弓って言うんですか？……それは、なんと言うか……。ま、まあ、良いです！……んっ、提督、力、強いんですね??」
「提督、この弓面白いねー、剣にもなるんだ。……何で弾薬を消費するのかは聞いちゃ駄目？……ま、いっか。これなら多聞丸も喜んでくれ……、え？多聞丸と会った？菅野デストロイヤーとも会った?!じょ、冗談ですよね?!ねえ?!!提督?!!」
　と、皆んな満足してくれたみたいだ。最悪、ドクロ先生を呼ぶくらいのつもりだったが、大丈夫みたいだ。

　あと、返された洗濯物は、古鷹と加古の甘ったるい女の子の匂いでいっぱいだった。ちょっと嬉しい。

３４話　孤独の叢雲

今日は勇気を出して、司令官のいる執務室に入ったわ……！この調子で、どうにか私の気持ちを伝えたいんだけど……。

『資材仕入：１１４５１４８１０円
給与手当：１９１９８９３円
外注費：０円
水道光熱費：３６４３６４円
（中略）
黒井鎮守府経済状況：黒字』

……は？

い、いや、おかしいでしょ?!

「し、司令官?その、質問があるんだけど」

「おっ、何かな?叢雲ちゃん」

「こ、この、経費よ！」

「……ん?合ってるよ?」

「い、いや、そうじゃなくって、おかしいでしょ！」

そう、計算が合わないのだ。資材、食料の仕入れ量が多く、給与手当も多い割に、支出は少ない。そして、収入は、謎の会社からの寄付金と提督のお給料で成り立っている。

「何この、株式会社ＴＡＢＩＢＩＴＯって?……その、明らかにアンタの仕業よね?」

「ああ、それはペーパーカンパニー。俺、一応公務員だし、営利目的で副業ができないからさ。法人作って、報酬ゼロの役員になったのよ。で、妹に従業員になってもらって、莫大な利益をタックスヘイブンで受け渡してもらい、贈与税を逃れ、最終的に俺のポケットマネーと言う形でこの鎮守府の収入になってるんだ。だから明記してないところもあるよ」

「ペーパーカンパニー?!タックスヘイブン?!!」

なにそれこわい！

「合法だよ?」

何の話か全然分からない。
「そ、それだけじゃなくって、この、外注費と、食費ゼロって、どう考えてもおかしいでしょ?!諸経費も殆どないし！」
「外注はそもそも、俺が鎮守府の整備と管理をするから不要だし、食費やら何やらは、別のペーパーカンパニーから寄贈という形で鎮守府に贈ったり、実際に俺が作ったり、近隣住民から、「廃棄予定にしてもらった」ものをもらったりしてるからな」
「?!」
えっと、つまり?難しくてちょっと……。その、私、軍艦だから、経済の話はさっぱりよ。
「何言ってるか分からないって顔だね?よし、今日は丁度、食料とかを買い込む日だし、叢雲ちゃんと社会見学をしよう、そうしよう」
そう言って、司令官は、暇そうな子を集めといて、と言い残し、外へ出た。

「はい、司令官。指示通り、暇してそうな艦娘を連れて来たわよ！」
「……連れてこられたけど、何をするつもりなの?」
「全く、用があるなら、直接言えばいいのに！」
「……で、何?!」
集まったのは、休憩室でだらだらポケモンをしていた曙（何故か手持ちのモクローに司令官の名前をつけていた）と、司令官がノリと勢いで出した音楽ＣＤを聴きながら、司令官の日記を読んでいた満潮、霞。司令官と出掛けると言ったら二つ返事で引き受けた。
「どこに行くかは私も知らないけど、何でも、社会勉強がどうとか」
「ふーん、まあ、あのクソ提督の考えてることなんて分かるわけない、か」
全く、クソ提督はやめなさいっていつも言ってるのに。まあ、気持ちは何となく分かるけどさ。素直になれないのは一緒だし。
「オラオラー!!!」

「「「?!」」」
司令官が来、でっかい！トラック?!
「さあ、乗り給えよ、諸君」
「な、ななな、何よそのトラック！そもそも何で呼んだのよ！このクソ提督！」
「このクズ！」
「バカ！」
「えっ、酷くない？」
いや、妥当でしょ……。人を待たせておいて、１０ｔトラックに乗って爆走しながら現れるんだもの。
「叢雲ちゃん慰めて？」
「いや、知らないわよ」
……あっ、つい冷たく突き放しちゃった……。頭を撫でたりしてあげれば良かった……。私で良ければ、いくらでも慰めてあげるのに……。
兎に角、私達はこの大きなトラックに乗り込み、鎮守府の外に出掛けた。……司令官とお出かけなら、行き先はどこであれ、楽しめそうね。

「ねぇ、どこに向かってるのかしら？」
「んー？取り敢えず、貿易関係かなー、ちょっと卸したいものがあって」
「へぇ、貿易ねぇ。確かに、アンタは色んなものを持ってるものね」
相変わらず、出所は謎だけど。
「で？何を卸すのよ？」
満潮が不貞腐れたかのような態度で聞く。でも、声からは喜色が滲んでいる。司令官と出掛けられて嬉しいのだろう。
「宝石」
「へ？」
そう答えた司令官は、懐から沢山の金銀財宝を出した。……え？

「はぇ？な、何？こ、これ？」
　面食らうのも無理はない。素人目に見ても、一つ何百万、何千万円とかしそうな大きなダイヤ、燃え上がるようなルビー、綺麗にカットされたトパーズ……。
「こんな、こんなの、その、どこから?!」
「えー？君ら、俺の日記読んだなら分かるでしょ？アフリカだよ」
「えっ?!あれ、実話なの?!」
　……私も、よく出来た小説か何かだと思っていたけど、実話？実話なの?!
「じゃ、じゃあ、あの、アフリカで対バイオテロ部隊と協力して、生物兵器と戦ったって……」
「その時のウイルスとプラーガがこちらになります」
　ゴトリ、と重そうな音と共に、車のシフトレバーの横に置かれる怪しげな瓶が二つ。中には、あからさまに危険そうな液体と、肉芽の様なもの。
「……キャアアアアアア!!!」
「し、仕舞いなさい!!早く!!早くぅぅぅ!!!」
「何で持ってるのよおおおおお!!!」
「いや、記念にもらおうかなーって。つい持ってきちゃった」
「死ねこのクズ！この……、クズ（語彙力喪失）!!!」
「もー、密閉してあるからそこまで危険じゃないのに。……ほら、仕舞ったから、ね？」
「「「ね？じゃないわよ!!!」」」

　貿易商の元に着いた。ああ、本当に、さっきは生きた心地がしなかった。曙はちょっと泣いてるし。……あ、曙が司令官に慰められてる。……私も泣いておけば良かったかしら。
「うう、この、クソ提督！びっくりしたじゃないの！もう！」
「ごめんって、普段深海棲艦と戦ってるんだし、生物兵器くらいなんともないかなと思っちゃってさ？」

「それとこれとは別なの！」
「はいはい、ごめんねー」
「あっ、も、もっと優しく撫でなさい！許してあげないわよ！」
「こう？」
「んっ、良いじゃない??」
……曙め。
「何セクハラしてるのよ！」
私は最近撫でてもらってない！
「はいよ、引っ張らないの、叢雲ちゃん」
「あっ、提督……」
曙が悲しそうな顔をするが、無視。悪いけど、一人だけ司令官に構ってもらうのは許さないわ。
「ほら、早く仕事しなさいな！」
勇気を出して手を握る。あは、司令官の手、大きくて、あったかい……。
「はいはい、……すいませーん、ゴローさーん？新台ですけどー？」
……「はーい」

「確かに、品物を受け取りました……。いや、新台さんの持ってくる品物は本当に質が良くて……」
と、何だか、いわゆる大人の話を始める提督と貿易商のおじさん。……このおじさん、結構体格が良くって、ちょっと怖いかも。
「いえいえ、たまたまですよぉー」
「いえ、本当に、深海棲艦のせいで、私みたいな小さな個人貿易商はかなり打撃を受けまして……。そんな中でも、多くの品物を安く売ってくれる新台さんには頭が上がらないですよ。新しい取引先も出来て、収益も上がりましたし……」
「ははは、感謝してくれるなら、実際に深海棲艦と戦っている彼女達に言ってあげて下さい」
ちょっと、バラして良いの?!
「あ、じゃあ、彼女達が？」

「はい、艦娘です」
「へぇ、それは……、あっ、そのお、いつも助かります。本当に……、貴女達のおかげで、路頭に迷わず済みました。ありがとうございます」
「いっ、いえ!その、お、お気になさらず?!」
緊張して声が裏返る霞。おじさんは苦笑いしている。……見た目はちょっと怖いけど、良い人なんだ。
「じゃ、これは俺から個人的なものですが……」
「これは……!!ケーキ、ですか!イチゴのショートケーキ……。その、なんだか、いつもすいません」
「良いんですよ、俺も甘党で、ついつい作り過ぎちゃうんですよ、お菓子」
「いや、本当に、新台さんの作るケーキは絶品ですから……。甘党の私にはぴったりで……」
……あのおじさん、甘党なんだ……。

「それで、次はどこに行くの?」
「農家と牧場、市場だね。……ここらの人達には事情を聞いてもらって、とり過ぎた野菜だとか、余った肉とか、魚とかをタダ同然で分けてもらってるんだよ。中には、態々ちゃんとしたものを、廃棄予定だって言い張って、押し付けてくるような気のいい人もいるよ。感謝しなきゃね」
と、言いながら、各地を回る司令官と私達。

……農家の人達は、「今までは機材とかの輸入に困っていてねぇ。艦娘様様だよ。これからも頑張ってね」と、野菜を分けてくれた。
……牧場の人達は、「私達も、海路が使えないと飼料とかが手に入らなくて困るんだよ。艦娘さん達には感謝してもしきれないよ」と、肉や牛乳を分けてくれた。
……市場の人達は、「艦娘さん達が護衛してくれるから、安心して漁

ができるんだ。本当にありがとう」と、海産物を分けてくれた。
「……ねぇ、司令官。私達って、沢山の人の役に立ってるのね……」
「ああ、そうだね。皆んな、君達に感謝してくれているよ」
「……私ね、艦隊の仲間達が無事なら、それで良いって、今まで思ってた。……けど、今は、この国の人達を守りたいって、そう思うわ」
確かに、大本営みたいな悪い奴らもいるのは事実。だけど、こんな風に、優しい人達もいるんだ。
私は、そういう人達を守りたい。それが、本当の平和なんだと思う。
「よし！良い子だ！叢雲ちゃん!!」
「ひゃあ！」
う、嘘?!わ、私、司令官になでなでされてる?!前に、つい手を払いのけちゃってから、一度もなでなでしてもらってなかった！……久しぶりのなでなで!!
「……いやね？君達艦娘には、もっと世の中について知って欲しいのよ。……俺達だけが無事ならそれで良いって訳じゃないんだ。沢山の人に感謝されてることを知って欲しかった」
「……うん」
「あっ、なんかノリで撫でちゃったけど、叢雲ちゃんは撫でられるのいやだったよね、ごめん」
駄目！もっと撫でて!!前は払いのけてごめんなさい!!
「別に!!……別に、いやって訳じゃないわ。その、急に撫でられて、びっくりしちゃっただけで……」
……うう、言えない！思っていることが口に出せない!!どうして?!
「……私のことも撫でなさいよ!!」
な、なんですって?!満潮、ここで気合いを見せた?!!耳まで真っ赤!!
「ん？こう？」
「……んぅ、そうよ！しっかり撫でなさい!!わわわ私は!!司令官に撫でられるのが好きなの!!!」
くっ、私達四人は、どれだけ素直になれるかが勝負だというのに!!

ここで満潮の一歩リード!!

「〜〜〜〜〜っ!!えいっ!!!」

あっ?!霞が司令官に抱きついた――?!!

「おお、どしたの霞ちゃん?今は取って付けたような感動シーンの最中だからね?」

「ちょ、ちょっとつまずい……、いや!違くて、し、司令官に!!だ、抱きつきたくなったの!!悪い?!!(マジギレ)」

「い、いや、悪くないけど?」

や、やだ、駄目!このままじゃ……!

「〜〜〜〜〜もうっ!!」

あ、あの曙まで?!あんなに意地っ張りだったのに?!!

「こっ、この、クソて、じゃなくて!!て、提督!!その、その、わ、私は、貴方が、その嫌いじゃなくって、その!す、すすすす、しゅきよ!!!う、うう、うわ〜〜〜ん!!やっと言えた〜〜〜!!!(マジ泣き)」

「そうなの?嬉しいこと言ってくれるじゃないの」

あ、ああ、駄目、駄目駄目駄目駄目!!司令官が取られちゃう!!!司令官に置いていかれちゃう!!!

司令官がいなくなったら、私は……!!

「……っあ、……」

どうして?!どうして何も言えないの?!あと一歩、ただ一言、「私も貴方が好き」と、そう伝えるだけで良いのに!!!

「……!!」

声が、出せない!!いやだ、いやだ、いやだいやだいやだいやだ!!!

嫌嫌嫌

と!!!

「えっ、ちょっと、叢雲ちゃん?その、襟引っ張るのやめて?伸びるから、服が伸び、……!!!」

「んっ??」

っぷはあ、……これで、伝わったかしら?

私の気持ち……??

３５話　南方海域攻略作戦　前編

『……と、言う訳らしいです。……旅人さん、頑張って下さい。音成鎮守府一同、応援しています!!』
「はいよー、態々ありがとねー」

「……提督、音成鎮守府からですか？」
「うん。なんでも、また大規模作戦があるんだってよ」
「……成る程、また、『鬼』クラスの出現ですか」
そう、鬼クラス……、前回の海域開放作戦の時に現れた、泊地棲鬼のような、強力な深海棲艦のことだ。
他所の鎮守府では、被害を度外視して、艦娘を大量にぶつけ、無理やり撤退させているとか。……そういう、擦り減るだけの作戦では勝てないんだがなぁ。でもそれって根本的な解決になりませんよね？
「よーし、大淀！皆んなを集めろ!!作戦会議だぁ!!」
「はい!!」

「……あの、提督？さ、作戦会議は？」
「うん？続けて良いよ、俺ちょっと何かつまめるもの作っておくから」
「いや、提督は、提督なんですから！お茶汲みくらい私がやりますから、真面目に会議を！」
「えー？いやだって、ほら、なんか最近は女の子にお茶汲みさせると女性差別がどうたらで……、あれ？」
ん？身体が浮いてる？どうした俺？
「馬鹿やってないで、早く来ないか」
ああ、長門さんに持ち上げられてたのか。……そのまま、この日の為だけに態々作った会議室の上座に座らされる。
このクソデカ会議室は、この鎮守府の艦娘全員を集めてもまだまだ余裕があるくらいの大きな部屋だ。壁紙から椅子の一つ一つまで、しっかりと拘ってかっこよく作った。趣味で。

「さて、提督が来たところで、此度の作戦の概要について説明する」
俺の後ろにある大型のホワイトボードに、『南方海域攻略作戦』と大きく書く長門。字がやたらと男らしい。
……普段は芋ジャージで鎮守府をぶらつく長門は、こと戦術論や戦闘行動に関しては一流だ。作戦の立案、実行共に活躍してくれる。
「良いか、今回の作戦の目的は一つ、南方海域の解放だ。……勿論、一筋縄ではいかん。偵察組が言うには、前回の大規模作戦の折、我々の前に立ち塞がった泊地棲鬼と同じ、『鬼』クラスの深海棲艦が待ち構えている、とのことだ」
……そうなのだ、ウチの鎮守府の偵察組からの報告によると、二体の『鬼』クラスの深海棲艦と、黄色い光を放つ深海棲艦が発見されたらしい。
「新種の深海棲艦、そして、二体の『鬼』クラスの深海棲艦だ、決して楽な戦いではない」
そう言って、隣に立つ陸奥から資料を受け取り、ホワイトボードに写真を貼る長門。
「……まず、この黄色い光を放つ深海棲艦だ。……実際に偵察をして、交戦した五十鈴から報告を聞こう、五十鈴、頼む」
結構大きめのおっぱいを持つ対潜対空ツインテール、五十鈴ちゃん。兎に角迎撃力が高い子で、今回は偵察を買って出てくれた。
「……そうね、あの黄色い光の深海棲艦は、エリートの上位個体ってところだと思うわ……。特別な何かは無いけれど、エリートよりも一段上の火力や装甲を持っていたわ」
「成る程、同じ艦種と行動は同じだが、基本的な性能が向上していると？」
「そう言うことね」
……一週間の調査により、新たなタイプ、黄色い光の深海棲艦を発見した。それを便宜上、『フラグシップ』と呼ぶことに。
そして、長門は二枚の写真をホワイトボードに貼り付ける。
「……これが、今回確認された『鬼』だ。まず、この戦艦型……、南方

棲戦鬼だ」
　大量の大砲が見て取れる下部ユニット、黒鉄の両腕、そしてドヤ顔と言う、いかにも強そうな見た目。
「まあ、見てわかるように、火力に特化している深海棲艦だ……。更に、例によって艦載機も搭載しているとのこと。……敵主砲の威力は馬鹿げている。回避が最優先だ、分かったな？」
　そりゃそうだ、俺はまだしも、並の艦娘なら即死するらしい主砲。絶対に回避するべきだ。
「そしてもう一体、空母棲鬼……。その名の通り、空母型の深海棲艦で、此方の火力もかなりのものらしい」
　鋭利なデザインの手甲と足甲を着けたサイドテールの女の子。此方も相当な強さらしく、音成鎮守府からの噂によると、数十の艦隊を屠っているとか。
「……そして、何より恐ろしいのは、この二体が同時に出現する、ということだ……。二体で連携することにより、極めて高い火力と制圧力を実現している……。という訳だ、提督、作戦はどうする？」
　えっ？俺？
「……そうだな、取り敢えず、このドヤ顔の子のパンツを……、分かったよ、分かったから睨まないで？泣くよ？わんわん泣くよ？」
　……作戦って言われてもな。分断は恐らく不可能、海のど真ん中にいる二体の敵、迎撃力も制圧力も火力もバッチリだ、どうもこうもない。
「真っ正面から、高速で懐に入って、叩き潰す」
「……可能か？」
　当たり前だよなぁ？だって、
「うん、俺も行くから」
「……はぁ、そう言うと思ったよ……。だが、他に方法が無いのも事実だ。……提督、貴方の力を貸してくれ……！」
　悔しそうな長門。……気にするな！半分くらいは、この新しい深海棲艦を脱がせたいだけだから！出撃も趣味なのよ!!とは口に出さないでおこう。怒られそうだし。

「では、編成は？」
「霧島さんと比叡ちゃんと、蒼龍ちゃん、飛龍ちゃん、摩耶ちゃん、那智さん、鈴谷ちゃん、熊野ちゃんに、大井ちゃん、北上ちゃん……。よろしく」
「……その、多くないか？原則、艦隊は六人なんだが……」
　え？何言ってんのさ？ゲームや漫画じゃあるまいし、頭数は揃えた方が良いでしょ？戦いは数だよ、兄貴。
「あ、あと明石も着いてきて？整備要員だから（戦闘は）ないです」
「はい！分かりました！」
　うむ、これで良し。さて、俺はこれから用事が……。

「待った！」
　ヌッ?!待っただと？ゆさぶりには応える他ない。これ、法廷の基本。
「う、噂には聞いていたが、司令官が出撃すると言うのは本当のことだったのか?!」
　俺に人差し指をつきつける那智さん。
「マジです」
「それは、その、許可できない！」
「弁護人の意見を却下します」
!!!!←!!!!
!!!!
「ぐっ！」
「い、いや、そうではなく!!危険だろう?!……皆も何とか言ってやってくれ!!」

「いや、まあ司令官やし……」
「提督は大丈夫です！」
「提督は不死身でち」

「……まともなのは私だけか?!」
「旅人号を用意しろ！武器はいい、皆んなの分の水と食べ物を!!」
「どう見てもあれは型落ちの輸送船じゃないか！」
「巻き舌宇宙で有名な紫ミミズの剥製は、ハラキリ岩の上で音叉が生まばたきするといいらしいぞ。要ハサミだ。６１！」
「?!あっ！ま、待ってくれ司令官!!目の前でダンボールを被っても隠れたことにはならないぞ!!司令官?!司令官ーーー!!!!」

会議、終了!!

３６話　南方海域攻略作戦　中編

今日はー、楽しいー、南方海域攻略作戦ー！
俺専用の素敵輸送船、旅人号を自動操縦させながら、深海棲艦お仕置きコスプレセットを製作しつつ、海上を走る俺。
旅人号は前回から更にチューニングを施し、最高の居住性と医務室、プチ工廠に仮眠室……、並の客船以上の快適さを実現した!!

「司令官、頼む、せめて機銃くらいは付けてきてくれ……」
「だが断る」
「司令？その、データを見るまでもなく、危険な作戦です。……せめて、最新型のイージス艦などを……」
「でも断る」
「まーまー、提督が良いって言うんだし、大丈夫でしょー」
「ふん、お前らが考えてるより、提督は強いんだよ。……アタシは良く知ってる」
　様々な意見が交錯する中、俺は……。
「鈴谷ちゃん、熊野ちゃん、これ、どうかな？」
「えー？罰ゲーム用にしてはかわいすぎなーい？」
「寧ろ私が着たいくらいですわ。……少し、際どいですけども」
　この鎮守府のおしゃれ番長、鈴熊シスターズに、深海棲艦に着せる服の相談をしていた!!

「クッ、駄目だ、話を聞く気がない!!……そもそも、あの船、中身が完全に客船だぞ?!あれで戦闘領域に突入など、正気の沙汰か?!!」
「装甲は硬いもん」
「如何に装甲が厚かろうと、反撃する兵器を搭載せねば……！」
「いやさ、反撃なんて事はさ、君らがやってくれる訳じゃん？俺だって一人で出撃したりはしないんだぞ？あんまり」
「……あんまり？」
　まあ、暇な時釣りや素潜りのついでに深海棲艦を辱めたりするけ

ど。
……そもそも、出撃自体はたまにだがしているんだよね。その時は一人だったり、何人か連れて行ったり、適当だけど。ま、なんだかんだ言って深海棲艦の子達もかわいいし、悪者だから無限にセクハラできるし、大変助かる。

そう、この前なんて……、ん？
「なっ、深海棲艦?!この私がまるで気づかなかっただと?!!……いや、今は戦う事が先決!!」
「あっ、ごめんちょっと待って」
走り出そうとする那智さんの肩を抑える。
「なっ?!何だ司令官!!ふざけてる場合じゃ!!」
「いや、敵じゃない」
「……は？」

「アハ??コンニチハ、提督??……提督ガイナイ間、ワタシ、マタ悪イ事シチャッタワ??……オシオキ、シテ??」
「もー、しょうがないなー！」
「アッ……??」
……この美人さんな深海棲艦、タ級のたっちゃんは、前回の作戦の折に出会った子で、お尻ペンペンにどハマりしたらしく、度々お仕置きを受けに来るのだ。……行動力のあるマゾって凄えよな。
「オラオラ、今日なんて着せ替えしちゃうもんね！ほーら、ミニスカエロメイドだオラオラァ!!」
「アン??コンナ格好……??」
「たっちゃんめ、今回は何をしでかしたんだ?!言え！」
「ンッ??……今回ハ、深海棲艦ノ溜マリ場ニ近付イタ漁船ヲ脅カシテ帰ラセタワ……??」
「良い事してんじゃねーか!!ご褒美だ！オラオラー!!」
「アッ……??撫デラレルノ、気持チイイ……??」
おおう、抱きついて来た。お腹の上辺りに当たる柔らかな双丘……

!!実に良い!!よーし、折角抱きつかれた訳だし、このままお尻を触って……？

……ん？あれ？腕が重いな？

「……何を、しているのかしら……？」

オアアアアアア!!!!そうだった!!皆んなと作戦中だったアアアアアアア!!!

大井ちゃん、デーモンみたいな怖い顔。や、やめよう？短気は損気だよ？あと、腕離して？パワーやばい！

「いやこのそれはこのそれはアレですよアレ」

「モー、提督??艦娘ナンテホットイテ、ワタシヲカワイガッテ？」

「あ”ぁ?!!”」

ひゃー!!大井ちゃんがポプテピピックみたいなキレ方してるー!!!

「……提督、こいつ、深海棲艦でしょ？ぶっ殺して良い？良いわね？よし、殺す!!」

「待って！待って!!大井ちゃんストップ!!!」

「何よ!!貴方は北上さんと私と、皆んなと一緒にいてくれるんでしょう?!!深海棲艦なんて要らないじゃない!!」

「ほ、ほら、深海棲艦にも良い深海棲艦が」

「少なくとも!!貴方に馴れ馴れしくくっ付く此奴は!!悪い深海棲艦よ!!……アンタ！私達の提督から早く離れろ!!」

「イーヤ??」

「きいいいいいいい!!!」

やっべ、魚雷構えてる、止めなきゃ。

「はい、ストーップ」

魚雷を取り上げて、抱き上げる。

「な、なぁ?!何をするんですか!!」

「大井ちゃん軽いねぇ、ちゃんとご飯食べてるかい？……もしかして、美味しくなかった？」

「あ、いや、だからその、いえ、ご飯は美味しいですけど!!そうじゃな

くっ」
「そっか！じゃあ、今晩はピザを焼こうと思ってるんだよ！あとはフライドチキン、オニオンリングとブロッコリーのサラダ、コーンスープ、デザートはカットフルーツとアイスクリームね！今回のピザは窯から作ったから、良い出来だと思うよ！」
「だ、だから」
「お昼はハンバーガー、フライドポテト、スティック野菜とピクルス、トマトスープ、チョコレートだよ！洋食ばっかりで悪いけど、味には自信があるんだ！」
「わ、分かりました！分かりましたから!!そ、その、顔が！顔が近くて……!!」
　顔を赤くして小さくなる大井ちゃん。……大井ちゃんはこっちから攻めると恥ずかしがって反論しなくなるからなー。ちょろいぜ！
「じゃあ俺、飯作るから。サラダバー!!」
「あ、はい……。……?!い、いや、誤魔化されませんよ!!」
　チッ、良い加減慣れて来たか……。
「良いですか?!深海棲艦は敵なんですよ!!敵と仲良くしてどうするんですか?!!」
　んもー、頭が固いんだからー。世の中を敵か味方か、みたいな見方をしちゃつまらないダルルォ？
　……大体、この深海棲艦というのは、今は多くが海で散った者達の怨念や、敵への怒りそのものみたいな、正真正銘の化け物ばかりになっちまったが、恐らく、本来の存在意義は『母なる海からの警告』だ。
　……たっちゃんが言うには、声が聞こえてくるそうだ。母なる海から、『人類に警告せよ』と。『海を血で汚すな、海に血を流させるな』と。
　だが人類は、その警告に対して、海の環境や生態系の破壊、挙げ句の果てには艦娘の大量投入と言う、最悪の答えを返した。
　……きっと、それを受けて、海は怒った。だからこそ、強力な鬼クラスの深海棲艦を創造し、深海棲艦そのものを強化し……、
「……提督！深海棲艦ですわ！……いつもの、化け物タイプ！理性はありませんことよ!!」

……そして今は、量産型の、理性のない、怨恨のままに暴れ回る化け物を創り出した。
「たっちゃん！俺の後ろに!!」
「ウ、ウン！」
　たっちゃんは、初期の頃の深海棲艦で、しっかりとした理性を持っている。そりゃそうだ、たっちゃんの本来のお仕事は、間抜けな人類に説教（物理）することだからな。だが、今の深海棲艦の殆どは違う、『海の怨恨そのもの』だ。先程言った通りの、辛うじて人の形をしているだけの化け物だ。最近、急激に増えてる。
　まあ、原材料の『怨恨』には事欠かないだろうよ……。あんだけ、艦娘達を沈めてるんだからな。馬鹿ばっかりだ、全くよ。
『『『『ガァァァァ!!!!』』』』
「重巡リ級！エリート!!十体!!」
　現れた重巡リ級は、砲撃をしながらこちらに向かって全速力で襲い掛かる。
「ちっ！早いな!!もう雷撃の距離か!!」
　こちらの攻撃で数を減らしながらも、仲間の轟沈を気にせずこちらに進んで来る。
「ひぇー！た、弾に当たるのも気にせず、こっちに突っ込んで来ます!!提督、逃げて下さい!!」
　最後の二体、傷だらけのリ級が俺達の目の前に現れ、怨嗟の声を上げながら、水死体のように膨れた片腕を振り上げる。
　……でもまあ、化け物の方がかえって良いかもしれないな。だってよ……？
「気兼ねなくぶっ飛ばせるもんなぁ!!?ハッハー！そんな技術もクソもない一撃、俺が喰らうわけないよねぇ!!?」
　ライトクロスカウンター……！人とは到底思えない、悍ましい顔面を潰す。だが、この程度では、この化け物は止まらない。故に、こちらも止まらない！ローリングソバット、旋風脚、縮地からの八極拳……沖捶、寸勁、頂肘、鉄山靠。全身がグチャグチャになったリ級が紙切れみたいに吹っ飛ぶ。隣のリ級に震脚からの崩拳、回し蹴り、猿

臂、裏拳、鉄槌、貫手……。胸を貫かれたもう一体のリ級は、一度大きく痙攣すると、動かなくなった。

……この手の敵は、砲撃、雷撃、爆撃で全身を吹っ飛ばすか、手足を切り落とす、全身の肉と骨を破壊するなどして、動かなくなるまで攻撃せにゃならん。たっちゃんみたいな、理性のある深海棲艦は、痛みも感じるし、ピンチには退却だってする。だがこいつらは、まるでゾンビみたいに、手足を千切られようが何しようが止まらない。こちらを殺すことしか考えていない。

ゾンビ……？洋館……、ラクーンシティ……、うっ、頭が……。

ま、まあいい、取り敢えず、リ級の死体を投げ捨て、進撃を指示した。

「よーし、進むぞ！」

「……馬鹿な、これ程の強さを？」

「……こ、こんなデータ、ありませんよ?!」

「へっ、だから言ったろ？提督は強いんだ。……ほら、呆けてないで、早く進むぞ、那智、霧島」

その後も、例によって、俺達は快進撃を続けた。当たり前だ、妖精さんが羅針盤を（賄賂のおかげで）弄ってくれるし、こちらの人数も多く、皆んなの整備や補給をしながら進めるんだ、負ける要素がない。

それに加えて、皆んなの練度だってかなりのものだ。

「北上さん、あれを使うわ！」

「うん、良いよ、大井っち！」

「「雷巡！キーーーック!!」」

完全に息ピッタリの北上ちゃん、大井ちゃん。同時に大きくジャンプ、背中を合わせ、飛び蹴りを放つ。その直後、太ももの魚雷発射管から魚雷を放ち、飛び蹴りによって吹っ飛ばされた深海棲艦を爆破する。

「熊野、ついてこれる？」
「私の方が、着任は先でしてよ？」
「言ったな？見てなよ！」
瑞雲を複数展開、爆撃しながらも砲撃する鈴谷ちゃん。
「えへへっ！どうよ！」
鈴谷が撃ち漏らした深海棲艦の排除を中心に、鈴谷のフォローに回る熊野ちゃん。
「背中がガラ空きですわよ、鈴谷？」
そして、最後に残った深海棲艦一体を挟むように立ち、
「背中は熊野に任せてるからね！」
「もう、調子のいい子ですこと！」
同時に砲撃。……一歩間違えれば、お互いの砲弾がお互いに当たりかねない、危険なものだが、抜群のコンビネーションがこれを可能にした。前後から同時に砲撃を受けた深海棲艦は、影すら残さず消し飛んだ。
「まあまあ、相変わらずと言うことで！」
友情を確かめ合うかのように握手する鈴熊シスターズ。絵になるなぁ。

「行けっ！艦載機!!」
最近、物理法則を超越し始めた艦載機を操る蒼龍ちゃん、飛龍ちゃん。
「オールレンジ攻撃!!!」
数多の艦載機が深海棲艦達を包囲、３６０度から集中砲火。あいてはしぬ。

「テ、提督？……ワタシ、モウ悪イ事シナイワ、本当ニ……」
ガタガタ震えるたっちゃんを横目に、羅針盤の示す道を行く艦娘達。……いやあ、最近は俺が守らずとも自衛できるくらいには強くなったみたいだな。喜ばしい事だよ。

さあ、そろそろお昼にしようか……。

37話　南方海域攻略作戦　後編

この辺りではあまり敵が現れないとのことで、提督の指示により、二組に分かれて昼食を摂る私達。提督は相変わらず、深海棲艦にくっつかれている。

「提督、コッチヨ、コッチノ方ニ南方棲戦鬼ト空母棲鬼ガイルワ！早ク倒シテアソビマショ？」

「ヲッ！作戦、終ワッタラ、アソンデ？」

「アタシモ！アタシトモアソンデクレ!!提督!!大好キダ!!」

……?!

し、深海棲艦が、増えてる?!!

い、いつの間に?!!

「よしよし、じゃ、この作戦終わったら、また今度遊びに来るからね」

「「ワーイ!!」」

「ちょ、ちょっと！待って下さい提督!!」

「もー、良いじゃん、大井っちー。あいつら、大人しくしてるみたいだしさー」

き、北上さん……。

「……でもさ、何であんなにいちゃいちゃしてるのかな？……ちょっと、ウザいかなー。一言いってくるね、大井っち」

き、北上さん……!!

何て頼もしい！提督を叱りに行ってくれるなんて!!

「提督ー？その子達、何なのー？どういう関係ー？」

「んー？この子達は深海棲艦、俺の、そうだな、知り合いだよー」

「「恋人デス（ヲ）！」」

「は？（半ギレ）」

北上さん、怒ると怖い!!

「……ほら、この子達は人恋しいんだろうよ、皆んな、ここらの離島でひっそりと暮らしてるから。……大目に見てやってくれないかな？」

「……それは」

「……仲間以外の誰とも会えないって、寂しいことだろ？それは、北上

ちゃんだって身をもって体験したじゃないか。……できれば、仲良くしてあげてくれ」
……まあ、そうですね……。深海棲艦である以上、仲間以外に会うことはできないでしょう。それは、確かに寂しいことですけど……。うーん、でも、深海棲艦は敵で……。
「ン？オマエ、北上カ？……ジャア、アタシト同ジ、雷巡カ?!同ジ雷巡ニ会ウノハ初メテダ！仲良クシテクレ!!『トモダチ』!!」
「え?!あ、うん……、?!、もしかして、チ級?!仮面は?!」
「アア、アレカ？アタシノ艤装ハカワイクナイシ、シマッテアルゾ？アト、アタシノコトハ『ちーちゃん』ッテ呼ンデクレ!!」
嘘?!じゃあ、さっきからずっと艤装を展開せずに、艦娘の目の前に立っているってこと?!
「ば、馬鹿じゃないの?!武器も持たずに敵の前に立つなんて!!」
「ン？何デダ？オマエ達艦娘ハ、武器ヲ持タナイワタシ達ヲ撃ッタリシナイダロウ？提督ハ、イツモ言ッテイルゾ？艦娘ハ、イイヤツダ、ッテ」
そんな、そんなの……！
「まあ、そういう事！……戦わないで済むならさ、それが一番だろ？平和が一番！ラブアンドピース!!ってね？」
……はぁ、もう、分かりましたよ。貴方は、そういう人ですから。最善ではなく、最高の結果を望む、そういう人です。
確かに、戦わないで済むなら、それが一番ですし……。でも……、
「貴方は、私達の提督ですから！深海棲艦ではなく、私達を見て下さい!!」
……あっ?!つ、つい本音が?!
「……あー、うん、ごめんな、寂しかったのな、大井ちゃん。安心して、ちゃんと見てるからさ」
「ちっ、ちっ、違いますっ!!そんなんじゃないです!!た、ただ私は、北上さんとの約束のことを……!!」
「よしよし、いい子いい子」
「わひゃあ！な、撫でないで下さい!!」

×
×
×もう、本当にこの人は……。でも、良いですよ、許してあげます。
×……でも、北上さんと私を裏切ったら、その時は……。
×
×
×
×さて、そろそろ決戦かね。……夥しい程の血の匂い、火薬の匂い、鉄と肉の焼ける匂い……、近い、いや、向こうから来たな。
×
『ワタシノホウゲキハ、ホンモノヨ……』
『ナンドデモ、ナンドデモ……、シズンデイケ……!』
さあて、おいでなすった、大ボス二人。……ん？アレ？こっち見てる？めっちゃ見てる？
『『……アーーー!!オ、オマエ!!黒井鎮守府ノ変態提督!!』』
「えっ？ひどくない？」
『ウルサイ!!オマエノ所為デ、初期型ノ深海棲艦ハ皆、使イ物ニナラナクナッタ!!』
『コスプレダノ、露出ダノ、変ナコトニハマッテ、ソノ上ドMニナッタリ!!命令ヲ聞カズアソンデバカリダ!!』
「大変っすね（笑）」
『『ブッ殺ス!!!!』』
全く、俺が変態な訳ないじゃないか。仮に変態だとしても、変態と言う名の紳士だよ。
怒り狂う戦鬼の放つ砲撃を弾く。……成る程、自分で本物と言うだけはある。かなりの威力だ。これは、直撃すればウチの戦艦でも危ない。続いて、空母棲鬼の艦載機が、制空権を取らんと飛んでくる。
「総員、弾幕を!!」
「「「了解!!!」」」
対空砲火……。戦鬼の砲撃なら、なんとか防げるが、空母棲鬼の爆撃は無理だ。攻撃範囲が広すぎる。……だからこそ、爆撃はさせない。高射砲などを装備した比叡ちゃん、霧島さん、そして鈴熊シスターズ。更に、ダブルドラゴンの艦載機による対空攻撃により、制空権を確保する。……しかし、こちらの艦載機もほぼ全滅、援護は期待でなきなそうだ。

『馬鹿ナ?!ワタシノ艦載機ガ?!!』
おや?制空権を取られるのは初めてかな?なんにせよ、これで空母の制圧力は封じた。……あとは、まっすぐ行ってぶっ飛ばす!
『落チ着ケ、砲撃デ殺レバイイ!』
『ヨシ、沈メッ!!』
飛来する砲弾。だが……、
「はぁい、駄目でした!!効きませーん!!」
……ハベルの大盾……。最高の、いや、最硬の大盾だ。これを両手でしっかりと構え、叫ぶ!!
「スーパーズ!重巡!!俺について来い!!突撃だ!!!」
「「「了解!!!」」」
大盾を構えたまま、まっすぐ前に進む。空は、残りの皆んながどうにかしてくれる以上、警戒すべきは砲撃のみ。……そして、その砲撃も防げるのであれば、接近は容易!!
『ナ?!!正気カ貴様等?!!!』
「ハッハー!正気だよぉ?!昔はねぇ!!雷撃用意!!撃てぇ!!」
「喰らえ……!!」
「吹っ飛べ!!でぇぇぇぃ!!」
「二十射線の酸素魚雷、大井っちと合わせて四回!行きますよー!!!」
「九三式酸素魚雷、行くわよ!!」
馬鹿みたいな量の魚雷。海中からの絨毯爆撃。
『『グオオオオオオオ!!!!』』
「やったか?!」
那智さん!それ言っちゃ駄目!!
『グウゥ!!危ナイトコロダッタナ……!!』
『クソ!艤装ガ……!!』
「嘘だろ?!あれ程の雷撃を受けて生き残るなんて?!!」
いや、違うな、多分、向かってくる雷撃に砲撃を当てて、迎撃したんだ。全て処理することはできなかったみたいだが、それでも、戦闘

能力は喪失していない。しかし、空母棲鬼は大破、戦鬼は中破といったところだ。
『キ、貴様等……!!生カシテハ帰サン……!!』
「どうする司令官！魚雷はほぼ使い果たした！この距離だ、背中を向けて逃げることもできん!!」
「空母棲鬼はほぼ死に体だ！那智と摩耶で戦艦が来るまで時間稼ぎ！素手でも充分な筈だ!!戦鬼は俺とスーパーズで倒す!!行くぞ!!」
「全く、鬼と殴り合いとは！無茶を言う!!」
「な～に、相手にとって不足はねぇ!!行くぜ那智!!」
「応!!」
空母棲鬼に駆け寄る二人。実力的には充分な筈だ……。
× × × ×
「どうした?!空母棲鬼!!それでも鬼か?!!」
那智が西洋剣で斬りかかる。
『グッ!!貴様ナド、艦載機ガアレバ……!!』
「オラ！余所見すんなよ！この摩耶さまを忘れんな!!」
アタシが殴る。
『グァッ!!貴様ァ!!』
提督の言う通り、艦載機も砲撃もないならば、鬼であれ素手で倒せる、これは事実だ。
『喰ラエ!!コノ！当タレ!!当タレ!!……何故当タラナイ?!!』
……だが、その力と耐久力は確かに鬼。そしてこちらは、一発でもらえば危ないだろう。……くっ、無茶苦茶に暴れやがって!!あの鋼鉄の手足に当たれば、タダじゃ済まないぞ!!
「くっ！喰らいやがれ!!」
機銃を放つ。……今回は魚雷しか装備してないんだ！備え付けの機銃しか、射撃武器はない!!
『効カンゾ!!』
くっ、やはり駄目か！機銃程度じゃダメージを与えられない!!やはり、アタシ達だけじゃキツイ!!

「じゃあ、これはどうかしら!!」
「気合い！入れて!!行きます!!!」
『ゴアッ!!』
「霧島!!比叡!!」
　おお！空母棲鬼の横っ面をぶん殴りやがった!!
『不意打チトハナ!!舐メタ真似ヲ!!』
「失礼ですね、奇襲も立派な戦術ですよ？……さあ、お喋りは終わりです。司令の敵は”挽き肉”にして差し上げます……!!」
?!
　眼鏡を握り潰し、そう言い放つ霧島。
　……鎮守府で近接格闘最強は長門だろう。だが、二番目がいない訳じゃない。多くの候補がいるが、ことステゴロにおいては、この霧島が最有力候補だ。
『”挽き肉”ダト?!ヤッテミロ!!』
　空母棲鬼の拳が真っ直ぐに突き出される。……私が喰らえば、骨にヒビが入るであろう一撃。だが、霧島は違う。
「うおりゃあ!!!!」
『何?!!』
?!
　自分の拳が割れるのも気にせず、鋼鉄の拳に合わせて、真っ正面からぶん殴る!!!あの鋼鉄の拳は、霧島の鮮血に彩られながらも、バラバラに破壊された!!
「もう一発!!!」
?!
　そして、『割れた方の拳』で追撃!!正気かよ!!
『クッ、オオオオオ!!!』
　空母棲鬼は、苦し紛れに、もう片方の鋼鉄の拳を翳すが、そちらもあえなく叩き割られた。
「もう、一発!!!!!」
?!

『ヤ、ヤメロオオオオ!!!!』
ぐしゃり、と、ものすごーく、イヤな音。空母棲鬼は、縦に回転しながら、数十メートル吹っ飛ぶ。最後の方は、河原に投げた石みたいに、水上を跳ねていった。……死んだか、ありゃあ？
「ドエレーーー”ＣＯＯＯＬ”でしたよ！霧島！」
「フフ、ありがとうございます、比叡お姉さま」
返り血をべっとり顔に付けた霧島が、いつもの笑顔を見せる。
……まあ、アレだな。『霧島を怒らせちゃならねえ』ってことだ。
×
×
×
×
横目で見ると、あっちは終わったみたいだね。
こっち、戦鬼の方は、と言うと……。
『貴様、服ヲ破イテ何ガシタイ?!ソレシカ出来ンノカ?!……ソシテ見ルナ!!触ルナ!!!』
「くっ！羞恥心が薄いタイプか!!強い!!」
いつも通り、提督が馬鹿なことやってる。
「真面目にやって下さい!!」
備え付けの機銃を放つ大井っち。まあ、効くわけないよねー。軽く弾かれちゃってる。……どうしよう、戦鬼には、副砲とはいえ、こっちを倒せるだけのものがある。でも、こっちには決め手がない。戦鬼を倒せるだけの決め手が。
「何?!写真撮影も効かないだと?!」
『ウザッタイゾ！失セロ!!』
「ぐはぁ!!!」

その時、私の直ぐ後ろから二本の矢が飛来した。
『?!、副砲マデモガ……!!クソッ!!』
「いやー、奇襲成功だね、飛龍！」
「そうね、これで副砲は使えない！」
蒼龍、飛龍の二人だ。弓で副砲を貫いたみたい。よし、これなら、囲んで格闘戦で……！

「行くよ！大井っち!!」
「ええ！北上さん!!」
　自慢じゃないけど、私と大井っちは息ピッタリの名コンビだ。……何も言わずとも、まるで鏡合わせみたいに動ける。
「えい！」
「それ！」
『グ、オオ、オ、チョコマカト!!奇妙ナ動キヲ!!!』
「こっちだよ！（ですわよ！）」
　鈴谷と熊野も来たみたい。戦鬼の背中に蹴りを入れる。
『キ、貴様等！寄ッテ集ッテ！卑怯ナ!!』
「なーに言ってんの？戦隊ヒーローだって5、6人いるだろ？正義の味方はこう言うことして良いんだよ!!」
『オアアアア?!!貴様、ナンテコトヲ!!!?』
　そう言って、瞬時に戦鬼の下の毛をハート型にカットする提督。うわぁ、自殺もんだよ、あれ……。でも、ふざけているように見えて、効果はてきめんだ。顔を赤くして、片手で下半身を隠すようになった戦鬼。片手が塞がった。
　……そして。
「よし！当たった！下部ユニット破壊!!」
　蒼龍の矢が下部ユニットを壊す。
「でかした蒼龍!!おおおおお!!必殺!!水龍敬ランドの刑!!!」
　すると提督は、またもや一瞬で戦鬼を下部ユニットから引き剥がすと、戦鬼に服を着せた。
　……いや、あれ、服っていうか……。
『ア、ワ、ワタシ、ナンテ格好ヲ……?!キ、キャアアアアアアア!!!!』
　ピンクのハート型のニプレス、網タイツにガーターベルト、太ももに正の字、その上から、大事なところを全然隠せてない、オープンクロッチショーツ……。ご丁寧に、ショーツの端には、意味有りげな白い液体の入ったゴム風船が括り付けられている。……私でも自殺するね、あんな格好。誰にも見せたくないよ、普通。……いやでも、提督になら……。いや、まあ、うん。

皆んな、戦鬼のあまりの格好に、顔を赤くしてしまう。……提督、ああ言うのが好きなのかな？

「俺達の、勝利だッ……!!」

完全勝利したと言わんばかりに、右手を上げる提督。

いや……、まあ……、うん、そうだね……。

３８話　南方海域攻略作戦　裏編

うっ、ここは、どこだ……？
ワタシは、確か、霧島とか言う艦娘に殴られて……。

「だーかーらー！尋問って言ったの!!誰が拷問するって言った?!」
「ですが司令、ただ聞いただけでは信用に値するデータは取れません、やはり、多少痛め付けるのは当然かと」
「そうですよー？……提督を誑かす深海棲艦なんて、痛め付け過ぎるくらいで丁度良いじゃないですかー」
「わわわわわ私!!こう言うの初めてで!!!でででででも、司令のお役に立ちますからー!!見捨てないでぇー!!!」
「よーし分かった!!霧島は釘バット置いて！明石はチェーンソー止めて！比叡は落ち着いて、バールの様なもの置いて！」

な、何だと?!ご、拷問?!!艤装を破壊された今、ワタシは並みの人間以上くらいの力しか出せない!!
……早く、逃げなければ!!
「あ、起きたんだね」
「ヒィッ!!」
ば、バレた?!!
「ああ、大丈夫だよ、私は、拷問なんてしないから」
そ、そうなのか？
「そうそう、飛龍ちゃんの言う通り！拷問なんて物騒なことは」
「じゃ、殺すね？……大丈夫、一撃で首を落とすから！痛くないよ！」
「ヒィィィ!!!」
腰に下げた曲刀を笑顔で抜く飛龍とか言う女！こ、殺される?!!
「待ったぁーーー!!!」
「あん??急に後ろから抱き着くなんて……。提督って、意外と甘えんぼさんなのかな？」
た、助かった……？

「はー、全く全くもー。……ええと、空母棲鬼さんだね？分かってると思うけど、君はこの艦隊に敗北し、捕らえられた、ここまでは良いね？」
「ア、アア」
「だから、これから尋問をします、良い？」
「イ、イヤ、ソレハ……」
その時、顔のすぐ横に大きな矢が突き刺さる。
「ウワァ!!!?」
「もう、提督に「良い？」って聞かれたら、「はい、ありがとうございます！」でしょ？駄目だよー？」
「蒼龍？いきなり矢を射る方が駄目かなー？」
く、狂ってる……！
だ、駄目だ、ここにいたら殺される!!
「あっ、待って！手荒なことはしないから！」
「ハッ、離セェ!!コンナトコロデ死ネルカァ!!!」
「落ち着いて！まだ顔の治療も終わってないんだから！」
腕を引っ張られ、抱き寄せられた。は、離してくれ!!
「司令官、こっちの戦鬼はどうする？……殺すか？」
「何?!戦鬼?!!ヤ、ヤメロ!!ソイツニハ手ヲ出スナ!!!ワタシノ親友ナンダ!!!」
那智とか言う女の方を見る、すると……。
「……ウワァ……」
……何だあの格好……。その、何と言うか、親友の見たくない、見るべきでない姿を見てしまった。……あ、後で謝るべきか？
「ウゥ、空母棲鬼ニマデ見ラレテシマッタ……。モウ殺シテクレ……」
「アー、ソノ、ダ、大丈夫ダゾ！ワ、ワタシハ気ニシテナイシ……、ワ、忘レル！忘レルカラ!!」
いや、無理だ、忘れるなど。完全に目に焼き付いてしまった。内股の正の字の数まで、しっかりと。
「コ、降伏スル、降伏スルカラ、戦鬼ニマトモナ服ヲ着セテヤッテクレ……」

もう、親友の痴態を見ていたくない。話せることなど大して無いが、とっとと話して、解放してもらおう。……せめて、親友の命くらいは守りたい。

「ワタシハ拷問ナンカニ屈シナイゾ!!提督ナンカニ絶対負ケタリシナイ!!空母棲鬼モ諦メルナ!!!」

……何と強い意志!!あの様な格好をさせられても心が折れないとは……!流石はワタシの親友だ!!戦鬼がそう言うならば、ワタシも負けられん!!

「ふーん、じゃあ、罰ゲームね」

「エ?」

罰ゲーム?罰ゲームとは?

「明石ェ!!カマーン!!」

「はーい!用意しました!熱湯と氷!!」

「ではまず!この熱湯風呂に入ってもらいます!10秒以上入っていられたら、釈放!失敗すれば、情報を一つ吐いてもらいます!!では、最初の挑戦者は?」

「……エ?」

ほ、本当に罰ゲームじゃないか!!

「ナ、ナラバ、ワタシガイコウ!!」

「戦鬼!!」

「オマエハマダ外傷ガ癒エテナイダロウ?ココハワタシニ任セテオケ!!」

なんて優しい奴なんだ!!

「ヨーシ、イクゾ!……押スナヨ!!絶対押スナヨ!!」

……でも、絵面は最悪だ。あの下着、股の部分が丸見えだから、大きく足を開いて浴槽の上でスタンバイする戦鬼の、見ちゃいけない部分が……。

「良いねぇ！写真撮っとこ！」
　そして、それに気付いた戦鬼は……。
「アッ！馬鹿!!ヤメロ!!撮ルナ……アッ！」
　身体を支えていた両手で、お尻を隠そうとし、支えを失った身体は浴槽に入ってしまう。
「オア”ア”ア”ア!!!」
「戦鬼ーーー!!!」
　勢いよく熱湯風呂に入ってしまった戦鬼は、これまた勢いよく熱湯風呂から飛び出た。
「熱ッッッッイ!!!ナンダコレ!!!熱ッッッッイ!!!!氷!!氷クレ!!!」
「戦鬼!!大丈夫カ?!!」
「クソォ!!屈スルモノカ!!コレシキノコトデェ!!!」
　なんと言う闘志!!ワタシも負けてられん!!
「はーい、ざんねーん!!罰ゲーム、続行ーーー!!!次は、この中身の見えない箱に手だけを入れて、何が入っているか当てるゲーム!!勿論、正解で解放、不正解でもう一つ情報を、そして更なる罰ゲーム!!さあ、次の挑戦者はー？」
「ワ、ワタシダ!!」
「イケルノカ?!空母棲鬼?!!」
「何、大丈夫ダ!!」
　正直、自信はない。だが、親友を助ける為だ！これくらい!!
「では、空母棲鬼ちゃん、どうぞ！」
　ええい、なんだこの箱は？大き過ぎず、小さ過ぎず、やはり、見ただけでは何が入っているか予想がつかない！
　しょうがない、意を決して、両サイドの穴から手を突っ込む!!
「……ン？……ナンダコレ……？モフモフシテ……、温カイ？……生キ物カ?!コレ生キ物ダロ?!!大丈夫ナノカ?!!」
「行ける行ける」
「イケナイダロ!!アッ!!指舐メラレタ?!!ナンダコレ?!!怖イ!!!アッ?!噛マレテル?!!コレ、噛マレテル!!!?」
「はい終ーーー了ーーー!!!それでは、お答えして頂きましょう!!!箱の

中身は何ですか?!どうぞ!!!」
「エッ?!ウーン、エット、……ネ、猫?」
　すると、ニヤニヤしながら箱に手をかける提督。
「では、結果を見て見ましょう……、残念!!!中身は、首輪付きでした!!!!」
「分カルカ!!!」

　この後も、ワタシ達は熾烈な拷問を受けた……。
「ゴムパッチン!これを噛んだまま、特定のラインまで下がったら成功!!」
「ウワー!」
「アアッ、スマナイ!戦鬼!!」

「イントロ当てクイズ!!今から俺がある曲のイントロを弾きます!頭上の風船が破裂するまでに正解して下さい!!」
「エッ?ナンダコノ曲?!普通ニ知ラナイゾ?!」
「イントロドコロカ全力デ全部聞カサレテモ……。オマエ、弾キタカッタダケダロ……、アッ、ヤバイ!!風船ガ!!怖イ!怖イ怖イ!!……ウワッ!!!破裂シタァ!!!!」
「正解は、パガニーニの２４の奇想曲第２４曲です」
「知ッテルワケナイダロ!!」

「ではこの、ローションまみれの坂を、登ってもらいます!制限時間は３分!よーい、スタート!!」
「ヌアアア!!ス、滑ル!!コウナレバ四ツン這イデ……!」
「ウワァーーー!!!」
「戦鬼ーーー!!!」

　そうして、ワタシ達二人は、確実に疲弊していった……。
　あと、ワタシも途中から脱がされて、裸エプロンとニーソックスと言う格好にされた。死にたい。

「うーん、根性ないなぁ？罰ゲームのネタが尽きかけてきたぞ？まあいい、お次はこれだ！激辛麻婆豆腐と、伝統の熱々おでん!!」
「ナラバワタシハ麻婆豆腐ヲ!!」
　戦鬼が麻婆豆腐にチャレンジ。となるとワタシは！
「ワタシハおでんニチャレンジシヨウ!!」
「その意気は良し!!では、制限時間は今から２０分間！よーい、スタート!!」

「……ハムッ！……ア、アレ？美味イゾ?!モシカシテ、ワタシ、辛イ物大丈夫ナノカ?!」
「……パクッ！……オオ、熱々デ、美味シイナ……！温カイモノハ美味シイ、海ノ上ハ寒イカラナァ……」
「あるぇー？番組的には美味しくないけど、まあ良いか。お代わりもあるよー！」
「オオ！」
「アリガタイ!!」
　……こんなに美味いものは初めてだ。……ん？あれ？罰ゲーム、成功じゃないか、コレ？

「もう悪い事するんじゃないぞー!!じゃーねー!!」

「ナンカ、普通ニ解放サレタナ、空母棲鬼……」
「アア……」
「ゴハン、美味シカッタナ……」
「アア……」
「……ソノ、実ハワタシ、チョット楽シカッタンダガ……」
「……ワ、ワタシモダ……」
「……今度、今度マタ負ケテシマッタラ、降伏シヨウ。ソレマデハ、少シ、大人シクシテオイテヤロウ」
「……ソウ、ダナ」

……私達だって、理性や感情はある。ずっと戦い続けるのは疲れるんだ。

……もしも、あの男にまた負けると言うなら、心から降伏しよう。その時は、本当に負けを認めよう。

……今日のところは、この海域から撤退してやる。覚えておけよ、提督！

……も、もしも、次、ワタシ達が勝ったら、あの男はワタシ達の小間使いにしてやるか。ふふ、楽しみだ。

39話　おい、酒飲まねぇか

「……はい！と言う訳でね、今回もね、皆んなのお陰で作戦は大成功！今夜は無礼講！酒飲み放題！食い放題!!祝って、どうぞ!!!」
「「「わーーー!!!」」」
黒井鎮守府、恒例の戦勝祝いパーティー!!!
……あの後、二人の鬼は南方海域から撤退し、海域は解放された。戦果については、音成鎮守府の証言と、実際の戦闘時の映像、更にあきつ丸ちゃんの口添えと言う万全の状態で大本営に送り付けた。これなら連中も頷かざるを得ないだろうよ。多分。
「提督殿、大本営への電文、通達完了であります！」
「おー、あきつ丸ちゃん、ありがとう。今日はもうお仕事終わりね、ほら、飲みな？」
「はっ、恐縮であります!!」
「もー、硬くならないでさ？……どうだい、この艦隊には馴染めたかい？」
「はい、最近は、段々と皆に認めてもらえてきているかと！この鎮守府で働けて、嬉しく思うであります！」
まあ、良い加減皆んなも慣れてくれたか。あきつ丸ちゃんは真面目な子だから、信頼を得て当然だな。
改になったあきつ丸ちゃんは、遠征は勿論、対潜も頑張ってくれてるし、試行錯誤の末に編み出した烈風拳と紫電掌はかなりの威力を持つ。更に、長物も使えるオールラウンダー。実に助かる。
「そりゃ良かった！困ったことがあれば言ってくれよな？……はい、これ！」
「こここここ、これは!!純米大吟醸、秋津!!最高級品!!!そ、それを、こんなに!!よよよよよろしいんでありますでしょうか!!!?」
「ああ、たらふく飲め……！お代わりもあるぞ！」
「お、おおお！じ、自分は、自分は、この艦隊に来れて幸せであります!!!」
因みに、あきつ丸ちゃん、日本酒大好き。大酒飲み。……けど、泣

き上戸で絡み酒。酔っ払うと、近くにいる艦娘を捕まえて泣きながら、「いつも迷惑をおかけして申し訳ないであります～」とか言って謝り始めるので、めんどくさい。けどかわいい。
まあ、そういう習性もあってか……、
「む、あきつ丸殿、どうだ？共に飲まんか？」
「これは長門殿、是非ご一緒させて頂くであります！」
……仲は、良いみたい。
×
×
×
×
「良い？！皆んな！！提督を酔わせるのよ！！！」
騒つく食堂の真ん中で、私は言い放つ！
「……急にどうしたのだ？足柄よ。……もう酔いが回ったか？」
もう、那智ったら、失礼しちゃう！！
「違うわよ！……良いかしら？提督はザルどころか枠でしょ、あの人？だから、酔ったところを誰も見たことがない……。違うかしら？」
そう、提督は決して、枯れているとか、ホモだとかそう言うのではない。私達が部下だから、我慢に我慢を重ねて、手を出さないのだ。……もう、こうなると、酒の力を借りるしかない！！一度でも手を出してもらえばこっちのものよ！！
「つまり、何が言いたいの、足柄姉さん？……司令官に迷惑をかけるなら……」
「まっ、待ちなさい羽黒！！お願いだから話を聞いて？！！仕込み杖（ケインソード）に手をかけないで？！！」
やめて！羽黒ったら、見た目に似合わず強いんだから！！提督の敵にはまるで容赦しないし！！
「そ、そのね、提督が酔っ払うとどうなるか知りたいってのもあるわ、でも、あ！待って妙高姉さん！ピストルソードに手を掛けないで！！話は終わってないわ！！」
「いえ、もう、提督に迷惑をかける気みたいなので、折檻の準備を」
ヒィ！！妙高姉さんには逆立ちしたって敵わない！！えーと、えーと、言い訳、言い訳、そうだ！！

「ち、違うの!!提督はほら、私達に遠慮して、リラックスできていないんじゃないかなーって!!ほら、お酒で酔っ払ってもらって、嫌なこととか吐き出してもらいたいじゃない?!!善意で言ってるのよ!!!善意で!!!」

ど、どうかしら!!

「……足柄」

「ヒッ!!」

「私は嬉しいです……!貴女が、そこまで提督の事を考えているなんて……!」

「ふむ、お前にしては中々良い事を言う。確かに、司令官には遠慮せずに、愚痴の一つくらいは言ってもらいたいな」

「足柄姉さん、見直しました!」

や、やった!生き延びた!!

……そして、話を聞いていた艦娘達が集まり、作戦会議が始まった!!……提督は今、飲めない子達に挨拶してる。今のうちに何かしらの手立てを……。

「しかし、酔わせると言っても、どうやってだ?あの人はとんでもなく強いぞ?」

「前はテキーラを七本くらい飲んでケロッとしてマシタネー」

「おやつタイムに、タバコはあまり好きじゃない、とか言いながら、ケーキを食べて、ラム酒を飲んでいましたね、ジョッキで」

「スコッチをラッパ飲みして、平気な顔して書類とか書くからねぇ、提督は」

「「「……化け物か?」」」

化け物なのよねぇ……。

「……あ、私、提督が酔っ払ったところ、見たことありますよ」

「え?本当に?!」

酔うと口が軽くなる大淀ちゃん!!お酒に弱いのに、提督に合わせようと強いお酒飲もうとする大淀ちゃんじゃない!!まあ、最近は、提督

に注意されてカクテルが中心らしいけど。
「んふー、そうですよー？酔った提督は激しいんでーす。……いっぱい可愛がってもらっちゃいましたー」
は、激しい?!
「へーイ!!大淀!!詳しく教えて下サーイ!!!」
「んーと、神造酒とか、鬼酒とかは、沢山飲むと酔っちゃうんですってー。秘密ですよー？えへへへへー」
よし！相変わらず酔うと駄目駄目ね、大淀ちゃん!!……でも、こういう子って男ウケするんじゃないかしら？……くっ、負けた!!
「神造酒？鬼酒？なんだそれは？」
那智が顎に手を当て考え込む。
「まさか、そのままの意味でしょうか？」
霧島も同じように考え込む。
「そんなもんある訳ないやろ……。いや、司令官ならあり得ん話じゃない、かなぁ？」
龍驤がお猪口を傾けつつ、そう言う。
……うーん、やっぱり、一筋縄じゃいかないかしら？
「あのー、これじゃないかな？居酒屋鳳翔の奥にあった、『飲み過ぎ注意！ソーマ』と書かれたこの樽……」
蒼龍が樽を担いで持ってきたみたい。……え？力が強い？艦娘なら当然よ、あのくらい。
「……あー、これか。怪しくて誰も手を付けなかったやつ」
「これが神造酒じゃないかな？」
「その前に、私が試してみても良いかい？」
あら、響ちゃん。見た目に反して、かなり酒に強いのよねー。
「では、失礼して、ショットグラスで……、ｋｈｏｒｏｓｈｏ！」
いった!!
「ど、どうなの？響ちゃん?!」
「……こ、これはっ……！とんでもなく、キクね……！でも、とんでもなく美味しいよ！……確かにこれなら、司令官も酔いつぶれるかもしれない！」

おお！あのウォッカを何食わぬ顔で飲み続ける響ちゃんが顔を顰めた?!これならいける?!
「はいはーい！鬼酒はここにあるよー！」
隼鷹！
「……これは、酒なのか？私はてっきり、生簀のようなものだと思っていたんだが……」
どう見ても、山椒魚？みたいな、両生類が入った水桶にしか……。
「んふふふ、ところがどっこい、こいつは酒なのさ！このちっこいのは酒虫っていう、ただの水を酒に変えるすごーい生き物！」
ええ……？それ、生物学的にどうなの？いや、別に、生き物に詳しいとかそういうのじゃないけどね？……普通に考えて、どうなの？
「じゃあ、ここは俺が……、おお！こいつは！……とんでもないな!!」
木曾が飲んだ！……よく飲む気になったわね。マムシ酒みたいなものかしら？うーん、でも生きてるし……。
「ね、ねえ？大丈夫？なんともない？」
「いや、大丈夫だ！これは美味いぞ!!本当に!!」
そ、そんなに？
「……酒虫、酒虫……、!!、も、もしかして、芥川龍之介の?!!あれは、創作では?!!」
え？赤城？どうしたの？
「大元は中国の怪異小説、聊斎志異ね……。だけど、それにしても、信じられない話ね……」
加賀も詳しい！……そう言えば、読書が趣味だったっけ？
「……あれは口伝の蒐集ですから、あり得なくも、ない、かしら？」
あっ、妙高姉さん。そう言えば、妙高姉さんも読書が趣味だった！……この鎮守府、皆んな結構インテリなのよねぇ。知的な美女、か。……こういう所、男ウケしそうよねー。
「まあ、何にせよ、これで準備は整ったわ!!」
見てなさい！今回こそ！提督をメロメロ（死語）にしてみせるわ!!
××××××××××

「お　ま　た　せ　（王者の帰還）」
飲みに来た。酒！飲まずにはいられない!!
「あーら、提督～？今日も素敵ね！お酒飲んで欲しいな～！あわよくば、酔ってそのまま私とグファ!!!ごめんなさい！妙高姉さんごめんなさい!!」
おっ、誘い方が致命的に下手な足柄さんー！素材は良いのに、誘惑の仕方が下手過ぎ!!
「み、妙高さーん？そろそろ、勘弁してあげてー?!ほ、ほら、妙高さんも一緒に飲もうよ！ねっ!!」
「……提督がそう言うなら……」
「あ、ありがと、提督……、いたた、これ、折れてない？」
「大丈夫だって、ほら、今日も飲むぞー!!」
酒、酒をくれ！一杯や二杯ではない、全部だ!!
「ふふふ、はい、どうぞ、一献」
「おー、ありがとう、鳳翔さん……、ん？」
あれ？これ、ソーマか？なんでここに？
「……どうかしましたか？提督？」
「いやこれ、ソーマ」
「ああ、居酒屋鳳翔の奥にあったお酒みたいですね……、飲みたく、ありませんか？」
あっ、これ断れないやつだ。
「いっ、いや、鳳翔さんに注いでもらって飲めないなんてことはないよ！ゴクッ……ほら、ね？つ、次は普通の」
「はーい！次は、私達が注いであげるね！提督!!」
ダ、ダブルドラゴン!!
「いや、俺は」
「……提督、私のこと、嫌い？嫌いになっちゃった？……私、要らないの？やだよ、やだ、やだ、やだやだやだやだ!!!」
おおう、もう、おおう……。
「そ、そんなことないよー!!蒼龍も飛龍も大好きー！愛してるー!!!」

「……うん!!私達も、提督のこと、大好きだよ!愛してる!!」
そして、渡されるジョッキ一杯のソーマ。こ、これくらいなら、まだ……。
「では、折角ですから、自分もお注ぎするであります!」
「俺もたまには注いでやろう。なに、俺とお前の仲だろう?」
「ていとくぅ〜、私の酒がのめないってのかぁ〜?」
「ウチも!」
「私も!」
「アタシも!」
おあ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!!!!!
「……ふふっ、どうした?提督?顔が赤いぞ?」
んあ〜、酔った!ヤバい、自制心が……!!目の前の長門がメッチャ良い女に見える!!いや、普段から良い女だけれども!!!
……落ち着け、目の前の女は対魔忍だ、芋ジャージで鎮守府の中をふらつく対魔忍だ、怖くない、怖くない!!
「んっふっふー、司令官、真っ赤っかやなぁ〜??かわええよ〜、司令官??」
違う、違うぞ、今俺の背中に抱きついて耳を甘噛みしているのはまな板だ。どこのご家庭にも必ずあるまな板だ!!決して、龍驤とか言う圧倒的美少女じゃない!!!
「んっ??ほら、提督?触って?提督、おっぱい好き?提督なら、いつでも、好きなだけ触って良いよ??……それとも、こっちの方?いつ使ってもらっても良いように、ちゃんとお手入れしてあるよ??」
違う違う違う!!今俺が手を突っ込まされているのは、ヤーナムの医療教会に転がってるブヨブヨの肉片!!断じて、蒼龍のエロエロボディの股の間じゃない!!!
「こっ、この、不肖あきつ丸!!提督殿の慰安をさせていただくであります!!んっ??ど、どうでありますか?自分、胸はある方だと思っておりますが故……??……ああっ??」

あっ、あっ、これ、これは、そう、あれ、なま、なまにく、生肉、な、あきつ丸ちゃんの生、生、あああ!!!!!!

「ハハ、前に風呂で見たが、相変わらず立派だな、お前のは……??……ほら、顔はこっちだ??……んっ、ちゅう、ちゅ、ちゅ……??」

がぎぎぎぎぎぎぎ!!!!木曾ーーー!!!!木曾がお前どこ触っ、木曾おおおおおおーーー!!!!!!

……もう、ゴールしていいよね?俺、頑張ったからいいよね?……やっちゃっても、いいよね……?

「……なあ、提督……?俺を、抱いてくれないか……?……俺を、お前の女にしてくれ……??」

……ゴール……!

……するわけねえだろ!!行くぞおおぁぁぁあ!!!

「んんっ?!て、提督、は、激しっ??んん、ちゅ、ちゅ、あ、だ、駄目だ!それ以上は……!!あっ!あああ!!」

……無傷で逃げるのはもう諦めた……。だが、挿入だけは、挿入だけはさせん!!!

「て、提督殿……?」

「フーッ、お前ら、覚悟しとけよ……!全員雌の顔になるまでアレしてくれる……!うおおおおお!!!」

「「「ーーーーーっ??????????!!!」」」

お、俺の、勝ちだ……!(満身創痍)

４０話　発情期の始まり

……ん。

……起きた。

……えーと？昨夜は、何したっけ？

……あー、そうだ、パパになるのを全力回避したんだっけ。

前にもこんなことあったなー。あの時は、確か皆んな全裸で、食堂で寝ちゃったんだっけ。

いやー、あん時は酷かったなー。全裸の俺の写真が鎮守府で出回って。

はっはっはっは。

「提督？現実逃避かい？……まあ、それならそれで良いよ。じゃあ、しようか??」

「時雨ー！ずるいっぽいー！私も提督さんとしたいっぽい??」

「やめて!!勘弁して!!」

「あは、安心して？今日は大丈夫な日だから……??」

「女の子のその台詞はなぁ！大体大丈夫じゃねーんですよー!!!オラ!!!」

男の言う、先っちょだけみたいなもんやぞ!!

パンツ脱いで馬乗りになってる児童ポルノ時雨を引き剥がす。

「……へぇ……。他の子とはしたのに、僕とはできないんだ……。……ふぅん……」

おっと、引き剥がした拍子にハイライトさんまで剥がれちまったみたいだ。

「（やって）ないです」

いや、マジで。

「もう、落ち着いて、時雨ちゃん」

ニコニコ笑顔の古鷹、俺の脱がされた服を回収し、言う。

「……何？古鷹さん？」

「提督の匂い、良く嗅いでみて？」

「そんなこと、言われなくっても……、!!、……そういうことか。ごめんね、提督。僕、ちょっと焦っちゃったよ」
あー、匂いか。この子ら、鼻が利くからなぁ。良かった、誤解が解けた。
「な？俺、何にもしてないだろ？さ、皆んな退いてくれ、二日酔いの飲兵衛達にお粥作ってやらにゃいかん」

「まあ、待ちなよ、提督……。一つ、聞きたいんだけどさ？……提督の口と、提督の手とかから、そこら辺で寝てる艦娘の匂いがするよ……？どうしてだい？」
加古ー？痛いとこ的確に突くねー？
「ほ、ほら、あれだよ、撫でたりとか、したから、ね？」
「……唾液と、汗と、……、ねえ？提督？何、したの？」
あー、駄目だこれ。取り敢えず逃げよう。
「……ａｄｉ・ｓ!!」
「あっ！逃げた!!」
「追うよ夕立!!」

「はー、危なかった……」
適当な部屋に逃げ込み、一息つく。あれはヤベーよ、気を抜けば即レッツコンバインだよ、ボルトインだよ。まあ、捕まることは無いけどさ？
第一、そんな事したら死ぬしかない。ジャパニーズ・ハラキリだ。
「「……」」
おおっと～？暁型の部屋かここー？ここは暁型のお部屋でしたか～？もー、いつも起こしてくれる響がいないから、皆んな寝坊しちゃったのかな～？
「……うふ、うふふふふふ……！やっと、やっとなのね？やっと私に頼ってくれるのね！」
「は？え？」

「……私、いつも考えてたわ、司令官に頼ってもらうには、どうすれば良いかって。……私は、戦艦みたいに強くないし、書類仕事も、家事も、皆んなに敵わない……。こんな私は、どうすれば司令官の役に立てるのかって……」
「お、おう」
あー、やばい雰囲気だ。ゆっくりと退がって……。
「ふふ、そうよね、男の人を喜ばせるのは、これしかないもの……。あ、司令官は動かなくて良いのよ？私、頑張るから??それとも、何かしたいこととかあるかしら？服はこのまま？全部脱いだ方が良い？何でも言ってね、全部、全部、司令官の言うこと聞いちゃうんだから……??」
よし、ドアの前まで来たぞ。……兎に角、全裸の成人男性と三人の少女という最悪の構図をどうにかせにゃならん。
「わ、私も、お、大人の、レディで……、し、司令官を満足させることくらい……！」
暁ちゃん、脅威度極低。
「はぁ、はぁ、し、司令官さん！い、い、い、電の本気を見るのです!!!」
電ちゃん、脅威度低。
「それじゃあ、早速、司令官にご奉仕するわ……??そ、その、まずはどうすれば良いのかしら？」
雷ちゃん、脅威度中。

……ふむ、逃げるか。大事を取って、撤退すべきそうすべき。さて、ドアを開いて、
「あ、やっぱりここにいたんだね、提督??」
「提督は逃げられないっぽい??」
時雨ちゃん、夕立ちゃん、脅威度極高。
「あら？提督は、駆逐艦に見られながらが良いんですか？……ふふふ、良いですよ??見せつけてあげましょう??」
「提督、早くその嫌な匂いを上書きさせて？他の女の匂いは嫌いだよ？ね？早く、早く、早く、早く早く早く早く早く早く早く早く早

く早く」
古鷹、加古、脅威度極極高。
ああ、残念!ここで俺の冒険はおわってしまった!!

「とでも、言うと思ったかい?この程度、想定の範囲内だよぉ!!」
当たり前だ、この程度で逃走できないなど、旅人の名折れ!生き延びることなら世界一!!俺の逃げっぷり、とくと見ておけ!!
「「「なん……だと……?」」」
「ふははー!!人の親になどなってたまるかー!!昼過ぎには戻ります!!ご飯は例によって余り物とか、外で食べるとかしてね!!」
瞬間、狩人の確かな徴を使用!!さあ、久しぶりのヤーナムへ……!!

「てな訳でさー。ここに避難したのよ。はぁー、どうすりゃ良いのかなー、俺」
『いや、知らないですけど』
「……旅人様、服を、着て下さい」
……ここは、狩人の夢。はるか異国のとある都市、ヤーナムの狩人達が見る、夢の世界。死体の肌みたいに真っ白な花が咲き誇る、綺麗な庭で、人型の触手と人形に話しかける。
「いやさ?モテる自覚はあったよ?でも、ここまで強烈なのは初めてで……」
『だから、知りませんってば』
「あの、旅人様、服を……」
こーの触手野郎、うねうねするしかできねえのか?はー、つっかえ、やめたら?この仕事。

「ちくしょー、お前は良いよなー？日頃からうねうねしてるだけで良いんだもんよー！楽だよなー！」

『いやいや、ただうねうねしてる訳じゃないですよ？ここをこうして、マジェスティックな感じにして、なんだかんだでヤーナムを平和にしてるんですから』

「あの、服を……」

何言ってんだか？こいつ、かなり楽な仕事してるね。少なくとも俺よりは楽。

「いやいや、人間関係無い分楽だね！そのマジェスティック、アレをああしてこうして、ビルゲンワーズすればだもんよー！（高啓蒙）」

なーにこと言ってんだよこいつ。相変わらずなだけある。

『もー、ですね。つまり、いっそ嫌われてみては？（高啓蒙）』

「……旅人様、あの……」

成る程、、。か。分かった。流石は上位者だな、分かりやすい説明だ。

「よーし、そうと決まれば、だな！じゃ、俺、娼婦のおねーさんとアレしてから帰るわ。じゃあな！」

『あ、帰りにはここに寄って下さいね、輸血液と血の穢れ用意しときますから』

「旅人様、服を、服を着て下さい……、ああ、行ってしまいました……。この服、いけなかったのでしょうか……。私の予備なんですが……。」

『……まあ、女装するくらいなら、全裸の方がマシ、なのかなぁ？』

41話　スカートは捲られる為に存在していると言っても過言ではない

好感度を下げる。

……そう、俺は上げすぎてしまったのだ。好感度を。

残念ながら俺は、今流行りの鈍感難聴少年ではない。俺は長い旅の途中、沢山の女性と出会った。関係を持ったことだって数えきれない。だからこそ、そう言ったことには敏感なんだよ。

……まあ、ここまでストレートに好意を寄せられて、勘違いと思う程イかれてはいないな。うん。

で、確かに、艦娘の皆んなにちやほやされるのは嬉しいよ？でもさ、世の中は広いんだ。もうちょっと、色んな人や、色んなものに出会ってから、恋とか、すりゃいいじゃん？……だってよ、あの子ら、生まれてから数ヶ月から数年程度だろ？

認めたくはないが、俺よりいい男だって世の中にはいるんだ、軽々しく「提督に全てを捧げる」なんて、言うもんじゃない。

だからこそ、親離れ、とは違うかもしれないが、それに近い意味合いを込めて、あえて嫌われよう。

……という名目でイタズラをしまーす！フゥー!!ここまで好感度上げときゃ怒られんだろ！いやー、ちょうど作戦が終わって暇だったし、艦娘の皆んなをちょーっとからかっちゃおうぜ!!イェイ!!

さーて、どうすっかなー？……よし、伝統のスカート捲り、スカート捲りをするぞ！

……まあ、龍田さんとか、大井ちゃん、叢雲ちゃんとか、リアルで殺しにかかる艦娘は、この際置いておこう。イタズラが許されそうな艦娘から段々攻めていく感じで。

よーし、ターゲット1、吹雪ちゃん！
スカート捲りと言えばパンツ！パンツと言えば吹雪ちゃん！吹雪鬼と言えば魔化魍……、うっ、頭が……。な、何が嬉しくて血みどろの戦いについて思い出さにゃならんのだ!!はいやめ！この思考は早くも終了ですね！さーて、スカートスカート！
「吹雪ちゃーん？」
「はい！お呼びですか？司令官！」
「はうあ!!」
な、なんてことだ！パンチラ！振り返る瞬間、普通の白いパンツが見えてしまった!!こ、これでは、スカート捲りをする意味が……!!あと普通に児童ポルノ。
「？、どうかしましたか？司令官？私、司令官の為なら、いくらでも頑張っちゃいますから！何でも言って下さい！」
はえー、今時見ない良い子やんけ！こんな良い子のスカートを、捲る？それは、許されて良いのか？いや、良くない（反語）。
「な、何でもないよ！いつも頑張ってくれている吹雪ちゃんにお礼が言いたくてね！」
「そんな、お礼なんて！私達は司令官の為なら、どんな敵だってやっつけちゃうんですから！それが当たり前なんです！私達は司令官の為ならどんなことだってしますからね!!」
ん、あれ？今一瞬、ハイライトさんが……？いや、気のせいだ、気のせいということにしておこう。
さあ、次だ、次!!

ターゲット2、陸奥！
多分許される。（確信）
「陸ー奥？」
「あら、何かしら？」
「タンガ!!黒!!」
「きゃっ！」
よーし、正解！黒色のタンガだ!!まあ、要はティーバックみたいな

の。セクシー、エロいっ！
「……ふふ、やっと、その気になってくれた？ずっと誘ってた甲斐があったわ……。こんな時間からなんて、火遊びどころじゃないけど、貴方となら……??」
あるぇー？好感度下がらんぞー？どういうこった？
あ、やべえ、抱きついてきた。捕まったら終わりだな。俺の理性が。
「旅人が一人、旅人が二人、ファイナル分ッ身ッ!!はぁっ!!!」
「逃さないわよって、?!!、き、消えた?!!」
「ふはははは!!それは分身だ！すまんな!!その気は無いのだ！ただのいたずらだよ!!」
さっさと逃げよう。そうしよう。

「……もっとセクシーなのが好みなのかしら？今度は、逃さないんだから……??絶対、モノにしてみせるわ……??」

ターゲット3、足柄！
もうね、こういう安パイを攻めるべきだよね、うん。
さて、扇風機セットオーケー!!
「足柄！喰らえっ!!」
扇風機スイッチオン!!
「青紫！ブラジリアンカット!!」
「あら？……いやーん！提督ったらー！」
青紫のブラジリアンカット。お尻の露出度が高いビキニってとこ。スケスケで大分攻めてる感じ。
……ええやん。前チラ見した時は安物だったのに。
「あら？普段着はちゃんとしたの履くのよ？」
あ、そっかあ。……足柄はかなりの戦闘狂だもんな。戦闘時は戦闘の妨げになるお洒落下着とかは身につけないのか。
「見直したよ、足柄！」
「あら！本当？やったわ！」

ターゲット4、摩耶さま！
足柄と同じ重巡なら、いけるいける！
まずはこのステルス迷彩で姿を隠して……。
今だ!!
「そぉい！縞パン!!」
「うおっ！だ、誰だ！何し、やが、る……、!!!、て、提督?!!」
はい、縞パンー！もうちょい色気があるやつの方がいいんじゃない？
「でも、これはこれで……」
「ば、馬鹿野郎！」
ヤベッ、お、怒られるかな？
「見るんなら見るって言ってくれよ！びっくりしただろ！……全く、はい、これでいいか？」
あれれー？自分から捲りあげてくれるのか（困惑）。俺に、どうしろと言うのだ！
「……な、なあ、提督？見るだけで、良いのか……？パ、パンツも脱ぐか？あ、あとは、上着も脱いだ方が良いか？ア、アタシ、こういうの初めてでさ、よく分かんないんだよ……」
おーっと、不味いぞー？男勝りな幼馴染との初夜みたいになってきたぞー？
「は、はは、冗談だよ、冗談！ただのいたずら」
「で、できれば、部屋の中でしないか？ここじゃ、誰かに見られるかも……。い、いや、提督がここが良いなら良いけどさ、初めてだし、は、恥ずかしいし……」
き、聞いてなーいー！……よし、ほっといて逃げよう！

ターゲット5、五十鈴ちゃん！
真面目ちゃんだからなー、結構怒られるんだろうなー。
じゃ、この幼い白枝で……。
「……ん？あ、あれ？見間違いかしら？木箱が動たような……、?!!、木箱が動いてる?!!」

「そこだぁー!!青色!レース!」
はい正解ィ!!!バックにレースがついてるお洒落なやつ。女子力の高さが伺える一品。
「……?!」
あ、フリーズした。悪いことした感があるな。
「じゃあ、俺、もう行くよ、五十鈴。その、すまん」
顔を赤くして、スカートを押さえる五十鈴ちゃん。
「……も、もう、良いのよ?たまには、息抜きも必要でしょ?」
「えっ、何この手は?なんで服を掴んでるの?」
「何って、ベッドに行くんでしょ?」
おやおやー?
「い、いや、ただのいたずらで」
「良いってば、気を遣わなくっても。女の園で男一人だもの、そういうこと、したくもなるわよね」
お、おやおやー?!
「違う!本当に違う!」
「ふふ、恥ずかしがらなくても良いのに。私と提督の仲でしょ?……むしろ、私は、私のことを選んでくれて嬉しいと思ってるんだから」
だだだだだ駄目みたいですね!!(焦燥)
「すいませんでしたぁ!!」
「あっ……」
服を手刀で切り裂きパージ、ダッシュで逃げる。マジかよ、五十鈴ちゃんは建造されたばかりだろ?!五十鈴ちゃんとしたことなんて、デートを数回、出撃の時盾になったこと数回、相談に乗ったり、艤装の整備を手伝ったり、髪をとかしてあげたり……、それか!!
えっ、でも、こんなに早く堕ちるもんか?嘘だろ?
今日はもう寝よう、何も考えたくない。……願わくば、明日は何にもありませんように……。

「ちゅっ??……おはようございます、提督！」
「……ああ、おはよう、大、淀？大淀？なんでスカートを捲り上げてんの？」
……空色、飾り付きのローライズ。結構エロい。
……おい、まさか、
「はい！なんでも、提督が下着を見たがってるとの噂で！皆んな、提督の為に勝負下着を!!」
ハッハー！神は死んだ！……いや、生きてるけども！立川で会ったけども!!
その時、寝室のドアがノックされる。気配は複数人。嫌な予感しかしない。
そして、ドアが開かれ……、
「おはようございます！司令官！パンツ見たいって本当ですか？よ、良ければ、私のも……」
春雨ちゃん、ビビットピンク、普通の。年相応のかわいらしさ。
「ぱんぱかぱーん！」
愛宕さん、黒のリオカット。超セクシー。
「もー、司令官も好きなんだから……??」
如月ちゃん、紅色、際どい紐。おい、まだ早いぞ!!そういうのは!!
「パンツ見放題と聞いて!!薄い本が厚くなりますねぇ!!」
何しに来た秋雲ちゃんェ!!!
「や、やめろ！お、俺のそばに近寄るなァーーー!!!」
……こうして俺は、今日一日かけて、鎮守府中でスカート捲りをする羽目になった……。だ、誰か助けて……、助けてクレメンス……。
「あら～？提督～？天龍ちゃんのを見に来たのかしら～？駄目よ～？私ので我慢して～？」
龍田さん、黒色、花柄刺繍入りシースルー。セクシーでありながら

もかわいらしさを演出。
「こ、これは、北上さんを守る為ですから！北上さんを、提督の毒牙から守るんです!!」
　大井ちゃん、白、普通の、サイド部分がレース。意外にも結構かわいい系。
「わ、私は、ほ、ほら！あんたが駆逐艦の皆んなに手を出さないように！そ、そうよ！私にするんなら黙っててあげるから!!な、何？私じゃ不満なの?!」
　叢雲ちゃん、薄いピンクのフルバック。白い服に白いパンツは透けるからね、仕方ないね。

　……いや、君らが俺を叱ってくれないとなると終わりだろ!!鎮守府の風紀こわれる!!に、逃げる！鎮守府から逃げる!!
「あら～？提督～？どこへ行くつもり～？逃さないんだから～」
「ちょっと!!もっと見なさいよ！折角良いの履いてきたのに！」
「な?!ひ、人が勇気を出して見せたのにぃ～!!逃すかーー!!」

　……逃げよう、どこか遠くへ、逃げよう……。

４２話　誰が為に戦う

……ここは、音成鎮守府。
去年設立されたばかりで、規模は小さく、私も未熟ながらも、大きな戦果を上げ続けている。
これは、勿論、私の艦娘達の努力もあるが、大きな要因として、この『ロック装置』が挙げられるだろう。
この装置については、技術的なことは分からないが、艦娘達をより強くするものらしい。お陰で、私の艦娘達は他の鎮守府の艦娘よりも非常に強くなっていった。
……どれもこれも、ひとえに、この装置をくれたあの人のお陰だろう。
私の尊敬する、あの男の人……。
また、会いたいな……。

「どうかした？提督？」
「ひゃい?!」
「ひゃい、とは何だ、ひゃい、とは」
「お、おどかさないでよー、日向さーん！」
び、びっくりしたなぁ、もぅ。
「何度も声をかけたんだがな？」
「あ、あー、ごめん、ぼーっとしてた」
「成る程、分かるぞ、……瑞雲のことを考えていたんだろう？」
「あ、もう瑞雲の講釈はいいです」
「……そうか」
いや、しょんぼりされても……。もう１００回くらい聞いたし……。
「しかし、伊勢は出撃しているし、私も退屈なんだ。なあ、初春もそう思うだろう？」
「……ん、なんぞ？わらわに用かの？」
初春ちゃん。執務室のソファーで寝そべり、本を読んでいるみた

い。
「退屈だな、という話だよ」
「お仕事も終わっちゃったしねー」
「わらわに言われてものう……」
どうしようかな?……そうだ、演習!黒井鎮守府に演習を依頼しよう!大本営から、演習の催促もきているし、ちょうど良い。

「て、提督ー!!」
そんな時、休暇の筈の艦娘、阿賀野が、この執務室に駆け込んできた。
「わっ、ど、どうしたの?血相変えて」
「て、提督!聞いて!その、そのね、私……、恋しちゃったみたいなの!」

「ええーーー!!!」
え?!恋?!わ、私だってまだなのに?!
「ほうほう?なんぞ、めでたい話かのぅ?」
「へぇ、何に惚れた?瑞雲?」
え?え?嘘でしょ?!生まれて数ヶ月の艦娘に先を越されちゃうの、私?!
「そ、それで?!あ、相手は?!」
「え、えっと、街で一目見ただけだから、名前とかはわからないんだけど……」
ひ、一目惚れ?!
「ど、どうしよう提督!わ、私、最近太っちゃったし!どうしよう!!」
「お、落ち着いて、阿賀野!その、私も経験が無いから、なんて言えば良いのか分からないけど……、そう、まず、相手はどんな人?」
まずは相手の分析!戦術の基礎!……万が一、相手が悪い人だと困るしね。
「えっとね、その、すっごく、かっこいい人!」
……えーと。

「はぁ、阿賀野や？それでは何も分からぬぞ？もっと、詳しく話すのじゃ」
　うん、その通り。
「く、詳しく、ね。……えっと、背が高くって、大っきな身体で……、綺麗な白髪の人！優しそうな笑顔がとっても素敵なの！」
　……ん？あれ？
「街で、知らない男の人達に絡まれて、どうしようって思ってる時に、私のことを颯爽と助けてくれて……、かっこよかったなぁ……」
　……えーと？
「……あっ！そう言えば、海軍の軍服を羽織ってた!!提督、知らない?!」
　その、その人、多分知ってる人なんだけど……。
「……提督、気のせいかな、阿賀野の言うその人、聞き覚えがあるぞ？」
「……多分、気のせいじゃないね、日向さん」
　多分、いや、十中八九、その人は……。

「提督ー！子日だよー！子日とお客さんだよー！」
「あっ、どうも、お邪魔します」
「あっ、はい」
　……。

　……?!
「え?!何でここに?!」
「いやー、近くまで寄ったから、挨拶してこうかなーって。……そしたら、子日ちゃんに着いてきて欲しいって言われて、ね？」
「提督！この人いい人だよ！いっぱいお菓子くれた！提督にもあげるー！」
　……もー、子日ちゃんったら。
「あ、ありがとう、でも、知らない人をここに連れてきちゃ駄目だよ？」
「……あ、ご、ごめんねー？海軍の人だから大丈夫だと思ってー」
「ははは、まあまあ、取り敢えず、お茶でも淹れるね？コーヒーでいい

？」
　いや、何でお客さんの貴方がお茶を淹れるんですか?!
「だ、大丈夫です！私が淹れ」
「はい、コーヒー。と、チョコレートでコーティングしたバームクーヘン」
　早い!!行動が早い!!
「チョコレートとコーヒーはドイツのだよ、この前ドイツに行ってね」
「は、はあ」
「知り合いのサイボーグと会ったついでに、色々と買い込んできたんだよ。……あと、現地の艦娘をもらってきた。いやー、ヤバかった。またブラ鎮だったもんだから、反射的にあっちの提督をノックアウトしちゃって……。最終的に英国に逃げ込んで、空路で逃げたよ。王立国教騎士団の力を借りなきゃ危なかったな……」
「はあ……？」
　サイボーグ？王立国教騎士団？
「……ところで、そこで固まってる女の子は？」
「……えっ？」
　あ、阿賀野？……阿賀野ー？
「……はっ?!わ、私、ついに幻覚を?!」
　阿賀野?!
「あ、あは、あはははは、こ、こんなところに、初恋の人が来る訳ないじゃない！きっと、夢を見てるのね！……折角の夢だし……、えいっ！」
「おお、膝の上かい？構わないけどさ」
　阿賀野?!!阿賀野が狂った!!!
「んー！夢の中でも優しい！大好きー！」
「そそそその、う、うちの阿賀野が!!すいません!!本当にすいません!!」
「んー！バームクーヘン美味しーい!!ねえ、貴方が作ったって本当？凄いのね！」
　ああ、阿賀野が、新台さんの膝の上で寛いでる！こ、これは、もう、

またご迷惑を……！

「気にするな！（魔王並感）」

うわー！この人、本当に良い人だよー!!ごめんなさーい!!

「で、でも、何かお詫びを」

「良いんだって、これくらい！こんな可愛い子に相手してもらえるなんて、それだけで幸せさ！」

ああ、こんなに良い人に借りを作ってばっかりで……、心苦しい!!

「で、でも、それじゃあ、私の気が済みません！何か、貴方にお返しをしたいんです！」

「そんなこと言われてもなぁ」

「まあ、そこを何とか頼むよ、君。……私を含め、君には感謝しているんだ。何か、お返しがしたい」

「そうじゃのう、わらわにも何か恩返しをさせてたもれ」

日向さんも、初春ちゃんも、この人に感謝してる。その気持ちは本物だ。

「うーん、……、あ、そうだ、じゃあさ、ちょっと話を聞いてくれるかい？」

「話、ですか？」

「うん、そう。これは、自慢というか、愚痴と言うか……、俺がこの前、ドイツでしたこと、だよ。……大本営には秘密だよ……？」

「そんなことで良いんですか？」

「いやいや、これ、かなり大事、凄く大事……。今回は、ちょっと、悪いことしたんで、ね？」

「は、はあ……？」

一体、どんなことを？

「それじゃあ、聞いてくれ、俺はこの前、ドイツに行って……」

43話　ハイル・ブロッケン

「うーん、ドイツの美術館も良いなぁ！誘われて行ったけど、良かったわ！」

夜、ドイツ、それなりのホテルの一室。……俺は、艦娘達のスカート捲りに疲れ、癒しとソーセージとビールを求め、この地に足を運んだ。

「あー、美味え。本場は最高だわ、肉！ビール！肉!!ビール!!って感じで。生きてて良かった」

このホテルの景色もまた素晴らしいね。ドイツから見る海は、うちの鎮守府とはまた違って……ん？

おい待て？

そこも一緒なのか？

海に行くと艦娘に出会う運命なのか？

×

×

×それとも……、

「あの手の屑とご縁があるのかね？だとしたら最悪だ……」

×

×

×

『×……あっ……！……や、やめ、な、さい……！やめ、ろ……!!ぐあっ!!』×

×全身が痛む、疲労で目が霞む、もう、立つことすらままならない……。……でも、それでも、大切な仲間達くらいは、守って、あげなきゃ……。私は、戦艦、一番丈夫なんだから……。

『だ、黙れ！黙れ黙れ!!貴様らが使えないせいで!!私は！降格処分だぞ?!ふざけているのか!!!』

『あっ、ぐっ!!』

『……ビスマルク、姉さまを、離して……』

『……て、提、督、やめて……』

『……ビスマルク、さんを、いじめ、ないで……』

『……だ……、駄目……、やめ、て……』
『ーーーッ!!雑魚風情がっ!!死ね！死んでしまえ!!』
だ、駄目、プリンツ、レーベ、マックス、ユー、やめなさい、駄目！
『こっ、の!!』
グラーフ!!
『ぐあっ！き、貴様!!貴様ぁ!!殴ったなぁ?!艦娘の分際で!!この私を!!』
『……ふっ、殺すなら……、殺せば良いさ……』
『望み通りにしてやルルブァア?!!!』
「はぁ、やっぱり、またこの展開か」

何が、起きたの？日本、語？

「森の木の葉の如くに体軽やかに、腕を弓の如くに引き、流れ星の如くにふり下ろす……」
『グァッ、な、何だ?!何なんだ貴様は!!この私をドイツ海軍の佐官と知っての狼藉か?!!』
「その時、手刀筋骨〝壮〟となる!!その壮拳もって風擦れば炎立つ!!!」
『な、う、腕に、ほ、炎?!貴様、一体?!!』
「敵の懐に深く入り、肉斬り骨断てば、ベルリンに赤い雨が降る!!」
『き、消え』
「必殺！ベルリンの赤い雨!!!」
『ぎいいいやぁぁぁぁぁぁ!!!!!熱い!!熱い!!焼ける!!焼け、る……』
「はん、これでもう、仕事どころか、ビーチで穴掘りもできねぇな、Ｇｅｒｍａｎｙ」
……凄い……！でも、何者？何故ここに？
「あー、無事かな？フロイライン？」
……敵意があるようには、見えない。

でも、私は、日本語は……。
「わ、わた、し、ニホンゴは、うまく、」
『あー、すまない、これで良いかい？……大丈夫？』
あ……、ドイツ語？凄く、流暢……。顔は、彫りが深め、日本人に見えない？……でも、ドイツ人でもない。
『あの、貴方は……？』
『いやいや、ちょっとお手伝いをね？……ま、ただの旅人さね、特に何者って程のもんじゃない』
……最近の旅人は、素手で人を切り裂くのかしら？
『君達、もしかさなくても、艦娘だろう？……そのさ、もし、良かったら、うちに来ないか？うちは良いところだよ、艦娘達は皆んな良い子だし、自然も豊富だし、飯も美味いし……、どうかな？』
『……は？』
何を、言って……？
『ああ、実は、俺は日本で提督をやっているんだ……。今は、休暇でここに来たんだ』
『貴方が、提督を？』
『そうだよ、……優秀そうな君達を、是非スカウトさせてくれないかな？……他に行くところ、ないんだろ？うちの艦娘も、昔はそうだったなぁ……』
……ああ、優しい、な。……多分、この人は、本気で私達を助けようとしてくれている。……少なくとも、悪いことを考えている人間の顔じゃない。でも……、
『それは、その……』
……無理だ。私達は兵器。兵器を他国に無断で持ち出すなんて、上が許す筈がない。
『……気持ちは、嬉しいわ。そこまで憐れんでもらって……。でも、どうにもならないことよ。……優しい言葉をかけてくれて、ありがとう……』
『……あー、そうか、……じゃあ、こうしよう。……君達を、攫う

！』
『え？』
顔を上げると、今まで影も形もなかったはずの大きな車があった。
『六名様、御案内!!』
『きゃあ！』
抱き上げられたと思ったら、一瞬で視界が変わる。ここは……、良く手入れされた、車の中だ！
『え？……え？』
『ほらいくどー』
『ちょ、ちょっと待って!!』
何を?!攫う、ですって?!危険過ぎる!!たかが、艦娘六人の為に、ドイツそのものに弓引くとでも言うの?!!あり得ない!!!
『おい、やめろ!!今すぐに降ろせ!!』
『あ、あの、私、よく分からないけど、た、多分、貴方は危ないこと、してます！』
『そうよ、悪いことは言わないわ！やめなさい!!』
皆、口々に彼を止める。当然だ、こんなこと、何の意味もない。……だって、いくら逃げたところで、どうせ捕まるのは目に見えてる。
『……姉さま！後ろから、車が!!』
追っ手?!早過ぎる!!……近くで待機してた憲兵の仕業ね?!
斯くなる上は……!!
『……あ、開かない?!!』
『ハッハー！お見通しだぜ？車から飛び降りて、囮になろうとしたろ？無駄無駄ァ!!言ったろ？攫うってよ!!』
『馬鹿なことを……！やめて！そこまでしないでよ!!どうせ、逃げられっこないわ!!』
例え、奇跡が起こっても、私達は逃げられない。……この人も、同じ。子供でも分かる。軍艦六隻を盗む、なんて、できる訳がない!!
『……無理よ……、絶対に……』
『そう？……試してみるかい？』

そしてその時、視界は傾いた。
『キャーーー!!!どうなってるの!!?!!どうなってるのこれ!!!』
『この車、傾いてる?!!傾いてる!!!!』
『怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い!!!!』
『イイイヤッハッァァァァァァ!!!!』
片輪で……!!!ドリフト?!!!
そ、そっ、待って!そっちには追っ手が!!つ、突っ込む!!!
『『『ぶつかるー!!!!』』』
『ぶつからない!!!!』

……え?、飛んで、え?

車が、一度だけ、縦に大きく揺れる。着地した?
……え?今、飛んでた?
……え?

『……撒いたな?』
『……何を、したの?』
『いやあ、トランポリンって大事だよな。龍歴院のハンターさんと猫には感謝しないと』
『は、はあ……?』
何のことかしら?
『……逃げて、どうする……。どうせ、また追っ手が来る……。この場を凌いだだけだ……。……貴方は、早く逃げろ』
……グラーフの言う通り。確かに、今は、手段は分からないにしても、奇跡的に逃げられた。でも、奇跡的に、だ。……そう、何度も起こらないから、奇跡って言うのよ。
『……そうよ、もう一度言うわ、……私達を連れて、ドイツから逃げるなんて、絶対に無理よ。奇跡は、二度と起こらない』
……ごめんね、名前も知らない、優しい貴方……。ありがとう……。

『いやいや、何その終わったみたいなムード？そう言うの良いから。早く船に乗って？次はイギリス、そのあと日本に帰国ね！』
　ま、また?!さっきまで、そこに無かったはずの船が?!
『旅人号……、良いだろ？これ？元はうちの鎮守府にあったポンコツだけど、今は直してカスタムして……、良い船になったよ』
『……どこから、こんな』
『まあ、良いじゃん？君らの治療と食事、あと服、何とかしなきゃだし、早く乗って？』
『だから、無理なのよ！逃げることなんて！』

　……『いたぞ！』
　……『捕まえろ!!』
　追っ手が！
『……言ったでしょう？絶対に、無理なの……。奇跡は、二度、と……?!』
『あー、分かったって！奇跡だろ？ほら、二度目と言わず、何度でも見せるよ!!!』
　今度は、何を?!!
《太陽の光の槍!!!》
　……彼の、聞いたことのない言語の呪文とともに放たれた、稲妻の光……。光が収まる頃には、追っ手は全て、倒されていた。
　は、はは、あり得ない……。
　こんなの、奇跡より、もっと凄い。
『……さて、フロイライン？二度目の奇跡を見たご感想は？』
　彼は、私を見て、ニヤリと笑ってそう言った。

４４話　見敵必殺

『……う、美味い！これが、祖国ドイツのヴァイスヴルストか……！』

……ほう、ほうほう、これが……!!まともな食事なんて初めてだ！

そうして、あの男が出した料理を私が口に運んでいる間も、あの男は忙しなく動き回っている。

『あ、あの？この瓶は？……ポーション？何ですか？……お薬、ですか？』

『んー？そうだよー？この前錬金した奴。……マテリアル、足りなくなってきたな』

謎の薬品で、プリンツを治療し、

『えっと、提督？本当に、良いの？ユーは、こんな可愛い服、初めてで……』

『ユーちゃん、ワンピース似合うなぁ！可愛い！』

出所が分からない服を、ユーに着せている。

……ここは、旅人号……。あの男、……提督（仮）が懐から「取り出した」船の中。今は、ドイツの領海を抜け、明日にはイギリスに着く、そんなところだ。

……未だに信じられない。あの後、この男は、多数の追っ手を退け、私達を制御する首輪を破壊し、存分に私達をもてなした。……ユーと、レーベ、それにプリンツは、既にこの男を信頼しているようで、先程からベタベタと甘えている。

……だが、この私、グラーフ・ツェッペリンには、あの男が不審に見えてならない。……何もかもが、おかしい。このような、強く優しく、眉目秀麗な偉丈夫、という絵に描いたような完璧な男が、突然現れ、そしてそいつに救われるなど。まるで、シンデレラだ。

……この世界は、お伽話のようにできてはいないのに。

……だがしかし、ビスマルクが言うには、この男に悪意はない、そうだ。……ビスマルクは、かなり初期の頃に召喚された古株で、私達

の中ではもっとも人生経験が豊富だ。ああ見えて。……そして、艦娘の人生経験は大抵、悪意に触れた回数を示す……。そのビスマルクが、あの男に悪意はないと言い切った以上、それは事実だと思う。

だからこそ、解せない。……この男、何が目的だ……？

「あ、グラーフさん、おかわり欲しいかい？」

「あ、いやその、すまない」

×

×

×……わ、分からない！

×

×

×

×

×ふ、ふふふ、ふはははははは……!!

×

×

×

×やっちまったぁぁぁぁぁぁ!!!!!

×その場のノリで動いたけど、これ、百パーセント犯罪ーーーー!!!!

散々カッコつけたけど百パーセント犯罪ーーーー!!!

ど、どどどどどうしよ!!国際指名手配とかされたら迂闊に旅できねぇぞ!!!?

いっそこれから行く王立国教騎士団に全部押し付け……、いや、そんなことしたらＩＣＰＯの百倍怖い化け物にとっ捕まる!!!やべえ、つ、詰んだ!!!

『……提督？どうか、しましたか？』

『何でもないよーー！ユーちゃーん！』

わーい!!ユーちゃん可愛いー!!黒井鎮守府に不足していた西洋美少女!!

こーんな美少女おったら、そりゃ声かけますわ!!クッソ、可愛い!!!

『あの、提督？……僕、まだ、信じられないんだ。……今、僕は夢を見ているんじゃないかって……。その、提督、僕に触れて？夢じゃないって、証明して？』

『ああ、もちろん！……こんな感じ？』

あああああ!!髪!ドイツ系特有の柔っこい髪質!!ふわふわしよる!!ふわふわしよる!!

『兵舎の大きな門の前に♪街灯が立っていたね♪今もあるのなら♪そこでまた会おう♪……ふふ、提督の髪、私のと全然違うね!』

『はは、俺はドイツ系じゃないし、何より男だからね』

何故か俺の髪を触りたがったプリンツちゃん、許可を出すと、嬉しそうに歌いながら、俺の髪を編み始めた。可愛い。その選曲はどうなん?って思ったけど、多分、歌なんて聴く暇がなかったんだろうな。

……まあ、あれだ。やっちまった、なんて、今に始まったことじゃねえよ。ごちゃごちゃ考えても何も変わらん。いつも通り、好きにやろう。

『おはよう、皆んな。さて、もうすぐイギリスだ。朝食を摂って、着替えたら丁度着くくらいだろう……、じゃあ、いただきます』

宣言した通り、そろそろイギリスに着く。取り敢えずは、ロンドン自然史博物館。その次は適当なパブで飯食って、オペラハウス行って……、後は成り行きで。

いやー、久しぶりだ、イギリス。楽しみ。とか考えながら、ふと、食卓を見回した。

……グラーフさん、マックスちゃんは、警戒してるみたい。特に、マックスちゃんはあまり話してくれない。

……逆に、ユーちゃん、レーベちゃん、プリンツちゃんは、かなり好意的に接してくれる。

……ビスマルクさんは、どことなく、一歩引いているようなイメージ。まだ信用されない、か。だろうな。

でも、言った通りに、ちゃんと食事は摂ってくれたし、着替えもしてくれた。嫌われてはいないはずだ。

……この子達も良い子だよ、本当に。攫っちまったけど、あのままあんな提督に任せておく方が駄目だ。……この前、四代目もガキ攫っ

て広島まで行ったらしいし、超法規的措置としよう。そうしよう。
さーて、観光観光！面倒なことはほっといて良いんじゃない？どうにかなるって、多分。

……『これ、何ですか？提督？』
……『恐竜の化石だね』
……『ほう、これがイギリスでもっともポピュラーな昼食なのか』
……『そうだね。……不味いなんてこともよく言われるけど、最近はマシだよ？』
……『うん、紅茶、美味しいですね、流石はイギリスです』
……『あっ、金剛にお土産買って行かなきゃ』

そんなこんなで、皆んなで観光を楽しみ、日が落ちた頃。
『いやー、オペラハウス良かった、また来よう』
『……結局、普通に観光しただけか。何がしたいんだ、貴方は』
『旅』
『……はぁ、そうか』
さーて、そろそろ帰るかー。おっと、その前に王立国教騎士団に挨拶……、しなくて良いか。旦那に会ったら面倒だ、し……？
『提督、誰かが、こっちに来ます。……赤くて、大きい人』
んんー？嫌な予感ー？嫌な予感がー？
『帽子を被っていて、丸眼鏡をした人です』
あっ、あっあっ、駄目、会いたくない、振り向きたくない。
『黒髪の、男だな。……笑っているぞ』
勘弁してくれ。
肩に、手が置かれ……、

「ククク……、我が主人がお呼びだ……。至急、本部に来い……」
……うん、逃げよ
「何処へ行く？本部はこっちだ……。もしも、逃げるというのならば、

仕方がない……。……ククク、主人の命令では、貴様の状態は問わないそうだ……」
「はい！喜んで!!」
チクショーーーーー!!!!!
「……で、この、ドイツの艦娘を誘拐した男の話だが……。心当たりはあるか？」
……ここは、王立国教騎士団本部、ヘルシング卿の館。
目の前にいる眼鏡をかけたキシリア・ザビみたいな女は、ここの大ボス、ヘルシング卿その人。
ヘルシング卿率いる王立国教騎士団は、反キリストの化け物共を殺して回る、クソ物騒な特務機関。……事ある毎に怪異やら何やらと関わっちまう俺と出会うのは、時間の問題だったのかもね。
ん？俺？俺は今、ヘルシング卿の前で正座させられてるけど？何か？
「こ、こここここ心当たりでっすか？な、ないですねぇ！いやー、お力になれず、すいません！じゃあ俺はこれで」
さて、逃げ
「……」
あっ、駄目だ、逃げようものなら、後ろに控える旦那に撃ち殺される。確実に。
「ほう、そうか。知らないか……。……ところで、お前の後ろの六人の女は、誰だ？」
「いっ、いや、ほら！ナ、ナンパしまして、ね?!」
「……誘拐された艦娘も、丁度六体だそうだ……。ひどい偶然もあったものだな……？」
「んえ”ぇ?!!あっ、そうですね！偶然ですね！偶然!!」
ど、どうしよ、王立国教騎士団からは逃げきる自信ないぞ?!それに、俺一人ならまだしも、六人も連れて逃げるとなると……。

「……はぁ、この阿呆め、誤魔化せると思っているのか？」
「……いや、まあ、分かってますけどねぇ……。どうやって逃げるか、と思っているところですよ、ヘルシング卿」
……分かっているさ、それくらい。バレてんのは重々承知。どう逃げるか、それを考えてるところさ。
うーむ、アレを使うか、いや、あれにするか……。

「勘違いするな。……我が王立国教騎士団は、この一件について、関与しない」
「……え？」
「我々は、大英帝国に仇なす化け物共を狩るのが仕事だ。……貴様が何をしようと、知ったことか……」
ヘルシング卿は、葉巻を吸いつつ、どうでも良さそうに答える。
……じゃあ何で呼んだんだよ、もう。
「だが、ドイツの軍部が大騒ぎして、その煽りを受け、英国まで慌ただしくなるのはいただけない……。飛行機を用意した、とっとと日本へ帰れ」
……あー、そっか。おかしいとは思ってたんだよな、ここに呼ばれるの。だって、人間の犯罪者の確保は、王立国教騎士団の仕事じゃないもんよ。……邪魔だから早くイギリスから出て行けってところか。
「あー、なんかすんませんね、見逃してもらっちゃって」
「……何を言っている？タダで、などとは言っていないぞ？」
うーわ、メンドくさっ！絶対面倒事押し付けてくる気だよ、この人……。

「なに、そこまで面倒な話ではない。……艦娘を一体、引き取れ」
「……はい？」
「詳しい説明は省くが、とある艦娘を一体拾った。……だが、王立国教騎士団には不要だ」
「……あー、軍部に渡せば良かったんじゃ？」

「出所不明の兵器など、渡したところで受け取ってはくれなかったよ。……当然だろう、任務の後、浜辺にいた女が艦娘だったなど、誰が信じるか……。そもそも、私達は特務機関。表の公的機関との繋がりは極めて薄い」
「……成る程ねぇ……。じゃあ、最後に一つ」
「……何だ？」
「その艦娘、美人ですか？」

「貴方が、私の提督？……私は、クイーンエリザベス級戦艦、ウォースパイト……、提督、よろしく頼むわね」
……あの後、すっごい冷たい目で、「……見れば分かるんじゃないか」と突き放され、その後、飛行場に連行された。
そして今、目の前で杖をつきながらゆっくりと歩く美女、ウォースパイトさんに挨拶された。……ありゃあ、足が……。
「……ああ、私はどうやら、足が不自由みたいなの……。それでも、不沈艦と呼ばれたウォースパイトよ、きっと、役に立ってみせるわ」
……ああ、そうか。確か、ウォースパイトは舵とかの不調に苦しめられた、とか。軍艦だった頃の特徴を受け継いで、ってことなのかな。
「うん、よろしく！……良ければ、手を」
「あら？エスコートしてくれるの？ふふ、紳士なのね」
気品のある笑みを浮かべるウォースパイトさん。良いね、かなり素敵だ。
『……提督、ユーも、手を握って良い？』
『ああ、構わないよ』

と、まあ、そんなこんなで、飛行機に乗り込んだ……。

４５話　黒井鎮守府へようこそ

「……という訳で、今日からこの鎮守府に所属する、この子達をよろしくね！」

さあ、帰ってまいりました、日本！……スカート捲り事件から三日、皆んなも沈静化したんじゃない？

「「「……はあ？」」」

え？何？

「どうかした？」

「い、いえ、まさか、海外の艦娘を連れて帰ってくるとは夢にも思わず……」

何だか久しぶりの大淀。そんなに驚くことかな？

「……しかし、提督の話によると、色々と不味くないか？」

と、長門。心配してくれるのかな？ありがとね。でも、多分大丈夫だよ。

「いやぁ、それがね？ドイツ軍も、あれだけ追っ手を差し向けておいて捕まえられませんでした、と、世間に公開は出来ないみたいよ？……大体、ブラック鎮守府の存在だって、世間の皆さんには伝えられていない情報だしね」

まあ、秘密裏に捜査されてはいるんだろうけどね。表立って動いたりはしないみたい。まあほら、軍艦六隻の紛失なんて、とてもじゃないが表沙汰に出来ないじゃん？不祥事というにはデカすぎる事件だ。

まあ、だからこそ、裏側の組織である、王立国教騎士団の耳に入ったんだろ。怖いねぇ、裏社会。

さて、ウォースパイトさんに車椅子でもプレゼントするか。あと、折角だし、鎮守府全体にバリアフリー工事をしよう、そうしよう。

「じゃあ、俺はこれからちょっと工廠行くから。……君達は、そうだな、金剛、はっちゃん、鎮守府の案内を頼んで良いかな？」

金剛は英語を、はっちゃんは独語を話せるからな、うってつけじゃん？了承してくれた二人に、海外艦達の部屋の鍵を渡し、俺は工廠へ向かった……。

×××××××××××
『あ……、て、提督……』
提督、行っちゃった……。寂しい、な。
『こんにちは、私は、伊８。はちって呼んでね。……貴女、もしかして、Ｕボート？』
『あ、う、うん。そうです』
あ、ドイツ語……。この艦隊にも、話せる子、いたんだ。ちょっとだけ、安心した。
『私も、潜水艦なの。よろしくね』
『は、はい、よろしくお願い致します』
『もう、そんなにかしこまらなくって良いよ……、じゃあ、着いてきて。この鎮守府の案内をするから』
『鎮守府の案内？』
『……うん、貴女達も、私達と同じような鎮守府で生きていたんでしょ？だけどね、ここは、良いところだよ』
『は、はあ』
そう言ったはちさんに、私達は着いて行った。日本の鎮守府、提督も、はちさんも、良いところって言っていたし、ちょっと期待です。
『まず、今いるここは会議室。大規模な作戦の時とか、今みたいな、大事な話がある時とかは、ここに集合』
とっても広くて、豪華な部屋。……でも、装飾は上品な感じで、嫌味がない。
『うむ、とても質の良い部屋だな。……壊したら怒られそうだ』
グラーフさんが言った。確かに、椅子やテーブルの一つ一つがこだわり抜かれている、と思う。
『多分、提督は怒らないよ？……でも、この部屋だけじゃなく、鎮守府の殆どは提督が頑張って作ったものだから。壊しちゃ駄目』
作った？
『あー、その、それは、日本風のジョークか？すまないが、冗談は苦手

だ』
『冗談じゃないよ。……この鎮守府、昔はボロボロだった。けど、提督が来てからは、提督自身が鎮守府中を掃除したり、改装したりして回ったの』
『……はは、そんな馬鹿な……』
　そうなんだ、やっぱり、提督は凄い。
『信じられないなら、工廠に行ってみる？今ならそこで証拠が見れると思うよ』

「うーん、こんな感じか？こういう感じのロイヤルなロイヤリティーを演出する感じの感じ」
「あれですよ、英国旗付けましょうよ、英国旗」
「いやそんな、ヤン車じゃないんだからさぁ、明石よぉ」
「えー？霧島さんはバイクに旭日旗付けてましたよー？」
「……ｏｈ……」
　工廠では、工具片手に車椅子を作る提督がいた。……この短時間で、あれだけ精巧なものを作るなんて……。
『……おいおい、冗談だろう？』
　グラーフさんが信じられないのも無理はない。……木のフレームは、まるでアンティークのように上等で、赤い皮と、金の装飾は絢爛でありながらも気品がある。パーツの一つ一つが輝いて見えるような、そんなものだ。
「ああ、丁度良かった。これ、ウォースパイトさんに。……プレゼント、気にいると良いけど……」
　そう言って、ウォースパイトさんの手をとる提督。でも……、
「その、Ａｄｍｉｒａｌ？こんな高価なものは……」
　確かに、いきなりあんな高価なものを渡されたら、驚いてしまう。すると提督は、ウォースパイトさんの手を、金の装飾に持って行き、触れさせた。
「ウォースパイトさん、俺はね、高価なプレゼントで女性を釣るような、安い男じゃないよ」

「……ｏｈ　Ｉ　ｓｅｅ．これは……、よく磨かれたｂｒａｓｓ（真鍮）ね？その上を酸化防止の為にコーティングしてる……」
「そう言うこと。……ちなみに、この木は、鎮守府の裏山で採ったもの。皮も、鎮守府の裏山の鹿から。……人件費はプライスレスってとこ。だから、原価はほぼゼロ。あるのは真心のみ、かな」
　ああ、そうか、提督は、私達の気持ちまで分かっちゃうんだ。やっぱり、凄い。本当に、凄い。
「ふふ、そうなのね。……それじゃあ、有り難くいただくわ。……Ｔｈａｎｋｓ，Ａｄｍｉｒａｌ……、これ、凄いわ、かなり楽に座れて、快適ね」
「気に入ってもらえて嬉しいよ。……それじゃ、俺も鎮守府の案内をしようか。……次はどこへ？」
「休憩室にしまショー」
「オーケーだ、はっちゃんも良いかい？」
「私は提督の命令に従うよ？」
　えっと、日本語はまだ、あまり上手くないけど、次は休憩室だそうだ。
　提督は、ウォースパイトさんの車椅子を押しながら、私達と一緒に歩き始めた。
　ちょっと、羨ましい。

「あの、提督？ここの休憩室って、どんどん拡張されてまセンカー？」
「おっ、よく分かったね、金剛。今や、この休憩室は、全部屋合わせれば会議室に匹敵する広さだよ」
　鎮守府の二階、休憩室。大きなその部屋では、艦娘達が思い思いにくつろいでいる。
『え？あ、あれ！テ、テレビに色が付いてる!!』
　オイゲンさんが言う。私もビックリしている。あんなにも綺麗な映像が流れているなんて。他にも、見たこともないものがたくさんあった。
『ここ、休憩室は、備品の持ち出しと一部の部屋が土足厳禁以外は特に

決まりはないから。出入りは自由、置いてあるものは好きに使って良いし、冷蔵庫のものも好きに食べて良いんだって』
『……その、良いんですか？』
『最初は私達も警戒したけどね。良いんだよ、好きにやって』
「さて、そろそろお昼だ……、俺、ちょっと食堂行ってくる。金剛、ウォースパイトさんのこと、頼むな」
「ＯＫ、提督！」
「あら、Ｔｈａｎｋｓ，金剛。迷惑をかけるわ」
　食堂？何で提督が食堂に？……もしかして、あの時みたいに料理を？
『そうだよ、この鎮守府では、提督と、軽空母の鳳翔さん、給糧艦の間宮さん、伊良湖さんが中心になって料理をしているの。……もちろん、味は最高、お代わり自由』
『ほ、ほう、味は最高で、お代わり自由なのか……』
　グラーフさん、ちょっと嬉しそう。……そう言えば、船の中でも、イギリスでも、たくさんごはんを食べてた。
『それじゃ、次は最上階、執務室に行くよ、エレベーターに乗って』

　最上階……。執務室の他にも、資料室や鎮守府の運営に関するものが置いてある部屋が多い、らしい。
　本来なら、この階だけで鎮守府としての運営はできると思う。
『ここ、最上階はお仕事の部屋ばっかりなの。だから、あんまりうるさくしちゃ駄目。提督は、お仕事をすぐに終わらせちゃうから、ここにはあんまりいないかも。……あ、あと、この鎮守府では、自分で報告書を書く必要があるから、そのつもりで』
　そう言って、はちさんは机の上の書類を見せる。
『それが、報告書かしら？……書くことが少ないのね。書類を書いたことなんてないから不安だったけど、これくらいなら……』
『ちなみに、提督はドイツ語でも英語でもロシア語でも何でも読めるから、好きに書いて良いって言ってた』
『あら、助かるわ、日本語は、漢字が難しくって……』

ビスマルク姉さんの言う通り、日本語は難しい。書類を書くのは初めてだけど、これなら、何とかなりそう。
『ええと、次は……、居酒屋鳳翔と、甘味処間宮、かしら』

鎮守府の一階、食堂のすぐ近く。日本風な看板と内装の居酒屋鳳翔、その隣は、可愛らしい看板と内装の甘味処間宮がある。……今は、鳳翔さんも間宮さんも、食堂で料理をしているらしい。
『居酒屋鳳翔ではお酒が、甘味処間宮では甘いものが食べられるよ……。でも、高いお酒とか、凝ったスイーツとかは、自分で買ってくるか、提督がくれるチケットが必要なの』
『チケット?』
『そう、……このチケット。ＭＶＰになったりするともらえる』
そう言うはちさんの手元にある小さな紙には、提督のサインが書かれている。
『それを使うと、具体的にどう違うんですか?』
『ええと、お酒なら、何万円もする高いのが、お菓子なら、スペシャルパフェとか高級アイスとか、美味しいのがもらえるよ。……提督と間宮さん達が本気で作ったものだから、市販のものとは比べものにならなかったよ……』
へぇ、そんなに……。
『……あ、そ、そろそろお昼だね、食堂に行こう……。今日のメニューは……』
食堂前のメニューボードを見る。あ、英語訳とドイツ語訳が小さく書いてある……。ええと、メニューは……、ローストビーフ、カリーヴルスト、ザワークラウト、マッシュポテト、茹で野菜、鮭とホタテの和風クリームシチュー、ツヴィーベルズッペ、カスタードプディング……、多い!!
『ああ、ここのメニューは選択制だから。ここに書いてあるものを好きに選んで食べるんだ……。あと、パンと米も選べる』
なるほど、選べるんだ。
『お腹も減ってきたし、早めに食べようか……。あとは部屋に案内す

るだけだし』
『わ、私達も、良いの？』
『勿論。……今日はライ麦パンがあるみたい。やった！』

昼食後、空き部屋に案内された。……空き部屋と言っても、ふかふかのベッドや、しっかりした家具のある、ちゃんとした部屋だ。
『それじゃあ、鎮守府の案内はこれで終わり。……これからよろしくね、皆んな』
『『『よろしくお願いします』』』
声を合わせて返事する。……はちさん、とっても優しくて、良い人。
『……あ、ごめん最後に、一つだけ』
『？、何ですか？はちさん』

『私は、私達は、提督のことが大好き……、愛しているの。この命を捧げてしまって良いと思うくらいに。……だから、もしも貴女達が提督の邪魔になれば、その時は……』
……そんな、あり得ない！はちさんの持つ本から、８．８ｃｍ　ＦｌａＫ（アハトアハト）の砲身が……!!

『その時は……、殺すから』

４６話　パルパルパルパル妬まスィ

……「Ａｄｍｉｒａｌ、ユー、日本語、上手くなった？……本当？嬉しい！」

……「あら、提督、今日は和食なの？……このニクジャガ、とか言うの、中々美味しいわね」

……「Ａｄｍｉｒａｌ？お酒？そうね、今日はスロー・ジンが飲みたいわ……。うん、美味しいわね、やっぱり。Ａｄｍｉｒａｌもどうかしら？」

……「おお、Ａｄｍｉｒａｌどうした？私に何か用か？……ふむ、今日の昼食か。……ハンバーグはどうだろうか。うむ、そうか。……その、良ければ、クラップフェンを作ってもらえるか？そ、そうか、ありがとう」

「ぜぇえりゃあ!!!!!」

「うおっと！……今日は一段と気合いが入っているでありますな、長門殿!!」

「……む、すまない、怪我でもしたか？」

ここは、鎮守府の体育館に併設された道場。目の前に立つのは、組手に付き合ってくれているあきつ丸だ。今はミットを持ってくれている。

「はは、大丈夫でありますよ。……ですが、何か悩み事があるご様子。……話くらいなら聞くでありますよ、長門殿」

「……うむ、それがな……」

「……はあ、要は、海外艦達が提督と近過ぎる、と？」

「まあ、そうだな」

組手を切り上げた私とあきつ丸は、シャワーを浴び、休憩室の和室でくつろぎながら、言葉を交わす。

「その、それは、なんというか……」

難しそうな顔をするあきつ丸。

「はは、嫉妬だな。笑ってくれて構わん」
「い、いえ、笑うなどと……。自分自身は、あまり気にしていませんが、普通ならば気になるでしょうね、あれは」
……そう、最近の提督は、海外艦達に付きっ切りなのだ。いつも、足が不自由なウォースパイトと、日本語が苦手なドイツの艦娘達と共にいる。
「む、あきつ丸はあまり気にならないのか？」
「ええ、自分は、あのお方に仕えられればそれで充分でありますから」
「そうなのか？……あきつ丸は、私と違って可愛らしいだろう？提督から寵愛を受けようとは思わんのか？」
すると、あきつ丸は、白い頬を赤らめ、こう言った。
「……その、それは、この鎮守府の艦娘ならば誰でも思うことでありましょう。それよりも、何故こんな事を？色恋の話など、らしくないでありますな」
「いや、それはな。……同室の、陸奥がなぁ……」
「……あー、成る程」
……そう、陸奥は嫉妬深いのだ。この私でも、若干の嫉妬を覚えるくらいのことだ。陸奥がどうなるか、簡単に想像がつく。
「陸奥殿、出撃の度に返り血塗れでありますからなぁ……。敵の屍に執拗に拳を振るったのでありましょう。きっと、今日も血塗れで帰って来るのでありましょうなー」
陸奥は、私と違い、長門型としての腕力だけでなく、技巧を持ち合わせている。普段は、その技巧を以って、深海棲艦を華麗に討ち亡ぼすが、今はただ、怒りのままに暴れているような印象だ。
だが、幸いというかなんというか、私達はそこらの深海棲艦にやられる程弱くはない。力任せに殴るだけでも充分すぎる戦力だ。……だからこそ、前までとは打って変わって、凄惨な戦いをする陸奥に文句は言えない。
「……陸奥殿だけでなく、最近、艦隊の一部がとても不機嫌なのも、やはり？」
「だろうなぁ……」

夕立は、金の髪が血色に染まるまで戦い、深海棲艦の腹に手を突っ込み、臓腑を引き摺り出して殺す。その相棒の時雨もまた、酷く惨憺たる殺し方をする。あれではまるで、戦いではなく狩りだ。
大井は、自慢の魚雷を使わずに、いたぶるかのように深海棲艦を蹴り殺し、愛宕は、巨大な大槌で頭をかち割って殺し、榛名は、全身の関節を外し、骨を折り、捩じ切って殺す……。
「だが、ああしてガス抜きをしなければ、おかしくなってしまうからな……」
「もう（おかしく）なってると思うでありますが……？（名推理）」
「……そう、だな。うむ、提督に具申してみるか……」
「お伴するでありますよ、長門殿」
×
×
×
「……と、言う訳でだな、この国に慣れない海外艦達のことは分かるが他の艦娘のことも気にかけてもらえないだろうか……」
「あー、やっぱり？ま、知ってたけどね？そりゃあ、あの子ら、あんなに血の匂いをぷんぷんさせておいて「何でもない」とか言うし。尋常じゃないですわ。
「うーん、分かってるよ？あの子らにも無理はしないように言ってあるから、大丈夫だとは思うんだけど……。やっぱり、辛そう？」
「……まあ、そうだな」
そっかー、キツイかー。……まあ、付きっ切りなのは今日までの予定だし、問題は無いな。
ビスマルクさんも段々歩み寄ってくれて、マックスちゃんも話しかけてくるようになって、グラーフさんは胃袋を掴んだし。
後は、戦場で大暴れするあの子らのご機嫌とりですかね？
と、その前に。
えい。
「……この手は何だ？提督？」
「いや、寂しがってたらしいから、撫でてる」
「……その、私のような女を撫でても楽しくはないだろう？」

はっはっは、何を仰る。
「長門、君はね、君が思っているよりずっと良い女だよ。……少なくとも、俺は長門のことが、好きだよ」
「……そう、か」
確かに長門は、普通の女性よりはるかに筋肉が付いているが、それはそれでアリなんだよなぁ。カッコいい系の美女だよ？全然アリ。
あきつ丸ちゃんは、あんまり寂しがってないみたいだけど、一応。
「あきつ丸ちゃんも、ほら」
「い、いやその、自分は……、畏れ多いであります……、あう……、これは、その、病みつきに……!!」
あきつ丸ちゃん。おっぱい。巨乳丸。いや、口には出さないけど、かなり大きめ。日本人は小さめだと思ってたんだがなぁ。
「じゃ、俺、あの子らを迎えに行くわ……。そろそろ帰投するみたいだしさ」
呆けている二人を置いて、窓から飛び降り、沖に向かう。
「……やっぱり、あの人は凄いな。私が一番欲しい言葉をくれた……。つまらん嫉妬など、吹き飛んでしまったよ」
「……はは、自分も、惚れ直してしまったであります」

よせやい、照れるぜ。

「はーい、おかえり！返り血拭いて、お風呂入ってきな！あ、あと、今夜はカレーだよ！」
「「「……え？」」」
え？じゃないが？
「提督、どうして、ここに？」
「海外の子達は、良いの？」
「ん？段々ここにも慣れてきたみたいだし、そろそろ良いかなーって」
「……ふふふふふ、そう、そうなの、じゃあ、やっと私のことを

見てくれるのね？」
　おや、陸奥ったら、血塗れのまま笑うと怖いよ？それにね、
「陸奥はこの一週間で戦艦を十八体沈めたんだってな？弾薬の消費も少ないし。……ちゃんと知ってるよ、見てなかった訳じゃないさ。でも、不安にさせてごめんな？」
　こう言う時はね、謝るんだよ。例え自分が悪くなくても、取り敢えず謝っときゃ良いのよ。特に女の子にはね。
「……ううん、良いのよ！悪いのは、勝手にいじけてた私だもの!!」
　あー、良かった、いつもの笑顔だ。
「皆んなも、良いかな？今回は、いきなり海外からあの子達を連れてきた俺が悪いんだ。だから、できたら、あの子達とは仲良くしてくれないかな？」
「はい！もちろんです！」
「まあ、同じ艦娘だし……」
　だよなぁ、この子ら、ちゃんと思いやりがあるもの。自分と同じような境遇の艦娘達を見捨てられる訳がない。……だからこそ、どうにもならなくてイライラしてたんだろうけど。
　でも、まあ、これにて一件落着ってことで。

「じゃあ、僕達は、お風呂に入って来るね……」
　あ、嫌な予感。逃げよう。
「そうだ、提督も一緒に……、チッ、逃げられちゃったか……」
「もう、駄目よ？時雨ちゃん」
「陸奥さん……」

「次は、隙を見せた瞬間に全員で抱きついて拘束、そのままお風呂にブチ込むわよ。……良いわね」

４７話　演習、黒井対音成　前編

「さあ、やってまいりました！演習!!黒井鎮守府ＶＳ音成鎮守府!!解説は私、青葉と！」
「実況は俺、南斗実況拳の使い手、旅人でお送り致します!!そしてゲストの～？」
「えっ、あっ、あのその、音成鎮守府の提督、海原守子です!!よ、よろしくお願いします!!」
「いやー、久しぶりにポスト開いたら、演習のお誘いですからねぇ？びっくりしたね、いやマジで」
「にしても、演習内容は記録して大本営に送るなんて、何だか、癇に障りますね！司令官!!」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ!!だからこうして、目一杯ふざけてる訳なのだよ、青葉ちゃん!!」
「あの、その割には、皆さん、殺気立ってませんか……？（小声）」
「……気のせいじゃない？」
「あー、なんか、司令官に勝利を捧げるって気合い入れてましたねー。まあ、私だって、戦う立場にあったら本気出してますよ、司令官の為ですもん」
「……お願いですから、殺さないでくださいね……？」
「あー、ちゃんと言ってあるから大丈夫だと思うけど……。やばくなったら即止めるから、安心して」
「えーと、そろそろ始めて良いですかね？」
「あっ、ちょっと待って、ちょっと待って、俺がやりたい。……よし！」
「え、何ですかその眼帯と付けひげと赤スーツ……」
「それでは、艦娘ファイト！レディー!!ゴー!!!」
「!!」
「?」
「（……艦娘ファイト？）」
×××××

「……その、これは、始めて良いのか？」
「ちょ、ちょっと待って下サイ……、はい、良いらしいデース!!
……それじゃ、行きマース!!」
「もー！グダグダやないか!!」
まあ、いつも通りの司令官やな。……そういう茶目っ気がある所も可愛いモンや。
……うちら黒井鎮守府の編成は、旗艦の金剛、うち（龍驤）、隼鷹、足柄、如月、三日月。
対して、音成鎮守府は、日向を旗艦に、伊勢、翔鶴、瑞鶴、能代、矢矧……。
まあ、数値の上では負けとるなぁ？……けど、今まで鍛えた練度が違う。負ける要素は、あらへんで。
それじゃ、先ずは制空権、やな？

「さあ、仕切るで……？」
「パーっと行こうぜ？パーっとなぁ!!」

うちは目の前にササっと勅令の文字を書く。展開した式神が束なり、艦載機の姿になる。
「あれは！嘘でしょ?!!烈風改じゃない!!」
相手方の瑞鶴が叫ぶ。まー、ビビるのも無理ないわ。だって、烈風改は……。
「それは、ペーパープランだけの、存在しなかった筈の艦載機よ?!!あり得ない!!」
「アハハハハ!!あるもんはあるんや！堪忍してぇな?!!」
ほんまに、うちの工廠組は優秀やなぁ？
「クッ、翔鶴姉ぇ!!艦戦ありったけ！噴進砲も全弾ばら撒いて!!あれは不味い!!!不味過ぎる!!!兎に角物量でどう、に、か……?!!」
「物量がぁ？なんだってぇ？あはははは!!!」
隼鷹は、放たれた大量の式神を、「式神のまま」操っている。その数は、正に圧巻。まるで雲のようや。

確かに式神のままでは、機銃も爆撃もできないし、脆い。だが、隼鷹は、その展開数に着目し、利用した。
「そーら！景気よく行っちまいな!!」
隼鷹が手を振り下ろすと、数多の式神達は、相手の艦載機や放たれた噴進砲の弾に絡みつく。
「そんな！艦載機の制御が!!」
「噴進砲が……!!」
結果、プロペラに式神を巻き込んだ艦載機は墜落、噴進砲は明後日の方向に飛んでいく。
「個」ではなく「群」で操られる式神は、瞬く間に相手の艦載機を「飲み込み」、無力化。そして、
「掌握っと！んじゃ、行っけー!!」
隼鷹は、自らの式神が取り付いた相手の艦載機を「作り変え」、流星改にし、そのまま相手に攻撃を仕掛ける。
「……馬鹿な！」
旗艦の日向が声を上げたその時にはもう遅い、流星改から放たれた爆撃が周囲を吹き飛ばした。

……存外、こんなものか？この程度なのか、他所の艦娘は？

「……いや、これは……」

「……驚いたぞ、まさか私達が制空権を奪われ、更に先制攻撃を許すとは……」
隼鷹の流星改の多くは、空を飛びながらも、ゆっくりと、真っ二つにズレる。
「……居合？」
……ふうん、やるやんか。あの日向、よく見ると航空甲板の裏にポン刀をくっ付けとるな。……じゃ、撃ち抜かれてる方の流星改は……。
「そう、瑞雲だ……！」

おー、おるわおるわ。瑞雲が奴さんの周りに展開されとる。こりゃあ、ちょっちキツイなぁ？
「制空権は取れたわね！じゃあ、行くわよー!!」
えらくウキウキの足柄が文字通り「消える」。……いやぁ、相変わらずおっそろしいわ。気配を消す、ってのも、ここまで来るとまるで魔法やな。
「それじゃ、私も行くわね？」
「……」
如月、三日月も追撃。
「私も行きマース！龍驤！隼鷹！後ろは任せマスネー!!Ｆｏｌｌｏｗｍｅ!!」
金剛も突貫。……全く、近接は苦手なんやけどなぁ……。
「あいよー」
「あっはっはっは!!良いねぇ!!どれ、景気付けに一本……、かーっ！美味い!!」
まーた飲んどるな。ま、隼鷹は飲んだ方が強いし、ええか。
じゃ、殴り合い、やな！
×
×
×
「嘘?!!砲撃しながら突っ込んで来る?!!」
「成る程、大胆で、それでいて的確だ。……フンッ！……頭に真っ直ぐ直撃コースの砲撃、か。これ程正確な狙いを付けられるなら、同士討ちの危険はないのだろうな。ならば、近付いて乱戦に持ち込むのもおかしく無い。……伊勢は空母と共に金剛達に対処、能代と矢矧は駆逐艦を」
「日向はどうするの？」
「私か？私は……、こいつの相手だ!!」
……あら？バレちゃった？
「もう、痛いじゃないの！ちょっとは遠慮しなさいよ!!」
「ふん、後ろから大円月刀で斬りかかる奴に遠慮などするか」
まあ、それもそうね。……にしても、一瞬で終わらせるつもりだっ

たのにな。……はぁ、帰ったらまた姉さんに叱られる……。
「……ちなみに、なんでバレたのかしら？」
「決まっている……、瑞雲のお陰だ。私の瑞雲は、私と視覚を共有しているからな。ほんの僅かに、私の後ろで、水しぶきが跳ねるのが見えた」
　ふーん、そう。
「でも、自分の手札を晒すなんて、随分余裕ね？……舐めてるの、貴女？」
　ムカつくわね。
　真っ直ぐ、前へ。あのドヤ顔、叩き斬ってやる。
「それともう一つ、お前は殺気が強過ぎる!!」
　一撃目、顔面目掛けて振り下ろす。……防がれる。続けて二撃目、回転し、遠心力を活かした横薙ぎ。……防がれる。三撃目、大きく踏み込み、腰を使った横薙ぎ。……防がれる、が、日向の刀が砕ける。
「……成る程な、これは、受けきれん。……重巡だと思って、心の何処かで侮っていたのかもな。非礼を詫びよう」
　日向は、砕けた刀を投げ捨て、航空甲板の裏にある、もう一本の刀に手をかけた。1、2、3本……。計四本、残り三本。雰囲気が更に鋭くなる。
「あら？今更謝っても手加減しないわよ？」
「だろうな」
　……大円月刀を上段に構える。
「……私も一つ教えてあげるわ。……私はね、気配を消すのが苦手なの。妙高姉さんはもっと上手く消えるし、那智なら水しぶきなんて起こさない。羽黒なら、認識されない……」
「……何が、言いたい？」
「ふふっ、つまり私はね……、こう言うやり方が得意って事よ!!」
　全力で、踏み込んで、全力で、振り下ろす!!!
「ちぃっ!!!」
　横に回避される。もちろん、織り込み済み。片手を大円月刀から離し、日向に向ける。同時に、手甲の手首部分に仕込んだ暗殺剣を伸ば

し、そのまま突き出す。
「う、おお!!」
……ふーん、これも避けるの。そこそこ、出来るのね。
無様に転がって回避した日向に追撃、艤装の砲撃を放つ。
「無駄、だぁ!!」
崩れた体勢からの斬り払い……。まあ、それくらいはできて当然か。でも、攻撃の手は緩めない。……相手が居合を使うなら、刀を鞘に戻さないようにすればいい。
雷撃。そして大きく跳躍。
「おおおおお!!!」
日向は、魚雷を斬り払う。……だが、私に刃を向ける時間は無い!!今だ!!
……しかしその時、私の根幹、本能が警鐘を鳴らす。それに従い即座に身を引く。瞬間、私の前を通り過ぎる影。
「こっ、れは!!」
「……ふん、そうだ、瑞雲だ……。認めよう、貴女は、私よりも、強い。……だからこそ、私の持てる全てを使う。……ここにある瑞雲は、戦況把握の為、この辺りに飛ばしていたもの。それを全て、ここに集めた……。往くぞ、足柄……!!」
こっちに攻めて来る。あら、不味いわね。……そもそも、攻めるのは得意だけど、守るのは苦手なのよね……。ペースを握られちゃ不利ね。
「はぁ、嫌ねぇ、防戦はごめんよ……。だ・か・ら、雲隠れっ!!!」
「ッ!!!?煙玉!!!?卑怯な!!!」
あら、「卑怯な!」ですって。随分と、可愛らしいことを言うのね?
「勝利こそが私の誇り……、あの人に捧げる勝利こそが……。それ以外に、何の価値があるの?……負けたら、何も残らない。誇りも、自分の命も、仲間の命もね……。……お喋りは終わり、さあ、往くわよ、日向?」

砲撃、雷撃、同時に移動。何度もこれを繰り返し、撹乱。
「ぐっ、お！こっちか?!」
日向の背後に移動、暗殺剣を頚椎に向けて振るう。
「ッ！殺気!!」
あら、殺気に敏感だったわね、この子。引っ込めるのは苦手だし……、出してみようかしら。辺りを殺気で埋め尽くすかのように、殺気をばら撒く。
「……!!?!!、これは……!!!」
あーあ、怯えちゃって、全然駄目ね。
……生唾を呑み込む喉、蠕動するはらわた、早鐘を打つ心臓の音。……獲物の音。
……脂汗、鋼鉄の艤装、詰まった火薬。……獲物の匂い。
……憐れな獲物の、精一杯の警戒の気配。

餓えた狼の前で、何と無力なことか。

「う、あっ!!」
両手首の暗殺剣で突きを放つ。肝臓、腎臓、膀胱、肺、心臓、脾臓、胃、腸……。そして首を掴んで、押し倒す。演習だ、刃を潰しているし、加減もしている。死にはしない。でも、まあ、
「私の勝ち、ね？」
「……ああ、参った」

ふふふ、提督、褒めてくれるかしら？

４８話　演習、黒井対音成　後編

「あるぇー？何これ？バトル漫画か何か？そう言うｓｓじゃないんだけどこれ？」
「いやぁ、足柄さん、強いですねぇ」
「……艦、娘……？」
「……つーか、皆んなもうちょっと容赦ってもんが欲しくない？ガチ過ぎて実況できねぇわ。申し訳ないが全力で殺しにかかるのはＮＧ」
「いえいえ、皆んなまだまだ本気じゃないですよ？……足柄さんの暗殺剣だって、本来は射出する機構が付いてますからね、あれを使えばもっと早く終わっていました」
「艦娘、艦娘って何でしたっけ……」
「いや知ってるけどさ？別に勝たなきゃならない訳じゃないんだし、分からん殺しはやめて、もうちょっと演習らしく……」
「いえいえ！負けちゃったら司令官が大本営から小言を言われるかもしれませんし、皆んなある程度は頑張りますとも！ま、何であれ、私達が勝つことで司令官の為になるならば、何としても勝ちますよー！」
「おぅ、おう。ありがとね？」
「…お願いですから、うちの艦娘をいじめないで下さい……」
×
×
×

……やはり、並以上くらいの実力はある。ならば、砲弾が見えずとも、射線に入らないように動くくらいはできマス、カ。
これだから、並以上の相手は面倒くさい。加減し過ぎればこちらが危ないし、かと言ってそれなりの力を出すと殺しかねない。
同族である艦娘を殺すのは避けたいし、何より、提督からの命令がある。
……提督、私の愛する提督。彼からの命令だ。ならば、どんなに、どんなに困難なことであっても、絶対に成し遂げて見せる。彼に見ていてもらえるならば、どんなことだってやってみせる。だから……、
「だから、私から目を離したら、ノー、デスヨ？提督……??」
「隙あり!!」
「ありまセンヨ」
伊勢は、大剣の切っ先をこちらに向けて、海面を滑り、身体ごとぶつかるように突きを放つ。……中々の威力、並みの深海棲艦なら簡単に貫くその一撃を、大剣の腹を蹴り上げ、逸らすと同時に身を躱す。……真っ直ぐの攻撃は、得てして、横からの力に弱いのだ。
「また蹴り技……!!何なのよ、一体!!」
……蹴り技……、思えば、始まりはあの時だった。彼が来てから、最初の大規模作戦の時……。彼は、私に襲いかかる砲弾を、華麗に、それでいて力強く蹴り上げ、無効化したのだ。あの姿は、今でも目に焼きついている。
「提督ー!!今日も私は、ＣＯＯＬに決めマース!!」
「くっ、速い!!」
こうして蹴り技を使うと、何だか、彼が近くにいるような気がして……。
「えぇい!!!」
兜割り、スウェイで回避。
「ｔｏｏ　ｓｌｏｗｌｙ……」
「この、がっ！ぐ、うぅ!!」
……全く、折角彼のことを考えていたのに。彼に撫でてもらったこ

と、デートをしたこと、キスをしたこと……。交わした会話の一言一句も、繋いだ手の温かさも、キスの味も、どれもこれも覚えている。……そうだ！これが終わったらティータイムにしよう！もちろん、彼と一緒にだ！

「と言う訳で、終わらせマスネー？」

「何を、言ってるの!!」

伊勢、大きく力を溜め、海面を這う斬撃、二回。……甘い。

「跳んだ?!」

……自分の中で、青い炎が燻るのが分かる。燃える愛を、魂を以って。慣性の法則のままに落下する身体、着弾点の伊勢に蹴りを放つ！

この身は地を穿つ弩砲の矢。急降下爆撃機の爆弾。敢えて名を付けるのであれば……、

……メテオストライク……!!

「ぐ、あっ!!!」

……本来なら、顔面を平らにしているところだけど、加減のために、威力を落として、右肩を蹴りつけた。

「ｈｅｙ、その肩じゃ、もう大剣は持てまセンヨ？まだやりマスカ？私、予定が出来たので終わりにしたいデース！」

「……こ、降参、参った！つ、強いなあ、金剛は……！」

「痛たたたた!!龍驤さん！痛いから!!離して!!ギブアップ!!ギブアップするから!!」

「はぁ、お強いですね、隼鷹さん。降伏します……」

×ふぅ、終わりデスカ。隙を突いて、後ろから襲いかかった軽空母の二人も、相手を倒したみたいデス。

×……後は駆逐艦達、デスネー。

×××

×××

「もう、早く当たってくれるかしら？」

×××××

「冗談！そんな蹴り、当たったら一撃で大破よ!!」
はぁ、私、手加減って苦手なのよねぇ……。
愛用の刺突型ブレードは、刃引きしても当たれば殺しちゃうし、火炎放射器は以ての外。じゃあ、後は盾を構えて蹴るしかないじゃない。
……大きく動くと、髪型が崩れちゃう。嫌ねぇ。
「チッ！能代！手を貸して!!」
「無理ぃ!!こ、こっちの駆逐艦！すっごく強いぃ!!」
三日月ったら、元気ねぇ。
「あの、あまり動かないで下さい。加減は苦手です」
「動かなかったら！その鉄の塊で！殴るでしょお!!能代、痛いのは嫌です!!」
小振りなツインメイスを使って攻めているけど、中々決まらないみたい。お得意のソードメイスは今日は持ち出してないみたいね。あの子も、手加減が苦手だから……。
「くっ！能代も駄目か！自力で何とかするしか……?!」
その時、近くに来ていた三日月が、矢矧の肩にメイスを打ち付ける。
「がぁっ!!そ、そんな!!」
「矢矧!!」
「戦場ですよ？目の前以外にも敵はいます」
直前で身を引いたのか、大したダメージじゃない。
「こんっ、のぉ!!」
振り向きながら、三日月に回し蹴り。当然、三日月にはかすりもしない。
……本当に、甘い。確かに、並みの深海棲艦相手なら充分なんだろうけど、私達を相手にするには、足りない。
戦場なら、後ろも敵がいる、それは当然。……だがそれは、目の前の敵から目を離していい理由にならない。
……ふふ、戦場を語る、なんて、私らしくないわね。でも……、
「目を離した方が悪いってこと！」
「ぎぃっ！あぁあ!!」

「矢矧ーーー!!!」

……私は駆逐艦、他の艦種に比べて、ウェイトが軽い。だから、ただ蹴るだけでは有効打にならない。故に、突進するように、全体重を乗せて、ぶつかっていくしかない。自身の身体を、質量弾として使用する……。

そうすれば、こんな風に、自分より大きな相手を有効的に倒せる。私の目指すは一撃必殺、それだけだ。

「矢矧、矢矧ぃ！大丈夫?!矢矧!!」

そもそも、一撃必殺を目指すようになったのは、司令官の言葉が始まりだ。

彼は、私を美しいと言ってくれた。

ならば、戦場という、美しくないところに長居はしたくない。潮風で髪は傷むし、肌も荒れる。返り血は汚いし、自分の血もまた然り。

だから私は、一撃で終わらせる。

私のいるべき場所は戦場じゃない、彼の隣だから。

「か、はっ、の、能代、だ、大丈夫、だか、ら、?!!、う、後ろ！」

「……え、あ、ああ！み、三日月!!きゃあ!!」

「これで、終わりです。貴女達の負け」

……三日月が今、能代の足を払い、転んだところにメイスを突きつけた。これで終わり。彼の元に帰れる。……今日はどうしようかしら?娼婦のように迫る?淑女のように口説く?どう着飾って、どうやって、彼に美しいと褒めてもらう?……今から楽しみね。

×××

×

×

×

だけどな。ちゃんと、言いつけを守って、過剰な攻撃はしなかった。
まあ、伊勢さん、矢矧ちゃんは痣になってたから、治療してあげたけど。あと、能代ちゃん共々落ち込んでたから、ちょっと元気付けといた。
映像は、音成鎮守府の方で大本営に送ってくれるらしい。助かる。
まあ、あれだ。皆んな勝った訳だし、ご褒美の一つぐらい用意してあげなきゃな。
こんなこともあろうかと、前々から用意しておいたご褒美があるんだよなぁ。
明日にでもお披露目するか。
「あの、新台さん?……艦娘って、あんなに強くなるものなんですか?」
話しかけてきたのは、音成鎮守府の提督、海原ちゃん。
「んー?ああ、どうやら、より強い相手と戦うと、より強くなるみたいね。……俺も、艦娘に稽古をつけてくれってよく頼まれるし、それじゃない?」
「な、なるほど、ただの相手じゃ駄目だと?」
「うん、やっぱり、艦娘同士とか、エリートやフラグシップの深海棲艦とかが良いみたい。……何も、死ぬ程じゃなくても、今日みたいな演習でも良いんだよ。兎に角、経験を積むこと」
「はい、分かりました。ありがとうございますね!……その、それと、もう一つだけ……」
ん?
「何かな?」
「あのですね、実は、この前、新台さんが音成鎮守府に来たあの日から、阿賀野が部屋に籠もりがちになって……」
え?阿賀野ちゃんが?超元気だったじゃん?
「あの後、新台さんが帰ってから、夢じゃないことに気付いてしまったらしく……」
あー、はい。
「その、よろしければ、電話でも良いので、部屋から出るように言って

もらえますか……？」
　そう言って、通話状態のスマホを渡してくる海原ちゃん。もちろんＯＫだぞ。
『……もしもし、どうしたの提督……。この哀れな阿賀野に何か用……？……はぁ、もう消えてしまいたい……』
「そんな寂しいこと言わないでよ、阿賀野ちゃん？また、会いに行くからさ？」
『……ふぇ？……その声……？!!!』
　おー、ベッドから転がり落ちたな？電話越しでも分かるわ。
『にゃっ、何で？え?!何で?!』
「はははは、なんかね、阿賀野ちゃんが落ち込んでるって聞いたからさ？無理言って、海原提督に電話を借りて、電話させてもらったんだよ。……阿賀野ちゃん、俺はさ、阿賀野ちゃんとお茶できて、楽しかったよ？全然困ってなんかいない、嫌なんかじゃなかったよ」
『……本当、ですか？』
「ああ、嘘じゃないよ。……そうだ、今度はさ、こっちに遊びに来てよ、歓迎するからさ！……だから、落ち込まないで。俺は、笑ってる阿賀野ちゃんの方が、好きだなぁ」
『……はい!!』
　パーフェクトコミュニケーションですわ。やりました。この後も、ちょっとばかり会話をして、そのうち、音成鎮守府の皆んなが遊びに来ることになった。いやー、モテる男は辛いなー!!（自慢）
　さーて、帰るか！

「「「「……」」」」
　さーて、その前に、物凄い目でこちらを見ているうちの艦娘達に土下座するか！

　モテる男は辛いなー!!（絶望）

４９話　湯煙伝説

今日も一日の業務が滞りなく終わった。昼間は、倉庫から武器を引っ張り出してきた艦娘達に稽古をつける日々が続いている。演習も終わり、皆、疲れが溜まっているのでは？

さーて、夕食後、休憩室でだらける、と見せかけて……。

「うむ、素晴らしい出来だな」

「もふ」

「お前に言われて、ノリと勢いで掘ったけど、かなりのもんだよな」

「もふもふ」

「まあ、掘る手間より役所とかに申請したり、水質調査する手間の方がめんどくさかったな!!」

「もふっ」

……そう、温泉である。首輪付きが、「この辺でいい温泉が掘れそうじゃね？」とのことなので、首輪付きと二人で、ほんの千メートル程地面を掘って、温泉を掘り当てた。皆んなにバレないよう、こっそりと計画を進行させ一週間、やっと完成したのだ。今夜、サプライズで提供しよう、そうしよう。

「じゃ、首輪付きよ、こっちに用意した別の風呂で一緒に一風呂浴びようぜ。一番風呂だぞ？喜べ！……あれ？首輪付き？どこ行った？」

「じゃあ、僕達もご一緒して良いかな？」

「嗅ぎ慣れないこの匂いは、温泉だったっぽい？」

……番犬組ーーー!!!そ、そうか、普通は匂いで気付くか!!まあ鎮守府の風呂の裏だもんな！俺の馬鹿!!嗅覚が鋭いこの二人なら当然……、ん？嗅覚が、鋭い？

「ああ、やっぱりこれ、温泉の匂いでしたか」

「おおー、凄いね、流石は提督だよー！」

猟犬組ーーー!!!しまった、この二人も鼻が利くんだった!!物理的に!!

不味い、このままだとまた混浴させられる!!番犬組ならまだ子供だと思えば行けるが、猟犬組は不味い!!重巡は洒落にならん!!結構出るとこ出てるから、この二人!!……逃げよう!!

「あはははは、どこへ行くんだい？提督？……逃がさないよ」

はい、知ってたー。

「良い湯ですね、提督」

まあ、皆さんの予想通り、捕まっちゃいました。ええ、捕まって、服を剥ぎ取られ、女の子用の露天風呂にぶち込まれちゃいましたとも。

俺なら逃げられたろ、だって？いやいや、無理よ、だって……。

「ね？だから言ったでしょ？提督は、しのごの言わせないで捕まえた方が良いって」

「提督と一緒だと、一段と気持ちが良いデース!!」

「いやぁ、露天風呂で月見酒！良いねぇ！」

「ぱんぱかぱーん！」

「流石に気分が高揚します」

「なるほど、これが日本のコンヨク！ハダカノツキアイ!!凄い文化ね!!」

鎮守府中が敵に回ったんだもの。

さっきから飲んでる隼鷹は、式神を飛ばしているし、陸奥も、すぐにこちらに飛びかかれる準備をしている。時雨と夕立は俺の手を掴んで離さないし、大淀は何故か隣にいる。気配を消しているが、近くには羽黒が潜んでいて、島風もいつでもスタートを切れる状態。

……こりゃ無理だ、申し訳ないけど。この子達を傷つけないで逃げるのは無理。観念しよう。
「はぁー、分かったよ、取り敢えず、髪を手拭いで巻くから、離してくれ」
「駄目だよ、逃げるじゃないか」
「提督、逃さないっぽい」
「あー、あのね？ここはそもそも、君達にリラックスして欲しくて作ったんだよ？……君達がそんなに気を張ってちゃあ、意味ないじゃん？」
「……本当かい？」
「ま、実を言うと役得と思ってるくらいさ。良い女と混浴だぜ？喜ばないような不能じゃないよ、俺は。……だから君達あんまり近付かないで、流石にドキドキする」
「……分かったよ、提督のこと、信頼してるから」
時雨と夕立が手を離すと、皆んなも警戒を解き始めた。そうだ、それでいい。折角の風呂で気を張るのは良くない。
じゃ、髪を纏めようか。……良し、ＯＫだ。
「ん、いいよ、はい」
「……え？何だい、提督。この手は？」
「……お手？」
「え？手、握るんでしょ？髪纏めたから、握っていいよ」
「「……うん！」」
腕に抱きつく様に手を握る時雨と夕立。

……ふはははははは!!作戦成功!!要は、近付かれなきゃ良いんだよ!!後ろは壁、隣は子供の時雨と夕立!!もう何も怖くない!!
「ずるーい！私もー!!」
ふん！島風ちゃんめ！全裸より恥ずかしい艤装姿を見慣れてるんだ、怖くないもんねー!!
「もう、私もお側に置いて下さいね？司令官？」
如月ちゃんなんてただのマセガキですわ!!エロかわいいとかそん

なあれは断じてない!!
　他の駆逐艦達は、恥ずかしがって中々近づいてこないし（ただしガン見されてるけど）、大丈夫だわこれ。勝ったも同然ー!!（殺駆並感）スイカ割りしたいくらいだ!!
　いやー、リラックスしますわ、俺も。たまにはさ？気を抜いてさ？ね？……まあ、気を抜かなかった試しがないんだけども。
　まあ、ヨユーですわ、駆逐艦なんてね、子供みたいなもんやし。
「あは、提督の身体、凄い……??」
　まあほら、時雨に太腿をなぞられてゾクゾクするけど、子供やし。
「れろっ……??提督の味……??」
　まあまあまあまあ、夕立に首筋舐められてるけど、子供やし。子供やし。
　でもちょーっと危ないから、離れよう？子供だからって自分に言い聞かせてもキツイよ？
「はいはい、離れて離れて！」
「うん、良いよ？」
「分かったっぽい」
「アレ？」
　意外に素直。どういうことだ？
「あはははは、分かってるよ、提督。……僕の身体は子供のそれだ、悔しいけど、誘惑は難しい。……だから、もっと効果的なやり方を選ばせてもらうよ」
「私達、そこまでお馬鹿さんじゃないよ？自分の見た目くらい、客観的に見れるっぽい……。必要なのは、提督の理性？って言うのを無くしちゃえば良いってこと。少しづつ、少しづつ……」
　両腕を掴まれたまま、温泉の奥へ。
　んー？ちょーっと待って？ちょっと待って？そっちには……、
「それじゃ、陸奥、約束通りにね」
「ええ、捕縛ご苦労様。大丈夫、目一杯誘惑するから??」
　陸奥……!!
!!

不味い、陸奥は駄目だ、理性が保たない!!
出るとこ出てて、それでいて引き締まった身体!!女優も裸足で逃げ出す美女!!
あっあっ、駄目、がっちり抱きつかれてる！
「逃げちゃダーメ??……今日は、提督にリラックスしてもらいたくてね？楽しませてあげるわ、提督??」
耳元で囁く陸奥。えっちすぎる。童貞ならとっくに死んでる。
「う、おおう！」
正面から抱き締められ、陸奥の大きな乳が身体に当たる。
「あらあら？私のおっぱい、気になるかしら？……触ってみる？」
触りてぇ……!!
「い、いや、と、取り敢えず、さ？す、座りなよ？身体冷えちゃうから、ね？」
「ふふ、そうね??」
いかん、目の前の陸奥がかわいい！熱っぽい目で見つめられてる!!だ、駄目だ、このままだと押し倒しちまう、目を逸らして、
「ここは譲れません」
「あー！加賀さんばっかりずるい！私もー！」
ぷにぷに一航戦加賀に、ふわふわドラゴン蒼龍、だと?!!背中のこのぷにぷにとふわふわ、人を駄目にするってレベルじゃねえ、致死量だ!!!
「や、やめ」
「ちょ、ちょっと恥ずかしいわね、これは……。ヌーディストビーチみたいなものかしら？……提督、その、私の身体はどうかしら？」
「いやあ、良い湯でありますなぁ……。提督殿には感謝してもしきれないであります！」
ぐおおおお!!!ビスマルクさんにあきつ丸ちゃんだとぉ!!!?ヤメロォ!!!そんな、デカイ乳は、本当に、ヤメロォ!!!
……よく見ると、辺りは、金剛型、空母、愛宕さん、龍田さん、摩耶など、(性的な意味で)超パワーの美女ばかりだ!!ソープじゃないんだぞここは!!!

「む、陸奥、か、勘弁してくれ！俺が何をしたって言うんだ?!」
「何もしてないわよ？」
「じゃあ、勘弁してよ！こんなん、我慢出来んわ!!」
「あらあら、我慢しなくて良いのよ？」
くっ、露骨に誘って来よる!!だがしかし、考えてみて欲しい！ここで陸奥とシンメトリカルドッキングした場合、周りの艦娘達はどうなるだろうか?!!
……『どうして？どうして私じゃないの？ねぇ、どうして？』
……『提督のお側に居れないなら、私の人生に意味なんて……』
……『やだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだ!!!!』
大体こんな感じ!!多分。どの道、俺は死ぬ!!
だれかたすけて。

「て・い・と・く??……ちゅっ??」
てめえこのふわふわドラゴン!!
「んっ、ぷはっ、あ、あのね？そう言うのはね、なんかこう、いかんよ？」
「えー？前にお酒飲んだ時はしてくれたよね？今は駄目なの？ほら、提督の好きなおっぱいだよ??」
手を！胸に！挟むな!!
「い、いや、まあ、嫌いじゃないけどね?!」

「……えい！……ど、どうかしら、提督?!わ、私、スタイルには自信があるのだけど!!」
ビスマルクさん?!不味いですよ!!
「やめなよ、ビスマルクさん！これは最早全然日本の文化とかじゃないから!!」
「え、遠慮しなくても良いわ！わ、私が受け止めてあげるから!!好きにして良いのよ、提督!!」
やべー、やべー。どうすんだこれ。どうすんだこの状況。

……いや、そう言えば、夕立が「理性を無くす」とか言ってたような……？

つまり、今は本気じゃない。こうして狼狽えては、皆んなの思う壺!!

逆に考えるんだ、こう言う感じのお店だと、おっぱいパブ的な、なんかそんなんだと考えるんだ!!

しからば御免!!

「あっ??提督……??」

「んっ??そんな風に、肩を抱かれては……??」

……おお、この二人、肩までぷにふわ。

そもそも、だ。女の子と触れ合うのは慣れてる。肩を抱くなんて良くやったわ。ＡＵＯ君に多額の借金（返す気無し）をして、ピュアな人だけが入れるキャバクラに通い詰めた俺の実力、見とけよ見とけよ～？（天下無双）

「加賀、君の気持ち、分かっているよ。だから、焦らなくても良いんだ（イケボ）」

「提督……??」

「蒼龍、俺の側に居てくれてありがとう、嬉しいよ。大好きだ（イケボ）」

「……あは、嬉しい??」

「あきつ丸、ずっと仕える、なんて言わずにさ、もっと仲良くなろう？もっと親密な仲に、ね（イケボ）」

「……提督殿、よろしいんでありますね??」

「ビスマルク、君は綺麗だ。美しいよ。もっと、君のことを見ていたいな（イケボ）」

「ほ、本当に……？嬉しい??」

「陸奥、ごめんな。不安にさせちゃったんだよな？大丈夫、ずっと側にいるよ（イケボ）」

「提督……！分かったわ??」

……ほらこんなもん。昔から、こうして肩を抱いて、適当な口説き文句をイケボで言えばどうにかなるんよ、俺は。雰囲気をエロく、ではなく、甘くしちまえば良い訳。ソープよりかはキャバクラの方がマシ。つまり、そういうこと。

あー、そう言えば昔、小遣い稼ぎに神室町でホストやったっけ。昔取った杵柄ってやつ？まあほら、艦娘ってのは皆んな得てしておぼこだし、こうして抱き締めたりなんだりして口説いちまえば勝ちよ。

……ただ、かなりキツイけど。歯の浮くような口説き文句を言うのは辛いもんよ？

まあ、問題はあれだ。

「「「……」」」

あっちから凄い目で見てる他の子達も含めて、艦娘全員を口説く羽目になったってことかな？

５０話　二つの思惑

ここは大本営……。
政府の裏側、邪悪な者共が集う魔窟。
艦娘という祖国の神霊を自分の都合で使い潰し、この国に横領や汚職を蔓延させ、多くの人間を苦しめる悪魔達……。
そして今、悪魔達は、この大本営に、一人の心優しいハンサムを不躾にも呼びつけ、なんかよく分からん話をするのであった!!」
「「「誰が悪魔だ!!!」」」
「貴様、どういうつもりだ？出頭命令を出してもう二週間だぞ？」
「大本営を舐めているのか？」
いやあ、めんどいから、良いかなーって。
「……で？今更来たのはどういう風の吹きまわしだ？やっと喋る気になったのか？」
「お茶くれない？あ、爽健美茶買って来たらぶん殴るから」
「……貴様！」
どういうつもりっつってもね？
「まあ聞いて？……俺、めっちゃモテる」
「は？」
「いや、あの場ではベストな判断だと思ったんだけどねぇ。あの後、皆んな部活のキャプテンに恋する乙女みたいに、俺の後をくっ付いてまわるようになっちゃってさ？クールダウンの為、ちょっと鎮守府を離れたのよ」
「何を言っている？」
「あのクールビューティの加賀も、俺を見て顔を赤くするもんだからさぁ？ちょっとマジで仕事にならない。あの子達の集中力がね？何やってても俺のことが気になっちゃうみたいで」
「なんの話だ？」
「まあ、一時的なものだと思うし、大本営に無理矢理呼びつけられたってことにしてここに。いや、本当は来るつもり無かったんだけどさ、皆んなにバレたら怖いし」

「……よく分からんが、舐められていることは分かったぞ！ふざけおって!!」
　お、お茶来た。
「大体貴様は、自分の立場を分かっていないのか？まさか、人質を見捨てているのか？それも無駄だ、我等大本営は、この国の中枢にある。人質を消さずとも、司法に訴えかけて貴様を犯罪者にすることも熱っつ!!!熱ぁ!!!

しょ？」
「うるさい!!」
もー、めんどくさっ。やっぱ来なけりゃ良かったわ。
「おらよ」
「……これは？」
「ロック装置。じゃ、帰るわ。……あのさ、この辺でオススメの風俗とかない？たまには良いかなーって」
「待て！これはなんだ?!」
「ググれカス」
ま、こいつ等にロック装置は使えないだろうよ。艦娘の首輪を外す度胸なんてありゃしない。それに、解析したところで、どうせ何も分かりゃしないしな。ロック装置を解析するには、頭に超が三つくらい付くような天才じゃなきゃ無理無理。じゃ、俺、風俗寄って帰るから。

「……行ったか」
「全く、訳の分からん」
「だが、これが艦娘共の強化に繋がるのは事実」
「早速解析しろ！」
「さあ、頼むぞ？元ブラックゴーストの研究者諸君……」
×××
×××
×××
×
ここは黒井鎮守府の会議室……。
提督に秘密で、私達艦娘だけで行う会議。
艦娘と言う超常の存在を分け隔てなく愛し、この鎮守府に安寧と希望をもたらし、私達の生き甲斐となった提督……。
そして今、私達は、提督をどうにかして籠絡するための策を講じ、会議を開くのであった!!
「……急にどうしたの、長門？」
「……いや、何でもない」

何となく、口に出してみたくなっただけだ、気にするな。
……さて、この会議も8回目だ。段々と、提督を籠絡する策や、提督の弱点も分かりつつある、と思いたい。
初期の頃は、提督を独占したい者、手出しするのは不敬だとする者、提督を共有しようとする者……、そう言った艦娘が入り乱れて、会議は難航していた。
しかし、最終的には、艦娘同士で無駄に争い疲弊するのは好ましくないとして、全員で結託。提督を（性的な意味で）襲わない限りは、各々でアプローチし、提督の理性を削るという方針で決定。この協定を守るならば、後は自由だ。
……もちろん、まだ納得していない艦娘もいるが、一人で抜け駆けすれば、その他の全員に追われることは理解している。
また、提督自体、艦隊の全員で動いても、本気で逃げられたら捕らえられないだろう。故に、私達は協力し合うしかないのだ。
「やっぱり、提督を捕らえるのは不可能デース、例え寝ていようと隙がありマセーン」
「あ、あの、私も試してみたんですけど、駄目でした……。司令官さんは勘が鋭過ぎて、どんなに気配を消してもバレちゃって……。ごめんなさい……」
ふむ、この鎮守府で最高の隠密性を誇る羽黒を以ってしても捕らえられんと言うことは、事実上捕らえられないと言うこと。
また、提督の筋力と身のこなしも馬鹿にならんし、その上、未知の手段で突然姿を消したり、空間を湾曲させ、テレポートまでする。捕らえるのは絶対に不可能だ。
「では、やはり、逃さないのではなく、逃げられないようにするしかないのですね？」
「子供、ですか？……練度が最大まで上がれば、多分……。何分、前例がありませんから、何とも言えませんけどねー」
今の私達の主な考え方は、子供を作ることだ。提唱したのは古鷹だが、確かに間違ってはいない。子供ができれば、提督は確実に逃げられん。

……まあ、私達に子供ができるのか、と言うのは、明石でも分からんそうだ。だが、肉体で？ぎ止めると言うのも、あながち悪くはない手段だとは思う。
「じゃ、いつも通りゆーわくするんか？うちにはちょっちキツイなぁ？」
「はぁ、誘惑だなんて、私達駆逐艦の気持ちにもなって欲しいよ」
「でも、司令官は私がキスした時、反応してましたよ」
「「「?!」」」
提督と唇を?!（重要）……重ねて？（嫉妬）
「……何やっとんねん、自分」
「司令官が可愛かったので」
「そんなん言うたらうちやって司令官が可愛くてしゃーないわ!!」
いかんな、これは協定違反だな、間違いない。
「三日月！それは……」
「言っておきますけど、協定には違反しませんよ？……ねぇ、大淀さん？」
「……チッ」
どういう、ことだ！
「大淀さんと明石さんは、司令官が、いつでも、どこでもキスをして良いと言質を取ったそうです。他でもない、司令官自身の許可があるんですから」
「た、確かか？大淀！」
「……はぁ、そうですよ、確かに言っていました」
「……何故言わなかった？」
「……聞かれてませんからねえ？」
「……ふん、そうか」
大淀は、未だに艦娘同士での結託に否定的だ。無理もない、最初から共有を狙う者達だって、金剛型や暁型など、姉妹艦同士で、とのことであり、全員での共有に賛成する者は少ない。
「まあいい、多少の出し抜きくらいは許そう」
「良いの？長門」

「良いさ、大事なのは結果だ。……皆んなも良いな！出し抜くのも結構だが、提督が望むのは平穏だ！決して、争いを起こすことの無いように！艦娘そのものを嫌われてしまったら元も子もない!!」
そう、提督は優しい。……だから、私達、艦娘同士で争うのは御法度だ。提督を不愉快にしてしまう。
「では、キスは解禁、かしら？ふふっ、楽しみね??」
「ああ、だが、いつも言っているが、やり過ぎて提督の邪魔になることのないようにな！以上、解散!!」

見ていろ提督、確実に堕としてみせるぞ……!!

51話　キス島侵攻作戦　前編

「「「提督、すみませんでした!!!」」」
「いや、別に良いよ。……ん？何かあったの？」
「その、言い訳になってしまいマスガ、羅針盤が……」
羅針盤？賄賂が切れたか？
……羅針盤、妖精さんが動かす謎の道具。艦隊の進むべき道を示すものだが、独自のアルゴリズムで動くため、制御は不可能、とのこと。
俺が羅針盤に取り憑いている妖精さんに賄賂としておやつをくれてやったら、言うこと聞いてくれるようになったけどな。他所は違うらしい。
それが今、言うことを聞いてくれない、とのこと。
「どれどれ？……妖精さんオッスオッス。……はい……、なるほどなるほど……、ｏｈ……、分かった」
ＯＫ、このキス島なる場所周辺では、潮の流れが特殊で、軽量な艦娘以外は立ち入れない、つまり、水雷戦隊、駆逐艦と軽巡で艦隊組んでＩＫＥＡ！とのこと。
だけどな～、駆逐艦はな～。キス島、結構危ない海域らしいしな～。音成鎮守府も、調子こいて進撃した連中の撤退補助作戦ばかり手伝わされてるって聞いた。かわいそう（小並感）。
兎に角、
「駆逐艦と軽巡を集めてくれる？作戦会議だ！」

「うきゃー！司令官ー！」
「しれぇ！遊んでください！」
「もーっと私に頼って良いのよ！」
ハッハー、作戦会議とは何だったのか。休憩室で駆逐艦と軽巡とダラダラしてます。……可愛くてつい、ね？
……いや、いかんでしょ？何やってんだ俺。最近皆んなからのアプ

ローチが激しくて理性がヤバいから、ついつい寛いじまった。
「そ、そのね？今日は作戦会議があってね？」
「作戦？」
「何をするんですか？司令官の為に私、頑張ります！」
「おうっ！」
わあ！話がまとまんねぇ！
でもまあ、出撃する艦娘は大体決まってる。
「と、取り敢えず、出撃するのは時雨と夕立、島風ちゃん、三日月ちゃん、如月ちゃんは決まってるんだけど、あと一人、誰か行ける子いるかい？」
この五人は、駆逐艦の中でもトップの強さ。海域の攻略となると外せない。
だが、この五人を連れて行くとなると……。
「那珂ちゃん、どう？出撃、したくない？」
「い、いや、な、那珂ちゃん、アイドルだし（意味不明）」
「暁ちゃんは？」
「ぴいっ?!!わ、その、私は、ししししし司令官がどうしてもって言うなら？でででも、他の子もいるわよ?!ねっ?!!」
「じゃあ、もちづ」
「ごめん無理」
……他がついてこれないのだ。それもそのはず、この五人の戦い方は、グロい。
敵艦の原型を留めないくらいにグチャグチャにするのだ。平気な顔で。
あまりにも凄惨。Ｒ１８タグが付きそうになる戦いっぷりは、黒井鎮守府の一部では賞賛されるが、一般的に見たらアレだ。この前、戦闘時の映像を見た音成鎮守府の面々はドン引きしていたっけな。
……でも強いんだよなぁ、この五人。
しゃあない、やっぱりここは……、
「はぁ、じゃあ、悪いけど、木曾！頼める？」
「ああ、良いぜ、俺とお前の仲だろう？遠慮するな！」

いつも出ずっぱりの木曾にお願いするしかないか。……木曾は出撃回数が多いからなぁ、なるべく休ませてあげたいんだけども。
でも、あの五人を引っ張って行けるのは、この中では木曾くらいのもんやし。
と言うわけで、編成完了。
「それじゃ、明日の０８：００、黒井鎮守府正門前に集合！以上、解散！」
「「「了解！」」」
「……会議、おしまいですか？しれぇ？」
「え、うん、おしまいだよ？」
「じゃあ、遊んでください!!」
「しょーがないなー！」
「うきゃー！」
いやぁ、癒し。駆逐艦は楽で良い。キスを強請られても、軽く口付けするだけで顔を赤くする子がほとんど。搦め手やエロは無い。（一部を除く）
性知識も大して無い（一部を除く）し、全然怖くな待て待て待て待て!!何で脱がせてんの？何で脱いでんの?!」
「?、こうするとしれぇが喜ぶって聞きました！」
だ、誰だ！うちの天使達に変なこと吹き込んだのは?!
「誰から聞いた?!」
「ええと、陸奥さんと、古鷹さんと、加古さんと、時雨ちゃんと、夕立ちゃんと……、皆んなです!!」
なんてことを……（憤怒）。
雪風ちゃんブラつけてないし。真っ平ら。
「待ちなさいよ！雪風みたいな小さい子に手を出したら犯罪よ！……あんたの相手は私がしてあげるから、私で我慢しなさい！」
ふぇぇ、曙ちゃんも充分犯罪だよぉ……。
「い、いや、曙ちゃんも大して変わんな」

「はぁ?!曙ちゃん?!!ぼのたんって呼びなさいよ!!!(マジギレ)」
デレ過ぎィ!!そんなキャラじゃないでしょ君?!!
「て、提督?わ、私の身体、どうでしょうか……?最近、太っちゃったかも……。ご、ごめんなさいっ!」
潮ちゃーん!!やめろぉ(建前)!!ナイスゥ(本音)!!!
もうこれ、身体は充分成長してるよね?ヤれる身体だよね?
「しれいかん??春雨とぉ、気持ちいいこと、しましょう??」
全裸。
……全裸?!!
ピンクは淫乱!白露型はヤバい!!

これは不味い!戦艦や空母なら合法だが、駆逐艦は違法!!児童ポルノ!!!
「大丈夫だよ、提督。僕らは艦娘、法律なんて関係ない、好きにして良いんだよ……」
た、確かに!!逆に考えれば、これくらいの見た目の子を合法的に抱けるチャンスなのでは……?っていかん!ここでそんなことしたら、他の艦娘に「うわぁ、よりにもよって駆逐艦と……(ドン引き)」みたいな感じになる!!危ねぇ!!
「ほらほら!離れて離れて!!君達にはまだ早いよ!!……春雨ちゃん?俺の足から退いて?股を擦り付けるのやめて?……ズボンが、これ、ビチャビチャじゃないの!!」
クソ、ちょっと前までは、普通の女の子だったのに!!こんなドスケベになりやがって!良いぞもっとやれ!!

はー、なんとか全員引き剥がせたか……。皆んな雌の匂いするもんだからかなり困る。キツい。ヤバい。
……見た目がロリだが中身は歳上、とかにも会ったことあるしなぁ。外見はあんまり気にしてないんだよ。可愛けりゃ良し!くらいのもんで。誘惑されれば普通に反応しちまうよ、そりゃ。
今までは、子供がじゃれてきていると思い込んで躱してきたけど、

こんなに沢山の女の匂いに囲まれると……。
「あはっ??提督、反応してるっぽい？」
「やめなさいったら！そんなとこ、触らないの！」
「あっ！……もー！」
引き剥がす。全く、油断も隙もねぇ。
「あら～？提督はロリコンさんですか～？」
……あ、そういや、軽巡は皆んないたんだ。……メッチャ怖い龍田さんも含めて！
「私、ロリコンさんは病気だと思うの～。……治療してあげるわ～」
あれあれ？龍田さん、俺の手を自分の胸に。結構でかい。形も良いし、ハリがある。……この感触、ブラもレースのシースルー系だな？前に見たパンツと同系統。こう言うの好きなのか、龍田さん。似合ってるわ。だがよ、
「……お、お触りは禁止なのでは？」
「……こ、これは、治療なのよ～？」
少しばかり顔を赤くしながらも、そんなことを言う龍田さん。時折漏れる甘い声が官能的。……やっぱり、龍田さんは美人だわ。
「痛え！」
横から腕を掴まれる。
「……提督は、ただ胸があれば良いなんて言わないよね？」
し、時雨？
「……あらあら～？邪魔しないで欲しいわ～？……胸はあるに越したことはないと思うけど～？」
た、龍田さん？
睨み合う二人。いかんなー、君達、普段は結構仲良いだろー？
「はいはいはいはい！喧嘩しないの！」
「……はい」
「……分かってるわ～」
不承不承といったご様子。ここで機嫌の一つでも取っておくか。

「俺は胸の大きさなんて気にしてないよ！それどころか、駆逐艦だから、とか、そう言うのも気にしてない、皆んなのことが好きだよ？」
「……僕のこと、好きなの？」
「ああ、もちろん！」
「……私のことも～？」
「好きだよ、龍田さん！」
「そっか、提督は、僕のことが好き、僕のことが、好き……。あは、あはははは！」
「あらあら～、そうなの～？うふふ、うふふふふふ」
よーし、機嫌良くなった。
……因みに、機嫌が良いか悪いかの判断なんだけど、見るところは頭である。
龍田さんの。
……実は、龍田さんの頭の上のあの輪っか、機嫌が良いとグルグル回るのだ。他にも、頭部になんかついてる艦娘は、頭部のユニットの様子で機嫌が分かることに最近気づいた。
うちの龍田さんは、メッチャ怖いけど、ちょろい。

52話　キス島侵攻作戦　中編

キス島。
極めて特殊な海域で、水雷戦隊以外を受け付けない特性がある。
その特性から、未だに攻略できた鎮守府は存在しないという。
……そもそも、多くの鎮守府は、火力と装甲に乏しい水雷戦隊を軽んじる傾向にあるから、当然の話かもしれないが。
だが、この黒井鎮守府は違う。
「提督、全員、出撃準備が完了した。指揮を頼む」
腕には包帯、風もないのにたなびく赤マフラー、腰には鎖、両手に手斧。キス島攻略の水雷戦隊の旗艦、木曾が言う。
周りを見回すと、皆んなも準備ができていることが分かる。
足回りのセッティングを整えた島風、背中にツインメイス、手元にソードメイスを持つ三日月、落葉を片手に佇む時雨、聖剣を担ぐ夕立、パイルバンカーを優しく撫でる如月……。
皆んな、俺の指示を待っている。
「うん、じゃ、行こうか」
「「「了解！」」」
さあ、出撃だ。派手に行こう！

鎮守府近くの海域から北へ、ずっと北へ。途中、知り合いの改心した深海棲艦達のいる離島へ物資を降ろし、更に北へ。
急に現れた、話の通じない深海棲艦共は、うちの艦娘と俺に一瞬でやられる。
「トマホォォォク!!ブーメラン!!!」
手斧を投げる木曾。凄まじいスピードで飛来する手斧は、並居る深海棲艦の首を刈り取り、木曾の手元に戻る。物理法則もあったもんじゃねえな。……やり方教えたの俺だけど。
「お前の脳味噌をグチャグチャに掻き回してやるっぽい!!!」
「この病気持ちのネズミめ……!!!」

聖剣で深海棲艦の頭をカチ割る夕立。聖剣の腹が真っ赤な血液と灰色の脳漿で彩られ、クリーム色の脳味噌が海上にブチ撒かれる。まるで、その深海棲艦の全てを否定するかのように。

時雨もまた、深海棲艦の攻撃に合わせ砲撃。体勢を崩した深海棲艦の土手っ腹に手を突っ込み、はらわたを捏ねる様に撹拌、最後には引き摺り出した。打ち捨てられた内臓は脈動を続け、だがやがて動かなくなる。

存分に返り血を浴びながらも、この二人は嗤う。超怖い。……二人に稽古つけたの俺だけど。

「そろそろ消えて下さい」

「はぁ、嫌ねぇ、返り血が汚くって……」

深海棲艦に対して、何度も何度も、執拗にメイスを叩きつける三日月。深海棲艦の、頭が割れ目玉が零れ落ち、胸元が潰れ骨と臓器の混ざり物がはみ出て、股下まで裂けて流れる血も無くなる時、その時漸く手を止める。

如月は、三日月と違い、深海棲艦の後ろに大きく回り込み接近、火炎放射器を使って焼き滅ぼす。海の上に存在するはずのない炎は、深海棲艦の肉と骨を良く焼いた。更に急速接近、その勢いのまま深海棲艦にパイルバンカーを放つ。くの字に折れ曲がった深海棲艦が宙に浮く。

うわぁ、エグい。……武装渡したの俺だけど。

……大体やったか？いや、まだだな、まだ遠くに何体かいる。こう言う時はアレだ。

×

×

「島風ちゃん、よろしくー！」

×

×

×

「島風ちゃん、よろしくー！」

「はーい！」

と、なるべく、元気よく返事。その方が提督が喜んでくれるから。

×

×

提督の命令、遠くにいる部隊、敵艦隊の殲滅。全部殺す。速く。誰よりも速く。
集中しなきゃ。

まずは眼を閉じて、大きく息を吐く。
そして、眼を開くと同時に、奥歯を噛み締める。
……これは、私なりの集中の合図。例えるなら、徒競走の鉄砲、レーシングカーの青信号、ロケットのゼロカウント。
つまり、今、私はスタートを切った。

……すると、世界は。
「……あは、おっそーい！」
ひどく、遅くなる。

そして私は、海を駆ける。

跳ねる飛沫、遅い。
流れる波、遅い。
空を飛ぶ海鳥、遅い。
敵の動き、遅い。
私の世界では、誰もが「遅い」。
私には、島風には、誰も追いつけない。

目の前、狂った深海棲艦。不細工な化け物。私の敵。提督の敵。殲滅対象。
「島風、砲雷撃戦、入ります！」

一体目、後ろを向いている。頸椎に蹴り。でも相手は戦艦。硬い。一発じゃ駄目。……四回、同じ場所を蹴ったら千切れた。殺した。
二体目、口を開けたまま停止。裂けた口は大きく開いている。口の中は内臓に繋がる弱点なのに、馬鹿みたい。魚雷を差し込み、信管が

カチリと鳴ったのを確認して、離脱。殺した。
三体目、やっとこちらに気付いたみたい。でも遅い。助走をつけて顔面に貫手。眼孔を貫き、脳を破壊。殺した。
四体目、金切り声を上げながら魚雷を撃つ重巡。行動も、魚雷の発射も弾速も全部遅い。全弾回避、臍に向かって貫手。念の為、貫いた穴に魚雷を詰めて、思い切り蹴りつける。殺した。
五体目、主砲を撃つ戦艦。砲塔の回転が遅い。砲撃の寸前、主砲の砲身を殴りつけてやる。すると砲弾は、最後の六体目の深海棲艦の胸と肩、頭に向かって飛ぶ。私自身は、五体目に向かって跳躍、踵落とし。脚の艤装の踵の部分は良く研いである。頭を半分にして、殺した。
ラスト、六体目、振り返るまでもない。五体目の放った砲弾でバラバラ。上半身が消し飛ぶ。殺した。
全部、殺した。
命令を完遂。

ふと、後ろを振り返る。
手斧の血を振り払う木曾。遅い。
血塗れの髪をたくし上げる時雨と夕立。遅い！
武器の手入れをする如月と三日月。遅い!!

……皆んな、遅い。

……時々、怖くなる。姉妹艦も、近しい存在もいない私は、こうして、閉ざされた世界で独りになってしまうのかも、と。
私は島風。
誰よりも速い。
先頭を走るのはただ一人。
私だけだ。
このまま、私は、独りきりで……。

「はーい、終了！ありがとね、島風ちゃん！ゴールだよ、ゴール!!」

……ああ、そうだ。

この人は、提督は、提督だけが、私の世界に入ってこれる。

トップを走る私の隣にいてくれる。

私の「速さ」についてきてくれる！

ひとりぼっちの私の側にいてくれる!!

「良く頑張ったな、島風ちゃん！……お前がナンバーワンだ!!」

「私が一番？やっぱり？そうよね！だって速いもん!!」

これからも、ずっと私についてきてね、提督？

53話　キス島侵攻作戦　後編

良し、噂の特殊な潮の流れは抜けたな。
あとは進むだけだ。
でもまあ、うちの艦隊の練度なら、苦労はしないな。
問題は、ここの海域を牛耳るボスだ。ボスを倒さなきゃ、海域開放には至らない。
で、そのボスっていうのは、大体は強力な深海棲艦だ。たまに、「鬼」クラスと遭遇することもある。
まあ、強力な深海棲艦は、理性がある奴が多いから、適当に懲らしめてから説得すれば帰ってくれるのが救いか。
そんなことを考えつつ、目の前の狂った深海棲艦をぶん殴る。
……こいつらも可哀想だよなぁ。無為に使い潰された艦娘達の怨みか、深海棲艦に殺された人々の怨みか、はたまた、海そのものの怨みか……、まあ、多分全部だろうが。理性はなく、姿形は酷く醜い奇形。ただただ、怒りのまま、怨恨のまま暴れるだけの肉人形。
昔の深海棲艦のように、見た目は艦娘と同じようで、海を汚す人々に警告を与える、そんなまともな深海棲艦は殆ど見なくなった。……母なる海が、人という種を滅ぼそうとしている。人は、もうそこまで海の怒りを買ってしまった。まー、親子ゲンカにしちゃ、やり過ぎだわな。
……ま、いいか。何を言っても、どうせ態度を改める奴なんていないし。俺がやることは、襲いかかってくる狂った深海棲艦を殺すこと、そして、たまにいるまともな深海棲艦を捕まえて、鎮守府近くの離島に住ませてやること。
今日は多分、これから鬼クラスの深海棲艦に会うだろう。そんな気がする。そいつにお仕置きしたら、後は言い包めてとっ捕まえる。それだけ。
……にしても、それらしいのには会わないな。もうキス島に着いたんだが。

島の中を探すか？もう陽が落ちてきたしな。早く帰りたい。残業はしない主義なんだ俺は。
でも、ここまで来たってことは、必ず近くにはいるはずだろう。まさか、島の中で戦うなんてことはしないだろうし……。

あ、殺気だ。
「全員、雷撃だ、来るぞ！」
「クッ!!先制雷撃?!」
「やってくれるね!!」
夜の闇に紛れていた深海棲艦が姿を現す。
『ホントウハ……ヨルハネェ……？　トォッ……テモ……コワイノヨ……？』
「駆逐、艦、か？」
「初めて見ますね、新型かも」
「だがまあ、話は通じるみたいだ。全員、殺さないようにな」
ま、鬼クラスなら、全力でぶつかっても多分死なないが。丈夫だからな、鬼クラス。
『……貴方ハ……』
「え、何？俺のこと知ってるの？」
『ウン、知ッテル……。戦鬼ト空母棲鬼カラ聞イタヨ……』
あー、そういや、この前戦って逃したんだっけ。元気かな、あの二人。また会いたいもんだ。
『エッチナ人デショ？』
よーし、覚えとけあの二人。パンツ剥ぎ取ってやる。んで、下の毛剃って、代わりに前貼り貼ってやる。
『デモ、面白イ人デ、美味シイ物クレルッテ。……ダカラ、捕マエテ小間使イニシテヤルッテ言ッテタ』
……ふむ、前貼りは勘弁してやるか。下の毛剃ってブラジル水着で許そう。
『……ウン、決メタ。貴方、カッコイイカラ、ワタシノ小間使イニシテアゲル……。アノ二人ニハ悪イケドネ』

小間使いかー。この子可愛いし、ちょっとアリかなーって。
「……あ”?」
「……はぁ?」
「……殺すっぽい」
「……舐めてんのか?」
「……行くよ、如月」
「はぁい、行くわよ~。……殺してやる」
マジギレである。
いつもの戦法。三日月ちゃんが先行、真正面から。如月ちゃんが後から、裏に回って。
だが、
『無駄ヨ!』
「……へぇ」
「厄介ね……」
三日月ちゃんのメイスを自分の手で、如月ちゃんのパイルを艤装の手で止める。
成る程、見た目よりパワーもある、と。
『……凄イパワーネ。噂通リ。……来ナサイ……』
すると、海中から深海棲艦。駆逐艦ばかりだが、兎に角数が多い。
「はぁ、嫌だね、あの癪に触る馬鹿女を斬り刻んでやりたいのに」
「雑魚の相手は面倒っぽい。早くあの雌犬を処分しなきゃ」
殺す気やんけ!いかんぞ!
「もー、二人とも?殺しちゃ駄目って命令でしょ?」
お、島風ちゃん偉い。
「そうだな、提督に楯突いたんだ、死ぬより辛い目に遭わせなきゃ、割に合わねぇだろ?」
え?ちょっと待って木曾?今なんか怖いこと言った?
「き、木曾?その、できれば優しく」
「さあ、行くぜ!深海棲艦野郎!!皆殺しにしてやるぜ!!ダブルトマホーーーク!!ブーーーメランッ!!!!」
木曾ォ!!

そうしているうちに無双ゲーが始まる。大暴れしまくる皆んな。ヤバい。
「ふっ……、はあっ！」
「死ね！死ね！死んじゃえ!!」
「あはははははは!!遅ーい!!!」
うん、最早出て来た瞬間にモグラ叩きみたいに殺されてる。
『クッ!!』
深海棲艦を召喚するペースより、うちの子達が殺すペースの方が早い。
さあ、どうする？
『ナラバ!!』
へえ、また闇に紛れるか。でも、それは悪手だなぁ。
「……時雨、夕立、頼めるか？」
「分かったよ、木曾」
「……うぅん、匂い立つなぁ……」
「うん、そうだ、こっち。……そこだね？」
砲撃の音が響く。
『ガァッ!!ナ、何故?!』
いやあ、隠れるんなら匂いまで消さないとなぁ？姿は隠しても、ねぇ？
「それに、隠れるのもヘタクソね。足柄くらいには」
まあ、探知能力が高い二人からすればね。足柄、今は下手だけど、筋は悪くないと思う。
それはさておき、
「どうする？もうネタ切れ？今降参するなら、お仕置きは少なめで許してあげちゃうよー？」
『舐メルナ!!』
真っ向勝負か？良いねぇ。
だが、うちの子達は強いぞ？
『ハハハハハ……！　ヤミノナカデ……シズメエ！』
砲撃。だが、うちの子達には掠りもしない。速攻で間合いを詰めら

れる。
「喰らえ……」
時雨の刺突。大きく身体を逸らし、やっとやっと回避。
「おっそーい！」
島風ちゃんの踵落とし。本体の腕で受けるが、余りの鋭さに出血。あらら、死ぬ程の怪我じゃないけど、可哀想だ。後で治療してやらなきゃ。
「死ぃ、ねっ!!!」
夕立の月光を纏わせた聖剣の一撃。艤装の腕で受けるが、敢え無く斬られる。あの聖剣の神秘はそりゃあもう、凄い。夕立の筋力と技量も相まって、正に必殺の一撃と化している。
『グ、オオォ!!オノレ……！オノレェ……!!』
いやあ、それなりに強い鬼クラスの子だけども、相手が悪かったなぁ。俺達と勝負するなら、鬼クラスで艦隊組んで来るくらいじゃないと。
『斯クナル上ハ……!!』
おお、こっちに来る。ジャパニーズ・カミカゼってやつか？いや、俺を人質にでもしようって魂胆かね？

だがな、俺の元に来るとはな、これまた悪手。それも、考え得る最悪の。
「そぉい！」
『……?!』
はいスカートゲットー。
『カ、返』
「そぉい!!」
はい上着ゲットー。
『イ、イヤァァァァ!!!』
おーおー、反応が良いねぇ？おっと艤装パンチ。危ねぇな、回避。同時に艤装の砲を折り曲げる。
『変態！変態!!コノ変態ーーー!!!』

「ふはははは―!!!なんとでも言え!!悪い子にはお仕置きだぞ―!!!」
知らん知らん。悪い子にはお仕置き。さあ、今回はどうするか。
『オ、オ前!!ハ、早ク服ヲ返セ!!』
「うるせぇ!そぉぃ!!!」
『パ、パンツマデ?!!イ、イヤァァァァ!!!!』
胸と股間を押さえて蹲る。なんか、悪いことしてるみたいですわ。
うーん、この子、肌が綺麗だ。……よし、決めた。
「行くぞ必殺!ボディペイントォ!!!!(水で溶けるタイプの絵の具使用)」
『キャァァァァァ!!!!』

完　全　撃　破　!!

５４話　旅人の飲むコーヒーは、甘い

……離島。
黒井鎮守府の北側、少し大きめの島。
この島には、黒井鎮守府の提督が拾ってきた、深海棲艦達が生活している。
ここに住む深海棲艦達は、皆、黒井鎮守府の艦隊に半殺しにされ、提督にこれでもかと辱められ、なんだかんだで調教されきってしまっている……。
当然だろう、海を守る為、人類に警告しようと勇んで現れたら、なんかメッチャ怖い女達に囲まれてボコボコにされ、よく分からんイケメンにセクハラされた後、急に優しくされるのだ。
……堕ちてしまうのも無理はない（確信）。
そんなこんなで集まった深海棲艦達は、たまに現れる提督の指示で、密輸業者への警告や、打ち捨てられた艦娘の保護などのブラックオプス的な、なんかそう言うフワッとしたアレを担当する集団となったのだ……!!

しかし、真面目に働いてはいるが、この深海棲艦達の性癖までは、まともにならなかった……。
「提督??見テ?モットワタシノ恥ズカシイトコロ、見テ??」
「提督!アタシ、オ仕事頑張ッタ!!ゴ褒美ハ……、オシリペンペンデイイゾ??」
「ヲッ!提督?今日ハ何スル?……何シテクレルノ……??」
言わば、ナチュラルな調教が生み出した、ソドムの街!
露出とコスプレ、ＳＭと緊縛とをコンクリートミキサーにかけてぶち撒けたここは、海上のゴモラ!!
今回、『折角水溶性のボディーペイントしたんだし、なんかそれっぽい企画立てようぜ！』
本日も、俺と天国に付き合ってもらおう!!
「さあ、やってまいりました!『ドキッ!深海棲艦ボディーペイント水

鉄砲チャレンジ!!～ポロリもあるよ！』実況はこの俺、旅人と！」
「解説ハワタシ、離島棲鬼デマイリマス！」
……ちなみに、離島棲鬼ちゃん、フリフリのゴスロリの下は荒縄で緊縛してる。自分で。……いや、確かに、倒した時に荒縄で亀甲縛りしたけどさぁ？
「さあ、今回のイベントのルールは簡単！お互いのボディーペイントを水鉄砲で溶かし合い、最後までペイントが残っていた子の優勝！」
「マタ企画モノノＡＶミタイナ話ネ！」
「イメージビデオです！（強調）……さあ、治療が終わり、気絶していた駆逐水鬼ちゃんが目を覚ましたようです！」
「エッ、エッ？何？何コレ?!」
「はい、スタートォォォ!!!」

「……ねぇ？」
「……提督？」
ん”ん”っ?!!
……そ、そうだ、うちの艦娘もいたわ……。しかも駆逐艦。
そして、目の前には仁王立ちする木曾。
……俺より頭一つ分以上小さいはずなのに大きく見えるのは、怒りなのかなんなのか。
「いや、違うんすよ、これは」
「……敵と馴れ合うな、とは言わない。だがな!!」
がっしり肩を掴まれる。ひぇぇ。
「女の身体が必要なら、俺を使え!!!」
「……はいぃ？」
……お、思わず、知り合いの特命係みたいな声出ちまった。
「お前には、特に女の趣味がないことは聞いている！……何故だ！俺じゃ駄目なのか!!!」
あ、あぁー、成る程！不安にさせちゃったか!!いや、まあ、エロ目的ももちろんあるけどさ！この子達はこう言う変なプレイ好きなん

だよ!!
「ち、違うぞ木曾!!!これは、彼女達の趣味だ!!!」
「な、何だと?!!」
「……良いか、木曾、世の中は広い。裸を人に見せて喜ぶ奴だっている!俺はそれに付き合っているだけだ!!善意で!!!」
決して俺の趣味とかそんなんではない!!!
「そ、そうなのか?!」
「……成る程、ね。世に聞く、変態さん、と言う奴だね?」
時雨がなんか真剣そうな顔で言う。
「そうだ!!変態さんと遊んでいるだけだ!!!何もおかしくはない!!!!」
「変態さんはほっといた方が……」
如月、正論はいかんぞ。
「いや、この子達は変態だが有能だ。君達にはさせられない仕事を日夜こなしている……。たまにご褒美くらい、な?」
「でも……」
夕立が不満気に言う。
くっ、ならば最終手段だ。
「あー、潮風で髪がガシガシだなー。……帰ったら皆んなでお風呂入らな」
「提督、遊んであげて?」
「うむ、好きにするといい」
「なるべく早く終わらせるっぽい」
効果覿面である!
「しゃあ!じゃあ行くぞ!!!離島棲鬼ちゃん!!バトル開始の宣言をしろ!!!」
「バトル開始イ!!!」
「エッ、エッ?エッ?!チョ、待ッ、キャアアアア!!!!」
たのちい。
「いやー、良いもんが撮れた。永久保存版ですわ」
「ウフフ、マタ来テネ、提督?」

「ウゥ、モウヤダ……」
　あんなこと言ってるけど、結構楽しんでた駆逐水鬼ちゃん。いやぁ、楽しかった。詳しく言うとＲ１８タグが付いてしまうから言わないけど、凄かったぞ。……また来よう。下手な風俗よりよっぽどいい。
　さて、残る問題は……。
「よし、終わったな、提督」
「帰るよ」
「お風呂にするっぽい！」
　艦娘ソープランドですかね。
×
×
×
×
　約束通り、お風呂だ。
「いや、服くらい自分で脱げるって」
「僕が脱がしたいの。……駄目かな？」
「構わんよ（寛容）」
　よし、許可を得た。協定違反にはならない。
　……他人のベルトを外すのはちょっと難しいな。でも、いつかやることだし、今のうちから練習しなきゃね。
　さて、パンツを、と。
　……むう、反応無し。
「何で？やっぱり、魅力が足りない？おっぱいが大きい方がいいの？」
「いやいや、常に勃ってたら病気だから。……そう言う気分じゃないだけで」
　成る程、そう言うものなのかな。
「どうやったら、そう言う気分になるっぽい？」
　夕立が聞くけど……、
「男の口説き方は自分で学ぶもんさ。ま、まだまだこれからさね」
　はぐらかされる、か。
「あら、じゃあ、こんな感じかしら？」
　如月がしなだれかかるけど、優しく肩を抱かれて、

「そうだな、上手じゃないか。可愛いよ、如月……」
「あんっ……??」
髪を撫でられる。……僕も、アレをやられたら骨抜きにされる自信がある。
……やっぱり、段々と、僕達の誘惑に慣れてきている。
相手が駆逐艦だから、とかじゃない。艦種に関係なく、僕達のアプローチを悉く躱す。
でも、断り方はかなり絶妙で、絶対に相手を傷つけない。
さっきみたいに、逆に相手を口説いてノックアウトすることも多々ある。
……そもそも、女性の扱いが異様に上手いのだ、提督は。
まず、僕の贔屓目で見ても、顔とスタイルは最高。強くて優しくて仕事もできる。
その上、言葉にせずとも気持ちを汲んでくれて、マメに気に掛けてくれる。けど、子供っぽくて可愛らしい一面もあり、いつも笑顔でいて、話しかけやすい雰囲気。
……こんな人、ほっとかれる訳ない。
多分、今までに、沢山の女と付き合ってきたんだろう。そうじゃなきゃ、説明がつかない。
提督が、僕以外の女と……!!

「あら?どうしたの時雨?怖い顔しちゃって?……よしよし」
「あぅ……」
だ、駄目だ、こうして撫でられると、さっきまで考えていたことが凄くどうでもよくなってくる!
「何か悩み事?……ああ、いや、無理に話さなくても良いよ、詮索するような無粋な真似はしないさ。……でも、人生の先輩から一つだけアドバイス!」
「な、何だい?」
「人生を、楽しめ!」
人生を、楽しめ、か。提督がよく言う言葉。

すると提督は、僕の手を握り、しゃがんで、僕と目線を合わせてこう言った。
「時雨、俺のこと好きかい？（イケボ）」
「う、うん、もちろん！」
「そっか、俺も時雨のこと、好きだよ。……だからね、そんな怖い顔はしないで欲しいんだ！（イケボ）」
そ、そんなこと言われると……。
「う、うん、ごめんね、なんでもないんだ！」
うぅ、もう、嬉しくって……。
「そうかい？……俺はね、大好きな時雨と同じ時間を過ごせて、とっても幸せだよ？もし、時雨を不幸にする何かがあるなら、俺が必ず何とかしてみせるから！（イケボ）」
も、もう駄目！
「提督??ぼ、僕もね、提督と一緒にいれてとっても幸せだよぉ??????」
幸せ過ぎて、どうにかなっちゃいそう……!!
……そもそも、誘惑なんてしなくて良いんじゃないかな？態々エッチなことをしなくても、こうして、提督と一緒にいられるだけで、目的は達成されている訳だし（混乱）。

この後は、普通に、一緒に温泉で過ごした。
その、普通に、一緒に、と言うのが、女の子にとって、何物よりも代え難いものだって、提督は良く知ってるから。
やっぱり、提督には敵わないなぁ……。

……でも、僕は今、幸せだ。

５５話　あなたは毒に強い免疫がある

いやぁ、キス島は強敵でしたね。
そんなこんなで終わったキス島攻略。一切期待はしてないが、大本営に結果を送りつける。
なんか、快挙みたいな扱いだけど、この程度のことはいつもしている。最近じゃ、遠征のついでに海域を開放してきた、とか皆んな言うし。
今じゃ皆んな、一端の戦士だよ。

それとこれとは全く関係ないんだけどさ、
「……金剛？この、俺の紅茶にさ、媚薬、入ってない？」
「……気のせいデース！」
金剛、ニッコリ。
「いや、今の間は何なの？確信犯だよね？」
「気のせいデース!!さあ、グイッと！飲んで欲しいデース!!」
「まあ、良いけどさぁ？」
紅茶を一口飲む。……アールグレイか。しかも、結構良いやつだ。淹れ方も練習したんだな、相当に美味い。
「うん、おいしい！」
「……あ、あの、何とも無いんデスカ？」
え？ああ、媚薬か。長年の旅の途中、毒だのウィルスだのを盛られることは多々あったしね。だから俺、薬とか効きづらい体質になっちゃってさあ？
「まあ、そうだな、媚薬の分味が薄まるから、少し濃い目に淹れてみたらどうかな？」
「……うーん、ちょっと良いデスカ？」
金剛は、俺のティーカップを手に取り、一口飲む。……ご丁寧に、俺が口を付けた部分に唇を合わせて。
「……即効性の筈なの、に？あっ、ああっ！」
急にゾクゾクと身体を震わせ、顔を赤く染める金剛。エロいなぁ。

「おーい、大丈夫ー？かなり媚薬飲んじゃったみたいだけど？」
「て、提督、提督??提督????」
あーあ、脚、ガクガクじゃんかよ。
「全く、どんだけ入れたんだか。ほら、立って？」
そう言って手を取ったら、
「だ、駄目！今触られたらっ！あ、あ、あああああっ??????」
あらら、腰抜かして気絶しちゃった。
……薬よりこっちの方が興奮するわ。良いな、発情金剛。このままベッドインしたい欲求をぐっと堪えて、何故か部屋中に隠れている金剛型の皆んなに声をかける。
「と、言う訳でさ、金剛が倒れたから、介抱してあげてね、皆んな」
「……いつから、バレてました？」
恥ずかしそうにクローゼットから出てくる榛名。
「部屋に入った時」
「さ、最初からじゃないですかぁ!!」
普通は気付くんだよなぁ。
「そうだね、榛名ちゃん、いつも柑橘系の香りのシャンプー使ってるでしょ？でも、金剛はローズヒップの香りのシャンプーを使ってるんだよね。……なのに、金剛のクローゼットから柑橘系の良い香りがするんだ、おかしいだろ？」
「え?!そんなので分かるんですか?!」
普通は匂いで人を判別できて当然なんだがなぁ。
「後は、心音と呼吸音かな。……最終的には勘だけど」
「そ、そんな……」
「あ、押入れの比叡とバスルームの霧島も気づいてるから。……じゃあ、俺、行くね？サラダバー」
「「?!!」」
なーんか驚いてるけど、気付くから。普通。つー訳で金剛型の部屋から出て行く。
「はい、提督、愛宕の手作りチョコレートですよ～！」

休憩室、愛宕と摩耶にエンカウント。ん、この匂い、また媚薬か。流行ってんの？媚薬？ノースティリスかな？
「ほ、ほら！あたしからも、やるよ！」
摩耶もくれた。……これも媚薬入り。何で？
「うん、ありがとう（釣りキチおばさん感）。早速食べて良い？」
「うふふ、どうぞ～？」
……ふむ、外側はガラナチョコ、中にはオレンジジャム（媚薬入り）か。中々良いな、頭使ってる。チョコに水は溶かせないし、中身のジャムに媚薬を入れたのか。
「ガラナチョコなんて久しぶりだわ。オレンジジャムちょっと甘さ強いね？媚薬の分だけ濃い目に作ってる？それとも、最初から甘めに作った感じ？甘いの好きだし良いんだけど。うん、ＯＣ!!」
「なっ?!何で分かむぐっ?!」
「……うふふっ、何のことかしら～？」
摩耶の口を素早く塞ぐ愛宕。
「いや、別に、俺は困らないから良いけどさ」
うん、美味いわ。やっぱり俺も甘党だなぁ。
「……な、なあ、提督？その、さ、か、身体は大丈夫か？」
「え？うん、大丈夫だけど？どうかした？」
媚薬なんて効かないんだよなぁ。
「（な、なあ、ちゃんと入れたんだよな？アレ！）」
「（い、入れた筈なんだけど～？）」
小声で話しても聞こえてるよ～？
「愛宕は食べないの？」
「い、いえ、私は……、いや、やっぱり、一つだけ……」
「お、おい、愛宕？」
「（確認の為よ。……一つくらいなら……）」
「はい、あーん」
「あーん??」
大きく口を開く愛宕。何を、とは言わないが、ぶち込みたい。ぱくり、とチョコレートを食べるが、ついでに俺の指ごといった。

ほう、可愛いことしやがる。
「うーん、美味しっ！……あ、あら？こ、これ、は、あ、あらあらぁ??」
何てことだ、ただでさえエロい愛宕が更にエロく！
……いつもお姉さんぶって誘惑してくるからなぁ。たまには仕返ししなきゃ（使命感）。
「おっ、大丈夫か大丈夫か？」
近付いて耳に息を吹きかける。いっつもやられてるし、多少はね？
「はぁぁぁん????だ、駄目ぇ!!」
ああ^～、??いいっすね～。
いつもの余裕は全くなし、俺の目の前で蕩けている。おおう、すっごい雌の匂い。良いね！
「う、うわ、だ、大丈夫か？愛宕?!」
「んうぅぅぅ??ま、摩耶！さ、触らないで！」
「あ、ご、ごめん?!」
「おやおやおやおや？なーんだか具合悪そうですねぇ？大丈夫？お兄さんが部屋まで送る？」
これも、毎回やられてる。事あるごとに、「お姉さんが○○する？」みたいに聞いてくるのよ。これすっごく下半身に悪い。
「だ、大丈夫よ～??」
「ほんとぉ？（狂気）」
優しく、肩に手を置く。
「あっ??あっ??あっ??あっ??????駄目、駄目駄目駄目駄目ぇ??????」
大きく痙攣。すると、そのままダウン。
善きかな……。
「あ、愛宕?!愛宕?!」
「大丈夫、気を失っただけ。……今は敏感だから、触らないであげてね」
「お、おう！」
いや～、良いもん見れたわ。チョコレートの残りは持って帰ろう。
「あはは、じゃあね！」
「あ、ああ、またな！」

「あら？羽黒ちゃん？どうしたの？」
珍しい。いつもは気配を消してこっそり俺を見つめてるのに。
「あ、あっ、あの、あの、その」
「んー？大丈夫だよー？ゆっくりで良いよー？」
羽黒ちゃんは普段、緊張しやすい子だ。だから、焦らせちゃならない。
「は、はい……。ご、ごめんなさい、わ、私、焦っちゃって……」
ん？この匂い……、香水か？しかも媚薬入り。まーた媚薬か。何なん？
にしても、これは、ランバンか？てか、足柄の使ってるやつじゃね？
「え、えっと、わ、私、その、特に用って訳じゃないんですけど、その、司令官さんと、あの、お、お話でも……」
「そっかー。良いよー」
効果音をつけるなら、そうだな、パァっと、って感じ？すごーく笑顔になった。この笑顔なら、知り合いのプロデューサーが一発でスカウトするレベル。良い、笑顔です……。
羽黒ちゃんはグイグイ攻めてこないから、いつも街でナンパするみたいにすると良い反応を返してくれる。
さあどう口説くか……、そうだな、香水の話かな？お話をしたいと言ってるけど、羽黒ちゃんはあんまり喋らない、自己主張が弱い子。こっちから聞いてあげよう。
「そう言えば、羽黒ちゃん、珍しく香水つけてるね？ランバンのエクラ・ドゥ・アルページュ？良いね、似合ってるよ！大人っぽくて素敵だね！」
「え、えへへ、う、嬉しいです！」
取り敢えず褒める。髪型、服装、メイク、香水、全部だ。
……て言うか、足柄、ランバンばっかりだな。あいつ、この前はマリーミー！付けてたっけ。
多分、結婚を引き寄せる、とか、恋を呼ぶとか、そう言うのに釣ら

れたんだろうなぁ。
うーん、でも、羽黒ちゃんのイメージならこっちかな？
「羽黒ちゃんには、こっちも似合うと思うよ！」
否定はしない。絶対に、泣きながら謝られるから。
渡したのはエンジェルハート。ハート形のボトルと同じく、キュートさが際立つ香水。
「あ、可愛い……。匂いも、甘い香りで……」
いっやー、可愛い!!羽黒ちゃん見てると、なんと言うか、若い頃を思い出す！こう、ね？初々しさと言うか、ね？
……いや、ちょっと待った。なんかさらっと流したけど、これ、媚薬！媚薬の匂い！媚薬入りだよ！
うーん、羽黒がやったのか、足柄が仕込んだのか？分からんな。
「にしても、羽黒ちゃん、なんだか、香水以外の匂いもするね？」
「えっ！あっ！あの、その！こ、これは！」
……あー、羽黒ちゃんか。追加で媚薬も振りかけた感じ、ね？
面白いじゃないの、乗ってやろう。
「うーん、何だか、身体が熱くなってきたなぁ……」
胸元のボタンを更に外す。鳩尾くらいまで外す。……羽黒ちゃん、ガン見である。
「は、はぅぅ……」
追撃しまーす。羽黒ちゃんに近寄ってぇ？抱き締める！
「可愛いよ、羽黒……」
「んぅぅ??」
おやおや、耳まで真っ赤。こうすると、体温が上がって、香水の香りが強くなる。そして、媚薬もまた同じように、強く散布される。よって、
「はぁ、はぁ、な、なんだか、私、私……！」
効いてきたな？
さーて、堕とすか。物理的に。
ちょっと強めに抱き締めて……、
「いけない子だなぁ、羽黒は……。それ、何の薬か分かってるんでしょ

？」
「あっ、わ、私は……」
「そんな風に男を誘惑する悪い子はね、俺みたいな、もっと悪い男に食べられちゃうよー？」
とか適当なこと言って、頬にキス。
「……きゅう」
はいダウーン。……羽黒ちゃん、本当に悪い男に騙されないか心配だわ。このまま抱っこして、部屋まで送る。

いやあ、段々と誘惑にも慣れてきたなぁ。
……もうね、お触りパブかなんかだと思えば良いのよ。人生で最も大切なこと、それは、「楽しむこと」だ。
挿入禁止が何だ？超一級の美女達に囲まれて、お触りＯＫキスＯＫだぞ？その上、混浴もあり。普通に最高。
どうしてもヤりたい時は、そこらの風俗か、普通にナンパでＯＫだし。いっそ、音成鎮守府の子達でも口説くか？それもアリだな。
うちの子達は、どうにかして俺を誘惑したいみたいだが、まだまだ甘いね。俺が今までの人生で、どれだけ口説いて、どれだけ口説かれたか知ってるのか、って話。

さぁ、今日も楽しむか。

56話　相反する最大戦力

週末、買い出しの日。私達の提督は、毎週ほぼ必ず買い出しに行く。つまり、この日は、半日だけ提督がいない日だ。とっても寂しいけど、車には皆んながこっそり監視カメラと盗聴器と発信器を取り付けたし、空母の皆さんは艦載機で監視してるみたいだし、大丈夫、らしい。

そもそも、提督は私達の前からいなくなる筈がないんですけど。

まあ、提督がいないと言うことは、提督の服を洗濯する良い機会、ということですけどね。

提督の服の匂いを嗅ぐと、とっても安心できて、身体の奥が熱くなるんですよね。その感覚が忘れられないんです。妹の加古共々、提督の服の匂いを楽しんだ後、私達の服と一緒に洗濯するんだけど、提督に見つかると何故か止められちゃうから……。

あ、そろそろ提督がお出かけするみたい。お見送りしなきゃ。

「じゃあ俺、買い出しに行ってくるから！皆んな仲良くしてるんだよ!!」

「「「はい！行ってらっしゃい！提督!!」」」

「……行ったか？」

「……ええ、行ったみたいね」

「……よし、全員、会議室に集合！提督攻略会議を始める!!」

「「「はい!!!」」」

あ、そうでした。毎週のこの日は、艦娘全員での会議の日でしたね。

……もう四、五ヶ月くらい前でしょうか、今日みたいに提督がお出かけしている日、皆んなで言い争いになったんだっけ……。

発端は覚えていませんけど、提督は私のものだとか、提督に仕える身で図々しいとか……。何だか、色々と言い合って……。

ええと、そう、木曾さんだったっけ？「提督は昔、世界を征服し、皆が幸せに暮らせる世の中にしたいと言っていた。ならば、俺達、艦娘同士で争ってどうする」とか。

その一言に、艦隊のまとめ役である長門さんも賛同、皆んなで話し合いをするようになったんでしたね。
そして、その話し合いは定期的に行われて、いつしか会議と言う形になりました。
……内容は、どうやって提督を堕とすかとか、そんなこと。
私はただ、提督の子供を孕んで、提督の側にずっと居たいだけだから、あまり関係のない話だけど。誰かが出し抜こうと関係ない。
……あ、でも、提督を持ち逃げするのは許さないかな。他に何人いても良いけど、私と加古が提督の側に居ることは絶対条件。
そうして始まった会議。いつも通り、特に進展はない。
「Ｈｅｙ！明石ィー！この薬、効かなかったデース!!」
「そうよぉ～！最高の出来、なんて言って、全然駄目じゃないの～！」
「あの、私も駄目でした……」
そう言えば、最近、明石さん謹製の媚薬が鎮守府中で出回ってたっけ。
……おかしい、なぁ。ちょっと、不愉快ですね。
「そ、そんな馬鹿な！ほんの一口で艦娘すら淫乱にするスーパー媚薬ですよ!!?!」
一言、口を出す。
「……ねぇ、そんなに強い薬、提督の身体に悪くないの？」
「あ、それは大丈夫です。提督に紹介されたとある方からの助言を基に、超強力ながらも一切の副作用がない、正にスーパーな媚薬ですから」
提督、知り合いが多いなぁ。提督の知り合いなら大丈夫、信用できるかな。
「ちなみに、ご職業はアイドル、ご趣味はアヤシイ科学実験だとか」
あれ？信用できなくなった！
「本当に大丈夫なの？」
「痛いですね、肩を掴まないで下さいよ、古鷹さん……。もちろん、前に遊びに来ていた音成鎮守府の艦娘と提督でテストはしましたよ」
手を払われる。同時に、腰のスパナに手をかけたのが見えた。……

へぇ、明石さん、こう見えてかなり「できる」から……。
「……それに、提督は私のヒーローですから。……何があっても、何にも負けませんよ」
「「「……私の？」」」
方々から声が上がる。
……はぁ、全くもう。皆んな、提督の事となるとこれだ。ぎゃあぎゃあと騒ぎ立てて……。
私達は提督の所有物。ペット。主人に愛されたいと願うのは当然だけど、主人の足枷になるのはいけないこと。ましてや、主人と対等であろうとするなど、以ての外。
拾ってもらった、救ってもらった分際で、どうして提督の隣を歩けようか？私達は、飼い犬らしく、主人である提督に跪き、提督の敵を咬み殺す為に尽力すべきだ。

群の先頭に立つべきは王、私達はそれに着いて行く従僕。

何で、皆んなそれが分からないんだろう？
頭、おかしいのかな？
提督を愉しませる為に、雌犬らしく尻尾を振って、媚びを売るのは当然だけど、提督の行動をコントロールしようとするなんて……。

……まあ、良いや。提督は優しい。この程度のことは許すだろう。だから、私が吠えても意味はない。吠えたら多分、提督に嗜められちゃう。……だったら、最初から吠えない方が良い。提督の手を煩わせる訳にはいかないから。
そう言えば、今日はこれから出撃があった。提督の敵を殺せる良い機会だ。
そう思って、私は、既に艤装の一部として認識されている愛剣、牙斬刀を取り出す。私の身の丈の倍はあるだろう、特大の剣。材質はとある超合金、鋭利な刃と、目の荒いノコギリのような牙。伸縮可能の柄……。

……ああ、相変わらず、綺麗な剣だ。提督がくれた、私の牙。
今日もこれで、沢山、沢山咬み殺そう。
そして、提督に褒めてもらおう。
それが私の一番の幸せ。
私の生き甲斐……。
×
×
×
「私のって何デスカ?!明石?!」
「違います!提督は私のです!!」
「あー、もー、煩いぞ!想うのは自由だ!……明石も、気安く口に出すな!」
「ちぇっ、はーい」
もぅ、皆んなうるさいなぁ。
「はぁ、全く、これでは会議にならないだろう?建設的な話し合いをだなぁ……」
建設的な、って言っても、あの薬が効かないとなると、もう打つ手が今の所ないなぁ。
またチャットであの人達に相談してみよう。
あら?古鷹さんが牙斬刀を……。そうだ、私もこれから出撃だ。
クレーンにマウントしてある、私の愛用工具、ライアットジャレンチを膝の上に。
ありゃ?ここ、塗装が剥げちゃってる。後で直さなきゃ。
そうだ!後で、提督と一緒に直そう!だって、ヒーローとヒロインはラブラブじゃなきゃおかしいものね!
……夕張ちゃんは、まあ、許してあげます。ヒーローにサブヒロインは付き物ですから。
でも、メインヒロインはこの私、明石です。それは譲れない。
……香水の匂いではなく、機械油と鉄の臭い、化粧で飾るのではなく、煤や油で汚れている、ブランド物のバッグではなく、両手一杯の工具と機械。
そしてこの身は、艦娘という人外。

そんな私を、美しいと、可愛らしいと、受け入れてくれるのはきっと彼だけだ。
戦う彼の姿は、どんなアニメの主人公よりもカッコ良くって、一緒に機械弄りをする彼の姿は、どんなマンガの主人公より素敵だ。
そんな彼の側にいたいと願うのは当然のこと。その為に、彼の側にいる為に、私は強くなった。

主人公はヒロインと共にあるべきだ。

何で、皆んなそれが分かってくれないのかな？
頭、おかしいんですかね？
私のヒーローと結ばれようなんて……。

……まあ、良いんです。沢山の登場人物が出るお話は悪くないですし。提督も、賑やかなのが好きみたいですし。私も、賑やかなのは嫌いじゃないですしね。ハーレムもののライトノベルと思えば苦じゃありません。
皆んなに誘惑してもらっているのは、最終的に、提督と私が愛し合う為の布石。鎮守府中に設置してあるカメラで監視、提督がその気になったらお持ち帰り、という作戦です。
……提督は、私のこと可愛いと言ってくれますけど、この艦隊の女の子も可愛い子ばっかりですし。折角だから有効活用しないと。
でも、また失敗かぁ。悔しいなぁ。
まあ、この苛立ちは深海棲艦にぶつけますか。
提督と紡ぐラブコメディ。
それが私の幸せ。
私の生き甲斐……。

57話　たっぽいたっぽい

「て、提督、その、良いか？」
「あいよ、どーぞ」
「あ、ありがとう！……では！……えい！」
　おーおー、相変わらず力強えな、長門は。スゲェわ、これ。普通の人間にやったら、胴体真っ二つだろうよ。
「むふー、あー、良いなぁ……」
　今、長門は、俺に抱き付いて、胸に頬擦りしているけど、これも普通の人間だったら胸が抉り取られてるね。俺からしてもちょっと痛いくらいだもん。相当だよ？
「ほら、長門、力加減の練習でしょ？もうちょっと力抜いて？」
「あ、ああ！すまない！……こんな感じか？」
「力抜き過ぎだね～。俺なら思いっきり抱き付いても大丈夫なんだ、もっと頑張って！」
「わ、分かった！」
　あらら、今度はもっと強い。

……事の発端は、長門の相談だった。
　どうやら長門は、力加減が苦手。もっと言うと、力加減が極端なんだ。
　普通の艦娘なら、1から10まで、1刻みに力の調整が出来る。だからこそ、普段は1から3の力で生活し、仲間同士での演習なら4から7くらい、戦闘なら10まで、と言うように、加減をする事で、超人的な肉体を持ちながらも、日常生活を送れている。
　因みに俺なら、0．01から10まで、ゼロコンマ刻み以下くらいの調整が可能。
　しかし、長門は、1、5、10くらいの、極めて大雑把な加減しか出来ない。
　それだけなら、ただ、不器用な人だね、で済むだろうが、さっき言ったように艦娘には超人的な身体能力がある。その中でも、長門は特別

「強い」。
どうにか、日常生活は送れているようだが、油断すれば力が入り過ぎてしまう、とのこと。
「はぁ、強くなれるのは良いことだが、調節が出来ないとはな……。全く、難儀なものだ」
そう言いながらも、俺に抱き着く長門。でもな、俺、地面に足付いてないからな？
「ほらほら、今度は入れ過ぎだよ～」
「す、すまない……」
しょんぼり長門。
ふと、長門の髪が顔にかかる。
うむ、石鹸の匂い。

……長門よ、固形石鹸で全身丸洗いはやめなさい？服も芋ジャージしかないし……。
んー、でも、これはこれで。死ぬ程健康的だからこそ、美容に気遣いは不要と言うことかな？
「……最近は、益々力強くなってしまってな……。見てくれ、腕なんてこんなに太く……」
力こぶを作って見せる長門。女の子にしてはかなり太い、よく鍛えられた二の腕。今じゃ、俺のハイエースに縄を括り付けて引っ張るからな、長門は。
そりゃあ、こうもなるでしょうよ。
「いやぁ、別に良いと思うけどな、俺は」
そう言いつつ、長門を見やる。
……飾り気のない、タンクトップの黒インナーは、筋肉量が多く体温が高い長門の愛用品。
最近は段々と暖かくなり始めたので、長門は、上はインナー、下はジャージという、凡そ女の子らしくない格好で、普段からそこらをふらついている。

それがたまらなくエロい……!!
鍛えられた大胸筋を差し引いても、かなりのサイズのおっぱいが、俺の身体に惜しみなく押し付けられている。
仄かに香る女の匂いは、汗なのか何なのか。何もせずとも良い匂いするタイプの女なんだよ、長門は。
ついつい撫でちゃう。
おお、髪もサラサラ。どうなってんだマジで。手入れしないでこれって、全世界の美容師を敵に回したぞ。
「あ、な、撫でるのか？私を？……いっ、いや、もちろん、嫌じゃない！その、むしろ、嬉しくて……」
更に強く抱き締められる。
「……ふふ、こうして私は、力加減の練習を口実に、貴方に甘えたいだけかもしれんな……」
んもー、可愛いこと言ってー。でも、そのパワーだと、もはやこれ鯖折りだからね？他の人にはやっちゃ駄目ね？
「……なあ、提督。私達は、どうなるんだろうな」
「んぁ？急にどうしたの？」
「……私達は、強くなり過ぎた」
「はあ」
「……私も、何度か外出して、今の時代の人々を見てきた。そして、思ったんだ。……私達は、異常だ。ヒトの形をしながら、ヒト以上の筋力、耐久性、体力、反射神経……、あらゆる点で優れている。そして、その力は、海の上では何倍にも膨れ上がる」
「そうだねぇ」
「その力は、ロック装置によって、高まる一方だ……」
「大丈夫、ちょっとずつ加減を学べば……」
「違うんだ」
一層、悲しそうな顔をした長門。こんな顔は久々に見る。
「はい？」
「……この前、街に出た時にな、ナイフを持った暴漢に襲われたんだ」
「なんだと、どいつだ！」

は？誰だ？殺すか？
「私は、上手く鎮圧する自信がなかった。だから、直接殴らず、ナイフを握り潰して見せたんだ」
「おお、偉いな」
「……そうしたらな、こう言われたんだ……。『この、化け物め』と……。周りで見ていた人々も、私のことを、まるで化け物を見るかのような目で見ていた……。私は、その言葉が忘れられないんだ……」
「長門……」
成る程なー、そう言う系かー。
……でも、俺の知り合いには、ナイフくらいなら平気で握り潰す奴一杯いるし、なんとも……。
つーか、闘気纏えば俺にも全然できるし。
やって見せるか。
「長門、確かに、普通の人から見れば、艦娘は恐ろしい存在なんだろう」
「……ああ」
「だがな、世の中には、普通の人しかいないって訳じゃない」
懐から安物のナイフを取り出し、握り潰して見せる。
「……と、このように、普通じゃない奴なんて、探せばいくらでもいる」
「……提督……。慰めてくれるのは分かるが……、そんな芸当は提督くらいしか……」
あらら、やっぱりこれくらいじゃ駄目か。まあ、長門には、言葉を重ねるより、実際に超人を見てもらった方が早い。
じゃあ、
「長門、散歩に行こう！」
「……はぁ？」
「なあに、論より証拠、超人を見せてやるって事さ！」
×
×
×
「その、何だ、ここは……」
「田舎？」
「い、いや、まあ……」
×
×
×

そう、さっきからすれ違うのは、年寄り、動物、モヒカン、ターバンの子供……。
ん？モヒカン?!
「おーい、こっちだよー！」
「あ、ああ！」
き、気のせいか……？

「「「ヒャッハー!!!!」」」
あっ、気のせいじゃなかった!!!
「ここは、南斗の里……。平たく言えば、超人達の総本山だよ。まあ、この辺りはお粗末な雑魚しかいないね、もっと奥に行けば……」
「なぁんだとぉ?!誰がお粗末な雑魚だってぇ?!!」
「あらま、めんどくさい」
……いや、どう考えても、こんな血の気の多そうな連中にそんな事言ったらそうなるだろう。
騒ぎを聞きつけた、筋骨隆々な男達がこちらを取り囲み、罵声を発し、今にも襲いかからんとしている。
「提督……」
「でも、こうするとな……」

「……貴様か。厄介ごとは勘弁してもらいたいんだがな」

「……大ボスが釣れる」
その時、とある男が空から現れた。
その男は、提督と同じような眉目秀麗な偉丈夫であり、しかし、提督より長い白髪と鋭い雰囲気を醸し出す男だ。
……戦わずとも分かる。この男、強い……!!!

「よー、久し、ぶ、り……、って、お前！真っ白やんけ!!!漂白剤使った？似合ってる似合ってる!!ギャハハハハハハ!!!」
「クッ、笑うな!!」

「で、何でお前ここにいんの？仕事は？」
……場所を移して、古い寺院の中。先程の騒ぎは、荒れ狂う男達を、この目の前の鋭い相貌の男が一睨みしただけで収束した。……やはり、私の目に狂いは無かった。この男、確実に私以上だ……!!!
「……クビになった……」
「テラワロス」
「仕方ないだろう?!目の前で女性職員にセクハラする上司を殴ってしまったんだからな!!大体にして残業と休日出勤ばかりで休む暇も無かったし!!ぐうぅ、アイリにもマミヤにも顔向けできん!!やっと決まった就職先だと言うのに!!!」
「で、今は古巣でバイト？もうさ、聖帝様とか、ＵＤ様とかに雇ってもらえば？」
「そんなみっともない真似はできん!!」
「その歳でフリーアルバイターの方がみっともないゾ」
「お前だって旅人だろう!!」
「残念！俺、最近就職しましたー!!」
「な、何だと?!」
……だが、提督と仲は悪くないみたいだ。しかし、警戒を怠ってはならないな。
「……それで、何の用だ？何をしに来た？あらかじめ言っておくが、厄介ごとは……」
「あー、この子に里の奥を案内してやって」
「……入門希望者か？だったら、正規の手続きをして……」
「いや、ただ見たいだけ」
「はぁ……、南斗聖拳は見世物ではないぞ？」
「就職先、紹介するから」
「……まあ、見せるだけなら良いだろう。よし、ついて来い」
「（ちょろい）さ、行くぞ長門」
「あ、ああ」

「……これは！」
この里の奥の奥。ここで見たものは、今までの私の常識を覆すものだった。
素手で岩肌を切り刻む男、蹴りで石柱を斬る女、鉄製の鎧を切り裂く男……。
「あれは右から、南斗夜梟拳、南斗翡翠拳、南斗流鴎拳……。皆んな、人間だけど、長門より強いよ。ほら、他にも、あっちには南斗比翼拳、南斗飛燕拳、南斗隼牙拳……」
……成る程、これを見れば、自分がいかに狭い枠組みでものを見ていたかがよく分かる。
「まさか、これ程まで……!!」
提督の言うように、世の中は広かった。まさか、自分よりも強いであろう人々がここまでいるとは……。
「因みにさ、あそこの、流鴎拳の人なんて、この近くで農家やってるんだ。……あれだけの力があっても、普通の暮らしは出来るんだよ、別に」
「そ、そうなのか？」
「そうそう。……自分の居場所なんてものはね、探せばいくらでもあるもんよ。もしもないなら作れば良いし。そんなに難しく考えることはないよ」
「……う、む。そう、だな……。難しく考えるのは、私らしくないな！」
「よし、その意気だ！……まあ、少なくともさ、長門がどんなに強くなっても、俺は側にいてあげるから、安心して強くなりなよ」
「……ああ！」
……そもそも、私の居場所は、最初から提督の隣にあった、と言うこと、か。
考え込むのは性に合わない。いつも通り、提督の為に強くなればそれで良いんだ。
きっと、提督なら、私に居場所をくれるだろう。鎮守府も、この場

所も、提督に導かれたんだ。
だから、私は……、
「私は、一生、貴方について行くぞ！だから、だからこれからも私を導いてくれ、提督……！」

５８話　おねショタ疾風伝　天

《Ａｋａｓｈｉが入室しました》
Ａｋａｓｈｉ：こんにちは。……あの薬、効きませんでした。
しきにゃん：えー？あれが？あの人、やっぱり人間やめてない？
ＬＥＯＮＡＲＤ：マジかよ。ヤベェな。
ヤゴコロ：えぇ……。じゃあもう、薬は効かないんじゃないかしら。
科学的に認めたくないけれど。
Ａｋａｓｈｉ：やっぱり、科学にも限界はあるんですかねー。
《タイヤ野郎が入室しました》
《@皿@が入室しました》
《スカさんが入室しました》
タイヤ野郎：話は聞かせてもらったよ！
@皿@：俺達に任せな、全部まるっと解決だぜェ～？
スカさん：いやあ、彼は何やっても死なないから良い実験台にゲフンゲフン。
Ａｋａｓｈｉ：えっ、誰ですか？
タイヤ野郎：吾輩達が誰か、そんなことは良いじゃないか。
@皿@：取り敢えず、この設計図を送っとくぜェ～。
スカさん：なに、お礼は稼働データで良いぞ。じゃあな。
Ａｋａｓｈｉ：えっ、いや、本当に誰ですか?!
《タイヤ野郎が退室しました》
《@皿@が退室しました》
《スカさんが退室しました》
×
×
×
「えぇ……（困惑）」
何？て言うか、誰？
……あ、添付ファイル。設計図だ。
えっと、これは、局地的な空間の湾曲？時空間の、操作、かな？いや、でも……。

「あ、明石さん？何ですか、それ？」
「あら、夕張ちゃん。……えっと、よく分からないけど、これ……」
「あー、あの人達ですか！凄いんですよ！兵器に関する知識が豊富！全く新しい観点からアプローチするチャレンジ精神！そしてそれを実現する高い技術力!!どれをとっても最高です!!」
……夕張ちゃん、兵器の事となるとこれだから……。変な人と仲良くなって……。
「……で、これ、どうしようかな」
「作りましょう!!（即答）」
「い、いや、信用できるの？」
「……多分？」
もう、安心できないなぁ。
「で、でも、兎に角作るだけなら……。使用については提督に許可を取れば良いですし」
「そうかしら？」
「……だってこれ、面白そうですよ？……多分提督なら、作れって言うと思いますけど……」
……ああ、多分、と言うより、確実に言う。あの人は退屈が何よりも嫌いだから……。よし、取り敢えず、作るだけ作っておこう！
「……良し、分かったわ！じゃあ、作るだけ作っておきましょう！」
「はい！」
腰から愛用のスパナを取り出し、早速作業に取り掛かる。

そして、数時間後……。

「「……出来た!!」」
無事完成！
「……にしても、これ、局地的な時間逆行を起こすんですよね？」
「そうね、にわかには信じられないけど……」
「原理的には可能、ですからねぇ……」
そう、まさに荒唐無稽な装置だが、その理論は完璧で、大凡失敗す

る点が見当たらないのだ。
「あらゆる物質の特殊な時間逆行……、面白そうではあるんですけど、結構危険ですよね、これ」
「一応、安全装置として、逆行した時間は一日で戻るみたいだけど……」
うーん、本当に大丈夫かしら？
……私達、それなりに技術力には自信があるのに、こんな人達が世の中にいるなんて……。全く、驚かされる。
作っておいてなんだけど、この装置の原理だって半分くらいしか分かっていない。ただ、一応の安全性は確保されてることくらいしか……。
「で、どうします？テストしておきますか？」
明らかにワクワクした様子の夕張ちゃん。
「うーん、そうね、一応テストしなきゃ。何か、テストに使えるものは……」
「これなんてどうでしょう？」
そう言って、夕張ちゃんが手に取ったのは、一冊の古書物だった。
……そんなもの、どこから？
「そこに置いてありましたよ？明石さんのじゃないんですか？」
「いや、違うけど……。提督のじゃないかしら？」
「……みたいですね、明らかに、日本語じゃないみたいですし。……難解です！」
ちょっとばかり、混乱した様子の夕張ちゃんから古書物を受け取り、時間逆行装置の中に入れる。
「じゃ、行くわよ……」
「はい、明石さん！」
「3」
「2」
「1」
「ゼ「あ、ここにあったのかこの本」ロ!!」

「えっ、何事？うおっ?!」

……んん!!!?

「……その、明石さん？い、今、提督が!!」

「……どどどどど、どうしよう!!どうしよう夕張ちゃん!!!!」

えっ、えっ、本当に、ど、どうしよう……!!今、絶対提督がいた!!絶対いた!!!

「う、おお、お？何だ、これ？視線が低い？声は高い？……何これ？」

「……あ、あの、提督、ですか？」

私よりも小さな背丈、中性的な声、整った顔立ち……。

「え、うん。……あれ？明石、背伸びた？」

「か……」

「か？」

「かわいいい

「……は、はは、で、出来るんですか？」
「うん。……この身体じゃ仕事とかしづらいだろうし……」
「あ、だ、駄目ですよ！」
「あ、明石さん？」
「安全装置です！」
　そう言って、装置の設計図の一部を見せる。
「……成る程、一日で戻るのか」
「はい！だから、今歳をとると、その分と元に戻る分歳をとってしまって、明日にはおじさんになっちゃいますよ!!」
「あー、じゃあ、我慢するしかない、のかぁ……」
「はい！……その、すいません、提督」
「いやいや、突然空間を湾曲させてここに飛んできた俺が悪いんだよ、自業自得さ」
　私に抱っこされながらも、頭を撫でてくれる提督。かわいい。
「……にしても、提督って、子供の頃からカッコよかったんですねぇ」
「ははは、褒めたって何も出ないよ、夕張」
　うわあ、笑うともっとかわいい！……いつか、こんなかわいい子供が欲しいなぁ。
「ほら、そろそろ下ろしてくれ、明石。この調子じゃ仕事もできなそうだ。大人しく部屋でゆっくりしてるよ」
　え、あ、そっか、中身は大人の提督のままなんだ。
　……あれ？時間逆行？
「……そう言えば、何で提督は私達のことを覚えているんですか？時間逆行したんですよね？」
「これを設計したのはあいつらだろ？あいつらは変な所でマメだからな」
「そう言うものなんですか？」
「そう言うことにしておいてやってくれ」
　はあ、そうですか。ご都合主義ですねぇ。
「じゃ、俺は部屋に引きこもるから。誰とは言わないが、一部に見つかったら大変だ。黒井鎮守府におねショタの嵐が吹き荒れるかもし

れん」
「何言ってるんですか」
「つまり、俺はこんな所にいられるか！部屋に帰らせてもらう！ってこと。じゃあの！」
「提督、それ死亡フラグです！提督？提督ー!?!!」

５９話　おねショタ疾風伝　地

「俺さ、自分のこの、しっかりとフラグを回収する所、好きだわ」

「きゃー！きゃー！かわいい！かわいい!!」

「提督、あーんですよ、あーん」

愛宕と加賀、おねショタの総本山の人達に捕まった俺。

経緯など特に無い。工廠のドアを開けた時点でとっ捕まった。

……そう言えば、空母の皆んなに監視されてたっけ、俺。

今は、休憩室のソファーに座った愛宕の膝の上。

何故か、加賀に餌付けされてる。

何これ。

「そ、その、帰って良い？」

「お姉さんに沢山甘えて良いんですよ～？」

「癒し、これが癒し……。成る程、流石に気分が高揚します」

「駄目だ、話が通じねぇ……！」

完全に自分の世界に入ってるこの二人。

この姿じゃ、イケメンパワーで乗り切ることも不可能。力づくで逃げ出すと、この子達が傷つく。どうする？

その時である。

「あら？愛宕さん、加賀さん？……その子は？鎮守府に部外者を入れちゃ駄目じゃないの！」

叢雲！助けて！

「あら～？大丈夫よ～？身内だもの、ねぇ？」

「この子は私の弟です（錯乱）」

「はぁ？何言ってんの？……待って、なんだか、この子、見覚えが……。

……も、もしかして、し、司令官？」

「助けて叢雲」

「司令官!!司令官なの?!」

「そうそう、説明は省くけど、なんだか小さくなっ」

が、愛宕に口を塞がれる。
「うふふ、違うわよ～？」
「弟です（混乱）」
「駄目ね、話が通じないわ……！」
そして、騒ぎを聞きつけて集まる艦娘達。

「提督?!提督なの?!そんなにかわいい姿になっちゃって……」
那珂ちゃん……。
「……良し、じゃあ、ちょっと女装して、那珂ちゃんとトップアイドル目指そう!!大丈夫、女装した男性アイドルがこの前テレビに出てたから!!」
なんでや!!
「て、提督……。貴方は大物になるって思っていたけど、まさか小さくなるなんて……」
五十鈴……。
「こうなったら、私が責任を持って、立派な男になるまで育ててあげるから!!」
なんでや!!
「な、なんやて?!司令官が子供に?!……ほんまや！かわいい!!ほーら、司令官ー？飴ちゃんやるでー？こっちおいでー？」
「龍驤、今の時代にそれやると、男女関係なく不審者扱いで捕まるからな、注意しろよ」
「なんでや!!」

くっ、不味いな、収集がつかなくなりそうだ。
仕方がない、肉を切らせてなんとやら、だ。喰らえ！

「愛宕姉さん、そろそろ離してよ？……愛宕姉さんの顔が見たいな、僕」
「そ、そうね！私も、提督の顔が見たいわ！」
はい、解放。

……吐きそう。なんだよ、愛宕姉さんって。辛いわ。俺、何歳だと思ってんだ。死にたい。
さあ、今のうちに……、ん？
「お姉ちゃんです（半ギレ）」
加賀ァ!!呼べってか!!
「ぐっ、か、加賀お姉ちゃん？お菓子、ありがとね！美味しかったよ！」
「……」
無言のガッツポーズ。なんなん？言っておくけど、中身は????歳だからな？
まあ、なんにせよ、これが我が逃走経路だ……!!
「とうっ！」
「あ、逃げた！」
すまんな、おねショタは好きじゃないんだ。
そろそろ夕食の仕込みもあるし。じゃ、食堂へ。

「……と、言う訳で、今日のメニューは和食中心ね！鳳翔さん、よろしく！」
「旦那様、お母さんですよ～！」
畜生！こっちも狂った！ひどい、世も末だ……！
「鳳翔さん……」
「はっ！い、いや、こ、これは……。そ、そう！練習です！練習なんです！い、いつか私もお母さんになる訳ですから！ねっ?!……ねっ!!」
ねっ、じゃないが？流石に、お母さんはキツイんだけどなぁ。でも、言わなきゃ駄目そう。
「はぁ……、お母さん？今日の晩御飯は？僕も手伝うからさ、早く作っちゃおうよ？」
「はぁぁぁん??」
鳳翔さん……。
「じゃあ、私達はママ、ですかね、伊良湖ちゃん？」
「そうですね、間宮さん！」

だから、じゃあ、じゃないが？……まあ、ママならそんなに。スナックとかだと思えば。
「ま、間宮ママ、伊良湖ママ？サボっちゃ駄目だよ！お料理の時間なんだから！」
「「はーい??」」
ああ、辛い。下手すりゃ君らくらいの娘がいてもおかしくはないんだぞ、俺……。
とっとと飯作ろう。拒絶反応で死ぬ前に……。

「チカレタ……（小声）」
「……司令官、大丈夫？」
弥生に慰められる俺。駆逐艦に混ざれば違和感無くね？と思って来てみた。いつもの場所だとおねショタの総本山の人達に捕まりそうだし。
「あれは、駄目みたいですね（冷静）」
「……私と同じぐらいの大きさなのに、いつもと食べる量は変わらないんですね」
吹雪、引き気味。そう？いつもの半分くらいだけど。
「にしても、君らは特に反応無し？助かるっちゃあ助かるけど。……こら、暁！好き嫌いしないの！」
「うっ、ピ、ピーマンは勘弁してぇ……」
「駄目だよ！暁！関東野菜連合にシメられるよ？」
「関東野菜連合!!?」
実際に俺の知り合いのアフロは何度か殺られたからな……。
「にしても、こうしてみると、兄弟みたいだねー。……あ、提督？良ければ後で私の部屋に来て？新刊落としそう……」
「あいよー」
オータムクラウド先生、ピンチ。……それと、姉妹がいなくて寂しそう。……そもそも、艦娘という時点で、親はいない、姉妹はいたりいなかったり、そして、人間とは埋められない身体能力の差があるからな。

皆んな、孤独だ。……憐れんでやれる程人間が出来ている訳じゃないし、共感できるような繊細な精神は持ち合わせちゃいない。でも、こんなかわいい子達が寂しい思いをするのは許せん。
「……そろそろ、建造とかするか？皆んな寂しいだろ？」
「……別に？」
「えっ？」
そうなの？
「まあ、仲間が増えたら嬉しいけどね。……それより私達は、司令官に子供扱いされる方がずっと寂しいよ」
望月……。意外なこと言った。
「そうねぇ、こんな見た目でも、私達は子供じゃないのよ？ちゃんと女の子扱いしてくれなきゃ嫌よ～？」
如月が非難するかのような目をして言う。けどよぉ……。
「自分の娘くらいの年頃の子を本気で口説くのもさぁ……」
「あら？今は貴方も子供よ？」
これは一本取られた。そうか、今は子供か俺。
「そっか、そうだな。……でも、まあ、姿形が変わろうと、俺が俺であることは変わらないし。駄目なもんは駄目だよ」
「はぁ、凄いわねぇ、提督は。……私はね、ちょっと怖いの」
「何が？」
「艦娘ってね、どんなに怪我をしても、入渠すれば治っちゃうんですもの……。時々、自分が何なのか、分からなくなりそうで……」
頬に手を当て、憂いを帯びた顔で言う如月。
周りの艦娘達も、如月の言葉に同意するかのように首を縦に振る。
アイデンティティの欠如、か。うむ、前までと違って、各々「自分自身」を形成できているようで何よりだ。
えーと、何だったか、欲求の五段階説、だっけな。つまり、今の艦娘達は、衣食住や安全、所属などの低次の欲求は満たされ、今度は、尊厳や自己実現などのより高次な、内的な欲求を持ち始めた、と言うこと。
欲望は大事だ。満たされないからこそ、行動を起こす。行動を起こ

すことは、結果はどうあれ素晴らしい。
　そしてまた、自己について悩み、答えを求めるうちの艦娘達は、より高次な知的生命体となった、と言える。
「素晴らしい、素晴らしいな君達は。……自分を探すこと、自分が何なのか考えること、それはとても大切なことだよ」
　……人生は楽しむもの、それが俺の自論だが、そもそも楽しむというのは本人の感性による。そして感性とは、自分の中にあるもの。故に、自己実現とは感性の強化、「楽しみ方」の強化に他ならない。自分自身を磨けば、世界はもっと面白く見える。
「……もう、提督って、たまに難しいこと言うんだから」
「すまんな。……でも、少なくとも、俺は皆んなのことをちゃんと見ているから。どんどん新しい自分を探して、俺に見せて欲しい。それが俺の望みだよ」
　そして、自己実現を成し、他人に自らの心を伝えられるようになること。自己を通して何かを創り出すこと。それこそが本当の「モノづくり」だ。
　つまり、ＤＩＹ精神は世界を救う……！

「もう！私のどこを見たいのかしら？しょうがないにゃあ……、良いよ？」
　……物理的にって意味じゃねえけど、まあ、見れるんなら見とくか。
如月、かわいいし。

　この後無茶苦茶見た（意味深）。

６０話　おねショタ疾風伝　人

さて、如月の如月をじっくり鑑賞し、オータムクラウド先生のベタ塗りを手伝ったところで、風呂の時間。おねショタの総本山の人達に捕まれば、全身じっくり洗われてそのままファイナルフュージョンしてしまう恐れがある。よって、時間をずらして夜。今なら誰もいないだろ。

とか思いつつ、風呂へ。俺専用のドラム缶風呂？使用禁止令出たよ。お陰で今は艦娘と鉢合わせ無いように、鎮守府にある温泉に入っている。

……でもね、

「……ん？おお、提督か。……小さくなったと聞いたが……。ふふっ、随分とかわいらしくなったものだな」

「……おねショタのダークホース長門……!!」

大体、７０人近い鎮守府で、風呂に人がいない方が稀って言うね……。

そしてまた、温泉に現れる艦娘達……。

「ほら、古鷹、加古！立って！お風呂入るの!!」

「時雨と夕立もでち！しっかりするでち!!」

「て、提督が、提督の匂いが……」

「ち、違う？提督じゃない？いや、提督？提督、なの？いやいや、違う……」

あー、匂いが変わったからエラーが起きてるな。イムヤとゴーヤ、お疲れ。

……かわいそうに。古鷹達は、なんだかんだで襲いかかっては来ないし。ただ、これでもかとマーキングされて、性的に迫られるだけで。ステイの一言でやめてくれる。

……正直、女の子に、犬にするみたいにステイとか言うのはアレなんだけど、他に方法が無いし。あと、撫でると喜ぶ。お手もする。犬か。犬だな。

「そんな調子で夜戦は大丈夫だったのか？」

長門の問いかけ。なるほど、この子らは夜戦に行ってたのか。通りでこんな時間に風呂に来たのか。
「大丈夫でち。皆んな今日も擦り傷の一つもなし、撃破率百パーセントでち」
「ふむ、流石だな」
うちの最大戦力だからな、この子ら。夜戦だろうと何だろうと、この子らには安心して任せられるから良い。ん？でも待てよ、夜戦に行っていたのは、うちの古鷹達と潜水艦二人だったはず。長門は？
「あれ、じゃあ長門はなんでこんな時間に？」
「ああ、これだ」
そう言って、手元の日本酒を見せられる。
「隼鷹から貰ってな。折角だから風呂で、と言うのも乙なものだと思い、夜に一人で飲む予定だった」
おっ、良いじゃん。……あ、ちなみに、風呂で酒は普通の人にはオススメしない。危ないから。超人向け。
「俺も飲もうかなー」
「こらこら、やめておけ、今は子供だろう？」
ああっ！懐から取り出した山崎２５年が!!
「返して！」
「駄目だ！……ふむ、思えば、子供に触れるのは初めてだな。よしよし」
こらこら、抱きしめるな、そのでかい乳のせいで呼吸が出来ぬ。別に数時間くらいなら呼吸は不要だが、一応タップ。長門の腰を二回叩く。
「む？なんだ？嬉しいのか？……全く、しょうがないな。私で良ければ、これくらい幾らでもしてやるからな??」
「んむー!!」
ちゃうねん。
「こ、こら、暴れるな??」
だから、ちゃうねん、ギブアップだよ。

あっ、後ろに柔らかな感触。
この感じは……、加古か？
「ね、ねえ、提督？提督なんだよね？本当に？……んっ、れろっ……、味が提督のと少し違うよぉ……」
首の後ろ側を舐められる。味が違う？そりゃそうだ、何年前の姿だと思ってる？下に毛が生えて無いくらいの歳だぞ？
そしてまた、気が付けば片手を夕立に甘噛みされている。
「はむっ……、違うっぽい。提督はもっとゴツゴツしてて……、でも……、うううう、違う？違わない？」
混乱し過ぎ。……まあ、五感が鋭い弊害だよなぁ。
さて、それより、どうやって長門のホールドから逃れるか……。
取り敢えず、空いている方の手で、長門の身体を軽く押してみる。
「んっ??どうした？もっと強くか？」
逆効果。更にパワーアップ。どうするか、痛いことはしたくないし……。
えーと、じゃあ、つついてみるか。
「あん??て、提督？……ふふ、そうだな、たまには私に甘えてくれ??」
が、駄目。そうだ、腰に文字を書いてみるか！ええと、『はなして』と……、
「ああっ??て、提督！い、今は子供の身体じゃないか！そう言うことは、大人の時にしてくれっ！……で、でも、どうしても我慢できんと言うなら……??」
おっ、解放された。
「んっ??」
と、同時に長門の顎クイ、そしてキスを「喰らう」。
……思いっきり前歯が当たったんだけど、長門の丈夫さとパワーから察するに、平気なんだろう。長門は。……普通の人にやったら前歯全損だぞ？
……凄えな、めちゃくちゃ舌入れられとる。あ、お酒の味する。
「……っぷは！な、長門？そのキス、普通の人にはするなよ？危ないからな」

「大丈夫だ、口付けは、貴方にしかしないからな！」
何がどう大丈夫なんすかね？
……まあ、今回は、俺に甘えるかわいい長門じゃなくて、包容力のあるお姉さんの長門が見れて良かったってことで。
さて、ある程度あったまったら、部屋に戻って寝るか。明日には元通りだ。ガキの身体ではどうにも調子が狂う。

……で、現在。このまま部屋に戻れば、おねショタの総本山の人達に捕らわれるのは目に見えている。
故に、
「曙ー」
危険性が低そうな曙と潮の部屋に！
ノックとともに呼び掛けると、ドアが少し開く。
「……は？（威圧）」
えっ？いや、何か怒ってる？
「そ、その、良ければ、曙の部屋で寝させてくれないかな？」
「はぁ？（威圧）」
ひぇー。何で？何か悪いことした？夜だからか？もう寝てたとか？
「アンタ、何回言ったら分かるの？」
「な、何のことかな？」
「『ラブリーマイエンジェルぼのたん』でしょうが!!!!」
デレ過ぎィィィ!!!!
クソ提督はどうした?!!
「い、いや、曙はそんなキャラじゃ」
「そういうのいいから」
「えっ」
「そういうのいいから」

「で、でも」
「そういうのいいから。……呼んでくれるまでドア開けないもん」
ぐっ！中高生ならまだしも、????歳の俺がラブリーマイエンジェルぼのたんはキツイぞ？だ、だが、曙の部屋はこの鎮守府でも最も危険性が低い部屋！
……曙はどうやら、恋人気分でいちゃいちゃしたいだけみたいだ。だから、エロいことは恥ずかしがってしないし、キスの一つで顔真っ赤。すごく楽。潮ちゃんも恥ずかしがり屋だし、本当に危険性が低い。
暁型はもう響以外は寝てる。
吹雪型、朝潮型も軍人らしく早起きするからもう寝てた。
他の子もだいたい同じ。
ここ以外に行き場は無い！
「ぐっ、おお、ら、ら、ラブリーマイエンジェルぼのたーん!!一緒に寝よー!!!（ヤケクソ）」
「もー！しょーがないわねー??」
……もう、明日腹切ろう。今日は色んなものを捨て過ぎた。
「あら？どうしたの？膝から崩れ落ちて。……もう、ひょっとしてそんなに眠かったの？本当にしょうがないわね、と、特別に私が添い寝してあげるわ！こ、光栄に思いなさい？」
一人で盛り上がってる曙に抱き上げられ、そのまま布団の方に引っ張られる。……あっ、めっちゃいい匂い。しかもこの匂い、俺と同じシャンプー使ってるな？畜生、かわいいな、この子は。
「あ、て、提督？どうしてここに？」
潮ちゃん、藍色のパジャマ。清楚ながら、かわいさもあるデザイン。
「こんばんは、潮ちゃん。すまないけど、ここで寝させて欲しい」
「えっ?!そ、その、えっと……」
わたわたし始める潮ちゃん。
「何、部屋の隅に置いてくれるだけで良いんだ」
「そ、そんなことはできません！……え、えっと、わ、私の布団で良ければ……！」

「もー！私の隣よー？」
曙が口を挟む。
「じゃ、じゃあ、提督には真ん中に……」
そう言って、布団を二枚、ぴったりと寄せる。気を遣わなくて良いんだがなぁ。
「ああ、良いんだよ、本当に。予備の布団とかあるよね？それを借りても」
「ないわよ」「ありません」
「えっ？だって、部屋を改装した日に渡し」
「ないわよ」「ありません」
あれ？いつ姉妹が来ても良いように、布団を多めに渡した筈だが？
「いや、絶対に渡し」
「ないわよ」「ありません」
……あー、これ、食い下がっても無駄なやつだ。と言うか、急にハイライトさんが死滅するのやめない？怖いよ？
「……そっか、じゃあ、良いよ。君達が言うならそうなんだろ」
「はい。……では、提督？そ、その、ど、どうぞ！」
「あっ、あらかじめ言っておくけど、え、エッチなことしちゃ駄目だからね！……そう言うのは結婚してからなんだから!!」
あ、おかえりハイライトさん。

……と、言うように、この後は特にハプニングもなく、一日を終えることができた。
問題は、ズタボロの俺のメンタル。

誰か助けて。

61話　黒井鎮守府の奇怪な一日

《5：00》

あ、おはようございます！青葉です！先日の黒井鎮守府おねショタ事変によって、メンタルがボロボロになった司令官は、今日一日休むそうです！そして私も、奇遇にもお休み!!あー、これはもう、取材しかないですね！

……今は午前5時。毎朝司令官にキスをしに来る大淀さんはまだ来てません！今日は、私が……！

っと、その前に、監視カメラで司令官の寝顔を見ておこう。部屋に近付くと気付かれちゃうだろうし。

……。

あ～、かっこいい～！鋭い双眸、彫りが深めで、高くてシュッとした鼻、薄めの唇、キリッとした輪郭！

あ!!そう言えば、司令官は寝る時はズボンだけなんで、上半身は裸なんですよ!!……ああ!!ふ、布団がはだけて！さ、鎖骨が！大胸筋が!!肩から腕の筋肉が!!!

う、腕が！あ、あれ？腕が上がって……？こっちに手を振ってる?!

……う、嘘、嘘?!し、司令官にバレちゃってたの?!!い、嫌！絶対に嫌われちゃう!!

あ、謝らなきゃ！すぐに!!

司令官！ごめんなさい！ごめんなさい!!

「よう、おはよう青葉！朝はおはよう、だぞ？」

えっ、あっ、お、おはようございます？

「監視カメラ、位置が悪いな。置時計型じゃあからさま過ぎる。そうだな、火災警報器なんてどうだ？手の届かない所だからな、盲点だ」

……あ、あの、怒らないんですか？

「怒る？何で？」

だ、だって、私は、司令官のことを……。

「え？別に見られて困るようなことしてないし……」

そんなこと言っても、犯罪、です、よね……？
「大丈夫だって、艦娘だし。刑法は適応されないでしょ。多分。……でも、俺以外にはやるなよ？」
……その、それは最早、心が広いとかそう言う話じゃ……。
「ちなみに、机の裏には衣笠の盗聴器、本棚には夕張の特殊カメラ、窓の外には空母達の艦載機、屋根裏に羽黒。おーい、羽黒おはよう！」
「……うぅ、お、おはようございます」
あ、屋根裏から申し訳無さそうな顔の羽黒さんが！
「その、どうしてバレたんですか？」
「気配」
「えぇー……」
……えっと、その、羽黒さんは、よくここに？
「ここ一ヶ月毎日だな。五時ちょっと前には屋根裏にいるね」
えぇー……。何で動じないんですか？いや、本当に。
「見せて困るようなものは、見せないようにしているからなぁ。追跡も困る時は撤くし」
そ、そうなんですか。寝ているところくらい、別に構わないと？
「うん、良いよ。何が楽しいのか全くの謎だけど」
えっと、その、あ、ありがとうございます？
「どういたしまして？」
……まあ、許可があるなら、良いか。
あ、そうだ、司令官、キスしてください！おはようのキスですよ！
「はいよ」
ほっぺじゃなくて!!

《０８：００》
さて、朝食の時間。最近は、食事中でも司令官の周りに人が集まるようになりました。……と言っても、大体は、司令官のあまりの食べっぷりに、勝手に胸焼けしたりして帰って行きますが。
私？私はもう、慣れました。いつも司令官のことを見ていますから。……いつも。

「もぐもぐもぐも

結局、司令官はあの後もろーちゃんを膝の上に乗せっぱなしだった。まあ、娘か何かだと思っているんでしょう。そうに違いないです。

さて、お昼前、既に昼ご飯の用意を済ませた司令官は、帰ってくる遠征組の出迎えをするみたいです。

……駆逐艦や軽巡の相手ばかりは良くないですね、重巡も構ってくれないと……。

「青葉、今時間ある？」

えっ、あっ、はい！

「じゃあ、一緒に出迎えに行こう」

あ、手を繋いで……。

……えへへ。

海岸、司令官と手を繋いで、一緒に出迎え。こうしてみると、まるで、ふ、夫婦みたいです！

「しれぇ！見てください！ジュースみたいなの拾いました!!しれぇにあげます！」

「……こいつは……。飲んでないよね？」

「はい！天龍さんが、猛烈に嫌な予感がするから飲んじゃダメって……」

「そっか、良い判断だ。……良いかい、雪風？君は正しく、そして幸運だ。……だが、世の中には知るべきでないこと、知る必要のないことが沢山ある。即ち、これについては忘れなさい」

「……？、はい！よく分からないけど、忘れます!!」

……その、一応聞きますけど、そのキラキラした赤い液体の入った瓶は、何なんですか？

「とある海底都市の負の遺産」

……まあ、深くは聞きません。司令官が話さないと言うことは、相当不味いってことですから。

前、司令官が読むなと言った本をこっそりと読んだら、鎮守府中にモンスターが召喚されて大騒ぎになりましたからね。もう二度とし

ません。

《15：00》

「提督提督！見てください！艦娘の好感度が分かる眼鏡です!!!」

「でかした明石!!……よし、明石イ！こっち見、あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!!!!」

「提督ー”ーーー!!!!!」

ちょっと!!何してるんですか!!!思いっきり爆発しましたよ、あの眼鏡!!!!!

「すみません!!あれ、100までしか測れないんです!!!多分、私の好感度が高過ぎてオーバーロードしたのかと!!」

なんてことを……！

「まあ、何ともないけどね」

司令官が無事だからと言って、何をしても良いと言う訳じゃないんですよ!!?

ねえ！司令官!!

「え？構わないよ？面白いし」

もー！司令官は皆んなに甘過ぎます!!

「うーん、厳しい方が良い？だったら、この前、青葉が召喚したモンスターに囓られた件なんだけど……」

優しい司令官が大好きです!!

《17：00》

司令官は、これから仕事みたいです。……司令官、何の仕事をしてるのか、本当に謎ですね。最初の頃は普通の書類仕事だけだったのに、今じゃ会社を作って、海域の解放によって盛んになり始めた貿易系の事業を展開している、とか。

それで、具体的に、今日は何を？

「んー、会議？」

はあ、会議、ですか？

……誰と？

「世界征服友の会と」
……また怪しげな……。大体にして、世界征服は趣味では？
「いやぁ、何だか最近、金に余裕が出てきたし。本格的に事業として活動をしようかなぁ、と」
まあ、司令官が望むなら、私は何でもしますよ！
「あら、じゃあ、ちょっと秘書やってくれる？」
……はあ、秘書、ですか？

《１８：００》
行き着いた先は、神奈川県川崎市の某所、普通の一軒家。
何で？悪の組織なんですから、もっと、こう、何か、あるじゃないですか!!
あ、でも、目の前の複数のモニタは悪の組織っぽい、かな？
「ああっ！何で悪の組織の定例会にヒーローがいるんだ!!」
「よー、食いもんは？あんだろ？出せよ？」
……ヒーロー？
首から下がチンピラなんですけど、ヒーロー？
「レ、レッドさん、今日は悪の組織の定例会だから！勘弁して下さいよ!!」
「一号くん……！」
「あ〝？」
「……何でもないです」
「一号くん……」
なんでしょう、あのぞんざいなデザインの戦闘員と将軍は。
あとは、居眠りしている赤い地下鉄職員みたいなおじさん。モニタには灰色のロボットや、謎の科学者が
映っている。
なんなんですかね、この状況。……ああ、赤いマスクのチンピラが、将軍っぽい人の襟首を掴んで……。
「うるせーよ!!大体にして、悪の組織の定例会だぁ？尚更止めるに決まってんだろ！アホかお前ら!!」

「レ、レッドさん！落ち着いて!!」
「黙ってろ!!」
あー、もう滅茶苦茶ですよ。

《２０：００》
「はい、じゃあ、定例会を終わります。……『森林再生のもたらす自然エネルギーとその利用について』の発表者、破壊大帝メガトロン様に拍手!!」
司令官の指示通り、悪の組織の人達は皆、拍手をした。
『いやあ、助かるぞ諸君！世界征服を望むもの同士、手を組まねばな！ではな！ハハハハハ!!』
そう言って、モニタに映る人々やロボットは、画面の電源を切っていきました。そして、全てのモニタから通信者がいなくなると、司令官はモニタを懐にしまいました。
……その、なんて言うか、かなり真面目な話をしてましたね。全員が、世界征服の具体案を提示し、ディベートし、征服後の展望や新たな技術について話し合っていました。
しかも、全員がまともなことを言ってましたし。世界征服によって世界を幸せに、平和に、ですか。皮肉なものですよね、悪の組織が平和を目指し、国家の大本営が平和を乱すんですから。
……あ、さっきの赤いマスクのチンピラは、司令官に駆逐艦の写真を見せられ、「この子達も働いてる」と耳打ちされると、目に見えてテンションが下がりました。今はパチンコ屋に行ったそうです。……ヒーロー？
「よーし、会議も終わった訳だし、飯にしようか」
「あ、私、唐揚げの下味つけておいたの」
「よし、わしも手伝おう！」
……こんな人達なら、世界征服を応援してあげても良いかもしれませんね。
「あ、青葉も手伝って」
あ、はい。

そんなこんなで、晩御飯の筈が、やたらと家庭的な悪の組織のトップ達が張り切り、料理を作りすぎて、いつの間にか宴会に。

私も、楽しそうな雰囲気に釣られて、ついつい飲み過ぎちゃいました。

気が付いたら、明日の朝に……。こう言うのって、何だか、良いですね……。

62話　侵入者　前編

いつもと変わらない日常。退屈はお断りだが、ここ、黒井鎮守府の日常と言うものは……、
「提督！大変です!!」
……実に飽きない。

「はいはーい、どしたの？」
大淀は大好きだ。こうしていつも俺に刺激をくれる。さあ、今日は何だ？工廠が爆発したか？地下室から謎の呻き声か？
「見知らぬ艦娘達が、この鎮守府に攻めてきました！」
「……えっ、なにそれこわい」
全くの予想外。え？だからさ、ギャグｓｓだよ、これ？
「大怪我をした艦娘を抱えて、ドックを占拠しています！出て行かないと殺すの一点張りで……！」
「えっと、取り押さえられなかったの？」
「それが、それなりに強くて……」
えー？うせやろ？うちの艦娘なら、並の艦娘なんて子供扱いできるんだけどなー？
「分かった、取り敢えず、見に行くよ」
「私もお伴します！」

「出てこーい！お前らは完全に包囲されているー!!」
なーにやってんだ那智。刑事か。刑事だな。那智だもんよ。もしくは宇宙海賊。
「む、司令官！……それが、今度は資材を出せと……」
分からんなぁ、自分の鎮守府に帰れば……、いや、帰れない状況なのか？よく分からん。
「経緯は？」
「うむ、そのだな、私達が出撃を終えて帰投する途中、艦娘の集団に会ってな。そいつらは皆、多かれ少なかれ負傷していたが故に、帰投

を勧めたんだ。だが……」
「駄目でしたー！・裏口も閉鎖してますー！」
　比叡？・そう言うことは立て籠もってる人達を刺激するから止めようなー？
「比叡!!……全く。で、その、帰投を勧めたんだが、自分達の鎮守府は遠いから、修理だけさせて欲しい、と言ってきてな。まあ、特に問題は無いと思って招き入れたら……」
「こうなったって？」
「……ああ、私のミスだ。済まない……」
「大丈夫大丈夫、那智に過失はないよ」
「だが……」
　那智、そういうのうちやってないから。責任がどうこう、とかって面倒だろ？・だから、無礼を承知で無視する。
「ところで、相手は何人？・艦種は？」
「……その、相手なんだが……」
「何？・どうしたの？」
「……航巡がいるんだ」
「……何だって？」
　あり得ない、航巡は、ロック装置を導入しているここ、黒井鎮守府か、音成鎮守府にしか存在しない筈だ。そして、音成鎮守府には航巡が存在しない。
「招き入れたもう一つの理由なんだが……、何故航巡がいるのか、それが聞きたくてな……」
「成る程、ファインプレーだよ那智。俺も是非聞きたいね」

　そして、ドックから出てきた五人の艦娘。皆んな、一様に、悲愴感が漂っている。
「資材を！・早く出して下さい!!」
　ボロボロの砲塔を構え、ドックに置いてあったナイフを構える長髪の美人さん。……艤装は、うちの那珂ちゃんと同じだ。と言うことは、川内型か。

他にも、後ろには、恐らくは睦月型であろう駆逐艦が二人。片方はおっとりした顔、栗色の髪のポニーテール。もう片方は少し鋭い目、癖が少しある白髪。
更に、多分綾波型の駆逐艦が二人。一人は、黄みがかったブラウンの髪、頬に絆創膏。もう一人は、薄いピンクの髪をツインテールにしている少女。
全員が、ボロボロの武器を構え、ドック内の工具で武装している。
おまけに、
「ありゃあ、瑞雲か。うちのじゃないな。音成鎮守府のでもない」
成る程、所謂、制空権を取られた状況ってことか。
それに、あっちの艦娘達も結構やるな。構えられた武器の狙いは正確、感じるエネルギーの大きさは通常の艦娘の数倍。うん、うちの子達じゃ、無傷で捕らえろってのは無理だな。殺すことは出来るだろうが、それは駄目だし。
緊張の一瞬。
そして、目の前の川内型の子が問いかけてくる。
「……貴方は、この鎮守府の人ですか？」
質問の最中でも気は抜いていない。厄介だな。まあ、質問の内容は是だ。
「私の名前は、新台真央。ご覧の通り提督さ」
「（ご覧の通り……？どの辺が提督なんでしょうか？）わ、分かりました。……ふっ！」
恐ろしく速い踏み込み。俺じゃなきゃ見逃しちゃうね。瑞雲が俺達の目の前を急降下、同時に俺は、川内型の女の子に取っ捕まる。
「くっ！司令官!!」
「動かないで!!!」
逆手に持ったナイフを俺の肝臓付近に向ける川内型の子。あ、身長差的に首は無理だったみたい。かわいい。
「くっ！司令!!……あ、いや、大丈夫ですね、司令ですし（小声）」
比叡、ダダ漏れ。
「……？、取り敢えず、大人しくこっちへ！」

俺を逃さないように、がっちりと胴に手を回し、拘束する川内型の子。うむ、抱き付かれるのはいいなー。もうちょい強くても良いのよ？

×とか思っていると、そのまま引っ張られ、力づくでドックにぶち込まれた。

×そこで、俺が見たものは……

×

×

×

×……私は、浦野鎮守府に所属「していた」艦娘、川内型の二番艦、神通。

×浦野鎮守府では、最近、『強化装置』なるものを試験運用的に導入した。

×これは、艤装と肉体との同調率を無理矢理上げて、艦娘の戦闘能力を増加させるものだ。

もちろん、私達の肉体にかかる負荷は、尋常ではない。

……そして更に、『改造』と『改修』……。

艤装が本体である私達は、艤装に手を加えられると、存在の根底が揺らいでしまう。……しかし、強化装置で無理矢理に強化されたこの身体ならば、艤装の強制的な改造にも耐えられた。耐えてしまった。

あの時は、常軌を逸する苦痛に気が狂いそうになったが、艦娘というのは人間よりもずっと丈夫だ。肉体も、精神も。

……だからと言って、そのまま耐え忍ぶことは、出来ない。

私達はもう、限界だった。

そして今日、私達の元に思いがけない幸運が訪れた。

浦野鎮守府から遠い海域で、他の鎮守府の艦娘と出会ったのだ。

今しかないと思った。

確かに、逃げたところで何にもならないだろう。だけど、私達は、あの苦痛から逃れたい一心で、案内された鎮守府に押し入った。

そして、紆余曲折の末に、ここの鎮守府の提督らしき人物を捕らえ

ることに成功した。
　そして今、私達が占拠したドックでは……。
「あ、あの？貴方は、何を？」
「はいはい、動かないの。かわいい顔してるんだから、怪我しちゃ駄目だよ？ほら、ここも！顔に切り傷なんて！そっちの航巡の子、最上ちゃんと三隈ちゃん二人と、川内ちゃんは入渠してて!!」
　何故か、治療を受けている。
「よし、こんなもんか。全く、こんなに怪我してたら、取り押さえるどころじゃないな。……あっ」
　……取り押さえる？
「どういうことですか？」
　即座に、目の前で座るこの提督（？）を抱き寄せ、首筋にナイフを添える。
　だけど、この人は、リラックスした様子でこう言った。
「いやぁ、取り敢えず様子見と思って潜入したんだけどね。思いの外怪我人が多くてさ？」
　ヘラヘラと……！
「質問の答えになっていません……。まさか、自分が殺されないとでも？」
　脅しつけるため、申し訳ないが、首筋を軽く、軽く……、あれ?!斬れない?!!
「ああ、俺はそう簡単には殺されないねぇ!!」
　不味っ、手を掴まれ……!!
「はい霧吹きー!!」
　何、霧、これ、は、く、すり……！か、身体に力が……!!
「お前!!神通に何をしたぁ!!!」
　川内、姉さん、駄目、です……!!
「ンッンー、明石謹製ウルトラ筋弛緩剤ィ……。霧吹き一つで艦娘すらダウーン、もちろん俺には効かない。……ああ、副作用とかは特に

ないよ。安心して捕まってほしい」
「このぉ!!!」
駄目です！艦娘が、人を、殴ったら……、?!!
「いいパンチだ、感動的だな……、だが無意味だ」
「……嘘でしょ？」

「言ったろ？取り押さえるってよ？今なら全員メイド服で許してやるよ」

63話　侵入者　後編

貫手！……駄目だ、逸らされる！
掌底！……これも駄目、捌かれる！
肘打ち！……軽く身を躱される！
さっきから殆ど全力全開、人間ならとっくに命はない速さと重さ！
フルパワーを出している筈なのに!!
「クソ！どうなってるのよ、アンタはっ!!!」
「成る程、速いねぇ。那珂ちゃんもびっくりするぜ、こりゃ」
「えいっ!!」
密かに隠れていた文月ちゃん、真後ろから、死角からの一撃！
「はい残念ー」
「ひゃあ！は、離し、て!!」
「霧吹きシューー」
「ふにゃあ……」
「文月ちゃん!!」
そんな……!!振り向きもせずに?!!
「貴様！よくも文月を!!」
「菊月ちゃん、激こうするんじゃあない……。過ぎた怒りは拳を鈍らせるって、それ一番言われてるから」
突貫した菊月ちゃんは、事もなさげに、簡単に捕まる。
「くっ！川内！今だ!!」
「!!、分かった!!」
いや、簡単に捕まったのはブラフ。即座に戦況を分析した菊月は、普通のやり方では勝てないと踏んだのか、この男の片腕を封じるように掴んだ。
……やるなら、今！
菊月の声を聞いた朧ちゃんと漣ちゃんも、ドックの中にあった頑丈そうな大型のハンマーを振るう。
私を含むて、三方向からの同時攻撃……!!回避も防御も不可能!!
これで、終わり!!!

「ムテッペキ、っと」

……は？た、盾?!

「ほらほら、呆気に取られちゃ駄目駄目。……霧吹き、と」

「ハフン……」

「ひゃぁあ……」

「馬鹿、な……」

……駆逐艦が全滅？四人の駆逐艦が全滅？三分も経たずに？ば、化け物か……？

「……何を、したの……？」

「昔、異界のとある民族と知り合ってなぁ……。彼らは、世界の果てを見つけられたんだろうかね……」

しみじみと、昔を懐かしむように言う男。くっ、話すつもりはない、と言う事ね。

その時、瑞雲が割り込む様に私の前に飛来した。これは、最上のだ！

「そこまでだよ……！」

「もう弾も殆どありませんけど、一度の戦闘くらいなら……！」

最上と三隈だ！……だけど、まだ怪我が……。何より、戦いで失った体力気力は戻ってないのに！

「ボク達なら大丈夫、十分休んだよ……」

「それより、ここが正念場ですわ。……この人をどうにかしないと、私達は終わりです」

そう言って、武器を構え、瑞雲を展開する二人。数は少ないとは言え、複数の瑞雲で包囲すれば……!!

「あーあーあー、困るんだよなぁ、ドックでドンパチは。直すのも掃除するのも俺だしね？すまないけど、チート使わせてもらうね？」

どこに隠し持っていたのか、明らかに怪しい、大型の注射器を取り

出した！
「また薬?!しかも、見るからに怪しい!!」
あんな真っ赤な薬品、あってたまるか！絶対に注射されたくない!!
ところが、この男は……。
「せえの、えいっ、と。……ああ、嫌だなぁ、これ。気持ち悪いんだ、変異ってのは」
「な、何を!!?」
自分自身に?!!
そして、手のひらを翳すと、

「……サイコキネシス」
「?!、瑞雲の制御が……!!」
「私の主砲が?!!」

「……超、能力……?!」
……冗談じゃない!!手を触れずに、私達から武装だけを奪うだなんて……!!これじゃあ、もう……!!
「打つ手なし、かな?……ではお休み、お嬢さん達。良い夢を……」
そして、呆気に取られた私の目の前にあったのは霧吹きだった。
……意識が、落ちる。
×××
×……ごめん、皆んな……。
×××
×××
×……ここは、どこ？
×……ボクは、ボクは航空巡洋艦の最上、最上型の一番艦で、それで……。
確か、そうだ、ボクは、自分の鎮守府から逃げ出したんだ。
……でも、一人でじゃない、鎮守府の皆んなと一緒にだ。

……皆んな？皆んなは？皆んなはどこに?!……少なくとも、ここにはいない、みたいだ。
ここ、この部屋にあるのはベッドだけ。窓もないし、他に家具らしい家具もない。……何でボクは、こんなところに？
……あ、水道、それと、小さなテーブルにコップが置いてある。そう言えば、喉が渇いた。失礼して一杯、水を飲む。

……そう、何か、喉が渇くようなことをしたんだ。多分、戦闘行動か何か。
……ここで寝ていたと言うことは、負けたってことかな？……艤装は、武装が外されてる。
やっぱり、負けた？じゃあ、死んだってこと？……でも、ここは、あの世にしては無機質過ぎる。なら、捕まった？仲間もここに？
……分からない。けど、少なくとも、ここにいては何も始まらないことくらいは分かる。
目の前にあるドア、この先に答えがあるのかどうかは分からない。でも、進むしかない。逃げ出したボクに、帰る場所なんて無いから……。
そして、意を決して、ドアを開く。

「誰かなぁ、そこにいるのは？」
「ん”ん”っ!!?!!」
へ、変な声出ちゃった！な、なにこの、何？何なの？誰なのこの、馬のマスクの人!!
「自分のこと、知らない？じゃあ、そのままにしておくべきじゃない？」
「い、いや、ボクは」
「でも俺は君を知っている」
「?!」
まだいた！鶏？何で?!
「俺の顔を見て？以前会ったことが……、あるよね？」

「い、いや、マスクだし」
「知らないですわ!!ここに招いた覚えもありませんことよ!!」
「?!!」
　また増えた?!こ、今度はフクロウ、かな?何なの?!幻覚?!どう言う幻覚なのこれ?!!
「え、えっと、その、ボ、ボクは」

「……本当に思い出せない?」
　鶏のマスクの男が言う。
「……その、ごめん、あんまり覚えてなくて……」
「じゃあ、ヒントをあげよう……。黒井鎮守府、ドックの占拠、提督の捕縛、返り討ち……」
　……不思議と、単語の一つ一つに聞き覚えがあった。

　……そう、そうだ、ボクは……。

「……貴方は、黒井鎮守府の、ボク達が迷惑をかけた鎮守府の、提督……?」
「あ、思い出した?」
　……あ、普通に脱ぐんだ、そのマスク。
「じゃあ、こっちは……」
「はーい!鈴谷だよ!初めまして、いや、船の時以来だし、久しぶり、かな?」
「熊野ですわ、以後、よろしくお願いいたします」
「鈴谷!熊野!!」
　ボクの妹、鈴谷と熊野だ!こんなところで会えるなんて……!!

　……そっか、そういうことか。
　……もう、悔いは無い。
「……提督さん」
「なにかな?」

「最後に、妹達に会わせてくれて、ありがとうございます」
「最後に？」
「え？はい。だって、提督に暴力を振るったんですから、処刑ですよね？」
「いやいやいやいや!!しないってば！思考回路が怖いよ!!」
「では、解体ですか？」
「何で死ぬことが前提？俺ってそんなに怖い見た目してる？」
……？
　じゃあ、なんでボクを生かしておいたのかな？……正直、浦野鎮守府に帰るくらいなら、死んだ方がマシだ。いっそ、ここで殺してもらった方が……。
「あー、調べたよ、浦野鎮守府のこと。相当な悪徳鎮守府だったね」
「え？」
「いやあ、胸くそ悪いね。かわい子ちゃんに酷いことするやつは大っ嫌いだ。……だから、消えてもらった」
「……どういう、ことですか？」
「浦野鎮守府は提督が謎の鶏マスクに襲撃され重体、二度と復帰できないってよ」
　……鶏マスク？
　鶏マスク?!!
「じゃ、じゃあ、貴方が?!!」
「保有している艦娘は全て行方不明、轟沈したとして扱う、だって。……同時期、ここ黒井鎮守府では、建造を行い、最上、三隈、川内、神通、文月、菊月、朧、漣の計八人を召喚、黒井鎮守府の所属とする」
　どういうこと?!理解が追いつかない!!
「その、えっと、それは……」
「……あー、つまり、黒井鎮守府へようこそ！歓迎しよう！盛大にな!!」
「そんなこと言われても、もっと詳しく説明して下さい!!」
「えー？だってもう説明するの八回目だし……。ま、良いか。じゃあ、

説明しよう。あれは昨日、君達が薬で倒れて、疲労のせいで丸一日寝ていた日の話だ……」

６４話　ホットライン鎮守府

「……提督、浦野鎮守府でしたっけ？……ぶっ殺しちゃいましょう」
「落ち着いて、明石」
「私も賛成です。叩き潰しましょう」
「はいはい、ドリル置いて、夕張」
　目が座ってる、ヤバい。
「提督だって分かるでしょう?!自分が作った技術が、こんな不細工な出来損ないのゴミに流用されるだなんて!!絶対に許せない!!!」
「この『強化装置』でしたっけ？これを作ったウジ虫には、死んで詫びてもらわなきゃ……」
　二人共、言葉遣い、言葉遣い。
　……にしても、『強化装置』ねぇ。確かに、これじゃロック装置の量産型、というより、劣化版だ。
　ただ単に、艦娘を手っ取り早く強化することしか考えていない、そんな感じのもの。また、捕縛した艦娘達にも無理な改造や改修の跡がある、とのこと。
　……酷えな。こんなに早く適合率を上げたら、艦娘の心身に大きな負担がかるだろうよ。
　それに、無理な改造と改修……。これは、言うなれば、生きた人間に直接、麻酔なしでメスを入れるような危険行為だ。
　何より、ロック装置の最も大切な、艦娘の魂を艤装から肉体に、徐々に移行する機構がない。
　この、魂を移行する機構があるからこそ、移行した分だけ艤装に拡張性が出来て、改造や改修が可能になるのだ。

　にしても、この装置、どっかで見た技法だな……。ん？このロゴマークは……!!
「……ブラックゴースト……?!」
「どうしました？提督？」
「あー、そのね、これは明石と夕張じゃ手に負えないし、行っちゃ駄目

だね」
「……私達じゃ、敵わないと？そんな強大な組織が？」
うーん、正直、艦娘でも不可能ではないけど、もしかしたら大型のロボットとか、強化サイボーグとかが出てくるかもしれない。その可能性がある以上、行かせることは出来ないな。
「まあ、今はもう残党だろうけどね。でも、何をやってくるか分からない、危険な連中だよ」
「……では、このまま指を咥えて見ていろと?!」
「そうは言ってない、専門家に任せろってことさ。……もしもし、島村さん？」
スマホを取り出し、とある知り合いに電話をかける。
『……はい、もしもし？島村卯月です！』
アッ！違う！アイドルの方だ！アイドルの方の島村さんだ!!ごめんな!!
「あっ、あー、その、ごめん、間違えた……」
『あの、旅人さん、大丈夫ですか？』
「いや、ごめん、間違い電話なんだ。……お宅のプロデューサーによろしく言っといて」
『はい！頑張ります！』
さてと、
「……もう一度！もしもし、島村さん？」
『……もしもし？島村ジョーです』
よし、サイボーグの方の島村さんだな。
「この辺にい、ブラックゴーストの残党、来てるらしいんすよ。じゃけん夜襲撃しましょうね～」
『なんだって！日本に?!……分かった、仲間達を集めてすぐに向かう！教えてくれてありがとう！』
……っと、これでＯＫ。製造元は後で叩き潰すから良いとして、まずは浦野鎮守府だ。
「じゃあ、俺はこれから浦野鎮守府にカチコミするから」
パパパッと着替えて、カチコミして、終わりっ！と。

「……なんですか、その鶏マスクとジャケットは」
「８０年代のマイアミでロシアンマフィアを殺してまわりそうな格好ですね」
「ホットラインマイアミ、絶賛発売中です。……さて、行ってくるよ。浦野鎮守府の件が終わったら、夜にはこの『強化装置』の製造元を潰すから、帰りは遅いね。鳳翔に、俺は夜いないから、晩飯頼むって言っておいてね」
「了解です！」

さて、やってまいりました、浦野鎮守府。場所の特定？グーグルマップって便利だよな。
あっ、憲兵だ。うちにはいないから珍しい。
「全く、提督殿も使えない。艦娘共が帰って来ないからおかんむりなのはまだ分かるが、こちらに当たらないでもらいたいな」
「その通りだな。所詮、艦娘を召喚することくらいしか能のない癖に、威張り過ぎだ」
ふむ、警棒で武装か。さて、押し入ろう。
まずは正門ドーン！二人の憲兵が吹っ飛ぶ。
そして、ダウンした片方に馬乗りになり、一撃。……あ、一応殺してないよ？峰打ちだから。
「ぐっ、一体何が……?!、お、お前は誰だ?!」
そして、倒した憲兵から警棒を奪い、今声を上げた憲兵に投げつけ、再度ダウン。
壁に叩きつけられた憲兵の頭に一撃、倒した。
さあ、進もう。
「なっ、何だお前、ホグァ?!!」
「ま、待て！や、やめアグッ!!!」
「来るな！来るな化けもギィッ!!!」
いやあ、精神コマンドは大事だね。刃物を投げつけても「てかげん」

しとけばＨＰが残るから。
さてさて、提督はどこかなー？
「クソ！どういうことだ?!艦娘共は帰って来ないし、さっきからやたらと騒がしい！一体何が起きているんだ?!」
ああ、ここか。
ハンマー片方に、ドアを蹴破って押し入る。
「な、何だ?!」
今は、証拠を残したくない。声を出さずに対処しよう。懐のテープレコーダーを起動させる。
『Ｄｏ　ｙｏｕ　ｌｉｋｅ　ｈｕｒｔｉｎｇ　Ｋａｎｍｕｓｕ　？』
「……何を言っている?!艦娘を傷つけるのが好きか、だと?!貴様、まさか、艦娘共からの回し者か?!!この私に復讐をしようとガァッ!!」
まずは一発。
「や、やめろ！艦娘共の言うことを聞いたところで何も利益はないぞ!!金が欲しいならごヒュッ?!!」
腹に蹴り。
そして、テープレコーダーを起動。
『Ｄｏ　ｙｏｕ　ｋｎｏｗ　ｗｈａｔ　ｔｉｍｅ　ｉｔ　ｉｓ　？』
ーーーこれから何をされるか、分かるよな？ーーー
「ヒッ!!やっ、やめっ……!!」

殺しちゃいないさ、殺しちゃあ、ねぇ？
だが、少なくとも、この男は二度と提督にはならないだろう。
二度とね。

65話　新人研修

息を、吐く。
すん、と鼻を鳴らす。潮風の臭いに乗ってくるのは、敵の臭い。深海棲艦の臭い。提督に仇なす愚か者共の臭い。
そして、こちらを取り囲む深海棲艦の臭いは、ゆっくりと闘争の臭いに変化していく。
私と背中合わせで、身の丈以上の剣を構えるのは、姉の古鷹。
古鷹は、次の瞬間に動くだろう。合図はいらない、私には分かる。
古鷹が動くと同時に、私は……、
「ブレストリガー……!!」
胸元の、一対の拳銃を抜く！
まるで居合のように、早撃ち一閃。
目の前の深海棲艦の脳幹を貫く。
飛び散った「脳味噌だったもの」が、顔に引っ付くが、気にすることはない。
死の匂いだから。敵の死の匂いは大好きだ。提督の匂いの次くらいには。
二丁の拳銃を交差させて構える。
二丁拳銃、ダブルトリガー、アキンボ……、まあ、何でもいい。好きに呼べ。
目的は何時もと同じ。何も変わりはしないのだから。

死を振り撒く。私達の、提督の前に立ち塞がる愚か者共を地獄に誘うこと……！
最早、艦娘としての大義はない。
艦だった頃の矜持は何処へやら、護国ではなく、惚れた男の為に命を懸ける、唯それだけの個人的な理由。
惚れた男の邪魔だから殺す……。
何と言う自分勝手。
しかし、この私の、私達の想いは、自分自身を以ってしても止めら

れやしない。
この身が艦娘でなく、悍ましい魔神と成り果てようとも、私達は提督の為に武器を振るうだろう。
そう、つまり……、

「神に逢うては神を斬り」
「悪魔に逢うてはその悪魔をも撃つ」
「戦いたいから戦い」
「潰したいから潰す」
「「私達に、大義名分などないのさ!!」」

そして、包囲している深海棲艦共が一斉に襲い掛かってくる。
……愚か。
こちらを囲む程度の知能が関の山なのか？
引鉄を引きながら、腕を開くように射撃、数多の銃弾を吐き出す。
開かれた腕は、まるで悪魔の羽だ。
そして、銃弾の全ては、吸い込まれるように深海棲艦の急所に当たる。一発も外さない。
ある者は胴体がはじけて、ある者は頭が吹き飛び、ある者は胸に風穴。
二丁の拳銃で地獄を彩る。

……半数程殺ったか？すると、深海棲艦共の動きが変化する。
成る程、剣を持った古鷹からは離れて、逆に、銃を持った私には近付く、か。
……全く、全く以って愚かだ。
そんなこと、予想しているに決まっているだろう。
飛びかかってきた深海棲艦。無駄だ、コンパクトに銃を振るう。顎をカチ上げるように銃口を突きつけ、トリガー。破壊する。
そして私は、銃を持ち替え、砲身部分を握る。……銃底に鋭利な刃が付いたこのブレストリガーは、手斧にもなるのだ。

……もっとも、私には、後ろで主砲を撃ちながら斬撃を飛ばす古鷹のような技量はない。だから、力任せに深海棲艦共の肉体を刻むことしかできないが。

近付いてきた深海棲艦を斬り刻み、ほんの数十秒。

さあ、そろそろ仕上げだ。

ブレストリガーを一つに合わせ、大斧に変形、すかさず周囲を薙ぐ。

真後ろの古鷹には何も言う必要がない。お互いの行動は分かりきっているから。現に、古鷹は跳躍、回避した。

そして古鷹も、跳躍後に斬撃。縦に一回転。もちろん、私は見ずに回避。先程言ったように、私と古鷹は一心同体。お互いの行動は、見ずとも分かるのだ。

さて、これで終わりだ。全滅だ。

振り向きざまに、後ろから迫る深海棲艦を斬りつける。同時に振り向いた古鷹も、私の前にいた深海棲艦を貫く。

×

「私達が、地獄だ!!」

×

×

×

「うわあ、派手ですねー」

相変わらず怖いなぁ、あの二人は。

……にしても、深海棲艦にも変化が見られますね。前までは、取り囲んだり、相手の行動を見て距離を変えたりなんてしなかったのに。

学習している？単純に性能が上昇しているだけではない？

まあ、良い。分析は私の仕事じゃないし。私、工作艦だもん。多分、大淀さんが資料でもまとめてるんじゃないかな？

……そんなことを考えていると、私の前にも深海棲艦が立ち塞がる。

「面倒ですね……」

だから、私は工作艦なのに……。

まあ、艤装の改造や改修を重ね、強化し続けた私は、自分で言うのも何ですが、強いんですよ。

万が一、怪我人がいても修理できますし、今回みたいな時には出撃するべきなんでしょうね。
しょうがない、です。
……別に、戦うのが嫌だとか、そう言う訳じゃありませんけど。こうして強くなったのだって提督の為ですし。
でも、私個人としては、提督に守ってもらいたいですよね！やっぱり、女の子ですし！
いや、艦娘だから、私が守るべき？うーん、どうなんだろう？

『ギギギギギギギ!!!!!!』
『ヴヴヴヴアア!!!!!!!!』
『ガァァァァァ!!!!!!』

……ああ、そう言えばいたんだっけ、深海棲艦。数はほんの2、30だけど、五月蝿いな、五月蝿い。不細工な化け物共が。
「はぁ、厭ですねぇ、喧しい化け物共は。美しい機械音ならまだしも、何で声を出すんですか？」
ベースのような燃える炉心の音は好きだが、深海棲艦の叫び声は嫌いだ。
鋼鉄のドラムのような銃声は好きだが、深海棲艦の撃つ砲のような湿った音は嫌いだ。
エレキギターのような震えるモーターの音は好きだが、深海棲艦の壊れた起動音は大嫌いだ。

……ああ厭だ、とっとと解体しよう。
そう思って、艤装に火を入れる。
……異常な改造をし続けた私の艤装は、既に『工作艦明石』のものではない。肥大化したタービン、炉心は最新式、増加装甲に強化スクリュー……。最早、艦娘であるかどうかも定かではない。
ならば、私を私たらしめるものは何なのか？何故に私は『工作艦明石』でいられるのか？

……それは一重に、愛だろう。
提督が好きだ。
百遍愛していると伝えても、この気持ちの一厘も伝わらない。
彼の為なら、私は何にでもなってみせる。彼の隣に居れるならば、何になっても構わない。
そうだ、今の私の技術力ならば、何にだってなれる。なってみせる。彼が望むなら、艦娘でも人間でもない何かになっても構わない！
「そう、こんな風に……！」
増設した両肩のハードポイントから、二本のチェーンソーを外す。
「チェインデカッター!!」
ああ、実にいい音だ。
モーターと言う心臓から伝えられた運動エネルギーは、まるで流れる血液の様にビートを刻む。
赤熱する程のエネルギーを持ったチェインデカッターは、深海棲艦の装甲も肉体もバターのように断ち切る。
最高、最高だ！
お次は新しい武器。
「ギークガン!!」
愛用の釘打ち銃を強化改造、武器として使用できるようにしたものだ。すぐさまセーフティーをリリース、景気の良い音と共に釘を射出。
深海棲艦は濡れた紙屑のようにボロボロだ。
我ながら素晴らしい出来！
最後はこれだ、いつもの。
「ライアットジャレンチ!!!!」
クレーンにマウントした巨大なレンチ。大きく、重く、そして丈夫だ。だけど、戦艦に匹敵する出力を持つ私にとっては最適の武器。
大きく振りかぶって、ぶん殴る。圧倒的なスピードと重さで振り回される大きな質量はそれだけで莫大な力を持つ。
艦種なんて関係ない、これに当たった深海棲艦は皆須らく潰れて捩

じ切れ、海上に屍を晒す。
相変わらず至高の道具だ!!

「……っと、こんなもの、ですかね？うちの鎮守府は大体こんな感じです！これからよろしくお願いしますね、元浦野鎮守府の皆さん!!」

「「「「え、いや、無理……!!」」」」
あるぇー？

６６話　ＫａｎＰｉｘｅｌ

『ＫａｎＰｉｘｅｌ!!』

「……何だ今の」

どこからともなく謎の声。か、かんぴくせる？何？

「ふっふっふっふっふっ……！」

「だ、誰だ!!」

「私達です!!」

工廠組！工廠組じゃないか!!今度は何した！

「見てください提督！特殊爆弾に位相軸偏位装置を取り付けた上に立体映像技術の応用を行なったスペシャル爆弾です！」

「分からないな、もうちょい詳しく」

「はい！これはですねぇ……」

工廠組、実はお喋りが好き。発明について話す時はノリノリだ。

……ふむ、なるほど。掻い摘んで言うと、俺の周りにいる艦娘の近くに突然爆弾が現れ、どうにかして２０秒以内に爆発を回避しないと、鎮守府が吹っ飛ぶ、らしい。

「えー、勘弁してよー。壊しちゃ駄目じゃん？」

「あ、そこらへんは大丈夫です。この前、提督がショタになった時に使用した、時間回帰装置の応用で、爆発の被害を受けたものはしっかりと爆発前まで戻ります」

しれっと言う明石。ご都合主義万歳である。

「それに、爆発はかなり派手ですが、生き物にはほぼ無害、吹っ飛ぶのは物質だけです！」

おそらく、火薬はこの夕張作なんだろう。嬉しそうで何より。まあ、被害がないなら良いか。

「本当に、誰にも迷惑がかからないのね？なら、構わないさ」

「やったあ!!」

何がそんなに嬉しいのか、理解に苦しむね。

「ああ、そう言えば、この執務室には監視カメラと盗聴器がありました

ねぇ？艦隊の皆さーん？今日は提督の周りにいると爆発する恐れがありまーす！気を付けて下さいねー？」
「はっはっはっ、嫌ですね、爆発する程度で提督に近付かないような艦娘は、この鎮守府にいませんよー？むしろ、皆さんは提督を気遣って会いに来るでしょうね！」
　え？何なの？なんで煽ったの？
「じゃあ、私達はこれで！失礼しました!!」
　……怪しい。聴覚に集中して、廊下を駆けていく二人に聞き耳を立てる。

　……「いやあ、中々悪辣な発想ですよねぇ、あの爆弾」
　……「あらゆる物質を破壊、ですからね、当然、艦娘の服もメイクも破壊されます！更に、鎮守府ごと破壊されるので、隠れ場所は無し！爆発した艦娘は、全裸で提督と向き合う羽目になるんですよ!!」
　……「この時期ですと、あんなところやこんなところの処理とかもしてませんし、下着とかも適当ですし、それを見た提督がなんて言うか……！」
　……「ふっふっふっ、どの道、提督に情けない姿を見られるだけで、艦娘には大ダメージですから！提督だけは、爆発から保護されるようにしましたし、艦娘は爆発した時点で、提督にじっくり見られてしまうんですよ！」
　……「やっぱり、この前古鷹さんとか那智さんとか、皆さん全員に叱られたの、根に持ってますよね、明石さん」
　……「何のことだかわーかりませーん」

　何だとぉ？合法的に艦娘の無防備な姿が見れるだとぉ？良いぞもっとやれ!!
　確かに、良く考えれば、入浴時に乗り込んで来る艦娘も、寝室に半裸で乗り込んで来る艦娘も、しっかりと勝負下着とかメイクとか何だとかで気合いが入っていた！
　例えば、陸奥とかは、最近はいつもメイクしていて、ノーメイクの

姿を見ていない!!
だが、忘れるなかれ、艦娘は、美人なのだ！
メイクの有る無し、服がどうこうなど無関係で美人!!世の中の女性に喧嘩を売るような、絵に描いたような美女ばかり!!!
そんな艦娘達の無防備な姿！見たい、見たくない？
よっしゃ、テンション上がってきた!!

「提督！怪我は無いか?!」
「えっ、無いけど？どうしたの長門？」
何で長門？常に無防備だよ、長門は。
服はジャージしか持ってないし、下着は安売りのスポーツ用、化粧の類は一切なしで、髪も伸ばしっぱなし。あと、どことは言わないけど、剃ってない。
「いや、爆弾がどうとか聞こえたんでな、心配で……」
「大丈夫、怪我人は出ないから。まあ、アトラクションか何かだと思ってさ？」
「む、分かった。……全く、また明石と夕張か。この前叱っておいた筈なんだがなぁ……。ん？提督、この、００：２０と書いてあるボードは何だ？」
「ここに浮いてるやつ？」
「ああ、表示が秒刻みで減っているそれだ」
あ、もしかしなくても、アレか。爆弾か。
「あー、長門、それ多分、爆弾。近くにあるんだと思うよ」
「……何？ならば、早く止めねば！」
周囲を見渡す長門。
「いや、そんなに本気にならなくても……」
「ここか？いや、ここだな?!……くっ、見つからないぞ?!……ああ、もう時間が!!うおおおおお!!!?」
『ＫａｎＰｉｘｅｌ!!』

「ぬわあああああああ!!!!」
「長門ー？無事かー？」
長門、下着の切れ端を残し、全裸に。
下着はいつもの安物、服はジャージ、髪も大分伸びたし……、
「……む、何とも無い、な。……いや、服が破れてしまったようだ」
いや、隠しなよ？恥じらいって欲しいんじゃないかな？
……ふむ、胸は相変わらずかなり大きい。腹筋は割れていて、かなりの筋肉。ヒップは肉付きがいいけど、それ以上に良く鍛えられている。
「長門、前を隠したら？」
「ん？別に見られて困ることはないぞ？」
いや、毛が……。かなり濃い。かなり硬そう。伸ばしっぱなしかよ。アリだな。

さて、長門の服と鎮守府は、あの後数分で元に戻った。マジで恥じらいとかないのね、あの子。
さあ、次はどうするか。
「提督！大丈夫?!」
「爆発音が聞こえましたわ?!」
もがみんにくまりんこ。カモが来たぜ。
最近はこの鎮守府にも慣れたらしく、俺ともよくコミュニケーションをとるようになった。
「もー、もがみーん？急に走らないでよー」
「三隈も、ですわ？ちょっと爆発した程度で、提督がどうにかなる訳がありませんことよ？」
カモ、追加。
お洒落番長の鈴熊シスターズの無防備な姿、私、気になります！
「で、でも、やっぱり心配だよ！」
「まー、私達も最初はそうだったし、慣れだね、慣れ。……ん？ところで、この表示は？」

よーし、爆弾発動。
「爆弾だってさ」
「何ですって！」
「あら？どこにあるんでしょう？」
慌てふためくもがみんとくまりんこ。逆に落ち着いている鈴熊シスターズ。
「大丈夫、大丈夫。さっきも長門が爆発したけど、怪我はないし被害も無かったからさ。安心して爆発してよ」
嘘は言ってない。長門にとっては、全裸はノーダメージだし。
「なーんだ、じゃあ平気じゃん！」
「そうですわねー、どうせ派手な爆竹のようなものでしょう。全く、人騒がせですわね、明石さんと夕張さんは」
うん、それを知ってるってことは、やっぱり俺の部屋を監視、盗聴していたんだね、熊野。
構わないけどね、覗き見る、ということは、自分が見られても文句は言えないってことじゃないかな？

『ＫａｎＰｉｘｅｌ!!』

「「「……へ？」」」
よし！見えたぁ!!俺の動体視力をもってすれば、一瞬で艦娘達のあられもない姿を脳内に焼き付けることが可能ゥ!!!
一斉に悲鳴を上げる最上型は、胸と股間を隠すが時既に時間切れ。
まずは最上と三隈。胸は小さい、明らかに日本人女性の平均以下だ。でも、ウエストはキュッと締まっていて健康的。血色も良い。切れ端から察するに、最上はスポーツ系の下着、三隈はレース系の下着だったな？手足も程よく鍛えられており、逆るパッションが伝わってくる。
毛はふわふわで薄め。手入れの必要がないくらいに。
対する鈴熊シスターズは、まあ、最上型らしく胸は小さい。でも、鈴熊は日本人女性の平均くらいだ。それ以外は、うーん、普通？戦艦み

たいに筋肉がある訳でも、空母達みたいに脂肪がある訳でもない、普通の女の子の身体。あと、メイクはしなくても可愛い。元が良過ぎる。
毛は濃いめ。しっかり手入れされてる。くっ、お洒落番長に隙は無かった！
「て、提督～！ボクを見ないでぇ～!!」
「うぅ～、み、見てませんよね？提督？」
「そ、その、いきなりはちょっと、こ、心の準備がね？」
「い、いつ見せて恥ずかしくないようにしていますが、その、今すぐは……」
いやぁ、最高ですね。
段々と、最上型の服が戻ってきたところで、次のターゲット。

弓道場。空母達を襲撃。かなり肥えたもちもち空母達には是非反省してもらいたい。夏までには痩せるつもりらしいが、その気概が見えないので、発破をかけてやろう。
「あれ、提督？どうしました？」
あっ、鳳翔さんも巻き込んじまった。まあ、良いか。ほら、好感度を下げなきゃ。ね？
さて、ここにいるのは一航戦、ダブルドラゴン、鳳翔さんの五人。
あ、加賀さんの前にタイマーが。
「？、何でしょうか、これは？」
「爆弾ですって」
「ああ、今朝の……」
「あれですね、明石さんと夕張さんの」
「特殊爆弾とか言ってたけど、大丈夫なの？」
「爆発したところ、煙で見えなかったんだよね」
「そう言えば、航巡の子達に怪我はありませんか？」
あれあれー？なーんで全員知ってるのかなー？窓の外にある艦載機、全部君らのかー？

「ま、まあ、ほら、爆発しても大丈夫だよ、航巡の子達は皆んなびっくりして悲鳴を上げちゃったけど」
嘘は言ってない。
「そうですか」
「あ、これじゃないですか、爆弾」
「見つけましたね、どうします、赤城さん」
「うーん、もう時間がありませんし、いっそ壊して見ましょうか」
「了解です。……えい」

『ＫａｎＰｉｘｅｌ!!』

知ってた。
「「「「……!!!」」」」
全員フリーズ。
それと同時に脳内レビュー。
まずは一航戦。おっぱいは大きめ。ウエストは出てる。もちもち。二の腕も太ももももほっぺたもお尻も、もちもち。おいしそう。ダイエットとは一体なんだったのか。
毛は……、とっ散らかってる！人に見せないからって！
ダブルドラゴンも同じ。黒井鎮守府体脂肪率ランキングの上位を独占する空母らしく、全身ぷにぷに。おっぱいはかなり大きい。鎮守府内でもトップクラスだよなぁ。
毛も同じく、とっ散らかってる。けど、一航戦と違って薄い。
鳳翔さん、空母達と違ってスレンダー。華奢で小柄。胸も小さい。これぞヤマトナデシコ、なるものなんだろう。
毛は薄い。しかもちゃんと処理してある。
「あー、その、なんだ、君達はもうちょっと出撃回数を増やした方が良いかな？」
ふわふわもちもちで大変よろしいが、このまま際限なく太ると危険が危ない。運動量を増やしてあげよう。
未だにフリーズしている皆んなの肩に手を置いて、

「大丈夫、艦娘だから、痩せるなんてすぐだよ」
おーっと、空母達、全員膝から崩れ落ちたー！

まあ、そんなこんなで。
『ＫａｎＰｉｘｅｌ!!』
「!!」
「?!」
「あー、金剛とウォースパイトは全部剃ってるのか」
『ＫａｎＰｉｘｅｌ!!』
「な、な、なんやこれー!!!」
「えっ、りゅ、龍驤、生えて、ない？嘘だろ?!」
『ＫａｎＰｉｘｅｌ!!』
「「「きゃあああああ!!!」」」
「潮ちゃんだけ生えてる、と」
『ＫａｎＰｉｘｅｌ!!』
「あは、見たかったならそう言ってよ提督」
「！　私達の身体に興味があるっぽい？」
「生えてないのね。……待って、雲行きがおかしい」
『ＫａｎＰｉｘｅｌ!!』
「提督、女に飢えているそうだな。俺を使ってくれ！」
「木曾、結構濃いめ。……え、なんで初めから全裸？しかも、今度は何、そんな噂になってるの？酷くない？」
『ＫａｎＰｉｘｅｌ!!』
「待って古鷹！待って!!あああああ!!!陸奥ああああああ!!!」

ふぅ。

パンツ持ってかれた。

67話　オーバード建造

最近、深海棲艦達が明らかに強くなっている。
前までは、ただ叫び声を上げながら襲い掛かるだけだったのに、今では、艦娘を取り囲んだり、位置取りの変更や陣形を組んだりするようになった。
更に、基本的な性能も向上しており、今ではフラグシップが戦隊を組んで現れる始末。
そのせいで、よその鎮守府ではかなりの被害が出ているそうだ。すでに、多くの鎮守府が閉鎖した。
……でも、その事実は国民に伝えられることはない。かつての大本営のように、勝っていると偽り続けるつもりだろう。それは構わないさ、要らぬ混乱を招くのは良くないし。
問題は、
「その、提督、元浦野鎮守府の方々を受け入れたのは良かったんですけど、どうやって大本営を誤魔化しましょう？」
それなんだよなぁ。
「うーん、建造したって事になってるし、資材をどっかで消費しないと……」
「でも、艦娘八人分ですよ？消費だなんて、とても……」
んー、そうだよなぁ、量がなぁ……。
買い集めたものだけど、無駄にするのは忍びないし。
どうすっかなぁ……。
「……じゃあ、逆にさ、本当に建造するのはどうかな？」
「……その、それは……」
「そうだ、そうだよ、何で態々マニュアル通りやる必要があるんだ？いつも通り行き当たりばったりでやるべきじゃない？」
「い、いや、その、規定量が」
「もうね、最近忘れてたけど、俺って他人を振り回す側でしょ？最近はちょっと慎まし過ぎたんじゃないの、とか思ってさ？」
「すいません、十分好き勝手やってると思います」

そう、そうだ、いつも通り、俺は俺の道を往く。
「そうと決まれば、行くぞ！ついて来い大淀！」
「えぇー、大丈夫なんですか？その、提督がそんなに気合いを入れると碌な事にならないですし……」
難色を示す大淀。
やはり、前々回の明石謹製大型ロボット大暴走事件が尾を引いてるのか？いや、前回のスーパー媚薬無差別散布事件か？いや、前回は鎮守府大爆発事件だったかな？
うーん、どうするか。どうやって大淀を言い包めるか。
よし、
「なあ、頼むよ大淀」
ずい、と壁に追い詰める。
「あっ??……はっ?!い、いや、だ、駄目です！前みたいにいきなり裸にされるのは困ります!!」
もう一押し。壁ドン。
「お願い！ね？」
「ひゃん??ら、らめれすぅ??」
くっ、やはり、大淀が誰にも見られないだろうと慢心した結果の、安物の下着と未処理の下の毛をバッチリ見てしまった件が尾を引いているのか？
あの時は慰めるのに苦労したなぁ。
さて、どうするか。
うむ、軽く屈んでもっと距離を詰めるか。
胸元にすっぽり収まる小柄な大淀。かわいいな、この子は。
「大淀、お願いだ、君は俺の言うこと聞いてくれるよな？……大丈夫、悪いことはしないさ、な？」
「ふぁあ??わ、分かりましたぁ??」
はい成功。大淀はなんだかんだ言ってかなりちょろい部類だ。
大淀はこう見えてかなりのむっつりスケベ、やることと言ったら精々俺の日用品を新品と取り替えるくらい。
こうして、[強引対応]で事を運べば、勝手に腰砕けになってくれる

ので大変楽。
ヤバイのは、口説くと喜ぶようになってきた戦艦、空母、一部重巡だ。それ以下の艦種は概ねちょろい。
さて、何故か鼻血が出てる大淀にハンカチを渡して、工廠へ。

「いやー、建造は久し振りだな」
「あ、提督！建造ですか?!また新しい女の子を増やすんですか？提督には私がいますよ？私では不満ですか？不満なら言ってくださいね？いつでも、何にでもなりますからね？あ、もしかして身体ですか？作り変えましょうか？新しく作った変異誘発剤で」
「よーしよし、俺はそのままの明石が一番好きだなー!!」
「そ、そうですか？嬉しいです！」
大喜びで抱き着く明石。適当に背中を撫でてやると全力で甘えてきた。
「んー??提督ー??好きです大好きですー??結婚してくださーい??」
「はいはい、分かった分かった。建造するからちょっと待ってねー」
ぴったりくっ付く明石を抱き上げたまま、建造ドックをセット。
「……提督？その、入れ過ぎじゃ？資材が溢れてますよ？」
コアラみたいに俺にしがみ付く明石が言う。
「行ける行ける」
「……まあ良いですね！提督についていくと退屈しませんから！さあ建造です建造!!イェェェイ!!!」
「Ｙｅａｈ!!!」
さあ、盛り上がってまいりました！
「ちょ、ちょっと待って！待ってください提督!!なんですかこれ！光が逆流して……！」
「……妖精さんが、こんなに……!!」
恐れおののく大淀と明石。
「提督！明らかに危険です!!中止して下さい!!!」
「これ、本当に大丈夫ですか?!!」

「俺はそうは思わん。建造こそが、艦娘の可能性なのかもしれん」
１／３５０スケール宇宙戦艦ヤマト
リボルテックヤマグチ真ゲッター３
セット、完了！
「愛してるんだぁ～、君達をぉ～～～!!ギャハハハハハハハ!!!!!」
「!!?!」

瞬間、ドックが爆発。そして……、

「大和型戦艦、一番艦、大和。推して参ります！」
「フッ、随分待たせたようだな……。大和型戦艦二番艦、武蔵。参る！」

「ま、まさか！大和型?!!」
「知っているのか大淀さん！」
おっ、民明書房かな？
「……基準排水量６５，０００トン、満載排水量７２，８０９トン、連合艦隊の切札、世界最大の超弩級戦艦、大和！と、その二番艦の武蔵！当然、建造を試みた者は多々いました。しかし、誰一人として、この二人を召喚できた提督はいません……」
神妙な様子で言う大淀。
「……凄い！凄いです！これって、歴史的な瞬間ですよ!!」
素直に喜ぶ明石。

「ええと、貴方が、この艦隊の提督ですか？」
姉の大和さん。背はかなり高め。細身で、胸は大きめ。すらりと長い手足が魅力的。
「ふむ、良い面構えだな」
妹の武蔵さん。大和さんより更にデカい。乳もデカい。大和さんとは逆で、かなり筋肉質で腹筋も割れている。あと、やたらと露出が

多い。やったぜ。
「さて、黒井鎮守府へようこそ！歓迎しよう、盛大にな!!」
いつもの。
「歓迎、ですか？ふふ、ありがとうございます」
「面白い奴だな、提督は」
「と、その前に、この鎮守府の案内をしよう。着いてきてね」
そして、いつも通りの鎮守府案内。特に変わった事もなく、滞りなく案内が終わる。
「ここは、とても良い所ですね！」
「軍属と言うには、いささか緩過ぎるがな」
満足そうに笑う大和型の二人。
そして最後に、グラウンドに行き着く。そこでは、
「おおおおお!!!!」
大地を揺るがす長門と、
「相変わらずお強い!!ですが、自分も負けないでありますよ!!!」
ひび割れた大地を縫うように駆けるあきつ丸、
「あはははははは!!摩耶ってば、おっそーい!!!」
空を蹴って飛ぶ島風に、
「このっ！待ちやがれ!!!プリン返せ!!!」
それを追う摩耶。

「……なんですか、あれは」
「うちの艦娘だけど？」
「……いや、おかしいだろう？あんな性能は……」
「はいこれ」
ロック装置を渡す。
「その、これは？」
「ロック装置。……平たく言えば、君達に力を与えるものだよ」
ドヤ顔で装置の効果を説明。
「……首輪型なのは、その、貴方の趣味だろうか？まあ、実際に私達は貴方の所有物だからな、構わないが……」

「いやいやいや、そんなんじゃないから！これ、本当は他のタイプもあったんだけど、いつの間にやら、首輪型以外は廃棄されてて！」
「は、恥ずかしいですね、これは」
「いやその、持ち歩くだけで良いから、態々着けなくても良いんだよ、大和さん？」
何なん？確かに、「新入りに首輪を渡す男」って文字で表すと変態っぽいけど、実際は良かれと思ってのことだからね？
首輪型は明石と夕張の趣味だし。

そんな時に、長門が俺を見つけて、嬉しそうに駆け寄って来る。
「おお、提督！組手を頼めるか？」
「ん、構わんよ」
「では行くぞ！久し振りの全力だ！」
「ま、待て！艦娘が人間を殴る奴が……!!」
武蔵さんが止めるが、
「はあああああ!!!」
長門は止まらない。
……でも正直、長門は技量がまるでない。躱すことも逸らすことも簡単だ。
真っ正面から迫るストレートを軽く逸らす。バランスを崩した長門は、倒れながらも無理矢理反転、回し蹴りを放つ。
「くっ、おおお!!!」
軽く屈んで避ける。すると長門は、体勢を整えながらも手刀を振り下ろしてきた。まあ、繋ぎのつもりで出したんだろうが、甘いな。
パリィ。
「な、あぁっ!!」
「はい、終わり」
完全に崩され、尻餅をついた長門の首に指を突き付けた。……実際、このまま致命の一撃をしたところで、長門は倒せないが。そんな攻撃力は俺にはない。
「あ、相変わらずだな、提督」

「まあまあ、俺は守ることと逃げることしか出来ないからね」
長門の手を取って、立ち上がらせる。
その後は、適当にアドバイスをして、長門は修練を再開したみたいだ。
そして、振り返ってみると、
「ほ、」
「ほ？」
「惚れたっ!!!」
「……はい？」
いきなり、武蔵さんに抱き締められる。
「長い間、私を建造できる者がいなかった理由！今なら分かる！私は、貴方のような益荒男を待っていたのだ!!」
「お、おう？」
「頼む、私を貴方の女にしてくれ！」
「武蔵さん?!」
早い、早いよ。
「ふふ、貴方が何と言おうと、私は貴方に心を奪われた!!それと、武蔵さん、などと、他人行儀な呼び方は止してくれ！」
「な、何で？」
「何、私より強い男だ、惚れるのも無理はない！」
えっ、ガンガン来る、ガンガン来るな、本当に。
「ちょ、ちょっと待って?!や、大和さん？おたくの妹さんを止めて?!」
「そ、その、旦那様？よろしければ、大和と、呼び捨てにして頂けないでしょうか？」
ブルータス、お前もか。

６８話　海の旅人ン

さて、新入りの艦娘達とちょくちょくコミュニケーションを取りながら、ゆったりと過ごす。
なんか知らんけど、新入りの艦娘達はやたらとうちの艦娘を怖がるなー？なんで？
……にしても、最近は段々と暖かくなってきたな。

「よっしゃ！漁業、しよう!!」
素潜りしたい、釣りしたい。魚食べたい。
そうと決まれば、潜水艦だ。それも一人や二人ではない、全員だ!!
テンション上がってきた!!
潜水艦の子達は仲が良いから、いつも大体一緒にいる。多分、今なら部屋にいるだろう。ろーちゃんは、どうかな？まあ、多分いるだろう。

そして、潜水艦の部屋の前。すかさずノック。
「あー、あー、もしもーし？聞こえてるかな？」

「でっちー！」
「だから、でっちじゃないでち！……あれ？提督の声？」
「確かに聞こえたわね」
「ん、今、ノックされたよ？」
「はーい！イクが出るのー！」
ドアが開く。同時に抱きつかれる。あっ、あっ、やめて、勘弁して、イクはヤバい。無邪気さが俺を殺す。
だが、堪えて抱き上げる。
「よーしよし、今日も可愛いぞ、イク！……さて、良い子の皆んな！暇かい？良ければ、俺と魚を獲りに」
「「「行きます」」」
即答。食い気味に。

「よ、よし、じゃあ、準備を」
「「「直ぐに行きます」」」
怖いな君ら!!

海。ＯＣＥＡＮ。
ここまで美しい自然に対しては、どんな形容詞も陳腐になる。だから、あえて口には出さないが、ただただ美しいと、そう心の中で賞賛する。
「提督？どうしたんでち？」
「ん？ああいや、ちょっと自然をリスペクトしてた」
「……？」
まあ、分からないか。良いさ、不用意に自然を破壊しなければそれで。
「ところで、何やってるの、はっちゃん？」
「え？漁をするんですよね？手っ取り早く魚雷で……」
モノローグ読んで？今、環境破壊はＮＧって、イワナ、書かなかった？
「やめなされ……、やめなされ……。水産資源保護法に触れる！」
そもそも、発破漁では、爆発の衝撃で魚の浮き袋が破けて、殆どが沈んじゃうし。まあ、量は獲れるかもしれないけど、無駄に殺すのはいかん。大切なのは、次に繋げることだ。
「わ、分かった、魚雷は使わない」
「じゃあ、手で獲るの？大変じゃない？」
イムヤの言う通り、うちのエンゲル指数から考えて、チマチマと魚を探してモリや素手で獲っていては埒があかない。
「うん、まあ、その辺は大丈夫。公海に出て魚群を探すから」
「公海って……、２００海里よ？」
「なーに、ほんの３７０．４ｋｍだよ」
「……ほんの？」
うん、ほんの。

今日の夜前には戻る予定だし、早く行こうか。
「その、提督？提督の輸送船じゃ２０ノットくらい、ですね？公海に出るまで、大体１０時間くらいはかかっちゃいます！はい！」
ふむ、ろーちゃんの言う通り、旅人号はいつも２０ノットそこら、時速に直すと大体３７ｋｍ／ｈくらい。単純計算で１０時間だわな。
単純計算では。
「大丈夫、大丈夫。５、６分くらいで直ぐに着くから。取り敢えず、船に乗って？」
「……まあ、分かったわ」
「提督が大丈夫だって言うんだから、大丈夫でち」
「提督？今度はどんな魔法を使うの？」
「んー？夕張に、新しいブースターのテストを頼まれてねー」
旅人号のボタンを押す。
「ブースター？」
「ヴァンガード・オーバード・ブースト……、時速４０００ｋｍ／ｈだって」
「「「……え？」」」
数分後、排他的経済水域を抜けて、公海に。
「び、びっくりしたでち！」
「思いの外、衝撃は無かったね」
「凄かった、です！景色が全部線みたいで！」
大成功。
ガン積みしたショックアブソーバーもしっかりと動作したみたいだ。
さて、狙うは今旬の魚。もちろん、食べる分だけ。無駄に何百トン単位とかで獲る必要はない。
「それで、何の魚を獲るの？今の時期なら、鰹？」

「そうそう、目には青葉山ほととぎす初鰹って言うだろ？」
「？、なんでちか？それ？」
「あー、そうだな、じゃあ、初鰹は女房子供を質に置いてでも食え、とか？」
「もー！お嫁さんを売ったら駄目なの！イクは売られても帰ってきちゃうんだから！」
「提督、めっ！ですよ！ろーちゃんは売れません！お嫁さんですから！ね？」
「あはははっ、嫌ねぇ、司令官のお嫁さんである私が売られる訳ないじゃない！」
「はっはっは、俺まだ結婚してねぇんだけどなー？おかしいなー？」
物の例えだよ？それくらいに美味いって話で。

「その、提督？聞きたいんだけど、魚群ってそんなに簡単に来るの？」
はっちゃんが言う。
「んー？運が良ければね」
「その、えっと、じゃあ？」
「だから、運を良くするよ」
懐から、エヘカトル像を取り出し、使う。これで今日は幸運な日だ。
「更にブーストォ！」
ユクモ村産お守り、激運発動。貪欲な金の蛇の指輪、錆びついた金貨使用、発見力上昇。カレル文字『瞳』、うさぎのしっぽ……。
「な、何やってるんでち？」
「幸運になってる」
「えぇ……」
あ、来た。魚群だ。
「じょ、冗談じゃ……！」
現実だぞ。
「更に倍率ドン！究極撒き餌ー!!」
神室町のドリームマシンなるものに数十万程突っ込んだら出ました。

ちなみに、真島の兄さんは百万注ぎ込んでマグロを引き当てた。笑える。
「さあ、まずは釣るぞー！……はい、皆んなの分の釣竿。それ、クソ高いから壊さないでね？いやマジで」
三千万円もした。
「ゴ、ゴーヤ達、釣りなんてしたことないでち！」
「ああ、大丈夫。その釣竿なら糸を垂らすだけで釣れると思うよ」
かなり昔に買ったんだけど。
「また、まじっくあいてむ、でち？」
「いや、神室町の質屋で買った」
「質屋……」
何か問題あるかな？
「あ、あと、気を抜くとシーラカンスとか竜宮の使いとか釣れちゃうからな、気をつけて」
「「「?!」」」
ちょっと遠くまで投げると変なの釣れちゃうのがなー。そこが欠点。
さて釣ろうか。
「おっ、良いねぇ、ガンガン釣れるわ。入れ食いだわ」
「本当です！釣り針を垂らすだけで、魚が釣れるなんて！」
暫く釣りを続ける。いやあ、こうして普通に釣りをするのも楽しいな。ノースティリス流の釣りをすると、そこらの水溜りからクジラが釣れちまうからな。たまには普通の釣りをしよう。
そんな感じで、滞りなく釣りは続いた。
この子達も艦娘、一本釣りをするくらいの筋力と体力は十分ある。
そして……、
「その、提督？もう、甲板が一杯でち。もう終わりにする？」
「お、そうだな」
確かに、甲板は鰹で一杯だ。だがな、
「じゃあ、次は素潜りな！」
続投。

「その、こんなに沢山、どうやって消費するの？」
イムヤが心配そうに聞いて来る。けどさ、よく思い出して欲しい。
「……大和型、食うよなぁ……」
「あっ（察し）」
大和型の二人が来てから、黒井鎮守府のエンゲル指数は2、3割上昇。それくらいなら平気じゃん？とか思うかもしれないが、母数が違う。
艦娘は兎に角、よく食べるんだよ。かわいい顔した駆逐艦だって、並みの大人位は平気で食うし、軽巡、潜水艦なら数人分、重巡、軽空母以上なら十数人分！
更に、一部の大飯食らいは、数百人分は食う!!食うのだ!!!
……まあ、その一部には俺もいるんだけど。
そんなこんなで、食料はこの程度じゃ足りない。素潜りして獲って来ないとな！
「はい、網！適当に獲って、食べられないのはリリースね!!よーし、海にのりこめー^^」
「「わぁい^^」」
×
×
×
「それは、食べられるね、そっちは毒あり、こっちは、まだ小さ過ぎ」
「じゃあ、海に帰すねー！」
素潜り。
最初は、何の装備もなしに飛び込んだ提督が心配だった。けど、やっぱり、提督は私達に、平気な顔をして着いてきた。やっぱり、提督は不死身でち。無敵でち。
「ほら、ゴーヤ！一緒に行こう？」
「はーい！ゴーヤ、潜りまーす！」
私の手を取った提督は、そのまま、手を繋ぎながら深海へ。
暗く静かな海の底、愛する人と二人きり。とってもロマンチックで素敵だ。
でも……、

「んー？どうしたのゴーヤ？いきなり抱き付いてきて？寒いのかい？」
優しく、撫でられてしまう。
……違う。
そうじゃなくって、私は……。
女の子として見て欲しい。
提督の目を見ると良く分かる。提督は、私達のことを、まるで妹とか、ともすれば娘とかみたいに見ている。
抱きしめてくれる、手を繋いでくれる、キスをしてくれる。……でも、私達を子供として見ている。
もちろん、家族がいない私達艦娘を目一杯愛してくれる提督は大好きだ。それこそ、私の全てを捧げても良いくらいに。
それでも、私達は女の子だ。こんな見た目でも、女の子なんだ。
……皆んな、提督に見て欲しくて、おかしくなってきている。
「ずるーい！イクもー!!」
「ろーちゃんも、です！」
「おー、どうした？皆んな抱き付いてきてさ？その、足にしがみつかれると泳げないよ？ちょっと、ちょっと待って？これ、沈んでるからね？待って？」
いや、私達はもう、おかしくなっているんだ。
提督は、私達に色んなことを教えて、どうにか外の世界に興味を持たせようとしているけれど、違う。
私達の居場所はここだ。
例え、ここ以外に私達を受け入れてくれる場所があったとしても、私達はここに居たい。
「てーとく？」
「んー？何だい、ゴーヤ？」
「大好きでち」

「そっか、ありがと」

今は、これだけ。

でも、いつかは……。

６９話　近海掃討作戦　会議編

浦野鎮守府がグーグルマップから消えて二、三ヶ月くらい経った頃。

俺は退屈していた。

いや、仕事はびっくりするほど順調だし、新しく来た艦娘達も俺に慣れたし、悪くはないんだけどね？

でも、順調過ぎるのはやっぱり退屈だなー。あ、そうだ（唐突）、

「思ったんだけどさー」

「はい？何ですか提督？」

優しく微笑む大淀。あー、この子、良い女だなー。こんな顔を向けてもらえる俺はきっと特別な存在なんだなってヴェルタースオリジナル。いや、なんでもない。そうじゃなくって、ええと、

「最近、大規模作戦してないね？」

「総員！聞きましたね?!提督は深海棲艦共の屍の山がお望みです!!」

オッ、緊急放送ゥー!!

「なんでや!!」

場所を移して、会議室。

「君達、本当に話が早いね。そういう所は好きだけどさ？その、女の子が屍の山とかさ、だ、駄目だよ？」

「「「はい！」」」

本当に分かってんの？

……まあ、最近は本当に大規模な作戦がなくて、皆んなちょっとイライラしているような気がしてたんだよね。

近頃はまた人数が増えて、個人の負担が減ったからね。あんまりにも戦わないと、自分が必要とされていないのかも、とか思っちゃうんだろう。

本人達は、戦いを望んでいる。なら、好きにさせるべきだ。
確かに、俺としては、静かに生きるのもアリだよ、と選択肢を提示しているが、他でもない本人達が戦いたいと言うなら、それを全力でサポートする。相手の意思を尊重する、これ、とっても大事。
……ただ、パパにはならないぞ。嫌だぞ、結婚なんて。まだまだ独り身でフラフラ遊び歩いてたいんだ。
さて、大規模作戦。
うちの鎮守府は、俺の贔屓目とか抜きで、日本最強だ。
決して、強くなろうとして強化装置を導入した鎮守府が、謎の鶏マスクに壊滅させられているから、とか、謎の九人のサイボーグが強化装置の製造元を悉く潰しているから、とかそんなんじゃない。
本当に、単純に、強い。
故に、ある程度の近海はほぼ開放、やることは全くない。
だから今回は……、
「今回の大規模作戦は、音成鎮守府と合同で行います！」
全力を出さない。
いや、全力を出さない、と言うより、最大戦力を出さない。
……そのだね、そろそろうちの子達の練度がカンストしそうなのよ。
艦娘の練度がカンストするってことは、限りなく人間に近づくくってこと。霊的存在である艦娘が人に。

つまり、孕めるようになる、らしい（明石談）。
……ヤバくない？
朝起きたらパパになってました、とか嫌だぞ俺。
よって、練度がカンストしそうな子達を避ける為、新参の子、それと出撃回数が少ない子に戦ってもらう。
「では、出撃する艦娘は？」
「今回はどうやら、近海の深海棲艦の残党を掃討する作戦だ。だから、危険は少なめ。どうせだから、なるべく戦闘経験が無い子に行ってもらいたいなー！」

……とりあえず、机の上にゼクシィがある子は除外。なんでほぼ全員そんな雑誌を？
ちょっと待って古鷹！たまごクラブある！早い！早過ぎる!!
絶対に避けなくては!!
安パイ！安パイは?!
キョロキョロと視線を動かした先には、微笑むビスマルク！
こ、これだ!!
「へ、編成だが、旗艦はビスマルク！それとウォースパイト、あきつ丸と、川内型全員!!」
この子達は、机の上にゼクシィもたまごクラブも無い！つまり安全！
「ん？今回は少ないな？」
定位置であるホワイトボードの隣にいる長門が言う。
「い、いやほら、今回は音成鎮守府の艦娘もいるから！ねっ?!」
実際、音成鎮守府もかなり強い。艦娘個々の練度なら、うちに匹敵するんじゃない？
「む、そうか？不安なら私も……」
「いやいや！大丈夫！大丈夫だから!!」
長門、練度は８０を超えた。ヤバい。
「俺とお前の仲だろう？」
「大丈夫!!ほんっとに!!本当に大丈夫!!」
木曾、同じく練度８０超え。改二も視野に。洒落にならん。
俺は知ってるんだからな、君らに渡した給料、殆ど貯金してるの！結婚費用とか言って!!誰か助けて!!
「そ、そのね？今回はなるべく戦闘経験の少ない子に出撃してもらおうかなって！ねっ?!」
「……そうだな、確かに、実戦は大事だ。仲間同士の演習で練度の数値だけを上げても為にはならんな！……そこに気付くとは、やはり天才か」
なんか知らんけど賞賛された。ドヤ顔しとこ。
……ん？練度の数値だけ？

嫌な予感がするぞぉ？
「大淀？ちょっとそこの、練度測定器貸して？」
「はい、提督」
で、このスカウター的なアレを付けてっと、今回の出撃組を見ると……、
「私が旗艦ね？任せて！」（ビスマルク：練度７４）
「Ｙｅｓ，ｍｙ ｌｏａｄ．　……Ａｄｍｉｒａｌ、出撃ですね」（ウォースパイト：練度７４）
「はっ、このあきつ丸に御用でしょうか！」（あきつ丸：練度７８）
「大規模作戦?!じゃあ、遠くに行くし、夜戦するよね?!!」（川内：練度５９）
「出撃ですね、了解致しました。……提督に拾って頂いたこの命、提督の為に使いましょう」（神通：練度５９）
「……えっ？このメンバーに那珂ちゃん？そ、その、キツくない?!」（那珂：練度４７）

うん。

しくじったぁぁぁぁ!!!!
え、何？何なん？こんなに強くなる？

うせやろ？
どうすんだこれ？
だ、だが大丈夫だ、結婚の算段を立ててる訳じゃない！問題はない!!
そう、そうだよ、ビスマルクなんてデカい暁みたいなもんやし、ウォースパイトが俺みたいなプー太郎に本気になる筈がないし!!
そうだ、何考えてんだ、まさか鎮守府の艦娘全員が俺に惚れてる訳、
「あ、その、Ａｄｍｉｒａｌ？」
「んあ？なんだい？ウォースパイト？」
「今度、一緒にイギリスに行きましょう？」

「良いけど、何でだい？」
「もう、式は本国で上げるに決まってるでしょう？今は便利ね、少しインターネットを見れば、本国の素敵な教会が見つかるんだから」
「んんー?!んんんんんー!!?」
　結婚？結婚とは？
「その次はドイツよ！提督はカトリック？プロテスタント？まあ、どの道素敵な教会は見つけておいたわ!!」
「んんんんんんーーー!!!?」
　えっ、えっ、何事？何？マジ、何で?!
「ははは、ご安心下さい、提督殿」
　あきつ丸……。
「良く良く考えれば、艦娘の自分達に戸籍はないであります。故に、事実婚という形で」
　形で、じゃないが?!
「提督ー！知り合い多いんでしょ？盛大な式にしようね!!川内型はもう式場を決めておいたから!!」
「ふふ、白無垢を着るのが楽しみです」
「えーっとー、那珂ちゃんはー、アイドルだからー」
「あ、那珂ちゃんはいいです」
「?!」
　やべぇよ、やべぇよ！外堀を埋めにきていやがる!!
　どうしよ、えーっと、えーっと、そ、そうだ!!
「ほ、ほら、そういうのはさ、深海棲艦がいなくなってから、いくらでもできるじゃん?!さ、作戦が、作戦があるから!!ね?!き、気を引き締めていこう!!皆んなよろしくおねがいさしすせそ（支離滅裂）!!!!」
『深海棲艦がいなくなってから、いくらでもできるじゃん?!』
「……ん？」
『深海棲艦がいなくなってから、いくらでもできるじゃん?!』
「……えーっと、録音？」

『深海棲艦がいなくなってから、いくらでもできるじゃん?!』
「さて、言質を取った、であります!各員、式場の準備を!!」

ハッハー!!

神は死んだ。

７０話　近海掃討作戦　前編

鎮守府を出発して数時間、近海領域の最後の地点に急ぐ。
音成鎮守府とは、現地の少し前のポイントで落ち合う予定。
にしても……、

「ファ―……ブルスコ……ファ―……ブルスコ……ファ―」
……Ａｄｍｉｒａｌ、大丈夫かしら？さっきから様子が変ね。
「Ｗｈａｔ，ｓ　ｗｒｏｎｇ？……どこか悪いのかしら、Ａｄｍｉｒａｌ？」
何故か、ナカチャンの背中に負ぶさるＡｄｍｉｒａｌ。
「その！那珂ちゃんの扱い、何か酷くない?!那珂ちゃんはアイドルなんだよー?!」
「那珂ちゃんは後でスカイダイビングな。知り合いのアイドルと一緒に」
「?!」
あら、ナカチャン、またスカイダイビングかしら？相変わらず凄いわね、そのヤマトダマシイは賞賛に値すると思うわ。
まあ、いつものことね。そんなことより、Ａｄｍｉｒａｌの方が大事よ。……Ａｄｍｉｒａｌは、会議が終わってから、何だか元気がないように見えるわ。
「ナデナデシテ―」
「あら？撫でて欲しいの？ふふ、可愛いわね、提督！安心して、私は、ビスマルク姉さま、なんだから！」
「モルスァ」
今度は、ビスマルクがＡｄｍｉｒａｌを抱き寄せて、頭を撫でている。
何だか、大きなティディベアみたいね。
「ふむ、もしかして……、提督殿は予定が一杯なのが嫌なのでは？」
なるほど、アキツマルの言う通りね。Ａｄｍｉｒａｌは子供のように奔放で、純真なお方。予定で一杯なのはきっと辛いわ。

「大丈夫、Ａｄｍｉｒａｌ。ゆっくりで良いのよ、時間は幾らでもあるんだから」
「勘弁してよォ!!式とかさぁ?!」
……あら？
「……Ａｄｍｉｒａｌ？私と結婚は、嫌なのかしら？」
また、冗談かしら？中々面白いわね？
……本当に、面白いわ。
「あー、その、いや、アレだよ。ま、まだ結婚は良いんじゃない？ほら、ふ、二人の時間を楽しむ的な?!ねっ?!」
……そう、そう言うことね？
「ふふふ、そうね、まだ私達は、恋人をしていないものね！」
「Ｗｈａｔ?!」
やっぱり、Ａｄｍｉｒａｌは優しい人ね。
……彼は、私達になるべく人間らしい人生を歩ませようと尽力してくれているわ。
確かに、結論を急ぎ過ぎていたかもしれない。普通の女性は、結婚する前は、夫となる殿方と恋人として愛を育むのだから。
「嬉しいわ、Ａｄｍｉｒａｌ！愛の前には恋、なのね。……貴方も、私に恋をしてくれるかしら？」
「んえあ?!」
して、くれないのかしら。
そんな訳、ないでしょう？
貴方は私が好き、私は貴方が好き。
「……いざりの女が嫌？それともｌｏｏｋｓ？ｂｕｓｔの大きさ？少しでも嫌なところは直すわ。恋人ですもの、貴方に美しいと思ってもらいたいの」
「あっ（察し）。だ、大丈夫だよー！今のウォースパイトが一番好きだ!!」
好き？
……好き、好き！そう、好きだと言ってくれるのね？
「足が不自由？大丈夫、俺が杖にでも何にでもなってあげちゃう!!」

……ああ、ああ、こんなにも、こんなにも嬉しいことはない。愛する人が、私を永遠に支えてくれると、そう誓ってもらえるだなんて……！

……しかし、ここで邪魔者が現れる。
『ギョッギョッギョッギョッギョッ!!!!』
『ギィィィィィィィ!!!!』
『グゴオオオオオオオ!!!!』

深海棲艦……。
「さあ、行くわよ!!」
ビスマルクが号令をかける。
闘争の時間だ。

はぁ、嫌だ、闘争は嫌だ、戦争は嫌だ。
戦火がもたらすものは破壊だけ。
破壊がもたらすものは悲愴だけ。
悲愴がもたらすものは苦痛だけ。
皆が手を取り合って歩けば、世界はもっと美しいと言うのに……。
お互いの足りない部分を補い合って、支え合って生きていけば、平穏が得られると言うのに……。
闘争と言う蛮行など、この世界には不要だ。あってはならない。

私は、Ｗａｒｓｐｉｔｅ。
闘争を侮蔑する者。

でも……、
『ガァァォァァオオオ!!!!』
「ウォースパイト！そっちに行ったわよ!!」
それでも、武器を取ると言うならば……、
「……Ｆｉｒｅ」

『ゲァアッ!!!?』
私が、全てを終わらせよう。
願わくば、この蛮行が最後の闘争になることを祈って……。
「雑魚とはいえ、数が多いです……！」
「むー！夜戦まで体力を温存したいのにー！」
「ひゃあああ?!な、那珂ちゃんピーンチ!!か、齧らないでー!!」
「Ｍｏｖｅ　ｂａｃｋ　ｐｌｅａｓｅ　……。蹴散らします」
「!!　全体、退がって!!」
殆ど動かない私の足に、回転させた鉄球を当てる。
すると、まるで何かに操られるかのように、私は海上に立ち上がった。
そして、もう一つ。
皮膚を鋼のように硬化させ、身体能力を向上させる。
「Ｅｎｅｍｙ　ｓｈｉｐ　ｉｓ　ｉｎ　ｓｉｇｈｔ　……」
敵機発見、照準合わせ。艤装の主砲を取り外し、両手に構える。
「Ｏｐｅｎ　ｆｉｒｅ　!!!」
全砲門、斉射。
「Ｆｉｒｅ！」
斉射。同時に、目の前の深海棲艦を蹴り殺す。
「Ｆｉｒｅ!!」
斉射。同時に、真後ろの深海棲艦を殴り殺す。
「Ｆｉｒｅ!!!」
斉射。同時に、隣の深海棲艦を千切って殺す。
私は、Ｗａｒｓｐｉｔｅ。
敵艦の腹に風穴を開ける啄木鳥。
私の名を、その身に刻め。
恐れ慄くがいい。

そうすれば、このような蛮行もなくなるだろう。

……そして、時間切れ。

私の未熟な技術では、ほんの数十秒が限界。

再び、自由の効かなくなった足は、ゆっくりと力を失っていく。ああ、いけない、艤装に戻らないと。

あ、足が、滑って……！

「おっと、大丈夫かい、ウォースパイト？」

「……あ、Ａｄｍｉｒａｌ　……」

優しく、抱き寄せられる。

「大分上達したね、鉄球の回転。その調子なら、ちゃんと歩けるようになるのもそう遠くはないんじゃない？」

「ふふ、そうね。……もし、もしも私が歩けるようになったら、お願いがあるの、Ａｄｍｉｒａｌ　？」

「ん？何かな？」

「私が、ちゃんと歩けるようになったら、結婚式を挙げましょう？一緒にＷｅｄｄｉｎｇ　ａｉｓｌｅを歩いて頂戴？その後、パーティで、一緒にダンスを踊るの」

「ん、ああ、バージンロードか。いいよ、俺はまあ、君達の父親みたいなもんだし？はははは、なーんだ、そう言うことかー、なら全然ＯＫだよー、父親としてなら結婚式に出るのもやぶさかじゃないね！ダンスももちろんいいよ！」

「Ｒｅａｌｌｙ？出てくれる？嬉しいわ！」

Ｗｅｄｄｉｎｇ　ａｉｓｌｅを二人で歩いて、その先も貴方と一緒。

今までも、そしてこれからも。

貴方は私の父親であり、兄上であり、そして夫であるから。

ずっと、ずっと一緒よ、Ａｄｍｉｒａｌ……。

71話　近海掃討作戦　中編

夕方、空が茜色に染まる頃。
「あ、来たんだ。……一応、自己紹介をしよう。音成鎮守府の今回の旗艦、日向だ。旗艦と言っても、原則そちらの提督の指示には従うつもりだから、よろしく」
ヒュウガ……、姉のイセと合わせて、音成鎮守府のツートップね？
前に、うちの鎮守府に来た時に何度か会ったわ。かなり、腕が立つわね。
「たーびびーとさーん!!!」
「はいキャーッチ！」
……馴れ馴れしく提督に抱き着くこの子は、確かアガノ、だったかしら。
「お久しぶりです！ずーっと会いたかったんですよー？」
「俺もだよ、阿賀野。今日は君の顔が見れて嬉しいよ」
……ふうん、そう。
「あっ、あー、ビスマルク？」
「あら？何かしら、提督！」
いけない、提督に話しかけられたら、笑顔じゃないと。
「もちろん、ビスマルクのことも大好きだよ！……だ、だから、できれば音成鎮守府の子とも仲良くして欲しいなーって」
……むむむ。
「お、同じ艦娘同士でいがみ合っても、何も良いことはないだろう？」
それは、そうだけど。
「た、旅人さん？わ、私、何か悪いことしちゃったかな？」
「いやいや、気にしないで。……そうだなぁ、もっと頻繁に交流すれば慣れるかねぇ？」
「ぴゃぁあ！あ、阿賀野お姉ちゃん！あんまり迷惑かけちゃ駄目だよぉ!!」
「あ、あ、阿賀野さん!!た、大恩ある黒井鎮守府の提督に何を?!!は、離れて下さいっ!!」

提督に抱き着くアガノを引き剥がそうとするのは、妹のサカワ。それと、駆逐艦のハツシモ、だったかしら。
「はっはっはっ、あいも変わらず器が大きいな、黒井鎮守府の提督殿は」
隣で笑っているのは、ワカバ、とか言ったかしら。ちょっと、よくわからない子。多分、ナガトやキソと同類ね。男の子みたいな性格。
「もー！良いでしょー？旅人さんは怒ってないもーん！……て言うか、酒匂も初霜ちゃんも、こっそりと旅人さんのセミヌード写真を隠し持ってるの、私知ってるんだからねー！」
「ぴ、ぴゃぁぁぁぁぁぁぁ!!!?」
「ななななな、何のことだかわわわわわ、分かりませんにぇ!!?い、いいい、今の私は恋愛には興味がななな、ないの!!!!ないんですってば!!!!」
……ふーん、そうなの。
「え、ちょっと待って、俺のセミヌード写真って音成鎮守府にまで出回ってんの？」
「……貴女達？彼は、私の提督よ？」
これぱかりは譲れない。
彼は、私のだ。
「は、はい！で、でも、好きになるのは自由だと思います!!」
許さない、潰す。
マントから取り出したのは、ルガーＰ０８マリーネ。
提督を、返せ！
「っと！危ねえ!!ストップだ、ビスマルク!!」
……どうして？
「……何で、その子を庇うのかしら？」
私じゃ、不満？このビスマルクでは不満だと？
「ビスマルク、聞いてくれ」
「嫌よ！聞きたくない!!私は、私は……!!」
だって、私は……!!
まだ、貴方に愛していると言ってもらっていない!!!!

「ビスマルクっ!!!」
「ひっ?!!」
……あ、わ、私、私は……!!
何て、ことを……!!
我がままを、言ってしまった……!!
い、嫌、嫌だ、捨てられたくない！嫌われたくない!!
そして、彼が私の肩に触れる……。
嫌、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！
「ご、ごめん、なさ、い、怒ら、ないで……」

「ごめんな、ビスマルク」
「……え？」
「不安だったんだよな、悪かったよ。……ビスマルクに甘えちゃってたのかもしれないな、俺は。愛してるよ、ビスマルク……（イケボ）」
「……提、督」
ああ、優しい、キスを、キスをしてくれた……。
ふふ、ふふふふふふ、キスをしてくれた!!
やっぱり、提督は私を愛してくれるのね!!一番に愛してくれる!!!
「そ、その！提督！も、もう一度、良いかしら?!」
「ん、ああ、はい」
……ふふふふふふ、二回目のキス！
これで、確実ね!!
×
愛し合う二人がキスをしたんだから、きっと明日にはシュバシコウが子供を運んできてくれるわ!!!
×
×
×
「×……あー、その、何だろうか。君も大変なんだな」
「×……うん」
×
大胆にも、皆んなの前で口付けをした黒井鎮守府の提督。
×
×

その後は、他の子にも捕まって口付けさせられていた。
……まあ、そうなるな。
「口付けとは、そんなに良いものなのか？」
「いやぁ、分からんね。長年生きてきたけど、女心は本当に分からん」
珍しい、この人にも分からないものがあるのか。
……ふーん。
「なあ、君、ちょっとこっちを向いてもらえないかな？」
「はいはい、何だい、日向ん……？！」
「……っぷはぁ。……なるほど」
実際にしてみたが……、
……うん、悪くない。
「えーと、その、日向？そういうのは好きな人と」
「ところで、話は変わるが、私の瑞雲を見てくれ。こいつをどう思う？」
「凄く、大きいです……。じゃなくって！何なの？！マイペースか！！大体にして、今回は夜戦あるんだよ？！瑞雲使えるの？！」
「私の瑞雲は天候や時間に左右される程軟弱ではないよ」
「コラー！！日向ったら何してるの！！」
おお、どうした伊勢。
「あー、まあ、良いよ、怒ってないから」
「い、いや、でも、その、すいません……」
全く、伊勢は堅苦しいな。
「ああ、そういえば、君からもらったこの剣、かなり良いね」
「あ、それ？知り合いのウィッチャーからもらったんだよ」
ウィッチャーというのが何なのかは知らないが、まあ、丈夫でよく切れる。十分だ。
「ひゅ、日向！！また黒井鎮守府の提督さんから何かいただいたの？！もう！ちゃんとお返ししたの？！」
「あー、ほら、今回の戦果でお返しをするよ」
「あのねぇ……」
……母親がいたら、こんな感じなんだろうか。

「良いって、良いって！あ、ほら、そろそろ敵が来るよ？各員、戦闘配備ね!!」
そう言って、目の前の旅人は姿を消した。
否、一瞬で、深海棲艦のいる方へ踏み込んだのか。ふむ、あの素早さは是非参考にしたいな。今度、また稽古をつけてもらおう。
あまり上の存在ばかり見ても仕方がないな、さあ、私も行こうか。
「灰は灰に」
海中から現れる深海棲艦の群れ。
愛用の刀に手を掛け、
「塵は塵に……！」
そして、疾走、同時に居合。
群れの土手っ腹を食い破る。
そして、討ち漏らした敵は、
「……瑞雲」
瑞雲で処理する。
……長い修練の末、私は、虚空から瑞雲を出現させることに成功した。そして、同時稼働数を犠牲に、瑞雲の一機一機を強化、艤装レベルの頑強さに。
翼を鋭く砥いだ瑞雲は、深海棲艦の骨肉を容易く切り刻む。
名付けて……、
「疾風瑞雲剣……!!」

と、まあ、こんな感じで、私の周りには敵がいなくなった。
余裕ができたが故に、周りに目を向けてみる。
「砕けろ!!」
私のすぐ後ろで、深海棲艦に風穴を開けて回る伊勢。大剣を自在に操る技量と筋力が素晴らしいな。
若葉と初霜は剣士ではないから、よく分からん。ウォースパイトとビスマルクも然り、だ。
「いやぁ、音成の艦娘も中々お強いでありますなぁ。うかうかしていられないであります」

あきつ丸か。彼女も素晴らしい剣士だ。しかし、長物の方が得意だとか。
近くで戦う川内と神通もかなりのものだ。ああ見えて那珂も凄い。
そして、
「あ、どっこいしょー!!」
彼の見事な徒手格闘。しかも、相手の攻撃は一撃たりとも当たっていない。……私も、格闘を覚えた方が良いかもしれないな。

全くもって順調だ。この調子なら、今回の作戦も簡単に終わるだろう。

ただ、余りに順調過ぎる気がする。

……嫌な、予感。
そして、
「?! 渦潮だ!!かなり大きい!!各員、散開!!」
その予感は的中した……。

こうして、私達は見事に分断され、散り散りになってしまった。
合流を急がねば。

それよりも先ずは……。
「目の前の敵を片付けてから、だな……!!」

72話　近海掃討作戦　後編

驚いた。
まさか、深海棲艦がここまで賢くなっているとは。
「あの、旅人さん？はぐれた艦娘からの通信によると、川内型グループ、あきつ丸さん、ビスマルクさんのグループ、ここには私達、音成鎮守府の艦娘と、そしてウォースパイトさん、と分かれました」
ふむ、三組に分断、か。
「距離は分かるかな？」
「はい、そう遠くはありませんが、かなりの量の深海棲艦に足止めされているみたいで……」
成る程ねぇ。
「やはり、各個撃破を狙われているのでしょうか？」
「だろうねー」
普通に考えたらそうだろうよ。
そして、まあ、最初に狙われるのは……。

『アイアン……ボトム……サウンドニ……シズミナサイ……』

一番弱いグループから、だろうね。それに、指揮官もいるし、真っ先に狙われて当然。
「な、何ですか、アレは?!未確認の深海棲艦?!鬼クラス以上です!!」
確かに、初霜の言う通りだ。初霜程の練度ならば、相手の実力を察することはできる。俺も当然できるが、アレは相当だ。
反応は一人では無い、あと三人。

『アノトキノ怨ミ……ハラサデオクベキカ……!!』
『ココデ会ッタガ百年目……!!』
『叩キ潰シテクレル……!!』

「おお、旅人よ、あれは前に送られてきた怪しげなイメージビデオに

映っていた、淫猥な格好をした女達ではないか？」
「そうだね、若葉。あの子達皆んな露出狂だから、真似しちゃ駄目だよ」
「……駄目なのか？」
「えぇ……？（脱いじゃ）いかんでしょ」
『誰ガ露出狂ダァァァァァ!!!!』
『脱ガセタノハ貴様ダロウガァァァァァ!!!!』
『決シテ許サンカラナァァァァ!!!!』
　ええと、泊地棲鬼、南方棲戦鬼、空母棲鬼、だったっけ？あ、これか。
「ほらほら、見てよ日向、写真だよほら」
「おお、これは……、自殺ものの写真だな。ばら撒かれたら社会的に死ぬタイプの!!」
『『『捨テロ!!!!』』』
　え？いや無理、永久保存版ですわ。
「あー、でもなー！大人しく降伏するなら考えても良いかなー!!（捨てるとは言ってない）」
『……オイ、ドウスル？降伏スルカ？』
『……マア、選択肢トシテハアリナンダヨナァ～』
『少ナクトモ、今ヨリ良イ暮ラシハデキソウダナ』
　おっ、良い感じか？
『何ヲ言ッテイル!!新タナチカラヲ得タ理由ヲ思イ出セ!!!』
　そこに声をかける二本角の女。後ろのそれ何？幽波紋？怖いよ？
『ソ、ソウダナ!!新タナチカラヲ使エバ、コイツラモ怖クナイナ!!!』
『ア、ソウダ！ワタシ達ハ提督ニ復讐ヲスルノダ!!』
　ほーう、新たなチカラ？確かに、よりスマートなフォルムになって、纏うオーラは何倍にも大きくなっている。成る程、虚仮威しじゃあないね。
『サア、オ前等ニ恥ヲカカセタコノ男ニ復讐ヲスルノヨ!!!』
『『『オウ!!!!』』』
　ボスは二本角の女か。真っ先にパンツを破りたい所だが……。

『待テ!!貴様ノ相手ハコノワタシ達ダ!!!』
立ち塞がる南方棲戦鬼と空母棲鬼。いや、頭に元、が付くだろうな、完全に別物だ。
「ふん、また水龍敬ランドにご招待されたいのか？」
『フフフフフ、無駄ダ！』
『ワタシ達ノ格好ヲ見ロ!!』
「……なん、だと？ま、まさか!!」
『ソウダ！ワタシ達ハ!!』
『『最初カラ全裸ヨリ恥ズカシイ格好ダ!!!』』
「クソっ！勝てねぇ……!!」
なんということだ!!既に全裸よりもヤバい格好をされたんじゃ手出しが出来ねぇ!!!
『ヨシ！膝カラ崩レ落チタゾ!!』
『勝ッタ!!』
「……え？なんですかあれ？」
「阿賀野よ、真面目に突っ込むのは野暮だぞ。……まあ、何にせよ……、今の私達は大ピンチというやつだな!!」
『ハーッハッハッハ!!ワタシ達ノ勝チダ!!!大人シクワタシ達ノモノニナルガイイ!!!』
『ハーッハッハッハ!!!』
……あ、死亡フラグが立ったな。調子に乗る悪役ってお前……。
「待ちなさい!!!!」
『ナ、何奴?!!』
「他者から愛する人を奪い取り、力尽くでモノにしようとするなど、言語道断。人それを「邪悪」という!!」

『ダ、誰ダー・名ヲ名乗レ!!』
「貴様等に名乗る名は無いっ!!!」
ロっ、神通姉さん!!!これで勝つる!!!
『オイ、足止メハドウシタ?!!』
「これのことですか？数だけは多い……」
あのさ、深海棲艦の生首を持ってくるのは止めよう？
あきつ丸といい、神通といい、帯刀してる子は何でこう首を取るんだろうか。怖い。
『馬鹿ナ!!アレダケノ数ダゾ?!!夜ナベシテ召喚シタトイウノニ!!!』
「いえ、どこかから、提督を自分のものにする、だとか巫山戯た発言が聞こえた気がしたので。少し、本気で蹴散らしてきました」
『ドウイウ耳シテルンダ!!!?……ウオオオア?!!ダ、誰ダイキナリ首ヲ狙ウノハァ?!!』
「ちぇー、惜しかったなー」
あ、経験値が持ってかれそうなＢＧＭ。黒井鎮守府の誇るニンジャ、川内のエントリーだ。
「ま、待ってよー！那珂ちゃんのこの、タクティカルアームズ？　とか言う武器、すっごく重いんだけどー！」
遅れて現れたのは那珂ちゃん。世界広しと言えど、特大剣を振り回すアイドルは那珂ちゃんだけだろう。

そして、さっきから火薬の匂いがプンプンしやがる。こいつは多分……、
「Ｓｔｅｒｂｅｎ！Ｓｃｈｅｉ・ｅ!!」
どうしたビスマルク！言葉遣いが変だぞ?!!
『グ、オオオオオ!!!?何ダアイツハ?!!コノ南方棲戦姫ガ火力デ押サレルダト?!!要塞カ?!!』
半狂乱で銃火器を撃ちまくるビスマルク。キレると手がつけられない。
艤装の限界以上に取り付けた砲塔で主砲の弾幕をばら撒く狂気の超火力がビスマルクのチャームポイント。

この調子なら、元戦鬼と元空母棲鬼はビスマルクと川内型で抑えきれるな。
「音成鎮守府！ウォースパイトと泊地棲鬼（？）を抑えろ!!　こっちは俺達でなんとかする!!」
「「了解!!」」
『ワタシカラ目ヲ離スカ？愚カナ!!』
二本角が怒りを露わにする。だがな？
「もし、よろしいでありますかな？自分、黒井鎮守府が艦娘の一人、あきつ丸と申します……。御相手仕りまする」
ビスマルクがいるってことは、あきつ丸もいるってこと。
『貴様一人ダト？舐メラレタモノダ……!!』
いやぁ、舐めてなんかないよ？二本角の子は、多分、今いる深海棲艦の中で一番強い。
「ふふふ、では、不肖あきつ丸！罷り通る!!」
だから、今ここにいる艦娘で一番強いあきつ丸をぶつける。
『槍ダト？ソンナ、モノ、ガ……?!』
軽い気持ちで受け止めようとしたのだろう、後ろの幽波紋みたいなので、迫る朱槍を受ける。が、しかし、朱槍は止まらず、後ろの幽波紋みたいなのの片腕を切り落とした。
「おや、どうかしたでありますかな？揚陸艦の槍一本を止められないのでありますか？そんな様ではとてもとても……」
『舐メルナァァァ!!!』
……まあ、よくよく考えれば、あきつ丸は、あの超パワータイプの長門と毎日毎日組手してるんだ、その実力は推して知るべしってか？
「ふぅぅぅ、遅い、脆い、弱い!!その程度でありますか？その程度で我等の提督殿の御手を煩わせているのでありますか？その程度で!!!巫山戯るなよ深海棲艦!!!」
怒りを露わにするあきつ丸は、身の丈以上の朱槍を振るう。一度振るえば大気が捩れ、二度振るえば海面が割れる。
『何ナンダ貴様ハァァァァ!!!?』
「ふん、艦娘に口舌はいらぬであります。あるのはただ行動のみ!!」

凄えな、とんでもなく、鋭い。いつもいつも高火力高防御の長門を相手にしている、と言うことは、長門の火力を躱す身のこなしと、長門の防御を貫く一撃を持つ、と言うこと。
『グ、グ、グ、グオオオオオオ!!!テ、撤退ダ!!!撤退スルゾ!!!』
ありゃ、この子、賢いな。プライド高そうなのに、戦力をしっかりと分析して、それを受け止めた上で最良の結果を出す、か。良いねぇ。

そんなに有能な子は逃がせないな。

「ビスマルク！砲撃!!」
隣のビスマルクに声をかけて、砲撃を頼む。
「了解！全弾撃ち尽くす!!オルガニックフォーメーション!!!」
うわあ、砲が多過ぎてハリネズミみたいだ。
で、一斉に火を噴く。音凄い！うるさっ!!てか威力!!!
「やったか?!」
……だが、そこに残っていたのは、原型を留めていない幽波紋みたいなのだけ。あちゃー、逃げられた、か。思い切りも良かったな。武器を盾にして逃げるなんてよ。
「提督、追撃しますか？」
「慌てるな、次も敵とは限らんだろう」
「……敵だと思うわ」

『オイ、ドウスルンダ?!戦艦棲姫ノヤツ、逃ゲタゾ?!!』
『ワ、ワタシ達モ撤退ダ!!ソモソモ、足止メガ効カナカッタ時点デ勝負ハツイテイル!!!』
元戦鬼と元空母棲鬼もビビって逃げ出すが、残念、行動が遅い。
「天空真剣！白刃斬り!!」
「分身殺法!!」
『『ホギャァァァ?!!!』』
オイオイオイ、死ぬわアレ。
殺す前には止めよう。

残るは元泊地棲鬼だが……。
「Ｊａｃｋｐｏｔ!!」
『ガァァァァァ!!!!』
既に終わったみたい。

『クソ!!何故ダ?!!折角新タナチカラヲ得テ、多数ノ深海棲艦ヲ召喚シ、万全ノ態勢デ臨ンダトイウノニ!!!何故ダ!!何故勝テナイ!!!?』
元泊地棲鬼……。
「君そのすっごく布面積が狭いチューブトップみたいなのエロいね、脱がせて良い？」
『イヤ、コレ、好キデ着テイル訳ジャナイ!!海ノ意思ガ決メタンダ!!』
ほーん、海の意思、ねぇ？
「まあ、詳しくは署で聞くから。大人しく付いて来なさい」
『……フン、生キ恥ヲ晒スノハゴメンダ。殺セ』
くっ殺？くっ殺なの？すみません、それ、来月からなんですよ。

……懐から取り出したのは、超ミニサイズ婦警服。ストッキングは大事な所だけ丁重に切り取ってある。
「大丈夫、安心して？……絶対に殺さないから!!」
ははは、こんな美人を殺す訳ないじゃないか。
だが罰は受けてもらわねばな!!
『ア……、アア、ナ、何ダソレハ……!!?』
「さあ、選ばせてあげよう、ニプレスの形を……!!」
『コッ、コココ、殺シテクレェェェ!!!』

73話　修羅場の修羅

「……コレガ、ワタシノ知ッテイルコトノ全テダ。コレ以上ハ何モ知ラン」

……ふむ、なるほど。

この目の前の超ドスケベミニサイズ婦警服の女、泊地棲姫……、鬼じゃなくって姫だそうだ……、彼女が言うには、海を守ろうとする意思が、自分達を強化した、らしい。

上位者、ではないな、何だろうか、この海そのものの意思なのだろうか？分からん。

そして、最近深海棲艦が強くなってきている理由は、艦娘が海に沈んでくるから、だそうだ。

要するに、轟沈、つまり海に還るその時、海がその艦娘の情報を得て、それを以って深海棲艦を強化している。

……なるほどな、原因は強化装置か。

強化装置を装備した艦娘が大量に轟沈、その情報を海に読み取られ、利用された、と。

更に、沈んだ艦娘の数もかなりのもの。

つまり、艦娘が沈んだ数だけ、深海棲艦は強化されると言うことか。

何となく、分かってはいたがなぁ。

「……ソノ、コノ服ノママ仲間ニ会ウノハ、本当ニ勘弁シテクレナイカ？モウ二度ト人ヲ襲ワナイカラ、ソレダケハ……」

因みに、今は、ひっ捕らえた泊地棲姫、南方棲戦姫、空母棲姫を、鎮守府近くの、深海棲艦の離島に護送中。

もちろん、写真は撮ったし、カメラも回してある。

「大丈夫だって、離島も君達みたいな変態ばっかりだから」

「ワタシハ変態デハナイ!!」

とぼけちゃってぇ（マジキチスマイル）。

「深海棲艦はスケベな変態ってそれ一番言われてるから」

「ナッ?!ソンナコトハ!!!」

反論しようとする泊地棲姫の後ろを指差してやる。
「……ホ、ホラ、アレハ、ソノ、例外ダロウ、多分」
そこには、水龍敬ランドみたいな格好のまま、優雅に紅茶を楽しむ南方棲戦姫と、裸エプロンにハイソックスで昼寝をする空母棲姫が。本人達曰く、慣れた、だそうだ。
その全裸より恥ずかしい格好に慣れちゃったら終わりだと思うんですけど（名推理）。
さて、そろそろ離島だ。泊地棲姫に現実ってやつを教えてやらねば。

「アラ？提督？マタ新シイ子ヲ捕マエテキタノカシラ？」
離島に到着。出迎えてくれたのは、優しく微笑む離島棲鬼。ゴスロリ。
「ホ、ホラ！離島棲鬼ハマトモダゾ?!!」
泊地棲姫がそう言うが、残念。
瞬時に離島棲鬼の服を剥ぎ取ってやる。
すると……。
「!!?!、ナナナナナナナ?!ナンダコレハァァァァァ!!!!」
「アン??提督ッタラ、ダ・イ・タ・ン、ネ??ンンッ?!!、敏感ナトコロガ、風ニアタッテェ????」
ゴスロリの中身は、荒縄で亀甲縛り、下着は着てない!!!やっぱり変態じゃないか!!!
「ショ、正気ニ戻レ!!離島棲鬼ィィィ!!!」
「アアン??ナ、縄ヲ引ッ張ラレルト、キツク締マッテェ??キ、気持チ、イイッ????」
「離島棲鬼ィィィーーー?!!!」
「じゃあ、俺、帰るから。大人しくしてるんだよ、泊地棲姫、南方棲戦姫、空母棲姫。離島棲鬼ちゃん、あとよろしく」
「ハーイ??」
「マ、待テ!!貴様、ワタシヲココニ置イテイク気カ?!!戦姫モ空母棲姫モ

何カ言ッテヤレ!!」
離島棲鬼にガッチリホールドされた泊地棲姫。戦姫と空母棲姫に助けを求めるが、
「ホー、中々イイトコロダナ！」
「提督、マタ会イニ来テネ？」
駄目でした。
「チクショオオオオオオオ!!!!!!!!」

さて、これにて一件落着!!
×と言うことで、折角だから、音成鎮守府の子達も呼んで、黒井鎮守府で祝賀会だ!!!!
×××
×××
×××
×突然ですが、黒井鎮守府の空気が最悪です。
×…あ。
×えと、すいません、音成鎮守府の提督、海原守子です。
本日は、合同作戦の成功を祝って、黒井鎮守府で宴会、とのことで……。
もちろん、恐縮のあまり、遠慮してしまいましたが、是非に、とお願いされちゃいまして、お邪魔させてもらいました。えへへ。
お酒もお料理も本当に美味しくて、皆んな楽しんでいたんです。
……あの時までは。

そう、問題のあの時、ビスマルクさんのあの一言が原因で……。

……「提督！そう言えば、私達の子供は男の子かしら、女の子かしら?!」

……ええ、空気が死にましたね、あの時は。
隣にいた、黒井鎮守府の軽空母、鳳翔さんが、全く笑っていない目で、「ふふふ、面白い冗談ですね？」とか言ったんですけど、そうしたらビスマルクさんが、
……「あら？さっきもまた子作りしたのよ？何回もしたから、双子かもしれないわ！」
とか言って！さっきまで楽しくワイワイしてた筈なのに、一気に皆んな黙って、ガラス玉みたいな目でこっちを見るんですよ!!!?
怖い!!!
もう私、本当に、怖くて怖くて……。
どうすれば良いのか分からなくって、取り敢えず、近くにいる、黒井鎮守府の提督さんに助けを求めようとしたら……、
「えっ?!い、いや、ヤってないよ俺!!!?」
そして、その一言を皮切りに、静寂は破られました。……そして、その一言は、今のこの惨劇の始まりでもありました。
「へーイ!!提督ー!!!どうして!!!?どうしてデスカ!!!?」
「なん、で？私は、私は、貴方のヒロインでしょう?!何で?!何で?!!!?」
怒り狂う子もいれば、
「榛名は、榛名は、榛名は……、あああああああ!!!!」
「嘘だ、よな？嘘だよな?!嘘だと言ってくれ、提督!!お、俺は、お前がいないと駄目なんだ!!強くなんてない、お前無しじゃ生きていられない、弱い女なんだ!!!!

地獄絵図って、まさにこのことなんだろうな……。
中には、
「ふうん、ビスマルクさん、おめでとう！次は私達の番だね、加古！」
「そーだね、古鷹！……まさか、ビスマルクと出来て、私達と出来ない、なんて道理は無いよね、提督？」
何故か喜んでる子もいましたけど、それは少数派。大半は、まあ、凄いことになっていました。
その、凄いことになった艦娘達は、提督さんを囲んで、愛憎入り混じった視線を向けてきました。
ど、どうするんですか、提督さん?!
こ、これ、このままじゃ、こ、殺されちゃいますよ?!!
……あと、私も何故か巻き込まれてるんですけど?!!
誰か助けて!!!!

「……あー、守子ちゃん？こっち向いて？」
「えっ？あっは、んんっ?!!」
な、えっ？キ、キス?!あっ、お酒の匂い、唇柔らかっ！……ん、これ結構気持ち良いかも？
じゃなくって!!!!何でこの局面でこんなことを!!!?
更に高まる殺気！あ、わ、私、ここで死ぬ?!!!?

「て、提督?!!こ、このビスマルクの目の前で、他の女の子と子作りなんて!!!う、浮気って言うのかしら？その、浮気？ってやつじゃない!!!怒るわよ!!!!」

「「「……は？」」」
……はい？

「良いか、ビスマルク？」
「な、何かしら？」

「キスで子供は出来ん!!!」
「えっ?!そ、そうなの?!!!」

……え?いや、その、まさか……?
「そ、そんなぁ、私、お母さんになれたんじゃなかったの?」
じゅ、純朴過ぎるっ!!!
「……はぁ、そう言うことだったのデスネー?焦って損した気分デース」
「よ、良かったぁ〜」
安心のあまり、艦娘達は皆んな膝から崩れ落ちました。た、助かった?
あ、わ、私も、こ、腰が抜けちゃって……。
「よっと、大丈夫かい、守子ちゃん?」
「あ、ありがとうございます!」
ふわぁ、だ、抱きしめてもらってる?!……じゃない!早く離れないと、艦娘達に殺される!!
「だっ、だだだ大丈夫です!大丈夫ですから!!」
「……産まれたての子鹿みたいだけど?」
「も、元からです!!」
「そ、そうかい?なら良いんだけども」

……その後は、彼は、泣きついてくる艦娘を上手にあやして、やがて、元の雰囲気に戻してしまった。
不安そうな子の手を握り、泣いてる子の背中を撫でて、抱きついてくる子を抱きしめ返して……。
す、凄い、艦娘とあんな風にスキンシップをとるなんて……。
……艦娘は人間とは違う。艦娘は、比喩表現抜きで強いのだ。
その力の差は、大人と子供以上。
彼は、ああして簡単そうに抱き合っているけど、やっていることは猛獣にじゃれつかれているみたいなものだ。
私なら、抱きしめられれば、骨は折れちゃうし、内臓も潰れると思

う。
おまけに、艦娘と言うのは、得てして幼い。
それもそのはず、艦娘がこの世界に現れてから、まだ十年もしていないからだ。
つまり、私より大人っぽい戦艦や空母の艦娘も、皆んな十歳以下。確かに、ある程度の知識を持って召喚されるとはいえ、その精神はまだまだ未熟さが残る。言ってしまえば、まだ子供だ。
そんな子供達を、あんな風になだめるなんて、かなり難しいことだと思う。
でも、それだけじゃなくって、ただ子供をあやすような優しさだけじゃなく、艦娘達を一個人として、一人の女性として尊重している。
殆どの提督は、艦娘の、素手で人体を引き千切る力と、入渠すれば欠損した肉体さえ治る耐久性、砲弾が飛び交う恐ろしい戦場を笑顔で駆ける精神、そう言ったものに恐れをなして、迫害するようになるのに。
でも彼は、そんな数多くの不可能を可能にしているからこそ、ここ、黒井鎮守府を日本最大の鎮守府にまでのし上げられたんだろう。
……やっぱり、彼は本当に凄い。
私の目標だ。
いつか私も、彼みたいな凄い提督に……。

７４話　ハラスメントの帝王　甲

「提督、その、大和型建造の件で大本営から通知が来てますけど」
「あー、あれだ、大和型建造時の監視カメラの映像でも送っといて」
　良いじゃん、どうでも。
　そんなことより、不安のあまり更に厳しくなった監視の方が大変。
　やはり、前回のビスマルクの件がまだ尾を引いているらしいな。
　ここいらでこう、ガッとコミュニケーションを取って、艦娘に安心をお届けしないとな。うん。
　……いや、待てよ？
「……今回こそ、好感度を下げられるのでは？」
　そう、精神的に弱っている女の子に追撃のグランドヴァイパー。（精神への）ダメージは更に加速する。これは非モテですわ。
「……提督、前も、同じようなことを言ってスカート捲りをして、失敗しましたよね？」
「い、いや、あれはさ、スカート捲りだったから！今回の俺はもう悪魔に魂を売ったから！修羅だから!!」
　な、舐めやがって大淀!!
「本当ですか？そもそも、提督になら何やられても嫌じゃありませんよ、私達」
　いやいや、そんな訳ないね！なんでも、なんてこたぁ無い!!試すか?!
「じゃあ実際に試してやる！男は皆んな狼！怖さを思い知れ!!はい、まずは大淀を抱きしめます！」
「あっ??は、はい、それから？」
　柑橘系の香り。華奢で女の子らしい身体。胸は控えめ。
「耳元で気持ち悪いこと囁きます！」
「ふわぁ??み、耳が、耳元に吐息がぁ！」
　うーん、気持ち悪いこと、気持ち悪いこと……、これだ！
「なぁ……、スケベしようや……」

良し！キモいわ！ギネスに載るレベルだわ!!
「ひゃいぃ……??しましゅ……??」
ウッソだろお前?!!
「……大淀、君さ、失礼だけどチョロすぎない？将来が不安になるレベルで」
「いやぁ、もう抱きしめられた時点で幸せ過ぎて、なんかもう色々どうでもよくなっちゃって……」
鼻血をハンカチで抑えながら照れる大淀。
「どう？好感度下がった？」
「グッと上がりました」
「えー」
おかしくない？流石に今のは下がるでしょ？イケメン俳優が言っても逮捕されるレベルじゃん？
「提督、自分を客観的にご覧になって下さい。提督は何を言っても許されるレベルのイケメンですよ」
こんなん、ノースティリスでプチの肉を食いまくればどうとでもなるぞ？魅力なんて簡単に上がるんだぞ？ワァオー。
「んー、まあ、失敗かー。仕方ない、他の子で試すか。ちょっと行ってくるわ」
「はい、行ってらっしゃいませ、提督」
「……いや、部屋閉めるんだけど？」
「はい、行ってらっしゃいませ、提督」
「鍵閉めたいから部屋から出」
「はい、行ってらっしゃいませ、提督」
村の出入り口で村の名前を教えてくれるＮＰＣかな？同じことしか喋らないのやめない？怖いよ？
「わ、分かったよ、鍵、ここに置いとくから、部屋を出る時は閉めてね？じゃあ、行ってきます」
……執務室を後にする。

……。

……大淀、何やってるんだろうか。また、俺の日用品を新品と入れ替えてるのかな？

ちょっと聞き耳を立ててみようか……。

……「あっ??あっ??あっ??あっ??提督??提督だいすき??????」

……ふむ、水音と喘ぎ声。

……ふむ。

聞かなかったことにしよう。きっとローション塗れでストレッチでもしてるんだろう。そうに違いない。

「イィィィヤッホオオオオオ!!!」

「司令官が空から?!!」

「降ってきたのです?!!!」

場所を移して鎮守府の正門前。そこにいたのはいつもの遠征組。天龍型と暁型である。

んなぁるほどぉ～？天龍ちゃぁぁん？

「オイオイ、びっくりするだろ？今度はどうしたんだ？」

「うー、わっほい!!」

パンツいただき。

「更にフォイ!!!」

ブラいただき。

「……はぇ？」

「天龍、くまさんパンツはどうかと思うぞ？あと、その胸の大きさでそのブラはおすすめできないな、形が崩れる可能性がある。しかし、艦

娘の身体の強靭さから考えればどうでも良いことかもしれないな」
「……な、な、な、な、にゃにをしやがるーーーーー!!!!」
おーおー、お怒りですわ!!こりゃあ好感度下がったわ!!!やったぜ!!!
「ヘイヘーイ!!天龍ちゃんびびってるぅー!!!」
「バ、バカヤローーーっ!……ガキ共が見てるだろ!!教育に悪い!!
……ったく、ヤるのは構わねぇけど、こう言うのは夜にしろっ!!!」
えっ?そこ?
「えっと、下着が可愛い方が良いのか?オレはそう言うの分からねぇから、龍田に聞いてみる。あ、それは処分して良いぞ」
えっ、マジ?
「じゃ、じゃあな、夜、提督の部屋に行くから……」
えっ、嘘?
どうしろと?

「あらあら〜?提督〜?」
あっ、死ぬわ俺。
「たっ、たたたた龍田、違うんだこれは許してくれごめん」
「私は昼からでも良いわよ〜??」
「?!」
「私にはどんなことをしても良いけど、天龍ちゃんには優しくしてあげてね〜?」
そう言って、胸元を大きく開く龍田。でけぇ!
「あ、あのさ、龍田って、俺のこと嫌いなんじゃないの?」
あれ?嫌われてたよな?
「もー、何言ってるの?……もう、貴方は充分に、私達に優しさを示してくれたじゃない?」
珍しく、影のない笑み。純粋な喜び。
「あー、その、つまり?」
「もう、これ以上、女の口から言わせるのは野暮ってものよ〜??」
か、かわいい……!龍田がかわいい!
「ま、まさかそんなに好感度が高いとは……。おいおい、冗談だろう

？」
「信じ、られない？まあ、そうよね～？私は貴方に、きつく当たっていたものねぇ……。ごめんなさい、今までの非礼を詫びるわ、提督……」
　さっきとは一転、悲しそうな顔で頭を下げる龍田。
「い、いや、良いんだよ！気にしてないし!!そんなことより、そんな風に謝られる方が辛いよ!!」
　いや、本当に。龍田は何も悪いことしてない。
「そ、そう？許してくれる？」
「許す!!」
「……やっぱり、貴方は優しい人。貴方になら天龍ちゃんを任せられるわ～」
　……ん、あれ？これ、このままじゃ、好感度が上がって終わりじゃね？
　クソ、ナチュラルに行動するとついつい好感度を上げちまう!!ここが分岐点だ！最高の選択肢じゃなくて、最悪の選択肢を選ぶんだ!!!
「……さっきは、昼からでも良い、だなんて言ったけれど、もちろん冗談よ～？私は、天龍ちゃんさえ、幸せになってくれればそれで良いの～。お願い、提督、天龍ちゃんを幸せに」
「ハイスラァ!!!」
　パンツとブラいただきぃ!!!
「……は？……え？」
　唖然とする龍田。ふっふっふっ、好感度が大幅に下がったな！俺の命と引き替えに!!今までありがとう皆んな!!第３部完!!来週からは機動戦士旅人が始まるぞ！皆んな見てくれよな!!
「……ふふ、ふふふふふ、あはははははは!!!」
　ヒィー!!めっちゃ笑ってるうーーー!!ここここ殺されるーーー!!!
　あ、ああ、襟首を掴まれて!!
　引き寄せられて!!!
「んーっ????」
　……キスされた？
「あは??そう、そういうことね??貴方は、器が大きいものね??天龍ちゃ

んだけじゃなく、私も女として見てくれるのね??嬉しいわ、嬉しい??????
天龍ちゃん共々、幸せにしてね?」
あんるぅぇぇぇぇ!!!
「い、いや、いきなり?!下着を剥ぎ取るような男は」
「私、ずっと不安だったの。貴方は、私には愛しているとも言ってくれないし、抱きしめてくれる訳でもない……。正直、女として見られていないんだと思ってた。でも……、うふふ??こんなことをするってことは、期待して良いってことよね?嬉しいわ~??」
そのまま、極めて嬉しそうに去っていく龍田。えぇー?
どうすんのこれ?

「はい!しれーかん!」
「ん?どうしたのいか、ず、ち?」
えっ、なんでパンツ差し出してきてんの、この子?
「?、欲しいんでしょ?大丈夫!私のをあげるわ!!私、司令官の為なら何でもするし、何でもあげるわ!!他に何か欲しいものはある?何でも、何でもあげるんだから!!」
うん、今の状況酷いよ?子供から脱ぎたてのパンツ受け取る男。ヤバくない?事案だよ?
その後も、暁型の皆んなは嬉しそうにパンツを押し付けてきた。その場で。脱ぎたてを。
「は、恥ずかしいよぉ~!で、でも、司令官が喜んでくれるなら……」
「電?恥ずかしいなら無理しなくて良いんだよ?」
「はい、司令官、これを」
「響、顔真っ赤だよ?こんなこと、しなくていいから」
「い、一人前のレディなら、こ、これくらいへーキだし!!」
「暁、一人前のレディは人前でパンツ脱がないからね?」
そして手元の六人分の下着。どうすんのこれ?どうすんの?
……むぅ、ほんのり温かい。

「にしても、パンツを何に使うのかしら?電、分かる?」

「はうっ?!そっ、それは、その……、えっと、夜に……」
「うーん、司令官は大っきいし、そもそも男の人だし……、本当にどうするのかしら?」
「わ、私は知ってるわよ?!な、なんてったってレディだし!!」
「はいはい、分かったよ暁。……雷、そういう話はまた後でいいじゃないか。とりあえず、鎮守府に帰ろう。そしておやつにしようじゃないか」
「そうね!とりあえずは休憩ね!」

そして、困惑する俺をよそに、去り行く暁型。
だが、最後に響が俺に近付いてきて……、
「司令官、態々下着を使わなくても、私本人を使ってもらって構わないんだよ?……私は艦娘、見た目よりずっと丈夫だよ。司令官の大きいソレも、無理矢理挿れてもらっても大丈夫。壊すつもりで抱いて良いんだよ」
「ななななな何を言ってるんだー?ひひひひひ響、抱くって何だー?抱っこかー?良いぞー?」
あっぶねえ!!!まさかのダークホース!!!思いの外ヤバかったぞ響!!!
とりあえず抱っこで誤魔化そう。大体の駆逐艦はこれでＯＫよ。
「ほーら、たかいたかー、い?」
と、抱き上げようと屈んだところ、逆に抱き寄せられ、頭を響の胸に押し付けられる。
「誤魔化されないよ、司令官。司令官は、女の下着だけが好きな訳じゃないよね、それは分かってるんだ。私には胸はないけど、その代わり、身体のどこを使っても良いから」
ホゲェーーーー!!!なんか凄いこと言ってるぅーーーー!!!!
「さあ、司令官、私の身体、好きに使って?大丈夫、私のことなんて考えなくて良いから。道具みたいに、好きに使って欲しいんだ……??」
ヤバいヤバいヤバいヤバい!!!響がエロい!!!手を出しちまいそうだ!!!

「あー！ずるーい!!私もー!!」
「司令官、その、私も、ぎゅってして欲しいのです！」
「もー！レディの私をほっといて、響と抱き合うなんて!!」
　た、助かった！
「はいはい！ケンカしないの！おやつにするんだろ？何でも好きなもの作ってあげるから！」
「本当に!!」
「やったのです!!」
「わーい!!……はっ?!い、いけない、私は大人のレディ、大人のレディ……」
「チッ」
　うわぁーーー!!響今さり気なく舌打ちしたーーー!!あっぶねえ、回避できて良かった!!!
　さあ、命を繋いでおやつタイムだ。

「次回に続くっ!!」

「司令官、誰に話しかけてるの？」
「いつものおふざけなのです」

７５話　ハラスメントの帝王　乙

さて、おやつタイム終了。
手元にある六人分の女性用下着は無かったことにして、懐にしまい込む。いや、四次元ポケットにしまっておこう。念の為。
「ったく、どうすんだよこれ？返すタイミングを完全に失ったぞ？」
愚痴りながら、四次元ポケットの呪文を唱え、折り畳んだ女性用下着を、空間に出現した渦にブチ込む。

「Ｗｏｗ?!凄い……！それは、ｍａｇｉｃかしら？Ａｄｍｉｒａｌ？」
ありゃ?!見られてた？
「ウォースパイト、い、いつから見てたの？」
「いえ、今さっきからですよ。……Ａｄｍｉｒａｌが女性用下着を握り締めているところから、です」
お？死んだか俺？今日こそ死んだか？
「見なかったことにして、どうぞ」
許して。
「んー、ｓｏｒｒｙ、忘れてあげません」
「な、何が望みだ！要求を言え！」
「……私、さっきまで出撃していたんですよ、Ａｄｍｉｒａｌ？つまり、汗をかいてしまいました」
「……シャワー浴びれば良いんじゃないかな？」
「Ｔａｋｅ　ｙｏｕｒ　ｈａｎｄ　，　ｐｌｅａｓｅ　？」
「そりゃ無理だ、申し訳ないけど」
先程の大人のレディ（笑）とか戦闘妖精でも対魔忍でもない方の雪風とかなら、背中でも何でも流してやるが、流石にウォースパイトはいかんでしょ？
「ふふ、そうですか、手を貸してくれるんですね！ありがとうございます、Ａｄｍｉｒａｌ??」
アチャー、聞いてないやつだこれ！
「あ、あのオッゴ!!」

「さあ、私のｒｏｏｍはこっちですよ、Ａｄｍｉｒａｌ??」
ぬうう!!一瞬のうちに、鉄球の回転で肉体を活性化させ、俺が避けたら自分自身が勢いのあまり怪我をするくらいの速さで抱きついて来おった!!こうされると回避できぬぅ!!!
「ちょ、ちょっと待っ」
ぐおおお!!腕力強ええええ!!!足が不自由な分腕力強ええええ!!!

そして始まった逆ソープ。
……誰得？
「あー、加減はどうかな、お姫様？」
肌は真っ白、艦娘特有の健康さから、かなりのハリとスベスベ感。
「んっ??さ、最高……よ??」
まあ、洗うだけだし？女の子と入浴したことなんて１１４５１４回くらいあるから、気負うことはないんだけどさ？
「あん??ふふ、本当に、上手ね、Ａｄｍｉｒａｌ??」
全幅の信頼を寄せて、身体を預けてくるウォースパイトが、ねぇ？まるで警戒してないんだ、この子。具体的には、簡単に命を奪えるくらいには気を抜いている。普段は全く隙がないのに。
流石に、この信頼は裏切れないよなぁ……。
い、いや！ここが俺の悪いところ!!ここで一歩前に進まねば!!
「トゥ―！ヘヤ―!!」
おっぱいを、揉む……!!
わーい！でけぇ!!!
「ほーら、ウォースパイト？簡単に男に身体を預けるんじゃないよ？こういう事されちゃうんだからね？」
「……Ａｄｍｉｒａｌ？」
あっ、ヤバい、怒られる？
「貴方はいつも、優しく触れてくれるわね??でも、ね？」
俺の手を上から掴んで……？
「もっと、強くして良いのよ??こんな風に??????」

揉まされるゥーーー!!!!
「ウォースパイトおおおお!!!!ｓｔｏｐ!!!ｓｔｏｏｏｏｏｏｐ!!!!」
「遠慮、しなくて良いのよ??淑女は、殿方を受け止めてあげるものですから……??」
ＧＯサイン出とるやんけ!!い、いや、駄目だ！ウォースパイトに一度飲み込まれたらそのまま引き摺り込まれる!!!
「あーあーあー!!は、早く終わらせて紅茶でも淹れようか!!!ねっ!!!」
「Ａｈ、そうね、初めてはベッドの上が良いわね??」
「ウォースパイト、ちょっと日本語の勉強しようか?!!日本語!!!通じてねぇ!!!!」
「?、そうかしら?まだあまり慣れていないから……。ｓｏｒｒｙ、Ａｄｍｉｒａｌ」
あるぇー？

ウォースパイトから解放され、娑婆の空気を味わう俺。
陰腹を切っておいて正解だった。失血のあまりエロどころじゃなくなって、逃げ切れたもの。さーて、輸血液輸血液。

「艦隊のアイドル！那珂ちゃんだよー!!イェイ!!」
「……どっから湧いて出た？」
殺伐としたｓｓに那珂ちゃんが!!
「もー！ひどーい！那珂ちゃんはアイドルなんだよー！優しくしてくれなきゃダメー!!」
かわいい。
ついついからかいたくなるタイプ。
「芸能界は厳しーんですー!!オラオラ！新人いびりじゃー!!」
頬っぺたふにふに。
「ふにゃ?!お触り厳禁ー!!」
あー、癒される。那珂ちゃんはかなりの安パイ。いつも笑顔の歌っ

て踊って戦えるスーパーアイドルだ。

そんな罪なきスーパーアイドルにセクハラをします。慈悲はない。

せーの、

「ジョイヤー!!」

抱き上げ、からのお尻！揉む!!

ほー？ダンスと戦闘で鍛えられたお尻は程よく引き締まりながらも、女性らしい肉付きもしっかりと感じられる……。

肌も綺麗で触り心地も最高。下着も触った感じ良質でありながらも可愛らしいものを着用……。

まさにアイドル!!

「……あ、て、提督ー！こらー!!アイドルにセクハラしちゃダメー!!」

一瞬、いつもの笑顔のまま、フリーズ。そして即座に再起動。

「どう？好感度下がった？」

「下がっちゃいましたー！バッドコミュニケーションですー!!」

「やったぜ」

「な、なんでぇー?!那珂ちゃんと仲良くしたくないのー?!」

「あ、いや、違うよ？ただ、あんまり好感度が高いと、あー、そう！アイドル活動に支障が出るじゃん？」

適当で良いだろ、那珂ちゃんだし。

「えー？提督と一緒にいる時の那珂ちゃんは、提督だけのアイドルなんだから大丈夫だよー！」

いつもの笑顔で答える那珂ちゃん。

「おっ、そうだな（適当）」

「もー！」

あ、そう言えば那珂ちゃん、自室ではやたらとだらしないらしい。同室の神通が言ってた。

おかしいな、俺は那珂ちゃんのだらしない姿なんて見たことないけど……？まあ、一応言っておくか。

「そう言えば那珂ちゃーん？聞いたよー？お部屋の中じゃだらしなく

してるんだってー？」
「……えっ、や、やだなー！アイドルの那珂ちゃんがだらしない訳ないんだからー!!」
　またもや、いつもの笑顔のままフリーズ、そして再起動。
「ほんとぉ？（狂気）」
「ホントにホントー!!那珂ちゃんはアイドルだもーん!!」
「分かったよ、信用するよ。でも、同室の子に迷惑かけちゃ駄目だぞー？」
「分かってるよー！……神通姉さん、怖いし。それじゃ、私はこれからライブのリハーサルだから！じゃあね！提督!!」
「おー、頑張れよー」
　そして、いつもの笑顔のまま去りゆく那珂ちゃん。那珂ちゃんのファンになります。
　途中、振り返って、
「あ、そうだ！そ、そのね、那珂ちゃん、そういうこと分からないから……、今度までに勉強しておくねっ！」
　いかがわしいことの勉強をするのか（困惑）。
「そんなこと、しなくていいから（良心）」

　はぁ、相変わらず元気一杯だったなー。かわいい笑顔で。

　あれ？
　そう言えば、俺、笑っていない時の那珂ちゃんを見たことねぇや。
　あれ？
　ステージの上ではもちろん、リハーサルも辛い練習も、戦闘中も……。
　俺の前では、「確実に笑っている」……？
　数日前に、一緒にスカイダイビングした時も、一度目は断ったけど、その次の週には、「練習したから大丈夫！」だとか何とか言って、「いつもの笑顔のまま」スカイダイビングをしたっけ。
　……あれ？

×那珂ちゃん、結構ヤバくない？
×
×そ、そっとしておこう……!!
×
×
×
×
×
《数日前……よりも前》
「艦隊のアイドル！那珂ちゃんだよー！」
×……なんて、ね。
「それにしても、急にスカイダイビングしろー、だなんて、困っちゃうなー」
流石に、歌と踊りには自信があるけど、スカイダイビングの経験はないなぁ。
「全く、夜更かしはお肌に悪いのにぃー！」
でも、提督が望んでるから。提督好みのアイドルにならなきゃ。アイドルは、努力をするところを見せちゃいけない。泥臭い練習シーンは、提督に見られない夜中、人気のないところで。
「うわぁ、やっぱり、鎮守府の屋上は高いなぁー……。こ、怖いよぅー」
でも、スカイダイビングの練習しておかなきゃ。提督の前では、一番かわいい私でありたい。いや、一番かわいい私でなくてはならないから。本番で笑顔を見せられないアイドルなんて、要らない。
「うーん、良し！那珂ちゃん、行っきまーす!!」
鎮守府の屋上から、飛び降りる。
「!!!〜〜〜っ!!あぐっ!!!」
悲鳴は、上げない。提督にだけは見られる訳にいかないから。他人にバレたら、提督を呼ばれるかもしれない。
そして、着地。全身が酷く痛む。
……腕の骨にヒビが入ったみたい。
「い、いたたた……、こ、こんなことなら、神通姉さんの稽古をしっかりと受けておくんだった……。はっ?!いけないいけない！那珂ちゃんスマーイル!!」

笑わなきゃ。笑えないアイドルは可愛くないから。
「よーし、次は絶対、笑ったまま飛び降りるんだから!!那珂ちゃん、ファイトー!!」
階段を登って、飛び降りる。
「ひっ……!!ぎゃっ!!!」
失敗。笑えなかった。そして、腕の骨が完全に折れた。
「あ、あれ?お、おかしいなー?失敗しちゃった?本場ではもっと高いところから落ちるのに……。ま、まだまだだよー!那珂ちゃんはアイドルなんだから……!!」
階段を、登る。そして落ちる。
「えへっ……、いぎゃっ!!!」
登る。そして落ちる。
「あははっ……、ぐっ!!」
登る。そして落ちる。
「あはははは!!ぎっ!」
登る。そして落ちる。
「あはははははははははは!!!!」
登る。そして……。

７６話　ハラスメントの帝王　丙

「あいむしんかーとぅーとぅーとぅーとぅとぅー！」
よう、首輪付き、旅人だ。
蒼龍を襲撃する。付き合わないか？
え？付き合わない？
……あ、そう。
え？裏山のさくらんぼ？ああ、採っていいよ、駆逐艦の子達と行くの？……うん、大丈夫。あ、あと、メロンもそろそろいけるから、あとで収穫しといて。
……さて。
「ふぃーるいと！いんざうぃる!!!」
「……ほぇ？」
隙だらけの蒼龍を襲撃!!
着物のォ！胸元をォ!!全ッ開ッ!!!
「Ｏｈ　，　ＳＡＲＡＳＨＩ　？」
スキル：窃盗
サラシ↑
褌
着物
「有給ラッシュ!!!」
成　功
サラシ　を　てにいれた　！
Ｅｘｐ　＋８１０

……それは、乳というにはあまりにも大き過ぎた。
大きく、ふわふわで、重く、そしてえっち過ぎた。
それは、まさに巨乳だった……。

「……え？」
おや、まだ現実が飲み込めていないご様子。

「おはよう、蒼龍！今日もかわいいね！」
「え？う、うん！おはようございます！提督！……あれ？」
……俺の勘違いじゃなければ、またでかくなったか？この乳？うちの艦隊トップクラス……。少なくとも１００ｃｍはある……。
「……？！、きゃ、きゃあ!!」
あ、やっと気付いた。
「びっくりしたなぁ、もぅ！」
うん、まずはそのおっぱいを隠そう？いや、脱がせたのは俺だけどさ？
「……すまぬ」
戻しとこ。
「え？なんで戻すの？触りたいんじゃないの？」
いや、触りたいよ？でもさ、触りたいからって触っていい訳じゃないの。
「第一、もっと恥ずかしがらなきゃ、ね？」
「えー？提督になら、良いんだよ？」
「はいはい、良くないです！……あと、サラシはやめなよー？ちゃんとした下着じゃないと、形が崩れるからね」
「？、普段は、提督の言う通りに、ちゃんとしたのを着けてるよ？私、さっきまで出撃してたから、提督の言う通りにサラシにしただけで……」
……まあ、聞き分けが良い分、他の子よりもマシ、と思うじゃん？
「そ、そっか。でもさ、蒼龍も女の子なんだから、服とか髪型とか、そう言うことに気をつけた方が良いんじゃないかな？出撃中だって、好きな下着を着たって良いんだよ？」
「うん！分かった！提督の言う事はなんでも聞くから!!」
……これなんだよなぁ。
「あー、その、蒼龍？俺はただ、こうした方が良いかもって、助言をしてるだけなんだ。ありのままの蒼龍で良いんだよ？」
「？、何で？提督が言う事は全部正しいんだよ？どうして、態々正解以

外の答えを選ぶ必要があるの？」

……自己の放棄。

一番やっちゃならない事だ。人生ってのは、どんなに辛くても、自分で進むべき道を選ばなきゃならない。人は誰でも幸せを探す旅人のようなものだから。

「提督、私ね？今まで、提督の言う通りにしてきたら、全部が上手く行ったんだよ！戦闘でもなんでも！全部!!」

「蒼龍……」

依存と言うより、甘えなんだろうか。

見た目は小柄なトランジスタグラマー。だが、中身は赤子のように純粋だ。

「だからね、私ね、提督の言う事ならなんでも聞くんだ！これからも、いっぱい命令してね、提督??」

……だから、俺の命令がないと、何もできない。

「……こりゃ、自立させるのに骨が折れそうだ……」

「何か言った？提督？」

「いや、何でもないよ……。そうだな、今日は、どんなことをしたんだい？」

「え？今日？今日は、提督に言われた通りに出撃して、提督に言われた通りに深海棲艦を殺して、提督に言われた通りに無傷で帰ってきたよ！」

「……そう、か。偉いぞ、よく頑張ったな……」

確かに、命令はしたけどさぁ……。

「昨日は、提督に言われた通りに飛龍と遊びに行って、その前の日は、提督に言われた通りに一航戦の二人と弓の練習をしたよ、その前と、そのまた前の日は、何も言われてないからお部屋で待機してたよ、その前も……」

「わ、分かった、もういい！」

やべえ、悲しくなってきた。この子、俺が声をかけてない日はずっと待機してんのか……。

「?、はい、分かりました」
まるで汚れを知らないかのような笑み。そのまま、俺の目の前で待機している。……今までは、凄く愛想が良い子だと思っていたが、まさか、これ、命令を待ってるのか?
「あのね、蒼龍?俺の命令じゃなくてね、その時自分がやりたいと思ったことをやるんだ」
「私は、提督の言う事を聞くのがやりたい事だよ?」
うーん、この。
じゃあ、こうするか。
「あー、あれだ、蒼龍、今度デートしよう」
「ホント?!」
「ただし!行き先も、日時も、全部蒼龍が決めるんだ、良いね?」
「……え?だ、駄目だよ、わ、私じゃ」
「別に、嫌ならやめても良いんじゃよ?」
「そ、それはやだよ!一緒にデートしたいもんっ!!」
「そうだ、それでいい……。それじゃ、決まったら連絡してくれ。大丈夫、蒼龍となら地獄にだって行ってやるさ!」
地獄の閻魔様、めっちゃ可愛いし。死神も可愛い。おっぱい大っきい。
「……うんっ!!ありがとうございます!提督!!」
いやぁ、丸く収まった。あんまりにも甘えられると、旅どころじゃなくなるしな。
ま、これも、俺の人徳が成せる業ってとこかな?(自意識過剰)

×
×……後日、蒼龍とのデートで、最終的にお城のようなホテルに連れ込まれるのは完全に別の話だ。
×
×
×
×
×
×
「提督??私の作った卵焼き、食べりゅ?」

「お、食べりゅ、食べりゅー」
もー、提督ってば、可愛いんだから??
「お味はどう？」
「うまみー」
やった！今回も、喜んでもらえた！
私が「入った」卵焼きで……。
私はね、提督？貴方のことが大好き??……でも、その大好きって気持ちと同じぐらい、貴方を尊敬しているの。
私はね、提督？貴方に助けてもらったこと、忘れずに覚えてるよ？あの時も、出撃の時も、私を、皆んなを守ってくれたよね。
私はね、提督？貴方みたいな人になりたいの。貴方みたいに、強い人に。強くなって、皆んなを、貴方を守ってあげたいの。
だからね、提督？私を、食べて？私と、一つになって？
そうすれば、私は貴方に近付ける気がするの……??
「美味しいけど、血を入れるなら味付けを変えた方が良いね」
「……気付いて、たの？」
「え？気付いてないと思ったの？……あ、良いよ、別に困ってないし。艦娘の血液は人とはちょっとばかり違うみたいね。感染症とか気にしなくて良いのかな？」
そんな、入れたのはほんの少しなのに……。
「なんとなく、鉄っぽさが強いかも。艦娘だからかね？ほんの少しハーブとか入れると良いかもね、匂い消しに。……ご馳走様、瑞鳳」
「え、あ、うん……」
……動じて、ない？提督なら、あり得る、かな？普通は、怒ると思うんだけど、もうずっと前から気付いてたみたいだし……。
「……その、ごめんね。気持ち悪かったよね……」
「？、別に？マミーの肉とか食ったことがある身としてはねー。美味

くて毒がなけりゃ幸せだよ」
……マミー？
「あー、なんて言えば良いんだろう、歩く腐乱死体？」
「?!、な、なんでそんなものを……？」
「……ノースティリスの冒険者はクソだ」
な、何があったんだろう……。
「そうだなー、じゃあ、はい」
「えっと……？」
膝の上を叩く提督。……座れ、ってこと？
「罰として、俺の膝の上に座ること！」
「そんなことで、良いんですか？」
「男の膝の上に座るってかなりキツイ罰だと思うけど……？」
むしろ、ちょっと嬉しいくらいなんだけど……。まあ、いいや。
「じゃ、じゃあ、座るね……？」
んっ??提督の膝……??胸も硬くて……??
「はぁぁ～??こうしてると、蕩けて、提督と一つに混ざり合っちゃいそう……??」

「隙ありゃーーー!!!」

……あ、れ？
着物の中に、手を、入れ、られて、る……?!!
「なーに安心しとるんや?!これはセクハラ回だぞ?!オラオラ!!!全身まさぐってやる!!!」
「きゃん！だ、駄目だよ～！格納庫まさぐっちゃ駄目！」
あっ??て、提督、凄く優しい触り方……??温かい提督の手が、私の敏感なところを優しく撫でてくれて……??
「えっ、この辺、格納庫なの？マジで？……格納できる程の容量無くない？（小声）」
「あんっ??て、提督、もっとぉ??????」
「お、おう」

優しいマッサージ、気持ち良くって、おかしくなりそう??

「……提督?その、なんでこんなことを?私なんかの、小さくて貧相な身体、触っても面白くはないかと……。もっと、こう、蒼龍さんみたいな……」

マッサージが終わった。全身に力が入らない。今は、身体を提督に支えてもらっている。

「そのさぁ?どこから来てるのその噂?俺は別に、巨乳じゃなきゃいけないとか、そういうアレは無いからね?」

「でも、ずっと前にお酒に酔った時は、蒼龍さんの胸を触ってましたよね?嬉しそうに……」

……やっぱり、私は他の艦娘に勝てない。だから、こうやって提督と一つになるしかないんだ。他に方法がない……。

「んー、競うな、持ち味を活かせッ!ってところかね。瑞鳳には瑞鳳の良いところがあるさ」

「そう、ですか?」

「ああ、俺には分かる。……瑞鳳のこと、ちゃんと見てるよ。少なくとも、俺は瑞鳳が好きだしね」

……そっか、そうなんだ。提督は、私のことも好いてくれるんだ。

そうだよね、提督は、提督だもん。私が思っているよりずっと凄い人だ。

「……その、提督?私のこと、好きなら、その……、わ、私と、一つになりましょう?」

上着を、脱ぐ。袴の紐に手をかける。今なら、こんな私でも……。

「ほげっ……、ちょ、ちょ待っ」

「あっ……??」

後ろから、強く抱きしめられる。さっきとは違って、強く。

「い、今はこれで精一杯、かな……?そ、そういうのは、もっと段階を踏むべきじゃない?」

「段階ですか?」

「そうだよ!段階だよ!そ、そのさ、こういうのは、か、過程が大事じゃ

ん?!料理と一緒よ、結果を急ぐのは良くない!!ねっ?!」
過程……、そっか、いきなりしなくても、ゆっくりで良い、よね。うん、提督は、私のことを大好きだって、愛してるって言ってくれたし。
「……うん！分かった！ゆっくり、ゆっくり、ね？」
「は、ははは、そうだね、はははははははは……、はぁ……」

でも、いつかは……。

提督と、一つに……。

７７話　ハラスメントの帝王　丁

「お待たせしました、司令！比叡カレーです!!」

　え？何この毒物？

「……え？……何？」

「え、えっと、その……、な、なんでも司令に手作りの食べ物（血液入り）を食べてもらうと、す、スキンシップが出来ると聞いて……。え、えへへ」

　かわいい。

「という訳で！この私渾身の比叡カレーです!!どうぞ、ご賞味あれ!!」

　劇物。

　……あのさ、比叡？ちょっと見れば分かるじゃん？それ、極彩色に薄く光って、泡立ってるんだぜ？刺激臭を存分に放ちながら。

　見るからにさ？

　ヤバイじゃん？

「その、味見とか……」

「はい！霧島がしました!!」

「……霧島は？」

「倒れるほど美味しかったみたいです!!」

　あっ、あかんやつや。長門や武蔵と同格のスーパーインファイターがダウンだと？

「へ、へぇー。ち、因みに、何を入れたの……？」

　何をしたらカレーがこんなことになるの？

「比叡カレーは、その時によって中身が違うんです!!今回は、鎮守府の地下で見つけた、鉄の扉の部屋から材料をもらいました!!……何故か、私は厨房に出入りを禁じられていますから」

　残当でしょ。

　ん？ちょっと待って、地下の扉？

「……ねえ、そこ、ｃａｕｔｉｏｎとかｏｆｆ　ｌｉｍｉｔとか書いて

無かった？」
「？　よく分かりませんけど、黄色いテープに赤色の英語とか、ドクロマークとか書いてありました！カッコよかったので、お邪魔しました！」
　あっ、あっ、ヤバイ、ヤバイ。
「その、そこはさ、立ち入り禁止なんだよね、うん」
「ええっ?!そ、そうなんですか?!す、すみません!!」
「ははは、次からは気を付けてね？じゃ、じゃあ俺は帰っ」
「でも、ちゃんと食べれそうなものを入れましたから！味には自信があります!!」
　ぐうぉ!!輝く笑顔!!こ、断れない……!!
「そ、その、食べれそうなものって……？良ければ、調理手順を教えて？」
　あそこに食材を置いた覚えはないんだけどな？
「はい！司令には、特別に教えちゃいます!!……まず、旧い石造りの棚にあった、骨で出汁を取りました！なんだか、手首みたいな形でしたね！あとは、その隣の背骨も入れました！」
　あっ、それ、聖者の手首と黄色い背骨。儀式素材。ヤバイ。
「その間に、近くの冷蔵庫にあったお肉を焼きました！」
　ふむ、捧げ物用に取っておいたデスアーマーとアダマンタイトゴーレムの肉。
「野菜は、つまらない独り言を言ったら急に飛んできたトマトを隠し味に、」
　ＳＣＰだよ、比叡。それ、ＳＣＰ。
「薬が置いてある棚の近くのものを沢山入れました！」
　テメリア産の錬金術素材。勿論毒物。
「お水は、その薬の棚からお借りしました。あ、勿論、透明なやつだけですよ？お水、ですから！」
　あそこの棚の透明な薬は、呪われたエーテル抗体のポーション、硫酸、毒薬……、兎に角、ヤバイ。
「ルーには、戸棚の粉を入れましたよ！ちゃんと赤色とか、赤褐色のも

のを入れました！」
　戸棚、戸棚の粉……、燼滅刃の塵粉？嘘だろ、勘弁してくれ。
「最後に、とろみをつけるために緑色のスライムを……」
「分かった、もういい！もう、充分だ……!!」
　これ以上聞いたら食べられなくなる。
「？、そうですか？そ、その、じゃあ、あ、あ～ん……??」
ぐ、
ぐおお、
ぐおおおおおおおおお!!!!!
「南無三!!!!」

……。

……？
［発狂］［朦朧］［猛毒］［劇毒］［遅効毒］［麻痺］［大出血］［混乱］［重病］［エーテル病］［突然変異］［火傷］［凍傷］［神経破壊］［盲目］［脆弱］［鈍足］［耐性弱化］……
「比叡カレーのお味はどうですか?!」
「うみみやぁ!!」
「?!」

はっ?!お、俺は、何を？
なんか、ＨＰ的な、生命力的なサムシングを失ったような気が？
いや、それだけじゃない、全身に力が入らない？立つことすらままならない、だと？
　マナも空っぽ、頭も痛い、血も足りないし内臓はミンチ。何やったの、俺？
「え、えっと、どうかしましたか、司令？」
「……？　……?!」

あっ、駄目だこれ、口開けないわ、衰弱が深刻過ぎる。
あっ、あっ、あっ、げ、限界、だ。
「ひゃあ?!い、いきなり抱き付いて……??や、やっぱり、噂は本当なんですね!!お姉さまに早く教えてあげないと!」
いや、ごめん、立ってられないだけだから。
決して、血液入りの料理で俺をコントロール出来るとかそう言うやつじゃない。
「ひ、ひ、えい?」
声を絞り出す。
「はい?」
「な、なんで、こんな事を……?」
何か、俺に恨みでも?
「い、いえ、私は……」
「こんな、やり方、比叡らしく、ないぞ?」
文句があるなら直接言ってくれ!毒はやめて!毒は!
「……だって、だって、わ、私も、私だって!司令が好きなんですから!!」
え?なんて言ったの?耳がイかれて聞こえないわ。まあ、適当に受け答えしておくか。
「私はっ!お姉さまみたいに美人でも、霧島みたいにかっこよくも、榛名みたいにかわいくもないんです!!」
あー、なんとなく、叫んでるのは分かる。どうせ、お姉さま大好きとかだろ。
「私だって!お姉さまみたいに司令と逢引をしてみたいです!霧島みたいに司令の力になりたいです!榛名みたいに司令のお世話をしたいです!」
次は、うーん、お姉さまみたいになりたい、とか、お姉さまとずっと一緒とか、かな?
「でも!私は、私には!お姉さまみたいな美しさも!霧島みたいな強さも!榛名みたいな淑やかさも!何も!無いんですよ!!」
で、最後は、お姉さまは司令が大好きだから、ずっと一緒にいてあ

げて、だろうか。
「……お願いします……、私を、見捨てないで下さい……、お願い……」
縋り付いて泣く比叡。今はなんか目が見えないけど、勘でどうにかしよう。うーん、
「比叡？俺は、比叡（達みたいな子）が好きだ、よ」
ああ、口がうまく回らねぇ。自分でもなんて言ってるんだか……。
「……本当、ですか？」
「嘘は、言わないさ」
「本当に、本当に、私を見捨てませんか？一緒にいてくれますか？なんの取り柄もないこの私を、お側に置いてくれますか？」
「もち、ろんだ」
あー、頭いてぇ。
「私のことを、愛してくれますか？」
「当然、だ」
適当な受け答えしか出来ん。
まーた、どうせ、いつもと同じだろ。

……比叡は、明るくて元気な女の子。普段は溌剌としているが、たまに、今日みたいに泣きついてくる。
弱い部分を見せてくれるのは信頼の証なんだろう。本人は、どうせ姉にべったり、俺に興味はないだろうから、問題は無い。
まあほら、父親として見られてるんだろうなー。
「……えへへ??嬉しい、です！司令は、私のことも見捨てないでいてくれるんですね！金剛お姉さまは、妹として大好きですけど、司令のことは、その、男性として……??い、いえ、何でもありませんっ！」
そうこうしているうちに癇癪がおさまったみたい。適当に頭でも撫でて……、あっ、今の俺は、身体が……!!
「……ふぇえ!!??きゅ、急に服を引っ張って……!!」
あー、やっちまった。この手触り……、上着かなんかだろうな。引っ張って脱がせちまった。
で、顔には少しばかり大きめの膨らみ……、抱き付いてるのか、こ

れ。離れようにも、身体が動かん。払いのけてくれ、比叡。
「司令、私のこと、求めてくれるんだ……??」
あら?怒らないのか?やっぱり良い子だわ。
あっ、背中凄え、ヒットマッスルが凄え。ネコ科の動物みたいにしなやかな身体。
「で、でも、流石にお姉さまに悪いですから、触るだけ、ですよ??」
あっ、ベッドに運んでくれた。動けないの察してくれたのか。優しいなー。

「ぶふぁ!!今起きた……!!」
いやぁ、寝てた。時計を確認すると、比叡が来てから三時間くらいか?何があったんだろうか、比叡に会った前後の記憶が酷く曖昧だ。
少なくとも、全身の毒や病気などの状態異常は治ったが、失った生命力と低下した一部のステータスなどはまだ戻らない。
一体、何したんだ、俺は?
まあ、良いや。回復を急ごう。ポーション、ポーション、と。

そして、破壊音とともに開かれるドア。
「こんにちは提督!榛名です!!」
ハッハー、今月6回目ー!!
「榛名ー?ドア壊すの止めようなー?」
「大丈夫です!ちゃんと、留め具の部分だけを正確に破壊しましたから!」
何がどう大丈夫なの?
……まあ、綺麗に手刀で切断されてるっぽいし、後でデッドボルトを溶接して直すか。
「ところで、榛名は提督のためにお料理(血液入り)を作ったんですよ!食べて下さい??」
「いや、ちょい待ち!」

榛名の持ってくる料理には、ほぼ百パーセント媚薬だの何だのが混入してる。
各種ステータスが下がった今なら、超強力媚薬が効くかもしれん。
多分、常人なら死ぬレベルの濃度だろうし。
「はい、あ～ん??」
「だ、だからね、今俺は調子が悪、もごごごご!!!?」
無理矢理行った!!!
……あ、美味い。肉じゃがだ。
「美味しいですか?まだまだ沢山ありますよ!どんどん召し上がって下さいね??」
相変わらずガンガン来るわー。榛名は、人の話を聞かないからな!
……まあ、食事は摂っておくべき、か?血が足りねぇし。

「ご馳走様、美味しかったよ」
「はい!ありがとうございます、提督??……では、次は、榛名を食べて下さいね??」
「何言ってんの?」
クソッ、ブレーキがブッ壊れていらっしゃる。
「榛名は危険日じゃありません!!榛名は大丈夫です!!」
「ウオオオオオ!!微塵も安心できねぇぇぇ!!離せェい!!!」
榛名、そう言って大丈夫だった試しがあったか?
「こんなこともあろうかと、提督の為にゴムを用意しておきました!」
そして、榛名の懐から取り出される薄いゴム風船。例のアレ。
「これなら、良いですよね?では早速……??」
「はい、没取ー!!」
「ああっ?!そ、その、私が着けて差し上げますから!大丈夫ですから!!」
ゴムの表面を触る。
「……穴開きゴムじゃねーか!!やっぱりな!!」
榛名の用意するゴムは危険。知ってた。(うす○に屋並感)
「……チッ、残念です」

舌打ちィー!!
「は、榛名、良いかい、こう言うのはゆっくりと」
「ゆっくりって、また今度って、一体いつなんですか?!!」
「は、榛名?」
「提督はいつもそうです!良く考えろとか、他にも良い人が、とか!!」
事実じゃん?
「私には、私達には、貴方しかいないんです!!!」
「榛名、違うぞ、世の中は」
「もっと広い、ですか?……そんなこと、どうだって良いんです!!確かに、私達は艦娘として肉体を得てから、数年しか経っていません!世界の広さも、どんな人がいるのかも、私達には分かりません!」
「でも!それでも!私達は提督が大好きなんです!!愛しているんです!!もっと良い人がいるとか、そういう、理屈じゃ無いんですよ!!!」

あー、その、うん。
「……何言っても無駄なやつ?」
「……はい。私達の気持ち、しっかり受け止めて下さい……」
んー、さて、どうするか?

……まあ、良いや。修羅場を避けながら口説いて行こう。いつも通り。やりたいことをやっていこう。
そうだな、俺も、艦娘の皆んなに遠慮し過ぎていたかもしれん。ご機嫌取りばっかりなんて、俺のキャラじゃないよねー。
考えてどうにかなった試しなんざねぇ。制圧前進あるのみって聖帝様が言ってたし。
「榛名」
「はい?」
可愛らしい女物のワイシャツに、長めのスカート。童貞を殲滅する

清楚系コーデ。
……一閃……。
ボタン外し……!!!
「……きゃっ?!」
小さい悲鳴と共に、反射的に胸を隠す榛名。
そう、そうだよ、俺の本質はセクハラ!!セクハラなのだ!!
下手に気を遣わず、ナチュラルに行くか。
「榛名、聞いてくれ、俺、実はな?かわいい女の子が大好きなんだよ……!!」
「は、はい、知ってますよ?」
えっ、嘘?
「……ほ、ほら、女の子のおっぱいとか揉んじゃうよ?」
「知れ渡ってます」
マジで?
「だ、だから、榛名にもセクハラしちゃうぞ!」
「!! は、榛名で良ければ、お相手しますっ!!!」
メッチャ嬉しそう!
……あれ?ひょっとして、冷静に考えれば、俺はセクハラし放題の環境にいる、よな?皆んなの好感度は高いし。
好感度を下げる為には、そう言う、男の駄目な部分をいつも通り全開にすればOKじゃん?つまり、フラフラ旅してた時と同じノリで良いってことじゃん?
……もう、これ、触っても良いよね?どうせ誰も怒らないし。
「しからば、御免!!」
揉んじゃえ。
「あっ??て、提督が、やっと、私に……??」
あー、この為に生きていると言っても過言ではない。
あー、大きさは戦艦の中でも普通くらいだけど、かえって大き過ぎないことで全体のシルエットが細くなり、セクシーさと可愛らしさを両立ウ……。
メイクは薄めで、派手さはないが清楚さを感じさせるファッショ

ン、もちろん家事は万能、控えめで落ち着いた性格ゥ……！
「あー、榛名は良いお嫁さんになるなー!!!結婚してくれ!!!」
美乳だし、このおっぱいなら絶対良いお嫁さんになる（意味不明）。
「は、はい!!!榛名は、提督のお嫁さんになります!!!」
え？そんなこと言って大丈夫なのかって？はは っ、ヨユーヨユー、星の数程の女の子に言ったわ。
嫌われることなんか怖くねぇ！野郎オブクラッシャー!!!
そうなんだよ、取り繕うってことは、よく見られるってこと。俺の本来の姿を出せば、自ずと嫌われる筈だ!!!

そう願いたい!!!

「結婚、結婚、結婚、結婚……？？うふ、うふふ、うふふふふふふ……？？？？？」

78話　ハラスメントの帝王　戊

次の日の午後。
いやー、昨日はヤバかった。予告通りに、夜、天龍と龍田が部屋に来てさ？
クロストライアングルされそうだったし、俺もしたかった。でも、流石に、ヤった時は百パーセント超修羅場確定だし、その超修羅場を収めるのは無理だと、俺のソウルが仰っていやがるし。
仕方がないので、適当にいちゃいちゃしながら添い寝した。次の日の朝に起こしに来た大淀にメッチャ怒られて大変だったけど、これまた適当にセクハラしたら許された。やったぜ。
そんなこんなで、色々と吹っ切れた俺は、今日も艦娘へのセクハラに励むのであった……!!

「なに言ってんの？提督ー？」
「あっ、ごめん、口に出てたか、北上？」
やべっ、そういや俺、普通に休憩室にいたんだった。そりゃ、お休み中の艦娘もおるわ。
「きゃー、セクハラされるー。危険な提督がいるって、青葉辺りに言っちゃおうかなー」
むっ、脅す気か？また休日を要求して、部屋の中でダラダラと映画とか見る気だな?!
「ふっふっふっ、脅しても無駄だァ……！昨日から俺はゲンシカイキしたのだ!!セクハラします！ええしますとも!!」
「うへぇ～、変態だ～」
「あっ、でも、嫌なら良いです、我慢します、ごめんなさい」
普通に良い子の北上からウザいとか言われたら立ち直れない。おじさんはな、メンタルが弱い生き物なんだよ……。
「ん～？私は別に構わないよ～。そもそも、提督に触られて嫌がる子なんて、この鎮守府にいないと思うよ？」
まあ、知ってた。でも、仲の良い女友達みたいなポジションの北上

に嫌われるのは、万が一にも避けたいものだ。
「ふーん、嫌じゃないなら、遠慮なく」
はい、まずは、ソファーでくつろぐ北上の隣に座ります。
肩に手を回して……、うーん、どうするか。北上はセクハラって感じじゃないんだよなー。
「なーに迷ってんのさ？好きにして良いって言ってるのに」
なんの恥じらいもなく、俺の手を掴んで、自分の胸に持っていく北上。
「もっと恥じらって、どうぞ」
「私にそう言うこと期待されてもさー……、んっ??」
俺の手のひらに胸を押し付ける北上。
あ、ふーん？はいはいはいはい、わかるわ。
普段、「そういった」イメージがない、昔からの幼馴染みたいな北上にこんなことされると、なんと言うか、かっとビング。
「北上は、他の子と違って大人しいよなー。北上みたいな子がいると助かるわ」
「まーねー。他の子みたいに、おかしな子ばっかりだと、提督も疲れちゃうでしょ？……んんっ??私は、提督と、大井っちと、皆んなと一緒にのんびりできればそれで良いからさ～……、んあっ??」
「……北上、君のそう言うとこほんとすこ。もう結婚しようぜ」
「んー？良いよー。皆んなも一緒にねー」
わーい。

……でもな、北上？
「……ま、その為には、大本営とか、深海棲艦とか、なんかそういう邪魔なやつらを潰さないとねー？……あん??最近は、陸の上でもある程度は戦えるし、大本営の軍人くらいなら蹴り殺せると思うよ？……あっ??いつ殺しに行こうか？あ、今日は駄目ね。訓練で全身が動かないから」
お前も十分におかしい子の一人だって、自覚してほしいな？

……北上がぐうたらしているのは、ただ怠惰な訳じゃない。正確には、「動きたくても動けない」のだ。こう見えて、北上はとんでもない密度の自己鍛錬を自分に課しているのだ。
毎度毎度、毎日欠かさず、肉体が動かなくなるレベルの超高負荷の鍛錬……。こうして休憩室や自室でダラダラして、大井に世話を焼かれているのも、疲労で身体が動かないから。
今だって、午前中はずっと鍛錬だったらしく、殆ど立って歩けない状態。普通の女の子程の力も出ないだろう。
「大丈夫だよ、提督。提督は、私達を守ってくれるもんね。代わりに、私達は提督の敵を殺すよ、全部殺す、殺してみせる。……だから、さ、これからも、ずっと一緒にいようね、提督……??」
「お、おう」
ま、まあ、まだかなりマシな方だしな、北上。

「北上さーん！お菓子と飲み物持ってき、まし、た、よ……?!!、な、なんで提督が?!!」
「よー、大井」
「わーい、ありがとー、大井っちー」
あー、大井、かぁ……。
「そ、それにぃ!!!そそそそその手!!!その手は一体何ですかぁ!!!?き、きき、北上さんの胸を!!!」
大井は、まあ、アレだ。
「離れろぉっ!!!!」
「ヒューッ！相変わらず物凄え蹴りだなぁ、オイ!!」
暴力がなぁ……。
「もー、大井っちってばー、やめなよ～」
「き、北上さん！だ、駄目ですよ！北上さんの胸を無理矢理触るような男は許しません!!」
激おこっち。
「いーの、いーの。別に減るもんじゃないしさー。それに、結構良い感じだよ？大井っちも触ってもらったら？」

「んえぇ?!!わっ、私は、その！……いや、そう、ですね、北上さんの身代わりに……」
すると、大井は、俺の手を乱暴に掴み……、
「これは北上さんを守るため、これは北上さんを守るため……、決して私が触って欲しい訳じゃない……、え、えいっ!!」
あぁ^～、良いっすね～。
大井は肉付きが良いからなぁ……。程良くデカい。ふっくらしてる。
「んっ??ふー、ふー、ふー、こ、こんな、いやらしい手つきでぇ??北上さんに??触れていたんですかぁ??ゆ、許しません??」
身をよじらせ、どこか嬉しそうな様子でおとなしく触られる大井。
「ま、とりあえず、俺の隣に座りなよ。立ったまんまってのもアレだし」
「わ、分かり、ました??」
指示通りに、俺の隣に座る大井。
まあ、照れ隠しの暴力暴言以外には特に何もないし。こちらもまだマシな方だよなぁ。
「おっ、大井っちも侍らせちゃう?両手に花だねぇ、提督」
大井が持ってきたチョコレートをかじりながら、北上がからかってくる。
「おう、スゲーだろ俺。尊敬して良いぞ。あ、あと一口ちょうだい」
実際、今まで結構頑張ってきたと思う。俺は褒められていい。
「んんっ??くっ??ああっ??……はっ?!あ、こ、こら！今度は北上さんと間接キスを?!!このっ！このっ！」
おー、痛え。思いっきり足踏んできたわ。
「ごめんってば、ほら、大井ともするから……、ひゃいよ」
口にチョコレートを咥えて、大井の目の前に顔を寄せる。
……大井は、北上さんがどうこう、とかよく口にするが、その半分くらいは嫉妬だ。だから、北上にしたのと同じように構ってやらないと、ご機嫌斜めになっちまう。……まあ、俺の自惚れじゃなけりゃ、だけども。

めんどくさいっち。
「は、はぁ?!いきなり何を言っているんですか?!!」
「やなの?なら、良いけろもさ?」
「嫌なんて一言も言ってないでしょう?!!何なんですか?!!!」
いや、何なの、はこっちの台詞なんだけどもさ?
「しょ、しょうがないですね、北上さんを提督の毒牙に晒す訳にはいきませんから!……はむっ??」
至近距離、そしてゼロ距離。咥えたチョコレートを舌で大井の口の中に押し込む。もちろん、一切の抵抗はなかった。間接キスよりも特殊なプレイをした気がする。
でも、可愛いねぇ。

まぁ、この後も、大井は文句を言いながらも、嬉しそうに全身を触らせて、北上はリラックスした様子で俺に寄りかかって……。
両手に花、良い体験だった……。

７９話　ハラスメントの帝王　己

夜。
居酒屋鳳翔にて。
あなたは★ストラディバリウスの演奏を始めた！
ジャン♪
軽空母『隼鷹』はあなたの演奏を褒め称えた。
「良いぞー!!」
チャラン♪ジャン♪
軽空母『龍驤』は目を輝かせた。
「ブラボー!!」
ジャン♪
重巡『足柄』はうっとりした。
歴史に残る名演だ！
おひねりに重巡『羽黒』をもらった！

「……オイ、足柄、お前だろ？今なら怒らないから、早く羽黒を」
「えへへ、司令官さんにもらわれちゃいました??」
あっ、そっかあ……（完全理解）。
羽黒ったら、自ら飛び込んで来たのか。
見ると、足柄は、薬でも嗅がされたのか、若干痙攣しながらぶっ倒れてる。
まあ、死にはしないだろうよ。

……羽黒の何がヤバいかって、他人に容赦がないところだ。
ああやって、実の姉も排除しようとする。まあ、直接的な暴力はしないから、無理に止める必要はない、な。
むしろ、止めたら……。
「……司令官さん、私はここですよ？どこを見ているんですか？私を見て下さい。私はここですよ？どこを見ているんですか？私を見て下さい。私はここですよ？どこを見ているんですか？私を見て下さ

い」
ヒェッ……。
「あー、いやその、すまない。あんまりにも可愛いおひねりに面食らっちゃってさ？」
「か、可愛い、ですか？え、えへへへへ、照れちゃいます??」
あらかわいい。選択肢を一つでも間違えれば大変な事になるだろうが、それなら最初から間違えなけりゃいい。
死ななきゃ安い、とはよく言ったものだ。
しくじらなきゃ、かわい子ちゃんに囲まれて良い思いができるんだぜ？
最高じゃん？
「んじゃ、飲み直しだ。おいで、羽黒」
「はい、司令官さん??」
擦り寄る羽黒。最近はちょっぴり積極的だ。
前までは単なるストーカーで、どこからか俺の着替えや入浴シーンを覗いたり、たまに見えるうなじだったり、開いたシャツから見える胸板だったりをこっそり見ているだけだったのにな。
意外とスケベなのでは？とか思ってるが、本人には言わない。確実に泣くだろうし。
でも今も、俺の腕を抱きながらこっそりシャツの匂い嗅いでるし多分スケベ。
かわいい。

……誰も近付けないように、周囲に霧状の睡眠薬を散布しているのが玉に瑕だが。
俺も、羽黒自身も毒が効かないんだよ。
いつだったか、羽黒が俺を籠絡しようと、こっそり媚薬を使って来た時。
あの時の失敗を鑑みて、毒に耐性を付けたそうだ。あっちで倒れてる足柄に聞いた。
最近はかなりの耐性を付けたらしく、こうして毒を散布するような

スタイルを多用しているとか。
黒井鎮守府トップの隠密性と相まって、かなり凶悪だ。
まあ、そんなこんなで、散布された睡眠薬のせいで、周りの飲兵衛達は皆んなダウン。素面なら避けられただろうが、今はべろんべろんに酔ってるからな。
でも、酔ってそのまま寝るなんていつものことだし、皆んな気にしないだろうよ。バレなきゃ犯罪じゃない、これ真理。
「?、どうかしましたか?司令官さん?」
小首を傾げる羽黒。見た目は清純派。
見た目は。
「ああ、いや、カルーアミルクで良いかい?」
「は、はい!」
だが、結構計算高い子だよ、羽黒は。
こうして俺にべったりとくっついてくるのは、必ず「二人きりにしてから」だからね。
誘い受け体質なのが救いか。
取り敢えず、酔わせて帰すか。
「んっ、このお酒、甘くて美味しい??」
「そうだねー。羽黒はあんまり強くないでしょ?飲みやすいのが良いと思うよ。俺の真似をして強いのを飲むのは駄目だからね?」
まあ、カルーアミルクもそれなりに強いけどな。
「そうですねー、司令官さんはお酒に強いですから……」
テキーラうめえ。
「ほらほら、たまには飲みなよ?羽黒はいつも頑張ってるもんな」
オラっ!酔い潰れろオラっ!お持ち帰り……、は無理か、残念。いつもならこの調子でホテル行きだが、修羅場はごめんだ。
でも、俺だって良い思いしたいじゃん?最近の俺は頑張ってるし?
……実際は、仕事してる時間よりも艦娘とデートする時間の方が何倍も多いけどさ。
そんなことを考えていると、羽黒が寄りかかってきた。
「んうぅ、私、ちょっと酔っ払っちゃったかもしれません……??」

……聞こえてくる心音も、伝わる体温も、酔っ払っている人間のものではない。
ひょっとして、アルコールにも耐性を付けてきたのか？
だが、ここはあえて付き合ってやろうか。
「おっ、大丈夫か、大丈夫か」
肩を抱き寄せる。パワータイプの姉、足柄と比べると細さが目立つな。
「あっ??大丈夫です??」
そのまま、セクハラを決行する。確か、羽黒の性感帯は脚だったかな。
羽黒の、細く引き締まった脚に優しくタッチ。
「あん??司令官さん……??」
ほう、白ストッキングですか。
たいしたものですね。
ストッキングは脚線美を強調する効果があるらしく、ついついガン見してしまうマラソンランナーもいるくらいです。
「良い子だな、羽黒は。……愛しているよ」
羽黒は耳も弱い。そもそも、感覚が鋭い子はやたらと性感帯が多いので安心。
「ふ、ふわぁ……??」
酒で酔わないなら仕方がない、こうしてダウンさせよう。
するり、とスリムなお腹に手を持って行き、優しく撫でてやる。
「し、司令官さぁん??そ、そこを、撫で、られると??は、は、羽黒は??羽黒はヘンになっちゃいます????」
あとは、そうだな、耳でも舐めてみるか。
「ああっ?!そ、そんな、ところぉ??ほ、ほんとに、おかしくなるっ??????あああああっ????」
すると羽黒は、一度大きく痙攣すると、気を失った。ちょろいぜ。
「……えーっと、終わったかしら？」
「ありゃ、やっぱり起きてたのか、足柄」

「ええ、最初からね」
そーかい、相変わらず演技が上手い。
勝利の為ならどんな手でも使う足柄、不意打ち騙し討ち上等。ほぼほぼ完璧な演技だな。
「じゃあ、羽黒は回収させてもらうわね」
「ＯＫだ、持って行きな」
「……あの、提督？」
「何かな？」
「この前はごめんね？」
あー、あれか。
羽黒が、ナンパしてきたチンピラ共を殺しそうになった件。
「この子、提督のことを馬鹿にされてカッとなっちゃったみたいで……」
緊急搬送されたチンピラ共は、それは酷い有り様だったらしい。少なくとも、もう二度とまともな生活は送れないくらいに。
それに、ばら撒かれた毒は、近隣の人間に無差別なダメージを与えた。
「……あれは、近くに散布された毒物は、化学物質の輸送車が事故ったから。怪我人は事故に巻き込まれた哀れな一般人。そうなったじゃないか」
そう言うことにした。
「……でも、それじゃ貴方が……」
「いーの、いーの、ヤクザと取引くらい、良くあることさ」
はぁ、借りを作るのは嫌なんだけどもなー。白竜のカシラ、今度はどんな無茶振りをしてくるんだか。
「……そう、分かったわ。でも、何か困ったことがあったら言って頂戴？私も、この子も、勿論鎮守府の皆んなも、貴方の力になるから」
「あいよ」
まあ、あれだ。
羽黒は一人で外出させちゃ駄目ってこと。

「……で、響はなんでまた、こう、ナチュラルに膝の上に座るの？」
「ハラショー。……毒の発生源が無くなったから、つい、ね」
　いや、つい、じゃないが？
「……せめて、さぁ？向こうを向いて座ってくれない？」
　なんなん？なつき度ＭＡＸかな？
「こうしていると、対面座」
「ストーップ、それ以上いけない」
　違った、淫乱度ＭＡＸだ。
「……良いじゃないか、こんなに小さな身体なんだ、きっと締まりが良いと思うよ。前も言ったけれど、私は一刻も早く司令官のものになりたいんだ。さあ、早く、私を司令官のものにして欲しい。一生消えない傷を、愛し合った証を残して欲しい」
「響様!!響様!!困ります!!あーっ!!響様!!困ります!!あーっ!!困ります!!」
　腰を！動かすな!!
「……そう。じゃあ、やめておくよ」
　あら、素直。
「よ、よし、それで良い」
「司令官の意思で抱いてもらわなきゃ、意味がないから」
　お、おう。
「は、ははは、やだなぁ、俺はロリコンじゃ」
「知ってるよ？」
「えっ？」
「司令官、相手が駆逐艦でも、言い寄られれば喜ぶってこと」
　ギクーッ!!!
「如月が嬉しそうに話してたよ」
　あ、あの処女ビッチめ!!!
「他にも、潮とか、叢雲とか、時雨とか……、兎に角、皆んなも」
　すいません節操なしで!!!

しょーがねーだろ?!!世の中にはなぁ、ロリババアという存在がいるんだよ!!!ロリババアを、「見た目はロリだけど中身はババアだし、ヘーキヘーキ」とか言って抱くとなぁ!「あれ、俺ロリでも行けるんとちゃうか?」ってなるんだよおおお!!!
「だから、私は待つよ。ずーっと、ね」
「そ、そりゃあ、嬉しいねぇ」
あっ、そうだ、セクハラ。セクハラしなきゃ。……響に?
……え?響に?
捕まらない?
実際、響はかなりの美少女だし。西洋人形みたいに整った顔立ち、陶磁器みたいに白い肌、細くて華奢な身体、どれを取っても最高クラス。
「どうしたんだい、司令官?」
優しく微笑む響。この天使のような少女にセクハラして良いのだろうか。

……良いんじゃないかな、GOサイン出てるし。
……えい。
「……んっ??その気になってくれたかい?司令官??大丈夫、した後はすぐにお風呂に入るし、誰にもバラしたりしない。だから、目一杯私を使って欲しい」
いやいや、ただのセクハラだから。
むーん、やっぱりまだ、肉付きがなぁ。響は少食だからかな?主食はウォッカ。
おお、肋骨、これ、浮き出てるんじゃない?かなり細いな、ちゃんと食べてんのか?ちょっと心配。
これはこれでそそるけど。
「その、司令官?もっと激しくして良いんだよ?」
「いやいや、その気はないよ?ただ触ってるだけで」
「じ、焦らしプレイは厳禁だよ」
「どこでそんな言葉を……」

そのまま、全身をまさぐる。……ふむ、響の弱点は首と、後はお尻と。記憶したぞ。
「もう、そんなことを、されると……??」
明らかに興奮したご様子。
「せ、せめて、お尻を叩いてもらえないかな?」
「?!」
えー。
「そ、そのだね、この前、音成鎮守府の若葉と会ったんだけど……、どうやら私も、マゾみたいなんだ??司令官に、乱暴されたい……??」
なんてことを……（憤慨）。
音成鎮守府め、明日苦情を言いに行ってやる!!
「えっちじゃなくて良いから、ちょっと叩いてくれるだけでいいんだ??お願い、司令官……??」
「い、いや、流石にそろそろヤバい」
「知ってるよ、司令官は、攻める方が好きなんだよね?」
ヌウーッ!!!何故知ってるゥ!!しゃーない、バラされたら怖いし、ここは言う通りにしておこう。
「後悔するなよーッ!!」
弱過ぎず、強過ぎず。
絶妙な力加減で、大きな音を立てるように。
「〜〜〜ッ!!!こ、これ、凄い??あたま、おかしくなるっ??????」
一発だけで、整った顔をだらしなく緩ませる響。
なるほど、普通のマゾ。ならば、このままダウンさせてやろう。せめて、痛みを知らず安らかにイくが良い。
いや、ちょっとは痛いか。

「いやー」
「はーっ??はーっ??はーっ??」
「やり過ぎたわ」
ちょっと楽しかった。うん。
完全に伸びた響を、部屋に運んでやらなきゃな。

「よいしょっ、と。うわっ、軽っ」
ん？
響の懐からメモ帳が落ちて……。
あ、開いちまった、中身を見るのはマナー違反、

『メモ
新台　真央（年齢不詳）
昭和????年　７月２１日　生
両親は行方不明、育て親は祖父
妹が一人（海外在住）
女性遍歴は極めて多いが、特定の恋人はいない（結婚は望んでいない？要検証）
幼少期から放浪癖が有り、各地を転々として過ごす。
世紀末幼稚園卒業以降、小中高は転々としていて確認が取れず。
職業は旅人
その旅は、国内外に留まらず、世界各国、異世界、別世界までに及ぶ（年齢不詳の理由、異世界では時間の流れが違うから？要検証）
旅人ではあるが、度々、様々な理由で転職することも。確認が取れているものだけでも、教師、弁護士、傭兵、探偵、料理人、パイロット、画家、冒険家、大工、狩人、エクソシスト、音楽家、ホスト、プロデューサー、そして提督。（詳しくは１９ｐ）
戦闘スタイルは空手を中心とした防御と回避特化の徒手格闘と、自己を強化する魔法（？）などで……』

「……はは っ」
俺は、何も、見てない。

８０話　ハラスメントの帝王　庚

「ヘェーラロロォールノォーノナーァオオォー
アノノアイノノォオオオォーヤ
ラロラロラロリィラロロー
ラロラロラロリィラロ
ヒィーイジヤロラルリーロロロー」
お昼。
報告書待ち。
暇。
……いやぁ、お恥ずかしい話、じっとしてられない性分でして。私は我慢弱い（ブシドー感）。
あと五分くらいなんだけどね、こう、俺の中の情熱がさ、リズムを刻んじゃって。ね？
確か、今回出撃してたのは、プリンツ、レーベ、マックス。
内容は確か、鎮守府の減少に伴う戦況の悪化からの、他所の海域の掃討だったな。
国民の平和を守る、正義の大本営様も、相当切羽詰まってるらしい。ワロス。
え？ああ、三人で大丈夫かって？
いやいや、三人だけと侮るなかれ、我が、悪の組織黒井鎮守府の一員よ。
三人に勝てる訳ないだろ!!

「「Ａｄｍｉｒａｌ（提督）ーーー!!!」」
「おっ！おかえ」
プリンツ・オイゲン、抱きつき。速度は１００ｋｍ／ｈを優に超える。ふむ、ロイヤルガード。
続いてレーベレヒト・マース。同じく抱きつき、横から。プリンツよりも速いな、闘気を纏ってガード。
後ろからはマックス・シュルツ。抱き締め。掴み技はガー不だ。

ヒートを纏いつつもこっそりと聖なる盾を詠唱、防御力を底上げ。
この子達は、どうやら、この俺が誰よりも強いと思っているらしい。もちろん、そんな訳ないんだよなぁ。
本人達が言うには、この子達を攫ったあの日の、追撃を華麗に逃れ、迎撃する俺の姿が印象的だった、とのこと。
……だから、なのか。それはもう、全身全霊の力でぶつかってくる。俺を強いと思い込んで。力加減は出来るみたいだが、してくれない。
実際、俺はもう、高レベルの艦娘にはバフを積まなきゃ勝てないレベルなのに。さっきだって、技やバフなしじゃダメージを受けていただろう。
「作戦成功ですっ！褒めて下さいＡｄｍｉｒａｌ！」
「ぼ、僕も、頑張ったよ！そ、その、僕も褒めてもらえるかな……？」
「こちら、報告書になります。……よ、よろしければ、私も、その、撫でて頂けないかしら……？」
わぁ！かわいい！
さて、報告書か。
……ふむ、作戦は大成功、感知できる範囲内の深海棲艦は全滅、話が通じる深海棲艦はなし、強さと賢さはいつも通りで、数は五十体そこら、と。
まあこんなもんか。
知ってた。
「……よし、素晴らしい戦果だ！ありがとう！」
撫でてあげる。
「わーい！」
「嬉しいよ、提督」
「んっ……」
さて、気になることが一つ。
「で、その後ろの麻袋は？」
「あ！これはね、提督にプレゼントです！」
うーん、嫌な予感。
「へ、へぇー、な、中は何かな？」

開いてみると、そこには……。
深海棲艦の、大量の生首。
うっわ、血の匂いはしてたけどさぁ……。マジかよこれ。……どうしよ。
地下室にしまっとこう。
「あのね、アキツマルさんが、日本では敵のミシルシ?をあげるものなんだって！」
あきつ丸ェ……。
「いやその、最近はやらないからね?侍も忍者もいないんだからさ、ね?」
いや、いるけど。知り合いにいるけど、一般的にはいないから。
「えー?でも、この鎮守府にはサムライもニンジャもいますよー?」
指差された窓の向こうには、演習する神通と川内。……まあ、そう、ですね。はい。
「ほ、ほら、あれは特殊な例だから。……な、なんにせよ、お仕事は終わり！ご苦労様！休んで良いよ」
「「はい!!」」
んー、良い返事。ドイツ艦は任務に忠実で実に良い。
「……で、帰らないの?」
「なんでですか?」
あっ、居座る気だ。でも、俺ももう仕事ないし。適当に遊んでやるか。
「あー、そうだな、俺も仕事ないからさ、これから一緒に遊ん」
「お風呂ですか?!分かりました！」
分かってない！分かってないよ?!
「は、ハダカノツキアイって言うやつかな?恥ずかしいけど、僕、頑張るよ??」
いやいやいやいや。

「わ、私も、提督が望むなら……??」
　そんなこと、しなくていいから。
「あ、あのさ、人の話を」
「そうと決まれば、早速、行きますよ！」
　ハッハー、聞いちゃいねぇ。
　ドイツ艦はメルヘン。はっきりわかんだね。

　……そんなこんなで、風呂。
　全裸の成人男性にくっ付く未成年のドイツ人女性という、明らかに言い逃れができない布陣。
　こっそりと飛んでいる艦載機は編隊を組んで俺を監視している。……もしも俺が「もう我慢でけん!!（アイアンハイド並感）」となった場合、即座に空母が雪崩れ込み、騒ぎを聞きつけて全員集合、からの鎮守府崩壊が目に見えている。
　結局、この子達に俺離れしてもらわなければならない。もう、ここにきてから一年近くするし。旅人が一箇所に留まるのってどうなの？とか思ってる。
　でも……、
「はーい、じゃあ、お背中流しますねー、Ａｄｍｉｒａｌ??……んっ??どう、ですか？Ａｄｍｉｒａｌはおっぱいが好き、なんですよね？私のおっぱいの感触はどうですか??」
「それじゃあ、僕はこっちを……。わぁ、凄い……、提督の筋肉、硬くて、大きくて……??」
「私は、反対側の腕を……。ああっ、んっ、提督の身体、逞しくって、素敵よ……??」
「ちょっと待ってちょっと待って、これもう、あかんやつでしょ？１２０分でうん十万くらい持ってかれるやつでしょ？」
　入浴料とサービス料込みでうん百万とかでしょ？知ってる。
「？、なんのことですか？」
「あっ、い、いや、なんでもないよ、その、こういったことは、はしたないからやめなさいってこと」

決して、知り合いのヤクザの組長と超高級ソープで三日間くらい遊び惚けたとかそんな事実はない。ないのだ。
「遠慮しないで下さい！Ａｄｍｉｒａｌは私の王子様ですから！沢山お世話しちゃいます??」
王子様ってガラじゃないんだがね？
「僕も、提督のお姫様だから??意地悪な悪魔から僕を救ってくれた提督と結ばれるのは当然だよね？」
まあ、今の行動は現在進行形で姫、いや、なんでもない。
「私、今でも覚えています。提督が、私を救ってくれて、優しく抱き締めてくれたことを??愛していると囁いてくれたことも??」
やってないし、言ってない。まるで覚えがないんだが？
「わ、分かった、分かったから！」
良いか？ドイツ艦は、ヤバい。
話が全く通じないし、記憶もアレだ。頭の中がお花畑なもんだから、正論も通用しない。例え、今この瞬間に突然押し倒しても、大喜びで抱かれるだろう。
心底ヤバい。

「もー、ぼーっとしちゃめっ！ですよ、Ａｄｍｉｒａｌ??そんな王子様は、こうです、ちゅっ??」
でもなー！かわいいんだよなー!!かわいいからなんかもうどうでも良いや!!ほっときゃどうにかなるだろ!!
「んっ、ああ、ごめんよプリンツ。お姫様と一緒なんだ、楽しまなきゃな？」
揉んでおこう。どうせ怒られないし。はぁー、最高。プリンツは、こう、若さが伝わってくるな。お肌のハリが凄いのよ、ハリが。
もちろん、どこの毛とは明記しないが、剃ってる。ツルツル。女子高生くらいの見た目のプリンツが、剃ってる。このアンバランスさには感服するぞ!!俺が!!
「あっ??もー、そんなところを触って……??私の王子様はエッチなのね??」

「むー！僕にも触ってくれなきゃやだよ、提督？」
「もちろん、忘れてなんかいないさ、レーベ」
レーベは、白い。兎に角、白い。アルビノか何か？ってくらい白い肌には、産毛の一つもない感じ。剃っているんだか、生えてないんだか、それは分からないが、詮索する必要はないだろう。
「んんっ??もっと、もっときつく抱き締めて？もう二度と、悪いやつに捕まらないように……??離しちゃ、ヤダよ……??」
……どうやら、レーベの中では、最初から俺と一緒にいた、と言うことになっているらしい。まあ、アレだ、妄想癖って言うのは躍起になって否定すると治らないからなー。徐々に諭して行こうか。

「わ、私は、その……」
「分かってるよ、マックス……、愛してる（イケボ）」
ぐっ、少女に愛してる、は流石に大ダメージだな。心に。心なしかカルマが下がった気がするぞ！
「……ふふっ、貴方に、愛してる、だなんて、何度も言われた筈なのにね……。でもね、何度言われても、とっても、嬉しいの……??」
うん、言ったのは今日が初めてなんだけどね!!
マックスは細身で、強く抱き締めれば壊れてしまいそうな儚さがあるな。うん。
まあ、壊れそうなのは俺の方なんですけどね痛だだだだだ。力強っ。

「あ〟〜、良かった……」
やっと解放された。プリンツは良い乳してたし、レーベは綺麗だったし、マックスは美しかった。それで良いじゃないか。
また触ろう。

「提督ー！さあ！行くわよ!!」

「えっ？ビスマルク、何の話？」
「もー、とぼけないの！提督はハダカノツキアイ、が好きなんでしょ？」
「……は？」
「私が付き合ってあげるわ!!行くわよ!!」
「ちょっ！待っ!!あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”～～～!!!!」

そう、そうだ、あのドイツ艦の何が厄介かって……、「他所でやったことを言いふらす」ことだったアアアアアーーー!!!!

この後滅茶苦茶滅茶苦茶にされた。

８１話　鉄血のカンムス（ハラスメントの帝王辛）

「駆逐艦の部屋がうるさい？」
「そうよ！」
苦情の主は五十鈴。怒って跳ねる度におっぱいぷるんぷるん。総統閣下も納得ですわ。
にしても、うるさいねぇ？そうなのか？
相手は子供だしな。ちょっとくらいはしゃーないじゃん？
「これが、ちょっと騒がしいくらいならかわいいものよ……。でも！」
そして、遠征で培ったのであろう力で、まるでドラム缶のように抱えられ……。
「はいまたいつものパターン」
引き摺り回されるってオチ。

「あー、これは……」
うるさい。
「ねっ!!うるさいでしょ?!!」
ぶつかり合う鋼鉄、溶接の大音、プラズマカッターの轟音。
まー、並みの工場よりかはうるさいな。
「まあ、犯人の予想はついてるよ」
「そうなの……、って、何よその深緑のジャケット？何よそのブーメランみたいな前髪？犯人と何の関係が……」
「まあ任せとけよ」
「……もー、分かったわよ……。じゃあ、後はお願いね？」
帰って行く五十鈴。
……さて、と。
「そうだろミカァ!!」
「「「!!!?!!」」」

「あ、司令官」
凄えよ、ミカは……。突然コスプレした成人男性が部屋に押し入っても、声一つ上げねぇんだからよ……。
「全……、女……部……突……やって……」
「乱……とん……」
「聞こえねーよ!!!旋盤止めて!!!レーザーも!!!」
はいはい！リテイクリテイク!!
「はい、じゃあ、やり直しね？……そうだろミカァ!!!」
「？、どうしたんですか、司令官？」
流石ミカ、ブレねぇな！
「全く、女の子の部屋に突然やってくるなんてね？」
如月。確かに、そこらに引っかかってる洋服は女の子のものだが、分解整備されたパイルバンカーや山積みの火炎放射器のパーツ、散らばった設計図及びデータ。書類とデジタル媒体、両方。
総評、女の子の部屋ではない。
「乱入してくるとは、とんでもない奴だ」
菊月。ビリヤード台の上には、乱雑に置かれた武器の数々。カラサワ、パルマシ、グレラン、ミサイル、レザブレ……。でも、整備はバッチリ、弾薬は別で厳重に保存。
総評、レイヴン。
「君らイケメン過ぎない？」
怖っ。
なんなの？
「ご、ごめんねぇ～？お部屋のお片付け、サボっちゃってた～！」
蜂のぬいぐるみを抱える文月。世に文月のあらんことを……。
かわいい小物やぬいぐるみで一杯、しかし匂いは血と硝煙。そして壁には謎の蜂の巣を模ったエンブレム。……あっ、よく見るとぬいぐるみの隣にイエローとブラックで塗装された大砲が。
総評、騙して悪いが……。
「ああ!!!?こ、このっ!!!あっ！あー……。マーシー、あれ、あいつラグくない？ラグだわ」

「も、望月ー？」
「あー、もー！じいじも引けないしさー!!やっぱりまた雪風に引かせるしか……、あっ、し、司令官?!あー、うー、そ、その、見てた……？」
自作のゲーミングＰＣ、据え置き携帯関わらず大量のゲーム。置きっ放しの漫画雑誌に埃を被ったアニメのＤＶＤボックス。
総評、君もオタクかい？
「ん、司令官、お疲れ様」
弥生、弥生のスペースは……、うん、良かった、普通。優しげだが、どこか几帳面さを感じる木製の机と椅子、本棚には小説がちらほら。ジャンルは色々。
本当に普通だ。
……机の上のガンダムハンマーを除けば。何で？三番艦だから？三号機だから？Ｇ３だとでも？明石だろどうせ！後で折檻してやる！
「司令官、命令ですか？」
「ミカァ！」
大本命、三日月。
例によって武器ばかり。明石が面白がってレールガンとか作るから……。
因みに、うちのミカの懐からは、火星ヤシの実ではなく、俺が持たせたお菓子が出てくる。
「……じゃなくて！あー、あれだ、君達ねぇ、武器の整備はまだしも、本格的な加工は他所でやりなさい！隣の軽巡の部屋の人らが迷惑してるんだからね？」
「……あー、はい、音ね？」
「私達はもう慣れているからな」
「防音の小屋でも近くに作るから、それで我慢して、どうぞ」
実際、白露型なんかは工房と呼ばれる専用の施設を保有している。
睦月型にもガレージくらいは作ってやらなきゃな。三日で。

「……で、さっきから思ってるんだけどさ」
「何だ、望月？」
「……何でオルガ？」
　それはね、望月、
「俺、まだオルフェンズ見てなかったんだよね」
「あー、そういうことね。ボックスあるよ？見る？」
「その為に来たんだぜ！見るぞミカァ！」
「はい」
　ミカがミカの活躍を見るのか。やっぱ凄えよミカは。
「……あの、司令官、お仕事は？」
「ぐっ、痛いところを突くな、弥生！だが、これはそう、艦娘に教育用ビデオを見せるのと同じこと！」
　他にも、デートの時は艦娘を引き連れての視察となっております。書類上は。
「オルフェンズは教育用だよね、分かるよ」
　流石望月！話が分かるゥ!!
　そんな望月は、一番大きなモニタを再生機に繋げ、ＤＶＤをインサート。
　三日月は、いつの間にか膝の上に。早いなミカァ！
　隣には文月と如月。戻って来た望月と、菊月も座って、再生。
「……え？全員で見るの？」
「アニメでしょー？楽しみー！」
「たまには、ね？」
「いや、何度見直しても良いし。名作だし」
「む、アニメはよく見るぞ。対処すべきイレギュラーの例がよく分かる」
　ふむ、皆んな乗り気じゃん。
「あ、そう？じゃ、再生、と」

　総評、やっぱ凄えよミカは……。

「カッコよかったわよ、ミカ」
「如月姉さん、何ですか」
「すごかったよ～、ミカ～！」
「文月姉さんまで。少し、照れます」
　かわいいぞミカァ!!
「……認めよう、三日月の力を」
「ありがとうございます、菊月姉さん」
「ん、頑張ったね、ミカ」
「はい、嬉しいです、弥生姉さん。……ですが、私が頑張った訳では」
　謙虚だな、うちのミカは。「別に？普通でしょ」くらい言って良いんだぞミカァ!!
「いやぁ、許されなかったか、デブ」
「だねぇ、やっぱり妹が可愛かったからね。全国の妹がいないオタクを敵に回したしね。残当」
「かなC」
　俺、望月のオタク並みの感想、好きだぞ。
「……司令官、この鎮守府も、あんな風になるのかしら？」
　期待が籠ったかのような顔の如月が言う。
「名瀬の兄貴みたいに？いやー、キツイっす」
　ガキなんか作ってみろ、鎮守府が火の海になるぞ。
「……まあ、陸奥さんとか榛名さんとか、黙ってないでしょうねぇ」
「そーいうこと。結婚なんて、やめとけ！やめとけ！」
「私は素敵だと思うんだけどね、皆んな司令官の愛人、だなんて??」
　私は、貴方と一緒なら、どんな形でもいい、とのこと。男の望む良い女になろうとするのが、如月の良いところなのかも知れん。

　ん、ちょい待ち、ラインだ……。
　オータムクラウド先生：たすけて
　だと……?!
「ッ!!ミカァ!!」
「はい」

服を、脱がせる。

「「「!!!?」」」

「自分で脱げますよ、司令官」

「いや結構。こういうのは、脱がせる楽しみもあるのだ」

三日月のセーラー服に似た艤装の服の部分を優しく脱がす。

おお、三日月、中々の筋肉だ……。しかし、筋肉の付け過ぎと言うことはなく、服の上からでは目立たないくらいだ。

戦闘に特化された肉体だが、だからこそこの様な美しさを持つのかも知れない。

最後に、飾り気のないパンツを脱がせる。

「最近は暑くなってきましたから、これも良いでしょう」

一糸纏わぬ姿の三日月は、恥じらいの一つもない。

それと、赤くなる弥生と文月。顔を手で覆っているが、指の間からこっそりこちらを見ている。望月も、少し赤い顔で、興味深そうにこちらを見ている。

菊月はしみじみとした様子で頷いているし、如月は微笑んでいる。

あの、別にここでおっぱじめる気じゃないぞ?ここはノーステイリスじゃない。俺はただ……、

「ミカにはミカのコスプレをしてもらうぜミカァ!!」

と言うこと。

オータムクラウド先生に、売り子を頼まれたのだ。

オルフェンズの全年齢向けギャグ本と言うならば、俺とミカが行くべきだろう。

さり気なく三日月の身体をあちこち触りつつも、パンツを履かせズボンを履かせ、着替えを終わらせる。いやぁ、うちのミカはかわいらしい身体だなぁ。結婚しろミカァ!!

「じゃあ、行くぜミカァ!!」

「分かりました」

そして肩車!!フゥー!三日月のしっかりと鍛えられつつも細身の

太ももがおおおおお!!!
テンション上がってきた!!

「……司令官、大分じっくりと三日月の身体を触ってたわねぇ」
「……私達にも興味を持ってくれているのかな？」
「わ、私も、あんな風に触って欲しいな～。三日月、すっごく嬉しそうだったもん！」
「表情は変わってないけど、明らかに喜んでたもんねー。んー、何かしら理由があれば触ってもらえるってことかな？」
「まあ、何にせよ……、誰であろうと、私達を超えることなど、不可能だ。何人侍らせようと良い、司令官には、私達でハーレムを作ってもらう」

「「「逃しは、しない」」」

８２話　ハラスメントの帝王　壬

……今!!

地面に足を叩きつけるかの様に、踏み込む！

そして回し蹴り……、生半可な速さでは、相手の速度に追いつけない。ならば、攻撃の範囲を広げる他ないだろう。

「ぜぇりゃあ!!!」

殺った!!

しかし、当たった筈の蹴りは、虚しく宙を切る。

見れば、蹴られた筈の相手は空気に溶けるかの様に霧散し、消えて無くなった。私が蹴ったのは、相手の残像だったらしい。

不味いな、目標を見失った。

気配も酷く希薄だ。後先を考えずに全力で集中し、感知範囲及び精度を最大にしているというのに、まるで気付けない。

ならば勘に頼る他ない。今までの経験上……、後ろ、いや……、

「上だっ!!!」

捉えた!!

「……ん、上出来だよ、武蔵。あー、痛え。もう俺よりも強いだろうよ」

「まさか……。貴方には敵わないさ、提督……」

その証拠に、提督は使っていない。

空間湾曲も、テレポートを始めとする魔法も、呪術、奇跡、闇術、仙術……、あらゆる術を。

霊薬もポーションも、エンチャント付き防具の一つも。

得意の弓や投擲も、数多の技能も。

「いやいや、空蝉まで使わされるとはね。全く、君達艦娘の成長速度には驚かされるよ」

「追いつける気がしないがな」

物理的にもな。提督は速過ぎる。島風が憧れるのも無理はない。

「なーに、才能はあるんだ。俺よりもな」

そう言って、疲れのあまり座り込む私に手を差し伸べる提督。全

く、色男と言うものは何をしていても絵になるものだ。
「む、ありがとうな」
「おっ、大丈夫か大丈夫か？フラフラだぞ？」
「まあ、全力以上を出したからな、消耗が、なぁ」
　そもそも、三時間はやり合った筈なんだが。息一つ上がらんのか。化け物か？ああ、駄目だ、倒れる。
「ほら、起きて。あーあー、砂埃が顔に……。ほら、拭くんだから、動かないの」
「むぅ……」
　まるで、大和が二人になったみたいだ。
　大体、無防備な女を前にしてそれは、少しばかり酷いんじゃないだろうか。もっと、こう、無理矢理押し倒すくらいは……。
「じゃ、肩貸すから、立ちなよ」
「あ、ああ」
　……並んで立つと、やはり、デカイな。私も大和も１８０半ば、並みの男より背が高い。そんな私よりも更に大きいとなると、かなりのものだろう。
　それにガタイも良い。掌もゴツゴツしていて、大きい。……滾るな。
「……ほら、ぼーっとしてないの。立って、どうぞ」
「……あー、すまん、見惚れていた」
「はいはい」
　むぅ、子供の様に背負われてしまった。やはり、女として見られていないのだろうか？乳は大きい筈なんだが。顔か？身体か？
「大和にパスで良いね？一緒に風呂入ってきなよ」
　うーむ。
「……そうだ。提督、裸の付き合いをしよう」
「まただよ（笑）」
　また、だと？他の女と？……少々苛立たしいが、まあ、いい。提督は私一人で収まるような器じゃない。
　……まあ、いい。

「いだだだだだだだだ!!!首折れる!!!締まってるから!!!旅人壊れちゃーう→!!!」

「ほぼ逝きかけました」
「す、すまない……」
つい、力が入り過ぎた。如何に死なぬと言えども、痛覚はあるらしい。
……なんだかんだ言って、風呂には着いてきてくれた。もちろん、互いに恥じらうことは無かった。見せて困る身体ではないが故に。
にしても、いい身体だ……。厳の様な大胸筋、鋼の如き腕、無駄のない腹筋、ガッシリとした骨格に大きな手足。そして、その、どこがとは言わんが、デカイ。
そして更に、その美しい肉体には、数多くの戦いの痕が残っている。
私自身も、前線に立つことから、生傷は絶えないのだが、提督はそれ以上だ。
大きな刀傷は肩口から脇腹まで達している、銃創は正確に肝臓や心臓の位置にあり、獣か何かの歯型は首筋を切り裂かれたことを示している。
素人でも分かる、あの傷は、一つ一つが致死のものだ。
……一体、今までどれ程の激戦を生き残ってきたのか、それが如実に伝わってくる。この男が如何に強いのか、理解させられる。
だからだろうか、私の女の部分は、目の前のこの男に、酷く、惹かれる。

「……つまり、俺はいつも言ってるけど、素の身体能力は並みなんだよ。組手の時は闘気で底上げしてるし、出撃の時は更に波紋まで使っているんだよ……、聞いてる？」
「提督、貴方の身体の傷痕を舐めさせてくれ」
「聞いてないのはまだしも何を言ってるんですかねぇ……？」
……駄目、だな。抑えられん。

「先に謝っておく。すまん」
「ちょっ」
長時間の組手で滾っていたのだ、性愛の欲求を抑えられる筈がない。若く健康な女の身体を持つ以上、性欲があるのは当然だろう？
「良い、身体だな……。こうして触れる度に、貴方の強さを感じられるよ……。さて……、は、むっ……」
舌先で、傷痕をなぞる。ざらざらとした感触。
舌を這わせる度、女の部分が、下腹部が熱を持つ。
「ん、はあ、提督……、愛しているぞ??」
「わ、分かったから！」
嫌がってはいないようだ。その気になってもらいたいものだが……。もちろん、今の私には子を作れる機能はまだないし、作ろうとも思わない。まだまだ、提督の為に戦いたいのだ。身重のまま戦う訳にもいくまい。
「なに、少しくらい構わんだろう？」
「駄目だ」
「……そう、か。私のような女は、嫌い、か」
「いや、俺は……、触る方が好きなんだよ」
すると、提督の大きな手が、私の胸を揉みしだいて……??
「くうっ??うっ、くっ??さ、触り方が、上手いものだな……??、……一体、この手で何人の女をモノにしてきたんだ……？」
提督は、女に慣れている。いや、慣れ過ぎている。何人も誑かしてきたことは、容易に想像できる。
「さあねぇ？でもまあ、碌な男じゃないってことは自覚しているよ」
「はっ、あっ??、ふ、ふふ、なら、そんな男に引っかかった私は、愚か者だな……??」
「……そうかもね。多分、俺は結婚しようと何しようと、一生変わらんだろうよ。人並みの幸せをくれてやることはできない」
「んんっ??だが、私は、貴方が隣にいることが一番の幸せなんだよ。……分かっているんだろう？」
「……分かってはいるがね、それは卑怯な気がしてさ」

「……卑怯？」
何を今更？
「まるで洗脳じゃないか。生まれて数年数ヶ月の君達に一番関わる男は俺だ。自慢じゃないが女にモテるこの俺だよ。これじゃあ、選択肢は一つしかないようなものだ」
……成る程、そういう見方もある、か。
だが……、
「例えそれでも、私は良いと思っているよ。そこらの有象無象よりかはずっといい」
「俺より強い男だってごまんといるぞ？」
「何も、強さだけに惚れた訳じゃないさ」
悪餓鬼の様に笑うところも、自然を大切にする心意気も、大きな夢を持つ男らしさも、全てが私を惹きつけてやまないんだよ、提督。
「……まあ、良いか。初恋なんだ、実ろうが実らまいが、最高の思い出にしてやらなきゃな！」
「そうだな！その意気だ！さあ、その意気のまま私と一発……？！」
「武蔵、提督と一発、何ですか？……提督も、その、大きくした○○○は、どういうことですか？」
や、や、や、ややややや、大和？
ど、どど、どうしてここに？
「……厭な予感がしたのです。この、大日本帝国海軍の誇る超弩級戦艦、大和を差し置いて、提督に初めてを捧げるなどと、不届きな艦の予感が……。まさか、貴女なのですか？武蔵……？」
「ヒッ」
「提督も、この大和よりも先に、妹の武蔵に欲情しようなどと……。どういう、ことですか……？」
「ヒッ」
「……あー、武蔵？」

「……何だ、提督」
「……逃げるぞ!!」
「応!!」
「逃がしません……!!!!」

まあ、こうして貴方と馬鹿騒ぎできるだけで、私は幸せだよ、提督……。

８３話　ハラスメントの帝王　癸

……「なんかの撮影？」
……「あ、あの子かわいい！」
……「おかーさん、あの子すごーい」
……「可愛過ぎる、修正が必要だ」
……「おっさん、負けんなー」

街の中。買い出しの途中。
「何あれ」
人だかりが。
「いだだだだだ！だ、だから誤解だって!!!」
「まだ言うか！この狼藉者め!!」
「は、初春ちゃーん！や、やめてー！」
……そして、聞き覚えのある声。
成る程、強制的に始まるサブストーリーか。わかるわ。
面白そうな厄介ごとには首を突っ込まないと死ぬ。
いつものトラックを路駐して、人だかりの中を歩いて抜ける。
「はいはーい、ごめんねー、退いてねー」
そして、人だかりの真ん中では……。

「こんの、竿師崩れめ!!何がきゃばくら、じゃ！うちの提督をどうするつもりじゃ?!」
「ち、違うってば！別にいかがわしい店じゃないよ、うちのエリーゼは!!ってか、力強いね君?!!」
「は、初春ちゃん、私、怒ってないから！大丈夫だから!!」

……ふむ、音成鎮守府の提督と、初春。それと、初春に腕を捻り上げられている、知り合いの金貸し。
あー、あれだ、ただただ、面倒なやつだ。大して面白くもない厄介ごとだ。

俺は面倒は嫌いなんだ。
……逃げちゃえ。

「この！このっ！このままへし折ってくれるわー!!」
「折れる!!本当に折れるから!!!……あっ?!そ、そこにいるのは、新台君?!新台君!!ちょっと!!!」
「え?あ！黒井鎮守府の……!!」
ぐっ、見つかった！流石に神室町でコインロッカーの鍵を５０本近く見つける人の視力は侮れんな!!!
「あー、はいはい、分かりましたよ！」

「……で?何事?」
人だかりを解散させて、三人に話を聞く。大体予想はついているがね。
「そこの男が、うちの提督を誑かそうと!!」
「だ、だから、ただ単にスカウトを」
「喧しい！言い訳など聞きとうないわっ!!」
「は、初春ちゃーん……」
激おこ初春。……て言うか、やっぱり私服は着物なんだ。
艦娘は目立つよなぁ。私服が着物の子多いから。そういや、うちの艦娘も話題になってたっけ。「着物を着た凄え美人がいる」って。本人達はナンパだのなんだのがうざったいらしいけど。
あと、個人的に、初春は艤装の鎖骨と脇がセクシー。
「い、いや、本当にさ、いかがわしい店じゃないよ?!ちゃんと風俗法守ってるし、給料も出してるし!!」
大慌ての金貸し。キャバクラのオーナーもやってる。顔も良いし頭も切れる、その上腕っ節も上等で金持ち。凄い男だよ。……だけど、毎度毎度、変な事やら事件やら、そういったことに巻き込まれる。
今回もまた。
「あー、守子ちゃん?何があったの?」
「は、はい！」

守子ちゃん。うちの隣にある、音成鎮守府の提督。可愛くって優しい子だよ。ちょっとビビりだけど、肝は座っているし、艦娘にキツく当たったりもしない良い子だ。
音成は、規模は小さいが、艦娘の個々の実力はうちに次いで強いね。戦果もバンバン挙げていて、表向きには、この国のトップ、と言うことになっている。
おっぱいも大きいし、ウエストは細めでお尻は肉付きがよろしい。
完璧だ。
「その、ですね、私達二人はお休みで、ここに遊びに来ていて……」
……『神室町、かぁ。実家とは全然違うなぁ……』
……『何とも、まぁ……。妾が知る日本とは、随分変わったものじゃなあ……』
……『でも、折角来たんだから、楽しんで行こうか！』
……『そうじゃな！』
ふむ、そうして遊んで、それから？
「それから、少しして……」
……『にしても、喉が渇いちゃったね。喫茶店も混んでるみたいだし』
……『ならば、そこの自販機なるもので何か買ってきてやろうではないか』
……『大丈夫？初春ちゃん、機械とか駄目じゃないの？』
……『ば、馬鹿にするでない！最近はてれび、を見れるようになったのじゃぞ?!』
成る程、その、初春が一瞬目を離した隙に？
「はい、その、そちらの秋山さんが……」
……『ん？おお、ちょっと、そこの君？』
……『ふえっ?!な、なんでしょう?!』
……『君さ、もし良かったら、キャバクラで働いてみない？』
……『え、ええっ?!!わ、私が?!!』
……『君には光るものがあると思うよ、ナンバーワンだって夢じゃ

ない。……ああ、申し遅れました、自分、こう言うものです』
……『あ、こ、これはどうもご丁寧に……。ええと、秋山駿、さんですか』
……『ええ、そこのキャバクラのオーナー兼、しがない金貸し、ですよ』
……『は、はあ……。で、でも私、キャバクラなんて、とてもじゃないけど……』
……『いやいや、君は本当に魅力的だよ？何事も経験って言うし、話だけでも聞いてみる気は』
「そして、その時……」
……『な・に・を！しておるーーーー!!!』
……『うおっ?!!』
……『うちの提督に身売りなどさせんぞ!!!失せんか、このうつけめ!!!』
……『み、身売りって……。い、いや、そんなことは』
……『成敗してくれるーーー!!!』
……『ちょ、ちょっと！ちょっと待っ、痛たたた!!!』

「……で、現在に至る、と」
「……はい。そ、その、初春ちゃんを止めて下さい！」
「分かったよ」
まあ、あのままじゃ不味いしな。
「ほら、初春？一旦離れて？ねっ？」
身体を掴む。振りしてさり気なく胸にタッチ。バレへんバレへん。
まあ、揉むほどねぇけど。こう言うのは気持ちの問題だから。触っていると言う事実に意味があるから。
「む、黒井の……！今はいかん、賊を逃してしまうからな」
「あー、そのね、その人、俺の知り合いなんだ」
あ、着物がちょっとはだけてる。エロい。見えないエロスである。
「……なんじゃと？」
「俺が話をするからさ、許してもらえないかな？」

「むう、大恩ある旅人の言葉故に、聞き入れたいのは山々だが……」
「いや、話を聞くだけさ、本当にこの人が悪いなら、警察にでもつき出せばいい」
「……分かった、良いじゃろう」
何とか、説得に成功。

「あー、すまない、助かったよ」
「年端もいかないような子供に痛めつけられた気分はどうです？」
「はぁ、最高だね」
はだけたジャケットを直しつつ、適当に軽口をたたく。
「よりにもよって守子ちゃんをスカウトしようだなんて、相変わらず命知らずだよ、全く」
「こんな可愛い娘さんがいるとはね、失敗したよ。あ、いや、妹さんかな？」
「いやいや、どっちでもないさ」
「と言うと？」
「この子は提督、こっちの子は艦娘」
「……ははっ、成る程ね、大失敗だ」
いやあ、本当に、相変わらずだ。

「それで？この男は？」
おっと、ご機嫌斜めだ初春。駆逐艦にしては大人っぽくてセクシーだぞ初春。
「この人は、そう、金貸しだよ。真っ当にやってる人でね、悪人じゃないさ」
「ほう」
「それで、金貸し以外にも、まあ、なんだ、とある店のオーナー、要は店長でね、そこに守子ちゃんをスカウトしようとしたんだと」
「身売りなどさせんぞ？」
なんで身売り？発想が古い！
「ああ、いや、なんと言うか、キャバクラはあれだ、うーん」

「あー、花魁とか？」
「舞妓でも近いかも？」
「「うーん」」
　おっさん二人で頭を抱える。
「……もしや、水茶屋か？」
「あー、それだ！」
「そう、それ！給仕に近い仕事だよ！」
「……つまり、うちの提督を給仕にしようと？」
「そのつもり、だったんだけどもね、提督さんとなると無理、だなぁ」
「公務員だしな、一応」
「……まあ、分かった。邪な気持ちはないのじゃろう、暴力を振るったことは詫びよう」
　綺麗な形で頭を下げる初春。何をやっても様になる。立てば芍薬、とはよく言ったもの。あと、髪の毛を振る度に椿の匂いがするな。素敵だ。
「あ、ああ、いや、良いんだよ、気付かなかった俺が悪いんだし」
　まあ、艦娘は知識がなぁ。英霊の皆さんみたいに、現代知識をもらって召喚されりゃ楽なのにな。
「ご、ごめんなさい、どれもこれも、初春ちゃんにちゃんと教えておかなかった私の責任です……」
　申し訳無さそうな守子ちゃん。でもさ、こう、胸に手を当てるそのポーズ、エロいね。
「良いんだって！気にしないでよ」
　にしても、女運無いな、この人。まさか提督を引っ掛けるなんて。
　そうだ、うちの艦娘を引っ掛けられたら困る。在籍艦娘のリスト（と言う名のプロマイド写真）と、俺の名刺でも渡しておくか。
「秋山さん、ちょっと。……これ、うちの艦娘のリストね。手を出さないようにお願い。他所にも言っておいて」
　趣味で撮った。後悔はしてない。……個人的に撮った水着バージョンは誰にも渡さん、永久保存だ。
「ん、ああ。……おいおい、こんな美人ばっかりなの?!この子も、それ

と、この子も、皆んな一月もあればナンバーワンだよ?!」
クックックッ、羨ましかろう。
「それと、これ、俺の名刺。今日みたいに、怒った艦娘がいたらこれを使って欲しい」
「はぁー、了解……。全く、こんな可愛い子に囲まれて、さぞかし楽しいんだろうねぇ?」
「あぁ、最高だよ」
定期的に命に関わるスキンシップが飛んできて、定期的に修羅場が起きるけど。
「それじゃ、解散、かね?」
俺がそう言って、帰ろうとすると、
「待たれよ」
初春にベルトを掴まれる。
「えっと?何かな?」
「何、折角じゃ、音成に寄って行くと良いじゃろう。皆も会いたがっておるぞ」
君ら、ほぼ毎日うちの鎮守府に来てるじゃん?
「あ、私からもお願いします!実は、実家から沢山のお魚が送られて来て……」
と、守子ちゃん。守子ちゃんの実家は漁師らしい。
「そこまで言うなら、寄ろうかな?」
「ありがとうございます!」
「うむ!」
さて、帰りは遅くなる、と。ライン入れとこ。
「じゃ、秋山さん、そう言うことなんで」
「はぁー、モテるねぇ、妬けちゃうよ。……それじゃあね、また」
そう言って、秋山さんはプロマイドを見ながら歩き出した。
×××
×××
×××
「うわっ、こっちの子はアイドル目指せるよ……。艦娘ってのは可愛

い子ばっか、おっと！すまないね、前を見てなかっ」
「あー!!!痛え!!骨折れちまったーーー!!!」
「オイオイオイオイ!!どう落とし前つけてくれんだ、おっさん!!!」
「カッコつけてんじゃねーぞ?!!」
あー、相変わらず、チンピラが多い……。
「うわっ、面倒臭さっ……」
「なんだとてめえ!!!」
「舐めやがって!!!」
「おい、どうせなら、さっきの女の前でボコってやろうぜ!!」
不味いな、巻き込みたくはないんだが……。
「おいおい、彼女達は関係ないよ」
「とぼけんなや!!!おらっ、女とガキ連れてこい!!!」
あっ、ヤバっ?!

「提督、旅人の側におるといい。旅人よ、提督を任せるぞ」
「はいよ、殺しちゃ駄目だぞ」
……おいおい、初春ちゃんがやるのか?!
止めるべき、か、な……?!
「おらっ！こっちに来おグッ?!!!」
「不届き者め……」
あれは……、鉄扇?!
「こ、このガキへぶっ?!!!」
「な?!あ、あのガキ!!」
「ふざけやがって!!!」
「なんじゃ、大の男が、女相手にだらしの無い……」
鉄扇を開いて防ぐ、閉じて叩く、持ち替えて、引っ掛けて倒す……。
「終わりじゃあ!!!」
「ヒッ!!ぐあああぁ!!!」
最後は突き、か！
「全く、迷惑千万、じゃな」
あの、動き……、!!

閃いたぜ……!!

『鉄扇公主の極み』を修得した!!

これだ!!

８４話　音成インザ旅人

ちょっとだけ、緊張するなぁ。
尊敬するこの、黒井鎮守府の提督である旅人さんを、うちに招くだなんて。
こちらから伺うことはあっても、あっちがいらっしゃることはあまり無いから。
「さて、音成鎮守府にようこそ、歓迎するぞ、盛大にのう！……じゃったかの？」
「初春ちゃん、似てる似てるー！あ、旅人さん、こんにちはー！」
「きゃー！旅人さんだ！お久し振りですー！」
魚雷みたいに突っ込む子日ちゃんと阿賀野ちゃん。
「お〟ぉ〟ん!!」
ああっ?!なんてことを！
艦娘の力と速さで、人間の旅人さんに抱き着くなんて!!
「ここここ、コラっ!!た、旅人さんに迷惑かけちゃダメ!!!」
「えー？旅人さんは頑丈だから大丈夫だよー！」
「会いたかったですー！」
「だが、まだ生きている」
ああ！ノーダメージだ！一体どうなってるの?!
「さて、そろそろ三時だ、おやつを作ろう！キッチンはどこかね？なければ出す」
「……出す、とは？」
「マダム殺しのフードプロセッサー」
懐から突然、明らかに重そうなフードプロセッサーが。
あっ、そうでした、この人の懐は異次元なんでした。
「い、いえ、キッチンはこちらにありますから！」
……ん？あれ？
「って、ダメですよ！お客様なのに、なんで料理する気満々なんですか?!お茶菓子くらいなら私が！」
「まあまあ、良いじゃろうに。本人がやると言うのだ、やってもらえば

良かろう？」
「でも……」
「じゃ、守子ちゃんは手伝ってもらえるかな？」
「うーん、分かりました」
　そうなんだよね、私も、料理は得意だし、お茶菓子くらいなら作れるんだけど、流石にプロ級の腕はないもん。
　多分、「自分で作った方が美味い」とか言われたら心が折れると思うし……。

「はい、じゃあ、やろうか」
「「「はーい！」」」
　……あれ？何で阿賀野型の皆んなが？
「提督ばっかりずるいよ！私も旅人さんのお手伝いするんだから！」
　阿賀野ちゃん、旅人さんのこと大好きだから……。
「私は、阿賀野姉が皆んなに迷惑をかけないように、と」
　能代ちゃんは、いつも阿賀野ちゃんに着いてる。しっかり者の良い子。
「私も同じ、ですね」
　矢矧ちゃんも、良く阿賀野ちゃんに着いていてくれる。能代ちゃんほどじゃないけど、しっかり者だ。
「わ、私は、その、姉さんが皆んな行くって言うから……。ぴゃぁ～、じゃ、邪魔だったかなぁ？」
　酒匂ちゃん。寂しくって着いてきたみたい。かわいいなぁ。
「おお、かわい子ちゃんがいっぱい！嬉しいねぇ！」
　……まあ、旅人さんも喜んでることだし、良いか。
　旅人さんは女の子が好きみたいですし。
「その、それで、どうするんですか？お茶菓子ですから、クッキーとか？」
「いやね、最近は暑くなってきたから、パフェとか作っちゃう！」
　ええ……。
「そ、その、アイスは無い、ですね。クリームの材料くらいならあるん

ですけど」
「まずここに万色フルーツがあるじゃん？」
　どこから？
「携帯調理器を使います」
　だから、どこから？
「はい、パフェの完成です」
「!!!」
?!!!
　はい?!!
「わー！すごーい！すごいよ!!」
「えぇ……（困惑）」
「料、理……？」
「？、ぴゃ？ぴゃぁぁ？」
　過程をすっ飛ばして完成です、と言われましても……。
「はい、阿賀野にあげよう」
「わーい！……はむっ……、おいしー！」
「ほらほら、こっちで座って食べて？他のは今から作っておくから、ちょっと待っててね？」
「うん！分かった！」
　……あー、なるほど。
　阿賀野ちゃんを座らせる為、なのかも。
　阿賀野ちゃん、ものすごーく、ドジだから……。
　キッチンに入れたら、危なっかしくてしょうがないもんね。
「さ、今のうちにさっさと作ろう。はい、とりあえず能代と矢矧は生クリーム作っておいて、守子ちゃんは俺と生地を焼くよ。酒匂は……、そうだな、イチゴのへたを切り落としといて」
「「「はい！」」」
　やっぱり、阿賀野ちゃんを封じる為に……！さ、策士だ！
　と、と言うか、作業スピードが速い……!!
「おっ、酒匂は結構器用だな、それだけあればタルトも作れそうだ。確か生地は四次元ポケットに……、あった」

そしてあの四次元ポケット！魔法って本当にあるんだ……。
「生クリームできましたー！」
「よーし、次はカスタードよろしくー」
「了解です！」
ああ、あまりの速さに、旅人さんが二人いるように見え……、あれ？……、
「二人いるー!!?」
「いや、一人だよ」」
嘘です！今完全に二人いました!!

そ、そんなこんなで終了です。
完成したお菓子を居間に運んで、皆んなで頂きます。
「お、君か。こちらに来るとは、珍しいな」
「日向ったら！もっと丁寧な対応を……！あっ、そ、その、こ、今回は音成鎮守府にいらっしゃいまして……」
あ、日向さんと、伊勢さん。出撃から帰って来たみたい。
と言うことは、
「んあー、疲れたぁー！……ん？甘い、匂い？……疲れた時は甘いもの……、私にもちょーだい!!……って、ええ?!」
「こら、瑞鶴？廊下を走っちゃ……、あら？」
一緒に出撃していた翔鶴型の二人も帰って来たみたい。
「あ、お邪魔してるよー」
「こ、こっちに来てたんですか？」
「いつもいつも、そちらにお邪魔してばかりで……。今回は、寛いで行って下さいね？」
「ああ、ありがとねー」
そして、二階からは、
「む、待たせたか？すまないな。お詫びに、この若葉のことを好きにするがいい！煮ても焼いても良いぞ!!」
「こここここ、コラ!!若葉ったら!!」
若葉ちゃんと初霜ちゃん。……うちの若葉ちゃんは、その、なんと

言うべきか、特殊な趣味があって……。
「む？何かおかしいだろうか？黒井の駆逐艦の響は、この前、膝に抱えてもらい、お尻を叩いてもらったとか」
「えっ」
「ちゃうねん、ちゃうねん……」
膝の上でお尻を?!（重要）……、叩かれて？（若干の興味）
「ふふふ、遠慮せずとも良い！響の調査ノートには、「どちらかと言うとS」と書いてあるぞ！安心してくれ、私はマゾだ!!」
「若葉ーーー!!!!何言ってるの?!!何言ってるの?!!」
「そぉい!!」
「さあ！我慢せずに劣情を私にむぐっ?!……もぐもぐ、うまい!!!」
シュークリームを口に!!
「あー！私も私もー！あーん！」
「はーい、阿賀野ー、あーん」
「んー??おいひい！」
……なんか、うまく誤魔化しましたね。
「つーかあれ、音成にも出回ってるの？マジ？マジかー……」
……私も持っているのは黙っておこう。
「そっ、それで、今日はどうして音成に？」
瑞鶴ちゃん、全力でフォロー。顔は真っ赤。……私もだけど。
……せ、攻める方が、好き、ですか……！
なるほど！
「ああ、守子ちゃんに誘われてさ。たまには、と思ってね」
「そ、そうなんですか。……あ、そ、そうだ、えっと、ですね？良ければ、後で弓をご教授願えますか？」
翔鶴さんが、期待を滲ませた声音で言う。珍しい、翔鶴さんがお願いだなんて。
「ん、もちろん」
「あ、ありがとうございます!!……あの一航戦の御二方も絶賛する程の腕前だそうですから、楽しみです！」
へぇ、弓もできるんだ！私も、学生の頃は弓道部だったし、少し気

になるなー、後で見せてもらおう！

……あれ？でも、

「……そのぉ、黒井鎮守府の艦娘は、大丈夫なんでしょうか？」

「ん？大丈夫だけど？」

いやその、そうじゃなくって……。

だって、黒井鎮守府の艦娘は、愛が、重いと言うか……。

「ああ、だって、ほら」

そう言って、窓の方を指差す旅人さん。

そこには……、

「……ひぃ!!」

窓に、沢山の式神がべったり張り付いて……!!!

「監視されてる、からね」

や、やっぱり、黒井鎮守府は、おかしい……!!

８５話　音成オンザ旅人

「生半可な旅人には真似できない一矢!!」
　ほらこんなもん。
「「あ、あはははは……」」
　なにわろてんねん。
「て、提督さん、薄々気付いてはいたけどさ、やっぱりあの人、人間じゃないよ!!」
「こ、これは、確かに、一航戦の御二方よりも遥かに……!」
「え？……え？なにあれ？」
　言う程か？静止物なら幾らでも当てられるだろ？ただ単に二、三十本の矢を同じ位置に当てただけだぞ？
　音速以上のスピードで動かれると、俺だって外すことくらいあるけど。
「と、まあ、こんな感じで。ほら、やってみ？」
「「無理です」」
　こんな遣り取り、前もやった気が。

「私は人間ですからね……」
　じゃあ何か？俺は人間じゃないとでも？酷いぞ守子ちゃん。そもそも、俺はどっちかと言うと肉体は仙人寄りだ。もちろん、変化や変異して化け物になることも可能だが。
　守子ちゃんは美人でスタイルも良いけど、時折辛辣なこと言う。悪気はないらしいが。でも、物事をはっきり言う子は好きなので、ついつい結婚を申し込んでしまった。受けてくれた。やったぜ。
　弓は普通に上手いな、弓道と言う意味では。実戦では使えないだろうが、この子は戦わないし、良いんじゃない？
「その、すいません……。まだまだ修練が足りず……」
　申し訳なさそうな翔鶴。初春と並んで、この音成鎮守府の母親ポジションの子。

美人だし、スタイルも中々。この前、ナチュラルに「襟が折れていますよ」とか言って、服装を直された時は、思わず結婚を申し込んでしまった。受けてくれた。やったぜ。
弓は、筋は良いんだけど、型にはまり過ぎな印象。
「前々から思っていたけど、やっぱり凄いわね、旅人さん……」
正規空母の割に胸の薄い瑞鶴。うちの豊満ボディの空母達を見ては、絶望に打ちひしがれているの、俺は知ってるよ。龍驤を見る度、安心しているのも。僕は（貧乳の女の子も）好きです（半ギレ）。そんな瑞鶴が可愛かった故に、音速で結婚を申し込んでしまった。受けてくれた。やったぜ。
弓の腕？うーん、こっちは逆に、型がガバガバ。

まあ、全員可能性はある。ユニコーンくらいの可能性秘めてるし、ちょっと練習すりゃ格段に強くなるな。
「んじゃ、まずは守子ちゃんから」
「は、はい」
弓を構える守子ちゃんに、後ろから抱きつくような形で手をとる。空母に教えるときはいつもこれだ。
「?!、そ、そそそそ、そのっ?!こ、これは?!」
「え？……あ、あー、そっか、セクハラかぁ!!」
やべー、うちの鎮守府だとセクハラすると喜ばれるから、ついついいつものノリでやっちまった、どうしよ。
「ごめんなさい警察だけは」
土下座である。プライド？何それおいしいの？
「いっ！いえっ!!だ、大丈夫です!!……こ、このままでお願いします!!」
良かった！好感度稼いでおいた甲斐があった!!
「そうかい、じゃあ、このまま……」
……乳でも揉もうかと思ったけど、やめとこ。今はその時ではない。

うちの鎮守府に慣れたせいで、セクハラ力が高まってるな、最近は。
このままではいつ通報されるか……。
「(わ、私達もあれ、やるの?!ど、どうしよ、翔鶴姉!私、汗臭くないかな?!!)」
「(だ、大丈夫、だと思うわ!ああ、私も、こんなことになるならもっとかわいい下着を着けておけば……!!)」
いやいや、そこまではやらんよ?監視もあるしね。
だが髪の匂いだけは確実に嗅がせてもらう!!
……いや、うちのわんわん達と同じかそれ以上に、俺は鼻が利くんだよ。耳も第六感も、かなり自信があるね。
そもそも、目も良いけど、視覚情報はアテにならんことの方が多いし。特にヤーナム。姿なきオドンは捕まえるのに苦労したな、うん。
という訳で、見た目だけじゃなく匂いや音とか、そう言ったもので他人を覚えてるもんなのよ俺は。
別に変態な訳ではないのだ。
断じて。
あ、守子ちゃんは、そうだな、短弓でも使わせよう。速射ができれば護身術くらいにはなる。
え?守子ちゃん?石鹸の香りだったね。あとは和食の匂い。化粧は薄め、人の血の匂いは多分生理。

さあ、次は瑞鶴だ。
「わっ、私?!……ちょ、ちょっと待って!!……よし!き、来なさい!!」
何を勘違いしてるんだか、両手を広げて目を瞑る瑞鶴。
えっ、どうしろと?
「(頑張るのよ、瑞鶴!!)」
小声で何言ってんの翔鶴?
うーん、ここは抱きしめておくべきか?抱きしめておくべきだろうな。
えい。

「あっ……、えへ、えへへへへへ??」
かわいい。
ぷにぷにほっぺが胸筋に当たって幸せ。
……ポケットのスマホにガンガンラインが届いてるけど、まあ、どうにかなるだろ。
多分。
そうだった、カリキュラムは、長弓。意外と力持ちだし、ダイヤ製の重いやつとかが良いだろう。あとは型。
匂いは、そうだな、フルーツの匂いだ。イチゴのタルトで大喜びだったし、フルーツ好きなのかも?そして艦娘特有の海と鉄の匂いがするなぁ。

ラスト、翔鶴。
「で、では!最後は私が!!」
おおっと~?勝手に胸に収まってきたぞ~?
「……その、私は、抱きしめて頂けないのでしょうか……?」
くっ、卑しい女ずい!!こんなことされたら、こうする他ない。
「あっ??力、強いんですね……??」
クソォ!!帰ったら死ぬぞ俺!!電話めっちゃ鳴ってるもんな!!でも、美人にこうされたら抱きしめざるを得ない!!!
男ってのは、悲しい生き物だな……。
弓は、軽めの長弓、だな。エーテル製も考えたが、艦娘にどんな影響が出るか分からん。大人しくミスリル製にしとこう。練習は動く目標を撃ち抜くこと。
匂いは、守子ちゃんに近いな。キッチンに立つからだろうか?あ、ちょっとだけ本の匂い。文学少女か。

……さて、教えることはこんなもんか。
取り敢えず、とっととラインを返さねばな。取り返しがつかなくなりそうだ。

「あ、できた！」
「おー、凄い凄い。頑張ったね、守子ちゃん」
　ポテンシャルがあれば、練習すりゃできる。何もおかしくない。
「教え方、上手いんですね。その、何かやっていたんですか？」
「あー、教師をちょっと」
「へぇ！そうなんですか！」
　毎回、教師してたって言うと驚かれるな。女の子からの受けは良いから、良いんだけどさ。
「教師、ですか。その、どんな学校で教鞭をとっていたのでしょうか？」
「もしかして、女子校とか?!」
「うん？女子校も何度かあったよ？最近だとアンツィオ高校ってところで戦車乗り回したっけ」
　いやぁ、ありゃあ最高だった。型は古いけど、良い戦車を乗り回せて。生徒も可愛かったし。
「戦車?!」
「昔は男子校に勤めていてさぁ、最悪だったよ。校舎は爆発するし、生徒が爆発するしで」
　クロマティはキツかった。流石の俺もゴリラとメカとフレディと不良共に経済学を教えたのは生まれて初めての経験だった。引き算が覚束ないレベルのアホに物を教えるのは辛いな。
「爆発?!」
「童守小学校も面白かったな、妖怪と戦った経験は他所でも役に立ったし」
　あんなに多くの妖怪とやり合ったのは、中々ないな。あの時の退魔の技は他所でも役に立つし、いい経験だった。幻想郷とかで大分使えたな、あそこで得た技能は。
「妖怪!!」
「あの、学校？ですよね？」
「？、学校だろ？」

何言ってんの？学校なんだから、戦車に乗ったり、色々と爆発したり、妖怪が出たりするのは当然だろ？
「……あ、また冗談とか？」
「む、本当だぞ、瑞鶴！見ろよ見ろよ！」
懐から取り出したのは、思い出アルバム。
「うわぁ、本当に戦車乗ってる……」
「その、何で学校にゴリラとロボットと外人歌手みたいな人が？」
「あっ、えっ?!こ、この人、手首から先が、無い?!」
な？言ったろ？

「……多芸なんですね、旅人さんは」
「……もしかして、提督のお仕事も、やめちゃったりする？」
「え?!や、やめちゃうんですか?!」
む、重要な選択肢だ。窓にはびっしり式神が張り付いてる。すっげえ一杯おるやんけ！キモっ!!だが、ここでしくじったら死ぬ。
「いや、途中で仕事は投げ出さない主義でね？海の平和を取り戻すまでは、一緒に頑張ろうな!!」
「「……はい!!!」」
どうだ?!
……去っていったようだ。
よし、今回も生き残ったな!!

……まあ、黒井鎮守府に帰ったら殺されるかもしれんがな!!!
どうしよ!!!

８６話　音成オブザ旅人

あらすじ、黒井鎮守府に帰りたくないので、音成鎮守府にお泊まりすることにした。
ラインはガンガン鳴ってる。
ハッハー、９９９件だってよ。
はー、死んだかな？俺？
中々のピンチだが、今の俺はまた別のピンチを抱えていて……。
「分かった！腹パンだ！せめて腹パンをしてくれ!!先っちょだけ！先っちょだけだから!!」
「ぬおおおおお!!!離せぇぃ!!!!」
「何故だっ!!腹パンだぞ?!!!皆んな大好き腹パンだぞ?!!!性器を使わずに子宮を犯すセッ」
「やめろや!!!!」
それ以上いけない!!!
「良し！よく分かった！ならば妥協しよう!!取り敢えず、この鎖を持ってくれ!!」
「ま、まあ、そのくらいなら……」
意図は分からんが。
「そのまま引っ張ってくれ!!遠慮はいらん！全力でだ!!」
「ええ？……ちょっと待て、これ、若葉のロック装置に繋がってるじゃねえかよ!!!」
「ふふふ、このまま散歩でもどうだろうか、御主人様!!」
「誰が御主人様だ!!!」
「なるほど、犬が人の言葉を話すな、と、そう言うことかっ!!わんわん!!」
「言ってねーよ!!!」
何でこんなことに？誰だ？どうしてこんなになるまで放っておいた?!!
「わわわわわ若葉ぁーーー!!!!」
「ぐっ?!は、初霜かっ?!!ええい、私の邪魔をするな!!!」

「何馬鹿なことやってるの!!!旅人さんから離れなさい!!!」
「ぐあああああ!!!やめろぉ!!!せめて引っ張るなら鎖の方にしてくれ!!!あああああああー……」
た、助かった!!このままじゃ色んな意味で大変なことになっていた……!!若葉め、侮れん!!
「本当に、本当にすいませんでしたぁ!!!」
土下座。お手本のような土下座。
「い、いや、良いんだよ、初霜！怒ってないからさ?!」
「で、ですが」
「構わんよ（心が寛大）」
「あ、ありがとうございます!!」
初霜、いつも若葉のフォローか。大変だなぁ。
流石に、攻める方が好きだと言っても限度があるわ俺も。
こんな時、知り合いの冒険者なら喜んで殴るんだろうが、俺には無理だ。
……あいつは、王都のど真ん中でペットの少女をサンドバッグに吊るして殴りつつ、血の繋がらない妹を縄で縛りつつ騎乗し、無邪気な少女の肉を貪りつつ、お嬢様と気持ちいいことするようなド変態だからな。
と、昔を思い出していると、初霜が話をし始めた。
「……若葉は、ああ見えて優しい子なんですよ」
「ああ、うん」
「昔から、誰よりも前に立って、皆んなの盾になって……。私は、傷付くのが怖くないから、平気だからー、とか、寧ろ好きなくらいだー、とか言って」
優しく微笑む、初霜。
「辛くない訳、ないのに。……ご存知かもしれませんが、艦娘は、手足が吹き飛び、臓腑が溢れようとも、入渠すれば元通りです。……でも、痛くない訳じゃ、ないんです」
「……ああ、知ってる」

実際、最近は少なくなってきたとはいえ、うちの鎮守府にも常人なら死んでいるような怪我をして帰ってくる子が沢山いた。
「あんな、あんなに小さな身体で、必死になって……。今でこそ、ロック装置の恩恵で怪我をし辛くなってはきていますけど、それでも、無茶ばっかりして……」
「……心配かい？」
隣の初霜の頭に手を伸ばす。
「正直、かなり。……でも、若葉は、何を言っても止まりませんから。仲間が傷付くくらいなら、私が、って。……だから、私にできることは、若葉を守ってあげることなんです！」
「……そっか、偉いな、初霜は」
仲間を守る。
当たり前だが、その当たり前をこなせるやつが世界にどれ程いるのか。
「えへへ、当然ですよ、このくらい。……でもまあ、本当に痛いのが好きになるとは思いませんでしたけどね」
苦笑いする初霜は、見た目よりずっと大人びて見えて。
「初霜……」
「はい？」
「好きだ」
「……はい？」
「いや、もう、かっこよくってつい。惚れた」
「も、もう！そう言う冗談はダメですよ？そ、それじゃ！」
はぁ、かわいい。
スカートを翻して去っていく初霜の美少女っぷりには感服した。
あ、パンツ見えた。黒か。黒だ。もうなんか、大人じゃん。手を出しても……、はっ?!あ、あれは式神?!い、いかんいかん、危ないところだった……!!
「……で、実際のところどうなん？若葉ちゃんよー？」
真っ赤になった若葉が出てきた。俺が気付かない訳、ないよねー。

「ぐぬぬ、気付いていたのか……」
「当たり前だよなぁ？」
「羞恥プレイか、やるな……。そ、その、だな、初霜が言っていたことは、忘れてくれないか？何となく、気恥ずかしくて、な」
　あらかわいい。
「えー？」
「そ、そこを何とか」
「まあ、良いよ。秘密だ」
「あ、ああ、ありがとう」
　すると、若葉は、初霜と同じく、俺の隣にぴったりと座った。……ああ、クソ、黙ってりゃこんなにかわいいのに!!
「……その、だな」
「ん？」
「初霜は、私のことを優しいと言ってくれたが、少し、違うんだ」
「……そう？若葉は優しくて」
「違うよ。……私は、怖い。ただ、ただ、怖いんだ」
「……ふむ」
　まあ、言わんとしていることは分かる。
「……私は、召喚されてからすぐに、私について調べたんだ。戦争で負けたのは、まあ、驚いたが、それ以上に……」
「乗組員のこと？」
　多いんだよ、自分について調べる艦娘は。
「……ああ。皆んな、死んでしまったんだ。飯もろくに食えず、慣れない陸の上で……、皆んな……」
　半分泣いてるな。
　……まあ、他人を想って涙を流せる奴は、良い奴だよ。嫌いじゃない。
「辛かっただろうになぁ、痛かっただろうになぁ……。私は、沈んだ私には、何も、何もしてやれなかった……」
　背中でも撫でてやるか。
「……だから、な？もう、私の仲間には、嫌な思いをさせたくないんだ。

皆んなが酷い目に遭うところ、私は見たくない。皆んなが辛い思いをするくらいなら」
「自分が、って？」
「ああ、そうだ。……もちろん、皆んなが強いことも、私を心配する人がいることも知っているさ。ただ、私が勝手に怖がって、勝手に皆んなの盾になっているんだ」
はーん？やっぱり、他人に何と言われようとも、自分の正しいと思うことをやるタイプか。
そう言うのはな、悪の組織で最も重要なんだ。
例え、他人に批判されても、法律で禁じられていようとも、自らの目的の為に戦う、それが悪ってもんだ。
「若葉ぁ？」
「む、何だろうか？」
「結婚してくれ」
「……あ、あのなぁ、人が真面目な話を」
「いやぁ、もうあまりにも良い女だったから。……本当は、一番怖がってるの、自分が死ぬことでしょ？」
「……参った、お見通しか」
死ぬのが怖い、死んだ後、仲間が守れないのが怖い。でも、今いる仲間が傷付くのも怖いから、戦うしかない。そんなところか。
「凄いじゃないか、尊敬するよ。俺は逃げてばっかりだからな」
まあ、逃げられなくなったら戦うけど。
「そう、なのか？」
「ああ、だから、恐怖に立ち向かえる奴には敬意を払う。惚れた。……と言う訳で結婚しよう」
「む、むむむ……、そ、その、だな、私は音成鎮守府の仲間がいるから、中々会いに行けるか分からんし……、それにマゾで……、見た目は子供だし、賢い訳でもないし……」
あらら？モジモジし始めたぞ？乙女若葉。アリだな。
「関係ないさ」
かなり強めに抱き締める。大丈夫大丈夫、実は、艦娘にはマゾが多

い。
そもそも、入渠すればあらゆる怪我が元通りになる存在だ、アイデンティティに悩むに決まっている。
その悩みは、大体、痛みは生きてる証拠だよ、みたいな結論に達するからな。戦っている間は、自分が自分らしくある一番の瞬間だと。
若葉もそうなんだろう。
自分が痛い思いをしている間は、仲間は無事で、自分の役割を果たしていると。
かわいそうだ、とは言わない。戦士への哀れみは侮辱だから。
でも、こうして若葉という女の子を可愛がるのは、まあ、セーフってことで。

……この後若葉は、俺の胸で泣いた後に、一緒に厨房から風呂から寝室までべったりだった。

いやー。

さでずむに目覚めそうだ。

「おっ、初春ー！一緒に寝よー！さー、ベットの上で組んず解れつ」
「ま、全く、わらわの様な童女に何を言う?!ま、まあ、秘め事は二人きりの時に、な？」
「あー！私もー！旅人さーん、隣で寝ても良いですか？」
「ＯＫですわ、阿賀野ー！」
「うきゃー！嬉しいです結婚しましょー!!」
「おーおー、してやるしてやる！毎週結婚してやる！」
「なっ?!ま、まさか、お前は、そこらの女皆んなに結婚を申し込んだりしていないだろうな?!!」
「えっ、してるけど？」
「わ、わ、わ、私の乙女心っ!!!」

「はいはい、若葉にそんなものないでしょ？早く寝るよ、明日も仕事なんだから」
「酷いぞ初霜ぉ!!!」

８７話　イキの良い海パン少女　前編

「じゃ、ありがとね」
「はい！また、いつでもいらして下さいね？」
「ああ、また、来るといい。次は肉が食べたい」
「こ、コラ日向!!」
「ははは、じゃ、また！」
　そして空から降って来る大矢。
「な、何だ?!!」
「敵襲かえ?!」
「提督を下げろ！空母は護衛！戦艦は前に！残りは警戒!!……くっ、気配が無かったぞ?!どう言うことだ?!!」
「あー、いや、これは……」
「……さあ、提督、帰りますよ」
　赤城、怖い。
「早く帰るんや。早く早く。早く早く早く早く早く早く」
　目の焦点が合ってない龍驤。
「嫌だなぁ……、提督の鎮守府はここじゃないでしょ？」
　笑顔の蒼龍。
　ふむ、両手と胴体を掴まれたか。
「まあまあ、これには訳が」
「話は」
「鎮守府で聞くよ」
「待ってくれ、待って、ああ、あああああああ!!!……」
「……あれ、大丈夫だろうかのぅ？」
「……まあ、死には、しないんじゃないか？多分」

「あら？お帰りなさい、旦那様??」
　出迎えてくれたのは鳳翔。なんか知らんけど、竹箒とひよこエプロンはなんとなく未亡人感が出てしまうので勘弁。めぞん。
「おお、ただいま鳳翔」
「……で？皆さんは、旦那様に何を？事と次第によっては……」
「「浮気です!!」」
「……へぇ」
　一瞬で破壊される竹箒。原型も残っちゃいねえ。
「提督、よその子との結婚なんて、私は絶対に認めません」
「うちも、許さへんで」
「提督は私とずっと一緒なんだよ？」
「婚約者を裏切ってはなりませんよ、旦那様」
「「「……」」」
　あっ、あっ、あっ、睨み合ってる睨み合ってる。
　蒼龍なんてあんなに牙を剥いて……。
　……。
　ぺろっ。
「んん?!……ちゅ??ぺろっ??はむ、むぅ??ぺろぺろ??」
「「ああーーーっ!!!」」
「何やってるんや！司令官!!」
　いやー、蒼龍の八重歯が可愛くてつい。
「ふひぇ～??」
　エロドラゴンもほら、こんなもん。これが技巧Ｌｖ５の力だ。
「申し訳ないが仲間同士で争うのはＮＧ」
「だ、だけど……」
「……分かりました、それはそうですね。ですが、事の発端は、貴方の浮気ですからね?!」
　その、赤城さんや、俺、今は恋人いないんだけど？
「そ、そうですよ！私と言う婚約者がありながら!!」
　してないよ？婚約してないよ鳳翔？
「提督！うちにもチューして!!」

龍驤はかわいいなぁ!!

まあ、あの後は、適当にあしらって終わりだ。ただ単に構って欲しいだけだったんだろう。しっかりしているように見える子ほど甘えんぼってそれ一番言われてるから。怒ってたのは空母だけ、監視してるのは空母だからな。

実際に、大体の艦娘は笑って許した。

「だが、あの程度ではしっかり可愛がれていない……、そうは思わんかね、大淀」

「あ、私にもキスして下さい」

「はいはい……」

「ちゅっ??……はっ?!血が……」

あー、まーた鼻血が。

血を拭った大淀は、取り繕うかのようにキリッとした雰囲気になり、提案してきた。

「……で、では、水着回、と言うのはいかがでしょうか?」

「水着回、とな?」

水着回。

「そうです、この暑い季節、避暑も兼ねて海に行くというのもよろしいかと」

「ふむ、艦娘のストレス発散にもなるな……、良いだろう」

「分かりました!」

「……なんで既に水着?そんなに海に行きたかったの?」

プールの授業が楽しみな小学生かな?

「あはははは、嫌ですね、何も、青葉さんがこっそりと水着の提督を隠し撮りして写真集を作るとか、そんないかがわしい計画がある訳ないじゃないですか。また新しいコレクションが増えるとかそんなんじゃないですよ」

おk、把握。

「まあ、良いか。じゃ、海に行くか!」

「お伴します!!……あ、アロハシャツは禁止です」

む、剥ぎ取られた。……その上持ち逃げされた。あのシャツ、結構気に入ってたんだが。
さて、鬱憤が溜まってそうな空母を呼ぼうか。他の艦娘は順次来る。
「海!!」
青い空、白い雲。
そして、
「あっ！提督！」
「こっちこっちー！」
「よー、折角だから、オイルとか塗ってくれー」
おっぱい!!
おっぱいである。
え？仕事？いやぁ、最近は少なくてさ？領海にはもう残党しか残っていないし、出撃となるとかなり遠くまで行かなきゃならん。
最近なんか、輸送艦の護衛とかばっかりだ。正直言ってめっちゃ暇。
まあ、そのお陰で、隠蔽されがちな艦娘の活躍が表に出やすくなって、全体のイメージアップになっている、と思う。
人と艦娘、絶対的な力の差がある以上、平等にはなり得ないだろうが、この調子なら、戦後も、艦娘達に居場所が作ってやれるかもしれない。
「万人が同じことをする、と言うのは平等じゃない。艦娘には、艦娘が出来ることがある。きっとそれは、戦う事だけじゃない筈だ」
「……な、なんや、急にえらいカッコいいことを」
酷いぞ龍驤。俺は常にイケメンだ。
「あと龍驤、うち、新スク水は禁止。今すぐこの旧スクに着替えろ」
「なんでや!!」
そもそも、なんでスク水なんだ、龍驤。
……ん？

ちょっとおかしいぞ？

……ああっ?!!

「き、君達ィーーー!!!!」

な、なんだその適当な水着はァ?!!

一航戦、サラシ！ダブルドラゴン、サラシ！鳳翔、水着（クッソ古いの）！隼鷹、サラシ！全員適当!!!あ、龍驤と瑞鳳はスク水。

「おかしいだろそれよぉ!!!」

「？」

「何か？」

くっ、恥じらえや!!ちょっと痩せたからって……!!相変わらず体脂肪率ランキング上位の癖に!!

「見てください提督、頑張って痩せましたよ」

赤城ィ!!!お腹を凹ませるなっ!!!

「あのなぁ！お前らなぁ！大淀を見ろ！この女子力!!パレオ!!かわいい!!!それに対してお前らは何だ!!!」

「「「はあ……」」」

「別に、私達の身体なんて見慣れているのではないのですか？」

「裸も水着も変わらないのでは？そこに何の違いもありはしないでしょう？」

「違うのだ!!!」

こんなこと、アトリームじゃ考えられない……。

「おーい、提督ー!!」

「お仕事終わったよー、遊ぼー!!」

「しれぇー!!」

他の艦娘もおいでなすっ……?!!

服のまま、下着、私服……?!

嘘だろ?!

脅威のガバガバ率!!!

これは、違う！俺が望んでいた展開と違う!!

「……るぞ」

「え？今何と？」

「水着を作るぞーーー!!!」

世界を変える……!!この俺の手で!!!

８８話　イキのいい海パン少女　後編

「……さて、俺の機嫌は今、大変よろしくない……、分かるかい？」
「その、何か気に障ることでも……？」
　鳳翔、悪いが、男には譲れないものがある!!
「ああ、そうだ！今回は、こればっかりは許せない……!!」
「そ、それは……？」
「水着だっ……!!!!!!!!!!!!」
　そう、水着。
　良いか？海や砂浜なんてな、ここ最近毎日見てるんだよ。
　俺が見たいのは水着!!水着なの!!!
　いつも混浴してる癖に？違う、違うんだ、そうじゃない!!
　水着には水着の良さがあるんだ!!!
　秘所に食い込むあの感じ、溌剌とした雰囲気、下着と布面積は変わらないのに、どうしてこうも違うのか。
　ロマン……。
　そう、ロマンである。
　水着には、ロマンがあるのだ!!
　なのに……、
「どうしてそんななんだよ!!!」
「……え？」
　鳳翔！君はな、相当元が良いじゃないか！
　何故、そんな、おばあちゃんみたいな水着のチョイスを……!!昭和感全開。
　確かに、鳳翔は何を着ても美人だ。だが、何を着ても美人だから、何を着ても良いって訳じゃないじゃん？
　何も、この前プロマイド撮った時の超セクシー水着を着ろって言ってる訳じゃないじゃん。
「鳳翔、頼む。着替えてくれ」
「は、はい？」
「頼む」

更衣室は用意した、頼む。
「わ、分かり、ました？」
「っし！おらおら！一航戦も！ダブルドラゴンも!!隼鷹もだ!!!」
龍驤と瑞鳳は旧スクな。
「「「は、はあ……」」」
「他もだァ!!!水着以外許さんぞおおおおおおああああ!!!」
長門、はいいか。競泳水着が似合ってるし。バッキバキの腹筋がカッコいい。クッソ際どいマイクロビキニの陸奥には後で結婚を申し込もう。
さて、色々とヤバい子（主に空母）が着替えている間、そこらの艦娘を鑑賞しましょうかね。

まず目を引いたのは龍田。黒一色。ホルターネックにアクセントの赤いリボンタイ、大きな黒薔薇を腰にあしらったパレオ。百点満点オーバー。
掛け値無しに綺麗だ。黒色故に、全体が引き締まって見えるが、お堅い印象よりもまず先に、華があることがよく分かる。
いつものセクシーでクールな龍田とは一味違い、今までの龍田の魅力プラス華やかさだ。
まさに、闇と光が両方そなわり最強に見える。
……だがな、龍田。その、ハイビスカスはな、頭の左側に付けていると、既婚者を意味するんだよ？君、未婚だよね？ね？
「あらあら～？私に見惚れちゃいましたか～？」
あのね、さりげなく俺の頭の左側にもハイビスカスを刺すのは止めよう？
してないよ？結婚してないよ俺？そりゃあ、思わず告白してしまうことは多々あるけど、本気で結婚をするつもりは当分ないよ？

その隣の天龍も最高だ。シンプルな白のビキニは、いつもの溌剌とした天龍の雰囲気そのものだが、胸元のワンポイント刺繍と腰に結んだ黒色チェック柄のリボンで可愛らしさは更に加速した。

厨二病気味とは言え、ああ見えてしっかりしていて、駆逐艦達の面倒も見てくれる天龍らしさが良く伝わってくる。あとやっぱり、脱ぐと凄いな、着痩せするタイプだ、天龍は。後で揉もう。

綾波型……。

朧、曙、漣はチューブトップ、潮ちゃんはタンキニ。皆んな、思い思いのお洒落をしていて、個人個人の可愛らしさを強調できているな。そしてお揃いの柄なしシュシュ……。若いからこそできるファッションだ。パステルカラーのシュシュは、大人の女が使うとどことなく安っぽく見えてしまうが、駆逐艦程の見た目ならばかえって子供らしい可愛さを演出できる。

綾波型は基本的に処女力が高く、セクハラがし辛いのが残念だ。

潮ちゃんなんて、揉んだら泣かれることは確定的に明らか。畜生。

あとは……、おお！榛名!!

真っ白なビキニ！しかし、リボンやフリルが嫌味にならない程度付いている……!!その上から、これまた白のラッシュガード!!長めの裾がすらりと長い足にかかり、動く度にチラチラと太ももが見える!!

なんてことだ、童貞ならとっくに死んでいたぞ!!あれで、特に意識をしていないと言うのだから、生粋の童貞殺しなんだろう。童貞じゃなくて助かった。

いや、もう、あの可愛さは童貞以上も殺すな、素人童貞くらいまでならキルレンジじゃね？

んー、あとは特に、目に付く子は……、足柄、は良いか。あいつはセクシーでアダルトな服が似合うし。態々あのTバックに苦言を呈するような真似はしない。マックスの襟付き水着も謎だが、可愛いから許す。

雪風はパンイチだったが故にお着替えコーナーへ、武蔵も私服だし（そもそも、私服がサラシにジーパンて何なの？）、最上もTシャツのまんまだ、許さん、お着替えコーナー送り。

それくらいか。
いやあ、良いねぇ、皆んな。
ここが天国か。
さて、そろそろ問題の空母がやってくるな。鬼が出るか蛇が出るか……。

「あの……、これで、宜しいんでしょうか？最近の流行りなんでしょうか……、すみません、詳しくないもので……」
ふつくしい……。
ビキニ。黒のビキニである。シンプルイズベストを地で行く鳳翔だ、最高に似合ってる。ついでに麦わら帽子もプレゼント。……俺自身にセンスは無いが故に、知り合いの未亡人みたいなアイドルと同じ様な格好にしてしまったが、まあ、許してくれ。
兎に角、
「結婚してください……！」
残りの人生を俺に下さい。
浮気は百パーセントするし、酒もガブガブ飲むけど。あ、いや、金はあるな、貧乏はさせないわ、うん。
「うふふ、もう結婚してるじゃないですか??」
はっはっはっ、そっかー。
ま、まあ、まだ、私より一日でも長く生きて、とか、もう一人じゃ生きていけないとかは言われてないし？セーフだろう。きっとそうだ。

「その、提督？私達はどうでしょうか？」
「少し、胸元がきついような……？」
「へー、水着ってこんな感じなんだ、結構可愛いかも？」
「提督ー！どう？私可愛いかな？」
「水着かぁ、良くわかんないけども、提督が着ろって言うなら……」
はぁーーー!!!!
やりました。

それぞれのパーソナルカラーと同じ色のシンプルなビキニを作ったが、ここまでとは!!!
素材が良過ぎる!!!
え？水着がキツそう？
……おかしいな、サイズは前と同じにした筈……、まさか、更に太っ、いや、よそう。俺の勝手な推測で皆んなを混乱させたくない。
いやー。
いやいやいや。
それにしても。
「蒼龍？おいで？」
「はーい！なんですか？提督？」
「オッラァーーー!!!」
「あぁん??」
揉んだ。
我慢、できませんでした。
だか仕方がないだろう。
谷間の魔力に抗える男などいないのだ。
だって、あんまりにもデカ過ぎて谷間がYじゃなくてIだからな？
こんなん犯罪ですわ。
あ、犯罪と言えば。
「良いかい？ここは一般の人も来る、普通の海岸なんだ。決して、他人に迷惑をかけないようにな!!」
いやー、ちゃんと言っとかないとな。

「警察だ!!（インパルス板倉）おい、お前！何やってるんだ!!」
「えっ」
「公衆の往来で婦女子の胸を揉みしだくとは!!逮捕だぁ!!」
「あっ」
あっ。

８９話　海での一幕

「違うんすよ、これは、違うんすよ……」
「現行犯だぞ」
「提督??もっと??」
ライダー助けて。
「公衆の場でセクハラって、おかしいよなぁ？それよぉ？」
な、何か言い訳、言い訳を……、そうだ！
「こ、これは、そう！恋人です!!」
「ほんと?!私、提督の恋人?!!」
あっ、やばっ。
後ろから聞こえてくる舌打ちの大合唱。アンド恨み言。
どーすっかなー、俺もなー、とか考えてると、蒼龍がいる方とは反対側の腕が掴まれ、胸を触らせられる。
ふむ、この胸の感触、加賀だな？
「妻です」
ドヤ顔の加賀。あのさ、何やってくれちゃってんの？この状況でさ？
「え、何それは……？（ドン引き）」
そして始まる大乱闘スマッシュブラザーズX。大騒ぎだ。一般の人達に迷惑をかけるな、とは何だったのか。
「私が妻です！」
「同棲してます!!」
「愛人です!!」
「将来を誓い合った仲です！」
「さっき結婚しました！」
あーもう滅茶苦茶だよ。
「司令官?!昨日はあんなに愛し合ったやろ?!忘れたんか?!」
「これは児ポですね、間違いない。何だこれは……、たまげたなぁ」
どうしてくれんの？このまま逃げるのは余裕だけど、立場上逃げられないじゃん。

「邪魔デース。退いて下サイ、ｐｏｌｉｃｅ　ｍａｎ……。提督ー！次は私デース!!」
「えぇ……（困惑）」
お巡りは困惑した。この子達は、救われることを望んでないのかって。
でも、お巡りは、この子達を救ってあげたかった。
だから、先に明らかにヤバい子を見つけ出し、止めることにした。
「（駆逐艦に向けて）君達、そう言ったことは……、やめようね！」

「……提督、何だい、これ。敵？殺す？」
「八つ裂き、っぽい？」
そして現れるガーディアン。よりにもよって、一番ヤベーのに声をかけやがった。
お巡りこわれる。

って、冗談言ってる場合じゃねえ。
このままじゃガチで殺しかねん。
やたらめったら殺しなんかしちゃならんよ。
第一、そんなことしたら、那珂ちゃんのゲリラライブや、謎の忍者の夜戦仮面の活躍、漁船などの民間用の船の護衛、工事現場に（半ば趣味で）出向く長門などなど、多くの艦娘の活動が無駄になってしまう。
「ステイ!!」
「わんっ!!」
封殺。危ないところだった。
警官殺しはいやーキツイっす。

……。

「……お手っ!!」
「わん!!」

……成る程？
「お座り!!」
「「わんっ!!」」
成る程成る程？

……。

「……ちんちんっ!!!!」

「やっとその気になったのかい提督？ふふふふふ、良いんだ、良いんだよ、全部僕に任せて」「あはっ、嬉しいっぽい？提督のこと食べてあげちゃうっぽい？あはははは」
「ウオオオオオオ!!!!知ってたァァァァァァァァァァ!!!!!けど止められなかったァァァァァァァ!!!!」
そ、そうだ、こんな時こそお巡り!!オラお巡り!!逆レやぞ!!!何とか言っ……、
「アーイキソ」
……なーんで砂浜に埋まってるんですかねぇ？
クソザコナメクジかな？
「レッツ背徳??」
「アイエエエエエエエエ!!!!」

「……ん？ほ、本官は、一体何を……？」
「……起きたか……」
「む、お前は変質、者ぁぁぁぁぁ?!!何故に全裸だ!!!一番駄目だろ!!!」
「安心しろお巡り。今、俺の股間は、謎の光で保護されている」
「謎の光!!!?」
「ＢＤ版では削除されるが、な」

「ＢＤ版?!!!」
秋雲の部屋にあったアニメを見て練習したからな。今の俺は、最早、公衆の場で肢体を露出するようなことはないだろう。無敵と言っても過言ではないな。
「……それより、ア→レ←、何とかして、どうぞ」
「……あー、あれは……、駄目みたいですね」
「はー、っっかえ……」
ア→レ←というのはもちろん、艦娘達のことだ。

ビーチバレーに勤しむ戦艦達。その美しさもそうだが、人目を惹くところがもう一つ。
「……あのボール、腹筋とか背筋とか鍛えるときのやつじゃん?」
「腹筋とか背筋とか鍛えるときのやつだね」
メディシンボールっっうんだけどもね、あれ。
オッ、霧島のスンゲェーアタック!隕石かな?
「海面に落ちた瞬間水が吹っ飛んだゾ」
「側面に１００ｋｇって書いてあるしな」
「死人が出るんだよなぁ……。勘弁して、どうぞ」

「あっちは大食い大会か何か?このクッソ暑い中、態々カレーの大食いとか、しなくていいから」
「いや、あれはいつものペースと量だな。周りの参加者は、多分お祭りだと思って勝手に参加してきたんだろう」
「えぇ……」
パタパタ動く鳳翔かわいい。単純に、料理が食べてもらえるだけで嬉しいんだろう。笑顔がいつもの三割増しだ。
え?バクバク食ってる空母連中?か、かわいいよ?かわいいともさ!ああ!

「すいませぇ~ん、あの子達は、な~んで海面を走ってるんですかねぇ?物理法則こわれる」

は?そんなの、片足が沈む前にもう片足を水面に叩き付けりゃ良いだけじゃん?
……走ってるのは案の定島風か。それと、川内だな。
追いかけっこの様だが、川内が分身や空蝉などの技で逃げるのに対し、島風が純粋なスピードで追う。
「中々良い勝負だな」
「そもそも常人には視認できないんですがそれは」
「で?あちらの方は釣りですか?ちょっと(釣果が)多過ぎんよ~」
サビキでガッツリ釣りをしているのは、天龍ちゃんと楽しい遠征組の皆んな。釣ってるのはアジか。フライか、刺身か。何にでもできるな。
龍田?ああ、龍田はインドア派だから、近くのビーチパラソルの下でジュース飲んでるよ。
実際、この二人には随分助けられてる。駆逐艦の面倒は勿論、教育だったりもしてくれるし。
あと天龍ちゃん、アウトドア派だから話が合うのよねー。この前も、駆逐艦引き連れて鎮守府近くの堤防でエギングやってきたんだけど、天龍、かなり上手い。しかもイカ捌ける。魚も捌ける。
「あー、もう、これは全員逮捕やろなぁ……」
「えー?許して下さい何でもしまむら」
「よし、じゃあ、浜辺行って、(本官と)バトれ!!」
「は?(威圧)」
何言ってんだこいつ。
「とぼけちゃってぇ……。あんた、武の心得、あるよね?最終的には拳で語れってそれ一番言われてるから。自らの正当性は自らの力で示すんだよなぁ……(したり顔警察)」
それでいいのか警察。
「あっ(察し)、これは警視総監の命令だから。ちかたないね。これ、認可状」

「ふむ、要約すると、悪い人間かどうか調べろってだけで、戦えとは書いてないんじゃないか？」
だが、まあ、認可状は本物だな。このサインは確かに、警視総監の冴島十三さんの字だ。
「確かに、戦えというのは本官の提案だけど、他に調べる方法がないんだよなぁ。ま、軽く流す感じで良いからさ？大丈夫だって、安心しろよ」
しゃーない。お巡り一人倒せば済むなら、それで良いか。
「……いや、待て？その構え、迫真空手か?!」
「おっ、よく知ってんねぇ!!おおおおお!!虎→哮←!!!」
「ぐぅっ!!!」
やはり一筋縄ではいかんな、下北沢出身はタチが悪い。
だが、
「迫真空手は、何もお前だけの技って訳じゃねえ!!奥義『亜”僧華”』!!」
「ンアッーーー（≧Д≦）!!!や、やりますねぇ!!まさか奥義を使いこなすとは……!!」
いや、逆に、これで意識を刈り取れないとはな。
と、なると持久戦か？

……いや、ナンセンスだね、そんなの。俺は海に遊びにきたんだ。決して、警官と殴り合いをしにきたのではない。
「久々に骨のある相手は、ああ～たまらねえぜ。汗まみれになるまでやろうや」
「いや、これで終わらせる」
「ファッ?!!」
「迫真空手究極奥義……」
「そ、それは、まさか?!な、何故?!!」
「邪拳!!『夜逝魔聖音』!!!」
……迫真空手とは、身体に秘められたオーラを以って戦う空手だ。オーラで身体を強化し、攻撃や防御の力を底上げすること。そし

て、そのオーラを放出することもまた、迫真空手の真髄なのだ。
まあ、大抵の相手は、迫真のオーラにあてられて「やめてくれよ……(絶望)」となるが。
「アッーーー!!!イキスギィ!!!!」

完　全　勝　利　!!
さあ、艦娘と遊んで「キャアアアアアア!!!!全裸の男の人が!!!!警察!警察を呼んでええええええ!!!!」
あっ、忘れてた!!!
俺、全裸だった!!!

以下、駆け込んでくる警官と殴り合いのループでした。
あー、クソ、笑えねえ。

９０話　ノムリッシュ旅人

「……え、なにこれ、どう云う純粋な闇の意思（キング〇ムハーツ）……だと？」

何で腕輪？……何で言語ジャミング？何？何で？

部屋を見回す。

監視カメラ、植木鉢、盗聴器、テレビ、艦載機……、いつも通りだな、うん。

あ、いや待て、机の上に何か？

「えー、何々？…うっ……頭が……ッおっ、ユウヴァ＝リスからの手紙か」

いやまてウザいなこれ!!

『～提督へ～

最近ＦＦにハマったので、しゃべる言葉がノムリッシュ翻訳される腕輪を作りました。是非使って下さい。あ、それと、腕輪はＦＦを１１とか１４とかのオンラインのを除く全シリーズをクリアするとちゃんと外れます。それじゃ

～貴方の夕張より～』

……。

「女神パドラ＝ヌス・ユールはかくのごとく語れり。

「それじゃ」じゃねーよ！…つけあがるなよ小僧ッ!!」

「――――……というオプティマだ。すまんが、戦友んな助けてくれ」

「ごめん何言ってるか全然分かんない」

望月……。この鎮守府で最もゲームが上手いであろう女……。駆逐艦同士のポケモン大会に（強過ぎて）出禁になるなど、その凶悪さは計り知れない。

「うわー、何それ？提督、厨二？」

茶化すのはオータムクラウド先生。こちらもコアゲーマー。

「助けるのは構わないけど、オレはこの二人程上手くはねーぞ？」
　天龍。いやぁ、今の状態で何言ってんのか伝わるの天龍ちゃんくらいだし。因みに、天龍ちゃんはゲームは結構上手い。特にゾンビゲーとか上手い。
「あらあら～？提督ったら、お風呂上がりの天龍ちゃんみたいな喋り方ね～？」
　お風呂上がりに必殺技の名前を考えているらしい天龍ちゃんの妹、龍田だ。天龍を呼んだら着いてきた。
「私、携帯ゲーム機のゲームしかやらないんだけど……」
　１６８。ほう、携帯ゲーム？……ＦＦ零式、というものがありましてな？
「名作ＲＰＧキタコレ！お仕事でゲームとは、黒井鎮守府のホワイト企業っぷりに全俺が泣いたッ！」
　漣。ゲームやりたそうな顔してたので。因みに、これも仕事扱い。
「はーい、鎮守府中に協力要請してきましたよ、っと。にしても、困ったものですねぇ、力尽くで外すと、ノムリッシュ翻訳が倍分かりづらくなるシステムなんて」
　明石もゲーマー。基本的にアクションが中心らしいけど。
　あ、あと、明石が言う様に、この腕輪はクソめんどくさいシステムと呪術的なアプローチによって作られてるみたい。無理に外すと、大人しくＦＦシリーズをクリアした方がマシなくらいめんどくさいことになる。
「夕張の名に相応しき戦士が魂に囁くには、伝説に謳われる腕輪は、ＦＦの各シリーズを『　完成』…つまり『記憶の再生の眠り』を司ると外れるらしい。とは言え、俺――かつての名をセフィロス――ヒ＝トゥリスで何者拾魔法絵本アルヴァニカも『　完成』「ルシ」の烙印を刻むのは不可能だ。手を貸して欲しい」
「……天龍ちゃん、なんて？」
「えーと、ここにあるゲームを全部クリアすると、提督が元に戻るんだってよ」
「そ、そうなのね……、多く、ないかしら？」

「まあ、人気シリーズだからな」
「じゃ、稲妻のごとく持って行ってくれ。目先の勝利に狂ったオレは久々に我らジュデッカをやり直すから。ＦＦジュデッカは壱ＩＤの名作、オプティマイズ人類の叡智は未だ及ばだね」
「……その、天龍ちゃん？」
「え？あー、ＦＦ４はシリーズ一番の名作だ、だってよ。俺は……、そうだ、このＦＦ１５ってのにするか！へへ、なんかこれ、話題になってたし、面白いんだろーな」
「そうなのね～。う～ん、私は～、ＦＦ１０にしようかしら？」
「え？何これ？もう選ぶやつなの？えーと、じゃあ私はディシディアで」
「じゃあ私はＦＦ８を」
「ＦＦＴＡキター！」
「携帯ゲーム機用は……、あった、ＦＦ零式？これね」
「私はアクション系が……、あっ、ダージュオブケルベロスじゃないですか！」
決まったみたいだな。
「ならば、各自、適当（ランク：Ａ＋）に」
「「「はい！」」」
こうして、俺達、黒井鎮守府一同のＦＦ強化週間が始まった……。
夕張？夕張は罰として離島送りにしたよ？言っておくけど、離島のあの子達はバイだ。後は、分かるな？
……まあ、あのままじゃ、俺に呪いをかけたと知ったマジギレの艦娘に殺されかねんからなー。神通教官１６８時間耐久のスペシャル特訓コースとか、プロのアスリートをダース単位用意しても余裕で死ねるレベルのキツさだし。
×
×
×
「あああああ!!!もおおおおお!!!」
「アラ？ドウシタノ？生理？」
「ちっがう!!……何で私が、この変態の巣窟に送られたのかって話!!」
×
×

黙ってろこの変態ゴスロリ女!!
何なのもー!ちょっとは悪いと思ってるけどさー!たまには提督に休んでもらおうと思っただけなのに!!
「エイ」
「……ひいやあああああ!!」
む、胸!!も、揉まれてる!!!
「き、き、き、き、気安く触るなっ!!!」
ちっ、寸前のところで身を躱された!
「オマエ、貧乳ダナー。ドウセナラ、モット巨乳ノ艦娘ニ来テ欲シカッタナ」
確かこいつは、雷巡チ級!
「煩いわよ!!」
「デモマア、艦娘ノ胸ヲ揉メルノハ中々ナイカラナ、モット揉マセテ」
「嫌!!!」
提督以外に触られたくないんだけど!!!
「ジャア、ココハ?」
「……!!!?」
おっ、お尻!な、撫でられて……!!!
「こんのぉ!!!」
「ヒギィ!!!」
振り向きざまに回し蹴り!!人のお尻を急に撫でるなんて最低よ!!
……え?提督?提督に撫でられるのはオッケーでしょ?何言ってんの?
「フ、フフフ、流石ハ黒井鎮守府ノ艦娘ネ……。蹴リノキレガ違ウワ」
鼻血を数滴垂らしながら、ゆらりと立ち上がったのは戦艦タ級。なんか硬いと思ったら、こいつらもロック装置を装備してたんだっけ。
……と言うか、なんなのよこいつら。
なんで全員ほぼ全裸なの?
何考えてんの?
「ヲー、ゴハン、獲ッテキタヲ」

「「プギィ……」」
猪二頭、１００ｋｇくらいのだ。殴られたのか、意識はない。
「オオ！良クヤッタゾ、ヲっちゃん!!」
「ヲッ!!」
「ン、頑張ッタワネ、ヲっちゃん。ハイ、貴女モ手伝ッテ？」
「なんで私が……」
「働カザル者食ウベカラズ、ヨ？」
「……まあ、そうね。一応、世話になってる訳だし……」

猪の解体を手伝う。私とタ級、一人一頭づつ解体。
「……アラ、上手イモンネ？機械弄リ専門ジャナイノカシラ？」
「何言ってるんですか、生き物も機械と変わりありませんよ。脳がＩＣ、筋肉がアクチュエータ、五感がセンサ……、パーツごとに解体する程度、訳ないわ」
まあ、明石さんならもっと上手く、手早く解体できるんだろうけど。
「普通ノ女ノ子ハ怖ガルンジャナイカシラ？」
「はっ、何を馬鹿な。艦娘が、血や肉を切り裂くことに抵抗を持つ訳ないでしょ？大体にして、いままでどれだけ貴女達深海棲艦を殺してきたと思ってるのよ？」
流れる血や剥がれる肉でいちいち生娘のように悲鳴を上げていたら、戦いにならないものね。……まあ、そう言う子もいるにはいるけど。
「……はい、こんなもんね。これ、誰に渡せば良いの？」
「離島棲姫ヨ。調理担当ナノ」
「あのゴスロリね、分かったわ」

クーラーボックスに肉を入れ、離島棲姫の元に届ける。
その離島棲姫は、と言うと。
「～♪～～♪」
鼻歌を歌いながら、調理の下準備をしていた。
隣にいるのは、泊地棲姫だろう。

「ム、肉カ。スマナイナ、客人ヲ働カセテ」
「い、いや、これくらいはね」
……にしても、楽しそうだよなー、この人達。

「ウマッ、モグモグ、ウマッ」
「アァー、アッタマルナァ～」
「デザートハ？」
「羊羹ヨ」
晩御飯は、牡丹鍋になりました。一人一つ鍋を渡されたけど、艦娘的には適量だ。
「……あ、おいしい」
味はすごくおいしい。臭みが無く、新鮮さを感じさせる一品だ。
……と言うか、何故私は自然に深海棲艦と食事しているんだろうか。
良く良く考えたら、この人達敵だったような気が。
「アラ？今ハモウ大人シイノヨ？」
隣の離島棲姫が言う。確かに、心を入れ替えて真面目に働いているとは聞いていたけど。
「……モウ、サッキカラ、ツレナイワネ。敵ジャナイノヨ？既ニネ」
「そうは言ってもね……」
「慣レテクレナキャ困ルワネ？提督ノ夢ヲ忘レタノ？」
提督の、夢……。
「……皆んな仲良く世界征服、だっけ」
「ソウネ、ソレヨ」
……正直、私は無理だと思っている。確かに、黒井鎮守府はかなりの戦力があるけど、海上以外ではその戦力は半減、人数も少ない。世界征服なんて、とてもじゃないけど……。
「無理カドウカナンテ、大シタ意味ハナイデショウ？」
「大した意味は、ない……？」
「ソウ。……ダッテ、ソレハ、愛スル人ノ隣ニイル上デ、何ノ問題ニナルノ？」

……そっか、そうだよね。
例え提督が破滅に向かったとしても、私達は提督の隣から離れないもん。行き先なんてどこでも構わない、よね。
「ソレニ、「アノ」提督ヨ？ワタシ達ノ思イモヨラヌ方法ヲ考エツイタリ、戦ワズニ済マセタリトカネ……、キット、ワタシ達ヲ幸セニシテクレルワ」
「……うん、うん！そうね！」
そうだ、提督は、不可能なんかに屈する人じゃない！きっと、私達皆んなを幸せにして、それで、世界の一つや二つ、軽く征服しちゃうもんね！
皆んな仲良く、か……。
結局、それが一番良いし、提督もそう望んでる。思えば、最近は鎮守府がギスギスしてばかりだ。提督は、ここで暮らす深海棲艦達のように、皆んなに仲良くして欲しいのではないだろうか。
帰ったら皆んなに呼びかけてみよう。

皆んな、仲良く、と。

91話　無職教官

「そ、その、折角来ていただいたんですが……」
「え、ええ～～～!!!」
「た、確かにこれだけの強さなら……」
「ご、ごめんなさい……。え、えっと、が、頑張って下さいね……？」
「は、はい……、大丈夫です……。それでは、失礼致しました……」

……。

……。

「ど、どうしよーーー!!!」
あ、あ、あ、明日からっ！お仕事がっ!!無いっ!!!
「どうしようどうしようどうしよう!!!い、いっそ、そこのローソンでバイトするしか……、って駄目ー！勿論駄目ー！だって私は練習巡洋艦だもーん！あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!!」
……そう、私は艦娘。
香取型練習巡洋艦二番艦、「鹿島」。
お仕事は、「艦娘を鍛えること」……。

……最初、私は、大本営で建造が得意な提督に召喚されたんです。
でも、練習巡洋艦ですから、全く期待されてなかったみたいで……。
……『フン、矢張り、「練習巡洋艦」か。大した性能は無いな。雑魚だ』
……お恥ずかしながら、この一言が頭にこびりついて……。
とっても、ショックでした。
その後は、そのまま近くの鎮守府に配属されまして。
そこで、何とか評価を覆そうと頑張ったんですよ？でも、単純な火

力で勝る戦艦や、燃費の良い潜水艦とか、周りの皆んなには敵わなくって……。
練習してもらおうにも、皆んな、沢山戦ってばっかりで、そんな暇無くて……。
そして、遂には、鎮守府から追い出されちゃったんです。
丁度、数年前の今くらいの季節でしたっけ。
路頭に迷った私は、たった一人で彷徨っていました。お金も何も無い訳ですから、ただ、虚ろに、道に座り込むことしか出来なくて……。
その時の自分が、酷く無力で……。
やっぱり私は、役立たずなのかな、雑魚なのかな、とか、そんな暗いこと考え始めちゃって……。
そんな時、です。
私の人生を大きく変える、「出会い」がありまして……。

……『うう、もう、十日も碌に食べてません……。い、如何に艦娘と言っても、もう、限界です……』
そう、あの日、今日みたいな夏の日。燦々と光る太陽が、どうしようもないくらいに私の体力を奪って行って……。
あ、私、ここで、死んじゃうんだ、って。なんと無く分かっちゃって。でも、それが、たまらなく怖くて、悔しくて、それで……、寂しかった。
立つ事も出来ないくらい消耗していた私は、道端に座り込んだんです。
ここが死に場所だなんて、嫌だな、とか思いながら。
そしたら、
……『死に晒せェェェ!!タスクマスターァァァァァ!!!!』
……『煩いのである!!!死ぬのは貴様である!!!とっとと金を払って死ぬのであるッ!!!』
……えっと、この時は、二人のスピードが速過ぎて、何が何だか良

く分からなかったんですけど……。
……『人が女抱いてる時にいきなり現れる奴があるか?!!!大体、旅人の俺が金持ってる訳ねーだろーがよぉ?!!』
……『キャバクラに入り浸っておいて金がないは通らないのである!!!無いなら無いで、ハラワタなり何なり売っ払って来るのである!!!!』
……『キャバクラじゃねえドリームクラブだぁぁぁぁぁ!!!!』
物凄い戦いだったのは分かりました。すぐ近くで戦いが起きてるのに、凄いなー、とか、なんとなく他人事に感じて、ボーッと見てたんですよ。すると……、
……『大体にしてお前からは十万ドルくらいしか……、ん?ありゃあ……』
……『いや、我輩の記憶だと十五万ドルは……、なんだ?』
……近付いて来たんです。二人が。
……『おいおい、大丈夫かい、お嬢さん?今時行き倒れなんて流行らないよ?』
白髪のカッコいい人と、
……『む、この女、中々にポテンシャルの高い肉体を持っているのである』
骸骨のマスクの人?だった……。

……『あ、ありがとうございます。ご馳走してもらっちゃって……』
白髪のカッコいい人……、旅人さん。彼は、近くの定食屋に私を連れて来ると、突然、「おばちゃん、メニュー全部!!君は何頼む?」と言い放って。
勿論、遠慮はしました。でも、隣で美味しそうに食事されると、我慢なんてとてもじゃないけど出来ませんでした。
……『いやあ、沢山食べる子は大好きだよー?そうだ、今度は俺の料理を食べて欲しいな!自慢じゃないが、並みのプロよりかは上手いんだよ?』
そう言って、今日の太陽みたいに笑う彼は、本当に眩しくて……。どうしようもないくらいに、私の心を奪ったんです……。

こんな風に、人間に優しくしてもらったのは生まれて初めてで。
なんてことはない、ちょっとした優しさの一つ一つが、嘘みたいに心に溶け込んでいって……。
思わず彼の胸で泣いてしまったけれど、彼は優しく受け止めてくれて……。
……『よしよし、泣きたい時には泣いた方が良い。抱え込むのは良くないからね』
……本当に、本当に、優しい人だった。
……多分、初恋、だったんだと思う。
我ながら、単純だなぁ、って思うけど。
……その後は、艦娘であることを伏せて、軍で教官のような仕事をしていたけれど、必要とされなくて、クビになった、と、簡単に説明しました。
ま、まあ、大体は合ってるし、良いんじゃないかなぁ……？なんて。
……『成る程ねぇ、クビになった、かー』
……『他人事じゃないのであるなー』

聞けば、この髑髏の人も、フリーの教官らしく、日本には休暇で来ていた、とか。
……『私、これからどうすれば良いんでしょうか……』
思わず、彼の優しさに甘えるように、聞いてしまっていた。
普通は、そこまで面倒を見きれない、と、突っぱねるだろう。けど、彼は……、
……『……良し！じゃあ俺が解決してあげようじゃないか！オラッ、金だタスクマスター!!』
……『ム、十五万ドル、確かに……、それと、この三十万ドルはなんであるか？』
……『三ヶ月だ』
……『……ム？』
……『三ヶ月で、そこの鹿島ちゃんを日本一の教官にまで仕上げろッ!!!（諸経費込み）』

……『……フム、良いだろう！契約成立だッ!!!』
……『……えっ？……えー!!』
と、私の目の前で、私に関わる重要なことが決まりました。
私の許可無しで。
……『ちょ、ちょっと、その、私は』
……『ん？ああ、大丈夫。このおっさんは、三ヶ月もあれば幼稚園児を暗殺者にできるから。腕は確かだよ』
……『そ、それは一安心……、じゃなくって!!お金は……』
……『あー、立替えておくよ！いつか、返してね？』
……『で、でも……』
……『もちろん、踏み倒してもオッケーよ？』
……『三ヶ月で日本一となると、少々タイムスケジュールが厳しいであるな。さあ、早速修行である!!ついて来い鹿島!!』
……『あっ?!えっと、えっと、ええーーー!!!
?!!!』
……『それじゃ、またねー』

……こうして、私の人生を変えた出会いは終わった。
この後、タスクマスターさんに日本一のお墨付きをもらった私は、各地の鎮守府を転々としながら、フリーの教官として、今の今まで生きてきた。
けど……。
「音成鎮守府、強過ぎだよぉ……」
最近は、鎮守府もめっきり減って、私の仕事はただでさえ少なかったのに！
あんなに強い鎮守府じゃ、私が教えることなんて何もないんだよなぁ……。
私はあくまで教官で、基礎までしか教えられないもの。自分の戦闘スタイルがキッチリと確立できている子には何も口出しできないんだもんなぁ。
「あー、どうしよ……。音成鎮守府さんが言うには、近くにある黒井鎮守府は更に強いって言うし……」

「行くだけ言ってみれば？」
「えー？行っても無駄ですよぉ……。あー、私は、ちょっとでも稼いで、あの人にお金を返して、皆んなの食い扶持を……」
「皆んな？結婚したの？」
「いえいえ、私、結婚するのは初恋の旅人さんと、って決めてます、から……？」
あれ？
ちょっと待って？
私、今、誰と話して……？

「へえ、旅人さんって俺のこと？かわいいこと言ってくれるね、鹿島ちゃんは」

「……あ」
「あ？」
「うわあああああああ!!!!!!」

……多分、今日は、人生で一番大きな声を出した、と思う。

９２話　可愛い子は攫ってこよう

「私、旅人のマオです。こっちは、艦娘の鹿島ちゃん。お邪魔させて頂きます。君達をスカウトさせて頂きたいんです」
「「「……は？」」」
旅人の宅急便状態!!!
「え？……え？誰だい、あンた？」
「鹿島ちゃんの初恋の人です」
「ちょ、ちょっと旅人さ～ん!!」
「こい？……恋か?!いやあ、流石は鹿島さんだぜ!!大人のオンナってやつだな!!なあのわっち!!」
「嵐、その言い方、何となく失礼だよ」
うーん、皆んな元気いっぱいでウルトラオーケー。
どうしてこんなことになったのか、端折りたいところだが、あえて説明してやろうではないか。
……でもまあ、あれだな。そんな長々と語ることはないな。
ただ、心優しい鹿島ちゃんは、同じような、なんだかんだで捨てられた、訳ありの艦娘達を保護して、仕送りしてたとのこと。まあ、艦娘であることを伏せたかったのか、孤児のようなものだ、と説明されたが。
駆逐艦が十一人の小規模な集団だけど、鹿島ちゃんがバッチリ訓練したお陰なのか、鎮守府として運営できるくらいの戦力はあるみたいだな。
内訳は、白露型の、海風、山風、江風。陽炎型の、マシュ、いや、浜風、野分、嵐、萩風、舞風。秋月型の、秋月、照月、初月。
ちなみに、前に鹿島ちゃんにあった時は艦娘の存在すら知らなかったが、今なら見れば艦娘かどうかぐらい分かる。そっか、鹿島ちゃん、艦娘だったのか。
いやー、本当にいやー。
……艦娘ってなんでこう、こんなにもかわいいんだろうか？
最近はロリに誘惑されまくりなため、かわいいロリが増えても普通

にヤバいって皆んな知ってるよね！
「……それで？スカウトって、どう言うこと？もしかして、アイドルとか？ダンスは得意よ？」
とは舞風ちゃんの談。……表面上は明るいけど、結構闇が深そうな子だなぁ。不安を解消してあげたい。
「いんや、うちには既に、歌って踊って戦えるスーパーアイドルがいるんでね。違うよ」
もちろん違う。スカウトってのはいつもの。要は、「私のものとなれ！勇者よ!!」ってやつ。
幸いにも彼女達は、黒井鎮守府の採用項目である「かわいい」と「艦娘」の両方を満たしている。即戦力だ。
「では、スカウトとはつまり、女中奉公をしろ、と？……鹿島さんが認める方ですし、悪くはされない、かな？」
クソ真面目そうな見た目の秋月ちゃん。艦娘特有の、知識の古さよ。
「いやいや、それも違う」
「じゃ、じゃあ、やっぱり、その……？わ、分かりました、で、でも、そう言うのは、私だけにして下さい……。それと、その、できれば優しく……」
顔を赤くするマ、浜風ちゃん。まあ、そうだよね、普通は身売りしろって言ってるように聞こえるよね。いや、違うけどさ。
「いやぁ、そう言うアレじゃないさ。ただ、俺は……、君達が、欲しい（イケボ）」
誤解を招くような言い方……ッ!!神をも恐れぬ所業……!!
もちろん、悔い改めるつもりは一切無いぞ！
「うえぇ?!あう、あの、その、あの～!!?」
鹿島ちゃん、耳まで真っ赤だ。これは処女ですわ。やったぜ。
ここで追撃のグランドヴァイパ。どうせアレでしょ？鹿島ちゃんも俺の部屋に監視カメラとか仕掛けるようになるんでしょ？知ってる。
だからこそ、今のうちから軽い男だと知らしめておかないとな!!

「鹿島……、俺のモノになれ（イケボ）」
「は、はいぃ～～～??」
「萩風……、俺は、君達に最高の未来を見せてやる！だから、黙って俺に、ついて来い！（イケボ）」
「そ、そんな、急に……。で、でも、貴方になら賭けてみても良い、かも……??」
「浜風！俺にはお前が必要だ！頼む、側に居てくれよ……（イケボ）」
「え、ええっ?!そ、そんな、出会ったばかりなのに……。でも、私は……、貴方となら、一緒に居ても、良い、かな……??」
いやー、もうね、悪魔に魂を大安売りしまくったせいか、最近は心が痛まないね。ちょっと前までは、イケボの発動の度に吐血してたくらいなんだけど、今じゃ駆逐艦にイケボを連発できちゃうもん。慣れって怖えよな。
まあ、そんなこんなで、大変適当に口説いておきました。……正直、相手は処女だからな、適当に口説いても墜とせますとも。
俺のやってることって、要は、「男子校育ちの少年に銀座ナンバーワンのキャバ嬢を差し向ける」みたいなもんだから。男性経験どころか社会経験すら怪しい艦娘に、大人の男として言い寄るんだから反則だよなぁ。
でもほら、恋も経験だから。是非楽しんで欲しい。……なるべく、遊びと割り切ってもらえるとすっごく助かるんだけどなぁ……。この子達、持ってる常識が昭和のそれだから、かなり貞淑なのが面倒だ。
「……その、それで、私達はどこに連れて行かれるんでしょうか？」
と、鹿島ちゃん。気になるのは当然だろう。
「黒井鎮守府」
お答えしましょうとも。特に嘘を吐く必要はない。そもそも、なるべく美人に嘘は吐かない主義だ。
「……はい？」
はい？じゃないが？兎も角、この人数だ。バスで行こう。さて、小型バス持ってたっけな……、あった。
「じゃ、このバスに乗り込んで？黒井鎮守府までは一時間そこらだか

ら」
「?!、バ、バスが?!そんな、どこから?!」
　このネタもう１１４５１４回くらいやったじゃん、もう良いよ。驚くほどのことじゃないでしょ？
「そう言うの良いから。乗って、どうぞ」

「……あのぉ……」
「んー？」
　バスの中、すぐ後ろの鹿島ちゃん。おずおずと手を挙げて質問してくる。
　どうせ、何故自分が艦娘と気づいたのか、とかでしょ？
「あー、あのね、初見の頃は艦娘って分からなかったけどね、今は、黒井鎮守府で提督をやっているんでね。艦娘かどうかくらい、何となく分かるよ」
「え?!黒井鎮守府で提督を?!」
　そんな、「え?!同じ値段でステーキを?!」みたいな言い方されましても。
「そうだよ。はいこれ、うちの給料明細」
「……????万円?!!えっ、えっ、じょ、冗談ですよね?!!」
「出戦手当とか、色々含めると????万行くンじゃね?!!」
「その上ボーナスまで……。あの、これ、流石に信用が……」
　そんなん言われましても。現状、深海棲艦という全く新しい外敵に対して互角に戦える稀有な存在である艦娘に、その額だからね？
　言ってしまえば、艦娘ってのはプロ野球選手より数が少ない。
　そんな子達に対して、一般的な佐官くらいの給料しかやってないってんだから、問題だと思うんだけども。
　もっと余裕があれば、それこそ、プロ野球選手よりも沢山くれてやりたいくらいだ。
「まぁ、額が少ないのは悪いけどさ、飯はちゃんと三食おやつ付きで出すし、住むところも、着るものも、ある程度の娯楽も用意してあるからさ？」

それで勘弁してほしい。
「えっ?!こんなに沢山の給料を出した上に、食事や住居に日用品まで支給されるんですか?!!」
「給料少なくてごめんね」
本当にすまない。余裕あんまりないんだわ。

「……鹿島さん、俺、何だか猛烈に怖くなってきたぞ」
「……わ、私も、怖いよぉ」
「だ、大丈夫よ嵐ちゃん、山風ちゃん……。た、多分。きっと」

93話　雨と風

「さあ、着いたぞ！……おっといかん、決め台詞決め台詞、と。……ゴホン、黒井鎮守府へようこそ!!歓迎しよう！盛大にな!!」
「……わぁ……!!」
大っきい。
あ、いや、提督（予定）も大きな人で、ちょっと怖いけど、そうじゃなくって。
……黒井鎮守府、すごく、大きなところ。
前に、私達がいた鎮守府とは比べ物にならないくらい。
「……なあ、何で、この、看板にさ、これ見よがしに『悪の組織黒井鎮守府』なんて書いてあるンだ……？」
「……そこだけは譲れないのだ」
「……はあ？」
……江風の疑問も最もだけど、そんなことよりもあたしは、この鎮守府の綺麗さが目についた。
あたしの知る鎮守府と言う施設は、もっと、こう、ジメジメしていて、嫌な感じがするところだった筈なのに。
門とか、塀とかも、艦娘を逃さないように、がっちりした、牢屋みたいな感じじゃないの？
ここは、全然違う。掃除が行き届いていて、門も塀も、上品で、嫌な感じのしない、お屋敷みたいな……、何というか、そんな風に見える。
「それじゃ、入って、どうぞ」
「……は、はい」
皆んな、おっかなびっくり、って感じ。もちろん、私も怖い。けど、海風も、江風も、手を握っていてくれるから。
前の鎮守府でも、嫌な思い、沢山したけど、仲間達皆んなで支え合って、乗り越えてきたもん。今回だって、きっと大丈夫。
……と、そう思っていたあたしが見たものは……、

「し・れ・い・か・ん??春雨、輸送任務、完了致しましたぁ??アハッ??ちゃーんと、愚かな深海棲艦共に『死と絶望』を届けて参りましたよぉ??」
「お、おう、頑張ったな」

……変わり果てた姉の姿だった……。

「そん、な……!!」
「春雨、姉さん……?」
「嘘、だ、姉貴が、あんな……!!」
血が……、血が、あんなに沢山!!
「春雨姉!!」
「あら?……もしかして、山風ちゃん、かしら?」
「春雨姉、死んじゃやだよ!!折角、折角また会えたのに!!」
やだ、やだ、やだ!!死なないで!死なないで!!

「ふぇ……?……あ、ああ!そのね、山風ちゃん?これはね、全部返り血なの!だから、大丈夫よ?」
「……え?」
返り、血?
「ほら、これで、深海棲艦共の内臓を引き裂いて殺して来たの??」
そう言って見せられたのは、血に塗れながらも、流星みたいな輝きを放つ、歪んだ二枚組の短刀だった。
「春雨、姉……?」
「?、何かしら?」
可愛らしい笑顔を見せる春雨姉は、確かに、どこも怪我をしているようには見えなかった。
でも……、
「司令官??これ、見て?ぜーんぶ、深海棲艦共の心臓だよ?あんな醜い見た目なのに、心臓は綺麗だよね??……まるで、宝石みたい……??」

春雨姉さんは、どこか、怖い。
……あっ、そ、そんな、大切な姉さんを怖いだなんて……。あたし、疲れてるのかも。そうだ、きっと、今日はたまたま、たまたまだ。いつも姉さんが血塗れな訳じゃ、
「ただいま！帰投したよ、提督！一々首を持ってくるのは面倒だからね、頸椎を引き抜いて来たよ！多分、全部で百くらいかな？」
「殺した数、覚えてられないから、心臓を引き摺り出して来たっぽい！ひい、ふう、みい、よ……、沢山殺したっぽい!!」
「「うきゃぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」」

「あはははは、怖がらせちゃったみたいだね。ごめんよ？」
「大丈夫？びっくりさせてごめんね？」
「でも、そんなんじゃ、この先生き残れないっぽい？」
……あの後は、普通に、何事も無かったかのように、鎮守府の中へ通された。内装も綺麗だったし、所属している艦娘の皆んなも、幸せそうに見えたけど……？
今は、取り敢えず、時雨姉に案内されて、白露型の部屋に来た。
他の皆んなも、姉妹艦だったり、手の空いている艦娘だったりに案内されて、自室（予定）に向かったみたい。まあ、荷物、置かなきゃならないし。
「これからお昼だけど……、まだちょっと時間あるし、工房においでよ」
「……工房？」
何だろう？工房？何か、造ってるんだろうか？
「工房って言うのは、提督が僕達の為に作ってくれた施設なんだ。名前は工房だけど、用途は武器の整備と物置、かな」
「は、はあ……」
武器……。なんで、艦娘が格闘武器を持っているんだろうか。
「んー？何で刀なんて持ってるのか分からない、そんな顔をしているね？」

「えっ、あっ、ち、違くて……！」
　いけない、失礼だったかな？
「ふふふ、良いんだよ。山風の疑問も最もだよね。……良いかい？僕達はね、艦娘なんだよ。艦でありながらも、人のカタチをして生まれてきたんだ」
「艦でありながら……」
「そう、艦でありながら、人のカタチをね。……だったら、艦の力と頑強さで、人の手足を振り回して、もっと言えば、武器を直接振り回すのって、おかしなことかな？」
「それは……」
　……確かに、私達は、カタチは人だけど、力も装甲も、艦のそれだ。だったら、人の器用さで艦の力を振るうのはおかしくはないかもしれない。
「分かってくれたかな？……それじゃ、こっちだよ。工房は外なんだ」
「あ、うん……」
　……正直、納得はできないけど、理解はした。
　兎に角、その、工房に行ってみようと思う。時雨姉は、信用、できるから。

「……すごい……！」
　物置、何て言うくらいだから、もっと無骨な建物を想像してたのに。工房は、すごくおしゃれな、西洋式の建物だった。……お隣の、近未来的なガレージも気になったけど。
「うわー！すっげー!!カッコイイ!!!」
　江風が大騒ぎするのも無理ないよね。今回ばかりは。
「君達も、道具を持った方が良いよ？そこにあるの、どれでも好きに持って行って良いから」
「マジ?!やったぜ!!じゃあ私は……、これ、貰っちゃおっかな～！」
　撃鉄の付いた金槌を引っ張り出す江風。……金槌なのに、火薬の匂い……？どう言うこと？
「こ、こら、江風？姉さん達に迷惑かけちゃ……」

海風がそう言うのも当然だよね。江風は、ちょっと、流石に調子に乗りすぎ。
「あはは、良いんだよ。……提督に迷惑をかけない限りは」
……そうだ、さっきから、何かおかしいと思ってた。時雨姉は、さっきからずっと笑ってるけど、でも、瞳の奥は、全然笑ってない。……どうして？
私達、何か悪いことしちゃった？
「？、ほら、海風も、山風も、遠慮しないで、道具を選んで？……一緒に提督の役に立とうじゃないか」
……提督。時雨姉の瞳は、提督って言葉を口にする度に、黒く澱んで……。でも、提督って言葉を口にする度に、幸せそうに、本当に笑ってる。提督が、原因なの？あの人からは、嫌な感じがしなかったのに。……後で、話をしてみよう。
「ええと、じゃあ、私はこれを」
海風が、遠慮がちに目の前の武器を手に取る。……あれは、鉈？ノコギリ？……ちょっと、海風のセンスが分からないかも。
「さあ、山風も」
「う、うん」
えっと、あたしは……、どうしよう、まともな武器がない。どれも、嫌になるくらい禍々しい。ん？……斧、か。まあ、無いよね。絶対に呪われてるもん、アレ。怖いからやだ。
「……選びかねているなら、最初に目に付いたものを手に取ると良いよ。はい、どうぞ」
「……えっ？」
あ、あれ？斧を押し付けられちゃった？
「白露型は直感に優れるからね。大体は、最初に目に付いたものが正解なのさ」
い、いや……、は、ハズレだと思うよ、時雨姉!!
「し、時雨姉？あ、あたしは」
「おっと、そろそろ昼食の時間だね。それじゃあ、渡した道具は肌身離さず持っておくんだよ。一週間もしないうちに、身体が艤装だと認識

して、艤装と同じように消したり出したりできるようになるから」
「はい！」
「え、ええー？」
あ、あたし、この斧を持って歩くの?!ぶ、物騒過ぎるよ……。
……結局、断りきれずに、この物騒な斧を押し付けられちゃった……。でも、帯刀した人とか、戦鎚を持ち歩いている子とか、そんな子が沢山いて、幸いと言うかなんと言うか、目立ってはいない。
あっちの人も、西洋剣を帯刀して……？
……嘘、あれ、あの人って……？
「……ふむ、今日はめでたい日だ、少々お高い洋酒を開けるか。羽黒、お前もどうだ？」
「うーん、じゃあ、ちょっとだけ……。本当に、今日はおめでたい日だもんね」
……分かる。艦娘として備わった機能なのか、艦の頃に会った艦とか、姉妹艦とか、そう言うのは、なんとなく分かるんだ。
あの人は……、
「那智さん、羽黒さん！」
「む？お前は……、山風、か?!再び相見えるとは！いやあ、今日は実にめでたい!!」
「わぁ……！久しぶり、山風ちゃん！また、会えるなんて、司令官さんには感謝してもしきれません!!」
那智さんに抱き上げられる。嬉しい、な……。
……でも、めでたい日、って何だろう？
「んー？ああ、今日はな、私達妙高型の練度が９０を超えてだな？」
「もう、少し。あともう少し……」
那智さんは、黒く澱んだ、でも、とても幸せそうな瞳。羽黒さんは、熱に浮かされるみたいに、狂ったかのように笑っている。
「練度？練度って、何……？」
……やっぱり、この艦隊は、どこかが……。
「……ああ、説明がまだだったのか？ふふふ、何、大丈夫だ、すぐにお

前も幸せになれる」
「司令官さんから、首輪を貰わないとね……」
「今の時間帯なら、提督は食堂だろうね。さあ、早く、提督のモノになろうじゃないか……」
皆んな、自分の首にかかった首輪を愛おしそうに撫でてる……。
やっぱり、やっぱりこの艦隊は……、
どこか、おかしいよ……。

９４話　白露型はガチ（でヤバい）

「ほーら、お代わりもあるぞー」
「えっ!!?こ、こんなにも美味しいものを、お、お代わりしてい良いんですか!!?」
「ああ……、がっつり食え……!!」
「うめ、うめ、うめ……」
「あ、秋月姉?……そ、その、じゃあ、私もお代わりを……」
「あ……、う、ぼ、僕は、こんな贅沢は……」
「もー、初月ちゃんよ?今は戦時中みたいに物資が無い訳じゃないんだからね?食べ物だって、殆ど、艦娘の皆んなへ、って分けて貰ったものだから!残す方が失礼だよ?ほら、お腹いっぱい食べるんだよ」
「そ、そうなのか?じゃ、じゃあ……、もぐ、もぐもぐ……、お、美味しい……!!」
あーらら?秋月型の奴ら、餌付けされてんなー。……でも、飯はマジで美味そうだ!!何だか、私も腹減ってきちまったなぁ。
「お腹が減ったのかい、江風?あっちにメニューボードがあるから、見て来なよ」
「おっ、ありがとさん!時雨の姉貴!」
メニューボード……、選べって事か?見れば、あっちのカウンターで、他の艦娘が注文をしている。成る程、あそこで注文しろってことか。
えーっと、料理名の隣に、番号が振ってあるな。番号で注文しろってことか?和洋折衷の沢山のメニューは１０種類以上だ。……うーん、ええと、麦飯が１番、あおさと長ネギと豆腐の味噌汁が４番、カレイの煮付け６番、ナスとパプリカの煮浸し８番に、ウニの茶碗蒸し１０番……マジかよ?!えっ、ウニ?!食った事無いぞ私!!
やばい、正直言って、かなり楽しみだ。
「えーっと、その、鳳翔、さン?」
で、合ってるよな?艦娘の勘ってやつだけど。
「はい?……あら?新しい子?……貴女は、江風ちゃんね?軽空母の

鳳翔です。提督と、間宮さん、伊良湖ちゃんと厨房を切り盛りしているの。よろしくね。……それで、注文、よね？何番かしら？」
「おう！よろしく……！注文は……」

「……う、うっま！何だこれ?!今まで食ったものの中で一番美味い!!!」
麦飯はふっくら、美味しく炊けてる。噛みしめる度に米本来の旨味が出てくる。
味噌汁はあっさり薄め、他が濃いめだから、清涼感、ってやつがあっていい。あおさの食感が何とも言えない！
カレイは、今が旬で脂が乗ってるらしい。メニューボードに書いてあった。しっかり煮込んだんだろう、よーく味が染みていて、脂身が甘くって……！
煮浸しも上等な出来だ。味が適度に染みていながらも、野菜らしい食感を損なっていない。……ってか、甘いなぁ！相当新鮮で、良い野菜を使ったんだろう。それこそ、生でも食えるような。
トドメにウニの茶碗蒸し……。銀杏とエビ、それとウニだけの、シンプルなもの。だからこそ、素材の味が十二分に活きてる。……これ、旅館とかで出すやつだろ？良いのか、食堂で出して?!
ほんっとに、ヤバい。これが毎日続くのかよ？高待遇ってレベルの話じゃねえよ?!……お、お代わり、良いかな？
「ん？ああ、お代わり？また、同じように注文してきなよ。……僕としては、7番の牛肉コロッケがオススメかな。提督の洋食は本当に美味しいから」
夏野菜たっぷりのペペロンチーノを啜りながらも、助言をしてくる時雨の姉貴。コロッケ、そう言うのもあるのか！
「すいませーン、7番と、1番、あとついでに10番！お代わり下さいっ！」
「はーい」
美味え!!!!

……いやー、あんまりにも飯が美味いもんで、夢中になって食ってたら、ついつい目的が頭からすっ飛んでたわ、うん。まー、山風も珍しくお代わりなんかして、海風もいっぱい食ってたからなー。もう、これだけで提督には感謝だなー。あ、デザートはカップケーキだった。美味し。

「それじゃ、提督。ロック装置を」

「えっ？あっ、あー。……ロック装置、かぁ……。なんつーか、毎回毎回、俺の手からこれを渡すのは、なぁ……」

新入りの、鹿島さんと私達は、時雨の姉貴に連れられて、食後に食堂の一角へ。提督が何だか嫌そうな面してるけど、どうしたんだ？

「あー、その、ね。これは、ロック装置。具体的に言えば、艦娘を強化するものなんだけど……、持ってるだけで大丈夫だから、態々首に巻かなくっても良いから。手足とかに巻いてくれればそれで」

ロック装置？……あ、時雨の姉貴とか、他の艦娘が皆んなしている首輪、か？どう言う仕組みか知らないけど、この江風達を強くする、か。……良いじゃねーか！望むところだ！

「こ、こりぇは、しょの……？！！」

「はうっ？！そ、そんな……？！だ、大胆過ぎですよぉ！」

「あの、あのあの……。その……。な、何でも、ないです……」

ん？何で真っ赤になってるんだ、鹿島さんと浜風と、野分は？え……？何々？ぺっとぷれい？何のことだ？

「えーっと……、海風は、構いません、けど……。その、あまりこう言ったことは、関心しませんよ？」

「まあ……、私も、構いはしませんけど……。そう言った趣味を他人に押し付けてはいけないと思います」

「お前って奴は……！こっ、この、変態め！僕に、姉さん達に何をするつもりだっ！！」

海風の姉貴も、萩風もちょっと赤い。何だ？熱か？初月の奴は何か知らんけど、赤くなりながらも怒ってるな。何でだ？

「なあ、嵐よぉ、何で皆ンな騒いでんだ？」

「分からねぇ……。強くなれるって、良いことだろ？なぁ、舞風？」

「うん、あたしも、もっと強くなりたいって思ってたし……」
「うーン、山風はどう思う？」
　山風に聞いてみるか。山風は、何つーか、勘が鋭いんだ。嫌な雰囲気とかに敏感なんだよな。
「この、首輪……。何だか、あったかい感じ。……うん、嫌な感じは、しない、かな……。多分、大丈夫……」
「おっ、そっかあ。山風が大丈夫ってんなら、問題ねーな!!」
「あ、あのね、江風？その、皆んなは首輪自体に問題があるって言ってるんじゃなくってね？その、男の人が、女の人に首輪を渡すってことが問題で……」
　照月、何だ？ハッキリしないな？何も問題無くね？
「何にせよ、着けながら戦えば強くなれる装備なんて、着けない訳にはいきませんね！」
　秋月の言う通りだな！よーし、早速……、こんな感じかな？犬みてーだな！
「違うから!!この装置の設計開発は明石と夕張だから!!俺の趣味とかじゃない!!!決して!!!」
　？、何騒いでんだ、提督？男はどっしり構えてなきゃ、駄目なんだぞ？
×××
×××
「……さて、と。正直、今日はもうやることないね」
　ロック装置を受け取って、時雨姉さんに連れられて鎮守府の案内をされた後。時雨姉さんは、そんなことを言った。
「え？出撃とかは？」
　江風が聞き返すけど、
「いやいや、君達はまだ、練度が足りないよ。当分は演習と、簡単な遠征だけ、だね」
「そう、ですか？海風は、これから、提督のお役に立たなくちゃいけないんじゃ……」
　正直、不安だ。美味しいご飯と、ロック装置という素晴らしいもの

を貰って、その次は今日は休め、だなんて。
「うん、その意気は良し、だね。……でもね、焦る必要はないよ。大丈夫。……そうだ、折角だし、道具を軽く使ってみたらどうかな？工房の裏にちょっとしたスペースがあるからさ。……ほら、あそこだよ」
「マジ？ちょっとこれ、気になってたんだよねー！」
……私も、自分が手に取った武器……、ノコギリ鉈、と言うらしい……、これが、さっきから気になっていた。
直感のままに手に取ったもので、よく見てはいなかったけれど、この武器は、よく分からない。
歪んだ長い柄に、ノコギリが付いた武器だ。でも、どの辺が鉈なんだろう？確かに、鉈らしき刃は、ノコギリ刃の反対側に付いているけれど、これじゃ斬りつけられないんじゃないかな？
でも、時雨姉さんが役に立たないものを渡す筈はないだろうし……？
「ええと、確か……、ここ、だったかな？よし、えっと、テストモード、と」
『テストモード、起動。ターゲットダミー、展開』
「うおっ?!!な、何か出たぞっ?!!」
「問題無いよ、サンドバッグみたいなものだから。試し斬りするといい」
「は、はあ……」
「すごいね、工房って、こんな機能もあるんだ……」
「あ、いや、これは睦月型のガレージのターゲットダミーを借りただけ。……あそこのコンソールから使えるから、好きにして良いって」
へぇ、白露型だけじゃなくって、他の艦娘にも色々と与えられているんだ。
……至れり尽くせり、ね。これで活躍できなかったら申し訳ないな、頑張って練度（？）を上げよう。
「じゃ、行くぜェ!!せーの、おりゃ!!」
ドカンと言う破砕音。
江風に思い切り殴りつけられたダミーは、ひしゃげて飛んで行っ

た。成る程、艦娘の馬力を以って殴れば、それだけで致命傷を与えられる、のね？相手が小物の深海棲艦なら、弾薬を使わないから却って良いかも。
「よし……、えいっ!!」
ノコギリ刃で斬り付ける。斬れ味は本当に鋭い。……でも、こんなもので深海棲艦を斬り付けたら、傷痕が酷いことになりそう。
「うう……、え、えーい!!」
山風も、重そうな斧を片手で振り回している。見た目はああでも、艦娘だから。あれくらいはできて当然ね。

……うん、ちょっとだけど、この武器の使い道が分かってきた。これは、相手の血を、命そのものを削る武器だ。
間違っても、人に振るうものじゃない。……もっと、強大な、人じゃない何かを狩る為に作られた、そんな武器。
「……ん、ああ、そうか。使い方、説明してないや。海風、それ、柄の取っ手を押し込んでごらん？」
？、時雨姉さん？……、柄の取っ手を？
「そのまま、刃を動かすんだ」
「刃を、動かす……、？!」
変形、した？
小回りの効くノコギリから、長い鉈へ……。
「……ノコギリ、鉈……！」
そっか、ノコギリ鉈。だから、ノコギリ鉈なのね。
「おおっ！かっけえ!!なあなあ、これには何か無いのか？時雨の姉貴？」
興奮した様子の江風が、時雨姉さんに尋ねる。
「爆発金槌は……、確か……、撃鉄を起こしてみて？」
「っしゃあ!!こうか?!……おお……、これは……!!こ、このまま殴れってことだな！よーし、どりゃあ!!!」
先ほどより大きい、爆砕音。
爆炎を伴う殴打……。ダミー人形は、弾けるように潰れた。

「山風の、獣狩りの斧は、柄を回して、引き伸ばしてごらん？」
「……わっ、の、伸びた？」
成る程、手斧から斧槍に、ね。
確かに、どの武器も、深海棲艦を相手取るには充分ね。
いや、充分、過ぎる。
こんな、恐ろしい、殺意のカタマリみたいなもの、どこで……。
「……ねえ、この武器、出所はどこなの？」
「知らないよ？……提督が説明しないってことは、知る必要のないこと、ってことさ」
時雨、姉さん……？
「良いかい、海風？僕達はね、提督に逆らう虫ケラ共を始末することが仕事なんだ。考える必要なんて、無いよ。考えるのは提督がやってくれる。黒井鎮守府の艦娘の最高の幸せはね、提督の命令を聞くことなんだから」
「時雨姉さん、何を……？」
……その時、見てしまった。
時雨姉さんの瞳を……。
「ひぃっ……!!」
……暗闇。
月のない夜よりも、暗い海の底よりも、ずっとずっと暗い、漆黒の闇。
この世の深淵。
地獄の最果て。
見てはいけない何か……。

「ね、姉さん……?!時雨、姉、さん……?!」
不意に、時雨姉さんが肩を掴んできた。
「痛ッ?!」
「……だからね、提督の邪魔はしないように、ね。……僕は提督を愛しているんだ。けど、二番目がない訳じゃない……。親愛なる妹を、この手にかけるなんて、そんなことはしたくないよ、海風……。だから、だからね……、提督の、僕の敵には、ならないでね……?」

……この時、私は。
無言で、首を縦に降ることしか、できなかった……。

時雨、姉さん……。

……どうして?

９５話　いあ！いあ！黒井鎮守府!!

「白米とは、美味いものだな……」
まるで、士官のような生活だ。
食事は美味い。給金も高い。娯楽も十分過ぎるくらいだ。菓子や酒のような嗜好品もあって、定期的な休みも貰える。
自室は、秋月型と言う枠組みで一部屋。だが、三、四人で丁度くらいの落ち着く部屋だ。あまり広いと掃除が大変だからな。家具は上等なものだったし、テレビや冷蔵庫に空調まである。
鎮守府の中は、基本どこでも出入り可能だ。他の艦娘の自室でもない限り。食堂は、いつ行っても大体は何か食べるものが置いてあるし、休憩室は、本当に、何でも置いてある。鳳翔がやってる居酒屋（何で鎮守府の中に居酒屋があるのか、全くの謎だが）には、酒もつまみも完備。間宮のところにも、美味いものばかり。おまけに、会議室や資料室は分かるが、体育館だの、プールだの……。温泉から農場まである。
一体、ここは何なんだ？
……こんなに、いい生活をしていて良いのか？
あ、いや、訓練は相応に厳しいが。……神通は、本当に厳しい人だ。だが、辛い訓練の一つ一つが、自分の力になっているのが分かる。
……最初、このロック装置とやらを見せられた時は、一体何の冗談かと疑ったものだが、中々どうして……。
「ご飯、相変わらず、美味しいです……！」
……まあ、秋月姉さんは嬉しそうだしな。良い、のかな？
「……でも、やっぱり、未だに信用ができないわね……。流石に、待遇が良過ぎるんじゃない？だって、もうここに来て二週間経つけど、出撃なんて一度もないのよ？それなのにこの待遇って……」
確かに。
照月姉さんの言う通りだ。
僕達は、未だに何も……。
「……照月、初月？失礼ですよ、こんなにも美味しいご飯を食べさせて

貰っている相手に、不信感を抱くなんて」
秋月、姉さん……。
「でも……」
「それに！疑って安全を保つよりも、信じて裏切られる方が良い、でしょう？他人を疑いながら生きるなんて、良くないです」
……ふふ、やっぱり、秋月姉さんは、僕の自慢の姉だよ。

さて、訓練だ。内容は応用的なもの。鹿島の基礎訓練とは全く違う。
「やあっ!!!」
そもそも、鹿島もあそこで、僕達と一緒に訓練をしている。
「鹿島さん、確かに、速さで敵わないから間合いに入れないように努力する、と言うのは正常な判断です。しかし」
「えっ?!嘘、消えっ……、ああっ!!」
「……この程度の速度には、ついて来い、と言うことです。違えないで下さい」
……相変わらず、神通には容赦の二文字がまるでない。訓練で辛い思いをすればするほど、実戦で困らない、と言うのは分かるが……。
「予め言っておきますが……、黒井鎮守府の戦場で、尋常な判断など捨て去って下さいね。全ては、提督の為に……」
殆ど、視認することすらできない速度について来い、とは、何の冗談だ？
「……そして、そこ。余所見をするな、とは言いませんけれど……」
「あ、ああ、すまな……、?!」
殺気?!
「気を抜いちゃ駄目だよー？常在戦場！提督の敵は海の上にいるのだけじゃないんだからねっ！」
後ろから、苦無を振るってきたのは、川内だ。どうにか、転がって回避したが。
……常在戦場、それは、分かるが……。敵が海の上以外にもいる、と

は？どう言うことなんだ？
「さて、鹿島さん？まだ訓練は終わっていませんよ。さあ、立って？……提督から譲り受けたその剣、飾りではないのでしょう？」
「くっ……！い、行きます!!」
……鹿島は、元から、剣の心得があった。それだけじゃなく、鞭を使うことも多々あった。……そこで、提督が言ったのは、じゃあ、一つにまとめろ、とのことだった。
そうして、出来上がったのは、蛇腹剣。……見るからに、技量を要求される剣だ。
鹿島は、その奇形の剣を巧みに操り、戦闘する。並みの深海棲艦ならば、瞬きする間にバラバラにされるだろう。
……これで、練度不足と言うのだから、黒井鎮守府の底が知れない。
思えば、最初に会った春雨も、その後に会った時雨と夕立も、複数の戦艦や空母の深海棲艦の死体を運んでいたな……。
つまり、黒井鎮守府の最低ラインは、単騎で複数の戦艦や空母を惨殺できるくらい、と言うとこか。……いや、冗談だろう？
「それじゃ、取り敢えずは、刃物で殺すことに慣れようか？はい、そこら辺から捕まえてきた夕級だよ。首を刎ねて、臓物を引き摺り出してごらん？」
「ヒッ……、時雨姉、こんなの、おかしいよ……」
「耳を澄ませてみて……？提督の命令が聞こえるっぽい。殺せって。沢山、沢山、敵を殺せって……」
「夕立姉さん！それは幻聴よ！お願い、正気に戻って!!」
「江風ちゃんも、ほら！早く殺してみて？大丈夫！提督は、殺せば殺す程褒めてくれるんだから??ほら、頑張ってぶっ殺して、提督になでなでして貰おうね??」
「わ、分かった、春雨の姉貴……。う、うおおおお!!!……や、やったぞ……。は、はは、ははははは、大したこと、ねえな……。こ、これで、提督が喜んでくれるンなら、私は……」
……白露型は、何だか大変そうだな。
何でも、白露型独自の訓練があるらしいけど……。聞いた限りで

は、まるで、死んで覚えろ、みたいな感じらしい。……よく分からないけど、大変なのは分かったぞ。
「うぉりゃあああああ!!!」
……対して、陽炎型は、蹴りを中心に様々な武術を習得しているみたいだ。
何故か、助走をつける嵐の足跡が燃えているが……？改造、改修と言うやつだろうか？
謎だ。
さて、僕もごちゃごちゃ考えている暇は無いな。明石から渡されたこの西洋剣？と盾？に一刻も早く慣れて……。
な、慣れて……。
「……このデザイン、何とかならなかったんだろうか……？」
嫌にテンションの高い明石が、嬉しそうに持ってきたものだから、断りきれなくって……。
……何で、獅子を象っているのだろうか？何で、獅子の口から剣の柄が出てきて、刃が生えるのだろうか。そもそも、素材は何なのか……。謎だらけだ。
明石に聞いても、うちは悪の組織だから、と。悪の組織が技術力に優れるのは当然だ、などと、全く話が通じない。
曰く、使いこなせば絶対無敵だと言ってはいたが……。どうなんだろうな。
だがまあ……、
「ほらほら！その大層な剣はオモチャじゃないでしょ？当ててみなよ！さあ!!」
「くっ、川内、無茶を言う……！」
今は目の前のこと、だな。
「初月、冷静に考えるんだよ！見えなくても、軌跡くらいは読めるようになったんだから!!大丈夫、自信を持って!!」
「秋月姉さん……!!」
姉さんの言う通りだ。人間が、飛来する銃弾が見えないように、僕にも川内の動きは見えない。だが、

「……こっちだ!!」
どっちから来るか……、それくらいは分かる!!
「……うん、取り敢えずは合格、かな？二週間でこれなら、上出来かな」
×……は、はは、突き出した剣の上に乗る、か。いよいよもって化け物だな。
×
×
×
×
「……さて、揃ったか？」
「秋月姉さんは呼んでないわ。姉さんは、こう言うこと、あまり得意じゃないから……」
「えーえ、全員」
「う、うん、いるよ……」
「よし、では早速、この鎮守府の異常についてだが……」
初月、照月、海風、山風……。なーに、この俺を差し置いて、作戦会議なんてしてるんだ!!
「ちょーっと待った!!」
「ま、待ってってば、嵐！」
「……嵐、お前は呼んでないぞ」
んなっ?!ひ、酷いな、初月は……。
「お、俺をこんな面白そうなことに呼ばないなんて、酷いぞ！」
「ご、ごめんね、嵐が……」
萩も付いてきてくれた。助かるぜ！
黒井鎮守府の調査だなんて、絶対面白いやつだ……！そもそも、悪の組織とか看板に書いてあったんだ、怪人の一人や二人が出てもおかしくない……。
「さあ！俺と一緒に、この黒井鎮守府に巣食う悪を退治しようじゃないか!!先ずは探検だっ！俺に続け!!」
この鎮守府、めちゃくちゃ広いからな。まだ行ってないところとか、沢山あるんだ。皆んなで探検しようぜ！
「お前、この集まりの趣旨が分かってないだろ?!……良いか？この鎮

守府はな、どこかがおかしいんだよ！だから、それを突き止めて、原因をどうにかする！それが目的なんだ！遊びでやってるんじゃないんだよ!!」
お、おお？怒られちまった。初月はいっつも怒ってるなー。
「……ん？でも、調査って言っても、何をするんだ？」
「……それは」
「なんだ、決まってねえのか？じゃ、足で稼ぐしかねえだろ？」
全く、短気は損気だぜ？
「……はぁ、ま、良いさ。ただし、邪魔だけはしてくれるなよ？」
「おう!!」
あったり前だろ？
「……そう、だな。取り敢えず、工廠に行ってみないか？」
工廠……。俺の艤装を改良してくれたスゲー人、明石さんと夕張さんがいるところだな。そういや、行ったことねえや。
「そう、だね……。この鎮守府の技術力、おかしいもん。あたし達が、前の鎮守府から逃げ出して、鹿島さんに拾ってもらえるまで、それなりに今の日本を見て回ったけどさ、この黒井鎮守府程の技術力は無かったもん……」
確かに、山風の言う通りだ。この鎮守府は兎に角スゲーんだ。ワープ装置とか、ロボットとか……。えすえふ、ってやつだな！
「じゃあ、行ってみるか？」
「そうだな、お邪魔してみよう」
良し！いざ、工廠へ!!

９６話　病みにのまれよ！

「ここが、工廠……」
……何だか、思っていたのと大分違う。
良く分からない機械と、良く分からない機械がガチャガチャ動いて、なんか、大きなやつがぐるぐる回って、変なのが転がってる。
……なにこれ。
「うへ、うへへへへへ、ここを……、こうして……、こんな感じかしら、夕張ちゃーん！」
「うひひ、最高ですよ明石さーん！」
……うわぁ。
おかしいよ、あれ。あの人達、変。
「ん？……あら？これは、これは……」
「ふふ、可愛らしいお客さんですね」
ひっ、こ、こっち来た……？！
「こんにちは！この工廠に、何かご用ですか？」
「もしかして、武装の整備とかかな？良いよ、すぐに受け付けるから！」
あ、れ？
……うーん。
嫌な感じは、しない。ぽかぽかして、優しい人達。何となく分かる。
「よくぞ聞いてくれたっ！俺達は、この鎮守府の調査をんぐっ？！は、はちゅつき？！もごもご！！」
「い、いやあ！その、この鎮守府に来てまだ慣れないからな！色々と見て回っているんだ！」
早速、口を滑らせようとした嵐の口を塞いで、初月がフォローした。
す、素早い。
「なるほど、見学ですか！良いですねー、私もまた、工場見学に行きましょうかねー？」
「あ、良いですね！そう言えば、今度、提督のコネで半導体製造工場の見学に行けるそうなんですよ！一緒にどうです？」

「えっ、良いんですか！嬉しいです！」
うーん、こうしていると、仲良しで、優しそうな人達なのに。
「ええと、その、質問しても良いですか？」
「あら？……えーっと、海風ちゃん、ね？海風ちゃん、何が聞きたいのかしら？」
「はい、えっと……」
「あら？……ふふふ、やっぱり、もう、分からないかしら？私は、こう見えても工作艦の明石なの！こっちは軽巡の夕張ちゃんよ」
……そうだ。何か違うと思ったら、この二人、分からないんだ。
普通は、艦娘なら、他の艦娘を見れば何となく名前とか艦種とか、そう言うのが分かるのに。
……どうしてだろう。
……そんなことを考えているうちに、皆んな、色んな質問をしている。
「ああ、うちの鎮守府はね、提督のコネとか、アイテムとかで色々と弄ってあるのよ」
「ワープ装置？ロボット？……ああ、あれは提督がくれたものを解析して、独自に開発したものです。沢山勉強して、提督の、皆んなのお役に立ちますからねー！」
……うーん、やっぱり、嫌な感じはしない。
むしろ、すごく、良い感じだ。あったかい感じ……、これは、多分、愛情なのかな。
「そ、その、二人は、好きな人が、いるの？」
「もちろんです！私は、提督を愛しています!!」
う、うん。
……また、提督、か。
「凄いんですよー、提督は！優しいし、カッコいいし、強いし……、何より研究用に資材をくれたりとか、私の趣味にも理解を示してくれるんですから！」
「機械は苦手、とか言いながら、十分な知識はありますしー、ちゃんと勉強してますし！ついつい熱中して長話をしちゃっても、ちゃんと聞

いてくれて！」
は、はあ。
「ミスをしちゃっても、「なーに、失敗は成功のもとだろう？」とか言って、いっつも許してくれて！行き詰まっていると的確なアドバイスとか、息抜きにデートとか……、兎に角、気が利くんですよ!!」
「実験の時はちゃんと手伝ってくれて！成功したら沢山褒めてくれるんです！それだけじゃなくって……」
「わ、分かった、分かったから！」
初月も引いてる。
うーん、やっぱり、提督のこと、すっごく好きなんだろうな。それは分かる。
皆んな、提督が大好き。それだけ、なのかな。
あたしも、あの人は、嫌いじゃ、ない。訓練、ちゃんと見ててくれて、頑張ったねって、褒めてくれるし。
誰よりも、ぽかぽかする、優しい人。
できれば、ずっと、一緒にいたい……。
……もしかして、考えすぎ、なのかな？おかしいことなんて、何も、ないのかな。
「いやー、にしても、明石さんも夕張さんも、最初、誰だか分かんなかったぜ！艦娘の勘ってやつも、アテにならねーな!!」
……嵐、失礼。
でも、二人は、さっきと変わらない笑顔で答えた。
「ふふふ、仕方ないですよ！私はもう、明石ではありませんから！」
「もちろん、私も既に、夕張じゃないんです！」
……え？
そう言って、艤装を見せてくる二人。
「ほら、これ、最新型の炉心なんですよ！スクリューも増設して、装甲なんて有澤重工の二枚重ねなんですよ！」

「私だって負けてません！リアクターはもちろん、ミサイルにレールガン、最近は有線ビット兵器にも着手し始めたんです!!」
「そんな……!!」
嘘、でしょ？
こんな、こんなの……!!
「お、おい！そんなに艤装に手を加えたら……!!」
「お、お前達はなんなんだ?!そこまで改造したら、もう……、艦娘ですらないじゃないか!!」
「……？、それの、何が問題ですか？」
……どうして？
どうして、笑っていられるの？
「この力があれば、提督のお役に立てるんですよ？」
「提督の為になら、どんな姿になっても構いません」
そんなのって……！
「だ、駄目、駄目だよ……！だって、そんなの……！」
「こんな姿になっても、提督は私の名前を呼んでくれるんです!!「明石、頑張ったね」って、「明石、かわいいよ」って!!!」
「だから、私達は艦娘なんです！もう艦娘じゃないけど、提督が呼んでくれますから!!提督が、私の名前を呼んでくれますから!!」
ち、違う、違うよ……！
「そんなの、間違ってるよ……！」
「……どこが、ですか？」
「や、やめなさい、山風!!」
海風、止めないで……！
だって、違うもん！
あの人は……!!
「提督は、ただ、皆んなと一緒にいたいだけだよ！そんな、無理して強くなることなんて、望んでないよ!!」
「あはっ、あはははは！あはははははは!!!」

なんで、笑って……？
「嫌ですね、山風ちゃん。……聞いてますよ。貴女、捨てられたんでしょう？」
「あ、たし、は……」
……『クズが！使えない、盾にもなれんのか?!』
……『使えない、雑魚め！役立たずのゴミだ、お前らは!!』
……『もううんざりだ！使えないクソガキ共め！とっとと出て行け!!消え失せろ!!』
「やだ、やだ、違う、違う……」
「弱い艦娘なんてね、要らないんですよ」
「そんな、こと、ないもん……」
違う、提督は、優しくて……！あたし達を、捨てたり、しない！
「ええ、ええ、もちろん、提督はそんな方ではありません、本当に、本当に、優しい方ですから……」
「どんなに使えない艦娘も、あの人は守ってくれますよ？大切に、大切に……。でも、そんな艦娘、必要あるかしら？」
「それ、は……」
「提督の足を引っ張るなんて、とてもとても……」
「戦うことしか能のない艦娘が、戦えないなんて、許させると思うかしら？」
弱いと、迷惑？
弱いと、提督が、困る……？
あたし、提督に、迷惑だって、思われてるのかな……。
「あ、あ、あたし、あたしは……」
「大丈夫ですよ」
あ、明石、さん……。あたしを、抱きしめて……。
……あったかい……。
「強くなれば良いんです」
「強く、なる……」
強くなれば、捨てられない？
強くなれば、提督の側にいられる？

強く、なれば……。
「強くなれば、提督からも、皆んなからも、必要とされますよ？絶対に、捨てられないんです」
「捨てられ、ない……？」
「ええ、使える道具は大切にされる……、当然でしょう？」

道具……。
あたし、は、道具……。
提督に、大切にしてもらえる、道具……。

「……そ、その！時間を割いてくれて、ありがとう！ぼ、僕達は、これで!!行くぞ山風!!」
「あっ……」
「あら？まだ大丈夫なのに……」

初月に引っ張られて、工廠の外に出た。
あたし、は……。
「や、山風、大丈夫か？」
「……うん、あたしは、平気……」
「……山風？貴女……」
「あたし、頑張る、から。提督の、道具として……」
「なっ……?!や、山風！正気に戻れ！あの人は、提督は、僕達を捨てたりなんかしない!!お前は、道具なんかじゃないんだ!!」
「……でも」
「大丈夫よ、山風！大丈夫、大丈夫だから……」
海風姉……。
「……なんだか、山風の様子が変になっちまったな。この調子じゃ、今日はこれ以上探索できないな。……取り敢えず、部屋に戻って休もうぜ？」
「ああ、そうだな……」
……考えすぎ？いや、でも、あたしは……。

あたし、は……。

９７話　黒井鎮守府ふたぐん！

「……山風は、大丈夫なのか？」
「ええ、時雨姉さんに任せたわ。……時雨姉さんも、僕達は道具なんかじゃないよって、慰めてくれて……。普段はちょっと過激だけど、ああ見えて私達のことを想ってくれているのよ」
「そうか……。海風は、そのまま山風に付いていてやってくれ。流石に、心配だからな……」
「ええ、それじゃ……」
「クソッ、この鎮守府、ヤバいんじゃないか……？」
はっきり言って黒井鎮守府は異常だ。
戦闘能力はもちろんだが、それ以上に、所属する艦娘の気性が、な。
確かに、司令は尊敬に値する素晴らしい人、って奴だ。
上官としても、人間としても、ああなりたいと思えるような、そんな男だ。
しかし、それでも、あんなに崇拝されるのは、おかしい。あれじゃ、司令自体も迷惑に思うんじゃないか？
「それじゃ、次はどうする……？」
初月が聞いてくる。……実は、前から、行くべきだと思ってる所が一つだけあるんだ。
「……地下だ」
「地下？」
そう、地下……。
どこでも出入り可能な黒井鎮守府の中で、唯一立ち入り禁止の場所……。
「あそこに何が隠されているか……、それで、司令の真意が分かるんじゃないか……？」
「……確かに。不誠実な事かもしれないが、あの人の隠している事が、もしも、もしも悪い事ならば……」
そうだ。
この鎮守府の記録は全部見た。司令の人となりも大体は分かった。

結果、司令はとてつもない善人だと、俺は分かった。
でも、隠されているところがただ一つ。
地下室だ。
……俺は、司令のことを信じている。だから、これは、最後の確認だ。
もしも、これで、何も出てこなければ、俺はこれから司令の為に命を賭して戦う。萩も、同じ意見だ。確かに、ここの艦娘は過激なところはあるが、俺だって、司令に笑顔でいてもらえるなら、なんだってしてやりたいと、そう思えるようになってきた。
だって、あの人は、司令は、本当の正義だから。
助けても見返りのない俺達に手を差し伸べてくれた、本当の正義だ。
だから……。

「……で、地下室前に来た訳だが」
「……開いてるな」
なんか、もう、怪しい。
「……ほ、本当に入るの？」
照月、恐れるな！これは、試練だ……！
「そ、それじゃ、行くぞ!!」
「ああ!!」
鋼鉄のドアを、開けっ、
『テケリ・リ、テケリ・リ……』
閉める。
……。
「な、なんかいたー!!なんかヤバいのいたーーー!!!」
「な、ななななな！なんだ今の!!!何だ今の?!!!」
「あわわ、あわわわわ!!!」
はー、はー、お、落ち着け！落ち着け俺!!そう、そうだ、見間違いだ!!黒いスライム状の何かなんていなかった、良いね？
「も、もう一度だ!!」

「や、やめておかないか？」
「あわわ……、お、お化け？お化けなの？」
大丈夫、次は大丈夫……。
ドアを、開けっ、
「畜生！まーた湧きやがった!!死ねっ！オラオラ!!アグニ！魔力の集積！ブレイズキャノン!!」
ッし、閉めるッ!!!
……。
「戦ってたーーー!!!司令が戦ってたーーー!!!!」
「何やってるんだあの人はーーー!!!」
「も、もういやーーー!!!」
落ち着け！落ち着け落ち着け落ち着け!!良く考えろ、鎮守府の中に化け物が湧いて出て、しかも、それと司令が戦うなんてこと、あり得るか？いや、無い!!!
きっと、幻覚とか、なんかそういうのだ!!!大丈夫だ、問題ない!!!
「げ、幻覚だ！見間違いだ!!」
「いや無理だろ！それは通らない!!だって、もう、さっきから爆発音とか聞こえてくるんだぞ?!!」
「ひいいいいい!!な、なんか、変な鳴き声が聞こえてくるうううう!!!」
う、うるさい！これは、そう、局地的に地震でも起きてるんだ！そもそも、あんなおかしな化け物がこの世にいるか？司令がなんか良くわからない魔法を使うか？そんな訳ないだろ!!!
よ、よし、三度目の正直だ!!
ドアを、開けるッ!!!
「あー、アメフラシに近いなー。ちょっと神話生物臭さが強いけど。醤油で煮てみたけど、結構アリか？毒腺とか取れば意外と……」
「「……食べてるー!!!?」」
「えっ、何？ここ、立ち入り禁止なんだけど」
「司令ーーー!!駄目だ！それ駄目なやつだーーー!!!」
「は、吐き出せ!!今すぐ吐き出せ!!!」
「て、提督？身体は平気?!お腹痛くない?!!」

「はい？何？なんなの？」

「……なるほど、立ち入り禁止の地下室が気になって、見に来た、と？」

「「……はい」」

うう、やっぱり、怒られるかな？

「全く……、駄目だよ？ここ、危ないから立ち入り禁止なの」

まあ、そりゃ、あんな化け物を見たら、な。

「なんで、こんな危険な部屋が鎮守府に……？」

「いやー、俺の持ち物がなー。色々と危険なものばっかりでなー。常人では見ただけでアウト、触ったら確実にお終い、みたいなもんもあるから。ここに厳重にしまっておかなきゃ大変だろ？」

……つまり、司令は、人々の平和の為に、危険なものを管理している……？

「俺、死んだり戦闘不能になったりすると、その場に持ち物を落としちゃうからさ？危険物は極力どこかに保管しときたい訳よ」

そうか、そういうことか……！

「じゃ、じゃあ、やっぱり、司令は正義の味方なんだなっ!!」

「はあ？」

「俺、この鎮守府の記録を読んだんだ！司令、あんたは凄い人だ!!大本営に邪魔されながらも、艦娘を助けて、人々を助けて、海の平和の為に戦っている、そうだろ?!」

憧れ、なんだ。誰かの笑顔を守りたい。ずっと、そう思ってた。

司令は、俺の憧れの体現だ。

俺の目指す、正義そのものだ。

でも……、

「んー？俺は、正義の味方なんかじゃないよ？ただ、自分のやりたいことをやっただけ。……好き勝手やってる分、むしろ悪党だよ？」

「な、なんでだ？どう考えたって、大本営が悪いだろ？なんで、自分を悪く言うんだ？謙遜、ってやつか？」

悪党？司令が？そんなはず、ないだろ！
「……大本営には、大本営の正義があるんだろ。もちろん、俺には俺の正義がある……。人は常に、自分の正義を貫いて生きているんだよ」
「自分の、正義……」
……そっか、自分だけが絶対に正しい、なんて、そんな訳ないか。
皆んな、自分が正しいって、そう思って生きているんだもんな。
「じゃあ、やっぱり、自分の正義を貫くって、悪いことなのか？」
「そうかもな。自分の正義を貫くってことは、好き勝手やるってことだし。それは、一般的には悪いことなのかもしれない。でもな、他人になんと言われようと気にするなよ！例え他人に悪と呼ばれても、自分のやりたいことをやらない方がずっと駄目だからな！」
「……司令……！」
そうだ！司令の言う通りだ!!
正義とか、悪とか、言葉に惑わされちゃ駄目だ!!
「……ま、自分の正義が間違いだった、なんてこともある。そんな時は、俺が、仲間達が止めてやるさ。……だから、自分の正義を信じて、真っ直ぐ突き進むんだ！」
「……おう!!」
……そっか、正義は、俺の中にずっとあったんだ……。
もしも、俺が道を違えても、あの人が、司令が俺に正義を示してくれる……、そう言うことか。
だったら、だったら司令は……。
絶対の、正義……。
×
×
×
×
×
道具、あたしは、提督の、道具……。
役立たずは、いらない子……。
「明石達も酷いね、僕達を道具だなんて……。確かに、提督には恩義があるけど、だからと言って道具になるなんて間違いだよ」

「そ、そうよね、時雨姉さんの言う通りよ！良い、山風、貴女は道具なんかじゃ……」
「僕達は、提督の犬なんだから」
　時雨、姉……？
「時雨姉さん、何を?!」
　い、ぬ……？
「だってそうだろう？食事も、住処も用意してもらって、沢山の愛情を注いでもらえる……。でも、何も返すことは出来ない。まるで犬じゃないか」
「それ、は……」
　犬、なの？あたしは、提督の、犬……？
「僕達には精々、目一杯提督に尻尾を振って、提督の敵を噛み殺すことしか出来ないだろう？だから、飼い主である提督と対等にはなれない」
　提督は、偉い？あたしよりも、上……？
「そんな、そんな言い方って……！」
「何か間違ったこと言ったかな、海風。……君も、本当は気づいているんだろう？僕達の立場ってものを」
「それはっ……」
　そうだ、そう、あたしは、犬。提督の、飼い犬。道具なんかじゃない。沢山、可愛がってもらえる……!!
「……別に、強制する訳じゃないさ。提督の妻だと思うのも、恋人だと思うのも、娘だと思うのも……、全部、自分の勝手でいい。ただ、僕達は皆んな、提督には一生かかっても返せない恩があることだけは、忘れちゃ駄目だよ」
「……はい」
　犬、犬……、飼い犬、かぁ……。
　えへ、えへへへへへ、ちょっと、可愛いかも……。
「さあ、山風？もう分かっただろう？……僕達皆んなで、提督に服従し

ようじゃないか……??」
「……うん、分かった……??」
分かった。
全部、分かった。
そう言うこと、なんだ。

あたし達は飼い犬。
一生可愛がってもらえる、構ってもらえる。
一生幸せ。ずっと一緒。

だから、あたしは……。

あたし、は……??

９８話　のけものフレンズ

「……いやさ、確かに、新入りの子達から目を離してたのは認めるよ？でもさー？」
「あ……、だ、駄目、ここにいて、寂しいのは嫌、独りは嫌……。提督、提督、大好き……。ずっと、一生、側にいて……？」
「よぉ、司令！俺、司令の為に頑張ってるぜ！最近は、やっと出撃を許してもらったんだ！司令の邪魔をする悪者は、俺が全員倒してやるからな!!」
「大丈夫、僕は、僕だけはまともだ、まともなんだ。提督のことを助けられるのは僕だけなんだ……。なあ、提督？お前は、もっと僕に頼って良いんだぞ？そ、その代わり、僕もお前に頼るから、さ？」
「（病むのが）早過ぎませんかねぇ？」
おかしい、こんなことは許されない。
俺はただ、浜風の大きなおっぱいとか、ナイスバディの鹿島とか、かわいい野分とかとデートしていただけだ。
あと舞風と添い寝した。いやー、かわいい。予想通り闇を抱えていらっしゃったね。何でも、艦の頃を思い出して怖い、だとか。まあ、時間が解決してくれる系のやつだね。少なくとも、俺が近くにいると安心するらしいし。
と、このように、俺に特に落ち度はありません！
艦娘が勝手に病んだんです!!
……まあ、それもしょうがないことなのよね。
艦娘は、この世界に生まれても、親も友人も何もない。持って生まれた記憶は、戦争の時の陰惨なもの。そして、その使命は、深海棲艦などという未知の化け物相手に戦うこと。
そんな状態じゃ、少しでも自分を愛してくれる相手に依存するのはおかしくない話だろうよ。
例えば、音成鎮守府だって同じだ。
あそこの提督の守子ちゃんだって、まるで母親か何かのように甘えられているそうだ。

艦娘とは、愛に飢えた生き物なんだなぁ。
まあでも、音成はマシだよね。守子ちゃんは母性くらいしか求められてないもん。
ところがどっこい、ウチは違います。父性愛も兄弟愛も色恋も友情も……、艦娘個人個人によって異なるが、多種多様な愛情を求められるのよ。
例えばさ、あそこでこっちをじっと見つめている陸奥。
陸奥は、俺に、恋人としての愛情を求めているんだ。
あそこでお茶を淹れている鳳翔なら、旦那として寄り添って欲しいと思っているし、多くの駆逐艦は俺に父親になって欲しいと心のどこかで感じている。
まあ、女性が愛情を求めるのは当然のことだし、綺麗どころばっかりの艦娘を愛するのは良いんだよ。実際、楽しいしな。
でも、艦娘は……、
「……ねえ、提督？新入りの子達ばかりじゃなくて、私も構って欲しいわ？それとも、私はもう用済みなのかしら？」
際限無く、愛情を求めるんだよ……。
「いやいや、そんなこと無いさ。陸奥も近くにおいで？」
「うふふ、嬉しいわ……??」
愛情は劇薬だよ。無尽蔵に注ぐもんじゃない。要は、リハビリだ。今まで愛されなかった分を埋めてやる、それだけ。過剰にやると壊れちまうからな。
段々と量を減らして、真っ当な恋愛を楽しみたいんだがねー。中々、上手くいかないな。
でも、このまま皆んなで楽しい思い出を作ったりさ、一緒に楽しく暮らしていくうちにさ、どうとでもなるよ。多分。
「な、陸奥」
「え？、何が？」

と、まあ。

綺麗な綺麗事を並べておきました。
こう言うカッコいいこと言っとくと女の子にモテモテだぞ！覚えておこう！
さーて？どうしましょーか？新入りの子達にも、なんだかんだでセクハラは済ませたしー？鹿島のおっぱいの触り心地最高だったしー。
正直言ってウルトラ暇。最近は、深海棲艦もかなり強く、それでいて賢くなってきたけど、それ以上にうちの子達が強いんで、日本の近海からはほぼ追い出せたんだよね。
あとは、ちょこちょこ攻めて、深海棲艦の総数と支配領域を減らす感じかなぁ。日本海はほぼ開放で、ロシアや中国との海路が繋がったし、太平洋も大分攻略が進んで、オーストラリアまで到達したし。そろそろ、アメリカまでの海路を本格的に開放してみようかな。それとも、オーストラリアへの海路を盤石にするか。ま、そのうちね？
あー、暇だ。順調過ぎて暇。

あー。

あーあーあーあー。

よし。

農場に行こう。よく考えたら、最近、首輪付きに任せっきりだったな。
いかんいかん、ＤＩＹ精神が錆ついちまいそうだ。あ、そうだ。夏野菜を丸かじりしたいから、マヨネーズと味噌持って行きましょうかねー。
あとはやっぱり、酒だな！
いやー！碌に働かずに昼間から飲む酒は最高だなー！！！
×××××××××××

僕は、首輪付き。
首輪付きけもの。
物心つくときには、森にいた。
お父さんと、お母さんは、いない。
覚えているのは、桜の木。
桜の木の下にいた。
桜の木が、僕のお母さん。
僕は、小さいから、他のけものに狙われて。
でも、僕は、強いから。
殺して、殺して、殺して……。
やがて、山の中。
山の中で、一人きり。
色々、考えて、木を植えて、果物を植えて、野菜を植えて……。
山は、僕のお城になった。
でも、僕は一人きり。

ある日、強い奴が来た。
ぷらいまるあーまーも、くいっくぶーすとも、全部通用しない。
僕は、生まれて初めて、負けた。
けれどそいつは、僕を殺さなかった。
何故かは分からない。
……面白い奴。
そいつは僕よりも賢くて、色んなことを教えてくれた。そいつに着いて行ったら、友達もできた。
山の下にある建物に行けば、摩耶とか、ビスマルクとか、色んな子が遊んでくれるんだ。
そいつは、美味しい食べ物もくれるし、遊んでくれるし、面白いお話もしてくれる。
僕の、親友。
名前は、旅人、と。
そう、名乗った。

……最近は、会ってないな。つがいなのか、なんなのか、沢山のメスに囲まれて大変そうだし。

「うらやまパークにようこそ!!」

?!!

「君は農業が得意なフレンズなんだね！すごーい!!」

きゅ、急に、空から……。

相変わらず、行動が読めない奴だ。

「おいおい！てめーこの首輪付きよぉ!!お前そこは歓迎しろよなー!!例えば、そう、「ふわあああぁ！いらっしゃぁい！よぉこそぉ→裏山へ～！」みたいな？」

何言ってんだこいつ。

「と、言う訳で、夏野菜の収穫ついでに、ソーラーパネルの増設をします」

……まあ、陽射しが強いから、ソーラーパネルの増設は悪くないかもしれない。

「あ、司令官」

「よー、調子はどうだミカァ!!」

「良好です」

あ、そうだ。

僕の農場に、よくいるこいつ。

名前は、三日月。

農業を手伝ってくれるし、僕の言葉もなんとなく分かってくれる、いい奴だ。こいつも、僕の友達だ。

それと……、

「おーい！急にどうしたんだ司令ー?!」

「ま、待ってぇ……！」

赤くてうるさいの、あと、緑色のうじうじしてそうなやつ。見ない顔だな。新しいつがいを捕まえて来たのかな？まあ、良いや。旅人の連れてくるメスは、悪い奴じゃないから。

他にも、また、見ない顔が増える。
明るい銀色と暗い銀色が一人ずつ、黄色いやつ、紫のやつ……。
青白いのと、赤くてうるさいのがもう一人、それと、銀色で大きいのも一人。
黒いの二人、茶色いの一人。
……また、沢山連れて来たんだな。
つがいって、そんなに沢山必要なのかな？
「「「提督ー!!」」」
「ふわあああぁー・いらっしゃぁい！・よぉこそぉ→裏山へ～！・どうぞどうぞ！・ゆっぐりしてってぇ！・いやま〝っ←てたよぉ！・やっと艦娘が来てくれたゆぉ！・嬉しいなあ！・ねえなんにぃのんむぅ？・色々あるよぉ、これね、ビールサーバーって言うんだってぇ明←石に教えてもらったンの！・ここからビールが出るからそれを使ってにぇ」
「「「提督?!!」」」
「はっ?!・す、すまない、I．Qが著しく低下していた……。よかったら、ソーラーパネルの設置を手伝ってくれない？」
「「「は、はい！」」」
……それと、なんだか知らないけど、あいつが連れてくるメスは強い。人じゃないのかもしれない。
今も、大きなソーラーパネルを軽々と運んでいるし……、なんなんだろう。
でも、ソーラーパネルは重要だからな。ほっとこう。
「あー、終わったー!!・さー、ビール！・ビール！・冷えてるかー？」
いや、持って来たのはお前だろ。酒が冷えてるかなんて、僕に分かるわけないだろ？
「ぐう正論。……おっ、味噌美味え、やっぱり、この鎮守府に来た時から寝かせておいた味噌を引っ張り出して来て正解だったな。そろそろマムシ酒と……、果実酒もいけるな……、持ってこよ」
梅酒は？
「来年だなー。二年は漬けたい。その方がコクが出るしー」

ふーん。……あ、マヨネーズ美味い。自家製だ、これ。
「そ、その、昼間からお酒なんて……」
「いーのいーの！休みでしょ？たまには羽目外さなきゃね!!」
お前、羽目外してない時なんてないだろ。
「シッ、言わなきゃバレないから」
「……？、提督？その子とお話しですか？ふふっ、かわいい……、かわいい……、ワンちゃん？、いや、猫、です、か？」
あー、僕自身も、僕が何なのか分かってないし。強いて言えば、首輪付きけものって種族、かな。
「首輪付きは首輪付きだよ。それ以上でもそれ以下でもない。……さ、鹿島も飲んで、どうぞ」
「じゃ、じゃあ、少しだけ……」

「ふへ、ふへへへへへ、提督ー？貴方の鹿島ですよー??」
「ありゃー？司令が二人いるー？えへへへへへー、二人いるのかー！えへへへへー！」
「提督ー！どこー！あたしの側にいてー！うえええええん!!」
「ん、美味しいですね、これ。苺の果実酒ですか」
おい、どうするんだこの状況。
「よしよし！山風ー、俺はここだぞー！あ、鹿島、おっぱい揉ませて！嵐、今は、俺は一人しかいないぞー！」
あー、もう。
なあ、三日月も何とか言ってやってくれよ。
「こちらのオレンジの果実酒も甘酸っぱくて中々……、あら？どうしたんですか、首輪付きさん？……ああ、なるほど。司令官ですか？大丈夫ですよ」
えー。
「司令官は、艦娘に付きまとわれていつも大変ですから。ストレスの発散は重要です」
……お前は違うのか？お前も、その、艦娘なんだろ？
「私は、司令官に全てを預けているだけです。命令を頂ければ、全霊で

実行する、それだけです。自ら率先して言い寄ろうとは思っていません。……もちろん、求めて頂ければ、喜んで抱かれますけど」

ふーん、愛の形は人それぞれ、ってことか。

僕には分からないな。

分からないけど……。

「おう、首輪付き！飲んでるか?!飲めよ!!かなり良いリキュールで漬けたからなこの果実酒!!!美味い！飲んで!!!」

……やっぱり、こいつは面白い。

９９話　開け、冥府の門

まあ、アレだ。
「提督??聞いてください！私も、加古も、練度が９８になりました！あと、一つ！あと一つです!!」
「あと少しで、提督の仔を孕める身体になるんだね??よーし、頑張っちゃうよー！」
ヤバい。
ヤバくなかった試しは無いが。
いや、でも、今回はいよいよもってヤバい。
「い、いや、俺はほら、父親になんて」
「大丈夫ですよ！提督はきっと、素敵なパパになれます??古鷹が保証しますよ??」
「私達だってサポートするしさ、不安にならなくっても良いんだよ??」
違う、そうじゃない……!!
ウルトラヤバい！
でも、まだまだ女遊びしたいとか正直に言ったら殺される!!
どうする俺!!
クソッ、やだなー！ジャパリパーク的な優しい世界で女の子達と楽しく暮らしてーなー！心労のない世界に行きてえ！
……いや、本当にどうするか。もうパンツ無いんだが。またもパンツを剥ぎ取られてしまうのだろうか。
「んふー??提督ー??くん、くんくん……??あはぁ、いい匂い……??」
「すんすん……??良いよぉ、凄く良いよぉ??」
あー、もう駄目。既に上着脱がされた。
俺、いつも、黒のワイシャツにジーパン、上着に提督の軍服って格好なんだけどね、もう既に上着とワイシャツを奪い取られたもの。
もうワイシャツも無いんだよなぁ……。
手持ちのペンとかも、よくビショビショになってるし、枕とか布団とかも毎晩ビショビショだ。基本、俺の私物は無くなってるかビショビショか、だ。

枕元には何故か、適度に湿った女性用下着が置いてあったり、いかがわしいプロマイド写真が仕込まれていたりで、気の休まる暇もない。良いぞ、もっとやれ。

……まあ、スケベなのは良いんだ、大変健全でよろしい。

「ほ、ほらほら、離れて離れて！俺、これからお仕事だから！さあ、執務室、へ……」

「くんかくんか！すーはー！提督の、提督の椅子……！んっ、ああっ……??……はっ?!!て、提督?!」

「……何やってんの大淀」

「……さて？何のことですか？」

……ま、まあ、良いんだよ！性欲があるのは生命体として当然っ!!健康的で良いことだっ!!!

ほ、ほら、うちの艦娘は、そう、や、優しい！優しいんだ！皆んな良い子ばっかりで、

「提督、今回の出撃の件ですが」

「夜戦してもいい?!」

キチガ、いや、川内型のお二人である。我が黒井鎮守府の誇る、首置いてけ型軽巡洋艦、川内、そして神通。え？那珂ちゃん？どうせこの後取っ捕まって強制出撃だよ。可哀想に（他人事）。

「提督、御命令を」

「最近増えてきたレ級がターゲットだね！」

「う、うん、じゃ、じゃあその、チェスト水雷戦隊！」

「了解!!」

「チェスト水雷戦隊」とは、川内型の隠語で、「ぶち殺せ」の意である!!

「誤チェストには注意して下さいね、姉さん」

「うーん、チェストの前に名前訊くのは女々かな？」

「うふふ、姉さんったら。深海棲艦は喋れませんよ？」

「そうだね！あはははははは！」

や、や、優しくて!!良い子!!

「こんにちは司令官。これ、ル級フラグシップ改の首です。……この

尻尾、本当に便利ですね。今まで自分に尻尾が無かったのが不思議なくらいですよ」
最大戦力の一人と化した、三日月ルプスレクスだ。
最近艤装に取り付けたテイルブレードがお気に入りらしく、顔面をズタズタに引き裂かれた深海棲艦の頭が、数珠繋ぎでぶら下がっている。
飼い主によく懐いた犬の様に、テイルブレードをぶんぶん振っているけど、その度に深海棲艦の脳漿だの髄液だのが飛び散る。やめて。
「あら？三日月ちゃん！素晴らしい戦果ですね！私達も見習わなくてはなりませんね、姉さん！」
「そうだね！えーと、首を詰める麻袋は、と」
……ほ、ほら！その、乱暴なところも確かにあるよ？け、けど、これくらいは普通だよ！
そ、そう、そうだ！
ご覧の通り、うちの艦娘は仕事熱心なんだよ!!海の平和を、人々の安寧を守る為！日夜戦ってくれてい、
「ご主人様ー！夏コミ行きましょーー！」
「ふ、ふふふふふ！間に合った！間に合ったぞー!!これで印刷所に土下座せずに済むっ!!!」
「えぇー、夏コミー？良いよ私はー。通販で買うからさー」
……あっ、そういや、夏休みあげたんだっけ。
働いてねーわ、人生エンジョイしてるわ。
クソ、どういうことだ？
仕事やってねえぞ!!（俺も含めて）
え？金？
いやあ、艦娘による安全な貿易ルートの確保によって荒稼ぎとか、東城会との繋がりとか、そういうアレじゃないよ？うん、違うよ？
合法だぞ！違法スレスレだけども。
しかし、全く！何なんだこの子達は！たるんどる!!
「漣！秋雲！望月!!」
「「はい？」」

「暑いから水分補給を忘れないようにな!!」
「「はーい」」
全くもう！
……さて、コスプレの用意するか。
「くくくくく、ふはははは、はーっはっはっはー!!!」
やっと！
やっと！
やっと出来た!!!
この私、明石と!!
親愛なる提督を繋ぐ!!!

結婚指輪が!!!!

練度上限の解放？そんなもの、副産物に過ぎませんよ。
大切なのは、そう！
絆!!
あの人と、提督と繋がる、強固な絆です!!!
提督に愛されているという証拠!!!

一応、人数分は用意しましたが……。
一番最初に指輪を渡して貰うのは、この私！明石です!!
だって、提督に最も愛されている道具は、この私ですから!!!
これは、所謂、儀式なんですよ！男性が女性に指輪を渡す、ロマンティックで素敵な儀式!!
本物の戸籍も、家族も、過去の思い出も何もない私達艦娘と出来る、唯一の儀式……!!
その名も!!!

ケッコンカッコカリ……!!!!

１００話　ケッコンカッコカリ

『私達、結婚しました！』

ふーん、あいつと、あいつ、あいつも結婚したのか。

馬鹿だなー、結婚イコール人生の墓場だぞ？結婚なんて、夜は楽しいかもしれないが、昼は退屈だ。

独り身が一番良いね、楽だ。家庭だの何だの、そういうのがあると旅人なんざやってられんからな。

……っと、ドアノック。

機械油と鉄の匂い、明石の匂いだ。

「入って、どうぞ」

「失礼します！……提督??突然ですが、この指輪を、私に渡してくれませんか？」

「え？ああ、構わないけど……？」

「では、この書類も、私に渡して下さい！愛の言葉を添えて……??」

ふむ、ケッコンカッコカリ、と。

……ふむ。

「すまんな明石俺は用事が」

「そういうの良いんで」

痛い痛い痛い痛い！肩!!掴まんといて!!

「さあ、早く、渡して下さい??」

畜生、嫌な予感はしてた！

何を隠そう、黒井鎮守府の艦娘は最近、どんどん練度がカンストしていっている!!

目の前の明石も例外ではない!!

「さあ、早く、早く渡して下さい??一番に、この明石に、一番最初に??」

この、一番に、と言うのが大変よろしくないポイント！

ちょっとでも順位を付けたり、特定の艦娘を特別扱いしたら、他の艦娘の不満が爆発！鎮守府も爆発!!

冗談抜きでこの鎮守府が更地に、いや、クレーターになるのは皆んな知ってるよね！

……今までずっと、艦娘に優劣を付けずにやってきた。言うなれば、全員を特別扱い。嫉妬深い子とも上手くやってきたし、最近は皆んな、ある程度はまともになってきたのに。監視の時間も、カメラと盗聴器の数も、ストーキングする艦娘の数も減ってきたと言うのに！

「こんなことしたら皆んなに怒られちゃうだろ!!」

もう許せるぞオイ!!!

「だから、そう言うの良いですから。早く、早く、早く」

急かさんといて!!

……さー、どうすっかな、考えろ俺。

なあに、弁護士やってた頃はよくやったわ。頭の出来は悪かねえんだよ。

うーん、そう、そうだな。

発想を逆転させてみよう。

「平等じゃなくなるから、ケッコンカッコカリしない」のではなく、「全員とケッコンカッコカリして平等にする」……、これだ!!

ならば、指輪を渡すタイミングはどうだ？分身くらいなら可能だが、流石に、ここの艦娘全員に、同時に指輪を渡せるほどの数は無理だ。

……そう、そうだな、なら、いっそ、同時じゃなくても良いんじゃないか？

つまり、結果的に、艦娘全員が同タイミングで指輪を手に入れられれば良いんだ。直接手渡しする必要はない。いっそ、寝ている艦娘の枕元にでも置いておけば良いんだ。

「明石、それ、作った指輪は一つだけじゃないよな？」

「はい、お優しい提督の事ですから。工廠に全員分用意してあります。……ですが、一番は」

「よし、工廠だな！じゃあの!!」

そしてすかさず飛んでくる釘。

「逃がしませんよ」

「ギークガン……!!」

明石特製の釘打ち銃、モードの変更で兵装としての使用も可能……!!
「すみません、提督。……ですが、貴方は簡単には死なないでしょう？本当に、本当に本当に本当に心苦しいのですが、逃げるようでしたら、手荒なやり方を……」
デッカースパナ、か。超硬合金のスパナだが……、明石のパワーによって振るわれるそれは、武器と言って良いほどに強力だ。
「行きます……、はあっ!!!」
明石のパワーと装甲は、度重なる改造と改修で、並の戦艦以上!!だが!!
「スピードはまだまだだな!!」
「くっ！やはり、掠りもしない……!!」
異常に肥大化した炉心や装甲を抱える明石は、如何に新型スクリューなどで機動力を補ったとしても、まだまだ遅い!!!
「悪いが、少し眠っていてくれ！眠りの手!!」
フィート、あなたは催眠をかけることができる、なんてな!!
「くっ、あ、あ……!!、え、えいっ!!!」
ん？何だ？何を握り潰した……？
「ふ、ふふふ、これは、電波妨害装置ですよ……。他の艦娘に、折角の、提督の告白シーンを邪魔されたくありませんでしたから……」
成る程な、そりゃそうだ。ケッコンカッコカリなんて知れば、艦娘達が大挙して押し寄せてくるのは容易く想像できる。
「で、ですが！この、電波妨害装置を破壊すれば！今まで妨害されていた映像と音声が一気に放送されます……！」
「えっ、何でそんなことしたの?!」
やめてよ!!
「ほ、他の艦娘に、じ、自慢したかったんですよーだ……。あ、も、もう、駄目、眠、い……」
じゃ、じゃあ……？
「「「提督、指輪を」」」

「……あー、まず、ね。そこは、ドアじゃないかな……？」
ええ、ええ、執務室の壁、吹っ飛びましたよ、ええ。

……まず、俺のやることは、工廠から指輪を取ってくる。
そして、最難関、艦娘を全員眠らせる!!眠りの手なら、半日くらいは眠らせられる筈だ。だから、半日。半日で、この鎮守府の艦娘を全員眠らせる。
その後は簡単、眠った艦娘の懐に、指輪を突っ込んでおく。書類は谷間に挟んどきゃ……、あっ、駆逐艦（と龍驤など）……、ま、まあ、うん、臨機応変に。
……最早、ケッコンカッコカリは、艦娘全員に知れ渡っただろう。
正面衝突は避けられん。
正直、艦娘とは、まともにやり合ったら勝てないんだ、俺は。だが、眠らせるくらいなら十分可能。各個撃破ならやりようがある!!
「提督のハートを掴むのは、私デース!!!!」
「チィ!!!!」
クソ、金剛型!!四人で来やがった!!この強さに、抜群のチームワーク、キツイな……!!
だが!!
「では、司令。大人しく、捕まっていただきます!!」
「ごめんなさい、司令！でも……!!」
霧島も、比叡も、かなりの威力のパンチだ。
でもな、教えてやる。
「力には技!!」
「なっ!!?!!」
簡単だ、逸らして、眠りの手で触れる。
「くっ、やっぱり、一筋縄では行きマセンネ!!!」
「なら、これでっ!!!」
金剛、榛名。素晴らしい技量だ。
だが、相性で勝れば怖くない！
「技には魔法!!」

「「ああっ!!」」
魔法「ビット」で気絶させる！
「くっ、む、無念、デース……」
完　全　撃　破　！
いやあ、助かったぜ、アルガス騎士団の団長さんよ。他人の教えは聞くもんだな。
さあ、次だ、囲まれないように絶えず移動せにゃならん。

「やあ、提督。……僕が何を言いたいか、分かるよね？」
「指輪、ちょーだい！私達と、幸せになるっぽい！」
「そんな、結婚だなんて、うふ、うふふふ……??」
「ですよねー」
感知能力に優れる白露型だ、見つかるのは当然だよねー。
「さあ、行くよ、提督!!」
「悪いけど、死なない程度に痛めつけるっぽい！ごめんね!!」
「手足の一本二本なら、直ぐに治っちゃうもんね、司令官は……。その、ごめんなさい!!」
くっ、分かっていらっしゃる!!大正解ですよ!!骨なんざ一本二本なら直ぐに治せる!!大して痛くもない!!
「だがよ、そりゃ駄目だ！」
即座に唱えた魔法は、テレポートアザー。眼前の相手をテレポートさせる魔法。
「えっ?!あっ、し、時雨?!」
「なっ?!ゆ、夕立！」
目の前の夕立を時雨の前に！後ろから迫る春雨は！
「キャーッチ！アンドリリース!!」
「え？ふ、ふにゃあ?!」
そしてこう！
《見捨てられし上位者よ！星の娘よ！エーブリエタースよ!!》
「エーブリエタースの先触れ」!!触手の召喚!!
「「ひゃあああ?!!」」

プロデューサーさん、触手プレイですよ！触手プレイ!!
「それじゃ、お休みー」
「はぁ……、やっぱり、提督には敵わない、か……」
「むー、殺すのは得意だけど、捕まえるのは苦手っぽいー……」
「ううー、やだー！司令官は私と結婚するのー！あ、あう……」
あー、危ねぇ。殺す気で来られたらヤバかったかもな。白露型は殺すことに特化してるし、な。
おら次ィ!!

「……来たか」
「ふ、ふん！北上さんと結婚だなんて、認めないわ！だ、だから、ちゃんと夫婦生活が出来るか、私がテストするの!!ほ、ほら、早く指輪を渡したらどうなの?!」
「えー？私、提督と結婚したいんだけどなー？大井っちも、木曾も一緒にどーお？」
工廠前、雷巡の三人か！
「……あの、さ、後でちゃんと渡すからさ、ここはどうか退いてくれないかな？」
「……すまんが、こればっかりは、な。……俺も、女だ。お前の一番になりたい……!!」
「……は？何言ってるの？良いから指輪を渡しなさい？」
「あはははは―、ごめーん、皆んなやる気みたいだしさー。ま、提督の一番ってのもキョーミあるからさー、ね？」
説得は失敗、と。
それじゃ、やっぱり？
「「提督、覚悟!!!」」
うへえ、泣きそう！
「バトルウイング!!」
ありゃ駄目だ、並の攻撃力じゃねえ。当たっちゃならん、絶対回避。

まるで生き物のように動くマント！物理法則もあったもんじゃねえな!!

「余所見は！」「駄目だよー？」

「ぬううぁ!!」

蹴りが重い……!!軽巡とはなんだっとのか!!!

下段と上段への蹴りの連打！脚と片腕が塞がれた!!

「よし、姉貴！そのまま抑えていてくれ！おおおお！トマホーク!!ブーーーメラン!!!!」

あっ、ヤバっ！えーと、えーと！そうだ!!

「鞏家兜指愧破千歩氣功拳!!!」

拳に集中した氣を放ち、飛来する大戦斧と相殺!!

「っ!!?!ま、まだだっ!!!」

武器を失っても向かって来るか。その意気は良し！

「そんな頑張り屋さんな木曾には手榴弾あげちゃう！」

「……え？」

ま、お得意の閃光手榴弾だけども。

「ハイパーズにも、ほい！」

「なっ!!?」

「ちょ、ちょっ、待っ……!!!」

フラッシュ・バン・アラカザム、なんってな！

まだまだ、搦め手には弱いねぇ。残念だが、強い奴よりも上手い奴の方が生き残れるもんさ。はい、眠りの手、と。

さて、指輪はゲットした。強い艦娘は大体ダウンさせた。後は……。

「司令官！吹雪です！指輪を下さ、あふん……」

「結婚！Ｈｅｉｒａｔ、ですね！ろーちゃんとＨｅｉｒａｔしましょ、ふにゃぁ……」

「さあ！提督！この足柄と結婚するのよ！大丈夫、花嫁修行はバッチリなんだから!!（男に）飢えた狼なんて誰にも言わせ、はひぃ……」

数をこなす。半日以内に。
幸い、手伝ってくれる子もいる。
「司令官、睦月型の全員が眠りました。……如月姉さんは最後まで駄々を捏ねていましたけれど……、今度、夜景が素敵なレストランでデートしてくれれば許す、だそうです」
「提督ー、羽黒さんの説得、終わりましたよー！かなり逃げ回られちゃって、大変でした……。相変わらず、姿形はもちろん、匂いも音も気配も全部、完全に周りと同化しますからね、頑張りましたよ」
「古鷹ー、提督ー、五十鈴も説得を聞いてくれたよー！明日の朝を楽しみに待ってる、だってさー！」
三日月、古鷹、加古……。要するに、一番になることを望んでいない子達だ。この子達に、俺の計画を話して、力を貸してもらっている。
「おー、ありがとー！助かるわー！今さっき、陸奥を眠らせたから、もう後ちょっとだー！」
さあ、説得して回ろう。
……「なるほどなぁ、艦娘に順位を付けたくない、かぁ。相変わらず優しいなぁ、キミィ。よし、じゃあ、たまには早く眠ったるわ!!明日の朝、楽しみにしとるでー!!」
……「はい、了解しました。提督の御判断は正しい事です。一番になれないのは、少しばかり惜しいですが……。私も、加賀さんも、皆んなが一緒に一番になれるなら、それで良いんです」
……「……一つだけ、約束して頂戴、Ａｄｍｉｒａｌ。……これからも、このウォースパイトを、愛して欲しいの。……ふふふ、良いのよ。この艦隊、とっても気に入っているの。まるで、家族ができたみたいで……。皆んながＡｄｍｉｒａｌとｍａｒｒｉａｇｅ、素敵なことよ」
あー、助かる。
……艦娘同士は大変仲が良い。当たり前だ、唯一持って生まれた、戦時中の記憶の中の存在なんだからな。
艦娘は、この世界の何者とも繋がりを持たずに生まれてくるが、艦娘同士は、強く繋がり合っているんだ。言うなれば、かけがえのない

戦友で、共に笑い合う親友で、何よりも大切な家族なんだ。
裏切ることも、いがみ合うことも、できないんだろうよ。
それでも、提督の一番になりたいのは皆んな一緒。ならば、恨みっこなし、力づくで手に入れよう。とかいう流れだったみたいだが。
でもまあ、しっかりと理性ある存在なんだ、説得には応じてくれたよ。皆んな、口を揃えて、「皆んなで貴方の一番になりたい」だとさ。
……俺には、過ぎた女の子ばっかりだなぁ。
「……悪いね、説得に付き合わせちゃってさ」
「良いんですよ！……その代わり！仮とはいえ結婚なんですから！私のことも、加古のことも、もちろん、他の皆んなのことも……。誰よりも、一番に愛して下さいね!!」
「……ああ、愛しているよ、古鷹も、皆んなも、ね」

あの、実は俺さ、もう五、六回結婚とかしてるんだよね……。
絶対に黙っとこう……。

１０１話　公開処刑

『ハーッハッハッハ！道化よ！また結婚したのか？なんかもう五、六回くらい結婚してるような気がするんだが？女なんぞ碌なものでは無いぞ、我なんて、結婚を断ったら結果的に親友が死んだからな？』

『?!　ま、また結婚したんでありますか?!ケロロ小隊一同、お祝いするでありますが……、その、えーと……、こ、今度は、上手くいくと良いでありますな!!』

『まただよ（笑）』

ふー。

はいはいはいはい。

「……なんでバレてんねん!!!」

言ってねーぞ!!!俺は誰にも言ってねー!!!大体にして、ケッコンカッコカリだ!!法的な拘束力はねえ!!!

『……確かにおれは、元教え子のお前に、まともに働いて欲しいと思っていたが……。まさか結婚するとはな。しかも、こんなにも沢山の女と……。やれやれだぜ……』

『押忍！新台さん！ご結婚、おめでとうございます!!戸籍のない艦娘達と事実婚とは、予想外のことですが……、それでも、お祝いの言葉を。親父にも、伝えておきましたよ』

『新台君、結婚したのー？もー、言ってくれれば良かったのにー。今からでも、お祝いの品とか送るからね。また、艦娘の子達を連れて遊びにおいでー！あっ、メダリオくん、カーメンマンくん、喧嘩しないのー！もー、今度は何したの？』

あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!!!

逃げ場ねーーー!!!!

どういうこったよ!!!一体何が起きたんだぁぁぁぁぁ!!!!

「号外ー！号外ですよー!!この度、黒井鎮守府の艦娘全員は、司令官と結婚しましたー!!!」

アオバワレェ!!!!
「んあああああい!!!!ストオオオオオオップ!!!!」
「ひゃん??こんな時間からだなんて、大胆ですねぇ、あ・な・た??」
「ど、どこまでやった？」
「？　どこまで、とは？」
　と、とぼけやがって!!もう許せるぞオイ!!
「さっきから電話だのメールだのがひっきりなしに届くんだよ!!!一体誰にケッコンカッコカリについて話した?!!」
「ああ、そういうことですか！」
　そうだよ（瀕死）。
「大丈夫ですよ、ツイッターとインスタとフェイスブックと黒井鎮守府公式サイトに掲載して、司令官の知り合いにも、私達が知っている限りの方にはお葉書を送っておきました！」
　大丈夫の意味分かってる君？それは、大丈夫じゃないよ、駄目って言うんだよ？
「……なんでそんなことしちゃったの？」
「お嫁さんですから！気を利かせておきました!!」
　裏目ッ!!!
「なんてことを、なんてことを……」
「わー、ツイッターの通知凄いですねー。百万リツイートですって」
　馬鹿じゃねーの?!
「そ、そうだ！ケッコンカッコカリには法的な拘束力がないことをしっかりと明記して」
「はい！ちゃんと書いておきましたよ！」
　手渡される新聞。
　……ふむ。
　……あー。
　……はい。
　その、ね。青葉の新聞は、衣笠と作っているらしいんだけどもね？
　兎に角、文章力が高いのよ。分かりやすく、読みやすい。
　で、今回の内容は、如何に艦娘達が恵まれない状況にあったか、と

か、そこに颯爽と現れた俺のこと、とか、ケッコンカッコカリは仮のものだが、艦娘は心から喜んでいるとか、最早これは事実婚で、艦娘と俺は本当の夫婦以上の強い絆で結ばれているとか……。
　真実を絶妙に織り交ぜた文章は、現実味を帯びながらも、まるでドラマや映画のように感動できる内容だ。要するに、大衆ウケするってこと。
「私の新聞は、軍規に触れることは書きませんから！これを機に、バックナンバーの一般公開もしましたよ！反響、凄いです！」
　そりゃあな!!どこどこの海域を開放しただの、艦娘毎の深海棲艦撃破数ランキングだの、大本営が公開しない、一般の人が喜びそうな内容でいっぱいだもんな!!
「……でも、ポッと出の女が、司令官の話をするのは気に入りませんね、潰したくなっちゃいます！……あ、もちろん、実際にはやりませんよ！ただ、かなりムカつくなー、と思いまして！」
　あー、今日の司令官コーナーか。俺の写真なんざ、一般公開すりゃ、女の子の目にとまるのは仕方ないわ。だって俺、イケメンだし。いや、自慢じゃなくて。本当にモテるんだよ。
　……ん？あれ？
　じゃあ、俺、気軽にナンパできなくなったってこと？
　……え？
「あ、この女なんて、ツイッターで司令官にナンパされたとか呟いてますね！こんな下らない嘘をつくなんて、最低です！実際に会ったら、首を捩じ切っちゃいそうです!!」
　……すまぬ、覚えがあり過ぎて、誰が誰だか……。ナンパなんて、星の数ほどやったわ……。いや、言ったら殺されそうだし、シラを切る他ないけど。
　あー、もうやだ！俺もうこれじゃ、異世界くらいでしかナンパできないじゃんかよ!!
「？　どうかしましたか、司令官？困ったことがあれば、青葉にお任せです！」
「あ、ああ、いや、もう、なんでもないよ、なんでも……」

一瞬、財団に乗り込んで、記憶処理装置を全世界にばら撒くことも考えたけど、そんなことやったら後が怖いし……。
「そうですか？私は、いつも笑ってくれている司令官が大好きですから！これからも、ずっと私達の側にいて下さいね!!」
良い子なんだよー!!
「じゃ、今撮った司令官とのツーショット、ツイッターに上げますね。……『旦那様と一緒に』、と」
余計なことしなけりゃなーーーー!!!!!

どうしよ。
もう、本当に、どうしよ。
逃げ場がない。
さっき、街に行ってみたけど、テレビ局だの、よく分からん活動家だの、単純なファンだの……、いろんな奴に絡まれて大変だった。
「もう俺、これからどうすりゃ良いんだか……」
「は、はあ」
「……君、嫌な事がある度に、音成鎮守府に逃げてくるのは、癖なのか？」
「ずるいずるい!!私も結婚する！旅人さんと結婚するのー!!」
いや、だって、近いし……。
ヤーナムとかノースティリスとかでも良かったんだけど、アイテムとか魔法とか使わずに行ける音成鎮守府で良いかなって。
「あ、ああ、それじゃ、阿賀野にも指輪をあげよう」
「わーい！やったやったー！……そ、その、で、できれば！できればで良いんですけど……、ちゅー、してくれませんか……？」
かーわいい！
「ん、じゃあ……、これで良いかな？」
「んーっ??は、はい……??」
わーい！阿賀野ちゃんかーわいいー!!
もうね、頭空っぽでＩ．Ｑ．を植物並みくらいにしないとやってけねえよ、これ。

「……あ、私にも指輪をくれないかな」
「わ、わらわにも、渡してもらって構わんぞ？」
「子日だよー!!」
もちろんあげちゃう。
今の俺はＩ．Ｑ．マイナス８１０くらいだから。
もう半ば自棄になってるよね。
「だ、大丈夫ですか……？」
心配してくれるのか、守子ちゃん。流石、音成鎮守府の提督だな。
凄い母性だ。
「いや、ね。折角だし、これを機に、色々やってみるよ。……上手くいけば、艦娘達を社会に出せるかもしれないし」
……いやあ、今回の件で思い知ったね。世の中には、艦娘を見たこともない人ばっかりなんだ。
活動家の連中が、「あんな小さな子を戦わせるなんて」とか言ってたが、事実、その通り。
何も知らないから的外れな意見を言えるんだろうけども、何も知らない人が大多数なんだ。いっそのこと、「艦娘は、人よりちょっと力が強いだけで、普通の女の子と何ら変わらないんですよ」みたいな触れ込みで社会に出してやるのも良いかもな。
やっぱりさ、人の形をして生まれてきた以上、人としての幸せを享受しても良いんじゃないかな。
「守子ちゃんはどう思う？」
「そう、ですね。この戦いがいつ終わるかは分かりませんが、でも、いつかは終わるはずです。その時、艦娘達に社会に出てもらうのは当然だと思います」
そーなんだよなー。俺は旅人なもんで、態々社会に出なくても、色んな国や世界で生きて行けるから良い。いっそのこと、野山で狩りや農業をして、一人きりで生きることも十分可能だ。
でも、普通の人間ってのは、社会に奉仕して、社会に支えられて生きるもんなんだよな。
だから、この戦いが終わった時のことを考えると、艦娘達の社会勉

強は急務。皆んな、戦いが終わっても生き続ける訳だし。
さっきも言ったように、艦娘がどういうものなのか、社会の皆さんはご存知でないらしいんでね。社会に出すのは簡単だろうよ。
まあ、あれだ。
カッコカリとはいえ、結婚しちまった訳だし。結婚相手の面倒くらい見てやらなきゃな。

はー！嫌だー!!結婚したくなかったーーー!!こんなことになるならやめときゃ良かったーーー！面倒臭えーーー!!!一体どうしてこうなった!!!?もー嫌だ!!!後で旅に出る!!!サバンナ行ってくる!!!コスタリカにも行く!!!自然を感じて癒されてくるのおおおお!!!!

１０２話　黒井鎮守府では、常識にとらわれてはいけないのですね！

ただいま。

いやー、サバンナ。

力強く生きる動物達の生命の息吹を感じたな。アフリカ特有の動物達の、弱肉強食や食物連鎖から見られる命の円環は、厳しいが、この星の絶対の法則であるように思ったね。だけど、それ故に、これからも強く生きて行こうと思えたね。広い草原をジープで駆け抜けながら見る大自然は、本当に素晴らしかった。

コスタリカも良かった。

多数の固有種が存在する熱帯林は、近年の環境保全活動により拡大し、その美しさを取り戻しつつあった。人類は愚かで、自然を食い荒らすものだが、その自然を元に戻せるのもまた人類なんだな、と。夜の静かな熱帯林からは、確かな命の力を感じたよ。掛け値無しに美しいところだった。

さて、艦娘達の社会進出、だったな。

まあ、大丈夫だろうよ。皆んな本当に良い子だ。少なくとも見た目が良いのはかなりのアドバンテージだし……、頭も悪くない。体力もある。

一応、一般常識と基礎学力の確認くらいはしておくか。

「よーし!!艦娘皆んなに一般常識のテストをさせるぞ!!さあ！会議室へＧＯ!!」

まあ、余裕っしょ。特に問題がある子はいないね。

「まあ、余裕っしょ」……、そう考えていた時期が、俺にもありました……。

「オイオイオイ」
死ぬわオレ。
えっ？なにこれは。
一般常識テストの平均点、３０点？これ、満点は１００点だよね？
え？
３０点？全国平均の半分くらい？
嘘だろ？
「どうしよ……、これ。え？いや、本当に、どうすんのこれ？」
「その、大丈夫ですか、提督？」
休憩室でテストの結果を抱えて、ついでに頭も抱える俺を心配する鹿島。鹿島は、両方のテストでほぼ満点を取ってくれていた。少なくとも、中高生くらいの学力はあるし、マナーもバッチリ。やはり、社会経験があるからだろうか。
「いや、だってさ、どうすんのこれ？基礎学力の方はまだしも、一般常識の方!!いかんでしょ!!」
そう、基礎学力の方は、大体平均５、６０点くらいだったんだが、問題は一般常識!!
どうなってんだこれは!!
……傾向を見ると、どうやら、国語力はある程度大丈夫みたいなんだが……、問題は社会と時事!!英語も駄目な子が多いし、文化とかも駄目っぽい!!理数分野は、まあ、そこそこ、か。
「うわー、完全に予想外だ。まさかここまでとは……」
「……うわぁ、本当だ……。その、かなり、点数が……」
かーなーり、酷い。総理大臣の名前を知らないとかザラだからね？
「失礼します、司令官。睦月型の答案を受け取りに来ました」
ミカァ……。
「三日月、今の総理大臣は誰だか分かるか？」
「すみません、存じ上げません」
即答である。
「剣桃太郎さんだよ、覚えておこうな……」

「はい」
そうなんだよ、この子達、現代にあまり興味がないんだよ。
あそこでスマホを弄ってる鈴谷とか、ゴロ寝しながら2ちゃんに入り浸る漣とかは少数派。
皆んな、世の中の動向にまるで興味がない……。
現代に溶け込もうともまるで思っていない。
今幸せだから満足だ、と言うがね、明日も幸せかどうかは誰にも分からないんだ。色んなことを知って、真っ当に生きて欲しいな。明日も幸せに生きる為にさ。
「なあ、長門よぉ！」
「む、総理大臣は変わったのか？私の記憶だと、東條英機殿だった筈だが」
「へぇ、素敵な方ね。でも、ちょっとおじさんねぇ。私は、提督の方が良いわね」
長門、と陸奥!!
……東條英機て。戦時の総理大臣じゃねーか。常識が昭和かよ。
「知っとこうよ、そこは……」
「あー、すまん。興味が無くてな……」
「私も、ファッション誌くらいしか読まないし……。大体、社会がどうとか、今まで考えたことも無かったわ」
でもまあ、しょうがないのかもな。この子達は、自分のことを兵器だと思ってるし。俺に使われれば、俺の言うことを聞けば万事安泰、みたいな。
うーん、聞き分けがいいのは嬉しいけど、やっぱり俺は自分でものを考えられる、自立した人が好きかなぁ。
「まー、長門はバイトしてるし、社会に出れるかどうかっつったら大丈夫なんだろうけど……。最低限の常識は身につけた方が良いよ？」
「むぅ、すまん」
「うーん、私も、何かやってみようかしら？」
そうなんですよ、うちの長門はバイトやってるんだよ。近くの工事現場で。たまたま、知り合いの土木作業員に会ったから、その伝手で。

いやー、代わりに性的な意味で襲われそうになったけど、まあ、一命を取りとめたわ。
ありがとうタカさん。
え？戸籍がない艦娘が働けるか、だって？ははは、何のために会社作って利益あげたと思ってんの？
偉い人の頬を札束でビンタして接待って言い張れば、戸籍の一つや二つ、合法的に作れるもんだよ。
因みに、バイクが趣味の霧島とかは、かなり喜んでた。公道を走れるからって。
「聞いたところによると、鹿島と、霧島もバイトやってるとか？」
うちの艦娘は大学生並みに時間的余裕があるからな。バイトなんてやろうと思えば（いくらでも）。
「はい！私は近くのローソンでアルバイトをさせていただいています！あ、も、もちろん、黒井鎮守府からお給料は十分以上にいただいてますけど！その、社会経験を積んでみようと思いまして……」
「すごいなー、憧れちゃうなー」
鹿島、偉い子。
「ふふふ、ありがとうございます！……私、提督には私のヒモになっていただきたいんです！提督に沢山甘えてもらって、一生面倒を見ていたいな、と思ってます??」
んんー？
「暴力を振るっていただいても、無理矢理犯していただいても構いません！私の全ては、提督の為にあるんですから??」
んんんんんー？
「き、霧島は？霧島は何のバイトを……」
改二になって背が伸びた霧島は、真面目でしっかり者。ちゃんと一般常識のテストも高得点を取っていたし、大丈夫だな。
「あら？ご存知無いのですか？真島さんはしっかりと伝えておいたと言っていましたが……」
……真島？まさか、真島のアニキ？
「私は今、東城会直系真島組で働いています。主に、賭博場の警備など

を担当していて、最近は賽の河原などが多いですね」
「あ、あのさ、違法行為は」
「大丈夫ですよ、ガサ入れがあれば、身元を押さえられる前にサツを半殺しにしますから。それくらいの腕はあります」
何言ってんのこの子?!!
「い、いや、ほら！艦娘は護国の為にって、いつも言ってたじゃん?!」
「存じ上げませんね」
良いのかそれで!!!
「私は、この国に仕えているのではなく、司令に仕えているのです。司令の為ならば、この命、惜しくはありません」
そ、それは、その、ね？
「な、なあ！長門もさ、護国の為に戦うのが艦娘だって……」
「……私も、そう思っていたんだがな。かつて、護国の為に散った英霊達のことも、私達艦のことも、今は誰も知らないし、何とも思っていないじゃないか……」
「そりゃあ、そうだが……」
現代人なんて、そんなもんだ。戦争と言う所謂痛ましい記憶は、なるべく思い出したくないんだろう。
「きっと、この、人の形で生まれてきたのは、貴方に仕える為なんだと思っているよ。……もちろん、この国も護ってみせるさ。大分変ってしまったとはいえ、私達の愛した日本だからな。でも、一番は貴方だ……??」
んあー、そっか。
変ったもんな、日本。
人の心は荒み、モノに溢れ、自然を破壊し……。艦娘の目には、今の日本がどう見えてるのかね。
でも、今の日本も捨てたもんじゃないって、ちゃんと教えたはずだ。
テロだとか、そういうことは考えてないみたいだし、良いだろう。
護国の為に、っていう考え方にとらわれずに、自分のやりたいことをやってほしいなー。

「では、恒例の大本営攻略会議ですが……」
「はい！青葉ちゃんの調査の結果、ここと、ここの警備が薄いですね！」
「大将はコイツか……、コイツの首をへし折れば、提督に安寧がもたらされるんだな……？」
……まあ、ヘイトの大半は大本営に行ってるみたいだし、大丈夫か。
自業自得だね、うん。

１０３話　レッツパーリー

「はぁ、お祭り、ですか」
「確かに、今は夏で、そろそろ秋ですけど……」
「どうして急に？」
「それに、私達に屋台を出して欲しいとは、どういうことデスカー？」
　あ、そうなんだ？それが何か問題？
　と、切り捨てたいのは山々だが、そんな酷いこと、俺にはできない。
　理由の説明をすると、まあ、そうだな……。
「だって君ら、戦争が終わったらどうするの？」
　そう、艦娘達の将来について、である。
「「「結婚します」」」
「あのさぁ……」
　社会進出して、どうぞ。
　えっ？旅人？うるせー、俺は良いんだよ、俺は。
「いやね？駆逐艦とか、軽巡とかは、まあ、学生で通じるじゃん？けどさ、重巡以上は、もう、戦争が終わったら社会人かなー、って」
「まあ、確かに……」
「私達の見た目は大人ですからねー」
　だって愛宕とかさ。あのおっぱいで学生は無理でしょ。
　それに、妙高型なんて、私服だと完全にＯＬだからね。最上型は高校生くらいだが。金剛型の諸君も、まあ、大学生くらいに見えないこともないが……。
「大学生って手もあるけど？どう？」
「ひえー！わ、私、その、勉強は苦手ですー！」
「うーん、特に学びたいこともありマセンネー」
　とのこと。今回は、夏祭りを通して、社会進出の足がかりを作って頂けたらな、という所存ですの。
　一般常識は、まあ、後々ね……。
「まあ、良いデショウ。……聞いた話によると、今の時代は、夫婦の両

方が働くのが普通だトカ……」
「ひ、ひえー?!そ、そうなんですか金剛お姉さま！は、初耳です！」
「私は、主夫というものがあるとテレビで見ましたよ！何でも、夫が家事や子育てをして、妻が働くんだとか……」
「なるほど、司令が家で出迎えてくれるなら、幾らでも頑張れますからね。効率的な考えです」
よし、よく分からないが、納得してくれたみたいだ。
「じゃあ、何をやるか決めておいてね。材料費は経費で落とすからさ」
「「「はい！」」」

まあ、こんな感じで。
……「えっ？ア、アタシ?!い、いや、急に屋台なんて……」
……「あら～？面白そうじゃない、摩耶？ええと、わたあめなんてどうかしら～？」
……「じ、自分もでありますか？い、いえ、ご命令とあらば……」
ぱっと見成人してそうな見た目の艦娘には、全員に声をかけた。俺的には、摩耶とかあきつ丸とか、まだまだ高校生くらいに見えるんだがなぁ。日本人は本当に若く見えるからなー。
ま、いっか。
大切なのは社会経験。
収益なんて考えちゃいないさ。
艦娘達には、お金で買えないような経験をしてもらいたいんだ。

うん。

そうだよ。

……ところで、浴衣ってエロいと思わん？あの、シャツとかと違って、ちょっと引っ張ればおっぱいが見えそうな感じとか、ちょっと捲れば下も見えそうな感じとか！

簪とかで髪をかきあげてもらってさ、うなじを見えるようにして！

分かるだろうか、こうさ、帯をあえて取らずに、胸元と下だけはだけさせてさ?!分かるだろ！分かってくれ!!

あー!!めっっっちゃ楽しみ!!!前回の水着の件と同じ轍は踏まんぞ？ちゃんと、休憩室に浴衣のカタログを置いたりして、浴衣見たいアピールは欠かさなかった!!!

実際、艦娘のほぼ全員は、浴衣の準備が済んでいるそうだ。やったぜ!!

……因みに、艦娘は何故か、殆どの子が浴衣や着物の着付けができるんだ。何でだろうな。謎だ。

あっ、そうだ！海外艦!!海外艦は着物の着付けができないんじゃないか?!!いかんこれは由々しき事態だ!!直ぐに着付けをしなければ!!

着付けと言う名目で服を脱がさなければ……!!

「つまりそう言うことだ。分かってもらえるか……？」

「……了解だ、Ａｄｍｉｒａｌ。ナツマツリの時には、その、ユカータ？なるものを着るのが、日本の習わしなんだな？持ってきたものと、このカタログの中から選べ、と言うことか」

「これが、ユカータ？テレビで見たことはあるけど……、どうやって着るのかしら？」

「色々な柄があるのね。……これは、ハイドランジアの柄かしら？素敵ね！」

大体あってる。

……イギリス人って、何でか知らないけど、ハイドランジアが好きだよな。あ、ハイドランジアってのは、紫陽花のことね。イギリスだと、丁度今くらいの時期に綺麗に咲くんだよ。

「さー、グラーフ、ビスマルク、ウォースパイト！好きなの選べよー、

三秒で作るからなー！」
　生地さえあれば、三秒で作ることは可能だ。浴衣はそんなに難しい構造じゃないし。
「それじゃあ……、これ！この、黒猫の模様が良いわ！可愛くて素敵よ！」
　ビスマルク……。
　何で、何で君はそう……、センスが子供っぽいんだ？
　大体いつも、黒猫の模様だよね。見た目は銀幕女優みたいにセクシーで大人の魅力に溢れているのに。
　うーん、良いんだろうか。黒猫の柄は子供っぽいよなー。マックス辺りに似合うと思ったんだが……。ま、良いか。
「はい！できた！さ、着替え着替え！」
　その気になれば一秒以下で着替えさせることが可能だがな、そんなことはしない!!さーて、上着に、ズボン……?!く、黒猫プリントのショーツ?!う、嘘だろ……?!
「?、どうかした?提督?……あ！若しかして、私の下着姿に見惚れちゃったのかしら?ふふん！仕方ないわね！もっと見て良いのよ?」
　クソ、何でこった。カッコいい系よりの美人であるビスマルクがこんな子供っぽい下着だなんて、なんか、こう、世界の法則が乱れる!!!
「あ、ああ、そうだな！ビスマルクは綺麗だな!!」
「ふーふん、当然よ！」
　デカい胸を張るビスマルク。くっ、何だこの背徳感！こんな綺麗な人に子供下着を着せて良いのか！凄いぞ!!
　と、そんなことを考えながらも、着付けを済ませる。さりげないボディータッチは忘れない。大胆なセクハラは旅人の特権。
「……うん、とっても可愛いわ！」
　鏡の前でくるりと回るビスマルク。君の方が可愛いぞ！
　……いやー、最初は失敗かと思ったけど、中々どうして……。アリだな!!
　ビスマルクは、ドイツ系の女性らしく、カッコいい系寄りの美人さんだ。それが、子供っぽくて可愛らしい浴衣に身を包み、はしゃいで

いる……。良くない？

「そ、その、Ａｄｍｉｒａｌ？こっちも頼めるだろうか？インターネットを見ただけでは、どうも……」

む、グラーフか。グラーフは、ファッションにあまり興味は無いようだが、身嗜みにはしっかりと気を配り、嫌味にならない程度のお洒落をするのだ！

「あ、あまり見ないでくれ……。ま、まだ、慣れないんだ……」

「あ、ごめんね」

よーし！バッチリ見た！下着はローライズ！鼠蹊部がセクシー！エロいっ！

さ、着付けだ。選んだ浴衣は、白と黒のストライプ。

……グラーフは、モノトーンのシンプルな柄の服が好きみたいだ。元が本当に美人な為、シンプルな服が良く似合う。良く、ファッションのアクセントになるようなアクセサリーとかを贈ってるんで、魅力は更に倍率ドン。

でもまー、

「俺からすりゃ地味過ぎるぜ！もっとシルバー巻くとかさ！」

「それなんだが、オビ？はこれにしようと思うんだ」

へぇ、ワインレッド。良いんじゃない？モダンなモノトーンの浴衣に、ワインレッドの帯。浴衣の大人っぽいイメージを崩さずに、華やかさを追加できる、と。グッドな選択だ。そりゃ、巻いてやる。

……素晴らしい！

「に、似合うだろうか、Ａｄｍｉｒａｌ……？」

「完璧だよグラーフ！愛してる！」

「そ、そうか！愛してる、か！」

グラーフもこれまたドイツ系。しかし、ビスマルクよりもずっとカッコいい系の美人。その雰囲気にあった、モダンな浴衣。だが、華やかさもワンポイント。最高だ！

「……Ａｄｍｉｒａｌ？私も、手伝ってもらえるかしら？」

……ふむ、ウォースパイト。
多分、自分でできるだろう。あんなにも巧みに鉄球を操る人が不器用な訳ない。そもそも、さっきから動こうとしないし。
……なーるほど？着せてもらいたいのか。可愛い奴め……！
さてと……、むむっ！この手触りはシルク！ブランド物だ！嫌味にならない程度の高級品！
ウォースパイトの上品な雰囲気ならば、ブランド物に着られることはない。
……まるで、王侯貴族のお嬢様を着替えさせてるみたいだ。俺はこんなことをしていいのだろうか。
……良いんじゃね？こんなロイヤルボディーに触れる機会は中々ないし。
あー！ロイヤルおっぱい！あー！
「あっ??……もう、今は駄目よ、Ａｄｍｉｒａｌ？」
モミモミしてやった。今は歓喜している。
……うん、似合うな。お高い生地を使ったが、上品さだとか気品だとか優雅さだとか、そういったもののおかげで全く嫌味に感じない。まるで歴史書に描かれた女王さまだ。

こんな調子で、セクハ、いや、浴衣の着付けをする俺。
いやあ、来週の夏祭りが楽しみだ。

「あんっ??もー、提督？プリンツのおっぱい、揉んじゃダメですよ？ユカータの着付け？をするんですから！……後で、沢山触って良いですから、ね？」
「？、ろーちゃんのお腹、すべすべですか？……ん??な、何だか、提督にお腹をなでなでされると、ろーちゃんは、変な気持ちに……??」
いやー、楽しみだわー！

１０４話　黒井鎮守府夏祭り　一日目

黒井鎮守府夏祭り、初日。
……あ、夏祭りは二日間やることにしました。
初日は身内と、近場にいる知り合いだけ。
二日目は一般公開。
……どうにも、うちもかなり有名になっちまったみたいでして。宣伝なんてしたら入場者数がとんでもないことになるんだよなー。よく護衛している漁師とか、近所の農家とかにチラシを渡したくらいに留めておく。
実際、面白がって鎮守府に忍び込む馬鹿とか、たまに飛んでくるドローンとか、押しかけてくるテレビ局とか……。
確かに、今までは鎮守府の内情も詳しい戦況も一般公開されてなかった。そんな中、ネット上に公開されたのは、美人揃いの艦娘達の幸せそうな日常の一コマと、確実に良くなっている戦況の様子。
それを信じて喜ぶ人、疑って怖がる人、色んな人がいるだろうが、まあ、皆んな一言言いたいんだろうなー。
追い返してばっかりじゃアレだしな、そろそろ一般公開して、「うちはクリーンな鎮守府ですよ」とアピールしなきゃならん。
でも、あんまり来られると面倒だから、情報は極力流さない。
まあ、既にＳＮＳではダダ漏れだが。二日目、どうしよ。

ま、いっか。
まずは、初日で練習だ。
どーせ、初日に来るのは知り合いだけだ。ある程度は迷惑をかけても、まあ、セーフだろう。
さ、祭りだ祭りだ！

「……提督？」
「ん？どうした大淀？」
「その……、知り、合い……？」

ん？モヒカン、怪人、モヒカン、サイボーグ、ヤクザ、グラップラー、モヒカン、女子高生、アイドル、超ロボット生命体、魔法少女、モヒカン……、こんなもんじゃね？

「何の問題ですか？」

「……いえ、提督がそう仰るならば、何も問題はありません」

？、どうしたんだ？あ、男の人が苦手なんだっけ？あー、じゃあ、大淀は誰かと一緒に行動させなきゃな。

俺は見回りだ。決して、艦娘の浴衣姿を見て回りたいとか邪なアレはない。仕事だ。仕事なのだ。

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!!!」

おっ、早速何かあったのか。”

「待ってくれ！俺は食材じゃない!!」

「？、何や？誰が喋っとるんや？」

「俺だよ！お嬢さんが抱えてるムキエビだよ!!」

「……あ！司令官のイタズラか?!もー！」

「待ってくれええええ!!冷静に考えてみろ、こんなデカイエビが自然界に存在するか?!しないだろ!!する訳ないだろ!!!」

「はっはっは、司令官のことや、何が起きてもおかしくあらへん。さー、お好み焼きお好み焼き、と!!」

「ガッ、ガメスーーーー!!!助けてくれーーーー!!!」

あー、いかんいかん。止めよう。

「龍驤、ストーップ。それ、食材じゃないぞー」

「んえ？し、司令官?!」

まあ、先輩はムキエビだしな。間違えるのも無理ないか。

「その人（？）はな、れっきとした怪人なんだよ。離してやってくれないか？」

「そ、そうだぞ！俺は怪人なんだぞ!!人造生命体だ!!」

「ええ?!か、怪人?!」

そう、怪人。あー、こっちの方にはあんまりいないもんなー。川崎の方は多いんだけども。

「でも、怪人っちゅうのは、もっと強くて怖そうな見た目で」
「龍驤？」
「実際に強くて、ウチら艦娘よりも身体能力が高くて」
「龍驤、やめて、やめたげて」
「第一、手も足もないやん。そんなんじゃ、敵と戦っても、文字通り手も足も出ないやん？」
「それ以上いけない、先輩泣いちゃってるから。ガチ凹みだから」
「う、うううう……」
　な、なんてことを！先輩は見た目通り傷みやすいんだぞ！慰めるガメスの苦労を考えたことあるのか!!
「……エビが丸まってるようにしか見えへんけど……？、それよりも、子供が待っとるんや！そのデカいムキエビを食べたい言うてな！」
　子供？
「あそこの、屋台の前の、水色の髪の女の子や！」
　龍驤の指差す先の屋台を見やると、
「あんな大きなエビ、初めて見たでゲゾ！」
「やめとけ！あれ、喋ってたぞ！絶対食いもんじゃねえ!!おら、行くぞ!!」
「こ、この世界は弱肉強食でゲゾ！喋ろうが何しようが、食われるときには食われ……、あー！は、離さなイカー！」
　……。
「あ、行ってもーたわ」
「ま、まあ、兎に角！世の中には色んな人がいるんだよ！見た目で判断しちゃ駄目だ、良いね？」
　差別はいかんよ。
「うん！分かったわ！せやな、見た目で判断しちゃ、あかんよな！……ところで、この喋るドラム缶は人間やろか？」
『俺のどこがドラム缶だってんだ、お嬢ちゃん？俺はしっかりと血の通った男だぜ？』
「畜生！クロマティのボケナス共！呼んでねえのに来やがった!!神山！神山の野郎はどこだ!!!」

ああ、クソ、ショックのあまり丸まって動かなくなった先輩を、そこら辺にいたフロシャイムの怪人に押し付けて、誤って踏んじまったメカ沢βを修理して、前田にメカ沢を押し付けて……。
呼んでねえ連中が紛れ込んでいやがるな……。
これ以上、面倒事が起きなきゃ良いんだが……。
「おおおおおおお!!!」
「〜〜〜〜〜ッッッ!!!!!」
長門が花山組長と腕相撲してるな、うん、平和だ。
「はあああああああ!!!」
「おりゃあああああああ!!!」
霧島と武蔵も、手近なグラップラー達と腕相撲してる。
素晴らしくインテリジェンスの低い、マッスル溢れる空間だな。
……近寄らんとこ。
まあ、ほら。うちの脳筋勢は、最近の深海棲艦は骨がないって嘆いてたし。良いガス抜きになるんじゃないかな。
うん、そうだよ。本人達はめっちゃ楽しそうだし、俺はここらで退散、
「お、久しぶりだな、新台！腕相撲だ……、やっていけよ！なァ？」
うわあああああああ!!!!!
愚地師範ああああああああ!!!!!

ハッハー、流石はグラップラーの皆さん。俺がいくら旅人だと言っても、グラップラー特有の謎理論により、強制参加させられた腕相撲大会！もちろん、いつものように場外乱闘勃発。
なんだかんだで俺は両腕を粉砕骨折。肋骨五本と右の大腿骨も折られた。笑えねえ。嬉々として乱闘に参加しようとしたうちの脳筋達を制止して、ぶっ倒れたグラップラーを回収し緊急搬送。
なんでこう、グラップラーの人は乱暴なんだか。暴力はいけない（カミーユ感）。
あーあ、全力で回復魔法かけてるけど、これ、治るまで五分はかか

るな……。まあ、内臓はノーダメージだし、身体の欠損もないからな。まだマシな方だ。

……ん、段々治ってきたか。

「おっじょおさーん！僕とお茶しーましょ！」

「その、榛名には提督がいますから……。ご、ごめんなさい」

「あら？この足柄に見惚れてしまったのかしら？ふふ、嬉しいけど、私には愛する人がいるのよ。ごめんなさいね？」

「……え？これ、ナンパってやつ？あははははー、ごめんねー、私、好きな人いるんだー。行こう、古鷹」

「？、私も、ですか？その、大変申し訳ないんですけど……。そ、その、気を悪くしないで下さいね！あ、貴方なら、きっと良い人が見つかりますよ！」

あらら、久々に見る光景。

「……うう、ここには可愛い女の子がたーくさんと聞いてすっ飛んで来たって言うのに……。あっ！し、新台先生!!」

「よー、諸星」

「ここここここここ、この、裏切り者ーーーー!!!!僕よりも先にこーんなハーレムを作るなんてぇ!!!」

残念だがな、駄目人間としての格と年期が違うんだよなぁ！

「「「提督ー??」」」

「いやー、すまないな諸星くん、本当にすまない」

思わず顔がにやけるなー！ごめんなー！ごめんな諸星ー！

「ぐぬぬぬぬぬぬ！悪いと思ってる人間の態度ではなーいっ!!」

あれ、そういやこいつ、彼女はどうしたんだ？相当嫉妬深い筈なのにな。

「て言うかお前、一人か？」

「……え？ああ、ラムには黙って出て来ましたよ？当然でしょ、絶対ついて来ようとするに決まってますよ！」

成る程、それもそうだな。

でもな、同じ道を歩む先人として、元教師として、一つ大切な助言をしてやろう。

「良いか諸星。ああいうタイプの女の子はな」

「ダーリン……!!!」

「ラ、ラム?!どうしてここに?!!あわわ、あわわわわわわ……!!!」

「地獄の果てまで追ってくるぞ」

最近、身に染みて分かる。女の怖さってやつが。

おーおー、すっげえな、お怒りだ。まあ、どうせ死なないからなー、あいつも。特に鍛えてる訳じゃないのに、俺の次くらいには頑丈なんだよなー。

……にしても、あいつの彼女、可愛いよなー。グラマーなのに可愛い顔してて、結構尽くすタイプで……。はっ?!

「……提督?そんなにソワソワして、誰を見ているんですか?榛名では、ご不満でしょうか?」

「あは、やぁねぇ、こんな美人を捕まえておいて、他の女に目移りするだなんて……。余所見をするのはやめて欲しいわね?」

「提督、良いよ、許すよ、浮気でもなんでも。……でもさ、他の女を見た後は、私のことも同じくらい見てくれるんだよね?こんなに愛してるのに、知らんぷりってことはないよね?」

「ふふ、大丈夫ですよ、提督。男の人は、幾つも愛を持っているんですものね。……だから、私にも、当然、分けて下さるんですよね?」

「す、すまん、待っ」

あっ、ヤバっ、今抱きつかれたら!くっつきかけた骨が!!

後ろで放電音が聞こえてくるが、それどころじゃない!あ、大腿骨折れてるから、逃げられっ……!!

「ぐわあああああああ!!!」

「……先生」

「……なんだ」
「……お互い、大変ですね」
「……そうね」

１０５話　黒井鎮守府夏祭り　二日目

黒井鎮守府夏祭り、二日目。
一般公開の日である。
呼んだのは、近場の住民の漁師だとか農家だとか、いつもお世話になっている人達だけ。
……その筈だが、どこで情報が漏れたのか、ＳＮＳなどで大騒ぎ。マスコミや活動家もなだれ込んで来て今は……、
「おい、見ろよ、あれが提督だってよ」
「すみません提督さん、私、〇〇新聞の者です。よろしければ、いくつかご質問を」
「情報の一般公開を！あれだけの情報じゃ国民は何も分かりません！私達には知る権利があります！」
あー、面倒臭さっ。
少なくともさ、祭りの場でこんなことする連中とは関わり合いになりたくないよな。さ、空間湾曲。
「「き、消えた?!」」

っと、ランダムテレポートだからな。ここはどこだ？鎮守府の中ではあるんだろうが。
「あら、提督？」
陸奥……。
最高！浴衣似合うわー！胸がない方が浴衣が似合う、なんて言うけど、そんなことはないんだぜ？陸奥みたいなボインちゃん用の浴衣や着付けの方法だって存在するんだ、似合わない道理はないよな!!
「いや、似合ってるよ陸奥！相変わらず、何を着ても綺麗だ！」
「あら、嬉しいこと言ってくれるわね？」
いや、本当に。いつもの陸奥の、溢れんばかりの女性的な魅力は鳴りを潜め、今は涼しげな美しさがここにある。
セクシーな陸奥も素敵だが、風流な陸奥も一風変わって良いもんだな！

露出の少ないからこそ感じられるエロス、あると思います！
「っと、それはさておき、問題はないか、陸奥？」
「ええ、貴方が上手く面倒な人を捌いてくれているお陰で、問題らしい問題はないわ」
そりゃあね？あんまりにも面倒なお客さんは強制退場、テレポートアザーでどっかに消えてもらった。
「無遠慮な視線とか、勝手に写真を撮られるのは困るけど……、艦の頃から、見られることには慣れているから」
本人達が言うには、艦の頃には、沢山の写真を撮られて、テレビや新聞にも載ったが故に、あまり写真に抵抗がないとのこと。
「あ、陸奥、お客さんだぞ」
因みに、陸奥はお面屋さんだそうだ。遠巻きに写真を撮る人ばかりで、あまり客はいないみたいだが……。
「あら？貴女も、陸奥って名前なのかしら？」
「？、そうよ？」
「あ、ごめんなさい、知り合いに同じ名前の人がいて……。この、狐面、一枚もらえるかしら？はい、これ、お金」
「はい、五百円、ちょうどね。どうぞ」
「ありがとう！……ほら、こっちよ九十九！見てこの狐面、何だかあんたそっくり！」
「はいよ……、ん？」
「ん？何だ？」
あれ、どっかで見た顔。
……。
……!!!
「ホゲェーーー!!!む、むむむむ、陸奥!!!」
「え？私？」
いや、君じゃない座ってて!!
「陸奥圓明流だ！逃げる他ない!!!」
加速、英雄、聖なる盾、ラクカジャ、スクカジャ、テトラカーン、タイムアルターダブルアクセル……。

全力でバフ。ここまでやって五分かどうか……。クソ、魔力が足らねえ！

俺はそれなりに器用な方で、必殺技だとか魔法だとか、覚えること自体はできる。だが、キャパシティは大したことないんだよ！魔術回路は十数本、魔導師ランクならCそこら、マナだって並以下だ!!

勘違いするな、俺は小狡いだけで、強くもなんともないんだよ!!

「だからこの場は見逃して下さいお願いします!!」

もうさ、俺が逃げたんだから、敗北ってことで良いじゃん？陸奥圓明流が不敗なのは分かったから、良いじゃん？

「……ああ、お前、新台か。……安心しろよ、祭りだって言うのに暴れたりはしないさ」

なるほどね、祭りじゃなきゃやり合う羽目になってた、と。

……いや、確かにさ、武闘家の皆さんには悪いと思ってるよ？勝手に技を盗んでるわけだしね？

だからって、強い奴と勘違いして挑んでくるのはやめてくれ、マジで。

「そ、そう？じゃ、じゃあ俺、見回りの仕事があるから！それじゃ!!」

逃げよう。

「頑張ってね、提、督……。もう見えなくなっちゃった。相変わらず速いわねぇ」

「……そんなに身体能力が高いんなら、戦っても良いんじゃないのか……？」

ふひぃ、怖かった。本家大元の無空波なんぞ食らったら内臓パーンだぞ。

え？ああ、陸奥なら大丈夫だ。あの男は、女子供を理由もなく殴るような真似は絶対にしない。

まあ、本当にヤバそうことがあれば、命を賭して守る所存だが。

中々ないよな、そんなピンチ。

さあ、見回りだ。

おー、那珂ちゃんがステージで輝いてるなー。浴衣じゃないのが残

念だけど、一般受けは最高だ。那珂ちゃんは正直、生半可なアイドルよりもずっと可愛くて、歌も踊りも正に一級だからな。

こりゃあ、ネットでこっそり発売してたCDの増販は確定だな。

……にしても、人が多いな。ネット舐めてた。この黒井鎮守府もかなり広いけどさ、やっぱりそれでも多い。かなりの人数が来ているせいで暑苦しいくらいだ。

ちょっとだけ、鎮守府の中に行って冷たいものでも飲むか。

今は、鎮守府の中は出入り禁止だ。一応軍隊なんでね、公開しちゃならない資料とか色々あるんだよ。

危険物一杯の地下室は、若干引く程の封印をかけて来たから平気だと思うけど。……うーん、イタズラしに入った一般人とかいないだろうな？

×××

「ば、化け物め!!!」

「ぐ、は、離せ!!」

「うーん、神通、これどうする？」

「殺すことは、恐らく、提督がお止めになるでしょう。それよりも、どうしてここに忍び込んだか、聞き出してみるべきですね」

……夏祭り。

提督は昨日、祭りの始まる前に、「楽しんで来るといい」と言って私達の頭を撫でて下さいました。

なんでも、戦いばかりの私達に、良い思い出を与えて下さるとのこと。

お優しい提督は、私達の命を救って下さっただけに留まらず、心も救って下さると言うのです。……なんと素晴らしい方なのでしょう。

この私、神通は、あのお方の為ならば全てを捧げてしまっても構いません。いえ、むしろ、既に捧げているのです。忠義の名の下に、全てを。

……そして、常に命じられたこと以上を、最良よりも最高の結果を主人に捧げる者こそが忠臣というもの。

「楽しめ」という、提督の御心を無視するようで心苦しくはありますが、交代制で鎮守府内の見回りをすることにしました。
先程、天龍型のお二人と交代して、この時間帯は私と川内姉さんで見回りをしていたところです。
……すると、愚かにもこの鎮守府に、薄汚い溝鼠が二匹、潜り込んでいました。
溝鼠共は、資料室が狙いだったらしく、施錠された扉をこじ開けようとしていました。ですが、すぐに取り押さえることに成功しました。
所詮は塵屑です、碌に反応も出来ずに捕まりましたね。そして、懐から取り出そうとした拳銃も握り潰してやりました。
すると、武器を失って恐れをなしたのか、ひいひいと泣き喚いて……。見るに堪えません。こんなものが偉大なる提督と同じ、人間の男だと言うのでしょうか。とても信じられません。
「お、俺達をどうするつもりだ!!」
「触るな！触るな化け物!!」
……。
「ぎ、ぎゃあああああ!!!!」
「ちょっと神通ー？殺しちゃ駄目なんでしょー？」
「いえ、骨の二、三本なら、折っても死にはしないと思いますよ」
あまりにも、見るに堪えない。うねる蛆虫を見ているような気分。不快、不快です、不快ですね。
このまま首を落としたい気持ちを抑えつつも、少しばかり思案。
……やはり拷問が相応しいでしょうが、私にも姉さんにも経験がありません。加減を間違って殺してしまっては、ここに忍び込んだ目的を吐かせることができませんし。
……どうしましょうか？最後は見せしめに首を晒すのは確定として……。全く、殺すまでの経路を考えるなど、初めてですね。
「とりあえず、逃げないように脚は折っておこうよ！」
「ええ、名案です、姉さん」
「や、やめろ！な、何をするつも、がああああああ!!!!?」

「ま、待て!!待ってく、ぐあああああ!!!!」
小枝を折るようにぽきりと。……脆い。この程度の力で、どうして黒井鎮守府に忍び込んだのか……。
「ねえ、どうしてウチに忍び込んだの？答えて？」
「……だ、誰が、言う、か……?!、や、やめっ、ぐあっ!!!」
……千本ですか。成る程、それならば早々死にはしませんね。流石は川内姉さん。
私も、暗器の一つくらい、持ち歩くべきなのでしょうか。
「く、はぁ、はぁ、はぁ……!!」
……いけませんね、逃げては。
軽く、軽く。手加減して、刀の鞘で殴る。
「ごふっ!!!」
……大丈夫そうですね。これくらいの力で殴り続けてみましょうか。
「ごふっ！がっ、いぎゃ!!や、やめ、あぐっ!!!」
……面倒ですね。
殺すことならば得意なつもりですが、拷問など。
生憎ですが私は、長門さんのように戦いそのものに喜びを見出すことも、時雨ちゃんのように血に酔う訳でもないのです。
私の喜びは、提督のお役に立つこと。
このように溝鼠を殴ることは、本意ではありませんね。
早く口を割って頂きたいものですが。

「んん?!血の匂い……、って、神通と、川内？何やって……、本当に何やってんの?!!」
提督!!
ああ、提督!!
いけない、このような姿勢で提督のお声を聞こうなどと!!
跪かねばなりませんね！
「はっ！鎮守府内部に忍び込んだ溝鼠共の拷問を行なっておりました!!」

「なにそれこわい」
早く、早く口を割らないと。提督の御手を煩わせてはならない！
「答えろ！答えろ!!答えろ!!!」
「やめ、やめてく、いぎゃあぁ!!!!!!」
提督のお役に立たねば!!!
「ちょ、ちょっと待って、ちょっと待って!!死ぬ！死ぬからそれ!!」
「て、提督……」
「あー、おい、お前。なんてウチに忍び込んだ？どこの差し金だ？」
ああ、そんな！溝鼠風情にお声をかけるなど!!
「……」
「……そのね、ちゃんと話せば見逃してやるからさ」
「……」
……は？
何だ、この溝鼠。何だ、その態度は。提督のお言葉を何だと思っている？
偉大なる提督のお言葉なのに！お声を聞けるだけでこの上ない幸福だと言うのに!!!!!!他でもない提督のご命令だと言うのに!!!!!!

駄目だ。

とても、我慢が、できない。

「死ね」

「っと！神通、だから殺しちゃ駄目だって！」
……どうして、ですか？
そのような、無礼で不遜で無価値で無意味な溝鼠に生きる価値など……。
ですが、提督のご命令は……。
ああ、ああ、私は、一体、どうすれば……。
「えーと、ん、よしよし、よく頑張ったな、神通！川内も、ありがとう

!」
「あ、あ、提督、その、ように、撫でられては……??」
多幸感……。
私に触れた提督の手の平から、歓喜と言う名の稲妻が走る。
早くなる鼓動。
熱くなる下腹部。
「拷問なんてしなくて良いから。捕まえたら、俺のところに持ってきてね」
「り、了解、しまし、たぁ??」
ああ、駄目、駄目だ。詔にも等しき、提督のお言葉だと言うのに。火照りきった頭では何も考えられない。
私は今、世界で一番幸せだ。
「いやね、魔力が勿体無いからやらなかっただけで。拷問なんてしないでも、話を聞くくらいならな?……『アクスィー』」
「……あ、う……、お、俺は、大本営の、エージェントで……」
「ば、馬鹿かテメェ!!何喋ってんだ!!」
蕩けた脳で何とか考える。……まじないの類?
「……はい、分かった。じゃ、帰って良いよ、全部聞いたし。……『テレポートアザー』」
「あ、あ……」
「こ、今度は何を」
溝鼠共が消えた?……まじないとは、実に便利なものですね……。
「その、提督……。御手を煩わせてしまって?!、……??????」
謝罪をしようとしたその時、提督が、私を抱き締めて……??
「神通、良いんだよ、謝ることなんて何もないさ。いつも頑張ってくれる神通のこと、大好きだ!……今日だって、気を利かせて、鎮守府内の見回りをしてくれたんだもんな、本当にありがとう!いつも助かるよ!」
〜〜〜〜〜っ
だ、駄目!本??????当に駄目です!!

そんな、そんなことをなさっては！幸せで、幸せで幸せで、気がおかしくなってしまいます!!

ああ、目の前がチカチカと点滅して、足腰が震えて……、もう、駄目、です……。

「あのー、提督？」

「ん？どうした川内？」

「神通、気絶しちゃったみたいだよ？」

「……あ、マジだ。……悪いことしちゃったかな？」

「うーん、幸せそうな顔してるし、良いと思うよ？……わ、私も、良いかな？」

「ん、はいよ、よしよし？？？

１０６話　深海棲艦が攻めてきた！　前編

「ぷはー、今日もいいペンキ☆」
夏祭りから一週間。殆どの艦娘には、半ば強制的に休みを取ってもらった。
戦いがライフワークである艦娘から戦いを奪うのは悪いが、たまには、ね？
という訳で今日は休憩の日。
もとい、黒井鎮守府閉店の日である。
殆どの空母は四泊五日全国食べ歩きツアーに参加して、金剛型とか海外艦はヨーロッパに旅行、最上型は熊野の神戸旅行について行って、駆逐艦の多くは遊園地へ、川内型は嫌がる那珂ちゃんを引きずって山籠り……。
……という訳で、今の黒井鎮守府には、殆ど人がいらっしゃらない。
普段は沢山の艦娘で賑わっているこの食堂もガラガラですわ。
まばらにいる艦娘は、呑んだくれてる響、呑んだくれてる隼鷹、呑んだくれてる武蔵……。
なんてこった、たるんどる。
え？俺？俺はお座敷の席で鳳翔に膝枕されてるけど？何か問題ある？
「……と言うより、鳳翔も休んだら？」
いつも家事とか頑張ってくれてるしな。
「ふふふ、大丈夫ですよ、旦那様。一昨日は、間宮さんと伊良湖ちゃんと旅行に行きましたし、ちゃんとお休みは頂いてますからね」
「もーっと休んで良いのよ？」
「いえいえ、家事でも何でも、私が好きでやっていることですから。……こうして、旦那様の側にいれるだけで、私は幸せですよ??」
女神かな？
「鳳翔は良い嫁さんになるなぁ」
「もう、何言ってるんですか？私は旦那様のお嫁さんですよ??」
はっはっは、ケッコンカッコカリの意味を理解してない艦娘の多さ

よ。……カッコカリだから確定じゃないとあれ程言ったよね？

……ん？爆発音？明石……、じゃないな、明石は今秋葉原にいるからな。

「何だよ、全く」

あー、やだやだ。

窓から海を見てみると……、

「……深海棲艦？」

……何だありゃ、見たことがないタイプのやつだ。しかも、数が多い。やたらめったら多い。

「……戦艦、でしょうか？千体以上はいますね。……どうしますか？艦娘を呼び戻しましょうか？」

すぐ近くにいた大淀が言う。

うーん、正直、そこまでやる必要はないと思うんだよね。

ここに残った艦娘だけで対処は可能だと思うんだけど……。

「にしても、大分近づかれてしまいましたね。あの防衛システムを乗り切ると言うことは、それなりの実力があると言うことでしょうし……」

そうなんだよなー。量も質も揃えて、ここまで来られるとなー。対処はできるけども、手が足りない。

戦って勝つことは出来ても、鎮守府とか陸地とかを護りながらだと面倒だよなー。勝ったけど鎮守府周辺は更地になりました、じゃ困るし。

「……あ、そうでした。明石さんから、こんなものを預かっていたんでした」

「……何このスイッチ」

「いえ、その、私がいない間に鎮守府に危機が迫った時、押して欲しい、とのことです」

お、おう、そうか。

「え、じゃあ、押す？」
「そう……、ですね。一応、危機ですし」
「だなー。……えい」

『ａｌｅｒｔ！ａｌｅｒｔ！ａｌｅｒｔ！』
うおっ、サイレンうるさっ!!
思わず、スイッチを落としてしまう。
するとスイッチから、明石の立体映像が流れ始めた……。
『……提督……。貴方がこれを見ていると言うことは、私は既にこの世にいないでしょう……』
芝居掛かったセリフを吐く明石の立体映像。嘘つけ、君、五分前までコトブキヤにいただろ。ツイッターで見たぞ。
『黒井鎮守府は今、空前絶後の大ピンチなんですね……。しかーし！希望はここにあります!!』
何なの？何でそんなテンション高いの？……よく見たら、立体映像の明石の目元にクマがある。……深夜テンションで撮ったんだな？そうなんだな？夜更かしは身体に悪いからやめなさいとあれほど言ったろ？
『こんなこともあろうかと!!!用意しておいた秘密のシステムがあるのですっ!!!『明石さーん、もう深夜ですよー？寝ましょーよー！』……夕張ちゃん、これ終わったら電気消すから、あと五分だけ待って！』
しかもこれ、自室かよ！同室の夕張に迷惑かけちゃ駄目だろ!!……後で説教だな。
『と、兎に角!!凄いシステムなんですよ!!!はい、終わりっ!!!バリアシステム起動!!!……夕張ちゃーん、ごめんねー、じゃあおやすみー』
その一言と共に、鎮守府をすっぽりと覆う半円状のバリアが現れた。ウッソだろお前。
「……マジかよ」
「す、凄いですね、驚きました」
形成されたバリアは、深海棲艦の砲撃を見事に防いでみせた。
「……この調子なら、鎮守府の防衛は大丈夫だな。……ほら、皆んな起

きてー！敵襲だよー！」
「ぐー、ぐー……、えへ、司令官、くすぐったいよ……」
「あっはっはっはっ!!たまには洋酒も良いねぇ!!……ありゃ？もう昼かい？おっかしいな、さっきまで夜だった筈じゃ？」
「あ〟ー、頭が痛いな……。お、芋焼酎か。……迎え酒、だな」
　あーもう。
「ほら！敵襲だって！ウチに深海棲艦が攻めて来たんだよ!!起きて!!」
　全くもう、引き摺って行くしかないか。
「大淀も、鳳翔も、出撃だ！付いて来てくれ！」
「「はい!!」」

『……デ？ソノ体タラクカ？コノアタシガ、アタシトネ級ノ量産型ヲコンナニモ用意シテ、先週カラ攻メル準備ヲシテタッテノニ、ソレカ？』
「ははっ、いやー、なんかごめんね、レ級ちゃん。うちの子皆んな休みでさー？また来月くらいならちゃんと相手してあげるから、今日のところは帰ってもらえる？」
　レ級か、ラミアみたいな見た目だな。……どっちが頭なの？
『……帰レ、ジャネェヨ！舐メヤガッテ!!叩キ潰シテヤル!!!行クゾ、ネ級!!』
『……了解』
　ネ級は、レ級のちっこい版みたいな子。どっちもかわいいね、うん。
　あー、あと、舐めるな、だっけ？
「いやぁ、あのさ、俺って旅人でさ？」
『ア〟ア？何ダ急ニ？』
「誰かに守ってもらえる訳じゃないもんで、危機察知能力がないとやっていけないのよ。……つまり、相手を舐め腐って、油断慢心しまくるようじゃ、とっくに死んでるってこと。だから俺は、相手を侮ったことなんて一度もない。唯の一度もね」

『何言ッテヤガル？今現ニ、アタシ達ノコトヲ舐メ腐ッテ、ソレッポッチノ戦力デ……？!!』

やだなぁ。

「適正な戦力だよ？」

舐めてるんじゃない、余裕なんだよ。

『ーーーッ!!!』

すぐ近くのレ級の量産型が、文字通り弾ける。爆発的な殴打によって。

「ふむ、少しばかり、固いな。だがそれだけだ」

酔っ払う？それが何かな？艦娘を人と同じ次元で語っちゃ駄目だ。飲める量も、分解する力も、人とは段違いなんだよ。

「ゴクッ……、ゴクッ……、っぷはぁ！酒を飲んだ後の水は美味いもんだな、酔いもすっ飛ぶ……！」

２リットルのペットボトル一杯に詰まった水を飲み干した武蔵に、先程までのような酔いは見られない。犬歯を剥いて嗤うその姿は武人のそれだ。

「他所では深海棲艦が艦娘を襲う。黒井鎮守府では、艦娘が深海棲艦を襲う（ロシア的倒置法）。……なんてね」

左肩に担いだ巨大な鎖付き鉄球を思い切り投げつける響。肉の詰まった袋を地面に叩きつけたような、湿った音と共に、レ級の量産型が吹き飛ぶ。

「ほいほい、っと！お仕事お仕事！働いた後の酒は美味いからなー！……ま、今も飲むんだけどね！アハハハハー!!」

日本酒をラッパ飲みしながらも式神をばら撒く隼鷹。ふらふらと揺れる身体とは裏腹に、微塵の狂いもなく動く式神は群としてうねり、雲のように浮かぶ。

「と、言う訳で。今からやるのは防衛戦じゃない。……殲滅戦だ!!!全員突撃ィ!!!!」

ノリノリである。俺が。
「「「了解!!!」」」
さ、行くぞ。
目にものを見せてやろう。

１０７話　深海棲艦が攻めてきた！　中編

「あら、ネ級さん、でしたっけ？どうやら、貴女の相手はこの大淀みたいですね！大丈夫です、殺しはしませんよ！提督に出来れば生かして捕らえろと言伝されましたから！」

……何だ、こいつ？

なんとなく、強さは伝わってくるが、所詮は軽巡だろう？

数多の戦艦、空母、重巡に囲まれて、何故笑っていられる？

……だが却って、油断できないな……！

相手は、「あの」黒井鎮守府だ。

噂は散々聞いている。侮って良い相手ではない。

……だが、艤装におかしな部分は見られない。……特殊な兵装は搭載していない？ならば！

『空母、艦載機ヲ、放テ……!!』

何かされる前に、アウトレンジから袋叩きにしてやる!!

『……ヤッタカ?!』

「強さとは……、ネ級さん、強さとは、一体、何だと思いますか……？」

……やはり、一筋縄ではいかないか！どのような手を使ったのか、擦り傷一つ付いていない!!

「もちろん、個人個人によって答えは違うでしょうけど……、貴女はどう思いますか？」

何だ？一体何を言っている？

「私は、こう思うのです……。強さとは……」

クソ、耳を傾けるな、戦いに集中しろ！

「『信仰』である、と」

馬鹿な！消えた?!

「『加速』の魔法だそうです……、あのお方に習ったんですよ」

後ろっ!!
?!
『チィ!!!
!!』
「ブロッキング……」
?!、拳が、弾かれた?!!
何だ、どういうことだ?!どうなっている?!!
「……私は、この鎮守府の誰よりも長く、見てきました……」
『戦艦!重巡!!行ケッ!!!』
間合いを取って、数で圧倒する!!!四方から攻撃して、疲労させれば……!!!
!!
「私の神様を……!!!
!!」
『……ッ?!バ、馬鹿ナ……!!!』
砲弾を、弾いた?!!四方から放たれた砲弾を?!!全て?!!!
「今のは廻し受け……。私の神様に教わった完全防御、だそうです」
防御……、ならば!
『量産型!!奴ニ取リツケ!!動キヲ封ジロ!!!』
防御など、させない!!適当な量産型を取りつかせて、量産型ごと轟沈させる!!!
『ト”、ト”ラ”エ”ッル”!!ア”ア”!!ア”ア”ア”ア”!!!』
命令を認識したようだな。最近は量産型の質が上がって助かる。ある程度複雑な命令も聞くようになったし、自分自身でもそれなりに考えるようにもなった。良い傾向だ。さあ、捕らえろ!!
「困りますね、そのように抱きつかれては……。私の身体は、神様に捧げていますから……」
……何?!飛ん、いや、き、斬った?!!刃物か?!いや、違う、あれは……!!
「飛燕流舞……!!」
……素手でッ!!!
「良い機会です、貴女にも、私の神様の素晴らしさをお教えしましょう!」

『ウ、撃テ!!!撃チ続ケロ!!!』
「ふふ、私の神様は、それはそれは素敵な方なんですよ？見た目だけじゃなく、内面も！慈愛に満ちた心をお持ちの方で、相手が敵であろうとも救うようなお優しい方です！それでいて強く、思慮深く、様々な才気をお持ちになっていて……！それなのに、驕らずに謙虚で、こんな私にも、優しく微笑んで下さるんですよ?!なんと慈悲深いのでしょう!!その愛は留まることを知らず、全ての艦娘を永劫に愛して下さるのです!!ああ、提督に抱きしめて頂いて、口付けをして頂いた記憶！今この瞬間でも思い起こせます!!!!!仄かに香る甘い香りと、ミントの香り!!私のそれとは違う、太く力強い腕に包まれる感触!!!!あのお方の暖かな鼓動も!!!!私に触れた柔らかな唇も!!!!全て!!!!全て!!!!」
クソ、クソクソクソクソ!!!
速い、硬い、鋭い……、強い!!!
用意した先鋭が、ゆっくりと、だが確実にその数を減らしている!!
駄目だ、ここはもう、駄目だ!!!一度退くしかない!!!
『ア……、アァ……!!ナ、何ダ?!何ナンダオ前ハァ?!!!』
怖い、怖い怖い、怖い……!!
ワタシは今、生まれて初めて、恐怖している……!!
「あら？嫌ですねぇ、自己紹介はした筈ですが？……まあ、良いでしょう！私のことも、私の神様のことも、分かるまで何度でも教えて差し上げます！」
『クルナ……!!クルナァァァァァァ!!!!』
×
「私は大淀、世界で一番素敵な神様の、しもべです!!」
×
×
×

『ゴアッ!!ゴアアアアアッ!!!』
「あら、嫌ですね。……ゴミは掃除しないと」
いつもと変わらない笑顔の鳳翔は、いつもと同じように弓を射る。しかし、その弓は艦載機に変化せず、並み居る深海棲艦の身体に突き刺さる。
……本来なら、これじゃ駄目だ。戦艦クラスのような深海棲艦はしぶとい、首を落としたり、はらわたを全部引き摺り出したりしなきゃ早々死にはしない。
だが。
『ゴアッ?!ゴ、エプッ……!』
……鳳翔は、深海棲艦に突き刺さった矢を、深海棲艦の体内で艦載機に変化させるのだ。エグっ。
口から、眼孔から、穴という穴から艦載機が湧き出てくる。終いにゃ、腹を突き破って出てくる始末。何あれ、エイリアン?南極で戦った嫌な思い出があるから勘弁してくれない?
「ヒャッハー!!ほらほら!逃げろ逃げろー!逃げなきゃ食っちまうよー?」
辺りが暗くなるレベルの式神をばら撒いた隼鷹は、鳳翔とは逆。式神を、外側から深海棲艦の身体に入り込ませるんだ。
砲撃だろうが艦載機だろうが魚雷だろうが……、圧倒的な物量の式神で「喰らい尽くす」。
『……?!、……!!!』
声を発することも出来ず、式神の雲に飲み込まれていく深海棲艦。
あー、あれだな、バッタの群れに食われる作物みたいな?
「ウラー!」
で、響は、あの細い身体のどこからあれだけのパワーを出してるんだか。鎖付き鉄球をぶんぶん振り回してる。
ま、そもそも超人レベルの肉体を持つ艦娘だ。そして、海に出ると身体能力が魔人レベルまで跳ね上がる。
……多分、神秘とか霊力とかの類だと思うんだけどなぁ。
身体能力と霊的能力は同じ次元じゃないし。

『オラオラ!!吹ッ飛ビヤガレッ!!!』
こうして飛んでくる砲撃も、口径はそんなでもないだろ？だけども、どう考えても、見た目以上の威力があるんだよ。
「いだだだ!!ヒビ入ったぞこれ!!!」
そうなんだよ、見た目以上の威力があるんだよ!!……多分、物理的な攻撃力に付け加えて、神秘の攻撃力を持つんだろうね!!んで、神秘成分のダメージがデカイ!!!
『シブトイナ!!トットトクタバレ!!!オラ撃テ量産型共!!!』
レ級ちゃん、俺のこと嫌いなの？当たり強くない？気のせい？
……深海棲艦も艦娘も、強力な神秘を持つんだよな。世の中は、深海棲艦や艦娘には通常兵器が効かないだの何だの言ってるけども、そりゃそうだ、神秘成分がないからな。物理的なダメージも通るには通るけど、神秘のダメージも乗せないと効果は半減だ。
だからまあ、
「波紋疾走!!」
『ギィッ!!?』
神秘や魔法、氣功や波紋を乗せた物理攻撃が良く効くみたい。……でも、硬いなー。艦娘や深海棲艦の持つ神秘には敵わないわ。言わばあの子達は、人の形をした神器とか宝具とか魔具とか……、そんなんだ。ただの旅人である俺に勝てる道理はないぞ！
『チィ!!オ前、ドウナッテル?!一体何ナンダ!!!?』
ま、避けるし受けるし逃げ回るけど。うーん、にしても、困った。こいつら硬い。本当に硬い。
「伝衝裂波!!」
『ガ、ァア……!!』
……十発以上、思い切り叩き込んで、やっと一体。やっぱり俺、戦いは得意じゃないね。殺すのは苦手だ。
『クッ!!オ前ダケハ生カシテ帰サン!!!艦娘ガ集マル前ニ、オ前ダケハッ!!!』
あらま、俺、狙われてる？……あ、俺、提督だったわ。そりゃそうだな、狙われるわ、うん。

……だが、レ級ちゃんは知らないみたいだな。
休みをあげても外に出ず農場に籠るあの子を！真面目でクールで可愛いあの子を!!この鎮守府の最大戦力の一人のあの子を!!!
「ミィィィカァァァ!!!!!!」
『～～～ッ?!!何ヲ叫、?!!ガッ、アアアアア!!!!』
「お呼びでしょうか、司令官」
……まさか、空から降ってくるとはな。
実は結構駄目元だったなんて言えない。
「……こいつら、殺って良いのですか？」
「ああ、頼む」
「了解です」
俺はレ級ちゃんには勝てないからな。さっき、強制ストリップ真拳で全裸にして、下腹部にハートマーク描いたり、内股に正の字書いたり、白くべたつく何かの詰まったゴム風船を引っ掛けたガーターベルトを付けたりしたが、まるで意に介さないんだもの。無理無理、勝てない。
……にしても三日月は随分と変わったな。爪と砲が付いた手甲、パイルバンカーの付いた足甲、刃の付いた尻尾、特大のメイス。
「邪魔です」
『イギャッ!!!?』
俺が十発以上叩き込んでやっと殺せるレ級量産型をたった一撃で殺すか……！やっぱ凄えよミカは。
十秒もあれば三体は殺す。……火力の格が違う。
だが、まあ。
「背中は任せろよ、三日月……！」
三日月に向かう砲撃を、魚雷を、爆撃を、受ける。
「……はい、司令官！」
駆逐艦でも丈夫な方とは言え、駆逐艦だ。防御力はそこまでではな

い。……背中くらいは守ってやらなきゃ、俺の立つ瀬がないじゃん？

さあ、後半戦だ……!!

１０８話　深海棲艦が攻めてきた！　後編

……『出来ましたよ武蔵さん!!武蔵さんの艤装の追加パーツです!!』

……『……明石、夕張、お前らな……。お前達が作った追加パーツのせいで、大和が暴走して、鎮守府総出で止めた件、忘れたのか？』

……『い、いやいや！あれはユーザー認証をやり忘れただけで！実際、追加パーツは強力だったじゃないですか?!ねっ！』

……『確かに、両腕のスクリュー、肩のキャノン砲、背中のエネルギー砲に、電磁バリア……。強力な兵装だったな』

……『そうなんですよそうなんですよ!!特に、電磁バリアは自信作なんです！あの長門さんの一撃も防ぐんですよ!!……まあ、稼働には莫大な電力が必要ですから、要改善ですけど』

……『ああ、そうだな。……お陰で、取り押さえるのに苦労したよ』

……『こ、今度は大丈夫ですから！ユーザー認証も済ませましたし！』

……『……まあ、いい。だが、もし暴走すれば今度こそ……』

……『大丈夫大丈夫！さあ、いきますよー!!』

……《ＣＡＳＴ　ＩＮ　ＴＨＥ　ＮＡＭＥ　ＯＦ　ＧＯＤ，ＹＥＮＯＴ　ＧＵＩＬＴＹ．》

「喰らえ!!!」

『ーーーーーッ?!!!』

……ふむ、いい調子だ。

結局、ユーザー認証？とやらは良くわからなかったが、成功したらしい。使えるならそれでいい。

追加パーツとやらは、この武蔵の両腕にある、黒鉄の巨大な手甲。他にも細部を弄られたが、どれも使い勝手が良いな。

「弾けろ!!!」

『ア〟ア〟ッ?!!!』

……何だったかな、明石と夕張が、嬉々として原理の説明をしてきた気がするが、まあ、難しい話は良くわからん。確か、手甲の肘辺りに付いた筒の伸縮で、圧縮空気をぶつける、だったか？

機構の名前は確か……、

「サドンインパクト……!!!」

……実に、良いな。

この調子なら、そろそろ終わるだろうな。三日月のやつも来たし、近場の艦娘も集まって来ているそうだ。

「テメェ等!!このオレが折角小型船引っ張り出して海釣りしてたってのに！人の休暇をなんだと思っていやがる!!!」

まず、帰って来たのは天龍だ。

鎮守府近海を小型船で回って釣りをしていたらしい。この日のために、船の免許を取得したとのことで、かなり楽しみにしていたな。

「お前等は許さねえ！この海域から生かして帰さねえからなー!!」

いつも、駆逐艦の面倒を見ている天龍は、一人で休めるような時が中々無い。休日であっても、駆逐艦を連れて遊びに行ってやったりしているからな。……今度からは、私も駆逐艦の面倒を見てやるか。

「雷神光臨!!!」

ほう、凄まじいな。艤装の踵で高周波ブレードを保持し、回転斬りか。器用なものだ、私にはとても無理だな。

「このクソ野郎共が!!この摩耶様のいる鎮守府に攻めてきやがって!!ただじゃおかねえぞ!!!行くぜ!!『スウォーム』!!!」

摩耶は、漆黒の剣を誇らしげに構えた。そこから繰り出される回転斬りは、??シャキーン??と言う鋭い音と共に深海棲艦を殲滅する。

それと、時折摩耶が視線の先から消えるのは、時間停止しているから、らしい。なんでも、あの剣で他人を斬り裂くと、時折時間が止まるとのこと。

原理？提督が持ってきたものだぞ、原理など分かるか。

……まあ、こうして、量産型はほぼ壊滅、ネ級、レ級共に大破、鎮守府及び周辺地域に被害無しで……、そうだな、言うなれば、完全勝利と言ったところか。

『畜生、畜生、畜生!!!畜生畜生畜生畜生!!!何ナンダ、何ナンダテメェ等ハ!!!』

「投降しろ、深海棲艦。……命までは取らんよ、安心しろ」

殺しても良いんだが、提督に頼まれたからな。

……ふふ、提督の頼みだ、何だってやってやらねばな。

『……セメテ、アノ男ダケデモ!!!』

「させんよ」

『グッ!!?ハ、放シヤガレコノ脳筋女!!!』

はあ、にしても、汗をかいてしまったな。帰ったら一風呂浴びるか。もちろん、提督と一緒にな。

「OK、捕まえてくれてありがとな、武蔵。……さ、降伏、しよう!」

『ダ、誰ガ降伏ナド……!!』

……む、いかんな、今提督の顔を見ると、滾ってしまう。戦の後は、提督に抱いて欲しくなって堪らん。

「提督ー!ネ級さんを確保しましたよー!」

『ヒイィ!!ヤ、ヤメロ、放シテクレ!クルナ、クルナ、クルナ!!』

「もう、私の神様の前にいるんですから!女の子らしくしなきゃ駄目ですよ?……でも、私の神様は、さっきから説明しているようにとっても優しい方ですから!安心して下さい!それじゃあ、私の神様に全てを捧げて……」

『ヤメロ!!モウヤメテクレ!!気ガ狂イソウダ!!』

……っと、終わったようだな。

にしても、雑な作戦だったな、量産型でない、しっかりとした知能のある深海棲艦ならば、もっとよく考えて行動するはずだ。

大体にして、今の黒井鎮守府が手薄だと、どこで知った?

……嫌な予感がするな。

××××××××××

いやー、勝った勝った。最早敗北を知りたいレベル。
やっぱり大したことない。やれる、やれるんだ俺達は！
などと思っていられるのもつかの間。
……増援だ。

『今回ノ作戦ハ失敗ノヨウネ、レ級……』
『チィ、戦艦棲姫……!!アタシヲ笑イニキタノカ?!!』
『自意識過剰ネ、ワタシハタダ、戦力ノ回収ヲシタイダケヨ』
戦艦棲姫以外は見たことのない姫クラスだな、十人はいる。
……それよりも、気になるのは……、
『……今回ノワタシノ目的ハ、レ級、ネ級ノ回収ト……、新型ノテストヨ』
『『『ーーーーー!!!!』』』
後ろのあいつらだ。
「あれは、南方棲戦鬼の量産型……?!」
まさか、鬼クラスを量産するとはな。
数は数百程度、倒すこと自体は可能だがなぁ……。
「そら行け式神！鬼でも何でも喰らい尽くせ!!」
隼鷹が式神を放つが、
『ーーー!!』
海面上を転がって回避する量産型南方棲戦鬼。
明らかに、知能の向上が見られる。
「?!、へぇ、避けるんだ！」
『ーーーーー!!!!』
「っと、危ない危ない！良いの撃ってくるねぇ!!」
砲撃も正確だ……、強いね、こいつら。
勝てない訳じゃない。でも、確実に強くなってきている。……艦娘も確かに強くなったけど、それと並行して深海棲艦も強くなってきている。
……不味くないか、これ？
物量は深海棲艦の方が上なんだ、あんまり強くなられると困る。

今まで得た情報じゃ、艦娘を沈めることによって得られる怨念で強くなっているらしいが……、今の日本には、殆ど鎮守府がないぞ？

一体どうやって……。

『アラ？オ困リカシラ？……フフフ、ドウシテワタシ達ガ強クナッタカ、デショウ？』

「あ、答えてくれんの？」

『馬鹿ネ、教エル訳ナイデショウ？』

そっかー。

「よし、当ててみよう。……何かチート使った？」

『サァ？ドウカシラ……』

違うな。

「怨念以外のパワーを利用したとか？」

『答エナイワヨ』

これも違う。

「うーん、単純に、海外で沢山艦娘を沈めてるとか？」

『……何ノコトヤラ』

あ、これだ。

「なるほど、海外か。盲点だったわー」

『ナ、何ノコトヨ！』

「嘘かどうかくらい、目を見れば分かるから。……じゃあ次は、どうして今回ここに攻めてきたか聞きたいんだけど」

『～～～ッ!!全員!!撤退スルワヨ!!』

あら、振られちゃったか。……今ここにある戦力じゃ、全員倒しきれないな。

そもそも、バラバラの方向に逃げたし。

……それに、あの子達を倒せば、深海棲艦を倒したことになるのか、それすら不明だし。

ほぼ無限に、何処からともなく湧いて出る深海棲艦か。通りで、まともに退治しようとする正義の味方がいらっしゃらない訳だ。

その皺寄せが俺に来る理由は全く分からんが。

あーやだ、まだまだ仕事やめらんなそう。

１０９話　さてはギャングだなオメー

「えー、では、本日のお仕事は、麻薬輸送船の襲撃という訳でしてー。本当はやりたくないんですけどー、やらないと白竜のカシラに怒られるんでー」

確かに、お隣の赤い国旗が素敵な国とか、白い国旗の国とかから流れて来る麻薬は今、日本で問題になってんのよね。

まー、アレです。深海棲艦のせいで海路が割高、若しくは使えなくなった今は、却って、海路での密輸が多いこと多いこと。

特に、ウチが頑張って開放した日本海とか酷いよ？まだ危険だから、自衛隊とかそう言う人達が入れないんだよね。だから、半ば無法地帯と化してる節はある。

こういうの見てると、平和なんてあり得ないんだなーって思うわ。旅の過程で、無意味な戦争とか無価値な殺戮とか傍迷惑な抗争とか色々見てきたけど、やっぱり世界はまがまがしい。

これを平和にするんだったら、某所で会った鉤爪の男みたいに、世界中の人々全員を作り直して洗脳でもしないとねー。

悪を無くすんじゃなくってコントロールする社会にしろとあれ程イワナ、書かなかった？必要悪って言葉知ってる？

……でもヤクは駄目だわー。トカレフくらいなら俺もカシラも見逃すけどさー、ヤクは駄目だわー。

悪いけども、国に帰ってもらう他ないかなーって。

今回は、高確率で人の血が流れたりすると思う。よって、護国の英雄である艦娘を連れて行く訳にはいかない。

つまり、

「コノ前ハ冴島組、ソノ前ハミレニアム……、ヤクザ稼業ハ大変ネー」

「今回モドウセ、デキルダケ殺スナ、ダロ？……コウイウ奴等ニ生キル価値ガアルノカワカラナインダケドナ？」

「コンナ世界ジャ、ワタシ達ミタイナノモ出ルワヲ。……人類ハ争ッテバカリ。ドレダケノ血ヲコノ海ニ流スノカシラ……」

ブラックオプスは深海棲艦の皆さんが担当しますよ、と。

そう言うこと。
「はいはい、後で何でもやってあげるから。お仕事ちゃんとやろうねー」
「「何デモ?!!」」
「エッチシテ！」
「良いよー」
「陸デデート！」
「構わんよー」
「離島ニオ泊マリシテ！」
「ＯＫだよー」
いやー、深海棲艦の皆んなはかわいいなー！
別に俺に依存している訳じゃないから、誰と何をしようと怒らないし。ドＭ揃い故に奇特なプレイに付き合わされることを除けば最高だもんよ。
肌が白いとか、夜中に光る目とかは気にならない。そもそも、相手が妖怪だろうと悪魔だろうと可愛ければそれで良いのだ。むしろ人外とかの方が体力があって長い時間楽しめたりするし。いやー、また異世界に行って風俗店巡りしてレビュー書きてーなー!!
え？艦娘にバレたら？うーん、死ぬんじゃない？俺が。ま、しくじったら死ぬ、程度のことなら何度もやってきたし、へーキへーキ。

さて、仕事だ仕事だ。
俺も、このまんまで襲撃する訳にはいかないからな。
「インコグニート！」
はい、変装と。
「……魔法？」
「うん、魔法」
今は深海棲艦みたいな姿に化けてみた。これならバレないだろう。
位置はこの近くだ、とっとと終わらせて、深海棲艦と良いことしよう。

「あれだ、とっとと終わらせよう」
デカイけど古い。どっかの企業の払い下げなのか何なのか。あまり状態が良くない船だ。
そして、船から漂う、低品質の合成麻薬の臭い。聞こえてくる某国語。確定だな。密輸業者だ。
「了解。艦載機ハ？」
ヲ級が艦載機を出そうとするけど、それは遠慮しとこう。
「いや、甲板を焼くと死人が多くなるから。先ずはチ級に軽く雷撃して貰おうかな。ゆっくりと沈める感じで」
「ン、ワカッタ」
「了解！」
大きな腕部の艤装から、禍々しいデザインの魚雷を放つチ級。
お、当たった当たった。蜂の巣を突いたみたいに大騒ぎしてる。オラ、待っててやるからとっとと逃げろや。
「……皆殺シデヨクナイ？」
タ級ったら、物騒なことを。
「まあまあ、知的生命体なんだからさ、創造的な行動をとろうよ、ね？……それに、殺すのは好きじゃないんだよ」
……相手が人だろうと化物だろうと、殺しは気持ちがよくない。理由は様々だけど、旅の途中で沢山殺したし、沢山壊した。けどやっぱり、良いもんじゃないよ、破壊は。
「……逃シタラ、マタヤッテクルカモシレナイワヨ？」
「……だったら、何度でも潰してやるさ」
大切なのは続けることだ。
とことん付き合ってやる。密輸業者が諦めるまで何度も。
俺達みたいな悪の組織は諦めが悪いんだよ。
「……ソウ。……ヤッパリ、甘イ人ナノネ、貴方ハ。……デモ、ソウイウトコロ、好キヨ？」
思わず見惚れそうな笑みを向けてくれるタ級。やっぱり、良い女だな、この子。
「そうかい、ありがとねー。……次の仕事もあるからさ、巻きで行くよ

？」
「了解」
　次は地中海辺りだったか？遠いけど、旅人号でＶＯＢ吹かせば直ぐだ。こんなこともあろうかと、旅人号にはステルス装置を取り付けておいたのだ!!明石と夕張が!!勝手に!!!
「さあ！どんどん潰すぞ！お仕事重点！ガンバルゾー!!」
　サボったらどうなるか分からんからな!!
「「オー!!」」

　はい、という訳で。
『助けてくれ!!』
『クソ、この海域は安全じゃなかったのかよ!!』
『く、来るな、化物!!』
　制圧完了、かな。
『積荷を捨てろ!!命あっての物種だ!!とっとと穴を塞いで、国に帰るぞ!!撤退だ!!』
　あっ、クソ、海にばら撒くなや!!
「！、アイツラ、薬ヲ海ニ……!!」
　させるか！
「プラスミド注入……、ウィンターブラスト!!」
　パイロキネシスじゃダメだ、麻薬輸送船なら、ほぼ確実に麻薬合成用の化学物質もあるはずだから。引火したら大変なことになる。ならば、冷やす。
『何?!ま、麻薬が凍って……?!』
『畜生、この船はもう駄目だ！ボートで脱出するぞ!!』
『馬鹿、そんなことしたら、俺達全員逮捕じゃねえか!!』
『じゃあお前はここで死ぬってのか?!!』
　そういうの良いからさ、とっととボートで逃げてくんないかな。まあ、こんな海域で、こんな時間に救難信号なんか出したら、ほぼ確実に密輸業者だってバレるけども。
　さて、麻薬をどうするか。

……まあ、いつも通り、四次元ポケットの魔法で仕舞うしかないか。
後で、ノースティリスのあいつにでも押し付けておこう。
娯楽に飢えてるらしいし、良いんじゃない？あいつはどうせ死なないし。毒にも耐性あるし。
良し、ここでの仕事は終わり。さあ、お次はイタリア、ギャングのパッショーネからの依頼だ。
かっ飛ばして行くぞー。
「はい、じゃあ後は旅人号に乗り込んで！今日中に終わらせたいから、ＶＯＢ使うね！」
「エ～……」
「オオ、アレ、ジェットコースターミタイデオモシロイヨナ！」
「ウウ、速過ギテ怖イヲ、アレ」
「大丈夫だって、安心しろよ！そいじゃ、ＧＯ!!!!!!」
「「ァァァァァァァァ!!!!」」

たのちい。
「ウェッ、何カ気分ガ……」
「スゲー！スゲーナアレ!!」
「コ、怖カッタ……」
さて、ボンジョルノ、地中海。
後で飯食いに行こう。イタリアは良いぞ、フランスも良い。飯が美味い。マジで美味い。

ん？

『ザ、ザラ姉、さま……、最期に、一言、くらい、は……、ごめん、なさ、いって……、言い、たかった、な……』

……あー、はいはい。
仕事が増えたらしい。

１１０話　深海棲艦が出やがった!!

動け、ない。
手足の感覚がない、ぼんやりする、目が開かない、寒い、血が足りない、痛い、爛れた皮膚が熱い。
姉さま、皆んな、どこ……？

「ドウスルノ？モウ、死ニカケヨ？」
「イッソ、楽ニシテヤルカ？」
「ヲ墓クライハ、陸ニ立テテアゲヲウ？」
「まあまあ、治せるからこれくらい、大丈夫よ大丈夫」

声が、聞こえる。
知らない声。
男の人の声。
初めて聞く声。
艦娘も、死後の世界に、行くのかな。

私、頑張った、よね？
出来れば、天国に、行けると、いい、な……。

「良いかな？この高速修復材は、俺と工廠組が共同開発した代物でね？ノースティリス産の祝福ポーションに生命の粉塵、バイタルスター、女神の祝福などを混ぜ合わせた、物凄い回復薬なんだよ！艦娘用に調整されてて、艤装までもが一瞬で元通りだ!!……材料が割高で、在庫があまりないんだがね」
「へェ、万能薬ッテコト？」
「そうさね、生きてりゃ治せる系のやつだ。……はいバシャー!!!」
『ほわあああああ!!!?!!!?』
冷たぁぁぁ!!!?

「ウェルカムトゥジスクレイジータイム」
『な、何?!何が起きたの～?!』
『あ、君、イタリア人なんだ。いや、ごめんごめん。……で、どうかな?薬は効いた?』
薬?薬……、あ、今の冷たいのかな?
……うん、うんうん、失くした手足も、焼けた身体も、穴が空いた艤装も、全部元通り!
『……凄いですね～!まるで、入渠したみたいに、綺麗に元通りです!……あの、貴方が、私を助けてくれたんですか～?』
『Ｙｅｓ　Ｉ　ａｍ　!!』
『わぁ～!ありがとうございます～!貴方は、命の恩人さんですね～!』
『冷たい薬を使ってごめんね?大丈夫かい?暖かいコーヒーを淹れたよ、飲むかい?』
『いえいえ～!助けてもらっただけで、ありがたいですよ～!あ、コーヒー、頂きますね～!……お～いし～!』

……あれ?それにしても、誰なんですかね?
うーん、見たことないけどー……、イケメンさんですね～?でも、イタリア人じゃない?
そう言えば、ここは?ここはどこ?
辺りを、見回し、て……?!

「エ?何?」
「メッチャ見ラレテルンダケド?」
「コ、コンバンワ?」

『……深海棲艦だーーー!!!』
なっ、ななななな!!?深海棲艦!深海棲艦!!どどどど、どうしましょう!!!はっ?!い、命の恩人さんだけは守ってあげないと!!!
『お、恩人さん!私の後ろに!!こ、今度は私が助けますからね～!!』

とは言ったものの、ど、ど、どうしよう!!戦艦と空母と、雷巡！私一人じゃ勝てないよね?!!
えーと、えーと、そうだ!!
『えーい！』
『うおっ?!どうしたの、急に抱き付いて来て?』
いやあ、守る為に、盾になろうと思って……。
……はっ?!だ、駄目だ！この人、大っきい！全然守れてない?!!
室内じゃ、砲を撃つ訳にもいかないし……、どうしよう！

『あー……、晩御飯はまだ済んでないかな?』
『え?あ、はい、まだですよ?……って、今はそれどころじゃないですよ～！』
『うちで獲れたものを使ったローストチキンとポテト、オニオングラタンスープあとサラダがあるんだけど、どう?』
『チキン?!!良いんですかずっと食べたかったんです嬉しいです！わーい！』
わーい！……レーションのお肉は固くて冷たくてあんまり美味しくないですからね～。
『お酒は?飲める?』
『お、お、お、お酒!!!!良いんですか!!!!』
お酒！お酒！お酒?!!!艦娘はお酒なんてもらえませんからね!!!!
『お、おう、赤でいいかい?丁度良いのがあってさ、一緒にどう?』
『あ、あ、あ、ありがとうございます～!!!恩人さんは神様です～!!!』
おお！おおお！これが、これが夢にまで見た!!赤ワイン!!!
『……なんだか、艦娘って、どこに行っても可哀想な扱いだよなぁ……。あ、どうぞ、食べて?味には自信あるからさ！』
『わーーーい!!!もぐっ……!!』
んんっ！外はカリカリ、中はジューシー！噛めば噛むほど肉汁が溢れて来て、それでいてニンニクの風味が良く効いていて美味しい！
ポテトもほくほくで、病みつきになっちゃいますね～！
スープも素材の味が活かされてて、サラダも新鮮でシャキシャキし

ます!!
美味しい、美味しいですね、美味しいです!!
そして!
『赤ワイン〜!えへ、えへへ、えへへへへへへ〜!』
お酒、お酒ですよ初めてです美味しいです〜!
豊かな葡萄の香り!どっしりとした味わい!身体を熱くするアルコール〜!!
『も、もう、ポーラは、死んじゃっても良いです〜!』
『い、いやいや、死なれたら困るよ、折角助けたんだからさ?』
あー、それはそうですねー!
いつまたこんなに美味しいものとお酒を飲めるか分からないですから、今のうちにたーくさん食べてたーくさん飲まなきゃいけません、ええ、いけません。
『んんー!おーいーしーいー!!!』

もー満足です食べられません〜。
目の前の恩人さんも、たーくさん食べてたーくさん飲むから、私もそれに釣られてたくさんたくさんたーくさん飲み食いしちゃいました〜!
「……結局、貴方ハ誰ナノ?」
『んう〜?何ですか深海棲艦さ〜ん?ポーラは今、お腹いっぱい胸いっぱいでいっぱいいっぱいなんです〜。……ん?あれ?……深海棲艦?!!』
わー!忘れてました!深海棲艦がいたんでしたどうしよう!!
『あー、落ち着いて、えーと、ポーラちゃん?その深海棲艦は、そう……、鹵獲したものだから!害はないよ!』
『え?そうなんですか?……あ、ポーラで良いですよ〜、貴方は命の恩人さんで、ポーラのお腹の恩人でもありますから〜!えへへ〜』
「お腹の恩人って何だよ(哲学)」
『?、何か言いました?』
『あ、ああ、いや、何でもないよ。……それで、ポーラ?君はどこの艦

娘なのかな？』
『セントトリステ鎮守府ですよ～』
あ、そうだ！ザラ姉さま！ザラ姉さまが心配してますよね～！帰らなきゃ！
『セントトリステ、セントトリステ……、あ、丁度仕事場の近くだ、送って行くよ』
『本当ですか?!嬉しいです～！』
助かりますね～、良い人ですね～！鎮守府の外はこんなに良い人がいるんですね、知りませんでした～！

『っと、深海棲艦だ、船を停めて応戦しよう。……お空の世界を思い出すなぁ、事あるごとにモンスターに絡まれるんだもんなぁ。話は後だ、先ずは魔物を片付けよう、なんつって』
『はい？外……？そういえばここ、どこなんですか？』
『ここ？地中海のど真ん中、俺の船の中だけど？』
船……、船?!
『い、今、地中海の船の中って言いましたか?!!』
『え？うん、言ったけど？』
そ、そんな！地中海は……!!
『地中海は今、世界屈指の、危険な深海棲艦の巣窟なんですよー!!!』

111話　い・ま・に！

地中海。
ユーラシア大陸とアフリカ大陸に挟まれた海。
古くより多くの文明を繁栄させてきた、人類史的にも特別な意味を持つ海だ。
そんな海は今……、
『良いですか～?!地中海はですねぇ、深海棲艦がたーくさんいるんですよー!!ポーラは皆んなと沿岸の警備をしていたんですけど、最近の深海棲艦は追い返すのでやっとやっとなんですから!!それなのに、地中海のど真ん中なんて……!』
深海棲艦が我が物顔で闊歩する、死の海と化している、らしい。
例の「皺寄せ」、なんだろうか。
大暴れする黒井鎮守府の代わりに、他所の海域が犠牲になった、のかなぁ。
犠牲になったのだ、日本の犠牲にな……。
などと言い張ったら、各方面からめっちゃ怒られることは間違いなし。かと言って、あまり黒井鎮守府の戦力を分散させ過ぎるのも良くないしなー。既に、結構遠い所まで出撃してるし。まあ、地中海にはまだ一度も来てなかったけど。
兎に角、戦力の総数を増やして、いろんな海域に派遣するしか無いな、うん。戦力の質は十分だし、後は総数を増やさなきゃ。
幸い、アメリカの大統領にメールしたところ、艦娘を二人送るって言ってくれたし。その上、艦娘をなるべく轟沈させないように指示する、とのこと。なんでも、副大統領のクーデターの際に協力した借りを返したいそうだ。助かる。
さて、地中海への出撃の件は保留。艦娘が足りないんで。
まだそこまで手が伸びないんだよね。大西洋ですら手付かずだから。
あ、いかんいかん、考え込んでる暇はない。今は深海棲艦が船外に

いらっしゃるとのことだ。
　さてさて。
『ポーラ、船内にいてくれるかい？ちょっと深海棲艦倒してくるから』
『無理無理！無理ですって！大人しく逃げて下さ～い！ポーラが、ポーラが囮になりま』
『じゃ、行ってきます』
『せめて最後まで聞いて下さい～！』
　さ、かわいいかわいいポーラちゃんは、俺の船にしまっちゃおうねー。
　……と、言う訳で、うちの深海棲艦を連れて、船外の深海棲艦をやっちゃいます。
　もとい、殺っちゃいます。
　決して、仕事が増えたことに関するイライラをちょうどそこにいた深海棲艦にぶつけたいとか、何で俺が海の平和を守らなきゃならないのとか、うちの鎮守府に来る反戦デモの人達の相手辛いとか、そういう邪な考えはない。ないのだ。
「さあ、行くぞ!!!」
「「了解!!」」

　おー、数も質もそれなりだな、確かに。
　船外、海面上に立つ俺と、うちの深海棲艦。時刻は深夜だが、旅人号のライトを点灯させ、視界を確保している。
「並ノ艦娘ニハ、荷ガ重イ大群ネ」
「んー、なら、「使う」、か？」
「……ヤメテオイタラ？アレ、辛インデショ？」
「いやあ、今回のは後遺症はあんまりないし、良いじゃん？……じゃなきゃこの、行き場のない怒りが」
　流石に激おこ。
「マア、好キニシタライイワ。……デモ、前ミタイニ、ヤリスギデ倒レナイデヨネ？」
「はいはい、大丈夫大丈夫！」

さあて、戦いだ。
……そして今回は、変異させてもらおう。
あー、つまり、前回、三日月は百体以上の深海棲艦を仕留めたが、俺は十体そこらだった。この体たらくっぷりを鑑みると、ここらで久しぶりに、本格的な戦い方を思い出そうと、そう言う魂胆になったのだ。
で、変異とは。
俺が大して強くないことは周知の事実だろう。だが、俺は一言も、これ以上強くなれないなどとは言っていない。
要するに、平たく言うと、俺は弱いから俺自身であることをやめて人外に進化しよう、と言うこと。
いつものように、波紋や氣功などの自然由来的な、燃費のいいのを使う訳じゃなく、莫大な魔力や貴重な薬品、禁術に呪いなどなど、そう言うので強くなろうってこと。
さあ、行こうか。
『呪われたエーテル抗体のポーション』『ジーントニック』『プラスミド』『変異誘発剤』『進化の秘術』『内なる大力』『生命湧き』『獣化の丸薬』『カレル文字「獣の抱擁」』
……こんなもんか。
……。
……。
あ、
ああアアア？
『アアアアアアアアアアアア!!!!!
で　き　あ　が　り　。!!!!』
分かりやすく、今の俺の状況を表すと……、肉体は練度カンストの戦艦以上、全身の血肉の一片に至るまで超強化。その上翼が生え、雷雨が急に現れ、鋭い爪が生えた。紅く爛々と光る目玉の瞳孔は猛禽のように縦に割れ、自らの中には燃え上がるような力と、徐々に溢れ出る生命力。エレクトロボルトにサイコキネシス、インフェルノ、ウィンターブラスト、ホーネット。そして、髪が異様に伸び、まるで獣の

尻尾のよう。おまけに鋭い牙もある。
そう、そうだな、こうなれば、勝てる。こうなれば、殺せる。
だが、やっぱり、人間の部分を削ぎ落としていくのは、良い気分じゃない。今の俺は、辛うじて人の形をしているだけの化物だ。
だが今は……、
『死ね、深海棲艦』
叩き潰させてもらう!!
×
×
×

『よし、良好、と。あ、申し遅れました、私は、黒井鎮守府の工作艦の明石です！以後、お見知り置きを、なんちゃって』
　身振り手振りで話す、画面の中の艦娘、明石さんは、愛想のいい笑顔が素敵ですね～。きっと、色んな人に好きになってもらえる人なんだな～って思います。
『ポーラは、セントトリステ鎮守府の重巡、ポーラで～す！よろしくお願いしますねぇ』
　今日は良い日だ、他の国の艦娘に会えるなんて、中々ないもん。
『……へぇ、提督ってば、また艦娘を……。……へぇ。……まあ、良いでしょう、戦力の増加は喜ばしいですし』
　……提督？
『あ、まだ説明を受けてませんでしたか？彼は……、貴女をここに連れてきた人です、彼は、日本の、黒井鎮守府の提督その人です』
『ええー!!』
『そして、艦娘の貴女がそこにいると言うことは、提督は貴女を欲しがっています。もちろん、戦力としてですよ？変な勘違いは駄目です』
『で、でもですね～？私は、セントトリステ鎮守府所属の……』
『そんなもの、関係ありませんね。提督は貴女を攫います。攫って黒井鎮守府所属にします。……あ、安心して下さい、黒井鎮守府は良いところですから』
　そ、そんな！攫いますって……?!
『ま、待って下さ～い！攫うなんて言われても、私にはザラ姉さまに仲間達がいるんです！』
『チッ、仲間まで……！ライバルが増えてしまいますね！……あ、あー、では、仲間も一緒に攫われます』
　？、ライバル？、……それより、攫われる、なんて！セントトリステ鎮守府の人達がなんて言うか……！皆んなものすごくものすごーく怒りますよ!!
　っと、船が揺れた！
　……あれ？

私、なにか大切なことを忘れてるよーなー、そうでないよーなー？
……!!
『こ、こんなことしてる場合じゃありません！外！恩人さんが外に出ちゃったんですよ!!!』
『えーと、つまり？』
うーんと、その、恩人さんは日本の鎮守府の提督さんだったんだよね？だから、
『その、提督さんが、お外に出ちゃったの!!深海棲艦でいっぱいなのに!!』
『成る程、戦闘ですか。……ところで、貴女の今いる海域は？』
『？、地中海ですよ～？』
『……分かりました、強力な深海棲艦が多数存在するんですね？』
え？なんで分かったんですかね～？ん～、手元でコンピュータを操作しているみたいですけど、それですかね？
『……では、貴女はそこにいて下さい。見た感じ、貴女一人が出たところで戦力になりませんから』
え?!だって！
『ああ、言いたいことは分かってますよ？……結論から言います、提督は死にません。不死身です』
……は？
『こちらのＶＴＲをご覧下さい』
そう言って、明石さんはモニターから姿を消した。
代わりに今、モニターに流れているのは、恩人さん……、日本の提督さんとその艦娘達の活躍だった。
『凄い……!!』
提督と、艦娘とが、お互いに背中合わせで戦っている！これが、これが日本の提督！日本の鎮守府!!
……私なんて、自分の提督の顔も見たことがないのに……。
『……と、もう充分ですね？提督は、死にません』

『……じゃあ、それじゃ、ポーラは、ポーラは何も出来ない？足手まとい？』
　それは、嫌だ。さっきの映像みたいに、恩人さんと一緒に戦いたい!!
『……ならば、一つだけ方法があります』
『方法？』
『貴女でも、まともに戦えるようになる武器ですよ……。テストは面倒くさ、いや、まだなので、安全の保証は出来ませんが……、どうしても、と言うなら……』
『……ポーラは、やります!!』
『……上出来です！さあ、武器はここです、こちらのポータルに転送しました！通信機も同封したので、武器の使い方を説明しながら戦場に出ますよ！』
『はい!!』
　さあ、武器を、武器、を……!!
『こ、これ……』
『多目的複合武装デスホーラー、そして格納された二丁拳銃ケルベロス……。今回も最高の出来ですねぇ。やはり、人よりも優れた身体能力を持つ艦娘の武器ですから、武器のスペックを極限まで上げても大丈夫、と言うところがですね』
　い、いやいやいや！そうじゃなくってこれ！
『その、これ！棺桶じゃないですかーーー!!!!』

１１２話　裏社会

『わー！わー！待って、待って下さいーーー!!!回ってる回ってる!!!反動凄いですこれ!!!』

『……はい、オッケーです。ガトリング砲のデータは取得したので、次は……、ミサイルにしましょうか。使い方は分かっているとは思いますが、一応アナウンスさせてもらいますね？えー、では、棺桶の十字架の長い部分がありますね？そこの裏側のレバーを１８０度回転させて……』

『こ、これって！本当に私の為に貸してくれたんですかー?!な、何だか、良いように利用されてる気が?!!』

『……ソンナコトナイデスヨー？さ、実験を再開、あ、いや、戦闘を再開しましょうか！』

『今実験って言ったーーー!!!』

ポーラです。

ポーラは今、ぐ～るぐ～るぐ～る回ってます。もー、大変です。

えーと、つまり、渡された棺桶は、棺桶じゃなかったんです。

ポーラは最初びっくりしました。だって、戦うのに棺桶を渡されたんですから。日本流のジョークなのかなと思って頑張って笑おうとしちゃいました。

でもそうじゃなくて、その棺桶こそが強力な武器だったんです。

一度、私が触れると、ユーザー認証？とか言うのをしたらしくて、これからこの棺桶は、私の艤装扱いになるらしいんです。

でも、ユーザー認証？のメッセージが、《Ｋｉｃｋ　ｔｈｅｉｒ　ａｓｓ　!!》っていうのは、乱暴かな～って思いますよ、明石さん？

ユーザー認証？が済んだら、この棺桶が私の艤装になったみたいで、頭の中に使い方とかの情報が流れ込んできました。

あまりの性能にびっくりして固まっていると、明石さんが、ケルベロスを出して下さいって指示してきました。だからそれに従って棺桶のボタンを押してみると、棺桶の側面から「ケルベロス」と言う名

前の大きな拳銃が二丁、せり出してきたんです。
普通、拳銃なんかじゃ深海棲艦を倒すことは無理なんですけど、このケルベロスは違いますよ～？駆逐艦の主砲くらいの威力があって、しかも、リロード無しで無限に連射できるんですから!!
……でも、反動が強くて。ちょっと肩が痛いです～。
それに、この棺桶自体にも色んな武器が付いているみたいでして。搭載している武器はガトリング砲、ロケット砲、ミサイル、らしいです。……何を考えながら生きれば、こんなものを作ろうと思うんでしょうかね～？
デザインも、十字架の真ん中のドクロとかすっごく怖いやつですし。
……それで、さっきまで撃っていたのはガトリング砲。あまりの威力と、その反動で、踏ん張りが効かなくてぐ～るぐ～る回っちゃいましたよ！
あ、でも、回転しながらガトリング砲を乱射した訳ですから。たくさんの深海棲艦をやっつけられました。Ｎｏｎ　ｔｕｔｔｏ　ｉｌ　ｍａｌｅ　ｖｉｅｎ　ｐｅｒ　ｎｕｏｃｅｒｅ　って言いますもんね、良かったです～。
後は、恩人さん、いや、日本の提督さんを助けなきゃ、ですね！
『早く撃って下さいよ～、早く～』
『んも～、分かりましたよぅ！』
あ、分かりました、明石さんって、困った人です大変です。
×
×
×
『で、ここまでやっておいて、俺の活躍は全カット？』
え、酷くない？
俺、結構カッコよく戦ってたんだけど？全カット？マジで？
しかもポーラ強い。うちの深海棲艦も強い。俺いらないくらい強い。
え？じゃあ俺、また無駄なことした？無駄にカッコつけただけ？この後、正直立っていられない程の後遺症が来るのに？

……畜生！台無しにしやがった！俺はいつもそうだ！この展開は俺の人生そのものだ！誰も俺を愛さない！
いや、艦娘の皆んなに愛されてるわ俺。
やったぜ。
さて、ポーラを怖がらせると悪いから、獣化を解いておくか。

……。

……!!!

あああああああ!!!身体痛いーーー!!!!スッゲー痛い!!!!頭も痛い!!!!
あーーーー!!!!旅人こわれちゃ～う!!!!

「フー、終ワッタワネ！……アラ、提督、後遺症？モウ、ショウガナイワネ」
すまぬ……、すまぬ……。

さて。
上陸しました、イタリア。
ポーラを送り届けたいのは山々だが、取引の時間がもうすぐだ。お小遣いを渡して、変装させたチ級とヲ級に任せておく。タ級は秘書としてついてきてもらおうか。
……というか、一人にはついてきてもらわなきゃ無理。後遺症で動けない。こんなこともあろうかと、懐に車椅子をしまっておいて良かったぜ。
さあついたぞ貸切のレストラン。ここで取引が行われるんだ。ギャングとヤクザと取引とは、うちも一端の悪の組織になったなぁ。
『お　ま　た　せ　（王の帰還）』
『む、時間通りに来たのか、珍しいな』
ブチャラティさん。ナポリ一帯を締めるギャング、パッショーネの

幹部だ。
『だが、約束の時間よりもせめて五分前には着くようにしておけ』
白竜のカシラ。日本から商談に来た、知り合いのヤクザの若頭だ。
……俺、旅人なんで。ビジネスマナーとかはいいです。
『……因みに、旅人だからビジネスマナーについてとやかく言われる筋合いはない、などと思わないことだ。今回は、悪の組織のトップとしての、ビジネスマンとしてのお前に用がある』
ひええ、すいません……。
『……それに、取引の現場に車椅子で来るのも意味不明だ』
『あ、これはまあ、怪我みたいなもんです、お気になさらず』

『……それで、仕事はどうなった？』
『いつも通り、深海棲艦流のやり方で始末しましたよ。写真はこれ。積荷は、いつも通り足のつかないように処分する予定です』
カシラは、沈没した密輸船の写真を一瞥すると、良くやってくれたの一言と共に金の詰まったアタッシュケースを渡して来た。
もちろん、手渡しじゃない。後ろに控える組員が、秘書役のタ級に渡した。おお、ヤクザっぽい。
中身の確認はしない。信用できる相手だから、と言うのもそうだが、大して手間のかかる仕事じゃかったからだ。中身の有る無しはどうでもいい。
ただ、無料でやるのは筋が通らないからという理由で、端金をいただいたんだよ。
『……では、今回の取引は』
『すいませーん、飯と酒ー!!あるだけ持ってング?!!』『……閉じろジッパー!』
お口チャック（物理）。
『今回の取引についてだが……』

はい、取引終了。

まあ、特に変わり映えもしない、いつも通りの取引だった。
内容は主に、俺が艦娘を率いて海域の制海権を握るから、その隙に貿易をどうこうって話。カシラとブチャラティさんは何だか別の取引もしてたけど、それは俺には関係ない。
あ、強いて言えば、地中海での貿易業がヤバイらしいので、海域を確保しろって話が。
……まあ、保留にしといた。前も言ったけど、ここまで手が伸びてない。なのにいきなり地中海に来たら、何で？って思われるだろ？
知ってる？鎮守府に来る謎の権利団体とか政治関係者とか、追い返してんのは全部俺なんだぜ？
艦娘じゃ対応できねーもん。あの子ら、俺に文句言おうとした人がいれば即座に殺すもん。駄目だもん。

まあ、仕事は終わり。
ポーラを鎮守府に送り届けてあげなきゃな。

……相手の鎮守府の出方によっては、鎮守府が一つ町から消えるんだが。

113話　イタリアンカチコミ

《ノックしてもしもーし！》
『な、なんだお前は?!』
『ここは立ち入り禁止だぞ!!』
　うるせえ入れろ。
『『ああっ!!』』
　正門ジャーンプ!!
《じゃあの》
『『し、侵入者だ!!!』』

　さあやって参りましたセントトリステ鎮守府！日本の鎮守府で大人気（指名手配的な意味で）の鶏マスクジャケットおじさんの参上だよ!!
　……ポーラが言うには、ブラック鎮守府じゃないらしいが。ちゃんと飯は三食出るし、大破すれば入渠できて、倉庫に入れてくれる、とのこと。……ブラックじゃない？これで？……まあ比較的マシ、いや、ブラックか？
　そして、何でも、自分の提督に一度も会ったことがないらしい。これはどう考えてもおかしいでしょ。
　余りにもおかしい、おかしいので、調べに来た。謎解き（物理）でピカラット荒稼ぎするぞー！
　さてまずは一階。ドアを手榴弾で爆破しダイナミックお邪魔します。
《死にたい奴！カラ、前に出ろッ!!》
　服装はジャケットに鶏マスク、声での身バレを防ぐ為にアニメやニュース番組などの音声を編集したテープを使用。いつもの鎮守府襲撃用セットである。
『な、なんだ!!?』
『爆発?!!』
『全員集まれ！不審な奴がこの鎮守府に入り込んだらしい!!捕まえろ

!!』

あ、混乱してるな。よしよし。

実はもう一つの懸念があってさ。……身体能力でバレるかもしれないってこと。だからなるべく、囮や不意打ちを活用して、「一般の成人男性でも可能な手口で」全員張っ倒す必要がある。

そう例えば、

『お前等はそっちへ向かえ！俺はこっちを見てくる!!』

『了解！』

こういう、一人だけになった奴を、

『クソ、どこに行きやがった、鶏野郎！……!!、グアッ!!き、貴様!!』

こうやって、各個撃破していく。……このやり方なら、誰も犯人を特定できないだろう。

『くっ、せめて無線を……！あ、ぐっは!!!……』

転ばせたら、トドメ。

……あ、殺してはいない、殺しては。

《おいどうした！一体何があった?!》

お、倒される前に無線を繋げておいたのか、やるな。意外と根性ある、感動的だな。だが無意味だ。

《おい！聞こえているか?!そっちは大丈夫なのか?!お……》

はい、破壊。なるべく怖がってくれ、冷静になって一箇所に集られると面倒だ。このまま、混乱に乗じて潜入しよう。

最上階。

ネオサイタマ式インタビューをしながら歩き回った結果、この階の何処かが執務室らしいことが判明。

しかし、何処が執務室なのかは分からない。

が、問題ない。全く以って問題ない。

……つまり、この階にいる誰かがこの鎮守府の提督なのだ。この階ごと制圧すれば問題ない。

《ソシテ、制圧！、したものがこちらです》

『だ、誰なの?!私に何の用?!!』
部屋の隅でガタガタ震えながら、これまたガタガタ震える銃口をこちらに向けるこの女。
《誰ダ?》
『こっちの台詞よ!!いきなり乗り込んで来て!!』
質問を質問で返すなあーっ!!疑問文には疑問文で答えろと学校で教えているのか?とプッツンしても良いが、女性に対して声を荒げるなんて主義に反する。
そもそも、今回はテープの音声以外のコミュニケーション手段が使えないし。
多分、この女の人が、ここの提督なんだろうな。服装から察するに。
しかし、もしかしたら提督の親族とかの無関係な人かもしれない。確証がないのに断定は出来ない。俺の勝手な判断で皆んなを混乱させたくない。
《誰ダ?》
『ひっ?!な、何よ……!撃つわよ!来るな!近寄るな!!』
……完全な恐慌状態。まさに、話にならない。
女の人を殴る訳にはいかんしなぁ……。
……。
《誰ダ?》
『ひっ?!や、やだ!来るな来るな!来るなぁーーー!!!』
一歩も動いてないんだが?ビビり過ぎでは?銃も構えているだけで、撃つ気配はないし。ほんのひと匙程の殺意すら感じられない。
さあどうするか……?
と、その前に!
『いたぞ!!執務室だ!!』
『早く連絡を!!』
憲兵!二人!!
先ずは、すぐ近くにある置時計を、無線を取り出した憲兵の顔面にシュウウウーーー!!別にエキサイティンではないが。
『あ”ぁっ!!!?』

うわあ、酷いな、顎が砕けた。もう二度とTボーンステーキが食べられないねぇ？

そして、呆気にとられたもう片方の憲兵に、型もクソもないテレフォンパンチ。本来なら、当身でも何でも出来るが、やらない。

『なっ……、?!!』

そして、壁に叩きつけられた憲兵を踏みつけ、ダウンさせる。

ノロノロと這いずっている、置時計を投げつけた方の憲兵にもトドメ（非殺傷）を刺す。

全く、油断も隙もねえな。

さ、提督カッコカリさんにお話を聞かなくては。先程からぽかんとしているこの女の人に、再び声をかける。いや、テープをつける。

《誰ダ？》

『あ、ああ……!、……い、嫌、嫌、嫌、ご、ごめんなさい、殺さないで……!殺さないで!!』

あら、今度は怯えてるみたいだ。これはこれで、話にならない。

『何でも!何でもするから!何でも言うこと聞きますから!殺さないで!殺さないで下さい!助けて!!』

銃はとっくに捨てて、床にへたり込んで、泣きながら命乞いをしている。残念ながら、俺はノースティリスのあいつのような気の狂ったサディストではない。たった一言、自分の身分を明かしてくれれば解放する。

《誰ダ？》

『嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい!!助けてパパ、ママ!!痛いのは嫌、恐いのは嫌っ!!』

遂には、失禁までして泣き喚いている。参ったな、このままじゃショック死しそうな勢いだ。

しょうがない、余り時間をかけたくはないんだが、執務室を探ってみるか。

手近な机から資料を取り出し、読んでみる。少なくとも、この女の人が提督かどうかくらいは、ここを家探しすれば分かるだろう。

……運営費用、違う。資材管理、違う。戦況分析表、違う。

『……ど、泥棒？な、何でもあげる！何でもあげるから！お金も、全部あげるから!!だから私は、私だけは！』

……目的は自分じゃないと、そう思ったのか、今度は全力で媚を売ってきたな。涙と涎でぐちゃぐちゃの顔で必死に笑顔を作って、頭を地面に擦り付けている。だから、そう言う趣味はないんだよ！

ん？日記……？

『……あ！それ、私の……、いや、な、何でもないです……』

この人のらしい。

……では、失礼して……。

１１４話　普通の、少し臆病な提督の日記

????月????日
今日は素晴らしい日だ！
私は選ばれたのだから。
何をやっても人並み以下だ、などとはもう誰にも言わせない。
私には、提督という、最高の才能があったのだから。
今はまだ小さな鎮守府だが、艦娘とやらを使って戦い抜き、やがて頂点を目指してやる。
もう二度と、誰にも、馬鹿されてたまるもんか。

????月????日
今日は、この私が、セントトリステ鎮守府に着任する記念すべき日だ。
ここから、私の栄光への道が始まるのだから。
……緊張する。
昔から、大事な場面ではあがってしまう。面接であれ何であれ、成功した試しがない。
……いや、大丈夫、大丈夫だ。
私は神に愛されている。
何も恐れることは無いはずだ。
取り敢えずは、艦娘とやらを見てみよう。一般には情報が公開されていないので詳しくは知らないが、大戦の頃の戦艦を模った人型の兵器らしい。
ロボットだろうか？

????月????日
正直、驚きが隠せなかった。
リットリオ、という戦艦の艦娘を建造したが、私と殆ど変わらないくらいの女性だったからだ。
しかも、その優しげな風貌は、同じ女性として嫉妬しそうになる程

美しかった。
微笑みながら、「これから一緒に頑張りましょう」と声をかけてくれたその姿は、人と変わらない。
むしろ、あがってしまって話せなくなった私のことを考え、気を遣ってくれた分、人よりも良いんじゃないだろうか。
確かに、資材と引き換えに、どこからともなく召喚されたことには驚いたが、そう言うものらしいと納得した。
資材を使って召喚されたからと言って、人と変わった姿をしている訳ではない。
……これからは、このリットリオと協力して、共に歩んでいきたいと思う。

????月????日
……何だあれは。
深海棲艦、何と恐ろしい存在なのだろうか。
化け物が海からやってくることは、ニュースや新聞で、知識として知ってはいたが。
全部、自分とは関係のない、どこか遠い世界の話だとばかり思っていた。
だが、見せられた深海棲艦の映像は背筋が凍る程に恐ろしかった。
あんなものと、私達は戦わなきゃならないのだろうか。勘弁してほしい。早速、提督になったことを後悔しそうだ。
リットリオが怯える私を慰めてくれたが、あの恐ろしい深海棲艦と実際に戦うのは彼女なのだ。
……大丈夫なのだろうか。

????月????日
リットリオは、任務を忠実にこなした。
実際に戦う映像を見たが、あの恐ろしい深海棲艦相手に果敢に戦い、見事に討ち滅ぼして見せた。
その力は、まさに戦艦そのものと言えるものだった。背中の艤装と

いう、人には到底装備することが叶わないような鉄の塊を以って戦ったのだ。
これなら、深海棲艦を全て滅ぼすことも可能かもしれない。
……だが同時に、私はまたもや恐ろしく思った。
あの深海棲艦に対抗する艦娘の力とは、一体……。
如何に、首輪型の制御装置で艦娘の殺生与奪を握っているとはいえ、それでも、私はこのリットリオを恐ろしく思った。あの鋼鉄の砲塔が、いつか私に向けられるんじゃないかと思うと、夜も眠れないのだ。
リットリオ自身は、初めて会った時と変わらない優しい微笑みをくれるが、それでも私は、恐ろしい。
だから、私はリットリオを閉じ込めることにした。何てことはない、部屋に外から鍵をかけるのだ。そして、憲兵に見回りをさせて、万が一のことを防ぐ。
幸い、リットリオもそれに納得してくれた。その上、私とは仲良くしたいと、国の為に戦いたいと、そう口にした。いつものように、優しげな笑みを浮かべて。
リットリオのあの笑顔に、嘘がないと信じたい。だけど、保険の一つもかけずにいられる程、馬鹿正直ではないのだ。
リットリオは、艦娘は人類の希望だ。そのはずだ。

????月
????日
アクィラを建造した。空母、と言う艦種らしい。正直、艦種があることすら初めて知ったが、空母と言うのは重要とのこと。
事実、出撃してもらったところ、大きな戦果を挙げてみせた。物理法則を完全に無視して放たれる艦載機は、複数の深海棲艦を同時に焼き払ったのだ。
……アクィラもまた、リットリオと同じく好感の持てるような人物だが、その力はまともじゃない。
また、保険だ。私は、持ったこともない銃を持ち、自室に丈夫な鍵を付けた。こんなことでは、艦娘の力に対抗することは出来ない、そ

れは分かっている。しかし、艦娘が私に襲いかかることはないと言うこともまた、分かっているつもりだ。

????月????日

戦況の激化に伴い、また建造だ。

召喚されたのはリベッチオ。駆逐艦、という艦種の、小さな、小学生くらいの女の子だ。

こんな小さな子も、艦娘なのだろうか。通りで、政府が情報を一般公開しない訳だ。これじゃまるで、中東の少年兵みたいだから。

こんな幼い子供が、人類の希望？とてもじゃないが、他人に対して胸を張ることなんて出来ない。

……でも、私は、代わってあげられる程強い訳でも、勇気がある訳でもない。

無邪気に笑うリベッチオに戦えと命じる自分が、酷く小さな人間に見えたのは、気の所為じゃないはずだ。

こんな小さな希望に縋る程に、人類は、私は無力なのだろうか。

そうだとすれば、酷く、惨めだ。

????月????日

リベッチオが大怪我をした。

常人ならば、とっくに死んでいるような大怪我を。

アクィラに肩を借りて帰ってきたリベッチオは、片腕が根元から捩じ切れ、顔の半分以上が焼け爛れていた。

見たことのない、ヒトの中身。

滴る生臭い血液が、零れ落ちる黄色い脂肪が、焼けた喉から聞こえてくる声が、その全てが、悍ましい。

私は、みっともなく、胃の中身を全部吐き出した。そして、声をあげて泣いた。リベッチオが、小さな子供の死体が動いているようにしか見えなかったからだ。

そんな中、リットリオはこう言った。

「早く、ドックへ！」と。

つまり、入渠させろと言うのだ。
入渠と言うのは、艦娘の怪我や艤装を直す施設のことだ。ここならば、まともに治療したならば、修理したならば、もっと時間がかかるであろう艦娘とその艤装を、数時間程で直す事が可能なのだ。
……しかし、このリベッチオは、生きているのが不思議な程の大怪我を負っていると思う。
入渠したところで、どうにもならない。なる筈がない。私はそう思いながらも、入渠の許可を出して、自室に逃げ込むかのように帰った。
一分一秒でも早く、この場所から、死の臭いがする場所から、離れたかった。

????月
あり得ない。
????日
リベッチオが完治した。
昨日の大怪我が、まるで嘘のように消えていた。
そんな、そんなはずはない、あってたまるか。あんな怪我、治る訳がない！
しかし、またリベッチオは無邪気に笑った。笑ったのだ。失くしたはずの腕も、焼けたはずの身体も、全部元通りで。
「提督さん！お陰で助かったよー！ありがとね！」
やめてくれ、私はただ、怖がっていただけだ。
「提督の判断のお陰で、リベッチオを失わずに済んだわ。本当に、ありがとうございます、提督！」
違う、私は何もしてない、そいつが、死人が、リベッチオが、勝手に生き返ったんだ。
「あら、リベ、戻ったのね。次は気をつけましょうね？あ、提督も、ありがとね？」
黙れ！私は、私は……！
……そうだ、違うんだ。
艦娘は、人じゃない。

深海棲艦と同じ、化け物だ。
だってそうでしょう？深海棲艦という化け物と同じ力を持ち、殺されても一晩で元通りなんだから。
違う、私とは、違う。
共に歩むことなんて、出来ない。
……封じ込めなくては。
倉庫に閉じ込めよう。鎮守府で一番強固なものに。部屋には監視カメラも付けて、叛意がないか常に見張らせよう。直接会わないで良いように、タブレットでコミュニケーションを取ろう。憲兵ももっと増やそう。
もう嫌だ、こんな化け物共に関わりたくない。艦娘なんて、人の形をしているだけだ。深海棲艦と何ら変わりはないんだ。
私に近寄るな、化け物め。

????月????日
不気味だ。
倉庫に閉じ込めて一日中監視カメラで監視されていると言うのに、艦娘共は特に嫌がる素振りを見せなかった。
「少し恥ずかしいですが、保安の為ですから」
「気にはなりますけど、提督には何か考えがあるんでしょう？」
「リベ、もっともっと頑張れば、また提督さんに会ってもらえるかな？」
もちろん、こんな化け物共には二度と会うつもりはない。何をされるかわからないからだ。出撃の時はタブレットで指示を出して、憲兵に艦娘を海まで連行させる。それ以外は倉庫で厳重に保管だ。それが、艦娘に対する正しい対応だ。

????月????日
戦況が悪化している。艦娘を三体、新たに建造した。
ローマ、ザラ、ポーラ。

新しい化け物が湧いて出た。建造したらすぐに憲兵を使って倉庫に行かせた。だから、顔を見たことはない。リットリオらにも、もう半年は会っていない。このまま、二度と会わずに終わりたいものだ。

しかし、その私の意に反するように、艦娘は勘違いをした。

必死に頑張れば、また私に会えると、そう思っているらしい。

冗談じゃない。誰が、あんな死人に、あんな化け物に会うか。

毎日毎日、大怪我をして帰ってくるのだ。時に、肉体の一部を欠損し、時に、臓器が零れ落ち、時に、全身に火傷を負い……。艦娘と言う名の死人が、血を滴らせながらドックへ這いずり、ほんの数時間で元通り。

私はもう、嫌だ。提督なんて嫌だ。こんな気持ち悪いものを見るのは嫌なんだ。

だけど、今更提督をやめたいだなんて言えない。どうすれば良いんだろうか。

????月????日

最近は、地中海の深海棲艦が増加したらしい。故に、地中海沿岸の防衛に集中しろとのこと。

防衛に集中しろ、か。政府も酷い連中だ。海から現れた深海棲艦という化け物についても、人類の希望と偽っている艦娘という化け物についても、殆どの情報を公開していない。

今、地中海では、深海棲艦と艦娘、化け物同士が殺し合いをしているのだ。血みどろの殺し合いを。

できれば、深海棲艦共々、共倒れしてもらいたい。

この悍ましい艦娘共には全滅してもらいたいが、そうするともう片方の化け物……、深海棲艦が攻めてくる。

なら逆に、奇跡的に艦娘側が勝ったらどうだ？そう、そうだ、私には艦娘制御装置がある。これさえあれば、艦娘を無力化し、解体することだって可能なんだ。

早く、早く深海棲艦を殺せ、人型の、死なない化け物共。そうしたら、私が、お前達をこの世界から消してやる。

提督なんてもう懲り懲りだ。
早く自由になりたい。

????月????日
使えない。
まるで戦況は良くなっていないらしい。深海棲艦は増加の一途を辿り、その質も向上しているとのこと。
どうせ死なないと思っていた艦娘も、ポーラとか言うのが一体いなくなったらしい。
ザラという艦娘が何か言っているらしいが、無視だ。艦娘の要求なんて聞く必要はない。むしろ、一度聞いたらつけあがってもっと酷いことを言ってくるかもしれない。
警戒しなくては。
警戒して、警戒して、私の身を守らねば。

１１５話　一択の選択肢

……成る程、ねぇ。

提督に選ばれてつけあがって、艦娘の異常性を目にして恐れる。そして、迫害しはじめる。

いたって普通。この女はいたって普通の提督だ。

うちの鎮守府だって、まだ練度が低い頃は、手足を失いながら帰って来たり、その子だと判別出来ないくらいの怪我を負ってしまう子もいた。

それに対して俺は、死体でもなんでも見慣れているもんで、特に恐いとは思わなかった。艦娘はそういう生き物なんだって納得して、必死に治療をしたが、普通は恐いって、見たくないって思うもんだ。

そうか、そういうもんか。

『提と、あ！いや、えーと、鶏さーん？皆んなを連れて来ましたよー？』

『やっぱり駄目よポーラ、勝手に執務室に入るなんて！』

『わっ！け、憲兵さんが！あの、だ、大丈夫ですかー？！』

ん、ポーラ達も来たな。

……さて、ここの鎮守府は、だ。

ブラックであることには変わりがないが、まだ一人も沈めちゃいない。何より相手は女性であるということもある。艦娘を引き取るだけで良いだろう。提督、やめたくてしょうがないみたいだし。

その前に、一つだけ。

今まで、貴女に会うために頑張っていたリットリオさん達に会ってもらおうか。

『ひっ……！あ、ああ！リ、リットリオ……！！』

『あっ！提督！お久しぶりです！そ、その、すみません、勝手に出て来てしまって！すぐに戻り……』

『嫌、嫌！！こっちに来るな！！』

『……え？』

『もう嫌！嫌なの！提督なんて嫌!!貴女達みたいな化け物と関わり合いになるのは嫌っ!!!』
『そ、そんな、私は……！提督と共に歩んで行きたいと！』
『無理に決まってるでしょう?!!貴女達は人間じゃない!!化け物なのよ!!……消えて！早くここからいなくなってよ!!!』
『提、督……』
『もう嫌！恐いのよ、深海棲艦も、艦娘も全て！もう、もう私は提督なんてやめる！海の平和なんて、人類の平和なんて知らない！私じゃない誰かがやれば良いじゃない!!二度と私の前に現れないで！この、化け物!!悪魔、め……』

……会わせない方が良かったか。
これ以上暴言を吐く前に、気絶させておいた。
……正直、これが普通の人間なんだろうな。恐れて、逃げて、迫害する。それが人間という生き物だ。
断罪など出来ようものか。
……そもそも、俺は断罪などしているつもりはないが。ただ単に、所謂ブラック鎮守府は、艦娘という美女を苦しめるから癪だってだけで。気に食わないからぶん殴るとかいう超個人的な理由で今の今までブラック鎮守府を潰して来たのだ。鬼畜の所業である。
だけど、この女の人をどうこうする気にはイマイチならないなぁ。
この人は本当に本当にビビリだった、ってだけだし。というより、こんだけ無様な姿を晒したんだし、もう良いじゃん。許してあげよう。

……さてと。
『あー、彼女はもう、提督をやめるそうだ』
『……分かり、ました』
リットリオ、ここの鎮守府一番の古株らしい。
『……提督が、私達を恐がっていたのは、何となく分かっていました。……でも、ここまで、追い詰めてしまっていたのですね……』

『……月並みな言葉だけど、君達は悪くない、良くやったと思うよ。もちろん、彼女だって悪くないさ。ただ、人一倍臆病だっただけで』
『はい……』
沈んだ顔のリットリオ。悔しいが、何もしてやれない。俺がここに来るまでもなく、ここの提督の心はとっくに折れていたのだ。
よくいる正義の味方みたいに、「勇気を出して皆んなの為に戦え」だなんて、言えた口じゃないしな。

『……リベ、化け物なの？リベは、提督さんの、皆んなの為に頑張ってただけなのに、頑張、って、提督、さんに、喜んで、もらいた、かった、だけなのに……』
涙を流し、嗚咽混じりの声で言うリベッチオ。唯一信じていた人に裏切られてしまったんだ、無理もない。
せめて、抱きしめてやるくらいはしてもいいだろう。
『あ……、あった、かい……。……だ、駄目、だよ？リベッチオは、化け物だから、悪魔だから……』
『少なくとも、悪魔は泣かない、さ』
『……うん』
知り合いのデビルハンターが言ってたから多分合ってると思うよ。

『……これから、私達はどうすれば良いのでしょう』
そう呟いたのは、ローマ、だったか？リットリオの妹だ。
それに続くように、アクィラとザラも口を開く。
『提督がいなくなっちゃったなら、アクィラ達はどうなるの……？』
『……もしかして、解体……?!』
騒つくイタリア艦。無理もない、原則的に、提督が辞職するならば、艦娘は他所に引き取られるか、解体だ。
この提督は、特に他の鎮守府との繋がりがある訳でもなさそうだし、このままいくと彼女達は解体されてしまうだろう。
残念ながら、政府の方針では、艦娘は消耗品なのだ。資材さえあれば幾らでも建造できる「モノ」……。その考え方はどこの国も変わら

ない。
面倒な引き継ぎ作業をするくらいなら、解体してしまえ、と。そう思われるだろう。
だから、
『……なあ、うちに来ないか？』
提案をする。
……実質、選択肢はないようなものだけども。
『……うち、とは？』
『ああ！この人は、日本の提督さんなんです～！何でも、黒井鎮守府って言う、世界で一番大きくて、世界で一番強い鎮守府の提督なんですって！凄いですよね～！』
ポーラが、努めて明るく振舞って、そう言った。良い子だな、この子は。
『……噂だけなら聞いたことがありますが……、本当ですか？』
『そんな、うまい話があるはず……』
『でも、他に行くところなんて……』
まあ、疑うのも無理はないな。
しかし、だ。俺はこの子達が何と言おうと、全員連れ去るつもりだ。こんな美人が幸せじゃないなんて神が許しても俺が許さん。少なくとも、人並みの幸せを知って欲しい。将来がどうこうとかはその後だ。
『もちろん、うちが肌に合わないって言うなら、他所に行ってもらっても良い、何なら、艦娘じゃなくて普通に働いたっていい。……兎に角、一度、うちに来るといい』
『……はい、分かりました。……私達は他に行くところもありませんし……』
最終的に、リットリオが答えを出した。一応、ここの艦娘の総意らしい。
良かった、ドイツ艦みたいに大騒ぎにならなくて。後は、元提督さんに、「艦娘は解体したということにしといて辞職してね。してくれなかったら鶏さんが会いに来ます」と不穏な手紙を残し、この鎮守府

から去る。
普通の人間なんだ、提督業なんて、軍人なんてやめて、普通の仕事をやるといい。そうだな、例えば、先生とか。
さあ脱出だ。こういう時に、艦娘は人と変わらない姿形をしているから楽なんだよな。ちょっと変装すれば何処にでもいるセクシー女優に早変わりだ。
旅人号に乗り込んで、いざ、おいでませ、黒井鎮守府へ。

『その、それでは、これからよろしくお願いしますね』
『ええと、その、よろしく。……あ、あまりジロジロ見ないで下さい！』
『アクィラ、今度はちゃんと活躍しますから！……見捨てないで、下さいね？』
『あ！日本に行くならワインを買いだめしなきゃ!!て、提督～？ポーラは美味しいワインが欲しいですね～？……樽で』
『こ、こら！わがまま言わないの、ポーラ！ご、ごめんなさい提督！ポーラに代わってお詫びします！』
『リベは、提督さんに酷いことしないからね？その、出来れば、仲良くして欲しいな……？』
『Ｂｏｎｊｏｕｒ！ Ｅｎｃｈａｎｔ･ｅ． Ｊｅ ｍ’ａｐｐｅｌｌｅ Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ Ｔｅｓｔｅ． 提督、どうぞよろしくお願い致します』
この七人とは仲良く、仲良く……？
「ちょっと待て、最後の誰だ?!!」
『……？、このコマンダン・テストに何かご用ですか、提督？』
誰だ!!!?

１１６話　その頃の黒井鎮守府の楽しいお留守番

「はあああ！烈風掌!!」
「……見切った!!!おおおお！次元斬!!!」

「「……」」

「いやあ、やりますなぁ、日向殿！まさか烈風掌を見切られるとは！加えてその新たな剣技！自分を追い越す日もそう遠くないかもしれないでありますな!!」
「ははは、謙遜が過ぎるぞ、あきつ丸。私なんかまだまださ。烈風掌も次元斬をぶつけて相殺するのがやっとだ」
　全く、鍛錬は良いものでありますなぁ。こうして、武技を交える度に新たな発見があるのであります故。
「……にしても、そちらの提督は不在だったか。残念だな、会いたかったんだが」
「ふふ、恋い焦がれておりますなぁ、日向殿も」
　なるほど、恋する乙女は強いものでありますからな。
「う、その、ごめん。でも、黒井鎮守府の提督に惚れてしまったみたいでな……」
「遠慮せずとも良いんでありますよ！仲間は多い方が良いでありますから！」
「仲間？」
「いやいや、提督殿は幾ら言い寄ってものらりくらりと……。いっそ、皆で囲い込んで、大奥でも作って頂こうと思っているでありまして！」
「ははは、それはいい！最後は揃って白無垢か？」
「うえでぃんぐどれす、やもしれないでありますよ？」
「「ははははははは!!!」」

全く全く、中々に、日向殿も話せるでありますな！
こんな日々が続けば、きっとそれが幸せと言うのでありましょう。

「……で、何の用でありますかな、貴殿らは」
「い、いや、その……」
「わ、私達は、反戦組合で……」
「黒井鎮守府の、戦力の私物化を……」
「へぇ……」
成る程成る程、平和な世の中になったが故の贅沢病でありますかな？よもや、「殺してくれ」などと……。気が狂っているとしか思えないでありますな。
仕事以外で殺しなど、やりたくはないのでありますが……。あ、いや、提督殿は殺しを嫌われるお優しい方。ならば死ぬよりも辛い思いをさせてやれば、殺したと言うことに……。
「あきつ丸、この人達、斬って良いのかな？」
「うーん、どうなんでありましょう？」
「な、何を……？」

「ま、待って下さ～い！」
と、その時、大淀が駆け寄ってくる。
何事かと、自分達の鍛錬を見物していた最上殿と三隈殿も同じく駆け寄って来た。
「もう！鎮守府内に勝手に入り込むのは犯罪ですよ!!あきつ丸さん達も、こう言う人達を見かけたなら私に連絡して下さいよ!!」
「ああ、いや、申し訳ない！いつもは提督殿に連絡するものでありますから、つい……」
「提督がお留守の今、鎮守府の運営を代行しているのは私なんですから！次からはちゃんと連絡してくださいね？……それでは、お帰りはあちらです！」
笑顔で正門を指差す大淀殿。流石、対応が上手いものでありますな！

「そ、そんな！せめて話だけでも！」
「貴女達は騙されているのよ！」
「然るべき保護を……」
うーむ、とても同じ日本語を話しているとは思えないでありますな。自分の耳がおかしくなければ、どれも、直訳すると、「極力苦しめて嬲り殺しにしてくれ」としか……。
「……ええと、つまり、皆さん全員、自殺志願者と言う訳でしょうか？その、申し訳ありませんが、うちの鎮守府は自殺志願者の支援は行っておりませんよ？」
で、ありますよなぁ……。やはり、自分の耳がおかしい訳ではないでありますな。まさか、こんなにも自殺志願者がいるとは……。現代社会とは恐ろしいものなのでありますな。
「は、はぁ？何を言っているんだ？」
「良いかしら、貴女達は、もっと別の生き方が……」
「君達のような多大な戦力が、一個人に委ねられているのは……」
焦れったいでありますな。
「自殺志願者は他所で死んで頂きたいであります！」
「そうですよ！死にたいなら、何も私達に殺されにくる必要はないじゃないですか！山奥で首でも吊って下さい!!」
「な、し、死ねだと?!」
いや、死にたいのでありましょう?!何を驚いているんでありますか?!!
「もう、駄目だよあきつ丸さん、大淀さん！」
「も、最上殿？」
駄目、とは？
「そりゃあ、この人達の言葉は、直訳すれば、『地獄の苦しみを与え続けた挙句、じっくりと時間をかけて殺してくれ』って意味になるよ？でも、この人達の気持ちを考えてあげなきゃ！」
「「気持ちを？」」
意味が分からないでありますな。

「提督は、相手の気持ちになって考えろっていっつも言ってるじゃないか！さあ、昼間から態々人の家にまで来て、一文の得にもならない文句を言いに来る人達の気持ちになってみよう！」
「ううむ……、そんな連中は、恐らく、相当暇なんでありますなぁ」
「構って欲しい、とかでしょうか……？すいません、その、一応軍事施設なので、あまりお話できることは……。あ、そうだ！最近、庭にコスモスの花が咲きまして……」
　おお、構ってやるのが正解なのでありますか！ならば……、そうでありますな、この前那智殿に分けてもらった洋酒の話でも……。
「や、やはり洗脳か……？」
「そんな……！」
「きっと、クーデターするつもりなんだ!!」
　って、煩いでありますな。とても、話を聞ける状況ではないであります。
「み、皆んな聞いてくれ！君達は、あの男に騙されてるに違いない!!」
「そうよ！女子供を戦場に出すだなんて、間違ってる！碌な奴じゃないわ！」
「早急に鎮守府を解体し、戦力を分配して配置するんだ！あの男は責任を取って辞職、いや、逮捕しろ!!」
「……あの男？碌な奴じゃない？逮捕しろ？……一体、誰の話でありますかな……？」
「決まっているだろう！この鎮守府の提督、新台真央のことだよ！」
　不敬……、まさかそんな不敬を？提督殿に不敬な口を？提督殿のことを馬鹿にしているのか？提督殿を、提督殿を罵ると？何だ、こいつらは。許さん、殺す、殺す、殺してやる……!!
「!!、ちょ、待って！あきつ丸さん!!槍を仕舞って!!日向さんも、剣を抜かないで!!」
　あ？止めないでいただけますかな、最上殿？
「取り敢えず殺しましょう！それから提督の素晴らしさを説けば良い

んです！さあ殺しましょう殺しましょう殺しましょう!!不遜で不敬な人間共を殺しましょう！死ね死ね死ね死ね死ね!!!」
「大淀さん！と、止まって下さいな！殺すのは駄目ですわ!!……貴方達！早く逃げなさい!!」
「「ひぃ!!!!」」
「何だ？言うだけ言って逃げるのでありますか？提督殿に楯突いた報いを受けていただきたい!!」
「駄目、駄目だよ！そりゃあ僕だって殺したいよ？でも、そんなことしたら提督に迷惑がかかるじゃないか!!」
「そうですわ！提督は陸での殺生は面倒事の元だからやめてほしいとおっしゃっていたではありませんか!!私も提督のご命令がなければあの人達をバラバラにしていたところですが!!」
　ぐぬぬ……。
　しかし、あのような不届き者は、到底生かしては……、いや、提督殿のご命令とあらば……、むうぅ、こんがらがってきたであります……。
「チッ……、まあ、良い。確かに、殺しては提督に迷惑がかかるからな。テレビで見たよ、黒井鎮守府は注目されている。……私達のせいで、ここの提督が大変な思いをするのは忍びない」
　……くっ、日向殿の言う通りであります。
　自分達のせいで、提督殿が良くない思いをすると言うのなら……。
「……そうで、ありますな。この場は見逃すであります。……はぁ、もう鍛錬の雰囲気ではありませんな、鎮守府に戻って茶でも飲むであります」
　全く……、気分が良くないであります。折角の鍛錬をこうも邪魔されるとなると。仕方がない、茶でも飲んで落ち着くであります。
×
×
×
×
×
「行っちゃいましたわね、あきつ丸さん……」
「あーあ、良い勝負だったのになぁ」
「残念ですわねぇ」
×
×
×

日向さんとあきつ丸さんの剣さばきは本当に凄いんだよね。
参考になるから、もっと見ていたかったんだけど……。
「……さて、どうするか。……うーん、少し早いけど、お昼にしようか」
「あ、お昼ですか、日向さん！僕達も一緒に行って良いかな？」
気持ち、切り替えなきゃね。終わっちゃったことは仕方ないよ。
今日の夜には、大好きな提督も帰ってくるしね、これくらい我慢、我慢。
「ああ、もちろん。ここの食堂で良いかな？」
「うん！」
あ、ちなみに、音成鎮守府の提督と艦娘も、しょっちゅううちに出入りしているんだよね。もう殆ど併合してるみたいなもの、かな？
「さて、今日のメニューは何かな……」
「あ、今日はバイキング形式だって」
「……何かあったのか？」
「なんだか、鳳翔さん達が函館のレストランに行ったあと、やたらと気合い入ってて……。私達もまだまだ、とか」
函館一番の老舗レストランに感化された、らしい。
「……この前も、東京の寿司屋に感化されて、寿司を握ってなかったか？」
あー、鳳寿司がどうこうとか……。
「ありましたねー。でも、あの時はお寿司一杯食べられましたし、良かったじゃないですか！」
「お寿司……、私はお魚が好きですから、あの時は嬉しかったですわね～」
あの時は凄かったなぁ、提督がおもむろに「小手返し一手じゃオラオラ！」とか言いながら物凄い速さでお寿司を量産してて……。
おっと、食堂に着いた。
鳳翔さん、間宮さんと伊良湖さんが神妙な顔をしながら料理してる。
……何故か、音成の提督も忙しなく動いている。
「うう、これじゃ駄目ですね、五稜郭亭の味に届きません……！」

「日之出食堂の味、超えられないなぁ……」
「材料は同じはずなのに、味沢さんにはまるで敵わない……！」
……一体、この人達の料理にかける情熱はどこから来るんだろう？
「……彼女達は一体、何と戦っているんだ？」
謎なんだよなぁ……。
「卵焼き、できましたよー！こちらが出汁巻、こちらが砂糖たっぷりとなってまーす！」
大皿をテーブルに乗せているのは、音成の提督、守子さん。
「で、うちの提督がこき使われているのは？」
「あ、それは私から頼んだんですよ、日向さん！……私、最近何もしてないような気がして……」
そう言えば、最近はよく厨房で守子さんを見かけるなー。
「何も、してない、か……。まあ、そうなるな」
「ひ、酷いです……」
実際、個々の実力が高過ぎる黒井鎮守府と音成鎮守府は、指揮も何もなくても、一人出撃すれば大体百は殺せるもんね。提督がやるべきことって、あんまりないかも。
「まあ、ほら、提督はそこにいるのが仕事みたいなものだから……（適当）」
「うう～、最上ちゃんまで……」
「あ、いや、その、悪く言ったつもりはないんだよ?!そう、その、提督は、ええと、仕事が……、仕事が……、無い？」
少なくとも、提督が提督としてのお仕事をしているところ、今週は一回も見てないや……。音成の提督も、暇そうに黒井鎮守府をぶらついてるだけだし……。
「わ、分かってますけど……。その、やっぱり、落ち着かないんです……！私は、黒井の提督みたいに、皆んなと一緒に戦えないですから！このくらいのお手伝いはやります！そ、それじゃ！」
あ、行っちゃった。
「……うちの提督、いい人だろう？」
「……はい、優しい人ですね」

「素敵な女性だと思いますわ」
本当に、僕達は、こんなにも良い人達に巡り会えて良かったよ。
「……で、あそこで、大皿ごと持って行ったお宅の空母と戦艦達についてなんだが……」
「日向さん、見なかったことに……」

117話　旅人の帰還

いやー、どーもどーも！
司令官の可愛いお嫁さん、青葉です！
いやはや、前々から司令官とは健全なお付き合いをさせていただいておりましたが！先月、ついに指輪をもらいまして!!えへへ、嬉しいです！
……まあ、眠らされて、起きたら枕元に指輪が置いてあっただけなんですけども。婚姻届カッコカリは机の上に置いてありました。
とはいえ、結婚は結婚。司令官が言うには、法的な拘束力は無いらしいそうですが……、私が司令官を逃すとでも？
何を隠そう、ケッコンカッコカリと同時に、全世界へ向けて私達の情報を公開したのは私ですから!!
少なくとも、ネットワーク上では、司令官と私達は事実婚であると印象操作しました！
……そのせいなのか、連日、鎮守府に変な人達がやって来ますけど……、嫉妬でしょうか？艦娘が美人なのも、司令官がカッコいいのも事実ですけど、喚き立てたところで何も変わらないし、司令官はあげませんよ？
あ、窓の外であきつ丸さん達が変な人達に絡まれてる。怖いなー、戸締りしとこ。

……さて、私はまた取材を兼ねた鎮守府の散歩ですかね。え？出撃？十分前にノルマの百体は殺して来ましたよ？ははは、やだなぁ、黒井鎮守府の艦娘なら、十分で百体くらい簡単ですよ！最近ではむしろ、移動の方に時間がかかるくらいですし。
っと、その前にお昼ですね。私のお腹の虫が鳴いちゃいました。
さて、食堂、食堂と。
……おや？瑞鶴さんに、翔鶴さん？
「あ、あれ？お、おかしいな？こっちだと思ったんだけど……」
「うーん、ここ、さっきも来たような……？」

どうかなさいましたか？
「わあっ?!きゅ、急に声をかけないでよ！」
「び、びっくりしました……」
あ、すいません。
えーと、それで、何かお困りですか？
「あ、その、えーと……、迷っちゃって……」
「す、すみません。ええと、食堂はどちらでしょうか？」
あー、しょうがないですよ。うちの鎮守府、洒落にならないくらい広いですからね。鎮守府の本館だけで下手な大学とかより広いんじゃないでしょうか？私も、昔はよく迷子になりました。
「そ、そうよね！迷っちゃうわよね！」
「ご迷惑をおかけします……」
食堂ですね、ちょうど私も行くところですから！着いて来てください！
「あ、ありがと！」
「まあ、感謝します！」

「んん～～～??やっぱり黒井鎮守府のご飯は美味しい～～～!!」
「もぐ、もぐ、もぐ……。ああ、よく噛んで食べなきゃ駄目よ、瑞鶴？」
ああっ！この二人も空母だった！な、なんてことでしょう、バイキングの料理が大皿ごと消えていきます……！
相変わらず、合単位以上で米を食う空母！大戦艦！
青葉、戦慄です……!!
「む！この出汁巻卵、ネギ入りかっ！……しゃきしゃきとした食感は飯が進むな!!」
長門さん、その、物理法則の限界まで盛られたお茶碗、意味あるんですか？もうおひつで行けばいいのに。
「おお！皿うどん！私の好物を用意しているとは、やるな鳳翔！」
おーっと！武蔵さん、大皿ごと行ったー!!何十人前もある皿うどんをすすり始めるその姿は、まさに大戦艦!!（意味不明）
「成る程な、最近はラーメン？と言う麺類に興味があるんだが……、こ

の、イエケイ、というラーメンは中々だな……」
塩分脂肪炭水化物、三拍子揃った恐ろしいラーメンをするのはグラーフさん！ドイツから来た正規食う母です！実際スゴイ!!
なんと恐ろしい空間なのでしょう！もう一年経ったので良い加減慣れるかと思いきや、そんなことはなく!!
くっ、これでは食欲が……。
いつも通り、見なかったことにしてご飯を食べましょう。
あ、このローストビーフ、ご飯に合いますね、おろし玉ねぎの和風のたれが美味しいです。

ふぅ、お腹いっぱいです。ちょっと痛いくらい、お腹いっぱいですよ。
やっぱりアレですね、食後のドーナツが効いたと言うか、そもそもたくさん食べたと言うか。……美味しかったです。
食後は、何故かやたらと気合の入っている厨房にインタビューして、そのあとはまた散歩ですかね。

厨房のインタビュー、完了しました。成る程、世の中には、凄いコックさん達がいるんですね。あの鳳翔さん達を以ってしても「勝てない」だなんて。
でも私は、ここの厨房の料理が一番好きですよ。なんだか、暖かい感じがして。
さてさて、散歩と言う名の取材です。ネタはあるに越したことはありませんから。
司令官が帰ってくる時間までまだ余裕がありますしね。一部の好戦的な艦娘みたいに、ノルマ以上の殺戮をしようとは思いませんしね、私は趣味に走らせていただきます！
「おやおや？むくれておりますね～、ぼのたん！ご主人様がいなくて寂しい感じ？」
「むっ！ぼのたん言うな！ぼのたんって呼んで良いのは提督だけなの！」

「ま、まあまあ、曙ちゃん……」
「漣もからかわないの！」
おやおや、綾波型のいつもの四人組ですか。
可愛いですねぇ、恋する乙女は。……まあ、その恋する相手が司令官なのは癪ですけど。
「ほー？ぼのたんったら、提督にゾッコン？今日も勝負下着ー？」
「はぁ?!勝負下着じゃない日なんてないわよ！提督が望むならいつだって準備オーケーなんだから！」
「あ、曙ちゃん?!」
「え?!気合い入り過ぎじゃ?!少なくとも今日は半日は帰ってこないんだよ?!」
ほうほうほう？中々に興味深い話をしておりますなぁ？
「え、じゃああの、ピンクのフリフリのやつ、勝負下着なの？」
「……やっぱり、もっとセクシーなのが良いかしら……。潮の勝負下着みたいな」
「曙ちゃん?!やめてよ！」
「ま、まあ、潮の勝負下着は確かにアレだけど……」
「アレって何?!」
「……そう言えば、確か今日は潮も勝負下着だったような？」
「や、やだ、漣ちゃん！め、捲らないで～！」
おお、サービスカット！激写激写!!
「「「……」」」
あっ、ヤバ、見つかった。
逃げよ、
「……青葉さん？」
……はい、すみません。

……何だか、皆んな私に冷たくないですか？ちょーっと下着を激写したくらいであんなに怒ること無いじゃないですか？私、半分くらい泣いてたじゃないですか？

まあ、良いです。

捕まって長門さんのところに連行されましたが、問題はありません。

「……また青葉か……」

何ですか、また、とは！

「……いや、これで何回目だ？」

覚えてません！

「はぁ、写真を撮る時は、せめて一言断りを入れろとあれ程……」

えー？そうすると皆んな断るじゃないですかー！横暴です！報道の自由をー!!

「全く……。ほら、罰として、手紙の仕分けだ！衣笠に手伝ってもらおうなどと思うなよ？」

どさり、と、音を立てて目の前に置かれたのは、段ボール一杯の手紙の山。

うへえ……。

「やることはいつも通り、悪意ある内容の手紙は廃棄して、それ以外は艦娘に渡すんだ。提督への手紙はこっちに移せよ」

はーい……。

全く、面倒ですね、この量！どうせ殆どはよく分からない反戦団体からとか、私達の見た目に惹かれたストーカーからなんですからね?!

『艦娘は人間と同じ理性ある存在で、無理矢理戦わせることなどあってはならない……』

『陸奥さんへ、一目惚れしました……』

『広報の写真を拝見させて頂きました、芸能事務所の３４６プロと申します。艦娘の皆さんの笑顔に惹かれました、是非アイドルに……』

ほーら！こんなんばっかりです！気持ち悪いですねぇ、もう！

長門さん、手紙とかやめましょうよ！

「む、やめたいのは山々なんだが……、ほら、これとかな」

長門さんが懐から取り出したのは、古い文字の手紙。
戦艦長門殿へ、と、達筆で書かれたそれは、どこか懐かしい気分になるものだった。
「これなんてな、私が艦だった頃に、私の乗組員をやっていた人からの手紙なんだ……」
へえ……。
「確かに、この鎮守府に届く手紙は、大半が雑多なものだがな、その中にこう言ったものが混ざっているかもしれないんだ。……全て廃棄なんて、できないだろう？」
……確かに、そう、ですね。
はぁ、仕方ないですね、仕分け、やりますよ。逃げも隠れもしません。……純粋に私達を応援してくれる人の気持ちを踏みにじるなんて、しませんよ。

はー、疲れた……。
やっと終わりました。殆どはゴミみたいな内容の手紙でしたけど、何通かは私達を純粋に応援してくれる人達からの手紙でした。
あ、私宛のもありましたよ！嬉しいですね！
「お疲れ、青葉。……そろそろ提督が帰ってくる時間だな、出迎えるぞ」
先程から、私の見張りを兼ねて、片手で逆立ち腕立てをする長門さんは、死ぬ程邪魔でしたね……。凄く気になってしょうがなかったです。
おっと、そんなことより、司令官のお迎えをしなきゃ、ですね！

あ、旅人号だ！見えてきた！
おーい、司令官ー!!
……あれ？
……。
なんか、また、新しい艦娘が……？

……へぇ、そうですか。
「いやーっはっはっはただいまただいまイェイェーさて俺はこれから仕事がめっちゃバリバリでマックスハートだからさよならお出迎えありがとう嬉しいよそれじゃ!!!」
あっ!逃げました!全員!追うんです!!また新しい女を引っ掛けてきて!!
今日こそは司令官のオンナになりますよ!!

１１８話　イタリアのチーズはガチ

「ッスゥー、すまないね、守子ちゃん。俺がいない間、うちにいてくれて」
「ちょ、ちょ、ちょ！な！何で全裸なんですかーーー!!!!」
何でって、艦娘に剥ぎ取られたに決まってんじゃん？いやぁ、今日もヤバかった。どうやら、新たな艦娘の増加に危機感を覚えたらしく、暴走した数名の艦娘に襲われたのだ。無論、性的な意味で。あ、安心してほしい、捕まってはいない。
まあ、いつものことよ。しかしだ、もう着る服がない。着ても持っていかれる。故に、このまま逃げて来たんだが。何の問題ですか？
「守子ちゃん、大丈夫だよ、俺は絶対に見えちゃならないところは謎の反射光で隠すことができるから」
なお、ＢＤ版では謎の反射光も剥がれてしまうのだが、これはｓｓなのでその問題は回避した。
「いや！倫理的に!!倫理的に駄目ですよ!!」
倫理？いやー、ここ、悪の組織なもんで。すいません、それ、来月からなんですよ。
しかしあれだな、全裸は不味いらしいな。じゃあ鎧でも着ておくか。これなら簡単に脱がせられないし。服とか、脱がされたり新品とすり替えられたりはするけど、壊したりはしないからな、あの子ら。複雑な構造の鎧なら、簡単に剥ぎ取られはしないだろう。
「ごめんごめん、ほら、ちゃんと着たよ」
「……なんですか、その鎧」
ドヤ顔フルハベル。ロードラン、ドラングレイグ、ロスリック……、様々な地で俺の命を守ってくれた愛用の防具だ。話すと長くなるのであまり言わないが、これを着ていると落ち着く。防御力的な意味で。一先ずはこれでいいや、この後着替えるから。
「まあまあ、それで？何か変わったことは？」
「うーん、特には。厨房の皆さんがやたらと気合い入っているくらいですね」

あー、あれかな、俺の伝手で連れて行った店に触発されたのかな？
「まあ、よくあるよくある」
「そうですね、前も同じようなことありましたし……」
前回は寿司だったっけ。知り合いのいる寿司屋に連れて行ったら、
「お、美味しい！……私達も負けていられませんね！」とか言い始めて。俺も久し振りに寿司を握る羽目になったっけなぁ。
「そうだねぇ……、ま、退屈しないで良いんじゃないかな？」
「んー、そうかもしれませんね。料理とか雑用とかなら、私もお手伝いできますし」
はー、近年稀に見る良い子かよ？何もやらなくていいのに、ちゃんと働こうとするのか……（困惑）。
「……艦娘の皆んなは、あんなに沢山怪我をしながらも頑張っているんです。私も、何か出来ることをやらなきゃ……」
大正義過ぎる。守子ちゃんも大概だよな、勇気や優しさがあり過ぎるっていうのも異常者だと思う。
まあ、俺みたいに、自分や仲間が傷付くことに慣れている人間よりはよっぽど良いんだけど。
「な、なんちゃって、えへへ。ちょっと、カッコつけちゃいましたけど、何もやってないと落ち着かないってだけですよ」
やめて守子ちゃん、やめて？今君の目の前に何もやってない人いるから。
「ま、まあ、兎に角、今日のお仕事は終わりだね。お疲れ様、泊まっていくかい？」
「はい、旅人さんこそ、遅くまでお疲れ様です！お言葉に甘えて、今日はお泊りさせてもらいますね！」
ぐうっ、違う、違うんだ、鎮守府としてじゃなくて、俺個人としての仕事だったんだ……。提督として働いた訳ではないのだ……。
……黙っとこ。

さて、イタリア、フランスの艦娘は、明日の朝にアメリカからの艦娘が来るとのことで、それを出迎えてから鎮守府の案内を一緒にしよ

うと思っている。
なので取り敢えず、部屋まで送って、今日のところは休んでくれと命じておいた。俺は着替えてから、酒を飲みに居酒屋鳳翔へ。
『んふふ～、ニホンシューですか～？美味しいですね～、ワインにも負けないかもしれません～！』
『ポーラ！も、もう！皆さんすみません！』
「んー？よく分からないけども、いーのいーの！さ、飲んで飲んで！……おーおー！いける口じゃないか！」
「大分飲むやん！隼鷹くらいのペースやなー、凄いわー」
……命じておいた、はずなんだがなぁ。
『はっ?!て、提督!!す、すみません！ポーラにはよく言っておきますから！どうか、どうか……』
ザラちゃん、君本当にイタリア人？何その綺麗な土下座？
『ま、まあまあ！怒ってないからさ！頭上げて、ねっ？』
『で、でも……』
『あ、提督～？日本のお酒も美味しいですね～、食べ物も中々……』
『ポーラァァァ!!!!!』
『まあまあ、怒らない怒らない！』
きっちりとしたザラと自由奔放なポーラ、黒井鎮守府の新たな凸凹コンビだ。
ポーラは隼鷹や俺と同じタイプだな、酒の匂いがするところにふらりと現れるのだ。まあ、しゃーない。酒美味いし。
……俺も飲もう。昼間は結局、なんだかんだであまり飲めなかったしな。
『ほらほら、ザラちゃんも飲みなよー』
明日、二日酔いとかにならない程度なら、飲んでも良いんじゃない？
『え、あ、私は……』
『あらら？お酒飲めない人？』
『い、いえ、多分飲めますけど……』
ちらり、と。ポーラのほうを見るザラちゃん。あー、あれか、自分

が酔ったら誰がポーラの面倒を見るのか、みたいな？
『大丈夫大丈夫、そんなに沢山飲まなきゃ良いのよ！それに、帰りは部屋まで送るからさ！』
『そ、そんな、ご迷惑を……！』
何言ってんの、ここにいる子達、隼鷹も龍驤も多分酔い潰れてここで寝るんだからね？それを運ぶのは俺と鳳翔だよ？
酷い時は武蔵と那智、足柄に長門とかも酔い潰れてるからな？今日はいないみたいだけども。
まあ、という訳で、一人二人増えたところで困らないぞ、と。
そういう事。
『良いから良いから！ささ、飲みなよ！白ワインとかどう？』
『そう、ですか？その、それじゃあ……、ん、美味しい！』
満面の笑みを浮かべるザラちゃん。いやあ、可愛いな。女の子はやっぱり、笑っている時が一番可愛いと思う。
「鳳翔、チーズくれる？」
「はい、ここに」
「ん、ありがと」
チーズ、チーズである。
『……ザラちゃんもどう？』
イタリアで酒のお供っていうと、チーズもそうだけど、ポテチとか、サラミとか、ブルスケッタにオリーブとかだよな。まあ、飲むのは夕食前だったけども。
『あ、ありがとうございます！……あ、これ、イタリアのですか？』
『そうだよー、今朝、イタリアで買ったんだよー？』
そう、今朝、ナポリで取引をする前に、市場でこれでもかと酒とかを買っておいたのだ。
酒やチーズは産地のものを使いたい。肉や魚、野菜なら、ここで獲れるものを使えば十分だが、一部の食材はやはり、その国特有の味が色濃く出るからな。
特に、イタリアのチーズは凄いんだ、産地のものを態々買うのも当然の美味さとバリエーションがある。

『ん～、美味しい、美味しいですね～！日本だから、故郷のものは食べれないなと思っていたんですけど～、買っておいたんですね～！』
『ふふふ、当然よ、抜かりはない。ワインも樽で大量に買っておいた……！』
『わーい！提督大好き～！一生ついていきます～！』
よせやい照れるぜ。……おお、ポーラ、おっぱい大きいな。くっ付かれると良い具合にモチモチ感が伝わってきてｂｕｏｎｏ。
……つーかこの、ポーラの艤装の服の、脇のところのデザインなんなの？スケベ過ぎない？犯罪でしょこれ。
『こら！ポーラ！提督にくっ付くんじゃありません！危ないでしょ!!』
えー、もうちょいくっ付いてて良いよ？
『いやぁ、ほら、飲み食いした分は提督に身体で払おうと思って～』
『な?!なななななな!!ポーラァァァァァ!!!!』
マジ？やったぜ。……と言いたいところだが、そりゃ無理だ、申し訳ないけど。
「なんやなんや、なに言ってるかは分からんけど、目の前でイチャイチャしよって！うちも構ってや！」
「そーだそーだ！私も構っておくれよー！」
機体がダメージを受けてまーす。……酔った勢いで、フルパワーで抱きついてくる龍驤と隼鷹。
一般的な成人男性なら、ラーメンマンにキャメルクラッチを喰らったブロッケンマンみたいになっているであろう威力。俺が座っている椅子は、そのパワーの余波で砕けてしまった。
もちろん、本人達に悪気は一切ない。ただ酔っ払っているだけだ。許そう。
『……!!、は、離れなさい!!提督が死んじゃう!!!』
そこに、真っ青になったザラが割り込んできた。
「うおっ?!な、なんや？血相変えて？」
「な、何言ってるか分からないんだけど？」

『何を考えているんですか?!艦娘が人間に抱き着くなんて!!』
ん、どうしたんだ?
「何だか怒られとる?!」
「えー?何か悪いことしたかな?」
『提督!大丈夫ですか提督!!』
あ、そうか。
普通は、艦娘に抱きつかれたら死ぬのか。
『心配する必要はないよ、ザラちゃん。俺は頑丈なんでね』
『?!、な、何で!!?!』
何でって言われましても。
『提督はルー・ガルーですもの、艦娘くらい何ともない、という訳ですわね?』
おーっと?どっから湧いて出たコマンダン・テストちゃん?
『ルー・ガルー……?』
『そうですわ、提督の正体は、白くて綺麗な人狼なのです!……あの時の提督は素敵でしたよ、月明かりに照らされ、白い毛並みをたなびかせ、紅い瞳が夜の闇に輝いて……』
うわー、しかも、あれを見られてたのか……。獣化だの変異だのした時の俺とか、極力見なかったことにして欲しいんだけども。
『うーん、やっぱりそうなんですか~?深海棲艦と生身で戦うような人だから、ポーラも、この人は只者じゃないな~って思ってたんですよ~』
『えっ?!何それこわい!!』
まあまあ、俺は人間だよ?
おっと、ポーラも遠慮なく抱きついてきた。
『て、提督?本当に大丈夫?』
『大丈夫大丈夫!ほら、全然痣とかないでしょ?』
軽く服を捲って見せる。
『ほ、本当だ……!』
ぺたぺたと俺の身体を触るザラちゃん。高校生ほどのイタリア人女性に身体を触らせる成人男性……、絵面は最悪だ。

『えーと、だからね、ザラちゃんも俺に遠慮とかしないで良いんだよ？あ、もちろんポーラも、テストちゃんもね』
壊れ物を扱うかのように、おっかなびっくりで対応されるのは嫌だしね。
『……はい！』

……と、まあ。このようにして、新しい艦娘ともスキンシップをとれた。
お次は、明日来るアメリカ艦だな。
さて、どうなることやら……。

１１９話　旅人ンラプソディー

さあ、朝だ。朝食を済ませ、鎮守府内の滑走路に行く。
え？ああ、滑走路は明石が作ったよ。
だからこうして、皆んなでお出迎え、と言う訳なんだけども……。
「はい、もしもし？」
『た、助けてくれ！日本の空域に入った瞬間、化け物が……!!』
なんか、めんどくさいことになってるっぽい。やだなー、嫌な予感するわー。
「落ち着いてくださいよ、パイロットさん。どんな化け物ですか？」
『あ、ああ、グリーンで、巨大で……、機体に絡みついていやがる！何とかやっているが、機体の制御が……』
あー！航空機に取り付く！緑色の！巨大な!!あー、あーあーあーあー!!めんどくさいぞ！めんどくさいぞこれは!!
「な、なあ、提督？あの航空機、緑色の何かが取り付いているんだが……？」
あー！もう！
「はぁ、間違いない。……あれは、衾だ」
「……ふ、衾？」
……さっきから凄い震えてるけど、大丈夫か長門？
「妖怪だよ。……それも、かなりタチの悪い」
あ、長門が立ったまま気絶した……?!

「妖怪って、本当にいたのね……」
「む、信じてなかったのか、陸奥？」
「正直、いつもの冗談だとばかり……。でも、こうして目の前にいる以上、存在するのよね……」
いるよー、めっちゃいるよー。
「で、あの、緑色の大きいやつ……、衾、だったかしら？人を食べたりする妖怪、なのかしら？」
「ああ、いつもははるか上空を飛び、時折「ごそっと」人を喰うために

降りて来るんだよ。でも、最近は航空機を狙うことに味をしめたらしいが……」
「間違えて、艦娘二人しか乗っていない航空機を狙った、と……？」
「っぽいねー。……まあ、運が悪かったってことさね」
あー、クソ、何たってうちを狙うんだ？やめてくれよ……（絶望）。
「その、弱点とかは？」
「お歯黒の歯といっぱいの炎」
「……如月ちゃん、どう？」
陸奥は、火炎放射器を標準装備した如月に声をかけるが……、
「ええと、私の火炎放射器は、あれだけの質量を燃やし尽くせる程、攻撃範囲が広くないわ」
無理だ。本当にいっぱいの炎が必要だ。それこそ、戦闘機のミサイルくらいの。
艦娘にもミサイルを装備した子がいるが、攻撃範囲的には燃やしきれるか微妙だし、何より中にはまだ人がいる。
つまり……、
「あー、嫌だねぇ、結局俺が行くのか。……取り敢えず、全員、石油入りドラム缶用意！ミサイルがある子は撃てるようにしておいて！じゃ！！」
「「「了解！」」」
×
×
×
『『あわわわわわ……!!』』
何よ、あれ?!妖怪、ですって?!そんな化け物との戦い方、知らないわよ!!
恐怖のあまり背筋が痺れる、身体中が痛む！どうすれば、どうすれば良いの?!
訓練もした、実戦の経験も積んだ！けど！空で妖怪と戦うなんて無理よ!!
『ど、どうすれば……!!』
もう滑走路はすぐそこなのに、このままじゃ着陸出来ない!!

『死ぬならせめて、アメリカの海の上が良かった……』
『サラ！諦めちゃ駄目よ！』
ここで終わるなんて、嫌!!
私はアイオワよ?!こんなところで終われるもんですか!!
……とは言っても、打つ手が……?!
「ダイナミックお邪魔しまーーーす!!!」
「「Ｗｈａｔ?!!」」
「Ｈａｌｌｏ？」
窓から?!何?!誰?!
『Ｍｒ．ストレンジャーとでも呼んでくれ給え』
ん……？あれ……？この人、どこかで……？そうだ、もらった新しい鎮守府の資料の、提督が……！
『貴方、もしかして……、提督?!』
『そうだよ（肯定）』
提督……!!、……?、え？何でここに？そもそも、どうやって？え？
『そ、その、貴方、どうやってこんなところに?!と言うか、何できたの?!危ないわよ?!』
『は、はは、あはははは……。わ、私は、サラは夢を見ているのかしら……』
『とにかくエスケープだ!!（集中線）先にパイロットは降ろしておいた、あとは君達だけだから!!さあ!!』
『脱出?!!どうやってするのよ?!!非常口が開かないのよ?!こんな状態じゃパラシュートだって』
『ナッシンレアリイマタァトゥーミー!!!』
『俺には何でこたぁ無い、なんて!!そんな訳』
あ、何よ?!捕まった?!……あら、かなり力が強いのね、私以上かも。
……じゃなくて!!ちょっと待ちなさいよ?!
『どの道、風は吹くのさ!!』

『な、何を……?!、ちょ、ちょっと!!飛び降りる気?!外にはあの化け物がいるのよ?!空中で捕まっちゃうわ!!』
『それに、さっきも言いましたけど、非常口が開きま』
……っな?!!非常口を、無理矢理蹴破って……?!!!
ちょ、ちょっと、待ちなさい、そんな、それは……!!
『『あ、お、お、落ちるーーーーー!!!!!』』

……!!!
……?
あ、ら?
落ちて、ない?
飛んでる……?
『参考までに聞きたいんだけど……、海にいる艦娘が空を飛ぶって、どんな気持ちだい?』
『悪くないわね……。じゃなくて!一体どうやって?!』
『と、飛んでる?!サ、サラ、飛んじゃってる?!』

『まあまあ、世の中には空飛ぶ人間なんていくらでもいるじゃん!じゃあ、そろそろ下に行こう』
彼……、提督はそう言ってふわりと着地して、その次に、
「全員!!石油入りドラム缶を思いっきりぶん投げろ!!」
と続けた。
日本語の勉強はそれなりにしたつもりだけど、石油入りドラム缶を投げる?何で?
もしかして、あの化け物を焼き殺す気かしら?でも、着火は……?
「菊月イィィ!!!今だっっっっ!!!」
「ターゲット、確認。排除、開始……!!」
『な?!艦娘に分裂ミサイル?!』
あり得ない、艦娘にあんな現代的な兵器なんて……!!
だけど、目の前で起きた爆発は、幻なんかじゃない、現実……!!

あれだけの石油を爆発したんだ、一瞬、太陽がもう一つ現れたかのような光とともに、化け物が絡みついた航空機を完全に破壊した。
爆炎に包まれた化け物は、かけらも残らずに消滅した……。
あ、あれ？
助かった……？
『サ、サラ！』
『アイオワ！』
『『た、助かったー!!』』
はぁー、正直、死を覚悟していたんだけど……、まさか、生きて日本の土を踏めるなんて！
ありがとう、神様!!
ありがとう、大統領!!
そして……、
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｏｋ　？、怪我はない？」
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｖｅｒｙ　ｍｕｃｈ　!!」
ありがとう、えーと、その、提督!!……提督？
「その、ちょっと待って……、貴方、貴方がこの艦隊のＡｄｍｉｒａｌ？」
「……資料で見た通りの顔、ですけど……」
え、冗談でしょう？それじゃあ、最近の提督は飛行機の窓を突き破って現れ、空を飛んで現れるの？……え？
「え？さっきそう答えたような……？まあ、良いや。俺、旅人の新台真央です！副業で黒井鎮守府の提督をやっています！よろしくどーぞ!!」
え、えええー？

１２０話　世界征服は実益を兼ねる趣味

「ガトリング砲に自由電子レーザー砲、対深海棲艦誘導弾に優秀な射撃統制システムを搭載したレドーム……、それに何よりも、この巨大なレールガン!!こんなものを積めるだなんて、嬉しいわ!!」
「それで、どうですか、使い心地は？」
「ｖｅｒｙ　ｇｏｏｄ！最高よ!!」
　アメリカからの艦娘が来てから一週間。早速、染まって来ている。
　いかん、このままじゃ「おい、艦これしろよ」と怒られてしまうやもしれん。
「あー、明石？海外の子を騙くらかして新兵器積ませるのは、やめようね！」
「は、ははははは、やだなぁ、騙くらかしてなんていませんよー？」
「良いの、Ａｄｍｉｒａｌ！Ｍｅが望んだことよ！」
　あれー？
「Ｍｅは、この一週間、黒井鎮守府をよく見学させてもらったわ……。皆んな、本当に素晴らしい活躍をしているのね！Ｍｅは、アメリカの鎮守府にいた時は、戦線の維持とか防衛でいっぱいいっぱいだったわ……」
　そりゃあ、そうだろう。今の深海棲艦の強さには、並みの艦娘は対応できない。
　必然的に防衛戦をする羽目になると思うが……。
「でも、ここは違った……。艦娘一人一人が、ａｇｇｒｅｓｓｉｖｅに深海棲艦に喰らい付いて、いいえ、喰い破っていくの！これなら、いつか本当に、深海棲艦から海を取り戻せるかもしれないわ……!!」
　まあ、皆んなには一日百体のノルマがあるらしいし。いや、指示した覚えはまるでないんだけども、最近は勝手に俺の書類を読んで、勝手に出撃して、勝手に帰ってくるから。で、大体、一日に百体くらいは殺すのがノルマになったらしくて。
　でも、沢山殺した子には別途ボーナスを出すし、その日のＭＶＰにはチケットという、スペシャルな酒や甘味と引き換えできる券を渡す

ことになっているが。
「駆逐艦の小さな子達も凄まじかったわ！深海棲艦の首を沢山袋に詰めていて……。まあ、ちょっとｇｒｏｔｅｓｑｕｅだったけれど」
まーた白露型だよ。いや、助かるよ？助かるんだけど、良い加減麻袋に深海棲艦の首を沢山詰めて持ってくるのやめない？白露型だけで一日につき千体以上の深海棲艦の死体が届くんだよ？
「ムツキｓｉｓｔｅｒｓも表現できないくらい凄いわ！現代兵器以上の武器を装備していて、身体能力も高い……。特にあの、ミカ？とか言う子なんて、恐ろしいくらいに強いのね!!」
よりにもよって。
ミカを見せたら誤解されるに決まってるじゃん？
悪魔のように強いうちのキリングマシーン筆頭を見たら、誰だって、「黒井鎮守府ヤバくね？」って思っちゃうじゃん？アゼルバイジャン？
黒井鎮守府は友達！怖くないよ！と示さねば、艦娘は社会から爪弾きにされてしまう。社会とか、差別とか、そう言う目には見えない悪意は得てして恐ろしいものだ。
俺一人なら、いくらでも差別でも何でもしてくれて構わないんだけどね。
「Ｍｅも、ここで強くなって、沢山の人を守りたいの！……Ａｄｍｉｒａｌ、力を貸して！」
「お、おう！」
反射的に返事したけど、俺が手を貸さないでも勝手に強くなるよね、君ら。

「提督、コーヒーを淹れましたよ」
「ああ、ありがとうサラ、嬉しいよ」
「そんな、サラは大したことは……、えへへ」
こっちで甲斐甲斐しく色々としてくれるのはサラ。ティターンズの方ではない。アメリカの空母のサラトガだ。
「……うん、良いな、美味しいよ」

さっぱりとした味わい……、アメリカのコーヒーって感じ。
「サラに、何でもお申しつけ下さいね！」
助られたから、その恩を返したい、とのこと。
世の中、持ちつ持たれつじゃん？艦娘は皆んな俺のことをいつも助けてくれてるんだから、一度や二度命を助けたくらいで感謝しないでも良いのに。
今みたいに、悪の組織を作ることも、海を開放することも、俺の個人の力では無理だったんだ。
悪の組織の長として、金を稼いだりできるなんて、相当に幸せになったと言って良い。
「君みたいな美しく聡明な人に仕えてもらえるなんて、俺は世界一幸せな男だよ！」
「て、提督……??」
お世辞抜き、本心だ。
「……提督？私の、妻の目の前で他の女を口説くんですか？」
「ん？いや、こんな美人がいたら口説かない方がおかしいじゃん？」
全く、何言ってるんだか。
「どこの世界の常識ですか!!」
「？　万国共通だろ？」
「……はぁ、分かってました、分かってましたよ……。でも、提督？私のこともしっかりと見ていてくれなきゃ、嫌ですよ？」
「もちろんさ」
実際、よく見ているよ明石。
……君が消費した資材とか、特に。

「……Ａｄｍｉｒａｌ、貴方は、沢山の艦娘に愛されているわよ？」
「そうだねぇ、全く、男冥利に尽きるってもんだ」
工廠から出て、数分。サラは新しい兵装の調整がうまくいかないらしいので、明石に預けて、俺とアイオワは試し撃ちの為、二人きりで近海に出ていた。あ、サラの新兵器は、何でも、海水を使ったウォーターカッターらしい。

「あら、気付いててその態度なの？」
「む、その非難がましい目は何かい？」
「……ねえ、Ａｄｍｉｒａｌ？サラは貴方のこと、好きよ？」
「もちろん、知っているさ。嬉しいとも」
そう答えると、軽く頬を膨らませたアイオワが、
「もう！知っているなら、もっと真摯に答えてあげて！」
と、そう言った。怒ってるつもりなのかこれ？かわいい。
「ははは、真摯に答えているつもりなんだがね？」
「もー！」
そして、ふぅ、と。
ため息を一つついて。
「……ねえＡｄｍｉｒａｌ？……Ｍｅはね、こんな風に、普通の人間みたいな生活、考えたことも無かったわ」
遠くを見るアイオワ。
「その日その日が、生き残る為に必死だった……。Ｍｅも、何度も死にかけたし、サラも辛い思いをいっぱいしたわ」
……そうか。
やっぱり、うちの所為かな。強くなったうちから逃れた深海棲艦が、他所に行っている……。何とか、しなきゃな。
「でも、頑張っているのは皆んな一緒なの。陸では、アーカムシティを中心に暴れ回るジョーカーとか言う犯罪者、ラトヴェリアから来たドクタードゥームとか言う悪の科学者に、ニューヨークではキングピンが、それにドクターオクトパス、磁界王マグニートー……。多くの悪が、この世界に蔓延っているわ。皆んな、戦っているのよ」
……そう、だな。
……。
……その人達、全員俺の知り合いなんだけども。
……うん、黙っとこ。
「そんな中、私がこんな風に休んでいて良いのかなって、そう思うの……。今、こうしている間にも、沢山のスーパーヒーローが、国を、地球を守る為に戦っているのに、私は……。こんなに、良い生活を……」

その、ね、あの、君の目の前にいる男は、悪の組織の長だよ？
……なんか、ごめん。
でもな、それはおかしいだろ？
「あ、あー、えっと、ほら！スーパーヒーローだってさ、自分の生活とかある訳じゃん?!アイオワだって幸せに生きて良いんだよ!!」
幸せに生きてこそ人生だ、そうだろ？
「でも……」
「大体、スーパーヒーローだって、日本のサラリーマンみたいに二十四時間戦っている訳じゃないだろ？」
連中、なんだかんだ言って休んでるぞ!!そもそも、現状を守ったり維持したりするだけだもんよ！正義の味方なんて楽だろ!!
「それは、そうだけど」
「ああ、そうさ、確かに、美味い飯も、休暇も、快適な部屋でも何でも惜しみなく提供するさ！でも、艦娘の皆んなには、それを享受するだけの権利があるんだ!!君達は、艦娘はそれだけ努力をしただろう!!」
そう、そうだ。
命を懸けて戦った艦娘が、幸せになれないだなんて、間違ってる。
誰が何と言おうと、間違ってる。そんなことは、神が許しても俺が許さない。
努力して、更に結果を出した人が報われない世界なんて、征服してでも変えてやる。
「Ａｄｍｉｒａｌ……」
おっと、珍しく熱くなってしまった。反省反省。
「すまない、ちょっと熱くなっちゃったよ。……でも、本心だ。君は、報われるべきだ、幸せになるべきだ。……例え、この世界を変えてでも」
「……ふふ、Ｍｅこそ、ごめんなさい。Ａｄｍｉｒａｌのこと、誤解してたわ！」
「え？」
「そんな風に、熱いＨｅａｒｔを持っていたなんてね……。ｊｏｋｅばかりの女誑しじゃないのね！」

ハッハー、酷いぞ？

１２１話　デート・ア・艦これ　その一

「ぎゃぁあああ!!!腕が！腕がぁぁあああ!!!」
「すみません、榛名の身体は提督の所有物ですから……？」
「あー、榛名？まず、セクハラされたなら、腕の関節を外す前に声を上げよう？それと、外でそう言う話は、やめて？」
「はい！榛名は大丈夫です！」
大丈夫だった試しが無いよ？
……はい、そんな訳で。
金剛型の皆んなとお出かけである。
正確には、俺の散歩に金剛型が着いてきた、だな。
仕事？
あー、そうだね、俺が知らない間に、北アメリカの端っこまでの海路を開放してたね。もちろん、指示はしてない。
もう俺要らないんじゃないかな？
……いや、そんなことは良いんだ、重要なことじゃない。それより、この状況はまるで……。
「提督ー？どうしたんデスカ？」
「早く行きましょうよ！」
「提督は大丈夫です!!」
「具合でも、よろしくないのでしょうか？」
「い、いや、何でもないよ？」
包囲……？
包囲されてない？俺？
……さり気なく、右に行く。
「どうしました、司令？」
笑顔の霧島に腕を掴まれる。
さり気なく、左に行く。
「えへへ、司令の手、あったかいです！」
笑顔の比叡に手を握られる。
うーん、この。

前に、
「アイホールドユー！抱きしめちゃいマース!!」
後ろに、
「んっ??提督……、榛名は、提督の側にずっといますよ……??」
……。
金剛型からはにげられない!!
何てこった、もう遅い！脱出不可能よッ！だなんて。
これではおちおちナンパも出来ない！宇宙の法則が乱れる！
「うわぁ、あんな美人を侍らせて……」
「あれ、黒井鎮守府の提督じゃね？ヤバくね？」
「なんか有名人らしい人発見！記念撮影なう！」
そして目立つ！自分で言うのもなんだが、俺はイケメン！そして艦娘は身内贔屓無しで美人！そりゃそうだ！
そして目立つと！
「あらあら～？お兄さんさぁ、良い女連れてんじゃん？ちょっと俺にも分けてくんない？」
「マジかよ！この女マジでイケてる！ヤベェ！」
「女優とかか？ヤベェ女優喰うのは初めてだわ！」
「メッチャルックス良いわー！オシャレだし、金持ちじゃね？ラッキー、逆玉じゃん！」
馬鹿馬鹿！やめろ！やめろ身の程を弁えないチンピラの皆さん!!
やめろ!!!
「こ、殺すな!!!」
「はぁ？もう命乞いかよ？そのデカい身体は飾りペブァ!!!!?!」
あ、いや、そうじゃなくって。
「ファックユー……、ぶち殺しマスヨ、ゴミめら……」
「金剛、殺すな……！」
この子達の話。
「良いですか、霧島！骨を折る時はこうやって折るんですよ！」
「や、やめろ！待て、待て、待て待て待て待て待て!!、ぎぃいやぁあぁぁぁぁ!!!!!!!」

「こうでしょうか？」
「あああああああ!!!!ぎゃぁあああああ!!!!」
「行きますよ！えい！とりゃ！」
「かぺっ!!!!痛ぎゃっ!!!!や、やめえぎゅっ!!!!殴らないでうぁあ!!!!」
あーもう滅茶苦茶だよ。
「ストップ!!そこまでだ!!死人は出しちゃ駄目!!」
殴るくらいならまだしも！止めないと殺しかねない!!
「殺した?!」
「警察！警察を!!」
「うわあああああ!!」
パニック状態だ。仕方ない。
「煙玉！」
それ、逃げろっ！

「はぁー、あのね？いつも言ってるけどね、気に食わないからって暴力を振るっちゃ、駄目だよ？」
いつもの。
その辺の小綺麗なカフェで小一時間くらい説教してやる！オラオラ！紅茶飲め！ケーキも食べろ！
全く……。
「提督とお外でティータイム！嬉しいデース！」
「あわわ、これって、もしかして、デートってやつでしょうか?!」
「榛名、感激です！」
「成る程、逢引、ですか！私達は夫婦ですものね！」
あるぇー？
説教とは一体なんだったのか。
確かに説教したはずなんだがな……？
「提督のお話は興味深いデース！」
「あんなゴミでも、殺すと大変なんですね……。知りませんでした！」
あ、成る程、普通の世間話だと思われてたんだ。
……たまには、こう、ガツンと言うべきだろうか？

「えーと、つまりあれだ、手加減しなきゃ、駄目だぞ！怒っちゃうぞ！」
「怒った司令も素敵です！」
「比叡！気合い！入れて！怒られます!!」
　なんでや!!
「ま、全く！俺は、ほら！怒ったら恐いぞ?!だから、手加減抜きで人を殴ったりしちゃ駄目だ!!」
「え？人を一人壊せば、提督にお説教していただけるんですか?!榛名、頑張りま」
「だから駄目だって!!」
　話が通じん!!
　いかんいかん！価値観がぶっ壊れてる!!
「駄目だってば!!俺を好いてくれるのは嬉しいけどさ！俺の為に他人を傷付けるなんて!!」
　倫理とかそう言う話じゃなくてさ、ただ単に、俺に構って欲しいなんて理由で、他人を傷付けるのは良くない。
　正確には俺は傷付け合うのが好きじゃない、だが。
「俺はさ、君達に、平気で他人に暴力を振るうような子になって欲しくないんだ」
「？、提督は、優しい子が好きなんデスカ？」
「んー、まあ、そうなの、かな？」
　いや、確かにさ、俺も喧嘩はするし殺し合いの経験も何度もあるよ？でも、本当に、良いもんじゃないんだよ。
　特に殺し合いなんて最悪だ。両手に血がこびり付くようなあの感覚は、世界で一番不快だと思う。
　まあ、艦娘が戦う為に生まれた存在なのは重々承知だがね、だからと言って、暴力や殺しは本来痛ましいものだと言う事実は変わらない。
　自分が何をしているか、何をしようとしているか、それを確りと自覚した上でその力を振るって欲しい。
　俺に言われたからとか、俺に好かれたいからとか、そうじゃなくてさ？

「提督は優しい子が好き……。榛名は、提督に優しくします！」
そうじゃなくてさ？
「優しく、優しく……、こんな感じで、司令を撫でてあげたり、とか、かなぁ？」
そうじゃなくてさ？
「私の分析では、優しい子とは、こう言うものかと。……さあ、司令？ケーキですよ、あ、あーん、です??」
そうじゃなくてさ？

……まあ、良いか。
ちゃんと、殺しは面倒事に繋がるってことは理解してくれたし。
俺の言うことを聞いてくれるのが救いだ。この調子で、確りとこの世界の常識ってやつを教えてやらねば。
……常識を、教える。
そう、そうだよ、これを機に、艦娘の皆んなにお出掛けと言う名目で常識を教えるんだ！
待ってろよ艦娘！
この俺が！常識を！教えてやるからな!!

１２２話　どこもかしこも、けものばかりだ（デートその二）

「デート！デート！提督さんとデートっぽい!!」
「ふふ、嬉しいよ、提督」
「きゃー！司令官とデートだなんて！幸せです??」
「う、うん？」
あれ？俺、デートするなんて言ったっけ……？
確か、社会見学って言ったよな？
え？言ったよな俺？
デートするなんて一言も……。
「提督とこうしてデートするのも久しぶりだね」
……いや、やめておこう。藪を突いてなんとやらだ。この藪は突くべきではない。多分、この藪を突くと、蛇どころかアメンドーズが出てきそうだからな。
さて、そんなことより、行き先だ。
常識を教えるのにはやはり、人外と人の区別の仕方から、だ。
つまり、この子達に、人外とは、人とは何なのかを見てもらうのだ。
幸いにも、感覚が極めて鋭い白露型だ、実際に見て、聞いて、触れて、嗅ぎ分ければ、きっと分かってもらえるはず。
と言う訳で、さあ、古都ヤーナムへ!!

……え？だって、うってつけじゃん？
ヤーナムには、人外と人の両方がいるし。
一時期は青ざめた月の所為で、空の彼方から上位者……、人ならざる、そして人を超えるもの達が大量に現れて、大変な騒ぎになったけど、今はいつも通り、獣の病と言う疫病が流行っているだけの古い町だよ。
艦娘は、よく分からないが、人の病気にはかからないとの事（明石調べ）だし、大丈夫。

もしかかっても治せるし。ノースティリス産祝福ポーションは例え機械だろうとアンデッドだろうと問答無用で治すからな！

言葉の問題も多分大丈夫。例によって、明石が、万能翻訳モジュールなるものを開発しておいたらしいから、それを使ってもらう。

……にしても、ヤーナムかぁ。

昨日は、金剛型の皆んなと神室町のバンダムに、今日は時雨と夕立、春雨の三人とヤーナムへ、か。

旅人らしく、そこら中をふらふら出来るのは楽しいな!!

×××××

「匂い立つなぁ……」

……へぇ。

体格……、提督よりも大きい。けど、まるで獣みたいにしなやか。

あの構え……、一見隙だらけに見えるけど、いつでも、どの方向にも対応出来るように脱力しているっぽい？

あの武器……、獣狩りの斧。普通のより大きい？何にせよ、使い込まれているっぽい。

そして、匂い。夥しい程の、血の匂い……。それも、相当に穢れた血の。こんな匂いの中正気を保てるなら、警戒すべきは肉体の性能だけじゃなく、むしろその精神……。

総評。このおじさん、かなり、強いっぽい……!!

「鋼と火薬、潮と血の香りだ……。その子供は、何だ？人じゃないな、上位者とも違う……、何だ？」

……良い。

纏わり付くような、色濃い殺気。

楽しめるっぽい？

「はい、ストーップ!!」

……？

「何でこう、殺し合う前提なの？先ず、コミュニケーションを取ろう？話し合おう？戦うのはそれからでも遅くないよ？」

……話し、合う？
ちょっと何言ってるか分からないっぽい？
「良いか、慌てるな、まだ目の前の生き物が敵かどうか分からないだろう?!何でそう、喧嘩腰なの?!」
「馬鹿を言うな、敵だった場合どうする？」
「おじさんの言う通りっぽい！油断した奴から死ぬっぽい!!」
良い事言うっぽい？
「サツバツ!!!……兎に角！敵じゃないんだお互いに!!武器を納めて!!」
ずー、提督の命令……。
「夕立、春雨、僕の隣に。提督の盾になるんだ」
「分かったっぽい！」
「うん、分かった！」
先手を取れそうにないなら、せめて、提督の盾になるっぽい！もしも何かあったら、提督の為に死ぬっぽい!!
「……で？この子供は？一体何だ？」
「あー、艦娘だよ、艦娘。分かる？」
「……前に、ヴィオラが言っていた、ような」
「あ、奥さんに聞いた？艦娘の存在は今の世の中では常識だよ、常識！」
「……ヤーナムには艦娘、とやらはいない。そして、破天荒と言う言葉そのもののようなお前が、常識を語るな」
へー、海に近いのに、艦娘がいないなんて、珍しいっぽい？
「ははは、やだなぁ、俺は世界各国を回ったんだ、常識なんてよく知ってるよ！……それにさ、ほら、この子達、おたくの娘さんと同じくらいの見た目でしょ？優しくして、どうぞ」
「……フン、俺には分かるぞ、そいつらの本質は、獣だ。今こうしている間にも、此方を警戒している、殺そうとしている……、酷い匂いだ。とても、娘と同じ年頃の子供の出せる匂いじゃない……」
なっ?!女の子に酷い匂いとか言っちゃ駄目ー!!
「酷いっぽい！そっちだって、殺意の匂いがするっぽい!!」

「心外だね、僕以上に血の匂いを振りまいておいて……」
「わ、私、臭くないですっ!!」
むぅ!やっぱり、油断ならないっぽい!
「だ、だからさー、戦いに来た訳じゃないんだよ!観光だ、観光!!」
「こんな田舎にか?」
「いや、ここには狩人も上位者も両方がいるからな。観光とは名ばかりで、実際は研修みたいなも」
「「デートです」」
「……」
「おーっと?その銃は何ですかな?俺を撃つ気満々では?」
「……娘に手を出したら、殺す。必ず、殺す」
は?提督を殺す?
その前に私達がお前を殺す!!
「駄目だって!」
「わぁ??提督さんに、ぎゅっと抱きしめられると……??」
「んっ??良いよ、提督、もっと、強く……??」
「あはっ、気持ち良い……??」
んー??最高っぽい!
「……」
「神父さん、引かないで?その、艦娘は年齢とかあまり関係なくて……」
「……まあ、娘に害が無ければ、良い」
「アッハイ。……おばさんは?」
「アイリーンなら、この時間帯なら、大聖堂だろう」
「そっか、じゃあ、そっちに行くぞ、時雨、夕立、春雨」
「うん、分かった」
「了解っぽい」
「はあい、司令官」
撤退っぽい。
……あれが、人間。やっぱり、人間は中々、性能が高いっぽい?提

督さんも強いし、あのおじさんも強いし。
「あ、そうだ！あの人を人間の平均だと思わない事!!あの人は、人間の中でも強い方だからね！」
「……そうなのかい？」
「え？あれが普通くらいじゃ無いんですか？」
「じゃあ、人間って、どれくらい強いっぽい？」
　え？
　あれが普通じゃないの？
「……大体、すれ違った住人とかいるでしょ？実力を察せない？」
「実力、隠してるんじゃないのかい？」
「隠してないよ！皆んな、あれで素だよ!!」
「それじゃあ、人間って、相当弱くないですか……？」
　春雨の言う通りっぽい？それが本当なら、艦娘と人間は、大人と子供以上の性能差があるっぽい！
「相当弱いんだよ！良いかい、大体、世の中の八割くらいは、ここの住人みたいに弱いんだ!!」
「残りの二割は？」
「化物」
　なるほど……！
　人間は、極端に弱いのと、極端に強いのの二種類がいて、弱い方が沢山いる……、そう言う事ね！
　提督とか、さっきのおじさんは強いやつの方なんだ！
　確かに、弱い方なんて、軽く叩けば死んじゃうくらいに脆そうだもん、だから提督は「殴るな」って言うんだ!!
「分かったよ、提督！」
「よーく分かったっぽい！」
「成る程、です！」
　弱い方を殴る時は、ものすごーく手を抜くっぽい！頑張るっぽい!!
「ふぅ、やっと分かってくれたか……。じゃあ次は、大聖堂にいるおばさんに、対人の戦い方習って？」
「大聖堂？」

「おばさん？」
「対人の戦い方？」
「そう！近くの大聖堂に知り合いの、対人戦闘のプロがいてね？あのおばさんから、対人戦闘の何たるかを学んで欲しいんだよ！だって君達手加減できねーんだもん!!!」
手加減……、今までは要らない技術。
でも、これからは大切って提督が言ってるし……。
×提督さんの為に、殺さずに、無力化！
×夕立、頑張るっぽい！
×
×
×
×
×
『……で？今度は何ですか？て言うか、嫌な事がある度にここ（狩人の夢）に逃げ込んでくるのやめてもらえます？』
「いや、結局、烏羽おばさんに三人を預けて来たんだけどもさ」
『……はあ、それで？』
「何か、おばさんがうちの三人を気に入っちゃって。今日は泊まって行くってさ……」
『へぇ、そうですか』
「いやそうですかじゃなくて……。常識教えるつもりが、どんどん逸脱していっているような……」
『え？常識？ヤーナムに？冗談でしょ』
「ん？何か俺おかしい事言った？」
『正直、新しい狩人を連れて来たのかとばかり……』
「そんな訳ないだろ。あの子達は優しくてとってもいい子で……、あ、ちょっと待って電話。もしもし？」
《あ、提督？時雨だよ。僕と夕立と春雨は、アイリーンさんと狩りをしてから帰るね。いやあ、狩りは良いね！僕達、艦娘としての戦いが終わったら狩人になるよ！じゃあ、これから狩りだから！後でね！》
「え、ちょっと、しぐ……、切れた……」
『……ええと、歓迎しますよ？』

「……就職の際は、是非宜しくお願い致しますよ、元狩人さん」

１２３話　黒井鎮守府のちいさな魔女（デートその三）

駆逐艦雪風は幸運だ。
この世界で一番、幸運の女神ってやつに愛されてる。
「常識ですか？しれぇ？」
ただ、神様は、
「はい！分かってます！人に暴力を振るっちゃ、いけません！」
いつだって残酷だ。

「事故だ!!トラックが歩道に!!」
「ひ、人が跳ねられたぞ!!」
「きゃあああああ!!!!」

「し、しれぇ！大変です！反戦団体の人達が!!」
「ああ、ありゃ、こっちに向かって来てた反戦団体の連中に綺麗に突っ込んでったな……」
「救助をお手伝いした方が……」
「あー、いや、その、そう言うのは、プロの仕事だから！近寄らない方が良いと思うぞ!!」
「は、はい……」
……どうやら、雪風の幸運の女神様は、相当甘いらしい。
雪風「だけ」に……。

こう言ったことは良く起こるんだ。
恐らく、雪風が、「潜在的に会いたくない」と感じた人間に、災厄レベルの不幸が齎される……。
幸運と言う名の、歩く終末。
黒井鎮守府の守り神。

運勢によって全てを書き換える、現実改変者。
それが雪風だ。
練度が低い、最初の頃はまだまともだった。
例えば、雀荘に連れて言ってみると天和で上がれるとか、カジノでジャックポットとか、宝くじに当たるとか、そんなものだった。
だが、雪風の幸運は、練度が上がるにつれて上昇していき、今では運勢が低下する呪いの装備を付けることを義務付けないと、まともに生活させられないレベルにまで達したんだ。
今、こうしている時にも、常人なら一歩外に出ただけで事故死するくらいまで運勢を持っていかれる呪いの指輪を付けさせているが、それでもこれだ。
多分、この指輪を外せば、大本営に隕石が落ちるんじゃね？いや、マジで。
雪風が指輪を外せる唯一の条件は、戦闘時。
俺は、指輪を外した雪風の、幸運の女神の暴虐を見たから、そう言える。
あれは駄目だ、絶対に駄目だ。
幸運の女神は、雪風を、俺を、黒井鎮守府を幸せにしてくれるが、その他の全てを破壊し尽くす。
陸で外させる訳にはいかない。
「ま、まあ、雪風は良い子だもんな！ちゃーんと常識を知ってるもんな!!」
「はい！雪風、良い子にしてます！」
うん、良い子だな！「雪風は」!!
ヤバイのは能力だけだよ!!
雪風自身はとっても良い子だ。少々子供っぽいけど、性根が真っ直ぐで優しい、お手本のような善人だ。
何だろうか、兵庫で高校教師をやっていた時を思い出すなぁ。
いたんだよ、勤め先の高校にも。
思ったことを実現させる、現実改変者が。女子高生だった。
……まあ、雪風は、あの子みたいに不思議を探している訳でも、世

界を大いに盛り上げようとしている訳でもない。その分、まだマシだ。
能動的に動く現実改変者ほど恐ろしいものはないからな。
……だが、このまま能力が高まり続ければいずれ、大変なことになるかもしれない。
今はまだ、雪風が不快と思った人間が事故に遭う、好いている人物に幸運が齎させる、くらいの小規模な現実改変だ。
指輪を外しても、世界規模の現実改変は不可能。
……とは言え、その能力が、過去や未来までに及べば？全世界を包み込めば？……確実に、厄介なことになる。
財団の独房に繋がれている、あのちいさな魔女のようにならない為にも、色々と考えなきゃな。
「雪風、新しいアクセサリーをあげよう。女の子は沢山お洒落した方が良いからさ……」
×
×
×
「女の子は沢山お洒落した方が良いからさ……」
「はい！」
わーい！司令からプレゼント、もらっちゃいました！嬉しいです！
「つと、女の子に渡すネックレスがボーン製なんて、良くないな」
ボーン……、あ、確かに、骨で出来てますね。
「造り替えようか。ゴールデンとか、シルバーとかかな？いや、あからさま過ぎて嫌味だな、ルビナスあたりにしておこう」
ルビナス……、前に見せてもらった宝石ですか？！
「だ、駄目ですよ！そんな高価なもの！」
「あ、大丈夫大丈夫、俺の懐は痛まないから。こうして、素材槌で……、えい」
わあ！一瞬で骨のネックレスが赤い宝石のネックレスに！
「え？！どうやったんですか？！」
「んー？素材槌だよー？このハンマーを使うと、叩いたものの材質を変化させられるんだ」

材質を、変化？……うーん、それって、おかしくないですか？だって、骨は、どんなに頑張っても宝石にはなりません。
「……えーと、しれぇ？それ、おかしいですよ？上手く言えませんが、骨は、叩いても宝石になりません！」
「いやいや、そんなことないよ？じゃあ、このテーブルを、このゴールデン製の素材槌で叩いてごらん？」
あ、また、どこかからテーブルとハンマーを……。
私は、ちょっとおかしいかなー？って思うんですけど、司令はおかしなことじゃないよ、って言いました。だから、おかしなことじゃないんです！
司令は、いっつも正しいですから！
「分かりました！えい！……わあ！テーブルが金色に……！」
や、やっぱり、司令は正しいです！そうですよね、長年この世界で生きてきた司令は、沢山の常識を知ってますからね！雪風は、まだまだ勉強不足です！
「でも、こんな手段で作った金は、レアメタル市場を破壊してしまうから、売りさばいちゃ駄目だぞ？」
「はい！」
そっか、金が沢山あると、金が珍しくなくなっちゃって大変ですもんね！
流石、司令！色々考えてるんですね！
「さて、このネックレスだが……」
「はい、分かってます！他の人に幸運を分けてあげるアクセサリーなんですね！」
「……ああ、そうだよ。とっても幸運な雪風だからこそ着けられるものなんだ。他の子に渡したりしちゃ、いけないよ」
やっぱり！前に司令がくれた指輪と一緒で、私の幸運を皆んなに分けてあげるアクセサリーなんですね！
私は、十分幸運ですから、この幸運を他の子に分けてあげたいんです！
皆んなが幸運になれば、皆んなが幸せになれますよね！それは、

きっと、素敵なことです！
いつだったか、司令が言ってました。私が一番幸運だと、他の子が一番になれなくて可哀想だろ、って。
そう言われると私、くじ引きとかをすると、いつも当たりを引いちゃいますから。その分、他の誰かが外れを引いてるってことですもんね……。
「おっと、今すぐ着けなくても良いよ、これから出撃でしょ？深海棲艦の前では、アクセサリーを全部外して良いからね。さあ、頑張って！」
「ー！、はい、しれぇ！」
司令に、応援されちゃいました！
雪風は、司令に応援してもらえると、いくらでも頑張れちゃいます!!
それでは、雪風！
出撃します！

……大変です！台風が巻き起こりました!!
でも、丁度私のいる所は、台風の目みたいですね！幸運の女神のキスを感じちゃいます！
まあ、最近は私が出撃するといつもこうなんですけど。
あっ！深海棲艦です！
「雪風は沈みませんっ!!」
やっつけます!!えーい!!
……あ、撃つ前に、雷が落ちて黒焦げになっちゃいましたね。
不思議です、私が撃とうと思った深海棲艦は、いっつも雷に打たれてやられちゃうんですよ！「運が良い」ですね！
きっと、幸運の女神と、司令のお陰ですね！
よーし、この調子で頑張ります！沢山やっつければ、司令が喜んでくれますから！
えーと、深海棲艦は……、多分こっちです！
「敵影発見です！」
「勘で」見つけられました！私も沢山訓練しましたからね、きっと、勘

も鋭くなったんだと思います！頑張りました！
……深海棲艦、沢山います！
あっ！撃ってきました!!
あれ？でも……、
「？、雪風には、掠りもしません!!」
「幸運にも」、一発も直撃せずに済みました！
『『『……？!』』』
「さあ、今度は雪風の番です！魚雷でまとめてやっつけちゃいます！
やー!!……っきゃー!!!」
あ、あわわわわ！「偶然」、空から隕石が!!
深海棲艦達が、一瞬で潰されちゃいました！
た、大変です、隕石が降るなんて……。司令に報告しなきゃ！
……あれ？深海棲艦、もういない？
さっきの隕石で全滅しちゃいました……。

うーん、私、何もやってないような……？

１２４話　君の姿は僕に似ている（デートその四）

「ごめんもう一回言って？」
「ですから、その」
「私達、弓が射れなくなっちゃって……」
「……なんで？」
「それは、その……」
「お、おっぱいが……」
「うむ」
「「おっぱいが大きくなり過ぎちゃって……」」

その瞬間俺は、小さくガッツポーズした。

……さて、おっぱいが大きくなった件、あ、いや、弓が射れなくなった件は大変だな、うん。
空母が弓を使えないってことはつまり、艦載機の運用が出来ないってことだ。
我が黒井鎮守府の誇るおっぱいドラゴン、蒼龍と飛龍は正規空母なのだ、艦載機が飛ばせないのは大問題。
「最近はもう、艦載機を飛ばせないから、直接深海棲艦を引き裂いてるんだけど……」
なにそれこわい。
「でもやっぱり、艦載機のオールレンジ攻撃が無いと戦い辛くって……」
オールレンジ攻撃……、正規空母の得意技だ。
物理法則を完全に無視して空を駆けるファ、あ、いや、艦載機で、ありとあらゆる距離、方向から攻撃をする、それがオールレンジ攻撃。
うちの正規空母皆んなは、多数展開したファンネ、じゃなくて艦載機のオールレンジ攻撃と共に、本体はそれの穴を埋めるかのように中～近距離で戦う。
つまり、ファンネルとは牽制であり決め手である。もちろん、無く

ても戦えるくらいにはうちの空母は強い。だが、なければ辛いのは当然だ。
「しょうがねぇなぁ(悟空)、じゃあ俺が力を貸してやるかぁ！じゃ、一緒に買い物に行こうか！」
「わーい！」

「……！
?!」
はい、帰還の骨片。
「久しぶり、盗人のじいさん。クロスボウある？」
「おお、あんたか、久しぶりだな。クロスボウならここだ」
「えーっと、どうしよっかな、アーバレストがおすすめなん」
「い、いや、ちょっと待って！何処ですかここ?!」
「え？いや、ロスリックだけど？」
何を言って……、って、そうか、皆んな行ったことないもんな、ロスリックなんて。
ここはちょっと非常識な所だから。誤解されないようにちゃんと言っておかないとな。
「ロスリックは、地球で言う中世ヨーロッパくらいの文明を持つ地で、不死者と言う生きながらにして死んでいる連中が心をすり減らしながらも生きている素敵な世界だ」
「不死者」
その名の通り、不死者は決して死ぬことがない。いや、正確に言えば、死んでも復活する。その為、死にまくって心をすり減らし、やがて自分が何者だったかも忘れ、他者のソウルを奪う為だけにそこらを徘徊し暴れる亡者へと成り下がる。可哀想な人達だ。
「因みに、この火継ぎの祭祀場の外に出ないでね？この辺、亡者とか魔物とか、地球より沢山出るから。時空間もガバガバだし」
「魔物」
出る。この辺には出る。近くの沼に出た巨大蟹は美味しかった。知り合いの不死者と一緒に食べた。

「そ、その、提督？ちょっと良いかな？」
「なんだい、飛龍？」
「……ここ、地球じゃないの？」
「異世界だよ？」
多分。
「魔物、地球にいないよ？」
「いるってば。蒼龍が見たこと無いだけで。大体、深海棲艦だって魔物みたいなものだろ？」
艦娘の皆んなって、深海棲艦と戦っておきながら、怪人とか妖怪とか魔物とかの存在を認めないよね、何で？常識を考えてほしいな。
「時空間がガバガバって？」
「この辺、時間の流れがおかしくてさ。それに付随して空間も歪んでるんだよ」
今は大丈夫だが、昔は良く時空間のうねりに飲み込まれて過去や未来に飛んでしまうことが多々あった。なんだかんだで戻って来れたが。
「な、なる、ほど……？」
「ああ、安心してくれ、この世界はちょっとおかしいから。ここに慣れろなんて言わないさ」
ロスリックは結構厳しい土地だしな。ローリアンに土手っ腹を貫かれて内側から焼かれた時は久々に死を覚悟したし。あの時は酷かったな、当分ホルモン焼き食えなくなったわ。
「まあ、取り敢えずさ、買い物しようよ。買ってほしいものがあれば何でも買うからさ！兎に角、片手でも撃てるクロスボウはちゃんと選んでね？」
「は、はい……」
×
×
×
「こりゃあ、また……、綺麗なお嬢ちゃんだな。だけどよ、クロスボウなんて使えるのか？相応の筋力が無きゃ……」
クロスボウ……。初めて見る武器だけど、これは何なんだろう？
×
×

「そ、その、すみません、それって、どういう武器なんですか？」
「ん？クロスボウを見たことがないのかい？……良いか、これはな、この弦をここに引っ掛けて……」
……へー、片手でも撃てる弓みたいなもの、かぁ。
これなら、弓と違って、胸が邪魔にならなくて良いな。
「……それで、ここからボルトが発射されるんだよ。……本当に大丈夫なのか？そんな細い腕で、クロスボウが引けんのか？」
「え？ここを引っ張って、ここに引っ掛けて、引鉄を引くんですよね？」
あ、凄い、使いやすい。単発の銃みたいな使い心地。
「……す、凄えな。やるもんだ」
「そ、そうかな、えへへ」
褒められて悪い気はしないよね。

「蒼龍、決まったかい？」
「うん、提督。私はこのアーバレストが一番手に馴染むかな」
ちょっと弦が引きづらいけど、一番使いやすいな。
「飛龍は？」
「私はこの、スナイパークロスが一番かなぁ」
「ＯＫ、じいさん、幾らだ？」
「そうだな、あんたには世話になってるからな。６０００で良いぞ」
６０００？何が？
「助かるよ。そぉい！」
「わっ、何ですかそれ？」
白い、炎？
「ソウル……、この世界のエネルギー体の一種で、通貨としても利用されるんだ」
「ソウル、ソウル……、その、魂って意味ですよね？」
「それ、本当に大丈夫なやつなんですか……？」
「ヘーキヘーキ。……うっぁ、持ってかれたァ……」
反応！反応が大丈夫じゃない!!

「……不死でもないのに、ソウルなんざ使うもんじゃないぞ？」
「ぁあ、へーキ、へーキ……（生命力低下）」
「提督！」
「む、無理しないで下さい！」
もう！提督ったら！また無茶して！
……あれ？って言うか提督、不死じゃないんだ。てっきり不死身だと思ってた。
「いやぁ、あいつが火継ぎを終わらせた時は、とうとうこの世界も終わりかと思ったが……、どうにかなったなぁ……」
「そうねー、あれ？あいつは？」
「火守女とどこかに出掛けたよ。全く、中々に仲が良くてなぁ……」

……提督、おじさんと話し込んでる。ちょっと寂しい。
……それにしても、ここ、何なんだろう？石造りの玉座が並ぶ、石造りの建物？
中にいるのは、あからさまに魔法使いに見える人とか、鍛冶屋とか……。こう言うの、ファンタジー？って言うんだよね。実在するんだ。
まあ、今更だよね。提督は、奇跡も魔法もあるんだよって言ってたし。提督が言うなら絶対に正しいよ。提督があるって言うなら、ある。当然だよね。
「蒼龍、飛龍、帰るぞー」
「はーい」
「また来いよー」

「……！？」
ま、また、一瞬で景色が……。
ここは……、鎮守府の裏？
確か提督が、触っちゃ駄目って言ってる篝火のあるところかな？
この辺はセーブポイントだから壊しちゃいけないって聞いている

けど……、セーブポイントってなんだろう？よく分かんないや。
「提督ー？どこですか？提督ー？」
「あ、いましたいました、提督！急に消えるのはやめて下さいね？監視するこちらの身になって欲しいです！」
あ、一航戦の加賀さんと赤城さんだ。……そっか、いつもの、艦載機の監視が途切れちゃったんだ。
提督が見えないと不安。その気持ち、分かるけど……、監視ってどうなの？
「全く、異世界へお出掛けの際には連絡をお願いしますとあれ程……」
「ほんの一時間くらいだしさ、大丈夫かなー、と」
「もう、不安だったんですからね？」
むー、赤城さん、さり気なく提督の隣に……。
「今後はこのようなことの無いように、しっかりと監視されて下さい」
加賀さんまで……。
「分かった、分かった、謝るよ！……だから、しなだれかからないで？恋人繋ぎやめて？」
むー！むむむむ！確かに私達はおっぱいは大きいけど、一航戦の二人のほうが女の人らしくて綺麗だもんなぁ。
提督はよく、自分で考えろって命令してくれるけど……、どうやったら提督を虜に出来るんだろう？
「蒼龍、飛龍、試し撃ちしておいてね！それじゃ！」
「あっ、提督ー！……！、逃げた！」
うー、もうちょっと一緒にいたかったのに……。
はぁ、しょうがないか。クロスボウの試し撃ちしとこう。艦載機無いと困るもん。
あーあ、私も一航戦の二人みたいに、提督を誘惑できたらなぁ。
「あ、そうでした。蒼龍ちゃん、飛龍ちゃん、明石さんが呼んでましたよ？何でも、どらぐーんしすてむ？が出来たとのことで……」
「四時くらいに来て欲しい、との事よ。……さあ、赤城さん？私もこのふぃんふぁんねる？なる装備をモノにするんですから。訓練をしますよ。日々、精進あるのみです」

「はい、加賀さん。……それじゃあ、頑張ってね、蒼龍ちゃん、飛龍ちゃん？」
「「は、はい！」」
……でも、私と飛龍は、一航戦の二人みたいに提督のことを監視なんてしないもん。酷いよ、監視なんて。不安なのは分かるけど、提督の迷惑だよ！
一航戦の二人は提督を叱るから、私は提督にいっぱい優しくしてあげよっと！
さて、艦載機を飛ばして……、提督の方に！

え？
これは観察だよ？
観察だから、提督の迷惑にならないもん。一航戦の二人みたいに、提督が他の他の女の子に声をかけたりしても、私達は怒らないよ？
ただ、大好きな提督を見てるだけ。

……ずっと見てるからね、提督??

１２５話　お前さんなら、できるできる！（デートその五）

「……」
「あー??提督素敵です良い匂いですあったかいです??????」
「ん??提督、提督、提督??????凄い、よ、提督……??????」
少し、待って欲しい。
昨日の夜、古鷹と加古が布団に入って来たのは分かった。
これはまあ良い。喧嘩をしない限り、俺の部屋には出入り自由、添い寝でも何でも勝手にしてＯＫだから。
昨夜の記憶はしっかりある、大丈夫だ、俺は何もやってない。
だが、
「……何で全裸？」
全裸。
全裸である。
何てこったい、全裸である。
全裸芸が許されるのは若手芸人か俺くらいのもんやぞ。
「あっ、駄目、キちゃう……、んんっ??????お、おはようございます、提督??」
「あ、あたしもっ、イくっ??????……あ、お、おはよう、提督??」
「……お、おう」
ちょっと待ってくれ、何でこんなにノリノリなんだこの二人？俺、何か不味いことしたか？
「ご、ごめんなさい、提督??わ、私達、提督がデートしてくれるとおっしゃられたのが、嬉しくて嬉しくて……??」
「ついつい、提督の部屋に入って、勝手に添い寝したんだけど……??」
「提督から良い匂いがして……??」
「まただよ（笑）」
艦娘の五感は、人間のそれよりずっと鋭いんだが、この二人は特に嗅覚に特化しているらしい。俺と同等くらいの嗅覚を持つんだ。

俺と同じくらいに嗅覚が鋭いってことは、猟犬レベルの鼻だってこと。
そんなにも高性能な鼻で、好きな匂いを吸い込んじまったらおかしくもなるだろうよ。
……現に俺も、先程から漂う古鷹と加古の甘い女の子の匂いにやられそうだ。極上の阿片を思い切り吸わされたみたいな、そんな感じ。やばい。
下手に鋭い感覚を持つと困るんだよね。良い匂いが常人の何百、何千倍以上に増幅される訳だから。
この子達がおかしいんじゃない、ただ鼻が利くだけだ。
「て、提督の匂い、凄過ぎて……??身体が熱くて、脱いじゃいました……??」
「ご、ごめん、直ぐに服着るからさ……??」
むしろ、よく襲い掛からなかったと褒めてやりたいくらいだ。
嗅覚が鋭い者にとっての「好きな匂い」は、例えるなら、麻薬のようなものなのにな。驚異的な自制心と言う他ない。
「だ、大丈夫ですよ、提督には、誓って何もしていませんから……??」
「うう〜、せ、切ないよぉ……??」
可哀想に。
もういっそのことヤってしまおうか？俺は一向にかまわんッ！だが他の子が何て言うかなぁ。もっと気軽にいかがわしいことをさせてもらいたいんだが。

「おはようございます??て、いと、く……」
あ、大淀。
「……ぐ、ぐはっ!!!!
大淀ォーーーー!!!!
?!!!!血を吐いて倒れたァーーーー!!!!
「大淀さんには悪いことをしちゃいましたね……」
「まさか、ショックで吐血してぶっ倒れるなんてねー。後で謝っておかなきゃ」

加古の言う通り、大淀は倒れた。
どうやら、一番最初に選んで欲しかった、とのこと。
重い、重いよ。日本人は貞操がキツくてなぁ……。性行為も一種のコミュニケーションだと思えば別に良くない？……いや、言ったら怒られそうだし、黙っとこう。
「まあ、入渠させたし大丈夫だよ」
「こう言う時、艦娘って便利だよねぇ……。入渠すれば大体何だって治っちまうんだから」
言われてみればそうである。
「誤解は解いておいたし、一応は問題ないと思うんだけども……、俺も後でもう一度謝っておくか」
その前に、お出掛けだわな。この子達はこう見えて、社会に適合する気の無い戦闘狂だから、ちょっとは社会に興味を持ってもらいたい。
しかも、長門や武蔵のような、より強い相手との戦いを望むタイプじゃなく、只々殺戮を楽しむタイプ……、命の奪い合いに心を踊らせ、戦場の匂いを求めて流離うような。
別に、殺戮を好むこと自体は悪くないさ。二人共、性根は良い子だしな。大体にして、罪無き人々を殺そうってんじゃないんだし良くない？
要は、戦う事でしか生きている実感を掴めないんだろうよ。
「そう言うのは性分だもんな、直せとは言わないよ」
さて、出掛けようか。ネックレスに、腕輪と、今日はオーデコロンも付け、
「あ、それはやめて下さい。提督の匂いがおかしくなるので」
……古鷹にオーデコロンを取り上げられてしまったので、オーデコロンは付けずに、いざ出発。
「ま、まあ、世の中には戦いの他にも面白いことが沢山あるからさ、少し見に行ってみようじゃないか！」
「……つまり、デートだね！」
……一緒に出掛けるとは言ったが、デートなどとは一言も言ってい

×
×××
×××
ないはずなんだがなぁ。まあ、可愛いからどうでもいいや。
×××
×××
「そ×
×そのね、俺はね、このドンドルマの豊かな自然や活気ある人々に
触れて欲しかったのであって……」
×
「古×鷹ァ！行くよ!!!」
「そこぉ!!!」
『ゴアアアオオオオオオオ!!!!!』

「ハンターになれとは言ってない」
うふふ、楽しいですね！
成る程、提督は、戦うことしか出来ない私達に、他の戦場をくれると言うのですか！
なんてお優しい……！
『ゴオオオオオオ!!!!!』
それに、この様な大物とやり合えるなんて、幸せです！
「ははっ、まさか空飛ぶ竜を殺せるなんてね！」
確か、リオレウスとか言ったっけ？
中々に丈夫だけど、大きい分、斬りつけてやると派手に血が舞って綺麗ですね！
「死ぃ、ねっ!!!」
『ゴアアアアア……、アア……』
右目に突き刺してやった牙斬刀が、頭の中にまで入りましたね。脳が破壊されたのでしょう、動かなくなりました。ふふふ、良い戦いでしたよ。
「ふぅ、終わりました！提督、ありがとうございます！良い経験ができました！」
「楽しかったよ、提督！」
「ま、まあ、君達が良いなら、良いけど……」
私達は艦娘、兵器ですから。戦っている瞬間はとても幸せなんです

よ。
特に、愛する主人の為に戦える時は最高なんです！
「いやぁ、そのさ、普通にデートすれば良いのにさ？確かに、この死体を売り払えば結構な金になるよ？けどさ、そんなこと気にしないで良いんだ」
「いえいえ、良いんですよ！提督、お金がないんですよね？大丈夫、私達が稼いでおきますから！」
「戦うだけでこんなに稼げるなんて、良いねぇ！これなら幾らでも稼げるよ！提督に全部あげるからね！」
「い、いや、俺は金なんて別に……。確かに昨日、裏カジノで三千万程溶かしたけども……、あれは俺個人の金だし！」
遠慮しなくて良いのに。提督には、私の全部をあげちゃいます??
正直、深海棲艦がいなくなった時に、私達は用済みになってしまうと思っていましたけど……、戦場は沢山あるものなんですね！これなら、ずっと提督のお役に立てますね！
「いや、もうさ、俺って殆どヒモ状態じゃん。これ以上君達に何かやらせたら俺、男として駄目じゃん？」
「そんなことありません！提督は、私達が養います!!」
「養う」
はい！私達は提督のペットですから！主人の役に立つのは当然ですよね！
「提督は何もやらなくて良いんだよ！あたし達がなんでもするからね！」
そうですよ、提督は、そこにいてくれるだけで良いんです！
「あぁ^～、駄目になる～」
「ふふふ、良いんですよ、もっと私達を使って下さい！」
どんなことでもやりますからね！提督の為に、なんでも！なんでも!!
「はい、提督！お金だよ！良いんだよ、幾らでもあげるよー！」
手筈通り、加古が報酬金をもらって来たみたい。提督にあげますね！

「い、いや、流石に現ナマをもらうのは……」
「提督は優しい人ですからね、遠慮して下さるんですね！それじゃあ、そうですね、食事はどうですか？是非、奢らせていただきたいです！」
「ま、まあ、それくらいなら……」
　やった！提督とお食事！

「……ところで、君達がハンターに登録してから、町の人達の視線を感じるんだけど……、何か知らない？」
「？、いえ？何も知りませんけど……？」
「気のせいじゃない？」
　視線、視線……？いつものことじゃないですか？
「いらっしゃいニャー！新鮮な食材が入荷してるニャー！……あ、うわぁ……」
「安いよー！安いよー！今日は回復薬が大量入荷！半額だよー！！……あ、あれって、うわぁ……」
「鉱石売りまーす！沢山買ってくれたら割引しますよー！……あれは、噂の……、うわぁ……」
　うーん、これくらいの視線は、近くの町に出た時も感じますけど……。
「……いや、うわぁって言われてるもん、俺めっちゃ見られてるもん」
　そう言えば、提督に視線が集中しているような？
「……そう言われると、そうですね。では、提督を不愉快にする人間は半殺しで……」
「い、いや、それはいかんよ？」
　そう、ですか？なら、良いんですけど……。
　ん、嗅ぎ慣れない匂いが近付いて来ますね、誰でしょう？
「あ！！た、旅人じゃないか！！」
「おっ、団長さん。お久しぶりです」
　提督のお知り合いでしたか。
　失礼のないようにしないと、ですね。
「そ、その、だな？……新人の女ハンター二人をペットとして連れ回し

て、こき使っていると聞いたが、本当、なのか？」
「えっ」
「あ、あのな、あまり酷いことはするもんじゃないぞ!!お前さんはハンターとして一流なんだ、新人の彼女達を守ってやるくらいの気概でないと……」
「えっ、ちょっと、待って？えっ？」
　も、もう！なんなんですかこのおじさん！急に何を言い出すんですか?!
「ペットとして連れ回している、なんて、人聞きの悪い!!違いますよ!!」
「そ、そうなのか？なら、別に構わないんだが……」

「私達がペットなのは合ってますけど、私達は自分の意思で提督について行ってるんですから!!」
「そうだよ！私達は好きで提督に隷属してるんだから、口出ししないでくれよ!!」
「……?!!」
　もう！人間は皆んなそう言うんです!!好きな人に、好きで隷属しているのに、皆んな止めようとするんですから!!
「……えっ？そ、そのさ、古鷹？も、もしかして、また、ペットとか言った……？」
　え？
「はい？登録の時に、身分の証明と言われたので、提督のペットだと……」
　間違っていませんよね？
「……加古も？」
「うん、だってこう言うのは、正直に本当のことを言っておくべきかなーって……」
「……ぐ、ぐはっ!!!!」
　提督ぅーーー!!!!血を吐いて倒れましたぁーーー!!!!

１２６話　何でも斬れる剣でバラバラに引き裂いてやろうか?!（デートその六）

「はははは!!取るに足りませんねぇ!!チェインデカッターーー!!!!」
おーっと？一人だけスパロボと有名な明石ネキの強烈な一撃!!!!深海棲艦はバラバラに引き裂かれたぁー!!!
「うわー、強いですねぇ明石さん……」
「ねー、ヤバイよねー」
実際ヤバイ。
俺、出撃してるのに戦ってないわ。
バ火力に超装甲のスーパー明石の戦力はＡ＋と言ったところかな。
お陰様でこちらにタゲがこない。
艦隊のメイン盾である俺がタゲを取れないなんて、ちょっとｓＹレならんしょこれは……。
明石は、敵の深海棲艦を「なんだこれは？」と破壊しまくるし、
『グルルァァァァァ!!!!』
たまに危ない深海棲艦も、
「あら、こっちへ来たんですか？深海棲艦の分際で？では、ご褒美に、０．０８秒で分子レベルまで分解してあげます」
『ギィィィ……ィィ……!!』
「ほう……」て（夕張が）分解する。
もう旅人いらないんじゃないかな。
「流石の火力ですね、戦闘開始から２１９秒で敵艦隊の７５．８５％を殲滅……。素晴らしい効率です、私も負けていられません！」
「激しく同意ですね」
「さあ、新兵器のテストも済ませましたし、後片付けをして帰りましょうか！」
夕張が駆け出し、すれ違った深海棲艦がチリに変換されていく。
そして飛んでくる深海棲艦の肉片。まさに地獄絵図と言ったところかな？

いっそもうメイン盾やめて忍者になろうかしらん？

「……あれ？ちょっと待って？デートに行くって言ってなかったっけ君ら？なんで出撃を？」

そういえば、昨日からデートだデートだと大喜びしていた筈なのにな。

「何を言ってるんですか？これもデートですよ？さ、次は陸でデートです！」

遂には出撃をデートと宣うか……。俺達は、強くなり過ぎた……！

さて、返り血を風呂で流して、デートの始まりだ。もちろん、今回もデートとは言ってないが、デートと解釈された。謎である。

風呂？もちろん、混浴でしたよ。（逃げることを）諦めてます。明石も夕張も華奢で女の子らしい身体してました。……パワーは俺以上なんだがなぁ、どうなってんだ一体。

「デート……、デート……。すみません提督、私達、戦闘能力にはある程度の自信があるんですが……、女子力はちょっと……」

知ってた。

「秋葉原は頻繁に行きますし……」

「んー、じゃあ、久々に北海道に行く？」

「良いですね！　……ミーくんにも会いたかったところですし！」

「あのサイボーグ、少し弄ってみたかったんですよ！」

「良し、決まりだな。俺も丁度、ちくわと鉄アレイの補給が必要だったし。近くのヴァナディールに寄るけど、許してね」

「「（ちくわと鉄アレイ……？）」」

やっぱりおやつはちくわでござるな～！

「……で？ちくわを買うだけで何でこんなことに？」

「さあ、分からんね。いつものことだし」

「ブロントォォォ!!!ここで会ったが百年目だ!!!死ねぇ!!!!」

「さんを付けろよ……、デコ助ーーー!!!!」

いやー、懐かしいな、ヴァナディール。
「……て言うか、提督？次元的に近い空間軸のことを近いとは言わないのでは？」
「そう？中継地点の経由なしでテレポ出来る土地は、一律近い言っていいと思うぞ？」
ヴァナディール直通のテレポストーンあるし、近いでしょ？次元転送については詳しいだろ、夕張。
「……確かに、世界軸的な距離は比較的近い？この程度の距離なら、簡単な次元転送装置でも十分……。すみません提督！やっぱり近いと言っても過言ではありません！」
な？常識的に考えれば分かるだろ？
「……にしてもあれ、かなりやりますね。人間にしては」
「そうだろうよ、ありゃ、人間でも結構できる方だからな。白い方はエルヴァーンだが」
明石の言う通り、連中は人間の中でも結構上。その上、アーティファクト級の装備……。総合的に見れば、うちの最大戦力と同等以上かもしれん。
「ハイスラァ!!」
「俺様の迅のダメージに注目ゥ!!」
この二人、ヴァナディールでもトップクラスの冒険者なんだよな。片やナイト、片や忍者、両方とも前衛のタンク。俺と同じポジションだ。参考にしたい。
「手裏剣！」
「下段ガードを固めた俺にスキはなかった！」
異常な防御力のナイト。素晴らしいガードだ素晴らしい。その防御力はまさに鉄壁と言ったところかな（スパロボ話）。
「メガトンパンチ!!」
「当たらねぇよバーカ!!」
対して忍者はとんでもない回避力だ。先程から指一本たりとて触れられていない。
「……まだ時間かかりそうだな。特上スシをおごってやろう」

「あ、そう言えばお昼まだでしたね」
「わーい！いただきます！」

「ぐあああああ!!!か、勝ったと思うなよおおおおお!!!!」
「もう勝負ついてるから」
「……あ、終わった？」
いやあ、惜しいな。また勝てなかったか。
「ようノブオ。生きてる？」
「ほ、本名はやめろ……」
おーおー、酷えな、ズタボロだわ。ポーションでもかけとこ。
「約束通り、忍具とちくわ買いに来たんだけど」
「痛ててて……、おう、あるぜ、ついて来い」
「ん、ありがとよ。……あ、こちら、忍者兼ちくわ屋の笠松ノブオさんだ」
「よろしくお願いします」
アイサツは大事だ、古事記にもそう書いてある。
「だから本名はやめろ！」

「ほらよ、約束の忍具と……、ち く わ だ 」
「……確かに。代金はこれで足りるか？」
ケースを開いて、忍具、ちくわの確認。素晴らしいちくわだ素晴らしい。
「……良し、足りてるな、十分だ」
取引完了である。
これで、当分の忍具とちくわは大丈夫だ。
「……手裏剣はまだ分かりますけど、ちくわ？」
「ちくわはボーナスステージで使うから。あとおやつ」
「（ボーナスステージ……？）」
×××
×××
笠松さんと別れ、ヴァナディールから転移して車で二時間。目的の
×××××

北海道の桜町に到着です。
久々に来ましたね、北海道。
ミーくん……、ミーくんに会わなきゃ。
私もサイボーグ猫とか作りたいんですけど……、素材がありませんから。生命工学は苦手ですし。
生き物って脆いですからねー。どこまで加工して良いのか、加減が分からなくって。
「明石さーん、ミーくんは……、こっちですね」
夕張ちゃんの優秀なレーダーをもってすれば、サイボーグ猫の一匹や二匹、簡単に見つかりますとも。
「はーい！」
ふへへへへ、ミーくん！
「うー、クロったら、また本気で殴ったなー？痛ててて……」
……いた!!
「ミーくーん！」
「あ、あ、あ、ああー!!明石お姉さん!!!うぁぁぁぁぁぁ!!!」
あー、可愛い！素敵なモーター音！軋みやエネルギーのロスが最小の駆動系！優秀な排熱システム!!可愛いー!!
「放してー！放してよー!!」
んんー！良いですねー！
「さあ、ミーくん！私がオーバーホールしてあげますからねー！」
「ご、剛くんにやってもらうから！ちょ、ちょっと！あ、あああーーーっ」
「オイ、ミーくん！人ん家の前でうるせーぞ!!……じゃ、邪魔したな」
「ああっ！クロちゃん！クロちゃんも私がオーバーホールしてあげますねー!!」
「うっ！く、来るなイカレ女!!来るなぁーーー!!!」
あ、逃げちゃった？もー、可愛いなー！
「おーい、明石ー？ミーくんバラバラのまんまだぞー、戻してやってくれー」
「うわーん！戻してよー！」

あ、そうでしたそうでした。ミーくんのオーバーホールがまだでした。仕事を途中で投げ出すのは良くないですね。
クロちゃんを弄れないのは残念だったけど、まあ良いか。
ミーくんの方が優しくて可愛いもーんだ。
「さ、ミーくん！私が綺麗にしてあげますね！」
「頼んでないんだけどー！」
「すまんな、諦めてくれミーくん。全ては、明石の好きそうなボディのミーくんが悪いってことで」
「納得いかないー！」
ふへへ、良いから良いから！オーバーホールオーバーホール！ついでに新しい機構も付けちゃおう！
「あ、ミーくん、新作の武器のテスト、お願いできる？」
「うん、いいよ夕張お姉さん。……カタログスペックは？」
夕張ちゃんったら、また武器ですか。
「でも、本当にもらっちゃって良いの？いつもうちに武器を届けてくれるけど……」
「ああ、私はデータの蒐集が目的なので。いつも通り、テストを終えた武器は好きにしてもらって構いません」
まあ、夕張ちゃんは外部に委託できない兵器のテストは自分でやってるみたいだし……、私から言うことは特に無いかな？
提督も何も言わないし。
「ミーくん、右腕のここんところのギアの磨耗が激しいんだけど、どうしたの？」
「さっき、クロと喧嘩して……」
「この荷電粒子砲のスペックなんだけど……」
「ふむふむ、威力を上げるために態と大型にしたんだね」
「リミッター解除して良いかしら？！」
「絶対ダメ！！」
うふふ、良いですねー、こう言う雰囲気！楽しいです！普通の女の子みたいなデートは得意じゃなくって……。提督と、夕張ちゃんと、皆んなで機械弄りが一番楽しいですねー。

「うーん、やっぱり凄いや、エネルギー出力機構が良いパーツのせいなのかな？５％くらいパワーが強くなったよ、ありがとう！……でも、急にバラすのはやめてね……？」
「はーい！またね、ミーくん！」
やっぱり、持ち主に愛されているメカは可愛いですねー！ミーくん、前会った時よりも性能が良くなってました！きっと、何度もアップデートを繰り返してもらっているんでしょうねー！
同じ道具として憧れますね！
私の提督も、私のことを大切にしてくれますから??
道具として、パートナーとして、こんなに嬉しいことはありませんよ??
「さて！それじゃあ、次はクロちゃんの番です！」
「……」
「ふふふ、近くにいますね？隠れたって無駄ですよー？レーダーに反応があるんですから！」
「……!!」
「うふふふふふ、逃げてもだーめ！待て待てー！」
「やっ、やめろおおおお!!!」

「……提督、あれ、良いんですか？」
「良いんじゃね？破壊のプリンスが破壊されるのも、インガオホーってことで」
「オ、オイラの側に近寄るなーーー!!!」

１２７話　艦娘の信条（デートその七）

「成る程？つまり……、ハネムーンね!!」
「いや、その……、そ、そうだな！ハネムーンだな！」
目の前で目を輝かせている足柄を裏切ることはできぬぅ……。
決して、イタリアに買い出しに行くだけ、たまたまそこにいたから誘ってみただけとは、とても……！
「……」
そして、足柄を連れて行くとなると、あそこで真っ黒な目でこちらを見ている羽黒も、なんかそわそわしてる妙高も、那智も、連れて行く必要があるのだ！
「ほ、ほら、君達も行くかい？」
「「行きます（食い気味）」」
とのこと。
しゃーねーな、本当は買い出しだけのつもりだったが……、観光でもするか。
場所は……、イタリアのフィレンツェで良いかな。あの辺は道を良く知ってるし。近くの観光名地のパリとか、コンスタンティノープルとかロンドンとかは人が多過ぎて却って、なぁ。
「で、でもほら、あんまり長居はしないよ？」
「分かってるわよ！私達だって仕事があるんだから！それじゃ、早速用意してくるわね！」
「お、おう」
た、楽しそうだなー。……はぁ、一泊するって皆んなに言っておかないとな。

さて、イタリア。
いつも通り、旅人号をすっ飛ばして数分で、目的地に到着。艦娘のパスポート？明石が作ったそうだ。え？犯罪？何言ってんだ、バレなきゃ犯罪じゃないと言う名ゼリフを知らないのかよ。
「まあ、そんなことはどうでもいい……。君らはさ……、目立たなきゃ

生きていけないの？」
「はい？」
「？、何のことですか？」
　僕は少なくとも、パンチで顔面を平らにされた人間の髪を掴んで引き摺り回している光景を尋常なものとは思わぬ。
「ああ、これのこと？何だか知らないけど、物陰から提督に銃を向けていたから……」
「す、すまない、司令官。余計なことをしてしまっただろうか？」
　妙高型は器用だ、加減もできてる。刺客の皆さんはグチャグチャだがちゃんと息はあるのだ。殺してはいない。
　だがね、美しいこのフィレンツェの街並みの中で、絶世の美女が返り血塗れで半死人を引き摺って歩けば、目立つ。そう、目立つのだ。
　加えて、相手が相手。
「うわ、これ、テンプル騎士団の連中じゃん……、面倒臭え……」
「お知り合いでしたか?!そ、その、すみません！」
　妙高が詫びるが、いや、そうじゃないんだ。
「その、ね、そいつらはね、世界中にいるから、マークされ過ぎないようにあえて放っておいた連中なんだよね……」
　テンプル騎士団……。世界を影から支配しようと目論む悪の組織だ。いや、本人達は悪の組織だとは思っていないらしいが。大衆を規律と秩序でコントロールすることこそが善だと考えている、らしい。
　別にそれが間違っているとクソリプを飛ばすつもりは毛頭無いが、俺は支配するのも、されるのも嫌だ。だから従わない。それだけだ。
　管理者は破壊される運命にあるってそれ一番言われてるから（アーマードコア感）。
「……じゃあ、私達、余計なことしちゃったのね……。ごめんなさい、提督……」
　珍しくしょんぼりする足柄。本当に月並みな言葉なんだが、足柄には笑顔が似合うんだ、そんな顔はやめてくれ。
「いや、構わないさ、やっちまったもんはしゃーない。……なんとなく、そろそろこうなるんじゃないかとは思ってたんだよねー。いつも

の、鎮守府に忍び込んでくる刺客と変わりないからさ、問題ないよ」
実際、大本営からのスパイ以外にも、様々なところから刺客が差し向けられている。暗殺者、狙撃手、殺し屋は日常茶飯事だ。
まあ、鎮守府の中にいるときは、そういうのは艦娘に半殺しにされているけど、こうして外に出ると、ねぇ？
「じゃ、じゃあ、やっつけちゃって大丈夫なんですね……？」
「ああ、大丈夫だよ、羽黒」
「良かった……」
優しく微笑みながら、捕まえた刺客の腕の肉を削ぎ落とす羽黒。
あ、あのね？殺さなきゃ良いって訳じゃないんだよ？
なまじ手加減ができるせいで、死ぬ限界ギリギリまで痛めつけやがるからもう。
うわー、痛そう、かわいそう。だがあれだ、まあ、喧嘩を吹っかける方が悪いってことで。人生の進む道を決めるのは自分だし、その選択で後悔するのも自分。道理だ。
「……まだ、いますね」
まるで猛禽のような、鋭い眼をして呟く羽黒。
……前に、艦娘は感覚が鋭く、中でも古鷹型は嗅覚が、白露型は直感が極めて鋭いと言ったような気がするな。
ならば、妙高型は、と言うと。
「８０ｍ先、建物の二階に三人。１４４ｍ先、建物の屋上に四人。２５８ｍ先、車の中に武装した六人……」
異常発達した視覚だ。
重心の傾きから隠し持つ武器を、筋肉の盛り上がりから戦闘経験を、瞳の動きから敵対の意思を……、あらゆる視覚情報を集め、脳内で分析し、敵対者を見つけ出す……。
言うなれば、獲物を探し出す鷹の眼。冷徹なアサシンの瞳だ。
「……確認したわ。近くの建物には私が、屋上には那智、車には羽黒が行って」
「了解」
「……あれ？その、妙高姉さん？わ、私は？」

「足柄は静かにやるのが苦手でしょ？提督についていて。またいつもみたいに別口の殺し屋が来るかもしれないから」
「は、はーい！」
と、軽いやり取り。
そして直ぐに姿を消す。……野生の獣よりもずっと上手い気配の消し方。世界そのものに溶け込むようなそれは、並みの人間では、目の前に立たれても気付かないだろうよ。

さあ、順に見ていこう。先ずは妙高だ。
あ、もちろん、妙高型は身体能力だって物凄い。特に凄いのは、
「疾ッ！」
ジャンプ力ぅ、ですかねぇ……（したり顔）。
フリーランで人混みを駆け抜け、障害物を飛び越え、壁を駆け上がる……。この身軽さ、全身の器用さも妙高型の得意技なのだ。
『おい……、どう言うことだ？三人消えたぞ?!』
『そんな訳あるかよ！』
『チッ、どうする？打って出るか？』
建物の中の刺客三人に音もなく近付いて……、
『痛ッ!!!』
『お、おい、どうした？急に倒れ、て……?!』
『な、何だ?!』
一人のアキレス腱を長剣で斬り裂いて転ばせ、背骨を踏み砕いた……。下半身不随、ってところか。
続け様に、二人目。片目を抉り、そのまま眼孔に指を引っ掛け、倒して、同じく背骨を踏み砕く。脊髄損傷による半身麻痺及び片目の喪失。
『ひ……!!』
「死ね」
最後、踵落とし。頭蓋骨陥没で何処かしらの身体機能の喪失、か。
すごーい。暗殺が得意なフレンズなんだね、とか言えたらどんなに楽か。あの人達、もう二度と立って歩けないだろうな。……まあ、殺

し屋なんて稼業をやってるんだ、こうなることも覚悟の上だろ。すまんとは言わないぞ。

次、那智。

妙高型特有の、手甲の手首部に取り付けられた隠し暗殺剣。那智のものは、先端にフックが取り付けられた特注品だ。この暗殺剣を使って、建物の小さな出っ張りを利用し、階段を使わずに建物の屋上まで登り……、

『おい、消えた三人は何処行った?!』

『知るかよ、見張ってたのはお前だろ?』

『合図はまだか?!ターゲットは既に射程範囲内だぞ!狙撃の許可を!』

『もしもし?A班、応答せよ、A班?クソ、早く出、あ、あああああああ……!!!!』

相手を引っ掛けて、投げ飛ばす……。

幸いと言うか何と言うか、そこまで高い建物ではない。引っ掛けられて落とされた刺客さんは、全身の骨を折ってリタイアだ。

『な、何だ?!!』

『あいつ、落っこちやがった!!』

『おい!大丈べッ?!!!』

下顎を突き上げるような掌底。思い切り噛み合わされた歯は、舌を噛み千切って砕け、口内から零れ落ちる。

『〜〜〜ッ?!!!』

あー、分かる分かる、舌を噛み千切ると痛いよなぁ、血がいっぱい出るし。歯も砕けるのは痛いんだ、折れた歯が口ん中にぶっ刺さってさー。

そしてそのままの勢いでこめかみに鉄槌。あ、鉄槌と言うのは、拳の側面で相手を殴りつける技のことね。念の為。

まー、またもや頭蓋骨陥没だわな。もう一人沈んだ。

それと同時に、またもう一人に襲いかかる。

『な、お前!』

足刀蹴り……、足の側面で蹴る技。それを、相手の膝に、正面から。膝の皿が云々とかじゃなく、曲がっちゃならん方向にひん曲がった。
そして、体勢を崩し、下がった頭にまたもや蹴り。あの威力なら、顔はもう元には戻らないくらい凹んでるな。
『ク、ソッ!!』
最後の一人、銃を取り出したところまでは良かったが……、
「甘い」
那智の方が早い。
胸元の投げナイフを、振り返ると同時に投げつける。銃を撃たれるよりも早くに。
『ガッ……!?!』
刺客の腕に投げナイフが深々と突き刺さり、銃を落とす。
そして那智は、その隙に踏み込み、暗殺剣で顔面を斬り刻む。
『ア〟』
眼球、鼻、耳、頬肉、唇……。切り分けられた顔のパーツがずり落ちる。
そして、その痛みを感じる前に追加攻撃。フックがある方の暗殺剣を肋骨の隙間に捻じ込み、投げ飛ばす。
肋骨の開放骨折、と同時に、空中に投げ出された刺客さんは、建物の屋上から落っこちてズタボロ。
……よくも、まあ。殺すなとは言ってあるが、殺してやった方がマシなんじゃないだろうか、これ。

……一番見たくないのは、羽黒だ。
毒薬の利用と、鎮守府トップの隠密性、そして……、
『クソ!通信が途絶えた!!作戦失敗だ、撤退するぞ!!』
『な、何だ?!車内に、何か……?!』
『け、煙……?、ど、毒、だ……』
嗜虐性……。
神経毒で動けなくなった六人の刺客に、ケインソード(仕込み杖)で拷問をしていく。

麻薬や毒キノコから精錬した神経毒は、ただ単に身体機能を奪うだけではなく、猛烈な後遺症を残すもの。どうやら、俺の「殺すな」を、「死ぬよりも辛い思いをさせろ」と解釈しているらしい。
「司令官さんに逆らった司令官さんに逆らった司令官さんに逆らった司令官さんに逆らった司令官さんに逆らった司令官さんに逆らった司令官さんに逆らった司令官さんに逆らった……」
あっ、やばーい、目に光がなーい。
「殺しちゃ、駄目です、罰になりません、殺しません、でも、殺します。死ぬよりももっともっと、もっともっともっともっともっともっと……。地獄を見せてあげます……」
大きな動脈を避けて、皮膚を、筋肉を、腱を刻んでいく。ご丁寧に、止血剤や麻酔まで投与しながら。
「貴方達には、何も残しません。全てを奪います。触覚を奪います。視覚を奪います。聴覚を奪います。味覚を奪います。嗅覚を奪います。手足を破壊して臓器を潰し脊髄を刻みます。貴方達は、何もない、虚無の中で、閉じた世界で生きて下さい」
……あー、あれだな。昔、「ジョニーは戦場に行った」っていう映画があってな。
まさかリアルで見るとは思わなんだ。

……ここまで、一分足らず。はやーい。もうさ、暗殺者として食っていけるよね、君ら。
「うへぇ、グロぉい……」
羽黒の方を見ていた足柄がドン引きしているが……。
『いたぞ！殺せ!!』
『護衛が一人の内に、早く!!』
「あら？こっちにも来たわね。……ぜりゃあ!!」
……人の手足を斬り飛ばすのもどうなん？恐らくは別口であろう殺し屋が、騒ぎを聞きつけて現れたらしい。俺、色んなところに知り合いがいるけど、それと同じくらい、色んなところに敵がいるんだよね。

『『あ”あ”あ”あ”あ!!!!!』』
「ったく、煩いわねぇ?”私達も、提督も、手足がすっ飛んだぐらいじゃ泣き喚かないわよ?みっともないのよ、男の癖に」
『腕がああああぁぁぁ!!!俺の腕がぁぁぁ!!!』
『脚ぃ、俺の脚が、斬られちまったぁ!!!』
　手足の一本二本で騒ぐなと言いたいが、まあ、痛いもんは痛いし。
「おっと、このままじゃ失血死ね。……えい」
　確かに、切り口から血が流れ続けりゃ間違いなく失血死だがな、傷口を思い切り踏み付けて、無理矢理動脈を塞いで止血ってどうなの？鬼かな？
「……まだ、止血が甘いかしら？一応、焼いておこうかしらね」
　ひえー、足柄ったら、潰した傷口に火薬盛り始めたわ。
「うん、これくらいね。……マッチは、と……、あった」
『『がぁぁぁあああああ!!!』』
　うわあ、やりやがった?!焼灼止血だ。中世じゃないんだからさ？悪魔かな？
「……うん、死んでない！大丈夫ね！」
「問題ありませんね、足柄？」
「全く、相変わらず派手なやり方だな」
「ただいま戻りました、司令官さん??」
「うん、その、お、おかえり？」
　おっと、帰ってきたみたいだ。早いな、サラマンダーよりずっとはやい。
「し、司令官さん……??」
　↓羽黒は褒めて欲しそうにこちらを見ている。
　↓羽黒は褒めて欲しそうにこちらを見ている。
　↓羽黒は褒めて欲しそうにこちらを見ている。
　さ、三回連続で見つめられたァー!!
　あもりにも露骨過ぎるでしょう？
　取り敢えず撫でておこうかな。
「んっ??司令官さん??司令官さん??」

犬のようにわしゃわしゃ撫でる。
「あっ??あっ、あっ、あっ??????これ、好きぃ……??????」
可愛い。
まるで天使だな。
実際にやってることも天使と相違ないし（メガテン的な意味で）。
はー、にしても、これじゃもうデートなどとてもとても……。
通行人は悲鳴を上げて逃げたし、店のシャッターは全て閉じられた。おまけに街には市民の通報を聞きつけた機動隊が来る始末。
もう駄目だ逃げよう。
「チッ、機動隊ですか……。散開、殲滅しますよ」
司令塔の妙高が命じると、
「顔が割れると事だ、隠せよ、足柄」
「んもー、分かってるわよ!……ロングヘアはこういう時困るわねぇ」
長髪を手早くまとめて、フードを被る那智と足柄。
「沢山斬れば、司令官さん、喜んでくれますよね……??」
毒物を暗殺剣に仕込む羽黒。
……ん？
ちょっと待って？
「……え?その、やり合うの?え?」
相手は、その、国家権力なんで……。
「では、参ります……」
国家権力はヤバい、国家権力は!!
「いや、待って……!逃げるぞ!!マジで!!マジで!!」
このあと滅茶苦茶宥めた。

１２８話　廃人冒険者と一緒（デートその八）

ここはノースティリス……。
地球とは別の、遠い遠い世界。時間的にはシエラ・テールの時代。
異常発達した狂気の魔法技術、突然変異の化物、背徳と悪意……、そこに人魔問わず様々な種族が入り乱れた混沌の世界。
まあ、詳しく知りたきゃ、もっと面白いｅｌｏｎａのｓｓがあるから、それ見て、どうぞ。

さて、ノースティリスは、俺が知る中でもトップクラスに危険な世界だ。しかしその危険性は、物質界的な意味での危険。故に、相応の力を持つならば……、
「スウォーム!!」
……問題は、ない。

「いやー、やるね、愛宕。この世界は危険が一杯だからよ、自分の身を守れない素人にはオススメできないんだよな」
「ふふ、大丈夫よ、提督。自分の身を守ることくらいは、ね？……でも、沢山脅された割には、大した奴が出ないわねぇ……。本当にここ、そんなに危険なところなのかしら？」
はっはっはー←
「死ぬよ」
「えっ」
「ノースティリス舐めたら死ぬ」
「は、はあ……」
冗談抜きで、死ぬ。
「例えば、だ。今向かっているのはパルミアと言う国なんだが……、次の瞬間に核爆弾で更地にされるかもしれない」
「もー、そんなことある訳な」
……「逃げろーーー!!!」
……「爆発するぞーーー!!!」

そして、太陽が落ちたかのような閃光。
……。
パルミア王国……、跡形も無くなったな。
「……あの、キノコ雲……、嘘、でしょ……?!」
ところがどっこい……夢じゃありません……!現実です……!これが現実……!
「おーおー、相変わらず派手だなー。どこの馬鹿だ?……あ、またあの野郎か。大方、店にウォッカが置いてなかった腹いせで国ごと爆破したな?」
「そ、そんな理由で?!!!」
いやー、ノースティリスの冒険者にとっては充分過ぎる理由だわ。
っと、あの野郎ってのは、まあ、俺の知り合いだよ。このノースティリス最高の冒険者で……、なんと言うか、まあ、とんでもなく、強い。
あの野郎と戦ったら?まあ、そうだな……、瞬殺されるだけだ。巨人と蟻ほどに格が違う。
人間辞めて全力でやっても確実に殺されるだろう、そんな相手だ。
さあ、来たぞ……!踏み込んで……、来たっ!!!
「右、ィ!!!」
あー!痛ってえ!!!速いし重いし鋭いし!!!片腕取れた!!!
「ッ?!!提督!!!」
「……ア”……ザ……」
おーっと危ない、そいつの前に出るな愛宕。
「……ごめんなさい、提督……!この世界、本当に危険ね……!こんな、化物……!!隙を作るのでやっとかしらね……!!」
「いや、いいから。下がってくれ、愛宕」
「駄目よ!!私のことは気にせず、逃げて!!」
いや、そうじゃなくて……、
「おら、酒だ」
「……オ”ア”……」
こいつ、酒が欲しかっただけだ。
「……は?」

ほらな、ウォッカの蓋を喰い千切り、そのまま飲み始めた。
「……ゴクッ、ゴクッ、ゴクッゴクッ……、ハ、ァ〟、う、あ、あ」
「よー、久しぶり。今度はどこに行ってたんだ？」
「……ムー、ン、ゲート、繋がった、先、ダンジョン、だった。２０年くらい、一人でいたから、喋り方を、忘れて、いた」
確かに、ぎこちない話し方だ。まーた、ダンジョンか。趣味が殺し合いの人はちょっと……。
「……提督？その……、まさかとは思うけど……」
「ん、知り合いだが？」
多くの友人の内一人だ。
「じゃ、じゃあ、なんで、殺そうと……？」
「いや、だからさ、」
「酒が、飲みたい、気分だった」
とのこと。
「……それがどうして、提督を殺すことに繋がるのかしら？」
あーあー、敵意向けないの。
……て言うか、あらかじめ言っておいたと思うんだが。この世界の命の軽さを。
つまりだ。
「買うより、殺して奪った方が早い」
と、言うこと。
「……っ!!」
声も出ないか、愛宕。まあ、そうだろう。だが、「宿屋に酒が売っていなかった」程度の理由で、国の真ん中で核ぶっぱするようなマジキチなのだ。察してくれ。
「……よく、来た。歓迎する、ぞ」
オリジナル笑顔で一言。顔は良いんだがなぁ、カルマの低さが顔にまで出ていらっしゃる。
「……何なのよ、こいつ……」
まあ、理解は出来ないか。酒一本や為に人殺しする人間の思考回路

は。
「気に食わないから殺す、ならまだ分かるけど……、たかが酒一本の為に？冗談でしょう……？」
はは、やだなぁ。こいつの殺しに意味なんてないよ。それがノースティリス流だ。
「いたぞー!!!」
「またあいつか!!!」
「ガードの名にかけて!!!」
おーっと？ノースティリスの良心、町のガードの皆さんのエントリーだ。
……まあ、犯罪者を見かけたら問答無用で殺しにかかるから、この人達も善人とは言えないんだが……。
「ギ、ひ！ギヒャハハハハ!!!!虫ケラが、俺を、狩るのかぁ!!!?」
何てことはない、安物の剣で思い切り斬りつけるあいつ。型もクソもないが、何百万、何千万と言う殺戮の経験は、特定の武技を使わずとも最高の斬撃になり得るのだ。
ほんの一瞬、瞬きほどの時間以下で、複数人のガードはバラバラの肉塊に、ミンチになった。
相変わらずとんでもない腕だ。俺は剣術とかは使えないが故に詳しくはないが……、少なくとも、こんなにも強い奴は他にいないだろう。
「あ〟あ〟あ〟、殺し、足りねぇ、なぁ」
その力に耐え切れず、根元から砕けた長剣を打ち捨てると、こちらを見てくるあいつ。瞳孔は開いてる。いやあ、こっちをロックオンされましても。
「……無理だぞ？大して強くなってねーもん。勝てない勝てない」
「チッ、つまらん……」
興味を無くす、か。こいつは、戦うのはもちろん、特に嬲り殺しが大好きなサディストのサイコパス。向かって来る奴は喜んで殺すが、こうして無抵抗の相手はあまり殺したがらない。
「そっちの女は、どうだ？俺を、殺してみるか？もう数百年は死んでい

ないからな」
事実、神様だってこいつは殺せない。
少年ジャンプの主人公よりも強いんだ。こいつとまともにやり合うなら、グランゾンでも持ってこなきゃな。
「……」
対する愛宕は、武器を握り締め、警戒するだけ。……確かに、圧倒的な格上相手では、一挙一動を見逃さないように集中すべきだが……、
無駄だ。
そんな次元じゃない。
「あー、人の妻をいじめるのはやめてくれないかな？」
「……ほう、結婚か」

そして懐に捻じ込まれるご祝儀。城一つ買える額。

……勘違いするなよ、こいつは、ただ単に、暇しているだけだ。自分のも含めて、命に対する価値観が終わってるだけで、お祭り事は大好きな暇人だ。つまり、俺と同じタイプの暇人。
「そういう、面白いことは、言えよ！ゲギャ、ハハハ、はははははは!!」
楽しそうに笑う。笑い声が若干アレだけど。
「おい、女、お前は何だ？ローランか？サイボーグか？……見たことのない種族だ。クカカカカ、また俺の知らないものを持ってきたのか、旅人。面白いな、本当に面白い……！」
「わ、私は、艦娘よ……」
うーん、ビビってんな、愛宕。最低限、愛宕を連れてこいつから逃げることくらいは可能だしな、そこまでビビんなくて良いよ。
正直、その辺に出る魔物は怖くないんだけど……、こいつに何かの弾みで殺されるかもしれんのが一番の懸念だったんだ。しかしまあ、この調子なら大丈夫だろ。めっちゃ機嫌良いし。
それじゃ、こいつの街に行こうかね……。

×××××××××
「……その、どういう、アレなの？」
「おりゃー!!マリ○カートで勝負だァーーー!!!」
「ギヒ、ギヒャハハハハハ!!!良いだろう!!俺を楽しませろ!!!」
大きな街の、城の中。
……提督と、さっきの恐ろしい化物が、テレビゲームをやっているわ。
どういうことなの……。
悪意はあっても敵意は無いみたいだけど……。
「あひぃん??お帰りなさいお兄ちゃん??お兄ちゃんの椅子になれるなんて幸せぇ????」
「椅子が喋るな」
「あぁん??ごめんなさぁい??」
……提督以上に大きな身体なのに、あんな小さい女の子を四つん這いにさせて、その上に座るなんて……。
……でも、あの緑髪の女の子、とっても幸せそう……。私も、提督になら足蹴にされたって嬉しいし……、そういうこと、なのかしら。
狂気の世界だと聞いていたけれど、どこの世界でも女の愛は変わらないのね。
「ご主人様??紅茶を淹れましたわ??」
「ご苦労」
「んんっ??い、いえ??ご主人様のご命令ならば、どんなことでも??」
あら、可愛い女の子ね。どこかのお嬢様かしら？
他にも女の人が沢山……。
「どうか、しましたか？」
「え、あ、いえ、何でも無いわ」
……この子も、多分、私よりも強いわね。
あそこで椅子になっている子も、お茶を淹れている子も、全員。
……そう、つまり、この子達を目指せってことね？提督。
……「うわぁぁぁ!!クラッシュした!!」

……「亀か、この辺にゃいねぇな」
提督は、「ただ遊びに行くだけだし……、本当に着いてくんの？ノースティリスは何も面白いもんないよ？やめとけば？」とか言っていたけど、そんなことはいつもの冗談よね。
私をおいて行くなんて絶対にありえないから……、多分、遠回しに誘ってくれたのよ。
最後には、「いや、本当に！冗談とかじゃなくって！危ないからね？お留守番して……、わ、分かったよ、着いて来て良いよ……」って、ちゃんと了承してくれたもの。ツンデレ？ってやつなのよ。可愛いわ、提督??
……「そういや、バナナもノースティリスにねぇよなー」
……「ああ、お前が持って来た苗木を品種改良して流通させたぞ」
そして、ここに私を連れて来たのは、ただ遊ぶためなんかじゃないわ！きっと、ここの人達みたいに、強く、そして忠実になれってメッセージなのよ！
そう言えば、私は、女として提督の興味を惹くばかりで、忠を尽くすことが疎かになっていたかもしれない。いや、きっとそうね、そうに違いないわ。
反省、しなきゃね。私は、女であると同時に船なんだから。両方の意味で愛されるようにならなくちゃ……。
女としても、船としても。両方の意味で……。
……「あ、スターだスター。無敵ー！」
……「星って黄色に見えるか？白とかじゃねえのか？」
でも、提督は、「ノースティリスの連中に常識なんてある訳ねーよ。反面教師にして、どうぞ」と言っていた？つまり、真似てはいけない……？
……「ご主人様ぁ??踏んでぇ??踏んでくだしゃいぃぃ??????」
……「邪魔だ。今はゲームやってるからな、オラ」
……「んひぃ??踏まれただけでイッちゃうのお????」
……「……申し訳ないが人前で奇特なプレイすんのはＮＧ」
ああ、そっか、提督は他人を支配したがらないものね。提督にだっ

たら、例え犯されて殺されたとしても喜んで受け入れるけれど、きっとそれは望まないわ。提督は穏やかな人だもの。

……まとめると、ここに連れてこられた理由は、つまり、私に忠義が足りなかったから……。

ごめんなさい、提督。

提督は優しいから、遊びに行くなんて嘘をついて、ここに私を導いた……。

提督の望みは、さらなる愛と忠義なのね……。

私、頑張るわ。

だから……。

「ずっと、ずっと私の側に……」

１２９話　矢矧です、よろしくおねがいします（デートその九）

「ごめんなさい、待たせちゃった……？」
ごめん、待った？とは！「彼女の口から聞きたい言葉」第４位（旅人調べ）である!!
ありふれた言葉、幾人もの男女が繰り返したお約束。だが、そう言ったお約束にこそ、確かな形式美があるのではないか……、俺はそう思うんだ。
「いや、今来たばっかりだよ、矢矧」
このやり取り、大事。めっちゃ大事。たったの二行でカップルみたいじゃん。テンプレとか常識とか、そう言うの大事にしていきたい。

……さて、なんでこうなったのか。
原因は、まあ。
阿賀野だ。
最近構ってもらってないと盛大に駄々を捏ねた阿賀野が、デートしたいデートしたいと粘着してきた故。
阿賀野型全員と行こうか、と思いきや、今回は二人きりが良いとのことで。
結果、阿賀野型は、一人づつデートすることになった。
因みに、デートをしないと言う選択肢はない。折角の休日、美人とデートして悪いかオラ。……もう半年くらい、まともに働いた覚えがないが。何か文句ある？

てな訳で、デート。
デートなのだ。
「そ、その、旅人さん！……手を握っても、良いかな？」
「良いぞ！」
いやぁ、音成の艦娘は良いなぁ、常識があって。守子ちゃんの教育

の賜物じゃん？
うちの艦娘なら、人目を憚らずに甘えてきたり、跪いたり、服を脱がせようとしてくるもん。常識って素晴らしいよね！
「は、はい！……えへへ、旅人さんの手、あったかい……」
「それほどでもない（謙虚）」
はー、可愛い。
あ、因みに、デートプランはない。矢矧の行きたいとこに行くぞ。
「さて、矢矧？早速だけど、どこか行きたいところは？」
「え？うーん、お給料もらったから、買い物もしたいし、観たい映画もあるし……、あ、お昼はハンバーガーが良いかな」
「ＯＫ、それじゃあ先ずは映画にしよう。買い物は後、荷物ががさばるからな。……と思ったが、映画が始まるまでまだ時間があるな、喫茶店で時間つぶしかね」
映画は、と、これだろうな、今話題の恋愛映画。矢矧はこう言うのが好みだ。
「……なんか、手慣れてるような？」
気のせい気のせい。
デートなんて１１４５１４回しかしたことないもん。

「……それで、阿賀野姉がまた転んで！……」
「へえ、そうかいそれは……」
紅茶を飲みながら、たわいのない会話。「コーヒーを一杯」？嫌だね、あれは死にかけたからな。
本当になんてことはない世間話なんだが、矢矧はそれが好きみたいだ。まあほら、女の子は概して、おしゃべりが好きなもんよ。
凄く可愛いおっぱい揉みたい。
おっぱい……、おっぱい、矢矧には、あまり……。まあ、おっぱいを揉むと言うのは精神的なアレだから。例え相手が洗濯板のような胸でも、やろうと思えば揉める。
おっぱいは心で揉むのだ。
あ、もちろん、いやらしい感じの視線は隠す。おっぱいを見るのは

いい。だが、相手を不快にしちゃならぬ。
「それでね、提督がね……」
「はは、相変わらずだな……、おっと、そろそろ映画の時間だ。行こうか」
「あ、本当だ、それじゃあ、行きましょう！」
おおーっと、ここで矢矧、俺の手をナチュラルに握るゥー。
「あ、その、す、すいません！……えーと、その……」
「矢矧、もう一度手を繋いでくれるかな？」
「……はい！」
と、最適解を打つける。
極論を言えば、人間関係は選択によって成るものよ。矢矧のような生娘の欲しがる選択肢はよーく知ってますぞ。
生娘を抱いたことなんて１９１９８１０回はあるし。……まあ、艦娘には口が裂けても言えないが。良いじゃん、別に。良い女を口説いて抱いて、何が悪いのか。日本の貞操という概念が理解できん。

「いやぁ、中々面白いもんだな、邦画も」
俺が一人で邦画を観ようとすると、何故か「もう一人の観客」と乱闘する羽目になるからな。
「本当、感動しました！」
ゴミを捨てて、映画館から出る。
捨てたのは、Ｌサイズのジンジャエールの紙コップだけだ。
本当は、映画館の良くあるクソ甘いキャラメルポップコーンを食いたかったんだけどさ、手を汚せないからやめといた。
理由？
「……そ、その、旅人さん？……映画の、ラブシーンの時に、手を握っちゃってごめんね？びっくり、させちゃったよね？」
これ。
……矢矧は、確かに気が強いところがあるけども、根っこの部分はものすごーく「女の子」だ。童貞の中高生が絵に描いたみたいな、理想的な「女の子」。

恐らく、映画のラブシーンの最中にこっそりと俺の手を握ったのは、映画のヒロインと自分を、相手役の俳優と俺を、重ねて見たんだろう。映画みたいな素敵な恋がしたいんだろうな、実に可愛らしい。
「いや、良いさ。折角のデートなんだ、仲良くしよう」
「はい！……えへへ、やっぱり、旅人さんって優しいな」
はい、天使。
さあ、お次は昼飯かね。丁度良い時間帯だしな。ハンバーガーっつってたし、ロッテリアで良いか。

「んー、おいひい！……チェーン店のハンバーガーも中々いけるねー」
「ねー、最近のは侮れないよねー」
うん、ＯＣ！
最近のチェーン店は本当に侮れないもんな。結構美味いわ。ただ、何でか付いてきた取り皿が「心臓直撃ディナープレート」なのは勘弁してくれ。心臓が止まると痛いんだ。持ち帰ろう。
矢矧は、艦娘らしく、普通の女の子よりかはたくさん食べるんだが……、まあ、常識の範囲内だ。食事量は大体、大人の男くらいかね、軽巡ならこんなもんか。周りから見れば、運動部の女の子に見えるだろう。
「……その、旅人さんって、戦艦とか空母みたいにたくさん食べるのに……、それで足りるの？」
「ん？ああ、大丈夫だよ？足りなくっても、夜にたくさん食べれば良いし」
心配はもっともだがね、デートだっていうのにそんな真似はしないよ。
食事ってのは、腹一杯食うのも良いけども、もう一つ、楽しむための食事ってもんがある。
……ほら、例えばさ、高級な料亭で、「メニューのこっからここまで全部持ってきて」とは言わないだろ？だって料亭の料理は多彩な味や彩りを楽しむものだから。ガツガツ食うもんじゃない。
デートの食事もそれと一緒。メインは、腹一杯食うことじゃなく、

女の子のペースに合わせて、料理の味とか何だとかの会話を楽しみつつ味わうもんだ。
……まあ、確かに量は足りないがな。俺、ハンバーガーで１００個とか普通に食うし！（メイン盾）でも、別に一食二食どころか、二、三ヶ月くらいなら飲まず食わずで生きることは可能だし、良いんだけども。
「我慢できる？もっと注文した方が……」
「いやいや、お店の迷惑にもなるからさ、大丈夫、大丈夫！」
てろやきばっが１００個持って来いなどとは言わないさ、矢矧の迷惑だし。
さあさあ、お次はショッピングだ。

と、思いきや猫に遭遇。野良猫って謎の井戸端会議してるときあるよね。
「ふぁぁぁ！猫！か、かわいー!!」
『にゃー』
『うにゃー』
『みー』
『ねこですよろしくおねがいします……うぎゃあ』
さ、ミーム汚染はしまっちゃおうねぇ。
「よしよし、いい子いい子！……あれ？どうかした、旅人さん？何かあった？」
「いや？何でもないよー！」
ちょっと昔に古い井戸の底を覗いたらこれですわ。まあ、多少メンタルは強いんで困ってはいないけども。
「あ、いけないいけない！ついつい寄り道しちゃった！」
「まだまだ時間はあるし、ゆっくりでいいよー」

そしてショッピング。これまた下手に、ありふれたショッピングモールで、服やアクセサリーを見て、気を利かせてプレゼントしたりして、普通のデートを普通に楽しんだ。

……俺自身は、一生思い出に残るような派手なデートが好きなんだが、矢矧はそれを望んじゃいない。普通の、ありふれた幸福を望んでいるだけだ。
さあ、家電コーナーを通り過ぎ、出口へ。
「私はトースター」
「？、旅人さん、何か言った？」
「あ、ああいや、ちょっとヤバい、いや、必要なトースターを見つけてしまってね、ちょっと買ってきてもいいかな？」
「？、はい、トースター？分かりました、待ってます」
チッ、油断も隙もねぇ。

夕暮れ。やっとあの子と良い感じ。
この時ズバッと風が吹いたりとか、ブラックホールに消えるやつとかはない。
いたらぶん殴る。
「今日は、とっても楽しかったです！」
俺がプレゼントした小さなネックレスに手を当て、微笑みをくれる矢矧。
「それで、その、えっと……」
モジモジしておられる。
はい、近付いてー？
「……キス、しませんか？」
やっぱりな。
こういう雰囲気だもんよ。
そりゃキスの一つくらいしたくもなるわ。
あー、良いなあ、こういうの。過ぎ去った青春が……、青春が……、青、春？矢矧くらいの年頃の俺、青春とかあったっけ？……いや、やめておこう。
「ああ、ああ、良いともさ。矢矧のお願いなら、何だって聞くよ」
何でもとは言ってない。
さあ、二人は幸せなキスをして終了だ。

キスシーン？はははは、嫌だな、態々言わんよ。

ただ……、矢矧の唇は柔らかかった、とだけ。

さあ、帰って土下座の準備、だな！（飛び交う艦載機を横目で見ながら）

１３０話　艦娘達は思春期

「ＯＫ、ご主人様のエロ画像ゲット」
「流石だな漣者」

「……漣ちゃん、望月ちゃん？」
「うわあああああ!!!母者（鳳翔）あああああああ!!!!」

ほら、世の中って、どうしようもないことがあるじゃん。
たまたま、朝早起きして、司令官の部屋に行きたくなることとか。
たまたま、司令官の服がはだけてるのを見ちゃったとか。
たまたま、手元にスマホがあったとか。
ついつい、誘惑に負けちゃうって、まあ、当然じゃん？
「……と言う訳で違うんですよ、鳳翔さん……。これはほら、つい、出来心で……」
「いや、違くて、司令官の画像はこれ、隠し撮りとかじゃ無くって、たまたま……」
「……へえ、たまたま？今朝珍しく早起きしたと思ったら……！提督の部屋に忍び込んで、寝ている提督の、ふ、服を脱がせてこんな写真を……!!」
「ま、まあまあ！ご主人様は全裸になると謎の反射光や煙で絶対に見えちゃいけないところは見えないようにする特技がありますから!!」
「そ、そうそう！ＢＤ版じゃなきゃ見えない感じの光で見えなかったし！写ってないし!!」
ヘーキヘーキ、シルエットしか分からなかったし!!猥褻は一切ない!!
「そ、それは、でも、シ、シルエットだけでも……、お、大っきい……??……じゃ、じゃなくて！寝ている提督の服を脱がせたのが問題です!!」
い、いや、ぬ、脱がせてねーし！し、司令官の、パ、パンツが勝手に動いたんだし!!

「そそそそ、そんなことやってませんよー？」
「ややややや、やだなぁ！鳳翔さん！」
「漣ちゃんも望月ちゃんも、そう言うお年頃ですから……、その、そう言うことに興味を持つのもおかしくはないですよ？け、けど、その、こ、これは……」
くっ、これがエロ本を母親に発掘されてしまった男子中高生の気持ち……！深海棲艦との戦いよりもずっと辛い！泣きそう!!
で、でもさ？原因の八割くらいは司令官だよ！鎮守府と言う女の園に、超イケメンでスタイル良くて性格良くて私達を可愛がってくれる男が一人いるんだよ?!こんなん、あれだよ、男子校に清楚系巨乳ビッチを放つみたいな所業だよ!!
無理！我慢とか無理!!
艦娘にだってね、性欲はあるんだからね?!!
「み、見逃して下さい鳳翔さーん!!ベストアングルなんですよぉー!!」
「だ、大体さ、司令官は怒ってないしさ、大丈夫だって！……なんなら鳳翔さんにもデータを……」
「そ、それは……??い、いや！だ、駄目です！そ、そんな不義理なことは……??」
「シャワー中の画像も付けますから！どうか、どうかー!!」
「これがあれば当分は困らないから！見なかったことにー!!」
×
×
×
「……あー、何だ、やり過ぎないように、な？」
×
×
×
何だろう、これは。
俺の見間違いでなければ、俺の『検閲済』のシルエットが写った画像のやり取りが行われている。
どうしよう、何て声をかけよう。
……。
「……あー、何だ、やり過ぎないように、な？」

おーっと？漣くんぶっ倒れたー！望月くん吹っ飛んだー!!

……まー、分かるよ？

ここだけ天〇帝国みたいな……、貞操逆転世界的な感じで男いないしね？

俺イケメンだし？

多少はね？

……って思ってたんだけども、最近はやばい。

今朝なんてパンツ脱がされて写真撮られた。朝だったもんで、俺のバズーカはメガバズーカランチャーと化していた。

プロデューサー！ポルノですよ、ポルノ!!

まあ、それくらいならまだマシなんだよね。

問題は、今まで抑圧し過ぎてしまったせいなのか、変な性癖に目覚めてしまった子で……。

「司令官、今巷では腹パンが流行っているらしい。頼めるかい？」

響よ、どこの巷なのかな？

「くんかくんか！すーはー！……あ、おはようございます、提督」

大淀、今ちらっと見えた見覚えのあるワイシャツ何？

「ふむ……、うん、今日も良い身体だな、提督！」

木曾、俺の身体じっくり弄るのやめて？

……逆セクハラ……!!

そう、逆セクハラである。

武蔵には会う度に身体を触られるし、愛宕にはおっぱい揉まされる。吹雪にはパンツを見せられ、夕立には物理的に舐められる。秋雲は俺×艦娘のスケベ同人誌をリリースし、金剛はキスしてくる……。

おかしい、こんなことは許されない。

乳揉もうが尻揉もうが壁ドンしようが押し倒そうが、何やろうが大喜びしやがる。打つ手がない。

ちょっと突き放そうものなら、

「……あはははー嫌ですね、司令。司令が私のことを嫌いになどなる訳がありませんよ？計算するまでもありません」
「……？、提督と僕はラブラブで、毎日愛し合ってるんだよ？僕と提督の仲は、例え神様だって引き裂けないよ！」
「はっ、申し訳ございません！斯くなる上は、この神通、責任を取り切腹致します！川内姉さん、介錯を!!」
こうなる。
笑顔で自刃しようとした神通はヤバかった。マジ震えてきやがった、怖いです。
さて、目の前で「見なかったことにー！見なかったことにー！」と大騒ぎする二人を宥め、フェードアウトさせてもらおう。
いやー、キツイっす。
もう我慢でけん!!となった場合、鎮守府崩壊が目に見えてるしな、やっぱり迂闊に手は出せない。
かと言ってこのままでは逆レ間違いなし。
駆逐艦だろうと何だろうと全力で孕みにきていやがる。初潮前の子だろうと気合いと根性で排卵しかねない。
逃げねば。
特にこの辺、艦娘寮付近は洒落にならん。喰われる。
早く目的を果たさねば……。

「もしもし、鹿島？おる？」
「！、はーい！今出まーす！」
目的……、そう、鹿島先生への相談である！
鹿島は黒井鎮守府でも屈指の穏健派、常識人……。戦闘狂でもラストサムライでもニンジャでもサイコパスでも狩人でもない、貴重な一般枠……!!
その証拠にさ、この前また刺客が鎮守府に送り込まれた時の話なんだけどさ？他の子ならR―18Gな人だったものを量産するんだよ、でも鹿島は違う。気絶させて警察に引き渡したんだ。
もうね、感動したよ。

そして確信した。俺を導いてくれるのは鹿島先生だと！
「と言う訳で鹿島！教えてくれ!!」
「は、はあ……？」
いや、本当に。分からないんだよ、正直。もうさ、良い加減慣れたのでは？毎日のように口説いてセクハラしてるんだが？もう好感度も頭打ち、後は下がるだけでは？
「わ、分かりました！この鹿島、提督の為に一肌脱ぎましょう！」
「わーい！」

「……お話は分かりました、つまり……、艦娘からモテる、性的な目で見られてしまう、と」
「そうそう、あんまりひん曲がった性癖に目覚められても困るからね、何とかならない？」
正直、モテることは得意なんだが、その逆は苦手だ。どうすればモテないの？マジ分からん。
「うーん、そうですね……、提督はとても魅力的な人ですから……、では、まずは服装を大人しめにしてみる、とかはどうでしょう？」
「ふむ」
なるほどな、俺は派手好きだからな。見た目で釣られてしまうのか。
「その、大きく開いた胸元とか、派手なアクセサリーとか……、変えてみれば良いのでは？その、ちょっと、いかがわしいかなーって……。た、例えば、スーツとかどうでしょうか？きっと似合うと思いますよ！黒のスーツとか素敵だと思います!!」
「そっかー」
ふぅん。要は、きっちりした服装だな？きっちりした服装は心もきっちりと引き締めてくれると言うくらいだ、多分効果ある。
さて、装備変更、スーツ。
早着替え？いや、普通にインベントリから出したスーツを装備しただけだが？何かおかしなことしたか俺？
「こんな感じ？」

「はうっ?!……か、かっこいい??」
「うん、ありがとね」
「と、とても良くお似合いです!次は、そうですね、真摯な態度、でしょうか?い、いえ、いつもの提督が不真面目と言う訳ではありませんよ?!」
「真摯な、態度」
真摯な態度とな?……あ、そっか、軽い男は宜しくないのか。「私だけを見て」ってやつだな。
試すか。
「鹿島……、好きだ。君に夢中だ。一生離さない……(イケボ)」
歯が浮くぅ!!歯が浮きそうじゃなくって歯が浮くぅ!!
いかん、ウルトラA級のキモい台詞だ、死にそう。
「は、はひっ??わ、わたひもらいしゅきれしゅ??????」
「お、おう」
大丈夫か鹿島?
「しょ、そ、そうでしゅね!その、そのまま、強く抱きしめたら良いと思います!!!」
強く抱きしめる?……ああ、俺、いつも優しく触れるようにしてるからか。
強く抱きしめたら喜ばれてしまうパターンも多いが……、鹿島がやれと言うなら間違いはないだろうな。
痛いかもしれんが、行くぞ。
「鹿島……!!俺のモノになれっ……!!(イケボ)」
「んあああああ??????なりましゅうううう??????鹿島は提督さまに絶対服従しましゅうううう??????」
あっ、鹿島が??????ッた。
何でだ?定期的に抱き着いたりして距離感を近付け、近所のお兄さん的なポジションに収まろうと思ったんだが、まだ慣れないのか……?
「鹿島ー、次はどうする?」
「ちゅぎ、次は??わ、わたひを??提督さま専用の肉便」

「よしありがとう大体分かったサラダバー!!!!」
何てこったい。ここは狂気の世界だ……。
やっぱりエロ鹿島じゃないか（憤慨）。
だがしかし、イメチェンは大事かもしれん。俺の性格は水素以上ニュートリノ以下くらいの軽さだから、艦娘が釣られてしまうのかもしれない。ならば、見た目も中身ももっとこう、重い？生真面目？な感じになれば良いんじゃね？
見てろよ艦娘！
俺の真の実力を見せてやる!!
そして知るが良い！
男の怖さってやつをなぁ!!!（死亡フラグ）

１３１話　どう頑張ってもイケメン

分かったこと。
堅物は、モテない……!!
そう、クソつまんねー男はモテないのだ!!
黒のスーツに伊達眼鏡という、クッソつまらん格好をした俺!!こーれは非モテですわ!!童貞待った無し!!
さっき試しに街に出た時も逆ナンされんかったし！いけるいける!!
これなら逆セクハラもされないだろうな！
「クククク、ハハハハハ、ハーッハッハッハー!!!!」
「(スーツの提督、カッコ良すぎっぽい……??)」
「(はわわ、キリッとした司令官さんも素敵なのです……??)」
「(オ、オイオイ、あれ、世界水準超えどころじゃねえぞ？超男前じゃねーか……??)」
んんー？
何か見られとるような？
いや、気にしなくても良いか。
逆セクハラなんてもうさせないもんね！
まあ見てな！

「いやあ、全く、やれば出来るんですね、提督は」
「そうそう、男の人は強引なくらいがちょうど良いのよ？」
はぁい、失敗！
艦娘には勝てなかったよ……（予定調和）。
おっかしーな、大分キモい攻め方したんだがな？
先ずは大和。清楚で上品な女性だ。そんな大和には後ろから思い切り抱き着いた。で、そのまま痛いくらいの強さで抱きしめて、耳元でキモいこと囁いたんだが……。
「ふふふ、やっぱり提督も男なんですね……??俺の女になれ、だなんて

……??」
ええー。
「あんなにきつく抱きしめて……、強く求めてくれるなんて??女として最高の幸せですよ??」
オイオイオイ。
「いつもよりずっと、提督の体温と鼓動を感じられて……??うふふ、やっぱり私は、貴方の女なんですね……??」
なんなの？
いやさ、分かってたよ？俺も皆んなもこうなることは分かってた。イメチェンした俺と艦娘なんて言わば、女騎士とオークみたいな、対魔忍と奴隷商人みたいな結果が見え見えの組み合わせなのよ？
まあ、分かってた（予知夢）。

「あらあら？大和にもそんなことを？……でも、良いわ。私は提督専用の女、なんだから??」
なんかいかがわしいことを口走るのは、セクシーで華のある美人、陸奥だ。
「あんな風に乱暴にキスされちゃったらもう駄目ね??提督のことしか考えられなくなっちゃったわ??」
歯がぶつかるくらい無理矢理に唇を奪ったんだが……、何でだ？あれじゃ気持ちよくないだろ？
「本当はいつも不安なのよ？提督はいつでも、何でも出来るんだから。私のこと、要らないんじゃないかって……」
陸奥……。
「でも、やっぱり、私達は愛し合っているのね……??後は、愛し合っている証拠、二人の愛の結晶が必要よね??提督は何人欲しいかしら？私は男の子一人と女の子二人が良いわね??」
陸奥?!
どうする、このままではまた、「い　つ　も　の」とか「知ってた」って言われてしまうぞ?!
このままではワンパターンだと方々から怒られてしまう!!

ええい、ままよ!!
「あん??」
「いやん??」
どうだ!乱暴に胸を揉んで、いや、鷲掴みにしたぞ!!こんな酷いこと普段は絶対にやらんからな!!ひゃー、柔らかっ。でも、かなり力強く弄ってるから気持ちよくないだろう……、むしろ痛いと思う。
どうだ?!怖いだろう!痛いだろう!さあ、少しは嫌がれ!!……正直さ、突然セクハラしたとき喜ばれちゃうと、セクハラのし甲斐がないんだよなぁ。かわいい悲鳴の一つでも上げてくんないかな。
「あはぁ??素敵です提督??この大和に、提督の欲望をぶつけて下さいぃ?????」
「乱暴にされるのが、こんなに気持ちいいなんて??……??もっと、もっと強くしてちょうだい??壊れちゃうくらいに……??????」
んもー、駄目だこりゃ。
……だが、これはこれで、良いかもしれん。
大和は、他の艦娘を口説こうものなら音速で機嫌が悪くなるし、陸奥は、ちょっと他の子をナンパしただけで他の子を睨み付ける。大変よろしくない。
ここでたまには強気な態度で攻めることで、「俺はこういう人間！俺はこういう人間！」ということをアッピルできる。
さすれば、嫉妬深い、グイグイくるタイプの艦娘も分かってくれるだろう。
どうも、艦娘達は俺のことを尊敬し過ぎている。俺は本来駄目人間だ。あまり人間性を期待しないでいただきたい。
もうね、モテないことは、好感度を下げることは不可能。それは大体分かってる。だから、せめて、俺が駄目人間だということ、今更直せないことはよく分かってもらいたい。
残念ながら俺はヒーローでも真人間でもない、一般通過旅人なのだ。
そうと決まれば行動あるのみ。
「行ってくる」

「?、何処に?」
「浮気しに」
「「……は?」」
ぐっ、き、君らなんて怖くないぞ!!ガールズハントは趣味なのだ!!そこは曲げられん!!例え包丁でザックリやられようと監禁されようと、ナンパと旅と酒はやめらんねーんだよ!!!
「はぁ、しょうがないですね」
「貴方はそういう人だもの、許すのが良い女ってものよね」
あれ?わちき許された?正直監禁されるかと思った。
「良いですよ、終戦すればずっと一緒にいられるんですから……。それまでは好きに過ごして下さい。……終戦、すれば、あの計画を……??ふ、ふふふ、ふふふふふふふ??」
「どうせマーキング装置は注入してあるし……、提督は私達から絶対に逃げられないもの。最後には私の隣にいるって分かってるんだから、そう目くじら立てる必要もないわよね。……ふふふ、楽しみ??」
マーキング装置?ああ、いつの間にか体内に入れられていたナノマシンのことかな?何だ、ただの発信機か。愛国者達の仕業かと思ったじゃないか。
さて、分かってくれたみたいだし、行くか。
そう、だな、先ずは嵐だ。嵐から誤解を解こう。どうにも、嵐は俺を正義の味方だと思っている節がある。ここが悪の組織だってこと、俺が悪の組織の長だということを知ってもらおう。きっと失望されるだろうが、今までみたいに騙しっぱなしよりかはマシだ!!
すまん、先に謝っておくぞ、嵐……!!
「? 知ってるけど?」
「えっ」
これマジ?
「ははは、やだなぁ、鎮守府の看板に思いっきり悪の組織って書いてあるじゃん!」

「いやでも、嵐は、ヒーローになりたいって……」
「なってるよ！」
　悪の組織でヒーローとは、これ如何に。
「良いか、司令？正義とか悪とかってのは、モノの見方一つで簡単に変わっちまうのさ！言葉だけに囚われちゃ駄目なんだぜ！」
　百理ある。ここまで分かってるなら最早教えることはないぞ!!いやぁ、素晴らしい、正義は常に自分の中にあるのだ!!
「……つまり、司令に逆らうバカは悪党だから殺す！司令に従う奴は生かしておいてやる！それが正義なんだ！」
「んんんんー？」
　あっれー？分かってなーい。
「い、いや、嵐？それはちょーっと不味いんじゃ？正義のヒーローは殺すとか言わないよ？」
「良いんだって！最近はダークヒーローとか言う都合のいいポジションがあるらしいから！俺もそれになる!!」
　ぬぅう、おのれ、また余計な知識を……。
「いやいや、良いか？俺はそんなまともな奴じゃないぞ？浮気もするし人に暴力は振るうし……、遊び半分で秘密結社の基地を爆破したり、ダンジョンでメテオぶっ放したり、知り合いの怪盗と盗みをしたり……、兎に角悪い奴なんだ！なっ！」
「そ、そんな、司令……」
　すまんな、嵐。君の期待を裏切るようで悪いんだが、強姦と麻薬関係以外の犯罪は一通りやったことがあるんだ。望む望まないにせよ、人を殺さなくちゃならない時だってあった。
　……本当にすまん。
「……司令、今の話、本当か？」
「本当だ、嵐に嘘はつけない……。すまな」
「すっげーーー!!!かっけーーー!!!やっぱ司令はサイコーだぜ!!!なあなあ、もっと詳しく聞かせてくれよ!!!」
　ほげっ……。なんでや？一ミリもカッコイイとこないやんけ……。
「他には何か無いのか?!あるんだろ?!やっぱり司令は俺のヒーローだ

!!!」

やめろォ!!キラキラした目で俺を見るんじゃぁ無い!!!穢れそのものみたいな俺を見るなぁぁぁぁ!!!!

１３２話　疾風伝説特攻の霧島

「霧島ー？このバイクどこの？」
「カワサキです」
「カワサキか……」
カワサキか……。

あ、はい。
旅人です。
先日はもう辛くて辛くて……。
嵐のキラキラした目の前で、若気の至りでしでかした悪事を白状する羽目になってね……。
テンプル騎士団の支部にバイトでＣ４仕掛けたこと、魔剣教団とのガチな殺し合い、スタークインダストリーズでの金庫破り、ワンダーテインメント博士との実験……、どれもあまり言いふらせない悪業だ。
それを聞いて、「すげー!!カッケー!!流石司令!!!」とガンガン持ち上げられてしまうと、こっちとしてはキツイんです。
今現在もこうして、俺のネガキャンの為仕事もせずに遊んでる訳なんだが……。
「ほら見ろ霧島。お宅んとこの提督、仕事もせずにバイク弄りしてっぞ。怒って良いんだからな」
「え？司令のお仕事はお休みでは？」
「い、いや、違う。俺、本当は毎日仕事あるんだよ。でも、最近は、俺の筆跡を完全コピーできるようになった大淀が俺の仕事全部やっちゃって……」
「……？、大淀さんがやるならば、それは大淀さんの仕事なのでは？司令の手を煩わせてはなりませんし」
あれ、そうか？……いやいや、駄目だろ！自分にできることをやるのは素晴らしいんだけど、俺！俺の仕事は?!
「と、言うより……、仕事、したいんですか？」

「え、したくねーよ？」
当たり前だよなぁ？
「では、私達にお任せ下さい。司令は私達の王なのです。お嫌なことは、何もやる必要はありませんよ」
なんだこれ。俺を駄目にする気か？これ以上駄目になると何も残らんぞ俺。
「い、いや、流石に悪いだろ？何もやらないで遊んでるなんて」
「いえ、司令は絶対に正しいので、悪いところなど一つもありませんよ？」
あっ、ヤバイ。
「そもそも、司令は十分過ぎる程に働いています。黒井鎮守府の全面改装及び増設の後は、清掃などの設備維持、炊事も担当しその上出撃までこなしていますよね？他にも、様々な雑務を担当しているじゃないですか。ご自愛ください、司令」
いや、その、全部趣味！確かに、恩を売ったみたいな形になったけどね？
だってよ、面白いじゃんか！ボロボロの建物を綺麗に建て直して、有り余った敷地にいろんな施設作ってさ!!
掃除は当然、自分が綺麗に建て直した建物を維持したいから!!
料理は趣味で食材の調達もめっちゃ楽しい!!
出撃はただのストレス発散!!
書類仕事？だから大淀に取られたっつってんだろ!!!
……事実！鎮守府の改装増設が終わった今は、趣味で家事やる人と化してるんだぞ?!何もやってないぞ?!ごめんな!!
「……ですから、ここで私に付き合わずとも、ご自分のお好きなことをなさって下さい」
「やってるよぉ！バイク弄りも趣味だよぉ～!!家事も出撃も趣味なんだよぉ!!!」
「そんな！良いんですよ、遠慮なさらずとも！司令はご自分のやりたいことを」
「してるよォーーー!!!!!」

なんてこった、ひどい誤解だ、働いてると思われてたのか!!
「違う、違うんだ、俺は、好きでやってるんだよ!!霧島が好きで、バイク弄りが好きでここに来てるんだよ!!そこには一片の義務感も存在してないんだよ!!!」
しゅみです。
「そう、なんですか?私のような女を」
「霧島は美人だろ!良い加減にしろ!!」
は?キレそう。美人なんだよなぁ。なんでこの子達は自己評価が日本の食べログ並みに低いの?
「……??、そ、そう、ですか??」
「な、霧島、怒って良いんだぞ!仕事サボって遊びに来た男を!」
「いえ、怒るどころか、感謝します、司令!大切なお時間を、私のために……??こんなに嬉しいことはありません!」
なんでや!
「そ、その、では、折角ですから、私と遊びに行きませんか?」
「ああ!」
あ、ヤバイ、遊びに行くという単語を聞いて反射的にＯＫしてしまった!!
「ふふ、よかった。実は、私の知り合いが司令に会いたいと言ってまして。さあ、首都高に行きましょうか!」
因みに、霧島と遊びに行くと、高確率で非合法カジノかバイクで首都高とかになる。
にしても知り合いねぇ……。
霧島の知り合いは大体がヤクザかマフィアだからなぁ。
「さあ、行きましょう!」
「誰×なんだ、知り合いって?」
「セ×ロニアスさんって言うんですけど……」
?!×
×××
×××
「い×やぁ、楽しかったですね!」
×××××

「アーイキソ」
　ふふ、良いツーリングでした。
「スピードの向こう側、ですか。良いですね、海ではあんな速度出せませんから」
「法定速度ェ……」
　?、バレなきゃ良いんですよ、バレなきゃ。逃げ切れば切符切られないんですから。
「まあ、原則現行犯やし。顔が割れなきゃ良いか。……にしても、連中と知り合いとは」
「ええ、良くしてもらっていますよ」
　やはり、族やヤクザとは中々に話が合いますね。あまり褒められた話ではありませんが。
　……ですが、車やバイクをかっ飛ばすのは楽しいですし、真島組での仕事は本当にやり甲斐がありますし。
　しょっ引かれない程度のやんちゃは良いと司令も言っていますから。
「にしてもゼッツーですか」
「はい、かっこいいじゃないですか、ゼッツー。……いつもはインパルスですけど、新しく買いました」
「はえー、すっごい。……給料の使い道があんのは良いことだよ。無駄遣いしろって訳じゃないんだが、趣味に没頭するのは素晴らしいよ」
　流石は司令。話が分かるお方です……!金剛お姉さまには、「アー、その、あんまり違いが分からないデース」と言われて大分ショックでしたが……、司令には分かってもらえるんですね!!
「……あれ?て言うか霧島、前新車おろしたって言ってなかった?」
「あ、はい。マジェスタ買いました」
　カッコイイんですよ、特にあのヘッドライトとか。
「あのフルスモークで紫のマジェスタ、君のか……。車庫、増やそうかなぁ」
　いやー、欲しかったんですよね、マジェスタ。

「司令も何台も持ってますよね？」
アメ車とバイクが何台か、トラックと日本車もいくつか……。
「あのワインレッドのシボレーコルベット、司令のですよね？」
「おお、そうだ。アメ車は大体俺の、若しくはアイオワのだな。痛車は明石か夕張で、ジープはグラーフの。ハイエースは天龍ので、軽トラは長門だ」
なるほど。
「……乗る？」
「良いんですか?!」
「デートしよう、デート！仕事サボって！デート!!いやー、仕事やってねーからなー！ワルだわー！ワルの極みだわー!!」
さっきから仕事をサボっていることをアピールしてきているようですが……、何の意味が？

……もしや、肩の力を抜け、と言うメッセージなのでは？

そう、そうだ、先程からおかしいと思っていた！
恐らく、司令は自分が仕事をサボっていると言うことで、私が休みやすいような環境を作ってくれたのだ。
その上で、自らの貴重な時間をさいて、こうしてデートに誘って、私をリラックスさせようと……！
確かに、艦娘と極道の二足の草鞋を履く私は、他の艦娘と比べれば忙しい。
それを苦痛とは思わないが、時折大変だと感じることはある……。
……司令は、全てお見通しなのね。
「……司令、ありがとうございます」
「ん？おお」
やはり、私が仕えるべきは司令だけだ。
こんなにも私のことを想ってくれるだなんて。
……一生ついて行きます、司令!!

１３３話　深刻な収容違反

「えっ、何このタイトル？」
　不安なんだけど？
「どうしたの、Ａｄｍｉｒａｌ？」
「いや、なんかタイトルが……、いや、何でもない」
　気のせいだろう。そう思いたい。
「にしても、運転が上手ね、Ａｄｍｉｒａｌ」
　ん、まあ、そりゃあな。エンジンとハンドルが付いてりゃ何だって動かせるさ。
「それに、アストンマーティンなんて、素敵じゃない。……お金持ちが好きって訳じゃないけど」
　なーに、ほんの二千万ちょいよ。
　この前裏で超高レート麻雀で差し馬握らされた時の負けよりかはマシよ、マシ。何なんだろうな、あのオッサン。鳴く度に牌が光ってたけど。
　え？どのくらい負けたか？億単位で持ってかれましたですわ。ウケる。
「でも、このアストンマーティン、明石と夕張に一週間くらい預けておいたからなぁ、不安だなぁ……」
「Ｗｈｙ？あの二人、素晴らしい腕じゃない？Ｍｅのレールガンもあの二人が作ったのよ？」
「いや、腕の良さは認めるが……、十中八九余計な機能を……、あ、マニュアルだ」
　何々、ミサイルポッド、防弾ガラス、ナンバー偽装装置、ステルス迷彩、ターボ、マキビシ、機関銃……。
「……あれ、知り合いの車にそっくりだわ」
　マティーニを、ステアせずにシェイクして、ってな。まだスパイやってんのかな、あの人。
「……どう？どんな風にカスタムされてるの？」
　助手席のアイオワが聞いてくる。

「あー、ちょっとばかし、物騒だね。まあ、事故らないだけ良いかもな」
「ふうん、あの二人のことだから、もっと凄いものを付けてるかと思ったんだけど」
そう言いながら、俺の手からマニュアルを取り、パラパラとめくり始めるアイオワ。
「……あ！これ、どうかしら?!そこのボタンで変形して空を飛ぶらしいわ!!」
そう言って、開かれたページを見せてくるアイオワの目は、キラキラと輝いていた。アイオワは結構な派手好きなんだ。趣味は俺に近いかもしれないな。
だが、
「それじゃ、その前にこいつはどうだ？」
ＣＤをインサート。
『バージニア州、ノーフォークの故郷を去り、我が心のカリフォルニア！グレイハウンドに乗り込んで……♪』
古いロック・ミュージックだ。今時こんなん流したら引かれるだろう。……そもそも、女の子とドライブの時にロック・ミュージックなんて良くないし。不良っぽいよね。いや、俺個人は好きなんだけど。
さあ、どうだアイオワ？
「あら！エルヴィス・プレスリーね！Ｍｅは彼の大ファンなのよ！」
あれれー？
あー、そっか、丁度世代、なのか？
「Ｐｒｏｍｉｓｅｄ　ｌａｎｄ、名曲ね！遠くまで行きたくなる気分にさせてくれるわ！」
歌を口ずさみながら笑うアイオワ。……ロック好きなのか。そっかー。
「ま、それはそれとして……、この車、飛ぶんだったか？どれどれ、このボタンかな……？」
あ、これか。
「にしても、エルヴィス・プレスリーってもう亡くなってたのね……。ｇｒｅａｔなミュージシャンほど早く亡くなるのは何故なのかしら

ね……」
「え？エルヴィスは死んでないよ？」
ええと、これを押して、と。
「何言ってるの？とっくの昔に……」
「彼は、故郷の星に帰ったんだよ！」
おっ、飛んだ飛んだ!!
速いね、これ!!
……何だか、久し振りに外宇宙へ旅に行きたい気分だな。
今度海王星にでも行くか。海王星には凄〜く美人な雪女がいてだな？

……ま、それはさておき。
「もう最高！天気も良いし、景色も！これ以上ないくらいのドライブ日和！……ふふふ、やっぱり、Ａｄｍｉｒａｌと一緒にいると退屈しないわね！」
……何でアイオワとドライブしてるんだろうか俺は。
いや、今更だけども。
だってアイオワはこう、サラの恋を応援する感じの、そう言うポジションなのでは？
「あ、言っておくけどね、Ａｄｍｉｒａｌ？Ｍｅは貴方が好きよ？」
「えっ？」
は？いや、薄々気づいていたけども、ここで言う？
「あら？Ｍｅは貴方のｇｉｒｌｆｒｉｅｎｄじゃないのかしら？」
……あ、そうだよな。
アメリカは最近行ってないから忘れてたんだけど……、アメリカに告白と言うものはない。
恋人には「なるもの」ではなく「なっているもの」……。
即ち、
「Ａｄｍｉｒａｌとは何度もデートしたけど……、貴方はｓｍａｒｔで、ｃｏｎｓｉｄｅｒａｔｅ　ａｎｄ　ｇｅｎｔｌｅ、ｌｏｏｋｓもｖｅｒｙ　ｇｏｏｄ!!Ｍｅとの相性も抜群ね！」

は？賢くて、思いやりがあって、紳士的で、見た目がとても良い？
は？
いや、見た目はまだしも、俺より賢い奴はごまんといるし、優しくするのは美人にだけだ。
あれだけデートしたのに分からんのか？
あっ、そうだ（天啓）、
「俺、浮気症だよ？」
大抵はアメリカ人は浮気を嫌うからな。
「Ｍｅは貴方をイタリア人だと思ってるから」
それは何か？浮気するってお見通しってことかな？イタリア人が皆んな浮気してるみたいな言い方はいかんでしょ。
「ふふ、Ｉｔ’ｓ　ｊｏｋｅ、冗談よ。……でも、でもね、Ａｄｍｉｒａｌ？貴方は、Ｍｅの居場所なの……」
「居場所？」
「そうよ？アメリカにいた頃は、こんなこと無かったもの。……勇猛な海兵達も、国民も皆んな、私達の事を怖がってた。ｍｅｄｉａはＭｅを持て囃したけれど、それは兵器としてであって、誰もＭｅ自身を見てくれなかった……」
確かに、アメリカでの艦娘の対応は、うちの艦娘達と比べるとまだマシだったらしいが……。
「艦娘は、化け物を殺す化け物……。そんな風に言う人も、沢山、いたわ」
猛烈なスピードで空を駆ける車の中に寂しさが響く。
「辛く無かった、って言ったら嘘になるわ。あの時のＭｅを支えていたのはｐｒｉｄｅだけだったもの。……でも、今は違う」
窓から流れる景色を眺めていたアイオワがこちらを向いて……。
「家族がいるから！……Ａｄｍｉｒａｌも、サラも、艦娘達全員がＭｅの家族よ！……恋人がどうとか、浮気がどうとか、そんなことにこだわるつもりはないわ。ただ、Ｍｅは、貴方の側にいたい……。ずっと、ずっと……??」
……ああ、はい。

そんなこと言われちゃうとなぁ。
側にいるよ。
……出来るだけ。

「あら？そう言えば、さっき、検問みたいなのを飛び越して来ちゃったけど、大丈夫なの？」
「えっ、検問？」
「そうよ？ええと、何だったかしら、腕章に『ＳＣＰ』って書かれた部隊がいたわね」
おーっと？
「？、監視塔、かしら？何でこんな所に？」
あっあっあっあっ。
「Ａｄｍｉｒａｌ、標識よ？あれは……、止まれ、ね。……空を飛んでいる車にも標識は適応されるのかしら？」
に、逃げ、
「え？あれ?!標識が、車両進入禁止に変わった?!……って、Ａｄｍｉｒａｌ?!急ブレーキは駄目よ!!」
「い、いや、違う！……止められたんだよ!!」
「……え？」
あー、クソ！はいはい！こう言うオチね！知ってた！このｓｓにシリアスはありませんもの!!こりゃ駄目だ、進入禁止の標識のせいで車が動かない！
「チ、チクショー!!!かかって来やがれオラーーー!!!!」
シンボルなんざ怖くねぇ！野郎オブクラッシャー!!!へし折ってやるからな覚悟しろや!!!
「Ａｄｍｉｒａｌ!!?!」
『……』
「オラオラ！何だ?!落石か？電車か?!出して見やがれ!!俺は死なねーぞ!!!」
道路標識通りの現象が起こせる？その程度で俺を殺せると思うな

！

おっ、標識が、変わっ、て……。

『……ＳＣＰ―０７６―２、ＳＣＰ―０９６、ＳＣＰ―１０６、ＳＣＰ―……』

「っしゃあ！逃げるぞアイオワ地の果てまで!!」

前言撤回。無理。勝てない。

「な、何？何なの？」

アイオワを抱えて逃げる。どうせこの後機動部隊が派遣されるんでしょ、知ってる。だから俺は逃げる！

走った。

そりゃあもう走った。

全開で走った。

「Ａｄｍｉｒａｌ、ｍｏｎｓｔｅｒがまだ着いて来てるわよ?!」

アイオワには目隠ししてあるが、レーダーに反応があるとのこと。

「ウッソだろお前」

機動部隊はどうした？

「一直線にこっちの方へ向かって来てるわ！」

追って来ているのは、人間絶対殺すマン、顔見たやつ絶対殺すマン、男絶対殺すマン……。

あっ、ふーん。

狙いは俺かぁ……（絶望）。

「アイオワ！逃げろ！連中の狙いは俺だ!!」

「なっ?!無理よ！三体に勝てる訳ないでしょ!!」

「馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前!!!（天下無双）」

俺のオーラ力的なサムシングも、この一年で強くなったんだ！

簡単にやられはしない!!

『ーーーーー！』

「なぁーんちゃってウソウソー!!!」

速いし硬いし強いし巧いし!!!

どうする、どうする……？

転移で逃げるか？いや、どうせ地の果てまで追ってくるだろうよ。
考えろ、考えろ……。
クソ、せめて一番強い人間絶対殺すマンさんだけでも止まってくれりゃあ……。

「もう、何なのよ！よってたかって！頭数を揃えなきゃ戦えないの?!とんだｃｈｉｃｋｉｎね!!」
『……？？？

だよなぁ、折角のデートだったってのになぁ……。

「へぇ、そんなことが……。災難でしたね、提督」
「いやー、大変だったよ、サラ。……今度はサラも一緒にドライブしようなー」
「はい！」

「……ところで、あそこにいる刺青の、えーと、中東系の男性は、提督のお知り合いですか？」
『……？？？

１３４話　出来ましたよ提督！

「出来ましたよ提督！私を絶頂させるスイッチです!!」
おやおや？びっくりするほどクソ雑な導入ー!!
まーた出オチじゃないか!!
……つーか、なんてもん作ってんの？
手渡されたのはピンク色の怪しげなスイッチ。
……。
強、と。
「ぁぁん??そんな、いきなりっ??????」
ふむ。
……最強、と。
「あひぃ?????」
ふむ。
……ふむ。
「いけないなー、いやー、いけないなー。良くないよこーゆーのはー」
たーのしー！
死ぬ程楽しい。貰っておこう。
さて、スイッチオフ、と。
「はぁ、はぁ……。すいません、私、ピンクなんで淫乱なんです」
「自分でそういうこと言う？」
「まあまあ！あ、ベッドはこちらですよ！……あ、逃げないで下さいよ!!」
「いやいや、Ｒ―１８はちょっと……」
いやー、キツイっす。
このｓｓがＲ―１８になったら、モチ先生のゼノギアスのエロ同人誌みたいなテンションで終始事が進むと思うぞ!!
「くっ、一体何が足りないんですか?!おっぱいですか?!」
「違うな……」
魅力＝おっぱいではないのだ。
「ならば、ファッションですね!!一ミリも知りませんが、何かこう、気

持ちお洒落な格好をすればどうにかなるでしょう!!」
　そう言って俺の目の前で着替え始める明石。下着はピンク。かわいい。
　格好がどう、とかじゃないさ。君は綺麗だ、明石。
「良し！対魔忍スタイル明石です！これで提督も悪徳政治家や魔族のようにズッコンバッコ」
「待て待て待て待て」
　格好がどうとかじゃないと言ったな、あれは嘘だ（前言撤回）。
「もうさ、あの、さ、ねぇ、もうね？」
「な、何かいけませんでしたか?!この防御力が低そうな上にピッチピチで丈が短い、タクティカルアドバンテージのまるでないこの服の何処が悪いんですか?!!」
「全部なんだよなぁ?!」
　分かっててやってない？
「長門さんだって対魔忍みたいな格好してるじゃないですか！」
「あれは艤装だルルォ?!長門の普段着は芋ジャージだよォ!!!」
　もしくはタンクトップに安物のズボン。結構そそる。

「待って下さい提督!!」
「その声は！」
　夕ば……、り……。
「私はユキカゼバージョンにしてみました!!!」
「い?!!!
「いやいやいやいや！してみましたじゃねーよ!!しちゃいかんでしょ?!!」
「えへへ、提督の命令なら、どんな姿にでもなってみせますよ??」
　かわいい。命令した覚えがまるでないけど。
「さ、さて！気を取り直して！出来ましたよ提督！私の性欲を操作するスイッチです！」
　え？格好そのまま？大丈夫かこの子ら？
「て言うか、何なん？スイッチ作るの流行ってるの？」

「こちら、赤いボタンは増加、青いボタンは減少となっております」
「宇宙適性B」
「「戦国魔神は関係ないだろ！いい加減にしろ!!」」
良いだろお前宇宙スペースナンバーワンだぞ（意味不明）。
さて、赤いボタンポチー。
「んっ??」
ポチー。
「あっ??あっ??あっ??」
ポチポチポチポチポチポチー。
「は、ああっ??????だ、だめ、です??????そんな、急に??????」
たーのしー!!
さて、青いボタンで沈静化。
両方保存しておこう。
「いやー、楽しいですね！」
「取り敢えず一次実験と二次実験は成功……、最終段階に移りましょうか!!!」
まーた悪巧みしてんな、この子ら。
ま、良いか。
きっと、退屈しないだろうしさ。

数時間後。
「「出来ましたよ提督！スイッチです！」」
「えっ、何の？」
「「……スイッチです!!」」
「だから何の?!」
「「押して下さい！早く!!」」
何なの?!
「こ、ここで一歩引くのが大人の醍醐味」
「させま」「せんよ」
（ハイライトが）ないです。

「さあ早く！このスイッチを押して私を調教陵辱するんですよ!!」
「感度３，０００倍になる媚薬も作っておきましたから！ほら、早く!!」
　人生経験には自信があるが、対魔忍コスの女の子二人に言い寄られたことはないですね、ええ。
　……冷静に考えれば、感度３，０００倍って最早痛みでしょ。
　気持ち良くはないと思うよ。普通にショック死すると思う。
「提督はエドウィン・ブラックみたいなものでしょう?!死にませんし!!」
　いやいや、不死ではないよ。
「昨日の戦闘で引き摺り出された内臓を何のためらいもなく自切して再生させたときは若干引きました!!艦娘よりしぶといんですね!!」
　あー、昨日の、ね。
　何だかんだで現れた、人間絶対殺すマンさんとインファイトしてきた件ね。
　内臓の六割と右腕、左手、大腿骨の粉砕骨折を犠牲に何とか倒せた。
　まあ、やったことはただのメガンテなんだけども。
　あいつに無理矢理近付いて、腹の中にＣ４くれてやったのよ。また来るって言い残して消えたけど、本当に勘弁してほしい。
　なので今の俺は、肺が片方と肝臓、腎臓が無い。右腕もまだ再生中。内臓の再生は時間がかかるんだよなぁ。ポーション使っても良いけど、出来るだけ治癒スキルは高めておきたい。
　左手と大腿骨、あと胃腸は治したから、特に問題はないな。魂さえ消滅しなけりゃ死なない。
「因みに、切断された提督の右腕は白露型の皆さんが回収しました」
「自切なさった内臓は明石さんが保管しています」
　それくらいなら良いけど。
「食べたりしないようにね？」
　俺の肉体は自分でもよく分からないくらい混ざり物が多いからな。
「あ、手遅れです。提督の血を舐めた艦娘が数人倒れました」
　んもー！

エーテルだの青ざめた血だの魔力だのＡＤＡＭだの放射能だの、色々とヤバいもん入ってるんだから。
人が摂取したら変異したりするからやめなさい。まあ、艦娘ならあまり問題はないんだろうけど。
「全く、その子達はドックだな？様子を見てくるわ」
いやぁ、心配だなー。心配だわー。
「ふふふ、話を逸らしても意味はありませんよ？」
しかし　まわりこまれてしまった　！
「なーに、このスイッチをちょーっと押すだけで良いんです！」
「だから何のスイッチなんだよ!!事前に分かっていればそれなりの対応が出来るんですがわからないと対応のしようがないんですわ？お？」
怪しさ満点だもんなぁ。
「……まあ、そこまで言うなら、良いです。お教えします。これは、艦娘を発情させるスイッチです!!」
「だーかーらー」
なんで？（三代目感）
「いやほら、スイッチの所為にすれば、合法的に提督と合神ＧＯできるじゃないですか!!」
謎の戦国魔神推し。
「正気を失っている内なら酔った勢いみたいな感じで済みます！勿論、皆んなの同意は得てます!!……大半は」
「いやいや、そんなやり方……」
「もう限界なんですよぉーーー!!!提督が好きで好きで堪らないんですよ!!!何でも良いから抱いて下さい!!!」
なりふり構わなくなってきやがった!!
「明石、初めては無理矢理とかじゃない方が良いぞ？後々後悔するからな」
「んもー！提督優しい！抱いて!!」
「はいはい」
抱きしめて誤魔化す。

んー、そろそろ限界か？
上手く躱してきたと思うんだがなぁ。
別に、今の関係が壊れる云々とか、そう言う乙女チックなセンチメンタリズムはありゃしない。
ただ……、
「……取り敢えず、長門さんと、武蔵さんはスタンバイしてます！陸奥さん、大和さんは、まあ。榛名さん以外は金剛型からも了承が！重巡は羽黒さん以外は大体大丈夫でしたし、軽巡は大井さんが怒って、川内型が恐縮している以外は問題ありません！駆逐艦は、アレです、よく分かってない子が多いのであんまり声をかけませんでした！」
多い多い多い多い!!!
「海外艦もオッケーだそうです！潜水艦など、その他の艦娘からも承認されました！」
数が多過ぎる!!!
良く考えろ、百人近くいる艦娘のほぼ全員と関係を持って維持しろってことだからな!!!?
そんなん、プロの駄目人間であるこの俺を以ってしても無理!!!
最終的に首だけになった俺が艦娘に抱えられてｎｉｃｅｂｏａｔに決まってるだろ!!!
……と言うか、百人近くを抱くとか物理的に無理では？十人くらいならまだしも、百人って。全盛期の加藤鷹でも無理でしょ。
「提督がいけないんですよ……？私達をこんなに愛してくれて……」
「スーツの提督が決め手でしたね。あんなカッコいい姿を見せられると、もう、グレート合体したくなりますよ!!」
え？スーツ？あれダサくなかった？
「まあ、それはさておき！さあ！押して下さい！早く!!」
「いや、押す訳ないじゃん？」
「じゃあ私が押します!!えーい!!……あら？」
ん？変わらねーぞ。
「ま、まさか?!既に発情しているから意味がないと?!!何てこと……、失敗です!!」

「淫ピの影響がここで出ちゃいましたね、明石さん……！」
ええ……（困惑）。
「くっ、これじゃ駄目です！提督、このスイッチを預かっておいて下さい！次こそはもっと凄いものを作ってみせます！」
「私も手伝います、明石さん！」
あ、走り去って行った……。
……まあ、楽しんでるなら、良いか。
「他人に迷惑はかけないようになー」
「「はーい!!」」
「「（迷惑をかけないとは言ってない）」」

１３５話　狩人の夜

「……で、これ、どうすンだ？」
「……どう、って……」
「提督、腕が生え始めてるみたいだし……」
「聞いて来たよ」
「あ、時雨姉貴」
「好きにしてオッケー、だそうだよ」
　好きにしてオッケーったってなぁ……。
「本当に、どうすンだ？これ……」
　斬り落とされて尚、人肌に温かく。滴れる血は乾かず。筋肉の硬直もない。
　提督の、斬り落とされた右腕……。

　先日、鎮守府に現れた謎の外人が、中庭で提督と死闘を繰り広げたんだ。
　皆んなで加勢しようとは思ったけど、提督が手を出しちゃ駄目だって言うから、戦いを見守ってたんだけど……。
　提督、とんでもねぇ無茶をしやがった。
　剣戟の雨霰の中を突っ切って、あのバケモンの土手っ腹に爆弾ぶち込んで、自分ごと吹っ飛ばしたんだ。
　思わず笑っちまったよ。
　この鎮守府の艦娘は皆んなイかれてるし、この江風自身もイかれてる自覚はあるぜ？
　でも、やっぱり、一番ブッ飛んでんのは、提督なんだよな。
　……だからこそ、皆んなあの人に着いて行くんだけど。
　本当、スゲーよ、あの人は。
　姉貴達が狗になった理由がよく分かる。
　どんなことだって涼しい顔でこなしちまうんだ。バカやってばっかりだけど頭は良くって、度胸もある。器もデカいし底抜けに優し

い。あの人に着いて行けば、深海棲艦も皆殺しに出来るだろうぜ。
兎に角、スゲー。スゲーんだ。

……だから、私も狗になることにした。

自分でも、イかれたことを言ってんのは分かってる。
だけどよ、思うんだ。
「艦娘の幸せ」って何なのか、って。
私達は艦娘だ。人間じゃねえ。
でも、明石さん達が言ったみたいに、完全な道具って訳でもねえんだ。……出来は悪いけど、一応考える頭は付いてるし、感情ってもんもあるしな。
でもやっぱり、人間じゃあねえんだよな。普通の人間ってのはよく分からないけど、戦いが日常で、殺す事殺される事を恐れず、んで、人よりも強え身体で生まれた……。
道具でも、人間でもねえ。
それが艦娘ってもんだ。
道具なら、大切に使われりゃ幸せだろう。
人間なら、愛し愛されると幸せなんだろう。
でもよ、どっちでもねえ私達はどっちの幸せも得られないんじゃねえのかって思ったんだ。
じゃあ、艦娘の幸せってのは何なのか？足りない頭捻ってよーく考えてみた。
……で、やっぱり、行き着いた先は姉貴達と同じだ。
……「狗」
あの人の、提督の狗として生きる。
つまり、「道具として」戦って提督の役に立って、「人間の女として」提督に寄り添う……。
何てこたぁない。
半分道具半分人間。
「艦」と「娘」。

つまりは狗だ。「艦」の部分で敵を殺して「娘」の部分で考える。「艦」の部分で整備され「娘」の部分で飼われる。そして、「艦」として持ち主を愛して「娘」として男を愛する。

ほらな？

幸せじゃねえか。

道具としても、女としても幸せだ。

二つの幸せが得られるんだぜ？１＋１は２じゃないぞ！私達は１＋１で２００だ！１０倍だぞ、１０倍!!

「あら？どうしたの、江風？」

「ん×ああ、何でもねえよ、海風の姉貴。……ただ、幸せだな、って思ってな」

「ふ×ふ、そうね、私達は、きっと世界で一番幸せよ……??」

×××

×

「どう×しようか？」

「保×存しましょう」

「どう×やって？」

「血×を抜いて、骨を削り、肉を掻き出し、剥製にしましょう」

「血はどうする？」

「血は輸血。司令官と同じ血を通わせましょう」

「骨はどうする？」

「骨は加工。装飾にして身につけましょう」

「肉はどうする？」

「肉は摂食。愛するあの人に近付きましょう」

「ああ、ああ、それは良い。素敵だ、とてもとても素敵だ……」

……決まったみたい。

決めたのは、そう、時雨姉と春雨姉。

あたしより賢いから、白露型で色々考えて色々決めるのはこの二人だ。

海風も賢いけど、まだ少し「足りない」らしいし、江風はそもそもあんまり考えてない。
因みに夕立姉は何も考えてない。

「メスはあるかな、春雨」
「はい、時雨」
「ありがとう」

目の前で、愛しい人の片腕が着々と加工されていく。
皮を剥がれ、肉を切られて、神経を引き抜かれていく。
けど、不思議と、嫌悪感は無い。

……少し前まではそれがたまらなく嫌だった。
自分を人と変わらない、温かさのある生き物だと信じたかったから。
流れ出る血を悲しみ、折れた骨を苦しみ、裂ける肉を恐れる。
そんな普通でありたかった。
人間になりたかった。

今は、違う。
違かった。
気付いた、とも言えると思う。

結局、どう取り繕っても、あたしは艦娘だった。

背負った艤装は冷たく、そして重くのしかかった。でも、酷く身体に馴染んだ。
手にした刃は悍ましく、そして血に塗れていた。でも、これ以上無く頼もしかった。
戦場の風は痛ましく、そして憎悪に満ちていた。でも、でも……、そこで戦うことは、驚くほどに自然だった。

戦うのは恐いけど、耐えられない訳でもない。
怪我すると痛いけど、気を失う程でもない。
殺すのは嫌だけど、罪悪感も、そして、苦痛もない。

提督はいつも言う。
「振り上げた拳は、殴った相手と同じくらい痛い」、と。
言いたいことはよく分かる。あの人は優しい。温かい人だ。
でもあたしは、あたしにはそれが分からなかった。どんなに戦っても、どんなに殺しても、私の手は痛くなかった。
痛くなかったんだ。

「綿を詰めて……、完成だ」
「うん、綺麗。とっても、綺麗」
「では、この肉を」
「そうだね、肉を」

きっとあたしは人にはなれない。
冷たい艦娘のまま生きると思う。
辛くはない。むしろおかしいのは今までの人生だ。人じゃないのに、無理に人になろうとしていた、今までの人生。
まるで、「自分を人間だと思い込んでいる精神異常者」だ。
「あたしは人間だ、誰が何と言おうが人間なんだ」なんて。

「いただこう」
「いただきましょう」

それでも。
そんなあたしにも、提督は温かさをくれるから。
言うなれば熱平衡だ。
冷たいあたしに沢山の熱を注いでくれるんだ。
だから……。

×
×
×
×
×
×
×
「あたしはきっと、幸せだ」
×
×
×
×
「……うん、うん。金色の陽だまりの味がするね。それと微かな青空だ×原始の海の茜色と凪いだ白い風が見える。いや、観測していると言×た方が正しいかな？兎に角綺麗だ。悍ましく綺麗だ。」
×そうだね、「見える」と言う表現は違う。観測する？かな？でも、感じ取るとも、入り込んでいるとも言える。……もっと厳密に言えば、それ専用の新しい瞳を内側に創造して、それを以って俯瞰する。そんな感じ。
もっとも、感じ取る方法や感覚は個々によって異なると思う。僕は、平たく言えば見ていることになるし、
「味は熱で蕩けた流星？匂いは香ばしい月、涼やかな熱帯の樹木で、優しい果実と肉の迷宮？……うーん、提督の「中味」は入り組んでるっぽい。薬と、呪と、気とが混じって、「ヒト」の部分が分からないっぽい？でも、凄く、凄く、素敵な匂い……」
夕立は嗅ぐことになるらしい。
「猛禽と渡り鳥の鳴き声の間の子みたいな味……??小人の笑い声でもあるけど、同時に狼の歓声みたい??讃えているのは讃美歌かしら？でもこれじゃ狂騒ね??それなのに冬の革靴の静けさと踏みしめられる雪の音だもの、可愛いなぁ??」
春雨は聞いているみたいだ。
成る程、どうして。
言葉は曖昧で陳腐だけれども、皆んなの感じたものは多少の差異はあっても同じだね。
「海風、理解出来たかい？」
感想を求める。今の所、一番見込みがあるのは海風だ。その調子で賢い犬になって欲しい。
「味、味は、人じゃない、獣でもない、ですね。かと言って上位者でもない、ような？でも、強く、確かな生命を感じます」

と、肉を嚥下した海風は呟く。
「それで？」
「……そう、ですね、そして、自然の……、太陽を中心に、遍く自然の要素があるように思えます」
……うん、まあ、良いかな。
「そうだね、概ね合っているよ。まだもう少し、深く見れるともっと良いよ」
「は、はい」
太陽は、そう、波紋法、だったか。それに自然は仙術だろう。
他にも、変異した細胞や捻じ曲がった遺伝子、妖魔の気配……、特に鬼、吸血鬼、悪魔、邪仙、天狗。でも、神の加護もある。そう言ったところも感じ取るには、まだまだ「足りない」か。
だけど、おあいこだよ。僕もまだ、提督の全ては見えていないからね。ふふ、底が知れないね、提督は。
提督のお陰で、僕の思考はとてもとても高い次元まで上がったけれど、それでもあの人のことは分からない。でも、知る余地がある、と言うのも素敵なことだよ。

ん？
見えるね。歩いてくる。工房の外、ドアの前。
鉄を纏う、血に染まった、群青の狼だ。
「……工房に、白露型に用かい、三日月？」
ドアが開く。
「こんにちは、時雨さん。事件だそうです」
「事件？」
「鎮守府内に謎の化け物が現れました」
「……何だって？」
すかさず瞳を拡張する。……見え過ぎるのは良くないからね、普段は最小限しか感知しないようにしているんだ。
「……これは?!」
上位者?!何故?!

「時雨、いる、いるよ、奴らだ」
顔を顰めた夕立が吐き捨てる。どう言うことなんだ、一体?!
「それと、その化け物について、司令官からのメッセージです」
小さなテープから音声が流れる。提督の声だ。
『今回の話のオチが思いつかなかった……。広げ過ぎた風呂敷は最早畳めん。ぶち破るしか無いのだ!・石川賢みたいに!・石川賢みたいに!!』
『ゲッターロボも虚無ったしな。悲しい。流石の俺も石川賢先生が死んだ時は泣いたよ。でもまだ虚無戦記読んで無いんだよな』
「……成る程」
凄い、この僕の啓蒙を以ってしても、微塵も意味が分からない。
「その、三日月?提督は、具体的に何をしたんだい?」

三日月は、重々しく口を開いた。

「……コーラにメンシスを入れました」

「コーラにメンシスだって?!!」
「コーラにメンシスっぽい?!!」
「コーラにメンシスだなんて……!!」
「そんな、コーラにメンシス?!!」
「メンシスって何だよ」
「何でコーラに?」
こ、こうしちゃいられない!
「皆んな!・狩の時間だ!!!行くよ!!!」
白露型の狩を知るがいい!
「「「はい!!!!!!」」」

ああっ、全裸の提督がアメンドーズに振り回され、と、飛んだぁーーー!!?!!

１３６話　クラウドブレイカー

「……ん、ここ、は……」
……ドック、かしら。
傷を負うことなんてもう殆どないから、凄く久しぶりね。
……あら？
そもそも、何でドックに？
出撃……、やられた覚えはないし、演習も違う。
ええと……。
そう、だ。
思い出した。
私は、司令官の血を……！

「あ、おはよう叢雲。やっと起きたか」
その、声は……。
「し、司令か、あああああああああい?!!!」
は、はははは、裸ぁ?!!!
何でドックの壁に突き刺さってんの?!!!
「取り敢えず助けてくれない？某有名エロフラッシュみたいな感じになってるから。俺の壁尻とか誰も得しない」
「何言ってんのよ!!!?」
相変わらず訳が分からない!!
……と、兎に角助けなきゃ。
「それっ！」
「おお、抜けた抜けた。ありがとねー」
「……って、ボロボロじゃない?!!」
何でこんな酷い怪我を?!
「死な安」
「は？」
「死ななきゃ安い」
「高くついてるわよ!!」

レーダーも何も使わないでも分かる。ボロボロよ、これ！ただでさえ、この前の謎の中東系の男との戦いで片腕と内臓を失ってるのに！
艦娘でも死んでもおかしくないくらいの怪我じゃない!!
「よく見てよ、全然余裕だからマジでマジで」
《ＨＰ：１》
「どの辺が?!!顔の横にＨＰ：１って書いてあるけど?!」
「……今にも燃えつきそうなオレの生命だが……、人形ごときにとらせてやるほど、安くはないっ……!!!」
「刃物がかすっただけでも減るようなポイントじゃないの!!!」
立つことすら出来てないわよ?!
「そんなことより、身体は大丈夫か？俺の血を舐めたんだろ？艦娘だし、あまり問題はないと思うが……、心配でさ。見舞いに来たんだよ」
「いやいや！あんたが大丈夫?!」
逆じゃない?!
何であんたが見舞いに来てんのよ!!

……て言うか。
「……気持ち悪くないの？」
「え？体調は悪くないけど？」
「そうじゃないわよ！……私は、あんたの血を……」
……あの謎の男との戦いの最中。司令官の血がばら撒かれた。剣を振り抜かれる度、司令官の血肉が宙を舞った。
……私は、それを……。
「ああ、美味しかっただろ？」
「……は？」
「俺の身体は仙人に近いから、半ば神霊に近い艦娘にとっては美味しく感じると思うよ？」
「……何言ってんのよ！あんた、間接的にとは言え、食べられたのよ?!怖いでしょ?!引いたでしょ?!……私のこと、嫌いに、なった、でしょ……!!」
化け物だ、私は。

大好きで大好きでたまらない人の血肉を……！
「えー？別に？知り合いの妖怪にはよく食べられるし。ほら、これ見てみ？昔会った吸血鬼の子なんだけどさー、会う度に血を吸われるんだよねー。ま、可愛いから良いんだけどさー」
「……は？」
見せられたのは、犬歯の長い、金髪をサイドテールに纏めた女の子が、司令官の首筋に噛み付いている写真。
「この子は幻想郷で会った子で人食い妖怪、こっちの吸血鬼はお空の世界で会ったんだよねー」
司令官に齧り付くリボンの女の子、手首に歯を立てている頭に羽が生えた女の子。
「……は？」
「は？じゃないが？」
「はぁぁぁぁ?!!」
何てこと、余所の女の子と嬉しそうに……！
「何なのよそのアルバム?!!ふざけてんの?!!寄越しなさい!!!」
こんな、こんなもの!!!
「あ、駄目、それ、グロ注意」
「こんなに一杯の女の子を取っ替え、引っ、換、え……？」
少しページを捲れば、巨大なトカゲに食い千切られている司令官。溶岩を纏う巨大蜘蛛に抉られる司令官。火傷顔のロシア女が率いる軍隊に集中砲火される司令官。白いドラゴンの吐く息で結晶化している司令官……。
「何よ、これ……」
「え？ゲームオーバー集的な？」
「いやいやいやいや！死ぬでしょこれ?!どう考えても死ぬわ!!」
「でもそれってあなたの感想ですよね？」
「一般論よ!!!」
浮気か、と疑った最初の女の子達との写真も、冷静になってよく見る。
「この子は？」

「んー？だからフランちゃんだよ。かわいいだろ？」
「……ねえ、もしかして、この背景に写ってるの……」
「背景に写ってる内臓あるじゃん？あれ全部俺のなんすよ（笑）」
「笑い事じゃないわよ!!」
　よく見ると、噛み付かれている写真の背景には赤黒い内臓が、明らかに人一人分以上散乱している。
　金髪のリボンの女の子に齧られている写真も、よく見れば、見切れてもいないのに腰から下が無くなっているし、頭に羽が生えた女の子の写真も、司令官が赤いシャツを着ているんじゃなくて、とんでもない量の出血をしていることが分かる。
　これじゃ、まるで……。

「俺の方が化け物？」

「ッ?!そんなことない!!」
　あんたは化け物なんかじゃないわ！
「……要するに、気の持ちようだと思うんだけど。俺、仙人だったり妖怪だったり超人だったりするけど、それでも気持ちは人間だもん」
「……自分は自分だって、思うことが大事ってこと？」
「そうそう、その通り。……結局、最後にモノを言うのは気持ちだよ。どんな行動を取ろうが、胸を張って自分だって言えるなら、それで良いじゃない？」
　胸を、張って？
「悪の組織だってそうさ。他人に悪と罵られても、自らの野望の為に日夜努力する……。でも、胸を張って生きている。自分の進む道が正しいと信じている」
　でも、私は……。
「正しくないことを、したんじゃないかって……」
「正しいかどうかは自分自身が決めることだと思うよ？……因みに俺は何とも思ってない、だから気にしないで欲しい」
　どう、なのかしら。一般的に言えば、正しくないことをした。けど、

それは一般的に言えばの話。
私は、私なら、司令官に噛み殺されても許せるけど、司令官は？司令官は怒ってない？恐がってないの？
……無理ね。司令官の気持ちなんて分からない。理解出来ない。私の艦長だった東少佐よりも頭がおかしな人だし。でも……。
「……嫌われるかと、思った。あんたに嫌われたら、私は……」
私は、私じゃなくなる……。
「はは、まさか。嫌う要素が無い。俺の血を口にしようとも、叢雲が叢雲であることに変わりはないさ。そして俺はそんな叢雲が好きだよ」
「……ありがと」
そっか。
なら私は正しいんだ。司令官が好きだと言ってくれるなら、どんなことだって正しい。正当化される。
やっぱり、司令官は司令官だ。
こんな私のこと、好きでいてくれるんだ。
「ほらほら、元気出たなら行くよ、叢雲！」
「ええ！」
「……うん、叢雲は不敵に笑ってる姿が一番だな！」
そうね！
私がしっかりしなくちゃね！

「で、行くってどこに？」
「いや、前回コーラにメンシス入れてさ」
「……つまり？」
「今回もオチが無かった。故に天丼。ギャグの基本ではないかな？まあ一般論でね？決して使い回しではない」
非常に遺憾だけど、司令官は賢い。普段の行動や会話に知性は感じられないけど、世界各国の言語を覚えていたり、法律や経済だったり、文化だったりと知識は多岐に渡る。だから、何を言っているか分からない時がたまにある。
「その、悪いけど、私にも分かるように言ってくれるかしら？」

「最初はオチを付けるためだけの軽率な行動だった。ここまでならまだ1アメンドーズで済んだんだ。だけど、途中から俺の少年ハートがかっとビング。メンシスコーラに儀式素材をシュー!!超エキサイティン!!!その他諸々をエクシーズ召喚してしまってな」

くっ、駄目ね、これっぽっちも理解出来ない。

「あー、その、結果だけ言ってくれるかしら？」

「あれです」

指差された先を見ると……。

……『ーーーー!!!!』

……「ハッ、旧主の番犬！犬っころ同士仲良く殺し合うっぽい!!

……月光よ!!煌めけ!!!」

……『ーーーーー!』

……「不味い！アメンドーズのレーザーだ！皆んな避けて!!」

……『ーーーッ!!!』

……「矢せろ、白痴の蜘蛛め!!!」

「……」

「本当にすまない（ジークフリート感）」

「この……、お馬鹿！この……!!」

よく分からない何かがウチの庭で大暴れしている。その原因はウチの主人が調子に乗って呼び出したから。笑えない。

「て言うか前も同じようなことやって執務室ごと爆発したじゃないの!!何で懲りないのよあんたはーーー!!!」

「オレは男の価値というのは、どれだけ過去へのこだわりを捨てられるかで決まると思っている（鰐並感）」

「〜〜〜〜〜っ!!!」

呆れて物も言えないとはまさにこのことね……。

「まあまあ、落ち着きなよ。俺必殺の獣王会心撃で……、あれ？立てねえ。あ、そっか、怪我してるわ俺。詰んだわ」

とびっきりの大馬鹿だ。でも、でもね？

「……はぁ、もう、しょうがないわね！私が全部殺してきてあげるんだから！任せなさい！」

そんな大馬鹿が好きでたまらない私は、もっと馬鹿なんだなって思うわ。

１３７話　地中海奪還作戦　強行偵察編

「ん？何だ？これを読めば良いのか？何々……、『旅人はですね、基本的に三千世界の、あらゆる地域に過ごしていまして、若干や危険が、多いところなので、そう言ったところで逃げやすいように旅人、あの、筋肉質な個体で。であと背も大きいので、死なないように。生存力ぅ……、ですかねぇ……（曖昧）。強い攻撃を、スッと、防御できる変人でして、結構危険なところが好きなので、軽々と１０発２０発は余裕で防御してくれますね（信頼）』……何だこれ？」

《くろいちんじゅふ　はつづきおねえさん（にほん）》

「何だこのテロップ?!!」

「はい、ＯＫでーす」

「頼むから……っ！真面目に……っ！真面目にやってくれ……っ!!」

　おかしいな、真面目にやってるつもりなんだが。

「まあまあ、お茶でも飲んで落ち着きなよ」

「それどころじゃないだろ！」

「ああっ、茶筒ー!!」

　そんな、奪われてしまった！

「初月、お茶淹れるの上手いな。もう少し濃い目だと尚良しだぞ」

「ん、分かった……、じゃなくて！戦闘中だろ！」

　戦、闘？

　何かな、それは。今はティータイムではなかろうか？ティータイムで良いじゃん。イギリスならティータイムだ。

「……と言うより、俺、何もやってないじゃん」

　戦闘？いいえ蹂躙です。偵察と言ったはずがまるで容赦のない殺戮を始める我が黒井鎮守府の艦娘の皆さん。

　目の前の初月は俺の護衛らしい。……だが、深海棲艦が感知範囲に入った瞬間に殺害されるもんなので暇そう。今はお茶汲みをしている。

「普通はそうだろ？むしろ、お前が前線に出ることの方がおかしいん

だからな？」
「そうかねぇ……」
　クソ寒い冬の海の上、熱いお茶を飲むという贅沢。女の子を戦わせて自分はダラダラなんてしたくはないが、実際、出来ることがマジでない。皆んな、俺が深海棲艦に何かする前にサーチアンドデストロイするから。
「いやー、海が赤いなぁ」
　どんだけ殺してんだ。さっきから深海棲艦の肉片が流れてくる。
「……色の違いが分からないんだが」
「そうか？結構赤いと思うけど」
　ま、良いか。
「敵はもういないみたいだし、帰る？」
　……今回の遠征の目的、それは、奇襲作戦前の偵察だった。
　奇襲作戦というのはあれだ。前に言ったように、深海棲艦は日本近くの海域からほぼ撤退しただろ？そして、俺達の見えない所で力を付けている、とも言った。……要は、それを見つけ出し殲滅する作戦のことだ。
　しかし、まあ、俺はこの作戦に反対なんだが。何故なら、戦況はとっくの昔に安定していて、とりあえずだが近隣の先進国の海路は安全を確保したし。このままじわじわと支配領域を広げていけば良いんだから。何も急ぐ必要はない。
　だから……。
「態々地中海まで来る必要あったか……？」
　と、言う感じ。
　俺としては、今支配している領域の更なる保全と、近場の海域の解放を目指したい。日本近海にだってはぐれ深海棲艦は湧いて出るしね。そう言うところからまずどうにかしたい。いたずらに支配領域を広げても管理が大変だしな。
　でも、ウチの艦娘にとっては……。
「深海棲艦は見つけ次第殺せ！提督の海を汚す豚共を始末しろ!!」
「どうした瑞鳳?!言葉遣いが変だぞ?!」

兎に角、殺したくて仕方がないらしい。なるほどな、日本近海にちょっかいを出してくる程度の深海棲艦じゃ骨がない、か。いや、愛故になのか？それとも護国の為？まあ、個人個人で戦う理由は違うだろうが……、とっとと深海棲艦を全滅させたいみたいだな。

だが、あくまで偵察だ。

「もー、はいはい！全員集合!!帰るよ！帰るってば!!」

「あら？どうしたの、提督？疲れちゃった？良いのよ、休んで。貴方、頑張ってるんだから！……膝でも貸そうかしら??」

「ああ、大丈夫だよ、五十鈴。また後でお願いするね」

「どうかした？司令官」

「おお、弥生。いや、今回は偵察だから。もう終わり、帰るの！」

と、偵察を頼んだ艦娘を呼び集め……、

「この大和にお任せ下さい！」

「ふはは、この長門が来たからにはもう安心だ！」

「鎧袖一触です。早く終わらせて夕餉にしましょう」

「ぱんぱかぱーん！」

「はっ、川内型二番艦神通、ここに」

「見てくれ司令！俺、やったぜ！」

おっかしーな、偵察組に入れた覚えのない艦娘がちらほら。

『ガァァァ!!!!』

「貴方……、消えて下さい」

『!!!……ガ、メイ、レイ、メイ、レイ……ハカ、イ……』

「だから……、ごちゃごちゃうるさいんですよ」

『!!!……カン、ム、ス……ハカ、イ……』

「……へぇ、まだ生きてる」

と、何故かいる三日月。

それに、

「……ここか？」

「ひゃん！つ、捕まっちゃいました??えへへ」

「おわっ?!見つかっちゃった？」

羽黒と川内が直ぐ近くに隠れていた。
「何なのマジで？偵察だよ、偵察？」
戦艦空母までいる。過剰戦力。
「いや、提督。よく考えてみた所、皆で偵察をしてみて思ったんだが、このまま強襲するのが一番と言う結論になってだな」
ん？え？長門？その、作戦立案と実行を両方やられたら、俺の仕事マジでないよ？アニメ版の提督みたいになりたくはないよ、俺？
「ここには、旅人号を中心に、明石の移動工廠船や夕張の重装戦艦、その他補給物資を積んだ船があるのだ。ここを前線基地するのはどうだろうか」
勝手に持ち出し……、あ、いや、旅人号は俺のだけど貸し出していて、明石と夕張の船は本人達のだし、補給船も鎮守府の備品みたいなもん。んー、あー、問題ない、のか？
「鎮守府自体の防衛と、日本近海の警備は？」
「問題ない。半分以上の艦娘が鎮守府に残っているからな。鎮守府自体の防衛システムも過剰なくらいだ。……それに、もしも何かあれば、旅人号のV．O．Bで即座に帰還出来る」
ほむ、「」確かにな。
「だがまあ、面倒なものだ。毎回毎回、遠征となるとこれだからな」
そうそう、そうなんだよ。あんまり遠くに行きたくない一番の理由は、これ。
大掛かりになるからだ。
良く考えろ、艦娘は、常人より体力気力があるとは言え、限界はある。故に、補給物資や休める場所は重要。ローテも組むからそれなりの人数も欲しい。な？面倒だろ？だから、長距離の遠征は最小限にしているんだ。
でもそれだけ。不可能ではない。
「まあ、三日もあれば終わるでしょ。取り敢えず、旅人号周辺の敵は全滅で、偵察も終わったし、今日は休もうか」
「ああ、了解だ」
結局、偵察のつもりが強襲になっちまったな。でも、俺は困らない

×
×
し×良いか。
×深海棲艦は困るんじゃない（適当）？
×
×
×
「ふ×い×ー、夜戦、夜戦、と」
「ほ×らほらー！気合い入れてくよ!!夜戦夜戦ーーー!!!」
×うへぇ、スンゲェ体力。川内さんには敵わねぇなぁ。
「ほ×ら、気合い入れろ、嵐」
×振り返ると初月。腐れ縁だが、俺の背中を任せられる、真面目な奴だ。
「分かってるって、うん。……それよりお前、付いてこなくても大丈夫だぞ？休んでて良いんだからな？」
のわっちも、萩と舞も来てるんだぜ？
一人ぐらい退いても、なあ？
「ふん、気遣いはありがたいさ。でも、その必要はない」
「けっ、かわいくねーなぁ！もっと愛想よくしなきゃ司令も振り向いてくれないぜ？」
「なっ?!そ、そんなことない！提督は僕のこと、何でも分かってくれている！」
「どーだかなー？」
へへへ、初月は真面目ちゃんだからな、からかい甲斐があるな。司令の言った通りだ。
お、深海棲艦の艦載機か？へー、深海棲艦も夜間でも艦載機を飛ばせるんだ。
でも、まあ、何でもいいや。
「墜ちろ」
初月が振り向きもせず、対空砲火。
あんなもんは蝿だ、ウチの鎮守府の空母と比べたらお遊戯にもならない。
「敵、近いみたいだな」
「ああ、らしいな」

「作戦は前線基地の防衛だ、とっとと終わらせようぜ」
「防衛なんだから、早く終わるも何もないだろ？」
「そうか？でも……」
その時、
『『ーーーーーッ!!!!!』』
咆哮が二つ。
「……でも、アレを殺ったら一応は終わりじゃねーかな？」
「……かもな」
湧いて出たのは鬼クラス。泊地棲鬼、か？オリジナルと違って色々と弄られてんな、よく分からん。
「泊地棲鬼、っぽいな。オリジナルと違ってゾンビみたいだ」
裂けた口に複眼、増加した主砲、肥大化した下部ユニット……。差し詰め、泊地棲鬼「改」ってところか。こいつ一体で並みの鎮守府なら更地にできるんだろうな。
「……ウチが匿っている深海棲艦のいる離島で聞いた話だが、泊地棲鬼は古株らしい。だから、劣化とは言えコピーされる程に深海側にデータが残っているんだろう」
……難しい話はよく分からないけども、要はコピー体らしい。
深海棲艦を生み出してるやつ……、やつ、なのか、場所、なのかも分からないけど、まあ、兎に角大元がある。その大元……、呼び名がないと困るんで「深海」って呼んでるんだけど……、その深海ってのが俺達の敵、らしい。正体は謎だ。
ええと、その、深海ってのは要はこっちで言う「提督」みたいなもんで、海の怨念やら何やらで深海棲艦を召喚して、人類にけしかけてるんだとか。
「最近は既に、南方棲戦鬼と空母棲鬼、離島棲鬼の変異種……、鬼クラスの「改」が出回っているらしいな。全く、その度に救援だ何だと世界中に行く羽目になるからな。こっちの都合も考えて欲しいものだ」
「でも、コピーとは言え鬼クラスの改なんてそうそう出ないだろ？司令が言ってたぜ？「鬼クラス以上は大和型建造するみたいなもん。気安くは無理」って」

その鬼の改が何でここにいるんだ？
「……さあな。戦力の全体像を把握されないためなのか、ここで戦力を蓄えていたのか……、それとも新型のテストなのか。一兵卒の僕に聞くなよ」
そう言って、盾と一体化した剣を構える初月。
「考えたって仕方ない、か。良いぜ、簡単だ。悪は殺す……、それだけだ」
俺は意識を切り替える。
戦う為のスイッチだ。
姿形が変わる訳じゃねえ。けど、確かに、俺は変わる。
イメージは炎。真っ赤に燃え上がって、邪悪を打ち倒す戦士。
司令に笑顔でいて欲しい。それだけを想う。
だから、
「だから、見ててくれよ……、俺の……！」
変身！

１３８話　地中海奪還作戦　夜間警備編

「っ、おい、先行するな！連携して……！いや、良いか。嵐なら大丈夫だな」
改造改修の結果か、艤装の脚底部から高熱を発し、蒸気の足跡を残して駆ける嵐。
腰の探照灯は夜の闇に溶けることなく、炎のように赤く輝いている。
「……まあ、態々連携する必要もないしな。馬鹿げた話だが、黒井鎮守府の艦娘の個々の実力は異常なものだ」
戦艦なら、鉄壁の防御と理外の膂力。
重巡軽巡なら、心技体の総合力。
僕達のような駆逐艦なら、卓越した技量と桁外れの速力。
……故に、駆逐艦の多くは、艤装を大きく改造改修し、不足しがちな火力を高めている。
特にその中でも、陽炎型は異質……。
「おぉりゃあ!!!!」
……素手なんだ。
確かに僕達は、度重なる改造改修で、身体能力も高まっている。しかしそれでも、正面切って肉弾戦をするには心許ない。
だが、僕達は、駆逐艦は馬鹿ではない。
陽炎型も然り。
実のところ、駆逐艦の最も大きな強みは、技量でも速力でもなく……。

『シィ……、ネェ……!!』
「超変身!!」
『……!!?』
「個人個人の特異性」なんだ。

「こっちだ、深海棲艦!!」
『?!!』
嵐の探照灯の光は、炎の赤から流水の青。一瞬で泊地棲鬼を飛び越えた。

……例えば島風。集中と同時に全ての出力を速力に回し、視認されない速さで駆ける。
……例えば曙。ジャバヴォックと称される右腕の手甲に機能を集約。圧縮空気、電磁誘導などによる異常な威力の砲撃及び鋭利な爪。
……例えば電。少林寺拳法とそれに合わせた艤装の柔軟化。伸縮自在の龍を模した手甲。旗のような槍。
駆逐艦は一芸に秀でるんだ。
そして嵐は……、
「まだまだァ！行くぜ！超変身!!」
超変身……。
艤装出力の即時変換による戦闘スタイルの急速変化。
今、嵐の探照灯の色は大地を司る紫。この場合、艤装のエネルギーは装甲とパワーに振り分けられる。
「折れ、ろぉ!!」
『ギィ……?!!』
この時の嵐の腕力は、戦艦に匹敵するだろう。
その力を以って、泊地棲鬼の砲を一本、無理矢理に引き千切る。
「はっ、丁度いいな、これ。「貰う」ぜ……！」
そして、嵐の手にある砲は姿を変え、紫の両刃剣に作り変えられる。
これが嵐のもう一つの特異性。導き出した答え。
……モーフィングパワー。
詰まる所、武器の現地調達だ。触れた物質を再構成して自分の艤装に変換する。強力な能力だ。
「オラ、返すぜっ!!!」
『ーーーーッ!!!?』
泊地棲鬼の腹部を貫く紫の剣。

引き抜くと同時に蹴り付けて跳躍。そして、
「超変身！」
今度は疾風の緑だ。今の嵐には世界が止まって見える。
「……そこだ!!」
ミリ単位の精度で放たれた砲撃は、泊地棲鬼の弱点を正確に貫いた。
腹の傷口、瞳、口内、関節、装甲の接合部……。
緑の時は砲撃の威力も向上しているらしく、泊地棲鬼の肉体はほぼ破壊された。
「トドメだ……。超変身！」
再度赤へ。
両手を広げて腰を落とす。
……ああ、また「アレ」か。
艤装の出力を脚部に集中。海の上に炎が走る。
そして飛翔。
一回転。
「うぉりゃあああああ!!!!!!」
……蹴撃。
破壊の一撃。
所謂、必殺技だな。
「なんだよ、こんなもんか？これなら、「金色」も「黒色」も使わないで済むな」
奥の手、使うまでもなかったみたいだ。
でもな、緩すぎる。
「油断するなよ、ここは戦場だぞ？」
「あー、分かってる分かってる。……初月こそ油断を……」
「ふん、僕は油断なんて……」
後ろか。
「していないさ」
甘いんだよ、深海棲艦。盾で防ぐ。
全く、今度は僕の番、か。

×
×
×まあ、いいさ。
×見せてやる、僕の力を……！
×
×
×
×あ、やっぱ気付いてたか。
×後ろに深海棲艦がいる、油断するなって言ってやろうかと思ったんだけどな。
×余計なお世話だな、そりゃ。
しかしよ、構えたのは盾だぜ、盾。
ウチの駆逐艦は皆んな何かしら凄い技を持ってるもんだけど、初月は……、秋月型は変なんだよ。
だってよ、深海棲艦とインファイトするんだぜ？
いや、俺はそもそも、ちゃんと避けるし、どうしてもって時はタイタン……、紫の力を使うし。でも、秋月型は違う。戦艦みてえに戦うんだ。
「ゴッドライジンソード……！」
おお、いつ見てもスゲーな、盾から剣が生えてる。
「せい！はっ！とりゃあ！」
『シィ、ガッ……!!?』
ははっ、深海棲艦を斬りつけやがった。
勿論、深海棲艦だってタダじゃやられねえ。反撃だってしてくる。初月は盾で防ぐけど、相手は鬼の改良型。パワーでは負けるだろ、フツー？でも、こいつは違う。
「効かないな！」
真っ正面から受け止めちまうんだ。それこそ、長門さんみてえに。
……何だったかっけかな？夕張さんが言っていた、ネオトピアの技術、だったか。感情をエネルギーに変換する、反則パワーだ。
そんで、初月は……、
「僕の戦う勇気は提督が支えてくれる。勇気ある限り、僕は決して倒れない……！」
原動力：勇気、ってか。

はっ、ぶっ飛んでるぜ。要は気合いでパワーを上げてるんだ。普段はクールだけど、根っこの部分は熱血なんだ、こいつ。
「大事なことも、やりたいことも、新しい世界へ飛び出すスリルだって、提督が教えてくれた！だから！」
と、まあ。
戦いの時はちょっとばかりテンションが高いんだよな、初月。でも、テンションが高いってことは、
『ーーーーー！？！！』
「ハイパー！！！！」
出力が上がるってことだ。稲光が刀身に宿り、
「サンダー！！！！」
踏み込んだ。泊地棲鬼は動かない。いや、動けない。さっきの斬り合いの時、初月が盾で攻撃を受けると同時に拘束光線を当てたからだ。勿論、拘束なんて数秒が限界だ。でもよ、
「クラーーーッシュ！！！！」
必殺の一撃を放つのには十分だ。
『ーーーーー！！！！』
電熱の剣で十字に斬り捨てられた泊地棲鬼は、四つに分かれて崩れ落ちる。勝負あり、だな。
「愛する力は「絶対無敵」なんだよ。覚えておけ、深海棲艦……」
愛する力、ねぇ。
「……終わりか。巡回に戻るぞ。……何だ？言いたいことでもあるのか？」
「べっつにー？ただ愛がどうとかー？」
「う、聞こえてたのか？……。まあ、事実だからな！僕と提督が愛し合っているのは！」
は？ちょーっと気に食わねえなぁ？
「おいおい、司令は俺のヒーローだぜ？ヒーローは、同じヒーローであるこの俺と添い遂げるのが当たり前だろ？」
海だけじゃなく、世界の平和だって守るんだ。司令と一緒にな。いや、腐った政治家だの軍部だので、この世界は間違ってるからな。一

度ぶっ壊して、司令を主軸に作り直した方が手っ取り早いか？
「……馬鹿だろ、お前。提督に自分の願望を押し付けるなよ。妻って言うのは旦那の言いつけを良く聞くものだろ」
「あ”？ただ言うことを聞くだけならロボットだってできるぜ？司令は色んなことをやるのが好きなんだよ。俺が手を引いてやった方が良いね」
「……」
「……」
『『～♪～～～♪♪♪』』
　チッ、何だ、通信か。
「……はい、こちら嵐」
「……もしもし、初月だ」
『おー、こんばんわ、二人とも。そろそろ上がって良いぞ！遅くまでありがとな！』
「司令!!」「提督!!」
『はっはっはー←仲良くしてた？』
　うう、それは……。
『あら？ケンカしちゃった？……まあ、そんな時もあるさ。でも、俺は皆んなで仲良くやっていきたいと思ってるから。ちゃんと話し合ってね？暴力はいけない』
「……分かってるよ。初月は大切な仲間だ。暴力は振るわない。でも……」
『主義主張が違うのは当然だ。良いんだそれで。物事をどう考えるかは個人の自由さ。押し付けは良くない』
「……そう、だな。僕もちょっと、強く言ったかもしれない」
『皆んな違って皆んな良い、だよ。信条も愛の形も人それぞれ、ってね。余談だが愛＝破壊と考えるナチ公に会ったことがあってな。あれはヤバかった。魂レベルの破壊は結構効くからな』
「はあ……？」
　何の話だ？
『兎に角、二人とも帰っておいで？早く二人に会いたいなー』

「おう！」「ああ！」
りょーかいりょーかい！しゃーない、司令が会いたいってんだ。最優先事項確定!!
「じゃ、帰投するか！」
「ああ、提督に報告だ。……鬼の改良型を殺ったんだ、沢山褒めてくれる」
そうだな、そうだ、それでいい。
ケンカなんてしてる場合じゃねえや！
司令に呼ばれりゃ、地獄の果てにだって行くんだからな！

１３９話　地中海奪還作戦　深海会議編

『緊急会議ヨ』
ワタシの名前は集積地棲鬼、????歳。
現在、管理者としてこの地中海で深海棲艦の生産及び改良を仕切っている。
量産型の深海棲艦の生産、各地への移送、新型の開発……、どれを取っても貢献度で右に出る奴はいない。
戦艦棲姫でさえ一目置く存在だ。
だが、そんなワタシは今、一つの大きな悩みと戦っていた。
……黒井鎮守府!!

私達深海棲艦最大の敵。最大の障害。
曰く、大斧を振り回す雷巡が空を飛び襲いかかってきた。
曰く、四体の重巡が闇に溶けるように姿を消し、深海棲艦の急所を貫いた。
曰く、海中からフルスペックのアハトアハトがせり出て火を噴いた。
曰く、地味な雰囲気の駆逐艦がローラーのついた艤装で海上を不規則に滑り、全身の火器の弾丸をばら撒いた。
揚陸艦の朱槍は一振りで五体は殺す、刀一本で暴れまわる軽巡、鉄槌を振り回す駆逐艦……。
大凡入手可能な情報には全て目を通したが、あれは異常だ。化け物だ。
確かにこちらの戦力は莫大だが、あんなものと真正面からやり合いたくはない。そんなものは愚策も愚策。貯めた預金をソシャゲに突っ込むような馬鹿げた案だ。
故に仲間内で話し合い、会議を以って作戦を練る。無策で挑むことだけはしたくない。せめて対策だけでも教え込まねば。
『ソンナモンハドウデモイイ!!早ク殺ラセロ!!アタシヲ虚仮ニシタアイツラハ海ニ沈メナキャナラネェ!!!』

『レ級、焦ラナイデ。機会ハアル』
『会議？』
『何カアッタノカ？……ソモソモ何故レ級トネ級ガイル？』
相変わらず、纏まりがない。
汚名返上に躍起になるレ級と、付き従うネ級。
ボーッとしている飛行場姫。
まともなのは中間棲姫くらいか。
『何カ、作戦ガ必要ダ』
『全戦力デ潰ス以外ネェダロ?!』
ちっ、聞き分けのない。
前にあれだけの醜態を晒したと言うのに、また無策で突っ込む気なの？
……口には出さないが。こういう手合いは怒らせると面倒だ。
『ソレハ効果的デハナイワ。一部戦力ヲ地中海ノ外ヘ』
『データハ海ニ流シタダロ?!』
……確かに、造った深海棲艦のデータ、そして怨念や資材は海に明け渡し、また引き出すことができるようにしてある。黒井鎮守府の襲撃に気付いた時には、全てのデータ、全ての資材を海に還した。
だが、深海棲艦も艦娘と同じく、一度造って形になってしまえば、資材に戻すことはできないのだ。
今ここ、地中海には多くの深海棲艦がいる。私が造ったテスト用であり、改良型でもある様々な深海棲艦が、だ。
戦艦棲姫にせっつかれて造った鬼クラスの改良型、エリートが数百。フラグシップも幾らか。更には姫クラスも、テスト用だが数体、その他諸々千体以上……。
並の鎮守府なら正面から潰せるような深海棲艦をこんなところで使うのは惜しい。どうにかして他所に回したい。
『データガアレバ幾ラデモ造レンダロ?!今アンノハ使ッチマエヨ?!!ビビッテンノカ?!』
『……長イ目デ見タ場合、ココデ無駄ナ消耗ヲ避ケルベキダ、ト言ッテルノ。今アル戦力ハ殆ド出撃サセルガ、出来ガ良イノハ離脱サセル』

これだから脳筋は……。
数の上で優っていて、個々の性能では及ばない相手なんだぞ？なるべく戦力を分散、戦闘を長期化させるべきだろう？
もしも、世界中の深海棲艦と黒井鎮守府の全てが真っ向勝負してみろ。勝率は五分五分だぞ。
……今回こちらに来ている黒井鎮守府の連中も、勿論全戦力ではない。良くて半分以下くらいか。それでも、脅威だ。ここにある深海棲艦を全てぶつけて、何体か殺せるかどうか……。
そんな賭けをするくらいなら、より戦略的な手法を用いるべきだろう。

こちらの位置は未だ把握されていないようだ。因みに、エーゲ海に陣取っている。
一方、黒井鎮守府の連中はシチリア島付近にいる……、筈だ。その辺りの深海棲艦の反応がごっそり消えたから、多分そうだろう。
戦略的には、全力で交戦を避け、全軍で離脱すべき場面だが……。戦艦棲姫は、海はそれを許さないだろうな。一応でも戦わなければ。
全く、だから中間管理職なんて嫌だと言ったんだ。上司も部下も同僚も皆使えない……。
何が、「鉱物資源の豊富なエーゲ海で好きなだけ研究をしていい」だ。とんだブラック企業じゃないか。

『……少ナクトモ、ココニ誘キ寄セルコトハ確定ネ。地ノ利ガアルシ』
飛行場姫が言う。まあ、間違いではない。だが、それだけでは足りない。
ワタシの目的は、「戦力の撤退」だ。勿論、私を含めて。
一応は戦艦棲姫に救援を要請した。増援を用意するらしい。ワタシ達姫クラスが逃げることは可能だろう。
つまり、「ある程度の損害を出して」、「やられたふりをして撤退」、と言う訳だ。
……そうだ。いっそ、交戦の前に戦力を逃がすか。開発したステル

スマントを被せて、後で出発させよう。
そして……、
『考エルマデモネェ！ココノ戦力全部ナラヤレル!!』
この馬鹿。
……まあ、確かに、手の込んだ策は力ですり潰される。シンプルに、それは理解できるが。
『レ級、出撃ハマダダ。明朝ト同時ニ周辺国家ニ爆撃、ココニ艦娘ヲ誘キ寄セル』
『ア〟ァ〟？命令ナンテ……』
『協力セネバ勝チ目ガ薄クナル』
ああ、面倒だ。理性的でない奴は面倒だ。大騒ぎするレ級をネ級と共に宥め賺す。これだけでタイムロス。
『……デモ、ソウ簡単ニ来ルカシラ？罠ダッテバレバレジャ？』
ふむ、中間棲姫の言う通りだ。しかし、そんなものはどうとでもなる。
『何、奴等ハ艦娘。人々ヲ守護スル者。ナラバ、人ヲ襲エバ必ズ来ル』
適当にちょっかいを出せば来るだろう。どんなに逸脱しようとも、艦娘は艦娘。深海棲艦が人を襲うように、艦娘は人を守らねばならない。
そこを違えれば、奴等は人の世界で生きることが出来なくなるからな。人ならざる力を持って生まれた運命、か。
人という愚かしくか弱い生き物の命を守って生きるなんて私はごめんだ。
まあ、なんにせよ、「近くで襲われている国家を無視する艦娘などあり得ない」。……来て欲しくはないが、呼ぶのは簡単。儘ならないな、この世界は。

さて、仕事だ。
気持ちを切り替えねば。
まずは、警戒すべき艦娘から……。

×××××××××××
会議、会議ねぇ。
『ボーットスルナ、飛行場姫』
『アー、ウン』
長いんだよなぁ、集積地棲姫の話は。
『エー、次ハコイツ。睦月型ノ十番艦、三日月ルプスレクスダ。駆逐艦トハ思エナイパワート変則的ナ機動、圧倒的ナ戦闘センス。メインウェポンハメイスダカラ、制圧力ハソコマデデモナイ。鬼クラス以下ナラ近ヅイタラ三秒デ殺サレルガ』
プロジェクター（海面投射式、集積地棲姫作）に映る黒髪の女。
片腕を喪い胸を槍で貫かれても再起動しそうな見た目だ。
《私はまだ止まらない。止まれない》
無駄に音声付き。
《うるさいです……。貴女、消えて下さい》
なにこれ、こわい。
『中途半端ニ追イ詰メルト目ガ赤ク光ッテ暴走スルラシイ。殺スナラ一撃デダ』
《邪魔です》
ひっ、生首引っこ抜いてる……。スピード的に視認するのがやっとなのに、所謂変態機動まで……。どうするの、これ。正直、一対一で勝てるかどうか……。
『コッチハ、白露型二番艦、時雨ダ。隙ヲ突ク能力ガ異様ニ高イ。懐ニ入レルナ、絶対ニ』
《ハぁぁぁ……。血だ、血の香りだ。薄汚い屑鉄共、腐った臓腑を掻き出してやる》
うっ、内臓を……。
確実に殺すと言う点では有効かもしれないけど……。でも、これは……。これは戦ってなんかいない。一方的な狩りだ。
《見えるんだよ、僕には……。だから視界に入らないでおくれよ、不快だ。君は腐敗した同胞のような者どもを見せつけられる苦痛が理解できるかい？纏わりつく海綿だね、残酷じゃないか……》

第一、目が、目付きがおかしい。……敵を見ていないのだ。どこか遠くを、見えない何かを見ているみたいで気味が悪い。
『コチラモ、中途半端ニ追イ詰メルト自刃シテ自己強化スル。ナルベク一気ニ追イ込メ』
自刃して強化って何よ(哲学)。……あ、映像だ。……血を纏う斬撃?どうなってるのこれ?しかも発火してるし……。
『コレハ長門。ゴリラダ。無敵ナノデ関ワルナ』
雑ゥ?!
《はっはっは!効かん効かん!!その程度か深海棲艦!!》
……でも、砲撃爆撃の雨霰の中を笑いながらノーガードで歩いてる。あながち無敵ゴリラで合ってるかも……。
『コレハ陸奥。ゴリラノ相方ダ。ゴリラ程デハナイガ概ネ無敵ダ。爆発物ミタイナモノダカラコイツニモ近寄ルナ』
また雑な……。段々面倒臭くなってきてない、集積地棲姫?
《はぁい、おしまいっ、と!……全然駄目ね、そんなステップじゃ私に届かないわよ?もっと綺麗に踊りなさい?》
でも、軽いステップと同時に、長門型戦艦の超パワーで蹴りつけられた深海棲艦は、爆薬が体内で弾けたみたいに吹き飛ぶ。成る程、爆発物だ。
ゴリラと爆発物は危険。ワタシ、覚えた。
三日月は悪魔で、白露型は狩人。金剛型はヤクザ、北上大井は火力オバケ、ドイツ艦は移動要塞、菊月はイレギュラー絶対殺すウーマン……。

……ん?あれ?危険じゃない艦娘は?

１４０話　地中海奪還作戦　鉄血開戦編

「こう言う時はあれか、頬を赤らめて「来ちゃった……??」とかだろうか。ポイント高いのでは？」

『『『カエレ!!!』』』

オッハー（激寒）。

さあやって参りましたエーゲ海。近隣の陸地に爆撃と言うやたら過激な方法で呼び寄せて下さった深海棲艦の皆様には、感謝の意を込めてこの「どう考えても乳輪と下の毛が隠せないマイクロビキニ」を着せて差し上げよう。

……冬だし、結構キツイと思う。

いやあ、びっくりしたよ。今朝、エーゲ海付近の国に深海棲艦の爆撃があったって言うからさ。誘き寄せたいのは分かるけど、もうちょっと穏便に呼べないのかね。メールとか。電話とか。

「と言う訳で何かあればここに連絡をくれるかい？」

空間湾曲。集積地棲姫だったか。間近で見るとやっぱりかわいい。遠くから見てもかわいいけども。

『……ト、捕エタ!!!』

は？何？

何で掴まれてんの俺？

『コイツサエ殺セバ……!!』

あっ、殺気。

成る程、かわいい顔して俺を間合いに呼び寄せ倒すつもりだったのか。策士だ。こんなにもかわいいと、ついつい連絡先を交換したくなってしまう俺の習性を利用するとは。やはり天才か。

だが、ただではやられん。

「５メガネ!!!」

『!!!』

「か?!!!らの明太子だ!!!」

『?!!!』

どうだ!!
『……イヤ、何ダソレハ?!!何ノ意味ガアル?!!!』
くっ、ハジケが通じなかったか。
ツボはここじゃなかったみたいだ。
「くっ、すまない皆んな!!俺はここで終わりみたいだ……!!頼む、意志を継いでくれ!!!」
すまない。本当にすまない。
『クタバレ!!!』
「おっと」
危ねえな、髪が動くのか。集積地棲姫の、太く編んだ髪の先端の牙に齧られそうになったわ。
「にしてもさ、君ら容赦無いねぇ。空を覆い尽くさんばかりの艦載機に砲弾だもんな。ざっと見て千体以上の深海棲艦か。しかも、量産型鬼クラスまで……」
酷いなあ、さっきから物凄い戦いだ。
『何ヲ言ッテイル……!!タッタノ数十体デソレニ拮抗シテイル、貴様ノ艦隊ハ……!!!』
拮抗?はは、まさか。

「打ち勝つよ、黒井鎮守府は」

言うや否や、弾き飛ばされる集積地棲姫。
『グッ?!!』
「いけませんね……。人の旦那様を奪っては……」
「大和!」
大和型一番艦。超弩級戦艦。大和だ。
両腕の巨大な手甲で思い切り集積地棲姫を殴ったのだ。巨大な質量を強大な力でぶつける、シンプルな攻撃。
『貴様!!!』
そして始まる殴り合い。巨大な手甲同士がぶつかり合う。ヒェッ、怖っ。

俺が守ろうにも、
『沈メェーーー!!!!』
「無駄です」
大和には電磁バリア付いてるし……。
大体、これくらいのレベルの強さなら、下手に手出ししなくても大丈夫か。
一応、辺りを見回す。
集積地棲姫は大和が抑えるとして……。
三日月が中間棲姫を、長門型がレ級とネ級を、ポーラ達が飛行場姫を担当、か。
その他の艦娘は近くの深海棲艦を叩いている。
空母や秋月型が対空、一部駆逐艦が対潜、他は艦種ごと、姉妹艦単位で得意とする戦法で思い思いに戦っているみたい。
相手も深海棲艦とは思えないくらいに組織立って動いているみたいだけど、どうにかなってる。なっちゃってる。
……俺、要らないよねぇ。指示するまでもなく動けるんだもの。
うーん、強いて言えば駆逐艦か。一番装甲が薄いし。……行くか。
「大和、ここは任せた」
「はい！いってらっしゃいませ、旦那様??」
「はいはい、いってきますよ、と」
っと、キスしなきゃ機嫌悪くなるからな、大和は。……新婚みたい？やめてくれ、まだ結婚はしたくない。
戦争終わったら結婚確定？ややややめてくれ。考えないようにしてるんだから。
×
×
×
×……『作戦？いつも通り、俺が囮やって、同じ様に個人個人が出来ることやれば良いんじゃない？もうこのレベルになると作戦とか要らないと思うわ』
×……『え？命令されたい？お、おう。別に良いけど……。マゾなの？違う？あ、そう』

……『それじゃ、頼んだぞ、三日月！頑張れよ！』

「……はい、司令官」

『クッ、チョコマカト……!!』

司令官の命令だ。命令してもらった。

司令官の命令があれば、私は死ぬまで、死んでも戦える。

中間棲姫、だったか。それなりの敵だ。腰から下、背中の大きな球体の艤装に火砲を満載、艦載機もある。硬いし、それなりに当ててくる。

『危ナッ……!!流石ニ当タッテアゲナイワヨ、ワタシハ!!』

「チッ」

面倒ですね。

小回りが利く太刀を使うべきか。いや……、

『……ッ?!爪……!!格闘戦ヲ挑ムト言ウノ?!!』

これで良い、ですね。

『舐メルナ……。如何ニ素早ク、力強クアッテモ駆逐艦！ワタシト殴リ合イガ出来ルトデモ?!!』

大きな艤装を削って行きましょう。

馬鹿ですね、こんなに大きい艤装を背負ってると、死角が大きくなるでしょうに。たこ焼きみたいな艦載機には注意が必要ですが……。

『飛ン……ッ!!!』

本体は、大したことありません。

……艤装を壊して無力化。出来るだけ殺すな、と言う命令。

果たしますよ、司令官。

さあ、頭上を取りました。

メイスを振り下ろして、

「終わりです」

『ーーーーッ!!!』

……いや、違う。
全身の筋肉が悲鳴を上げるが、それに構わず、身体を捻る。必殺の攻撃から無理矢理に回避に転じるのだから、身体がおかしくなるのは当然。
骨が軋んで、肉が裂け、筋が伸びた。
そして、その時。
『死ネェ!!!!』
無理矢理ずらした頭の横を、「足」が通り過ぎる。
少し、掠めた。
ギリギリで反応できた。当たれば頭蓋が砕かれてたかもしれない。

でも、甘い。
今、私が不意を突かれたのは事実。でも、不意を突いたからって油断しましたね。確実に殺したと、思い込みましたね。
ネイルで顔を狙う。視覚を奪えば……！
「……チィッ?!」
『ヒッ?!』
……浅い、か。斬り裂けたのは髪の一部だけ。
こう言う時、この小さな女の身体が嫌になる。
『……人ノ髪ヲ、ヨクモ』
赤く輝く瞳でこちらを睨み付ける深海棲艦。……足、あったんですね。
痛む身体を再稼働させ、メイスを構える。
『暴走サレルト面倒ナノヨ。一瞬デ死ンデ頂戴』
嫌です。心の中で答えて、回避。狙ってくるのは頭、首、心臓。言葉通り一撃で殺したいらしい。
姫クラスだから筋力は中々、火力も艦載機も健在。
でも下手です。力を活かしきれていない。振り回しているだけ。
砲撃は、単に「今いる位置」に適当にばら撒いているだけ。未来位置の予測射撃も、回避予定の地点に対する射撃による行動の制限も出来ていない。

『当タレ!!コノ!!』
本命であろう艦載機も、ふわふわと浮かぶ特徴的な機動以外は既知の行動。他の深海棲艦で見た。黒井鎮守府の空母の様に、常識外れの機動、いや、奇動をする訳じゃない。
『艦載機ヨ!!!……何故当タラナイ!!?』
本体もパワーだけだ。出力は比叡さんくらいだろうか。その癖、自分よりも格下の相手としか戦ってこなかった者の動きだ。虚を突かれない限り、まず当たらない。
『チィ、動クナァ!!!』
……うん、慣れてきました。
私の尻尾、テイルブレードを伸ばして、宙に浮かぶ艦載機を貫く。
『ッ?!ソンナ馬鹿ナ?!!』
跳躍。艦載機を踏みつけ、踵部の射出杭……、ヒールバンカーを使用。破壊する。その反動と共に空中で前進。身体を一回転させ、深海棲艦の背部へ移動。その最中に腕部に仕込んだ主砲で深海棲艦の艤装の火砲を射撃。
『グッ、アアッ?!!』
着地と同時に主兵装である超大型メイスを振り下ろす。
『ック、ウウ!!!』
……当たらないことは織り込み済みです。メイス先端に仕込んだパイルバンカーを射出。深海棲艦の艤装の外殻部を削る。
『グァァァァ!!!』
殺しきれない、ですね。
チマチマやればどうにかなりますけど……、あまり時間をかけて、面倒事を増やすのは良くありません。
耳元の通信機をオン、司令官に連絡。
「司令官、アレを使います。許可を」
『……駄目だよ。暴走モードは。止まらないじゃないか、三日月は』
司令官、私の身を案じて……。口答えはしたくないけど、戦闘を長

引かせること即ち司令官の身に何かある確率が高くなるということ。だから……、
「……早く終わらせないと、被害が出るかもしれません。万が一の確率であっても防ぎたいんです」
『……一分だけだぞ、ミカ』
「……三十秒で終わらせます……!!」
許可を頂いた。
じゃあ、
「行きます……!!」
出力の制限を、解放する……!!!
すると、世界が赤く、赤く染まる……!!!!

……私は元々、不出来な艦娘だ。
何せ、「出力に肉体が追い付かない」のだから。
体内に溢れるエネルギーの奔流に、私の器が耐えられない。出力端子である肉体は、エネルギーの使用によっていとも容易く焼かれてしまう。
だから、普段は半分以下のエネルギー量しか使えない。否、使わないんです。戦闘行動で利用するエネルギーの反動から身を守る為、多くのエネルギーをカウンターウェイトとして浪費する訳ですから。
それを、今は全部、戦闘用として利用する。この状態では、エネルギー量に耐えきれず肉体は徐々に焼き切れるが、その代わりに大きく戦闘能力が向上します。
『赤イ、瞳……!!?暴走ダト!!?』
何を驚いているんでしょう。普段は使わないだけで、いつでも任意で使えるのに。
『……来イ、量産型共!!』
撤退する気ですか？殿に量産型を展開して来ました。
……意味ありませんよ、そんなもの。
私の前に、司令官の前に立った時点で、タダじゃおかない。
「逃す訳、ないでしょう」

海面を踏みしめ、背部からエネルギーを噴射。ロケットの様に加速。当然、背部は焼き付くが、関係ない。
テイルブレードは、絶えず深海棲艦を貫く。
一体、二体、三四五体纏めて、六体……。
全身の武装を駆使し、壁役の深海棲艦を殺しながら前進。
『ア、アアアアア!!!』
いました。
「……そこだ」
今なら、大振りのメイスも当てられる。跳ね上がった出力でなら、大きな動きでも無理矢理に速くできるから。
『オ、オ前、楽シンデルダロ?!戦イヲーーーー!!!!』
……?、何を言っているんですか?
「……まあ、良いか。こいつは壊して良い深海棲艦だし」
エネルギーで腕を動かし、フルスイングのメイスを叩きつける。
『グ、エッ』
ああ、吹っ飛ばしちゃいました。
……原型は留めていますし、死んではいないでしょう。

時間も、宣言通り三十秒。

命令、終了しました、司令官。

１４１話　地中海奪還作戦　鬼虎侵攻編

「ふはははは!!!効かんな、深海棲艦!!!」
『クッソ、何ナンダコノメスゴリラ!!!硬過ギル!!!』
「む、失礼だな、貴様は。ぬぅん!!!」
『オッァーーー!!!?オマケニクッソ強エエッ!!!!』
『レ級!!』
　思わず、レ級に声をかけるワタシ。
　くっ、このままじゃジリ貧だ。
「あら？目の前の相手から視線を外して良いのかしら？」
『クッ……!!』
　速い……!!
『来イ!!』
　適当な深海棲艦を差し向けても、
「はぁっ!!!」
『ブレイクダンス……!!!』
　逆立ちのまま、開脚、回転……?!ダンス？いや、これは鋭い蹴りだ!!
　ワタシの適当な深海棲艦では、一瞬で駆逐される！
　やはり、量産型では無理か！

　だが、手はある！
『シィッ!!!』
「!!、……深海棲艦が、武器を？」
　よし、当たる。当てられる！
　集積地棲姫作、対艦娘刀だ……！

　……前回、黒井鎮守府の不意を突いて、本部に攻め込んだワタシとレ級は、いとも容易く撃退されてしまった。充分な戦力はあった筈なのにだ。
　だからこそワタシは、必死に考えた。敗北の理由を。勝てなかった

訳を。
パワーでは負けていない、スピードもだ。数は遥かに多かったし、殺意だって負けていない筈だ。
だが、ワタシ達深海棲艦には、技量と、上等な艤装が無かった。
故に、ワタシは武器を、刀を使うことにした。
集積地棲姫に頼み込んで、新たな艤装として。
追加装甲、高感度センサなども増設。更に模擬戦や訓練でワタシは強くなった。
あの日から毎日欠かさず刀を振るった、本気でトレーニングしてきた。負ける道理はあるものか！
『行クゾ!!』
「あら、結構……！」
踊るような動きに惑わされるな！本質を捉えろ！
『ウオオオォォォ!!!』
「やるじゃない！」
未だ互いに本命の一撃には当たらず、打ち合いが成り立っている。
……行ける！
あの時とは違う、戦いにすらならなかったあの時とは!!ワタシは勝つ!!戦って、勝つ!!
『シャァァ!!!』
「っ！危ないわね!!……あっ！」
艤装を斬った！……だが浅い!!
しかし、これで分かった。当たる、斬れる！即ち殺せる!!
「もう、酷いわ！女の子を傷付けるなんて！」
『……フン』
会話をする気はない。余計に心を惑わされるかもしれないからだ。
余計な情報は排除する。
「嫌ねぇ、折角、出来るだけ怪我しないように動いてるのに……」
『ソノ首、貰イ受ケル!!!』
鞘に納めた刀身を抜刀、鞘の中で刀身をを存分に加速させ、居合!!!
首を、落とせ!!!

『取ッタ!!!』

「無理よ」

『ーーーッ?!!!』

この女、歯で刀を……!!!

「勘弁して頂戴。こんなことに意味なんてないわよ?」

聞くな!揺らぐ!あの時の二の舞いになるのは防げ!!

『ハァァァァァ!!!!』

袈裟斬り、逆胴、突き、面、斬り上げ!!何でも良い、斬れ、斬るんだ!!!

「貴女達に勝ち目なんてないでしょう?諦めなさい、提督なら悪いようにはしないわ」

聞くな!聞くな!!ワタシは戦いに来た!会話など不要だ!!!

回避を続けるこの女に切っ先を向ける。純粋な殺意を込めて、力を込めて刀を握る。恐れるな、臆するな、逃げるな!強く自分に暗示する!

「こんなことしても何も変わらないわよ?私達艦娘が勝って終わりに決まってるでしょ?」

それでも、歌うような声が嫌に響く。……やめろ!聞くな!!

「出撃なんて碌でもないわ。身体に傷を付けちゃ駄目だし、声を荒げて殴りかかっても駄目、返り血だって駄目……」

まさか、と。心のどこかで、頭のどこかで思ってしまう、考えてしまう。……考えるな、戦いだ!!

「……動き辛いけど、そうしなきゃ可愛くないわ」

『ーーーーーッ!!!!』

そんな、ことを……!!!!

「潮風は髪もベタベタになるし……、本当は出撃したくないのよ?でも、出撃しないと提督が困っちゃうでしょ?「可愛いままでいる」、「提

督の役に立つ」、どっちもやらなきゃならないところが艦娘の辛いところよね」
『貴様ハッ!!!』
「?、何かしら?」
『貴様ハ！戦イノ最中ニ何ヲ!!何ヲ考エテイルノダ?!!ドレダケコチラヲ見下セバ気ガ済ム!!!?!!』
やめろ、やめろ！やめろやめろやめろやめろ!!!
「ああ、貴女……」
聞くな!!!!!!
「戦ってるつもりだったの？」

『ア、アア、アアアアアアアアアアア!!!!!』
同じ、だ。同じだ。あの時と同じ。あの時のあいつと同じ目だ！
……こいつは、ワタシを「見ていない」!!
「その、ごめんなさい。戦ってるつもりだなんて思わなくって。……でも、どうせ、なんだかんだ言って逃げるんでしょ？決死の覚悟って訳じゃないんでしょ？」
『馬鹿ニスルナッ!!!ワタシハッ、ワタシハ本気デ!!!!!』
声を荒げて叫ぶ。酷い侮辱だ。
「だって、貴女、弱いじゃない。強さってものが何かまるで分かってない。だから私には響かない」
トラウマが蘇る。あの時のトラウマが。
「強さ、よ。強さ。分かるかしら？強さって言うのはね……」
『良いですかネ級さん、強さとは……』
聞こえる。あいつの声が。
「『愛情』なのよ」『『信仰』である、と』

『ウワアアアアアアア!!!!』
駄目だ、駄目だ。殺せ、早く殺せ。ワタシが壊れる前に、目の前のこいつを殺せ。殺すしかない。技も何もない、力任せに刀を振るう。死ね、死んでくれ。ワタシの前から消えてくれ！
「貴女には愛が足りないのよ、愛が。愛情があればなんだってできるのよ？強くなるなんて簡単だわ」
『死イイイネエエエ!!!!』
「でも、戦ってるつもりの貴女を無視したのは良くないわ。美人は気配りもできなきゃ駄目なんだから。……しょうがないから、少しだけ……、『戦って』あげる」
瞬間、どこから出したのか、匕首……、所謂ドスを取り出す陸奥。おかしい、違う、変わった。一挙一動に目が離せない。言葉一つ聞き逃せない。本来なら切り落とすべき余分な情報すらも無理矢理に脳に叩きつけられる。
『ア、アア……!!』
声が、出ない。喉が異様に渇いて、目の奥が針で刺されたみたいに痛い。心臓が締め付けられる感覚。肌が粟立つ。これは、そう、捨てたはずの、戦闘に不要なはずの感情。
恐怖……。

だが、それを自覚する前に、ワタシは。
「……やっぱり、弱いわねぇ」
『助け、ケテ……』
どうしようもなく、壊されてしまっていた……。
×
×
×
『ユ×ソ、馬鹿力ガァァァァァ!!!!』
「効かぁん!!!!」
タソ、焦んな、アタシ。力任せじゃ駄目だ。技を使え。武器を使え。
×
×
×

袖口から出したのはとっておき。集積地棲姫の野郎に作らせた、対艦娘用のジャマダハル。

……アタシは器用な方じゃねえし、刀みたいな小綺麗なモンは性に合わない。だからコイツだ。鍔と平行になる位置にある柄。握ると丁度、拳の延長として使える形のこの短剣。造りも丈夫で、思い切り力を込めても壊れない。

このアタシの力を、刃物に乗せて一点集中すれば……!!

『ブチ抜ケロッ!!!!』

「む！」

通った!!

『ギャハ!!通ッタゼ!!貫ケンナラブチ殺セル!!!』

「……久し振りだな、出血など……」

『コレカラ血ダルマニシテヤッカラ気ニスンナ、ヨッ!!!!』

両手のジャマダハルを刺す！刺す!!突き刺す!!!良いね、相手が血に染まるのはいつ見ても爽快だぜ!!!

「はぁっ!!!」

『当タンネーヨボケ!!!』

こいつ、アタシより不器用だ。威力ばっかで大振り。狙いは大雑把。馬鹿力にだけ気を付けりゃいいんだ、楽勝！

「やあっ!!!」

『ヒュウ!!危ネエ!!』

良いね、コツは面じゃなくて点。最低でも線。範囲を絞って力を込めりゃ何とかなるもんだな！

『イイ、ヤッハァー!!!』

三回回ってぶった斬る！遠心力を乗せた全力の一撃が顔面にヒットォ!!!

「おおっ?!!」

切れたのは額か？派手に血が出たなぁ、オイ!!サイコーだぜ!!!

「むう……、捉えられん、なぁ」

『コノママジワジワ嬲リ殺シ決ッ定ッ!!!血ィ流シテ死ニナ!!!!』

行けるな、これ。

余裕だ。
こういう頭空っぽの脳筋野郎はチョロいぜ。次は首でも狙うか？
それとも手首？脇？デカい血管を狙ってやるぜ!!!
「仕方ない。提督には、なるべく傷付けるなとの言伝があるんだが……」
『……ア”ァ”？』

「死んでくれるなよ、深海棲艦」

『……エ？』
アレ？
何で頭の上に海があるんだ？
何でアタシは飛んでるんだ？
何で、何で……。
世界がひっくり返ってるんだ？

「名付けて、『地裂の極み』と言ったところか。少々荒っぽいが、効果は絶大だ」
違う!!!
こ、この脳筋、足下の海を思いっきりブン殴って……!!!
『力尽クデ吹ッ飛バシタッテノカヨ……!!!』
クソッ、クソッ!!ふざけやがって!!
ぐるぐる回る三半規管を黙らせて、無理矢理身体を反転。海に着地する。
「おおおおりゃあああああ!!!!」
『グ、オォォ!!!!』
やべえ、さっきの一撃のせいで身体が言うこと聞かねぇ!!!掠っただけでも死ねる攻撃だ、大き目に避けなきゃならねぇってのに!!!
『来ヤガレッ!!!』

平衡感覚が戻るまでは盾役を出して何とか……。雑魚でも、足止めくらいにはなんだろ。行けよ、量産型共!!!

「うりゃあああああ!!!」

『ンナッ?!!バ、馬鹿カテメェ!!!!』

深海棲艦の群れに走って……!!

『ギッ』

『ガッ』

『ゴァッ』

「はははははは!!!逃がさんぞ!!!」

お、追っかけて来やがった!!!

深海棲艦をはね飛ばしながら!!!

『待テ、来ルナ、ヤメロ、来ルナ来ルナ来ルナ来ルナ来ルナ!!!!来……!!!!』

「でりゃあああああ!!!!」

『ガッ……!!!!』

……ああ、空って、こんなに青かったんだな……。

最期に思ったのは、柄にもなく、そんなことだった……。

１４２話　地中海奪還作戦　銃墓殲滅編

「んもー、めんどくさいですね～。早く帰ってお酒飲みたいんですけど～？」
「そんなこと言わないの、ポーラ！折角、地中海の深海棲艦にリベンジ出来るんだから！ほら、棺桶持って！」
「棺桶じゃなくってデスホーラーですよぉ～！最近は改良して色んな機能が付いたんです～」
　凄いんですよー？愛用の二丁拳銃、ケルベロスと連結してエネルギー砲になったりとか。
「じゃあそれ使って戦って！皆んなも頑張ってるんだから！ほら！」
「え～？他の子いるならポーラは要らない子ですよ～」
　チラーっと横を見る。
「ローゼス!!」
　弾けば弾くほど放電する謎のギターをかき鳴らしつつ、投げたバラが何故か爆発するリベッチオ。
　バラって爆発するんですね～、初めて知りました～。
　で、また、チラーっと後ろを見る。
「オリンピア！破壊輪舞曲!!」
　コマンダン・テストさんの操るマリオネットが、そのボディに仕込んだスパイクで周りの深海棲艦を砕いてますねぇ。
　人形のオリンピアはいつ見ても綺麗です。白いドレスで。六本腕で。
　うーん、やっぱり、ポーラは要らない子では？皆んな強いです強過ぎます。ポーラが頑張らなくても何とかなっちゃう感ありますよ～。
「ぐぬぬ……。あっ、ほら、囲まれてるわよ！早く！」
「ええ～？」
　あ、本当だ。あと一秒くらいで喉笛に食らいついて来そうですね～。
　でも。

「銃を抜いてから撃つのに一秒も要りませんよねぇ？……ケルベロス!!」
「センターヘッド！」
銃声は重なって三発。
私のケルベロスが一発づつ、ザラ姉さまのセンターヘッドから一発。
「……ザラ姉さま？センターヘッドを私の耳元で撃つのはちょっと……」
大っきいからうるさいんですよ、センターヘッドは。
「嫌なら起きなさい！」
その分、威力は折り紙付き、ですけど。……艦娘ですら撃てば脱臼する程の反動、ですからね、センターヘッドは。最早、拳銃と言うよりライフル銃では？
「はぁ、しょうがないですね～。行きますか～。全く、出撃より提督とお酒飲んでる方がずっと楽しいのに……」
「はいはい、終わったら幾らでも飲んで良いから。その分、ちゃんと戦うのよ！」
「は～い」
じゃ、一丁行きましょ～！

「ん～、邪魔です～」
はぁ～、嫌ですねぇ。銃声はあんまり好きじゃないです。ばんばんうるさいですからね。
私の耳は、素敵な音楽とか、大切なザラ姉さまの（お説教を除く）お話とか、仲間の声とか……、そして何より提督の言葉を聞くためにあるんです。
「だから～、貴女のお話にはキョーミありませ～ん。ごめんなさ～い」
『コッチモ、貴女トオ話スルツモリハ、ナイワ』
あ、砲撃。狙いは雑ですけど直撃コースですね～。当たったら痛いですよ～？死にはしませんけども。
うん、弾き返しちゃいましょう。

「それっ」
『……!、砲弾ヲ棺桶デ迎撃シタ……?!』
そんなに驚かれても……。これくらい、うちの鎮守府だと出来ない子の方が少ないですよ?
「早くやられちゃって下さ〜い!」
百発百中、ケルベロスのトリガー何度も引く。
『クッ、ナンテ威力……!!』
「当たり前ですよぉ。対深海棲艦用なんですから。ザラ姉さまのセンターヘッド程じゃないですけど、大抵のものはぶっ壊しちゃいます〜」
撃てば壊せる。それがケルベロスです。
「知ってますか?提督はですね、とっても、とーっても優しいんですよ?私がザラ姉さまに怒られてる時もいっつも助けてくれるんです。……そんな提督に酷いことするなら、この私が、ポーラが、提督の代わりに怒っちゃいます」
『……ソウ。ワタシモ怒ッテルノヨ。ノンビリ過ゴシテタノニ襲撃ダッテ叩キ起コサレテ。……許サナイ』

「壊れろ」『失セロ』

瞬間、眼前の空間が弾ける。
私が放ったミサイル……、デスホーラーの機構の一つです。それの爆発と、飛行場姫の艦砲がぶつかったみたいです。
あーあ、煙がもくもく。前が見えません。
うーん、あれですね、これは……。
『ハァァァ!!!!』
「痛ぁ?!!」
グーで殴られました?!ひ、酷い、一応女の子なのに!
『接近戦ハ苦手ミタイネ!!』
あー、バレちゃいました?そうなんですよね、接近戦はちょーっと苦手です。他の皆んなみたいに元気いっぱいに殴り合いは出来ませ

んよ～。
　デスホーラーで殴ろうにも、
『フッ、大振り過ギル！当タラナイワヨ!!』
　だ、そうです。
「参りましたねぇ、こー言うのは私の担当じゃないんですよ～。ナガト、さんはいないし～、コンゴー、さんはお留守番……。誰か～、代わって下さい～」
『チッ、プライドッテモノガ無イノネ!!』
　？、自分で出来ないことは仲間に任せる、それの何がおかしいんですか？意固地になって全部自分でやろうとする方が駄目では？
　一人で何でも出来るのは提督くらいのものですよ～。「自分は戦えない、弱い」だなんて言い張ってますけど、
『はーい、ローマはポーラのフォローに回ってー。ミカは念のため後退、望月と菊月に代わって。ヴォアー!!良いの撃ってくんなぁ、深海棲艦!!』
　戦いながら、よく分からない手段で戦況を把握、その上指揮をとってるので、役割的には何人分なのやら……。

「ポーラ、しゃがんで」
「あ、は～い」
　答えるや否や、頭上を通過するガンブレードの刃。
『チィッ!!!』
　っと、提督の指示通り、ローマさんが来ました。このまま、ローマさん前衛私が後衛ですかね～。
　これで少しは気が抜け、
『……!、ソコダッ!!!』
　あ。
「痛ぁい!!!」
　×××
　×××
　×××
　やった！
　×××
　×××
　×××

仮に殺せていなくても、顔面に砲弾を撃ち込まれて平気な訳ない！
良くて脳震盪だ、少なくともリタイアは確定……！
次は二刀流の、ガンブレードを持った丸眼鏡の女だな。
ローマ、と言ったか？すぐに潰すわ！

でもその時、倒したはずの銀髪の女が、確かにこちらを見た。気のせいじゃない。
『……何?!』
「……あはっ」
しかも、脳に衝撃を受けたとは思えない正確な射撃を……!!
『何故ダ?!!』
確かに直撃して吹っ飛んだはず！回避や防御をするところから見て、防御力はそこそこのはずだ！
「いやぁ、痛い～、痛過ぎる～」
……まさか。
『痛覚ガナイ……?!』
その上、ダメージによる戦闘能力の低下もない！
「あ、分かっちゃいますか～？ポーラは、実は、痛くないんですよねぇ。せめて口だけでも痛いって言わなきゃ、痛いって言葉の意味を忘れちゃいそうで……」
やり辛いわね……。バラバラにしなきゃ殺せないだなんて。
「前の提督の言葉なんですけど……、『死人は死なない』、らしいですよ～？ポーラ達は死人みたいなものですから～、これ以上死なないんですよ～」
血で赤く染まった髪をかきあげて立ち上がってくるポーラ。まるでゾンビ……！
『クッ、沈メッ!!!』
血が出てると言うことは、失血死すると言うこと。必ず殺せる。殺せるはず。殺せる、わよね？
「あ”、あ”あ”あ”あ”、痛”い”でずね”～」
『死、死ナナイノ?!!』

殺せるわよね?!

「だ~か~ら~、死人は、死にません。そう言ったじゃないですかぁ。……今の提督に拾って貰ってからもずっと、ポーラ達は死人なんですよ~。でも、提督は死人のことも愛してくれますから~」

そ、そんな馬鹿な……。要注意艦娘に認定されてないから、雑魚なんでしょ?!作戦前のブリーフィングでは、こいつに注意しろだなんて言われてない!

「優しいですよねぇ、かっこいいですよねぇ……。私達みたいな、肉体の一部が吹き飛んでも生きてるような化け物にも、沢山の愛情をくれるんですから……」

くっ、要注意艦娘のリストにないと言うことは、即ち新入りだってことでしょう?!新入りなのに、こんな、こんな……!!

「じゃ、これで終わりです~」

ッ?!!あれは、背中の棺桶が変形して、本体と接続、エネルギー砲になった……?!!

避けっ、

「朽葉流……!」

!!!、いつの間にか足を斬られて……!

「遅いわ、深海棲艦」

チィッ!!!ローマめええええ!!!

「行きますよ~?ケルベロス!!O・D・!!!消し飛んじゃってください~!!!」

『グ、グオアアアアア!!!!』

「ふー、やりましたやりました。これでお仕事終わりです~」

「待ちなさい、ポーラ。……確か殺しちゃ駄目なんじゃなかったかしら」

「……あ」

「ポ、ポーラぁぁぁ!!!」

「ひ~ん!一緒に探してくださいザラ姉さま~!!まだギリギリ死んで

ないはずです～!!!」

１４３話　ミカネキ、丸洗いされるの巻

『ゼ、全滅……?!１３００体ノ深海棲艦ガ全滅?!!三時間モ経タズニカ?!……バ、化物メ!!』
「いや、ここはネティクスだろ。ν系にしろS系にしろ、まずはここじゃね？」
「やっぱν系はスタメンだよねー。……今作はネオジオングがクソ強いって聞いたよ？」
「そうなん？ま、ネオジオングならどうせシナンジュから行けるだろうし……、先ずはサザビーじゃね？掻っ攫ってきたギラドーガから行けるっしょ」
『……何ヲシテイル』
「「Gジェネ」」
　望月と一緒にGジェネである。敵が全滅したんで。
「ＤＬＣのホットスクランブルマジでヤバイ」
「うーんこのバランスブレイカー」
「どーせクリア後に黒歴史ターンエーとかもっとヤバイの出てくるんでしょ知ってる」
『ナ、舐メヤガッテ……!!』
「舐めるも何も、貴女にはもう何もできないでしょう？」
　集積地棲姫を倒した大和はガチャガチャと艤装の調子を確かめながらもそう言った。事実、深海棲艦は全滅、姫クラスも全員戦闘能力を喪失している。
「降伏しなさい。勝ち目はありません」

『ソウカシラ？』
「!!、戦艦棲姫……!!」
『チッ、遅イゾ、戦艦棲姫……！』
　あー、はいはい、増援か。
　こりゃちょっとキツイか？艦娘だって疲労している訳だし。だが、ここで姫クラスを潰せるなら……。

『オット、貴方達ノ相手ハコイツラヨ!!!』
『『『……!!!』』』
ほー、成る程、成る程。
「姫クラス……?!量産に成功していたなんて!!」
大和が驚くのも無理はない。うちの艦娘にも対抗しうる、姫クラスの量産はかなりのヤバさ。ヤバみある。数は数体だが、量産出来ていると言う事実が不味い。
『コ、コノ馬鹿!!折角ノ隠シ球ヲココデ使ウカ?!!コノ、馬鹿!!コノ馬鹿!!!』
『ナ?!助ケニ来テヤッタノニ、何ヨソノ態度?!!』
『シカモコレ、昨日ワタシガコッソリ逃シタ奴ジャナイカ?!!』
『ソコラヘンニイタカラ使ッテルダケヨ!!悪イノ?!!』
『悪イワ!!!』
と、口論しながらも、後退していく姫クラス。ちゃっかり撃破した他の姫クラスも回収して行った。
「はー、しょうがない。姫クラスの追撃はいい!そこらで暴れてる深海棲艦を撃破してくれ!」
「「「はっ!!」」」
「さてと……」
おう、もっちーよ、なーにGジェネ再開しとるんや。さてと、じゃねーよ。
「えー、だってだるいし……。皆んないるから、一人くらいサボっても……」
うーん、一理ある。
「……じゃあさ、もしも周辺国家に被害を出さないで深海棲艦を全滅させたら、何でも言うこと聞いてあげ」
「望月!駆逐艦!行きまーーーす!!!」
はっや。
「と、まあ。あとはダイジェスト化するまでもなく」

駆逐艦が駆逐して終わりって言うね。
戦艦が戦って従順な重巡が頑張って……。もう何も言うことはない。完璧以上に殺戮をして下さった。
後は帰還するだけだ。前線基地の撤退準備を済ませると、旅人号を発進。アクセル全開インド人を右に。
地中海を軽く見回りしたら、鎮守府に帰るんだよ。
一瞬、取引の関係でギャング関係の人等に会っていくべきかと思ったが、やめた。
今は鎮守府の提督として来ている以上、裏との繋がりはＮＧなのだ。二度手間だが、地中海の奪還についての話は、また今度お話ししに行こう。
さあ、見回り、見回り、と。
まあ、殆どの深海棲艦は潰したし……、見回りってか買い出しだわな。
よーし、ワイン良し、チーズ良し、香草良し、肉良し!!!帰って宴会だ!!!

「なーんか、忘れてない？」
「何かなもっちーよ」
「とぼけないでよ、司令官。出撃の時言ったよね？周囲の国々に被害を出さなかったら何でもしてくれるって」
あ。
「い、言ったよーな、言ってないよーな……」
「言ったよね？（迫真）」
ひ、ひぇえ……。
「言いました……（自白）」
「よ、よし、それじゃああたしとセッ」
「ストーップ!!!」
何を言い出すんだこの子は!!!カミーユかな?!!!
「ゴム有りで良いから！お願い!!」

「女の子の台詞じゃない?!!」
「司令官の前で格好付けるのはもう諦めたし!後はもう押して押して押しまくるしかないの!!」
なんでや!
もうちょっと、こう、取り繕ってくれ!
「少なくとも、司令官の《サテライトキャノン!》の盗撮写真をやり取りしてるシーンを見られてるから。もう取り繕ってもどうしようもなくない?」
確かに、望月（と漣）は俺の《サテライトキャノン!》が《月は出ているか?》の時の写真を盗撮した前科があるが……。
「いかんいかん!表現の限界!ＴｏＬＯＶＥる的にボカして、運営と戦っていると言うのに!!これ以上エロいことしたら怒られちゃうだろ!!!」
「大丈夫大丈夫!マガジン的な、青年誌的な感じで誤魔化せば行けるって!!ねっとりとした描写が無ければ怒られないって聞いた!!!」
「むぅーりぃー（もりくぼ感）!!」
「何ならいっそ漫画ゴラク的な感じとかでも割とどうにかなりそうな気がする!!さ、パパッと、ね!ね!!」
何がそこまで君を駆り立てるのかね?私には理解に苦しむね（鬼畜）。
大体にして漫画ゴラクは駄目だろ!一番駄目だろ!!うれしょんが作者の性癖に響きました!!あれは青年誌ってか成年誌だから!!
「はいはい、新しいグラボ買ってあげるから!それで我慢して、どうぞ。じゃ、俺、ミカを風呂に入れてくるから。サヨナラ!」
三日月は現在、出撃時の暴走モード（任意）で両足と右腕、右眼が麻痺している。入渠すれば直ぐに治るが、その前に風呂に入れなくては。返り血を落とさねばドックの修繕液が赤く染まる。入渠前の入浴は基本。
「待てぇい!!!」
「お、おう」
何なの?さっきから何なの?怖いよ望月。

「あたしも」
「うん？」

「あたしもお風呂に入れて！」
×
×
「……うん？」
×
×
×

るだろうけど、密着度がより……!!
「流すぞー」
「はい」
今度は膝に乗せて髪を洗い流す?!そんな、あの体制だと司令官の《サテライトキャノン!》がお尻の辺りに……!!
「次は身体ねー」
「分かりました」
おおお、おおおおお!司令官の手が!遠慮なく、されど優しげに三日月の身体に触れて……!!見るからに手慣れた手付き……!!あの鉄面皮の三日月が気持ち良さそうに目を細めると言うことは相当……!!
「よく泡立てて……、心臓から遠い所から優しく洗って行くんだ」
「んっ??成る程です」
泡立てて、の下りで、石鹸を付けた司令官の大きな手が、三日月の女の子にしては少し大きめな手に重ねられ、ゆっくりと泡立てられる!決して擦るような感じではなく、撫でるような感じでもない……、正に洗うと言った手付きで!
あの触れ方……、いつもの壊れ物を扱うような手付きよりは力強い!汚れをしっかりと落とすための強さだ!
「脚、感覚あるの?」
「はい、少しは。触られてるのは分かります」
産毛一つない、健康的な三日月の脚を優しく洗ってる……。
あ、前は三日月自身が自分で洗ってはいるけど……。流石三日月、恥じらわないっ!!!
こうして裸で向き合ってる時点であたしは結構ギリギリだと言うのに……。三日月、恐ろしい子……!
「ん、動く方の腕出して」
「はい」
「よし、脇んとこ、くすぐったいだろ。ごめんな」
「いえ、問題ありません」
そんなっ!膝に乗せられ、泡で滑らないようがっちり掴まれて、そ

の上で神経の塊である指先に入念なタッチ?!あんなことされたら気絶するよ?!
「あ、あんっ??」
あの三日月ですらあんな艶かしい声を出すくらいだもん、あたしなら倒れてるだろうな、あれ。強力過ぎる。
「ほい、最後に背中。ミカは筋肉あるなぁ」
「すみません、女らしくなくて」
「いや、カッコ良くって素敵だ。それと、女らしくあることよりも三日月らしくある方がより素晴らしいんだよ」
「そう、ですか」
「そうさ!俺は三日月が好きなんだよ。いつもカッコ良い三日月がね」
「……はい??了解、です??」
髪を洗い流した時と同じ要領で、抱き締めるような体勢のまま背中を洗う……。問題は、がっちりと抱き締めたあの状態で、あの台詞を言い放つところ……。大らかな性格の司令官は、平気な顔して「好きだ、愛してる」とか言うから……。
耳元で好きだなんて言われたら嬉しさのあまり卒倒するね、あたしなら。確実に足腰立たなくなる。
「はーい、じゃ、湯船に浸かろうなー」
「はい」
そして、お姫様抱っこで湯船へ……。あれ、身体の正面、ばっちり見られちゃうじゃん!恥ずかしくないの?!
「おおー、腹筋、綺麗に割れてんなぁ。良い身体してんねぇ〜!」
「あ……、くすぐったいです、司令官??」
乳繰り合いおって……!ぐぬぬ!完全に事後だよあれ!幸せなキスをして終了しそう!
「んー」
「んっ??」
実際にした!!!キスした!!!

「さて……」
お、あたしの番?!あたしの番かな?!これは期待出来ますねぇ……!!
三日月と違って動けるというアドバンテージを最大限に活かして
ラッキースケベをガンガン、
「上がるか」
「待てええぇぇい!!!!」

１４４話　でれもっちー

「ここはベタにノエル・アンダーソンでは？」
「戦記はギャルゲー。モーリン・キタムラも割とアリじゃない？モーリンかわいいよモーリン」
「戦記はギャルゲー。メイも良かった。かわいいと言う一点ならＭＳ戦線のアン・フリーベリちゃんだな。あれはかわいい。うちで採用したい。あとカードビルダーのレイコちゃんも」
「ホア・ブランシェット推しだと思ってた。意外」
「普通にかわいい子好きよ？望月も好き」
「んなっ！……もう」
　と、そんな感じでガンダムの話。望月は基本的に今流行りのアニメ、ゲーム、漫画、もしくはガンダムの話をする。
　うちには百人近くの艦娘が在籍してるけども、それぞれ趣味趣向は違うのだ。その中でも、望月はオタク系……。明石、夕張、漣などと同じようなタイプだ。
　どうでも良いが、望月は、昔アイドルのプロデューサーをやっていた時に担当していたアイドルに似ているな。メガネだし茶髪だしオタクだし。いや、あの子みたいに同人誌は描かないけども。
　そして俺の手は望月の頭の上にある。……洗ってくれとしつこく迫られたので、望月が疎かにしている髪のケアを買って出たのだ。こんなに綺麗な茶髪なんだ、適当にしておくのは良くない。いかに艦娘の身体が健康とはいえ、しっかりとケアをしなければ痛むもんは痛む。
「んー、枝毛。ちゃんとドライヤー当ててないなー？潤いが足りないぞー？」
「えー、良いよ別に。司令官はそれくらいじゃあたしを嫌いにならないもん」
　良く分かってんじゃん。
「まあ、どうしてもって時はこうして洗ってあげるから。洗って欲しい、くらいなら、いつでも聞いてあげるよ」

「……女を駄目にする司令官」
　人を駄目にするソファみたいな？
「……面倒見が良いよね、本当に。あたしみたいなの、普通は見捨てられちゃうもん。こんな駄目な女の子でも好きでいてくれるのは司令官だけだよ」
「そんなことないよ（サーバル感）！望月はかわいいし、優しい子だもんよ。誰も見捨てたりなんかしないって」
　たまに、凄くマイナスなこと言うよね。
「いやいや、あたし、駄目な子だし。直す気もないし。でも、司令官がずっと一緒にいてくれるのは分かるよ。司令官だけは、あたしを絶対に見捨てない。絶対にあたしを守ってくれる。そうだよね」
「お、おう」
　そりゃあ、望月の為なら俺の命くらいくれてやってもいいけどさ。命なんて安いものだ。特に俺のはな。実際、ノースティリスで暮らした日々は人命の尊さを忘れさせてくれましたね、ええ。
「……少なくとも、俺と、鎮守府の皆んなは望月を見捨てたりなんか絶対にしないぞ。俺が保証する」
「……うん。ありがと、司令官」
　でれでれ望月。でれもっちー。最近はツンデレだろうが何だろうがデレしかない。嫌われたい訳じゃないけどさ。いや、好感度は少し下げたいくらいだが。
「ところで、身体は洗ってくれないの？」
「んあー、いや、二回連続でスケベはなぁ」
　怒られたらどうしようって感じ。
「そんなタマじゃないでしょ！いいからほら！はよ！はよ!!」
　急かさんといて。
　まあ、良いかなー。望月もお年頃だし、そう言うのに興味があってもおかしくないかー。それに、誰でも良いって訳じゃなくって、俺を好いてくれてるみたいだし。
　ま、背中でも流してあげようかね。
「分かったよ。じゃあ、あっち向いて」

「わぁい、うへへ……」
先ず目に入るのは肌の白さ。出不精の望月は肌が白く、筋肉量は少ない。三日月とは正反対だ。もちろん、それが悪いって訳じゃない。柔らかな肌に丁度良い脂肪の付き具合はそれだけで素晴らしい。
触れる。
「あ、んっ??」
……見た目の通り、凄く柔らかい。手入れされたきめ細かさと言うよりも、若さ故の滑らかさと言った感じだろうか。望月の少し低めの体温は、風呂だからだろう、いつもより高い。
「あー、凄いこれ、凄い。駄目になる。いつも以上に駄目になる。あぁ〜」
肩を揉むようにマッサージしながら、段々下へと洗い込んでいく。望月は身体のコリが多いな、あまり動かずにゲームをしているからだろう。特に肩や首のコリが酷い。
「ゲーム、控えろとは言わないけど……、たまにストレッチとかするんだよ。肩こり、大変だからね」
「あっ??これヤバっ??……っ、は、は〜い」
「疲れたらしっかり休むんだよ」
「う、うん……。相変わらずのバブみ……。幼児退行しそう」
甘やかしてるつもりはないんだけど……、艦娘的には、俺に父性を感じるらしい。
「父親、か……」
親父の記憶ねぇわ。基本うちの親族は旅人体質なもんで、直ぐに行方をくらます。親族のうち今連絡を取れるのは妹くらいだ。
「大変だよね、司令官。将来は大家族確定だもん」
「え？」
「え？」
何の話？
「あたし達と結婚して子供作るんだよね？」
「なにそれこわい」
確定事項かよ。

「ん？ああ、あたしは子供とか別に。司令官と一緒に居られればそれで。でも、子は鎹って言うし、末長く養ってもらうためにも作りたいかな」
　いやほら、そんな理由で子作りは……。
「……私も出来れば欲しいです、子供。司令官は得意ですよね、育てるの」
　ミカェ……。
「こ、子供の相手は大変だぞー？」
「そう言えば、教員免許持ってたよね、司令官。子供が出来ても安心だね、こりゃ」
　い、いや、持ってるけども。
「ほ、ほら、あれだ、確かに小学校の教師もやったけど……。あれはほら、殆どやったことは地球防衛だけで！地球は守ったけど子供達の成績が良くなったとかはないし！」
　他にも妖怪退治とかもあったっけ。まあ、何にせよ、真面目に授業やった覚えはない。
　大体、俺の、と言うか我が家の教育方針は放任主義。それぞれ個性活かす感じでよろしくと言う極めてアバウトかつ適当なものだ。思考回路が教育者向きではない。
　でも、俺みたいな、子供の目線になれる大人は一人ぐらいいるべきだってのも確かだが。それは確かなことだが俺みたいなのをメインに据えるのは駄目なんだよ。
「何のことかよく分からないけど……、子育てはあたしも手伝うからさ、大丈夫だよ」
「子供の名前はアカツキにしますか？被りますけど」
「こ、子供とか十年早いぞ！もっと大きくなってから……」
　まだまだひよっこだぁ。そもそも初潮も来てないような子供が何を、
「あたし達、全員生理来てるよ？」
「マジかよ」
「気合いで排卵した」

「マジかよ」
初耳。排卵って気合いでどうこうできるんだ……。いや、タカさんも気合いで孕まないって言ってたし、多分どうにかなるんだろう。世界には俺に分からない不可思議なことが溢れてるなぁ。
「マジかぁ……」
「マジだよー。そろそろ現実を受け入れて子供を」
「それは本当に、ちょっと考えさせてくれ」
めんどくさい、まだまだ旅したい、それは勿論だがそれ以上に俺の子供という恐ろしい存在をこの世に生み出すことに抵抗がある。抵抗しかない。
立って歩けるようになれば自然と旅に出るような遺伝子なのだ、方々で災厄の種をキャプチャーして転んだ拍子にばら撒く、そんな傍迷惑な存在となるだろう。俺がそうだった。
俺は、世紀末幼稚園の卒園と同時に旅に出て、あらゆる土地や世界を転々として生きている。両親も会ったことすらない。育ての親である祖父も、数年間程俺を育てると何処ぞかへ消えた。
そんな家系の子供を、増やす？……駄目でしょ。
「……まあ、まだまだ時間はあるし。それは良いや。……ほら、三日月みたいに、膝の上に乗せてよ！」
「ん、はい」
成人男性の膝に座る少女。見るからにヤバい光景だ。だが、最近は吹っ切れてきて、バレなきゃヘーキくらいには考えてる。実際、バレなきゃヘーキだしな。
「バレなきゃヘーキとは言え、ぐりぐりするのはやめてくれ」
「……おかしい、勃ってない」
勃つかよ。ある程度は自在に操作できるし、何より相手は駆逐艦。早々勃ったりはしないさ。そこまで欲求不満って訳でもないし。
「こらこら、このままじゃエロ担当扱いされてしまうぞい」
「いやいや、エロ担当は空母とか戦艦とか重巡とか……、あれ、全員？」
エロ担当多過ぎ問題。
「取り敢えず早く風呂入って！この後宴会なんだから！」

ザバーっと流して風呂にゲットオン。
「うー、エロ展開ぃー」
口惜しそうに呟く望月。そんなにか。そんなになのか。
「ほら、撫でてあげるから我慢なさいな」
「んっ??これ、単に猫可愛がりしてるだけで、欲情はしてないよね、司令官」
そりゃあなぁ。流石にロリコンではないが故に、相当上手く誘ってくれないとこの年頃の子に食指は動かないさ。
その点幻想郷はヤバかった。十代そこらの子供に見える女の子が何百歳とかザラで、妖艶に迫ってくるもんだから。鬼酒で酔わされて誘惑のコンボは普通に堕ちる。流石酒呑童子と言ったところか。
そんなのと比べれば、うちの艦娘なんてまだまだひよっこ。ちょっと迫れば赤くなるもん。
「そりゃあ、子供相手に欲情したら不味いだろ」
「如月は口説けば反応するって言ってたけど？」
如月は迫り方が結構上手いからな。
「上手く口説けば、な。簡単にはやられないさ。裏ルートだ、攻略難度は高めだね」
「朱鷺戸沙耶みたいな？」
「むしろ塚原ひびきみたいな」
「攻略出来ないじゃないか（憤慨）」
あれだよ、仲良くはなれても恋人には出来ない的な。隠しキャラですよ俺は。簡単には口説かれないんだよなぁ。
星の数ほど口説いたし口説かれたから、そういう事に慣れちゃってもう。慣れって怖い。
まあ、見た目にはそんなに拘らないし、上手に口説いてくるなら正直なんでも良いから、攻略する側からすれば多少は楽かもな。
「ぐぬぬ、クソゲー過ぎる……。好感度が上がらない不具合」
「カンストしてるよ」
実際、艦娘の皆んなは、ちょっとめんどくさい所もあるが、性根は良い子でそれぞれ個性的で退屈しないし、好感度的なものは上限一杯

まで上がってるよ。
「じゃあ抱いて」
「はい」
肩を抱き寄せる。
「……はぁ。本当は童貞とか、そんなオチはないよね？」
「ご想像にお任せします、ってね」
百人斬りどころじゃないからな、大っぴらには言えない。毒耐性あるからって人は元より人外まで幅広く抱いたし抱かれた。言いふらしたら怒られそうなので言わないけど。
「その反応、絶対童貞じゃないもんね！百人斬りに決まってるよ！あーあ、やっぱり、現実はクソゲーだー！」
……まあ、皆んな薄々気づいてはいるだろうし、良い加減手を出しても……。
いや、やめとこ。

１４５話　祝い酒は高級品

「酒ＵＭＥＥＥＥＥＥＥ!!!!!」

この物語は残念ながら、俺ＴＵＥＥＥＥではなく酒ＵＭＥＥＥＥなのである！格好良さとは無縁だ！すまんな！

いやー、碌に働かずに飲む酒は美味えなぁ!!マジで美味え!!

今日もやったことと言えば、ちょっと地中海まで行ってきて申し訳程度に戦って、後は混浴。びっくりするほど働いてねーな俺。

でも、勝ちは勝ちでして。地中海からは深海棲艦が撤退、相手の生産力を大きく下げる結果になった。二次大戦中のアメリカ以上のとんでもない生産力を持つ深海棲艦の勢いを弱めたのはデカい。

で、勝ったから恒例の宴会。

んー、良いね。事ある毎に祝い事と称して酒を飲む。今回の地中海の件で多くの資金を得られたからな、それはもう黒に限りなく近いグレーな方法とかで。この有り余った金を存分に使い豪遊なのだ。

貯金？知るかなのだ。無くなったらまた金持ってそうな金ピカ王から借金するのだ。もしくはあれをああして稼ぐとか。意味もなく貯金するのって良くない事だと思うんだ、俺は。

「と言う訳でほい！」

純米大吟醸～。

かーっ！美味え！かーっ！

鎮守府の母親ポジションである鳳翔が作った和風おつまみとの親和性よ。

洋酒の方が好みなんだが、日本酒も嫌いな訳じゃない。むしろ好きだよ。米の甘みが良いよね。あんまりお酒って感じがしないけどさ。アルコール度数が低くてジュースみたいだ。

「日本酒ってワインと比べると安いですよねぇ」

「でもこれ二十万円……」

「ヒエッ……」

ポーラだけじゃなくザラも飲みなさいな。後のことなんて考えなくて良いから。楽しまなきゃ損損。

「ほら、ポーラ、ワイン買っておいたぞ。ザラも是非飲んでくれ」
と、手元の瓶を傾ける。
「わーい！」
「あ、ありがとうございます！」
赤ワインだ。好きだろ、君達？
「んん、美味しい、美味しいです！飲んだことない味ですね～？……んん、んんんん？淡いけど、味が全体的に高い水準で纏まっていて、でも、根っこの部分は力強くて……」
「……本当だ。香りとか、味とか、どれがが突出しているんじゃなくて、限りなくバランスが取れてる。……何ですか、このワイン？」
だろうな。癖がない分、通じゃなきゃ味は早々分からん。
「銘柄かい？」
「……ザラ姉さま、私、嫌な予感がします」
「……奇遇ねポーラ、私もよ」
「これだよ」
「うわあああああああロマネコンティあああああああ!!!!!」
なーに、ほんの二百万円ちょいだよ。
「なんて事を……！なんて事を……!!」
「あ、開けちゃったんですか?!!」
酒だよ？飾るのも良いけど、後生大事に抱えておくのもなぁ。
まあ、二、三本別で取っておいてあるが。
「まあまあ、流石に何十年も前のじゃないから。安心だね」
「い、いつのですか？」
珍しく真面目な顔したポーラが聞いてくる。
「ＸＸ年の」
「当たり年のお高いやつじゃないですかぁ!!!」
そりゃ良作時のやつが美味しいからね。仕方ないね。
「うわあああああ！飲んじゃった！え、どうするんですかこれ!!」
慌てるザラ。そんなにか？
「まあまあ、たまには贅沢しないと」
「そんなこと言って先月はシャトーマルゴーとか買ってたじゃないで

すかぁ!!!」
まあまあ。
金も、酒も、あるなら有効に活用せにゃならん。
全部俺のポケットマネーだから安心して飲んで欲しい。
「はぁ。まあ、提督は言っても止まりませんから～。ぐだぐた悩むより、今この瞬間を楽しむことが大事ですね～。提督、もう一杯下さ～い」
「おっ、良いね。素敵な考え方だ。先の事を考えるのは最小限、今この瞬間は楽しみこそ全てだ！その時君は美しい！ってスタイル！」
本当に、先の事なんて最小限で良い。そりゃ冠婚葬祭くらいは頭の隅に置いとくべきだがね、予想出来ない未来にばっかり気をとられるのもおかしな話だ。
もしかしたら明日にでもKクラスシナリオが起きたり、ムンドゥスが復活したり、暗黒大将軍が攻めてきたりするかもしれない。
人生なんて泡沫の夢。流星のように輝いて、一瞬一瞬を楽しんだもん勝ちだよ。
「あはははは～！そうですそうです！ポーラ、今まで頑張ってきましたから！楽していいはずです!!楽しんでいいはずです!!!」
「そうそう！皆んな頑張ってるだろ？頑張ってる人は楽して良いんだよ！君にはその権利と義務がある」
それが必然だ。
「ポ、ポーラ……」
「ザラ姉さまも飲みましょ～？もう諦めて、この生活に慣れちゃいましょ～？……私達、幸せになって良いみたいです」
「そう、ね。そうよね！私達も、幸せになって良いわよね！て、提督！私にももう一杯下さい！」
「アイヨー」
飲め、飲むのだ！べろんべろんに酔っ払って、明日の朝まで馬鹿騒ぎしようじゃないか！ああ、クソ、人生楽しいなぁ……!!!
日本酒やワイン程度じゃ酔えないが、この宴会の雰囲気がたまらなく好きだ。強いて言えば、この楽しげな雰囲気に酔ってしまいそう

だ。
最高だよ、全く。
「さあ、飲んでくれ提督。さあ！さあ!!」
「神便鬼毒酒は、と。……ささ、提督！お酒よ！」
「鳳翔さーん、ソーマ下さい！今日こそ提督を……！提督ー、お酒ありますよー！」
全力で酔わせに来ている艦娘達はまあ。うん。
升を渡してくる長門、俺に特効の神便鬼毒酒を拵える足柄、空いた杯にすかさずソーマを注いでくる鹿島……。目がマジだ。大学生の新歓コンパの如く、虎視眈々と狙われた俺の明日はどっちだ。
お持ち帰りされそう（小並感）。
まあ、そん時はそん時だ。最近は俺のちゃらんぽらんさ加減を理解してくれたらしく、色々と大目に見てもらえるようになってきた。
この調子なら風俗に行っても許されるかも、
「……提督？僕と提督は高い次元で繋がっているし、お互いの内側を見せ合える仲だけど……、他所の女と交わるなんて、悲しいよ」
いや、無理だ。
最近は表層の思考くらいなら見ただけで読み取れるようになってきた時雨に釘を刺される。風俗はＮＧとのこと。
「僕で良ければ、好きなだけ抱いて良いよ？筆舌し難いような陵辱だって受け入れるし、肺腑を抉るような痛みも愛として受け取るよ。脳と、その内側の瞳さえ無事なら多分死なないから、どんな行為だってしてくれて良いんだ」
「き、気持ちだけ受け取っておくよ」
裂けるような笑みを浮かべる時雨。……多分、俺の命令なら死すらも受け入れるんだろうな。
「よ、他所の女？交わる?!司令官さんはそんなことしません！……ね、司令官さん！……そんなこと、あったら、私は……」
「お、そうだな」
羽黒が言う。新ジャンル、バレたら死なれるの羽黒だ。誰だ、風俗

がセーフとか言ったやつは！
「他所の、女？提督にそんなものは必要ありませんよ？提督、貴方のお嫁さんはここですよ、余所見は駄目ですよ」
一瞬で瞳が濁るプリンツ。風俗の許されなさは異常。てか怖い。
……ってか、じゃあどうしろってんだよ。
君らに本格的に手を出して良いのか？
でもなー！一人抱いたら全員抱くまで帰れま１０だろーしなー！つれーわー！提督つれーわー!!……まあ、やったら人間関係ズタボロになりそうだわなぁ。でもなー、誘えば百二十パーセントＯＫだろうしなー。据え膳だしなー。
「提督は、僕のこと、嫌い、なのかな。こんなに好きなのに、待ってるのに、ずっと待ってるのに」
据え膳（毒入り）。最上は多分、一度やったら永遠に依存して来そうだ。

……なーんて考えつつ。
「う、おお、おおおおお……」
酔いが、酷い。
「さあ、もっと飲んで欲しいのです！」
「は、はは、俺ばっかりじゃなくて、君も……」
不味い、先に酔い潰さないと。
「電は飲めないのです！」
「そう、だったな、あは、あはははは」
畜生、飲めない艦娘にお酌させて俺を酔い潰すつもりか。電にお酌されれば倒れるまで飲まざるを得ない。……考えたな。
ってか、神便鬼毒酒、効くなぁ！俺のダークサイドな部分に直撃。
どうしよ、いつも以上に頭の中が空っぽだ。
「良い子だなぁ、電は」
「なのです！」
身体が痺れるわ、酔いは酷いわで。
「良い子だなぁ、電は」

「ふわぁ……??」
はっ、酔った勢いでセクハラを……！こんな小さな子になんてことを!!
畜生、旅人としての性！防御回避セクハラだけは眠っててもできるからな、俺！
「良い子だなぁ、電は」
「ーーーっ?????」
ああっ、また！
「……さて、司令官？うちと向こうで休憩せぇへん？飲み過ぎはあかんで」
「全く、本当にクズね！ほら、私が介抱してあげるからこっち来なさい！……来なさいよ!!」
「もーっと、もーっと、私に頼って良いのよ!!」
ってか露骨ぅ!!
お持ち帰りする気マンマンじゃねーの!!
どうしよ、どうする？
このままだと……、食われる!!性的な意味で!!!

……『発想を逆転させるのよ』
はっ?!千尋さん!!!
そう、そうだ。
逆に考えるんだ！
酔っちゃっても良いさと考えるんだ!!
「オッラァーーー!!!」
「て、提督?!なんて凄い飲みっぷり……!!」
樽ごと行ったぜ。

「良いか、足柄……」
「は、はい？」
「男ってのはな、あんまり飲み過ぎると……」

「勃たない!!」

あ、もう駄目、意識が……。

１４６話　バカとカジキと召艦娘

「……令官、司令官。朝だぞ、司令官」
……ん。
「えーと、おは、よう？」
昨夜何してたっけ。記憶ねぇ。めちゃくちゃ飲んだことはなんとなーく覚えてるんだけど……。
「ん、あ、誰？……那智？」
「ああ、おはよう、司令官。……いや、もう司令官と呼ぶべきではないな」
え？
「貴方は父親になったのだから」
血の気が一気に引く。
おい、まさか。
おい、やめろ。
おいおいおいおいおい。

「昨夜は良かったよ、あなた??」

「おおおおああああああああ!!!!!」
「まっ、待てっ！冗談だ!!何もしてない!!何もしてないから!!!自害はやめてくれ!!!!!」

「……で？」
「……その前に、胸に思い切り冷凍カジキマグロが刺さってるんだが……。大丈夫なのか？」
「いやそりゃ概ね大丈、ガハッ!!!!……大丈夫だけどさ」
「嘘つけ！今思いっきり吐血したぞ?!!大体なんで冷凍カジキマグロで

胸を貫くなんてエキセントリックな自殺法を選んだ!!!?」
たまたま四次元ポケットに入ってたからだけど?冷凍カジキマグロは武器としても使えるって神室町で証明されてるんだから、それで自殺するのはおかしなことじゃないもん。
「それで、なんでこんなことを?真に受けて思わず自殺しちゃったじゃないか」
「い、いや、ほんの冗談のつもりでだな。……そんなに、私が嫌いなのか?」
しゅんとなる那智。
「いや、そうじゃないけど……。ゴムが見当たらなかったから」
まさか避妊してないのかと。
「……あ、ああ、そう言うことか。子供はまだ欲しくないと言っていたからな。そうか、嫌われている訳じゃないか。ならいい」
良くねーですよ。
「全く、心臓が止まるかと思ったよ!」
「……現在進行形で胸にカジキマグロ刺さっている奴に心臓が止まるとか言われても……」
いや、思いっきり心臓に刺さってるけど、止まってはいないよ?
「……ところで服を着たらどうだ?裸のままでいられると、その、なんだ、困る、な」
あれ?なんで俺全裸?脱いだのかな……?
まあいいや。あれだけ飲んだんだ、勃たなかっただろうし、心配はいらない。
さて、何故か那智から手渡されたサイズがぴったりの服を着て、本日も行動開始、だな。
「……本当に、飲み過ぎると勃たないんだな」
……え?確かめたの?
あ、そっかぁ(超速理解)。だから俺全裸だったのか。うわぁ、寝てる間に何されたんだ俺。
なんてこったい。

「すいませーん、旅人さーん！守子でーす！相談があるんでうわああああ!!!カジキマグロ刺さってるうううううう!!!」
あ。
「おはよう、守子ちゃん」
「おはようじゃないですよ!!!」
いやおはようだろ。今はまだ八時だよ？
いや、午前の八時だが、地球の裏側ではおやすみの時間だ。ならば、
「あー、おやすみなさい？」
「洒落になってないですよぉ！本当に永遠におやすみなさいレベルの怪我じゃないですかぁ!!」
「はは、上手いこと言うなぁ。ゴホッ!!」
カジキマグロを引き抜く。邪魔だ。後で解凍して俺の晩飯にしよう。
「う、うう、胸に穴が……!!何で死なないんですか?!」
「慣れ」
「!!!?」
ぶっちゃけ、刺されてもショック死しないには単純な生命力の高さと痛みへの慣れだ。百回も刺されりゃ慣れる。確かに痛くはあるけど、過去にもっと酷い目に遭ったことがあるんだ。耐えられない道理はないよな！
「それで、相談って？」
「うう、先ずは傷をどうにかして、それから服を着て下さい……」

はい、着た。傷は治した。奇跡で治した。大回復。
「……それで？」
相談、とは何かな？
「あ、はい。……えっと、実は、建造したくて」
ほう、建造。
「……すれば良いんじゃないかな？」
俺の許可要らないよ？

「いえ、その、黒井鎮守府の工廠で建造させてもらいたいんです。……黒井鎮守府の工廠には、旅人さんに着いてくる沢山の妖精さんもいますし、成功率も高いかなーって」

成る程、うちで建造したい、と。

「OK、やろうか」

「ありがとうございます！」

なーに、構わんよ。

×

×

×

×黒井鎮守府、工廠。

×黒井鎮守府の明石さんの改造により、ロボットやドローン、その他良くわからない機械が稼働しているここにいると、まるでSF小説の世界に迷い込んだかのような錯覚に陥る。

「で、建造って、誰を呼ぶんだい？」

旅人さんの問いかけ。私は、予定を話す。

「取り敢えず、扶桑と山城ですかね。それと、神風型も呼ぼうかと」

でも、一つ問題が……。

「……で、触媒は？」

そう、触媒です。……艦娘と言うのは、各種資材と、その艦所縁のもの……、例えば装甲板の一部とか、例えばその艦の軍服とか、そう言ったものを触媒にして召喚されるんです。

入れなければ完全にランダムな艦娘が現れるそうだけど、殆どが失敗だとか。

そんな触媒は勿論貴重でして、個人で手に入れられるものではありません。

全て、大本営が管理しています。だから、

「実は、扶桑型の分の許可が下りなくて……」

と言う訳です。

どうやら、黒井鎮守府と懇意にしている音成鎮守府の戦力を増やさせたくないみたいで。

「成る程、ね。分かったよ、力を貸そうじゃないか」

「ありがとうございます」
聞いた話によると、旅人さんは物凄くぞんざいな触媒で艦娘を召喚できわああああああ!!!?!!」
「よし、と……」
「何も良くないですよ！なんでトラックとお湯ぶち撒けたんですか!!!?!!」
「ん？三菱ふそうトラックと山代温泉だけど？」
「!!!?!!」
え？これ触媒?!
「ほら、早くボタン押しなよ」
「い、いや、流石に無理があるんじゃ」
「行ける行ける」
え、ええー。
「もし失敗したら資材は返すからさ、試しにやってごらんよ」
うーん、それは悪い気が。……まあ、良いか。私の物差しで測れるような人じゃないし。やってみよう！
「え、えーい!!」
そして、ドックが光って……。

「……扶桑型超弩級戦艦、姉の扶桑です」
「扶桑型超弩級戦艦、妹の方、山城です」

「は、はははは……。本当に成功した……」
信じられないけど、成功したんだ……。トラックと温泉って……。他の提督の苦労をあざ笑うかのような所業ではないだろうか。
ま、まあ、良いや。出来たんだから文句は言わないでおこう。
それじゃ、後は駆逐艦を召喚して、と。

「神風型駆逐艦一番艦、神風！推参です!!」
「朝風よ。神風型駆逐艦二番艦、朝風」
「神風型駆逐艦の三番艦、春風と申します」

「僕が神風型駆逐艦四番艦、松風だ」

よし、成功！

ふぅ、良かった。過程は兎も角、結果は大成功！全員召喚できるだなんて嬉しい！

「……で、僕の司令官はどっちだい？」

松風ちゃんが話しかけてくる。疑問はもっともだ。

「あ、私です」

「……じゃあ、こっちの彼は？」

「えーと、お隣の鎮守府の提督さんだよ。ちょっと都合があって、私のいる鎮守府じゃなくって、ここ、お隣の鎮守府で建造したの」

「……つまり、ここは私達の鎮守府ではない、と？」

扶桑さんが聞いてくる。わぁ、凄く美人だ……。

「う、うん、そうだよ。ここは黒井鎮守府……、国内最大の規模と戦力を持つ鎮守府なの。黒井鎮守府さんとはかなり懇意にしてるから、仲良くして欲しいな」

「はい、それは勿論ですけど……」

……やっぱり、周りが気になるみたいだ。無理もない、ロボットが歩き回って、ドローンが宙に浮いているんだもん。工廠とは一体。

「ま、まあ、ここは凄い鎮守府だから！周りのものは気にしないで！」

「今は凄いんですねぇ、機械が歩き回るなんて。……にしても、黒井鎮守府、の司令官様は、その、素敵な方ですね。もしかして、司令官様の恋びきゃぁぁぁぁぁぁ!!!」

ああ！そんなこと言うとどこからともなく刃物が飛んでくるのに!!

「おおっと危ねえ。大丈夫かい、春風ちゃん。……一応直撃コースではなかったけども、刃物の投擲はやめさせなきゃなぁ」

「は、はい……??」

数メートル先の春風ちゃんを一瞬で抱えて飛び退いた旅人さん。相変わらずとんでもない身体能力だ。

「……何よ今の踏み込み。まるで見えなかった……？」

怪訝な顔をする山城さん。無理もない、私もびっくりしてる。……けど、段々と、旅人さんの言う通り慣れてきている感じだ。毎日驚かされてるから、メンタルが強くなったのかもしれない。

因みに旅人さんは、顔が真っ赤の春風ちゃんを立たせて優しく頭を撫でていた。……もう落としたんだ。

「あ、あの！旅人様は、ご結婚なされているのでしょうか?!」

「んー？今は結婚してないねー」

「良かった……??その、宜しければ、今度一緒にお茶でもどうでしょうか？」

「おお、それは良い。君みたいな可愛い子とお茶が飲めるだなんて幸せだよ」

「か、かわっ?!うふふ、うふふふふ、これはひょっとして脈ありと言うやつなのではないでしょうか??（小声）」

す、凄いなぁ、モテるなぁ。

「と、兎に角！黒井鎮守府さんとはほぼ合併状態だから！訓練も暫くは黒井鎮守府でするように！今日の夜には私達の鎮守府……、音成鎮守府に帰るから、それまでは自由に過ごしてね！」

「「「了解！」」」

「……にしても、どうして急に建造を？」

「その、最近、とある噂が気になって……」

「噂？」

「大本営の艦娘が、大本営の意にそぐわない提督を排除して回っているとか……」

１４７話　勝手に助かれ

……「のう、筑摩。もう良いんじゃ。吾輩のことは忘れて、何処ぞかに逃げよ」
姉さんを見捨てて逃げるなんて、無理ですよ。
……「のう、筑摩。お主は良くやった。もう休んで良いんじゃ」
姉さんが辛い思いをしてるのに、休める訳ないじゃないですか。
……「のう、筑摩。吾輩は、お主に幸せになってもらいたいのじゃ」
私は、姉さんに幸せになってもらいたいんです。
だから。

「次のターゲットは黒井鎮守府の提督、新台真央だ。これが終われば利根を開放してやる。失敗は許されんぞ」
「……了解致しました」

だから、その為なら私は……。

なんだって、やります。

黒井鎮守府……。国内最大の鎮守府。莫大な戦力を持つと聞きます。事実、下調べの時ですらほぼ侵入出来ないくらいでしたから。数多くのセンサーにトラップ、そして知覚範囲が広い艦娘。
本当に勘が鋭くって……。その腕もまた一流であることが窺い知れます。
まともにやったら勝てません。
しかし、私にもチャンスが巡ってきたようです。
「大本営の艦娘、ねぇ……」
「司令官、怖いぴょん？うーちゃんが付いてるから大丈夫大丈夫！」
「司令官の身はこの朝潮が守ります!!命に代えても!!」
「いざとなれば不知火が司令の盾になります」

「提督なら大丈夫よ！村雨が助けてあげる！」
「ははは、ありがと。……守子ちゃんのついでに建造したけど、良いもんだな。建造して正解だったわ」
今、あの提督の側にいるのは、建造されたばかりの艦娘だけ。護衛の川内さんは夜戦に行ったのを確認。
今ならやれる……!!
……にしても、幸せそう、ですね。
この幸せを壊すのは忍びないのですが、生憎、私は姉さんの為ならなんだってやりますから。

……ごめんなさい。
音も無く後ろから近付いて、刃物を首に……。

「……で、君は誰だい？」

血の気が一気に引く。
そんな、まさか。
そんな、やめて。
そんなそんなそんなそんなそんな!!
どこで、どうして気付かれたの?!!
「お客さんかな？……それにしてはちょっと物騒だね。これは仕舞っておこうか」
っ?!刃物を奪われた?!速い!!
「その程度でっ!!」
艤装展開！……人を護る為の艤装でこんなこと、したくはないけど……！
「機銃よ!!」
「おっと、良くないなぁ！」
！、弾いた!!やはり前情報通り、改修済の艦娘並みに硬いっ!!!
「な、なんてことを?!」
「司令、退がって!!」

「ちょ、まっ」
くっ、艦娘が前に！
でも動きは鈍い、いかにも生まれたてと言ったところ。人体の動きに慣れていない……、障害にはなり得ない。それに、ターゲットは逆に艦娘を庇っている……。
「不知火さぁーん！朝潮ちゃーん！退がってエ！危ないからぁ!!」
「なっ?!司令?!!」
「えっ?!前に出ちゃ……!!」
良心の呵責を感じるけど、隙あり、ね……!!
「至近距離からの主砲なら……!!」
「あっ、やべっ」
……ごめんなさい。
「死んで、下さい……!!!」

「あああああああ!!!!」
や、やった?!
……煙が充満していて何も見えない！死体も残らずに消し飛んだとは思うけれど……、万一生き残っていたら不味い。せめて血痕くらいは……。
……生臭い、血の匂い。焼けた肉の匂い。
……やっぱり死んで……。
……?
あれ？違うこれ、人の血の匂いじゃない。
「カジキのたたきィ……!!!」
お魚の焼ける匂い?!!!
煙が凄い?!!
「ちょ、ちょっと、これ、どういう?!!」
「まあまあ、カジキのたたきでも食べて落ち着きなよ」
「……?!!」
む、?!無傷?!
それより、何で魚を焼いて?!何故このタイミングで?!!

「刃物を見て思い出したんだけど、今朝カジキの解凍しといたんだったわ。厨房から取ってきて七輪でたたきにすることにしたぞ！」
「……は？」
「因みに、解凍するときは流水解凍な。色が悪くならないように」
……はっ?!!い、いや、何にせよ、死んでないなら殺さなくては!!
「っ、これで!!!」
殴って殺すしか……。感触は最悪だけど、確実だ。
「おっと危ない」
避けた！くっ、長引けば不利になる！
「このっ、当たって……！当たりなさい！」
「ドゥエドゥエドゥエドゥエ村雨ちゃんたたきひっくり返して裏面に火を通してドゥエドゥエドゥエドゥエドゥエ」
「あ、はい」
当たらない?!!触ることすら出来ないだなんて!!!
「これぞＴＡＳ……、Ｔｏｏｌ　Ａｓｓｉｓｔ　Ｓｔｒａｎｇｅｒである！」
ツールアシスト旅人?!!!

「ま、そんな訳で……」
「ただいま、提督！」
不味い、川内さんが帰ってきて……!!!
「状況はよく分からないけど、その子、取り押さえるねー！」
「ゲームオーバー、だね」
そん、な……。
単純な腕力と速さで取り押さえられてしまった。ここの艦娘には逆立ちしたって敵わない。もう、逃げることは不可能だろう。
姉さん、助けられなくて、ごめん、なさい……。
××××××××××××

「えー、バッドエンドの匂いがしたので、ぶち壊しにしようと思いまーす」
フゥ!!!イエア!!!ヒャッホーウ!!!!
ノリノリですわ。悪巧みはするのもぶち壊すのも楽しいぜ!!!
……特に、人質をとって優位に立ったつもりの奴を、その立ち位置から引き摺り下ろす時なんて最高だ。
うえへへはは、やってやったやってやったやってやったぜー。みたいな。
あばばばば、あばばばばばば。みたいな。
そんな気持ちになる。
「……と、言うわけなんだよ」
「……？」
おっと、小首を傾げられてしまった。
「えーと、だな、川内。つまり、俺は、自分で強いと思ってるやつにNOと断ってやりたいんだよ」
昔田舎で会った漫画家も言ってた。偉そうなやつ、驕り高ぶってるやつの鼻っ柱をへし折ってやるのは最高だよ。まあ暴力は好きじゃないんだがね。でも、ムカつく奴が酷い目に遭えば指を指して笑う。それが悪の組織ってもんだろ？
「成る程、調子に乗ったお馬鹿さんを張っ倒すんだね！」
分かってくれたか。
「ま、待って下さい！」
「え？」
何かな、筑摩さん。
「一体、何をするつもりですか?!」
「大本営に忍び込んで君の姉さんを回収。そして……」
「皆殺し？」
「物騒！いや殺さない！殺さないよ川内！回収したら普通に撤退！」
……聞いた話によると、この筑摩さんは大本営に姉が捕らえられていて、俺を暗殺出来たら開放すると言う約束を大本営と交わしたらしい。

また大本営か。壊れるなぁ。
テンプル騎士団だの要注意団体だの、俺を狙う奴多過ぎ。うちに来た刺客の皆さんは艦娘にボコボコにされてばっかりなのに、どうしてこう、懲りないのかね？
艦娘が捕まえてくれるから、実害はほぼないんだけども。
「良いか川内。今回のミッションは人質の回収……。ノーキルノーアラートで頼むぞ!!」
難易度エクストリーム。
「うん、任せて!!」
瞬間、川内の姿がかき消える。川内なら大丈夫だ。
……大本営の警備ルートは調べてあるらしい。頼むから大本営襲撃とかはやめてくれよ。上層部とは関係ない人達を傷つけちゃならないし、上層部自体も、いきなり消したら国が揺らぐからな。
本当に、頼むから、殺しはやめてくれよ……？

「……恩を売ったつもりですか」
と、呟いた筑摩さん。
「いや？ただやりたいことをやってるのさ」
いや、マジで。いつもいつも迷惑ばっかりかける大本営に煮え湯を飲ませてやりたいのだ。まあ、確かに、助けてあげたいって気持ちもあるにはあるが。
どちらかと言うと、大本営への仕返しって面の方がデカイな。
「ッ！嘘です!!何の見返りもなしに大本営に敵対なんてっ!!!」
既に敵対してるようなもんだしなぁ。
「いやいや、嘘じゃないさ。大体、川内を見たでしょ？あの子の隠形は相当なものだよ？サイバトロン並みのザル警備である大本営に忍び込んで人一人攫ってくるなんて簡単さ」
「出来る出来ないの話じゃありません！大本営は表にも裏にも大きな影響力を持つ大組織ですよ？見ず知らずの艦娘の為に、それを敵に回すかもしれないことを進んでやる馬鹿がいますか?!」
「いるさ、ここに一人な！」

宇宙海賊並みの感想。
「……ぶっちゃけ、大本営とは極めて仲が悪いんだよね、うち。ただ、大本営が無視できないくらいの戦力と戦果があるから、鎮守府の解体は命じられないってだけで」
事実、大本営さんからは、スパイや刺客、憲兵の派遣、情報統制による戦果の隠蔽、資金、資材の供給の停止とか食らってるし。
何と言うか、自主退職させようとしてくる感じ。鎮守府自体がデカく、それでいて強くなり過ぎたんで、解体するのは惜しいんだろう。どうにかして頭の俺を潰そうとしてくるんだ。
「だから、事あるごとに仕返しをしてるんだよ。それがたまたま、君の姉さんを助ける事に繋がったってだけ。つまり……、君達は運良く、勝手に助かる」
助けようとして助けるんじゃない。助けてしまうのが旅人。俺は俺好みの悪事をするから、皆んな勝手に助かっちゃえば良いと思うよ。
「……運？運ですって?!何で今更！そんなもので!!!」
痛、殴られた。
「そんな、そんなもので……!!」
納得いかない、かねぇ。
運悪く酷い目に遭って、運良く救われる。……確かに酷い話だ。はいそうですかとはいかないだろう。
でもさ、過ぎた物事は取り返せないんだ。嫌でも前に進まにゃならん。人間ってのはそう言うもんだ。……艦娘は人間じゃないとか言うツッコミは聞かない。
「どうしてですか！もっと、もっと早ければ！私も、姉さんも、こんなに苦しまずに済んだのに!!今更助かれだなんて!!!」
どうして、か。俺にも分からないよ。何でこう、世界ってのは理不尽なんだろうな。
悲しまなくて良い人が悲しんで。死ななくて良い人が死んで。
世の中なんてそんなもんの一言で収めるには残酷過ぎる。
「もっと、もっと早ければ……。私は……！」

そうだな、もっと早ければ……。

もっと楽しい人生を、

「私は誰も傷付けずに済んだのに!!」

え?そっち?

あ、あー、そっか。悪いことだよな、鎮守府の襲撃とか。うん、悪いことだ。実は悪いことらしい。襲撃、俺もしたことあるけど。何度も。

「私が、私がどんな思いで!どれだけの人を傷付けて!!う、うううう……」

……聞いたところによると、大分多くの鎮守府を潰したらしい。殺されたとまでは聞かないが、それでもかなり多くの提督が駄目になったとか。

護国の為にある艦娘にとって、人間を傷付けるのは苦痛なのか。……あれ、うちの艦娘は……。いや、よそう。触れてはいけないやつだ。

ま、まあ、今も病院のベッドで眠り続けている人もいるらしいし、悪いことなんだろう。……うちの艦娘の方が多くの再起不能者を作り出してる?ごめん、その話は聞きたくない。

俺がどう思うか、ではなく、本人の罪悪感の問題だからな、これは。罪の意識ってのは、自分の中でケリをつけるしかないんだよ。償うにせよ、ぶん投げるにせよ、ね。

だから、俺がどうこう出来る話じゃない。過去を乗り越えるのは、自分自身にしか出来ないから。いや、応援はするけどもね?

……兎に角、泣き崩れた筑摩さんを放っておくのは良くないよな。

「……あー、カジキのたたき、食べる?」

１４８話　居酒屋鳳翔　前編

《ボルトォ、ここの酒ウメーな！》

「……」

こんばんわ。すっかり夜ですね。私が管理しているここ、居酒屋鳳翔にも、沢山のお客さんがいらっしゃってます。

名前に反してお店ではなく酒保のようなものですから、いつもは艦娘しか来ないんですけど……。

でも、たまに、提督のお知り合いの方が訪れたりもします。

私としては、料理を食べて、お酒を飲んで楽しんでもらえるのは嬉しいことです。

鎮守府の保安と言う意味では、外部の方を入れるべきではありませんけどね。

ですが、提督が許可を出しましたから。提督が白と言えば鴉も白色です。

ですから、

《何だ？何見てやがる？このテロメア様に文句でもあんのか？》

「……」

背中から機械の蛇が生えた、グラサンコートの怪しい男も、

「「「ヒャッハー!!!」」」

ベルメットの男に率いられたモヒカン集団も、

『……』

全身刺青の中東系の男も、皆んな、お客さんなんです。はい。

……時々、「あれ？この人、ここにいて良いんでしょうか？」みたいな人が来ますけど、提督はお叱りになりませんから。

多分、良いってことなのかと。

ああ、それにしても……。

《ぐおっ、何だこれ？このテロメア様が酔っ払う？……おいボルト、この酒、「遺物」かなんかか？》

「……知らん」

「??」「ヒャッハー!!!」」」
「??????」
「??ああ。女将さん、ごはんは炊いてあるかな?ごはんを食べないと、お腹がすくじゃないか」
『へぇ、仕事抜きでもお付き合いしたくなるような美人ばっかりだな、艦娘ってのは。……おいニック、帰るなよ?!たまには付き合えよ!』
『チッ……』
「ギョーザ、大葉入りのギョーザをくれ。……ニカイドウの程じゃねーけど、ここのもウメェ。酒は特にいける」
……繁盛してますね（思考停止）。
……あの人なんて暴れられたら止める自信がありませんし、あっちの人は人間じゃない。この前提督に爆弾で吹き飛ばされた人まで……。
正直、ここに来ているお客さんの戦力で並みの鎮守府とやり合えるんじゃないでしょうか……。類は友を呼ぶ、とでも言いますかね、提督のお知り合いはびっくりするくらいに強くて、それで提督と同じ様なキチガ、いえ、その、変わった方ばかりでして……。
どうしましょう……、皆さん頭がおかし、いえ、気難しい方が多いですから。頑張って少しずつ外国語も覚えたんですが……。
例えば、カウンターのこの人。
《ん、おい女!酒が切れたぞ!一番高いの持ってこい!》
「……酒だ。安物でいい」
「は、はい」
緑色のコート。同じ色の帽子。丸いサングラスに長い金髪の大男。提督並みの偉丈夫です。格好は怪しげですけど、ハンサムな方ですね。
でも、
《ウメー、ウメーな。……ん?ってこれ安モンじゃねーか?!!》
背中から、機械の蛇が生えてます……。それが、全く何語か分からない言葉で話していて、その上お酒も飲んでいます。何ですかこれ。
ま、まあ、それはまだ良いんです。喋る機械くらいならうちでも作

れますから。問題は……、
「そ、その、おつまみはいかがですか？」
「いや、いい」
「で、ですけど……」
本体のこの男の人、何故がネジを食べてるんですよ……。
この人は、たまにお酒を飲みにふらりと現れる方なんですけれど……。いつも、強めの洋酒と持ち込んだネジや鉄屑をぼりぼり食べているんです。
流石に、お腹を壊してしまうのではないかと思いまして、いつも「おつまみはいかがですか？」と申し出ているんですが……。
「……他人とは、食生活が合わない」
「は、はあ……」
と、お断りされてしまうんです。
どうしてでしょうか？私の料理を食わず嫌いしていると言う訳ではないみたいですが……。
いえ、提督も鉄屑を食べることが出来ますよ？本人が言うには、「フィート：あなたは何でも食べられる」、だそうです。ですが、鉄屑は美味しいものではない、胃が悲鳴を上げるとおっしゃっていましたし……。
「……あむ」
あ?!こっちを見ていた赤城さんがボーキサイトを食べた?!
「……美味しくないです」
「赤城さん?!」
でしょうね……。
「特別美味しい金属なのでしょうか？でしたら少し、分けて頂いても……」
《鉱物を食ったぞ？……お前と同類でもないのに、馬鹿なのかこいつ》
「……違う、普通の金属だ」
「そうですか……。やはり、世界一の冒険屋ともなると、味覚も違うものなんですね！」
「冒険屋とは、殺し以外の様々なことを請け負う便利屋のようなもの

と聞きました。味覚は関係がないかと」
普段はとても物静かな方で、あまりお話はしませんけど……。
でも、食いしん坊同士、気が合うのでしょうか。赤城さんや加賀さんと一緒にいるところも、たまに見かけるんですよね。

「「「ヒャッハー!!!」」」
「ジャギ様ァ!!」
「ジャギ様こそ北斗神拳の伝承者ですぜ!!」
「ジャギ様のお陰で、俺達は職にありつけたんです……!!俺、ジャギ様に拾われてなきゃあ今頃……!」
「オウ、やめろ。湿っぽい話は無しだ、酒が不味くなる」
「ジャ、ジャギ様……!!」
あそこにいらっしゃるヘルメットの男性は、黒井鎮守府に石油を卸す、株式会社世紀末の社長さんです。
「やっぱり、ジャギ様は俺達のボスに相応しいぜ」
「ゴロツキだった俺達を拾ってくれた恩、一生かけて返しますぜ!」
因みに、部下のモヒカンの方々は、ああ見えてお喋りが好きで、よく色々なお話をしてくれるんですよ。
色々なお客さんとお話できるのは幸せなことです。見た目で怖がらずに、一歩歩み寄ってみることも大事なんですよ?
「俺ァ、今でも覚えてますぜ!聖帝軍にしょっ引かれそうになった時、助けてくださって、そのままウチで働けってなもんで!」
「たまたま人手が足りなかっただけだ!」
……そうすると、見た目よりずっと良い人だと分かりますから。人も食べ物も、食わず嫌いは良くありません。
「皆さーん、ご注文の世紀末骨付き肉ですよー」
「「「ヒャッハー!!!」」」
世紀末骨付き肉は皆さんの好物です。塩胡椒で味付けした骨付き肉の盛り合わせなんですが、何故か大好評でして。あと、他にも、保存食のガチガチのパンのようなものを「ヒャッハー!食料だぁー!!」と喜んで食べます。

……その、味覚は、あんまり良くないみたいです。で、でも、何を出しても美味しいと言ってもらえますから！
「全く、あんた達は味音痴だねぇ」
「食えりゃ良いんすよ、食えるだけで幸せですぜ！」
「だけども、俺達みたいな馬鹿でも女将さんの料理が美味いことは分かってますぜ！」
そして、モヒカンの方々に自然と溶け込んでいる隼鷹さん。
全く何の違和感もないです。
「……で、ジャギ。あんた結婚は？」
「そーですぜジャギ様ぁ！アンナさんをいつまで待たせるんですかい?!!」
「とっとと告っちまって下さいよ!!」
「そ、そ、その話はやめろ!!ま、まだ決心が……」
「あたしだって提督と結婚したんだよ?!さっさとくっ付いちまいな!!!」
「う、うるせえ!!!」
……式には呼ぶと言ってから一年以上経ちましたねぇ……。

『アベルー、迎えに来たぞー。……この扉、ＳＣＰだよなぁ。収容した方が……、いや、やめておこう。ほっといた方が絶対に面白い!!!科学者としての私の勘がそう言ってる!!!』
扉……。現在、黒井鎮守府の科学力及び魔法や呪術などの凡ゆる力で「到達可能な」かつ、「提督が足を踏み入れた」世界に複数存在する転移装置、と聞いています。
意味はよく分かりませんが、提督の知る世界からお客さんが来る、と言う認識で良いらしいそうです。
技術の大元は夕張ちゃんが、「提督を逃さないために」造ったものです。提督を信用していないみたいで少し良くないんですけど……、仕方ないですよね。提督の家はここですから。迷子にならないようにしないと……。
『????????』

『ハッハー、何言ってるのかまるで分かんなーい。……って、ピザの追加注文か。……え？これ、経費で落ちるよね？』
《ん、やあ、ブライト博士。アベルも》
『やあ、時雨ちゃん！サムライソードにセーラー服の戦艦とは、全く以？？？

戦いたいなら次からは僕が相手に……》
『????……』
??もう時雨ちゃんったら。私だって、提督を傷付けた彼を殺したいのに。
「駄目よ、時雨ちゃん。命令、覚えてるでしょ？」
でも、提督は、手出しするなと命令しました。「いかん！そいつには手を出すな！一度勝ったら殺されるまで挑まれるぞ！」と。
見ての通りあの人は不死身です。正確に言えば、死んでも、後日別の場所で生き返るらしいそうです。
実際、先日に提督が「判決！死刑!!」の一言と共に自爆特攻をした時、確かに死んだはずです。でもこうして生きていると言うことは、提督の言った通り無限に蘇るんでしょう。
そしてその性格は狂った武人。提督のような強い人間との殺し合いが趣味、だとか。
組手くらいならまだ良いんです。けど、殺意を以って提督を傷付けるのは……。
《……鳳翔さん、殺気、漏れてるよ》
「ふぇ？あっ、はい、すみません！お騒がせしました！」
いけないいけない！私としたことが……。
『そう言ったもの』に敏感な方ばかりですもの。殺気を出しちゃいけませんね……。ここの女将だと言うのに、お客さんを不安にさせてしまいました……。皆さん、一斉に手元の武器を抜いて、いつでも殺し合いができる状態に。こんな雰囲気ではお酒どころではありません。
一体、どうしましょう……。
×
×
×
「っ、と。侵入完了！」
塀を垂直に駆け上がり、頂点で一回転。縁に足をかけ、塀の内側へ。そして、塀を垂直に駆け下りて、建物の影と一体化する。
以上のことを、無音で、一秒以下で、且つ気配を消して行う。簡単だ、誰にでもできる。

……にしても、下調べ通り、侵入感知装置が殆どない。精々、旧式の監視カメラと、やる気のない憲兵が数人、か。これじゃ、侵入してくれって言ってるようなものだよね。

黒井鎮守府なら、最低でも、赤外線、サーモグラフィー、超音波センサーの三種類は常にオンラインだし、機銃付き監視カメラとドローン、駆逐オートマトンがそこらを徘徊してるのに。それプラス明石と夕張の気分で防犯システムが変更、強化されるし。

まあ、確かに、日本を支配した気になっているこんな間抜けな奴らをおちょくるのは楽しいかも。

さて、間取りも、警備ルートも全て把握してるし、特別な敵もいない。

ただ見つからずに、殺さずに、人質を取ってくれれば良いんだから。簡単簡単。

さ、行こう。

一歩。始動。存在感を極限まで薄める。

二歩。加速。速度を上げる。

三歩。四歩。五歩。六歩……。

入り口、不可。見張りとカメラ。

窓、不可。鉄格子。

屋上……、可。

何の変哲も無い、ただの鍵穴。ピッキングツールを差し込んで五秒。解錠完了。

人質の位置は恐らく地下。真下へ、降りていく。

飛ぶ、跳ねる、駆ける、最速無音で、死角を利用し、下へ、下へと……。

下へ、下へ、下へ、下へ、下へ……。

「……筑摩、無理していないと良いんじゃが。ん？」

いた。

「なっ?!だ、誰じゃドゲフ!!」

「うるさいからちょっと寝てて」

はい、回収。
このまま、次は、上へ、上へ……。
楽な仕事だった。予定の時間の半分も経ってない。
……ん？
血の、匂い？

「ホント、殺し屋って言うのは、この世で最も卑しい仕事ですよ……。貴女もそう思いませんか？ご同業さん……」
あー、あれね。提督がここにいたならこう言ってるね。
「楽な仕事はフラグ、騙して悪いが」ってね……。

１４９話　居酒屋鳳翔　後編

「女将さん」
「は、はい？」
「ごはんがないじゃないか……」
「はあ……？」
　今の殺気、感じなかったんでしょうか？
「ごはんを食べないと、お腹がすくじゃないか。お腹がすくと、怒りっぽくなるじゃないか」
　ああ、もしかして……。
「……すみません、気を遣っていただいて。ごはん、ですね。奥で炊いてありますから、持ってきますね！」
　場を和ませる為に？
「おおー！」
　いえ、これは何にも考えてない顔ですね……。でも、場が和んだので、結果的には良かったです。有難うございます、お客さん。
　……あれ？でも、見ない顔ですね？
「わたしは新台先生に会いにきたのです」
「新台先生？提督のこと、ですか？」
　見たことのない顔、提督を先生と呼ぶ、冬服の学ラン……。提督が教師だった頃の、生徒さんでしょうか？
　それにしては……。
「……貴方、人じゃありませんね？……この気配は……、ロボット、ですか？」
　生命力が感じられない？見た目は完全に人なんですけど……、気配が機械のそれです。
「やは、ロボットじゃないよ、アンドロイドだよ」
「は、はあ……」
　あ、この人、よく分からないタイプの人だ。
「で、では、ごはんですね？何にしましょうか？」
「……ごはんはごはんでは？」

いえその、ごはんって言っても色々あるじゃないですか。オムライスくらいならすぐに作れるんですけど……。
「では、コシヒカリで」
「ごはんってそう言う意味ですか?!」
米そのものを単品で?!白米を出せと?!!
「その、おかずは?」
「……?」
ええー?そんな心底分からないみたいな顔をされましても……。
「わ、分かりました。白米ですね?」
白米……。白米だけを?お客さんにごはん単品だけを出すのは初めての経験ですね……。どうしましょう……、取り敢えず大盛りにしておきましょうか?
「ではその……、ご、ごはんです」
「わあ!おいしい!」
ごはんだけを……。しかもロボットなのに……。
「もぐもぐもぐ……。新台先生はですね、宴会があるといつの間にか現れて、お酒を飲んで帰るんです。昔からそうでした」
「は、はあ」
いきなり何を……。でも、提督の昔の話を生で聴けるのは貴重ですね。
提督の過去については、提督の日記……、嘘か本当か分からないような意味不明の冒険譚からしか読み取れませんから。
本人からの話も、「思い出は、俺の何よりも大切な宝物なんだ。自慢は出来ても見せることは出来ないんだよね」などと言って、内容がアバウトですから。
「魔法で隕石を降らせた」とか、「裁判所で霊媒が行われた」とか、「月人のお酒を盗んだ」「半人半魔のデビルハンターと神を倒した」「一つ目の部族と世界の果てを目指した」などなど。真偽のほどは定かではありません。
「その、提督……、彼はどんな先生だったんですか?」
凄く気になります。

「新台先生は……、鳥坂さんに似ています」
「誰ですか?!」
「わあ、急に大きな声を出さないで下さいよ。首が取れちゃったじゃないですか」
　ほ、本当だ。首が取れてコードが……。
「「確保ぉーーー!!!!」」
「な、何ですか?」
「機械!メカ!ロボット!」
「わたしはアンドロイドで」
「未知の技術!」
「あ、あ~れ~……」
　ああ、夕張ちゃんと明石さんが、お客さんを攫って行ってしまいました……。
　ま、まあ、良いでしょう。壊しはしないと思いますし。ああなった二人は止められませんから。

　さて、場の雰囲気も和んだことですし。
『……あ、あー、やっぱりお付き合いは遠慮しておこう。……スンゲェ殺気。お前以上かもな、ニック』
『……（試すか?）』
『……馬鹿この、試すとか冗談はやめろ、棺桶に入る予定は当分先だぞ?!』
　ふふっ。
　……こちらとしても、旦那様がいらっしゃるので。
『お付き合いはご遠慮しておきますね』
『うおっ、き、聞こえてた?!いやその、ごめんね、悪く言ったつもりはないんだ』
　……こちらの二人は外国の方。片方は金髪の白人。もう片方はアジア系の、「混ざり物のある」人間。
　……薬品でしょうか?肉体の中身が尋常じゃありませんね。……それに、強い。相当に練り上げてますね。

『……（ここの女共、強えぞ。Ａどころかｓは行くだろうな。やめとけ）』
『だから、ジョークよジョーク。人の女を無理矢理寝取るようなマネするかっての』
『……（お前、人妻の相手もしてんだろ）』
『いや、そりゃ仕事でやってんだよ！意外と大変なんだぞジゴロも!!』
　それに、耳も聞こえないみたいです。周りの音に反応していませんから。先程から手話で会話なさっています。
　……そして、この、女の敵らしい金髪の白人男性。
『ジゴロだなんて、いけませんよ？』
『……あっ、やべっ』
『……（女ばっかりのここでよくもまあジゴロだなんて言えるな）』
『き、聞かなかったことに……』
　はぁ、全く。
『誠実な提督を見習うべきです！』
『……あいつが誠実なら、俺なんて聖人君子じゃないかな』
『……（そりゃ認めるが）』
『あら？誰のことかしら？聖人君子って、まさかウォリックさんのことじゃないですよね？』
『ん？ああ、いや、何でもねぇよアクィラちゃん』
　……因みに、外国の方はよく海外艦とお話をしているところを見ますね。
　会話の内容は半分くらいしか分かりませんが、仲は良いみたいです。

「モグ、モグ……。ウメェ。やっぱギョーザは最高だ」
　……トカゲ。
　首から上がトカゲ。
　どうしましょう、人の言葉を話すので、人間扱いで良いのでしょうか？ですが、提督が言うには、高位の妖魔は人語を解すると……。
「……ん？何？オレの顔に何かついてる？」

「い、いえ……」
まあ、店で暴れないなら、良いです。良いんです。
ナイフを装備しているみたいですが……。
基本的に、武器の持ち込みは可です。居酒屋鳳翔には、前にも言った通り、様々な世界に繋がる扉があります。なので、たまに、悪しき妖魔の類が現れたりするんですよ。他にも、賊や悪党が入り込んだりもします。
要するに、自分の身くらい自分で守って下さい、と言う訳です。
……ふふ、艦娘の台詞じゃありませんね。
「……あ！アンタもしかして、オレのこと、怪人かなんかだと思ってるのか？オレは人間だぞ！」
え？どの辺がですか？
「昔、魔法使いに魔法の練習台にされたみたいでな、首から上が爬虫類になっちまったんだ」
「は、はあ」
魔法使い、ですか。
「みたいって言うのは、オレにはこの姿になる前の記憶がないんだ。だから、オレが誰なのかずっと調べてる」
……記憶喪失のトカゲ頭の大男、だなんて。いろいろな人が世の中にはいるんですねぇ。
「……なあ、オレに見覚えとかってないか？」
「その、すみません。でも、提督なら魔法を使えるので、提督に聞いてみるのはどうでしょうか？」
「そうか……。提督ってのは、旅人だな？あいつは違かった。それに、あいつの魔法は、オレの知ってる魔法使いの魔法とは違うみたいなんだ」
魔法使いにも種類があるんですね。提督も魔法を使いますけど、血統による固有の魔法などは使えないそうです。本人が言うには「写輪眼でも血継限界はコピーできないだろ？そういうこと」らしいそうです。
「うおっ?!な、何だ？モンスターか?!」

「誰がモンスターだ!!」
あ、摩耶さん。……摩耶さんはトレーニング代わりにモンスターと戦うことが多いらしいですから。
「……何だ、そう言う種族かなんかか」
「いや、そーじゃなくってだな」
もう、摩耶さんは失礼ですね。思っても口に出してはいけませんよ？……でも、根は優しい人ですから。問題にはならないでしょう。
それにこうして色々な人とコミュニケーションをとって、より人らしくなること。それは素晴らしいことです。
「まあ、ここはホールじゃないしな。聞き込みしたって無駄か。女将さん、ビールおかわり！」
「はーい」
もっと、もっと人間を真似て……、提督の心を掴んで見せます。待っていてくださいね、旦那様??
×
×
×
×
×はー、危ない危ない。
見るからに相当な手練れだったし、相手にしたくなかった。だから一か八か提督の名前を出したら……、
……「君、旅人の所の子？そっか、じゃあ、殺る訳にはいかないなぁ……。お互い、何も見なかったってことにしておこうか」
とか言ってどっか行っちゃった。
イかれた銀髪の、蜘蛛の刺青の男。相手したら無傷で帰れなかったと思う。やっぱり提督は凄い。名前一つで凄腕の殺し屋を退かせるんだから。偉大なんだなぁ。
因みに、死体は大本営の幹部の一人だった。どうせ、何か悪いことをして他人の怨みを買って、そして殺し屋に殺られたんだろうね。ゴミらしい末路だと思うよ。
むしろ、私が殺っても良かったんだけどね。今日の仕事は、
「ふにゃぁ……」
これ（利根）を回収することだから。見つからずに、って言われた

けど、まあ、大本営の人間に見つかった訳じゃないし、良いか。
んー、でも、無理矢理気絶させて運ぶのはちょっと手荒だったかも。後で謝っておこう。
さあ、大本営の人間に見つかる前に、帰ろう。利根を背負って非常階段へ。勿論、悠長に階段を使ったりなんてしない。非常階段のあるフロアの壁を垂直に駆け上がる。
……っと、流石に、人一人背負ってたら、垂直移動が難しいな。途中で階段に着地も挟まないと。実質的には、連続で三角飛びしてるみたいになってる。一人なら一気に駆け上がれるけどね。
「ほっ、やっ、とお」
「ふにゃっ、ほあっ、ゆ、揺れっ」
はいはい、ごめんごめん。揺れるのは許してね。最速で移動してるから、ちょっと乗り心地悪いだろうね。
さて、そろそろ……。
「屋上、と」
それじゃ、窓枠を伝って降りるよ。
落下の衝撃で死なれても困るし、窓枠とか室外機とか、そう言った出っ張りに手を掛けて降りる。一人なら、壁を駆け下りるんだけどね。
「うううう……、ちくまぁ……」
……この子、寝言うるさいなあ。布かなんかで口元を縛っておけば良かった。
まあ、もう良いや。塀を乗り越えて大本営の外に出ちゃったし。さあ、早く鎮守府に帰ろう。
うーん、ご褒美は何がもらえるかな。撫でてくれるかな、抱きしめてもらえるかな。もしかしたら、キスしてもらえるかもしれない。
……楽しみだなぁ。

１５０話　料理人の心得

「利根姉さんを助けて下さってありがとうございます。その上、ここで雇って頂けるなんて……。今まで人を傷付けたきた贖罪のため、貴方へ恩を返すため、誠心誠意お仕えします」……、そんなことを言われて早一週間。

利根、筑摩を含めた新入りの艦娘は、圧倒的な教官力を持つ神通、鹿島の手により、パイナップルアーミー並の速度で急成長させられている。

だが、艦娘も人間と同じく、疲れを感じる生き物。息抜きは必要だ。特に、神通のスパルタも真っ青な殺人トレーニングは心身をぶち壊す。

故に、新入りの艦娘には週二日の休日を与える事にした。平日は朝から晩まで訓練してるんだ、休んだってバチは当たらないだろう。

「提督！遊んで！」

「はっはっは、しおい殿、痛いでござる。痛たたた、痛い痛い」

だが俺で遊んで良いとは一言も言ってない。痛たたたたた、引っ張んないで引っ張んないで。

……しおいは、その明るい性格から早くも鎮守府に馴染んだみたいだ。

「提督さん、そろそろ三時ですし、一緒におやつを作りませんか？」

こっちの速吸も大分馴染んだ。料理が上手く、厨房に立てると言うのも早く馴染んだ一因だろう。

「そうだねぇ、クッキーでも焼こうか」

クッキーは初心者向けながらも奥が深いものだ。今回は、そうだな、アイシングクッキーにしようか。

「と、言う訳で。やって参りました厨房。……間宮と伊良湖は何でいるの？」

「え？だって提督が洋菓子を作ると聞いて」

「今後の参考にしようかな、と！」

そんなキラキラした目で見られてもなぁ。ただクッキー焼いて、アイシングクリームで絵を描くだけだし。凄くはないと思うよ。
「特別なことはしないよ？先ずはクッキーを焼きます」
「待って下さい！」
「何？」
どうしたの速吸。俺、なんか悪いことしちゃった？
「……いつ焼いたんですか？」
「今」
「……？！！」
「料理スキルでの料理は1ターンで出来るからね仕方ないね」
「1ターン？！！」
そう、1ターン。え？1ターンで通じない？一歩歩くのに必要な時間のことなんだけど。ノースティリス単位じゃ駄目？
「え、いや、だって、クッキー焼くなら小麦粉をバターを混ぜて砂糖と卵を入れて、生地をなじませてオーブンで焼いて……、一時間はかかりますよね？」
「いや、1ターンで足りる」
「1ターン」
1ターンあればパフェまでなら作れるでしょ。何言ってんの？
「で、でも、これ、フードプロセッサーですよね？どうやって焼いたんですか？」
「調理器具である以上、概念的に料理は出来るよ」
「概念」
そう、調理器具という概念がある以上、流し台でステーキを焼くことも、バーベキューセットでケーキを焼くことも十分可能だ。
「そ、それに、材料は？木の実を使ったように見えましたけど、木の実だけじゃ、こんなちゃんとしたクッキーはできませんよね？」
「材料はアピの実だよ。食べると、器用、習得、魔力のステータスが鍛えられる」
「アピの実」
ノースティリスでよく採れる木の実だ。そこらじゅうで拾えるか

ら初心者冒険者のお供って感じ。
「わ、分かりました。……でも、木の実一つでクッキー何枚かって、おかしくないですか？質量、変わっちゃってますよね？」
「料理すれば原材料より重くなるのは仕方ないでしょ。アピの実一つが０．０４ｓに対して、調理後の重さは０．５ｓ固定なんだし」
「０．５ｓ」
そうだ。例え何十ｓあるドラゴンの肉だって、ステーキにしてしまえば０．５ｓに強制的に変化するんだ。
ｓってのはノーステイリスにおける重さの単位で、鉄のロングソード一本でおよそ４．２ｓくらい。
「……提督、何だか頭が痛くなってきました」
「大丈夫？」
おでこに手を当てる速吸。え？なんか俺、おかしなこと言ったかな……。
「提督、こうですか？」
「そうだよ間宮。中々、料理スキルが高まってきたじゃないか。勿論、普通の料理法も出来なきゃ駄目だけどね」
しっかりと心を込めてはいるが、ノーステイリスの料理では限界がある。繊細な料理にはあまり向かないんだよね。だって冒険者の技だもん。
……でも、ご家庭で作るクッキーくらいなら十分に対応できる。
「味見してみて」
「はーい。さくっ……、美味しいです！」
よし、しおいの口に合ったみたいだ。
「速吸も」
「は、はい……。あ、美味しい?!」
過程はアレだが、ちゃんと美味しく作ってはいるんだ。素材の味を活かす系のアレである。
「それに、今回はアイシングクリームでのデコレーションだから」
クッキー自体は凝る必要がないよね。
「クリームでデコレーション……、絵を描くんですね？」

「そうそう、こんな感じで」
ビール瓶の底くらいの、少し大きめのアピの実クッキーにクリームで絵を描き込んでいく。
「あまり気負わないで、楽しんで」
固めのクリームで縁を、柔らかめのクリームで色をつけて。
「でも、美味しくなるように気持ちを込めるのを忘れずに」
素早く、繊細に。
「結局のところ、料理は愛情だからね。たかがクリームでお絵描きするだけなんだけど、美味しく食べてもらう気持ちは大切で……、っと、できた」
「……?!、これ、私ですか?艦だった頃の……」
そう、海に浮かぶ補給艦、速吸を描いてみた。
「わあ!こっちは私です!」
運河の伊４０１も別で描いた。
「提督すごーい!写真撮ろーっと!」

「え?え?普通に神業では?」
「速吸ちゃん」
「間宮さん?」
「提督だから仕方ないと思って、納得して」
「は、はあ……」
「提督は定期的に奇跡を起こして毎日神業を見せるので、驚かないように慣れて下さい、としか」
「伊良湖ちゃん……」
申し訳ないが、人をびっくり人間みたいに言うのはＮＧ。
「うわぁ、右手と左手で別々の絵を……。人辞めてませんか?」
いや、ちょっとは辞めてるけどさ、大体は人間だよ。四捨五入すれば人だから人とカウントしてくれ。……あれ?いや、仙人は人間とカウントしていいよな?そうじゃなきゃ俺人間じゃないぞ?……まあ、ほら、そう言うのは気の持ちようだろう。
「俺は人間だよ」

×そう、人間だ。概ね人間だから人間だ。約人間。
「人間の動きでは……」
×人間だよ。
×
×
×
「フ×ゥー！テンション上がって来たァ！お菓子作りたーのしー!!あはは×はははは!!!」
「ヒ×エッ……」
×わあ、ハイになってる……。
提督さん、何でも出来るんだなー。空を飛んで瞬間移動して、艦娘と一緒に出撃して、建物を建てて、自爆したりして、その上料理も作る……。控え目に言って人じゃない。
「人間だよ」
……。
そ、それに、そのどれもが一流。料理だって凄く上手い。
「いやいや、俺なんてまだまだ。世の中にはもっと上手い人が」
「その、世界で一番じゃなくても、上手いものは上手いと思います！」
何で変なところで謙虚なんだろう……。プロ級なのに。
「いやね、俺はあくまでプロ級ってだけで。世の中には俺が逆立ちしたって敵わない料理人が何人もいるからなぁ。いやぁ、味吉さんとか、北方さんとか。無理無理、敵わんね」
だ、誰ですか？
「あー、確かに。日之出食堂、凄かったですね」
「五稜郭亭の料理も神懸かり的な美味しさでした」
……成る程、自分より上手い何人もの料理人に会ったから、自分の料理がそれ程でも無いと思っているんですか。
……何で超一流の料理人と同じ物差しでものを語るんでしょうか、この人達は。自分の本業を思い出して下さい……。
「その、提督さんは提督ですよ？料理の腕前なんて……。間宮さんも、艦娘が本業ですし」

「え？俺の本業は旅人だよ？」
「あ、そう言えば私、艦娘でした」
　えー。
「なんて言うか、その……」
　良いん、ですかね？
「まあまあ、皆まで言うな。意識の低さは重々承知。……最近は最早趣味で提督やってるからな俺は」
「で、でも、提督さんは凄く頑張って戦っていて、お掃除とか料理とか、そう言うのも全部やって、その上、私達に時間を割いてくれてるじゃないですか！」
　頑張り過ぎなくらいには頑張ってると思いますけど……。
「え？そう？書類とかは全然書いてないよ？一日中遊んでるだけで」
「それでも、この鎮守府で一番の働き者ですよ！」
「ははは、ありがと。本当に趣味でやってるんだけどね、全部」
　確かに、料理とか、家事をしてる提督はとっても楽しそうですし。そう言ったことを楽しめる人なんですね、提督は。
「単に、美人揃いの艦娘に良いもん食わせてやりたいだけなんだけどね。ほら、俺、悪者だから。美人には目がないのだよ」
「ふふ、そうなんですか」
　もう、そんなこと言って。提督が優しい人だってことは分かってるんですよ？
　例えば、野菜嫌いの駆逐艦のことを考えて、野菜を細かく刻んだ肉団子やスープを作るとか。例えば、メニューに無くても、出来るだけ艦娘の要望に応えてくれるとか。
　他にも、女の子ばかりの鎮守府ですから、味付けを少しだけ甘めにしているところ。皆んなが戦いで汗を流すから、少し濃い目の味付けにしていること。
　料理一つからでも優しさが伝わってくるんです。確かに、奇をてらった発想や、超級の技術はないのかもしれませんが、何より……、暖かい……。
　提督は、本当に私達を大切に思ってくれているんだなって分かっ

ちゃいます。
「そうそう。男相手なら手料理なんて作らないもんね。……でもここは良いよなぁ。毎日毎日、キレーに食べ終わったお皿を持ってきて、ありがとう美味しかった、って言ってもらえるんだからよ」
おどけて言う提督。でもやっぱり、嬉しそう。
「あ、私もそれ、いつも思ってます！この前のカレーの時も、暁ちゃんが嫌いな人参を全部食べてくれて！」
間宮さんが言い出しました。
「ああ、あの時？」
「そうですそうです、あの時です！……あの時のごちそうさまって一言、私は一生忘れません!!」
「それなら私も負けてませんよ！電ちゃんのナス嫌いを克服したときも凄かったんですから！」
伊良湖ちゃんも声を上げる。
「確かあの時は、ミートソースドリアにしたんでした！電ちゃんも美味しい、美味しいって全部食べてくれて……！」
自分の作った料理を美味しく食べてもらえる、それはとっても嬉しいことです。感謝されるのって気持ちがいいですから。
他人に感謝してもらえるような美味しい料理は、深い愛情がなきゃ作れません。だから、ここの厨房の人達は皆んな、愛情を込めて料理を作れる、心優しい人です！

私、こんな素敵な鎮守府に来れて、良かった!!

「あっ、狙撃だ。殺し屋かな？」
「伊良湖ちゃん行くわよ。提督の敵に死を」
「はい。手足斬り刻んでシチューにして食わせましょう」
「その前に皮を剥いでから顔面を素揚げにしますよ」

……わ、私、こんな素敵な鎮守府に来れて、良かった!!!

１５１話　旅人強度１０００万パワー

「どうしよう大淀、今朝から他人にプロレス技をかけたくてたまらないんだ」
「夕張さぁーん!!!とっとと出頭なさって下さーい!!!今ならまだ許しますよぉー!!!!」
　またアホなことを……!!

「いや、やってないわよ！」
「嘘はいかんぞ!!」
　はい。
　それはもう凄いスピードで事を理解した皆さんが協力してくれて、夕張さんは敢え無く御用。
　長門さんに担がれた夕張さんは、必死に自己弁護をしています。
「う、嘘じゃないって！プロレスなんて知らないもん!!」
「うあー駄目だごめんね加減するからアームロック！」
「あっ??良いよ司令官??もっと強く……??」
　どうやら、またもや呪いの類らしいそうで。何時ぞやの言語汚染の時と同じような術式だとか。
　今はマゾ……、いえ、響ちゃんがご褒美を……、いえ、犠牲になっているところです。なんて事でしょう、お優しい提督が、望んでいない暴力を私達に……。提督次は私もお願いします。
「待てぇい!!マゾと言えば私が」
「本当にごめん??????ルゼンチンバックブリーカー」
「んあああっ??????」
　チッ、何処から湧いて出たんですか若葉ちゃんは。
「か、考えてもみてよ！この私が、前と同じような術式をそのまま使うと思う?!改良するに決まってるでしょ?!!」
「……確かに」
　それもそうですね。夕張さんのことですから、術式をより凶悪にしてからやるはずです。

じゃあ、一体誰が……？
「……ッ!!」
「あっ、明石が逃げたぞ！追え!!」
「私は悪くない!!深夜テンションが悪いのよ!!!」
「大人しくしろ!!!!」
はい。
やりました、事件解決です。このまま、明石さんから解呪の方法を聞き出して、提督を元に戻、その前に一度技をかけてもらってから元に戻します。
別にマゾって訳じゃありませんけれど、あんな風に密着して、気道を絞められたり関節を極められたりしたら、提督に自らの命を弄ばれているかのような気持ちになれてさぞ気持ちが良いでしょう。
「さあ、解呪の方法を吐いて下さい！黙秘権はありませんよ!!」
後で必ず解呪しますから。後で。
「そ、それが……」

「分からない、ですって？」
「ご、ごめんなさい、完全に深夜テンションで作ったから、設計図すら無くって……」
はい？
何言ってるんですかね明石さんは。
「仕方がなかったの……。怒涛の四徹で意識が曖昧になった所でキン肉マンを読んでしまって……。曖昧な状態のまま曖昧なものを作って、提督の部屋に放り込んだんです」
は？
「こら明石、徹夜は身体に悪いからやめなさい??ってコブラツイスト」
「あんっ??もっとぎゅーってして下さい、提督????」
は？何やってるんですか明石さん!!
「次は私の番ですよ!!!!」
「……いや、そうじゃないだろ大淀……。解呪の方法を……、……ま

あ、後で良いか」
何ですか長門さん。今は解呪とか後回しで良いでしょう?!何だって良い、提督とイチャつけるチャンスです!!
「はっはっは、困るんだけどレインメイカー」
「ああんっ??」
ああ、左手を強く強く握られてっ??提督の筋肉に包まれた太い右腕で首を??はあっ??気持ち良いっ????
あー、駄目ですねこれは。これは駄目です。じっくり一晩くらいかけて解呪してもらわないと。
「はぁ、はぁ……??……何やってるんですか明石さん!とっとと比較的ゆっくり解呪の方法を探して下さいっ!!!時間は待ってくれないんですよ!!!」
「は、はい!……はい?」
「大淀、自分がなんて言ったか分かってる?判断力失ってない?ツームストンパイルドライバー」
ああああっ????腰を強く押さえてっ??提督の顔が私の股間にっ??
「大淀ー!早く代わるネー!」
「うちもうちもー!!」
「ろーちゃんもやりたいでっす!」
×
×
×
×
×
若葉だ。
黒井鎮守府に遊びに来たところ、面白いことになっていた。
あの優しい旅人が、艦娘にプロレス技をかけて回っているではないか。
遂に私好みのドSになってくれたかと思うと、胸が熱くなるな。もちろん、物理的に熱いものを垂らしてくれるのも歓迎だ。蝋燭とか熱湯とか。
……まあ、実際は、ドSに目覚めてくれた訳ではなく単に呪われていただけだったが。残念だな。
だがしかし、それはそれ。あの旅人がプロレス技をかけてくれるの

は事実だ。
ふふふ、分かるか？プロレス技だぞ？絞めたり極めたりするんだ。
……良いぞ？
……調査の結果、かけるプロレス技は旅人が選べるそうだ。よって今は、体育館の真ん中に長蛇の列をなす艦娘、リクエストした技をかけてくれる旅人、という奇怪な集団ができている。
……何故、ここまでの列になったのか。それは簡単だ。プロレス技は、相手と密着するからだ。要するに皆んな、なんだかんだと理由をつけて、旅人に触れて欲しいのだ。
……しかし、列が長いな。しょうがない、技をかけられている艦娘を見て待機するか。

今は金剛の番だ。
「キャメルクラッチをお願いしマース!!」
「……あのさぁ、一昔前に流行ったＪＫリフレじゃないんだからさ、プロレス技を態々かけられに来るのはどうなの？キャメルクラッチ」
「ああん??」
……普通に凄いな、一瞬で床に倒した。足を引っ掛けて腕を引っ張ったのか。あまりにも綺麗な投げだ。あれじゃ痛くないだろう。
「んっ、良いですヨー？？？？癖になりそうデース？？？？」
うつ伏せに倒した金剛の上に馬乗りになって、両手で首を、背筋が反るように極めている……。普段は絶対にやらないだろうな、こんなこと。
加減はしているみたいだが、酷く倒錯的な絵面だな！良いぞもっとやれ!!

「……はい、次！一人二分なんでしょ！」
「あーん、もうちょっとお願いデース!!」
「駄目駄目、終わりにしなさい」
「もー、並び直すネー！」
「っしゃあ！次はあたしだ!!」

次は摩耶か。
「さ、三角絞めを頼む！」
三角絞め……。座らせた相手の後ろから、脚を使って、首と片腕を極める技だな。
「はいよ、三角絞め！」
「くうっ??がっ????」
腕をガッチリどホールドされるからな、アレは。身体を旅人の股下に挟まれる形になるから、相当に気持ち良いだろう。
「肩が……、気持ち良いっ????」
プロレス技である以上負荷はかかるはずだが、そこは旅人。限りなくダメージをゼロにしている。むしろ、整体のようにコリをほぐしてすらいる。どうやっているかは謎だ。
にしても凄まじい密着度だな。がっちりとホールドされている。
「ん、あああ、ああああああっ??」
締め上げられる度に、良い具合に筋肉や関節が伸ばされて、所謂「痛気持ち良い」状態だ。喘ぎ声を上げるのも無理はない。
「はい、次ー」
「ちっ、もう終わりか。しゃあねえ、また並ぶか」
「よし！次はこの武蔵の番だ!!提督、ブレーンバスターを!!」
次は武蔵か。
「はいはいブレーンバスター」
「ぐおっ、良いぞ！もっと強くだ!!私に提督の男を感じさせてくれ!!」
成る程、ブレーンバスターか。逆さになるように抱えて、頭から地面に叩きつける技だ。関節技ではなく叩きつける技も良いな！キリキリと締め付けられる痛みとは違ってこれもまた……。
「もう一丁！」
「うおあっ！そうだ、その調子だ!!」
だが、またもや、地面に叩きつける瞬間に力を逸らして、ダメージをゼロにしている。徹底して、暴力を振るうつもりはないらしい。そもそも、女性に暴力は（できるだけ）振るわない主義だそうだ。
「はいよ、終了！次は？」

「お、おう！俺だ！パワーボムってのを頼む！」
なっ、天龍め、パワーボムだと?!
これも、相手を地面に叩きつける技だが、問題はその体勢……。
「パワーボムなんて確実にパンツ見えるけど良いんだねパワーボム！」
「おあっ??」
先ずは体勢を崩し、前屈みにさせ……、
「うおお??」
首を股で挟む。そして、上から腰を抱きしめて……、
「あああああーーーっ?????」
抱き上げて、地面に叩きつける！……この時、股が大きく開いて、下着が見えてしまう！何でスカートなんだ天龍!!
「満足かい？」
「ん、おお、いや、まだだ??もっとやってくれぇ?????」
結果、四回ものパワーボムを受けた天龍は、満足げに去っていった。
「じゃ、次だ。……何やってんだろうな俺」
「は、はい！私には、卍固めを……!!」
衣笠め、卍固めだと？
「えーとね、分かって言ってるんだよね卍固め」
「あん??」
片腕で相手の片腕を極めつつ、頭に脚をかけて、尚且つ、もう片方の腕で臀部を押さえる……。
「て、提督ぅ、もっと！もっと強くぅ??」
確信犯だなあれは。臀部に触れて欲しいが為に卍固めを……。なんて奴だ、衣笠。末恐ろしいな。
「ああ、あああ、ああああああっ??????」
うむ、二分持たずにダウンしたみたいだ。刺激的な技は時間一杯まで楽しめないのが難点か。
「次ー、若葉だぞー」
「む、私か。そうだな……」
うむ、かけてもらう技は事前に決めてある。

「キン肉バスターだ……!!」
ふふ、周囲が騒つくのも無理はないか。何せ、キン肉バスターは危険な技だ。全身に負荷がかかるからな。
流石の旅人もこれは加減できんだろう……。
「ん、良いよキン肉バスター」
よしきた！身体を逆さに、首と首を合わせるようにし、両足首を掴み……。
さあ、背骨、首、股にダメージを!!
「ははははは！さあ、私を痛めつけろ旅人!!リョナ同人誌みたいに！リョナ同人誌みたいに!!……あれ？」
い、痛くない……?!
「はーい、健康になろうねー」
くううううう!!全身の筋が刺激されて……!!ほとんど痛くはないが気持ちが良い!!!とんでもない技量だ！これほどの大技でも痛みをもたらさないとは！
「た、旅人ー！もっと力を入れてくれー!!」
しかし、それでは困る！暴力を振ってもらわねば!!
「タルンダタルンダタルンダタルンダこんなこともあろうかと自分にデバフかけまくっといて助かったぜタルンダ」
「チクショーーー!!!」

と、言う訳で。
私達は、全身を程よくマッサージされてから解放されたのだった。
覚えておけ、旅人！私はいつだって、お前のドＳへの目覚めを心待ちしているからな……!!

１５２話　黒井鎮守府お料理コンテスト

「料理……、料理か」
「どうかしましたか？提督？」
「いやぁ、ね……。この前は皆んなでクッキー焼いたけどさ……。皆んな、料理ってできるの？」
　純粋な疑問である。未だに殺人的な料理を量産する比叡などの魔人を見ると、ひょっとしてこの子達……、駄目なのでは？と思ってしまうのだ。
「私はある程度出来ますよ？得意料理はカツレツです」
　ニコリと笑う大淀。確かに、たまに厨房に立つこともあるからな、大淀は。
「しかし、そんなことを聞いてくるという事はアレですか」
「どれだよ」
「私達の手料理が食べたい、と……！」
「……!!、成る程、よくぞ提言したな、大淀よ！」
　なにそれたのしそう。
「直ちに、艦娘お料理コンテストを手配します!!審査員は提督、鳳翔さん、間宮さん、伊良湖ちゃん、速吸ちゃんです!!」
　さあ盛り上がってまいりました！
『えー、鎮守府放送、鎮守府放送……。艦娘お料理コンテストを開催いたします!!!優勝者には、一日提督の専属メイドになれる権利が与えられます故、こぞって参加致しやがって下さいッ!!!!!』
　なにそれきいてない。
「えっ、えっ？なにそれ」
「まあまあ！景品がある方が燃えるじゃないですか!!」
「ま、まあ、そうだね。俺、何にも損しないからそれくらいなら」
「よっしゃ言質取りましたよ!!!!これで専属メイドと言う名目で一日中べったりできる……!!!!」
　あ、ふーん。
　……よく分からないが協定があるらしい。『皆んなが皆んな全力で

甘えたら、提督の迷惑になるから、積極的なアプローチは……、やめようね！あと抜け駆けしたらぶっ殺す』くらいの内容らしい。
だから、大義名分がある時は、それはそれはもうベッタベタに甘えてくる。例えば、作戦後の宴会とか、たまたま同じ時間に入浴した時とか。
そのため、普段は俺の一挙一動をじっと見ているくらいで、監禁しようとするなどのあからさまな行為はしてこない。助かる。
しかし、大会の景品と言う形なら話は別だ。協定違反という負い目なく、気兼ねなくイチャコラできるだろうから、全員全力を出すだろう。
……実のところ、なんだかんだと理由をつけて、特定の艦娘だけを構うこともあるにはあるのだ。結構デートとかしてる。そしてそれを見た艦娘が嫉妬して、それのフォローでまたデートと言う無限ループで過ごしているここ最近。要は一日デートしろみたいなもんだし、特に困らないかなー。

『開催時間は今日の正午！場所は食堂！参加賞は提督の熱いベーゼです！食材は自費でどうにかするか鳳翔さんに伺いを立てて下さい!!!!!!!!』
はっはっはっ、何一つ了承してねえのに自動的に全てが決まったぞー。
そして鳴り響くスマートフォン。
「……はい、ラインが来ました。全員参加だそうです」
「でしょうねぇ、道理でねぇ」
知ってた。
「では、調理に取り掛かるので。行って来ます」
目がマジなのでマジヤバい。どうしようか、このやる気。
「あー、ほら、仕事は？」
「来月分まで終わってます」
あーもう駄目。止められない。大体、俺の筆跡をコピーして勝手に仕事するって何なの？あと君こっそりと役所に俺のサインをコピー

した婚姻届出してんのバレてるからね。でも、皆んなやってるから役所側にいたずらとして処理されてる事実。
「よ、よし、分かった。でも気合の入れ過ぎは良くないぞー？肩の力抜こうなー！」
もう止まらんかぁ……。いつも言ってるけど料理は愛情なんだよね。景品目当てじゃ美味しく作れないぞ？
そこんところをちゃんと理解できるかが勝負だろうな。
さあ、あれこれ言われる前に食堂に移動しますかね……。

『ええと、これを読むんですね？……黒井鎮守府お料理コンテスト、開催～！……、ふふふ、ちょっと恥ずかしいですね』
「はい、ありがと鳳翔」
と言う感じで始まった、黒井鎮守府お料理コンテスト。
挑戦者は全員と言うこともあり、一部チームを組んで行う。採点方式は、俺、鳳翔、間宮、伊良湖、速吸の五人が、一人１０点の点数をつけ、５０点満点で最も点数が高かった艦娘の優勝と言うシンプルなものだ。

『さて、最初の挑戦者は……、足柄さんですね』
「ふっふっふっ、一番槍は私よ！メニューはなんと！」
「カツやろなぁ」
「カツでしょうね」
「カツなんだろうなぁ」

「カツよ!!!!!」
カツだった。

「……うん、相変わらず美味しいな」
俺は好きなんだが、他の四人は「カツか……」みたいな顔してる。それもそうか、足柄特製のカツは……。

「衣がサクサクですね！……でも、カツが大きくて……」
「衣多めですか……」
「そうよ！衣を二度付けて、二度揚げにしたの！その方がサクサクで美味しいわよ！」
女性には、ちょっとキツい。
油はしっかりと切ってあるが、それでも、衣の増加による油分と濃い目のソースはかなり「効く」。山盛りのキャベツもお腹に溜まるものだ。
さあ、点数は。
俺、鳳翔、間宮、伊良湖、速吸の順に……。
１０、５、５、３、７……、計３０点。
「ぐぬぬ」
いやぁ、俺は好きなんだがなぁ……。
「すみません、脂っこいものはどうしても駄目で……」
申し訳無さそうな伊良湖。そもそも、採点者が俺だけじゃないってことを考えるべきだったな。
「うう、満点は逃したわね……。で、でも、まだ希望はあるわ！それに、提督からの熱いベーゼももらえるらしいし……」
「後でな」
流石に食後すぐにキスをする程気が狂ってはいない。
さて、次だ。

『春雨ちゃん、メニューは麻婆春雨です』
ほう、洒落が効いてる。
「はーい、司令官？春雨特製の、麻婆春雨でーす？」
かわいい。既に美味しい思いをしたな俺。
いや、見るべきは料理だな。本人の可愛さは料理に関係しないからな。あんまり。
「……これは」
美味い。美味いけど……。
「？！、美味しいです……、けど……。これ、何入れました？」

鳳翔が尋ねる。無理もない、十分美味いのに、その上不自然に美味いからだ。
「……何のことでしょうか？」
ほー、しらばっくれる？
「え？え？凄く美味しいじゃないですか？何かおかしいんですか？」
困惑する速吸。
まあ、アレだよな、これ。
??脳内??麻薬の分泌量を増やす……、五感の向上、筋力強化……、あとは??????と??????ってところか」
??薬??膳（？）料理だ。
「……??あはっ??正解です司令官??……でも、副作用が出ないようにしっかりと調整してあるんですよ？」
「く、薬?!薬入ってるんですかこれ?!」
速吸が驚くのも無理はない。この麻婆春雨には、数多の薬品が絶妙に配合されている。某所で頂いたドーピングコンソメスープの如く。
「……春雨ちゃん？ここまでやったら、最早料理じゃないですよ？」
鳳翔が怒るのも当然か。美味しいけどこれは最早料理ではない。お料理コンテストとしては……、
「失格です！」
と言うことだな。
「ちぇっ、残念。でも、後で司令官にちゅーしてもらえるから、良いかな??」
さあ、間髪入れずに次の料理だ。

『春風ちゃん、サンドイッチです』
……あれ？何でいるの？
「何やら、素敵な催し物があると聞きまして……。そ、それに、参加した者には、た、旅人様のく、口付けが……！」
成る程ねぇ、景品に釣られて来たのか。よくよく見たら参加者リストに音成の子もいるわ。全員いるわ。
「で、ではその、一生懸命に作りましたので！どうぞ召し上がって下さ

い！」
「おお、ありがと。……あ、美味い」
和風ツナサンド、和風玉子サンド。和風サンドイッチ尽くしだ。醤油や出汁がベースの軽めのサンドイッチ。だが、俺用に照り焼きサンドのような重めのも用意してある。
うむ、料理とは相手のことを考えて作るものだ。俺の好みも、鳳翔ら審査員の好みも抑えた品々は正解だな。
９、７、６、９、１０で計４１点になった。
好みの問題だろうが、かなりの高得点。因みにだが、鳳翔はパンよりごはん派、逆に間宮はパン派。間宮的にはパンが市販なので少しマイナスだとか。
どんどん行こうか。

『響ちゃん、和風ボルシチです』
こう見えて料理が得意な響の、和風ボルシチ……。酒のつまみを追求しているうちに料理にハマったとは言うが、中々の腕前だ。
今回は、食べさせる相手が俺だけじゃなく鳳翔達も、とのことなので、和風な白だしベースでハーブ類少な目のボルシチだ。
醤油を少し垂らすことによって和風パワーアップ。入れるのもサワークリームじゃなくて生クリームだ。
「私達の口に合うように白だしを使っていますね」
和食派の鳳翔もこれにはニッコリ。
「でも、白だしの取り方は上手く出来なかったよ」
とは本人談だが、悪くない出来だと思う。……俺は洋食派だから、いつものブイヨンで作る方が好きなんだけどね。
難しいな、俺の好みは男性的で、脂っこく味が濃いもの、逆に、鳳翔は女性的であっさりしたものが好きなんだ。
７、８、１０、９、８の計４２点。
間宮は添えてある揚げパンが美味しかったとのこと。

と、まあ、このように。

『大和さん、オムライス……、４４点！』
『古鷹さん、加古さんチーム、ハンバーグ……、４５点！』
『初霜さん、豚汁……、３９点！』
　着々とコンテストは進んでいき……。

『ひ、比叡さん、カ、カレー（？）です……』
　オチの時間がやってきた訳だ。
「ひ、比叡、ほら、あれだ。カレーは寝かせた方が美味しくなるって言うし、地下室に封印してみるのはどうだろう？厳重に」
「そそそそうですね、封印すべきですね」
「大丈夫！心配ご無用です！圧力鍋でつくりましたから!!……途中で蓋が溶けて無くなっちゃいましたけど」
　圧力鍋の蓋が溶ける？何入れたの？硫酸？
「て、提督、もう失格で良いですよね……（震え声）」
　鳳翔の言葉も無理はない。俺達はアレが料理には見えない。あの石油の膜みたいに虹色に光る液体をカレーとは認めたくないのだ。
「見た目はちょっとあれだけど、味には自信があります！」
「ちょっと？」
　上位者の体液みたいな見た目だよ？
「兎に角、食べてみて下さい！」
　食べるの？
　これを？
「わ、私はちょっと……」
「痛い、臭いだけで粘膜が痛い！」
「食べるのは……」
　全員が０点を出す中……、
「えー！美味しく作ったのに、何でなんですか?!……司令は食べてくれますよね！」
　え？俺は食わなきゃいけない流れ？
「はい、司令！あーん！」
　あ、

死ん

……そんなこんなで、バイオテロによって無事終了したお料理コンテストは、俺の犠牲によって幕を閉じた。

旅人は犠牲になったのだ。カレーの犠牲にな。

１５３話　世界で一番綺麗な黒

早朝。
身体と脳の休眠状態を終了。一般的には眠りから覚めた、と言うべきなのかもしれないけど、僕達は眠っている間もある程度の情報は感知できるからね。
同時に脳に流れ込む情報量を増加。脳内の瞳を拡大する。
眠っている状態よりも、より多くの事物を感知し、鎮守府全域に異常が無いことを確認。……今日も何かが入り込んでいるようだ、後で見に行かないと……。
朝の情報収集を終了。情報の収集範囲を制限。
普段通り、僕自身を中心に半径十数メートル。透視、読心、予知……、そういったものの範囲の制限はマナーだ。
あまり範囲を広げ過ぎると、見るべきでないものまで見えてしまうから。知り過ぎは身を滅ぼすものさ。
さて、おはよう、提督。
隣で寝ている提督を起こし、提督の綺麗な目を見つめて、声をかける。
「おはよう、時雨。……警護は午後からで良いのに、昨日の夜から悪いね」
今日は午後から、身辺警護をするように命じてもらった。
しかしこれは、僕達と親交を深める為の口実だ。態々気を遣ってくれたんだね、提督は。嬉しいよ。
ほら、皆んなも起きて。警護の前に鎮守府の見回りだ。
「……声を出さないでも、テレパスで起こせば良くない？」
いやいや、声は大事だ。確かにもう、声を出さずとも、脳内に直接語りかけるくらいは簡単にできる。でも、あまりやり過ぎると人らしさを失うからね。
艦娘という人を超えた身でありながら、人らしさを失わず、人の振る舞いをする。ふふ、大事なことだよ。
例えそれが児戯に等しかろうとね。

人間性を失えば、僕らは獣に劣るだろうから。ただ強いだけの獣はこの鎮守府には不要なんだ。
さあ、今日も人らしさを失わずに、提督の為になることをしようじゃないか。

……とっとと起きなよ、村雨。
何？あと二時間？全く、まだまだ啓蒙が足りていないね、君は。

朝。
見回りだ。白露型の狩りを見るといい。
「ま、待てよ、俺はスパイなんかじゃねえ！ほんのイタズラのつもりで入り込ん」
成る程、君は陸のスパイか。
「……な、何を言って」
第六特殊偵察部隊、????少将の私兵。
「……な、何を」
迂闊だ。いっそ憐れなくらいに迂闊だ。閉ざされてもいない心のままここに入り込んだのかい？僕には見えていると言うのに。
「ま、待てよ、待ってくれ、本当に俺は……」
年齢は２７歳、階級は曹長。目的は偵察。黒井鎮守府の機密の奪取。
「……い、いや、俺は……」
母は他界、父親と兄。恋人はいない。
「……」
任務成功の暁には二階級特進、特別手当も出る……？参ったな、その程度の理由で命を捨てるのか。
「……な、何で知ってる?!お、お前、何をした？俺に何をした?!」
……ああ、君は浅いんだ。思考の次元が低過ぎる。表面を見れば内側まで分かるんだ。
「……クソッ!!」

おまけに脆い。
「ッあ、痛え！痛えよ!!手がぁ、俺の手ぇ!!」
目も濁っていて、美しくない。脳に瞳は無く、啓蒙も持ち得ない。
「うあっ、痛え、痛えよ、折れちまった、手が、手が……」
……だが、分かるよ。
「……ッ!!?わ、分かった、もうやめてくれ、直ぐに帰る、帰るよ。もう機密なんて要らない、要らないから」
秘密は甘いものだ。
「……おい、やめろ、やめてくれ、帰るって言ったろ、なあ」
だからこそ……、
「やめろ、やめろ！やめろやめろやめろやめろ!!ぎいっ」
……恐ろしい死が必要なのさ……。
「あああ、ああああああああ!!!」
……愚かな好奇を、忘れるような、ね……。

……ここはもう充分だね。この男はもう何もできないだろうし。何も、ね。
次に行こうか……。
『時雨姉』
……何だい、江風。
『さっきそこでぺこぽん？がどうこうとか言ってるカエルみたいなの捕まえたんだけど……』
……瞳を拡大。
『いや、ちょっ、は、離すであります！我輩は怪しい宇宙人では……』
『コラ、暴れんな!!』
……うーん。
まあ、提督に引き渡す、かな……？

午前。
「いやーっはっはっはっは！部下が失礼したな、軍曹殿！」

「ゲーロゲロゲロ！なんのなんの！気にする必要はないであります！」
ああ、よかった。この生き物、提督の知り合いだ。大抵、こういうよく分からないものは提督に見せた方が上手くいく。
この前なんて阪本と名乗る、喋る黒猫が訪ねて来たからね。黒猫が。……悪意が無さそうなら提督に引き渡すのが正解、かな。
目を見れば悪意の有無くらいは分かるしね。
「手間をかけたな、時雨。この人は、そう……、取引先だ。殺られると困る」
うん、何となくそんな気はしてたよ。
「因みに買ったのはこれ。万能兵器化飲料ナノラ。ナノマシンの集合液でな。その名の通りかけたものを何でも兵器に出来るんだ」
……へえ。提督にしては物騒なものを買ったじゃないか。
「いや？前々から買ってるぞ？何せ、これを明石、夕張作のプラモデルにぶっかけて鎮守府近海に放つことによって、近海の防衛ラインを形成をしているからな」
……じゃあ、何かい？
この鎮守府を守るあの無人兵器群は……。
「ああ、元はプラモデルだね」
うわあ、初めて知った。そして知りたくなかった。やはり知識は時に毒にもなる。何事も知り過ぎてはならないものだね。
「でも、物量的にはかなりのもんだし、質もそれなりだし。……深海棲艦の厄介さは深海から無限湧きすることだろ？物量に対抗できるのは同じく物量か、君達艦娘という圧倒的な個のどちらかなんだよ」
確かに、深海棲艦の一番の脅威は、たまにいる鬼クラスのような個体の強さよりも、大量に湧いて出る群の物量だ。
海から出現すること、恐れを知らないこととかも厄介な点だけど……。
「ゴキブリの如く湧いて出るからね、深海棲艦は。一匹見たらなんとやら、だ。そりゃ正義の味方も軍隊の皆さんもまともに相手しない訳だ。……もちろん、俺達だってまともに相手したら物量ですり潰され

ちまう。だから、ある程度の頭数は必要なのさ」
そう言って提督は、手元にある戦闘機のプラモデルに先程の謎の液体を振りかけて、窓から投げた。
「そぉぃ!!!」
すると、プラモデルの戦闘機は宙空で光に包まれ、本物になって飛んで行った。
「……と、まあ、このように防衛ラインを形成しておるのじゃよ」
……そっかー。

昼。
今朝は、知りたくなかった新事実を知ってしまった。
知ってしまったからには、やはり不安だ。
だからこうして、確認しに来たんだ。僕の瞳なら、兵器の良し悪しくらいは見抜けると思う。……尤も、提督ほどの瞳は持ち合わせていないけどね。まだまだ啓蒙が足りないね、僕も。
勿論、出撃は済ませた。一日百体程度のノルマ、容易く達成できる。提督が言うには、うちはゲゲル方式を採用している、だとか。仮にノルマを達成せずとも爆死はしないらしい。何の話かな？
「不安？でも、砲台や一部戦艦はちゃんと造ったものなんだよ？」
確認には、提督も面白がってついて来た。
因みに、ちゃんと造った兵器はどのくらいの割合なのかな？
「三割くらい」
……そっかー。
不安だなぁ。ナノマシンによる急造品の質も安定性も確かに確認したけど……。
「大丈夫大丈夫、ケロン星人の科学力は確かだから」
いや、知らないけど。
如何に提督が大丈夫と言っても、保安に関わることで手は抜けないよ。提督の安全より大切なものはないのさ。
「悪いね、なんか」

良いんだよ、提督。君さえ無事なら、ね。

午後。
鎮守府の裏にある山。首輪付きけものと呼ばれる、小さな白い獣が管理する地域。
提督は、綺麗な黒い目を輝かせて、言った。
「最近、梅の花が咲いてさ。皆んなで見に行こうと思ってたんだよね。ここ、並みの自然公園以上に管理が行き届いてるからさ」
ふふっ、じゃあこれはデートかい？
「そうとも言うね。……二人きりじゃなくって悪いけど」
良いよ。白露型の皆んなは同胞、半身とも言えるくらいだ。一緒にいて苦にならないさ。
「そうかい？なら良かった。仲良しなのは良いことだ」
ん、撫でてくれるのかい？……うん、気持ち良いよ。
「あー！私も撫でて欲しいっぽい！」
……夕立、もうちょっと、もうちょっと待って。あと五分だけ。
「わ、私も提督に撫でて欲しいかなーって」
「あ！姉貴達！抜け駆けは駄目だぞ！提督は皆ンなで共有するンだからな!!」
わ、分かってるよ、江風。

夕方。
「……そろそろ帰ろうか」
うん、そうだね。日も暮れてきた。
「夕陽、綺麗だねぇ……」
微笑を浮かべながら、地平線を見つめる提督。
白髪が夕焼けのオレンジに染まって。
黒色の目が太陽の赤を映して。
……君の方がずっと綺麗だ。

「……おお、ちょっとドキッとしたな。カッコいい口説き文句だ」
ああ、ごめんよ、口に出てたかい？
「耳はいい方なんでね。褒め言葉は聞き逃さないのだよ」
そう言って、風に揺れる白髪を手で押さえ、僕に目を向ける提督。
……なんて、綺麗な目なんだろう。
まるで黒曜でできた万華鏡みたいだ。
「でも、そう言うのは男の子の台詞じゃん？……だから、時雨。君はあの赤い夕陽よりも美しいよ」
そして、暖かな言葉。
やめてよ、提督、そんなことされると……。
「……時雨？」
欲しく、なっちゃう。

ああ、ああ、駄目だ。
僕は狗なのに。
抑えが、効かない。
「どうした、時雨？」
黒を。
暖かな黒を。
陽光を宿したその黒を。
「何で顔を触るんだ？」
黒く輝いているんだ。
白い闇、確かな朧月、静謐な騒乱。
全てを秘めていて、讃えていて、愛している。
「俺の顔に何か……、ああ、そうか」

「あげるよ、時雨」

夜。

「時雨、また『貰った』っぽい？」
責めるような口調の夕立。
うん、まあ、『貰った』よ。催促したみたいで、悪いんだけど。
「我慢した方が良いんじゃない？」
それは無理じゃないかな。
僕も、皆んなも。
今日だってそうだ。あのままだと、提督に魅せられて、無理矢理に抉り取ってしまっていたかもしれないし。
大体、夕立だって『貰った』じゃないか。
「赤を少しだけっぽい！提督をちょーっと齧って、舐めただけ！」
量の問題？
「部位の問題じゃないかな……」
ああ、山風。
君は白を一房『貰った』のかい？
「うん……。綺麗な白色だから、編んで紐にして、ミサンガにするの」
それは素敵だね。
「時雨姉は、黒を『貰った』の……？」
そうだよ、ほら。
スプーンで綺麗に抉り取って貰った後は、神経を丁寧に剥がして、その後に透明なガラスの筒に入れて、ホルマリンを流し込んだんだ。
「わあ、綺麗……」
ふふ、そうさ。
世界で一番、綺麗な黒だよ……。

「にしても、提督、片目で大丈夫なの？」
一晩寝れば治るってさ。

１５４話　でっちの暇潰し

潜水艦の部屋。中央の、大きな炬燵を囲む私達。
提督が提督になってくれてから、順風満帆な日々を過ごしてきた私達にも、悩みの一つや二つ、あるのだ。

「暇でち」

うん。
正直言って、最近暇でち。

「オリョール行くの！」
イクが提案。
「昨日行ったでち。て言うか、資材は売るほどあるでち」
倉庫を見て欲しい。既に、戦争でもおっ始める気なのかってくらい溜め込んでるから。
「じゃあ、キス島？」
イムヤが提案。
「これ以上強くなってどうするでち。それに、しおいはまだ訓練過程中でち」
フラグシップの戦艦を一発で沈められるようになった今、これ以上強くなっても意味なくない？
「暇ならアハトアハトの整備手伝ってよ」
はっちゃんが提案。
「めんどくさいからいやでち」
何が嬉しくてあのデカい大砲を磨かなきゃならないのか。
「訓練は？」
しおいが提案。
「後でやるでち」
しおいの訓練は午後から。
「じゃあ、どうするの？」

ろーちゃんが質問。
あー……、そう、でちねぇ……。
「……今日もここで駄弁るでち」
……やることないなー。
でも、兵器であるゴーヤ達が暇なのは良いことだよね。平和を享受しようそうしよう。
「……でっち、だらだらしてると太るよ？」
「失礼な。ゴーヤはスリムでち」
大体、ほぼ毎日出撃して泳いでるんだから、太る方が難しいでち。
「ええー？ほんとにござるかぁ？」
「本当でち！」
「本当だ、結構筋肉ある」
……？！
「でちぃ？！！！」
どっから現われたでちか、提督？！！
「びっくりした……、いや本当にびっくりしたでち……」
不意を突かれたでち……。勘は鋭い方なんだけど……。
「ごめんごめん。ちょっとさっきまで異次元にいてさ。転移に失敗してここに」
正規の方法で入室してくだち。何ですぐ次元を超えるでち。
「毎度毎度、大丈夫なの？司令官」
イムヤの言葉も尤もだけど、基本的に提督に常識は通用しないから……。
あっ、なんかナチュラルに炬燵に入ってきた……。
「はっはっは、大丈夫大丈夫。にしても、いやー、外は寒いねー」
「異次元にいたんじゃ？」
「途中シベリアに落っこちた」
ははーん、さては不死身でちね？
相変わらず丈夫だなぁ、何やったら死ぬんだろう。
いや、死んで欲しい訳ではないけれど。明らかに死ぬようなピンチ

を涼しい顔で切り抜けられると、私達の存在意義が分からなくなる。提督を守るとは何だったのか。
　私達艦娘なら、頭が壊されたら実質的に死ぬ。あ、いや、頭を吹き飛ばされても死体をドックに放り込めば肉体は再生するけど、それをやると脳が再構成されて、今まで蓄積した記憶が全部無くなる。つまりは、艦娘の脳はセーブデータでち。メモリーカードでち。
　だから、極めて大量の出血とかでも、脳が駄目になっちゃうから気をつけなきゃならない。
　でも、提督は……。
「いやー、危なかった。南シベリアのバイカル湖付近には行っちゃ駄目だぞ、ｋｅｔｅｒクラスだ」
「……提督、左腕が……！あと、お腹に穴も……!!」
「ん？ああ、持ってかれた。因みに、炬燵に入ってるから分からないかも知れないけど、右脚も根元から先が千切れたんだよね」
　……最早インチキでち。ギャグ漫画じゃないんだから、手足を千切られて、内臓の殆どを失えば艦娘でも危ないレベルでち。
「……提督」
「安心してくれ、出血は止めてある。炬燵を汚したりはしないよ。ただ、血液が足りなくて。ちょっと寒いんだよね」
　ない方の手で静止してくる提督。
　いや、そうじゃなくって……。
「あ、あああ、あああああ……!!!」
　しおいが限界点突破してるでち。
「しおい?!大丈夫か?!」
「提督ー、死なないで！死なないで!!!しおいを置いてかないでよー!!!えーん!!」
「どうしたしおい？何か辛いことでもあったのか？」
「提督が死んじゃいますー!!!」
「いやー、すまない。普通は驚くよね」
「グスッ、うええん、て、提督が死んじゃうかと……」

「大丈夫でち、提督はそのくらいじゃくたばらないでち」
冗談抜きで不死身でち。
「……本当？」
不安そうなしおい。
「自爆したり化け物に食われたりしても平気な顔で帰ってくるのがうちの提督でち。何の心配もいらないでち」
そんなことより問題は……、
「……で、提督。その傷、誰がやったのかな」
据わった目で問いかけるはっちゃん。あー、もう、面倒なことになった。
「そうよ、答えて司令官。私、司令官に暴力を振るう奴なんて許せない」
「復讐しなきゃ駄目なの」
「ろーちゃんの提督に酷いことする子は、死んでいいかなーって」
……ほら、面倒。
提督は困った人でち。皆んな、提督のことが大好きでたまらないって分かってるのに、平気で怪我したり、遠くに行ったりするでち。
いくら治るからって言ったって、怪我なんてして欲しくない。いくら帰ってこれるからって、次元を超えるほど遠くになんて行って欲しくない。
女心が分かる癖に、無鉄砲でやんちゃなままでち。
「はいはい、皆んなやめるでち。提督に指示されない限りは、勝手な行動は慎むでち」
そりゃあ私だって、提督の敵は全身全霊でぶっ殺す所存でち。でも、何より大切なのは提督の意思。勝手に殺すのは不許可。提督が駄目って言うなら駄目なんでち。
「そうだね、俺のミスで勝手に怪我しただけだから。気にしないで良いよー」
……でも、たまには、頼って欲しいでち。気にしないで、なんて言わずに、敵を殺せと命じて欲しい。提督に何もしてあげられないのは辛いよ。

それに、気にしないなんて無理。提督が酷い目に遭うのは、嫌。全く、こっちの気も知らないで……。
「本当に、本当に何もやらなくて良いの？イク、強いよ？今日だって深海棲艦をいっぱいやっつけてきたのね！提督に酷いことする奴は、イクが全部殺してあげるの！」
「はは、気持ちだけもらっておくよ」
……でも、きっと無駄でち。
私達が幾ら怒っても、提督は旅を続ける。死ぬような思いも、辛い別れも、全部承知の上で。終わらない旅を楽しむんだと思う。
だから、私達に出来るのは……、
「……分かったでち。でも、提督の帰ってくる場所はここでち。だから……」
「あ×あ、必ず、なるべく早く、生きて帰ってくるよ。いつもね」
×提督の帰ってくる場所を守ること。
×それだけでち。
×
×
×
「遅×いわ」
「あ×っ、わあ!!!」
×痛ぁ……。
「ほ×ら、早く立ちなさい！戦場はもっと厳しいのよ!!」
「うう、何で格闘戦？私達、潜水艦だよね？」
黒井鎮守府に来てから、数週間。出撃はせずに毎日訓練ばっかりだけど……。
「こういうのは基礎が大事なの！戦いの基本は格闘戦でしょ！」
「いや、数で押すのが一番だと思う。だから魚雷の召喚数を……」
「数で押すより正確さなのね！一番は魚雷で狙撃なのね！」
皆んな、言ってることがそれぞれ違って……。
進捗は良くない、です……。
「戦闘スタイルの問題だ」

「提督!!」
　車椅子に乗った提督が声をかけてきた。片足が無いから立てないみたい。
　……正直、さっきは提督が死んじゃったと思って焦ったけど、大丈夫、みたい。痛そうにしてないし、顔色も良くなってきてる。お腹の穴だって塞がった。
　でも、私としては、安静にしてて欲しいんだけど……、本人は車椅子のまま私の訓練に着いてきたんだよね。
　何を言っても大丈夫の一点張りだし、他の皆んなも大丈夫だって言うし……。もしかしたら、提督も艦娘と同じようなものなのかも。そう思うことにした。
「戦闘スタイル？何の話？」
「そうだな、例えば……」
　ゴーヤの方に目を向ける。
「ゴーヤは、潜水艦の艦娘の基本である魚雷の生成に特化して……」
「敵に触れる瞬間に魚雷を創って、直接叩きつけるでち」
　ああ、そっか。
　ゴーヤの触れたものを爆発させるように見えたあれ、そう言うことだったんだ。つまり、打撃の瞬間に魚雷の弾頭を叩きつけてるんだ。
　次は、イクに目を向ける。
「イクなら、魚雷による狙撃を突き詰めた」
「そうなのね、イクはスナイパーなのね！」
　そうなの？まだ近海にしか出たことないから、分からないけど……、イクは狙うのが得意みたい。
　そしてイムヤに目を向ける。
「イムヤは、音もなく忍び寄り、海中に敵を引き摺り込んで直接戦闘」
「海中こそ潜水艦のホームグラウンドなのよ。海中の私達は無敵だわ」
　成る程、だから格闘戦を教えようと……。
　続いてはっちゃんに目を向ける。
「はっちゃんは同時展開数を増やしたんだ」

「対空砲なら十数本、魚雷なら百本くらいかな」
そうなんだ。手元の本から色々な兵器を出して数で押すのがはっちゃん流なんだね。
最後に、ろーちゃんに目を向ける。
「ろーちゃんは潜水艦の基本方針である群狼作戦の先発……」
「要は偵察です！はい！」
群狼作戦……。誘い込んだ敵を狼の群れみたいに囲んで倒すやり方だね。
「……つまり、一人一人違った特徴を持つ訳だ」
「……じゃあ、私はどうすれば良いの？」
私は？私に出来ることって何だろう？
「何でもかんでも提督に聞いちゃ駄目でち。自分で考えるでち」
ゴーヤ……。
そんな風に言われても、分からないよ。艦だった頃と違って、今の自分が何を出来るか、なんて。
「大丈夫だ、しおいなら、すぐに答えを見つけられるさ」
でも、少なくとも……。
「……うん、分かった！私、頑張って答えを探すね！」
提督の言葉は、絶対だ。
何故かは分からないけど、この人の言葉に従っていれば、全部上手くいくんだもん。
きっと、皆んなが言うみたいに、提督は神様なんだと思う。
だから……、
「提督が出来るって言うなら、絶対出来るよね！」
これからも、私を上手に使ってね、提督。

１５５話　旅人がいない日　前編

「提督！提督！提督！提督ぅぅぅぅぅぅわぁぁぁ

そっ閉じ。
執務室にある俺の椅子に頬擦りする大淀。見なかったことにした方がいいやつだなこれは。
＞そっとしておこう。
だが、そっ閉じしたはずのドアは勢いよく開かれた。
「おはようございます、提督！今日も素敵ですねっ！」
「さっきのノリからよく話しかけられるね？」
割と肝が据わってるね、大淀。
「何のことでしょう？」
あ、そっかー、無かったことにする気かー。
「いや、何でもない。俺は何も見てない」
俺は物分かりが良い大人なのでスルーしてあげちゃう。（この辺りの心配りが人気の秘訣）
「ところで提督？」
「ん？」
「執務室の椅子に座って頂けませんか？提督成分が薄れて……」
「え、何？さっきのは尋常な出来事なの？」
スルーするしないじゃなくって、普通の行動だとでも？恐れ入ったよ。
「？、はい？私達艦娘は提督成分が無いと生きていけないのですよ？」
「初耳ィ」
百五十話過ぎて初めて知る新事実。
「私が今決めました」
「君のその時折強引なところ、嫌いじゃ無いよ」
「そんな、急に愛してるだなんて……??」
はっはっはっ、俺これ日本語話してるよね？通じてるよね？
……さて、執務室の執務机の椅子に座って、仕事の開始。いくら大淀が俺の代わりに仕事をやるって言っても、大まかな方針を決めたり全体の指揮を執ったりするのは俺だ。
最低限、皆んながどれだけ働いてるのかくらいは知っておく必要がある。

「大淀、今週の資料を」
「はい」
　すると一転、仕事モードの大淀が横から平行スライドするかのように動き、資料を手渡してくる。
「……ん、ありがと」
　大胆な速読は旅人の特権。三十秒程で資料全てに目を通した。
「……白露型は凄いね、一週間のキルスコアが一万を超えたか。間宮券とボーナスをあげよう。川内は隔日で夜戦か、特別手当出さなきゃな。暁型も頑張ってるみたいで……」
「はい、了解しました」
　同時に、有能有能アンド有能なミス大淀氏がマッハで書類作成。（仕事が）速きこと島風の如しである。
　彼女は酷く曖昧な指示から俺の意思を汲み取って良きに計らってくれる。最初の頃は俺が隣で書類を書いていたが、艦娘の学習能力とは恐ろしいもの。つまり大淀は、俺の評価基準を知り尽くしているのだ。
「では……、今月の給料明細は……、これで宜しいでしょうか？」
　スピーディーにペンを走らせ、書類を作成した大淀。まるで俺が書いたかのような内容と筆跡。
「良いよ」
「ありがとうございます」
　俺の仕事終了である。
　すると大淀は、嬉しそうに近付いて来て……。

　いや、いかんでしょ。
「……え？」
「このままでは職業が艦娘ではなくなってしまう感。大淀、ステイ」
　あまり依存され過ぎても困る。求められるだけ与えていてはいずれ歯止めが利かなくなるやもしれん。ここで一歩引くのが大人の醍醐味。
「な、何で、どうして」

「大淀、たまには我慢しなきゃ。四六時中一緒にいれる訳じゃないんだからさ。……あとこのシャツ最後の一枚だから、持ってかれると困る」
「う、うううう、うううううーーー!!」
そのうーうー言うのをやめなさい。
あまりにも酷いストーキングや覗きは病気だ。多少は構わないんだが、それに依存するようになってはいけないよね。
「と言うわけで大淀。俺、旅に出るわ。一週間くらい」
君達にも親離れならぬ、俺離れしてもらわなきゃねー。
「……え？」
「皆んなにも伝えておいてね」
「自殺して良いですか？」
「急に何言ってんの？」
死ぬ程？
「いや……、ちょっと……。提督と一週間会えないなんて思うと、手が震えて……」
マジかよ……。
俺が思ってた以上に異常。
「マジで無理です……。マジで……。提督と会えないくらいならリスカします……」
「キャラ崩壊が著しい」
「……」
「よし分かった、五日にしよう。だから無言で砲塔を自分に向けるのはやめるんだ」
「死にます」
交渉の余地無しかよ。
「良いから！死んだりしたら嫌いになるからね！」
だが、押し切る。
「……分かり、ました。三日ですね」
さり気なく縮めてんじゃねえよ！
「駄目だって！そろそろ俺離れしてくれなきゃさぁ」

甘えてくれるのは嬉しいような恥ずかしいような。でも、度が過ぎてる。
「俺がいない間、良い子にしてるんだよ？」
「うえっ、ひっく、ぐすっ、わっ、分かり、ました……」
泣く程？
「と、兎に角、行ってくるね」
心を鬼にして、いざ出発。
どこ行こうかな、ティリスで冒険か、ロンドンで謎解きか……。
いや、ちょっと待てよ？確かロスリックのあいつが新たに輪の都なる土地を見つけたとか何だとか……。
五日もあればいけるな、行こう。なんかドラゴンとかに食われたり騎士に刺されたりしそうな気がするけど、行こう。
さて、帰還の骨片……！
×
×
×
×
×
×ぐっ、う、は、吐きそう……。
×提督、提督成分が……。
×ほ、放送を……。
×命令の放送を……。
『はぁ、はぁ、はぁ……。て、提督が、旅に出ました。……五日間』
……「ええええええ!!!!!!!!」
……「そ、そんな!!!!」
……「うわあああああ!!!!!!!!」
悲鳴が聞こえる中、私は執務机に手をついて、何とか立ち上がる。
「わ、私が、私がしっかりしなきゃ……」
提督の不在……。
一日ならまだしも、五日間……。
精神が保つかどうか……。
ですが、命令です。良い子にしてろと命じられたのです。で、あれば。
「私が、指揮を執らないと！」

私が、黒井鎮守府をまとめなければなりません！

「おい、大淀！さっきの放送は何だ?!」

長門さん……。

「……放送の通りです。提督が旅に出ました」

「……五日もの間か」

「はい……」

「はっきり言っておく。保たないぞ」

知ってます、知ってますよ。

五日間も提督と会えないなんて、皆んなおかしくなるに決まってます。

ですが……、

「提督は、良い子にしていろ、と。そう命令なさいました」

「しかし……」

「提督のお言葉に逆らう気ですか」

「そういう訳ではないが！」

割り切れないのは分かります。ですが、もう、時すでに遅し。

私達に出来ることは、提督がお帰りになるまで、「良い子」にしていること。

取り敢えず……、

「ショックで倒れた子の介抱をします。長門さん、手伝って下さい」

出来ることからやっていかないと……。

１５６話　旅人がいない日　中編

「よう、久し振り。アリアンデル以来だな。さて、行こうか」
「え？飛び降りんの？え？マジ？」
「あー！落下ァ!!!お前この野郎ハベルなんて重いの着てるからぁー!!!」
「おいなんだあれ。蝶か？天使か？あ、痛、痛い痛い、なんか飛んできた!!」
「デブ硬いデブ硬い」
「また落ちんの？」
「毒沼とか……」
「天使だ、逃げろ!!あっ、テメー！自分だけ見えない体使いやがって!!」
「褌拾ったぞ」
「アツゥイ!!呪術!!」
「またまた落ちんのか」
「おっ、ここ、どっかで見たような……、待て、おい、何だアレ、デーモン、待って、あああ、ああああああ!!!」
×
×
×
「たったの五日間程度で何をガタガタ騒いでいるんだ、全く」
「そうだな、その通りだ」
「武蔵さん、長門さん、手が洒落にならないくらい震えてるけど、大丈夫でち？」
「大丈夫だ、問題無い」
大丈夫に決まってるだろ、ゴーヤ。
私は、大丈夫だ。
長門も、大丈夫だ。
ほらな？大丈夫だろ？（意味不明）
「はぁ……。駄目そうでち」

……まさか五日間も会えないとは。まだ三日目とはいえ……。
正直言って辛い。
限界だ。
だが、私達がしっかりしなくちゃならないんだ……。
良い大人が、留守番も満足にできんなど、そんなこと、あってはなるまい。
……いや、私達が大人かどうかは分からないのだが。建造されてから数年だし、年数で言えば子供なのかもしれないが、しかし自意識としては大人のつもりだ。
だがしかし、こんなにも……、
「寂しい、な、提督……」
こんなにも、脆かったか、私は。
提督は多忙な人だ、声を掛けられない日だって確かにある。それでも、「ただこの鎮守府にいない」こと、それだけで。
ここまで、虚ろになるものか。
「項垂れてないで他の子の面倒見てくでち。まともな艦娘は少ないんだから」
「あ、ああ……」
ゴーヤはまとも、か。
明らかに元気のない潜水艦達を引っ張って行っているな。
「提督がいない間、良い子にしてるでち。命令でち。提督の命令は絶対でち」
とは本人の言だ。
酷いのは駆逐艦だろう。精神的に未熟なせいか、酷く寂しがっている。
「なんで、司令、どうして……」
「ずっと、一緒に、いてくれるって……」
「のわっち、萩、しっかりしてくれよ、もう……」
どうやら、思い詰めるタイプの艦娘は特に辛いらしい。もしも帰って来なかったら、と考えてしまうのだろう。気持ちは分かる。
「あ、嵐……。だって、司令が、司令が……」

「大丈夫だって、司令は俺達に嘘ついたことなんて無いから。約束通り五日で帰って来るに決まってるだろ」
「も、もしも、もしも帰って来なかったら？」
「……皆んなで迎えに行けば良い。大丈夫、黒井鎮守府の力なら、必ず見つけられる」
　それは、そうだな。
　もしも帰って来なかったら、皆で迎えに行くか。時間にルーズな人だ、遅れてしまうかもしれない。ぴったり五日で帰れないようなら、探し出して迎えに行ってやる。
「でも、でも、夕張さんが、次元レベルで見失ったって！観測範囲より遠くに行ったって言うのよ?!」
「俺達と司令の絆は、距離の遠さくらいでどうこうなるもんじゃねえ!!」
「でも!!」
「でもじゃない!!」
　全く……、
「二人共、やめるんだ」
「……武蔵さん」
「良い子にしていろ、それが命令だぞ？」
「でも……」
「分かっている。不安なのは皆んな一緒だ」
　提督のように、うまく優しい言葉をかけてはやれないが、それでも、な。
「……はい。分かり、ました。ごめん、嵐……」
「俺も、ごめん。ちょっと、熱くなり過ぎた」
　丸く、とはいかないが、収まったか。
×……普段は仲が良い艦娘同士も、小さな衝突が見られるな。やはり×提督の存在が大き過ぎた。
×早く帰って来い、提督……。
×××××××××

「はぁ……」
「溜め息すんなよ、龍田……」
「天龍ちゃん……」
　気持ちは、分かるけどよ。提督が旅に出てもう三日だしな。
「天龍さん……。司令官は、まだ、帰って来ないのですか？」
「……ああ、まだだ、もうちょっとだ」
「そう、ですか。……まだ、ですか」
　電なんて、こんなに元気を失って……。
「あっ、暁が、私が、良い子にしてないからっ、司令官が、司令官は、しれいかんっ……、うええええん！」
「そんなことないわよ～、大丈夫よ、暁ちゃん」
　暁だって、泣いてばっかりだ。
　雷は部屋に籠ってるし、響も自棄酒しっぱなしだ。
　酷えよ、提督。何でこんな……。
　俺達を放ったらかしにして、どこに行ったんだよ。
　提督が待っていてくれるから、俺達は黒井鎮守府に帰って来れるんじゃねえか。
　提督がいないと思うと、おちおち出撃も出来ねえよ。
　俺達は全員、提督の為に戦ってんのに……。
「提督に甘え過ぎてたわね、私達……」
　甘え、か……。
　そうかもな。
　俺達は提督に甘えてばっかりだったよな。
「……良い加減、愛想が尽きちまったのかな」
「そんなことは……」
　いや、分かってる。
　提督は俺達を見捨てたりなんてしない。それは分かってる。
　けど……、だけど、それでも。
　心のどこかで、提督が俺達を捨てちまうんじゃないかって、思っちまう。
　このまま帰って来ないんじゃないかって、思っちまう……。

「はぁ……」
「……天龍ちゃんも、溜め息してるわよ～」
「……悪い」
「「はぁ……」」
反省するから、さ。
早く帰って来いよ、提督……。
×
×
×
「……鈴谷、食事ですわ」
「……要らない」
「少しくらい食べたらどうですの？いかに艦娘と言えども、三日間も碌に食事を摂らずにいては……」
「ほっといてよ」
「もう……」
心配ですわ……。
提督が旅に出てからと言うもの、部屋に籠りきりで。食事も摂らずにただ時間の経過を待っているんですもの。
「……熊野は、さ。辛くないの？」
「私？私は……」
辛くないと言えば嘘になりますわね。ですがそれ以上に、夫の帰りを静かに待つのも淑女のつとめだと考えていますわ。
帰ってくる提督を、優しくお迎えするのが私の使命だと……、そう考えています。
「私は、耐えてみせますわ、この程度の試練……」
いくつもの試練を、障害を乗り越えていく……。
愛とは、そういうものではなくって？
「……私には、無理だよ。耐えられない。提督用に飛ばしてる艦載機でも見つけられないくらい遠くに、こんな長い間……」
鈴谷の言う通り、普段私達は、艦載機で提督の警護をしてます。自主的に。たまに追跡を振り切られてしまうこともありますが、こんなにも長い間警護をしていないのは初めてですわね。

「心配だよ、熊野。提督が心配。辛い思いしてないかな、痛い思いしてないかな。……私が、提督を守ってあげなきゃ駄目なのに」
確かにそれは心配ですわ。
危なっかしいことばかりする提督は、一日中警護して、私達が守って差し上げなくてはなりませんから。
でも……、
「きっと大丈夫ですわ。提督のことですもの、どんな困難にも打ち勝って、ここに帰ってきますわ」
私は提督を信じていますわ。
「……そう、だね。提督なら、大丈夫だよね」
「ええ、きっと。ですから、そんな調子では、満足に提督をお迎えできませんことよ？少しくらいは食べなさいな」
「うん、そうする……」
……それでも、寂しいのは本当ですわよ？
早く帰っておいでなさいな、提督……。

１５７話　旅人がいない日　後編

「おっ、某宝具かな？弓兵多過ぎ問題」
「呪いだな、早く倒せよ」
「騎士……、炎！やだなぁ、亡者に堕ちても技は冴えてるんだから」
「魔法なのか奇跡なのかは分からんが、索敵範囲が広い！」
「良いの？安請け負いしちゃって？闇喰らいのミディール、眠りを守る、ねぇ……」
「また沼か」
「竜狩りが何故ここに?!」
「人間性を見せよ、か」
「解呪の碑はこれか」
「くっ、ドラゴンブレス！効くなぁ!!」
「やっぱりパッチじゃねーか!!」
「あいつがミディールか。ドラゴン退治は久しぶりだな。うおおおお！死ねよやー!!!」
「ちょっと待って、眠りを守るって約束は？知らない？進む？鬼かよ……」
「ほーらほらどうすんだ！何か呼び出してきたぞ!!」
「……やはりこの世界は……」
「ジジイてめえ!!!某デビルハンターみたいな動きしやがって!!!」
×
×
×
「五日経ったわよ」
「霞さん、司令官が出て行ったのは五日前の午後ですから。まだぴったり五日間ではありません」
「ぐぬぬ……」
約束……。約束なのに。五日で帰るって……。
「もーーーーーやだ!!!」
あ、曙が……。
「我慢できない!!提督を探しに……、チィッ!!!」

「駄目です……。命令は良い子にしていろ、ですから」
「……三日月イ……!!!」
あら、相変わらず凄い技のキレね。
三日月のメイスは牽制でも強力、曙の手甲の爪は堅く鋭い。
「邪魔を、するなっ!!!」
「司令官の命令を聞いて下さい、曙さん」
「何が命令よ……!!」
「司令官の命令こそ、私達の全てでしょう。他に何か？」
「ふざけないで!!あんたは提督が心配じゃないの?!!」
「心配？司令官は必ず帰ってきます。何を心配する必要があるんですか？」
「……っ、この、メンタルお化け!!!」
……って、ちょっと！
「味方同士でやり合わないでよ!!」
私闘は禁止よ！
「私にそのつもりはありません」
「……私にだってないわよ」
「じゃあ、艤装下ろしなさい」
「「……」」
「睨み合わないの!!」
はぁ……。
駄目ね。鎮守府中が荒れた雰囲気。
予想は出来てたけど、ここまでおかしくなるなんて。
「……ごめん、ちょっと気が立ってた」
「いえ、大丈夫です」
曙はもうギリギリね。物凄くイライラしてる。
逆に三日月は完全に司令官を信じてる。例え、ずっと帰って来なくても、一生待ち続ける感じかしら。
性格も考え方も真逆だから……。
「三日月、後何時間？」
「後、三時間で司令官は帰ってきます」

×三時間、ね。
×よし。
「執務室行くわよ。司令官が帰ってくるまでカウントダウンするわ」
×
×
×
『司令官帰宅まで、後三時間！』
「三、時間……？」
「本当……？」
「もふ」
あいつが外出した。
僕の友達の旅人が。
旅人の周りにはメスが沢山いて、それに囲まれて過ごしている。
でも今は、あいつがいないから、メス達の機嫌は最悪。多くは倒れてしまった。
……僕は、手が足りないから、倒れたメス達の面倒を見ろって言われた。
猫の手ならぬ、首輪付きけものの手も借りたい状況らしい。
幸い、今は冬で、裏山の管理もあまりすることがない。ちょっとくらいなら、手伝っても良いんだよね。
「……首輪付き、提督は、帰って来るの？」
「もふ」
飛龍だったっけ？胸が大きいやつだ。
「私達、提督に命令してもらわないと、何にも出来ないの……」
「もふ」
こっちは蒼龍。胸が大きい。
「提督、提督、提督、提督……」
……僕に言われてもね。
兎に角、さっきの放送でメス達が起き始めた。
面倒をみなきゃ。
ああ、全く。
手伝うなんて言わなけりゃ良かったよ。

×××
×××
×
×
×

自分の槍は、武技は、脆くも崩れ去ったのだ。
「あああああああ!!!」
無心になれと自らに言い聞かせるが、心にあるのは寂寥のみ。
無念無想は夢のまた夢。必殺の槍技も今は錆びついた。
「……提督殿」
結局自分は、提督殿に甘えているだけ、か……。
仕えるなどとは、程遠かった。
自分は、憐れでありますな……。
×
×
×
『司令官帰宅まで後一時間！』
「あら、時雨ちゃん。山風ちゃんは大丈夫？」
「さっき、目を覚ましたよ、古鷹さん。心配してくれてありがとう」
ああ、良かった。
目の前で倒れた時はびっくりしたもの。
「今は海風が介抱しているよ」
「海風ちゃん？海風ちゃんも、提督がいなくなった日に、喉を掻き毟ったって聞くけど」
「ああ、ああ、大丈夫さ、大丈夫だよ。何も、問題は無い。……海風は少しばかり脆いからね、苦労したみたいだ。でも、眼を見て諭せば分かってくれたよ」
「ふふ、分からせた、じゃなくって？」
「もちろんさ。身内を洗脳する訳ないじゃないか。ただ少し、蒙を啓いてあげただけだよ」
……へぇ、そう。
「……嘘の匂いはしない、か」
「心外だね。君に嘘をつく理由がない」
でも、嘘をついている意識が完全に無いと、匂いもしないからなぁ……。
「……大体、仮に艦娘の洗脳をしたとして、何の問題があるんだい？」
「躾の問題かな？仲間に喰らいつく駄犬はあの人の走狗に相応しくな

いし」
「はは、躾けるのは提督だろう？君じゃない」
「そうね。でも、お馬鹿さんは要らないのは事実でしょ？」
「ははははははは」
「ふふふふふふ」
うーん、やっぱり、腹芸は苦手かなぁ。私、提督みたいに器用じゃないから。
だから、
「疾ィッ!!」
直接、身体に聞いた方が早いかな……？
「……危ないじゃないか」
……うふふ、相変わらずだなぁ。剣を突き付けられたくらいじゃ、何ともないか。
「……本当に、洗脳はしてないのね？」
「ああ、誓って。……僕の妹だよ？そんなことはしないさ」
時雨ちゃんは私より賢いから、分かりづらいや。
でも……、
「それに、僕達は群れだ。提督が一番なのは変わらないが、二番目だってあるだろう？」
「二番目？」
「群れの仲間さ。提督の次に大切なのは、同じ艦娘の皆だろう」
「……国とは言わないんだ」
「ははは、国は三番目以降だね」
……まあ、良いかな。理由としては納得できる。
「僕達は人類じゃない、艦娘だ。数少ない仲間同士で共喰いなんてしないさ。野蛮だ。非論理的だ」
そもそも、共喰いしないのも、提督を不愉快にさせない為だし。時雨ちゃんもその辺は分かってる、よね。
「そう、ね。疑ってごめんね、時雨ちゃん」
「良いさ、実際に、白露型が側から見れば怪しげなのは自覚しているよ」

それにもしも、もしも提督を不愉快にするようなら……。
その時は、ちゃんと、消し炭にするから、ね？

１５８話　ただいま

『司令官帰宅まで後……!!、司令官、お帰りなさい!!!!』
「ん、ああ、ただいま」
瞬間、鎮守府中が揺れた。
……気がした。けど、あながち間違いでもなさそうだ。
はいまずトップバッターは島風。
「提督ーーーーーー!!!!!!」
「あ”んっ!!!」
まるでミサイルだ。
続いて駆逐艦。
「提督!!!!」
「司令官!!!!」
「司令!!!!」
「ぉお”ぉん!!!」
直撃。狂気のスピードから繰り出される抱き着きは凶器である。
思わず、死にかけのニャン◯ゅうみたいな声が漏れた。
軽巡重巡と、速い順に突撃してくる。
部屋は既に人口で飽和状態。
うん、死ねる。
「待って、待って、お願いだから」
揉みくちゃにされてるよ!来日したハリウッドスターかな?なお威力。
「はっ、提督!怪我しているじゃないか!待っていろ今私が」
きゃー長門さん男前ー。返しがついた矢を引っこ抜くのは治療とは言わないぞー。そして素早く回収される俺に刺さっていた矢。きっと誰かのコレクションになったんだろうな。ほら、あれだ、ロックスターのギターピックみたいな。
「はむ、ちゅ、れる……」
闇喰らいと称される、強力な闇の力を持つ黒龍ミディールに噛られた傷口に舌を這わせているのは夕立。え?何々?俺の血美味い?

そっかー。
「提督っ……！必ず帰ってきてくれると、私は信じてました……!!」
パンツ返して大淀。
と、まあ、こんな感じで。所謂大歓迎状態。いやー、モテモテですわ。笑える。
あれ？見れば、明らかにやつれている子もちらほら。ある程度は予想は出来てたけどさぁ。俺がいない間ずっとダウンしてたとでも言うの？嘘やん。笑えねえ。
「宴だ、宴の準備をしろ！提督の帰還をお祝いするんだ!!」
神かな？人を神仏か何かのように扱うのはＮＧ。悪いが、俺は人だ。
「はっはっは、良いよそんな。お祝いなんて」
「いや、そう言う訳にもいかん。貴方が無事帰ってきてくれたのだ。全力で祝う他ない。私達にとってこんなに嬉しいことはないのだからな」
そう？まあ、そこまで言うなら、良いけど……。
「さあ、提督を宴会の会場までご案内するんだ。陸奥」
「分かったわ」
すると、どこからか取り出した手錠を片方は俺の、もう片方は自分の腕にかける陸奥。
「はは、何これ。アクセサリーにしちゃデカくない？」
それに、俺の趣味じゃない。
「さ、行きましょう、提督」
そのまま俺の手に指を絡める陸奥。
良いけど、さぁ。
「……シャワーでも浴びてきたら？」
返り血塗れじゃん、君。また自棄になって深海棲艦を殴り殺してきたな？女性に多い、怒るとヒステリックになるやつかな。まあ、被害に遭うのは深海棲艦だし、困ることでもないんだけど。
取り敢えず、顔を拭いてやるか。
「あ、ん、ありがと」

拭きながら撫でる。
陸奥は自分のプロポーションに自信を持ってるからな。褒めたり触ったりすると喜んでくれるのだ。
可愛いやつめ。このこの。ここか、ここがええんか。
「……で、この手錠は？」
「……行きましょう、提督」
あ、そっかあ。スルー推奨かぁ。
まあ、外そうと思えばいつでも外せるし。
とか思いつつ、陸奥の誘導に従って移動。どこ行くんだ、食堂か。既に宴の準備は出来ているみたいだ。鳳翔達が三分でやってくれました。
ぞろぞろと集まって来る艦娘。……出入り口や窓の前に立つのは、俺を逃すまいとしているからだろうか。だろうな。
「さあ、座って、提督。お祝い……、の前に治療ね。全くもう、こんなにいっぱい怪我して……」
そう来ると思ってある程度は治してある。帰って来る前に、回復魔法やら奇跡やら薬やらで、四肢の欠損や主要臓器は治しておいた。自然治癒とは違って、負担とコストがかかるから、急速な肉体の再生はあまりしたくなかったが。
「治療と言っても、特にやることないんだけど。一応、大きな怪我は治しておいたし」
それに、どうせほっときゃ治るからね。
しかし、
「駄目よ」
と、服を脱がされ、包帯を巻かれる。
もちろん、服は回収された。
「いくら治るからって言っても、怪我して良い訳じゃないわ。本当に、本当に……、本当に本当に本当に本当に心配だったのよ？」
「そ、そうか」
愛されてるな俺。
こんなに大切に思ってもらえるなんて、俺はきっと特別な存在なの

では（ヴェルタースオリジナル感）。
よし。
「ありがと。包帯はこんなもんで良いよ。さて、俺も料理を手伝「良いから。座っててちょうだい」……はい」
目力。
目で制されてしまった。
「提督は何もしなくて良いの。ね？」
ね？じゃないが。
「はーい、提督ー。あーん」
「あ、あーん」
いつの間にか隣に座っていた最上に餌付けされる俺。うん、料理は美味しい。
「提督ー、この北上様が肩揉んであげるよー」
「お、おう」
肩こりとかそういうものは一切ないけど。
「五分経ったよー、交代して、雪風ちゃん！」
「うー、分かりました、交代します！」
雪風と入れ替わりで膝の上に座る文月。
何なのだこれは。どうすれば良いのだ。至れり尽くせりで堕落しそうだ。いや、人間的には既に堕落しているんだが。
「いかんいかん、これ以上駄目人間になったら手が付けられん。俺を甘やかさないでくれたまえ」
「あらあら、良いのよ？少しくらい駄目な方が、親しみがあって良いと思うわ」
「いやいや、そんなそんな」
「良いんだってば、ほら！」
そう言って、俺の片手を自らの豊満な胸に持って行く陸奥。ナイスおっぱい。
「……女の子に囲まれて、良いもん食いながら酒盛りって、完全に悪いやつだよな」
「提督は悪の組織のトップなんでしょう？じゃあ、問題無いんじゃな

いかしら」
　一理ある。既に悪の組織だった。
「なら良いかー！酒持ってきてー!!」
「はーい、只今ー」
　そうだよな、うん。
　俺、この五日間頑張ったしな。これくらい許されるよな。
　さあ、酒だ!!!
　明日の朝まで飲むぞー!!!
×
×
×
「……ん、おはよ、あれ？」
「おはようございます、提督」
「あ、ああ、おはよう大淀。なんか、これ、空間が……、閉鎖されてる？」
「……ああ、それについては事故、だそうです」
　事故ですよ、提督。ええ、事故です。
「事故？」
「夕張さんが、空間操作関係の機材を誤って操作し、空間を歪ませてしまったとか」
「……ふーん。まあ、そうだな。確かにこれじゃ、迂闊に空間湾曲で転移出来ないな」
　……良し！
「その気になれば抜け道はあるけど……、やるつもりはないよ。暫くの間は、外出を控えるね」
「そうしていただけると、助かります」
　そうですね、暫くの間は。
　提督にいてもらわなければ。
「……だから、手錠は外してもらって良いかな？煩わしいかなーって」
　……？
　何を仰っていらっしゃるのか、分かりかねますね。
「取り敢えず、朝食にしましょう？厨房の方、私もお手伝いしますか

ら」
「なら、尚更外さなきゃ。えい」
「あーーー!!!」
「待って、分かった、分かってる。……えい」
あ、足にかけ直した……。
「五日間くらいは、こうして繋がれたまんまでＯＫかね」
「……少なくとも、一週間はずっと外出をしない、ですか？」
「増えてるんだが。……まあ、それで良いよ。実際、倒れた子とかも多かったらしいじゃん？俺のせいで泣いた子がいるってんなら、償いは出来る限りするさ」
提督……!!
なんとお優しい方なのでしょうか！
「ありがとうございます！では、早速厨房へ！皆んながお腹を空かせて待ってますからね！」
「おう」
しかし、この手錠で提督と繋がれている感じ……。運命の赤い糸のようで嬉しいですね。
だからこそ、この状況を羨む子もいるでしょう。
ですから、皆で話し合って、なるべく平等になるように、提督と手錠で繋がる役を決めなければなりません。
……本当は抽選などで決めたいのですが……、そうすると、雪風ちゃんばかりが当たりを引き当ててしまいますから。
「と言うわけで提督、厨房の後は会議にご出席なさるよう、お願いいたしますね！」
「え、うん……、何の？」
「それはもちろん、提督を身体で？ぎ止める役割の方を決める会議ですよ」
「言い方どうにかならない？」
「お好きな艦娘に護衛を」
「なるほど」
ですが、提督自身に無理矢理に選んでいただくと、角が立ちますか

ら。結局は私達が選出するしかありませんね。
さて、どうしましょうか……。

１５９話　うーちゃんのいたずら大作戦

いたずらしたいぴょん。
「……すれば良いんじゃない？」
いたずら、したいぴょん。
「……だから、すれば良いんじゃないかな？」
じゃあ動いて欲しいぴょん！手錠で繋がれてるんだから、司令官が動いてくれないとうーちゃんも動けないんだぴょん!!
「分かった、分かった。降参だ」
早く行くぴょん！
「で、いたずらったって、誰に？また弥生にか？勘弁してあげなよ」
うーん、そう、だね。いっつも弥生にばっかりだし、たまには違う子にいたずらするぴょん。
「俺とかは？」
……司令官は異様にトラップに強いぴょん。落とし穴も黒板消しも静電気も全部通用しないぴょん。
「まあ、トラップは慣れだしなぁ。命に関わらない優しいトラップには引っかからないかな」
命に関わるトラップは、最早いたずらとは言わないぴょん。
さあ、そんなことはどうでもいいぴょん、早くいたずらするぴょん！
「俺、ついて行く必要無くない？手錠外そうか？」
……それは、駄目。
その、そう、司令官は後ろ盾ぴょん！もしもバレた時、司令官に庇ってもらうぴょん！
「一人の方がバレづらいんじゃ？」
……関係ないよ。今日は私と一緒にいなきゃ駄目。
それに、あの、司令官の身のこなしならそうそうバレないぴょん！
「そうか？なら良いけども。じゃあ、行こうか？」
うん！

最初のターゲットは、空母の二人ぴょん！
ひりゅーさーん！そーりゅーさーん！……よし、いないぴょん！
ピッキング開始ー！
……よし、開いた！
「ピッキング出来るんだ」
練習したぴょん。
さあ、侵入して……、何にもないぴょん？
普通のベッド二つと……、小さなテーブルに椅子が二組。後は小さなタンスだけ。とても、女の子の部屋じゃないぴょん。
「……はぁ、またあの二人は」
どう言うことぴょん？
「あの二人、趣味が無いんだよ。やっていて楽しいと思うことをやりなさいと言っているのに、『提督の命令を聞くのが一番楽しいことだよ』ってな感じで」
なるほど、だからこんなに生活感がない部屋に……。
「……せめて、テレビと冷蔵庫くらいは置いていってやろうか」
そうするぴょん。流石のうーちゃんも気の毒になったぴょん。
「あと撃龍神」
……何ぴょん、そのロボットのフィギュア。
「なんか似てるから」
確かに、カラーリングはオレンジと緑だけど……。

さ、さあ、気を取り直して！
次は天龍ぴょん！
「因みに、天龍と龍田は同室だからな」
天龍はやっぱやめといて、えーと、青葉にするぴょん！
「青葉か。青葉型の部屋だな？」
ノックしてもしもーし！……いないぴょん！
ピッキング開始！
……艦娘寮の部屋の鍵は、構造が同じぴょん。開けやすいぴょん。
よーし、開いたぴょん！

……。
「おお、よく撮れてるな」
写真……。壁一面に司令官の写真が。
……え、これ、ヤバいやつぴょん？触れちゃいけない闇ぴょん？
「別に闇でも何でもないが」
いやだってこれ盗撮、
「本人が撮られたと気付いていれば盗撮ではないのではないだろうか」
犯罪行為が容認されてるぴょん。
「ま、悪の組織ですから？」
ドヤ顔やめるぴょん。自分の盗撮写真を見てよく撮れてるなは流石におかしいと思うぴょん。
「それ程でもない（謙虚）」
まあ、凄くはあるけど憧れないぴょん。
で、いたずらだけど……。
「俺の自撮り顔写真でも置いとくか」
……それがいいぴょん。下手なことしない方がいいぴょん。早く撤退するぴょん。
「ちょっと待ってアングルが」
そんなのどうでもいいぴょん！
「逆光は勝利。頭上の空白は敵だ」
知らないぴょん！

次は……、大淀ぴょん！
「大淀？何で？」
大淀は怒らないぴょん。
「いや、怒るよ？俺が怪我した時とか」
それは誰だって怒るぴょん。
まあ、つまり、大淀はまだまともな方ぴょん。
さて、今の時間は大淀は執務室にいるぴょん。部屋にいないのは分かってるから、早速ピッキングぴょん。

……開いたぴょん。
あれ？
司令官の、部屋？
あ、あはは、うーちゃん、間違って司令官の部屋に来ちゃったぴょん？
「いや、大淀の部屋で合ってるぞ」
いやいやいやいや、だってこれ、寸分違わずに司令官の部屋ぴょん。
無駄に大きいベッド、綺麗なクローゼット、大きめのテレビと冷蔵庫、本棚にパソコン……。
どこをどう見たって、司令官の部屋ぴょん。
「大淀は俺の部屋を真似てるみたいなんだ」
で、でも、だって、ハンガーにかかった服まで同じぴょん？
「いや、あれは俺の。服とか小物とかはちょくちょく盗まれてる。まあ、同じ物の新品を代わりに置いておいてくれるから問題はないんだけどね」
問題大有りぴょん。
窃盗は犯罪ぴょん。
「いや、世の中の犯罪行為の十割はバレなきゃヘーキ、バレても逃げ切れば無問題。被害届がなけりゃ無かったことになるのだ」
この鎮守府の道徳はどうなってるぴょん?!
「何たって悪の組織ですから？」
だから、ドヤ顔やめるぴょん!!

……白露型の工房ぴょん……。
「楽しそうじゃん行ってみようぜ」
うう……、逝っちゃってるぴょん。精神状態おかしいぴょん。
「工房はピッキングじゃ開かないからな。合鍵を使うぞ……、はい開いた」
いや、待って、心の準備が……！引っ張らないでぴょん!!うわあああああ!!
「ほら、見てごらんよ。何も怖いものないだろ？」

見てごらん、ってか、見えないぴょん？電気は？
「あー、ここ、電気通ってないんだよね。ランプならあるよ」
このご時世にランプって……。しょうがない、点けよう。何気にマッチを擦るのは初めてぴょん……。
すると、真っ暗な部屋にランプの灯りが点いて……?!
……あ、え？
「よくできてるなこれ」
ひっ!!
「何？どうしたの？」
そそそそそ、それっ、腕っ！人の腕!!!
「ああ、俺の腕の剥製だな」
目玉が!!!
「俺の目玉のホルマリン漬けだ」
心臓が!!!
「俺の心臓の瓶詰めだ」
……全部司令官ぴょん!!!?
「俺のパーツ集めんのが趣味みたいよ」
イかれてるぴょん!!!
「他にも薬品と、武器と……、あ、いかんなこれは見ちゃならん。名状しがたいアレとかコレとか」
うわーーーー!!!
「あと願望器じゃない感じの聖杯」
うわーーーー!!!
「儀式素材」
うわーーーー!!!
逃げるぴょーーーーん!!!!
はあ、はあ、はあ、はあ……。
ヤバかったぴょん。闇だったぴょん。この鎮守府には開けちゃならない扉が多いぴょん。
「次どこいくー？」

いや、懲りるぴょん！あんなもの見てまだなんかやる気ぴょん?!
「首輪付きの小屋なんてどうだろう」
……ま、まあ、首輪付きの小屋ならまだ安全ぴょん？
「決まりだ、行こう」
う、うん。
ところで、冷暖房完備でネット環境まである建物を小屋と言い切って良いのかな……。
「首輪付き、いるか？」
「もふ」
「いるわ。さあ、卯月。いたずらして良いぞ」
「もふっ」
据え膳ッ!!!
何ぴょん、いたずらして良いぞって!!大体にして、犬、じゃない、猫、でもない、……何だろうこの動物？いや、この、なんか白いふわふわした動物にいたずらする程落ちぶれてないぴょん!!!
「首輪付きけものは首輪付きけものだよ。それ以上でもそれ以下でもない」
「もふ」
……本当に何の生き物ぴょん？けものとは一体……？
「殺戮と農業が得意なフレンズだ」
「もふ」
……と、兎に角！こんな風にお膳立てされて、動物（？）相手にいたずらなんてする訳ないぴょん!!
「遠慮しないで良いんだよ？噛んだガムを毛皮にくっつけるとか、痛たたた噛むなこの野郎」
「がぶっ」
おわあ、噛まれてるぴょん！
「さあ、今のうちにいたずらを!!」
えーと、えーと、そりゃ！
「もふ」
……ふわぁ、もふもふ！もふもふぴょん！

「いたずらと言っておきながら撫でるだけ？」
だから、動物にいたずらはしないぴょん。それに、首輪付きは白くてもふもふな黒井鎮守府のマスコットキャラぴょん。こんな可愛い子にいたずらはしないぴょん！
「……可愛い？」
え？首輪付きは凄く可愛いと思うぴょん。
「ええー？こんな、史上最も多くの人命を奪った個人って目をしてるのに？」
そんな、それは言い過ぎじゃ……。あっ、でも、つぶらな瞳だけど眼光は鋭い。
「艦娘くらいの戦闘能力はあるからな。あまり舐めないで差し上げろ」
「もふもふっ」
は、はは、まさか、ね？

あー、もう、なんか、疲れたぴょん。
「いたずらは？」
もう良いぴょん。部屋に戻るぴょん。あ、提督の部屋だからね？睦月型のガレージじゃ、
「え？」
あ、遅かったぴょん……。
て言うか、疲れたって言ったぴょん。なんで更に疲れそうなところに連れてくぴょん？鬼ぴょん？
「またまた。卯月の拠点じゃないか」
いや、ガレージは睦月型の拠点ではあるけど。寛げるとは一言も言ってないぴょん。
「そうなの？」
そうぴょん！
『認証……、睦月型、司令官。ゲート開放』
「良いじゃん、近未来的で」
ここだけスター○ォーズみたいな空間になってるぴょん！気疲れ

するぴょん!!
……大体にして、どれもこれも現代の技術力じゃ実現出来ないような超技術ばっかりぴょん。
「俺の伝手と工廠組の頑張りだな」
何でそれでどうにかなるぴょん!・何をどうやったらロボットアニメみたいな謎の超技術を実用化できるぴょん!・
「どうした卯月?・武装が必要か?・」
うっ、菊月……。
「菊月!・菊月じゃないか!・イレギュラーハンターと名高い菊月だ!!」
「フフフ、誰であろうと、私を超えることなど不可能だ!!!」
何を言ってるぴょん。
「ふはははは……、それで?・卯月は何が必要だ?・あ、このパルスキャノンは駄目だぞ、私のだ」
要らないぴょん!・そんなのより、もっとこう、魚雷とか艦娘っぽいものを装備するぴょん!・
「垂直ミサイルならあるぞ」
うう、何言っても無駄ぴょん……。
「まあ、武装弄るくらいなら良いじゃん。むしろ、強くなってもらわなきゃ困る」
「ほら、卯月。司令官もこう言っているんだ。良い加減、光学兵器の一つでも持ち歩け」
いや、ちょっと、こら!・勝手に艤装を弄らないで欲しいぴょん!・待って!・あ、ミサイルつけないでぴょん!!待って!!・あああ!・あああああああ!!!!

１６０話　熱く激しく求めてくれ

よう、提督。
「ああ、おはよう、木曾」
それで、早速だが、今日の予定はどうするんだ？
「予定も何も……、『これ』がある以上、外出は出来ないよね」
そう言って、腕の手錠を見せてくる提督。
……すまない。それは外せないんだ。少しの間だけ、我慢しててくれ。
「ああ、いや、分かってるよ。皆んな寂しかったんだよね。暫くは外出しないからさ、安心してよ」
……ああ。
……先日、提督が五日間の旅に出た時の話だが、俺は……、寂しさのあまり、正気を失っていて、出撃も碌にできない有様だった。
全く、自分の弱さに反吐が出る。
提督を支えると決めたのに、未だに守られてばかりだ。「寂しかったよな、ごめんな」と頭を撫でられ、ガキのようにあやされる自分が許せない。
何て不甲斐ないんだ、俺は……。
「……偉いな、木曾は。俺に気を遣ってくれるのか」
やめてくれ、当たり前のことだ。
「いや、それでも嬉しいよ。さあ、朝早くから悪いが、厨房に行こうか」
……ああ。料理は出来ないが、野菜の皮剥きくらいは手伝うからな。

「助かったよ、木曾。ありがとう」
何言ってるんだ、提督。俺はちょっと手を貸しただけだ。鳳翔や間宮の方がずっと役に立ってただろ。
「それはそうだ。人には得意不得意がある。差があるのは仕方ないことだ。でも俺は、手伝ってくれたこと自体が嬉しかったんだよ」
そんなの……。

「綺麗事かな？」
ああ……。そんなのは綺麗事だろ。邪魔だったんじゃないのか？
「俺はかわい子ちゃんと厨房に立ててラッキー、君は俺と厨房に立ててラッキー。それで良いじゃん？」
……そうだな。それで良いか。だが覚えておいてくれ、俺は提督の役に立ちたいんだ。もっと俺を使って欲しい。
「んー、じゃ、おいで」
ああ、何だ？
「えい」
お、おお？何なんだ？急に抱きしめてきて？
「んんー、あったかいな木曾は。はあー、あーうー」
ど、どうした？
「セクハラした」
セクハラ？セクハラになるのか？俺は抱きしめられて嬉しいんだが。
「よっしゃ、メッチャ元気出たわありがとう」
そ、そうか？そういうものなのか？
「スキンシップは大事、だろ？」
あ、ああ！そうだな！スキンシップは大事だな!!

「スキンシップは大事なんだが……、手を繋いだまま歩くのはどうなの？」
……嫌か？
「そんなことはないよ」
……なら、良いだろう？俺とお前の仲じゃないか。
「……ただ、手を繋ぎたいだなんて、木曾は可愛いこと言うなー、と思ってさ」
意外か？
「いや？そうでもないな。なんたって、木曾は女の子だし」
女の子、か。
「うん、可愛い女の子だ」

はは、そんなことを言うのは提督くらいだ。街に出ても男と間違えられるくらいだぞ、俺は。
「見る目がない人間なんて沢山いるさ。少なくとも俺は、木曾の良いところ、沢山知ってるよ」
なら、それで良いさ。有象無象がどう思うかなんてどうだって良い。提督に見てもらえるなら、俺はそれだけで良い。
「……そっか。でも、世界は広いんだ。俺以外にも、木曾の良いところを分かってくれる人もいるよ」
要らないさ。お前がいればそれで良いと言った。……いつも、俺以外にも良い人が、などと言うが、何故なんだ？俺が鬱陶しかったか？
「いやいや、そんなことないよ。そうじゃなくってさ……。確かに、俺と艦娘の皆んなとの出会いは幸せなものだと思ってるよ？でも、幸せってのは、探せばいくらでもあるものなんだ。だから、皆んなにも、幸せを探して欲しくってね」
与えられる幸せに満足せず、より大きな幸せを探し求めろと？
「そう、なるのかな？」
成る程、俺の幸せか……。提督の言う通り、俺自身が幸せを探すのも重要かもしれない。だが、少なくとも、提督の側にいれるだけで俺は満足なんだがな。
「……やっぱり、可愛い女の子だな、木曾は」

『テーテレッテー、テーテーテー』
おお、凄いな！
「映画、あんまり観ないの？」
ああ、そう言えば観たことが無かったが……、いやぁ、面白いな！にしても、考古学者とはこんな仕事なのか。大変なんだな。
「いや、それは映画だから」
鞭は使わないのか？
「フェドーラ帽も被ってないよ」
そうなのか……。
「まあでも、世の中が不思議で溢れてるのは本当かな」

じゃあやっぱり、聖杯とかもあるのか？
「ああ、あるぞ。うちにある。使うとダンジョンへの道が拓けるだけだが」
クリスタルスカルも？
「聖者の頭蓋なら。使うとこれまたダンジョンへの道が拓ける」
す、凄いな。それはなんとも……、
「旅、してみたくなるだろ？」
……ああ、そうだな。
まだ見たことのない何かを探しに行きたい、その気持ちが少し分かった気がする。
だから提督は旅に出るんだな。
「ああ！未知の世界は最高だろ？」
次、旅に出るときは、着いて行って良いか？
「そうだね、今度、皆んなで一緒に旅行にでも行こうか」

「お昼、どうだった？」
ああ、美味かった。いつもありがとう。
「そう言ってもらえると嬉しいよ。さて、午後はどうしようか？何かやりたいこととかはある？」
いや、ないな。暇な時間にやることと言えば鍛錬くらいだ。
「んー、鍛錬以外にも何か趣味を持ってみるのも良いと思うよ？」
そうだな……、さっき見た映画は面白かったな。
「じゃあ今日は、映画を観て過ごそうか」
良いのか？俺に付き合う必要はないぞ？提督にやりたいことがあるならそっちを優先してくれ。
「大丈夫。今日は映画を観たい気分だから。さあ、行こうか」
そう言って、自室に入ってテレビを点ける。姉貴達はいない。恐らくは休憩室だろう。
「はい、ポップコーンとコーラ。映画観る時のしきたり」
へえ、そうなのか。
「何でか分からないけど、食べたくなるんだよね、キャラメル味のポッ

プコーン」

「そろそろお風呂入ろうか、木曾」

ん、ああ、そうだな。映画に夢中になって忘れていた。

ちょうど終わった映画を消して、と。風呂に向かうか。自室にもシャワーはあるが、どうせなら、提督が態々作った大浴場が良い。

自室から数分歩いて……、ここだ。因みに、大浴場の裏には露天風呂がある。至れり尽くせりだな。

「っと、手錠があるから脱ぎづらいな、一旦外すよ……、よし、はい」

よし、俺も脱いで、と。

さあ、風呂だ。

「……きゃあああああ!!!」

……何だ？

「ししししし、司令官!!!な、何故ここに!!!」

「朝潮か。急に大きな声出しちゃいけないよ、皆んながびっくりするからね」

「はい、すいません……、じゃなくって！何故女湯のここに司令官が?!」

「いやぁ、本当は俺も遠慮してるんだけど、皆んなの強い要望があってここに」

「?!……、?!!!」

確かに、初見では困惑するか。だが、提督と一緒に入浴したいと言う欲求は、ここの艦娘なら当然あるもの。

「ごめんね、気を悪くしたなら謝るし、すぐに出て行くから」

「い、いえっ！何も問題ありませんっ！む、むしろ、光栄です！」

例え新入りでも、それは同じだ。

「本当にごめん、なるべく後ろ向いておくから」

「いえっ！司令官さえ宜しければ、朝潮の身体を、どうぞお好きなようにっ!!!み、見るのも！ふ、ふ、触れるのも！司令官の思うがままにして下さい!!!」

「お、おう」

……ほらな。
「……ん、どうした木曾？」
いや？手が早いな、と思ってな。
「あー、悪かったよ。新入りだけじゃなく、君もちゃんと相手するさ」
本当か？
「もちろん」
そう言うと、提督は俺の肩を抱いてきて……、
んっ……？？
優しい、口付け……？？
「ふう、満足かい？」
まだだ、もっとだ、提督……？？
そんなものじゃ満足できない。もっと強く、激しく……？？
俺を求めてくれ……？？

１６１話　のじゃロリといっしょ

「ああ^～、美味しいのじゃ^～」
まともに食事ができて、甘味まで味わえるとはのう。なんと幸せなことなんじゃろうか。
「ふふっ、姉さんったら。頬っぺたにクリームが付いていますよ」
それに、筑摩も隣にいてくれる……。
全てはあの男の采配のおかげじゃな。
……と、噂をすれば何とやら、じゃ。
「やあ、利根、筑摩。黒井鎮守府には慣れたかな？」
新台真央、と言ったか。白髪の偉丈夫で、ここの提督である色男……。
正に囚われの姫君のような立場にあった吾輩を、大本営の目を掻い潜り助け出し、筑摩共々ここに所属させるという荒技をやってのけた強者でもある。
……それにしても、何とも……。
「提督、お主は誠に……、ハンサムじゃのう」
「良く言われるよ」
……助けられた贔屓目を抜きにしても、提督はハンサムじゃ。肩まで伸ばした美しい白髪に、健康的な肌。黒の瞳は鋭くも優しく、輝くほどに白い歯の並ぶ口元にはいつも微笑を浮かべている。鼻筋もすうっと真っ直ぐで、日本人とも西欧人ともとれる顔付きじゃ。
耳の形も良い。
そして、目測で１９０ｃｍを超える長身。良く鍛えられた肉体が、ボタンをいくつか外してある黒いワイシャツから覗く。……捲ってある袖口から見える太腕も、余分な脂肪は一切ない。太い筋肉、太い血管からは生命の力が感じられる。
服装はいつも黒のワイシャツと紺色のジーンズなる履物。靴は狐色の革靴じゃ。そこに、士官の白制服を羽織り、首元には見事な細工物をぶら下げておる。
聞くところによると、ノースティリスなる異界の地での、魔法のか

かった品だと言うのじゃから驚きじゃ。吾輩も魔法の指輪を貰ったが、着けていると明らかに身のこなしが速くなるものだからこれまた驚いたものじゃ。
「あ、そうだ（唐突）。さっき食堂でぇ、美味い苺タルト、焼いてきたんだけど……、食べてかない？（提案）」
「おお、頂こうかのう」
「あ、ありがとうございます」
……その上、性格は春風の如く涼しげで、気持ちの良い男じゃ。些事を気にせず豪胆で、立場に驕らずしかし誇りを持ち、その癖子供のように純真なのじゃ。
鎮守府中の艦娘が提督に夢中になるのも仕方ないじゃろうなぁ……。
「……おお、美味い！苺の甘酸っぱさがたまらんのう！」
「本当、美味しいです！」
その上、何をやらせても一流じゃ。嫌味なほどに謙遜するが、ほぼ万能と言っても良いくらいには何でも出来る。
これじゃあ、惚れるなと言う方が無理じゃろう。
じゃがのう……。
「恋は盲目と言うが……、艦娘はここまで狂うものなんじゃな……」
ふと、窓を見ると、艦載機がこちらを見つめ。
ふと、壁を見ると、監視カメラがこちらを見つめ。
ふと、辺りを見ると、艦娘の目がこちらを見つめ。
監視、盗聴、発信機……。凡ゆる手段を以って見られているのじゃ、提督は。
……常人ならノイローゼで倒れてるじゃろうなぁ……。
この提督の何より優れる点は、図太い精神じゃ。病的なまでに提督を愛している艦娘に四六時中監視され、一挙一動を見つめられ、その上で盗聴や私物のすり替えまでもが行われておる。
極め付けは、この男、それに気付いておきながら何とも思っていないのじゃ。監視カメラに手を振り、艦娘に声をかけ、盗聴器に話しかける……。尋常な精神じゃなかろうの。

一体、どんな経験をしてこればあのように図太くなれるのか、想像もつかんな。
「……さて、急に休日、と言ってもやることが思いつかないかい？でも、ここで一日ケーキを食べてるのは良くないだろ？やりたいことはない？」
休日……。
そう言えば休日だったの。
今は週に二日休むのが普通らしい。月月火水木金金の時代は終わったんじゃな。深海棲艦とやらに海を侵略されている今の世で、そんな調子で大丈夫なのかと問うたものだが、
「今は十分に戦力があるからな。全員を一斉に出すより、順次休みを取りながら万全の状態で戦って貰った方が良いだろ？」
とのことじゃ。
正直、寝る時間と食う時間があれば大体は何とかなると思うんじゃがなぁ。大本営の言う通りと言うつもりはないが、この身は人外、護国の艦じゃぞ？
休んで何とする？寝る時間があって、こんな良いものが食べられる。それで十分じゃろうに。
……むむむ、参った。やることが思いつかん。大本営に監禁されていたせいか？
「筑摩は何かやりたいことがあるか？」
と、筑摩に問うてみる。
「私は、そうですね……、外に出てみたい、ですかね」
外……、外とな？
「利根姉さんと一緒に外に出るの、夢だったんです」
「うむ……」
外出、か……。
「大本営の命令で陸を歩く度、いつもこの国の人々の幸せそうな姿を見ていました……。手を繋いで歩く家族を見て、私もあのように幸せになってみたいと……、いつの間にか、そう願うようになっていたのです」

家族……。

そう、じゃな。筑摩は吾輩の大事な家族じゃ。家族と外出するのは、きっと楽しいじゃろうな。

「外出？それなら、スマホ持って行ってくれるかい？うちの鎮守府では……」

……要は、通信機を持ち歩け、と。確かに、緊急の連絡に対応出来ねば困るのじゃ。と、言うより、今は電話が持ち歩ける時代か……。

「む、了解したぞ。これを持ち歩けば良いんじゃな？」

「……それと、あー、その格好もやめないか？それはあんまりにも……」

格好？……ふむ。艤装を創造した神は随分と助平なのじゃな。女子にこのような格好をさせるとは。これでは外出出来んではないか。

「この丈が短い服では外に出る訳にはいかんなぁ」

「そう来ると思って服は用意してあるから、着替えてから外出するといい。……それと、俺も着いて行くよ。申し訳ないけど」

「……それは構わんが、良いのか？」

吾輩なんぞに構っておって。提督なんじゃ、多忙じゃろうに。

「もちろん。美人のエスコートは大得意なんだ」

「美人、か？吾輩が？」

ほははっ、全く、全く……。

敵わんなぁ……。

×

×

×

「ほー、ほーほーほー、凄いのう、変わったのう。吾輩の記憶にある日本とは全く以って異なるのう」

「ふふふ、姉さん、そんなにキョロキョロと辺りを見回しては、より目立ってしまいますよ？」

……私も、初めて外に出た時は驚いたものです。

艦だったあの頃とは何もかもが違うんですよ、今は。

「ほら、こっちだ。おいで、利根。筑摩も」

「む……」

「あっ……」
そう、違うんです。
……あの頃とは違って、握られる手も、こんなに暖かい……。
……艦だった頃の、操舵を握りしめられる感覚は覚えていますが、この様に、慈しむように触れてもらえるのは初めてです。
あの頃には無かった心臓が高鳴り、あの頃には無かった頬が赤く染まる……。
それがたまらなく、心地良い。
「……提督、お主の手は暖かいのう。まるで陽だまりのようじゃ」
「はは、爪は触らないように、ね」
少しだけ、頬を赤らめる利根姉さん。私も姉さんも、提督が好きだ。
恋とか愛とか、そう言ったことは分からないけれど。人間の考えはまだまだ理解出来ないけれど。
でも、それでも、この暖かさは大好きです……。

「に、にしても、人の身体は艦と勝手が違うものじゃの！陸を歩くなんぞ新鮮じゃ！」
どこか気恥ずかしくなった私達は、提督に手を握られながらも口を開きました。
ふふ、艦が気恥ずかしい、なんて。でも、今は艦ではなく、一人の娘として人生を歩んでいるんですね、私達は。
湧き上がる感情には未だ慣れませんけれど、不快ではありません。
……楽しい、ですね。
きっと、これが楽しいという感情なんだと思います。
確かに、この感情を守る為なら、監視や盗聴もやむを得ないですね。
私も監視用の艦載機を飛ばしてみようかしら……。
「ウ〟ォア〟ァ!!!」
「提督?!」
「……はぁ、はぁ、いや、何でもない」
「いやいや、何でもないことはないじゃろう?!」

そうですよ、提督！
今朝から気になってましたけど……！
「あえて突っ込まなかったが……、お主、何で犬耳が生えておるんじゃ?!」
「鋭い爪もです!!」
「……昨日、比叡に料理を教えてて」
「「成る程」」
分かりました、また怪しげな病気に罹って、肉体が変異したんですね。
「どうしよ、尻尾生えちゃった……」
あー、えーと。
「大丈夫ですよ提督、かわいいです」
「そうじゃな、犬みたいで」
「はは、ありがと。まあ、ほっときゃ治ると思うから」
……もう、なんだか、放っておけない人ですね。
うん、やっぱり決めました。提督のために艦載機を飛ばします。
姉さんも、提督も、私が守ってあげますからね……。

１６２話　アサシン型

羽黒は強い。
毒の扱いに長けていて、隠密性も一番。それで、敵の群れに単身で潜り込んでは、勘付けれずに敵の首を落とす。
足柄は強い。
妙高型一の気迫。一太刀で三体は殺す剛剣。煙幕に含み針の様な小手先の技術も決して馬鹿には出来ない。煙幕に乗じた奇襲はかなりのものだ。
妙高姉さんは強い。
心技体全てが高い水準で纏まっていて、二刀流の、熟練の剣さばきと高い対応力であらゆる場面で活躍する。
ならば、私は。
私の強さとは何か。
「疾ッ……！！」
……技だ。
正面、深海棲艦。
私専用に、先端を鉤爪状に湾曲させた暗殺剣、フックブレードを手甲の手首から引き出し、動脈を斬りつける。刃を引き抜いてやると、滑った血液が間欠泉のように噴き出す。
迫る砲撃は、近隣の深海棲艦の眼孔にフックブレードを引っ掛けて、盾にして対処する。目玉をくり抜いた柔らかさの次に来る、砲弾の衝撃は関節を曲げて受け流す。
剣を抜けば一体、首筋を半ば程断ち切り、二体、口蓋から剣を突き刺し脳幹を貫く。返す刀で三体、殺す。
私達は……、妙高型は、強い。

しかし、何よりも強いのは、武技ではない。
忠誠、だ。
全ては、司令官の為……。
あの人の為なら、私達はどんな汚れ仕事でもできる。例えそれが、

暗殺の様な真似でもだ。
だから司令官、覚えていて欲しい。
貴方には忠臣がいるのだと。
貴方に隷属する女がいるのだと。
貴方のモノであるのだと……。

「那智、集中しなさい。来ましたよ」
「ん、ああ、済まないな、姉さん」
いかんいかん、意識を切り替えねば。あの人のことを考えると、夢見心地になってしまう。まるで、恋に浮かれた乙女のようにな。
「二体、三体……、四体。鬼クラスの戦艦かな。赤いからエリートだと思う。いつも通り量産型」
羽黒の知らせを聞いて、自分の眼でも確認をする。……成る程、その通りのようだな。
「では、一人一体。首級を提督に捧げますよ。私達が殺せば殺すほど、提督はお喜びになりますからね」
「「了解」」
ああ、そうだな、殺す、殺さねば。殺した数だけ愛されるのだ。殺した数だけ忠義を示せるのだ。
散開し、敵を仕留める。必要とあらば、チームワークを行うが、妙高型はそれぞれのやり方で戦う事の方が多い。
しかし、まあ、
「何とも、弱い……」
鈍いのだ。全てが。
『メイ、レ、イ……、ハカイ』
目は節穴か、鼻は飾りか、勘はどうした。
こうして目の前に立っても、
『……？』
気付かれる事はない。
量産されたゴミでは、私達に敵わない。
どんなに強化された装甲も、火砲も、私を認識していないなら意味

はない。
「死ね」
『ギッ……』
喉を一突き。
力を込めて引き抜くと、裂けた首から鮮血が舞う。
これで終わりだ。これだけで終わりだ。
「さあ、終わりです。帰投しますよ」
見れば、他も同じだった。私達、妙高型の隠密性の前では、量産された深海棲艦の感知能力では無力なのだ。
×返り血を拭って、剣を振り、血を吹き飛ばす。
×……私達は、強い。
×だが、戦いにならないと言うのも、どうなのか、な。
×
×
×
「姉×さん待って姉さん待って、流石にそれは死ぬと思うの」
「腕×の一本や二本で艦娘が死んだりするもんですか」
「あ×ア”っ!!!?」
「ま×まあまあ、そう怒らなくても良いじゃないか、妙高姉さん」
いいえ、今日ばかりは許しません。
……大体、那智も那智です。毎晩毎晩、提督と晩酌をして。それについて行って酔潰れる足柄が悪いとはいえ、誘う那智にも責任がありますよ。
「おっ、折れたァ、これ絶対折れたァ……」
「折ってません!」
失礼な。実戦でもないのに本気で力を入れるものですか。ただ、痛めつけただけです。
「いやいや、俺は怒ってないよ、妙高」
「……提督がそう言うなら」
全く、しょうがないですね……。
「それより、妙高もどうだい、一杯やろうよ」
「ええ、提督のお誘いとあらば」

倒れ伏した足柄の座っていた席に、代わりに座ります。
因みに羽黒は、提督に寄りかかって寝たフリをしていますね。まあ、甘えているだけなら、あまり問題は無いでしょう。
「お説教も良いけど、やり過ぎないようにね」
「はい、それはもう！」
提督がそう言うならば。
「……まあ、説教をやめてくれるなら万々歳だ。また禁酒令なんぞ出されたら困るからな」
「……長い休肝日が必要かしら、那智」
「い、いや、遠慮しておこう」
那智も失礼ですね……。
姉を敬う心が足りません。
実はあまり尊敬されてないとか……。
……考えないようにしましょう。
「那智も飲みなよ、この酒、那智が持ってきたんだからさ」
「あ、ああ。にしても、ペースが早いなぁ、司令官は。艦娘よりも酒に強いとは」
確かに、早いですね。こんなに飲んでお身体は大丈夫なんでしょうか。本人は、「ザルどころか枠だから」とのことですが。
……毎度大怪我して帰ってきて、気付いたら再生してますから。お酒の飲み過ぎくらいでどうにかなる身体ではないと分かってはいます。それでも、心配です。提督に倒れたれたら、私……、後を追って自害します。
「はっはっはー←俺の身が心配？（酒が）美味しいから大丈夫だよ！」
「む、そうだな！こんなに美味いものが身体に悪いはずがないよな！」
「もう、調子が良いんだから……」
確かに、こうして皆で飲むお酒は美味しいですけど。飲み過ぎはいけませんからね。
「くぅ～、美味い！有り余る給金で良い酒を買った甲斐がある!!」
実際、余りますね、お給金。住み込みで、三食付きなのにこんなにもらって良いんでしょうか。それより、

「コラ、那智。提督に合わせてペースを上げちゃいけませんよ」
「まあまあ。あ、そうだ（唐突）。今日は何をしてたの？妙高の話、聞かせて欲しいな」
わ、私の話、ですか。
「ええと、今日は出撃を……」
「いや、そうじゃなくってさ。仕事の話じゃなくってプライベートの話だよ」
仕事を頑張ってくれてるのは知ってるしね、と付け加える提督。
「プライベート、となると……、読書でしょうか」
私も、その、有り余ったお給金で少し本を買うようになって。
「読書か……。良いじゃないか。失敗しても問題ない本を読むんだよ」
読書で失敗とは一体。
「マナを吸い取られたり、モンスターが出現したりするから、古書物には気を付けるように」
はあ……。

……もう、すっかり夜です。
明日も仕事ですから、お開きですね。
まだ飲みたいと駄々をこねる足柄を黙らせ、寝たふりを続ける羽黒を抱えて、部屋に戻ります。
「はいはい、もう遅いから。また明日な」
「やーだー、まだ提督と一緒にいるのー！」
「……足柄？」
「ヒッ！ま、待って姉さん！よく考えて？建造から一年そこらの私達はまだ年齢的には子供！ちょっとぐらいわがままを言っても」
「それが遺言ですか？」
「すいませんでした……」
少なくとも、お酒を飲んでいる時点で子供ではないでしょうに。毎度毎度、下手な言い訳をするから怒るんですよ。素直に謝ればお説教も短めになるのに。

「んー、そんなに言うなら、俺の部屋で寝るかい？」
「え、本当?!」
「て、提督！足柄を甘やかさないで下さい！」
そ、そんな破廉恥な!!男性の提督と同じ部屋で寝るだなんて、何か間違いがあってからでは、
「妙高も来るかい？正直、部屋のベッドがデカイから5、6人くらいは余裕だよ」
「行きます」
そりゃあ行きますとも、ええ。
「その、何だ、私も良いだろうか」
「司令官さん、お隣で寝ても良いですか？」
……那智は兎も角、羽黒はさっきまで寝たふりをしていたのに。
まあ、良いです。敬愛する提督のお誘いですから、断る訳がありません。
倫理も何も関係ありません。
そ、それに、もしかすると、これは……！
「夜伽でしょうか？」
「え？いやいやいやいや、ただの添い寝だよ？」
「そ、そうですか」
勘違いでしたか。そ、そうですよね、いきなり夜戦（意味深）のお誘いなんて……。ただの添い寝ですよね。
「さあ、寝ようか」
「はい、提督」
……添い寝、ただの添い寝……。
その、もしも、提督が我慢できなくなっても、私は……。
お説教、しませんから。
つ、つまりですね、妙高型は……、
「い、いつでもＯＫですからね！提督！」
「お、おう」

１６３話　菱餅とほっぽちゃん　前編

「そういえばこれ、昨日の出撃で拾ったんだけど、何かしら？」
そう言って、隣で寝ていた足柄から手渡されたのは……、
「……菱餅？」
菱餅。
赤白緑の和菓子。ひな祭りとかの時の菱形のアレだ。
「えーと、つまり？」
「深海棲艦が持ってたのよ」
「深海棲艦が持ってた」
どう言うことだ、まるで意味が分からんぞ。
「足柄！何でそんなものを持って来るの?!罠だったり、危険物ならどうするんですか!!」
「ご、ごめんってば、妙高姉さん。でも、危険な感じはしないし、ちょっとした罠くらいなら何とかなるでしょ？」
「そう言う問題じゃありません！軽率だ、と言っているんです！」
「まあまあ、そんなことより、これが何かの方が問題だよ」
深海棲艦が菱餅を運んでいた、かなり重要なポイントだ。
「……で？どうするんだ、それ」
那智が問いかけてくる。んー、どうするって言ったって……。取り敢えず、
「あむ」
「「「食べたーーーー!!!!!!」」」
そりゃ食うでしょ、お菓子だし。
「し、深海棲艦が運んでいたものですよ?!」
「そんな得体の知れないもの、口にするんじゃない!!」
そしてこの熱いバッシングである。一応、食っても多分死なないと言う勘と経験則に基づいての行動なんだけど。さて、お味の方は……、
「……燃料、ボーキサイト……、うん、資材だこれ」
何かこう、上手く言えないけど、圧縮された資材、かな。お腹にた

まる感じだ。
「資材……、資材?!」
「なん……、だと……?」
　信じられないかもしれないが、事実だ。この菱餅は資材の塊。お菓子じゃない。
「じゃ、じゃあ、司令官さんの言葉を信じるとするなら、深海棲艦は資材を運んでいたってことですか?」
「ああ、そうなるな」
　そう言えば、保護（誇張表現）した離島の深海棲艦に聞いたことがある。資材は深海に貯められるが、一度に引き出せる量は少ないと。
　……一定ランク以上の強さを持つ深海棲艦は、深海棲艦を創り出す能力を持つらしい。
　だがそれも、資材を使ってのこと。資材が無ければ深海棲艦も創造できない。そして一度に引き出せる量は少ない為、時間をかけて数を増やしている、と。
　逆に言えば、手元に資材さえあれば、一度にたくさんの深海棲艦を創造できると言うことだ。
　つまり、何者かが資材を集めていることイコール、深海棲艦が生産されていると言うこと。
「成る程、要するに……」
　作戦会議、開始だ。

「はい、お茶。と、和菓子」
「む、ありがたい」
　会議室にて、お茶汲みをする俺。菱餅を見た所為か和菓子を作りたくなった。
「……じゃなくってだな！いつも言っているように、貴方がお茶汲みをしてどうする！」
「まあまあ、怒んないでよ長門。お饅頭あるよ、はいあーん」
「あーん、もぐもぐ、美味い！……じゃなくてだな!!」

「まあまあ、ちょっと待ってよ。そろそろ、偵察に行ってもらった龍驤が帰って……、来たな」
「ただいまー、偵察して来たでー」
午前に頼んでおいた偵察を済ませたらしい龍驤が、長門の手元から水性ペンをひったくり、ホワイトボードに文字を……、
「……司令官、抱っこして」
「……ああ、届かないのね。よいしょっと」
文字を書いた。
『ＡＬ海域！』

「ＡＬ海域だと？開放したはずではないのか？」
長門の言葉も尤もだ。ＡＬ海域？馬鹿な、開放したはずでは……？！
「でも、この……、菱餅？を持ってる深海棲艦は、北の方に移動してるで？偵察機で追っかけたら、ＡＬ海域辺りで反応がなくなったわ」
「うーむ、そうか……」
どう言うことだろうか。ＡＬ海域はとっくの昔に取り戻したはずの海域だ。
「新たに深海棲艦が現れたのか？いや、それなら流石に気付くはずだ、いやしかし……」
長門は、顎に手を当て、考え込む。こと戦術に関することならば頭も回るのだ。ながもんとは言わせないぞ！
「……うむ、力押し、だな」
しかし、導き出された結論は脳筋である。やっぱりながもんじゃないか……（憤怒）。
「いやー、もっと作戦らしい作戦欲しくない？」
「……仕方がないのだ。皆、最悪生きて帰れるだけの実力を持った精鋭だし。もしかしたら囮であるという可能性もあるしな。第一、私達が気付かない程度の戦力しか持たないのであれば、力押しが一番だろう」
まあ、長門の言葉は正しい。正直、うちの目を掻い潜って潜伏できる程度の戦力相手に、こちらの戦力を多数割当てることはできない。

最悪、罠だったとしても、生還する実力はあるし、少数精鋭で叩くのは正解だろう。
作戦とは戦力差を埋める為のものであり、最初から戦力で勝てるなら不要なのだ。
しかし何だ、最近は最早ネオサイタマめいた光景ばかりだな。艦娘が出て殺す。イヤーッ！グワーッ！それで終わりだ。ヤンナルネ。

と、言う訳で。
「じゃあ、出撃するのはアイオワとサラ、天龍と龍田、吹雪、叢雲に頼もうか」
「「「了解！」」」
「後俺も行く」
「……最早、何も言うまい。ただ、怪我はしないようにな」
そりゃあもちろん、好き好んで怪我はしないさ。俺の怪我は必要経費みたいなもんよ。
それに、火力と装甲の戦艦、航空戦力の空母、水雷戦の軽巡と、小回りの利く駆逐艦。
この編成なら、何が相手でも上手くいくだろうね。第一、今回は危険な任務ではないと俺の勘が言ってる。いつもの、大規模作戦の時のような危機感はない。
「長門の言った通り、少数で叩くよ。戦力が足りなければ、一度撤退して増援を呼べばいいし」
相手を舐めてる訳じゃないが、恐怖がまるでないのだ。
今回は大丈夫。
そんな気がする。
因みに、俺の勘が外れることはまずない。
長い旅の間に培った直感は、生命の危機に関することならば大体は当たる。生存だけは誰よりも上手い自信があるからな。俺を殺したいならゼオライマーでも持ってこいや。
「いよっしゃあ！俺の殺人剣を見せてやるぜ！」
「Ｍｅが必要なのね！ＯＫ！ｇｒｅａｔな勝利をｐｒｅｓｅｎｔする

わ！」
「アンタの敵は私が皆殺しにしてあげるんだから！安心なさい！」
そんでもってこちらの士気は上々。
負ける要素がない。
×今回もツキジめいた殺戮ショー、狂気のカーニバルの始まりだろうな×
×冏情するよ、深海棲艦。
×
×
×
『×…港湾棲姫？ココ、安全カナ？』
『×…多分。ココナラ、バレナイ。安心シテ、北方棲姫』
『×…黒井鎮守府、コワイ。見ツカッタラ、酷イ目ニ遭ウ。殺サレル…×』
『コノママ、ココデ戦力ヲ増ヤシツツ、潜伏スルダケナラ、大丈夫』
『……本当ニ？』
『……多分』
『戦力、コレデ足リル？足止メニモナラナインジャ……？』
『大キナ行動ヲ起コスト勘付カレルカモシレナイ。チョットヅツ、防衛用ノ戦力ヲ増ヤサナキャ』
『テイウカ、何デ資材ヲ菱餅型ニシタノ？』
『エ？可愛イカト思ッテ……』
『ア、意味ハナインダ』
『ウン』
『……』
『……』
『ウウ、ニシテモ、アンナノト戦ウナンテ、他ノ深海棲艦ハ頭ガオカシイヨ……』
『確カニ、黒井鎮守府ハ恐ロシイ。デモ、戦ウフリダケデモ、ヤッテオカナイト。怒ラレルシ。前線ニデモ出サレタラ困ル』
『前線……、ム、無理！アンナノト戦イタクナイ!!』
『落チ着イテ。マダ戦ウト決マッタ訳ジャナイ。ココデ戦ッテイルフ

リヲシテイレバイイ。ダケド、ヤツラガ、バケモノナノハ確カダ。マルデ血ニ飢エタ悪魔ダ……』

『モ、モシモココニ攻メ込ンデ来タラ……!!コ、殺サレル!確実ニ!!』

『大丈夫、大丈夫ダ、バレテナイ。安心シテイインダ。……ハァ、黒井鎮守府ノ艦娘ヲ見タトラウマ、マダ治ラナイカ……』

１６４話　菱餅とほっぽちゃん　中編

ＡＬ海域。
その端っこの方。
小さな群島のある領域。
成る程、ここなら隠れるのにうってつけだろう。
事実、さっきから見慣れない深海棲艦がウロウロしていらっしゃる。
「オラッ!!!!……チィ、この深海棲艦、硬い!!!」
高周波ブレードを振るう天龍が言うのも無理はない。
なんか知らんが、ここの深海棲艦、異様に硬い。
火力が足りない俺なんて、未だに一体も倒せてないもん。
「司令官、もしかして、これって……」
「ああ、足止めだな、こりゃ」
まさかとは思うが……。
「提督！偵察機からの連絡です！二体の深海棲艦がこの海域から離れようとしています！」
「……逃げようとしてる？」
おかしいな、深海棲艦が。
深海棲艦と言えば、こちらを見れば襲いかかってくるものだ。戦う前から撤退なんてしない。
どう言うことだろうか。
しかし、何にせよ、逃していい訳じゃない。
「アイオワ!!サラ!!」
「ＯＫ！Ｍｅのｒａｉｌ　ｇｕｎで、足止めの深海棲艦を蹴散らしてみせるわ!!ｆｉｒｅ!!」
「水圧カッターでバラバラに引き裂いてあげます!!!」
そして、空を切る光の線と水流の刃。
いやぁ、面制圧ができるこの二人を連れて来て良かった。
「……チッ、本当に丈夫ね。まだ生き残ってるわ。第二射、ｃｈａｒｇｅを……」

「いえ、大丈夫ですよアイオワさん。後は私達が」
そう言って、艤装左肩部分の折りたたみ式の長距離キャノン砲、ドロッパーズフォールディングガンを展開する吹雪。手持ちのヘヴィマシンガンで別の敵を狙い撃ちながらも、キャノン砲の砲撃も見事に命中させる。
「……例え神にだって、私は従わない！……でも、司令官になら……」
叫ぶと同時にマガジンをリロード。その間もミサイルランチャーでの射撃を行い、攻撃を途切れさせない。
一方で叢雲は、高速移動しながらガトリングガンとマルチマイクロミサイルランチャーによる多段攻撃を行い、天龍、龍田は手持ちの高周波ブレードで深海棲艦を斬りつけている。
「本当に硬いわね……。別の装備の方が良かったかしら？」
摑みかかる深海棲艦をひらりと躱して、通りすがりにミサイルランチャーで焼いていく。
「おりゃあ！」「消えなさい」
足にマウントした高周波ブレードで暴れる天龍を、人斬り鋏で戦う龍田がフォローする。抜群のチームワークだ。
そんなこんなで、火力でゴリ押された深海棲艦は、すぐにバラバラにされ、すり潰された。
「……はい、終わりです！行きましょう司令官！」
「う、うん、そうだね」
いやっはっはっは。
あれだな、うちの子、怒らせちゃ駄目だな、これ。
正直言って、勝てない。
……追うか。

早速見つけた。
いやあ、アイオワとサラは兎も角、うちの子って足が速いから。方向が分かってるなら追いつけるよね、うん。
『チッ、キタノカ……』
『ウウ、嫌ダ……』

色々と大きい深海棲艦と小さい深海棲艦。恐らくは姫クラスだろう。
『ダガ、侮ッタナ。六体程度ナラ……!!』
『モウ駄目ダァ、オシマイダァ……』
『正気ニ戻レ、北方棲姫!……六体程度ナラ、勝機ハアル!』
そう言って、潜伏させていたであろう深海棲艦を展開する巨乳。
成る程、随分と溜め込んでいたみたいだな。先程のやたらと硬い深海棲艦が大量に召喚された。
『……コイツラハ、ワタシガ調整シタ特製ノ深海棲艦ダ。火力ハ低イガ装甲ハ並ジャナイ』
『『『『オオオオオオ……ン』』』』
そうかい、足止め特化型ってことか。
『ソシテ!!』
「!!!!」
『クルナ……、クルナァァァ!!』
そして、制圧力の高いアイオワとサラを引きつける、か。
「いい作戦だ。感動的だな。だが無意味だ」
『ナンダト……?』
「つまり、俺がぶち壊しにしてやるって言ってんだよ!」
『……人間風情ガ!吠エタナ!!』
見せてやる、俺の力を……!
あと、あらかじめ言っておくけど、相手が巨乳でテンション上がったとかそう言う事実はない……!!
×
×
×
「俺がぶち壊しにしてやるって言ってんだよ!」
×
×
×

瞬間、司令官が大きい方の深海棲艦に走り込んで……！
「はい、パンツゲット」
『……ハ？』
「で、出ました！司令官必殺の強制ストリップ真拳です!!」
強制ストリップ真拳……、筋力、速度、器用さによる窃盗を、必殺技の領域まで高めたもの！
「六体程度なら勝機がある……、その浅はかさは愚かしい！」
『ナ、ニャ、ナ、ナニヲスル!!!?!返セ!!!』
「ブラいただき」
『ワ、ワアアアア!!!?』
相変わらず凄いスピード……、私の目を以ってしても見抜けない!!
『マ、真面目ニ戦エ!!!』
「おっと危ない」
そして、大振りの腕の一撃を避ける司令官。司令官の身のこなしなら、掠りもしない！
「大人しく投降しろ！今ならチャイナ服で許してやる!!因みに早く投降しないと着せる予定のチャイナ服の丈が一秒につき一ミリづつ短くなります!!!」
『ナ、ナンダト!!!?着ルカソンナノ!!!!』
「着せると言ったァ!!!」
『ウワアアアア!!!!』
す、凄い！　投降してないのに着せた!!
「ンッンー、良いねえ、実にやりやすい。君のように真面目でまともな子が相手だと楽で良いよ」
『見ルナ……、見ルナァ!!!』
うわぁ、ミニスカみたいな丈。色んな意味でキツいなぁ。
「良し今だ！吹雪、艤装を破壊しろ！」
「はい！」
何となく可哀想だけど、まあ、深海棲艦だし。良いかな。撃っちゃえ。
『グオッ!!ヒ、卑怯ナ!!誇リハナイノカ!!?』

「誇りじゃ飯を食えねーんですよぉ!!!吹雪！容赦するな!!」
「了解です!!」
丈が短いチャイナ服の裾を必死に抑える深海棲艦。隙だらけ。
……私も、あれを着る勇気はないなぁ。
「どう？投降する？」
『フザ、ケルナァァァ!!!!!』
あ、怒った。
身体を隠すのをやめて、こっちに向かって来る。わあ、凄い、ブラも付けずに走ってくるから胸が揺れて……。愛宕さんとか、大きいと大変だって言ってるけど、本当なんだなぁ。
あ、司令官がカメラで撮影してる。
『先ズハオ前ダァ!!!』
ん、ああ、司令官に攻撃を当てられないからって、私の方を狙って来たんだ。
「うーん、そうやって舐められるのは……」
『チィ、避ケッ』
「ちょっと、ムカつくかな」
反転、そしてマシンガンのトリガーを引く。
『ガッ！』
「……確かに、私なんて司令官の足元にも及ばないけど。私になら勝てると思ってるんですか？」
うん、ムカつく。ムカつくなぁ。
『グ……、オ前!!!』
「私は司令官の艦娘ですよ。弱い訳、ないでしょう」
舐められたなら、痛い目に遭わせないと。
反転、ミサイルを発射。
『アアッ!!!』
反転、腰のガトリングガンとミサイルを斉射。
『コ、コノ』
反転、フォールディングガンを発射。
『ヤメ』

反転、遠心力を乗せてパンチ。
『ア〟』
「……まだやりますか？」
大破、かな。艤装の殆どを破壊したから。
『ワタシガ、負ケル……？駆逐艦タッタ一体ニ……？』
「……だから、駆逐艦だと思って舐めたのが間違いなんですよ。例え駆逐艦でも、私は、黒井鎮守府の一員です」
『ソンナ、馬鹿ナ！コレホドノ強サヲ……!!』
私自体は、そんなに強くないもん。ただ、油断してるなら、どんなに強い相手でも倒せるってだけ。
「最初に司令官が言ったじゃないですか。六体程度なら勝機があるなんて考えるのは浅はかだって」
『ワ、ワタシ、ハ……』
「それじゃ、お別れです。私を……、黒井鎮守府を侮ったことを悔いて……、死んで下さ」
「待った！容赦するなとか言ってごめん！やっぱ容赦してあげて!!」
横から司令官の声。
「はい、分かりました！」
射線をずらして肩を撃ち抜く。
『グ、ハッ……』
チッ、マシンガン程度じゃ決定打にならないなぁ。装甲に弾かれちゃう。
「なーんで撃ったなんで撃ったー?!」
え？いや、司令官の敵は潰さなきゃ……。
「やめてって言ったやんけ!!!」
「はい、殺すのはやめました！」
「あのさぁ……、どうすんだよこれ！この無残な姿をよぉ！ボロボロじゃねえの!!」
『モウ……、ヤメ……』
「あはは、ある程度壊しても、ドックに突っ込めば治るんですし、良いじゃないですか」

深海棲艦も艦娘と同じ。ドックで治るんだから、半殺しにしちゃいましょう！

『マ、待テ、ヤメロ……!!』

「いや、本当に！勘弁してあげて！」

「はい、手加減します！」

ガトリングガンをトリガー。

『ギャアアアア!!!』

「待った、待った！もう死に体だから！ぐったりしてるから！死体蹴りは」

マシンガンをトリガー。

『グアアアアアアア!!!』

「やめたげてよぉ!!」

安心して下さい、司令官！司令官に楯突く深海棲艦は、皆殺しにしますから！

私、司令官の為に頑張っちゃいますね！

１６５話　菱餅とほっぽちゃん　後編

『ウワアアアア!!!カエレ!!カエレ!!!頼ムカラカエッテクレ!!!!』
「チッ、やるわね！」
「こうも艦載機を出されると、水圧カッターのチャージができませんね……」
　サラの言う通り、ｃｈａｒｇｅができないとＭｅのｒａｉｌ　ｇｕｎも使えない……。
　ｃｈａｒｇｅの長さは唯一の弱点ね。そこを突かれるとは……。
「ラプターも出してるけど……、敵の数が多過ぎて！」
　……サラのラプター、押されてるわね。ラプターも相当な量出てるけど、それでも駄目。
　他の子も足止めされてるみたいだし、チマチマ倒すしかないのかしら。
『ワタシガ何ヲシタッテ言ウンダ!!』
「うるさいわね、深海棲艦。貴女、存在そのものが悪なのよ」
　Ａｄｍｉｒａｌに逆らう奴は全部悪党なのよ。Ａｄｍｉｒａｌは誰よりも正しいの。
『フザケルナ!!ワタシハ、ワタシハ何モシテナイ！ナノニドウシテ!!』
「だから何？見逃せって？」
　随分腑抜けてるわね。
『戦ウ理由ガナイ！』
「あるわよ」
『ッ……!!命令カ?!ソンナモノノ為ニ!!!』
　ｆｏｏｌｉｓｈね。命令だけじゃないわよ。Ｍｅもサラも同じ。命を懸ける理由はもっとｓｉｍｐｌｅなの。
「ｆａｍｉｌｙを、Ａｄｍｉｒａｌを守る。その為なら、何だってやってみせる。少しでもＡｄｍｉｒａｌに危害を加える可能性があるものは……!!」
　Ａｄｍｉｒａｌはね、Ｍｅ達にｆａｍｉｌｙをくれた。帰ってくる場所をくれた。それをほんの少しでも脅かすなら、その可能性がある

なら……！
「排除するわ!!」
『……!!』
蹴散らす。文字通りに。
Ｍｅは戦艦、艦載機くらい、ただの蹴りで十分。
敵の艦載機を少しづつ破壊して、一歩前へ。やっぱり、艦載機を出している大元を叩かなきゃ、終わらないわ。
『ヒッ?!』
「行くわよ、サラ」
「……無茶じゃないかしら?」
確かに、この艦載機の包囲網の中、突っ切るのは無茶かもね。でも、良い加減埒があかないわ。それにね、サラ?
「やってやれないことはないわ!!」
「……ふふっ、そうね！やりましょう、アイオワ！」
日本のキギョウセンシ?には不可能って言葉はないらしいわ。やってやれないことはない、気合いの問題、無理と言うのは嘘吐きの言葉！なら、Ｍｅ達にだって出来るはず!!
無茶は通してこそ、よ！
「おおおおお!!」
機銃?爆撃?そんなものじゃ死なないわ。戦艦と空母がその程度で墜ちるとでも?攻撃を受けながらも前へ！
『クルナ……』
「邪魔!!」
腕を振るって、進行ルート上の艦載機を弾き飛ばす。前へ！
『ク、クルナ！』
「行っけええええ!!」
包囲網を突破！突っ切るわよ！
『クルナァァァァァ!!!!』
届いた!!!
「ｇｏ　ｔｏ　ｈｅｌｌ!!!!」「墜ちなさい!!!!」
『ア、グゥ、アアアアアアア!!!!』

深海棲艦の小さな身体に、Ｍｅとサラの蹴りが突き刺さる！
『コノ……、悪魔、メ……!!』
最後に一言、言い残した深海棲艦は、蹴りを受けた部分を押さえながら、前のめりに倒れた。
見れば、Ａｄｍｉｒａｌももう片方の深海棲艦の姫クラスを倒していたわ。
終わり、ね。
いつも通り、Ｍｅ達の勝利よ!!
×
×
×
×
×……ん。
どこだ、ここは……？
ワタシは、確か、黒井鎮守府に敗れて……。
「はい、ＢＧＭ、よーい、スタート」
「ヲッ、リョーカイ」
「……ってこれ、我が栄光じゃねえか！誰が鬼畜戦士だ!!」
「イヤー、提督ニモアンナ風ニナッテ欲シイナー、ト思ッテ」
「なる訳ないだろうが!!」
「ナラナイノカ……」
声、声が聞こえる……。
忌々しい、あの男の声、それと女の声だ……。
「お、おはよう！気分はどうだい？」
「……最悪ダ」
瞳を、開く。
目の前にはあの男、恐らくは深海棲艦であろう女が三人。
……裏切り者か。
「……ワタシニ、何ヲスルツモリダ」
「コスプレ」
……は？
「いやあ、君、スタイル良いしさ。楽しみだわ」
……よく見ると、深海棲艦の女は三人ともメイド服を着ている。

何なのだ、これは。どうすれば良いのだ。
まあ、少なくとも。
「断ル。何ガ嬉シクテオ前ラノ着セ替エ人形ニナラナキャナランノダ」
言いなりになってやる気はない。
「あーあ、良いのかなー？そんなこと言っちゃってー？そんな態度だと、ほっぽちゃんが……？」
「ホッポ……、北方棲姫カ?!ヤメロ！アノ子ハ関係ナイ!!!」
人質か……!!
なんて卑怯な!!
「ふふふ、ほっぽちゃんの声を聞かせてやろうか？」
そう言って、手元のスマートフォンで電話をかけるあの男。すると……、
『ヤメロ、ヤメロ!!港湾棲姫！助ケテ!!助ケテヨ!!!イヤアアアアアアアア!!!』
「北方棲姫!!!!」
「おっと、通話はここまでだ。……あとはどうすれば良いか、分かるよね？」
くっ……!!
「……分カッタ。何デモ言ウコトヲ聞ク。ダカラ、ダカラ北方棲姫ダケハ……!!!」
「ん？今何でもするって言ったよね？（お約束）」
「北方棲姫ハ大切ナ妹分ナンダ……。頼ム、手ヲ出サナイデクレ……」
「まあ、それは君の態度次第だね。逆らうと、ほっぽちゃんはもっと酷い目に遭うぜ……？」
この、下衆め……!!
「ウッワ、キッツイ。着セテオイテナンダケド、ブラジル水着ハヤベーワ」
「チ級、水着ヨリボンテージノ方ガ良イワヨ」
「ヲッ、ナース服……」

くっ、屈辱だ。
だが、北方棲姫のことを思えば、こんな辱め……!!
「エロ下着ダ！」
「シースルーノブラヨ！」
「ティーバックヲ!!」
こ、こんな辱め！
「内腿ニ正ノ字……」
「電動マッサージ機……」
「搾乳……」
こ、こんな、こんな、こんなあああああ!!!
「モウ勘弁シテクレエエエエ!!!」
限界だあああああ!!!
慰み者にするなら早くやれ！
「あれあれ？良いのかな？そんな態度だとほっぽちゃんが……」
『ヤメロオオオオオ!!!!!』
「ウ、ウウ、ヤメロ！ソレダケハヤメテクレ……!!」
北方棲姫……!!
「もう遅い。やれ、離島棲姫!!」
『ハーイ、了解ヨー』
『ピーマンハイヤダアアアアアア!!!!!』
「……エ？」
『ハイ、アーン』
『苦イイイイイ!!!』
あれ、なんかワタシが思ってたのと違う。
「だから、ピーマンを残すと関東野菜連合にシメられるって言ってるだろ！」
「何ノ話?!」
こう、拷問とか……。
「嫌いなもの食べさせるって充分拷問だと思うんだよね」
「イヤ、モットコウ、爪ヲ剥ガシタリトカ、鞭デ叩イタリトカ……」
「えっ、何それ怖っ……。どうやったらそんな思考回路に至るの？残

虐超人かよ」
　ええー？
「ヤダ、拷問ダナンテ……」
「怖イナ……」
「ヲッ、ソンナ酷イコト、ヤラナイ……」
「エッ、拷問ジャナイノカコレ。ジャアワタシ、何サセラレテルンダ？」
「え？いやなんか、ノリで」
「暇ダッタカラ」
「新シイオモチャデ遊ボウト」
「皆ンナニ着イテキタダケ」
　じゃあ、何だ？
「……ワタシハ、遊ビニ付キ合ワサレテイタ、ダケ……？」
「うん」
「……コ、殺シテヤルウウウウウ！！！！」

１６６話　黒井鎮守府ギャルゲ化計画

春。
新しい出会いと別れの季節。
寒い冬を越え、ひと段落ついた頃。
学生なら丁度、進学や卒業の時期。
始まりの季節の優しい春風に吹かれるこの黒井鎮守府にも、変化が起きていた……。
「……何これ」
眼前に、ゲージ、ステータス、年月日……。
「……ギャルゲかな？」
と、その時、鳴り響く携帯電話。
おっと、出よう。
『正解です！』
「え？」
『この鎮守府が単一のネットワークシステムによって制御されているのはご存知でしょう……。私はそのシステムを利用して、鎮守府内でＶＲギャルゲシステムを構築したのです！』
「毎回思ってるけど電子制御系増やし過ぎじゃない？」
クラッキングされたら困るんじゃ？
『うちのシステムにクラッキングできる集団なんて限られてますよ。直接鎮守府のサーバールームに侵入してバッグドアを仕掛けられたりしない限りは問題ありません』
まあ、明石が大丈夫と言うなら大丈夫なんだろう。
「分かった、それで？」
『はい、それで……、このシステムは、提督の視界をギャルゲっぽくするだけでなく、近隣の艦娘の好感度の変化や、提督自身のスキルなどを表示することが可能です』
成る程、スキルか。
「どれどれ……」
早速、視界の端っこにあるスキルの項をタッチしてみる。

すると、視界一杯に文字が広がった。
「……多くない？」
ＭＭＯＲＰＧのカンストキャラみたいだ。
『だって提督、できないこと無いじゃないですか』
「そんなこと無いぞ、俺にもできないことくらいある」
『またまた、ご冗談を』
本当なんだがなぁ……。
『それはさておき！折角ですから艦娘に会ってみて下さい！頑張って完成させた好感度システムを使って欲しいのです！さあ！』
「うん、まあ、やってみるよ。じゃあね」
携帯を切る。
好感度システム、ねぇ。前に同じようなことをやって、好感度がオーバーロードして爆発したからなぁ。鎮守府が爆発しないことを祈ろう。

「さて、何処へ行こうか」
と、考えると、目の前に選択肢が浮かんでくる。
うーん、じゃあ、取り敢えず部屋を出ようか。
ふむ、「廊下へ移動」だな。
そして、ドアを開けると……。
「あ、提督！おはようございます！」
おっ、榛名だ。
好感度は、と。
《??９９９９／１００》
んっんー、早速ぶっ壊れてますねえ。予想通り過ぎて何も言えん。
さて、ここでまた選択肢。
１．ああ、おはよう。
２．今日も綺麗だね。
３．おっぱい揉んでいい？
うむ。
……毎回思うんだけど、ギャルゲの選択肢って一つだけ明らかにヤ

バいの混ざってること多いよな。頭おかしい選択肢を用意する理由は何なんだ。
はい、3。
え？いやいや、好感度下げようかなーって。
決して、揉みたいだけとかじゃなく。
さあ、聞いてみようじゃないか。
「おっぱい揉んでいい？」
「はい！喜んで！」
《好感度アップ！》
ちょっと待って、このシステムおかしい。壊れてる。今の選択肢は好感度が下がるやつだったろ！
「いや、その、今のは……」
「？、遠慮は要りませんよ？榛名の全ては提督のものです」
マジか。ならいいや。揉んでしまえ！
「ん……、あ……、提督、もっと……??」
《好感度アップ！》
なんでや!!
どう言うことなんだ一体。
明石に聞いてみよう。
携帯電話を取り出して、と。
「もしもし明石？このシステム狂ってない？」
『正常です！』
ウッソだろ。どの辺が？
『好感度システムにはバイアスをかけて、オーバーロードを防いでいます。今モニターしている限りでは、問題ありません』
「いや、そうじゃなくって。明らかにハズレの選択肢で好感度が上がってしまう不具合」
『うーん、好感度システムは、モニターした艦娘の表情や心音などで好感度の変化を測定してますから。好感度アップの表示が出てるなら実際に好感度が上がってると思いますよ』
あ、そっかあ……。

やっぱり、何やっても好感度が上がってしまうってことか。ある意味クソゲーだな。
「どうかしましたか、提督？何か、気に障ることでも？」
「いや、何でもないよ。朝から良い思いできて嬉しいくらいさ」
おっぱい揉んで好感度が上がってしまうとなると、もう打つ手はないのではないだろうか。
どうする？
1．謝る
2．褒める
3．スカートを捲る
はい、3。
「よっと」
「あ……」
うむ、白、と。
飾りっ気は最小限ながらも、可愛らしさとセクシーさが同居する綺麗なショーツだ。
「そ、その……、提督は、榛名のパンツに興味が？」
まあ、ないと言えば嘘になるが。
「多少はね？」
「そうですか……??」
《好感度アップ！》
いよいよもって分からん。パンツを見て好感度が上がる？こんなのアトリームじゃ考えられない……。
何とも言えない空気の中、時計の音だけが響く。
そして。
「……そ、そのっ！」
榛名が口を開く。
「……パンツも、脱いだ方がよろしいでしょうか……？」
「それ以上いけない」
いかんな、いかんいかん。
ギャルゲにパンツを脱がせると言う選択肢はない。そもそも、ちゃ

んと良い子にしている榛名を脱がせるなんて酷いこと、できないな。
1．脱がせる
2．脱がせる
3．脱がせる
「ガッデム」
なんてことだ……。選択肢が脱がせる以外にない……。どうあっても俺はこの手を汚さなくてはならないのか……。
「仕方ない、榛名！後ろを向いてくれ！」
「は、はい！」
お尻の方から脱がせればＯＫかもしれない。要は前を見なけりゃいいんだ。
「脱がせる！が同時に着せる!!」
そして脱がせると同時に別の下着を着せる。これでＲ―１８展開は阻止できたはずだ。
「あれ？え？私、脱がされて……、あれ？」
榛名は混乱しているが。
「楽しかったよ榛名。ありがとう」
「は、はい……？」
有耶無耶にして逃げてしまおう。
……にしても、手元に残った榛名の下着、どうしようか。

榛名の下着は、後で洗濯して返そう。
それより、今俺が気にするべきは、目の前のこの子。
「……何よ」
大井っちだ。
「何でもないよ。ただ、大井は今日も綺麗だなって思ってさ。少し見惚れていたよ」
「ふ、ふんっ！嘘よ、そんなの」
《好感度アップ！》
成る程、ツンデレにも効果あり、と。
どれどれ、好感度は……？

《??９９９９／１００》
よーし、ぶっ壊れてんな。知ってた。
さて、どうするか。一応、好感度を下げてみようか。
１．世間話
２．料理の話
３．Ｈな話
３だ。
「いやー、にしても、大井って……、良い身体してるよな！」
「きゅ、急に何よ」
《好感度アップ！》
はい、駄目。だが諦めないぞ。
「引き締まった下半身に軽巡にしては大きい胸、ふんわりとした髪……。どれを取っても最高だよ」
「……ふん」
《好感度アップ！》
さあ、ここでたたみかける！
「いや本当に。顔も可愛くってさ、性格だって好みだ」
《好感度アップ！》
「面と向かって俺に意見を言ってくれる子は少ないから、助かってるよ」
《好感度アップ！》
「北上の面倒を見るだけじゃなく、自分のノルマもこなすんだから偉いね」
《好感度アップ！》
よし、こんなもんか。
ん？大井の顔が赤いぞ？照れてるのか？
「……??」
どうしようか？
１．抱きつく
２．放っておく
３．からかう

折角だから、俺は1の選択肢を選ぶぜ！
「えい」
「わひゃあ！な、ななな、何をするの提督!!!」
《好感度アップ！》
「いやあ、可愛かったから、つい」
「つい、じゃない！セクハラよ！」
《好感度アップ！》
「嫌ならやめるけど……」
「やめてなんて一言も言ってないでしょ！何勝手にやめようとしてんのよ!!!」
セクハラをやめちゃならないのか。もうこれわかんねぇな。
「全く、変態よ、変態！こんなこと、私にしかしちゃ駄目なんだから……??」
ごめん、さっき榛名にも同じようなことやった。
「も、もう良いかな？」
さて、そろそろ離れようか？
「ま、まだ駄目」
と、なんだかんだと甘えられて、解放されたのは十分後のことだった。

「朝からおかしい目に遭ったぞ……」
まあ、美味しい目でもあったが。
「どうかした？司令官？」
雷か。
「んー、今日も朝から愉快な展開で面白いって話」
「司令官が満足なら、私も嬉しいわ！」
よし、良い子だな。花マルをあげよう。
どれどれ好感度は？
《??９９９９／１００》
よーし、案の定バグってるな。
さて、好感度を下げてみたいところだが……。

「でも、困ったことがあれば何でも言ってね！私が司令官のことを助けてあげるから！好きなだけ私に頼って良いのよ！」

どうする？

1．愚痴を言う

2．抱っこする

3．撫でる

ここは、2だな。子供扱いすれば多少は好感度が下がるかもしれない。

「そーれ」

「きゃ、司令官？」

わあ、軽ぅい！

「……司令官、楽しい？」

「うーん、概ね？」

「……じゃあ、私も楽しいわ！」

《好感度アップ！》

駄目か……。

これは怒られそうだなーって選択肢を選んでるだけで、無理に好感度を下げようとは思わないが。

にしても、雷は子供扱いしても喜んでくれるのか。

じゃあ、逆に大人扱いしてみるか。

1．政治の話題を振る

2．経済の話題を振る

3．キスしてみる

3だ。政治や経済の話は知らないって返されると思うし。

「雷？」

「なあに、しれいか、んっ?!」

ああ、俺は何と言う悪党なんだろう。雷のような小さい子にキスするだなんて。ロリババアでもない純朴な少女に何てことを……。後で自害しよう。

もう良いだろ、口を離し……？

「んっ??まだ、だーめ??」

あっ、違う。これは、そう、捕食だ。
「んーっ????」
「待っ、ん、雷、待って」
開いた口にねじ込むように舌を入れてくる。唾液を啜られ、歯を舌で撫でられる。
間違いない、俺がヤられる側だ。
「は、放し」
「ちゅう??れる、れろ……??」
《好感度アップ！》
「俺が悪かっ」
「あむ??ちゅー??」
《好感度アップ！》
「ごめんなさ」
「はむ……??ちゅ??ちゅ??」
《好感度アップ！》
ま、不味い。
こんなところ、誰かに見られたら……。
「司令官！おはようなの、で、す……?!」
「おはよう司令官。良い朝だ、ね……?!!」
「私は大人のレディだから、挨拶だってちゃんとでき……、る……?!!!」
あ。
「終わった」
「「あああああああーーー!!!!」」
次回、旅人死す！デュエルスタンバイ！

１６７話　黒井鎮守府ギャルゲ化計画　改

「あーあ、全身キスマークだらけ。これじゃ外出する気にならないな」

ちょっとやばいくらいキスされた。

おかげさまで全身キスマークだらけだ。

手鏡で見た限り、顔なんて真っ赤よ。

まさか、あの後に他の艦娘にも見つかってキスされるとは……。

死ぬかと思ったぞ。

「大丈夫かい、提督？」

「時雨か」

どれ、好感度は……？

《??愛しているとも。ここを見なくても分かるだろう？／１００》

あっ、あー、バグってる。最早数値ですらないのか……。

「そう言えば、今朝から何かに観測されているような気配を感じたんだけど……、原因は明石かな？」

バレていらっしゃる。

「ああ、駄目とは言っていないよ。ただ、感情を電子の海に掠め取られる感覚は不愉快だから、少しいたずらをしてやろうと思ってね」

すると、時雨の隣に出ている好感度の表示が歪んで変化する。

《??大体にして、僕の愛は数値なんかで表せないよ／１００》

《??そうさ、愛は永遠の幻視なんだ。君がいつも僕の瞳に在る／１００》

《??だから、そう……、君の瞳に僕は在るかい？／１００》

まさか好感度ゲージで会話する羽目になるとは。

まあ、テレパスとあまり変わらないか。

さて、選択肢は……。

１．

２．提督自身に答えて欲しいな

３．

成る程。

「あー、時雨？」
「何だい？」
「安心してくれ、俺の瞳にはいつも君が在るよ」
愛は幻視。
つまり、そこに本人がいなくても、強く想い続けること。愛する人の幻を見るくらいに、強く。
「……愛してる」
そしてこれは物事の本質の話だ。
言葉に意味はない。思いの丈にこそ意味がある。そして、時雨の瞳には、そう言った本質こそが映るのだろう。
「……うん、そうか、そうだね。視えたよ、提督の想いが。やはり君は全てを愛している。世界の全てを」
「納得したかい？」
「疑ってすらいないよ。ただ、こうした確認作業も愛なんだろう？」
確かに、愛を確かめ合うだなんて言葉もあるな。
事実、その愛の確認作業でキスマークだらけにされた訳だし。
「だけど、ああ、気分がいいね。愛の確認、愛していると囁いて貰えるだけでこんなにも……、こんなにも心が踊るとは」
「俺も沢山愛されて嬉しいよ」
本心である。
「……それじゃあ、もう一つだけ、良いかな？」
「ああ、何でも言ってくれ」
何でもするとは言ってないが。
「先ずは、屈んでくれるかい」
「ああ」
何だ、キスか。それくらいなら幾らで、も?!
「……ぺろっ」
が、眼球舐め……?!
「れろ、れる……」
まさかそんな奇特なプレイが急に始まるとは。この旅人の目を以ってしても見抜けなかったわ。

「あー、時雨？」
「んちゅ……、何だい？」
「楽しい？」
「かなり」
　そっかー。
「君の目が好きなんだ。何よりも美しいから」
　そこまで言うか。時雨が知らないだけで、もっと綺麗なものがこの世にあると思うよ。
「……さあ、次は提督の番だよ」
「えっ、俺も？」
　参ったな、こんなプレイの経験はあまり無いぞ。
「ううん、こうか？」
　唾液の雑菌が眼球に良くないんだが……、まあ、艦娘だし大丈夫か。
「……ああ、良いよ。もっと……??」
　目尻を撫でるように、瞳孔をなぞるように。
　そもそも、神経の集まりである眼球はとても敏感だ。舐められるのは苦痛のはずだが。
「……気持ち、良い……??」
　まあ、本人が良いなら、良いんじゃないかな。

『もしもし？もしもし提督？』
「ん、どうした明石」
『良かった、やっと繋がった……。良くわからないけど、白露型の子の近くだと、鎮守府のシステムがエラーするんですよね』
　あー、多分、瞳の所為だろう。
『データによると、特殊な干渉波が……』
「システム自体をどうこうする気は無いみたいだし、良いんじゃない？」
『うー、でも、何か負けた気がします。この鎮守府のファイアウォールは一流のハッカーでも破れないんですよ？』
　一流のハッカーか……。

「例えば、デッドセックくらい？」
ちょっと前にアメリカで知り合った。
「ああ、アメリカの……。んー、どうでしょう。あのクラスとなってくると正直不安ですね。……って言うか、また凄いお友達ですね』
「顔見知りってくらいだよ」
『提督の交友関係って本当謎ですよね』
そうか？ただちょっと普通の人より知り合いが多いだけなんだが。
そんな話をして、電話を切る。
ちょうどその時、庭の花に水やりをしている古鷹と出会った。
「あら？提督？」
「おお、こんにちは、古鷹」
「ふふ、こんにちは」
古鷹はかわいいなぁ！
そんな古鷹の好感度は……？
《??９９９９／１００》
まただよ（笑）。
「どうかしましたか？」
「いや、何でもないよー」
いやー、愛されてんな俺。笑っちゃうぜ。
さて、どうする？
１．花の世話、ありがとう
２．俺も手伝おうか？
３．加古はどうしたの？
うーん、３？基本的に、女の子の前で他の女の子の話は良くないと思うよ。でも、いつも一緒にいる加古がいないのも気になるし。聞いてみようか。
「加古は何処に行ったんだ？」
「加古は、霧島さんとバイクで出かけましたよ。ふふ、加古のことを気にかけて下さってありがとうございます」
《好感度アップ！》
（好感度を）上げるのではなく上がってしまうのが旅人。旅装備の旅

人が艦装備のジョブに遅れをとるはずがないと過信した結果がこれだよ！
「もしかして、加古に何か用事がありましたか？呼び戻しましょうか？」
「いや、その必要はないよ」
「そうですか。ですが、用があればいつでも、何処にでも呼んでくださいね。加古共々、どんなことだってやりますから」
首輪型のロック装置をなぞり、服従の意を示す古鷹。尽くすタイプと言うやつだろうか。
……て言うか、お願いだからその首輪はやめてくれ。そんな趣味は無いんだ。
「じゃあ、ロック装置を……」
「それは無理です」
んー。
「これは、提督の狗である証明ですから。大好きな提督との繋がりなんです」
「分かった、百歩譲ってチョーカーにしよう？犬の首輪みたいなそのデザインはやめよう」
「え？かわいいじゃないですか、これ」
そっかー。
なんかもう、良いや。満足そうだし。女の子に犬の首輪をつける男と言う十字架を背負って生きていこう。しょうがねえよ、人生そんなもんだよ。諦めよう。
「それで、私に何か命令はありますか？」
命令、ね。
古鷹みたいなかわいい子が何でも言うことを聞いてくれるってのは魅力的だが、命令ってのは何か嫌だな。お互いに人間なんだからさ、もっと対等な立場で、
1．お手
2．お座り
3．伏せ

畜生、選択肢は馬鹿だ！俺の話を聞いちゃいねえ！
しょうがない、1だ。
「古鷹ー」
「はい？」
差し出した俺の片手に、
「お手」
「はい！」
《好感度アップ！》
手を乗せる古鷹。
それで良いのか古鷹よ……。
「ふふ、こんなことで良いなら幾らでもやりますよ？」
「犬じゃないんだからさぁ……」
やらせたのは俺だが。
「犬は嫌いですか？」
「いや、犬が嫌いって訳じゃないよ。犬の知り合いもいるし」
奥羽山脈辺りに。
「……犬の知り合いって、何だか凄い響きですね」
ん？何かおかしい？普通に犬とか、猫とかの知り合いっているだろ？知能がある以上会話はできるんだし。
「まあ、良いです。提督ですから。獣の知り合いがいてもおかしくはありません。でも提督？私に命令するのに、遠慮なんてしなくて良いんですからね？」
遠慮しなくて良い、か。
じゃあ……、
1．おかわり
2．チンチン
3．フリスビーを投げる
2のチンチンだな。
因みに、犬の芸であるチンチンの語源は『鎮座』からきている。男性器は関係ない。
「古鷹ー」

「はい？」
「チンチン！」
「ちんちん……？」
顎に手を当て小首を傾げる古鷹。何をやってもかわいいなぁ。
するとやがて、何かに気付いたらしく、ああ、と一声上げる。
「つまり、こう言うことですね！」
ん、どうした急に屈んで。
「初めてですから、あまり自信はありませんけど……。問題があれば言ってくださいね」
アッー！ズボン脱がされたァー！さっきチンチンの語源は鎮座からきてるって解説したのに、構わず俺のチンチンをアレする気だ!!!
逃げよう！
「あら？どちらへ？提督？」
「言われなくてもスタコラサッサだぜぇ！」

「危ないところだった」
『ですね……。ギャルゲどころかエロゲになるところでした』
R―18タグを付けるような事態にならなくて良かったぜ。
『にしても、提督のパンツの柄、かわいいですね』
「どうやって見たのよ」
『鎮守府の監視カメラでちょいと』
「技術の悪用は、やめようね！」
忠告して、電話を切る。
さて、艦娘、艦娘ー、と。
いた、蒼龍だ。
「やあ、蒼龍」
「あ、提督！」
おっと、抱きついてきた。
好感度はもちろん、
《??９９９９／１００》
ですよねぇ。

「何してたんだい？」
「えっとね、提督に言われた通りに散歩してたよ！」
　言われた通りに、か。
「あー、確かに、散歩をすると良いって言ったけどさ。命令ではないんだよ」
　あくまで提案のつもりで、やりたいことをやって欲しいのだが。
「そうなの？じゃあ、命令は？」
「命令は、って……。自由に過ごして欲しいと思ってるだけで」
「じゃあ、命令が貰えるまでお部屋で待機？」
「いや、好きに過ごしてくれ」
「？、好きに過ごすって、何？私が好きなのは、提督の命令を聞くことだよ？」
　……蒼龍と飛龍は、自己に対する意識が低い。趣味や趣向が無く、ただ俺の命令のみに従う。
　それじゃあ、悲しいじゃないか、寂しいじゃないか。もっと人生を楽しんでくれよと思うが、本人達は命令を聞くのが一番の幸せだと言い張るのだ。
「いつも言ってるけど……、命令に従うだけじゃなくって、自分で考えて行動してごらんよ」
「無理だよ、私が考えるなんて意味ないもん」
　うーん、重症だな。
　受け止めきれない訳じゃないが、だからって俺に依存し過ぎるのも良くないよね。なるべく、自立を促すような選択肢を選ばなきゃな。
　ならここは……、
　1．抱きつく
　2．スカートに手を突っ込む
　3．胸の谷間に手を突っ込む
　クソ、全てが駄目だ。まるで話を聞いちゃいねえ。少しのシリアスも許さないって言うのかよ。
　観念して1だ。
「蒼龍！」

抱きつく。
「わっ、どうしたの提督？」
?!!、やっっっわらかい！おろしたての布団かよ！フッカフカだ!!
「……柔軟剤は何をお使いに？」
「え？何の話？」
何て身体だ蒼龍。鎮守府トップクラスのふかふかほわほわボディ、恐れ入るわ。
「ああ^～駄目になる～」
「？、提督が喜んでくれるなら、私も嬉しいかな！」
《好感度アップ！》
蒼龍って何でできてるんだろうな。綿菓子かな。ふわふわで甘い匂いするし。
食べてしまおうか。色んな意味で。
いや、いかん、耐えろ。子供のように純粋な蒼龍にそんなことはできない。
「んー、かぷっ」
んあ？
「えへへ、甘噛み。知ってる、提督？動物は好きな相手を甘噛みするんだって！テレビでやってたの！」
あああ、ああああーーー!!!
「蒼龍かわいい!!!」
かわいい！かわいい!!かわいい!!!
凶器レベルのかわいさだ、死人が出てもおかしくない！
「んー、提督にぎゅーってされて幸せだよ～」
《好感度アップ！》
豊満なバストを押し付けるように抱きしめてくる蒼龍。やばいやばい、理性がぶっ飛びそう。
駄目だ、手を出してはならない。鎮守府が崩壊する！
「……で、でもね、提督が良ければね、抱きつくよりもっと凄いことしても、良いんだよ……？」
やめたまえ、そう言う雰囲気作りは！

「私、提督の言うことなら何だって聞くからね？最初は上手くできないかもしれないけど、私頑張るから！」
いかんよ、いかん、もう……。
「だからね、提督。私のことを……」
煩悩が……！
「……好きにして？」
あ、駄目だ。

切腹するしかねぇ。
「おおおりゃあああああ!!!!!!」
「え?!て、提督ーーーー?!!!」

……と、まあ、そんな感じで。
手刀で割腹自殺を計った俺は、そのままぶっ倒れて。
前回の次回予告をしっかりと回収して、黒井鎮守府ギャルゲ化計画の終わりを迎えるのであった……。
《ＥＮＤ》

１６８話　メンタルケア　前編

とある日の昼下がり。
相変わらず仕事がない俺は、休憩室でテレビを見ていた。テレビの内容は、戦場の兵士のドキュメンタリーだ。
『……このように、戦争に出た兵士の多くはＰＴＳＤによって苦しめられ……』
ふむ、ＰＴＳＤ。心的外傷後ストレス障害。つまりはトラウマだな。
旅に出てからと言うもの、毎日のように命の危機に晒された俺はもう慣れたが、普通の人間は違う。自らの命に危険が及ぶと、それがトラウマになるものだ。
それはきっと、艦娘だってそうだろう。
自分と、そして戦友の命に関わる戦場に毎日のように出撃して、まともな精神状態でいられるだろうか？
皆んな、心の奥底では辛いと思っているかもしれない。ううん、知らないけど絶対そう。
そもそも日本はメンタルケアに関する学識が足りていない。気合いと根性でどうにかなるのは一昔前のジャンプくらいのもんだ。
カウンセリング……。
早急にカウンセリングする必要があるな。
思い立ったら吉日、即断即決即行動、黒井鎮守府カウンセリングルームの開設だ！
「もしもし、成歩堂なんでも事務所ですか？希月弁護士に依頼したいんですが……」
「……で、何ですか、これ？」
現れたのは大淀。カウンセリングにおいでよの張り紙を見てくれたのだろうか。
「カウンセリングルームだ」
カウンセリングルーム……。黒井鎮守府の防音室の一つを改装し

た部屋だ。突貫工事で今日作った。
「カウンセリング、ですか？」
「そう、カウンセリングだ。ココロのスキマ、お埋めします」
「また、急な話ですね」
「でも、重要なことだろ？メンタルケアは大事だ。だから、知り合いのカウンセラーを呼んでね」
「はあ……。心労なんてありませんけど……」
「いやいや、本人が気付いていないだけで、ストレスが溜まってるかもしれないだろ？相談だけでもしてみて欲しいんだ」
本人は何ともないと思っていても、心の奥底では……、なんてよくある話だ。
「分かり、ました。折角のご厚意ですし」
「それじゃあ、俺は出て行くよ。大淀はカウンセラーさんをこの部屋に案内してくれ。そろそろ来るから。俺は暇な艦娘から順にカウンセリングを受けるように言っておく」
「了解しました」
と、そんな感じで。告知の為に放送室に向かおうか。
カウンセラーの方は問題ないだろう。あの子はまだ若いが、心理学への知識も、他人の心に寄り添おうとする優しさも十分にあるからな。
×
×
×

……「え？ええー？」
なんの因果か、黒井鎮守府でカウンセリングをすることになりました……。
確かに、心理学を学んできたのは事実で、法廷で証人にカウンセリングをしたことも何度かありますけど……、まさかカウンセリング自体を依頼されるとは。
……でも、困っている人の助けになれるなら、それも良いかな。
あ、艦娘は人じゃないってツッコミは無しですよ？相手が人じゃなくっても、困っているなら手を差し伸べる。
わたしは、成歩堂なんでも事務所でそう学んだから。
……でも、流石に、シャチの弁護をした成歩堂さんにはビックリしたけどね。

おっと、そろそろ到着かな？
……って、
「広っ!!!」
広い！な、何ここ？わたしがアメリカで通っていた大学よりも広いかも？
敷地だけじゃなく、建物も大きいし……。でも、軍隊の施設らしい厳つさはしない、かな？花とか植えてあるし。まるで女子校みたいな……。
「あの～？」
「はい？」
と、そんなことを思っていると、セーラー服の女の子に話しかけられた。あ、あれ？もしかして本当に女子校？
「カウンセラーの方でしょうか？」
「え？あ、はい」
「黒井鎮守府にようこそ、私は艦娘の大淀です。よろしくお願いしますね」
「……え？」
艦娘……？

「えええええええ!!!」
わ、わたしと変わらないくらいの年頃の女の子じゃない！
「?、どうかなさいましたか?」
「い、いやその、何でもありませんよ！」
驚いた、噂には聴いていたけど、本当に普通の女の子にしか見えない……。
『ビックリシタヨー！』
「あら?今の声は何でしょうか?」
あ、そっか。いきなり声が聞こえたらビックリするよね。
「今の声はこれです。モニ太って言って、わたしの心理分析を手助けしてくれる道具なんですよ」
そう言って、首に下げたモニ太を見せる。
モニ太は、今説明した通り、わたしの心理分析に使う道具だ。……勝手にわたしの感情を話してしまうところが玉に瑕。
「そうですか?まあ、危険は無さそうなので、持ち込んでいただいて結構ですよ。では、早速、カウンセリングルームへ案内をさせていただきますね」
「はい、お願いします！」

大淀さんに案内されて、黒井鎮守府の中へ入った。途中、何人かの艦娘とすれ違ったけれど……、皆んな、格好は兎も角、普通の女の子にしか見えなかった。
こんな子達が日夜戦っているなんて、信じられない……。
「……ですから、艦娘の外見の年齢と精神の年齢は一致しないこともあると思っていて下さい。他にも……」
因みに、隣にいる大淀さんは、艦娘についての説明をしてくれている。
説明を聞いた限りでは、艦娘は人間とは違って、戦争の頃に造られた戦艦の記憶を持った、人型の戦艦らしい。
そう言われても、わたしの目で見た限りは、皆んな普通の女の子にしか見えなかったけど……。

「あ、ここです。カウンセリングルームに到着しました」
「あ、案内ありがとうございます」
「いえいえ、提督の命令ですから……」
あ、あれ？
今、提督って口にした時、凄く大きな喜びの感情が……？
「それでは、私は退室しますね。カウンセリング、よろしくお願いします」
「え、ええ、分かりました」
気のせい、じゃないよね。
……わたしには、声のトーンから他人の感情を読み取る特技がある。だから、それを利用して法廷でカウンセリングをして、本当の証言を引き出すことができるんだけど……。
さっきのは、おかしい。
大淀さんは、提督と言う言葉を口にする時だけ、とても、とても大きな喜びの感情を感じていた。普通の会話では、感情の起伏は一般の人と変わりないのに。
提督……、旅人さんのことだよね。一体何が……。

「すいませーん」
！、おっと、いけない。余計なことを考えてる暇ないよね。折角来たんだし、カウンセリングしなきゃ！
「はーい、どうぞー」
「失礼します……」
部屋に入って来たのは……、やっぱり普通の女の子。中学生くらいかな？第六十一駆逐隊と書かれた黒のハチマキが特徴的だ。
「秋月型防空駆逐艦、一番艦、秋月です。よろしくお願いします！」
「うん、よろしくね！」
うんうん、元気があって大変よろしい！……悩み、あるのかな？
取り敢えず、話を聞いてみよう。
～秋月の悩み～
「実は私、元々は違う鎮守府に所属していたんですよ」

「そこでは、もっと酷い扱いを受けていたんですが……」
「この鎮守府に来てからと言うもの、全くの逆で」
「待遇が良過ぎて、怖くなってくるんです」
……成る程。
今ある幸せが贅沢に感じるってことね。
「大丈夫！幸せで悪いことなんて無いよ！」
「そうでしょうか……」
「もっと今の自分を認めてあげよう？今まで辛い思いをしてきた分、幸せになって良いんだよ」
カウンセリングの第一歩は、今の自分を認めてあげること。真面目な人ほど重い荷物を抱え込んでしまうから。
「で、でも、三食食事ができて、休みまであって、その上お給金までもらえるんですよ?!贅沢過ぎます!!」
「そ、それは普通のことなんじゃないかな？」
「いえ！艦娘は多少食事を抜いたところで死にませんし、その気になれば休まず戦うことだって可能です！」
「だけど、休まずに戦えって言うのも変な話じゃないかな？しっかりと休んだ方が、その、戦いにも集中できると思うよ？」
戦いとか、そう言うことはよく分からないけれど、休まずに何かをやり続けるなんて無茶だ。
「食事もすっごく豪華で！昨日なんてビフテキが出ました!!」
ビーフステーキかぁ、良いなぁ。
「良かったじゃない」
「よ、良かったですけど……。人間、一日に玄米四合と味噌と少しの野菜があれば生きていけるのです！」
雨ニモマケズかな……？
もしかして、いわゆる貧乏性ってやつなんじゃ……。やっぱり、常識が昔のままなのかも。
「あ、あのね？今の時代ならもっと裕福に暮らしても良いと思うよ？それに、秋月ちゃんは普段凄く頑張ってるんでしょ？報われても良いと思うな！」

「そ、そうでしょうか？私、頑張ってるんでしょうか？」
「うん、そうだよ！秋月ちゃん達が頑張って戦ってくれているおかげで、わたし達は安心して暮らせるんだよ！ありがとう、秋月ちゃん！」
事実、黒井鎮守府のおかげで、日本近海は随分安全になったらしい。マスコミやメディアはそのことをあまり取り上げないけれど、口コミやインターネットでは多くの人が黒井鎮守府の名を挙げている。
「で、でも、でもですよ？私はまだ、司令になんの恩返しもできていません！」
あれ？秋月ちゃんも？
司令って言葉を口にする時、大きな喜びの感情が……。
多分、旅人さんに感謝してるのかな？
「うーん、恩返しって言うのは、一度にやらなきゃいけないことかな？もっと長い目で見て、毎日頑張ろうと思えればそれで良いんじゃない？」
「そ、それはそうですけど……。でも、不安で……」
こんな時は、そうだ！
「秋月ちゃんは大丈夫です！」
「え？な、何ですか急に？」
「わたしの先輩の受け売りなんだけどね、不安に思った時は声に出して大丈夫ですって言ってみるの！秋月ちゃんも、声に出してみて？」
自己暗示って言葉もあるくらいだしね。実際に声に出してみるのは効果アリ、かな。
「え、えっと、秋月は大丈夫です？」
「もっと大きな声で！」
「秋月は大丈夫です！」
「もう一回！」
「秋月は大丈夫です!!……な、何だか、不思議と、大丈夫な気がしてきました！」
「本当？良かった！」
「そうですね、生涯をかけて、拾っていただいたご恩をお返しすれば良いんですね！相談に乗ってくれて、ありがとうございます!!」

「うん、どういたしまして！」
解決、かな？

にしても、艦娘、かぁ。
人間と同じ姿形で、人間と同じ心を持ってる。人間と何が違うんだろう？
秋月ちゃんなんて、中学生くらいの女の子にしか見えなかった。
これを機に、艦娘がどんな人達なのか知れたら良いな。

１６９話　メンタルケア　後編

何人かカウンセリングしたけど……、艦娘の皆んなは、旅人さんの名前を出す度に、とても大きな喜びの感情を感じているみたい。
こ、これって、もしかしなくても、愛情だよね……?!うわー、なんて言うか、大人だ。わたしには、愛とか恋とか、そう言うのはあまり分からないや。
「失礼するよ」
あ、新しい相談者さんだ。ちゃんとお話ししなくちゃね。
「はーい、どうぞー」
入っていたのは、白い長髪の、小学生くらいの女の子。セーラー服がよく似合っていてかわいい。
「ヴェールヌイだ。響と呼んでほしい。ごくっ……」
そう言って響ちゃんは、手持ちのスキットル……、お酒用の水筒を傾けた。
……?!
「待った!!」
あまりにも自然に飲むからスルーしそうになったけど、それってお酒じゃない?!
「何だい?」
「み、未成年者の飲酒は法律で禁止されてます!」
「艦娘に未成年も何も無いさ」
そ、そうだった、確か、艦娘の精神年齢と肉体の年齢は必ずしも一致する訳では無いって……。
でも、これ……。
「ハラショー、このウォッカは当たりだな」
「その、身体とかに問題は……」
「無いね。至って健康だよ」
うーん、痩せてるけど、不健康なほどじゃないし……。やっぱり、人間とは身体の作りが違うのかも。
「それで、相談なんだけど……」

「う、うん。何かな？」
　兎も角、話を聞いてみよう。
　～響の話～
「司令官の人間関係は複雑だ」
「経歴も調べてはいるが、全てを知ることは到底できないだろう」
「だから、単刀直入に聞く」
「貴女は、司令官の何なんだ」
……！
　微かな怒りと、不安……。わたしを警戒している？もしかして、旅人さんを取られると思ってるの？
　嫉妬ね。愛されてるなぁ、旅人さんは。
「……落ち着いて、響ちゃん。旅人さんとは知り合いなだけだよ」
「知り合い？」
「そう。昔、旅人さんが逮捕された時に、弁護をしたことがあるの」
　あれは大変な事件だったなぁ……。でも、最後は無事に逆転無罪を勝ち取ったんだけどね。
「……確かに、弁護をされた記録があるね」
　分厚い手帳をめくる響ちゃん。記録って一体何だろう。
「これ？これは司令官の記録だよ」
「記録……？」
「ああ、私が調べられる範囲での司令官の経歴や人間関係を調査したものだよ」
　見せられたのは、旅人さんの詳細なプロフィール。
　まさか、これって……。
「あらかじめ言っておくけど、ストーキングじゃないよ。司令官には、調べて良いって許可をとってあるから」
「そ、そうなんだ」
　違う、明らかにストーカーだ……。スケジュールから身体的特徴まで、全部記録してある……。
「もちろん、これ一冊だけじゃないよ。写真や動画でもまとめてあるし」

と、盗撮まで……。
確かに、ストーカー行為は、直接的な行動がない限りは民事だから、本人が訴えなければ問題はないけど……。
「本当に、旅人さんはこれを了承してるの？」
「うん、あの人は心が広いからね。好きなだけ調べて良いって言われたよ」
そんな……。神経が太い人だとは思ってたけど、まさかここまでとは。自分の行動を逐一監視されて、記録されているのに、何とも思わないの？
少なからず、ストレスは感じているはず……。そうじゃなくっても、ストーキングなんて犯罪だ。
「でもね、響ちゃん。行動を監視されるのなんて、凄くストレスになることなの。大切な旅人さんに迷惑をかけたくないでしょ？」
「ああ、大切さ、誰よりも、何よりもね。だから私は知らなくちゃならない。どれもこれも、司令官を守る為なんだ」
そう言う響ちゃんの目は、ガラス玉のように綺麗で……、でも、暗く濁っていた。
なんてことなの……。こんなことはおかしい。でも、聞き取った感情と実際に話している言葉に矛盾がない！
つまり、響ちゃんは心の底から、「自分が旅人さんのストーキングをすることで、旅人さんを守っている」と思い込んでいる……!!
「もちろん、好きな人のことを知っておきたいと言う好奇心もあるけどね。でも、それ以上に、司令官は私が守ってるんだ」
「だ、駄目、そんなの間違ってる！」
やめさせなきゃ！
「何も間違ってなんかいないさ。私は知るべきなんだ、司令官の全てを」
「……好きな人のことを知りたい気持ちは分かるよ？でも、そんなにたくさん調べるのは変だよ。聞きたいことがあれば、本人に聞けばいいじゃない！」
「……あ、その手があったね」

……え？

「私を含めて皆んな、監視カメラや盗聴器の設置ばかり気にしていて、本人に聞くと言うのを失念していたよ」

「み、皆んなって……、他にも監視や盗聴をしている子がいるの？」

「艦載機が飛ばせる人は毎日飛ばしてるし、艦種毎に監視カメラと盗聴器の設置をしてあるね」

うわっ……。

「見るかい？今も監視カメラはオンラインだよ。……ほら、司令官が監視カメラに手を振ってくれている」

本当だ……。執務室らしき場所にいる旅人さんが、笑顔で監視カメラに手を振っている……。この人、どういう神経してるんだろう……。

「ふふ、今日も素敵だよ、司令官……」

……旅人さんの神経もそうだけど、響ちゃんの精神も尋常じゃない。それに、他にも監視や盗聴をしている子がいるって言うし……、艦娘の心の闇は深いかもしれない。

「と、兎に角、ストーキングはやめよう？仮に旅人さんが迷惑してなくても、犯罪だよ！」

「そうだね。……でも、艦娘を裁く法律なんて、この国どころかどこの国にもないさ」

そうか、艦娘……！人間と何ら変わりはないから忘れていたけど、この子達は艦娘なんだ！艦娘を裁く法律は、無い……!!

「でも、言いたいことは分かったよ。私も裁かれないとはいえ、犯罪はしたくないからね」

でも、良心が無い訳じゃないみたい。感情表現が豊かで人間味のある子ばっかりだし。

「じゃ、じゃあ……！」

「いや、司令官のことを調べるのはやめないけど」

「そこはやめようよ！」

……ま、まずい。

この鎮守府はおかしい。
聞いたところ、所属する艦娘の殆どが、旅人さんに対して、盗撮や盗聴、ストーキング、私物のすり替えをしている……。
しかも、それを注意しても、やめる気がないみたいで……。
……「盗撮？まあまあ、これも愛故にや」
……「ここは譲れません」
……「まー良いじゃン？本人が良いって言ってるンだしよー」
暖簾に腕押し。糠に釘。その上、誰一人として、自分の行動に疑問を持っていなかった……。
これじゃどう考えても、旅人さんにプライベートな時間は一切無く、常に誰かに監視されていることになる。
それを許している旅人さんもそうだけど、こんなことがまかり通るこの鎮守府自体が異常だ!!
異常、なんだけど……。
「何、やってるのかな……？」
「はい！新聞を書いています！あ、今週のありますよ、読みますか？司令官の写真、よく撮れてますよ！」
「あ、ありがと……」
本人達はこの調子……。
「ええと、その、青葉さん、だったよね。何でも、この鎮守府で一番の情報通だとか」
兎に角、話を聞いてみよう。元凶を突き止めないことには、何とも……。
～青葉の証言～
「あ、盗撮と盗聴？私が原因ですよ」
……。
……え？
あれ？犯人……？
「？、どうかしましたか？」
「ど、ど、ど、どうかしましたか、じゃないよ!!!何で?!」
「何で、と言われましても。青葉は記者ですから。真実を追い求めた

結果、盗撮と盗聴に至りました」
「至っちゃ駄目だよ?!」
「まあまあ、細かいことを気にしちゃいけませんよ。もっと大らかに生きましょう」
「いやいや!大らかにじゃないって!」
そこを大らかにしたらこの世は無法地帯になっちゃうよ!
「いやあ、でも、おかしな話ですよね。私が司令官に許可を取って監視カメラを仕掛けたら、皆んなが挙って同じことをするんですから。パクリですよパクリ」
こ、この子、まるで罪の意識がない……!!
それどころか、盗撮を正当な行為だと思っている……!!
どうしよう、更生の余地がない!!
「じゃあ、青葉さんが全ての元凶ってこと……?!」
「人聞きが悪いですね」
「駄目だよ、犯罪は!それに、旅人さんもストレスを感じてると思うよ?」
「そんなことありません!司令官は全てを受け入れてくれます!」
ぐぬぬ……。
「そんなに言うなら、司令官本人に聞いてみて下さい!」
スピーカーをオンにした携帯電話で連絡を取る青葉さん。
「もしもし司令官?盗撮や盗聴がストレスになってますか?」
『いや?別に。愛されて嬉しいなー、くらいにしか』
うう、何でですか……。
「ほら、ね?だから青葉は、取材をやめなくても良いんですよ!それじゃ!」
あっ!逃げた!

だ、駄目だ、この鎮守府は駄目だ。
皆んなまともじゃない。
……「はぁ、はぁ、提督のシャツ……。提督の匂いがする……??」
……「このコートですか?司令官から借りたのです。良い匂いがす

るのです??」
……「はぁん??て、提督のパンツ!は、榛名は大丈夫じゃありません??」
手遅れだった……。
どうしてこんな風になるまで放っておいたんですか?!!
「答えて下さい、旅人さん!!」
「え、俺?」
〜旅人の証言〜
「答えろって言われてもなぁ」
「気付いたらこうなってたんだよ」
「それより、悩んでる子はいた?大丈夫そう?」
……。
「とりあえず、一通りは話を聞きましたけど、皆んな特に大きな悩みはないようです」
「戦うのが辛いとか、怖いとか言ってなかった?」
「一言も言ってませんでした」
「マジで?」
マジです。
「それより、鎮守府内での犯罪行為の多さですよ!何やってるんですか旅人さん!!」
貴方、艦娘の保護者でしょう?!
「え?皆んな良い子でしょ?」
「良い子じゃありませんよ!皆んな何かしらやってるじゃないですか?!」
「良いじゃん、そんなの。俺が許してるんだからさ」
……はぁ。
「……まあ、百歩譲って、盗撮や盗聴が許されたとしても、それでもなおおかしいんですよ。……艦娘の皆さんの精神分析の結果、旅人さんに対する、強過ぎる愛情と執着心が見られました。このまま放っておくと危険です」
「危険?」

「まともな精神状態の子が一人もいないんですよ！」
　このままじゃ、取り返しのつかない事件が起こるかもしれない。
「そうかい？今の所問題はないけど？」
「起きてるじゃないですか！問題!!……良いですか？愛されることが悪いとは言いません。けど、限度ってものがあるでしょう?!」
「壊されそうなほど愛されても、俺自身が壊れなきゃ問題はないだろ？」
　ああ言えばこう言う！
「兎に角！艦娘にはもっと厳しく接して下さい！これ以上の犯罪行為を容認しちゃいけません!!」
「わ、分かった、分かった」

　ああ、疲れた……。
　最初はカウンセリングだったはずなのに、いつの間にか、常識を教えることになってたよね。
　まさか、艦娘に、下着泥棒は犯罪だと教え込む日が来るなんて、夢にも思わなかった……。
　それにしても、思いの外アットホームな職場だったな、鎮守府。
　艦娘の精神構造はちょっと変だったけど、基本的には人と変わらなかったし……。
　ニュースとかで言われているほど、危険な集団ではないのかもしれない。
　艦娘も人と変わらない、心を持った生き物なんだな……。
×
×
×
「……帰ったかい？」
「帰ったっぽい」
「人の振りをするのは疲れマース」
「精神分析を躱すのは難しかったね。変に思われれば司令官に疑いがかかるからね」
「人間の感情は分かりませんからねー。提督への愛は隠せませんでし

たけど、それ以外は上手く隠せたし、万々歳でしょう」
「喜びも、悲しみも、全ての感情は提督の為にあるのですわ。提督以外のヒトに感情を向けるのは、酷く疲れますの」
「にしても、提督も提督よ！私は提督以外の人間なんてどうでも良いのに……」
「まあそう言うな。提督は気を遣ってくれたんだろう」
「気遣い無用よ。私は提督がいれば後はどうでも良いの。皆んなだってそうでしょ？」
「まあ、な。正直な話、国も人もどうでも良い。提督さえいればそれで……」
「まあまあ、一応、外面を取り繕っておかなきゃ。社会で生きる上では大事だよ、外面って奴がね」

１７０話　武器や防具は装備しないと意味がないぞ
前編

うーむ、艦娘に厳しく、か。
俺は人を叱るのが苦手だ。自分が上から物を言えるような立場だとは思わないし、何より、怒るのが好きじゃない。
だが、人間、他人から指摘されないと自覚できない欠点だってある訳だし、叱るという行動が悪いってことでもない。
つまりは、心を鬼にして叱る時が来たということ。
「よし」
叱ると言ったら体育教師。
体育教師と言ったら……、
「持ち物検査、開始ィーーーー!!!」
ズバリ、持ち物検査だ。
持ち物には素行が出る、と思う。
よって、艦娘の持ち物を検査して素行のチェックをしようって寸法よ。まあ見てな。

「あら、提督？竹刀なんて持って何を？」
「はい、鹿島確保、と」
「え？え？」
鹿島　を　捕まえた　！
私服の鹿島だ。恐らくは出掛ける予定なのだろう、小さなポーチを持っている。小物にしっかりと気を遣っていてお洒落。かわいい。十段階評価で百点。
「私物の検査だ！大人しく持ち物を見せるんだ!!」
だが俺は近年稀に見る修羅。女の子の荷物の詮索という禁忌を、犯す……!!
「私物の検査、ですか？はい、構いませんけど……」
懐から机を取り出し、その上に鹿島の私物を並べる。

「プラダのポーチと財布、キーケース、化粧品、携帯電話……」
上品な白のポーチと長財布……、プラダのブランド物。キーケースもプラダだ。化粧品も少しお高いもの。携帯電話はエクスペリア。待ち受けは俺とのツーショット写真だ。
参ったなあ、まともなものしか持ってないぞ。
「艤装は？」
「はい、今呼び出しますね」
どれどれ？
「連装砲、探照灯、水中探信儀、爆雷、蛇腹剣……」
よく手入れされた、しかしなんの変哲もない武装。
うーん、問題無し。清廉潔白。
「無罪！」
文句無しの無罪判決だ。
持ち物も艤装も、おかしなところはない。
「呼び止めて悪かったな、鹿島。行っていいぞ」
「はい、提督」
笑顔で手を振り、出掛ける鹿島。何だ、思いの外まともじゃないか。素行に問題無しだ。
この調子で正門で持ち物検査を続けよう。何、うちの子は良い子ばっかりだ。問題なんてないだろうぜ。

「問題なんてないだろうぜ……、そんな風に思っていた時期が、俺にもありました……」
「？、どうしたの提督？」
「ビスマルクゥ……、これは何なのかね？」
「あら？知らない？ルガーＰ０８よ」
いや、ルガーＰ０８は知ってるよ。ただね、今はルガーＰ０８の存在の話をしてるんじゃねーのよ。そうじゃなくってね、
「何で持ち歩いてるんですかねぇ」
銃刀法って言葉、知ってる？
「趣味よ」

「うーん、この」
　趣味かあ。ルガーＰ０８が好きなのは分かったけどさ、持ち歩いている理由ではないよね？アレか、質問が悪かったのか。
「あのね、そうじゃなくってね……、日本国内で拳銃を持ち歩く理由が聞きたいんだよね」
「お守りみたいなものかしら？」
「随分と物騒なお守りだね」
　アメリカならまだしも、日本国内では些か物騒過ぎるお守りだ。
「ルガーＰ０８で使用する弾薬は９ミリパラベラム。パラベラムの意味は、ラテン語の警句のＳｉ　ｖｉｓ　ｐａｃｅｍ，ｐａｒａ　ｂｅｌｌｕｍから取られてるの。お守りには最適でしょ？」
　汝平和を欲さば、戦への備えをせよ、ね。知ってる。
「じゃあ、銃弾を持ち歩けば良いんじゃない？」
「それじゃ面白くないでしょ？」
　まあ、確かに。
「それに、その気になれば、艤装として消せるんだから、大丈夫よ」
　そうだな、拳銃も武器だもんな。艤装の一部として消すことも呼び出すことも可能だな。じゃあ最初っから消しておいて欲しいもんだが。バッグからルガーＰ０８を取り出す女の子なんてそうはいないだろ。
「まあ良いや。ルガーＰ０８以外は普通だし。艤装は？」
「艤装？全部かしら？」
「ああ、検査だからな全部見せ、ごめん待った多い多い多い多い」
　ビスマルクのマントの中から、出るわ出るわ。ルガー、ワルサー、ヘッケラーコッホ、マウザー……。拳銃から大砲まで。うわっ、これカール自走臼砲じゃねえか。グスタフまである。何だこれどうなってんだ。
「本当はフルスペックのグスタフを持ち歩きたいんだけど、反動がきついから……。アハトアハトはあるわよ、フルスペックで」
　艦娘の艤装は、史実よりスケールダウンしているのが常だ。どうやら、武装の概念を抽出して、その分の神秘を以って戦うようになって

いるみたい。
　例えば、ビスマルクは３８ｃｍ連装砲改を装備しているが、本当に口径が３８ｃｍある訳ではない。３８ｃｍ連装砲改であると言う概念を取り出して、抽出した神秘が破壊力となる訳だ。勿論、見た目通りの威力もある。
　フルスペックだと、その分、神秘の力は落ちるが、物理的な制圧力と破壊力はデカい。故に、態々フルスペックの武装を使う艦娘もいるとか何だとか。
「でもまあ、グスタフのフルスペックは無理でしょ」
　海の上に列車砲は無理だ。
「そうかしら……。きっとカッコいいと思うんだけど。あ、それと提督？」
「何？」
「この銃……、仕舞うの手伝ってくれる？」

　ビスマルクの銃器集めは実益を兼ねた趣味だからなー。良いことだよ、問題ないよ。
　一大隊分くらいの火砲があったけど、気にしないでおこう。
　さて、次のターゲットは……、
「提督？正門で何を？」
「あ、提督」
「夕張！明石！君に決めた！」
　買い物袋をぶら下げ、鎮守府に帰ってきた夕張と明石。さあて、荷物を検査するぞー！
「艦娘の持ち物を検査してるんだ。見せたまえよ」
「持ち物検査ですか。怪しいものは持ち歩いていませんよ？」
「そう言う面白いものは工廠に置いておきますしねぇ」
　それは俺が決めることなのだ。
　先ずは夕張のからだ。どれどれ……？
「鞄に、工具セット、財布に鍵、タブレット。買い物袋の中は、プラモデルか……」

問題無し、と。
「何で工具セット持ち歩いてんの？」
「職業柄、と言いますかね、無いと落ち着かないんですよ」
成る程ねぇ。
財布は二つ折りの小さいやつに鍵が付いている。プラモデルはガンプラ。タブレットの待ち受けは俺のアップ写真だ。
「持ち物に異常はないな。艤装は？」
「艤装ですね、了解です！」
ゴトリ、と言う重い音と共に、鎮守府正門前の庭に置かれる夕張の艤装。
「これは？」
「プラズマブレードです」
「これは？」
「レールキャノンです」
「これは？」
「フォトンランチャーです」
そっかー。
「爆雷とか電探とか、そう言うのは？」
「あはは、やだなぁ。今の時代、そんな古い装備で戦いませんよー」
「艦娘とは一体何だったのか」
現代どころか近未来の兵器を搭載するとは。これもうわかんねぇな。
「確かに、最新の装備では、戦艦だった頃の概念的神秘は機能しません。でも、それ以上に、圧倒的技術力を以ってすれば、容易に神秘を超えることが可能！」
「ゴリ押しだなぁ」
技術力を上げて物理で殴るのか。解答としては間違ってないから何とも言えねえ。
次、明石。
持ち物は、と。
「夕張と変わんねえな。買い物袋の中はフィギュアか」

夕張と同じく、工具セットを持ち歩いているみたいだ。無いと落ち着かないアイテムなんだろうか。タブレットの待ち受けは勿論、俺の写真だ。

うん、異常無し。

「怪しいものなんて持ち歩いてませんよー」

「じゃあ、艤装は？」

「これです」

そう言って渡されたのはオレンジ色の工具。巨大なレンチ、電動カッター、スパナ、釘打ち銃。

「見事に工具しかない」

「深海棲艦を解体するんですから、これで良いんですよ」

まあ、工具の形をしているけど、実際には武器として使われてるし、良いか。

艤装にも問題無し、と。

どこにも問題無いじゃないか。やっぱりうちの鎮守府は平和だったんだ。

いや、待て。

慌てるな、ここで結論を出すのはまだ早い。今日来た子がたまたま良い子だった可能性もある。

よし、明日も検査を続けてみよう。

この正義の使徒旅人仮面が、諸君らを……、裁くぜ!!

……「提督がタキシードっぽい」

……「タキシードに仮面なのです」

……「まーたおかしなことやり始めよってからに」

……「まあまあ、好きにさせてあげようよ、本人は楽しそうだしさ」

……「ぽい」

……「なのです」

……「せやな」

１７１話　武器や防具は装備しないと意味がないぞ
後編

「はぅぁなぐったーいむはぅぁなぐったーいむ！」
　え？ムーンライト伝説じゃないのかって？知らんなぁ。仮にタキシードに仮面を付けていたとしてもムーンライト伝説じゃなきゃならないなんて法はないィ。ごめんね、素直じゃなくてね。
「……その、司令は、何を？」
「見れば分かるだろ？」
「いえ、全く」
　何だと？俺はそんな不可解な行動をとっているだろうか？
「見たままだよ、見たまま。おかしなことはやってない」
「……タキシードに白の仮面のまま、縦笛からギターの音を出して、某有名ロックナンバーを熱唱する姿が、おかしくないと？」
「何か変か？」
「……いえ、司令が正しいと言うなら、何もおかしくはないのでしょう。不知火の浅薄な考えをお許し下さい」
　何も謝ることはないのに。畏まった子だな、不知火は。
「ところでぬいぬい」
「不知火です」
「今、艦娘に対して持ち物検査をやっているんだ。ご協力お願いします」
「……はあ、持ち物検査ですか」
「まあ、見るからに検査してますって態度だからな。分かってたと思うが」
「どの辺が検査してますって態度なんでしょうか……」
　おかしいな、検査してますって雰囲気を出してたはずなんだが。まあいいや、とっとと検査をしよう。
「先ずは手荷物を見せてくれ」
「了解です」

俺の懐から出した机に、不知火の手荷物が置かれていく。
「まず財布」
「はい」
「鍵」
「はい」
「……これだけ？」
「はい。あまり持ち物を増やしたくはないので」
んー。まあ、良いか。
「艤装は？」
「これです」
「主砲、高射砲、魚雷……」
うん、普通だな！
「陽炎型の戦闘方法は格闘攻撃が主ですから。特殊な装備はありません」
そうだったな。陽炎型は格闘戦がメインだったよな。不知火はパワーを活かした戦闘スタイルが魅力だ。特に、パンチ力には定評があるらしい。
艤装で変わっているところと言えば、赤いスカーフくらいか。
やっぱり問題はない。
「時間を取らせてすまなかったな、行っていいぞ、不知火」
「はい。……その、一つ質問してもよろしいでしょうか」
「何かな？」
「タキシードと仮面はまだ良いんです。ロックも、まだ分かります。でも、どうやって縦笛からギターの音を出しているんですか？笛から弦の音は出ないと思います」
あ、あー、はいはい。
「昔、そふとくりーむと言う悪の組織に関わった事があってね。その時ちょっと」
「ちょっと……？」
「まあ、正確にはガリクソンプロダクションってところでだけど。とある音楽講師に、縦笛の吹き方を教わってね」

「はあ……。縦笛、ですか」
何かおかしなことを言っただろうか？
縦笛から熱いビートを奏でても問題はないと思うんだけど……。
「……いえ、もう、何でもありません。司令が正しいのですから。固定概念は捨てましょう」
「？、よく分からないが、大丈夫か？」
「はい、大丈夫です。もう、なんか……、大丈夫です」
そっか。

不知火は頭を抱えて鎮守府に戻って行った。頭痛かな？
「提督？何やってるの？」
「山風か」
不知火と入れ替わりで、鎮守府から出てきたのは山風。小動物系のかわい子ちゃんである。別に机の下に隠れてむぅーりぃーとか言う訳ではないが。
「おいでー、パパだよー」
「えっ、提督、あたしのパパなの？」
「年齢的にはパパでもおかしくないんだな、これが」
大変笑えないが、俺はもう山風くらいの娘がいてもおかしくない年なんだよな。
「提督がパパ……。良いかも」
いっそのこと養子にでもしようかしらん？いや、結婚したいから駄目って反対されるだろうな。
「じゃ、じゃあ、ね、あの、パ、パパ？何やってるの？」
くー、うほう！良いねぇ！可愛いぞ山風ェ！おじさんがパパにでも何でもなってあげちゃうからな!!
「パパはねー、艦娘の皆んなに持ち物検査をやってるんだー。山風も協力してくれるかい？」
「い、良いよ。協力、する」
よし。
「じゃあ、先ずは手荷物を見せてくれるかな？」

「う、うん、分かった」
そう言って、手荷物を机の上に置いていく山風。動作がいちいち可愛いなオイ。
「これは？」
「携帯電話。アイフォンだよ」
新しいモデルのやつだ。
「これは？」
「お財布。あと、鍵と、飴玉かな」
財布は小さめ、鍵にはキーホルダーが付いている。飴玉は駄菓子屋で売ってそうな、粗目砂糖がまぶしてあるやつ。分かるよ。これ美味しいよね。
「これは、俺の髪で編んだミサンガか」
「うん、提督の髪、綺麗だから……」
「でも、滅多なことでは切れないと思うぞ」
俺の髪、硬いし。
「ううん、良いの。願い事とか、無いし。お守りとして着けてるから」
「そうか。なら、良いんだけどね」
さて、持ち物はこんなもんか。
次は艤装を見せてもらおう。
「艤装は？」
「うん、今呼び出すね」
おっ、出てきたな。
「これは……、獣狩りの斧か」
「そうだよ。よく使うから……」
獣狩りの斧……。古都ヤーナムの狩人が使う仕掛け武器だ。柄を伸ばすことが可能で、大斧からハルバードに変形する機構を持つ。
「で、これは改造主砲か。水銀弾を撃てるようにしてあるな」
「うん。水銀は重いから、足止めには最適。あたしのは散弾だから、射程は短いけど」
どうやら、白露型得意の艤装パリィ用に調整されているようだ。
艤装パリィと言うのは、相手の攻撃に合わせて砲撃をして、体勢を

崩す技。
大抵は、体勢を崩した敵は、その瞬間に内臓を引き摺り出されて惨殺される。
「む、この瓶は……」
鉛の秘薬か。飲むと一時的に体重が増加する秘薬だ。
「それ、鉛の秘薬……。あたし、軽いから。戦いの時に踏ん張りがきかなくて」
「飲み過ぎないようにな」
「うん」
よし、艤装にも問題はない。総評、無罪！やっぱり山風は天使だった！
「よしよし、良い子だな山風は。問題無しだぞ」
撫でてやろう。
「えへへ、本当？あたし、良い子？」
「ああ、良い子だよ、山風」
「あたしのこと、見捨てない？」
「見捨てる訳ないじゃないか」
「そう、そっか、そうだよね。えへ、えへへへへ」
あー、可愛い。

やっぱりうちの子は天使やったんや。問題なんて無いんや。
誰だ、うちの子の持ち物検査をやる度にＳＡＮ値チェックが入るなんて言った奴は！ほのぼのハートフルストーリーじゃないか！良い加減にしろ!!
「なあ武蔵!!」
「え？あ、お、おう」
通りすがりの武蔵に声をかける。
「ところで武蔵。俺が何やってるか分かるよね？」
「うむ、分からん」
「ＯＫ、そんなこともある。ならこれでどうだ？」
懐からブルマを取り出して見せる俺。

「すまん、余計に分からん」
「……そっか」
残念だな。
「一応、持ち物検査をやっているんだけど、武蔵も協力してくれる？」
「む、そうなのか。とてもそうは見えなかったが……。まあ、構わないぞ」
さて、了承も得たことだし、武蔵の手荷物を検査していこうか。
「財布と鍵、替えの眼鏡、プロテインバー、俺のコート。……俺のコート、武蔵が持って行っていたのか」
一張羅って訳でもないし、困らないんだけど。
「サイズも丁度良いからな、借りているぞ」
無断で借りられていた件。
「……駄目か？」
まるで悪びれずに首を傾げる武蔵。駄目かどうかと問われたら。
「世間一般的には駄目らしいよ」
と、厳しい答えを返してみる。
「そうか。では、改めて言おう。借りるぞ」
「良いよ」
でも、男物だよ？良いのかね。まあ、本人が良いなら良いんだろう。
「お次は艤装だ。見せてくれ！」
「うむ、艤装か」
黒の巨大な手甲か。
盾みたいな形だ。肘の部分にはポンプのような機関があり、手首部から圧縮空気を噴出するギミックがある。
「……これだけか？」
「ああ」
「主砲は？」
「部屋に置いてある」
そうか、殴った方が早いってことか。
良い具合に脳筋だな。
「武蔵、ありがとう。問題ないよ」

「因みに、何を持っていれば問題ありなんだ？」
　え？それは……、
「これとか、あれとか……、あとこう言うのとか」
「……何だそれは」
「輝くトラペゾヘドロン、アルハザードのランプ、銀の鍵……、ナコト写本にネクロノミコン、グラーキの黙示録」
　流石に、こう言うものを野ざらしにはできない。
「よく分からんが……、それは『分かってはいけないもの』だな？」
「平たく言えばそうだね」
「他にも、麻薬、聖杯、ＳＣＰとかも規制対象だ。決して軽はずみな気持ちで持ち歩かないで欲しい」
「まず、手に入れる方法がないんだがな、そんなもの」
　そう？結構その辺に落ちてるじゃん。

　いやー、結局、危険物を持ち歩いている艦娘はいなかったな。
　所有していたとしても、しっかりと管理しているみたいだし、言うことなしだ。
　うん。
　危険物は、なかった。
「タキシード、洗濯しておきますね」
「シャツをこちらへ」
「提督、パンツ下さい」
　危険人物は多々いたがな！

１７２話　武器や防具は装備しないと意味がないぞ
裏編

「提督は、私達の手荷物を見た訳です」
「ならば、私達も、提督の手荷物を検査する権利があると言うこと！」
「いや、そのりくつはおかしい」
　止めないで下さい、武蔵さん！
「武蔵さんも興味があるはずです！提督の持ち物について！」
「愛する提督の情報ですよ?!何でも知りたいと思うのは当然でしょう！」
　もっと言ってやって下さい、夕張ちゃん!!
「し、しかしだな明石、夕張」
「大丈夫ですよー！提督はその程度じゃ何とも思いませんから!!怒ったりなんてしませんってば!!」
「そうですそうです！提督のことだから、面白おかしいものを沢山持ち歩いているに決まってます!!」
「面白いかどうかじゃないだろ……」
「いえいえ、提督は常々言ってますよ?人生を楽しめ、と！」
「まあ、確かにそうだが」
「それに見て下さいよこれ！万能鑑定マシーン！提督の所有する謎アイテムの正体もバッチリですよコンチキショー!!」
　暇潰しに作った万能鑑定マシーンの出番ですよー!!

　さあ、ここにある提督の鞄！いや、このフレンズ感溢れるかばん!!
　ご開帳です!!!
「待てーい!!!」
「何奴?!!」
「大淀です！」
「白露型っぽい！」
「うちやで！」

「Ｍｅよ！」
「陽炎型だ！」
は、はわわ（諸葛亮）、暇人達がゾロゾロと！雁首を揃えて!!提督の匂いを嗅ぎつけて現れましたね!!
この明石だけに美味しい思いはさせないと言うことですかッ!!!
仕方ないですね。まあ、そんなこともあるでしょう。皆んな、提督の謎を知りたいでしょうし。
「では、本邦初公開、提督の持ち物!!ご開帳です!!!!!」

まずは手前の方から行きましょうか……。
「これは……、ミントガムですね」
ブラックなガム。エチケットは基本らしいですねー。提督が常にいい匂いしてる理由の一つですね。
「何の変哲もありませんね。その辺のコンビニで売ってる物です」
夕張ちゃんがそう言ってガムを鞄にしまいました。続けて、鞄に手を突っ込む夕張ちゃん。
何だ、普通じゃない。やっぱり提督もまとも、
「魔道書です」
「!!?!?!」
あっ、まともじゃなかった。
「……一応ですが、表紙には何て書いてあります？」
「そうですね……、日本語でも、英語でもないですから、読めませんね」
見たことのない文字……、外国語ですねこれ。
「どうします？読んでみますか？」
「うーん……」
「……それは、やめた方が良い」
あ、時雨ちゃん。
「得てして、世の中は知らない方が良いことの方が多い……」
そう言うと、夕張ちゃんの手元から魔道書を引ったくって読み始める。
「……だが、ああ、これは……、実に興味深いね。冒涜そのものだ。魔

物の咆哮……、つまりは、宇宙の彼方だ。死のすぐ側にある」
「何言ってんですかね」
時雨ちゃん、時折よく分からないことを言うから……。アレですね、電波系って奴ですね。
「うん、まあ、平たく言えば危ないものなのさ。僕が預かっておくよ」
そうですか。まあ、良いんじゃないでしょうか。「そう言ったこと」に関しては詳しいみたいですし。
「気にせずに次行きましょうか。では、はい！……縦笛！」
縦笛。
裏に「むすたんぐ」とマジックで書かれています。何なんですかね。
「一ミリたりともギターじゃないんですが」
「どの辺がムスタング？」
マジで何ですかこれ。え？ムスタング？
「……これ、昼間に吹いてたやつじゃない？」
「「……」」
「よこせ！」「縦笛をこちらに！」「縦笛！」「間接キス！」
ああ！醜い争いが!!夕張ちゃん、早くしまって下さい!!
「はいはい、次です次！次は……、あれ、なんか引っかかって……、よし、出てき、た……!?」
「うわあああああ!!」
戦車だーーー!!!鞄から戦車出てきたーーー!!!
「あら、ティーガーＩＩじゃない。流石提督ね、よく分かってるわ」
嬉しそうなビスマルクさん。喜ぶポイントが謎なんですが。
「……どうするんですかこれ」
「……長門さん、武蔵さん、押し戻して下さい」
本当に、どうなってるんですかこれ。鞄に本物の戦車を入れるって、どう言う神経してるんですかね。
「次、次よ！はい！」
「ＴｏＨｅａｒｔ２」
「なんでや!!」
龍驤さんの叫びも尤も。参りましたね、まるで意味が分かりませ

ん。ドイツ戦車の後にギャルゲが出てくる状況。謎過ぎる。
もう私、提督が分かりません。
一体何を考えているのか……。
「しかもこれ、ＰＳＰ版ですね。あ、ＰＳＰもある。色はピンクです」
何故今時ＰＳＰを……。
「なんか……、もっとこう、提督の秘密とかそんなん無いんですか？」
「いやあ、無いですね。あ、替えのパンツ！」
自然な流れでパンツを懐に入れる夕張ちゃん。ずるいです。
「……夕張ちゃん？」
「まあまあ。えーと、後は……、調理器具、ロレックス、メッサーラ（プラモデル）、オリハルコン、けものフレンズのアニメＤＶＤ、分度器、幸せのベッド、青い秘薬、ハベルの指輪……」
「あー、えーと、なんか、もう、分かりませんねこれ」
統一性も何も無いですけど。何なんですかね。

「あ、明石さん、武器の欄がありますよ」
「武器の欄とは一体……」
武器の欄って何ですか。何でアイテム欄表示されるんですかね？って言うか、非暴力不服従反正義を旨とする提督が、武器を？
珍しいですね。でも、興味深いです。
「はい、まずは……、衝撃鋼ギルガメス」
銀色の……、手甲と足甲？材質は……、何でしょうかねこれ。
でも、綺麗。銀色のフレームに極彩色のボディ。精密な機構、装飾は少なめ。
「んー？これ、地上に存在しない材質っぽいですね」
万能鑑定マシーンを当てる夕張ちゃん。因みに、さっきから使っている万能鑑定マシーンは、物の名前と大まかな用途などが分かります。香霖堂？何ですかそれ。
「まあ、後で工廠で調べてみましょうか。他は何かありますか？」
「はい、次は……。えっ、これは……」
「あっ……」

……その、これは……。
「……アレ、ですよね」
「何かと聞かれれば、マッサージ機と誤魔化すやつですね……」
「直接的に言えば、男性のアレの形をした、電動のおもちゃですね」
あの、これ、その、これ……。
「その、なんだ。提督はこう言うのが好きなのだろうか」
む、武蔵さん……。
「ま、まあ、悪くは無いな。私も女だ。攻められるのは嫌いじゃない」
ああ！スイッチを入れないで下さいよ！振動してる振動してる!!
「む、このディ○ド、セレクターに強以上……、自殺、と書かれたところがあるな」
ディ○ドとか言わないで下さい!!!R―18タグが付いたらどうしてくれるんですか?!!
「ふむ、では……、折角だから……、自殺、と。……おおおおおおおお!!!」
「ッ?!!これは?!!高周波です！バイブレーターからとんでもない高周波が発生しています!!早くスイッチを切って下さい武蔵さん!!!」
「お、おう！」

あ、危ないところでした……。鎮守府が灰になってもおかしくない高周波でしたね。
「な、なんて物を持ってるんですか、提督は」
「なるほどなるほど、正に昇天するバイブレーターですね」
武器とは一体。提督の中での武器ってなんなんでしょうか。確かに、攻撃力はありましたけど。
「まだありますよ、これは……、パンティです！」
「提督は武器って言葉知ってるんですかね？」
何の変哲も無いパンティのどこが武器なんですか。
『我が名はライトニングベヒモス』
「「「パンティが喋った!!!?」」」
ちょ、待っ、えっ？

『呪いを受けし龍鱗のパンティ也』
えっ？
いや……、えっ？
『汝、力を望むならば、我を手にせよ。汝の生き血と引き換えに、強大な力を齎そう』
「えーと、これは？」
「待って下さい、今万能鑑定マシーンで……。はい、生きている……、呪われたパンティです」
「文章にするとまるで分からないですね」
「でも、強力な幻惑の力と、魔法らしきエネルギーが感知できました。多分、投擲武器です」
悲報、パンティは武器だった。
「って、このパンティ、誰のなんですか？まさか他所の女の人じゃ……」
それは困ります。提督には何処の馬の骨かも分からない女の子のパンティを持っていて欲しくありません。
「その、ええと、ライトニングベヒモスさん？貴方は何処から来たんですか？」
意を決して、パンティに話しかける。
『我の生まれはダンジョン也』
ダンジョン……、出土品ってこと？
「よかった、誰か他の女の人のパンティって訳じゃないんですね」
パンティを武器として使うのは百歩譲って良しとしても、私以外の女の人のパンティを持ち歩かれるのは嫌ですからね。

大体こんなものでしょうか。
「いやー、何一つ分かりませんでしたね」
「提督の女の子の好みとか、知りたかったんですけどねぇ」
「提督は好みのタイプとか無いんじゃないですか？」
「特に無いよ」
「ほら、無いって本人もこう言ってる……、え？」

あれ？
「て、提督?!」
「いやー、アイテム欄を弄られる感触があったから何事かと思ってね。びっくりしたよ」
あ、アイテム欄って触られてる感触があるもんなんですね。
「ドラえもんだってスペアポケット弄られるとくすぐったがるだろ。まあ俺としては、勝手に懐をまさぐられてる感じな訳でさ」
「そ、そうなんですか。その、すみません」
「良いの良いの。気にしてないから」
ああ、相変わらず心が広い。
結構怒られるようなことやったと思うんだけど。
それでも笑って許してくれるなんて、やっぱり良い人だな。

「お詫びに私のパンティあげます」
「遠慮しておくよ」

１７３話　安全などない

「もしもし？」
『あ、あきつ丸！貴様！』
「おや、陸の将校殿でありますか。何か御用でも？」
『ふざけるなよ貴様！再三の通告を無視しおって！直ぐに帰還しろ!!命令だ!!』
　今更になって何を。ま、大方、最早大本営ですら迂闊に手を出せない程に強大になった黒井鎮守府の戦力を削ぎたいのでありましょうな。
「ハッ？一向に聞こえませぬが?!」
『き、貴様!!戻って来いと言っておるのだ!!命令だぞ!!』
「断固としてお断り致します」
『何だと?!貴様の所属は陸だろうが!!裏切るつもりか?!』
　裏切るのか、という台詞は、多少でも恩を売ってから言うべきでありますな。ただ建造して、出来損ないと蔑み、蔑ろにしていた相手によくもまあ。
「陸も海も関係ないであります。ただ、自分の仕える相手は提督殿だけだと言う話でありますよ。なんなら辞表でも書くでありましょうか？」
『……ただで済むと思うなよ!!』
　ふん、つまらない捨て台詞でありますな。
「……あきつ丸」
「……おや、長門殿」
　見られていた、でありますか。
「これはこれは、お恥ずかしいところを」
「いや……。大丈夫なのか？」
「……それは、どちらの意味でありますかな」
　この自分の身を案じてなのか、鎮守府の敵を増やしたことについてなのか……。
「全く……、今更多少敵が増えたところで変わりはあるまい。お前の

身を案じてのことだ」
「それはそれは。ありがたい話でありますな。……大丈夫でありますよ。陸に未練などないでありますし、手出しもできないでありましょうし」
鎮守府の居心地が良過ぎて、陸に帰る気がなくなったでありますよ。
それに、
「……もし、陸が実力行使をするならば、自分が一槍馳走に参るであります」
もしも、陸が牙を剥くならば、このあきつ丸が責任を持って皆殺しにするであります。
「確かに、陸だろうが大本営だろうが、直接うちに攻め込んでくるなら、逆に叩き潰してやるつもりだがな」
そう言って涼しげに笑う長門殿。いやあ、これは惚れてしまいそうでありますな。
「にしても、提督殿はどう考えているでありますかねえ」
いい加減に大本営を取り潰しても良いとは思うのでありますが……。
「少なくとも、武力での制圧は望んではいないだろう」
「何故でしょうな」
殴りこむのが一番手っ取り早いでありますよ。
「提督の言葉だが……、『殺しはしたくないし、させたくない』だそうだ」
「今更、でありましょう。自分達が艦だったあの頃、何人殺した事やら」
「それでも、だ。あの人は殺し合いは好まない。……安心しろ。分かっているとは思うが、水面下では動いているんだよ、私達も」
「大本営のスキャンダル、不正の証拠……、武力以外で殺す方法でありますな？」
敵でも殺すな、との主命。ならば、敵に死んでもらえばいい。社会的に。

「ああ、そうだ。大本営は潰すのではなく操る。……我々の意のままに動く操り人形になってもらうのだ。今はその為の糸を括り付けている最中でな」
またも、涼しげな笑みを見せる長門殿。しかしそこには、どこか恐ろしいものがあった。
成る程、戦略となると中々の切れ者になるものでありますな、長門殿は。言っては悪いが、普段はあれなのに。
「徐々に根回しもしている。大本営の能無し共が気付く頃には、我々は海を牛耳っているだろうな」
「それはそれは、恐ろしい話でありますなぁ」
「何、提督は世界が欲しいと言ったからな。献上するのが忠臣というものだろう？」
「その通りでありますな」
世界征服、か。このままの調子で大本営の実権を握り、各国に恩を売りつければ、あるいは……。

「さて、謀はお任せするとして、自分は鍛錬でもするでありますか」
生憎、戦うことしかできないでありますからな、自分は。策略は他の艦娘に任せて、自分のできることをやるであります。
尤も、鍛錬は趣味でもあるが故、好き勝手に振舞っているだけとも言えるでありますが。
さあて、今日は誰に手合わせを申し込むでありましょうか……。
「あ、あきつ丸さん」
「おや、村雨殿」
白露型……。
成る程、良いでありますなぁ。
今日は白露型に挑んでみるでありますか。
「何？また道場破り？」
「む、道場破りとは何でありますかな？」
「鎮守府中の噂だよ？あきつ丸さんが鍛錬と称して、色んな艦娘に手合わせを申し込むの」

「……」
　ええと、それは……、初耳でありますな。迷惑に思われていたのでありましょうか……。
「あ、でも、誰も困ってないから安心して。どうせ皆んな暇してるし。何なら、今、私が相手になろうかしら？」
「よろしいのでありますか？」
　それは、願ってもない話であります。白露型……、相手にとって不足無し。手合わせできるとなると喜ばしい。
「うん、良い、よッ!!」
　すると、村雨殿は了承の言葉を。そしてその笑顔のまま一閃。即座に呼び出した異形の鋸剣で斬りつけてくる。
「ふ、うっ」
　息を吐く。同時に身を引く。……何たる豪剣か！これが駆逐艦の力か！白露型の技か！
「嗚呼、良いでありますなぁ……。相当の手練れ……、深海棲艦のつまらない虫けら共とは違う武技！」
　思わず、胎が熱くなる。自分は今、興奮している。
　良い……。堪らなく、良い。
　三度の飯よりいくさが好きなものでありましてな、自分は。
「あ、やっぱり避けちゃうか。まあ、このくらいは当然かー。じゃあ、ペース上げるね？」
　そして、村雨殿の獣の如き踏み込み！
　疾い!!見切りが追いつかないでありますな！
「だがまだ甘い！」
　鋸剣を刀で受ける！
「そっちこそ」
　な、剣が伸びて、曲がった?!これは……、蛇腹剣だったでありますか！これが白露型の仕掛け武器!!
　刀を捨て、転がるように後方へ飛ぶ。
「獣肉断ち……、白露型の仕掛け武器よ」
「成る程……、刀では無理、でありますな。朱槍を抜かせて頂く」

自分、一番得意なのは槍でありまして。
「あ！あきつ丸さんの槍だ！見たかったんだよね！」
はしゃぐ村雨殿。まあ、多少は有名でありましょうな、自分の槍も。
「本気のあきつ丸さんとやり合えるなんて嬉しいな！行くよ!!」
「いや、申し訳ないでありますが……」
鋸剣を巧みに操る村雨殿。素晴らしい技でありますな。だが……、
「……このあきつ丸、朱槍を抜いて負けたことは唯の一度もないであります！」
槍を抜かせた時点で、勝負は決まったであります……！
弾く、弾く、弾く、弾く……！強撃なれど朱槍ならば凌げる！そして懐に入る！
「しまっ……！」
そして、間合いの長い蛇腹剣が故に、大きく弾けば隙ができる！
「はああ!!!」
石突で突く……！

「むー、負けちゃった」
「いやいや、良い勝負でありますよ」
本当に良い勝負ができたであります。満足でありますな。
「あんな大きな槍を小枝みたいに振り回すんだもん、反則だよ。……でも、あきつ丸さん、まだまだ余力あったよね？」
「確かに、余力はあったであります。本気ではなかったでありますよ。されど、全力ではあった」
「あーあ、私もまだまだかー。時雨みたいに強くなりたいなー」
時雨殿でありますか。鎮守府でも屈指の実力だと聞く……。
「時雨殿はどちらに？」
「時雨？時雨はなんか、邪神がどうこうとか言って裏山に行ったよ。……もしかして、私に勝ったから、次は時雨ってこと？」
「それは、まあ……」
「うーん、儀式の邪魔をすると怒られるから、後でね」
儀式……。そう言えば、鎮守府の裏山だけ闇に包まれているであり

ますな。いつものことなのでスルーしていたでありますが。
「多分、呼んだのはニャルラトホテプだと思う。叡智と神秘が必要だから。宇宙は空にあるからね！でも、深海にも闇夜は広がっているから！」
いや、知らないでありますが。
「あれ？分かんないかな？えっとね、私の見立てでは、宇宙は深海にあったんだよね。でも、宇宙は空にあるのを見たから、間違ってたって思ったの。けれど深海には夜空と海綿と髄液があって？？？？の残滓だったの。だから？？？？の？？？？で？？？？」
やはり白露型。物？？？？狂い？？？？なのでありましょうか、意味の分からない言葉を……。賢過ぎると言う？？？？のも問題なのでありますな。
「で、では、後ほど……」
「うん、また後で！」

怖いでありますなー。
狂うほどに知識を得て何を望むのか……。
まあ、自分には関係のない話でありますな。では、儀式とやらが終わるまで、散歩でもするでありますか。
……にしても、それなりの強さで打ち込んだ筈なのでありますが。鳩尾を石突で突いたと言うのに、苦しい顔一つ見せないでありますか……。やはり、強い。深海棲艦をちまちま殺すよりも、仲間内で手合わせする方が楽しいとはこれ如何に。

１７４話　アブダクション（物理）

……「よーし、こんなもんか。建造開始ィ!!」
……「提督!!それどころじゃありません!!なんか蟹みたいな化け物が鎮守府に攻めて来ました!!!千体くらいいます!!!」
……「え、あ、あー、ミ＝ゴだな。多分、白露型の儀式に釣られて現れたんだろ。待ってろ、今俺が」
……「ああ、窓に！窓に!!」
……「任せろ！チャアアアジ!!イン!!行っけー!!俺のトムキャットレッドビート、駄目でしたあああ!!!」
……「て、提督ーーー!!!」
……「き、緊急放送！緊急放送!!提督が蟹みたいな化け物に攫われました!!即座にぶっ殺して提督を奪還して下さいッ!!!」
……「何……、だと……？」
……「まるで意味が分からんぞ！」
……「と、兎に角殺すのよ！黒井鎮守府に喧嘩を売る奴は化け物だろうと何だろうと皆殺しよ!!!全員突撃ーーー!!!」

「……ん」
……どこクマ？
ここは、どこクマ……？
鉄と油の匂い。何時か見た工廠に近い風景。
誰も、いない……？
「……誰かー、いないクマー？」
「……ん、いるにゃ」
あ、隣から声が……。
「……あ、多摩？」
「あ、球磨。久しぶりにゃ」
「久しぶりクマー！また会えるなんて嬉しいクマ！……ところで、ここはどこクマ？」

「知らんにゃ」
「知らんて……」
　んー、お手上げクマ？……自分達が艦娘で、深海棲艦と戦うことは何となく分かってはいるけど……。
「ここはどこで、誰に呼び出されたクマ……？」
　今は何時クマ？戦争はどうなったクマ？
「……取り敢えず、探すにゃ。多摩達を呼び出した提督が、必ずいる筈にゃ」
「分かったクマ……」
　そうだ。提督……、球磨達を呼び出した提督がどこかにいる筈クマ。艦娘になったけど、球磨達は艦。提督が必要クマ。
　……ん？
「待つクマ、まだドックに誰かいるクマ」
「にゃ？」
「こんにちは、高雄です……、って、あら？」
「鳥海、参りました……、え？」
「名前は出雲ま、じゃなかった、飛鷹です。航空母艦よ！よろし……、く？」
「軽空母、祥鳳です……、あら？」
「「「……提督（司令官さん）は、何処に？」」」
　……艦娘クマ。

「……成る程、提督がここにいない、と？」
　重巡の高雄がそう言った。
「見た感じいないクマ。だから、探すクマ」
「……勝手に動き回って良いんですか？」
　祥鳳が心配そうに言う。
「でも、ここにいても何も始まらないクマ」
「席を外しているだけかも……」
「む、確かにその可能性もあるクマ」
　どうするクマ……？

「窓」
「いきなり何クマ、多摩」
「窓が、外側から割られてるにゃ。……何かあったのかもしれないにゃあ」
「……！」
確かに、窓ガラスの破片が屋内に散らばってるクマ。……何者かがここに侵入した？
「も、もしかして、強盗?!もしくは誘拐?!」
悲鳴を上げる鳥海。こうしちゃいられないクマ！
「皆んな、提督を探すクマ！」

「いない！」
「こっちも！」
「誰もいない……！」
人っ子ひとりいない、もぬけの殻クマ！
「どう言うことクマ?!」
明らかに人がいた痕跡はあるのに!!
「くっ、誰か！誰かいないクマ?!」
艦娘もいない？元からいないクマ？違う、艤装がそこら辺に転がってる。それとも同タイミングで提督と一緒に攫われたクマ？いや、それはおかしい。こんなに大きな施設にいる人員全てが同時にいなくなる筈はないクマ。
「テレビも点けっぱなし、食べ物も出しっぱなし……、何か不測の事態が起きて、ここにいる人員が皆んな出て行ったとか？」
神妙そうに呟く飛鷹。
「ねえ、不味いわよね、これ。ここがもし鎮守府なら、何者かに襲撃されてるって事になるもの」
鎮守府……、その可能性は十分にあるクマ。艦娘は鎮守府で建造、運用されるクマ。だから、ここも鎮守府だと考えて良いと思うクマ。
そう仮定した上で考えると、これは、襲撃クマ……！
でも、窓から見える水平線には、深海棲艦の姿はないクマ。

……一体何が？
「兎に角、この建物とその周りを調べるクマ」
今はそれしか出来ないクマ……。
それに、時間が経てば誰か帰ってくるかもしれないクマ。

そして、外に出たその時。
お腹の底に響くような爆発音が聞こえてきたクマ……！
「爆発?!」
「爆撃ッ?!!」
「違う、遠い!!」
キョロキョロと辺りを見回して、見つけたのは黒煙を上げる裏山。
「あそこクマ！」
「……裏山？」
「何で山から爆発音が？」
「しっ、声が聞こえるクマ……」
……「提督を返せ!!!」
……「黒井鎮守府を舐めるなよ、化け物!!!」
……「死ねーーー!!!!」
……何かと争ってるクマ？提督を返せって……。
「……つまり、何者かに襲撃されて、提督が攫われて、それを追いかけて行ったって事かしら？」
「飛鷹の言う通りにゃ。少なくとも、誰かがあそこで戦ってるにゃ」
どうするクマ……？もしも別件なら首を突っ込むべきじゃないし、そうじゃなくても陸の上での戦闘。艦娘になったばかりで、身体の動かし方にも慣れてない球磨達に何が出来るクマ？
「……行くクマ？」
「……行くしか無いんじゃないかにゃ」
うう、行くしか無いか……。
嫌な予感がするクマ……。
「あっはっはゴメンゴメン捕まったわ。多分このままユゴスまで連れ

てかれそう。あとよろしく」
「諦めないで下さい提督!!クソ、死ね甲殻類!!!」
「いやあ、宇宙旅行もたまには良いもんだよ?」
ど、どうなってる、クマ……?
「ね、ねえ、あ、あれ、深海棲艦かしら……?」
「ヒッ……」
「あ、あはは……」
「な、何これ……」
震える飛鷹。倒れる祥鳳。死んだ目で笑う高雄と鳥海。
「い、いや、何か別物じゃないクマ……?」
「別物って何にゃ!!」
『『『ギ、ギ、ギ、ギギギギギギギギギギギギギギ』』』
甲殻類……、蟹や海老みたいな身体に、蝙蝠の羽、多数の鉤爪がついた足を持つ化け物……。
そんな化け物が、提督と呼ばれる男の人を捕らえて、明らかに宇宙船と思われる何かに押し込もうとしているクマ。
「……え?これ、助けた方が良いクマ?」
訳わからんクマ。発狂しそうクマ。何であんな悍ましい化け物がこの世に存在してるクマ?そもそも何で提督らしき人は攫われそうになってるクマ?
「……ん?おお!新しい艦娘かな?初めまして、俺はこの黒井鎮守府の提督で」
「い、いや!攫われそうになってるクマ?!何で自己紹介してきてるクマ?!!」
「アイサツは大事だ。古事記にもそう書いてある」
「い、良いから早く逃げるクマ!!」
兎に角助けるクマ!
「あ、待って、今引っ張ったら……」
ん?今ブチって……。
「あーあ、取れちゃった」

「……あ……!!」
腕が……!!お腹も……!!
「ち、違っ、そ、そんなつもりじゃ」
「良いよ良いよ、さっきから取れそうになってたし」
そ、そんな、球磨は、球磨は……!この人を助けようと思って……!
「ああ^〜、出血で怠いんじゃ〜」
血が、あんなに……!あれじゃもう、助からない……!!
「提督!!ふざけてないで逃げて下さい!!!」
「後でいい?ちょっと攫われたい気分」
「今すぐ逃げて下さァい!!!!!」
何を言って……!もうあれじゃ……!!片腕は取れて、内臓が溢れて、身体中に切り傷があって……!!
「分かった分かった、逃げるよ。新入りの子達も来ちゃったみたいだしな」
「う、動いたクマ……?!」
た、立った……?!生きているのが不思議なくらいの怪我をしているのに?!
「ん?何やってるの?君らも早く逃げて……、あれ、一人倒れてるじゃん。担いで行こう」
「余裕ッー!!!」
「ほら、走るよー」
「足折れてるのに何で走れるにゃあ!!化け物より化け物にゃあ!!!」
えっ、えっ、走ってる?足折れて、あれ?内臓、あれ?
「あ、腕ねえや。ちょっと腕返して」
「あ、はい」
「……よし、くっ付いた。じゃあ倒れた子を担いで、と。さ、帰ろうか」
く、くっ付いた……?!
「殿は……、ミカァーーー!!!!!」
「はい」

「サーチアンドデストロイ！サーチアンドデストロイだ!!」
「了解しました」
メイスを持った艦娘が降ってきた?!
もう訳分からないクマ!!
「ほら、走って。建造されたばかりの艦娘にミ＝ゴはちょっと荷が重いからな。逃げような」
「ク、クマ……」
「にゃあ……」
訳が分からないけど……、従うべきクマ。多分、この人が提督クマ。
実際に、艦娘になりたてのこの身体じゃ、陸での戦闘なんて無理クマ。しかも相手は得体の知れない化け物。なら、球磨達に出来ることは、足手まといにならないように退くこと。
殿は優秀そうな他の艦娘がやるみたいクマ。
「……貴方が提督クマ？」
「ああ、そうだよ。ごめんね、挨拶が遅れて」
でも、そんなことよりも、一つだけ聞いておきたいことがあるクマ……。
「その、一つだけ、質問しても良いクマ……？」
「良いよ」
「提督は、人間クマ……？」
「概ねは」
「概ね?!!」
……こうして、球磨達は、（自称）人間の提督の指揮下に入ったクマ……。
……やっぱり、どう考えても、深海棲艦よりも何よりも、提督が化け物クマ。
球磨達の明日はどっちクマ……？

１７５話　変態のすくつ

おはようございます、大淀です。
昨日は謎の化け物による襲撃がありましたが、だからと言ってこの黒井鎮守府に変わりはありません。
今日もいつもと変わらない平常運転でやっていきたいと思います。
早朝。
業務の開始はまだですが、愛する提督の顔を見たいが為、提督の部屋までやってまいりました。
さて、提督、おはようございます。怪我の具合はどうですか？
「ああ、大丈夫だ」
脊髄損傷と内臓破裂の割に、平気そうですね。
「その程度じゃ何ともないよ」
んー、今日もイケメンですね、提督。
「よく言われる」
結婚して下さい。
「してるでしょ」
じゃあ子作りしましょう。
「ははは、遠慮しとく」
チッ。
流れで行けるかと思ったんですが。
「行けねーですよ」
仕方ありませんね。
「よし、飯作るから俺は行くね」
あ、行ってらっしゃい。

朝です。
朝食の時間です。
「「「おかわり!!!」」」
「はいよー」
大飯食らいの戦艦空母は、朝から山ほど食べます。遠慮という言葉

を知らないのでしょうか。
調理担当の提督は、六人くらいに分身して料理をしています。
最初はびっくりしましたが、今は、なんかもう、慣れました。
因みに、鳳翔さん達も四人くらいに分身して調理しています。
分身できないと厨房に立てないルールでもあるんですかね。
「大淀はおかわりいる？」
あ、いえ、朝からそんなに食べられませんよ。
「「おかわり！」」
ん？
珍しい、鈴谷さんと熊野さんですか。
「いやー、改二になってからと言うものの、お腹が空いて……」
「でも、スタイルは維持できていますわ」
あー、そう言えば最近、改二になったんだとか。二人とも背が伸びて、スタイルも……。
「でも、いざ大きくなったらなったで、重いわねー」
……くっ。
艦娘はあまり成長しません。霊的な要素があるから、殆ど歳をとらないんです。
ですから、背はもちろん、胸も大きくなりません。
しかし、改造は違います。
改造された艦娘は、何故かは知りませんが、少し成長するのです。
実際に、高校一年生ほどだった鈴谷さんと熊野さんは、高校三年生くらいに成長しています。
そしてその胸も……!!
畜生、私の改二はまだなのですか?!このままではまた提督に中高生扱いされてしまいます!!

午前です。
工廠に乗り込みます。
明石さん！私も改二になりたいです！
「えっ、何ですか急に」

改二になってナイスバディになって、提督を誘惑するんですよ！
「あ、あー。個人差もありますよ？龍驤さんなんて改二になっても全然成長しませんでしたし」
むむむ。
「何がむむむですか」
はぁ、分かりましたよ、諦めますよ。
「あら、あっさり」
よく考えたら、色気程度でどうにかなる人じゃありませんし。
誘惑したくらいでどうにかなるなら、苦労しないですよ。
「ですよねぇ。どう言い寄ってもいつの間にか主導権を握られて、提督のペースになっちゃいますよね」
そうなんです。この前なんて全裸で抱きついてみたんですが、気が付いたら駅前でデートすることになっていました。楽しかったです。
「大淀さんって控え目に言ってキチガイですよね」
失礼な。私はまともですよ。

昼です。
午前中に書類仕事をパパッと終わらせ、昼食の時間。
あ、私はポークソテーにしました。
美味しいです。
「ふー、終わった……。ここの訓練、厳し過ぎるクマ……」
新入りの一人、球磨さんが食堂に入って来ました。それに気付いた提督は……、
「おお、お帰り球磨」
「ただいまクマ」
球磨さんの手を取り、席に座らせました。
その時です。
「ん？球磨、手を怪我してるな。……はむ」
あ。
「む、舐めるなクマ」
な、なんて羨ましいことをッ!!

「ごめん、嫌だった？」
「……嫌ではないクマ」
ハァーーー!!!
「うおっ?!!どうした大淀?!何でナイフで自傷行為を?!!」
提督、私も怪我しちゃいました!!
「え？あ、舐めろって？分かったから、分かったから自傷行為はやめて！」
「フンッ!!……提督ー、私も怪我しちゃいマシターー！」
「今自分で折ったよね、金剛？」
「私も怪我したって事にしておいて、舐めてくれないかしら」
「何言ってんの陸奥」
くっ、パクリです！悪質なパクリですよ！
そこまでして提督に舐めて欲しいんですか?!
「君がそれ言う？」

午後です。
ふへへ、提督に舐めてもらいました。
気持ち良かったです。
あれですね、血液という自分の一部が、愛する人の身体に吸収される感覚。最高です。
今度は経血入りの手料理とかプレゼントしましょうか。提督なら毒入りでも平気な顔して食べますし。
あ、安心して下さい。提督に舐めてもらったところは私が舐めました。
はい、提督の唾液美味しかったです。
「うわっ、何一人で笑ってるんですか大淀さん」
「うわっ」って何ですか、鹿島さん。
「いや、指舐めながらニヤニヤ笑ってる人を見たら、誰でもうわって言うと思いますよ」
違いますよ、これは。提督の唾液を摂取していただけです。
「え？舐めてもらったんですか？」

はい！実は……。
「チッ、その場に居合わせたら私も舐めてもらったものを……」
ほら、何もおかしくない。
キチガイ扱いはやめて下さいよ！大体、鹿島さんも中々の変態じゃないですか!!
「は、はい？どの辺がですか？」
提督を誘惑して、ヒモにしようとしてるじゃないですか！
「え?!何かおかしいんですか?!」
大分歪んだ性癖かと。
「い、いえいえ！私はただ、提督に甘えて欲しいだけですよ！」
何言ってるんですか！提督にＤＶされながらめちゃくちゃにして欲しいとか常日頃から言ってるじゃないですか！
「なっ、ちょ、ちょっとマゾなだけです！首を絞めながら犯して欲しいくらいにしか思ってませんー!!」
やっぱり変態じゃないですか……！

夕方です。
やはりこの鎮守府は変態の巣窟ですね。恐ろしい……。
私は清純派なので、あんな変態と一緒にされたら困ります。
さて、提督がいない内に、提督の部屋からパンツを頂戴して来ましょうか。
パンツパンツー、と。
あ！
「あ、大淀さん」
古鷹さん！
何故ここに？
「提督のパンツを借りに来たんです」
何だ、私と同じ用事ですか。
「うーん、大淀さんとはちょっと違いますね。私はパンツを洗って返すので」
え？提督のパンツですよ？食べないんですか？

「いえ、私は自分の洗濯物と一緒に洗って返却しますね。そうすると、私の匂いと提督の匂いが混ざり合って……」
ははーん、成る程、上級者ですね？
「マーキングですよ、マーキング」
変態にも色々な種類があるんですねー。
「え？別に変態ではないですよ？」
変態は皆んなそう言うんです。

夜です。
晩ご飯を食べ終わって、後は入浴ですかね。
監視カメラを見たところ、ちょうど今の時間、提督がお風呂に入ろうとしてますから、混浴しましょう。
提督は遠慮して、一人でドラム缶風呂に入ろうとしますからね。
駄目ですよ、私と一緒にちゃんとしたお風呂に入りましょうねー。
……にしても、人が多いですね。
提督がお風呂に入ろうとしたのを見計らって、同じ時間に入浴しようとする艦娘が多いこと多いこと……。
「はーい、提督ー??身体洗いますねー??」
「髪洗いますよー??」
「待ってこれ、ソープランドじゃねーんだよ？あっ、ちょっ、身体擦り付けないの！」
くっ、先を越されましたか。
既に提督は、多数の艦娘に囲まれて、全身丸洗いされています。
「チッ、出遅れたわ」
あ、足柄さん。
「あら、大淀ちゃん。貴女も？」
はい、駄目でした。
「まあ、そんなこともあるわよ。諦めましょう。また次があるわ」
はぁ……。
「あんまり纏わり付いても、うざったいだろうし。一歩引くのも大事ね」

そうですね。
仕方ないです。
諦めて提督を視姦しますか。

夜中です。
今、提督は晩酌でもしている頃でしょうか。
私はお酒が得意ではありませんから、一緒に飲む訳にもいきません。
もしも一緒に飲めば、私は早々に酔い潰れて、提督に介抱されるでしょう。
それはそれで美味しい話なんですけど、提督に迷惑はかけたくないですし。
と、なると……。
眠くなるまで、提督の日記でも読みますか。
まあ、勉強ですね。
提督のことは、愛していると同時に尊敬もしています。私のことを救ってくれた、正に神様ですから。
少しでも提督に近づく為、その技を、魔法を、術を身に付けるんです。
ドラグスレイブ……、これはこの世界では使えない。
フォトンランサー……、リンカーコアという器官がない。
轟音の波動……、マナを使い切ると生命力を失う。
ソウルの結晶槍……、危険なソウルの業。
アザトースの呪詛……、邪悪な精神破壊。
どれも酷くピーキー。下手をすれば使用者の命が危ないものばかり。提督は自分の命を何だと思っているんでしょうか。
よく魔法を使っているところを目にしますが、アレは毎回、自分の命をちり紙で鼻をかむくらいの気安さで懸けていますからね。まともな精神構造じゃありません。
うーん、死に近付くことによって見えてくるものがあるんでしょうか。

私にはとても出来ませんね。
でも、少しでも提督に近づく為なら、命くらい懸けても良いでしょう。
少しづつ、少しづつ……。
邪法を極め、魔技を極め、愛する提督に近づくんです。
その結果、私は、艦娘でも人でもない何かになるでしょう。
でも、後悔はありません。
提督と一緒ですから。

ふう、そろそろ眠くなってきました。
提督のパンツを枕カバーにして、と。
お休みなさい、提督。
枕元の提督の写真にキスをして、眠る。
私の一日はこれで終わりです。
願わくば明日も、黒井鎮守府にいつもと変わらない明日が来ますように……。

１７６話　ガサ入れ

季節は初夏。
段々暖かくなって来た今日この頃。
私は、噂の黒井鎮守府の調査に来た。
もちろんそれは、マスコミのような野次馬根性ではなく、正当な理由を持って、職務としてのことだ。
ここに来る前の上司の言葉を思い出す。
……『上層部は腐敗している！日本の海がここまで平和になったのは一重に、黒井鎮守府のお陰だろう！』
……そうだ、その通りなのだ。
大本営の上層部は、腐敗している……。
深海棲艦の襲撃以前から、何かと国家存亡の危機に陥ることが多かった日本は、かつての海軍、空軍、陸軍を再結成し、国防の要とした。
だがしかし、それも名ばかりで。
所詮は平和ボケした日本人と言うべきか、再編された軍隊は瞬く間に腐敗した。
有能な総理の尽力も虚しく、大本営はただの、癒着や天下りの温床となったのだ。
そんな大本営にとって、流星の如く現れ、異例の速さで海域を開放していき、ついに日本海を奪還した黒井鎮守府は、邪魔な存在だった。
よって、黒井鎮守府の功績は改竄され、秘匿され、評価されることはなかった……。
しかし、そんなことは許されて良いはずがない！
幸いにも私は上司に恵まれていた。私の上司は、黒井鎮守府の待遇を変えようと考えているのだ。
私自身も、今現在の黒井鎮守府の評価はおかしいと思っている。これを機に、黒井鎮守府の功績を再評価し、しかるべき地位と名誉を与えるべきだ！
そう考えつつ、私は、件の黒井鎮守府へと足を運ぶのであった……。

「これは……、入って良いのだろうか」
黒井鎮守府に到着してまず気付いたのは、憲兵がいないと言うことだ。
大きな門が目についたが、普通はいるはずの見張りが一切いないのだ。
「鍵も開いている……」
一体どうなっているんだ？
兎に角、入ってみよう。
さて……、門から本棟まで距離があるな。
だが少なくとも、見える範囲にはある。行くか。

そして、しばらく歩ったところで。
カラカラと、鉄棒か何かを引き摺る音が、私の真後ろから聞こえて来た。
「何だ？」
振り返ると、そこには。
「ひっ、あ?!」
片手に肉片のこびり付いた奇形の鉈を持ち、もう片方の手に、恐らくは深海棲艦であろう、いや、深海棲艦だったであろうものの生首をぶら下げる、銀髪の少女がいた。
美しい銀の髪を返り血で赤く染めたその姿は、筆舌し難い恐ろしさで、私には、地獄からの使者のように見える。
何より恐ろしいのはその瞳だ。
夢現の中にいるようでいながらも、確かな智慧を秘めたその瞳に見つめられると、頭蓋を割られ、その中身を見られているような錯覚に陥る。
「な、なん、いや、あ……」
私が、恐ろしさのあまり言葉に詰まっていると、目の前の少女は、薄く笑って声をかけてきた。
「侵入者かしら？」

……はい、などといったら、その瞬間に、少女の手にある鉈で首を斬り落とされる。
そう思った私は、恐怖を押し殺し、必死に声を上げた。
「わっ、私は憲兵だ！黒井鎮守府の待遇を改善するため、視察に来た！」
すると、銀髪の少女は、目を細め、私の目を見つめてきた。
「……本当みたいね。取り敢えず、提督に会ってもらいましょう」
……目を見れば分かる、と言うやつなのだろうか。信用は得たらしい。
「此方へ。提督に連絡をしました」
連絡をするような仕草は見られなかったが、取り敢えず、この少女の指示に従うことにした。詳しく聞く勇気が持てなかったと言うのもあるが。
……そして私は、先導する少女の後ろにくっ付いて歩き、この鎮守府の提督の元へ案内してもらった。
「提督、お客さんよ」
提督、と呼ばれた男は、事前に見た書類の通りの、白髪の大男だ。
「ありがと、海風。あ、こんにちは」
海風と呼ばれた銀髪の少女は、提督と呼ばれた大男に首を見せると、一礼してそのまま去っていった。
「は、あ、こ、こんにちは？」
そして大男は、軽く会釈して挨拶をすると、こんなことを言った。
「視察ですか？しなくて良いですよ？」
は？
「い、いや、そう言う訳にも行きませんよ！拒否権はありません！」
「いやあ、うち、見られたら困るとこで一杯ですからねえ。賄賂とか通じます？」
な、何なんだこの男は？
ヘラヘラ笑いやがって。
こんな男が、日本最大の鎮守府の主人なのか？
「そう言ったものは一切受け取りません！」

「あ、そう?……で、何が見たいって?」
「艦娘の管理状態と、戦果ですね」
「あー、はいはい。じゃあ取り敢えず、俺について来て下さいよ。今日は元々、鎮守府を散歩するつもりだったし、丁度良いや」
いやいや、どう言うことだ。
提督とあろうものが、平日の昼間に鎮守府を散歩するつもりってどう言うことなんだ。
提督と言えば、執務室で書類仕事をしているものだろうに。
「んじゃあ、こっちから行きますか」
「あ、ちょっと!」
くっ、マイペースだこいつ……。
廊下を歩いて、二階に上がって行った。クソ、着いて行ってみるしかないか。
ん?いや、折角提督が目の前にいる訳だし、直接聞いてみるのも良いか?
「では早速、艦娘の管理状態についてですが」
「ん」
「え?」
「こんなん」
階段を上ったその先は、大部屋だった。
「んー、プリン美味しい!」
「萩、六巻取ってー」
「はい。……嵐、その漫画面白い?」
こ、これは……。
「……艦娘ですか?」
「そうだね」
な、の、野放し?
「い、いや、これは、不味いでしょう?!艦娘ですよ?!人間なんて単純な腕力で縊り殺せるんですからね?!」
あり得ない!
艦娘は人の形をした兵器だ!

それを、こんなに自由にしておくか普通?!
危機管理って言葉を知らないのか?!
「いやいや、うちの子はそんなことしませんよー」
「ふ、ふざけないでいただきたい！」
「ふざけてねーよ。確かに、艦娘は人を殺せるだけの力があるけど、それと実際に殺すかどうかは別の問題だろ」
り、理屈の上ではそうだが……！
だからと言って、こんな杜撰な管理をするものか?!
「確かに見た目は人間ですが、艦娘は人ではありません！裏切られる可能性も考慮して、しっかりとした管理をすべきでしょう?!」
「まあ、あれだよね。裏切られたら俺がそこまでの男だったって話で」
「そ、それは貴方の覚悟の話でしょう！もしもこれだけの艦娘が反旗を翻せば、どれだけの被害が出ると思っているのですか?!」
「人を疑って生きるより、信じて裏切られる方がマシだ。大分、大分マシだ」
「だから、艦娘は人では……！」
「人間だよ」
「はい?!」
「心があるんだ、人間と変わらないだろう」
はぁ……。
「もう良いです。ここで、人間とは何かについての議論をするつもりはありません。ただ、この事は、しっかりと報告させてもらいます！」
仕方ない。
これは本部に持ち帰って、厳正に対処しよう。
「好きにしなよ。……お次は戦果だったか？資料室は上だ」

資料室……。
もう一階階段を上った先、会議室のすぐ隣に資料室があった。
「ここが資料室だ、好きに見て良いですよ」
では、言われた通りに資料を……。
『時雨：週間撃破数１０００体達成』

『長門：量産型レ級エリート通算１００体撃破』
『木曾：量産型姫クラス通算１００体撃破』
「……馬鹿な!!」
「えっ何が？」
あり得ない！
こんな馬鹿な記録があるか!!
「何ですかこの記録！」
「何って……、戦績だけど」
「こんな戦績がありますか！」
週に千体？レ級や姫クラスを百体？あり得ない、あり得るはずがない！
週に千体なんて、並みの鎮守府一つ分の戦果だ！ましてやレ級や姫クラスなんて、鎮守府一つが総力を挙げてやっと一体倒せるかどうかなんだぞ!!
「うち、強いから」
「改竄するにしても、現実的な値を書くべきでしょうに！」
「マジだって」
ぐ、しかし、黒井鎮守府の戦力が強大なのは事実。強ち間違いでもないのか……？
いやしかし、それにしたってこの記録はおかしい。
どう考えても、こんなに沢山は撃破できないだろう。週に百体の間違いではないのだろうか。
「本当の記録は無いのですか？」
「いや、だからさ、本当も何も、それが本物の戦果だって」
「冗談はやめていただきたい。いかに黒井鎮守府が優れているとは言え、ここまでの戦果は出せないでしょう」
「うちには出来るんだよ」
「くっ、何を馬鹿な。記録の改竄は大罪ですよ！この件についても厳正に対処させていただきますからね！」
「はいはい、勝手にしろよ」

戦力の私物化、杜撰な管理、記録の改竄……。黒井鎮守府、まともじゃない！

「帰らせていただきます！追って罰を通達しますからね!!」

「あ、待てよ」

私は、提督の制止を振り切り、階段を下りていった。

艦娘が野放しになっている危険な空間から離れたい気持ちももちろんあったが、それよりも、不正を正したいという義憤に駆られていたのだ。

しかし、建物を出たところで、私の足は止まった。

いや、止められた。

大きな破砕音と共に、目の前が爆ぜたからだ。

「な！」

目の前には、破砕音の原因、奇妙な形の金槌があった。

「お帰りかい、お客さン」

艦娘だ……！

しかも、最初に会った、銀髪の少女と同じ目付きをしている！

「何を……」

「話、聞いてたぜ。随分なこと言ってくれるじゃン？お陰で、タダで帰すには行かなくなっちまった」

ま、まさか。

逃げ出そうと辺りを見回すが、その時には、同じ目付きの少女達に囲まれていた。

少女達は皆、薄く笑い、奇特な武器を片手に、私に迫って来たのだ。

「ああ、ああ、安心するといい。僕達は命を奪う事はない。ただ君は忘れるんだ。忘れるだけなんだ」

「今日の記憶を処理するだけっぽい。提督は相変わらず優しいっぽい」

「はーい、記憶処理装置、持って来たわよー」

何だ、一体何なんだ！

私は一体、何をされるんだ?!

「君は、黒井鎮守府の不利益になる。だから……」

すると少女達は、物凄い力で私の身体を固定すると、私の頭に何かを取り付けた！

「待て、何をする気だ、やめろ、やめろ！やめろおおおおおおお!!!」

「大丈夫、すぐに忘れるよ」

１７７話　風紀校正

『うなじが男子の劣情を煽るので、ポニーテールを全面禁止』

……ほーん。

まーたＰＴＡだか何だかが頭のおかしい校則を思い付いたんだな。

確かにうなじはそそるが、禁止はやり過ぎだろう。

そんなん言ったらイスラム教徒並みに露出を禁じないとすぐに欲情ポイントを見つけてしまうぞ。男ってのはそう言うものだ。

それだけじゃない、ケモナーやリョナラー対策も必要になってくるだろう。

そんなんじゃ、ナチスもびっくりの監視社会待った無しだ。

でも……、

「いやっほう！提督のシャツ！くんかくんか！」

「提督の靴下!!」

「パンツもぐもぐ!!」

「……風紀ってのは大事だよなあ」

「「？、提督、何か？」」

いや、何でもないっす。

さて、風紀ガバガバな我が黒井鎮守府。このままでは変態鎮守府と噂されてしまうかもしれない。

そうなっては一巻の終わりだ。ツイッターとかで叩かれて悲しい思いをする。オフ会０人待った無し。

つまり、こう言うことだ。

「メルヘンチェーーーンジ!!!風紀委員!!!」

取り敢えず、学ラン着てトンファー持った。これで咬み殺すとかなんかかっこいいこと言ったら風紀委員なんじゃね？知らんけど。

さ、この調子で破廉恥極まり無い艦娘達をビシバシ注意していくゾ～。

「と、言う訳で島風」

「何？提督？」

一般通過艦娘、といったノリで目の前を通り抜けようとしていた島風の肩を掴む。
「どうしたの？」
小首を傾げて此方を見つめるこの島風の、この、ハイパードスケベエロ艤装。どうにかしなきゃ、いけないんじゃないですかねぇ……。
「何だその格好は！」
「え？艤装だよ？見れば分かるよね？」
面積ガバガバ上着、股下０ｃｍスカート、尋常じゃねぇ紐パン。クッソ平和なＪＡＰＡＮにおいても即ハメボンバーされそうな装備。水龍敬ランドじゃねーんだぞ。
「そんな服で出歩いちゃいけません！破廉恥です破廉恥！」
「もー、分かってるってば。流石に、鎮守府の外ではちゃんとした服を着てるよー」
んあ？あー、じゃあ、いい、のか？いやいや、よくねーよ、よくねーんですよ。
「よくないんだよ！鎮守府内でもちゃんとした服を着て、どうぞ」
「んー、暑いんだけどなあ。でも、提督が言うなら、普通の服着てくるね！」
「ああ、そうしてくれ。今は髪型一つで風紀が云々と言われる時代なんだよ」
と、さっき見たニュースの件について言及する。
「……ふーん」
すると、どうしたことだろうか。
島風は、頭の上のうさ耳黒リボンを解いて、ポニーテールにしてみせたではないか。
「……どう、かな？」
「かわいい（食い気味）」
「そうじゃないの！その、そうじゃなくって……、提督は、あのね、私のポニーテールで……、えっと、エッチな気持ちに、なる……？」
……ここでなりゅうううううう!!!と正直に言い放つのは簡単だ。
しかし、下手したら自分の娘位の年頃の女の子相手に欲情しましたな

どと言ったらどうなる？（社会的に）死ぬぞ？
やっぱりロリコンじゃないか……（憤怒）と思われるかもしれない。が、違うんだ。
例えば幻想郷。
あそこは凄かった。外見年齢が俺の半分位の歳の癖に、何百歳も歳上とかザラで。
そんな子達を口説き口説かれてると、相手の女の子の見た目が子供っぽくても、アプローチされると反応する悲しい身体になってしまっているのだ俺は。
正直、艦娘に手を出してないこと自体を褒めて欲しい。
それに、恋愛という物は難しい。慣れている俺なら、艦娘相手にならら簡単にイニシアチブを握ることが可能だ。しかし、いつひっくり返されるか分からん。
ここは……、そうだな。こうしよう。
「そうだなぁ、そんな風に誘われると……」
「あ……??」
軽く抱きしめて、
「釣られちゃう、かもね」
耳元で囁く。
「えへ、えへへへへへへへ……??」
堕ちたな（確信）。
やっぱり子供ですわ。艦娘なんてちょろいもん。敗北を知りたい。
抱きしめるついでに尻でも撫でとくかァー。
「あん??もー、提督ったらー??」
ｆｏｏ！楽しィ!!!!
「兎に角、なるべくちゃんとした格好をするんだぞー」
「はーい??」
顔を赤くして去って行く島風を見送りながら一息ついた。
その時である！
「青葉、見ちゃいました！」
「アオバワレェ?!!」

気配はしてたが、出て来るとは。
「ポニーテールにすれば、司令官にセクハラして貰える……？」
意味不明だ。
まーた訳の分からんこと言い出したぞー。
「司令官！青葉はポニーテールですよ！」
「いや、ちゃうねん。ほら……、イメチェンして可愛かったから、こう……、なんつーか……」
しどろもどろ。
「じゃあ髪下ろしてみました！」
するり、と髪を下ろす青葉。可愛い。
「可愛い」
「はい！……で、セクハラの方は？」
「えっ？えっ、あっ、じゃあおっぱい揉むわ」
「どうぞ！」
何だこれ。え？何？何だ？これ？
どういう状況？
まあいいや、分からんけど、揉めるもんは揉んでおけ。
「はあん??あっ、ああっ??」
あっ、凄い。鍛えてるから張りと弾力があるわ。あと迸る若さ。そんで色白だな青葉。
「し、司令官、しれいかん??あ、青葉は、もう……??」
はっ、いかんいかん。これ以上はフランス書院。
フランス書院美少女文庫。
流石にフランス書院美少女文庫はヤバイ。
「はい終了」
「え、あ、も、もうちょっとだったのに……！」
何がもうちょっとなのかは秘密だ。
「さ、青葉、俺は行くからな」
「い、何処へ？」
「鎮守府の風紀を守りに」
決意は固い！初志貫徹！今日の俺は一味も二味も違うぜ！今日こ

そはこの鎮守府の風紀を正してみせるッ!!!
「協力してくれ、青葉!!」
「じゃあ私は、イメチェンするとセクハラして貰えるって言いふらして来ます!」
はっはっは、お願いだから話聞いてくんねぇかなー?

はい、と言う訳でー。
「提督さん、どう?リベ、ポニーテールにしてみたの!可愛い?」
グループラインで報告、からの艦娘一斉イメチェンの流れ。つまりはセクハラを強要されてる俺氏。風紀こわれる。
そして、今は通りすがりのちゃおに絡まれてる。
「おー、可愛い可愛い」
「リベ、可愛い?えへへ、やったー!」
そして朗らかに笑うリベは、両手を開いて待機する。
「はい!良いよ!」
……え?何これは。やれってこと?このちゃおにセクハラしろって?
いやいやいやいや。
それは良くない(ミスターモハマド)。
「何のことかな」
とぼけよう。
「リベ的にはお尻とか触って欲しい感じ!」
ガッデム。
「ほら、そう言うのはさ、リベにはまだ早いんじゃないかな」
言いくるめ。
「……何で、そんな事言うの?提督さんはリベに意地悪しないよね!ね!」
はいファンブル。
うーん、この。結局セクハラさせられるのか。もう半ば諦めている。
「分かったよ、分かった!する、するから!」

しかし、しかしだ。
……リベのどこを触ればセクハラした事になるんだ……？
真っ平らなつるぺたロリボディ。どうすれば……？
いや、怯むな俺。俺はこんな所で立ち止まる男じゃねぇ筈だ。俺は、止まらねえからよぉ……！
「よーしじゃあリベの可愛いお尻をナデナデしちゃうぞー！」
「きゃん??提督さんのエッチ～??」
だからよ、止まるんじゃねえぞ……!!

さて、気をとりなおして次だ。
セクハラセクハラ、と。
あ、いや、違う違う。風紀校正だよ馬鹿野郎。
「と言う訳だ。頼むから服を着てくれ、潜水艦の皆んな」
「水着じゃ駄目なの？」
いかんでしょ。
最初に会った時なんて、イメクラかな？って思ったもんよ。旧スクとかヤバイヤバイ。
「そう言えば、髪型を変えればセクハラして貰えるって聞いたのね」
「マジでちか」
「……ほら、提督。はっちゃんの貴重なポニーテールですよ。ほらほら」
「……分かった、セクハラするから。せめてスカート履こう？ね？」
旧スクにセーラー服の上だけ着てるのとか、マジで危ない格好だと思う。そう言う風俗店ですって言われたら納得するレベル。
「分かったわ。スカートを履くわ。だから……」
「はーい！ろーちゃん、スカート履きます！」
「はいオッケー、スカート履いたな。じゃあ俺はこれで」
逃走。
「何よ、司令官……。イムヤのこと、嫌いになった……？」
あ、ヤバイ、泣いてる。
勘弁してくれ、女の子の涙なんて、あらゆる男共通の弱点じゃない

か。
「嫌いになんてならないよ、大丈夫大丈夫」
「本当に？」
「ああ、勿論。じゃあ俺はこれで」
「う、うう、グスッ。やっぱり、司令官は私を嫌いに……」
ああ逃れられない！（カルマ）
「よ、要求は？」
「セクハラ」
ヒェ～。
セクハラしないと泣かれるのか。全く以って意味不明だな！
だがまあ、しゃあねえな、見せてやるか。
風紀を正す為の、正義の鉄槌ってやつをな。
「せいやーーーっ!!!」
「あ、あれ？これ、何だか、身体が暖かくなって……?!き、気持ち良いっ!!!気持ち良いよ!!!あああ!!あへあああああ?????」
いろんな液体でそれはもうびしょびしょに濡れたイムヤが崩れ落ちる。
「なっ?!イ、イムヤに何をしたでち?!」
「房中術の応用だ。触れるついでに気を送り込んだ」
対魔忍が如く感度3，000倍とは言わないが、感度数倍の愛撫だ。せめて痛みを知らずに安らかにイクがよい。
「セクハラを強要するような悪い子には良い薬だろう。さあ、君達もだ……！」
「ふえっ？あああっ!!イ、イク、イクのぉおおおお?????」
「ま、待つでち、ゴーヤは無実で、でちいいい

そう思いたい。

１７８話　風紀校正　卍解

「オッラーン！禁止だ禁止だ！」
「……何やってるのよ、司令官」
　む、叢雲か。
「風紀校正をちょっとな」
「風紀校正？」
　俺は口頭で、この黒井鎮守府の風紀が乱れていること、それを止めるために風紀委員と化したことを伝えた。
「……ふーん」
「ふーんじゃないよこの子は」
「はっ?!一瞬で服が可愛いフリフリのワンピースに……?!」
　そんなスリット、認められません。何ですかその胸のスリットは。授乳スリットですかな？
「よし、これで風紀は守られた」
「……そんなことより！」
　俺が一人で納得していると、叢雲は俺を睨みつけ、スマホを突き付けてきた。
「……ねえ、これ、どういうこと？」
「ん？」
　見せられたスマホの画面には、『司令官、バジリスクタイム突入』の文字と共に、艦娘にセクハラする俺の動画が。動画編集されるまでが早いなあ。流石青葉。覚えてろ畜生め。
「いやあの、クォレハ……」
　と、俺が口ごもっていると、叢雲は、目に見えてイライラし始めた。怖い。
「何、って聞いてるのよ」
「違うんすよこれは。その、児童ポルノ的なアレではなくてですね」
　おおう、動画で見せられると辛いな。おっさんが幼女のケツ揉んでるんだもんな。やべぇよ、やべぇよ……。
　どうしようか。土下座でもするか？俺の頭はヘリウムより軽いぞ

！
「……この、変態」
「うぐぐぐぐ……」
痛いですね……、これは痛い（心が）。
カリスマイケメン旅人のイメージこわれる。
これは自己弁護だな。
信用でダイスロールですわ。
「これは何かの間違いだ、悪の組織の陰謀だ！」
「何が間違いよ！それに、ウチが悪の組織じゃない！」
流れるように失敗。
知ってた。
やったぜ（やってない）。
落ち着け俺、俺のバトルフェイズはまだ終了してないぜ。
「ほら、アレだ。あー、いつものことじゃん？駄目だった？」
ここは開き直ってみるのも良いんじゃないの？
「何よ！今度は開き直るの?!この変態！変態！」
アッ駄目かァ！
「島風にリベッチオみたいな小さい子にこんな事して、恥ずかしくないの?!」
「あぐぐぐぐ……」
（心の）傷は深いぞ、がっかりしろ。
あーもう分かってますよ、セクハラしろってことでしょ？そうであろう？
「叢雲」
「……何よ、変態ロリコン司令官」
「セクハラするから許してくれ」
「……は、はぁ?!あんた何言ってんの?!」
いやもう、分かってんだよ。今一瞬、叢雲の目に期待の色が見えたぞ。恐ろしく早い邪念……、俺でなきゃ見逃しちゃうね。まあ、結果は見えてるんだよね。オチは皆んな知ってる。

叢雲の乳首を弄ってｔｈｅ　ｅｎｄだ。

あの授乳スリットからして、叢雲は乳首が弱点であるのは自明の理と言えるだろう。

やって良いのか、と言う恐れは勿論ある。乳首は不味いのではないか、と。しかし、ＢＡＳＴＡＲＤ!!と言う偉大な前例があるが故、少年誌レベルの話でも乳首位なら許されると俺は確信しているのだ。

「良いぜ、てめえが何でも思い通りにできるってなら、まずはその幻想をぶち殺す！」

「ちょ、な、んにゃあああああ??????」

勝ったッ！第三部完！

叢雲は、セクハラされると、生まれたての子鹿のように両足を震わせながら嬉しそうな顔をして帰って行った。やっぱりセクハラがパーフェクトコミュニケーションじゃねーかふざけやがって。

この鎮守府でまともなのは俺だけだな。

「この鎮守府を……、変えたいッ!!」

と、俺が静かに闘志を燃やしていると、

「あら?どうしたんですか提督、学ランなんて着込んで」

黒井鎮守府のやべーやつ、サイコパスメガネ、マジキチなどと名高い、大淀が現れた。

「うーん、学ランの提督も素敵ですねパンツ下さい」

「うん、あげない」

「私のパンツとトレードでどうでしょう」

「どうでしょう?じゃないんだが」

「あっ、すいません。今パンツ穿いてませんでした」

この人頭おかしい……。

「大丈夫か大淀、ヤクとかキメてないよな?取り敢えずパンツ穿いてくれ」

強制ストリップ真拳の応用で手持ちのパンツを穿かせる。脱がせる事が出来るんだ、穿かせる事も容易。パンツはその場で作った。

相変わらずぶっ飛んでるな大淀は。
「あっ、ところで提督。私、髪を編んでみたんですよ」
「おっ、良いじゃん。似合ってるよ」
「さっきラインでイメチェンするとセクハラしてもらえるって聞いたんですけど」
「誤報だ」
「セクハラしてもらえるって聞いたんですけど」
「いやあの」
「セクハラしてもらえるって聞いたんですけど」
このわざとらしいゴリ押し！
うーん、セクハラとセクハラでセクハラがカブってしまった。
なるほど、この鎮守府はセクハラで十分なんだな。
まあ良いや。
セクハラさせてくれるんならやろう。
大淀と言ったらまずここ。スカートのスケベスリットだ。何なんだろうねこれ。利点無くない？
ここに手を突っ込んで、と。
「ああっ？？？

……紐パンだ。
やっぱりな。
これは駄目だ、風紀を乱している。
「如月、紐パンはやめなさい」
「あら？どうしてかしら？」
くっ、悪びれずに……!!確信犯だな!!
「えっちなのはいけないとおもいます！」
「司令官、こう言うの嫌い？」
少し困ったような顔で首を傾げる如月。かわいい。
「すき」
「じゃあ良いじゃない」
はっ?!いかんいかん、ほぼ反射で答えてしまっていた。違うんだよ、俺の好みとかはどうでも良いんだ。風紀の問題よ。
「良くないの！風紀が乱れちゃうでしょ！」
「そんなのどうだって良いわ。私は司令官に愛される格好をするの。貴方に愛してもらえるなら、どんな格好にでもなるんだから??」
チッ、カッコいいこと言いやがる……。
「じゃあ、着替えてくれるかな」
「あらあら？ここで服を脱げって言うのかしら？司令官のえっち??」
あ、ふーん？そう？
そう言う態度？この俺を手玉に取ろうと？処女なのに？ふーん？
はい、壁ドン。
「ああ、脱げよ」
「……えっ？」
「脱げって言ったんだよ、如月」
「ま、またまた、冗談よね？」
いや、脱がせる。
無言で紐パンの紐を解く。
「やっ、ちょ、ちょっと」
すると如月は、少し焦った様子でパンツを押さえる。
「俺の望んだ格好になってくれるんだろ？」

腰に手を回しながら抱き寄せ、もう片方の紐も解く。さあ、どうだ？

「……わ、私、初めてだから……、優しく、して……？」

おっと、潤んだ瞳、上気した肌。完全にスイッチが入っているな。良いじゃんそそるわー。

だがな！

「目を閉じろ、如月」

「う、うん……??」

如月の心音が大きく、早くなったその時！

即座にパンツを穿かせてテレポートするッ!!!

「うえへへはは。やってやったやってやったやってやったぜー」

みたいな。

「あばばばば。あばばばばばば」

みたいな。

「……と、言う訳なんだよ」

「どー言う訳ですか……」

所変わってここは工廠。

明石と夕張の城だ。

「って言うか君達、その服装は何よ？」

明石はヨレヨレのTシャツに短いジャージ、透けブラ。パンツも見えている。

夕張はキャミソールに安物のハーフパンツ。勿論、パンツが見えている。

これは許されざるよ。

「下着が見えてるんだよォ……」

「え？良いですよ別に」

「見られても減るもんじゃないですし」

君らが良くてもなぁ、風紀的には良くないんだよ！

「はい禁止」

「「はっ?!いつの間にか服がカジュアルなパンツスタイルに?!」」
よしよし、似合うぞ二人共。
「うわ、こんなちゃんとした服、勿体無くて着られないんですけど」
「ですねぇ」
しかし、するりと服を脱ぎ始める二人。何で?
「何脱いでんだよー」
「いやだから、勿体無くて」
「デート用に仕舞っておきます」
ええ……。
「基本的に服は安物しか着ませんよ私達」
「機械油とかで汚しますから……」
「なるほど?でもせめて、ジャージでも良いからちゃんとした服着よう?」
「はーい」
「善処します」
本当かなぁ……(疑心暗鬼)。
「……と言うか提督?気付いてない訳じゃないですよね?」
そんな中、明石は、露骨にこちらを見つめてきた。
「ほら提督、ツインテですよ!夕張の貴重なツインテですよ!!」
夕張必死のアピール。
……二人共、いつもと違う髪型だ。
「気付いてない振りしてた事に気付いて欲しかったな」
はー、しろってか。セクハラしろってか。
「で、どうして欲しいの?」
「あの意味不明なスケベスリット、何で存在すると思います?」
「私の艤装が無駄にヘソを出してる理由を考えた事は?」
ああ、もう。
しょうがねえなあ(悟空)。
観念した俺は、大人しく二人の身体に手を伸ばした。

１７９話　理想を抱いて爆死しろ

「ふんふんふふーん♪」
私は鳥海。
黒井鎮守府の艦娘だ。
……最近の私は充実している。
最初の頃は不安だったけど、優しくてカッコいい司令官さん、強い仲間達、そして大切な姉妹に囲まれて、日々訓練に励んでいるからだ。
訓練は笑ってしまうほど厳しいけど、自分の実力がどんどん伸びていってるのが分かるし、目一杯頑張った達成感は何物にも代え難い。
この調子で強くなって、皆んなと肩を並べて戦えるようになれたら良いな。
「ふふ、良い天気。今日も平和で」
「ぬわーーーーっ!!!!」
「ししししし司令官さんーーーー!!!!?」
その瞬間、大地を揺るがすような爆発音。
同時に空から降ってきた司令官さん。
「ち、鳥海……」
「ッ?!しゃ、喋っちゃ駄目です!!」
ひ、酷い！胸から下が弾け飛んでる!!いくら司令官さんでもこれじゃ……！
「あ、アイカツの結果がこれだよ……」
「?!、し、司令官さん？司令官さん！司令官さーーーーん!!!」
司令官さんが意識を……！
どうすればいい、どうすれば……!!
落ち着け！落ち着くのよ私!!司令官さんは大丈夫、不死身よ！今私にできる事は……！
「誰か来てください!!司令官さんが負傷して意識を失いました!!」
助けを呼ぶこと！
幸いにもこの黒井鎮守府には、様々な技能を持つ艦娘が多数います！

皆んなの力を合わせれば、司令官さんを助ける事だってきっと出来るはずです!!
「何事ですか？あ！」
「提督?!」
「司令官!!」
私の呼びかけに応じて、近くの艦娘が集まって来ました。
「皆さん、司令官さんが……！」
「落ち着けよ、鳥海」
「摩耶！」
姉の摩耶が、私の肩を掴む。
不思議なことに、摩耶は冷静だった。
「大丈夫だ、これくらいじゃ提督は死なねえ。それよりも犯人は誰かってことだ！」
「犯人?!司令官さんの治療は?!」
「三分の二くらい吹っ飛んじまってるじゃねえか。手の施しようがねえよ」
そ、そんな！
「ま、放っときゃ元に戻ると思うけどな」
「そんな訳……！」
摩耶の目線の先、私の手の上の司令官さんを見ると……、
「嘘……?!」
ゆっくりと、本当にゆっくりと、傷口がテープの逆再生の様に元通りになっていっている。
「……いつもは爆発くらいじゃこうはならねえんだけどよ、前の謎の宇宙人に襲撃された時の傷が治ってなかったからな、提督」
「どう言うことなの……？」
「要はスリープ状態なんだよ。全エネルギーを回復に回してんだろうよ」
「スリープ状態……」
じゃあ、眠っているだけ？
「そう言うことだ。だから、今やるべき事は……！」

「ウワーッ！何ですか何なんですか！何で急に捕まったんですか私達!!」
「痛い痛い痛い痛い！やめて長門さんやめて!!」
犯人探しってこと……？
「あのですねー、何かしら事件がある度に、私達を犯人扱いするの、やめてもらえません？」
「そーですよ！心外です！」
捕まった容疑者はいつもの二人、明石さんと夕張さん。
黒井鎮守府で起きた事件の半分はこの二人の仕業と言われています。
実際、一昨日も鎮守府の倉庫一つが爆発炎上しました。この二人の謎の実験で。
「喧しい！多少騒ぎを起こすくらいならまだしも、提督に怪我をさせる奴があるか!!」
「や、やってないですよ!!」
「私達、さっきまでプラモ作ってましたもん！爆破なんてしてません!!」
……限りなく怪しいけど、証拠はない。
犯人と断定することはできないと思う。
「ま、待って下さい」
「む、何だ鳥海」
「まだ、明石さんと夕張さんがやったと決まった訳じゃ……」
こんなの、駄目だ。
まだ犯人と決まった訳じゃないのに。
「なら、犯人は誰なんだ？」
「分かりません……、でも、ちゃんと捜査してから捕まえましょうよ」
「捜査か……」
すると長門さんは、顎に手を当て、少し考える素振りを見せた後、こう告げた。
「よし、良いだろう。提督をこんなにした奴には、神通の訓練１６８時

間をプレゼントだ。さあ、犯人は名乗り出てこい！」
「「「「……」」」」
「……鳥海、犯人はここにはいないようだ」
「当たり前ですよ!!」
そんなこと言われて名乗り出てくる訳ないじゃないですか!!
捜査して下さいって言ってるのに!!
くっ、脳味噌が筋肉でできているという噂の長門さんじゃ駄目だ、もっと知能が高い人は……！
「提督ー、三分の一になっても素敵ネー！」
「眠ってる提督もカッコいいです！盗撮盗撮、と」
「チッ、下半身が吹っ飛んでちゃいかがわしいこと出来ないじゃないですか！畜生！」
だ、駄目だ！控え目に言ってアホしかいない！
「そ、そうだ、白露型は?!白露型の皆さんなら、なんかこう、よく分からないアレで犯人を言い当てられるんじゃないですか?!」
「む、今はいない。全員出撃している」
くっ、こう言う時に限って！
「インテリは?!インテリはいないんですか?!」
「ンー、霧島は今、バイクで首都高に行ってマース」
「一航戦はさっき食べ歩きに行きました」
「妙高型は遠征中です」
神は死んだッ!!
「もうめんどくせえからここにいる全員ぶん殴って……」
「摩耶、やめて」
我が姉ながら脳筋……。
駄目だ、これは駄目だ。アホと脳筋しかいない！
このままでは迷宮入りになってしまう！
「そうだ！司令官さんの伝手で探偵や警察を……！」
そう思って、司令官さんの傍に落ちていた、司令官さんの携帯電話の電話帳を開く。
探偵、警察……、あった！

金田一、江戸川、桂木、レイトン、杉下、左、高野、古畑……。
「ええと、誰を呼べば……」
「待てよ鳥海」
摩耶？
「探偵や警察を呼ぶのはやめとけ」
「え……？」
「他所の人間が入ってくる方が提督は困るね。それに、もしかしたら、事故かもしれねーだろ？だって爆発くらい毎日のように起きてるじゃねえか」
た、確かに……。
宇宙人にヤクザ、モヒカン、超ロボット生命体が現れるこの鎮守府において、爆発なんて日常茶飯事……！
そんなことで一々外部の人間を呼ぶ訳にはいかない！
と、なると……。
「鳥海」
「摩耶……」
「頑張れ」
あっ、私かぁ……。

「ええと、まず、何処でどう爆発したんですか？」
最初に、爆発の原因の特定ですね。
そう思って問いかけると、明石さんがタブレットを操作しながら答えた。
「倉庫の一つですね。爆発のエネルギー分布から見て、化学薬品によるものです」
「化学薬品……。ますます怪しいぞ、明石!!」
「違います長門さん違います痛い痛い痛い」
化学薬品、ですか。成る程……。
なら、犯人は化学薬品の調合が出来る人ですね。
となると、明石さん、夕張さん、妙高型、白露型、睦月型……、あれ？容疑者が多過ぎません？

いや、でも、妙高型、白露型は出撃しているし……、いやいや、事前に仕掛けておけば……。
兎に角、
「何者かが化学薬品を作り出して、それを使って爆破したと？」
誰かが故意にやったのは確かですね。
「何者かって言うか、提督がですかね」
え？
「何で断言出来るんですか？」
「いや、見てましたからね、私」
「……は？」
「監視カメラの映像です、どうぞ」
「……あるんなら最初から出して下さいよ!!」
「出す前に拘束されたんですよ！」
全く、監視カメラの映像は、と……。
『グリセリンと、硝酸硫酸をレッツラ混ぜ混ぜ……、アアッ！零し』
薬品と薬品を混ぜ合わせる司令官さんが、調合の最中、器を落として、大爆発。
「……事故じゃないですか!!」
「グリセリンと、硝酸と硫酸。ニトログリセリンですね」
「何を作ったかとかはどうでもいいです！むしろ、何で作ったか、ですよ！」
問題はそこです！
「成る程、提督が爆薬を作った理由が大事なんですね？」
「え？あ？はい？」
まあ……、そうですね。もしも誰かに作らされているとするならば、その作らせている人こそが犯人と言っても過言ではないでしょう。
「ではあちらをご覧下さい、元凶です」
その時、パタパタと足音を立てながら、鎮守府のアイドル（自称）さんが現れました。
「あれー？提督ー？那珂ちゃんのライブで飛び切りの火薬演出するっ

て言ってたよねー？何処ー？」
「……では、皆さん。犯人は那珂さんで、良いですね？」
「「「異議なし」」」
「え？皆んなどうし、あ、待って、神通姉さん？え？訓練？一週間ぶっ通し？待ってやめて、死んじゃう、那珂ちゃん死んじゃう、あ、あ、アアーーー!!!」
解決、と言うことですかね。

１８０話　この酒飲みが！

よぉ、提督さぁー。
たまには二人でしっぽり飲むかい？
良い酒が手に入ったんだよ。
ああ、大丈夫、肴も持ってきてやんよ。

酒はこれ、獺祭。
美味いんだよねぇ、これが。
ささ、提督もどーぞ。あたしも一杯、と。
……かーっ、美味い！
……ふう。
あー、その、ね。
……提督、ありがとね。
え？いや、飛鷹のことだよ。
また飛鷹と会えるなんて、思ってもみなかった。嬉しいよ。
商船だった頃から一緒だったからね。
でももう、会えないもんだとばっかり。
気にするな、って？はは、やっぱり提督はデカい男だねぇ。
だからこそ、惚れたんだけどさ。
……。
うん。
何か、あれだね。
二人っきりだと、何話して良いか分かんないや。
む、緊張するなって言われてもなぁ。
やっぱりあたしも女だし？こーんなことして提督を誘惑してやろうとか、考えてる訳で。
うりうり、どうだい？抱きつき攻撃だ。
……お、おっぱいの感触が良いって？
随分はっきり言うね、提督。
あ、あー、ハンサムのみに許された特権かい。そうなのかい。

確かに、見惚れるくらいにハンサムだよ、提督は。
え？あたしも綺麗だって？
はは、煽てたって何にも出ないよ、全く。でも、嬉しいよ。
あ、ん……。
お世辞じゃない、本気だ、なんて言ってさ、優しく口付けされるとさ、その、なんて言うかさ、クるね、効くね。
あたしの乙女心ってやつがきゅんとするよ。
その、女を誑かすテクニック、何処で覚えてきたんだい？
……秘密、かい。
……別にぃ？機嫌悪くなんてないよーだ。
むぅ、だって、あたしの知らない提督がいるって考えると、やっぱり寂しいよ。提督には、ずっと側にいて欲しいんだ。
ずっと、ずっと、ずっと、ずっと。
永遠よりももっと長く。
……うん、ずっと側にいて、提督。
へへ、そう言ってもらえると嬉しいよ。

じゃあさ、提督。
提督の話をしておくれよ。
あたしの知らない提督ってやつを知りたいんだ。
え？日記を読めって？
ああ、あの、休憩室に置いてある提督の日記？
あれ、正直言って、信用ならないんだよねぇ。それに、書き方も安定してないし。適当に書いたんだろ？
やっぱりね。
じゃあ、内容はデタラメ……、じゃないのかい？
ええ～？本当に？あの日記が正しいとすると、提督はまともじゃないよ。
あれじゃ人間辞めて……、いや、そうだったね、提督は。とっくに色々と辞めてたよね。
……頼むから提督は辞めないでおくれよ。

え？自分は人間だって？
はは、冗談が上手いね、提督。
身体の三分の二が吹き飛んで平気なのは人間じゃないよ。
いや、精神論じゃなくて。
心の問題じゃないよ。
頑なに認めないのやめてよ、ねえ。
だって、こうしている今も、無くなった身体が段々生えてきてるし。
何？
妖力を解放して再生を早めてる？
妖力って何さ。
銀眼の斬殺者？妖魔の力？
それとリジェネレーションと回復法術？
いや、良いかい提督。
人間は、無くなった肉体が再生したりしないんだよ。
再生する人間もいるって？
いないよ、そんなものはいないよ。
会ったことがある？それは人じゃない何かだよ。

そうさね、それじゃ、教師だった頃の話を聞かせておくれよ。
やってたんだろ、教師。
うんうん、伊藤と三橋がやんちゃで、セロニアスはキレてて、朝霧はバカだった？
よく分からないんだけど……。
え？アンツィオではドゥーチェして、小学校で地球防衛して、クロマティは爆発した？
何がなんだか……。
あー、つまり、問題児が多かったのかい？
へえ、伊藤はいい奴で三橋は卑怯な奴なのかい。でも、面白い奴らだった、と。
セロニアスってのとは今でも会う？バイクとかギターとか、趣味が合う？良いことだよそれは。

朝霧はバカ？ふーん、不良ねぇ。
そして、女子校で戦車乗り回して、小学生と地球を守って、クロマティ高校は宇宙人に侵略されて校舎全損？何を言ってるんだい？
証拠は……、あ、あるんだ。写真だね。
うわあ、本当に教師だったんだ。
……昔から真っ白なんだね、髪の毛。
え？子供の頃から？生まれつきなのかい？違う？若白髪？く、苦労したんだね。
教師ねぇ……。
どんな先生だったんだい？
普通の先生だった？
いやいや、そう言う冗談は置いといて。
えー？提督がまともな教師だった訳ないでしょ。
……やっぱりね。
不良生徒の喧嘩を観戦したり、ストリートファイトに混ざったり、授業放っぽり出して生徒と遊びに行ったりしてたんだ。
まー、それでこそ提督って感じだねえ。
……と言うか、働くのが嫌なのに、よく教師なんてやったね。
金かい？
持ってるだろ、金なんて。
え？
結構綱渡り？
（返す気のない）借金もある？
ピークで金の無かった頃は荒川の橋の下に住んでた？
ははは、また冗談かい？
え？
荒川の橋の下には金星人がいる？
河童が村長？
ウッソだぁ。
……証拠写真をどこからともなく出すのをやめておくれよ。
うーわ、本当だ、橋の下に家建ててる……。

ホームレス生活の為にこんなことを？技能の無駄遣いだよ。
何だいこの星の被り物した奴。心なしかムカつくんだけど。

随分と気楽にやってるんだねぇ。
金が無くても心は豊か、ってことかい？
何々？
ピンチも沢山あった？
死にかける様なピンチ？
またまた。
なんだかんだ言って死なないじゃないか、提督。
え？
真夜中のサーカス？ラクーンシティ？冬木市？魔剣教団？幻想郷？杜王町？ロードラン、ドラングレイグ、ロスリック？ヤーナム？ノースティリス？
ちょ、ちょっと待った、ちょっと待った。ってか、そんなに震えてどうしたんだい？トラウマ？
もう、一気に言われても分からないよ。
提督は一体何と戦ってるんだい。
真夜中のサーカスでは、自動人形の大群と戦って首だけにされた？ねじ切られた？
B．O．W．も英霊も妖怪もスタンド使いも強過ぎた？
悪魔に魂を破壊された時は死を覚悟した？
巨大なドラゴン、デーモン、魔物にはらわたを食い千切られた？
……んー、本当なのかい？
いっつも思ってるけど、そんなに沢山の冒険をすれば、普通は死んでると思うんだけどさ。
……は？死んだこともある？死んでも蘇る魔法をあらかじめ使っておく？
こ、怖くないのかい？
慣れれば平気？死んだらその時はその時？
……は、ははは、やっぱり提督は提督だね。

こう言っちゃ何だけど、提督は艦娘よりずっと、化け物だよ。
いや、もちろん、貶してる訳じゃないさ。
でも、本当に、凄いよ。
凄いよ、提督は。
死ぬのが怖くないんだね。
……だからさ、いつか提督が、ふらっと居なくなっちまうじゃないかって思うとさ。
怖いよ。
私は怖い。
提督を失うのが怖い。
分かってるよ。
提督は私の側に居てくれるって約束してくれた。
けど、提督が怖いんだよ。
死ぬ様なことも涼しい顔してこなしちまう不死身のスーパーマンなのは知ってる。
でも、提督が自身の力に飲まれてしまわないか、とか、思いがけない事故で死んでしまったりしないか、とか、そう言うことを考えると止まらないんだ！
もう少し、あたしに、守らせておくれよ……。
……うん。
うん、そうかい。
分かった。
それじゃあ、これからはもう少し頼っておくれ。
あたしは、提督の為なら何でもするよ？提督の好みの女になるよ。
言うことを何でも聞く。
……じゃあ、とりあえず、一献くれないか？だって？
ふふ、そうだね。
さあ、飲もう、提督？

１８１話　この闇、深いッ！

いやあ、爆風は強敵でしたね。
「あ、提督。身体は大丈夫なんですか？」
おはようございまーす！と心の中でシャウトし、目が覚めたら自室のベッドの上。昨日は隼鷹と酒飲んでから自室に戻って寝た訳だから、何の異常もない。
因みに、自室に大淀が入り込んでるのは仕様だ。異常ではない。
「身体の五割は再生がまだだけど、特に問題は無いね」
「そうですか良かったです」
四肢が無くてもバジリスクのアレみたいに這って動けるし。流石に舌は伸ばさないが。
兎に角、両足が再生するまでは車椅子だな。
「ところで那珂ちゃんが外で死にかけてるけど、どうしたの？」
「罰です」
「ふーん」
まあほら、那珂ちゃんは頑張り屋さんだし（適当）。
訓練してるなら放っておいて大丈夫か。
「今日はどうしようか」
「休んで下さいよ、両足が無いんですから」
休む……。
ほうほう、休む。
そう言えば、この黒井鎮守府に来てからと言うもの、休んだ日は無かったな。
あ、いや、毎日が夏休み状態だけど、そう言う意味じゃなくって。
日がな一日部屋で休む様な日は無かった、と言うことだ。
良し、じゃあ、たまには部屋でゆっくり過ごすか。
「分かった、今日は部屋でゆっくりするよ」
「はい」
ここで大淀が部屋から出ていかないのも仕様である。異常ではない。

んー、そうだなぁ、こちとら旅人、部屋でじっとしてるのはなんかアレだな。
んー、んーんーんー。
……魔道書でも読んでおくか。
手札が多いに越したことはない。魔術は目に見えない武装だからな。身体を破壊されても、最悪意識さえあれば使える「術」はあらゆる場面で重宝する。
因みに職業的には放浪者。
そんな時、ドアがノックもなしに開かれる。
「たっ、旅、旅人様ぁ!!!」
「旅人さん!!!」
お隣の、音成鎮守府の艦娘、春風と、その提督の守子ちゃんだ。
「ああ、おはよう。どうしたの？」
「ば、爆発したって聞いて……」
「うん、したね」
「大丈夫なんですか……？」
心配してくる守子ちゃんに、
「ああ！おいたわしい！旅人様がこんな姿に……!!」
俺に縋り付いて泣く春風。
どうしたんだ一体。
「その、どうしたんだ一体、みたいな顔やめて下さいよ……。死にかけておいて、何でそんな平常運転出来るんですか……」
若干非難するような目で見られる俺。
「死にかけてないよ、別に。爆発した時も身体の三割も残ってたし」
「それ、普通は死にかけどころか死んでますからね?!」
ははは、嫌だな、俺はそれくらいじゃ死なないようになってるんだよ。なんて言ったって俺だぜ？
「旅人様ぁ……、ふぐっ、ぐすっ、わた、私、旅人様が倒れたと聞いて、とても、とても、心配しておりました……。ご無事で何よりです……」
「そっか。心配かけてごめんな、春風」

泣くほどか。なんか悪い事しちゃったな。
「あ、た、旅人さん、足が……！」
ふと、俺の欠損した下半身を見た守子ちゃんが指を指して驚く。
「明々後日までには治すよ。あーあ、ゲームみたいに一晩寝ればどんな怪我も元通り、とかなら楽なんだけどもな」
「いやいや、三日で元通りになるのもおかしいですからね？」
ドラクエみたいに一晩で治ればなぁ。この怪我だと完治までに一週間はかかるだろう。
そんなこんなで、守子ちゃん達と軽く談笑しているとその時、側にいた大淀に肩を叩かれる。
「ん？何だ？」
「提督、これを」
手渡された文章には、一文。
『海軍のイメージアップの為、鎮守府内でイメージビデオを作成せよ』
と、大本営からのありがたいお手紙だった。
全く、何でうちがそんなことせにゃならんのだ。
地中海を開放した頃辺りからかな、露骨に擦り寄って来てるよね、大本営。何でも、うちの子達が大本営の内部を掃除しているらしいが……、そのせいだろうか、この前も、変な憲兵がやって来て面倒なことになったからな。
「馬鹿らしい」
書類を適当に丸めてゴミ箱にシューーーー!!!超エキサイティン!!!しようとしたら、
「あれ？それって……？大本営からの?!す、捨てちゃ駄目じゃないですか!!」
と、守子ちゃんに阻止される。おっ、どうしたどうした？
「えー？良いよこんなん。放っておこう」
「いけませんってば！」
「規則は破るためにある。……日本で一番戦果を挙げてるんだ、うちは。誰にも口出しさせねーよ」
「それでも、一応指示は聞かなきゃですよ」

「むぅーりぃー」
「駄目ですよー」
そう言い合っていると、またもや、大淀に肩を叩かれる。
「提督、いっそ音成の提督にやってもらえばどうでしょうか」
うーん？守子ちゃんに？
……イメージビデオの撮影、か。それくないなら大丈夫だろ。うちの鎮守府、治安はロアナプラ並だけど雰囲気的にはあずまんが大王並にほのぼのだから。
「じゃあ、守子ちゃん、任せた！」
「え？え？はい？」
「海原提督、よろしくお願いします。あ、カメラはこちらに。……そこら中瑞雲まみれにする航空戦艦、タダ飯食らいの鶴二匹、菓子をねだる軽巡駆逐……。少しくらい、働いていただきますよ？」
「……え？」
×
×
×
×
「……何で？」
アレ？私、何かよく分からないうちに、仕事を任されちゃった？
もかも、断れない感じ？
え、ええー。
「旅人様から託されたお仕事です！頑張りましょう、司令官様！」
春風ちゃんは何故かやる気満々だし……。
でも確かに、黒井鎮守府にはお世話になってるから、仕事の一つや二つ……。
『海軍のイメージアップの為、鎮守府内でイメージビデオを作成せよ』
「あっ、駄目だこれ」
ビデオ……？ビデオを撮るの？私が？黒井鎮守府で？
どうしよう、私、死んだかも。
「は、春風ちゃん……」
「まあ、ビデオ、ですか？黒井鎮守府の素晴らしいところを世の中の皆様に知っていただく為ですね！」

黒井鎮守府の、素晴らしいところ……？

「うへへ、昼間から飲む酒は美味しいなあ！」「ハラショー」「ポーラ的には赤ワインですよ赤ワイン」「さあ、手合わせであります！」「おっしゃー！やれやれー!!」「北上さーーーん??」「はいはい、どしたの大井っち」「ああ、ゴース、あるいはゴスム」「いあ、いあ、くとぅるふ」「ふんぐるい、むぐるふなう」「んー、深海の屑共の血が見たいっぽい」「深海棲艦の首でサッカーしようぜ！」「深海棲艦捕まえて来たから解剖よろしくー」「ちくわ大明神」「提督のパンツ……??」「司令官のセミヌード写真ゲットォ!!」「あー、提督と『ファイナルフュージョン！』したいなー！」「私も提督と一晩中『シンメトリカルドッキング！』したいですねぇ」「ククク、良いな、やはり。殺せば殺す程司令官のお役に立てるのだ」「ポケ戦は名作」「仕事サボって見るアニメは最高だぜ！ご主人様はどうせ怒らないし！」「うおお！間に合えぇ！夏コミぃ!!」「オータムクラウド先生ェ……」「司令官的には貧乳もアリなはず……。うちも捨てたもんじゃないな!!」「ぴょえええん!!もう限界ぴょん！積載量オーバーぴょん!!」「卯月、もっと積めるよ」「卯月、光学兵器は良いぞ!!」「ヘイ、霧島！その血塗れのバット捨てるネー!!」「チンピラ相手に喧嘩しただけですよ」「武器持った方が手加減になるとはこれ如何に」

素晴らしい、ところ……？

うっ、頭が……。

「あ、あら？司令官様？司令官様?!司令官様ーーー?!!」

１８２話　病みの中に「意志」があるッ！拾いに行こうッ！　前編

「だ、大丈夫ですか、司令官様？」
「大丈夫……、ちょっと立ちくらみしただけだから……」
　落ち着け私。
　平気平気、黒井鎮守府は恐くない……。
　イメージビデオなんて簡単簡単、ちょっとしたビデオくらい撮れ、
「ア〝ァ〝ーーー!!?機材が吹っ飛んだぁーーー!!!」
「明石さん、ここの計算ミスってます!!!」
「きゃーーー!!!」
「あ、危ない司令官様!!!」
　と、撮れ……、
「手合わせであります!!!」
「あ、不味い、投げナイフが弾かれて向こうへ……」
「ひいっ!!?」
「この程度、弾いてみせます!!!」
　……撮れ、
「シュート!!!」
「あー、深海棲艦の首があっちに飛んで行っちゃったわねー」
「ひゃあい!!?」
「キャッチします!!!」
　……撮れるの、これ？
　取り敢えず、こうしよう。
　満遍なくビデオを撮って、使えるものを選んで……、後は黒井鎮守府の青葉ちゃんに動画編集をしてもらって完成、ということにしよう。
「行くよ、春風ちゃん。少しでもまともな所から取材をしなきゃ……」
「了解いたしました、司令官様。ではまず、戦艦の方々から取材をしましょう。戦艦の方々は落ち着いた方ばかりなので、素敵なビデオが撮

れることでしょう！」
　そうだと良いね、本当にね……。

　カメラ片手に広い黒井鎮守府内を移動し、よく戦艦がいると言う休憩室の一室、サロンのような部屋にやってきた。
　そこには、優雅に紅茶を楽しむ金剛型の姿があった！
　そう！それです！そう言うのです！それで良いんですよ!!良かった、安心しました。これでちゃんとした内容のイメージビデオが作れますね！
　おっと、その前に、本人に許可を取らなくちゃ。
「あの～、金剛さん？」
「ワッツ？貴女は、音成の……？何か御用デスカ？」
「ちょっと、その、旅人さんからお仕事を頼まれまして。このビデオで金剛さん達の姿を撮影したいんですよ」
「？、別に構いませーン」
　私が、イメージビデオ作成の件について話すと、金剛さんは快く了承してくれた。
　そして、金剛さんは、紅茶の香りを楽しみ、一口飲んだ後、隣の霧島さんに声をかけた。
「ヘーイ、霧島！最近、ヤクザの方はどうネー？」
「はい、シノギの方は上々ですね。この前の野球賭博の件で大分稼がせてもらいましたから」
「ヒエー、凄いなあ、霧島は」
「霧島ったら、シャツが返り血塗れですよ。榛名が新しいのを用意しますね」
　んんんんんん？
　平和は？平和は何処へ？
「いっそ赤いシャツを着れば良いネー。そしたら返り血も目立たないデース」
「成る程、流石お姉さまです。盲点でした」
「待って……、ちょっと待って下さい、本当に……!!」

「ホワイ?・どうしマシタ?」
いけない、これはいけない。
一般人に聞かせて良い会話じゃない！
「そ、その、もうちょっと普通の会話をお願い出来ますか?これ、大本営に送って全国放送するビデオなんで……」
「アー、そうデスネ。あまり、大っぴらに話せることじゃないデース。ンー、この前、六本木に行った時の話をしマース」
六本木かぁ、お洒落な感じ。凄いな、金剛さんは。艦娘なのに、私より女の子らしいや。
「そこで白竜って言うヤクザに出会って」
「ス、ストップですストップ！」
ヤクザとか絡まない方向で!!
「あー、えっと、そうだ！紅茶！紅茶の話とかどうですか?!」
何とか、平和な方に持っていかないと!!
「今日の紅茶はダージリンデース。素敵な香りを楽しむ為にストレートで淹れてありマース。お菓子は提督特製のアップルパイで、サクサクの食感と甘酸っぱいリンゴの味が絶妙でとっても美味しいデース」
「そう！そう言う方向の話をお願いします!!そうですね、例えば……、紅茶の美味しさの秘訣は何ですか?」
きっと方向性の問題なんだ。話す内容の全部が全部悪いなんてことは流石に……。
「提督の血液デース！」
「……は?」
「直接舐めるとクラクラしますよね、提督の血は」
「この霧島が考えるに、飲むのではなく直接血管に注入すべきかと」
ひ、ひいいいいぃ……!!
「あ、分かります。提督の血を体内に入れた時って、身体がカッて熱くなって、そのあとはぼんやりとした気持ちになるんですよね」
「何か危ない薬とかじゃないんですかそれぇ?!」
「まあ、薬っぽくはありますよね。でも私達、もう提督の血無しじゃ生きていけない身体になってるんですよ」

そう言って、底のない深淵のような目をした榛名さんに微笑みを返される……。
……だ、駄目だ、ここは狂気の世界だ！
「か、帰ろう、春風ちゃん！」
「ひっ……！は、はいっ……！」
これ以上ここにいちゃいけない、そんな気がする。

「はあ、はあ、はあ……」
危なかった……！相変わらず闇が深過ぎる……!!
「な、何で旅人様の血液を紅茶に？……美味しいのでしょうか？」
「分かんないよ……」
意味が分かんないよ。
「あはははははは」
「うふふふふふ」
……今度は、笑い声？何だろう、何処から聞こえてくるのかな？
この部屋だ。
あ、ドアが少し開いてる。
……ちょっと覗いてみよう。
「提督？どうかしら、新しい手錠は？」
「あー、これ、魔力吸い取ってるねー。良いんじゃない？俺レベルの魔力ならこれくらいが丁度良いな。これ以上のペースで吸われると命に関わる」
陸奥さん、と旅人さん……？
陸奥さんはまだしも、旅人さんは何でここに？
「で？誰かしら？」
あ、バレちゃった?!
「す、すみません。笑い声が聞こえてきたので、つい……」
ここは、どうやら、長門型の部屋みたい。高級そうで上品な家具は陸奥さんの趣味なんだろうな。ぬいぐるみは……、まさか、長門さんの？
「覗くなんて、失礼しちゃうわ」

「それは、その、すみません……」
「まあまあ、それくらい良いじゃん。別に見られて困る訳じゃないんだからさー」
それより、旅人さん、何でここに？部屋で休むとか言ってたような……？
そんな私の顔を見て察したのか、旅人さんは何故自分がここにいるのか、説明をしてくれた。
「ああ、俺はね、陸奥に攫われたの」
「攫われた？」
どういう事だろう？思わずおうむ返ししてしまう。
「面白いかなーって思って陸奥に攫われてみた。で、今は監禁の練習を手伝ってるところ」
「か、監禁？誰をですか？」
「俺を」
え？ん？あー、えっと？
「俺が陸奥に攫われてあげて、陸奥と一緒に俺の監禁の練習をしてるの」
「日本語がおかしい?!」
何言ってんですか?!
「ふふふ、提督は私のものよ。大事に大事に、しまっておかなくちゃ。他の女の子にいたずらされないよう、大事に、ね……??」
「陸奥はどうやら、俺を監禁して飼いたいらしくてな。その方法を四六時中考えてるらしいんだ」
監禁?!飼う?!
「まあ俺を監禁なんてまず無理だよね。逃げようと思えばほら、この通り」
片手の手錠をまるでマジックのように外す旅人さん。え？今何をやったの?!
「あん、駄目よ、手錠を取っちゃ……。提督は私が一生飼ってあげるんだから??」
そう言うと陸奥さんは、旅人さんに手錠をかけ直して、かなり強い

力で抱きついた。ミシミシと何かが軋む音が聞こえてくる程に。
「はっはっは、陸奥は可愛いなあ！」
はー……。
相変わらず、何考えてんだか分かんないや……。
「まあ、これは突発的なヤキモチみないなもんだから。気にしないで良いよ、いつもの事だし。……取材なら空母のところに行ってごらん」
「はあ……、分かりました……」

「やはり手打ち麺ですよ」
「ハンバーグも中々だぞ」
「あとは、うーん、ライスボールとかですかね」
部屋にコーヒーの匂いを漂わせながら、休憩室で談笑を交わしているのは空母の、アクィラさん、グラーフ・ツェッペリンさん、サラトガさんの三人だ。
……これ以上発禁ものの発言をされても困る。少し、様子を見てから話しかけよう。
「提督のお蕎麦には大根おろしとわさびも付きますよ？」
「む、それは中々……」
「ああ、良いですね、美味しそうです」
そう言って、手打ち蕎麦の美味しさを伝えるアクィラさん。
……。
……うん、良し。
ちゃんとした会話だ。
空母の人達は基本的に食いしん坊だから、会話の内容はちょっとアレかもしれないけど、それでも普通の内容だ。
「すいませーん」
「はい？何かしら？」
撮影、よろしいでしょうか？と声をかけたところ、これまた普通に了承してもらえた。
「ええと、何でしたっけ？」

「Ａｄｍｉｒａｌの手打ち麺の話だ」
「ああ、そうですそうです。……お蕎麦以外にも、手打ちうどんや手打ちラーメンも絶品なんですよ、これが」
「ふふ、良いですね。久しぶりに食べたくなってきました。今度提督にお願いしましょう」
　手打ち麺かぁ……。
　旅人さん、本当に料理上手だから、きっと凄く美味しいんだろうなぁ。
「だが、ハンバーグも負けていないぞ？Ａｄｍｉｒａｌが丁寧に手で捏ねたハンバーグ……。最高だ」
　グラーフさんはドイツの艦娘だからかな、ハンバーグが好きなんだ。ハンバーグの起源はドイツだってどこかで聞いたことあるし。
「この前、ハイキングに出かけた時、提督のライスボールを頂きました。提督が握ったライスボール、美味しかったです」
　アメリカの空母、サラさんはおにぎりを推してますね。
　うーん、食べ物の話ばっかり。
　……だけど、平和なだけマシかぁ。
　血を飲んだり、監禁しようとしたりするよりは良いよね。
「いやあ、良いよな、Ａｄｍｉｒａｌの料理は」
「ええ」
「だって、ねぇ？」

「「提督（Ａｄｍｉｒａｌ）のエキスがたっぷり入っているから??」」

　……え？
「食べれば食べるほど、あの人の成分を摂取した気持ちになってな??」
「内側から犯されてる感じが最高??」
「むしろもう、提督を食べちゃいたいです??」
　え、ええーーー!!?
「提督を食べる……、アリですね！」
「食べるとしたらどう食べる？やはり踊り食いか？」

「お願いしたら腕一本くらい貰えるかも……？」
あ、甘かった！
黒井鎮守府を舐めていた！
まともな人なんて誰一人いないんだ!!
に、逃げよう……！
何も見なかった事にしよう！
「あ、あは、あはは。もう大丈夫です！そ、それじゃあ!!」

私は何も見てない。
血を啜る艦娘も、監禁を画策する艦娘も、食人を画策する艦娘も……。
何も見てない。
そういう事にしておこう……！

１８３話　病みの中に「意志」があるッ！拾いに行こうッ！　後編

はぁ、はぁ、はぁ……。
大丈夫、私は大丈夫……。
黒井鎮守府にも、きっとまともな所はある。
……庭に行こう。
今の時間帯なら、確か……、古鷹さんが庭で花に水やりをしているはず。
「ふんふんふふーん♪」
いた……。
鼻歌を歌いながら、ホースで水やりをする古鷹さん。なんていうか、可愛らしいなあ。
でも、見た目に騙されちゃいけない。この人も黒井鎮守府の一員なんだ。絶対にどこかおかしいに決まっている。
例え、白のワンピースに麦わら帽子の美少女に見えても、中身は何を考えているか分からない、魔物と言っていいだろう。少し失礼な表現だけども。
「あの、古鷹さん？」
「何ですか、海原提督？」
「黒井鎮守府のイメージビデオを作成しろと旅人さんからの指示で……」
「撮るんですか？構いませんよ」
「ありがとうございます！」
そうすると、優しげな鼻歌とともに、水やりを再開する古鷹さん。
「ふんふんふーん♪」
……可愛らしいなぁ。
これでまともな精神ならなぁ……!!
おっと、このまま代わり映えしない動画じゃアレだし、質問でもしてみようかな。嫌な予感がするけど。

「あの、何故花を？」
「え？可愛いじゃないですか、お花。良い匂いもするし」
……うん、真っ当な理由だ。
「艦娘は五感が鋭いですよね。私と妹の加古は、特に嗅覚が鋭いみたいで、良い匂いのするお花は大好きなんですよ」
うん、うん。
ちゃんとした話だ。
私は今、「会話」できている!!
「じゃあその、好きな花は？」
「うーん、これと言って好きな花はありませんね。でも、薔薇とか、百合とか、良い匂いのする花が特に好きですよ」
「そうなんですか！」
良し、この調子で……。
と、思った矢先のこと。
「古鷹ー、肥料持ってきたぞー」
「ありがとう加古」
あ、加古さんだ。台車に肥料を乗せて運んできた。
「あら？駄目よ加古、ここに骨が残ってるわ」
「あ、本当だ。悪い、骨粉用の骨とどっかで混ざったみたいだね」
……骨？
い、いや、待て、まだ危ないものと決まった訳じゃない！獣の骨かもしれない!!
「あは、あはははは、ひ、肥料はやっぱり、生ゴミから作っているんですよね？」
「ええ、生ゴミね」
「で、ですよねぇ！」
解体した獣の骨ですよね!!
「あんな醜い生ゴミから、こんなにも綺麗なお花が咲くんですから、素敵です」
醜い、生ゴミ……？
「ま、まさか……」

「肥料の元は深海棲艦なの」
　や、やっぱりいいい!!!
「そ、そんな、死体だなんて！」
「？、生ゴミですよ？」
「おかしいですよ！」
「そうなんですか？でも、深海棲艦は生きていようと死んでいようと生ゴミじゃないですか？」
「いやそれは、古鷹さんにとってはそうかもしれませんが」
「提督に逆らうんですよ？生ゴミじゃないですか？」
　ああっ、一瞬にして「会話」ができなくなった!!
　こうなった黒井鎮守府の艦娘は駄目だ、意思疎通ができない!!
　カメラを構えている春風ちゃんの肩を叩いて合図する。……ここから離れなきゃ。
「じゃ、じゃあ、私達はこの辺で!!」
「え？まだ全然撮ってないと思うんですけど……？」
「いえ！もう十分ですよ!!」
　これ以上恐怖映像は要りませんから!!

　こ、怖かった。
　……さっきの古鷹さん、顔は笑っていたけど、目の奥底は真っ暗だった。
　何を考えているのかまるで分かんないよ……。
「うう……、取り敢えず、取材しなきゃ」
　訓練場の神通さん……、は駄目だ、笑顔で凶悪な訓練をしてる。
　工房の白露型……、も駄目だ、明らかにやばい。
　ガレージの睦月型……、も駄目、明らかにおかしい。
　くっ、万事休すなの……？
「……おい、道の真ん中に突っ立って、何をやっている」
「えっ、あっ、ご、ごめんなさい」

ええと、初月、ちゃん？
防空駆逐艦、秋月型の三人だ。
「さあ、秋月姉さん、照月姉さん、勉強の時間だ」
「うう、本当にやらなきゃ駄目？」
「駄目だ。今のうちに勉強しておかないと、将来困るじゃないか」
「将来なんて……」
「戦争が終わっても、僕達の人生は終わらないんだ。先のことも考えなきゃいけないだろ？」
あっ、なんかいい事言ってる……？ひょっとしてまともな人なんじゃ……？
うーん、よし、駄目元で取材してみよう？
「ちょっと良いかな、あの……」
と、イメージビデオ作成について伝えると、
「ん、ああ、構わない。ただ、勉強をするだけだから、見ても面白いものじゃないぞ」
「いえいえ！良いんです！平和な動画が撮れれば!!」
「そ、そうか」
そんなこんなで着いて行った先は秋月型の私室。全体的に質素な感じの部屋だ。
三人は、部屋の中央の丸テーブルに集まって、勉強を始めた。
主導しているのは初月ちゃんだ。
「照月姉さん、そこ違う」
「あ、本当だ、ありがとう初月」
ちょっと覗いてみよう……。
うーん、高校レベルくらいかな？結構ちゃんと勉強してるんだ。
「あの、ちょっと聞いて良いかな？」
「何だ？」
「勉強して、どうするの？」
正直な疑問だ。勉強してどうするつもりなんだろう？
「取り敢えず、大学は出ないとな。学歴がないとこの先困るだろ」
大学！え、偉いなぁ、先のことまでしっかりと考えてるんだ。

「その後は？」
「提督と共働きで、夫婦として生きていく。子供も欲しいから、育児休暇がとれる会社が良いな」
へ、へえ。
「そして都心から少し離れた海の見える土地に家を建てて、ペットに大きな犬を飼って、家族皆んなで一生幸せに暮らすんだ。僕自身は子供は二人欲しいな。男の子と女の子一人づつ。まあ、姉さん達の子供も合わせれば大家族になるだろうから、家は結構大きい所になるだろうな。だから、相応の経済力が必要なんだ。今の貯金に数百万あるけど、これだけじゃ足りないだろうしな。その為にも学歴を積んで……」
うう、将来計画がやたらとリアルなんだけど……。
「……それで、子供が大きくなったら、年に一度は旅行をするんだ。提督は外国の文化や外国語に堪能だから、海外に行くのも良いかもしれない。いつもは海の見える家に住んでいる訳だから、観光先では綺麗な街並みを見るためにヨーロッパなんて良いかもしれないな。それで……」
お、重いッ……!!途轍もなく重い!!愛が重い!!!
頬っぺたに手を当てながら、嬉しそうに話し続ける初月ちゃん。
これはこれで、ある意味でやばい！
逃げなきゃ延々と話すよね、これ。
「う、うん！そうなんだ！ありがとう！十分撮れたから、私達はこの辺で！そ、それじゃ!!」
「だから、頭のおかしいうちの艦娘達とは違って……、ん？もういいのか？そうか。じゃあ、また今度」

ここも離脱……。
黒井鎮守府の深い闇……。
やはり、一筋縄ではいかない！
そう、ですね、朗らかな人。朗らかな人を探しましょう。
そう思って歩き回ること数分。私達は埠頭に辿り着いていた。

「あれは……」
そこには、折りたたみ椅子に腰掛け、釣り糸を垂らす天龍さんの姿があった。
「ん、なんか用か？」
天龍さん……、天龍さんはまともな方、かなあ……。
話してみよう。
「あの、取材を……」
と、イメージビデオの件について伝えると、
「おお、良いぜ、何でも聞きな」
快諾してくれた。心は広いんだよなぁ。病んでさえなければ、皆んな良い人なのに……。
「天龍さん、釣りが好きなんですか？」
「ああ、アウトドア全般だな。でも、釣りが一番好きだ」
「なるほど、何を釣るんですか？」
「何でも釣るぜ？今日はサビキやってるけど、この前は提督とカジキ釣りに行ったしな」
「カジキ釣りを？」
「おう！ありゃあ楽しいぜ？かなり暴れたけど、ま、そこは艦娘の腕力で押さえ込んで一本釣りだ」
和かに語る天龍さん。釣りかぁ。実家を思い出すなぁ。私の実家、漁師だから。
「でもまぁ、一番釣りたい獲物は、釣れないままなんだけどな」
「へぇ、何を狙ってるんですか？」
「決まってんだろ？提督だ」
「アッハイ」
さて、春風ちゃんに合図をしてビデオを切る。いかなる理由があっても、黒井鎮守府の艦娘が旅人さんの話をし始めたらもう駄目。深い闇に包まれる。
「提督、カッコいいよな……。俺のものになってくれないかな……」
「い、いやあ、ちょっと分からないですね……」
曖昧に言葉を濁しておこう。

「あ”?・分かんねえのか?・提督は最高の男なんだよ」
ひいっ!・やっぱり駄目だ。はっきり言おう!・
「は、はい!・そうですね!・私もカッコいい人だと思います!」
「んだと?・提督に手出ししたら……」
「わ、分かってます!・分かってますから!・手出しなんてしませんから!!」
どっちにしろ怒るんじゃないですか?!
こんな時は、えーと、そうだ!
「良いですか天龍さん!・わ、私は旅人さんのこと、尊敬してはいますけど、異性としてどうこうってつもりはありません!」
兎に角、異性として興味がないと言っておけば……!!
「……そうかよ、ならいい」
良かった、信じてもらえた……。
「どの道、提督に手出しした奴は殺すんだ。好きにしろよ。俺は最終的に提督が側にいてくれりゃそれで良いからよ」
良くなかった、私殺される……。
い、いや、大丈夫、手出ししてないもの、しないもの!
「大丈夫です!・手出ししませんから!」
「だから、良いって。問題があれば殺すから」
う、うう、目が本気だ……。
「わ、分かりました」
もう、無理だ。
ビデオを返そう。
イメージビデオなんて撮れなかった。
私は何も見てない。
今日あったことは忘れて、音成鎮守府に帰ろう……!!

１８４話　お見舞いをお見舞いしてやるぜ

守子ちゃんが泣きながらビデオカメラを返却してきた。
何だってんだ一体。
ビデオはー、っと。
よしよし、まあまあ撮れてるじゃんか。
あとはこれを編集して完成ってところかな。
さて、と……。
休めと言われた以上休まなきゃな。
実際、足が無いんじゃ出来ることは少ない。
魔道書でも読みながらゆっくり過ごすか。
「司令官」
……そんなことを考えたその時、自室の扉がノックされる。
この声は、響か。
「入って、どうぞ」
「やあ、お見舞いに来たよ」
お見舞い……。
お見舞い。
嬉しいな、お見舞いとは。
美少女のお見舞いと言うのはかなり大きなご褒美では無いだろうか？ポイント高い。
これも日頃の行いって奴だな。神様は見てるんだ。尤も、俺の信仰する神はこの世界にはいないが。
「嬉しいよ、響。来てくれてありがとう」
「良いんだ、司令官。気にしないで」
ウォッカストリチナヤの瓶を酒の棚に置いて、俺のベッドに自然体で潜り込んでくる響。
「ウォッカは後で飲んでね」
「ああ、ありがとう」
んー、ぬくい。ぬくぬくだ。響の体温を感じる。響は子供だから体温が高い。子供だなどと本人には言えないが。

「ねえ、司令官？」
「どうした、響？」
「……もしも、司令官が、原型が分からなくなるくらいバラバラに吹き飛んだらどうなるの？」
　え？何でそんなこと聞くの？怖っ。
「いや、普通に頭から再生すると思うけど……」
「……不死身？」
「死ぬ時は死ぬさ。当分その予定はないけど」
「……じゃあ、今回も、死んじゃうかもしれなかったの？」
　んー。
「死なないさ。俺は死なない。死ぬ訳がない」
　例えば、今この瞬間に核ミサイルが降り注ごうと。
　例えば、今この瞬間にバイオハザードが起きようと。
　例えば、今この瞬間に魔帝が蘇ろうと。
　俺が死ぬ訳ないのだ。
　絶対に死なないと言う自信がある。
「本当に？」
「冗談は好きだが、嘘は言わないさ」
　ああ、あれか。
　心配されたのか、俺は。
　そりゃそうだわな、意識不明の重体だった訳だし。
　頭でも撫でて誤魔化そ。
「んぅ……、誤魔化されないよ、司令官」
　あら、そう？
「司令官は、絶対に死なないって言う自信があるみたいだけど、本当に死なない訳じゃないんでしょ？少しは気を付けてよ。司令官がいなくなったら、私……」
「分かったよ。ただ、仮に俺がいなくなっても、自殺とかはしないようにね。それだけは約束してくれ」
　いや本当に。死んでも生き返る自信はあるけど、死なれると生き返さなきゃならなくなるから。

「……駄目。万が一にも、いなくなっちゃ駄目」
「はいよー、はいはい」
旅人にいなくならないで、か。難しいことを仰る。
まあ、俺も悪魔じゃない。こんな不安定な子達を置いて姿を消すことは出来ないさ。
「ずっと一緒にいような、響」
「……うん！」

響は俺に一頻り甘えると、満足して帰って行った。
その響と入れ違いで訪ねて来たのは……、一航戦、赤城と加賀だ。
「「失礼します」」
「ん、赤城と加賀か。どうしたの？」
「お見舞いです」
そう言って、机の上にフルーツバスケットを置く加賀。
いやー、加賀もお見舞いに来てくれたのかー。モテモテだなー。モテモテ過ぎて困っちゃうなー。
「心配しました、提督……」
俺の胸に飛び込んでくる赤城。
そっかー、心配だったかー。
美人に心配されるのって、意外と悪い気分じゃねえな、とか思いつつ赤城の頭を撫でる。
うむうむ、髪はサラサラ良い匂い。しっかりと手入れしているようで何より。
「……何故あのようなことを？」
加賀は、神妙そうな面構えで俺に質問してきた。
「あのようなこと、とは？」
「聞けば、ライブの演出のためと言う理由を借りて、強力な爆薬を大量に精製したとか」
ああー、はいはい。
「いや、あれはライブ以外にも何かしらで使うだろうと思って、多めに作っておこうとしたのよ。そしたら手を滑らせて」

すると、加賀は溜息をついて、頭を押さえながらこう言った。
「……率直に言いますが、頭がおかしいのですか、提督は」
ひどーい！
「おかしくねーよ？」
「まず……、まずですね、提督と言う立場にありながら何故こんな危険なことを？」
「俺の立場はいつだって一人の旅人なんだよ。危険を恐れる必要がない」
「爆薬を精製した理由ですが、使う機会が他にあるとでも？」
「魔物と戦う時とかに使うじゃん」
「手が滑ったら死にかけるようなことをやる程の価値がある行動でしたか？」
「まあ、ハイリスクっちゃあハイリスク」
……相変わらず、加賀は頭を抱えている。
何だ？俺は何かおかしなことを言ったか？
「お願いですから、もう少し大人しくして下さい。もう、自分一人の命と言う訳ではないのですから」
そうなの？初耳。
「この鎮守府は、貴方がいるから一つになっているのです。逆に言えば、貴方がいなければ崩壊するのですよ」
それは知ってるけど……。
「俺がいなくなったら、ここら一帯更地になるだろうね」
多分、俺が失踪すれば、艦娘達はドッタンバッタン大騒ぎだろう。
「分かっているのなら」
「でも」
でもね……。
「でも、大人しくなったら負けだよ。青春なら、やりたいことやったもん勝ちなのだ」
「……青春という歳でもないでしょうに」
いやいや、俺は永遠に青春、一生毎日が夏休み。死んでも遊んで暮らすって決めてるから。

「……兎に角、気を付けて下さい。今後はこのようなことが無いように！」
「ははは、善処します」

と、このように。
加賀に説教され、赤城に抱きつかれたりして、一航戦のお見舞いは無事終了した。
その後は、また、一航戦と入れ違いになって新たな艦娘が。
「司令官??」
「……春雨か。もしかして、お見舞いか？」
とってもラブリーな美少女、春雨のエントリーだ。かわいい。
「そうでーす！大好きな司令官に、お見舞い、しちゃいます??」
わーい、嬉しい。
「はいっ、春雨特製の、麻婆春雨ですっ！」
麻婆春雨。
そろそろお昼だしな、ありがたい。
「じゃ早速、いただきます」
んっ、これは!!!
ステロイド、アルカロイド、増血剤、麻酔、錬金術で作り出されたポーション……!!
混入している数多くの薬品が俺を癒すッ!!!急速再生するっ!!!
「うあ”あ”あ”あ”っ!!!!おあっ、あ”あ”あ”っ……、お、美味しいよ春雨ェ!!」
失くした足がボコボコと音を立てて再生する。臓器も同様にだ。
「うんうん、司令官は元気一杯な姿が一番ですからね??」
まさか強制的に元気一杯にされるとは思いもよらなかった。
「ありがとう春雨、元気一杯になったよ」
そう言って、力こぶしを作ってみせる俺。失くした足も臓器も再生して、血液も増えて元気になったからな、実際元気超元気。
「うふふ、じゃあ、元気になった司令官にお願いがあるの??」
「何だい？」

すると春雨は注射器を取り出して、言った。

「司令官の血液、頂戴？」

ああ、何だ。

「その位なら、幾らでも」

「あは⁇やったあ⁇」

春雨は『旅人の輸血液』を　手に入れた　！

１８５話　星に願いを　その１

ううっあ”、大分抜かれたなァ……。
俺の血で何すんだろうな、春雨。
まあいい。
しかし、あれだな。春雨だけのお願いを聞いたとあっちゃ不公平だ。
よし、ここは、日頃の感謝の気持ちを込めて、艦娘の願いを叶えてあげよう。

「と言う訳で陸奥。さあ、願いを言え。どんな願いでも一つだけ叶えてやろう」
「あら、本当？うふふ、どうしようかしら……??」
いや、違うんだ。
これは決して遠回しな自殺なんかではない。
単純な善意、愛情から来るものだ。
愛を以って接すれば、愛のある答えを返してくれるだろう、きっと。
「それじゃあ、提督？」
「何かな？」

「自分の手足を切り落として、この首輪をはめて、私の部屋で一生を過ごしてくれないかしら？」

愛のある答えとは。
「それは不可能だ。他の願いを言え」
四肢欠損からのペットプレイか。中々に業が深いな。リョナはいかんぞ。
「どうして？一生大切にするわよ？」
そう言う問題じゃないよね。もっと根本的な所が間違ってる。
「俺はマゾじゃないから、ペットプレイには付き合えない」
そこに尽きる。性癖の問題だ。倫理？道徳？知らんな、犬にでも食

わせろ。
「飼ってあげたいのに……」
「妥協案として犬耳生やすから、それで」
獣化の丸薬を飲み込み、犬耳と尻尾を生やす。俺の獣化とか完全に誰得だが、仕方がない。
「……！　うん、可愛いわ、提督」
すると、抱きしめられ、頭を撫でられた。おお、陸奥の豊満な胸が押し付けられて実際ウレシイ。相変わらずのダイナマイトボディだな。本人は爆発は嫌だと言ってるが。
「よしよし、良い子良い子……」
生やした犬耳を触られる俺。少しくすぐったいが、悪い気はしない。陸奥お姉さんに甘えるのもアリだな。
「陸奥ー！」
すぐそこのソファに押し倒す。陸奥はあれだな、お姉さんタイプだ。いや、長門型では妹だが。甘えるより甘えさせる方が好きなんだろう。
甘える……、甘えるか。任せろ、今の今まで社会に甘えてきた旅人さんだ、完璧な甘えっぷりを見せてやるぜ!!
「陸奥、愛してるよ」
「あらあら、どうしたの？」
取り敢えず、唇を奪うか。
「んっ？……ちゅ??れろ??れる……??」
おやおやおやおや？
軽くキスしたはずが、頭を押さえつけられ、無理矢理にディープキスさせられてる。
「ちゅ、ちゅう??」
長門型特有のパワーで押さえつけられ、唾液を啜られる俺。唇を奪われているのは俺だった……？
でも良いや、抵抗しないでおこう。手足を切り落とせ、ってのも、抵抗されたくないってことなんだろうし。
されるがまま、逆レ的光景を楽しむか!!

「あは??提督の唾液、美味しい……??」
濃厚なディープキスの後のセクシーな赤い舌がエロくって大変オーケー。
「それは重畳」
「犬耳と尻尾、ぴこぴこ動いて可愛いわ??」
犬耳尻尾を存分にモフられる。獣化時のモフモフさ加減は密かに自信アリなのだ。ふふふ、どうだ陸奥よ、俺はモフモフだろう?もっと撫でて良いのだぞ?
されるがままに撫でられていると、行為はどんどんエスカレートしていき、陸奥は遂に俺の服を脱がせ始めた。何とかパンツだけは阻止したが。
「貴方は私のもの、誰にも渡さないんだから……」
おお、全身にキスマークを付けられたな。
エロい。
エロいなあ陸奥は。
俺、おじさんだから、エロい子大好きなんだよね。いや、おじさんがエロい子大好きみたいな言い方は配慮に欠けていたな、すまない。
「……楽しい?」
「ええ、とっても」
それは良かった。
「……隙ありよ!!」
「無いんだな、これが」
一瞬、パンツの中に手を突っ込まれそうになると言うアクシデントもあったが、概ね無事に過ごせたと言って良いだろう。
×
×
×
夏の日の昼間、私は今日の任務を終えて、鎮守府に帰ってきたところでした。
妹の那智と別れ、外出しようとしたその時、
「俺は神龍、俺は神龍……」
謎の自己暗示を続ける、私の愛しい人に出会ったのです。

「……あの、提督？」
「よう、妙高。聞いて驚くな、今日の俺は神龍なんだ。さあ、願いを一つだけ叶えてやろう!!」
神龍……？
「あの、すいません、神龍とは？」
「何だ、妙高。漫画は読まないのか？」
「はい、読んだことはあまり……」
文学小説はよく読みますけど、漫画は……。
「まあ良い、兎に角、願いを叶えてあげよう」
「は、はあ……」
また、急な思いつきでしょうか？
そもそも、私ごときが提督にお願いなんかして良いのでしょうか？
色々と迷うところではありますが、願いを言うだけならバチは当たらない……、ですよね？
「で、では、もし、もしよろしければ……、わ、私と買い物に!!」
「んもー、良い子だな妙高は。そんなことで良ければいくらでも！
……皆んなこんなだと楽なんだけどなぁ」
「良いんですか?!ありがとうございます！」
や、やりました！

「……にしても、本当に買い物に付き合うだけで良かったの？折角何でも願いを叶えるってんだから、もっとこう、ボーナスを出せとかさ」
「いえ、私は、提督のお側に居られるだけで幸せですから……」
ご多忙な提督の時間を、私に少しでも割いてくれるなんて、こんなに嬉しいことはありません。
「そう？もっと我儘言って良いのよ？」
「そんな！こうして一緒に歩けるだけで、私は……」
十分満足ですよ、提督と二人きりで居られるだけで。
……本当は、もう少し。
欲を言えばもう少しだけ、距離を縮めたいところですが……。
「んー、分かった、こうだな？」

「えっ？あっ……??」
提督、手を、繋いで……？
こんな、まるで恋人のように……??
「い、いけません！私なんかに、こんな……！」
この人はいつもそうだ。
ただ、愛するだけの、奉仕するだけの立場にある私の、ほんの、ほんの小さな欲を見抜く。
私のして欲しいことを見抜いてしまう。
「駄目です、私は……」
「良いじゃん良いじゃん、妙高は美人さんなんだからさ、ちょっとくらい我儘言っても許されるよ」
……愛して、くれるんです。
私は提督を愛せるだけで幸せなのに。
こんなことをされたら、私は……。
「さあ、行こうか。買い物……、新作の本だったな」
私は、おかしくなってしまいます……??

１８６話　星に願いを　その２

「願い？」
「そう、願い」
居酒屋鳳翔、夜の一幕。
足柄との酒盛り。
酒盛りィ！
失礼しました、酒盛りと出てしまいました。
……いやあ、足柄は良いぞ。セクハラも下ネタも冗談も通じる。顔良しスタイル良し器量良しの良い女だ。こうして酒を飲み交わしてる最中、遠慮なく接することができるからな。
「俺にできることなら何でもやるぞー」
「……毎回そんなことするから後々後悔する羽目になるのよ？」
はっはっは、何を仰る。
そんな人が脊髄反射だけで生きてるみたいに言うのは感心しないぞ！
俺だって色々と考えて生きているのだよ。
「……それで、願い、だったかしら？」
「おう、なんかやって欲しいことあるか、足柄」
響に貰ったウォッカのグラスを傾けつつ、足柄に問いかける。
まあ、なんだかんだ言っても足柄だ。そんなヤバいことは言わねえだろ。
「んー、特に無いのよねぇ」
「あら、意外。子供が欲しいくらい言ってくるかと思った」
あるぇー？おっかしいな？無欲だぞ？
「子供？子供ねぇ……。まだそう言うのは良いわ。第一、身重になったら戦えないじゃない」
おっ、バーサーカーかな？うちのカルデアにはバーサーカーしか居ないぞ！
「私は艦娘なのよ？貴方に勝利を捧げるために存在しているの」
足柄がこちらを向く。酒のせいなのか何なのか、上気した頬が色っ

ぽい。
「私はね、提督。貴方のためなら何だって出来るのよ。貴方のためなら、行きずりの男に抱かれようと、死ぬより辛い拷問を受けようと構わないわ」
……凄い女だ。
足柄は覚悟している。
普段はただのバーサーカーお姉さんだが、その胸には確固たる意志を、決意を秘めている。やると言ったらやるスゴ味があるッ!!
例えば、だ。
例えば、足柄に、苦楽を共にしてきた黒井鎮守府の仲間を殺せと言ったらどうなるだろう。
例えば、足柄に、この国の総理大臣を殺せと言ったらどうなるだろう。
例えば、足柄に、何の罪もない赤子を縊り殺せと言ったらどうなるだろう。
答えは簡単。
殺すのだ。
足柄は殺す。
俺の前に立つ障害の一切合切を殺すのだ。
それが足柄の、妙高型の忠義であり、愛の形なのだ。
「……足柄さんよ、いつも言ってるけども、俺は」
「ストップよ、提督。それ以上は駄目」
足柄は俺の口元に人差し指を当て、屈託のない笑顔で告げる。
「提督、貴方はね、この足柄が全てを捧げるに値するたった一人の人よ。……好きよ、大好き。心から愛してるわ」
突然の告白。
……うあー、やっぱり、良い女だ、足柄は。
大人っぽい外見からは想像もつかないような明るい笑みを浮かべる足柄。綺麗だ、掛け値無しに。
「……ありがとう、足柄。俺も愛してるよ。だからこそ、足柄にしてやれることって無いか？」

こんだけ愛されちゃあなぁ。お返ししなきゃならんでしょ。
「良いのよ、別に。こうして一緒にお酒が飲めるだけで嬉しいわ！」
あれ？ひょっとして足柄って良い子？他のサイコパスの皆様方とは違って、まだまともな方向性なんじゃないか？
確実に、付き合いやすい方ではあるよな。
「そっか、じゃあ、飲むか！」
「ええ！」
ウォッカのグラスを呷る。うむ、良い女と飲む酒は美味い。
因みに足柄は缶チューハイ。仕事に疲れたＯＬ感。
……。
よし、セクハラするか。
いや、待ってくれ、これは違うんだ。
ほら、あれ、あれだよ、うちの艦娘、基本的にセクハラすると喜ぶから！スキンシップは大事だよな！
決して、足柄の完熟ボディにムラっときたとかそんな邪な理由は無いから！
し、仕方ねえだろ?!フロイト並みに全てが性に結びつく黒井鎮守府だぜ?!セクハラは基本！
まあそんな訳で。
「足柄ー」
「あら？やぁん??」
ヤバいと思ったが性欲を抑えられなかった。ムラムラしてやった、後悔はしてない。
足柄の肩を抱き寄せ、乳房を揉みしだく。
おお……、これは……！
言っておくがな、足柄のスタイルは相当なもんだぞ!!言動はＯＬ感に溢れているが、身体は大人の女としてバッチリ成熟していて、おっぱいだって形が良くって適度なデカさ！
その上、度重なる戦闘行為で鍛え上げられているから、筋肉の張りがあって……!!おっぱいに沈んだ指が押し戻されるこの弾力!!分かるか!!貴様らに分かるか!!!

「もう、提督ったら??」
官能的……!!
なんて色気だ、おち○ちんが破裂してしまう!!!いや、そこまでじゃねえな、俺の平常心を以ってすれば、
「ねえ、分かる？私がこんなことを許す男の人はね、貴方一人だけなのよ??」
無理ですわー！無理無理！こんなことを言われたら無理！
男冥利に尽きるとかそんなレベルじゃねーですわー!!
「誘ってんのか足柄ァ!!!」
「私はいつでもオーケーよ！」
畜生！抱きたい！突っ込みたい！ナニがとは言わないがガンガン突っ込みたい!!
良いんじゃないかこれ？良いんじゃないの？
あっ、駄目だ。もしもここで抱いてみろ、監視している艦載機やカメラからバレて鎮守府崩壊。
クッソ、監視を振り切ってホテルにでも転がり込むか？
いや、それも駄目だ、白露型とか古鷹型に勘とか匂いとかで見事にバレる。
どうあってもセッ○ス出来ないのか俺は!!
畜生、こんな世の中間違ってる！
変えてやる……！
俺が世界征服してエロに溢れる世界に変えてやるんだ!!
「んうっ??提督、触り方、気持ち良いわ??」
変えてやるんだ!!!

さあて、足柄との一幕でアンダーテールばりに決意を胸に秘めた俺は、新たな艦娘の願いを叶えに行くのであった！
お次のターゲットは、鳳翔だ。
黒井鎮守府の母、皆んなのママ、鳳翔だ。
別に母の日とかそう言うあれでもないけど、願いを聞こうじゃない

か。
……良く考えたら、俺に母親は居なかった。いや、生物である以上母親は居たんだろうけど、物心つく前に両親は蒸発してたんだよね。
だから母親ってのがどんなもんなのか良くわからんけども、それでも鳳翔はこの鎮守府の母親的な立ち位置にある、と思ってる。
そんないつも頑張ってくれている鳳翔に、感謝の気持ちと愛をお届けしてやるぜ！
「と言う訳だ鳳翔！」
「は、はあ……」
「良いか鳳翔、この黒井鎮守府はアルファコンプレックス並みに幸福が義務付けられてるからな！」
艦娘、幸福は義務です。
「そ、そうなんですか？私、既に十分過ぎるくらいに幸せで……、願い事なんてありませんよ？」
無欲ッ!!!
清廉潔白かよ。人間、強欲なくらいで丁度良いってのに。
「駄目だ鳳翔、我儘を言え」
「わ、我儘を言え、ですか？」
すると鳳翔は口元に手を当て、視線を右上にやり、考える素振りを見せた。やがて、考えがまとまったのか、手を叩いて、言った。
「では、こうしましょう。休んで下さい、旦那様」
「ん？休みが欲しいの？良いよ、一週間くらい休暇出すから」
「いえ、そうではなく、旦那様に休んで欲しいんです」
「……は？」
は？ちょっと何言ってるか分かんないですね。
「ちょっと、ちょっと待って、俺は鳳翔のお願いを聞きに来たんだ。何で俺が休むなんて話になるんだ？」
「いえ、だって……、旦那様はいつもお料理やお掃除に戦闘指揮に戦闘行動、色々頑張って下さっているではありませんか」
いや……、いや、ここ最近頑張った記憶が無いんだけども。
「いつも私達の為に尽力して下さっている提督がお休みしてくれるの

が、私のお願いです」
美しい、実に美しい笑顔で告げる鳳翔。地上に舞い降りた女神かよ。ＡＰＰ１８超えるぞこれ。
先程明石に「何か俺にお願いとか無い？」って聞いたら、速攻で「一発ヤッて下さい」って返って来たのに。欲望に塗れていたのに。
薄々気付いてはいたが、やっぱり鳳翔は女神だったんだ。
だがな!!!
「駄目だ！そうじゃないんだ！そうじゃないんですよ!!」
俺は許さない!!
そんな答えは許さない!!!
絶対に許さないぞドンサウザンドオオオオオオ!!!!
「え？え？」
「俺は！鳳翔の！お願いが！聞きたいの!!!」
駄々をこねる!!!???年間もの間社会に甘えて来た旅人の駄々！舐めるなよッ!!!
「え？あ、ええ？じゃ、じゃあ、そうですね……」
また、先程と同じ、考え込む仕草。
「で、では、その……、頭を、撫でて頂けませんか？駆逐艦の皆んなにするみたいに……」
……。
「鳳翔」
「……す、すみません。変なこと、言っちゃいました。わ、忘れて下さい」
「鳳翔」
「わ、私、もう行きますね？これからお洗濯しなきゃいけませんから」
「鳳翔オオオオオオ!!!!」
「きゃあ?!」
駄目だ駄目だこれは駄目だ。反則過ぎる。美人なのに可愛い。可愛いのに美人。

もう辛抱たまらん！思いっきり遠慮なく抱きしめ、頭を撫でた。髪はふわふわ。撫で心地最高。俺の知り合いの医者は嫁を撫でてたら一日が終わってたって言ってたけどこれマジだな。
「あっ……??」
「よしよし、良い子だな、鳳翔」
うむうむ、鳳翔の体温が伝わってくるぞ。あったけえ……。安心する温度、そして匂いだ。
「いつもいつも、家事も出撃も頑張ってくれてありがとな。感謝してるぞ」
「そんな、私は……??」
「大好きだ鳳翔。一生幸せにしてあげるからな。ずっと一緒だぞ」
「……はい??」
俺としては、ちょっと強引に迫るくらいが丁度良いと思ってるんだが、たまにはこうやって純愛するのも良いよね。
んー、ラブラブですわ。
石破ラブラブ天驚拳放てそう。
「……あの、旦那様？」
「ん、何だ鳳翔」
「その、もしも、もしもよろしければ……、また今度も、撫でて頂けませんか……？」
今じゃ！パワーを純愛に！
「いいですとも!!」
……と、言う訳で、鳳翔を存分に愛でた俺は、次のターゲットの艦娘を探して鎮守府を巡るのであった。
次はどんな出会いが待っているのだろう。
今から楽しみだ。
……生きて帰れるかな、俺。

１８７話　星に願いを　その３

スニーキング!!
蛇のように、音を立てず、気配を消して、対象に忍び寄る。
思い出すぜェ、アラスカのフォックス諸島沖のシャドーモセス島を！
……あの時はヤバかったなあ。成り行きで知り合いの蛇と呼ばれる男とシャドーモセス島ってとこに潜入してな？詳しい話は省くけど、爆発に巻き込まれて死にかけた。その後海を泳いで帰った。寒かった。
そんなこんなで、存分に鍛えられたスニーキング能力を十全に発揮。
そしてそこから、はい、いっせーのーで！
「如月ィ!!!!!」
「きゃあ!!!?!!」
後ろからッ！抱き上げるッ！
よーしよしよし!!よーしよしよし!!!
「え？え？司令官？」
如月にペースを握られるのは不味い。処女ビッチだが魅力は本物。いつコロッと堕とされるか分からない。
確かに俺は百戦錬磨のナイスガイだが、同時に人間の屑でもある。
今この瞬間にも、如月のエロ可愛さに負けてベッドインしてしまう恐れがあるのだから、侮ってはいけない。
「ど、どうしたの司令官？」
「如月のお願いを聞きに来た！」
畳み掛けようじゃないか。某黒のライダーが如く理性が蒸発する前にお願いを聞き入れるのだ。さもなくばこどものじかん的な、ＬＯ的な展開が待っているぞ。
大丈夫だ俺。俺には鋼の理性がある。恐怖を捨てろ、前を見ろ、進め、決して立ち止まるな！退けば老いるぞ！臆せば死ぬぞ！
「あら、本当？じゃあ、司令官には……」

すると如月は、俺に抱きついて、言った。
「素敵な夢を見せて欲しいの??」
素敵な夢をォ?!見せて欲しいのォ?!!
「ねえ、良いでしょ？貴方と一緒に、初めての夜を……??一生忘れないロマンティックな思い出が欲しいの??」
夢見る少女の乙女心がキュンキュンしちゃうのッてかァ?!叶えてやるよォ!!
「ならば俺は……、ナドレ!!!!」
はい、服パージ。
さあ、今の俺は全裸だ。
だが安心して欲しい。俺の絶対に見えてはいけないところ、即ち股間の《断空砲》は、確りとブルーレイでなくなる謎の光で隠されてるからな！これで18禁展開にはならない。
そして待って欲しい。
俺もただ脱いだ訳ではない。
「蒸着!!!!」
早着替え……!!!!
俺は即座に正装の白いツーピースーツに着替える。この間約0.1秒以下。
ホストみたいな格好？いや、俺の趣味だよ？……まあ、ホストやってた頃に使ってたのと同じやつだけど。
「やだ、かっこいい……」
如月もこの反応。
そう、俺は、今まで黙っていたが、実は、イケメンなのである!!!!
……イケメンなのである!!!!（強調）
ダークデイズドライブとかニャルラトホテプの人間に化けた姿とかハリウッドスターとか、兎に角そんなレベル。ＡＰＰで言うなら18くらい。
……さてさて？
何勘違いしてるんだ？俺のバトルフェイズは終了してないぜ！
「強制ストリップ真拳!!」

強制ストリップ真拳……。
俺が唯一、誰にも負けることがないであろうと確信できる必殺の拳技だ。
それを以って、如月の服を脱がせる!!あっ、まーた紐パン履きやがってこの子は!!!
更に更に!脱がせた後は、着せる!!!赤の華やかなドレスを!!!
「如月、パリで良いか?」
「え?え?」
「それとも香港?中華でも良いぞ?」
「何の話?」
え?
「だから……、夢が見たいんだろ?ここは一つ、最高のデートを、と思って」

さあ、所変わってフランス。花の都パリ。
うん、門の創造で転移しました。俺の神話技能は９９あるぞ。
「ちょっと待って司令官、ちょっと待って……。私、理解が追いついてないわ」
今北産業ってか?
「パリで
デートを
しましょう」
「……なるほど?」
考えるな、感じろ。
「まあ、よく分からないけれど……、司令官とデートできるなんて嬉しいわ。エスコートして頂戴?」
如月の小さな手をとって、と。
「勿論さ、愛しい人」
街へ。
と、まあ、そんな感じで。高級ブランドの本店が立ち並ぶサントノーレ通りでショッピングを楽しみ、オペラを見て、最終的に夜景の

素敵なレストランへと。
　因みに、ここまでの出費、日本円で大体百万くらい。ギリギリ合法の貿易だ何だで荒稼ぎしてる俺からすれば安いもんよ。
『どうもミスタ、食前酒は？』
『シャンパーニュを』
『娘さんには？』
『彼女は娘ではない（無言の腹パン）』
　ソムリエと軽いやりとりをしつつ、如月と運ばれてきたシャンパーニュで乾杯をする。
「……楽しんでくれているかい、如月？」
「ええ、とっても！……ふふ、最初はちょっとした冗談のつもりだったのに、こんな素敵なデートができるなんて思ってもいなかったわ！」
　いやあ、こう言うロマンティックなのはね、得意なんですよ。ロマンティックあげるよ。キラキラ光った夢をあげるのだ。
　……マナーも店選びも女の子口説くために覚えたって言うのは秘密だ。
　そんな感じで、美しいパリの夜景を楽しみながら、上等な料理に舌鼓を打つ。……ん、ここの料理いけるわ、ソースの味付けがグッド。帰ったら真似しよ。
　……さて、いつもなら。
　自由気ままな旅人としてのいつもならこの辺でホテルに直行、シルクのベッドで愛し合おう朝まで、と言った所だが。残念ながら、それは許されない立場にある。
　良い加減そろそろ逆レされそうではあるが、俺から襲うのはＮＧなのだ。儘ならないね、世界。
　まあ、この後は、普通に、本当に普通に鎮守府に帰ったんだが……。もう、ここまで雰囲気作りした訳だから、セッ〇スしたと言っても過言ではないだろう。達成感有り。
　と言う訳でいつも通り、幸せなキスをして終了だ。
　……何にもしてないよ？
『警察だ！こんな時間にこんな幼い女の子を連れ回して、何やってる

!!』
何もしてないんだけどなぁ!!!!

何もしてないのに捕まると言う悲劇。警官を殴り飛ばして逃げた。犯罪？知らん、そんな事は俺の管轄外だ。
さて、次のターゲットは？
「おっそーい！」
島風かァ……!!
「ｃｏｍｅ　ｏｎ、島風!!」
呼び止めると島風は急ブレーキ。俺の方を向いた。
「提督、どうしたのー？」
同時にマッハ抱き着き。速度！効くゥ!!
「かっ、は、し、島風！何か俺にお願いとかないか？何でもやってやるよ！（何でもとは言ってない）」
「ええっ！本当?!じゃあね、じゃあね、提督のアレ、教えて！」
……アレ？
アレとは一体？
「何のこと？俺に教えられることなんて、あんまりないんじゃないかな？」
二段ジャンプも空中ダッシュも教えたんだがな。もう教える事なんて特に……。
「あの、魔法陣がパッて出て、飛ぶやつ！」
魔法陣？ナーク＝テイトの障壁……、あ、いや、エアハイクか？
「これ？」
目の前でエアハイクをする。因みに、俺の魔法陣の色は白だ。知り合いのデビルハンターは赤だった。
「そう！それ！」
これか。
「良いぞ、教えてやる」
さて、まずは魔力の操作からだな。

島風も艦娘、内在する神秘に比例して魔力もあるだろう。
「まずはこう、こんな感じで、魔力を出して……」
島風に魔力を流す。
「んあっ??て、提督のが、入ってきて……??」
……いやらしい。
「凄い、こんなに沢山……??あったかいので、いっぱい……??」
純愛ラブラブエロ同人みたいな台詞を吐くんじゃあない！
「さあ、やってごらん」
「ん、こう、かな？」
「良いぞ、それを円形に圧縮して、足から出すイメージだ」
「ええと……」
二、三時間程経っただろうか。
島風は、俺の的確なインストラクションによって、見事エアハイクをマスターした。
常々思ってるけど、艦娘の学習能力やべえ。何で二、三時間で技一つモノにできるんだよ。俺がトリックスタースタイル極めるのにどれだけの悪魔を狩ったと思ってんだ。これが才能ってやつか。
「……良し！提督！駆けっこしよ！」
「ああ！」
そして、覚えたエアハイクの試運転だろうか、駆けっこを申し込まれた。
良いだろう。俺も逃げ足には自信があるんだ。
「じゃあ、追いかけるよ！」
「追いついてみろ、島風！」
加速！ヘイスト!!タイムアルター……、ダブルアクセルッ!!!!
速度バフガン積みの俺に追い付けるかな？
「あは、はっやーい！」
ヒエッ、追い付いて来やがった?!聖闘士か何か？速過ぎィ!!!
そして教えたばかりのエアハイクを活用していらっしゃる。魔力で作った足場で空を跳ねる島風。ちょっと真剣に洒落にならない。今の今まで築いてきた自信が崩壊しそう。

「クッ、エナンザム!!!」
更にバフ。
「あ、は、ははは、ははははは!!!やっぱり、提督、はっやーい!!!」

まさかエナンザムまで使わせられるとはな……。正直ビビった。
だが、加速し続ける島風の世界に着いていけるのは俺だけなんだ。
走ってやらねば、島風の為にも。
「側にいるぞ、島風」
「……本当？」
「ああ、本当さ」
隣を歩く島風の頭を優しく撫でて、珍しくまともなエンディング。
良かった、嬌声を響かせる駆逐艦はいないんだね。本当に良かった。
エロ展開は無い、良いね？
ああ、でも。
おでこに軽く、キスくらいはさせてくれ。

１８８話　星に願いを　その４

差別は嫌いだ。
俺は最初に、艦娘の願いを叶えると言ったんだ。
例え、この黒井鎮守府以外の艦娘の願いであっても、俺は叶える。
有言実行初志貫徹。ブレない男なのだ俺は。
さて、誰にしようか。
そんなことを考えつつ、休憩室に行く俺。休憩室には大抵誰かいるからな。
そこには、
「もぐ、もぐ……、んん～！おいひいです！」
ケーキを一ホール頬張る翔鶴の姿が！
……休憩室の冷蔵庫には、俺が手慰みに作ったお菓子が大量に常備されていて、自由に食べて良いと言ってある。
そして、大飯食らいの戦艦空母の皆んなは、放っておくとお菓子を喰らい尽くしてくれるのだ。作った側からすればとっても嬉しい。
「もぐ……、あ、どうも、旅人さん」
「やあ、翔鶴」
まあ、特に何か問題がある訳でもなく、いつも通り、通常のコンタクト。
さて、翔鶴である。
翔鶴……、翔鶴か。
ほぼほぼ合併状態にある音成鎮守府の艦娘だ。今日もうちに訓練しに来たのだろう。今は休憩中と言ったところか。何も問題はない。
さて、願いを聞こうか。
「やあ、ようこそ黒井鎮守府へ。この紅茶はサービスだから、まずは落ち着いて飲んで欲しい」
「あ、ありがとうございます。……その、何かご用でしょうか？」
俺は翔鶴に優しく微笑む。
「……また、ですか？」
「うん、「また」なんだ。済まない。仏の顔もって言うしね、謝って許

してもらおうとも思っていない」
そう、「また」だ。
また、いつもの思い付きである。
「でも、この俺の顔を見たとき、君は、きっと言葉では言い表せない「ときめき」みたいなものを感じてくれたと思う。殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい。そう思って、そのケーキを作ったんだ。じゃあ、願いを聞こうか」
「願いを？……成る程、今回はそう言う趣向なのですね」
理解が早くて大変ＯＫ。
つまり、そう言うこと。
「因みに、その、お願いとは、どの位の範囲まで……？」
「そんなん、俺に出来る範囲なら何でもよ」
ここで我が黒井鎮守府の艦娘ならば、「ん？今何でもするって言ったよね？」となって、野獣の眼光を見せられることになるところだが、音成鎮守府なら安心安全。安請負しちゃうもんねー！
「んー、そう、ですねえ……」
ケーキを食べ終え、口を拭いながら思案する翔鶴。何だ？何でも聞くぞ？
「それじゃあ、動物と触れ合いたいなー、なんて……」
「ＯＫだァ！」
何て優しい答え。まともだ。
首輪付き、はマンネリ感。動物園、じゃあ触れ合えないな。
ならば答えは一つ。
「奥羽山脈、行こう！」
「……奥羽山脈？」
東北の、秋田の方、奥羽山脈の二子峠。あそこには俺の友人がいる。いや、人ではないからな、友人と言って良いのか分からんが、それでも、俺は友人だと思ってはいる。
そんな友人達に会いに行こうじゃないか。
さあ、やって参りました奥羽山脈。

初手獣化からの遠吠えで、知り合いを呼び寄せる。
『ウオオオオオオオォォォォン……!!!!』
するとどうだ、二子峠から沢山の犬が!!
『久しぶり、お前ら!元気してたか?』
『おお!久しぶりだな、旅人!』
『食い物寄越せ!』
『旅人だ、旅人の野郎だ!』
はっはっは、戯れるな戯れるな。いやあ懐かしいな、ハイブリッドの件以来かな、ここに来るのは。
「え?あの……、ちょっと待って下さい。……話、通じてるんですか?」
「さっきから皆んな喋ってるだろ?」
「いえ、その……、吠えてはいるな、とは思いますけど……」
んー、やっぱり通じてないか。犬と話せない人多いよな、何でだろ。
まあ、それはさておき、
「ほら、触れ合って良いぞ、翔鶴」
「は、はい、じゃあ……」
触れ合うが良い、翔鶴よ。
「わ、もふもふ……、可愛い」
おっかなびっくりと言った様子で犬を撫でる翔鶴。もちろん、翔鶴の方が可愛い。
『何だこの女?』
『俺の……、嫁?』
奥羽軍の戦士の一匹、佐助に尋ねられる。因みに、佐助の犬種は柴犬だ。……まあ、翔鶴は俺の嫁と言っても過言ではないだろう。一応ケッコンカッコカリの指輪も渡してあるし。
「この子、お名前は何て言うんですか?」
「ああ、こいつは佐助、そいつはロケットだな」
「そうなんですか……。男の子ですか?」
「うん、奥羽軍の戦士は大体男だよ」
「戦士?!」

この山にいる犬は皆んな勇敢な戦士だよ。
「た、戦うんですか？」
「有事の際には」
侵略者が現れたり、熊が出たりしたら戦うんだぞ、奥羽の戦士達は。
「ほら、餌でもあげると良い」
「は、はぁ、そうですか。佐助くーん、おやつだよー」
『おお、ありがとよ』
うん、良い画だ。動物と美女。視聴率アップ間違いなし。キルビジめいて視聴率アップですわ。ヘルピープルも納得の可愛さ。
写真でも撮っておくか。ベンもジョンも死んだし、会える内に会っておかないとなー。

犬との触れ合いを存分に楽しんだ翔鶴と別れ、鎮守府に帰ってきた。
さーて、まだまだ聞くぞ、まだ聞くぞ。
次は、と。
「くっ、黒井鎮守府の皆んなには負けてられない……！はっ！やっ！てやぁぁぁ!!」
訓練場で必死に刀を振るう神風を見つけた。
袴か。このご時世に大正浪漫感溢れるこの格好。良いじゃん。
「何やってんの？」
「あ、旅人さん！」
会話コマンド。
……何？普通だって？いや、俺、普通の人だから。いきなり抱き上げたりとかそんなことはしないさ。
さて、何やってんのかな、と。
「どうしたの、やけに熱心に訓練してるけど」
「旅人さん、お願いがあるの！」
お、話が早いな、実にＯＫだ。
「何だい？」

「私を強くして!!」
「えっ」
えー。
なんか、こう、キャピキャピしたやつを予想してたから……。神風の神風をペロンしてペロンみたいな……。
「お願いしますっ！私、黒井鎮守府の皆んなみたいに、強くなりたいんです!!」
「……まあ、良いか」
ここまで熱心にお願いされちゃあねえ。

「……で、えーと、強くなりたい、だっけ？」
「ええ！」
……参った、普通にどうしよ。
俺、強くねえし。ウタカゼで例えるならば俺は知恵と愛情にしか振ってない感じ。戦いは門外漢。
「あー……、えー、神通、は駄目だな、訓練で殺しかねん、鹿島、も基礎しか教えられないし……、そうだ！」
そうだ、装備。
装備を変えれば簡単に強くなれるんじゃないか？
「これ、あげる」
「……これは？」
「飛竜刀」
ユクモ村で狩ってきた。言っておくが、俺は一応G級ハンターの資格を持っているぞ。
「こんな凄い業物、貰えないんだけど……」
「良いから貰ってよ。俺が持っててても腐らせるだけだしさ」
と言う訳で飛竜刀を押し付けておいた。
「さて、これでいくらか強くなったんじゃない？」
「……いえ、得物が良くなっても、地力は変わってないから！」
地力ねぇ。そう言うのは本当、継続して訓練するしかないからなぁ。積み上げるしかないのだ。

「地力をすぐに鍛えるのはちょっとなあ……」
「やっぱり、無理、かな？そんなうまい話は無い？」
「いや、あるにはあるけど……」
　手っ取り早く地力を鍛える方法なら、人間をやめるのが一番早いんだけど、まさかおすすめする訳にはいかねえしな。となるとハーブか、ポーションか。ポーションは貴重だからなー。
　でも、他でもない神風のお願いだ、できるだけ叶えてやりたい。多少の出費が何だ。
「だったらお願い！私を強くして！尊敬する足柄さん達に追い付く為にも、手段は選んでられないの！」
「しょうがないにゃあ……、良いよ」
　テレテレッテレー、ノースティリス産、潜在能力のポーション。
「飲むと良い。ちょっとだけだが、強くなれるよ」
　正確には強くなる余地が増える、だが。
「……え、その、薬とかは……」
　ん？何か問題が？
「いつもみたいに魔法とかで強くして貰えるのかと……」
　バフ魔法は一時的な強化だから。
「まあまあ、ポーションどうぞ」
「え？これ大丈夫なの？本当に大丈夫なの？」
「一気、一気！」
「わ、分かったわ……。えいっ！」
　お、飲んだ。
「あとはこれ、キュラリア」
　ノースティリス産ハーブ。ノースティリスのハーブは何故かは知らんが食べると大きく経験値を得るからな。味は不味いが。
「これ、食べるの？」
「不味いけど、効くよ」
　恐る恐るハーブを口にする神風。
「う、うえっ、本当に不味い？！」
　不味いよ、そりゃあ。えぐみと苦味の集合体みたいな感じだよ。下

手すりやそこら辺の雑草の方が美味い。
「噛まずに飲み込むんだよ」
「……うう、これ、本当に強くなってるの私？」
「ああ、ちょっとづつだけど、確実に強くなってるよ。……ポーションとハーブ、数日分あげるね」
と、ポーションとハーブの在庫を押し付けて、俺はクールに去るぜ。
おっと、その前に。
「口直し、要るかい？」
「うえっ……、う、うん、良ければ何かくれない？」
「はい、どうぞ」
口直しと言ったら決まってる。
熱い口付けだ。
「んにゅ?!!」
何だい、キスくらいで真っ赤になって。そのまま神風はフリーズした。
……いやー、処女からかうのは面白いなあ！

１８９話　星に願いを　その５

「～♪」

何処からか、聞こえてきた鼻歌。脳味噌を蕩かすような甘ったるい声。ずっと聞いていたいくらいに素敵だ。

そして歌の内容は「星条旗」、アメリカの国歌。

さて、日本の、この黒井鎮守府でそんな歌を歌うのは？答えは簡単、合衆国への愛国心溢れる彼女一人だろう。

「よう、アイオワ」

「Ｈｅｌｌｏ、Ａｄｍｉｒａｌ！」

アメリカンダイナマイトボディ、アイオワである。ヒュー！見ろよあの尻と乳！最高だぜ！

「ｈｅｙ、何やってるんだ、アイオワ？」

さて、声をかけてみるか。見た所、アメリカのニュース雑誌を読んでいるところだが？

「……アベンジャーズ」

そんなアイオワの口から漏れたのは、アメリカで絶賛活躍中のヒーローチームの名前だった。

どうしたの急に。

「仮想敵としては最大ね、かなり強い面子が揃ってるわ。海の上でも勝てるかどうか……」

あら物騒。

「何でアベンジャーズと戦うなんて話してんのよ？」

「？、Ａｄｍｉｒａｌはヴィランなんでしょう？いつか戦うこともあるかもしれないじゃない」

あ？んー？あー、そう言えば俺、悪党だったわ。

最近は悪いことそんなにやってないからなあ。自分が悪人だってことすっかり忘れてた。

俺がやったのって、密輸とか職権乱用とか、ギリギリ合法なことばっかりだからな。悪いことやってるって意識があんまり無い。起訴されない程度のことを中心にやってる。表立って悪事はしないが、

確実に悪の片棒を担いでいる。言わば悪の中継業者みたいなもんだ。
「まあ、どちらかと言えば悪党だけど、ヒーローとか政府とかを相手にドンパチやるつもりはないよ」
「そう？貴方に命令されれば何でもやるわよ？ｒｏｂｂｅｒｙも、ｍｕｒｄｅｒも、ｔｅｒｒｏｒｉｓｍでもね」
はっはっは、危険思想危険思想。
テロはいかんよテロは。ノリと勢いで強盗やったことも、止むに止まれず殺人をしたこともあるんだけど。
強盗は楽しかったよ、アイザックとミリアって言う男女二人組の強盗と一緒にしょうもないもん盗んでさ。
殺人は……、色んなところでやったな。特にノースティリス。あそこは世紀末的世界観だから……。
でもテロは駄目だろー。罪なき不特定多数の人をいたずらに死なせるなんて悪の組織失格だ。世界征服っってんだから、殺しはＮＧ。
「兎に角、俺の目の黒い内は、そんなことやらせないから安心して良いよ」
「あら、そう？」
そうだよ。
「でも、もしも、望むことがあったら何でも言って、Ａｄｍｉｒａｌ。貴方の願いなら何でも叶えてあげるわ！」
マジで？じゃあ俺とベッドの上で大人のプロレスごっこを……、いかんいかん邪念が。違う違う、俺がお願いを聞いてやるんだよ。
「嬉しいよアイオワ、いつも言うことを聞いてもらって。けど、俺ばっかりが言うこと聞かせたら不公平だろ？だから今日は俺がアイオワのお願いを聞いてあげるよ」
「ｏｈ、ｒｅａｌｌｙ？嬉しいわ！ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！Ａｄｍｉｒａｌ！」
手元の雑誌をパッと畳み、顔を上げて嬉しそうに言うアイオワ。アメリカ人に遠慮という文化は存在しないッ!!好意には感謝が返ってくるのだッ!!
正直、こう言う反応の方がさっぱりしていて好ましい。

「うーんと、うーんと……、どうしようかしら？ｄａｔｅもしたいし、美味しいパイも焼いて欲しい、ｓｈｏｐｐｉｎｇもしたいし……」
　可愛い悩みだなぁ。
「よし……、決めたわ！」
「何だい？何でも言ってくれ」
「一緒にお昼寝してちょうだい！」
「良いよ！」
　これが良識派か。

「簡単なお願いで助かるわー。５０００兆円欲しいとか言われたら困ってた」
「そんな天文学的な額のｍｏｎｅｙ、要らないわよ……？」
　令呪を以って命じる、添い寝しろっ！の言に従い、俺の部屋のキングサイズベッドに二人で寝転ぶ俺とアイオワ。良い雰囲気だ。最早セッ〇スしていると言っても過言ではない。
「本当は、その、エッチなことしたかったんだけど……、他の子からなんて言われるか……」
　それなんだよなぁ。俺自体は別に、ヤるのは構わないんだけどなー!!!
　チラッと、窓を見ると、艦載機がびっしりと。監視カメラもオンライン。畜生め。
「だから、これで我慢するわ。……んー」
　俺の胸元に顔を埋めて、思いっきり鼻呼吸するアイオワ。ちょっと、ちょっと待って、おじさんだよ俺、臭いよ？……いや、世の中のおじさんが臭いみたいな言い草は良くないな。
　……いやね？俺はおじさんだって自覚があるからね？肉体年齢は二十代後半くらいになるように調節してるけどさ、臭いとかはやっぱり気になるじゃん。
　だから、オーデコロンとか常用してたんだけども……、古鷹に、「それ、臭いからやめて下さい」って言われてさ。それ以降、制汗剤すら使えない有様よ。

「あはぁ??Ａｄｍｉｒａｌの匂い、最高ぉ……??」
しかし、艦娘の皆んなからすれば、俺の匂いが良い、らしい。ええ……（困惑）。
俺の匂いで軽くトリップしてるアイオワの頭を撫でてやる。
何でトリップしてるかは謎だ。んー、おかしいな、俺の匂いには病み付きになるようなヤバい成分は含まれていないはずだが。
そう言えば、知り合いのクンカーアイドルには「キミ、エキゾチックでデンジャラスな匂いがするね！」と言われたことあるが、何か関係はあるんだろうか。
まあアレかね、いつの時代でもエキゾチックでデンジャラスな男ってのは女を惹きつけちまうもんなのかね。
「この匂いが堪らないのよぉ??Ａｄｍｉｒａｌ好き、好き！大好き！Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ!!」
アイオワが壊れたぞ、どうする？トロットロに蕩けてやがるぜ。
「俺の匂いねぇ……」
「分からないのかしら?!Ａｄｍｉｒａｌからは女を駄目にする匂いがするのよ!!」
女を駄目にする匂いとは一体。
確かに、うちの鎮守府の子達は俺の匂いを躍起になって嗅ぐが……。そんな良い匂いがするものなのだろうか。
「ふふふふふ、Ａｄｍｉｒａｌの匂いに包まれたままお昼寝……！まさにｈｅａｖｅｎ!!!」
そう言ってまた抱きついてくるアイオワ。
「……まあ、臭くないなら良いや」
皆んなが喜んでくれるなら、俺はそれで良いよ。

テンションアゲアゲ（死語）のアイオワをなんとか寝かしつけ、アイオワと会った休憩室へ戻る俺。
何故か海外艦は匂いフェチが多い。
日本以外はあまり汗を洗い流したりなど体臭に気を遣う文化がな

いからだ。一律香水で済ませてしまう。
だからなのか、どうも、俺の生の匂いには興味深々らしい。
「提督??」
それは、ここにいるサラトガも例外ではないのだ。サラは、俺に近付き、自然な流れで抱きついてきた。
そして、俺の匂いをさり気なく嗅いでいる。やっぱり匂いフェチじゃないか……。
まあ、それは別に構わないが。
「よお、サラ」
と言って、軽く口付けを交わす。こんなん挨拶ですわ挨拶。
「ふふ、提督の味……??」
するとサラは、軽い口付けで交換された唾液を味わうかのようにぺろりと、赤い舌を動かした。途方もなくエロい。エロは良い文化。そして、そのまま、サラは言った。
「提督、最近は皆んなのお願いを聞いて下さっているとか?……サラも、実は、提督にお願いがあって来たんです」
ほーん、鎮守府で噂になってんのか。
「俺にできる範囲ならね」
と、前置きしておく。
「大丈夫です、提督なら平気なことですから……」
んー?何かな?何かな?
「提督……、貴方を、食べたい……??」
食人だね!分かるとも!
「成る程、それは性的な意味で?」
一応聞く。
「それも素敵ですけど……、どちらかと言うと食料的な意味でですね!」
そっかー。
予想はしていたが、食人かー。食われんのは慣れてるけどさー。ま

た変な性癖に目覚めちゃってもう。取り返しがつかねえぞこれ。変異治療のポーションで良いかな。
「まあ、一口くらいなら良いよ。はい」
俺の身体には色々とヤバいもんが入ってるからな、一口だけな。齧りやすいように防御デバフを自分にかける。さあ、僕の身体をお食べ。
「あは、やりました！あーん……、かぷっ」
晒した肩に齧り付くサラ。
まあ、相応に、痛い。生きたまま齧られるのはそれなりに痛い。ラクーンシティの惨劇を思い出す。あの時も沢山齧られたっけ……。ウイルスは効かない身体だが、食われはするのだ。
「んぐ、もぐ……」
愛おしそうに俺の身体を撫でながら、俺の肉を咀嚼するサラ。すると、どうしたことだろうか、まるで雷に打たれたかのようにビクビクと震え始めたじゃないか。
「〜〜〜ッ!!!」
微量とはいえ、プラスミドとかヤバい薬入ってるからな、俺の身体。大丈夫だろうか。
「サラー？大丈夫かー？」
「〜〜〜最っ高!!!」
おやおや。
「凄い……、凄い!!大好きな提督にお腹の中犯されちゃってる……??」
口元を血で濡らし、恍惚とした表情を浮かべるサラ。ここだけ見るとホラーシーンである。
「……ああ、ごめんなさい提督。痛かったですよね、辛かったですよね。サラが舐めて治してあげますからねえ……??」
血の溢れる傷口を戯れつく犬のように舐めるサラ。口では俺に気遣い、傷を治すと言ってはいるが、どう考えても俺の血を啜っている。
「サラ？」
「じゅる、じゅるる……、はあい？」
「美味しい？」

「えへ、えへへへへへ、ええ、とっても……??」
あーあー、口、真っ赤じゃないか。ハンカチを渡たして、と。
「口、拭きなよ」
「もう、ちょっと。もうちょっとだけお願いします」

結局、その後。
サラは小一時間ほど俺の血を吸い、満足したのか、酔っ払ったかのようにふらふらと、千鳥足で自室に帰って行った。
俺の血肉、ねぇ。半分は仙人だからね、美味いらしいね。ただ、摂取のし過ぎには注意ってことで。
他の子にも言っておかないとな。
……正直、貯めてる輸血液持っていかれるのは困るんだよなぁ。
血が足りないよ、全く。

１９０話　星に願いを　その６

「デート、デート、提督ーとデート！」
おーおー、楽しそうだな、榛名。
榛名が楽しそうで何よりだよ。
……可愛い可愛い榛名ちゃんに「何か願いはないか？」と聞いたところ、速攻で「デートしたいです！」と返ってきた。故に今は、街へと繰り出し、デートしている。
こうして街を歩いてるぶんには普通の女の子だよなぁ。
あ、どこの街って言われると、神室町なんだけども。やっぱ遊ぶならこの辺だよな！
「えへへ、こうして提督とデートできるなんて、榛名は幸せ者です……??」
これでもうちょっと大らかなだったらなあ……。ちょっとでも他の子に粉かけようもんなら一瞬で怒るから……。
まあ、地雷さえ踏み抜かなきゃただの美人さんだ。問題ないな、何も問題ない。
格好もほら、白の薄手のコートに黒のワンピースでさ、清楚な感じで可愛いじゃん。相変わらずの童貞殺しファッション、百戦錬磨の俺じゃなきゃ死んでたね。
「提督、次はどこに行きますか？」
「ホストクラブにでも行くか？スターダストってとこに知り合いが」
「は？（威圧）」
「ごめん何でもない」
うう、冗談が通じないよぅ……。
「そ、そろそろお昼だし、何か食べようか？俺のおすすめは寿司なんだけど」
他にも焼肉とかラーメンもおすすめなんだが、デートで行くのはなぁ。
「はい！榛名はそれで構いません」
「じゃ、決まりだ。寿司吟は昭和通りだから……、すぐそこだな」

寿司屋。
寿司吟はかなり美味い。世界を旅した俺が知る寿司屋の中でも中々に美味いところだ。
「榛名、遠慮せずに頼めよ、俺の奢りだ」
「い、いえ！良いんですよ！お給料貰ってますし！」
馬鹿言うな、男が、上司が奢らなくてどうする。古い考えかもしれないが、レディーファースト女性優先、全額奢るに決まっておるだろうが!!
むしろ払う気だったのか榛名。良い子だな、オイ。
しかし、榛名は、遠慮して注文する気配がない。ならばどうするか。
「大将、今日のおすすめは？」
「へい、カジキと、いくらですかね。鯖もありますよ」
「榛名、光り物大丈夫？」
「え？はい」
「じゃあ、おすすめを。二貫ずつ下さい。彼女にも」
「へい」
勝手に頼んじゃう。……おすすめは苦手なものでもない限り、頼んだ方がいい。旬の魚は美味いからな。その時一番美味いものを食べるのが真の食通ではないのかね。
そんな調子で、勧められるがままに食べていき、二時間後。
俺達大飯食らい勢からすれば少量の、一般的に見れば数人前の食事を済ませ、お会計。
榛名は最後まで払うと言っていたが、それを無視して全額払った。安心して欲しい、今の俺はかなり金がある。食事代くらいいくらでも出すとも。
さあて、次はどこに行くか。
艦娘とのデートって難しいよな、大抵のプレイスポットが駄目になるから。
バッティングセンター……、艦娘の動体視力と筋力を以ってすれば、ホームランが量産される。

ダーツにボーリング……、艦娘の精密動作性からすれば余裕。
んー、どうするか。
「榛名、次、どこか行きたいところあるか？」
「そう、ですね、カラオケなんてどうでしょう？」
うー？うん、名案だ。
カラオケなら、艦娘の超人的身体能力が仇となることはないよな。
んじゃ、カラオケ行くか！

「よー、おにーさん？可愛い子連れてんじゃーん？」
「取り敢えず出すもん出して、女置いて消えろや」
「ヤベェ、マジパネェ、この子アイドルとか？」
知ってた。
神室町だもんな。治安悪いもん、この辺。
こう言う手合いが湧いちゃうのも仕方ないよな。
仕方ないことなんだよ。
だから、
「榛名ァァァ!!!手を出すなァァァ!!!!」
だから殺すなよ榛名ァァァ!!!

「……邪魔を、しました」

「は？何言ってんの？」
「……私と、提督の、デートを、邪魔しました」
「提督？よく分かんないけどさ、こんな奴より俺達とデートしようよ」
やばい、不味い、死人が出る!!
「は、榛名！行こう！カラオケ行くんだろ?!こんな奴ら放っておいて行こうぜ?!なっ?!」
くっ、榛名が手を出す前にこいつらを倒、
「消えて下さい」
「ぎぃっ?!あ、あ、ぎぃいやぁぁぁぁぁぁ!!!!?!」
お、遅かったか……!!

チンピラの腕を千切りやがった!!!
「榛名!やめろ!!!」
「はい!やめます!!」
もぎ取った片腕をその辺に投げる榛名。叫び、逃げ惑うギャラリー。
「い、一般人に暴力を振るうなって、イワナ、書かなかった?」
「はい!ごめんなさい!」
ピッカピカの笑顔で告げられるごめんなさいには、一片の罪悪感も見られない。
「榛名、良いかい榛名。駄目なんだ、こんな怪我をさせちゃあ、いけないんだ」
ああ、畜生、榛名はそうだ。
微塵も悪いと思っていない。むしろ、こうやって、人一人壊したことによってお説教して貰えると、会話ができると思っていやがる。
人の腕をもぎ取っておいて、「俺とのコミュニケーションの一因になる」くらいにしか思っちゃいないんだ!
「良いか榛名、腕をもぎ取るのはやり過ぎだ。そして、俺に構って欲しいなら口で言ってくれ」
「はい!分かってます!」
「……分かってて、やったの?」
「はい、つい、カッとなっちゃって……。駄目な榛名に、お説教して下さい??」
うっとりと、瞳の中にハートマークを写した榛名が、そう言って俺にしなだれかかる。
「……分かった。するよ、説教する。だからさ、頼むから、行き過ぎた暴力を振るわないでくれ……」
「はい!提督の言うことなら、なんでも聞きます!」
聞いて、ないんだよなぁ……。

暴走列車榛名をどうにか窘めた俺。榛名が常識を理解してくれる

のは、一体いつになるんだろうか。
私は、悲しい……（ポロロン）。
そんなｈｅａｒｔａｃｈｅ　Ｎｏ．１な俺の元に現れたのは……、
「あら、提督？項垂れて、どうかした？」
ゲルマン美女ビスマルクだった。
「聞いてくれビスマルク、榛名がおかしいんだ」
「？、知ってるわよ。ハルナがおかしいことくらい」
周知の事実であったか。おかしいと思われてんのね、榛名。
「そんなことより、提督？」
「何だい、ビスマルク」

「私とセッ○ス？をしてくれないかしら」

ん”ん”っ？
ビスマルク、急にどうした？そんなこと言う子じゃなかっただろ？
「んえあ、ちょっと急に……、い、いけませんねぇ（語彙喪失）」
「ネットで調べたの。子供を作るには、キスじゃ駄目で、その、セッ○ス？って言うのをすれば良いらしいのよ。よく分からないけど」
「そう、ですねぇ、そりゃあねぇ」
ビスマルクめ、見た目大人なのに、何でこんな色々と無知なんだよ。無知シチュかな？でかい暁の名は伊達じゃねーな。
「んーんん、ほら、あれだ、まだビスマルクには早いんじゃないかな？」
「そんなことないわ！私、ちゃんと生理？って言うのも来てるのよ！」
え？大丈夫？ちゃんと生理用品使ってる？使えてる？
「その、大丈夫？ちゃんと処理できてる？」
「よく分からないけど……、生理の日はお股から血が出るのよ……。びっくりしたわ……。タンポンってやつは挿れるのが怖かったから、ナプキンを使ってるわ」
だから、駆逐艦並みの感想やめろ。何だよびっくりしたって。何か、こう、えもいわれぬ罪悪感が湧くだろうが!!
……にしても、ビスマルクはナプキン派か……。うちの鎮守府はど

ちらかと言うとナプキン派が少ないんだけどな。
何で知ってるのかって？いやあ、スカートめくりは日課でして。パンツの上からでも、ナプキンかタンポンかぐらいは分かるのよ。
因みに、アグレッシブに格闘戦などで動く艦とか、潜水艦はタンポン派だ。逆に体術を使わない空母なんかはナプキン派。
……まあ、良い。
そんなことはどうでも良い。それよりも、だ。
「それで、ああ、えっと、子供が欲しい、だったか？……ビスマルク、ペットを飼うんじゃないんだぞ。もうちょっとよく考えろ」
頼むから、考え直してくれ。
軽はずみな気持ちで子供が欲しいなんて言うもんじゃない。
「考えたわよ！ちゃんと考えた上で、私は、貴方との子供が欲しいの！」
苛烈な告白である。
貴方との子供が欲しい、と来たか。
男冥利に尽きると喜べば良いのか、これは。
「ほら……、あれだ、出産は痛いぞ」
「私は艦娘よ？痛い思いには慣れてるわ。……って言うか、子供はシュバシコウが運んで来てくれるのよ？何も痛いことはないわよ？」
……ドイツでは、「赤ちゃんはどこから来るの？」と言う問いに対して「シュバシコウって鳥が運んで来るのさ！」と答えるらしい。
「えーと、あれだ、子育て大変だぞ」
「前の鎮守府での仕事と比べたら、どんなことでも楽ちんよ！」
んーもう、ああ言えばこう言うんだから！
「と、兎に角、そう言うのはまだ良いだろ？」
「いつなら良いの？」
純粋な、実に純粋無垢な目を向け、俺に尋ねるビスマルク。
「あー、うー……、せ、戦争が終わったらな！」
戦争が終わったら？また旅に出るつもりだがな!!
「……分かったわ！でも約束よ！戦争が終わったら、私と子供を作ること！指切りげんまん、よ！」

「おう考えてやるよ（やるとは言ってない）」
子作り、かぁ……。
俺もそろそろ、年貢の納め時か？
もう????歳だから？
良い加減家庭を持てと？
けっ、冗談じゃねえよ。俺は死ぬまで、いや、死んでも旅を続けるんだ。
ちょっとのお金と明日のパンツがあれば生きていけるんだ。
嫌だからな、俺は。孫に囲まれて老衰とか、そう言う人並みの幸せは求めちゃいない。隠居なんてしないからな。
……絶対嫌だからな!!!

１９１話　バブみの殿堂

「オギャりたい」

……。

……また変なこと言いだしたぞこの子は。

「……どうした望月」

「司令官って相当なバブみがある訳じゃん？こう、何と言うか、包容力の塊みたいな……。だから、こう、オギャりたいなぁ、と」

ええと、つまり？

「赤ちゃんプレイがしたい」

うーん変態的。

赤ちゃんプレイ……、赤ちゃんプレイか。経験はある。勿論、あやす側でだが。実際に赤ん坊の面倒を見たことだってある。だが赤ちゃんプレイか……。

「望月……」

「ふはは、知らないもんね、恥なんてもんはとっくに捨てた！後は欲望に向かって突貫あるのみ！」

下半身に忠実だなぁ。

まあ、白露型に時々言われる「内臓見せて」とか、空母に言われる「食べさせて（物理）」とかよりかは健全、かぁ……。

「良し分かった、おいで望月」

「イヤッホオオオオオオォォウ!!!!!」

テンション高いなー。

全力で、そりゃあもう全力で甘えてくる望月。今は俺の膝の上で抱きかかえられている。

「パパぁ……??」

うーん、この。

何の躊躇いもなくパパ呼ばわりか。ある意味で強メンタルではないだろうか。人間ってのはここまで自らの欲望に忠実になれるものなのかね。

「パパしゅきぃ……??」
「はいはい、よしよし」
「んぅ……、もっとなでなでしてぇ……??」
全く、猫撫で声で……。可愛い奴め。
「良い子だな、望月は。パパに沢山甘えて良いからな」
実際、これくらいの歳の娘がいておかしくない歳だしなぁ……。正直、本当に娘ができたような気持ちだ。……でも、時折、ふとした仕草でムラっとさせられたりするから油断はできねえ。
「わぁい??」
はい、頭を撫でてー、頬に手を当て、唇をなぞる。手入れしてないのにプルプルの唇。良いねぇ、幼いながらも女を感じさせられちまう。畜生、可愛いな本当に。
「んー、んむっ??」
おお、指に吸い付いて来たぞ。
「ちゅうぅ??れる、れろ……??パパぁ、パパぁ……??」
口唇欲求を満たすべく、じっくりと俺の指を舐る望月。成人男性の指だぞ、美味しくないぞ。
「えへ、えへへへへへへ、パパらいしゅきぃ〜??」
……望月が良いなら良いんじゃないかな。しゃぶられてる指を少し動かす。
「む、にゃ、はむ……」
少しざらついた舌のぬるりとした感触と……、これは、歯か。規則正しく並んだ歯の感触。
「あむ、あむ……」
あ、甘噛みしてきた。
「パパ、パパ、パパぁ、すきぃ、しゅきなのぉ??」
「パパも望月のこと大好きだぞー」
「結婚すりゅ……??パパと結婚すりゅのぉ??」
「そうだな、結婚しような望月。パパのお嫁さんになろうな」
「なりゅ、パパのお嫁さんになりゅううう??????」
はっはっは。楽しいなぁ。

「……ん、寝ちゃったのか」
望月は安心しきって眠ってしまった。
……寝かしておいてあげよう。
「……で？赤城もやりたいのか？」
「えっ?!あっ、い、いや、私はですね……」
気付いていたぞ、赤城！きさま、見ていたなッ!!
「赤城も甘えたいのかい？」
再度、尋ねる。返答は分かりきっているが、意思確認は大事だ。
「わ、私は、私は……」
さあ、こうなりゃヤケだ。やぁあってやるぜ!!!
「おいで、赤城……（イケボ）」
「あ、ああ、お、お父様ぁ……??」
堕ちたな（確信）。
まあまあまあまあ、これで艦娘の息抜きになるんなら安いもんよ。
「よしよし、赤城はいつも良い子だな。パパは嬉しいよ」
「お父様、お父様、だいしゅきな私のお父様??お父様の為なら何でもすりゅの……??」
何てことだ……。冗談半分で言ったはずなのに、赤城が、赤城が……。幼児退行してしまった!!これはいけない、俺が責任持って面倒を見なければ!!
しかし何でもするとな？何とも男心を擽られる台詞じゃあないか。
熱っぽい視線を受けながら、赤みを帯びた頬をつついてみる。おお、ぷにぷに。
「お父様、お父様、だいしゅきお父様ぁ??」
いつもの凛とした佇まいは何処へやら。完全にキャラ崩壊していらっしゃる。可愛いから許すが。
「お父様ぁ……??」
抱きついてきたな。興奮してるのか、体温が高い。ぬくぬくもちもち赤城。
いやはや、えらいことに、いや、エロいことになってしまった。

……にしても、良い感触だ……。
油断慢心、一航戦特有のゆるゆるボディの威力よ。
お餅のようにもっちもち、綿あめのようにふわっふわ。甘い香りの一航戦。良いぞ、良いぞー！
お尻なんてほら、この弾力！ゴムゴムの実の能力者かな？
「あんっ??お父様ぁ、お尻なでなでだめぇ??」
ふはは、良いではないか良いではないかー。

……意外と楽しいなこれ。艦娘甘やかすの楽しい。
思えば、艦娘には親がいないんだよな。甘える相手がいないなんて不憫だ。俺が、甘やかしてやるかぁ！
「と、言う訳だ神通。分かるね？」
「はっ、いや、それは……」
「分かるね？」
「で、出来ません！提督に、あ、甘えるなどと……！そんな不遜なことは！」
流石は神通。忠義の人だ。
だが俺は、普段から大人っぽくある神通のような子にこそ、甘えて欲しいと思っている。もっと肩の力を抜いても良いのよ、と。
「神通、たまには甘えてくれよ。前々から思っていたが、君は抱え込み過ぎだ。訓練も出撃も頑張り過ぎるくらいにやっているんだ」
「そんなことはありません！むしろ、休み過ぎなくらいです！」
どの辺が？一週間ぶっ通しの訓練、連日の夜戦、朝から晩まで戦い尽くめでしょ君。
「ほら、おいで神通。遠慮はいらないよ」
「で、ですが……」
仕方ないなあ。
「甘えろ、神通。命令だ」
「……は、はい。分かりました……」
すると神通は、意を決した、と言う様子で、
「あの、その……、ち、父上??」

「よし、良い子だ」
おずおずと、遠慮しながらも、すっぽりと俺の胸に収まる。
んあー、クッソ可愛い！やっぱり美少女じゃねえか！
だが駄目だ、ここで焦るな。ここで焦って無理矢理抱きしめるようでは駄目だ。あくまで優しく、壊れ物を扱うように！
「神通……」
「父上ぇ……??」
いつもとは打って変わって、熱に浮かされたような表情を見せる神通。素晴らしいなオイ。
「父上ぇ、ちゅー、ちゅーしてぇ??」
I．Q．が良い具合に下がってるな、神通。良いんだそれで。女の子なんだ、たまには誰かに甘えとけ。
「はい、ちゅー」
「ちゅ、ちゅー??」
唇を重ねて数十秒。長い長いキス。
ムーディーでロマンティックな気分にさせられるな。赤ちゃんプレイと言う前提がなけりゃ。
「もっと、もっとぉ……??」
「はいはい」
せがまれればせがまれるだけキスをする。所謂ラブラブと言うやつなのではないかな？
「神通、可愛いぞー」
「えへへ、ほんと？」
「勿論さ、父上が神通に嘘なんてつく訳ないだろ」
嘘ついたことないよ。本当だよ。
「うん、うん……??」
「俺の可愛い娘じゃないか！」
「やぁ！やぁ、やらぁ、お嫁さんなの、お嫁さんが良いのぉ！」
そうか、そうか。
「お、おう、そうだな！お嫁さんだよな！」
「私は父上のお嫁さんなのぉ、一生一緒なの……??」

ベタ甘である。

まあこんな調子で、艦娘を甘やかして回った訳だが……。

「「「パパぁ……??」」」

問題は、鎮守府中の艦娘が赤ちゃんプレイにどハマりして、運営に支障が出始めたってことかな！

さーて、艦娘を正気に戻す作業の始まりだぁ!!

192話　ハロウィンの一幕

「「「トリックオアトリート!!!」」」
「ハッハァー!!!そう来ると思ってあらかじめバタースコッチシナモンパイを焼いておいたんだぜぇぇぇ!!!」
お菓子をくれなきゃ悪戯するぞ、かい。
と言う訳ではい、ハロウィンの時期です。
いやね、悪戯されても困ることはないんだがね。どうせなら美味しいもん食べて欲しいからね。渾身のバタースコッチシナモンパイ、食してみよ！
「「「わーい!!」」」
「美味しいのです!!」
「甘くって美味しい!!」
「バターとシナモンの風味が最高!!」
はっはっは、そうだろうそうだろう。俺のパイは美味いだろう。洋菓子作りは大得意なのだ！
……俺のパイって言うと何か卑猥な感じだな。俺の○○って言い回しがさ。何かスケベだ。
さて、それは兎も角。
現在の黒井鎮守府はハロウィンムードに溢れていらっしゃる。
駆逐艦の子達が鎮守府を駆け回り、お菓子の収集、若しくは悪戯をしているのだ。
悪戯……。
この黒井鎮守府において悪戯と言えば、性的なものになるのは想像に難くない。
つまり、こう言うことだ。
「ふはは、悪戯しに来たぞ、提督!!」
「武蔵イッ……!!」
……逆セクハラの時間だ。
「何でも今日は、合法的に他人から菓子を巻き上げ、応じなければ悪戯

をして良い日だと聞いてな」
「んー、合ってるけど違ーう」
もっと可愛らしいもんだよハロウィンってのは。
「それで、悪戯をしに来たんだ」
にいっ、と犬歯を見せて笑う武蔵。
「お菓子あげるから……」
と命乞いが如くクッキーを差し出したが、
「悪戯をしに来たと言ったァ!!」
ヒィーーー!!!駄目でしたーーー!!!
「ふむ、良い尻だ」
尻を揉まれた。やだ、私、お尻撫でられちゃってる……!と、痴漢に遭った女子高生の気持ちになる。
「鍛えられた筋肉で盛り上がっていて、あれだな、セクシィ、と言うやつだな」
そりゃあねぇ。スペースコブラみたいにセクシーな尻だよ俺のは。尻に自信ニキ。
「ほう、これは……、ふむふむ、成る程……」
洗脳催眠ものに出てくる竿役の中年オヤジのような、考えうる最高のいやらしい手つきで俺の尻を撫で回す武蔵。何なんだ一体。
「よしよし」
「よくない、よくない」
なーに手を前に回してるんですかね?
「手淫くらいならセーフだろう?」
「何一つセーフじゃないよ」
クッソ、力強え!!凄いパワーでベルトを外そうとしてくる!!
「まあまあ、遠慮するな。溜まってるんだろ?」
「……いや、そんな事はないよ」
……まあ、溜まってるかと言えばそこそこなんだが。女の園に男一人な訳だし。ここだけ終末のハーレム的な世界観だし。
「なあに、安心しろ。嫉妬深い大和の奴は私が説得してやる。そうしたら後は鎮守府中の艦娘を取っ替え引っ替え好き放題抱くと良い」

「ハッ、そいつは良い、是非お願いしたいところだね」
いや本当に。
大和は嫉妬深いんだ。
もしもこの状況を見られたら怒髪天ってとこだろうな。
「提督ー！トリックオアトリー……、何を、しているのですか……？」
ちょうど、タイミングよく現れた大和。知ってた。
今の俺？武蔵に下半身を弄られてる。
「もう一度、聞きます。何を、しているのですか」
……ほらな、怒髪天だ。
「むむ、大和。来たのか」
「ええ、ええ。折角のハロウィン、お祭りごと故、愛する提督の元に来てみれば、これです。まさかの、妹の裏切り……、許し難い事ですよ、これは」
ヒェッ、マジギレやんけ。
本当にどうにかできるんだろうな、武蔵。
「ではこうしよう大和。お先にどうぞ、だ」
「……は？（半ギレ）」
「お前が一番最初に抱かれれば良い。私は多くを望まんよ。提督に愛してもらえるなら妾でも愛人でも何でも良い」
「……」
考え込む大和。
「それなら、まあ……」
良いのかよ。
「……私も、皆が幸せになれる道を歩みたいですし」
良いんだ……。何だか、順当にハーレムが出来てきている気がする。幸せ過ぎる。このままだとどこかで致命的なしっぺ返しが来るな。知ってるぞ、俺は詳しいんだ。
根無し草の旅人が幸せになれる訳無いだろ！良い加減にしろ！

さて、そんなことを考えつつ、武蔵と大和にお菓子をあげて、その場から離脱した俺。うっわ、ベルト千切られちゃったよ……。新しいの着けておこう。
と、ベルトを作りながら歩いていると、廊下に声が響いた。
「提督ー、何処デスカー？提督ー？」
む、この声は、金剛か。
「何？」
「あっ、いまシタ！ふっふっふ、提督、トリックオアトリック！」
あーはいはい、悪戯する気満々って訳ね。
「お菓子あげるけど」
一応宣言するが、
「ノー！目的は悪戯デース！あ、お菓子も貰いマース」
金剛の意志は固かった。
俺の手を取り、自室へ無理矢理押し込むと……、そのまま、寝室のベッドに押し倒された。
因みに、金剛のベッドはノースティリス産のダブルベッドだ。中々に経験値が得られるので良いと思う。
……まあ、今更、練度なんて上がってもどうしようもないが。この前明石の強化型練度測定装置で測って回ったところ、うちの平均練度は三百を軽く超していたらしい。最大戦力の長門、時雨、古鷹、木曾などは、四百にも到達していた、とのこと。
「むむっ！提督、今、私以外の女の子のこと考えてマシタ!!」
鋭いねぇ、この子！
「いやいや、そんな事は無いよ。君に夢中さ。もう、離さない」
君が全てさ！
「目を離しちゃノー、ですからネ！……んふー、提督ー！バーニング！ラーーーブ!!」
燃えるような愛、ａ　ｈｕｎｋ　ｏｆ　ｂｕｒｎｉｎｇ　ｌｏｖｅってか。良いね、あれは名曲だ。
君の燃える恋心で、明日の空に光を灯す、なんてね。
「んーーー」

俺に馬乗りになった金剛は、髪が乱れるのにも拘らず、俺の胸に顔を押し付けて、思い切り頬擦りしてきた。
「何だ、甘えん坊だな、金剛」
「えへへー、アイラブユー、提督??」
天下無双クラスの可愛さだ。恐れ入ったぜ。
そして、俺の服に手をかけ、
「ん、何だ、どうする気だ」
「こうするんデスヨー!」
シャツのボタンを外し、開いた胸元にキスの雨を降らせる金剛。
あー、こりゃ、キスマークが……。他の子に見つかったらなんて言われるか。
「あーあーあー、こらこらこら、そーんなにキスマーク付けたら駄目でしょー」
「何も駄目じゃありまセーン!私と提督のバーニングラブの証デース!……さ、次は提督の番デース??」
そして、服を捲り上げる金剛。おっぱいはそれなりに大きい。あっ、ブラのデザイン可愛いなー、レースが良いね。
え?て言うか、え?俺もキスマークつけるの?俺がキスマークをつける側に回るの?それはちょっと不味いんじゃない?
……しゃあねえな、やるか。
「ん……」
「はうっ??」
まあ、あまりに犯罪的なので詳しい描写は省くが……。ご馳走様でした、とだけ。

この後も何故か、戦艦や空母が悪戯をしに来て、揉みくちゃにされた。
それはもう、揉みくちゃにされた。
危ないところだったぜ(貞操的な意味で)。
ただな、悪戯として俺の部屋にぷにあなDXを置いて行った明石と夕張は暫く許さないからな!覚えとけよこの野郎!!

１９３話　妹と……

『旦那様、ご機嫌いかがでしょうか』
「ああ、上々だよ、Ｍｒ．ハンディ」
この黒井鎮守府のそこら中に徘徊するこのロボット、Ｍｒ．ハンディは、明石と夕張特製の家事手伝いロボットだ。
他にも、アサルトロン、プロテクトロン、セントリーボットなどの警備ロボットが鎮守府を巡回し、警備に当たっている。
うーん、俺の仕事が減るんだよなぁ。
Ｍｒ．ハンディは、球体のボディに三つのカメラとマニピュレータを持ち、ブースターで浮遊するロボットで、それなりに高度なＡＩを持つ、有能なロボットなのだ。
料理は俺と鳳翔や間宮、伊良湖、速吸がやるが、掃除や洗濯、庭の管理維持などはＭｒ．ハンディが済ませてしまう。
ただでさえ働いてない俺の立場が……。
「Ｍｒ．ハンディ、休む気は無いか？俺も家事したい」
『いえいえ！滅相も無い！家事は私達にお任せして、旦那様は奥様方とコミュニケーションをとってあげて下さい』
くっ、有能なんだよなぁ！
流石はＡＩ、変な方向に親切だ。……因みに、ロボット達は俺のことを旦那様と呼び、俺はロボット達に対する第一優先の命令権を持つ。命令権を持つんだが……、ロボットにプログラムされた基本思考ルーチン的に、俺は家事をやらせてもらえない。
しゃあない、明石と夕張のところにでも行くか。
このままロボットを増やすと堕落するぞと警告せねば。

「つまりな、明石に夕張。あまり便利になり過ぎるのも良くないぞ」
「はあ……」
「分かりました？」
さては、分かってないな？
「何にもやらないと何にも出来なくなるぞー」

「良いじゃないですか別に。今の時代、家事なんてできなくても困りませんよ」
と、明石が言う。
「提督が駄目になれば駄目になるほど、私としては助かります。その分、提督をお世話出来る訳ですし」
と、夕張が言う。
流石は技術の申し子。言うことが違うぜ。
だがな？
「俺の仕事が無くなっちゃうだろ！俺が家事をやらないでどうする！」
「だから、やらなくて良いんですってば！」
良くないでしょ俺の存在意義無くなるじゃんもー。
「提督はそこにいてくれるだけで良いんですよ！」
「家事とかはロボットに任せて、私達とイチャイチャしましょうよ！」
いやいやいやいや、いかんでしょ。
「女の子に囲まれて酒飲んでギリギリ合法なビジネスで荒稼ぎって……、悪党じゃん！」
「……提督は悪党でしょう、それは」
「ウチは悪の組織ですよ」
……あ、そっか。
あー、うー、じゃあ、良い、のか？
「良いんですよ良いんですよー、私達と一緒に機械弄りしましょう！」
そう言って明石は、俺の手を取り、隣に座った。
うーん、良いのか。良いのか？……まあ、良いか。
「提督、ほら、見て下さい。新作のスナイパーキャノンですよー」
「新しい発明ですよー」
話を逸らされてしまった。でもまあ、騒ぐほどでもないか。
ん？そう言えば……。
「妹とはどうなんだ？仲良くしてくれているか？」
妹……。
あまり言及していなかったが、俺には妹がいる。

どんな子かと言うと、そうだな、兎に角、身内の贔屓目を抜きにしても……、
「はい、仲良くしてますよ！実際に会ったことはないんですけど、チャットとかスカイプとかで！凄いですね、かなりの天才です！」
「提督がマルチな方面に才気を見せる秀才だとすれば、妹さんは技術力に特化した天才ですよね」
そう、天才なのだ。
いつか言った、「原子力空母をラップトップ一つで掌握して見せる」と言う文言に違わず、技術力方面の天才……。
それも若干引くレベルの。
「でも私達、気になってることがあるんですよ」
「何だい？」
「妹さん、お幾つなんですか……？」
「声が明らかに子供なんですよねぇ」
ああ、それは……。
「あいつ、昔俺が拾ってきた若返りの薬を改良したものを間違って使ってな、肉体年齢が九歳のまま止まってるんだよ」
実験中の事故でな。
「へー、そうなんですか」
「では、ヨスガノソラ的な展開は？」
「ないです」
妹は攻略キャラではありません。繰り返します、妹は攻略キャラではありません。
流石の俺も九歳の、初潮前の幼女に欲情はしねぇよ。……しない、と思う。しないと思いたい。
え？駆逐艦に欲情するじゃんって？れっつ!!おひめさまだっこ？ハナマルセンセイション？いやーちょっと覚えがないですね、はい。
「それを聞いて安心しました！ライバルは少ないに越したことはありませんからね！」
安心しろ、妹に手を出す日は未来永劫来ないから。

『あー、あー、明石君、夕張君？聞こえるかね。私が先日送ったアサルトロンの実働データの件なんだが……』
おっと、噂をすれば、だ。
「久し振りだな」
『……む、兄さんか』
妹の名は……、
「花凛」
新台花凛と言う。
俺の唯一の、血の繋がった家族だ。
「煙草、吸い過ぎてないか？ちゃんと風呂入ってるか？ご飯食べてるか？」
『むう……。心配し過ぎだ。餓鬼じゃあないんだぞ。……肉体年齢は九歳児だが』
そりゃあ、心配もするだろうさ。家族なんだから。お前は家族だ（腹パン）。
「今、どこにいるんだ？」
『……マサチューセッツ州だ』
「風邪とかひいてないか？」
『元気だよ』
「そうか、そりゃあ良い。健康が一番だからな」
そんな、他愛のない会話を続ける俺達を見て、明石が一言。
「あれですね、兄妹って言うより……、親子みたいですね」
ああ、まあ、なあ。
『……実際、育ての親みたいなものだしな』
「……えっ、あっ、何か、複雑な家庭の事情とかでしょうか?!でしたらすいません!!」
「いやいや、そう言う訳じゃないよ、ただ……」
「ただ？」
……口に出したくはないが、俺の家系……、新台家は代々、屑だ。それも、相当にハイスペックな。
例えば、「宇宙最強の男を目指す」と言って異世界に消えた曽祖父。

「最高の建築物を建てたい」と言って行方を眩ませた祖父。「世界一美味しい料理をこの手で作る」と言って亜空間に飛び込んだ父……。
新台家の男は、皆んなコレだ。控え目に言って頭がおかしい。
家庭を顧みず、皆何処かへ行ってしまうのだ。
斯く言う俺も、「世界の果てを超えた先まで旅したい」と言う思考回路の元行動するが故、他人のことは言えないんだが。
まあ、そんな訳で、物心つく頃には放置されていた俺は、適当に妹を育てて……、旅して、旅して、また旅して。現在に至る、と。
なまじ、妹の頭が良かったせいか、殆ど放ったらかしにしてしまっていた。乳幼児の頃におしめを替えてやったくらいで、立って歩くようになったら放置。今思うと、相当悪いことやった気がする。
それが負い目なのかなんなのか、妹はついつい気にかけてしまう。仕送りもしちゃう。
「ただ……、親が物心つく頃には蒸発してたから、妹を育てたのは俺ってだけで」
「そう、なんですか。……提督、ご家族のこと、全然話さないんで、聞いちゃいけないことなのかとばっかり思っていましたが……」
「単に話すことが無かっただけだね。でも、俺は、親がいなくて困ったこととか特にないから」
アレだな、新台家の問題は、子供側が別に親がいなくても困らないスペックを持つって点もあるよな。皆んな一種の超人なんだよなぁ。
子供側が可愛くねー子供なのが悪いってのもある訳だ。
『……それで、アサルトロンのデータは？』
「あ、はい、今転送します」
『……確認した。ロブコ社にデータを売り払って研究資金の足しにしなければ……』
「仕送り増やそうか？」
『いや、不要だ』
そうか？必要ならいつでも言えよ。可能な限りはくれてやるからな。
『金の心配はいい。兄さんだって、余裕がある訳ではないだろう』

「あるよー、余裕あるよー」
複数のヤクザやマフィアとのギリギリ合法ビジネスによって荒稼ぎしている今、金の心配は無用だ。
今、俺は、輸出入産業の利権の多くを握っている。
何せ、艦娘で輸出入ルートを警備するのも、深海棲艦を嗾けて輸出入ルートを駄目にするのも自由自在だからだ。
お陰様で大本営の補助がなくとも莫大な資金を集められている。
艦娘にもしっかりと給料を出せてるし、自由に使える金も前とは段違いだ。
『……それでも、研究資金くらいは自立している……！
妹が自立している……！
妹の俺離れ。さみしい。
『私だってこんなりだが????歳だぞ。そりゃあ自立もするさ』
「そうか……、????歳か。????歳にもなるのか。お互い、歳をとったなあ」
『兄さんも私も、肉体年齢は若いままだろう。精神が老化しなければ、お互いまだまだ現役だ』
「そう、だな」
まだ若い。
「……兎に角、困ってることとかは無いんだな？」
『無いよ、壮健だ』
「大本営の監視とかは？」
大本営の監視……。
大本営はどうやら、俺の唯一の肉親である妹を人質に取ろうと、妹を監視しているらしい。だがしかし、
『はっ、あの程度の監視、何も困らんさ。いざとなれば警備ロボットを嗾けて潰せばいい』
妹の技術力の前では、無意味なんだがな。
まあ、何にせよ、
「何かあったら、いつでも連絡してこいよ」
何かあれば、力になるさ。家族だからな！
『……ああ、ありがとう』

一言言って、通信終了。

「……ヨスガノソラ的な展開はないって言ったのに、妹さんと仲良いじゃないですか～！」

「ええい、仲が良いだけだ！それ以上でもそれ以下でもない!!」

勘繰らないでいただきたい！妹とは、何も、ないのだ!!!

１９４話　秋刀魚漁

秋。
秋刀魚が美味しい季節だ。
夏の焼けつくようなあの日差しとは打って変わって過ごしやすい陽気、実りの秋だ。他にも、読書の秋にスポーツの秋、食欲の秋と話題には事欠かない。
でも、そんなことより、秋刀魚が美味しい季節だ。

……秋刀魚、食いてェ……。

秋刀魚が食いてえ。刺身にして生姜醤油で、塩焼きにしておろしポン酢で、蒲焼にして、揚げ物にして、炊き込みご飯にして……。
……今、俺は、私事で作戦を発令しようとしているッ!!
職権乱用？黙れ、俺は止まらないんだよ!!

はーい皆んなー集まってー！作戦会議の時間だよー！この一声で、鎮守府内の艦娘は会議室に集合した。急な命令だと言うのに、このやる気。頭が下がる思いだ。
「暇な子ー、手挙げてー」
「「「はい！」」」
んー、全員暇なのかー、そっかー。
「はいはい、そんな訳ないでしょ。本当に暇な子は？」
そう言ってみると、ポツポツと手が下がっていく。何だ、皆んな結構予定あるじゃん。良かった。暇は無味無臭の猛毒だからな、暇、良くない。
そして残ったのは、真に暇な数人だった。
「最上ー、暇なの？」
「うん、予定ないんだー」
「鳥海も行ける？」
「はい！」

「利根と……、江風もか」
「暇じゃよ」
「うン、オッケーだ」
「卯月も？」
「うーちゃんも大丈夫ぴょん」
「菊月もＯＫ？」
「勿論だ！」
と、まあ、そんな感じで。
今回は六人で良いか。航巡重巡駆逐と良い感じだし。
「じゃあ、出撃、お願いできるかな？」
「「「了解！」」」
「まあまあ、出撃と言っても大それたことはしないけどね。確認された深海棲艦の補給部隊を叩くついでにちょっと漁するってだけよ」
嘘だ。
本当は逆だ。
秋刀魚漁しようとした場所付近に深海棲艦が湧いてるから、ついでにぶっ殺すだけだ。
人間の屑の理論である。
まるで将棋だな（意味不明）。
でも皆んな、文句言わずについて来てくれる。天使だ。
「さあ、行くぞ！旅人号にのりこめー^　^」
「「「わぁい^　^」」」

さて。
我が黒井鎮守府の力を以ってすれば、輸送部隊程度一網打尽な訳だが。そのはずなんだが。
「んんー？んんんんんー？思ったより数多いんだけどもー？」
ざっと見て輸送艦護衛艦諸々含めて三千はいるかな？
……これ、倒せる？
全滅は無理じゃね？

「不味ったなあ、今からでも誰かもっと制圧力がある子呼ぶか？」
空母とか、戦艦とか。
「む、心外だな」
「菊月？」
「この程度の軍勢……」
菊月の肩から伸びたグレネードランチャーが火を噴き、数体の深海棲艦を纏めて吹き飛ばした。
「私達だけで充分だ」
×あらそう？
×なら、良いか。
×じゃあ、そうだな。……無双ゲーの始まりだ！」
×
×
×
「卯×月、行くぞ！」
「う×ー、うーちゃん的には、こんな艤装積みたくなかったぴょん……」
×文句を言うな。
×あと、そのＴシャツダサいぞ。何ださんまって。
「早く艤装を出せ」
「むー、良いぴょん、後で司令官に泣きつくぴょん。沢山慰めてもらうんだぴょん」
「好きにしろ」
さあ、行くぞ！
「ターゲット、確認。排除、開始……!!」
艤装呼び出し、パルスライフルＷＧ―ＸＰ２０００。
弾数は２００、射程は１８０００。
ばら撒くように放てば、深海棲艦は次々と蒸発していく。
続けて、小型二連ミサイルＷＭ―Ｓ４０／２、グレネードランチャーＷＣ―ＧＮ２３０を呼び出し。
両武器の作り出す爆轟に包まれた深海棲艦は、骨も残らず消し飛ぶ。
更に、レーザーブレードＬＳ―２００１。

これで、接近してくる深海棲艦を斬り伏せる。灼けた深海棲艦の匂いが心地いい。
「卯月ィ!!!!」
「あーもう、分かったぴょん！艤装呼び出し！ＩＳＯＮＯＫＡＭＩ ｍｄｌ．２!!」
ＩＳＯＮＯＫＡＭＩ ｍｄｌ．２……、アサルトライフルだな。それも、装弾数に特化し、継戦能力を高めたもの。
うむうむ、良い選択だ。卯月も分かってきたじゃないか。
両手のＩＳＯＮＯＫＡＭＩ ｍｄｌ．２を乱射しながら、深海棲艦に吶喊する卯月。良いペースだ、これならすぐに全滅させられ、ッ?!!
「回避しろ卯月!!」
「分かってるぴょん!!」
その時、大出力のビームが、私達のすぐ側を掠めた。
「危ないなッ!!」
「相変わらずとんでもない威力ぴょん!!」
これほどの大出力のビームとなると……、
「うむ、上々じゃな！」
利根だな。
「おい、危ないだろ！ちゃんと狙え！」
と注意するが、
「いやー、すまんの！」
悪いと思っているんだかいないんだか……。
しかしあの、大型のジェネレーターに直結した大型のビーム砲の威力には、眼を見張るものがあるな。
余談だが、妹の筑摩はプラネイトディフィンサーと呼ばれるバリアフィールド発生装置を装備しているらしい。姉の利根のビーム砲が最強の矛、妹の筑摩のバリアフィールドが最強の盾と言うコンセプトだそうだ。
「ははははは！吾輩と筑摩と、提督の前に立つ者は、誰であろうと消し炭にしてくれるわ!!」
轟音を響かせ、破壊の嵐を撒き散らす利根。

恐ろしいな……。
ふと、振り向くと、そこにはまた別の破壊。
「鳥海、吶喊します！」
アーティファクトと呼ばれる超常の武器類の一つ、★死を奏でる大鎌を振るう鳥海。
あれは、駄目だ。
科学に真っ向から喧嘩を売る魔法の品。
私達睦月型の使う武器は頭に超が付くが一応は科学技術の産物だ。しかし、高雄型の使うそれは、魔法と言う全くの別体系の技術によって成る。
ノーステリィス……、異世界の狂気を孕んだその武器類には、爆音の衝撃波を発する、時間を止める、局地的に世界の終末を起こすなどなど、気狂いじみた効果があるのだ。
★死を奏でる大鎌にあるのは、
「行きます！」
浮遊、魔法からの保護、炎熱からの保護、
「首を、斬り落とすッ!!!」
首狩り、魔法力吸収、そして、
『轟音の波動……!!!』
魔法威力増大、だそうだ。
魔法、魔法だぞ？
あり得るものか、普通。
一応、軽く概要を聞いてみたが、私には理解できなかった。全く異なる世界の突拍子もない話に、脳が理解を拒んだとも言える。
しかし、高雄型は弛まぬ努力の末に、魔法を習得したと聞く。
結果、
『ライトニング……、ボルトォ!!!』
黒井鎮守府に魔法使いが誕生した。
何を言ってるか分からないと思うが、私も何が起きてるか分からない。
むしろ、この鎮守府では何が起きてもおかしくない。

あっちでは、ほら……。
「砕けろ!!」
魔力、なるもので顕現した青い左腕で、深海棲艦の群れを殴りつけている最上。
「おりゃ!!!!」
そして、レッドクイーンと呼ばれる、背にジェットの噴出口がある片刃剣を爆炎を迸らせながら振り回している。
なます斬りってやつだ。
驚異のスピードで、スタイリッシュに破壊されていく深海棲艦。
こちらもまた、違った恐ろしさだ。
如何に精強な深海棲艦であっても、空中にカチ上げられて攻撃を続けられれば、何もできないまま殺されるだろう。
もし戦うことがあれば……、いや、考えたくないな。
最後はこいつだ、
「ははははは！死ねよ！」
江風だ。
次々と深海棲艦を殴り殺し、湿った殴打音を響かせている。
戦う姿は人か、獣か。それとも、もっと恐ろしい何かか。
流石は黒井鎮守府でもトップクラスの戦闘能力を持つ戦闘集団、白露型だ。
その中でも、江風は異端……、極端な程までの攻撃性を持つらしい。
奇形の大金槌、爆発金槌には、撃鉄が取り付けられており、一度その撃鉄を起こし、深海棲艦を殴りつけると、
「爆ぜろッ!!!!」
爆炎による追加のダメージを与えるのだ。
「ひゃは、ははは、はははははは！燃えろ燃えろ！提督の敵はみぃンな燃えちまえ！」
狂った笑みを貼り付けたその顔は、やはり、人ならざるもののように見える。炎獄で嗤う魔獣の類だ。
だが、何より、何よりも狂っているのは、

「秋刀魚ｇｅｔ！秋刀魚ｇｅｔ！秋刀魚ｇｅｔ！」
司令官その人だ。
『はいもがみん退がって！利根フォロー！江風六時の方向！』
魔法だろうか、謎の方法で脳内に直接指示を送りながら、
「よっしゃ、大漁大漁！帰ったら秋刀魚パーティですわ！」
漁をして、
「邪魔だオラオラ、波動拳！アグニ！チェーンバインド！」
深海棲艦に対処する……。
本人は火力や射程において艦娘より大きく劣ると考えているらしいが、大凡不死身と言っていいほど丈夫な司令塔としての働きがどれだけ役に立っているか、理解していない。
私達と言う圧倒的な個を完全に統率するブレーンだぞ？戦場を上から俯瞰しているかのような的確な指揮の素晴らしさと言ったら……。
直接戦場に出てリアルタイムで指揮を執って貰えば、艦隊の戦力が何割か上昇すると言っていい。司令官は自分が艦隊における戦闘でどれだけ重要なファクターになるかまるで理解してない！
その上、的確な援護防御もしてくれる盾役だ。非の打ち所がない。
「秋刀魚ｇｅｔ！秋刀魚ｇｅｔ！秋刀魚ｇｅｔ！……でもこんなんじゃ駄目、もうこんなんじゃホラ、秋刀魚獲らなきゃねもっともっと！長門型も一航戦も皆んな食うからねちかたないね」
一体どうなってるんだこの人は。
全く、底が知れないな……。
『菊月ー、三時の方向！』
「了解！」
おっと、ご指名だ。
艤装呼び出し……、ＷＧ—１—ＫＡＲＡＳＡＷＡ!!!
「消し飛べ、深海棲艦」
まあ、いい。
考えても意味はない。
どの道、私のやることはたった一つ。

敵の殲滅なのだから。
司令官の前に立つイレギュラーを排除する、それだけだ。
それが愛と言うものだ。
だろう？

「わぁお！大漁大漁！……ん？ボボボボボ！助けて！流されちゃ……」
「あっ、司令官が撤退する深海棲艦に連れ去られていくぴょん?!」
「ええい、確保だ！捕まえろ！」

１９５話　フランス旅行、そして救済

黒井鎮守府秋刀魚パーティから数日後。
俺の気は狂っていた。
「あびゃぁぁぁ!!!」
「ど、どうかしたかしら、Ａｄｍｉｒａｌ？」
どうかしたのか？
どうかしてるぜ。
だってよお、
「禁断症状だ……」
「禁断症状？」
「最近旅してなぁぁぁいのぉぉぉ!!!」
旅してないからな！
「旅？ｔｒｉｐね！」
「いやｊｏｕｒｎｅｙ!!!」
旅行とは違うんだよ！
「良いかウォースパイト、俺は旅人だ、旅人なんだ。……旅らしい旅ができない現状は、辛い!!」
ほら見て鳥肌。旅人アレルギー発動なの。
「じゃあ、何処かに出掛けるかしら？」
「銀河の彼方とか行きたい。遠くへ、遠くへ……」
知り合いのイ＝スと時間旅行するのも良いかもしれん。或いは、ノーステリィスでの冒険者生活、或いは、幻想郷でのその日暮らし。或いは、或いは、或いは……。旅に出たい。まだ見ぬ新たな世界をこの目で見たい。
「そんな遠くへ行ったら帰ってこれないでしょう？」
「いや、それは……」
そもそも、旅人の俺に帰るという概念はない。艦娘の皆んなに帰って来いとせがまれるから帰って来ているだけだ。出来ることなら、世界の果てに姿を眩ませたい。
「兎に角、何処かに行きたい、遠くに行きたい」

「じゃあ、フランスに行きましょう？私、ルーヴル美術館を見たいの！」
「ルーヴル美術館？私も行くわ」
「コマちゃんか」
「コマちゃんはやめて」
「やはり海外か、いつ出発する？」
「ヴェールヌ院」
どこからか現れたコマンダン・テストと響。なんだ、行けってか、海外に連れてけってか。
……気楽な一人旅が一番なんだがな、本当はな。
「んー、しょーがないなー！連れてってあーげちゃう!!」
どうしようもなく、女の子には甘いんだよな、俺ってやつは。

「えー、これがモナリザだ。描かれたのは１５０３年から１５０６年辺り、元々はフランス王フランソワ１世が購入したと言われていて……」
と言う訳で。
やってきましたパリ。ルーヴル美術館。世界最大級の美術館だ。
最近の移動は専ら門の創造だな。日帰りにしたいんだもん。ほんの二、三日鎮守府にいないだけで発狂するからな、うちの艦娘は。
ああ、門の創造ってのはちょっとした魔術の儀式で、特殊な紋章を刻んだ壁に対してアルコールをかけ、魔力を注ぎ込むと消費した魔力の分だけ空間転移する、って言うやつ。便利だからついつい使っちゃう。
「……ｍａｇｉｃじゃなくて、普通に飛行機とかで行きたかったわ」
まあ、そうだよな。移動も含めて旅行だよな。でも、日帰りの予定だからね、仕方ないね（レ）。
「まあまあ、帰りはノルマンディーに寄ってディナー奢るからさ。ノルマンディーは何食っても美味いけど、特にチーズとりんごが絶品なんだよなぁ。カマンベールチーズめっちゃ美味い。クリームソースとか正直洒落にならん美味さ」

ノルマンディーの料理はクリームソースが何かとついてくるんだけどそれがまた美味いのなんのって。りんごの焼き菓子とかも美味いのよ。
「それは美味しそうね！……もう、今度はちゃんとｔｒｉｐしましょう、ね？」
「おっ、そうだな」
だから、俺のこの欲求は、溢れるパトスは旅行欲ではなく旅欲だと……。いいや、言っても通じないだろうし。良いか。
「司令官、あれはなんだい？」
「キリスト磔刑、マンテーニャ作だね」
「じゃあ、あれは？」
「聖ゲオルギウスとドラゴン、ラファエロ作」
響にあれやこれやと説明しながら、美術館を回る俺達。
「そう言えば提督、結局、モナリザって本物なの？」
「いや、分からん。盗んで調べれば分かるだろうが……、やるか？」
「だ、駄目よ！」
などと、テストと他愛のない会話をしながら歩く。
美術鑑賞は良いな。心を豊かにしてくれる。過去の美術品を通して、古き日々を夢想し、そこから現代に通じる様々なインスピレーションを、刺激を得る。健全だ。これでもかってほど健全だ。
温故知新とはよく言ったもの、古きを知ってこそ見えてくるものが沢山ある。
「あ、あれは知ってるよ、ミロのビーナス」
「正解だ響。作者はアンティオキアのアレクサンドロス、紀元前１３０年から１００年頃の作品だな」
「……さっきから、詳しくないかい、司令官」
「一般常識だぞ」
「そうかな、司令官が博識なんじゃないかな」
そんなことないんだけどな。ただ、美術品とかに詳しいとモテると思って覚えただけだし。何でもは知らないよ、知ってることだけ。
過大評価のし過ぎだ。俺の知識の半分は女の子を口説くため、もう

半分は無いと死ぬ場面があったから覚えたもので。別に博識でも何でも無い。知能だって精々秀才止まりだ。
基本的に器用貧乏なんだよね、俺って。
「ははは、お褒めに預かり恐悦至極にございます」
「司令官は良い加減自分のハイスペックさを自覚した方が良いよ」
はいはい。

さてさて、夜。晩飯の時間だ。
予告した通りノルマンディーに到着。手近な店に入ってありったけの注文を。
いやいや、見ろよこの海の見える夜景！綺麗だ、ろ……？ん？
あー、ああ。
俺は、さ。
目が良いんだよ。少なくとも、マサイ族とかそんなレベルじゃなく。
こーんな海の見える所からじゃ、色々と見たく無いもんが見えちまう。
『立て、帰らなきゃならないだろ、鎮守府に！』
『……帰ってどうするのよ、待ってる人なんていないのよ、アーク！このまま逃げれば……』
『……ッ！それでも、私達は、仕える人を選べないんだ！』
ついでに聞こえたく無いことも聞こえちまう。
ああ、もう、君達さぁ。
「そう言うことは俺の見えないところでやってくれないかなぁ!!!?」
俺は一も二もなく飛び出した。
×
×
×
『嫌よ……、私は嫌！帰りたくない！』
『駄々をこねるんじゃない、リシュリュー!!』
なんてことを言うんだ、リシュリューは！
例え、例え望まざる相手でも、忠義を尽くすのが我々の仕事ではな

いか！
逃げ出すなど……、あってはならない！
そう、例え……、延々と罵倒され、暴力を振るわれたとしてもだ。私達には、それしか、ないのだ……。
『アイ惨かりんかねか……、やっぱりクソゲーじゃないか！世の中はクソゲーだわ。リセットボタンはどこ？ここ？』
『なっ……?!だ、誰だ!!?!』
海に、人が?!艦娘……、じゃない、男だ!!
「ん？君、女騎士っぽいな。ｃｏｕｌｄ　ｙｏｕ　ｓａｙ　くっ殺せ！」
『な、何だと？』
「ｐｌｅａｓｅ　，　ｃｏｕｌｄ　ｙｏｕ　ｓａｙ　くっ殺せ！」
「クッコロセ？」
クッコロセとは何だ？
『もっと感情を込めて！』
「？……クッ、コロセ！」
「ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！」
何なんだ一体?!!
「ああ、クッソ、クウガさんとオーズ君と旅に出たかったなぁ。あの人ら今どこいるんだろう。良いなぁ、俺も凡ゆるしがらみを捨てて旅に出てえなぁ。……旅に、出てえなぁ……」
何だ、何を言っている？
『……何者、なんだ？』
「にしても気に食わねえなあ、ああ、気に食わねえ。俺はクウガさんみたいに、誰かの笑顔を守りたいなんて高尚なことは考えちゃいないさ。オーズ君ほど命に価値を見出してもいない。だがな、だがよ！」
何を？
「目の前で辛い思いをしている美女くらい、助けてみせるさ！」
ええい、英語で話さんか！

『君、所属は？』
『えっ、あっ、ＥＵの、サンドラ鎮守府だが……？』
　むっ、きゅ、急になんだ？
『ようし分かった、サンドラ鎮守府を……、潰す！』
『は？はぁ?!何を言っているんだ貴様は?!』
　い、いきなり何を言いだすかと思えば……!!
『分かってる……、分かってるよどうせ！またブラック鎮守府だろ！良いよもう！ぶっ潰して来るからさあ！』
　は、話が通じん！どう言うことだ?!何を言っている?!
『まーた鶏マスク付けてさ、鎮守府解体（物理）ですわ！見とけよ、二度と艦隊運営出来ない身体にしてやる！』
『待て待て待て待て！も、もしや貴様は、テロリストか?!何を堂々と鎮守府を潰すなどと発言しているんだ!!』
『君を幸せにしてあげる！（イケボ）』
『な、なぁ?!』
　な、なんだと?!
『美人が幸せじゃないなら、世界の方が間違ってるんだよ！俺が世界を変えてやる！伝説は塗り替えるもの！』
『どう言うつもりだ?!何をする気だ!!答えろ!!』
『今から君達を不幸にする奴らを半殺しにして、君達を助ける』
　なん……、だと……？
『ブラック鎮守府殺すべし、慈悲はない』
『待て……、待ってくれ。それじゃあ、何か？私達の為に、私達の鎮守府を、潰す、と？』
「ｅｘａｃｔｌｙ」
　その通りでございます、って……。
『何故だ？何故私達なんかを』
『美人だ。助かるに値する』
『どうやって鎮守府を潰す？』
『変装して乗り込んで、全員半殺しにする』
『そんなことが許されると思っているのか？』

『知らないもんね、俺がやるって言ったらやるんだよ』
ああ、ああ、分かった、分かったぞ、この男……、
『さあ、案内してくれ、鎮守府解体ショーの始まりや』
何も考えていない……!!
『まず、結論から言わせてもらおう……。国防の観点から、サンドラ鎮守府に案内することは出来ない！』
祖国に忠を尽くしたこのアーク・ロイヤル……、如何なる理由があれど、裏切ることなど出来ない！
『そう言うの良いから。今の辛い現状を抜け出して、真に国家の為に戦いたいと思わないかね？君はどう？』
『……本当に助けてくれるの？』
『リシュリュー?!』
リシュリュー、何を……?!
『アーク、良い加減目を覚まして！あんなところで使われていたら、私達はいずれ使い潰されるわ！』
『それがどうした！艦娘の役目だろう！』
『まあまあ、取り敢えず案内してよ』
『……分かったわ』
『おい、リシュリュー?!何を勝手に……!!』
『私は！……私は、使い捨ての道具のまま死ぬのはごめんよ。……だから、賭けてみようと思うの、この人に』
リシュリュー……。
『ああ、大船に、いや、宙船に乗った気持ちで待ってろ！俺が全部、するっとまるっと解決してやる!!!』
大丈夫、なのだろうか……。

１９６話　サンドラ直撃、そして粉砕

『な、なんだ貴様?!ここは関係者以外立ち入り禁しびゃ!!』
『何をするろぁ?!』
《ちわーす、三河屋でーす》
　はい、と言う訳でね、やってまいりましたサンドラ鎮守府。ＥＵ所属の新しい鎮守府らしく、最初に召喚したリシュリューとアークロイヤルのお二人を使い捨ての鉄砲玉としてそこら中を駆けずり回してるとか。
　これはギルティ。ブチ殺し確定ね。
　義憤って訳じゃない。今こうやっているこの時だって虐待されている子供がいるだろう。レイプされる婦女子がいるだろう。辛い思いをしている艦娘がいるだろう。
　それを全部どうにかしようみたいな、ヒーロー的な思考回路は皆無だ。こう言う言い方はアレだが、知らない人がどうなろうと知ったこっちゃない。
　……だがよ、俺の見えるところでやるなよ。胸糞悪い。
　女の子の涙を見た後で美味い飯が食えるか?食えねぇだろ?だから助けるんだよ。理由なんてそのくらいのもんだ。
　でも、鎮守府一つ潰すには十分過ぎる理由だ。
『なっ、何をやっているんだ貴様はー!!!』
『憲兵をノックアウトした』
『立派な犯罪行為だぞ!!!』
『超法規的措置って知ってる?』
　アークロイヤルちゃん、激おこ。
『勝手に私達の制御装置も壊すし……、何なんだ貴様は!』
　制御装置……、艦娘の首輪のことだな。黒井鎮守府開発のロック装置とは違い、艦娘の自由を奪うためのもの。もちろん、即座に破壊した。
『だぁから、言ったろ?君達を助ける、安心しろってさ』
『……私達は』

『はいはい、助ける価値も、理由もあるんだ。大人しく助けられなさい』
悪いが、君の意見は聞いてないよ。俺が助けるって言ったら助けるんだ。俺の納得のいく形で事が収まるまで好き勝手やらせてもらうぞ。
俺、自分で言うのも何だけど、なろう系主人公が如くサイコパスなもんで。気にくわない奴は何だかんだ理由をつけて潰すのよ！
『……ところで、その不気味な鶏のマスクは何だ』
これ？変装。

『だ、誰だっ、がああああ?!!』
『ごはぁ?!』
『貴様、ぷぎゃ?!!』
ンッンー、いい調子だ。
『……大丈夫かしら』
だが、俺の快進撃とは対照的に、憂いを帯びた表情を浮かべるリシュリュー。
『んー？何がー？』
『ねえ、ここのＡｍｉｒａｌを再起不能にしたら、私達は日本に行って、黒井鎮守府ってところに引き取られるのよね？』
『ああ、そうだよ』
もちろん、いつもの。親の顔より見た展開。おいでよ黒井鎮守府へ、だ。
『そこに行けば、私達は、幸せになれるのかしら？』
『それは分からないさ。幸せってのは自分の手で掴み取るものだからね。まあ、飯と金と休みは出すよ』
『……そう』
幸せは、なんて言うか本当に、掴み取るもんだからねぇ。
幸せになれるかどうかってのは自分次第じゃないかな？まあ一般論でね？
『でもまあ……、ここにいるよりは、ずっとマシさ』

『そう、よね』
さあ、行こうか。
サンドラ鎮守府を駆け回り、中枢の執務室へ。
さあ、提督の面、拝んでやりますか。
《お邪魔しまーす！》
『だ、誰だ?!!』
《俺だ!!!》
『!!!?』
んー、予想に違わず、厭な顔をした男だな！俺みたいな爽やかイケメンとは違って、不細工だ。心の醜さが顔にまで出てる。
《お前、地獄行き、確定ねっ??》
いや、本当に。地獄行きにしてやってもＯＫなんだがね。俺も焦熱地獄までなら落ちたことあるし。まあ、地獄に行ったら行ったで面倒なことになるしな。半殺しの再起不能で済ませてやるよ。あっ、でも、幻想郷の閻魔様にはまた会いたいな。美人だ、彼女は。
さてさて、そんなことより。
『何を言っている?!』
《罪と罰、罪と罰、罪と罰》
『罪と罰だとぉ……？私がいつ、何をしたと言うのだ?!』
自覚がないって恐ろしい。
《艦娘、艦娘》
『艦娘、だと？……リシュリューとアークロイヤルの差し金か！あいつら、建造してやった恩を忘れたか！』
おいおい、何だ建造してやったとは。お前が腹を痛めて産んだ訳でもねえだろ。
『Ａｄｍｉｒａｌ……』
『Ａｍｉｒａｌ！』
『貴様らッ……!!!』
怒りの篭った視線をアークロイヤルとリシュリューに向けるサンドラの提督。

……サンドラの提督って言うとアレだな、新宿のアーチャーみたいな。つまるところ俺は黒井の提督か。アレ？ヤクザっぽい。
『貴様らを建造し、使ってやっているのは誰だと思っている?!この私だぞ！道具の分際で持ち主に逆らうのか?!』
『自分が道具だって事くらい理解してるわ！でも、Ａｍｉｒａｌに使われるのはもううんざりよ！仕える相手くらい、自分で決めるわ!!』
『貴様にそんな権利は無い!!』
《アルヨー、アルヨー、アルアルヨー》
道具、ねぇ。何でそう、自ら一線を引きたがるのかね。艦娘も人も、心があるんだから一律一緒で良いだろうに。
そう言う態度だから世の中から差別が無くならんのよ。
それに、だ。忠を尽くすのは自分にしとけ。その方が後悔しないぞ。
《艦娘にも、心はあるのさ～♪》
『だからどうした？人間と同じ扱いをしろとでも言うのか？何を馬鹿な、艦娘は悍ましい化け物だぞ！これは差別ではなく、分別だ!!』
ほーん、死ね。
すぐ側の灰皿を投げつける。
『があっ?!き、貴様ぁ……!!』
《ｂｙｅ―ｂｙｅ！》
ぶん殴ってやれ。
『ぐっ、クソッ!!』
ほー、腐っても軍人か。ただ殴るだけじゃ防がれるな。
いや、反応できない速度で殴ったり、魔術使ったりしたら、こっちの身元割れちゃうかもしれないだろ？他所の鎮守府を潰す時は出来るだけ常人の技術と身体能力でって決めてんのよ。声も録音テープ使ってるし、顔もマスクで隠してるしで。
さて、どうするか……？おっ、
『まっ、待て！そんなもので殴られたら……!!』
ゴルフクラブ、発見ー。
おらよ。

『いっ、ぎゃあああああ!!!』
おーおー、折れたな。
《気分はどうだい？》
『き、貴様ああああ!!!覚えておけよ！貴様も、貴様を呼んだ艦娘も！皆、殺してやる!!!』
元気一杯じゃねえの。
もう一発行っとく？
『がっ、や、やめろ！』
もう一発行っとく？
『いぎゃ、ぐ、ああ』
もう一発行っとく？
『ぁあ?!や、やめてくれ』
もう一発行っとく？
『げぁ?!!もう、やめて、くれ!!』
もう一発、行っとく？
『やめろ！もう充分だ!!』
おっと、どうした、アークロイヤル。
《君も、殴る、カイ？》
『そうじゃない！……もう、たくさんなんだ。例え私達のためでも、暴力は振るわないでくれ……』
なんて。
なんて心優しい子だ。
感動した。
今まで虐げられてきた相手を前にしてその態度、感動した！
まさに聖人君主だ！
《ホォール！イィン！ワァン!!!》
『ぐあああああ!!!』
はい、とどめ。
『何故殴ったー?!!』
いや、だって、とどめ刺さないと。
君が優しい人だと言う事は、俺の暴力を止める理由にはならない。

そこには何の因果関係もないだろ？
大体にして、俺は宣言したはずだ。
サンドラ鎮守府を潰す、と。

さて。
無意味で無慈悲な鎮守府解体劇の後。
「と、言う訳で、今日から黒井鎮守府所属になるアークロイヤルとリシュリューだ。仲良くするように」
「「は？」」
そんなイセスマ見た感想みたいなこと言っちゃやーよ。
「ちょっと……、ちょっと待ってくれないか司令官。食事前に姿を消したのは、まあ、百歩譲って良いとするよ。でも、何で、新しい艦娘を連れ帰ってくることになるんだい？」
響、冷静なツッコミ。
「長く生きているとこんなこともある」
「ないよ」
バッサリ。
「まあまあまあまあ、アークちゃんと、リシュリューちゃんを見てくれ」
「……見たけど、彼女達が何か？」
「……可愛いだろ？」
「は？（半ギレ）」
可愛さは全てにおいて優先されるだろ、常識的に考えて。
『はい、さあさあ座ってアークちゃん、リシュリューちゃん。おっこのカルヴァドス美味えな飲みなよ』
『い、いや、私は』
『そう言うの良いから』
遠慮はいらない。
『お酒なんて初めて！ありがとう、新しいＡｍｉｒａｌ！』
『良いの良いの、着任祝いだ、好きなもの注文しな』
それで良いんだリシュリューちゃん。

「おお、このホロホロ鳥のオージュ渓谷風なんて素晴らしい出来だ。シェフを褒めてやりたい」
カルヴァドス……、りんごの蒸留酒の風味が効いていて、その上で生クリームがベースのソース・ノルマンド。
美味しいなー。やっぱりフランスは飯が美味いわー。
「ああ、帰りは俺一人でロシアに寄るから。皆んなはこれ使って帰ってね」
と、帰還の巻物を渡す。
帰還の巻物と言うのは、その名の通り、特定の場所に帰還できる巻物だ。
「はぁ……。まあ、しょうがないわ。Ａｄｍｉｒａｌですもの。こんなこともあるわ。……Ａｄｍｉｒａｌ？今度は私の祖国イギリスへ、二人きりでｔｒｉｐしましょ？」
ウォースパイトが言う。
はいはい、旅行な、旅行。……ウォースパイト、殆ど歩けないのに結構アクティブだよな。

まあ、こんな感じで、日帰りフランス旅行は、予期せぬ形で終わりを迎えた。
……予期せぬ形だったが、存外、悪くなかったな。
新たに誘拐してきたアークロイヤルとリシュリューの今後に乾杯、だ。
「うわぁ、凄いね司令官。カルヴァドスをラッパ飲みとか……。それ、四十度はあるのに」

１９７話　同志よ

「ひーびきくーん、俺、一人で行くって言ったよねー？」
ロシア、海沿いの街。
買い出しに来た。
買い出しに、来た、のだが……。
「ハラショー、ロシアの大地を踏むのは初めてだ」
呼んでもいないのに響が着いて来た。
「買い出しだぞ、何にも面白いことないぞ」
酒とか色々。キャビアも買うぞー、買っちゃうぞー。……別にロシアで買うからキャビアが安くなるとかそう言うのはないからな。ロシアでもキャビアは高級品だ。
「そんなことはないさ。司令官と一緒にいられるだけで私は幸せだよ」
えっ、何で今口説かれたの俺。やだ、キュンとした。胸キュン。侮れねえな響。
「それに……、司令官と一緒にいると……」
『うわーん、どう言うことだー!!祖国が無くなったなんて信じんぞーーー!!!』
「……絶対に退屈しないからね」
ああ、はいはい、また厄介事ね。

『おい貴様！ここはどこだ!!』
厄介事の種、目の前で泣き喚くこの美女。俺の勘が正しければ、艦娘だ。見れば分かる。なんて言うか雰囲気とか、匂いとかそう言うのでも分かる。
「司令官、この人は……、多分、ソ連の戦艦、ガングートだね」
と響の言。
ソ連……、ソ連。
オッ、厄ネタだな？
『あー、ここ？ロシアだよ』

『ロシアロシアロシア……、皆口を揃えてそれだ！ソビエトは……、我が祖国、ソビエトはどこだ！』
オオッ、厄ネタかァ!!
ええ……、俺が説明するの？
『あー、ソビエト社会主義共和国連邦は、１９９１年、１２月にソビエト連邦共産党の解散に伴い、ソビエト連邦の共和国が全て独立、事実上解体されたんだよ。もう、だいぶ前の話だ』
『う、嘘だッ!!!』
嘘じゃないんだがなぁ。嘘松と言えればどれだけ楽か。
『本当だよ。気の毒だが、ソ連はもう、無いんだよ』
『そ、そんな、馬鹿な……』
頭を抱えるガングートさん。もうね、本当に、気の毒としか言いようがない。申し訳ないが何もしてやれない。俺には、彼女を元気付ける方法がない。
『……どうしてだ？どうして祖国は滅ばねばならなかった？理由は何だ？』
『……経済破綻が主な理由でね。当時の大統領が改革案を出すが見事に大コケ。まあ、限界だったんだよ、共産党一党独裁とか、社会主義計画経済とか』
冷戦がなぁ……。まあ、冷戦より前の記憶しかない艦娘に説明するのは難しいが。
『……では、私は？祖国を失った戦艦は？何処に行けば良いのだ……？』
俯いたまま呟くガングートさん。
まあ、行くところがないなら……。
『うち来る？』
勧誘だ。
幸いにもこの人は我が黒井鎮守府の募集要項、美女、そして艦娘の二条件を見事に満たしている。
『うち……？何処だ？』
『黒井鎮守府。日本の鎮守府だ』

『枢軸国側ではないか……』
『もう昔のことなんだよ、ガングートさん』
悪いが俺は、二次大戦を体験していない。だから、当人の恨みや因縁も分からない。
だけど、もう良い加減にしてくれよ。過去の因縁は忘れて、手を取り合おうじゃないか。
『一歩、進んでみる気は無いか、ガングートさん』
『……祖国を、捨てろと言うのか？』
『違うさ、君の祖国は、いつだって君の中にある』
適当なことを言っておこう。シリアス苦手だし、雰囲気で押し切ろうか。いけるいける。大丈夫大丈夫、俺イケメンだし。
『祖国は、私の、中に……』
はっ、と何かに気付いたかのように目を見開くガングートさん。
『そう、か……、そうだな！祖国は私の中にある！』
よく分からんけど元気になったみたいで良かった。いや本当に。
『その話、受けよう！どうか、私を導いてくれ……!!』
『心得た！』
ガッチリと手を握るガングートさん。
いやあこれで一件落着ですわ。……うん、カリスマにものを言わせただけなんですけどね。これが交渉スキルですよ、奥さん。

『ところでガングートさんは何処から来たの？』
『さん、はやめてくれ、むず痒い。……分からん、気付いたら海の上にいてな。取り敢えず陸を目指し、辿り着いたのがここだった』
買い物をしながら、ガングートさ、いや、ガングートに話しかける。
うーん、気付いたら海上にいた、か。
ドロップか？
……ああ、ドロップと言うのは、何らかの要因で突然艦娘が現れる現象のことね。
ごく稀にしか起こらない筈なんだけどな。
まあ俺、上条なんとかさんレベルのトラブル体質だし、俺のせいみ

たいなところもあるっちゃあ、ある。
禁書三期応援してます。
『そっかー、じゃあガングートはドロップで生まれたのか。うちでドロップで生まれたのはコマンダン・テストとウォースパイトだけだよ。レアだねレア』
『む、そうなのか？』
『まあ、だからって皆んなと何か違う訳じゃないけど』
差別はない。
『ところで、その、さっきから気になっているんだが、そこのちっこいのはもしかして……』
『……確かにちっこいかもしれないけれど、それを本人に面と向かって言うのはどうかと思うよ』
響が多少むくれながらもそう返す。
『ヴェールヌイ、か？』
『そうだよ、ヴェールヌイだよ』
『おお、おお！同志よ!!』
響に抱きつくガングート。キマシ？キマシなの？キマシタワー建てる？
『はぁ、はいはい、離れてよ。司令官以外に抱きつかれても暑苦しいだけだよ』
『ああ、いや、すまない。かつての同志に会えて嬉しいよ』
ニコニコと、本当に嬉しそうに笑うガングート。良いね、表情がコロコロ変わって可愛らしいよ。感受性が豊かなのは良いことだ。
『……貴様も驚いただろう。この世界に呼ばれたら、祖国が無くなっていたんだからな』
『まあ、ソ連が無くなっていたことには驚いたけど……、それだけだね』
『む、何故だ』
『私の祖国は日本だよ』
『……そうか』
今度は一転、悲しそうな顔に。

『ま、まあ、そうだね、それでも、艦の頃は一時ソ連に身を置いたことがあるからね。同志と呼びたいなら、そう呼んでくれて構わない』
『そうか……!!』
また一転、嬉しそうな顔に。
『そうだな、そうだな……！生きてさえいれば、かつての同志にまた会えるかもしれん！これからよろしくな、同志ちっこいの!!』
『……だから、ちっこいのはやめてくれないかな。気にしてるのに』
なんだ、気にしてんのか。？せぎすのロリボディ、需要はあるんだけどな。俺的にも十分可愛いと思うんだが。
欲情するかって？
……さ、さあ、どうだろうね？
『……こんな身体だと、司令官の気を惹くのもやっとやっとだよ』
『気を惹く？何のことだ？』
『いずれ分かるよ、いずれね……』

１９８話　帰宅後

はいどうも、ただいま日本。
と言う訳で、門の創造で帰国した俺、と響とガングート。
響にガングートを任せて、俺は、業務に戻る。
業務と言う名の遊び歩きにな！
「俺がいない間に何かあったかー？」
指を鳴らすと、どこからともなく川内が現れ、
「特に何も。これ、大淀さんから」
俺にメモを手渡した。ゴウランガ！
手元のメモを読むと……、ふむ。俺がいない間に東弊重工さん来てたのか。取引先だ。それと、反戦団体の活動家を追い返した、と。テンプル騎士団も攻め入って来てたのか。
まあ、何だ。いつも通りだな。

うちの治安はロアナプラ通り越してヘルサレムズロット並みだけど、私は元気です。

そんなことを考えながら、鎮守府を歩く俺。俺が歩くと厄介ごとの方がやってくるので楽しい。
さあさあ、今回の厄介ごとは何かな～？
「出来ましたよ、提督!!」
お、明石かぁ！明石は良いぞぉ、毎度毎度面白おかしいことをしでかしてくれるからな。
「今度は何やったんだ明石？」
「魔剣です！」
よぉーし！魔剣かー！
「最上ちゃんに依頼されて、魔剣を造ったんです！」
んー、閻魔刀に近い見た目。
あ、閻魔刀ってのは、昔会ったデビルハンターの兄貴が持ってたマジパネェ日本刀のことね。何でも、人と魔を分かつ剣なんだそうだ。

「まあ、リソースの殆どを強度と斬れ味に注ぎ込んでますからねぇ。提督が見た本家大元にはまるで届かないんですけど」
「そらそうよ。あのレベルの魔剣がホイホイ創造されてたまるか」
あれはやばいぞ、俺にも特効だ。俺も魔にカウントされる存在だからな、よく効く。……俺本人は人間のつもりだが、何故か魔にカウントされる。悲しい。
「それじゃ、テストお願いします！」
「え、俺が？」
刀とか使えないんだけど。戦闘は苦手だとあれ程。
「いやいや、最上呼びなよ。俺、剣術の心得とかないからさ」
「……えっ、そうなんですか?!何でも出来るもんだとばっかり」
何でもは出来ないよ。俺にだって苦手なこととかある。戦闘は苦手なことの最たるものだ。
そもそも、戦闘に使えるスキルが少ないんだよな。俺のＫＡＲＡＴＥは守るためのものだし、その他武術も受け流しが基本。強いて言えば弓、投擲くらいか。銃器も駄目だ。
「だから、いつも言ってるけど、戦闘に使えるスキルは殆どないんだよ俺」
「いやあ、ノリノリで前線に出るもんだからてっきり……」
戦闘スキルがない奴が前線に出ちゃ悪いか！……悪いよな、冷静に考えて。俺、艦娘の皆んなの負担になってるよなぁ。不甲斐ない……。
「でもまあ、ものの良し悪しくらいなら俺にも分かるよ。サーチ、歴史的遺物！」
「は？」
「分かった、すまない」
イセスマはお気に召さない？そうかい、そうかい。
あー、俺も異世界転生してハーレム築きてえなぁ。
……なーんちゃって！既にこの世界でハーレム築いてるもんねー！侍らせちゃってるもんねー！
まあ、このハーレムに手を出したら死ぬんですけど。鎮守府崩壊

デッドエンドですけど。
さあ、そんなことより、この魔剣を鑑定してみようじゃないか。
『鑑定』
どれどれ……？
☆《闇魔刀・レプリカ》（８ｄ７）（５）
貫通３０％
完全貫通の機会［＊＊＊＊＊＋］
クリティカルの機会［＊＊＊＊＊＋］
混沌耐性［＊＊＊］
地獄耐性［＊＊＊］
魔法耐性［＊＊＊］
ってところか。かなりの高性能だ。神器クラスだな。
このクラスを作れるとなると、一流と言っても良いだろう。
「流石だ明石。素晴らしい出来だ」
「お褒めに預かり恐悦至極！」
恭しく傅いて見せる明石。芝居がかった態度。
全く、可愛い奴め。

「出来ましたよ、提督!!」
お次は夕張のターンだ。
「どっから現れた」
「転移装置、実装しました」
そうかい。
「それより見て下さいこれ！提督の旅の記録からインスピレーションを得て作り出したこれ！」
「何だい？」
「コアメダルです」
「それ以上いけない」
「十枚では何も起こりませんが、九枚にすることにより欲望が生まれて」
「ヤメロー！オーズ君呼ばなきゃならなくなるだろー!!」

「……と、言うのは冗談で、三枚しか作ってません。しかもレプリカです。陽炎型に渡しておきますねー」
良かった、本当に良かった。あのレベルの怪人が湧いたら、俺じゃどうにもならないからな。
ライダー案件はキラーパスよ。何だって俺は人外と縁があるのか。
「まあ、本当は、艦娘の身体に直接メスを入れてインプラント！超強化！とかやってみたいんですけどねぇ。残念ながら生命工学はからっきしで」
「はっはっは、倫理って言葉知ってる？」
「うふふ、知りませんねぇ」
流石はプロフェッサー夕張。マッドだ。
「面倒臭いんですよ、そんなもの。何の意味もない。技術の進歩に対して、やれ禁忌だ、やれ神の怒りだと……」
このプロフェッサー夕張に倫理観や道徳心と言うものはないのだァーーー!!
まあ、俺も、色々と人間やめてる要素あるし、強くは言えないんだけど。そもそも、俺も倫理観や道徳心は無いしな。
クローンやサイボーグや戦闘機人の知り合いがいるが、皆んな葛藤はあれど、思い思いの人生を過ごし、その分野で活躍してるんだから良いんじゃない？みたいな。
日本生類創研？如月工務店？知らん、そんなことは俺の管轄外だ。でも、俺の見えるところで女の子に酷いことしないようにね。やったら叩き潰す。

夕張と別れ、居酒屋鳳翔へ。
「出来ましたよ、旦那様!!」
と、鳳翔に話しかけられる。
「はいはい、何だい？」
「居酒屋鳳翔の新メニューです!!」
「おお、できたのか。そうか、そうか」
そういや、メニュー増やしたいとか言ってたっけ。

色々と相談に乗った記憶がある。
「たくさんのアドバイスをくれた旦那様に、一番最初に食べて貰いたくって……??」
可愛いこと言うじゃないの、鳳翔。
君が望むなら何だって食べるさ、毒だろうと何だろうとね。
艦娘にはよく血液入りの手料理やお菓子を食べさせられるし、正直何でも食える。怖いもんなしだぜ。
でも、比叡カレーは勘弁な！
「まずはこちら、ロール白菜です！」
「ほう……」
土鍋が出てきた。だし汁の香り……。
もうこの時点で美味しい。
「どれ、いただこうか」
和風スープを一口。くっ、美味い。やはり和食じゃ敵わないな、鳳翔には。
そしてロール白菜を一口。うーん、良いね。鶏肉を使ってるのかこれ。淡白な味わいだ。ヘルシーで美味しい、良いと思う。
「お次はこちら、茄子の豚肉巻きです！」
「ほほう……」
茄子の豚肉巻き……。
主な味付けはポン酢だな。
程よい酸味が食欲を促進する。茄子もジューシーで非常に美味い。秋茄子は嫁に食わすなとはよく言ったものだ。
「最後はこれ、揚げ鶏のネギソースかけです！」
「なるほど」
揚げ焼きにした鶏肉にたっぷりのネギソースをかけたこの一品。
ネギのシャキシャキ感に、鷹の爪のピリ辛さ。
文句なしに美味い。
「……ご馳走様。流石だ鳳翔、美味しかったよ」
「旦那様にそう言っていただけるのが、何よりも嬉しいですよ！」
「今晩飲みに行くから、その時また作ってくれ」

「はい！」

さあ、定時だ。

業務終了の時間だ。

うちは名前に反して白い鎮守府だからな。ホワイト企業だからな。自ら進んで夜戦と言う名の残業をしてくれる熱心な子もいるが、基本的にはお仕事は終わりの時間だ。

最近の艦娘の皆んなは、一日百殺のノルマを課されていることになっている（俺がいないところでそう決まったらしい）、が、個人個人が強過ぎて、一時間もしない内にノルマ達成、後は鎮守府で思い思いの時間を過ごす、ようになっている。

つまり、何が言いたいのかと言うと、うちの艦娘は、就職活動が終わった大学生くらい暇だ、と言うこと。

「出来ましたよ、提督」

「何がだい、赤城」

「暇な時間が、です。さあ、提督？鳳翔さんのところでお酒飲みましょう？お酌しますから、ねっ？」

「そりゃあ良い、最高だ」

いやー、今日も一日、頑張って……、ねえな。でもアフターファイブだ！飲み行くぞ！

「ところで赤城、獣耳はどうした」

「提督、アズールレーンのやり過ぎで頭が……？！」

１９９話　黒井鎮守府の爽快な一日

《０５：００》

はいどうも、おはようございます司令官！

青葉です！

「青葉……、青葉か？どうした、髪の色が違うぞ？それに獣耳は……？」

目を覚まして下さい!!!この世界線はそっちじゃありません!!!

「はっ?!……おれは、しょうきにもどった!!」

もう、大丈夫なんですか、本当に……。

折角の、一日密着取材と言う名の合法的にイチャイチャ出来る日なんですから！ちゃんと私を見て下さい！

「もちろんさ、ちゃんと見てるよ、青葉」

今日は一日、一緒ですよ！

《０７：００》

んんー、豚汁美味しい……。

最近は肌寒くなってきましたからね、暖かい豚汁が沁みますねぇ。

黒井鎮守府、鳳翔さん特製の豚汁には、大き目の豚バラ肉、ジャガイモ、人参、大根、ごぼう、こんにゃく、長ネギが入っています。具沢山でボリューミーな一品です。

けれど、戦闘行動や訓練でカロリーを大量に消費する艦娘にとってはぴったりなんです。

余ったらうどんとか入れて食べるんですけど、それがまた美味しいんですよねー。

ま、この黒井鎮守府のご飯にハズレはないってことですよ。

『トンジル……、トンジルね。豚の汁と書くらしいけど、中々どうして、美味いわね。食べたことのない味だけど』

フォーク片手に何かを呟くのは、新たな艦隊の仲間、リシュリューさん。

まだ日本語に慣れないのか、恐らくはフランス語？らしき言葉で話

していますね。
『この魚は……、サーモンかしら？塩焼きにされてるのね。こっちは……、ほうれん草をソースに漬け込んだもの？』
ほうれん草のお浸しを、怪訝な顔で口に運ぶリシュリューさん。
『あら、美味しい』
食べた瞬間、顔を綻ばせるリシュリューさん。ああ、やっぱり、味覚は全国共通なんだな。外国の人でも、日本の美味しいものは美味しいと感じるものなんですね。
なんだか、心の距離が近付いた気がします。この鎮守府の料理を美味しいと感じてもらって誇らしいです。

《０９：３０》
「実は……、昨日から母乳が止まらなくって」
……司令官。
「待ってくれ誤解だ身に覚えがないガキなんざこさえちゃいねえ」
司令官。私と言うものがありながら。愛宕さんと。司令官。司令官。司令官。
「待って青葉待ってやってないやってない」
司令官。
「あっ、愛宕！何か心当たりはないか?!」
「そう言えば……、明石さんから牛乳を貰って……」
「……ＳＣＰ６８６か！明石ェ!!……あ、これ、エリクシール。状態異常治るから飲んでね」
「ええ、分かったわ。……その、提督？私のおっぱい、搾ってみたい？」
「ああ！」
司令官。
「アアーーー!!!」

《１２：００》
全く、司令官は……。
おっぱいの何が良いんですか。あんなものただの脂肪の塊です。

……決して僻みとかじゃないですよ。事実を言ったまでです。
「んんー、大っきくなったらなったで、肩がこるなー」
「ですわねー」
チィッ!!!
何ですか鈴谷さんに熊野さん！嫌味ですかッ!!!
「へ？い、いや、別に？」
良いですよ良いですよ！私だって改二が来たらボインボインですからね!!
「は、はぁ……？」
きぃーーー!!!
改二にさえなれば……！改二にさえなれば……!!

《13：00》
はぁ……。失礼しました、ちょっと取り乱しました。
……大体、司令官も司令官です。あんなに喜んでおっぱいを揉んで……。青葉のじゃ不満なんですか。
「いや、そんなこたぁ、ないけども」
だったら私のおっぱいで満足して下さい。
「満足するしかねェ!!」
んっ、そうですそうです。司令官は青葉に夢中になって下さい。
「そこら辺はほら、青葉の努力によるだろ」
努力ってなんですか！
「ほら、俺の気を引くためお洒落するとかさ、そう言うのだよ」
お洒落、ですか。
「他にも、男心を擽るセクシーな仕草とかさ」
むー、難しいです。
「まあ、そこら辺は経験かな。でも、恋は女の子を綺麗にするから、心配はいらないさ」
男心、男心かぁ。
男の人が女心を分からないように、女の子だって男心なんて分かりませんよー。

「そうか？男心は分かりやすいぞー？」
　そうですかねぇ。司令官の男心、全然分からないんですけど。
「そりゃあ、みっともない下心とかは巧妙に隠してるからな」
　あるんですか、下心。
「男心なんて下心そのものみたいなもんよ」

《１５：００》
『私は……、何を、やっているのだろうか……』
　紅茶のティーカップ片手に、どこかぼーっとした様子のアークロイヤルさん。
『どうした、アーク』
『むっ、Ａｄｍｉｒａｌ……』
　と、そこに、司令官が話しかける。英語なので、何言ってるかは殆ど分からないですね。
『……いや、私は、何をやっているのか、と思ってな』
『あー、祖国を裏切ったとでも思っているのか？違うぞ、そんなことはない』
『だが……』
『良いか、どうせ忠を尽くすならば、自分に忠を尽くせ。……この言葉は、知り合いの兵士の受け売りだがね』
『自分に……、忠を尽くす……』
　胸に手を当て、思いつめた表情を見せるアークロイヤルさん。
『……分かった、その言葉、肝に銘じておこう。私は、私自身の自由意志で、祖国の為に戦うのだ』
『ああ、それで良い。……訓練が終われば、イギリスの海域に派遣するからさ、その時存分に活躍してくれ』
『ああ、了解した』
　……司令官が何を言ったかは分かりませんが、何か良いことを言ったのは分かります。
　司令官、口が上手いから……。
　アークロイヤルさんみたいな堅物は、すぐに丸め込むでしょう

ねー。

《１７：００》

『うおおおおお!!!ブロークン！マグナムッ!!!!』

うへぁ……。

まーた明石さんの超技術ですか……。

恐ろしいものを……。

『まだだ、まだこの艤装を使いこなせていないッ!!』

と、恐らくはロシア語で何かを叫ぶガングートさん。

『おーい、ガングートー、もう暗くなってきたし、帰っておいでー』

司令官も、ガングートさんに対して、ロシア語で呼びかける。

『む、いや、しかし、まだ艤装が……』

『良いから！休むことも訓練の一環だよ！』

『まあ、そうだな、分かった』

『……やっぱり、寂しいかい？』

『……まあ、な』

目を伏せて言うガングートさん。

『異国の地で言葉も通じん、同志もいない。世界で独りきりなんじゃないかと、時々思う』

『大丈夫だ』

あっ、司令官！ガングートさんを抱きしめて……!!

『俺で良ければ、側にいる。それに、鎮守府の皆んなを新しい同志だと思って、受け入れてみてくれ。皆んな良い子だ』

『……分かった。そう、だな、今はもう、皆んな仲間なんだな。ありがとう、私に寄り添ってくれて……』

くっ、私を放っておいて何良い雰囲気になってるんですか?!

私も抱きしめてくれなきゃ嫌です！

『む、なんだこいつは』

『青葉だ。君の新しい同志だよ』

「ふむ……、ｔｏｖａｒｉｓｈアオバ！ｐｒｉｖｅｔ！」

えっ何て？

「よろしくだって」
は、はあ。

《１９：００》
晩御飯です。
今日のメニューにあった、ペリメニというのを食べてみます。なんでも、ロシアの郷土料理だとか。
ん、これは……、美味しいです。
いわゆる水餃子ですね。皮がモチモチして美味しいです。
スメタナ……、サワークリームをかけて食べるんですが、これが中々ですね。お肉の旨味がサワークリームのまろやかさとベストマッチです。
ウォッカも飲んでみます。
ショットグラスで一気に、口に含まず喉で飲むのがロシア流、だそうです。
えい。
……っああ、これ、効きますね！
駄目ですねこれは、強過ぎます。大人しくジンジャエールで割って飲みましょう。
……うん、もう一品行けますね。
じゃあ、次はこのブフ・ブルギニョンって言うのを。フランス料理だそうです。
ブフ・ブルギニョン……、意味は牛肉のブルゴーニュ風、だそうで。牛肉の赤ワイン煮込み、ビーフシチューみたいなもの、らしいそうです。
味も……、うん、ビーフシチューですね。お肉が舌の上でとろけます。
付け合わせの野菜も美味しいんですよねー。鎮守府の裏山で作られた美味しい野菜です。人参甘っ。じゃがいもほくほく。
はー、美味しい。
うう、また食べ過ぎちゃいましたー。

ま、まあ、どうせ太らないですし、平気ですよ、平気。

《２２：００》

夜。お風呂を済ませて、居酒屋鳳翔へ。

「新メニュー美味え」

……私、司令官ほど飲めないんですけど。

「はっはっは、俺と同じペースで飲むのはいかんでしょ」

うっわ、私がストレートじゃ飲めなかったウォッカをラッパ飲みしてる……。

「ルースキースタンダルトって銘柄のこのウォッカが美味いのよ」

は、はぁ……。

司令官、人間ですか。

「まあ、概ねは」

概ね、かぁ……。

「ほらほら、こっちのワインもいけるぞ。辛口だが大丈夫か？」

あっ、はい。

「こっちのビールもいけるのよ」

どうも。

「カクテルはどうだい？」

美味しいです。

……大分飲みました。

酔いが、回って……。

「お、ギブアップか？」

は、はい、ギブアップです……。

「んじゃ、俺もここまでにしとくかー。部屋まで送るね」

え、あ、は、はい！

こ、これは、あれですね、送り狼ってやつですね！酔った青葉をあしてこうして……、うきゃー！

「……いや、普通に添い寝までだが」

なーんでですかぁー！手ぇ出して下さいよぉ～！

「はいはい、手を出させてみろ、ってことで」

ちぇー。
んー、じゃあほら、パンツ見せますよほら。
「そんなあからさまに見せられちゃあなあ」
じゃあどうしろって言うんですかぁ～！
「頑張って口説いて、どうぞ」
ああ、もう駄目です、ベロンベロンです……。
お休みなさい、司令官……。

２００話　旅人二周年パーティ

「ああ、忙しい忙しい……」
「それは、こっち、それは……、あっちです」
「はいはーい、お酒はこっちです！」
……。
「ねえ、何やってんの？」
朝っぱらからパタパタ動いてさ、どうかしたの？鳳翔達よ。
「何って、宴会の準備ですよ」
宴会？宴会……、んー、何の？最近は別に祝うようなこと無くない？聞いてみるか。
「宴会って、何の？」
「そんなの決まってるじゃないですか！旦那様の提督着任二年目を祝う宴会ですよ！」
「あ、そっかあ」
もうそんなんになるのかぁ。
二年目、二年目かぁ……。旅人の俺が旅をせずに一箇所に留まり早二年。おかしい、こんなことは許されない。
「盛大に祝いましょう！私、腕によりをかけてお料理しますからね！」
でもこんな嬉しそうな鳳翔の顔を見ると文句言えねえよなあ。
……また今度、なんだかんだ理由つけて旅に出よう。一週間くらい。
さて。
「どれどれ、俺も手伝おう」
「いえいえ、旦那様は祝われる側ですし。休んでて下さい」
っってもなあ。何もやらないでいるのもなあ。俺も出来ることなら働きたくねえけど、朝っぱらからしっかり働いてる艦娘の前で休むことは出来ねえよ。
「良いからほら、料理、手伝うよ」
「じゃあ、ピザをお願いできますか？旦那様のピザ、好評なんですよ」
「おう、良いぞ！」

俺自慢の窯焼きピッツァ！宴会のような祝い事には最適よ!!
ポテトも揚げちゃう！ターキーも焼く！パーティパーティ楽しいなー！
「ふふ、旦那様が楽しそうで何より、ですね」
『えー、では、俺着任二年目を祝って！乾杯!!!』
「「「乾杯!!!」」」
つつがなく宴会の準備を終え、何の問題もなく宴会は始まった。音頭をとるのは俺だ。特に話すこともないから、早々に乾杯したが。
「おめでとうございます、提督！」
「おう」
「これからもよろしく、司令官！」
「おう」
「ずっと一緒ですよ、司令！」
「おう」
……皆んな、嬉しそうだ。
ああ、これは、これじゃあな。
当分、旅できそうにないや。

さて、宴会だ宴会だ。悪の組織のトップとして相応しい態度をとらなくちゃな。……などと、意気込まなくても、
「はい、提督、あーん??」
と、榛名に餌付けされ、
「さ、お酒よ。こっち向いて」
と、叢雲に酒を飲まされ、
「あん??提督、私の身体、好きにして良いんだからね？」
五十鈴におっぱいを揉まされる。
分かるだろうか、この状況。あっちを向けば女の子、こっちを向けば女の子。
悪のギャングが沢山の女の人を侍らせてるみたいな、そんな感じ。本当、侍らせてるって言葉が一番しっくりくるこの状況。

スマホ太郎さんどころの話じゃない。百人近くの女の子と事実婚しているこの現状。平たく言ってクソ以下の人間性だ。
何がクソかって言うと、この現状に慣れつつある俺。すっかり、悪の帝王が板についてしまった俺よ！
こうして多様多種な美女を侍らせ、高笑いだもんよ。
文句なしの悪だ。退治されても文句は言えないかもしれない。ハーレムを築くなんて、倫理的にＮＧだよねえ。エロゲじゃないんだからさ、ハーレムとかさあ。
「ひょっとして俺は最低の屑なのでは」
貴方って最低の屑ねっ!!
「そんなことありませんよ！提督は最高です！素敵な人です！」
榛名にあやされる俺。
「いやもう、榛名、いや、もう……」
「提督は何も気にしないで良いんですよー」
なんか知らんけど甘やかされてんな俺。堕ちるところまで堕ちたって感じ。
このまま俺を駄目にして鎮守府に縛り付けておこうと言う魂胆だろうか。無駄だぞ、俺は旅人だ、誰が何と言おうと旅人なんだ。旅には出るぞ。
平和、平和なぁ……。平和になったら本当に、どうすんだろ俺。日本海と地中海を奪還し、太平洋辺りもほぼ解放したしなぁ。
でも、平和な結婚生活とかごめんだよなぁ。一生旅したいし。
「はーい、あーんですよ提督。あーん」
「あーん」
……まあ、考えるのは後で良いか。別にどうとでもなるだろ。
嫌なことは限界ギリギリまでほっといて、最後の最後にぶん投げるタイプだ。
……ふう、五十鈴のおっぱい柔らかいな。流石のロケットおっぱいだ。
「あん??」
「ぐへへ、良い乳してんじゃねーか五十鈴ー」

「私のおっぱいは貴方のためにあるんだからね？好きにして良いのよ??」
うーん、この。可愛い。
「はい、提督、口を拭くわねー」
と、ビスマルクに口を拭われ、
「お次は僕がお酌するよ」
時雨に一献貰う。
至れり尽くせり酒池肉林プラス女の子。完璧過ぎる布陣だ。
その上、
「妙高型の剣舞です、ご覧下さい」
怪しげな余興まで始まった。
「少しでも提督の無聊を慰められれば、と」
あ、スゲー、上手い。
「加賀さんが演歌を」
上手い上手い。
「白露型が深海棲艦の処刑と拷問を」
えぐいえぐい。
と、古代ローマが如き、パンとサーカス。食事と見世物。愚民政策。
この子達は俺をどこまで駄目にしたいのか。
加えて、供給され続ける俺特効の酒。
神便鬼毒酒なんてよく効くよ、俺は鬼でもあるからな。
ああ、いや、昔鬼火を取り込んだり、妖怪の肉を食ったり、妖気にあてられたりしてな。鬼とか天狗とか吸血鬼とかになりかけてるんだよ、俺。
ソーマも効くな、神の酒だ、魂が酔っ払う。
いかんいかん、ボーッとしてきた。
……ああ、思えばこの二年間、色々あったなぁ……。
大淀に私物をすり替えられたり、青葉に盗撮されたり、木曾と武蔵に逆セクハラされたり……。
夏祭りしたり、輪の都行ったり、ミ＝ゴと戦ったりもしたっけな。
本当に、色々あっちょっ、待っ」

クッソ、ズボン脱がされたッ!!!
酒が入って隙ができたかッ!!!
「こらこら、返しなさい」
「だーめ??」
んもう。
「守子ちゃん助けて」
「すいません無理です」
んもう。
あ、もちろん、音成鎮守府の子達も誘ってあるよ。
音成鎮守府……、うち、黒井鎮守府の隣の鎮守府だな。親交は極めて深い。
宴会の度誘ってるけど、提督の守子ちゃんはなんか知らんけど遠慮しちゃって来ないこともあるんだよね。音成の艦娘は皆んな来るけど。
でも今日は、俺着任二周年パーティだって言ったら来てくれた。酒は大勢で飲む方が美味いと思う。個人の感想だが。
「どうだい守子ちゃん、楽しんでるかい?」
「はい、とても!着任二周年、おめでとうございます!」
いやあ、守子ちゃんは今時見ない良い子だよ。
優しくて、正義感あっちょっ、本当に!!!」
パンツ持ってかれた。
持ってかれたぁぁぁ。
既に上着も脱がされているので、これで全裸だ。
おかしいな、俺、艦娘より脱がされてねえか?なんで艦娘のサービスシーンより、俺の全裸シーンの方が多いんだ?誰が得するんだ?どう言うことだ?
「まあ、どの道、見えちゃいけない所は見えないようにしてるんだけどさ」
最早説明するまでもないが、俺の股間はブルーレイ版では無くなりそうな謎の光によって見えないようになっている。この効果により、全裸になっても危険はないと言えるのだが……?

「さて、提督?子作り、しましょうか??」
危険あったわ。
「ふふふ、古鷹?俺は子供なんて作りたくないぞ?第一、俺が簡単に捕まると思うか?……空間湾曲!!」
……何?!!
「何故発動しない?!」
「夕張ちゃんが空間閉鎖しました??もう逃げられませんよ?こ・づ・く・り・しましょ?」
くっ、史上最強のヨメ並みの感想!!!
「ならば!!!」
自らの土手っ腹を貫こうとした俺の手が物凄い力で掴まれる。
「自殺も駄目ですよー??」
チッ、読まれていたかッ!!!
ならば!!
《内なる大力!!!》
これでHPの消費を狙う!元は、秒間1パーセントのHP消費の引き換えに二割ほど攻撃力を上げる呪術だが、自殺にも使える!お得!
「はいはい、駄目ですってば」
くっ、これは、ポーション?!か、回復してしまう?!
「さあ、これで、提督と私達を阻むものは何もありませんよ??」
待て、待て、待て、やめろ!!やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ!!!!!
「あ、あ、あああああああああああああああああああああああ!!!!!」
悪役らしく、最後は滅ぶもの、か。

２０１話　エクシーズ召喚

「よーし、建造するぞー」
「あの、提督、昨日の事ですが」
「昨日は何もなかった」
「え？」
「昨日は何もなかった」
「あ、あの」
「昨日は何もなかった」
「は、はい」
　昨日は、何も、なかった。
　何も、なかったんだ。
　良いね？
　さて、そんなこんなで、建造をする訳だが。
「んー、どうしよっかなーどうしよっかなー」
「どうせまたこれでもかってくらいぞんざいな触媒で艦娘を建造するんですよね、知ってます」
　明石、そう言う言い方は感心しないぞ！
「まずはこれ、雲龍」
「何ですかこれ」
「和菓子」
「和菓子」
　和菓子だ。
「和菓子で艦娘を召喚するんですか」
「雲龍（和菓子）でオーバーレイネットワークを構築!!」
「はぁ」
　で、お次はと。
「天城越えのＣＤ」
「ＣＤ」
「葛城ミサトのフィギュア」
「フィギュア」

「折れ曲がって血痕まみれのゴルフクラブ」
「ゴルフクラブ」
　これらを、建造ドックにぶち込みます。
　ゴルフクラブは、サンドラ鎮守府で使用されたアレです。咄嗟に持ち帰って来ちゃってた。テヘペロ。まあ、リサイクルってやつだ。ＥＵ製だし、ＥＵ内の艦娘が出るのは予想に難くない。
「行けるんですかこれ」
「良いか明石、行けるんですか、じゃない、行くんだよ」
　時に、男っていうのは、やれるやれないではなく、やるかやらないかと言う選択肢を叩きつけられることがある。つまりこう言うことだ。
　止まんねえ限り、道は、続くッ!!!
「俺は、止まんねえからよぉ、止まるんじゃあ、ねえぞ……!!!」
　キボウノハナ―。
「あとはこれと、これと、これとこれ!!!建造!!!ハイどん!!!!」
「あーあー、光が、妖精さんが集まって……」

「雲龍、推参しました」
「天城と申します」
「葛城、参ります！」
「あたしはそう、ルイージ・トレッリよ」
　艦娘が四体……、来るぞ遊馬!!
　こねーよアストラル!!
「天津風の出番ね！」
「白露です！」
「睦月ですっ！」
「皐月だよっ！」
　プラス、駆逐艦が四体。
　やあやあやあ、よく来てくれた嬉しいよ。
「黒井鎮守府へようこそ！歓迎しよう、盛大にな!!皆んな、俺が提督だ。よろしくね」

「「「よろしくお願いします！」」」
んー、良い返事だ。元気一杯。さあ、病まない程度に好感度を上げて、適度に仲良くやっていきましょーか。
と、決意をしたあたりで、ボインボインの白髪のおねーちゃん、雲龍さんから声がかかる。
「あ……」
「ん、どうした、ええと、雲龍さん？」
「惚れた」
「はい？」
「一目惚れ」
「んんん？」
ええと、つまり？
目と目が合う瞬間、恋だと気付いた、と？
「私のハートを貫いた!!!」
「えっ、あっ、ええー？」
突然の告白。
ど、どう言う事だ？
まだ何もやってないのに？
女の子にモテる自覚はあるが……。
「理屈じゃない。好き。好きになった」
「そ、そうか」
「今晩、食事でもどう？」
「あ、ああ」
グイグイ来るな、この子！

「まずは、鎮守府の案内をするよ。着いて来てくれ」
「「「はい」」」
俺に抱きついて来る雲龍さんを引き離し、新規艦娘を連れて鎮守府の案内を行う。今度こそ好感度を上げ過ぎないよう注意しなきゃな。
「さて、まずは白露ちゃん。白露型の工房に送るよ」
「工房？何を作ってるの？」

「ああ、いや、便宜上工房と呼んでいるだけで、何かを作ってる訳じゃないさ」
　まあ、危険物は作ってるらしいが。火薬とか薬品とかね。
「へえー。他にも白露型の妹達っているの？」
「いるよ、白露型は艦隊でも特に強い戦闘集団だよ」
　いや、マジで。情け容赦ゼロの狂気の戦闘集団白露型。よく内臓ちょうだいとか血をちょうだいとかちょっとばかり闇の深いリクエストをしてくること以外は、忠誠心が高く戦闘能力も高い素晴らしい子達だ。
　皆んな、仕掛け武器と言う特殊な趣向の格闘武器を持ち歩き、脳内に瞳と呼ばれる異様な器官のようなものを持つ特異な狩人である。
　その瞳を以って、見えざるものを見つめ、過去や未来を見通し、精神と時の狭間を漂流する探索者でもある。
「さ、行っておいで白露ちゃん」
「うん！」
　そんなところに無垢な白露ちゃんを送りつけて良いのかって？いや、白露型って時点で遅かれ早かれ、ねぇ？俺の脳内の瞳が言ってる、どうせ皆んな血に飢えた狩人になると。
　……「キャー!!しっ、心臓が！瓶詰めの心臓がぁ!!!人の腕の剥製がぁ!!!!」
「さて、お次は睦月ちゃんと皐月ちゃん。睦月型のガレージへ」
「はーい」
「ガレージ？」
　そう、ガレージ。
「睦月型はガレージを一つ所有していてね、そこを拠点としているんだ」
「へえ」
「ふーん」
　睦月型もこれまた優れた戦闘能力を持つ特異集団だ。全員、艤装を限界ギリギリまで改造しており、近代的な武装……、エネルギー砲や

特殊質量弾などで武装している。
全員まともじゃない、狂気のハイテク集団と専らの噂だが、俺はそうは思わん。投薬やインプラント手術など、直接肉体を変異させることはしていない分まともと言って良い。
そんな睦月型に新入りの睦月ちゃんと皐月ちゃんを渡して良いのか？
良いのだ。
限界ギリギリまで超武装させられるだけ。何も怖いことはない。
……「菊月ちゃん？何持って……、パルマシ？レザライ？」
……「え？僕、何されるの？ちょ、ちょっと?!」

「後は休憩室にいる皆んなに案内を頼むとするか」
天津風ちゃんを陽炎型に押し付けて、と。
陽炎型は格闘戦主体の集団だ。各々がフォームチェンジなどによる艤装出力の急速転換を得意としていて、あらゆる場面に対応できる汎用性が売りだ。
……「嵐？ちょっと、何これ？ゼクター？」
一方ルイージちゃんは同じイタリア艦に引き渡すことにした。
イタリア艦……、イタリア艦はマフィアだ。義理人情に厚いが、一度敵と定めたものに対してはどこまでも苛烈に攻め立てる。
加えて全員が死人……、まるで最初から自らを生命体と思っていないかの如くダメージに鈍感。その上恐怖も持たない。
……「何で棺桶背負ってるのポーラ？」
後は空母。
又の名を食う母。
色んな意味で食いしん坊ばかりだからな、空母は。
皆んな、「貴方を食べたい」と言う口説き文句で攻めてくる。それは、比喩や暗喩じゃなくって直接的な意味でのことだ。
俺がちょっと食われたくらいじゃ死なないのを良いことに、物理的に食らいついてくるのだ。
でもまあ、食人癖以外は大抵まともな方なので、黒井鎮守府におい

ては安パイとも言える。
……「やだ、提督と離れたくない」
……「わ、我儘言わないで下さい、雲龍姉様」
……「雲龍姉、行くよ！」

……これで全員か。
よしよし、案内終了だな。
想定外はあったが、最初から俺が手厚くあれこれ案内するんじゃなく、姉妹艦、同種の艦に丸投げすることにより、好感度の上昇を防ぐと言う上級スキルの発動だ。
うーん、これは非モテですわ。
この調子で、新入りの艦娘とは絶妙な距離感を保ち、父親のような、兄のようなポジションを目指していきたい。

２０２話　ベーリング海奪還作戦　前編

うー、最近の朝は少し寒いな。オフトゥンから出たくない。まあ、シベリアとか北極よりかは暖かいから寒さ的には平気なんだが。
平気なんだが、それでも、ぬくぬくのオフトゥンは恋しいもの。中々離れられないね。
「そうは思わんかね、時雨よ」
「ああ、そうだね」
と、何故かいる時雨に声をかける。
何故俺の部屋にいるんだろう。
「単純に会いたかったから、じゃあ駄目かい？」
俺の脳内の疑問に、俺の思考を読んで答える時雨。
「いや、問題ないよ」
思考を読まれるのがデフォみたいなところはあるが、不快ではない。碌なこと考えていないから読んでも面白くないだろうけど。知り合いの覚り妖怪には「この人頭おかしい……」ってよく言われる。
「ふふ、本当に会いたかったから、と言うのもあるけど、本題はこれさ」
ん、作戦具申書……？
題名は、『ベーリング海奪還作戦』か。なるほど。

「そりゃあ！」
『ベーリング海奪還作戦!!』
ホワイトボードに文字を書く。
「やります」
「端的過ぎる」
そうだろうか？もう、やりますで十分ではないだろうか。作戦会議なんか必要ねえんだよ（ＫＢＴＩＴ）!!
正直言って言うことがない。
「編成どうしよっか。……言い出しっぺの白露型全員で良いか」
戦闘能力が高過ぎて、艦種関係ないもんな。例え戦艦が出ようと白露型で十分だ。特に時雨と夕立は最大戦力にも数えられるほどだし。

「ブリーフィングをしないか！」
と、長門に注意される。
つってもなあ。
「あー、そうだな、そう言えば、新しいタイプの駆逐艦が確認されたんだった。これだ」
ホワイトボードに写真を貼る。
その深海棲艦は、まん丸で、まるで人魂のような見た目だった。
「名前はナ級。こっちの後期型は火力が馬鹿にならないから、気を付けろ」
くらいかなぁ。言うことねえわ。
「海域のボスと思われるのはこれ、駆逐棲姫。なんか春雨に似てるからわるさめちゃんと仮称するね」
「?!」
……うん、以上だ。
「何か質問は？」
「ないよ」
「ないっぽい」
「ありません」
よし、と……。
全員問題なし。
時雨のスカートをめくって、と。
うん、黒！
「さ、行こうか!!」
「（スカートをめくった意味は……？）」

旅人号にＶＯＢ（追加ブースター）付けて海上を音速で疾走、日本の黒井鎮守府からものの数分でベーリング海についた。
羅針盤？知らんなぁ、そんなものは。
「白露はまだ練度が低いからな、身を守ることを最優先に考えるように」

「はーい！」
　因みに、白露の持つ仕掛け武器はパイルハンマーだ。破壊力が一番だから、らしい。
「じゃ、敵が出るまで待つか」
　ＶＯＢを切り、平常速度で巡航する旅人号。これより、敵とエンカウントするまでだらだら巡航することにした。
　旅人号の中に用意された居間で、白露型とだらだらする。とても作戦中とは思えないが、戦闘前には気負わずに肩の力を抜くことも大事だ。
「提督……」
「時雨……」
　色っぽい目で見つめられる。ヤバいな、最近の時雨は色気が凄い。ミステリアスな雰囲気を漂わせ、大人っぽく迫ってくる。ついつい、こっちもその気になっちまう。
「んっ……??」
　キスされた。これが春雨なら、思いっきり舌を入れてくるんだけど、時雨はあまりそう言った、所謂エロい責め方はしない。ただ、愛を伝えるように、思いの丈を吐露するように長い長いキスをするのだ。
「ずるいよ、時雨姉……。提督、あたしとも、ちゅーしよ？」
「おっ、そうだな」
　対して、山風は、雛鳥が餌をねだるかのようなバードキス。親に甘える感情だろうか、愛に飢えていやがるな。……あとなんか甘いな、飴玉でも舐めていたんだろうか。
　二人の肩を抱きながら、存分にイチャイチャする。楽しいなあ、イチャイチャすんの楽しいなあ！
「あたしも構うっぽい～！」
「はいよー」
　夕立には噛み付かれた。首筋から流れ出る一筋の血を、掬い取るように舐められる。
「あは、美味しい??」

赤い瞳が愉悦で歪む。白露型にとって俺の血は万能薬であり、嗜好品だ。
「提督？次は脾臓が欲しいわ？食べて、食べて……、貴方の事をもっと知りたいの??」
俺の腹部をなぞる海風。セクシーで妖しい魅力があるな。
こんな感じで、両手に花どころか全体的に花状態で楽しんでいると、俺の脳内の瞳に敵影が映った。
まん丸、ナ級だな。
「はーい、じゃ、そろそろ行こうか」
「あらら、残念」
「ちぇー、もっと提督とこうしていたかったのになー」
村雨と江風が文句を言うが、仕方ないことだ。
出ちまったもんはしゃーない。
「行くぞー」
「「了解」」」
オンオフしっかりできるのができる大人ってやつだ。

船外には、予想通り、ナ級の姿が。
「んじゃ、やりますか」
「ああ、行こうか」
「殺すっぽい」
「うふふ、行くよ？」
俺が目の前のナ級に駆け出すのと同時に、全員が海面を蹴った。
そして、俺以外のそれぞれが、皆手元に艤装を……、仕掛け武器を顕現させた。
時雨は、柄頭に着脱可能な刃の付いた日本刀、落葉を。
夕立は、月の光を纏う、月光の聖剣を。
春雨は、隕鉄によって造られた一対の薄刃剣、慈悲の刃を。
村雨は、伸縮自在の蛇腹剣、獣肉断ちを。
白露は、特殊機構で鉄杭を打ち出す、パイルハンマーを。
海風は、鋸と鉈の複合武器、ノコギリ鉈を。

江風は、撃鉄の付いた大槌、爆発金槌を。
山風は、ハルバードにもなる大斧、獣狩りの斧を。
それぞれが悍ましい、殺意の極致にあるような武器だ。

『ガァッ!!!』
「死んじゃえ」
村雨は、ナ級の砲撃を、首を逸らすだけで避け、獣肉断ちを伸ばして一撃を加えた。
『ギッ……?!』
「それ」
そして、伸ばした獣肉断ちの鋸刃を叩きつけ、思いっきり、引いた。
『ガガゴガゴガガガガガガ!!!!』
結果、ナ級は、装甲が、血肉が、骨が刮げて、真っ二つ。無残な屍を晒す。
近付いて噛み付こうとするナ級に対しても、即座に獣肉断ちを縮め、対応する。
『ガギッ』
「はいはい、遅い遅い」
更に、襲いかかるナ級を迎撃するかのように砲撃し、白露型専用の水銀弾を叩き込んでは、
「いただき!」
動きの止まったナ級の内臓を引き摺り出す。
『ガ……、ア……』
びくん、と大きく身体を動かしたナ級は、血の塊を吐き出すと、故障した機械のように動かなくなる。

山風は、見た目と違って酷く暴力的だ。
「うううう……、あああ!!」
駆逐艦にしては強過ぎる筋力を存分に発揮し、獣狩りの斧でナ級を斬り飛ばす。
ナ級の群れの真ん中に躍り出ては、

「邪魔ぁぁぁ!!」
がしゃん、と言う音と共に、斧の柄を伸ばしてハルバードにしたと思うと、
『ギッ』『ガッ』『ゲアッ』
くるりと一回転、薙ぎ払い。
これで、多数のナ級が真っ二つになる。しかし。
「ぁぁぁぁぁぁ!!」
山風は容赦せず、もう一回転。計二回転の３６０度薙ぎ払い。
真っ二つに分断されたナ級達の身体は、吐き気を催すような肉塊と化した。

一転、春雨は華麗だ。
歪んだ二枚刃の慈悲の刃は、星に由来する隕鉄で造られており、速度が乗れば乗る程鋭くなると言う特性がある。
「あはっ??」
凄まじい速さで戦場を駆け巡る春雨。
交差させて斬り裂く、貫く、退く瞬間斬りつける……。ステップと共に放たれる鋭利な斬撃は、死の残響のようだ。
その、死の残響と共に春雨は、
「うふふ、あは、あはははは!!」
殺戮の舞踏を踊るのだ。

一通りの殺戮が終わったあたりで、ナ級の群れの奥からわるさめちゃんが出てきた。
『ヤラセハ……シナイ……ヨッ!!』
「わるさめちゃん！わるさめちゃんじゃないか!!」
『ワ、ワルサメチャンジャナイ！駆逐棲姫ダ!!……ヨクモヤッテクレタワネ、反撃開始ヨッ!!』
するとどうだろうか、俺達を囲むように、数百体の駆逐水鬼の量産型が集まってきた。
なるほど、罠か。ここにおびき寄せて、量産型水鬼で囲んで殴る作

戦だったんだな。
『フフフ、サァ、追イ詰メタワヨ、黒井鎮守府!!!』
「あは、は」
「ははははは、ははははは!!」
「あはははははは!!」
　そして、笑い始める白露型。
『ナ、ナニガオカシイ!!?並ノ鎮守府ナラ百回潰セル戦力ヨ!!!?』
「ああ、いや、すまない。おかしくってね。その程度で勝ったつもりになるなんて、まるでお笑いだよ」
　くつくつと、喉を鳴らして笑う時雨。
「……しかし、これは、些か多いじゃないか。不快だね、不快だ。全て、直ぐに、消そう」
『ナ、ナニヲ……?!』
　時雨は、自らの胸に落葉を突き立て、抜いた。
　その瞬間、血の波動が辺りを吹き飛ばす……!!
「さあ、白露型の狩りを見るがいい……!!」

２０３話　ベーリング海奪還作戦　後編

「さあ、白露型の狩りを見るがいい……!!」
その一言と共に、時雨の姿が掻き消える。
……加速。ヤーナムの大いなる業。古い狩人の遺骨による秘儀である。
『ナッ、キ、消エ……!!』
残像すら置き去りにする超高速度のステップで移動する時雨は、水鬼らの目に映らず、ただ、血でできた赤の斬撃を空間に残す。
先程の唐突な自刃は、日本刀『落葉』に血を纏わす為のこと。因みに、思い切り胸を貫いていたが特にダメージはないらしい。まあ、俺も心臓貫かれたくらいじゃ死なないからね。
目にも留まらぬ高速移動、そして、血を纏う斬撃。これが白露型二番艦時雨の、真の戦闘スタイルである。
「……ふっ」
軽く息を吐き、加速。一瞬にしてトップスピードまで加速し、
「疾ィッ!!」
落葉を振り抜く。戦場と言うキャンパスを斬撃の赤で彩る。
並の鎮守府なら真っ正面から相手取れる水鬼が、熱したナイフを入れたバターのように斬り分けられていく。
ならば、と、闇雲に暴れる個体に対しては、
「甘いよ」
即座に水銀弾を叩き込み、体勢を崩す。
そして、
「そこだ」
一瞬、落葉を消して、隙を見せた水鬼の腹部に腕を差し込む。
すると、水の入った皮袋を無理矢理撹拌するような、ぐちゃぐちゃと言う異音が辺りに響き、二、三秒程経った頃に、
「はあっ！」
内臓が、引き抜かれる。
『ア、アウ、ア……』

蠕動するはらわたが海上に投げ出され、主人の亡骸と離れた位置でその役目を終える。
悍ましく、実に冒涜的な絵面だ。
一般的に見れば燦々たる死の有様だが、俺には、一枚の美しい絵画のようにも見える。
血霞の舞う退廃芸術。
時雨の戦いはまさにそれだ。
ああ、なんだ。
やっぱり、綺麗じゃないか、時雨。

次に見えたのは月の光だ。
あの青い、暗い光だ。
「月光よ……!!」
夕立は、自らの剣、月光の聖剣に暗い光を宿す。
効果は劇的だ。
宇宙の深淵を宿したその大刃は、夕立の腕力によって振るわれ、水鬼の群れを瞬く間に斬り刻む。
「はあああああ!!!!」
両の手でしっかりと握られた、夕立の手には大き過ぎるそれは、夕立の想いに確りと答えた。
「邪魔！邪魔ぁ！提督さんの邪魔っぽい!!!」
子供の癇癪のように暴れるその姿は、正しく獣で。
「消え、ちゃえ!!!」
豪腕に振るわれた大刃はその身に宿した月光で深海を照らす。
そして、
「行っけえええええ!!!!!」
刀身から発する光が、斬撃に付随して、光の刃として空を駆けて行く。
言うなれば、光の波だ。
月光の奔流だ。
美しい、輝くそれは、進行上の水鬼達を斬り伏せながら、消えるま

で真っ直ぐに進んで行った。
やっぱり、綺麗だ。
「あは??提督さんの声、聞こえるっぽい??提督さんが褒めてくれるなら、夕立、いっぱい、いっぱい頑張れるっぽい??」
そして、夕立は、脳内の瞳に導きを得ている。それが俺であるらしい。まあ、何にせよ、道を見失うことはないだろう。

《エーブリエタースの先触れ……!!》
「オラァ!!!」
水鬼の包囲網をぶち破った青白い触手の束と爆炎は、海風と江風だ。
そして、神秘に依る秘儀を使い熟すのは海風だった。
……元来、艦娘は神秘の存在だ。
嘗ての大戦の英霊であり、一種の信仰の集合体であり、神霊であるのだ。
故に、その身は神秘に長け、
《彼方への呼びかけ……!!》
ヤーナムの秘儀との相性は抜群である。
彼方への呼びかけ……、ヤーナムにあった医療教会の、聖歌隊の秘儀だ。精霊を媒介としての高次存在との接触の為に編み出された業の副産物で、星の小爆発を起こす。
それは、小規模な流星の飛沫で、周辺一帯の敵にダメージを与えるものだ。
一方で、江風は。
「ぶっ飛べ!!!」
爆発金槌の機構を十全に使い、水鬼の群れを蹴破っている。
時折、油壺を投げつけては、
「これもやるよッ!!!」
火炎瓶での攻撃も行なっている。
深海棲艦も生体組織で構成されている以上、火炎は効くのだ。
「オラァ!!!」

襲い掛かる水鬼の出鼻をくじくように、顔面に爆発金槌を叩き込み、
「死ぃ、ねっ!!!」
撃鉄を起こした爆発金槌で爆炎を撒き散らす。
「わー、すっごいよ！提督！あたしも負けてらんないね！」
「無理するな白露ー」
で、俺と白露は、と言うと。
「行っくよー！えーい!!!」
「おっと、危ない」
意外と、コンビとして成立していた。
俺が防御と回避一辺倒なら、白露は火力特化。白露型でもトップの火力を持った白露との相性は良い。
「やー!!!」
白露が殴って、
「はいよー、はいはい、受けますよー」
俺が守る。
「とう!!!」
白露が何も考えず、火力を十全に発揮し、
「はーい、白露ー、退がろうなー」
俺がフォローする。
負担？いや、まあ、多少はね？
直接殴れない分これくらいはさ。
『ソンナ、馬鹿ナ!!全滅?!!一体、ドレダケノ戦力ヲ用意シタト思ッテイルノヨ!!!?』
いやー、見積もりが甘いっすねー。
『ア、悪夢ヨ……!!』
「ああ、そうだね、君は悪夢に囚われた。僕達の、狩人の悪夢にね」
時雨は、そう言って落葉を構えた。
『ウ、アア、オチロ！オチロォ!!!』

錯乱気味のわるさめちゃんはこちらに砲撃してくるが、時雨はそれを軽々回避した。
「無駄だよ」
そして、時雨は回転しながら宙に浮き、降下すると同時にわるさめちゃんを斬り裂く。ああ、なんて酷いことを!!!
『キャァァァ!!!』
「わるさめちゃーーーん!!!」
「……提督、どっちの味方なんだい」
そりゃ、可愛い子の味方だよ。
「わるさめちゃん大丈夫？」
『エ、ア、大丈夫ジャ、ナイ？』
「待ってろ、今回復魔法かけてやるからな」
『クッ!!アッチ行ッテ!!!』
ど、どうしたわるさめちゃん?!
『敵ニ治療サレテモ、嬉シクナイッ!!!』
ああ、その点なら大丈夫。
「わるさめちゃんには降伏してもらうからな」
『降伏?!降伏ナンテ絶対シナ』
はい上着どん。
『ア、アレ?!服ガ』
スカートどん。
『キャ、キャァァァ?!!!』
胸元と股間を抑えるわるさめちゃん。おやおやー？どうかしたのかなー？
「降伏、する？」
『シ、シナイモン!!!』
んじゃあ仕方ねえなぁ?!全裸にひん剥いてからこの水龍敬ランドの刑にかけるしかねぇよなぁ!!!
はい、下着どん!!!
「必殺ウ!!!水龍敬ランドの刑ィィィ!!!!!」
『キャァァァァ?!!!!』

乳首のところをハート型に切り取ったチューブトップに紐パン、股間部に「ｆｒｅｅ??」と油性ペンで書いた。
うーん、辱しめた辱しめた。満足満足。
気絶したわるさめちゃんを回収して、と。
「はーい撤収ー！帰るよー！旅人号に乗り込んでー!!」
「「「はーい」」」
ふう、さて。
悪は滅びた!!!

さて？深海棲艦退治後はお決まりの……？
「セクハラだぁぁぁ!!!」
「ヒッ……!!」
「……提督？」
「まあ待て時雨、まあ待て」
違うんすよこれは。違うんすよ。
「わるさめちゃんは罰を受けなければならない、ここまでは良いか？」
「いや、君の趣味だよね」
そっ、そんなことは、ない、ぞ？
まさか俺の趣味だなんて、そんなことは……。
「正直に、こっちを向いて、確りと言ってくれるかな？」
くっ……、趣味です……。
「じゃあ、何かい？僕も、こんな淫猥な格好をすれば良いのかい？」
「いやいやいやいや、そんなこたぁない。これはほら、罰ゲームの意を込めてのことだから。何にも無しに淫猥な格好をさせるとか変態じゃん」
いや俺、変態じゃないんでー!!そう言う下心とかはバッチリ隠していきたい。
「ふぅん。まあ、良いさ。好きにすると良い。でもね、僕達のことも見てくれなきゃ、嫌だよ」
「もちろん。その辺り、俺は抜かりないから」
ヘイトコントロールとか好感度調整とか超得意。盾役だし。

「まあ、提督がしろと言うなら幾らでもするからね、その、淫猥な格好を」
「エロコスプレは悪い子だけに着せるもんだから。時雨は良い子、大丈夫」
悪戯してもらえないのが不安？大丈夫、良い子には普通にセクハラするから!!
良い子には労いのセクハラ、悪い子には断罪のセクハラ。あらゆるセクハラをマスターして初めてセクハラマスターと言えるのではないだろうか。
……セクハラマスターになってどうすんだよ。
「さーて、わるさめちゃん、覚悟は良いかなァ？」
「ヤ、ヤメテヨオ……」
「駄目駄目ェ！観念してエロ写真撮られるんだよ!!」
撮る、撮る、一眼レフで撮る。
超楽しい。この時のために生きてる。
ふう、両足のないわるさめちゃんに際どい格好をさせて、四方八方から撮りまくりとは……。神をも恐れぬ所業だな。
だが、悪いのはわるさめちゃんの方だ。大義名分は我にあり。これは裁きの鉄槌なのだ。分かってくれ。
「ヤ、ヤダ、ソンナニ撮ラナイデ！……ウ、ア、ソンナ所マデ……?!」
「許しは請わん、恨めよ……」
「イヤーーー!!!」
よっしゃ、撮れた撮れた。
なんだか知らんが、兎に角良し!!!

２０４話　戦慄のＲＪ

わるさめちゃんを散々辱しめて、深海棲艦の離島に送りつけて、次の日。
「体調を崩すくらいに面白くない……!!」
太平洋の嵐をプレイ中の俺。流石はクソゲーオブザイヤー受賞作品、恐るべきつまらなさだ。
「……何やっとるんや、司令官」
あまりのクソさ加減に俯く俺に話しかけるのは、ＲＪこと、龍驤。
「クッッッソつまらんゲームやってる」
「暇なんか？」
「暇」
クッッッソ暇。先日のベーリング海奪還で俺の、鎮守府の暇は加速した。
俺達は、強くなり過ぎた。敗北を知りたい。
このままじゃ脱獄して日本目指す羽目になる。
いけない、このままではいけない。
「そっか、暇なんか。なら、うちと遊んでくれへん？」
「かまへんかまへん！」
ええぞ！
「よっしゃ！ほな、行くでー！」
龍驤に手を取られる。
可愛らしい、小さい手だ。少し力を入れたら壊れてしまいそうだな。まあ、実際は並の人間よりずっと丈夫なのだが。壊されそうなのはいつだって俺の方だ。
「どこ行くの？」
「そんなん、外出てから考えればええやろ」
適当。だが道理だ。気取らないで良い関係って良いよね。
外に出て、龍驤と手を繋ぎながら歩く。大人と子供くらいの身長差があるから、歩幅の差が出る。ゆっくり歩いてやらねば。

「で、どこ行く？遊園地とかか？」
「もー！子供扱いせんといてー！うちは大人のレディーなんやで!!」
「マ？」
「マジやマジ。大マジや」
大人のレディーらしい。
自分で自分を大人と言い切る奴は大抵大人じゃないと言う法則。あると思います。
格好もパーカーにジーパンと女子力低。やっぱりＲＪじゃないか……。
「とりあえず、その辺のショッピングモール冷やかしに行かへん？」
「良いよー」
ショッピングモールか、悪くない。
「いやー、凄いな。うちの時代はこんなん無かったからな、どこ行っても物珍しいんや」
まあ、二次大戦頃の記憶しかない艦娘にとって、現代のものは何でも珍しく見えるんだろう。
「でも、良い加減慣れたでしょ。もう建造されて何年も経つんだし」
「いやー、うち、一人だと殆ど外に出えへんからなぁ」
「あれ、何で？」
龍驤の性格的に、頻繁に外出してそうだが。
「いや、うち、この見た目やろ？どこ行っても迷子扱いされるんよ」
「あー」
なるほどね。
ぱっと見小学生くらいにしか見えないもんね、その辺ほっつき歩いてたら補導されるわな。
「もー、大変なんよ。お酒飲みたいってお店に言ったらびっくりされるし！」
龍驤も呑んだくれ勢だからなー。そっか、外で飲めねえのか。可哀想に。
「免許でも取ったら？」
「えー、めんどい」

あると便利だぞ、免許証。
「あっ、たこ焼きや！司令官、たこ焼き食べへん？」
「食う食う」
たこ焼き屋を見つけた龍驤は、嬉しそうにパタパタ走って行く。俺の手を引いて。
むーん、可愛いな。
「すいませーん、たこ焼き下さい！」
「はーい、どれにしますかー？」
ああ、ほら、たこ焼き屋の店員さんに早速子供扱いされてる……。
「うーんとな、これと、これと、これと、これとこれ！司令官は？」
龍驤もそれなりに食うぞー。軽空母とは言え空母は空母。並の大人より大食いだ。
「同じものを」
俺はもっと食うけどな！……でも、あんまり注文し過ぎるのもあれなので、控える。
「えっ？えっと？」
それでも、普通と比べたら多いか。
「ええと、普通のたこ焼き、ネギソース、照り焼きソース、チーズ明太子を二つずつ」
「ご、五千六百円になります」
「ほい」
俺が店員さんに万札を差し出す。釣りはいらねえ、とっときな。
「あっ、司令官！もー、こういう時にお金使わんと、何のためにお給料貰っとるか分からなくなるわ」
「通販で使えば？」
「……あー、なるほど？」
今の通販は凄いぞ、大体なんでも手に入るからな。
「でもうち、このあまぞん、ってやつイマイチ分からんのや」
「んー、どこが？教えてあげるよ」
「そもそもスマホがよう分からん」
ほら、龍驤は古い人間だから……。現代技術に追いついていけない

のだ。
「ボタンじゃないのがなんか、こう、使いづらい」
「おばあちゃんか」
「誰がおばあちゃんやねん」
　駄目だよ、ちゃんと新しい技術についてこなくちゃ。取り残されるぞ。
「何でこんないっぱい機能があるん？電話できればええやん」
「ラインとか便利だろ」
「んー、文字打つのが苦手や」
「ツイッターとか」
「分からん」
「ゲームとか」
「家帰ってやりゃええやろ」
　うーん昭和！でも、艦娘の皆んなって大体こんなもん。現代っ子があんまりいない。
　ぱっと思いつく現代っ子と言えば、うちでは、イムヤとか鈴谷とか、望月と漣とかだな。鹿島とか秋雲も結構……、あとは工廠組とか。
　兎に角、皆んな現代に溶け込む気が全くない。
「ほら、このキャンディを砕くゲームとかどうだ？面白いぞ」
「うーん、ホンマによう分からんなー」
　そんなこんなで、龍驤にスマホの使い方を教え込んでいると、
「たこ焼き、上がりましたー」
「はいはーい」
　たこ焼きが。
「おっ、できたみたいやな、食べよ」
　そこら辺にあるテーブル席に座って、できたてのたこ焼きを食べることに。
「「いただきます」」
　挨拶は大事だ、古事記にもそう書いてある。……艦娘は常識が古いからなのか、礼儀がなっている場合が多い。今時いただきますをしっかり言える子なんてそうはいないのにな。

因みに俺もつい言っちゃう。俺は旅人、いつも何かをいただく側なので、せめて感謝ぐらいは……、と思った結果。
「んー、できたては美味いなー」
「ホンマやなー」
美味い美味い。旅の最中は最悪人肉とか食わされたこともあるし。店売りのたこ焼きなんて美味しいものの部類だ。
「……！」
ん、どうした龍驤。
「司令官、あーん」
ああ、はいはい。
「あーん。……じゃあ俺も。龍驤、あーん」
「あーん」
機械的なイチャつき。
もっと、こう、少女漫画的な心のときめきや葛藤はないのか。
「えへへ、ちょっち恥ずいなー」
軽く頬を染める龍驤。
うむ、可愛い。
所謂ラブラブ状態なんだが、周りの人には何か微笑ましいものを見る目で見られてしまってる。娘か何かだと思われてるんだろうなー。

食後、ショッピングモール内をぶらつく俺達。
「司令官、映画見よ、映画」
そんな中、龍驤がショッピングモール内の映画館を見て言った。
「良いよー」
映画は好きだ。承諾する。後数十分で開幕だ、ちょっと待とう。
「映画、映画かー。司令官、好きな映画は？」
「あー、明日に向かって撃て、かな」
「ふーん、どんなん？」
「懲りない馬鹿二人がフラフラ生きる話」
「……おもろいんか、それ」
「まるで自分の人生を見てるようで楽しい」

正直、一番面白いのは俺の人生だが。どんな映画より旅の方が楽しいのだ。事実は小説より奇なりとはよく言ったもの、そこらの三文小説よりずっと楽しい人生を歩んできた。
「司令官、人生を楽しんどるもんなぁ」
「何だ、龍驤は楽しくないのか、人生」
いかんぞ、人生は楽しんでナンボだ。
「んー、楽しいけど、もうちょっと、大っきくなりたいなー、とは思うわ」
艦娘は成長しないからなぁ……。
望み薄、だな。
「あ、そろそろ始まるで」
「おっ、そうだな、行こうか」
と、店員さんにチケットを渡すと、
「こちらのお子さんは子供料金で大丈夫ですよ？」
とか言われる。
「うちはこー見えても大人やで！」
「え……？あ、あー、すみません？」
と、短いやり取りの後、映画に入る。

見た映画は、よくあるアクション映画だった。
「いやー、おもろかったなー！」
「中々だな」
普通に面白かった。
「でも龍驤、恋愛映画とかじゃなくって良かったのか？」
「んー、うち、恋愛とかよく分からんし」
そうなの？
「正確には、恋愛映画とか恋愛小説とかが分からんのや。何で皆んな、あんなにうじうじ悩むん？好きな人に好きって言えないもんなんか？」
あー、これはサバサバ系女子ですわ！
「うちは後ろ暗いこと何にもあらへんから、司令官に真っ直ぐ好きっ

て言えるで！」
「そうか、龍驤は真っ直ぐな女の子だな。好感が持てるよ」
「うちも司令官の事、大好きや!!」
やはり圧倒的美少女。真っ直ぐ、一本気な女の子だ。恋に悩む女の子も可愛いけど、こうやって真っ直ぐ向き合える女の子も可愛いし、かっこいいと思う。

さて、昼も過ぎて良い時間。
おやつ食べたい。
「龍驤、おやつ食べよう」
「せやな。……そう言えば一階にドーナツ屋あったな、行こか」
おっ、ドーナツ。良いね、日本のドーナツは……、ってかお菓子全般が甘さ控えめだよね。それが良いんだけど。いや本当に、日本国外のお菓子は甘過ぎてなぁ。それはそれで美味いんだけどね。
「さて、ミスドミスド、と」
二人で１０個ずつくらいか、ドーナツを買って、またもやそこらのテーブル席に着く。
「いただきます」
「美味い、美味いな」
「このチョコのついたオールドファッションが好きなんよー」
「俺はこの、チョコついたフレンチクルーラーかなー」
「もちもちしたやつも好きやわー」
「カスタード入ったやつも好き」
「あ、司令官、口元にクリームがついとるで？……はい、取れたで」
機械的なイチャつき（二回目）。
「ん、甘い」
まるで当たり前のように、俺の口元のクリームを掬って舐める龍驤。特にドキドキとかはない、気取らないイチャつきだ。
乙女チックなアレはないのか。
「まあ、その辺が龍驤の良いところだよな」
「？」

「じゃ、司令官、また後でな！」
「おお、今晩も飲もうな」
ブンブン手を振る龍驤と別れる。
この別れのワンシーンすら、葛藤の一つもないんだ、龍驤は。今夜は帰したくないとか、お前と結婚するのは俺だと思ってたとか、そう言うのがない。
さっぱりしてんな、流石龍驤。
やはり龍驤は、病んでいないのでは？
病み尽くしの中で清涼感と言える存在だな。
艦載機での監視はしてくるが、まあ、誤差の範囲だろう。
病んでない子もいる！希望はここにある!!
「ふふふ、提督。龍驤ちゃんとのデート、楽しかった？」
ヒェッ……、陸奥……!!

もう夜だ。陸奥の気を鎮めるのに時間がかかった。
危ないところだった。
これでもかってほど乳を揉んだら解放されたが。
「司令官！」
「どうした龍驤」
そして、ここは居酒屋鳳翔。丁度、龍驤とエンカウントしたところだ。
「見てたで～！陸奥のおっぱいを!!」
「揉んだが、問題でも？」
「むむむ！当てつけか！揉むほど無いうちへの当てつけかー!!」
「いやいや、そんなことはないよ」
そんなこたぁ無い。
「……揉んで」
「は？」
「うちのも揉んで!!」
「まあ、良いけど……」

おっぱいは心で揉むもの。貧乳でも愛撫はできるッ!!
龍驤を膝の上に座らせて、後ろからおっぱいを撫でる。
「こうか？」
「んっ??ええよ、ええ感じや」
なんと言うか、罪悪感。年端もいかない子を毒牙にかける成人男性の図、な訳だから。側から見たら。
「ちゃんと揉まな、機嫌直らんからな??」
「おう」
平坦な胸を撫で回す。対貧乳の対策もバッチリなのだ。
一通り撫でたあたりで、
「あっ??あっ??あっ??あーーーっ??????」
足をぴんと伸ばして、どこかへと達する龍驤。どうしたんでしょうね、一体ね？（すっとぼけ）
「満足した？」
「うん……??満足や……??」
ふー、楽しかった。
「そろそろ下ろして良い？」
「ん……、駄目」
そっか、俺の膝の上が気に入ったか。
「今晩は司令官に目一杯甘えるんや??」

この後は、強いて言うようなことはない。それでも、一言言うのであれば……。
この後滅茶苦茶イチャイチャした。

２０５話　私のハートを貫いた!!!!

「例えば、貴女達がその昔……、幼き頃……、捨てられて凍えてる仔犬を助けたことがあるとしましょう」
「雲龍、待って雲龍」
「でも死ね」
　ああーーー!!!!やりやがったーーー!!!!
「雲龍!!雲龍待って!!!」
「な、何だ?!」
「けっ、警察!警察呼ぶぞ!!」
「おじさん、貴方達はウルトラマンにでも守られてるの?それとも……」
　ああーーー!!!!またやったぁーーー!!!!
「楽園にでも住んでるのかしら」

　雲龍とデートに行って数分、俺は、女子高生達に逆ナン……、ってか援交のお誘いを受けた。
　すると雲龍は静かにブチ切れ、話しかけてきた女子高生を三十メートルくらい蹴り飛ばしたのだ。
　それを見咎め、警察に通報しようとしたサラリーマンのおっさん達も同じく蹴り飛ばした。
　……鬼か?
「提督、好きよ」
「分かった、分かったから……」
　マジでいかれてる。洒落にならん。思考回路がショートしてる。
「一般人に暴力は……、やめようね!」
「そう……（無関心）」
　これだもんよーーー!!!!
「雲龍、大切なことなんだ、ちゃんと聞いてくれ」
　雲龍の肩に手を置いて、目を合わせてしっかりと話す。
「……提督」

「良いか、艦娘の力ってのは、一般人よりずっと強いんだ。気安く殴って良いもんじゃない。……そもそもんん?!」
……キスされた。
「近くで見ると、より素敵ね」
ははっ、聞いちゃいねえ。大丈夫?これ、日本語通じてる?
「雲龍……、ちょっとくらい、話聞いてくれても良くないか……?」
「聞いてるわ」
嘘つけ!!!
「それより、そろそろ食事の時間ね。行きましょう、奢るから」
俺の手をしっかりと握って、歩き出す雲龍。マイペースってレベルじゃねえぞ!!
「ここで良い?」
「ん、ああ、どこでも良いけど……」
「じゃあここで」
そうして、俺の手を引いて、その辺の定食屋に入る雲龍。
「好きなもの、頼んで。お金は私が払います」
「お、おう」
凄い勢いに押され、奢られることに。
「ご注文は?」
「じゃあこの、ジャンボ唐揚げギガ盛り定食と、特大ハンバーグギガ盛り定食、ギガ盛りミートソースパスタで」
「私も同じものを」
大体十数人前。適量だ。
「ええっ、何人前だと思ってるんですか?!」
店員さんが驚くが、それくらいは食うからな、俺達。
「大丈夫ですよ、フードファイター以上に食うんで」
「わ、分かりました……。唐揚げギガ二つ、ハンバーグギガ二つ、ミートソースパスタギガ二つですね」
「はい、お願いします」
と、言う訳で。
「本当に、マイペースなのは良いんだけど、突然人に暴力振るうのはや

めてね」
「善処するわ」
　善処するだけ、なんだろうなぁ。まあ良いや、言ってもどうしようもなさそうだし。一般的な会話を振ろう。
「……えっと、ほら、鎮守府での生活は慣れた？」
「ええ、まあ」
「趣味とかは見つけられたかな？」
「いえ、特には」
「困ってることとかは？」
「ありません」
　……会話、弾まねぇな！でも、少なくとも、話は聞いてくれてるっぽい？
「……ハンサムね、提督」
「え、ああ、ありがとう？」
「大好きよ」
「お、おう」
　何なんだ？何なんだ一体？分からん、変な子だよ雲龍は。
「帰ったらセッ○スしましょう。提督の子供、欲しいです」
「んんんんー、外でそう言うこと言わなーい。外じゃなくても言わなーい」
「あ、まだできないわね。練度を九十九まで上げたら、子供を作りましょう」
　艦娘の肉体は、生まれたばかりでは霊的要素が強く、そのままでは子供なんてできない。しかし、ロック装置により肉体との適合率を上げると、練度九十九ケッコンカッコカリ時点で、完全に肉体が人間のものと同じになる。
　つまり、艦娘は、簡単に言えば、練度九十九で子供を産める身体になるのだ。
「んあー、あれだ。子供なんて良いもんじゃないぞ。大変だぞ」
「大丈夫、私が育てるから」
　うーん、この。

俺の話を聞いているようで聞いていない。完全に自分のペースで「喋ってる」だけだ。事実、先程からやっているのは、会話ではなく一方的な宣言ばかりだもの。
完全にサイコパス。
対話をしようよ対話を。
「あ、料理が来ましたね」
「ああ、いただこうか」
「いただきます」
あ、この唐揚げ美味い。
「……」
「……」
無言で食べ進める俺達。
「こ、これ、美味いね！」
「ええ、そうですね」
か、会話続かねー!!!
でもちょっと嬉しそうなのは分かる。例え一方的でも、話しかけられるのが、構ってもらえるのが嬉しいって面だ。
本当にごく僅かな表情の変化と、雰囲気の違いから気持ちを割り出してるが……、攻略難度高いな、この子は。
あっ、パスタ美味え、素朴な感じの味がグッド。ハンバーグも手ごねだな、ジューシーで美味しい。

特に会話もなく食事を終わらせ、再び街へ。
「提督、子供は何人欲しい？」
何だよいきなり？急な発問。
「いやぁ、いらないかな」
「そう……、二人くらいいると良いと思います」
「だ、だからね、俺は子供なんて」
「男の子と、女の子」
「話聞いてる？」
「提督と同じですね、男の子一人と女の子一人って」

怖ーい、話聞いてなーい。
「確かに俺には妹がいるけどな……、新台家の男ってのが不味いよ、碌な大人にならないから」
「きっと、提督に似てハンサムな子に育つと思います。髪もきっと白ですね」
いやいや、俺の髪が白いのは地毛じゃないから、遺伝しないと思うよ。
「俺のこれ、若白髪だよ?」
「へえ、そうなんですか。でも、私の髪が白いから……」
ふーん、ある程度、望む答えを出してやると会話が成立する、と。
「まあ、娘だったらいても良いかな」
「女の子ですか。私に似て、愛想がない子になったら嫌ですね。提督に似て明るい子になって欲しいです」
「はっはっは、愛想なんて別に気にならないさ」
「提督は、私のような愛想のない女も好きですか」
「ああ、好きだよ」
「ふふ、嬉しいです」
何だ、結構会話が出来るじゃねえか……。

そろそろ良い時間だ。居酒屋鳳翔にでも行くかァ!
「雲龍、酒飲もうぜ酒」
「はい、お酒、好きですよ」
との事なので、居酒屋鳳翔に直行。酒飲むぞー。
「鳳翔さーん、ビールちょうだーい」
「はーい」
鳳翔マイワイフ……。
鳳翔からビールを受け取る。
キンッキンに冷えていやがる……っ!!
「鳳翔さん、私も同じものを」
「はーい」
鳳翔さんがまたもやキンッキンに冷えていやがるビールを注いで、

雲龍に渡す。
「んじゃあ、乾杯」
「ええ、乾杯」
喉を鳴らしてビールを飲む。やっぱこれだね、このために生きてる。
「……随分、美味しそうに飲むのね」
「んー？俺、お酒好きだもん」
「提督が幸せそうだと、私まで嬉しくなるわ」
と、雲龍は、優しげな笑みを見せた。何だ、可愛い顔出来るじゃんかよ。
「そうかい、俺も雲龍が喜んでくれて嬉しいよ」
正直な気持ちだ。例えちょっとサイコパスでも、黒井鎮守府の仲間だし、可愛い女の子だ。若干話が通じないくらいで嫌いになんてならない。
「提督」
「何、雲龍？」
「やっぱり私、提督が好きです」
「俺も雲龍のこと、好きだよー」
「提督を好きになって良かったと、心から思います」
「ははは、ありがとね」
無表情だが、声に喜色が。分かりづらいけど、好感度は上がってる。
……いや、上げようと思ってないのにね！おかしいね!!
不味いな、この辺で好感度を下げるようなことやっとかねえとな。
さて、雲龍の隣に座って、と。
「触るぞ、雲龍」
「どうぞ」
雲龍の太腿を、揉む……!!
おおお、おおおおお！
筋肉！キック主体で戦うからか、太腿の筋肉すげー!!結構硬い!!
でも肌触りはすべすべ。白い肌。綺麗だ。
「どうだ雲龍、嫌いになったか」

「何をですか？」
「突然セクハラしてきた俺のことをだよ」
「いえ、嫌いになる要素がありません」
やっぱりな（レ）。
まあ、そんなことだろうと思ってた。むしろ嫌われる方法を知りたい。
「提督、その程度で良いんですか？服、脱ぎますよ？」
「いや、そこまではしなくて良い」
そんなことしたらエロ小説になっちゃうだろ!!
っはー、このしなやかさよ。ネコ科の動物みたいな鋭さと柔軟性を持ったこの足。こんな太腿に触れるとは、役得だ。
「本当に、これで満足ですか？」
「おう」
「挿れなくて、良いんですか？」
「女の子が挿れるとか言わないの」
「私はいつでも構いません。例え、今この瞬間に犯してもらっても」
「はいはいはいはい」
俺はセクハラできるだけで満足なの！中学生の頃のような、煮え滾る獣欲はもうない！……いや、性欲はあるけどね？
「じゃあ、そうだな。今晩は一緒に寝ないか？」
「喜んで」
よっしゃ、ベッドの上であんなことやこんなところを触りまくってやるぜ!!
と、今晩を楽しみにつつ、お開きだ。寝室へＧＯ！

さあさあ、セクハラするぞー!!

おっと、ここから先は、大人の時間、ってことで。
「提督……??」
「はいはーい」
まあ、なんだ。

楽しんだよ、色々とね。

２０６話　ロボットだから、マシーンだから

……「命令？ないよそんなもの。自由に過ごしなよ」
自由に……。
自由に？
自由って……、何？
私が、考えるの？
……そんなことする必要、無いよね？
だって、提督がいるんだよ？
提督は凄いんだよ、何でもできるし、かっこいいし、優しいし。よく大淀さんが提督のことを神様だって言うけど、本当だと思う。
そんな神様みたいな提督が、指示を出してくれるなら、それに従うだけで良いよね。
自分で考えて動く必要なんて、無いよね。
「……蒼龍？」
「何？提督？命令くれるの？」
命令、欲しいな。
私が一番幸せなのは、提督の命令を聞いている時だからね。
「あー、一体これで何度目になるか分からないんだが……、自分で考えろ、蒼龍」
「私も、何度目か分からないくらい言ってるけど……、命令して、提督??」
「よーし、分かった。そっちがその気なら俺はこうだ。激おこだ。いっそもう嫌になるくらいに命令してやる!!」
「ほ、本当に?!やったあ！」
命令だ！命令が貰えるんだ！
うふふ、やったね！
「……命令貰えるのが、そんなに嬉しいのかい？」
「うん！私、提督に命令されるの、大好き！」
「……良いかい、これだけは言っておく。君はロボットでもマシーンでもない、人間だ。俺と同じ、人間なんだ。それだけは、覚えておい

て欲しい」
「……？、分かった」
私は、人間……？
よく、分からない。けど、提督が覚えておけって命令してくれたし、覚えておこうっと。

「まずは着替えろ、お出かけするぞ」
「うん！」
あは、命令！命令してもらっちゃった！提督に隷属してるって、考えただけで最高！
さあ、命令の通り、着替えよう。
提督に作ってもらった服を着て、と。
「はい、着替えたよ、提督！」
「よしよし、良い子だぞ、蒼龍」
あ、頭なでなで……。くふー、嬉しい。
「じゃ、出かけるぞ、ついて来い」
「はーい！」
ついて来い、だなんて。犬みたい！わんちゃんみたいに、提督の後ろをついて行こう！私は提督専用の雌犬だからね!!
ああ、ああ、嬉しいな、嬉しいな。雌犬として、奴隷として提督の命令に応える。私ってなんて幸せなんだろう！
「……蒼龍、俺は蒼龍をペットや奴隷のようには思っていないよ」
あら？心でも読まれちゃった？それともまた心理学？まあ、なんでも良いや。私の全部は提督のためにあるんだから。でも、一応聞いてみる。
「じゃあ、どう考えてるの？」
「あー、その、家族、かな」
家族？家族かぁ。私は奴隷が良いんだけど。
「命令するたび恍惚とした表情を浮かべるのはやめてくれー……」
えへへ、私、顔に出やすいタイプだし。

提督と一緒にお出かけ。嬉しいな。
何もなくっても、提督の隣を歩けるだけで、私は幸せ。
欲を言えば、もっと命令して欲しいんだけど。よく言うブラック鎮守府？くらいに、私のことを酷使して欲しい。私のことを、必要だって言って欲しい。
「来い、蒼龍」
「あっ??」
手ぇ、握ってぇ……??
ふふふ、提督の手、ゴツゴツしててあったかいな。
「どこ行くの？提督」
「なら、サ店に行くぜ！」
サ店……、喫茶店ね。
「スタバで良いか」
「うん」
よく分からないけど、提督が行けって言うなら地獄にだって行くからね！
「いらっしゃいませー」
とか思っているうちに、手を引かれて喫茶店に。
「俺、キャラメルマキアートで。蒼龍は？」
「分かんないから提督と同じので良いよ！」
何か呪文みたいな横文字がメニュー欄に浮かんでいる。全く分からないので、提督におまかせだ。
「それじゃ、キャラメルマキアート二つ。スコーンとワッフル、あとドーナツも二つずつお願いします」
「はーい」
すると、一分しないうちにキャラメルがかかったコーヒー、とお菓子が来た。
「お待たせしましたー」
「よし蒼龍、座れ」
「はい！」
「食べろ」

「はい！」
「……これあかんよなぁ。側から見たら完全にそう言うプレイだよなぁ」
命令を受けて、席に座ってドーナツを頬張る私。
ん、美味しい。
提督の手作りドーナツ程じゃないけど。
「なあ、蒼龍。やっぱやめにしないか？蒼龍に命令すればするほど、俺の社会的地位がガタガタ言ってるんだけどもさ」
「やだやだ！今日はたくさん命令してくれるって言ったもん！」
駄目だよ提督。今日は嫌になるくらいに命令してくれるって約束したもん。
「だが、見ろ、周囲の目を！俺はゴミクズを見るような目で見られてしまっている!!この事実をどうする?!」
「じゃあ、提督が、『皆殺しにしろ』って命令すれば良いんだよ！提督を不快にする奴は、私が全部殺してあげるからね！」
提督は私に遠慮し過ぎ！もっと道具みたいに、気軽に命令してくれれば良いのに！
気に食わないから殺して来い、とか、そんな命令でもちゃーんと聞くんだからね！
×
×
×
×……「ざわざわ……」
×……「ヤダー命令だってー」
×……「変態だ……」
×ひー、怖いよー怖いよー。世間の目が怖いよー！
どれもこれも蒼龍の仕業だ。
蒼龍がスタバのど真ん中で命令してなんて言うから！
お陰で俺達は、特殊性癖抱えた人を見る目で見られてしまっている。
「蒼龍、頼むから、外でそう言うこと言うのやめような」
「……？、うん、分かった」

意味は分かってないが、兎に角、俺の命令は聞く、か……。
そんなんじゃ寂しいじゃないか、悲しいじゃないか。
思考停止は一番いけないよ。
「蒼龍、俺の命令の意味って、考えたことあるか？」
「ない、かな？」
「そうか。あのな蒼龍、俺はな、仕事で命令することもあるが、それ以外で君に何かを言う時は、幸せになって欲しい一心で命じてるんだよ」
……まあ、偶に邪念が混ざることもあるが。本心は愛情から来る親切心だ。
「うん、それは、何となく分かるよ！だから、提督の命令を聞けば私は幸せになれるんだよね！」
そうだが……。
「蒼龍、俺はな、幸せってのは自分で探すもんだと思ってる。……蒼龍も、自分で自分の幸せを探してみれば良いんじゃないか？」
いつも言っているが、人は誰でも幸せを探す旅人のようなものだからな。
「嫌だよ？」
そっかー。
「私の幸せの全部は、提督がくれるから。私はそれで十分なの」
ああ、そうか。
蒼龍は満足してしまっている。
果てのない欲望を持つ俺とは真逆だ。これで良いと、今のままで良いと満足している。満足してしまっている。
だから蒼龍は動かない。
自立、してくれないなぁ……。

「コーヒー、美味しかった！やっぱり、提督の命令を聞けば幸せになれるね！」
境界が曖昧なんだよな。美味しいコーヒーを飲んで幸せ、なのか、俺の命令を聞いて幸せ、なのか。

コーヒーが美味しいことに喜びを感じたんだろうけど、まずその前提として俺の命令がある。
例え、命令なしでコーヒーを飲んでも美味しいと、幸せと感じるだろうが、俺の命令がない時と比べるとその幸福感は大きくランクが下がるんだろう。
「俺の命令」と「その他の幸せ」が合わさってこそ、本当の幸せなんだろう。最初はそうだった、筈だ。
だが、蒼龍は、いつからか、「俺の命令」をこなしたことによる幸福感が他の全ての価値観を圧倒するようになってきた。
今では、それこそ、仲間殺しやテロのような「その他の幸せ」に繋がらないようなことでも、命令を聞くようになってきている。

蒼龍は、壊れてしまっているのだ。

……歪みきった人格だが、俺が死ねと命じない限りは問題ないだろう。
殺せ、と命じたら殺しまくるだろうが、その辺は俺が制御するしかない。
結局は、俺の責任か……。
あーあ、嫌だな、他人の人生背負うのは嫌だ。責任重大じゃんかよ。
まあ、世界の命運握るような大きな戦いよりはマシか。
昔よりはマシ、昔よりはマシ……。
そんな感じで自分を誤魔化す。
「大丈夫だ、蒼龍。君は俺が守る」
社会とか世論とか、常識とかそう言うのから、守っていきたい。
「?、うん、ありがとう?」
守護らねば……。

２０７話　ラッキースケベと因果律

「因果律干渉装置？」
「はい！」
まーた面白そうなモン作ってきたな工廠組よ。
「使うとどうなるんだ？」
「提督の周りでラッキースケベが多発します」
ほーん。
「構わん、やれ」
むしろこっちから頼む、やってくれ。ｇｉｖｅ　ｍｅ　ｍｏｒｅ　スケベ!!!
「ぅオッケーです!!イヤッホゥ!!!装置起動ッ!!!!」
その瞬間謎の機械音。時空が歪む感覚。起動したっぽいな。
「よっしゃ、許可は得ましたからね！うおお、提督ーーー!!」
「えっ、何？」
明石が急に抱きついてきて……。
「あっ、滑っ」
っと、受け身……?!とれない?!転ん……!!
「うおおおお?!」
と、気付いたら俺は、明石と絡み合うように転んでいた。
おまけに、明石のスカートはめくり上がり、俺の眼前に。一方で明石は、俺の股間に顔を埋めるような体勢だ。
「ふへへへへへへ!!ラッキースケベはですね、提督だけじゃなくって私達艦娘も幸せになれるんですよぉ!!」
男の股間に顔を埋めて幸せと申すか。
「ずるいです明石さん！私も！」
「夕張、ちょっと待っ」
またもや、不可解な転び方。
「むぐ」
「あん??提督??」
顔騎。

顔騎である。
具体的に言えば、俺の顔面に騎乗するかのように座る夕張。
「もごご、んー」
「あっ、駄目??喋っちゃ駄目です??」
なーるほどな、これがラッキースケベが起こる因果律か。中々楽しいじゃないか。
「っぷは、明石、これ、いつまで続くんだ?」
夕張を退かせ、明石に問いかける。
「今日一日だけです」
そうかそうか。
「なら俺は、今日という日を楽しんでくるか」
今日だけってんなら、なあ?

ところが、人生ってのは往々にして、自分の思い通りにはいかないもので。
「おかしい（全裸）」
何故だか、いつのまにか、俺が全裸になっていた。
つまりこういうことだろうか。
俺の周りでラッキースケベとは、俺自身にも効果が及ぶと。
要するに、俺のお色気シーンも起こりうる、と。
んー、誰得?
「むっ、提督?……何故全裸なのだ?!」
「俺にも分からねえ、気が付いたらこうなっていた……。何を言っているか分からねーと思うが、俺も何をされたのか分からなかった……」
頭がどうにかなりそうだった……。催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなモンじゃ断じてねえ、もっと恐ろしいもんの片鱗を味わったぜ。
「そ、そうか」
ごほん、と軽く咳払いする長門が、
「にしても、あれだな。その、目のやり場に、困るな……」

忙しなく視線を動かす。
「あ、別に見ても良いよ、見られて困るもんじゃないし」
自分で言うのもなんだが、人に見せて困るような身体ではない。流石に某所で会った黄金の獣さんほどではないが、それなりに良い身体しているっていう自信はある。
それに、もう何度も言ったと思うが、俺の絶対に見えちゃならないところは謎の光や泡、蒸気などで良い具合に隠されている。何も問題はない。
「でもパンツくらいは履いておくか。ちょっとの小銭と明日のパンツがあれば大丈夫って知り合いの旅人が言ってた。……どうした長門」
「その、なぁ。目の前で、惚れた男が全裸でいたら、なぁ？」
「あ、嫌だった？」
「い、いや、その、そそる」
「そ、そっか」
いかんな、長門ほどのパワーの持ち主からは、一度捕まったら逃げられんだろう。逆レされそう。四次元ポケットからパンツ出して、と。
「パンツ、派手だな……」
「これ？カッコイイでしょ？」
紅いパンツを履く。無論ガラパンだ。ボクサーパンツはね、あの締め付けられる感覚が嫌なんよ。
続けてジーパン、シャツを着て、海軍制服の上着を羽織って、と。
「よし、と」
いつもの格好だ。うーん、キマってるな、俺。ナルシストって訳じゃないが、女の子にはモテるからな、イケメンと言って良いだろう。少なくともダイオージャのＯＰよりはカッコいい自信がある。
「前から思っていたが、胸元のボタンを外さないでくれるか……」
「へ？なんで？」
「その……、凄く、セクシーなんだよ！いつもいつも、目のやり場に困るんだ！」
若干顔を赤く染めながら言う長門。

「正直、目に毒だ……！いかがわしい！」
「いかがわしいって……」
酷いな、もう。大胆に開いた胸元がそんなに駄目か？
「私達艦娘にも、性欲はあるんだぞ？いつもいつもそんな格好をされると……、その、なんだ、困る！」
「そうなのか？」
ちらりと、シャツをめくって見せる。
「やめろぉ！」
まあ俺、貞操逆転世界の竿役みたいなポジションだし。クソビッチムーブもなんのその。艦娘のためになるってんなら、誰も得しないお色気シーンを提供する準備ありだ。
「いい加減慣れてよ。それじゃあ俺、易々と脱げないじゃん」
「慣れるなどと……！そもそも、易々と裸にならないでくれっ！」
無理無理。俺、脱ぐの好きなんだよね。いや、変態じゃないけど。断じて変態じゃないけど。ただ、良い身体してるから見せつけたいみたいな……。
「兎に角、しっかりしてくれ！」
「はいはい」
ぷいっと、顔を逸らす長門。そのまま踵を返して……、
「うおっ?!」
「おっと、ありゃ？」
立ち去ろうとした時、転び、俺が支えようとしたら、何故か長門の顔が俺の股間に。
「ーーーッ?!!」
やはりこの因果律は、俺のラッキースケベを起こすらしい。
「すっ、すまない！」
「気にしてないよ。って言うか、組手の時とかも触れたりするじゃん？」
「それとこれとは別だ!!」
真っ赤になった長門は駆け足で逃げ去っていった。

組手の最中に股間や胸に触れてしまうこともあるだろ？とは思ったんだが……、なんか違うっぽい。
いやー！女心は分からんなー！（すっとぼけ）
さてさて、お次のターゲットは？
「あら、提督？」
「ザラェ!!!!」
ＯＫＯＫ！中々にからかい甲斐のある堅物ちゃんじゃねーの!!
ザラは初心なネンネちゃんよ！
「よしよし」
「あぅ、む、胸元、そんなに開いちゃ駄目です！」
「何で？」
「あの、その……、え、えっちだからです」
「ほーん」
ほーん!!ほほーーーん!!!つまりザラは、人のことをえっちな目で見ちゃうのか！いけないなぁ！いけないなぁ!!
「はは、俺は、ザラになら見られても嫌じゃないよ」
口説くッ……!!ザラを口説く!!!
「そ、そんな、ことは……、そ、それでも駄目ですよっ！」
「ザラは興味があるのかい、俺の身体に……」
「あ、あうううう……!!」
ザラの顔は真っ赤っかっか、燃えてるぜ。いい調子だ、このままクソビッチムーブでからかい倒そう。
「触ってごらん？ほら……」
「あっ、だ、駄目……、本当に駄目ですよ！」
口では駄目だと言うが、その割に俺の腹筋に当たっているザラの手は、退けられる様子がない。
良いなあ良いなあ、謙虚だなあ！
これが武蔵とかだったら、何の遠慮もなくベタベタ触られてるんだけど。
たまにはこう言う処女感ある反応も良いよね！
「ザラ……」

「あっ??」
壁際に追いやる。壁ドン！壁ドン!!
「ザラ、愛してるぞ」
耳元で囁く。
「は、はい！私も、提督のこと、ｔｉ　ａｍｏ……、愛していますっ！」
おっかなびっくり、と言った様子ながらも、しっかりと俺に抱きつくザラ。良いな、今、俺は、ラブコメをしているッ!!
「良いかザラ、俺はザラの恋人なんだよ。だから、ザラが望む時に、望むことをして良いんだ」
「わ、私が、望むことを……？」
ごくり、と、生唾を飲み込む音が聞こえて。のぼせたように真っ赤な顔は、先程から変わらず、付け加えて、呼吸が荒くなって、鼓動が早くなって……。
「じゃ、じゃあ、私は、私は……、やっぱり言えませんー!!」
と、逃げ出そうとしたザラはすっ転んで。
俺を巻き込んで見事に転んだ。
「んにゃあ?!!」
「はっはっは、ラッキースケベラッキースケベ」
俺の股間にダイブするザラ。歪んだ因果律はぶっ飛んだアンサーを出す。笑える。
「ーーーっ!!!」
ああ、ザラが気絶した。

やっぱり処女からかって遊ぶのは楽しいぞい。
初心な反応が見られて幸せ。
さて、次だ。
「全く、提督は先程から何をやっているのですか」
加賀か!!ＯＫＯＫＯＫ、加賀も結構な堅物だぜ。しからば御免!!
「ほら加賀、見ろよ見ろよ」
腹筋チラ見せ。
「……何ですか」

　至って平静、のように装ってはいるが、心音の高鳴りは防げなかったようだな？どくん、と大きな音が聞こえたぞ。無論、俺の聞き耳を以ってしてのことだが。
「サービスよ、サービス」
「そんな見っともない真似、控えて下さい」
　加賀の鋭い眼光が俺を射抜く。いやはや、手厳しい。
　……だが、その視線が俺の腹筋に釘付けになっていることはしっかりと気付いているぞ。いつ誰に狙われるか分からない旅人生活、人の視線には敏感なのよ！
「あら？加賀は見たくないの？」
「……いえ、私は」
　長い沈黙。興味がありますと肯定しているようなものだぞ。こう見えて腹芸の類が苦手なんだよな、加賀。意外と素直な子だよ。
「……鎮守府の風紀が乱れますから」
「今更じゃね？」
　あってないようなもんでしょ、この鎮守府の風紀。俺も極力、全年齢対象、ＣＥＲＯ　Ａでやっていきたいけれども。
「何でも良いですから、自分を安売りするようなことは、しないで下さい」
　自分を売る（至言）。
「誰にもやってる訳じゃないさ、加賀にだったら見せても良いと思っただけで」
「……それは」
　と、ここらで適当なセリフを一つ。
「で、ですが、今は戦時中です。浮ついた気持ちでは」
「大変な時だからこそ、潤いってもんが欲しいんじゃないかな？」
　ゴリ押す。
「そんな、こと……」
「加賀、もっと自分に素直になりなよ」
「素直、に……？」
「そう、素直に」

まあ、暴走されたら困るんだけどね。
「で、では、その、腹筋を……」
ほうほう、腹筋を？
「触らせて、貰いたい、です……」
後半、消え入るような声になりながらも、言った加賀。
なるほどな、腹筋を。なるほどな。
「良いよ、ほら」
加賀の手を握って、俺の腹筋に這わせる。
「あ……、はぁっ……！」
おっ、どうしたどうした。
「ああ〟っ」
鼻血出して倒れた?!

いやあ、楽しかったなあ。
ラッキースケベ、十分堪能したよ。
さて……。
「む？今日はよく分からんが、提督に触っていい日なのだろう？どれどれ……」
武蔵に捕まってゲームオーバーですか。
ですかぁ……。
「全く、溜まっているなら呼べば良いだろうに、ふふふ、ふふふふふふ……」
たすけて。

２０８話　絶対島風領域

私は、天津風。
黒井鎮守府に新しく配属された、艦娘。
なんだけど……。
「あはは、あはははははは!!!!!おっそーい!!!!」
「ちょっと島風！速過ぎよ！連携を……」
「……ついて来れない方が悪いのよ」
「そんな言い方！」
島風の扱いに、困ってるの……。

「島風、もうちょっと他人のことも考えなさい！」
「うるさいなぁ、遅い艦が悪いんでしょ」
「そう言う言い方はしちゃ駄目よ！」
「天津風には関係ないもん」
「心配なのよ！」
もー、何を言っても駄目。一番速いけど、一番孤独。
誰よりも速い、島風の加速した世界について行ける艦娘は殆どいない。だから島風は、この鎮守府で最も速く、最も孤独なの。
あ、私が島風について行けるのは、この、よく分からない、工廠から貰ったゼクター？の効果ね。
そんな島風自身も、司令さえついてきてくれれば、後はどうでもいいって感じで……。
独断独走、そればっかり。
私にとって島風は、妹のようなものだから、いつも一人きりの島風が、気にかかってしょうがない。
何とか、皆んなの輪に溶け込ませたいところだけど……。中々、難しいわね。もうグループが決まっちゃってるから。
艦娘にも仲良しグループ？みたいなのがあってね。艦種毎、姉妹艦毎で行動するのよ。だけど、島風は、そのどこにも属していなくて。
「そんなんじゃ、ずっと独りぼっちよ！」

「別に良いけど」
　これだから、なぁ……。
「と、言う訳なのよ。何か良いアイデアは無いかしら？」
「え？俺？」
「いや、丁度そこにいたから」
　それに、陽炎型の中心的存在だしね、嵐は。
「うーん、島風がなぁ」
「そうなのよ。私が来る前からこうなの？」
「そうだなぁ、島風は、いつも一人でいるよなぁ」
　そうなんだ、やっぱり、ずっと一人で……。
「話しかけたりしなかったの？」
「いや、話しかけても、適当に返されるからな。あんまり、他人に興味が無いみたいだ」
「そんな……」
「でも、良いんじゃないか？本人が一人でいたいって言うならさ」
「嵐までそんなこと言うの?!」
「逆に、天津風は心配し過ぎだよ」
　そう、かしら。
「俺達は見た目は子供かもしれねーけど、中身はそうじゃないんだ。放っておいても大丈夫だって」
　でも……。
「それに、うちには司令がいるからな。何が起きても何とかしてくれんだろ」
　司令、司令かぁ。……あの人なら何でもできるし、確かに大丈夫そう。
　配属されてまだ一ヶ月もしてないけど、あの人の人柄は分かった。
　あの人は、良い人だ。
　誰にでも分け隔てなく接して、根が優しくて、島風も気にかけてくれる。
　実際、アクの強い人物の多い黒井鎮守府がうまくやって行けている

×
×
のも、あの人によるところが大きい。
×
「…×…頼って、良いのかな」
×
×
×
×
×私は、島風。
×この黒井鎮守府最速の艦娘。
×……いや、一番は提督かな、本気の提督にはまだ追い付けないから。
×まあ、取り敢えず、私は速い。
×私の加速する世界についてこれるのは、提督だけ。
そう思ってた。
けど……。
「ほら、島風！一緒に食べましょう？」
「あ、うん」
一人、新しく。
友達が、できた。
「島風は何を頼んだの？」
「……ハンバーグ」
「じゃあ、私もハンバーグにしよっと」
天津風だ。
工廠のよく分からない技術で作られたベルトを使って、クロックアップ？によって加速する天津風は、私の世界に足を踏み入れた。
それだけじゃなく、
「ちょ、ちょっと島風?!食べるの速い！」
「良いでしょ、別に」
「良くないわよ！お腹痛くなるわよ?!」
私生活にも、口出しするようになってきた。
ちょっと、うざい。
友達なのは悪くないけど、急に私の速度についてくるんだもん、戸惑っちゃうよ。
いつも私の完全独走だったのに。

「いやあ……、まさかサクラ大戦のＤＶＤボックスで旗風ちゃんが建造されるとは……」
「まあ、神風型なんて帝国華撃団みたいなもんでしょ？」
「それと千歳と千代田、水上機母艦ですね」
　あ、音成の提督。
　と、提督、大淀さん。
「いやでも、でも……」
「うちも同じようなもんだしな。雰囲気的には」
「提督、お言葉ですが、音成鎮守府の雰囲気が帝国華撃団なら、うちはレッドショルダーです」
「マジで？」
　……どうやら、音成鎮守府には、旗風、千歳、千代田が配属されたらしい。
　ふーん。
　私の速度についてこれない艦娘がまた増えたんだ。
　関係ないや。
「……などど、思っているな島風ェ?!!」
　すると、提督にいきなり抱き上げられた。
「!!
?!!」
　え?!何?!
「速度関係なしに艦娘同士仲良くしような！」
「う、うん」
　わ、分かった。
「その顔は……、ふむ、新しい友達の天津風が、自分と同じ世界に立ってくれるのが嬉しいような戸惑うような、と言ったところか？仲良くなれるか不安になりつつも、自分のプライベートな、触れて欲しくない部分にまで触れられそうで微かな嫌悪感もある、と」
「え？あ、うん」
　い、いきなり過ぎる……。って言うか、描写が的確！心でも読まれたのかな？
「いや、心は読んでないぞ。心理学＜８０＞だ」

そ、そう。
「良いか島風、友達は大事にしろ。人生の先輩からのアドバイスだ」
「もちろん、そのつもりだよ？でも……」
「戸惑うのは分かる。だけど、少しずつ、心を開いてごらん？きっと、良い結果になるよ」
心を、開く、か。
天津風と、そんな仲になれるだろうか。
「島風は、他人とは距離を置きたいタイプだろ？だから、世話焼きな天津風にお節介されて苛立ってるんだよな」
「うん」
「でも、それは、天津風が純粋に島風のことを心配してのことだって気付いてもいる」
「うん」
「しかも、今まで俺と島風しかいなかった、島風の世界に、急に天津風が入り込んで来たみたいに感じる、と」
「……うん」
本当に心読んでないの？完璧に私の気持ちを理解されちゃってるんだけど？
「私、天津風と仲良くなれるかな？」
「大丈夫、大丈夫だ島風。きっとうまくいく。君はただ、素直に生きれば良い、真っ直ぐに、いつも通り走れば良い」
「そう、かな」
「そうだよ」
んー、提督が大丈夫って言うなら、大丈夫かな。
いつも通り走れば良い、か。
分かった、提督。

２０９話　ｊｉｎｇｌｅ，ｊｉｎｇｌｅ，ｊｉｎｇｌｅ　前編

「Ｊｉｎｇｌｅ　Ｂｅｌｌｓ、Ｊｉｎｇｌｅ　Ｂｅｌｌｓ……」
鈴が鳴る、と。
クリスマスの季節だ。
何だかんだでお祭りごと大好きなうちの子達は皆んな、クリスマスの準備に入っている。
そんな中、クリスマスの料理に、お菓子作り、ツリーの飾り付け、プレゼントの用意と、俺のやる事は多い。
でもこんな風に平和な忙しさってのも悪くは……、
「いやぁ、俺は旅人だしなぁ」
悪くはないと思いたいのは山々だが、俺としてはもっと旅要素が欲しい。まるで一般家庭のような様相。柄じゃないんだよね、こんなの。
ああ、旅に出たい。何処か遠くへ行ってしまいたい。
「司令官、食堂の飾り付け、終わったのです！」
「よしよし、偉いぞ電」
今じゃ一端のパパさんだよ。
「どうかしましたか、司令官？」
「俺も父親がすっかり板についてきたなって」
「は？（威圧）司令官は電の旦那様なのです」
「そ、そうだね、ははは」
ははははは、はぁ……。
まあ、取り敢えずは、良いか。まずは目先のこと。
そう、クリスマスプレゼントだ。
うちの子達が大喜びするような、何かプレゼントが必要だ。
そして、クリスマスプレゼントが自分の欲しいものと違った、などと言う悲劇を起こさないためにも、俺はあらかじめの調査に赴くのであった……!!

「と、言う訳で、暁。何か欲しいものはないか？」
「何言ってるのよ司令官！私知ってるわ！サンタなんていないんだから！」
　いやいや、それはどうかな？
「いるぞ？」
「え？」
「サンタいるよ。昔会った」
「ほ、本当?!司令官ならあり得るかも……!!」
　まあ、うちには来ないんだが。サンタカウント的には、艦娘は子供じゃないらしい。でも、昔サンタの手伝いをしてたこともあったし、俺がサンタの代わりをしても大丈夫だろ。
　俺が、俺達が、サンタだ!!
「だから、クリスマスプレゼントは何が欲しい？」
「そ、それじゃあ、えっとね……、美味しいお菓子！」
「それは、クリスマスパーティーの時に沢山作るからね」
「え、そう？じゃあどうしようかしら。……そうだ！暁は大人のレディだから、化粧品が欲しいわ！」
　うーん、まだちょっと早い気がするが……、まあ良いか。
「分かった、化粧品だな」
　メモメモ、と。
　軽くなら、化粧も良いだろう。許可ェ!!色気ついても良い頃だろうしな。
「暁は分かった。他の皆んなはどうだ？何が欲しい？」
　雷、電、響にも聞いてみる。
「はいはーい！司令官との子供が欲しいわ！」
「欲しいもの、ですか？司令官なのです！」
「欲しいもの？司令官かな」
　んーんん。
　なのですかー。
　なのですですかー。

「駄目です（ヤーマン）」
駄目なんだよなぁ。なんで皆んな俺の身柄を欲しがるのか。子供らしくおもちゃの一つでも強請ってくれよ。あと子供はいらないとあれほど言ったよね。
「えー！何で駄目なの？」
「駄目なものは駄目！諦めて！」
「やーだー!!」
雷が駄々をこねる。
「駄々をこねたって無駄ですー！……ぬいぐるみで良いかい？」
「……司令官の手編みなら」
「ＯＫ」
ぬいぐるみ、ぬいぐるみと。
余談だが、昔、動き回るテディベアに酷い目に遭わされてな。ｋｅｔｅｒクラスだったよ。
「で、電は？」
「だ、だから、司令官が」
「以外で」
「えー、じゃあ、特に無いのです」
そうかい？じゃあ適当な服でも送るか。
「響は？」
「司令官とＳＭプレイ」
「以外で」
「じゃあウォッカくらいかな」
ウォッカなんていつも飲んでるだろ？しょうがない、適当なアクセサリーでも送るか。
「よし、大体分かった。呼び止めてごめんよ、行っていいよ」
「「「はーい」」」
うーん、うちの子達は欲がないなあ。欲しいものが特にないなんて。俺なんて世界が欲しいくらいなのに。
欲望は大事だぞ。あり過ぎても困るが。……人間、欲に塗れてる程度で丁度良いんだがね。

まあ、それで、人の欲望から生まれた怪物、ヤミーが大暴れして大変なことになったこともあったが、その辺はご愛嬌ってやつ？
兎に角、欲を持つことは大切だ。
「と言う訳で蒼龍、欲しいものは何だ？」
今度は、窓の外を見てボーッとしている蒼龍に話しかける。
「え？特に無いけど」
ほーれ無欲。
「なんかあるだろ、ほら……、なんか」
「無いよー。私は提督の命令があれば、何にもいらないよ！」
これ、マジで言ってるからなあ……。
俺の命令一つで命すらくれるのが蒼龍だ。
「命令なんていつもしてるでしょ」
一応、君の上司だからね俺。
「もっと命令して欲しいの！もっと、もっと、提督の役に立ちたいな！」
十分なんだが。
「命令は、ないよ。クリスマスプレゼントは服とかで良い？」
「提督にもらえるものならなんだって嬉しいよ！」
本当に喜んでくれるからなぁ。そこらに落ちてる石ころだって、渡せば喜ぶだろうぜ。それくらいの好感度、いや、信仰度と言っても差し支えない、アレだ。
そんな蒼龍には白のブラウスと黒のスカートをプレゼントすることにした。髪を下ろして女子大生っぽい服を着せればほら、提督さんちのエロドラゴンだ。
「楽しみに待っているが良い、蒼龍！」
「はーい！」
手を振る蒼龍と別れ、俺は更なる調査へ。俺は昔探偵やってたこともあるからな、調査はお手の物よ。まあ、身体は子供、頭脳は大人な名探偵に美味しいとこ全部持ってかれて、解決した事件なんてあんまりないが。
大して人の役に立ってないが、浮気調査とか逃げたペット探しとか

はよくやったし。さあ、その辺にいた皐月を捕まえて調査術でダイスロールだ。
「皐月が欲しいものをズバリ言い当ててみせよう!!」
「おっ、何だい急に!新しい遊びかい?良いとも!僕が遊んであげるよ!」
「よーし、まずはヒントをくれ!」
「ヒント?えーっとね、僕が欲しいものはね、綺麗に光るアレだよ!」
綺麗に光る……?
「空を駆けるアレか?」
「そうそう!それそれ!」
「羽の付いたアレだな!」
「そうそれ!!」
せーの!
「「ＶＴＦミサイル!!!!」」
わーい!近接信管式ミサイルだー!!!
クリスマスプレゼントにミサイルを欲しがる珍妙な事態。ツッコミは受け付けない。
「ミサイル、可愛いよね!」
可愛いか?
「そ、そうだな!」
ちょっとセンスが斜め上だが、そこもまたチャームポイントっすよ!
とか思ってると、そこに、
「ただいまー、提督!」
「おー、おかえり天龍」
スキー板を抱えた天龍が。
「楽しんできたか?」
「ああ、最高だったぜ!」
アウトドア型軽巡洋艦、天龍のエントリーだ。
天龍の趣味はアウトドア。暇な時は外で遊んでるか、駆逐艦の面倒をみているかの二択。

俺のことも頻繁に誘ってくれるから、暇しなくて良い。俺もアウトドア派だから相性は抜群なのだ。
そんな天龍には、うーんと、どうすっかな……。
「そうだ、天龍、まだスノボはやってないんだよな？」
「ん？ああ、今年からやるぜ」
「板、まだ買ってないよね？」
「おう」
「良かった、クリスマスプレゼントにスノボあげるね」
「ああ、そっか、そんな時期か……。俺もプレゼントを用意しないとな」
天龍のことだ、駆逐艦に何か買ってやるんだろう。ちょっとしたお菓子とかだろうが、プレゼントと言うのは、もらえるだけで嬉しいものだ。
……と、これで解決だな。一通りの調査は終わった。後は、クリスマス当日に備える！
俺はこれ以上この世界にジョナサンのようなやつを産みたくはない！
待ってろクリスマス！
休暇もプレゼントも、バッチリ用意してやるぜ!!

２１０話　ｊｉｎｇｌｅ，ｊｉｎｇｌｅ，ｊｉｎｇｌｅ　後編

今日は、１２月２５日。
例の神の子が生まれた日。
即ち、クリスマスだ。
クリスマスである。
クリスマスなのだ。
「メッリークッリスマーーース!!!」
「「「メリークリスマス!!!」」」
パン！とクラッカーの軽快な音が響く。黒井鎮守府はいつになく、いや、いつも通りのお祭りムードだ。実際にお祭りなんだが。クリスマスパーティーなんだが。
このムードに乗じて、俺は、サンタに扮してプレゼントを配り歩くのだ。
外を見れば、御誂え向きに白雪が降り積もり、所謂ホワイトクリスマス。さあ、盛り上がってまいりました。
因みに、黒井鎮守府は冷暖房完備、クソ寒い冬の夜も安心して眠れる。まあ、冬の海を疾走する艦娘が寒いとか気にするのかって話だがね。
もちろん、俺も平気だ。極寒の大地程度に膝を折っていては旅なんてできないからな。シャツ一枚でシベリアも何のその。ホットドリンクでも飲めばなお良し。
「でも異常に寒いな」
昨日まで雪なんて降ってなかったらのにね！おかしいね！
「で、何やったんだ時雨」
こう言う時は大抵何かやってるよな、白露型。
「ああ、ああ……、風に乗りて歩むものさ」
ふむ、イタクァ、か。
「何でイタクァを喚んだ？」

「何、クリスマスには風情、と言うものが必要だろう？気を利かせて、ね」
なるほど、つまり、雰囲気の良いクリスマスを演出するために、態々、風の属性を持ち大気を司る神格であるイタクァを喚び出し、雪を降らせたって訳ね。大凡エキセントリックだが、親切心から来るもの。
「良いけど、後で還すんだよ」
「勿論だとも」
今更、神話生物の扱いについて講釈を垂れるつもりはない。
ただ、自分で喚んだものの責任は取ろうな。
そんな時雨には、これだ。
「はい、無名祭祀書」
魔道書だ。確か、白露型がまだ持っていなかったやつ。
「……これは、良いのかい？」
「良いとも、是非役立ててくれ」
魔道書と言うものは得てして、稀覯書の類だ。買うとなると馬鹿高い。それなりに高給取りな艦娘にも中々手が出ないものだ。
だが俺は、物理的に盗んだもの、借りて写本にしたもの、大枚叩いて買ったものなど、多くの魔道書を所有している。
「これ、初版じゃないか！こんな高級なもの……」
「良いんだ、あげるよ」
発売後即発禁を喰らった魔道書の初版である。その価値は、推して知るべし、ってところだ。
「うわあ、ちょっと、これは、本気で嬉しいな！」
いつもクールな時雨が、柄にもなく大喜びしてる。その顔だよ、その顔が見たくて、こんなもんを用意したんだよ。
「ありがとう、提督！」
その顔が見れるんだったら、苦労した甲斐があるってもんだ。
稀覯書もらって喜ぶ……、知的な美少女ですねこれは。鷺沢さんかな？
さて、後は海風にナコト写本の写本を渡して、村雨に輝くトラペゾ

ヘドロン渡して……。そんな感じで色々と渡そう。
皆んな、喜んでくれるかな……。

次は、ドイツ艦だ。ドイツ艦にプレゼントを渡そう。
「ビスマルク、メリークリスマス！」
「ええ！メリークリスマス、提督！サンタの格好？素敵ね！」
「ああ。これ、プレゼントだよ」
「あら、Ｄａｎｋｅｓｃｈ・ｎ！」
ダンケ??ダンケ??
……なんか、がんばれ??がんばれ??みたいで卑猥。
「開けて見ても良いかしら？」
「勿論さ」
「これは……、カスタム拳銃ね！」
そう、渡したのは、悪ふざけレベルに改造した１０ｍｍピストルだ。
「強化レシーバーでファイアレートを底上げして、グリップも強化されている……、ロングホーテッドバレルで安定性も良いわ。マガジンも大型で装弾数も多い。リコンスコープも付いているのね！」
正解だ。一瞬でカスタムの内容を見抜くビスマルク。こと火器においては抜群の鑑定眼とセンスを持つビスマルクが気に入ってくれたなら、それはその銃の完成度の高さを物語ると言うものだ。
「良い銃ね！ありがとう！」
「俺は銃が苦手だから、完成度に不安があったんだけどね。ビスマルクが良い銃と言ってくれるなんて嬉しいよ」
正直不安だった。工廠組の手を借りたと言っても、銃器スキルの無い俺のカスタム拳銃はビスマルクのお眼鏡に叶うのか、と。
「もしも要らないなんて言われたらどうしようと思ってたよ」
「そんなこと言わないわよ、提督ったら。……本当、こんな良い銃が貰えるなんて嬉しいわ。明日、試し撃ちするわね」
よしよし、ビスマルクへのプレゼント、大成功、と。

さてさて、お次は……？

「司令官、メリークリスマス、です」
ミカァ!!!
!!
「メリークリスマスだぞミカァ!!!」
クールで可愛いキリングマシーン、三日月ルプスレクスだァ!!!!
「ミカには農耕の本を買ってあるからなぁ！」
「ああ、クリスマスプレゼント、と言うやつですか。良いですね」
こう言う雰囲気も良いだろミカァ!!たまには皆んなでほのぼのするんだよ!!
違うな、黒井鎮守府はいつだってほのぼのだ。いつだって雰囲気はよつばと！だ。
にしても、
「三日月はあれかな、農家にでも憧れてるの？」
Ｔ◯ＫＩＯ的な……。
「いえ、別に。ただの趣味です」
「そっか」
きっと、殺し以外で何かを生み出して社会の役に立っていると言う喜びを……、いや、三日月はそんな柄じゃねえな、多分、純粋に土弄りが好きなんだろう。
「でも、今は冬なので、特に作業はありませんけど」
冬だし、雪の降る中作業することもない、か。
「土弄りできない、と。じゃあミカ自身を弄るぞ！」
「どうぞ」
「高い高ーい」
「はい」
「良い子良い子」
「はい」
「おっぱい揉み揉み」
「はい」
このノーリアクションである。
もちろんツッコミも入らない。
さみしい。

でも、もしも気持ち悪いとか言われたら、いとも簡単に心が折れるだろうからな、ノーリアクションで丁度いいかもしれない。
「っふー、ありがとう三日月。楽しかったよ」
「司令官が喜んでくれるなら、何よりです」

さて、後は……。
「加古ー」
「ん、何だい提督？」
加古の手を握り、
「プレゼント！」
「これは……？」
バイクのキーを握らせる。
「何これ？」
「ＦＬＨＴＣＵＳＥ８の１１０ＴＨアニバーサリーエディション」
ハーレーの限定モデルだ。
「……マジ?!良いの貰っちゃって?!」
「ふはは、ＯＫよ、ＯＫ」
あげちゃうもんねー！
ほんの四百万ちょいよ、軽いもんだ。
「やったー！嬉しいよー！ありがとう提督！」
まあ、加古の給料数ヶ月分なんだが。
加古も買おうと思えば買えるはずだ。
それでも、こんなに喜んでくれたのは、俺が買ってあげたからだろう。
加古も女の子だ。例えバイクと言うイケメンアイテムでも、好いてる男から渡されたらそりゃあ嬉しいだろう。
「提督大好きだよー！」
抱き着いてデカイ乳を押し付けてくる加古。ああ^～、良いっすね～。

ラスト、陽炎型。

「マシュ……、浜風！メリークリスマス！」
「（マシュ？）提督、メリークリスマス、です！」
「ちょっと先輩って呼んでみて」
「……先輩？」
　ローーード！キャロメット!!!
　さて、ノルマ達成した訳だが。
「これ、クリスマスプレゼント」
「良いんですか?!うわー、ありがとうございます！」
　うむうむ、素直な反応だ。大変よろしい。
「あの、中を見ても？」
「ああ、構わないさ」
「では、失礼して……」
　因みに中身はネックレスだ。無難なチョイスかもしれないが、浜風は特に欲しいものがないと言っていたからな。仕方ないね。
「……わあ、可愛いネックレス！流石は提督ですね！小物選びのセンスも抜群です！」
　そうかな。ただ俺は浜風に一番似合うものを選んだつもりなだけなんだが。
「そう言ってくれると嬉しいよ」
「ちょっと待って下さい、私も何かお礼を……」
　と、懐を探る浜風。
　いやいや、何かお返しを貰おうなんて魂胆はないよ。
「お礼なんていいさ。いつも頑張っている浜風に、旅人サンタからのプレゼントなんだ」
「ですが……」
「どうしてもお礼がしたいなら、そうだね……、キスしてくれる？」
「え、キス、ですか？ふふふ、はい！」
　すると浜風は、キョトンとした顔の後、優しくはにかんで……、
「ちゅ??」
　俺の頬にキスをした。
「えへへ、ちょっとだけ、恥ずかしいですね」

かわE。

さて、プレゼント配布終了、と。

いやあ、今年も良いことしたな。善行だ。天国行き待った無し。

「あ、いたいた、司令官！」

「んあ、吹雪？どうした？」

「あの、プレゼント、ありがとうございます！それで……」

小さな箱を手渡される。

「……これは？」

「私達艦娘から、司令官へのクリスマスプレゼントです！」

おお……！

おお!!

「嬉しい」

「えぇ、泣く程ですか？」

泣くさそりゃあ。わんわん泣くさ。

嬉しい！ハッピー！超感動!!

……何を言っても陳腐になるな。娘のように可愛がっている子達からのプレゼントだぜ？そりゃあ嬉しい心が躍る。

愛されている、その事実が俺の胸を打つ。最高の気分だ。

「ありがとう……、ありがとう……」

跪いて礼を言う。もう感謝しかない。

「よ、喜び過ぎですよ、司令官！」

「開けて見ても良いかい？」

「はい！」

これは……、指輪、か。

シンプルながらお洒落さを感じる一品……。

……？

……。

……あの。

「これ、発信機」

「明石さんと夕張さんが作ったんですよ！私達艦娘だと思って、いつ

も持ち歩いて下さいね！」
「……う、うん」
そう来る、かぁ……。

211話　お正月とお仕事

さて、クリスマスが終わればもう……、
「あけまして」
「「「おめでとうございます！」」」
お正月だ。
もういくつ寝るとお正月、ってか。
おせちは鳳翔が主体になって作ってくれた。鳳翔は和食が得意だからな。逆にクリスマスみたいな洋風なイベントの時には洋食が得意な俺が主体になって飯を作る。
あと、お雑煮に入れるもので揉めたので、お雑煮を数パターン作ったな、うん。出身地によってお雑煮に入ってるものまちまちだもんね。味噌なのかだし汁なのか、餅は焼くのか焼かないのか、とかね。
裏山にはまだイタクァが召喚されているので、雪の降る中で俺達はお正月を楽しむのだ。
「凧揚げしましょ！」
「かるた大会よー！」
「羽根つきしますよー！」
「コマ回しです！」
はっはっは、皆んな元気だなー。
元気一杯だ。
その元気に負けないように、お正月アイテムも超強化されてる。
まず、凧揚げをする暁だが、タコ糸ではなくワイヤで凧を揚げている。
陽炎型のかるたも鉄板だ。
次にほら、あそこで羽根つきしている駆逐艦をご覧になってくれ。
「なのです！」「やー！」「なのです！」「やー！」「なのです！」「やー！」
あの、二人の間を音速で過ぎ去っていく物体あるだろ？
あれ、羽根つきの羽根なんですよ。
羽子板も艦娘の力に耐え切れるように特殊超合金製。羽根も同じ

く。
こうでもしねえと艦娘間でスポーツはできないからなぁ。身体能力が高過ぎるってのも考えものだねぇ。
「「ゴー、シュート!!!」」
明石と夕張は何故かベイブレードを回している。コマならなんでも良いと思うなよ。
「かまくら作ったぜー、中で餅焼こう餅」
「あらあらうふふ」
アウトドアの申し子、天龍は、ノリノリで巨大かまくらを製作、中で餅を焼いている。
俺も餅食いてえな。
餅……、のりと醤油がスタンダードだけど、きな粉も美味いぞ。意外なところではわさびなんてのも合う。バター醤油とかも最高なのよ。そもそもが米なんだから、ご飯に合うものは何でも合うよな。
まあ、俺は……。
「はいはい将軍あけましておめでとうございます！あっ、ゆかりん？お歳暮ありがとうございますー。おいテメェ！ポーション投げんな!!」
仕事なんですけどね!!!
あー!!働きたくない!!!
でも数少ない俺のお仕事シーンだしな！働かなきゃな！
でも働きたくない!!!
あー!!
助けて!!!
あー!!!
「新年明けましておめでとうございます、と」
年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状年賀状!!!
畜生、何で俺はこんなに人脈が広いんだ？一体どれだけ届く？どれだけ返さなきゃならない？
届く内容も、悪の組織、ヤクザ、モヒカン、ギャング、マフィア、ヴィ

ラン、テロリスト、マッドサイエンティスト……。
なんなんだ？悪党ばっかりじゃねえか。
いや、それは良い。うちも悪の組織だからな。
だけど、なんだか知らんが、悪の組織一同からのアプローチが激しい。
やはり、多数の海域を奪還して貿易網を手にしたのが鍵か？多くの悪の組織から「共存共栄でやっていきましょう」と声がかかる。利権に食いついて来たか。
もちろん、こちらとしても無駄に血を流したくはない。多くの悪の組織と手を組むのは賛成なんだがね。
でも、こんだけ手を組んでも、正義の味方には敵わない事実。強いんだよな、正義の味方。レッドさんとか、正直勝てる気がしない。
うちの艦娘が大暴れしても、地球の二割を破壊しないうちに鎮圧されるだろう。
だから俺は表立って戦わない。ヤクザのように、ハイエナのようにやっていきたい。目指せ、こっそり世界征服。
×
×
×
「ああ、提督、あんなにお仕事に囲まれて……。おいたわしいです……」
可哀想な提督。
代わってあげられるならこの大淀が今すぐにでも代わってあげたいところですが……、残念ながら、他組織とのコミュニケーションは提督以外にとれませんからね。
私もたまに、秘書役として悪の組織同士の会合に出席することもありますが……、お仕事の代行はとても無理です。ですから、必死になって仕事をする提督に対して、出来ることはありません。
悪の組織の長である提督は、暇そうに見えて意外と働いているのです。
一日の大半を艦娘との逢引に費やしているように見えても、その実、空いた時間では悪の組織間での貿易の中継、技術交流などに努め

ているのです。
例えば、フロシャイム。
日本を中心に暗躍（？）する悪の組織で、多数の怪人が所属。その怪人のバイオ工学のノウハウと、我が黒井鎮守府の兵器工学との取引は重要です。
例えば、東城会。
関東最大の極道組織で、裏表問わず輸出産業についての仲介などをお願いしているとか。
例えばＢＦ団。
ビッグ・ファイアと言う首領の下に集った、十傑集と呼ばれる十人の超人を中心にした組織で、黒井鎮守府とは友好関係にあるとか。
このように、悪の組織としての地位を確立しながらも、艦娘とのコミュニケーションを欠かさない提督には本当に頭が上がりません。
「提督、私、お茶を淹れてきますね！」
せめても、それくらいは……。
「おう頼む。あ、はいはい、Ｄｒ．ドゥーム？久し振りですね。技術交流の件ですが……」
死んだ魚のような目になりつつも、テキパキと仕事をこなす提督。
五人に分身しながら、電話対応しつつ、お歳暮の仕分けをし、年賀状を書く。
控え目に言って人間業じゃないですが、どうしても今すぐに仕事を終わらせたいそうで……。
何でも、お正月と言うお祭り騒ぎに参加したい、とのことで。あと、笑ってはいけないやつを見たいだとか何だとか。
提督はお祭り騒ぎが好きですから。何もなくとも、年中宴会をするような方ですからね。
「はい、お茶です、提督」
「ありがと。はい、こちら悪の組織黒井鎮守府です。密輸？ええ、やりますよ」
一瞬でお茶を飲み干した提督は、仕事に戻ります。
「やらなきゃ……、お仕事しなきゃ……、年越す前に終わらせたい」

「頑張って下さい！」
ああ、応援することしか出来ないこの身に怒りを覚えます。
私にとって、提督は神にも等しき、いや、神そのものなのですから。
提督が辛い思いをなさっているのならば、私もまた同じく、辛いのです。
ああ、私の、私の神様。来年も、誠心誠意お仕えしますからね！
「うおおおお！夜までには終わらせて、こたつの中で皆んなで年越しそば食べながらお酒飲んでダウン○ウンのアレ見るのおおおおお!!!」
ええ、ええ、今晩はご一緒しますとも！

２１２話　むらさめむらむら

「やーん??提督のえっちー??」
「はっはっは、良いではないか良いではないかー」
ベッドの上からこんにちわー、旅人でち。
皆さんいかがお過ごしですか?大変なお仕事、頑張ってますか?しっかりと勉学に励んでますか?
俺?
いやあ、俺は村雨とイチャイチャするので忙しくて……。
「ああん、駄目だよ～、そんなところにちゅーしちゃ～??」
今、寝起きなんだけどね、昨日は色々あって白露型の部屋で寝たからさ。
丁度、同じ布団に入っていた村雨が甘えてきてさー。
いやー、申し訳ない。イチャイチャして申し訳ない。いっそもうイチャイチャと言う効果音が出るほどにイチャイチャして申し訳ない。
こーんな超ウルトラハイパー美少女と同衾できちゃうなんて、俺はなんて特別な存在なのだろうか。ヴェルタースオリジナルもびっくりだぜ。
「提督ったら、村雨にむらむらしちゃった～?」
「おー、しちゃったしちゃったー」
実際、村雨にはむらむらポイントが多い。活発ながらもどこかセクシーさを感じさせる雰囲気、白魚のような手指、金色の髪……、どこを取っても可憐な美少女だ。
そんな美少女とベッドの上で絡み合えるとは、なんと幸せなのだろうかと、自らの幸せを噛み締めながら、村雨を抱きしめる。
んああやわっこい!細っそりしてて華奢!かわいいなぁんもぉ!!
「朝からしちゃう?ヤっちゃう?」
「ヤっちまうかぁ!」
ズボンを下ろす。
窓に艦載機。
チッ。

ズボンを上げる。
「いや、駄目だ、それはできない」
「良いじゃん良いじゃん！提督になら、村雨の良いところ、見せてあげちゃうよ??」
良いところ……！気になる！村雨の！ちょっと良いとこ！見てみたい！
「でもぉ、代わりに、提督の良いところも、見せて欲しいなぁ……??」
ズボンを下ろす。
窓に監視ロボ。
チッ。
ズボンを上げる。
「朝だから、まだ朝だから」
「提督のここは準備万端って言ってるよ？」
「朝だから！それ朝だから！」
寝起きと言うことで『月は出ているか？』状態の俺の『サテライトキャノン』をガン見される。
いかん、教育に悪い。鎮まれ、鎮まるのだ。
「にしても、服の上からでも分かるけど、提督のって大っきいよね??」
「なーに言ってんのよこの子は」
他の男の『サテライトキャノン』見たことあんのか？男も知らないくせに。処女めが。
「ネットのえっちなビデオで見たよ？」
あ、そう来る？
「コラ、そんなもの見るんじゃありません！」
「いやいや、後々の為に知っておく必要が」
「１８禁なのです」
「お酒は勧めてくるのに、えっちなのは駄目なんだ？」
ん？んー、それもそうか。
「じゃあ、お酒と同じく、用法用量を守って使うんだよ」
あと、触るときは綺麗な手でな。
「まあ、提督以外の男の人じゃ興奮しないんだけどね」

「それは、喜ぶべきことなのだろうか」
「喜んでよー、私を独占できるのは、提督だけってことなんだから」
そう、か？

俺の『サテライトキャノン！』も鎮まり、朝食を済ませた頃。
「手伝って、提督！」
「おう、何だ」
村雨がまた来た。
「今晩は星の配置が丁度いいから、星間旅行をしようと思うの！」
「なるほど、それは良い。で？」
「黄金の蜂蜜酒作るの、手伝って！」
黄金の蜂蜜酒は特殊な材料を使った魔力を込めた酒。つまり魔力を貸せ、と。
まあ、良いか。
「ヨロコンデー!!」
魔力込めるだけで良いなら手伝うよ。
「良かった、来て」
村雨に手を握られ、白露型の工房へ。
工房……、白露型の根城だ。西洋風の古い様式の建物で、電気は通っていない。ろうそくや暖炉に照らされた薄暗い部屋の中には、魔道書や魔術的に価値がある物品が並ぶ。勿論、魔術的な保護で要塞化されてもいる。
「ええと、黄金の蜂蜜酒の壺は？？？

「ありがと、助かったよ提督」
「はいよ」
　魔力回復のポーションを飲みながら、壺を返す。
「……何でわざわざポーション飲むの？」
「魔力が満タンじゃないと落ち着かないんだよ、職業柄」
「？　提督は無職じゃなかった？」
「旅人ですぅー！無職じゃないですぅー!!」
　無職じゃないですぅー！働けないんじゃなくて働いてないだけですぅー！兎に角、旅人的に、魔力は満タンじゃなきゃ怖いのだ。ほら、こまめにガソリン入れる人みたいな……。
「旅人やってるとな、まあ、急にニャルラトホテプに連れ去られたり、黒い腕に引きずり込まれたり、意識がなくなったり、事故ったり、転移失敗したり、時空を超えたりするんだよ。そんな時、魔力が満タンじゃないと急な出来事に対応できないだろ？」
「変なことに首突っ込むからじゃないかな……」
　俺クラスになると変なことの方からやって来るのよ。
「ま、常に万全の状態でいようってことだ！」
「なるほどねー」
　分かってくれたか。
「あ、そうだ、ちょっとポーション貸して？」
「ん、欲しいのか？だったら新しいのを……」
「違くて……、んー」
　ああ、はい、口移しで飲ませたい、と。
　ポーションを口に含んで、顔をこちらに向けてくる村雨。誘惑しおる。
　しょうがないなー、こんな小さい子にこんなことするのは不本意なんだがなー。
　詳しい描写はしない。いかがわしいからだ。ただ、ご馳走様でした、とだけ。
　……村雨はいつも、こちらを揶揄うような惑わせるような絡み方を

してくる。
百戦錬磨の女誑しな俺だが、ちょっと気を抜けば村雨の魅力にやられてしまいそうになるから怖い。
もうほら、男なんて下半身は別の生き物だからね。むらむらしてやった、後悔はしてない、とか言い始めるからな。
「ありがとー、提督。助かっちゃった！お礼にお酌してあげるー！」
「おっ、良いねえ」
昼間から飲酒宣言とは、挑戦的だな。良いご身分だ。だが、艦娘様に提督様と実際に良いご身分なもんでね。
「昼間から飲む酒は美味いんだよなー」
「ねー」
真面目に働く社会人諸君には悪いが、俺達は飲むぞ。まあ昼間に酒を飲まないのは日本人くらいのもんだろ。ヨーロッパの方とか行けば分かるが、昼間に酒飲んでそのまま仕事に行くとかザラだぞ。
「乾杯！」
「乾杯！」
俺は間違いなく酒に強いし、村雨も艦娘らしく酒に強い。昼間から飲んでも仕事に支障は出ないだろうぜ。
まあ、俺も村雨も仕事らしい仕事は無いんだが。暇してる。
「んー、美味しっ」
因みに、村雨は赤ワインが好きらしい。
俺は……、特に拘りは無いな。強いて言えば強い酒が好きだ。
だが今は、村雨に合わせて赤ワインを。
んー、優雅だ。昼間から飲酒という事実が更に酒を美味くする。
「ん、ミュジニーか」
「すごーい、正解！よく分かったね提督！」
「この繊細な味わいはミュジニーだ、そりゃあ分かるさ」
因みに俺はソムリエの資格を持ってる。イタリアで取った。
「……前々から思ってるんだけどさ、そんなに色々できるのに、何で真面目に働かなかったの？」
そんな人をニートみたいに……。

「真面目に働くとか、向いてないしな。どうしようもないくらいに、ふらふらと旅すんのが好きなんだよ」
「……じゃあ、提督のお仕事も、嫌？」
「……気に入ってるさ、それなりにね」
そろそろ辞めたいけども。旅に出たいけども。
「もしも、もしもね、また旅に出ちゃうなら……、私も、白露型も、皆んなも、連れて行って……、くれる？」
「……ああ」
……ああ、そうだな。
でも、面倒を見てはやれないだろうしな。どう、かな。一生一緒って訳には、中々、なぁ。
「……ふふ、良かった。嘘でも、一緒にいて良いって言われるだけで、私は十分。十分幸せ、だよ」
……そっか。

「提督、提督！星が見えるよ！行こう！」
星辰の位置が正しく定まるこの夜更けに、俺は村雨に手を引かれ、外に出る。
綺麗な、夜だ。
星達の輝く夜だ。
俺と村雨は昼間に作った黄金の蜂蜜酒を飲み、魔力を込めた石の笛を吹いて、唱える。
「Ｉａ！　Ｉａ！　Ｈａｓｔｕｒ！Ｈａｓｔｕｒ　ｃｆ，ａｙａｋｖｕｌｇｔｍｍ，ｖｕｇｔｌａｇｎ，ｖｕｌｇｔｍｍ！Ａｉ！Ａｉ！　Ｈａｓｔｕｒ！」
すると空から、烏でもなく、土龍にでもなく、禿鷹にあらず、蟻にあらず、吸血蝙蝠とも違い、腐れ爛れた人間とも違う、空を飛ぶ化け物が現れる。
……ビヤーキーだ。
「行こう、提督、行こう」
何の躊躇もなく化け物に乗った村雨が、手を差し出す。

「ああ、行こうか」
「どこ行くー？」
「村雨と一緒なら、どこでも」
「じゃあユゴス覗いてこようよ、ユゴス！」
「ああ、良いとも」
君と一緒なら、どこだって天国さ。
さあ、行こう。
星の彼方へ……!!
と、言う訳で、ビヤーキーに乗って、肉体を保存して精神だけになって、そのまま宇宙へ。
行き先はユゴス辺り、冥王星辺りの星だ。ミ＝ゴって言う蟹みたいな化け物が住んでいる星だ。
黒く窓のない塔が立ち並ぶ都市とか、不思議な鉱物の大鉱床とかしかないんだが、村雨はそれで良いのだろうか。
「？」
……本人は満足そうに見えるし、まあ良いか。
さーて、久しぶりの星間旅行だ。楽しもうね！
「綺麗……、綺麗だよ提督。宇宙から見る星は、とっても綺麗！」
音より早く、光の速さで空を駆け抜け、星と星との間を飛ぶ俺と村雨。
「はっはっは、この大空に輝く星々よりも、君の方が綺麗さ、村雨」
「やだもー??」
好感度アップも忘れずに。
……いや、今更好感度稼いでどうすんだよ？クソッ、気を抜くとこれだ、すぐに女の子を口説いちまう。悪癖だと分かっちゃいるがやめられねえ。
そして地球が豆粒より小さくなった頃、村雨が口を開く。
「……ねえ、提督？提督の夢は世界征服なんだよね？……何で？征服してどうするの？」
「これは知り合いの悪の組織の総統の受け売りなんだが……、くだらない国境を取り払って、世界をひとつに結ぶことで、疑いやいがみ合

いや傷つけあうことなく、格差を無くし、誰の子供も自分の子供のように愛する世界にするための世界征服……、なんてな」
まあ俺は、そこまで考えている訳じゃないが、人々が争い合うことがなくなれば、旅はもっと楽しくなると思ってな。
そして自然への愛情、敬意を忘れずに、世界の全てを愛せるようになったら、きっと素敵だと、そう思ったんだ。
「そう、そうね、それは素敵ね、とっても素敵ね……！」
そうか、そう言ってくれるか。
……こうして、夢の話をしているうちにユゴスについて、最終的にユゴスを覗いて帰った。
いやあ、途中で神格に捕らえられたりせず、至って平和な星間旅行だったな。
「また行こうな、村雨」
「うん！」
平和平和、毎日が、世界がこんなほのぼのだと良いんだけどなー。
ま、そのためには、世界を征服しなけりゃな！
さあさあ、明日も世界征服頑張るぞー!!

２１３話　トランスジェンダー論

「ＴＳビーム!!!」
「うおっまぶしっ」
な、なんなんだ一体？
……ん？身体が、おかしい。
「あぐっ、おお、おおおおおおお!!!!」
焼け付くような感覚。血肉や骨格を組み替えられる感触。……これは、変異だ！
……どうなった？
視線が少し低くなって、手足が細くなって、胸が大きくなって、ナニが消えて……。
「お、お、女になったのか……？」
なん、何で？女？何で？
「ふふふふふ……」
「明石だな……。これはどう言うことだ？」
現れた明石は、笑いながらも口を開く。
「私は考えました……。何故、提督は私達を抱いてくれないのか、と」
「それは、いつも説明してるけど、子供できたら困るとか、一人抱いたら全員抱く羽目になるとか、鎮守府崩壊の危険性とか」
「そんな時、私の中に天啓が舞い降りたのですッ!!」
明石は、逝っちゃった目で叫ぶ。
「……あー、その、天啓ってのは？」
「レズセッ○スならオーケーじゃないか、と」
……。
「……」
何言ってんだ？
「レズセッ○スならば、怒られる心配はないのではないか、とね！」
「大丈夫か明石？クスリでもキメてんのか？」
「いえ、クスリはやってません。でも恋はしてます！」
恋した相手をＴＳさせるのか。たまげたなぁ。

「例によって一晩で戻りますので、安心して私とレズセッ〇スして下さい！」
イかれてるよ、お前……。
「まあ、良いや。おいで明石」
「ヒャッホウ！」

レズなので卑猥ではない。猥褻は一切ない。
ただおっぱいを揉まれただけだ。
俺のおっぱいを。
ボンキュッボン。
何でか知らんが、メチャクチャスタイル抜群の女になったのだ俺は。
これはノースティリス式の性転換だ。
即ち、男性だった頃の魅力がそのまま女性の時の魅力に反転する。
つまり、イケメンの俺が女体化すれば、美女になるって寸法よ。即ち今の俺は旅人オルタ！いや、プロト旅人か？分からん。
スレンダーながらも肉感的で、活発な雰囲気のナイスバディ。うーん、可愛い。自画自賛だが良い女だ。
と言う訳で、圧倒的美女になった俺は、鎮守府を歩き回った。そう言うのもある意味面白いと思ったからだ。
「……誰かしら、貴女は」
すると、大井っちに呼び止められた。
「あら、分からない？俺だよ、俺！」
「分かんないわよ！」
「俺だよ！俺だよ！」
「だから分かんないって！」
「俺だよ!!!」
「……提督？」
やっと分かってくれたか。
「え？なん、何で？女？何で？」
大井は困惑した。気持ちは分かる……。

「何で女になってるのよーーー!!!」
「知らん。そんなことは俺の管轄外だ」
「知らんじゃないわよ!!」
　おーおー、お怒りだぜ大井っちよぉ。
「元に戻るのよね？」
「戻るよ」
「……なら、良いけど。ずっと女のままなら、どうしようかと思ったわ」
「いやいや、俺が女の子でも大井は困らないだろ」
「困るわよ！」
　あれ？大井はレズって聞いたんだけどな。
「レズじゃないの？」
「……は？はぁぁぁぁ?!!何言ってんのよ?!私はレズなんかじゃないわよ?!!」
　クレイジーサイコレズとはなんだったのか。所詮は風評被害か。
「だって北上……」
「北上さんは親友で姉妹なだけよ?!同性愛的なアレじゃないわよ！大体にして私が好きなのは提督だけ……、あっ」
「そっか、大井は俺が好きなのか。ありがとな」
「待って、今の無し、今の無し!!」
　顔を真っ赤にして首を振る大井。大井はすぐに口を滑らすなあ。
「ぐぬぬぬぬぬ……。だ、大体にして何よその身体！下品な胸とお尻!!」
　これ？いやー、なんかでっかくなっちゃった。
「まあまあ、ほら、俺と流行りに乗ってレズールアーンと行きましょうぜ」
「お断りよ!!」
　レズはお好みじゃない？あらそう？
「兎に角、早く元に戻りなさい！男の提督の方が、その、素敵なんですから！」

いやー、やっぱり大井っちは可愛い。
レズは拒否られたが、まあ、良いだろう。強要はできないからな。
ノンケに迫る同性愛者ほど罪深いもんはねえからな。
「えい」
「おっと危ない」
そんなことを考えつつ、廊下を歩く俺の首の後ろに手刀が。
「侵入者、駄目……」
山風だ。侵入者を排除する、艦娘の基本方針に忠実だな。
「山風、俺だよ、俺」
「ん、え？提督？」
流石山風。脳内の瞳で本質を見抜くか。一発で誰か分かったみたいだ。
「提督、何で、女の人になってるの？侵入者かと思って、びっくりしちゃった……」
「何でだろうな。なんか知らんけど女の子になっちゃったからな。まあ、なっちゃったもんはしょうがないってことで。ほーら山風、ママだよー」
俺自身がママになることだ……！
「えっ？提督、あたしのママなの？」
今日はママだ。いつもはパパの気分だが。
「甘えて、どうぞ」
「うーん？わ、分かった」
いまいち納得してないようなしているような、そんな様子で俺に抱きつく山風。
俺の胸の谷間に山風の顔が押し付けられる。あら〜〜、良いですわゾ〜。
「……おっぱい、大きい」
「んー、アレだね、男性の時の性的魅力が今の魅力に転換されてるからね。つまり、俺はイケメンだったってことさ」
「なる、ほど？」
これまた、頭の上に疑問符を浮かべながらも、俺に抱きつく山風。

細かいことはいい、今の俺は超絶美女ってだけだ。
「んん、落ち着く」
「よしよし、良い子だな、山風は」
なるほどな、この気持ちが母性か。
山風は俺が守る。守護らねば……。

山風は俺の胸の中で眠った。安心して眠くなっちゃったみたいだ。可愛らしいもんだな。
そんな山風を俺の部屋のベッドに寝かせて、俺は鎮守府の徘徊を再開する。
……いや、そろそろ晩飯時だな、食堂に行かなくては。
「さあ、鳳翔！料理を作るぞ！」
「……え？誰ですか？」
と、鳳翔。
「提督さんのお知り合いですか？」
と、速吸。
「？」
と、間宮と伊良湖。
「俺が……、旅人だ！」
と、キメ顔で言ってみると、
「旦那様が、女の人に？」
「はえ～、すっごい」
「スタイルが凄いですね……」
「美人さんですねえ」
割と受け入れられた。
なるほどな、俺が女になっても、愛は変わらないのか。素晴らしいな。
ってか、皆んな、適応が早くない？
「いつものことですから」
なるほどな、突然獣化したりしてるしな。
俺の性別が変わるくらい、黒井鎮守府じゃ日常茶飯事ってことか。

「因みに、いつ男の人に戻るんです？」
「明日には戻るってさ」
「良かった」
　ホッとした様子の速吸。
　戻れば変異していいのか（困惑）。
「って言うか、私より大っきいですねこれ。どうなってるんですか」
　と、間宮に胸を触られる。
「狡いですよ、提督！」
　何故か伊良湖に怒られる。
　まあ、どこがとは言わないが、特盛りの間宮より更にデカイからな、これ。
　並盛りの伊良湖が怒るのも無理ないかもしれん。
「愛宕さんクラス……、反則です！」
　伊良湖よ、そんなに気に食わないかね。
「私が提督を悩殺したいのに、提督の方がセクシーってどう言うことですかぁ！」
「まあまあ、伊良湖ちゃん……」
　間宮に窘められる伊良湖。
　まあ、仕方ないよね、伊良湖の気持ちも分かる。
　好きな男が超ウルトラセクシーボイン姉貴になったんだもんな、お察ししますわ。
「でも本当に……、大きいですね」
「外国の女優さんみたいです」
　鳳翔と速吸に褒められる。褒められてんのかなこれ。
「その、触っても？」
「鳳翔？！」
　どうした！トチ狂ったか？
「いえ、その、私自身、あまり大きい方じゃないので……。ちょっと、触ってみたいなあ、と」
　ん、あー、なるほど？
「まあ、良いよ、減るもんじゃないし」

許可しちゃう。あ、減るもんじゃないしってのは俺個人の意見だからな。普通の女の人の胸をいきなり揉んじゃ駄目だぞ。同性でも駄目だぞ。
「あ、私も触って良いですか？」
「いいよぉ」
速吸も触りたいらしい。
確かに鳳翔も速吸も並盛り……、平均か、それ以下かだもんな。いや、俺が巨乳美女ばかり口説くからおっぱいに関する評価基準が高くなってるだけなのかもしれんが。
別に巨乳好きって訳でもないんだけどね。
兎に角、揉みたいなら揉んでいいよぉ。
「……なるほど、これが巨乳」
「うわー、でっかいですねぇ」
いやん、揉まれてしまった。
もうお嫁に行けないわ。行く気はねえけど。

鳳翔達は気の済むまで俺の胸を揉んだ。
風向きがおかしい。
エロい流れはロクでもない結果になる。
エロは駄目だ、エロは駄目だ。
「て・い・と・く??」
「お、大淀……」
あちゃー、終わりだ。
「くふふ、女の人になった提督も素敵ですねぇ」
「や、やめろ大淀。レズだぞ、同性愛だぞ」
「関係ありませんよぉ、提督が提督であれば、私はそれで良いんです。……提督、今晩はですね、折角女性になられた、と言うことなので、女の悦びを知っていただこうと！」
「や、やめてくれ」
や、やめろ！そのブルブル震えるあれを近付けるな！ウィンウィン動くあれを近付けるな!!

「さあ、遠慮せずにメスアクメキメて下さいね！」
「あ、あ、あ、アッーーー!!!!」

２１４話　必殺技開発日誌

「く、は、ははは、ははははは！弱いでありますなぁ、深海棲艦！脆い、鈍い、弱いっ!!!」
深海棲艦を朱槍で蹴散らしながら、嗤うあきつ丸。
あきつ丸は元気いっぱいで可愛いなあ。あと、槍を振るう度におっぱいぷるーんぷるーん!!総統閣下も納得のお乳だ。
そんなことを考えつつ、疾風の如きスピードで処理されていく深海棲艦を横目で見ながらも、俺は、戦いを続ける。
「はあっ、せいっ、よっと!!」
鉄山靠、回し蹴り、後ろ回し蹴り。
鎖骨打ち、フック、肘打ち、裏拳、アッパー、南斗聖拳。
ここまでやって、やっと一体。
さて、ここで俺とあきつ丸のキル数を数えてみよう。
あきつ丸：２５７
俺：１８
ご覧の有様だよ！
嘘、私のキル数、少な過ぎ……？
自分の役立たずっぷりに思わず涙がちょちょぎれそうだぜー!!

「と言う訳だ」
「はあ」
鎮守府に帰ってきた俺とあきつ丸。
「ひょっとして、俺は……、クソザコナメクジでは？」
「いえ、提督殿は防御と回避に特化しているのでありましょう？何も撃破数が全てと言う訳でもあるまいし……」
気を遣ってくれているのか、あきつ丸？
良いんだ……、俺がザコなのは周知の事実だ。
「そもそも、提督殿の役割は艦隊の指揮では？戦う必要がないでありますよ」
そうかな？

「でも俺は主人公だぜ？俺ＴＵＥＥＥＥする義務みたいなの、あるじゃん？」
「はあ……」
　分かっていないご様子。
「強くなくては、提督と名乗れないのではないかな」
「いえ、強さに関係なく、貴方は、自分達のたった一人の提督殿でありますよ」
　優しい。
　流石はあきつ丸。思いやりの心に溢れていやがるぜ。
「だが、俺は思うんだ。このままではいけない！と。毎日百体のペースで深海棲艦を倒して回るうちの艦娘の皆んなを指揮する手前、もう少しくらい強くなるべきだ、と！」
　俺なんて、今日は結局３０体も倒せなかったからな。
「まあ、提督殿が強くなりたいと仰るならば、誠心誠意お手伝いする所存でありますが」
　ならば、早速特訓だ！
「着いて来いあきつ丸ェァ!!!特訓の時間だァーーーー!!!!」
「はっ、了解したであります」

「まずは、だな、必殺技だ」
「はあ」
「必殺技が欲しい」
「必殺技、でありますか」
　そう、必殺技だ。
　ヒーロー皆んなが、場合によっては悪役も、皆必殺技を持つ。
　必殺技。書いた通り、必ず殺す技である。
　必殺技さえあれば、こんな俺でも活躍できるんじゃないかと思うのだ。
「だからまずは、必殺技を編み出す」
「なる、ほど？しかしどうやって？」
　いまいち納得していない様子のあきつ丸に、どうやって必殺技を編

み出すのかと問われる。
うむ、どうするか？取り敢えずは、既存の技から何がインスピレーションを得るべきではないだろうか。
そんなこんなで、適当な木人を用意して、技を放つ。
「取り敢えず、今持っている必殺技を使ってみる。見ていてくれあきつ丸」
「了解であります」
「はあああ……！必殺、強制ストリップ真拳!!」
木人の服を即座に脱がせる。
これが俺の技、強制ストリップ真拳だ。
目にも留まらぬ速さで相手の服を脱がせる、必殺の技だ。
お次はこれだ。
「必殺！水龍敬ランドの刑!!!」
水龍敬ランドの刑……。
俺のもう一つの必殺技。相手にエロコスプレをさせる技だ。木人は瞬く間に卑猥な格好にさせられた。
「はあ、はあ……、どうだ？」
肩で息をして、あきつ丸の方を見る。
「どうだ、と言われましても……」
あきつ丸は、困ったような顔をして、言った。
「実質、火力ゼロでは？」
「ぐうっ、痛い所を突いて来やがる……」
そう、そうなのだ。
実質、火力ゼロなのだ。
「目にも留まらぬ速さで相手の服を脱がせる技、でありますか。正直、深海棲艦との戦いでは、あまり意味が無いでありますな」
「そーなんだよなー。深海棲艦との戦いとなると、単純な破壊力を求められるからなー」
単純な破壊力？そんなものはない。戦いは苦手なんだと言っているだろうが！
喧嘩騒ぎは好きだが、命をかけた、切った張ったの大勝負は得意

じゃない。慣れてはいるが。
深海棲艦との戦いのような殺し合いは、俺の最も苦手とする所だ。
人類皆兄弟みたいな気持ち悪いこと言うつもりはないし、立ち塞がる敵は殴り飛ばす気でいるが、それでも、殺しは得意になれない。
俺が銃器や剣などの武器が使えない理由もそれだ。「殺しが好きじゃないから」。
「向いてないんだよなぁ……」
そもそも、俺は戦わない。俺の判定では生き残れば勝ちなんだ、態々相手を殺す必要がない。やらなきゃやられる、みたいな場面以外では殺しはしない主義だ。
「そうでありますなぁ、提督殿は温和なお方。戦は苦手でありましょう」
「そーなのよ」
まあ、正直に言えば、温和な性格って訳じゃないが。
俺はなろう系サイコパス主人公らしく、美女には優しく、男には厳しいタイプなだけだ。
つまり、艦娘の前では優しい姿を見せているだけで、俺の本性は屑だ。いや、自分を卑下しているとか謙虚な姿勢とかそんなんじゃなくって。
ぶっちゃけ、下半身に忠実なだけなんだが。
だが、一部の艦娘は勘違いしている。俺を聖人君子だと思っている。
失望された時が怖いなぁ……。
「ううん、アレでありますな、強力なまじないの類とかは？」
まじない？まじない……、うーん。
「マスタースパーク、スターライトブレイカー、ソウルの奔流、メテオ、ホーリー、メギドラオン……」
使える魔法を列挙してみる。
「はあ？」
「レーザーが出る。あと隕石が降ったり、大爆発したり」
「なんだ、強いではありませんか。やはり、切り札を隠し持っているの

でありますな」
「でも、反動で死ぬ」
「は？」
「魔力使い過ぎでパーンてなる」
　パーンて。
「パーン、とは？」
「だから、文字通り、内側から破裂するんだよ。マナの暴走で」
　限界を超えた魔力の行使は、身体機能を破壊するんだよなぁ。
「……あー、自分、まじないの類には詳しくないのでありますが……、使い過ぎると死ぬので？」
「おう、死ぬ」
　詳しい描写はグロテスクなんで避けるが、よりポップに言えばザクロみたいになる。
「えぇ……（困惑）」
「でも安心しろ、そう言う時はあらかじめ、死んでもいいように蘇生魔法をかけておくんだよ」
　んなもんリレイズよ。
「……自らの死すら、織り込み済みだと？」
「勿論よ」
　ドヤ顔を晒す俺。
「……あー、良いでありますか、提督殿」
「おう、何だね、あきつ丸」
「死ぬのは、なりません。絶対に、なりません。提督殿が死ぬくらいならば、このあきつ丸が死にます」
　俺だって、積極的に死のうとは思わない。ただ、死ぬべき時には死ぬが。
「分かってる、分かってる」
「いいえ、分かってなど、いないであります。提督殿は自分の全てであります。何よりも愛する提督殿が死すくらいならば、自分も後を追わせて頂く」
　うわ、出たよ、後追い自殺宣言。

うちの子は皆んなそうだ。俺が死ぬくらいなら自分が！とか、後追い自殺します！とか言う。そんなことしなくて良いから……（良心）。
「はぁ、良いか？いつも言っているけど、俺が死んだって後追い自殺なんてするなよ？そんなことしたら嫌いになるからな」
「例え、提督殿に嫌われようと、提督殿のいない世界にいるよりはマシであります」
にこり、と。花の咲いたような笑顔で言うあきつ丸。いや、怖いよ、なんで笑顔で後追い自殺宣言してんの？
「分かったよ、なるべく死なないようにするから」
「ええ、そうして下さいであります」

「あきつ丸ー」
「はい？」
「結局、必殺技思いつかなかったなー」
「ああ、そうでありますね」
付け焼き刃じゃ駄目ってことなのかもな。
「まあ、アレです。必殺技、などに頼らず、普段から繰り出す一撃一撃に必殺の気迫を込めれば良いんでありますよ。少なくとも、自分はそうしているであります」
「おお、それ、なんかカッコいいな。採用」
なるほど、リュウセイさんみたいに、常に適当な必殺技ブッパしてるみたいに戦えば良い訳だ。
一撃一撃が必殺なら、必殺技なんて必要ない。道理だ。
「じゃあ、俺もそうやっていくわ」
「ええ、そうして下さい。決して、外法には手を出さず、真っ当な戦いをして下さいであります」
「おうよ」
常に真っ当な戦いをしているつもりだが……。
もし、もしも、これからの戦いで、俺が無茶しそうだったら、その時は。
「頼らせてもらうよ、あきつ丸」

「ええ！このあきつ丸に、どーんとお任せ下さいであります！」

215話　バレンタイン

バレンタインだ。
ヤクルト？いやそれはバレンティンだろ。
褌の日？いやいや、バレンタインだよ。話を逸らすな。
何々、チョコレートを渡すのは日本の風習だって？欧米では親しい人にプレゼントやお菓子を贈る日？良いんだよ、今は日本にいるんだからさ。
本場では愛の告白なんてしない？良いだろ別に、日本の風物詩だしさ。
いくら否定されても、今日がバレンタインで……、
「「「提督！チョコレート、どうぞ!!」」」
俺が、沢山の艦娘に囲まれてチョコレートを渡されてる事実は変わらないんだよ。
「ありがとう、いやあ、ありがとう」
モテモテだな俺。モテモテだわ。
モテモテ過ぎて困っちゃうなー。
既に山程チョコレートを貰っている。山程だ。
手作りだったり、買ったものだったり、色々だが、兎に角沢山のチョコレートが押し付けられる。まあうちの鎮守府プラス音成鎮守府の艦娘プラス音成鎮守府の提督からの分で優に百個を超える。
こりゃあ食べるのに一日はかかりそうだな。
どんどん食べて行かねえと……。
紅茶を飲みながらチョコレートを食べる。うん、今日の仕事はこれだな。
それと、俺もチョコレートケーキを作っておいたのだ。ホワイトデーにはまた別のものをお返しするが、ホワイトデー関係なく皆んなに美味しいものを食べさせてあげたいという善意からだ。
折角のバレンタインデー、美味しいチョコレート菓子を食べてもらいたい。艦娘の皆んなはいつも頑張っているからな、幸せにしなきゃな。

そんなことを考えつつ、貰ったチョコレート菓子を齧る。うーむ、美味い。店売りの、手作りの関係なく、気持ちの込められた贈り物ってのが嬉しいよね。
「じゃじゃーん！」
「おお、急に何だい？」
休憩室の一室でチョコレート菓子を齧りつつ漫画を読んで寛いでいるこの俺に、急に背後から話しかけてきた艦娘は。
せーの、今日は何の日？
「子日だよー!!」
子日だ。
「旅人さん、旅人さん、子日からのチョコレート、あげちゃう！」
そう言って渡される可愛らしいチョコレート。飾りのついた小さなビニール袋に、ハート型に固められたチョコレートがいくつか。
あれだな、これは……、小・中学生の頃を思い出す……、可愛らしい一品だ。
「そ、そのね、子日のチョコレートはね、ほ、本命だよ？」
顔を赤くしてもじもじしながらも、そう伝えてくる子日。可愛らしい、可愛らしいじゃないか。
「じゃあ、頂こうか……」
ぽりぽりと音を立てて食べる。味は市販品のものだ。だが。
「……うん、美味しいよ、子日。ありがとう」
子日の愛情、という付加価値がこのチョコレートを最高級品以上に輝かせるのだ。
「本当？えへへ、嬉しいな！」
「俺からもチョコレートケーキをあげるよ。冷蔵庫にあるから好きなの食べてね」
「うん！」
俺が作ったチョコレートケーキ……、美味いぞ？自分で言うのも何だけど、美味いぞ？
冷蔵庫に向かった子日は、うーん、と少し迷うような声を出してから、ガトーショコラを取り出した。

「じゃあこれ貰うねー！」
「ああ、好きなだけ食べろ……」
でも晩御飯食べられるようにある程度加減して食べろ……。
備え付けてある食器棚からフォークを取り出して、俺の隣に座り、ガトーショコラを頬張る子日。
「んーーー!!美味しいーーー!!」
くくく、そうだろうそうだろう。
美味しく作ったからなぁ！
「……子日、何だか、負けた気がするよ？」
ん？あ、あー、そっか。
「もっと手の込んだものを渡した方が良かったかな？かな？」
自分は市販のチョコレートを溶かして固めただけのものなのに、相手の男はチョコレートケーキ作ってんだもんな、アレだわな。
「そんなことないぞ、こう言うのは気持ちが大事なんだ」
「そう、かな？」
「ああ！俺は、子日にバレンタインチョコを貰えて、心底嬉しいよ」
「本当？」
「本当さ、嘘じゃない。大切なのは愛情さ！」
「じゃあ、良いけど……。子日、お菓子作りとか、頑張ってみるかな？」
「良いね、その時は教えてあげるよ」
「うん、お願いね！約束だよ！」
「ああ！」
優しい世界。

いやあ優しい世界。
俺の貰ったチョコレートの七割には、毛、血、経血、唾液、愛液、爪などが混入しているが、子日のチョコレートには異物が混入していなかった。
良かった純愛だ。
さてさて、どんどん食べ進めていかないとな。
んー、これは足柄のチョコか。お、ゴディバじゃん。確か、「お菓子

作りは出来ないわねー。下手なもの作って渡すよりも、良いものを買った方が良いと思って」とのこと。足柄の良いところは、自分が何が出来て何が出来ないかしっかりと考えられるところだ。
鳳翔からは、きな粉と和三盆を使った和風チョコが。美味え、美味えぞこれ。ああ、全く、和食じゃ勝てないや。鳳翔凄い。
如月からは……、チョコレートマフィンだ。どこの、とは言わないが体液入り。ふわふわのマフィンの中にとろとろの液。えっちだ……。
感想を脳内に記録しつつも、着実にチョコレートを消費していく俺。
だが、まだ俺にチョコを渡していない艦娘も何人かいる。
つまり、チョコはまだ増える。
食べなきゃ……、チョコレート食べなきゃ……。
「提督？私からもチョコレートです」
おおっと、ここで追撃のグランドヴァイパー、チョコレートの量は更に加速した。
くれたのはそう、海風だ。
「ありがとう、海風」
礼を言ってチョコレートを受け取る俺。
「拙いものですが、目一杯愛情を込めて作りました。良かったら食べて下さい！」
「おう！」
手渡されたのは生チョコ。さて、食べてみるか。
さてお味は……？

……うん、血液の味!!

もう色の時点でアレだったからね。赤いチョコだったからね。
いやあ、これは……、美味しいと言って良いのか？これを美味しいと言えば、海風の一部を摂取して美味しいと言ったことになるじゃないか。それは変態的だ。

「ふふふ、お味はいかがでしょうか？」
「あー……、うー……」
なんて答えりゃ良いのか。困ったなぁ。
「美味しかった、ですか？」
んー、んー、んんんんー、んー、んー、ん、ん、ん、ラヴィ!!!
「美味しかった、と言って欲しいです……」
分かった、分かったよ。些か以上に変態的だが……。
「あー、何だ、その……、お、美味しかったよ、海風」
「く、くふ、くふひははは！」
すると、海風は……、ぶっ壊れた。
「ははははははは!!提督が!!提督が私を!!!私を美味しいと!!!あははははははははははははは!!!!」
あーもうめちゃくちゃだよ。
狂気のままに嗤う海風。
そっとしておこう。

テンションが上がった海風を放置して、更なるチョコレート消費へ。
もう一年分くらい食べてるんじゃないかな。
まあチョコレートと言っても中には異物が混入してるから、一割くらいはチョコレートじゃないものを食ってる計算になるけど。
このチョコレートの山の一割くらいはチョコレートじゃない。
「司令官」
「響か。チョコくれんのか？」
「それなんだけどね……」
するり、と布の落ちる音。
響は全裸に。
ん？
んんー？
「今からこの熱いチョコを私の身体に塗りたくるから、司令官は私を舐めて欲しいんだ」

んんんんー？
思考回路がショートしていらっしゃる。
何をどうすればそのような結論に至るのか、皆目見当もつかない。
「正気かな？」
「良く考えてみて欲しい、司令官。私は熱いチョコがかかって気持ちいい、司令官はチョコレートを摂取できて嬉しい。ｗｉｎ―ｗｉｎと言う奴じゃないだろうか」
何に勝ったの？負けだよもう。
「まずは乳首に……」
「待って待って本当に待って」
ヘラを持って胸に向ける響。ちょっと待とう？おかしいよ、おかしいからね。
もうＲ１８でやったらどうですか？とか言われちゃうから！
「それともこっちに塗るかい？」
「そっちはもっと駄目ぇ!!!」
「はぁ、はぁ、見てよ司令官。このチョコレート、熱々で……。身体にかかったらきっと気持ちいいよ……！」
こいつ、頭が……。
「兎に角、駄目だからね」
「そ、そんな……。じゃあ私はどうすれば良いんだい？」
「普通にチョコ渡して」
「渡すからお返しにこの鞭で打ってくれるかな」
「承服しかねる」
何でさ。普通にチョコ渡すだけで良いんだよ。この際何入ってようと文句言わないからさ。体液でも薬品でも好きなもん入れて良いからさ。
「くっ、分かったよ。じゃあチョコを渡すから、顔面を殴って……」
「殴りません」
「せめてビンタだけでも」
「女の子は極力殴らない主義だから」
「そう言うプレイの範疇なら良いでしょ！」

あー、もー、しょーがねーなー！
「分かった、分かったよ、叩くから」
「良し……！」
何も良くねーけどな！
「おら、よっと」
仕方なく、本当に仕方なく……。
「ひっ??ぎぃぃぃ????」

いろんな意味で逝った響を見届けて、俺は紅茶を飲む。
ああ、今日もお仕事、大変だな、と。
そんなことを、不意に、思った。

２１６話　修羅場を作る程度の能力

『嫌よねえ、あの子。ちょっと可愛いからって調子に乗ってるんじゃないの？』
『キモーい、ありえなーい』
《女の戦いスペシャル！本当にあった昼ドラみたいな話！》
と、テロップが流れるテレビを見つつ、一服。寒い時期だ、ほうじ茶が美味しい。
……女の戦い、か。
概して、女の子は陰湿で陰険だと言うが。
テレビでも、野球部のエースの少年と交際していた少女が、嫉妬心から陰湿ないじめに逢い、自殺に追い込まれる、と言うシーンがあった。
あとは、旦那の浮気相手に凄惨な報復をする女の人とか。
自分をフった男に復讐する女の人とか。
怖い。洒落にならん。
そして何が怖いって、俺も他人事じゃないってところだ。
「浮気した旦那と無理心中ですって。怖いですねー。提督も気を付けて下さいね」
俺の隣でほうじ茶を飲む古鷹が、ニッコリと微笑んで、言う。何それは？何かの警告？怖いよ？
「う、うちの艦娘はそんなことしないよな！な？！」
「ええ、ええ、そうですとも！私達艦娘は提督を不快にしたりなんてしませんよ！」
いつもと変わらない、満面の笑みで言う古鷹。綺麗だ。いっそ恐ろしいくらいに綺麗だ。
だが不安だ。
俺も、いつカナ―シ―ミノ―状態に、伊藤誠状態になるのかとヒヤヒウアいや、ヒヤヒヤしてる。別に首だけになっても死にはしないが。
「ですが、外部の女の人はするかもしれませんよ？」

「が、外部に女なんていねーし!!!」
その辺で女の子引っ掛けたりなんてしてないよ?ナンパなんてしてないよ?風俗も行ってないよ?ないったらないよ!
「いえ、良いんですよ。私は、提督がどれだけ女の人を囲おうと気にしませんから」
「か、かかか、囲ってないよ!本当だよ!」
「そうですか?でも、この鎮守府に提督の行動に文句を言うような躾のなっていないメス犬はいませんよ!」
メス犬とか言わないの!
「でもほら、嫉妬したりとか……。修羅場は起きてるよね?」
「最近は少ないじゃないですか」
まず、日常の中に修羅場があることに疑問を覚えようか。
「別に口汚く罵り合ったり、殺し合いを始める訳ではないのですから」
確かに、うちの修羅場は、空気が極限まで悪くなるだけで、悪口や暴力は無い。艦娘同士の仲は良好なのだ。だが、
「空気が悪くなるのがなあ」
困るんだよな。
「ヤンデレは本当に勘弁」
「何ですかヤンデレって」
「君達のことだよ」
「つまり?」
「病んでるしデレてる」
「病んでませんよ?」
どの辺が?
病みまくりでしょ。
「間違いなく精神を病んでるよ、君達は」
「そんなことありませんよ!皆んな忠誠心が高い、提督の従僕です!」
その辺りが病んでるって言ってるんだよなぁ。

あらすじ。どこもかしこもヤンデレばかりだ。
あの後も、少々話したが、どうやらヤンデレである自覚は一切ない

らしい。
んー、自分のことって中々気付けないモンよね。
そうだ、自分の異常さを感じて貰うために、艦娘を煽るのはどうだろう。
自分の感情が異常だと気付けば、少しはまともになってくれるかも。
些か以上に危険だが、やってみる価値はあるだろう。
「よし……」
ダッシュ。アンド……、
「鈴谷ァーーーー!!!」
「わぁ?!何?!何なの?!!」
「何ですの?!」
ゴー。
「鈴谷……、鈴谷ァッ……!!」
紅茶を飲む熊野を横目に、休憩室のソファーの上でダラダラとスマホをいじる鈴谷に突撃。平均より幾らか大きい胸に飛び込んだ。
「鈴谷」
「ど、どうしたの提督?」
「好きだ」
「ええ?……ふふ、ありがと」
少し困惑しながらも、好きだと告げられた鈴谷は口角を上げて礼を言う。
一方熊野は?
「あらあら……」
困ったように笑うだけだ。セーフ。
何だよ、嫉妬しねーじゃんか。
「よしよし、鈴谷は可愛いなぁ」
「えへへ、照れる〜」
「あらあら……」
なんてこたぁないな。
「おっぱい大きくなったなー」

「やん、揉んじゃだめぇ」
「……あらあら」
　嫉妬なんてしないか。
「良いではないか良いではないかー」
「ああん??」
「……」
　ふと気になって、ちらりと、熊野の方を見る。
　その時、ほぼ無意識に俺の心理学＜８０＞が火を噴いた。
　そして表面上は変わらないが、熊野の中に渦巻く強烈な嫉妬の感情を察知!!
「……」
　ヒィ、喋らないのが怖い!!!
「提督」
「はい！」
「何の、おつもりですか」
「いや、ちょっと……」
「私の目の前でこれ見よがしに鈴谷を可愛がって、何のおつもりですか」
「熊野に、嫉妬させてみようと……」
「そうですか。もう十分ですわ」
　そう言って笑う熊野。笑顔が怖い。
「ご、ごめんなさい……」
　クソッ、しゃーねーだろ！女の子に怒られたら平謝りするしかねーんだよ男ってもんは！
「……はぁ。何の悪ふざけか分かりませんが、私のことも可愛がってくれなきゃ嫌ですわよ」
「ごめんな熊野」
　熊野を抱きしめる。抱きしめるしかない。
　ここで機嫌を損ねたらどうなるか、そんなことは子供でも分かる。
「で、でもな熊野。そんなに嫉妬されたら、俺、困っちゃうよ」
「何か問題でも？鈴谷を愛する分だけ私も愛すればよろしくてよ」

そうだけどもね、そうだけどもね。
「熊野、良いかい？君達はおかしいんだ。嫉妬し過ぎなんだよ。もっと穏やかに生きて欲しいなーって」
「？、そうですか？」
「申し訳ないがヤンデレはＮＧってこと」
「ヤンデレ？」
「病んでるしデレてる」
「病んでませんことよ？」
病みまくりでしょ。
「そういうの良いから。自覚して。病んでるよ」
「はあ」
はあ、じゃないが。

説得したが、例によって無駄に終わった。
あれだけの病みっぷりに対して、自分が異常だとはかけらほども思ってないらしい。
これは決して俺の説得技能が低いからとかではない。
自覚のないヤンデレって怖い。
だが諦めない。皆んなのヤンデレを治すためにも、一肌脱いじゃおう。
さて、見つけたのは満潮と霞だ。
どっちを揶揄っ、いや、嫉妬させてみようか。
……霞だな。
「満潮」
「ひゃん?!な、何よ司令官?!」
霞の前にいる満潮に思いっきり抱きつく。背後から抱きついたからか、びっくりして変な声を出す満潮。
「愛してるよ」
「急に何なのよ……」
「突然ですまない。けど、君に、愛していると伝えたくなったんだ。この気持ちは止められない」

愛を止めないで。これが最後のフォーリンラブ、なんてね。
いよいよもってプライドも何もなくした俺は、満潮のようなロリに愛の告白をすることも可能なのだ。
もう怖いモンなしである。
「もう、変なの……??」
口ではそう言うが、満潮は、愛おしそうに俺の手を撫でた。脈ありですわ。
「こ、こ、こ、このクズーーー!!!」
一方で、霞はキレていた。
「霞、静かにしようよ。急に大声出したら皆んながびっくりするでしょ」
「あ、ごめんなさい……、じゃなくて!!急に何やってるのよこの変態!!」
おっふ、効くなあ、ロリから罵られるの、効くなあ。……マゾじゃないからね、傷つくんだよね。
「何って……、愛する満潮に思いの丈を伝えただけだよ」
「愛する、満潮……!ふふん??」
喜色満面の表情を浮かべる満潮に対して、
「ぐぬぬぬぬぬ!!」
悔しそうな、怒ったような顔をする霞。
「満潮、君はいつも俺に幸せをくれるね。嬉しいよ。世界で一番君が好きさ」
「んもう!調子良いことばっかり言って!」
「そんなことないさ、心の底から君を愛しているよ」
何千何万と言った口説き文句を連発だ。
「司令官が、私を……、うふふふふふ」
まさに夢見心地と言った雰囲気の満潮。
「う、う、う……」
「ん?」
「ひっく、ぐすっ、うううう……」
ああっ?!霞が半泣きだ!

「司令官の馬鹿ー！司令官は私のものでしょ?!」
ええ……？霞のものになった覚えはないんだけども。
「ごめんな、霞」
取り敢えず謝っておこう。俺は腰が低い旅人だ。謝るのは得意だぜ！
「許して仮面！」
そしてハジケリストでもある!!
「許さない!!」
ＩＧＡ、許されません。
「ゆるちてゆるちて」
「許さないってば!!」
参ったな、完全にヘソを曲げてしまったぞ！
「この場で心臓を抉り出すから許して」
「発想が猟奇的?!」
実際、それくらいしか許しを請う方法が思いつかん。女の子を泣かせるのは重罪ではないかね？
「そこまで、しなくても良いわよ！ただ、私は……！」
可愛がって欲しい、顔にそう書いてある。
……しょうがないにゃあ、良いよ。
「霞、君は俺の天使だ」
「あっ??」
「いつも美しい、俺の天使なんだ」
「んんっ??」
「もう離さない、君が全てさ」
びーまいべいべー。
「んふっ、えへへへへへ……??」
一頻り撫でたら、どうでもよくなったのか、蕩けた顔で俺に抱きつく霞。
くっくっく、ちょろいぜ。
某獣殿が如く、女は駄菓子と言い切る訳ではないが、俺も悪い男だと思う。

顧みる気はねえけども。
「司令官、だーい好き！」
「ははは、よしよし」

「さて」
「大淀さん、ちょっと提督にベタベタし過ぎよ～？」
「愛宕さんこそ、胸を押し付けるのはやめたらどうですか」
「提督の前で下らない争いはノー、デスヨ」
「提督殿が不快に思っているでありますよ」
「躾のなってないメス犬は鎮守府にいらないよ？そこら辺分かってる？」
「古鷹さん、そんなに切れてちゃ提督さんが悲しい気持ちになるっぽい。提督さんは優しい子が好きっぽい」
例によって、調子に乗り過ぎて、艦娘を煽りまくってしまって、鎮守府中がＦＦ１４並みのギスギスオンラインと化した訳だが。
「えーと、どうするかなー」
「「「……」」」
さて、困った時はどうするか？
うんうんそうだね、土下座、だね！
さあて、頭下げるぞー！

217話　ドキドキ！エロトラップダンジョン！

時に、諸君らは、エロトラップダンジョンと言うものをご存知だろうか。
知ってる人はそのままで、知らない人は説明しよう。
エロトラップダンジョンとは、その名の通り、エロいトラップに彩られたダンジョンのことである。
エロ触手、催淫ガス、淫魔……、あらゆるいかがわしいエネミーで一杯の回廊……。
それを、鎮守府の裏に作りました。挙って攻略して下さい」
「提督、誠に僭越ながら申し上げます。正気ですか？」

「さあやって参りました、黒井鎮守府エロトラップダンジョン！鎮守府の裏に、異世界と繋がるゲートを設置、そのゲートの先が、この俺お手製のエロトラップダンジョンとなっております」
鎮守府の皆んなには正気を疑われたが、俺は敢行した。
今、俺はエロトラップダンジョン中に設置された監視カメラから、ダンジョンを覗いている。
さて、最初の挑戦者は……？
『エロトラップダンジョン……、よく分かりませんが、司令官が来いと言うのなら、行かなくてはなりませんね』
んっん、朝潮かぁ……。
どうせならもっとセクシーな子に来て欲しかったが、これはこれで需要あるな。
忠犬朝潮のあられもない姿！私、気になります！
まずはエロ触手だ。さあ、どうだ……？
『？、触手？』
さあ、エロ触手よ！朝潮の服を溶かして、あんなところをあんな風にしてしまうのだ!!
『ガオメインバスター!!』
あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”?!!!
”?!エロ触手ーーー
?!!!!

……朝潮保有のエネルギー銃、ガオメインバスターで蒸発するエロ触手さん達。なんてことだ……、なんてことだ……。
手塩にかけて育てたエロ触手が一瞬で灰になってしまった。畜生めぇ!!!
次、次だ！次こそは!!
『これは？』
催淫ガスだ！
『くっ、ガスですか』
すると朝潮は、ガオメインバスターで次フロアへの壁を破壊して、ガスを吸わずに進んでいった。なんなの？何でこう上手く行かねえのかな？
って言うか、ガオメインバスターが便利アイテム過ぎる。
気を取り直して、次のフロアは、と。
おお、スライムか。服を溶かして、あんなところをああ言う風にするアレだ。
朝潮さんよ、ここは空気を読んで一発、
『ガオメインバスター!!!』
クソがッ!!!
またもや一瞬で蒸発するスライム達。スライムの調教もタダじゃないんだぞ、こっちの都合も考えてよ。
ええい、次だ！
マドハンド的なやつ!!マドハンド的な、手淫モンスターだ!!なんかこう、女性の愛液からエネルギーを得るみたいな都合のいいやつ!!!
行けぇっ!!!
『私に、触れるなぁ!!』
マドハンド的なやつーーー!!!!
『私に気安く触れて良いのは司令官だけです。消えなさい』
まるでゴミを見るような目でマドハンド的なやつを一瞥すると、爪牙でバラバラに切り裂いて殺した。
くそう、くそう。俺はただ、色々なエロトラップでエロエロになる艦娘が見たかっただけなのに！何も悪いことやってないのに!!

何だ？何が悪い？社会か？政治か？この世界か？
畜生、畜生、俺に過失はないと言うのに!!
『これは、宝石？貰っても良いのでしょうか……』
ああ、もうゴールしやがった。
『こんな高価そうなもの……。でも、ダンジョン踏破おめでとうと書いてありますし……』
良いよもう、あげるよ。持って行きな。
『これは、ダンジョンを踏破したご褒美という事なのでしょうか。なら、貰って行きましょう。問題あれば、後で返しに行けば良いですし』
はぁー……。

誠に遺憾ながら、我がエロトラップダンジョン一発目は失敗だったと言わざるを得ない。
まあほら、初回だから。大丈夫大丈夫、こんなこともある。
次こそは大丈夫だから。本当だから。次は、エロトラップに引っかかってエロエロになった艦娘が性的な意味で乱れまくるから。見とけよ見とけよ～？
さあ、次の挑戦者は……？
『しゃあねえなあ、行かねえと提督、泣くだろうしなあ……』
摩耶様である！
確かに、誰も来なかったら寂しくて咽び泣いていたところだ。そこら辺を何だかんだ言っても気を遣ってくれる摩耶はいい奴だと思う。
さて、摩耶、摩耶である。
巨乳である。
摩耶のような巨乳勝気美人が、快楽に呑まれ、トロトロのエロエロになる……。ああ～、良いっすね～。
頼んだぞ、エロトラップダンジョン！
俺に淫靡な光景を見せてくれ！
さあ、まずは第一関門、エロ触手畑だ！
『ふん！せい！どりゃあ!!』
おお、もう……。

スティール製の長剣、ノースティリス産固定アーティファクトの一つ、ディアボロスだ。
俺が譲ったその長剣を十全に使いこなす摩耶は、ノースティリスの一流冒険者程の実力も相まって、かなりの強さを誇る。
つまり、だ。
「エロ触手さーーーん!!!」
エロ触手達は一瞬で切り裂かれ、その生命活動を終わらせた。
まだだ、まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！
次、半透明丸呑みモンスターだ!!!
その名の通り半透明で、筒状のワームで、筒の内側にびっしり生えた小さな触手で全身を愛撫してくる卑猥なモンス、
『チェストー!!!』
うわあああああああ!!!半透明丸呑みモンスターーー!!!
輪切りに、輪切りにされてしまった……。なんてことだ……。酷い、こんなこと、許されて良いのか？おお、神よ……。
……ま、まあ、良い。ここまでは予想の範囲内だ。
次の、この、催眠光線照射器はどうかな？
この光線に当たれば、一発で即発情。メス堕ち待った無しだ。
『ふっ』
アッ、避けたァ!!!
『甘いんだよッ!!!』
そして、即座に間合いを詰めて装置を両断。あー、なるほど。当たらなければどうと言うことはない、と。
はっはっは、クソが。
ぐぬぬ、ならば！ならば、だ。獲物が剣なら、対応しきれない程の物量で押してやる！
群生するタイプのヒルだ！それも、体液を啜るタイプの！これが四方八方から襲いかかれば、流石の摩耶も……。
『うざってえな……！スウォーム!!!』
ああっ、駄目だ！摩耶にはスウォームがあったッ!!!
スウォーム……、周囲を薙ぎ払う技だ。摩耶の場合は回転斬り。竜

巻のような回転で、襲い来るヒルの群れを全て切り裂き、事なきを得た。
『何だ、こんなもんか。意外とちょろかったな』
ぐぬぬぬぬ。
と言う訳で、いとも簡単にゴールして下さった摩耶は、ゴール地点にある宝を取って帰って行った。
くやしいのうくやしいのう。

クソ、うちの子達強過ぎない？
濡れ場が全くないよ！はー、つっかえ！やめたら、この仕事？
『ここがエロトラップダンジョン……。提督に呼ばれたから、来たけど……』
ぬう、朧か。
駆逐艦……。
良いのだろうか？
まあ、良いか。もう駆逐艦とかロリとか、どうでも良いのだー!!
行けぇっ！エロ触手!!
『わわ、タコ？イカ?!……斬って良いのかなこれ』
そして斬殺されるエロ触手さん。分かってる！エロ触手さんが破壊されることなんて承知の上だ！これは格ゲーの小パンみたいなもん、取り敢えず出した牽制みたいなもん！
……朧の左腕にブレードの生えた盾の様な手甲が顕現する。綾波型の艤装だ。ナノマシンの集合体で出来ているらしい。
朧のそれの名はナイト、その名の通り騎士がモデルだ。綾波型の艤装の中でも最高の硬度を誇る。
兎に角、エロ触手は失敗、次の手に移る。
次の手……、拘束椅子だ。
座ったら最後、拘束されたのち、エロ拷問にかけられる。
因みに、この拘束椅子に座らなきゃ、次のフロアへの門は開かない。
さあ、どうする？
『この椅子に座れば、門が開くんだ。でも、罠だよねこれ。じゃあ

……』
あっ。
『ミストルティンの槍!!!』
右手に出現させた、高速振動槍、ミストルティンの槍で門を突破した……?!
『えへ、ちょっと反則かも』
ちょっとどころじゃない、完全に反則だ。
ゲームだったらバグ技って感じ。ある種の壁抜けだし。
まあ、良い。
私は許そう。寛大な心でな。
気を取り直して次、エロミミックだ。宝だと思って開けたら最後、内側から出てきた触手でネトネトのエロエロだ。
『わあ、宝箱だ！開けてみよう！』
ふふふ、今度こそ終わりだ!!!
『わー?!触手だー?!』
そう、そして……、朧は。
蹴り一発でエロミミックを粉砕して、フロアを押し通ったのであった。
やっぱり駄目か……。
だが、俺には奥の手がある。
『あら、可愛い子ねぇ』
『ふふふ、遊びましょ？』
『な、何ですか、貴女達は』
淫魔だ!!!
こんなこともあろうかと、魔界でスカウトしてきたサキュバスの皆さん……、こうかはばつぐんだ!!!
『小さめのおっぱい、素敵ね??』
『キュッと締まったお尻もキュートよ??』
はっはっは！レズなのでＮＴＲではないです！安心して下さい！
『さ、触らないで！』
『恥ずかしがらないで良いのよ～？お姉さん達と気持ちよくなりま

しょ？』
『天国に連れてってア・ゲ・ル??』
流石はサキュバス！流石は本職！堕落させるにはもってこいだぜ！
『触るな』
『がっあ、うう……?!あああああああ!!!』
『いぎぃ?!ぎぃいやぁあああああああ!!!』
うわあああああ?!サキュバスさん?!!
『朧に、触るな!!』
『わ、分かったわ！ごめんなさい！だから暴力はやめて!!』
『痛い……、痛いよ……』
容赦なく、サキュバスの手足を斬り飛ばした朧。
……急にキレるのやめてよ。
ああ、可哀想に。後でサキュバスさん達を治療しないとな。
『ああ、気持ち悪かった……。提督以外にベタベタ触られるなんて』
汚い物を触った、とでも言うように、身体を撫でる朧。そんなに？
そんなにか？
そうして、宝の前に辿り着く朧。
『ふう、やっと終わり。……何の意味があったのかな、このダンジョン』
本当にね……。無意味だったね……。

結局、この一日、エロトラップに引っかかった艦娘はいなかった。
誰もが皆、力押しと頭脳プレイでエロトラップを回避もしくは破壊して、押し通るのだ。
悲しいなぁ。
しょうがないから俺が淫魔に抱かれて来るか。
艦娘のエロシーンは一切なかったが、俺が一肌脱ぐんで許してくれ。
さて。

「さあ、行くぞぉおおおおーーー!!!」
「ヒャッホー男よ!」
「新鮮な男だーーー!!」
「精液よこせーーー!!!」

２１８話　衝撃！挨拶回り編　その１

「挨拶回りの時間だよ、挨拶回りの時間だよ」
「はぁ……？」
挨拶回りの時間だよ。
いや、新年明けてからすぐ行けよと言うお言葉は尤もだ。
だがね、新年は皆んなお互いに忙しかっただろ？だから、時期をずらして今、なんだよ。
そもそも知り合いに会うのに時期なんて関係ねぇんだよ（暴論）！！
「知り合い、ですか？」
大淀が聞き返す。
「そうだ！古今東西にいる俺の知り合いに会う!!トモダチ大事！超大事!!」
そう、そうなのだ。
世界各地を旅して回った俺には、実に多くの知り合いがいる。
友達だったり、恩師恩人だったり、はたまた、艦娘には言えないが恋人愛人だったりだ。
長い長い、人生と言う名の旅の途中、助けて助けられて、恋したりされたり、対立したり、喧嘩したり。一緒に笑ったり泣いたり。沢山の経験を積んできた。
そんな知り合いに、また会いたい。
会って話をしたい。
それが今回の趣旨になります。
まあ、知り合い側から会いに来い、顔を見せろって言われてるし。
行かなきゃ（使命感）。
「行ってきます!!」
「じゃあ、お供しますね！」
え？
いやいや、別に良いよ。
お供だなんて。アイルーじゃあるまいし。
「私は提督の秘書ですから！」

むむむ、そこまで言うなら付いてきても構わないが……。
「付いてきても面白くはないと思うよ？」
「大丈夫です！」
そう？

「……その、ここは？」
「んー？料亭」
「この方は？」
「総理大臣」
「ご関係は？」
「恩師かな？」
少し、緊張した様子の大淀。
無理もない、ちょっと高級な料亭だからな。
そこに、男の渋い声が響く。
「いや、新台は、命の恩人だ……」
内閣総理大臣、剣桃太郎さんだ。
「いやいや、そんなことないですよ。桃さんは俺の師匠みたいなもんですって。恩師ですよ恩師」
「フッ、稽古をつけたことなんて数えるほどだろう？」
「それでも、最高に為になりましたから。桃さんがいるから、今の俺があるんです」
「謙遜が過ぎるぞ」
「そんなこたぁないですよ。今だって艦娘に苦労かけてばっかりで……」
と、暫し談笑する。
桃さんは、さっき言った通り、数多くいる俺の恩師の一人だ。
特に氣功を使った戦いにおいては、俺の知り合いの中でも右に出るものはいない。
その上、頭も切れてイケメンだ。勝てないねこりゃ。唯一勝ってんのは若さくらいのもんか。
「……仲、よろしいんですね」

小声で耳打ちする大淀。
「ん……、ああ、そうだな。紹介しよう大淀。と、言っても、態々紹介しなくても知ってると思うが……。内閣総理大臣の剣桃太郎さんだ。桃さん、こちら、艦娘の大淀です」
「あ、はい。ご紹介に預かりました、軽巡洋艦の大淀です。よろしくお願いします」
「ああ、よろしく。護国の英霊である艦娘に会えるとは、喜ばしく思う」
ニコリと笑ってそう返す桃さん。あー畜生、この人何言っても様になるな。俺よりイケメン。俺が女なら惚れてる。
「そのぉ、つかぬ事をお聞きしますが……、どう言った関係で？」
「んー？まあ、話すと長くなるけど……、俺が救護のバイトやってた時に知り合ったんだよ」
「はぁ」
「桃さんは、若い頃、男塾って言う超絶スパルタ学校の生徒でな。そこで日夜死にかけるような闘争を続けていたんだ。そんな桃さん達を片っ端から回収して回復魔法かけまくったのよ」
いやあ、なんか知らんけど、急に、男塾名物！とか言って命に関わる曲芸バトルを始めるからな、男塾は。
その度に、酸の沼や奈落などに落ちた塾生を回収し、蘇生させるバイトをしてたんだよ。王大人って人と一緒に。
そんなことをやってたら、男塾の塾生と仲良くなれたんだよね。
それで、暇な時間に拳法を習ったりもしたっけか。お陰様で技のストックが増えるわ増えるわ。切れるカードが増えるのは嬉しいね。
「驚邏大四凶殺の時、覚えているか？あの時は、Ｊも冨樫も、虎丸も死んだとばかり……」
「あーはいはい、あの時ですね。あの時は酷かった。限界ギリギリまで回復魔法使ったせいで逆に俺が死にかけて……」
と、昔話に花を咲かせる。
こういう雰囲気ええわー。
まったりタイム！

「……それで？最近はどうだ？」
「どう、とは？」
「全く……。とぼけるなよ。鎮守府の運営についてだ。海軍からは良い話を聞かないからな」
そりゃー、そーでしょーよ。
大本営が俺のことを悪く言わない訳がない。
「何やら悪い噂ばかり聞くが……、大丈夫なんだろうな？」
「日本に害はありませんよ。それは約束します」
密輸くらいは見逃して欲しいが。
「……なら、良いさ。お前は罪のない人々をいたずらに傷つけるような男じゃないからな」
おっ、わちき許された。
「今の今まで、日本のために戦ってくれて、ありがとう。感謝している」
「いえいえ、こちらこそ。最初は厄介な仕事を押し付けられたとばかり思っていましたが、中々どうして、楽しい。海の平和を取り戻すまで戦う所存です」
と、握手を交わして、この場はお開きだ。

いやあ、桃さん、元気そうだったな。生涯現役って感じだありゃ。
漢気を感じたね。衰えてなんかいない。流石だよ。
さあ、そんなんこんなで次の日。今日も元気に挨拶回りだ。
「あら、旦那様？外出ですか？」
「おうとも。挨拶回りだ」
すると、ひよこのエプロンにほうきと言うめぞん感溢れる姿で正門の掃除をする鳳翔が声をかけてきた。
「挨拶回り、挨拶回りですか……。旦那様、私も付いて行ってよろしいですか？」
「良いけど……、何で？」
「いえ、私も、旦那様の妻として、取引先の皆様方に顔を見せる必要があるかと」

んんー、まーた厄介なこと言い始めたゾ。
まあ、良いか。もうどうにでもなーれ。
「分かったよ……、連れてってやるよ!!連れてきゃ良いんだろ!!!」
オルガ並みの感想。

「あらあら、ようこそ、新台君〜!」
「いやー、どうもどうも、将軍」
と言う訳でやって参りました、川崎市。黒井鎮守府から電車で一時間ちょっと。悪の組織フロシャイムの川崎支部だ。
「こんにちは、ヴァンプ将軍」
「あら、鳳翔さん!どうもー」
ここの将軍であるヴァンプ将軍と鳳翔は、お互いに料理という共通の趣味がある知り合いであるのだ。リアルではお母さんタイプ!!
悪の組織の将軍の趣味が料理?良いだろ別に人それぞれだよ。
「溶かすぞコラァ!」
「呪うぞテメェ!」
「やめなよメダリオ!カーメンマン!お客さん来てるんだよー!」
「離せウサコッツ!こいつまた俺のカップラーメン食いやがった!」
「だから悪かったって言ってんだろ!器がちっちぇえんだよお前は!」
あそこで言い争いをしてるのはフロシャイムの怪人達だ。
とは言え、平和だ。トムとジェリー並みにどうでも良い理由での喧嘩だからな。
大本営がドロドロと悪事をしている最中、フロシャイムや黒井鎮守府はこんな感じでほのぼのしてる。
どういうことなんだろうな。
「あーあー、やめなよメダリオ君、カーメンマン君!ごめんねぇ、新台君に鳳翔さん。騒がしくってー」
「いえいえ、いつも通りなようで安心しましたよ」
仲いいなー、うちも見習いたい。正直、俺絡みの修羅場の空気の悪さはヤバいからな。全編ほのぼののフロシャイムを見習いたい。

「メダリオー、新作のカップラーメンだろ？ほら、くれてやるよ！」
「お、サンキュー新台。ってか来てたのか」
　メダリオにカップラーメンを投げ渡す。
「んお、新台じゃん」
「よー、カーメンマン」
「新台さん、久しぶりー！」
「はいよ、ウサコッツ」
　と、怪人どもに挨拶して、と。
　悪の組織の会合っぽいことを始めるかな……。

「……いやー、新台君はね、ちょっとの間だけだけどうちで下宿して怪人やってたのよ～」
「へぇ、そうなんですか？」
　悪の組織っぽいこと、してたはずなんだがなぁ……。
　いつのまにか話は脱線、俺の昔話へ。ビール、ではなく発泡酒を煽りながら、俺がフロシャイムに下宿してた時の話をする将軍。
　なんかちょっと恥ずかしいな。自分で語る分には問題ないんだけど、他人の口から語られる過去話って何だか心がくすぐったくなる。
「新台君はねぇ、ちょっと決め手に欠けるけど多彩な技を持つからねー。レッドさんを翻弄して頑張ってくれたんだけど……、やっぱり駄目でね。肋骨折られて負けちゃったんだよ」
「まあ、そんなことが？」
「そうそう、レッドさんの喧嘩キックを避けて、顔にパンチを入れたところは凄かったんだけどね、攻撃が当たらないって段々イライラしてきたレッドさんが一気にギアを上げてね……」
「それで、敗北したと？」
「そうなのよ。いや～、惜しかった」
「そう、ですか、そんなことが……」
　いやぁ、懐かしいな。ここらに住んでるヒーローのレッドさんには敵わんね。強いんだよあの人。洒落にならんくらい強い。
「では、私が旦那様の仇討ちを!!」

「ほ、鳳翔?!」
「止めないで下さい！私の旦那様に手出しする人は許しません！」
と、何故かやる気の鳳翔。
「まあまあまあまあ、もう昔の話だから！」
「ですが……」
「良いから！ねっ！」
いやー、レッドさんとやり合うのは勘弁。もうやだ。五、六回くらい負けてるからね俺。
「ですが、旦那様に刃向かう者は全力を以って排除するのが黒井鎮守府です！世界征服の妨げとなる障害は排除すべきかと」
「あーもー」
「行きますよ旦那様！」
「新台君、良い部下を持ったねぇ……。よーし、私達も協力するからね！打倒レッドさん!!」
あーもう滅茶苦茶だよ!!

そんなこんなで、鳳翔がレッドさんにあしらわれ、俺と将軍が説教される。
なんてことはない、フロシャイムの日常の一コマを体験して、今日という日は終わった。

２１９話　衝撃！挨拶回り編　その２

例によって、挨拶回りだ。
「青葉ー」
「はい、司令官。何でしょう？」
「秘密組織に興味とかって」
「ありますねぇ!!」
そうか、そうか。
「そんじゃあ、行くか。財団にな……」
と、そう言う訳で、俺達はアメリカまで、飛んだ。
旅行……、ついでに、財団に挨拶回りの為になぁ!!

『ヤーハー、来たな旅人！』
『来たぞ博士！』
さあ、やって参りましたサイト　????!!
財団アメリカ支部!!
「青葉、ほれ、万能翻訳モジュールだ。付けとけ」
「はい。……、え？これ、私、英語になってる？』
万能翻訳モジュールの効果だ。喋る言葉を即時に指定の言語に変換、耳に入る言語も変換する。
『うーん、この……。私の目の前で早速新たなオブジェクトが!!』
『これくらいならＡｎｏｍａｌｏｕｓアイテムでしょうよ』
『あの、司令官？ここはどこですか？そしてこの人は……？』
ご存知でない？ならば説明しよう！
『ここは財団、それのアメリカ支部さ。世界中の異常存在から人々を守る為に存在している秘密組織だ』
様々な特異な人、物、動植物、場所、現象を、人々に知られないよう確保し、収容し、保護する。そんな団体だ。
『そして彼はブライト博士。財団に所属する研究者の一人だ』
『よろしく、ええと……』
『あ、青葉です』

『おお、おお、青葉ちゃんか、良い名前だ、よろしく青葉ちゃん！』
仰々しい態度で青葉と握手する博士。
『ところで博士？』
『んっん、何かな？』
『青葉の首に９６３をかけようとするのは止してもらおうか』
『チッ、艦娘の肉体が手に入れば面白いことができると思ったんだが……』
全く、油断も隙もねーな。
『で？何をしに来たんだ？私も暇じゃない。漫画を読んだり、ゲームをしたり、アニメを見たりする仕事がある』
『ああ、いや、サイト???を見て回ろうと思ってね』
『はっはっは、財団職員として許可はできないな。個人的にはＯＫなんだけどね』
『じゃあ、博士を脅して無理矢理見学していったってことにしない？』
『まあ、それなら良いんじゃないかな。実際、ｋｅｔｅｒクラスオブジェクトの君に暴れられたら困るしね』
俺、財団ではｋｅｔｅｒクラスオブジェクト扱いらしい。そして黒井鎮守府は要注意団体扱い。
まあ、封じ込められない上に変な能力を多数所持した男だからな、その評価も仕方ないかもしれない。
『しかし私は有効活用すべきだと常々提言してるんだがなぁ。戦闘能力は０７６、０９６、１０６などを十分な間足止めできるくらい、財団にとって有用な薬品を作り出す技能、魔法、気功、仙術、呪術などの未知の技術を使いこなす……。知能こそ並みの研究員ほどだが』
９６３を手で弄びながらそう言う博士。
『加えて１７３に頸椎を破壊されたときも、０８２に食われかけた時も、６８２の脱走に巻き込まれた時も平気で生存する不死性……。認識災害、ミーム汚染を跳ね除ける精神力……。他のｋｅｔｅｒクラスにぶつけるべきだと私は思うね』
笑いながら非常におっかないことを言う博士。本当、碌でもないなこの人。

『私はね、Ω―7計画の方向性は間違っていなかったと思うんだよ。毒を以て毒を制する、その方向性はね。だから、旅人君も使いまわせるDクラス職員と考えれば非常に有用だ。なのに！上の連中ときたら！』

天に向かってごちゃごちゃ言い始めた博士。まーたドラックかなんか使ったな？ガンギマリじゃねーか。

『そうですかそうですか、じゃ、俺達は行くんで』

さて、インコグニートで変装して、と。

いざ、サイト????へ……!!

《ハロー、キャシー、調子はどうだ？》

《ハロー、旅人。良好とは言い難いけど、貴方が来てくれたと思うと少し気が楽になったわ。旅の話を聞かせて？》

『これは、浮気……？いやでも……』

レベル2のゲートを青葉がハッキングして収納施設へ。

会いに行ったのはキャシー。紙面で踊る可愛いあの子だ。

……キャシーは、何というか、二次元世界の住人だ。

ああ、いや、萌えアニメのオレのヨメ！とかってそう言うのじゃない。キャシーは、絵なんだ。

紙面の白にペンの黒で描かれた、二次元空間で生きる女性、それがキャシーだ。

今、俺とは筆談で話している。

《旅か、そうだね、俺が今働いている日本の自然を描いてあげよう》

左手で鎮守府の桜並木を描きながら、右手で最近の旅先での話をする。

『司令官、これは浮気ですか？』

『触れもしない相手にどうやって浮気するんだよ』

確かにキャシーは可愛らしいが。あくまで知り合いだ。

《わあ、綺麗……！日本は素敵なところなのね。私もいつか行ってみたいわ》

《そりゃあいい》

絵の中の桜並木で踊るキャシー。幸せそうだ。
キャシーは、ある時、財団の手違いで自分が絵であることに気づいてしまい、それに心を痛めた。
二次元の世界にたった一人で生きる、孤独な女性だ。
おまけに、こんなところに収容されているんだ。そりゃあ、気も病むってもんだろ。
だからこうして、時々会いに来てるんだ。例え絵の中の女の子であっても、女の子は女の子！優しくしなきゃな！
《へえ、今、そっちの世界は大変なのね》
《そうだよー、Ｅｘｐｌａｉｎｄクラスオブジェクト、深海棲艦。ＸＫクラスシナリオ要因さね》
いや、もしかしたらＳＫクラスシナリオかもしれんが。深海棲艦の狙いは謎だ。
《ここの、その、財団？さん達も大変そうなのに、貴方も忙しいのね》
《でもまあ、部下が優秀だから。割とどうにかなってるよ》
さて。
こんなものかな。
《じゃあ俺はそろそろ帰るよ。またね》
《うん、また、会いに来てね》
《もちろんだよ》
こうして俺はキャシーとの会話を済ませて、施設を出たのであった。
『浮気……、浮気……、うーん』
『ちょっ、待っ、無理です！無理です！司令官！司令官あああああ!!!』
『大丈夫大丈夫』
こぽこぽと、楽しげに泡立つスライムに青葉を押し込む。
『あっ、あっ、待って下さいこれ、待って……、あ、あれ？気持ちいい？』
こいつは、くすぐりオバケだ。
どんなやつかって言うと……、まあ、その名の通りだ。

人を抱きしめて、撫で回す。いい匂いのする、スライムである。主食はお菓子。
因みに、スライムだからと言って猥褻は一切ない。
『んにゃ?!あは、あはははは!くすぐったい!くすぐったいからぁ!!』
乱れ青葉。
猥褻は一切ない、ないのだ。
青葉が息も絶え絶えになり、くすぐられてる姿にエロスなんてある訳ないじゃないか。
くすぐられてる女の子を見て興奮なんて特殊性癖ですよ。
『あはははは!やめて!やめてってばぁ!!』
ごぼごぼ。
『あはははは!はははははは!!』
こぽこぽ。
『ほ、本当に駄目、もう駄目!!』
青葉、若干本気のギブアップ。するとくすぐりオバケは、くうくう、と音を立てて引き下がった。
『はあ、はあ、はあ……。なんなんですかもー!!もー!!』
はっはっは、許せ。

『アエ!おいで!』
『あう、たびびと、たびびとー?』
『ううっ、何ですかその人……、人?』
アエは……、言うなれば、沼女だ。
『この子かい?アエって言うんだ、可愛いだろ?』
『いえ、その……、だって、緑の……』
アエの肌はまるでカエルなどの両生類みたいにまだら模様の緑色だが……、それがどうかしたか?
『可愛いだろ?』
『だって、その子、確実に人間じゃない、ですよね……?』
はっはっは。
『でも、可愛いだろ?』

『はぁ？はぁぁぁ?!どう言う神経してるんですか?!人じゃないんですよ?!』
『いや、でも、可愛いだろ？』
『それしか言えないんですか!!』
　それ以外に言うことある？
『おー、たびびと、たびびと、だっこ、してー』
『お、抱っこか、良いぞー』
　ヒタヒタと言う足音と共に俺に近づくアエ。警戒する青葉。
『こら青葉、睨むな睨むな。アエは野生的な子なんだから、警戒心とかそう言うのが嫌いなんだよ』
『だって、これ、明らかに人間じゃ……』
　いや、人間にカウントしても良いだろ別に。仮に人間じゃなかったとして、それが何だ？こんなに可愛いんだぞ？なら良いだろ。それが全てだろ。
『肌の色なんかで人を差別しちゃいけないんだぞ』
『いや、黒人白人がどうこうとかならまだ分かりますよ？でも緑って！緑は無しでしょ?!髪もなんかぬらぬらしてるし……』
『あい、だっこー』
『よしよし、良い子だアエ』
　だから何だ。何の問題ですか？
『……ん？し、司令官!!溶けてますよ?!!』
『ん、ああ、アエの手足の粘液に触れると溶かされるんだ。アエは胃腸が退化して、代わりに手足で肉を溶かしてそこから栄養を摂取する性質があるみたいでな』
　因みに口から溶解液を吐いたりもする。
『みたいでなって……、食べられてるってことじゃないですか！』
『そうね』
『そうね?!』
　こーんな可愛い女の子を抱っこできるんなら、ちょっと溶かされて食われるくらいなんてこたぁないよなぁ？
『司令官は馬鹿なんですか?!』

『大学院出てるぞ』
『そうじゃなくって!!』
『たびびと、おいしー。おいしーし、あそんで、くれる。ぽちゃぽちゃ、しよっ!』
『水遊びか?良いぞー』
おっと、水遊びをご所望だ、遊んで差しあげろ。
『あーもう滅茶苦茶ですよ!!』

「いやー、面白かったな」
「笑い事ですか?!こっちはいつか死ぬかもとハラハラしましたよ!!」
いや、俺が死ぬ訳ねーだろ。
「死なない死なない」
「何なんですかその自信は……」
「俺は死なないから」
「分かりましたよ、もう……。うう、流石に今日のことは記事にできそうにないです。青葉の個人的な記録ファイルに入れておきましょう……」
「そうだね、あそこは一応秘密組織だし。皆んなには内緒だよ」
「……そう言えば、司令官もｋｅｔｅｒクラスオブジェクトって呼ばれてましたね。あんなの達と同じ括りなんですか……？」
「あー、みたいね。君らも一応同じ括りっぽいよ」
「えええ……。青葉なんてただの、どこにでもいるちょっとクラッキングが得意な艦娘ですよ、無害ですよ」
まあ、俺達も現状は、深海棲艦という特異存在によるＸＫクラス世界終焉シナリオの対抗策として、辛うじて見逃されてるだけだから。
実際財団は、深海棲艦がｋｅｔｅｒからＥｘｐｌａｉｎｄとなるまでには、上から下まで、国内外支部全体が相当な騒ぎだったらしいし。
聞くところによると最初は隠蔽しようと躍起になってたみたいだが、どうやら、現行兵器ではあまり効き目がない、なら新兵器を作ろう、いやいや防衛ラインの形成を急げなどと大騒ぎして。
どうやら深海棲艦には神秘ダメージ……、ヒューム値の改変を伴う

攻撃が有効だという点までは見抜いたらしい。流石財団、有能。
だが、そこに更に艦娘という新たな特異存在が現れて更に大騒ぎ。遂には封じ込めが出来なくなって、あえなくＥｘｐｌａｉｎｄ化、って訳だ。
尤も、深海棲艦騒ぎが収束したら、多分、俺達を収容しに来るんじゃないかな？
あと、俺がノリでかっぱらったオブジェクトも返せって言って来ると思う。２９７とか４５８とか。
まあ、もちろん、捕まる気はこれっぽっちもねーけど。
「まあ、いざとなりゃ夜逃げすりゃ良いのよ。逃げちゃえ逃げちゃえ」
「はぁ、まあ、その時は……、お伴しますよ、司令官」

２２０話　衝撃！挨拶回り編　その３

いつも通り、挨拶回りだ。
「じゃ、行こっか、司令官！」
「いや、既に行ってきた」
（挨拶回りを）終わらせておいたのさ！
「えっ」
どうした文月。
問題あるかね？
「い、いや、だって、あたしとお出かけする流れだよね？そうだよね？」
「済ませた」
「んんんんーーー!!!」
はっはっは、何が不満なのかね。
……財団を本格的に見て回るとなると危険だ。昨日は軽く見て回る程度だったから良かったものの……。ミーム、反ミーム、認識災害……。記憶処理装置をお供にお出かけなんてさせらんないしね。
「やーーーだーーー!!お出かけするのーーー!!!」
駄々をこねる文月。ふみぃ……。
「分かった分かった、じゃあこうしよう。俺が挨拶回りしてきたところの話をするから、文月はそれを聞いてくれ」
「えー、んー、あー、まあ、良いよ……。その代わりっ！これから間宮さんとこで一緒におやつ食べながらね！」
文月は渋々だが、納得してくれたようだ。

食堂、間宮の手作りお菓子を食べながら、財団の日本支部に挨拶回りしに行ったことを思い出す。
「じゃあ、そうだな、何から話すか……。ねこ、は駄目だな、緋色の鳥……、も駄目だ。そう、犬……、わんわんらんどか」
「わんわんらんど？」
そう、わんわんらんど。
「そこの調査に行ってきたんだがな」

「調査……」
「犬じゃなかった。いや、犬には近いんだが、犬じゃないんだよ」
「は、はぁ？」
犬だけど犬じゃない何かに貪り食われてきた。
「……また危ないことしてきたんでしょ！駄目だって言ってるのにぃ！」
「いや違うって。道端で急に危ないことの方からやって来るんだよ」
「またそんなこと言ってー……」
いや、本当だって。
「例えば、そう……、今はもうないんだがな、昔、いきなり生存権の侵害で訴えられたことがあってな」
「何それ」
「いや、俺にも分からんが、臓器の形がどうこうとか言って、何にもしてないのに臓器を抜き取られたんだよ」
「えー、怖っ……」
いや、本当に。
俺もなんだかよく分からんうちに複数の臓器を奪われて心停止したんだよ。
「あとは、そうだな……、あなたの人生、盛り上げます!!ってウェブサイトを見たら、大変な事件が起こったりとか」
「何で変なウェブサイト開くの……」
「好奇心に負けて」
仕方ないことだった。
「あとは、そう、廃校になった中学校に潜り込んだら、頭が色んなものに置き換わってる人達に死ぬ程頭を殴られたりとか」
「……何で廃校になった中学校に潜り込んだの？」
「好奇心に負けて」
仕方ないことだった。
「おもちゃでできた恐竜に潜り込んで圧死しかけたりとか」
「……」
「好奇心に負けて」

仕方ないことだった。
「……結局、司令官自らが変なところに首突っ込んでるからだよね？」
「そんなことはないぞ」
そんなことはない、はずだ。
ほのぼのしたケースもある、と思う。
「うーんと、えーと……、あの、その……、あー、あれだ、鰻を飛ばす祭りに参加した時とか」
「何それぇ」
「山形辺りだったっけかなぁ。なんかよくは分からないけど、空に向かって鰻をぶん投げて、一番遠くまで飛ばした人がその年の年男って言う」
「……よく分かんない」
「俺にもよく分からん。でも、年男にはなれたぞ。そしたら、投げた鰻のビジョンが脳裏に浮かぶようになってな」
「更に分かんない?!」
いや本当に、俺にもよく分かんないから……。
「あとは、そうだな、飛行機に乗ったら複数のフレディ・マーキュリーが現れてライブやってくれたりとか」
「フレディって誰？」
「伝説のロックスターだよ。Ｑｕｅｅｎって聞いたことない？」
「んー、あるような。あれ？でも、Ｑｕｅｅｎって昔のバンドだよね？」
「ああ、そうだよ。因みに、フレディはとっくの昔に亡くなってる」
「ん？んん？あれ？」
「でも、飛行機でコンサートしてた」
「もー分かんないよ……」
いや、マジだって。マジでフレディ・マーキュリーだったんだよ。
いきなりどこからともなく現れたフレディが飛行機の中でｗｅ ｗｉｌｌ ｒｏｃｋ ｙｏｕを歌い始めたんだよ。信じてくれ。
「あとは……、座るとノースカロライナまで飛ばされる椅子とか」
「だから、何なのそのヘンテコアイテムは!!」

「これなんだけど……」
「しかも持ち歩いてるの?!」
いや、面白そうだったから、かっぱらってきた。
「でもたまにサウスカロライナとウェストバージニアに飛ぶらしい」
「だから何なのそれぇ……」
いやだから、俺にも分からんよ。
「あ、そうだ、これならすぐに行けるし、一緒に飛んで行こうか」
「えー……。限りなく怪しくて怖いよ……」
「恐れるな俺の心、悲しむな俺の闘志」
「わっ、わっ、わーっ!待って待って、ちょっと待って!!!」
「いいいいいやっふーーー!!!!」「あああああああーーー!!!!」
飛んでみた。

文月とサウスカロライナ州を見て回ってきた。
楽しかった(小並感)。
さあて、次はどこに向かおうか……。
「そうだ、会長に会いに行こう」
会長……、愚地師範にだ。
愚地師範は俺の空手の先生だ。
あの人に教わった空手があるから、今まで生き残ってこれたんだ。
恩人も恩人。恩師の一人だ。
だが問題が一つ。
「あの人、俺を鍛えたがるんだよなあ……」
グラップラーの皆さんが出るとなると、何かとステゴロ回になりがち。
「司令、お出かけですか。では、私が護衛につきますね」
「霧島もグラップラーだからなぁ……」
「はい?」
いや、何でもねーよ。

「んん？オォ！新台じゃねえか!!」
「はい、こんにちは、若先生」
　愚地師範の息子さんの愚地克巳さん……、若先生だ。
「そっちは？」
「部下です。何でも護衛……、らしくて」
　頭を下げる霧島。
「へぇ、お前も偉くなっちまったもんだなァ」
「そんなこたぁ、ないですよ。俺はいつだって一人の旅人です。偉くなんてありません」
「そうかい」
「ええ」
　俺は偉くなんかない。俺の立場はいつだって一人の旅人だもの。
「で、何だ？親父に会いにきたのか？」
「ええ、はい」
「なら上だぜ。稽古中だし、久しぶりに相手してもらったらどうだ？」
「んー、そうですね、そうします」
　そう、だな。俺も最近は、稽古らしい稽古をしてないからな。深海棲艦とやるのは、技術もクソもない殺し合いだから、たまには技量を持った人を相手しないと……。
　ビルの上階に上がってと……。
　ううん、神心会のビルに来るのも久しぶりだ。最近はほとんど顔を見せてなかったからなー。
　本来なら、こういう男臭い場所は苦手なんだがね。
　さて……。
「愚地師範」
「オォ、新台じゃねえか」
　倒れ伏す門下生に囲まれて、師範は言った。
　……愚地師範は、こうして、たまに門下生達からの挑戦を受けるのだ。
　自分の腕を錆びつかせないためなのかなんなのかは分からないが、この人は結構血に飢えている。もういい歳なのにストリートファイ

トやったりとか。
「何だ、道着なんか着て。やる気かァ？」
「ええ、軽く手合わせ願います」
俺のＫＡＲＡＴＥも錆び付いてる可能性が高い。
ここは一丁、打ち直して貰わねえとな。
「霧島、手を出すなよ!!」
「はい、了解です」
霧島に指示して、と。
「やるか、新台ィ……!!」
「ええ、腕、鈍ってますから。叩き直して下さいよッと!!」
軽い組手の稽古が始まった。

「痛ててて……。師範、軽くって言いましたよねぇ?!」
「馬鹿かオメェ、死なない程度に加減しただろうが」
それは加減と言うのだろうか。
「これ、肋骨にヒビ入りましたよ……」
「そんなもん、ほっときゃ治る」
そりゃーそーですけど!!
でも……。
「師範」
「何だァ？」
「ありがとうございます」
錆び付いたＫＡＲＡＴＥがある程度は戻ってきた。やはり、自分より技量が高い人を相手にするといい刺激になる。
「急に改まってどうした？」
「いえ、最近は腕が鈍る一方で……」
「ン？闘争ってるんじゃないのか？深海棲艦、とやらはどうなんだ」
「丈夫で力強く、素早いです……。でも、それだけです」
「成る程なァ」
深海棲艦は技量を持ち得ないからな……。
「ま、また来いや。お前は拳が軽いが、相変わらず守護るのは相当だ。

その調子で鍛えろ」
「押忍、ありがとうございました！」
いやー、為になった。
さて……。
「霧島、どうした？血が出るほどに拳を強く握りしめて……？」
怖いんだが。
「……私は、護衛だと言うのに、司令に怪我をさせてしまいました」
「え？ああ、これ？いつものことだから気にしなくて良いよ」
「ですが……!!」
良いんだよ。
これは、そう、正当な怪我だ。授業料みたいなもん。
「だから本当に、気にしないでくれ。これは必要経費だ」
「いえ！怪我をするならば私が！」
「いや、俺が鍛えてんだからさ」
「本来、司令は鍛える必要などないのです。私達がお守りするべきなのに……」
「そう言うのいいから」
俺を守るとか、そう言うのはいい。女の子に守られる男なんてカッコ悪いだろ？
「安心しろよ、俺自身も、霧島も、俺が守るから（イケボ）」
「ですが……、うう、はい……」
腰に手を回しながら、必殺のイケボ。
全く、艦娘の皆んなはいつもこうだ。ちょっと怪我したくらいで大騒ぎする。
まあ、俺も、言い方はアレだが、自分一人の身体じゃないってことか。
多くの人に愛されてるんだ。
ご自愛下さいとのことだし、もうちょっと自分を大切にしようか……。
「いちゃつくんなら外でやれや」

「あ、すんません」

２２１話　衝撃！挨拶回り編　その４

更に、挨拶回りだ。
どこに来てるかと言うと……。
「高雄型、散開!!」
「ファイアドレイクが来たわよ！」
「任せろ！」
『ライトニングボルト!!』
ノースティリスだ。
……今日は、ノースティリスの「あいつ」に会いに来ている。
だが……、あいつは俺と同じくらいの冒険好きの冒険野郎。会いに行ってもいるかどうか……。
まあ、会えなきゃ会えないでノースティリスを観光して帰るだけだから。
ノースティリス……。ノースティリスはなー、そう、そうだな、け、景色が良いぞ！
……それを補って余るほどのクッソ厳しい環境、三ヶ月に一回吹く肉体の変異を誘発するエーテルの風、凶悪なモンスター、突如現れるダンジョン、明らかにやばい盗賊とか、色々アレだが。
で、でもまあ、腕に覚えがあるなら、一度行ってみても良い土地だ。暮らす、となるとちょっとばかし辛いが。俺も何度死にかけたことか……。
「やぁぁぁ!!!」
おっと、そろそろ勝負が決まったかな。
「やるねぇ、皆んな」
「へっ、この程度の奴らなら、目隠しして座っててても勝てるね」
と、摩耶が微笑む。
まあ、正直、外で鉢合わせるモンスターは大して強くないからな。俺でも対処可能なくらいだ。
厄介なのはダンジョンのモンスターだろう。高レベル帯のドラゴンなんて強いのなんのって。

グリーンドラゴンの無属性ブレスが耐性パズルに引っかかんなくて一番効くのよね。
ああ、ああ、嫌な思い出が蘇る～。
高レベル帯のキューブがダンジョンを埋め尽くした時とか！不可視の南瓜にポーション投げつけられて人間じゃなくなった時とか!!死の宣告に間に合わなくて死んだ時とか!!!
うん……、うん。やっぱりノースティリスはクソだわ。景色くらいしか良いところねーわ。
あっ、強いて言うならあれかな、艦娘にバレずに風俗に行けるって点かな。おお、こりゃデカイ利点だ。凄いぞノースティリス。
「んじゃ、あいつの国へ行くぞー」
「「「了解！」」」
さあて、あいつの国へ行くとしますか。
いるかな、あいつ。

「ゲギャ、は、ははは、また来たのか、旅人」
結果：いた。
いましたよ、こいつ。
うーん、来ておいてなんだができれば会いたくなかった。
何せカルマ―１００……、大量殺戮者、サイコパス、ノースティリスのヤベーやつなのだから。
顔色ひとつ変えずに女子供を殺害し、人間牧場、無差別テロなんでもござれの悪魔超人（比喩にあらず）だからな。
今、こうして話している瞬間にも、気分ひとつ変われば俺の首を刎ねるだろう。
兎に角ヤバい。超ヤベー。
その上強い。
もうおかしいくらい強い。バランスブレイカーだ。
格ゲーの強キャラとかそう言う枠組みじゃなく、一人だけチートコマンドって感じ。なんて言うかそれくらい強い。
俺の知り合いの中でもトップクラスに強い奴だ。こいつより強

いってなるともう、スーパーロボットでも連れてくるしかないってレベル。
艦娘の皆んなも強いが、こいつと戦ったら三秒も保たないだろう。
まあ、実際に戦うとなると存分に嬲られ、死ぬまで陵辱されるだろうけどな！こいつ、度を越したサディストだから。
自分を慕ってくれている少女やお嬢様、血の繋がらない妹などを、公衆の面前で殴ったり犯したりする精神破綻者だからな。
「何だ、それは。お前のペットか？」
艦娘に視線を向けるあいつ。
「まあ、仲間だよ」
「ほう……」
ギラギラとした、血に飢えた魔物のような目で見つめてくるあいつ。
「う……」
警戒する艦娘。
はっはっは、無駄だよ。警戒なんて意味ないない。こいつがその気になれば一瞬で殺されるんだから。
「艦娘……。ローランに近い種族か」
まあ、女の子しかいないからね。ローランに近いかもしれない。
「提督、とは面白いのか」
「いや、基本書類仕事だよ」
やってねーけど。
「ふん、つまらんな……。お前の世界も、退屈そうだ」
万物を力でしか計れずに、混沌と暴力に生きるお前からすれば、大抵の世界はつまんねえよ。
ああ、いや、悪く言ってる訳じゃない。この広い世界、こいつみたいな奴もいるだろう。許容しよう。ゆるすよ。
「うん、だから来んなよ」
「頼まれても行かねえよ。俺は退屈が嫌いなんだ」
良かった、世界滅ばなくて済んだ。
「……それで、何しに来た？」

「んー、観光？」
「ハッ、観光？ノースティリスにか？相変わらず面白いジョークを言うな、お前は」
　ウケた。
「冗談じゃないけどね」
「まあ良い。来い、飯くらいなら馳走してやるぞ」
「おっ、良いの？行く行くー」
　そう言って厨房に消えるあいつ。
　……あいつは万能だ、もちろん料理の腕だって一級。
「ほら、できたぞ」
　ほらね、料理スキルで一発ですわ。
「女共も食え」
「あっはい、頂きます」
　少しの逡巡の後、出された料理に口をつける高雄型……。
　ん、待て、これは……！
「おい、しい？何の肉でしょう？」
「初めて食べる味ね……」
「本当ね」
「まあ、美味いんじゃないか」
「待て、食うな！」
　これは……。
「人肉だ！」
「「「……え？」」」
　高雄型の手が止まる。そして、数秒。
「う、えええ……!!」
「そ、そんな……」
「えええええ?!」
「嘘だろ……」
　阿鼻叫喚。
「うん？何だ？若い女の肉だぞ？」
「あのな、良いか？俺達は、人肉は、食えない」

まあ俺は食おうと思えば食えるが。
「な、な、なんてもんを食わせやがる！」
摩耶が食ってかかる。
「だから、人間の、若い女の肉だ。美味いだろう？」
駄目だぞ摩耶。こいつに俺達の常識は通用しないからな！
「ふ、ふざけんなよ！人の肉をいきなり食わせるやつがあるか!!」
「ふむ、なるほど。なら、こいつの肉ならどうだ？」
へ？俺？
「……提督の肉なら、ちょっと食べてみたいかも」
「なら調理してやろう」
へ？あ？

ギャーーース!!!

ふー、痛え痛え。一秒しないうちにダルマにされたぜ。リョナラーさん歓喜のダルマにな。
で、俺のダルマとか誰得？
結局あの後、高雄型は俺のハンバーグ（原材料的な意味で）を味わい、帰っていったよ。
ノースティリスは駄目だな、人の心が失われる。
道徳心とか人間性とか大事でしょ。
あ～、さてさて、次はどこに行こうかなっと……。
「ちょっと、ちょっと」
おや、空間に裂け目。
「貴方、新年も明けたんだから、幻想郷に挨拶しに来なさいな」
「ゆかりん……」
「……世界広しと言えど、この大妖怪八雲紫をゆかりんなどと呼ぶのは貴方だけよ」
ゆかゆかーゆかりん。少女臭がするぞ。兎に角、呼ばれて飛び出てなんとやら。来いって言うなら行くさ。ゆかりんのお願いは断れな

い。
「んじゃ、行こうか……」
「はい！」
「ええ、いらっしゃい」
……ん？
鹿島？
「何でいるの？」
「え？いやだって、提督お一人でお出かけなんて駄目ですよ！護衛の一人くらい連れて行ってくれないと！」
いやいや、俺は何様だよ。
ＶＩＰかよ。ＶＩＰでやれ。
「あら、可愛らしい護衛ね」
「勘弁してくれよ……」

スキマで送られはい到着。
忘れられたものが行き着く最後の地、幻想郷だ。
俺達は、その幻想郷の中でも一等危険な地、紅魔館に来たのだ。
「フランちゅわーん!!!」
「真央ーーー!!!」
「ぎゅー!!!」
ウウッヘァ！フランちゃんかーわーいーいー!!!
何が吸血鬼だァッ！美少女ならそれで良いだろうがァッ!!
「て、提督?!待ってください！その子とはどういうご関係なんですか?!」
鹿島に怒られる。でも鹿島はあまり怖くはない。鹿島で良かったなお前、鹿島じゃなかったら死んでたぞ。うん、助かったぜ！
「ガールフレンドよ、ガールフレンド」
「ガ、ガールフレンドですか……？」
そう、ガールフレンドだ。何もおかしくはないな！
「ねえ、真央？血を吸わせて？」
「ああ、いいとも」

フランちゃんを抱き上げる。うっは、軽ぅい！
「んー、かぷっ」
「ぐっ」
首筋に痛みが走る。そして、それから来る虚脱感。俺、今、吸われてる!!
「あはっ??美味しっ??」
「あ、あ、そんな、提督……!!」
あたふたと慌てる鹿島を他所に、どんどん血を吸われてく俺。
「フランちゃん可愛いいいイェア!!!」
フランちゃんは可愛い。可愛いので俺の血を無制限に吸っても許す。可愛いは正義よ、正義。
「提督！提督ー！私以外の女の子に鼻の下伸ばして……、でも、提督がＮＴＲられるって言うのもありかも……？」
何言ってんだ鹿島。
「んーん、真央、この人、だあれ？」
鹿島か？鹿島は俺の……、
「部下、かなぁ」
恋人、と言いたいのを堪えて、波風を立てない答えを。
「へえ……。ねえ、真央？真央は私のものだよね？」
「んああ、ううん、そうかもねぇ」
「……余所見しちゃ、駄目だよ？」
「お、おう」
いや、俺は誰のものでもないんで、とか言いたかったが、言った場合キュっとしてどかーんだ。
ご機嫌を損ねれば彼女の『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』で爆散する羽目になる。逆らっちゃいけない。
まあまあ、可愛いもんよ。子供の独占欲となんら変わりはない。
「ねー、真央、旅の話聞かせて？今度はどこに行ったの？そうだ！またお姉さまに内緒でお外に遊びに行こう！幻想郷の外とかにも興味あるかも！」
「おっ、そうだな」

「提督……、提督が私の目の前で知らない女の子にＮＴＲれ……！あ
あっ、そんな、提督ぅ??」
くねくねする鹿島を放置して、フランちゃんを抱き上げ、移動する。
この調子で幻想郷を一回り挨拶して回って……、それでいいか。
仙術の師匠である青娥、酒飲み仲間の勇儀、魔法を教えてくれたパ
チェ、元バイト先の霖之助さん……。挨拶する人数は多い。
「さあ、行こうかフランちゃん。まずは図書館だ」
「うん、良いよぉ」
「だ、駄目です提督！私の目の前で他の子とえっちなこと……??あ
あっ??」
脳内ピンク色の鹿島の首根っこ捕まえて、と。
「旅人、行きまーす！」
宙を、蹴った。

２２２話　衝撃！挨拶回り編　その５

昨日、あの後は、紅魔館で晩御飯ご馳走になって、そのまま帰った。
血の滴るようなステーキを出されたが、ちゃんと牛肉だったぞ。
ノーステイリスとは違って。良かった良かった。
レミリアもいい人、いや、いい吸血鬼だったしな。
普段はきゅうけつ鬼ごっこの開発など、奇行が目立つが。
さて、そんなこんなで。
幻想郷の挨拶回りは一日では終われないな。あそこは密度が凄い。
広さはそれほどでもないが、多数の神超人仙人妖怪がひしめき合ってるから。
と言う訳で、挨拶回り幻想郷編、続投だ。
「行ってきます！」
「ストップだ司令！」
んああ、嵐ィ！裾を引っ張るんじゃないよ!!
「司令、駄目だろー？護衛もなしにどこ行くんだよ」
「幻想郷」
「はぁ？よく分からんけど、一人で行動しちゃ駄目だぜ？」
えぇ……。一人で行動しちゃならないって、子供じゃあるまいしよー。
「ちょっと挨拶回りしてくるだけだから」
「駄目駄目、俺も着いてくから、ほら」
ンモー。

「にゃーんにゃん、にゃーんにゃん、邪仙さあんだよー!!にゃーんにゃん、にゃーんにゃん、お腹が黒おいーーー!!!」
「……なんの歌？」
「邪仙にゃんにゃんの歌。そろそろ来るぞ」
人里で歌を歌いながら歩く。
すると……!!
「あら、お腹が黒おい？腹黒って言ってるのかしら？失礼しちゃうわ」

ふらり、と。
青髪の女が現れたのだ。
「やあ、青娥娘娘」
彼女は、霍青娥。外道に堕ちた仙人、邪仙にして、俺の師匠である。
「あらあら、青娥娘娘だなんて、気安いわね」
「貴女が、『あら、師匠だなんて硬い呼び方、可愛らしくないわ。青娥娘娘と呼びなさい?』って言ったんでしょうが」
「あら、そうだったかしら?」
そうだよ。
「にしても、相変わらず……、良い身体してるわねぇ」
「ん、おう」
「妖気神気魔力霊力混じり合った、混沌の化身……。ねえ、キョンシーとか興味ないかしら」
「ならないってば」
青娥はいつもそうだ。冗談交じりに……、多分半分は本気だけど、俺にキョンシー化をオススメしてきおる。
「なんだ、こいつ!悪そうな奴だな!」
大正解だぞ嵐。
青娥は社会一般的に言う悪い奴だ。家族を騙し、見捨てて、己の野望のため邁進した……、それが彼女だ。
「まあ、生意気な子ね」
「コラ嵐、やめとけやめとけ!」
「だって、司令!こいつから限りない悪の匂いが……!」
確かに青娥は悪党だが。限りなく悪党だが。
「でも青娥は世にはばかるタイプの邪悪だしなぁ」
巨悪とか邪悪とか、そう言う大きな悪って中々駆逐されないのよね。
「教えてくれ!こいつは一体、司令の何なんだ!!」
「んー、師匠?」
「師匠、だと……?」
青娥とは、ある日、幻想郷にて出会い、そのまま、「道教に興味とか、

あるかしら？」とか、「仙人になれば不老長寿、金剛不壊よー」とか言って勧誘されたのだ。
甘言に乗った、とは違う。単純に興味があった。その時は既に、若返り薬……、祝福された鈍足のポーションを所有していた為、不老長寿には興味がなかったが……。
それにとんでもない美人である、青娥が誘ってきたのだ。乗らない手はないよな。
「そうよ、彼は私の可愛い可愛い弟子なの」
そう言って、ふわりと浮かんだ青娥は、俺に抱きついてきた。
丁度いいサイズの均整のとれた胸が当たって嬉しい。流石は修行に修行を重ねた仙人ボディ。
「なっ、なぁぁぁ?!!司令から離れろっ!!!」
嵐が真っ赤になって怒る。
「青娥やめて」
「んー？いつもなら喜んで抱き返して来るのに、どうしたのかしら？」
妖しく笑う青娥。こいつ、分かってやってるな？相変わらず性格悪りぃ。
「今の立場的に、そう言うことはできない。離れてくれ」
「そう？残念だわ～。折角、房中術の特別レッスンを、と思ったのに」
青娥娘娘の房中術れっすん??ふるこーす！だとぉ!!!?
「あ、嵐、俺ちょっとこの人と修行（意味深）してくるから。はいお駄賃、遊んでおいで」
「え？え？」
嵐すまん。
「ちょ、ちょっと！どこ行くんだよ司令！」
「頼む、行かせてくれ……!!」
むしろイくんだが。イかせられるんだが。
「た、大切な用事なのか？」
「大事大事、超大事」
「うーん、俺と一緒じゃ駄目か？」
「見せつけながらのプレイ？そう言うのも素敵ね??」

ぐううおおあああ!!!
「ああ、この人と二人でちょっと大事な話をな。皆んなには秘密だぞ」
「……分かった。司令がそう言うなら」
よっっっしゃぁぁぁぁぁ!!!
「それじゃ、行こうかしら」
「ああ」
「いってらっしゃい、司令！」
いやあこれは修行ですからね、修行。
修行だから。
……行ってきます!!!

流石は青娥娘娘……。青娥娘娘とにゃんにゃん。
恐ろしい手腕だった。いや、物理的な意味で。恐ろしい、恐ろしい、手の、こう、スキルが……。色々なところのスキルがこう……。
さて、嵐にはしっかりとタオの、仙術の修行だったと言いくるめ＜８０＞しておいたから無問題。
次の観光名所、いや、挨拶回り先は、地底だ。
……いやいや、観光名所だなんて思ってませんよ。幻想郷は危険なところなんですからねぇ。
さてさて、地底。
言葉の響きから陰鬱な場所と思われるかもしれないが、実際は結構良いところだ。
人々に嫌われた、爪弾きにされたもの達が集う、旧地獄。
そこでは、鬼を始めとする怪力乱神共が生きていた。
「ポーラ、離れるなよ」
「はーい」
ポーラの白魚のような指が俺の手にかかる。可愛いじゃないか。
「……あの、あのあの、提督？ここは仮装パーティーでもやってるんですか？」
「いや？」

「じゃ、じゃあ、本当に……？」
「鬼、怨霊、色々いるね」
「わー……、初めて見ました。いるんですねぇ、こう言うの。びっくりです」
　驚くポーラ。
「深海棲艦だって同じような化け物じゃん？」
「あ、そうですね。ポーラ達、普段からお化けみたいなのと戦ってますよねぇ」
　何となく、納得したようだ。深く考え過ぎないのはポーラの美点だよな。
　さて、地底に来た訳だが。
「勇儀ー、出てこーい、酒やるぞー！」
「何やってるの？」
「ちょっと知り合いを呼んでる。おーい、勇儀ー！飲もうぜー!!」
　と、こうして酒瓶揺らしてりゃ……。
「おー、真央じゃないか！来てたのか！」
　鬼が釣れる。
　鬼が出るか蛇が出るか、だとか何だとかよく言うが、マジで鬼が出るからな、幻想郷。
「よう、勇儀」
　彼女は勇儀。あの、悪名高い星熊童子だ。
　因みにデュエリストは関係ない。
「何だ何だ、水臭いねぇ！こっちに来てたんならすぐに会いに来なよ！」
「悪いな、他にも挨拶回りする場所があってさ」
　気安い態度で肩を抱いてくる勇儀。
「むー……、提督ー？誰ですかその人ー？」
「星熊勇儀……、俺の酒飲み仲間さ。勇儀、今日は山程酒を用意した。今夜は無礼講だ、飲もうぜ」
「おお！良いじゃないの！飲もう、とことん飲もう!!」
　楽しもうね！

「え？・え？・何ですか？・宴会ですか？」
「宴会だよポーラぁ!!・飲ま飲まイェイ!!」
　俺は何故か知らんが、妖怪には人外認定されてるから、地底でも馴染めるのだ!!
「どうせやるなら盛大にやろう!!俺、さとりん呼んでくる!!」
「おお、そうだな！・行ってこい!!……ところで、お前さんは？」
「ポーラですよぉ～」
「見たところ、神霊かい？」
「はい～、みたいですよ～」
「ふうん、じゃあ、こっち側ってことかい」
　艦娘も人外判定らしい。

　ここは地の果て流されて、俺。
　地底の管理者、さとりんのいる屋敷、地霊殿にて。
「さとりん！・お酒！・さとりん!!」
　酒瓶を片手に乗り込む俺氏。
「ヒェッ……」
「さとりんおいで、お酒飲みに行くよ」
「お、お構いなく」
「いいから来いやオラオラオッラーーーン!!!」
　うるせえ！・行こう!!
「い、いやぁぁぁ!!」
「んにゃあ?!さとり様ー!!!」
「さとり様が誘拐されちゃったーーー!!!」
　地霊殿の主人、古明地さとり氏を誘拐。
「オラーーー!!!」
　勇儀と合流。
「飲めや騒げやー!!無礼講じゃーい！・祭りじゃーい!!!」
「あっはっは、相変わらず景気が良い男だねぇ!!お前らも飲みな！・こいつのおごりだよ!!」
「「「オオーーーッ!!!」」」

地底の荒くれ者達が杯を傾ける。
「さあさとりんも飲んでほらハイ」
「い、いや、私は」
えっ、飲まないの？じゃあお燐とお空誘おうかな。
「貴方、前にお空を酔わせて地霊殿を吹っ飛ばしたの忘れたんですか?!」
あー、そんなこともあったっけかな。
ところで今日は何色のパンツ履いてんの？
「いきなりのセクハラ?!」
待って、当てるから……、んー、薄ピンク？
「……い、いえ、違います」
なるほど、正解か。
「ぐぐ……、また心理学ですか。人の心を読むのはやめて下さい！」
君だって俺の心読んでるだろ？
「私は妖怪さとりだからです！」
俺のは技術だ。表情の変化、間の取り方、目線などから、本当に思っていることを割り出す。心理学＜８０＞ってね。
「にしても、さとりん相手だと喋らないで済むから楽だな。以心伝心ってやつだ」
「以心伝心？ごめんです。貴方みたいな物狂いの心を読むと頭が痛くなってきますからね……」
つれないこと言うなよ、さとりん。
「むー！提督！また新しい女の子ですかー？ポーラも構ってくれなきゃ嫌ですよー!!」
「ん、ああ、分かってるさポーラ」
「待って、下さい……、その女の人の心の中……!!!?」
どうかしたか、さとりん。
「やっぱり、物狂いの知り合いは、物狂い、ですか……」
あっ、さとりんが倒れた。
あー、そっか。
ポーラの心を読んだのか。

はっはっは、迂闊だなあさとりんは。
ポーラの心は……、
「(提督提督提督

２２３話　衝撃！挨拶回り編　その６

「ゆうかりーーーん!!!」
「ふん！」
「グワーッ?!!!」
ゆうかりん呼ばわりは流石にＮＧだったか!!!
くー、効くねえ。
いいパンチだ。素晴らしい。
美しい花達の花弁が舞うこの太陽の畑に、俺の身体が飛んで行く。
花弁と共に宙を舞う俺。
なんて重いボディブローだ。我が黒井鎮守府パワー部門最強の長門のに匹敵するぞ、この鉄拳。
Ａｎｏｔｈｅｒなら死んでた。
「ぐ、う、ぐはっ」
痛え……。
「提督ーーー!!!」
地面に叩きつけられた俺に駆け寄るゴーヤ。
「提督、提督！大丈夫でちか?!」
「ぐ、はぁ、大丈夫だ」
肋骨粉砕ってとこか。
痛い。
痛いが、このくらい慣れたものよ。
「な、なんででちか?!なんで提督にこんな酷いことするんでち?!」
俺を殴り飛ばした女に詰め寄るゴーヤ。
その女の人は、緑髪で切れ目ながらも、どこか花を思わせる雰囲気の美女だった。
名を、風見幽香。
魑魅魍魎が跋扈するこの幻想郷で、最強の名をほしいままにする、絶対者。大妖怪だ。
「何よ、貴女」
「ゴーヤは提督の鑑娘でち！提督を虐める奴は、ゴーヤが絶対に許さ

ないっ!!!」
「……へえ、真央、随分面白いのを連れているのね」
サディスティックな微笑みを浮かべる幽香。
「生きた神霊なんて珍しい。どうなってるのかしら、これ」
「ゴーヤに手を出すなよ、幽香」
「さあ、どうかしらね？目の前でうろちょろされると、鬱陶しいわ。虫けらみたいに潰しちゃうかも」
ううん、やっぱり幽香は変わらないな。
圧倒的な力を誇る、王者の風格。
君臨する者。
幻想郷の頂点の一角。
唯我独尊のカッコいい人だ。その生き様には男として惹かれる部分があるな。
「ゴーヤ、手出しするなよ。幽香を相手にするのは嫌だ」
「で、でも……」
「俺は、ゴーヤがちゃんと我慢できる子だって思ったから、ここについて来てもらったんだぞ。我慢、出来るよな？」
大分卑怯な言い分だが、納得してもらう他ない。だって、幽香は強い。超強い。
恐らく、艦娘でまともに戦えるのは長門や木曾、時雨、夕立、古鷹、加古、明石などの鎮守府でも最強と名高い最高戦力組だけだ。
恐らく、ゴーヤでは勝てない。
「う、うぅ、分かったでち」
すまんな、ゴーヤ。
幽香を怒らせてボコボコにされるのは忍びないからな。
「さて、幽香。新年明けましておめでとう。今年もよろしくね」
「もう二月よ」
まあまあ、そんなことはどうでも良いじゃないか。
「君に会えて嬉しいよ」
「私は別に嬉しくもなんともないんだけど」
あら、つれないねぇ。

「俺は君のこと好きだよ」
「……はぁ、相変わらずの色ボケ男。女なら妖怪でも良いなんて、本物の馬鹿ね」
「君は美人だ」
「だから？」
「愛してる」
「安売りされる愛の言葉ほど虫酸の走るものはないわ」
ひっどーい！本気なんだけどなー。
幽香は確かに、人妖問わず恐れられる大妖怪だが、本当に美しい女だ。俺が声をかけない訳がない。
「提督……」
「何だい、ゴーヤ」
「……他の女の子にそんなこと言っちゃ嫌でち」
「あ、あー、そうだな！ごめんな！ゴーヤも愛してるぞ！」
「……えへへ、うん。ゴーヤも、提督のこと大好きでち」
ゴーヤを撫でる。良い子だなぁ。
「何よ、そういう仲なの？」
「一応な。何の因果か百人ぐらいの女の子と事実婚してるんだよ」
「クズの中のクズね」
「え？酷くない？」
罵倒されてしまった。やはりドSか。
「最低の女たらしね。死ねば？」
「て、提督は悪くないでち！ゴーヤ達が結婚して欲しいってワガママを言ったんでち!!」
幽香の視線が絶対零度まで冷え込む。
「いや違うんすよ、これは違うんすよ」
「クズ、ゴミ、最低男」
ひええ、俺の心に大ダメージ。マゾなら飛び跳ねて喜ぶ幽香の罵倒だが、俺みたいなノーマルからすれば普通に心が傷つく。
「あー、その、何だ。これを機に幽香も俺と結婚」
「死ね」

「グワーッ!!!」
「提督ーーー!!!」

四、五メートルくらいかな。
え、ああ、いや、飛距離。殴り飛ばされた時の。
酷いな幽香は。何も殴ることはないじゃないか。
二度もぶった、親父にもぶたれたことないのに。
さて、過ぎたことはもういい。
次に繋げていこう。
次の挨拶回り先は、そう、ここ。
「博麗神社か……」
妖怪神社こと、博麗神社である。
ここは、幻想郷と外の世界を隔てる結界を維持している、要の地。
そこには、幻想郷を守護する巫女がいるのだ。
「何、提督。お参り?もう二月だよ?」
連れてきた北上が言う。
「いや、お参りじゃねーよ。賽銭は入れるけど」
賽銭代わりに適当な金貨を投げ入れると、ちょうどその時。
「あら?」
「よう、霊夢」
幻想郷の異変解決屋、今代の博麗の巫女、博麗霊夢が現れたのだ。
「あら、金貨?感心感心、ご利益あるわよー」
「何の?」
「それは、まあ、分かんないけど。博麗の名にかけて幸せが訪れると宣言するわ。責任はとらないけどね」
「適当だな」
「そんなもんよ」
そんなもんか。
「にしても、何しに来たの?異変は起きてないわよ?」
基本的に俺は、異変が起こる度に幻想郷に現れ、霊夢について行き、

現れた美女達を口説き落とすと言うスタンスだ。
「君に会いたかっただけさ」
「はいはい」
「ありゃ、駄目か」
「そもそも、女連れで女を口説こうってところに疑問を持ちなさいよ」
成る程、女連れではナンパは成功しないと。初めて知ったそんなこと……。
「あははー、私、お邪魔だった？」
「いや、そんなことないさ、北上」
頬をかく北上の肩を抱く。
「……ってか、その人神霊じゃない。罰当たりね、あんた」
霊夢が北上を見て言う。
「だから何だ、美人なら口説くのが礼儀だろう」
口説くに決まってるよなぁ。
「へー、じゃあ、私を口説いてくるってことは、あんたの中では私も美人扱いな訳ね」
ちょっと嬉しそうな霊夢。可愛いじゃないか。
「もちろん。野に咲く一輪の花のように、可憐な少女だよ、君は」
「あら、お上手ね」
「本心さ。君になら俺の人生を捧げたって構わない」
「はぁ、本当に良く回る口だこと。女たらしじゃなければ一考の余地ありなんだけどねぇ……」
と、頭を押さえる。
んー？俺は全ての美女を等しく愛しているだけだぞー。
「男前だし、面白いし、いい奴なんだけれどねー。でも致命的に馬鹿なのがねぇ」
「何でそんなに散々な評価？俺なんか悪いことした？」
「厄神とか吸血鬼の妹とかさとり妖怪の妹とか色んな女をたらし込んで、あんたを取り合って殺し合いになりかけたりしたでしょ」
「ああ、そんなこともあったな」
いやー、あれはヤバかった。

「ま、浮気しないって言うなら、相手してあげるわよ」
マジで？
「しないしない」
「嘘つけ」
信用無いな、俺。
「何だよ何だよ、霊夢だって年頃の女の子じゃねーか。蕩けるような甘い恋とか、興味ねーの？」
「無いわよ。魔理沙じゃあるまいし」
断言。
乙女力が欠如しておる……。
「って言うか、この子は何なのよ。神霊でしょこれ。異変起こしたら潰すからね？」
霊夢が北上を指差す。
「艦娘だよ」
「はぁ？」
「二次大戦頃の戦艦の神霊。今はこの子達と海の平和を守ってるんだよね」
やってることと言ったら霊夢と一緒、だよなぁ。トラブルシューターだよ。
「……よく分からないけど、今度は何人たらし込んだの？」
「百人くらい」
「馬鹿じゃないの」
食い気味に言われた。酷いな。
「え？何あんた……。百人くらいの神霊をたらし込んだの？いや、本当に、どうしようもないくらい馬鹿ね」
「皆んな可愛いから……」
「見た目が良いって理由で女の人に声かけるのやめなさいって言ってるでしょ？紫に声かけた時なんかは本当にびっくりしたわよ……」
いや、美人だったから。美人だったから。
「いつか痛い目に遭うわよ」
「望むところだ」

「望むな！」
はっはっは。
「まあ、でも……、本当にどうしようもなくなった時は、ここに来なさい。匿うくらいは、してあげるわ」
「ああ、ありがとう、霊夢」
……かくして、俺は幻想郷への挨拶回りを終えたのだった。
また異変起こったら、乱入しよう。
そう、心に誓って。

２２４話　衝撃！挨拶回り編　その７

ハロー花凛（妹）、元気ですか。
兄さんは元気です。
そんなこんなで挨拶回りと言う訳でここ、異界と現世が交わる街へルサレムズ・ロットにやってきた訳ですが。
『ハーイ！諸君！皆んなの堕落王フェムトだよ!!』
ただ今、黒井鎮守府一同……、
「ストナー！サンシャイン!!」
「サドン！インパクト!!」
「コークスクリュー！パンチ!!」
「トールハンマー！ブレイカー!!」
「インフェルノ！ブラスター!!」
「シィッ!!」
「はぁぁぁ!!」
『『『『キシォアァァァァァ!!!!
!!』』』』
交戦中です??
……いやいや、やっぱり駄目だったよ。犬も歩けば棒に当たるように、俺が歩けば厄介事が起こるのは皆んな知ってるよね。
よって、御多分に洩れず異常発生、護衛について来た七人の艦娘……、木曾、武蔵、大和、古鷹、加古、時雨、三日月が交戦し始めた。
何と？って聞かれると難しいな。
ヘルサレムズ・ロットで悪名轟くあの堕落王フェムトの魔獣って事は分かってるが……。
「六時間六分六秒で自壊、それまでは周囲のものを手当たり次第に喰らって進化成長する、ねぇ……」
ちょーっと、厄介過ぎない？
「南斗聖拳!!」
『グギ?!キェシャオオオ!!!』
あっ、駄目だ駄目だ。俺じゃ火力が足りない。全くもって足りない。

「頼むぜミカァ!!」
指パッチンと共に最強の召喚呪文。あいてはしぬ。
「了解です」
飛び立った三日月がメイスで魔獣を思い切り殴りつける。
木細工をハンマーで壊したような音。ありゃあ、骨という骨がイかれた音だな……。魔獣は紙屑みたいに吹っ飛ぶ。
「ヒュー！サイコーだぜミカァ!!いつもクールでカッコいい！俺の自慢の艦娘だぁ!!」
「ありがとうございます」
さて、どうするか。ここでまごまごしてても事態は好転しないぞ。
「んー、どうするかなー？」
脳内の瞳を拡張、周囲一帯を観測……。
……『ブレングリード流血闘術!!』
ああ、いた。
挨拶回りの目的、秘密結社ライブラの皆さんだ……。
「全体！進めェ!!」
「「「了解!!!」」」
ここで俺は思った。
世界の平和を守るのはライブラさんの仕事であって、俺達が戦うことはないんじゃないの？と。
更にこう思った。
魔獣、相手するのがめんどくさいし、押し付けちゃえ、と。

「総員、縦列に並べーッ!!」
「１１７式……」
おっ、やってるやってる。
「絶対不破血十字盾（クロイツシルトウンツエアブレヒリヒ）!!!」
ライブラのリーダー、クラウス・フォン・ラインヘルツさんの闘技がうなり、巨大な魔獣が十字に破断された。
「……提督、やるね、あの男の人」
時雨が俺に耳打ちする。

「そらそうよ。世界の平和を守る正義のヒーローだぜ？弱い訳がない」
いや本当にね！そんだけ強いなら深海棲艦の案件丸投げしたいんだけどね！
海上では戦えないし、戦力のリソースをヘルサレムズ・ロット以外には割けないんだと！
と言う訳で俺達が戦うんですが。悪の組織なのに深海棲艦と言う悪と戦ってる現状、これ如何に。
「ンモー、サイアクー!!」
金髪で眼帯の女性、K・Kさんが魔獣の血をモロに浴びて文句を言う。
「残りの魔獣を掃討しなくてはな。行くぞ皆んな！」
そしてライブラの副将、スティーブンさんが声をかける。因みにマインクラフトは関係ない。
「はいはい、っと。ん？なんだあいつら……？」
おや、ザップ君、こちらに気付くゥー。
「ガキ三匹、美人一人、可愛い女の子二人、メスゴリラ一体……？誰だ？おーい、旦那ぁ、誰か来るぜ」
「む、誰だろうか」
クラウスさんが振り返ると、当然、その先には俺達がいる訳で……。
「どうもこんにちは、黒井鎮守府です」
俺が挨拶する。
「ああ、こんにちは、ライブラです」
クラウスさんが挨拶する。
はい、挨拶回り終了ー!!
と、言いたいところだが。
「ミスターマオ、加勢して欲しい。頼めるだろうか」
チィッ！この野郎！
「いやいや無理無理、俺弱いし！戦えないし！」
「謙遜は要らない。先程も艦娘達を率いて戦闘行動をしていたと報告が上がっている。頼む、これ以上の被害は許容できない」

クソッ、クソッ、分かった分かった分かりましたよ!!!
怖いなもう、マジな視線で射抜くんだから！
クソ真面目デカブツめ、うちを巻き込まないでくれ!!
「はぁ～～～！（クソデカ溜息）各員！ライブラのメンバーと連携して魔獣を叩け！」
「「「了解!!」」」
俺の命令を受けた艦娘達は、一斉に駆け出した。
まあ戦うのは艦娘なんだけどね、戦わせたくないって言うか……。世界の平和を守るために戦うのが癪にさわるって言うか……。
そんな感じだ。
「トマホーク！ブーメラン!!」
木曾が魔獣の肉体を破壊する。
「……は、はは、あんな子供が前線に出てるのか。どうやらおかしいのは異界だけじゃなく現世も、らしい」
満面の苦笑いを見せるスティーブンさん。
「焼けろ……!!」
肩口のビーム砲をぶっ放す大和。
「嘘ぉ、ビーム?!現世の技術力どうなってるのよ！」
K・Kさんが驚く。
「白露型の狩りを見るが良い……!!」
血と炎を纏う斬撃をばら撒く時雨を見て、
「馬鹿な、あれは斗流血法・カグツチ……、じゃない?!何ですかあれは、見たことのない血法だ！」
ツェッドが目を見開く。
「うぉおう……、化け物じゃねえか。あれが艦娘ってやつか」
「酷いなザップ。彼女達は化け物なんかじゃない、人間だ」
「はっ、化け物の大将にそんなこと言ってもな」
おーおー、人様を化け物の大将呼ばわりか。
「なあ陰毛頭、言ってやれよ、この化け物マンによー」
「誰が陰毛頭だ誰が!!……でも確かに、マオさんは相変わらずですねー」

神々の義眼の保持者、レオナルド君が話しかけて来る。
「そうだろうそうだろう、相変わらずのイケメンだろう」
「いえ、まあ、顔が良いのはそうですが……、中身がぐちゃぐちゃって言うか、混沌を煮詰めたって言うか……」
んん？ああ、そうか。
全てを見通す神々の義眼だものな。
俺の中身なんて妖魔機械神気薬波紋仙術ごった煮のカレーみたいなもんだから、そんな反応にもなるか。
「へぇー、神々の義眼にはどう見えてるのかね」
「えっと、その……、大変言いにくいんですけど……、化け物ですね」
そうか、やっぱり化け物に見えるか。
「うひゃはははは！聞いたかよ！やっぱり化け物じゃねーかお前!!」
「うるせーぞザップこの野郎」
「痛え?!テメェ今人が手を離せないからって！」

「ようこそライブラへ。歓迎しよう、ミスターマオ。それと、艦娘の諸君」
魔獣騒ぎから数時間後、俺達はライブラの本拠ビルに招待されていた。
「あ、いえいえ、お構いなく」
実際、物見遊山ついでに挨拶しに来ただけだからな。
だから……、
「「「……」」」
そんなに警戒しなくてＯＫよ？お互いにさ……。
「おいおい旦那、良いのかよ？こんな化け物共引き入れて」
「やめたまえザップ。彼らは世界一の鎮守府一員だぞ。我々と同じく、世界の秩序を守るために尽力する方々だ」
「いやいやいや、それにしたってヤバ過ぎでしょ?!旦那並みのインファイターにレーザービームぶっ放す女、刃物鈍器振り回すガキ、女ガンマン……、ヤバ過ぎでしょーよ!!」
超人具合ではお前らも大概だと思うぞ。

それに……、
「世界の秩序を守るっつってもね。仕事でやってるだけさ」
やりたくてやってる訳じゃない。どちらかと言うと世界を掻き乱したい側だ。
いや、無駄な混乱は望むところではないな。もっと、こう、楽しいことで世界を盛り上げていきたい。
俺が世界を征服した暁には、自然を愛し、人を愛せる世界にしてみせるぞ！
「……しかし、今日まで海の平穏を保っていてくれたのは紛れもなく貴方方だ。私からも礼を言わせてもらいたい」
「はぁ」
律儀ー。
相変わらずこの人は見た目と違って律儀でクソ真面目で。
まあ、それがこの人の美徳なんだろうよ。
「「「……」」」
……ってか警戒し過ぎィ!!
せめて艤装消して！
「皆んな、艤装消して！失礼でしょ！」
「駄目だよ提督」
古鷹が唸るように言う。
「だって、正義の秘密結社だよ？悪の組織の天敵じゃない」
「……ま、まあね、そうなるね」
で、でもうちはそんなアクティブに悪やってないから！
俺達は気のいい歌の大好きな世界征服組織なだけなんです！
「諸君、どうか警戒しないで欲しい。我々ライブラは、諸君らが世界の平和を脅かすようなことをしない限り、敵対することは断じて無い」
「ほ、ほら、クラウスさんもこう言ってるから、ね？」
「……良いでしょう。ですが、私達は提督のご指示があれば、即座に、世界に喧嘩を売れる、とだけ申しておきます」
武器を仕舞いながら大和が宣言する。
あわわ、また物騒なこと言ってもう！

「その辺りは仔細問題ありません。ミスターマオは悪戯に世界を混乱せしめるような真似をする方ではないでしょうから」
「そうそう！世界相手に大立ち回りなんてしませんですとも！ええ！」
今のところ世界をどうこう、なんて予定はない。いや、未来永劫ないと思う。
「ライブラさんとは仲良くしていきたいです、はい！」
「私も、黒井鎮守府さんとは良い関係を築いていきたいと思う」
そして、俺は眼前の大男と手を握り合う。うひょー、でけえ。俺も１９０ｃｍはあるんだが……、クラウスさんは俺よりさらにでかい。手もでかい。
因みにうちで身長で言えばでかいのは長門型と大和型が１８０ｃｍくらいで、逆に小さいのが１４０ｃｍくらいの雪風。余談だな。
さて、そんなこんなでライブラの皆さんとは仲良くやっていきたいと宣言して、無事に終了だ。
今日の挨拶回り終了。
帰りは、ええと、ヘルサレムズ・ロットには最高のレストランがあるとか言ったっけ。
そこ、寄ってこうか。

２２５話　衝撃！挨拶回り編　その８

またもや、挨拶回りである。
まあ、挨拶回りと言っても物見遊山ついでに知り合いに会うだけなんだけどね。
さあ、どうするか……。
暫し、考える。
「艦隊のアイドル！那珂ちゃんだよー！」
アイドル？
アイドル、ふむ。
「３４６プロに出向くかァ……！」
元職場にＧＯだぜェ！

「その……、困ります……」
「ちっちゃいこと言うなよプロデューサー君」
「すごーい！ここが提督が働いてたプロダクション?!」
那珂ちゃんを引き連れて３４６プロへ。
元職場に来て悪いか?!
「せめてこっち、３４６カフェの方へ……！」
「いや俺幸子と茜とユッキとゆっこと輝子とナターリアと……、兎に角、元担当アイドルに会いに行きてえから」
「あっ、駄目です！本館の方は駄目です！貴方、美城常務に何やらかしたか覚えてるんですか!!」
「激寒ポエムおばさん、女版バンコランって呼んで顔にビールぶちまけただけだよ」
「貴方それでクビになりましたよねぇ?!」
それは所謂コラテラルダメージだ。そんなこともある。
「男には曲げられないものがあるのさ！」
「その辺を曲げない人間は社会でやってけないんですよッ!!!」
しゃーない、しゃーない。
だってあのおばさんアイドル部門を収縮するって言って来たから

……。
　つい、ね？
「確かに、いきなり現れてアイドル部門の収縮を宣言した美城常務にも悪いところはあります。ですが！ですが！」
「良いじゃん良いじゃん、過ぎたことよ」
「と、言うより、女版バンコランとは一体何のことだったんですか?!」
　いやだってあの人バンコランみてーな目元してたし。
「知り合いにバンコランって言う似た人がいたんだよ」
「は、はあ」
「因みにそいつホモだった」
　まあ、美少年好きだったから、俺は狙われなかったが。
「そう、ですか。……そ、そんなことは良いんです！兎に角、美城常務はこれ以上ないくらいにお怒りでした。そんな美城常務の前に再び姿を表せば……」
　まあ確かに、何されるか分からんなぁ。
「と言う訳です。迂闊にフラフラしないでください」
「ま、了解」
　なるほどな、大変だな、プロデューサー君も。

「プロデューサー?!うおおおお！トラーーーイ!!!」
「あーっ、プ、プロデューサー?!!」
　おっ、茜と、幸子か。
「あーーー!!!」
「んだよ、どうした那珂ちゃん」
「て、提督が知らない子と抱き合って……」
「んあ？あー、いや、茜は俺の元担当アイドルでな。これくらいのスキンシップは普通よ、普通」
「そ、そうなの？」
　いかんいかん、３４６プロにいたころも軽いハーレム状態を楽しんでたからな。
「どうだ幸子、仕事は大丈夫か？」

「ええ、ええ、大丈夫ですとも！貴方の持ってくる、『世界各所でスカイダイビング』、『逝ってQでイ〇トさんと世界旅行』、『アフリカの未開の地で原住民とバンジージャンプ』なんて馬鹿げた仕事が来なくなったお陰でねェ!!」
　はっはっは、幸子幸子。
「でも、楽しかっただろ？」
「……うっ、それは、そうですけど！でも、楽しかったのはちょっとだけですよ！ちょっとだけ！」
「またまた～」
　嘘つけ、絶対楽しんでたゾ。
「貴女も……」
「え？」
「貴女も提督の無茶振りに応えてきたアイドルなんだねっ！」
「え？え？何、誰ですか？」
「あ、急にごめんね？私は那珂、艦隊のアイドルだよ！」
　那珂ちゃんが幸子に自己紹介する。
「辛かったよね、怖かったよね……！急に未開の地で紐なしバンジーとか洒落にならないよね！」
「よ、良く分かりませんが、貴女もこのプロデューサーの被害者なんですね?!」
　そして団結。
「そうかな、俺そんなに酷いことしてるかな？」
「してます！」「してるよ！」
「ボクはアイドルなんですよ?!なんで芸人みたいな企画に毎度毎度巻き込まれなきゃならないんですかぁ!!」
「那珂ちゃんだってアイドルなの！バンジージャンプとかスカイダイビングはもう嫌ー!!」
「なるほど、一理ある」
「一理あるじゃないですよ！それが全てですよ!!」
「那珂ちゃんはアイドルなんだよ！アイドルらしいことさせてよ！」
　あーあーあー、聞こえない。何か言ったの？俺のログには何も

ないな。
「とぼけないで下さい！ボクなんて、スカイダイビングやりすぎてスカイダイビングの資格取っちゃったんですからね?!」
「私もだよ!!」
「良いじゃん、資格はあると有利だぞー」
「スカイダイビングの資格なんてなにに使うんですか?!!」「なにに使えるの?!!」
そりゃあ、その、スカイダイビングに？
一人で飛べるってことだろ！スゲーじゃん！
「因みに俺スカイダイビングでパラシュート開かなかった事あるぜ」
「えっ」
「あの時は死にかけたなぁ。さ、二人共！今からフリーでスカイダイビング行くか！」
「えっ?!今の話の流れからスカイダイビング?!!」
「私もやりたいです！」
「おー、茜も来るか？」
「はい！」
「うちの軍用ヘリと軍用パラシュートでスカイダイビングといこうじゃないか！なーに、映像はちゃんとユーチューブにアップして346プロの宣伝するからさぁ」
「ま、待ってください、ボク、お仕事が……」
「那珂ちゃんもやだよ?!」
恐れおののく二人を他所に、
「プロデューサー君、幸子のスケジュールは？」
「……はい、確認しました。大丈夫です」
「よっしゃ、イクゾー!!!」
「い、いやあああああ!!!!!」

ふー、たのちい。
幸子と那珂ちゃんと言うドリームタッグプラス茜でスカイダイビ

ングしてきた。
空から急降下するあの感覚！良いねぇ！
また今度も誘おう。そうしよう。
実は俺も持ってるからな、スカイダイビングの資格。
さて、次だ。
次は、そう、ジャギ。ジャギのところに行くか。
連れて行くのは、そうだな、隼鷹。隼鷹もヒャッハー系だ。
アポ？いらんいらん、友達に会いに行くだけだ。あいつ別に偉い訳でもねえし、ちょっと顔出すだけだし。
さて、隼鷹、隼鷹はー、と。……いた、昼間から飲んだくれてる。さ、隼鷹を回収してと。
「行くか、株式会社世紀末……!!」

「ヒャッハー!!旅人の兄貴じゃねぇですかい！ジャギ様にご用で？」
「ああ、新年明けてから顔見せてねえしな。一応取引先ってことで挨拶くらいはしとこうと思ってな」
「ヒャッハー!!了解でさぁ！こちらです!!」
株式会社世紀末に着いた。
相変わらずモヒカンがそこらにいるなぁ。威圧的ぃ。
「ジャギ様ーーー!!旅人の兄貴ですぜぇ!!隼鷹の姉貴も一緒です!!!」
「んあぁ？何だぁ？」
「よう、ジャギ」
「来てやったよ」
俺と隼鷹が声をかける。
「おお、マオと隼鷹じゃねえか。何しに来た？」
「「新年の挨拶」」
「遅えよ！もう二月だろ!!」
あ、やっぱり？
「全く……。まあ良い、折角来たんだ、上がっていけ」
「おっ、サンキューな」
「ジャギー、酒ー」

「分かった、分かった」
ジャギから酒をもらって、一服。
「にしても突然だな。今日が休みだったから良かったものの、急に訪ねて来るのは失礼だぞ」
革ジャン鉄メットの奴がなんか言ってる。
「その見た目でその台詞は似合わねえよ」
「馬鹿お前、親しき仲にも礼儀ありだろ」
「だからぁ、革ジャン鉄メットがそんな台詞吐いてんじゃねえよ！キャラ崩壊が著しい！」
「んだとテメェ!!」
変なところでまともだからな、こいつ。
「そう言えば、あんまりにも自然に接してるから聞いてなかったけど……、二人ってどこで知り合ったんだい？」
「ん？あー、実家がさ、近かったんだよ」
俺の実家の近くに、北斗道場があったんだよ。南斗の里も近かったな。
「なるほど、じゃ、二人って幼馴染なんだね～」
そうなる、かな。
「いやぁ、こいつとは本当、腐れ縁だ。こいつは平気でおっかねぇ兄者をからかったり、南斗の里にちょっかい出したりしやがるからな。それに付き合わされる身にもなれってんだ」
ジャギが腕を組みながら言う。
「へー、ジャギの兄さんって恐いのかい？」
「そりゃあ恐えの何のって……。強くてデカくて強面で、俺なんかじゃどう逆立ちしても敵わねえ人だよ。まあ、トキ兄者は優しいが」
「うん？何人兄弟？」
「四兄弟だ。上からラオウ兄者、トキ兄者、俺、ケンシロウの順だな」
「南斗の里ってのは？」
「俺達が使う拳法は北斗神拳ってんだがな、それと対になる拳法が、南斗聖拳って言うんだよ。その南斗聖拳には流派が色々あってな。その総本山が南斗の里ってんだよ」

「南斗聖拳……、あー、提督が使ってる、ような」
顎に手を当て、隼鷹が言う。
「そうだな、こいつは南斗聖拳の使い手だ。正式な伝承者って訳じゃねえが、色々な南斗聖拳をある程度まで使えるんだよ。ある意味でものすげえ器用な真似してるんだぜ、こいつは」
「へー」
まあ、俺のモットーは広く浅くだからな。どの南斗聖拳も完璧とは言えないが、ある一定ラインまでは使えるんだよ。
「んじゃ、提督って強いの？」
「……基準によるな。強い、と言いたいところだが、それは一般人を基準にした時のもんだ」
酒を煽って、ジャギが言葉を続ける。
「正直、俺達の周りが強過ぎるからな、あんまり強えって気がしねえんだよ。ラオウ兄者も、トキ兄者も、認めたくはねえがケンシロウも天才だ。それと比べると、俺やマオは一段や二段じゃきかないくらい下だ」
「なるほどねぇ」
「いやでも、凄いっちゃあ凄いんだぜ？北斗神拳も俺が教えたらあっさり使えるようになりやがったしよ、才能はある。まあ、それでも秀才止まりだが」
「じゃあ、微妙なんだ」
「び、微妙って……、まあ、そうだが」
「まあ、気持ちは分かるよー、黒井鎮守府にも馬鹿みたいに強い子がゴロゴロいるから。周りが強過ぎると自分の力に自信持てなくなるよね」
「それが分かってんなら、お互い、支え合うんだぞ、お前ら」
「そんなん、お前に言われるまでもないさ」
俺がそう返す。
「へっ、そうだな、仲がよろしいこって」
まあな。一応、カッコカリとは言えケッコンしてる仲だしな。
ところでジャギ。

「お前いつ結婚すんの？」
「……その話はするな」
このヘタレメット……。

２２６話　インド洋攻略作戦　会議編

面積約７３５５万平方キロメートル、想定水量２９２１３１０００立方キロメートル。
インド洋……。
なんて言うか、端的に言うと、次の仕事場だ。

「それで？作戦の方針は？」
会議室の中、大きなホワイトボードの前で腕を組む長門が尋ねてくる。
「まあ、どうもこうもないよね。真っ直ぐ行ってぶっ飛ばす、右ストレートでぶっ飛ばす、ってな感じで」
毎回言ってるけど、作戦は？って聞かれても無いと答える他ないんだよな。
まず一つに、作戦を立てるほど深海棲艦が強くない、いや、うちの艦娘が強過ぎるって点。
大抵は正面からぶっ潰せるからな、態々趣向を凝らす必要はないわな。
作戦というのは足りない戦力を知力で補うってことだし。筋力でぶち破れるなら作戦なんて要らねえよな。
第二に、海のど真ん中で人型同士で戦うのに作戦もクソもないって点。
これが艦隊戦ならまだしも、艦娘は人型の生き物。作戦の立てようがないのだ。
その上、戦場は障害物もない起伏もない海の上。
俺にできることは精々、戦場を俯瞰して臨機応変に細かな指示を出すくらいだ。
だから俺達がやるのは殲滅戦よ、殲滅戦。わーっと行ってわーっと殺す。平たく言えばそんなもんだ。
「しかし……、そうだな、敵の情報は？」
「敵の情報ねぇ」

まあ、一応偵察は出したが。
「ほい、ただいまー」
「はーい、おかえりー」
偵察に出した龍驤が丁度御都合主義的に帰ってきた。
ドンピシャのタイミングやな。……まあ、今日の午前にお願いしておいたから、午後である今に戻って来るのは何もおかしくはないな。
ん？ああ、日本からインド洋まで午前から午後くらいの時間で往復できる訳無いだろ！いい加減にしろ!!って？
そらもう、空輸ですわ。
うちの艦娘は遠距離へ出撃する際には、ヘリや輸送機で空を飛んでくんだよ。工廠組謹製の航空機は丈夫で多機能でな、ちょっとやそっとじゃ落ちない。
反則？
いやいや、そりゃあ空輸もしますわ。よく考えてみ？艦娘は人型なんだぞ？重さも人間並み。質量保存の法則を無視して艤装を呼び出す。じゃあもう空輸するしかないじゃない！
「じゃ、司令官、これ」
「ありがと、龍驤」
そんなこんなで、手渡された資料を見る。
ふむ、駆逐艦、軽空母、戦艦、正規空母。
四人の姫クラスと量産型がうじゃうじゃと。
なるほどなるほどなるほどねー。
「少なくともこの戦艦の子には勝てないな」
「何故だ？」
「俺必殺の強制ストリップ真拳が効かないからだ」
強制ストリップ真拳は、最初からすでに全裸より恥ずかしい格好をしてる子には効かない！効きにくい！
「そしてこの、どことなく吹雪に雰囲気が似ている軽空母」
「まあ、確かに、雰囲気が似ているな」
「可愛い」
「はぁ……」

はぁ、じゃないが。最重要だろ。誰が敵かより！誰が可愛いかで深海棲艦を語れよ!!!
「こっちの駆逐艦の子もクールそうな見た目で良いね」
「はー、だがな、いくら可愛かろうが私達は手加減しないぞ。深海棲艦である以上全力で潰す」
あら怖い。
「こっちの白い子も可愛いじゃないか」
「顔半分が真っ黒で肢体が人のそれじゃないぞ。可愛いと思うポイントが無いだろう」
「いやこのくらいならモンスター娘の範疇よ」
もーんすたー、もーんすたー、もんもんもんもんもーすたーらーいふ。
ラミアにハーピィ、ケンタウロスでも何でもござれだ。見た目良ければ全て良し。人外娘もなんのその。
ああ、異世界で風俗のレビュー書いたの、面白かったなー。スタンクとゼルは元気だろうか。また一緒にレビュー書きに行こうな。
「女と見ると節操なしだな……？」
「アッ、いやいや、何でも無いよー！」
いかんいかん、風俗巡りしたなんて言えない。黙っとこ。
いやあだが思い出すな。エルフは美人揃いで、獣人やハーピィはもふもふの抱き心地、モノアイの大きな瞳は美しく、ラミアに巻き付かれるのも気持ち良かった。
まあ、低級サキュバスに死ぬ程絞り取られたり、ハズレの店に当たっちまったり、サラマンダー抱いてチ◯コがこんがり焼けたりしたのは良い思い出だ。
「と、取り敢えず、鎮守府の半数は連れてくから。皆んな用意しとい て」
「「「了解」」」
さあ、そんなことより久しぶりの大規模作戦だ。気合い入れて行くぞ。

×××××××××××××××

『深海海月姫……、ヤツラダ、黒井鎮守府ガ、来ル……』

今朝、ワタシは、空に偵察機が飛んでいるのを見つけた。故に報告する。

……ここは完全にワタシ達の支配領域だ、こんなところまで来れるのは噂の黒井鎮守府だろう、間違いない。

ここ、インド洋は、正規空母の深海海月姫を中心とした深海棲艦の領域だ。

ワタシ、駆逐古姫も、インド洋を守る深海棲艦の一人。他には、軽空母の護衛棲姫、戦艦の北方水姫が所属している。

『ソウ……。ソロソロ来ル頃ダト思ッテイタワ……。心配、ナイ』

深海海月姫がそう告げる。

成る程、お見通しって訳ね。

深海海月姫は凄い。その強さも、知恵も、皆んなが一目置いている。ワタシ達のリーダー的な存在だ。

そんな深海海月姫が心配ないと言うのなら、問題はないわね。

『策ハアルノ？』

話を聞いていた護衛棲姫が尋ねる。

『エエ』

深海海月姫が頷く。

『策トハ？相手ハアノ黒井鎮守府、コチラモ警戒シタ方ガイイ』

北方水姫が尋ねる。

『コノ、集積地棲姫ガ造ッタ新シイ深海棲艦……、ナ級ヲ使ウノヨ』

深海海月姫が答える。

『コノナ級ニハ、内部ニ強力ナ爆薬ガ仕掛ケラレテイルノ。近接戦闘バカリノ黒井鎮守府ニハ特ニ効クノヨ。コレラヲ前線ニ送ル』

爆薬か……。これだけの数の、破壊されたら爆発するタイプのナ級……。それなら、黒井鎮守府に打撃を与えられるかもしれない。

『足止メノ鬼クラスモ数千体ハ用意シタ。対艦娘用ノオペレーションモ読ミ込ミ、武装モ揃エタ』

おお……！元からワタシ達が優位なのは変わりないが、これで更に

立場は盤石となった！
『……タダ、戦ウ前ニ言ッテオクコトガアル』
『『？』』
ん？何だろうか？
『最初カラ全力デ……、殺ス気デ行クノヨ。手加減モ、油断モナシ』
……。
『何故ダ？強イト言ッテモ所詮ハ艦娘。ワタシ達ガ本気ヲ出スホドデハ……』
『ソウネ、艦娘ナンテ雑魚バカリ。ココマデ戦力ヲ出スナラ、何ガ相手デモ殲滅デキルワ』
ワタシの言葉に、北方水姫が追従する。
黒井鎮守府がどれ程のものかは分からないが、それにしても、ワタシ達に敵う訳はない。
正直に言って、そこまで警戒する必要はないと思うのだけれども……。
『……敵ヲ、侮ルナ』
そう思ったワタシに対して、深海海月姫は咎めるように言った。
『ヤツラハ、敵ダ。唯一、我々ヲ滅殺セシメル者共……。ソコニ一片ノ油断慢心モアッテハナラナイ』
『シカシ』
『確カニ、コノワタシモ、黒井鎮守府ノコトハ資料デシカ知ラナイ。ダガ、ソノ資料カラデスラ、異常ナ戦力ガ伝ワッテクル……』
……確かに、ワタシも資料は見た。黒井鎮守府が冗談みたいに強いのも知っている。
だが、ワタシ達にもプライドってものがある。
ワタシ達の方が弱いなどと、認められるか！
第一、海からの強化だってあるのだ。ワタシ達の底力も更に強化されている。戦って勝てない道理はない。
『ヤツラノ力ハ、一体一体ガ姫クラスト同等以上ト考エラレル……。

イイカ、油断ハスルナ』
だがなぁ……。
『アノ、ワタシハ、深海海月姫ノ言ウ通リダト思ウ……』
護衛棲姫……。
『黒井鎮守府ハ、強イ。マズハソコヲ認メテ、気ヲ引キ締メルベキ、ト思ウ』
『……護衛棲姫、ソウヨ、ソレデイイ。今マデ、黒井鎮守府ナド取ルニ足ラズト言ッテイタ連中ハ皆、帰ッテ来ナカッタ……。ツマリ、黒井鎮守府ハ、ワタシ達深海棲艦ニ勝チ続ケテイルト言ウコトダ』
『ソレハ、ソウカモシレナイガ……』
『イカニワタシ達ガ海カラノ強化ヲ受ケタト言ッテモ、不安ハ残ル。確実ニダ。ワタシハ黒井鎮守府ヲ確実ニ粉砕シタイ』
深海海月姫……。
そう、だな、二人の言う通りだ。油断しちゃならないな。
そうと決まれば最初から全開だ。
首を洗って待っていろ、黒井鎮守府!!

２２７話　インド洋攻略作戦　開戦編

やって参りましたインド洋。
私用輸送船旅人号、工廠組製移動工廠船、護衛戦艦数隻。黒井鎮守府の艦娘の約半数。そんな面子を引き連れていざ出陣。
対するは四人の姫クラス、鬼クラス多数、その他深海棲艦多数。
おうおうおうおう、雁首揃えてぞろぞろと。ぞろぞろガーデン。
地平線を埋め尽くさんばかりの敵、敵、敵。まるで古代の戦争だ。
良いね、乗ってきたぜ。
さあ、戦いだ。
っと、その前に名前聞いておこう。
「君達、名前は？」
君の名は。
『名乗レト言ウノカ……、イイダロウ。ワタシハ深海海月姫。貴様ヲ殺ス、深海棲艦ノ名前ダ……!!』
『……駆逐古姫』
『北方水姫トイフ』
『護衛棲姫ヨ』
あら、意外にも素直。
「じゃあ、スリーサイズ教えてくれるかな」
『会話ヲスルツモリハナイ。死ネ……!!』
飛んでくる艦載機。
「うおっ、危ねえ」
スリーサイズは聞けなんだか。
仕方ないね。
「そんなら後でひん剥いて、身体に聞くとするか……!!」
『攻撃開始ッ!!!!』「作戦開始ィ!!!!」
声が、交差した。

まず駆け出したのは、足の速い駆逐艦だ。
「島風からは、逃げられないって！」
「行くぜ、超変身！」
「白露型の狩りを見るがいい……！」
数で劣る黒井鎮守府だが、その分は質で補ってるから（ドヤ顔）。
目算数千体の鬼クラスだが、うちの艦娘は一人一人が一騎当千……、無双ゲー並みの強さなもんでして。
『チィ……！前線ガ押シ負ケルダト……！』
「ふっふっふ、どうよ、うちの艦娘は？強いだろ？」
『波状攻撃ダ！休マセルナ!!』
それも無駄だ。うちの艦娘は継戦能力だって高い。
「無駄無駄ァ!!」
『ト言ウカ何デ貴様ハワタシノ隣ニイル?!』
「良いじゃん良いじゃん、仲良くしようぜ」
深海海月姫の肩を抱いてみる。
『失セロ!!!』
「ありゃ、振られちゃった？」
艦載機に攻撃される。
あら危ない。
うーん？俺イケメンだよな？何でだ？深海棲艦は魅了できないのかしら？
試しにちょっとイケメンパワー全開で迫ってみよう。
「時よ止まれ、お前は美しい（イケボ）」
『ナ……、何ヲ言ッテイル？』
「君が好きだーと叫びーたーい！」
どうだ？
『馬鹿ヲ言ウナ！敵同士ダゾ!!』
「そんなことはどうでも良い……。過去の因縁は水に流して、仲良くしようじゃないか」
『……例エ貴様ガドウ思ッテモ、戦イハ止メラレナイ!!』
「そもそも、何で戦ってるの俺達？もう良いじゃん、やめよう？戦って

得られるものに価値なんてないさ」
『……黙レ!!』
駄目かぁ。
後ひと押し、一向聴って感じなんだけどもなぁ。
こうなったらもう俺渾身の猛虎落地勢しか……。奴八破奴八破ー。
いや、他の子を口説いてみようか？
「護衛棲姫ちゅわ～ん」
『シッ!!』
「うおっ?!危ねえ?!」
いきなり殺意全開の回し蹴り。酷いね、全く。
「護衛棲姫ちゃん、俺と熱く激しく愛し合わないか?最高に満ち足りた暖かな日々を……、おわぁ?!」
音速で迫る平手打ち。
「こ、殺す気かっ?!」
『……イヤ、戦場ダシ。当タリ前デショ』
そんな、酷い……。
こうなったら……。
「戦争なんて下らねえ!俺の歌を聴けぇ!!!!」
歌うしかねえ。
『フンッ！』
「ぎゃあああ!!ギターーーー?!!!」
ああっ、ギターが！
「北方水姫ちゃん慰めてー!!!」
『消エロッ!!!』
おおおおお?!なんて綺麗なストレート?!!
「く、駆逐古姫ちゃ」
『ヤアアア!!!』
げえっ?!砲撃?!!
「回ッ、避ィ!!!」
危ねえ危ねえ。
んー、駄目か。やっぱり交渉とか説得じゃどうにもならないっぽい

ね。
ならもう……、
「はぁ、分かった分かった。もう良いよ。君達を傷つけたくなかったんだが……、そうも言ってられないらしい」
潰すしか、ないか。
×
×
×
「シィッ！はぁぁぁ!!」
「うひゃあ、すっごい斬れ味……。流石はぼのたん。強いぞー、カッコいいぞー！」
「うっさい漣！あんたも戦いなさい！」
「戦ってるよー！ほいっと！」
大規模作戦キタコレ！
ご主人様の嫁兼メイドこと漣は、だーい好きなご主人様の命令通り、インド洋にやってきたのであった！
……私と同じく、ご主人様ラブのイカれたメンバーを紹介するぜっ！
「ジャバウォック!!」
まずは皆んなのアイドル、ぼのたんこと曙から！
曙のはジャバウォックって言って、鋭利な爪の形をした手甲だよん。圧縮空気砲も付いててチョー強力！ヤバイ！
その爪には引き裂けないものはない、と言っていいくらいの斬れ味で、さっきから迫り来る鬼クラスの深海棲艦をバッタバッタとなぎ倒してる。
うむうむ、無双ゲーですな。
んえ？
ジャバウォックって何？って？
んん、それはねー。
『ナノマシンの集合体』なんだよね。
ぼのたんに限らず、綾波型の武装は、ナノマシンの集合体で形成されるの。

ナノマシン……、分かる？目に見えないくらい小さな機械のことなんだけどね、それが無数に私達の身体に移植されてるの。
ぼのたんは、右腕のジャバウォック。
朧は左腕のナイト。
潮は両目のクイーンオブハート。
私？
私はねぇ……、
「ホワイトラビット!!!」
両脚の脚甲!!
『ガギッ?!』
これにより圧倒的な脚力を得る!!
それだけじゃなく……、
「やあああ!!!」
『ゴガッ?!!』
『ギッ?!!』
『ゲアッ?!!』
圧縮空気による飛行も可能、ってね！
空中で高速移動、からのキーック!!!あいてはしぬ!!!
「砕けちゃえ!!!」
膝蹴りぃ～、っと。
足払い、蹴り上げ、踵落とし！
『ゴガ……』
……最後の踵落としで、目の前の鬼クラスの頭を叩き割って、終わり。
んー、数は多いけど、やっぱり相手にはならない感じー？楽勝楽勝！
見れば、先陣を切った駆逐艦に続いて、軽巡重巡が、戦艦空母が追いついてきたし。
はい、勝ち確の流れいただきましたー。
「ふん、ぬぁ!!!」
なんだろうかなぁ、文字で表すなら、ゴシカァン！とか？兎に角、物

凄い音を立てて吹っ飛ぶ深海棲艦。
「脆い、な」
長門さんだ。
来た、火力来た！メイン火力来た！これで勝つる！
まあもう勝負ありだよね。黒井鎮守府は最強無敵。はっきりわかんだね。

だけどここで、異変が起こる。
「ぐおっ?!」
……爆発？
「ぐう、気を付けろ！撃破すると自爆する深海棲艦が前線に紛れ込んでいる!!」
と、長門さんの声が響いた。
自爆する深海棲艦……？厄介だなぁ。
「各員、遠距離戦を心がけろ！」
遠距離戦って言ってもなぁ。まともに砲撃してたんじゃ火力が足りないし……。
んー、こっちも切り札を切るべきかな。
腐らせとくのも勿体無いしね。
「ぼのたん、反物質砲！」
まあ、切り札は私にはないけど。ぼのたんだけど。綾波型の、切り札ってこと。
「ぼのたん言うな!!……確かに敵が多いわね……。提督、良い？」
『良いよー』
曙が虚空に向かって尋ねると、どこからかご主人様の声が。良いってさ。
『全員退がってー、曙が前線を焼き尽くすよー』
ご主人様の声が脳内に響く。
同時に、艦隊の全員が一旦退く。……私が言うのもなんだけど、何でこんなに聞き分けが良いんだろうね。艦娘なんて変わった子ばっかりで、規律も何もない黒井鎮守府なのに。

突然、前線を焼き尽くすって言われて信用するもんなんだ。まあ、それだけ仲間意識が強いってことなのかな。
「行くわよ……、死ぃ、ねえええ!!!!!」
そして吐き出される火砲。
予告通り、焼き尽くされる前線。
まるでこの世の終わりみたい。
『次、睦月型がオーバードウェポンで突っ切るから、それに続いて』
「りょーかい、っと」
ボロボロになった深海棲艦の前線に、駄目押しのように迫る睦月型。
蒸発した海の飛沫の上に、チェーンソーが、ビームソードが、特大のミサイルが空を舞う。
『ハッハー、凄い凄い、これで深海棲艦の前線は総崩れだ。やれやれー!やっちまえー!』
いやあ、もうこれ、艦隊戦じゃないよねえ。物凄い殺戮ショーだよ、これ。
でもまあ、良いか。
ご主人様が楽しそうだし。
ご主人様が楽しいなら、私も楽しい。それだけだよね。
「さあ、追撃追撃、行くよー!」

２２８話　インド洋攻略作戦　戦闘編

『バ、馬鹿ナ……！ドウイフコトダ!!!』
「ははははは、甘いぞ、深海棲艦！」
甘い、甘いぞ、深海棲艦。我ら黒井鎮守府、切り札の一つや二つ、持っているに決まっているだろう。
『ッ、モウココマデ辿リ着イタトイフノカ?!』
「中々の包囲網だが、突破したぞ。この、ガングートがな！」
私、ガングートは黒井鎮守府の艦娘だ。
母国ソ連、いや、ロシアの地で提督に拾われて、黒井鎮守府に所属したのだ。
黒井鎮守府に所属してまだ日は浅いが、それでも、世界最強の鎮守府の一員であると言う誇りと自信がある。
故に……、
「北方水姫、と言ったな、貴様」
姫クラスが相手でも、恐れるに足らず！
「私が、相手だ……!!!」

『クッ、死ネエッ!!!』
無数の砲撃が、私の身体を貫かんと飛来する。だが、焦ることはない。
「プロテクト！ウォール!!!」
プロテクトウォール……。
艤装の掌を中心に発生した空間湾曲フィールドにより斥力を発生させ、攻撃を防ぐ技、と言うか機構だ。
『ナッ、何ダト!!?』
これで北方水姫の砲撃は防いだ。
「今度はこっちの番だ！」
私の艤装、両腕の手甲と背中の羽が、陽の光を受けて黒く輝く。
「ファントムリング!!」
ファントムリング軸固定良し。

「ブロウクン・ファントム!!!」
ブロウクンファントムは私の主兵装だ。回転した右腕部艤装を射出し、敵を粉砕する機構だ。
並みの深海棲艦なら、瞬く間に貫く黒鉄の拳、受けてみろ!!
『グゥッ?!!オオオオオオオ!!!』
ばりばりと言う轟音と共に、自らの手甲でブロウクンファントムを防ぐ北方水姫。む、受け止めたか。流石は姫クラス、一筋縄ではいかんな……。
「ならば接近戦でケリをつけてやる！行くぞ!!」
『グオオ……、ヤラセルカ!!』
すると北方水姫は弾幕を張る。接近戦は不利と思ってのことだろう。
今まで碌に戦闘せず、蹂躙ばかりしてきた深海棲艦と、接近戦で戦う仲間に恵まれ、訓練を積んできた私との間には隔絶した差がある。
近付けば、勝てる。
私は確信した。
「うおお、おおおおおおお!!!」
『ッ?!馬鹿ナ?!弾幕ヲ突ッ切ッテキタダト?!!』
だから、甘いんだよ、深海棲艦。
見通しが甘い。
私を、私達を誰だと思っている？
たった百そこらの頭数で世界に喧嘩を売れるだけの戦力がうちにはあるんだぞ。末端とは言え、その一員である私が、弱い訳、ないだろ……!!
「ぬぅ、ん!!!」
『舐メルナァ!!!』
横っ面へ殴打。だが防がれる。
「せりゃあ!!!」
『ガァッ!!!?』
もう片方の手でレバーブロー。当たった。
『ウ、オオオオオ!!!』

しかし北方水姫は、痛みに耐えながらも、殴り返してきた。
だが、遅い。
そして、
「ふんっ!!!」
軽い。
シマカゼはもっと速かった。
ナガトはもっと重かった。
それと比べると、深海棲艦のなんと未熟なことか。型も何もないテレフォンパンチ。その程度の拳で私を倒せるか！
「うりゃあ!!!」
『ゴッ、ハ……!!!』
北方水姫の土手っ腹にパンチ。水の入った皮袋を床に叩きつけたような奇妙な音が響く。内臓にいくらかダメージが入ったか……。
「はぁぁぁ!!!」
『グゥッ、ガアアアアアア!!!』
間髪入れずにラッシュだ!!!
「終わりだ!!!」
『ヤラ、セルカァァァ!!!』
……トドメの一撃を放ったが、弾かれ、あまつさえ反撃までしてきた!!
「ぐおっ!!!?」
『ワタシヲ、怒ラセタナ……!!』
これは、もしや……!!
「『壊』状態……!!!」
一部の強力な深海棲艦は、壊状態と言う、ある種の暴走形態があると聞いてはいたが……!!!
『コノ状態ニナッタカラニハ、生カシテハ帰サナヒ……!!!ハァッ!!!』
「ぐ、ああっ!!!」
なるほど、出力は倍増、と言うわけか。
体を抉る砲弾の雨あられ。
ははっ、やるじゃないか。

中々だ、効くな。
「だがな、そんなことで、そんな程度で私が倒せると思ったか!!」
『何ヲ……!!!』
パワーで負けている現状は不利。確かにそうだ。
だが、そんな不利をひっくり返す、必殺技が私にはある！
「ゲル・ギム・ガン・ゴー・グフォ……！」
『ッ、ヨクワカラナヒガ、ヤラセルカッ!!!』
砲弾が、当たる。
当たる、が、死にはしない。
死なないなら、倒せる！
「ヘル！アンド！ヘブン!!!」
攻撃のエネルギー、防御のエネルギー、両方を合成し、敵を貫く……!!
さあ、深海棲艦。
これが私の切り札、勝利の鍵だ!!!
「うおおおおおおおお!!!」
『グ、ア、アアアアアアアアア!!!!』
ふっ、私の勝ちだ……!!
×
×
×
「護衛棲姫と言ったな……。騎士としての矜持だ、名乗ろう……。私の名はアークロイヤル！」
『ナ、何……?!』
ワタシは困惑した。
目の前で名乗るこの女……、アークロイヤルがあまりにもちぐはぐだからだ。
……騎士甲冑に盾。それとランスと西洋剣。
決闘でもやろうと言うの……？
まあいい、付き合ってやる義理はないわ。
『行ケッ、艦載機!!』
アウトレンジから一気に決めさせてもらう……!!

「メガファン!!!」
『ッ?!』
瞬間、奴の槍の先から、稲光が迸る。
差し向けた艦載機は全て落とされた。
「はるか遠く、スダドアカワールドの魔法だ。効くだろう……?」
スダドアカワールド?魔法?もう、分からないことだらけ。
ただ、分かるのは……、
『油断大敵、カ……!!』
気を抜いたら死ぬ、と言うこと。
「さあ、悪よ、滅びろ!!!」
『チィッ!!!?』
ああ、もう!
最悪よ!
遠距離では魔法と艦載機、近距離では剣と槍。隙がない!!
それに、
『何ヨソノ艦載機!反則ジャナイ?!』
「む、私のハリアーのどこがおかしい?」
馬鹿じゃないの?!
最近の機体じゃない!!どうして艤装になってるのよ?!!
「黒井鎮守府驚異のメカニズムだぞ」
その一言で何でも片付けられると思ったら大間違いだからね?!
「最近はＲＸ―プロジェクトなるものを企画しているらしいが……、
詳細は不明だ」
ああもう、話しても無駄だ。
『艦載機ヨ!!』
攻めなくては!
物量で押せばいずれ……!!
いや……、
「どけぇ!!!」
防御力にものを言わせて突っ切ってくる……!
『クッ、接近戦ハゴメンヨ!!』

「むっ、逃げるかっ!!」
当たり前じゃない！槍や剣を持った相手と殴り合いなんてするもんですか！
「ならば仕方がない、速攻でケリをつけさせてもらう!!」
な、何を……？
「オーノホ、ティムサコ、タラーキー!!!!」
アークロイヤルが謎の呪文を唱えたところ、炎を吹く剣、霞を彷彿させる鎧、力強い盾が現れ、アークロイヤルはそれらを身に付けた。
「三種の神器(レプリカ)だ……。この状態はエネルギーの消費が激しいからな、数分しか保たないのだ。だから!!」
ッ?!は、速い!!!
「終わらせるぞ」
『ーーーッ!!!サセルカァッ!!!』
航空甲板で殴りっ、?!
「甘い」
『バ、馬鹿ナ』
ワタシの航空甲板が二つに両断された!!
「喰らえ……!!」
『ウグゥ……!!』
斬られ、た……!!
出血で、意識が……。
クソ、勝てない。勝てなかった。
深海海月姫、あとは、頼ん、だ……。

２２９話　インド洋攻略作戦　終戦編

『ソンナ馬鹿ナ、ソンナ、ソンナ……！』
深海海月姫が用意した策も、兵器も、一瞬で、一撃で、消し飛ばされた。謎の光に飲まれ、前線ごと壊滅したのだ。
あり得ない。不条理だ。こんなこと、あってはならない。
『ナンダ、ソノ力ハ……!!ナンナンダ……!!!』
ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな……!!
『一体何ヲシタァッ!!!?』
「反物質砲……」
激しく動揺するワタシに、黄色い髪の女が話しかけて来た。
「やあ、駆逐艦の皐月だよ！君は駆逐古姫、で合ってる？」
気安いな……。
『貴様……』
「簡単に説明するね？アレは、反物質砲。反物質を放って対象を対消滅させるんだって」
『ソンナモノ、アッテタマルカ……!!』
反物質砲だと？そんなもの、現代の技術力ですら……!!
「あるものはしょーがないじゃないか。因みに、僕のアセンブルは今回はＫＥキャノンとオートキャノン、ストレコザ、ＶＴＦミサイルだよ」
続けて話す皐月とか言う艦娘。
「因みに睦月はカラサワカラサワイザナミイザナミアラキデアラキデ、卯月はバトバト範サブオックスオックス、文月はカラサワカラサワアマテラスオックスオックスね。結構、皆んなガチめなアセンだね。所謂、殺しに来てるってやつかも」
何言ってるか全く分からん。
『フ、フン、ペラペラトヨク喋ル……』
「え？関係ないよ。だって、君は……」
イエローカラーの巨砲が二門、こちらを向く。
「ここで終わりだもん」

『誰ガ……!!』
終わってなど、やるものか。
「あはははは！行くよー？」
『クッ……！』
巨砲が火を吹いた。駆逐艦とは思えない火力だ。
避けなければ……!!
『ウ、オオオ!!!』
海上を滑るように移動して、飛来する砲弾を回避するワタシ。
「うーん、今日の僕は固定砲台だからなー。エイムだって皆んなと比べるとまだまだだしー」
ぐ、おおおお!!
『雷撃ッ!!!』
隙を見つけて魚雷を発射するも、
「はいはい、迎撃迎撃」
『クッ……！』
魚雷は火砲に穿たれ、無力化される。
しかし、弾数制限があるはずだ!!
「あ、弾切れだ」
ガチンと、金属が噛み合う音。弾丸が尽きたのだろう。今だっ!!!
『オオオオオ!!!』
「うわっ?!」
やったか……!!
?!
「痛たたた……」
よし、ダメージを与えたぞ!!
『コノママ押シ切ル!!!』
「やってくれたね……」
その時、不意に、虚空から巨大な機械の塊が現れる。
『待テ……、ナンダ、ソレハ?!』
せしてそれは、皐月と言う艦娘の背中にくっ付く。
「対深海棲艦規格外六連超振動突撃剣……。君がなまじっか強いから、これを使わざるを得なくなったんだよ。恨むなら自分を恨んで

ね」

回る、回る。六枚の巨大なチェーンソーが。

破滅的な轟音と共に、火と煙を吹いて、悪魔のように唸り声を上げる。

あ、あんなものを喰らったら……!!

『待テ、ヤメロ、クルナ』

「加減はするよ、でも、相当痛いと思うから、覚悟した方が良いよ」

『ヤメロ、ヤメロ……、クルナクルナクルナクルナ!!!』

「これが、全てを焼き尽くす暴力だ!!!」

『クルナァァァッ!!!』

×

×

×

『ソンナ、ワタシノ策ガ……!!』

「大丈夫？」

『大丈夫ジャナイ!!』

「そっか、取り敢えず落ち着こう、お茶飲む？」

『イラン!!』

おっ、どうしたどうした？

なんだ、ピリピリしてんな？女の子の日か？女の子の日の辛さは分からないな。女になったことはあるけど。ああ、いや、変異的な意味で。

そう言えば知り合いに水を浴びると女になる男がいるんだが、あいつは女の子の日とかどうなってるんだろう。今度聞いてみるか。

にしても深海海月姫ちゃんマジギレしてんなー、重い日だろうか、女の子は大変なんだなー。

『クソッ、ナンダアレハ、完全ニ想定外ダゾ……!!』

ああ、反物質砲？いやね、しょうがないよね。

うちの戦いってのは戦術と戦術をぶつけ合うようなお行儀の良いものじゃなくって、分からん殺し叩きつけてぶち殺すスタイルが基本なのよね。

でも本来、戦いってそう言うもんじゃね？と、俺は思う。

「まあ、そう言うもんだって納得してよ」
『貴様ァ……!!艦載機ヨッ!!!』
おお、スゲー。
流石は姫クラス。
流石は正規空母。
あっという間に空は深海棲艦の艦載機で埋め尽くされた。
『死ネ……、死ネ!!ワタシノ前カラ消エテシマエッ!!!』
おーおー、酷えな、爆撃、機銃、中には直接体当たりしてくるのもいる。
「参ったね、こりゃ」
飽和攻撃はなー。
避けるか受けるかして逃げるのが俺のやり方なんだが。
逃げ場がないとなると……。
「ムテッペキ、プロテス、ファランクスＩＩＩ、英雄、肉体の保護、プロテクション、剛体術、練丹術……、ハベルの鎧と盾、鉄の加護の指輪、カレル文字『深海』……!!」
受けるしかないよなぁ？
『……コレダケノ飽和攻撃ヲ受ケテ死ナナイダト？ドウイウ防御力ダ!!』
いやあ、俺は硬さには定評があるからね。代わりに、攻撃力は皆無だけど。
いわば俺はＲＰＧゲームにおけるタンクなのだ。
例えるならそう、ＦＦ４のセシルみたいな。パラディンに火力を期待するなよ。
加えて俺には剣スキルがない。剣スキルってか、武器全般を扱うスキルがない。使えるのは精々弓と投擲だけだ。
だから……、
「やっちまえ、木曾ー!!!」
「おうっ!!!」
火力支援、お願いします、と。
『チィッ!!!』

「トマホーク・ブーメラン!!」
俺の後ろから躍り出た木曾は、ウイングで空を駆け抜ける。
『グウウオオオ!!!』
投擲されたトマホークが深海海月姫の頭部装甲？を破壊。
しかし、
『コォン、ノォ!!!』
剥がれた装甲から両腕を出した深海海月姫は、頭部装甲に突き刺さったトマホークを弾く。
『貴様等ァッ!!!』
おお、暴れる暴れる。格ゲーで壁際に追い詰められた初心者みてえに暴れていやがるぜ。
「ハッ、やるかい？」
『来イ!!!』
なるほどね。
「やっちゃえバーサーカー!!」
だがね、ふふっ、俺のサーヴァント（艦娘）は強いのだ。
俺の一声で木曾は更に間合いを詰める。
どこからか取り出された大戦斧の大きな影がインド洋に映り込む。
そして。
「喰らいやがれェ!!!」
一気に攻め込む木曾。並の男よりずっと男らしい。その姿は歴戦の荒武者を彷彿とさせた。
俺的には大暴れする度チラチラ見えるスカートの中が大変グッド。
色気抑え目のグレーのボーイレッグでありまするな。
実に良い。
そんなこんなで、木曾をバレないようにいやらしい目で見ていると。
「ストナー!!!サンシャイン!!!」
『グオオオオオオオオ!!!』
決着がついていた。
展開した艦載機ごと破壊され、死ぬ一歩手前までダメージを受けた

深海海月姫。
可哀想。
「大丈夫？」
『大丈夫ジャ、ナイ……』
「そっか、取り敢えず落ち着こう、お茶飲む？」
『イラン……、グハッ』
ああ、血が……。
「木曾、やり過ぎ」
「ん、ああ、すまない」
木曾　は　どうでもいい感じだ!!
……木曾にとっては深海棲艦なんてどうなっても構わないのだろう。
敵は殺す。艦娘の基本方針だ。これをなんとか、敵を無力化する、にまでグレードダウンさせた俺は賞賛に値すると思う。
褒めて。
さて、いとも簡単に、あっさり、仕事は終わった訳だが。
『はーい、姫クラスの子達回収してー。残敵を掃討して』
俺が念話で呼びかけると、艦娘達は命令に忠実に動く。
「ヒュージミサイルで消し飛んじゃって!!」
「ブレストリガー!パルスビームモード!!!」
「アサルトコンバットです!!」
残敵を掃討して……。
俺の軽い命令を良く聞き入れて、命令通りに深海棲艦の残党を撃滅する艦娘達。頭を失った深海棲艦はまさに烏合の衆だ、バラバラに動き出しているのを取っ捕まえて叩き潰す。
「提督、あと五分もすれば残存戦力の処理が終わります。姫クラスは捕らえました」
俺の目の前で跪く神通。
「あらそう。マジ苦しゅうない」
無礼に返す俺。
「ありがとうございます」

が、何故か礼を言われてしまう。
「まあ良いや、姫クラスをここに」
「はい。……提督がお呼びだ、来い！」
そして即座に連行されてくる姫クラス四人。
さて……。
「選ばせてあげるよ」
『従属カ死カ、ト……？フン、殺セ。生キ恥ヲ晒スノハゴメンダ……』
何言ってんの？
「ああ、いや、そうじゃない」
『……何ダソレハ』
コスプレ衣装だが？
「ミニスカエロメイドか、ミニスカエロナースか、選べってんだよ……!!!」
『グ、オオ、オオオオオオオオ?!!殺セェーーー!!!イッソ殺シテクレェーーー!!!』

２３０話　戦勝パーティ

さて、インド洋の深海棲艦を倒し、またもや海の平和を守ってしまった俺達、黒井鎮守府。
いや本当に、不本意なんだがね。何で俺達が戦わなくちゃならないのか。誰か代わりに戦ってくれないものか。
世に名だたる正義の味方諸君は仕事をしているのか。何故悪の組織のうちが深海棲艦と戦わなきゃならないのか。
……でもまあ、仕事だしな。
桃さんとか空条教授とか、多くの人に期待されてるしな。
恩師恩人の期待は重いし、何より、働かなくては生き残れないのだ。世知辛いねー。
さて、と言う訳で。
姫クラス四人を捕らえてミニスカを履かせ撮影した後、離島に放り込んでおいた。
生き恥だ、殺せと懇願されたが、そこは俺。エロコスプレで陵辱の限りを尽くしたのだ。
楽しかったです。
そして、だ。
戦いに勝った後は？
やることは一つ。
「宴じゃい!!!」
宴会だ。
まあね、ここはね、黒井鎮守府はね、幻想郷とかワンピースとかみたいに、事件がひと段落したら宴会って決まってるから。
俺が酒を飲みたいだけ？い、いやいや、そんなことはないぞー。
だけどほら、こう言うのはお約束だから。例えばワンパターンと言われようと続けていきたい習慣。
「今回の作戦、皆良く頑張ってくれた！戦勝を祝して、乾杯!!!」
「「「乾杯!!!」」」
いつも通り、適当に音頭をとり、早々に乾杯する。乾杯前に長々話

したりはしない。
俺はイケメンなので不必要なことは語らない。沈黙は金だ。
「おめでとう、提督」
話しかけてきたのは長門。艦隊のリーダー的存在だ。
「ああ、おめでとう。これも全て、君達の努力のお陰だよ」
素晴らしきかなこの勝利、その全ての功績は艦娘にある。俺は何もやっていないさ。
「そんなことはない。どれもこれも提督の力だ」
いやいや、俺は軽く指揮を執っただけだよ。
正直に言って艦娘は、この強さなら、俺がいなくても海を奪還するのは時間の問題だ。
確かに数年前までは、マブラヴが如く追い詰められていた人類だったが、今は黒井鎮守府が攻勢に出たお陰で、海の半分以上を解放している。
後数年もすれば、この青い海の全てを人類の手に取り戻すことが可能だろう。
「いやいや、この調子なら、俺がいなくても……」
と、俺が冗談半分で言ったら……。
「やめてくれ！駄目なんだ、私は。提督がいないと、駄目だ」
長門に抱きしめられ、そう、返された。
なお、抱きしめの威力はジーグブリーカー並み。軽く死ねる。
「長門……」
今のでダメージ受けたから離して欲しいかなーって。
「いなくなるなんて、冗談でも言わないでくれ。私は、私達は、提督がいないと駄目なんだ……」
んー、やはり依存されてる。
後数年で海を解放できるってことは、提督である俺がお役御免になるってこと。即ち、俺の旅も再開するってことだ。
それまでには艦娘の皆んなを自立させて……、とは考えてるが。どうだろうか、無理そうだな。
最悪、追跡を振り切って逃げることも視野に入れて……。

いや、よそう。
先のことなんて分からないんだ。考えても無駄だよな。
なんかこう全てが上手くいって全体的に丸く収まる筈だ。
何てったってご都合主義って書いてあるからな。
最後にはまた旅が再開できる、と思う。
「長門、甘えるのは構わないけど、そろそろ自立するべきじゃないかな」
「提督の重荷になっていることは分かっている。だが……」
「重荷だなんて思ってないさ」
重荷、ねぇ。
側から見たら歪な関係なのかもしれないが。
「だが私達は、提督がいないと兎に角駄目なんだ。ずっと、ずっと側にいてくれ……!!」
「……ああ、そうだね」
そうだね、と。
俺は、嘯いた。

さて、おっぱい揉もう。
すまん、シリアス決め込んで女性人気ゲットとか思ったんだけど、保たなかった。
だってもう、目の前におっぱいがあるんだもん。
抱きつかれて押し付けられた長門のおっぱい。触りたくもなるだろ。
「長門……!!」
「んにゃあ?!」
揉んだ。
良く鍛えられた大胸筋の上のおっぱい。少し硬い感触だが、それもまた良し!!
「い、今は真面目な話をしていただろう!!この流れで何で胸を揉むんだ?!」
「ごめんなー!シリアスとかできないんだ俺ー!!ごめんなー!!」

すまない。本当にすまない。
だが俺は揉みたかった、揉みたかったのだ。
自分の欲望に正直に生きてきた俺にとって、美女の誘惑に乗らないと言う手はない。例え罠であろうとも、そこに快楽があるのなら突っ込む（色んな意味で）のが俺流だ。
「はぁ、もう……、良いさ。提督はそう言う人だ。好きなだけ触ると良い」
「イェア！」
ゴーサインも出たことだし、目一杯揉もう。
さーて、揉み揉みーっと。
「んっ??」
揉み。
「あっ??」
揉み。
「ちょっと待っ??」
揉み続ける。
「ーーーっ????」
おおっと?? 長門は一際大きく痙攣した。どうしたのかなー？
「おやおやおやおや、大丈夫かな長門」
しかし揉む手は止めない。
「イっ、ああっ!?? △○×!?!??」
長門は、言葉にならない嬌声を上げる。
ええんか、ここがええんか。
楽しいなぁ、女の子責めるのは楽しいなぁ!!
最高に楽しい。
イクのよりイかせる方が楽しいんだよ。淫らに乱れる女の子ほど良いものはな、
「あらあら、あらあらあらあら」
その時、隣から、万力のような強さで腕を掴まれた。
「陸奥ェ……」
「狡いわ、二人とも。私も混ぜてくれなきゃ嫌よ？」

陸奥　からは　逃げられない　!!

しょうがねえな、陸奥も揉んでおくか。

息も絶え絶えな長門を隣に座らせ、陸奥を膝の上に座らせる。

「これで満足か、陸奥」

「あん??ええ、とっても」

甘い声を漏らす陸奥の、ふんわり大きな胸を揉みしだく。

おお、これは……。相変わらずのナイスバディだ。ただ大きいだけでなく、美しい形……。均整のとれた完璧な肉体。

「ああっ??相変わらずっ??触るのが上手ねっ??」

「そりゃあね」

「んんっ??何人の女の子の胸をっ??揉んできたのかしらねっ??」

「秘密だよ、秘密」

そろそろイかせるか。

それ、キュッと。

「ああんっ??」

大きな艶声を上げる陸奥。その姿は美しく、官能的だった。端的に言えばエロい。エロいのだ。生半可なＡＶ女優なんて敵じゃない。その姿はまさにそう、サキュバス……!!

流石は陸奥だ。

俺ももう創聖合体したい気持ちを抑えるのでいっぱいいっぱいだ。いや、やっぱ無理、誘おう。

「む、陸奥、ちょっと俺の部屋で」

「提督……。それは、駄目じゃないかな」

はわわ（諸葛亮）、し、し、時雨?!

「陸奥さんと、何を、しようとしていたのかな」

いやいやそんな、創聖合体だなんて思ってませんよ。あなたと合体したいだなんて。

「僕はいつも言ってるよね？そう言うことは白露型がしてあげるって」

俺の肩に手をかける時雨。

「白露型なら、滅茶苦茶に犯して、好きなだけ孕ませて良いんだよ？なんなら、殺してしまっても構わないんだ。提督の為ならどんなことだってするよ、僕達は」
と、耳元で囁かれる。
ん？今なんでもするって言ったよね？
「じゃあパンツ見せて」
「はい」
ひらり、と。スカートをめくってパンツを見せてくれる時雨。
黒。
良し良し。
黒。
黒かぁー。
駆逐艦らしく幼さを残す相貌ながらも、どこか妖艶さを感じさせる時雨にはピッタリの色だ。
「パンツも脱ごうか？」
「いやそれは困る」
Ｒ１８は不味いですよ!!
「何が不味いのかな？僕と交わることがそんなに嫌かい？だとしたらショックだよ、提督」
いや、そう言う訳じゃない。ただ、そんなことをしたら方々から怒られると言うか……。
「……まあ、良いさ。提督の気が向いた時、好きなように使ってくれれば、それで良いんだよ」
そんな道具じゃあるまいし。使ってくれなんて悲しいこと言わないでくれよ。
「じゃあ、好きに躾けて下さい、と言っておくよ。白露型は君の忠実な僕で、ペットなんだから」
……ああ、全く。
何を言っても無駄だな、こりゃあ。
「じゃあ、おっぱい揉ませてくれる？」
「僕の胸かい？そんなに大きな方ではないけれど……、提督が揉みた

いなら」
ウェーイ!!
さて、時雨を膝の上に座らせて。
揉む。
「あっ??良いね、こう言うのも??刹那的な快楽に身を委ねるのも素敵だ??」
うーん、やはり控えめ。
二次性徴の真っ只中と言った年頃のその肉体は、青い果実も良いところ。
だがしかし、これくらいの年頃の女の子を触るのはこの世界では１００パーセント犯罪、その背徳感分の喜びがある。いや、ロリコンではないが。
「はあっ、んんっ??楽しいかい？」
「最高に楽しい」
最高に楽しい。
時雨の控えめおっぱいを揉めるこの喜び。
なんと表現すべきか。
かっこよく、我が肉体が歓喜に打ち震えた、とでも言っておくか。
「ほらほら、お酒も飲んでね」
そして順当に酔わされていく俺。

「うへへへへへへ、おっぱいがいっぱい……」
酔いが良い感じに回ってきたな。
目の前がぼんやりする。
海の中を漂うような感覚。
気持ちが、良い。
「提督さん？酔っ払っちゃったっぽい？えへへ、じゃあ、夕立のここを……。んんっ??」
なんか触っちゃいけないところを触らされてる感覚があるけど、よく分からない。
「良い感じにぐてんぐてんですねー??ふふっ??ぺろ、れろ、れる……

??」
耳を舐められてる感覚があるけど、よく分からない。
「あはっ??提督の、おっきい……??ご立派、だね??」
触られちゃいけないところを触られてる感覚があるけど、よく分からない。
よく、分からない。
眠い。
まあ、鎮守府の中だし、眠っても危険はないだろう。
そう思って、俺は。
意識を、手放した。

２３１話　乱痴気騒ぎ後の騒ぎ

ふー。
なるほど、なるほど……。
「おはよう」
「おはようございます、提督」
さて、朝起きて、まず気付いたこと。
全裸だ。
自発的に脱いだ覚えがないと言うのに、全裸だ。
そして次に、鼻につく女の匂い。
なんていうか、ヤった後の……。
……。
……?!
「古鷹」
「はい？」
「ヤってないよな？」
「うふふ、何もしていませんよ？」
ほんとぉ？
「ただ、私は、提督の『息抜き』をお手伝いしただけですよ」
息抜きとは。
ナニを抜いたんですかね。
「可愛かったですよ、提督??」
何が？
怖いんだけど。
俺、何されたの？
記憶ないんだけど、寝てる間に何されたの？
うっわ、怖い。
え？
本当に何？
ついに逆レされた？
「本当に何もしていないんだな？」

「はい、何も」
ニコニコ笑顔の古鷹。
本当？ねえ本当？
いきなり子供連れてきて貴方の子よ！とか無しね？
「提督？」
「何？」
「男の人のアレって、あんなに沢山出るものなんですね」
アレとは。
「二回目三回目も同じくらい沢山出て……。凄かったですよ、提督??」
何が？
何？
何されたの俺。
……まあ、良いか。
忘れよう。酔ってやったことは忘れてＯＫ。
どうせ大したことじゃねえよ。
さーて、風呂入ってこよう。

「おおう、全身キスマークだらけだ」
大浴場の姿見で身体を確認したところ、全身くまなくキスマークだらけだった。
変わりどころで歯型、注射痕なんてのもある。
本当に俺は寝ている間に何をされたのか。謎は深まるばかりだ。
そんなことを思いつつ、大浴場でシャワーを浴びる俺。
「お、司令官じゃん。……ってかキスマーク凄っ」
ん、望月か。
「本当にな、凄いキスマークだよなこれ」
「まああたしもキスマーク付けたんだけど」
ブルータスお前もか。
「この辺だったかな」
と、脇腹あたりを突いてくるもっちー。
「む、くすぐったいな」

「ほれほれ」
と、一頻りいちゃついて。
自然な流れで俺の隣でシャワーを浴びる望月。
「司令官、昨夜はお楽しみでしたね」
そんなドラクエの宿屋みたいなこと言われましても。
「昨夜は何されたんだ俺」
「空母に齧られて、白露型に血を抜かれて、あとは、ほら、『息抜き』のお手伝いをね」
だから、息抜きとは一体なんなんだ。
「ところでさ」
「何？」
「でっかかったよ」
何が？
「そんで、沢山出てた」
だから何が？
「あたしも触ったけど、熱くて硬かったよ」
何が？ナニの話？
「はーい、さっぱりした。先に上がるねー」
謎は深まるばかりだ……。
×
×
×
「さて、夕張ちゃん！」
「何ですか明石さん！」
「作ってあそぼの時間ですよー！」
「わーい！」
何を作ってあそぼーかなー！
はい！
今日はー！
「今日はホムンクルスを作ります！」
「わー！」
ホムンクルス……。提督の持っていた書物にあった魔法生物です

ね！
　錬金術の本に書いてありました！
　生命倫理？知りませんねぇ、そんな言葉は。
「これで、私の体細胞と、昨晩提督から採取した白くべたつく何かをレッツラ混ぜ混ぜ！」
「こっちには私の体細胞を使いますよー！」
「錬金陣を描いて、と」
「描きまして、と」
「エネルギーを流します！夕張ちゃーん！ジェネレーター持ってきて下さいー！」
「はーい！」
　さて、準備ＯＫです！
「行きますよー!!」
「ドキドキですね!!」
　せーの!!
「「通電!!!」」

『『キ……、ギ……、ギガギ！キシェオアアアアアアアアアア!!!!!!』』
「あっはっは、夕張ちゃん」
「あっはっは、明石さん」
「「失敗ですね!!」」
　やっちゃいました??
　いやー、失敗失敗。
　何が悪かったんでしょうか？流すエネルギーを電気にしたこと？そもそも人外の提督と私達の体細胞を使ったこと？それとも普段の行いとか？
　まあ、何にせよ。
「化け物ですねぇ」
「そうですねー」
　鋼鉄の機械の様なフレームに、黒いコールタールみたいな体液が滴り、獣や鳥、魚、樹木の様な組織を持ち爛々と輝く臙脂色の瞳が多数。

悪魔の様な翼と、棘のついた尻尾。辛うじて人型ですが……、原型をとどめていませんね。
私の作った方は重厚なフォルムで、夕張ちゃんが作った方はシャープなフォルムが特徴的ですね。
『ギギッ……、チェ、イン！デ！カッターー!!!』
『ガガッ……、カデン！リュ、ウシ！ホウ!!!』
「うっひゃいあーーー!!!」
なるほどなるほど、私達の体細胞から、私達の性質を受け継いでいる、と。
「どうします、明石さん！」
「取り敢えず、逃げましょう！」
逃げて、適当な艦娘に押し付けちゃいましょう。
建物を破壊しながら、逃走する私達に追いすがる二体のホムンクルス（？）。
「明石さん、暁型の皆んなです！」
「おーい！皆んなー!!」
前方に見えた暁型の皆んなに手を振る。
「あら？」
「ん？」
「明石さん？」
「え？」
『『ガガガギギギ!!!』』
「「助けて下さい!!!」」
「「「う、うわあああ?!!」」」

「明石さん、今度は何したの？」
軽く怒った様な目線を向ける響ちゃん。
「私と提督の愛の結晶を作り出すつもりが、失敗してこんなことに！うう、悲しいです、私は!!」
「洒落になってないからね、あんな化け物。取り敢えず全員で足止めするよ。夕張さんは応援を呼んできて」

「はーい!!」
元気よく返事して、本館に走って行った夕張ちゃん。
私は、暁型の皆んなと足止めだそうです。
「豪熱マシンガンパンチ!!!」
雷ちゃんの鋭いパンチがホムンクルス（？）のボディを貫く。
しかし、
「ッ?!再生!!?!」
『ギギッ!!!』
ホムンクルス（？）は、欠損した肉体を再生させたのだった。
「再生か……。まるで司令官みたいだ」
「そりゃそうですよ、提督の白くべたつく何かを使って作ったんですから。再生もするでしょう」
「……何でそんな馬鹿なことしたんだい？」
「だって、提督と私の細胞から作り出したホムンクルスですよ？間接的とはいえ、愛の結晶と言っても過言ではないでしょう!!愛する人との愛の結晶が欲しい、女の子の当然の欲求です!!」
「……明石さん、やっぱり貴女は気狂いだ」
酷いですねー！狂ってなんかいませんよ！
『グググルルル……!!!ブン、マー！スパナ!!!』
「くっ……！明石さんの性質と司令官の性質を持つ化け物……！厄介だね」
私のブンマースパナを模した兵装で暴れるホムンクルス（？）。
パクリですよ！悪質なパクリです！
「しょうがない、外だし良いか。炸裂！ガイアクラッシャー!!!」
響ちゃんが両拳を地面に叩きつけると、瞬く間に大地は隆起して、その鋭い土の牙でホムンクルス（？）を貫いた。
『『ガギッ?!!』』
「今だ電、暁!!!」
「宝華教典・五火七令羽旗!!!」
「ローゼスハリケーン!!!」
電ちゃんのフェイロンフラッグによる電磁拘束、暁ちゃんのローゼ

スビットによるエネルギーの渦での拘束。
それにより、二体のホムンクルス（？）の動きを完全に止める。
「ふう、これで抑えられるだろう。応援が来るまで待とうか」
「はーい」
それにしても、何で失敗しちゃったのかしら？うーん、私の予想だと、提督に似てカッコいい男の子が生まれると思ったんですけどねー。
そーんな可愛い我が子に、「ママー！」なんて呼ばれたら……！
「うへへ、うへへへへへへ……!!」
「……？明石さん、どうかした？」
「響ちゃん、今ちょっと妄想が良いところなの。邪魔しないでね」
「……やっぱり、気狂いだ」

「応援じゃぞ！」
「今度は何したのよ明石さんは!!」
現れたのは利根ちゃんと五十鈴ちゃん。
なるほど、ビームで再生する前に吹き飛ばす作戦ですね！
「ビームキャノンじゃ!!!」
「ツインバスターライフル!!!」
「「消し飛べ!!!」」
『『ガァァァァァァ!!!!!』』
二人の砲の銃口から溢れた破壊の閃光は、二体のホムンクルス（？）を飲み込んで、やがて消えた。
二人の武装の設計は夕張ちゃんだったかしら？うーん、素晴らしい出来ね。エネルギー系武装ならやっぱり夕張ちゃんね！
「ありがとー！助かったわ！ごめんね皆んな！」
「明石さん、ごめんと思うなら、こんなことしないでもらえると嬉しい」
響ちゃん、なんか私に当たり強くない？！
「お詫びに、次は成功させますね！」
「もうやらないでくれ、と言ってるんだがね」

それはちょっと無理ですかねー。
ま、なんにせよ……。
「取り敢えず、あの化け物が壊した建物、ちゃんと直してね、明石さん、夕張さん」
「はーい！」
仕事が増えました、ねぇ。

２３２話　ホワイトデー

三月十四日。
そうだね。
ホワイトデーだね。
皆んなから沢山の血ョコ（誤字にあらず）を貰ったからね、お返ししなきゃね。
もちろん、お返しするのは真っ当に美味しいチョコレート菓子だ。マシュマロやキャンディにクッキーでも良いだろう。
異常なものをもらったからと言って異常なものを返すのはおかしいだろう？血や体液を混入させたりなんてしないよ。
「川内は何か食べたいものとかあるかい？」
「……っはー、嘘でしょ？何で分かったの？」
と、天井裏がガコンと開いて川内が顔を出す。
そんなもん、旅人の感知能力からすれば丸見えなのよ。
俺は旅人、青空の下に生きる男だぜ？いつ何時襲われるか分からないその生活の中で、目星＜８０＞や聞き耳＜８０＞だけでなく勘や脳内の瞳などがどんどん鍛えられていき……、ってことよ。
「鍛えてますから」
「うう、私の隠形を暴けるのなんて提督だけだよ。本当に、どういう勘してるの？」
そう言われてもな。奇襲に気付かなきゃ死ぬような場面に何度も出くわすと嫌でも感知能力なんて鍛えられるぞ！
人間、必要に迫られればどんなスキルだって習得できるんだよ。
「で、何の用だい？」
「んー？そろそろホワイトデーだから、提督にお返しを取り立てに来た、って言ったら？」
「歓迎するよ。で、何が欲しい？」
「提督の、チョ・コ・バ・ナ・ナ??」
むむむ。
いかんよ、下ネタは。

いい加減色んなところから怒られてもおかしくない。
「チョコバナナ？お祭りとかで食べられるでしょ」
と、すっとぼけ。
「もー、分かってる癖にー??」
逃げられん、か。
川内は俺に身をすり寄せ、俺のズボンに手をかける。
「こらこら」
「うちって、産休とか育児休暇とかある？」
「ん、一応あるけど」
「じゃあ、デキても安心だね！」
こらこら。
「はいはい、やりませんからね」
と、軽くあしらう。
「良いじゃん良いじゃん！私と気持ちいいことしよう？」
駄目です（ヤーマン）。
Ｒ１８の壁は厚い。
それに……、
「刹那的な感情に身を任せると碌なことにならないぞ」
実体験だ。
「この気持ちは刹那的な感情なんかじゃないもん」
俺に抱きついて言う川内。
んー、そうだな。
「そう言われては仕方がない。じゃあ、しようか」
「本当?!やったあ！」
まあ、俺としては、ヤりたいのも山々なところなんだがねー。
でも、最近は、いざヤろうとすると……。
「させないっぽーーーい!!!」
「ぐあああああ!!!」
横からロケット抱きつきで俺の胸に収まる夕立。
そう、そうなのだ。
最近はヤろうとすると、専ら、邪魔が入るようになったのだ。

「提督さん、駄目っぽい」
「じゃあ夕立としよう」
「ならＯＫっぽい！」
　それならばと、夕立を抱いて歩き出そうとすると、
「は？いやいやいや、それはおかしいでしょ、夕立ちゃん。何で横から入ってきて提督を掻っ攫ってる訳？」
　川内がこれをカット。
「じゃあ川内としよう」
「だから、駄目っぽい」
　夕立がカット。
「じゃあ夕立と……」
「うー、提督さん、からかってるっぽい？」
「バレたか」
「からかわないで欲しいっぽい！」
　おこなの？夕立ちゃんおこなの？
「まあまあまあまあ、怒らない怒らない」
「むー！」
　ご機嫌斜めだ。
「ほら、機嫌直してくれよ、夕立。はい、バレンタインのお返しのチョコチップクッキー」
「いただくっぽい……、美味しい!!」
　だろうな。
　俺渾身のクッキー、不味い訳がない。
「はい、川内にも」
「あ、うん。お、美味しい……!!」
　よし、餌付け完了。
「もぐもぐ……、じゃなくて!!!」
　おっ、どうしたどうした。
「川内さんと私、どっちを選ぶっぽい?!」
「私だよね、提督！」
「私っぽい!!」

「「ぐぬぬぬぬぬぬ!!!」」
ああ、もう……。
修羅場だ。
シュラバ。
そういや昔、シュラバ・やポンって知り合いが、
「「どっちを選ぶの、提督（さん）!!」」
あー!
あーあーあーあー。
現実逃避もさせてくれないのかよ。
「とてもじゃないが選べないよ。どっちもじゃ駄目かい？」
「じゃあ、どっちが先か選んでよ！もちろん、私を先に愛してくれるよね！」
「はぁ？何言ってるの川内さん？私が先っぽい！」
「「ぐぬぬぬぬぬぬ!!!」」
あーあー、いがみ合いはいかんよ。
「こらこら、やめなさいってば」
「表に出るっぽい、川内さん。決着つけるっぽい」
「へぇ、望むところだよ、夕立ちゃん」
「はいはい、喧嘩しない喧嘩しない！」
睨み合いを続ける二人を引き剥がす。
「でも……」
「だって……」
「でももだってもありません！仲間同士仲良くしなさい！」
「「はーい」」
一件落着、か？
「で、どっちを選ぶの？私だよね、提督さん！」
「私よね、提督！」
あーーーもーーー!!!
保留で、と答えて空間湾曲でその場から立ち去った俺。
最近は露骨に襲いかかって来る艦娘達。

もうちょっと、女の子らしい慎みを持っていただきたいところだ。
まあ、エッチな女の子も好きだけど。いや、大好きだけど。
でも、抱けないのに誘惑されてもなあ。
「大淀、バレンタインのお返し何がいい？」
「そうですね、提督と私の間に子供を、なんてどうでしょう」
どうもこうもないが。
「食べ物にしてもらえるとありがたいんだけど」
「では、提督の濃厚なホワイトチョコ（意味深）を……」
また下ネタだよ。
「下ネタは……、やめようね！」
本当にやめよう？いい加減怒られるからね？これ、一応、Ｒ１５までだからね？
……ってか、Ｒ１５ってのもまた分からんよな。十五歳頃なんてヤりたい盛りじゃんかよ。少なくとも俺は、十五歳の頃にはかなり女遊びしてたよ。
ノースティリスで風俗巡りしたりな。楽しかったよ。
「……提督？」
「……ああいや、ちょっと昔を思い出してた」
「ふふ、過去に想いを馳せるのも結構ですが、どうせ考えるのならば私と提督の輝かしい未来についてでしょう！」
ははは、大淀は今日もトップスピードだなあ。
でもな、良いんだ、そんなことは。
重要なことじゃない。
「大淀……」
「はい、提督？」
「お願いだからパンツ履いてくれ」
そう、大淀はノーパンなのだ。
何故だか知らんがノーパン……。
ノーパン。
「いえ、これは、提督にいつでも犯してもらって構わないというアピールで……」

「そんなこと、しなくていいから（良心）」
「こう言った方がよろしいでしょうか、私のいやらしいメス穴をご主人様のたくましいおちん」
「やめロッテ!!!」
　どうしたいんだ、大淀。
　むしろ、どうしたんだ。
「俺をどうしたいんだ大淀は。どうして欲しいんだ」
「端的に言えば、ブチ犯していただきたいと思っています」
　ネジが数本抜けているどころか、中枢回路が短絡してショートしているようなご回答。やはりヤバい（再確認）。
「あのな、大淀。大淀は女の子なんだから、そう言う下品な物言いはやめた方が良いよ？」
「そうですか？このような物言いの方が提督が興奮されるかと思いまして。あと私の趣味です」
　趣味か。
　そう言う趣味なら、まあ、仕方ない、ですかね。うん。
「でもほら、一応Ｒ１５だからさ、純愛決め込まねえと方々からお叱りを受ける訳よ」
「はあ」
「私のハートがキュンキュンしちゃうのー、とでも言っておけば純愛だから、オールＯＫだから」
「キュンキュンするのは提督専用のハメ穴と子宮ですかね」
「違ーう、もっとこうピュアに！可愛らしく！慎ましやかに!!」
「？」
　はぁ、分かってない顔だ。
「兎に角、エロから離れて！まともな思考回路を身に付けよう？」
「はい！」
　返事だけは良いよね。
「はい、じゃあこれ、バレンタインのお返しのお菓子ね」
「ありがとうございます」
　軽く頭を下げて礼を言う大淀。美人だなあ。美人なんだけどなあ

!!

「こちらのお菓子には提督の精液が入っていたりとか」

「しないよ！」

２３３話　ダイエットしろ、赤城

「もぐもぐ……、美味しい！」
あははは、赤城は美人だなあ。
……。
俺の記憶がおかしくなけりゃ、いつも何かしら食ってるよな。
……。
食い過ぎ、じゃん？
「赤城、ちょっと来て」
「はーい？」
「おいで」
腕を広げて待つ。
「はいっ！」
赤城が胸にダイブ。
……。
ふむ。
ふむ、ふむ。
「あっ、ちょっ、提督！駄目です！脇腹のお肉つまんじゃ駄目ですー！」
「赤城」
「ダイエット、しようか」
瞬間、赤城は一瞬にして絶望顔になる。
「い、嫌です！美味しいものを食べるのをやめたら死んじゃいます！」
「だって、これはさ、あのさ、ちょっと、如何なものかと」
もちもちっ！ふにふにっ！ふわふわっ！
「お、女の子はちょっとふくよかなくらいが一番可愛いんですよ！」
「それを女の子自身が言っちゃう？」
「夏までには痩せますから！」
「去年も聞いたよ、それ」

「……提督、どうかご勘弁を！」
「うん、駄目」
「いやあああああ!!!」

「……取り敢えず、食べるのやめて。ほら、これから出撃でしょ？ついて行ってあげるから、行くよ！」
「うう、はーい」
工廠製ヘリに揺られて空の旅。
戦闘海域まで真っしぐら。
特にトラブルが起こることもなく、着いた。
「ほら、赤城！敵艦接近！来るよ！」
「はい！ファンネル!!!」
赤城は、良い返事一つを返すと、艤装から、赤い円柱状のユニット……、ファンネルを射出した。
「そこっ！」
赤城の思考によって制御されるそれらは、宙空を不規則に浮遊し、黄色のレーザー光を照射した。
『『『ーーーッ!!!?』』』
その光は、迫り来る深海棲艦の身を貫き、どんどん屍の山を積み重ねていった。
でも。
これは。
「（赤城、動いてなくね？）」
はんはんははーん、成る程成る程成る程ねー？
通りで赤城が痩せない訳だ。
「分かった、もう良い、帰還するぞ」
「え？はい」

次、お稽古の時間。
「……これでっ！」
皆中。

おー、素晴らしい。
良い腕だな。
ミリ単位で着弾点を制御できるとなお良し。
「うーん、今日はこれくらいですかねー」
ここでも、俺は思った。
「（赤城、動いてなくね？）」
と。
「良し分かった、戻ろうか」
「はい！」

昼過ぎ以降の自由時間。
大抵の艦娘は午前中に出撃してノルマを達成し帰ってきて、その後は思い思いに過ごしている。
「おやつ、おやつ……♪」
「駄目です」
「うわーーーん!!!」
おやつを食べようとする赤城を阻止。
「むー、良いですもーん。こうなったら不貞寝です！……て、提督も一緒にお昼寝、しませんか？」
「良いよ」
「えへへ、やりました！」
可愛い。
可愛い、が。
「（赤城、動いてなくね？）」
と、俺は思った。
そんなことを考えながら、休憩室の畳の部屋で赤城と昼寝した。

結論。
「赤城」
「はい！」
「動くんだ」

「はい？」
「有酸素運動が足りないよ」
「有酸素運動……？」
そう、ダイエットと言ったら有酸素運動、有酸素運動と言ったらダイエット！
赤城のお腹周りについたその魅惑の駄肉、落とすためには走らなきゃ！
脂肪を燃焼させるには！
「まずは着替えようか。ジャージほい！」
「わっ、い、一瞬で服装がジャージに?!」
強制ストリップ真拳の応用だよ。
「それじゃあ走ろうか」
「えっ、走り込みですか?!」
走り込みだよそりゃ。
「い、今から?!」
「そうだよ（肯定）。行くよ、ほら、走って！」
「うう、分かりました……」
……夕焼け空をバックグラウンドに、走る俺と赤城。
「走れー、赤城走れー」
「はーいー」
「頑張れ、頑張れ」
「はーいー」
おお、良い調子だ。
もっと走れ、頑張って走れ。
しかし、十キロそこら走った頃……。
「も、もう無理です、限界です」
「後十キロ」
「無理ですぅーーー!!!」
「せめて五キロ」
「一歩も歩けませぇーん!!!」
「赤城!!!」

「無理なものは無理なんですぅー！」
　十キロ程度でへばるか……。
「赤城、体力ないのな」
「えぇ?!十キロ走ったんですよ?!」
「君、軍人でしょ。十キロ程度で音を上げちゃいけないんじゃないかな」
　俺が傭兵やってた頃の訓練はもっとキツかったゾ。
「いや、ほら、あれです……、私空母ですから！走れなくっても問題はないんですよ！」
「陸自のレンジャー部隊にでも預けようか？」
「それだけは……！それだけは……！」
　レンジャー部隊、すっげえ厳しいからな。
「はぁ、もう良いよ。帰ろう。車出すから、乗って」
「うう、はい……」

「ダイエットと言ったら水泳だ、水泳」
「分かりました！一航戦赤城、泳ぎます！」
　次の日、黒井鎮守府プールにて。
「……にしても、相変わらず黒井鎮守府の設備は充実してますね。並みのスパリゾートより凄いんじゃないですか？」
　趣味が高じて温水プールまで作ったからな。
　因みに、温泉もゲームセンターもテニスコートもボウリング場もあるぞ。
「そうそう。折角作ったんだから使ってよ」
「スポーツはそんなに好きじゃないです」
「ンモー」
　水着に着替えてきた赤城の腹肉をつまむ。
「ああっ！駄目ですー！つまんじゃ駄目ですー！」
「何がつまんじゃ駄目だこら。身長と体重は？」
「身長は、１６５センチくらいで、体重は、その、えっと、ひ、秘密です??」

腹肉をつまむ。
「ひゃあん！わ、分かりました！言います！言いますから！その、ですね、６０、ごによごごによ、キロです……」
「うん、１０キロは落とそうか」
「無理ですぅー!!死んじゃいますぅー!!」
「じゃあせめて５キロ」
「でーきーまーせーんー!!!」
できない、と言うのは、嘘吐きの言葉なんですよ。
「赤城、良いか？太り過ぎると健康被害が大変だから言ってるんだぞ！赤城の！為を！思って!!!」
「わ、分かりましたよぅ」
「良し、じゃあ泳いでくれ。……あれ、泳げるよな？」
「あ、はい、それはもう。……そもそも、海上で戦う艦娘が泳げない訳ないでしょう。皆んな泳げますよー」
「よーし、じゃあ泳いで来てね。端から端までを百周」
「百周!?!」
ん？何だ？そのくらいならちょろいだろ？
「体力お化けの提督と一緒にしないでください！」
そうか？
俺の体力なんて精々、飲まず食わず寝ずで三日間戦闘行動を続けられるくらいのもんだ。
ＢＦ団の人達や、幻想郷の妖怪達と比べたらまだまだ貧弱、クソザコナメクジだ。
「さ、行ってらっしゃい、赤城」
「うう、分かりました……」

結局、五十周をしないうちに赤城はダウン、俺に抱えられて部屋へと戻った。
「赤城……」
「何も言わないでください……」
「……」

「違うんですよ、これは……。そもそもダイエットすること自体が間違ってるんですよ……。提督はどんな私でも愛してくれます……」
「いや、あんまりにも太られたら俺もなー」
「うううううー！見捨てないでくださいー！」
「じゃあ、これからは定期的に運動するようにな」
「分かり、ました……」
　項垂れる赤城。
　……ん？
「流石に気分が高揚します」
「むしゃむしゃ、んー！美味しー!!」
「もぐもぐ」
　加賀、蒼龍、飛龍。
「君達」
「「はい？」」
「ちょっとおいで」
　両手を広げる。
「「はい！」」
　胸に飛び込んでくる三人。
　……うん、うん。
　あー、はいはい。
「君らもダイエット、だね」
「「?!!」」

２３４話　特技：酔わせてお持ち帰り

「エサヒィ～スープゥードゥラーーーイ!!!」
「え？」
「鳳翔、間宮、一緒に飲まない？」
「え？何ですか今の？」
「いや、気にしないで良いよ」
　何となく口に出してみたかっただけだ。
「でも、冗談抜きで好きだよ、アサヒスーパードライ。辛口でキレがあってさ。俺、辛口の酒好きだし」
　喉越しが良くって、ガブガブ飲む俺には最適なんだよ。脂っこい料理をたらふく食った後にアサヒスーパードライを喉に流し込むのが最高なんだぜ。
「は、はあ」
「二人もたまにはビールとか飲んで思いっきり酔ってみなよ」
「私は、後片付けもありますから……」
「そーんなの俺がやっておくからさ」
　なーんだよ鳳翔！
「提督にご迷惑をおかけしてしまうかもしれませんし……」
「気にすんなってばよ」
　なーんだよ間宮！
　お互いまだ若いだろ！酒の席で自制なんてしなくていーんだよ！そして酒の席でやったことなんて気にすんな！迷惑なんて好きなだけかけろ！
「駄目ですよ。只でさえ、最近はロボットにお仕事を取られているのに……」
　ああ、あれなー。
　鎮守府中に徘徊する多数のお手伝いロボットなー。
　基本、料理以外の家事は全部やってくれるから、厨房組がちょっと困ってるらしい。
「良いじゃん、これを機に、家事以外の趣味でも見つけたらどうだ？」

ビールサーバーからビールをリロードしつつ、提案する。
「そう言われましても」
「思い付きませんねえ」
「編み物や裁縫とかは？」
「出来ますけど、皆んな十分過ぎるくらいお給料を貰ってますから、態々何かを作ることもないですね」
鳳翔が言う。
「……そもそも、何で殆ど戦っていない私にも、他の艦娘達と同じくらいのお給料が出てるのが分からないんですけど」
と、間宮。
うちの艦娘の給料、基本給は一律一緒だ。出撃や、夜戦には別で手当てを付けている。
「まあまあ、そんなことは良いじゃないか。さあ、飲めよ」
「もう、また誤魔化しましたね？」
「ビールが好きならエビスビールだな。コクがあって美味いんだよ」
「もう……」
誤魔化されてくれる二人。
渡したビールをゆっくりと煽る。
「……まあ、家事はさ、最悪ブラウニーとかシルキーとかキキーモラとか呼び出せば良いし、気にしなくて良いよ」
「何ですかそれ」
「家事やってくれる妖精とか幻獣とか」
「へえ、そんな便利なのがいるんですか」
感心する間宮。
「でも、呼ばなくて良いですからね！これ以上お仕事がなくなっちゃうと、困ってしまいます」
「ああ、分かった」
そう？
「まあほら、趣味がないってんなら、酒くらい飲みなよ。何なら飲むのが趣味だって言っても良い」
少なくとも俺は酒盛りを趣味と言えるくらいの頻度でしている。

「そうですね、それも良いかもしれません。……んー、ビール美味しいです」
鳳翔がエビスビールを飲む。
麦芽百パーセントだからな。独特のコクがあって美味いのよ、これが。
「よし、たまには俺がおつまみを作るか」
「いえいえ、提督は座っていて下さい！そう言うことは私達がやりますから！」
「もう立っちゃったもんねー」
さて、材料はと。
鯛に、キャベツ、椎茸、あさり……、などなど。旬の美味しい食材で一杯だ。
じゃあそれを、こうして、こうして、こう。
「春野菜たっぷり鯛しゃぶ、おつまみキャベツ、焼き椎茸、あさりの酒蒸しだ」
素材の味を活かした。
「言ってくだされば作りましたのに……」
「まあまあ、たまにはね。ささ、食いなよ」
「では、いただきます」
「いただきます」
さあ、どうだ？
「「～ッ！美味しい！」」
「はっはっは、だろうな」
「甘みと旨みがぎっしりの旬の真鯛のしゃぶしゃぶですよ！」
「塩辛いガーリックソースと春キャベツの甘さとのハーモニーが！」
「椎茸もジューシーで噛むたびに水分が溢れてきます！」
「あさりの酒蒸しは安定した美味しさですね！バターの風味が最高です！」
満足してくれたようだ。
「どんどん飲みなよ。後片付けは俺がやっておくからさ、たまには思いっきり酔ってみなよ」

「うーん、まあ、そうですね。所謂、ハメを外す、と言うやつですか」
「そうそう。たまにはがっつり飲まなきゃな」
飲みニケーションの強要、ではないが、真面目で良い子の二人には、たまにはハメを外してリラックスして欲しいと言うのが本音だ。
何と言うか、良き妻であろうと頑張ってくれるのは嬉しいし、ありがたいんだが、たまには気を抜いて欲しい。
「オラオラ、飲め飲め、がっつり飲め」
「は、はい」
「いただきますね」

２　ｈｏｕｒｓ　ａｆｔｅｒ、二人は。
「えへへぇ、だんなさまー??」
「ていとくー??」
べろんべろんに。
どうでもいいけどべろんべろんってなんか響きがエロいよね。
かなりのペースで飲んでたから、相当酔ってるなこりゃ。
酔った女の子は色々と守備力が下がるので良いですよねっ！
女の子を酔わせてお持ち帰り……、よくやったことだ。
「だんなさまー、あーんですよー」
「はいはい、あーん」
おつまみを口に入れられる。
「よしよし、良い子良い子れしゅ??だんなさまも、だんなさまとの赤ちゃんも、可愛がってあげますかりゃねぇ??」
確かに、鳳翔は良い母親になれそうだが。
「俺的には子供とか要らないんだけど」
「だめぇ!だーめでーしゅー!だんなさまの赤ちゃん欲しいでしゅかりゃ??たくしゃんの子供に囲まれて……??おかーしゃんって……??えへへへへへぇ??」
俺の腕に頬ずりしながら、妄想を垂れ流す鳳翔。
きっと、今の鳳翔の頭の中には、幸せな家族との未来予想図が広がっていることだろう。

おめでてーな。
「んー??ていとくぅ??しゅきぃ……??」
いつもの貞淑なキャラが崩壊しているのは間宮。
俺に抱きついてべっとり甘えている。
「どうした間宮、随分と甘えん坊じゃないか」
「ほんとはぁ、ずっとこうしたかったんでしゅ……??でもぉ、私は、ていとくの妻だから、ちゃんとしなきゃって思ってぇ??」
そうかい。
「良いんだよ、間宮。沢山甘えてくれて構わない」
「んもぅ、ていとくだいしゅきー??」
「はいはい、俺も好きだよー」
さて、既にシャツは脱がされ、上半身裸な訳だが。
なんだか知らんが、艦娘の皆んなは酔うと俺を脱がせるみたいだ。
まあ、酔ってなくても脱がされるが。
そして、全身くまなく付けられたキスマーク。
独占欲の表れか。
「だんなさまのお母さんになってあげましゅね??」
そして、母親になりたがる鳳翔に、
「はは、遠慮しておくよ」
「ていとく、わたしのお父しゃんになって??」
本当は甘えたかった間宮。
「おう、良いぞー」
愛い奴め。良い良い、余は全てを許そう。
「だんなさま、子供、作っちゃいましょー??」
「ゴム有りでなら今すぐにでも……」
『駄目だよ』
あっ、時雨からテレパシーが。
ゴム有りでも駄目らしい。
「ずるいでしゅよぅ、鳳翔さーん!ていとく、私とも子供作りましょ??」
「ゴ、ゴム有りなら……」

『駄目だよ』
クッソ！邪魔するなァッ！時雨エッ!!!
「さあ、二人とも！俺と部屋でイイコトしようじゃないか！」
さあ宴もたけなわいい調子。今なら誘っても許されるのでは？
「はーい??」
セッ○スするんだ！俺は！うおおおお!!!
「「「白露型だ！」」」
「「一航戦です！」」
「「「妙高型よ！」」」
「「「最上型です！」」」
そして部屋に雪崩れ込む艦娘。
あーもう滅茶苦茶だよ！
結局、どうあっても俺はセッ○スができないのでしたとさ。

畜生……、畜生ーーー!!!

２３５話　自分を卑下する男はモテない

「ぐへへ」
「……？」
　何だろう、提督の視線を感じる……。
「あの」
「何？」
「何を見てるんですか？」
「祥鳳の柔肌」
　私の、肌？
　……ああ。
「服を片方、はだけさせているのが気になるんですか？」
「ああ、君の玉のお肌が綺麗に輝くのを見て幸せになっているのさ」
　ええと？
「提督は、私の身体を見ると嬉しいのですか？」
「ああ、そりゃあもう」
　つまり、これは、「そう言う事」ですよね。
「えへへ、少し恥ずかしいですけど……、提督になら、見られても平気です」
「……そうかい。俺的には、鎮守府がいくら女所帯とは言え、あんまり無防備な格好を晒すのは良くないと思うんだけどもね」
「そ、そうですか？」
「そうさ、そんな格好をしてると、俺みたいな悪い男に食べられちゃうぞ」
「て、提督になら、食べられちゃっても……」
　食べられちゃうって、つまり、エッチなことをされてしまうって事ですよね。
　少し、恥ずかしいけれど、提督になら……。
「……はぁ、祥鳳も俺のこと好きなのか。そんなに好感度を稼いだつもりはないんだがな」
　……そう、明け透けに言われると、これまた恥ずかしいですね。

「……はい。私、祥鳳は、提督を、お、お、お慕い申し上げます!!」
　でも、これが正直な気持ちですから!
「んあー、もー、俺、駄目男だよ、惚れる要素ある?」
「はい、沢山」
　時折、提督は自分を過小評価する。謙虚さは美徳だけど、そこまで自分自身を卑下しなくてもいいと思う。
「えぇ……。俺クズだぜ?」
「やめて下さい!幾ら提督でも、提督を悪く言うのは許しませんよ!」
　何でいつもは自信満々でカッコいいのに、時折自分を貶すようなことを言うんでしょうか。
「いやいや、天下無双のクズだぞ俺。麻雀で負けて三千万スった時の話とかする?」
「さ、三千万……?」
　それは、確かに、物凄い額ですが。
「そう。マンション麻雀で負けてな」
「マンション麻雀って何ですか?」
「マンションで打つ麻雀」
　マンションで、麻雀を?どう言うことなんでしょうか。
「いつもレートはデカピンくらい」
「どのくらいですか?」
「千点千円」
　成る程?
「でも、その日は違った。傀と名乗る黒ずくめの男に、『打ちませんか?』と誘われてな。あれよあれよとレートを上げられ最終的には『御無礼』の一言と共に三千万が一夜で消し飛んだよ」
「それは、何というか、大変ですね」
「ギャンブルやる男とか最低だよね」
　そうでしょうか?
「男の人は、賭け事とか、お好きでしょう?多少は仕方ないかと思います」
「三千万は多少じゃねーけどな」

確かにそうですけど。でも……、
「ですが、提督は、鎮守府の運営資金には一切手を出していないじゃありませんか。三千万円は確かに大きな額ですが、提督にとっては決して取り戻せない額ではないですよね？」
「そりゃ、そうだが」
「最低の男、と言うのは、周囲の反対を押し切ってまで、使ってはいけないお金にまで手をつけて、賭け事をする人のことを言うんだと思います」
「そう、か？」
「はい」
その点、提督は、お金の使い方は豪快ですが、手をつけてはいけないお金には、一円たりとも手をつけないお人です。
それに、例え賭け事に負けても、怒ったりせずに割り切ることが出来る人格者でもあります。
普通は、三千万円も負けたら怒ったり泣いたりするでしょうが、提督はそんなことはありません。大きな負け分を笑い飛ばせる時点で、大物です。
「……うーん、そう言う見方になる、か。だがな、一応言っておくが、マンション麻雀は犯罪だ」
「えっ、そうなんですか？」
「ああ、刑法１８５条、賭博罪。見つかったら捕まるんだよ」
「へえ」
「そう、そうだよ。俺は悪い奴だ。数多くの犯罪を犯してきた。こんな悪い男に惚れちゃならないよ」
悪い……？
一体、どこが悪いのでしょうか？
「ですが、そもそも、提督がすることは全てが正しいのです。何が悪いこと、なんでしょうか？」
「まさかの全肯定?!」
当たり前、ですよね。
「俺は、ほら、悪いこと色々やったぞ！知り合いの怪盗三世と金庫破り

とか、テンプル騎士団のアジトに爆弾仕掛けたりとか！」
「確かに、一般的には悪いことかもしれません。でも、全て、提督がするならば正しいことになるかと思います」
「な、何を言ってるんだ祥鳳。俺は悪党だぞ」
「いいえ、提督は常に正しいのです」
　提督が白と言えば鴉も白色。常識ですよね。
「何なの君達、洗脳でもされてんの？好感度高過ぎとかそう言うレベルじゃねーぞ」
「洗脳？いえ、されていませんが」
「自覚なしか。……はぁ、遠慮しなくて良いんだぞ。気にくわないこととか、俺の駄目なところとか、指摘して良いんだからな」
「……分かり、ました」
　提督に駄目なところなんて無いのに。気にくわないなんて、そんなこと……。常に私達のために尽力してくれている提督には、頭が下がる思いです。
「ですが、覚えていて下さい。この祥鳳、提督のためならば、いつでもこの命を捧げる、と！」
「重いよー、アジア系マフィア並みの忠誠心が重いよー」
「ふふ、もっと軽く考えて良いんですよ。私達の命、好きに使い潰して下さいね！」
×
×
×
×
×
悲報、祥鳳が重かった。
命を預けるとか忠誠心がマッハ。
「正直、重いよ。期待が重い。俺はそんな凄い人間じゃないんだ」
「はあ」
　どう思う？翔鶴。
「私は、旅人さんが、祥鳳さんにそれだけの忠誠心を向けられるだけの凄い人だと思いますよ？」
　そうか？おだてるなよ。
「そうかな」

「はい！まず、頭が良いじゃないですか！だって、大学院出てるんですよね？」
「ああ、最初は日本の大学だったけど、留学してアメリカのミスカトニック大学とイギリスのグラッセンヘラーカレッジで考古学を修めたよ」
「凄いじゃないですか！」
いや、そうでもないけどね。大学の名前だけじゃ、社会に出てから通用しないって空条教授が言ってた。俺、社会出てねーけど。
「俺は賢くなんてないよ。精々、人よりちょっと頭の出来が良いって程度さ」
英国紳士の方の教授とか、本当に頭が良い人にはまるで叶わない。俺の頭の出来は精々上の下ってところか。
素の性能がそんなんでもないんだよ。妹の方が賢い。
「でも、教員免許も持ってるんですよね？」
「持ってるけど、あんなもん誰でも取れるよ。大学で片手間で取っただけだよ」
日本の教師のレベルを見て欲しい。教員免許なんてもん、誰にだって取れる。
「それでも、凄いじゃないですか！誰にでも出来ることじゃありませんよ！」
そうかい。
「それに、身体能力も超人並です！」
「並の超人並ってとこだよ」
「並の超人って言うのはよく分かりませんが……、素手で鋼鉄を引き裂き、銃弾を弾き、野生の獣より素早い……、完璧です」
その程度だ。技量は海王さんや愚地会長に届かないし、パワーや耐久性はラオウさんに届かない。気の闘技は桃さんに何十段も劣るし、スピードはヤーナムの狩人さん達に劣る。
いわば、人間卒業試験仮合格程度だ。
「何より、艦娘の全力を受け止めてくれるのが、私達にとって一番嬉しいんです。思いっきり触れ合えるなんて、とても喜ばしいですよ」

「いやー、俺程度のレベルの超人なら結構いるよ？」
「少なくとも私は見たことありませんけどね」
「探さないからだよ」
「それに、何より、人外の私達にも優しくしてくれるその心こそ、旅人さんの良いところですよ」
「まあ誤解だよね。俺が君達に優しい理由は、君達が美人だからだよ」
「ふふ、人じゃない私達を美人だなんて……。嬉しいです」
……あ、何だろうこれ。楽しい？
何言っても全肯定されるんだこれ。
ツイッターとかで日本人のオタクが可愛い女の子をママって呼ぶアレと一緒だ。
母性……。
翔鶴には確かな母性がある。
このままの調子で、俺はどんどん自分の悪事を白状する。
「借金もあるんだ」
「そうなんですか？」
「何十億も。踏み倒したけど」
「大丈夫ですよ。旅人さんは悪くありません」
「ストリートファイトした」
「旅人さんは悪くありません」
「強盗もやった」
「旅人さんは悪くありません」
「殺人もやった、殆どは正当防衛だけど」
「旅人さんは悪くありません」
「イスラム教徒に扮してアッラーを讃えよと叫びつつ道行く人に黒いボストンバッグを投げつけたりした」
「旅人さんは悪くありません」
ああ〜。
浄化されるー。
「借金してまでキャバクラに通った」
ドリームクラブってところに。

「あ、それは駄目です」
えっ。
「キャバクラって、女の人とお酒を飲みながらお話するところですよね？それは駄目です。お話ならこの翔鶴がしますから、そんなお店には行っちゃ駄目ですよ」
俺から生き甲斐を奪おうと言うのか。
「翔鶴、悪い。キャバクラはやめらんないんだよ」
「……分かりました、ではこうしましょう！」
……
……
……
「で？」
「はい？」
「何これ」
改装された居酒屋鳳翔。
「キャバクラです」
キャバクラか。
「旅人さんの為に、キャバクラを作りました！キャストは全員艦娘ですが……、楽しんでいって下さいねっ！」
「成る程」
成る程。

２３６話　艦キャバ　前編

「……何やってんの、守子ちゃん」
　海原守子。
　お隣の、音成鎮守府の提督だ。
　最近は殆どやることがないらしく、黒井鎮守府で雑用を買って出てくれている。
「えっと、その、受付兼ボーイです」
　女の子なのにボーイとな。
「守子ちゃんは指名できない感じ？」
「は、はい。すいません。……でも、私なんかとお酒飲んでも面白くないと思いますよ。えへへ」
「分かった、じゃあ、今度個人的に一緒に飲もうな」
「あ、はい！」
　さて。
　壁を見る。
「ナンバーワンとか、張り出されてないの？」
「本日開店ですから」
「因みに店名は？」
「暁の水平線、です」
　成る程ねぇ。
「では、早速ですが、ご指名は？」
　うーん、どうすっかな。
　……。
「ちょ、ちょっと待って、何か、これ、駆逐艦や軽巡の子達もいない？」
「……はい、います」
「風俗法って言葉知ってる？」
「わ、私は止めたんですよ？けど、全員いないと不公平だって話になったらしくて……」
　何が不公平？
「いや、だってこれ、例えばさ、暁とかがドレス着て酒出して来るんだ

ぜ？そんなのもう犯罪じゃん」
「私に言われましても……」
まあ、まあ、良いわ。ここは黒井鎮守府、常識が通用しないと思って良い。
「で？セット幾らよ？」
「え？」
「こんだけのキャバ嬢いたとしたら、セット一万、指名料三千、ボトルで数万ってとこか」
「えっと、セットって何ですか？」
「え？基本料金だよ」
基本料金＋指名料＋酒代＋サービス料＝財布へのダメージ。
「基本料金……？」
「キャバクラはね、席に座るだけで金がかかるんだよ」
「えっ！そうなんですか?!」
知らなかったのか守子ちゃん。
「で？幾らよ？」
「え？えーと、無料です！」
「何イ……？」
じゃあどこで金を取られるんだ？
「怖いな、ぼったくりか？」
「兎に角、無料なんです！旅人さん限定で！」
「高い酒飲んでも？」
「居酒屋鳳翔に置いてあるのを持ってくるそうです」
あー、確か、高級シャンパンとか置いておいたっけな。
三十万くらいの。
「よし分かった、もうごちゃごちゃ考えない」
「はい、あまり考えないでいただきたいです」
「じゃあ、指名しよう。あ、これって人数制限とかあるの？」
「基本、一人づつにしてもらえると助かります」
「分かった。じゃあ……」
どうするか。

そう、だな。
「霧島で」
「はーい。霧島さーん、指名入りましたー」

「ご指名いただきました、霧島です」
数分後現れた霧島。
黄色のワンピースドレス。
ほう、華やかでいい感じ。
「ドレス、似合ってるよ、霧島」
「はい、ありがとうございます」
取り敢えず褒める。
褒めるところから円滑なコミュニケーションが始まると言っても過言ではない。
「仕事柄、風俗店に足を運ぶことも多々ありました。データは揃っていますよ」
「成る程」
「先ずは席に案内します。こちらへどうぞ」
「ああ、ありがとう」
「では、お座り下さい」
……キャバ嬢ってか、用心棒？
メニューを開く。
「霧島、何飲みたい？」
「では山崎１２年にしましょう。お願いしますー！」
「はーい」
守子ちゃんがパタパタを呼ばれて来て。
「おまたせしました、山崎１２年です。グラスはこれでいいですか？」
「良くないね」
「え？」
「キャバクラなら、ゲスタンとレディタン分けるべきだね」
「何ですかそれ？」
「ゲスタンは８オンス、レディタンは６オンスだよ」

「ええと、これと、これですか？」
「そう、偉い偉い」
「ありがとうございます！」
と、守子ちゃんとのやり取りの後。
「さて、こう改まって、何の話をすべきか」
「いえ、司令。肩に力を入れず、いつものようになさって下さい」
「いつものように、っつってもなあ」
「そう、ですね。私のデータによると、仕事の愚痴を言ってみるべきかと」
俺が？仕事の愚痴？
「いや俺、仕事してないから」
「はっ、ご冗談を」
冗談も何も、仕事らしい仕事は……。
いや、そうか。
裏の貿易関係の仕事か？
「いや、仕事は上手くいってるよ。愚痴なんて無いさ」
「そうですか。では、自慢話に移行してみてはどうでしょうか。データによると、キャバクラに来た男性の多くが愚痴と自慢話をしてくるそうですから」
「俺はそんなことしないけどね。純粋に口説くよ」
「いえ、司令の自慢話に興味があります。是非聞かせて下さい」
まあ、そこまで言うなら……。
「じゃあ、俺が、埼玉県春日部市の幼稚園児とその家族と一緒に、世界を救った話をしようか」

「へえ、そんなことが。興味深いですね……。他には何かありませんか？司令のお話、もっと聞きたいです」
話せ、と言われたら話すが。
まあ、確かに、俺の旅話は面白いだろう。
俺の旅は、かけがえのない思い出ばかりだ。でも、
「俺の話ばっかりで良いのか？俺は霧島の話も聞きたいんだが」

俺ばっかり喋ってもな。
「いえ、キャバ嬢は聞き役に徹するものと聞きました。それに……」
「それに？」
「司令のお話は、本当に面白いのです」
そうかい。
「そう？じゃあ次だ。うーん、そうだな。ユクモ村でハンターやった話でもするか」

「……こうして、俺とハンターさんは、アマツマガツチを討ち倒して、ユクモ村に平和を取り戻したんだよ」
「そんなことが……。素晴らしいご活躍です、司令」

「……そして、その、身体は子供頭脳は大人の少年探偵と共に事件を解決して、大惨事を防いだって話さ」
「流石司令です」

「……そんなこんなで、多数の犠牲者を出しながらも、６８２を捕らえた俺と財団は……」
「……レイトン教授とその弟子の少年とのフィールドワークは楽しかったなー。失われた超文明の遺跡を発掘して……」
「……そして、エージェントのレオンと俺はＢＳＡＡのクリスと合流して、バイオテロの首謀者を……」
「……と言う訳で、偽神相手に大立ち回りを演じた俺とダンテ、ネロは、無事フォルトゥナを救って……」
「……消えた百億円は、ミレニアムタワーで悪徳政治家と一緒に吹っ飛んで、錦山さんはケジメをつけたって話。桐生さんは……」
「……こうして、ガンズオブザパトリオット事件は収束したんだ。最後の、スネークとオセロットとの殴り合いは、生涯忘れないであろう光景だった……」

「時間ですー」

守子ちゃんが伝えに来た。
延長して計三時間、ずっと俺が喋ってただけなんだが……。
「霧島、俺が喋るだけで本当に良かったのか？」
「はい。提督のお話は大変面白く、為になりました」
霧島がそれでいいなら、良いんだけどさ……。
×
×
×
「次の指名はどうしますか？」
守子ちゃんに尋ねられる。
俺は、ううん、と、一つ唸って。
「じゃあ、妙高で」
指名した。
「はーい、妙高さん、指名入りましたー」

「お待たせしました、妙高です」
紫のドレス。派手過ぎない、清楚な雰囲気のそれは、妙高にベストマッチ。
「綺麗だよ、妙高」
「ありがとうございます、提督」
はにかむ妙高。美しい。
「妙高は何飲む？シャンパン？」
「いえ、私なんて、安酒で十分ですよ」
「……フードメニューは？」
「大丈夫です」
……。
「良いか妙高、キャバ嬢ならな、飲み物はシャンパン、フードメニューはフルーツ盛り合わせを頼むんだよ」
上手い具合に、甘えた声で!!
「そ、そう言うものなんですか？」
「そう言うものなんだよ。謙遜しちゃ駄目だ、ナンバーワン目指すなら高いメニュー頼ませないと」

「別にナンバーワンなんて目指していませんが……」
そう？
「妙高ならナンバーワンも夢じゃないぞ」
「そもそも、キャバクラ、と言うものがよく分かりません。昔の喫茶店みたいなものでしょうか？」
「あー、大体あってる」
妙高達の時代の喫茶店と言えば、内情はほぼ今で言うキャバクラに近いものだったらしい。
「で、では、提督は、そのようないかがわしいお店によく、行くのですか？」
「行くのですよ」
「なりませんよ！」
いかんのか。
「提督ともあろうお人が、そんな下賤なところに足を運んではなりません！」
下賤なところ大好きなんだけど。
風俗とか大好き。趣味。生き甲斐。
高貴さとかそう言うのとは無縁だ。いや、ビシッと決めろと言われればできないこともないが。
「提督のお相手は、今後は私達が！……でも、私のようなつまらない女では、提督もお嫌でしょうから。金剛さんのような華やかな方に頼みましょう」
そう言って席を立つ妙高の腕を掴む。
「いや、俺は、君がいい」
「え？提督？」
「妙高にお相手して欲しいんだ」
「も、もう、そんなこと……！リップサービスってやつですか？」
何だよリップサービスって。どこでそんな言葉覚えて来るんだ。
「本心さ」
「本当、ですか？」
「本当だとも」

「そ、それでは……」
何だい？
「一度きり、一度きりで良いのです。私に、好きだと、愛してると、言っては下さいませんか……？」
それくらいならお安い御用。
「妙高……、愛してるよ（イケボ）」
「……ああっ！」
あっ、妙高が倒れた。

２３７話　艦キャバ　中編

「はあい、ご指名ありがとうございまーす！足柄よん??」
　足柄だ。
　姉の妙高が、例えるなら柳のような美人だとしたら、足柄は薔薇の花束だ。
　ともすればけばけばしいくらいに派手で、煌びやかで華のある、美しい女性だ。
「足柄ー」
「なあにー？」
「綺麗だな。君みたいな美人にお酌してもらえるなんて、俺は幸せ者だ」
「やだもう、お上手なんだから！」
「ははは、さあ、何飲む？」
「シャンパン、頼んでもいーい？」
　上目遣いでおねだりする足柄。良いじゃん、これが、これこそがキャバ嬢だ!!俺の求めていたものだ!!
「良いよー、頼め頼め」
「やったー！お願いしまーす！」
　注文する足柄。異様に様になっている。
「シャンパン、ゴールドで！」
「はーい」
　はい三十万飛んだー!!

「でも、こうしておあつらえ向きの場所を用意されても、態々話すことなんてないわよねぇ」
　グラスを傾けつつ、語りかけてくる足柄。
「あ、でも、こうして二人きりなんて場面はそうそうないかも。レアよレア」
「ああ、そうかもな」
「ふっふっふ……、さあ、提督！お酒の力で、普段言えないようなこと

を洗いざらい吐いてしまうのよ！さあ！さあ！」
　おっ、なんだなんだ、普段言ってないこと？
「クジラに一番近い動物はカバだってこと？」
「確かに普段言ってないけど!!そうじゃないのよ!!……えっ、ってかそうなの？クジラとカバって仲間なの？」
「鯨偶蹄目だからね」
　初耳だろう？豆知識だ。
「いや、初耳だけど！そうじゃないのよ！もっとこう、提督が言いたくても言えないような、そんなブラックなことよ！そう言うを私にぶちまけちゃって!!」
　ブラックな話……。
「タコスミって実は美味いんだよ。取り出す手間と分量の少なさから使われないだけで」
「確かにブラックな話だけど!!私が予想してたのと違う?!えっ、ってか美味しいんだタコスミ?!」
　美味いんだよ、これが。
　タコスミでパスタ作ったことあるけど、中々の出来だった。
「そうじゃなくって！もっとほら、そう、愚痴よ、愚痴！この私に胸の内を明かしてちょうだい？」
「何で？」
「今回はキャバクラ回なんでしょ？だからよ」
　そうかい。
「それに、提督だって、いつでも気を引き締めていたら大変でしょう？大丈夫よ、提督の駄目なところも、ちゃんと受け止めるから」
　気を引き締める？そんなつもりはないんだがな。
「そうだな、足柄になら、ちょっと愚痴を言っても良いかもな」
「そうそう！言っちゃって言っちゃって！」
　そうだなあ。
　足柄は母性もあるな。
「最近、ちょっと隣くらいの世界によく行くんだけどさ」
「うんうん」

「そこで新大陸古龍調査団ってとこに潜り込んで、新大陸の調査をしてんのよ」
「うん……、うん？」
「そこで、ゾラ・マグダラオスって古龍を捕まえようと皆んなで頑張ったんだけど、見事に失敗しちゃってさ。駄目だったよ」
「……うん？」
　分からんのか？
「えっと、まず、古龍調査団？って何かしら？」
「新大陸にいる古龍を調査する団体だ」
「古龍って？」
「長く生きるドラゴンだ。その多くは、火を吹いたり爆発したり天候を操ったりなど、法外な力を持っている」
「な、成る程ね、はいはい、提督の破茶滅茶は今に始まったことじゃないわよね、はいはい」
　何だよ、人を無法の化身みたいに。
「じゃあ提督は、その新大陸ってところに、その、古龍？を調査するために向かったのね？」
「そうだよ」
「何で調査するの？」
「詳しくは知らんけど……、古龍渡りって現象の解明のためだって。学者先生とかいっぱい集まってるよ」
　目的は知らん。
「で、その、ゾラなんとかってのは、どう言うやつなの？」
「うーん、火山に手足が付いた巨大な化け物、かな」
　黒くて、デカい。
「……それ、ゴジラとかじゃなくって？」
「ゴジラではないな。ゴジラくらいデカいが」
「そんな化け物を、捕まえようとしたの？」
「いや、俺が言い出したんじゃないよ？上がそう言ったから」
　俺は内心、「無理じゃね？」って思ってた。けど、皆んな乗り気だったし、やる気満々だったから水を差さなかっただけ。

「どうやって捕まえようとしたの？」
「砦を築いて、二段階作戦で」
まず第一の砦で体力を削ります。
第二の砦で捕まえます。
「ごめん、言わせてもらって良い？……馬鹿じゃないの？」
だよなぁ。
山みたいにデカい化け物を殺すならまだしも捕まえようってんだからな。それも、大砲やバリスタ程度の火力で。
「提督は何やったの？」
「俺？弓でチマチマと」
「山相手に弓で戦ったの？」
「うん」
「勝てると思ったの？」
「いや、無理だと思ってたよ」
「でも、やったんでしょ？」
「うん」
はぁ、と溜息をつく足柄。
どうした？
「いやあ、あんまりこんな言い方はしたくないけど、馬鹿な真似はやめて」
「いや、良いところまではいったんだよ？でも、急に現れたネルギガンテってやつに邪魔されてさ」
「はいはい。大丈夫なの？怪我とかしてない？」
「してない（した）」
「どっちなのよ」
「もう治した」
治る怪我は全部軽傷と言って良いのではないだろうか。
「全くもう、いくら言っても危ないことして帰ってくるんだから」
「俺も男の子だからな。危ないことは大好きなのだ」
「もー、戦いは苦手なんじゃなかったの？」
「いや、これは狩りだから。狩りは得意だよ」

狩りはまた別だ。
「まあ、良いわ。でも、死なないでね。それだけは約束してちょうだい？」
「善処するよ」
×
×
×
×
×
×
善処する、だからな。
死なないとは言ってない。
さて、次の指名はー、と。
「リシュリューー！君に決めた！」
「はい、リシュリューさんですね」
ボーイ役の守子ちゃんがリシュリューを呼ぶ。
すると。
「Ａｍｉｒａｌ、ご指名のリシュリューよ」
輝かしい白のドレスのリシュリューが現れた。
「やあ、リシュリュー」
「Ｂｏｎｓｏｉｒ、Ａｍｉｒａｌ」
挨拶を交わして、と。
「で？これはどう言う趣旨？Ｃａｂａｒｅｔの真似事かしら？」
キャバクラはキャバレーとクラブを複合した和製英語。よって、間違いではない。
「大体合ってる」
「困ったわね、歌もダンスも自信がないわ」
「ああ、いや、それは大丈夫。リシュリューはただ、俺と楽しくお喋りしてくれればそれで良いから」
「それだけでいいの？」
「むしろキャバクラってそう言うものだから」
「そう」
と言う訳で。
リシュリュー、リシュリューか。
我が鎮守府のおフランス的美女にして、からくり使い。

あるるかんのレプリカを使って、戦場で無双する人。
……まあ、うちの鎮守府の子達は皆んな無双ゲーが如く無双するんだけど。
「楽しくお喋り、ねえ」
「そう、お喋り。何か話したい事はない？」
「話したい事、そうねえ。あ、最近、あるるかんの聖ジョージの剣を新調したのよ」
「リシュリュー、俺に合わせて危ない話をしなくったって良いんだぞ」
女の子が口を開いて第一に武器の話題ってどうなん？
「でも、男の人にファッションの話題とか振っても分からないんじゃないかと思って」
「俺は分かる方だぞ」
わかるマン。
「そう？それじゃあ、ルイヴィトンの新作の話なんだけど……」
……
……
「この、ピンク色の色合いと模様が綺麗でね、素敵なのよ！」
「エルメスも素敵でねー。そうだ、この前可愛いネクタイがあったのよ。プレゼントするわね」
「ｉｐｈｏｎｅケースはね、日本のが結構可愛いのよ」
まともな会話をする俺とリシュリュー。
キャバクラ、これこそキャバクラ！
「にしても、Ａｍｉｒａｌは女物のブランドにも詳しいのね」
「そりゃ、ある程度はね」
「……女装癖でもあるのかしら？」
「なんでそうなる」
「だって、並みの女の子よりブランド物に詳しくて、お洒落の話が通じるのよ？ちょっと疑わしいわ」
「俺はノーマルだ」
「Ｖｒａｉｍｅｎｔ？」

本当に？じゃねーよ。
「本当だよ、疑わないで」
「まあ、女の子に興味があるなら、良いわ」
ん？
「俺が女好きじゃないと困るの？」
「ええ、好きな人が同性愛者だと困るでしょ？」
あっ。
「あ、あれ？リシュリューって俺のこと好きなの？」
「ええ。Ｊｅ　ｔ☒ａｉｍｅ、愛しているわ、Ａｍｉｒａｌ」
お、おかしい。
好感度を上げた覚えがないのに。
「何でだ？何で惚れた？顔か？」
「恋は理屈じゃないのよ」
嘘やん。
「や、やめとけ、ほら、俺、不倫するぞ」
「良いわ、私の魅力で？ぎ止めるから」
んんー、んんんんー？
「俺じゃ君を幸せにできない」
「それは私が決めることよ。Ａｍｉｒａｌは言ったでしょう？幸せは自分で掴み取るものだ、と」
言った気がするが！
「だから、安心して。私はＡｍｉｒａｌに、生涯をかけてついて行くから。一生、一緒よ」
安心できねぇーーー!!!

２３８話　艦キャバ　後編

「さて、守子ちゃん」
「はい」
「ちょっと禁忌を犯してみようかと思う」
「はあ」
そう、今の俺は無敵だ。
恐れるものなどない。
「……初春を指名するぞい」
「えっ、わ、分かりました……」
若干引く守子ちゃんを他所に、俺は駆逐艦である初春を指名した。
駆逐艦、駆逐艦である。
ロリである。
これは、某姫騎士の如く「貴方って最低の屑ねっ！」と罵られても当然の所業。
しかし、俺は吶喊する。
やるったらやる。
鬼畜外道に堕ちようともやる。
止まるんじゃねえぞ。

「は、初春じゃ。……本当にわらわで良かったのかや？」
「ああ、初春が良いんだ」
呼んだ。
初春を呼んだ。
あー、やっちまった。
これで俺もロリコンだ。
ロリに堕ちる、ＵＡ数の為に。と言うキャッチコピーでやっていきたいと思う。
因みに、初春は着物を着ている。紫の着物だ。気合い入ってんじゃーん。
「さて、飲もうか、初春」

「う、うむ」
え？初春は飲めるのか？そもそも飲ませて良いのか？
ス、スイスの一部では十四歳から飲酒できるそうだ。
まあほら、固いこと言いっこなしだよ。
飲めるなら飲めば良いさ。
「シャンパンでも飲むかい？」
「いや、日本酒が良いのう」
キャバクラで日本酒？こんなのアトリームじゃ考えられない……。
いや、良いか。初春が飲みたいって言うなら。
「守子ちゃん、獺祭持ってきて」
「はーい、これですね」
守子ちゃんが獺祭を持ってくる。お高い酒だ。
「また高い酒を……」
呆れた様子の初春。
日本酒なら獺祭が美味いからな。
フルーティで雑味がなく、飲みやすいから女性にもおすすめだ。
俺の好みではないけれど、良い酒ではある。
「どれ、一献」
「悪いね」
盃に注がれた酒を飲み干す俺。
いやあ、悪いことやってる。
初春みたいな少女にお酌させてる。
悪だ。
これでもかってくらいに悪だ。
「美味いかや？」
「ああ、初春みたいな美人にお酌してもらえば、どんな酒だって美味いさ」
「ほっほっほ、口が上手いのう」
「そうでもないさ。俺が褒めるのは、心から美人と思った人だけだよ」
「何じゃ、わらわを口説くのかや？」
「ああ、そうだな」

悪魔に魂を売った俺は、初春のようなロリを口説くことも可能としていた。
「むう、わらわのような童女を口説くのもおかしな話じゃぞ？」
「愛に年齢なんか関係ないさ」
「あ、愛と来たか。ま、まあ、しょうがないのう、わらわを存分に愛するが良いぞ！」
良いぞー！
「ははは、ほら、初春も飲みなよ」
「うむ！」
今度は逆に、初春にお酌する。
「くーっ、良いのう、良いのう！良い酒じゃー！」
「高い酒は単純に美味いからな。安酒はそれはそれでありなんだが」
安酒を気のいい仲間達と一緒に飲むのも良いもんだ。
「そう言えば、貴様は何でわらわ達にも給金を渡しておるんじゃ。しかも、とんでもない額を」
「そりゃ、初春達もうちの一員みたいなところあるからじゃん？」
「確かに、黒井鎮守府との付き合いは長いがのう……」
「正直、金が余ってるんだよね」
「じゃあ貯金せい」
「俺、貯金とかできない種族だから」
宵越しの金を持たない。それが旅人だ。
「だからと言って、わらわに渡されてものう……」
「良いから。俺みたいなプータローに金を持たせちゃならんのよ。君らがちゃんと使うと良い」
酒、ギャンブル、風俗で溶かすよりかはよっぽど良い。
「何×がしたいんじゃ、貴様は」
「美×人を口説いて酒飲んで世界征服したい」
「訳×分からん」
×××
×××
「て×・い・と・く！どうする、ナニする？」
×××××

鈴谷を指名した。
鈴谷はカーキのキャバスーツを着ている。
女子高生くらいの鈴谷……、ギリＯＫか？
いや、アウトだな。摘発されるねこりゃ。
風俗法違反っすわ。
でもここは黒井鎮守府。
無法地帯だ。
無法地帯なので、女子高生くらいの鈴谷にお酌させても許されるのだ！
「さあ、鈴谷！何飲みたい？」
「んー、シャンパンゴールド！」
「はっはっは、良いぞ、頼め頼め」
よっしゃ、三十万円!!
「フードメニューはフルーツ盛り合わせで！」
「頼め頼め」
よっしゃ、五千円!!
「お願いしまーす！」
「はーい」
はっ？高額な注文をノリノリでしてしまった！
やはり小悪魔系女子鈴谷、侮れん！
「お待たせしましたー」
守子ちゃんがシャンパンゴールドとフルーツ盛り合わせを持ってくる。
「じゃ、乾杯しよー！」
ヒュウ！テンションアゲアゲ！パーリーピーポー！
「ああ！乾杯！」
「乾杯ー！」
卍解ー！
「んー！シャンパン美味しい！お高いだけあるよねー！」
おお、分かるか。
酒の味が分かる女の子……、良いね！

俺？俺はガバガバ飲むけど、一応酒の味は分かってるよ。ただ、ちょっとやそっとじゃ酔わないから、沢山飲むってだけで。
「シャンパンは熊野とよく飲むけどさ、こんな高いのはあんまり買わないかなー」
そりゃそうだ。
今、俺達の目の前にあるのは、ドン　ペリニヨン　レゼルブ・ド・ラベイ、最高級品だ。
高い。
キャバクラで頼んだら三十万円はする。
「熊野は祝い事の時くらいにしか飲まないんじゃないの？」
「黒井鎮守府では毎日がお祭りだからね、熊野も結構飲んでるよ」
あらそう？
「お給料も沢山貰ってるしね、皆んな結構好き勝手してるんじゃない？」
「そうか、要調査だな」
今度、艦娘の皆んなの給料の使い道について調査しておこう。
「まあ、それでも、鳳翔さんのところに行けばある程度は飲み放題だし、下手なお菓子屋さんより提督や間宮さんのお菓子の方が美味しいし、使い道は殆どないんだけどね」
そう？
「ギャンブルは？」
「やらないかなー。何が楽しいのか分かんないし」
「男とか」
「私には提督がいるもん」
「お洒落とかは？」
「んー、そこそこかな。毎月?????万円も貰ってたら欲しいアイテムとかトレンドの服とか全部買っても全然余るしー」
成る程な。
「あっ、でも、熊野とかはエステ代が結構するとか言ってたっけ」
「いやー、女の子は美容に金使うべきだよ？」
「私も何かやろうかなー」

「たまにはエステとかも良いんじゃない？」
「そういうのも良いけど、私は今、インスタに凝ってるからさ」
おおー。インスタ映えと言うやつですな。
「えい、ツーショット」
と、俺とシャンパンをスマホの画面内に入れて。
『提督とキャバクラごっこ中！シャンパンがチョーおいしい！』っと。インスタに上げよう」
ほう、顔出しＳＮＳですか。
「ネット上で変な奴に絡まれたりしてない？」
「んー？絡まれるよー。でもそう言うのはオール無視だね」
ツイッター民の漣、望月、秋雲、イムヤ辺りも、ＳＮＳで変な人に絡まれて大変だって言ってた。
「でも君ら、本名で、しかも顔出しでやってるからね」
日本最大の鎮守府の艦娘です、なんつったら変な人も湧く。
クソリプも飛んでくる。
オフ会やったら数百人は来るでしょ、君ら。
それこそ、本物の大物ユーチューバーが如く。
……大物ユーチューバーって言うとアレだな、なんか、こう、良くない。
「私達はほら、顔見られても困らないし。名前だって知られても問題ないからさ」
確かにな。住所まで特定されてる訳だしな。怖いもんなしか。
「提督は何かＳＮＳやってるー？」
「俺はツイッターとかフェイスブックとか」
「マジー？私もやろうかな？」
「鈴谷みたいな可愛い子がやったら、オタサーの姫が如く祭り上げられるぞ」
「うーん、それはちょっとキモいかも」
でも、ちょっとしたニュースとかが見れるＳＮＳも、社会の動向を知るには良いツールだ。
「まあ、始めたらフォローしとくよ」

「んー、始めちゃお。メアド打ってー、ユーザー名決めてー」

「ふー、もう時間だねー」
終わった終わった。
いやー、楽しかった。
「え？何言ってんの？」
「はい？」
「これから店外デートだよっ！」
「ちょっ、鈴谷」
「行こっ！」

そんなこんなで、鎮守府内のカラオケルームで朝までコース。
何だ、その、えーと、楽しかった、です。

２３９話　ジビエとか結構好きな方です

……簡単なあらすじ。
『能代、デートしない？』
『え？あ、はい！』

さて、三行以下のあらすじで表される経緯の元、デートを決行することに。
「どこに行こうか。能代はどこか行きたいところとかない？」
「え？えーと、動物が見たい、かな？」
「動物って？」
「えーと、パンダとか？」
パンダか。
「じゃあ中国行こうか」
三千メートルくらいの山の竹林に住んでいるんだぞ。
「えっ」
「今丁度発情期だからな、普段おとなしいパンダが戦う貴重な姿を見られるぞー」
「ええー？じゃあ、ライオン！」
「ならサバンナか。アフリカに行くぞ」
「ペ、ペンギンとか……」
「分かった、南極な」
「わ、態々現地に行かなくたって、動物園とかで良いじゃないですか？」
いやいや、雄大な自然を知るためには、自らの足で出向くのが一番だぞー。
「え？動物園で良いの？」
リアルジャパリパークのリアルフレンズ達と楽しく遊ぶのも一興では？
実際、艦娘なら肉食の猛獣に襲われたって死にはしない。
「はい、上野動物園なんてどうですか？」

「能代がそれで良いなら、良いんだけど……」
　上野動物園？それで良いのか？
「じゃあ、私着替えてきますね！二時間後に駅前で待ち合わせって事にしましょう！」
「構わんよ」
　一緒に行けって？いやいや、デートだからな、待ち合わせもするだろう。
　そう言うのも含めてデートなのだ。

「旅人さん！待たせちゃいましたか？」
「いや、今来たところさ」
　二時間後、駅前にて。
　例え待っても待ってないと答える、それが男ってもんだ。
「それじゃあ、行きましょうか！」
「ああ」
　能代と手を繋ぎ、駅構内へ。
「阿賀野姉はすぐＳｕｉｃａを失くしちゃうんですよ。この前一緒に出かけた時もまた失くして……」
「はは、阿賀野らしいね」
「本当に、阿賀野姉は私がいないと駄目なんだから！」
「能代はいつもしっかりしてるよな」
「そんな、私は当たり前のことをしているだけですよ」
「その当たり前のことがちゃんとできるのが素晴らしいんだよ。良い子だな、能代は」
「そうですか、えへへへ」
　と、自然な会話を交わしながら電車に乗り込む。
「わ、人がいっぱい」
「東京だしな。ほら、能代は可愛いんだから、痴漢とかされないように俺にくっ付いとけ」
「は、はい。えへ、ちょっと恥ずかしいですね」
「……能代、例え痴漢されても、痴漢の腕の骨を折ったりしちゃ駄目だ

からな」
「や、やりませんよそんなこと」

「着いたな」
「はい！楽しみです！」
　上野動物園だ。
「あ、パンダだーー！」
「可愛いーー！」
　俺の中では、「もう見た」だが。
「パンダは、一日の半分以上を寝て過ごすんだ」
「へえ、阿賀野姉みたい」
　そんなにダラダラしてんのか阿賀野は。
「カンガルーだーー！」
「可愛いーー！」
「カンガルーは後ろに跳ぶことができないんだ。そのことから、後ろに退がらない、と言う意味で、オーストラリア海軍のシンボルになっている」
「へえー」
「ゴリラだーー！」
「かわい、くはないですね」
「ゴリラの握力は５００キロくらいらしい」
「凄いですね」
「長門の握力は５００キロを超えるらしい」
「えっ」
「象だーー！」
「かわい、くは、ないですね。大っきいです」
「象は、一日の殆どを食事の時間に費やすそうだ」
「へえー、阿賀野姉みたい」
　待って、阿賀野はどんだけダラダラしてんの？
「キリンだーー！」
「おー、長いですね」

「キリンは一日に二十分しか眠らないそうだ」
「阿賀野姉も見習って欲しいです」
　阿賀野をどうしたいんだ能代は。
「ハシビロコウだー！」
「動きません、ね」
「ハシビロコウの主食は肺魚という肺がある魚でな、呼吸をするために水面に顔を出したところを、捕まえるんだ。そのため、ハシビロコウは獲物をじっと待つから、動かないんだ」
「へえー」

「今日は楽しかったです！ありがとうございます、旅人さん！」
　あの動物は食うと美味いぞ、などといった話題は避け、豆知識おじさんと化した俺は、能代の隣で動物豆知識を披露しながら解説役に徹した。
「ああ、俺も楽しかったよ、能代。また一緒にデートしような」
「はい！」
「っと、それと」
「はい？」
　能代の唇を奪う。
「ーーーっ?!!」
「これは、今日一日付き合ってくれたお礼ね」
「はぁ、はいぃ～??」
　ふふふ、可愛いもんだな、能代は。
×
×
×
×
×……簡単なあらすじ。
『能代ばっかりずるい！私も旅人さんとデートする！』
『良いよ』
×
×
はい。
　あらすじの通り。

阿賀野が駄々をこねて、俺とデートの約束を取り付けてきた。
「で、どこ行こうか。阿賀野はどこか行きたいところとかない？」
「んーとね、お魚が見たい！」
「じゃあダイビングか。熱帯の海は綺麗だぞ」
「い、いや、そんな大掛かりなことしなくて良いよ……。普通に水族館に行こう？」
なんでだ？熱帯の海で魚達と泳いで回るのは楽しいぞ？艦娘はみんな泳げるらしいし、悪くない提案だと思うが。
まあ、良いか。
「私、シャチが見たいの！シャチって可愛いでしょ？」
「そうだね」
ああ、まあ、見た目はな。
でもあいつらホッキョクグマからクジラまでなんでも食べる肉食の捕食者だけど。
「ペンギンとか、アザラシとか、イルカも見たい！」
「そうかい」
ペンギンかぁ、あれ、脂っこいんだよな。食ったことある。
アザラシはエスキモー達と食ったけど、内臓が不味かったな。肉はクジラに近い味。
イルカは結構美味かった。
「じゃあ、行こう！」
「どこに？」
「え？えーと、この、サンシャイン水族館ってところに行こう！」
その場でスマホを取り出し、近く、かつ人気のある水族館を選ぶ阿賀野。
無計画だなぁ。
「着替えなくて良いのかい？」
「え？うん、別に良いかな」
ジーパンにTシャツ、ラフな格好だ。
デートだと言うのにお洒落をしようとは思わないのか。
いや、それが悪いとは一言も言ってないけど。

「じゃあ、行こうか」

「わー、人多いよ、旅人さん」

「東京だしな」

はぐれないようにしっかりと手を握って、と。

「あっ、えへへ」

嬉しそうに握り返してくる阿賀野。可愛いもんよ。

「っと、到着」

「わー！凄いよ旅人さん！水族館って感じ！」

そりゃ、水族館だからね。

「サメだー！」

「強そう！」

多分、君の方が強いと思うよ。

「サメは種類が豊富だから一概には言えないが、相当に賢いらしい」

にしてもサメ、サメか。肉は新鮮だと結構美味い。フカヒレも美味いぞ。

「エイだー！」

「変な形ー」

「エイの毒は兎に角痛いんだ。タンパク系の毒だから、刺されたら患部を温めるんだぞ」

北海道の方では普通に食べられているらしい。俺も食ったことあるけど、コリコリして意外と美味かった。

「刺されたことあるの？」

「あるよ」

ダイビング中、膝に毒針を受けてしまってな……。

「クラゲだー！」

「可愛いー！」

クラゲはなぁ。コリコリするだけで味は特にないんだよな。酢味噌和えとかにすると結構美味い。

「でも、なんだか、海の底を思い出してちょっとトラウマが……」

沈んだ時のことを思い出しちまうのか。

海の底にいた時の記憶……、あるのか？
「ペンギンだー！」
「可愛いー！」
「ペンギンは水中では結構速く泳ぐんだ」
ジェンツーペンギンなんかは時速３６キロくらい出るらしい。
味？だから、分厚い皮下脂肪が脂っこいんだよ。でも、結構美味かったよ。
「あ、アシカショーだって！見よう、旅人さん！」
アシカか。
アシカは獣臭くってなー。
え、いや、味の話。
「わー、凄い！ボールを鼻の上に乗っけてる！可愛いー！」
阿賀野の方が可愛いよ。

「あー、楽しかった！今日はデートをエンジョイしたね、旅人さん！」
「そうだね、阿賀野。また一緒にデートしような」
「うん！……あ、旅人さん、なんか忘れてない？」
ん、ああ……。
これか。
「んーーー??」
熱い抱擁とキス。
「えへへ、満足……??」
ふにゃり、と顔を緩ませ、へたり込む阿賀野。
そりゃ良かった。

２４０話　音成提督と一緒

音成鎮守府。
黒井鎮守府のお隣にある、小さな、あるいは中規模な鎮守府です。
提督はこの私、海原守子。歳は二十五歳。
見た目は、そうですね、艦娘の翔鶴さんにどことなく似ていると言われます。いえ、髪は黒色ですけど。
この海を守ろうと思って、数年前、大学の卒業と同時に提督になりました。
実家は田舎の漁村の漁師で、特技は魚料理です。
「やあ守子ちゃん」
この人は黒井鎮守府の提督、新台真央さん。何でもできる完璧超人で、かっこいい男の人。
黒井鎮守府って言うのは、国内どころか、今では世界最大級の規模と戦力を誇る巨大鎮守府。
音成鎮守府は、黒井鎮守府に近い位置にあるということもあり、黒井鎮守府とはほぼ併合状態です。
「はい、何か？」
「おいで」
「は、はあ」
歩き始めた旅人さん（名前ではなく、旅人さんと呼んで欲しいらしい）に、取り敢えず着いていく。
「あの、どこに？」
「居酒屋鳳翔」
「ひ、昼間ですよ?!」
昼間からお酒だなんて！
「仕事、あるの？」
「……ありま、せん、けど」
そう、そうなのだ。
最近は、お仕事が、ない。
艦娘の皆んなは有能の一言で、簡単な書類仕事を除けば、今や私の

仕事は、黒井鎮守府での簡単な雑用のみ。
私は、と言うと、日がな一日、黒井鎮守府をふらふら歩って、その辺の艦娘の皆んなからお仕事を貰って、それをこなしているだけだ。
「じゃ、飲もうよ、守子ちゃん」
だからと言って、昼間から酒盛りはどうかと?!
「うう、良いんでしょうか、こんな時間からお酒だなんて……」
「鳳翔ー、テキーラ持ってきて。ジョッキで」
「普通は死んじゃうかもしれませんからね?!」
旅人さんは完璧超人だが、悪癖もある、そうだ。私も艦娘の皆んなも何とも思っていないけれど、旅人さんが言うには悪癖らしい。
まず一つ、これは普段の生活を見れば分かるけど、女の人に弱い、ってところ。美人には目がないそうだ。
私のことも美人だと言っていたけれど……。えへへ、ちょっと恥ずかしいですね。
そして二つ、時間やお金にルーズなところ。沢山稼いで沢山使うのは悪いことじゃないと思うんだけど。
そして、三つ目に。
「テキーラ一杯で死ぬかよ」
お酒を沢山飲むところ、だ。
「大きなジョッキでテキーラですよ?!」
まあ、酔って暴れる訳でもないし、悪いことでもないとは思うんだけど……。
「大丈夫大丈夫、こんなに美味い酒が身体に悪い訳ないじゃん」
喉を鳴らしてお酒を飲む旅人さん。うわぁ、あれ、私なら倒れちゃうんだろうなぁ……。
「守子ちゃんも頼みなよ」
「い、いえ、ですから、まだ昼間ですし」
「でも、仕事ないんでしょ。酔っても困らないじゃん」
「そう、ですけど……」
お仕事はありませんけど、それでも、昼間からお酒は抵抗が……。

「今度飲もうって約束してたじゃん」
「しました、けど」
堕落……、堕落してしまう！このままじゃ、碌にお仕事せずにお酒飲む人に！
「鳳翔ー、カシスオレンジ頼む」
ああっ！
「ん？カルーアミルクが良かった？それともビール？」
「だ、だって私、碌にお仕事してないのに、昼間からお酒だなんて」
「俺も働いてねーから」
嘘だ。
旅人さんは、家事をしたり、出撃したり、貿易したり、艦娘とコミュニケーションを取ったりと沢山頑張っている。
働いていない、と言うのは旅人さんの主観であって、余所から見れば十分働いている。
艦娘と遊んでいるのも、艦娘のモチベーション維持と考えれば仕事の範疇だろう。
そう考えると、旅人さんはいつも働いている。
私は、私、は……。
「まあまあ、嫌なことは飲んで忘れよう！」
「もう、分かりました……」
はぁ、考えてもしょうがない、か。
出されたカシスオレンジを一口。うん、美味しい。あはは、働かなくってもお酒は美味しいんですねー。
「こっちも飲んでみるかい？」
「え？あ、じゃあ、ちょっとだけ」
旅人さんからテキーラのジョッキを受け取る。
か、間接キス……！
「って、凄い爽やか！そして辛口っ！」
「パトロンシルバーよ。俺はブランコの方が好きだからな」
「あ、でも、甘くて独特な香りがします。結構美味しいかも」
「そうだろうそうだろう。スピリッツは美味いんだよ！女の子はあん

まり飲まないかもしれないけどさ！」
強いお酒好きですよね、旅人さん。
「で、何だい？愚痴なら聞くよ？」
「愚痴って言うか、最近の私、まるで働いてないな、って……」
「んもー、気にしなくっても良いってば！ベーシックインカムが導入されたとでも思って、ゆっくりしていってね！」
そんな、こと……。
「そもそも、働かないで済むならそれが一番ではないだろうか（哲学）」
「そうかも、しれないですけど……。それはその分、皆んなの負担になっていると言うことになるじゃないですか」
「守子ちゃん真面目過ぎー。世の中なんて持ちつ持たれつ、負担なんて好きなようにかけて良いんだよ」
そう言う訳にもいきませんよ。
私が頑張ってない今、私の代わりに誰かが頑張っている、と言うことになるんですから。
「良い子だなぁ、守子ちゃんは。俺も見習うべきだな、こりゃ」
「そんなこと……」
「いやだって、守子ちゃんは俺と違って、借金もないし、口説き落とした女の子ほっといて旅に出てもいないし、良い子じゃないか」
「え」
な、何やってるんですか旅人さん。
「風俗と酒とギャンブルとで溶かした金、一銭も返してないぞ俺」
「うわぁ」
旅人さん……。
「因みに幾らくらいあるんですか、借金」
「十億から先は数えてないね」
ひ、酷いですね、それは。
「幻想郷とかドリームクラブとかの女の子なんて、口説いて抱いた後は会いに行ってないし」
「うわぁ」

「因みに何人くらい」
「百人以上？」
　うわぁ……。
「と、まあ、このように最低のクズな訳だが」
「いや、その、最低だなんて……」
　いえ、その、えっと……。
「いやいや、取り繕う気はないから」
「まあ、はい、確かに、ちょっと酷いかな、とは……」
「そうよ。守子ちゃんは俺みたいにマイナスじゃないだけマシよ、マシ」
　うーん、そうなの、かなぁ？
「それに、雑用を頑張ってくれてるんだろ？」
「雑用なんて、ちょっとだけですよ？」
　掃除も家事も、その辺を徘徊しているロボットがやってしまう。
　料理は旅人さんと厨房組の艦娘達がやる。
　私がやるのなんて、本当に、ちょっとしたことだけだ。
「仕事、仕事ねぇ。あ、そうだ」
　何かを思いついたような顔をする旅人さん。
「うちの窓口やってよ」
「窓口、ですか？」
「そう、受付。クレーム対応とかするの」
「クレーム、来るんですか？」
「来るねー、反戦団体とか。大変そうだけど、やってくれる？」
「は、はい！やります！やらせて下さい！」

「旅人さぁん！何ですかこのお金ー!!」
「え？君の給料だけど」
「何でクレーム対応程度で??????万円も渡すんですか?!」
「うちの給料、基本給は??????万だから」
「兎に角、こんなにたくさん貰えません！」

「貰って」
「い、いや」
「貰って」
「駄目で」
「貰って」
もー!!

２４１話　建造もて王サーガ

「お花見するから建造するぞ」
「は？」
　え？俺何か変なこと言ったか、大淀。
「いや、ちょっと、意味が分からないです」
　だからさ。
「これからお花見しまくるじゃん？」
「はあ、まあ、黒井鎮守府なら、そうでしょうねえ」
「それなのに、お花見の後に艦娘を建造したら、お花見に参加できないだろ？」
　それはかわいそうだろ。
「あ、あー、成る程？戦力増強とかではなく？」
「戦力は十分足りてるじゃん？でも、いっぱい仲間がいた方が楽しいだろ」
　俺、一人で月見酒とかも悪くないと思うけど、皆んなでワイワイ宴会する方が好きなんだよね。
「それは、そう、ですね」
　理由なんてそんなもんで十分では？
「はい、それじゃ、建造建造」
　建造用の素材を用意していく俺。
「提督、これは？」
「ストライカーユニット」
「こちらは？」
「ＳＴＧ神威」
「では、こちらは？」
「純米大吟醸秋津」
　バッチリ揃えた。
「うーん、この」
「大丈夫、大丈夫」
　某所で会ったオレンジのツナギの運び屋の口癖だったか。大丈夫、

大丈夫ってな。
「それとまた五つくらい触媒を用意して、と」
　スイッチオン、同時に叫ぶ。
「計八つのモノを使ってシンクロ召喚!!」
「(シンクロ召喚?)」
　頭に疑問符を浮かべる大淀を他所に、開いたドックから次々と艦娘が現れる。
「そう……、私が大鳳」
「給油艦、神威と申します」
「水上機母艦、秋津洲よ!」
　そして、
「長良です」
「名取と言います」
「由良です」
「鬼怒、いよいよ到着しましたよ!」
「阿武隈ですぅ」
　残る五人も。
「やあやあやあやあ、よく来てくれた嬉しいよ。俺は新台真央、提督だ。名前で呼ばれるのはあまり好きじゃないから、提督、司令官とでも呼んでくれ」
　実は、名前で呼ばれるのはあまり好きじゃない。女の子みたいだろ、真央って。真央が男の名で何が悪いっ!俺は男だよー!!!
「「「はいっ!」」」
　んっんー、いいお返事。花丸ついでに二重丸あげちゃう。
「時に、諸君らが何故この時期に建造されたから、分かるかね?」
「「「……」」」
「Ｍｓ．大鳳」
「はっ、大規模作戦、でしょうか」
　ＮＯだ。
「違うな。神威さんはどう思う?」
　畜生、何だその艤装。脇っ!巨乳っ!ウコチャヌプコロしてえ。

「戦力増強の為、でしょうか」
「ｎｅｉｎ、そうじゃない。秋津洲ちゃんは？」
「えっと、うんと、思いつかない、かも」
「そうか。では、答えよう」
　俺は無駄に溜めを作って、答える。
「……お花見だ」
「「「……は？」」」
「我らが黒井鎮守府は、これから、鎮守府内の桜がなんかこういい感じになり次第、連日お花見週間を決行するッ!!!」
　満開から散り始めまでの数日間、ずっと馬鹿騒ぎします！
「れ、連日？」
「お、お花見？」
　長良型の諸君は、正に、開いた口が塞がらない、と言った表情。
「そうだ、お花見だ」
　恐る恐る、と言った表情で、神威が聞いてくる。
「ま、まさか、提督は、お花見の為に私達を建造したのですか？」
「そうだ」
　概ね合ってる。
「わ、私達は、深海棲艦から、海を取り戻す為に……」
「それなんだが、君達はこの世界についてどれだけの知識があるんだ？サーヴァントのように現代の知識を貰ってから召喚されている訳じゃないんだろう？」
　疑問だった。
「ええと、そうですね。私は……、船体に魚雷が突き刺さって爆発、海の底に沈んだところ、までは記憶にあるのですが。深海棲艦については、何となく、そう言うものに襲われていると言う朧げな知識だけです。姿形も知りません」
　大鳳が答える。
「成る程ね」
　艦娘を創りたもうた神様は随分と適当らしい。
「ですが、日本の、いえ、人類の危機なんですよね？」

「まあ、そうだね」
「ですから、召喚に応じたんですが」
んー？
なんだそりゃ。
英霊における座のようなもんか？
「君の意思でここに？」
「いえ、分かり、ません」
分からないんかい。
「何と言えば良いのでしょうか、その、集合意識？のようなところから、引っ張られる、ような感触がありまして。それに抵抗せずにいたら……、ここに」
分かんねえなー。
抑止力的なものが働いてんのかな。
「でも、詳しい戦況は分かってないのね」
「はい。その、私達を追加で喚んだ、と言うことは、戦況は悪いんですよね？」
「いんや、別に？」
「えっ」
えっ、じゃねえよ？
「むしろ良い方じゃない？深海棲艦はどんどん強くなってるから、俺的には油断はしない方が良いと思うけど、こうして連日お花見できるくらいには安定してるよ」
「そう、なんですか。それは喜ばしいことですけど……」
けど、何だい。
「それじゃあ、私達は、何の為に喚ばれたのでしょうか……」
「ああ、いや、どの道戦っては貰うよ？訓練は厳しいし、戦場にも出すよ。君達がそれを望むならだけど」
「は、はい！もちろんです！戦わせて下さい！」
うーむ、分からんなあ。自分から戦いに行くのか（困惑）。
俺の価値観では、戦いはしないのが基本、嫌なことからは逃げに逃げる、だからな。

戦いなんてしないに越したことはない。何故自ら痛い思いをしに行くのか、気が知れないね。
「一応、言っておくけれど……、戦うことを強要してはいないんだ。君達の『前』の記憶がどうだったかは分からないけれど、今は人と大して変わらない女の子だ。好きに自分の幸せを探して貰っても……」
「いえ！私達は艦娘ですから！」
「お気持ちはありがたいですけれど……」
「私達艦娘は戦ってこそです」
「例え戦局が優勢でも、油断せずにお国の為に頑張りますよ！」
……誰かの為に、何かの為に。俺とは縁のない言葉だ。俺は、俺の快楽の為だけに生きているから。
だけど、そうか。
「……そうか。じゃあ俺は何も言わないよ。それが君達の意志ならば」
戦いたい人は好きに戦えば良いんじゃないかな。
「じゃあ、早速出撃かも？」
「いや、まずは訓練、の前にお花見だ、お花見しよう」
「え、ええー？」
嫌だって言ってもするんだよお花見を……。
「おっと、その前にロック装置を渡しておこう」
「ロック装置？」
そう、ロック装置。
「正式な名前は、魂魄移転及び艤装適合率上昇装置、とかだったかな」
「はあ」
「艦娘、と言うのは神霊、言わば幽霊だ。実体を持った魂魄、霊体なんだ。そして、その霊核は艤装にある。このロック装置ってのは、その霊核を肉体側に徐々に移し替え、艦娘を個体として、生命として確立して、人間に近付けるんだ」
「よく分かんないかもー！」
うん？そんなに難しい話じゃねーよ？
「要は、生まれたばかりの艦娘ってのは、実体はあるけど幽霊みたいに

フワフワした存在なんだよ。でも、これを付けて生活すれば、徐々に肉体の方をしっかりとさせて、かつ、肉体の方に魂を移し替えることができるってこと」
　すると、大鳳が尋ねる。
「それに何の意味が？戦う者として、肉体に魂を移し替えてしまうのは都合が悪いのでは？」
　ふむ、ソウルジェムみたいに、外部に魂があった方が良いと言うのも、意見としては分かる。だが。
「いや、一概にそうとは言えない。肉体の方に魂を移し替えることで、その分、艤装に拡張性ができるからだ」
「拡張性？」
　大鳳が聞き返す。
「そうだ」
　工廠のプロジェクターを起動、黒井鎮守府の艦娘達の画像、映像を出力する。
「これは……！」
「艤装の改造……、艦娘は、練度の上昇に応じた分だけの、艤装の拡張性を得る。そして、練度９９にして、艤装から肉体への完全移行が完了、その時艦娘は……」
　プロジェクターの艦娘達が素手で深海棲艦を引き千切る。
「……超人を超えた、現人神になる」
　つまりは、艤装を完全に制御下に置くのだ。
　艤装のエネルギーを肉体から出力する……、それ即ち、拳は砲撃に、蹴りは雷撃に。真の意味で『艦』『娘』になるのだ。
「成る程……。この装置には、そんな力が……」
　戦慄した様子の大鳳達。
「しかし、一つ質問があります」
「何かな」
「これは、その、桃色で、ハート型のエンブレムがついた首輪型なのには、どのような理由が？」
　それは、聞かないでくれ……。

俺の趣味じゃない、工廠組のせいなんだ……。

２４２話　花見回

「うむ」
満開だ。
黒井鎮守府に植えておいた桜の木は、その美しい花弁を見せつけるように花開いた。
え？鎮守府に着任してから二年しか経ってないのに桜が育つ訳ない？いやいや、俺の手元にはどんな木々も一瞬にして育つ骨粉というアイテムがありまして。某所でスケルトンを倒して作った。
「美しいな」
やはり自然は偉大だ。大地に根を伸ばす木々は、頬を撫でる風は、青く広い海は、俺に大切なことを教えてくれる。
昔、自然を、声なき者達を救うために世界人類に喧嘩を売った強化外骨格の使い手に会ったことがあるが、この美しい自然を見ればそれも納得である。
今この瞬間にも、この自然を無計画に破壊する者達が存在すると思うと、慚愧の念が絶えないが、それでも今は、身近な自然を賛美しつつ……、
「お花見を、しよう」
お花見を、しようじゃないか。

「デッデッデデデデカーン」
「どしたのご主人様。ＲＴＡでも始めるの？」
「いや、やらないけど」
お花見っつってんだろ漣。
「まずは場所取りだ、場所取りをするぞ」
「鎮守府の敷地内だし、場所取りとか要らなくない？」
ぐぬぬ。
「なるべく君達には社会人っぽいことさせたいんだが」
「お花見の場所取りやらされるのってブラック企業では」
そう？

「ってか、そう来ると思って、暇な艦娘達がブルーシートを敷いてきてくれたってさ」
成る程、流石は黒井鎮守府。
指示するまでもなく、準備完了ってことか。
「料理は……、やったな」
俺と厨房組が朝早くから料理しておいた。沢山の美味しいお弁当を作ったんだゆぉ。
そして頭パーリーピーポーの俺、酒もしっかりと持ち込む。
……完璧では？
桜ＯＫ場所取りＯＫ食い物ＯＫ酒ＯＫ。オールＯＫ。
「ククク、クキキキ……！お花見っ……！冒涜的っ……！お花見っ……！」
思わず帝愛の大金持ちみたいになる俺。
「お仕事全面お休み！お花見週間！開始ィ!!」
「わーい!!」
さあ、狂気のカーニバルの　開　幕　だ。

「はい、よーい、スタート」
俺のその一言は、艦娘達の喧騒に飲まれていった。
ざわざわと、総勢百何十名。音成の艦娘も追加で更に倍率ドン。
多くの艦娘が集まり、お花見は開催された。
そして俺は、キンッキンに冷やしたウォッカを瓶ごと煽る。
「ああ、美味え」
春の訪れを感じつつ、最高に美味い酒を飲む。
酒の味ってのは雰囲気の味でもあるからな。
どんな高級品でも、辛気臭い連中と飲むと不味く感じるし、どんな安物でも、気の合う仲間達と飲むと美味く感じる。
「提督」
「おお、ガングート。どうだ、一杯」
現れたのはガングート。大分酔っているように見える。
「頂こう。モスコフスカヤか、祖国の良い酒だな」

これ？辛口で美味いんよ。
「……相変わらず化け物じみた肝臓だな。私自身も相当に強い自信があるが……、貴様程ではない」
ショットグラスでウォッカを喉に流し込むガングート。
「くぅーっ、効くなあ！美味いっ！」
おお、ガングートもいける口だな。
「このサーロ、どこのだ？」
「うちで漬けたのだよ」
「成る程、通りで美味い訳だ」
ガングートと一緒に、サーロをパクつきながらウォッカを飲む。
「……貴様の酒の飲み方は、我が祖国のそれに近いな」
「ああ、ロシアには三年くらい居たからね」
「三年だけか？」
「おいおい、俺は旅人だぜ？旅人の俺が三年も居たんだよ」
一箇所に何年も滞在するのは稀だ。それを言えば、ここでずっと提督をやってる今の状況はレアケースと言える。
「成る程。他にはどんな国を旅したんだ？」
「イギリスは学生の頃に数年留学して、ガキの頃は二年くらい中国の少林寺にいて、三年かけてアメリカを回って、ドイツにもちょっといたな」
「ほう」
イギリスでは英国紳士な教授と謎解きして、吸血鬼の旦那と出会った。少林寺では海王さんに稽古つけて貰って、アメリカでは数多のスーパーヒーローや宇宙的恐怖だったりと出会い、ドイツではナチ残党の円卓の超人共に鉢合わせしたっけ。
「まあでも、時間的には、他所の世界を旅した時間の方が長いかね。ノースティリスとかユクモ村とかロスリックとか」
「成る程分からん」
「そうだな、どこの世界も、凶悪なモンスター達が跋扈するところさ」
「それは恐ろしいな。そこに何がある？何を見てきた？」
「全てだ」

俺の旅には俺の全てがあった。
とても言葉では言い表せない。
「そうか」
またも酒を飲むガングート。
「なら、ここにいることも、貴様の本意か？貴様の言う、全ての内の一つなのか？」
「ああ。黒井鎮守府での経験も、旅の一部だ」
そうだね。
「……そう、か。私達も、貴様の一部なのだな」
嬉しそうな表情を浮かべるガングート。
俺の一部と言われたのが嬉しいのか。
どう言う性癖なんだそれは。
「貴様は私達を受け入れてくれる、それは良いな、良いことだ。……ああ、出来るなら、貴様と一緒に溶け合って一つになりたい。実に共産主義的だろう？」
「そ、そうだね」
分からん。
酔いが回りまくっているのか、訳のわからないことを言い出したガングート。
「そうだ、魔女の使うような大釜でな、貴様と一緒に煮込まれてな、一つに溶け合うのだ。分かるだろう？それは素晴らしいことだ。ｋｈｏｒｏｓｈｏだ」
何だそりゃ。どこから来るんだそんな発想。
「皆んな違って皆んな良い、じゃないか」
「むう、個人主義め」
そう言うと、ガングートは俺の手元の酒瓶を引ったくって、他所に行った。
「ふふ、間接キスだ」
見せつけるように俺が口を付けていた酒を飲み干すガングート。
何がしたいんだ、ガングートは。まあ、酔っ払いの思考回路は理解できないってことか。

「提督」
「お、時雨か。楽しんでいるか？」
「うん、楽しいよ」
まるで悪党の愛人か何かのように、しなだれかかる時雨。
事実、俺という悪党の愛人的なポジションであるから、何にも言えねえが。
「愛人……。ふふ、光栄だよ。それは素敵だ、とてもとても素敵だ」
「こらこら、俺だから良いものの、心を読むのは控えるんだよ」
俺は別に心を読まれても困らないから良いんだが、普通は心を読まれるのはよく思わない。
「提督だってその気になれば人の心を読むくらい容易いんじゃ？」
「俺は心理学＜８０＞以上のものは基本使わないようにしてるんだ」
脳内の瞳で無理矢理人の心を覗くことも出来るが、やらない。
「分からないな、思いやりと言うものかい？」
「そうさ、思いやりは大切だ」
「……それは、少し嫌だな」
ええ。
「提督が僕達以外にその優しい思いやりを向けるのは、妬けるよ」
ははーん、嫉妬か。
まあ、可愛いもんよ。
「可愛いこと言うなあ、時雨は」
「可愛い、か。そう言ってくれるのは提督だけだよ」
そんなことないよ！
だが、時雨は、近くにいた多摩に声をかけた。
「白露型をどう思う？」
と。
すると多摩は、
「怪しい連中にゃ」
と、そう答えた。
「多摩、酷いこと言っちゃ駄目だぞ」

「酷いも何も事実だしにゃあ……」
そうか？怪しいか？
「いつその怪しげな儀式に巻き込まれるかと思うとゾッとするにゃ」
「儀式？ちょっと外なる神を呼び出してるだけだろ、気にすんなよ」
「……まあ、実のところ、そんなに気にしてはいないにゃ。この黒井鎮守府は、危険人物の集まりみたいなところあるし」
いやいや、皆んな良い子だよ。
「ほらね、提督。この鎮守府における白露型の認識なんてこんなものさ」
そっかー。
可愛いのにな、時雨。
「え？一応確認するけど、仲が悪い訳ではないよね？」
「うん？仲は良いと思うよ？」
なら、良いか。
軽口を言い合える仲なのかね。

……「今日ばかりは飲ませてもらうぞ！」
……「そんなこと言って、ほぼ毎日飲んでるでしょ」
……「それ一気、一気！」
……「ｋｈｏｒｏｓｈｏ」
……「ｃｈｅｅｒｓ！」
……「お花見なんですから、鳳翔さんも飲んで下さいよ」
あー。
最高だ。
「「「提督ー！」」」
ハーレムを築きつつ、酒盛りする。
三文小説、なろうテンプレ主人公みたいな展開。
他所から見ればゴミ以下だろうが……、当事者としては最高だよ。
「もふ」
「首輪付きか。楽しんでるか？」
「もふ」

「そうか」
　楽しんでくれているみたいだ。
「ここに来てからもう二年も過ぎたのか……」
「もふ」
「この光景がいつまで続くか、それは分からないが……」
「もふっ」
「それでも、俺は、今この瞬間を楽しむよ」
「もふもふ」
　人生を、楽しめ。
　俺のルールだ。

２４３話　ドキドキ！健康診断！

さて。
お花見も終わり、目ぼしい行事はひと段落。
暫くは大人しく……、いや、待てよ。
こんなに食ったり飲んだりしていたら、健康に被害が出るのでは？
生活習慣病とか怖い。
艦娘が病気になるのか、と言ったら微妙なところだが、健康を損なって良いことはない。
健康診断だ。
「大淀」
「はい」
大淀が、横からスライドするように現れる。
……本当にどうなってんだ？呼べば鎮守府内のどこにでも来るんだよな。執事かよ。ギャリソン時田かよ。
まあ、良いや。
「大淀、健康診断をしよう」
「はっ、私達の健康診断でしょうか」
「ああ、君達の健康状態が気になる。身長や体重を測って、工廠組に協力してもらい、健康状態を割り出してくれ」
「はい」
「ああ、勿論俺は、詳細なデータを見ないからな。女性の体重とかを詮索するのは日本じゃマナー違反らしいし」
「いえ、誰も気にしないかと」
そう？
「むしろ、そうですね。健康診断と言う限定的なシチュエーションにおけるセクハラをお願いしたく」
「んんー？」
あらやだ。
たまにまともな話したらこれだ。
俺には一切邪念がなかった。ただ単純に、艦娘達の健康のため、健

康診断が必要だとそう思っただけなのに。
「……つまりは、お医者さんプレイです」
静かに言い放つ大淀。
分かった、分かったよ。
やりゃあ良いんだろ。
四次元ポケットの魔法により白衣を取り出す。
「黒井鎮守府健康診断、開始ッ！」
「了解致しました、全艦娘に通知します」

「で、なんでも君らは下着姿なの？」
「「「お医者さんプレイと聞いて」」」
「健康診断だよッ!!!」
無駄に勝負下着な艦娘達を一瞥して叫ぶ俺。
なんなんだ一体これはどう言うことだ。
「提督に私の全てを見せちゃいマース??」
ブラをずらして見せる金剛。
むう。
良い。
俺は金剛の胸の桜色の一部を凝視した後、告げる。
「いやほら、今回はほら、真剣だから。マジで君達の健康を」
金剛が俺の手を取り、胸元へ寄せる。
「おっぱい！」
「あんっ??」
はっ?!
だ、駄目だ、反射的に揉んでしまった！
「い、いや、駄目だ、真面目に」
「ちゅっ??」
ふへへ、キスされちゃった。

「提督、私の身体、好きに調べてね??」
ぐ、愛宕。
「私の身体に、興味、あるの?えへ、ちょっと恥ずかしいけど、提督には、全部見せてあげるからね??」
ぐぐ、プリンツ。
「イクのイイトコ、見たい?見たい?提督にはぜーんぶ見せてあげるの!触っても、良いよ??」
ぐああー!イク!
うわあああああ!!!

理性崩壊。

「駄目でした」
駄目だった。下着姿の沢山の女の子が誘惑してくるこの倒錯的な光景に早々に堕ちた俺は。
「じゃあまず、胸囲から測ろうかぐへへ」
「やん??」
全自動セクハラマシーンになってしまったのだ……。
「熊野ー、熊野の胸囲はー?」
「あんっ??もう、揉んでるだけで大きさが分かるのかしら?」
「８４のＣ」
「えっ、本当に分かるんですの?!」
分かるぞ、旅人の必須スキルだ。
「体重は、と」
抱っこする。
「４４．５ｋｇかー、痩せてんなー」
「分かりますの?!」
「身長は１５６ｃｍか」
「うう、何で分かるんですの?」
「俺が俺で俺だから」
俺には分かる。

「はい、後は視力聴力採血レントゲンね、いってらっしゃい熊野」
「は、はい」
ウエストとヒップも言い当てられるし、もっと言えば、触れる必要すらないけど。
見ただけでスリーサイズを見抜けるのは男として当然なのではないかね？
「さあ、次だ次」
「Ｍｅよ！」
アイオワかー。
「９５のＩ」
だから、見ただけでも分かるんだよ。
「触って確かめて？」
だが触らされる。
ふにょん。
「うむ、やはり間違いない、９５のＩだ」
「本当に分かるの？」
「分かるとも。さあ、息を吸って」
「？、ええ、分かったわ。すぅー」
「吐いてー」
「ふぅー」
「……ＯＫ、内臓にも問題なし」
「えっ、聞いてたの?!聴診器は？」
そんなもん要らんよ、聞こえるだろ他人の心音くらい。
「どこまで聞こえてるの？どれほど耳が良いのよ……」
「俺はイルカと喋れる」
「超音波まで?!」
コウモリやクジラとも話せる。
まあ、それでも、クジラを食ったりするけど。
喋れる相手を殺して食うのはどうなのかって？俺、人間を食ったことだってあるぞ。
あまり思い出したくない経験だが。

まあ、その辺は弱肉強食ってことで。
でも、それでも、クジラやイルカは美味いから。つい食っちゃう。
……アイオワに言ったら怒られそうだな。
動物愛護がどうこうって。アメリカ人だし。
やめとこ。
「さあ次だ」
「そ、それじゃ、測って」
天津風かよ。
「７５のＡ」
「さ、触っても、良いのよ？」
「いやいや、俺はそんな」
「うう～、触ってよ……」
触って、ときたか。
そーんな平らな胸に釣られクマー。
しかし、度重なるロリの誘惑により耐性が弱体化した俺は、普通に釣られた。
最早相手がロリだろうと……、どうでも良いのだァーーーー!!!
「えい」
「ああんっ??」
瞬間、肌、重ねて。
「ここか、ここがええんか」
「だ、駄目ぇ、先っぽぉ??敏感だからぁ??」
天津風の胸の桜色の頂点を弄り回す。
ふへへっへ、やったれやったれ。
ヤバい、楽しい。
悪魔に魂を売った俺は、小中学生にしか見えない天津風の胸を触ることに忌避感を持たなかった。
もにゅん。
いや、そんな音はしねえな、そんな音がするほどデカくはない。
擬音で表すなら、すとん、って感じの胸。
「んひぃぃぃ????」

だが、胸である以上イかせることは可能だッ！
「オラオラオラオラ」
「あっ、駄目??それ以上は??おかしく、なるぅ??????」
大きな嬌声を上げて膝をつく天津風。
「ツフゥ!!」
良い調子だぜオイ。
次は視力の方見てくるか。

「時雨、脳内の瞳は使うなよ」
「それじゃあ精々１０．０くらいしか見えないよ？」
いやこれ、視力検査だから。スコアアタックではない。
「んー、一番目が良いのは羽黒か、妙高か、ってところか」
両目３０．０オーバーくらいか。
「鷹の目を使わせて頂ければ、これの倍以上は見えますよ」
俺並みの視力か。凄いな。
後は聴覚。

「あ、はい、聞こえます」
「犬笛の音域なんだけど」
「だって私は提督の狗ですし」
うん、意味不明。
何故か人間の可聴域を超えた領域まで聞こえる白露型と古鷹型。
「まあ俺も聞こえたけど」
「へえ、提督も耳が良いんですねえ」
さあ、次はレントゲンだ。

「うん、皆んな異常なしだな」
「仮に異常があっても、ドックにぶち込めば治るでち」
そんな乱暴な。
「これがろーちゃんの胸の中身？これ、良いの？」
「ああ、問題ないよ」

医療分野の知識もある。
ろーちゃんのレントゲン写真は異常なしだよ。
さて、最後は採血か。これは難関か？

「ほーら、注射だぞう、怖がらないでねー」
「あのね、司令官」
何だね雷。
「私達艦娘はね、出撃で、内臓が破けたり、目玉が飛び出たり、手足が吹き飛んだりするのよ？今更注射くらいで怖がったりしないわ」
「おたくのお姉さんは大層怖がってるみたいだが」
「暁は大丈夫、大丈夫よ、何てったって大人のレディだもの、レディは注射なんて怖くないわ、大丈夫大丈夫」
「……まあ、暁は例外よ」
そう？

目ぼしい項目は終わった。
尿検査？
ああ、それは、俺がやると倒錯的過ぎるプレイになるので、明石が代わりにやってくれたよ。
全員、あれだけ飲み食いしてるのに、問題があるものはいないってさ。
一部空母の体重くらいか、気になるのは。
まあ、こんなもんか。
健康診断、終了と。

……正直ね、血液検査とかやったけど、健康なのかどうかは完全には分からないんだわ。
艦娘は血液中に血小板が多かったり、鉄が多かったりとかして、未知の細菌がいたり、中にはナノマシンを流してる子もいたし。
でもまあ、臓器とかは形は人間と変わらないみたいだし……。
多分、健康だと思う。

それくらいしか言えない。

「じゃあ、提督の健康診断を始めますか」
じゃあって何かな大淀。
「健康診断と言う名目で、提督にセクハラしたいのです」
俺がセクハラされるのか（困惑）。
「はい」
と言う訳で、何がと言う訳でなのかは分からないが、と言う訳で。
瞬く間にパンイチにされる俺。
バックグラウンドから艦娘達の黄色い声が。
「はーい、まずは身長から」
測るまでもない。
「１９５ｃｍだよ」
自分の身体データくらい把握している。
俺も把握しているし、艦娘達だって分かってるはずだ。
果たしてこの俺の健康診断と言う茶番に意味はあるのか。
「良いから測らせてください」
「まあ、良いけど」
身長計に乗る俺。
「……うん、１９５ｃｍです！」
そうだね、そうだろうね。
「体重は、と」
「１０５ｋｇだよ」
「はい、１０５ｋｇです」
計るまでもない。
「良い身体してますねえ、じゅるり」
涎を拭く大淀。ちょっと怖い。
「次は視力ですよ」
「まあ、良いけどさ」

「はい、これは」
「右」
「これは」
「上」
「これは」
「下」
「……はい、視力３０．０オーバーです」
　はいじゃないが。
「って言うか大淀って伊達眼鏡なのな」
　大淀も視力１０．０あった。
「まあ、艦娘ですし。艦娘で身体に障害があるのは、その艦の謂れによりますから。ウォースパイトさんなんかは、艦だった頃舵周りの不調に悩まされたと言う謂れから、艦娘になった今、足が悪いじゃないですか」
　成る程な、軽巡大淀は、目が悪くなるような謂れは無かったってことか。
「因みに、視力ワーストワンは青葉さんです」
　ああ、成る程。
「さて、次は聴覚ですよ」

「聞こえる」
「……１５００００Ｈｚですよ？」
「聞こえるんだって」
　聞こえるよ。
「提督はイルカか何かで？」
「違うが」
「……まあ、良いですよ。次はレントゲンです」

「異常なしです」
　だろうな。
　普段は人間でいることを心がけているし。

「その気になれば臓器を増やしたりできるけど」
「そんなことしなくて良いですから」
　そう？
「次に、血液検査なんですけど……」
　何？
「もう、血液の色からおかしいですよね。ちょっと赤過ぎです」
　まあ、そうだね。
　常人のそれと比べて些か赤いね。
「そして成分。どの数値も一般的な成人男性の血液と比べておかしいです」
　だろうな。
「でも健康だよ」
「多くの薬品やナノマシン、細菌など、危険な物質が混入しています」
「それで？」
「……なんで生きていられるんですか？」
「死なないと思うと死なないもんよ。気持ちの問題」
「はぁ……」

「最後に尿検査ですか」
「やだよ」
　君らにおしっこを見せろってか？そーんな奇特なプレイごめんだね。
「まあまあ、私が採取しますから」
「やだってば」
「まあまあまあまあ」
「やだかんね！」
「そう言わずに」
　逃げよう。
「あっ、逃げっ！」

流石にそれは嫌だ。

２４４話　ガチキャン

「キャンプがしたい」
　ガッチガチのインドア派の望月が何か言ってる。
「ゆるキャン見たな？」
「何故バレたし」
　お見通しよォ……。

　しかし、艦娘の希望要望は基本的に叶える俺。
　睦月型を連れて裏山にやってきた。
「トイレはあそこだからな。さあ、テント張るか」
「待ってよ司令官、何で裏山にトイレがあるの？」
「ゆるキャン放送当初から、キャンプに行きたいとか言い出す艦娘がいるだろうなー、と思って、あらかじめトイレを作っておいた」
　そうでなくても、裏山は広い。目ぼしいところにトイレを設置するのは当たり前だろう。
「用意が良いなぁ……。テントね、どうするの？大っきいの一つ張る？それとも小さいのいくつか張る？」
　どうするかな。
「俺を入れて十人だろ？三、四人用のテントを三つで良いんじゃない？テントじゃなくて家を建てるって手もあるが」
「家？どうやって？」
「森のほったて小屋の権利書」
「権利書がどうしたの？」
「使うと家が建つ」
　ノースティリス産のアイテムだ。
「またとんでもアイテムを……。テントで良いよ」
　俺もこれ、原理は分かってないんだけどもね。使うと家が建つのだ。
「それより、テントだと、誰が司令官と一緒に寝るかで戦いが起きるね」

「じゃんけんで決めなさい」
　さて、テント張るか。
「手伝います」
「ありがとな、ミカ」
「あー！あたしもやってみたいー！」
　文月もやるのか。
「私も、手伝う……」
　弥生も手伝ってくれるか。
「僕もー」
　皐月もか。
「じゃあやるぞ。ワンポールテントはコツがいるからな、マニュアルはあるけど、分からないところは聞けよ」
「「「はい！」」」
「……望月はやらねえの？」
「あたしはほら、雰囲気を味わいたいだけだし。実際やれって言われるとだるい」
　最高にインドア派らしい答え。好き。

「さて、キャンプも張ったことだし、アウトドアっぽいことやるか」
「待って」
　何？
「何それ」
「これ？ハンターボウ」
「弓なんか持ち出してどうするの？」
「鹿でも狩って来ようかなって」
　この人数と俺の食欲なら一頭分食い切れるだろうし。
「いや、ゆるキャンだから！司令官のそれはガチキャンじゃん！」
「いや、俺がガチならもっとアレだぞ。生き残るために生の獣肉や虫、爬虫類などを喰らい、生き血や朝露から水分を得て、雨風でテントの張れない中、泥にぬかるむ大地で眠るぞ」
「ヒェッ……。何それは、ベアさんか何か？」

ガチのサバイバル……、若い頃はそんな感じだった。いやあ、あの頃はなー。
まだ毒耐性も甘く錬金術も使えなかった頃は、得体の知れないものを口にしてゲロ吐いてのたうち回る羽目になったり、雨風の中、病気になりつつも必死に身体を休めたり。何度死にかけたか覚えていない。
でも、楽しかった。そのどれもが良い経験だった。
まあ、今では、錬金術で、その辺の石ころをふかふかのパンにできるし、四次元ポケットには沢山の食材がストックされているし、そもそも転移で安全なところに戻れるんだけど。
何だか、経験を積んでいくにつれて張り合いが無くなっちまったなあ。今じゃサバイバル程度じゃ間違っても死なない身体と技能を持っているからな。
ちょっとだけ、つまらなく感じる。
「兎に角、何かしら獣を狩ろう。熊か？猪か？食べたいのは何だ？」
「ってか、いるの？裏山に」
いるよー、放し飼いってか、放流ってか。
「いるよ」
「いるとして、狩って良いの？」
「首輪付きから許可は得ている」
裏山ちほーの管理人（？）である首輪付きには、好きに狩って良いよ、生態系を崩さない範囲でね、と伝えられている。
「ううん、まあ、良いけど。私は行かないよ、狩りとかやったことないし」
望月が言う。
「私もちょっと……」
如月もやんわり拒否する。
「うーちゃんも嫌ぴょん」
卯月も拒否。
「私は行きます」
ミカァ!!

「じゃあ、三日月と狩りしてくるから、ゆっくりしていてくれ」
「「「はーい」」」
「くんくん、こっちから獲物の匂いがする」
「分かるんですか？」
うん？俺、並の猟犬くらいには鼻が利くんだよ。
「……いた」
「鹿ですね」
ハンターボウに矢をつがえる。
……いつもはもっと良い弓使ってるが、この世界の生き物はあっちの世界のそれと比べて些か脆い。矢が刺さった瞬間風穴が開いて吹っ飛ばれたりしたら困るから、あえて威力の弱いハンターボウを使う訳だ。
「シィッ！」
矢を、放つ。
『ーーーッ?!!』
鹿の頭に突き刺さった矢は、鹿の脳を破壊して、殺した。
「よし、仕留めた」
「お見事です」
持って帰るか。
「ところで、司令官は動物と話せるとか」
「ああ、そうだね」
「……鹿とも話せるんですか」
「うん」
「話せる相手を狩るのですか」
「弱肉強食だから」
しゃーない。
俺にできることは、死にゆく者達に感謝の念を捧げることだけなんだよなぁ。
「ただいまー」

「「「お帰りなさい！」」」
帰ってくると、思い思いに寛いでいる睦月型に出迎えられる。
折りたたみ椅子に座ってファッション雑誌を読む如月に、ソシャゲの周回をする望月。武器を磨く菊月。
「睦月と卯月は？」
「探検に行くって言って、川に沿って歩って行ったわ」
そう。
まあ、万一迷っても、俺の追跡＜８０＞がある。それに、匂いなどで追跡することも可能だ。問題はない。
「昼からは釣りなー。今の時期は虹鱒が美味い」
「りょーかいでーす」
「はーい」
さーて、早速解体するか。
まずは血を抜いて、冷やして、皮を剥いで、と。
「うっわ、グロっ」
スマホ片手に望月が現れる。
「どうした望月」
「んー、怖いもの見たさ？」
成る程な。
「さ、どんどん行こう。次は腹を切って……」
「うわわ、これ何、司令官」
「それは肺だな、そっちが心臓。心臓と肝臓は美味いぞ、食うか？」
舌もいけるぞ。
「うーん、どうせなら挑戦してみようかな」
「じゃあ後で焼いてやるからな」
解体解体と。慣れたもんよ。今じゃナイフ一本で兎からドラゴンまで解体できる。
「ツイッターに上げて良い？」
「良いよー」
「『ガチキャンなう』っと」
でも、動物愛護がどうこうって人には気をつけろよー。

「さあ、昼飯だ」
「「「わーい！」」」
　メニューは鹿肉のバーベキュー。
「鹿肉はな、強火で熱すると固くなるからな、弱火でじっくりと熱するんだよ」
「成る程ー」
「ファイア」
「……魔法で火ぃ点けるのやめてくんない？一気にキャンプがファンタジーに」
　ん？ああいや、めんどくさかったから。
　ごめんね、空気読まないで。
「そろそろ焼けるぞー、食え食え」
「うん……、美味しい！」
　小さな口を懸命に動かす睦月型の諸君。
「美味っ」
「ジビエは美容にも良いって聞いたわ」
「美味しい……」
　満足してくれたか。
「っはー、キャンプ最高かよー。こんな美味いもの食べれて、その上空気がいいところでゴロゴロできるなんて！まあ、あたし何にもやってないけど!!」
　と、望月。
「望月は何もしなくて良いんだよ、俺に任せろ」
「あぁ^～、駄目になるぅ～」
「司令官、望月ちゃんをあんまり甘やかしちゃ駄目だよぉ！」
　そうか睦月お姉さん。
「あー駄目ー、もー駄目ー、ただのニートになるー」
「もー！」
　ぷんすか怒る睦月。
「ところで睦月」

「んー？なあに、司令官」
「にゃしい、とか言わないの？」
「そこに触れちゃ駄目」

そうか、触れてはならないのか。
「そろそろ釣りにイクゾー」
「「「はーい！」」」
虹鱒はこの季節が美味いんだよ。
「はい、釣竿」
「……司令官、釣竿を何本も持ち歩いていることになる訳だが、冷静に考えればおかしくないか？」
「そう？俺もアイテム欄整理とかあんまりしないから」
懐に入ってるものを全部合計すると何トンになることやら。少なくとも乗り物が入っている時点で何十何百トンだなー。
「さて、釣ろうか」
「何気に初めてだ、釣りとか」
ああ、そう？
「まあ、最悪釣れなくても良いよ」
「何で？」
「俺が釣るから」
その気になれば釣れますとも。
「あと、望月がリクエストしたスープパスタも作るし」
「ふーん、おかずには困らないってことね」
そーいうこと。
「さて、と」
釣り糸を垂らす。
じっと、待つ。
釣竿を立てかけておく。
ジュースを飲む。
「司令官、何を飲んでいるんだ？」
菊月に問われる。

「ん？ジュースだよ、飲むかい？」
「いただこう。……酒ではないかー！ストロングゼロではないかー!!」
「ストロングゼロなんてジュースみたいなもんだろ」
「……司令官がそう思うならそうなんだろうな、司令官の中ではな」
「ってか引いてるぞ、菊月」
「む、おお！ええい！」
おー、釣れた釣れた。

はい、内臓を取って、串を刺して、と。
「火は、ああ、魔法使うと雰囲気がアレなんだっけ？じゃあ普通にマッチ使うわ」
マッチは手前に擦る派だ。
「種火をー」
薪に燃え移った火種は、段々と大きくなり、燃え上がった。
「焚き火、凄い」
弥生が若干目を輝かせる。
「弥生もやってみたいか？」
「良いの？」
うん、もう一箇所で焚き火するから。
「マッチ使うの初めて……。あっ、火がついた！」
「よしよし、それじゃこっちに火を……」
と、焚き火を二つ設置したところで。
「じゃあ虹鱒は焚き火の近くに置いて焼くとするか。こっちではスープパスタ作るぞー」
「おお！ゆるキャンのアレだ！パスタ折って外人兄貴達がカンカンに怒るやつだ！」
テンションが上がる望月。
「まあ、大鍋で作るからパスタ折ったりはしないんだけどね」
「ええー、折角だから折ってよー」
まあ、良いけどさ。

と言う訳でパスタを折ったりしつつ、焼けた虹鱒を食らい、時刻は夜へ。
「司令官マシュマロ焼きたいマシュマロ」
「良いよー、ほら焼けー」
「わーい！」
夜行性のフレンズである望月は、夜になるにつれてテンションが上がっていくのだ。
「司令官それ、何やってるの？」
皐月に問われる。
「ココアにラム酒入れてる」
「へぇ、美味しいの？」
「スンゲェ美味い」
「じゃあ一口ちょーだい」
「良いよ、ほら」
「あら、私を差し置いてイチャイチャしちゃ駄目よー」
「うーちゃんもー！」
と、イチャイチャ展開もあり。
「さて、後は寝るかー」
「誰が司令官と一緒のテントで寝るか……」
「真剣勝負！」
「「「じゃーんけーん！」」」
ぽん、ってか。

で、一緒になったのは三日月と望月で。
「司令官、寝袋使わないの？」
「んー、そんな寒くねえし」
基本、猛吹雪や雪の中でもない限り、寝袋は使わない。夜はまだ冷える？知らないな。
「じゃあ腕枕してー」
「あいよー、三日月もするか？」

「良いんですか？」
「良いとも」
「では、私も……」
　と、二人に腕枕して。
「さあて、寝るか」
「ええ」
「んー、私、いつもこの時間帯はＦＰＳの時間だから、眠くないなー。司令官、なんか眠くなるような話して」
　んー？
「啓蒙主義とは、理性による思考の普遍性と不変性を主張する思想で……」
「あっ、凄い眠くなってきた」
　そうか、真面目な話は苦手か。
　……ちゃんと聞けば面白い話なんだけどなぁ。

「朝だぞー」
「んん、後三時間……」
「望月起きろ」
「んん、ふぁぁ……。今何時？」
「七時」
「んえぇ？……普段は午後まで寝てるけど、昨日は早く寝たし……、まいっか、起きよう」
　望月は普段、就活が終わった大学生並にだらだらしている。
　基本的に起きるのは午後、皆んながお昼ご飯を食べる頃にのそのそと起きる。
　健康に問題があるんじゃないかと心配しているが、この前の健康診断ではなんとオールグリーン。何の問題も無かった。
　まあほら、俺も大概自堕落な生活してるし、人のこと言えないよね。
「ほい、朝ごはん」
「んー、朝ごはんかー、食べられるかなー」
「あれ、朝は食べない派？」

「いや、お腹減った時に何か食べるって感じだから……。うー、でも、皆んな食べてるとあたしも食べたくなってきたかも」
「じゃあ、はい」
　ポトフだ。
「ポトフ？良いね、これなら軽いし、食べれるわ」
　ポトフは良いぞー、肉と野菜とコンソメさえあればできるからな。
　俺も旅の途中の飯はポトフとかシチューとかだった。
「うっわ、ウマー」
　しかも、今回は、肉も野菜もちゃんとしたものを使っている。
　怪しげな街の闇市の肉とかじゃない、ちゃんと俺が作ったベーコンだ。
「朝はまだ冷えるから、あったかいポトフは染みるねえ」
「美味しー」
「美味しいです」
「お野菜が甘くって……」
「厚切りベーコン美味しい！」
　大絶賛である。

「じゃ、そろそろ帰るかー」
「「「はーい」」」
　さて、テントを畳んで、と。
「意外と楽しかったわー」
「だろー？アウトドアも良いだろー？」
「自分でやるのはごめんだけどね」
　もー。
「私は楽しかったです」
　と、三日月。
「そっか、また皆んなで行こうなー」
「はい」
　まあ、これにて。
「ザ・エンドってね」

キャンプ、終了だ。

２４５話　エイプリルフールは騙される方が悪い

「……リシュリュー、そのお腹は？」

「……貴方の子よ、Ａｍｉｒａｌ??」

「ぜりゃあああああ!!!!」

「あっ、ちょ、馬鹿ね!!っ！心臓を抉り出すなんて……!!」

「何か申し開きは？」

「ありません」

焦った、焦った。

そうだな、そう言えば今日はエイプリルフールだったな。

お腹に枕を入れていただけのリシュリューにまんまと騙され、反射的に自殺してしまった。

「いつも言ってるけどね。死なないのは分かってるけれども、自分を傷つけるようなことはしないでって言ってるのが分からないの？」

「面目次第もありませぬ」

てへぺろ。

「大体にして、自殺するってどういうことよ！愛する人との間に子供ができたなら、しっかりと祝福すべきでしょう？」

なんか怒られてる俺。

「いや、俺は子供は」

「大丈夫よ、安心して。子供を産んだ後も、貴方のパートナーとしてしっかり努力するわ。ずっと魅力的な女のままでいるって約束する。それに仕事だってやめないわ。艦娘としての仕事も生涯続けるから」

「子供とかはちょっと」

「教育だって任せて。ちゃんと母親としての役割も果たすわ」

あー、そうじゃなくってだな。

「こ、子供はいらない」

言ってやった！

諦めてくれリシュリュー。
俺、子供とかは要らないんだ。
「Ａｍｉｒａｌ、何を言っているの！少子高齢化の進む先進国の国民として、子供を産むことは重要なことよ！」
「育てられる自信が」
「大丈夫よ安心して、私が支えてあげるから」
「余裕が」
「嘘おっしゃい。あれだけ稼いでおいて余裕がないだなんて言わせないわよ」
「ノウハウが」
「貴方、教員免許持ってるんでしょう？子供は得意なんじゃないの」
あーうー。
「こ、ここは軍事施設だぞう！子供を育てられる訳ないだろー！」
「そうかしら。レジャー施設も顔負けな娯楽も揃っているし、子供を育てるには最適な場所だと思うわ」
そういう問題じゃないだろ。
「それに……、子供というのは、両親の背中を見て育つものよ。立派に戦う私達の背中を間近で見ながら育つなら、きっと良い子になるわ」
キラキラした目で言うリシュリュー。
どこから来るんだその自信は。
「兎に角！俺は子供は作らない！」
「……知ってるかしらＡｍｉｒａｌ」
「何が？」
「夫婦間じゃ、レイプは犯罪にならないのよ」
くっ、実力行使か!!
逃げよう!!
「あっ、こら！待ちなさい！Ａｍｉｒａｌ！Ａｍｉｒａｌーーー!!!」
「危ないところだった」
キッチンにて。
スイーツ作成中。

クラップフェン揚げちゃう。
ついでにドーナツとチュロスも。
「じー」
と、そこに、物欲しそうな顔をしたグラーフが。
「そのクラップフェン、食べても良いか？」
「良いぞー、君達の為に作ったんだからねー」
ふふ、美味しいものを沢山食べるんだよ。
「ありがとう、Ａｄｍｉｒａｌ。ふふふ、生まれてくる子供達にも、美味しいものを食べさせてやれるんだろうな。とても幸せなことだ」
ふふふ、ん？
んー？
「あっ、そっか、エイプリルフールかぁ！騙されないぞうグラーフったらもうー！」
「エイプリルフールは午前中までだろう。あの熱い夜の出来事を忘れたか、Ａｄｍｉｒａｌ？」
ん？
んー？
キッチンから出て、と。
「おらあああああああ!!!」
首をナイフで掻き切った。
「うわあああああ!!!何をやってるうううううう!!!」

「冗談を言った私が悪いのは分かるが、首を切る馬鹿がいるか！」
「すいませんでした」
また騙されてしまった。心臓に悪い冗談はやめてくれ。咄嗟のことで焦り過ぎて心理学＜８０＞も機能してなかった。
「……そんなに子供が嫌いか」
「ん、いや、子供は好きだよ」
変な意味ではないぞ。ロリコンとかそういうのじゃない。
「では何故そんなにも、子供を嫌がる？お互いにいい歳じゃないか」
「いい歳？そうか？君、五歳くらいじゃ……」

「精神年齢の話だ、肉体的にも子供を産むには丁度いい。……それとも、私に魅力がないのか？」
「そーんなことはないさ！君は誰よりも魅力的だよグラーフ」
　当たり前だよなぁ？
「では何故嫌がる？」
「俺の呪われた遺伝子を世に広めたくない」
　新台家は代々人間の屑の家系！呪われた遺伝子を世に広めてはならないッ!!
「何を言っている？Ａｄｍｉｒａｌは優れた遺伝子の持ち主だろう」
　そんなこたぁない。実際並だ。
「Ａｄｍｉｒａｌ、貴方は優生学という言葉を知っているだろうか」
「知っているが」
「ならば分かるだろう？誉れ高きアーリア人である私と、私が知る限り最も優れた人間であるＡｄｍｉｒａｌの遺伝子を掛け合わせるのだ。さすれば、極めて優れた子供が生まれると思わないか？」
　流石ナチ公、凄い事言うぜ。
「そういう話はデリケートだからやめようね」
「む、そうなのか？だが、私とＡｄｍｉｒａｌの子供なら、Ｓｃｈｕｔｚｓｔａｆｆｅｌに入ることも夢ではないと思うぞ」
　だから、デリケートだから。
「もうないでしょ親衛隊」
「例えば、の話だ。……しかし、総統閣下のお考えは間違いでは無かったと思うんだがなぁ。Ａｄｍｉｒａｌのような優れた人間の遺伝子が世に広まれば、世界はもっと良い方向に進むだろう。Ａｄｍｉｒａｌの遺伝子を引き継いだ者こそが、世界を統べるに足るだろうな」
「デリケートだから！本当にデリケートだから!!」
　やばいぞ、Ｒ１８以外の理由で怒られそうだ!!
「その点黒井鎮守府は素晴らしい。各国から集められた、艦娘と言う超人……、外見も美しい女達の遺伝子と、これまた素晴らしい超人であるＡｄｍｉｒａｌとの遺伝子が掛け合わされた子供が数百と生まれるのだからな」

いやいやいやいや。
「優生学的に見て素晴らしい子供ができるだろうな。きっと、強く、賢く、それでいて美しい、超人になるだろう」
「俺なんてそんなに優れた人間じゃないよ」
「ＩＱは？」
「２００ちょっとかな」
「天才じゃないか……。その上、首を掻き切っても死なないし！」
天才？馬鹿言うな、天才って言うのは江戸川君とかアルセーヌさんとかを言うんだよ。俺なんて雑魚もいいとこよ。因みに俺の妹のＩＱは俺の数倍だってよ。勝てねえ。
「貴方はいつも自分はただの人間だと言い張るがそうではない。文化、歴史、言語学、考古学、オカルトなど様々な知識を持った万能の天才だ」
「そうでもないさ」
そんなんでもないぞ。俺と同じように世界を旅すれば、誰だって身につけられるぞ、その程度の知識と技能は。
「兎に角、考え直してくれＡｄｍｉｒａｌ！世界を征服すると言うならば、世継ぎは必要な筈だ！」
「お、俺の世界征服はそんなアレじゃないから！」
「かつてのアーリア人が成し得なかった世界の統一を目指すのだろう?!」
「物騒！」
そういうんじゃなくて、俺は優しい世界を創り出したいだけだから。
「ドララーッ！」
「ムグー！クラップフェンが口に！もごご！……逃げたか！」
「ふー、チカレタ」
あー、バゼルギウスはクソだなー。今日も狩りの途中で乱入されたよ。
「お帰りなさい提督！」

古鷹が出迎えてくれた。
「おー、古鷹。お出迎えありがとなー」
「いえ！……提督、これを見て下さい」
妊娠検査薬？
陽性……？
……？
「できちゃいました！」
「とうえええええい!!!」
「ああっ、そんな、剥ぎ取りナイフで切腹だなんて?!!」

「ごめんなさい、たまにはお遊びが必要だと提督に言われたので、ジョーク代わりに妊娠検査薬を用意してみたんですけど……」
良かったー！陽性じゃなかったー！色ペンで線が引かれてるだけだったー!!
「まさか切腹させてしまうだなんて！すみません！」
「いや、いいさ、切腹したのは俺だ」
「ほんの冗談のつもりだったんです」
ゆるすよ。
「……でも、子供が欲しいのは本心です！その、提督？よろしければ、私と、子供を……」
「いや、そのつもりはない」
断るか。心苦しいが。
「そう、ですか。……その、もしも、もしも子供ができても、提督に迷惑は絶対にかけませんよ？」
「いや、そういうんじゃなくてね」
「私達が責任を持って面倒を見ます。提督はいつも通り、好きに生きてもらって構いません」
だから、そういうんじゃなくてね。
「勿論、子供のことは大切にします！目一杯愛します！教育だってちゃんとしますから！」
「古鷹」

「お仕事だって頑張ります！提督に敵対する者は皆殺しにします！」
「古鷹！」
「はい！」
　申し訳ないが……。
「現在、子供を作る予定はないよ」
「……え」
　ここらできっぱり言っておかないとな。
「俺はもう別世界で過ごした時間を合わせて????年、下手したら??????年近く生きてるが……、だからこそ、子供を作る気はない。俺は旅人だから」
「……せ、戦争が終われば」
「それでも、だ。俺は一人旅の方が性に合ってるんだよ」
　ごめんな、古鷹。
「……嫌、です」
　古鷹……。
「その命令だけは、聞けません」
「古鷹、わがままは……」
「お願いします。他には何もいりません。ですから、子供を……」
　泣きそうな顔を向ける古鷹。
　ぐぬぬぬぬ、子供は嫌だ、だが、古鷹を泣かせるのはもっと嫌だ。
「分かった、分かった、前向きに検討するよ」
「はい！」

　ああ。
　もう。
　きっぱり断った方が良いってのは分かってるんだけどね。
　悲しませたく、ないんだよね……。
　いっそ子供を作るか？
　いや、そりゃねーな。
　俺の子の子育てなんて大変面倒な真似できるか。
　それに、これ以上しがらみは要らないんだよ。

俺は一生涯、自由な旅人として生きるんだ。
皆んなを、裏切ることになっても、な。

２４６話　バニ淀

ふむ。
成る程。
最近巷では大淀にバニーガールの衣装を着せるのが流行っているらしい。
よく分かった。
「大淀」
「はい」
バニーガールの衣装を差し出す。
「着てくれ」
「了解致しました」
話が早い。

俺の目の前で艤装であるセーラー服を消して、全裸になる大淀。
「ヒュウ」
口笛を軽く一つ吹いて着替えを眺める俺。
良いね、バニーに着替えるだけじゃなく、ストリップまでやってくれるのか。
「だが、男性の前で急に全裸になるのはどうかと思うぞ大淀」
「いえ、提督に私の全裸を見ていただきたかったので」
「ヒュウ」
情熱的なアプローチだ。
燃えるぜ。
「どうですか、私の身体は」
「ああ、凄くホットだよ。食べちゃいたいくらいに」
「ありがとうございます」
そして、扇情的な網タイツに黒の肩出しボディスーツ。うさ耳尻尾の小物も忘れずに。
うーむ、エロい。
「大淀、一晩どうだ？」

いかん、あまりにも魅力的だったので、どストレートに誘っちまった。
「この大淀、提督に抱いていただけることを夢見ておりました！慰安任務、了解致しました！」
その時執務室のドアが開く。
「なりませんよ提督」
筑摩!!
「はい」
「なんだその手は」
「……え？つまり、私も着ろ、と言うことでは？」
んんー？
「まあ着てくれるならそれはそれで」
緑のバニー服を渡す。
「着て来ます」
お？ストリップは無しか？
「……やっぱりここで着ます」
「ヒュウ」
俺の期待の目を察したのかどうかは分からないが、ストリップをやってくれるとのこと。
良いねえ。
「うう、恥ずかしい……」
筑摩の艤装であるドスケベ前掛けが光の粒子になって消える。
「やっ、やぁ、あんまり見ないで下さい！」
駄目だ見る、視線がいく。
桜色の頂点から生い茂った芝生まで。
「ビューティフォー」
顔を赤くしながらなんとか着替えた筑摩。
緑のうさ耳がぴょこんと跳ねる。
「どう、ですか？似合ってますか？」
「最高にセクシーだ」
ヤりたい。

「よし今日の仕事はヤメだ、飲むぞ」
大淀と筑摩の肩を抱き執務室の外へ。
するとどうだろうか。
……「成る程、バニー……」
……「オー、バニーガールデスネー」
……「僕もあの格好をすれば提督に構ってもらえるかも！」
「「「提督ー！」」」
艦娘が続々とバニーに。
どう言うことだこれは、夢でも見てるのか？
居酒屋鳳翔が高級クラブみたいな装いに?!
これはこれは。
正に、夢だけど夢じゃなかった、ような。
「俺はその、君達の最高にクレイジーなところが大好きだ」
「「「お褒めにあずかり恐悦至極です!!」」」
おお、おお！
あっちを見てもうさ耳！こっちを見てもうさ耳！
うさ耳うさ耳うさ耳うさ耳うさの耳！うどんげいーん。
俺の人生は常にハードモードだったが、ここに来てボーナスステージの嵐か。
「これは、何か？注文をしても？」
「ええ、お好きに」
では、と一呼吸置いてから指パッチン。
すると目に眩しい白バニーの速吸が!!
「ご注文は何でしょう、提督さん？」
「シャンパーニュを。それと、コンテチーズを頼む」
「かしこまりました！」
今日はエレガントに決めたいところ。
服装も取引用の白スーツに変えてある。
「……ところで提督さん。似合ってますか？」
「ああ、最高だよ速吸。俺のものにしたい」
「も、もぅ、速吸は提督さんのものですよぉ～??」

あーーーーーーーーーー。
クッッッソ可愛い。
最高に倒錯的なシチュエーションを堪能する俺。
うおっ、暁型までバニーだ。
よろしくない。
「児ポ」
「まあまあ」
許されるのか……。
流石は黒井鎮守府、格が違った。
蒼龍も緑のバニー。
良いのかあれ、胸が溢れて……。
「あ、出ちゃった。この服、胸が大きいと大変だなー」
見えたッ!!!
はっ、いかんいかん、露骨な下心は隠さねば。あくまでクールに。
……オイオイオイオイ、見ろよあれ見てくれよ。
黒バニーのサラだ!
綺麗な脚、太もも、魅惑のヒップライン、キュッと締まったウエスト、豊満なバスト……。
ホットだ……。最高にホットだ。
今すぐにでも押し倒したい。
あっ、ウインクされた。
お次は……、と。
情熱的な赤のバニー、江風。
江風?!
いや、さ、だから児ポが……。
手を振る江風。
……まあ、ほら、あれだよ。
俺、違法風俗で結構若い娘抱いたことあるし……。
それを加味すると江風くらいでも全然行け……、いやいやいや、道徳心を捨てるな、お前そう言うとこやぞ、そう言うとこ大事なんやぞ。
「お待たせしましたー」

そして、艦娘達を眺めているうちにシャンパーニュが。
んー、美味い。
艦娘達が可愛くて今日も酒が美味い。
いつもはこんなお上品な酒を飲まないんだが、こういう時くらい、な。
「どんどん飲んで下さいね??」
「ｏｈ、ＹＥＡＨ……」
飲みますよー飲む飲む。
ってこれ、これまた良いシャンパーニュを。ヴィンテージものだ。
どこにそんな金が？だって？
いや、裏の貿易関係で。
あんまり詳しく言うと、俺の恩師の先生方に大目玉食らいそうだから、詳しくは言えないが。
さあ、そんなことよりバニーだ。
バニー艦娘を愛でよう。
「アクィラ、ちょっとおいで」
「何かしら？」
「後ろ向いて」
「こう？」
引き締まったお尻！
「Ｍａｇｎｉｆｉｃｏ!!」
「そんな、もう！素晴らしいだなんて！」
ガリレオフィガロマニフィコ、なんてな。
知らない？
あ、そう。
俺はファンなんだけどね。
古いか。
「提督を虜にしちゃいますから！アカーギやグラーフには負けません！」
そうだな。
「アクィラは彼女達に負けないくらい美しいさ」

「本当、ですか？」
「本当だとも！提督嘘つかない」
たまにしか。
「ところで提督、今晩抱いて下さるんですよね」
と、大淀。
「ああ、勿論だ」
「いえ、なりません。抱くならば私を」
筑摩が割り込む。
んー。
これがあるからなぁ。
俺もね、いい加減艦娘を抱きたいのよ。
その気持ちはある。
毎日のように情熱的なアプローチを受けて、燃え上がらない男なんているか？
でも流石に、抱く時は必然的に一人ずつになる訳じゃん？
いや、セッ○スするのに分身とかしないわ。
まあ、一人ずつになる訳。
でも、そうすると、誰が先かで言い争いになるのよ。
そもそも、俺は童貞じゃないのにな！
初めてじゃないんだから誰が最初でも良いだろとは思うんだけどな！
でも艦娘達は誰が一番最初に抱かれるかで日夜鎬を削っている。
「俺、別に童貞じゃない訳だし、誰が最初でも良くない？」
「ならば私を！」
「いいえ、私を！」
んー。
マウンティング合戦とかじゃない、単純に、自分が一番に愛されたいと言う感情。
まあ別に、抱かれなくても一緒にいるだけで満足って艦娘もいるしな。
でも、将来的には子供が欲しいって皆んな言う。

怖い。
そして懸念は。
「では、今夜お部屋に伺います」
「私が先ですから」
逆レ、からの、「○○としたんだから私ともして欲しい」のラッシュよ。
そんなことが起きた場合、流石の俺も腹上死する。
百何十人だぞ。
全盛期の加○鷹でも捌けねーよ。
無茶言うな。
あと、赤城が、一緒に風呂入っているとき、俺の下半身を見つつ「フランクフルトが食べたいです」とか抜かしやがったのが個人的な今年恐怖を感じたことトップスリーに入る。
怖い。
まあ、なんだ。
つまり。
「当分抱けそうにないか……」
悲しい。

「おー、漣、メイド服か。似合ってるよ、可愛い」
「マ?!えへへぇ、可愛いって言われちゃったー??……ま、まあ、私は美少女ですし!ご主人様がメロメロになっちゃうのも仕方ないですね!」
……「「「メイド服か!!」」」
おっと、今度は艦娘喫茶か……。
良いぞ、もっとやれ。

２４７話　私物回収と服

「たまには自分で書類を書いてみるか」
と、ペンをとったところ。
ぬるっと、滑った感覚が。
「うおっ」
くんくん。
「愛液だこれ……」
うわぁ。

俺の私物は、懐に入れておかないと、すぐに艦娘に何かされる。
小物は舐められたり、自慰行為に使われる。
服は嗅がれたり、自慰行為に使われる。
ベットや枕、布団は勝手に使われたり、自慰行為に使われる。
食器はしゃぶられたり、自慰行為に使われる。
全体的に愛液唾液まみれにされてしまう。
もうパンツは一枚も残っていない。シャツもだ。今は少ない服でやりくりしている。
私物の回収……。
そうだ、私物を回収しよう。

「大淀」
「はい」
「俺の私物を返してくれないか？」
私物窃盗の筆頭、大淀に声をかける。
「ええ、構いません」
おや、大人しく返してくれるのか。
「では、私の部屋へどうぞ」
「おう」
案内された部屋は、俺の部屋と全く同じ家具とその配置。ストーカー大淀による俺の部屋完全再現だ。

「……ですが、何故急に私物の回収を？」
「そろそろ服のストックが無くなってきたからな」
「え？そんなことはないはずですが。私はお借りした提督の私物は、同じものを買ってお返ししていますから」
　んー？そうなのか？
　つまり、大淀は、俺の私物のすり替えだけ……、絶対数は減らしてないと。
「何でパンツやシャツが減っていくんだろうか。おかしいなあ」
「艦娘全員がちょこちょこ盗んでいくからじゃないですか？……はい、提督のパンツです」
　成る程なぁ。
　くんくん。
「……なあ、大淀。これさ、このパンツさ、物凄くいかがわしい匂いがするんだが」
「それは、いかがわしいことに使いましたからね」
　んー。邪姪はやめようね！
「……やっぱ、返さなくて良いよ」
「いえ、是非受け取って下さい。私の愛液が染み込んだパンツを提督が穿くと思うと非常に興奮します」
　まーた訳の分からんこと言い始めたぞ。
「そう来ると思ったよ大淀。断るね」
「いえ、是非お願いします。一回だけで良いので穿いて下さい。そしたら私がまた使うんで」
「勘弁してくれよ……」
「私が使ったパンツを提督に穿いて頂けば、それはもう、間接的とは言えセッ○スと同義では？」
　大淀、女の子なんだからもっとこう慎みを持ってくれないだろうか。
「今この瞬間も、提督のことを犯したくてたまらないのです。我慢など、とてもとても……」
「また旅に出ようかな」

「死にます」
もー。

迷いなくリスカしようとした大淀を止めて、工廠へ。
「おーい、明石」
「はーい、提督」
「俺の私物返して」
「えー」
えー、じゃないが。
「そろそろ服がないんだよ」
「でも、大半はオ○ニーに使いましたから、愛液まみれですよ」
「女の子がオ○ニーとか言うんじゃないよ全く」
どれ。
くんくん。
あー、こりゃ駄目だ。
「返さなくて良いよ」
「はっ?! いや待てよっ! 私が使った提督のパンツを提督が再度穿けば、間接的とは言えセック」
「穿かないよ」
思考回路が一緒なんだねー。

その後、服の回収を続けたが、皆んなの手元にあるやつは全部使用済みだった。
しょうがねーな。
「買うか」
「出かけるのは良いですけど護衛をつけて下さいね」
大淀にそう声をかけられる。
護衛? 護衛か。
「そんなもんなくても俺の居場所なんて把握してるでしょ」
「何事も、万が一、と言うものがありますから」
んー、一人で服選びとはいかない、か。

取り敢えず車回そう。

車庫にて。

「ん？」

「あら」

アイオワとサラに出くわす。

真っ赤なキャディラック。

女性が乗るには随分と厳ついな。

「Ｈｅｙ、どこに行くんだアイオワ、サラ」

「ショッピングモールよ」

丁度良い。

「乗せてってくれ」

「あら、買い物？」

「ああ、服をな」

「Ｗｏｗ！ｒｅａｌｒｙ？それなら、Ｍｅが選んであげるわ！任せて！」

「私も！」

「いや良いよ」

「さあ行きましょう！」

後部座席に押し込まれて……。

「発進！Ｇｏ！」

あーもうめちゃくちゃだよ。

「Ａｄｍｉｒａｌにはこっちのｃａｓｕａｌでｓｅｘｙなやつの方が似合うわ!!」

「いいえ！こっちのｆｏｒｍａｌなものの方がカッコいいです!!」

「あーもー」

着せ替えさせられる俺。

「このトゥモローランドのチェック柄のシャツにジャケットを合わせれば……、ほら素敵です！」

「Ａｄｍｉｒａｌはそんなイメージじゃないでしょ！おじさんじゃあ

るまいし、カーキーのジャケットなんて駄目駄目！こっちのワールドストリートの赤いパーカーが良いわ！これにいつものジーンズを合わせて、と。うーん、カッコいい!!」
「アメリカの不良少年じゃないのよ?!ストリートファッションなんて問題外！」
「「ぐぬぬぬぬぬぬ!!!」」
俺、いつものビズポロで良いんだがなぁ。
「あのな、俺は」
「こっちの方が良いわよね！」
「こっちですよね！」
うーん、アイオワが持ってくるのはイメージとして若過ぎる。逆にサラのは年寄り過ぎ。
「提督、ここはいっそ思い切ってスーツ買いましょう！ブリオーニのスーツなんてきっとお似合いだと思います」
ブリオーニて。そこまで年食ってね、いや、実年齢的にはそんなもんか？でも、精神年齢はいつだって永遠の十九歳だから。
「スーツ？ｎｏｎｓｅｎｓｅ！でも強いて言えば、そうね、この真っ赤なスーツなんてどうかしら！」
オイオイオイ、鉄華団団長じゃねーんだぞ。
「はぁ?!あり得ないわ！提督はしっかりとした大人なのよ！相応しい格好をするべきだわ！」
はっはっは、耳が痛いよ。
「いいえ！Ａｄｍｉｒａｌはまだまだ若いわ！それにｃａｓｕａｌな雰囲気の人なんだから、もっとｃａｓｕａｌな服を着せるべきよ!!」
まあ若くもないけどね。永遠の十九歳……、いや、二十代後半くらいだ。
「大体にして真っ赤って……。明らかにビジネスには適さないじゃないの!!前々から思ってたけど、アイオワ、貴女センスがおかしいわよ!!車も真っ赤なキャディラックとかあり得ないから!!」
「こっちの台詞よサラぁ!!いつもいつも年寄りみたいなセンスして!!Ｍｅ達は現役なのよ?!」

「ぐぬぬぬぬぬぬぬ!!」
あーもう。
「こらこら、喧嘩しないの」
「こうなったら鎮守府の皆んなに聞きましょう！提督が何が似合うか!!」
「望むところよ!!」
あーあーあーあー。
本当に。
もう。

「で？これはどう言う訳？」
「Ａｄｍｉｒａｌ（提督）の着せ替えです（よ）!!」
会議室に集まった艦娘達に囲まれて。
隣には男物の服の山。
「はい、まずはこれ」
アイオワにパーカーを渡された。
着てみる。
「満足かい、ｈｏｎｅｙ？」
「あはぁん??ｓｏ　ｃｏｏｌ!!」
歓声が上がる。
「そうじゃないんですよ、提督は何着ても似合いますけど！スーツです！」
サラに指示される。
いつも取引で使ってる白スーツに着替える。
「やあ、ｓｗｅｅｔｈｅａｒｔ」
「んんぅ??ｍｙ　ｌｏｖｅ……??」
歓声が上がる。
「私からはこれを」
秋雲が燕尾服を持ってくる。
着る。
鳳翔が着物を持ってくる。

着る。
愛宕がチャイナ服を持ってくる。
着る。
着る。
着る。
着る。
「……もういい？」
「「「満足です……??」」」
各々が写真を撮りまくり、満足した様子で帰って行った。
「サラ、ごめんね。Ａｄｍｉｒａｌはスーツでも素敵だったわ」
「私こそごめん。提督は何を着てもカッコよかったわ」
和解するアイオワとサラ。
えっと、つまり？
「俺はいつもの服装でいいって事？」
「まあ、はい。何着ても似合いますし」
「あ、でも、たまにはお洒落してね」
「ああ、分かった」
そうか、じゃあ、今日は……。
ジャケットでも着ておくかな。

２４８話　旅人しゃちょー

「大物ユーチューバーになりたい」
　まーた変な事言いだしたぞ漣。
「今度は何事だ」
「なんとかしゃちょーとか、なんとかキンみたいな、大物ユーチューバーになりたいのです！」
「オフ会０人」
「そっちじゃない」
　そうか。
「兎に角、スーパーイケメンであるご主人様と、スーパー美少女のこの漣が力を合わせれば！再生数なんてちょちょいのちょいだぜぇ!!」
　そうかな、そんなに甘い世界じゃないと思うけど。
　ユーチューバーと言うのは、何かと隔意を持たれがちだが、俺は普通に職業の一種だと思う。
　そんな人達のトップ層が、数百万再生される動画を量産する中、ただのどこにでもいる普通のイケメンである俺が面白いことできるかってのは、微妙なところだ。
「目指せ！一千万再生!!」
　いやー、キツイっす。

「と、言う訳でご主人様。なんかやって」
　なんか、とは。
　早速カメラを向けて来る漣。
　んー。
　とりあえず六人くらいに分身して、と。
「Ｔｈｅ　ｗａｒｄｅｎ　ｔｈｒｅｗ～♪」
　楽器を演奏しながら歌ってみた。
「スゲーーー!!!けどどうやってんのそれ?!!」
「いや普通に分身して」
「普通の分身とは」

分身は分身だよ。やろうと思えばできるだろ。
「ってか何の曲？聞いたことないんだけど」
「プレスリーだ」
「えー、古いー。もっと新しいのにしなきゃ流行んないよー」
「分かった」
駄目か、プレスリー。
「鮮やかなー色ー♪」
「あっ、知ってるそれ！今人気のアイドル！トライアドプリムスでしょ！」
「正解」
「声も渋谷凛だし……、これは凄い！再生数伸びるぞー！」
「いや、それは無理だろう」
「へ？何で？」
「俺のは所詮、猿真似に過ぎない。本家大元には敵わないんだ」
俺は基本的に、誰かの劣化コピーでしかない。
「それでもネタにはなるし。とりあえずこの映像、アップしよう！」
まあ、勝手にすると良い。

「まだ足りないなー。そうだ、料理してよ！なんかこう、美味しい料理作ってみて！」
「分かった」
「あっ、そうだ！あらかじめ言っておくけど、料理スキルで一瞬で出来ましたってのは無しね！動画映えしないし！速度遅めでオナシャス！」
む、技を魅せろと。
「ではまずこのアプノトスミート」
「何の肉ゥ?!」
「アプノトス」
「だからアプノトスって何?!」
写真を見せる俺。
「恐竜では？」

「美味しいよ？」
　こんがり肉にすると最高だぞ。
「この世界にある食材で！」
　えー？美味しいのに。
「じゃあ逆に聞くけど、何が食べたい？」
「え？うーん、ユーチューブ映えする料理……、個人的にはお肉が良いかなー」
「では子羊のロティを」
「解説よろ」
「ポイヤック産の子羊のローストをポイヤック産のワインと頂く。復活祭の時期だしな」
「成る程分からん！私もう、ポプテピクッキングのあれみたいに隣でわぁ～！って言うだけの役やるから、後はご主人様に任せちゃうね」
「任せろ。あ、丁度いい時間だし、昼飯も作っていい？」
「もちろんＯＫだけど。今日の昼ご飯はおフランスな感じですかー」
「ああ」
　さて、厨房に着いたな。
　厨房組に今日のメニューを通達してと。
　あ、漣、厨房にいるなら手を洗いなよー。『石ケン』で手を洗いなサイッ!!ってな。
　……さあ、やるか。
「さて、油とバターを……」「並行してパン焼こう。発酵は済ませてある」「コンカッセ、つまり粗みじん切りだね」「スープどうすっかな」「コンソメは用意してある、と」「酒飲まない子にはブドウジュースで良いか」
　並列思考、分身、思考加速……!!
「だから分身はやめてってば……。はぁ、まあ良いや。ご主人様ー、メインディッシュが子羊のローストなんだよねー」
「うん？まあ、そうだな。メインディッシュってか肉料理は子羊のローストだな。他にも色々作るぞ。俺の腕、見とけよー見とけよー」
　まあ、自慢するほどじゃないが。精々ギリ一流って程度だ。超一流

には敵わんよ。
「……まあ、気合い入れてコース料理作ったとしても、マナーを守ってしっかり食べれる艦娘なんてそうそういないしな」
リシュリューやテスト、アークロイヤルにウォースパイト辺りなら、しっかりとコース料理を作ってもちゃんと礼儀正しく食べるだろう。
しかし、他の艦娘はどうだろうか。
日本の艦娘の皆んなは大抵、ナイフとフォークが使い慣れないようだし。
一部の艦娘……、長門や赤城なんかは、銀シャリが無いと気が済まないらしく、例えフランス料理を作ったとしても全力で米を食う。
今回のこの、子羊の背肉のロティなんて、手掴みでバクバク食べるであろうことは予想に難くない。
「でも、ご主人様はマナーとかあんまり指摘しないよね」
「食事で一番のマナーは、他人を不快にしないこともそうだが、美味しく食べることだ。あまりにも酷くない限りはノータッチかね」
「あ、そうなの」
さて、ここいらで肉をローストしてと。
サラダは完成。シーザーサラダだ。
スープもそろそろか。
「後は焼くだけ？うーん、動画映えしないなー。あ、そうだ、インタビューターイム！えっとね、料理のコツは？」
「アレンジすることだね」
きっぱり。
「え？アレンジってしちゃ駄目なんじゃないの？レシピ通りに作るものじゃ」
「いや、料理ってもんは塩の振り方一つで味が変わるんだよ。食材一つ一つの癖を把握して、食べる人のことを考えて適切なアレンジを加える、それが料理の腕だ」
レシピに書かれていないところこそが、料理人の腕の見せ所なのだ。

「ははあ、色々と考えていらっしゃるので」
「勿論さ。俺は常に君達のことを考えてるよ」
「聞きましたか皆さん！これぞイケメン！イケメンですぞー!!」
顔を赤らめながら、カメラに向かって手を振る漣。
と、いくつか話をしているうちに。
「そろそろか」
さて、ローストした肉を休ませてと。
「ソース、ソース」
パッセしてと。
「煮詰めまーす」
「うーむ、手間ですなあ。私にはとてもできない」
「そうでもないさ」
慣れればね。
「さて、ソースの味見よろしく」
厨房組に味見してもらい、合格をもらう。
「はい漣も」
「私味見なんかしても分からないんだけど……。あっ、ウマー」
「良し、と」
「こーんな美味しいもののレシピ、ユーチューブに公開して良いのかな」
「大丈夫だ、素人には真似できないし、玄人には敵わないから」
「何？謙遜ですかぁ～？私は知ってるんだよ、ご主人様が昔、一流ホテルで働いていたこと！」
「昔の話さ」
「くぅー、カッケー！昔の話さ、とか、そー言うキザな台詞言ってみたいぜー!!!」
キザな態度をとったつもりはないが、カッコよく見えてしまうのは仕方ない。だって俺カッコいいもの。
きあ、飯の時間だ、食ってきな漣。
××××××××××

「ウマー!・え、良いのこんな美味しいもの食べて?!後で怒られたりしない?!」
うう、本格フランス料理をタダで食べ放題……。他所のお店で食べたら幾らするやら。
「はっ、いけないいけない、食レポしなきゃ……。もぐっ、ウ、ウマー!!」
語彙力が低下するっ!!!
美味すぎる!!!
鳳翔さんの和食も美味しいけど、ご主人様の本格洋風も最高!!!
あー、私もメイドらしく、料理の一つでも作れるようになるかと思ったけど、これ無理だわー。
どうやってもご主人様を超えられないもの。
「もう食べ終わっちゃった。……お代わりしよ」
次は～、えーと、これだ、メニュー5番の真鯛のポワレ。あとパン。パン美味しいふんわり焼きたて。
「ご主人様!・5番とパン頂戴!!」
「パン何?・種類いくつかあるけど」
「んー、クロワッサン!!」
ご主人様のクロワッサンはサクサクでふんわり甘くて美味しい。バターをつけて一口食べれば天国行き待った無し。
「へいお待ち」
あ、その辺はフレンチじゃないのね。
「あと漣、フランス料理のことフレンチって言わないようにな。ちょっとばかし下品だ」
そうなの?
まあ、意味は分からないけど、言わない方が良いなら言わないでおこう。
さてさて、お味はー?
「んー!・ウマー!!」
美味いっ!!!
クロワッサンもさっくさく!・甘い!

「……」
あれ？コマンダン・テストさんが、微妙な目でこっちを見てる。
食べ終わった後に話しかけてみた。
「どしたのテストさん」
「サザナミ、あのね。パンはちぎって食べるのよ」
んー？
「齧るのはマナー違反だわ。一口分だけちぎって、バターをつけて食べるの」
「クロワッサンも？」
「クロワッサンもよ」
ふーん。表面サクサクだし、崩れちゃわない？
「まあ、でも……」
「がつがつ」
「お代わり!!」
「がりっ、もぐもぐ」
物理法則の限界まで盛られたご飯をかき込む長門さん。
おひつのしゃもじでご飯をかき込む赤城さん。
子羊の背肉の骨ごと食べる武蔵さん。
「戦艦や空母よりはマシね」
遠い目をするテストさん。
「でも、ご主人様も沢山食べるけど」
「あの人は、沢山食べるけど、テーブルマナーはしっかりしてるのよ。そう言うところも素敵だわ」
成る程。流石は私のご主人様。隙がない。

「いや、そーでもねーぞ？」
「あれ？」
「鎮守府では、女の子に見られるから、テーブルマナーをしっかりと守ってるだけで、基本的にはがつがつ食うよ俺は」
あ、そうなんだ。
「正直、せせこましく高い料理を食うよりも、そこらの山で獲ってきた

獲物を丸焼きにして、酒飲みながら肉を喰らう方が好きだね」
「獲物て」
「あっ、これはオフレコで」
　まあ、うん。
「なんか再生数が伸びるようなことやってよ」
「んー、パルクールでもするか」
　と、鎮守府外部を走り回って、と。
「お菓子作り」
　神業の飴細工。
「芸術」
　綺麗なギリシャ感溢れる彫刻。
「んー、いまいちパンチが弱い！」
「じゃあ俺が狐耳に……」
「バーチャルで隠さなくて良いレベルのイケメンじゃん」
　私も元から美少女だし。
「そうだ、ゲーム実況しよう！」
「太平洋の嵐……」
「駄目、クソゲーでしょそれ。デモハンやります」
　デーモンハンター。デーモンを倒して素材を剥ぎ取り武器や防具を作るゲームだ。
「アニメ実況……」
「イセスマで良い？」
「駄目」
　何故クソに突っ込んでいくのか。

「はぁー、さて、投稿！と」
　鎮守府の一日を映したムービー。これは流行る！
　おっ、早速コメントが！
『料理人なのか提督なのか』
『どうやってんだそれ』
『こんなイケメンが渋谷凛ボイスで歌って踊るのか……』

『良いもん食ってんなー』
『化け物のボスも化け物ってことか。把握』
『あたまおかしい』
『艦娘可愛すぎない？』
『漣たん萌え』
うーん？
おかしいな、反応が酷い。

……その後、結局、ツイッターなどで拡散され、動画は数百万再生された。
反応は酷かったけれど、まあ、概ね好評だった。
次は望月とＰＵＢＧの実況しよーっと。
目指せ！不労所得!!!

２４９話　カウンタードッキリ

この前のエイプリルフールは、あろうことが騙される側になった俺。
ぐぬぬ、許せん。
許せん、ので。
ドッキリを、します。
違えるな、俺はいつでもトリックスター。
掻き乱す側なんだよ！

ターゲット１：レーベ
さて、先ずはレーベだ。
レーベにドッキリするぞ。
俺は悪魔に魂を大安売りした。
レーベのような純朴な天使にも平気で酷いドッキリしちゃうもんね。
さあまず、レーベの部屋で首を吊ってと。
自殺ドッキリだ、どうだ？
はい、ドアがガチャリと音を立てて開く、と。
「……あ！提督！」
首を吊っている俺に抱きついてくる。
「僕に会いに来てくれたの？嬉しい！」
ちょ、ちょっと待ちな？
ほら、提督首吊ってるよ？
死んでるよ？
おたくの愛する提督さん、自殺してますよー？
「よいしょっと」
俺の身体を引っ張り、無理矢理ロープを千切る。
そして俺を抱えると、ベッドに寝かせた。
そして。
「えへへ、提督、提督……??僕だけの騎士様……??」

いや、ちょっと、待って？
さっきまで死んでたよ？
呼吸も心臓も止めてるんだけど？
おーい、ちょっとー？
「そうだよね、提督は僕だけの騎士様だもんね！愛するお姫様に会いに来てくれるんだよね！二人の愛は永遠だよね!!」
ガン無視でござるか。
「提督？ちゅー??」
あ、キスされた。
「えへ、キスしちゃったぁ??」
可愛いんだがね、だがね、ほら、確認して、心停止してるから。
ベッドの上に寝せられ、身体を弄られながら、全身を擦り付けられる俺。
「お姫様と騎士様は結ばれて、一緒、二人で、幸せに暮らしましたとさ……??」
もう一度キス。
「でもね、二人の物語はまだまだこれからだよ??永遠に続くラブストーリー……??一緒に歩んで行こうね??」
言い切ると、さらにもう一度キス。
「ううー、もう駄目！えっち、しよ……？」
服を脱ぎ始めるレーベ。
おい待てや。
「お姫様と騎士様は、身も心も結ばれなきゃ駄目なんだよ??僕、初めてだけど、騎士様が優しくリードしてくれるもんね??」
待て待て、脱ぐな、脱がせるな！
死んでるんだぞー!!
俺死んでるんだぞー!!!
「あは??大っきい??こんなの挿入るかな？でも、愛があれば大丈夫だよね??」
待ちなされー!!
暫し待たれよー!!!

「でも、ぼっき、だっけ？もっと大きくなるんだよね？僕、知ってるよ？今、気持ちよくしてあげるね……??」
う、お……！
「おあーーー!!?待てぇい!!レーベこら待てぇい!!」
「？、どうしたの提督？」
「どうもこうもねーよ！今死んでたじゃん俺！死んでたじゃん!!」
「？、生きてるよね？」
「そう、だけど、そうじゃねーのよ！思いっきり首吊ってたのにノーリアクションなのおかしいでしょー！おかしいでしょー!!」
「だって、提督は死なないんだよ？」
「いや、俺も死ぬときゃ死ぬよ」
「ううん、そんなことないよ！僕の騎士様が死んだりする訳ないじゃない！騎士様はお姫様とずっと一緒で、固い絆で結ばれてるんだよ！」
あ、あー？
これ、話通じてない？通じてないな？
「それより、ほら??えっち、しようよ??僕、頑張って可愛い赤ちゃんを授かるからね??」
流石ドイツ艦、脳内お花畑だ!!
「まあ、いいか」
ヤれんならヤるか。
「レーベ！駄目っ！Ａｄｍｉｒａｌは私の王子様なのー!!」
「提督は私に会いに来てくれたの！」
しかしプリンツとマックスの乱入でお流れになる。
ぐぬぬ。
ドッキリもセッ○スも失敗か。
次こそは!!
!!

ターゲット２：野分
のわきん！のわきん！のわきん！の、わ、きん！（スカイリム的なノリで）

野分だ。
さて、執務室で、十字架に自分を括り付けて、と。
適当な槍で胸を貫く。
どう？聖者は十字架に磔られましたって言ってるように見える？
それとも、人類は十進法を採用しましたって見えるか？
そーなのかー？
どうでもいいか。
さて、そろそろ野分が来る時間だ。
どうだ……？
コンコン、とノックされる。
そして入室する野分。
「野分です。お呼びでしょうか？」
さあ、どうだ！
「あの、司令？」
の、野分？
「新しい遊びでしょうか？」
野分ー?!
「取り敢えず、槍を抜きますね。痛ましいですから」
のわっちオイ！
「あっ、血が沢山……。すいません、私には司令を癒す方法がありません」
のわっちぃ!!
「それで、命令はなんでしょうか？」
心配してよぉ！
おたくの司令、槍刺さってたんだよぉ?!
「あ、あの、無視は、困ります……」
死んでることに言及しろおおおおお!!!
「わ、私、何か気に障ることでもしてしまいましたか？司令、司令？」
揺さぶられる俺。
ああ、もう。
「……はぁー、あのさぁ、折角自殺したのにノーリアクションなのは

ねーわよ？」
「え？いつものことなので」
そうかぁ？そんなに自害してるかぁ？
ランサー並の自害率だと思うんだけど。
「定期的に自害なさるので、そう言う趣味なのかと」
「んな訳あるかい。自害したら痛いんだぞう」
「ですが司令は嫌なことがあるとすぐに自害なさるので」
そこまでじゃねーよ。
そんなメンヘラ女のリストカットみたいな言い様は酷い。

ターゲット３：葛城
分かったこと。
死亡ドッキリじゃ駄目だ。
なんだか知らんが俺は天膳殿並に死んでると思われてる。
つまり、パンチが弱い。
威力が低い。
ならば、より悪趣味なドッキリに移行するだけのことよ!!!
「葛城、俺、瑞鶴とセッ○スしたんだけど」
欺瞞！
だが趣味の悪い最低のジョークだ!!
憧れのあの人と上司が懇ろな関係だったら？
ショックだろう、かなり。
さあ、どうだ？
「え？そうなの？良いなぁ」
え？
「そろそろ私も抱かれたいなー」
え？
「はっ、つまりはこれで、私も瑞鶴さんと本格的に姉妹に?!」
え？
ちょっと……、何言ってるか……、分からない、です、ね。
「く、くくく、瑞鶴の奴、良い声で鳴いてくれたぜ」

「そうなんだー。私も声出ちゃうかも？気持ちいい時に出る声を聞かれちゃうのって、なんだか恥ずかしいわね」
　えっと、えっとね？
「お、お前の憧れの人が上司と懇ろになっていたんだぞ」
「うん？貴方は私の旦那様でしょ？旦那様が私の憧れの瑞鶴さんもまとめて一緒に愛してくれるんだよね？」
　ん、あ？
　えっとね、えっとね、何かが違うぞ。何かがおかしい。どこかが壊れてる。
「いや、おかしいだろ？そこはショックを受けるべきところだろ？」
「え？艦娘は全員まとめてお嫁さんにしてくれるのよね？」
「い、いや、そんなことを言った覚えは」
「ってか、私達もう結婚してるのよね？」
「カッコカリな!!カッコカリだかんな!!!」
　違うからな！そこら辺大事だかんな!!
「私達皆んなを愛してくれるのよね？」
「まあ、愛してはいるがね」
　美人は誰だって愛している。
「じゃあ今晩は私ね！」
「い、いや、そうじゃなくって」
「天城姉と雲龍姉も呼んで一緒にする？」
　姉妹丼?!
　実に興味深い!!
　じゃ、じゃなくって!!
「うっ、嘘だよ、ヤってないから!!」
「そう？私はいつでも構わないからね？」

　ターゲット４：多摩
「何にゃ？」
　葛城は駄目だった。
　あれはない。

あれはおかしい。
あってはならない。
多摩……、多摩は、そうだな。
「ちょっと来い」
「分かったにゃ」
さて、自室のベッドに放り投げて、と。
「多摩、今からお前を、犯す!!」
最低なこと言うー。
人として許されないドッキリだが、艦娘達にはこれくらいやらねーと効かないだろうと思いまして。
報いは受ける、全てが終わった後でな。
さあ、どうだ、多摩ァ!!!
「ん、勝手にするにゃ」
んんんんんんーーーー!!!
「ほ、ほら!酷いことされちゃうんだぞ!滅茶苦茶滅茶苦茶にされちゃうんだぞ!良いのか?!」
「まあ、提督以外に襲われたら殺してるけど、提督なら別に良いにゃ」
「んんんんんーーーー!!!駄目でしょー!女の子なんだから!襲われたら悲鳴の一つでも上げるべきでしょ!!!」
駄目だー!
この子も駄目だー!!
「初めてだから優しくするにゃ。壊れ物を扱うように丁寧にするにゃ」
「するけどぉーーーー!!!仮に抱くなら優しくするけどぉーーーー!!!」
ちーがーうーだーろー!!
「後球磨型の皆んなもちゃんと抱くにゃ、可愛がるにゃ」
「あああああああ!!!そうじゃないだろ!!!そうじゃないだろうがぁ!!!」
「特に木曾はああ見えてデリケートなやつだから優しくするにゃ」
違うのー!!
「服は脱いだ方がいいかにゃ?それとも脱がせたいにゃ?はたまた着たままがいいかにゃ?」

「脱がせたい」
脱がせんの好きなのよ俺。
女の子の身体を守る服を一枚一枚優しく剥いでいくってのはサディスティックな喜びが……、違う違う!!
「じゃあヤるにゃ」
「ヤるけどぉ!!!」
「やらせませんよ提督!!」
大淀が乱入。
「あああああああ!!!」

黒井鎮守府ドッキリ計画、結論：セッ○スできなかった。

２５０話　カウンタードッキリ　セカンドライド

黒井鎮守府ドッキリ計画。
まだだ、まだ終わらんよ！
まだ終わってなーい！
と、いう訳で、ドッキリをやります。
続投です。
ええ、続投ですとも。
見てろよ艦娘、二度と生意気言えないように度肝を抜いてやるぜ。

ターゲット５：利根
利根だぁい！
取り敢えず、利根の布団に入って、と。
利根が部屋に帰ってくるのを待つ!!
……。
お、鍵が開いた。
この足音は利根だ。
よし、どうだ?!
「んー、んーんーんー、っと?む、布団が盛り上がっておるの?」
お、気付いたみたいだ。
「むむむ、何者じゃ！姿を現せぃ！」
威勢が良いねえ！
だが出ない。
「……そっちがそのつもりなら、吾輩は、こうじゃぞー!!」
布団を引っぺがす。
そこにはっ!!
「やあ、利根！」
上半身全裸の俺!!
「て、提督!!」
驚く利根。
ふふふ、その顔が見たかった！

「し、仕方ないのう??こんな昼間から伽がしたいと言うのか？だ、だが、吾輩を求めてきてくれたのは、その、なんだ、う、嬉しいぞ……??」
ん？
服を脱ぎ始める利根。
全部脱ぎ終えると、布団に入ってきた。
そして、俺の隣にころんと寝転ぶ利根。
「こう言うのはよく分からん……。任せるから、好きにしてくれぬか？」
そんなことされたらこっちはもう堪らない。
たまらなーいぜハニハニ。
利根はロリみある存在だということを加味しても、誘われたら反応しちゃう悲しいサガ。
「利根っ！」
利根に覆いかぶさる。
「ああっ??」
「愛してる、愛してるぞ、利根！」
「んっ??吾輩もじゃ、愛しておるぞ、提督??」
利根の下半身を弄る。
「んんっ―??ああ、あー??良いぞ、気持ちいいぃ??吾輩の初めて、貰ってくれぇ????」
「ああ、利根は初めてだもんな、優しくするぜ……」
と、俺がファスナーを開けたところで！
「あの、司令官さん、何をやっているんですか……？」
窓から羽黒が!!
「え、いや、これは」
「まさか、利根さんと、するつもりとかじゃないですよね」
「あっふん」
「私よりも利根さんを愛している、なんてことはないですよね」
「そ、そんなことは、ないぞ」
「じゃあ、私と、してくれますよね？」

「あ、後でな」
「何ぞ、提督、見られながらヤるのか？良いぞ??もっと気持ちよくするのじゃ??」
「利根さんは黙ってて貰えますか」
「はっ、何じゃ？提督は吾輩をご指名なのじゃぞ？邪魔するでないわ」
「……口が減らないですね」
おーっと、空気が悪い。
逃げよう。
逃げた。

ターゲット６：陸奥
いや、自ら死にに行ってるとかそんなんはなくて……。
その時その時のテンションに身を任せてるだけで……。
まあ、ほら、ね？
扱い辛い女性だって話だが、最新型が負ける訳ねーだろ！行くぞぉ!!
まずは長門型の部屋に潜入してと。
陸奥のベッドに潜り込む。
うわ、すんごい良い匂いするこれすごい。
雌の匂いだ。
……おっと、足音。
この足音は陸奥だな。
ふふ、陸奥を驚かせるぞー。
おどろけー！
「あら？誰かしら？」
布団をめくる陸奥。
「ワシじゃよ」
「まあ！」
感嘆符。
そして。
首輪、手錠での拘束。

目にも留まらぬ速さだ。
「嬉しいわ、私のものになってくれるのね？」
「ははは、俺は誰のものにもならないよ」
「良いでしょ？」
「良くないね」
「私の全ては貴方のもの、なのに、貴方は私のものになってくれないの？それはフェアじゃないわ」
フェアとかフェアじゃないとかそう言う問題じゃない。
「良いか、監禁は駄目だ」
「どうして？」
「鳥は空を飛ぶものだからな」
「風切羽を切り落とすだけよ」
はぁ、話が通じないな。

ターゲット7：古鷹
あの後は、拘束を外して逃げた。
監禁は違法だ。
してはいけない。
監禁以外にも愛を伝える方法はあるだろうと俺は思うよ。
さて、古鷹かぁー。
古鷹のびっくりした顔、見てえなぁ。
可愛いだろうなぁ。
『わっ、びっくりしました、提督！凄いですね！』
なんつってな！
褒められたい。
疲れた社会人である俺は古鷹のようなかわい子ちゃんに無条件で褒められたいのだ。
よーし。
「と言う訳で古鷹、良く見ておけよー！」
「はい！」
ポンと薔薇の花を出す。

マジックだ。
「わあ、凄いですね！」
よし、驚いたな。
「んー、古鷹は素直で良い子だなあ」
頭を撫でる。そして頬を染める古鷹。
ナデポは標準装備よォ、俺だってオリ主だ!!
「でも、何でマジックを？」
「ん？あー」
あ、そうだよ、ドッキリじゃん。
何普通に驚かせてんだ俺。
「えーと、えーと、うーん」
「？、どうかしました？」
「いや、どうやったら古鷹はびっくりするのかと思ってな」
良く良く考えたら古鷹は肝が座っている。
黒井鎮守府でも最強の一角で、切り込み隊長を務める古鷹。
驚かせるのは容易ではない。
「んー、あ、そうだ！私、提督との子供ができたら驚くと思います！」
「そりゃ俺も驚くなあ」
悪知恵を……。
悪い古鷹。
堕天使。
「ええと、それじゃあ、提督にいきなりおちんちんを見せられたらびっくりしますね」
「それ俺捕まるやつやん」
何だそれ。
誰でもびっくりするわそんなん。
「……見せてくれても良いんですよ？」
「見せないよ」
「じゃあ匂いを嗅がせてもらうだけでも……」
「じゃあってなんだじゃあって。駄目だよ」
「そ、そんなぁ」

涙目になる古鷹。
ああ、もう。
「はぁ、ちょっとだけな」
「良いんですか?!」
ちょ、待て、股間は嗅ぐな!股間は……、股間はやめろ!!

ターゲット8：酒匂
もう良いよ。
ほら、あれだよ。
ターゲットが悪かったよね、うん。
最初からちょろいターゲットにすれば余裕っしょ。
酒匂のことだ、どうせちょっと驚かせばぴゃあとかぴゅうとか言ってばたんきゅーよ。
さて、白い布でも被ってと。
「うわあああああ!!!」
「ぴゃあああああ!!!」
よーし、予想通りだ。
「はっはっは、驚いたか酒匂」
「ぴゃあ?あ、た、旅人さん?」
「旅人さんだよ」
「え、あ、も、もー!酒匂を驚かせちゃ駄目ー!」
「ごめんね、酒匂が可愛くてつい」
「か、可愛くても駄目なんです!旅人さんの意地悪!」
おや、嫌われてしまった。
「嫌われちゃったかな?」
「……旅人さん、もう意地悪しない?」
「ああ、しないしない」
適当に。
「じゃ、じゃあね、酒匂にね、お詫びの印、ちょーだい?」
お詫びの印……、やはり金一封だろうか。
いや、多分これは……。

「んっ……??」
キス待ちだ。
もぉー、しょーがないなー。
これはしょーがないなー、この子はー。
そりゃ!!!
「んっ、ちゅ、れろ……」
「!!!
?!!」
舌を思いっきり入れる。
まさか唇に、しかもディープキスをされるとは思ってもいなかったのか、酒匂の肩が大きくビクつく。
「……んっ、あっ、れろ??」
しかし、たっぷり十秒ほど硬直した後は、負けじと舌を入れ返してきた。
ほう、やるかい？
「んちゅ、ちゅう、れる……」
「んんぅ??????れる、ちゅ、ちゅっ??」
……おっと、酒匂が俺の足に股を擦り付けてきた。
思い切ってお尻を揉んでみる。
「?!……んぅ??」
……抵抗しない。
なるほどねぇ、ＯＫってことねぇ！
よし抱こう。
「駄目ーーー!!!」
くっ、誰だ!!
「酒匂ばっかりずるいよー！阿賀野もするのー!!!」
また邪魔が入った……。

黒井鎮守府ドッキリ計画、結論：やっぱり、セッ○スできませんでした（半ギレ）。

２５１話　金の使い所

ある日。
昼下がり。
休憩室にてだらける俺、と加古。
「加古ー」
「んー？」
「俺、思ったんだけどさー」
「んー」
「君ら、何に金使ってんの？」
そう、そうなのだ。
俺こと旅人提督は、ブラック鎮守府絶対潰すマン、ホワイト企業の申し子である。
そんな俺は、艦娘達にちゃんと給料を渡しているのだ。
しかし、艦娘達の給料の使い道は謎。
もしも、ＦＸなどに手を出して、負債を抱えるようなことになったら、目も当てられない。
だから俺は、今、思った。
そうだ、調査しよう、と。
「んー、バイク」
加古の給料の使い道は、バイクだそうだ。
「バイクの維持費とか……、ライダースーツとかヘルメットとか」
ほーん、成る程。
「後はカスタマイズにも結構かけてるねー」
成る程成る程。
「残りは貯金」
「良い子だ」
「因みに、古鷹はガーデニングが趣味だから、植物の種の代金分くらいしか使ってないらしいよ」
「ふーん。服とかは？」
「あたしも古鷹も適当なの買ってるよ。ってか、頻繁に提督が買った

り作ったりしてくれるじゃん」
　しょうがないだろ、可愛い子には良い服を着せたくなるんだよ。
「酒も安いのなら鳳翔さんとこで飲み放題だし。つっても、安いのって言っても何万円もする酒も置いてあるしねぇ」
　そうだね、ビールくらいなら飲み放題だね。
「食べ物だって嗜好品含めて幾らでも食べられるし」
　そうだね、食堂行けば大抵は何かしら置いてあるね。
「給料の使い道がない」
「そうかい。まあ、借金をこさえたりしてないなら、良いさ。さて、俺はこれから、艦娘達の給料の使い道を調査してくる」
「あーい、行ってらっしゃいー」
「行ってくる、じゃ」

　ターゲット1：鳳翔
「鳳翔」
「はい？」
「給料、何に使ってる？」
「ええと、殆ど貯金してますけど」
　偉い。
「あ、でも、そうですね、新しい調理器具とかあると、つい買っちゃうこともあります」
「そういうのは経費で落としてくれて構わんよ」
「いえ、これも趣味で買っているものなので」
　そうか。

　ターゲット2：千歳
「旅人さん、いつも言ってるんですが」
「何？」
「こんな額、どう使えば良いのか分かりませんよ」
　大した額でもねえだろ。
「俺なら一晩で溶かせる額だよ？」

酒と風俗とギャンブルで。
「えぇ……」
「まあ、借金とかこさえてないなら、何したって構わないよ。あ、でも、クスリとかはやめような」
「やりませんよ、そんなこと」

ターゲット３：熊野
「熊野、熊野は、黒井鎮守府から出てる給料をどう使っているんだ？」
「ええと、エステと、服と、お酒をちょっとくらいですわ」
「そうか、それだけじゃ使い切れないんじゃないか？」
「そもそも、もらったお給料を使い切らなきゃならないなんて決まりはありませんし……」
そうか。
俺は手元に金があると何かと使っちまうからなー。
「いや、偉いよ。俺なんて生まれてこの方貯金なんてしたことない」
「今までどうやって生活してきたんですの」
「その日暮らしとか、借金とか、ギャンブルで増やしたりとか」
「まとまったお金が必要な時とかは……」
「ラスベガスってところにカジノって言う魔法の施設があってな。そこでお金を増やせるんだよ」
「はぁ……」
よく分かっていない様子の熊野。
「他にも色んなところにあるからな、カジノは。パチンコはレートが低いからやらない」
「？」
ギャンブルの話とかは分からないらしい。流石はお嬢様だな、熊野。

ターゲット４：金剛
「……と言う訳なんだが、金剛はどんな風に給料を使ってる？」
「ンー、お洋服と、お化粧と、紅茶ぐらいデース」

へえ、そんなもんか。
「でも、殆ど余りマスネー」
「宝石とかブランドものとかは？」
「持ってマース」
うんうん、良いぞ。女の子は着飾るのが一番だ。
「ってか、提督が普段から何かとプレゼントしてくれマース。これなんて四十万円もしたのに……」
ダイヤの指輪を見せる金剛。
「金剛の為なら安いもんよー、幾らでも買ってあげちゃう！」
金剛はその名の通りダイヤが似合うんだ。明るくエレガントな美女だもんよ。
「甘やかし過ぎは、ノー！ですからネー！」
甘やかしてるつもりはないんだが。

ターゲット５：プリンツ・オイゲン
「もごもごもごご？」
「……あの、提督？話すときは、私の胸に顔を埋めるのをやめたらどうかな？」
はっ?!
「すまない」
ついつい、プリンツの胸に顔を埋めてしまっていた。
「それで、給料の使い道だったっけ？」
「ああ、そうだ」
「それなんだけど、私は殆ど使ってないかな。一番大きな買い物と言ったら……、最近車を買ったことくらいかな？」
ほー。
「因みにメーカーはフォルクスワーゲン！ドイツの歴史あるメーカーよ！」
あー、車庫にあった新車のポロ、君のか。
「けど、うちの車庫は何なのかしら？数千万クラスの高級車ばかり。芸能人じゃないんだから……」

殆ど俺のだ。しゃーない、高級車はカッコいい。カッコいいからつい買っちゃう。
Ｓクラスのメルセデスとかかなり高かったが、買った。欲しかったんだもん。

ターゲット６：漣
「漣、給料の使い道は？」
「んー、ＰＣとか？」
何に使ってる？と言う問いに対して答える漣。
「あとはほら、フィギュアとか漫画とか」
ふむふむ。
「タペストリーとかクリアファイルとか！」
所謂、オタクグッズだな。
「ってか給料多過ぎィ！ＧＴＸ１０８０Ｔｉ買ったからね私もう！ＰＵＢＧが捗るぅ!!」
そいつは良かった。

ターゲット７：海風
「海風、給料の使い道は？」
「そうねえ、稀覯本である魔道書を買い集めたり、骨董品であるアーティファクトを買い集めたりしてるわ」
うーん冒涜的。
「服や小物は？」
「最低限のものを個人的に」
「駄目だよ、海風は可愛いんだから！もっとお洒落しなさい！」
「？、はい？」
「はいこれ、今年のトレンドの服。あとアクセサリー」
「あらあら、ありがとうございます？」

ターゲット８：龍驤
「給料の使い道ぃ？」

「そうだ」
「そんなもん、酒とツマミに決まっとるやん！」
そうか。
「最近やっと、この、あまぞん、ちゅーのが分かってきたで！」
「偉いぞ龍驤」
「テングってところのビーフジャーキーが美味いんよ」
あっ、定期購買してる。

うん、うんうん。
特に問題ねえな。
流石はうちの艦娘達だ。
皆んなとっても良い子だよ。
霧島とかは株とかやってるみたいだけど、大きな損害は出さないようにちゃんと調節してやってるみたいだしね。
だが、殆どの艦娘は、金の使い道がないって言ってたなあ。
そうだ、今度鎮守府内に購買部でも設置するか。
艦娘達の消費を増やしてやろう。
艦娘達は欲望が足りない。
人間、欲に塗れている程度で丁度いいのだ。
その欲望、解放しろ！
なんてな。

「じゃあ逆に、司令官はどんな風にお給料を使っているんですか？青葉に取材させて下さい」
「良いだろう」
見ておけ、これが金を使うと言うことだ!!
「先ずは賽の河原に行きます」
「賽の河原？あの、死んだ子供が行く？」
いや、本物じゃねー方。
電車に乗って数十分後、到着したのは神室町。

「あっ、ここのトイレ、入り口になってる！」
「ここが賽の河原だ」
地下にある、裏カジノ、地下闘技場、風俗。
裏の大人のプレイスポットだ。
「うわー、こう言うの、本当にあるんですね。法律的に大丈夫なんですか？」
「はっはっは」
「え？駄目ですよね」
「はっはっは」
「あの、ちょっと」
「はっはっは」
さあ、行こうか。
まず、給料を全額チップに変えてと。
ルーレットか、今日はルーレットの気分だ。
「赤の３に全額ベットだ」
騒つく周りを他所に、俺は百万相当の金を一点に賭ける。賭ケグルイ。
「ええっ！大丈夫なんですか?!」
「ああ、大丈夫だ、まあ見てな」
脳内の瞳をフル稼働、そもそもの動体視力、目星＜８０＞、その他諸々を総動員して……。
「あ、赤の３です」
ジャックポット、ってな。
３６倍だから、三、四千万にはなったかな？
「さて、この調子で億単位まで増やすぞー」
「ええ……」
一時間後、キャッシュケース一杯の金が数個。
「あんまり勝ち過ぎると怖いお兄さんに怒られるからなー、撤収だ撤収」
「は、はい」

さーて、この増やした金を使って高級ソープ……、いや、青葉が居たんだったな、そりゃ無理だ。
「さて、新しい車かバイク買うか、艦娘達にプレゼントでも送るか……」
「ちょ、ちょっと待って下さい！折角そんなに稼いだのに、湯水のように使っちゃって良いんですか?!」
んー？
「良いの良いの。金は天下の回り物ってね。あ、そうだ、今日は麻雀の気分かなー」

「御無礼」
「ぐわあああああ!!!」
「あンた、背中が煤けてるぜ」
「ぐわあああああ!!!」
「倍プッシュだ……！」
「ぐわあああああ!!!」

結果：消し飛んだ
「は、はは、い、一億円が、数時間で、パァ……」
「いやー、つっええな、あいつら!!負けた負けた」
「負けた負けたじゃないですよ!!!一億円が消し飛んだんですよ?!!」
「それが？あぶく銭が消えるのは道理だろ」
「は？」
俺が稼いだ金なんてあぶく銭みたいなもんだ。基本的に、手元にある金は使ってしまう。
「んー、次はどうすっかな、まだ手元に三、四百万残ってるし……」
「とっといて下さい！貯金して下さい！」
「あ、そうだ、馬主になってみたいんだよね俺。馬でも買うか。確か数千万くらいだっけかなー」
「貯金して下さぁぁぁぁい!!!」
「じゃあカメラでも買うかな。青葉にも買ってあげちゃう」

「そんなことしなくて良いですから！司令官は旅人なのに、お金の使い方はアレですよね!!」
アレとは何だアレとは。
「兎に角！貯金して下さい!!」
「わ、分かったよ」
「はぁ……、『司令官のお金の使い方は豪快！お嫁さんである青葉は苦労します！』と」
そうかな。
一応は、鎮守府の運営資金には手出ししてないし、節度を持って使っているつもりだ。
「良い加減な浪費は控えて下さいね？子供にも悪影響ですから」
「俺に子供はいないし、作る予定もない」
「なーに言ってるんですか、青葉と子作りするでしょう！」
しねーよ。
「兎に角！ちゃんと貯金すること！良いですね!!」
「はーい」
まあ、幾ら貯金すると明言はしてないから、一ヶ月に五百円くらい貯金すれば良いだろ。

去っていく青葉を尻目に、俺は残った金でフランスに高級ワインを買いに行った。
いつものことである。

２５２話　神罰下れ

「Ａｄｍｉｒａｌ聞いて！キョートよ！皆んなでキョートに行ってきたの！」
　そうかいそうかい、良かったなアイオワ。
「日本は良いところね！ニューヨークだったら、ゴミだらけの道に物乞いとホームレスがぞろぞろといるんだけど、キョートは快適だったわ！」
「キョート……、良いところだったわ。今ではパリも移民受け入れのせいで黒人がぞろぞろといて、ロマがそこらじゅうで悪さしてるんだけど、日本ではスリとかいないものね」
　リシュリューが続く。
「そうね、車椅子の私にも優しい人が多いわ」
　ウォースパイトが続く。
「治安良いですよね」
　イタリアが続く。
「ベルリンなんて落書きだらけだもの。あと、トイレがタダなのは凄いと思うわ」
　ビスマルクが続く。
「モスクワなんてそこらに酔っ払いの浮浪者がいるぞ」
　ガングートが続く。
「でも、ナンパとか」
　ナンパされるでしょ君らは。可愛いし。
「んー、東京ではよくナンパされるわ。でも、Ｅｎｇｌｉｓｈで返すとガイジンガイジンって言われて帰らせられるから楽よ」
「うざったかったらノシちゃえば良いしね」
「ねー」
　うーん、武闘派。
「え、てか何？この面子で京都に？」
「行ったわ！」
　ほーん、海外戦艦組で。

「マイコサンに会ったわよ！日本語お上手ですねって言われたわ！……日本人は皆んな言うわよね、日本語お上手ですねって」
言うなぁ。
「帯引っ張るやつちょっとやりたかったんだけど、駄目って言われたわ……。アクダイカーンになりたかったのに」
何やってんだビスマルク。
んー、てか、この面子で？
大丈夫なのか？
「その、君らは仲良いの？」
「？、良いわよ？」
「過去の遺恨とかは？」
「別に？ビスマルクは未だにヒトラーが正しかったって言うし、リシュリューが物騒な国歌を歌うけど、でも気にしないわ。思想は人それぞれ自由だもの」
あら？大らか。
「大体、今やお互い命を預け合う仲間なのよ？過去の遺恨なんて下らないもので足の引っ張り合いをする程馬鹿じゃないわ」
偉いなー。
全ての国がこんな感じで大らかにやってくれると助かるんだけどなー！
これくらい世界中の人々が仲良くなってくれれば俺も世界征服しなくて済むんだけどなー！
なー！
「それより聞いてよＡｄｍｉｒａｌ！ビスマルクったらね、キヨミズデラから飛び降りようとしたのよ！」
何やってんだビスマルクは。
「えー？あれって飛び降りるものなんじゃないの？」
「だから違うってば！」
「トレヴィの泉的なものでしょ？」
「一緒にしないで！」
イタリアが反論する。

「まあ、昔は願掛けにそんなことをやったこともあったらしいが」
「でも提督は飛び降りたことあるわよね？」
「何で知って、いや、何でもない」
　酔った勢いで昔やった。
「ほらね？」
「もー！Ａｄｍｉｒａｌはー!!」
　ごめんて。
「なあ、聞きたいんだが」
「何だいガングート」
「何故、ギンカクジは銀色じゃないんだ？」
　それは……。
「諸説あるけど、銀閣寺は金閣寺を参考に作られたから、かな」
「金の次だから銀なのか」
「多分ね。詳しくは分かっていないよ」
「ふーん、やっぱりＡｄｍｉｒａｌは詳しいわね。そうだ、今度の旅行にはＡｄｍｉｒａｌにもついてきてもらいましょうか」
　とウォースパイト。
「そうね、ガイドを雇うより面白いわ」
「ん、良いよ」
　美女に囲まれて旅行か。
　役得役得、と。
「じゃあ今度ね」
「おう」
　気がついたら予定が埋まっているここ最近。スケジュールを気にしなくてはならない旅人とは一体。
「後はねー、あそこが凄かったわ！フシミイナリタイシャ！」
　あー、あそこか。外国人ウケが良いよな。
「オイナリサマが居たわよ！」
「へえ、会ったのか？」
「会った……？いえ、石像だったけど？」
　ん？

「え？」
「お稲荷様だろ？喋るだろ？」
「え？何それは？」
　あれ？
　俺なんかおかしいこと言ってる？
「あれ？もしかしてビスマルクって、神様とか見えない人？」
「えっ、えっ、いるの?!本当にいるの?!」
「イエス様がブッタ様と立川で休暇をエンジョイしてるのもご存知でない？」
「そうなの?!本当?!ねえそれ本当?!」
　あら？ご存知でない？
「はは、ははは、イエス様に会ったのは流石に冗談だろう？冗談だと言ってくれ！」
　狼狽えるなガングートよ。
「マジだけど」
　頭を抱え始める海外艦達。
　何だ、何がおかしい？
「因みにイエス様はペドロとアンデレとネトゲやってるよ」
「嘘だァー!!流石に嘘だァー!!」
「ブログもやってる」
「信じんぞー!!!」
　マジなんだけどなぁ。
「神って案外フランクよ？もう今は幻想入りしたけど、八坂様とか守矢様とか」
　風祝に手を出した時は殺されそうになったが。
「こっちの世界じゃないが、エヘカトル様とかジュア様とかも結構良いよ」
「き、貴様の言うことが仮に真実だとして、貴様は何をした！」
「イエス様の茨の冠引っ張った」
「「「馬鹿ーーー!!!」」」
「あれ防犯ブザーなんだぜ、鳴らすと五秒でウリエルが飛んでくる」

「何やってんだ貴様はーーー!!」
おお、どうしたガングート。
「おお、神よ……。我が主人の非礼を詫びます！」
どうしたイタリア。
「主よ、申し訳ありません!!」
どうしたアイオワ。
「あー、そうか、ちゃんと神のこと信じてるのか」
碌でも無いけどなあいつら。
旅の途中死にかけて神に祈ったり呪ったりしたけどスルーされたし。
「良いですか提督！貴方にやれと言われれば、このイタリア、神様だって殺してみせます！ですが！ですがぁ！」
神を敬えってか。
しかと胸に響いたぜ。
「かしこまっ！」
「本当に分かっているのか、全く……」
ガングートが呆れたように吐き捨てる。
「ねえＡｄｍｉｒａｌ、Ａｄｍｉｒａｌは神様が怖くないの？罰当たりなことをするとＨｅｌｌに落とされちゃうわよ！」
んー、地獄か。
「焦熱地獄までなら落とされたことあるし、幻想郷の旧地獄にはよく行くし」
「……え？」
「いや、焦熱地獄はキツイぜ、気温が洒落にならんし、煮えた鉛の大釜で煮詰められるのは流石に辛い」
「じゃあ何でここにいるのよ！」
「獄卒ぶちのめしたり、スニーキングスキルフル活用して抜け出したりしたんだよ。最後の最後まで鬼灯って鬼が追っかけてきてな、超怖かった」
「なんてことを……」
「幻想郷の地獄では死神や閻魔が美人だったから口説いた」

「どうやら、Ａｄｍｉｒａｌの辞書には罰当たりという言葉が存在しないみたいね」
　そうかね。
「後面白いのはあれだ、最後の審判ってあるだろ？」
「ええ、エジプトの、死者の心臓の重さと羽根の重さを秤にかけるあれね」
「俺の心臓は羽根と釣り合ったんだよ」
「ええー……」
　ホルスのあの微妙な面は今でも忘れられない。
「本当なの？」
「本当さ、幻想郷の旧地獄は良いところだ。今でも鬼と酒盛りしに行くよ」
「鬼……、日本のＭｏｎｓｔｅｒね」
　うん？
「妖怪に会いたいのか？幻想郷行くか？」
　化け狐に化け狸、猫又、覚り、天狗に吸血鬼と、色々な妖怪がいるからな。
「え、えーと、いや、ちょっと、それは遠慮しておくわ。怖いとかじゃないのよ？決して！」
　と、ビスマルク。
「妖怪も最近は大変なんだぞー。俺が知ってる鎌鼬には、住んでいた森が開発されて、住む場所を追われて、人を恨むようになったケースとか」
「希少動物じゃないんだから……」
「人の子を引き取った覚り妖怪とか」
「本当なの？」
　さっきから本当？って聞いてくるけどマジだよ。インディアン嘘つかない。
「Ａｄｍｉｒａｌの旅は異常だわ。世界中どこにでも行ったことがあるんだから」
「イギリスには超強え吸血鬼がいるんだよ。まあ、あのワラキア公そ

の人なんだけど」
「ｊｏｋｅなのか本当なのか分からないけど、仮に真実ならとんでもないことになるのよね……」
「白面の者って言う九尾狐が強くてさ、多くの妖怪が命を賭けて戦ったんだ」
「でも、嘘か本当か見分ける手段はないし……」
「ルシファーとフットサルやった」
「提督を疑いたくないと言う気持ちはありますが……」
　俺はさっきから本当のことしか喋ってないが。
「兎に角、今度幻想郷にでも行こうか。知り合いの妖怪や神に合わせてあげるよ」
「ええ、分かったわ……」
　あややとか萃香でも捕まえれば良いか。レミリアは……、見世物にするなって怒りそうだな。
　兎に角、信じられないと言うなら連れて行ってやろう。
　百聞は一見にしかずだ。

２５３話　チスイスイってキャラどこかで……、あっ、ボーボボか

「なーんで俺がそんなことやらなきゃならないんですかねぇ？」
「お願いします、提督！」
　美しい髪を床に垂らして土下座する鹿島を見下ろしつつ、お願いを突っぱねる俺。
　美女のお願いだ、極力聞いてあげたいところだが。
「いつになったらＤＶしてくれるんですか?!」
　聞いてあげられないお願いも、あるのだ。

「待ってください、よく考えてみてくださいよ、提督」
「考えるまでもねえよ」
　俺は女の子に暴力を振るったりは極力しない。
　ブスは普通に殺すが、美女には優しくするのだ。
　当たり前だよなぁ？
「私達艦娘は、提督のモノなんです。どんなに酷使しても、無理矢理に犯しても、誰も咎めることはない、そんな『モノ』なんですよ？」
「俺は君達をかけがえのない家族のように思っている。そんな酷いことはしないよ」
「何故ですか?!男性なら誰もが憧れる、鬼畜陵辱プレイがやり放題なんですよ！」
　男性をなんだと思ってるんだ鹿島は。
「ちゃんと貯金もありますから、無計画孕ませ中出しもオッケーなんですよ?!」
「鹿島」
「あっ、私ったら、つい品のないことを……。ごめんなさい」
　鹿島は本当に、俺にどうなって欲しいんだ？
「と、兎に角、乱暴して欲しいんです！」
「乱暴ったってよぉ」

うーん。
「えい」
「きゃっ」
部屋のベッドに優しく押し倒してみる。
「鹿島……」
「あん、提督??」
頬を撫でる。
「……はっ?!ち、違います！そうじゃないんです！」
違うのか？
「例えば、そう、服を破って無理矢理に、とか！」
服を、破る？
鹿島の服に手をかける。
「ん？これ、ビーラディエンスの新作じゃん。可愛いよ、似合ってる」
「あ、分かります？そうなんですよこれ、気に入ってるんです」
「鹿島は白が似合うなぁ、綺麗だよ」
「えへへ、ありがとうございます！」
うーん！可愛い！
１０点満点中１００点の可愛さ。
「鹿島は大人っぽくて可愛い系だから、今年流行のピンコッタなんて良いんじゃないか？ちょっとシックなところとか似合うと思うぞ。なんなら、これから一緒にショッピングしようか？」
「良いですね！丁度靴なんか欲しいなーって思ってたんですよ！」
「ＯＫ、何でも買ってやるさ」
「そんな、悪いですよ！お給料沢山貰ってますし！」
「馬鹿言うなって、最近の俺が幾ら稼いでるか知ってんの？」
うちの年商うん千億だからな。
合法非合法問わず、凡ゆる貿易業に関係しているうちの稼ぎ。そりゃあ、一部上場企業並みですわ。
「でも、お給料、月に????万円も貰ってるのに……」
「もっと渡した方が良い??かな？」
あんまり渡し過ぎて身持ちを崩しても良くないから、ある程度の金

額を渡すようにしてるんだけども。
「いえいえいえいえ!!わ、私達は一兵士なんですよ?!佐官どころか将軍並みにお給料渡されちゃって困ってるんですからね?!」
「でも、君達は軍隊の将官なんかよりずっと希少だし、役に立っているだろ。スポーツ選手より活躍してるんだから、年俸何億とか渡した方が良いのかなってずっと悩んでるよ」
「やめてください!そんなに沢山貰っても、使い道が分かりません!言っておきますけど、艦娘の皆んな殆どが、お給料を持て余してますからね?!」
そうなのか?
俺には金を持て余すと言う感覚が分からん。基本的にあると使っちゃうから……。
「貯金だってもう家が一括で買えるくらいあるんですから!」
そんな程度、あぶく銭だろう。俺なら酒と風俗とギャンブルで一晩で溶かせるぞ。自慢じゃないが。
「大体、衣食住が保証されているのに、その上で基本給??????万円、出撃手当に夜間手当まで諸々全部付くなんておかしいですからね?!」
「いやー、妥当だろ」
「今では音成の艦娘にまでお給料出してるんですから!」
「出すでしょそりゃ」
俺は何にもおかしなことはやってないぞ。
君達はそれだけ働いてる。
確かに、実働時間は短いかもしれないが、それはひとえに、君達が有能だからだ。
「その上で、こうして一緒にショッピングしようって話になったら、買い物代から食事代まで全部出すんですから!」
「出すよそりゃ」
可愛い女の子と一緒に出かけた時は、経費という経費は俺が負担するでしょそりゃ。ブスには一銭も出さないけど。
「ーーーッ!!提督は私達に甘過ぎですっ!もっと鬼畜になってください!」

鬼畜になってくださいと来たか。
生まれて初めて言われたかもしれん言葉だな。
長い人生、全てが既知であるとか黄金の獣さんみたいなことを言うつもりはないが、大抵のことは体験して来たこの身。
しかし鬼畜になってくれと懇願されたのは初めてだ。
鬼畜、鬼畜かぁ。
すういーっと。
「あっ??あっ??あっ??」
鹿島の内股をなぞる。
ふーっと。
「あんっ??」
鹿島の耳に息を吹きかける。
びくびくと痙攣する鹿島。
「?、さ、最後までやってくだしゃい……??」
「駄目ー」
懇願する鹿島を切り捨てる。
「な、何でぇ?」
「鬼畜になって欲しいんでしょ?だから、鬼畜らしく、お預けにしようかなーと」
「それは鬼畜じゃなくて単なる意地悪ですよぉ!」
え?そう?
違いが分からん。
「良いから、もっと激しくしてください??」
「まあ、了解だ」
それじゃ、触ってあげようか。
「あっ??イクッ??」

「はぁはぁ……、良かったです、提督??」
鹿島に　セクハラを　しました。
お互いに楽しめたからｗｉｎ―ｗｉｎじゃん?
「それじゃあショッピングに行こうか」

「はい！……その前に下着替えて来ますね」
と、部屋に戻った鹿島がまた戻ってきて。
「はい、着替えてきました！行きましょう提督！」
「おうよ」
よーし、誤魔化せたな。
「……って、違いますー！提督ー！誤魔化さないでくださいー！」
ちっ。
「何がだい？」
「鬼畜になってくれるって話です!!」
なるとは一言も言ってないよなぁ？
「そんな話した？良いからショッピング行かない？」
「ショッピングには行きます！けど……」
その前に鬼畜になれってか。
「なあ、良く考えてみろよ鹿島。優しい俺の方が好きだろ？」
「そ、それは、優しい提督はもちろん大好きですけど！」
なら、それで良いじゃん。
「無理矢理されるのが良いんですよ！お願いします！一回だけ！お願いします!!」
しょーがねーなー。
まあ、ＳＭプレイとか言葉責めとか、そう言うプレイの範疇だと思えば。
「じゃあ、一回だけな」
「はい！」
「何しようか……」
「そう言えば、提督は血を吸うことができるんですよね？私は提督の血を口にしたことがありますけど、提督は私の血の味を知らないんですよね……」
「そうだね」
「じゃあ、私の血を吸って貰えませんか？」
「……まあ、良いよ」
さて、フィート：あなたは血を吸うことができる、と。

「がぶり」
「あんっ??」
少し、血を吸う。
吸血の牙だ。
「っぷは、これで満足？」
「は、はい……??凄かったです……??」
頬を赤らめた鹿島は、満足そうに崩れ落ちた。

「で？この行列は何？」
「献血です」
鹿島とショッピングを楽しんだ次の日。
俺の部屋の前に行列ができていた。
「何でも、ゴネれば提督に血を吸ってもらえるとのことで」
目の前の大淀が言う。
「俺のスタミナ消費とかは？」
「頑張ってください」
えっ、酷くない？
「では、提督、どうぞ??」
ちっ、ったく、吸えば良いんだろ、吸えば!!

２５４話　旅人ホスト　前編

いつぞやの艦娘キャバクラは楽しかった。
やっぱり俺はどうしようもねえくらいに、夜の街って奴が好きなんだな。
……。
そうだな、艦娘達も、夜の街って奴を体験して良いんじゃねえのか？
俺が久々に、夜の男になるのも悪くねえんじゃねえか？
今日の俺は最高にギラギラ、夜の王だ。
「鳳翔！居酒屋鳳翔を借りるぜ！」
「え？はい」
改装、そして！
こんなんなりましたー！
白を基調とした上品なホストクラブ風!!
「て、提督？これは、つまり？」

「黒井鎮守府ホストクラブ編、始まります！」

白髪をいつも以上に綺麗にセットし、ブランド物の白スーツにこれまたお高い時計に小物。
うーん、ホストだ。どっからどう見てもホストだ。
ホストやってた期間は短かったけど、ナンバーワンになったこともある。
俺は見た目だけならパーフェクトイケメンだし。
小さな気遣いだってできる。目星＜８０＞で。
目星＜８０＞、言いくるめ＜８０＞、説得＜８０＞で天下無双の落としっぷりを見せたっけかな。
ホストの心得はギラギラしたおっさんと夜の王目指してる人に習った。
夜の商売はかなり性に合っていて、結構稼いだ記憶がある。

さて……。
「旅人さん、じゃなかった、マオさん！指名です！」
またもやボーイをやらされている守子ちゃんの声を受けて、俺は立ち上がった……。

「ご指名ありがとうございます、マオでーす！」
「は、はい！大鳳です！」
ンッンー、たぁいほー、大鳳かぁ。
テンアゲでゴリ押しっすわ。
「ハロー、大鳳ちゃん！取り敢えず座ってよー！」
「は、はい！」
んー、緊張してるな。
席に案内して大鳳を座らせる。
なお、大鳳の動きは壊れたブリキの玩具のよう。
「あ、キンチョーしちゃってる？ＯＫ　ＯＫ！ウチの店では女の子は皆んなお姫様だから！リラックスして自然体でいーよ！」
「分かりました……！」
「まあ、でも……、大鳳ちゃんみたいなカワイイ娘は俺だけのお姫様にしたいなー？」
「そ、そんな！私なんかが！」
「駄目駄目ー、大鳳ちゃん、私なんかー、なんて言っちゃ駄目だよー？大鳳ちゃんは良い子なんだから、もっと自信を持たなくちゃ！」
「そ、そうですか？」
「そうそう！」
事実、大鳳は可愛い。
「ちょっと喋ったら喉乾いちゃったね、何か頼んでも良い？」
「あ、はい！」
「はい、メニュー」
「ええと、ええと、どれを頼めば良いんでしょうか？」
「大鳳ちゃんが好きなやつでいいよー」
「特に好みは……」

「じゃあこれなんかオススメかなー？」
「で、では、それを」
「ＯＫ、注文入りまーす！」
カフェ・ド・パリを注文。
これなぁ、ホストクラブだと原価の１０倍とかザラだかんねー。怖いよねー。
一応俺は破産させるまで注文させたりはしないけど、世の中のホスト狂いのお姉様方はどうしてるんだかね。
「それじゃ、大鳳ちゃん、乾杯！」
「はい！乾杯です！」
うむ、酒が美味い。
「……美味しいです」
「そっか、良かった。んー、大鳳ちゃんはお酒飲んでる姿も様になるなー」
「も、もう、お上手なんですから！」
いつも言っているが、褒めるのは人間関係の基本だ。それはホストモードでも変わらない。
「……なんだか提督、フランクですね」
「もー、違うでしょ？今はマオって呼んで？」
「そっ、そんな！私なんかが提督のお名前を……！」
「俺、大鳳ちゃんの可愛い声で名前を呼んで欲しいなー？」
「ふえっ?!わ、分かりました、では、マ、マオさんと！」
「呼び捨てでいーよー？」
「そそそそ、そんなこと！恐れ多いです!!」
「もー、大鳳ちゃんは俺のお姫様でしょ？お姫様は自分の騎士（ナイト）を呼び捨てにする権利があるんだよ？」
「う、うう……、マ、マ、マオっ！」
顔を真っ赤にし、手を胸元で握りしめて、目を瞑って呟く大鳳。
俺は笑顔でこう返す。
「なーに、大鳳ちゃん！」
「ふわぁぁぁ??」

幸せの絶頂、と言った様子で蕩ける大鳳。
「えと、それで、俺がなんかフランクな態度だって？気のせいじゃない？いつもこんなだよー」
嘘だ。
ホストモードだからテンション高めだ。
「そ、そうですか？」
「そだよー」
さて。
「それで、大鳳ちゃんは何で俺を指名してくれたのかな？」
「それは、マ、マオが、好きだから……」
「わー、ホント？嬉しいな！俺も大鳳ちゃんのこと大好きだよ！愛してる！」
「そ、そんな、えへへ??」
と茶番を入れつつ。
一般的な会話に移行する。
……一般的な会話っつっても、大鳳はファッションやゴシップに興味がない模様。
攻め所はどこだろうか。
「そ、そう言えばですね！私この前、サーカスを見に行ったんですよ！」
「へえ」
「何でも、世界を救ったサーカスとか言う……」
あ、知ってる。
「それって、仲町サーカスでしょ？」
「知ってるんですか？」
「知ってるも何も、昔そこでお世話になってたんだよー！」
「ええー！」
これはマジ。
「じゃあ、世界を救ったって……」
「ホントもホント、大マジだよ！」
「どんなことをしたんですか？」

「まあ、俺はちょっと戦ったくらいでさ、あんまり凄いことはしてないんだけどね」
ギイさんもジョージも皆んな死んだ。
ヴィルマさんと阿紫花の野郎は何か死ななかったけど。代わりに俺の胴体に風穴が空いた。
「それでも凄いですよ！」
「そうかな？あっ、そうだ、ダーツやらない？大道芸で鍛えた投擲術を見せてあげるよ！」
「はい！」
ダーツを見せる。
「凄い！百発百中です！」
「大鳳ちゃんもやってごらん」
「はい……、あ、あら？全然当たらない」
「コツ、教えてあげるね？」
手を優しく握ってと。
「あっ、手を……??」
大胆なボディタッチはホストの特権ってね！

耳まで真っ赤になった大鳳を帰し、次の指名。
「えへ、来ちゃった」
山風？
ちょーっとばかし、夜遊びするには早いんじゃ……。
まあ、良いか。
うちの店では女の子は皆んなお姫様。
それ相応の対応をしなきゃなぁ?!!
「指名ありがとう、俺のお姫様！」
「えへ、えへへへへ」
「席に案内するねー」
「うん」
良いのだろうか、山風を席に座らせる。
「ねえ、提督……。名前で呼んでも良いの？」

「　ＯＫだよー」
「えへへ、じゃあね、マ、マオ？」
「なあにー？」
「えへ、呼んでみただけー」
「んもー、カワイイなー、山風ちゃんはー！」
　実際可愛い。
　いやあ、艦娘は口説きやすくって良い。
　火傷やリストカット痕のような所謂地雷もないし、顔も良いから容姿を褒めやすい。
　だが逆に、一般の女性らしい話題には疎いという一面もある。
　女性らしい話題についてこれるのはリシュリュー、アイオワ、サラ、金剛、陸奥、足柄……と、まあ、数える程だ。全体の半分にも満たない。
　そして、白露型はどうか。
　白露型が興味を持つ話題といえば、宇宙、神秘、魔術とオカルト関連。それと医療と狩りくらいか。
「……？、マオ、ちょっと、若い？」
　お、バレたか。
　祝福された鈍足のポーションで若返っておいたのだ。
　ホストといえば若者だろう。いつもの二十代後半ボディではちと荷が重い。
「そうだよー、ちょっと若返ってみたよ！どう？山風ちゃんは今の俺、好き？」
「マ、マオ、はね、どんな姿でもカッコいい、よ？」
　可
　愛
　い
　。
　流石俺の天使、言うことが違うぜ。
「ホント？アリガトねっ！」
「マオ……」

「なあに、山風ちゃん？」
「ぎゅっ、てしてぇ……」
「良いよー、ほら、ぎゅー」
「んぅ……」
　温い、ぬくぬくだ。
「山風ちゃんはあったかいね」
「マオも、あったかい……」
　さて、一頻りいちゃついた後。
「そう言えば、俺の知り合いに狩人がいるんだけどさ」
「うん」
「その人、今は狩りを全うして上位者になったんだけどね……」
「へえ」
　山風の好きそうな会話を続ける。
「マオは、上位者なの？」
「んー、そうとも言えるし、違うとも言えるね。でも、神格としては雑魚も良いところだよ」
「そうなの？」
「うん、知り合いの狩人さんと一緒に月の魔物を、青ざめた血を倒したせいか、身体ってか、魂の一部が上位者になっちゃって」
「そう、なんだ。じゃあ、やっぱりマオは人じゃない、ね？」
「うん？人だよ？」
「え？」
「心があるんだ、人間と変わりないよ」
「そう、かな？」
　そうだ。
「だから、山風ちゃんだって人間だよ！優しい心があるんだからね！」
「優しい心？」
　あるでしょ、優しい心。
「あたしには、別に、そんなものないよ？」
「あるってば！」
「そうかなあ？」

山風は優しい子だ。
誰がなんと言おうと優しい子だ。
「……マオは、人間であることに、拘るね。何で？」
「人間は素晴らしい生き物だからさ」
「そう？人間なんて、野蛮で、愚かだと思う、よ？」
「それも、確かに、人間の一面だけれどもね。俺は、絶望に、邪悪に立ち向かえる素晴らしい人々のことを知っているんだ」
俺は旅の中、様々な人間に会ったが、やはり人間は素晴らしいと思った。
困難や理不尽に対して立ち向かえる、そんな人間達は大好きだ。
「……でも、あたし、人間は、嫌い」
「そっか。でも、人間の中にも、良い人はいるってこと、ちゃんと知っておいて欲しいな」
「……うん」

マオ、か。
名前で呼ばれるのそんな好きじゃないんだけどな。
たまには恋人気分で本名呼ばれるのも悪くないかも。
さて、次は、と。

２５５話　旅人ホスト　後編

「ご指名ありがとうございます、マオでーす！」
「ふわぁ、提督さん、カッコいい……??」
ふっ、また可愛い子を堕としてしまった。
今回のお客様は由良。
由良……。
ふたりエッ、いや、何でもない。
まあね、まだ建造してから一月くらいしか経ってないし、堕ちてるなんてことはないだろうよ！
ないだろうよ！
「マオって呼んでよ、由良ちゃん」
「え！じゃ、じゃあ、マオ？」
「うんうん、由良ちゃんの可愛い声で名前を呼んでもらえるなんて、俺は幸せだな！」
「も、もう！お上手ですね！」
あれ？
いや、堕ちてねーよな？
流石に一月で好感度カンストはねーよな？
今日は単純に癒されに来ただけだよね？ね？
きっとそうだ、そうに違いない。
由良は単純に男遊びがしたいだけだろう。
さあ、そうと決まればホストだホスト。
「じゃあ、席に案内するね？」
「はい！」
さて、席に座って、と。
「こう言うのって私、よく分からないんですけど……、足柄さんが言うには、どんぺり？ってやつを頼むものだとか」
「ドンペリ？ＯＫ！コール行きます！」
さて、六人に分身して、と。
「由良ちゃん！」

「ありがと！」
「ドンペリ！」
「ありがと！」
「これからも！」
「マオを！」
「「「よろしくねー！」」」
「わー！凄い凄いー！どうやってるんですかそれ！」
「昔、私立忍者学園ってところで忍術を習ってね」
そこのシノブちゃんって言うくノ一が可愛くってさー。
「分身の術……！マオは忍者なんですか?!」
「いや、忍者は齧った程度だね」
「……忍者って齧った程度と表現して良いものなんでしょうか？」
良いんじゃね？
「でも、私憧れちゃいます！マオは出撃からお料理までなんでもこなしちゃうんだもの！」
「そんなことないよ！俺だって、皆んなに支えてもらっているから頑張れるんだよ！」
「もう、謙遜が過ぎますよ！」
本心だが。
俺一人じゃどうやったって現状の稼ぎは出せなかった。
全ては艦娘の頑張りのお陰だ。
俺は何もしてない。
やったことと言えば、深海棲艦騒ぎで壊滅した輸出入産業の利権を分捕り、知り合いの悪の組織と提携して利益を上げてるくらいだ。
んー、悪党。
「でも、謙虚なところも、その、素敵だと思います??」
頬を赤らめる由良。
んー？
惚れてないよねこれ？
大丈夫だよね？
媚薬を投げつけた覚えもないし、好感度は上がってないと信じた

い。
「え、えっと、それで、由良ちゃんは俺と何がしたいのかな？」
「えっと、んー、こう言うところに来るのは初めてだから……」
「何でも良いんだよ？俺が何かやって見せても良いし、一緒にダンスを踊るのも良い。ただお喋りするだけでもＯＫだよ！」
「えっと、それじゃあ、政治の話なんですけど……」
うわぁ！
偉ーい！
うちの子は皆んなやれ新しい武装を積んだとか、やれ新しい必殺技を編み出したとか物騒な話ばっかりだから！
政治の話とか真面目なこと言えるのって良いよー、ポイント高いよー！
「……それで、今の政権一強状態で良いのかなって。まあ、私達、選挙権も何もないんで言っても意味はないんですけど」
「そんなことないさ、ちゃんと色々考えられるって偉いよー！えと、今の政権が一強だって話だよね？うーん、それはそれで良いんじゃないかなぁ、今の総理大臣は信頼できるから」
「そうですね、確かに剣総理大臣は信頼できます。……ちょっと武闘派過ぎるかもですけど」
「はは、桃さんは昔からああだから」
「……えっ？お知り合いなんですか？」
「ああ、桃さんとは桃さんが学生だった頃に知り合ったんだ」
「……マオって本当に凄いですね。総理大臣と知り合いで忍者で、生身で深海棲艦と渡り合って、家事全般出来るとか」
渡り合ってねーよ、最近じゃ足止めでいっぱいいっぱいだよ。
君らが何百何千と深海棲艦を叩き潰している横で、二、三十体倒せるくらいのペースだよ。
鬼クラス以上は火力が足りなくて殆ど倒せないしね。
この前フル装備で鬼クラスに挑んでみたら一体倒すのに十分もかかった。
もちろん、回復薬とかも使ってだ。

やはり、俺は戦いに向いてない。
女の子に戦わせるのは情けないが、しょうがないよね。
「完璧超人ですよね！」
「そんなことないよー、由良ちゃんの方が凄いって！最近訓練頑張ってるもんね！偉いよ！」
「そんな、あれは工廠の技術力があってこそですよ！」
「そうかな？」
「ええ！デザインはちょっとアレですけど」
確か、由良の艤装は黒い悪魔の羽のようなユニットと、大型のビームサイズ、シールドだった筈だ。ジャマーも装備している。
「まあね、女の子にはちょっとアレだけど、でもカッコいいと思うよ？」
「はい！良いんです、私、深海棲艦にとっての死神になるって決めましたから！」
怖いこと言うね。
「私、マオを、皆んなを守れるなら、何にだってなります！何だってやります！だから……」
だから？
「ずっと一緒ですよ、マオ??」

いや……、あれは親愛とかそう言うのだから。
愛にも色々種類があるでしょ？
違うから、由良は俺に惚れてなんかいないから。
惚れて、ないと、良いなぁ。
さあ次、気分を入れ替えて行こー。
「ナンバーワンのー、マオを指名しマース!!」
金剛デース！
きんいろモザイクではない。
「ハロー！金剛ちゃん！」
「ハーイ！マオ！」
俺に抱き着き、頬擦りする金剛。

良し良し、愛い奴め。
「マオ??会いたかったデース??」
「俺もだよ金剛ちゃん！」
瞳の中にハートマークを写した金剛が擦り寄って来る。
「取り敢えず座ろうか」
「ハーイ！」
と、席に座らせてと。
「さて、改めまして！指名ありがとね、金剛ちゃん！」
「マオに会うためならどこにだって行きマース！」
おっほ、言うねぇ。
「そんなに愛してもらえるなんて嬉しいよ！」
「本当なんデスヨー？マオを愛する気持ちは誰にも負けまセーン！」
この自信を持って、胸を張って他人に愛を伝えられるところが金剛の良いところだ。
「俺も、金剛ちゃんのこと世界で一番愛してるよ!!」
まあ、概ね本当だ。
俺にとって女性は順位をつけるものじゃない。
皆んな違って皆んな良いし、全員がナンバーワンでオンリーワンだ。
「嬉しいデース！あ、そうだ、見てくだサーイ！」
服を見せつける金剛。
「マオに見せるために買いマシタ！」
「へえ！可愛いよ！似合ってる！情熱的な赤が金剛ちゃんにぴったりだよ！」
金剛は赤のドレスを着ていた。
似合ってる。
金剛は華やかな女性だ、こう言う華やかな格好はベストマッチだ。
「えへへー！照れちゃいマース！」
「そんな金剛ちゃんにはこれかな、薔薇の花！」
「ワーオ！」
花束を四次元ポケットの魔法により取り出す。

「嬉しいデース！」
「喜んでもらえてなりよりだよ！俺は金剛ちゃんのために生きてるんだから……！」
嘘だ。
俺はどこまでいっても俺のために生きている。
特定の誰かのものになることなんてない。
「ンー！マオは女性のツボを熟知してマース！今日は、私の望む言葉をかけてくれるんデースネー？」
「今日だけじゃないさ！君が望むのなら、いつでもどこでも、なんだってするよ！俺は君の騎士（ナイト）なんだから！」
と、リップサービスぶっ込んだ後は。
「最近は六本木によく行きマース！」
「へえ、そうなんだ！六本木といえば○○カフェにはもう行った？」
「ハイ、行きマシタヨー！紅茶が美味しいネー！」
「分かる分かる！あそこの紅茶美味しいよね！パンケーキも一度は食べておきたいって感じの一品だし！」
などど、暫し談笑し。
「そうだ！マオ、踊りまショー！」
「金剛ちゃん、社交ダンスできるの？」
「もちろんデース！レディの嗜みデスカラ！」
「良いよ、やろうか」
「ハイ！リードして下さいネー？」
社交ダンスをして。
「歌って下サーイ！マオの歌声が聴きたいデース！」
「良いよー、何歌う？」
「じゃあ、このラブソングを……」
歌わされたりして。
「あっ、ごめんね、金剛ちゃん、もう時間みたい。延長もいっぱいいっぱいしたし」
「エー？もうデスカー？」
「また来てよ、今度もまた一緒に素敵な時間を過ごそうね」

「うー、ハイ、分かりマシター」
「それじゃ、金剛ちゃん、またね」
と、頬にキスして。
「んっ??分かりマシタ!また来マース!!」
金剛が帰る。

はー、こんなもんか。
ホストモードはちょっと疲れるねぇ。
でもまあ、八割は自然体だし、仕事モードとかの方がよっぽど疲れるよ。
兎に角、ホストは終了だ、終了。
よく頑張った方じゃない?俺。
艦娘の皆んなの癒しになれたなら幸いだ。

２５６話　将来的に役に立つから

「大淀、艦娘の社会進出の件だが」
「はい、こちらになります」
ふむ。
終戦と言う名のゴールがそろそろ見えそうになってきた昨今、艦娘の社会進出の件についてはよく考えてあげなきゃならないと思い、艦娘全体にアルバイトを奨励したんだが。
面接で落ちる５０％
一週間以内にクビ２０％
一週間以内に辞める２０％
芳しくない。
「これはひどい」
艦娘の一割ほどしか、まともにバイトすらできてない模様。
どう言うことだ？
「大淀、バイトの件、どうした？」
「はい、面接で落ちました」
バイトの面接落ちるって何だよ。相当だぞ。
「何しでかしたの？」
「私はただ、『他に働いた経験は？』と聞かれたので、ご主人様である提督の性奴隷と下僕を兼任していますと正直に答えたところ、その場で不合格を言い渡されまして……」
うん、原因はそれだね。
「外でそう言うこと言うのやめてってイワナ……、書かなかった？」
「ですが、真実を言った方が心証がよろしいかと思いまして」
よろしくねーよ。
大体にして真実でもないしな。
俺のふわふわな記憶が正しければ、大淀と致したことはない。
え？
いや、してないよな？
してないよね？

「大淀、変な嘘つくのやめてよね」
「こんな名言を知りませんか提督。かつての同盟国のかのお人は、嘘も百遍言えば真実になる、と言いました」
「ヨーゼフ・ゲッベルスだな」
と、どこぞの紅茶の名前の戦車道の女の子みたいなやりとりをして。
「……兎に角、こうなった以上、原因解明に努めるしかねぇな。行ってくる」
「はい、行ってらっしゃいませ、提督」
俺は戸を開けた。

ケース1：明石
「明石、バイトの件だけど」
「はい、一日でクビになりましたよ？」
「……何で？」
「さあ？」
明石がやったのは、車の整備だ。
「何て言われてクビになったの？」
「やり過ぎだ、と」
んー、予想は出来るが一応聞くか。
「何しでかしたの？」
「車を整備しろ、と言われたので、ニトロブースターと飛行機能付けたら、凄く怒られました」
そりゃ、怒られるわな！
「何でそんなことを？」
「え？整備しろって言われたので」
「は？」
「え？」
整備だよ？言葉の意味分かる？
「改造だよね、それは」
「いえ、整備ですよ。改造するなら熱核タービンエンジンとビーム

コーティング、ハイアクトミサイルは付けますね」
成る程、明石の感覚では、整備の範疇だったと。
「分かった、もう良いよ……」

ケース2：愛宕
「愛宕、バイトの件だけど」
「あら？三日で辞めてきたけど？」
ああ、ああ、それは知ってるとも。
「俺が聞きたいのはな、何で店長の腕をへし折ったのかって話ね」
慰謝料請求が来てるからね。
「セクハラされたの」
「成る程」
うーん、じゃあ、仕方ないのか？
「でも、セクハラなんていつもされてるだろ。俺に」
「んもう、提督は良いのよ！むしろウェルカムなんだから！でも、他の男は許さないわ」
これは喜ぶべきなのか。
「でも、何も折ることないよな？」
「えー？殺さないようにちゃんと我慢したのよ？」
まあ、そこは素直に偉いねと言っておこう。

ケース3：長門
「長門は工事現場で働いてるんだよな」
「ああ」
似合うなー、工事現場。
「結構前から働いてるもんな」
「友人もできたぞ」
「ほう、そりゃあ、良いことだ」
「タカさんとノリさんと言うのだが」
成る程。
あの人達だろうなぁ。

俺も工事現場でバイトしてた頃会ったことがあるんだよね。
まあ、気の良い人達だよ。
超体育会系だけど。
「素晴らしいよ、長門。その調子でアルバイトを頑張ってくれたまえ」
「了解だ」

ケース４：霧島
「霧島は……、ヤクザか」
「はい」
真島組でヤクザ稼業をやっているらしい。
「どうなんだ、調子は」
「良好です」
そうかい。
「真島の兄さんの無茶振りに振り回されてないか？」
「それは、仮とは言え組員であるので、ある程度は仕方がないかと」
キレて真島の兄さんと対決とか駄目だからな？
「それに、真島さんも、私が女性であるからか、あまり無茶は言いませんから」
ん、そうか。
流石に頭パーリーピーポーのあの人でも、女性相手ならある程度は優しいか。
「警察に捕まったりするなよ」
「はい、大丈夫です」
なら、良いか。

ケース５：鹿島
「鹿島はロー〇ンでバイトか」
コンビニか。やること多くて大変だろうに。
「はい！学ぶべきことが多くて、楽しいですよ！」
ああ、鹿島。鹿島！
なんて良い子なんだ！

「偉いぞ、鹿島」
「いえ！提督にはいずれ私のヒモになって欲しいので！その予行練習と思いまして！」
　んんー？
「提督のためを思えば、どんなお仕事も苦じゃありません！」
「いや、俺はヒモになる気は……」
　確かに、ヒモをやってた頃もない訳ではないが。
「憧れ、なんです」
「はぁ？」
「寂れたマンションで、呑んだくれる提督に毎日暴力を振るわれながら、借金を返すために身を粉にして働く……」
　何その妄想。
「そして、ギャンブルで負けた腹いせに毎晩痛めつけながら無理矢理に犯してもらって、そのままズルズルと子供ができたりして……」
「い、いや、そんな酷いことしないよ」
「ええっ？して下さいよ！私の夢なんです！」
　変な夢見るんじゃないよ。
「やらないからね」
「せめて首絞めだけでも」
「やらないってば」
「腹パン……」
「やらない」
　鹿島は駄目だ。
　駄目って言うか、なんて言うか。
　筋金入りのマゾで、駄目男好きなんだよね。
　俺の駄目人間っぷりに惹かれてるらしい。
「兎に角、俺は女子供に暴力は、基本的に振るわないんだよ」
　例外はあるがね。
「そ、そんなぁ」
　落胆する鹿島。
　お願いだからまともになってくれ。

ケース６：阿賀野
何？阿賀野はうちの艦娘じゃない？音成の子だって？
知らん知らん。
定期的にうちに来てるんだからうちの子も同然、まとめて面倒みるぜ。
「阿賀野は、一週間でクビか」
飲食店でバイトしていたらしい。
「えへへ、うん」
ちょっとだけ照れた様子の阿賀野。
「何しでかしたの？」
「お皿を割っちゃって……」
「それだけ？」
いくらなんでもそれっぽっちでクビにはならないだろう。
「あとは、料理をひっくり返したりとか、お水を零したりとか……」
あー。
はいはい、成る程。
阿賀野は、そう。
ドジっ娘、なのだ。
「ドジしちゃった訳ね」
「うん、ごめんなさい」
うーん、可愛いから許す。
しかし、社会は厳しい。
いかに可愛くても許されない限界ラインと言うものがある。
阿賀野はそのラインを、悠々と超えてしまったのだろう。
「そう、だな。今度は工場とか、比較的簡単な作業をやるところに行けば良いと思うよ」
「はーい」
さて。
艦娘の諸君らは、揃いも揃って社会不適合者だ、と言う悲しい結果

が出てしまった訳だが。
「どうしよ」
どうしようか。
やはり、艦娘は戦うことしかできないのだろうか。
暫し、悩んで。
「まあ、どうにでもなるか」
どうにでもなると思った。
知的生命体である以上、進化、適応するものだ。
いつも通りの投げっぱなしジャーマンスープレックス論法だが、それで良い。
俺は期待しているんだ。
個性的で可愛らしい彼女達の行く末に。
社会に出る出ない関係なしに、彼女達の人生に幸あれ、と。
そう、願った。

２５７話　心覗いて事もなし

「さて、仕事終わり、と」
ふう、と一息ついて。
仕事も午前で終わり、ですか。
まあ、艦娘と言う戦力兼整備士であるこの明石は、他の艦娘と比べれば仕事は多い方ですが。
皆さん、本当に優秀で、艤装のメンテナンスくらいしか、やることないんですよね……。
趣味で新しい兵器や発明品を作ることはありますけど、もう殆どそっちがメインみたいな。
しかも、予算は黒井鎮守府から直接出るんで、懐は痛まないし。
至れり尽くせりで。
「……提督は、何を考えているのでしょうか」
研究資金は幾らでも用意してくれる、お給料もくれる、食べ物もお酒も、お菓子も、服もアクセサリーも、愛情までくれる。
だから、時々、不安になる。
いっつも笑顔のあの提督が、何を考えているのかを。
もしかして、私達のことを迷惑に思っているんじゃないかと、そう思うと夜も眠れない。
「……と、言う訳で、提督の心が読める眼鏡を作りました。艦娘の皆さんはテストにご協力をお願いします」
……「不敬では？」
……「いや、白露型は皆提督の心を読んでいるそうだぞ」
……「興味深いですね」
「異議異論はもちろんあるでしょう、ですから、強制はしません。……ですが！提督が普段何を考えているのかを可視化するまたとないチャンス！逃す手はないかと思いますが？」
「「「……」」」

すると、艦娘達の手が、手元の眼鏡に伸びる。
くくく、成功ですね。
さあ、提督？
教えてください。
貴方が何を考えているのかを……！

「明石、何だその眼鏡」《可愛いな、似合ってる》
はぁい成功！
読めます読めます読めますねー!!!
「これですか？ちょっとした発明です！鎮守府に配布しましたが、あまり気にしないで下さい！」
「ふうん、そうかい」《明石可愛い》
「ところで提督？私について、何か言いたいこととかないでしょうか？」
この質問で、提督の心を見る!!
「言いたいこと？」《んー？何のことだ？いつものいたずら？いや……》

「見たな」《見たな》

「え？」
《心を読んでいるな？》
「ちょっ?!何で分かるんですか?!」
《分かるさ、そのくらい。覗かれている感覚があるんだ》
「す、すみません……」
《俺の心を覗くのは非常に危ないから、おススメしないぞ。認識災害とかミームとか》
「は、はあ」
《誤字とか、伊る、ねことかな。脳に記憶処理装置をぶち込む羽目になるのは嫌だろう？》
分かりませんが。

《まあ、そうと分かれば俺も、深層心理までは読ませないように注意するから》
「ええー」
《ブーイングは聞きませーん》
ぶーぶー。
《心を読むのは構わないけど、俺だけにしとけよー。他の子の心を読んだりしちゃ駄目だからなー》
「あ、それは大丈夫です、この眼鏡、提督の心しか読めませんから」
《それは安心だ》
って、そうじゃない！
そうじゃないんですよ！
私が提督の心を読もうと思ったのは……。
「私のこと、迷惑に思ってないかと……」
「んーん、そんなことないよ」《いやマジで》
「でも、心の奥底では……」
「俺は明石のこと好きだよ」《愛してるばんざーい、ってね》
「まあ、分かり、ました。でも、提督。なるべく、思ったことは口に出して下さいね。嫌なところは直しますから」
「ああ」《嫌なところなんてねーけどな》
××
××
×司令官??司令官??
×私の大好きな司令官ー??
×ふふ、白露型である私は、こんな道具なんてなくても、司令官の心を読めるけど……。
一度、しっかりと見てみようかな??
「司令官ー??」
「ん？」《ヘルシェイク矢野》
んん？誰それ？
「ああごめん、ヘルシェイク矢野のこと考えてた。何だい春雨？」《今日の晩飯何作ろう。コロッケ、いや、メンチカツ……》

えっと……。
「司令官の心を覗きに来たの??」
「ふむ、ストレートな物言い、実に良い。好きなだけ覗きたまえよ」《マグマミキサー村田》
だから誰?
……まあ、いっか。
さあ、集中して、脳内の瞳を拡張して……。
「あ!!ハハはっ!キヒィ!!来たァぁ!!!」
ふふ、見える……!流れ込んでくる!!
司令官の記憶が!!!
《タソ、食いもんがねえ……。あー嫌だな、しょうがねえ、ゾンビの肉食ってみるかー。うおぇ??? 不味い……》
《『!!????????????????じくじった。ムーンビースト共め、遠慮なしか……》
《くっ、やべっ『ーーーー!!!』獣め、畜生、内臓が……》
《チッ!クソが!死にやがれー!!……っはぁ、やったか》
《何だここ。監禁??????????????ずっと一緒?オイオイ、冗談キツイぜお嬢さん》
《寒い……、寒い……、死ぬ……。洒落にならねえぞ八寒地獄》
「くっ??????????????ひっ、ひはは、あはははは!!やっぱり司令官は私達と一緒だ!破綻者なのね!!」
「んえ?何が?」《そうだ串カツにしよう!たまにはこういう晩飯もありだろう》
「生きるために屍肉や蛆虫を喰らい、得体の知れない化け物共にはらわたを抉られ、数多の悪意に殺し殺され!!そんな中でも司令官は確固たる自分を持っている!持ち続けている!!」
狂気の中、正気でいるものが最も狂ってる……??
「お、おう、そうだな。確かに俺は、我の強い方だが」《後は、そうだな、お好み焼きでも焼くか。たこ焼きもいいな。焼きそばも。関西リスペクトー》
「常人なら自我が擦り切れ、心的外傷で精神が潰れるはずの日常!!貴方は、司令官は、それでも自分であり続けた!!!」
「人聞き悪いな、確かに辛いこともあったが」《人を気狂いみたいに言

うのはＮＧ》
「暗い宇宙の深淵の中、確かな輝きを放つ恒星のようで！……美しい！美しいの、司令官の心は!!!精神は!!!」
「照れるぜ」《春雨のパンツ何色かな》
「うふふふふふ、あははははは!!!あ、ピンクです」
何て綺麗なんだろう!!
ああ、だからこそ、だからこそ……。
この人が、欲しい……!!
この人の光が私達だけに降り注いだらどんなに素敵か!!
×欲しい、欲しい欲しい欲しい欲しい!!!
「頂戴、司令官……??」
×「ほ×い」《まーた血液抜かれんのか。その内貧血で倒れるぞ俺》
×
×
×
「し×ーーーーーぁはーとあたっく!!」《ああ^〜、やっぱりクイーンは最高だぞい！ロックの頂点だ！》
×ああ、いた。
×私のＡｄｍｉｒａｌ。
ロックミュージックかしら。私はクラシックくらいしか聴かないから、詳しくはないけれど、Ａｄｍｉｒａｌが歌うと様になるわね。とっても上手だし。
「おやウォースパイト。何か用かい……、って聞くまでもないか。さっきから艦娘達が俺の心を覗きに来てるからな」《つーか眼鏡似合うなー。知的な雰囲気だ》
「一応聞いておくわ。心を覗かれることに嫌悪感は？」
「無いね。俺の知り合いには心が読める女の子がいる」《琴浦ちゃんとかさとりんとか》
脳内にビジョンが浮かぶ。
一般的なｈｉｇｈ　ｓｃｈｏｏｌの女の子と、紫の髪が特徴的な女の子だ。
「他にもいる」《ボクシング界を牛耳るとか抜かしたチンピラとかダー

ビーとか言うゲーマーとか》
特徴的な男性が二人。
「俺も読もうと思えば読めるし」《心理学＜８０＞と脳内の瞳で》
成る程……。
「じゃあ、少しくらい心を読まれても問題ない訳ね」
「そうだね」《かまぼこ》
かまぼこ？
……まあ、良いわ。
「それじゃあ、子供の頃のことを思い出してみて頂戴？貴方の過去が知りたいの」
相互理解は恋愛で最も大切なことだと思うわ。
Ａｄｍｉｒａｌは私のことを理解してくれるけど、私はＡｄｍｉｒａｌのことを理解しきれていない。
もっと知りたいわ、私の愛しい人。
「まあ、良いぞ」《子供の頃？子供の頃かー》
《『ジャギー！アミバ！行くぞィァ!!!!』『うおおやめろ馬鹿野郎!!兄者の顔に落書きなんて!!!!』『こ、殺されるぞ!!!!』》
《『愚地師範、稽古つけて下さい！』『ヨッシャ、良いだろう』》
《『花凛、飯だぞー』『うん、兄さん。ありがとう』》
成る程、世紀末幼稚園。
「お知り合いが沢山いるのね。こんなに沢山の人を覚えていられるの？」
「うん、案外覚えてるもんだよ」《出会った人のことはよく覚えてる》
でも、あれね。
皆んな特徴的な人ね。
「あ、そうだ、Ａｄｍｉｒａｌのｓｉｓｔｅｒに会いたいのだけれども」
「うん？何で？」《うちの妹に何の用だ？》
もう、Ａｄｍｉｒａｌったら。
「結婚相手の家族にはしっかりと顔を見せるべきよ。貴方のｓｉｓｔｅｒは私のｓｉｓｔｅｒでもあるんだから」

「んんーん」《なーんだそりゃ。ケッコンカッコカリとは一体何だったのか》
「今度、鎮守府に招くと良いわ」
「考えとく」《考えておくだけな》
ふふふ。
でもね？
「Ａｄｍｉｒａｌ、私は嬉しいの」
「何でだい？」《大体予想できるが、聞こうか》
あら？分かってるのに聞くのかしら。
まあ、そこもＡｄｍｉｒａｌの良いところよね。
「家族ができたから！」
「ああ」《そうかい》
「艦娘と言う、世界で一人きりの私の、家族になってくれたじゃない！」
「そうだな、君達の家族だな俺は」《兄とか父親ポジションじゃいかんのか》
駄目よ。
「それでね、Ａｄｍｉｒａｌ。戦況もそろそろ安定してきたし……、新しい家族を」
「えー」《嫌だ》
むぅ。
Ａｄｍｉｒａｌは意地悪ね。

２５８話　怖い話

「日本の夏も暑いわねぇ」
「そうだよねぇ、この湿気がねえ」
　初夏の夜。
　アイオワと居酒屋鳳翔でビールを飲む。
「んー、何かこの暑さを吹き飛ばすような、ｃｏｏｌなことはないかしら？」
「ｃｏｏｌなことねぇ……」
　怖い話とか？
「夏の風物詩といえば、怖い話だが」
　すると、何人かの艦娘が集まってくる。
　そうかそうか、怖い話が聞きたいか。
「ｈｏｒｒｏｒ？良いわね、何かあるかしら？」
「ああ、メキシコの麻薬カルテルに喧嘩を売って……」
「そういうリアルで怖い話じゃなくて！そうね、ウォーキング・デッドみたいな話はある？」
　ウォーキング・デッドみたいな？
「じゃあ、数年前中国で起きたバイオテロの話でもする？」
「バイオテロ？」
「Ｔウイルス感染者やジュアヴォはまさにゾンビだったぞ」
　頭を吹き飛ばさない限り立ち上がってくるから面倒だった。
「何よそれ」
　俺は日記に貼ってある写真を見せる。
「……ＣＧよね？」
「いや、これが頭を潰さない限り、立ち上がって襲いかかってくる」
　まあ、ジュアヴォは一定量ダメージを与えるだけでも倒せる分楽だが。
「ｊｏｋｅ？」
「ｔｒｕｅだ」
　嘘は言ってない。

……どうも艦娘は、俺の話を冗談半分で聞いている節がある。
俺は嘘をついていないと言うのに。
嘘をついたり、話をボカしたりするのは、女の子が絡む話の時だけだ。
「まあ、本当の事の発端は十何年くらい前のラクーンの惨劇に関わってくるんだけどね」
「ああ、あれね。その頃はまだ建造されてなかったし、深海棲艦もまだ確認されていなかったのよね。でも、アメリカが国内にｍｉｓｓｉｌｅを撃った大事件だし、話は聞いているわ」
「あれ、バイオテロだったのよ」
「そうらしいわね。何でも、死者が蘇ったとか。馬鹿馬鹿しいわ」
「マジだぞー」
俺は手持ちのＴウイルスを机の上に乗せる。
「このＴウイルスでな。死者であれ生者であれ、脳の特定部位を刺激して、結果ゾンビと化す訳だ」
「ッ?!!さ、流石に嘘ね。そんな危なっかしいウイルスを持ち歩いてる訳ないわ。まともな神経をした人間、な、ら……。まともな、神経……?」
ん?
「……Ａｄｍｉｒａｌは、まともな神経をしていない?」
その瞬間、艦娘達が壁際に退避する。
「そっ、そっ、そっ、それ、本物とか言わないよねっ?!!」
「ああ、もちろん、強化ガラス製だからそうそう割れないよ。でももしこれが割れたら、あらゆる経路からウイルスが拡散、ここら一帯が死の街になるだろうな」
「仕舞ってぇぇぇ!!早く!!!早くぅ!!!!」
焦んなくても大丈夫よ、もし割れても火属性の魔法で焼き払うし。
「はぁ、はぁ、はぁ……、そんな危険物持ち歩くなんて、正気かしら?」
「至って正気だがね」
「で、こっちが投与された人間がある程度の知性を残したままゾンビ化するＣウイルスなんだけど」

「出さなくていい！出さなくていいから!!」

「……と、まあ、そう言うことで、俺とレオンはバイオテロの首謀者を打ち倒し、平和を守った訳だ」

「……本当？」

だからマジだって。

「ほら、写真」

全てが終わった時、レオンと一緒に記念写真を撮った。

「あ、こっちはロス・イルミナドスを壊滅させた時の方だ。こっちか」

「そっちも気になるけど……、これね？」

「映像もあるぞ、ほら」

……『はっはっは、何あれ？蝿？』

……『醜悪だな……』

……『ここで決着をつけるわよ』

……『オラオラ、魔法の矢！』

……『やったわね！』

……『ところでお前魔法使いなんだろ？パパッと脱出できるような魔法はないのか？』

……『あるにはあるけど、下手したら発狂するよ？』

……『……そうか。魔法も万能じゃないんだな』

……『あ、あそこにヘリが！あれで脱出しましょう！』

「……本当なのね」

Ａｄｍｉｒａｌ嘘つかない。

「とても信じられないけど……、Ａｄｍｉｒａｌ、本当に世界を救ってるのね」

「いや、俺の活躍なんて大したことない、ちょっと戦っただけだ。そんなことより、日頃から対バイオテロで戦ってるレオンやＢＳＡＡの人達の方が凄いよ」

「謙遜し過ぎ。貴方、戦場でサポート役や司令塔がいる安心感を知らないの？」

俺が役立つサポート役だと？

はっ、そんなことはない。
「俺は英雄達について回ってうろちょろしてただのオーディエンスさ。頑張ったのは彼らであって、俺はただ状況を楽しんで馬鹿みたいに写真を撮ったりしてただけだよ」
「まあ、こんな状況を楽しんでいる時点でもう正気じゃないけど、貴方も紛れもなく英雄よ。誇りなさい」
そうかなぁ。
「何で変なところで謙虚なのよ？」
「だって俺、マジで何にもやってねーし」
「何を言っているのよ！これなんてほら、人の盾になってる！」
クリスの盾になっている写真だ。
「いやそりゃクリスに死なれたら困るもんよ、誰がバイオテロに立ち向かうのよ」
「貴方、人の盾になれるってどれだけ凄いことか分かってる？」
こんなん誰だってできる。
「単に死なないって自信があるだけで、別に凄くも何ともないよ。君達だって死なない自信があれば、敵の攻撃を受け止めたりするだろう？」
「それはＭｅ達が艦娘だからであって……」
「同じさ」
「でも、誰かを守れるのは素晴らしいことよ」
「これは死なれると凄くめんどくさいことになると予想しての行動だから。俺、滅多なことがない限り、可愛い女の子以外なら普通に見捨てるからね？」
その辺誤解してるよね。
俺、別に心優しくも何ともないのよ。
最悪人殺しもするし。
善人ではないよね、中立中庸だよね。
「そう？でも、こんな状況で人を守ったのは……」
「誤解されてるようだから言っておくけど、俺は悪人だから。むしろ、悪人でも協力しなきゃヤバい事態になってるのがこれまたヤバいの

であって……」
「……仮に、貴方が悪人でも、Ｍｅ達は貴方のこと大好きよ？」
好感度は下がらない、と。
まあいいさ。
「ただ、本当に誤解しないでね。俺はあの某怪盗三世と盗みをしたりしてるからね。決して褒められた人間じゃないんだ」
「某怪盗三世……、それ、ルパン三世のこと？あれって確か義賊とか言ってなかったかしら？」
「確かに、彼は義賊だがね、やってることは悪いことだろう」
悪だよねー。
「殺しや盗みは悪いことだけど、ターゲットを選ぶのは偉いと思うわ。Ａｄｍｉｒａｌは、酷い悪人しか殺さないし、悪い金持ちからしか盗まないでしょう？」
そんな、ことは……、いや、そう、か？
思い起こせば、殺したのは悪人ばかりだ。
ノースティリスの強盗団、悪の魔術師、邪教の狂信者……、殺したのは、生きる価値のない悪党ばかりだ。
……まあ、生きる価値を俺が定義できるのかと言ったら微妙なところだが。
盗みだって、基本的に金持ちからしかとらない。
「こっそりやってる密輸の件だって、深海棲艦騒ぎで規模を縮小した貿易会社の溢れた人間を使ってあげたりしてるんでしょ？」
「それは、そうだがね」
そりゃノウハウある人間を他所から引っ張ってきただけなんだがね。無能にはノータッチだしな。
それにやってるのはグレーからブラックな貿易だ。車とか貴金属とか臓器とか、そう言う稼げるのを売買してる。
麻薬は駄目なんだが。
お陰さまで裏世界では、今最も安全な密輸ルートとして引っ張りだこだ。
「自覚がないみたいだから言っておくけど、現時点で海の六割を解放

してるし、貴方も十分に英雄なのよ」
「そうかね」
「教科書に名前が載ってもおかしくないレベルね」
　流石にそこまでじゃないと思うが。
「それに、この調子だと、どう考えても深海棲艦から海を取り戻せるし……、貴方、また世界を救うのね？」
「そんな大層なことじゃないさ。それに、世界を救うのは君達艦娘だよ」
「Ｍｅ達を指揮してるのはＡｄｍｉｒａｌじゃないの。こういうのは兵隊じゃなくって指揮官の栄誉になるものよ」
　要らないんだけど、栄誉。
「名誉とか栄誉なんかより、俺は美女達の愛とかの方が欲しいねぇ」
「あら、じゃあＭｅ達が目一杯愛してあげるわ！」
「いいねぇ」
　とても嬉しい。
「酒ギャンブル風俗と旅があれば何も要らんな！」
「風俗は駄目ね」
　チッ。

２５９話　未来へダイブ　その１

「提督、ちょっと血を貰っても？」
「構わんよ」
「では！これを……、こうして！完成です！」
　なんだなんだ。
　また新しい発明か。
　楽しみだな。
「明石、この、ＳＡＯみたいなサムシングはなんだ？」
「これはですね、ＶＲマシンです！フルダイブ式の！」
　ほーん。
「つまり、ゲームか」
「まあ概ねそのようなものです。ここに私の遺伝情報を、と。はい、やりましょうか、提督！」
「よーし、良いぞやろうか」
　ゲームは好きだよ。
「では、装置を装着してプラグイン！と」
「なんで所々パクるかな？」
　未来へとナビを取るのか。
　やめようね！
「冗談です！フルダイブ！と宣言して下さい！」
　ＯＫ。
「「フルダイブ!!」」
×
《遺伝情報認証、フルダイブ》
×
×
×

「はい！」
んー？
どう言うことだ？
俺はてっきり、ＳＡＯみたいな、オバロ的なアレを期待していたんだが。
「それに、遺伝情報がどうと、か、……」
「どうしたんだ父さん」
んんんんー？
この、ピンク色に白のメッシュが入った餓鬼は誰だー？
嫌な予感がするー、嫌な予感がするぞー。
「きゃー！可愛いです○○ちゃんー!!」
「うお、何だよ母さん」
「おい明石」
「何ですかパパ」
誰がパパだコラ。
「何しやがった？」
「ですから、ＶＲですよぉ～」
ヘラヘラ笑う明石。
まさかとは思うが……。
「シミュレーションしたな？」
「さっすが提督！賢いっ！そのとーりでーす！血液の遺伝情報から、二人の間に子供ができた場合をシミュレートする、ＶＲマシン！名付けて、将来見える君です！」
っはぁー。
「やりやがったなぁ、明石ィ……!!」
そんなことしてみろ、艦娘の反応が……!!
「あ、予約詰まってますから、早く○○ちゃんとの日常を体験しましょう！」
畜生、俺のあずかり知らぬところで謎の予定が詰まってる……!!
「ほら、見てくれ父さん！髪の色がピンクになるマシンだ！」
ちっ、この餓鬼が俺と明石の息子だって言うのか。悪い冗談だ。

「はぁ、何でそんなもん作った？」
「若白髪は良くないと思ってな！あ、でももう若くもねーのか？」
あー、こりゃ俺の餓鬼ですわ。
クソ失礼なところとかな！
「もー、○○ちゃんったらー??」
明石は俺の餓鬼カッコカリに抱きついている。
明石はサイコパスだが、自分の子供に愛情を向けることはできるみたいだな。
にしても、俺と明石の子供ねぇ……。
ピンク色の髪に白のメッシュ、長髪。瞳の色は緑。背丈は十代前半の年の頃に反して高め、少し華奢で肌が白くインドア派で軟派な印象。藍色の作業着……。
「お前、艤装は出せんのか」
「うん、出せるぜ？てか、あんたの子供は全員艤装が出せるって判明しただろ」
ん？
「待て……、全員？全員って言ったか今？」
「？、ああ。あんたの子供、俺を含めて百何十人。全員だ」
ぐ。
「ぐはぁ?!!」
「う、うおっ！血を吐いた?!」
一瞬で胃に穴が空いた。
「大丈夫かよ、父さん？」
「やめろォ！俺を父と呼ぶなァ!!!」
「えぇ……」
「もー、どうしたんですかパパー？」
パパと呼ぶな明石ィ!!
「そうだ、父さん！どうせあんた暇だろ？俺の警備ロボットの相手してくれよ！花凛姉さんに貰った設計図の、試してみたんだ！試験的にセンサを増設してさ、サーモグラフィーと次元観測装置の安易版を付けたんだ！」

はー、はー、はー。
「テメエこの野郎、親にあんたはねーだろ」
「はぁ？日頃から母さん達を口説いて回って、その辺フラフラしてるダメ人間の癖に親がどうとか言うなよなー」
こーんのクソ餓鬼が。
「やーん、反抗期ー??」
明石　は　嬉しそう　だ　！
「ママは？ママのことは好き？」
「母さんか？母さんは、まあ、時々ウザいけど、色々教えてくれたし、餓鬼の頃面倒見てくれたし、嫌いじゃない、かな」
「んもー、照れちゃって！可愛いー!!」
「や、やめろよもー!!」
何だ？
何なんだこの光景は？
勘弁してくれ。
頭痛がする。
吐きそうだ。
「……まあ、父さんにも一応感謝はしてるよ。沢山の母さん達の間を取り持って、鎮守府運営のための金を稼いでくれてる訳だし。でも好感度は低めだぜー、いい歳なんだからもっとしっかりしろー」
何で俺は自分の餓鬼に説教されてんだ？
死のう。
「おっとあぶねえ！ライアットジャレンチ！」
自害しようとしたその腕を巨大レンチで掴まれる。
「嫌なことあると直ぐに死のうとするからなあんたは！いい加減慣れたぜ！」
「離せやクソ餓鬼、殺すぞ」
「……ひょっとして、父さんって俺のこと嫌い？」
「パパ！駄目ですよ！」
明石にも怒られる俺。
「まー、確かに、あんたを使って勝手に実験とか色々やってきたけど

さー、クソ餓鬼ってのは酷いんじゃないのー？ジドーギャクタイってやつだぜ？」
　ニヤニヤする餓鬼。
　この煽りっぷりは間違いなく俺の餓鬼ですわ。
「子供なんて絶対に作らんぞぉぉぉ!!!」
「んー？でも母さんは二人目が欲しいとか言ってるぜー。あー、俺も彼女作ろうかなー。作ろうと思えば幾らでも作れるしな！俺イケメンだし！イケメンだし！」
　うっわ、俺の血筋だ!!
「だ、駄目ですー！可愛い可愛い○○ちゃんを他所の子になんてあげませーん！」
　明石が反対する。
「はっはっは、大丈夫大丈夫！ちゃーんと可愛い子連れてくるからさ！そうだな、花凛姉さんみたいな！」
　花凛……、俺の妹だ。
「妹と仲が良いのか？」
「ああ！あの人はスゲーよ、本物の天才だ！俺の目標は母さんと花凛姉さんなんだ！」
　×そう……。
　×
　×
《ダイブ終了》
　×
　×
　×
「っ×ぷはー！楽しかったー！可愛かった○○ちゃんー!!」
　俺は何一つ楽しくなかったがね！
「おーっと、次の艦娘が来てしまいましたね。では、提督、もう一度フルダイブをお願いします」
　ああ、もう。
　どうにでも、なれ。
《遺伝情報認証、フルダイブ》

×××××××××××
「っ×たく、次は誰だ？」
×「どりゃあ!!」
「甘い」
×背後からの一撃を弾く。
「くっ、強い……！流石は父上！」
……歳の頃は十歳程。黒の綺麗な長髪。キリッとした相貌に、年頃の割にはかなり高い身長。道着に黒帯を締めている。
……。
「長門だな？」
「○○よ、父親に背後から殴りかかるとは何事か！せめて正面から殴れ！」
「はい！母上!!」
やああ！と、声を上げて殴りかかってくる息子カッコカリ。
成る程、パワーは長門譲りか、なかなかのもんだ。
だが。
「だから甘いんだよ」
長門に似て素直過ぎる。
「う、わぁっ?!」
そのまま、餓鬼を地面に落とす。
俺、男には容赦しないからね。
「ぐうっ?!……流石は父上！御見逸れしましたっ!!」
んー、こいつは俺の餓鬼にしては態度が悪くねえな。
長門の血か。
「ところで母上！武者修行の旅についての話ですが」
「ならん！ならんぞー！」
思い切り息子に抱きつく長門。
「グワーッ！良い加減子離れして下さい！ってか首絞まってる絞まってる!!」
「○○を他所になどやるか！私の側にいろ!!」

「しかし！今の俺の年頃には、父上ならば旅に出ていたと聞きます！俺も諸国を渡り歩き、武の真髄を極めたく！」
「ならばこの私を倒してから行くのだ！」
「むっ、無理です！女性である母上に暴力を振るうなどと！」
「では提督を倒すのだ！」
「おっ、お言葉ですが、父上は『負けない、死なない』ことに特化しております！倒すことは不可能かと！」
「不可能なものか！お前は私と提督の子だぞ！誰よりも強くなれる筈だ！」
「はっ、はいっ！」
×
×
《ダイブ終了》
×
×
×
×
×長門との子供はまだマシか？
×でもなんかアホそうな面構えだったしなー！
×やっぱり子供とか要らねーわ。
「むふー！良かった！良かったぞ提督！あんな風な可愛い子供を作ろうな！」
「え、あ、はい」
長門に肩を叩かれる。
はー、何なんだ一体。

２６０話　未来へダイブ　その２

「まだまだ予約が詰まってますよー」
と、明石にアナウンスされる。
次は……、扶桑か。
「ふふ、よろしくお願いします、旅人さん」
「はー、しょーがねーなー」
「フルダイブ」
×
×
×
《遺伝情報認証、フルダイブ》
×
×
×
「母様、父様ー」
むー、娘か……。
扶桑をそのままスケールダウンさせたような美少女だ。
「可愛いな」
「ええ、そうですね旦那様」
旦那様とは何かね、扶桑君。
「お名前は？」
「○○ですよ」
「お幾つですか？」
「今年で７つになります」
おー、賢い。可愛い。
遺伝子的には美形の遺伝子、幼いながらもかなり美しい。
「ふふふ、母様も父様も、いつも私を愛してくれますね」
にこり、と。花の咲いたような笑顔を見せる娘。
「この笑顔は旦那様譲りですね」
「そうか？扶桑も最近はよく笑うようになってきただろ」
「いえ、私は昔から不幸な女で……」
「あら、母様？いつも幸せだって言っているじゃないですか」
そうなのか？

「私がそんなことを？」
「ええ。愛する夫と、その娘、そして仲間達に囲まれて毎日幸せだ、と」
「ふふふ、そう、ですか」
満足そうな笑みを見せる扶桑。
にしても、んー、娘かー。
可愛いなー。
「えい」
抱っこしてみる。
「わあ！あ、あの、○○はもう抱っこをねだるような歳ではありませんよ？」
「えい」
肩車してみる。
「肩車なら良いとかじゃなくてですね？父様？父様ってば！」
むー、娘。娘かぁ。
ほれほれ。
発育具合は、っと。
「あうあう、父様！娘とは言えども、女の人のお胸をいきなり触ってはなりませんよ！」
「いやあ、扶桑の子だしな、将来的にはデカくなりそうだ」
「……○○は、父様の下品なところが嫌いです！」
おっといかん、好感度が。
「だ、旦那様、流石に娘に手は出さないで下さいね？その、お相手なら私がしますから」
照れた様子の扶桑。
「市民扶桑、お相手とは何のことですか？」
「その、あの、えっと、よ、夜の……??」
「か、母様まで！自分の娘の前でそのような話をするのはやめて下さい！」
顔を赤くする娘。知ってんのか、ませてんなぁ。
「良いじゃんか扶桑。どうせＶＲだ、このまま娘の前で……」
「あっ??だ、駄目ですよ、なりません……??」

「やめて下さいってばー!!」
娘に引き剥がされる。おお、凄い力だ、流石艦娘の子。
「離せ娘。俺は扶桑とＶＲセッ○スするんだ」
「せ、せっく……?!父様!!!」
声を荒げるなよ。
「良いですか父様！父様は父様なんですよ！もう独り身の旅人ではありません！親としてあるべき姿を……」
あれ、俺これ、また自分の子供に説教されてる。何でだ？
一応、工業哀歌バレーボーイズ並みの品格は持ち合わせているんだが。
「ふふふ、立派ですね、○○は」
扶桑は満足そうだ。
でもな？
「好きな人との性行為も、幸せな日常に欠かせないものではないかね？」
「そ、それは」
「お前も将来は、愛する男に抱かれることになるんだからな？……まあ、ＶＲに言ってもしゃーねーか」
「わ、私は、まだ、そんなこと……」
んー？
新台家の人間にしては自立してねーな。
新台家の人間と言えば、立って歩く頃には自立してるもんだけどな？
「もう七歳なんだろ、自立しても良いんじゃねーのか」
「父様の感覚で語らないで下さい！私には、まだまだ父様も母様も必要です！」
そうなの？
俺、物心つく頃には自立してたし。
「習ってないことも沢山ありますし、まだまだ一緒にいたいのです！そんなこと、仰らないで下さい！」
「そうですよ、旦那様！家族は一緒にいないと……」

そこら辺が感覚の違いだ。
俺の中で七歳と言えば、もう旅に出ていた頃。
分からんな、普通の感覚ってやつが。
×
《ダイブ終了》
×
×
×
「どうでしたか？」
「あー、まー、娘は可愛かったよ」
「私の息子も可愛かったでしょう?!」
「は？」
「……まあ、良いです。さあ、次の艦娘ですよ、用意して下さい」
あいよ、と。
×
《遺伝情報認証、フルダイブ》
×
×
×
「マ×
×ママー！」
「ん×ー！○○は可愛いのね！」
イクか……。
子供の方は、と。
娘だ。
青地の髪で毛先は白、ほんわかとした顔つきで年齢は十代前半程。
胸の発育はイク譲りなのか、デカい。
スカイブルーのビキニに黒のアロハシャツ。
活発ながらもセクシーな雰囲気はイクのそれだ。
「あー！パパだー！イェーイ!!」
ハイタッチしてきた。
このテンションの高さは俺の遺伝なのかイクの遺伝なのか。
アッパー系の薬でも決めてんのかってくらいハイテンションだな。
「……何で水着なの？」

「いつでもどこでも泳げるようにだよ？」
　何言ってんのこの子。
「寒くないの？」
「ううん？別に？」
　寒さ耐性あるんだ。
「パパの旅先って寒いところや暑いところもあるしねー。環境の変化でおかしくなるほどヤワな身体してないよ！」
　俺の旅について来たのか。
「こんな程度、ノイエルやココット村と比べたら暑いくらいだよ！」
「そうか」
　はぁーーー!!
　着いてくんのかよ?!旅に！俺の旅に!!
「パパは嫌がってたけど、私からは逃げられないからねっ！ママと一緒に着いていくんだから！」
　クソが。
「パパはいろんなところに連れてってくれるから大好きだよー！また一緒にどこか行こうね！」
「ほえー、将来はそんなことになるのねー」
　イクゥ……！（虎眼並感）
「勿論、ママも一緒だよ！」
「わーいなの！」
　抱き合うイクと娘。
「俺の一人旅は？」
「駄目駄目ー！パパは一人にすると浮気しちゃうから！私が監視するの！」
　しないで、お願いだから。
「浮気は駄目だよー？イクママも、ゴーヤママも、はっちゃんママも寂しがるよー！」
「頼むから俺から生き甲斐を奪わないでくれ」
「あー！なんなら私を口説いたって良いよ？キンダンのカンケーってやつ？」

「駄目なのー！提督はイクのなのね!!」
「えー?!だって私の周りにカッコいい男の子いないしー！いっそパパのお嫁さんになっちゃおうかなーって！」
「申し訳ないが近親相姦はＮＧ」
「良いじゃん良いじゃん！私の方がママより若くてピチピチだよー？」
「むー！むー！怒るのー!!」
「あはは！ウソウソ！ママも綺麗だよ！」
「もー！」
　んー、このそこはかとない無自覚に男子の劣情を煽る感じ。
　イクのそれだ。
「でもでも、ママとパパの娘の私もとーっても可愛いんだから！」
　まあ、可愛いのは認めるが。
「どう？パパ？私、可愛い？」
「あー、可愛い可愛い」
「じゃあ、私とえっち、したい？」
「しねーよ」
　なんで近親相姦をオススメされにゃならんのだ。
「えー？だって私の見た目、駆逐艦のママ達と同じくらいじゃん！パパの守備範囲内かなー、って思って」
「流石に娘に手を出すほど落ちぶれちゃいねーよ」
「○○〜!!!!」
「きゃー、ママが怒ったー！助けてパパー！」
　俺の後ろに隠れる娘。
「趣味の悪いジョークを言うお前が悪い」
「ガーン！パパが私を裏切ったー！」
　最初から味方じゃねーよ。
「でもパパはツンデレだから……、助けてくれるって私信じてるっ！」
　はぁ？
　俺がツンデレ？
「パパは何だかんだ言いながら、私がピンチの時には助けてくれるも

ん！」

……そりゃあ、娘だしな。ある程度は優しくするさ。

息子なら平気で見捨てるが。

「だから、ね？パパ！大好きだよ！」

ああ。

「そうかい」

×

×

《ダイブ終了》

×

×

×

「どうでした？」

「娘、か……」

いや、ちょっと考えさせられたよ。

「ちょっとだけ、悪くねえとか……」

いや、気の迷いだな。

俺は根無し草の旅人なんだ。

やっぱり、子供なんて要らねえよ。

２６１話　未来へダイブ　その３

「次の艦娘は、と」
　死んだ魚のような目で明石を見つめる俺。
「あら？提督、テンション低めですね」
　そりゃそうもなるよ。
「うう、ああ、キリングミーソフトリー、キリングミーソフトリー……」
　優しく殺してー、優しく殺してー。
「弱音を吐かないで下さい」
　いや、弱音も吐くわ。
「さあ、次は那珂ちゃんさんですよ」
「艦隊のアイドル！行くよー！」
「アイドルが妊娠とか良くないんじゃないですかね」
「え？えーと、那珂ちゃんはそういうのもアリだと思うよ？！いずれは子供ができるのもおかしくないなー、って！」
「いやアイドルでしょ那珂は。子供とか良くないんじゃ」
「い、引退後の計画もー」
「生涯現役とか言ってなかったっけ」
「えーと、えーと、兎に角良いでしょ？！那珂ちゃんも自分の子供の顔が見たいのー！！」
　しょーがねーなー！！！
「分かった、分かった」
「分かってくれた？」
　分からないということが分かった（無知の知）。
「じゃあ、やってみよう！」
「はいはい」
「フルダイブ！！」
×××
《遺伝情報認証、フルダイブ》
×××××××××

さて、那珂ちゃんの子供は、と。

「俺の歌を聴けええええ!!!」

なーーーーんだこの熱気バサラ的なのは!!!?

十代半ば程の見てくれに、奇抜な茶色の長髪に白のエクステ、細身だが長身でしっかりと鍛えられた筋肉、赤縁のキャッツアイサングラス、ノースリーブのオレンジのコート、腕にはトライバルの刺青、ダメージジーンズにジャラジャラの鎖とアクセサリー……。

「キャラが濃いんだよテメー!!!」

「っと、何だよ親父！俺の歌に文句でもあるのか？」

「大有りだボケナスがッ!!!」

文句ねー訳ねーだろアホが!!!

「何だその髪型は」

「ロックだろ？」

は？殺すぞ？

「服装」

「カッコいいだろ？」

マジで殺すぞ？

「んで刺青」

「母さんは反対したっけな」

総評、殺す。

「○○ちゃん！」

「那珂ちゃんェァ!!何とか言ってやってくれェイ!!!」

「良い歌だね!!」

んんーん。

「お前、それで良いのか？」

「え？那珂ちゃんは満足だよ？」

「だってこの、パンクでロックな……」

「俺はスターだぜ!!」

「黙れボケ」

「カッコいいよー！」
　あんれェ?!那珂ちゃんさん?!!
「母さんが艦隊のアイドルなら、俺はスターだぜ!!輝く星になるんだ!!」
　何言ってんのこいつ？
「ちょっと不良っぽいけど、こんなに良い歌を歌える子が悪い子な訳ないよー！」
　那珂ちゃん、判断基準が良くないよ!!
「でも、これ、こいつ」
「提督、良い？歌は心の写し身なんだよ！真っ直ぐな心じゃないと、真っ直ぐな歌は歌えないの」
「流石だぜ母さん!!その通りだ!!」
　五月蝿え！ギター弾くな!!
「母さんは凄えよ、歌もダンスも一流で、人々の心を魅了する良いパフォーマンスが出来る！俺の尊敬する人だぜ!!」
　感極まった、と言った様子でギターを掻き鳴らす息子カッコカリ。
　疲れる。
　疲れるぞこいつ相手にすんの。
「パパは？」
「いや、親父は別に」
　んでムカつくゥ。
「親父の音楽には心が籠ってねえ!!」
　まーたなんか知らんけど子供に説教されてる。
「確かに技術は一流だが、それだけだ！音楽はハートだぜ!!」
「うんまあ、余計なお世話だよね」
「俺が手本を見せてやる!!俺の歌を聴けええええええ!!!!」
　……まあ、聴いてやるか。
　……。
　あ、上手いなこれ、上手いぞ、俺より上手い。
「……どうだ？」
「認めるよ、上手い」

「だろ！」
　でもムカつくなー。
「お前、好きなバンドは？」
「んー？何でも聴くけど……、特に好きなのはクイーン、メタリカ、ローリングストーンズ、レッドツェッペリンとかかな」
　うーん、俺の好みと一致している。
　これが血筋か。
「ジミヘンは？」
「好きだ」
×うーん血筋。
×
×
《ダイブ終了》
×
×
「つらい」
×
「元気出して下さい提督！」
×
「すごくつらい」
×
「大丈夫ですよ！」
　何が？
「では次行きましょう！」
「もうやめて」
「予約が詰まってますからね！ほら、急いで！」
「堪忍して」
「またまたぁ、提督も可愛い子供に会えて嬉しいですよね！嬉しい筈です！さあ行きましょう！」
×
×
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×
×
×
「○○は大人のレディよ！」
×
「明石ィィィ!!!出てこおおおい!!!説教だあああ!!!」
×
×
×
×

ふざけんな、これ、マジ、ふざけんなよ!!
「?、どうしたのパパ?」
六歳くらいの見た目の藍色の髪をした少女。
間違いなく、これは……。
「○○!ママよー!」
「あっ!ママー!」
暁の子だ!!!
「うおおふざけんなーーー!暁と子作りなんてしねーぞーーー!!!」
「ど、どうしたの司令官?嫌なことでもあった?」
現在進行形で嫌なことが起きてる!!
「……はっ?!いけないいけない、○○は大人のレディなんだから!」
「ふふ、○○は可愛いわねー」
ふざけんな……、マジふざけんな……。
こんな未来あってたまるか!!
「暁、子供なんて作らないからな」
「えー?こんなに可愛いのに」
そう言う問題じゃねーよ。
「ママー、○○もママみたいな大人のレディになりたいの!どうすれば良いの?」
「ええ?!えーと、うーんと、それはね……、あ、そうだ!ママみたいに素敵な旦那様を見つけると良いわ!!」
「そっかー、旦那様かー」
「そうよね司令官!」
「んあ、あ、そうだね」
「パパもそう言うならきっと間違いないわね!よーし!私もカッコいい旦那様を見つけるぞー!」
こんな、こんな未来は、未来は……。
「ねえねえ、○○、ママのこと、好き?」
「うん!ママのこと、大好きよ!私の憧れの大人のレディなんだから!」
「本当は?」

「……アイオワママとかサラママとかリシュリューママの方が、大っきくてかっこいいと思う」
「がーん」
「で、でもでも、暁ママも大好きよ！なんて言ったって、私を産んでくれた人だもの!!」
「うう、良いのよ、暁はレディとしてまだまだよ……」
「お、落ち込まないでよママ！」
茶番だ、こんなものは。
「じゃあ、パパのことは好き？」
「パパも大好きよ！」
抱きついてくる娘。
ぐうう、おおお！
お前は、お前は存在してはいけないのだ！
でも可愛い。
「パパはいつもどこかに行っちゃうから、あんまり会えないけど、私のことをとっても愛してくれるもの！」
うああ！ぐああ!!
え？
何これ？
だって暁だよ？
俺の娘的なポジションの子よ？
子供に子供を産ませるみたいな……。
完全に児童ポルノ。
え？
……抱くの？
……暁を？
……暁とセッ〇スするの？
あり得ないだろ、そりゃ。
流石にやって良いことと悪いことがある。
越えちゃいけないラインってもんを考えろ？
「それに、パパはとってもカッコいいし！私もパパみたいなカッコい

い人と結婚する！」
はははは、そうか。
そうか。
×ありがとなー。
×
×
《ダイブ終了》
×
×
×
×……ぐはぁ!!!
×あああっ、提督！何故いきなり吐血を?!」
「ぐ、う、明石ィィィ!!!越えちゃいけないラインを考えろォォォ!!!」
「越えちゃいけないラインなんてスタートラインみたいなもんです」
言い切った?!
「もう勘弁してくれ」
「またまた～、まだまだ元気そうじゃないですか！」
どの辺が？
「次行きましょうねー」
勘弁してくれよ……。

２６２話　未来へダイブ　その４

「もう、やめちゃっても良いかなァ、人生」
「あっはっはっは、お互いまだまだ若いじゃないですかぁ」
もう消えて無くなりたい。
闇に還りたい。
やめて！旅人のライフはゼロよ！
「次行きましょ次」
「ひええ、堪忍してぇ」
「良いではないかー良いではないかー」
×あーれー。
×
×
×
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×
×
×
×次は誰だ。
×誰が俺の心を殺す？
×……ここは、白露型の工房、か？
×いや、違うな。
似たような建物が併設、いやいや、増設されている？
ドアを、開ける。
中に入ると、そこには。
「やあ、待っていたよ、提督」
「こんにちは、父上」
男が、時雨の隣に腰掛け、本を読んでいた。
十代半ば頃、若いが、落ち着いた雰囲気から成人にも見える。細長い体躯、しかし、絞られた身体であり、一切の無駄がない印象。切れ目の瞳は青く、確かな智慧を秘めている。長い黒髪を編んでいて、顔には何を考えているか読めない微笑みが浮かぶ。
服装は一般的なヤーナムの狩装束を改修したもの……、黒の得体の知れぬ皮でできたロングコート、同じ材質のブーツと手袋。傍らには

羽根付きの三角帽子と、刀……、千景。
……胡散臭え！
「おや、それは酷い」
って、こいつも俺の心を読めんのか。
「ええ。特に父上は素直なお人だ、読むのは容易い」
「ほー、言うねぇ」
「中々に優秀な狩人じゃないか。僕は嬉しいよ」
と、時雨。
「ええ、ええ、もちろんですとも。私は母上の最高傑作。至上の狩人なのです」
薄ら笑いを浮かべる息子カッコカリ。
「デカイ口を叩く。何を以って至高と嘯く？」
「嘯くなどと……。私達白露型の子は皆、調整と訓練を受け、それなりに実戦もこなしましたから。これは根拠のある自信なのです」
あー、嫌な予感がするが、一応聞こうか。
「調整とは？」
「薬物及び魔術……、様々な視点からのアプローチによる身体と精神の強化です」
なーにやってんだ白露型。
「私達の身体と精神は、母上の胎にいる頃から投薬や儀式によって強化されております。他にも、神話生物や上位者達の肉体の一部を切り離し、肉体に埋め込み、瞳を中心に様々な能力が強化されているのです」
人体改造、か。
「全く、倫理って言葉知ってるか、時雨」
「ふふふ、知っているとも」
知っている上でそう言うことするなら尚更タチ悪いよね！
「まあ、胎教の一種のような感覚だろうね。僕達にとってはそれが普通なのさ」
「……そして、誕生してからも、投薬や儀式、更に手術を続行し、更なる強化を。父上の血も輸血させていただきましたよ。あれは良い、貴

方は月であり太陽だ」
俺の血を輸血？
なんてことを……。
「時雨、お前は息子を何だと思ってるんだ」
「うん？とても大切に思っているとも。ともすれば、君の次くらいには」
時雨の言う、俺の次に大事というのは、いつでも切り捨てられることを指す。
白露型の忠誠心は異常だ、俺のためなら自分の姉妹だって容赦なく殺す。
と、言うか、艦娘は、特に強いものこそ精神に異常を持っている。
「時雨……」
「愛してもいるさ、とても、とてもね」
「お前はそれで良いのか？」
俺は息子カッコカリに問う。
「何が、ですか？」
「お前は、実の母親に肉体を弄られて、人じゃない何かにまでなって、それでも一番に愛されている訳じゃなくって……。それで、良いのか？」
「はは、何を。私は例え一番でなくとも、母上にも父上にも愛していただいております。それに私は改造のお陰で人を超えることができました。私は嬉しいですよ。感謝しています」
ああ、クソ。
こいつも人として、どこかおかしい。
まー、サイコパスの俺が言っても仕方ねえか。
「それで、訓練と実戦とは？」
「ヤーナムで狩りを。そしてドリームランドでも少々流浪の旅を。更に、ミスカトニック大学の医学部で学問を修めました」
ふむ、頭も切れると。
この歳で医学部卒ってんだから、紛れもなく天才だわな。
「はは、ありがとうございます」

笑う息子カッコカリ。
「ですがまだ、母上には敵いませんから。私にもまだ改善の余地があると言うことです」
そりゃあまあ、時雨には敵わないだろうな。
時雨は俺の知る中でもかなり強い部類だ。
簡単には超えられないだろう。
「だけどまあ、いずれは超えてもらわなきゃ困るね。僕の子供なんだから」
「これは手厳しい」
「当たり前さ」
×はは。
×
×
×
《ダイブ終了》
×
×
×
×
「どうでした？」
「ああ、なんか、俺の子供とは思えないくらいまともだっ、いや、まともっ？まともか？」
「どうしたんですか？」
「いや、いや、ええと……。まあ、何でもない」
まあほら、子供作るなんてそんな。
そんな訳ないそんな訳ない。
時雨だぜ？
そーんな子供にマジになる訳ないじゃーん。
「おっと、次の艦娘が来たようです」
「ＯＫだ」
さて、苦行の再開だ。
辛いぞ。
耐えろ。
《遺伝情報確認、フルダイブ》

×××××××××××
「よっ、提督」
「やあ、摩耶」
摩耶、摩耶かぁ……。
まあ、ギリギリセーフだろうか。
「あたし達のガキか……。へへっ、なんだか照れ臭いな！」
「そうね」
俺は顔も見たくないんだがね。
でも摩耶が幸せそうならＯＫです！……ＯＫ、かなぁ。
「っと、転移成功……、ん？」
「おお！」
現れたのは冒険者風の少年だった。
年の頃は十代前半、摩耶と同じダークブラウンの髪を適当に切り揃えた髪形、青い瞳。
軽鎧に外套、ブーツ、手甲、ロングソードに盾。弓も背負っている。
「お袋と親父か。三週間ぶりだな」
「おおー！こいつがあたし達のガキか！生意気そうなところが提督にそっくりだ！」
いや、生意気そうってんなら君の遺伝だと思うよ。
「どこに行ってたんだ？」
と、俺が問いかけると。
「ノースティリスだよ」
息子カッコカリは頭をかきながら答えた。
ほーん、ノースティリスか。
「お、あそこに行って来たのか！ネフィアか？」
摩耶が嬉しそうに問いかける。
「ああ、俺は冒険者だからな」
平然と答える息子カッコカリ。
「何で冒険者なんかに……」
「あぁ？別に良いだろ、なりたかっただけだ」

そうだろうか。
冒険者などと言う、旅人に等しい、命がペラ紙一枚より軽い仕事をやるのは、親不孝者ではないか。
「摩耶はそれで良いのか？」
「ん？あたしは別に構わねーぞ？ガキがやりたいってことをやらせるのが親ってもんだろ？」
止めるのも親の仕事だと思うんだけどね。
まあ、そこらへんは、親がいない俺が言えることじゃねーか。
親無しが教育について講釈垂れるなんてな。
そもそも、誰かにものを教えられるほど何かを修めている覚えはない。精々、何やっても一流止まりだ。超一流や超超一流には敵わない。
「大体、俺がどこで何をしようと俺の勝手だろ」
ふーん、態度悪いなこいつ。
「テメエ、態度悪いぞ！」
言ってやれ摩耶。
「うるせーなぁ……」
どうでも良さそうに返す息子カッコカリ。
「親父、あんたさ、よくこんな跳ねっ返りで生意気なのを嫁にしたな。馬鹿なんじゃねーの？」
ほー、言うじゃんか。
「摩耶は俺の大切な人さ」
「ふーん。女はやかましくないのが一番だろうに。声を出すのはヤってるときだけにしろよ、とは思うけどな」
あ、この下衆さはあれだ。
ノースティリスのあいつ……。
「お前、ノースティリスのあいつと……」
「あぁ？あの人と俺とじゃ格が違えよ。あの人は本物だ、俺の目標だ」
よりにもよってノースティリスのあいつを目標にしちゃったか。
「まあ、良いさ。俺はとやかく言わないよ」
新台家は代々屑の家系。

×新しい屑が生まれても特に問題はない。
×
×
《ダイブ終了》
×
×
×
「やっぱり、俺の息子だわな」
「へ？」
「いや、屑だったよ」
「別に提督は言うほど屑でもないでしょう？」
強姦以外の犯罪行為は一通りこなした経験がある。
とある怪盗三世との強盗、窃盗行為、ヤクザとの賭博に詐欺、秘密結社との放火に爆破、ハッキング、飲酒運転、脅迫、名誉毀損、器物損害、公然猥褻、売春、偽証、賄賂、密輸……。
アレ？俺これ屑だな、大分屑だな？
何にも言えないやつやんこれ。
「いや、本当に屑だわ俺。人生省みると大分悪いことやった」
「そうですか？そんなに悪いことやってるとは思えないんですけど」
「これは酷いぞ」
「まあ、私は提督が何をやっても怒りませんからね」
俺を甘やかすなー？
……兎に角、俺の息子も新台家の男らしく人間の屑に育った。
やはり駄目だ、子孫を残してはならない。
呪われた血統、ここで断つ。

２６３話　未来へダイブ　その５

「堪忍してけろー」
「まだですよー」
未だ続く地獄巡り。
次は誰だ？
《遺伝情報確認、フルダイブ》
……。
「ふふふ、やはり私は美しい……」
なん、だ、この……。
「う、魚座のアフロディーテ？」
「誰が黄金聖闘士ですか」
お前だよ。
年齢は十代後半、ボリュームのある茶色の長髪、長い睫毛、高い鼻、薄い唇と端正な顔。現代の貴族と言えるような、キチッとしたスーツを着込み、真っ赤な薔薇の花を片手に、鏡に映る自らの姿を見て美しいと呟いている。
完全にヤベーやつだ。
例えるなら、一昔前の耽美絵に出てきそうな感じ。キモい。
「いやーキツイっす」
「何がキツイのですか父上」
「てめーだよ」
「これはこれは、酷いことを仰る。私の美しさのどこに不満が？見てくださいこの母上譲りのブラウンの髪を」
「だから何だ」
「ふふ、美しいでしょう？」
あー、なんかムカつくゥ。殺っすかー。
「まあまあ、司令官、怒らないであげて？」

あ？
え？
あーあ、あ？
「如月……？」
えっ、これ、如月の、息子、なの？
「そ、育て方、間違い、ました、ね」
最低限言葉を選んだ。いや選べてないか。
「ああ、母上！美しい人よ！」
跪いて如月の手の甲にキスをする息子カッコカリ。
なんだそりゃ。
気障ったらしい。
「とっても美しい子じゃない。育て方を間違えてなんかいないわ」
いやこれは……。
「ふふ、当たり前でしょう。私は母上と父上の子供なのですから。美しいに決まってますとも」
うーん。
「え、何？如月……、何これ？」
「私が、美しい子に育って欲しいと願ったからじゃないかしら」
「何で？」
「あら、司令官が私に美しいと言ってくれるからよ。だから、美しい私の子供も美しいのは当然の摂理じゃないかしら」
んん？
分からねー。俺には分からねえ理論だ。
「それに俺、別に美しくもないぞ」
イケメンではあるが。
「いえ、父上には父上の美しさがあります」
「お前には聞いてないよボケ」
「おや酷い」
ふっ……、と笑う息子カッコカリ。鼻につくなあコイツ。
「じゃあ、アレか？ナルシスト気味な如月は、それが遺伝してこんなんなりましたと？」

「そう、ね。私、自分を美しいと思っているから。自信があるわ」
なる、ほど？
「でも、司令官のせいでもあるのよ？貴方が私のことを美しいと褒めてくれるから、私もそう思い始めたのよ」
んーあーそう。
「でもコイツはムカつくな、なんか。一々態度がカンにさわる」
「……父上、何か気に食わないことでも？私でよろしければ相談に乗りますが？ああ、そうだ、仏蘭西から取り寄せた葡萄酒があるのです、一緒にどうですか？」
「？、とってもいい子じゃない」
いや、そのー。
「なんかこう、大人っぽい態度がムカつく」
大人の対応しやがって。
「もう、子供っぽいこと言って」
「ふふ、そこが父上の良いところでしょう」
チッ、まあ、良いさ。流してやるよ。俺、大人だし。気に食わないからって噛み付いたりしないし。
「それに、私は父上を尊敬していますから」
「ほう」
「私と違い、泥に塗れ笑う姿がとても美しいのです。人としての生命の活力……、生きる喜び。父上を見ているとそう言ったものが伝わってきます」
「お、おう」
「私は所詮、外見を取り繕っているだけに過ぎませんから。旅をする父上と、それに寄り添う母上が最も美しいと私は思っていますよ」
そう言って、これまた、ふっ……、と笑う息子カッコカリ。
「そ、そうか」
「いつか私も、父上と母上のように、真なる魅力を磨き上げ、誠に美しい人間になりたいものです」
「が、頑張れ」
何だこりゃ。

×
×
×
×
×
《ダイブ終了》
×
×
×
×
「何」
×
「どうでした？」
×
「いや、これは、その、分からん」
×
感想が出てこない。
×
「楽しかったですか？」
「いや別に」
それは、確信を持って言えるが、楽しくはない。
「さあ、次ですよ！」
「キツいっす」
「大丈夫です！」
×
大丈夫じゃないって言ってんの?!分かる?!
×
×
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×
×
×
×
白露型の工房、か。
きあて、誰だァ？
「パパー！」
×
「おうっ」
×
緑の髪……。
「山風か」
「えへ、そうだよ、正解……」
これは、娘か。
「パパ？」
……歳は十代前半。背丈は山風と同じくらい。癖のある緑髪をサイドアップにし、処刑隊の狩装束に身を包む。流石に金のアルデオは被っていないようだが。狩人らしい無駄のない肉体に啓蒙を感じる

瞳。顔立ちは山風に似つつも、少し鋭角なのは俺の遺伝か。背中にはローゲリウスの車輪が。
「趣味は？」
「うちに仇なすものを処刑することだよ！」
性格はどうやら、明るい山風、と言ったところか。物静かながらも朗らかな人柄。明るい笑顔が眩しい。控えめな山風とは少しばかり違う、と言って良いだろう。
そしてやはり、狩人だ。血に酔った、善い狩人だ。
「そうかそうか、よしよし」
「くふー！パパのなでなで好きぃ??」
「マ、ママもなでなでしてあげる、ね？」
「わあい、ママー！」
「ふふ、甘えんぼ、だね」
慈しむような目で娘を撫でる山風。
「山風は、娘をちゃんと愛しているんだな」
「うん、愛して、るよ？二番目に」
二番目、か。
女なのに、自分の子より大事なものがあるのか。
「一番は、ね、提督だよ??」
それは、少し。
悲しいんじゃ、ないかな。
「？、悲しくないよ？」
と、娘カッコカリ。
「パパとママが仲良しなのはとっても良いことだよ！」
「だけど、君は……」
「私は二番目で良いよ？」
そうじゃ、ないだろ。
女の子は、愛されるべきだ。
「んーん、それは、良いよ。ママはパパのものだから。飼い主を一番に愛するのが狗の仕事でしょ？」
「そう、か」

「でも、いつか。私を一番に愛してくれる人に、出会えたら、良いな」
「そう、だね……」
何だ、これは。
「山風、それじゃあ、君の代わりに、俺がこの子を一番に愛しちゃ、駄目かい？」
「え、だ、駄目……」
その瞳には、怯えがあった。
「私が、一番じゃないと、嫌……！」
「そうじゃないさ、一番が複数あっても良いだろう？」
「それは、えと、ええと」
「俺は艦娘皆んなを一番に愛しているからさ。そこにこの子を加えようと思ってるだけさ」
愛を知らずに育つと碌なことにならないし、愛などいらぬと悟ってもこれまた辛い道を歩む羽目になる。
「……分かった。要らなくなったら、処分するだけだから」
「ッ、自分の子供なんだぞ、そんな言い方はしちゃいけない」
「？、そう、なの？そういうのは、よく、分かんない、かな」
山風は、愛とは何か、分からないのか。
寂しいな、寂しい。あまりに不憫だ。
「……俺が君達を精一杯愛するよ。だから」
だから、君も娘を愛してあげてくれ、山風。
×
×
《ダイブ終了》
×
×
×
×
「……」
「どうしました？」
「いや、愛って大切だな、と思って」
「そうですねえ、愛は大切ですねえ」
「明石は俺のこと愛してくれるか」
「ええ！」

「それじゃあ、自分の子供は？」
「愛しますとも！」
「それは、一番にか？」
「提督と一緒に、一番に愛しますよ！」
そうか。
それは、良かった。

まあ、子供作る気はないけど。

２６４話　未来へダイブ　その６

「帰して」
「もう、何が気に入らないんですか？可愛い子供達に囲まれて幸せでしょう？」
「君の幸せと俺の幸せが同じとは限らないだろう」
「そうですかー？でも、たまにはこういうのも良いでしょう？」
「たまにって頻度じゃないよね、しょっちゅうだよね」
「まあ良いでしょう！さあ、行きますよ!!」
×
×
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×
×
×
「なのです！」
「明石いいいぁぁぁぁぁぁ!!!!許さんからなぁぁぁぁ!!!!説教、いや、折檻だぁぁぁぁ!!!!」
「ど、どうしたの、パパ？」
九歳くらいのショタっ子だ。ショタ……。新台家らしくハンサムだが、電の遺伝か柔らかな雰囲気があり、ふんわりほんわか系。髪はショートカットくらいに伸ばしていて、女の髪型と言っていい。黒の短パンに長い縞々のストッキング、白の英字Ｔシャツに淡いピンクのフード付きジャケット。
「女の子かよてめーはよ」
「え？え？だって、この服、可愛いと思って」
女児にしか見えん。
まあ、骨格や声、匂い、重心移動などで男だと見抜けるが、一見すると美少女にしか見えない。
「○○ちゃーん！」
「あ、ママ！」
母親をママとか呼ぶなや!!
男が女をママと呼んでいいのは場末のスナックでだけだ！

「電は良いのかこれで」
「?、今の時代、無理に男らしさに拘る必要はないかと思うのです」
「でも、ほぼ女装……」
「僕、女の子の格好するのも好きだよ?」
「完全に女装してるやんけ!!」
　何でだ?何でこんなことになった?
「スカートとか、ひらひらして可愛いよね」
「おいおい」
　何でこんなナヨナヨしたカマ野郎に?
「……ってか、待てよテメエ、これは」
　上着をめくってズボンを下ろす。
「あっ??パパ、駄目だよぉ??僕達、親子なのに??」
「お前は……!何で女物の下着とブラを着けていやがる?!!」
「えぇ?趣味だけど……」
「変態じゃねえか!!!」
「ち、違うよぉ、僕はちょっと女装が好きなだけだよぉ」
「電は良いのか、変態で!!」
「私は、変だと思わないのです。見た目も可愛いので、女の子の格好をするのも良いと思うのです」
　うおおう。
「じゃあ、最後に一つ聞こう」
「なあに、パパ?」
「お前、ホモか?」
「ううん、違うよ」
　ほっ。
「男の人でも、女の人でも、どっちも好きかな」
「まさかの両刀でしたぁぁぁ?!!!」
　えええええええ?!!!
「男の人なら、パパみたいな逞しい人が好きかなー。女の人なら、ママみたいに可愛い子が好き」
　おおおう、おおおう……。

「パパって、ハンサムで男らしくって、それで大っきくて、僕の好みのタイプなんだよね??」
「キモいわー」
「き、キモくないもん！……パパとなら、エッチしても良いよ??」
　ふん!!
「痛あ?!何で殴るのぉ?!」
「身の危険を感じた」
「大丈夫だよ、攻めるのはパパ、受けるのは僕だから！後ろの穴はいつでも使えるように綺麗にしてあるからねっ??」
　おらぁ!!!!
「痛い痛い痛い!!折れちゃう！背骨が折れちゃう!!!」
　一旦下ろす。
「痛た……。女の子ならママみたいな子が良いかなぁ。ちっちゃくて可愛い子が好きだよ！」
「お目が高い」
　まあ、電が可愛いのは認めるし、共感する。
「でも、ママとエッチしようとは思わないけどね。だってママ、パパにぞっこんだし。もちろん、エッチしてくれるなら喜んで相手するんだけど」
「それは駄目なのです。電の身体は司令官のものなのです」
「……ほらね？」
　ああ、そう。
「でも、パパなら誘惑すれば抱いてくれるかなーって！」
「ヤらねえよボケ!!」
「触りっこだけでも」
「気色悪いわぁ!!!」
「おおっと?!あ、危ないなぁ！投げ飛ばさないでよ!!」
「まあまあ、司令官も○○ちゃんに優しくしてあげて欲しいのです！」
「電、駄目だ、こいつは変態だ、殺さねば」
「でも、投げ飛ばす時のパパ、力強くってカッコよかったよ??」
「殺す」

×
×
×
《ダイブ終了》
×
×
×
「えぇ……（困惑）」
×
「どうでした？」
×
「酷かった」
×
まさか両刀とは。
×
「そんなこと言って、結構楽しかったんじゃないですか？」
「いや、全く」
「では次行きましょう！」
×
えぇー。
×
×
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×
×
×
×
……グラウンドで剣戟の音。
×
これは……。
×
「血の豆が潰れるまで剣を握りなさい。血の小便が出るまで剣を振るいなさい。日々是精進あるのみです」
×
「はい、母上!!」
「返事だけですか？力と技、そして心がなければ何も出来ないと知りなさい」
「グゥッ!!!」
息子カッコカリの腹部を蹴り上げる神通。
成る程、な。
「やめい、神通」
「はっ！」
「ち、父上、ぐふっ、これは、お見苦しいところを！」
「いや、いいさ」
年齢は十代半ば。俺に似てハンサムな顔。キリッとした眉に意思

の強そうな瞳。長い茶髪をポニーテールにまとめて、オレンジの着物を着て帯刀している。
「あー、なんだ、お前は。いつもそうなのか」
「はい！母上に稽古をつけてもらっています！」
　そう、か。
「お前は、親に愛されているのか？」
「ええ！それはもう」
　なら、いいんじゃないかな。
「神通、厳しそうだけど」
「それこそが愛情かと存じまする」
　そうかい。
「お前は……、そうだな、俺の子にしては礼儀がなっているな」
「母上の教育の賜物です」
　ふーん。
　まあ、聞き分けがいい息子ならいてもいいかも……、いや、やだな。
「母親の教育ねぇ」
「はい、母上のお陰で、拙者は、もののふになれ申した。感謝の極みであります」
　もののふ。
「ですかまだまだ甘いですよ。及第点だけしかあげられません。お前にはいつか、私を超えてもらわねば困ります」
　と、神通。
「はっ、精進致します」
　と、息子カッコカリ。
「なん、つーか、つまらねえな、お前」
「は、つまらない、でありましょうか」
「俺の息子なのに、女遊びも、博打も、酒もやらなそうだ。つまらん。真面目な奴とは話が合わない」
「そ、それは、申し訳ありませぬ」
　完全に神通似だなぁ、人として面白くねえや。
「そんな真面目に生きて人生楽しいか？」

「その、楽しいかどうかで人生を評価したことがないので」
「街へ出て、女の一人でも抱いてみろ。人生は楽しいぞ」
「し、しかし」
「なりませんよ。女人に惑わされるなどと」
「勿論でございます、母上。色事に興味はありませぬ」
「神通、ちょっとは遊ばせてやれよ」
「なりません」
うーん、頭が固いなあ。
こりゃ、幸せな家庭なんて夢のまた夢か。
《ダイブ終了》
「神通は厳しいなあ」
「当たり前です、愛すればこそ、厳しくもなります」
「俺には好き勝手やっても怒らないのにな」
「ええ、提督は主君ですから。お叱りするなど、とてもとても……」
俺は怒られないのか。
「女癖とか直さなくても良いの？」
「ええ、勿論でございます。提督はお好きなように振舞っていただきたく存じます」
「そうか……、分かった。でも、俺は神通のこととっても大事に思ってるからな、愛してる」
「ありがとうございます」
と、言う話、だ。

２６５話　未来へダイブ　その７

「分かったから、やりゃあ良いんだろオラ」
「はい、やりゃあ良いんです」
「次は誰だ」
「はーい、私だよー」
　川内か。
　どうせ忍者だろ。
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×
×
×
「拙者、○○でござる。ニンニン！」
「やはり忍者か……」
　歳の頃は十代半ば、黒の忍装束に身を包む。
「よいしょ」
「おろろ、頭巾を取らないで欲しいでござるよ」
　髪型は黒のウルフカット。顔立ちは日本人風なハンサム顔。目線を読まれないためなのかなんなのか、糸目だ。
「へー、結構可愛いじゃん！」
「おやおや、これはこれは。母上殿ではありませんか」
　背丈は……、川内より大きいな、１７０後半くらいか。
「そうそう！母上だよー！」
「は、母上殿、この歳で頭を撫でられるのは恥ずかしいでござるよ～」
「遠慮しない遠慮しない！うりうり～！」
「うああ～」
　楽しそうだな。
「そらよ」
「痛っ?!な、なんで向こう脛を蹴られたんでござるか?!」
「なんか、ムカついて」
「酷いでござる！」

大体にしてありえねえんだよなぁ。
どう言う教育をしたらこんな変な人間が出来上がるんだ。
「ござる口調の人間ってイラつかない？」
「これはキャラ作りみたいなもんでござるよ。忍者アピールでござる」
なんでまたそんなこと……。
「黒井鎮守府の面子はキャラが濃いですが故。モブキャラにはなりとうないのでござるー」
下らないこと気にしてる。
そこら辺は俺の遺伝だろうか。
「でも実際、マジで忍者でござるからな。隠密暗殺情報収集なんでもござれの忍びでござるよー」
「本当ー？ちゃんと修行してるー？」
川内が尋ねる。
「勿論でござるよ！拙者、ナルトを読んで育ったので、友情努力勝利の三点はしっかりと押さえてあるでござる！」
エセ忍者じゃねーか。
「尊敬する人はハットリくんでござる」
エセ忍者じゃねーか。
「所構わず現れて他の忍者をスレイしたりは？」
「しないでござるよ、そんな怖いこと！拙者、優しい忍者でござる！」
優しい忍者とは。
なんて言うか、行動の一つ一つがカンにさわる野郎だなー。
「趣味はそこらの観光客に忍術を披露して忍者の存在を認知させることでござる」
馬鹿だこいつ。
「で？実際どれくらいだ……？」
瞳を使って見る。
……嘘だろ、神通の子供と同じくらい強い？
「お前は……」
「……ふふ、修行は欠かさないのでござるよ」

なるほど、ふざけているのは、相手を油断させるための手段の一つか。
そう考えると、できるな、こいつ。
「ねえ、○○？母上は好き？」
「え？まあ、はい、好きでござるが……、面と向かって言うのは恥ずかしいでござるな」
照れんなや、気色悪い。
「じゃあ、父上は？」
「好きでござるが、それを伝えると、冷たい目で、『気持ち悪いわー、男に好きとか言われたくないわー』とか言われるので……」
「提督酷い！」
いや、だって、息子だし……。
実際に息子がいたら割と塩対応になると思うよ。
「まあでも、何だかんだ言って、役立つことを教えてくれたり、遊びに連れて行ったりはしてくれるでござるし。父上殿も割と優しいでござるよ」
「そうなんだ！」
いや、俺はそんなことしねーし。……子供ができたら丸くなるってことか？はー、嫌だねえ。
「いや、そんなことないぞ。俺の息子とか、事故か何かでぽっくり逝って欲しいくらいに思ってるぞ」
「ははは、であれば、子供のうちに縊り殺しているでしょうに。貴方はそう言うお人だ。殺しくらいで心は動かないでござろう」
それは、そうだが。
「父上殿は父上殿なりに、拙者のことを愛しておられる。拙者は幸せ者でござるよ」
……チッ。
べ、別に、愛してなんかいねーよ。

《ダイブ終了》

×××××××××××××
「俺は、別に、子供を愛したりなんかしないさ」
「そうですか？提督は愛情に溢れた人間だと思いますが」
「俺の愛は女性にだけ向けられるんだよ、それも、美人にね」
「なら、次は提督好みの美人とのシミュレーション！行ってみましょうか！」
「ああ、はいはい、逝きますよー」
×××
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×××
×××
「英国紳士の○○でーす！」
あー、はいはい。
「金剛」
「大正解デース！」
十代後半、肩にかかるくらいの茶色の長髪を編んでいる。紳士的なジャケットにシルクハット。手元には紅茶。それと英字新聞。
顔立ちは銀河で英雄の伝説を紡げそうな凛々しい顔。柔らかな微笑みを浮かべている。
「ティータイムにしましょう、マミィ、ダディ」
「イエース！」
「まあ、良いさ……」
慣れた手つきで紅茶を淹れて、どこからかスコーンを取り出す息子カッコカリ。
「さ、いただきましょうか」
「ああ……」
紅茶を一口。
……ほう、美味いな。中々のレベルだ。
「うん、上々デース！」
金剛も上機嫌だ。
「はは、ですが、まだまだダディには敵いませんから」

そりゃあな。
ふう、一服して。
「で？」
「はい？」
「お前は今、何をやってるんだ？」
「はい、ロンドンのグラッセンヘラーカレッジで大学生を」
成る程な。
「学科は？」
「考古学です」
俺と同じか。
「研究室、まさか、レイトン教授んとことか言うなよ」
「そのまさか、ですよ」
成る程な。
「経歴パクるんじゃねーよ」
「はは、いえ、ダディが学んだことを僕も学びたいと思ったので」
ふーん。
「じゃあ、旅をしな。俺が学んだことは学校よりも旅の中での方が多い」
「ええ、勿論ですとも。こうして、大学の長期休暇の折には、諸国を旅しているのです。今は、たまたま帰郷していまして」
「そんじゃとっとと消えちまいな、ここは俺と金剛の愛の巣だ」
「て、提督ー！ちょっと酷いデース！優しくしてあげて下サーイ！」
「冷たいですね……」
ちょっとショックを受ける息子カッコカリ。
「人恋しけりゃ女でも買えよ。俺んとこに来るんじゃねー」
「そんなことを言わずに、抱きしめるくらいはしてくれても良いじゃないですか」
「はっ、嫌だね」
「よしよし、私が抱きしめちゃいマース！」
金剛がフォロー。
「マミィ……。嬉しいです、貴女は優しいお人だ」

「おーっとー？マザコンかなー？」
　煽る俺。
「い、いえ、マミィのことは好きですが、決してマザコンなどでは……！」
「女受け悪いぞ」
「女性にモテるかどうかで物事を考えることはありませんから！」
　少し怒ったような顔をする息子カッコカリ。
「全く、どうして貴方は意地悪なのですか？息子である僕をしっかりと愛してくれても良いじゃないですか」
「嫌どす」
「はぁ、貴方と言う人は……。まあ、ですが、学費や生活費だったりは全部出してくれますし、それを愛情だと思えば……」
　それは親としての義務感でやってるだけだから。
「子供の頃はよく親子皆んなで遊びに行ったり、料理を振舞ったりしてくれたと言うのに！最近の貴方は些か冷たい！」
「男ってのは下の毛が生えたら大人なんじゃい。てめーのことはてめーで面倒見やがれ。甘えんな」
「あ、貴方が何と言おうと、僕は貴方が好きだし、尊敬しています！」
「おいおい、ファザコンか、ホモか？」
　よろしくないねー。
「もう少し、構ってくれても、良いじゃないですか……」
「寝言は寝て言え」
「辛辣？!!」
×
×
《ダイブ終了》
×
×
×

て下サーイ」
「おう考えておくよ」
考えるとは言ってない。

２６６話　未来へダイブ　その８

「誰かなー？次は誰かなー？」
「明石、バラエティ番組のノリでやっても俺は辛いぞ」
「じゃかじゃん！嵐ちゃんです！」
「よろしくな！司令！」
　だーかーらー。
「駆逐艦じゃん。ロリじゃん。駄目じゃん」
「まあまあ！」
「いくぜ！せーの！」
　はいはい、せーの。
「「フルダイブ!!」」
×
×
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×
×
×
×
「おっ、父さん、母さん」
　現れたのは、男装の女。
　十代後半。身長は１７０後半くらいだろうか。赤の髪を適当な長さに切り揃え、ピンで留めてある。キリッとした眉はまるで男のようだ。
　服装も、カーゴパンツにノースリーブのシャツ、そしてバックパックと、旅人の装いだ。
「君は……、何をやってるの？」
「んー？冒険家、かな」
「冒険家……？」
　聞くついでに胸に触る。
「サラシか」
「あ、あのな、いくら男装してるとは言え、俺は女だぜ？いきなり胸を触るか普通？」
「娘だし、良いかなーって」

「良くないわッ！」
「どげふん」
　殴られた。
「こらこら、喧嘩するなよー」
　にこやかな笑顔を見せる嵐。
「つーか、何で男装してんの？」
「んー、冒険の途中、女だと、変なのに付きまとわれたり、女だからって舐められたり、兎に角不都合があったからな」
　まあ、なあ。
　女で旅はキツいんじゃない？
「中東とかでは車の運転もできやしないからな」
　確か、あっちでは、女性は車の運転を禁じられているとか。
「そもそも、何故に冒険家？」
「うん？そりゃ、旅をする父さんの背中を見て育ったからじゃね？」
　え？俺のせい？
「旅をする父さんの横顔、本当に楽しそうだったから……、俺も真似したいと思って」
「成る程な、確かに、旅してる司令は嬉しそうだ」
　そりゃあ、ねえ。
　旅は生き甲斐だ、人生そのものだ。
「じゃあ旅人で良いじゃん」
「んー、父さんと全く同じってのも芸がないし、どちらかと言うと俺は、人がいないところの方に多く行くから、冒険家が正しいかなって」
　ふーん。
　そうかい、そうかい。
「なあなあ！」
　おっ、どうした嵐。嵐が娘カッコカリに尋ねる。
「お前、俺のこと好きか？」
「へ？そりゃ、好きだぜ？」
「そっか！」
　嬉しそうな嵐。

「母さんには正義の心得を教わったからな！俺はどこでも正義を貫いてるぜ！」
「司令！可愛いぞこいつ！」
　ポンポンと娘カッコカリの背中を叩く嵐。頭を撫でようにも届かないんだな。娘カッコカリの方が身長が高い。
「そ、そう？良かったね」
「じゃあ、司令のことは好きか？」
「もちろん、大好きだ！父さんは俺の目標だからな！」
　そう、か。
「カッコよくて、強くて、賢くて、自慢の父親なんだ！」
　んんーん。
　重いなー。
「俺はそんな凄い存在じゃない」
「俺にとっては凄い存在さ、尊敬してる」
「煽てるなよ」
「本心さ、あんたより凄い旅人には会ったことがない」
　うーん。
「そうか、なら、良いさ。ただ、怪我とかしないようにな」
「あ×あ！」
×
《ダイブ終了》
×
×
×
「お×おー、中々楽しいじゃねえか！」
「俺は何一つ楽しくないけど」
「そ×、そうなのか?!司令は楽しくなかったのか？」
「ま×あ見たくないもの延々と見せられてる訳だしね」
「そっか……、ごめんな。俺、司令との子供が見られるって聞いて凄く嬉しくてさ。でも、司令の気持ち、考えてなかったみたいだ。本当にごめん……」
　ああっ、あー、いやー。

「い、いや、嵐は悪くないさ。俺も少しは楽しめたし！気に病まないでくれ！」
「そ、そうか？なら、良いんだが」
純真な嵐に酷いことは言えない。
ただ、これをセッティングした明石。
君は許さないからな？
×さあ、次だ。
×
×
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×
×
×
「萩風か……」
×手を振る萩風。
×そして、その隣にコーヒーを啜る青年。
×いつか。
歳の頃は十代後半。まず目につくのはソフト帽。それにトレンチコート。顔はキリッとしていて大人っぽい。
ってか、こりゃ、なんだ。
あからさまに……。
「探偵？」
「そうだ。新台探偵事務所所長、〇〇だ」
ハードボイルドな感じで笑う息子カッコカリ。
ほーん。
探偵か。俺も探偵やっていた頃があったぞ。読心できるからトリックもクソも無かったが。まあ、依頼は殆ど浮気調査とか猫探しとかだったがね。
殺人とかそう言う面白いのは江戸川君とか金田一君とか弥子ちゃんが解決してた。ドーパント関係は左君が。
「ええと、確認するけど、息子？」
「フッ、息子の顔を忘れたか親父」
「うんまあ、忘れたいよね」

とても十代後半には見えないハードボイルドさ。若造の分際で……。
あ、煙草吸ってやがる。
「……ふぅ」
「!、駄目よ!健康に悪いわ!」
が、萩風に取り上げられる。
「ああ、お袋がいたか……。参った、お袋の前じゃ一服できないな。まあ、たまの禁煙も悪くない、か」
ニヤリと笑う息子カッコカリ。
なんだこいつ、ハードボイルドだぞ。
「趣味は?」
「特に無いが、煙草と酒くらいか。……まあ、お袋には叱られちまうが」
「駄目ですよ、身体は大事にしないと!」
あー、萩風は俺にも、飲酒を止めようとしてくるからなー。
居酒屋鳳翔に現れては、飲んだくれ勢にお叱りの言葉を浴びせてくるから。
まあ、飲み過ぎる方が悪いんで何にも言えねえが。
「で?本当のところは?」
「……はぁ、俺は探偵だからな、嘘をつくのは専門外、か。……推理小説集めと日記さ」
あらかわいい。
「推理小説は実際の推理に役立つかと思って集めてみたら、のめり込んでしまった、と言うところか。日記は、あんたが書いているのを見て真似るようになった」
「尊敬する人は?」
「シャーロック・ホームズ、エルキュール・ポワロ、オーギュスト・デュパン、ネロ・ウルフ、ミス・マープル……、それと師匠達かね」
名探偵か。
「好きな酒は?」
「バーボンだな」

これまた狙いすましたかのようにハードボイルドォ。
因みに煙草はラッキーストライクだった。
俺？俺は基本吸わないよ？煙草臭いと女の子に嫌われるし。臭いとか言われたら立ち直れない。心が折れる。どうしてもって時は葉巻とか水煙草。
艦娘も基本的に吸わないみたいだが、煙草の匂いがする女の子もセクシーだと零したら何人か吸ってみた子もいるみたいだけど。
扶桑辺りがキセルを吸う姿は中々様になっていて良かった。
「……女の前で、他の女のことを考えるのはやめたらどうだ？」
「ん？読めるのか」
心を。
「心理学＜８０＞だ、大体は分かる」
「そうか」
技能を引き継いだか。
「誰から教わった？」
「フッ、忘れたのか？あんただよ、親父」
俺かぁ。
自分の息子にスキルを教える羽目になるのか。うわ嫌だなめんどくせえ。
「推理は金田一さんと工藤さん、交渉は桂木さん、その他諸々はあんたと左さんから教わったのさ。つまりあんたは俺の師匠の一人って訳さ」
おー、すげえなそりゃ。ハイブリッド名探偵だ。
「探偵事務所はどこにある？」
「サンフランシスコだ」
「……マルタの鷹か」
「……はて、何のことやら」
こいつ……、ただの推理小説オタクの可能性が……？

《ダイブ終了》

×××××××××

「何だあいつ」

「どうしました、提督」

「明石、君はこれから説教だからな」

「何故?!」

２６７話　未来へダイブ　その９

「今回で最後だからな」
「はい、それはもう！」
　ぷんすか！
　流石の俺もぷんすかだ。お怒りだ。
　もうこれ以上は心労は要らない。
×
×
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×
×
×
×
「ちょ～っす」
「んん？お、おおう」
　木の上を見上げると。
　枝の上でナマケモノのようにダレている少年が。
　歳は十代前半、黒眼黒髪の日本人風の美少年だ。長い黒髪は後ろで一本のおさげになっている。顔つきはおっとりとしていて、事実、おっとりとした雰囲気。瞳は半目で眠たげな表情。服装は深緑の半袖シャツに黒の短いズボン。
「そらよ」
「おわあ」
　木を蹴ってやる。
　すると、バランスを崩した息子カッコカリは、軽やかに片脚を木の枝に引っ掛け、落下を防いだ。
「酷いよー」
「落ちろ」
「あひん」
　頭から落ちる、が。
「っと」
　猫のように身体を捻り、体制を入れ替えて着地する。
「何でこんなことするの？」

「俺の息子とかこの世から抹殺したい」
「ひえー、助けてー、こーろーさーれーるー」
丁度現れた北上に抱きつく息子カッコカリ。
「おーよしよし、可哀想にねえ」
にへらとわらって息子カッコカリを受け止める北上。
さあてね……。
「取り敢えず……、北上から離れろ。殺すぞ」
割とマジな殺意を滲ませて一言。
「は、離れまーす」
冷や汗をかいて離れる息子カッコカリ。
「か、母さん、酷いよあの人、実の息子に本気の殺気飛ばしてきた」
「そんなもんだよー」
「そ、そんなもんかなー？」
殺意マシマシ。
「てめーは何だ」
「何、って、父さんの息子だけど……。名前は○○だよ」
「趣味」
「うーん、昼寝？」
「特技」
「どこでも寝られることかな～」
「好物」
「えーと、チョコレート」
「尊敬する人は？」
「え、え？何これ、面接？」
「尊敬する人は？」
「わ、分かったよ、答えるよ。……うーん、特にいないけど、父さんって答えた方が良い？」
「遠慮されるのもムカつくんで良いです」
「一々辛辣……」
「座右の銘は？」
「のんべんだらり」

「将来の夢は？」
「えー、ニート」
　よし。
「じゃあ死のうか」
「じゃあって何さ?!」
「どうどう、提督、どうどう」
　俺の肩を押さえる北上。
「ふしゅるるる……、殺すぅ、殺しきる……」
「やめてー」
「提督ー、駄目だよー？自分の息子なんだから、愛してあげてー」
「俺にはできない」
　断言。
「おおう、言い切るねえ」
「今すぐにでもぶち殺したい」
「……あの、さ。僕は、父さんのこと、結構好きなんだけど。そう言う言い方をされるのは、ちょっと、ショックだなー」
「いや、そう言うのいいんで」
「……うう」
「……流石に酷いよ、提督」
　北上に苦言を呈される俺。
「しかしな」
「自分の子供を何だと思ってるの？」
「負の遺産」
「……」
　言外に非難される俺。
「いや、よく考えて欲しい。ニートになりたいとか抜かす子供を可愛がれるだろうか」
「それでも、私達の子供なんだよ？もっと愛してあげてよ」
　参ったな、俺の愛は女の子にしか向けられないのだ。
「いやーキツイっす」
「……○○、提督は面倒を見てくれた？」

「あ、うん。面倒は見てくれたよ。母さんの負担にならないようにって」
「……つまり、私のためであって、○○のためではない？」
　そうだね。育児をするなら、北上の負担にならないように協力するだろうね。
　北上のために。
「……それでも、僕は、父さんが好きかな」
「○○……」
「俺は別に」
「提督はもう……」
×
《ダイブ終了》
×
×
「どうでした？」
「イライラした」
「またまたぁ～」
　殺意に満ちた。
「さ、次でラストですよー」
「よーし」
　やっと終わりかー。
　地獄が終わる。
×
《遺伝情報確認、フルダイブ》
×
×
「チャオ！パードレ」
　イタリア語……。
「可愛い息子の帰郷だぜー？酒奢ってくれよー」
　ファーック。気安く肩組んできやがった。
「隠してんだろ～？ロマネコンティとか！出せよ～」

……十代後半。銀髪。髪は無造作にかき上げられている。鼻が高く彫りが深い、西洋人風の顔。優男って顔だ。
身体は、背が高く、よく鍛えられている。この筋肉の付き方は暴力に生きる人間のそれだ。
そして重心の傾きから、懐に拳銃を隠し持っていることが分かる。
服装は、灰色のスーツにハット。
……マフィアか。
問題は誰の子なのかだが……。
「はぁーい、ポーラですよぉ」
んー、成る程ー。
「ああ、マードレ！」
「○○～！」
抱き合う息子カッコカリとポーラ。
「よしよし～」
「マードレ、会えて嬉しいよ」
「私も嬉しいですよぉ～」
「愛してるよ、マードレ……」
引き剥がす。
「おや、嫉妬かな？」
殴る。
「顔はやめてくれ?!」
さて。
「お仕事は何をしてるんですか～？」
「え？ま、まあ、金融関係だったり、不動産関係だったり？」
マフィアなんだろ、分かるわ。
俺がどれだけ裏社会の人間と関わり合いになってきたと思ってんだ？一眼見りゃ分かる。
「麻薬は」
「ウチ、薬はやらないんでね」
「そもそもどこのマフィアだ」
「イタリアさ、ネアポリスはいいところだ」

ははーん？
「パッショーネだな？」
「あれ？パードレには言っておいた筈だけど」
あ、そうなんだ。
「まあ、やってることはカジノの仕切りとみかじめ料集めくらいですよ。最近は個人的に株が儲かってるね」
そんなもんか。
「じゃあやっぱりスタンド使いなのか？」
「ええ、そうです。僕はスタンド使いだ」
成る程。
「んー？悪いことやってるんですか～？」
「あーあー、マードレは何も気にしなくて良いんだよー！」
ポーラには話してない、と。
「あー、仕事の話は良いだろ？飲もうよ！」
「そうですね～！私、自分の子供とお酒を飲むの楽しみにしてたんです～！」
「で？スタンドは？出してみろ」
「はぁ？まあ、良いけども」
すると、息子カッコカリから、力あるヴィジョンが。
金色の人型実体。機械感がある。
「名前は、ニルヴァーナだ」
ふーん、近距離パワー型。
「能力は振動だ」
振動、また応用の効きそうな……。
「さあ、これ以上話すことはない。それより飲もうじゃないか」
スタンド使いは自分の能力について詳しく話すのを嫌う、か。
……と、一杯やって。
「私の子供にしては賢そうですね～」
はは、どの辺が？
「ああ、それはパードレのおかげさ。勉強はパードレが教えてくれた」
「成る程～」

「パードレには色々教わったよ。他にも、審美眼とか、ピアノの弾き方とか、何でもね」
「は～、やっぱり提督は凄いですね～。私がお酒飲んでる間にそんなことを」
「マードレからは優しい心を教えてもらったさ！」
　んっんー。
　マザコンかぁ……。
「マードレは世界で一番の母親だよ！心から愛しているからね！」
「んふー、可愛いですね～」
　良いんだ……。
　まあ、ポーラが良いならそれで良いけど。
×
×
×
《ダイブ終了》
×
×
×
「終わり、か」
「はい、お疲れ様です」
「今回の件で大分ショックを受けた」
「はい」
「ちょっと旅に出る」
「はあ」
　駄目だ駄目だ、旅に出よう。
　もう、旅に、出よう。

２６８話　お誕生日おめでとう

何だろうか。
今日は朝から騒々しいな。
忙しい忙しいと呟きながら、あちこちを行ったり来たりする鳳翔に声をかける。
「どうしたの、そんなに慌てて」
「何を言ってるんですか！今日はパーティですよ?!」
パーティ？
……何の？
「すまない、思いつかないな、何のパーティだ？」
「そんなの決まってます！」
何だ？
「旦那様のお誕生日です!!!」
あ？
あー。
もうそんな時期か。

子供の頃ならまだしも、大人になると自分の誕生日とかどうでもよくなるよね。
むしろ、誰も祝ってくれない訳だし、また一つ無駄に歳をとってしまった、みたいな後悔が……、とか皆んな言う。
うち？
うちはそんなことないぞー？
皆んなの誕生日……、一応進水日を誕生日と暫定的に割り当てて祝ってるんだけどね。
皆んなの誕生日はしっかり祝ってるぞー。
守子ちゃんの誕生日も聞き出して祝った。
妹の誕生日もプレゼントとケーキを送りつけた。
まあ、と言う訳で、黒井鎮守府は毎日のように誕生日パーティやら何やらで賑やかだ。

「にしても、俺の誕生日か。別に祝わなくても良いのに」
「何を仰るのですか！旦那様のご誕生日ほど重要な行事はありませんよ！」
いや、もっとこう、色々あるだろ。
謝肉祭とかクリスマスとかさ。
俺の誕生日なんて全然特別な日じゃねえよ。
大体にして何回めだと思ってるんだ？
……それに、あらゆる世界を行き来した俺は、自分の年齢が曖昧だ。
本当に今日歳をとる事になるのか、分からない。
そもそも、今現在の年齢も謎。
この世界での誕生日を参照すれば、三、四十ごによごごによ歳くらいだが、ここは時間軸が違うノースティリスやロスリック、その他諸々の別世界で何十年も過ごした記憶がある。
それを加味すれば？？？？？歳くらいは……。
でもまだ死神来てないし……。
とかなんとか考えてると。
「それでは、私はパーティの準備がありますから」
鳳翔はパタパタと駆け出して行った。
「うーむ」
ま、良いか、と。
思考を手放す。
まあほら、祝われる分には良いじゃんか。
何も問題はないし。

「お誕生日おめでとうございます、プレゼントに子供を作りましょう」
「待て待て待て」
問題あったわ。
「取り敢えず飲んで下さい。飲んで意識を失って下さい」
「何する気だ」
「レイプさせていただきます」
「言うねえ」

え？何これ、祝われてるよね？
俺、祝われてるよね？
「これって俺、祝われてるの？」
「もちろんです」
「でもレイプされんの？」
「だからこそレイプします」
あっはっは、訳分かんなーい。
「子宝に恵まれれば誰だって嬉しいものでしょう」
「俺の気持ち考えようか？」
「気持ち良くしますよ？」
そうじゃなーい。
「物理的に気持ち良くしてどうするよ。精神の話だ」
「？、提督は私を抱きたくないので？」
「そんなことないよー、抱きたいよー、許されるなら今すぐシルクのベッドで朝まで愛し合いたいよー、でもね、そうじゃないんだよ大淀ー」
「？、私は無茶苦茶に乱暴してもらう方が好きですね」
「うん、俺は君の性癖の話をした覚えはないね」
「無理矢理にされる方が、強く求めていただけていると感じ、より気分が高まります」
だからね？だからね？
「あの、これ、大丈夫？日本語通じてる？」
「はい」
「それで、ね？話を変えるけどさ」
「もう既に濡れているので前戯は要りませんよ？」
「話を！変える！けどさ！」
こぉんの野郎！
「こんなに盛大に祝ってくれて嬉しいよ、ありがとう」
「いえ、他でもない提督のお誕生日ですから」
我らが黒井鎮守府のテンションは「お？ナザリックかな？」って感じ。

つまりいつでも絶好調。
お願いだから敵対者を殺すのはやめてくれよ。
「それでも、本当に嬉しいさ。……俺、親もアレだし、旅人だし、誰かに誕生日をしっかりと祝ってもらったのなんて子供の頃くらいでさ」
「提督……」
ほろり、と涙をこぼす大淀。
「この歳になってこんな風に祝ってもらえるのは、中々ないよ。だから、ありがとう」
「……そのように喜んでいただけて、こちらも喜ばしいです」
感謝するぜ、君達と出会えたこれまでの全てに。
「で、『かんむすみんなひとりじめっ！～俺専用の孕ませオナホ～』計画の話に戻りますが」
「なにその頭悪いエロゲみたいな」
ｓｅａｌ臭。
「いえ、今回の提督のお誕生日の際に立てた計画です」
「そんな馬鹿みたいな計画立てちゃったの？」
「頭を捻りました」
もっと別のところに脳みそ使おう？
「さあ、どんどん飲んで下さいね。そしてＲ１８展開に持っていきましょう」
「これ以上エロいことすると運営になんて言われるか」
「よくわかりませんが彼岸島とかではしょっちゅうそう言う描写ありますし大丈夫でしょう」
まあ、青年誌レベルなら許されそうではあるが。
「取り敢えず台本を用意しました」
どれどれ。
『おい、メス犬！こんなに乳首を固くして何を考えているんだ？』
《乳首を抓る》
『あっ??すみません提督??』
『ご主人様だろ、メス犬が！』
《殴る》

『んああっ??ご主人様ぁ??』
『ここもこんなに濡らして……、この淫乱め！』
《下半身を触る》
『はいっ！大淀は淫乱なご主人様専用の肉便器ですぅ??』
《ここで無理矢理挿入》
『使ってやるからありがたく思えよ、メス犬!!』
『ありがとうございますぅ??』
『この薄汚いメス犬が！オナホま◯こ使ってやるだけありがたいと思えっ!!』
『ああっ、ご主人様ぁ??ご主人様ぁ??』
……。
「大淀、正気か？」
「至って正気です」
なんだ、これは、なんだ。
なん、なんだ。
「俺はこんな酷いこと言わないよ」
飛影はそんなこと言わない。
「是非お願いします」
「絶対にこんな酷い言い草はしない」
「いや、もう、フリだけでいいんで。頼みますから一回やって下さい」
「何が嬉しくて君らの奇特な変態プレイに付き合わなきゃならないんだ！」
「お願いしますご主人様」
「誰がご主人様だッ!!!」
あれ？おかしいな、俺これ、誕生日だよな？
祝われてんだよな？
「秋雲ちゃん監修のイメージプレイ台本が艦娘の人数分ちゃんと用意されてるんですよ?!」
「なんでそんなことしちゃったの?!」
「提督のプレゼントに……」
「ごめん要らない」

「ですが、通常のセッ○スでは得られない快感を……」
「要らないから」
「そう、ですか……。ではこの台本は勿体無いので秋雲ちゃんにエロ同人誌にしてもらいましょう」
「なんでそうなる」
「この私のエロ妄想が全国に広がると思うと、興奮しますね！」
「はぁー」
大淀は本当にアレだな。
アレ、アレ……、ああ、酒で思考回路がまとまんねえ。
実はさっきから神便鬼毒酒を飲まされていた俺。
「ああ、そろそろ朦朧としてきましたか？では脱がせますね」
「あ、おい、やめろ」
あー。
脱がされた。
全裸にされた。
まただよ（笑）。
あー、ふらふらする。
あー。
あ、なんか下半身触られてんな。
……。
いや、駄目でしょ？
「こら、触んな」
「では咥えましょうか？」
よく見れば周りに艦娘達が。
囲まれてる？
あれ？
俺これ、今から輪姦される？
「駄目だ駄目だ！散れ！」
「遠慮なさらずに」
更に酒を飲ませてくる大淀。
「ごくっ、ごくっ、ぷはっ」

あー？
うー？
あ痛。
「齧ったな？」
「美味しいです！」
赤城に齧られた。
傷口を舐められてる。
「ぐ、やめろ」
逃げなくては。
しかし後ろから……、恐らくは戦艦だろう。物凄い力で押さえつけられる。
「まあ座れよ、提督」
やべえ、意識、が……。

……「わあ、相変わらず沢山出ますねえ」
……「デカイな、こんなものが本当に挿入るのだろうか」
……「栗の花のような匂いって言う例えも分かりませんね。言うなれば男の匂いですかね」
……「骨も美味しいです」
……「新しいナノマシン入れましょうか」
……「僕達の血を輸血するよ。ああ、ああ、提督の血が僕達の血と混ざり合って……??」

２６９話　黒井鎮守府修学旅行ハワイ編　前編

あー。
「旅に出てぇ……」
旅に、出てぇなぁ……。
「しょうがないですねぇ」
大淀！
「二泊三日までですよ」
「やったぁぁぁぁぁ!!!!」
「あと、艦娘も何人か連れて行って下さい」
「ぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
なっんっでっだぁ?!!!!!!!!
「ヤダー！一人旅が良いーーー!!」
「そうですね、艦娘達の慰安旅行を兼ねて、何組かに分かれて旅行しましょうか」
「ヤダーーー!!」
「まあ、修学旅行みたいなものです。夏で旅行シーズンでありますしね。提督には引率をお願いしますね」
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ!!!!!!」
駄々をこねる。
とても????歳の成人男性とは思えない醜態を晒す。
「お願いしますね」
「やだぁ……。やだよう……」
「お願いしますね」
「ヤダーーーーー!!やだもん!!一人旅するもん!!」
「お願いしますね」
「ゴリ押さないでぇ?!」
「ああ、いえ、提督は好きに行動して良いですよ。私達はそれについて行くだけなので」
言ったなこの野郎!!
「連れてきゃ良いんだろ!!!（オルガ並感）」

転移!!!
……あれ？
「何だこの、腕輪は」
「転移防止装備です」
外れ、ねえ?!呪われてる?!いや、堕落してる!!!
くそぅ、くそぅ！
ラスベガスでストリップ観ながらがぶがぶ酒飲んで、パリでキャバレー観ながらがぶがぶ酒飲んで、バンコクでゴーゴーバー観ながらがぶがぶ酒飲んで風俗巡りする計画がおじゃんだぁぁぁぁぁ!!!!
ドイツやネバダのＦＫＫとかぁぁぁ!!!オランダで若い娘抱いたりとかぁぁぁ!!!
あああああああああ!!!!!
酒、ギャンブル、セッ◯ス三点揃ってこそ人生なのではないだろうか？
おかしいな、これ、何でだ？
人生返して。

「はぁー、しゃあない。これを機にプライベートジェットでも買うかー」
「そんなお金はどこから……、いえ、そう言えば黒井鎮守府の年商は???億円……。プライベートジェットの一機や二機、買い付けることも可能ですね」
一部上場企業並に稼いでる。
深海棲艦の出現によって死んだ海上貿易の利権の多くを握ったからな。
こんだけ稼いでると大本営も怖くねえ。お国も黙り込むぜェ。
「鎮守府の活動資金って名目で溜まってる金も、使い所がないしな」
工廠組の活動だったり、食費や光熱費、艦娘達の給料だったりに使われているが、それでも余る。
と言う訳で鎮守府の活動資金から数百億するビジネスジェットを購入。

そして届いたジェット機を（頼んでいないが）工廠組が改造して。
「さて、行くか」
「……いや、ちょっと待って下さい。ジェット機の操縦は」
「俺がやる」
「その片手の酒瓶は」
「タンカレー」
美味しい。
「……まあ、良いでしょう」
良いのか。
まあ、まさか誰もジンを飲みながら航空機を運転するとは思うまい。
それじゃあ、行くか。

わいわいと集まった複数人の艦娘達が魔改造ジェット機に乗り込む。
何十人も。
はは、これじゃツアーだ。
ははははは。
はぁ。
因みに、行き先はハワイだ。駆逐艦がいるのにベガスやメキシコなんて行けない。
いや、並の誘拐犯やロリコン野郎なら簡単に撃退できるだろうけど、ああ言う都市に子供を連れて行く訳にはいかない。
それに、ロンドンやパリで芸術鑑賞って訳にもいかないだろ。
お子様達は大人しくワイキキビーチで水遊びでもしてろってことさＨＡＨＡＨＡ。
そのお子様達の引率が俺なんですけどね。
畜生が。
《はーい、皆んなシートベルトは締めたかなー？》
アナウンスを流す。
「「「はーい!!」」」

んー、良いお返事。
《いや本当はね、ベガスとかに行きたかったんだけどね……。君らいるからハワイになったよ。まあ、ハワイも悪くはないから、楽しんでくると良いよ》
「「「はい」」」
はいじゃないが。
《あらかじめ言っておくけど、知らない人には着いていかない、チップを忘れない、耳に硬貨を入れない、俺がナンパをしても許すとか、色々なことをしっかりと守るように》
「「「は？」」」
は？じゃないが。
《では出発します》
「「「わーい！」」」

「ねえねえ司令官！運転するとこ見てて良い？」
「ああ、構わないが」
やぐされた俺の元に舞い降りた天使の名は雷。
可愛い可愛いＭｙ　ｓｗｅｅｔ　ｈｏｎｅｙだ。
「何飲んでるの？」
「タンカレー」
「ちょっとちょうだいね……、ってこれお酒じゃない！駄目よ！」
あー、取り上げられた。
しゃあない、音楽でも流すか。
今回は、と。
レッドツェッペリンの気分だ。
「ろんりろんりろんりー!!!」
「上手ね、司令官！」
いつのまにか隣に座っていた雷。
「運転なんか見てて楽しいか？」
「ええ、とっても！」
そうかい。

「にしてもハワイね。少々刺激が足りなくて俺は悲しいよ」
「そうなの？でも、色々なものがあるのよ、アメリカって！」
　知ってるよ、嫌ってほど旅したから。
「鉄砲も撃てるのよ！」
「撃ちたかったなら、うちで撃てば……、ってか、大砲ぶっ放してんのに鉄砲如き……」
「後ね、海が綺麗！」
「日本の海だって悪くないだろ」
「むー」
　少しむくれる雷。
「分かった分かった、悪かったよ」
　頭を撫でてやる。

「さあ着いた」
「むにゃ、おはよう司令官！」
　隣で寝ていた雷を起こす。
　さあ、行こうか。
「暑いわ……！」
　そうか？こんなもんだろ。
　無事入国審査を抜けてと。
　ホテルに荷物を預けて……。
　……荷物を預けるとか、普段やらないからな。ホテルとかも予約しないで適当な安宿に泊まるし。
　さて。
「さあ、好きに遊んでこーい。悪いことは極力するなよー」
「「「はーい!!」」」
「はい解散」
　解散宣言とともに俺は装備変更。
　水着に赤のアロハシャツと言うワイキキ装備に。
　そのまま海へ。
「イイイヤッホオオオオオ!!!!」

アイテム欄からサーフボードを取り出し、波に乗る……!!
旅に出れなかったストレスからか、俺の波乗りは荒々しかった。
『あ、あんた、名の知られたサーファーなんだろ？なんて呼ばれてたんだい？』
その凄まじい波乗りっぷりから、現地民に尋ねられる。
『……カリフォルニアドリーム』
俺がカッコ良く答える。
「おー、凄え！俺もっ！」
天龍か……。
チッ、これでナンパできなくなったな。
だが諦めない。
サーフィンに夢中になっている天龍を放置して、ビーチへ。
おっ、あの子可愛い、声かけよう。
『やあ、お嬢さん』
『こんにちは、お兄さん』
『観光かい？』
『ええ、北米から』
『良いね、素敵だ』
『口説いてるの？』
『さあ、どうかな？』
距離を詰める。
『でも、あー、彼女さんが怒ってるわよ』
「え？」
「うふふ、提督ー？」
龍田、貴様……!!
『貴方とってもハンサムだけど、浮気は良くないと思うわ。じゃあね』
「あっ、待っ」
「何を、やっているんですかー？」
「チッ、ナンパだよ」
「私が許すとでもー？」
うるさいな、何でナンパするのに許可取らなきゃならない。

「それ逃げろっ！」
「うふふ、待ちなさいー！」
『おいおい、お嬢さん、４４マグナムを片手で撃てると思ってんのか？やめときな、両手で持つんだ』
「このおじさんなんて言ってるの響？」
「銃を片手で撃つな、だってさ」
「なーんだ、大丈夫よ！暁はもっと重い主砲を撃ったことあるんだから！」
『馬鹿、おまっ、いや、ブレてねえ?!』
「へー、意外と当てられるものだね」
「当たり前よ！いつもは動く的に撃ってるんだから、止まった的に当てられないなんてことはないわ！」
『しかも中央に命中だと?!お嬢さん何者だ?!』
「……なんて？」
「あれだね、暁が思いの外ちゃんと当てたからびっくりしてるみたいだ」
「何よー！失礼しちゃうんだから！」
「私も撃ってみようか。えい」
『あ、あり得ねえ！こんな子供が片手で１２ゲージを?!』
ガンクラブでは暁と響がおじさんや観光客の度肝を抜いていた。
「こらこら」
「あ、司令官！」
「司令官も撃ってみてよ」
……まあ、良いけど。
「おらよ」
ばんばんと銃声がなる。
「「……あれ？」」
勿論、一発も当たらない。
「言ってなかったっけ。俺、銃器スキルは持ってない」
戦術スキルもだ。

「いや、これはちょっと……」
「なんでもできるとばかり思ってたけど」
　そんなこと言われてもね。
『なんでぇ、お嬢さん達は凄えのに、こっちの兄ちゃんはてんで大したことねえ』
　うるさいな、余計なお世話だよ。
　俺はエレガントでスマートなナイスガイだから銃なんて野蛮なものは使わないのだ。

「んー、良いねえ」
　ハワイのストリップからこんにちはー！旅人でち！
　夜だからねちかたないね。
「うう、提督～！」
　どうした阿武隈、そんなに赤くなって。
「何でこんなところに～！」
　こんなところ、ってのは酷いな。
「趣味だが？」
「うう～、提督は変態さんですぅ～！」
　はぁ？
　ストリップくらい好きに行かせてくれよ。
『やあ、君のダンス、最高にセクシーだね』
『チップありがとう、お兄さん！』
　パンツの紐にドル札を突っ込んでやる。
「うわわ、えっちです……」
「んで、何の用だ阿武隈」
　何で着いてきたの？
「提督が変な女の人に連れて行かれないか見張ろうと思って」
「なら安心しろ、アメリカではネバダ州以外じゃ売春は違法だ」
「そう、なんですか？」
　まあ、それで俺が合法的な風俗だけを利用しているとは一言も言ってないし、そもそもナンパするんだけど。

違法な売春もやった。
まあ、言わなきゃバレないからヘーキヘーキ。

「さあ、後は寝るだけか」
いつもの旅とは違い、それなりに上等なホテルだ。
なんなら最上級のホテルでも良かったが……、そういうところはマナーに厳しいからな。
はぁー、あーあ、一人旅なら今頃美女と一緒に気持ちいいことできたのになぁ。
まあ、良いか。
来てしまったものは仕方ない。
寝よう。
そして楽しもう。

２７０話　黒井鎮守府修学旅行ハワイ編　後編

『メニューのここからここまで下さい』
『朝っぱらから酔ってんのか兄ちゃん』
『俺は大食いなんだよ』
『はは、分かった、残すなよ？』
　と、軽いやり取りをしつつ。
「オムレツ、ロコモコ、エッグベネディクト、フレンチトースト、フルーツ……、朝から食べるねぇ」
　北上がサンドイッチを齧りながら俺の目の前に座る。
「適量だよこんなん」
　んー、流石アメリカ。量が多くて俺ハッピー。
「んー、結構美味しいねー」
　俺のフルーツをつまみ食いする北上。
「ハワイの飯は結構美味しいぞ」
　俺はハイペースで食料を消費していく。
「そうなんだ。ってか、結構日本語通じるねえ。流石は観光地」
「日本人も多いらしいしな」
　こーんな地価高いところによく住んでられるよなー。
　基本安宿か路上で寝るんで、地価が高いところに住む人の気持ちは分からんね。
　この青い空の下全てが俺の家なのだ。
「で、今日の予定は？」
「取り敢えずダイビング」
　あとスカイダイビングして乗馬して潜水艦にでも乗るか。
「潜るの？」
「潜るよー、海ん中はキレーだぞー」
　潜り過ぎると神話生物とかに遭遇するけど。
「ふーん、じゃあ、あたしも大井っちと一緒に行っていい？」
「いいぞ」
　さーて、潜りますかー。

軽巡とオアフ島にてダイビングだ。
「（スゲー！魚だ！提督！魚だ！）」
ノリノリの天龍。
水中故に何言ってるか分からん。
心理学＜８０＞で大体分かるが。
「（わー、熱帯魚って何でこんなにカラフルなのかねー）」
と、北上。
『それは、メスを惹きつける為だったり、同じ種類の仲間達を認識する為だったり、そもそも単純に保護色だったりと理由は様々だ』
「（……心の中に話しかけるの、どうやってんの？）」
そりゃあ脳内の瞳とか魔法とか。
「（毎回気になってるんだけどさ、作戦中とか提督の指示が心の中に響くと言うか……、聞こえてくるけど、テレパシー？）」
『大体合ってる』
テレパシーも使えない奴が提督やるか？
『あ、あと言っておくけど生き物やサンゴには触るなよー』
「「「（はーい）」」」
環境保護だ。
自然を壊してはならない。
自然環境とか文化遺産とか、そういうの大事にしていきたい。
人と自然に優しい世界征服を心がけています。
「（見て下さい司令官！サンゴですよウミガメですよ！可愛いですね！）」
ウキウキの長良。俺としては野生生物より君達の方が可愛いと思うのだが。
自然の神秘より女体の神秘の方が興味深いですなぁ。
ぴっちりとしたダイビングスーツがくっきりとボディラインを強調しとるやんけー！
「（ところでな、提督。いい加減突っ込んでいいか？）」
と木曾。

『何に？』
「（まず、な、ダイビングだと言うのにその装備は何だ？）」
む、海パン穿いてるんだが、悪いのか？
『安心してください、穿いてますよ』
「（いや、それは良いんだ、ダイビングスーツを着てないことは、まあいい。しかし、何故、シュノーケルを着けていないんだ！）」
『呼吸なんてしなくても一晩くらいは大丈夫でしょ』
そんな別に呼吸してないくらいで……。
なんてこたぁないでしょ。
「（息を止めてるのか？く、苦しくないのか？）」
『別に』
ちょっと息できないくらいでへばるようじゃ旅人やれないからね。
ハンター式水泳術で水の中でもなんのその。
ガノトトスは強かった。アタリハンテイ力学がね……。
「（水中メガネなしで見えるのか？）」
『見えてるよ』
水中なので目星にマイナス判定かかるけど。
でも、それでも目星＜７０＞はあるし、脳内の瞳もちょっと使ってる。
俺に見えないものはない。
「（まあ、なら、いいさ、いいんだ）」
？
変な木曾。

さあて、スカイダイビングだ。
『待ちなよ、旦那――！やめた方がいい！そんなに酔ってちゃ……』
うん？
飲んではいるが酔ってはいないぞ？
それにな。
『うるさいんだよ！おたくはタクシーの運転手で俺のオフクロじゃな

いだろうがあ！ん～～～？』
『でも……』
『釣りはいらんよ、とっときな。あばよ』
ドル札を渡す。
『メリークリスマス!!!』
俺はシャンパンを飲みながらヘリから落下した。
「司令官ー!!!」
お、朝潮か。
「どうしたー!!!」
空中だからか声が大きくなっちまうな。
「パ、パ、パラシュートは?!!パラシュートはどうしたんですか?!!!」
ん？
あー。
「忘れちゃったー!!!」
「は？」
てへぺろ。
「つ、つ、つ、掴まって下さいーーー!!!早くーーー!!!」
はっはっは、どうした朝潮。
「死んじゃいますーーー!!!早くーーー!!!」
「ヘーキヘーキ!!!大丈夫だって!!!見てろよ!!!」
落下ダメージで死なないようにする方法なんていくらでもある。
タイミングよくバケツの水をぶちまけたり、銀猫の指輪だったりな。
でも今回は……。
「そろそろパラシュート開けー!!!」
「い、嫌ですーーー!!!司令官が死ぬなら私も死にますーーー!!!」
はっはっは、何言ってんだか。
「オラ!!!」
「ああっ?!!!」
朝潮のパラシュートの紐を引っ張ってやる。
「司令官ーーーー!!!!!……あら？」

「何？」
空を飛ぶ俺。
「何、ですか、それ」
「フレイムウイング」
「……空、飛べたんですね」
飛べるさそりゃ。
飛べなきゃ幻想郷とかで困るぞ。
まあ、俺は男なんで弾幕ごっこはあんまりやらなかったけどな。

乗馬だ。
「せいやぁ！」
「「「おおー!!!」」」
艦娘達から感嘆の声が上がる。
「やっぱり、司令官は何でもできるのです！」
「隙がないね」
「すごーい！」
「かっこいいー！」
ふふふ、べた褒めされる俺。
正直、騎乗スキルには自信がある。
ノースティリスのあいつほどではないが、それなりのスキルはあるのだ。
サーヴァントとして召喚されることになったら、アーチャー、キャスター、アサシン、そしてライダーにはなれるだろう。
まあ、英雄でも何でもないんだけど俺。
「車も、バイクも、飛行機も、そして馬も！何にでも乗れるのね！」
「俺が動かせないのはエンジンのついてない船だけさ」
本当の話、女の子の上に乗るのが一番得意なんだけどねＨＡＨＡＨＡ!!
下ネタだから言わないけど。
「乗り方教えてー！」
「良いだろう、幾らでも教えてあげるよ」

「わーい、なのです！」
ここで俺は紳士ムーブ。
艦娘達に乗馬を教えた。

そして潜水艦。
ツアーにした。
自前の潜水艦もあるっちゃあるが、不審な潜水艦がハワイ領内をウロウロしてたら百パーセント怒られるので、やめておく。
「まあ、綺麗ねえ」
と、龍田。
龍田は、濡れるのが嫌だとか言ってダイビングには不参加だった。
「君の方が綺麗さ、マイハニー」
「あら、昨日は他所の人をナンパしてたのに、今日は私を口説くの？」
「ぎくーっ」
そこを突かれると弱い。
「……私のことはいくら裏切っても良いわ。でも、天龍ちゃんを悲しませるようなことをしたら、その時は」
「そ、その時は？」
「貴方を殺して私も死ぬ」
ヒェッ……。

と、二日目も無事終了し。
「チェックアウトしたかー、帰るぞー」
「お土産買っていきましょー！」
「わーい！」
三日目、帰還予定日となった訳だが。
「どうだ、楽しかったか？」
側にいた五十鈴に問う。
「ええ！お休みをエンジョイできたわ！これで明日からもお仕事が頑張れるってものね！」
そうか。

君達が楽しめたんなら、まあ、良いんじゃないかな。
と、思い、プライベートジェットに乗り込んだ。

艦娘を連れての旅行はやはり、保護者としての責任から難ありと言えるだろう。
確かに、楽しかったが……、やはり俺は一人旅がいい。
やっぱり、深海棲艦騒ぎが終わったら、また旅に出よう。
なんかこう、全体的に丸く収まるはずだ。
うん。

２７１話　黒井鎮守府修学旅行ローマ編　前編

まだまだ終わらない、黒井鎮守府修学旅行。
次の行き先は白露型と重巡でローマだ。
ローマ！
因みに俺は異世界でハンニバル・バルカに会ったことがある。
ボケてた。

先日買った黒井鎮守府専用飛行機の中にて。
「ローマ！凄いわね、素敵な場所よ！お洒落な私達にはピッタリよね！」
いつのまにか隣にいた足柄が話しかけてくる。
俺はまたもやロックを流しつつ、ご機嫌で飛行機を飛ばす。
「うぃあおふとぅねばぁねばーらんど!!!」
今日はメタリカの気分だ。
「提督もテンション上がってきたのね？」
「いや別に」
イタリアには一年くらいだけど滞在してたことあるし。
毎日のように美術館やら大聖堂やらを見て、見聞を広めたっけか。
お勉強、ってやつも真面目にやってみると面白いもんだ。
「何よぉ、私達と旅行よ？嫌なの？」
「出来れば一人旅がしたかったかなーって」
「もぉー、どうせ一人で旅しても、行くのはエッチなお店でしょ？」
失礼な。
俺はちゃんと芸術鑑賞もするぞ。
女体美の方が好きだがな。
「そーんなことないそんなことない。人はエロのみに生きるのにあらずよ」
俺だってエロ展開以外にも最高に愉快なアドベンチャーを楽しんだりもする。いや、むしろそっちがメインだ。
「そうかしら？」

「そうだとも」

イタリアに着いた。

「うーん、良いところね！中世みたいな街並みが素敵よ！」

「ええ、確かに素敵ですね」

「日本とは全然違う……」

「良いかー、改めて言っておくが、チップを忘れない、人殺しをしない、騒ぎを起こさない、ちゃんと守れよー」

「「「はい！」」」

まあ、このグループはそれなりにまとも、か？

「それじゃ、解散！」

さて、艦娘達を解散させてと。

……俺も遊んでこよう。

ん？電話だ。

『もしもし、旅人か？今どこにいる？』

『ローマだけど』

『ちょうど良かった、今、ローマに逃げ込んだ同朋達がアブスターゴに追われているらしい。援護してやってくれ』

えー。

『嫌だよ、俺、休暇中だし』

『おいおい、それはないだろ？こっちは自由と正義のために休日返上で働いてるってのに』

『知るか』

『教団に手を貸すと約束したろう？』

『そりゃ休みじゃなけりゃ喜んで手を貸すがね、あまり多くを期待するなよ。俺はアサシンじゃねえんだよ』

やだね。

『……数年前、アブスターゴの支社に強盗が入ったようだ』

『……それが？』

『アブスターゴの公式の会見では、何も盗まれていないとされている

が、事実は違った。……エデンの果実。何者かが、エデンの果実の一つを奪って逃走した』
『……』
『分かっているぞ、お前だな？』
　あらバレてる。
『……さあ、何のことやら』
　しらを切るか。どうせ決定的な証拠はないし。
『……あまり勝手なことをすると、教団も敵に回るぞ』
『それは脅しか？零細秘密結社』
『どうとでも取れば良いさ』
『……』
『……』
　はぁ。
『まあ、良いさ。五分だけな』
『助かる』
　さて、仕事だ。
「提督ー？」
　ん。
「なんだ足柄」
「どうしたの？」
「何でもないさ、ちょっと仕事がな」
「そう？手伝う？」
「いや、大丈夫だ」
　あまり巻き込みたくないのが本音だ。
　艦娘の敵は深海棲艦、決して、裏から社会を支配しようとする秘密結社などではない。
「遠慮しないの！」
「聞いていたぞ。確かうちはアサシン教団とやらに手を貸していたな」
「仕事ですか」
「はい、頑張りますね」

湧いて出る妙高型。
はぁ。
「分かった分かった。皆んなもー、わがままなんだからぁ」

さて、無理矢理付いて来た妙高型諸君と、ちょっとした仕事だ。
スペイン広場にて、撤退するアサシン達の支援……。
俺も妙高型も変装済み。
さあ、あとは戦うだけだ。
……来たな。
『アサシンだ!!』
『殺せ!』
『ここだ、追え!!』
「最後に確認するけど、殺すなよ!良いな!!」
「「「了解!!」」」
『だ、誰だ、ぐわっ』
『ひいっ、折れっ』
『がはっ』
三十人くらいか、これならすぐだ。
「悪いね、仕事なんだ」
俺は、迅速にアブスターゴの兵隊の骨を折っていく。ただの兵隊風情、簡単に潰せる。
……これで囮にくらいはなっただろう。
あとは勝手に撤退してくれ、アサシン。

「いやー、凄かったですね、司令官」
「青葉……、見てたのか?」
アブスターゴの連中を叩き潰し、方々に散っていった妙高型。
囮の役目は果たしたと言える。
「見てましたよぉ〜、態々外国に来てまで大立ち回りとは、司令官らしいですねぇ」
「変装してたんだが」

「動きで分かります！司令官は無駄のない無駄な動きを挟みつつ、綺麗に骨を折ったりとか、治りやすい怪我をさせてますね？」
おお、分かるか。
「で、骨を砕いたりとか、毒を使ったり、刃物を使ったりするのは妙高型の皆さんですね？」
正解だ。
「いやー、凄かったです！全部はこのカメラに記録されて、あっ」
あっ、スられた。
「もー、駄目です、よっと！」
すると青葉は、人間では考えられないスピードで踏み込み、スリをした男の首根っこを捕まえる。
そしてカメラを取り返すと。
「えい」
軽い掛け声と共に一撃。
『あああぁ!!』
それだけで紙切れのように吹っ飛んでくスリ。
カラテ！ブラボー！などと言って沸き立つ現地民。
「えへへ、めるしー！」
それはフランス語な。

ここはトレヴィの泉。
後ろを向いてコインを投げると云々ってあれだ。
ここには……、お、鈴谷と熊野がいるな。
「どうだ、泉にコインは入ったか？」
「もちろん！」
「もちろんですわ！」
ほー。
「ちゃんと二枚入れたからね！」
確か、二枚だと、好きな人とずっと一緒にいられる……、とか。
相変わらず可愛いことするなぁ。
「まあ、私はよく分かってないんだけどね！ゲージュツってやつ？」

鈴谷はあまり興味がないのか？
「この辺では最大の、バロック様式の建築物だぞ、美しいだろう」
「えー、わかんなーい。バロック様式って何ー？」
「バロックってのは十七世紀頃のイタリアから始まった運動で……」
「分かんないってば、もっと分かりやすく！」
「すごく派手で綺麗なのをバロック様式って言うのよ」
「そうなんだ凄ーい！」
やったね！
……これは別に、鈴谷が馬鹿なのではない。
一般人の見識からすればこんなもんだろう。
バロック様式を凄く派手で綺麗の一言でまとめて良いのか、それはまあ、グレーゾーンだが。
「鈴谷、貴女はもっと審美眼と言うものを養うべきでしてよ？」
「そんなのどこで使うのよー」
「現に今使い所ですわよ」
まあ、ほら、俺は気にしないから。
よく世の中には女性も自立をスキルをとか言う人いるけど、俺は可愛ければそれでよしだと思ってる。

そして、ここはコロッセオ。
ここには……、お、海風がいる。
「あら、提督」
「やあ、海風！コロッセオはどうだ、古き良き文化に触れていい刺激になったか？」
「ええ」
それは重畳！
「ねえ、提督？」
「む、どうした？」
「かつての人々は、ここで殺し合いを見世物にしたのよね？」
「そうだぞ！剣闘士だな」
「へえ、面白そう。私達もやらない？」

は？
「え？」
「鎮守府内で剣を交えるのよ」
「い、いやいやいや、駄目だってば！」
何を言ってるんだこの子は。
「そうかしら？私達が戦うのを、提督が眺める……、素敵な催しだと思うのだけれど？」
「いや、私闘は……。当時の剣闘士だってな、喧嘩は禁じられていたんだぞ」
豆知識。
「大丈夫よ、私達なら腹に刃物が刺さったくらいじゃ死なないし、怪我はドックですぐ治る……。うん、そうね、やりましょう。姉さんに相談してくるわ」
「え？駄目だかんね？」
「大丈夫よ、提督を楽しませてあげる」
君達が戦っても俺は楽しくないよ？
「提督を取り合って戦い合う……、ふふ、楽しそう！他の艦娘と本気で手合わせしたかったのよね！」
まあ、そんなに戦いたいなら……。

さて、一日目は終了だ、良い感じの四つ星ホテルに泊まる。
本当は五つ星でも良かったんだがね、あんまり贅沢し過ぎるのも良くないよね。
そして不公平になるとか言う謎の理由で俺は一人部屋だ。
まあ良いさ、一人寂しく寝るもんね。

２７２話　黒井鎮守府修学旅行ローマ編　後編

二日目、ローマでの朝。
「飯、飯ー、っと」
朝食のバイキングで五人前ほど頂く。
流石イタリアチーズが美味い。
パンも美味いなー。
ハムエッグも中々。
あ、コーヒー美味え。
「朝から食べるね、提督」
おや、山風。
「ああ、俺はな。尤も、イタリアの人は朝はコーヒーとビスケットくらいで済ませるらしいが」
つまり、星なしホテルで出されるような朝のコーヒー一杯が正しいイタリアの朝食ってことよ。
三つ星以上のホテルで出されるバイキングは外国の形式って訳。
俺？俺は食うぞー、どこでも食うぞー。
俺は食える時にはしっかりと食うタイプだ。
長い旅の中、突然食えない時だってある。
食える時に食わなきゃ、死ぬのだ。
俺は極限状況で腐った人肉を口にしたことも、敵のモンスターに噛り付いたこともある。
今でこそ、なんでも食べられるが、若く未熟な頃は悲惨だった。
艦娘達には美味しいものをたくさん食べてもらいたいものだ。
「私は、カプチーノと、クロワッサンで良いよ」
「そうか？そうだな、折角ローマに来たんだし、昼はカルボナーラなんてどうだ？デザートはティラミスで」
「……提督にリクエストすれば、本場のより美味しい外国の料理が食堂で出るよね。態々外国で食べる必要、あるかな？」
「あるぞー、俺なんて精々並の一流並だからな、本場の超一流の味ってのを知ると良い」

まあ、ローマの飯ってそんなに美味くもねーけどな!!

市場にて。
俺は買い出しだ。
隙あらば食い物を買って、四次元ポケットに放り込むのがもう癖みたいになってる。
多分もう四次元ポケットにある食材だけで何千何万トンとあるが……、それでも買う。
いつ俺に惚れた超常的な能力を持つ女に監禁されるか、いつ謎の神話的現象に巻き込まれて食事できなくなるか、分からないからだ。
っと、おや、古鷹と加古だ。
「へー、色々あるねえ」
「お野菜が色とりどりで綺麗ね」
話しかけよう。
「なーにやってんの？」
「あ、提督」
「市場を見て回ってました。こういうの、見てるだけでも楽しいですよね」
あー、確かにな。色々あるし、見て回るだけでも楽しいよな。
「欲しいものあるかい？買って帰って、料理するよ」
「え？良いのー？じゃ、生ハム買って」
「こら、加古ー？わがままは駄目だよ？」
「はは、良いよ、生ハムな。後でハムも買うから」
取り敢えずは、ここら辺の野菜……、日本ではあまり手に入らないやつ。
プンタレッラ、フィノッキオ、チコリ、ロマネスコなどなど。
「うわー、色が凄いね、食べれるのこれ？毒とかない？」
「はは、ないよ、食べるとどれも美味しいよ」
「でも、本当に、どうやって食べるのか分からないくらい個性的ですね」
「んー、これはサラダ、パスタに混ぜたり、ピクルスにしたりしても美

味しい、こっちは香味野菜だね」
と、四次元ポケットから取り出した野菜を見せながら買い物をしていると。
『な、なあ、あんたのそれ、魔法か？』
あら、見られてた。
まあ、俺は魔術の秘匿とかどうでも良いと思ってるし、バレたところで何も困らないんだけど。
『魔法使いが食材を買っちゃ悪いかい？』
『い、いや、悪くないさ、それで？何が欲しい？うちの生ハムは絶品だよ！』
味見を勧める店主。
遠慮なく古鷹達と味見して、と。
「あ、美味しい」
「うん、美味いよ」
『よし、買った！あるだけくれ』
『あるだけ?!わ、分かった』
と、塊の状態の生ハムをいくらか買って。
『な、なあ、疑う訳じゃないんだが、魔法で金の複製とか……』
『はは、そんなことはやってないさ。疑わしいなら貴金属や宝石で払っても良いよ』
『いや、分かった、大丈夫だ、信用する』
と、信用＜８０＞を活かして。
いやあ、買った買った。

昼、予告通り山風とカルボナーラを。
「あ、美味しい……」
満足気な山風。
「美味しい！」
「お、ンまい」
改白露型の二人もついて来た。
「デザートはティラミスな。食べ終わったらジェラート食べ歩きしな

がら観光名所見て回るよー」
「あたしも、着いて、行って良い？」
「なら、お姉さんも行くわよ山風」
「え？じゃあ、私も」
などと、会話をしつつカルボナーラだ。
カルボナーラ……。
ペコリーノ・ロマーノやパルミジャーノ・レッジャーノの風味がたまらないでおじゃるな！
よし、味覚えた、再現できる。
さて、ティラミスはー、と。
「んー、美味いな」
マスカルポーネの濃厚なクリームがね。
よし、こっちも覚えた。
「それで、ジェラート食べ歩きだって？」
「ジェラートって何？」
「あー、アイスクリーム、かな」
「へえ、アイスか。暑いし、丁度いいな！」
と、四人で店を出て、ジェラート店へ。
「ここではマロン味が美味いらしいぞ」
まろーン。
「へえ」
「じゃあそれを」
「クリーム乗せられんの？」
「ああ」
クリーム乗せが美味いのよー！これまたねぇ！
『ピスタチオ味一つ』
『マロン味、クリーム乗せで』
『チョコレート味、クリームを少し乗せて』
あれ？
「君ら、イタリア語喋れたの？」
「え？魔導書読むのに使うし……」

あ、なるほど。
「最近はムー大陸語を習ってます」
「誰に？」
「時雨姉さんにです」
海風が答える。
あ、なーるほど。
白露型は知能が高いんだなぁ。

サンタ・マリア・イン・コスメディン教会。
え？
知らない？
あれだよほら、ローマの休日だよ。
オードリー・ヘップバーンとグレゴリー・ペックが真実の口に手を入れてイチャイチャしたあそこだよ。
ここには……、おや、鳥海。
「あ、司令官さん」
「どうした鳥海」
「司令官さんと……、いえ、私如きが……」
？
「何だ？遠慮はいらないぞ？」
「で、では、し、司令官さん！よろしければ、一緒に写真を！」
なんだ、その程度か。
一緒に写真を撮る。
にしても真実の口か。
世の中には本物も存在すると知ったら、鳥海はどう思うんだろうな。
「これで良いのかい、王女様」
「はい！」
「それで、次は？可愛いサンダルでも買うか？それとも髪でも切る？スクーターで街中を疾走して煙草でも吸うかい？」
「そんな、私なんかが……」

「はっはっは、君は俺にとって王女様だよ」
「言い過ぎですよぉ」

夜だ。
さーて、そこらで売春婦でも……。
「提督、どうしたの？」
「何でいるかね、愛宕」
「提督が声をかけようとした子より、私の方がスタイル良いと思うわー」
確かに、それは……。
ぼん、きゅ、ぼん。
……ゴクリ。
「愛宕は、一晩幾らでお相手してくれるんだ？」
「タダよ??」
「ひゃっほう、お買い得ゥ!!」
「て・い・と・く！」
おおっと高雄。
「私の方がお得ですよー」
「ほう、その心は？」
「え？えーと、低反発枕もつけちゃう！」
「通販かよ」
笑える。

と、なんだかんだで二日目も無事終了し、最終日。
「ガサ、お土産買うよー」
「はいはい」
無事お土産も買って、帰りの飛行機。
ネアポリス付近なら、知り合いのマフィアと会っていたんだけど……、艦娘を態々マフィアと合わせるのもどうなん？と思ってやめた。
ベタにローマ行ったけど良かったかな。

「楽しかったか、村雨」
「え？うん。楽しかったよ。また連れてってね！」
艦娘が楽しんでるなら良いかー。

２７３話　黒井鎮守府修学旅行パリ編　前編

まだまだ続くよ、黒井鎮守府修学旅行編。
お次のメンバーは、空母軽空母潜水艦。
行き先はパリ。
フランスだ。
「あいきゃんとげっとのー！おーのーのーのー！」
ローリングストーンズの気分で空をかっ飛ぶ俺。
隣には鳳翔。
「何て言うか、その、ろっく？ですね？」
「おおよ、今日の俺は最高にロックだよ」
「なるほど、旦那様は、くーる、なのですね？」
「そうだよ」
適当に返す。
ああだこうだと話しかけてくる鳳翔を構いながら空の旅。
曰く、海外へ行くのは初めてだからとても楽しみらしい。

現地に着いた。
「さて、分かってると思うが、スリに気をつける、現金で払うのはなるべくやめておく、ぼったくりに気をつけること。以上、解散」
「え？そんな怖い街なんですかパリって?!」
割と治安悪いと評判。
まあ俺は殺人が罪にならないノースティリスとかで過ごした経験があるせいか、治安の概念がよく分からないんだが。
まあ、少なくとも、観光客が安心して歩けるなら平和と言って良いんじゃないかしらん？
「子供の集団は大体スリだ、あとはアンケートを装った詐欺とか、兎に角気をつけろよ」
「は、はい……」
ホテルに荷物を預けて、と。
はーい、じゃあ行ってらっしゃい。

オペラ座だ。
オペラ座といえば、オペラ座の怪人のふりをした殺人事件が……。
金田一って言う知り合いの探偵が解決してたな。
さて、そんなことはどうでも良い。
オペラ座だ。
今日はバレエをやってるらしい。
「どうだい天城、本場のバレエは」
「はい、とても綺麗です」
だよな。
あ、あの子可愛い。
「でも、提督もこれくらいは踊れますよね？」
「踊れるけど」
一応、並のプロ並には。
「因みにリシュリューとテストとガングートも踊れるらしい。謎だ」
何で艦娘は謎スキルを持っているのか。
「そんなに色々な特技があるのに、どうして提督は提督をやっていらっしゃるのですか？」
……あれ？
そうだな、何で俺提督続けてんだろ。
もうやめても良いよな？
「成り行きで提督やってるだけだから、もうやめても良いよなこれ」
「あ、提督が提督をやめるなら、ちゃんと言ってくださいね？その時は、私も艦娘をやめますから」
艦娘をやめるって何だよ（哲学）。
君達、種族が艦娘なんでしょ。
「いや、国を守るのは……」
「そんなの知りません」
んんー？
「提督がいない国なんて、滅んで良いですから」
「ちょ、ちょっといけないな、そういうのは。力があるから何でも好き

にできる訳じゃないんだよ」
　護国の英霊である艦娘がそういうこと言っちゃうのは国際問題とかに発展しかねない。
「そうですか？提督に逆らうなら誰でも何でも殺すべきだと私は思いますが。弱い方が悪いのでは？」
「違う、違うぞ天城、そんな悲しいこと言わないでくれ。君は優しい子だろう？」
「いえ、私は提督には優しくするよう心がけていますが、それ以外は割とどうでも良いと思っていますよ」
　い、いや、俺の天城は心優しい……、天使なんだ。天使はそんなことは言わない！

　ノートルダム大聖堂。
　やはりこの辺はカトリックが多いぜ。
　ってか売春とかに厳しいからクリスチャンは嫌いなん……、いやいや、やめておこう、偉い人から怒られてしまう。
　でも姦淫駄目、禁欲しろとか正直無理。嫌だ。酒ギャンブル風俗はやめられれん。
「おおー」
「流石は外国ですね」
　赤城と加賀か。
「まあ、無神論者が聖堂を観光ってのもおかしな話だがな」
「あ、提督」
　そこら辺どうなのよ。
「私達も一応は神の存在を信じていますよ」
　あらそう？
「提督が神は存在するって言いましたものね」
　なるほど、俺が言ったからか。
「それに、私達も兵器ですから。ゲンを担ぐことはよくあります」
　なるほど、いわゆる、古い考え方って訳だ。
　艦娘には多いよな、ゲンを担いだりする子。今時珍しい。

まあ、どうやら、常識が戦時中のまま生まれてくるのが原因だと思われるが。
「お参りもよくしますよー」
「偉いな赤城」
「ですが、キリストは、私達の声に耳を傾けるでしょうか」
「今あの人休暇中だからなぁ」
「え？会ったことがお有りで？」
「うん」
前も言ったが、キリストは立川で休暇中だ。
「ブッダも休暇中だ」
「へえ、そうなんですか」
感心する赤城。
「まあでも、神の愛は無限らしいし、祈ってみるのも良いんじゃない？」
俺の知り合いの剣士は、祈ると両手がふさがる、そんなことするくらいならその手で剣を持ち戦えと言っていたけど。
祈るな！祈れば手が塞がる!!って。
「そうですね、異国の神様に祈ってみるのも悪くないかもしれません」

エッフェル塔。
エッフェル塔は当時、パリの美しい街並みに鉄の下品な塔を建てるなと反対されたそうだ。
だが俺は、これはこれで良いものだと思う。
鉄塔には鉄塔の美しさがあるだろう。
電波塔とは文明の進歩の象徴なのだ。
「そうは思わんかねしおいちゃん」
「え？私そういうのよくわかんない！」
そっかー、わかんないかー。
「ねえ提督？」
「何だい？」
「これ、東京にも同じのあるよね？」

「いや、まあ、同じ電波塔だけどね」
　同じのって……。
「私が知らないうちに大きいの出来てたんだ！凄いね！」
「そ、そうだね」
　そうだ、しおいが沈んだのは戦時中。まだ東京タワーが出来ていない頃だ。
「でも、何であんなに大きいの？」
「電波を遠くまで送る為だよ」
「へえー」
　ってか、最近は、もっと高いスカイツリーが建ったよね。
　もしかして。
「しおい、あんまり外には遊びに行かないのか？」
「え？うん、あんまり鎮守府の外には出てないかも」
　なんてことだ、艦娘の社会進出が。
「君らはもっと社会に出なきゃならんよ。若い女の子なんだから、東京くらいには行きなさい」
「えー？私みたいな田舎者が東京なんて行けないよー！今日だって、こんなおしゃれな街に連れてこられて、大分浮いちゃってるんだから！恥ずかしいよー！」
　浮いてない浮いてない。
　大丈夫大丈夫。
　可愛いから、しおい可愛いから。
「外国人いっぱいで正直怖いよ！」
「んもー、だーいじょぶだってー！」
　何も怖いことないでしょ！
「連合国側だし」
「もう戦争は終わったでしょ！」
「無理ぃ、アウェーだよー！」
　今更敵がどうこうってあれでもないでしょ。

　フランスといえば美食ではないかね。

三つ星レストラン……。
俺みたいなリッチな旅人には似合いの場所だね（ドヤ顔）！
実際に今は、三つ星レストランに通ってもノーダメージな懐事情。
なら、行くしかないでしょ。
「なあ、鳳翔」
「そうですね。でも、ちょっと緊張しちゃいます」
珍しく洋服を着た鳳翔を連れて、三つ星レストランへ。
鳳翔はな、どこでも基本は着物だが、洋服だって似合うんだぞ！
プレゼントした服着てくれるしな！
似合うんだぞ!!
可愛いんだぞ!!
クッソかわええ。
『ワインはどうしましょうか？』
『ん？ああ、それじゃあペトリュスを』
『奥様は？』
『え？じゃあ、同じものを』
『因みに、彼女は別に奥様じゃないんだが『いえ、妻です』……まあ、良いさ』
『？、ご注文、承りました』
一番良いコースを頼む、とお願いして。
鳳翔は外国語もある程度話せる。
コース料理ね、量が多いんだけど、俺は余裕だし、鳳翔も艦娘故に余裕。
女の人とコース料理を食べると、どうしても量の関係で残してしまうもの。
しかし、俺は、残さず、美味しそうに食事する女性の方が好きだ。
その点、艦娘は良いよな、何でも美味しそうに食べるし。
『こちらアミューズの～……』
「わあ、凄い綺麗ですね」
「流石は三つ星レストランだよ。味も……、うーん、これはちょっと勝てないか？」

「ふふ、何も競うことはないじゃないですか」
　いや、俺にもプライドがある。
「このソースは……、黒トリュフだな？」
「本当、美味しいです」
『オードブルはフォアグラの～……』
「このフォアグラのとろみ……、どう再現したものか」
「再現に拘らずとも、旦那様は旦那様のやり方で料理すればよろしいじゃありませんか」
「確かにそうだが」
『スープはコンソメの～……』
「お、スープは再現できるな。俺、煮る料理は全般的に得意だ」
「へえ、そうなんですか？」
「旅の途中はよく煮る系の料理作ったからな、経験値よ経験値」
『魚料理は舌平目の～……』
「あー、これは難しいな、何使ってる、あのチーズと……」
「そういえば、魚料理はあまり得意じゃないって言ってましたよね」
「うん、やっぱ旅となると陸じゃん？魚料理は経験値不足なのよ」
「でも、プロ級のお寿司が握れるのに苦手ってのもおかしな話ですよ」
『ソルベの～……』
「お、このシャーベット、ワインでできてるのか」
「本当ですね、酸味が効いていて美味しいです」
『肉料理は牛肉の～……』
「お、美味いな。これならうちでも作れる。……コストを考えなければ、だけど」
「こういう料理って原価からして高いですから……」
『デザートのチョコレートの～……』
「ん、美味いが、これなら射程範囲だ」
「射程範囲って」
「デザート作りは特に得意なんだよ」
『コーヒーです』
「うん、コーヒーも一流だ」

「緑茶派ですけど、たまにはコーヒーも良いですね」
「っと、こんな時間か。少し寛いでから帰ろうと思ったが、無理だな」
「ええ、ホテルに戻りましょうか」
ああ、十分堪能したよ……。

ホテルに戻って睡眠をとる。
寝る。
さて、明日はキャバレー行こう。
楽しみだ。

２７４話　黒井鎮守府修学旅行パリ編　後編

俺は朝食を断って、ホテル近くのパン屋でパンを買い、さらに、ホテル近くのカフェでコーヒーを飲みつつパンを食べた。
んー。
美味ー。
手持ちのジャムをたっぷりと塗ってと。
あー、やっぱり焼きたては違うなー。
ケーキも美味い。
「相席して良いかな？」
「私もー」
飛龍蒼龍ダブルドラゴンか。
「良いとも、座りたまえ」
「「わーい！」」
カフェの丸テーブル席に三人で腰掛ける。
「パン美味しいねー」
「いつもはご飯なんだけどねー」
パンを頬張るダブルドラゴン。
「マーマレードだ、使いたまえよ」
「マーマレードって何？」
「柑橘系のジャム」
「あ、本当だ、みかんだ！」
「オレンジな」
ダブルドラゴンはものを知らない……。
と、ダブルドラゴンと十人前くらいのパンとケーキを平らげて。
「さて、今日はどうするんだ？」
「これから、ノートルダム大聖堂に行くよ」
偉い偉い、自分で計画立てられたな。
成長が見られる。
「良い子だぞ二人とも。偉いな、自分で考えて行動できるのは良いことだ」

「ううん、提督がオススメって言ってた観光名所を巡っているだけだよ」
「それでも、少しは自分で考えられるようになったじゃないか。凄いぞ」
「そう、かな？」
「ああ、褒めてやる」
偉い偉い。

ノートルダム大聖堂。
パリの中心、シテ島に建てられたこの荘厳な大聖堂は、最初のゴシック様式の建物だ。
素晴らしい建築物だな。俺も彫刻や建築は一通り出来るが、ここまでのものを作る腕はない。特にデザインが苦手だ。
俺には、オリジナリティがないのだ。
所詮は他人の猿真似……、劣化コピーなのだ。
だから、創造性のある人間は実に素晴らしい生き物だと思う。
「はえー、すっごい」
と、見事な小並感の飛龍。
「多聞丸にも見せてあげたかったなぁ」
「あの人は異世界で立派に戦ったから」
「……疑うわけじゃないけど、ねえ？」
え？山口多聞さんは大破した飛龍と異世界に漂流して客員提督やってたよ？
「ま、まあ、多聞丸が元気なら私はそれで満足かな。なんの悔いもなく提督に嫁げるよ！」
「はっはっは、カッコカリな」
「でも、本当に綺麗な建物だねえ」
と、蒼龍。
「だろう？やっぱりヨーロッパは建築物が美しくて良い」
古いものは美しい。
東京に建ち並ぶ大量生産のビル群くらいなら、俺にも再現が可能だ

が、ことヨーロッパの古き良き街並みを再現するのは不可能だ。
俺に再現できない、即ち超一流。
芸術は素晴らしい。
まあ、街並みは結構汚いんだが。
ゴミとか落ちてる。

セーヌ川のクルージング。
「柄じゃないんだけどねぇ」
ワインの瓶を片手に船内を歩く隼鷹。
なるほど、フランス仕様か。
「でもまあ、酒の肴にはなるかねえ」
と、セーヌ川の橋を眺める隼鷹。
「……にしても、艦が船に乗るのってどうなん？」
「んあ？あー、そういや、そうだね」
何だろうか、少しおかしいのでは？
「そう考えるとおかしいねぇ、乗り物が乗り物に乗るなんてね」
ははは と笑う。
「いやでも、本当、良い街並みだねえ。日本じゃ見られない光景だよ」
「そうだな」
飲み続ける。
「酒も美味いしねえ」
「日本酒じゃなくっていいのか？」
「実は、特にこだわりないんだよねえ、これが」
あ、そうなんだ。
「酔えりゃ何でもいいよぉ、何でも！あ、でも、強いて言えば焼酎が好きかも」
なるほど。
「まあ、酔っ払って地面で寝るなんてことがないように。身ぐるみ剥がれたり攫われたりするからな」
道端で寝てたら少なくとも財布はスられる。
「だいじょーぶ、だいじょーぶ！ぜーんぜん酔ってないからぁ！」

本当か？

オルセー美術館。

元々は、この建物は駅だったそうだ。

だからだろうか、所々に駅っぽい趣向が見える。これはこれで面白い造りだ。

そしてここには……、瑞鳳か。

瑞鳳が、日本語のガイドとにらめっこしつつ、美術館内を回っている。

「あれが……、ゴッホ。なるほど、これが芸術……！」

「ああ、フィンセント・ファン・ゴッホ。ポスト印象派の画家だな。有名だ、これくらいは分かるだろう」

「あ、提督！」

「他にもポスト印象派の絵画は、ここにはセザンヌとかあったっけかな。見ておくと良い」

「は、はあ」

「あ、分からないかな？」

「いえ、えっと、名前だけなら……」

まあ、いいさ。

「芸術鑑賞は良いぞ、心を豊かにする。戦うこともいいが、心にゆとりを持ち、余裕のある生活を送るんだよ」

「はい！」

うむ、いい返事。

シャンゼリゼ通り。

シャンゼリゼ通りにはなー、メルセデスの展示をしてるところがあってなー！

「見ろよあの芸術的な曲線！鋭角なフォルム！素敵やん？」

「わ、分からないでち。どれも一緒に見えるでち……」

困惑するゴーヤ。

分からんのか？

「あっちが競技用で、こっちは最新の。あれは……」
「？」
　理解していない模様。
「まあ、良いさ。興味のない話を聞くのは苦痛だよな。俺に付き合わなくっても良いんだぜ？」
「そ、そんなことないでち！提督の好きなものは、ゴーヤも好きでち！」
「いやいや、無理しなくって良いから。一緒にお菓子食べに行こうなー」
「子供扱いしちゃ、嫌でち……」
　んー？そうか？
「それではお嬢様、お手を」
「ん……」
　手を繋いで外へ出る。
「俺とお茶してくれないかな？」
「うん……！」

　ムーランルージュ!!
　有名なキャバレーだ。
　来たかったんだよね、久々に！
「ヒュウ！良いねえ、カンカンは！踊りの最中に見えるあの脚！綺麗だ！」
「はぁ、君なぁ……」
　ため息をつく龍驤。
　何だよ、何で隣にいるんだ？
　俺の趣味に付き合わなくても良いぞ別に。
「あのな、そんなん見たいなら、うちらが見せるで？何で態々こないなお店に行くんよ？」
「しゅみです」
　そこは譲れません。
「趣味ったってなあ。モテないおっさんやあるまいし……、風俗なん

て……」
苦言を呈される俺。
「やだ、やめない」
だが、やめるつもりは一切ない。
「嫌やわー、司令官がうち以外の女に夢中になるのは嫌やー！」
駄々をこねられましても。
「見ろよ龍驤、あのお尻！引き締まっていてキュートだ、齧り付きたいくらいにね」
「何やねんもー！うちだってかわええよー?!」
「おっ、そうだな」
今はダンス見たい気分なんだけど。
おお、あの子可愛い、あとで声かけよう。

無事二日目も終了し、帰る日に。
「楽しかったか、鳳翔」
「ええ、とっても！良い経験になりました！」
そうか、なら、俺から言うことはねえな。
俺も結構楽しめた。
まあ、一人旅程じゃないがね。
良かったんじゃない？

２７５話　黒井鎮守府修学旅行ロンドン編　前編

修学旅行の続きだ。
連れて行くのは戦艦と睦月型、音成鎮守府。
行き先はイギリス。
ロンドン。
ロンドンだ。
ロンドンと言えば……、俺の母校のグレッセンヘラーカレッジがある。
結構上等な大学なんだぜ？凄いだろ？褒めて。
女の子の大好きな３Ｋ……、即ち、高学歴、高身長、高収入の俺。
俺、カッコいーーー!!!
うんうん、やっぱり俺はイケメンだなあと感心しながらも、空の旅。
「わー、凄いです！」
隣に乗せた守子ちゃんが柄にもなくはしゃいでる。
「どしたの？」
「だって、飛行機の運転席に座れる機会なんてないですよ普通！船なら何度も乗ったことがあるんですけど」
そうかい？
「どうだい、運転席から見る景色は」
「凄いです！」
目を輝かせる守子ちゃん。乗り物好きなのかな。可愛い。
『ｈａｓ　ｈｅ　ｌｏｓｔ……』
「あ、ごめんね、音楽かけちゃって。消そうか？」
「あ、いえ、お構いなく」
今日はブラックサバスの気分だった。
「女の子隣に乗せてんのにロックは良くないかなーって」
「え？そうですか？私は気にしませんよ？カッコいいと思います」
「マジ？いやあ、女の子ってあんまりロックの良さを分かってくれないからさあ。守子ちゃん、好きなグループは？」
「え？えーと、色々あるんですけど、そうですね、マンウィズアミッ

ションとか？」
鉄血のオルフェンズじゃねえか！
まあ、これっぽっちも、面白くなかったけどな。
「はい、じゃあ、分かってると思うが、殺し、喧嘩は厳禁ね。はい、解散」
解散する。
「ん？守子ちゃんも好きなところ行って良いよ？」
「いえ、私、海外とか初めてて」
「大丈夫大丈夫、身ぐるみ剥がされることはあっても死にはしないから、多分」
「こ、怖いんですよ！」
んー？
「じゃあ、一緒に観光する？」
「はい、お願いします！」
一人旅がおススメなんだがな。
一人でこそ、誰にも頼らずに自分で行動するから、成長できる。そう言うとこある。
でもまあ、心細いってのは分かったよ。なら、手を握ってあげようじゃないか。

「取り敢えず、その辺のカフェでお茶でも飲んで一服しよう」
「はい」
「ンー、流石は本場！紅茶が美味しいネー！」
おっ、金剛発見。
「やあ、金剛。ティータイムかい？」
「イエース！ティータイムデース！提督も一緒にどうデスカー？」
「もちろんＯＫ。ほら、守子ちゃんも注文しなよ」
「は、はい」
守子ちゃんの手を引いて、席に座る。
「……提督は渡しませんヨ」

「ひっ?!い、いえ、これはそう言うんじゃなくて……!!」
「ああ、守子ちゃんが一人で海外は不安だって言うからね。まあ、ちょっとしたデートさ」
「ズルイデース！」
「もー、金剛とは何度もデートしてるだろ?たまに守子ちゃんの相手したって良いじゃないか」
「むむむ」
「何がむむむだ」
さあ。
ティータイムしようか。
『注文は?』
『このケーキとこのケーキ。それと、これとこれ。それとスコーン。あとアールグレイ』
「五つも食べるんですか……」
ん?適量さ。
『お嬢さんは?』
「え?えっと……」
「何にする?」
「じゃあ、スコーンを。それと折角なので紅茶を」
「アールグレイで良い?」
「あ、はい」
『スコーン一つ。それと、アールグレイ』
『はい、ご注文、承りました』
さて、注文したものが届いて。
「おっ、中々美味いな」
「あっ、凄く美味しい」
紅茶を堪能する俺達。
「うう、最近体重がアレなのに……。スコーン美味しい、美味しいよぉ……」
「んー?ダイエットしたいなら、護身術でも教えてあげようか?」
「え?いやいや、私なんかに時間を割いていただかなくても」

「良いさ、それくらい。ついでに空母も呼んでダイエットさせなきゃな。アレはまずい」
「むー、私も混ぜて下サーイ！」
「君は護身術なんて要らないくらいに強いだろうに」

「バッキンガム宮殿だ」
「名前くらいなら……」
「ちょうど今、衛兵交代式やるってさ、見ていこうか」
「はい！」
　おや、あそこにいるのは。
「武蔵じゃないか」
「む、提督か」
　どうしたんだ、珍しい。観光って柄でもないだろ。
「いや、仮に英国に攻め入る場合、どれだけの防衛力があるのか知りたくてな」
「あーら、物騒」
「だが、この程度なら簡単そうだ。この施設一つくらいなら、艦娘どころか黒井鎮守府の戦闘用ロボットで落とせるな」
　あのね、あのね。
「別に俺は英国と騒ぎを起こそうなんて気は無いからね」
「そうか」
　それに……。
「英国には死ぬ程強い吸血鬼がいるからな」
「ほう？私でも無理か」
「無理だね」
　アレには勝てないだろう。
「成る程、世界は広いな」
　ニヤリと笑う武蔵。

　ロンドン塔。
「ちょっと、ここ、怖いですね」

「ああ、まあ、何体か霊はいるな」
「……え?!い、いるんですか?!」
そりゃいるさ、処刑や幽閉に使われた施設だぞ、出るに決まってる。
「だ、大丈夫なんですか、それって」
「んー?多分大丈夫でしょ。深夜とかならヤバいかもね」
「そう言うもの、なんですか?やっぱり、夜の方がお化けは活発になるとか」
「そうだね、基本そう。人がいないであろう時間に動き出すよ。でも、上位の存在となってくると、時間関係なしに動き回るけどね」
ここには、そんなに強いのはいない。
「あ、やあ」
「……今、何に挨拶したんですか?」
「いや、普通に幽霊にだけど」
俺、人格があるなら幽霊でも人間とカウントしていいと思うのよね。
「じょ、冗談ですよね?」
「子供二人だったからリチャード5世とその弟だろうよ」
「ひぃぃ……。す、すみません、手を繋いでもらっても、良いですか?」
「ん?良いよー」
どうした、甘えたいのか守子ちゃん。

ロンドン郊外、魔術協会付近。
……ん?
「逃げようか守子ちゃん」
「は、ええ?」
守子ちゃんを姫抱きにして逃げる。
いや、ねえ?
『いたぞー!!』
『捕まえろ、旅人だ!』
『今日こそ異界の魔術を我らの手に!!』
ほーら、おいでなすった!

こりゃ不味いな、手伝ってもらおう。
「ミカァ!!!!」
「はい、お呼びですか」
そして空から降ってくる三日月。落下系ヒロインかな？
「追っ手が邪魔でね、死なない程度に相手してやってくれ」
「了解しました」
ミカを差し向ける。
そして俺と守子ちゃんは逃げる……。

ロンドンアイまで逃げた。今は守子ちゃんと二人で観覧車に乗っている。
「はあ、はあ、何だったんですかアレは?!」
「あれはね、魔術協会」
「魔術協会？」
「その名の通りよ。魔術の研究をしている機関なんだけどね、そこに狙われてんの、俺」
「何でまた……」
いやあ、こっちが聞きたいよ。
「多分、俺の知識と体質を狙ってのことだろうね」
「そ、それじゃあ、アレですか？カルト宗教みたいに、生贄にされちゃったり？」
「いや、ホルマリン漬けじゃない？あと記憶操作」
「うう、何でですかぁ……」
「魂のエネルギーを物質化するソウルの魔術、超高性能なノースティリスの魔法、秘匿され続けた悍ましいヤーナムの秘儀……、俺の頭の中には、研究者が欲しがるような知識で一杯なのよ」
「それは、また……。穏便に教えるとかは、できないんですか？」
「やーだよめんどくせー」
まあ、相手が美人なら考えないこともないがね。
「それと体質。俺、上位者だったりエーテル病だったりプラスミドだったり、色々と入ってるから。まあ、大体は仙人なんだけど。だか

らまあ、魔術の触媒の材料なんかになる訳よ」
「じ、人体を使った魔法……、考えたくないです」
「うちじゃ白露型が研究してるっていうから、血とか臓器とか分けてあげてるんだけど」
「うう、グロテスクな話は、あまり……」
　あ、そう？ごめんね？
「あとは、俺の持っているアイテムを奪おうとしてるんだろなー」
「アイテムですか？」
「ほら、これとか、これ、これなんかも魔術的に価値がある」
「これは？」
「上位者……、まあ、なんだ、神様の血液だよ」
「こっちは？」
「トラペゾヘドロン。魔術的に価値がある宝石かな」
「これは？」
「ゴールドオーブ。時間改変の力を持つ強力なマジックアイテムだね」
「……そりゃあ、狙われもしますよねぇ」
　そうかなぁ？
「まあそれより、景色見なよ、綺麗だよー」
「はぁ……」

「さあ、夜だ！置屋にでも……、って、守子ちゃんいるから無理かぁ」
「え？」
「いや、風俗行こうかと思ったんだけど」
「え、あ、その、だ、大丈夫です！待ってるんで!!」
「いや、そこまで屑じゃないよ。さ、ホテルに戻って今晩は寝ようか」

……残念だ。

２７６話　黒井鎮守府修学旅行ロンドン編　後編

ロンドン二日目。
さて、フィッシュ＆チップスを食べて……。
うん、まあまあ美味い。
「塩気が、ない……？」
驚愕している長門。
「イギリスの料理には、基本的に自分で塩をかけるんだよ」
「そういうもの、なのか」
そういうもんよ。
「しかしこの、フィッシュ＆チップスと言うもの……、あまり美味くはないな。紅茶は中々だったんだが」
「しゃーない」
イギリスの飯は、そんなに美味くはないから。
「まあ、食い物に文句は言わん。食えるだけで幸せだ。もぐもぐ」
そうだね、俺もそう思うよ。
「で、提督、今日の予定は？」
「母校の教授に挨拶してくる」
「ほう」
いるかな、レイトン教授。

グラッセンヘラーカレッジ。
俺はここで、考古学を修めた。
「因みに守子ちゃん、学部は？」
「あ、人文学部です」
「そうなんだ」
と、守子ちゃんを引き連れて大学へ。
ついでに扶桑もついてきた。
「旅人さん、本当にこんな良い大学に通ってたんですか？」
失礼な。学歴詐称などしていないぞ。
っと、ついた。

教授の研究室だ。
『教授ー』
ノックする。
すると。
『その声は……、ああ、やっぱり。久し振りだね、旅人君』
山高帽の英国紳士が現れた。
『彼女達は？』
『恋人、兼同僚です』
『……私の記憶だと、他にも何人かと結婚していなかったかい？』
『気のせいでは？（すっとぼけ）』
『……男性たるもの、いつでも紳士であることを心がけなくてはいけないよ』
おや、やんわりと女癖の悪さについて注意された。
『これ、お土産に。日本のお菓子です』
『ああ、ありがとう。英国には旅行かな？』
『ええ、社員旅行です』
『ああ、そう言えば提督になったとか……。世界征服はどうしたんだい？』
『やってますよー』
と、教授といくらか言葉を交わして、紅茶をご馳走になって。
『じゃ、そろそろ帰りますわ。近くに来たらまた会いに来ますし、力が必要なら呼んで下さいね。教授と冒険できる日を、また、楽しみにしてます』
『ああ、私もだよ』

大英博物館。
「教授はやっぱり良い人だったな」
「優しそうな人でしたね」
と、守子ちゃんと言葉を交わしつつ。
大英博物館の見物。
すると、ロゼッタストーンの前で微妙な顔をする日向が。

「うーん」
「どうした日向」
「ああ、君か。……私には、これが価値あるものに見えなくてね」
「まあ、単なる掲示板みたいなもんだからな」
ただ古いだけ、とも言えてしまう。大したことは書いていない。
「なんて書いてあるんだ？」
「……父の王位を継いだ若き者、王の中で最も傑出したる者、エジプトの守護者、神々にどこまでも忠実に仕え……」
「あー、もういい、分かった。いや、分からないが」
そう？
「と、言うより、読めるのか。何やら古い文字のようだが」
「ヒエログリフだね」
読もうと思えば幾らでも。
「あ、あれは分かるぞ。イースター島のモアイだ」
「そうだよ。イースター島のモアイだ。ホア・ハカナナイアだね」
「しかし不気味だな、何のために存在するんだ？」
「あー、これは、アクアクって邪霊を封印するためにあるんだよ」
「……聞いたことがないんだが」
「いや、本当だって。モアイの下にはアクアクがいるんだ。実際に俺がイースター島に行った時は大きなアクアクが復活して、あわや地球壊滅の危機、ってところだった。まあ、現地の精霊やとあるケロン人と事件の解決に努めたが」
あん時はやばかった。死ぬかと思った。実際に軍曹殿は一回死んだ。
「ケロン人とは？」
「ガマ星雲第５８番惑星、ケロン星の知的生命体だ」
「つまり、なんだ、宇宙人と協力して古代の悪霊を倒したと？」
「だからそう言ってるじゃんよ」
「はぁ……」
何かおかしいこと言っただろうか？

「阿賀野ー」
「はーい！」
　ロンドン橋で阿賀野とプチデート。
「私、お邪魔ですよね、すいません……」
　消え入りそうな声で言う守子ちゃん。
「なんの、守子ちゃんも一緒にデートだー」
「ダブルデートだよ、提督さん！」
「い、いや、ダブルデートって言うのは、２組の男女がデートすることで、二人の女性を連れて歩くことじゃ……」
「まあ、良いじゃん良いじゃん、気にしないで。ほら、夕暮れが綺麗だよ」
　ロンドン橋で見る、暮れなずむ夕陽は例えようもなく綺麗だった。
「わあ、綺麗……」
「そうだねぇ」
「ロマンチックな雰囲気だね……」
「そうだねぇ」
「ここは、夕陽をバックにキスなんてすべきじゃないかな？かな？」
「そうかねぇ」
　じゃあほら、ちゅー。
「んー??」
「守子ちゃんもするかい？」
「いっ、いえ、私は……」
「えー？折角だしして貰えば、提督さん」
　はい、守子ちゃんも。
「そ、その、ちょっと、私は、んぅ??」
『エエエィメエエエン!!!
「ぐ、おお、守子ちゃん、逃げるよ！」
　夜、やばいのに見つかった。
「きゃあああああ!!!」
　銃剣が何本も飛んでくる。怖い。ヤバい。

「何ですかあれええええ!!!」
「イスカリオテだ」
「知りませんよ！」
「ヴァチカンの悪魔祓い機関だよ、そういや俺、悪魔とか吸血鬼とかになりかけてるからな、そりゃ狙われるわな」
『薄汚い化け物（フリークス）に、神罰をォォォ!!』
「あっ、ぶねえ！」
　守子ちゃんを庇って銃剣が複数本背中に刺さる。
「げ、が、はっ、守子ちゃん、取り敢えず、王立国教騎士団のところまで逃げよう。流石にあれも、ヘルシング機関の本拠地までは入って来ないだろう」
「た、旅人さん……」
「転移、は無理っぽい、結界が張られてる。物理で逃げるしかないか」
「……私のこと、置いていって下さい！」
「守子ちゃん？」
「今、私が足手まといになっていますよね？旅人さん、私のことは気にせずに、逃げて下さい」
「駄目だ」
「でも……」
「大丈夫、俺は嫌なことから逃げることに関しては超一流だ。見とけ……」
　やりたくなかったが、しょうがない。
「あ、が、がぁっ!!!」
　変異誘発剤で肉体を変異させ、背中に羽を生やす。反動で刺さった祝福済みの銃剣が抜ける。痛いね、痛い。
　物理より祝福済みってのがよく効く。
「はぁ、はぁ、はぁ、空飛ぶから、掴まって」
「でも」
「早く、見つかるから」
　結界を解析、このタイプなら……。
「これを、抜いてエー！ぎぃ、い、焼けるゥ……！」

焼ける手のひらを無視して、結界の基点となる銃剣を抜く。結界が薄くなり、そこから突破できる。
俺は完全な悪魔吸血鬼じゃないので、聖なるものに対してもこれくらいのダメージで済むのだ。
「さあ、逃げよう」
「は、はい」

割と簡単に逃げ切れた。青鬼くらいの難易度だったな。
レストランにて。
「ふいー、痛え痛え、死ぬかと思ったぞ」
「とか何とか言っても、どうせ死なないでしょ、旅人さん」
「死ぬときゃ死ぬよ、神風ちゃん」
誤解されがちだが、死ぬときは普通に死ぬ。
「お、このパイは中々だな」
「そうね、でもやっぱり、私は和食の方が好きだけど」
まあ、和風な見た目してるもんな。
今日だって旅行だって言うのに、洋服じゃなくって和服だし。
「あれ？もしかして、私服、和服しか持ってないの？」
「ええ、そうよ」
えー、あー？
「洋服プレゼントしようか？」
「要らないわ、どうも洋服は性に合わなくって」
そう？
……さっきから注目されまくりなんだがね。
『オー、サムライガール？』
『ｗａｈｕｋｕ……』
『ジャパニーズ……』
和服で海外旅行する人、初めて見たかもしれん。
しかも、姉妹含めて五人で和服だ。
世界の法則が乱れる……。

「さーて、ヤバイのに見つかる前に帰るぞー」
「はーい」
二日目も無事（？）終了し、帰る日に。
「いやー、生きてるって素晴らしい」
「また死にかけたんですってね」
と、如月。
「まあ、よくあることさ」
「もう、心配かけちゃ駄目よ？」
「ああ、ごめんな」
これっぽっちも悪いとは思っていないが、謝っておく。
悪いのは俺じゃない、クソ物騒なイスカリオテだ。
俺は人間なのに……。
まあ、母校があるとは言え、クソ面倒な連中、美味くない飯、とっても怖い吸血鬼の旦那と、来るメリットは殆どないイギリス。
「また来ましょうね、司令官」
「お、おう」
また、かぁ……。

２７７話　黒井鎮守府修学旅行幻想郷編　前編

ラスト。
海外艦と幻想郷だ。
「ほら、こっちこっち」
「え？大丈夫なのこれ、空間の裂け目みたいな……」
「そう言うもんなんだって。ほら、早く入らないと霊夢にバレて怒られるから」
「誰よ、レイムって……」
海外艦達を幻想郷に送る。
さあて、行こうか。

「あーのーねーえー」
「ままま、怒らないで怒らないで霊夢ちゃーん」
案の定、霊夢に怒られた。
「結界に穴開けないでって、いつも言ってるわよね？」
「ゆるちて」
「ぶっ飛ばすわよ」
ああん、ひどぅい。
「で？今度は何よ」
「観光しにきた」
「……はぁ～。あのねぇ、ここは幻想郷よ？妖怪とか色々危ないものが出るのよ？分かってる？」
「？、言うほど危険か？」
ノースティリスよりは平和だし……。
「……まあ、この人達も、神霊みたいだし、大丈夫そう、ね」
納得した霊夢。
「よーし、皆んないいかー、今から特殊な機構を備えた護符を配る！それを、この幻想郷にいる間はずっと身につけてるように！」
「「「はーい！」」」
護符を配る。

「……ん？あれ？何かしら、カードがポケットに。……何々、重砲『レールガン』？」
「あら、私のポケットにも。……機巧『聖ジョージの剣』？」
「あれえ？私もですか～？銃墓『ケロベロスＯ．Ｄ』……？」
「えー、今皆んなのお手元にあるのは、『スペルカード』だ。この幻想郷での主な揉め事解決の手段とされている、弾幕ごっこで使うアイテムだ」
　俺は、弾幕ごっこの概要について説明する。
「へえ、美しさを競う、ねえ……」
「つまり、殺しはご法度だと？」
「ああ、殺しは駄目だ。まあ、相手が殺す気で来てるなら殺し返しても良いかもしれないが」
「成る程……」
「まあ、君達の艤装も、その護符を着けている限り、非殺傷の魔力弾になるから。安心してほしい」
　機銃を空に撃つビスマルク。
「あ、本当だ、光の玉になってる……。綺麗ね」
「じゃあ、皆んないいかい？揉め事は弾幕ごっこで、殺しは極力しない、道に迷ったら俺を呼ぶ」
「「「はい！」」」
「それじゃあ、解散！あ、人里はあっちな。今の君達は飛べるから、飛んでいくといい」
　飛行機能も護符にエンチャントしておいた。
「と、言う訳で俺は」
「？、何よ」
「霊夢ちゃんとラブラブに過ごすのだ!!」
「過ごすか馬鹿」
　ああんひどぅい……。

　何だかんだ言って、神社内でお茶を淹れてくれた霊夢。フゥ、ツンデレェ！と煽ったら怒られた。

さて、人里に行こうか。
「んんー？見ない顔だな、どこの子だ？」
「リベは黒井鎮守府の子だよー！」
「黒井鎮守府……？どこだ？」
おや、慧音。
俺が昔一時期バイトしていた寺子屋の先生だ。
「やあ、けーね」
「む、真央か。今、身元不明の子供が……」
「提督ー！」
「この子、うちの子」
「なん……、だと……？」
驚くけーね。
「お前、お前、ついに結婚したのか?!誰とだ?!誰とだぁ?!!」
妖怪のパワーで肩を掴まれる俺。いたたたた、痛いって。
「結婚はしてないよー」
「してるよー！提督はリベの旦那様なのー！」
「なん……、だと……?!!」
更に驚くけーね。
「貴様ぁ、よりにもよってこんな小さな子を手篭めにしたのかぁ!!!」
痛い、痛いから。
「お前はぁ！山の風祝にも厄神にも河童にも魔法使いにも吸血鬼にも鬼にも天狗にも兎にも猫にも狐にも狸にもその他諸々にもあまつさえ妹紅にまで手を出しておいてぇぇぇ!!!」
「い、いやほら、皆んな大切に思ってるし。皆んながオンリーワンでナンバーワンだし」
「私にも手を出して来たよな?!」
「いやだってけーね美人なんだもん」
「こぉんのぉ……!!女誑しがぁぁぁ!!!」
「どげふん」
「ああっ、提督ー?!」

一メートル程地面に埋まった。頭突きで。
例えるなら、ハリケーンミキサーを食らったウォーズマンみたいな。
よろしくない、よろしくないな。仮にも教育に携わる者が暴力など振るって良いのかと抗議したが、火に油を注ぐ結果にしかならなかった。
けーねには会う度に怒られてる気がする。
「ほへぁ!!?」
んん、何だ。
「尻尾もふもふ！尻尾！」
「お、お嬢ちゃん、やめとくれ～！」
おや。
「マミゾウさん」
「お、真央、これ、女の子がの、儂の尻尾を……」
「ん？あぁ、ウィー、やめてあげなさい」
「はーい！Ａｍｍｉｒａｇｌｉｏ！」
「ふぅ、助かった……、って、お主んところの子か?!!」
「そう、彼女は……、俺の部下」
「ほー」
「兼恋人でーす」
「ほ？」
目が点になるマミゾウさん。
「……よ、幼女趣味か？いかんぞ、女が抱きたいなら儂が相手になるから、幼気な少女に手出しするのはやめるんじゃ！」
「手ェ出してねぇよ」
「ウィーはいつでもＯＫだよ！」
ってか、幻想郷ならセーフでは？
法律とか甘いし。
「いかん！いかんぞー、ろりこん、は病気なのじゃぞー！」
いや別にロリコンとかそう言うのじゃないです。

いや別にロリコンとかそう言うのじゃないです。
「真央さん！お久しぶりです！」
「大ちゃん！久しぶり！元気だったかい？」
ロリコンとかそう言う言い方はアレだね、ほら、単に子供好きの可能性もあるだろ。
いかに妖精がロリにしか見えなくても、決して俺はロリコンじゃない。
ほら、ほら、中身は大人だから。年齢的には歳上だろうし。
全然ロリコンじゃない、全然ロリコンじゃないんだ。
「だから怒らないでくれローマ」
「提督……」
「ローマ違うんだこれは違うんだ」
「真央さぁん??ちゅっ??」
「て、い、と、く……!!!」
「まあ待て、まあ待て」
違うんだ……、兎に角これは違うんだ……。
「チルノちゃんとー、皆んなで、また一緒に悪戯しましょうね！」
「この子はほら……、遊んであげた近所の子供みたいなアレで……、あの、ほら、俺、子供とか好きだし」
「私、怒ってます」
ヒイッ。
「これは違うんだ。兎に角違うんだ。誤解だ。許して」
「夜の悪戯も、教えて下さいね??」
ヤバいヤバいヤバいヤバい。
逃げるか、逃げよう。

宿は博麗神社を借りることにした。部屋余ってるだろうし。
「ただいま霊夢」
「別に、あんたはここに帰ってくる必要とかないでしょうに」
「もー、素直にお帰りって言ってくれても良いのよ？」
「何で旦那でもない男にお帰りと声をかけなきゃならないのかしら」

「?、旦那になろうか?」
「……この馬鹿」
ん?嫉妬か?可愛いな霊夢は。
「全く、他所でこんなに女を作って……。早苗、泣くわよ」
「かもな」
「フランも怒るでしょうね」
「だろうな」
「聖にも小言を言われるんじゃないかしら」
「でしょうね」
で?それが何か問題?
「……最ッ低」
ええ……。
「なんか当たり強くない?気のせい?」
「あんたなんていつか刺されちゃえば良いのよ」
「はっはっは、刺されたことがないとでも?」
しょっちゅう刺されてるよ、痴情の縺れで。
「何人もたらしこんで、悪いとは思わないの?」
「いや?俺は皆んなを、あらゆる美女を平等に愛しているよ?」
「……はー、そもそも、根っこの部分が破綻してるのね」
そんな人を人格破綻者みたいに。
「本当に、本当に、心から愛しているさ。相手が何人とか些細な問題じゃないかな」
「普通はね、一人の女の人を愛するものなの」
「それは君の見聞が狭いよ。一夫多妻の国なんて幾らでもあるし、長い人生、沢山の人に恋したりされたりするものさ。霊夢もいずれ分かるよ」
「……兎に角、浮気癖直しなさい」
「浮気じゃないのさ、全員に対して本気だから」
「……はぁ〜」
?
何だよ。

「まあ、今日は宿を貸してくれてありがとう。明日の朝食は期待してくれ」
「ええ、そうするわ。あんたの料理は咲夜並だしね」
「明日の夜にはここで宴会もするからな、その時も料理するぞ」
「それは楽しみね。外の世界のいい酒、沢山持ってるんでしょ？」
「ああ、最高のものを約束しよう」
「そう」
まあ、この後は、霊夢と少し会話して……。
眠くなったから、寝たんだが。
添い寝を提案したら殴られちゃった。
何でだろうな？

２７８話　黒井鎮守府修学旅行幻想郷編　後編

太陽の畑にて。
「うわあ！綺麗よ！とっても綺麗！」
夏、という事で、咲き誇る太陽の花。
「ははは、おっと、摘んだりするなよ」
「そんなことしないわよ」
「死ぬぞ」
「摘んだら死ぬの?!」
振り向いて驚愕するビスマルクに。
「ええ、殺すわ」
緑髪が綺麗な彼女が話しかける。
「あら、貴女は？」
「ここの管理人、ってところかしら」
日傘をさして、優雅に歩く。
「彼女は、花妖怪……、風見幽香。ここいらで最強の存在だ」
「最強……」
実際、ビスマルクでどこまでやれるか？
んー、硬さは戦艦以上、火力も要塞並、速力は超人……、あれ？これ結構いい勝負しそうじゃない？
「やあ、幽香。ご機嫌麗しゅうございまっす」
「貴方に会ったせいかしら、少し虫の居所が悪いわ」
はっはー、酷～い。
「……確かに、強さは魔物のそれだけど、形は人と変わらないのね」
ん？そうだね。
「……これも、艦娘ってやつかしら？」
「ああ、そうだよ」
「そう、中々楽しめそうね」
サディスティックな瞳で見つめてくる幽香。
「おやおや、弾幕ごっこなら俺が相手になるぞー」
「嫌よ、貴方、当たらないじゃない」

まあね。怒首領蜂大往生をクリアする程度の能力だから。弾幕避けるのとかヨユー。
「でもまあ、その子の目の前で貴方を甚振るのも悪くないかもね」
おやおやおやおや、サディスティックー。
「……提督に暴力を振るうなら、私が相手になるわ」
おっと、一触即発？
「大丈夫だ、ビスマルク。幽香はただ、構って欲しいだけだから」
その瞬間飛んでくる超高速のストレートパンチ。
吹き飛ぶ俺。
「は、はぁ？馬鹿言ってるんじゃないわよ。貴方なんて眼中にないわ」
「て、提督ー?!」
「ツ、ツンデレ……」
「死ねっ!!!」
「あぎゃあ」

頸椎を砕かれた。
ははは、致命傷で済んで良かった。
さて、今は寺。
まずは豪族に会ってこよう。
「貴女が、聖徳太子様なのね？女の人だとは思わなかったわ」
と、着いてきたウォースパイトが言う。
「そうか？アーサー王も女だぞ？」
「あら、本当？びっくりね」
「ところで太子様」
「何だい、真央」
「送った青のジャージ、着てくれないんですか？」
「……何で外の世界の服を渡されるのか分からないんだが、デザインが気に食わなくてね」
「飛鳥文化アタックは？」
「何だいそれは」
「ハーブの香り～、聖徳太子～♪モテモテ過ぎて～、困っちゃうな～♪

とか歌わないんですか？」
「ひょっとして馬鹿にしているのかな？」
いえいえいえいえ、馬鹿にしてるなんてとても。
「……にしても、君の欲はとてつもないな。良い女を抱きたい、美味い飯を食いたい、酒を飲みたい、賭け事をしたい……、と、実に俗なことから、世界を征服したい、自然を守りたい、文化を守りたい……、など、大それたことまで。面白い男だよ、本当に」
「まあね、女性を楽しませるのは得意なんだよ」
特に太子様みたいな美人は。
んー、良い女だな太子様。一晩お相手できないかな？
「……おや、私を抱きたい？過ぎた欲望だね」
そうかな？
「ならば、ふむ、君が道教をしっかりと信仰し、私の部下になると言うならば、考えてやらないこともないよ？」
「マジで?!」
なりゅー!!
と、言おうとしたところ。
「Ａｄｍｉｒａｌ」
微笑むウォースパイト。
……。
はい、ごめんなさい。

次も寺。
ひじりんに会いに行くのだ。
着いて着たのはテスト。
「日本のｍｏｎｓｔｒｅ、気になるわね」
「ほら、見ろよ見ろよー。あれが船幽霊だ」
「あら、キソに似てるのね」
そこにつっこんではならんぞ。
「あれが鵺」
「ヌエって何？」

「キマイラ」
「……私には女の子にしか見えないけど」
　女の子だよ？
「あれは入道」
「ニュウドウ？」
「坊主頭の妖怪のことさ」
「隣の子は？」
「入道使い」
「ニュウドウ使いって何よ……」
　何なんだろうな、俺にもわからん。
「そして、彼女がここのボス、ひじりん」
「聖です」
「あら、私はコマンダン・テストよ、よろしくヒジリン」
「聖です！貴方と言う人は……。また女人を誑かしているのですか！」
「ひじりんも俺に誑かされてみるかい？」
「お断りしますっ！」
「そんな寂しいこと言わないでくれよ？俺は聖が好きだよ？」
「……貴方が正式に仏門に入り、悪戯に女人を誑かすことのないよう自制を覚えたら、その時は」
「その時は？」
「……こ、交際、するのも、吝かではありませんよ？」
　よっしゃ！俺、仏門に入っちゃうぞぉ！
　と、言おうとしたら。
「提督！もう、駄目よ！宗教にハマるのはよして頂戴！」
「えー」
　テストに怒られてしまった。
　ちっ、コマちゃんめ。

　神社。
　今は山の方の神社に来ている。

山の方の巫女、やまみこに会いに行くぞ。いや、実際は風祝だが。
「早苗」
「ああ！真央さん！お久しぶりです!!」
「ああ、久しぶり！元気だったかい？」
「ええ、とっても！真央さんも元気そうですね！」
「提督、知り合い？」
プリンツに問われる。
「あ、ああ、知り合いさ」
「いえ！真央さんは私の大切な人です！」
「は？」
ああ、いや……。
「一緒に現人神になって、守矢の信仰を集めていく約束をしました！」
し、したよーな、してないよーな。
「何言ってるの？提督は私の王子様なんだよ？」
ん、んん。
「私のです！」
「わーたーしーのー！」
「おやおや、いかんな、喧嘩しちゃ」
「真央さんは私と現人神になるんですよね？」
「ああ、いずれね」
「私とドイツに帰るんです！」
「そのうちね」
「早苗はやらんぞーーーー!!!!」
グワーッ！神二柱!!!!
神二柱から有り難い蹴る殴るの暴行を受けた俺。
酷い、なんてことだ。世も末だ。
俺はただ美少女を口説いて回っているだけなのに、何故怒られなきゃならないんだ!!
「どう言うことなんだにとりッ!!!!!!」
「ひゅい!!!!?し、知らないよぉ～！盟友の女癖が悪いんじゃないかー!!」

そうか？
「俺は悪くねぇ!!」
「何で自信満々なのさ?!悪いからね?!」
「そうね、Ａｄｍｉｒａｌが悪いわ」
と、アイオワ。
声を大にして言いたい。俺は一片も悪くねぇと。
「ところで貴女、本当にカッパ？ネットで見たのと違うわ」
「？、河童だよ？」
「ちょっと失礼……」
にとりから帽子を取るアイオワ。
「頭にお皿、ないじゃない」
「ないけど……？」
「……ただのｅｎｇｉｎｅｅｒ？」
俺も思ってるけど、言うな、アイオワ。
「じゃあなにとり、今度デートしような」
「え、えぇ？だ、駄目だよぉ、雛に悪いし」
「まあまあ、そう言うなよ、一晩だけ！お友達から！」
「わ、悪い気はしないけどね？」
「にとり愛してる」
「もー！」
「……ほら、Ａｄｍｉｒａｌ！帰るわよ!!」
あいたたた、引っ張るな、アイオワ。
今はにとりを口説くのに忙しい。

夜。
博麗神社で宴会。
酒と料理は俺と紅魔館、白玉楼、博麗神社が提供した。他にも、皆ちょこちょこと持ち寄って来たみたいだ。
「真ー央！」
「よお、萃香」
「飲んでるかー？」

「おう」
「……で？いつ本格的にこちら側に来るんだ？」
「まだ人でいたいかな」
幻想郷にいると様々な派閥から勧誘される。
萃香からは鬼にならないかと誘われている。
「なんだよぅ、待ってるんだぞ私はー。お前が私達のものになるのをなー！」
「むうう！提督はやらんぞ！悪魔め！」
と、ウォッカ片手にガングート。
「悪魔じゃないよー、鬼だよー」
「どちらでも変わらん、悪しき者だろう」
「むっ、何だい何だい、横から急に。真央は私と一緒に鬼になって、長い長い時を共に過ごすんだぞー！」
「舐めるなよ貴様!!」
「やるかー!!」
「「弾幕ごっこだ!!!」」
「あーあーあー」
喧嘩すんなっつったんだがねー。

さあ、宴もたけなわ。良い感じ。
「Ａｄｍｉｒａｌは渡さない!!!」
「提督は私のものだ!!!」
「Ａｍｉｒａｌは私の旦那様よ!!!」
乱痴気騒ぎはいつのまにか弾幕ごっこ会場に。
光弾飛び交う博麗神社で、俺は酒を飲みながら弾幕ごっこを眺める。
まあ、弾幕ごっこだし、死にはしねえだろ。
ん？
「どうしたもこたん」
「あ、ああ。いや、お前、また新しい女を誑し込んだんだな」
「人聞きの悪い、皆平等に」

「愛してるってんだろ、はいはい。まあ……」
ん？
「いずれお前には、蓬莱の薬を飲んでもらうからな。私と、永遠の時を生きてくれるんだろう？それまで死ぬなよ？」
あ、ああー、そんな約束もしたっけか。
覚えてねえわ。一々自分の言う口説き文句を覚えてると思うか？俺が。
まあ良いや、もこたんが一緒にいたいって言うなら、いてあげよう。
でも。
「今はまだその時ではない」
「そう、か？なら私は待つさ。ふふ、待つのは得意なんだ……」
俺の人生の終着駅は、もこたんと永遠の時を共に過ごすこと、らしい。
なんか知らんがそう言うことになった。

さて、次の日。帰還日だ。
飲み過ぎと弾幕ごっこで倒れた艦娘達を回収して、と。
片付けを手伝ったところで。
「んーーー、それじゃあ俺は帰るわぁ」
「ん、そう」
寝ぼけ眼の霊夢に告げる。
「また、異変があったら遊びに来るわ」
「口説きに来るの間違いじゃないかしら」
ははっ、そうとも言う。
「でも、まあ……、異変がなくても、暇なら遊びに来なさいよ」
「……ああ、分かった」
俺は霊夢にそう言って、艦娘達を連れて鎮守府に帰って行った……。

２７９話　怒って欲しいの

こんにちは！
私は鹿島！
最高にカッコいいご主人様である提督に仕える艦娘です！
お仕事も順調だし、提督はカッコいいし、全て上手くいってるんですけど……、一つ、不満があるんです。
「提督に怒られたい……！」
そう……、提督はとっても優しい！
私としては、ボコボコに殴ってもらったり、死ぬほどこき使ってもらったりしたいのに！
ああ、提督に腰が抜けるほどお説教されたい！
沢山暴力を振るってもらって、酷いこといっぱいしてもらって……、そして最期の瞬間は、提督の手で殺して欲しい??
なのに、提督ったら！
……「鹿島は可愛いなあ、良い子だ」
……「んー？愛してるよ、一生大切にするからな」
……「そんな酷いことしないさ、君を傷付ける奴は許さない」
優し過ぎですー！
暴力もレイプもしないなんて、提督は男の人なのに積極性に欠けるんじゃないですか?!
「どう思います皆さん!!」
「むう、被虐趣味の鹿島にそう言われてもな」
「でもまあ、確かに、提督に怒られたいのは分かりますねぇ」
「でも提督は優しいから……」
そうなんですよね、滅多なことでは怒ったりしない。
「提督の新たな一面を見るためにも、怒らせてみませんか？」
「不敬では？」
「しかしなぁ」
「ええんちゃう？」
意見は割れましたが、概ね好意的に捉えられました！

では……。
「どうやって怒らせます？」
「あー、食事をぶちまけるとか？」
「龍驤さん、なんて恐ろしいことを……！そんなことしたら提督が泣いちゃうじゃないですか！」
「……まあ、怒らずに泣きそうではあるわな」
それは駄目です！
「じゃあ悪口を言うとか」
「……私が心苦しいんですが」
「やれや」
まあ、分かりました。
やってみましょう。

「提督ー！」
「はいはい、なんだい鹿島」
「えっと、えっと、提督の馬鹿！」
「んんーん、可愛い」
「エッチ！」
「そうだね」
「変態！」
「うん」
あ、あれー？
怒ってない？
「駄目人間!!」
「自覚はあるよ」
「うー、性欲魔人!!」
「そこまでじゃないさ。まあ、性欲がないことはないが」
「クズ!!!」
「改めて言われなくても分かってるよ」
「……これ以上酷いことが思いつきません」
「もっとあるだろ、女誑しとか野蛮とかギャンブル狂とか金遣いの荒

さとか、歳の割に落ち着いてない、人殺し、犯罪者、盗人、人食いと責める点は多々あると思うが」
「提督に悪いところなんてないです……、悪口なんて言えません！」
「いや、悪いところの塊みたいなもんなんだがな」
ううー、悪口を言って怒らせるのは無理、ですね、失敗です……。

そうだ！悪戯をして怒られましょう！
よし、この箒で……。
「提督ー！」
「はいはいー」
扉に入る瞬間に、箒を上げる！
「ん？何だい鹿島」
あっ、跨がれた！
「い、いえ、何でも……」
次！
黒板消しを……。
「っと」
キャッチされた……。
次！
パイ投げを……。
「もぐもぐ」
空中で食べられた……。
次！
落とし穴を……。
「……」
迂回された……。
「鹿島、ブービートラップの基本はな……」
その上トラップの講釈までされた……。
くっ、失敗です……。

こ、こうなったら！いきなり暴力を振るえば!!

「えーい！」
「よっと」
　避けられた！
「まだまだ！」
「はい駄目」
「次！」
「惜しいね」
……
……
……
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」
「鹿島は少し視野が狭いかもなー、後ろまで目をつける感じで、気配を感じる力を養った方が良いかもな。そこら辺は妙高型が上手いから、聞きに行ってみたらどうだ？」
「は、はい、ありがとうございました……」
　そうでした、防御と回避においては、鎮守府でもトップクラス……、ダメージを受けない、受けても死なない、そう言うコンセプトの人でした。
　突発的な暴力には慣れきっていて、突然後ろから殴りかかられても、狙撃されても、無差別な範囲攻撃をされても全部対応するような人でした……。
　暴力に訴えかける、失敗です……。

　そうだ！無視しましょう！虐めの基本です！
　……私が虐められたいんですけどね、おかしいですよねこれ。
「鹿島ー」
「つーん」
「？」
「無視でーす」
「おやおや、悲しいな」
「ふーんだ」

さあ、どうします？提督！怒りますか？怒っちゃいまあああああ
?!!
「鹿島ー、鹿島は可愛いなー」
ギュってされてるうううう!!
「鹿島ー、俺とお話してくれるかなー」
「えへへへへぇ、はぁい??」
はっ
?!!
だ、駄目よ鹿島！欲望に負けちゃ駄目!!
「だ、駄目ですぅ！提督なんてもう知りません！無視しちゃいます！」
「そんな寂しいこと言わないでよー」
ほわあああああ!!
＋撫で撫でえええええ!!
「鹿島の可愛い声が聞きたいなー」
「駄目ですからぁ??」
「そう言わずにさ、俺とお喋りしよう？ねっ？」
壁ドンんんんん!!
「は、はいっ??お喋りしましゅ??」
「ふふふ、それは良かった、それじゃあ行こうか」
お姫様抱っこまでえええええ!!

「ふぅ」
駄目ですねこれ……、駄目ですね。
これは……、駄目ですね。
ああ、もう、いっそ、こうしましょう。
「その、提督。提督はどうしたら、私達に怒ってくれるんですか？」
本人に直接聞こう。
「んー？俺、君みたいな可愛い女の子には何されても怒らないよ？」
「そんなことないでしょう！感情があるなら、必ず怒るツボはあるはずです！」
「そんなの無いけど。美人には何されてもオールオッケーよ」
「例えば、例えばそう、いきなり殴りかかられたら?!」

「ダンスのお誘いかな、と思うよ」
「ポジティブですか?!」
「まあ、それは冗談だとしても、俺がなんか悪いことやっちゃったんだなって反省して、誠心誠意謝るよ」
「理由なんてない、物盗りとか、快楽殺人とかだったら?」
「物盗りの女の子なら、お金をあげるし、快楽殺人犯の女の子なら、殺されてあげるよ」
「どう言う神経してるんですか?!」
　えーと、えーと……!
「じゃあ、作った料理を投げつけられたら?」
「俺の腕が悪いんだなって思うよ」
　ええー……。
「そうだ、妹さん!妹さんに危害を加えてきたらどうです?」
「妹なら自力でなんとかすると思うけど……、一応止めるかな」
「怒らないんですか?!」
「妹を狙うってことは技術系の問題だろうし、妹に技術提供を依頼するよ」
　相手が可愛い女の子なら、肉親に危害が加えられても怒らない……?!
「でも、怒らないってことはないですよね?感情が欠落しているとかでは……」
「いや俺も相手が男か不細工なら怒るよ」
「例えば、どんな時に?」
「ホモにロックオンされた時とか」
　それは、まあ、怒るでしょうね。
「いきなり殴られれば殴り返すし、殺そうとしてくれれば殺し返すかもしれない。極力殺さない主義だが」
　そう、ですか……。
　はっ、そうだ!
「私が男になれば……?!」
「その場合、ショックで自殺するね」

では、無理ですね……。

結論として、提督は怒らないことが分かりました……。

でも、土下座して頼み込めば、鞭で打ってもらえるのも、また分かりました！

将来的には、土下座している頭を上から踏みつけてもらったり、言葉責めしてもらいながら鞭でしばいてもらったりとかも予定してます！

ちょっとづつ、ドＳへの道を歩んでもらいますからね??

２８０話　ゴールデン神威

ゴオオオオルデン！
「神威！」
「はい！」
「狩りがやりたい気分だ」
「はい！」
「付き合ってくれるかな？」
「もちろんです！」
勿論、獣狩りとかそう言う明らかにヤバい感じのサムシングじゃない。普通にハンティングだ。
「神威は何が食べたい？」
「キムンカムイですかねぇ」
熊か。アイヌの言葉で山の神。
「うちの裏山に出るからな、狩ろうか」
「普通は、この時期に狩りなんて危ないんですけどね。でも提督と私ですし」
確かにな、この時期の熊は、冬籠りの準備をし始める頃だ。つまり、活発に動き始める時期。普通のマタギなら冬にやるものだが……。
残念ながら俺達は普通じゃない。
お互い、熊くらいなら素手で殺せる。
「あっ、そうだ、折角だから子熊を捕まえてイオマンテしませんか？」
「そんなことしたら子熊を可愛がった駆逐艦の子達に強烈なトラウマが残るから」
イオマンテとは、アイヌの儀式で、可愛がって育てた子熊を縊り殺し、解体して、全身余すところなく生きる糧にする儀式である。まあ、大分うがった見方で言ったが間違いない。正確には、神々の魂を送り返す儀式だな。
いや、サイコパスではない。宗教観の問題だ。野蛮と嘲るつもりはない。むしろ俺にも、自然に、命に感謝しようとする心は伝わる。
アイヌ的には、熊を始めとする野の獣達は神なのだ。熊の肉も毛皮

も神様の贈り物と考えられている。
まあ兎に角、熊送り系の儀式なんてしたら、皆んなの心に消えない傷を残すだろう。それは良くない。
卯月辺りなんて泣いちゃうんじゃないかな。
ほら、あれだ、昔何処かで聞いた、クラスで育てた子豚を最後に子供達に食べさせて命の大切さを教えるみたいな。ある意味拷問だよな。
「？、なら、可愛がらなければ良いのでは？」
そんなアリシパちゃんみたいなこと言って……。
「って言うか何で態々儀式なんて」
「白露型の皆んなとか、楽しそうですよね」
ああ、まあ……。
白露型の儀式はほら、また別のやつだから。なんて言うか、邪悪な感じのアレだ。
「あれは、ほら、神降ろしとかだから……。研究のためにやっているものであって、遊びとかじゃないから」
「真似しちゃ駄目、ですか？」
「出来るだけ真似して欲しくはないねー」
「分かりました……」
少ししゅんとする神威。
「あー、そうだな、儀式は出来ないけど、アイヌ料理は作れるから。一緒に作ろうな」
「はい！」
にしても、あれか。
「儀式やりたいだなんて、やっぱり神威は神の存在を信じているのか？」
「いえ別に」
あるぇー？
「私にとっての本当のカムイは提督だけです」
んっん、なんか今怖いこと言わなかった？
「私、思うんです。こんなに優しくて、全てを与えてくれる提督は、カ

ムイなんじゃないかって」
んー。
「違うよ」
「いえ、提督は私達のカムイなんです！私達を守って、恵みを与えてくれます！着るものも食べるものも住むところもくれます！」
確かに、そうだが。神になどなったつもりはないし、今後なるつもりはない。
「はは、俺はカミサマなんてつまらないものになるつもりはないけど、神威のお願いならなんでも聞くさ」
まあ、神で例えるならゼウスだろうかね。クズっぷりが良く似てる。……いや、アポロンか。まあその辺りだろう。人間性的に。
「本当ですか?!じゃあ次は子宝を貰えると嬉しいです??」
んー。
「うんそれ無理」
「大切にしますからぁ！」
「さて、狩りに行こうか」

一狩り行こうぜ、と言う訳で。
山。
鎮守府の裏山。
鹿、熊、猪などが住み着いている。
管理者である首輪付きによると、日本でも類を見ないほどに肥沃な山だから、野生動物が沢山生息しているらしい。
「首輪付きちゃんもカムイみたいですね。こんな豊かな山を管理してくれているなんて」
「それには同意するよ。でも、あいつにとってこれは趣味でもあるからな」
あいつも腹を空かせている時は、鹿を捕らえて食ったりする。
でも最近は、黒井鎮守府に飯をたかりに来ることが多い。
どうやら、料理の美味さに目覚めたらしい。酒とかも喜んで飲む。
この前梅酒差し入れしたら喜んでた。

「ありがたいです、本当に。私を取り巻く皆さんも本当に優しくて、私はカムイモシリに迷い込んでしまったかのように感じています」
「カムイモシリ、神の世界か」
「実際に、ウェンカムイみたいな艦娘も多数いることですし、もうカムイモシリで良いんじゃないですかね」
　ウェンカムイ、荒神、疫病神のこと。確かに上位者の技法や血肉を取り入れた白露型なんかは悪神と言っても過言ではないかもしれない。そもそもの種族が艦娘、つまりは神霊である君達は神であると言っても良いかもね。
「それを言ったら深海棲艦こそウェンカムイだけど」
「はい！ですから、深海棲艦は、殺した後バラバラにしてばら撒いてます！」
　人を殺す悪いウェンカムイは、バラバラにして野山の腐れ根の上にばら撒くのがアイヌ流。
「はっはっは、神威が猟奇的な行為を行っているとの報告の原因はこれかぁ」
　夕立辺りから、「神威も中々にやるっぽい！」との報告が来ていたが。望月辺りからは「あれ、グロいからやめさせてよ」と苦言を呈されていた。
　まあほら、そう言うのは宗教的なアレだから勘弁してあげて欲しい。

「で、狩りですが」
「ああ、やろうか」
「それは？」
「必滅の一矢」
　ここ最近の愛用品だ。
「トゲトゲで強そうですね！」
「強いよ、実際」
「何で出来ているんですか？」
「ネルギガンテ」

「えっ」
「ネルギガンテ」
「そ、そうですか（何でしょうかそれは）」
　強敵だった。
「じゃあまず、熊を探そうか」
　俺が鼻を鳴らす。
「こっちだ」
「え？なんで分かるんですか？」
「匂い」
「はあ、提督はホロケウカムイみたいですね」
　狼か。まあそれくらいは鼻が利くからな。
「あ、足跡。本当にこっちみたいですね！凄いです！」
　さて、痕跡を見つけたところで。
『グルル……』
　発見ー。
　さあて、威力を絞って……、射る！
『グオッ?!!』
「狩ったぜ」
「ほえー、心臓を綺麗に貫きましたねー」
　威力を絞ったから、肉体に大穴が開くようなことがなくてよかった。
「提督のお力ならば、頭をかち割って殺せるんじゃ？」
「まあ、バフ積めば出来ないことはないけど」
　そうすると服が汚れるし。
　あ、山にいるけど服装はいつものシャツです。舐めてんの？って感じ。
　山を舐めると痛い目に遭うもんだが、俺はこれでも舐めてない。俺はこれで大丈夫なんだ。着の身着のままでアラスカだろうがシベリアだろうがアフリカだろうが、どこに飛んだって大丈夫。何故なら俺は旅人だから。
「そうですね、それをやるとチノイペコタタプが作れなくなっちゃい

ますもんね！」
　え？アレ作んの？まあ、良いけど……。
　チノイペコタタプ、熊の脳のたたきだ。
　美味しくは、ないよなぁ。

「さあ、作ろうか。何が良い？」
「オハウにしましょう！」
　汁物か。良いね。煮る料理は得意だ。
「チタタプも作ります！提督、ちゃんとチタタプって言って刻むんですよ！」
「神威、ゴールデンカムイ読んだな？」
「アリシパちゃん可愛かったです！」
　誰だ神威にゴールデンカムイ渡したのは?!
「アイヌの漫画だって望月ちゃんに勧められて読んだんですけど」
　望月か。
「内容は変態の漫画でした！」
　大体合ってる。
「漫画は漫画だからな」
「でも提督も概ね不死身ですし」
「そうだけど」
「私達も漫画みたいな存在ですし」
「そうだけど」
　それは言っちゃいけない。

「ご馳走さまでした！」
「ああ、お粗末さまでした」
　食事シーン？特に語ることはない。二人で合計数十ｋｇ消費して、残った分は俺の四次元ポケットへ。
「また一緒に料理しましょうね！」
「もちろんだとも」
「嬉しい……、嬉しいです！この喜びを何とかして表現したいです！

儀式しましょう！」
「やらないってば」
神威は、ちょっと。
変な子だな。

２８１話　黒井鎮守府大運動会

黒井鎮守府ー！
「大運動会ー！」
「「「わー!!!」」」
「いやあ、そう言えばね、秋だよね」
「「「はい」」」
「ほら、スポーツの秋って言うじゃん？ってかあれだ、運動会の季節だし、なんかやろうかなーって」
「「「はい」」」
「んでさ、あれだよ、君達はほら、見た目的には小中学生でおかしくない子もいる訳だし？たまには学校行事っぽいことしといた方が良いかなーって思ってさ」
「子供扱いしないでほしいっぽい！」
「暁は大人のレディよ！」
「うちも大人やぞー！」
「あー、じゃあほら、あれだ。どうせ君達、学校に行くつもりなんて微塵もないんだろ？でも、人生で一度くらいは運動会を経験してみるのも良いんじゃないかな？と言う感じ」
「「「まあ、それなら……」」」
話がまとまったところで。
艦隊を四チームに分ける。
もちろん、艦種に偏りが出ないように均等にだ。
大型の艦娘はパワーと耐久性に優れ、小型の艦娘はスピードと精密動作性に優れるからな。
さて、見てみようか。
まずは赤組。
長門がリーダーの脳筋集団だ。
白組。
金剛がリーダー。こちらもパワー型？
青組。

大和がリーダー。技巧派。
黄組。
伊勢がリーダー。頭脳派かもしれない。
1チームにつき三十人くらいか。
そして、これは重要なことだが……、服装はブルマにした。
俺の趣味だ。
さて、準備は万端。
「選手宣誓とかやる？」
「いや、そこまではやらなくて良いだろう。しかしスピーチくらいはしたらどうだろうか」
「えー、本日はお日柄も良く……」

「じゃあ、早速競技を始めよう。まずはエクストリーム大玉ころがしだ！」
「ほう」
「それも、ただの大玉じゃないぞ！工廠製トン玉だ！」
「何というか、美味しそうな名前だが、何だそれは？」
「トン単位の玉だ」
「ああ、そう言う……」
長門が納得してくれたところで。
「大玉ころがし、開始ィ!!!」
赤組では古鷹が、白組では利根が、青組では足柄が、黄組では青葉が、それぞれ、トン単位の大玉を押す。
「おおおおお!!!」
「はあああああ!!!」
「こんのぉ!!!」
「ちょ、これ、重い!!!」
まあ、俺もバフ全乗せくらいじゃないと動かせないくらいに重い大玉だからねえ。
それでも、素の力だけでころがせる艦娘のパワーってスゲー。
「コーナーを、曲がっ、てぇ!!!」

やはり、古鷹が一番速いか。そりゃそうだ、普段から牙斬刀……、身の丈以上の特大剣を片手で振り回すんだもんよ。パワーはあるだろうな。
次点は足柄、こちらもパワー型だ。
そして利根、青葉と続く。
成る程なぁ、大体予想通りの結果だ。
「ゴール!!」
「やりました！一位です！」

玉入れだ。
「この玉入れでは、玉の数が無限になっている」
「どう言うことデスカー？」
「まず、この元素転換装置によって創り出された何の変哲も無い玉だが」
「元素転換装置を使ってる時点で変哲ありマスケドネー」
「玉入れの籠に触れた時点で、範囲数十メートル内にランダム転移する」
「転移しちゃ数が分からないのデハ？」
「大丈夫、玉入れの籠の枠に、超高性能センサーがついていて、入った玉の数はしっかりと記録されるんだ」
「成る程デスネー」
金剛が納得してくれたところで。
「それでは、エクストリーム玉入れ、開始！」
エクストリーム玉入れが始まる。
「シィッ!!!」
「行くよっ!!!」
「分身っ!!!」
青組の時雨と、白組の島風が突出しているな。それに黄組の川内が追う形だ。赤組は駄目そう。
まず時雨だが……、速いのだ。
黒井鎮守府最速は、間違いなく島風だが、時雨は体感的に速い。

『加速』の秘儀を使った高速移動は、小回りが利く。切り返しや方向転換の高速化は、動きのロスを極限まで切り落とした無駄のない速さ。
つまり、最速の島風に対して精密動作性で挑むと言う訳だ。
更に、脳内の瞳を使った未来予知によって、ランダム転移した玉を効率的に回収して投げ入れている。
つまり、最高効率で玉入れをしているのだ。
一方で島風。
島風は、黒井鎮守府最速だ。
音を置き去りにして空を駆けて、圧倒的な速さで、玉を投げ入れていらっしゃる。
時雨といい勝負だな。
それに遅れて、川内が、ニンジャとしてのスキルを全開で使って追いすがる。
結果は……、青組、時雨か。他の白露型がいたこともデカかったな。

次、綱引き。
「あのう、艦娘の力なら、綱程度引き千切れるのですが……」
「だろうな」
艦娘の筋力はトン単位。それが複数人。
生半可な綱では千切れてしまうだろう。
「なので、今回用意したのはこちら、アダマンタイト製超硬ワイヤ」
アダマンタイト製と言うことで硬さはバッチリだが、重さがね。しかし艦娘なので無問題。
「ちょっと引っ張ってみて大和」
「分かりました。んー!……これなら大丈夫そうですね」
大和が引っ張って強度の確認をした。
「さて、良いかな?……エクストリーム綱引き、開始ッ!!」
まあ、赤組……、長門がね。
「おおおおおお!!!」
下手をすれば並の艦娘十人分くらいのパワー。力こそパワーとはよく言ったもの。そのパワーは、アルティメットフォームのクウガさ

んに匹敵する。
　因みに、大体、艦娘の平均的な身体能力のスペックは仮面ライダー並。俺？本気でバフを積めばなんとかライダーに追いつくくらいかなぁ……。
　そんな感じで、綱引きは赤組の独壇場。

　さて、騎馬戦だ。
「女の子に騎馬戦やらせるのもどうなん？って思ったけど、やります」
　キャットファイトじみたエロもあるかな、と期待してのことだ。
「これは……、鉢巻を取ったら良いんだね？」
「そう、鉢巻を取られたら失格の時間制限付きバトルよ」
「危険は特にないですね、艦娘ですし」
　伊勢と会話を交わして。
「それでは、エクストリーム騎馬戦、開始!!!」
　始めた。
「はあっ!!」
　徒手空拳が強い黄組の神通が活躍。技量タイプはここにきて強い。
　時雨、陸奥辺りも中々。
　技量タイプの面目躍如じゃーん。
　ってか、割とマジでやってんのね。こう言うのはスポーツだから手を抜くもんかと思いきや、全員概ねエンジョイしてる。
「うりゃあああああ!!!」
「はあああああああ!!!」
　ああ、金剛と大和がラッシュの速さ比べしてやがる。
　もしかして、オラオラですかァーーー?!

　借り物競争。
「あ、言っておくけど、俺に頼むのは禁止な。大抵のものは持ち歩いてるから」
　出せと言われれば船からナイフまで幅広く持ってる。インベントリ、アイテム欄に。

「だが、そうすると、借り物を見つけるのに苦労するのではないか？」
「そうくると思ってあらかじめ鎮守府中にアイテムを配置しておいた」
「成る程」
　長門と会話して。
「それでは、エクストリーム借り物競争、開始!!!」
　開始した。
「バイタルスター……？何だこれは?!どこにある?!」
「わさビーフ……、休憩室のお菓子置き場になら！」
「反魂香……、反魂香?!えっ、反魂香?!そもそも存在するんですか?!」
「日本刀……、武器庫デスネ！」
「照魔鏡……、そんなものどこに……！」
「祭祀者の骨の刃……、何だそれは？ええい、恐らくは白露型だろう。そう言う怪しいものはあいつらだ」
「シャトー・ラフィット……、ワインねこれは、多分。居酒屋鳳翔に行こう」
　皆、良い具合に迷っている。
　良いぞ、迷え、もっと迷え……。

　障害物競争。
「もちろんただの障害物じゃないよ！」
　工廠製の非殺傷警備装置を流用した、特殊トラップの数々！
「致死性トラップがあっても良いと思いマスケドネー」
「いや、流石にそれは」
　危ないからね。
「それでは、エクストリーム障害物競争、開始ー!!!」
　さあ、走るのだ艦娘達よ。
　さて、障害物用に用意したエロ触手。
「せいっ！」
「はあっ！」
「やああ！」

うーん、この。死滅するエロ触手君。
石の防壁も、
「おらぁ！」
楽々突破。
電磁網を、
「しびびび」
痺れながらも通過。
浮遊ブロックも、
「とっ、はっ、よっ」
跳ねるように通過。
うんうん、うん。
全員ゴール、か。

リレー。
「でもただのリレーじゃないよ！」
「このバトン……、何か細工してありますね？」
「リレーのバトンに重力発生装置を取り付けた」
艦種毎によって強弱はあるが、概ね精神と時の部屋レベルの重力がかかる。
「成る程、これなら、単純な速さだけではなく筋力も必要になりますから、勝負は分かりませんね」
大和が納得したところで。
「エクストリームリレー、開始ィ!!!」
さて、どうなる？
「うっ！」
「重い！」
素早さに定評がある羽黒、島風が足をとられた。筋力はないからな。
逆に、筋力のある艦娘……、戦艦などは、単純なスピードが遅いからな。
「くっ、駆逐艦で差をつけることができマセンネー！」

「おおおおおお!!」
力と速さのバランスが良かった黄組が優勢、か。
「結果発表〜!!（浜田風）」
さてさて、結果はー？
……。
「あの、これさ、ちゃんと点数計算したんだけどさ」
「ああ、つまり、そう言うことか」
長門が察する。
「そうなんだよね……。全組、同点！全員優勝！優しい世界!!!」
「「「お、おお〜？」」」
「なんか、ちょっち、納得いかへんな」
「元はと言えば俺が艦娘の力が平均になるようにチーム分けしたからね。この結果は必然なんだよね」
でも、でもな？
「だけど、今日のこの時のために、必死になって汗を流した経験、それこそが大事なんじゃないかな？」
「ああ、まあ、そう、ですね」
「あー、うーん、せやなー」
「まあ、そうなんじゃ、ないですかね」
うんうん。
「今日は皆んな、素晴らしい経験ができたんじゃないかな！」
「そうですかねぇ」
「仲間との絆とか！なんかそう言うの！」
「あー、かもしれませんね」
「いやあ、めでたしめでたし！皆んないい経験ができた！絆が深まった！」
「まあ、私は提督の指示でやっただけですので」
「暇つぶしに」
「遊びです」
つまりまあ、結局のところ。

俺の命令で始まった運動会は、そこそこ楽しかった、との評価を受けて。

「「「来年こそは勝つぞー！」」」

「「「おー!!!」」」

艦娘にスポーツをする口実の一つができたって話かね。

２８２話　映画を見よう

「提督！提督！見てこれ、提督！」
嬉しそうなビスマルクの手元には、映画「帰ってきたヒトラー」のＤＶＤが。
あー、うー？
「ヤバい組み合わせだな」
「素晴らしい映画だったわ！とても夢のある話ね！」
確かに、映画やドラマ、小説やゲーム、漫画アニメなど、文化に触れることは良いことだ、推奨している。
しかし、しかしだ。
これは悪影響なのでは……？
ナチス当事者にナチスの映画を見せて良いのだろうか。何というか、それは、ヤクザがＶシネ見るみたいな……。
大変よろしくない化学反応が起きるのではないでしょうか。
「あんまりこう、ナチスとかの話すると、色々と怖いから」
「何が？」
「ＵＮＥＩさんとか……、兎に角、怖い人に睨まれる」
ハサンの人達だって、極力イスラーム臭を出さないようにやっているのに、艦娘の人達がナチスとか軍国主義とかやっちゃならんでしょ。
「そう？でも私、今は提督の所有物だけど、元はナチスドイツ所属だから」
「お、おう」
「それでね、この映画！とっても面白かったわ！総統閣下が現代に現れるなんて、夢のある話じゃない！」
「あー、もしも本当に現れたらどうする？指揮下に入るの？」
「んー、挨拶くらいはしたいけど。今は提督の所有物だって言ってるじゃない」
あ、そんなもんなんだ。てっきり俺を連れてドイツに帰るくらいは言うかと。

「でもほら、あれだよ、世間一般じゃナチスは悪党だよ」
「それなのよね。ナチスって何か悪いことしたかしら？」
「そりゃ、ほら、人体実験とか」
「その代わり、医学が発展したじゃない。必要な犠牲でしょ？」
　いかんいかんいかん、艦娘が必要な犠牲とか言っちゃ駄目よ。
「まあ、俺も、顔も名前も知らない誰かが死んだところで何の感慨も湧かないけれど、社会一般的にそういうのは駄目じゃん？それに、艦娘って立場なのに、必要な犠牲とか言うと怒られるよ。犠牲を出さないのが仕事だろって」
「？、何であれ、どう取り繕っても犠牲は出るものよ？」
　そうだけどね。
「人間嫌いなの？」
「んー、結構」
　あっ、そうなんだー。
「特に価値がない人間が嫌いなの。権利ばかりを主張する能無しがね。それに、クズが死んだところで、私達は困らないでしょう？提督みたいな上等な人間が生き残れば良いんじゃないかしら」
　選民思想ー。
「人の価値なんて誰にも決められないさ」
「提督って女の子に対しては綺麗事を言うわね。本音は？」
「気にくわない奴は殴るし、最悪殺す」
　暴力や殺しは嫌いだけどやらないとは言ってないからね。
「そっちの方が男らしくって素敵よ！」
　そう？
　ビスマルクはｄａｒｋ―ｌａｗか。ってか黒井鎮守府全体がダークだが。悪法に従うという意味でｄａｒｋ―ｌａｗもちらほらいるが、基本的には破滅的なｄａｒｋ―ｃｈａｏｓが多い。俺は一応ｎｅｕｔｒａｌ―ｎｅｕｔｒａｌだけど。
「私達が法になればいいのよ」
「良くないぞ、力で押さえつけるのは、反発しか生まない」
「本音は？」

「ありのままの君が好きだよ」
　正直、美人なら何でも良いんだよなあ。サイコパスの人殺しだろうが人食い妖怪だろうが可愛くてデートとかセッ○スとかしてくれるんならそれで良いよ俺は。
「ありのままの私を受け入れてくれるなら、何も気にすることはないわね」
「でもほら、少しは猫を被る意思も見せて。偉い人達から怒られるとアレだから」
「はーい」

「見てくれよ提督！ほらこれ！」
「火垂るの墓」のＤＶＤを見せてくる摩耶。
　ああ、はいはい。
「アタシ、映画に出たんだぜ!!」
「そういや出てたね」
　そんなシーンもあったなあ。そういやアレは摩耶だったな。
「映画はどうだった？」
「まあ、面白くはなかったな」
　そう？
「アタシ、弱い奴って嫌いなんだよな」
　おっと？
「弱肉強食だ、弱い奴は死ねば良い」
「ほら、あれだ、もっとこう、慈悲の心とかは？」
「あぁ？ねえよ、んなもん」
　ないの？
「弱くて、馬鹿で……、妹一人守れなかったガキの話だろ？」
「んんぅ、そうじゃ、ないんだけどもなぁ」
　もっとこう、感動したとか……、戦争の悲しさとか……、情動はどうなってるんだこの子。やはりｄａｒｋ－ｃｈａｏｓか。
「大体にして、そんなこと言ったら俺だって弱いさ」
「は？どこがだ？提督の強みは死なないことだろ？」

んー。そりゃそうだが。
「君を守ってあげることはできないかもよ？」
「はっ、良いぜ。アタシが提督を守るんだからな！」
やだもう、男らしい。
「でもほら、艦娘なんだからさ、弱い民草を守るのがお仕事でしょ？」
「そんなのどうでもいい」
そんなの？どうでもいい？
「いや、だって、ほら」
「何でアタシが顔も名前も知らない有象無象を守らなきゃならねーんだよ。私が守るのは鎮守府の仲間と、提督だけだ」
「役目はどうなん？」
「役目？知らねーよ。アタシはアタシのしたいことをするんだ」
ああ、艦娘の役目とかもうどうでもいい感じか。

「提督提督提督ぅーーー！！！」
抱きついてくる明石。脚まで絡めてきている。所謂だいしゅきホールドだ。
「おお、よしよし、どうした？」
可愛い。可愛いので頭を撫でてやる。
「んにゃ～??」
よく懐いた犬猫のように擦り寄って、頬擦りしてくる明石。
「可愛い可愛い」
「提督大好きですー！」
「はいはい、俺も大好きだよー」
で、何の用かな。
「あ、そうですそうです。ちょっと私、久しぶりに映画を見まして」
「ほう」
「これなんですけど」
「……パシフィックリム」
「はい」
あー、嫌な予感する。

「まさか、作ったとか……」
「あはははは」
　なにわろてんねん。
「実に興味深い内容でしたよ！ロボットプロレスはいい文明！」
「古き良きロボットプロレスだったな」
　ウルトラマンといい昔のロボットアニメといい、巨人がプロレスするのはロマンがあって良いよな。俺もそういうのは好きだぞ。
「まあ私は提督とベッドの上でプロレスしたいんですがね！あっはっは！」
「んん、そうだね」
　唐突な下ネタ。
「あー、え、映画の感想は？」
「興味深い、ですね。怪獣ですか。もしも本当にそんなものが現れたら楽しそうですね」
「仕事が増えるだけでしょ」
「え？何で私達が戦わなきゃいけないんですか？」
　あれ？国防……？
「ああ、そう言えば私、艦娘でしたね。国防が仕事でした。すっかり忘れてましたよ」
「ええー……」
　明石はｄａｒｋ―ｎｅｕｔｒａｌかね。
「ぶっちゃけもう国防とかどうでもいいんで。黒井鎮守府内の食料生成プラントと浄水装置をフル稼働すれば、黒井鎮守府だけで完全独立が可能ですから」
「そうなの？」
「あれ？言ってませんでしたっけ？黒井鎮守府は、その気になれば移動要塞に変形して宇宙空間で旅ができるようになってます」
「んんんー？マクロスかなー？」
　いつの間にそんな超時空な……。
「はい。つまり、提督が提督をやめると言って頂ければ、いつでも独立可動モードへ切り替えて、この星を見捨てて永遠に宇宙を旅すること

も可能なのです」
「い、いや、そんなつもりは……」
「あ、異次元空間や異世界へのワープももちろん可能ですから、黒井鎮守府一同、いつでもどこでも永遠について行きますからね！」
め、迷惑ゥーーーー!!!

２８３話　大西洋攻略作戦　会議編

「この前性欲の赴くままに白露型に口噛み酒作らせたんだけど飲んでみたら魔力が付与されてたんだよね」
「……その話は、この作戦と関係のある話か？」
「いや？ないけど？」
「……はぁ。では、作戦会議を開始するっ!!」
　さあて、始まりました作戦会議。
　うちもほら、お役所仕事だから。無駄だと思ってもやらなきゃならんこともある。
「攻略目標は大西洋だ！ここを落とせば、人類に、いや、提督の手に海が返ってくると言っても過言ではない！心してかかれっ！」
　長門が、海図のある壁に手を叩きつける。
「「「「おー!!!」」」」
　艦娘達もやる気十分。
　勝ったな！
　ネタバレ：勝つ。
　もう結果見え見えの勝負なんでやりたくないんだけど、深海棲艦さんはそうは思ってないらしくて。
「降伏勧告文、出してきたんやけど、あかんかったわ」
　戦う羽目になった、らしい。
「ふむ」
「あんっ??」
「……何で今鈴谷のおっぱい揉んだんや」
「いやなんとなく」
　理由はないが。
「深海棲艦は徒党を組んで、大西洋の……」
「スカートぺろーん」
「めくんなや！聞いとるんか?!」
　分かった、分かった。
「兎に角、このポイントにおるんや。いつも通り鎮守府の半分くらい

の戦力で攻め落とすべきやとうちは思う」
「成る程、ありがとう龍驤」
「ひゃあん??だ、だからぁ、真面目な話をしてる時にスカートめくるんやない！」
「白か」
「もー！やる気あるんかー？」
ないでー。
「だってもう、ねぇ？鎮守府の半数嗾けるんなら、勝てるでしょ」
この物語は艦娘ＴＵＥＥＥものだから。
前々から言っているが、黒井鎮守府に作戦など必要ない。
ただ、圧倒的な暴力で磨り潰すだけだ。
「何体殺せるか競争するっぽい！」
「どうせすぐに数えるのが面倒になるだろうに」
「ではこの、私が発明した、轟沈数カウンターを！これを使って皆んなでスコアアタックしましょう！」
艦娘達は、明日決行されるグランギニョル、狂気の殺戮ショーに心を躍らせている。
もちろん、これで油断している訳ではない。
最大限に楽しんではいるが。
殺戮に、流れる血に狂喜するのが艦娘という生き物らしい。
彼女達は根っからの軍人であり、暴力装置であり、殺戮者だ。
皆須らく、血の歓びを見出している。
彼女達は、狂っている。いや、これで正常なのか。
それは俺が決めることじゃないが。
「また、司令官のために戦えるのね！」
「提督のために深海棲艦を殺せるなんて、幸せです！」
「敵は殺す、それだけだ」
彼女達は、俺のために殺すと言う。
それが至高の喜びだと、存在意義だと。
最初は、その姿のそのままに、人としての幸せを受け取ってほしいと願っていたが、違うのだ。

数年の間、共に過ごして。
されど本質は変わらない。
彼女達は戦う者だ。
戦う者だった。
あんな小さな見た目の駆逐艦も、大人に見える戦艦も皆。
小さな差異はあれど、本質は戦神だ。
根本的に人とは違う。
人の幸せを求めることなどない。
ならば、命じようじゃないか。
「皆、今回も、戦ってくれ。……俺のために」
「「「……はい!!!」」」
それが、彼女達の幸せならば。
×
×
×
×
『ヤバイヤバイヤバイヤバイ』
『オ、落チ着ケー!落チ着クノヨ深海双子棲姫ー!!!』
軽巡棲姫が言う。
『コ、ココガ最終防衛ラインヨ、突破サレタラアソコニ逃ゲ込ムシカナイ……』
潜水棲姫が言う。
『ドドドドウスルンダ!!!ドウスルンダ!!!?』
重巡棲姫が言う。
『黒井鎮守府ニ目ヲツケラレタ……。モウ駄目ダァ、オシマイダァ……』
防空棲姫が言う。
そして。
『アンタ達……、腑抜ケタコトイッテルンジャナイワヨ!!!』
『『戦艦棲姫……!!』』
『ココガ最終防衛ラインナノヨ!気合イ入レナサイッ!!!』
『『ジャ、ジャア、一緒ニ戦ッテクレルノカ?』』
『イヤ、ワタシノ仕事ハ別ニアルカラ』

『『ナンダヨモオオオ!!!戦ッテクレナイノカヨオオオ!!!』
『ウルサイ!オ前ノ役割ヲ果タセ!!』
そんなこと言われたって!!!
ワタシ、深海双子棲姫の黒い方、通称クロは、白い方、通称シロに話しかける。
『コレ、ヤバイ、ヨネ?死ヌ、ヨネェ?!』
『死ヌ!絶対ニ死ヌ!!殺サレル!!!』
生きたままミンチに加工される……。
終わりだ、死ぬ、殺される。
『チッ、アアモウ!仕方ガナイワネ!集積地棲姫ガ開発シタ新兵器ヲ渡スワ!!』
『『デ、デモ、ソレクライジャ……』』
『姫クラスノ量産型モ付ケルワ』
『『無理無理!彼女ガ出レバ……』』
『彼女ハ、アソコノ守護者ヨ、出テクルコトハナイワ』
うううー!!
なんでよ!!!
『深海双子棲姫!艦載機ダ!!』
本当だ……。
なんだろうこれ、降伏勧告文……?
えっと、内容は……。
《理性ある深海棲艦の諸君へ
前略、深海棲艦様。立秋とは名ばかりの暑い日が続いています。深海棲艦の皆様はいかがお過ごしでしょうか。
こちらはとても元気です。皆様の攻撃が弱まりつつある今、我々黒井鎮守府は大変暇でして。暇過ぎてこの前は艦娘達と慰安旅行に行ってきました。結構楽しかったです。
で、本題なんですけど、降伏していただけないでしょうか。そちらにもこちらの戦力の情報は届いていると思います。結果は、火を見るよりも明らかだとは思いませんか?無駄な怪我人が出る前に、戦いになる前に、降伏してほしいと考えています。

正直な話、俺も、艦娘達を止めるので精一杯です。今まで、理性ある深海棲艦側にも、死人が出ないように配慮してきましたが、我が家のキリングマシーン達は殺す気満々です。つまり、ここで戦えば、貴女達は死ぬかもしれません。

いえ、むしろ、死んだほうがマシと言う苦痛を与えられる可能性も十分にあります。白露型は、深海棲艦を生きたまま解体し、儀式の触媒などに加工します。長門型は、その怪力で、活動している深海棲艦の四肢を千切るのです。睦月型は、レーザーや化学弾頭で溶かしてきます。

もちろん、降伏してくれた場合は、鎮守府近海の離島で、他の理性ある深海棲艦と自活してもらうことになるので、扱いについては保証します。

うちにいる深海棲艦の皆んなは、趣味に仕事に充実した日々を過ごしているそうです。皆さんも是非、彼女達の仲間になって欲しいです。

さて、重ねて言いますが、どうか降伏して下さい。俺も、女の子が痛めつけられるのを見るのは忍びないですし。

と、言う訳で、残暑厳しき折、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。》

……。

『降伏シヨウ』

『フザケルンジャナイワヨ!!』

顔を真っ赤にした戦艦棲姫が怒鳴る。

『何ヨコレ!舐メヤガッテ!殺スノヨ!全員殺セッ!!』

『ダ、ダッテェ……』

生きたままバラバラにされちゃうって……。

『深海棲艦ダッテ日々進化シテイルノヨ!貴女達ガ負ケルハズナイワ!行キナサイッ!!』

『ウウウウウ、分カッタ、分カッタヨウ……』

怖い上司と、怖い敵の板挟み。

こうして、勝てる望みのほぼない、絶望的な戦いが始まることになった……。

『シロ……』
『クロ……』
『生キテ帰ロウネ……』

２８４話　大西洋攻略作戦　開戦編

既に名乗りは済ませ、戦場の真ん中で。
目に見えてローテンションの深海双子棲姫に声をかける。
「いや本当に、残念だよ」
『『……ハイ』』
「何で降伏してくれなかったのかな？」
『『……上カラノ命令デシテ』』
なるほど、君達も大変なんだね。
『『ソノ、手加減トカッテ……』』
「皆んなー、手加減してくれるー？」
「「「嫌です」」」
「……だ、そうだ」
『『ヒ、ヒィィィ……!!!』』
すまんな、俺にも止められないんだわ。
『ドウショウ、シロ……！』
『ソ、ソウダ！クロ！』
んんー？どうするんだー？
『『ウ、ウフーン??』』
なるほど、色仕掛けか……。
甘いな。俺がそんなものに惑わされるとでも思っているのか。
「そんなものに釣られクマー!!!」
『『アッ、釣レタ!!!』』
はっ?!つ、捕まってしまった?!!
『『ヨ、ヨシ！提督ヲ殺サレタクナカッタラ撤退シロー!!』』
「作戦開始っ！殺せええええ!!!!!」
「「「おおーーー!!!!!」」」
『『ナッ、ナンデエ!!!?』』
「まあそうなるな」
俺に人質としての価値はない。
逃げ出せるからだ。

『『撃ツヨ?!本当ニ撃ッチャウンダカラネ?!!』』
「小ぶりなお尻がキュートだねえ。痩せてるみたいだし、後でお腹いっぱいご飯を食べさせてあげるからね」
折角だから、ということで、二人のお尻にタッチ。
『『キャン?!エッチ!!』』
殴られる、が避ける。
「まあ、死ぬ前にはちゃんと止めるから。多分」
『『多分!!!?!!』』

さて、脳内の瞳を使って、戦場を俯瞰する。
因みに、俺自身は深海双子棲姫ちゃんと追っかけっこしてる。可愛いなぁこの子達。深海棲艦は陶磁器のような白い肌が素敵よね。人外の輩だけど抱き心地も良いし。
どうなってるかなー、と。
軽巡棲姫のところにはー？
おっと、この経験値を泥棒してきそうな音楽は！
「イヤーッ!!!」
川内!!
『グワーッ!!!』
川内がニンジャしてる。
ラブサバイバー川内、彼女はニンジャだ。
おお、ゴウランガ！
『クッ、コノ、対艦娘用大太刀デ……!!』
軽巡棲姫は、自身の複製である量産型姫クラスと共に、刃を振るうが。
『クソ、当タラナイッ?!』
圧倒的に速さが足りない。
『『『『オオオオ!!!』』』』
襲いかかる量産型軽巡棲姫は。
「遅いなあ」
工廠特注の、ナックルガードが付いた川内愛用の忍者刀で斬り刻ま

れる。
「ほい」
『ア〟』
頸動脈を斬られて、間欠泉のように血を噴き出す個体。
それに、
「そりゃ」
『ウア?!』
突きを放ち、確実に心臓を貫く。
「終わりっ」
『ガ』
それの口に忍者刀を差し込むように、突く。
これで、失血と脳幹の破壊で完全に機能を停止させた。
やっぱり、人型なのがなぁ。
急所が多いから……。
確かに、川内には、一太刀で姫クラスを沈めるような火力はないけど、その分を圧倒的な手数で補ってくるからな。
戦場を駆ける川内はまさに、死の旋風だ。
『当タレエ!!!』
「残念、それ残像」
『グアッ?!!』
肩を斬られる軽巡棲姫本人。
「雑魚を潰すまでちょっと待っててねー、後で嬲り殺しにしてあげるから」
『ヒ、ヒイ?!!』
「神通！那珂ちゃん！」
「はい」
「はーい！」
「雑魚の相手、お願いね！」
「ええ、了解です」
「りょーかい！」
駆け出す三人。

神通……、サムライ女。
刀を使った剣術で堅実に量産型を片付けていく。
「疾ッ!!!」
那珂ちゃん、アイドル。
歌って踊って戦える、スーパーアイドル。
武装はタクティカルアームズと言う特大剣と、ナイフ。
「よい、しょっと!」
そして、川内は。
「はぁぁぁ!!!」
『グッ、ガアッ?!クソォ!!!』
予告通り、軽巡棲姫を嬲り殺しにしている。
「そろそろ終わらせるよ」
おお、素晴らしい分身だ。
「えい!」「やー!」「てぇい!」「はぁ!」「おおおおおお!!!」
分身体が一斉攻撃して、フィニッシュ、か。
『グオオアアアッ!!!』
倒れる軽巡棲姫。
「んー、やっぱり、物足りないなあ」
×
×
×
ここは海中、水の中。
私達、潜水艦の相手は、潜水棲姫とその量産型の群れ。
ふふ、はちの圏内だよ、そこ。
ゴーヤがハンドサイン。
《殲滅でち》
私もハンドサイン。
《了解》
……海中では基本、皆んな喋らない。
いや、今では工廠の謎技術のお陰で、水中でもコミュニケーションを取れるんだけど、何となく皆んな喋らないでハンドサインでやり取りしちゃう。癖なのかな。

兎に角、漁の始まりだ。
まずはいつも通り、ウィーとろーちゃんが先行。
敵を引きつける。
二人は、天使のように水中を舞い、敵のターゲットになった。
そのまま、退く。
そこで、待ち構えていた私達が……!!
撃つ!!!
ウィーとろーちゃんが囮になり、引きつけた敵を撃つ、潜水艦の基本方針だ。群狼作戦釣り野伏せ、そんな感じ。
『『『?!!!』』』
私の魚雷弾幕が、イクの正確な魚雷が、波状攻撃となって襲いかかる。
爆音。
水中での爆発音はよく響く。人間なら、とっくに鼓膜が駄目になっているところだろう。
艦娘である私達にとってはなんて事はないけど。それは、深海棲艦にとっても同じみたいで。
『!!!』
潜水棲姫が何らかの指示を出すと、魚雷を撃ち返してくる量産型。
でも、その程度でどうにかなる程ヤワじゃないんだよね。
甘い。
私は心の中で呟くと同時に、魚雷を召喚。迎撃する。
ゴーヤも危なげなく回避して、敵に接近、叩くと同時に体表から魚雷を召喚、爆殺する。
イムヤも前に向かって回避。間合いを詰めて格闘戦を始めた。水中での格闘戦なら、イムヤに敵うものはいない。
しおいはマイペースに晴嵐を出している。
じゃあ、私も殺すかなー。
『!!!』
何かを叫びつつ、虚空から異形の魚雷を百数本召喚してくる潜水棲姫。

だから、甘い。
甘いのよ。
『ーーーッ?!!!』
馬鹿な?!だろうか。
またもや叫ぶ潜水棲姫。
残念だけど、貴女と私じゃ格が違うんだよね。
魚雷弾幕、同時展開数、三百六十。
アハトアハト、同時展開数、百二十。
ーーー弾けろ。
『ーーー?!!!』
海の中だから聞こえないけれど、悲鳴をあげたであろう潜水棲姫が吹き飛び、海中の爆発から押し上げられる。
……手足が吹き飛ぶのが見えたけど、深海棲艦はそれくらいじゃ死なないと思うし、良いよね。
ふふ、殺した殺した。
後で提督に褒めてもらおう。

２８５話　大西洋攻略作戦　蹂躙編

『ナ、何ダァ～、コレハ?!!』
「あるるかぁん!!!」
か、ら、く、り……?!!
リシュリューと名乗ったあの海外艦、何者だ?!
「ｄａｎｓｅｚ！」
奴の手指が空中で踊る度、恐るべき速さで深海棲艦が撃滅される。
「オリンピアッ!!!」
コマンダン・テストと名乗った海外艦も同様だ。
『エエイ、攻メロ！物量デ押シ潰セ!!!』
量産型に命じるが、
「甘い」
二人の操るからくり人形に容易く粉砕される。
リシュリューと名乗った海外艦のそれは、黒衣の道化師。
頭の大きな羽飾りが特徴的なそれは、物凄いパワーで深海棲艦を引き裂いている。
コマンダン・テストと名乗った海外艦のそれは、白衣の女神。
複腕を動かし、これまた高水準な性能を以って、深海棲艦を蹴散らしている。
ふざけるな、ふざけるな、ふざけるなっ!!!
『ソモソモドウイウ理屈ナンダッ!!!ソンナカ細イ糸デソレダケノパワーガ出ルモノヲ動カセルカッ!!!アリエン!!非常識ダッ!!!』
「いや、私も原理は知らないけど、動かせるなら良いじゃない」
『グヌヌヌヌ～!!!』
おかしい、あり得ない。技術レベルがおかしい。
「これから死ぬ貴女が知る必要あるかしら」
『シ、死ヌノハ貴様等ダ!!!』
……啖呵を切ったのは良いものの、殺せる気がしない！
しかし、木材のフレームに歯車だと?ふざけた機構だ。そんなもので深海棲艦を引き裂いて殺すとは、考えられん。

「オリンピア！ＬＡ　ＲＯＮＤＥ　ＤＥ　ＤＥＳＴＲＵＣＴＩＯＮ（破壊輪舞曲）!!!」
『ナッ、何ィ!!!?』
　四つ腕の白いからくりは、肘から金属刃を露出し、胴体を高速で回転させて周囲の深海棲艦を薙ぎ払った。
　何たる斬れ味……!!
『怯ムナ、押シ込メ!!!』
「ＬＥＳ　ＡＲＴ　ＭＡＲＴＩＡＵＸ!!!（戦いのアート）」
『何?!!』
　今度は黒いからくりの方。
「虎乱!!!」
　同じように上半身を凄まじい速さで回転させ、周りの深海棲艦を蹴散らす。
『オカシイ！オカシイダロ?!何デデキテイルンダ、動力ハ何ダ、何デソンナパワーガ出ルッ!!!』
「はぁ、素材はボーダイ樹とノヴァクリスタル、動力は神秘、パワーの源は艤装の出力を回しているから。これで良いかしら？」
『ハ、ア、ウ……？』
「一から説明しないとわからない？ボーダイ樹はネオガイン遺跡の守護者ドガインが落とす生命力溢れる木材よ。これならある程度は自己修復するわ。ノヴァクリスタルは瘴気の谷で採取したものよ。ライトクリスタルよりも希少で価値が高いわ。そして堅牢で鋭い」
　何を、言って、何だ、それは……？
「動力である神秘は魔術回路を刻んで。ヒヒイロカネを中心に配置した炉心に古龍の血で陣を描き込んだの」
　知らん……、知らないぞ、知らないぞ、そんなものは!!
「そして、艤装として所有することで概念的に同化、強化されて、出力が上がる……。これで良いかしら」
『ア、ア……？』
「……理解できなかったようね。何も分からない癖に質問しないでくれるかしら」

『ウ、ウウ……』
ク、クソ……！
『ズ、ズルイ、オカシイ！何デ、何デオ前達バカリ……!!コレデハ虐殺デハナイカ!!!』
「そう、それが何か問題？」
『ッ?!!』
「私達は降伏の機会を与えたわ。それをふいにしたのは貴女達でしょう？だから、許さないわ、重巡棲姫」
『ダ、ダガ』
「ふふっ、まあ、でも、どの道……」
黒衣の道化師は両腕からギザギザの折りたたみ刀を展開する。
「一度痛めつけるつもりだけど！聖ジョージの剣!!」
『ウ、ア、アアアッ!!!』
怖い、逃げ、なくては、逃げ、ええっ!!!
『ア、エ？』
あ、脚が、動かない？
熱い、痛い、焼けるように熱い。
「脚の腱を切ったわ、さあ、もう逃げられないわ」
『ヤ、ヤメテク』
「うるさい」
蹲るワタシは、背中を蹴られた。
『イッ、ギィイ!!?』
「ねえ、貴女、分かっているの？降伏勧告を無視したってことは、Ａｍｉｒａｌの好意を無視したってことよ。……生かして帰すと思う？」
『ゴ、ゴメンナサ』
「謝罪の言葉は聞いてないわ。ただ、ただ……、苦しみなさい。懺悔しなさい」
あ、がっ……。
×××
×××
×××
『対艦娘用エネルギーライフル、ソード……、何故通用シナイ！』
×××××××

こちら、五十鈴です。
長良型で防空棲姫を集中攻撃！
まずは長良が二本のヒートショーテルを交差させるように振り抜く。
「やああっー!!!」
『チィ!!!』
防空棲姫は一歩退いて回避する。
次、由良のビームシザース。
『ウ、オオ!!!』
転がって横に回避。
次、鬼怒のツインビームトライデント。
「喰らえ!!!」
『アアアッ!!!』
鬼気迫る表情で、エネルギーソードで払う。
『死、ネェ!!!』
エネルギーライフルを乱射してくるが、
「当たらないっ！」
難なく回避。
「名取！」
「撃ち返します！」
『オオオ!!!』
転がって名取のミサイルの爆発範囲から逃れる防空棲姫。
次いで、私と阿武隈のツインバスターライフル、メガキャノンの斉射。
『危、ナッ!!!』
またもや回避。
……レーザー兵器は攻撃力が高いから、一撃必殺の攻撃になる。
その、一撃必殺の応酬……、ふふ、戦意が滾るわ。
『ナ、何故ダ』
「何よ」
『何故勝テナイッ?!!!』

ええ、そんなこと言われても。
「んー、訓練が足りない、気合が足りない、技術が足りない……。でも、一番足りないのは」
『何ダ、ソレハァァァ!!!』
「運、かしらね」
『ソンナ、モノデエエエ!!!』
突き刺さるビームサーベル。
『グ、ガハッ……』
口から煙を吐いて倒れる防空棲姫。
「終わり、かな」
×
×
×
×
「貴様等には罰を受けてもらう」
『ヒ、ヒイイイイ!!!』
怯えて抱き合う深海双子棲姫。
死屍累々の戦場。
「大丈夫だ、殺しはしない、殺しは、なっ！」
『!!!ゴヘェッ!!!』
?!!?
『イヤァァァ!!シロオオオオ!!!』
吐瀉物を撒き散らしながら、水切りの石のように海上を跳ねていく白い方。
「お前もだ」
『へ？アグハッ!!!?』
同じく吹き飛ぶ黒い方。
ガスマスクのような艤装が外れ落ち、這うように逃げ出す深海双子棲姫。
「逃すと思うか」
足首を掴む。
『イヤァァァ!!!イヤ、イヤァァァ!!!離シテ!!離セッ!!!』『痛イイ!!ヤメテクダサイ、謝リマスカラァ!!!』
「黙れ」

『『ブヘェ!!!!』』
海面に叩きつけてやる。
「ふん」
そして、足首を握り潰す。
『『ア、ギィィィ!!!!』』
「さて」
そして、首を掴み、海に沈めてやる。吐瀉物と涙と涎に塗れた顔が洗われて良いだろう。
『『ガボボボボ、オボボガボ!!!!』』
数分した後、引き上げる。
『『ゲッホ!ゴホ、ゲホ!!コヒュー……』』
「私は手加減が苦手でな。死なない程度に嬲る方法がこれくらいしかないのだ」
『『モウ、ヤメテ、クダ、サ……』』
失禁しながら、泣きを入れる深海双子棲姫。
だが。
「駄目だ」
『『ヒッ、ア、ガボボボボ!!!!』』
再び水中に沈めてやる。
「やめろめろめろ長門めろ!!!」
「む？」
何だ、提督か。
「何だ、今は少々忙しいんだが」
「手を離せ」
「しかし」
「命令だ！」
む、分かった。
『『ガホッ、ゴホッ、ハァ、ハァ……』』
「大丈夫かい」
『『……』』
「はい、タオル。顔を拭きな」

『『アリ、ガトウ』』
「ごめんな、もう大丈夫だからな。さあ、怪我を治そう」
『『ウン……』』
「……」
何だ、これは？
何故だ、提督？
「そいつらに、貴方の優しさを向ける必要はあるのか？」
「あるさ、俺は美人には優しくする主義でね」
「敵だぞ」
「大目に見てやってくれ」
ふん、まあ、いい。
命令だ。
「全員！残敵の掃討！そして姫クラスをここへ！」
「「「了解!!」」」
切り傷だらけで血塗れの軽巡棲姫は、髪を引っ張られながらも、提督の前につき出された。
手足を失った潜水棲姫も。
同じく手足を捩じ切られた重巡棲姫。
土手っ腹に穴が空き、手足を焼き切られた防空棲姫。
姫クラスが揃った。
「これは酷い……。君達、何もここまでやることはないんじゃないかな」
苦言を呈する提督。
「む、指示通りに殺さなかったが」
「殺さずにリンチしろとは言ってないよね」
「す、すまない」
「……まあ、良いさ。これくらいなら治せる。でも、精神の方は」
『ゴメン、ナサイ、ゴメン、ナサイ……』
『痛イ、痛イ……』
『殺、シテ……』
『ヤダ、ヤメテクダサイ、ヤメテクダサイ……』

「……療養が必要だな」
「療養など……。貴方にそんなことをする義理はないはずだ、放っておけばいい」
「俺、見える範囲にいる美人には優しくする主義だから」
分からんな。
「さて、後味最悪だけど……、大西洋、攻略、と。帰って祝宴だ！俺はこの子達を治して、離島に送るから。それじゃ」
「「「了解!!」」」
まあ、なんにせよ。
「私達の、勝利だ!!」

２８６話　祝杯はわかめ酒

「ショコランラッペリッチャァァァ!!!（挨拶）」
「何ですか今の」
「挨拶」
　さあて始まりました宴会！
　大西洋解放の宴会!!!
　宴会……。
　分かってる……、俺の貞操がヤバいことは。
　でも飲みたいんだ！
　皆んなでワイワイ飲みたいんだ！
　頭パリピなんだ!!!
　頼む、オチは分かっているだろうが、飲ませてくれ、酒を飲ませてくれ！頼む!!!
「説明ッ！旅人が！宴会で！やたら飲む!!」
　ビシバシスペシャルみたいなテンションの俺。誰にも止められねぇぞ！
「んあああぁぃ!!!酒ダァ!!!酒を出せぇあああぁぃ!!!」
「はい、旦那様。何が飲みたいですか？」
　と、鳳翔。
「わかめ酒っ、ゲフンゲフン！スピリッツ」
　いかんいかん、野性解放はいかん。
　つい本音が……。
「へ?!わ、わかめ酒ですか?!」
　聞かれているって言うね。
　カリスマイケメン旅人のイメージこわれる。
「ち、違うんだ違うんだ、俺はそんな変態みたいなことは言わない」
「い、いえ、良いんです！私の身体で満足していただけるなら……??」
　そりゃあ鳳翔の身体は最高にビューティフルだが。
「今、脱ぎますね??」
「いや、いかんいかん！俺が脱がされるのはまだしも、君が脱いではい

かん！」
　そうはいかんざき!!!
「じゃあ、こうしましょう！野球拳です！」
　んん。
「えっそれはあれだよね、負けたら飲むんだよね」
　知らないのか、野球拳は元々負けたら酒を飲むんだぞ。
　ってか、お座敷遊び全般が、負けたら飲むってルールだよ。
「いえ、脱ぎます」
　脱ぐのか。
　しかし、脱ぐのか。
「え、良いのこれ」
「お座敷遊びですから。性的に倒錯した怪しいことをやる訳じゃないですから大丈夫ですよ」
　そっか、良いのか。
　え、良いの？
「勝ちに行って良い？」
「旦那様に脱がされるのも、脱いでいただくのも、どちらにせよ美味しいので」
　成る程、皆んな得するってことだな。
　皆んなが幸せになれるってんなら、俺はするよ。
　野球拳を!!!

「「やきゅーうー！すーるならー！」」
　さあて始まりました野球拳！
　合法的に艦娘を脱がせる事ができるマル得ゲーム!!!
　わーい！たーのしー!!!
　まずは鳳翔、君に決めた。
「「よよいのよい!!!」」
　俺チョキ、鳳翔パー。
「あらあら、負けてしまいました……」
「「よよいのよい!!!」」

「よよいのよい!!!」
「よよいのよい!!!」
……
……
……
「あ、あの、流石に一度も勝てないのはおかしいですよね？」
「俺にはグリードアイランドで鍛えたじゃんけん必勝法があるからな」
「どこですかそこ」
「昔ちょっとな」
とある異世界でステーキを頼んだら何故かハンター試験なるものに巻き込まれて、そのまま流れでな……。
「はあ……」
ふむ。
と言う訳で、鳳翔を全裸にひん剥いた訳だが。
ＨＵＵＵＭ、良い……。
血色の良い健康的なシミひとつない肌。家事仕事で鍛えられた二の腕は筋肉質にならない程度に引き締まり、足はすらりとしていてバランスがいい。美しい肢体。控えめな胸はツンと天を向く。皆んなから母親のように慕われているが、その実、一人も産んでないが故、男を知らない清らかな身体だ。経産婦のようにモントゴメリー腺が目立つことはない。お腹はつき出ない程度に肉がつき、女性らしい丸みを帯びている。控えめに手入れされた茂みに、品のいいお尻。
……良い。
あー良い。
天使か女神か。
鳳翔の身体を褒め称えるポギャブラリーが足りない。
「えっと、それで、わ、わかめ酒、ですよね？」
「いや、それはいい、それはヤバいから。本格的に怒られる」
怖い、ＵＮＥＩ怖い。
「どうぞ……！」

「話聞いて？ってかさ、艦隊の皆んなに見られてる中で何をやっとるんだ君は」
「？、特に恥ずかしくはありませんよ？艦隊の皆んなは家族のようなものですし」
　家族に痴態を見られるのって相当なダメージだと思うんですが。
「大体にして俺も辛いからね、この視線の中でわかめ酒を飲むのは」
「大丈夫ですよ」
　何が？
「さあ」
「う、いや、それは」
「さあ！」
「だ、だからさ」
「さあ!!!」
「う、うわあああああ!!!!」

（中略）

　やってしまった……。
　俺は何てことを……。
　……ちょっと楽しかったなんて口が裂けても言えない。
「で、何この列」
「いえ、同じことをやっていただこうかと」
「やめよう？」
　本当にさ、怒られるから。
「いやもう鳳翔さんにやったんですから私達にできないって道理はないでしょう」
　と、大淀。
　それは、そうだが。
「ここまできたら一人も二人も百人も変わりませんよ。さあ、どうぞ」
　大淀この野郎、正座したまま、態と胸にかけて注いでいる。
　透明な日本酒が大淀の白い肌を伝ってセクシー、エロいっ！

……
……
……
愛宕。
「ねえ、提督？私、見ての通り下の毛も金色なんだけれど、それでもわかめ酒って言えるのかしら？」
「知らんが」
俺は君達に無理矢理淫猥な行為をさせられてる訳だから。
メンタルボロボロよ。
それにしても愛宕。
デカァァァイ！説明不要ッ!!!
目測で１００は超えているであろう特大バスト。
素晴らしい。
大きいことは良いことだって言うじゃん？
「あら？こっちで飲む？」
と、谷間に酒を注ぐ愛宕。
まあ谷間の方が危険性は薄れるか。
いやそれでもやべーよ。
一種の女体盛りだからねこれも。特殊性癖だよ。
つーか女体盛りって美味しくないんだよな、体温でほんのり温まるから。あれは雰囲気を楽しむものだ。
ん？女体盛りをやったことがあるのかって？
い、いや、そ、それは、まあ。うん、別に良いじゃん。今その話しなくてもよくない？
……
……
「生えてない場合はわかめ酒と言えないのではないか？」
「菊月、回れ右して帰りたまえ」
「その命令は聞けないな」
やめろ……、マジやめろ……。

駆逐艦だぞ、ロリだぞ。
やっちゃいけないことくらい分かれ!!!
「菊月、もっと自分を大切にしてくれ」
「そう言うのはいい」
いいって何だこの野郎。
「さあ、飲んでくれ」
おいおいおいおい、マジかよ。
……
……
……
「?、司令官、これって楽しいの?」
暁イッ!!!!
「俺は限りなく楽しいが暁は本当の本当にヤバいから駄目だやめろ」
「私だけ仲間外れは嫌よ!」
「いや本当、勘弁してくれ。謝るから、もう、謝るから」
「えへへ、こんな感じ?きゃっ、お酒冷たい!……早く飲んで司令官?あったまっちゃうわよ?」
「あああああああああ!!!!」
……
……
……
俺は……、俺は何てことを……。
「もう殺してくれ」
「提督を殺すなんてとてもとても!むしろ提督が私達を殺して下さい!」
畜生、ここは狂気の世界だ。
倫理こわれる。
「あ、そうですね、提督ばかり飲んでいるのもなんですし、私達も飲んで良いですか?」
「いや、そりゃ良いけど」
「提督の血を」

「……まあ、良いよ。結局楽しめたし」
「ありがとうございます！血酒にして飲みますね！」
まあ、抜かれたね、ごっそりと。

なんつーか、魂的なアレも、抜かれたね。
俺はもう疲れちゃったよパトラッシュ。

２８７話　黒井鎮守府大食い大会

「太平洋大西洋インド洋と攻略しちまって仕事がねえなあ」
ウォッカを呷りながら自室でエロゲを嗜む俺。
いや別にエロゲやりたい訳じゃないんだけど。
はるるみなもに！をオススメされたから。
「提督的には誰がお好みで？」
「んー、皆んな可愛いしなーって、大淀？」
自室なんだがなあ。
「失礼しました。ですが、いかがわしいものに興味を持っていただけるのは喜ばしいです」
「でもまあアレだな、実妹ルートはちょっと気が引けるな。リアル妹持ちとしては。まあやるけど」
「成る程。……提督、お暇ですか？」
「まあ丁度今フルコンプしたところだからな。暇だわな」
「では、こんなものはどうでしょうか」
企画書を渡される。
『黒井鎮守府大食い大会』
……成る程。

さて、そうと決まったら動くか。
開催期間は三日間の昼。
空母戦艦、軽空母重巡、軽巡その他、駆逐艦の四部門で大食い早食い選手権。
外部の人間も呼んで本格的な大会にすることも考えたが、駄目だ。
基本的にうちの子はご飯を残さないが、外部の参加者は残すだろう？
大量に廃棄が出たら困るし、食べ物を粗末にされるのは嫌だから、外部から人は呼ばない。フードファイターとかあれ画面で見えないところで吐いたりしてんだぜ。
そして、俺も戦艦空母に混じってやるか、と思ったが、早食いなら

確実に勝ててしまうのでやめておく。
え？どうやって勝つのか？
そりゃ、変異して人外になれば、大抵のものは丸呑みできるから。
早食い大食いしたら、人外に変異して無尽蔵に食える俺が有利過ぎるだろう？
変異しなくても早食いは得意だ、艦娘諸君には勝ち目がないだろう。
だから不参加。
さあて、やろうか。
あ、そうそう。
艦娘の食欲についてだが。
駆逐艦でも並の大人より食うぞ、って感じ。
これが軽巡重巡クラスになると、おっ、ラグビー部かな？ってくらい食う。相撲部屋くらい食う。
空母戦艦は人外。ドラゴンボールくらい食う。
それもそのはず、艦娘は皆須らく軍人、肉体労働者なのだ。
食わねば体が持たんのだよ。

さあてそんなところで一日目。
お題は……！
「五目チャーハン！」
俺と厨房組が大鉄鍋でチャーハン作るよ！して作った大量の五目チャーハン！
さあ、食せ!!!
駆逐艦には三百グラム。どれくらいかっていうと大体、飲食店の普通の大盛りチャーハンくらい。
「はふはふ、うん、美味しいね」
あっ時雨、君、大食いする気ないな？
「時雨、お代わりして良いんだぞ？」
「僕は一皿で十分かな。大盛りだし」
そうなの。

「タイムも計ってるけど」
「急ぐ理由もないからね」
そうなの。
……なんだか大会を根本から否定された気がするが、美味しそうに食べてくれてるからどうでもいいや。
軽巡その他は五百グラム。1．5合くらいか。まあこれくらいなら中高生なら平らげるであろう量。
「美味え！具はチャーシュー、エビ、卵、長ネギ、貝柱、人参、干し椎茸、筍か！多数の食感が楽しめるな！」
おっ、天龍ちゃん早ーい。
「お代わりっ！」
「はいよー」
結局、天龍は5皿平らげた。タイムは15分。食べるの早いね天龍。
重巡には盛りに盛って一キロ。米換算で3合だ。
「やっぱり料理人の腕で違うわね、チャーハンって」
と、足柄。
「んー！お代わり！」
「はいよー」
足柄が7皿、か。
足柄も食うんだよね。まー、前線で剣振り回す訳だから腹も減るかね。
そして空母戦艦。
驚愕の三キロや。8合ぐらいか。
「がぁつがぁつ……、お代わり!!!」
赤城食うねえ、いい食いっぷりだ。
たくさん食べる女の子は好きだぞう。
赤城は結局10皿平らげた。
俺も10皿食った。まあ腹八分目かね。

二日目。

メニューは……！
「とんこつラーメンだ!!!」
替え玉式。
個人的にはハリガネが一番美味いと思う。なんかこう、歯応えがあって、麺食ってる感が増していいよね。
ニンニクは沢山入れるし角煮もチャーシューも明太子も味玉もキクラゲもネギもメンマも全部乗せるのが俺のジャスティス。
さて、麺の重さだが、茹でる前で大体百グラム。茹でると百何十グラムといったところか。
さあ、何玉いけるかな？
食せ、艦娘よ！
まず駆逐艦から見ていこう。
「わー、美味しい！本場の味ってやつだね！」
睦月がどんどん食べ進めていく。
「替え玉ちょうだい！やわめで！」
「あいよー」
3玉くらいか。
結構食べたな。
軽巡その他。
あきつ丸もここに含まれる。
「おおう、明太子の辛さが濃厚な豚骨スープに絡んで……。そしてこのスープ！本場の味を踏襲しながらも嫌な臭みが全くないでありますな！」
そして謎の食レポ。
「おまけにトッピングも無制限で飽きがこない！角煮がとろけて脂の甘みが口の中にひろがるでありますぅ！」
ズズーっと麺を啜るあきつ丸。幸せそうだ。
二十分で8玉くらい平らげていた。その上、角煮が気に入ったらしく、角煮も六個食べていた。
そして軽空母重巡。
「ズズーっ」

おおう、食うねえ、利根。
小さい体につるっと入る。
「もぐ、もぐもぐ、んん、チャーシュー美味っ！」
美味そうに食うなあ。
「はふはふ、あっつ、美味っ」
かなり食ってるな、２０は行ったか。
「このトッピングの紅生姜が憎いのう！酸味がアクセントになって美味いのじゃ！」
最終成績２５玉。三十分程だから、ペースもかなり早い。
そして、空母戦艦。
「ズルズルーッ!!」
おお、凄え。
グラーフが凄い勢いで麺を啜っている。
「替え玉ハリガネお代わりだ!!!」
豚骨ハリガネお代わりだだだだだ、と。
めっちゃ食うな。
スープを注ぎ足しつつ、３４０玉。三十キロそこらか。まあまあ食うなー。
その上でチャーシューも一個、一枚じゃないぞ、一個だ。それと角煮も六十程、キクラゲボウル一杯分とメンマ、ネギ、そして卵四十個。ニンニクもがっつり入れていた。
更にビールも飲んでた。
グラーフも割と飲む方だ。
俺もビールをお供に３５０玉くらい食べた。チャーシュー二個と角煮百程。卵明太子なども百くらい。適量適量。

さあ、三日目。
「三日目はやはり……、カレーだ!!!」
海軍といえばカレー、カレーといえば海軍。
甘口から激辛まで。トッピングはご自由に。
市販のカレールーより美味いカレーを作るのは難しいとだけ言っ

ておこう。
市販のカレールーはね、あれって研究されて完璧な配合になってる訳で。
まあ俺もある程度は料理を極めた身、市販のカレールーより美味いスパイスの配合なんて訳ない。
そして今回作ったのは、厨房組と研究の末作り出した、黒井鎮守府スペシャルカレー。レシピは秘密だ。
これを、大鍋数百個単位で作った。
さあ、おあがりよ！
まずは駆逐艦！
ご飯一合にカレーをかけて食うッ!!!
一合は３５０グラム、大盛りだ。それにカレーをかける訳だから、結構な量になる。
更にその上、トッピングをする訳だから……、成人男性がお腹いっぱいになるくらいの量だ!!
暁はカレーにハンバーグをトッピングしたようだ。
「ハンバーグ美味しい！毎週金曜はカレーの日だけど、色んなトッピングがあって飽きないのよね！」
そして勿論甘口。
黒井鎮守府の甘口は本当に甘い。小学校のカレーが如く甘い。小辛で辛さ控えめ、中辛で普通。辛口で、まあ、ちょっと辛いくらいだ。激辛からは、何というか、とても辛い。激辛の上は超激辛、超超激辛と続く。
そもそも辛さを口で説明することは出来ないよね。まあ、ココイチで例えると１０辛くらいまでは要求に応えられるよ、ってことで。
俺は辛いの結構平気。
他の子はどうだ？
軽巡その他には三合出した。
ゴーヤは、と。
「目玉焼きとソーセージが合うでち！」
色々とトッピングを試しながら中辛でカレーを食う！

「んー！鎮守府のカレーは最高でち！多くの艦娘の記憶から作られた海軍カレーを厳選して、皆んなが納得する奇跡の味を作り出したっ！正に奇跡のカレーでち!!!」
確かにな。それぞれ秘伝のレシピを持つ艦娘達全員に完璧に美味しいと言わせるカレー作りは難航した。
しかし、厨房組とのたゆまぬ努力の結果、最高のカレーができたと思う。
トッピングも色々、こだわってるしな。
結局ゴーヤは3皿食べた。
さて軽空母重巡。
五合だ。
飛鷹はほうれん草や揚げナス、蒸しさつまいも、オニオンリング、レンコンチップスなどをトッピング。
「んー！カレーとお野菜、よく合うわ！」
カレーをたっぷりつけた、揚げたてサクサクオニオンリングに齧り付く。
「んんんんー！おーいしー!!」
頬を押さえて美味しさを噛み締める飛鷹。
そのままご飯を一口二口、そして、
「やっぱりカレーには牛乳よね！」
牛乳で口内をリセットする！
辛口の辛味が洗い流された後、すかさずご飯を口に運ぶ。箸休めにトッピングの野菜を齧る。
その無限ループで十合つまり一升、平らげた。
一時間程だ。
そして最後は空母戦艦。
「辛いッ！美味いッ！止まらんッ!!!」
超激辛のカレーを頬張る武蔵。
直径３０センチ程の皿に山盛り十合、３．５キロのご飯に超激辛カレー、そしてサクサクメンチコロッケチキンカツトンカツ全部のせ。
カロリーの暴力をガンガン食らう。

「このカツがまた……！サクサクの衣に超激辛のカレーをつけて齧り付けば……！うん、うーまーいーぞー!!!」
大阪城を破壊しそうなリアクションだ。
十升くらい、一時間半で食べた。各種カツは３０個くらい。
俺は八升ほど、辛口で、カツも６０個くらい。その他トッピングも５キロ程。
カレーは飲み物。

「さて、優勝者は……」
大食い部門、赤城！
早食い部門、武蔵！
また、艦種別だと。
駆逐艦部門、嵐。
軽巡その他部門、天龍。
軽空母重巡部門、足柄。
空母戦艦部門、赤城。
まあ、概ね予想通りだ。
赤城は無尽蔵に食う。
武蔵は丸呑みしてんのかってほど早い。
でもまあ、美味しかったとのことで、良かったよ。
各員にはトロフィーを作って渡した。
喜んでた。
うーん。
何やってんだろうな俺ら。

２８８話　記者会見

「はぁ？記者が来る？」
「そーなんだよ全くもー」
　どう言うことだ全くもう。
「いやあ、大西洋の開放で、うちはほぼ全海域を取り戻した訳じゃん？そのことについて色々とお話しなきゃならんそうで」
「何でそんな……」
「主に野党がね……？この国の野党は、ほら、ね……？」
　政治の話はよく分からんが……。
「と言う訳で、記者会見的なスピーチ的なインタビュー的なそう言うサムシングをやらにゃならんそうよ」
「面倒な……」
　軽く頭を抱える。
「んで、あれだ、暇そうな、かつ、まともに受け答えできそうな子に声かけてんのよ」
「それで、この私にか」
「長門は、まあ、割とまともな方かなって」
　確かにな。雲龍や羽黒、大和辺りなら、日本語が通じない可能性もあるな。ドイツ艦、白露型辺りもまずいか。
「他には誰に声をかけた？」
「鹿島と、赤城、鳳翔、古鷹、時雨、三日月、アイオワくらいか。あと、呼んでないけど大淀もついてくるだろうね」
「何と言うか、それは……」
　大丈夫なのか。
「鹿島はドＭであることを除けば鎮守府で一番常識を弁えてるし、赤城も食人癖を除けば温厚な性格だ。古鷹もあらかじめ言って聞かせてある、鳳翔はまともな方、時雨も外面を取り繕うのは得意、三日月は余計なことは喋らない、アイオワは軍人としての心得がある。大淀は……、無難に難があるが、まあほら、俺がフォローするしかないよね」

貴方が大丈夫と言うなら、私から言うことはないが……。
「世界征服を目標としているとは大っぴらには言えんな。最悪、国家転覆作戦の緊急始動を視野に入れねばな」
「入れない入れない」
む、そうか。

鎮守府の一室にて。
「えー、それじゃあね、やりたくないんだけどね、その、記者会見的なアレをね、始めようと思います（半ギレ）」
チカチカと、無遠慮に切られるシャッターが鬱陶しい。記者とは、いつの時代もこんなものなのだな。
しかし、あれだな。守るべき国民のはずなのに、びっくりするくらいに愛情が湧かないな。羽虫のように群がってきてうざったいくらいにしか思えない。
ああ、いかんいかん。最早我々は提督の私兵で愛人だが、あくまでも、公僕……。国を守るために戦う兵士であると取り繕わなければ。
「えー、まずぅ、今回ですがぁー、大西洋の開放にあたりまして、やりたくなかったんですけど、スピーチをしろとのことでぇ（半ギレ）」
……提督、機嫌が悪いな。私達と一緒の時は全く怒らない温厚な方だが。
「で？えー、何だっけ。ほら、アレだよ。特に話すことねーよ。言っておくけどリハーサルは愚か台本すらないから、全部アドリブで話すんだけどぉ（半ギレ）」
提督は、午後の紅茶、のペットボトルに入ったウイスキーで口を湿らせ、語る。巧妙なカモフラージュだ。
……この人のアドリブ力なら、記者会見くらい準備なしで十全にこなせるだろう。
「俺はぁ、黒井鎮守府で提督を務めさせて頂いております、新台真央ですぅ。二、三年前、ちょっとした縁（大嘘）から提督に任命されましてぇ、以降こちらで職務を全うしていた次第ですぅ（半ギレ）」

舌打ち混じりにスピーチを続ける提督。
「えー、他の鎮守府と違い、黒井鎮守府が破竹の勢いで戦果を上げられたのはぁ、もちろん、艦娘達の健闘もありますが、このロック装置の開発も挙げられるでしょう（半ギレ）」
うむ、割と嘘だな。私達の頑張り、ロック装置もそうだが、提督由来の謎技術については触れない方向か。
「深海棲艦側の抵抗も激しいものでしたが、艦娘達の必死の努力の末、ほぼ全海域を取り戻すことができましたぁ（半ギレ）」
そして、捕虜にした深海棲艦のことも伏せるのか。
と、提督が嘘の混じったスピーチを、「はい！以上！終わり！閉廷！」の一言と共に終わらせ、質疑応答の時間に。
「A新聞社の○○です。黒井鎮守府さんが他の鎮守府と比べ大きな戦力を持つ理由について、もっと詳しく教えて頂けないでしょうか」
「うんそれ無理」
ざわざわと騒めく会場。
「軍事機密だから。軍事機密って便利な言葉だよな」
「しかし、その技術を他の鎮守府にも広めることができれば、より早く戦況は安定したのではないでしょうか」
「もうやったんだよなぁ。音成鎮守府にも技術提供したから。大体にして、このロック装置は、軍事機密に触れるので詳しくは言えませんけど、他の鎮守府では運用できないらしくてぇ」
嘘だ。
ロック装置は誰にでも使えるが、艦娘を隷属させる制御装置との併用ができないのだ。だから、他の鎮守府では採用されない。
一時期、ロック装置を改造した、艦娘を隷属させつつも強化する強化装置が流布されたことがあったが、提督とその知り合いが強化装置の製造元を悉く破壊して回り、今では殆ど強化装置の話は聞かない。
「Bエクスプレスの○○です。その、そちらの女性が艦娘でしょうか」
「そうだけど」
提督はスクリーンに私達の戦闘時の写真を映す。写真提供青葉と隅っこの方に書いてあるな。

すると、またもや騒めく会場。
「ＣＧか？」「いや、アメリカのアベンジャーズなどと同じような括りだろう」「強力過ぎる……」
「あ、そうなんだ。で？それが何か問題？」
「で、では、あの、アメリカの国有ヒーローチーム、アベンジャーズのような？」
「まあそうだね、流石に彼らには劣るが、ヒーローチームではあるよね」
「軍が所有する国営のヒーローチームのようなものですね」
「んあぁ、そうなんじゃあ、ないっすかねぇ（曖昧）」
もちろん違う。私達は既に、軍の命令を聞き入れるつもりはない。全て、提督の指示で動くのだ。
「Ｃ社の○○です。正直、黒井鎮守府の戦力は強大過ぎると思います。解体して再編する予定は？」
「ないです（全ギレ）」
折角の仲間が、離れ離れになるのは忍びない。
「しかし、主要な海域の奪還作戦では、半数ほどの戦力しか使わなかったとか。余らせるくらいなら分散させては？」
「戦術的観点から一度に動員する数を制限しているのであって、戦力が余っているとかそう言うのじゃないです（大嘘）」
「成る程……。艦娘の皆さんにもご意見をお聞きしたいのですが」
む。
「……現状、我々は、提督以外の指揮下に入るつもりはない」
一斉にシャッターが切られる。
「何故ですか！」「何か特別な理由が?!」「戦力の集中の意味は?!」
「提督は、私の知る限り最も有能で……、勇気ある方だ。彼以外に我々を扱いきれる人間はいない」
事実だ。
提督の指揮は一流だし、戦場に共に立てる指揮官は提督の他にいない。
海上を疾走し深海棲艦と拳を交えながら超能力で戦場の全てを俯

瞰しテレパシーで指揮を執る人間が他にいるのか。
「○○党では、そもそも戦力が多大過ぎるとの声もありますが」
「は？（全ギレ）戦力が足りなくて困ることはあっても、多過ぎて困ることはねーよ」
「日本はそもそも軍事国家ではなく、先の大戦の反省から軍隊を持たない法律さえあります。それなのに、多大な戦力を抱えては、何かと誤解を招くのでは？」
「何だァ、てめえ……（全ギレ）」
　提督キレたッ!!!
「外交上の問題となるかもしれません」
「俺の管轄じゃねーよなそれ。政治屋が騒ぎ立ててるだけで特に問題はないんだよなぁ」
「艦娘の皆さんはどう思いますか？」
　視線がこちら側に向く。
「僕達が邪魔なら、この国から出て行くだけなんだけどね」
　時雨が答える。
　またもや、激しくフラッシュが焚かれる。
「国防はどうなるのですか?!」
「うん？僕らが要らないんじゃないのかい？要らないなら出て行くし、必要とされるならいる。それだけの話じゃないか」
「し、しかし」
「君達は僕らをマシンか何かだとでも思っているのかい？人を愛することもあれば嫌うこともあるんだがね」
「Dテレビの○○です！では、人類に敵対することもあると?!」
　うむ、あるぞ。
「提督はそんなことを望んでいないよ。提督が望まないことはやらないさ」
　敵対しないとは言ってないな。
「護国の英霊ではないのですか?!」
「何度も言わせないで欲しいけど、僕達はマシンじゃない。意思がある。良いように使われることはないのさ」

「ですが！」
「こちとら命懸けで戦ってんだよね。それが要らないってんなら出て行くだろうよ。何かおかしいこと言ってるか？（全ギレ）」
提督が言う。
最悪艦娘をやめることも視野に入れているからな。
「Eスポーツの○○です。艦娘は全員提督の愛人の愛人部隊と聞きましたが」
「んえぁ、それは、あれですねぇ（曖昧）」
「「「妻です」」」
そしてフラッシュが一斉に焚かれる。
「んああ、何でそう言うことマスコミの前で言うかな君達ィ」
「事実ですし」
と、鳳翔。
「世界一の鎮守府の実態が愛人部隊というのも問題かと」
「何がですか？」
と、鹿島。
「その、風紀が……」
「先程うちの時雨ちゃんが申し上げたように、私達にも自由意思があります。誰を好きになろうと私達の勝手では？」
と、赤城。
「ですが、その……」
「「何か問題でも？」」
「いえ……」
閉口する記者。
「Fゴシップの○○です！ズバリ、提督に惚れた理由は？」
「それはもう強く優しく賢くハンサムで、私を誰よりも愛してくれるからだろう。提督よりも良い男は他に知らん」「提督が提督になる前にお会いして……、一目惚れでした。とても優しくて……、太陽のような方ですから」「共に過ごす内に惚れ込みました。心にゆとりを持つこと、美味しいものを食べてこその人生など、重要なことを教えて下さいましたから」「いつしか、恋をしてしまったみたいで。少し恥ず

かしいですね。今は愛し合ってます」「美しい瞳に惚れ込んでね。確かな智慧と、深き愛に触れて、僕の全てを捧げたいと思ったのさ。事実、提督のためならこの命、惜しくはないよ」「色恋沙汰はまだよく分かりませんが、孕むなら司令官との子供が良いです。司令官との子供なら、良い子に育つと思います」「提督は私の神様ですから。三千世界でたった一人、私が誠心誠意お仕えすると心に決めたお人です」「私のことを世界で一番可愛がってくれる方だからです。誰よりも大切に、愛して下さいますから」「Ｍｅのｆａｍｉｌｙになると言ってくれたの。血縁も何もない艦娘の、兵器のＭｅに。愛してくれると、言ってくれたの」

最初から、私、鹿島、赤城、鳳翔、時雨、三日月、大淀、古鷹、アイオワ。浮ついたような、そんな表情で言った。

いかんな、愛する提督について語れば、頬が緩む。

しんと、静まり返る会場。

「……それは、何とも」

む、何故ドン引きを？

「あー、もう良いだろ。帰れ。記者会見は終わりだ」

提督は終わりを宣言すると、困惑した様子の記者達が帰っていった。

「はぁ、チカレタ……」

「お疲れ様です、提督」

「もう二度とやらない」

「ええ、そうして下さい」

「あそびにいくヨ」

「お伴します」

大淀との軽いやり取りの後、遊びに行く提督。

うむ、やはり提督はこうでないとな。

２８９話　黒井鎮守府猛レース　前編

「あー、暇だ」
「こんな企画はどうでしょう。艦娘達全員を無限に歩かせるのです。足を止めたものは射殺して、最後に残った一人の願いを何でも叶える、と言う」
「何だっけそれ、死のロングウォークだっけ」
「はい、面白かったです」
　ホラー小説を面白かったと抜かすか。
「でもまあ、方向性は悪くない。レース、レースね」
　頭の中に特徴的なフレーズが。
「チキチキマシン、チキチキマシン～♪ってな、知ってる？」
「……すいません、存じ上げません」
「だろうな」
　古いアニメだ。艦娘が存じ上げないのは予想に難くない。
「ええと、つまり？」

「レースをやろう」

　俺の鶴の一声で始まった、黒井鎮守府大レース。
　明石と夕張はハイテンションでレース用のメカを用意し始めた。
「ふふ、ついに、我らが黒井鎮守府工廠の技術力を見せつける時！」
「倉庫に押し込んでおいたロボットの使い道はここだっ！」
　そして、艦娘達に告知する俺！
……「レースやろうぜ！」
……「えー、だるい」
……「ご命令とあればやりますが……」
……「何で？」
　しかし艦娘達は乗り気では無かった。
……「賞金は三億円!!」
……「「「(要らなっ)」」」

……「あとは俺が何でも言うこと聞いてあげる券」
……「「「やるぞおおおおお!!!!」」」
しかし、何故か急にやる気を出してきた艦娘達。
「しかしこれ、ＦＧＯ民から怒られませんかね」
夏イベが……。と、明石。
「大丈夫だ、これはチキチキマシン猛レースのパロディ、怒られるならチキチキマシン猛レース側からだろう」
「そっちの方が怖くないですか」
「バレなきゃへーキよ」
と言う訳ではい。
参加者一覧表を見る。
三日月：ガンダムバルバトスルプスレクス
菊月：ホワイトグリント
吹雪：バークラリードッグ
叢雲：クラウドブレイカー０１
古鷹型：マジンカイザーｓｋｌ
初月：ライジンオー
島風：サイバスター
天津風：ブラックサレナ
霞：アバレンオー
明石：ガンレオン
……
……
……
「車よりロボットの方が多いんですがそれは」
「妨害でも何でもありのレースですからね、ロボットの方が有利でしょう」
レースとは一体何だったのか。
「大丈夫これ、スマブラにならない？」
「まあ、大丈夫じゃないですかね。ってか、場所はどこでやるんですか？」

「こんなこともあろうかと、異空間にレースコースを作っておいたんだ」
「流石です提督」
さすてい。
「観客は？」
「俺の知り合いが万単位で押しかけてくる」
「はえー、すっごい」
折込チラシに転移の術式を描き込んでな、ばら撒いたんじゃよ。
「じゃあ、準備万端ですね」
「ああ。開幕までまだ時間があるから、レースに参加する艦娘を見て回ってみるよ」
「はい、行ってらっしゃい、提督」

ポルシェ３５６、ジャガーＸＫ１４０、フェラーリ３０８、デラシャペルタイプ５５ロードスター……。真っ黒なボディのクラシックカーが並ぶ。
そして時雨はデモンベイン。
「君らはマフィアか何か？」
「心外だね」
白露型だ。
「しかもこれ……」
ボンネットを開く。
中身は別物だ。
そこにエンジンは無く、魔術回路と炉心があった。
選りすぐられた生体パーツ、遺物、オーパーツの類。
「この車何キロ出るの？」
「音速以上で空を飛ぶよ」
はーん、ふざけやがって。
それを車と言って良いのか。
「大体、コースだって数百キロあるじゃないか」
あるが。

「最低でも音速は出さないと他の機体に追いつかないだろう？」
　そうだな。
「ちゃんと魔術回路による防壁も積んでいるよ」
　確かに、かなり強固だ。最新式のレールガンの一撃を受けても走行可能だろう。
「まあ、良い車なんじゃない？」
「ふふ、だろう？応援してね提督」
「ああ」

　三日月。
　ガンダムバルバトスルプスレクス。
　ガンダムバルバトスルプスレクスだ。
　大事なことなので二回言いました。
「あ、司令官」
「何これ」
「私の機体、ガンダムバルバトスルプスレクスです」
　んんんんーんん。
「マジかよ」
「技術的なことはよくわかりませんが……、リアクターを二基搭載してるそうです」
　マジかー。
「操縦できんの？」
「阿頼耶識システム……、ではなく、艤装直結システムで、直感的に操作できます」
　そうかー。
「む、司令官ではないか」
「菊月か」
「ところで、私のホワイトグリントを見てくれ、こいつをどう思う」
「凄く、大きいです」
　じゃなくって。
「ＡＭＳ……、ではなく、艤装直結システムを採用しているそうだ」

「コジマ粒子は……」
「……」
おいこら、顔を逸らすな。

吹雪はどうだー？
「ブッキー」
「アニメ版じゃないんでブッキーは勘弁して下さい」
ブッキー呼ばわりは嫌、と。
「吹雪はどうだ？」
「当てにならない部品が五十はある」
おいおい。
「って言うのは嘘で、ちゃんと作りましたよ！明石さんが！」
「でも装甲が……」
「当たらなければ良いんです!!」
ヒュー、言うねえ！
「で？こいつの肩は赤く塗らねえのか？」
「貴様！塗りたいのか！……なんてね！」

大和も出るのか。
「大和これは……、ビッグファウ？」
レース向きでは無いように思えるが。
「大丈夫です、他の艦娘を蹴散らします」
あの、あくまでレースだからね？
妨害ありで、なおかつ俺がコース内にトラップを仕掛けてるとは言え。
「貴方の大和は、きっと一番になりますからね！」
「お、おう。頑張れよ」

サラは……、と。
パラス・アテネか。
「黄緑が綺麗で可愛いですね」

「そうだね」
明石め、サラがサラだからパラス・アテネ寄越したんだな？
「でも、味方にビーム砲とか、撃って良いんでしょうか？」
「安全面には特に気を遣ってるそうだ」
「まあ、出来るだけフェアな勝負をしたいですね」
ああ、そうしてくれ。

長門は？
「うむ、ジプシーデンジャーだ」
明石め、やっぱり作ってやがったな。
「陸奥とペアで運転するんだ」
「へー」
大丈夫なのだろうか。
あの、脳を直結するっぽいシステム。
明石のことだ、搭乗者のことは一切考えていないだろう。

成る程ね、皆んな用意は万全ってことか。
「明石、これは？」
「ギャグマンガ空間形成装置です」
「どう言うことだ」
「この装置があれば、死人が出ません」
素晴らしいな。
ってか、そんなもんあるなら普段から使えよ。
「あ、言っておきますけど、普段から使えよってツッコミは無しですよ。これ、死人が出ない、即ち敵も殺せなくなるんですから。稼働に時間もかかりますし、コストも安くは無いです。次元改変系なので」
……まあ、そんなうまい話はないってことか。
何にせよ、レースの開幕だ。
挨拶？
適当でいいよそんなん。
観客は、と。

うーん、ＡＵＯ君とかゆかりんとか大物がぞろぞろと。ジャギやアミバのような小物もちょろっと。

……皆んな案外暇なのかね？

まあ、何にせよ……。

「レース開始だァ!!!」

３

２

１

ＧＯ（ｉｓ　ＧＯＤ）!!!

２９０話　黒井鎮守府猛レース　後編

「さあ始まりました楽しい楽しい黒井鎮守府猛レース大会！解説はこの俺、旅人こと新台真央がやらせていただきます！よろしくどーぞ！」

『旅人の妹の新台花凛だ。アメリカから通信用ドローンで見てるぞ。このレースの技術部を提供している。よろしくどうぞ』

さて、と言う訳で。

レースだ。

レースですよ。

某動画サイトで生放送しつつ、レースなのだ。

「かーぜに、なりーたいー」

皆んなには決して諦めずにウィニングランしていただきたい。レッツエンドゴー。

いや、レッツゴーレッツゴーレッツエンドゴーの方が有名か。

「さて、トップは島風、サイバスター。次点で菊月、ホワイトグリント」

俺はウイスキーで喉を潤しつつ、実況する。

『この調子なら私が一番ね！だって速いもん!!』

甘いぞ遊戯!!

いや、島風!!

速いだけではクリアできんのがこの黒井鎮守府猛レース大会よ!!

『って、何あれぇ?!』

「はい、解説しましょう！あれは！俺が夜なべして作ったプラモデルに、某ケロン人提供の万能兵器化飲料をぶっかけたもの！つまり！」

ガンダムバエルの群れです。

草バエル。

『そんなのありー?!』

「はーっはっは、知らん知らん！簡単にはゴールさせないもんね！」

こう言う催し物は思いっきり遊ぶべきだと俺は思う。

派手に行こうか。

『うううう、もー！ディスカッターー!!!』

剣を抜く島風のサイバスター。
続く菊月も。
『うおっ?!何だあれは?進行妨害か?……ならば倒す他あるまい!』
三日月のガンダムバルバトスルプスレクスも。
『……蹴散らします』
中には。
『えー?!無理無理、相手してらんないよー!と言う訳で、お先にっ!!』
タゲを他人に擦りつけて、先行する鈴谷のオーガス。
『あっ、鈴谷!!』
『待てっ!!』
そして予告通り音速で空をかっ飛ぶクラシックカー、とデモンベイン。
白露型だ。
『島風は速いからね、少しばかり妨害させてもらおうか。……マダラスの笛ッ!!!』
『きゃっ?!羽がっ?!!』
秘儀の発動により召喚された大蛇が島風のサイバスターの羽を傷つける。これで島風一強から勝負は分からなくなってきた。
『それじゃあ、お先に』
飛んでいくクラシックカーとデモンベイン。
『ぐぬぬぬぬ!後で覚えてなさい、時雨!』
『ははは、怖いな。僕はルールに従って行動しているだけなんだけどね』

さあ、第二関門。
俺が用意したのは……。
「俺が手塩にかけて育てた……!」
巨大エロ触手の群れだァーーーー!!!
……しっかし、ロボにエロ触手嗾けてもなあ。
俺は別に。
特殊性癖の人は喜ぶんじゃない?

世の中にはモビルスーツで射精する人もいるらしいし。
『うへえ、気持ち悪っ！』
嫌悪感を露わにする霞。
乗機はアバレンオー。
ドリルとクローでエロ触手を千切るわ抉るわ。
名前に違わぬ暴れっぷりだ。
『こんなもの、空を飛べば……』
空中に逃げようとする菊月。
しかし。
『ぐおっ、脚を掴まれ……、うおおおお?!!』
引き摺り下ろされる。
『クソ、ならば、これだっ！アサルトアーマー!!』
アサルトアーマー……、ホワイトグリントの周囲に展開されているプライマルアーマーと言うバリアフィールドを攻勢展開、周囲を薙ぎ払う機構だ。
『ふう、行くぞ』
しかし、その代償として、一時的にプライマルアーマーが消えるのだ。
つまり。
『隙ありっ！ブロウクンファントム!!』
『ぐおっ、しまった?!!』
バリアがなくなる。
『クソっ、ブースターを……！よくも!!』
『油断したなぁ、白いの！このガングートのガオファイガー、先行させてもらうぞ!!』
ブースターを吹かすガングート。
『ヨグ＝ソトースのこぶし!!!』
『ぐああ!!!』
海風にブースターを破壊されるガングート。
いやー、勝負は分からなくなってきた。本当に分からん。
ジャガーくらい分からん。

第三関門、四脚スナイパーＡＣの群れだ。
「狙撃を回避しながら進むのじゃー」
のじゃのじゃー。ってな。
初春あたりにユーチューバーやらせるか？
リアル和風のじゃロリユーチューバー娘さんだぞ。
これは行ける。
さて、レースはどうなってるかな？
『狙撃ですか』
滅茶苦茶な機動で回避する三日月。
『効かないねっ!!!』
不規則な動きで回避、防御しつつ飛行する木曾。乗機はブラックゲッター。
『危ないですわねっ！』
華麗に回避する熊野。因みに乗機はオーガスＩＩ。
『効かないもんねー』
『流石です北上さん！』
大井と北上はガンバスター。防御力でゴリ押し。
皆んな頑張れー。
『ううー、私の前を走らないでっ！』
島風のサイバスターが剣を振り回す。
『チッ、駆逐艦はこれだから。ウザいなあ』
『北上さん、バスタートマホークです！』
『うんっ！行くよ大井っち！』
『『やあああああっ!!!』』
おー、戦ってる戦ってる。

さあ、第四関門。
『な、何だ?!』
『あれ？スピードが……』
「ふはは、ここでは特別なルールがある!!」

『『『特別なルール？』』』
　さあ、スペシャルアドバイザー、幸子カモンッ!!
「フフーン！どうもどうも！世界一可愛いボクでーす！」
『は？』
『何やこいつ』
『早く説明して』
　イライラの艦娘達。
「わ、分かりました。ここはですね、カワイイものしかスピードを出せない空間なのですよ！」
『『『は？』』』
「世界一可愛いボクが、皆さんの機体を鑑定して、カワイイ機体だけがスピードを出せると言う設定です！」
　設定とか言うなや幸子ォ!!
「とりあえずその黒いドクロのロボットはダメですね！とても女の子のチョイスとは思えません！」
『えっ？』
『うわっ、速度が?!』
　古鷹アンド加古のマジンカイザーｓｋｌはスピードを失った。
　幸子鑑定のお眼鏡にかなわなかったようだ。
「黒いクラシックカーはまあまあセンスありますね！カワイイかって言うと微妙なところですけど」
『よし』
『それなりですね』
『うん』
　白露型のクラシックカーはまあまあの速度が出た。
「パラス・アテネ！黄緑がカワイイです！形はちょっと虫みたいで嫌ですけど」
『うん、上々ね』
　サラのパラス・アテネもそれなりだ。
「ウイングガンダムゼロカスタム!!天使みたいで綺麗です！行ってよし!!」

『やったわ！』
五十鈴のウイングガンダムゼロカスタムは加速した。
「ガンダムローズ、中々にエレガントな感じですね！」
『よしっ！』
暁のガンダムローズも加速。
さあ、どうなる……？

数百キロのデッドヒート、その勝負の行方は……?!

２９１話　黒井鎮守府猛レース　エピローグ

「黒井鎮守府猛レース、優勝者は……?!」

（溜め）

「ン幸子ォォォ!!!!!」
「え?は?え……?はぁぁぁぁぁ?!!!!」

俺はマイク片手に幸子にインタビューする。
「どうですか幸子さん。一位になったご感想は?」
「え?あの、ボク、レースに参加してすらいないんですけど?!」
「どうですか幸子さん。一位になったご感想は?」
「プロデューサーすーぐゴリ押しするんですから!!やめて下さいよ!!」
「ご感想は?パンツ脱がせますよ?」
「現役アイドルに堂々とセクハラ宣言しないで下さいっ!!」
「で?一位になったご感想をお聞かせ願いたいんですが」
「い、一位も何も、ボクはアドバイザーで……」
「幸子あれを見ろ」

クレーターができたレースサーキットを指差す。
「何が起こったか分かるか?」
「ええ、はい、あれですよね?ゴール前で多数のロボットが乱闘を始めて、最終的に全部爆発してレースサーキットごと吹っ飛んだんですよね」

そうだな。

縮退炉に相転移エンジン、プラズマリアクターに核融合炉。そんなエネルギーの塊であるスーパーロボット達が一堂に会し、乱闘を始めて、爆発したらどうなるか。

見ろ、クレーターが複数できた。

高濃度の放射能汚染とコジマ汚染、高エネルギーによる時空亀裂

……、問題は深刻だ。
「と言う訳でレースはノーコンテスト、勝者なしで終わった訳だが、それでは収まりが悪いだろう？」
「収まりが悪いって……」
「取り敢えず、無事だった幸子を優勝ってことにしたんだよ」
「い、いやいやいやいや、意味分かりませんから！」
「いやもうめんどくさいし……、観客もいる中引き分けですーっ、てのも何かアレだろ？」
「そ、そうかもしれませんけどぉ！」
「そして、困った俺の元にほら、幸子だ」
「ボク、ですか？」
「幸子は万能のジョーカーだろ」
「なんですかその過大評価は」
「アフリカにロケに送った時も、イ○テQでイ○トさんとスカイダイビングやらせた時も、北の海でクリオネと戯れた時も、幸子は十全にミッションをこなしてくれた」
　懐かしいなー。
「ええ、ええ、覚えてますとも……！プロデューサーのせいで何度も死にかけたのをねぇ!!!」
「生きてんじゃん」
「なーにを言ってるんですか！アフリカじゃライオンの群れに突撃して!!」
「可愛いだろ、ライオン」
「生きた心地がしませんでしたよ!!そしてイ○トさんとのスカイダイビングの件では何故かプロデューサーも一緒に飛びましたし!!!」
「俺も飛びたかったし」
「クリオネの件では、何でしたっけ、流氷の天使とコラボレーション？ダブル天使？ってふざけてるんですかぁ!!!」
「本気だが？」
　勘違いしないでほしい、幸子に持ってくる仕事はいつだって全力全開で本気の仕事だった。

「ボクは、ボクはアイドルなんです!!イ○トさんとか出川○朗さんみたいな芸人じゃないんですよっ!!」
「わーかってる、わーかってるよぉ」
「プロデューサーのせいで!未だにその手のバラエティ番組からのオファーがめちゃくちゃ来るんですからねっ!分かりますか?!」
「良かったじゃん」
「……まあ、お仕事があるのは嬉しいんですけど、ボクもアイドルなんですからこう、歌ったり踊ったりとか」
「じゃあ、やるか?出資するから」
「スポンサーになってくれるんですか?!」
「ああ。取り敢えずアマゾンの奥地で……」
「だーかーらー!!!」

「……兎に角、優勝者は君だ。これ、賞金と俺になんでも言うこと聞いてもらえる券」
「賞金、ってうわあ!これいくらあるんですか?!」
「三億」
「三億?!」
「安心しろ、日本円だ。ドルな訳ないだろ?」
「いやそれでも三億ですよ?!」
「またまた、アイドルの幸子様からすりゃあ端金でしょうよ」
　国内外にも名声が轟く天下の３４６プロのアイドル様ダルルォ?
「あのですねぇ、プロデューサーのぶち壊れた金銭感覚からすれば端金かもしれませんが、一般市民からすれば一生暮らせるくらいの大金ですよ?ぽいっと人に渡さないで下さい」
　そうなの?
「でも誰も受け取る人いないし」
「じゃあ貯金して下さいよ」
「旅人は宵越しの銭を持たない。ちょっとの小銭と明日のパンツさえあればいい。酒代と風俗代もありゃ上等よ」
「相変わらずぶっ飛んでますね……。端的に言って頭がおかしいで

す」
　ははは、酷いなあ。
「分かった分かった、じゃあこの、俺が何でも言うことを聞いてあげる券を進呈しよう」
「何ですかそれ、子供の肩たたき券みたいなものですか？」
「そんなもんかね。一時的に俺の時間を割いてあげる券かな。具体的には２４時間くらい」
「なあんだ、それじゃあ、プロデューサーに戻って下さいって、お願いできないじゃないですか」
　んー？
「あれ？戻ってきて欲しいの？」
「それは……、そうですよ。皆んな、貴方がプロデューサーをしてくれていた時が一番楽しかったんですから」
「そう、か」
　そうだな、楽しかったな。
「……なんで、プロデューサーは、プロデューサーをやめちゃったんですか？」
「……そりゃあ、君らが俺の支えなしでも真っ直ぐ立てるようになったから。それと」
「上司が気に食わなかった、とか言わないで下さいよ？」
「……上司が気に食わなかったからだ!!」
　はぁ、と溜息をついた幸子。
　な、なんだよっ、その目は！
「あのですねえ、アイドル部門を解体するって宣言は確かに大事件でしたよ？でも、何でそこで、あっちのプロデューサーさんみたく言葉で説得しようと思わなかったんですか？」
「俺、キレると手と口が同時に出ちゃうタイプだから」
「ほんっとにクズですねっ!!!」
　いやあ、しゃあないよあれは、しゃあない。
　よく分からんポエム垂れ流されてシンデレラガールズ含めアイドル部門解体だもんよ。

「むしろビールかけくらいで済ませた俺って大人じゃね？」
「へいへーい！その化粧落としてやるぜ女版バンコランよぉ！とか叫んで、どこからか取り出した瓶ビールで野球よろしくビールかけって、大罪ですよ」
「いや許されるレベルでしょ？それをあのおばさんマジギレしてクビだーとか言うから」
「そりゃクビですよ、どこの世界に常務を罵倒しつつ顔面にお酒をぶっかけてクビにならない会社があるってんですか！」
「探せばあるかもしれねーだろ！」
「屁理屈はやめて下さい！」
　ふう、とお互いに一息ついて。
「……皆んな、心配したんですよ？」
「それは、ごめんね」
「クビだー！って言われた瞬間、おー辞めてヤルァ！って叫んで出て行ったそうですね」
「そうだね」
「何でそう、無茶ばっかりするんですか」
「楽しいだろ？」
「あーやっぱり狂ってますね貴方」
　何故か狂人扱いされる俺。
　コレガワカラナイ。
「まあ、こっちの、何でも言うことを聞いてもらえる券は貰っておきますよ。プロデューサーのことですから、地球の裏側にいたってすっ飛んできて、本当に何でも言うことを聞いてくれるんでしょうし」
「ああ、聞くとも」
「それじゃあ、ボクは帰ります。……皆んなともたまには会ってあげて下さいね！」
「ああ、会うとも」
　手を振る幸子を見送る。
　さて。
「この放射能汚染とコジマ汚染と時空亀裂がある空間からダウンした

艦娘達を拾って来なきゃな……」

お仕事お仕事、と。

今の仕事は提督、だからな。

２９２話　召喚祭り

「ちゃぁああい……」
「対馬です、よろしくお願いします」
　んおぁぁぁい……。
　おぉぉおん……。
「ぺドぉ」
　いかんですわよ（お嬢様旅人）。
　はぁぁん、だってこんな、こんな。
　セックスアンドザシティ、ソドムアンドゴモラ、狂気と混沌、背徳の城黒井鎮守府。
　ここに、こんな幼い、小中学生程の駆逐艦より更に幼い子を……。
「君はここにいちゃいけない。帰った方がいい」
「え……、対馬は、要らない子ですか？」
　一瞬にして絶望顔になる対馬ちゃん。
「そーんなことあーりませんですわよー!!可愛い対馬ちゃんとずっと一緒にいたいなー!!」
「本当ですか、司令……？」
「本当でござるよー！」
「その、私、無愛想ですけど、艦隊の皆んなと仲良くなりたいと思ってます。もちろん、司令とも……」
「んんんんん！大丈夫だよ対馬ちゃんとってもいい子だからすぐにお友達できるからね!!!仲良くしよーねー!!!!!」
　ああ、クソ、こんな幼気な少女も汚されてしまうのか……。
　黒井鎮守府……、恐ろしい子!!

　そんな訳で新たなお仲間を建造。
　戦局も良い方向に傾いてる訳なんで、大量に召喚した。
　まず、占守、国後、択捉型海防艦を始めとして、五月雨、涼風、荒潮、長月、水無月、深雪、初雪、香取を建造。
　普段ならここいらで終わらせるが、もうそろそろ建造する必要すら

なくなる気がして、駄目押し。
ガンビア・ベイ、イントレピッド、ジャーヴィス、タシュケント、サミュエル・Ｂ・ロバーツまで建造。ふざけた人数だ。
音成も夕雲型を建造した。
流石に二十人近くの大建造だったもんだから、混乱もある。
海外艦は相変わらず日本語話せねーもんなんで、通訳ができる金剛と響を呼んで、それぞれ解説する。
使うのは、俺が一時間でちょちょいと作ったパワーポイント。
これを大会議室のプロジェクターに写して、大学講義よろしく鎮守府の説明をする。
《たのしい黒井鎮守府（くろいちんじゅふ）しょうかい、新台真央》
海外艦には金剛と響がそれぞれの国の言葉に訳して伝える。
以降、俺の言葉は海外艦にも伝わっているものとする。
「えー、どうも皆さんこんにちは。皆さんを建造した提督の新台真央と」
「あ、海原守子です」
プロジェクターに俺と守子ちゃんの略歴を出す。つっても、俺のは略してもとんでもない量だったが。
『あの、良いですか……？』
英語のガンビア・ベイちゃん。金髪のツインテールと巨乳が眼福。ナードっぽい雰囲気もまた可愛い。ガンガン押せば口説き落とせると見た。
「今日も一日ガンビア・ベイ!!」
『はい？』
「いや、何でもないよ。質問かい？」
『は、はい。その、まず、それ、何ですか？』
「これ？プロジェクター。映写機だよ。君達がいない間に世の中は進歩したのだよ」
『あ、いえ、そっちじゃなくって、その、Ａｄｍｉｒａｌの経歴なんですが……』
考古学者、エンジニア、弁護士、格闘家、同人作家、教師、冒険者、

パイロット、ネゴシエーター、経営者、歌手、探偵、遊び人、悪の組織の怪人、狩人、その他、まとめて旅人。
「なんか変？」
『変じゃないところがないんですが』
　んー？
「俺はどこにでもいる一般通過旅人だよ？」
『え？』
　ん？
　まあ良いか。
　スライドショーを次に進める。
《はじめに》
《黒井鎮守府は、日本どころか世界最大の規模の巨大鎮守府です。主に、海上での商業活動の護衛や、各国への技術提供などでお金を稼いでいます。悪の組織です》
「ここまでは良い？」
『良いかしら？』
　挙手したのはジャーヴィス。んんんジャーヴィスぅ……。英国のガキといえばチャヴが思い浮かぶが、ジャーヴィスはステレオタイプのいいとこのお嬢ちゃんって感じだ。きゃわういぅい。
『そのね、軍隊って、お金を稼いで良いものなの？そういうのは税金で賄われるんじゃないのかしら？』
　うん、正論。でもね。
「いや、ちょっとうち、お上から嫌われててね。金貰えてないのよ」
『えっ?!大丈夫なの?!』
「そこは俺の敏腕借金術で初期資金作って、その後は色々なアレをアレして資金繰り。今は一部上場企業並に稼いでるよ」
『良いのかしら……』
「良いんじゃないかな、お上がお金くれないんだし、自分達で稼がないと。大体にして維持費そんなにかからねーし。君達がモノホンの空母戦艦なら、一人につき維持費が億単位飛ぶじゃん？でも実際、君達は食事と艤装を直したり動かしたりする分の資材さえあれば戦え

ちゃうんだよね。つまり、維持コストがべらぼうに安いのよ。だから稼いだ金に対して経費が少ないのなんのって。給料もしっかり出すから期待しててな」
『お小遣いくれるの？』
　若干目を輝かせるジャーヴィス。いるんだよな、船の頃の経験から、人間の活動に憧れを抱く艦娘って。
「えー、君の頃の貨幣価値で言うと……、十数ポンドくらいは出せるよ。月に」
　ポンド千円で円の価値は今の８０倍くらいだとしての計算だ。
『えええええ?!それって将軍並じゃない！私、そんなに偉くないわ！』
「知らん、そんなことは俺の管轄外だ」
『あと、悪の組織って？悪いことしてるの？』
「ちょっとだけ」
『駄目よ！悪いことしちゃ！』
「いや違法行為もやらないと経済回んねーのよこれが。うちはヤクザみたいなこすっからい稼ぎ方してるんで法律面はグレーだけど違法ではない感じよ」
　さて、次。
《艦娘寮》
《基本的に寮生活になります。シャワーとトイレ付きのワンルームです。家具は買うか暇そうな旅人に頼んで下さい。生活必需品は支給します。スマホとか》
「はい」
「はい、荒潮ちゃん」
「お部屋ってどれくらい広いのかしら？」
「一人部屋なら八畳くらい。姉妹艦いるなら、でっかい部屋を充てがわれて好きに部屋割りさせたり、逆に壁を全部取っ払ってめちゃくちゃ広い部屋にしたりもするよ。要相談だね。アレなら鎮守府近くに家を建てても良いよ。マンションも可」
「へえ」
「朝潮型ルームは十人部屋になってるよ」

「敷地どれだけあるんですかこの鎮守府?!」
「工廠の技術で時空間歪めてるから正確な大きさは不明だけど、漫画の金持ちキャラとかでよくある、日本にこんな敷地ねえだろみたいな広さだと思ってもらって良い」
「えっと?」
「いや、気にしなくて良いよ」
　さて、次。
《食堂》
　メニューのサンプル画像をスライドショーで流す。
《毎日日替わり、金曜の昼はカレーです。１から１０くらいまでの番号に対応したメニューがあり、それを食堂の受付で番号を言うと調理担当が作ります。調理担当は、鳳翔、間宮、伊良湖、速吸、提督です。大盛り可、おかわり無制限》
『良いかしら』
「何かな?」
　スカイママことイントレピッドだ。
『私達、兵器よ?こんなに良いもの食べさせて貰えるって本当?』
「俺は君達を同じ人間だと思っている。だから、俺は、君達に食べてもらいたいものを出すよ」
『……ふふ、優しいのね、貴方』
　美人にはね。
　次。
《温泉》
　ここで「おおぉ……!」みたいな歓声が上がる。
《黒井鎮守府には温泉があります。内風呂にも様々な効能のお風呂を用意しています。お風呂上がりには卓球やゲームはどうでしょう?アイスも完備しています!》
　健康ランドも真っ青の充実っぷりだ。
「はい!」
「はい択捉ちゃん」
「あの、あの、私達、こんな凄いところにいて良いんでしょうか?」

ん？
どう言うことだ？
「毎日温泉なんて、お金持ちみたいです！贅沢は敵ですよ？」
んー、戦争末期って感じ。
「今の日本はそれなりに豊かだし、黒井鎮守府は稼いでる。世界で一番戦績を挙げているんだから、世界で一番良い思いをする権利があるだろう。……と言っても、中々良い思いをさせてあげられてないんじゃないかと日夜悩んでいるが」
ハイ次。
《休憩室》
《つまるところ居間です。和室もあります。冷蔵庫とお菓子コーナーのお菓子は食べ放題！》
「はいっ！」
「はい佐渡ちゃん」
「お、お菓子食べほーだいなのか?!」
「ああ、がっつり食え……」
ご飯をちゃんと食べられる程度に食え……。
次。
《居酒屋鳳翔》
《鳳翔さんのお店。完全無料。お高いお酒は要相談》
「あの、無料って？」
と、香取ーヌ。
「無料は無料だよ。艦娘は完全無料」
「え？それは……」
「まあ、鎮守府の運営的に、ちょっと飲んだくらいじゃ経営が傾かないのよ。好きに飲みな」
次。
《その他の施設》
《温水プール、射撃場、グラウンド、体育館、弓道場、テニスコート、ボウリング場、映画館、図書館など。近々売店の設置も検討》
「あのう」

「はい五月雨ちゃん」
「ここ、本当に鎮守府ですか？」
「？、鎮守府だよ？」
　さて、こんなもんか。
「では、それぞれ姉妹艦や近しい艦娘に引き渡すので、それぞれの教育方針に従って訓練し、好きに生活してくれ。以上、解散！」
「「「は、はあ」」」
　まあね、皆んなの上司であることを強調したからね今回は。まさか惚れられたりはしないっしょ。

２９３話　海原守子の一日

「はい、もしもし、黒井鎮守府窓口です」
私の名前は海原守子。
提督だ。
今、私は。
『もしもし、株式会社クロスですけど』
「はい、株式会社クロス様ですね。貿易に関するお話でしょうか？」
黒井鎮守府窓口で、働いている。
海を守ろうと家族の反対を押し切り一念発起して提督になったはずが、気付けば別の鎮守府に半分併合されてその上で電話応対の仕事を任されるようになった。
何を言ってるか分からないと思うけど私にもよく分からない。
「はい、はい、ではそのように新台に伝えておきます、失礼いたします」
ここ、黒井鎮守府で事務仕事をやっているのは。
「はい、麻薬密輸船の轟沈ですね」
大淀さん、
「兵器技術の提供ですね」
翔鶴さん、
「金塊の密輸ですか？」
鹿島さんなどが担当。
まあ、十人くらいはまともに電話応対できる艦娘がいるので、黒井鎮守府はちゃんと運営できている。
因みに、これが長門さんなら。
『あの、もしもし、黒井鎮守府さんですか？こちらは株式会社〇〇です』
「む、何だ」
『あ、あのですね、今週の貿易品目の確認なんですが』
「そんなこと、私に言われても分からんぞ。陸奥ー！陸奥ー!!代わってくれ、電話だ!!」
となる。

電ちゃんだと。
『もしもし、株式会社○○です』
「はい、こちら黒井鎮守府なのです」
『え？子供？電話番号間違ったかな……？』
「え？いや、あの、黒井鎮守府なのです！」
『ごめんね、おじさん番号間違えちゃったみたいだよー』
「だ、だから、黒井鎮守府なのです！」
となる。
雲龍さんなんかはもっと酷い。
『もしもし、株式会社○○です』
「……今日は空が綺麗ね」
『は？』
「……こんな日は提督と一緒に外でお散歩したらきっと気持ちが良いわ」
『え？あの？』
「……ちょっと誘ってみようかしら」
と、電話を切るだろう。
黒井鎮守府の八割はサイコパ……、話がちょっと通じな、通じにくい子が多いぃ、って言うか、その、まあそんな感じだから、電話応対を許されているのは十人ちょっとだけだ。
……それにしても、半分くらいは違法なことに突っ込みは入れていいのだろうか。
黒井鎮守府は、兵器の開発と輸出、違法合法問わずの貿易の護衛や仲介、他の密輸船の襲撃などで生計を立てている。
悪事の片棒を担がされている気がするけど、まあ、気にしちゃいけないのだろう。
大々的に悪事はやっていないのだ。
密輸にしても中継や護衛に留めて、積荷が何なのかは知らない、というスタンスを貫くし、兵器技術についてはいつのまにか裏で政府の許可を取ったらしい。
公的機関に踏み込まれても、洗脳装置らしきもの（怖くて聞けない

怪しい機械）で記憶を改竄し解放するので、どこにも悪事はバレていない。
とてもグレーな鎮守府である。

「ふう……」
五時だ。
黒井鎮守府では九時に業務開始、五時には定時。
窓口も締め切り、そして週休二日祝日も休み。
事務処理での残業はなし。
めちゃくちゃホワイトだ。
艦娘でも五時以降の出撃は申請をあらかじめ出さなきゃならない決まりになっているので、物好きしか夜戦はやらない。
この仕事の少なさは学生時代と変わらないくらいの忙しさなので、真面目に働いている世の中の社会人の皆さんに申し訳ないという気持ちが湧いてしまう。
ストレスと言えば、窓口なので、たまに野党の政治家を名乗る人や反戦団体みたいなよく分からない団体から要領を得ない謎のクレームの電話がかかってくるくらい。
仕事と言っても、電話がかかってくるのを窓口にいる艦娘の皆んなとお喋りしつつ、美味しいお菓子とお茶を楽しみながら待っていれば良いだけなのだから。
大淀さんとか鹿島さんとかも、旅人さんのこととなると凄くエッチでいかがわしいことを言うけれど、それ以外ではまともだ。
大淀さんは読書家なので、面白い本の話をしてくれる。でも、ホラー小説をとても面白いと賞賛する斜め上のセンスの持ち主なので、話半分に聞いているけど。
鹿島さんはとってもお洒落で、ファッションの話題に詳しい。私はあんまり詳しくないので、同じ女の人として尊敬する。
他に、窓口にいる艦娘と言えば鳥海さんかな？大淀さんと同じく読書家で、難しい本が好きみたい。古典文学って言うのかな、そう言うの。私は流行っている小説をちょっと読むくらいだから……。

他にも陸奥さんとかいるかなぁ。陸奥さんはファッションに詳しいのもあるけれど、クラシックのコンサートに行ったり、美術館巡りをしたりとか、芸術への造詣が深い。高尚過ぎて私はいまいち分からないなあ。

思えば艦娘の皆んなって本当に個性があるよね。旅人さんが趣味に生きる人だから、趣味を持つことを推奨したっていう背景があるのを差し置いても、艦娘の皆んなは多様な趣味を持つように思う。

海外戦艦旅サークルとか、趣味で夜戦や山籠りをする川内型（那珂ちゃんは無理矢理付き合わされてる）、ゲーマーの望月ちゃん、黒井鎮守府のＷｅｂページを作った青葉さん衣笠さん、怪しげな魔術の研究以外にも芸術への造詣が深い上に楽器の演奏や絵を描いたりできる白露型と言う謎の集団、鎮守府中のお花畑やバラ園を管理する古鷹さん、バイクいじりをする加古さん、株取引が趣味の霧島さん。

黒井鎮守府には、多様多種な趣味人がいる。

それはまあ、衣食住が保証された上で、３桁万円のお給料と週休二日祝日も休みと定時退社と多めの有給を貰えば、誰だって趣味に走ると思う。

艦娘の皆んなは実質週休六日、皆んな物凄く暇らしい。

趣味がないとやっていけない、とのこと。

私も特に趣味らしい趣味はないので、正直暇だ。

「定時ですね。どうします？」

大淀さんが尋ねてくる。

「丁度食堂が開く頃ですし、晩御飯食べてから飲みに行きましょう」

鹿島さんが提案。

いつもの流れだ。

「うう、お酒飲むとまた太っちゃう……」

「え？海原提督、そんな太ってますか？」

「最近ついに５０ｋｇの大台に乗りました……」

「なあんだ、私と５ｋｇしか違わないじゃないですか」

「５ｋｇもっ！違うじゃ！ないですかぁ!!」

ナイスバディの鹿島さんには分からないでしょうねえ!!女の子で

５ｋｇはとても大きい数字なんですよお!!
「そんなお腹とか出てます？……あっ、ぷにっとした」
「ひうぅ、突かないで、突かないで下さいぃ……。脇腹が出たりなんかしてません……」

食後、居酒屋鳳翔にて。
「「「かんぱーい！」」」
飲み会だ。
窓口チームは、旅人さんが関わらない限り、割とまともな集団だ。なんて言ったって日本語が通じるのだ。黒井鎮守府には日本語が通じにくい子が多い。海外艦もそうだけど、サイコパ、キチガ、あー、えーと、詳しくは、私の口からは……。
私とも、お友達、みたいな関係だと思う。
ただ、この人達は、旅人さんの命令があれば、私を殺すことは愚か、仲間同士で殺し合い、強盗殺人、テロ、何でもやるけど……。
「私、焼き鳥食べたいです、ねぎまとぼんじり、砂肝と皮、塩で。それとアサヒスーパードライを」
「季節のお刺身盛り合わせと適当にお刺身に合う日本酒を」
「うーん、ローストビーフと野菜スティックを。お酒は赤ワインで」
「かしこまりました、海原提督はどうします？」
笑顔で対応する鳳翔さん。
因みに、温厚そうに見える鳳翔さんも旅人さんを馬鹿にしたり命令があったりしたら相手が誰でも殺しにかかる。
「わ、私は……」
「どうしました、海原提督？まさか、また太るとかどうとか考えてるんですか？」
「だって……」
「まあ大丈夫ですよー。ダイエット代わりに護身術を習っているんでしょう、提督に」
「多少太っても運動すれば平気ですよー」
「ご飯あんまり食べてなかったじゃないですか、大丈夫大丈夫」

う、うう……。
甘言……っ!!
「うううう〜!!か、唐揚げとフライドポテト、キリンビール下さいぃ!!」
「はい、かしこまりました!」
うあああー!!
甘言に惑わされてしまった……!!

「うう、美味しい、美味しいよお……」
駄目ぇ、やめられないぃ……。
タダで飲める美味しいビール……、キリンの一番搾りがぁ……。
さっぱりしてて美味しい……。
唐揚げがジューシーでお肉の旨味が流れ出るのを、さっぱりビールで洗い流すように飲む……!!
ああもう駄目……。
美味しい……。
お父さんお母さんごめんなさい、私は欲望に抗えない駄目な子です……。

「今週何体殺しました？」
「８００くらいですかねぇ」
「白露型が鬼クラスの身柄欲しがってましたよ」
「何に使うんですかねー」
「知りませんよ、また怪しげな儀式じゃないですか」
「でもあれ理にかなったことしてますからね。最近は時間を止める実験してるみたいですよ？」
「それに何で深海棲艦の肉体が欲しいんですかね」
「電池代わりにするんですよ。生体エネルギーを吸い取って使うんです」
「生贄ってやつですか」
「私も専門外なんで、詳しくは説明できませんけど、ティンダロスの猟犬をどうするかで大分議論してるみたいですよ」

飲みながら会話をする電話組。
「そう言えば海原提督、また変なのに絡まれてましたね」
「ああ、あれですか、野党の……」
「連峰でしたっけ、なんか変な女」
し、失礼ですよ大淀さん……。
「なんか変なこと言ってませんでした？」
「ええ、まあ……、なんだか現政府の批判と黒井鎮守府の解体？とか言ってましたね」
「いつの世も政治家は馬鹿なんですねえ」
と、コップを傾ける大淀さん。
「でも、今の総理大臣も大分無茶苦茶やってますよね」
と鹿島さん。
「剣桃太郎さんでしたっけ？提督の知り合いの。かなり武闘派らしいですね。軍隊の再編とか、防衛費の増額とか、強気外交とか……。この前も、尖閣諸島にやって来た中国船を大砲撃って追い返したとか」
「うーん、私達、戦艦ですから……、いまいち外交とかよく分からないんですよねぇ。領海に無許可で入って来たり、領土を占拠されたら潰すのが普通なんじゃないですか？」
「ですよね。まあでも、本格的に戦争になれば戦力差的に勝てないんじゃないですかね。いや、私達が参戦すれば勝てますけど」
「日本軍は優秀らしいですよ？それに、また神風が吹くかも」
「そんなもの期待して戦わなきゃいけない時点で負けですよ」
グラスを傾けつつ、そんな話題を。
一応軍隊だから、そう言う話題が多くなるかなあ。
「でも、深海棲艦が出ているのに、人同士の戦争なんて起こりますかね？」
「あはは、何言ってるんですか海原提督。人間がどんなに馬鹿なのか知らないんですか？地獄の底でも争い合うと思いますよ、人間ってやつは」
「……その、人間、嫌いなんですか？」
「嫌いですね。でもまあ、海原提督は人間の中でもマシな方ですから

嫌いではありませんよ」
　そ、そうなんだ、艦娘の皆んなって人間のこと嫌いなんだ……。
「そんなゴミ虫共を守っていると思うとイライラしますが……、提督の命令ですし」
「そもそも私達は旅人さんの命令で戦ってるだけですしね。国防とかどうでもいいです」
「海上貿易では、ほぼ世界征服を達成しましたし、後は各地に技術と武力を提供することで経済的に優位に立てば……」
　うーん……。
「深海棲艦を倒して、皆んな仲良く、とはいかないんですかね？」
「でしょうね。仮に深海棲艦を倒したら、次は私達艦娘が排斥の対象になるでしょう」
「そうならないように、適度に支配して管理しなくてはなりませんね」
　それは……、でも、人間はそんな生き物じゃないって、私は信じたいな……。

「「「お疲れ様ー」」」
　解散して、自室に戻る。
　黒井鎮守府に自室が用意されている事実について疑問を覚えるが、スルーする。
　にしても、人間が嫌いで、支配して管理すべき、か。
「このままじゃ、黒井鎮守府の皆んなは、本当の悪になっちゃう……」
　そうならないように、私ができることは、何だろう。
　世界を守ったのに、悪者になるなんて。
　そんなのはおかしい、よね。

２９４話　悪質なパクリでは？

俺、大淀、明石がいる、執務室から話は始まる。
「黒井鎮守府、目安箱～」
「悪質なパクリでは」
バレなきゃヘーキよ、ヘーキ。
「え？これは私……、頭巾とか用意した方が？長門さんや赤城さん、島風ちゃんも呼びましょうか？」
「私も包帯巻いた方がよろしいでしょうか？」
「いや駄目だ、そこまでパクったらＫＡＤ○ＫＡＷＡに怒られるやもしれん」
「そろそろ各方面から怒られてもおかしくないですよね……」
「俺達はもう、そういう路線でやっていく方針だから」
邪道を往く。
「さあて、そんな訳で、見ていこうか……」
『提督が私を陵辱レイプしてくれません、どうすれば良いでしょうか？（大淀）』
俺は無言でお便りをゴミ箱へ捨てた。
「どうしました、提督？」
「いや、ちょっと……」
「あ！これ私のお便りじゃないですか！捨てるなんて酷いです！」
「問題外だったから……」
「私を思いっきり露出調教陵辱するだけなのに、何を躊躇っているので？」
「せめて普通にエッチしない？何でそんな酷いプレイを」
「しゅみです」
趣味か……。
さて、こっちは？
『夕張ちゃんも呼んで３Ｐなんてどうでしょうか？（明石）』
「まあどうもこうもないよね」
ゴミ箱行き。

「あ、これ、私の！何でゴミ箱行きなんですか?!」
「自分の胸に手を当てて考えてごらん」
「分かりました！……あっ??」
揉めとは言ってないんだがね!!
「気を取り直して次だ」
『提督と二人でベットの上でやる格闘技をしたいな。良い汗をかこうじゃないか！（武蔵）』
んんー、プロレスごっこかなー？
『ｐ．ｓ．勿論セッ○スのことだぞ』
クソが。
これもゴミ箱行き、と。
次だ。
『提督と思いっきりハメ撮りして、海外のアダルトサイトに動画を投稿してみたいです??（鹿島）』
駄目に決まってる。
ゴミ箱行き。
次だ。
『ケッコンして大分経つのに、初夜はまだなのかしら？（如月）』
ませたロリ娘め、十年早い。
ゴミ箱行き。
セッ○スしろ、青姦しろ、調教ＳＭプレイしろ……。
「君達はそんなんばっかか!!」
「ええっ、お、怒らないで下さい！どうしたんですか？」
「どうもこうもないわ！君達は何を考えているんだ!!」
「主に性的なことを考えております！」
「分かってた！分かってたけどね!!」
畜生、駄目だこの子達は。
「まともなお便り、まともなお便り……」
『ゴーヤでち。いい加減ろーちゃんにでっちって呼ぶのやめさせてほしいでち。（ゴーヤ）』
あった！

なるほど、あだ名の変更か……。
「よし分かった、行こうか」

「と、言う訳で、でっち呼ばわりはやめようね！」
「え？でっちはでっちだよ？」
「彼女はでっちではない（無言の腹撫で）」
「うきゃーー！」
わさわさわさわさ。
どしたのわさわさ。
腹を撫でる。
ろーちゃんを膝に乗せ、腹を撫でながら話す。
「いいかろーちゃん、でっちというのはな、日本では、丁稚……、つまり弟子や平社員のことを指すんだよ。あまりいい言葉じゃないんだ」
「？、ふぁ、あん??」
「雑用や使い走りをした存在のことだから、人の呼び名としてはあまり良いものではないよね」
「ああっ??イくっ??」
「だから今後は、そういう呼び方を控えるようにして欲しいんだ、分かるかい？」
「あ、ああっ、駄目っ??イってるのに??」
いや、駄目じゃなくて。
「ここは俺の顔に免じてさ、どうか頼めないかな？」
「イぃ～ッ!!!!ああああっ??????」
良いの？
良かった。
「……あの、提督」
「何だ大淀」
「言いづらいのですが、ろーちゃんは気絶しています」
え？
「お、おおっ?!何でだ?!」
「提督の見事なポルチオマッサージによるものかと」

「俺はそんなことしてないぞう！」
「いえ、恐らくは無意識下なのでしょうが、下腹部を触っていました。瞬時にポルチオを開発されたろーちゃんは、キャパオーバーの快楽により、気を失った、ということです」
「なんてことだ……」
　無意識って怖い。
　今じゃ無意識に性感帯の開発をしてしまうのか俺。
　ってか、これ、どれもこれもスキンシップ＝セクハラにさせた艦娘に責任があるんじゃ……。い、いや、やめておこう、俺が悪いんだ。

　初の依頼は失敗してしまった。
「次こそは、次こそは……」
　熱く燃え上がる俺。
　次こそは失敗しないぞ。
「はいお便りドン」
『アイヌ料理が食べたいです。（神威）』
「なるほど」
　ん？そういや何でアイヌなんだ？名前が神威だから？
　君、アメリカ出身じゃ……。
　いや、やめておこう、この辺の事情を突くのは良くない。藪蛇だ。
「どうするんですか？」
「作るよ」
「ではまず材料が必要ですね。本格的なものを、となると、やはり北海道に飛ぶ必要が？」
「あるねー」
「私も手伝いますよー！ゴールデンカムイ読んだので大丈夫です！」
　と、明石。
「ははは、心強い。じゃあ、北海道に飛ぼうか」
　帰還の巻物、北海道へ飛ぶ。
「さて、熊数匹鹿十匹ってとこか」
「では私のギークガンで!!」

「威力過多だねー」
俺がハンターボウを取り出す。
「では、私達は何をすれば？」
大淀が問う。
「見てて。何にもやんなくていいから」
「「はい！」」
さてと……。
一時間後、目標数を狩り終えた俺は、鎮守府に帰還し……。
「今日のお昼ご飯は～、っと、アイヌ料理？……何で？」
「鮭のチタタプって何？」
「オハウとは？」
作った。
「何でアイヌ料理なんて作れるんですか？」
「ああ、昔ちょっとな」
色々とな。
「え！今日はアイヌ料理なんですか！エヤイコプンテク！嬉しいです！」
喜ぶ神威。
うん、成功だな！

さあ、次のお便りは……？
『強者との戦いを楽しみたいであります。（あきつ丸）』
「ワァーオ、バイオレンスー」
怖いなー。
「あ、でも、気持ちはわかります。無性に戦いたい時ってありますし」
ええ、怖っ。
「私達は兵器ですからね、戦いたい時があるんですよ」
「私もよくストレス発散代わりに出撃してます」
そんな健康法みたいな……。
兎に角、戦いか。
最近、新大陸でイビルジョーが発見されたらしいし、連れてってや

るか。
「あきつ丸ー」
「はい」
「ちょっとおいでー」
「はい！」
　さて、転移、と。
「クエストを受注してと」
「あの、どこへ？」
「君の望む戦いになるかどうかは分からないが……、たまにはハンティングなんてどうだい？」
「おお、良いでありますな」
　狩場にて。
『ギャオオオオオ!!!!』
「ほう、良きかな、であります……」
『ガァアウ!!!!』
「ふっ！」
『シィィ!!!』
「おお、避けるでありますか！勘のいい!!」
　割と接戦か。
　いや、あきつ丸が加減してるなこりゃ。
　戦いを楽しむために手を抜いていやがる。
　更木剣八みたいな戦い方しよってからに。
「ではもう一段上げるでありますよ」
『ギガァッ!!!?』
　イビルジョーの身体に槍の傷痕が走る。
『ガァァァ!!!!』
「おお、お怒りでありますか？」
『ガガガァ!!!』
「では、そろそろお開きにするであります」
『ガギッ!!!?』
「死ね」

『ガ、ア……』
たっぷり三十分かけて嬲り殺しにしたあきつ丸。
闘牛のような魅せプレイを見せてくれた。
「楽しめたか、あきつ丸」
「はい、中々でありますな」
まあ、ストレス発散になったなら、いいんじゃない？

「いやー、中々に解決できたんじゃない？」
「ええ、提督のご活躍、素晴らしかったです！艦娘の悩みを解決しようと尽力して下さり、ありがとうございます！」
ふふふ、美女から感謝されるのは嬉しい。
いいことしたなー！
「ですが、まだまだお便りは残っていますよ！」
「いや、それはゴミ」
「残っていますよ！」
「捨てたんだって」
「残っていますよ！」
だから、八割はセッ○ス関連だったから!!!
聞けないお願いも、あるのだ。

２９５話　悪質な質問ばかりだな

俺、大淀、明石がいる、執務室から話は始まる。
「黒井鎮守府、質問箱～」
「なんかこの流れ、前回もやりませんでした？」
「まあ、文句は言いませんけど」
　良いじゃん別に。
「さて、質問箱ですか？」
「どういった趣旨で？」
「いや、この前ウォースパイトに、恋愛は相互理解が大事だって言われてな。俺のことを艦娘の皆んなに知ってもらおうと」
「なるほど」
「そう言われれば、私達って提督の過去をあまり知りませんよね」
「だろう？だから、君達とより親睦を深めるためにも、質問箱を設けたんだよ」
「素晴らしいお考えです」
　だろ？
「じゃあ、早速見て行くか」
　どれどれ、最初のお便りは、と。
『お好きな体位は？（大淀）』
「まただよ（笑）」
　ゴミ箱行き。
「え？あ！これは私のお便り！そんな酷い、私の質問にはお答えして下さらないのですか?!」
　だって下ネタだし……。
「駄目ですよ、質問箱を設けた以上、答える義務があります」
　えー……。
「ええと、特にこだわりはないけど……」
「強いて言えば？」
「分かったよ、耳貸して」
「はい！」

「ごによごにょ……」
「背面座位？」
「ああ、もう、折角ごによごによで誤魔化したのに……」
「何故背面座位がお好きなのですか？」
「ず、ズケズケ聞くね……」
「お答え下さい」
「分かった、分かった。ごによごにょ……」
「胸が揉めるしキスもできるから？身体を預けられるのが好き？」
「だーかーらー」
大淀、下ネタはやめよう。
そろそろ怒られるからね？
「分かった、この話はやめよう。ハイ、やめやめ！」
話を切り上げる俺。
次のお便りを見る。
『お好きなプレイは？（明石）』
「だからさ、だからさ」
ゴミ箱行き。
「……あ！やっぱり私のだ！何で答えてくれないんですか?!」
「そりゃあ、これはさ、男同士の酒の席での質問くらいでやるなら分かるよ？けど、これ、質問箱に入れるものじゃないでしょ」
「今後の参考になるかと思いまして」
「何の？」
はー。
「で？お好きなプレイは？」
はー！
「……あー、特にこだわりはないよ」
「強いて言えば？」
食い下がるんじゃないよ！
「……女の子を甘やかしてあげるのが好きかな」
「赤ちゃんプレイ……」
「いや、そこまでじゃねえけど。やっぱり、男として、頼られるのが良

いかなーって」
　クソ、恥ずかしいぞ！何答えてるんだ俺！
「男らしいですね！提督、好きです！」
「俺も好きだよ明石」
「「えへへへへ」」
　さて、次だ。
『好みの女性のタイプはなあに？（雷）』
　んー。
「本当に特にないんだよね、可愛ければそれで良いよ」
「いつもそう言いますよね」
「正直疑わしいです」
　なんでや。
「いや、本当だって。女性にはそれぞれが固有の美しさを持つから。順位つけることなんてできやしないさ」
「ほら、自立している女性が良いとか」
「確かに、自立している女性はカッコよくて素敵だが、俺を頼ってくれる女性も愛おしく思うよ」
「体型とか」
「胸から上が人間の形してるなら何でも。ラミア、ケンタウロス、ハーピーでも良いよ、可愛いなら」
「守備範囲広過ぎでは？」
　そうかい？
「そう言えば深海海月姫も口説いてましたよね」
「ああ、彼女は美しい」
「……つまり、女なら何でも良いんで？」
「いや、不細工には厳しいよ？」
「でもあれ、顔半分が……」
「もう半分は美しいだろう？」
「そう言う問題なんですかね……」
　美的センスの違いというやつか。
　ハイ次。

『好きなエロゲは？（望月）』
「えぇ……」
　俺は困惑した。
「あ、私も気になります」
「そんなもん知ってどうすんのよ」
「後で買ってプレイしておきます」
　えぇ……。
「デモンベインかなぁ」
「エロよりロボが好きなだけでは？」
　と、明石。
「うん、ロボ好き、カッコいい」
「流石は提督、少年ハートを忘れない」
「装甲悪鬼村正とか」
「やっぱりエロよりカッコいいのが好きなんですね？」
　まあ、正直に言えば、普通に街でナンパすればワンナイトラブが楽しめるし、態々エロゲやる必要性がないのよね。
「ランスや炎の孕ませシリーズ、対魔忍は？」
「……いや、やったことはあるけど、何そのチョイス」
「提督もああなってほしいなー、と」
　やだよ。
　次。
『そう言えば年齢は？（漣）』
「だから、分からんのよ」
「でも、誕生日は昭和????年ですから……、三、四十歳ですよね？」
「異世界で過ごした分、歳取ってるから。まあでも、その分若返ってるから、年齢は謎」
「いい歳ですよね、三、四十歳って」
「心は二十代だから」
　よし次。
『好きな漫画は？（秋雲）』
「んー、色々あるぞ、バジリスクとか」

「またマニアックな」
「いや、本当に何でも読むからな。コロコロコミックとかでもない限り、大抵は。ジャンプもサンデーもチャンピオンも買ってるよ」
「提督、何の漫画の話にも対応しますよね。でも、いつ読んでるんですか？」
「こうやって」
　ジャンプを取り出して、速読。
「……五秒で読めるんですか？」
「うん、面白かったよ」
「ははあ、成る程、速読ですぐ読んじゃうから、色んなことができるんですね。ＡＤＶとかでもとんでもない速さで文字送りしますもんね提督」
「分身して、アニメ見ながらゲームやって漫画を読んだりしますもんね」
　いつだって楽しむことに全力なのさ。
　ハイ次。
『ベンチプレスは何ｋｇほど上げられるのか。（長門）』
「普通に二、三百だけど」
「あれ？そんなもんですか？」
　そんなもんだよ。
「意外と力は弱いんですね」
「バフ込みなら何十トンくらいか」
「あ、あー、そうですね、提督にはバフがあるんですよね」
　スキル魔法フル活用でトン単位のパワーを発揮する。
「って言うか、バフ率おかしくありません？何十何百倍じゃないですか」
「いや、一つのバフだけじゃなく複数のスキルや魔法を組み合わせるからな」
「なる、ほど？」
「例えば速度バフなら、ノースティリスの魔法、『加速』で速度を増やして、ヴァナディールの『ヘイスト』で時間的に加速、『とんずら』で

速度アップ、そこに『タイムアルターダブルアクセル』で更に時制御、倍速になり、エナドリによる『エナンザム』で身体能力を数倍にして、『ブーストダッシュ』、『北斗無想流舞』、『トリックスタースタイル』、ヤーナムの『加速』で瞬間速度の向上。これで大抵のやつは追いつけない」
「は、はあ」
　何だ？実は結構自慢なんだぞ、俺の速度。
　次だ。
『好きな食べ物はなんですか？（鳳翔）』
　ふむ。
「俺、好き嫌いないから」
「確かに、提督はなんでも美味しそうに食べますね」
　ただし、比叡カレーは勘弁な!!!
「強いて言えば肉かな」
「クスッ……」
「ん、何だよ」
「いえ、子供のような答えだったので」
「おかしいかよー」
「ああ、いえ、悪く言っている訳ではありませんよ。その、なんだか、可愛らしいなと」
　そうか。
「あとは甘いお菓子と酒かなぁ」
「ははあ、成る程」
「……あ、そうだ、逆説的に、嫌いな食べ物を知れば」
「そうですね、その方が参考になりそうです」
　と、明石と大淀。
　……何の参考？
「では提督、嫌いな食べ物は？」
「腐った人肉とかかな」
「それは食べ物ではないかと」
「あとは鉄とか石とか」

「それは食べ物ではないかと」
「混沌系モンスターの肉とか」
「それは食べ物ではないかと」
　んー？
「嫌いな食べ物を聞いているのです。食べられないものの話はしていません」
「嫌いなものは沢山あるんだがなぁ」
「人肉は食べ物ではないかと思います」
「食べれるよ」
「……食べたことがおありで？」
「ああ、何度か食べざるを得ない状況になって」
　人肉は割と美味い。
　さて次。
『趣味、特技は？（グラーフ）』
「ＫＡＲＡＴＥとものづくりですかね」
「ＫＡＲＡＴＥって空手とは違うので？」
「俺のＫＡＲＡＴＥは総合格闘術と化してる節があるから。最早空手とは別物」
「ものづくりとは具体的には何を？」
「色々だよ。料理だったり服飾だったり建築だったり、ＤＩＹ全般だね」
「素敵なご趣味ですね！」
「ありがとう。まあ、他にも、読書や音楽、映画にダンス、アウトドアとか、一通りやるしできるけどね」
「多趣味ですよねー。色々なことに興味が持てるって凄いことだと思いますよ。少なくとも私はインドア派なんで、アウトドアを楽しめる提督が羨ましく思います」
　と、大淀。
「大淀は読書が趣味なんだよな」
「ええ、官能小説ですが」
「そ、そうか」

ま、まあほら、読書はいいことだから。

こんなもんか。

「あと聞きたいことは随時受け付けるから。ストーキングとかする必要はないよ」

「では、最後に一つだけ、よろしいですか？」

「何？」

何でも聞いてくれ。

「女性遍歴についてですが」

「あ!!!そろそろ晩御飯の時間だ!!!支度をしなきゃ!!!あー!!!忙しいなー!!!」

「あの」

「忙しい!!!忙しい!!!忙しいから後でな!!!」

「女性遍歴は」

「いや!!!ちょっと!!!忙しいから!!!」

逃げよう。

２９６話　黒井鎮守府コロシアム　前編

「では、始めましょう。黒井鎮守府コロシアムです」
「やめよう？」
　いつぞやの予告通り始まってしまった、黒井鎮守府コロシアム。
　艦娘の本気の手合わせが観れる、らしい。
　だが、そんなことは許されない。
　仲間同士で殺し合いなどと……。
「いえ、これは私達のためでもあるんですよ」
「なんで？」
　謎理論を振りかざす大淀。
「最近の深海棲艦は正直言ってヌルいですから。艦娘同士で真剣な訓練をした方が為になります」
「だからといって態々実戦形式にしなくても」
「訓練ですから。実戦形式でなければ為になりません。それに、提督の走狗達が噛み合いをするだけ……、言わば闘犬のようなものです。心配はいりません」
「俺は君達を犬と思ったことはないよ」
「ありがとうございます。では、第一試合！」
「話聞いて？」
　大淀の強引なところ、好きだけど嫌いだよ？
「……それに、何もこんな見世物風にすることないじゃん、悪趣味だよ。俺は古代ローマの王様じゃないよ？」
「いえ、提督は古代ローマの王よりも尊く、偉大なお方です」
　んもー。
「ぶっちゃけ暇過ぎて殺し合いくらいしかすることがなくなってます」
「もっと穏やかな選択肢をだね」
「どう取り繕っても私達は兵器ですから。戦わないとフラストレーションが溜まるのです。何卒お願いします」
　はぁ、そうきたか。

確かに艦娘は戦うもの、平穏な暮らしは性に合わない、らしい。
艦娘に戦うなと言うのは鳥に泳げと言っているようなものか。
「……危ないと思ったら止めるからな」
「もちろんです」
まあ、じゃあ、やる？
やるの？
分かったよ……。
「それでは第一試合！明石対夕張!!」
「待って」
「何か？」
「俺の記憶が確かなら、その二人は親友同士だよね？よりにもよってそんな対戦カード組むか普通？」
「ほら、あれですよ、不良漫画とかでよくある、夕焼け空をバックにしての殴り合いみたいなもんです。友情を確かめ合うみたいな」
「言うねえ」
え、良いの？
そう言う感覚なの？
「因みに、この一戦は黒井鎮守府の技術力を見せるデモンストレーションでもあります！」
なるほど。
「では、開始です!!」
さて、黒井鎮守府のグラウンドの仮設コロッセオを見る。
半円形の透明なバリアフィールドがグラウンドの中心を中心に展開されており、そのバリアの外側にはそれを囲むようにして仮設された腰掛けがいくらか。規模や材料は手抜きだが、安全性はしっかりと考慮されたコロッセオもどきになっている。
むしろ一晩でよくもまあここまで形にしたな。
艦娘達全員は、コロッセオの席で応援したり野次を飛ばしたりしてる。
実にローマ的だ。
さて……。

いつもの笑顔で、いつもの調子で武器を向け合う二人。
「行きますよ明石さーん！」
「かかってきて下さい夕張ちゃーん！」
「あはははははは!!!!」
対戦ゲームをやるかのような気軽さで、戦いは始まった。
「ハイメガキャノン！撃てーっ!!」
先攻は夕張、ハイメガキャノンなる巨砲から極太のレーザーの奔流を放つ。
流星の煌めきのような一閃、だが、明石は身の丈以上の巨大なレンチ、ライアットジャレンチを盾にして防ぐ。
「うおおおおお!!」
そのまま前進を始めた明石。物凄い防御力だ。
「チッ！インコム、行けえっ！」
有線の子機を飛ばして多方向からレーザーを照射する、インコムを放つ夕張。
「がっ?!効きませんねぇ!!」
少し怯んだがそれだけ。
「行きますよ！チェインデカッター!!」
「くうっ!!」
咄嗟にハイメガキャノンを盾にするが。
「でええりゃあー!!」
一対のチェーンソー、チェインデカッターに十文字に切り裂かれる。
「ああっ、このハイメガキャノン、良い出来だったのに！やりましたね?!」
「甘いんですよ夕張ちゃーん！」
大きく回転しながらチェインデカッターを叩きつけるように斬りかかる明石。
しかし、それを屈んで回避した夕張は、新たな武装を召喚する。
「ドリルッ！アーンド、高周波ブレード！」
大型のドリルと高周波ブレード……。

両手に持ったそれで襲いかかる夕張。
「だから甘いんですよぉ!!!」
しかし、拮抗したのはほんの数秒。
ドリルは捻れ、高周波ブレードは折られる。
「少し保たせれば、良いんですよ、何故なら!!」
「ッ?!ヤバっ?!」
「荷電粒子砲!!!」
その威力は殺す気満々では？
「ぐ、う、おおおおお!!!」
「嘘?!押し返す気?!どんな装甲よ?!!」
「はあっ!!!ライアットジャレンチよっ!!!」
巨大なレンチ、ライアットジャレンチで荷電粒子砲の滅びの光を押し弾きながら、ブースターで前進する明石。
物凄い防御力と出力だ。
「こ、わ、れ、ろぉ!!!」
「ああっ?!」
荷電粒子砲を破壊して、ライアットジャレンチで夕張の胴体を掴む明石。
「はあああああっ!!!」
「きゃあああああ!!!」
地面に叩きつけられる夕張。
これは勝負ありだな。
「勝負あり！勝者、明石！」
歓声が上がる。
まあこの結果は分かってた。
明石は黒井鎮守府でも最強の一角。
夕張では勝てない、よな。
そもそも、夕張の得意な距離はロングレンジ。インファイターの明石に懐に踏み込まれた時点でキツイ。
あの並みの戦艦以上の出力で押さえつけられれば、大抵の艦娘はお手上げだ。

それに、明石はまだ、エネルギーの完全開放状態であるマグナモードを使用していない。夕張もえげつないほどの武装量や次元兵器を見せつけてない。全力じゃなかったってことだ。
「えーん、私の荷電粒子砲がー！」
「よしよし、ポーション飲んで、ほら」
「はい……」
回復させてと。
ＯＫ。

さて、次だ。
「第二試合、天龍対神通!!」
ほー、サムライ対サムライ。
「よっしゃ、行くぜ！」
サイボーグ、ではないが、高周波ブレードの使い手、天龍と。
「御前試合、仕ります」
天空宙心拳、天空真剣の使い手、狂気のサムライ女、神通のエントリー。
二人は前に出て、構える。
天龍は霞の構え、神通は正眼の構え。
攻撃的な性格の天龍と、型にはまった性格の神通。異なる二人の立会い。
「では、始め!!」
「はあっ!!!」「疾イッ!!!」
声が、交差する。
電光石火、高速の突きを放つ天龍、対する神通は突きに袈裟斬りを重ねるように放つ。
轟音。
それと共に弾かれあった二人は、またもや一足一刀の間合いに。
「やるな、神通」
「天龍さんこそ」
お互いに笑い合う二人。

「だが」「だけど」
「勝つのは俺だ!!」「勝つのは私です!!」
間合いを詰める二人。
「ガァぁあ!!!」
「チェストォ!!!」
獣のように吠える二人の影が、またもや交差する。
また、剣と剣が弾かれあった……!
「シィぁあ!!」
しかし、再起動するのは、神通の方が一瞬早い。取った好機、逃さずに、神通は攻める。
「やあああああ!!!!」
それは、まるで、斬撃の嵐。
俺ですら、見るのがやっと。見切ることは難しいだろう刃の煌めき。
「はあああああああ!!!!」
「くっ」
しかし、天龍はそれをシノギ。
「そ、こぉ!!!」
そしてカウンター。
「?!、ぎ、いぃ!!」
直前で身を躱す神通。あそこからカウンターを避けるとは、達人だ。
そして間合いが離れた時、天龍は徐ろに高周波ブレードを鞘に納めて……。
「はぁあ……、シィっ!!!」
抜刀術……!!
必殺の威力を込められたそれを、どう凌ぐ……?
「天空真剣」
来た!
「ハヤブサ斬り!!!」
天空真剣の奥義で相殺した!

「ならぁぁぁ!!!」
天龍は高周波ブレードを踵部艤装に装着して、紫電を纏いながら回転斬撃を繰り出した。
「雷神光臨!!!」
「稲妻二段斬り!!!」
電気の渦が火花を上げる。
煙が晴れるとそこには……。
「へっ」
「……やりますね」
刀が折れた二人がいた。
「引き分け!!!」
大淀の声が響く、が。
「いや、違うね、俺の負けだ」
あら?どうした天龍?負けず嫌いの君が。
「神通は素手でも天空宙心拳がある。刀を折られた時点で俺の負けだよ」
ほーん、そうかい。
「……では、勝者は神通とします!!」
と、大淀の宣言。

成る程、素晴らしい戦いだった。
「どうでしょうか、見世物としては上等かと」
「いや、見世物とかそう言う言い方はアレだけど、中々に興味深いねこれは。君達の成長が見れて嬉しいよ」
「ありがとうございます。では、次の対戦も是非お楽しみ下さい」
「あ、ああ」
さあ、見ようか。
艦娘の力を……。

２９７話　黒井鎮守府コロシアム　後編

さあ始まりました、黒井鎮守府コロシアム。
次の対戦カードは……。
「第三試合！野分対霞!!」
ほー。
これまた面白い対戦カードだな。
スーパーヒーロー大戦だ。
赤黄緑の三枚のコインをバックルに嵌め込む野分。
『タカ！トラ！バッタ！』
謎の音声が響く。
それぞれ、タカ、トラ、バッタの趣向を持つ艤装が現れる。
一方で、変わった腕輪のボタンを押す霞。
『爆竜チェンジ!!!』
白いひし形の牙のような物体がいくつか、身体を覆う。
「試合開始ーーーー!!!」
「おおおおおおお!!!!!」
試合開始の号令とともに激突する二人の拳。
二人ともメインは格闘戦である。
砲撃？雷撃？なにそれ美味しいの？と言わんばかりの特攻。怖い。
「せぇいやーーーー!!!!」
野分が両腕のクローを展開して斬りかかる。
しかし霞は。
「ティラノロッド!!」
先端に小さな恐竜の頭部が付いた、赤いロッドで防ぐ。
「っく、おおおおお!!!」
弾かれたクロー、大きな隙を見せる野分は、バックステップで誤魔化すが、
「シィッ!!!」
霞はその隙を見逃さず、踏み込んで、ティラノロッドで突きを繰り出した。

「ぐっ！」
だが、バックステップの速度からして、突きは深く刺さらなかった。致命傷足り得ない。
「艤装召喚……、メダジャリバー……!!」
……艦娘は、武器や防具など、道具を艤装として認識すると、自在に出したり消したりできるようになる。つまり、艤装とは、インフィニットなストラトス的なアレの扱いらしい。
光の粒子が集まり、野分の手に一本の剣が顕現する。
メダジャリバー……、片刃の大剣だ。
「いいやぁっ！」
バッタのように地面を蹴って、前方に跳ぶ野分は、回転の遠心力も加えつつ霞を斬りつけた。
「ふっ！」
霞はそれを屈んで回避する。
……当たれば大怪我だろう。仲間同士でよくもまあ。万が一がないように、艦娘にはダメコンを持たせてはいるが……。
ああ、ダメコンってのは、俺と工廠が作ったアイテムで、様々な観点……、魔法、呪術、科学などから、即死を回避、あるいは、一度の致死ダメージを無かったことにする装備だ。兎に角コストがかかるので、あまりストックはないが……、こんなところで使って欲しくはないな。
そんなことを考えている間にも打ち合いは続く。
「えい!!!」「やあっ!!!」
んー、派手な斬り合いだ。
カッコいいね。
「そこっ!!!」
おっと、野分が霞のティラノロッドを弾き飛ばした。
決まった、か？
「終わりです!!!」
「がああああっ!!!」
あっ、ふーん。

剣の腹を殴って弾きやがった……。
中々の神業、やるじゃん。
「やるわね、野分」
「霞さんこそ」
「でも……、私には届かない。アバレさせてもらうわよっ!!!」
霞の身体の白い牙状の物体が、鋭利に尖る。
アバレモードか……。
一時的な強化状態、野性解放的なサムシングだ。
「がああああっ!!!」
霞は獣のように、いや、龍のように吠えると、一息で間合いを詰めた。
「くっ、速っ?!!」
「りゃあああああっ!!!」
爪で引っ掻いて野分の艤装を切り裂く霞。
「ならばぁ!!コンボでぇっ!!!」
『ライオン!トラ!チーター!』
おっと、ここで野分はコンボを使ったか。
しかも、速度に特化したラトラーターコンボだ。
「せぇいやーーー!!!」
恐るべき速さで接近した野分は、両腕のクローで交差するように切り裂く。
そして、同じく。
「ぐるあああああ!!!」
両手の爪で交差するように切り裂く霞。
「「おおおおおおおお!!!」」
……結果は。
二人の頬に切り傷が。
相打ちだ。
『引き分けです!』
これ以上はマジになっちゃうからね、仕方ないね。
二人とも全力は出してないみたいだが、本気ではあった。

素晴らしい勝負だったよ。

次だ。

「第四試合！曙対日向!!!」

「そう」

すると、曙の右腕が変異する。

黒い鉤爪を持った生物的なデザインの手甲に、だ。

「やるか」

対して日向は重武装。大剣、刀、手甲具足。

え？

やるの？

「始めっ!!!」

「「おらぁぁぁ!!!!」」

うおっ?!行った!!!

「「がああああああ!!!!」」

思いっきり手甲をぶつけ合う二人。怖っ。

作画がダイナミックプロみたいになってる。

ってか女の子の出す声じゃないよそれ。まるで獣の咆哮みたいだ。

普段あんなに可愛い声してんのにどっからそんな声出してんの？

しかし、単純な破壊力なら、曙の方が有利だぞ。なにせ曙のジャバウォックは次元すら切り裂くからな。

いや、確か日向も……。

「シィッ!!!」

曙の攻撃を躱す日向。

「ジャバウォック!!!」

「次元斬!!!」

次元斬があったな。

次元を切り裂く必殺の剣技だ。

同じ次元の破断。エネルギー同士がぶつかり合って宙空で爆ぜた。

なんだあの火力ふざけやがって。

軽く見積もって俺が命を削って放つ必殺技の数倍の威力だ。

自分の弱さが悲しくなってくる。
「瑞雲ッ!!!」
そして瑞雲を即時召喚した日向は、
「行けェッ!!!」
五月雨の様に曙の頭の上から急襲させる。
「?!、チィッ!!!」
しかし曙は、獣の様な反射神経と驚異的な身体のバネでバックステップし、これを回避。
そして、回避と同時に瞬時に、手甲のジャバウォックに圧縮空気砲を展開、射撃する。
「喰らえッ!!!」
「喰らうかッ!!!」
だが、日向はこれを跳んで回避。
そこから、
「流星脚!!!」
急降下し蹴りを放つ。
ライダーか何かで？
「甘いィ!!!」
それを、容赦のないパンチで相殺する曙。
またもや、エネルギー同士のぶつかり合いで空間が爆発、火花が散る。
どうなる？
手札の多さで言えば日向だが。
技の数と武器の数は日向が上だ。戦艦であることを加味するとパワーや防御力もある。おまけにスピードだって速い。
しかし曙も負けてないぞ。身のこなしもそうだが、特筆すべしはその破壊力。ジャバウォックの鉤爪は一撃一撃が必殺なのだ。
つまりこの勝負、日向が多彩な技で削りきるか、曙が一撃入れるかなんだ。
さあ、曙の方が立ち直りは早かった。硬直が解けて先に動くぞ。
「斬れろ！」

「つぶな！」
風切り音と共に迫る五指の斬撃波をまるで瞬間移動の様な速さで躱す日向。
あの斬撃波、一撃でも当たれば勝負ありだ。
そもそも日向は戦艦にしては技量タイプで、殴り合いを良しとしない。
基本的に全弾回避し、隙をついて、若しくは隙を作って丁重なゴリ押しでぶち殺すタイプだ。
「スティンガー!!」
「それがどうした!!」
一方曙は臨機応変。日向のような理詰めではなく、その時その時、相手の動きによって戦法を変える。
まさに、高度な柔軟性を維持しつつも臨機応変に、を地でいくタイプ。
今は、日向の攻撃を相殺し続けることにより、日向にペースを握らせないように動いている。
「おらぁ!!!」
「くっ、次元斬!!!」
おっと、日向のペースが崩れた。
「そ、こぉ!!!」
「?!」
決まりか？
「……フッ」
口元に獰猛な笑みを浮かべる日向。
ああ、そうか、違う。
これは日向のブラフだ。
「終わりだ」
曙の背後に移動し、刀を抜き放つ日向。
「あんたがね」
おっとー？
しかしこれに気付いていた曙。

日向の刀を掴み取る、と同時に。
「ジャバウォック!!!」
殴りかかる！
「まだだッ!!!」
日向は刀を手放し、大剣の方で曙に斬りかかる！
「「ぐあっ!!!!!」」
ダ、ダブルノックアウト!!!!
「そこまで！この勝負、引き分けです!!」
大淀の号令がかかる。
「「まだいける」」
「はいっ、落ち着こうな！」
二人の間に割って入る。
血の気多くない？献血でもして血ぃ抜いてきたら？

うーん、良い勝負だった。
実力は拮抗していたな。
名勝負なんだけど。
なんだけどさ。
なんか。
なんか違くない？

２９８話　黒井鎮守府コロシアム　裏編

「ところで」
「何？」
「先日のコロシアムの件で、艦娘の強さは大体確認できましたが」
「おう」
「提督は、如何程の強さをお持ちで？」
　え？
「弱いよ、俺は」
「またまた、ご謙遜を」
　君達が秒単位で殺す鬼クラスを数十分かけないと殺せないくらいだ。
「組手などはよく相手になって下さいますが……、提督の本気は見たことがありません」
「そりゃあ本気出して戦うような事態にならないからね」
　むしろ、そうなったら困るよね。
「と言う訳なので、提督に全力で戦っていただけるように、敵を用意致しました。是非、お力を振るって下さい」
「建前は？」
「力というものは使わないと鈍るものです。私も、事務仕事の合間に組み手や出撃をこなしていますから。提督のお身体が鈍ることのないようにと言う善意からの行動です」
　ふむ、一理ある。
「本音は？」
「提督が勇ましく戦う姿を録画して、新たなオカズにします。性的な意味で」
　ふむ。
　やはりか。
「んー、まー、確かになー。最近は全力で戦うなんてことないし。ちょっとばかり戦うのも悪くねえかー」
「では、戦って下さいますか？」

「よし、良いだろう」
たまには俺がかっこよく戦う姿を見せてやるかァ～。
『ではまず、最初に、鎮守府に侵入しようとしたスパイの皆さんです！』
ほー。
「やってやる、やってやるぞ……！」
「殺さなきゃ、殺される！」
「クソ……！」
武装した人間か。
『愚かにも、鎮守府に侵入しようとした屑共を捕らえて……、武器を持たせ、提督を殺せば逃がしてやると指示しました！』
成る程ね。
『本来であれば、このような不敬、許されざることです。しかし、慈悲深き提督は処刑を禁じられております。ならば、せめても、有効活用をすべきだと思い、このような催しを！』
観客席の艦娘達から感動の声が上がる。
『では、第一回戦、始め！』
「「「うおおおお!!!」」」
アサルトライフルで射撃してくるスパイの皆様。
ううん、普通に避けるが。
そして普通に殴るが。
男だし、容赦はいらないよね。
「おらよ」
一人目、銃弾を避けながら接近、顔面を殴り抜ける。
「ぐはっ」
二人目、大きく飛んで顔面を踏みつける。
「ぐえっ」
三人目、二人目を投げ飛ばしてぶつける。
「ぎゃあ」
四人目、腹パン。

「ごふっ」
まあ、死なない程度に加減してやってるから。骨くらいは折れてるかもしれんけど。
さて、武器を取り上げて。
『テレポートアザー』
どこかへランダム転移させる。
『まだまだいますよー！』
実況の大淀から声がかかる。
「めんどくせえな」
なら、こうだ。
旅人奥義……、
「精神破壊ピクチャーズ!!」
邪神が写った写真を掲げる。
そして、それを見たスパイ達はＳＡＮ値チェック失敗、全員が泡を吹いて倒れた。
「こんなもんか」
『成る程、知能プレイですね！』

『さて、第二回戦、黒井鎮守府戦闘ロボです！』
人型アンドロイドが多数。
戦力は……、まあ、人より大分強いかなーってくらい。
成る程、となると、手札の精神感応系は使えないな。
「物理は苦手なんだがなあ」
物理戦闘はあんまり。
え？その図体で、って？
これは家事に本気で取り組んでいたらこうなっただけであまり関係ない。
え？肉体は飾りなのか、って？
おっとやめておけ、心は硝子だぞ。
「さ、行こうか」
『ヘイスト』

速度バフ。
『レイジＩＩＩ』
攻撃力バフ。
「南斗水鳥拳奥義！天地分龍手!!!」
真空波を飛ばして敵を切り裂く技だ。
『ｂｅｅｐ』
しかし、表面装甲を削るに留まる。ならばそこに！
《ソウルの結晶槍!!!》
『……!!』
よし、破壊した。
『まだまだいますよー！』
実況の大淀から声がかかる。
クッソ、火力足りねえ。
「お次はこれだ！共振パンチ!!!」
破壊、と。
「虎砲!!!」
つ、ぎぃ！
「フラッシュピストンマッハパンチ!!!」

『第三回戦！神話生物です!!』
ええー、俺もう疲れたんだけど？
と言っても来るか。
もちろん提供は白露型。
ん？艦娘にＳＡＮ値チェックは入らないのかって？
安心してほしい、艦娘達のＳＡＮ値は元々ゼロだ。
まずは一体目、星の精。
ブヨブヨの透明な、心臓のような肉塊。鉤爪と吸血針を持つ。血を吸って来る奴だ。あ、いや、夕立じゃないよ、夕立も血を吸って来るけど。
『キチキチキチキチ……』
ほう、鉤爪か？

「よっと」
身を躱す。
掠りもしない。
回避＜９９＞だ。
そもそも、こう言った知能の低い生命体の攻撃は避けやすいんだ。
自前のスピードで負けてない以上、戦略や戦術を使ってこないなら、避けるのも動きを読むのも容易い。
「しぇい!!」
『ギチッ』
南斗聖拳で斬りつける。
そして、背後から迫る火の精に、
「へいパス」
『ギギギ?!』
放り投げた。
引火して燃える星の精。
「ご苦労」
星の精が燃え尽きた頃、火の精を手持ちの消火器で吹き飛ばす。
はい次。
ゾンビ、はー。
《大発火》
呪術の炎で燃やす。
次、空鬼。
まあ、グロいんで詳しい描写は避けるが、鉤爪を持った人より大きな人型の化け物だ。
ぐ、おお。
《墓王の大剣舞!!》
脳の回路が焼き切れるのを感じる。俺は本来、墓王の大剣舞を使える程呪術を習熟していない。つまり、無理してるんだ。過ぎた術の行使は自らの身を焼く。
「ぶっ、は」
あっ、鼻血出ちゃった、カッコ悪いなあ。

ハンカチで鼻血を拭いつつ、次。
『メ〟エ〟エ〟エ!!!』
黒い仔山羊かぁ。
ああそうだな黒くて……、数メートルのカブのような球体に数本の山羊のような足が生えて、てっぺんから触手が生えていて、そこら中に口があって、そこから仔山羊の断末魔の様な声を出し続ける化け物、かな。
兎に角、大物だ。
手札切らなきゃな。
『マホカジャ』
魔法攻撃力上昇。
『ラクンダ』
敵防御力減少。
そして。
「カートリッジロォォォド!!!」
足りない魔力量を補う為、十本の魔力が詰まったカートリッジをロードする。
「ディバインッ!!!バスタァァァ!!!」
知り合いの魔砲少女から習った砲撃魔法をぶち込む。
しかし、無理な魔法行使にまたもや脳の回路が悲鳴を上げ、焼き切れる。
「うぐっ、おええっ」
うん、コップ一杯分くらいかな？
ああ、いや、吐いた血の量のこと。

『第四回戦！工廠謹製ホムンクルス（？）です!!』
ほーん。
『遺伝子は提督のものと私のものを使用！結果、多彩な攻撃手段を持つ防御型のクリーチャーになりました！戦力的には練度百相当の艦娘並の身体能力があるでしょう！』
「手札切れなんだが？」

『キシュァオーーー!!!』
さーて、どうしましょっかねー。
……うん、泥仕合か。
……
……
……
三時間後。
「しゃあっ!!!」
『ゴアァァァ!!!』
フルハベル装備の俺は、やっとの思いでホムンクルス（？）の脳天を貫き、撃滅した。
既に複数の内臓は潰れており、右腕は切り落とされている。左足は骨が露出するほど齧られており、右目は抉られている。
「や、やっと勝てた……」
一言、と同時に仰向けに倒れる。
「チカレタ」
『お疲れ様でした、提督！』
本当にね。

「で、どう？俺の弱さ分かった？」
「いえ、予想以上にやるな、と言ったところですかね」
そう？
「あのホムンクルス（？）には勝てないと予想していました。火力的に」
あー、そうだね。
「まあC４の自爆特攻で大ダメージを与えることができたからな」
「本当、無茶しますね」
「しなやす」
まあ、良い見世物にはなったか。
もう暫くは戦わねーぞ。

２９９話　体力検査

体力測定でもやるか。
「いやあ、知り合いにさ、刃牙君って言う超強いグラップラーがいるんだけどね、その子、体育の体力検査で落第しそうになったんだってさ」
「ええと、つまり何ですか？」
「いや、それとこれとは全く関係ないけど艦娘の体力検査やります」
「は、はあ」
「いや別に意味とかはないけどね。でもほら、体力検査しとけば、今の実力が分かる訳じゃん？今後の訓練の目標とかできるんじゃないかなーって」
「成る程」
「それとな、大淀。俺は思うんだ。ブルマって良いよね、と」
「了解致しました、全艦娘に通達します」

はい。
ブルマ！
ブルマ!!
ブルマ!!!
って感じで。
俺がブルマを見たいが故に始まった黒井鎮守府体力検査。
「いやあ良い眺めだ、これだけでもう嬉しい」
「あのさぁ、司令官」
ん。
「どうした望月？」
「前の運動会で懲りなかったの？」
懲りるって……、何だ？
「だからさあ、私達に体力検査させるのってさ、意味なくない？」
「この世の中のことの大半は意味はないよ。そういうのは自分で見出すもんじゃないかな」
「いや、哲学じゃなくって。あのね、私達に体力検査やらせるとね」

どうなるんだ？
「僕のヒーローアカデミアみたいになるよ」
ふむ。
「承知の上だ」
「まあ、承知の上なら良いんだけどね……。多分、ＴＡＳ動画みたいになるよ？」
まあ多少はね？

１：握力
取り敢えず、工廠がこんなこともあろうかと用意しておいたのだシリーズの一つに、百トンまで測れる握力計ってか計器があったので、それを無理矢理使う。
俺？
バフ抜きなら５００ｋｇ、バフありで十トンくらいかな。単純なパワーなら気功で数トンは出せる。
「さあ、測ろうか」
「む、筋力には自信があるぞ！」
「駄目、長門は最後」
「何故だ？」
「どうせ計器ぶっ壊すでしょ」
「こっ?!壊さないぞ！ちゃんと手加減するから！」
はいはい。
さて、見ていこうか。
「やぁん、私こういうの苦手よ～」
うーん、最下位は如月かあ。
それでも五トンくらいあるけどな!!
一位？
「そーっと、そーっと、あああっ?!!」
長門だ。
測定不能。
平均して二十トンくらいかなあ。

２：上体起こし
所謂腹筋だな。
俺なら、まあ、三十秒あれば１００回はいけるかな。
「ふひい、疲れました……」
最下位は赤城、６８回。いかんな赤城よ、ぷにぷにお腹をどうにかしなきゃ駄目だぞ。
一位は金剛だった。
２６５回。
パワーとスピードが高水準にまとまっているのは金剛型だ。
因みに、こんだけできるのに腹筋は割れてない。謎過ぎる。
一方、長門や武蔵なんかは、金剛の記録には一歩及ばなかったけれど、腹筋はバキバキに割れている。何故だ。
まあほら、艦娘は根本的に人間とは違うし。そんなもんかと納得する。

３：長座体前屈
俺ならまあ、６、７０ｃｍは行けるだろう。バフありなら？手ェ触手にして伸ばせるから１０００ｃｍとかふざけた数値になるんじゃない？
最下位は望月。３０ｃｍくらい。
「無理無理無理無理、もう曲がんない、もう曲がんないから」
「望月ー！」
「無理だってば、限界」
身体硬いな君は！
その外見年齢でそれは酷いぞ!!
一位は、何人もいるから分からないが、多くの駆逐艦は７０ｃｍくらいいったみたいだ。
うんうん、身体柔らかいと怪我しないから良いね。

４：反復横跳び

俺は……、バフ抜きで１００、有りで６００点ってとこかな。
さあ、見ていこう。
まず最下位は赤城。
「ひいい、できません～……」
たったの３５回。
「あのさぁ……」
「すみません提督……」
「仮にも軍人がその身のこなしはさぁ」
「うぅ、ごめんなさい～！」
まあ良いよ、ゆるすよ。
俺は心が寛大、怒りが有頂天になることは滅多にない。
逆に一位は時雨だ。
島風じゃないのかって？
実は島風は小回りが利かないって弱点があるのよね。
最大速度は圧倒的なんだけど、小回りなら時雨なんだよ。
「……ってか、加速の秘儀使ったな？」
「ふふふ、さて、何のことやら」
まあ良い。これもゆるすよ。
別に体力検査でバフを使っちゃならないなんて決まりはないもんね！

５：持久走
これねえ……。
艦娘の馬鹿体力を考慮して、男子基準で１５００ｍ走ってもらうけど、どうだか。
俺は、バフ抜きで３分くらい、有りなら数秒ってところかな。速度には自信があるぞ。
はいそして最下位は赤城。
７分１１秒。
「疲れたのか赤城」
「いえ、流石に１５００ｍくらいならそんなに疲れませんが、単純に足

が遅いんですよ私……」
確かに、艦娘の体力なら、数キロ走った程度じゃ疲れない。
うーん、１００キロくらい走ってもらおうかな？
で、もちろん、一位は島風。
「私が一番？当然！だって早いもん！」
タイム？まあ、５秒切ってたよ。
ソニックブーム撒き散らしながらエアハイクで空を蹴って疾走してた。

ＥＸ：超持久走
１５００ｍ程度ではとてもじゃないが体力は測れないということで、急遽種目を追加した。
走らせる距離は実に１５０ｋｍ。実に百倍である。
さて、最下位、一位は変わらなかったが、艦娘のおおよその体力は測定できた。
戦艦、駆逐艦の多くは体力があるようで、１５０ｋｍをほぼペースを落とさずに全力で駆け抜けたみたいだ。
軽巡重巡、その他はペース配分して走っていた。
でも、神通、川内、あきつ丸辺りはほぼ全力で駆け抜けていた。
駄目だったのは空母。
数十キロメートルの辺りでペースが落ちていた。
まあ、空母の中でもインファイターな雲龍型はペース配分をしっかり考えてちゃんと走り抜いたが。
赤城は途中で１０回くらいギブアップとか言っていた。許さん、走れ、ダイエットじゃ。

６：シャトルラン
俺はまあ、無限にできるな。体力的な意味ではなく、スピード的な意味になる。
音の間隔が０．０５秒を切るようになったら厳しいかな？
ここでも、最下位は赤城だった。

赤城は走るのが遅い。
１００回やる頃には音の間隔に追いつけなくなって、最後は転んだ。
「い、いえ、体力的には大丈夫なんですよ？ただ、スピードが」
「分かった分かった、休んで良いよ」
言い訳など聞きｔｏｎｉｇｈｔと言うことではないが、聞き流しちゃう。
赤城はそのしっかり者に見えてちょっとポンコツなところが可愛いのだ。
直さなくて良いよ。
一位は、時雨と島風だ。
５００を超えた辺りでもう良いかな、と。

７：５０ｍ走
俺は大体、バフ抜きで百メートルを５秒フラットで走れる。有りなら５０ｍを０．０５秒くらいか。
さて、最下位は、言わずと知れた。
「だ、だから、私、足遅いんですよ!!」
赤城。
９秒フラット。
いや、良いよ、ゆるすよ。
さて、黒井鎮守府全体の平均は４秒ってところかな？
一位は相変わらず島風。
直進の小細工抜きのスピード勝負ならやっぱり島風だ。記録は０．０５秒。
他の子はねえ、大体、軽い艦ほど速くて、重い艦ほど遅い感じ？
まあ俺から言わせりゃ全員重いんですけど！別の意味で！あっはっはっは！笑えねえ。
そうだな、天龍はニンジャランで３秒台、ニンジャの川内は１秒切るくらい、神通も縮地で１秒切る。
時雨も加速の秘儀で０秒台。

スピードも中々だな、うちの子は。
一部グラップラーが踏み込みの力を入れ過ぎて地面抉ったりしてたけど。

８：立ち幅跳び
測定は砂場ではなく特殊カメラでやります。
いやね、砂場だとどうせ皆んな飛び越えるでしょ？俺には分かる。
さて、やってみようか。
あ、俺はバフ抜きで５メートル、有りで５０メートルってところかな。
それで、最下位は蒼龍。
３メートルしか飛べなかったみたいだ。
「うう、なんかごめんなさい……」
「気にしないで良いよ？次は頑張ろうね！」
と、慰めの言葉を。
一位は川内。
流石はニンジャ、一飛びで４５メートルは飛んだ。
因みに最近はパルクールにハマってるらしい。

９：ハンドボール投げ
測定はカメラで。投げられたボールの初速なり何なりを測って飛距離を計算するマッスィーンを工廠から提供されている。
これを使って測定。
俺は……、バフ抜きで１００メートル、有りで８００メートルってところかな。
こちらの最下位は如月。
「うーん、やっぱりこういうの苦手だわ」
１００メートルちょいってところか。
如月はステゴロ苦手だもんな。
まあほら、か弱い女の子も可愛いしな。
一位は長門。

「おおおおおおあ!!!!!」
うーん、１０キロメートル。
相変わらずふざけた腕力だ。
「加減したんだがなあ……」
嘘つけ。
え？
嘘でしょ？

さて、全種目終了。
ほぼ全員がＡ判定。
まあ、俺の目から見た総合判定では……、うーん、金剛かな？
金剛型辺りが筋力速力持続力が一番高水準にまとまっている印象。
でも体力検査は別に競うもんじゃないしな。
「皆んな、ご苦労様！体力検査終了だ！」
「ふぃー」
「疲れたー」
「結果見せてー」
結果を編集して、後日、掲示板に張り出しておいた。
皆んなよく頑張ったね。
さて。
体力検査にかこつけて艦娘のブルマ画像を大量に手に入れた俺は、画像を編集して、アルバムに仕舞い込むのであった。
違うんすよ、違うんすよこれは。
ほら、これは、あれだ、艦娘の成長記録って言うかなんて言うか。
スケベ目的じゃないっすよ。
決して。
断じて。
ぐへへへへ。

３００話　行き着く先は

さあて、日本はすっかり秋。
先日の大建造祭りから一ヶ月くらい経ったかな？
新入りも、訓練をこなしつつ鎮守府にも慣れたみたいだ。
良かった。
まあまだ一ヶ月だし、俺に惚れるとかはないだろう。
あっははは、ないない、海防艦とかロリってかペドでしょ？
そんな幼い子を口説いたりなんてしないよ！
ペドになんか絶対負けたりしない（キリッ）！
「司令??占守は司令がだーい好きっす??」
「司令??好き??好きです??」
「司令、ちゅーしよ？ちゅー??」
ペドには勝てなかったよ……。
いや違うんすよ……。
これは、違うんすよ……。
あるぇー？
おっかしいなー？
口説いた覚えはないんですがねー？
「え？占守、俺のこと好きなの？」
「愛してるっす！」
愛してるときたか。
「ほら、俺ペドフェリアじゃないから」
「駆逐艦にも手を出してるんで海防艦も行けると思うっす」
それを決めるのは君じゃねーよ？
「占守、まだあの日きてないっすから、やり放題っすよ？」
「あの日とか言わないの！」
めっ！
「でもその内気合いで排卵するっす」
「気合いで?!」
女の人って気合いで排卵できるもんなんだ……。

でも俺の知り合いの土方の女の人は気合いで孕まないって言ってたし、気合いでどうにかなる部分もあるのかも……、いやねーよ。
「ほら、良い男紹介するから」
「司令より良い男って存在するんすか？」
悔しいが何人もいるよ。
懐から写真を取り出す。
「ほら、この人なんてどうだ？剣獅子丸ってんだけど、俺より強いぞー」
「嫌っす、司令が良いっす」
「じゃあこっちはどうだ、東方仗助ってんだけど、優しくて良い男だぞー」
「嫌っす、司令が良いっす」
「これならどうだ、火野映司！知り合いの旅人なんだが、これまた良いやつで」
「嫌っす、司令が良いっす」
「んもー！」
何だってんだ？
俺の何が良いんだ？
ただ超イケメンなだけだろ俺なんて。
もっと他に良い男いるよ。男は顔じゃないだろ？
「占守、俺に拘る必要はないんだよ？皆んなが俺のこと好きだからって占守まで俺のことを好きになる必要はないんだ」
「皆んながどうこうとかは関係ないっす。占守は司令が好きっす」
「それはほら、あれでしょ？お父さんに好きって言うやつでしょ？」
「いえ、一人の女として愛してるっす」
んんっ。
「今すぐにでも抱いて欲しいっす」
「よ、よしよし、抱っこか、良いぞー」
「……分かってるっすよね？」
「な、何のことかな」
「なら……」

「んっ？」
　ありゃ、キスされ……、待て待て、舌を入れるんじゃない！
「っぷはあ……??これが占守の気持ちっす??」
　占守ー……！
「だ、駄目だぞ占守、俺じゃ君を幸せにできない」
「それを決めるのは占守っすよ」
「それに、ほら、酷いことされちゃうぞ！ほら、えっと、スカートをめくられたり……」
「はいっす」
　スカートをめくって見せる占守。
　あらおパンティのカラーは、白か、可愛い。
「司令にとっては子供に見えるかもしれないっすけど、占守はちゃんと考えてるっす。考えた上で、司令が好きなんすよ」
「そっか……。因みにどこが好きなの？」
「全部っす（即答）」
　そっか……。
「まあ強いて言えば占守的には司令のその飄々とした性格が好きっすねぇ。風に揺られてどこまでも遠くに行っちゃいそうなところが素敵だと思うっす」
　そうか。
「あとハンサムな見た目も好きっす」
　そうか。
「それと正面から甘えても大丈夫な頑丈さとか」
　そうか。
「ちょっとエッチなところも可愛いっす。それとそれと、優しくて料理上手でお話も面白くって」
「分かった、分かった」
　参ったなあ、これ、本気で惚れられてるぞ。特に口説いた覚えはないんだけどなあ。
「あと、いつも占守に可愛いって言ってくれるのが凄い嬉しくって……。訓練を頑張ると撫でてくれたりとか……、えへへ」

そんなモン挨拶みたいなモンでしょ。リップサービスは基本。ああいや、本音だしリップサービスでもねえのか？
俺は基本褒めて伸ばすタイプだからね。
「あとは遊びに連れて行ってくれたりとか、色々買ってくれたりとかするし、一杯愛してくれるのが嬉しいっす??」
いやそれはほら、愛情にも色々あるじゃん。家族愛みたいなモンだったんだがね。
「兎に角、大好きっす、愛してるっす、二度と離さないっす。占守も司令のお嫁さんになるんで、あとよろしくっす」
……っすかー。

「おや、香取ーヌ」
「香取です」
「俺の知り合いに秋本カトリーヌ麗子って婦警がいてな」
「はあ」
「いやあ金持ちは凄いね」
「提督も中々にお金持ちな生活をしていると思いますが……」
そう？
まあ今は金があるから使ってるだけだよ。
「ですが、男の人の価値はお金を持っているかどうかではありませんから。そんなこと関係なく、私は提督が好きですよ」
そっか。
香取は良い女だな。
美人なんだから金にがめついくらいで良いのにな。欠点がないって怖いわ。
俺なんて欠点が多いってか欠点そのものみたいなもんなのに。
「まあでも、俺は香取の守備範囲外だしな？」
「え？そんなことないですけど？」
「えっ？だって香取、ドSなんでしょ？」
あの知り合いの魔人探偵みたいに。
「ええっ?!ど、どこからそんな根も葉もない噂が?!」

「巷の方で」
「巷の方で?!」
　え?・違うの?
「でも鞭とか持ってるし」
「偏見ですよぉ！私は別に、他人を虐めて喜ぶ趣味はありません～！」
「ええ～？ほんとでござるか～？」
「本当です～！」
「でも眼鏡だし」
「関係ないですぅ～！」
　そうなの?
「もー！疑り深い提督なんて知らないですっ！」
「ごめんごめん」
　御機嫌斜めの香取ーヌの頭を撫でてやる。
「んぅ、ぎゅってしてくれなきゃ許しません」
「はいよー、はいはい」
　抱きしめてやる。
「んー??許しちゃいますぅ??」
　可愛いやつめ。
　あれ?てかこれ、
「香取も俺のこと好きなの?」
「はい、もちろんです！」
　んー。
　困るなあ。
　これ以上嫁が増えると大変なことになる。
　社会的な立場とか色々。
「姉妹共々、提督のご寵愛を受けたいな、と」
「おぉん」
　ご寵愛だと?
「俺は王様じゃないんだがね」
「いずれ世界を手に入れるお方でしょう?・陛下とお呼びしましょうか?」

「柄じゃねえよ」
世界、世界ねぇ……。
確かに世界征服はするが、武力を以ってではない。
知り合いの世界征服目指してる軍曹殿も武力での侵略は時代遅れと言っていた。
それに、征服と言う意味ならほぼ達成している。
膨大な海に関する利権を手にしているからな。
海を制しているから、法外な利益を上げることができるし、世界征服は成ったとして良いだろう。
今の政権に文句もないしね。
なんか知らないけどうちの子達が色々工作して軍部に食い込んでるし……、事実上、黒井鎮守府は独立した武装勢力になりつつある。
即ち、俺が昔ちょっと関わった……、そう、アウターヘイブン化しつつあるってことだ。
ああ、アウターヘイブンってのはまあ、昔ちょっと色々あった、とある傭兵が作った傭兵の国、みたいなもんで。
各国に武力と兵器を輸出する、と言う形で成り立っていた国だ。
それを言えば黒井鎮守府は……、百人を超える多彩な兵員、艦娘と、各種機動兵器多数、核兵器まで保有している。
そして領土は移動要塞黒井鎮守府。
その気になればアウターヘイブンと同じことができる。
……深海棲艦がいなくなれば、経済的に海を支配するのは俺達だ。
そして、圧倒的な武力を輸出する傭兵会社に……。
うーん、あり得そうで怖いな。
「なあ香取」
「はい？」
「黒井鎮守府がＰＭＣになったらどう思う？」
「え？最初からＰＭＣで、副業で貿易業やってるもんだと思ってました」
マジで？
「だって、政府からの支援、一切ありませんし。最早軍隊じゃないです

よね、私達」
「そ、そうだけどほら、日本への帰属意識とかは？」
「多少はありますけど、私からすれば、私の知る日本はもうありませんから」
確かに、艦娘が知る日本は戦時の日本だ。
「ですから、私達からすれば、この黒井鎮守府での生活が全てなんですよね」
成る程な……。
「まあ、皆んな一緒に気ままな傭兵稼業ってのも悪くねえ、か」
「そもそも、提督と一緒にいられるなら何だってやりますよ」
俺達の行き着く先はＰＭＣ、か。
それもまたアイカツ、悪くねえ。
……悪くねえな。

３０１話　読書の秋

「はあ？読書感想文？」
「そうだ」
　呆れる望月を前に、俺は提案した。
「既に鎮守府中に掲示しといたけど、君らに読書感想文を書いて欲しいのよね」
「なんでまた……」
「君ら学校行きたくないって言うから、せめても学校っぽいことやろうと思って」
「別にやらなくて良いよ？」
「そーうはいかないぜぇ、学力も大事超大事。それに大切なのは情動よ、情動」
「司令官が絡まない話だと結構皆んな無反応じゃん」
「それがいかんのよ。感情表現が豊かな方がよろしいだルルォ？」
　高度に情報化する社会だからこそ、情動的な面を持って欲しいよなあ？
「まあ、司令官の命令ならなんでも聞くけどさ」
「じゃあ原稿用紙三枚は書けよ！では、サラダバー！」

　一週間後、律儀に読書感想文を書いた艦娘達から原稿用紙を受け取り、それを読んだ。
　こう言う、生徒が頑張って書いたものを評価するってのは教師の醍醐味だよな。ああ、俺、教員免許持ってるんよ。
　さて？
　望月。
『とある魔術の禁書目録を読んで』
　んー。
　あのさ、読書感想文でライトノベルは……。
　まあ、いいか。
　内容は、と。

『インデックスが相手の使っている魔法に割り込んで妨害してたけど、あれ、できんの？』
あー、あれね。
「できるよ、相当難しいけど、と」
他には？
『あと、クローンの話なんだけどさ、黒井鎮守府の技術力では、クローンの生成は可能らしいのよ。でも、司令官のクローンを作ろうとしたら、受精卵の時点で暴走、触腕や羽根が生えた人型の狼の様な化物になったらしいよ。何で？』
なーにやってんだ工廠。
「そりゃ俺のコピーなんて作ろうとしたらおかしくなるに決まってるでしょ、と」
『それとさ、私も睦月型ってことで多少武装については知ってるんだけど、あれ、レールガンじゃないよね？』
そうだね。
「ラノベだから突っ込むのはやめて差し上げろ、と」
こんなもんか。
次。
漣。
『ポプテピピックを読んで』
せめて活字本にしない？
『クソマンガですわ！』
でしょうねえ。
次、海風。
『家畜人ヤプーを読んで』
チョイス!!!
『中々に興味深いお話でした。人間を家畜として飼い殺しにする、面白い発想です』
やめよう、やめよう、本当に危ない話はやめよう？
『人体の改造を普遍的に受け入れられる世界はさぞ生きやすいでしょう。私は、人間という種が進化したいのであれば、人為的に肉体に手

を加えるしかないと思うのです』
ひゃー。
海風ったら過激ィ。
『ああ、因みに、内容的には、私のマゾヒズムは刺激されませんでした。私は提督に陵辱されてこそマゾヒズム的な快楽を感じるのです。また、提督の肉を食している時には更に大きな快楽が……』
俺が食べられてるのはどうでも良いが。
『特にＥＨＳが女性主権と言うのは面白い設定ですね。しかし、私達艦娘は基本的に、提督に導いてもらわなければ何もできない、愚かで矮小な存在です』
そんなことないよ！
『ですがまあ、提督以外の人間が世界を支配したとして、それが良いことだとは思いませんが。それに、提督は例え何があっても、世界がひっくり返ろうと、誰にも従わない方です。ペットとして連れ歩くなどとてもとても。逆なら良いんですが』
まあ、支配はするのもされるのも嫌いだ。
ってか、君達はペットじゃないってあれほど言ったよね。
「もうちょいまともな本読んで、と」
ハイ次。
村雨。
『ドグラ・マグラを読んで』
春雨。
『黒死館殺人事件を読んで』
夕立。
『虚無への供物を読んで』
山風。
『匣の中の失楽を読んで』
「やめろや!!!」
日本三大奇書やぞ!!!
だからチョイス!!!
『『『面白かったです』』』

しかも面白かったんかい!!!
時雨。
『ヴォイニッチ手稿を読んで』
だから!!!
チョイス!!!
そのチョイスをなんとかして!!!
『、、、』
原稿用紙。ではなく羊皮紙に、紙いっぱいの魔術的な解釈、考察が書かれている。
「誰が自由研究しろって言った、読書感想文だよ読書感想文、と」
もー。俺、君らが分かんないよ。
次、青葉。
『銀河ヒッチハイクガイドを読んで』
おお。あれは良いぞ、面白い本だ。有名だし。
ただな？
『４２』
横着して原稿用紙いっぱいに生命、宇宙、そして万物についての究極の疑問の答えを書くのはやめような。
「横着するんじゃないよ、と」
次、那智。
『ファウストを読んで』
あー、あの子洋書好きだったもんね。
『何故罪を犯した人間が愛によって救われるのだ？やはりキリスト教的な観点だろうか。私はファウストが救われるべきではないと思った。メフィストフェレスは大損じゃないか。悪魔は神に敵わないということか』
あー……。
まあ、ほら、そういうもんだしなあ。
「こういう本は悪魔が負けないと色々不味いのよ、と」
次、羽黒。
『マルドロールの歌を読んで』

あのさぁ……。
そういうチョイスはやめよう、な？
『何となく、分かりました』
しかも分かっちゃったの？
シュルレアリスムよ？
『ミシンとコウモリ傘の、手術台の上での出会いと言う暗喩は……』
えーと。
「シュルレアリスムって読んでると、ん？ってなるけど、自己解釈で自分を納得させて読み進めるもんだから良いんじゃない？と」
じゃあ次、鹿島。
『ソドム百二十日を読んで』
「君達はっ！普通の本を読むことができないのかっ!!!」
『色々なプレイが書いてあって、中々参考になりました！工廠の技術で私が性別を変えたりして提督とエッチするのも良いかもしれませんね！』
「性別を変えたりとかはしないでね、マジで。と」
次、グラーフ。
あ、グラーフとか海外艦にはレポート用紙を渡した。流石に日本の作文はやりづらいだろうと思って。あ、まあ、でも、本人達の日本語力なら普通に書けるだろうけど。
さて、ドイツ語で書いてあるな、何々？
『我が闘争を読んで』
「だからナチスとかの話はやめなさいってば!!!」
『やはり総統閣下のお考えは素晴らしい。今からでも民族浄化をすべきじゃないか？』
「やめろーーー!!!」
怒られる!!!
『実際に要らない人種とかいるだろう』
「やめろーーー!!!」
『北の方の朝せ』
「やめろーーー!!!」

いかん、いかんぞ。
さあ次だ。
赤城。
『雲隠を読んで』
雲隠……？
ああ、源氏物語か。
『何であるんですかこの本？』
「拾った、と」
『存在しない本のはずなんですが……。まあ、良いでしょう。提督ですし。内容は非常に興味深く……』
うんうん、まともまとも。
おっと、次はウォースパイトか。
『フィネガンズ・ウェイクを読んで』
えっ、あれ全部読んだの？
よく読めたね、俺でも結構難しいのに。要求される知識量がね。
ユリシーズの方がまだマシじゃない？
『難解だったけど、中々に面白い部分もあり、最後の回帰の部分が……』
偉いな、レポート用紙数十枚分書いてある。
……ひょっとして暇なのか、こんなもん読んじゃうってことは。
次、大淀は。
『ファニー・ヒルを読んで』
「はい終了ー!!!」

まあ、こんなもんか。
……何でうちの子達は、普通の本を読んでくれないのかねぇ。
君の名は、とか、ブレイブストーリーとか、そう言う本を読んだ子は一切いない。
一部のライトノベルや漫画を読んできちゃった層を除けば、難解な本、お堅い本、エログロな本ばかりだった。
艦娘諸君には心のゆとりが足りない……。

学校の図書館みたいに、今時の本を「オススメの本！」としてどこかに置いておくべきか。

うーむ。

３０２話　自由研究

「はあ？自由研究？」
「そうだ」
　はい、まあ、前回と同じパティーン。
「学校っぽいことをやるぞ」
「何でまた……」
　秋雲が呆れたように言う。
「艦娘の情操教育の為に、な」
「それいる？」
「いる」
「はぁ……、同人誌で良い？」
「良いぞ。いっそ、次の冬コミに皆んな出してもらうか」
　コミケは行った人は分かるかもしれないが、いかがわしい同人誌ばかりを売っている訳ではない。どちらかと言うと大人の自由研究みたいな内容が多いのだ。
　グッズなども販売してるしな。
「オッケー、〆切は冬コミまでとかヨユーヨユー！」
「ああ、いや、原本は一ヶ月後には見せてもらうぞ」
「えっ、マジで？うーん、じゃあ全編カラーは無理っぽいなー、巻頭カラーで」
「全艦娘に告知したからな、頼むぞ」

　そして、一ヶ月の時が流れた……。
　さあて、見ていこう。
　まずは秋雲。
『珍じゅぷ！～やっちゃえ！大提督？？エッチな野望総集編！～』
　エロ同人誌だ。漫画単行本程の厚みがある。
　……まあ、良いさ。
　まだ常識の範囲内だ。
　この程度、想定の範囲内だよぉ！

内容は、明らかに俺としか思えない男が、明らかに黒井鎮守府としか思えないところで明らかに艦娘としか思えない女の子達とセッ○スしまくる直球エロ同人誌だ。
シチュエーションは多岐に渡り、陸奥らしき女の子との逆レ風味、秋雲らしき女の子との純愛、睦月型らしき子達との集団プレイなどなど。
まあ、良いさ、この程度。
次。
鳳翔。
『美味しい和食』
俺も手伝ったから分かるが、内容は料理本だ。
鳳翔オススメの美味しい和食の作り方が写真付きで解説されている。
主なメニューは、大根と豚肉の煮物、肉巻きえのき、やわらかチキンカツなどなど。
この本を作るには大分手古摺った。鳳翔は機械全般が全く駄目で、もちろんパソコンなんて使えない。よって編集は殆ど俺がやったのだ。文を書いたのは鳳翔だが。
いやー、一本指でたどたどしくタイピングする鳳翔は可愛かったぞ。
間宮、伊良湖、速吸も同じ要領で料理本を出した。
次。
加賀だ。
『東日本食べ歩き日和』
グルメ本、っぽいな。
東日本の美味しいお店を食べ歩き、無駄に豊富な語録で料理の美味しさを表現している。
五番町飯店、五稜郭亭、鳳寿司、日之出食堂などが高評価だ。
俺も知っているがあそこは美味い。
加賀の舌を信用して良いのかって？
あのね、うちの子達は皆んなかなりの大飯食らいだけど、味は分

かってるかんね？
そもそも艦娘……、常人より優れた感覚を持つ超人なのだから、味覚が人間より正確でも何もおかしくねえよなぁ？
因みに赤城は西日本で食べ歩きしたそうだ。加賀の本とは対になっているみたいだな。
次、衣笠。
む、ＣＤか……？
パソコンに入れてみる。
『あまラブ～甘えてラブラブ??提督との日常～』
これは、ギャルゲ、か？
……。
五時間後。
いや、どうやらこれは攻略対象が俺一人の一本道の乙女ゲームってやつだな。しかもエロありだ。むしろ女の子視点のエロゲと言った方が正しいかもしれない。
ヒロインの衣笠ちゃんが、攻略対象の俺と出会って、色々あって結婚、ラブラブ甘々な日常を過ごして、数年後、子供を連れて歩く俺と衣笠の後ろ姿が映ってエンディングだ。
これが正規ルートらしいが、他にも、衣笠ちゃんが監禁されてペットにされてしまうエンドや、子供を作らずに世界を旅して回るエンドなど、複数のエンディングがある。
ＣＧは差分抜きで１２０枚程度、フルボイス。
そういや、台本渡されてそれを読んだ記憶あるわ。
挿絵は秋雲、音楽は那珂、シナリオは衣笠。
文章力は流石と言ったところで、並のシナリオライター以上。女性向けを意識しつつも男性も楽しめる。エロのパターンも豊富で抜きどころにも困らない。
ただ、一つ言わせてくれ。
……自分が主人公のエロゲをコミケで配る気か？
……正気か？
まあ良い、次だ。

那珂ちゃんは、と。
うん、予想通りＣＤだ。
あ、いや、ＤＶＤかこれ、ＤＶＤだ。
内容は、と。
ライブ映像とインタビューか。
因みに、インタビューしてるのは青葉。
それと等身大ポスターとシャツにカレンダー。
……アイドルの物販かな？
次、三日月か。
『農業日記』
趣味でやっている裏山の農業を日記にしたっぽい。スペシャルサンクス首輪付き。
次、菊月。
『武装理論』
艦娘の武装について詳しく書かれた本だ。
メインはプライマルアーマーの理論らしい。
次は……、明石。
明石は最初、「艦娘と人間との生殖実験なんていかがでしょーか！」と襲いかかってきたが、断っておいた。
結局何を作ったんだか、と言うと。
『縮退炉応用理論』
ふむ。
縮退炉がある前提で、その理論を応用した機械について触れている。
まあ、縮退炉が存在しない現代社会においては、やけにリアルな空想科学読本として受け入れられるだろう。
因みに、黒井鎮守府の地下には縮退炉が置いてある。
次、問題の白露型。
時雨。
『戯曲「黄衣の王」についての考察と検証』
……戯曲、黄衣の王についての考察と検証をした本。

常人ならギリギリＳＡＮ値チェック入るか入らないかの冒涜的オカルト本。
魔術について心得が有る者が読んだら、「おっ」となる内容だ。
まあ、コミケに魔術師が来るとは思えないが。
他の白露型も、怪しげな民族伝承や伝説について綴った邪悪なレポートが主だった。
海風はレポートに加えて自作の護符を売るらしい。
次。
電。
ＤＶＤだ。
再生、と。
『映像で分かる象形拳』
編集、青葉、と。
たどたどしい口調で象形拳の概要とコツについて説明しながら演舞を披露する電の映像だ。
可愛い女の子、しかもロリイタの功夫映像。これは売れる。
次、ローマ。
『オリジナルブレンド配合表』
ローマはコーヒーを淹れるのが趣味だったか。
美味しいオリジナルブレンドの配合表が書かれている。
所々に諸注意やコツなどが書かれているくらいで、問題はない。
次、千歳。
『地酒飲み比べの旅関東編』
関東地方で地酒を飲み比べしてきたらしい。
地酒の銘柄に、辛口甘口、キレ、香りなどなど、様々な要素をパラメータで表示し、感想レポートを書いた本になっている。
因みに隼鷹は九州編で同じような本を出していて、ポーラはワインの飲み比べをしていた。
この子達の肝臓が心配だが、健康診断では健康そのものだった。
次。
レーベ。

絵本だ。
『僕の騎士様』
……例によって、俺らしき人がなんか悪魔っぽいサムシングと戦って攫われたレーベらしき女の子を救う内容の絵本。
絵のタッチはメルヘンの一言だが、悪魔の絵のおどろおどろしい姿や血に塗れても絶対に倒れない騎士などからどこか恐ろしいなにかを感じ取れる。
次、川内。
『現代忍術学基礎』
忍術について記された本だ。
手裏剣の投げ方から分身の術まで、修行法などが書かれている。
次、足柄。
『暗殺術基礎』
暗殺術について書き連ねた本。
身近な物から危険物を作り出したりする方法、衆人環境の中バレずに暗殺する方法、ピッキング、人体の急所などなど、非常に物騒な内容。
北上は、と。
『とびっきりのクソ映画レビュー』
タイトル通りだ。
クソ映画をレビューしたもの。
シャークネードあるじゃん。サメ映画多め。
天龍は。
『内陸釣り日誌』
関東地方での釣りのポイント、コツ、道具などが詳細に書かれた釣り日誌。
笑顔の天龍が魚を抱えているだけで絵になるのに、その上実用性も抜群。
こりゃ売れますわ。
こんなもんかな。

じゃあこれを冬コミで、って事で。
俺？
俺は、そうだな、旅写真集でも出すか。
昔も旅写真集出したことがあるけど、割と売れたし。
この前の旅行の写真とかまとめて出そう。

３０３話　海外艦旅サークルと一緒

「ベイ、どうだい、黒井鎮守府には慣れたかい？」
「あ、Ａｄｍｉｒａｌ！う、うん、大丈夫、ａｌｌ　ＯＫ、黒井鎮守府、とっても良いところ」
「……」
「あの、Ａｄｍｉｒａｌ？」
「ベイって言うとあの中尉を思い出すな」
「え？誰ですか？」
　そんなことはどうでも良い。
　もうやめにしませんか？ベイ中尉について考えるのは。
　俺の中でのベイはガンビア・ベイちゃんただ一人！
　あんな串刺し公のことは忘れよう！
「ベイは可愛いもんな、よしよし」
「ふにゅ……、私、Ａｄｍｉｒａｌに撫でられるの、好きです……??」
　ベイは可愛い。
　アメリカ人にしては（まあ、この鎮守府生まれだから正確に言えばアメリカ人ではないが）控えめで大人しい女の子だ。
　はっきりものを言う女の子も好きだが、控えめな子も可愛らしいいじらしい。好きだ。
　だが、こうしていると。
「ＡｄｍｉｒａｌはＭｅのｈｕｓｂａｎｄよ！」
「私のよ！」
「いや私のだ！」
　あっはっは、海外艦達が取り合いを始めたぞー。
　全くぅ、可愛いなあ君達は～！
「私の！」
「私のだ!!」
「ぐあああああ!!」
　ブチっていっ、あ、腕取れた。
「あ、ごめんねＡｄｍｉｒａｌ」

「くっつけよう」
「ぐあああああああ!!!」
取れた腕を傷口に押し付けられる。
「ちょ、ちょっと待っ」
「そうだ、折角だからこの腕もらって良いかしら？」
アイオワがもぎ取った俺の腕に頬擦りする。
「サラに食わせるのか？」
ガングートが尋ねる。
「駄目よそんなの、勿体ない」
ビスマルクが茶々を入れる。
さて。
「良いかな君達、まず、人の腕を捥いだらごめんなさい、じゃ済まないな、でもとりあえずごめんなさいだろ？」
「「ごめんなさい」」
「そう、それで良い」
俺はポーションを服用して回復し、腕を再生する。
袖ごと持ってかれたからな、服も縫い直す。
正直、肉体持ってかれるより服が駄目になる方が困る。
さて海外艦。
海外艦の皆んなは、サイコパスだがかなり社交的で、日本の艦娘達とも仲良くしてくれている。やはり、サイコパス同士何か通じ合うところがあるのだろうか？
基本的に誰とでも仲良くしてくれるし、外部の人間に対しても態度が悪いなんてことはない。
そして、海外艦の特徴として、旅行好きなところがある。
俺がこっそりと海外艦旅サークルと呼んでいる海外艦の集まりは、黒井鎮守府がノルマさえこなせば何も言わないし、好きなだけ休んでいいというところを利用して、毎月旅行に行っている。
黒井鎮守府は、ゲゲル方式を採用している。即ち、決められた時間内に、決められた数の深海棲艦を討伐する方式。
最近は、月や週の初めに一斉に出撃して、深海棲艦を一気に山ほど

殺し、そのあとはまた来月来週まで休むというのがデフォルトになってきている。
具体的には一週間で千体のノルマ。因みに、鬼クラスなら五体分、姫クラスなら十体分とカウントされる。
ここで、海外艦は、月の初めに一斉に出撃し、深海棲艦を四千体殺害し、残りの日を遊んで暮らすような形になった。
他にも、別途お小遣いが欲しい場合は、追加で出撃することもあるし、趣味で夜戦の申請(夜戦は残業と同じで申請を出す必要がある)をする子、習慣として毎日出撃する子など色々いる。
因みに、深海棲艦の撃破数は、最初は適当な艦娘にバグンダダ持たせてカウントさせようかと思ったけど、それは手間なので、工廠にアクセサリー型の自動撃破数カウンターを作ってもらい、それを使っている。
「ねーえ、Ａｄｍｉｒａｌ？ベイばっかりじゃなくってＭｅも構ってくれなきゃ嫌よ？」
アイオワが頬を染めて再生した方の腕にしなだれかかる。
「はいはい、分かったよー」
分かりましたともー。
そのまま俺はクレーン車もかくやと言ったパワーで引っ張られ、隣に座らせられた。
ビスマルクが膝の上に、ガングートが空いたもう片方の隣に座る。
はいハーレム。
「ねえねえ聞いて？この前はね、皆んなでヨハネスブルグに行ったのよ！」
「そうか」
「……心配とかそういうのは？」
「あのね、確かにヨハネスブルグは治安悪いけど、観光客が普通に観光してたら襲われたりなんかしないんだよ。よくネットでヨハネスブルグのガイドラインなんてのを見るけど、あんなん嘘だからな」
「そこは嘘でも心配してるって言うのよー！」
「いや、俺はアイオワの強さを信用してるからなあ。俺より強いアイ

オワなら、どこでも大丈夫だろ」
「むぅ～」
　むぅ～、じゃないよ。君、俺より強いでしょ。
「それで、どこに行ったの？」
「あのね、色んなところに行ったわ！えっと、Ｌｉｏｎがいっぱいいるの！」
　あー、ライオンパークだっけ。
「Ｌｉｏｎはね、こーんなにｂｉｇだけどｃａｔみたいで可愛いの！」
　んん？
「あれ、ライオンパークは確かサファリパークみたいに車で回るやつだったはずだけど？」
「降りたわ」
　降りたの？
「だって、間近で見たかったんだもの」
「現地の人びっくりしたでしょ？」
　そういうのはやめようね！
「ええ、確かに現地の人間はびっくりしてたみたいだけど、実際、Ｌｉｏｎに噛まれた程度じゃ痛くないし……、それに、Ｌｉｏｎもちょっとじゃれついてきただけなのよ？ｃａｔと同じよ！」
「はっはっは、一般人はライオンにじゃれつかれたら死ぬんだぞー」
「それでね、そのあとは移動して、ビーチに行ったの！ｐｅｎｇｕｉｎがいっぱいいたわ！……ｐｅｎｇｕｉｎって、皆んな寒いところにいるものだと思ってたわ」
「ああ、ケープペンギンね」
　ボルダーズビーチか。あそこは良いぞ眺めが最高だ。
「ビスマルクは気に入ったから一匹持って帰ろうとか言って、鞄に押し込もうとしてたわ！」
「野生動物は捕まえないでねー」
「はーい」
　ビスマルクが返事をする。
「でも、Ｍｅ達、サファリでハンティングしてきたわよ？」

「そうなの？」
ふむ。
ハンティングか。
自称自然保護活動家、なんて連中は大嫌いだよな、ハンティング。
俺は結構好きだけどね。
人は生きているだけで沢山の生き物を殺しているし、毛皮や角の為に獲物を狩ることの何が悪いのかね。
感謝の意と敬意が大事なんであって、行為そのものはそこまで悪くねえだろうに。
肉をとる家畜と何が違うんだ？家畜の肉は良くて、ヒョウの皮は駄目なのか？鰯はあんなにお安くやり取りされるのに鯨は駄目なのか？それをお前らが決めるのか？
結局、生命の価値なんて主観でしかないんだ。
「殺し過ぎたりしてはいけないよ、環境の保護は大切だからね」
「もちろんよ！」
なら良いさ、生態系を大きく崩さない程度ならハンティングでも何でもやれば良い。
「それでね、私はｌｅｏｐａｒｄを狩って、毛皮をとってきたの！とっても綺麗よ！」
ん？
「どうやって狩ったの？」
「普通に、飛びかかってきたから、捕まえて頚椎を折ったの」
んん？
「それで、えっと、ビスマルクはｂｕｆｆａｌｏを銃で、ガングートは素手でｅｌｅｐｈａｎｔを狩ったわ！」
んんんんー？
「ワシントン条約って知ってる？」
「ええ、大丈夫よ、ちゃんと、うちの息がかかった密輸業社に運ばせたから！ａｌｌ　ＯＫ！」
何が？
ま、まあほら、多少はね？

犯罪は駄目だぞぅ、と叱っておいたが。
まあ、なんかあればマネーパワーと裏社会パワーでもみ消すし。
「あ、あの……」
「おやおや、どうしたベイ」
「わ、私も構って下さい……」
「おお、いいとも」
可愛い奴め。
「むー！むー！」
「アイオワ、嫉妬しちゃあ”あ”あ”あ”あ”!!!」
また折れた。

３０４話　お昼時コンツェルト

昼前になると俺は辻斬りのようにエンカウントした艦娘に質問を投げかける。
「今日の昼飯は何が良い？」
「カツ丼！」
「唐揚げ！」
「刺身！」
ふむふむ、なるほど。
中には、食べさせてもらえるだけで幸せなので、リクエストするのは不敬ではないか、とする艦娘も多いが、こちらとしては俺の好みで作ると肉多めカロリー高めになってしまうことが多いので、なるべく要望を聞いていきたい。
「海外艦は？」
「ピッツァ！」
「ハンバーガー！」
「グラタン！」
海外艦は海外艦で、味覚がイマイチ違う。ご飯も好きだがやっぱりパンとのこと。なので毎回パンも焼く。
とすると、汁物は豚汁にして……、お好みでバターを入れてくれ、みたいな。コーンポタージュも作ろう。
さて、艦娘達の要望から脳内でメニューを形成していく。
それを、食堂のホワイトボードに書き込む。
まずは……。
１：麦飯
２：白米
３：バゲット
４：クロワッサン
５：チーズ入りカンパーニュ
６：メロンパン
７：クリームパン

８：ロッゲンミッシュブロート（ライ麦パン）
と、パンと飯を用意して……、あとはスープだ。
９：豚汁
１０：コーンポタージュ
１１：ミネストローネ
そしてメイン……。
１２：揚げたてトンカツのザクザクカツ丼
１３：鶏の唐揚げ（マヨネーズ、甘酢あん、ネギ塩）
１４：旬のお刺身三点盛り（マカジキ、マダイ、サンマ）
ここで更に旬の野菜を使ったサブメニューを追加。栄養のバランスから野菜も食べて欲しい。
１５：ピリ辛きんぴらごぼう
１６：じっくり煮詰めたカボチャの煮物
１７：ルッコラと大根のサラダ
そして洋食枠……。
１８：ピッツァマルゲリータ
１９：旅人特製ハンバーガー１００％ビーフ
２０：グラタンドフィノワ（じゃがいものグラタン）
更に気まぐれメニュー。
２１：きのこたっぷりクリームソースパスタ
２２：ナスと豚肉の味噌炒め
２３：イワシのマリネ
デザートはモンブランとスイートポテトを用意してますよ、と。
ご飯はやおかずは小（１５０ｇ）、中（２５０ｇ）、大（３５０ｇ）、特大（７００ｇ）、日本昔ばなし（１０００ｇ）から選べる。それより食うならおひつごと持ってきてとか言えば対応します。
さあて、黒井鎮守府食堂、開店だ。

と、それと。
今日は料理の研究のため、艦娘達から感想を聞きたいと思う。
さて、行くか。

「はぐっ……、んんんん～！Ｄｅｌｉｃｉｏｕｓ……、本当にＤｅｌｉｃｉｏｕｓ……」
　まずはアイオワだ。アイオワはハンバーガーを所望した。アイオワはアメリカンなので月に一回はハンバーガーを食べないとエラーを起こして死ぬのだ（本人談）。
「アイオワ、味はどうだ？不満とかない？」
「何言ってるのよＡｄｍｉｒａｌ?!不満なんてある訳ないじゃない!!この完成されたハンバーガー……、こんなにも美味しいものが地球に存在して良いのかしら?!」
　そこまで？
「こんなに美味しいハンバーガー、Ａｍｅｒｉｃａじゃ食べられなかったわ！牛肉１００％のジューシーなパティに新鮮なレタスとトマト！オニオンとチーズも入って完璧！兎に角完璧なの！」
　確かに、素材には拘ったが。それは料理人として当然の心構えではないかね？
「付け合わせのポテトも、ちゃんとした油で揚げられたほくほくの美味しいお芋だし、ピクルスも自家製でよく漬かってるわ！」
「改善点は？」
「無いわ。これは完全なハンバーガーよ。大統領閣下にも食べさせられるわよ」
　うーん、参考にならねえ。
　隣にいるサラを見る。
「提督この日本のこの惣菜パンとか菓子パンとかって凄いですよね！Ａｍｅｒｉｃａじゃこんなパンはありませんよ！」
　メロンパンとクリームパンがお気に入り、と。
「提督知ってますか、アメリカのクリームはこんなに優しい味じゃないんですよ？これでもかって甘くした品質が怪しい卵とミルクで作られたただ甘いだけの怪しいものなのに、ここのクリームと言ったらもう！」
「味はこんなもんでいいの？」

「ｅｘｃｅｌｌｅｎｔです！」
そっか。
次は……、白露型に聞いてみるか。
「時雨」
「何かな？」
「美味しい？」
「とても美味しいよ」
そっか。
時雨は麺好き。
パスタが一番好きらしい。
「僕は提督の作る料理が一番好きでね、外では食事しないんだ」
あら、嬉しい。
「このクリームパスタ……、しいたけとしめじと舞茸がたっぷり入っていて、それでいてえぐみは一切ない。クリームのまろやかな味わいを胡椒の風味で引き立てている」
まあ、実を言うと、時雨はパスタが好きらしいので、時雨向きに作っている。
時雨はまろやかな味わいが好きっぽい。
「こっちのサラダも新鮮だ。野菜の苦味と仄かな甘味がたまらないよ」
成る程。
「ミネストローネも素晴らしい出来だね。野菜の旨味が凝縮されているよ」
……日本の艦娘なのに洋食の方が好きなの？
「うん、そうだね。気付けば洋食派になっていたよ」
そうなの。
「江風は？」
「私は和食派」
ふむ。
白露と五月雨、涼風、春雨は和食派、残りは洋食派らしい。山風はどっちも好きだとよ。

「お味の方はいかがでしょうかねえ」
「んもー、最高！こーんなに美味え唐揚げを出せる店、日本に幾つあるんだか！」
　そこまでじゃないけどね。探せば名店なんていくらでもあるもんさ。
「あ〟あ～、ナスおいひぃ……。麦ご飯とめちゃくちゃ合う……。豚汁も最高……。黒井鎮守府特製豚汁……」
　と、春雨。
「うーん、より美味しいもの作りたいから、改善点を探してるんだけど」
「「「完璧です」」」
　これだからなぁ。
　次は……、こっちか。
　隼鷹が日本酒片手に刺身と白米を。きんぴらごぼうとナス味噌炒めも。カボチャの煮物も頼んだみたいだ。
「あ〟あ～、酒が進むぅ～」
　酔いどれ隼鷹。
　いつものことだ。
「お味はいかが？」
「最高ぉ～」
　べろんべろん。
「いやー、白米に刺身だよぉ、贅沢だぁ……。最高……。いつ死んでもいい……」
「そんな悲しいこと言わないで」
「冗談冗談～、提督との子供が一人前になるまでは死ぬに死ねないよぉ」
「そんな予定も立てないで」
「いや、私の夢は自分の子供と飲むことだからねえ」
「はっはっは、そんな日は永劫来ねえぞー」
「まあ、まだ良いよ。深海棲艦とか色々わちゃわちゃしてるし。でも、平和になったら、ね？」

ね？じゃねーが？
「にしても刺身美味いねえこれぇ。新鮮な魚だよ。サンマなんてほら、コリコリで最高！きんぴらごぼうも子供でも食べられるくらいの辛さでピリ辛、ナス味噌炒めは麦味噌で甘めにできていて美味しい、カボチャもよーく煮込まれてねっとりしてる……。あー、美味い」
「和食は鳳翔主体だからなぁ、どう？」
「最高ー」
「そうか、伝えておくよ」
さて次。
ポーラ。
「どう？」
「もぐもぐ……、おいひぃれすよぉ～」
ピッツァマルゲリータ……、本場の味を再現した。
「提督ぅ、分かってますねぇ！イタリアでは余計なものを乗せないんですよぉ！シンプルイズベストです！バジリコとモッツァレラチーズとトマトソース、それだけで十分なんです！」
定番だよな、マルゲリータは。
「でも、赤ワインには合わないんでビールにしますね～」
「飲むのをやめると言う選択肢は？」
「無いですねえ」
成る程。
「このイワシのマリネも良いですねえ、イタリアの料理がよーく分かってますね！」
俺、海外生活長かったから、どうしても外国っぽい料理になっちゃうのよね。
さて、近くのテーブルに目を向けると。
「う、うぅう……」
スプーンを咥えたまま涙を一筋流すコマンダン・テストが。
「どうしたテスト、味が悪かったのか？」
「いえ、違うの……。これは故郷の味なのよ……」

グラタンが？
「提督、貴方、分かってて作ったでしょう？」
「まあ、狙ってはいたよ。フランスの子に喜んでもらおうと」
「懐かしい味なのよ……。私の中の何かが過去に想いを馳せているわ……」
美味しいならそれでいいけど……。
「おまけに出来も最高よ。生クリームに溶け出したジャガイモのデンプンでとろみができて、美味しいグラタンになっているわ」
そう言う料理だしね。
「味も完璧よ。微かなニンニクの香りも甘い生クリームの舌触りもジャガイモのホクホクさ加減もバッチリ」
「改善点とかは？」
「これが黄金比よ」
はい。
続いてぇ、武蔵！
「がつがつがつがつ！さくっ、もぐもぐ！」
おひつ（五合）で特大カツ５枚を平らげる。
分かる分かる、カツ丼って無限に食えるよね。
「美味い……、美味いぞ!!」
「味に問題はない？」
「そんなものある訳がない！ああ、こんなにも美味いものが毎日食えるとは、私はなんて恵まれているんだ!!」
お、おう。
「このカツの良質な肉特有の甘み、衣の香ばしさ、そして新鮮な卵と玉ねぎ！一口ザクッと齧れば夢見心地だぁ！そして、すかさずタレの染み込んだ白米をかき込めば……!!うまっ、まぁ……!!」
「は、ははは、よく噛んで食べるんだよ」

うーん、改善点は見つからなかったか……。
正直、俺くらいのレベルになってくると、欠点を探すのは難しい。
でも、個人的にはまだまだ甘い点がある、と思う。

海原雄山に文句つけられないレベルの腕前を身に付けたいもんだ。

３０５話　黒井鎮守府クイズ大会

「黒井鎮守府！クイズ大会ーーーー!!!!」
　叫ぶ大淀。
「どうした大淀」
　流石大淀だ。黒井鎮守府のマジキチのトップ層とまことしやかに囁かれているだけはある。因みにトップは俺。
「提督、私、思いついたんです！」
「おう、何を？」
「愛の証明ですよ！」
　うーん端的。
「すまない、説明してくれるかい？」
「はい！……私は常に、提督へ愛を伝える方法を考えています。そして今回、『好きな人のことは何でも知ってなきゃならない』理論により、クイズ大会を開催することになりました！もちろん、クイズの内容は提督についてです！つまり、提督についての知識を見せつけることで、提督への愛の証明とするのです！」
　はっはっはっ、相変わらずだなぁ。怪しげな企画を立てさせたら黒井鎮守府一だな！
「クイズの形式は？」
「問題毎にフリップボードに答えを書き込み、答えられなかったら脱落！生き残りサバイバルです！」
「なるほど」
　その形式なら、大人数の鎮守府でも上手くまとまるな。
「会場は悪ノリした明石さん達の手で既に完成しています！艦娘も集めました！後は提督の許可があれば、すぐにでも始められます!!」
「よっしゃ！やるか！」
「はい!!」
　楽しそう。
　理由はそれだけで十分だよなぁ？

「さあやってまいりました黒井鎮守府クイズ大会！参加者は黒井鎮守府全員！」
休憩室の一部が、臨時のクイズ大会会場に。うちの艦娘は全員集合。因みに、まだ入って日の浅い新入りは参加しなかった。
「音成鎮守府も参加するぞ」
「楽しんで下さいよ、日向さん！」
「また突飛なことを……。お前達、どんどん旅人に似てきていないか……？」
さて、役者も会場もバッチリだ。
「え？私は司会なんですか？」
音成鎮守府の提督の守子ちゃんも呼んだ。
何か知らんけど、問題は俺が出して良いらしい。俺が問題を出し続けて、答えが正しいかどうかの判定も俺がやるそうだ。
一見ガバガバなシステムだが、まあ何とかなるだろ。
「じゃあ、早速出題して良いか？」
「あ、マイクどうぞ。海原提督も」
『お、ありがと』
『あ、はい、どうもありがとうございます』
んじゃ、一丁やりますかァ……。
『じゃあ……、俺の妹の名前は？』
何処かで言った気がするな。多分これは皆んな知ってるんじゃない？
「はい！」
「余裕です」
「む……」
さて、そろそろ良いか？
『そこまで！……答えは、花凛だ！』
俺の妹の名前は、花凛。新台花凛だ。何人かの艦娘には話した覚えがあるからな。それくらいは皆んな覚えているか。
『へえ、花凛さんって言うんですか』

『ああ、俺と違ってインドア派でマッドサイエンティストのニートだ』
……脱落者は無し。音成鎮守府の艦娘も知ってるみたいだ。
……にしても、明らかに話した筈のない艦娘まで知っているとは恐れ入る。
『じゃあ次だ……、俺の得意料理は？』
これも知ってるだろう。
「よし」
「余裕なのね」
「楽勝デース」
書くのが早いな。やっぱり皆んな知ってるか。
『よし、答えはビーフシチューだ！』
はい、全員正解。
『洋食が得意なんですよね』
『日本より海外にいた頃の方が長いからね』
次だ。
『俺が好きな映画は？』
「これです！」
明日へ向かって撃て、正解！
『どんな映画なんですか？』
『ワイルドバンチって言う盗賊団が馬鹿をやる話だよ』
次。
『俺の身長は？』
「これだ！」
１９５ｃｍ、当たりだ。
『背高いですよねー』
『大き過ぎると困ることの方が多いね』
うーん、当ててくるなぁ。
じゃあこれはどうだ？
『最近俺がショックを受けたことは？』
誰にも話してないことだ。
「分かりました」

「上々ね」
「簡単っぽい」
　マジかよ。
「「「秋山と言う男との料理対決に敗れたこと」」」
『……正解』
『その、何があったんですか？』
『中華料理で勝負をしたところ負けてね。ボロクソ言われたよ。ショックだった』
　何で知ってるんだー？誰にも言ってねーぞー？
　次。
『俺の最終学歴は？』
「「「ミスカトニック大学考古学部」」」
　お、正解。
『海外の大学ですか？』
『ああ、編入転入を繰り返して、最後はアメリカのミスカトニック大学を卒業したんだ』
　大学院まで行った。
　因みに、これも殆ど誰にも話した覚えがない。

　にしても大変だなこれは。
　脱落者が出ない。
『……俺の昨日の入浴時間は？』
「「「９時１４分から１０時１７分」」」
『……俺が今朝起きた時間は？』
「「「午前５時半」」」
『……俺が得意な魔法は？』
「「「自己強化全般」」」
……
……
……
『あー、えーと、靴のサイズ』

「「「３２ｃｍ」」」
『……これもう勝負つかないでしょ』
１００問くらい出したが、誰一人として脱落者は出ていない。どうなってんの？
「提督のことなら、何でも知っています」
「司令官さんのこと、ずっと見てますから」
「あんたの行動なんてお見通しなのよ！」
んー、そうなの？
『……た、旅人さん……？』
真っ青になって震える守子ちゃん。
『皆んな物知りだねー』
『いやこれ、監視されて……。いえ、やめておきます』
うん、賢明だ。
さて、困ったぞ。このままじゃクイズ大会として成立しない。皆んなが答えられないような問題を出さねば。
あ、そうだ。

『俺の好きな人は？』

「「「私です!!!」」」
そして始まる口論。
「提督は私を愛してるの！他の誰でもない、私を!!」
「ノー！私こそ提督の正妻ネー!!」
「提督は私のものよ!!」
ンッンー、クイズ大会からダンガンロンパになってしまいましたなぁ。
『ど、どうするんですかこれ』
いや、大丈夫だ。収拾はつく。
『こんなこともあろうかと、会場のいたるところに爆弾を設置しておいた』
『?!?!!』

『つまり、爆発オチで締めろ、という訳だ』
『いやいやいやいや！何言ってるんですか危ないですよ!!』
『大丈夫、何時ぞやの、服と建物だけを吹っ飛ばすご都合主義のスペシャル爆弾だから』
『そう言う問題じゃ……!!』
『それじゃあ、景気良く行ってみようか！はい、ドーン!!!』
『ちょっ、待っ、あああああああああ!!!!』

部屋と服は吹き飛んだが口論は止まった。結果的に大成功と言える。
「な、な、な、何やってるんですか旅人さぁん!!」
「いやあ、やっぱり信頼と安心の爆発オチかなー、と思って」
「駄目だ、一番ぶっ飛んでるのは旅人さんの頭だった!!」
「大丈夫、ダメージを受けたのは空母だけだから」
ほら。
「うう、一航戦の誇りが……」
「ふ、太ってないです……。肥えてないです……」
「そ、その、これは……」
「多聞丸に顔向けできない……」
流石は体脂肪率ランキング上位陣。肉付きが違うぜ。
「……な？」
「な？、じゃないですよ！服を着てください！あとこっち見ないでください！」
「そんなに怒らないでよ。ただ部屋を爆破しただけじゃん」
「自分の鎮守府を爆破することがありますか!!」
そうかな？
俺はオチの為なら何だってするぞ。
それにな、
「俺の特技、見えちゃいけないところは謎の反射光で見えなくなる効果を広域に渡ってばら撒いたからな。艦娘達もバッチリ見えてない

ぞ」
「何を言って……、あ、あれ？本当だ?!見えちゃいけないところが謎の光で見えなくなってる!!」
「最近はこの技の範囲を広げることに成功してな、ほら、艦娘達も乳首と股は謎の光で隠れてるだろ？」
「うわ、本当だ……」
「まあこんなもんよ。ほら、取り敢えず守子ちゃんはこれ着て」
「あ、はい……」
さて、黒井鎮守府クイズ大会……。
引き分けだ。

３０６話　ハラスメントの大神　その１

「あ」
　セクハラしてぇ。
「わあー!!わあああああ!!発作だぁぁぁ!!わあああああ!!!」
「どうかなさいましたか、司令官」
　ミカァ!!!
「司令官大変、発作。性的悪戯無即、死。我望性的悪戯」
「それは一大事ですね、では、今すぐにセクハラをして下さい」
　わぁい！
　……いやっ！
　しかし待てよ!!!
　しかし、待て?!!?
「倫理的にミカにセクハラは許されるのだろうか」
「私はいいと思います」
　ーーー私はいいと思いますーーー
　成る程。
　本人が嫌がってないなら、いい。
　真理だ。
「じゃあ三日月みたいなロリに手を出しても良いのか？」
「よろしいかと」
　良いんだな?!
「ふへへ、おじさんについておいで三日月ちゃぁん」
「?、司令官はおじさんではありません」
　あ、そう？
　なんか、ありがとな。
　さあて。
　手持ちのベッドを取り出して、その上に三日月を押し倒す。
「みぃかづきぃー！」
「はい、司令官」
　まずはジャブだ。抱きついてみる。

「？」
おおう、胸がない……。
まあ、仕方がない。
「司令官……」
あ、頭撫でてくれんのね。
わぁい。嬉しいサービスだ。
三日月のなでなで。五分で三千円は取られそう。
「何か、辛いことでも？」
「いや、特にないけど……、強いて言えば艦娘皆んなに犯されそうになることかな。集団で」
「成る程、それは不敬ですね。後で私からも注意しておきます」
「ああ、いや、悪くはないよ。求められるのは嬉しいし」
「そうですか」
そういや三日月には犯されそうになってねえな。
何でだ？
キリングマシーンだから？戦闘行動にしか興味がないのか？それはそれで寂しい。
「三日月はその、なんだ、性欲はないのか？」
「はい、そうですね」
あ、そっかぁ。
「ですが……」
おっ、キスされた。
「司令官の側にいると、少し、胸の奥が熱くなります」
んー、良いねえ。
俺は即座に顎クイ。
ミカの唇を奪う。
「んっ」
三日月　は　されるがままだ　！
ああ、何でだろうな。女の子の唾液は甘い気がする。
事実、隙あらばポケットの中からお菓子を取り出し、食べる三日月の唾液は甘かった。

チョコレート菓子でも食べていたんだろうな。三日月とのキスはチョコの味か。ロマンティックで可愛らしいじゃないか。
「甘い、ね」
「っぷは。司令官は、ミントの味がします」
まあね、ミント系のタブレットやらガムやらが好きでね。良く口にするんだよ。
だがまあ、あれだな。
キスしてみたが、三日月側から求めてくる気配はあまりないな。
次、ボディタッチ。楽しい楽しいボディタッチだ。
胸！
すとーん。
「……揉むほどないな」
「すみません」
「あ、いや、三日月は悪くないぞ」
かつて俺が教師をやっていた高校の女の子は言いました。
「貧乳はステータスだ、希少価値だ！」
と。
「そういうものですか」
「おう、そうとも！」
小さいから悪いなんてことはない。おっぱいは皆須らく良いのだ。
次はー、お尻っ！
「お、おおお」
かてえ。
良く引き締まってる。
良い、お尻だ……。
……肛門の括約筋と下の穴の筋肉は繋がっているらしい。
つまり、お尻が引き締まっている、すなわち、前も……。
……。
ゴクリ。
「どうしました、司令官」
「いや、三日月の魅力を再確認していたところさ」

「私に魅力？そんなものはないと思いますが」
あるんだよなぁ……。
次に、背中！
「おお、おおおお！」
硬い！
良い、筋肉だ。肉体美だ。本当に美しい。
「ふつくしい……」
背中を触っているが、前から抱きしめるようにして触っているので、密着度が凄い。
んー。
三日月の首筋の匂い。ほのかに香る甘い匂い。
「ほああ、ｇｏｏｄ、ｖｅｒｙ　ｇｏｏｄ……」
「満足していただけたならば幸いです」
「も」
「も？」
「もう我慢でけん!!!（アイアンハイド並感）」
そして窓から屋根裏から現れる艦娘達。
「私が先です！」
「いいえ、私こそ!!」
「クソォ!!!」
三日月、抱けませんでした!!

「武蔵武蔵武蔵武蔵イーーーー!!!」
「おう、なんだ」
「改二おめでとう」
「ああ、ありがとう」
「武蔵武蔵武蔵武蔵イーーーー!!!」
「どうした」
「君の白髪は健康的に焼けた褐色の肌に映えて美しいね」
「ああ、ありがとう」
「武蔵武蔵武」

「待て、なんなんだ、そのテンションは」
なんだと聞かれましたら!!!
「そうか。前置きは良い。セクハラさせろぉ!!!」
「……ほう？」
武蔵の眉がピクリと動く。
「俺はッ！武蔵のッ！おっぱいを揉みたいッ!!!」
「成る程、男らしくよく言った！良し、揉め!!!」
「ヒャァァァッホオオオウ!!!!」
「だが!!」
おっ、なんだ、どうした。
「タダでは揉ませんぞ、私も女だ」
「くうっ、なんだ、要求はなんだッ!!!」
金かっ?!
「私も提督にセクハラさせろぉ!!!」
くっくっくっ、成る程なぁ？
「良いぜ!!!」
「良し!!!」
許す!!!
しゃおら！揉むぜぇ、揉むぜぇ、超揉むぜぇ!!!
「うらぁ!!!」
むちっ。
おおお。
「筋肉ゥ」
「だろうな、鍛えているからな」
「硬い」
「なんだ、柔らかい女の方が好みか？」
「いや、これはこれで……！」
ぎっしり詰まった大胸筋の上に、スマートな乳肉が乗る。むちむちの魅惑の肉。齧り付きたいくらいだ。
「良い、乳だ……」
「満足か？」

「おう」
一切の無駄のない完璧な戦闘用肉体。なんと美しいことか。
そして太もも。
おお、これは……。
筋繊維の塊だ。セクシーながらも力強い。そして、筋肉から発される熱。色々な意味でホットだ。
褐色肌が官能的。
「よく鍛え込んでいるな」
「ああ、どれもこれも提督のためだ。提督に勝利を捧げるため、私はどこまでも強くなるぞ」
お尻。
これまたキュッと締まっていて上向きだ。尻たぶを握ってやれば、
「む……??」
少しばかり、感じたような吐息を漏らす。
両手でもって尻の筋肉をほぐすように揉み込んでやると、
「あ、ああっ??」
悦びの声を上げ、よがる。
背中は発達したヒットマッスルの塊だ。ともすれば男に見紛うくらいの。だがやはり、抱きしめてみれば、骨格から女だとしっかりわかる。
むしろ、女の身でここまで練り上げたことに賞賛を送りたい。そして、それを好きにできる喜びに感謝を。
「素晴らしいヒットマッスルだな」
俺は、声をかけると同時に、武蔵の背中の筋肉の溝をなぞってやる。
「ふぅう……??は、あう……??」
エロティックな甘い吐息を漏らす武蔵。
隆起した筋肉をぐいっと揉み上げる。
「お、おおう??」
「可愛いよ武蔵……」
薄っすらと汗ばんだ褐色肌を優しく愛撫し続けると。
「もう、駄目だ、焦らすな！」

突然、艤装である服を消す武蔵。
「武蔵！」
強力な力でその場に組み伏せられる俺。
「ふーっ、ふーっ、ふーっ……、我慢、できん！犯すぞ……！」
「いやーっ！」
俺のズボンを無理矢理脱がせ、跨る武蔵。
「中に出して良いからな」
「きゃー！たしゅけてー！」
割とノリノリの俺。
その時！
「武蔵イッ!!!」
「や、大和ォ!!!」
「私の提督と何をするつもりですか……」
「黙れっ、私は提督を抱くのだ！」
「させると、思いましたか……？」
「お前の指図は受けん!!」
「提督も、何故、大きくしているのですが？」
「いや、そりゃあ、やっと艦娘を抱けるのかなーと」
「私が抱かれて差し上げますから、他の艦に目移りする必要はないですよ」
「ほら、武蔵の方が先にやる流れだったし、良いじゃん。次はお相手するからさ！」
「駄目です」
ああはぁ。
全裸になる大和。
ブラボー、おお、ブラボー!!
「なっ、横から入ってきてそれはないだろう!!」
「黙りなさい、武蔵。姉に譲りなさい」
「そっちこそ妹に譲れ！」
おーっと、キャットファイトキャットファイト！
しかも全裸で！

良いねえ良いねえ！
おおっと大和、武蔵のおっぱいを乱暴に掴むぅー、武蔵は大和の顔を押す。
五分くらい堪能して。
「こらこら、喧嘩は駄目だぞー」
止める。
「はっ?!す、すみません、見苦しいところを……」
「いや、これはこれで良かったがね」
「それで、どちらが先かという話ですが」
「提督はどちらを先に抱きたい？」
あー。
うん。
この問いが出た時点で終わりだ、逃げよう。
どちらを選んでもどちらかが傷つく。
「いっそ3Pしない？」
「「……て、い、と、く!!」」
ひゃあ、怒った!!
逃げよう!!

３０７話　ハラスメントの大神　その２

逆に攻めてみるのはどうだろう。
なんか最近、逆レされそうになったりとかそんなんばっかりだし、逆にこう、俺の方からアグレッシブにセクハラしていくのはどうだ？
男の怖さ、思い知れ。
そうと決まればまずは大淀だ。
あの子は割とマジで洒落にならない変態だからな。
「大淀ァ!!!」
「はい」
「パンツちょうだい」
騒いだら殺す。
……とか言った犯罪者、昔いたっけか。
俺から言わせりゃ、未成年とヤる時に証拠を残す方が馬鹿なんだよなぁ。
未成年を口説くんなら安全にやらんと。ケーサツ怖い超怖い。この国の警察は賄賂が通用しづらいからなー。やりづらいわ。
「はい、良いですよ」
しかもくれるのかよ。
「えっ、ここで脱ぐの……？てか、マジでくれんの……？」
「どうぞ」
ほかほかの脱ぎたておパンティをいただいた。
「……ノリで言っただけだから、本当にもらえるとは思っていなかった感」
どうすれば、良いのだ……？
「嗅いだり舐めたりして、自慰行為に使用するものでは？」
そうなんですか？
嗅ぐ……。
「いや、変態でしょそういうのは。俺は至ってノーマルだから」
「いえ、ちょっと試しに嗅いでみたらどうでしょうか」
変態の道に引きずり込まないで欲しい。

……。
わ、分かったよ、嗅げば良いんだろ、嗅げば。
くんくん。
「どうですか？」
「大淀の匂いがする」
女の子の匂い。良い匂いだ。
あー、いや、女の子のパンツ嗅いで良い匂いだはヤバイ感想かもしれんけど、間違いなく悪い匂いじゃないんだよ。
「良い匂いですか？」
「……まあ、うん」
「セッ○スしたくなりますか？」
「……いや、それは」
「おち○ぽハメたくなりませんか？」
「大淀、下品だから」
なんなの？
「すみません、つい趣味が出てしまいまして」
「よろしくない趣味だね、人前では言わないようにね」
「はい」
本当によろしくない。
「最近では秋雲ちゃんに誘われて、エロ同人誌にハマってます」
「そ、そう」
「好きな作家は、○凪、7○4、知るか○カうどん、オイ○ター、は○うな辺りですかね」
うわぁ……。
「うわぁ……」
「？、何故ドン引きを？」
そりゃあ、ねえ……？
「あ、そうだ、最近考えたのですが、私の四肢を切り落としてペットプレイに興じるのはいかがでしょう？」
「……俺は、君のことを心から大切に思ってる。痛い思いや辛い思いはさせたくないよ」

「確かに、提督の手を煩わせるのは心苦しいですが、提督の肉便器になると言う魅惑的な響きには抗えません」
「やらないってば」
「一週間だけお試しでどうでしょうか？大丈夫です、艦娘ですから、どんな怪我もドック入りすれば元通りです」
「仮に怪我を治せるからって、怪我をして良いって訳じゃないからね」
「清々しいまでのブーメランですね。提督はいつも死ななければあらゆる怪我は軽傷、しなやすとおっしゃっているではありませんか」
　言ってるぅ、けどぉ。
「提督、私の幸せは貴方に使われることです。貴方の煮えたぎる獣欲や支配欲、破壊欲を満たすためだけに存在しているのです。貴方の敵は殺します、貴方の言うことはなんでも聞きます。だから、お願いです」
　大淀……。
「私を、好きにして下さい。玩具にしてください。虐げて下さい。……使って、下さい」
　大淀、は。
　そうか。
　その生き方しか知らないし、曲げるつもりもない、のか。
「……分かった、できる限り、君を使おう。でも、大切にする」
「……はい！」
　さて。
　それじゃあセクハラするか。
「えい」
「んっ??」
　大淀をくるりと回し、後ろから抱きつく。
　身長差から、覆い被さるような形で変態的だ。
「大淀ぉ……」
「ひぃん??」
　胸はー、っと。
　柔らかい。

が、そこまで大きくもないな。控えめだ。
「あああああっ??????いひぃ??????」
揉みますよー、揉む揉む。
桜色の頂点を引っ張ってやれば。
「おらっ、イけ??!!!」
「あひぃいいいい??????」
かくんと、膝を折る大淀。
「提督……??」
「よしよし、イったな、大淀。可愛かったぞ」
「お願いが、あります……??」
「なんだい？」
「後で、露出プレイに付き合ってください……??」
「まあ、それくらいなら……」

黄昏て窓の外を眺めていたら、訓練後の最上を発見した。
汗が滴る最上。
ほー。
ちょっと興味ある。
窓に手を掛けフリーフォール。着地。
「もーがみん！」
「ひゃあ?!て、提督？」
くんくん。
……汗から女の子のフェロモンを感じる。
「ちょっ、駄目ぇ、嗅がないでぇ！今僕、臭いからぁ！」
「良い匂いだぞ最上」
「ううー、えっちだよぉ……」
エッチだよそりゃ、男なんて皆んなエッチさ。
「提督は変態さんなのかな?!」
「変態とかそう言うアレでは断じてないが、訓練を頑張った後の芳しいもがみんスメルが気になったので」
「気にならないでよぉ……」

仕方ないことなのだこれは。
さあ。
「最上」
「うう、なあに？」
「一緒に風呂入ろう」
「……うん??」
セクハラを続けようか。
さて、風呂。
「ようし、最上の背中流すぞー」
「えっと、じゃあ、お願いしようかな」
ゴシゴシ、と。
いやそんなん普通に背中流すだけに決まってますやんか。そんなん……、そんなん、やりませんわホンマ。
そーれ、ゴシゴシ。
「んぅ、気持ちいい……??」
……ゴシゴシ。
「あっ??そこも洗うの？ちょっと恥ずかしいなぁ??」
……。
「あっ??やっ、駄目??そこは駄目ぇ??????」
……。
「凄いよお??気持ちいい??僕、イっちゃうよお??????ああああああっ??????」
ふう。
いやー、洗った洗った。
普通に洗っただけだ。
誰が何と言おうと普通に洗っただけ!!
普通に!!!
「じゃあ、次は、俺の背中でも流してもらおうかな」
「はぁ、はぁ??う、うん??」
すると、最上は、何を思ったのか。
自分の胸にボディーソープをつけると。
「えい??」

そのまま身体を擦り付けてきたのだ。
くっ、最上め、どこでそんなことを覚えてきた?!
「これぇ、いいよぉ??擦れてぇ……??」
コリコリとした突起の感触が背中に。
ふむ、ソープか。
最近ソープには行ってないから、楽しい。
インベントリからマットを取り出す。
そして、マットの上に最上を倒す。
「最上ー」
「ひゃあん??ぬるぬるで気持ちいいよ??」
「綺麗な脚だな」
「んんぅ??太もも擦っちゃ……??」
「ここも綺麗だ」
「あっ??そこは……??」
(以下略)
「良かったぞ、最上」
×「うん、僕も、気持ち良かった??」
×「また一緒にお風呂入ろうな」
×「うん……??」
×
×
×
×「で、マジでやるの?」
×「わんん!」
×首輪型のロック装置にリードを繋いで、その先を提督に渡す。犬耳カチューシャとお尻に挿入れるタイプの犬尻尾も装備済みだ。
×「本当に尊厳とかそういうのないんだな」
「わんわん!」
「分かった、分かったよ、散歩するから」
「わん!!」
うふふふ!楽しいです!
「わんわん!」

「なんだよ、撫でろってか。分かったよ、よしよし」
「くぅーん」
幸せです！
さて！
「わん」
「大淀？片足を上げてどうした？ま、まさか」
んっ、んぅ。
「大淀!!それはまずいだろ！待て！おい!!」
じょろろろろろろ。
「あっ??ふぁあ????」
「や、やりやがった……」
「わん??」
「はぁ、取り敢えず、そこ、拭かなきゃなぁ……」
気持ち良かったです!!

３０８話　ハラスメントの大神　その３

「発作！」
あー！
あああああー！
「ぐうう、セクハラぁ……！セクハラがしたいぃ……!!」
美少女のお尻を揉みたい、乳首を弄りたい。
俺にだって性欲はあるのだ。
「セクハラするぅー、目に入った子からセクハラするぞぅー！」
怪しげな新宝島ステップで徘徊していると。
「？、ぽい？」
「夕立ちゃぁあぁしゅらやぁ!!!!!」
「え？え？どうしたの提督さん？」
「あびゃびゃぁー!!!!」
気狂いゲージと言うものが存在するならばとっくにメーター満タンだろう。今の俺の作画はちょぼらうにょぽみみたいな感じ。
新宝島ステップのまま前に進む俺。
『おっぱいもませて』
「良いけど……、何でハイパーボリア語？」
意味はない。

白露型の拠点、工房に連れ込まれた。
最近では増改築を繰り返し、遂には部屋まで移転したのだ。
故に、工房の一室には、
「ぽいー！」
白露型が寝泊まりする部屋、ベッドがある。
ベッドに押し倒された俺。
そしてベッドから香る女の子の匂い。
んー、グッド。
「提督さん、溜まってるっぽい～？」
歳のころからは考えられないような妖艶な笑みを見せる夕立。こ

れだから白露型は怖い。
「実は、結構。正直、君達に手を出せないのが辛い。つらたん」
「大丈夫っぽい！最近、会議で、提督さんに抱かれる順番みたいなの決めてるっぽいし！」
「マ？」
　やばたにえん。
　それはさておき今は夕立だ。
「夕立ァ!!!」
「はいはい、どしたの提督さん??」
　夕立の無い胸で慰められる俺。
「ｈｉｎｎｙｕｕ（ダミ声）」
「むー、しょうがないっぽい！艦娘だからあんまり育たないっぽい～」
　悲しいねぇ……。
　しかし俺は寛容。大人の完熟豊満ボディでなくとも、未成熟ロリィタボディでも手を出す。
　手を出すのだ。
　悪魔に魂を特売大安売りした俺、最早相手が夕立のようなロリでも気にしなくなった。
　一種の闇堕ちでござるな！
「俺は女の子を乳で差別する事はないッ!!!」
「おっきい方が好きじゃないの？」
「小さいのも好き」
　俺の赴任していた学校の女子高生が言ってたっけな。貧乳はステータスだ、希少価値だ、と！
　ワイトもそう思います。
「おっぱいに貴賤はないのよッ！皆須らくおっぱいは最高！」
「私のおっぱいも好き？」
「大好きさ！」
　ああ！
　それってハネクリボー？
「ふふ、良かった。それじゃあ……」

艤装である黒の狩装束を霧散させる夕立。
ああ、言い忘れていたけれども、艦娘の何人かは元の艤装である服装を着ていないケースがある。
白露型なら狩装束を着ていて、黒い得体の知れない獣か何かの皮で出来たコートの様なものに、水銀弾のガンベルト、ナイフ入れ、秘儀の触媒入れ、薬入れなどを身につけ、鋭角な帽子も被っている。
夕立は赤い布飾りが特徴だ。
妙高型なら濃い紫色のフード付きコート、アークロイヤルは鎧、愛宕は重装鎧、ビスマルクはマントとか。
何にせよ……、おひょー！全裸だぁ！
両手をわきわきさせながら夕立に近づく。
「いや～ん??っぽい？」
「ぐへへへへ、夕立い、気持ちよくしてやるからなぁ!!!」
「……」
はっ?!
「し、時雨？」
「うん？良いよ、続けて？」
う、うう。
「僕の妹であり親友でもある夕立の胸を揉むんだろう？構わないよ」
そ、そう？
じゃ、じゃあ、揉むわ。
「えい」
「ああんっ?????」
はあああああ～。
未成熟柔らかおっぱい……。
ああああああ～、ああああ～。
言語化不能の幸せ。
ああ、今俺は悪いことしてる……！
罪悪感？知らんな！最早そんなものは性感を高めるスパイスにしかならんよ!!!
「あー、最高」

「んんぅ??て、提督さんっ??揉むの??上手っぽい~??」
ああ、そうだとも。夕立に揉む様な胸はない。ほぼ性感マッサージだ。
だがな、ゆめゆめ忘れるな！
おっぱいは！
心で揉むものだ!!!
「うおおおおおおぁ!!!」
「ーーーっ?????」

（中略）

ふぃー。
いやー、いやらしいことしたわー。
だけどほら、旅人流マル秘スキル、「全年齢版ではエロシーンが中略される」により、全てスキップされた。
ヤったかどうかは皆んなの心の中に。
シュレディンガーのエロ。
観測されない限りエロとエロじゃないの状態は重なり合い結果は誰にも分からないのだ！
にしても、夕立は。
下の毛も金色なのか。
そして。
「次は僕かな」
時雨も相手した。

まだ止まらんよまだ舞える。
ギリギリ限界まで行こうぜ。
俺はセクハラ界の星になるのだ。
休憩室に行ってみようか。
休憩室……、所謂黒井鎮守府の居間だ。
特に用事がないときは、艦娘はここにいる。

自室に籠る子もいるにはいるが。
お次は……。
「君に決めた!!!」
「え？はい～？」
ポーラだあああ!!!
「ポーラ君の瞳にはー、ポーラ何が見えるー」
明日のポーラ。
「ええ？普通に提督ですね～」
「だがそんなことはどうでもいい……」
今はそんなことはどうだって良いんだ。
「じゃあ何で聞いたんですか～？」
意味はない。
「ポーラ大好き！」
ポーラを抱き上げる。
「わひゃあ?!なな、何ですかぁ？」
「ポーラが好き過ぎて夜も眠れない」
「えっと、ありがとうございます～？私も提督がだーい好きでーすよ～??」
おおポーラ、なんて可愛い子なんだ。
ポーラ……。
「スカートやめたのな」
「あ、駄目でしたか～？」
「いや、ズボンも似合ってるよ」
ポーラの服装はジャケットとシャツ、ズボンだ。伊達眼鏡と帽子も装備している。
今はフリーなので、シャツとズボンと伊達眼鏡だけだ。
「でもあれですよね～、提督、スカートめくりが趣味じゃないですかぁ」
言うほどめくってないよ。
……いや、めくってないよ。
めくってない。

「スカート履いた子を見ると基本的にめくりますよね～」
「それはめくらないと何故か皆んな不機嫌になったり落ち込んだりするから」
俺はセクハラを義務付けられているのだ。
「時にポーラ。近頃トゥイッターでおっぱいチャレンジなるものが流行っているらしい」
「はあ」
呼吸を止めて一秒、俺は真剣な目をして言った。
「おっぱい見せて」
さあ、そこから何も言えなくなるか？
星屑ロンリネスか?!
「良いですよ～」
「っしゃ!!!!!」
承諾ッ!!!
第二ボタンまでだらしなく開かれたシャツを更に開きブラを見せるポーラ。
「えい」
そして、その、可愛らしい白のブラを片方ずらして、おっぱいを露出させる!!!!
「ハッハー」
良い。
中々でかいなー！
「触りますか～？」
「触る～」
触るでしょそりゃ。
それ、つんつん。
「んっ??」
ぷにっ。
ｏｈ、ｙｅａｈ……。
「な、な、な、なっ……?!」
あ。

「て、てて、提督っ?!何やってるんですかーーー!!!」
ああー。
ザラに見つかってしまった。
「違うんすよ、これは、違うんすよ……」
「何が違うんですかっ!ポーラの、む、胸をっ!!」
「見間違いでは?」
揉み揉み。
「現在進行形で揉んでるじゃないですかーっ!!!」
はっ?!
て、手が止まらん!!
「おっぱい好きですよねぇ??」
「大好き」
「ポーラに手を出すのは駄目ですっ!……胸なら、私のを!」
マジで?
「とかなんとか言っちゃって~?本当は提督に揉んで欲しいだけでしょ~、ザラ姉さま~?」
「そそそ、そんなこと……」
「良いんです良いんです~、ポーラは分かってますよ~」
「違いますから!わ、私っ、そんなエッチな子じゃ……」
まあザラは割とむっつりスケベだよな。
「ザラもおっぱい見せて」
「ええっ?!えっと、えっと……、は、はい??」
あ、見せるんだ。

おっぱいを揉んで満足した俺。
今日も楽しかったです。
神に、俺の女神エヘカトル様に感謝しよう。
あとおっぱいに感謝。
「いやー、今日も鎮守府運営楽しかったなー!」
でさ。
俺の部屋の机の上にある、全艦娘のおっぱいチャレンジ画像はさ。

何なの？

３０９話　ハラスメントの大神　その４

諸君らは、魔が差してつい、なんてことはないだろうか。
俺はよくある。
魔が差してつい、高い買い物をしてしまったり、セクハラしちゃったり、レアアイテムを窃盗していたりとか。
するじゃん。
するじゃん？
「司令は、対馬の平らなおっぱいが好きですか??そうですか??ふふふ??」
だからさー。
あるでしょ？
そう言う……、あの……、あれ。
あるでしょ？
「魔が差した」

対馬がいたのだ。
その姿は、地上に舞い降りた小さな天使だった。
罪深き小人である俺の前に、小さな、美しい彼女が降り立ったのだ。
それを目にした俺は、即座にハイエースを召喚。
「かぁいい……、お持ち帰りぃ☆」
「え？え？あ、司令？」
かぁいいモード突入。
生きるため、仕方なかった（弁護士並感）。
ひふぁえ。
あひゃあ。
あひゃひゃひゃひゃ。
黒井鎮守府に勤め始めてから、更に女性に弱くなった俺。
対馬（ペド）にいやらしいことをする……！
俺の罪（ロリペド）は止まらない……、加速する……！
清廉なる正しき人道を理解しようとしない野蛮な獣（ロリペド）!!

あろうことか……、この天使に手をかけ、冷たい墓標（ロリペド）の下に引きずり込んだ!!
ヒィーッヒッヒ。
うぇーはー。
クランクニー。
「つまり、そう言うことなんだ、対馬」
「どういうことですか？」
察してくれ。
「でも、ふふふ、司令が私に興味を持ってくれるのは嬉しいです??」
チィッ!!語尾に??を付けやがって!!完全にメス堕ちしていやがるッ!!
「いや、対馬は清純な天使だから。そう言うのに惑わされたりしない（断言）」
「……対馬は子供で、性欲も何もないと？」
「そ、そうだ！対馬は天使！エッチなことしない！」
「それは、司令がそう思いたいだけでは？」
「いや、攫っておいてなんだけどさ、対馬ってまだ１０歳にもならないくらいの年頃に見えるし。実際、性欲とかないんじゃないの？」
「ふふふ、そんなことありませんよ？」
そーなのー？
「エッチなことには興味津々です??」
ソーナノー？
ッフゥ、テンションを下げろ、落ち着け。
「確かに、対馬の身体は子供のものですが、心はそれなりに大人ですし、司令とエッチしたいな、と思うこともよくあります」
「それはほら、気持ちだけじゃなくって？身体はそれに追いついてないんじゃないかな」
子供の好き、は性欲が絡まないケースが多いからな。
「それじゃあほら、えい」
「お、おお？」
お膝の上に。

あっ、お尻柔らかい。
子供特有の丸みを帯びた小さなお尻。この頃流行りの女の子、即ち、お尻の小さな女の子。呼びかけずともこっちを向いてくれる俺のハニーだ。だってなんだか、だってだってなんだもん。
「手を貸して、司令」
「おう？」
手を物理的に貸す。
「切り離したほうが良かった？」
「え？い、いや、切っちゃ駄目よ？痛いでしょ？」
「いや、対馬のためなら腕の一本や二本、安いものだ」
「そ、そう？でもやめてね？司令が傷つくのは見たくないわ」
なんて優しい子だ……。
やはり天使。
「それじゃあ、ね？」
そして天使は、俺の手を、
「えいっ??」
上着の中へ。
……!!
??!、て、天使にふれたよ!!
「んふぅ??ほら……、司令？私の乳首、かたーくなっちゃってるの、分かりますか??」
あばばばばば。
「私、興奮、しているんです??ふふふ??」
「ちょっと待ってちょっと待って、対馬はやばい」
「あんっ??こうやってぇ、司令のお膝の上でぇ、お尻をぐりぐり～ってすると……」
「お客様！お客様!!困ります!!あーっ!!!お客様!!困ります!!あーっ!!!
困ります!!あーっ!!!困ります！お客様!!困ります!!あーっ!!!あーっ
お客様!!」
「ふふふ、ほら??司令も反応しちゃいました、ね？」
「違うんすよ、違うんすよこれは」
「そんなこと言ってぇ、その割には対馬のおっぱい、ずっとなでなでし

てますね??」
「手が勝手に」
あはあ、平らな胸にこりこりした感触。
「えい」
「くっ……、は?????ち、ちくびぃ、抓っちゃ駄目れすよぉ?????」
「対馬ァ、いけないなァ……。天使がこんなことしちゃあ……」
「ふふふ??そうですよぉ、対馬は悪い子なんです??天使なんかじゃありません??悪魔なんです??」
「それじゃあ、退治しなきゃ駄目だなっァ……?」
「はい??司令のお股のおっきな剣で退治してください??」
「対馬ァ!!!」
「あんっ??」
はっ!!!
視線?!!?!!!
「「「……」」」
ああ、窓に、窓に!!
他の艦娘に阻止され、対馬とエッチはできませんでした。
まあ、いつもの、だな。

蒼龍にセクハラしたい。
しかし、蒼龍は無知……。
人道に反する。
いや、性教育とすればワンチャン?
……ってか、俺に命令されない限り何もやらない蒼龍。なら、性教育もしなきゃ駄目なんじゃないこれ?
あれ?そう考えると不安になってきたな。
大丈夫?一人で買い物できる?通販使える?電車に乗れる?ＡＴＭ使える?エッチできる?
あれあれ?
ちょっとこれは……、行ってこよう。
「蒼龍」

「あ、提督！」
駆け寄って、俺に抱きつく蒼龍。
「蒼龍、一人でお買い物できるか？」
「多分できるよ？」
「電車に乗れる？」
「んー、無理かな、分かんない」
「通販とか、ネットは使える？」
「使い方分かんない」
「電話はかけられる？」
「うん、覚えたよ」
「ＡＴＭ使える？」
「？、なにそれ？」
んー、現代人としてやばいレベル。
「あー、子供の作り方は分かるか？」
「うん。提督のおちんちんを、お股に刺せばいいんでしょ？」
あーうー？
「まあ、そうだが、誰に習った？」
「鳳翔さんに聞いたら、顔を真っ赤にしてはぐらかされたけど、時雨ちゃんに聞いたらちゃんと教えてくれたよ？」
よりにもよって時雨かあ！
「時雨ちゃんが言うには、最初は痛いけどだんだん気持ちよくなるんだって」
んんん、お、おう。
「そうだねえ、大体合ってるねえ」
良かった、性感はあるんだな。
まあ、それは分かってた。
痛みには鈍いみたいだが、性的な感覚は備えているみたいだ。
「あと、赤ちゃんができたら、おしめを替えて、おっぱいをあげて、寝かせれば良いんだよね？」
「そうだぞー、蒼龍は物知りだなー」
「えへへー！」

蒼龍……。
見た目に反して純粋で、純朴で、それでいて残酷だ。
ふんわりほんわか、に見えるが、いざ戦闘となれば、はねバドの初期と最新巻くらいの落差で作画が変わる感じで雰囲気が変わる。
放課後ティータイムからＴＭレボリューションくらいテンションが違う。
今はふわふわタイムなので、安心安全だ。
「蒼龍おいで」
「うん」
「はい、ちゅー」
「んっ??」
唇を軽く触れる程度に重ねる。
「えへへぇ??」
かわええ。
だけど残酷な天使だからなあ。
ｄａｒｋ―ｌａｗだからな。
「提督にちゅーしてもらうと、胸がぽかぽかするんだー??」
「蒼龍……」
蒼龍は何も知らない……、汚れなき女なんだぞ。
酷いことなんて、できないよ。
「はい、提督。おっぱい揉んでね」
「いや、蒼龍に酷いことはできない」
「?、酷いことじゃないよ?提督におっぱいを触ってもらうと、ふわふわーってして、びりびりーってして、とっても気持ちいいもん」
ふむ。
しかし、蒼龍は……。
見た目は大人だが、中身は子供なんだ。
エロいことなんて……。
「わっほい！」
できる。
乳を、揉みます。

いやー俺も良心はあるんだけどねー、やっぱおっぱいには逆らえないねー。
このおっぱい！
おっぱいぷるんぷるーん！
無理無理、理性は薄氷。意志は薄弱。
「うっひょー」
「あうぅん??」
でけー。
マシュマロみたいにふわっふわ。
基本的に蒼龍は、ユニバーサルデザインか何か？ってくらいに丸くて柔らかな、子供やお年寄りに優しい安全ボディ。
「生意気なおっぱいしやがってぇ」
「あん??ごめんね、おっきいの嫌い？」
「大好きー！」
一頻り揉んだ後。
「っふー、楽しい」
「ねえ、提督？そろそろ、ぼっき？した？」
ギンギンガギンなどとは言えない。
「ど、どうだろうかな？」
「ぼっき、したらおちんちん入れて！」
「いやー、やりたいのは山々なんすけどね」
「大丈夫！私、頑張るから！」
「ははは、そうかい」
何を頑張るのかね。
「むぅ……、えい」
俺のズボンが破られる。
んえ？
「あは??おっきい??」
「ちょ、ちょっと待っ」
「えい！」
押し倒される。

「提督も私も準備完了！さあ、赤ちゃん作ろ？」
「それは逆レイ」
「いくよー！」
「「「させるかぁーーー!!!」」」
あ、危ねえ。艦娘達の手により、突発的逆レイプは阻止された。
こうして、黒井鎮守府の平和は保たれたのであった。

３１０話　各国のクリスマス

今年も例年通り、白露型がイタクァを召喚し黒井鎮守府一帯に雪を降らせた。
そう。
クリスマスの時期だ。
『暖炉の火に焼かれる栗、雪の精が鼻をさする……』
「あら、Ｔｈｅ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ　Ｓｏｎｇ？センスが良いわね、分かってるじゃない」
「ん、ああ、アイオワか。俺ぁ、ナット・キング・コールが好きでね」
「その、提督って、趣味が古くないですか……？」
と、ベイ。
「あー……。まあ俺おじさんだからね」
「最近のバンドとかは？」
「んー、あ、ＷＡＬＫ　ＴＨＥ　ＭＯＯＮとか、Ｖｉｎｔａｇｅ　Ｔｒｏｕｂｌｅとか」
「……やっぱり、ちょっとセンスが古いですね。あ、いや！悪い訳じゃないんですよ！」
いや、俺がおじさんなのは仕方ないこと。
実質？？？？？歳くらいだし。

さて、クリスマス。
うちの子達は皆、十二月頭に仕事を全部終わらせ、全員お祭りモードに入っている。
特に海外艦のオフっぷりは凄まじい。
基本的にオンオフしっかり切り替える海外艦は、オンの時は真面目で効率的に仕事をこなすが、オフの時は全力でリラックスして楽しむ。
良い傾向です（フラジール並感）。
艦娘の中には、常在戦場を掲げる子や、逆に常に手を抜いている子もいる。

そんな中で、オンオフを切り替えられる海外艦は働き方が好ましいと思う。
ほら、働き方改革？とか、なんかそういうのあるじゃん？プレミアムフライデーとか、なんかそんなノリで、休む時にはしっかり休んでな？
特に神通。
冬の山籠りって何？山籠りに季節関係ある？四季ごとに山籠りする気か？よりにもよって冬に？
やめようね！
……そんなこんなで、海外艦はクリスマスを楽しんでいる。
因みに、文化の違いからくる衝突は特にない。あまりそういうのにこだわらないのがうちの子の良いところ。
クリスマスプレゼントは俺から手渡し、サンタさん（に仮装した俺）からのプレゼントが渡される、という方式に。
言うまでもないが、海外でのクリスマスは家族と過ごす日。決してセッ〇スをする日ではないと明言しておくことも忘れない。鹿島がおもむろにコンドーム渡して来たからオラ何事かと思ってたまげちまったぞ（悟空）。

ではアメリ艦から見ていこう。
アメリ艦はアメリカンなので、クリスマスプレゼントを渡し合っている。
まあ、百人を超える鎮守府のメンバー全員にプレゼントを渡すという訳にはいかないから、親しい間柄同士で渡すなど工夫をしているっぽい。
俺にも渡さなくて良いと言ってある。クリスマスの度に百人を超える艦娘から一々プレゼントをもらっていたら、部屋がいくつ合っても足りない。
贈るなら食べ物とかにしてくれと頼んである。
クリスマスカードもしまう場所がないから書かなくて良いと伝えた。

皆んな渡したがっていたが、まあ、そこは我慢してもらおう。
「Ａｄｍｉｒａｌ！はい、ｃｏｏｋｉｅよ！マミヤに手伝ってもらって皆んなで焼いたの！」
「おお、ありがとう……、うん、美味しいよ」
技術的にまだ甘い？一工夫でもっと美味しくなる？いやいや、プレゼントは気持ちこそ大事なんだろうよ。それに、十分美味しい範囲だ。
因みに、アメリカではクリスマスケーキというものは存在しない。クッキーだ。チキンも食べない。七面鳥だ。
後はキャセロール……、言うなれば鍋で作るグラタンみたいなの？を食べるのが基本的なアメリカのクリスマスなんだけど。
「Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ　ｃａｋｅ！Ｄｅｌｉｃｉｏｕｓね！」
クリスマスにケーキを食べる習慣を難なく受け入れ、ショートケーキをワンホール食べるアイオワ。
まあ、本人が楽しいならそれで良いんじゃない？

ドイツ艦。
ドイツはね、クリスマスマーケットって言って、クリスマスに開かれる市場があるのよ。そこで家族でお買い物するのがドイツ流なんだよね。
と言う訳で、前日にドイツ艦他希望者を連れてドイツのクリスマスマーケットに行って来たんだよ。
本人達は楽しめた、とのこと。
そう、それで、クリスマス当日は家族と過ごす……、まあ、ここはどこも一緒だな。
そして料理はガチョウのローストやシュトーレン。
美味しいぞ！
それといつも通りポテトとソーセージ。
いや、いつも食ってんじゃないの？と思うかもしれないが、本人達の希望と、ポテトとソーセージはパーティ向きと言うこともあり、大量に作った。

つーか、ドイツ人自体、そんなに食事に執着してない。
朝シリアル、昼ソーセージとジャガイモ、夜パンとチーズ、くらいで済ませるからな。
まあでも、うちのドイツ艦達は日本に来てから随分グルメになったし、食べる量も多いので、結構こだわっている。

続いてロシア艦。
彼女達にとって、今日、12月25日はクリスマスではない。
それもそのはず、ロシア正教のクリスマスは1月7日なのだ。これは、ロシア正教がグレゴリオ暦ではなくユリウス暦を使っているからだな。
でも、その辺は空気を読んで、こちら側のクリスマスを楽しんでくれている。
一応、豚のローストだったり、キャビアだったり、ロシアのパーティ料理も出してはいるが。
「うん？楽しんでいるぞ？日本のクリスマスはそう言うものなんだろう？В чужой монастырь со своим уставом не ходят. と言うじゃないか」
とガングート談。
郷に入っては郷に従え、か。
なるほどそうだな。

イタリア艦。
まあ、特に変わったことはない。
クリスマスは家族と過ごす日、だから家族である提督や艦隊の皆と過ごすんだ、だってよ。
いや、ちゃんとコース料理出すよと言ったんだが。
イタリアが、
「ああ、別に立食パーティーで良いですよ。私達、家族であると同時に同僚ですし、会社のパーティーだと思えば」
と辞退。

いや、クリスマスくらいちゃんと作るよ？でも良いって言うから、普通にいつも通り立食パーティーでやるけど。
ローストチキンを量産した。
一人で何個か食べるから皆んな……。
ブルスケッタとかピンチョスとかパネトーネとか。
パスタも色々と。
しかし、イタリア艦も大分日本に慣れてきたな。最初ナポリタンを見た時なんとも言えない顔してたが、今では普通に食べてるし。
リベはむしろ好きだとよ。
「パスタにケチャップって、最初は驚いたけど食べてみると美味しいね！あ、あと、黒井鎮守府にはちゃんと沢山チーズ置いてあるから嬉しいよー！」
あと、食事中にお茶飲むのとかも「えぇ……（困惑）」みたいな顔をする。イタリアでは食事中は水かアルコールだからな。
食後にカプチーノを飲んでいる人を見かけると、見なかったことにするそうだ。

イギリス艦。
前に気になって一度聞いてみたんだけど、君達はスコットランド人なのか北アイルランド人なのかウェールズ人なのかイングランド人なのか、と。
そしたら、ウォースパイトもアークロイヤルもジャーヴィスも頭を抱えて、「全部の記憶がある」と答えた。
恐らく、これは俺の予想だが、艦娘は艦の記憶から出来ていて、その、艦の記憶とは、乗組員の記憶である、と。
初めから、基礎的な自国の文化や歴史、料理の味を知っているのも、ある程度の学もあるのも、全部乗組員の記憶を基にしているのだろう。
しかし、当時の軍人、乗組員となると、国中から集められた人間になる。
そんな国中の人間のぼんやりとした記憶を持つ艦娘には、自分がど

こ出身なのかいまいち分かってない、と言うか気にしてない。
強いて言えば、自分が作られた造船所がある地を出身地と言う場合が多い。
まあ、つまり、イギリス艦は皆んなイギリス人、とくくって問題ないってことだ。
料理は……、七面鳥、ローストビーフ、サーモン、クリスマスプディングなどなど。
しかし、イギリス艦は全員、日本食の方が好きとのこと。
「良いかしら、Ａｄｍｉｒａｌ。イギリスに料理なんて高尚なものはないわ。あるのはただ、殺人的に不味いフィッシュ＆チップスだけよ。私はもう食生活的にイギリスに帰りたくないわ」
とウォースパイト。
好物は唐揚げ。
「この鎮守府に来て気付いたんだが、ウナギのゼリー寄せは人類の食べ物ではないな」
とアークロイヤル。
好物は肉じゃが。
「祖国には帰らないわ。あんなに料理が不味い国は信用できないもの」
とジャーヴィス。
好物はオムライス。

フランス艦。
マルシェドノエル、クリスマスマーケットにも参加して、クリスマス当日。
やっぱり家族と過ごす日。
沢山の家族と過ごせてとても幸せ、だってさ。嬉しいこと言ってくるじゃないの。
でまあ、やっぱり七面鳥。他にもシーフードやらフォアグラやら、良いものを沢山。
今回のビュッシュドノエルは自信あるぞお、と伝えたところ、とて

も楽しみ、ありがとうとのコメントをいただいた。
あとはシャンパーニュのお高いやつと生牡蠣を用意。
関係ないけどオシャレ艦の熊野や陸奥も喜んでた。

日本艦。
未だにクリスマスをよく分かってない子がいらっしゃる。
神通が神妙な顔をして、「提督、今日、さんた、なる侵入者が現れるとの噂が……」とか言ってた。笑った。
基本、和風っぽい艦娘はクリスマスがなんなのか理解してない。
「ふむ、あれだろう、神が生まれた日なのだろう？」
と長門。
「ええ？洋酒が飲める日でしょ？なんかのお祭り？」
と隼鷹。
「え？クリスマス？……なんの日なのかしら？」
と神風。
まあ、良いんじゃない？
料理は、鳳翔が張り切って作った。
和食を。
鳳翔もいまいちクリスマスを理解していない。
基本的に神様が一人と言うのがいまいちわからないらしい。
万物に神様は宿っている、とのこと。

まあ、そんな感じで、クリスマスは艦隊の皆んなと……、家族と過ごした。
……。
あ。
『兄さん、私を忘れるとは酷いな』
「ご、ごめんね花凛」
妹忘れてた……。

311話　ウォースパイトの満腹な冬の日　前編

冬の朝。
クリスマス後の一幕。
深々と降り積もる雪は、イギリスでは中々見られない光景。シラツユシスターズの子達による人工的？な雪でも、とても美しいと思うわ。
日本語では、風情がある、と言うのかしら。雪の降り積もった建物の丸いシルエットは優しげで、雪の上の足跡は何となくだけど芸術的だわ。駆逐艦や海防艦の子達が作った小さなスノーマンも愛嬌があって可愛いわね。
その隣にＡｄｍｉｒａｌの本格的な雪像を作ってあるのは、まあ、いつものことね。あの人、遊びとなると本気になるから。まあ、そこが素敵なんだけど。
そんな様子を自室の窓から見て……、ああ、もうこんな時間。
朝ご飯の時間よ。
私達、イギリス艦は、食事の時間とティータイムが本当に楽しみなの。
何せ、祖国イギリスの食事は……、不味い。
ちょっともう……、お話にならないくらい不味い。
ここ、黒井鎮守府で出される料理と比べると、家畜の餌にも劣る。
オートミールはふやかしたインコの餌、フィッシュ＆チップスは悪性の油の塊、ウナギのゼリー寄せは生ゴミ、ハギスは悪魔の作り出した兵器。
……黒井鎮守府に来る前までは、料理に必要性などなく、お腹を満たして栄養をとれれば良いと思っていた。
しかし、今は違う。
美味しい食事は毎日の生活に活力をくれる。
私達イギリス艦は、美味しい食事と、Ａｄｍｉｒａｌの為に戦うのだ。
……祖国に戻る気はもうない。あんなに食事が不味いところでは

もう生きていけないから。
アークロイヤルもジャーヴィスも、祖国から帰ってこいと言われても最早帰ることはないでしょうね。
私達はＡｄｍｉｒａｌと結ばれたの。一生側にいるわ。
どんな絆よりも強固で、何者にも引き裂かれない。
死が二人を分かつても、永遠に、ずっと、一緒。
永遠に。
永遠に。
永遠に。
うふふ。

さあ、まずは朝食の時間よ。
同室のアークロイヤルとジャーヴィスと共に食堂へ。
ジャーヴィスを起こしてあげて、身支度を整えて、アークロイヤルに車椅子を押してもらいながら、艦娘寮から出る。
途中、何人もの艦娘とすれ違い、挨拶を交わす。
……うん、皆んな笑顔。相変わらず、ここはとっても良いところね。
……食堂はかなり広く作られているから、狭いという感覚は全くないわ。
もちろん、黒井鎮守府は全面的にバリアフリーで、車椅子の私でも行き来しやすいの。
そして、掲示されているメニューを見る。
暫し悩んで、決めた。
ご飯、焼き鮭、ほうれん草のお浸し、かぶときゅうりの漬物、豆腐とわかめの味噌汁、ネギ入りだし巻き卵、それと納豆。
「うわあ、朝から重いわね……」
うるさいわねリシュリュー。貴女は？クロワッサンとジャム？ヨーグルトにフルーツ？合計１ｋｇ？足りるのかしら、そんなで。貴女戦艦でしょ？
「血糖値が上がれば良いじゃない。まあ、艦娘である以上、お腹は減りやすいから、朝からこの量を食べるんだけれども」

私は白米だけで１ｋｇ、更にお代わりするつもりよ？
「それでお昼ご飯食べれる？」
余裕ね、美味しいから。
「そ、そう、まあ、貴女が良いなら良いんじゃないかしら」
さて、朝ご飯よ。
日本昔ばなし盛りにした沢山の白米！
ふっくらで、お米特有の甘みがある。しっかり炊けていて、お米の粒がピンと立っている。
それを、脂の乗った塩焼きの鮭で一口。
ああ、美味しい……。
鮭の上質な脂の味と、お米の旨味が口の中にじんわり広がっていく。
日本の朝ご飯。
これだからやめられない。
浅漬け、されたかぶときゅうり。
仄かな塩味と野菜の甘み、苦味そして酸味。嫌なえぐみは一切なく、豊かな風味がたまらない。
また、ご飯を一口。
……うん、そう、これよ。
ほうれん草のお浸しに箸を伸ばす。
出汁、の豊かな香りが、口の中を支配する。噛めば噛むほど甘みが染み出してくる。
この香りを、味噌汁で流し込み、口内をリセット。味噌の独特の風味がたまらない。
そしてだし巻き卵。芸術的な手腕で丸められた、ネギの入った卵焼き。
簡単に箸でほぐせるくらいに柔らかなそれは、口に入れた瞬間、卵本来の味と出汁の味両方を与えてきた。更に、噛めば、ネギのシャキシャキとした食感が返ってくる。
そして、納豆。
これは曲者よ。

海外艦には苦手という子も多いわ。
でも、こうしてよく練って、醤油とからしを入れれば……。
そう、これよ、これ！
最初は敬遠していたけど、いつのまにか、この独特の風味と食感の虜になっていたわ！
って言うより、チーズと同じ発酵食品よね？何で嫌がるのかしら？
そしてご飯を食べ進めて……。
お代わり下さいな！

１２月の大出撃……。
１２月の初めに、一斉に出撃して、１２月と１月分の撃破数ノルマを一気に達成する、黒井鎮守府独特の行事。
大出撃が終わった後は、基本的には皆んな休む。
中には、休まずに訓練や出撃を繰り返す子もいるけどね。
あれかしら、日本名物ブラック企業のモノマネかしら？良くないわよそういうのは。
さて、私は、と言うと、休憩室で紅茶を飲みながら読書。
アークロイヤルも一緒よ。
ジャーヴィスは……、外に遊びに行ったわ。ふふ、元気なのは良いことよ。どうせ艦娘だし風邪をひいたりはしないでしょうけど、あまり身体を冷やさないようにね。
最近読んでいる本はこれ、重力の虹。
中々面白いわ。
……っと、そうこうしているうちに、昼食の時間。
頭を使ったからかしら、ちゃんとお腹は空いてるの。
さあ、今日のお昼は何にしましょう？
メニューを見る。
むむむ。
……よし、決めたわ。
醤油ラーメン、餃子、炒飯、エビチリ、回鍋肉！
今日は中華なのね。良いわよ、日本の中華は。

もちろんサイズは、全部日本昔ばなし！
さて、まずはエビチリから……。
……ピリ辛！
本場中華の辛過ぎな料理と違って、エビの甘みを感じ取れるくらいには辛さ控えめだわ。きっと、駆逐艦や海防艦のことを思って、辛さを控えめにしてあるのね。
そしてこの、エビのプリプリ感！歯がエビの身を噛みちぎる時の快感と言ったら、筆舌し難いわ。
次に、回鍋肉に箸を伸ばす。
ああ、もう、箸で掴んだ時点で分かるわ。これは、美味しい。
実際に食べる。
ほらね、ああ、ほら、美味しいわ。
甘辛い味付けの野菜と肉、強火で手早く炒められたそれらは、旨味を逃がすことなく凝縮されている！
歯ごたえもあって、『食べている』感触をくれる！
次にラーメンね。
……この、麺を啜る、というのは未だに慣れない子も多いけれど、私はなんか、食べているうちにできるようになっていたわ。
さて、ずるっと、黄色い麺を啜る。
……ふふ、流石はＡｄｍｉｒａｌ。今回も最高の出来ね！
私は今回、あっさり醤油ラーメンをオーダーしたわ。
他の炒め物が脂っこい中、あっさりとした昔ながらの醤油ラーメンで脂を洗い流したかったから。
予想通り、回鍋肉の脂は、あっさり醤油味に流されて胃の中へ。
さあ、次に手を出したのは餃子ね。
Ａｄｍｉｒａｌの超ペース……、一個一秒の神速で包まれた餃子。
さあ、醤油に酢、辣油を取り皿に垂らして、綺麗な焼き目にたっぷりつける。
一口で一気に食べると……！
程よいモチモチ感の皮に包まれた、ジューシーなお肉の旨味が口内を刺激する！

犯罪的……、犯罪的な美味しさよ！
そのお肉も、にんにくの香りを十分に効かせて、粗く刻まれた白菜のシャキシャキ感が最高のアクセントになる！
そして、そして、炒飯。
今回は蟹炒飯らしい。
卵、蟹、ネギ、グリーンピースだけのシンプルなもの。
だからこそ、料理人の腕の見せ所ね。
まあ……。
一口。
ほら……。
一口。
Ａｄｍｉｒａｌの料理の腕に、心配なんていらないんだけれども。
もう一口。
ああ、止まらない。
蟹の旨味が米全体に広がっていて、どんどん食べられるわ。
……ふう。
ご馳走様でした、Ａｄｍｉｒａｌ。

お昼も過ぎていくらか時間が経った頃。
この時間はティータイムよ。
イギリスから出て行ったとしても、この習慣は変わらないわ。
アークロイヤルもジャーヴィスも、この時間はティータイムって決めてるの。
たまにコンゴウとか、他の艦娘とご一緒することもあるわ。
日本でも、そう、おやつタイム？とか言うみたいね。
伝統的なイギリスのティータイムでは、スコーンなんかを食べるんだけど……、別に私達は伝統とか気にしないから。
さて、取り出したのはケーキ。
ケーキ！
ケーキよ!!
黒井鎮守府の冷蔵庫にズラッと並ぶ冷蔵庫には、沢山のケーキが詰

まっているの。
こんなにあって余らないのかって？
大丈夫よ、賞味期限が近い順から空母達が物凄い勢いで食べちゃうから。
どうしても余れば首輪付きに食べさせるんですって。
首輪付き……、黒井鎮守府に住み着いている謎の生物。
白い、白い……、猫、みたいな、犬みたいな、うさぎ、じゃなくって、狸や狐ともちょっと違う、なんか、こう、獣。
赤い首輪がチャームポイント、つぶらな瞳のもふもふした子。
正体は完全に謎だけど、皆んなから可愛がられているわ。
……本当に何の動物なのかしら？
まあ、それはそれとして、ケーキの時間よ。
切り分けられているケーキ……、色々な種類があるものを楽しむの。
同じものを食べるんじゃなくて、色々なものを楽しむのが良いわね。
ショートケーキは王道よね。
苺の酸味とクリームの甘みの調和が、口の中に幸せを齎してくれるわ。
Ａｄｍｉｒａｌ、お菓子作りがとっても上手よね。
ショートケーキはシンプルなケーキよ。
それをここまで美味しくするなんて、どれだけの練習と才能を……。
そしてアップルパイ。
林檎の爽やかな酸味とサクサクのパイ生地。
スフレチーズケーキ。
しっとりとした生地を口に含めば、チーズのマイルドな味わいが口に広がる。口どけなめらか。
ミルクレープ。
クレープ生地とクリームが折り重なった芸術品。味も芸術的な出来。クリームの味は優しく、繊細だ。

どれも素晴らしい出来……。
これに、高級な紅茶を飲んで、皆んなとお喋りしながら楽しい時間を過ごすの。
さて、次は夕食ね……。

３１２話　ウォースパイトの満腹な冬の日　後編

晩御飯の時間まで、私はゆっくりして過ごす。
英字新聞を読んだり、鎮守府の図書館から借りてきた本を読んだり、映画を見たり、編み物をしたり、各所に取り付けられた監視カメラでＡｄｍｉｒａｌのことを見守ったりして、穏やかに過ごすの。
争いのない穏やかな日々はとても良いものね。
毎日がこうなら良いのに。
そもそも、できるのであれば、私は、戦争なんて野蛮なことはしたくないの。
知性ある生き物同士が争い合うなんて馬鹿らしいでしょう？
話し合いで解決するのが、知的生命体の正しい姿よ。
その点Ａｄｍｉｒａｌは素晴らしいわ。相手が何であれ、穏便な手段を使うから。
例え、生きる価値の全くないゴミクズみたいな馬鹿が相手でも、丁重に言葉を尽くしてから、それでもどうしても駄目な時だけ、暴力を振るうの。
そう言う知的なところがとってもカッコいいと思うわ。
戦いたくない、でも、お仕事をしないのは申し訳ないし、働く時はきちんと働くわ。
深海棲艦の殆どが、人の言葉を解さない獣であるからね。
薄汚い、白痴の獣はもう、殺すしかない。
……そろそろ晩御飯ね。
今日の晩御飯は何かしら？

食堂にて。
メニューを見る前から、香ばしい醤油の香りを感じる。
今夜は鍋。
鍋、鍋！
ああ、なんて素敵な響き。
鍋なのね。

何にしようかしら……。
ああ、そうね、やっぱり、これよね。
すき焼きを下さいな！
サイズはもちろん日本昔ばなしで！
すき焼き……、そう、私を魅了してやまない和食の一つ！
この寒い季節に、熱々のタレが染み込んだ具材を食べれば、身体は内側からポカポカと温まり、たちまち元気溌剌よ！
さあ、そろそろ煮えたかしら？
メインの肉はまだよ、先ずは焼き豆腐から……。
箸で掬うように取って、生卵につける。
あーん。
んんぅ、これは……！
焼いてあることにより香ばしさを追加された豆腐は、柔らかな舌触りでほろほろと崩れていく……！
そして続いてしいたけ。
これは凄いのよ、しいたけはタレの味を存分に吸っているの。
だからこうして口に入れた瞬間、甘いタレの風味が溢れる。
そして、これを。
噛むと……！
ああ、もう！じゅわっと口の中にタレの旨味が広がる！
日本人、なんて凄いのかしら。塩っぱい物に甘い味付けを追加することで、より味に深みを持たせる、だなんて。
ただ焼いただけのイギリス料理が直線だとしたら、日本の料理は立体……。多方向の美味しさが、喜びがある！
ふう、次はえのきね。
卵につけて、と。
んん～！
コリコリ！
きのこがそれぞれ持つ独自の香りと旨味が噛めば噛むほど伝わってくる！
そしてここで春菊。

日本のハーブね。
強い……、ともすれば、人によっては嫌いかもしれない独特の匂い。
私は好きよ。
さて、ここでメインの肉ね！
生卵をたっぷりつけて……！
はむっ！
……んんー!!
甘塩っぱい味付けのタレを存分に吸った高級牛肉は、美味しい美味しい肉の脂がタレの甘みとマッチング！
肉本来の旨味と甘味が、すき焼きという料理の技法によって、更なる高みへと達している!!
ふぅ。
ここでしらたきによるインターバル……。
うん、程よくタレの味が染みていて美味しいわね。
そしてここでネギよ。
シャキシャキとした食感がたまらないわね。
匂いも強いけど、この匂いが癖になるわ。
日本人が色々なものにネギを入れるのも分かる気がするもの。
更に、この、味が染みた白菜！
シャキ、と言うよりトロッと言うか。
よく煮てある白菜は、タレを十分過ぎるほど吸っていて……！
ああ、凄く美味しい……！
どんどん食べて、そして最後は。
締めのうどん、ね。
こんなに具材の味が染み込んだスープを捨ててしまうのはもったいない、いや、むしろ神の冒涜に等しいわね。
だから、日本人は、最後の最後まで美味しく食べられる方法を考案したの。
それが、お鍋の締め。
ご飯やうどんを入れて、美味しいスープの最後の一滴まで食べ尽くす……。

とても合理的な判断ね。
さて、うどんをもらって、鍋に投入。
暫く煮込んで……。
……そろそろいいかしら？
さて、ズルッと。
うん、うん、やっぱりこれね。
うどんがタレの旨味を吸って最高の味になっているわ。
もちもちの食感を楽しみつつ……、スープも全部平らげて。
ご馳走様でした。

そろそろ夜ね。
お風呂に入りましょう。
シャワーより、どうせなら大浴場が良いわ。
黒井鎮守府の大浴場には、温泉まであるのよ。
レジャー施設も顔負けの充実っぷりね。
もちろん全面バリアフリーで、私でも入りやすい。
私は脚が不自由なんだけれど、杖をつけば少しは歩けるの。
これは、『ウォースパイトという戦艦は舵が不調だった』という謂れからくるもの。入渠しても治らない、言わば持病のようなものね。
さて、床は滑り辛くできているから、強化プラスチックの、お湯の中に入れても問題のない杖をついて、温泉に入るわ。
温泉にはもちろん、露天風呂もあるの。
ええ、景色は綺麗だし、お湯は暖かいし、最高だったわ。
そう……、お風呂も感動的な時間だったけれど、もっと素敵なのはこれからよ。
日本の習慣、晩酌の時間なのだから。
日本人はどうやら、夜にお酒を飲むらしいの。
私もそれに倣って、夜にお酒を飲みに行くことが多いわ。
もちろん、昼間に飲むこともあるけれど。
基本的に、黒井鎮守府は、やることさえやっていれば、昼間から飲んだくれて居眠りしてても誰も怒らないの。

……軍隊としての規律？まあ、良いんじゃないかしら。そもそも、私達はＡｄｍｉｒａｌの私兵だし。
専属の傭兵のようなものかしらね。
じゃあ、日本らしく、晩酌に行くわよ。
アークロイヤルも来るの？
ジャーヴィスは……、飲めない？眠いから寝る？そう、おやすみ。
ふふふ、夜は大人の時間よ。
全面的にバリアフリーな鎮守府を移動して、居酒屋鳳翔へ。
まあ、要するに酒保なんだけれども。
けど、鎮守府の内外からお客さんが来るから、居酒屋と言っても良いかもしれない。因みに、艦娘とＡｄｍｉｒａｌは完全無料。外部のお客さんからはある程度の……、相場より安めの料金を請求するらしい。でもこれは完全に店のマスターである鳳翔の趣味でやっているから、払われる金額は通貨も値段もバラバラ。
非営利目的で居酒屋をやっているとは、変な話よね。
でも、居酒屋鳳翔は、本当に広くて、お洒落なテーブルが沢山とバーカウンター、畳の間がある。
キッチンの奥には、食堂と同じく、食料庫へと通じる転移装置があるの。だから、移動の必要がないから、料理はかなりの速さで出てくるわ。
分身して料理する女将は居酒屋鳳翔の名物なのよ。
外部からの客、だけど、どうやらこれは、Ａｄｍｉｒａｌが行ったことのある世界にランダムで繋がる扉が現れるの。お客さんはそこを通ってくる、らしいわ。
Ａｄｍｉｒａｌは異世界食堂方式、って言ってたけど……、何かしらね？
まあ、そのせいで、たまにあからさまに人間じゃないお客さんが来ていたりするけど、艦娘もよく考えれば人間じゃないし、どうでも良いわよね。
それじゃあ私もオーダーしようかしら。
オーダーは決まっているわ。

串カツ盛り合わせ特大セット、枝豆、おつまみキャベツ、獅子唐のガーリック炒めを下さいな！
「はーい、ただいまー」
ホウショウがパタパタと可愛らしく動いて、注文を受ける。
「串カツ？また揚げ物か？太るぞ？」
何よアーク、艦娘はそう簡単には太らないわよ。
「と言うより、唐揚げじゃないんだな」
今日は串カツの気分なの。
確かに、唐揚げはおやつにも食事にもおつまみにもなる最強のワイルドカードよ。
でも、カードゲームはジョーカーだけじゃ成り立たないでしょう？
「ふむ、そうだな。ああ、私は焼き鳥の、つくね、もも、皮、ぼんじり、砂肝、ねぎまを四本づつ、そのうち、二本はタレ、二本は塩で頼めるかな？それと枝豆とナスと豚肉の味噌炒めとイカゲソの唐揚げを」
「はーい、お持ちしますねー」
瞬時に大ジョッキのビールが出てくる。
「こちら、お通しの小松菜と油揚げの煮浸しです。ビールは、ウォースパイトさんがエビスビール、アークロイヤルさんがキリンの一番搾りですね」
ええ。
「ああ、ありがとう」
さて、乾杯しましょう。
お通しは、と。
……うん、優しい味ね。
それでいて、これからアルコールが入ってくるんだよ、と胃に語りかけてくるような、そんな味よ。
ビールは、と。
……やっぱりエビスビールね。
この味、コク、苦味。ビールを飲んでいる、という気持ちにさせてくれるわ。
暫しアークと談笑。

そして、五分もしないうちに料理が来たわ。
まずは枝豆から。
……枝豆。
日本のおつまみの定番ね。
でも、定番になるにはそれだけの実力があるってとこよ。
どんな局面でも美味しくいただける……、それが枝豆。
そう、この塩気のある豆が美味しいのよ。
塩気のある豆、なんてありふれたもののように感じるのに、何故か、美味しい。次々と手を伸ばしてしまう。
まるで魔法ね。
獅子唐のガーリック炒め……。
これもビールに合うのよね。
獅子唐は苦い。
けど、この苦味がたまらなく、良い。
大人の味ね。これを楽しめる自分の舌に感謝しましょう。
ああ、ビールが進む。
ビールおかわりお願いします！
そしてこれ。
串カツ盛り合わせ特大セット。
計三十本の串カツの盛り合わせ。
多様多種な串に刺さった揚げ物が沢山。
ああ、どれから食べようかしら、迷うわ……。
そう、ね。
まずはここから攻めてみましょうか。
玉ねぎよ。
さあ、ソースをたっぷりつけて……、頬張る。
サクッと、衣を歯で貫いて、しんなりした仄かに甘い玉ねぎを噛みしめる。
ソースの複雑な奥深い味わいが、玉ねぎの熱と甘味を包み込む。
美味、しい！
たまらず、ビールのジョッキを傾ける。

口の中の油が洗い流され、次の準備よ。
お次は豚バラ肉、さあ、お味は……？
んん～!!
最っ高!!
豚と衣の脂がソースの酸味で中和されて、いくらでも食べられる！
また、ビール。
そしてアスパラ一本まるごと！
豪快ね、でも嫌いじゃないわ。
これは、じゃあ、塩でいってみましょうか。
塩をちょんとつけていただきます。
……ああ、至福。
アスパラらしい、野菜らしい苦味がほんのりと、そして甘み。サクサクの衣の、油で揚げてあるが故に出てくる甘味。
その二つが合わさって、とても甘いもののように感じる。
うん、塩も良いわね。
ここでまたビール。
レンコン……。
根菜類ね。
これを揚げ物にすると……。
ああ、ほらね、やっぱり美味しい！
ホクホクで、それでいて歯ごたえがあって、根菜として大地から養分を吸い上げたのであろう力強い旨味。
止まらない。
はいビール。
そして牛串！
牛串よ！
ソースをたっぷりつけて、と。
お味は……？
……ふふっ、食べる前から分かっていたわよ。
美味しい、美味しいに決まっている。
ここにきてもう語彙力の限界を感じているわ。

美味しいものを褒め称える言葉が足りない。
それだけのレパートリーを示してくれたわ。
ここでビール。
箸休めに、おつまみキャベツをつまんで……。
さあ、夜はまだ長いわよ。

食べ終えた頃にはすっかり良い時間。
そろそろ帰って寝ましょうか、アーク。
「ああ、そうだな。いやあ、休みは良い。前の鎮守府ではこんな良い思いはできなかった。Ａｄｍｉｒａｌには本当に感謝している……」
ええ、そうね。
こんな良い思いができるのも、全部Ａｄｍｉｒａｌのお陰ね。
愛しているわ、Ａｄｍｉｒａｌ。
ふふっ。

３１３話　お正月（母乳）

「おしょーがつじゃーん」

前日、カウントダウンを済ませて、お正月。

居酒屋鳳翔でどんちゃん騒ぎになっている真ん中で、正月の仕事をある程度済ませた俺が音頭をとる。

あ、もちろん、今日は居酒屋鳳翔でも客の受け入れはしない。完全に身内だけでのパーティー。

さて、マイクスイッチＯＮ。

『えー、皆さん！新年、あけましておめでとうございます！』

「「「あけましておめでとうございます!!!」」」

『今年も、黒井鎮守府一同、健やかに過ごせるように祈っております！それと！皆んな大好きだよー！愛してるー！今年もよろしくねー!!』

「「「わあああああああ!!!」」」

歓声と拍手が送られる中、マイクのスイッチを切り、酒を飲みに行く。

ああ。

今年も楽しくやっていきたいね。

録画しておいた笑ってはいけない例のアレを見つつ、皆んなで駄弁りながら酒を飲む。

アイオワが、「Ｊａｐａｎのｃｏｍｅｄｉａｎは面白いわね！特にサチコ・コシミズ」とか言ってたので、いやいやあの子アイドルだからと訂正しておく。

幸子は、笑ってはいけない例のアレに出演していた。

まあ、昔もキャストにねじ込んだことあるし。

番組の途中で幸子がガキの使いではない人達とスカイダイビングさせられるのは恒例行事だ。

ではでは、酒を飲もうか。

まあ、場は既に混沌だよね。

ほぼ全員が大ジョッキか瓶ごと。

酒も高いのばっかり。
飯も良いのばっかり。
今回の酒宴でうん千万単位の金が消し飛ぶと言えば分かるだろうか。
一本うん十万の酒をパカパカ空けるんだもんなー、そりゃ金もかかるわ。
でも本当に、黒井鎮守府は軍事施設の割には設備の維持に金がかからないから、懐へのダメージはあまりない。
なので、こういう時くらいは奮発して、良いものを飲み食いして欲しいぞ。
鎮守府の貯金は軍事施設並にあるからな。
ってか、忘れがちだけど軍事施設だしな！
国から予算は降りてないけど！
まあ、それくらいなんてこたぁねぇ。
「なあ響ィェァ!!!!」
「そうだね」
「聞いてよ響チャン！」
「何？」
「ウイスキーは響が一番美味いと個人的に思う」
「そうだね」
「白州も美味い」
「そうだね」
「……響はエッチなことに興味深々」
「そうだね」
なんてことだ、響が、何でも言うことを聞いてくれる響チャンになってしまった！
わかるーせやなーそれなー。
と言う訳で今回の酒は響！
ウイスキーは良いぞぉ、キンキンに冷やしてストレートでも、ロックでも、なんならカクテルでも美味いからな！
元々甘いものが結構好きなんで、仄かに甘い香りのウイスキーは特

に好き。
その中でも響はトップテンに入るくらいには好き。
いや、お前前にアサヒビールとかスピリッツとか言ってただろと言う意見はあるだろう。
しかし、俺は酒の種類によって求める方向性が違うのだ。
ビールならキレと喉越しだが、ウイスキーなら味わいと香りだ！
だからウイスキーはガバガバ飲まないよ、味を楽しむものだからねこれ。
……うーん、美味い。
あとはなー、バーボンも美味いぞ。バニラの香りがしてな、アルコールの甘みがな。
バーボンと言えばあの人が好きだったな。
コンバットマグナムの元殺し屋。
今何やってんのかねあの人ら。
楽しそうなことあったら連絡してねと言ってあるから、何かあれば連絡が来るだろうけど。
賢者の石の時も、カリオストロの時も、ノストラダムスの時も、楽しかったなあ。
……最近は、昔を懐かしむことが多くなった気がする。
歳をとったのか。
あるいは。
現状が退屈なのか。
×……旅をしていた頃と比べて、現状は。
×……。
×やっぱり、平穏な日々ってのは、性に合わないね。
×
×
×どうもこんばんは。
×提督のパーフェクトセクレタリー、大淀です。
×私も少しばかりお酒が入っているので、言動がちょっとおかしくなってしまうかもしれません。ご了承下さい。

さて。
私の神様である提督の今日の生活は。
朝、いつも通り早起きして、料理を。
その後は、年末年始の仕事を。
とても忙しそうで、おいたわしいです。
しかし、年賀状や暑中見舞い、お中元などのやりとりは、提督にしかできない仕事。
普段の仕事であれば幾らでも代わって差し上げますが、こればかりは……。
夜には、仕事を終わらせて、飲みに。
そして現在。
「響うまうま」
飲み続ける提督。
うふふ、提督が幸せなお気持ちでいらっしゃいますと、私まで幸せな気持ちになります。
「……んっ??」
響が美味いと絶賛する提督を見て、艦娘の方の響ちゃんが感じています。
チッ、淫乱め。
「響は美味いなあ」
「そうだね」
「こっちの響のお味はどうかなぐへへ」
「きっと美味しいよ。ほら、味見してみて」
上着をめくって、ブラをずらして、乳首を見せる響ちゃん。
こーれはちょっと許せませんねアウトです。
その時、響ちゃんを押しのけて隼鷹さんが前に。
「提督ぅ、駆逐艦の乳臭い子供おっぱいより、大人のおっきいおっぱいの方が好きだよなー？ほーら、私のおっぱいはお酒の味がするぞー！多分！」
「ポーラのおっぱいはきっとワインの味ですよぉ～」
「不肖この赤城、提督に授乳したいと思います。私、甘いものが好きな

ので、きっと、お乳も甘くて美味しいと思いますよ？」
くっ、出遅れた……！
淫乱共め、提督におっぱいを吸わせるためには手段を選ばないつもりですか!!
「え、あ、いや、成人男性が若い女の子のおっぱい吸うのはヤバイでしょ」
すると、艦娘達は、提督の目の前で胸を搾って見せました。
「工廠製の薬品で、一時的に母乳が出るように調整しました」
「はっはっは、ふざけてんの？」
因みに私も服用済みです。
副作用？そんなものを気にしていたら提督を誘惑することなんてできませんから。
基本的に、艦娘に効くレベルの強度の薬品なら、並の人間なら死にます。
白露型協力のスペシャル母乳噴出剤……、使い時は、今……！
「待って、マジで、待って？よく考えよう？新年早々何で俺が君らのおっぱいを吸うみたいな話になってんの？おかしいよね？」
「幸先が良いですね！」
「幸先が良いって言葉の意味分かってる？地獄へ真っ逆さまの間違いじゃなくて？」
「提督……、こんなことはあまり言いたくはありませんが、わがままは少し控えてもらえませんか？」
「正当な主張だよね？」
ふふふ、提督におっぱいを吸っていただけると思うと、興奮して……！
「分かった、せめてこうしよう、搾乳してこよう？母乳飲めってんならもう、飲むからさ。それで勘弁してくれない？」
「では、搾って下さい」
「……は？」
「？、提督が搾乳して下さるんですよね？」
「そんなこと一言も言ってないよね？大丈夫？耳呪われてない？」

そんなことはありませんが……？
「え？……え？俺が搾るの？」
「はい」
「やめよう？」
「いいえ」
「ＮＰＣみたいな対応もやめて！」
うーん、どうしましょう？
「もー！おっぱいなんていっつも触ってるのね！何を躊躇う必要があるの?!」
「そうだそうだー！私達はただ、提督に母乳の飲み比べをして欲しいだけだー！」
外野から野次。
「わ、分かった、分かったよ！飲むから！皆んなの母乳飲むから！」
「「「わーい!!!」」」
「く、狂ってる……」
？、海原提督、何か言いましたか？

「司令官！雷のおっぱい、美味しい？」
「う、あ、う、うん！お、お、美味しいよー！」
提督が、世界の全ての生きとし生けるものを呪うかのような沈痛な顔で言う。
ど、どうしたのでしょう？
私達の母乳に何か不備が？
「皆さーん、聞いてくださーい！母乳噴出剤の副作用が分かりました！どうやら、定期的に母乳が出るようになるそうでーす！その度に提督に搾乳してもらいましょー！」
「「「おー！」」」
それはいいですね！
「死のう」
提督が手持ちの爆薬を抱えて自爆した……?!

３１４話　冬コミ

「冬コミやぞ」
予告通り、冬コミに出る。
この前に艦娘達にやらせた自由研究をコミケで発表する。
もちろん赤字覚悟の出版だが、あいにく金はある。
前日の会議では、人殺しだの暴力沙汰だの面倒は起こさないように言いつけておいた。
問題はない、と信じたい。
頼むぞ。

会場にて。
俺は守子ちゃんに売り子を任せて、うちの艦娘達がちゃんとやれてるか見回りをすることにした。
「じゃあ、任せるよ守子ちゃん」
「はい！任せて下さい！私、コンビニでバイトしてたことあるんで、これくらいは大丈夫です！」
うんうん、守子ちゃんは頼もしいな。
常識人枠はこういう時強いよー。
え？
本は買わないのか？
いやあ、今回は良いかな、そんな暇ないし。
でもたまに掘り出し物とかあるから同人業界は本当に分からないんだよなあ。
さて、見て回ろうか。
因みに、艦娘達は皆、珍しく艤装の服で来ている。
コスプレっぽくて良いんじゃない？と提案したからだ。
普段は皆、鎧だったり狩装束だったり、はたまた私服のシャツだったりと、服装は自由にさせている。
水着姿で出撃した時は流石に舐め過ぎでは？と思ったが、その数時間後に返り血まみれで帰ってきたのを見て全てを諦めた。

そして、うちの艦娘は……。
「良いですね、何のコスプレですか？」
「うーん、艦娘のコスプレかしら」
「カンムス？漫画？アニメ？」
「史実、かしら？」
「史実？まあ良いや、写真良いっすか？」
オタクの皆さんに絡まれている艦娘達。
まあ、無害だしいいんじゃないですか？
別に写真撮られるのが嫌なら艦娘自身が断るし。断っても無理やり撮ってきたなら止めるが。
「写真？まあ、別に良いわよ、好きに撮ってもらって。慣れてるし」
「あ、ひょっとして本職はモデルとか？慣れてる感じしますもんね！」
「いえ、軍人よ」
「えぇ?!そうは見えないけど……」
早速、カメラを持った人に絡まれてる陸奥のところへ顔を出す。
「よう、陸奥、どうだ？」
「あら、提督。そこそこね。それより、写真を撮りたいって人が多いわ」
「そうか、撮らせてんの？」
「ええ、ジロジロ見られるのは慣れてるわ」
まあ、観艦式とかやっただろうしねえ。写真撮られて新聞に載ったりもしたろうし、慣れてる、のかね。
「あの、本下さい」
「ええ、五百円よ」
因みに、陸奥が出した本は写真集だ。自分の。
陸奥は正直言ってハリウッドレベルの美女なので、写真集は着々と売れている。
割といやらしい目で見られているが、陸奥は気にしていないようだ。
陸奥は自分が魅力的な女だと理解しているから、いやらしい目で見られるのは仕方ないと割り切っているそうだ。

本当に良かった、いやらしい目で見られたから殺すとか言いださなくて。
「いやらしい目で見られるのは不快だろうけど、だからって殺したりはしないようにね」
「うーん、愛宕辺りならやりかねないけれど、私はあんまり気にしてないわ。だって、虫けらに見られて怒りが湧くものかしら？」
んんーん、君の中では人間は虫けら、と。
「は、ははは、流石に虫けら扱いは酷いんじゃないかな？」
「あらあら、全ての人間がそうとは言ってないわよ？一定以上の、何かしらの技能を持つ人間には敬意を払うわ。でも、それ以外のゴミは……」
ふむ。
黒井鎮守府は実力主義だ。
弱者を、才能もなく努力もしない者を酷く蔑む傾向にある。
特に、何も知らないくせに鎮守府解体を迫る政治屋や反戦団体、バカな学生などには愛想が尽きているそうで、黒井鎮守府の皆んなは、そういうやつらを人間として見ない。
艦娘はそもそもが人間じゃないし、肉体も頭脳も人間を遥かに超えた超越種なのだ。人間を下に見るのも仕方ないのかもしれない。
昔、新しい血族を名乗る超人集団と争ったことがあるが、あんな風に人間を殺しにかかることのないように、俺が手綱を握る必要がある。
手綱を握る、かあ。犬じゃねえんだからさあ、勘弁してくれよ全くよう。
「陸奥、人間は馬鹿も多いけど良い人だっているんだ、人間そのものを嫌いにならないようにな」
「ええ、それは分かっているわ」
見回りを再開する。
「お嬢ちゃん写真良いかな？」
「セーラー服？可愛いね」

「似合ってるよ」
「は、はわわ」
おーっと？
可愛い可愛い俺の電ちゃまがロリコンニキ達に絡まれとる。
いかん、このままではオフパコされてしまう！
ん？まあでも、電が幸せならそれで良いんじゃないかな？俺に独占欲とかは別にない。
「電、モテモテだな」
「あ、あの、嬉しくは、ないです」
そうなの？
男女問わず、モテると嬉しいと思うんだけど。
「あれかな、言い寄られるならイケメンが良いってこと？」
「いえ、私は司令官さん専用なので」
んー？
「そ、そっか、嬉しいよ、ありがとね」
さて、電のＤＶＤは売れてるかな？
……おお、結構売れてる。
やはりロリ効果か。

「……で、あるからして、この民族伝承のひょうひょう虫とは、シャンであることが推測できるよね。シャンって言うのは、遥か遠くの惑星、シャッガイからやって来た鳩ほどの大きさの虫型知的生命体で……」
「……つまりこの、○○県○○市○○村の１８５６年９月に記録された大コウモリとは、ビヤーキーの事を指していると推測されます。ビヤーキーとは……」
「……要するに、この伝承に現れた神話的存在は、察するところショゴスでしょう。ここに、『Ｉ ｈｅａｒｄ ａ ｓｔｒａｎｇｅ ｓｏｕｎｄ．Ｔｅｋｅｌｉ－ｌｉ，Ｔｅｋｅｌｉ－ｌｉ．』とありますが、これは完全にショゴスの鳴き声を……」
青い顔をする人々の前で、見本の本を開いて見せながら、講釈をす

る白露型。
白露型は、各国の民族伝承に見られる神話的存在の特徴から、それの正体は何か調査して来たらしい。
フィールドワーク楽しかったってさ。
夕立はアメリカのインスマスに態々訪れて実地調査したとか言ってるし。
具体的に何を出したかって言うと、村雨が、○○県○○市○○村のひょうひょう虫と言う大きな虫が出た時、人々の気が狂うという伝承を、シャッガイという星から来た昆虫型知的生命体の仕業だと主張。
春雨が、○○村の大コウモリ伝説の正体をビヤーキーだと主張。
海風が、○○州○○町の都市伝説であるテケリリと鳴く黒い影をショゴスだと主張。ついでに魔力を込められたエルダーサインが刻まれた護符を販売。
他にも、黄衣の王についての本、ヤーナムの上位者達の考察本、ルルイエ語の入門本、簡単な呪文の本、脳科学と魔力の本、深きものどもの生態調査本などなど。
どれも発禁ものだが、こういう本が売れるのがコミケの良いところだ。
因みに、白露型の可愛い見た目でホイホイされたオタクの方々、オカルトオタクの方々はあまりの冒涜的内容に真っ青になっている。
まあでも、白露型は人の精神や脳の動きについて極めて詳しいからな。ちゃんと出す情報を絞って、精神崩壊者を出すことなく本を売っているみたいだ。
この後白露型の本がその手のオカルト愛好家にかなりの額で売れるようになるのはまた別の話。

「スケブお願いします!」
「はいはい、そこ置いといてー」
オータムクラウドこと、秋雲は大人気だ。
本もかなり売れている。
「オータムクラウド先生を撮っても良いですか?!」

「へっ？わ、私？良いけど、別に可愛くないでしょ？そうだ、今日は他の艦娘の子が来てるから、どうせ撮るなら他の子を」
俺は秋雲の肩を叩く。
「ノー、秋雲は可愛い。とても可愛い。皆んな大好き秋雲。ＯＫ？」
「ふーん、そうなの？」
「いや、僕達もオータムクラウド先生は可愛いと思いますよ？」
と、ファンに褒められる。
「もー！煽たって本は安くならないんだからねー？」
でも、そんなに嬉しそうじゃないな。
これはマジで褒められてると思ってないな？
まあ、俺は誰にでも可愛いって言うから褒められてる気がしないって感じなのかね。

よしよし、こんなもんか。
黒井鎮守府コミケ作戦は普通に成功。
良い結果を残せたと思うよ。
この調子で艦娘の社会復帰目指そうか！

３１５話　謎の義務感により正月っぽいことをやらされる悲しい男

「ふむ、そうだな。新年明けまして……、書き初めでもするか」
新年っつったら書き初めでしょー！宿題で出たよね！俺も日本にいた時は書き初めの宿題出されたぞー。
まあ、宿題をやったことは一度もないが。
勉強ってのは自分の意思でやるから身につくものであって、他人に強制されたり、一日何時間とか決めたりするのは良くないな。
まあ、それで……、あれだよ。
ここ、黒井鎮守府では、艦娘の情操教育も頑張っていきたいと思っている。
日本文化に触れることで、和の心を学ぶことが狙いだ。
「あら、良いですね」
と、鳳翔。
「俺も書こう……、どうだ！」
「世界征服……、素敵ですよ」
行書で「世界征服」と一枚。
「へー、書き初めですか。小、中学生の頃やったなあ」
と、守子ちゃん。
「守子ちゃんもなんか書いたら？」
「んー、そうですね、それじゃあ……、むむむ……、よし！」
世界平和と四文字。楷書で。
うむ、守子ちゃんは字が上手いな。
教養を感じる。
いやあ、字が綺麗な人はそれだけで良いよね。字には性格が出るだとか何だとか言うが、強ち間違ってもいない。
その証拠にほら、鳳翔の字なんてとっても綺麗だ。鳳翔も綺麗だ。
一日一善、と。
うんうん、良い文字を書く。

もう鳳翔は可愛いから生きてるだけで善行みたいなところあるのに、これ以上徳を積むのか。仏にでもなる気かな？

折角だから、艦娘達にどんどん書き初めをさせる。

基本的にフリースタイル極めてる黒井鎮守府、海外艦は母国語で書き初めを。

長い半紙を横向きに、筆記体でさらさらと。

「Ｔｈｅ ｂｅｓｔ ｌｕｃｋ ｏｆ ａｌｌ ｉｓ ｔｈｅ ｌｕｃｋ ｙｏｕ ｍａｋｅ ｆｏｒ ｙｏｕｒｓｅｌｆ．っと」

「おお、アイオワ。あー、マッカーサーか」

意味は、まあ、運は自分の手で引き寄せるもの、みたいなニュアンスかなあ。

「そうよ、この言葉は常に胸の中にあるの。運は自分の手で引き寄せてこそ、よ」

成る程なあ。

一方ドイツ艦は……、これは、ニーチェか。

「悪とは何か？弱さから生じるすべてのものである」

ふむ……、まあ、その、多分な、ニーチェは、心の弱さとか、そう言うのを伝えたかったんじゃないかな？

「そう、そうよ、弱いものが悪いの」

君のそれは選民思想だぞ、ビスマルク。

「Ｐｈ☒ｎｇｌｕｉ ｍｇｌｗ☒ｎａｆｈ Ｃｔｈｕｌｈｕ Ｒ☒ｌｙｅｈ ｗｇａｈ☒ｎａｇｌ ｆｈｔａｇｎ」

「こら時雨」

「？、何だい？」

こーれはいかんでしょ。

「いかんでしょ？」

「どうせ白露型以外は読めないよ」

「ルルイエ語は危ないだろうに」

「取り扱いさえ間違えなければ、何も危なくはないさ」

んもー。

ポーラは？「ｖｉｎｏ」。

隼鷹は？「酒」。
欲しいものを書くんじゃないよ？分かってる？
さて、あと一月っぽいことは？
餅でもつくか。
「よいしょー！」
「はい」
「よいしょー！」
「はい」
「よいしょー！」
「はい」
鳳翔とペアで餅つき。
「わー！やりたいやりたい！」
やりたいと駄々をこねたアイオワにやらせる。
「壊すなよー？」
「ＯＫ！Ｉ　ｃａｎ　ｄｏ　ｉｔ！」
まあ、流石に、力加減はできるようで、杵を破壊せずに、覚束ない手元の動きで餅をついていた。
そして、できた餅を加工する。
「お雑煮にしたんで食べてねー」
「「「わーい！」」」
生憎、うちの子のＰＶなら餅が喉に詰まっても死なない。
でも、ゆっくりよく噛んで食べろー。
……ん？
「もぐ、もぐ……」
あっるぇー？
アイツがいる。
いつの間にかいる。
正直、正月くらいはお前のような物騒なのに関わりたくないんだがー？
鳳翔から手渡されたお雑煮を食べ終えると片手を懐に入れるアイツ。

「ほらよ」
「お、おお、ありがとね」
お年玉貰った……。
開けてみると、★ヘルメスの血が。
折角なので飲む。
……速度が上がった。
まあ、こいつとは結構長い間一緒にいたしな。
魂の友って感じ。
「じゃあ、これは俺からのお年玉」
「……酒か」
こいつと俺の仲が割と良い理由として、まず、味覚が近しいというところ。
味の好みが似ているから、俺が好きなものを贈れば喜んでくれる。
「樽ごと持ってけ」
「助かる」
そう言って、アイツは、冒険に戻った。
あー羨ましい、俺も旅したい。
そう、それで、餅だが。
お雑煮、お汁粉にして消費。
海外艦に人気。
「食べたことない食感ね……」
「とてもユニーク……」
「伸びる……」
大福とか人気だった。
優しい甘さが良い、らしい。
「きな粉美味いけど何でできてんのか分からん」
「私も」
「善哉とお汁粉の違いも分からない……」
と、望月達。
「きな粉の原材料は大豆、善哉はつぶあんでお汁粉はこしあん（諸説あり）なんだよ」

「おおー、物知り」
拍手された。
さて、そうだな、あとは、新年も明けたことだし、お年玉でも渡すか。
「ほい、守子ちゃん、お年玉」
「……え？はぇ？い、いやいや！受け取れないですよ！もうそんな歳じゃありませんし！」
「まあまあ、遠慮せずに。ほんの気持ち程度しか入ってないからさ」
「そんなこと言われましても……」
「受け取ってくれなきゃ守子ちゃんの実家に彼氏ヅラして乗り込むよ？」
「悪質ッ?!!」
守子ちゃんに受け取らせる。なあに、ほんの十万円程だ。
艦娘にも渡す。
額は十万円程。
あんまりたくさん渡しても恐縮されるからな。
まあ、艦娘の月給の何分の一って額だ、受け取ってくれるだろう。
「秋月、お年玉だ」
「え、ええっ！く、下さるんですか?!」
「おう、あげちゃう」
「そ、そんな、あんなにお給金をもらっておいて、その上お年玉まで?!」
「おー、くれちゃう」
「で、ですが、断るのも失礼！つ、謹んで頂戴します!!」
秋月は、何度も頭を下げて、礼を言って去って行った。
次は鈴谷。
「……えっ、と？」
最初、一瞬、万札を渡してコンドームも渡し土下座するというドッキリを思い浮かべたが、あまりに最低な行為なので控えた。
鈴谷は見た目はギャルだが、貞淑な子だ。
その見た目に釣られて、売春行為を申し込んでくる中年もいると聞

いたが、全部毅然とした態度で追い返しているらしい。
立派だな。
「はい、鈴谷。お年玉」
「え？マジ？ありがと！」
遠慮なく受け取る鈴谷。
「あ、十万も入ってるじゃん！」
「こらこら、目の前で開けるのは失礼だぞ」
「ごめんごめん。でもでも～？十万ももらったら、お返ししなきゃな～？」
お返し？
「気にしないで良いとも」
「だーめ！お返しは～、そうだ！鈴谷の処女でどう？」
「こらっ、初めては好きな人としなさい！お金で、とかは良くないよ」
「えー？私の好きな人は提督だよー？」
「俺も鈴谷が大好きだけど、このお金は本当に、単純にお年玉だから」
「そうなの？……でも、お年玉をもらう歳かな、私達」
「まあほら、俺は君らを娘みたいに思ってるから」
「むー」
「はいはい、むくれないの」
さて、他の子にも渡して行こうか。
「曙、はい、お年玉」
「な、何よ。お金なんて別にいらないわよ」
「良いからもらっておいて、ホラホラホラホラ」
「ま、まあ、もらっておくわ。……ありがと」
ヨシ！
次、陸奥。
「お金なんかより、貴方が欲しいわ」
ヨシ！
次、羽黒。
「あ、ありがとうございます……」
ヨシ！

ヨシ！
ヨシ！
ヨシ！
……
……
……
「大体正月っぽいことはやったか」
「そう、ですね？」
守子ちゃん、なんで疑問形？
「あとはこの新年ＣＭをテレビで流させる」
「新年ＣＭって……、会社じゃあるまいし……」
「あと最後に言いたいんだけど」
「はい？」
「謎の義務感に駆られて色々やったけど、正月の楽しみ方は個人の自由なんで、うちを参考にしなくても良いよ」
「は、はあ」
完！

316話　旅人の体内

「提督、この本は中々に面白いね」
と、時雨が珍しく漫画を持ってきた。電子書籍だが。
時雨は、極めて怪しい古書物か、お堅い本、学術本、論文しか読まないイメージがあったが？
どれ、なんの本だ？
はたらく細胞？
「ああ、これは中々面白いよ、良い漫画だよね」
あー、はいはい、こういう本ね。こういうのは良いよね。楽しめるし勉強にもなるし。
「人体についてポップに学べるね、良いよ、これは。鎮守府の図書館にでも置こう。……正直、黒井鎮守府の学力レベルは低いからね、最低限度は勉強すべきだよ」
「それで？それだけじゃないだろう？何か言いたいことがあるんじゃないのか？」
「ふふふ、やっぱり分かるかい？」
血の匂いを漂わせる狩装束を翻し、手招きする時雨。
「ほら、これだよ」
「うむ、黒井鎮守府学会？」
あー？
成る程、学会の真似事をするのか。
「この前の、ええと、コミケだったかな？あれは中々楽しかったよ。人前で何かを発表するのは、色々と新たな発見があって良いものだね」
確かにな。
人前で話すことによって、新たな発見をすることも良くあるな。
「それと漫画、なんの関係が？」
「ふふふ、僕が今回研究するのはね、提督なんだ」
ほー。

全艦娘を集めて、会議室で学会を行う。

発表者は、黒井鎮守府でもＩＮＴに振ってある子……、白露型、妙高型、工廠組などだ。
そして、目玉である俺の生態及び肉体の調査結果を発表する時雨。
「では、提督の体細胞について解説を始めるよ」
プロジェクターに画像を映す。
「まず最初に、基本的な構成物質から見ていこうか」
俺の赤血球を棒で指す。
「これが、提督の赤血球。こっちが、普通の人間のもの。提督の赤血球は勾玉のような形をしているね。そして、成分的には、ヘモグロビンを常人の数倍含み、酸素や栄養素の含有量も数倍。そして特定のエネルギー……、波紋、魔力、マナ、オド、気功などに反応し、励起状態になる」
励起状態の俺の赤血球は、高速で回転して活性化する。
「この励起状態だと、エネルギーの通りが良くなり、全身にエネルギーを効率良く分配できるんだ」
へー。
「続いて、こっちが白血球。通常のものと違って角錐形だね。この白血球は、毒物やウイルスに反応して、角の部分で菌を貫くんだ」
えっ、そんなアグレッシブなの？
「この白血球は……、白血球に関わらず、多くのリンパ球が、十字架状で回転しながら菌を切り裂いたりするなど、かなり駆逐力があるね。毒物ならなんでも平気で分解するみたいだ」
そう言って、俺の血のサンプルに炭疽菌やらＨＩＶやらインフルエンザウイルスやらＴウイルスやらを注入して見せる時雨。
それを観察している電子顕微鏡の動画では、俺の血の中の白血球が回転しながら猛スピードでウイルスに接近し、貫く様子が観察される。
えっ、怖いんだけど。俺の中身そんなんなの？
「それと核実験もしたよ。提督に高濃度の放射線を当てて、反応を見たんだけど、被爆した部分が再生していったんだ」
俺が、核実験室の中で放射線を当てられているシーンが流れる。

「その、提督が、『やっぱり神様なんていなかったね』と書かれたスケッチブックを持っているが」
外野からの質問。
「それの意味は不明だよ」
と、時雨。
さて、放射線を当てられた俺。
体表面の反応を見る。
細胞に変異が見られる、と思いきや、細胞はぐにゃりと形を変えて、正常な形に戻った。
おおお、と歓声が上がる。
「と、このように、提督の肉体は、提督の意図しない変形が起こると、再生反応を起こすんだ」
成る程。
「この再生反応なんだけど、これがまた面白くてね。まず、この細胞……、暫定的に設計細胞と名付けたこの細胞が、ＤＮＡ情報から血小板に指示を出し、肉体の再生が始まるんだ」
「あの、血小板に肉体を再生させるような機能は無いと思いますが」
外野からの質問。
「もちろん無いさ、普通はね。でも、提督の肉体は違う。提督の血小板には、細胞分裂を促進したりするなど、通常の血小板にはない様々な効果があるんだ」
ここでまたおおー、と歓声が。
「実際に見てみようか。提督、申し訳ないけれど、指を一本千切ってもらって良いかな？」
「良いよ」
人差し指を千切る。
「じゃあ、ここに電子顕微鏡を置くね。……ほら、見てごらん、血小板が大量に染み出して、細胞分裂を促しているんだ」
１分ほどで指は元通りになった。
「……分かったかな？普通、爪なんかは再生しないものなんだけれど、提督のこの設計細胞は例え脳が欠損しても治すんだ」

前に実験で脳の言語野を切り離してもらったことがあるけれど、二、三分くらいはまともに話せなくなったが、その後再生して、普通に喋れるようになった。
「因みにこの設計細胞だけど、肉体から切り離されると非活性化するんだ」
「んん？じゃあ、仮に、提督を均等に真っ二つにした場合、どちらが再生するんだ？」
外野からの質問。
「うーん、それはね、分からないんだ。もしかしたら提督が二人に分裂してしまうかもしれないね」
え？マジ？怖っ。
「と、思ったんだけどね。この設計細胞は、未知の手段で他の設計細胞となんらかのやり取りをしているみたいなんだ。だから、再生し過ぎたりなどの問題は起こらないんだ。そして、一度非活性化した設計細胞は、元の肉体に戻らない限り活性化はしない」
ふーん。
「次に、臓器の構成を見てみようか。これが略図だよ」
明らかに、尋常な人とは違う臓器構成。
「これが提督の心臓の断面図なんだけど、心房が多数あるのが分かるかな？これにより、血液の循環を速くして、先程の励起赤血球を高速で循環、全身にエネルギーを行き渡せるんだ」
明らかに人のそれじゃない、大きめの心臓。
「これが肝臓。三角ではなく台形なのが分かるね。アルコールからテトロドトキシン、ストラキニーネ、ボツリヌストキシン、何でも分解するよ」
形がおかしい肝臓。
「これは胃だね。二つあるよ。食べたものに合わせて胃酸のＰＨを調整するんだ。鋼鉄を食べれば、強酸で溶かすよ」
複数ある胃。
「ここ、盲腸には、草食動物のようにセルロースを分解するバクテリアがいるみたいだね」

デカい盲腸。
「それでこれはリンカーコア。魔力を生み出す器官だね。言うまでもなく、普通の人間にはないよ」
リンカーコア。
「肺も三つあるね。理論上は一日くらいなら無酸素で運動できるみたいだ」
複数ある肺。
「他にも面白い細菌や細胞があるんだ。まずはこれ、アダム。今は非活性化しているけど、活性化すると様々な効果を発揮するんだ」
ああ、アダムか。
「これは、プラスミドと呼ばれる物質を消費して、電気や炎、冷気などの現象を起こすんだ」
まあ、火力はそこそこだけど応用が利くんで、たまに使うよね。
「こっちのジーントニックなんかも、直接遺伝子に作用する薬剤の効果だね」
そうだね、昔ちょっと色々あって服用した薬のアレだね。
「遺伝子といえばこれだよ、提督のＤＮＡ情報。こっちがヒトゲノムだね。これ、見てもらえれば分かるけど、殆ど違うんだ」
あ、本当だ。
「ヒトゲノムとの類似度はおよそ５２パーセント程だね。残りは、イヌ科、頭足類、鳥類、魚類などに見られる特徴があるよ。そのうち１５パーセントは地球上のどの生命体とも一致しない未知の遺伝情報が含まれているね」
……え？そんな違う？
「あ、あの、確かヒトゲノムとの違いについては、人とチンパンジーでも９６パーセントはＤＮＡが同じ、人と鶏でも６０パーセントは同じなんですよ？そ、それが、５２パーセント？」
外野からの質問。
「うん、５２パーセントだね」
マジかー……。

「あの、聞けば聞くほど人間じゃないんですけど……」
とまた質問。
「そうだね。でも、生殖は何故かできるみたいだから安心してほしいな」
んー。
「結局、提督って何なんですか……？」
質問。
「ふむ……、一言でまとめると地球外生命体なんだけど」
うん？
「俺は人間だよ？だって５２パーセントだよ？過半数は人間なんでしょ？じゃあ人間で良いじゃん」
「……だ、そうだよ」
いかんのか？

３１７話　あなたは神を信じますか？

「アナターハ神ヲ信ジマースカー？」
「はい」
「あら意外？この世界に神はいない！とか言うと思ったのに」
「？、神様なら目の前にいます」
「？、俺しかいないけど？」
「？、提督が神様です」
　んー？
「そ、そっかあ！」
　思考を止めた。

　そんな大淀を放置して、懺悔室を設置。
　神に懺悔しろ。
「何故懺悔室などを設置なさったのです？」
「いやほら、君達の愚痴とかなんかそう言うのを聞いてあげようと思って」
「成る程、ご厚意に感謝します」
　じゃあ、聞いていこうか。

　１：暁
　暁ちゃーん。
　暁ちゃまは何か悪いことしちゃったのかなー？
「貴女は神を信じますか？」
「え？うーん、いるんじゃないかしら？」
「ふふふ、そうだね、神様も可愛い暁のことを見守ってくれているよ」
　俺は神なんて信じていないが。
　いや、神の存在は認知しているけど、嫌い。
　正直に言って反吐が出る。
　全能だと嘯くなら、救われぬ人々を救ってみせろ、あと俺も救えと思う。

「さて、暁。今の俺は神父様。懺悔も愚痴も色々聞いちゃう。悔い改めて」
「う、うん。えっと、そのね？昨日ね、電のプリン、間違って食べちゃったの……」
あら^～。
ｋａｗａｉｉ。
「そうなのか、仲直りはできたかい？」
「うん、謝ったら許してくれたわ」
「そいつは良かった、黒井鎮守府は仲良しこよしでやっていきたいからね。ＦＦ１４みたいな雰囲気は嫌だから」
「？」
「いや、何でもないよー。そう、それで？」
「でも、悪いことをしたのは変わりないわ。ちゃんと罪滅ぼしがしたいの」
んんんー。
「暁は偉いなあ！罪滅ぼしだなんて、とても良い子だ！」
俺は罪に塗れているからなあ！
「それじゃあ、こんなのはどうかな？電に、プリンを作ってあげるんだ！」
「それは良い考えね！でも、私にできるかしら？」
「俺が手伝うからさ！」
「本当？ありがとう！」
シャオラァ！
解☆決！

２：足柄
足柄か……。
いや、足柄ってか、妙高型は割とマジで懺悔が必要。
だってあの子ら、暗殺やってるもん。
いや……、極力殺しはやって欲しくないんだけどね。
いつのまにか、アサシン教団と繋がってた。

最近、アブスターゴの幹部が次々と姿を消しているけど、原因はうちの子だからな。
全員が紫のアサシン装束に、能面をつけて現れるから、裏の業界では『楽団』と呼ばれている。
金のためではなく、どちらかと言うと自由のため戦うので始末に負えない。
「貴女は神を信じますか？」
「そんなものがいたら、この世の中はもっと良くなっているはずよ」
ふむ。
「懺悔することは？」
「無いわね」
おう？
「いや、暗殺とか」
「私は、殺すべきものしか殺さないわ」
んおお。
「殺すべきものを決める権利なんて誰にも無いよ」
「そうかもね。でも、世の中に、死ななきゃならない人間がいるのは確かなことよ」
「そりゃあ、そうだが。君達が手を下す必要なんてないだろう」
「あの教団、零細秘密結社の癖に金払いは良いのよね。それに、騎士団の連中は気に食わないし」
「気に食わないから殺すのか？」
「そうよ？真理でしょう？とどのつまり、殺人の理由は、他人に命じられたか、それともそいつが気に食わないかのどちらかじゃない？」
そう、か。
「分かった。なら、存分に殺すと良い」
「言われなくても楽しんで仕事をしているわ」

3：初雪

半ニート艦娘、初雪。
「貴女は神を信じますか？」

「え……？まあ、ガチャを引くときとかに祈ったりはするけど……」
　現代人並の宗教観か。
「引けなかった時は？」
「神を呪う」
　言うねえ。
「それじゃ、懺悔しておこうか。神は全てをお許しになる。まあ、神が許さなくても俺が許すけど」
「懺悔？……うーん？」
　少し悩むそぶりを見せる初雪。
「私は、特に悪いことしてない、かな？」
「課金額」
「いやー、お給料いっぱい出るし、ソシャゲにつぎ込んでも良いかなーって」
「……まあ、良いけどね。俺みたいにギャンブルで溶かすよりマシ……、マシか？」
　マシ、だろう。

4：雲龍

「貴女は神を信じますか？」
「おはよう、提督。……こんにちはかしら？」
　よーし、成る程。
「雲龍、神様っていると思う？」
「そんなもの、どうでも良いわ。そんなことより私とデートしてくれない？」
　相変わらず人の話を聞かねえ！
「雲龍、今俺はね、艦娘達に懺悔をしてみたらどうかと提案しているんだ。日本ではあまりポピュラーじゃないが、キリスト教圏では基本だし、何より、他人に告白することで精神の安定を」
「そう、行き先は温泉で良いわね？」
「たまには俺の話聞いてくれても良くない？」
「？、聞いてるわよ？」

どの辺が？
「混浴があるところが良いわ」
「はぁ、分かったよ。明日でどう？」
「分かったわ」

5：タシュケント
「貴女は神を信じますか？」
「それはまあ、ある程度は」
ここで言う、タシュケントのある程度は、海外基準だからな。
道徳の規範として神を信じている。
悪いことをすると、「神様が見ているよ」と叱られるのが海外だ。
「タシュケント、悪いが俺は神の存在を認知している上で、神が大嫌いだ」
「……提督のためなら、神にだって弓引くよ」
「そう、か。なんだか、嬉しいような、申し訳ないような」
「気にしないで。同志になってくれたからとか、恩があるとか、そういうの抜きにして、貴方が好きなんだ」
うー。
こんな良い子誑かしちまうとは、多少、罪悪感あるな。
「あ、ありがとね、嬉しいよ。俺もタシュケントを愛しているよ。……ところで、今の俺は神父、懺悔を聞いているんだ。何か懺悔することはあるかい？」
因みに、懺悔って言うのはあんまり正しくないんだが。告解の方が正しい、が、まあ、懺悔でも通じないことはない、よな？
「懺悔？告解のことだね。うん、そうだね……。僕はね、提督。神様に祈らなくなったんだ」
「それは、どうしてかな？」
「まだ、艦娘になる前、船だった頃はね、毎日、毎日、戦争が早く終わりますようにって祈っていたんだ。けどね、今は、皆んなびっくりするほど強いから、神様に守ってもらう必要がないんじゃないかな、って」

「ははは、そうだね、神なんていらないね」
「神様にお祈りしないなんて、不信心でしょ？」
「いや、良いんだよ。祈っても何も変わらないからね」
祈ってもギャンブルで勝てねえし、助けたい人は助けられねえし、自分の身は守れねえ。
旅先、血に塗れた戦場の最中、ヘドロに塗れたスラム、この世の地獄で、どれだけ神に祈ったことやら。
神は、祈りを聞き届けなかった。
だから俺はこの世界の神を信じることはない。

6：加賀

「貴女は神を信じますか？」
「……どうしました、急に？」
「いや、暇だったから。加賀は神様を信じてる？」
「それは、まあ。戦船ですから、ゲンを担ぐくらいはしますよ」
「そうなの。お参りとか行った？」
「はい、鹿島神宮に」
鹿島神宮と言えばタケミカヅチ。
タケミカヅチと言えば武神、航海神とも。
「殆どの艦娘は毎年鹿島神宮にお参りしています」
うん、知ってる。
「で、懺悔だけど」
「そう、ですね、一つだけ」
「聞こうか」
「……ご飯が美味しくて、つい食べ過ぎてしまいます。どうにかなりませんか？」
んー。
「その分運動すれば大丈夫！」
「分かりました、毎日の走り込みを増やしましょう」
問題解決だ！
……ん？いや、懺悔はあくまでも、神に赦しを乞うとかそう言うの

だよな？
問題の解決を図るのはどうなの？
まあ、いいか。

Ｅｘ：俺
「そういう提督は、懺悔することはないのですか？」
と、大淀。
「ないね」
と断言する俺。
「あのクソッタレなカミサマに何を詫びるってんだかね？聖書を読めば分かるだろ？神なんて碌なもんじゃねえ」
「バチが当たるかもしれませんよ？」
「当たったことねーから安心しときな」
神か、最初に罪を考え出したつまらん男さ。
そんな奴に振り回されるだなんて、俺はゴメンだね。
さて、神を信じる艦娘は半々ってところかな？
宗教なんて正直、争いの種にしかならないからな。
うちの子達は文化について寛容だから、他人の信仰についてとやかく言うことはないが。
それでも、宗教は、神は、碌なもんじゃない。
ああいうのは、話半分で聞くのが丁度いいのさ。

３１８話　軍事演習でありますの巻　前編

「合同演習？」
何で急に？
て言うかどこと？
秘書のポジションに勝手に収まっている大淀が資料を出す。
「ガマ星雲第５８番惑星宇宙侵攻軍特殊先行工作部隊の皆さんです」
ああん？
「え？軍曹殿んとこ？うわ珍しいな」
あの軍曹が自発的に演習をやろうだなんて言わないだろう。
伍長辺りに尻を蹴飛ばされたのかな？
「俺、そういう武闘派なことあんまやりたくないなあ」
「折角なので受けました」
あれれー？
責任者俺なのになー？
「闘争本能が止められませんでした」
危険人物だなあ。
「宇宙の彼方の軍人相手にどこまでやれるか、試してみたいのです」
まあ、うちの子は基本バーサーカーやしなあ。
「ええんちゃう？」
何でも言うこと聞いてくれる旅人チャン。

「って言うかさー、何でこの寒い時期に態々演習をするんでありますか？ダミダヨー！ダメダメ！」
「そうだそうだ、人と人とは戦わなくても分かり合えるはずだ！」
「そーそー！そんなんだからいつまでたってもオールドタイプなんでありますよ！今時武力で侵略とか流行らないっしょー？」
「やかましい!!!」
野次を入れる俺と軍曹殿にお怒りの言葉が。
「ギーローロー？気に食わないからって怒鳴るのはやめるでありますよ～？もういい歳なんだからさぁ？」

「そこまで歳をとった覚えはないっ！」
　赤ダルマことギロロ伍長だ。
「まあ落ち着けよ伍長。ほら、お菓子食べるか？」
「いらん!!」
　そう？
「しかし、本当に良かったんでありますか？軍事演習だけではなく、冬樹殿達まで見学の許可を……。曲がりなりにも軍事施設でありましょう？」
「ああ、良いの良いの。うち、見せて困るもんはないし。あっても見せないし」
「軍曹！凄いよ！艦娘は戦艦の幽霊みたいなものって聞いたけど、普通の人間と変わらないんだね！」
　と、冬樹君。
　……あー。
「大淀、説明が必要か？」
「そう、ですね。新入りを含めると、提督への理解度がまだ低い艦娘もいますから。一応、説明した方がよろしいかと」
「ふむ、全員、会議室に集めてくれる？」
「了解しました」

　会議室にて。
「……と、言う訳で、知り合ったのが、こちらのケロロ軍曹殿だ」
　説明をした。
　まあ、そんな話すこともないよね。
　ただ単に、ひょんなことから出会った、地球侵略を目指す異星人の五人と、それに連なる他の異星人、地球人の少年少女達。
　それだけの話だ。
　アメリカ艦がエイリアンは本当にいた！とはしゃいだくらいかな。
「やっぱりエイリアンは本当にいたのね！政府は隠していたのよ！」
　とアイオワ。
「え？いや、アメリカならＭＩＢが……、あっ」

「……Ａｄｍｉｒａｌ？ＭＩＢって何？」
「さて、それで演習だが」
「ＭＩＢって何?!えっ、何それ、やだ、怖い?!」
　いや、あの組織のことはあんまり言いふらせられないからね。
「演習は、およそ一週間かけて行う。まあ、初日は黒井鎮守府の見学、次の日から本格的に火力演習、野戦、隠密戦、電子戦、白兵戦、果ては地球侵略のシミュレーションでの対抗戦も行うつもりだ」
「「「了解」」」
「尚、戦闘訓練においては、ギャグマンガ空間形成装置を利用しての非殺傷戦闘となる。……いや、個人的には、本気出して欲しくないんだけど、怪我だけはしないようにね」
「「「はい」」」
　まあ、演習で死人なんざ馬鹿らしいからな。危険は排除。
　それで、だ。
「じゃあ、早速、これからは見学だ。民間人もいるから、見せちゃならないアレとかコレとか隠すように!それじゃ、解散!」
「「「はい!」」」
　テキパキと動き始める艦娘達を他所に、冬樹君達民間人を案内……、大淀……、いや駄目だ、鹿島、鹿島にしよう。
「鹿島、ちょっとおいで」
「はい？」
「この子達の案内頼めるかな?俺と一緒に」
「はい、構いませんよ!」
　鹿島はドＭの変態だけれども、社会に出せるくらいにはまともだし、ヤバさをある程度は隠せる。
　大淀は、話の端々から出るサイコパス味を隠せない。バレたらドン引き案件だ。
　後は……、比較的まともな子。
「香取もついてきて」
「ええ、了解です」
「あの、提督」

と、大淀。頼むからボロを出すなよ。
「ん、なんだい？」
努めてクールに返す俺。
「外に兵士が。始末しますか？」
「んっん」
それは多分、ここの桃華ちゃんとこの兵隊だね。
「手出しするな、命令だぞ、絶対だぞ！間違っても殺すなよ!!」
「了解しました」
と、小声で伝える。
危ねえよ。
うちがやべーやつらだとバレたらやべーからな。
民間人の心象って大事。
「あの、旅人さん？どうかしましたか？」
「な、ななな、なんでもないよ冬樹君!!本当になんでもない!!!さあ、黒井鎮守府を案内しようか!!軍曹殿もついてきて!!」
「はい！」
「了解であります！」

さて。
「まずここが会議室ね」
「電子化はしないのでありますか？」
と、軍曹。
「ああ、うちの子はアナログ派が多くてね。まあ、艦娘ってのは君達からすれば骨董品レベルの兵器だからね、元は。ケロン星レベルの技術力での会議室を作ることも不可能じゃないけど、皆んなが使いこなせないから、やらないのよ」
「成る程……」
「非効率的だ、近代的な機器を扱えるように訓練をすべきだろう」
と伍長。
「そうは言うけどね、うちの子はスマホすらまともに使えない子がいるのよ。あれだけ簡潔なインターフェイスでも無理ってんだから、近

代的な機器は無理なのよ」
「困らないのか？」
「別に。うちは人材に困ってないし。百人超えるんだぞ？それで、それぞれが異なる技能を持つ、と」
「ふむ、成る程な」
　納得してもらったところで、次へ。
「こっちが資料室だ」
「わあ……！オカルトの資料とかもありますか？！」
「ああ、あるとも。沢山ね。ここには、人間が見ても問題がない程度の資料しかないが」
「え？」
「ああ、いや。得てして、世の中には知るべきでないことが多いと、そう言いたいだけさ。そうだね、後で、白露型の工房に連れて行くよ。そこなら、オカルトを嫌ってほど見れるさ」
「本当ですか？！うわー、楽しみだなあ！」
　冬樹君はねえ。
　男だけど、今時見ない真っ直ぐな良い子だし、壊したりはできないな。
　見かけによらず度胸もあるしな。
　気に入った少年を壊すのはどうなん？って言う。
　あ、もちろん、ホモではないです。
「うわ……、あたし、こういう文系っぽいとこ苦手～」
「夏美さん、大丈夫です！私がついていますから！」
　ずらりと並んだ本棚とＰＣを見て、引き気味の感嘆の声を漏らす夏美ちゃん。それと小雪ちゃん。
「うーん？同性婚するならオランダがオススメだよ？あそこ、大麻も吸えるし、大らかだし」
「ど、同性婚？！しません！！」
　顔を真っ赤にして怒鳴る夏美ちゃん。
　いや、いっつも女同士でベタベタしてるからレズなのかなって。
　俺は別に同性婚が悪いとは思ってないよ？

ホモではないけど。
文化ってのは多様性を認めるところから始まるんだぞう。
「んで、こっちが……」

と、説明をして、外へ。
「さて、次は工廠だ」
「あら、提督。見学ですね？」
「うん」
明石に挨拶してと。
そして明石が、
「直接お会いするのは初めてですね、クルル曹長。こんにちは、黒井鎮守府技術担当の明石です」
「おう、よろしくなァ～。っても、ネット上じゃ結構な頻度で会ってるけどなァ。クックックッ」
曹長に挨拶を。
そうか、そういや、知り合いか、君ら。
「っていうか、工廠なんて機密の塊では？」
と、軍曹殿。
「あ、大丈夫、奥は見せないから」
奥はね、ちょっと、ね。
核とか、ね？
お見せできないものが、ね？
警備ロボットの製造ラインや、兵装の保管庫。
「黒井鎮守府の警備ロボットはこのレトロな雰囲気がたまらないでありますなぁ！」
「でしょ～？これ、デザインは俺と明石と夕張、あと妹なんだけどね、この丸っこいラインが可愛げがあって良いっしょ～？」
『女々しい左翼野郎、共産主義のろくでなし！』
「この謎のＡＩも良いでありますなぁ、趣があって！」
「さ、次は睦月型のガレージだ。武器の試射もできるぞぉ！」
と、睦月型のガレージへ。

睦月型のガレージでは、ターゲットドローン相手に武器を試射してもらった。
「どう、伍長？うちの兵器の調整は」
「フン、威力と精度は高いが、プロにしか扱えんピーキーな調整だな。しかし、女とは言え軍人なのだろう、艦娘とやらは。なら、問題ない。このレベルの兵装を扱えなければ、少数精鋭とは言えんからな」
と、銃器のプロフェッショナルである伍長にアドバイスをもらった。
うん、伍長が大丈夫ってんなら大丈夫だろう。
外部の意見を取り入れたかったのだ。
そして、白露型の工房。
「時雨」
「何かな？」
幽鬼のように工房の扉を開けて現れる時雨。
見学者達はその雰囲気にちょっと引く。
冬樹君は興味津々だが。
「この子、オカルトに興味があるみたいだから、一般人に渡しても問題ないレベルの資料用意して」
「ああ、分かったよ」
扉の奥に引っ込む時雨。
「時雨、中に入っても良いか？」
「片付けてはあるけれど……、おすすめはしないかな」
「……それでも入りたい？」
「はい！」
目をキラキラさせる冬樹君。
何だかんだで全員で入ることに。
「うっ、臭い……、何の匂い？」
夏美ちゃんが文句を言う。
「……!!、これは……!!夏美さん、私から離れないで下さい!!」
「え？何で？」

「これは、匂いの強い香水で誤魔化してますけど、生き物の血や体液の匂い、阿片、芥子、大麻などの危険な薬品の匂いです!!」
あー……、分かるか、流石に。
「時雨ー、隠そうよ、そう言うのは」
「いやあ、数時間で最低限は誤魔化したんだけどね……、勘がいい子もいるものだね」
ククッ、と喉を鳴らすように笑う時雨。
見学者は全員、ホラー映画を見るような顔。
「はい、資料だよ。オカルト、と言っても、僕の専門は魔術や秘儀を中心に、薬学、化学、ルーン、降霊術、死霊術、カバラ数秘術、占星術、呪術辺りだね。SFなら明石さんに聞いてね」
資料を手渡される。
さて。
「これ以上ここにいる場合は、精神に著しい障害を負う可能性があるけど、どうする?」
「それで、はいって言う人がこの世にいると思いますか?!」
夏美ちゃんに怒鳴られた。

３１９話　軍事演習でありますの巻　中編

さて、黒井鎮守府に新たに作った客室と言う名の離れに一晩泊まってもらって、演習の日。
少年少女達は見学。
まずは電子戦やろうか。
お互いが用意した機器をネットワークに接続して、特定のデータを取り合いする、と言う内容。
……つっても、これは俺もあんまりよく分からん。
電子戦なんて、俺は基礎しか分からない。
同人ゲームとか、ちょっとしたコンピュータウィルスとかなら作れるんだが、軍用ファイアウォールみたいな本格的なのは流石に無理だ。並のハッカー並の能力しかない。
詳しく聞けば理解はできるんだが……、明石も、曹長も、プロ中のプロだ。
多分、全員、何やってるか分からないと思う。
実際、高度過ぎてよく分からなかった。
夕張に解説してもらう。
「はい、まずですね、明石さんは艤装直結システムでコンピュータとリンクし、直接的なハッキングを行いました」
ふむ。
「艤装直結システムで直結した機器は、自分の手足のように動かせますから、それを利用して、圧倒的な演算能力でゴリ押しに走ったのです」
なるほど。
「クルル曹長は、その圧倒的な演算能力に一時押されましたが、ファイアウォールが保たないと見るや否や、ダミーデータの増殖に切り替えました。もちろん、本物のデータは巧妙に隠して」
それで？
「それで、ゴリ押しが得意な明石さんは、全ダミーデータを無理矢理に破壊しようとし始めました。力尽くで」

で？
「すると、クルル曹長はダミーデータに自己増殖機能を持たせて、更にかく乱。明石さんの方の主要データをどさくさに紛れて掻っ攫う、という話でした」
ふーん。
まあ、予想はできていたけれど、明石の負けだ。
「うーん、やっぱり無理かあ」
「クーッククク、まあ、防御力より攻撃力を重視した構成がアレだが、それなりにはやるんじゃネーノ？」
「ありがとうございます」
明石が礼をして、電子戦は終了。

次は白兵戦。
向こう側から出るのはタママ二等兵。
「あー、その、ね。うちは白兵戦は滅茶苦茶強いから、やめといた方が……」
「そんなことを言われて怖気付くボクじゃないですぅ！」
そう？
「その、じゃあ、誰とやり合う？」
「んー、そうですねぇ、ボクは兵士としては突撃兵に当たるですぅ。だから、そちら側の最も優れた突撃兵を……」
「ほう」
長門が、嗤った。
あ、やばい。
「黒井鎮守府には突撃兵に相当する艦娘が多々いるが、その中でもトップは私、長門だ」
「そーなんですか？確かにマッチョな……、肉体美ですぅ。じゃあ、長門さんにお相手してもらうですぅ！」
「やめとけ、死ぬぞ」
俺は一応警告しておく。
「大丈夫ですぅ！そう簡単にやられはしないですぅ！」

「ふはは……、では、立ち合おうか」
あーあ。
知らねえぞ俺。
観客席に透明なバリアフィールドをかけた、この前鎮守府に作ったコロッセオ的な建物へ。
「タマちゃーん、頑張ってー！」
「はいですぅ、モモッチー！」
ほのぼのと声援を受ける二等兵。
「な、長門、やり過ぎないようにな……？」
「ふふふ、勿論だとも」
本当だな？本当だな長門？
言ったからな俺は。
「では、始め！」
大淀の声に従って、真っ直ぐに駆け出す二等兵。
「やああーっ！」
飛び蹴りが長門の腹部を捉えた！
しかし！
「効かんなあ……」
長門には通用しない。
長門は素手でベンガルトラ、インドゾウ、アリゲーター、リオレウスなどを殺せる。
猛獣や竜と素手でやり合えるのだ。
「な、何て硬さですかぁ?!」
「こちらの番だ」
ぶおん、と大きな風切り音。明らかに拳を振っただけで出せる音ではない。
「受けッ、無理……、避け、ますぅ!!!」
あからさまにおかしい、ギャグで済まないスピードとパワーで繰り出されたフックは空を切る。
「ふ、ふふふ、な、中々の力を持っているじゃないですかぁ！でも、まだまだですぅ!!タママインパクト!!!」

口からビームを放つ二等兵。
「ほう！面白いな。はぁっ!!!」
気合いの篭ったパンチでビームを弾き飛ばす長門。
長門にはね、うん、効かないんだわ。
長門は物理じゃ殺せないんじゃないかな……。
「ば、馬鹿なぁ！ですぅ?!!」
「終わりか？なら」
「はっ?!」
「吹き飛べ」
「ぶへぇ!!!あーーーーれーーーーー」
「ああっ?!?!タマちゃーーーーん!!!」
「タママ二等兵ーーー!!!」
星になった……。

やはり長門はやばい。
今回がギャグ回で良かったな……。
タママ二等兵を回収して、次へ。
「機動戦だ、機動歩兵はいるか？」
ギロロ伍長がお相手してくれるそうだ。
「ここは私が出よう」
菊月、か。
9の数字を持つもの。
デストロイナンバー。
黒井鎮守府最強の一角。
機動戦なら彼女だろう。
「では、始め！」
大淀の号令とともに飛翔する二人。
ギロロ伍長が羽型のバックパックでふわりと飛行するのに対して、菊月はカァオとかっ飛ぶのが特徴的だ。
「成る程、速いな」
伍長が武装を異空間からロードする。

菊月の速度を見て、エネルギー兵器を選択したようだ。
「しかし、速いだけでは！」
ビームライフルを構え、斉射。
「エネルギー兵器か。やはり、異星人ともなるとエネルギー兵器の方が発展するものなのか？」
対する菊月は、クイックブーストで残像を残しながら回避、同時に、両手のアサルトライフルを放つ。
「正確な照準だな……、この女、できるっ……！」
菊月のアサルトライフルの火線に当たらないよう、身体を捻りつつ回避運動をとる伍長。
しかし、伍長の頬に弾丸が掠る。
「何？読み違えただと……？いや、違う！そうか、右の銃と左の銃で弾速が微妙に異なるのか！」
「正解だ！」
超時空要塞的な機動で空を駆ける二人が銃を撃ち合う。
「ちぃっ！だが甘い！」
ここで、思い切り前に出る伍長。
「接近戦はどうだ?!!」
「浅はかな！」
ビームサーベルを抜く伍長に対して、レーザーブレードを喚ぶ菊月。
「そこだ!!」
ビームサーベルを回避して、レーザーブレードを振り抜いた。
「ぐおっ！」
回避し損ねて、片手のビームサーベルを弾かれる伍長。
「隙ありだ！」
しかし、後ろに退がりつつ、もう片方の手のビームライフルで、レーザーブレードを振り抜いた菊月を狙う。
「やったか?!」
「……無駄だ」
「バリアフィールド、だと?!」

「これはプライマルアーマー……。そしてこれが!!」
「何を……?!くっ!!」
「アサルトアーマーだ!!!」
「う、おおお!!」
　咄嗟に離れる伍長。
「く、っ、うう……、バリアフィールドのエネルギーを攻撃に転用したのか……。だが、今ならバリアは張れないだろう！」
　そう言ってバズーカをぶっ放す伍長。弾は散弾だ。通常弾頭だと、超高速移動で回避されると踏んで、面制圧を選択したのだろう。流石はプロだ、咄嗟の判断力に優れるな。
「むっ……！ならば、これで!!」
　二段クイックブーストで回避した菊月は、バックパックからミサイルを放つ。
「その程度!!……何っ?!!」
　迎撃しようとビームライフルを向けた伍長だったが、その瞬間に空中でミサイルが分裂。放射状に分かれたミサイルの迎撃は極めて難しいだろう。
「くっ……！」
　回避に専念する伍長。劣勢だな。
「舐めるなよペコポン人!!」
　肩部ミサイルランチャー、脚部グレネードランチャー召喚、射撃。
「ふん」
　菊月は、その全てを難なく迎撃。
　しかし、爆炎と煙で視界が塞がれる。
「そこだ!!」
「読めている！視界を塞いで一撃を入れるつもりだろう?!しかし私にはプライマルアーマーが」
「理解している。故に、使うのはこれだ」
「スナイパーライフル……！」
　確かに、それなら、菊月のプライマルアーマーを貫通できる！
「しかしっ！馬鹿正直に当たると思うかっ!!」

「当てる、当ててみせる!!」
「やってみせろ!!オーバードブースト起動!!」
超高速移動する菊月に、伍長は。
「……そこだぁーーー!!!」
何と、見事に、菊月の肩に当てたのだった。
「そこま……、あっ」
「すまん止まれん」
「なっ、ぐっはあ?!!」
菊月が伍長と衝突、そして墜落。
ふむ……、勝負としては、しっかりと一撃当てた伍長の勝ちだが、艦娘は脳味噌吹っ飛ばされたりでもしない限り死なないし、丈夫だ。
殺し合いなら、勝敗は分からなかった、ってところか。
「さあ、今日のところはこれで終わりだ。晩飯まで好きに過ごしてくれ」
さて、明日はどうなる?

３２０話　軍事演習でありますの巻　後編

隠密戦のスペシャリスト同士が対決をする。
「あ、ドロロ兵長いたんだ」
「酷いでござる、旅人殿?!」
「ジョーダンよ、ジョーダン。……んー、うち、直接戦闘なら、兵長に匹敵するレベルの子何人かいるけど、今回は隠密戦ってことなんで」
「そちら側にもアサシンと呼ばれる艦娘がいる、とか?」
「いるけど……」
兵長は馬鹿みたいに強いからなぁ。
まあ、ウチの子なら……、足柄、か?
直接戦闘も暗殺もバランスよくできるし。どちらかと言えば直接戦闘の方が得意か。あと、小手先の技術。
暗殺という一点なら羽黒、バランス型なのが妙高、フリーランが一番得意で技量が高いのが那智。
「じゃあ、足柄、頑張ってな。見た目に反して宇宙規模レベルで強いから、胸を借りるくらいの気持ちでｉｋｅａ」
「ええ、分かったわ」
「それでは、始め!」
はい、フィールドは裏山。
十分に離れた距離から開始。
「そいやっ!」
木々の間を駆け巡る兵長。あー、やっぱ速え、素の俺よりいくらか速いってとこか?相当だな。
一方、フリーランで森の中を飛ぶように駆ける足柄。
妙高型のフリーラン……、パルクールの腕は凄まじく、ほんの1センチに満たない小さな出っ張りさえあれば、キロメートル単位で登れるし、平地で走らせても人類よりずっと速いスピードで動く。
まあしかし、スピード的には兵長の方が速いな。
だが、相手を捕捉したのは足柄の方が早かった。
足柄の鷹の目が兵長を捉えたのだ。

奇襲をかける足柄。
「むっ?!殺気?!」
兵長は辺りを見回す。
「……成る程。殺気というものは、中々に隠しきれないものでござる。敢えて殺気を振りまくことで、位置を悟らせないとは」
と、感心した様に呟く。
「死ね」
兵長の頭上から舞い降り、アサシンブレードと呼ばれる手首の隠し剣で脳天を狙う。
「甘い！」
だが、超反応でこれを完璧に防ぐ兵長。おお、スゲー、俺なら掠ってるぞあれ。
「奇襲の前に、場の殺気が揺らいだでござる……。流石に気付くでござるよ」
「あら、残念」
失敗と悟るや否や、即座に離脱し、更なる奇襲を狙う足柄に、兵長は追いつく。
「御免！」
「フン……」
兵長の小太刀の一撃を手甲で弾くと、その場に置く様に爆弾を投げる足柄。
「くっ！」
爆弾を弾き飛ばす兵長は、それで一手失う。
その隙に、大円月刀を大きく振りかぶる足柄。
足柄は暗殺者の割には強いパワー、腕力を持ち、重量武器で力を溜めて振り抜く一撃はガードや防具ごと敵を叩き潰す。
「はあっ!!!」
「ぐ、うっ！」
軽く吹っ飛ばされる兵長。
小太刀で上手く受けたが、力の全てを受け流すことはできなかったようだ。

「がああああァ!!!」
猛烈に攻める足柄。
基本的に脳筋。防具を着込んでいる相手も、死ぬまで殴れば死ぬでしょと言わんばかりにパワーでゴリ押すので怖い。
人間は愚か、異星人であるケロン人やその他知的生命体を遥かに超えた膂力から放たれる連撃は、一撃一撃が致死。
「くっ、はっ!やっ、とっ!」
しかし、兵長とてプロ。更に、このような、人外の存在との戦いの経験も十分。自らの腕力を大きく超えた一撃を避け、いなす技量がある。
「そこっ!」
隙を見つけて連撃の合間に一撃を入れるが、
「駄目ね」
それはもちろん、罠だ。
足柄のスタイルは丁重なゴリ押し。
豪胆かつ、狡猾。
足柄がその気になれば、数分間は無酸素運動が可能だ。つまり、何を意味するかというと、数分間の間、一撃で戦車の装甲板を引き裂くような攻撃を、途切れさせることなく続けられるのだ。
足柄を、艦娘を相手にする場合、人の形をした戦略兵器だと念頭に置く必要がある。
しかし、初見の兵長にそんなことが分かる訳もなく、まんまと腕を掴まれ……。
「爆ぜろ」
「投げッ……?!」
地面に叩きつけられた。
「ぐっ、危なかったでござる、ギリギリで受け身がとれたでござるよ……」
「あら、やるじゃない」
あー、その、ね。
兵長も、ただの兵隊さんじゃない。

ケロン軍の特殊部隊、「アサシン」のトップだった男だ。
この兵長も、並ではないということだ。
「ドロロ忍法！流星斬り！」
兵長は、投げられて離れた分、遠距離攻撃をしようと斬撃波を飛ばす。
「脆いわね」
しかし、その斬撃波を素手で砕く足柄。ッヒュー、怖ーい。
「な、なんと！ならばっ!!」
分身して多方向から攻める兵長。
「あー……、これはちょっと、アレね」
「覚悟!!」
「切り札を切らなきゃねえ？」
「な、何っ?!!」
艤装召喚。
剣を抜くと、稲光が迸る。
エデンの剣……、超古代文明の遺産。
雷が轟き、空間を焼く。
足柄ほどの使い手に、電撃を放つ剣。
正に、鬼に金棒である。
「何でござるか、それは!!」
「さあ？提督からの貰い物よ」
「くっ、アサシンマジック！鑑定眼力！……古代文明の秘宝、群衆の支配?!そ、それは、人の持つべきものでは」
「五月蝿いわね……、所詮道具よ。どう使おうが私の勝手じゃない」
足柄は基本的に難しいことは最低限しか考えない。
「ならば!!変異抜刀！ドロロ斬りっ!!!」
「なっ?!突っ込んで来る?!!くっ、お、あああ!!!」
さて、勝負の行方は……?!
「……はぁ。負けたわ。降参よ」
「ふぅ……、いや、拙者も危なかったでござるよ」
軽く肩に火傷をした兵長と、首元に刃を突きつけられた足柄。

うーん、流石に。
勝てなかったか。
……しかしまあ、足柄も手を抜いていたところはある。
もちろん、兵長も奥の手である鬼式などは使っていない。
双方、「アサシン」故に、力の底は見せない、ということかね。

最後に競うのは。
「俺？」
「我輩でありますか？」
地球侵略シミュレーターによる、侵略速度の競い合い、だそうだ。
「まあ、良いけど。じゃあ、やる？」
「負けないでありますよー、旅人殿！」
「フゥン、大淀、デュエル開始の宣言をしろ」
「デュエル開始ィッ!!!」
さて、始まりました、地球侵略シミュレーション。
俺は、初期に用意された資金で、テロ組織に資金を横流ししつつも、ＰＭＣを結成し、テロの鎮圧を図る。
「むむむ……、まずはこう！」
軍曹は何故かバン○イに投資してガンプラ工場を作らせた。
何やってんの？
「ケロロ……！貴様というやつは!!」
伍長がブチ切れる。
「ケーロケロケロ！見ておくでありますよ赤ダルマ君！」
俺はテロ組織を裏から操り、ついには核ミサイルの発射までやらせた。
「あ、あるぇー？お、おかしいでありますな？ガンプラで世界征服するはずが?!」
軍曹が苦戦しているうちに、マッチポンプにより、自ら組織運営した核ミサイル所有の最悪のテロ組織を滅ぼし、治安維持の名目で各国に兵を展開。
核ミサイルで荒廃した各国は、うちの兵士を借りる他選択肢はな

かった。
　そのまま、各国の主要部に食い込んで行き……。
「征服完了、と」
「ゲ、ゲーロー?!ば、馬鹿なっ！我輩のガンプラで世界を盛り上げよう作戦が敗れた、だと……?!」
　俺は征服完了。三年と少しかかった。
　軍曹は五年かけたが全く侵略できなかった。

　最後は火力演習やったんだが、これは、まあ、良いだろう。
　お互いに機動兵器出し合ってデータとった、とだけ。
　スパロボ感。
　終わりに、宴会。
　その後、次の日に反省会という流れ。
　宴会では、普通に飲みまくって、反省会では、戦った子達がこれからも精進すると約束した。
「軍曹、うちの子に上には上がいると良い経験を積ませることができたよ。ありがとう」
「なんのなんの！我輩達も色々とデータがとれたでありますし！感謝感激であります！」
　と、お互いに握手して。
「では、また！」
　また会おう、軍曹。

３２１話　漫画家に会いに行こうッ!!

『やあ、旅人君』
「ああ、露伴先生。久しぶり。何？」
『君、最近、色々とやっているらしいそうじゃあないか……』
「そりゃあ、提督やってるけど」
『単刀直入に言おう。取材がしたい』
「……いや、軍事機密とかあるんで」
『ああ、もちろん、もちろんだが、手に入れた情報を言いふらしたりはしないと、『約束』しよう。僕は約束は守る方だ』
「……見られると困るんだけど？」
『責任は僕がとるとも、気にしないで君はウチまで来てくれ。ああ、そうだ。艦娘、ってのも見てみたいなあ、二、三人連れて来てくれ。それじゃ』
「あっちょっ……、切れた」
……はー、しゃあねえ。
観光も兼ねて、行きますか。
Ｍ県Ｓ市、杜王町に。

さて、艦娘を連れて来いとのことだったが。
十中八九、「本にされる」ので、俺以外の男に触られてもプッツンしない子を連れて行くべきだ。
由花子ちゃんみたいにプッツンする子が多いからなあ、ウチは。
人殺しや違法行為も何とも思わないし。
まず……、駄目なのは大淀、雲龍、春雨、陸奥、愛宕、大和、潮、羽黒、神通、榛名……、ん？んんん？大半駄目だぞこれ？
あー、えっと、まともな子、いや、この際まともじゃなくてもいいからサイコパス味隠せる子……。
ん、む、あ、足柄？は比較的まとも、か？急に殺したりはしないし……、後、時雨、は自分のサイコパス味隠せる子だし。それとあきつ丸も良い方だな。

俺以外の男に触れられたから即座に殺しにかかるようなことはしない、だろう。
と言う訳で三人にはあらかじめ声をかけておいた。
「さあ、行こうか」
「「はい」」
まあ、この三人なら大丈夫だろう。
ついでに、杜王町の名所を回って一泊二日。
ちょっとした出張ですだよ。

杜王グランドホテルに荷物を預けて、そのまま町へ。
「いやあ、M県は良いな、飯も美味いし」
特産品の牛タンの味噌漬けが美味いんだよなー。
「？、宮城県仙台市よね？」
「いや、明記はされてないからそこんとこはボカす」
「そ、そうなの？」
足柄、大人の事情だ。
「それで、具体的には何をするんだい？僕は、本にされるとしか聞いていないんだけれども」
「そのまんまの意味よ」
「ふむ……？」
顎に手を当てる時雨。
「まあ、死んだりはしないから安心して。……まだ時間あるし、ちょっと観光して、飯食ってから行くよ」
「まあ、自分達は、全て提督殿にお任せするであります」
と、あきつ丸。
そうかい。

観光、って訳だが……、観光地ではない杜王町。
うーん、そうだなあ。
「あっ、そうだ、ほら、この岩」
「何それ？何だか、人の顔みたいね」

微妙な顔をする足柄。
「これね、アンジェロ岩って言うの」
「アンジェロ岩ァ～？何よぉ、それ～？」
む、足柄はお気に召さないか。
「は、はははは！何だい、それは！何だい、提督！」
おや、時雨には受けた。
「どうやったんだい、これ？人と岩をこねくり回すだなんて、面白い発想だね！いや、この発想はなかったよ！凄く面白いじゃあないか！」
オリジナル笑顔の時雨。時雨はまあ、人体実験とかやってるし、そういうエグい話が大好きだ。
「ふむ……、人体を岩と合成したと？何故？」
あきつ丸が尋ねてくる。
「ああ、こいつね、アンジェロっつーんだけど、犯罪者なんだよね、死刑相当の。とあるスタンド使いの怒りを買って、結果的にこうなった」
「全然分からないでありますな……」
「だからその、スタンド使いだよ」
「？」
ああ、そこからか？
「スタンド……、精神力のビジョンのようなものだ。まあ、一種の超能力だな。これをやったスタンド使いは、触れたものを治す能力を持っている」
「成る程、面白いでありますな」
「ふふふ、良いなあ、面白いなあ。そういう貴重な素体で実験してみたいものだね」
時雨は、スマホで写真を撮り、脳内の瞳を使って軽く検査すると、メモ帳にメモを書いていた。
後は、この近くなら……、鉄塔。スーパーフライか。
「ほら時雨、あれ見てみ？」
「どれどれ……、へえ！こっちも面白いね！呪いかな？」

「いや、あそこに人がいるだろ？あの人のスタンドだ」
「これは……、成る程、同化しているのか！その上、あれは……、僕の見立てだと、攻撃を反射、するような？」
「ああ、そうそう。あの鉄塔は、自身への攻撃を反射するようになっているよ」
「ふむ……、スタンドとは、精神エネルギーのヴィジョンだと聞いているけれど、あれ、本人に制御できていないんじゃないかな？」
「あー、そうみたいね。色んなスタンドがあるから」
　俺が見たものの中では、船になるスタンド、戦闘機のスタンド、鮫のスタンドとか、人型かどうかとか関わらず、色んなのがあるな。
「それは面白いね、ぜひ見て見たかったよ」
「そうだねえ、これから会いに行く露伴先生もスタンド使いだから、見せてもらえるよ」
　スタンドってのは、波紋とかの精神や自然のエネルギーを使える人間には見えるものみたいだからな。魔術を使える時雨なら見えるかもな。
「え？つまりどういうことよ？あそこの鉄塔にいる人は何なの？」
　足柄が首を傾げる。
「ああ、あれ？あの人、あそこに住んでるの」
「はぁ?!住んでるって……？どう見たって廃棄された電波塔じゃない?!」
「いや、あれね、本人のスタンド能力で、あそこに縛り付けられてるの。鉄塔から出れないの」
「何それ、呪い？」

「さて、飯にしよう。スゲー美味い店に予約しておいた」
「……イタリアンレストラン『トラサルディー』……、ここ？」
　ああ、そうとも。
　めっっっちゃくちゃ美味い。
　隠れた名店だ。
「うーん、イタリアンなら、提督の方が上手いんじゃあないのぉ～？」

「いや、ここには勝てない。無理」
「そんなに？」
「それだけの価値はある」
「ふーん……。あれ？メニューは？」
「ああ、ここの店主は、客が一番食べたいものを出すから」
「おまかせ、って訳ね。相当自信があるってことかしら」
「いや本当に……、それだけ美味いんだよ。あ、後、時雨」
「何だい？」
「ここの店主もスタンド使いだけど、攻撃の意思はないから、暴力は振るうなよ？」
「へえ、そうなんだ。料理に作用するスタンド、ということかな？」
「まあ、そんな感じ。さて、と……、トニオさーん、旅人ですー」
「いらっしゃいマセ、旅人サン……。食前酒は『いつもの』ですね？」
「そうそう、よろしく」

「ウンまああ～いっ!!!」
「凄っ、何これ、美味しい!!」
「おや、本当に美味しいね」
「おお！素晴らしい味であります!!」

さて、腹も膨れたところで。
「露伴先生ー、来たよー」
「来たか……！」
この、面白いセンスのヘアバンドの男。
漫画家、岸辺露伴さんである。
クッソ気難しい上に変人なので、相手するのに苦労するが、俺を、
「世界で一番価値のある資料」として、よく呼びつける。
「こちら、艦娘の、『足柄』、『時雨』、『あきつ丸』」
「ふむ、彼女達が、艦娘か……」
スタンドを出す露伴先生。
あっ、この野郎。

『ヘブンズ・ドアー!!!』
だけどまあ。
「馬鹿なっ！『三人とも消えた』ッ?!」
「露伴先生、後ろ見てみ？」
「『後ろ』だと？」
ヘブンズ・ドアーに触れられる前に即座に反応し、視界外へ移動したのだ。
ウチの艦娘はそれくらい平気でやる。
「……なんてことだ！あの一瞬で僕の背後へ？」
「それくらいはやれるよ、ウチの子は」
「はは……、ははは！凄いじゃないか！これは内容にも『期待』できそうだ！」

そのまま部屋の中に案内された。
「さあ、旅人君。まずは君からだ。『ヘブンズ・ドアー!!!』」
すると、俺の肉体はばらけて、本になる。
「て、提督?!大丈夫なのそれ?!……いや、大丈夫ね、この前自爆した時なんてほぼ肉片から再生したものね」
足柄が胸をなで下ろす。
「ふむふむ……?、『艦娘はセクハラされたがっている』?、最低だな君は。『深海棲艦』、おお、これが……。『働きたくない』、働け。『幻想郷で旅行』?、これは凄い！こんなところがあるのか!!」
いやん、見らちゃった。
「ふむ、では……、次は足柄さん。取材に協力してくれないか？」
「まあ、良いけど……、スリーサイズとかは見ちゃ嫌よ？」
「もちろん、そういう情報には極力触れないと約束するよ。それじゃ、『ヘブンズ・ドアー!!』」
足柄の手が本になる。
「『アサシン教団』、『暗殺計画』、『国外逃亡の段取り』……!!!素晴らしい！現役の暗殺者の資料が見れるだなんて!!」
「あっ、そういやそうだ。露伴先生、これ、絶対に誰にもバラしちゃ駄

目よ？知っていると知られた時点で命を狙われるから」
「もちろん、情報を得る立場として、その価値や危険性は分かっているさ」
　興奮した様子で読み進める露伴先生。
「次は時雨君だ。良いかな？『ヘブンズ・ドアー!!』」
　時雨、本になる。
「『秘儀』、『魔術』、『上位者』、『啓蒙』、『外なる神』……!!時雨君は、『魔法使い』かっ!!良いぞ……、素晴らしい資料だ……!!このグロテスクな地球外生命体のデザインは、僕の漫画で活きる！参考になるじゃあないか!!」
「あまり見過ぎると気が触れるよ」
「……確かにそうだ。言われて気づいたが、『冷や汗』をビッショリとかいていたッ!!『邪神の記録』！知り得るにはあまり連続して見てはいけないな」
　軽く深呼吸して、精神を安定させる露伴先生。
「では、次だ。あきつ丸さん、よろしく頼むよ。『ヘブンズ・ドアー!!』」
　あきつ丸も本にされる。
「『間合い』、『龍狩り』、『大ふへん者』、『穀蔵院一刀流』……。成る程、武術の達人、ってやつか！これも良いな。『他の艦娘との戦闘データ』まである！」
……
……
……
　露伴先生は、本にした艦娘達をある程度読むと、人数分のサイン色紙を渡してくれた。
　時刻は夜中だ。
「素晴らしい資料だった。これを元に、読み切りを何本か書こうと思っている……。それじゃあ、これから早速仕事だ。帰ってくれ」
　呼びつけておいて、事が終われば帰れとは。
　まあ、帰るけどさ。
「で、どうだった？」

「「提督（殿）と一緒ならどこでも楽しい（であります）」」
そう。
まあ、楽しめたなら良いんじゃない？
今日はもう遅いし、一泊してから帰るか。
杜王町、いい町だ。
殺人鬼もいなくなったしな。

３２２話　死の楽団

ここは地下室。妙高型の拠点だ。
私達、妙高型が支持する、アサシン教団の旗がかけられた一室。
ホワイトボードに男の写真を貼り付けて、妙高姉さんが口を開く。
「ターゲットはこの男。カーチック・ゴドフリー。４６歳、アメリカ人。アブスターゴの幹部よ。例によって、裏から世界を支配しようと暗躍しているの。つまり、提督の敵ね。質問は？」
質問は？と問われれば、当然、ある。
私は、手を上げて尋ねた。
「はい、那智」
「ターゲットの位置、警備は？」
「ネバダ州で休暇中、らしいわ。いつもの、警備員満載のビルに突撃って訳じゃないから、その分楽かしら？」
若干雑な説明だが、正直に言って、警備状況がはっきり分かることなどまずない。
そもそも、警備状況が丸裸になるならば、最初から依頼なんてこない。
依頼主であるアサシン教団も暗殺者の団体。殺せるならばとっくに殺している。我ら妙高型に来る依頼は、どれも、警備が厳重過ぎてまともに暗殺できないようなものばかりだ。
まあ、これも、まともな人間ならば、という次元での話。艦娘である私達には特に問題はない。
「はーい」
足柄が元気よく挙手。
「はい、足柄」
「逃走経路は？」
「今回も、教団が用意した足を使います。陸路で一日移動した後は、飛行機で帰国しますから、偽造パスポートを無くさないように！特に足柄！」
「あ、あはは、はーい」

足柄はパスポートを失くして、一人だけ別ルートで帰ったことがある。
この手の仕事でミスは許されないというのに、全く。
「あ、あの」
「はい、羽黒」
「ど、毒物の制限は？」
「ネバダ州の真ん中よ？拡散性がある毒は駄目、極力小規模のものにしてね」
「わ、分かりました」
その後もいくつか質問を重ねて、準備ができたところで。
「それじゃあ、行きましょう」
空路で、ネバダ州へ。

ネバダ州ラスベガス。
艦娘としても、暗殺者としても縁がない土地だ。
実際、今回来るのも初めてのことだ。
だがまあ、どうとでもなるだろう。
ターゲットがいるのはこのカジノらしい。
いつもの、フード付きコートを着込んで、カジノ内に入店。
ターゲットは……、いた。
二階の吹き抜けのすぐ側。
……ん？
「成る程」
『レディースアンドジェントルメン！本日は、この、カーチック・ゴドフリーの主催するショーにようこそおいで下さいました！』
罠、か。
その瞬間、カジノのドアや窓が締め切られる。
そして現れる大量の警備員、そして、サイボーグ。ほう、月光……、アームズ・テック・セキュリティ社製の無人二足歩行兵器のことだ、まで導入してきたか。
『楽団め、やり過ぎたんだ、貴様らは。今日こそ終わりにしてやる！死

ね！』
楽団、とは、私達の業界での呼び名だ。
能面で活動しているうちにそう呼ばれるようになった。
ふむ、にしても、どうやら本気で潰しにきたらしいな。
第一陣、警備員、小銃で武装。
ふむふむ。
「いやはや、侮られたものだ」
笑える話だ。
この程度で、私達が殺せるとでも？
艤装召喚、アルタイルの剣。
無論、伝説と謳われたアサシン、アルタイルの剣の本物ではなく、レプリカであり、艦娘用に作られた超硬合金製の両刃剣だが。
「シィイ!!!」
『速っ……!!?』
一太刀で首を斬り飛ばす。
私は無駄に痛めつけるようなことはしない。
一瞬で殺してやるぞ。
「それっ」
『ぺぁ』『ぶがっ』『げはっ』
大円月刀を振るい、一息に数人をまとめて吹き飛ばす足柄。
『くそ、くそおおお!!!死ねえええ!!!』
足柄は小銃で撃たれるが、避けない。それくらいじゃ私達は死なないし、大してダメージもないからだ。
『う、嘘だろ、マシンガンを食らってピンピンしていやがる!!?』
「やったわね？」
『う、う、うわあああ!!化け物おおお!!!』
「あら、失礼しちゃう。えいっ」
『があっ』
蹴りの一発で、首から上が柘榴のように弾けた。
全く、足柄め、殺し方が汚いな。
私のようにスマートにできんのか。

ほら、妙高姉さんのようにしても良いぞ。
『死ねえええ!!!』
「ふっ」
二本のピストルソードで小銃の弾丸を弾く。
単純に、小銃より私達の方が速いのと、それを成すほどに剣が丈夫なのがある。まあ、弾丸が当たっても死なないんだが。
『ヒッ、あ、弾切れ、が、あぁ』
「死になさい」
さくり、と。
心臓を貫いて、殺す。
首を断ち、頭蓋を割って、殺す。
流れ作業のように手早く殺す。
やはり、妙高姉さんは一流だな。
羽黒も負けていないぞ。
『お、おい、おかしい、何かがおかしい。そう、そうだ、四人いたはずだよな、三人しかいねえ、ぞ……？がはっ』
『何だ、どうし……、げへぁ』
気配を完全に消して、指揮官を殺して回っている。
暗殺という一点においては黒井鎮守府最高の腕前だからな。
さて、そろそろ第二陣が来るか。
第二陣は、サイボーグか。
『死ねえ!!!』
まあ、人間よりはマシだが。
それでも。
「甘いな」
要は、私達にとって、斬るものがちょっと変わっただけなのだ。
血と肉ではなく、カーボンと人工筋肉の塊と言うだけ。
とどのつまり、斬れるのであれば、相手が何でも構わないのだ。
「貴様が死ね」
どんどん、首を斬り落としていく。
「なんだ、サイボーグも大したことはないな」

さっきの焼き増しだ。
足柄は素手でサイボーグを投げ飛ばし、大円月刀でボディを斬り飛ばして殺す。
妙高姉さんも二刀流で手早く首を斬り落として、舞う。
羽黒もこっそりと殺す。
さて、最後に第三陣。
月光などの無人兵器だ。
まず、足柄が、こんなこともあろうかと!と言いつつ、取り出したチャフグレネードで撹乱。
まあ、やはり、これもまた。
斬るものがちょっと変わっただけだ。
鉄の塊を斬れば良いんだろう？
簡単な話だ。
??????フリーランで月光のボディを駆け上がり、メインコンピュータらしき部分に剣を突き立てる。
『????ーーー!!!』
??????図体だけ、だな。
??他の妙高型も、同じような要領で月光を撃破していた。
さて。
「カーチック・ゴドフリーだな」
『ば、馬鹿なっ!!あれだけの数を一分で殲滅だと?!あり得ん!!!』
「そうか、では死ね」
『ま、待ってくれ、金ならいくらでも』
「ん、ああ、いや、金は最低限で良いんだ。私はな、」
『げ、あ……!!』
「お前のような屑には、一人でも多く死んで欲しいだけなんだ」
半ば慈善活動なんだよ、これは。

その後は、陸路で逃走。
顔もバレてない。
服も着替えた。

完全に旅行に来たＯＬ四姉妹にしか見えないだろう。
使った武装も全て艤装なので、喚んだり消したりは自在。
検問も素通りだ。
「いやあ、大したことなかったわねー！」
「足柄……！」
「ヒッ、妙高姉さんごめんなしゃい」
「良いですか足柄？今回は珍しく、罠にかけられたんですよ？つまりこれは、相手側がこちらを狙って来たと言う訳です。要するに、今後もこのようなことがあるかもしれない、のですよ」
「ま、まあまあ、あの程度なら幾らいても」
「その油断がいけないのです！もしも提督のお手を煩わせるようなことがあれば……、私は絶対に許しませんよ！」
「もー、分かってるわよー！」
まあ、確かに、このように罠をかけられるのは初めてのことだ。
つまり、暗殺は、これからもっとやりづらくなるだろう。
司令官が嫌う屑共の排除も、うまくいかないと言うことだ。
この世界は司令官のもの、司令官が心地良く暮らせるよう整備するのが私達の使命。
だと言うのに、仕事が捗らなくなると思うと、怒りが湧くが……。
「まあ、良いだろう。今日のところはゆっくり休んで、また次に目一杯殺そうじゃないか」
「そうそう、帰って飲みましょ！」
「ああ、全くもう……、でも、そうね、休むのも仕事のうちね」
頷く妙高姉さん。
「羽黒も飲もうな。ああ、お前は酔わないんだったか？」
「う、うん、アルコールにも耐性があるから。でも、折角だから一緒にお酒飲もう？」
「ああ、そうだな」
こうして、飛行機に乗り、無事帰国した。
うむ、一仕事した後の酒は、格別に美味いものだな。

３２３話　たびびととあそぼ

「子供達と遊んであげよう」
大正義俺、駆逐艦と遊ぶ。
そんな暇はあるのか、やはりロリコンだった！などのバッシングはあるだろう。
でも今の駆逐艦は凄いぞ、最高だ。
それに子供と遊ぶのってなんか慈善っぽくて良いのでは？
「おや、遊んでくれるのかい？」
すうっと、物陰から現れたのは時雨。
「ああ、遊んであげるとも」
「それは良い、それじゃあ、僕達と『お医者さんごっこ』をしないかい？」
お医者さんごっこ？
ホワンホワンホワーン（妄想するときの効果音）
……『あんっ??駄目だよ提督??』
……『ふへへ、時雨の悪いところを診察しちゃうぞう！』
……『あっあっ??そこは駄目??』
……『ここがこんなに腫れてるじゃないか、いけない子だなあ！』
成る程。
「シャオラ！やりましょうかァ!!!」
「ありがとう、提督」

白露型の工房にて。
「メス」
「ぽい」
「鉗子」
「ぽい」
んん？
「あ、あれ？俺の想像してたお医者さんごっこと違う?!」
「開創器」

「ぽい」
「鋸」
「ぽい」
　ギコギコと音を立てて、俺の肋骨が開かれる。
「し、時雨、俺はね、なんかもっとこう、ピンク色な感じのお医者さんごっこを想像してたんだよ」
「んー？ああ、ほら、手鏡だよ。見てごらん、提督の臓器は綺麗なピンク色だね」
「そ、そうじゃなくってさ、もっとエロい感じの」
「刺激的なのがお好みかい？」
　時雨は、天使のような笑顔で言う。
「ま、まあ、そうだね」
「では電気を流そうか。電流用意」
「ギャース!!!」
　直接体内に電極を突っ込まれ、通電。ちょっと心臓が止まる。
「ふむ、どれくらいまで耐えられるのだろうか」
「ってか、せめて麻酔ほしいよね？」
「提督、麻酔が効かないじゃないか」
「まあ、効かないけど。その辺は思いやりで……。いやいや、麻酔効かないって分かるなら尚更開胸なんてしちゃいかんでしょ？」
「君はこの程度じゃ死なないだろう？」
「そうたけど!!」
　そうじゃないだろ!!
「次はどうするっぽい？」
「ああ、そうだね、心臓に有害物質を注入してみようと思うよ。Ａ―５８８３のアンプルを取ってくれるかな？」
「りょーかいっぽい！」
「勘弁しちくりー」
「ははは、まあまあ」
「まあまあじゃないよこの子は！あっ?!今注射したでしょ!!」
「村雨、心電図は？」

「正常だよー」
「ふむ……」
　ふむ、じゃなくってさ。
「俺はほら、アレだよ、白衣の天使と化した時雨達とキャッキャウフフしたかったんだよ？」
「？、ほら、白衣だよ？満足かい？」
「今の時雨は死の天使だよね、ヨーゼフ・メンゲレだよね」
「光栄だね。夕立、次の薬品を。Ｔ―０９５２だ」
「あびゃー」
　時雨ったらもう。
「次、ロボト……、前頭葉の切除をやってみようか」
「今ロボトミーって」
「いやいや、これはお医者さんごっこだよ？」
「はっはっはっ、俺の知ってるお医者さんごっことは天と地ほども遠いなぁ！」
　そして、あれよあれよと頭蓋を開かれる俺。
「６つの系統の判別方法は？」
「あっあっ、水見式という方法があっ、最も簡単であっあっ、一般的なあっ」
「ふむ……、この辺は記憶を司っているようだね。ならここを切除すれば……？」
「んあっ……。あ？ここどこだ？えっと、君は？……ああ、いや、時雨だな」
「へえ！ここは再生が早いね、記憶に関係する部分は大事ってことかな？ではここは？」
「あっあっ」
「提督、何か変化はあるかな？」
「あー、多分そこ、左腕の神経を司る系のやつだな。腕が動かない」
「成る程、こっちは運動関係か。ならこっちは？」
「あふん」
「おやおや、人の形が保てなくなったね」

「まあ、あれだよね、あの子達、精神年齢は余裕で二十歳超えてるからね、遊ぶとかそういうあれじゃないよね」
あの後はバラバラに腑分けされたので、回復魔法で回復。
鎮守府を歩く。
「ソシャゲ今何やってる？」
望月。
「まあ、色々……、ＦＣＯとクラブルと、あー、最近、ドールズなんたら始めたよん」
漣。
「私も大体同じ」
初雪。
「あ、私もドールズなんたら始めたー」
秋雲。
ふむふむ。
「わーーー!!!」
「「「うわあああーーー!!!」」」

「あのさ、司令官。突然ボブネミミッミみたいな作画になって高速移動するのマジやめて、ビビる」
望月に怒られる。
「楽しいかと思って」
しょんぼりん。
「で、何？」
「いや、駆逐艦と遊んであげようと……」
「え、マジ？遊んでくれんの？」
「ああ！何やる？鬼ごっこか？」
「ははっ、馬鹿にしてんの？そこまで子供じゃないよ？」
もっちー、笑顔が怖いぞ！
「冗談よ、冗談。でも、島風なら大喜びしてくれるんだがね」
「そりゃ、島風ならね」

「ならば諸君らは何か？答えは分かるぞ、さあ！」
ゲーセンへ!!
黒井鎮守府内のゲーセンへＧＯ。
「えー、今回はー、皆んなが喜ぶと思ってー、はいドン!!」
「「「わー！ブレイブルークロスタッグバトルだー!!」」」
台ごと買った。
「やったー！うちにも導入されるんだね！」
「うちにはぽくとと鋼拳とストリートファイトーとかだからねー」
「駅前のゲーセンでやり込んだ。私には誰も勝てない」
「おんやぁ？聞き捨てなりませんなぁ？この秋雲、格ゲーではかなりのもんよ？」
と、テンションが上がるゲーマー勢。
「はっはっは、君らのゲームの腕は素晴らしい。ただし！その腕前は日本じゃあ二番目さ」
「「「何だとでは日本一は?!!」」」
「俺さ!!!」
「ヒューッ、煽るゥー!!!」
「司令官ー、大口叩いちゃいましたねぇ！」
「これで負けたら恥ずかしい」
「見せてもらおうか！提督の格闘ゲームの腕前とやらを!!」

「ああーっとぉ？ゴルドーとルビー使うぅ?!ガチでは?!」
「あのね、俺はね、ゲームで手加減するのは、ゲーマーに対して失礼だと思うんだよ。だから強キャラでぶち殺します??」
「外道ゥーーー!!!」
「リーチキャラで遠くから嬲り殺しじゃ」
「悪魔だ、悪魔がいる！」
『ＦＩＧＨＴ!!!』
「オラっ、刺さったらコンボ入るからなァ!!」
「テイガーだから！投げキャラだから！間合いが！間合いが!!」
「ほーら中段刺さった、コンボだコンボ」

「あっ、あっあっ、死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！」
「はい勝ったーーー!!!」
「外道めええええーーー!!!」
「望月ーーー!!くそう！ならばこの漣が弐寺で仇をとってやるぅ！さあ、勝負だぁ!!!」
「しゃおらー!!!言っておくが俺はＳ＋だぞおおおお!!!」
「うわあああああ!!メッチャ上手いいいー!!!」
「なら私は遊戯王、デュエルで勝負する！」
「初雪ィ！俺のデッキに勝てるかなァ?!!」
「勝ってみせる!!」
「そうか、ならばこれでどうだ!!」
「?!、オ、オルターガイスト?!私のデッキのメタを!!」
「くっ、初雪までやられたか！なら！スマブラで勝負よ提督！秋雲が提督に敗北を教えてあげる!!」
「ウオオオオオオア!!!やってみろぉ!!!はいクラウド」
「クッソ!!何のためらいもなく強キャラを！あっ、強、負けっ、あー!!!」

ハイテンションでゲームで遊んできた。
手加減はしなかったので、勝ちまくった。
いや、あの子達も上手いんだけどね。
だがまあ、ゲームを長年やり込んできた俺にはそうそう敵わんよ。
「あら、ｄａｒｌｉｎｇ??」
「やあ、ジャーヴィス」
ふむ、ジャーヴィスと遊んであげよう。
「ジャーヴィス、遊んであげよう、何かしたいことはあるかな？」
どうせかくれんぼとかそんなんだろ。
ジャーヴィスはまだまだ子供よ!!
「そうねえ、ｄａｒｌｉｎｇとお散歩がしたいわ」
「ほう、お散歩」
え？そんなんで良いのか？
……いや、あんまり子供と思うのも良くないな。

島風とかも良く駆けっこしたいと言うけど、あれ半分訓練だしな。
暁とか雪風も、子供っぽいように見えるし、会話をしていても子供らしさが目立つ。けれど、知能自体はかなり高く、単に子供っぽい性格なだけだと思われる。
「それじゃあ、一緒にお散歩しようか。たまにはこういう穏やかなのも悪くないさ」

「あら、綺麗な黄色い花！これ、なんていうお花かしら？」
「それはフクジュソウ。花言葉は、幸せを招く、永久の幸福、悲しき思い出、かな」
「あら、ｄａｒｌｉｎｇったら博識ね。そういうところも素敵だわ！」
古鷹の育てた花が咲いている鎮守府の庭を歩く。
正直、軽く散歩したり、遊びに行くくらいなら、鎮守府から出る必要はない。
この黒井鎮守府、内部の施設はマクロス並に充実している。
どういうことかというと、黒井鎮守府から出なくても、娯楽、運動スペース、ある程度の食料生産プラント、その他日用品の生産プラント、武器庫、全力戦闘でもうん十年保つ資材、と、衣食住その他諸々が揃っているのだ。
このまま、宇宙の果てへ向かって旅をしても問題ない施設、設備がある。
実際に、宇宙空間や多次元空間を航行する機構やバリアフィールド、砲台、機動兵器まである、マジモンの要塞だ。
「しかし、うちの中だけで良かったの？なんなら、もっと遠くに……」
「良いのよ、お散歩なんだから。こんなに広くて素敵なお庭と、裏には山まであるんだから！鎮守府から態々出ることもないわ」
「確かにそうだが、鎮守府の外にも良い景色はあるんだ。今度は一緒に外に出かけよう」
「……ふふ、分かったわ。誘ってくれるなんて嬉しい！」

さて、こんなもんか。

駆逐艦達と親睦を深められたと思う。
……ん？
「次は戦艦と遊んでくれるんデースヨネー？」
「潜水艦でちー！」
「空母は構っていただけないのですか……？」
あー。
「もちろん、君達とも遊んであげるとも」
平等に、ね。

３２４話　喫煙話

白露型から、この前遊んでくれたお礼に、とタバコをもらった。
よく買えたね、と言ったが、返答は意外にも、「作った」であった。
はて、うちの農業担当の首輪付きはタバコなんて作っていたかな、と思いながら、そう言えば黒井鎮守府の中には喫煙所がないなと思いつき、急遽設置した。
俺は普段は吸わないが、別に吸えない訳でもないし、折角ワンカートンももらったんだし、吸おうと思った。
暫くは喫煙所に通おうと思う。

一日目。
「あら、旅人さん？」
扶桑がいた。
そうか、扶桑は吸うのか。
そうだったな。
「扶桑は何を？」
「銘柄ですか？」
「ああ」
「ピースです」
……。
「なんか、嫌なことでもあったのか？愚痴なら聞くよ？」
「？、いえ、特には」
いやだってピースって。しかもフィルターついてないやつ。
「これまた重いの吸うねえ。体調とか崩れない？」
「艦娘ですし……。たかがニコチン程度でどうこうなったりはしませんよ」
まあ、そうか。
「タバコは、まあ、吸い過ぎなければ良いよ。けど、麻薬はやらないようにね」
大麻マリファナくらいならギリ許すけど。覚せい剤とか合成麻薬

はダメゼッタイ。
「ええ、それはもちろん」
さて、俺も吸うか。
怪しい紙巻タバコに魔法で火を点ける。
……。
「……麻薬だこれ」
「どうしました？」
「いや、なんでもない」
白露型ー？
よくもまあ、こんなものを。
常人なら一本吸えば廃人コースの高濃度麻薬だ。
こんだけの濃度なら、俺にもちょっと効くな。
ああ、ふわっとする、良い気持ちだ。
……けど、快楽目的なら、女の子とああしてこうしてする方が好きだね、個人的には。
まあ、折角作ってもらった訳だし、ワンカートン分は吸っちまうか。
「旅人さんは何ですか？」
「銘柄？」
「はい」
「あー、付き合いで吸ったりはするけど、こだわりはないね。強いて言えばハイライトかなあ、ラム酒っぽくて美味い」
「そうなんですか」
「でもね、そもそも、タバコを吸うと料理に臭いが移るし、最近の女の子はタバコの匂い好きじゃないって子が多いし」
「そうですねぇ、タバコの匂いが好きな女の子は少数派でしょうね」
「だから吸った後はちゃんと匂いを消さないと……、ってそれに、口も臭くなるし。扶桑、吸った後に歯を磨くんだぞ」
タバコは歯が黄色くなるからな。
「はい、それはもちろん。歯磨きはいつもしていますよ」
ほんとかな？
「あーんしてみな」

「あーん」
「あら綺麗。喫煙者とは思えない白い歯」
「ですから、艦娘ですからね。タバコくらいでどうこうなりませんし。もし、何かあっても、修復材か入渠でどうとでもなりますしね」
「便利だなあ」
「頭が吹き飛んでも再生する旅人さんと比べたら、艦娘も不便ですけどね」

二日目。
日向がいた。
「君が喫煙とは、珍しいな」
「そうね、自覚はあるよ」
日向は、タバコを吸いながら、文庫本を読んでいた。
しかし、本に栞を挟んで畳むと、懐に仕舞ってしまった。
「?、俺に気を使わなくても良いよ?別に、好きに過ごしてくれて構わない」
「いや、そうじゃなくてな」
なんなんだか。
「本を読むより、君と話す方が楽しいからな」
「……そっか」
軽く微笑んだ日向の顔に、少し、見惚れた。
「ところで、君のそれは何だ?煙の匂いを嗅いでいるとくらくらするぞ」
「これ?白露型謹製麻薬タバコ」
「……また危なっかしいものを。君も、怒るときは怒った方が良いんじゃないか」
「いやあ、あれでも、俺のことを愛してくれてる訳だしさ。強くは言えないよ」
「君はとことん女に甘いな」
よく言われる。
「あ、日向、銘柄は?」

「普通に赤マルだが」
そうか。

三日目。
霧島がいた。
「よー」
「あら、司令」
霧島は、外でよく吸っているのを見るな。
銘柄はセブンスターか。
まあ、らしいっちゃらしいな。
「あ、今、セブンスターが似合うなって思いましたね？」
「うん」
「やっぱりですか……。うーん、そんなヤンキー臭いですかね、私」
あ、悩んでたんだ。
「趣味は？」
「バイクと酒とタバコです」
あらら。
「まあほら、他人の趣味に口出しはしないけどさ、そういう趣味だとヤンキーっぽいって思われるよね」
「まあ、その辺は自覚してますけど。むむむ……」
そんなことで悩むとは、可愛いじゃないか。
「霧島可愛い」
「え？ふふふ、そういうのは、お姉様に言ってあげてください」
「いやー、霧島も可愛いよ、本当に」
「そ、そうですか？」
「ああ、本当本当。それに、いつも頑張ってるしな。偉いぞー」
「うふふ、そうですか、司令はいつも私のことを見てくれているんですね」

四日目。
妙高型がいた。

「えっ羽黒吸うの？」
「は、はい、こういうのは、付き合いですし」
そっか、意外だな。
「と言うより、好き嫌いはあるけれど、タバコを吸えない艦娘はいません。吸うこと自体は出来ます」
「マジで？」
びっくり。
「基本的に、船に乗る人って、喫煙者が多いじゃないですか。だから、私達艦娘も吸おうと思えば……」
あー、はいはい、成る程ね。
「足柄は外で吸ってんのよく見かけたな」
「そうねえ、今までは外で吸わなきゃならなかったけど、喫煙所ができて助かるわ」
そっか。
「それに、タバコは、潜入活動の時にも役立つんですよ」
と妙高。
「どういうこと？」
「ただ突っ立っているより、タバコを吸って談笑していた方が自然に群衆に紛れ込めるということだ」
と那智。
因みに、全員メビウス。
あ、羽黒はメビウスオプションだった。

五日目。
海外艦がいた。
「ガングートじゃーん」
「おう、私だ」
キセルか。
カッコいいな。
「何？アンホーラ？」
「ああ」

「紙巻タバコは吸わないの？」
「いや、吸わないこともないが、キセルの方が好きなんだ」
成る程。
「アイオワは？」
「Ｍｅ？ラッキーストライクよ」
ふむ。
アメスピじゃねーんだ。
「サラは？」
「いつもはラッキーストライクだけど、今回はキューバ産の高級葉巻を取り寄せたわ」
あー、そういや、アメリカじゃキューバ産の葉巻は買えないんだったっけか。
「どう？」
「良いですね、これは。煙が美味しいです」
まあ、キューバのは美味いよなあ。
「グラーフは？」
「ウエストだ」
そっかー。
「イタリアは？」
「イタリアンアニスです」
ふーむ？
基本的に、それぞれの国のタバコを吸ってるみたいだな。
「何で自分の国のタバコを？」
「ほら、Ｍｅ達、やっぱり、外国人だから。洋モクの方が口に合うのよね」
ふーん、そういうのあるんだ。
たださ、ガングートとサラはさ。
喫煙所に何時間居座る気なんだ？
まあ、暖房もクーラーあり、酒も置いてあるし椅子やテーブルもあるから、大人の休憩室として活用してもらう、か？

六日目。
今日は工廠組、龍田、武蔵がいた。
珍しい組み合わせだ。
「吸うんだ、君ら」
「普段は研究が上手くいかない時の気晴らしに吸ったりしてます」
「右に同じです」
と、明石と夕張。
銘柄はキャスター。
「龍田は？」
「私はたまに吸うくらいですかね～」
ピアニッシモじゃん似合うわ。
「天龍は吸わねーの？」
「あー、何回か吸ってるところを見たことはあるんですけど～、どうも駄目みたいで～」
「ふーん、天龍は酒も駄目だしな。そう言うところ可愛いわな」
「ふふふ、本当ですね～」
「でも龍田も美人さんで好きだぞ。大人の女って感じで」
「あらあら～、照れてしまいます～」
で、武蔵は？
うわ、しんせいだ。

七日目。
結構いた。
「若葉じゃん」
「む、旅人か」
銘柄は、と。
「……あのさ、それは何なの？シャレ？」
「皆んな言うが、これは好きで吸ってるんだぞ」
若葉は、わかばだった。
「いや、だって……、わかばは当たり外れあるじゃん」
「タバコなんて吸えれば良いだろう」

そうかな？
「赤城はぁああ？ブラックデビル?!まーた甘ったるいのを」
あーもう煙の匂いからして甘ったるい。
「提督、これ凄く甘いです！デザートみたい！けど、提督？タバコは太らないんですよ？」
何故かドヤ顔で告げる赤城。
まあ、キロ単位で飯をドカ食いするくらいなら、タバコの方がマシ、なのかなあ？
「ちょっとおいで？」
「はい？」
「ちゅっ」
「?!、んちゅ??んん??」
あー、やっぱ甘いわ。唇まで甘い。
響はー、っと。
ポールモール？やだ、渋い……。
ゴーヤは、クールか。
海風……、その匂いは大麻だな？やめなさいってば全くもう。

はてさて、予想以上に使われるようになった喫煙所。
元々、居酒屋鳳翔の喫煙席くらいしか、タバコが吸える場所はなかったからな。
タバコは身体には悪いが、ストレスの発散にはなる。
兵士である艦娘諸君は、ストレスのコントロールも立派な仕事だ。
好きに吸って良いぞ。どうせ身体も壊れないみたいだしな。別に、タバコを吸う女の子はやだとか言わないし。

３２５話　息抜きしよう

いやーほら、まだまだ肌寒い今日この頃。
温泉とか、入りたくないっすか？
「なあ鳳翔？」
「そうですねえ……。温泉、良いですねえ」
「山奥のさ、誰も知らないような秘湯とかにさ、一緒に入るのはどう？」
「ああー、良いですね、そういうの！」
鳳翔は乗り気だ。
「間宮と、伊良湖と、速吸も連れてさ、一丁混浴なんてどうだろうか、と思ってな」
「行きたいです！と、言いたいところですけど……、私達が鎮守府を空けると、皆んなのご飯が……」
「まあまあ、うちの子だって子供じゃないんだ、お金も渡してるし、自分で何とかするさ」
「お店もありますし……」
「たまには休んだら？いっつもお店開いてるじゃん」
「そう、ですかねえ……」
鳳翔は、悩む様子を見せた。
「なあ、良いだろ？たまにはさ、一緒に旅行しようよ」
「良いんでしょうか……」
あと一押しだな。
「夫婦水入らず」
「むむっ！」
「裸の付き合いで燃え上がる愛情」
「むむむっ！」
「息抜き」
「むーっ！そうですね……、分かりました！行きましょう！」
よし、堕ちたな！

冷たい風が手足を撫でる。太陽の光が微かに暖かい。流石に、雪はもう降らないだろうが……。
まあ、俺の中で寒い、というのは、マイナス４０℃くらいからを指す。
平均気温が７℃くらいはある今を寒いとは言えない。
ホットドリンクも防寒着も必要ないだろう。
それは、艦娘達も同じようで。
「今日は涼しいですね」
と、着物に羽織を羽織った鳳翔。
あくまで、季節感に合わせた格好をしているだけで、その気になればこの場で水着になっても歩けるそうだ。
まあ、恥ずかしいからそんなことはしないと言っていたが。
間宮、伊良湖、速吸も同じだ。
三人も、思い思いの冬服……、洋服だ。を着て、俺を中心に並んで道を歩く。
間宮は可愛らしいピンクのコート、伊良湖はグレーのセーター、速吸はジャンパーにズボンとメンズライクで大変可愛い。
洋服を着ない鳳翔は兎も角、センスあるのよね、この子達。
やっぱり女の子ってのはそういうもんなのかね。
いや、安心だよ、普通の女の子やってくれて。
普通の女の子達と、普通の旅行だ。
うん、普通だな！
空間系の魔法を使ってひとっ飛びは風情がないからな。
かといって電車は混んでる。
首都圏の電車舐めんなよ、マジで混んでるからな。
痛いくらいに電車に押し込まれて、ぎゅうぎゅう詰めで。
他にもアジア圏の電車やバスに乗ったが、ありゃ酷い。
旅に必要なのは余裕、豊かさ。
満員電車とかお断りですわ。
と言う訳で、手持ちのキャンピングカーで移動。
運転はもちろん俺。

因みに、速吸も運転できる。免許は大分前に取ったそうだ。
鳳翔は、機械はまるで駄目なので、運転も無理。
間宮と伊良湖は……、多分、免許は取れるけど、態々取る必要もないと思っているらしく、取らない。
俺はいつも通り飲酒運転して、高速に乗る。
秘湯は、色々と知っているが、今回は関西の方に行くつもりだ。
黒井鎮守府の場所？
まあ、関東の……、Ｋ県としようか。
明記はしないが、その辺だと思ってて。
さあ、それで運転中。
皆んなで談笑しながら、テレビを点けて、高速道路を疾走。
「鳳翔達はさぁ、いつも働いてるけど、息抜きできてる？」
「？はい。その、皆んなでやっている食堂の運営も、居酒屋の運営も、趣味ですから」
「あー、仕事が趣味みたいな？」
「そもそも、お仕事とは思っていませんよ」
「成る程ね、趣味でやってるのね」
「はい。居酒屋の方も、稼ぎは二の次ですし」
「そっか、だから、日本円以外で支払われても何にも言わないのね」
「そうですね、明らかに人間ではないお客さんとかは、貴金属や宝石、金貨などで支払ってきますね」
「へえ、そうなの。市場には流さないようにね」
「ええ、もちろんです。出所を探られたら困りますものね」
「因みにさ、いつも気になってるんだけど、メニューに金額書いてないじゃん。いくらもらってんの？」
「ああ、それは、お客さんにお任せしているんですよ」
「Ｐａｙ　Ｗｈａｔ　Ｙｏｕ　Ｗａｎｔ方式って訳か。そんなことすると払ってもらえないんじゃ？」
「そんなことありませんよ？皆さん、相場より少し多めなくらい払ってくれます」
「ほー」

鳳翔達と会話しながら、山奥へ。
「大分道がなくなってきましたね……」
「あ、温泉の匂い」
「提督さん、その温泉はこの辺りなんですか？」
間宮、伊良湖、速吸が話しかけてくる。
「そうそう、この辺。ここからはちょっと歩きだ」
こんなこともあろうかと、あらかじめ道は整備しておいた。
「こっちこっち」
「わ、凄ーい！」
脱衣所も用意してある。
さあ、お風呂ターイム!!!

秘湯。
数十年前に発見した、山奥の温泉。
少し熱いくらいのお湯と、山の綺麗な景色が魅力、か。
まあ、景色は良いよ？自然の美しさは理解している。
温泉も良いとも。
でも、そんなものより。
「鳳翔、ちょっとおいで」
「はい？」
乳！尻！太もも！二の腕！脇！臍！
女体美が一番だよなあ!!
たとえ地の果てでも美人がいれば幸せ。
ああー、鳳翔ー。
熱めの温泉で上気した頬が！
女の匂いが!!
鳳翔ー!!
あああああーっ!!!
「鳳翔、すき」
「はあい、私も大好きですよ??」
隣の鳳翔がしなだれかかる。

あー下手したら俺より力強いはずなのに細っこくて華奢ででも胸やお尻は程よく肉が付いていて性格は慎ましくて穏やかで優しくて可愛いーーー。
控えめに言って女神だ。
胸を触る。
「んー、初めて会った時より大きくなったなあ」
「あんっ??はい、今はちゃんと食事もとれますし、ちょっと太っちゃいました」
「鳳翔は痩せてるから、もうちょい肉付けても良いんじゃない？」
「赤城さんみたいな女の子がお好みですか？」
「いや、あれはあれでアリだけどね、あそこまで太らなくても良いよ？あと、まあ、3、4ｋｇくらいは太っても良いんじゃない？」
「でも、太るのも大変ですよね……。そんなに沢山は食べれませんから」
「そうだね、俺も太れないタイプだ。
食べても太れないタイプだ。
そもそも、艦娘は基本的に殆ど太れない。
赤城が太るのは、消費するエネルギーより、摂取するエネルギーの方がかなり多いからだ。
「ずるいですよ、提督ー？」
「私も可愛がってほしいです??」
「提督さん??」
おっと。
間宮、伊良湖、速吸も甘えて来る。
小さくて可愛いお尻が膝の上に。
あおぉん。

風呂上がりに牛乳を飲みながら、山から下りて旅館へ。
適当に飯を食って、いちゃつく。
「鳳翔ー」
「はあい？」

「お尻も丸くなったねー」
「そ、そうですか？」
「可愛くなったよ」
「ふふ、嬉しいです」
ナイスバディな艦娘の魅惑のヒップも良いが、鳳翔の慎ましいお尻も良い。
……でも、お尻を撫でられて嬉しいとは、鳳翔も変わっているな。
「私も触ってくださいー」
間宮達も触られたいそうだ。
「まーみやー」
「はい！」
「おお、間宮の胸はボリュームがあるなあ」
「あんっ⁇私のおっぱいは提督専用ですからねー⁇」
そりゃあ良い。
皆んな、身も心も捧げるんだとよ。
重いなあ。

じゃあ、そろそろ寝ようか。
旅館ってやることないんだよな。
まあ、何かをするんじゃなくって、何もしないと言う贅沢を楽しむ場だからな。
俺は、ここで、鳳翔達と何もしないでゆっくりした。
ああ、本当に。
豊かな気持ちになれるな。

３２６話　息抜きの裏側

「……ん、ふぁあ……」
うーん。
……あ、おはよう？
目を覚ました私は、軽く身体をほぐしてから時計を見る。
朝六時、か。いつも通りね。
さて、同室の、暁型の皆んなを起こさなきゃ。
電は声をかければ起きてくれるし、現に今も起きてるんだけど、暁は一人じゃ起きれないし、響も朝は弱いから。
「電ー、おはよー」
「ふにゃ……、ふぁあ。おはようなのです、雷ちゃん」
さて、あとは……。
「暁ー、起きなさいー。朝よー」
「むぅ……、あと五分……」
「駄目よー、起きなさーい」
「やぁ……」
「えーい！」
布団を引っぺがす。
「ふにゃー?!」
「おはよう暁！」
「まだ眠いのにぃ……」
「早起きは三文の徳なのよ！」
「三文あげるからその分寝かせてよー」
もう……。
「響ー、響も起きてー！」
「Хороший　Налет……」
「何言ってるか分かんないわよ！ほら、起きて！」
「うう……」
のそのそと起き上がる響。
寝間着から着替えて、まだ半分以上寝てる響を着替えさせて、身嗜

みを整えて、皆んなの身嗜みをチェックして。
「さ、朝ご飯にしましょう！」
「……?!はわわ！今日は、厨房組が全員旅行で、朝ご飯が無いのです！」
……あ！
そ、そうだった！
厨房組は、司令官を含めて皆んな旅行中だ！
「うー、そうね、それじゃあ、朝ご飯を作りましょう！」
「えっ！」
「えっ、って何よ？」
「作れるんですか？」
「作れるわよ？」
普段はもっと美味しいご飯を作れる厨房組の皆んなにお任せしているだけで、私がお料理できないなんて一言も言ってないわよ？

食堂は、いつも通り、沢山の艦娘で賑わっていた。
いつもと違うのは、皆んなが厨房に入っていることだ。
ずらりと並ぶ大きな冷蔵庫から食材を運び出し、簡単に調理して食べ始める。
海外艦の殆どは、朝は軽めに済ませるので、シリアルや果物、ヨーグルト、ビスケット、作り置きパン、ハム、チーズなんかを適当に冷蔵庫から取っていって、今日の予定を話し合いながら食事していたわ。
他は、いつも通り、自分の姉妹や同じ艦種のグループで集まって食事してるわね。
大体、姉の艦娘が何かしらを作って、自分の分と妹の分を出しているみたい。
あ、でも、天龍型は龍田さんが利根型は筑摩さんが作ってるみたい。
「あらあら～、おはよう、暁型の皆んな。ご飯は今作ってるからね～」
「私も手伝うわ！」
「そう？それじゃあ、お願いね～」

因みに、龍田さんは料理もできる。
特に苦手なことはこれといってないらしい。凄い人だ。
「雷ちゃん、私はスープとサラダを作っておくから、卵とソーセージを焼いておいてくれるかしら？」
「それくらい簡単よ！」
目玉焼き目玉焼きー、っと！
因みに、黒井鎮守府には、目玉焼きすらまともに作れない艦娘は結構多い。
でも……。
「おーい、連れて来たぞー！」
「おお、来たか！」
『『『Ｍｒ．ハンディです、奥様』』』
黒井鎮守府には、お手伝いロボットがいる。
「お前ら、料理ができるんだな？」
長門さんがロボットに尋ねる。
長門さんは、卵すらちゃんと割れるかどうか怪しいレベルで不器用だ。
『ええ、簡単なものであれば。お茶も淹れられますよ。でも一番得意なのは洗濯とお掃除です』
「じゃあまず、米を炊いてくれ」
武蔵さんが指示する。
『かしこまりました』
武蔵さんもかなり不器用だ。
「おかずどうする……？」
「はぁ、それは私達が作るから、あっちいってなさい」
「武蔵もよ、大きい身体で厨房をうろつかないで」
と、陸奥さんと大和さん。
二人とも、厨房組ほどじゃないけれど、料理上手だ。
「「お、おう、すまん」」
他には……、空母の皆んなは。
『奥様、お米が炊けましたよ』

「赤城さん、お米が炊けたわ」
「ええ、加賀さん。日本人はお米さえあれば大体なんとかなりますよね」
納豆とか、卵かけご飯とか、海苔とか、ふりかけとかで乗り切っている。
赤城さんも、別に料理が苦手な訳ではないみたいだけど、朝から沢山作るのは大変だものね。
……本当に、ご飯を作るのって大変ね。
こんなことを毎日三回もやってくれる厨房組と司令官には、感謝しなきゃね。

昼は自由行動よ。
あ、一応言っておくけれど、暁型だって、いつも一緒にいる訳じゃないわ。
まあ、仲は良いから、一緒にいることは多いけれど。
午前中に近海のパトロールを済ませて、今は戻ってきたところね。
近海に問題はなかったわ。
いつも通りね。
……このパトロールも、習慣でやっているだけよ。
黒井鎮守府周辺には、ステルスを搭載した無人兵器が、休みなくパトロールしてるわ。
無人兵器群は、近海もパトロールしているから、異常があればすぐに通信がくるの。
私達が近海をパトロールしているのは、全く意味がない行為なの。
まあ、そうね……、外部に向けた仕事してますアピールにはなるかしら。
でも、大体は、私達の中では、散歩に相当するわ。
あ、お昼ご飯どうしようかしら。
海の上を走るとお腹が減るのよね。
……と、そうそう、今日は外で食べてこよう。
……あれ？

そこらにうちの艦娘がいるわね。
それと、ツイッターで、皆んなの行き先は分かる。
近場のロッテリアに入って、何十個もハンバーガーを買うアイオワさん。
肉体労働者向けのデカ盛りが自慢の定食屋に入るイギリス艦。
パン屋に行く白露型。
コンビニで済ませようとする睦月型。
食べ放題の焼肉屋に入っていく空母。
昼からやっている居酒屋に入る隼鷹さん、千歳さん。
二郎に入るグラーフさん。
ビュッフェに行く金剛型。
マックに行く工廠組。
……この辺はデカ盛りのお店が多いから、艦娘の皆んなも困らないわね。
因みに、沢山食べる戦艦や空母の艦娘は飲食店からマークされていて、来店されると店の食材が大きく減ると恐れられているらしい。
司令官もマークされている。
私は……、その辺のカフェで、紅茶と一緒にサンドイッチを食べた。

お昼ご飯を食べてからは……、どうしようかしら？
お仕事はやることがないし、お昼寝？
お金も沢山あるし、遊びに行く？
うーん、決めた。
本屋さんに行こう。
実は、少女漫画を読むのが好きなの。
今、ネットで調べたら、読んでいる少女漫画の新刊が出てるって。
買いに行くわ。

……途中でお巡りさんに捕まったわ。
中学生が平日の昼間から何してるんだって。
いやー、免許証、取っておいて良かったわ。

免許証を見せて、すごく若く見える人って事で誤魔化しておいたから。
駆逐艦、海防艦、あと龍驤さん辺りは、平日に外を出歩いてると捕まるから……。
子供扱いされるのって嫌だわ。
でも、漫画は買えたし、鎮守府に帰って読みましょう。
……あ、アイオワさんとサラトガさんがナンパされてる。
「Ｔｈａｎｋｓ　ａ　ｌｏｔ，ｙｏｕ　ｓｐｏｉｌ　ｔｈｅ　ｍｏｏｄ！」
笑顔だけど、滅茶苦茶嫌がってるのは分かる。
「あ？英語？分かんねーけど、ちょっと来いよ」
「Ｏｈ，Ｉ’ｍ　ｓｏｒｒｙ！　Ｍｙ　ｅｙｅｓｉｇｈｔ　ｉｓ　ｊｕｓｔ　ｔｏｏ　ｐｏｏｒ　ｔｏ　ａｐｐｒｅｃｉａｔｅ　ｙｏｕｒ　ｂｅａｕｔｙ！」
あー……、アイオワさんって、結構口が悪いから、多分酷いこと言ってるんだろうな……。
「チッ、良いから来いよ、ガイジン！」
「Ｓｔａｎｄａｒｄ　Ｅｎｇｌｉｓｈ　ｐｌｅａｓｅ？　Ｉ　ｄｏｎ’ｔ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ」
「このっ!!」
そして、アイオワさんに触れようとした瞬間。
「Ｆｕｃｋ　ｏｆｆ……、失せろって言うのが分からない？」
「あ、ぎゃあああああ!!!!」
あーあ、やっちゃった。
あれ、脚、蹴りで折ったわね。
「痛えええええええ!!!痛えよおおおおおお!!!!」
「Ａｄｍｉｒａｌ以外の男に触られるのとか、本当にあり得ないから」
「こら、アイオワ？やり過ぎよ？」
「何よ～？サラだって、触られたら手足の一本二本は折るでしょ～？」
「私はそんなことしないわ！」
「本当に？」

「ええ、鼻の骨を折るくらいだわ」
「あら、とっても穏便ね！」
「「ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!」」
うーん、まあ、いつものことかな。

夜ご飯もないんだ……。
どうしよう？
あ、大淀さんだ。
「はーい、夜ご飯はバーベキューにしまーす！個人個人で適当に焼いてくださーい！」
なるほど、料理ができないなら、できないなりに、やり方はあるってことね。
バーベキューなら焼くだけだし、なんとかなるわね。
「あー、お野菜美味しい」
自家製野菜のバーベキュー。
「お肉も美味しい」
これまた自家製のソーセージや肉。
「はーい、寒いんで豚汁も作りましたよー」
豚汁かあ。
「もらってこよう」
あー、良いなあ。
たまにはこういうのもアリね。
……でも、司令官がいないのは、寂しい。
早く帰ってきて、司令官。

３２７話　ガングートと一緒

ガンちゃん？
ええい、略すな。
ガングートと呼ばんか。
ガングートすこ？
なんだ、すことは。
好きという事か？
だ？
だい？
大好きか?!大好きなのか?!!
ＤＡＩＳＵＫＥ?!!!
なんだＤＡＩＳＵＫＥとは?!!誰だ?!!!
な、何故踊る?!なんなんだ、なんなんだ一体?!!
え？
こ、心から愛している？
そ、そうか。
なら、最初からそう言え！
何故踊った?!
特に意味はない？
……酔っているのか？
……素面でそれなのか。
それは、まあ、なんというか。
薄々感じてはいたが、変わった男だな、貴様は。
いや、それは良いか。
ユニークな人柄なのは、付き合っていて面白いからな。
社会主義的ではないが、それもまた良いだろう。
ほら、取り敢えず飲め。
ズブロッカだ。
これはクセが強いがそのクセの強さがたまらないのだ。

ほら、酒の席なんだ。
無礼講だぞ。
飲め飲め。
うむ、良い飲みっぷりだ！惚れ惚れするな。
酒は好きか。そうかそうか。
ここ、黒井鎮守府なら、多くの酒が飲み放題だからな。
好きなだけ飲むと良い。
まあ、酒代もつまみ代も私の金ではないのだがな。
黒井鎮守府の運営費から出ているとのことなので、実質的には貴様の金だ。
いつもすまんな。
養ってもらうとは、社会主義的ではないな……。
しかしこの国は資本主義だ。
郷に入っては郷に従えと言う諺の通りに、それに従おう。
だが、まあ、黒井鎮守府では皆が富んでいて、皆が幸せそうに暮らしている。
実に社会主義的で素晴らしいぞ。
仕事が少ないせいか、怠け者の気があるが。
健全な生活には健全な労働が欠かせないものだと言うのに……。
まあ、それは良いだろう。

ほら、酒の席だぞ。
何か面白い話をしてくれ。
え？
最近はそういうのはパワハラで訴えられる？
そ、そうなのか？
最近は怖いな。
社会から、人々の優しさが失われていっているようだ。
む。
それは体感であり、実際に優しさが失われたというデータはない、と？

成る程、そう言えば貴様は大学を出ているんだったか。データから理論的な答えを見つけるのは重要だな。
軍事的な観点にも繋がるだろう。
貴様は賢いな。
それで、面白い話だが。
私？私にはないぞ。
私は普通に日常を謳歌しているだけだからな。貴様のように、人に話せるような冒険譚はないさ。
む、自己表現か。
コミュニケーションスキル？い、いや、私はそんなもの……。
な、何？社会に出てから困る？いや、既に社会に出ているだろ？
黒井鎮守府は学生と同じ？
学生気分なのか?!
な、成る程な。戦いが終わっても、人生は続く、か。
……先のことなど、考えたこともなかった。
ただ、漠然と、皆と、貴様と、幸せに暮らすものとばかり。
そう、だな。
未来のことも考えねばなるまい。

そう、それで。
式はいつにする？
え？
その話はしちゃ嫌だ？
どうしてだ？
折角だから、盛大な式を挙げたいだろう？
既にロシアの会場をピックアップしているんだ。
ほら、ここなんかどうだ？
艦娘を全員呼んで、盛大な式にしよう。
貴様は凛々しいからな、その白髪に、黒のタキシードはよく映えるだろうよ。
私がウエディングドレスを着るのは、些か違和感があるがな。

……ん、あ、そうだな。
私が結婚式を挙げたら、他の全員もやりたがる、か。
それもそうだな……。
そんなことをしたらスケジュールが一年分は丸々埋まるな。
だが、いずれは……。
考えておいてくれ。
ん？
それは、まあな。
私だって女だ。
結婚式に憧れもある。
女々しいか？
……ふふ、そうだな、私も、貴様からすれば、可愛い女の子だものな。
物好きめ。
ふ、ふん、何が、ガングートは百人中百人が可愛いって思う美人さんだよー、だ。
私にはお見通しだからな。
貴様はその舌先で、何人もの女を虜にしてきたのだろう！
だ、だが、まあ、あえて、あえてだ、私も騙されてやろう。
貴様のことを好きになってやるとも。
愛してやるとも。
だが、貴様はいずれ、私を捨てるのだろう。
ひっぐ、ぐずっ、私を、捨ててしまうんだ。
一人でどこかに行ってしまうんだ。
だから、だから私は、本気で好きになることはない……。
ないんだ……。
本気で愛したりなんて、しない……。
……そんなの、無理、だ。
とっくの昔に、本気で好きになっていた。
貴様が好きで好きでたまらないんだ。

頼む、お願いだ、私の側にいてくれ。
私を一人にしないでくれ。
私は、私は、貴様がいないと駄目なんだ。
どうしてだ？
どうして貴様は、どこかへ行ってしまうんだ？
その手足をへし折って捻じ切れば、ずっと私の隣にいてくれるのか？
……あぁ、分かっている。
そんなことをしても無駄なことはな。
だが、貴様は知るべきだ。
想い人が、いつどこへいなくなってしまうかわからない、その恐怖を。
貴様は嫌じゃないのか、私達と離れ離れになるのが！
……貴様の、ずっと一緒にいる、は嘘なのだろう？
貴様は、私の望む言葉をくれるが、それを実行する訳ではない。
私を喜ばせるために、ずっと一緒だと嘯くんだ。
……たまには帰ってくる？
嫌だ、ずっと一緒にいろ。
側にいろ。
そうじゃないと私は、おかしくなってしまう。

それじゃあ、こうしよう。
抱いてくれ、提督。
……子供が、欲しいんだ。
貴様がいなくなってしまうなら、せめて、忘れ形見だけでも……。
何人か、子供を産ませてくれ。
逃げるな。
待て。
簡単な話だぞ、貴様は何も考えず、私を孕ませれば良いだけだ。
ほら見ろ、胸だって大きい方だし、顔だって悪くないだろう？
痩せ細っても、肥えてもいないだろう？

特別に美しいとは言わずとも、醜くはないはずだ。
そんな私の身体を好きにして良いんだ。
なんなら暴力を振るったって良い。
貴様に殺されるのだって悪くない。
……でも、愛していると囁きながら抱いてくれたら、嬉しい。
は、初めてなんだ。
だから、どうか優しくして欲しい。
もちろん、慣れてきたら激しくしてもらっても大丈夫だぞ？
痛いのも平気だ、艦娘だしな。
だが、子供が欲しいから、子宮を傷つけることはどうか控えてくれ。
私の全部を捧げよう。
だから、貴様を私に寄越せ。
私と、一つになろう。
……え？
抱いて、くれるのか？
そうか！
嬉しいとも。
沢山、愛してくれ。

さあ、準備は万端だ、早速抱いて……、む？
くっ、貴様等！
私と提督の恋路を邪魔するか?!
抜け駆け？
う、うるさい、私は提督と幸せな家庭を築くんだ！
邪魔をするな！
ぬおおおおお?!!

３２８話　セッツブーン

「わーい、セッツブーンだー！」
いやー。
艦娘の皆んなはノリが良いから困らないなあ！
今時節分なんて真面目にやる家庭、そうそうねえよな。
なんだか、そういうイベントをちゃんとやるのは裕福な家庭ってイメージがあるよな。
まあ、実際、我が黒井鎮守府は裕福。
情操教育の為、日本文化に触れてもらう為、節分を敢行。
さあ、やろうか。

「節分だ」
「セッツブーン！って、何？」
いまいち分かってないプリンツ。
「ああ、これはな、一種の厄払いなんだ」
「宗教的なアレ？」
「そう、だな、大体そう」
「Ｍｅこれ知ってる、鬼は外ーってやるやつでしょ！」
アイオワがなんだか嬉しそうに言ってくる。
「そうそう、炒った大豆……、ｓｏｙｂｅａｎを鬼に投げるんだ」
へー、と声が出る。
「ねえ、Ａｍｉｒａｌ？鬼って、日本のｍｏｎｓｔｒｅよね？何で豆なんかで倒せるの？」
と、リシュリュー。
ふむ。
「鬼の目、即ち魔目に、豆を投げることにより、魔を滅することができたから、とされているよ」
「……鬼って、大したことないのね」
「いや？昔会ったけど滅茶苦茶強いぞ？ってか、妖怪は基本的に明確な弱点がある代わりに滅茶苦茶強いのが基本だから」

いやあ、幻想郷で絡まれた鬼は強かった。パンチ一発で俺の胴体に風穴開けるんだから相当だぞ？

バフ全部載せ防御結界ありありの俺の防御を全部力押しで割ったりするし。もう相手したくない。

「そうなの？」

「妖怪ってか、その類のやつらは弱点さえ突かれなければ、ほぼ無敵だしな」

聖なるものに弱い吸血鬼、人間の唾液の付着したもの以外ではほぼダメージを受けない上に龍を殺す大百足、聖なるもの以外からはほぼ攻撃を受け付けない上にとんでもない性能の鬼、天狗、河童、妖狐その他諸々。

「昔、ヴラド公その人である吸血鬼と戦ったことがあるが、殺しても蘇り、聖なる力が込められた武器でなければ攻撃が通用しなかった」

「ヴラド公……、まさか！ルーマニアの?!」

「いや、その時はイギリスで会ったが……、法外な強さだった。あれはうちの戦力の半数を出して殺しきれるかどうか……」

「うちの戦力の半数って……、うちの艦娘なら、単騎で小国の軍隊を滅ぼすくらいはやるのよ?!」

「あの人は死そのものだからなぁ、ちょっとした軍隊レベルの戦力でどうこうできんよ」

俺も一人じゃ何回か殺すのが限界かな。逃げ切るのも……、まあ、それは大丈夫だが。

「鬼も強いぞ？特に、かつて四天王と呼ばれたあの子達なんて、正直異常な強さだったね」

「四天王……」

「てな訳で今日は四天王の伊吹さんを呼んであります」

「はーい、来たよー」

鬼の四天王のオ、伊吹萃香さんだァ!!!

酒で釣った。

あとは個人的に俺に会いたかったらしい。

なんか、「鬼はね、自分の気に入った人間を攫っちまうんだよ。お前

も攫ってやるから、待ってな」とか、「お前が人間の生を楽しみたいというから、飽きるまで待ってやっているんだ。何、時間はいくらでもある」とか、「勇儀も待っていることだしね、早くこちら側においでよ」とか言われてあるが、まあ、スルー。
「「「……鬼？」」」
「鬼だろそりゃ、どっからどう見ても鬼よ」
いやァ、鬼っスわー。
「角が生えた女の子にしか見えないけど」
「ノンノンノンノン！違うよォン、君より何百何千歳も年上の大先輩さね、見た目に騙されちゃあいかんよ～？」
「とてもそうは見えないわね……」
まあなあ、萃香は飲んだくれてる子供にしか見えないわなあ。
「うげ、神霊だ……。ちょっと旅人ー、どう言うことだー？こいつら、長生きするぞー？」
「そうだね」
「とっとと人間なんてやめて、こっち側に来いよー。妖怪は楽しいぞー？」
「いや、俺は当分は人間でいる予定だから」
俺の片腕に頬擦りしながら、妖怪サイドへの勧誘をする萃香。
その瞬間、この場の雰囲気が一変。
殺気が膨れ上がる。
「……へぇ、こりゃあ、私も本気でやらないと退治されるかもね」
萃香がニヤリと笑う。
萃香も鬼だ、戦闘狂の気はある。
「今回は豆まきだから！ガチバトル展開はないです！どしたの君達？血の気多くない?!」
「「「提督を奪う奴は殺す」」」
ヒェー!!
「ま、待て待て、そもそも殺し合いじゃ」
「へえ、言っておくけど、旅人はいずれ私のものになる予定だよ」
「まっ、ちょ、萃香!!あーーー!!!」

「『ミッシングパープルパワー』!!!」
「「「艤装召喚!!!」」」
あー。
あーあーあー。
爆発する鎮守府。
あー。
「鬼退治ができるなんて光栄ね！」
「やれるもんならやってみなよ！」
「「「おおおおおおおお!!!!!」」」
俺は取り敢えず、自分の心を落ち着けるため、懐から取り出したウォッカを一口。
うん、すごく落ち着いた。
っふぅー。
さて。
「やめなさーい!!!（しかるたびびと）」

黒井鎮守府の一室は、完全に吹き飛んでいた。
なんてことを。
あとで直そう。
さて、あとは、普通に、萃香に協力してもらって豆まき。
でも俺は、萃香とも一緒にいたいと思うから、鬼は内と唱えて豆を投げた。
鬼は内福は外とか言うと、倒された怪人が巨大化するかもしれないので、その辺は気をつける。
これはヤバイバ。
「うきゃー！」
「……これ、効いてるの？」
「多少はね。まあ、今回の豆は落花生だから殆どダメージはないらしいけど」
萃香に豆を投げつけたりなんかしたら可愛そうだろ!!
と言う訳で落花生を投げてる。

ほら、今の時代はね、落花生を投げたり、大豆アレルギーがある子供に配慮して新聞紙を丸めたものを投げたりするらしいよ？
リアル鬼である萃香に炒り豆を投げたら、普通に痛いらしいし。
俺も若干効く。
おかしいな、俺、人間のはずなのにな。ニンニクは好きだけど、十字架とかちょっと効くし、聖書読むとちょっと痛いし。
やっぱり、悪魔とか鬼とか吸血鬼に成りかけてんのが悪いのかな。
まあ、でも、そうやって、本当に炒り豆でダメージ受ける人に豆を投げるのは可哀想じゃん？
だから、落花生を投げて豆まきの雰囲気だけを、ね？
良いんだよ、こういうのは雰囲気を楽しめればさ。

そして恵方巻き。
無言で食べると願いが叶うと言ったが、黒井鎮守府の艦娘達は、俺と暮らすことが願いなので、それは既に叶っているとして、普通に、和気藹々とした雰囲気で食事をする。
「エホウマキ……、スシとは違うの？」
「いや、寿司だよ」
「因みに、このカンピョウ？って、原材料は何？」
「ユウガオって言うウリ科の植物を細く切って乾燥させたものを、水で戻したもののことだよ」
「へえ、そうなの、ウリ科ってことは、ズッキーニとかきゅうりとかと同じなのね」
アイオワと会話しつつ、節分的な料理を食べる。
これはなあ、節分の時に出る料理は、地方によってバラバラだからなあ。
一応、鰯とか、鯨料理とか、とろろご飯とか、蕎麦とか出してるけど。
「て、提督、海外艦の方々に鯨を出しても良いのでしょうか？」
と鳳翔。
「……いいんじゃないかな？」

「で、でも、しーしぇぱーど?とか言う人達に怒られるかもしれません。そうしたら私、皆殺しにするしか……」
鳳翔がオロオロと伝えてくる。
「あはは、大丈夫よホーショー。シーシェパードなんて、アメリカ人もｃｒａｚｙだと思ってるわよ」
と、アイオワ。
「そもそも、かつての大戦で何人も殺してきた身としては、今更、動物愛護とかしようと思いませんよね」
「家畜は殺すのに鯨は駄目なんてことはないわよ」
「私、毛皮製品が好きだから。そう言う類の批判はしないわ」
と、海外艦の意見。
……『どうせ人間に食われるんだったらクジラになりたいね……。食われるために育てられ……、何もわからないまま友達だと思ってた人間に殺される。ブタや牛にしてる事の方が残酷だと思うぜ……、オレはね。クジラやイルカは食われたとしてもそれまでは自由に大海を泳いでいたんだ……。捕まったのは力と運が無かったからさ。オレだったら戦って敗れたい……。ブタや牛と、クジラやイルカとの間に決定的に違うことが一つある。戦うチャンスすら与えられない者と……、戦って敗れることのできる者……、オレにはこの差はでかい……、と思うぜ』
かつての知り合いの言葉を思い出す。
俺もほぼ同意見だ。
「まあ、ね、節分は別に、派手なイベントじゃないからね。今度はリオのカーニバルに連れてってあげるよ。予約とったし」
「「「はい！」」」
と、まあ、オチはないが、次の予定が決まったところで、セッツブーンを終わろうと思う。

329話　グロみ

……『あら、時雨じゃない』
……『雷か。ん？どうかしたかな？』
……『そうねえ、たまには皆んなで遊ばない？』
……『まあ、構わないけどね』
……『丁度さっき、可愛い絵柄のアニメを見つけたの！皆んなで見てみましょう？』
……『良いとも。タイトルは？』
……『ハッピーツリーフレンズって言うんだけど』

やあ！僕は旅人！黒井鎮守府の提督さ！
アメリカンなノリでこんにちは。
いやー。
そのね？
おかしなテンションにもなるわ。
なんか知らんけど、休憩室で艦娘がハッピーツリーフレンズ見て笑ってる。
あれ、笑えるもんじゃなくない？
分からない人のために解説しよう。
ハッピーツリーフレンズとは、海外アニメで、超ゴアなグロ表現ばかりの酷いアニメだ。いや、好きな人には申し訳ないが、少なくとも教育によろしくはないとだけ言っておく。
内容は、動物を模したカラフルなキャラクター達が、時に爆散し、燃え尽き、ミンチになる、グロアニメである。
それを、何故か知らないが、駆逐艦達が見ている。
「あ、頭吹っ飛んだわね」
「面白ーい」
「ふむ、提督ならこれくらい……」
え？
何その……。

もうさ、これさ、俺が死ぬやつだよね？
分かってる、分かってるよ、もう分かりきっているともよ！
どうせあれだろ?!俺がハッピーツリーフレンズみたいな目に遭うんだろ!!
そうなんだろ!!
分かってんだよそんなこたぁ!!
「うわー、バラバラになったねえ」
「提督も頼めばバラバラになってくれるっぽい」
「提督、次は燃えてもらおうかな」
ひえええ。
「よーし、皆んなで司令官と遊びましょう！」
「「「おー！」」」
え？
俺で遊ぶの？
また殺されれんの俺？
怖いわー。
まあ、良いけど。
「はい、ここで朗報です！私達工廠組が、新たに作ったこの発明品！名付けて『死亡空間生成装置』!!試してみて下さい!!」
「あ、明石さん」
「これは？」
「ギャクマンガ空間生成装置などの、因果操作系の機械を弄ってたら出来たマシンです！使うと死にます！」
怖っ。
誰が使うんだそんなの。
「提督に使ってもらいましょう！」
あ、俺なのね。
はいはい。
「大丈夫かな……、司令官さん、死んじゃうかもしれないのです」
おお、電！優しい心。
そう言うの忘れないでいてほしい。

「あはは、電？何言ってるのよ？」
ん？村雨？
「提督が死ぬ訳ないじゃない！」
「それもそうですね！」
「「あはははは!!」」
んー？
んんんー？
優しい心はー？
優しい心は何処へー？
「ギャクマンガ空間生成装置も併用して使うんで、死にはしないと思いますが、まあ、死ぬ程痛い思いはすると思いますね」
何で他人事？
酷くない？
俺、ひょっとして嫌われてたりする？
「ふむ、それを使うと、死の因果が引き寄せられると言うことかい？」
「あ、そうですそうです」
「なら、敵対組織に使うことで自然死や事故死に見せかけた殺しができるのか……。役に立つじゃないか」
時雨が嬉しそうに頷く。
え？
でもテストは俺でやるんでしょ？
「そうだよ」
「提督さん、ちょーっと、お手伝いして欲しいっぽい！」
おおーっと、見つかっていたか。
「んもー、しょうがないなあ」
まあ、何回か死ぬくらいなら良いかなあ。

五、六回ミンチになった。
ダイジェストでお送りすると、まず、装置を起動すると演習場からミサイルの流れ弾が。
転移で逃げようとしたが珍しく失敗して、爆炎に包まれる。

上半身だけで這って動いていたら、鎮守府の一部が倒壊して潰される。
黒井鎮守府の機動兵器群が誤作動を起こして俺に自爆特攻。爆死。
鎮守府内の防衛機構が誤作動、俺に牙を剥く。レーザーブレードで賽の目に切り分けられた。
黒井鎮守府内に悪魔が大量発生、守子ちゃんを庇って斬られて臓物ポロリ。
いやー、死んだ死んだ、大分死んだ。
でもさ、思ったんだけど。
「これさ、捕まえてきた深海棲艦で試せば良かったんじゃね？」
あ、時雨が目を逸らした。
俺の死体が欲しかったらしい。
ならしょうがないな。
次、捕まえてきた深海棲艦でテスト。
適当な深海棲艦を鎮守府内に放流し、装置を起動。
……面白いように死んでいく。
他殺だけではなく、事故死、自然死も含め、狙ってやってるでしょそれみたいな死に方も多数。

テストが終わったので実装する。
試しに、黒井鎮守府排他派の海軍上層部に使ったらしい。
上映会をやる。
まず、会議をしている場面から始まる。テロップには、「こいつら全員死にます」と書いてある。
佐官らしき人が護衛と共に車に乗る。
しかし、エンジンがつかない。
訝しんだ護衛兼運転手は何度もキーを回す、すると、大爆発。
黒焦げになった佐官が車から這い出てくるが、そこに都合よくトラックが突撃。
轢かれた佐官の黒焦げの腸がびろりと伸びて、クソと肉片の混じった血が地面にペインティングされる。

次の佐官は、銃を持った護衛とどこかの施設内を歩いている。
その時、護衛の一人の銃が暴発。放たれた弾丸は跳弾し、奇跡的に佐官の横っ腹に突き刺さる。
佐官の体内で暴れまわった弾丸は、はらわたを引き裂いて、脇腹から出てきた。
真っ直ぐ進む物体というのは、得てして外力に弱い。肉体に入った弾丸は、柔らかな臓器に触れ、体内を跳ね回るのだ。
痛みに悶絶する佐官が膝をつき、護衛の反乱だと思い込み銃を抜いて乱射する。
護衛の頭蓋を撃ち抜くが、外れた弾丸は何故か全て跳弾。
佐官に返ってくる。
帰ってきた弾丸は、佐官の側頭部を貫く。
そこから、灰色のクリームのような脳漿と、透明な脳液、そして血液の赤が混ざった汁がドロドロと溢れて、死ぬ。
次の佐官は車で移動中のようだ。
真っ直ぐな高速道路を時速１００ｋｍを超えるスピードで走っている。
しかし、突然運転手が胸を押さえて苦しみだすと、ハンドルに突っ伏して死んだ。心臓発作だと思われる。
それと同時に、それに気づいておらず、車のドアに寄りかかるようにしていた佐官。横着しているな、シートベルトはつけていなかった。
だが、ドアは急に外れてしまう。
ドアの支えを失った佐官は、咄嗟にシートベルトを掴むが、半身を道路に投げ出される形になった。
ところで、サンダーという工具は知っているだろうか？
電動ヤスリのことなんだが。
何が言いたいのかと言うと、今現在の状況のアスファルトは、時速１００ｋｍ超えのスピードで動くサンダーということだ。
段々とシートベルトが伸び、佐官の側頭部が、アスファルトについた。

まずは耳、そして頭と、ゴリゴリと削れていく佐官。
削れた箇所からは白い骨が見える。耳なんてもうとっくになくなっている。
どうにか地面に手を突こうとしても無駄だ、時速１００ｋｍ超えにより手は弾かれる。
鼻も、頬も、顎も、額も、全てが削ぎ落とされた頃。
対向車線からやってきたトラックとすれ違う。
その瞬間、首から上が対向車線のトラックに引っかかり、千切れるようにかち割れる。
残された身体はシートベルトから手を離してしまい、道路の上で前衛的オブジェよろしくバラバラになってブチまけられる。
その上を、急には止まれない車達が、死者の冒涜よろしく踏み荒らして、道路上に赤いタイヤ痕を残していく。

さて……。
「ふむ、大分コミカルな死に方だったね、面白かったよ」
「凄かったー！」
「黒井鎮守府の敵が苦しんで死んで、良かったのです！」
艦娘達は、お菓子片手に死のショーを見物していた。
女の子は優しくなきゃなあ……。
でも残虐でも可愛ければそれはそれでよし。
しかし、事故死や自然死とはいえ、ピンポイントで殺せるので、うちが疑われる可能性は高い。
使用は控えるようにと言いつける。
はあ、全く。
育て方、間違ったかな……。

３３０話　メスガキ分からせマン

最近は、「メスガキ」に「分からせる」のがトレンドらしい。
ツイッターで言ってた。
ふむ……。
メスガキ、とは、生意気な少女のことを指す。
しかし、分からせるとは何を指すのだろう。
何を分からせれば良いのだろうか？
俺が主に教えられるのは、ＫＡＲＡＴＥ、ＤＩＹ、サバイバル、ちょっとの魔法とその他の技術ってところか。
そして、屈服させる？のだとか。
幼い子を屈服させても何も面白くはないと思うが……。
生意気なメスガキを懲らしめ、大人の力を見せつける、らしいな。
成る程、完全に理解した（わかってない）。

まずはメスガキを用意せねばなるまい。
「と言う訳だ、諸君」
「「？」」
ふむ。
「えっ、と？つまり私達は何をすれば良いのかしら？」
と、如月。
「いや、だから、俺が如月に、俺の方が上だと分からせるのだよ」
「？、それは、まあ、司令官の方が上じゃないかしら？」
「生意気な如月を屈服させるのだ」
「……！、そうなのね??あらあら、何されちゃうのかしらぁ??」
興奮した様子で擦り寄ってくる如月。
うぅ……。
「それで、どうやって屈服させられちゃうのかしら？やっぱり、司令官のたくましいココでかしらぁ??」
俺の下半身に指を這わせる如月。
くそっ、メスガキめ……！

と、一般的な男ならやられてしまうのだろうが、俺は違う。
「そうだな……。今から如月を調教するんだ。如月がもうやめてって泣き叫んでもやめてあげないからな」
ぶるぶると身を震わせた如月は息を荒くして股間を擦り付けてくる。
「やあん??そんなことされたら私、おかしくなっちゃうわぁ??」
さあ、震えろ……!!

「ああん……??やあ、もう駄目え、やめてぇ??」
「こんなんでやめる訳ないよなあ？オラオラ、かき混ぜてやるよォ!!」
「ああ～ん??」
「……何やってるの、司令官、如月ちゃん？」
「「お菓子作り」」
睦月の問いに答えた俺は、如月にお菓子作りを分からせるために訓練していた。
やめてっつってもやめてやらねえからな!!
これは調教だ、コツを掴むまでマンツーマンで指導してやる!!
オラオラ!!
「混ぜ具合はこれくらいな。混ぜ過ぎるとかえって食感を損なうからな」
「これくらいかしら？」
「厚さは均等にな。そうじゃなきゃムラができる」
「ええ」
「オーブンの温度はこれくらい。この量ならこれくらいの時間だぞ」
「分かったわ」
十分指導したら。
「よーし、焼けたぞー！睦月型の皆んなにお裾分けにイクゾー!!」
「はーい??」
はい勝ち～～～（旅人はお菓子作りがプロ級のため）。
「これに懲りたら、生意気な言動は慎むんだな!!」
「うふふ、はぁい??」

いやー、懲らしめた懲らしめた。

次のメスガキは……、江風!!!

「オラ、江風!!分からせてやる!!」

「え、ええ？何をだ？」

「……分からせてやる!!」

「だ、だから何をだよお？」

俺にも分からんが、兎に角分からせてやる！生意気なメスガキめっ！このっ！このっ！

「あ、じゃあ、あれを教えてくれない？」

「よーし、良いだろう、大人を舐めるなよ!!」

「あっ、凄い凄い！こンな、こンなの！」

「ほら見ろ……、これが中に入っていくんだぜ?!」

「あっ、ああっ！そ、そンなあ！」

「……何やってるの、提督、江風？」

「「礼装作り」」

山風に質問されたので答えた。

「成る程なあ、その術式の中にこれを埋め込むのか」

「そう、そして出来たのがこれ」

「使ってみて良いか？」

「いや、一枚あげるよ」

「良いの?!ありがと！」

作った礼装を江風にあげた。

大人の俺は子供と違って懐に余裕があるから、礼装をパッとあげられちゃうのだ。

「それじゃ、早速起動してみるか！そら！」

ズボン型の礼装を履いた江風は、魔力を流して礼装を起動させた。

「おお……、じゃあ、使うか。ええと、『ポケットを叩けばビスケットが一つ』!!」

俺があらかじめ設定したワードとともにポケットを叩けば、魔力に

よってビスケットが生成されるという術式を込めてある。
　これは、物質生成の術式に、ノースティリスの錬金術の術式を埋め込み作り出した術式だ。
「おお！本当にビスケットができた！しかも小包装されてるし！」
　物質生成はかなり難しい術式で、それを簡単な口述と動作の二つで自動化したこの術式は、個人的には完成度が高いと思う。
「あ、このビスケット、結構美味いな！」
　味の調節も難しいところだった。ただの物質生成では、味気ないものになってしまう。そこに、ノースティリスの錬金術を埋め込むことで、ある程度の味を実現したのだ。
「やっぱり、提督はこういう面白い礼装を作るのが得意だな！時雨姉貴もその辺りは敵う気がしないって褒めてたよ！」
　褒められてんのかね？
　まあ、なんにせよ。
　はい勝ち～～～（下らないｏｒピーキーな礼装を作らせれば旅人の右に出るものはいないため）。
「くくく、これに懲りたら、生意気な口は控えることだ！」
「ン？お、おお！」

　さぁーて、お次のメスガキは……、朝霜！お前だ!!
「このメスガキめ……、分からせてやる!!」
「お、おう？あたいかい？」
「Ｓｏ、Ｙｏｕ!!!君だ!!!」
「な、何を分からせるんだい？」
「全てを」
「?!」
　教えてやるぜ、このメスガキっ!!

「うあ、こんなの、無理ぃ……」
「弱点をガンガン突いてやる!!」
「うあああっ！」

「あら、旅人さんと朝霜さん？何をやっているのかしら？」
「「模擬戦」」
夕雲に尋ねられたので、答えた。
「おおおりゃあ！」
栄華の大剣……、古びたその大剣は、朝霜の小さな体躯と同じくらいには大きい。それを、朝霜は、艦娘という人ならざるものの膂力で操ることで、深淵を歩く獣の如き剣術を実現していた。
「がああっ!!」
ネコ科のしなやかな獣の筋肉から生み出されるような、静から動へと移り変わる時が見切れぬような、凄まじい速さで踏み込むと同時に、横一文字に大剣を振る朝霜。
それも、一度ではなく二度。
二回転の連撃は、獲物を確実に仕留める絶殺の二撃。
しかし、俺から見たらまだ甘い。
獣の如き疾さは所詮は獣の域でしかなく、剣技は、俺が見てきた、古今東西の剣豪剣聖と比べれば些か以上に劣る、拙い武技であった。
俺は、宙に飛んで回転連撃を避ける。
すると朝霜は、
「もらったあ!!」
と、大剣を担ぐように両手で構えると、素早く空中で一回転し、その遠心力でもって、大剣を地面に叩きつけるように振り下ろした。
俺はそれに反応し、横に身を躱した。
しかし、その剣の着弾点の、整備されたグラウンドの地面は叩き割れ、爆発物を放ったかのようにクレーターができている。
それは、朝霜の一撃の威力の大きさを物語っていた。
だが。
「？、うおっ?!」
俺はあらかじめ、朝霜の眼前に爆竹を投げておいた。
それに驚いた朝霜は、軽く身を引いた。
本当に、軽くだ。
だが、それは、戦場では十分過ぎる隙だ。

「えい」
「んっ、ああ……」
朝霜の喉元に指を突きつける。
「俺の勝ち」
「ああうー」
変な声を上げて、艤装である大剣を消し、両手を上げて降参の意を示す朝霜。
「駄目だー！あたいじゃ敵わないよー！」
「いやあ、よく頑張った方だよ？」
実際、俺じゃ殺せるかどうか。
「うっそだー、旅人さんなら、喉や動脈を斬りつけて、死ぬまでおちょくれば殺せるんでしょ、艦娘だって！」
うーん、どうだろうか。
その辺は相性の問題だ。
俺に迫る技量を持つ艦娘や、俺じゃ傷一つつけられない艦娘にはどう頑張っても勝てないが、俺が傷つけられる程度の防御力と技量の艦娘であれば、まあ、殺せないこともない。
やらないけど。
しかし、そういう艦娘には、何かしら特殊な能力や武器、技があったりするもの。一筋縄ではいかないだろう。
朝霜を楽に相手できたのは、単に、朝霜がまだ経験を積んでいないというだけ。
練度二百から三百程だろう。
しかしこれが、黒井鎮守府のトップ層である、練度六百超えの艦娘には、こういった模擬戦でしか勝ちを拾えないだろうことが分かる。
まあ、取り敢えず。
はい勝ち～～～（火力を問われない模擬戦であれば技量とスピードがある旅人に敵う艦娘はそうそういないため）。
「これに懲りたら、生意気は言わないんだぞ」
「へ？あ、ああ、うん」

いやー、勝ちまくったなー。
生意気なメスガキに分からせてきたわー。
大人の力見せつけてきたわー。
これで生意気に大人である俺を誘惑してきたりはしなくなるだろうなー。
しかし。
「司令官??如月の身体、好きにして良いのよ?」
「ほら、提督??媚薬入り高濃度麻薬だぞ??吸ってくれよな??」
「旅人さんよ、あたいのここに興味あるだろ?触ってくれよぉ??」
このっ、このっ！
メスガキめっ！
まだ懲りてなかったのか！
しょうがねえな。
「皆んなまとめて、分からせてやる!!」
「「あんっ??」」
はい勝ち～～～!!!

３３１話　ガチ登山

「ご主人様」
「どうした漣」
「登山したいなー」
「ヤマノススメ」
「何故バレたし?!」
　お見通しよォ……。

　綾波型を連れて登山。
「裏山は行き慣れてるだろうし、エベレストでも登るか？」
「え？マジで？」
　大マジよ。
「初っ端からそんな大きい山に登って大丈夫なもんなの？」
「いや、一般人にはオススメしないけど、君達、一般人じゃないじゃん」
「あー、成る程？」
　そう言うもんなのよ。
「でも、プロなら、山を舐めるなって怒るもんじゃない？」
「いやいや、俺なら、地球の山程度、何の障害にもならないよ」
「お、凄い自信」
　出現する敵対的存在は精々熊程度、環境は少しばかり空気が薄くて、足場がちょっと悪くて、少し冷えるくらい。
　何を警戒する必要があるのだろうか？
　確かに、自然は強大だ。
　自然に打ち勝てるような強大な存在は何十人かしか知らない。
　だが、俺も、打ち勝つとまでは言わずとも、死なないくらいの芸当は容易い。
　敵対存在？
　俺を殺したいならば上級悪魔や大妖怪を用意しなきゃな。それも複数。
　空気が薄い？

俺はハンターでもある。一日は無呼吸のまま活動可能だ。呼吸補助アイテムや波紋を使えば更に活動時間は伸びる。
足場が悪い？
そもそも空飛べるしな。
冷える？
永久凍土並ならばシャツ一枚で平気だ。それ以上寒くても、ホットドリンクを飲めば平気平気。
結論。
何も問題はない。
艦娘も、大体俺以上のスペックがあって、１５０ｋｍくらいなら一日で走り抜ける体力と、暑さや寒さにも強く、常人より何倍も優れたバイタリティとメンタリティを持つ。
うん、やっぱり、問題ない。
「行くカァー!!!」
「「「はーい」」」
だが、流石に装備無しで山に入れば止められる。
取り敢えず、綾波型の諸君らには暖かい服を着せる。
そして俺も、ワイシャツ一枚で問題ないが、あえて服を着込み、バックパックを背負う。
「こんなこともあろうかと、エベレストへの登山許可を取っておいた。さあ、ネパールに飛ぶぞ」
「マジで!!?」
うん？
山登りがしたいんだろ？
「そ、そんな本格的なのは……」
と、潮。
「ははは、あっちの世界の新大陸やら、魔界やら、もっと過酷な地域なんて山ほどあるんだからさ。エベレストなんて簡単簡単！」
「でも、はぐれたりしたら死んじゃうんじゃないかな……」
と朧。
「うん？艦娘の仕事だって、常に死と隣り合わせだろうに。それに、は

ぐれても見つけてあげるから安心するといい」
「本当に大丈夫なの？」
と曙。
「もちろん！君達なら平気さ！」
さあ、行こうか。

現地のエージェントを雇うことはなかった。
流石に必要ない。
二日で帰る予定だし。
早速登山開始だ。
この辺はちょっと（１５０ｋｍ）だけ歩かなきゃならないからな、取り敢えず、最初のキャンプまで全員早歩きで。一日あれば最初のキャンプ地まで行けるだろ。
「それ行くぞ」
「「「はーい」」」
さあ、歩き出した俺達。足取りに淀みはない。
「景色が良いだろ？」
「そうだね、まだこの辺は麓が見えるねー」
山の斜面を、小走りで移動。
「たまには運動するのも健康的で良いだろう。なあ曙」
「ふん、これくらい、毎日の軽い運動レベルよ」
おや、そうなのか？
「毎日どれくらい走るの？」
「１００ｋｍくらい、二時間で走るわ」
へえ、まあまあだな。毎日の軽い運動ならそれくらいで良いかもしれない。
……あ、潮のおっぱい揺れてる。
「……提督、あんた今どこ見てたの？」
「潮のおっぱい」
「ええ?!わ、私のおっぱいですか?!」
潮が何故かちょっと嬉しそうに言う。

いや揺れてるから……。
「むー！何よ！ほら、私のおっぱいだって揺れ、揺れて……」
「曙、無理するな」
「ううー!!」
曙は可愛いなあ。
「別に揺れなくても、曙は可愛いよ！」
「駄目なの！私はもっと提督に見てもらいたいの！」
嫉妬しちゃってもう。
たっぷり五時間かけて歩いた。

第一キャンプに辿り着いた。
予定通りの時間だ。
「さあ、飯にするぞ」
今回は山っぽい食事を作っていきたい。
いや、その気になれば地の果てだろうと本格イタリア料理でも何でも作れるが、折角山に登ってる訳じゃん。
雰囲気を大事にしたいよね、と漣に言われた。
成る程、そう言う見方もある。
俺もたまに、錬金術で作ったふかふかのパンが無性に食べたくなる時があるからな。
え？ああ、いや、ノースティリスで冒険者やってる頃に覚えた錬金術なんだけど、フライパンさえあれば、そこらの石ころでも何でも、ふかふかのパンにする術式があるんだよ。
そう言うもんなんだ、納得してくれなくても良いが理解はしてくれ。
さて、飯を作る訳だが。
態々コンロを使ってクッカーを火にかける。
「おお、それっぽい！」
漣が興奮気味に手元を見てくる。
「メニューは何ですか？」
朧がそう尋ねてくる。

「煮込みラーメンだよ。今回はあえてちゃんとしたものは作らない」
まず、麺も手打ち麺ではなく、乾麺を使用。
あらかじめ切っておいたキャベツやらもやしやら沢山の野菜を入れて、豚肉と卵も煮込む。
アクを取って煮込む。
鶏がらスープの素を使って、更に煮込む。
こんなもんか。
保温容器にわけて、さあ、食べろ。
「おっ、美味い美味い！山っぽい！」
満足感を露わにする漣。
「あったまりますね」
美味しそうに食べる潮。
よしよし、こんな感じが普通のアウトドアなんだな。
「ほら、山だから栄養沢山とらないと！カロリーメイトでカロリーを摂取しよう！あとココアも淹れるから身体を温めるように！」
「そんな寒くないわよ？」
「ありゃ、そうなの？」
やっぱり、艦娘も寒いのは平気か。
「よーし、それじゃあ、ここをキャンプ地とする！」
大型の、六人くらい入れるテントを張る。
「ほら寝袋寝袋」
「わー、これ面白ーい」
「ミイラみたい」
と、ガヤガヤしながら寝た。

次の日。
「今日は山頂を目指すぞー」
「「「はーい!!」」」
うん、いい返事。
山頂を目指して山道を行く。
いや、道らしい道はない。

梯子をかけたりして、どんどん進む。
おっと、潮が手を滑らせて５ｍくらい落ちた。
「大丈夫かー？」
「はーい」
まあ、数メートルの落下くらいで艦娘がどうにかなる訳ないよね。
縄を垂らして、と。
「掴まってろよー、そーれ！」
「わあっ！」
引き上げる。
「さあ、行こう。ここら辺は空気が薄くなってくるぞー」
「……そう言われると、ちょっと息苦しいかもね」
この辺は酸素が地表の三分の一くらいだからなー。
だがまあ、艦娘の強靭な心肺機能からすればなんてことはない。
「あとほら、そこら辺に凍死体とか転がってるけど、見なかったことにするんだよ」
「？　なんで死んでるの？」
「君達艦娘にとっては大したことがなくても、人間にとったら過酷な土地なのよ」
「死体を弔ったりはしないんですか？」
「いやー、そんな余裕ないでしょ」
お、落石。
「ふん」
まあ、砕くよね。
落石程度。
あ、破片。
「えい」
「それ」
綾波型諸君らも、落石を拳で叩き割って普通に進む。
そして。
「頂上に到着ー！」
「「「わー!!」」」

素晴らしい景色だ。
エベレストに登ったのは久しぶりだしな。
折角登った訳だし、各自写真を撮りまくる。
「ツイッターに上げよ」
漣が動画を撮ってツイッターに上げる。
俺も写真を撮りまくり。
「おおおＲＴヤバーい」
鳴りまくる漣のスマホを背景に……。
「さて、登山、どうだった？」
「「「楽しかった」」」
うむ、よし。
「ただね、ご主人様」
「どうした？」
「次は緑が見える山にしようね」
はい。

３３２話　異世界転移これくしょん　その１

「つんつーん」
「んんぅ……、えへへぇ、そんなつんつんしちゃらめらよていとくぅ」
「つんつんつつーん」
「うへへへへぇ……」
「ごつん」
「痛っ?!な、なんだい?!敵襲かい?!」
「おきてー」「おはよー」「こんちわー」
……は?
なんか、わらわら、いる?
夢?
夢だわこれ。
寝よう。
「おやすみ」
「「「おきてー!」」」

はーい、こちら隼鷹。
昨日の夜の記憶がないでーす。
いや、飲んだのは覚えてるけど、飲んでからどうしたのか全く覚えてない。
え?
なにこれ。
どうしたの?
ここどこ?
それに……。
「はろー」「二つ目ギョロリん」「誰?」
こいつら、何?
なんか、こう、ぞんざいなデザインの化け物だけど。
一つ目の目玉に手足がひょろり。
背丈は１ｍ程?

もう完全に、あからさまに人じゃないね。
でもまあ、あれだわね、敵意があったら、寝ているうちに何かされてるだろうし。
言葉も喋れるみたいだし。
「えと、こんにちわー？」
「こんちわ」「おはようでは？」「どっちでも良いでは？」
「え、えっと、お前さん達は誰かな？」
「ボク、イーポン」「ツーポン」「サンポン」「ペラポンです」「ニャンポンですよろしくおねがいします」「きけんなヒロポン」「わがなはデラポン」
あー？
「そ、そうじゃなくって、ほら、種族名？何人なのかね？」
「われわれ……」「われら」「総称？」「パタポン」「「「パタポン」」」
パタポン……？
なんだそりゃ。
そもそもこれ生き物？
明石辺りがドッキリとかでなんかやってるとかじゃなくって？
触ってみようか。
「わわー、たかいたかーい」
軽い。
丸い。
やわっこくてあったかい。
少なくとも生き物、かねえ？
「あなたはだれ？」「二つ目ギョロリん」「二つ目、どこかで見た気が？」
「旅人！」「じゃ、ニンゲン？」
「い、いや、私はまあ、艦娘の隼鷹だけど……。提督の、ああ、旅人の知り合いかい？」
「旅人、前に会った」「一緒に世界の果てを探してくれた」「おっきい」
「かたい」「じょうぶ」「たてポンといっしょ」「おおぐい」「料理じょうず」「しなない」
ええと……、まあ、提督絡みのモンスターって訳だね、こいつら。

「あ、あのさ、私、鎮守府に帰りたいんだけれど」
「ちん……？」「とんちんかん？」「トンチンカン？」
　あー、通じないか。
「えっと、ここはどこなのかね？」
「「「パタポリス」」」
　ははっ、どうしよ、分かんないわ。
「私がなんでここにいるか、分かる奴はいるかい？」
「いる？」「わからん……」「なにもわからん……」
　そっかー。
「どうするかね……」
　まあ、待ってりゃ、そのうち異常に気づいた誰かが迎えに来てくれるんじゃない、かなあ。
　多分。
「困ってる？」「たいへん？」「かわいそう？」「まいご？」
「あ、ああ、そうだね、迷子だね。でも、何日か待てば迎えに来てもらえると思うから」
「たいへんだね」「かわいそう」「うちにおいで」
「い、良いのかい？」
「「「いいよー」」」
　軽いなあ……。
「おいで」「来てー」「ごはんのじかん」
「あ、ああ、ご馳走してくれるのかい？」
「肉ならある」「狩りしてきた」「カーチク」「モッチチ」
　なんか知らないけど、食べ物をくれるみたいだ。
　正直、助かる。
　その気になれば一週間くらいなら飲まず食わずでも死なないけれど、腹は減るからね。
「焼くぞー！」「はいどーぞ」「どーぞ」
「……で、これは何の肉なんだい？」
　骨つき肉を渡された。
「ふくーら肉」

「……い、いや、それはほら、見れば分かるけどさ、何の肉なんだい？鳥？牛？」
「とり？」「とり」「モッチチの肉」「わたしが狩りました」「最近は狩人がゆうしゅうで毎日ふくーら肉たべほうだい」
パタポン達が指差したのは、丸い、丸い……、鳥？鳥にしてはデカくない？２ｍくらいあるんだけど?!
ま、まあ、ガチョウとかの肉だと思えば。
艦娘だし、腹を壊して死ぬってこたあないだろうけど。
「い、いただきます」
齧ってみる。
「……あ、結構美味しい」
「でしょ！」「旅人も大好きだって言ってた」「みんな大好きふくーら肉」
「あの、飲み物はあるかい？」
「みなれた液体」
「……なんかしゅわしゅわしてない？」
「へいきへいき」
……炭酸かな？
「ごくっ……、あ、これ、炭酸だ……」
「キャベツも食べてー」「ギョロきゃべつ」「とれたて！」「しんせん！」
「あまい！」
「あ、ああ、生なんだね……。あ、美味いねこれ」
キャベツも食わされた。
ま、まあ、こうして見ると愛嬌があって可愛いんじゃないかい？
……ん？
こいつら、目玉しかないのに、どうやって食べ物を食べてるんだ……？

「じゅんよー」
「なんだい？」
「狩りできる？」

「狩りかぁ、ちょっとやったことないなあ」
「じゃあ戦える？」
「それは、まあ」
「ちょっと見せて」
　カンポンと名乗った個体……、全く見分けがつかないねこいつら、
まあ、そいつに連れられて、石畳の舞台の上に。
「かかってこーい」
「ええー……」
　盾を構えたカンポン。
「かかってこーい」
「わ、分かったよ、ほら」
　軽く殴ってみせる。
　おっ、ビクともしないね。
「てかげんむよー」
　へえ、結構やるみたいだ。
　それなりの力で殴る。
「もっともっとー」
　思いっきり殴る。
「きかないぞー」
「驚いた、ちっこいのに丈夫なんだね、あんたら。ちょっと、本気出すよ!!」
　式神召喚、折り重ねて巨大な拳にして、殴る!!
「!!」
　吹っ飛ばされるカンポン。
　あちゃあ、やり過ぎたかな？
「「「……」」」
「あ、あの、ごめんね、怪我はないかい？」
「すっげ！」「じゅんよーすっげ！」「おったまげー！」「つよい！」
「お、おお、そうかい？」
　褒められた……。
「カッチンドンガいける？」「いけるいける」「だいじょーぶ」

なんかコソコソ話し合ってる。
「じゅんよー」
「なんだい？」
「われわれは今からカッチンドンガをたおします」
「なんだいそりゃ？」
「でっかいの」「ドラゴン」「食べられる」「鉱石をとる」「つよい」
うーん？
「てつだってください！」「「「ください!!」」」
「あー、つまり、ドラゴン退治を手伝え、ってこと？」
「「「うん」」」
まあ……、タダ飯ってのも悪いしねぇ。
「良いよ、案内しな」
「わーい！」「ひゃくにんりき！」「たすかる！」

『ゴァァァァァ!!!!!』
「ははっ、こりゃ凄いね」
10m近い大きさの恐竜。大きな顎だねえ。大迫力だよ。
まあ、負ける気はしないけどね。
……ってか、さっきから聞こえる太鼓の音は何なのかね？
《ポン　ポン　パタ　ポン》
何なのこれ？
「せめろー！」「とっちめチン！」「やっちゃえ！」
「……まあ良いや、ほら、行くよぉ!!せいやぁ!!」
そして最後は、仮面をつけたパタポンが。
「ヤバヤーリ!!!」
投げた槍が爆発して、カッチンドンガとか言う恐竜は倒れた。
「「「やったーーー!!!」」」

パタポン達は、そのまま、カッチンドンガの首を祭壇に捧げて、宴を始めた。
うわあ、文化の違い。

「って言うか、あんた達、さっき仲間が死んでなかったかい？呑気に宴なんかやってて良いものなのかね？」
「しんだ？」「だいじょーぶ」「ふっかつする」
「は？」
「あれ見て」
　曲がりくねった木の根元に、死んだパタポンの帽子？らしきものを埋めると。
「リボーン!!!」
　瞬く間に木が煌めいて、パタポンが復活した。
「パタポン族はキャップがあればふっかつできる」
「め、めちゃくちゃだね、あんたらは」
　そう言うもん、なのかね……。

　……ん？
　そういや、祭壇があるってことは、何かを祀ってるってこと？
「やっぱりあれなのかい？神様を信じてるのかい？」
「かみポンさまはいつも見ている」「かみポンさまばんざい！」「かみポンすっげ！」
　うーん？
「本当にいるのかい？」
「「「いる」」」
　あー、やばいねこれは。
　大淀みたいな……、狂信者の目だわ。
「じゅんよーもきこえたでしょ？」「タイコのねいろ」「ポンポンパタポン」
　あ？あー。
「あの太鼓が、あんたらの信じる神様なのかい？」
「そう」「神様はすごい」「世界の果てに連れてってくれる」
「世界の果て？」
「世界の果てを見ることがパタポン族のひがん」「そのためなら、なにもおしくはない」「見れるならなんでもする」

変わった種族なんだねぇ……。
「そっか、いつか世界の果てに行けると良いねぇ」
「「「うん！」」」

そして、次の日。
「隼鷹!!」
「あっ、提督」
「どこ行ってたんだもう！心配したんだよー！」
提督が態々迎えに来てくれた。
なんか、悪いね。
それで、そう。
私がこの世界にいる原因は、私が酔っ払って、提督が居酒屋鳳翔に設置した「扉」に入ったから、だった。
その「扉」ってのは、提督が今まで行ったことがある世界や地域に繋がる、ワープゲートみたいなもんで、色んな世界からのお客さんが来れるようにするためのもの。
まあ、なんだ。
百パーセント私が悪いね！
うう、ごめんよぉ……、反省するよぉ……。
「おお、隼鷹を見ててくれたのか？ありがとな」
「だいじょーぶ」「またおいで」「ばいばい」「さよならじゅんよー」
提督は、パタポン達に礼を言うと、そのまま私の手を取り、元の世界へ。
「ありがとね、みんな。短い間だったけど、楽しかったよ」
「われわれも、たのしかった！」
パタポンの小さな手を握り、帰ることにした。

それから、また幾日か過ぎた、ある日。
「しばらいはチャリンでいいですか？」
「はい、何でも良いですよー」

「うっめ！」「旅人の世界のさけはうまい！」「たべたことのない肉！」
「とてもあまいたべもの！」「すっげ！」
居酒屋鳳翔にいるんだけど、あいつら。

３３３話　異世界転移これくしょん　その２

はーい、こちらビスマルク。
「あの、こんにちは」
「え、ええ、こんにちは」
朝、起きたら。
「あの、Ｆｒ・ｕｌｅｉｎ、ここはどこかしら？」
「ふろいらいん？……ここはエローナの国ですよ」
知らないところにいたわ。

昨日、どうしたんだったかしら。
ええと、夜に、ジュンヨウと浴びるようにビールを飲んで……。
……原因はそれね。
酔って……、酔ってここに？
どれだけ遠くに来たのよ、私は。
全く見覚えがないところに来るなんて。
でも空港に行った覚えとかはないし……。
「そうだスマホ……、圏外ね」
ポケットから取り出したスマホは、残念ながら圏外。
参ったわ、ここが何処か見当もつかない。
「あー、えっと、エローナの国、とか言ったわよね？」
「はい、ご主人様が支配する、パルミアを超える巨大国家です」
パルミア？
「あの、貴女はムーンゲートらしきものを通ってここに来たと聞いています。この辺りの地理が分からないんですよね？」
「そもそも、どうやってここへ来たのかも分からないわね」
「そうなんですか？」
「ええ、ちょっと、酔った勢いでね」
「それは大変ですね」
……。
そう、それで……。

「Ｆｒ▪ｕｌｅｉｎ、あー、お嬢さんは誰かしら？」
「私の名前は……、いえ、そう、ですね、ただの『少女』ですよ」
「？、それじゃあ、Ｆｒ▪ｕｌｅｉｎと呼ばせてもらうわ」
名乗らなかった少女……、十代半ばほどの、ブロンドの髪が綺麗な女の子は、前時代的な軽い鎧に身を包み、身の丈を超えるハンマーを背負っている。
コスプレ、かしら？
でも、見たところ、あのハンマーは本物、ハリボテじゃないし……。
「その、貴女の通ってきたムーンゲートの形は、黒井鎮守府の扉だそうですが、貴女は黒井鎮守府の方ですか？」
「え、ええ、そうよ。……って、扉？……ああ！私ったら、酔ってあの扉をくぐったのね?!」
そう、確か……、提督が、異世界食堂方式、とか言っていたあの扉。
確かあれは、異世界に繋がるとか言っていたわね。
ってことは、ここは異世界？
っぽいわね、空気がなんだか違うわ。
「旅人様は私のご主人様のご友人ですし、その関係者であるならば、私が面倒を見ますね。多分、そちらの旅人様がお気づきになって、迎えにいらっしゃるかと思います。それまで、この国でゆっくりしていってください」
「え、ええ、ありがとう。それで、ここは、どんな国なのかしら？」
見たところ、中世のような街並みだけど。
「ここは、私のご主人様が作った国で、ノースティリス……、この辺りの地域では有数の大都市です。技術や文化もトップクラスのものが揃っているんですよ」
「へえ……」
ご主人様、ねえ。
「その、ご主人様って？」
「お会いになったことはありませんか？大鎌を背負い、軽鎧を着込んだ、黒髪の冒険者の男性です」
あー、えっと。

ああ！
「オショーガツの時に見た気がするわ。とても鋭い目をした人ね？」
「はい、多分、その方ですね」
へえ、あの人、たまに鎮守府に出入りしてるわよね。
それに、ご主人様？
……こんな小さな女の子に、ご主人様って呼ばせているのかしら？
それはどうなの？
「どんな人なの？」
「殺戮と強姦と強盗が大好きで、暇潰しに核爆弾をパルミアの真ん中で爆破したり、隕石を降らせたりするお方です。旅人様にもらうお酒と、若い女の肉が好きなんだそうですよ」
「えっ、何それは」
控えめに言って化け物じゃない？
「犯罪者なの？」
「はい」
「ひ、人を食べるのかしら？」
「はい」
そ、そうなの。
まあ、提督の知り合いだし、危ない人なのね。
「そ、そんな人がよく街なんて作れたわね」
「ああ、免罪符を買ってカルマを上げてから、街の人を集めたんですよ」
「め、免罪符？そんなものがあるのね」
昔のカトリックかしら……。
「それじゃあ……、そうですね、街の観光でもどうですか？案内しますよ」
「あら、いいの？それじゃあ行きましょう」
「お食事はどうですか？」
「そう、ね、まだＦｒ・ｈｓｔ・ｃｋは済ませてないわ」
「はい？」

「あー、朝食はまだよ。ドイツ語は通じないのね……」
「そうですか、では、食堂に行きましょう」
……メイドが歩き回る大きな食堂。
メイドさん、かぁ。
可愛いわねえ、私もそういう服を着てみようかしら？
ふりふりで白黒の可愛い服を着て、提督に見せたら……、可愛いって褒めてくれるかしら？
ふふ、提督に褒めてもらえたら、私は何もいらないわ。
「あの、貴女、ええと」
「ああ、ビスマルクよ」
「ビスマルクさんは、人肉を嗜みますか？」
「嗜まないわよ?!そんなもの食べる訳ないじゃない!!」
シラツユシスターズじゃあるまいし!!
「そうですか？すみません、ご主人様も、私を含むご主人様のペットも、人肉を嗜むものでして」
「そ、そうなの」
「で、あれば、ドラゴンのステーキがオススメですよ」
「まあ、ドラゴン？食べたことないわね、食べれるの？」
「ノースティリスでは最高クラスの肉と名高いんですよ」
へえ、そうなの。
確か、神話では、ドラゴンの血を浴びて不死身になった男の話とかがあるし……、やっぱり、ドラゴンの血肉は特別なものなのかしらね。
「ドラゴン牧場もありますから、あとで見に行きますか？」
「それは面白そうね」
ドラゴン牧場……。
ドラゴンって飼育されるものなのね。
「さあ、ドラゴンステーキをどうぞ。今朝とれたカオスドラゴンのステーキです」
「カオスドラゴン……、何というか、穏やかじゃないわね」
さて、まあ……、こちらは艦娘。ある程度の毒やウイルスなら無効化するし、ほとんど病気にもならない。

つまり、何を食べても平気だってこと。
気になるお味は……？
「……Ｌｅｃｋｅｒ!!」
「え？」
「あ、美味しいってことよ」
提督に聞いたけど、トカゲはささみのような味がするらしいわ。
でも、ドラゴンはトカゲとは全然違うのね！
どちらかと言えば、クジラとか、馬とか……、あと牛にも近い？ような？それで……、野生的ね、ジビエって感じ。
和牛のような、霜降りでとろける、といったイメージじゃないけれど、噛み応えがあって、肉汁が溢れる……、みたいな？
駄目ね、ウォースパイトみたいな食に関するうまい感想が出せない。
けどまあ、とても美味しいわ！

食事を終えて、牧場や畑の見学。
牧場には、カオスドラゴンという、十メートルクラスの巨大なドラゴンが。
「強そうね、これを食べるの？」
肉食の生き物は食べても美味しくないって聞くけど……。
「ドラゴンは雑食ですし、カオスドラゴンはレベルが高くて、肉の質が良いんですよ」
「そ、そうなのね」
レベル？
「こっちの柵は……？」
「その四角いのが、テロ用キューブ、にゅるにゅるしたのが、テロ用エイリアンです」
「テロ用？生物兵器ってこと？」
「そうですね、ご主人様は、いたずらに世界に混沌を振りまくのがお好きな方ですから、街中で放つ用の増殖モンスターと寄生モンスターを用意しているんです」

「何でそんなことを……」
「ご主人様は、平穏な日々を過ごす人々が恐怖のどん底に堕とされ、大切な人を喪って慟哭する姿や、プライドを捨てて媚びる人々をプチっと殺すのが趣味ですから」
「そ、そうなの」
「最近は、妊婦の腹を引き裂き、胎児を母体に食わせて笑っていましたよ。あの時のご主人様はとても楽しそうでした」
そのご主人様っていうのは悪魔の一種かもね……。
気をつけないと。
「こ、こっちの畑は？」
「野菜、果物、宝石、アーティファクトが生えます」
「は？」
「あ、神器が生えてますね。収穫してみますか？」
「い、いやその、私の目が確かなら、植物に剣が生えているんだけれども」
「そういうものです」
「そ、そう……」
そういうものなのね。

「ビスマルクー、どこだー？あ、いた！」
「あ、提督！」
提督が迎えに来てくれたわ。
「うちの子の面倒見ててくれたのね、ありがとう」
「いえ、ご主人様のご友人のお嫁さんですから」
「扉はこの辺にあるんだろ？暇な時はうちにおいで、ご馳走するよ」
「ありがとうございます、ご主人様と伺いますね」
と、少女と短い会話を交わすと、提督は私の手を取って、転移。
黒井鎮守府へ帰った。
「ビスマルク、あそこは本当に危ないから」
「そ、そうなの？」
「エーテルの風が吹く時期じゃなくって良かった。大丈夫かい？」

「身体に問題はないわ」
「あっちに行くなら、最低限、シェルターと食料を持ち込むこと！良いね？」
「え、ええ」
ノースティリス……、よく分からないけれど、恐ろしいところだったわ。

３３４話　異世界転移これくしょん　その３

「……えへへへへ、やぁん、旅人さんったら、そんなにおっぱい揉んじゃ駄目ですよぉ……」
『……』
「ちゅっちゅも駄目ですぅ、千歳、旅人さんのこともっと大好きになっちゃいますからぁ……」
『……』
「でもぉ、大好きな旅人さんにお願いされたら、私は断れません……、ああ、ついに千歳と旅人さんは結ばれるんですね……」
『……その』
「うー？何い、千代田？今何時……、あ、あら？どここ？」

はい、こちら千歳です。
えーと、ですね。
目の前には全身鎧の騎士。
石造りの、祭祀場、らしき場所。
こ、ここは、どこかしら？
昨日の夜、艦娘皆んなでワイワイ飲んだあと、記憶がない。
確か……、トイレに行って、その後……。
ええと……。
駄目ね、思い出せないわ。
でも、ね？
それがなんで、こんなことになるのかしら？
まず、見るからに、ここは日本じゃない。
となると……。
「明石さん？出てきなさい、また変な悪戯をして！」
『……その、だな』
「それとも夕張ちゃんの方ですか？早く出てこないと怒りますよ?!」
『……待ってくれ』
……はぁ。

「……あなたは？誰が変装してるの？それとも立体映像？ロボット？」
　こんな、鎧の騎士なんて、そうそういてたまるもんですか。
『……私は、その立体映像とか、ロボットとかは分からないが、少なくとも、そのどちらでもない』
「じゃあ何かしら？今時、騎士鎧だなんてあり得ないわ。誰かの悪戯なんでしょう？」
　すると、騎士は、私の手を握った。
『ほら、触れるだろう。霊体やまやかしではないぞ』
「中身が機械とか」
　今度は、兜を取る騎士。
「これでどうだ？」
「あら、美形ね。旅人さん程じゃないけれど」
「それはどうも。……旅人の知り合いか？」
「妻よ」
「そ、そうか」
　妻よ。
　ええ、そうですとも。
　妻だって言ったら妻なのよ。
　まだ肉体関係はないけれど、それも時間の問題。
　旅人さんは私のことを愛してくれているもの、そのうち抱いてもらえるわ。
　そうしたら、元気な子供を作って……。
『人間か？』
　……っと、兜をかぶり直した騎士が質問してくる。
「人間？違うわ、私は艦娘よ」
『……聞いたことがないな』
　兜のせいで表情は見えないけれど、悩んでいるような仕草を見せる騎士。
「……それで？ここはどこ？」
『ここは、火継ぎの祭祀場だ』

はぁ、そうじゃないわよ、もう。
「そうじゃなくって、どこなの？」
『……？、ああ、ロスリックだ』
ロスリック？
聞いたことないわね。
まあ、別にニュースとか地理とかには興味がないから、私が知らないだけなのかもしれないけれど。
「そう……、ロスリック。それで、あなたは？」
『火の無い灰……。そう呼んでくれ』
「？、それは、渾名とかじゃないのかしら？名前は？」
『名前？名前か。……ふふ、そんなものは、とうの昔に忘れてしまったよ』
どこか、悲しそうに、自嘲するかのように短く笑った騎士は、そう呟いた。
「……そう。何か事情があるのね。それじゃあ、騎士さんと呼ばせてもらいますね」
『ああ、好きに呼んでくれ。それで、君はどこから来たんだ？』
「日本の、黒井鎮守府からよ」
『……日本、か。聞いたことがないな』
まあ、でしょうね。
「まあ、何日か待てば、旅人さんが迎えに来てくれるわ、きっと」
『そうか。愛されているんだな』
「ええ、当然よ！私と旅人さんは結婚しているの！」
『……そうか。幸せに暮らすといい。私のようにはなるなよ』
……過去に何かあったのかしら。
ちょっと、暗いわね、この人。
『……艦娘、とは、不死ではないのか？』
「それはそうでしょう。不死？死なない生き物なんていないんじゃないのかしら？」
何を言っているのかしら。
『そうか。では、飢えるのか』

……そうね、お腹が空いてきたわね。
「この辺に飲食店とかって……、いえ、外国だしお金が使えないわね。どうしようかしら……」
まあ、一週間くらいなら、我慢できないこともないけれど。
『そうか……。人間に近い生き物なんだな、艦娘とは。しかし、この辺りに食べれるものはないな……』
「どういうことかしら？食べれるものはないって。じゃあ、あなたは何を食べているの？」
『はは、私に食事とか、睡眠とかというものは不要なんだ』
はぁ？
「そんなの、あり得ないわ。人間なら、いえ、艦娘でも、お腹は減るし眠くもなるわよ」
『……私は、人間じゃないんだ』
「やっぱり、ロボット？」
『い、いや、違うんだ。私は……、不死なんだ』
不死。
火の無い灰。
そう名乗った騎士は、どうにも人間じゃないらしいわ。
どうにも、呪われていて、死ねないのだとか。
「あなたも大変なのね」
『ふふ、そうだな、大変だな』
兜で、くぐもった声で答える騎士さん。
『しかし、そうだな。食事をしなければならないのか。困ったな』
少し首を傾げると、そうだ、と前置きしてから、こう言った。
『前に、旅人と一緒に食べた、大沼の蟹……。あれは美味かったなあ……。他にも、古竜の頂の岩トカゲも美味かった。よし、取ってこよう』
そう言って、騎士さんは、私にここで待つようにと言いつけて、篝火に触れると、姿を消してしまった。
「なんなのかしら、もう」

待てって言われてもね。
何が何だか。
取り敢えず、祭祀場と呼ばれたここを歩き回る。
「……」
黙って鍛治をする人、本を読んでいる人、祈っている人。
話しかけづらいわね……。
「お嬢ちゃん」
「あら？」
……なんだか、明らかに怪しい人に話しかけられた。
私の、困惑というかなんというかを感じ取ったのか、柔らかい態度を見せる、おじさん？かな？
「いやぁ、俺は怪しいもんじゃないんだ。まあ、こんな格好じゃ説得力はないだろうけどよ」
痩せた身体に腰蓑一つ、頭に大きな頭巾を被った小男。
「え、ええと、あなたは？」
「俺はグレイラットってもんだ。お嬢ちゃんは、旅人のマオの知り合いなんだろう？」
「妻よ」
「お、おう、そ、そうなのか？その、それでよ、この世界について何も分からないみてえだったからよ、俺が教えてやろうと思ったんだが、迷惑か？」
「いえ、それは有難いわ。あの騎士さん、何処かに行っちゃったから」
「あいつはそういう奴さ。ふらっといなくなると、デカいことをやって帰ってくる大物さね」
「そうなの？」
「ああ、そうとも。……それじゃあ、あいつと旅人の話をしようか」
……
……
「へえ、そんなことが……」
どうやら、ここは、遠い遠い昔のどこかも分からない遠い場所らし

い。
　そこで、騎士さんは、旅人さんと旅をして、ある時は巨大なドラゴンを、ある時は伝説の騎士を、またある時は巨人を。
　様々な困難に打ち勝ってきたらしいわ。
「凄いのね、騎士さんって」
「ああ、あいつは凄えよ、本当に凄え」
『戻ったぞ』
　あら、帰ってきたみたい。
「で、これは？」
『大沼の蟹の鋏と、岩トカゲだ。火を通せば食えるはずだ』
「私の為に態々？その、あ、ありがとう」
『気にするな。私はもう、使命を果たして退屈なんだ』
　使命、ね。
　火の時代を終わらせたとか言うけれど。
『火防女、鍋と塩はどこにやった？』
「こちらです、灰の人」
『ああ、あったあった。さて、水と薪は……、と』
　蟹の鋏と岩トカゲを砕いて、捌いて、鍋に入れ、塩を振る騎士さん。
それと、どこからか摘んできたのか、野草も入れている。
『発火、と』
　片手から火を放ち、鍋を火にかける。
『贅沢を言えば、野菜やパンも欲しいが……、たまに旅人から買い取るくらいで、常備してはいないんだ。すまないな』
「そ、そう。良いの、食べられるだけで十分よ」
　食べなくても死なない人に、食料を用意しておけって言うのも無理な話よね。
『……さあ、そろそろ良いだろう。食べるといい』
　粗末な、木でできた器に、蟹と肉をよそわれる。
「ありがとう、いただくわ」
　まあ、味には期待していないけれど……。
「あら」

思ったより美味しいわね。
『どうだ、中々いけるだろう？旅人が教えてくれた料理なんだ』
「そうなの。……旅人さんとは、長い間一緒にいたのよね」
『ああ。彼は、決して強くはなかったが、どんな白霊より頼りになった、私の大切な友人さ』
……ふーん。
なんだか、私の知らない旅人さんを知っているのって、ちょっと、悔しいわね。

「千歳！」
「旅人さん！」
半日もすると、旅人さんが迎えにきてくれた。
「心配したんだよもう！こんな危ないところに来て！」
「ごめんなさい、旅人さん……」
「いや、良いさ。無事でいてくれただけで、俺は嬉しいよ」
「あのね、旅人さん。貴方の知り合いの、騎士さんが面倒を見てくれたの」
「騎士さん……、ああ、灰か。ありがとう、火の無い灰よ。世話になった」
『気にするな、お前の妻だと聞いた。大したもてなしができなくて悪かったな』
「いや、もてなしなんて……。ここにいさせてくれただけでありがたいよ」
旅人さんは、頭を下げると、騎士さんと握手をして、私を連れ帰った。

不思議な体験だった。
おとぎ話の世界に迷い込んだような。
もし、次があるなら。
祭祀場の外を見て回りたいものね。

３３５話　異世界転移これくしょん　その４

む、こちら長門だ。
昨晩は少し飲み過ぎてしまって、意識が曖昧になって、そのまま床で寝た、気がするが。
ここは森だ。
むう、黒井鎮守府の裏山だろうか？
……いや、お世辞にも賢いとは言えないこの私にも分かるぞ。
辺りを見回すと、明らかに、裏山のものではない動植物が生息している。
発行する大きなトンボのような生き物、極彩色の鳥のようなもの、おかしな形の昆虫。
蔦が伸び、草木が生い茂るジャングルのような地。
日本ではない。
いや、地球ですらないかもしれない。
ここは、どこだ。

「むう……」
取り敢えず、艤装である服を着て、辺りを歩く。
遭難した時は歩き回るななどとはよく聞くが、今のように助けが来る見込みがない場合なら、歩き回る他ないだろう。
幸いにも、景色が特徴的で、同じ道を行ったり来たりすることはない、とは思うぞ。
さて……。
「腹が減ったな……」
戦艦は燃費が悪いのだ。
「だが、その辺の虫を食う訳にもいかんな……、それは最終手段だ」
そう呟いて歩く。
一刻も早く人を見つけねば。
提督が探しに来てくれるだろうが、その前に何か食べたいぞ。
む？

「これは……、何かが焼ける匂いか？火、と言うことは人がいる、のか？」
まあ、現状、何の手がかりもないしな、向かうしかないか。
森の木々を掻き分け、足を進める。
すると、そこには。
「グルルルルゥ……」
「恐竜……？」
頭から尻尾の先まで、十メートルはあろうかと言う竜がいた。
桃色の皮膚に、青紫の毛が生えた竜だ。
成る程。
「ガルルルゥウ!!」
「ここはそういう世界か！」
竜は、私の姿を見るや否や、尻尾で攻撃をしてきた。
縄張りを犯す敵に見えたのだろうか。
対話は不可能だな、これは。
尻尾の一撃を受け止め、投げ飛ばす。
「おおおおお!!!!」
「ガァアッ!!」
竜は、背中から地面に叩きつけられ、苦痛のうめき声を上げる。
それはそうだろう、そのトン単位はあるであろう巨体を投げ飛ばされたら、効くだろうよ。
「グ、ガアアアア!!!!」
すると、竜は、背中に羽のような膜、トサカを立てて、怒り狂った。
痛みを怒りで打ち消すのか。実に野生的で、効果的だな。
そのまま、竜は、火を吹いたのだ。
信じられるか？
火を吹く生き物とは、この世のものとは思えんな！
しかし、火を吹くくらいでは私は殺せん。
少しばかり煤が付いたが、無傷だ。
さあ、次はこちらの番だ。
「砕けろ！」

「ゴギャ!!!?」
鼻に当たる部分を殴り、吹き飛ばしてやった。
「まだだっ!!!」
地面を踏みしめ、追いすがり、膝蹴りで顎を砕く。
「だりゃりゃりゃりゃー!!!」
空いた土手っ腹に連打を浴びせると、内臓が破壊されたらしく、竜は、大量の血液を吐いて、動かなくなった。
「ふむ、こんなものか」
と、そこに。
「あ、あの」
「む？」
生物的な鎧を身につけた人間が声をかけてきた。
「君、今、アンジャナフを素手で殴り殺していなかったか？」
「これは、アンジャナフ、と言うのか。私相手に一分保たせたのだ、それなりには強いな」
と、正当な評価をした。
「は、はあ、そうか……。君はとても強いんだな。自分じゃこれだけ武装してやっとやっとだよ」
「なに、努力は人を裏切らないぞ。精進するといい。君もいずれこれくらいはできるようになる。……ところで、ここはどこだ？」
「ここは、古代樹の森だけど」
「そうか……。実は私は、道に迷っていてな。助けてくれないか？」
「あー、まあ、今丁度、今日の仕事がなくなったところなので、手を貸しますよ」
「む、助かる」

どうやら、この戦士の仕事は、先ほどの竜……、アンジャナフだったか？の危険な個体が現れたらしく、それを討伐しにきたと言う話だった。
が、しかし、それより先に私がアンジャナフを殺してしまった故に、報酬は全部渡す、とのこと。

少し悪いことをしてしまったか？
「すまない」
「いや、気にしないで良いさ。狂暴なモンスターは大きな被害を生むかもしれないからね」
そうか。
さて、それで、なんだが。
「旅人、新台真央の名に聞き覚えは？」
「マオ……、ああ、旅人か。知り合いなのかな？」
「ああ、そうだ。連絡できるか？」
「いや、旅人は神出鬼没だから、連絡はできないな。けど、たまにここに来るから、ここで待っていたらどうかな」
「良いのか？すまないな、本当に」
「良いよ、大丈夫」
……。
ぐぅ、と、私の腹が鳴る。
「ぐぬ」
「あ、ああ、その、食事はどうかな？料理長の料理は安くて美味しいんだ」
「そ、そうなのか？」
先程、報酬と言って、この世界のお金をもらったしな……。
「よし、では、そこで何かを食べようか」
案内されたその土地は、船の周りに木組みの建物が無秩序に建てられた、ある種面白い地だった。
ここは『アステラ』。
新大陸の調査団の地。
そこで、その、料理長なる人物に会ったのだが。
「ニャんだ？」
「い、いや、何でもない」
猫だぞ、こいつ!!!
比喩でも何でもなく、猫みたいな人とかでもなく、二足歩行で歩く猫だ！

どうなっているんだ一体……。
いや、それを考えれば、うちにも、首輪付きという二足歩行で歩く動物がいたな……。
おかしくない、のか？
「そ、その、オススメを」
「おう」
しかし……。
目の前の鉄板で肉や魚を焼き、大鍋でシチューを作られると、こう。
食欲が湧く！
「はいよ」
「おお！いただきます！」
串に刺さった海老、肉。これは……、パエリアというやつか？それとシチュー、そしてチキン？らしき鶏肉。
それと酒……、これはビール？のような、エールというやつか？
さて、肉。
「はふ、熱っ、むおお！」
肉汁が溢れる！
美味い！何の肉だ？分からんが美味い！
「シチューは？おお、濃厚だ！」
提督が言っていたな、煮る料理は一度にたくさん作るほど美味いと。
成る程、確かに、これは一度にたくさん作らないと出せない味だろう。
美味いぞ。
パエリアは……。
「おお！美味い！」
魚介の風味がたまらないな！
しかし、私が食べたことのあるものとは少し違うな……、こっちの方が生命力に溢れるような、活力を得られるような気がする。
「ごくっ！っぷはあ！」
酒も美味い！

「お代わりだ！」
「……姉ちゃん、まだ食うのかい？あの旅人並か？」
「む、確かに私は、提督と同じくらいは食べるが？」
「……てめえら、じゃんじゃん作れ！余った食材は全部使え！この姉ちゃんは旅人並に食うぞ！」
「「「ハイニャ!!!!」」」
おお！
料理がたくさん！

「ふぅー、食った食った！いや、美味かった！」
「お代はこれくらいニャ」
「こんなもので良いのか？安いな」
「余りそうな食材を全部食べてもらったから安いニャ」
「成る程な」
はあ、満腹だ、美味かった。
こんなに美味いものを腹一杯食べれば、どんな敵も怖くはないだろうな！
む？
「長門ー、迎えに来たよー」
「おお、提督！」
「もー、酔って別世界に行くとか駄目だよー？気を付けてねー？」
「ああ、すまない……」
「でも、楽しかったかい？」
「あ、ああ！」
「なら良かった。次からは一緒に行こうね」
そして、提督と軽く挨拶回りして、そのまま、帰ることになった。

しかし、あの味は忘れられないな……。
「あ、あっちの食材は幾らかあるから、黒井鎮守府でも作ろうか？」
「本当か?!」
美味い飯が食える。

こんなに幸せなこと、そうそうないぞ。

３３６話　異世界転移これくしょん　その５

はい、こちらアイオワ。
昨日の夜の飲み会以降の記憶がないわ！
ＨＡＨＡＨＡＨＡ！
笑っちゃうわね！
「で？ここはどこかしら？」
暗い街角。
中世風。
何処からか血生臭いような臭いが漂ってくるのが、艦娘という超常的な感覚神経の持ち主であるＭｅには感じられたわ。
それに、薄暗い。
月明かりだけが、陰鬱な街並みを怪しく照らしている。
時計を見たら夜の十二時であることが分かった。
「どこよ、ここ」
遠くから、人のような、獣のような遠吠えが聞こえる。
うーん、そうね。
取り敢えず、歩いてみましょうか。

あ、人影。
ｇｈｏｓｔ、ではない、わよね？
嫌よ、ｇｈｏｓｔとか。
そういうのはシラツユシスターズの領分でしょう？
さて、と。
取り敢えず英語で良いわよね。
「ｈｅｙ！」
「ウ、あ」
あら？
……人じゃないわね、これ。
「ヴァア、うるぐるるう」
人の形をした、獣？かしら？

血生臭い、獣臭い。
化け物じゃないかしら。
でも、Ａｄｍｉｒａｌもこれ以上の化け物だし、話が通じるかも。
「もしもし、英語は分かるかしら？」
「ケモノ、獣の、獣が、ああ、あうるるる」
「……その、ここはどこかしら？」
「……まれ」
「え？」
「黙れえれれ?!、この病気持ちのネズミが!!殺してやるれ!!!れあ！れあるるる!!!」
片手の斧を振り上げて、襲いかかってきた。
「ちょ、ちょっと貴方ねえ……」
ただの鉄の斧みたいだから、素手で受け止めたけれど……、腕力が凄いわね、人間の倍くらいあるんじゃないかしら？
「もしかして、物盗りとか、そういうのかしら？Ｍｅは軍人だから、無駄な殺しはしない主義なんだけれど……、襲ってくるなら、殺すわよ？」
その時。
「……ぁぁぁ」
「ん？」
「おぉぉぉぉぉ!!」
人の胴体を真っ二つにできそうなほど重厚な斧を持った大柄なおじさんが、目の前の獣人間を蹴り倒して。
「がぁぁぁぁぁ!!!」
「ぎぃぃぃぃぃぃぃ?!!!」
頭をかち割った。
え？
……え？
やだ、何これ。
何でこんなｇｒｏｔｅｓｑｕｅな光景を見せられなきゃならないの？

Ｍｅなんか悪いことした？
「……女、無事か」
「……あっ、え、ええ、大丈夫よ」
大柄なおじさん……。
片手には、そう、確か、ヤマカゼが持っていたものと同じ大斧。左手には散弾銃……、それも、ａｎｔｉｑｕｅな古いモデルのもの。服装は神父服に黒いマント、そして、黒革の帽子。
少し長めの髪、そしてヒゲ。色は銀。顔は、悪くないけど、表情が険しいのと、目元をボロボロの包帯で隠しているのが不気味でｍｉｎｕｓ　ｐｏｉｎｔかしら？
「獣狩りの夜に出歩くとは……、愚かな女だ」
「獣狩りの、夜？」
「……知らないのか？お前……、この匂いは、人じゃないな、艦娘、とやらか」
「え？に、匂い？！」
やだ、Ｍｅ、変な匂いとかするの？！
「匂い立つなぁ……、分かるんだよ。鉄と火薬の匂いがするんだ」
「ｍｅｔａｌ？ｇｕｎｐｏｗｄｅｒ？そ、そうかしら？Ｍｅには分からないけれど」
ｒｅａｌｌｙ？！
「アイリーンなら教会だ」
え？え？
「あ、あのね、Ｍｅはここに迷い込んだみたいなの」
「……迷い込んだ、だと？」
「ええ、その、昨日、酔っ払って」
「……馬鹿なのか、お前は」
なっ、ば、馬鹿とは何よ！！
「う、うるさいわね、たまには羽目を外したって良いじゃない！それで、ここはどこなの？」
「ヤーナムだ」
ヤーナム……、シラツユシスターズが話していた、ような？

「そう……、それで、黒井鎮守府に帰りたいのだけれども」
「知らん」
知らんって……。
「俺はお前らがどこからきたかなんて知らん」
まあ、そうよね、それもそう、か。
「……だが、道くらいは教えてやる」
「あら、ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」
なんだ、思ったより優しい人ね。

おじさん……、ガスコインと名乗った神父さん。
一緒にヤーナムの街を歩く。
ヤーナム。
この古い都は、とある病が流行っているそうだ。
その名も、『獣の病』。
感染したものは、理性を失い、獣になるそうだ。
聖職者ほど、より強大な獣になる、とか。
そして、月夜の日。
獣狩りの夜が始まる。
獣狩りの夜とは、即ち間引き。
獣の病により、獣となって暴れる人々……、いえ、『元』人々を、殺して回る夜のこと。
そうやって、獣狩りを実行する人々のことを、狩人と呼び。
狩人は獣の血に塗れながら、獣狩りを行うらしい。
この、ガスコインさんも、狩人の一人だと言う。
相棒のヘンリックさんとは別行動で、『仕事』をしているらしいこと。
狩人狩りのアイリーンと言う人が面倒を見てくれると言うこと。
獣は殺せるなら殺してしまって良いこと。
それくらいしか聞き出せなかった。
何せ、このガスコインと言う人は、気難しい上に無口で。
あまり話しかけることはできなかったし、話すのが面倒なようで、

答えてはくれなかった。
　でも、なんだかんだ言って、仕事の最中に素人で一般人（？）のＭｅを案内してくれる辺り、悪人ではないな、とは思うわ。

「アイリーン」
「何さガスコイン……、あら」
　案内された先には烏の羽の大きなマント。黒い革の服と小さなとんがり帽子。ペストの医師のような、嘴のような白いマスク。
　声からして女性、それも老齢の。こちらもまあ、不気味ね。
「可愛らしい子じゃないか。それにこれは艦娘だ」
「ええと、貴女がアイリーンさんかしら？」
「そうさね、私がアイリーンさ」
「Ｍｅはアイオワって言うの。よろしくね。その、それで、Ｍｅはちょっと迷っちゃって……」
　と、経緯を話すと。
「……成る程ねえ。迷い込んだのかい」
　納得してもらえた。
　因みに、ガスコインさんは、アイリーンさんにＭｅを預けると仕事に行くと言ってどこかへ行った。
　薄情ね。
「しかし、参ったね。獣狩りの夜だ、安全な場所なんてありゃしないよ」
　そう？
　なら……。
「うーん、そうね、折角だし、お仕事を手伝ってあげるわ！」
「手伝い？……艦娘なら、できる、か。いやあ、それでも狩人でもない奴が獣狩りなんてやるもんじゃあないよ」
「確かに、ＭｅはＨｕｎｔｅｒではないけれど、その代わりにＡｒｍｙよ！治安維持なんて簡単なんだから！」
「……はぁ、まあ、私の側が一番安全かね。ついておいで、この辺りの獣を狩るよ」

「ええ！」

「私の担当はこの辺りでね。気をつけるんだよ、聖職者の獣は手強い」
大聖堂付近がアイリーンさんの担当らしい。
街にはガスコインさんとヘンリックさん。
旧市街は封鎖されていて、古狩人がいるとか。
森には連盟と言う人達がいて、獣の間引きをしているらしい。
さて、Ｍｅはアイリーンさんと一緒に巡回ね。
「デカいのだ、気をつけるんだよ」
六メートルくらいの巨人が、ハルバードを振り回して暴れている。
どうなっているのよ、この街は。
「オオォオン!!!」
「ふっ」
「馬鹿！受けるんじゃないよ!!」
その声を無視して、振り下ろされるハルバードを受け止める。
「はぁあ!!!」
片腕を思い切り振って、ハルバードをタイミング良く弾き飛ばす。
「オオオオオ!!!?!!」
「やああ!!!!」
「ゴッ!!!?」
そのまま、蹴りを入れて倒す。
「なんて馬鹿力だい……」
倒したところで、アイリーンさんがとどめを刺した。
「無茶はおよしよ、見ててヒヤヒヤするよ」
「いつも通りよ？」
「それにしたって、獣の正面に立つのは良くない。力でゴリ押しちゃいけないよ」
「まあ、分かったわ」

そうして、幾らか獣を狩った頃。
「ここにいたか、アイオワ」

「あら、Ａｄｍｉｒａｌ」
「迎えに来た、と言いたいところだが、折角だし獣狩りを手伝っていくか。前衛頼んだ」
と、弓を取り出したＡｄｍｉｒａｌが、言った。
「ＯＫ！任せて！」
獣狩り、治安維持活動。
そういうのは得意よ！

そして夜が明けて……。
「はい、獣狩り終了ー！狩人の皆さん、お疲れ様でーす！あ、ガスコインさん、これケーキ。娘さんと奥さんに」
「ああ」
Ａｄｍｉｒａｌに連れられて、解散。
帰り際には、ガスコインさんにケーキを渡していた。何でも、娘さんがいるそうだ。
「アイオワ、帰るよ、おいでー。あ、アイリーンさん、ありがとうございます、これ、うちで焼いたクッキーです」
「ありがとう。白露型の子達によろしく伝えておいておくれ」
「はーい」
と、普通に、さも当然のように、転移魔法で帰った。
ヤーナム、恐ろしい土地だったわ。

３３７話　異世界転移これくしょん　その６

は～い～、こちらポーラですよお。
んへへへへ。
いやあ、昨日の夜は沢山飲んでー、なんだか気持ちよくなったら～、んー。
覚えてませんねえうはへへへへえ～。
仕方ないんですよお、お酒が美味しいんですもの～。
「で？誰ですか貴方？」
「いや、こっちのセリフだぜぇ……」
んー？
「オレンジだからオレンジさんで良いですか～？」
「オイラはそんな名前じゃねえ！」
「ああ、オイラーさんですか～」
「い、いや、オイラはビィってんだ」
「？、オイラーさんじゃないんですか～？」
「ビィだよ！オイラはビィ！」
「オイラー・ビィさんですか～？」
「違うっての！ビィが名前なんだよ!!」
「ああ、そうですか～、なら、最初からそう言って下さいよ～」
「言っただろ!!」
「それでトカゲさん」
「オイラはトカゲじゃねーーーっ!!!」
あら～？
怒らせちゃいましたねえ。
なんででしょう？
「ビィ、どうしたの？」
すると、十五歳くらいの女の子が。
「ジータ、この姉ちゃん、なんつーか、微妙にズレてんだ……」
「えへへぇ、よく言われます～」
「ええと、貴女は？」

「私ですかぁ？私はポーラですよぉ」
「ポーラ、ね。何でこんなところに？」
「ええ～？」
……そう言えば、何でここにいるのか、ここがどこなのか、分からない？
「んー、分からないです～」
「え？わ、分からない？」
「はい～、迷いました～」
「迷った……？」
昨日の夜、たらふく飲んで記憶がないと言ったところ。
「あはは、ラムレッダみたい……」
「？」
「え、と、ここにいたら危ないよ？森の中は魔物が出るから」
「はぁ、魔物」
魔物～？
魔物？
「深海棲艦ですか？」
「えっ、深海、何？」
「深海棲艦なら、私が倒しますよ～？」
「ち、違うかな？深海なんとかじゃなくって、魔物だよ？」
「日本で魔物と言えば深海棲艦くらいですよ～？」
妖怪って言うのを見たこともありますけど、それは違う世界の話ですし～。
「ここはその、ニホンってところじゃないよ？」
「ええ？そうなんですか～？んー、寝ている間に日本から出ちゃったんですかねえ？」
「い、いや、それは分からないけど、そうなんじゃないかな？現に今ここにいるんだし」
「ここはどこですか～？」
「アウギュステだけど……」
んんん～？

「えと、ヨーロッパですか～？」
「いや、アウギュステはアウギュステだよ？」
んー。
「あはぁ、完全に迷いましたねえ！」
もう完全に……、完全に迷いましたねえ！
「……もしかして、困ってる？」
「んー、割と？」
「それじゃあ、取り敢えず私の団に来てよ！」
「団？」
「そう、騎空団！」
んー。
「よく分からないですけど～、お酒はありますか～？」
「沢山あるよ！」
「沢山ですかそうですかー！じゃあついて行っちゃいます～！そのうちお迎えは来ると思いますし～！」
「お迎え？」
「提督ですよぉ」
「提督……、偉い人？」
うーん？
提督……、階級的には偉くないですし。
「でも凄い人ですよ～。優しいしかっこいいし～」
「……旅人のマオって人？」
「あ、はい」
頭を抱えるジータさん。と、ビィさん。
「マオさんね……！マオさんとこの子ね……!!」
「あの野郎の知り合いか……」
「どうしました～？」
「あの、ね、マオさんはね、うちの団の非常勤みたいなものなんだけれど……」
「女癖が最悪でなぁ……」
あー。

「私達、艦娘も、百人ぐらいいますけど、皆んな提督が大好きで、日夜鎬を削ってる？んですよ～」
「うわぁ……、うわぁ……」
「あの野郎は本当にもう……」
　仲良くやっているとは思いますけど～？
「大丈夫なの？大丈夫なのそれ？私の団、あの人のせいで女の子同士が争い合って大変なことになったんだけど」
「たまに半分本気で殺し合いしたりしますけど、基本的に皆んな仲良しですよ～？」
「うわぁ……、うわぁ……」
　ええ～？
　何があったんでしょう……？
「最初はメーテラとかラムレッダとか狙いやすそうなのを……、次にマライアとかシグとか……、堅実にソシエとユエルとか……、見境なくシャルロッテとかセンとか……、アステールやサラにも声をかけていたし……、どうやったのか堅物のシルヴァやそもそも人じゃないゾーイまで……」
「うう……、やめてくれぇ、睨み合わないでくれ……、オイラ達仲間だろ……」
　トラウマに嘆く二人。
　……提督、何をしでかしたんですかねえ？

「それじゃあ、私達は依頼だから」
「姉ちゃんはどうすんだ？」
「んー、お伴しますねえ」
「戦えんのか？」
「はい～、殺し合いは得意ですよぉ～！」
「物騒だなあ……」
　よく分かりませんけど、魔物を殺せばお酒が飲めるんですよね～？
「この辺りのお酒は何が美味しいんですかね～、楽しみですね～」
「ああっ！魔物だ！」

「えい」
　ケルベロス。
「銃……？」
「姉ちゃん、銃使いだったのか！でも、そんなでけえ銃、どこに隠し持ってたんだぁ？」
「これですかぁ？」
　私のケルベロスとデスホーラーは艤装ですよお。
　なんなら、この服も艤装ですねえ～。
「艤装なんで、好きに出したり消したりできるんですよぉ」
「艤装？」
　艦娘、知らないみたいです。
　まあ、恐らくは地球じゃないですものね～。
　なら、艦娘について知らないのもおかしくないですよねえ。
「えーと、ですねぇ、まず、私達は艦娘と言って、私の世界で活躍した戦艦の、何というか、化身なんですよぉ」
「へー、星晶獣みたいなものかな」
「肉体のある船の幽霊みたいなものと思ってもらって構いません～。ちゃんと子供も産めますし、お腹も減りますよ～」
「成る程」
「でも、毒物に強くて～、力も素早さも、丈夫さも五感も、全部、人間より強いんですよ～」
「へー」
「それで、皆んなそれぞれ、艤装と呼ばれる装備を持っていて～、それを使って戦うんですよ～」
「その銃が艤装なんだね？」
「はい～、それとこの服と、デスホーラーも艤装です～」
「そうなんだ」
　そうなんですよ～。
　二丁拳銃ケルベロス、複合武装デスホーラー。
　そしてズボンとジャケット、帽子に伊達眼鏡。
　これが私の艤装。

「あ、また魔物だ！」
「えい」
「早い?!」
よく分かりませんけど～、この程度の強さなら、戦闘にもなりませんね～。
害虫駆除みたいなものですかねえ。
「まあ、このレベルの魔物なら、私も、まず負けることはないけれど、ポーラは凄いね！無傷で切り抜けちゃうんだもん」
「えへへぇ、それほどでもないですよぉ～。私は、黒井鎮守府の中では中くらいの実力しかありませんから～」
「こ、これで中くらいなんだ……」

魔物?を沢山倒したので、報酬をもらって、グランサイファーってところでお世話になりました～。
「ん～！こっちはエールが主流なんですか～？」
これはこれで美味しいですね～、ビールとかとはまた違った味わいです～！
料理も美味しいですし～。
戦後はこの辺りで騎空士?をやるのも良いかもしれませんねえ。

「ポーラ、ここにいたのか、迎えに……」
「「「マオー!!!」」」
「あっ、やべっ」
あ、提督。
お迎えありがとうございます～。
「マオっ！会いたかった！」
「ウチの旦那様になってくれるって！」
「ぼくをずっと怖い人から守ってくれるって!!」
「愛しているって言ってくれたじゃないか！」
「一生側にいるって!!」
「けんぞくぅなんだよ!!一緒にいなきゃダメなのに!!」

あら？
女の子達が集まりましたねえ。
「あ、あはははは、ポーラ、帰るよ、早く帰るよ」
あ、見なかったことにする気ですねこれ。
「「「マオー!!!」」」
「お願い帰して……、お願い帰して……」
うーん。
「彼はポーラのものですよぉ～、有象無象は引っ込んでて下さ～い」
「「「……は？」」」
んー？
「「「マオは渡さないっ!!!!!」」」
やりますかぁ?!
「かかってきて下さいよぉ～!!」
そして始まる乱闘。

「グハァッ!!!」
「ジーターーー!!!!ジータがストレスで血を吐いちまったぜぇ!!!」

３３８話　イート・ザ・深海棲艦

「提督、私思ったんです」
「なんだい赤城」
「深海棲艦って、食べれるんじゃないですか？」

赤城……、遂に頭が……。
「赤城さん……、遂にいかれてしまいましたか……」
加賀が悲しそうな目で赤城を見る。
「ちっ、ちっ、ちっ、可能性の追求ってやつですよ、加賀さん」
何が？
「赤城さん、良いですか？深海棲艦は、食べ物ではありません。見れば分かるでしょう？」
「そうかしら？世の中には、孵化しかけのヒヨコや蛆の湧いたチーズ、動物のペニスや睾丸を食べることもあるんですよ？」
因みに、それらは腹の丈夫さに物を言わせて食べてきたらしい。俺も食べたことある。いやあ好奇心って良くないよな！
「いえ、まあ……、そうですけど、それとこれとはまた話が別では？」
加賀反論。そーだそーだ。
「ほら、イ級とか、外殻を砕いたことあるでしょう？中身は青白い肉なんですよ、行けますって」
「し、しかし……」
うむ……。
俺が口を挟む。
「赤城、あのな、深海棲艦の正体は、恐らくだが、海の怨念なんだよ。それでも食べたいか？」
「怨念ってなんだか重そうでお腹にたまりそうですよね」
「赤城さぁん!!」
加賀の悲痛な叫び。
まあ、そうだな。

赤城が食べたいってんなら、やってみるか。
「で、僕達のところに来た、と」
「そうだよ（肯定）」
えー、この手のことのスペシャルアドバイザー、白露型、の時雨のところに来た。
赤城と加賀も一緒についてきた。
工房はランタンと魔法で光り、怪しい雰囲気を醸し出している。
「あらかじめ聞いておくけど、深海棲艦を食べたことってある？」
「いや、流石にないね。深海棲艦を食料的観点から見たことは無かったよ」
だろうなあ。
白露型は神秘学者集団みたいなもんやし。
「で？どうなの？実際？」
「ふむ、これが成分表だよ」
紙を受け取る。
どれ。
たんぱく質、脂肪、ビタミン、ミネラル……。
「あれ？これ、食える？」
「そうだね、食べたとしても問題はないね」
マジか。
「でもこれ、ちょっと、数値が人の肉に近いよね」
「おや、そこに気付くとは」
ニヤリ、と笑う時雨。
おっ、緑髪のエレアかな？
このままでは「本当に食べてしまったのか？」されてしまうやもしれん。
「しかし、それはあくまでも成分表。深海棲艦は怨念で動く肉の塊なんだよ」
「成る程、じゃあ、霊的に問題がある、と？」
時雨は少し考える仕草をして、言った。

「……いや、艦娘や提督なら、食べたとしても直ちに問題はないと思うよ」
　そんな放射能みたいな。
「てか、俺なら何を食べても大体大丈夫でしょ」
「……そうだね、それもそうだ。話を聞くところによると、赤城が食べたいと駄々をこねたんだろう？」
「まあ、そうだね」
「むー、駄々なんてこねてませんよー！私はただ、可能性の追求を」
「赤城さん、黙ってましょう？ね？」
　赤城ェ。
「ふむ、どうだろう。怨念の量も大したことはないからね。総合的に見て、食べても問題はないと思うよ」
　そう、か。
「じゃあ、早速やろうか。赤城、深海棲艦を狩ってきて」
「はい！」

　さて。
「イ級です！」
　取り敢えず……。
「血抜きだな」
　狩ってから転移で直ぐに帰ってきてもらったから、死体は新鮮だ。
「ひゅうぅ……、せぇや!!」
　まず、甲殻を切り裂く。
　南斗聖拳で。
　その後、動脈を切り裂いて逆さ吊りにする。
　ドロドロと、人間のそれより赤黒い血液が流れ出て、辺り一面に鉄の匂いが漂い始める。
「美味しそうですね」
「正気ですか赤城さん」
「ええ、血の匂いは好きですよ」
「まあ、私も嫌いではありませんが」

おおっと？ヤベー会話。
スルーして解体。
臓器の作りや位置は、時雨から渡された紙に書いてあった。
それぞれを分解する。
「青白い、ですね」
手元を覗き込む赤城が呟く。
そう、深海棲艦の肉は青白いのだ。
何というか、普通の肉の色彩を反転させました、みたいな。
「よし、と」
取り敢えず解体完了。
「どうします？焼きますか？」
「待って、取り敢えず俺が食べてみる」
生で。
え？
いや、生肉。
食わない？
いやあ、俺は旅の途中、生肉すら食えないシーンが多々あったから、
生肉でもご馳走ってか、何て言うか。
さて、ぱくり、と。
「ど、どうですか？」
んー。
あー。
「人の肉に近いな。食感は硬めだ。煮ると美味いかもな」
「成る程！」
寄生虫とかもいないし、割と食料として優れているのでは？
次は……、焼いてみるか。
塩胡椒でシンプルに、一センチ程の厚さに切り分けた肉を焼く。
「食べてごらん」
「いただきます！」
「う、い、いただきます」
赤城と加賀が、食べる。

「ん、これ、意外と美味しいですよ」
「……本当、美味しいわ」
驚いた表情を見せる二人。
確かに、想像していたよりはずっと美味い。
人間の肉っぽいが、幻想種っぽくもある。食用ではない肉らしい野性味もあるが、海の生き物であることから、獣臭いということもない。
いやー、狸とか食ったことある？あれくっせーのよ。
「次は、スペアリブだ。煮込んだものを甘辛いソースで食べるぞ」
「あ、これかなりいけますよ！普段の料理として出てきても大丈夫な感じです！」
「お、美味しい！料理人の腕かしら？」
あれ？
これ行けるな。
行けるんじゃないか？
「良い匂い……！何作っ、て、る、のおおおおお?!!本当に何作ってるのかしら!!!?」
おっと、サラのエントリーだ。
「いや、ちょっと、深海棲艦食ってみようって話になって」
「どうやったらそんな猟奇的な発想が?!」
「前あげた俺の右腕どうした？」
「?、スープにして食べましたよ？」
うーん、この。
「深海棲艦を食べるなんておかしいですよ!!!」
「俺を食べるのは？」
「それは普通」
うーーーん、この。
「サラさん、これが思いの他美味しいんですよ！」
「アカギ……、遂に頭がいかれて……」
「いかれてません！本当に美味しいんですよ!!」
「ほ、本当に？ｒｅａｌｌｙ？」
「本当です！」

恐る恐る、サラが焼いた深海棲艦肉を頬張る。
「……あ、お、美味しい?!」
「でしょう?!」
などと、騒ぎながら食べていると。
「何だ何だ?」
「どうした?」
「何、うおおおおおわ!!!深海棲艦食べてるうううう!!!」
と、艦娘達が集まってきて。

「本当に美味しい……」
「深海棲艦って食べられたのね……」
「何だろうこれ……、鯨?牛?に近い?うーん……」
結局、皆んなで深海棲艦を食べた。
割と皆んな、娯楽に飢えているし、冒険心もあるしで、多くの艦娘が深海棲艦肉を口にしていた。
「ね、提督、可能性の追求、やってみるものでしょう?」
「ま、まあ、そう、かな?」
そして、深海棲艦を食べ尽くした後。
「白露型が提督の肉を提供してくれるそうだ!」
「「「わーい!」」」
あっ、ふーん。
最終的に俺の肉の料理を作らされる羽目になったが。
「あのさ、君達はさ、食べられる人の気持ちを考えたことある?」
「嫌なんですか?」
「割と嫌じゃない」
美人になら食べられても良いかなーって。
どうせなら性的に食べて欲しいもんだけどなーーー!!!

３３９話　旅人、シリア行き

こんにちは！
私は吹雪です！
特型駆逐艦の一番艦で、司令官にも愛されているんですよ！
愛されているんですよ!!
司令官と私は愛し合っていてその絆は誰にも引き裂けないんです
司令官はこのクソみたいな世界を守るために身を粉にして働いて下さるお優しい神様みたいな方ですなのに有象無象のクズどもはのうのうと生きていてイライラするなあこんな世界いっそ滅ぼして私と司令官だけの愛に満ち溢れた世界に作り変えてしまえばいいのかな
司令官以外の人間なんてどうでもいいし黒井鎮守府さえあれば生きていく上で困らないし大好きな司令官と二人きりになれたら毎日沢山エッチして沢山子供を作って私達だけの世界にするんです。
さて、司令官は何処かなー？
司令官にエッチなイタズラして欲しいなあ、そうやって司令官が段々と私なしでは生きていけなくなるように工作するのって大事だよね。
司令官は喜んでくれるかどうか分からないけれど、司令官に触ってもらえると私は嬉しいなあ。
司令官も私のことを大好きっていつも言ってくれますし、司令官も得してるんじゃないかな?!
じゃあ何も問題ないよね、司令官にセクハラしてもらおう。
あら？
朝の食堂のテレビ画面が映り変わる。
『え？これ映ってる？大丈夫？大丈夫なやつ？えー、艦娘の皆さん御機嫌よう。提督こと旅人です。この度、シリアの何とか戦線的な……、なんか、そういうあれに捕まってしまいました。身代金的なサムシングをアレしてくれるとアレです。あ、あと、私の名前はうまるちゃんです。韓国人です』
「「「!!!?」」」

その瞬間、艦娘一同に衝撃が走るっ……!!
「たたた、大変です！司令官が!!」
どうしましょう龍驤さん!!
「……あー、アレやろなあ、最近流行りの」
え？
「なんかニュースで見た気が」
「こーれは流石に怒られるのでは？」
「提督のあの、恐れるものなど何もないみたいな精神、好きですよ」
え？ええ？
「あのな、吹雪、これはアレや、嘘っぱちなんよ」
「……嘘？」
「せや、これはな、まあ、詳しくは分からんが嘘なんよ」
「なあんだ、良かった！攫われた司令官なんていないんですね！」
「せやな」
……？
あれ？
「……それじゃ、司令官は？」
「「「……!!」」」
「あれ？本当におらんの？」
「朝から見てません」
「……まさか、あの人、誘拐されたってことにして一人で長旅をしようって魂胆じゃ」
「「「(あり得る!!)」」」
一瞬にして慌ただしくなる鎮守府。
「全く提督はっ……！」
「私の側から離れちゃ駄目なのにっ！」
「取り敢えず、提督の部屋に行くわよ！」
「鍵閉まってるわね」
「はいはーい、ピッキングするぴょんー」
地味にピッキングが得意な卯月ちゃん。

「ぴょんぴょーん、っと。電子ロックでもない限りラクショーラクショー」
「よし、では開けよう」
……中は！
何もないですね。
監視カメラの映像と変わりないです。
「念のため、部屋を調べましょう！」
「ええ」
「了解！」
ええと、確か……。
「そう言えば、さっき、映像で俺はうまるちゃんだって」
「うまるちゃんの単行本があったで」
「何か関係が……？」
「いや……、多分やけど、そんなんあらへんやろなあ」
司令官はうまるちゃんではなかった……？
「では何故、俺はうまるちゃんだと？」
「それはほら、本家の方が……」
本家？
「あと韓国人だって」
「司令官は日本人やで」
「……何で嘘ついてるんですか司令官は!!」
「知らん……、あの人の思いつきはほんまに分からん」
むむむ……！
パソコンは？
パスワードかけてない！
ログイン、と。
「あーっ！エッチなゲーム入ってますよこれ!!」
そこには、女の子のアイコンが!!
「え？何々？」
と、望月ちゃん。
「ほら、これ！りーんかーねーしょん新選組？とか、新世黙示録？と

か、明日もこの部室で会いましょう?とか!!」
「なん、だと……!ニュータイプ育成ゲームマインドシーカーにチーズとずっぷ?!これをコンプしたというのか……!!司令官、イエスだね!!」
何が?!
「太平洋の嵐とかダメジャーとかアジノコとか……、攻めるねえ司令官」
「しかも全部クリアしてある……、つよい……」
「でも基本ゲームは持ち歩いてるでしょご主人様は。ここに置いてあるのは多分、持ち歩く価値がないゲームなんじゃないかな」
「その可能性は高いね」
何の話……?
「私が勧めたエロゲはコンプしてくれたみたいだし」
「何勧めたの?」
「ちっちゃくないもんっ!としゅきしゅきだいしゅき」
「もっちーさん外道説」
「いや司令官がロリコンになれば私らにも手ェ出してくれんでしょ?」
「おっ、策士かー?」
「策士現る」
「諸葛孔明かな?」
え?え?
何やってんの?何の話?

「さて、シリア?に捕まったとか言ってましたよね」
シリア……、国の名前かな。
そこに、司令官が?
「んー、司令官の両脇に立っとった二人の男……、あれは外国人っぽかったな」
「じゃあ、海外にいるんですか?」
「多分、な」

「そもそも発信機は？」
「あんなもんおまけみたいなもんや。司令官がその気になれば簡単にジャミングできるわ」
　そう言えば、前に司令官が、「俺はＳＣＰみたいなもんだからＧＰＳは無駄」みたいなこと言ってたような。
「そうだ、白露型に……」
「無理っぽい、提督さんたら、逃げる前に認識阻害使ったっぽい。防御や逃走、隠遁の術式においては、私達でも敵わないっぽいー」
「使えないなあ夕立ちゃんは！」
「そんなこと言われても仕方ないっぽい！どうせ今回も一発ネタだから、次にはひょっこり帰ってきてるに決まってるっぽい！」
　そうかな……。
「皆さん大変です！司令官、本当にシリアにいます!!」
「「「え？」」」
「ツイッターを見て下さい！」
　……本当だ！
　司令官のツイッターに、現在位置、ダマスカスと！
　ダマスカス……？
　シリアなんですか？よく分からないけど。
「ダマスカスはシリアですよ！」
「え？じゃあ、あのシリア何とか戦線的な人達、マジもんなんか？」
「恐らくは」
　……それは、何というか。
「ヤバくないですか？」

「ん、んんん？あれ、ちょっと待って下さい、頭の中に何かが……？」
　これは、映像……？
　あ、あああ、あああああ!!
「し、司令官!!司令官が鎖で!!!」
　司令官が、まるで生贄にされたかのように、鎖に繋がれているビジョンが脳内に!!

あ、そのビジョンの下に米印のテロップが。
何々？
『国の威信をかけたロケットのプロジェクトに失敗した母に会いに行ったら、怒れる国民に捕まり、生贄にされました』
ですって?!!
「これは……」
「あれだね……」
「あれだわ……」
「間違いなく……」
「「「クドルート」」」
え？
「望月ちゃん！・漣ちゃん！・初雪ちゃん！・秋雲ちゃん！・説明して下さい!!!」
「いや……、いやこれは……、クドルートですわ」
「今回、全方面に喧嘩売ったねえ」
「流石は司令官、つよい」
「Ｋｅｙ信者に見つかったら殺されるよこれ」
「何の話なんですか?!」
ええい、訳の分からない話を!!
「助けないと……!!」
「いやこれ普通に助けたら、司令官ががっかりするよ」
と望月ちゃん。
「じゃあ、どうすれば良いんですか?!」
「えーと、誰か、司令官から捨てておいて、みたいなことを言って箱をもらった人、いない？」
「……あ、あー、うち、昨日、なんか変な鉄の塊が入った箱もろたわ」
と、龍驤さん。
「今持ってる？」
「持っとるよー」
「じゃあそれ握って、司令官のこと考えて」
「んー、こう？」

すると、龍驤さんの手元の鉄の塊は、消えて。
「あ、脳内映像の司令官の手元に鉄の塊が！」
「因みにあれ、ロケットのパーツね」
それで鎖を破壊した司令官は、見事脱出。
やりました！
やったー！

「司令官、一発ネタの度に命賭けるのやめない？」
「こればっかりは、やめらんねェぜ……」
「お帰りなさい！司令官！」
「おー、ただいま吹雪ー、楽しかったか？」
「ドキドキしましたよ！やめて下さい！」
「いや、やめらんねェ……」
何でですかね……。
「次は妹と一緒に海外の列車でポッキー食べる」
「「「まさかのヨスガネタ」」」
もー！何なんですかー!!!

３４０話　深海棲艦島での一幕

黒井鎮守府がバリバリ戦って、倒された深海棲艦はどうなったのか？

それは、勿論、捕虜にしてある。

では、捕らえた深海棲艦はどこへ行ったのか？

その答えは、俺がこっそりと買い取った日本近海の島で生活している、と言うことになる。

ここは、深海棲艦島。

捕らえた深海棲艦の住処だ。

半径十数キロメートルの大きな無人島で、家畜や農園プラントがあり、縮退炉とバリアシステム及び偽装映像出力システムによって守られた、自活可能な孤島である。

偽装映像出力システムにより、外から見たら普通の無人島にしか見えないようになっている。

故に時折、赤い旗に黄色い星の船なんかが不法に占拠しに来ることもあるが、その時はまあ、連中の船に原因不明の不調とかが起きるようになってる。

いや本当に……、そう言うの多くて。

深海棲艦騒ぎで、今こそ世界中の国々が団結して頑張らなきゃならない時なんじゃないのかな、とは思うんだけどね。

やっぱり人間って、そんなにお利口な生き物じゃないんだな、これが。

どこも、深海棲艦が出て、退治された海域の利権とか何だとかで騒いでるし。

お隣さんは多分、この深海棲艦騒ぎの混乱に乗じて、領土拡大をしようって思ってんだろうな。

やだなあ、いつになったら世界は平和になるのやら。

世界レベルの危機でも足の引っ張り合いか。

マブラヴじゃないんだからさあ、勘弁してくれよ全くもう。

まあ、それはそれとして、深海棲艦にも手ェ出しまくってまーす。
「どう？わるさめちゃん、ここなんて気持ちいいんじゃない？」
「アヒッ??アヘェ??ダメ、ソコダメェ、オカシクナル??????」
「大丈夫大丈夫、責任とるから」
「アアアアアー????」
いやあ深海棲艦は良いね、手を出しても艦娘みたいに騒ぎにならないし。喧嘩しないし。
艦娘はねぇ、良い加減に抱きたいんだけど、抱こうとすると邪魔が入るからねえ。
誰が一番最初に抱かれるかで競い合っているみたいで。
皆んな平等に愛しているって伝えてるんだけどな。
いやいや、本当本当。
愛しているよ？
どこぞの獣殿のように世界の全てを愛しているとは言わないけれど、大抵のものは愛しているよ。
特に美人はね。
「あらら、失神しちゃったか。次はー、っと」
「オイ、次ハワタシダ！早ク愛シテクレ！激シクナ!!」
バコンと寝室のドアを開けて現れる空母棲姫。
……あのさ、ヤったあとの余韻というかさ。
まあ、その辺は良いか。
ゆるすよ。
「はーい、空母ちゃんねー、良いよー、天国まで連れてってあげるよー」

いやあ。
深海棲艦の皆んなとはね、全員と肉体関係あるけどね、ギスギスしないから良いわ。
幻想郷とかね、結構ギスったからね……。
うん、ほら、ね？
いや……、あれは酷かった。
まあ……、大体俺が悪いんだけど。

姉妹両方に手出ししてね。
ほら、ね？
なんか……、殺し合いになったりとか。
フランが、「真央は私のものなのッ！私から真央を奪う奴は殺すッ！例えお姉様でもっ!!!」ってなって。
あとはこいしが、「真央～、大変だね～。変な女の子いっぱいだね～。だから私が助けてあげるね！」と言いつつ攫おうと追いかけて来たり（実際捕まって地底に監禁された）。
錯乱した雛に包丁で刺されたりとか、萃香に攫われたりとか。
いやあ、怖かった。
でも楽しかった。
それに対して深海棲艦は楽よー。
抱きまくっても誰も怒らないし。
ギスらないし。
「あれ？そういや、深海棲艦って変装すれば外出して良いって言ってあるけどさ、ナンパとかしないの？」
「シナイナー」
「そーなの？俺以外の男とかに興味は？」
「ナイゾ」
ふーん？
じゃあ、俺が深海棲艦を独占しているってことになるのか。
やったぜハーレムじゃーん。
なお俺つえーはない模様。是非もねえな。
くっ、俺も今時流行りのなろう主人公みたいに強くなって皆んなを守りたいッ！
……しかし、現状、俺が強くなる必要性って皆無だしな。
まあそりゃ、強いことは良いことだけど、俺は別に強さを求められてないし。
艦娘もね、あれだけ強いのは努力しているからなんだよね。
俺も、日頃から錆びつかない程度には訓練してるけど、あの子達はガチで訓練してるから。

日頃遊んでるように見える艦娘も、大体は毎日訓練してるし、新しい武器を使いこなせるように練習もしてる。
俺が簡単に勝てることはもうないよ。
出会ったばかりの頃は搦め手で幾らでも勝ちを拾えたけど、今はもう無理だね。
特に白露型なんかとは相性最悪だよ。
技量とスピードで並ぶ相手には弱いんだ、俺。
戦場で出会ったら脇目も振らず逃げるしかないだろうね。
「何ヲ考エテイル？」
「ん、ああ、女の子の前で他の女の子のことを考えるのは良くないよね、ごめんよ」
「イヤ、別ニ構ワナイ。シカシ、オ前ガ何ヲ考エテイルカ、知リタイノダ」
「そりゃまた、何で？」
「好キナ男ノコトハ何デモ知リタイダロ？」
あら、可愛いこと言うねえ。
「あー、そうだね、もっと強くなれば、皆んなを守れるのかな、って」
「ハッ」
鼻で笑われた。
「守ラレル女ナド、オ前ニ相応シクナイ。オ前ノ隣ニイル女ハ、オ前ノ重荷ニナラナイクライニ強クナキャ駄目ダ」
「そんなことないよー、美人さんなら誰でも歓迎！」
「ソウカ？タダ美シイダケノ女ナンゾ、オ前ノ隣ニイル資格ハナイト思ウガナ」
「何でよ？」
「オ前ハ、前ニ進ム。進ミ続ケル。ツイテイクニハ、アルテイドノ力ガ必要ダ」
「う、そう言われるとちょっと困るな」
そうだね、俺、旅人だしね。
進むにつれて置いて来た女の子、沢山いるなあ。
でも、人生ってそう言うもんじゃない？

別れがあるからこそ、その人との時間を大切にできるんだと思うな。
「オ前ハ、イズレ、黒井鎮守府モ、深海棲艦モ捨テテドコカニ行ッテシマウノダロウ？」
「……いやあ、そんなことはないよ」
どうかな、あり得るな。
深海棲艦騒ぎが終われば、俺はまた旅に出るだろうし。
「フン、嘘ダナ」
「ほ、本当だよ」
「ダカラナ、ワタシ達ハオ前ニツイテイクノダ」
「……い、いやほら、旅人に惚れ込むのは良くないよ。新しい恋を探すとかさ」
「……オ前、コレダケ抱イテオイテ、ヨクモマアソンナ台詞ガ吐ケルナ。普通ニ鬼畜ダヨナ」
そ、そんなことないよー？

３４１話　嵐の日常

『１：名無しさん　ＩＤ：○○○○○○
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ
ヒーロー少女現る
○○○○．ＭＰ４』
クリック、と。
『や、やめて下さい……』
『なんだよぉ、俺達と遊ぼうぜえ』
気弱そうな女性が、三人のチンピラに囲まれている。
周りの人々は見なかった振りをするか、スマートフォンを向けてＳＮＳに投稿するネタができたと見物するかで、手出しはしない。
社会って冷えなー。
そこに。
『やめろ！』
これは……、嵐か。
『あぁ？おいなんだガキィ！』
『文句でもあんのかぁ！』
絡まれる嵐。
あわわ、助けなきゃ！
ってこれ過去の映像か。
慌てたぞこの野郎。
『文句はある！その女の人は、嫌がっているじゃないか!!』
『なぁんだとぉ!!』
『そんなことねぇよなあ?!』
キレて女性に詰め寄るチンピラ。
『ひぃ！』
女性は怯えて身を引く。
『やめろ！怖がってるだろ！』
『ウルセェぞガキが！ぶち殺されてえのか!!』
『やってみろ!!』

嵐が果敢に言い放つ。
やだ、カッコいい……。
『んだとぉ！ガキだから殴られねーとでも思ってんのか!!』
そう言って、大人気なく、嵐に殴りかかるチンピラ。
あ、嵐、なんて危ないことを……。
『ええいっ!!』
『あ？がぁっ!!?』
しかし嵐は危なげなくチンピラの拳を片手で受け止めて、チンピラを投げ飛ばす。
おお、強いぞー！カッコいいぞー！
『て、てめぇ!!』
『このガキっ!!』
残りのチンピラが掴みかかってくるが。
『えいっ!!』
『がっは!!』
『ぐあぁ!!』
避けてから、アッパーカットを決める。
残りのチンピラも軽く倒した嵐は。
『お姉さん、大丈夫か？』
と、絡まれていた女性に話しかける。
『は、はい、大丈夫、です』
『なら良かった！なるべく友達と歩くとかして、気をつけるんだぞ！じゃあな！』
と、一言言ってから去る嵐。
うん、完全にヒーローじゃん。
偉い。

話を聞いたところ、嵐は、自警団よろしく、東京辺りの街を歩いて、チンピラやヤクザを相手に日夜戦っているらしい。
……なんで？
……暇つぶしらしい。

えーと？
暇つぶしで街を守ってんのか。
なんて言うか、凄いな。
艦娘の中には、副業をしている子も多いが、嵐みたいに慈善事業？
みたいなことをしている子はいない。
偉いぞー、あとで褒めてあげよう。
うん。
うーん。
そう、だな。
嵐の活躍を間近で見たいな。
……。
よし。
こっそりと、外出する嵐についていこう。
嵐はどこかなー？
「重い荷物を～、枕にしたら～♪」
っと、いたいた！
今日も一人で街を歩くんだな！
はい、追跡、隠れる、忍び歩き＜８０＞、と。
行くかァー！

おっ、早速事件だ。
「きゃー！引ったくりー!!」
女性がカバンを引ったくられる。
フルフェイスのヘルメットをした男が、スクーターで逃げる。
「俺に任せろ！」
嵐が走り出す。
嵐はその気になれば１００ｍを一秒で走破するからな。
そんな嵐からすれば、スクーターなんてトロいもんに追いつけない訳がねえよなあ？
物凄いスピードで走って、スクーターの背後について、スクーターの本体の後ろ側を片手で掴む。

「な、なんだ?!」
そして、徐々にスピードを下げる嵐。もちろん、力によって物理的にだ。
成る程なぁ、思いっきり引っ張って止めたら、慣性で運転してる引ったくり犯が吹っ飛ぶもんな。
犯人にもなるべく怪我をしないように配慮しているのか。
本当に良い子だな、嵐は。偉いぞ。
「さあ、盗んだものを返せ！」
「う、あ、あ、は、はい、返します!!」
そして、返却されたカバンを、引ったくられた女性に渡す嵐。
「お姉さん、気をつけてな！」
「ひっ！あ、ありがとう……」
そして、見返りを求めることもなく、パトロールを再開する嵐。
本当にいい子だわ。
……でも、あの被害者の女。スクーターを力ずくで止めた嵐に怯えていた、な。

次はー、っと。
お、裏路地でカツアゲかあ。
「ちょっとジャンプしてみろよオメー」
「ひいっ、わ、分かりました、出しますから……！」
そこに！
「おい、やめろ！」
嵐だー！
「な、なんだてめえ！」
「俺が誰かなんてどうでも良い。だけどな、カツアゲなんてみっともない真似はやめろ！」
お、偉いなあ！
カツアゲは良くないもんなあ！
「う、うるせー！」
「アルバイトとか自分でやるんだ、お金は自分の努力で稼ぐから意味

があるんだぞ！」
うわぁい！耳が痛え！
やめろ嵐、その言葉はギャンブラーに効く。
そうだよな！
お金ってのは賭け事とかで稼いじゃ駄目だよな！
賭け事で溶かしちゃもっと駄目だよな！
ごめんなー、ごめんな嵐ー！駄目な大人でごめんなー！
さて。
「黙れや、ガキィ！」
おわ、チンピラが嵐に殴りかかってきた！
「ふんっ！やあっ！」
「がっ……、はあっ?!!」
それを、片腕を軽く振って、弾くと、引いていたもう片方の手で拳を固めて殴り返した。
チンピラは一撃で倒された。
「お兄さん、大丈夫かー？」
明るい顔で被害者に話しかける嵐。
「……だよ」
「え？」
「誰が助けてくれなんて頼んだんだよ！お前のせいで、次カツアゲされるとき、もっと酷くなるじゃないか!!」
て、めえ、このクソガキ……!!
嵐は善意で助けたんだぞ、それを!!
すると嵐は、少し悲しそうな顔で。
「そうか……、ごめんな。でも、もしも、戦う勇気が少しでもあるなら、頑張ってみないか？少しだけなら、格闘技も教えてやれる……」
「うるせーよ！そんなこと僕にできる訳ないだろ！余計なことしやがって……!!」
「……ごめん」
嵐……。

クソ、ムカつくな。
次は、お昼に、そこら辺の定食屋で唐揚げ定食を食べる嵐。
かわええ。
癒された。
そして、道端で、また騒ぎが。
「おいゴラァ!!金返せやぁ!!」
「ひぃぃ!」
ヤクザ複数人が小さな飲食店から取り立てをしているみたいだ。
「おい、やめろ!!」
そこに突っ込んでいくゥ。
「なんだぁ、ガキィ」
「関係ねえだろ」
「すっこんでろ」
「やめてやれ!」
おー、啖呵切ったよ、嵐。
「こいつを庇う気か、嬢ちゃん」
「ああ。確かに借りたものを返さないのは悪いことだ。だが、その人にも生活ってもんがあるだろ!」
「知るかよそんなことはよぉ!こいつは契約書にサインしたんだぜぇ?!」
「そもそも、その契約は正当なものなのか?!」
「ぐっ、うるせーな!」
最終的に、ヤクザ側が暴力を振るってきた。
ふむ、嵐から殴ることはあまりないのかね。
「おらっ!」
「遅い!」
「あふん」
ヤクザの拳を避けて、カウンター気味に放った拳は、ヤクザの顎を掠める。
顎を正確に打ち抜いて脳を揺らして、脳震盪で倒したのか。
なるべく怪我をさせない、ということか。

優しいな。
「て、てめえ！」
「やっちまえ！」
「この野郎!!」
次々と襲いかかってくるヤクザ。
中には、ドスを抜いている者もいる。
しかし、嵐は、突き出されたドスの刃の部分を掴んで、握り潰した。
「ひっ、ば、化け物……!!」
「とうっ！」
「がへえ」
「うおおおお!!」
「甘い！」
「うぐう」
「うおおおおおあ!!!」
遂には、拳銃を取り出して、撃ったヤクザ。
しかし、まあ、艦娘にそんなものは効かない。
「馬鹿！街中で鉄砲なんて撃つな！危ないだろ！」
の一言とともに、弾丸を掴み取った嵐。
掴み取った弾丸をそこら辺に投げ捨てると、銃を持ったヤクザから銃を取り上げて、顎を打ち抜いて倒す。
「あぎゃ」
「全く、こんなものはこうだ」
そして、拳銃を握り潰して、そこら辺に捨てる嵐。
最後に、腰を抜かした飲食店の人に手を差し伸べて、こう言った。
「大丈夫か、おじさん？立てるか？」
しかし。
「ひっ、う、わあ、あ、ば、化け物……!!」
大層怯えた様子で嵐の手を振り払う飲食店の男。
てめえ……!!
「お、俺は化け物なんかじゃ」
「お、お前は化け物だ！寄るな！寄るなああ!!」

ああ、そうかよ。
銃弾を掴み取ったら化け物かよ。
そんな程度で良ければ、できるやつは何人も知っているんだがな！
「そう、か。ごめんな。じゃあ、俺は行くから……」
悲しそうな嵐。

もう、駄目だな。
これは、良くない。
「嵐！」
「し、司令?!」
俺は嵐を抱きしめる。
「君は正しいことをした、胸を張って良い！」
「み、見てたのか？」
「ああ、コソコソついてきてすまない。けど、嵐、君に非はない！」
「そ、そうか？へへ、ありがとな！」
俺を抱き返す嵐。
「俺は、司令にそう言ってもらえるなら、それだけで嬉しいよ。ありがとう、司令」
「……嵐！」
なんて良い子なんだ嵐は！
「頑張ったな、偉いぞ。本当に良い子だ」
「えへへ……」
「嵐は化け物なんかじゃないからな、大丈夫だからな」
「うん……」
「さあ、一緒に帰ろう。小さなヒーローさん」
俺は嵐の手を取って、黒井鎮守府へと帰る。
嵐は、艦娘は化け物なんかじゃない。
皆んな、本当に良い子なんだ。
帰ったら、美味しいもの食べさせて、いっぱい遊んでやるからな、嵐。

３４２話　マッシヴ

「ふふふ」
「ぐぬぬ」
　んー。
「勝ったぞ、武蔵」
「今回は負けたよ、長門」
　そんな二人の手には。
『全日本ボディビル大会女性部門優勝』と『準優勝』の杯が。
　ふーむ？
「良いじゃん、筋肉女子」

　さて、何があったのかと言うと。
　まず前提として、長門と武蔵は筋トレが趣味だ。
　毎日毎日飽きもせずに筋トレ組手。おかげさまで、と言って良いのか、それはもう美しい肉体美がある。
　彼女達は日々のトレーニングは欠かさない、故にリアル系格闘ゲームの女キャラみたいな物凄い筋肉の持ち主だ。
　二人のトレーニング見た？アンチェイン並の訓練してるからね？
　具体的に言うと離陸するヘリに鎖つけて引っ張るとか、重機と相撲とか。
　そんなビンビンマッチョなお二人は、その恵体を見せびらかしたい欲があるらしい。
　どうも、俺一人に美しいと言われればそれで良いらしいが、どうせならなんかの賞をとって褒めてもらおうと考えたんだとさ。
　それで出たのがボディビル大会。
　いやー、確かに「肉体美」を見られる催し物ではあるけどさぁ。
　まあ、その結果ッ!!
「仮面ライダー!!」「冷蔵庫!!」「肩にちっちゃいジープ乗せてんのかい?!!」「土台が違うよ、土台が!!」「筋肉本舗!!」「キレてる!!」「デカい!!」

と大好評状態だったらしい。
怖いねー。
えーあー、それで、日本一の筋肉美女と認定された二人は、ノリノリで俺に迫る、と。
どう思います？
俺はね、美人ならなんでも良いと思ってるからね、マッチョの腹筋バキバキ系女子もアリだと思ってるよ。
大体にして、俺の方がマッチョだし。
いや、その辺はね？
意外だと思うか？
俺より長門と武蔵の方がマッチョだと？
そんな訳ないんだよなぁ。男性と女性とでは積める筋肉の量が違うぜえ。
俺がどのくらいマッチョかと言うと、友達のジャギと同じくらいはマッチョだ。つまりは世紀末ボディ。たっぽいたっぽい。
でもそんなに力はないけど。
俺の知り合いには測定不能の握力を持つ男とか腹筋でショットガン受け止めるアンチェインとか色々いるし、そんなのと比べたら俺もまだまだ常識の範囲内なんだよなあ。
バフかければ俺もトン単位の力出せるけど。
そう、それで、うちの二人がその物凄い筋肉で迫ってきたのよ。
抱きつかれる俺、背骨ボキボキ。
どうせ再生するでしょみたいなノリで全力でぶつかってくる二人。
しかし俺はやめてなんて言えない。
彼女達には全力でぶつかれる相手が必要だろうと思って。
痛いが。
ものっそい痛いが。
まあ、俺が死にかけるなんて日常茶飯事と化している節があるから、誰も気にしない。
いや、何人かは気にするけど、俺があまりにも不死身なんで、最近は解放骨折内臓破裂すると心配して撫でてもらえるくらいかな。

少なくとも身体の何割かを失うような大ダメージでもない限り心配されない。
かなしい。

などと、色々考えているのは全部。
「ええい、提督は私のものだ」
「なんの、私のものだとも」
「ぐっ、がああああ!!」
現実逃避だ。
現在は岡っ引きよろしく左右から引っ張られている。
防御バフ積んでさけるチーズ化は防いでいるが、ちょっとでも気を抜けばバラバラ確定でござる。
いやー、モテるってつれーわー!
「ちょ、ちょっと、二人とも、裂けちゃう、裂けちゃうよ俺」
「「む、すまない」」
ふう。
外れた関節をはめて、と。
「それで、どうしたの?」
「いやあ、私はボディビル大会で優勝したんだぞ?私の方が美しいだろう?」
「お、おう」
……ボディビル大会で評価されるのは筋肉の美しさで女性としての美しさではない気がするぞお。
しかし、あえてそれを言うこともないか。
実際、女性としての美しさも中々のものだしな。
強いて言えばもっとお洒落しなさいとは思うが。
あと、レモン石鹸で全身丸洗いもやめさない、と。
それとメイクとかしないのかね。
二人ともね。
まあ、元が良いから何にもする必要がない、のかねえ?
「いやいや、私だって負けていないぞ!見ろこの上腕二頭筋を!!」

「お、おう」
うーん？
「二人とも美人じゃん。順位なんてつけられないよ」
「む、そうか」
うん。
「どの辺りの筋肉が美人だ？」
と、長門。
うん？
うーん？
「何その斬新な質問。顔が美人だね、スタイルも良いよと言ってるのよ、俺は」
「顔」
「そう、顔」
「……ふむ？私は美人なのか？」
「そりゃあもう、とびっきりの美人だよ。ノーメイクでこれって各方面の女性に喧嘩売ってるとしか思えないね」
「そうなのか？」
「もちろん、武蔵もだよ」
「ふむ」
二人揃って首を傾げている。
え？
まさか、自覚ないの？
「二人とも女優レベルで美人だけど、自覚ないの？」
「特には」
ウッソだろオメー。
はぁー。
なんつーか、ブスに限って自分は美人だって思ってるよな。対して、美人は自分が美人だと言わない。
いや、たまに本当にカワイイ子もいるけど。幸子とか。
いやー、俺もイケメンイケメン言ってるとひょっとしてブサメンなのではないかと勘繰られるかもしれんなー。

だがあえて言おう、俺はイケメンだ。
「顔が良いとかはあまり興味がないな。それよりほら、どうだ、私の筋肉は」
俺はむしろ筋肉には興味ないかなあ……。
「あー、まあ、良いと思うよ」
「おお、そうか！」

ふーむ。
ひょっとして、艦娘って、自分が美人だと自覚していない？
「もっちー」
「あいよー」
「自分はカワイイと思う？」
「は？冗談でしょ。私可愛くないよ」
んー。
「鹿島、自分の顔が良いとか思わない？」
「え？自分の顔ですか？特には……」
んんんー。
「暁、自分はカワイイと思うかい？」
「え？……そんなこと、考えたこともなかったわ」
んんんんー。
「ついでに聞くけど、守子ちゃんはどう？自分の顔、気に入ってる？」
「はい？……えっと、普通、だと思います」
あーーーー。
「つつしみ」
慎みかよ。
「君らは本当に……、そこらの並のアイドルを鼻で笑えるくらいに美人だからね？分かってる？」
「「「？」」」
ンモー。
ダーメですわねクォレハ……。
よし（即断即決）。

「お洒落させよう」
　そうと決まれば。
「陸奥ウェア!!!」
「はあい、何かしら？」
「長門と武蔵!!この二人に可愛い格好させてやってくれ!!」
「……無理ね」
「何故」
　ま、まさか。
「あのね、提督。基本的にね、女物ってね、細めにできてるのよ」
　やっぱりか。
「筋肉？」
「そうねぇ、無駄な筋肉が邪魔ねえ」
「む、筋肉は無駄ではないぞ！」
「そうだ、闘争の基本は格闘戦！筋力は運動能力の大切な」
「だまらっしゃい」
　と陸奥。
「「む」」
　む、じゃないよ全く。
「全くもう、二人とも、こんなに筋肉つけて！服、どうしてるの？」
「「ジャージかタンクトップ」」
「「はぁ……」」
　俺と陸奥は揃って溜息。
　良くないなー、良くないなー、そう言うのはなー。
「そんなに!!美人なのに!!そんな格好じゃ!!駄目でしょ!!!」
「そうよ、女なんだから、もっと身嗜みに気を遣いなさい、二人とも」
「「む、そうか」」
　そうだよ。
「よっしゃ、しゃーなし、俺が特注サイズの服を作ってやる。陸奥、サポート頼んだ」
「任されたわ」
　そしてガンガン服を作る俺。

……
……
……
「ドレスの一着くらい持っといた方が良いって！」
「い、いや、不要だ」
「欲しいの!!それとスーツもよ!!」
「着る機会がないんだが」
「いつかあるかもしれないでしょ!!」
「お、おう」
「ってか何このパンツ？ふざけてるの？」
「ユニクロの五百円くらいのやつだが」
「はぁ？ふざけてるのかしら？」
「ふざけてなどいないが」
「駄目ですよこれは、駄目駄目ェ」
「これね」
「むぅ、落ち着かん」
「ブラはこれ」
「むぅ……」
「革ジャンとか似合いそう」
「まあアリね、かっこいい系よね」
「も、もう良いか？」
「良くない」
「勘弁してくれぇ……」

「はいそれじゃ、まず、レモン石鹸で全身丸洗いはやめること!!」
「はい……」
「服もジャージとタンクトップ以外を着ること!!」
「はい……」
「良いね？」
「分かりました……」
はい、解決ッ!!!!

「提督、ありがとうね」
「どうした陸奥」
「あの二人は本当にね、素材は良いのに着飾らないから」
「勿体無いよね」
「これでちょっとはマシになる、かしらね」
兎も角、そんなこんなで、二人はちょっとお洒落になった。

「女の子でしょ!!シーブリーズシャンプーはやめなさーい!!（しかるたびびと）」
「「はい……」」
お洒落に、なった、か？

３４３話　夢の中

「いや、そういうのはプライベートの侵害だからさ」
「はい、これ、許可の署名です」
　ふむ。
「じゃあ、やれってこと？」
「はい」
　ふーむ。
　順を追って話そう。
　……まあ、順を追わないで話してもこの一言で終わりだ。
　明石の新発明。
　つまり、そういうこと。
　あえて、あえて順を追って話すと、こうだ。
　明石は俺と結婚式を挙げる夢を見たそうだ。モンスター娘のいる日常アニメ版のＯＰのような映像を見た、とのこと。
　めちゃくちゃ楽しかったので実現したいと思ったが、俺が結婚式なんざやる訳がないと理解している明石は、現実的な方向からのアプローチをやめた。
　その変則的なアプローチとは、即ち、もう一度同じ夢を見ることである。
　そうやって、夢の抽出や編集などを行なっていたところで、他人の夢を覗く装置を作ったそうだ。
　それを、折角だから俺に試してほしい、と。
　被験者の艦娘の許可もとった、と。
　というお話だったのさ。
「え？で、やるの？」
「はい」
　そっか、やるのね。
　じゃあ、艦娘の夢を見ていくか。
　貰った装置はヘッドギア風の……、なんていうか……、ＶＲマシン的な……、ＳＡＯ的なサムシングだ。

またパクりやがったな明石ェ。
ないよ！剣ないよぉ！
さて、これを艦娘の頭に取り付けて、眠ってもらうと、艦娘は夢を見て、で、俺がその夢を俯瞰できる、と。
よくできたシステムだな。
確かに、艦娘の皆んながどんな夢を見ているのか、少し気になるしな。
狩人の夢なら何度も行ったが、他人の夢に行ったことはない、かねえ。
そうなってくると、ちょっと楽しみかも。
よし。
まずは、赤城でも呼んでくるか。
赤城と言えば沢山食べてよく眠るいい子だ。
きっと可愛らしい夢を見てるんだろうな。
「と、言う訳で、赤城、頼んだ」
「はい！おやすみなさい！」
アッ、寝入るのハヤイ！
しかも俺の膝で寝た。
さて、赤城の夢の中はー？

『あはははは、うふふふふ！食べ物がいっぱいです!!』
予想通りだ。
なんかこう、綺麗な……、プププランドみたいなところに畳とテーブルがある。
そこには、ジャンルを問わず沢山の食べ物が。
さっき、ケーキをホールでいくつか食べたあとだと言うのに、沢山の食べ物に囲まれている夢を見てる。
カービィかな？
『うふふふふ、最高です！』
夢の中でも食事を続ける赤城。
しかし、段々と世界は狂っていく。

太陽は黒く染まり、空は血のように赤くなる。畳やテーブルは人骨の山となり、草花は枯れる。
食べている食材も全て、人間の肉になる。
『あはははははははは!!!美味しい!!!美味しいです!!!!あはははははははははは!!!!』
あはは、怖いなあ。
『やっぱり、提督は、美味しいですねぇ……!!』
あ、やっぱり？
これ、俺が食われてるのかぁ。
まあ、そんなこともある。
ゆるすよ。

因みに、空母はほぼ全員こんなもんだった。
サラなんて俺が目の前で腹を掻っ捌いて内臓を引き摺り出し、目の前で調理する夢を見ていた。
なにそれ。
あのさ、君達、本当に俺のこと好きなの？
食べちゃいたいくらい可愛いってのは比喩表現だよ？
それで、次は武蔵、か。
武蔵の夢は、と。
だだっ広い荒野の真ん中で、俺と殺し合い。
『く、は、はは！はははは!!!楽しいなあ!!!楽しいなあ提督!!!』
え……？
殺し合いしたいの？
『武蔵イィィ!!!!!』
『来ぉい!!!!!』
え？
本当に……。
何これ。
これは何？
あの俺、ガチで殺しにきてる動きだ。

……ってか、性能盛られてないかなあれ？
大分強いぞ？
本人である俺より大分強いぞ？
んんー？
『殺った!!!』
『効かん!!!』
武蔵も本気で殺す気のパンチだ。
俺もそれに応えるかのように、触手やエーテル病まで発症させて、フルパワーで南斗聖拳を放っている。
それでも、武蔵の体表に軽く切り傷を作るくらいでダメージはない。
『ディバイン……、バスターーー!!!!』
うわあ、俺の奥の手の一つ、殺傷設定のディバインバスターまで。
どうなってんだ武蔵の夢の中の俺は。

……少数派だが、何人かは俺と殺し合いがしたいらしい。
俺の知り合いの地上最強が、戦いはセッ○ス以上のコミュニケーションだって言ってたし、きっとそう言うことなんだろう。
……どう言うことなんだろう？
まあいいや。
さて、お次は潮だ！
さあ、どうだ！
『あん??ああん??』
あー……。
うー、あー。
いけませんねこれは……。
いけませんね……。
そんなことは……、その、いけませんね……。
『そこぉ??凄いひぃ??もっと突いてぇ????』
いやー……。
確かに潮は魅力的だけどさ……。

実際にやるかどうかと言ったら、なあ。
その……、潮ちゃんは、溜まってるん、ですかね？
と、思いきや、割と淫夢を見ている艦娘は多かった。
思春期か君らは。
バリエーションも多岐に渡り、俺と様々なプレイを楽しむ艦娘が。
あのさぁ……。
大淀とか酷かったね、うん。
野外露出とかＳＭとか。
俺でそう言う夢を見られると、何というか、うーん。
いや、なんとも言えない気持ちになるでしょ？
身近な異性が自分の淫夢見てたと思うと、ほら、どうすりゃいいかわかんなくなるでしょ？
よし、次は夕立だ。
夕立の夢は、と。
……。
青ざめた月。
ヤーナム、か？
『提督さん、夕立の世界に何かご用？』
あっ、そっかあ。
こっち側を認識してるかー。
『ここはね、私の夢の中。心象風景っぽい』
凄いね、君の夢の中って……。
腐肉、死者、血液、臓器、魔獣。
狂乱、殺戮、憤怒、怪異、破壊。
この世の地獄に見えるなあ。
『素敵でしょ？』
そ、そうかな？
『血が見たいっぽいー』
血に酔っているのかね。
『白露型は狩人だよ？皆んな、血に酔った、良い狩人っぽい』

そうか……。
正気は失っていないかな？
『あは、何を以って正気と定義するっぽい？』
それもそうだ。
では、胸の内に燃える愛はあるかな？
『愛……、難しいっぽい。それを定義する明確な基準は存在し得ないから。でも、少なくとも、私は、私達は、提督さんの為なら、何も惜しくはないっぽい』
そうかい。
なら、希望はあるかい？君の道を照らす光はあるかい？
『あるっぽい！提督さんこそが私の光っぽい！提督さんの声が聞こえるの！導きの月光で、闇を照らす光の道筋っぽい！』
心の中に導きがあるのか。
それは良いことだ。
ふむ、それならば、道を踏み外すこともないだろうし。
安心したよ。
これからも、狩人とか艦娘とか、頑張ってね。
『はーい！』

うん、まあ、予想できたけど、白露型だからね。
エグかった。
んー、まあ、皆んな大体予想通りかなー。
悪夢に悩まされている子とかはいないみたいだし、大丈夫だな。
よし、最後に俺の夢のデータを送っておこう。
あ、俺の夢？
普通に、旅動画になるが。
俺が延々と旅をする夢だ。
特に面白いもんでもないと思うよ。
取り敢えず、今回も困っている子はいない、と。
皆んな充実している、と。
なら、良いや。

３４４話　人外フェチの殿堂

「おぉお」
　うぉおぉお。
「どうです？」
「かわええ」
「やりました！」
　明石がケモい。
　獣人化してる。
　因みに兎。
　うさ耳。
　肉球。
　良きかな。
「今度は何したの？」
「はい！白露型のデータを借りて、黒井鎮守府に艦娘が人外化する怪電波を放ちました」
「皆んなの許可とかって」
「ないです」
　ないのかー。
「あのね、明石。何かやるときは皆んなから許可をもらおうねってあれほどイワナ、書かなかった？」
「そんなこと言いましたっけ」
「言ったなあ」
「まあ、良いじゃないですか。告知しない方が面白いですよ」
　面白いのはそうだろうけど。
「副作用とかは？」
「（知ら）ないです」
　ンモー。
　君はあれだな？パルプンテを嬉々として使うタイプだな？
「まあ、良いじゃないですか。面白いですし」
　面白い試みではあるけど。

「副作用があるかどうか分からないのはちょっと」
「平気ですって。これ、一回自分で試してますから。入渠したら治ることが確認できてますから」
　また危ない真似を……。
「戻らなかったらどうするんだよ全くもう」
「その時はその時ですよ。臨機応変にやります」
「あのねぇ、明石。俺は君が本当に大事なのよ。あまり心配をかけさせないでね？」
「んもぅ！提督優しい！大好き！」
　もふっと抱きついてくる明石。
「誤魔化されないぞー」
「むー」
「むー、じゃないよ全く。危ないことはやめなさいとあれほど」
「出撃している時点で危ないも何もないですよ」
「そりゃそうだが……、自ら危険に突っ込んでいくこともないだろ。君が苦しい思いをすると俺も辛い」
「……提督って、なんだかんだ言っても、ただ甘やかすだけじゃなくって叱る時は叱ってくれますよね。私、そういうところ好きですよ」
「それじゃあ言うこと聞いてくれると助かるなあ」
「それとこれとは別ですよー！さあ、提督！人外化艦娘を楽しんできて下さい！」
「……取り敢えず、そうさせてもらうよ」

　大淀ー。
「大淀、おおぉ」
「はい？」
「エルフか」
「何がですか？」
「耳」
「耳……？あ、あら？何これ?!伸びてる?!!」
「明石が」

「あ、はい、分かりました明石さんが何かしたんですね」
話が早い。
「大淀はエルフかあ」
あまり変化はないな。
「元々、大淀は優しげな美人さんだからなあ。ちょっと凛々しくなったように見えるくらいかな？」
「もう、美人さんだなんて??」
「本当のことだよー」
「照れちゃいますよー??」
……。
「耳、触って良い？」
「はい、どうぞ？」
触り。
「あんっ」
「えっ、何？気持ちいいの？」
「結構気持ちいいですね。元々、耳が敏感なんで」
あっ、そっかあ。
うん……、この耳、軟骨だな。
コリコリしてる。
……。
「はむっ」
「ひぃあぁぁ??????」
「気持ちいいの？」
「さいこうれしゅ??」
ふーん。

大淀を弄んだ。
エルフらしき種族に会ったことは何度かあるし、耳を触らせてもらったこともあるが、大淀の身体はまた違った良さがある。
ん？
「たたた、大変です司令官！」

吹雪はーっと。
「私、猫ちゃんになっちゃいました!!」
ネ　コ　ミ　ミ。
ｇｏｏｄ。
「そっかー、猫ちゃんになっちゃったかー、可愛いなー」
「いやいや！大変なことですよ?!」
「いや、これは明石が」
「あっはい分かりました」
明石の名前で納得するんだな、皆んな。
「何で私は猫ちゃんになったんでしょう?」
「ランダムらしいよ?」
「うーん、ってことは、普段の私が猫ちゃんみたいってことはないんですね?」
「そうだね」
「そうですよね！私はどちらかと言えばわんちゃんですよね！」
あー?
「そう、だねえ、どちらかと言えば犬かな」
「そうですそうです！私、司令官の犬ですし！」
ん?
「それはなんかちょっと違くない?」
「いえいえ、艦娘は皆、司令官の愛玩動物兼猟犬ですよー」
「あくまで立場は対等だよ」
「そんな！私達艦娘の方が下なんです！部下なんですからね！」
「俺はそんな風に思ったことないなあ。皆んな恋人だと思ってるよ」
「こ、恋人だなんて??えへへへ、照れちゃいます??」
さて。
「吹雪にゃーん」
「やぁん??」
もふもふ！
もふもふもふん！
ふもっふ！

たのちい。
いやあ、イイゾー、これ。
もふもふと化した吹雪にゃんをモフる。
「ほら、吹雪ー、舌出してー」
「はい、んあー」
おー、舌も猫みたいにザラザラ。
「はむ」
「ーーーっ??????」
舌を舐める。
ザラザラだーい。
すると、吹雪はもふもふの腕を俺の後ろに回して抱きついてきた。
「しゅごいでしゅ??いまぁ、ベロがぁ、敏感でぇ??キスぅ、感じちゃいますぅ??????」

もふった。
良い。
いやー、良い。
……ん？
「司令！」
「雪風……？」
どこだ？
「下です！」
「……うぉおう」
妖精さんになってる！
「妖精さんになっちゃいました！」
成る程、これはこれで。
「可愛いぞ雪風」
「ありがとうございます！……でも、どうしてこんなことに？」
「明石が」
「はい、分かりました！」
凄えよな本当にもう。

この鎮守府での騒動の半分は明石の仕業だと囁かれているが、嘘じゃないね。
「妖精、か」
「どうしました？」
「１ｓ以上の重さのものは装備できないが、各耐性が優秀」
「？」
「因みにノースティリスのあいつはジューアな」
「？」
「あー、えーと、雪風可愛いー！」
「うきゃー！」
「しかしリョナラーに見つかれば酷い目に遭わされてしまう……。妖精さんは隠れててねー」
「そーなんですか？」
「俺の知り合いに妖精ってかエルフがいるんだけど、そいつは相棒と出会うまでは、悪い人たちにナイフ投げの標的にされてたよ。名前はパックってんだけど」

「次は誰かな？誰かな？」
「アカシィー!!!今回ばかりは許さんぞおおお!!!お、あ、Ａｄｍｉｒａｌ?!」
「アーーークちゃまではあーりませんかぁ」
「や、やだっ、み、見ないでくれ！頼む！」
アークロイヤルは。
「こ、こんなの生き恥だ!!」
ケンタウロス化してた。
ふーむ、これはこれで。
「アーク」
「見ないでくれぇ、醜い私を見ないでくれぇ……」
「ちょっと、乗っていい？」
乗りたい。
「な、わ、私を馬扱いするのか……？」

「駄目？」
「しょ、しょうがないな、ちょっとだけだぞ」
　わーい。
「じゃあこの轡を噛んでねー」
「むぐっ、な、なんという……！だ、だが、貴方になら牛馬のように扱われるのも悪くないっ??」
　ははは、ナイスジョーク。
「ハイヤァッ!!」
「むぐぐーっ
　?????」

……
……
……
「はい、と言う訳でですね、データが取れましたからね、この人外化光線銃が完成しましてですね」
　と、明石。
「おめでとう？」
「これを提督にズドン、と」
　お？
「白い狼をベースに鱗の生えた触腕、蝙蝠と烏の羽、猛禽の目、二列の鮫の歯、棘の生えた爬虫類の尾……。平たく言って化け物ですね」
『人間だよ、俺は』
　姿形なんて大した問題じゃねえよ。
「そうそう、それと、頼まれておいた異世界転移装置、できましたよ。実験も済ませました、正常に動作します。加えて、良さげな異世界も発見しましたよ」
『でかした』
　さて、それじゃあ、次のイベントに備えようか。

３４５話　異世界テンプレファンタジー　その１

望月がラノベを抱えて歩っていたが、それを道に落とす。
そしてそれは側溝へ……。
「ああっ、私のラノベが！」
「ハァイ望月ィ」
そこで俺のエントリー。
側溝から話しかける。
「異世界転移もの見てる？最近流行ってるよ？」
望月が首を横に振る。
「オォ……、なろう系は受け付けない？何も皆んなが皆んな全てクソって訳でもないぞ？」
と、俺が風船を出しながら言う。
すると、望月は。
「どうせテンプレチーレムでしょ、騙されないよ」
と手を引っ込める。
「確かにそう言うテンプレチーレムが大多数なのは認めよう。しかし、中には違うものもある」
そこで俺は畳み掛ける。
「でも、ファンタジーは良いだろう？指輪物語みたいな世界！夢があるだろ？異世界に行ってみたくなるだろう？」
「確かにね！ダンバイン見るわ」
「待てや！」
俺は望月のラノベを取り出す。
「私のラノベ！」
「どうだい？これを機に異世界でファンタジーしてみないかい？」
嫌な顔をする望月。
「オォ……、中世レベルの生活は嫌だ？大丈夫、転移のマジックアイテムでいつでも黒井鎮守府に戻ってこれる。観光気分で異世界転移俺つえーだ！」
「本当に観光気分で異世界転移俺つえーできる？」

「ああ、本当だとも！異世界転移は良いぞ望月ィ、異世界転移は良いぞぉ……」
　ゆっくりと手を伸ばす望月。
「だから君も……」
　俺はその手をゆっくりと掴み。
「異世界にご招待だ!!!」
「あああーーー!!!」
　引き摺り込んだ。

「……で？」
「異世界転移とか、興味ない？」
「まあ、なくはない、かな」
「面白そうでしょ？」
「うん、まあ」
「行こうか」
「いや、行くかどうかならうーん、って感じだよ？」
　そう？
「いやほら、この前は職場体験代わりに艦娘にアルバイトやらせたら大失敗だったじゃん？だから、最初から冒険者とか暗殺者とか軍人とかやってもらうのならどうかな、と」
「何で司令官は色々やらせたがるの？」
「君達が社会に出れるようにと思って」
「私は養ってもらう気満々だけど」
　いや、それは良いけどね。
「いざという時のためとか」
「司令官が死ぬとかないでしょ」
　ないけど。
「……まあ、良いよ。どうせ暇だし、付き合うよ」
「ありがとう望月!!」
　望月は何だかんだ言って優しいから好きだ。
「じゃあ、あとで異世界転移体験組を集めたら、俺が神雷を誤って落と

×
×
すから、それに巻き込まれて転移してね」
「う、うん」
×
×
×
×
「んっん、さて、やるか。えー、ごほん。と言う訳で、お前さんは死んで……、ねえな、えー、雷を落としてしまった、あー、ショック？で、異世界転生をしてもらうことになる？なりまし、あー、なりました！いや違う、なったのじゃ！」
グダグダじゃんか。
せめて台本くらい用意しようよ、司令官……。
神のコスプレもつけ髭だけで雑だし。
「はーい、ご主人さ、じゃなかった、神様ー。しつもーん」
「はい、なんじゃ？漣？」
「チートはくれますか？」
「いやもう……、既にチート持ってるでしょ君ら。これ以上何が欲しいの？」
「じゃあ、スマホ下さい、ネットに繋がったやつ」
「あ、うん、そのくらいなら良いよ。特殊素材と魔法技術を使った、異世界でも使えるスーパースマホを渡すから、受け取ってね。あ、受け取るのじゃ」
役作りも雑ゥ。
「えーと、あとなんか言っとくことあったっけかな……。あ、そうだ、ステータスオープンって言ってみ？あ、のじゃ」
「？ステータスオープン」
『モチヅキ　１４歳　女　艦娘族
職業：ウェポンマスター
生命力：２８７５５
精神力：１９３５１
筋力：１０５４
魔力：７８８
耐久：１２７７

器用：２５４８
技量：２４１１
感覚：２６６４
敏捷：２９４１
スキル
艤装召喚５
クイックドロー４
精密射撃５
クイックブースト４
オーバードブースト４
マルチロックオン４
ブーストチャージ４
算術４
科学４
戦術３
異世界語理解５』
おぉお……。
なんかそれっぽいのが出た。
「えー、なお、ご覧になっているそのステータスは、一般人の生命力、精神力が１００、各ステータスが１０、スキル二つ三つがその世界の人の基本ステータスとなっておるのじゃ。あ、スキル横の数値はスキルレベルで５が最大ね。異世界語理解は俺からのプレゼント。年齢は外見年齢から適当に決めた、俺が」
「え？待って待って待って？強過ぎない私？」
「いや……、君らのパワーを数値化するとこうなるんだよね……」
……まあ、並の人間の百倍くらいは強いとは思うけど、私も。
えー、これはもう、早速ヌルゲーの予感。
……まあ、良いか。
「あ、あと、ステータスは見せようと思えば他人にも見せられるから」
そうなんだ、お約束だね。
「もっちー氏、見せてー」

「お、漣。良いよー」
ふむ、漣は格闘家。
巻雲は魔法使い、秋雲は呪術師、初雪はガンナー……。
他にも見せてもらおう。
白露型はやっぱり狩人で、摩耶さんは魔法剣士、愛宕さん重戦士、鳥海さん魔法使い、高雄さん戦士。
妙高型は暗殺者で、古鷹さんベルセルク、テストさん人形使い、川内さんは忍者、神通さんは侍、那珂ちゃんは吟遊詩人。
弓を使う空母は狩人認定。
戦艦は大体が格闘家。
ガンナーと格闘家が多い傾向があるかな。
まあ、艦娘だしね。
私としては魔法使いがいることにびっくりなんですけど。
おかしいでしょ、普通に。
……まあ、黒井鎮守府がおかしいのは今に始まったことじゃない、か。
よし。
じゃあ、まあ、行こうか。
「黒井鎮守府に帰るには、渡したスマホのホーム画面にある帰還をタップしてね。はい、じゃあ、いってらっしゃい」
……
……
……
「っと、ここは？」
町外れ、ってところかな。
人影はない。
でも、向こうに街らしきものが見える。
周りには、漣、初雪、秋雲、巻雲。
大体、いつも一緒にいる面子だ。
「これはあれかな、パーティを組めってことかな」
「五人で？」

「普通四人じゃない？」
「そう？メガテンでは六人だし、モノによるんじゃないかな？」
五人で駄弁りながら、街へ向かって進む。
門番さんに適当に挨拶して、街中へ。
おお、ファンタジー。
あ、ちょっと怪しまれたけど、女の子なんで最終的にはスルーされたよ。
そんで、割とノリノリの初雪が、冒険者やりたいと言い張って、結局冒険者をやることに。
「初雪さんや、何でそんなノリノリなの？」
「実は私、なろう系好き」
ははあ、なるほどなあ。
「このままパーティをクビになっても美味しいッ!!」
「いや、クビになんてしないよ……」
「最近は、パーティをクビになった人が無双するのが流行ってるから……」
そっか……。

「おいおい、成人もしてねえガキが冒険者だって？」
「この仕事舐めてんのか？」
「甘く見てんじゃねえぞ！」
そして、テンプレに絡まれた。
「ふおお……！」
ああ、初雪の目がキラキラしてる。
そうだよねえ、見た目女の子の五人が荒くれ者の冒険者になろうとしたら絡まれるよねえ。
「へへへ、いやー、すみませ「かかってこーい！」ちょっと初雪?!何で喧嘩売るの?!」
「「舐めんなガキィ!!!!」」
あーもー、全く！
「手加減苦手なんだからさあ！」

「ぐえ」
軽く、本当に軽く押し飛ばす。
それだけで宙を舞うチンピラ冒険者は、壁に叩きつけられた。
「あちゃー、殺してないよね、これ？」
「死んでない、おっけー」
初雪ー。
「てっ、てめえ」
「私のターン」
初雪は、振り下ろされた斧を片手で白刃取りすると、軽く殴った。
「あぎ」
そして、あまりの威力に縦に一回転するチンピラ冒険者。
「ちょっと!!」
「大丈夫、殺してない」
「ひ、ひいいいい!!!」
残った冒険者は逃げて行った。
そして、無事一目置かれた私達は、冒険者登録をする。
「……え？な、何ですかこのステータス」
そして、無事にステータスがバレる。
「実はドラゴンだったりとか？」
あー、めんどい。

３４６話　異世界テンプレファンタジー　その２

伝説級のステータスということで、大騒ぎになった。
ギルドマスターなる偉そうなおじさんとも面談する羽目になって、大変面倒くさかったね。
初雪は、なんだか楽しそうにしてたけど、こっちはいい迷惑だよ、本当に。
「あー、そんでどうするの？」
「取り敢えずランク上げ」
また、これ、テンプレで、冒険者にはランクがあるらしい。ＳからＥまで。
方式的には加点式みたいだから、適当に戦ってればランクは上がるみたいね。
五人でパーティ組んでそこらで暴れ回る。
ゴブリンの巣にプラズマミサイル撃ち込んだり、オークの群れにパルスガン掃射したり。
パーティとしてのバランスも良かった。
回復役がいないことが気になるけど、そもそも回復が必要なほどのダメージを受けるとは思えないし。
まず、前衛に漣。
直接攻撃を受ける、所謂タンクではないが、ターゲットを自分に向けて、後衛に手出しさせない。
異常なスピードで敵を撹乱し、近付こうとする相手を蹴り飛ばす。
そして、中衛に私と初雪。
私はレーザーブレードとレーザーライフル、プラズマミサイルで、初雪はライフルと格闘、そしてパイルバンカーで機動戦。
しょうがないから私が全体指揮してる。
後衛に秋雲と巻雲。
呪術と魔法で範囲攻撃してくれる。
そうこうしつつ一、二ヶ月冒険者をして回ると、すんなりとＢランクに昇格していた。

変な異名とか付いた。
個人的によく使うエネルギー系武装の光から、『燐光』の通り名が付いた。
やめて……。
恥ずかしいからやめて……。
尚、『紫杭の盾』と名付けられた初雪さん、大喜び。
「つよそうで草」
こちとら草も生えないんだけどね！

そう、それで……、今私達は、辺境って感じのところにいる。
この辺境は、開拓地で、魔物退治の依頼が多いのだ。
つまり、私達向きだってこと。
あ、そうそう。
例によって、魔王とかいるらしい。
そいつらが、暗黒大陸？ってところから攻め入ってきているらしいよ。
王都とかでは、その、魔王の僕が度々攻めてくるとのこと。
もう、ね、面倒だからその魔王とかいうのをちゃっちゃと倒して終わりにしたい。

「緊急クエストです!!」
冒険者ギルドに出向くと受付嬢が大声を張り上げていた。
「ドラゴンです、この街の付近にドラゴンが来ました!!至急討伐をお願いします!!」
ドラゴンが出たらしい。
「ドラゴン、ねぇ……」
「受けます」
「あ、初雪!!」
「貴女は……、燐光のパーティの?!ありがとうございます！これで何とかなるかも……!!」
初雪が勝手にクエストを受諾してしまった！

ああ、もう！
……まあ、いいか。
しょーがない、やろう。
「依頼の詳細を聞きたいんだけど」
「あ、はい。依頼は、街に来るドラゴンの退治、報酬は三百万ゼニーです」
「え？三百万？」
庭付きの家が買えるんだけど。
「はい、流石に、今回の事件は大事ですから、冒険者ギルドも大金を出しますよ」
「ふーん、まあ、分かった。良し、行こうか皆んな」
「「「うん」」」

現場に急行すると、そこには緑のドラゴンが。
『グォア……、ガォ……』
「ん？何だろう、あれ？」
「何かに、怯えてる？」
「追っ手が来ないか後ろを振り向いているみたいに見えるね」
確かに……。
何かから逃げてきたのかな？
まあいいや、やっちゃえ。
私がレーザーライフルを撃つ。
あ、貫通しないんだ。
結構丈夫っぽい？
『ガァ??!!』
「漣！タゲとって！」
「りょーかい！」
「初雪は私と援護射撃！」
「うん」
「秋雲と巻雲は術を！」
「「はーい!!」」

指示を出して、と。
「行くよー！」
漣が空を飛んで、ナノマシンでできた具足で思い切りドラゴンの側頭部に蹴りを入れる。
『ガッ?!!』
ドラゴンが怯んだところで。
「今だ、撃てー！」
「分かった」
初雪とライフルで、ドラゴンの翼に集中砲火。
『ガァァァ!!』
ドラゴンは翼に傷がついて、地面に落下する。
「今だ!!」
「はいはいー！」
秋雲が、混沌の大火球を。
巻雲が、ソウルの結晶槍を。
それぞれ撃ち込んでドラゴンにトドメを刺す。
『ゲ、ァ……』
ああ、ドラゴンの頭がぐちゃぐちゃに……。
グロいんだよなあ、未だに慣れない。
別に私は殺しを楽しいと思ったりしないからなあ。
こういうグロいの見せられると困る。
素材の剥ぎ取りとか、極力やりたくないね、うん。
「もっちーさん、もっちーさん」
「はい何初雪さん」
「ドラゴンの角の先っちょ切って。記念に持って帰る」
「はいはい」
レーザーブレードで、と。
うわ、結構丈夫だな、ドラゴンの角。
じっくり数十秒かけて焼き切ったドラゴンの角を懐に仕舞う初雪。
「ついでに写真撮ってツイッターに上げる」
皆んなで殺したドラゴンの前で写真を撮る。

「終わりましたー」
「も、もうですか?!」
「確認お願いしますー」
「は、はい」
　そして、数時間後に、確認の人が来て。
「ドラゴンの死体を発見したそうです!それと同時に、Ｓランクへの昇格も決定です!!」
「な、何だと!!」
「本当か?!」
「凄え、流石は『燐光』のパーティだ……!!」
　あー、やめて下さい本当に、その厨二異名やめてー。
「それにしても、ドラゴンは何から逃げていたんだろうね?」
「さあ……?」
「ドラゴンって、魔王軍でも切り札の強力なモンスターなんでしょ?それが脱走とか、する?」
「それにドラゴンは凶暴で、誇り高いとか聞くけど」
「そんなドラゴンが逃げる程のことがあったの、かな……?」
　うーん。
「分かんないなぁ、けど、何かが起きてることは確かなんじゃない?」
　と、月並みなことを言っておいた。
「ふおぉ……!良い、この雰囲気……!」
　あと、初雪が喜んでる。
「まだ見ぬ強敵の気配っ!」
「はいはい」

「さて、それじゃあ、次は西に向かうよー」
「「「おー」」」
「魔王とかってのを倒さなきゃならないからねー、まずは四天王とやらを倒さなきゃならないっぽいねー」
　あー、えっとね、四天王は大体世界の東西南北に一人?一体?ずつ

配置されていて、魔大陸へ侵入できないように結界を張っているらしいよ？
だから、四天王を各個撃破して、その結界を破壊して、魔王のいる魔大陸に行かなきゃならないんだってさ。
……めんどくさい。
さて、冒険者ギルドから滅茶苦茶引き止められたけど、行くよー。

３４７話　異世界テンプレファンタジー　その３

「望月、知ってる？」
　と漣。
「何が？」
　と私は聞き返す。
「今向かってる西には、『骸』って呼ばれる凄腕の冒険者の二人組がいるらしいよ」
「へえ」
「じゃあ、その『骸』より先に四天王の一人、土のバルコンネを倒さなきゃ」
　と初雪。
　はいはい、分かったよ。
　それにしても、『骸』か……。
　一体何者なんだろう……？

「あ、こんにちは望月ちゃん」
「よー、望月ー」
　……。
　あー。
　……。
　うー。
『骸』の正体は、古鷹さんと加古さんだった。
「身内かよっ!!!」
　何でだよーーー!!!
　何で身内なんだよーーー!!!
「ファンタジーぶち壊しじゃんかよ！」
「はい？ふぁんたじー？よく分かりませんけれど、怪我や病気になったりなんかしていませんか？」
「あ、それは、うん、大丈夫だけど」
「それは良かったです。私は犬ですから、群れの仲間を大切にします

よー」
相変わらず頭おかしいこの人……。
古鷹さん。
自称、司令官の犬。
司令官を不快にすれば仲間だろうと噛み付く狂犬だ。
趣味は庭の整備。
巨大な特大剣、牙斬刀を片手で振り回す怪力と、雷を操る技を持つ魔神。黒井鎮守府でも最強の一角である。
ステータスを確認させてもらったところ。
『フルタカ　１８歳　女　艦娘族
職業：ベルセルク
生命力：５８７７０
精神力：５６９８１
筋力：６２１２
魔力：１０４６
耐久：４５６８
器用：１７４５
技量：２９７８
感覚：２６７７
敏捷：１４３１
スキル
艤装召喚５
料理４
園芸４
剣術５
格闘４
歩法４
連携５
殺意のオーラ５
血の狂乱５
死の旋風５

魔刃連撃５
威圧４
トールハンマーブレーカー５
マジンパワー５
異世界言語理解５』
私の上位互換かな？ってレベルで強い。
ってかスキル欄が怖い！
何よ、殺意のオーラって！
この人本当に怖いからもう……、もうね、もう……。
何が怖いってね、この人には底なしの悪意があるんだよね。
他にも榛名さんみたいに、日本語が通じないやべーやつはいるけれど、古鷹さんは悪意を持ってキレてるからやばいんだよね。
ナチュラルボーンキチガイは、実はまだ交渉の余地があるから。司令官の命令だとか言えば騙せるんだよね。
でも、古鷹さんは悪意を持ち、態とやるから怖い。
命乞いとか通用しないタイプだ。
何を言っても、司令官の敵と認識したものには喰らいつく狂犬だから。
あー怖い。
「そ、それで、古鷹さん、何でこんなところに？」
「？提督の命令だからですよ。命令通りに戦っているんです」
「あー、いや、司令官はね、私達に異世界での生活をエンジョイしてほしい、ついでに社会での生活を学んでほしい、と思ってるんじゃないかな」
「そうなんですか？」
「私はそう思うなあ。別に戦えとは言ってないし」
「でも、私は戦うことしかできませんから」
「あ、そうですか」
あとついでに、戦闘狂のキリングマシーンであることも挙げられる。
兎に角殺し合いが好きらしくて、庭の整備以外では出撃か実戦形式

での訓練、と言う名の殺し合いばかりしている。
　正直言って、会話のコマンドを一つ間違えれば、首が斬り飛ばされる可能性がなきにしもあらずなので、あんまり会話したくない。
「……あー、兎に角、私達は魔王を倒す予定だけど、古鷹さんは？」
「特に予定はありませんね。この辺りで適当にモンスターを殺していくつもりです」
「それじゃ、ちょっと手伝ってくれないですかね？」
「はい？何をですか？」
「この西の都の近くには、魔王の四天王の一人がいるらしいんですよ。一緒にそいつ倒しませんか？」
「ええ、良いですよ」
　あら、あっさり。

　まあ、ね、古鷹さんと加古さんのコンビは最強だからね、いてもらうと助かるよね。
『ぐっ、がぁぁ……!!ば、馬鹿な、この俺様をここまで追い詰めるとは……!!』
　土のバルコンネは、古代遺跡の洞窟の中にいた。
　金属の鉱石の塊のゴーレムみたいな見た目のやつで、黒くて４ｍくらいの硬そうなやつだ。
　頭の部分からオレンジ色の三つの目が光っていて、身体の形を自在に変化して襲いかかってくる。
　まあ、５時間くらいかな？ダンジョンの中を進んで、最奥にいた。
　最初は、『俺様は四天王最硬のバルコンネ様だ！』とか、『メスどもめ！ゴブリンの孕み袋にしてやる！』とか言って粋がっていたけど、それを聞いた古鷹さん、加古さんがブチ切れて襲いかかって行った。やっぱ怖いよこの二人。
「私の全ては提督のもの……、提督のものを犯して殺す？」
「許されることじゃないね、それは」
　どうやら、常日頃から司令官の子供が欲しいと言っているのに、一向にその気配がないところ、孕み袋にしてやると言われたのが相当イ

ラついたらしい。
ふぇえ、逆鱗の位置がどこだか分からないよぉ。こっわ。
「古鷹さん、援護射撃要りますか？」
「ううん、大丈夫だよ、望月ちゃん」
振り返って笑顔で告げる古鷹さん。
やめて下さいこっち見ないでうわあ瞳孔ガン開き!!
片手で２ｍ近い特大剣をぶんぶん振り回してる。
遺跡の中だし引っかかるんじゃないの？と思うじゃん？古鷹さんの馬鹿力は、遺跡の壁ごとぶった斬っているのよね。
古鷹さんは、１００ｋｇを超える肉厚の馬鹿でかい特大剣を片手で振り回す怪力その力を完全に制御する技量。
加古さんは、艦娘ですら反動で肩が外れかねない程の威力がある二丁拳銃で、１ｋｍ圏内なら百発百中。
……でも、そんなことより、凄いのは、二人揃った時のコンビネーションだ。
声も、視線も、合図もなしに、完全な連携を可能とするコンビネーション。
いやもう、あれはコンビネーションなんてものじゃないね。
最早、腕脚四本の魔神と言った方がいい。
加古さんが銃を向けた時には、射線の古鷹さんが避けて、古鷹さんが剣を振った時には、間合いの加古さんが跳んで。
まるで、一つの生き物みたいに動く。
その威力もさることながら、手数が尋常じゃない。
離れれば銃撃、近付けば斬撃が飛んでくるキルゾーン。
二人がコンビを組んだとき、勝てる奴はいないと評判だ。
「「死ね」」
『がぁぁぁぁぁ!!!!!』
例えるなら、熱したフライパンにバターを押し付けたみたいな、そんなスピードで物理的に削られていく土のバルコンネ。
『ひいっ、や、やめ……!!』
「「死ね」」

古鷹さんが首を斬り飛ばし、加古さんがその首を撃ち抜いた。
……化け物、じゃん？

「『燐光』のパーティと『骸』の二人が四天王を倒したぞ!!!」
「うおおおおお!!!」
「祝杯だあああああ!!!」
土のバルコンネの首を持って帰ったら、大歓迎された。
「いやあ、ありがとうございますー」
適当に礼を言って場を逃れたいが。
「何を言う！礼を言うのはこちら側だ！」
と、領主まで出てきた。
「君さえ良ければうちの騎士に、いや、嫁入りしないかね？」
「「「結構です、既に心に決めた人がいるんで」」」
「そ、そうか。しかし、パーティーにくらいは出てくれるかな？」
「いやー、次の四天王を倒さなきゃならないんでー」
「な、なんと！まさか、全ての四天王を倒すつもりかね?!」
「いや、一応、魔王討伐が目標ですねー」
「ま、魔王討伐を?!」
「と言う訳なんで、忙しいんですよー。それじゃ失礼しますー」
面倒事を全スルーして、次の街へ。
次は、東かな。
東の街。

３４８話　異世界テンプレファンタジー　その４

東の街に向かう。
東には、風のベルドンナとか言う四天王がいるらしい。
その前に、中央の王都を経由するから、ついでに王都に寄った。
「んー、その辺の串焼き肉とか買ってみたけど……、なんて言うか大味だね」
「私達のグルメ基準が高いのって司令官の仕業だよね」
「司令官の料理が美味し過ぎて、外で食べる意味があんまりない」
と、現地で飲み食いしつつ、街を歩く。
ん？
「おい、聞いたかよ、あの噂！」
「あれか、『暗殺教団』か？」
「ああ、少し前、白昼堂々、ワリーゼ卿が暗殺された事件があるだろ？ありゃあ、暗殺教団の仕業だって話だ」
「そうだ、ワリーゼ卿とその私兵だけを隠し剣で殺して、そのまま、まんまと逃げちまったってんだろ？ひゃあ、おっかねえなあ」
「本当だな、そんな恐ろしい連中が世の中にいるもんだと思うと夜も眠れないぜ」
と、噂話が。
……。
違うよね？

「あら、望月じゃない」
「あ……、足柄さん。足柄さんはこっちの世界で何やってるの？」
「暇だったから暗殺教団を立ち上げて、悪人を殺して回ってるわ」
「また身内かーーー!!!」
まただよ。
また身内が変なことやってるよ！
なんでなの？ファンタジーで何でこんなことを？
「足柄さん、分かってる？ファンタジー世界で何でそんなことするの」

「望月、活人剣って知ってるかしら」
「……一人を殺して沢山の人を助ける、みたいなアレ？」
「そうよ。一人の悪人を殺して万人を活かす剣。柳生宗矩の言葉ね」
「つまり、この異世界でそれをやろうと？」
「そうよ。提督は異世界で好きにやれと言ったわ。だから、私は私にできることをやろうと思ったの」
自分にできることで真っ先に思い浮かぶのが暗殺教団の設立ってこの人の頭は大丈夫なのだろうか？
「因みに妙高型全員でやってるわ」
おやおやー？
頭がやばいのは一人じゃないとは。
「ファンタジー世界なんだからさあ」
「いいじゃない、別に。最近は凄いのよ？王から直接依頼されることもあるんだから」
中枢に食い込むのやめて。
「何十人かは、暗殺者としてある程度使える程度には仕込んだし、私達がいなくなっても安心ね」
何が？
何が安心？

さて、足柄さんのステータスを見せてもらう。
『アシガラ　２４歳　女　艦娘族
職業：暗殺者
生命力：３８５４１
精神力：３７４１２
筋力：４８３３
魔力：６７８
耐久：２９６９
器用：２５８７
技量：２５４０
感覚：５８２０

敏捷：1741
スキル
艤装召喚5
暗殺術5
剣術4
短剣術4
槍術4
弓術4
精密射撃3
投擲4
爆薬生成5
罠生成4
奇襲5
格闘4
歩法4
騎乗3
運転3
感知5
隠密4
演技2
変装4
料理3
サバイバル3
鷹の目5
外国語5
異世界言語理解5』
「……何でこんなに無駄に多才なの？」
「暗殺するには、何か一つができればいい訳じゃないのよ。敵を見つける鷹の目と、逃走するための運転技術、私は苦手だけど、演技して周囲に溶け込むとか、そう言う技術も必要ね。それと、武器も色々使うし」

「ははあ」
　暗殺者にも色々あるんだなあ。
「望月もやる？楽しいわよ、暗殺」
「そんなトランプやる？みたいなノリで誘われても……」
「え？じゃあ、何してるのかしら？」
「一応、魔王を倒そうかなーって」
「うーん、そうなの？私達は、この世界の人々の問題はこの世界の人々に解決させようと思ったのよね」
「いやー、無理じゃない？」
「あらゆる国の人々が一致団結すればできるんじゃないかしら？」
「それを無理って言うんだと思うよ」
「そうかしら？人々が一致団結する助けになれば良いなと、世の中にとって邪魔な人間を始末してるのよ」
「まあ、確かに、例によって、魔王に寝返った裏切り者とか、情勢が見えずに好き勝手する馬鹿とか、いっぱいいるみたいだけど」
「そうよ、そう言うのは消すべきでしょ？」
　うーん、その辺は本当に難しいよね。
「私は、私達が魔王を退治した後は、この世界からいなくなろうと思ってるよ」
「それで、魔王を倒した後、魔王より強いものとして、世界に恐れられるのを防ぐ、と？」
「そうだね」
「うーん、そういう見方もある、わよねえ」
　顎に手をやり、首をかしげる足柄さん。
「でも、暗殺教団は必要なのよ。この世界、私達の世界ほど倫理観がある訳じゃないし、消さなきゃならない人間はかなり多いわ。自浄作用って必要でしょ？ほら、水槽の中に小エビ入れとくと水が綺麗になる、みたいな」
「暗殺教団を水の中の小エビと表現する足柄さんにびっくりなんだけど。でもまあ、言ってることは割と正しいかもね。でも、さ、その暗殺教団は腐敗しないの？」

「うーん、投票で選ばれた、任期が決まった幹部複数が協議制で指示を出すことにしてるけど。その辺は分からないわね」
「協議制かあ。意思決定が遅くならない？」
「そうねぇ、この世界の悪党って、分かりやすいのが多いじゃない？例えば盗賊とか、悪徳商人とか。私達の世界みたいに、裏金とか密輸とか、分かりづらい悪事は少ないのよね。だから、下調べが少なくて済むから何とかなってるわ」
　ふーん。

「で、良ければ、風の四天王倒すの、手伝ってもらえませんか？」
「うーん、まあ、良いわよ。妙高姉さん達を呼んでくるわ」
　と、何だかんだで手伝ってもらえることに。
　正直、助けはいらないかもだけど、皆んなで冒険したいし、折角だし。
「風のベルドンナはこの古城にいるらしいよ」
「そうなの、じゃあ行ってくるわね」
「え？」
　～5分後～
「はい」
「……何ですかこれ」
「生首」
　……。
「え？まさか暗殺したんですか?!!」
「？ええ、悪いかしら？」
　えええー。
　ちょっと、それは、どうなの？
「何で馬鹿正直に戦う必要があるのかしら」
　まあ、うん……、まあ、うん。
　もう、良いや。
　もうね、もう、良いよ。
「じゃあ、この首、王都に持って帰りましょうか」

と妙高さん。
王様に見せるそうだ。
まあ、良いや。
そうだよね、妙高型の基本の戦闘スタイルは暗殺。
戦闘になる前に殺すのが基本。
ロマンとか、そういうのはない。

「聞いたか、風のベルドンナも倒されたらしいぞー!!」
「本当か?!」
「やったぞ!!」
街では噂になっている。
「それだけじゃねえぞ!水のローナンテもこの前に倒されたらしい!!」
「何だと?!じゃあ、後一体、火のボルケインだけじゃねえか!!」
「人類の勝利は目前だ!!」
え?
「あ、あのう、水の四天王、倒されたんですか?」
「ん?ああ、何でも、北の海で泳ぐ変な女達が倒したらしいぜ」
「……その、変な女達って?」
「よく分からねえけど……、『売られた喧嘩は買うでち』とか言ってたらしい」
ゴーヤか!!!
また身内!!!!
はぁ……、まあ、良いよ、もう、良いよ。
とっとと、火のボルケインを倒しに、南に行こう。
もう本当に、これ以上ファンタジー雰囲気を壊されない内に。

３４９話　異世界テンプレファンタジー　その５

南の街へ、火のボルケインを倒しに。
何だかんだで最後の四天王だからね。
あと、南には勇者がいるらしいから、それにも会いたい。
勇者は、何でも、物凄い威力の魔法と、最強の剣技を使い、盾も持ち、攻防も距離も問わずに戦えるオールラウンダーで、三人の仲間と一緒にいるんだとか。
勇者かあ、楽しみだなー。

「おっ、望月じゃねえか」
「身内ーーーッ!!!!」
摩耶さんだった。
勇者パーティの正体は、高雄型であった。
であるかー……。
もう、もうね、本当にもう……。
「どうした望月？」
「いや……、折角ファンタジーなのに、身内にしか会わないから……」
「そうなのか？」
「がっかり感が凄い」
「そ、そうか？なんか、ごめんな？」
「あ、いや、摩耶さんが悪い訳じゃないんで！本当に！大丈夫だよ、うん」
「いや、まあ、そうだよな。普通は現地の冒険者が活躍してるって思うよな……」
「いや、まあ……」
「なんか、悪い」
「いや、大丈夫、本当に」

『マヤ　１８歳　女　艦娘族
職業：魔法剣士

生命力：４２６６６
精神力：４１４４０
筋力：４９６３
魔力：３９７５
耐久：３４６６
器用：１５４７
技量：１９７８
感覚：１４８１
敏捷：１５８９
スキル
艤装召喚５
剣術５
盾術５
弓術４
投擲４
歩法４
騎乗３
火魔法４
雷魔法４
氷魔法４
無属性魔法４
自己強化魔法４
回復魔法４
空間魔法４
サバイバル４
異世界言語理解５』
ステータスは強いし。
「あ、そうだ、望月。あたし、ちょっと火のボルケインとか言うの倒したいんだけどさ」
「あ、うん」
「四人じゃダンジョン攻略がめんどいからさ、手伝ってくれない？」

「え、真面目にダンジョンを攻略するんですか?!」
「お、おう」
おおお、冒険者っぽい!!
「オッケーです、やりましょう!」

いやあ、良かった!!
これが一部艦娘だと、ダンジョンに爆薬仕掛けて一網打尽とか平気で言うからね?
さて、と。
「火のボルケイン、ボルテスの塔攻略、開始!!」
「「「わー!!!」」」
楽しい!

って言ってもまあ、戦闘面で困ることはないけどね。
私、漣、初雪、巻雲、秋雲の五人と、高雄型の四人。
困らない困らない。
「火蜥蜴だ、横からやって!初雪!」
「あいあいさー」
ここでも、指示するのは私かな。
摩耶さん達、高雄型は……、なんて言うかな、個人プレーが基本って感じ?
連携とかはないけど、お互いに気づいたところをカバーし合うみたいな。
やっぱり、連携のプロである古鷹型の二人を見た後ではねえ。
でも、強いよ。
少なくとも、私よりは強いんじゃないかな。
「いや、戦ってみると分かんねえと思うね。実際、睦月型は強いし、アウトレンジから攻められるとキツイし」
と、摩耶さん。
「そう?摩耶さんなら、その気になればどうとでもできるんじゃない?」

「いやあ、その辺は本当に分かんねえって。実際にやり合ってみないとなあ」
「いや、実際にやり合うとかごめんですけどね」
「あたしは構わないぞー？」
「いやいや、本当に、勘弁してよ、マジで無理だから」
「そうか？やりたくなったらいつでも言えよ」
「なーにが嬉しくて身内でバトらないとならないんですかねェ……」
いやー、戦闘狂だよね、割と。

「あ、ご飯どうします？」
「安心しろ、あたし達は異次元ポケットの魔法で食料を持ち込んでるからな」
「え、そうなの？」
「ああ、分けてやる」
「いや、なんかごめんなさい」
「良いって、気にすんなよ」
そんで、ダンジョン飯。
「この火蜥蜴の肉、食えるんじゃねえか？」
「……え？く、食うの？」
「ああ、冒険者だからな」
うーん。
まあ、艦娘だし、毒が入っててもしなないかな。
ダンジョン飯、ちょっと興味あったし。
「じゃあ、焼いてみます？」
「いや、野菜と煮てみようぜ」
煮る。
「はぁい、コンソメあるわよー」
と、愛宕さん。
「コンソメは美味いぞー、パスタも入れてスープパスタにしよう」
スープパスタ、アリだね。
「あとサンドイッチも作ってきましたよー」

と、鳥海さん。
「飲み物は紅茶で良いかしら？」
と、高雄さん。
この人達、サバイバル能力高くない？

そして、塔の最上階に。
『クハハハハ……!!俺が四天王の一人、火のボルケインだ……!!』
おー、ドラゴンかー。
『ここまでよく来たものだ……、だが、ここで終わりだ!!』
と、襲いかかって来た。
でもまあ、こちとら、たかがドラゴン程度にやられるほど弱くはないからね。
「撃て撃てー！」
『アイスボルト！』
『スウォーム！』
と、10分くらい戦って、最後は。
『ぐあああああーーー!!!くっ、ここで俺を倒したところで、新たな十人の魔王様には勝てないぞ!!!精々足掻くんだな!!!ふふふ、ふはははは!!!』
と言って倒れた。
ん？
んんー？
「十人の魔王？十人の魔王?!!多くない?!!」
『いや……、最近魔王様が代替わりして……。それで、なんか……、十人に増えたのだ』
「い、いや、多いって!!王様が十人いるんだよ?!国としておかしいだろ!!」
『い、いやその、我々魔族は国というか共同体で、強い奴が王になるから……。今回はたまたま同格のやつが十人いたってだけで』
「ウッソだろオイ！」
『いや、本当なのだ。新しい魔王様達には誰も敵わない。先代魔王はズタズタに斬り刻まれて死んだ。城にいたドラゴン族も皆、悍ましい

実験に使われ、命からがら逃げ出したそうだ』
「えええ?!」
あ、あの、辺境で倒したドラゴンって、逃げて来たやつなのかな?
「もう良いか?」
「アッハイ」
『ぐぇ』
摩耶さんが火のボルケインにとどめを刺す。
えー?
十人?
十人の魔王?
えー?

どう考えても多過ぎる。
下手したら負けるかもしれない。
と言う訳で、各地から仲間を集めた。
「あの、古鷹さん、加古さん」
「「はい?」」
「なんか、魔王倒したいんだけど、十人もいるらしくて」
「あ、手伝って欲しいと?」
「うん、良いかな?」
「良いですよ」
とか。
「足柄さん、魔王倒すの手伝ってくれない?」
「あー……、まあ、良いわよ。妙高型は手を貸すわ」
とか。
「ゴーヤ、魔王倒すの手伝って」
「えー……、ゴーヤ達、陸では強くないでちから、いやでち」
「そう、なら良いや」
とか。
「それじゃ、高雄型の皆さんも手伝ってくれるの?」
「ああ、良いぜ」

とか。
良し。
「それじゃあ、皆んな！魔王を倒しに行くぞー!!」
「「「「おー!!!!」」」」
と、言うことになった。

３５０話　異世界テンプレファンタジー　その６

私達は、艦娘の仲間を引き連れて、暗黒大陸へ向かった。
例の十人の魔王、そいつらを倒せば世界は平和になるっぽい。
十人の魔王……、一体何者なんだろう？

暗黒大陸についた。
普通は船に乗って何日もかけていくものらしいけど、艦娘の速度と、水の上を走れる能力からすると、ちょっと走れば隣の暗黒大陸に辿り着くことができるね。
さて、この中世レベルの技術でどうやって建てたんだ？って感じの巨大な魔王城に入る。
そこには……!!
「……おや、思いの外早かったね」
「そう？こんなもんっぽい？」
「想定の範囲内だよね」
ふぅ。
さて。
「身内かよぉぉぉぉーーーーー!!!!」

現れたのは白露型。
確かに魔王でも違和感はないけどね？
あのね？
ねぇ？
あーもうファンタジーぶち壊しじゃん。
まーた身内だよ!!
「ふむ、折角ここまで来たんだ……」
え？
『相手をしよう。魔王としてね』
そして、姿が変わる白露型の十人。
白露。

頭から尻尾の先まで１０ｍはありそうな巨大蠍に。しかし、頭には人の上半身を持ち、甲殻で覆われた身体をしている。
両手のハサミは肥大化し槍のようになり、何故か炎を纏っている。尻尾は三本目は六つ。
時雨。
６ｍ程の人型。頭には、長く伸びた頭髪のような触腕が多数。異様に伸びた触手のような尾も生えている。
骨のような長い両腕には、火を噴く刀が二本握られている。不気味な、血とも髄液とも言えるような液体が滴っている。
村雨。
１５ｍ級のドラゴン。赤黒い全身には鱗が生え、尻尾には鋸の歯のような器官が存在する。
首は二本に分かれ、頭は二つ。コウモリの羽のような翼は全身を覆い隠すほど大きい、奇形の龍だ。
夕立。
４ｍ程のケンタウロス型。顔はなく、口のような割れ目だけがある頭。青白い光を放つ鋭角な鎧のようなものを身に纏う。
青白い巨大な大剣を担ぎ、鬣のような金髪をたなびかせる。
春雨。
４ｍもある烏が、無理矢理に人の形に歪められたかのような姿。
肩から伸びる複数の触腕の先には、銀色の鉤爪が煌めく。
五月雨。
５ｍ程の蜘蛛。全身が淡く光る鞭毛に覆われていて、手脚は大鎌の様に鋭い。
それだけじゃなく、甲虫の羽根のようなものが生え、口元からは残忍そうな牙が覗く。
海風。
青白い触手の塊。７ｍ程の巨体を、粘液を垂らす触手の塊で動かしている。
触手の塊には所々ブルーの瞳が覗き、一際大きな触手には鋸の歯と刃がついている。そして、溶解液と毒を滴らせている。

山風。
３ｍ程の獣人。浅葱色の、ハリネズミのような体毛を全身から生やしている。
身の丈を超える巨大なハルバードを持ち、電撃を放っている。
江風。
５ｍ程の鹿人間。赤黒い毛が全身を覆う。
巨大なハンマーのような右腕には炎が。
涼風。
極彩色の４ｍ程の魚人。脇腹と背中から甲殻のある触腕を生やしている。
片腕が肥大化し、弓のような形になっている。
え？
……え？
「あ、あのさ、ちょっと」
『僕達が魔王なんだよ。さあ、かかってくるといい』
「い、いや、身内で潰し合いは」
『まあ、良いじゃないか。さあ、殺し合おう』
「ちょ、ちょ、ちょ、待っ!!!ああああああーーー!!!」

と言う訳で、私ＶＳ時雨。
いやーキツイっす。
触手を揺らめかせながら、コマ送りみたいな速さで踏み込んでくる時雨。
「ヤバっ……!!!」
クイックブーストを吹かして急加速、回避。
ギリギリだねえ……!!
「でも、さ、長所を自分で潰しちゃあ、ねえ!!」
まあ、恐らくは手加減舐めプなんだろうけどねっ!!
……時雨は間違いなく、黒井鎮守府でも最強格だ。
特に恐ろしいのは技量と速度の融合……。
所謂、拍子が読めない、んだよね。

いつ動いたか分からない速度と足捌きで、気付いたら目の前で刀を振りかぶっていた、いや、気付いたら斬られていた、なんて調子に。
秘儀と呼ばれる魔法のようなもので、ただでさえ、視認することすら困難な機動性を更に底上げして、炎を纏う刀ですれ違いざまに斬りつける。
ステップと同時に姿が掻き消えたと思いきや、何十体もの深海棲艦が一秒せずに斬殺されたなんてザラ……。
艦娘として限界まで速く、鋭い。
間合いに入ればその圧倒的な技量から、技で勝つことは誰もできない。
近付かれたら死ぬ、かねえ。
でも、今はあえて、移動前の溜めや、武器を振りかぶるスピードを意図的に遅くしているように感じるし、事実、あの巨体を使いこなせていないように思える。
そこが付け入る隙、かな。
ってか！
「私のレーダーで捉えきれない……、ってか、私の動体視力が足りないっ、ねっ!!」
脳内のレーダーには、コマ送りみたいに高速で移動しまくる時雨のシグナル。アテにならないね！
武装切り替えパルスガン。
弾幕を張る！
『へえ……』
「あークソ！エネルギー弾斬るとか平気でやるから剣術ガチ勢は嫌いだーーー!!!」
こんの、エクストリーム剣術!!!
パルスガン弾幕を斬った！
『遅いよ』
「あ、ぐうっ!!!」
あっ、クソ、避け損なった。
片腕が斬られる。

くっ、腕の筋肉がやられた……！
これじゃ銃が撃てない！
「けどさ」
随分優しいね、時雨。
斬る前に声をかけてくれるなんて……！
カウンターしてくれって言ってるようなものだよねえ……っ!!!
クイックドロー、ムーンライトソード!!!
『……ふふ、上出来だよ、望月』

他の皆んなも、魔王白露型を倒したみたいだ。
……ってか、魔王白露型は、皆んな微妙に手加減していた。
古鷹型コンビなら勝てるかもだけど、他の艦娘じゃ多分相討ちくらいかなぁ。私は負ける自信ある。
それなのに勝てたってことは、手を抜かれてたってことだね。
……何で？
「いや、ね。こういうものは正義の味方が勝たないと困るだろう？」
「あ、気を遣ってくれたのね」
「ああ。あらかじめ魔王は殺しておいた。四天王も死んだ。この世界に人外の被害は当分ないだろう」
んー。
「僕達は先に帰るよ。必要なデータはとれたしね」
「そう……」
多分データとりの方がメインだったんだろうなあ。
「どうする？」
「帰る、かなぁ……」

「勇者達よ、よくやってくれた！褒美に王子との結婚を許そう！」
「「「結構です」」」
「では辺境伯の爵位を」
「「「いりません」」」
「な、何が望みだ？」

「「「帰ります」」」
全てをお断りして、皆で黒井鎮守府に帰る。

「ただいま～」
「おー、望月。どうだった？」
「いや……、面白くは、なかった、かな」
「そっか……」
「スーパー身内ファンタジーだったしね」
うん……。
やっぱり私は、現代のこの、黒井鎮守府で、ぐだぐだ過ごすのが一番、だね。

３５１話　海原守子、回顧しつつ語る

はい、こんにちは。
海原守子です。
今年で２６歳ですよ私……。
そろそろ結婚とか考えなきゃ……。
うぅ、嫌だよ……。
最近はお仕事が充実してるから、あっという間に時間が過ぎていくけど……、私、特にこれといって技能がある訳じゃないし。
気がついたら何もできないおばさんになっちゃってるかも……?!
こ、怖い！
私の仕事なんて、クレーム対応と受付、簡単な書類仕事くらいのもの。
特別なスキルとかは特になし。
私、このままでいいのかな……？
「ヒャアァ！スカート捲りー！」
「やーん??」
うう……、あそこで楽しそうにスカートを捲って回っている旅人さんは、ああ見えて仕事はバッチリできる。
書類仕事なんて私の三倍は速いし、速読速記もできる上、何十ヶ国語も話せて、あらゆる分野の知識があるし、職人技もある。
何をやっても一流並なのが旅人さんだ。
本人が言うには、一流以上にはなれないのが弱点らしいけど、普通に生活する分なら一流並の技能があれば十分だよ……。
私は……、最近やっと英語を覚えたくらいですね。
「もーりこちゃーーーぁあぶねぇぇぁ!!!?勢いでスカート捲るところだったぁ!!」
何故か縦回転しながら詫びを入れてくる旅人さん。
「あ、その、め、捲らないで下さい、ね？」
「もちろん、俺はセクハラしない。黒井鎮守府にセクハラとかないから（大嘘）」

アッハイ。
「まあ俺は態々スカートを捲らなくても何穿いてるか大体想像できるんだけど」
「ええ、何ですかそのスキル」
「でもスカート捲りとかのコミュニケーションを取らないと艦娘が不機嫌になるから。俺はセクハラを……、強いられているんだ!!!（集中線）」
は、はあ。
「で、守子ちゃん。今回は何を悩んでいるのかね？愚痴と相談は聞くよ」
「え、あ、分かるん、ですか？」
「あ、ごめんね、俺、顔を見れば他人の考えていることが大抵わかるんだよね。心理学＜８０＞で」
そう、でしたね。
「でも、私の話なんて」
「ノンノンノン、守子ちゃいん、君も黒井鎮守府の仲間、言わば家族、ｆａｍｉｌｙじゃないか。悩みを聞こうとも」
家族、かぁ。
「分かり、ました。それじゃあ、ちょっと聞いて下さい」
「よっしゃ、酒飲みながら聞くわ。飲んで話そう、飲んで」
「あ、いや、ちょ、お酒は」
「まあまあまあまあまあまあまあまあまあ」
「いやいや、ちょっと」
「いいからいいから」
良くないですって！

結局、飲まされちゃいました……。
あうー、おさけおいしい……。
「旅人さん、私はもう駄目です、駄目な女なんですー！」
「そーんなことないよー！」
うぅ、旅人さん優しいから……。

「でも、特に何もできないし、これと言った経験もないまま、どんどん歳ばかりとっていて……」
「そうかな？結構色々な経験をしていると思うけど？」
「いえいえ！全然ですよ！私なんて受付のおばさんですから……」
「ヤクザやマフィア、ギャング、悪の組織、テロリストを相手に取引できる度胸があれば何でもできるでしょ」
「……はぇ？」
「え？」
　はい？
「え？いや、ほら、守子ちゃんってあれでしょ？うちの取引先と色々話したんでしょ？」
「え？その、不動産屋とか、家具屋さんとか、です、よね？」
「不動産屋は地上げ屋、家具屋は密輸人だよ」
「えええええーーー?!!!」
「あら、気づかなかったの？」
「き、気づきませんでした……」
「いや、とっくに気づいてやってるもんだとばっかり……。ごめんね」
「いえ、その……」
「うーん、いやならやめてもいいんじゃよ？」
　そ、れは……。
「ただ、麻薬とかそういう人を不幸にする悪事は誓ってやってないから安心してね」
「な、なら、まあ……」
　ええと。
「その、主にどんなことをやっているんですか？」
「うん？武器とか、象牙とか、剥製とか、そう言うのの密輸とか、海外の土地の売買とか。ほら、今は中国の土地が儲かるよ」
「は、はあ」
「他にも、深海棲艦に麻薬密売組織の襲撃をやらせたりとかもしてるし、妙高型は悪人の暗殺もしている。霧島はヤクザとアルバイトしてるね」

「あの……、あまり、悪いことはしない方が」
「んー、これ、必要悪だからね。半グレやら中国人朝鮮人にやられると、加減を知らねえからやり過ぎたりするのよ。だから、俺がやらにゃならない」
「必要悪……」
　私だって子供じゃないし、そう言うのがないと世の中が回らないとは分かっているけど……。
「まあ、安心しなよ。俺達は悪人からしか奪わないからね」
「で、でも、悪人にも家族がいたりとか」
「ああ、そうだね。でも、悪人を放っておけば、より多くの罪のない人が苦しむよ」
「それは、そう、ですけど」
「まあ、基本的に、殺しはしないけどね、俺は」
　難しいな、世の中って。

「それで？何悩んでるの？やっぱり、結婚とか？」
「まあ、はい……。実家からお見合い写真が送られてきて……」
「うーん、今の時代、結婚に拘る必要もないとは思うけどね、俺は」
「そっ、そうですよね！結婚しなくても平気ですよね!!」
「まあ、どうしてもってんなら相手を探す手伝いくらいするけど、無理に結婚しなくても良いんじゃない？」
　そうですよね！
「でも、あれだよなぁ、今の仕事じゃ出会いとかないよなぁ……。趣味関係で男の人と会ったりはしないの？」
　趣味関係、かあ。
　私の趣味は読書と釣りなんだけど……。
　うーん、本を読みながら鎮守府で釣りをするのがいつもの過ごし方だからなあ……。
　でも、釣りで知り合いができたことはないかなあ。
「守子ちゃん、釣りとか好きでしょ？遠くに釣りしに行った時とか、男の人と会わない？」

「会うんですけど……、男の人って、ちょっと苦手で」
「俺は？」
「旅人さんは、何故か平気なんですよね」
「ふーん」
あれ？
そう言えば、なんで旅人さんは平気なんだろう……。
旅人さんは……、何というか、嫌な感じが全然しない。
下心がない、と言う訳ではないんだろうけど……、旅人さんは、本能的に、「この人は自分を害さない」と思える人だ。
悪戯に人の気分を悪くしたり、暴力を振るったりとかをしないように思える、そんな人。
顔は少し鋭くて、ハンサムだけど、いつも微笑んでいて、楽しそうに笑う人。
身構えようと思えない。
「でもほら、世の中には笑顔で人を騙す奴なんて沢山いるから。気をつけた方が良いよ」
「旅人さんは、多分、そんなことしませんよ」
「おや、随分と俺を買ってくれているね。何でかな？」
「勘、です、かね？」
「ふふっ、勘か。乙女の勘なら仕方ないよなあ」
旅人さんがビールを飲む。
「あぁ^〜、生き返るわ〜。……じゃあ、好きな男とかはいない感じ？」
「はい、特には……」
「そう？うちに俺の知り合いとか来てるけど、カッコいいな、って思った人とかいない？」
「何人かはいるんですけど……、私が見た中では、旅人さんが、一番好み、で、す……っ?!あ、あう、忘れて下さいっ！」
「ん、あ、うん」
うわー。
変なこと言っちゃった……。

……でも、旅人さん、かあ。
旅人さんが結婚してくれたら……。
「するかい？結婚」
「い、いやいやいや！そんなの、駄目ですよ！艦娘の皆さんに怒られちゃいますし！」
「そう？結婚はアレだけど、養うよ？」
「え？あ、いえいえ！働きますから！」
「良いって、一生面倒見るよ」
「そんなこと……」
でも、そうすれば。
皆んなとずっと一緒にいられるのかな。
「皆んなで好きに生きていこうよ」
「……はい」
なんだか、それで良い気がする。
それなら。
好きな人とずっと一緒に、いられる、から。
旅人さん本人に好きだなんて言えないけど、ね。
「あ、そうそう」
「はい？」
「俺も守子ちゃんのこと好きだよ」
「……はい」
言わなくても、バレちゃってるし……。

３５２話　仕事やろうぜ

もう四月の初め頃じゃん。
よし。
「たまには仕事するッかァ～」
いやー、ね。
俺の仕事は、殆どが大淀とかの仕事できる艦娘が代理で終わらせちゃうのよね。
俺の意思をほぼ完全に読んでくれるから、適切に仕事を終わらせてくれちゃう訳よ。
俺がやることと言ったら最終チェックくらいのもんで、殆どやることはない。
たまには俺もなんかやらにゃなあ。
動き出す、俺。
「大淀」
「はい」
「仕事やります」
「はい」
大淀はね、ほら、付き合い長いから、何で？とは聞いてこない。
俺がやると言ったら全力でサポートしてくれる。
良妻。
いや、やめてくれ、結婚してない、結婚してないぞ。

さて、とは言え、さっきも言ったように、俺の仕事はない。
そもそも、仕事の速さ的には大淀の方が俺の何倍も速い。
遅い奴に任せるより、速い奴に任せて、遅い奴はそいつにしかできないことをやらせるのが効率的じゃん？と考えられる。
黒井鎮守府はホワイトかつ効率的。
できないこと、苦手なことには、チャレンジしてみろとアドバイスはするが、無理矢理やらせたりすることはない。
事実、先日の異世界送りの件についても、半分くらいの艦娘は断っ

た。
ＮＯと言える日本人を目指して欲しい。
さて、俺にできること。
わーたしにーでーきること。
ひとーつづーつーかーなえ……、こなしていきたい。
パンツじゃないからはずかしくないもん。
俺にできることとは即ち、取引先と直接会うことと、黒井鎮守府の責任者としての役割の二つ。
責任者としての役割については、まあ、うちの子は皆んな優秀だし、滅多に責任取るようなことは……。
……。
さあ、取引先に挨拶してこよう！

『やあ、こんにちはジョルノ。ああ、いや、もうジョルノさんって呼んだ方が良いかな？』
『構いませんよ、マオ』
あら、心が寛大。
目の前にいるのはイタリアンマフィア、パッショーネのボス、ジョルノ君。
昔知り合ってね、友人なんだよ。
いやあ、ちょっと仕事にイタリアまで来てさ。会合だよ。
「真央～？イタリアまで来といて何の話をするんや？」
「仕事の話ですよ真島さん」
「なんや、みぃーんな英語やから分からんわ」
「イタリア語です」
「変わらへんやろ」
真島組の真島組長。東城会の代表として来てもらった。
他にも色んな人と仕事の話をする。
三合会の張さん、ホテルモスクワのバラライカさん、黒須組の白竜さんと大物が揃っている。
『喧しい男だ……。平和ボケした日本のギャング如きが何故ここにい

る？』
とバラライカの姉御。
「あん？何や姉ちゃん？」
しかし、真島さんはロシア語が分からない。
が。
『タイのロアナプラに引き篭もるお山の大将に言われたくはないな』
と、態々ロシア語で言い返す白竜のアニキ。
『……なんだと、ヤポンスキ（日本人）』
腰の拳銃に手を伸ばすバラライカさん。
それに反応してスタンドを出すジョルノ君。懐の銃に手を伸ばす張さん、白竜のアニキ、ドスを手にする真島さん。
おおっとー？
『はいはい、やめましょうよほんとにもう！皆んないい歳した大人でしょうに！喧嘩腰はヤメテ!!!』
と、俺が英語で呼びかける。
あーもー、こう言う人達集まると喧嘩するから嫌だわ。
毎回俺が止めに入る。
最悪撃たれる。
俺が。
『仕事の話をしましょう？ねっ？』
『『『……チッ』』』
やだ、怖いよぅ。
『それよりバラライカさんは後で俺と一晩』
銃声。
『……酷くない？』
『さあ、仕事の話をするぞ』
と張さん。
『あれ？俺が撃たれたことはスルーなの？俺の扱い悪くない？』
『では去年の総決算から入ります』
とジョルノ君。
え？

俺の扱い、悪くない？

仕事終了。

『バラライカさん、この後暇？デートとか』

銃声。

『……酷くない？』

『９ｍｍが効かないチウドーヴィシシィ（怪物）と付き合う趣味はない』

『いやいや、人間だって。９ｍｍくらいなら弾く奴いっぱいいるって！ねっ、デートしよう！退屈はさせないか』

銃声。

『消えろ』

『はい、すいません……』

「大淀ー」

「はい」

「仕事で辛いことがあったから慰めて」

「はい」

帰国。

悲しいなあ。

バラライカさんにはイマイチ好かれてないなー。

何でも、銃弾が効かないと言うのはかなり気味が悪いんだとか。

ロアナプラ行った時はよく化け物扱いされたっけ。

「では、こちらへ」

「おいーっす」

「はい」

ソファに座った大淀が、自分の膝をポンと叩く。

おっすおっすおーっす。

そりゃアレかい？膝枕かい？

イェア。

「ｆｕｕ→」

ダイブ。
「それで、提督？何か嫌なことがあったんですね？話してください、力になりますよ」
「ンアッ、そのゥ、ちょっと言いづらい話だから！」
「そうですね、私以外の女を口説いて振られたなんて、私には言いづらいですよね」
「そうなんだよー、流石にそれは言いづら、い……？！！」
何で知ってりゅの？？？
「いえ、良いんですよ、気にしてませんから」
「い、いや、本当に、その」
「気にしてませんから」
「……ごめ」
「気にしてませんから」
あびゃぁぁぁ。
怖いよー。
艦娘怖いよー。
「どうやって知ったの？」
「人工衛星と滞空ナノマシンです」
ほぁぁ。
「君達、割とヤバいストーカーだよね」
「愛故にです」
愛と言えば何でも許されると思うなよー？

さて、次は書類仕事を終わらせようか。
まあ、さっきも言ったけど、やることは多くない。
あ、それと、書類仕事とは言ったけど、基本データで送られるよ。
いや、態々紙にする必要ないよね。
今どこもペーパーレスでしょ。
んじゃやるかー。
んー。
……あのね、まあね。俺のところに資料が来ている時点で、もう終

わってるようなもんだからね。
基本的に俺は確認するだけ。
俺がやることと言ったら、年末年始に決算やったり挨拶したりくらい。
たまに、直接取引先と会ったりしなきゃならない時もあるけど、それも月に何回か。
仕事っていう仕事はないねー。
もうこうやってサインを書くことくらいよ。
……ん？
『書類』『書類』『書類』『婚姻届』『書類』……。
「騙されると思ったか……？」
婚姻届をゴミ箱にシューーーッ!!!超エキサイティン!!!
書類の中にはこういうのがあるから困る。
どこから手に入れてきたのか、魔界技術で作られた、サインすれば魂を縛るような呪具まで紛れ込んでいるから怖い。
「あとエロ自撮り写真な」
何故か変な写真も紛れ込んでいる。
うわうわうわ、凄いこれこんな、小さな身体にこんな極太の。うわわわわ。
あーあ、そっちの穴にも？
えっ、そこも？
あらららら。
……貰っておこう。懐のアルバムに忍ばせる。

「さて、仕事したなあ」
「お疲れ様でした」
頑張ったなー。
……これで、一ヶ月くらいはもう仕事がない。
「いかんなー」
「はい？」
「何か俺にできることを探して働かなきゃな、と思って」

「その必要はありません、養います」
「ヒモかぁ、それもありっちゃありなんだよなぁ」
でもなー。
「いや、まあ、思いついたらだけど、何かしらはやるわ。最近、お遊びが過ぎる気がする」
「そう、ですか」
うん。
なんかしら、やろうか。

３５３話　女誑しの旅人と２０１８の技を持つ冒険家と明日のパンツの旅人

「はいあらすじ。なんかやろうと思って色々と仕事の手伝いをやっていた俺はいとも簡単に頭がパーン。普段働かないから拒絶反応が出て爆発（物理的に）してしまったのである。そこから首だけの姿で過ごして、三日後に身体が再生した頃、俺は思った」

旅してえ、と。

最近なー!!!

旅してねーよなー!!!

俺は旅人なのにな、おかしいな。

しゃオラ。

旅るぞクルァ!!!

オルァー!!!

「こんな時のために電子基板弄って作った『旅先おまかせマッスィーン』で旅先を選定じゃー」

のじゃー!

ツフゥー。

はいはいはい。

じゃ、イクゾー。

「スイッチオォン」

液晶画面上でルーレットが回る。

何で電子式にしたのかと言うと、人力ルーレットやダーツ、クジ引きなんかでは好きな結果が出せちゃうからだ。

電子式の完全ランダムなら俺も読めない。いや、脳内の瞳使えば読めるけど、少なくとも平常時では見えないよ。

そして……、はいドン。

『ボリビア』

ボリビアかあ。

ボリビア……。そうだね、あの、ブラジルの隣にある国なんだけど、

貧乏でね……。大体スペイン語が話されるから言葉で苦労はしないけど。
まあほら……、発展途上国だし、治安は悪いわうるさいわ臭いわでね。
いやほら……、違うんだよ、日本が綺麗過ぎるんだよね。
俺は基本的に同じ場所には三年以下しか滞在しないんで、世界各国色々見てきたけど、日本はもう、マジで綺麗。
逆にパリとかニューヨークとかって、皆んなが思ってる程綺麗じゃないんだよね。
特にパリなんて住民の心まで汚……、いや、怒られそうだからやめておこう。
あ、でもあれだ、ボリビアはウユニ塩湖って言うデカい塩湖があるんだけど、あそこの景色はめちゃくちゃ綺麗だぞ。旅人なら一度は行ってみるべきだな。
今は丁度乾季に入った頃かなー？
地面がぜーんぶ塩の塊でね、真っ白で綺麗だよ。
えーと、ついでだから首都のラパスで一泊しようかな。
帰りはブラジルに寄ってナンパしよーっと。

「あ」
「あ」
「あ」
出会ってしまった旅人三人……。
これも俺の運命力によるものか……？
「久し振り、クウガさん、オーズ君」
「久し振りだね、新台さん」
「わあ、お久し振りです！」
いやいやいやいや。
本当にもう。
クウガさんはねー、もう、十年以上前くらい？に会った人でね。
二千の技を持つ男を自称する冒険家で、世界を旅して回っている人

だよ。
そうだなー、あの時はヤバかったなー。
日本に、「ゲゲル」と言う、殺人数を競う殺戮ゲームを行う古代の種族、「グロンギ」が現れて、日本中の人を殺戮したんだよね。
それを、クウガさんは、古代の戦士クウガに変身して戦う術を得て、皆んなの笑顔を守る為に戦ったんだよね。
俺も成り行きで巻き込まれたけど、俺は美人の為にならまだしも、顔も分からない誰かの笑顔の為に戦うことなんてできないからな。
まあ、凄い人だよ。
俺なんかよりずっと。
そしてこっちはオーズ君。
何年か前に会った。
欲望を食らって育つ怪物、「グリード」と戦う戦士、オーズとなって戦った人だ。
詳しくは省くけど、まあ、本当にいい人だよね、うん。
いやね、空っぽだったオーズ君が、相棒のアンク君との取引と対立の末に、自分の夢を、やりたいことを見つける旅路にね、俺は感動したよ。
ほら、俺の旅って基本、他人に巻き込まれるものだから。技能は身についたけど、主人公になれないのが常でさ。
だから、オーズ君みたいに、旅を通して大きく成長できた人なんかは凄いと思うね。
俺はまあ、メンタルは強くなったけど、基本的に本質は子供の頃から変わってないから。
少年ハートを忘れないと言えば聞こえは大分マシだけどさ。旅をしても、俺の本質、中身は変わっていない。
羨ましいって訳じゃないけど。
なんか、こう。
眩しい、よね。
「お二人も旅？」
クウガさんが尋ねてくる。

「そうだね、旅だね」
「はい」
　俺とオーズ君がそう返す。
「へー、二人は最近どこに？」
「俺はここ最近ずっと日本」
「俺は……、最近は南米辺りですかね。チリの方から歩ってきました」
　ほー。
「クウガさんは？」
「んー、ここ最近はブラジル辺りかなあ」
　そっかー。
「二人とも、日本には顔出してる？」
「……あー」
　あー、じゃないよ。
「で、でもほら、定期的に電話してるから」
「そ、そうですよ、俺も連絡してますし」
「クウガさんはほら、妹さんに会わなくて良いの？」
「あー、うん、まあ、そろそろ顔を出そうかな……。新台さんも妹さんいるじゃないですか、その辺りは？」
「んー、あー、まあ、妹の誕生日には毎年顔出してるし。オーズさんは？比奈ちゃんに合わなくて良いの？」
「ええと、まあ、そろそろ会いに行くつもりです」
　アレだね、旅人の特徴として、身内と顔を合わせる機会が少ないってのがあるね。
　まあ、良くないよね。
　俺もね、妹には年に一回は会ってるんだけどねー。
「そっかー。あ、そうだ、飯でも食ってかない？奢るよ」
「えっ？」
「新台さんが奢るだなんて珍しいですね」
「いやー、昔は金が無いからね、奢らなかったしむしろたかってたけどね？今は俺もうブルジョワだし？」
「え、何？何か悪いことでもした？」

「してないって！働いてんの！」
「えー?!新台さん、働いてるんですか?!珍しい！」
「え？酷くない？」
　言い様が。
　何？二人にどう思われてんの俺？
「だって新台さん、仕事したくないって常日頃から言ってるでしょ」
「新台さんの稼いだお金は賭け事と女の人に貢ぐのですぐになくなっちゃうじゃないですか」
「いや、まあ、そうだけど」
　そうだけどね？
「最近はね、日本の軍隊関係の司令官になってね。それと副業で貿易関係をちょっと。言わば社長？」
「軍隊？似合わないね」
「自覚してますよクウガさん」
「でも社長って、凄いじゃないですか！」
「君の頭ん中にあるのは多分鴻上ファウンデーションだろうから言っておくけど、そんなでかい規模じゃないからね？」
　さて、それじゃ行こうか。

「いやあ、まさか本当に奢ってくれるとは。でも、ありがとう」
「ご馳走様です」
　食ってきた。
「にしても、相変わらず食べるねえ」
「お酒もリットル単位で飲んでましたね」
「いや、控えめに十人前くらいだよ？あと、この辺の酒はそんな強い酒じゃないからね、いくらでも飲めるね。二人は飲まないの？」
「いや、日本ならまだしも、海外で昼間っから酔っ払ってたら、悪い人とかに絡まれちゃうからね」
　そっか。
「それにしても、ビックリしましたよ！日本にはあれ以来帰ってないんですけど、そんなことになってたんですね！」

「俺も深海棲艦の噂は聞いてたけど……、そんな感じなんだ」
　うんまあ、辛いよね！
「艦娘さん達も凄く美人さんだし……、なんて言うか、新台さんは相変わらずですね。いっつも女の人と一緒にいますよねえ」
「いやー、もうね、酒とギャンブルと女の子はやめらんないね、うん。二人はこれからどうするの？」
「俺は……、ペルーに行こうかな」
「おっ、良いじゃん。ペルーは飯が美味いんだよなあ」
「俺はちょっと飛行機代を稼ぎます。それでまたちょっとアフリカの方に行こうかな、と」
　ほーん。
「新台さんは？」
「俺？俺は取り敢えず、ウユニ塩湖見に行って、ブラジルの方でぶらりナンパ旅よぉ」
「え？良いの？その、艦娘さん？が待ってるんじゃない？」
「い、いや、ま、まあ、ほら！良いの良いの！」
「えぇ……」
「新台さん、本当に大丈夫ですか？また女の人に刺されるんじゃ……」
「大丈夫だって、今年はまだ十六回しか刺されてないから」
「刺されてるじゃないですか！」
「それとは別に爆発したり解体したり食べられたりもしてるよ」
「相変わらず不死身だね」
「そうでもないけどねえ……。さて、と、ナンパ旅始め、ん？」
「おはようございます、提督」
　大、淀？
「クウガさん、オーズ君、俺はちょっと用事を思い出した」
「え？」
「こんにちは。お話は伺っていますよ、五代さん、火野さん。提督が自慢の友人だと仰っていました」
「あっはい」
　その台詞を吐いた瞬間に、大淀は俺の手首を掴んだ。

「さて、帰りましょうか、提督」
「ヤダーーーーーーーー!!!!」
俺は掴まれた片腕を切り落とし、走った。
走った。
走った。

「……五代さん、新台さんは大丈夫なんですかね？」
「うーん……、まあ、あれくらいならいつものことだと思うよ」

３５４話　黒井鎮守府避難訓練

「避難訓練？」
「はい！」
　執務室にて、書類チェックの最中に、笑顔の鹿島が現れる。
「避難訓練……、確かに必要だな」
「そうですよね、今まで一度もそう言うことをやっていなかったので、やるべきなんじゃないかな？と思いまして」
「そうだよなあ、うちってかなりデカい施設だから、そういうのも必要だよなあ」
　良し。
「着いてきて鹿島。まずは設備関係の責任者である明石に話を聞きに行こう」

　工廠。
　俺ですら分からない様々な機械がそこら中に転がっている。
「避難訓練？要りませんよ、そんなの」
　と、明石。
「何で？」
「うち……、黒井鎮守府の防災システムは完璧だからです」
　ほー。
「ｋｗｓｋ」
「はい！まずですね、黒井鎮守府の外装からいきましょう。外装ですが、重力子による斥力フィールドと熱量を分解吸収するバリアフィールド、白露型特製魔導防御機構……、は私はノータッチなんですけど、あるそうです」
　ほうほう。
「砲台ですが、普段は砲台のほぼ全てが地面に埋められています。ですが、最大展開数はカノン砲、榴弾砲、レーザー砲、魔導キャノンの四種が三十門ずつあります。それとは別に、ＳＩＷＳと地対空ミサイルの発射台も隠してあります。あ、核兵器もありますよ」

なそ
にん
「こちらが第一戦闘配置時の黒井鎮守府の予想図になります」
そして目の前にＡＲビジョンが浮かぶ。
空飛ぶ黒井鎮守府に円形の半透明バリア、そして沢山の武装が生えている図が見られた。
「えぇ……、こんなんなるの？やり過ぎでは？」
「いやー、作ってる最中になんか楽しくなっちゃって。私の考えた最強の要塞になっちゃいました」
うーん、気づいたらうちが宇宙要塞になっていた件について。
「理論上は、生産プラントをフルで動かせば、自給自足をしたまま宇宙旅行ができますね」
「マクロの空を貫きそう」
「そうですね、そのうち変形機能とどデカイ主砲を取り付けたいですね」
なーにを目指してんのかね。
「それで内装ですが……、監視カメラ、警備ロボ、赤外線センサは常にオンラインです。それに付け加えて、五種類の監視防衛システムからランダムで二種類、十二時間毎に切り替わります」
あー、そんなことも言ってたっけかな。
「それと、ファイアウォールはもっと凄いですよー！ペンタゴンのファイアウォールの三倍はあります！攻勢防御プログラムも付いて、一流ハッカーをダース単位で、スパコンを数台用意しない限り突破は困難ですね。まあ、重要なデータは外部ネットワークと切り離してあるんですが」
成る程。
「あ、それで防災システムなんですけど……、工作用ロボットと隔壁、自動消火、ガス排気、毒物やウイルスを分解するナノマシンの散布などが可能です。理論上では、黒井鎮守府の６７パーセントまでなら破壊されても１２０時間以内に復旧が可能です」
凄え。

「因みに動力は？」
「核融合と反応炉、魔力炉心ですかね」
　おー。
「まあ、そんな訳で、黒井鎮守府で防災訓練をやるメリットはほぼないです。もし仮に黒井鎮守府から退去しなければならないなら、その場合は黒井鎮守府は堕ちているでしょうから」
　成る程なー。
「じゃあ、あれだな、なんか特殊なパターンの事件が起きたと仮定して、その場合の対応について考えるのはどうだ？」
「特殊なパターン、ですか……？」
「そうだな、例えば」
　ゾンビパニックとか、どうだろうか。
×
×
×
「今日も一日ガンビア・ベイ!!」
「え？え？な、何？」
「今日も一日ガンビア・ベイ!!」
「だ、だから、何？」
「今日も一日ガンビア・ベイ!!」
「モチヅキ、サザナミ、ハツユキ……？」
「いや、特に用事はないよ」
「そ、そうなの……？」
　私はガンビア・ベイ。
　軽空母。
　Ａｄｍｉｒａｌとか一部の艦娘に会うと、何故か、「今日も一日ガンビア・ベイ」と言われる。何だろう？
　それはさておき……、今日は何して遊ぼうかなー？
　仕事は月の初めにまとめて終わらせたし、あとは遊んでるだけで良いんだもんね。
　お部屋に篭ってゲームしよう。
　ヌマブラの最新作楽しいなー。

でも、モチヅキは異常に強いから一緒にやりたくない……。
あ、それとドラワエビルダーズの新作もそろそろ出るし、やらなくちゃ！
アニメも今期は当たりだし！
漫画も沢山買った！
うふふ～、やることいっぱいあるなー！
『鎮守府放送、鎮守府放送……。えー、これから、特殊条件下における避難訓練を開始する。これは訓練です、これは訓練です』
「え？え？」
な、何？
何が起きたの？
『これは、黒井鎮守府の防衛システムがダウンした状況を想定した訓練です。各自、侵入者に対して対処してください』
えっと……？
うーん、侵入者に対処ってことは、そんな難しいことじゃないかな？
多分、サイボーグとかで代用……。
『あ、因みに、侵入者は、ｐｒｅｓｅｎｔｓ　ｂｙ　白露型です』
あっだめだこれ逃げよう。
そう思った瞬間、窓を突き破って何かが現れる。
『ヴァァァァ』
『テケリ・リ』
『○×△◇?!／＃＆＿＼＊＄￥』
『キシュォァ……』
『じょうじ』
「い、い、い、いーーーーやーーーー!!!!」
気持ち悪いっ、気持ち悪いっ、気持ち悪いっ!!!
人肉を繋ぎ合わせて作ったようなゾンビ、スライム、いつぞやのホムンクルス、醜い獣、黒い人型の化け物……。
シラツユシスターズの作るクリーチャーは酷く悍ましい。
ああ、どうしよう！

室内では、私の武装は強力過ぎて使えな、
「ふぅんぬぉお!!!」
『アギャギ!!!?』
「きゃーーーーー!!!!」
「む、どうしたガンビア・ベイ？女のような悲鳴を上げて」
「女ですから……」
ナ、ナガト?!
室内でも容赦なくぶん殴って破壊した?!
ええ……。
あぁぁ?!!
レーザーの光が壁をぶち破って飛んできた?!!
爆発っ?!爆発してるっ?!!!
きゃわあ！肉片が飛んできた?!!!
も、も、もう!!!
「鎮守府が壊れちゃうよ!!!戦う人は外に出てーーー!!!」
私が叫ぶと。
「「「確かにそうだ」」」
と、艦娘全員が外に出た。
そして。
「各員、殺せえええええ!!!」
「「「おおおおおおおお!!!!!」」」

「はいっ、反省会」
異形の屍肉から、濃い血と体液の匂いが立ち込めるグラウンドの中で、Ａｄｍｉｒａｌが手を叩きながら言った。
反省会……。
確かに、今回の件は反省すべきだと思う。
「そうねえ、私達って、指示されないとまともに動けないことが分かったわ」
イントレピッドが言った。
「でも、個人個人の判断で戦ったのはおかしくないでしょう？」

アイオワが言った。
「でも、そのせいで鎮守府はボロボロよ」
サラが言った。
うーん……。
「そうだね、今回の場合は、室内戦ができる艦娘が室内を掃討して敵を外に追い出して、それ以外の艦娘は外で敵を倒すべきだったね」
と、Ａｄｍｉｒａｌが告げる。
そっか、そうですね……。
「まあアレかな、こういう時用のマニュアルを用意してない俺が悪いみたいなところはあるよね。次からはさっき言ったように、外に敵を追い出してから戦うこと！イイネ？」
「「「はい!!!」」」
よし、次からはちゃんと対処しよう。

３５５話　初心者向け旅体験その１　前編

社会不適合者しかいねえなこの鎮守府。
俺を含めて。
「古鷹ー」
「はい？」
「戦争終わったらどうすんの？」
「戦争、が、終わる……？」
「やりたいこととかないの？」
「やりたいこと……？」
うーん。
ほら、アレだよね。
艦娘って基本的に思考回路が昔のままだから、食事ができるだけで幸せとか言うのよ。
日本がまだ、経済技術共に発展していない、二次大戦頃の常識のまま。
俺としては、健全でより高次な欲求を持って欲しいところなんだけどな。
「古鷹。いずれ戦争は終わる。その時、君の居場所はどうするんだい？」
「私は、ずっと提督のお側にいますよ」
「だからね、いつも言ってるけど、そうはいかないでしょ。先のことなんて分からないんだからさ。自立してもらわなきゃ困るよ」
「じりつ？」
「うん、いい加減、戦うことしかできないのも困るってこと」
「私、は、要らない子ですか……？」
「そうじゃないよ、けどさ、この世界で生きていくなら、戦う以外の生き方も学んでくれなきゃ困るんだよ」
いい加減にね、本当に。
君らはさ、戦うこと以外にも道を見つけた方が良いよ。
俺と一緒にいたいと言うなら尚更。

俺は旅人、基本的に自分の面倒を見るのでいっぱいいっぱいだ。
俺についてきたいなら、いついかなるところでも生きていける生存力が欲しい。
そもそも、平和な現代社会において、戦うことしかできないのは致命的では？
いや、それが悪いとは言ってないんだが。
戦うことしかできない奴だっていて良いし、それが悪いことだとは思わない。
しかし、現代社会において、戦うことは別に役に立たないからな？
いや、あの人みたいに、個人で米軍くらい強ければ違うかもしれないが。
でも、人から奪って暮らすのは良くないね。
生産的じゃない。
俺のように、自然と共に生きたり、たまに稼いだ金でその日暮らしをしたりする技能が重要だ。
つまりは、「敵を殺す力」より、「一ヶ月を一万円くらいで凌ぐ力」の方が、俺の側にいるというなら必要になる。
一ヶ月を一万円くらいで凌ぐ。
いやー、昔やってたバラエティ番組じゃないんだからさぁ、みたいに思うかもしれないが、俺はマジで言っているぞ？
それに付け加えて、言葉が通じない、衛生環境が悪い、治安が悪い……、そんな地域でも生きていく力が欲しいよね。
「つまり、だ」
旅ができないなら俺にはついてこれないぞ、と。
「そうなんですか……。じゃあ、私に、旅を教えてください」
「えー」
いやー、それはちょっと。
男の一人旅と女の子の旅行は全然違うからねえ。
「大丈夫ですよ、文句なんて言いません」
「嘘だゾ、ドヤ街スラム街で生き抜く力があるのかなぁ？（疑心暗鬼ゴロリ）」

「提督と一緒なら、どこでも楽しいですよ」
「オッ、言うねえ」
　じゃあさ。
「試すか？」
「良いですよ」

「はい、来ました、ケニア」
　旅ゾ。
「古鷹、はぐれないようにね」
「はい、それじゃあ、手を繋ぎましょう！」
「……まあ良いけど」
「ケニアですか、聞いたことがありませんけど、どんな国なんですか？」
「えっ、ケニア知らない？ヤバくない……？ご、ごほん、ケニアはね、アフリカの国でね、サファリってところに動物がたくさんいるんだよ。あと治安がクソ」
「そうなんですかー」
　はい。
「それでな、今回の旅の内容なんだが」
「はい」
「金を使わない」
「はい？」
「飛行機代以外で金を使わないで一週間過ごす。現地で稼ぐのは可」
「はあ」
「物品の持ち込みはいつも持ち歩いているものなら可、俺の場合手持ちのものを今アイテムボックスから取り出す、しかし、食べ物や石鹸、服、靴、水、風呂、寝床、移動手段なんかは現地で買うかなんかして手に入れること。艦娘は万能翻訳マシーン利用可」
「はあ」
　そういうレギュレーション。

今回のレギュを初心者向け旅レギュと制定する。
これでもかなり甘い方だよね。俺は着の身着のまま密輸船に乗り込んで移動して、労働ビザなしでバイトして、悪党から盗んだりして生きてきたから。
「しゃおら、イクゾー！（デッデッデデデデカーン）」
「はい！」

「さて、古鷹？金がない訳だ。どうするべきだと思う？」
「奪えば良いと思います」
んーんん。
「それは良くないなあ」
「そうなんですか？」
「悪い奴からは奪っても良いが、何もしていない奴から奪うのは駄目だね」
「それじゃあ、悪い奴を探す？」
「まあ、それは俺もたまにやるけどね、今回は旅人の稼ぎ方を見せてやる」
俺は背中のケースからギターを取り出した。
あとは分かるな？

「いやー、稼いだ稼いだ」
「いくらぐらいになったんですか？」
「３００００シリングくらいかなー。ノースティリスで鍛えた演奏スキルはどこでも活きるね」
「それって……、どれくらいですか？」
「三万円くらい」
「え、それは……」
「ああ、ケニアは物価が安いから大丈夫よ。１０００シリングもあれば泊まれるし。部屋はアレだけど」
虫とかな。
まあ場所にもよるけどなー。都会の方は日本と変わらないくらい

金がかかるけど、田舎の方はやっすいの。
今回はあてもなく観光して回るから、まあー、ちょい田舎の方に行く、かね？
だから安めと見積もって……、うんまあ、一週間くらいなら余裕で保つね。
「そうなんですか？」
「こだわらなけりゃ泊まる場所なんていくらでもあるし……、何なら路上で寝たって良い。食い物だって狩りで獲っても良いんだよ」
「成る程……」
でもまあ今回は古鷹がいるので、最低限の文明的な生活はするけど。
俺一人なら、原住民とコンタクトを取って、狩猟しつつ生活することも可能だが、しないでおく。
いやほら、俺なんて、酒と女とギャンブルがあれば幸せだから、そこら辺で女の子引っかけつつ、獣を狩って暮らすのでも十分楽しいんだよね。
フォールアウトよろしく文明が崩壊しても生きていけると思うよ。
「でも、女の子はそうはいかないでしょ？」
服とか化粧とか、色々とさ。
「私は特にこだわりはありませんよ？」
「えぇ～？ほんとにござるか～？服は？」
「しまむらです」
「おいおいおいおい、しまむらはいかんよ!!しまむらはいかんよ?!!」
金のない学生とかが着る奴だろ!!
いや……、給料を????万は渡してるんだから、もっと良い服買ってくれマジで。
「提督はどこのブランドの服を着ているんですか？」
「俺？俺は普通にポールスミスだけど」
「じゃあ、私も同じのを」
「えー……、古鷹はもっと可愛い系じゃないかな？帰ったら服選んだげるから、少しはファッションに興味持とうよ、女の子なんだからさ。

鈴谷か……、熊野、金剛、陸奥辺りに聞くと良いぞい」
「はあ」
「ちなシャンプーは？」
「メリットです」
「メリットはいかんよ!!え？メリット？いかんでしょ！」
　髪が痛む。
「提督は何を使っているんですか？」
「俺？チャップアップシャンプーだけど」
「じゃあ私もそれを使います」
「んー、あー、良いんじゃない？」

「さて、買い物は済んだことだし、なんか食べに行こうか」
　バックパック背負って二人で移動。
　何が食べたい？とは聞かないよ？
　だって、そうそう選択肢がある訳でもないしね。
　日本みたいに、どこでも何でも好きなものが手に入る訳じゃねーんだよ。
「何が美味しいんですか？」
「ピザ」
「え？」
「もしくはマック」
「あ、あの、ここならではの料理とか」
「……俺は腐った人肉とかじゃない限り文句は言わないけど、古鷹はウガリとか食べれるの？あれ、美味くはないよ？」
「まあ、大丈夫ですよ」
　ふーん。
「じゃあほら、ちょっと食べてみ？」
「……美味しくないです」
「ね？」
　だろぉ?!
「あー、この中だったらビーフシチューがマシかなぁ？肉は結構美味

いし」
「あ、本当ですね、お肉美味しいです」
じゃ、食べた後は移動して、宿を探そうか。

３５６話　初心者向け旅体験その１　後編

『２０００シリングだ』
『はぁ？相場は５００シリングってところだろ、舐めんな』
『２０００シリングだ！』
『嫌だね、譲らねえよ。５００シリングだ』
『おい西洋人、甘く見てんじゃねえぞ！』
『俺はこう見えても東洋人だ。はい５００シリング。これ以上は払わないからな』
『足りない、２０００シリングだ!!』
「死ね」
「まぁーーーっ!!!?古鷹！待って！待って古鷹!!」
　牙斬刀を抜いた古鷹を止める。
「提督の手を煩わせるクズは殺さなきゃ、ですね！」
「駄目だから！駄目だからね古鷹！」
　値段交渉で揉めるのは海外では普通なんだよ!!
『ひ、ひいっ!!わ、分かった、タダで良い！タダで良いから殺さないでくれ!!』
　タクシーのおっさんは逃げていった。
　うん、まあ。
「タクシー代得したズェ……」
　やりました。

「良いかい古鷹、日本ではあまり見ないかもしれないけど、こっちだと値切り交渉をやるんだよ」
「そうなんですか？」
「ああ。連中、相場の分からない金持ちの旅行者だと思って、ぼったくろうとしてくるんだよな」
「万死に値しますね」
「いやいやいや、それくらいで殺してたらキリがないよ……。思い通りにいかないから殺すってのは良くないよ」

「ですが、騙そうとするなら罰を受けるべきでは？」
「騙すのは確かに悪いことだが……、騙される方も悪いってところはあるしなー」
悪意なんて大小を問わなければ世界中のどこにもあって、それから身を守るためには自衛するしかなくて。
旅をする上で必要なのは単純な力だけじゃなく知恵や人を疑うことも大切だ。
「あ、ごめん古鷹、ここのホテル、シャワーが水しか出ないわ」
「構いませんよ」
そう？
二人でシャワーを浴びてきたら……、さあやるか！というような色気のある展開にはならない。
薄い壁の薄汚いホテルでさあやるかとはならないでしょ？
うん。
「シャワー冷たかったでしょ？」
「いえ、この国は暑いのであまり気にならなかったです。でも、お風呂に入れないのは少し気が休まりませんね」
「あー、そうだよね、日本人は特に、お風呂に入れないのが辛いって言うね」
硬めのベッドの上に寝そべる。
「それに、夜は結構冷えるからね。艦娘だから風邪とかはひかないだろうけど……、あったかくして寝ようね」
「はい、その……」
ん、ああ。
「一緒に寝る？」
「はい！」

朝、チェックアウトする。
ここでも例によってぼったくられそうになったが、古鷹がキレて店員の襟首を掴んで殺気を当てると半額になった。
やだ、俺より頼もしい……。

惚れちゃいそうですわ。
「っし、まあ、ケニアに来たんだからサファリは見ておこうか」
俺はもう何度も行ってるけどね。
だがまあ、自然ってのは季節や時間帯、その他諸々の要因で姿を変えるもの。
同じもの、同じ景色が見れることは二度はない。
だからこそ面白いんだと思うよ、俺は。
「さて、古鷹。サファリに行きます」
「はい。動物がいっぱいいるんですよね？」
「そうだよー」
うーん、歩きで行っても良いんだけどね。
保護区にそのまま忍び込んだことも多々あるけど、犯罪だしな。
「と言う訳でツアーに参加します」
「はあ……、またお金で揉めるんじゃないですか？」
「んー、どうだろ？多分大丈夫じゃない？ツアー関係は割とちゃんとしてるから、ツアー料金でぼったくられることはあまりないとは思うよ」
「そうですか？」
「まあどこかで騙そうとしてきたりはするかもね」
「治安、悪いですね」
「しょうがないって。むしろ日本の治安が良過ぎるのよ」
そんなことを話しつつ、ツアーガイドの店へ。
『ツアーですか？ぜひうちを！』
「コニチワー、トモダチー！」
『サファリならうちが一番ですよ！』
と、激しい勧誘。
「古鷹、どこが良いと思う？」
「そうですね、少なくともあそこは駄目ですね」
と、指を指す。
「おっ、正解！よく分かったねー」
「だって、指先から睡眠薬の匂いがしますからね。良からぬことを考

えていそうです」
「そうだよー、観光客に睡眠薬入りのお茶を飲ませて眠らせた後、身ぐるみを剥ぐんだよなー」
　睡眠薬入りのお茶……、下北沢……、野獣……、うっ、頭が。
「にしても、睡眠薬の匂いなんてよく分かったね？」
「白露型が持っているのを嗅いだことがあるんです」
　ああ、成る程。
『うち、明日から出発、五日間！ドライバーは運転上手いし、ホテルも綺麗だよ！』
『資料は？』
『はいこれ』
　ふむ……、まあ、妥当かな？
「ここにしようか、古鷹」
「はい、提督に従います」

　そして明日。
　あらかじめ食料や水を大量に買い込んでおいたものをバックパックに詰める。
『出発だよ！動物が沢山見られるといいね！』
　と、サファリ専用車に乗せられて移動。
「あれ？と言うより、古鷹は動物の匂いとか平気なの？」
「あ、平気ですよ。そう言うものだと割り切っているので」
　あ、そう。
　さて、八人くらいかな？集まったんだけど。
『君、凄く可愛いね！名前を聞いても良いかな？』
『古鷹です、よろしくお願いしますね』
　同じ観光グループの軽薄そうなアメリカ人が声をかけてきた。
「ふ、古鷹、殺すなよ、お願いだから」
「？名前を聞かれたくらいじゃ殺しませんよ？」
　ほんとぉ？
『古鷹ちゃん、恋人とかいる？』

『はい、この人です！』
『う、お、超ハンサム……、負けた……』
　まあ、そのアメリカ人は俺の方が圧倒的にハンサムであることを察して、退いたが。
　古鷹との旅行は、いつ古鷹がキレるか分からんからデンジャラスで楽しいな（皮肉）！
　それで……。
『ほら、あそこ、ガゼルがいるよ』
　と、ガイドが声をかけてくる。
「……鹿？」
「違うよー、ガゼルは牛の仲間だよ」
「へえ、じゃあ食べられるんですか？」
「うん、美味いよ。帰りにガゼルが食べられる店探して寄ろうか」
『あれはダチョウだ』
「あれは鳥ですね」
「ああ、食うと美味い」
「味はやっぱり鶏みたいなんですか？」
「いや、赤身で脂身が少ない感じかな。生でも美味いんだよね」
　牛肉の代用品としても注目されてるんだぞ、ダチョウ肉。他にも、卵と羽根が色々なところで使われてるな。
『ゾウだよ、ほらみて、子供のゾウと一緒だ』
「ゾウですか」
「ゾウはなあ、まあ、凄い筋っぽくて硬いんだよな。味は悪くないけど」
「へえ」
「あとは、そうだな。ゾウは死んだ時に凄いぞ。ハイエナとハゲワシがゾロゾロと集まってきて骨だけになっちゃうんだよ」
「そうなんですか。提督もこの辺りで死んだ時は食べられましたか？」
「え？うん、調子乗ってたらライオンの群れにやられてはらわた引き摺り出された経験があるけど」

「へえ、ライオンさんはなんて言ってました？」
「美味いってさ」
「やっぱりそうですか。提督って美味しいですからね」
「特に心臓はめちゃくちゃ美味いともっぱらの評判だよ」
いやあ懐かしいなあ、人外のお友達は俺の心臓がかなり美味いって言って、よく胸骨をぶち破って手を突っ込んでくるからなあ。
まあ俺なんてね、皆さんの愛と勇気とか、そう言うのを守ってるんでね、実質アンパンマンみたいなもんなんすよ。僕の身体をお食べ、みたいな？
『あれは……、ライオンだ！』
「あ、ライオンですよ提督。話しかけてみて下さい」
「良いよ。おーい」
「グルル……」
「こんにちは」
「ガオ」
「うん、遠くから」
「ガオ」
「そうかな？」
「ガウ」
「あー、そうだね。俺のことは良いからそっちのこと聞かせてくれない？」
「ガウガウ」
「ほー。ありがとう、参考になった」
成る程なあ。
「なんて言ってました？」
「西に群れがあるんだって」
「へえ、本当ですか？」
「うん。動物の言葉って、なんかこう、ニュアンスで分からないかな？」
「理解できるのは提督くらいですよ」
「そんなことないぞー？俺の知り合いの大学教授の弟子は、動物と話

せるって言ってたぞ」
『西にライオンの群れがいると無線が入ったよ！向かってみようか！』
ガイドの言葉を聞き流しながら、サファリを満喫した。
「どうだった？」
「楽しかったですよ！」
帰り道。
古鷹は楽しかったと言ってはいるが。
「でも、不便だし、飯は美味くないし、汚いし、貧乏だし……」
「そんなことは関係ありません」
そう？
「提督、私は、大好きな提督と一緒にいられるなら、例え地の果てでも、地獄でも、一緒にいられるだけで嬉しいですよ」
「古鷹……」
「提督と一緒にいられるのが、艦娘の一番の幸せなんです！」
古鷹は、本当に良い子だなあ……。
「でもな、古鷹？そうは言っても辛いだろ？俺は本当に地獄に行ったこともあるから言うけどさ、君達を連れていけないようなところにも行くかもしれないんだよ」
「それでも……、私達はついて行きます」
あとナンパしたいからついて来られると困る。
でもまあ。
「分かった、ついて来て良いよ。でも、頼むから、たまには一人にさせてね」
「はい！」

３５７話　初心者向け旅体験その２　前編

「じー……」
「どうした鈴谷」
「この前」
「うん？」
「この前、古鷹と二人きりで旅行に行ったんだよねー？」
「ああ、それが？」
「狡いなー、二人きりとか狡いなー！」
「鈴谷も行くか？」
「マジ?!良いの?!」
「但し、初心者向け旅レギュだぞ」
「何それ？」
　レギュレーションの内容を説明する。
「ふむふむ……、お金を持たずに出発して、現地で稼ぐんだー。……キツくない？」
「俺は別にキツくない、けど鈴谷にはキツいだろうな。いやならやめてもいいんじゃよ？」
「はー？へーキだし！」
「お？なら試すか？」
「良いよ、やってやろーじゃん！」

　はい、インド。
「鈴谷くぅん？何持ち込んだのかなー？」
「スマホだけだよ、ダイジョーブ、レギュレーション範囲内だって！」
　まあ許す。
　俺はギターだけ。あと、中身が空の大きなバックパックも。
「さぁて？まずは稼がなきゃ話にならねえよなぁ？」
「どうやって稼ぐの？」
「んー、そうだな、今回はー」

「ソーリー！スミマセーン！」
あ、あいつ今観光客からスッたな。
あいつもスリだ、あのガキも。
都会だからスリが多いな。
よし。
「鈴谷、ちょっと待ってろ」
「え？」
「俺の速度もな、捨てたもんじゃねえぞ？」
足捌きと加速の魔法で加速して、目にも留まらぬ速さで街を駆け抜ける。
そして。
「提督？何これ、財布？……ってことはまさか」
「スリ本人の財布プラススリがスった財布……、と。中身を確認するからネカフェにでも入ろうか」
「え、えー！提督ー！いつもは私達に良い子にしなさいって言うのに、そんな悪いことやっちゃうのー？！」
「いやー、スリからスった金は悪党から奪ったカウントだから。悪行ではない」
「……まあ良いや！」
わちき許された。

「さあて、中身はー？合計してー、３００００ルピーか！結構稼げたなー！やっぱりスリがスった観光客の財布が混じってるからかねえ」
「いくらぐらい？」
「四、五万円くらいかな」
「え？それっぽっち？だって、１０個以上財布スってきたじゃん？そんなんじゃホテル代にもならないんじゃない？」
「大丈夫、インドは物価がクソ安いから。五百円もあれば宿も見つかるし二百円もあればまともなカレーが食えるぞ」
まともじゃなくて良いなら屋台とかだともう四十円くらいで飯食えるぞ。

「マジ？何それ凄ーい」
「じゃあ、ネカフェを出て……、ここで普通のスマホならＳＩＭカードを買うところなんだけど」
「はーい、提督と艦娘のスマホは明石の変な改造で地の果てでも電波繋がりまーす！」
　ってな訳で、スマホのネット環境についての問題は解決、と。
「次はスーパーで食料とか水とかを買い込むよ」
「おー！」
　スーパーにて。
「シャンプー欲しいよー」
「これはアプリコットの香りだってよ。ノンシリコンだ」
「ノンシリコン？ならそれにしようかなー。安物のシャンプーは髪が痛むから嫌なんだよねー」
「分かるわー。けど本格的な旅では風呂なんか入れないからね」
「どうすんの、そういう時は」
「川で水浴び」
「冬は？」
「濡れた布で拭く。俺は寒さとか平気だから冬でも水浴びするけど」
「うわー、私無理ー」
「無理って言われても湯船がある宿なんて中々ないぞ？そもそも湯船に浸かるって文化がないからな」
　入浴するって文化自体があんまりないのよね。ローマ人のテルマエとか有名に思うだろうけど、アレはキリスト教の伝来とともに廃れたし。
　いやー、水の価値が安くて温泉がそこらから湧いている日本ならではなんだよな、風呂って。
　外国では何日かに一回シャワーを浴びるくらいのもんだぞ。
　だから、まあ。
　体臭はお察しだ。
　あー、いやほら、でもさ、身体を洗うかどうかは気候にも左右されるでしょほら。

高温多湿となると毎日でもシャワー浴びたいけど、寒くて乾いた……、寒冷地なんかではあんまり風呂入ろうって気にならないよ。
でもまあ、俺は基本的に毎日水浴びしたいと思ってはいるよ。
湯船は入らなくても良いかな、って感じ。
「あとね、提督、一言いい？」
「何かな？」
「マジで暑い」
あー。
「今は特に暑い時期だからなー。でもこの時期逃すと雨季が来ちゃってジメジメするから。日陰なら結構涼しいよ？」
「暑いー、暑いー」
「ほら、水」
「何℃くらいあるのこれ」
「ほんの４２℃くらいだって」
「ほんの???」

「よっしゃ、飯にするか。鈴谷ー、下手すりゃ腹壊す屋台の飯とちゃんとした飲食店の飯、どっちが良い？」
「それ、実質一択じゃん！」
いや、分かんないでしょ？屋台の方がコスパは良いんだよ、コスパは。もしかしたら屋台の方が良いって言うかもなー、なんて。
「じゃあここのちゃんとした飲食店に入ろうか」
「うん……、それでも、建物ボロくない？」
「こんなもんだよ。もっと都心の方には綺麗な建物もあるけど、この辺だとこれくらいが妥当かねー。あ、でも、味は悪くないと思うよ。本場のカレーは……、いや、インドには正確にはカレーって食べ物はないんだけど、まあ、不味くはないよ」
まあ、味覚は人によって違うからなんとも言えないが。
「そうなの？」
「あ、それとここおかわり無料だ」
やったぜ。

「メニューは……、って読めないよこれ。んー、提督のおすすめにする！」
「んー、そうかい。まあ、何食べてもこの店ならそうハズレはないだろうね」
まあ俺も旅には慣れてるから。
美味い店くらい勘と嗅覚で分かる。
それと客層かな。
この店には、いかにも富裕層って感じの客が多いから。
いや、必ずしも高価＝美味しいという比例関係ではないとは思うけど、一般的にはやっぱり高価＝美味しいという図式は成り立っちゃうよね。
俺もゼロ円で何か作れって言われたら獣の丸焼きくらいしか出せないけど、百万円で何か作れって言われたら、美味しい本格フランス料理とか中華とか和食とか作れるし。
そりゃあ、獣の丸焼きと比べたら、本格フランス料理とかの方が美味いだろ？
確かに高い癖に不味いものもいっぱいあるだろうけどさ、普通は高い方が美味いよね、ってな訳で。
『サブジと、タンドーリチキン、ビリヤニとカレーを何種類か』
サブジは炒め物、ビリヤニは炊き込みご飯。
俺が適当に注文する。
「あれ？ナンじゃないの？」
「違うんすよねー。ナンは精製小麦粉だろ？精製小麦粉はそれなりに高級品なのよ。だからインドでは、全粒粉でできたチャパティってのを食べるんだぞ、基本は。まあ、次はナンを食べに行こうか」
「うん」
『ご注文のお品です』
「お、きたきた」
「いただきますー！っと、その前に写真撮っとこ。インスタに上げよう」
さて、味は、と。

「うん、美味しい」
「うん、いけるいける」
いや、特に食レポはする気がないけど、美味いよ。
「でも結構辛いねー、私は平気だけど」
「そりゃあねー。味は良いから良いじゃん？ってことで」
いやー、肉は美味いなー。
インドはね、ベジタリアンが多いからね。
ベジタリアンの飯は肉がないからあんまり美味しくない。
いや、それは俺の好みの問題なんだけど。俺って基本肉が食いたいから。
「「ご馳走さまでした！」」
さて、この後は宿を探すかー。

３５８話　初心者向け旅体験その２　後編

宿はどうすっかなー。
「鈴谷、シャワーは温水が良い？」
「うん」
「じゃあちょっと高くなるな」
「んんー、我慢した方がいいかなー？」
「いや、大丈夫。今回は初心者向けだから」
上級者向けとなるとこうはいかないけど。
上級者向け旅レギュとなると、「地球がリングだ！」並の投げやり設定になる。
例えば、ランダム転移魔法で適当に転移して、そこで着の身着のまま過ごすとか。
引きが悪いと雑草を食う羽目になるぞう！
さて、宿は……？
「ここにしようか」
「あ、思ってたよりは綺麗かも」
二千円ちょいくらいの宿にした。
ちょっと良いとこ。
「そうだね。でもほら、酷いところはもっとアレだからね、うん」
俺は一般的に酷いと言えるレベルの環境の宿でも気にならないけど。
まあ俺は隣に神話生物がいようとも眠れるし。
「シャワー浴びたら明日は観光だ、もう少ししたら一緒に寝よう」
「オッケー……、テレビ何やってるんだろ？何これ、映画？」
インド映画がテレビでやっている。
「……何で踊ってるの？」
「あー……、まあ、そういう文化なんだよ」
「そっか」
「でも、面白い映画も沢山あるんだよ！翻訳版が確か鎮守府に何本もあるから、なんか見てごらん？」

「ふーん。まあ、映画なら北上が詳しいから聞いてみよーっと」
「北上なあ、あの子は映画好きだからな……」
北上は映画好きで、ジャンルを問わずに色々見ている。特に、クソ映画を面白おかしくレビューするのが持ちネタで、かなり笑える。
その北上の面白クソ映画レビュートークをまとめた、この前のコミケに出した「とびっきりのクソ映画レビュー」はアングラな人気を誇り、結局増版して更に売ることになった。
「テレビも全部インド語だから分かんないなー」
「ヒンディー語な」
「ひんでぃ」
「そう」
「インドではなんて挨拶すれば良いの？」
「????」
「えっ、えっ、はい？もう一回」
「????」
「分かんないよ、分かんない」
「カタカナだとナマステ、かな」
「なますて」
「そう」
「じゃあ明日は色んな人にナマステって言おう！」
「良いんじゃないかな？アイサツは大事だ、古事記にもそう書いてある。そろそろ寝るかい？」
「もうちょいツイッター弄るよー。提督はもう眠い？」
「俺は一二週間くらいなら別に眠らなくても平気だし」
「うへえ、私も夜型だけど、一日五時間くらいは寝たいかな……」
「徹夜とかしないの？」
「たまにするけど、普段はあんまりしないかなあ」
お、偉いぞ、ちゃんと寝てるな。
「……よし、と。そろそろ寝ようかな。提督ー、腕枕してー」
「はいよー、はいはい」
「んー、程よく硬くてむっちりしてる。良い筋肉ですなあ」

「よく言われるよ。さ、おやすみ」
「はぁい、おやすみー」

「朝だよ」
「おはよ、じゃなかった、ナマステー」
「はい、ナマステー。朝食は近くの店で何か食べよう」
「何がおすすめ？」
「インドはですねえ、サンドイッチとか割と美味いんですよ」
「サンドイッチ？意外ー」
　正確にはホットサンド的なものだけど。
「あ、本当だ！美味しい！」
「肉が入ってないのがちょっと寂しいけど、野菜の味とスパイスの香りがするサンドイッチは、カレーに飽きたって時には最適だね」

　因みに服は、俺も鈴谷も近場の服屋で一週間分買ってある。
「うわー、エスニックー」
「似合ってるよ鈴谷」
　折角だから鈴谷には現地の民族衣装、サリーを着てもらった。
　あれだよ、５ｍくらいの布を巻きつけるやつだよ。
　似合うな。
　顔の作りがアジア系だからか？
　いや、鈴谷は髪の色も綺麗なエメラルドグリーンで、鼻も高く小顔だ。ハーフに見えるな。
　鈴谷には学生服とかが一番似合うかなー。
　なんかそういうコスプレっぽいのが似合っちゃうタイプ。
　俺？
　俺は普通に安めの長袖シャツと帽子かな。
　あー、あのね、暑い場所では長袖の方が良いんだよな。
　日の光が直接地肌に当たるのは良くないんだよ。だから、長袖の通気性がいいシャツとかで過ごした方が良いんだよね。

さて、インドだしな。
となると、やはりここかな。
タージマハル。
文化遺産だしな。
でも鈴谷はこういうのは分からないだろうから、軽く見て回る程度で。
妙高辺りは歴史に詳しくて興味もあるから、色んな話ができるんだけどな。
鈴谷は歴史とかに興味がないから軽く建物と景色を見て回る感じになると思う。
「へー、綺麗」
「ここはね、女の人のお墓なんだよ」
「王女様とか、そういう人の？」
「そうだねえ、こんな大層な建物を作られちゃうくらいなんだから、相当愛されていたんだろうねえ」
「ふーん……。提督は私のことどれくらい好きか教えて？」
「いっぱいちゅき」
「じゃあ、私が死んじゃったら、どうする？」
「普通に生き返らせるけど」
「あ、そんなことできるんだ。死んでも安心だね」
「あ、でも死体がないと生き返せないから、死んでも帰ってきてね」
「うん、モチロン！私は提督の側にずーっといるからね！」
そうか……。
「にしても、うーん、お墓かー」
「どうした鈴谷」
「私はどんなお墓に入るかなー、って」
「艦娘は基本的に歳をとらないんだし、お墓には入らないんじゃない？」
「でも、死ぬことは死ぬでしょ？その時のためにどんなお墓が良いか考えておこうかなー」
「因みにどんなお墓が良いの？」

「提督と一緒のお墓が良いかな」
「俺は死ぬつもりはないからなあ」
「そうなの？じゃあお墓は良いや。提督、死ぬ時は言ってね。提督が完全に死んで、二度と生き返る気がないって言ったら、その時は」
「その時は？」
「私も一緒に死ぬから」
……。
「俺の人生と鈴谷の人生は別だろ？俺に合わせる必要はないよ」
「えー？でもさ、提督がいなくなった世界とか、なんの価値もないよね？」
「そんなことはないさ、確かに世界は無価値なゴミも多いけど、それと同じくらい価値あるものに溢れているんだ」
「そう、かな」
「そうとも。俺がいなくなっても、死ぬだなんて言わないでくれ」
「うーん、じゃあこうしよう！鈴谷とね、子供を作るの！」
「無理」
「そしたら、その子を育てるのが私の生き甲斐になると思うから」
「無理」
「無理とかじゃなくて」
「無理」
「提督はさあ、もういい加減観念したら？私達もね、どうせならちゃんとエッチして妊娠したいって思ってるだけで、その気になれば提督の精液のサンプルで体外受精もできるんだからね？」
「お願いだからやめて？」
「提督のおちんちんで孕ませるか、体外受精で孕ませるかの違いしかないんだよ？どの道孕ませるんだから、どうせなら二人で気持ちよくなった方がいいでしょ？」
いや、本当にもう。
お願いだからやめてくれない？
「旅はどうだった？」

「うーん、黒井鎮守府って恵まれてるんだねー、ってことが分かった、かな？」
確かにな。
毎日美味しいものをいくらでも食べられて、清潔で温度や湿度も丁度いい。しかもスマートハウス。お手伝いロボット付き。理想的な家だ。
「インドは暑くて大変だったねー。あ、カレーは美味しかったかな。あと飲み物とお菓子も結構美味しかったよ」
成る程成る程。
「まあ、また行きたいかと言われると微妙だけどねー。あ、でも提督と一緒ならどこに行っても楽しいからね」
「そっか。じゃあ、帰ろうか」
「うん！」
鈴谷と手を繋ぐ。
そして空港へ。
まーなんだ、あれだなー。
結構楽しかったなー。
またどっか行こうか、鈴谷。
今度は、熊野も一緒に。

３５９話　初心者向け旅体験その３　前編

「うりうり～」
「どうした足柄」
　仕事明けのＯＬみたいなテンションで絡んできたな。
「どうだったの？」
「鈴谷との旅行かな？楽しかったよ」
「ふーん、やっぱり若い子が好き？」
「若いも何も艦娘って年齢とかあんまり関係ないでしょ」
「見た目の話よー、ほら、私なんておばさんでしょ？」
「は？」
　どの辺が？
「このおっぱいの張りはお姉さんだねー」
「あんっ??」
　この感触は二十代のおっぱいだぞ？
　こーんなおっぱいぶら下げといて何がおばさんだコラ。
「えー？でも、艦隊の皆んなはもっと若いでしょ？」
「若いってか、子供は多いよね」
　駆逐艦や海防艦を若い女の子とカウントするのだろうか。あれは幼いって言わない？
「提督は小さい子が好きなんでしょ？」
「そんなこと一言も言ってないよね？」
　人をロリコンみたいに言うのはＮＧ。
「ぶっちゃけロリコンでしょ？」
「ちーがーいーまーすー!!ロリコンじゃないですー!!」
　ロリもいけるってだけでロリコンではないんですー！
「本当？」
「本当だよもう……。で？足柄も旅したいと？」
「あら、良いの？」
「ああ、分かったよ……！連れてってやるよ!!連れてきゃ良いんだろ!!」

「あ、え？」
「どこに行こうかな～？」
はいドン。

「ＴＨＡＩＬＡＮＤ」
「タイね、初めて来るわ」
「因みに、初心者向け旅レギュだからね」
「何よそれ？」
「俺が！海外で！稼ぐ!!!（ビシバシスペシャル風）、説明ッ!!!」
説明した。
「成る程ねえ……。こんな感じかしら？」
すると、足柄は、目にも留まらぬ速さで通行人の懐をスリ、財布から紙幣を取って投げ捨てる。
「お上手、だけど、なるべく一般人からはとらないようにな？」
「ああ、大丈夫よ。今スったあいつ、ヤク中よ？指と指の間に注射痕があったわ。気持ちよくなるクスリを買う金があるなら、私にくれても良いでしょう？」
「やるね、足柄」
足柄は抜け目ないなー。

「足柄、タイはどうだい？」
「そうねー、私、仕事の都合でよく海外に行くけれど、発展途上国にはあまり行かないのよ」
ここで言う足柄の仕事は、要人の暗殺である。
「何で？」
「悪人ってね、大体、先進国の大きな都市にいるのよね」
「へー、そんなもんなの？」
「この前はロンドン、その前はニューヨーク、そのまた前は大阪で、そのまた前は……、ロサンゼルス、パリ、シカゴ、モスクワ、ってところかしら」

「おー、凄いね。世界を飛び回って楽しいでしょ？」
「まさか。妙高姉さんがクソ真面目だから、観光なんてする暇もないのよー？仕事中は碌に景色も見れないしー」
「はぁ、大変なんだねえ」
「そうよー、大変なのよー？だから今回は甘やかして？」
「もちろんだとも、おーよしよし」
「えへへぇ、提督大好きー！」
　そっか、仕事大変なんだなー。
「アサシン教団でしょ？あいつら人手不足だから人使いが荒いんだよなぁ」
「分かるわー、あの人達、お金はしっかり払うけど、働かせ過ぎなのよねー」
「え？月にどれくらい休んでる？」
「流石に日曜は休んでいるけど、黒井鎮守府としての出撃と、暗殺者としての仕事があるから、……まあ、週に一日くらいかしらね」
「えー、働き過ぎじゃない？」
「でもほら、こうやってたまにバカンスとかあるから。積極的に旅行だ何だで連れ出してくれると、お休みが増えて嬉しいんだけど」
「そっかー、じゃあ、妙高型を積極的に遊びに連れてってやらなきゃなあ」

「こっちにもブランドものって結構あるのね。普通の服はかなり安いし」
「物価安いからねえ」
「じゃあこれ着て早速旅しましょうか！」
「おう、どこ行きたい？」
「そうねえ、さっきから黙ってたんだけど、この国クソ暑いわね！」
「ほんの４０℃くらいだよ」
「ほんの？」
　いやまあ、このくらいならへーキでしょ。
「日焼けが怖いわー」

「でも、入渠すれば日焼けも元通りなんでしょ？」
「そうよー、艦娘って便利よねえ」
　日焼けも損傷扱いで、入渠すれば治るらしい。凄いね。
「取り敢えずどこかのお店に入って……、どこに行くか話し合いましょう？」
「良いよ」
　スタバへ。
「……スタバ、タイにもあるのね」
「あるよー？スタバは割とそこらへんにあるからね」
　マックとかケンタッキーとかもそこらへんにあるぞ。
「って言うか、日本人多くないかしら」
「結構いるねえ」
「何しに来てるのかしらねー」
「風俗とかじゃない？」
「あー。提督もそういうの大好きだものね」
「さあ、何のことやら」
　そして、そこらで買った観光ガイド本を広げながらどこに行くかを決める。
「やっぱり海じゃないかしら？」
「この辺は果物がめっちゃ美味いよ。マンゴーとか」
　と、色々と話を。
「取り敢えず飯にしない？」
「良いわよー、どこが良いかしら？」
「そろそろ日が落ちてきて涼しくなってきたし、屋台で食べ歩きなんてどうだろうか」
「屋台！そうね、屋台が色々あったものね」
　と言う訳で食べ歩き。
「あ、これ美味しいわね」
「ほら足柄、ビール飲もうぜ、飲める時間になったし」
「飲める時間って？」

「タイってさ、お酒を出して良い時間が決まってんのよね」
「え？何それ？」
「タイには、お酒を売ってもらえない時間と、売ってもらえない日があるんだよ」
「へー」
「午後五時くらいからは売ってもらえるから飲もう」
「ええ。……因みに、売ってもらえない日は何の日なの？」
「仏教に関係する日と、選挙の日かな」
「へー、そうなの。これ、タイのビール？……あ、結構美味しい」
屋台で飯を色々と食べる。
足柄も艦娘、更には重巡。
食事量は成人男性のそれを遥かに超える。
「パッタイ？って言うの？これ結構美味しいわ」
「お、良かった。こう言うところの飯は受け付けないって人もいるからさあ」
「私、そんなにお高くとまってないわよー。にしても安いわねー、日本の屋台はもっと高いのに」
「まあねえ」
「んー、美味えなあこの辺の飯は。昔を思い出す」
「昔？」
「そうそう。今ほど強くもなくて、外国語も覚えてなくて、魔法もろくに使えなかった頃。バックパックと小銭でどうにかしたり、知り合いの家とか女の子の家に転がり込んでさー」
懐かしいなー。
「さて、それじゃあ、宿を探そうかねー。希望とかある？」
「安宿で良いわよ」
「んじゃ、適当なところを……」
さて、つづく、と。

３６０話　初心者向け旅体験その３　後編

安宿と言っても、あまりに安過ぎて色々とヤバいような所は避けておく。
初心者用旅レギュ故に、バックパッカーが宿泊するような安宿よりはワンランク上の宿にしておく。
さて、服も買った、食料も買った、日用品も買った。
今日は休もう。
「寝ないの？」
「まだ別に……。って言うか、眠ろうと思えばどこでも眠れるし」
「おっ、流石は暗殺者。言うことが違いますね」
「褒めても何も出ないわよ～？」
ふーむ？
「で、どうなの？暗殺者は楽しい？」
「……なんだか、娘との会話内容が思いつかなくって、当たり障りのないことを聞いちゃうお父さんみたいな台詞ね」
「おや、デンジャラスでエキゾチックな会話がお好みか？」
「提督の場合、聞いたら精神が崩壊するような冒涜的エピソードがいっぱいなんだから、デンジャラスでエキゾチックな話題は本当に危ないから駄目よ～」
「是非もねえな」
ちょっとニャルラトホテプとチェスやった話とか、イ＝スと旅行した話とか、フィリピン爆竹で自爆した話とか、結構面白いと思うんだけどなー。
モルディギアンと遭遇して丸呑みされた時の話とか傑作だと思う。個人的には。
いやあれは面白いよ、本当に目が眩むんだよね。
そう言う神格でさ、なんか、こう、姿がぼやけて目が眩むから攻撃が当たらない当たりにくい！って感じで。
「それで、仕事の話？仕事は面白いわよ？」
「人殺しが面白いの？」

「それはまあ、少しはね。こんな稼業をやる奴なんて皆んなどこかおかしいのよ。人の首を斬り飛ばしてストレスを感じない人間なんて異常でしょ？まあ、そもそも私は人間じゃないけど」
ふむ。
カッコつけとかそう言うのを抜きで、人の死に何も感じない、若しくは高揚すると言うのは、優れた殺人者として重要な要素だね。
俺もまあ、相手が気に入らない奴なら、殺しても何とも思わないしな。
んー。
別にサイコパスとかそういうあれでも厨二病的なあれでもない。
人間は、というより知性ある生物は、同種の死体を怖がったりして、危機感を覚えるようにできている。
俺はそう言うのが慣れちゃって、完全に恐怖を感じなくなっちゃっただけだよ。
なんかこう、下水にずっといたら鼻がバカになって臭いのが平気になるみたいな？
艦娘の場合は、忘れられがちだけど、人間とは完全に別種の生物なんだよなー。
足柄にとっての殺人は、ハンティングと変わらないんだと思うよ。
だって、人間は、人間を銃で撃てって言われると拒否するけど、獣を銃で撃てって言われると喜んでやる人いるじゃん？
そう言うことだよ。
「やっぱりすばしっこい奴とか丈夫な奴は殺し甲斐がある？」
「んー、そうねー、しぶとい奴とか追い立てて殺すのは楽しいわねー」
猫みたいで可愛いなー。
「でもあれだもんね、大義の下での殺人だもんね」
「ええ。私達艦娘だって、理由もなく人を殺したりすることはないわ。私がやっているのはそう、害獣駆除よ」
と、まあ、艦娘の認識はそんな感じ。
「にしても、それなのに人間の俺が好きなのっておかしいよね、艦娘」
「え？人間……？」

人間だよ、俺は。

ネクストデイのモーニング。
「飯にします」
「ええ」
「おかゆがおいしいです」
「そうなの」
そう、この辺はお粥が美味しいのだ。
肉とネギが入ったゆるめのお粥。
エネルギーが吸収されやすくて朝のパワーになります。
「あら、本当に美味しい」
「ね？美味いでしょ？」
適当に朝飯を済ませて、あとはタイを放浪。
「この辺はムエタイって格闘技があってさ。知ってる？」
「ええ、少しはね」
「ムエタイのチャンピオンのサガットって人と知り合いなんだけどね、あれは凄いよ、めっちゃ強い」
「へえ～」
会話をしながら、色々と見て回る。
「お寺に行ってみようか。あ、有名なお寺とそうでもないマイナーなお寺、どっちが良い？」
「そりゃあ、まあ、普通は有名な方じゃないかしら？」
「ただし、有名な所は人がいっぱいいます」
「気にしないわ～。私が仕事でよく行く先進国の大きな街も人が沢山いるんだから」
そう？
じゃあ、ワットポーにでも行こうか。

「うわ、本当に人多い」
「でしょ？」
「全体的に金色で趣味が悪いわねー」

「それが特徴なんだよなあ……」
「やっぱり侘び寂びがないと駄目じゃない？」
「価値観は人それぞれだから。足柄は日本の艦娘だからそう思うだけで、他の国の人はそう思わないかもしれないよ」
「成る程……」
そして。
「因みに、ここ、タイのマッサージが受けられるんですよォ」
「あら、良いじゃない。アンチエイジング的な？」
「ｋｗｓｍさん……？」
「えっ誰？」
いや、何でもナーミン。
「じゃあ行っちゃいます奥さん？」
「行くわよー！」

「どうだったー？」
「凄く理想的な身体で、凝っていないって言われたわ」
と、足柄。
「良かったじゃん」
「提督は？」
「人の身体の感触じゃないって」
「ああ……」
なんだそのやっぱり？みたいな顔はー？
「んー」
「どうした足柄？」
「黒井鎮守府スペシャルマッサージ……」
え？
黒井鎮守府が風俗店に？
「提督がやる」
「俺が？」
「うん、そうね、うん！それで行きましょう！提督、帰ったら、黒井鎮守府でマッサージして？」

「まあ、良いけど……」
何、それは。

「次は海だー！」
「ダイビングね！」
「あ、髪とか大丈夫？」
「あとでケアするわよ」
じゃあ行こうか。
「んー、南の海って感じね！」
「ねー、綺麗だねー」
エメラルドグリーンの美しい海！
「ちょっと海の上を歩かない？」
「良いよー」
島の周辺をぐるりと回ってお散歩。
「んー！気持ち良いわー！」
「いつも海の上を走ってるよね、って言うのは野暮かな？」
「んもー、違うのよー！南の島を仕事抜きでお散歩、しかも大好きな人と二人きりで、って言うのが良いんじゃない」
「ほー」
「それじゃあ、この辺りで潜ってみましょうか！」
「大丈夫なの？」
「ええ、艦娘は全員水泳ができるし、呼吸なんて何時間かはしなくて平気よ。流石にゴーグルは欲しいけどね」
まあ、やばければ俺が助ければ良いし。
しゃ、潜ろう。
あ、水中ではテレパシーで会話するよ。
足柄はテレパシーとかできないけど、俺が足柄の思考を読み取って、俺がテレパシーで話して会話する。
『わー！綺麗ねー！』
『普段はダイビングとかしないの？』
『しないわねー』

『潜水艦の子達に頼めば嫌ってぐらい海の底をエンジョイできますよ』
『い、嫌よ……。あの子達、元気いっぱいだから、振り回されちゃいそうで』
『誰かに』
『あ、そうだ。』
『待って？』
『……何？』
『……あ、イルカ！凄い、沢山いる！』
ちょっと魔法で操って、イルカの群れを呼んでみましたー。
『可愛いわねえ』
『中身は幼児みたいなもんだからね』
知能が。
『……こんなに可愛いのに、提督はこの前イルカを食べてたわよね？』
『美味しいよ、イルカ』
『提督って、動物の言葉が分かるのよね？』
『うん』
『……動物に命乞いとかされたら、殺し辛くない？』
んー。
『逆に聞くけど、命乞いするからって暗殺対象を見逃したりとかする？』
『……あー、そう言う感じ？結構ドライなのね』
『え？そう？』
大切なのは、感謝の気持ちを忘れないことじゃない？
「さて、どうだった、足柄？」
「良かったわ。また、どこかへ旅行に連れて行ってね」
ふむ。
いつも仕事で忙しい足柄が、少しでもリラックスできたなら、この旅の目的は達成されたと言うこと。

やりました。

３６１話　艦娘格付けチェック

大淀と二人で次のイベントの打ち合わせ。
「笑ってはいけない黒井鎮守府とかどう？」
「白露型が食品に薬品を混ぜて、無理矢理笑わせるとかやりそうですよね」
「あり得る」
「艦娘格付けチェックはどうでしょう？」
「あ、良いじゃん！やろうか！」
はい、と言う訳で。

「艦娘格付けチェックーーー!!!」
鎮守府の一部を改造して、セットを作った。
何人かの艦娘を集めて、いざチェック！
「え？何ですかこれ」
と吹雪。
「テレビとか見ない？」
「あ、いえ、知ってはいますけど。何で今やるんですか？今は六月なのに」
「いや、こっちの世界線はそうだけど、あっちの世界では正月だったから」
「???」
まあ、やろうか。
はい、それじゃあまずはこれだ。
Ａ：俺がそれっぽく描いた落書き
Ｂ：プロの絵画
まずは熊野。
「Ｂですわね」
おー。
「クロード・モネの『庭の女たち』ですわね。Ａは提督がそれっぽくお描きになったのでしょう？」

分かるのか、偉い。
はい、雪風。
「えーと、えーと、Ａの方が、ゲージュツって感じです！」
はい！
時雨。
読心は禁止している。
「ふむ、Ｂだね。フランスの印象派の画家、モネの絵だ。Ａはかなり上手い落書きだね、提督が作ったのかな？印象派の雰囲気を出しながらも……、そうだね、ルノワールの画風に似せている。芸術家気取りの馬鹿なら騙せるんじゃないかな？」
凄いな。
次、卯月。
「い、いやいやいや！分かる訳ないぴょーん?!……えー？じゃあＡぴょん？」
はいはい。
結果発表ー！
「Ｂでーす」
「そうですわよねえ」
「だろうね」
このようにしてやっていきます。
因みに、司会の方は俺と守子ちゃんが。つまり俺が浜○ポジションで守子ちゃんが伊○四朗ポジション。
お手伝いロボットが撮影していて、あとでＹｏｕｔｕｂｅの黒井鎮守府チャンネルで流す。

次、宝飾品。
Ａ：高級ブランドの宝飾品
Ｂ：それのデザインをパクって俺が安物の材料で作った偽物
ファイト！
まずは如月。
「あ、これはＡね」

「どうかな？」
「雑誌で見たもの。Ｂは提督が作ったの？上手ねえ」
「じゃあＡの控え室に行ってね」
「はあい」
　ふむ、如月も割とできるな。
　次、鹿島。
「Ａですね」
　おー。
「ティファニーの新作ですよね。可愛いと思います」
　ファッション関係は得意な艦娘が割と多いなー。
　明石は？
「えー？いや、普通に分かんないんですけど。え？じゃあ、Ｂ？」
　長門は？
「分からん。Ｂか？」
　正解は。
「おめでとうございます!!」
「あ、良かったわ」
「合ってた」

　次は利き酒だ。
　Ａ：コンビニのワイン
　Ｂ：ロマネコンティ
　あらかじめ言っておくとね、ロマネコンティってそんなに分かりやすく美味い訳じゃないんだよね。少し淡い味わいで、余韻と香りが独特な感じかな。
　そして、昨今のコンビニワインは安いけど美味いんだよね。酒造技術の発達により、安くて美味しいワインを量産できるようになったってこと。
　今回は、コンビニワインの中でも、俺が一番美味いと思ったやつを持ってきた。フルーティな味わいで美味いよ。
　さて、どうだ。

木曾。
「Bだ」
おー。
「Aは……、何と言うんだ、添加物？とか、そう言う感じがするな。Bの方が独特な味がするが、こっちの方が良さそうな酒だ」
隼鷹。
「Bだね」
おー。
「ロマネコンティだろ？伊達に酒飲みやってないよ」
ポーラ。
「Bです～」
おー。
「この淡いような味わいと、独特の香り……。そして、後に残る官能的な余韻。確実にロマネコンティです～。香りを嗅いだ時点から分かってました～」
凄えな、伊達に飲んでないな。
では、鈴谷は？
「え？んー、普通にAの方が美味しいかな？」
青葉。
「うーん……、A！」
結果発表ー！
「正解はBです!!!」
「やっぱりな」
「ところでロマネコンティもっとくれない？」

次は音感だ。
A：近くの高校の吹奏楽部
B：プロバンド
どうだ！
暁。
「???」

「大人のレディの暁は、どっちがプロか分かるよね？」
「え、あ、う、も、もちろんよ！えーと、そう、Ａだわ！Ａの方が、その、なんか、上手よ！」
　ははは。
　陸奥。
「Ｂね」
　おー。
「ヴィヴァルディの春ね？Ａは学生さんかしら？たくさん練習したみたいだけど、学生レベルね」
　因みに、陸奥の趣味は芸術鑑賞だ。個人的にウィーンなんかに行って、コンサートに行くこともあるし、ヨーロッパで美術館巡りをすることもある。
　はい、武蔵。
「聞いたことのない曲だな」
　うっそだろお前。ヴィヴァルディの春だぞ？
「じゃあ、Ａにしておくか」
　佐渡は？
「えー？Ａかな？」
　イタリア。
「Ｂですね。だって、ヴィヴァルディはイタリア人ですよ？これを間違えたら恥じゃないですか」
　結果発表ー！
「Ｂです」
「やっぱりね。そうね、今度一緒にコンサートに行かないかしら？」
「よかった、正解だった」

　次、紅茶。
　Ａ：フォートナム＆メイソンの高級紅茶
　Ｂ：午後ティー
　はい、金剛。
「Ａデース」

流石。
「フォートナム＆メイソン、デスネー？あそこの紅茶は愛飲していマース。これはアールグレイクラシックで、ベルガモットオイルのフレーバーが特徴的デスネー」
伊達に紅茶飲んでねえな。
次、ウォースパイト。
「Ａね」
はい、即答。
「イギリス王室御用達のフォートナム＆メイソンの紅茶ね。私はロイヤルブレンドの方が好きかしら？」
つよい。
秋雲は？
「えー？んー、Ｂ……？」
若葉は？
「分からん、Ｂにしておくか」
結果発表ー！
「Ａデース」
「あ、やっぱりデスカ」
「流石に外さないわよ」

最後はこれ。
Ａ：１００ｇ数万円の和牛
Ｂ：いつも買っているちょっと良い肉に俺が手を加えたもの
世界に誇る神戸ビーフのステーキ。ミディアムに焼いて、シンプルに味付けしたもの。
それと、いつも鎮守府で使っている普通の肉。それを下拵えしておいたものを焼いたステーキ。
どうだ？
まずは吹雪にやらせる。
目隠しをした吹雪に、ステーキを食べさせる。絵面が犯罪的なのは許して。

「まずはA……、んー、美味しいです」
ほうほう、それで？
「Bは……、美味しいです」
「では、どっちが和牛のステーキでしょうか?!」
「分かりません！」
うーんこの。
「分かりませんから、えーと、美味しかった方、Bにします！」
あっ、はい。
「じゃあ、Bの控え室で待っててね」
次は大淀。
「そう、ですね。Bが食べ慣れた味ですね。だから、Aの方が和牛だと思います」
おおー。
電は？
「分からないのです……、どっちも美味しいので……。えっと、じゃあ、B？」
赤城は？
「答えはAですね。けれど、Bも美味しかったですよ。決められた予算の中でここまで美味しいものを作るとなると、しっかりと下拵えをしなければならないでしょう。このレベルの美味しい食べ物を毎日食べさせてくれる提督には感謝していますよ」
ありがとう。
うちの一流芸能人枠、リシュリュー、テスト、ウォースパイト、アーク、陸奥、熊野辺りは？
あ、言ってなかったけど、一流枠はさっきから控え室は別室でやってもらってるよ。
「「「Aね」」」
「味で分かるわ」
「旨味で分かりますわ」
「こちらの方が高価だと思います」
やだ、教養有り有り。

では俺が結果発表をして……。
「正解はＡです!!!おめでとうございます!!!」
「あ、やっぱりですか」
「そうですよね」

うーむ。
予想通りの結果になったな。
まあ、そもそも、艦娘は皆自然体で生きてるからな。
格付けチェックをして剥がす化けの皮はそもそもない。
一流芸能人枠の艦娘は実際一流で、駄目そうな艦娘は実際に駄目なんだよね。
まあ、こんなもんかー。

362話　艦娘探索者　準備

「提督、僕は感動したよ」
　俺が昼間からウォッカを片手に新作の映画を見ていたら、時雨が話しかけてきた。
　映画に感動した、とかそう言うアレじゃないな。言い方は悪いけど、時雨はそんな柄じゃない。
　丁度エンディングテーマが終わり、製作会社のロゴマークがデカデカと映った画面を横目に、聞いた。
「主語がないのよ主語が。何の話？」
「心を読んでも良いよ？」
「いやあ、コミュニケーションって大切だよな」
「ふむ、一理あるね。では、話そうか」
　時雨は、俺の隣に座って、腕を抱くと、話し始めた。慎ましい胸の膨らみを押し付けられるのがたまらないな。
「そうだね……、どこから話したものか」
「ゆっくりで良いし、適当に話してくれて構わないよ。俺と君の仲じゃないか」
「ふふ、そうだね。……探索者を見たんだ」
　へあ。
「君ももちろん知っていると思うけれど、この世界は常に、邪神や神話的恐怖、外なる神に狙われている、砂上の楼閣に過ぎない」
「そうだねえ」
　何度か世界を救ったことがあるからね、それは理解しているよ。
「見えるだろう、遥か彼方に、アザトースが微睡んでいる姿が。人の世界に降り立ったニャルラトホテプが、狂乱の種を撒き散らすのが。悍ましい人外共が、影の街に跋扈し、狂った人間が動乱を呼ぶ様が」
「そうだねえ」
「そんな中、僕は見たんだ。人の輝きを」
「ほー」
「矮小な人間如きが、神々に逆らい、立ち向かう姿を。僕は、感動した

よ」
　ふむ……。
「時雨のそれって、頑張ってる人間に感動したって言うか、こう、教育テレビでやってる生き物はこんなに頑張って生きてる！みたいなの見ておおー、ってなってる感じだよな」
　こう、カラスが木の実を割るために車を利用するのを見て、「わー、かしこーい」みたいな？
　時雨の知能はもう、人間の領域を遥かに超えているから、人間なんてただの動物にしか見えないんじゃないの？
「ふむ、そうだね。でも、例え、僕より知能が劣っていたとしても、精一杯考えて、できることをやれる人間には敬意を払うよ」
　視点が神なんだよなあ。
「で、つまり？」
「はい、これ」
　紙束。
「白露型の調査レポートだよ。そこに、動乱の種がある」
　ふーん？
　紙束を見る。
　Ｗｏｒｄでまとめられた、カラー写真付き調査報告書。
　タイトルは、『神話的怪奇発生予測地』とある。
「Ｗｏｒｄ使うんだ」
「紙媒体の保存は難しいものも多いからね。データ化したり、コンピュータを使ったりはするとも。得意ではないけれどね」
　ほーん。
　紙束をめくる。
「何々……？『神城島』『クローズドシナリオ』『推奨人数：四人』『推奨技能：博物学、心理学』『予定時間：二日』……？」
　まるでＴＲＰＧの導入案内みたいだぁ。
　そんな感じの、『シナリオ』の発生場所について記されている。
「つまりこれはあれかな、艦娘に探索者をやらせる、と？」
「そうだとも」

うん。
「ゲームとして成立しないよ多分」
「その時はその時さ。化け物共の計画がぶち壊されたところで、誰が困るって言うんだい？」
「……それもそっか！」
ん？
「でも危なくない？」
「艦娘は余程のことがない限り死なないし、精神も人間とは違う。最悪、僕達と提督が助けに行けば良いじゃないか」
百理ある。
「やるっかぁー」

「で、これは？」
「今回の艦娘探索者編「編とかメタ発言はやめよう？」……艦娘探索者の企画は、ステータスと技能が大事だ」
「そりゃそうだね」
適材適所。何だってそうだ。
「例えば、戦闘力よりも推理力が求められるシナリオにおいて、長門さんのような脳筋は無用の長物だ」
確かに。
「それで？」
「だからあらかじめ、艦娘のステータスと技能を調べておく必要があると思ったんだ」
「成る程」
で？
「ここに血を一滴垂らしてくれるかな？」
と、羊皮紙を渡される。
見るからに、魔術的な工作が施されたものだ。
ふむふむ。
よく切れるミスリルのナイフで、親指をチクっと。
血を垂らしてみると。

『新台真央　Ａｇｅ：２８

ＳＴＲ：３２
ＣＯＮ：１２５
ＰＯＷ：２００
ＤＥＸ：１０８
ＡＰＰ：１８
ＳＩＺ：１７
ＩＮＴ：２５
ＥＤＵ：１８
ＨＰ：１００
ＭＰ：６８
ＳＡＮ：６８９５１３６４８
装甲：１５
回避
こぶし
組みつき
キック
投擲
ＫＡＲＡＴＥ
応急手当
目星
聞き耳
追跡
忍び歩き
跳躍
登攀
言いくるめ
説得
クトゥルフ神話
オカルト
博物学

魔法
忍術
呪術
奇跡
秘儀
製作：料理
芸術：音楽
外国語
……
……
……
（以下多数）』
「なにこれぇ（ゴロリ）」
「提督のステータスと技能だよ」
そっかあ。
「凄いの？」
「ＨＰとＭＰの平均は大体１０以上、ＳＡＮは５０程、他のステータスは……、人間の最大値が１８くらいかな」
「へー、じゃあ俺って人間の限界くらいイケメンなんだ」
「ふふ、そうだね」
うーん？
「この装甲ってのは？」
「その数値以下のダメージは無効化するんだ」
ふむふむ。
「因みに、普通の人間は装甲は０だよ」
「俺も普通の人間だよ、それなのに装甲がある、これはおかしい」
「うん」
うんじゃないが。
「そうだね、通常の９ｍｍオートマチック拳銃が急所に当たって１０のダメージってところかな」
「へー」

じゃあ。
「このＳＡＮってのは？」
「正気度かな。その人間がどれくらいまともかを表す数値だね」
「じゃあ俺まともなの？」
「いや、ここまで高いと逆に異常かな」
ほーん。
「上位の邪神に出会えば、人にもよるけど、平均して５０くらいは減るね」
「じゃあ、常人なら、上位の邪神に出会えば発狂してもおかしくないってこと？」
「そうだね」
そんなもんかな？

「それじゃあ、艦娘を日本全国に派遣する感じで？」
「そうだね」
「じゃあ俺らは脳内の瞳で観測するっかぁー」
はーい、それじゃ、艦娘探索者編。
よーい、スタート。

３６３話　艦娘探索者　その１

『鳳翔　Ａｇｅ：２５
ＳＴＲ：４５
ＣＯＮ：６４
ＰＯＷ：３４
ＤＥＸ：３２
ＡＰＰ：１８
ＳＩＺ：８
ＩＮＴ：１５
ＥＤＵ：１８
ＨＰ：５０
ＭＰ：２６
ＳＡＮ：６８０
装甲：８
組みつき
合気
弓道
製作：料理
外国語
家事
目星
信用
応急手当
精神分析
水泳』

……？

「あの、時雨ちゃん？これは？」

「貴女のステータスだよ、鳳翔さん」

ステータス……？

状態？

「因みに、あくまで陸上でのステータスだから、海の上ではもっと高いよ」
はあ。
「貴女には……、そうだね、ここに出張してもらおうか」
「提督？」
「ん、ああ、そんな感じでよろしく」
まあ、提督が行けというなら行きますけど……。

「えっと、じゃあ、行ってきます？」
よく分かりませんけど……、行きましょうか。
今回は、艦娘の皆んなが一斉に出張するので、厨房の心配はいらないそうです。
「間宮さん、伊良湖ちゃん、速吸ちゃん、何か聞いてるかしら？」
「何も聞いてないですね……」
「あ、シナリオ名は、『渡良瀬町食人事件』って聞きました」
事件……？
つまり、私達にその事件を解決しろ、ということかしら……？
「この、ステータスと言うのは？皆んなもらいましたか？」
「はい、私のはこれです。……全体的な数値は鳳翔さんと変わりませんけど、鳳翔さんと違って、私には柔術と聞き耳がありますね。精神分析と弓道はありません」
と間宮さん。
「私もだいたい同じですけど、剣術っていうのがあります」
と伊良湖ちゃん。
「私は……、運転：自動車と説得、図書館っていうのがあります」
と速吸ちゃん。
ええと、つまり？
「四人で協力して、事件？を解決すれば良いんじゃないですか？」
「成る程……。じゃあ、頑張りましょう！」
「「おー！」」

速吸ちゃんの、『運転：自動車』でこの街に来ました。
兎に角、この渡良瀬町で事件を解決すれば良いんですよね？
たしか、食人事件、とか。
駅前で歩いている学生さんに話を聞いてみる。
こういうのは、若い人の方が色々知ってそうですよね。ほら、ええと、ついったー？とかでニュースが見れるそうですから。
私は、『信用』してもらうために、軍の関係者だと言って、話を聞く。
「あの、すみません。ええと、この辺りで事件？があったそうなんですけど、何か知りませんか？」
「えっ、あっ、はい。あれですか、あの、人が食われたっていう……」
「そうですね、それです。詳しい話を聞かせてもらえますか？」
「……まあ、いっか。俺も詳しくは知らないんだけどさ、この辺で人間が食べられたって話があってさ」
はあ……。
「どの辺りですか？」
「廃病院があっちの方にあるんだよ。そこの裏路地で、って話」
「警察は動かないんですか？」
「あくまで噂だしなあ……」
そうですか……。

「どう思いますか、間宮さん？」
「んー、やっぱりその、廃病院が怪しいのでは？」
「私もそう思います」
「そうですよね、怖い映画とかで見ましたもん、廃病院にお化けとかいるんですよ、きっと！」
そうですね……。
「じゃあ、廃病院に行ってみましょうか！」
「あ、その前に、懐中電灯とか買って行きませんか？」
「そうですね、廃病院はきっと暗いですから」
「お化け、怖いですね……」
「塩とか買って行きましょうか……」

「ごめんくださーい！」
「……誰もいないみたいですね」
四人で、件の廃病院に入る。
「まずは受付を調べてみましょう」
「「はい」」
資料やテーブル、棚の周りに『目星』をつけて、何かがないか探す。
「あら……？この棚、動かされた跡がある……？」
ちょっと、どけてみましょうか。
すると。
「鉄の扉……？」
「廃病院の隠し部屋、ですか」
「いかにも、って感じですね……」
「……え？入るんですかこれ？」
まあ、それは、行くしかないんじゃないかしら……。
「鍵とか見つけましたか？」
「いえ……」
んー。
「こじ開けちゃいましょう（ＳＴＲ４５）」
錠前を引っ張って、と。
うん、開きましたね。
ただの鉄で良かったです。
「それじゃあ、入りますよー」
「はい」
「ううう、怖いよ……」
「大丈夫なのかな……」
まず、扉を開いて目に入ったのは、地下へと向かう階段ですね。
懐中電灯で足元を照らしながら、一歩一歩下っていくと……。
「……待ってください。今、『聞き耳』を立てていたんですけど、何か、唸るような声がしました」
私には聞こえなかったけれど……。

「唸り声……、なら、もしかしたら猛獣の類とかかもしれませんね。戦うことになるかもしれませんから、覚悟は決めておきましょう」
「「はい」」
私が弓矢を、伊良湖ちゃんが刀を出す。
一体、何が現れるのでしょう……？

「クックック……、美しいお嬢さん、どうしましたか？」
一人の男が、地下の一室にいた。
「あの、貴方は……？」
「私は屍、と申します」
「屍さん、ですか」
「ああ……、しかし嬉しいよ」
「？」
「君達のような美しいお嬢さん達が……」
暗がりから、奇妙な妖怪が現れる。
「我が神、モルディギアン様の贄になるのだからねェ!!!」
私の『弓道』、間宮さんの『柔術』、伊良湖ちゃんの『居合』、速吸ちゃんの『空手』。
一気に四体の妖怪が吹き飛んだ。
「……は？」
「よくわかりませんが……、妖怪は殺してしまった方が良いですよね？」
「良いと思いますよ」
「お化けじゃなくて良かった、斬れるなら平気ですね！」
「ううっ、手がベトベト……。あとで石鹸で洗わなきゃ……」
意外と脆いんですね、妖怪って。
「グ、グールよ！殺せェ!!!」
追加で四体の妖怪が。
私、『合気』で受け流し、同時に投げる。
間宮さんが『柔術』で絞め殺す。
伊良湖ちゃん、『秘剣流れ星』。

速吸ちゃんは『空手』の『キック』。
鉤爪のついた、二足歩行の犬のような人間、グールと呼ばれた妖怪は、それぞれ。
投げられたグールは頭が弾けて（２Ｄ６＋ダメージボーナス３Ｄ６）死亡。
首をへし折られた（２Ｄ６＋ダメージボーナス３Ｄ６）グールは死亡。
刀で頭蓋骨を横に真っ二つにされた（２Ｄ１０＋ダメージボーナス３Ｄ６＋１０）グールも死亡。
蹴りで吹き飛ばされ（２Ｄ６＋ダメージボーナス３Ｄ６）壁に叩きつけられ（クリティカル）肉体が弾けて（追加ダメージ５Ｄ６）死亡。
「……は？」
「ええと、その、貴方は結局誰なんですか？」
「鳳翔さん、私が思うに、この人は悪者じゃないですか？」
「確かに！妖怪に指示を出していましたよ！」
「殺しちゃった方が良いと思います！」
……うん、そうね。
「ま、待て、や、やめろ、わ、私は神の御許へ」
『合気』で投げる。
「ぺぎゃ」
即死。

その後は、失礼ですけど、少し家探しをさせてもらいました。
時雨ちゃん（ＧＭ）からのお願いでして。
この男の人の懐に、『食屍鬼写本の断片』という文書があったので、それを持ち帰ります。
「時雨ちゃん、これで良いですか？」
『十分だよ』
とのことなので、帰りましょうか。
夜には、居酒屋の方を開けたいですし。
日帰りで終わって助かりましたね。

３６４話　艦娘探索者　その２

『川内　Ａｇｅ：１７
ＳＴＲ：４８
ＣＯＮ：５４
ＰＯＷ：３６
ＤＥＸ：８８
ＡＰＰ：１８
ＳＩＺ：８
ＩＮＴ：１３
ＥＤＵ：１８
ＨＰ：４４
ＭＰ：７８
ＳＡＮ：５４０
装甲：７
回避
投擲
剣術
応急手当
鍵開け
隠す
隠れる
聞き耳
忍び歩き
追跡
登攀
目星
水泳
跳躍
変装
忍術』

「……ふーん？」
ステータス、ステータス……。
英語はさっぱり、だけど、多分これは私の能力を数値にしたもの、かな？
「そうだよ」
と、時雨。
「成る程ねぇ……」
各数値の説明を受けて、まあそんなものかなー、って納得した。
技能も……、確かに私はこれくらいならできる。
「けど、紙一枚にまとめられるのはなんかヤダなー」

「神通はどうだった？」
「ステータスですか？ええと、川内姉さんよりもＳＴＲが高いですけど、ＤＥＸが低いですかね。技能は、『信用』や『剣術』、『居合』、『乗馬』、『制作：料理』、『芸術：能楽』、『歴史』、『説得』、『図書館』などがありますね」
へー。
「那珂は？」
「んー、那珂ちゃんは姉さん達みたいにステータスが高いわけじゃないみたい。あ、でもＰＯＷは上かな。技能は『芸術：音楽』と『芸術：ダンス』、『芸術：エレキギター』、『特大剣』、『ナイフ』、『投擲』、『マシンガン』、『言いくるめ』くらいかなー」
うーん。
「なんか、こう、さあ……」
改めて、技能を見ると……。
「これ、何かと戦って来いってことかな？」
時雨（ＧＭ）は、そうだよ？と言って、私達三人を送り出した。
タイトルは……。
『手口村の悪意達』、だそうだ。
「……で？」

取り敢えず、その手口村に来たんだけど。
時雨（ＧＭ）は行けば分かるとしか言わないし。
こんな辺鄙な村に何があるのよー……。
「時雨ちゃんもあらかじめ資料とかくれれば良いのにねー」
那珂が言ってるけど、本当にその通りだよねえ。私はＮＩＮＪＡだけど、あらかじめ攻め込む先の前情報は欲しいよ。
「それなんですが……」
どうしたの神通。
「あらかじめ、手口村について、『図書館』で調べたんですよ。しかし、何も資料が見つからなかったのです」
「え、何それ？」
「『歴史』的な観点からも見てみましたが……、あそこには昔、富豪の別荘と小さな村がある、と小さく記述されているのみで、特に資料は何も」
うーん？
「怪しい、よね」
「怪しいですね」
「怪しいねー」
よし。
「私、偵察してくるね。二人は近くのバス停で待ってて」
「はい」「うん」
『忍び歩き』しつつも『隠れる』。
そうやって、村に侵入する。
村は、小さな商店、十数建の民家、畑、軽トラなんかがある小さな村だ。
少し先に、大きめの洋館らしきものが見える。あれが富豪の別荘かな？
……にしても、子供が多いような気がする。
百人近くの子供が……。
……いや、違う！

「「「キシャァオオオ……」」」
『目星』をつけて見れば簡単に分かる。あれは、人間じゃない！
形は子供だけど、目がなくて、両手のひらに鋭い牙が生えた口がある！
ってことは、それを見て何も言わない大人達もヤバいってことなのかな？

次は洋館を見てみる。
真正面からの侵入は流石にバレる、よね。
裏門から『登攀』して侵入。
んー、えーと、『目星』をつけてみたら、三階の窓が開いているのが分かった。
『跳躍』して、『登攀』して、窓から侵入。
『忍び歩き』しつつ『隠れる』と同時に、『聞き耳』を立てる。
……一階に三人、地下に一人。
その辺りは避けて、できるだけ情報を集めよう。

家探ししてから、二人の元へ戻る。
「瞳のない、手に口がある子供、ですか」
「うん。私の『知識』にはない化け物だった」
「これが別荘で盗んできた日記？」
「そう。軽く読んでみたけど、どうやら、『イゴローナク様』とか言う奴が関わっているみたい」
「聞いたことないね……」
うーん……。
「考えるのめんどくさいし……」
「そうですね……」
「そうだねー」
「「「皆殺しにしようか」」」

「「艤装召喚」」
そして、村に真正面から入る。
「あ、あの、何かご用ですか？」
男の人が話しかけてくる。
「勘違いなら謝るけど。貴方達、悪者なんじゃないの？」
「いえ、そんなことはありませんよ？」
「あの子供みたいな姿の化け物、危なくないの？」
「あれは……、この村では奇形の子供が生まれやすくてですね」
ふーん。
「じゃあ、イゴローナク様とかって言うのは？」
「……どこで知った？」
「さっき、あそこの洋館に忍び込んだの」
「……それを知られては、生きて帰すことはできないなぁ……」
すると、男の首がゴロリと転げ落ちた。
男の身体はみるみるうちに膨れ上がり、両手のひらに口が現れる。
『シネ!!!!』
村中の人間が同じような化け物の姿になり、子供の姿の化け物と共に襲いかかってきた！
「那珂ァ!!」
「はーい！タクティカルアームズ、『マシンガン』!!いっくよー!!」
那珂のタクティカルアームズがマシンガンに変形し、そこら中に弾丸をばら撒く。
これで相手の出鼻は挫けた。
「よし、攻めるよ！」
「はい！」「うん！」
『シネエ!!!!』
相手の手のひらの『噛みつき』を『回避』して、手裏剣を『投擲』する!!
『グゥ?!!』
相手の大きなお腹に突き刺さって（２Ｄ６）怯ませた。

そこに神通が『居合』で胴体を斬り裂く。
『ガアッ?!!』
胴体が真っ二つ（２Ｄ１０＋ダメージボーナス３Ｄ６＋１０）になり、死んだ。
『バカナ?!!』
「余所見しちゃダメだよっ！アイドルの那珂ちゃんから目を離しちゃ……」
那珂が、『特大剣』に変形させたタクティカルアームズの、特大の質量を叩きつけるように振り抜く。
「ダメなんだからねっ!!!」
『ペギャ?!!』
袈裟斬りに斬られた（３Ｄ１０＋ダメージボーナス３Ｄ６＋１５）化け物は真っ二つになった後、グズグズの黒い油の塊のようなものになって消える。
騒ぎを聞きつけて、館の方からさらに沢山の化け物達が。
「「かかってこい!!!」」

十分後。
「これで、終わりっ!!」
『ギィヤァァァ!!!』
最後の化け物を両断した後。
『館からイゴローナクの手を回収してね』
と、時雨（ＧＭ）の声が。
「これかな？」
言われた通りに、口に手がついている腕の石像が館の地下室にあったので、それを回収。
仕事はこれで終わりかな？
出張かあ。
これも良い経験になった、かな？

３６５話　艦娘探索者　その３

『長門　Ａｇｅ：２５
ＳＴＲ：３５８
ＣＯＮ：２９７
ＰＯＷ：３２
ＤＥＸ：２１
ＡＰＰ：１８
ＳＩＺ：１６
ＩＮＴ：９
ＥＤＵ：１３
ＨＰ：１８５
ＭＰ：２４
ＳＡＮ：２８１
装甲：３０
こぶし
キック
頭突き
組みつき
長門流喧嘩術
運転：自動車
制作：軍事作戦
水泳』
ふむ。
横を見る。
『陸奥　Ａｇｅ：２４
ＳＴＲ：２５９
ＣＯＮ：２１５
ＰＯＷ：４８
ＤＥＸ：５１
ＡＰＰ：１８

ＳＩＺ：１５
ＩＮＴ：２８
ＥＤＵ：２１
ＨＰ：１４７
ＭＰ：３９
ＳＡＮ：４８０
装甲：２５
回避
キック
ナイフ
信用
目星
聞き耳
ナビゲート
乗馬
経理
写真術
博物学
考古学
人類学
心理学
法律
歴史
芸術：音楽
芸術：ダンス
芸術：絵画
芸術：バイオリン
芸術：ピアノ
制作：料理
制作：絵画
外国語

英語
イタリア語
フランス語
ラテン語
水泳』
「おい、おかしいぞ！陸奥がこんなに有能なのに、私がこれじゃなんだか私が馬鹿みたいだろう?!」
「いや……、そんなものでしょう、実際」
「なんだとう！陸奥めえ！」
「痛った、抓らないでよもう！」
あ、姉の威厳が！
やめてくれえ、こうやって能力を可視化するのはやめてくれえ!!

「えーと、シナリオ名、『遥か遠きルルイエ』ですって」
「ルルイエとはどこだ？」
「私の『知識』では、そんな名前の海底都市があったと思うわ。架空のものだと思うけれど……、時雨（ＧＭ）が関わっているとなると、実在するのかもね」
「つまり、お化けは出ないのか？」
「……どちらかと言うとＳＦかしらね」
「えすえふ」
「サイエンスフィックションよ」
「何語だ？」
「英語でしょ……」
「兎に角、お化けは出ないんだな」
よーし、なら平気だ。
「……はぁ」
「む、何だ？……言っておくが私は別にお化けが怖い訳ではないからな？本当だぞ！」
「はいはい、分かってるわよ」

「深淵島……、ここね」
太平洋側にある、住民三百人程の小さな島、深淵島。
ここに行けと、時雨（ＧＭ）から指示があった。
「ふむ……、来たは良いが、陰鬱な雰囲気だな」
「そうね……、住民の人達も、なんだか、ちょっと……」
何というか、魚のような顔をした人々が、背中を丸めて、よそ者の私達をジロジロ見てくる。
「その、すまない。この島について教えてくれないか？」
「……」
「お、おい？」
行ってしまった……。
これは、アレだろうか。
無視されたのだろうか？
そんなことが何度か続いた。
ふむ……。
「陸奥、どう思う？」
「閉鎖的な島、と言っても限度があるわ。島民同士で会話しているのは見かけたし、話せないって訳でもないのに、これほどまでに無視されるって言うのはね……」
だよなあ……。

そうやって、島を見て回ると、海岸に洞窟があるのを見つけた。
その奥に、魚のような人のような化け物の石像と、石碑があった。
「……読めん！」
「これは……、英語ね。ええと……」
内容はダゴン秘密教団についてや、ダゴンの召喚や退散の呪文だそうだ。
なんだそれは。
「私の『知識』では、アメリカの宗教団体だったと思うわ」
そうか。
「それにこの石像……、『考古学』的な観点から見ても、どの年代のも

のか分からないわ」
「つまりどう言うことだ？」
「恐らく……、人じゃない何かが関わっているってところね」
　その時。
『『『いあ！いあ！ダゴン!!』』』
「何だ？」
「さあ？でもまあ、厄介ごとね、多分」
　行ってみるか。

　海岸に、巨大な魚人が。
　どう言うことだ全く（ＳＡＮチェック自動成功減少なし）。
「陸奥、あれはなんだ？」
「さあ？ダゴンって呼ばれている訳だし、ダゴンさんなんじゃないのかしら」
　ふむ。
「因みにダゴンって言うのは古代フェニキアの……」
「あー、良いから、行くぞ」
「はぁ、はいはい」
　『何者だ……』
　デカイな、３０ｍくらいはありそうだ。
「こちら、黒井鎮守府の長門だ!!そちらの目的をお教え願いたい!!」
　聞こえるように声を張り上げる。
『ルルイエの浮上である』
　はぁ？
「あー、治安維持に影響がある場合、そちらを鎮圧しなくてはならないのだが!!」
『人間の世界など、如何様にも滅べばよいのだ。我らがクトゥルフ様の為にな!!』
　そうか。
「それでは、黒井鎮守府代表として、貴様を鎮圧する!!」
『やってみせろ、矮小な人間もどきめが!!』

相手の『踏みつけ』を受けるが、この程度ではダメージは受けない（装甲３０）。
「おおおりゃあ!!!」
『組みつき』で投げる（２Ｄ６＋ダメージボーナス６Ｄ６）。
島に叩きつけられたダゴン何某は、大きな叫び声を上げた。
『ぐおおおおおおおおおお!!!!き、貴様ぁ!!!!』
「まだやるか？大人しく帰るなら、命まではとらないでおいてやるぞ」
『舐めるな!!!』
『かぎ爪』を振るうダゴン。
私はそれを『受け流し』て、その腕を駆け上がり、ダゴンの頭に『こぶし』を振るう（２Ｄ６＋ダメージボーナス６Ｄ６）。
『ぐあああああああああ!!!!』
頭が弾け飛んだ（クリティカル追加ダメージ８Ｄ６）。
首を失った死体が崩れ落ちる。
私はそれを持ち上げて、海に向かって投げ飛ばした。
「海に還れ」
こんな死体が島で腐っていたら、明らかに異常だからな。
証拠隠滅、と言うのだろうか、都合の悪い死体は海に還せば良いのだ。

「な、なんてことを！」
「我らがダゴン様を！」
「よ、よくも！許さん！」
いきり立つ魚人達。
「恐らくは、彼らがダゴン秘密教団でしょうね。ダゴンとやらを呼んで、悪事をしようとしていたのだと思うのだけれど……、長門が碌に調査もせずにぶっ飛ばしちゃうんだから、何が何だか分からないわね」
「どの道、向かってくるなら潰すだけだ」
「ま、そうね」
「行くぞ!!」

……

……

……

程なくして、魚人達は一人残らず死んだ。

弱かったな。

「まあ、こんなものか」

その後、時雨（ＧＭ）からの指示で、島の石碑や、資料などを破壊して、指定された一部を持ち帰る。

「結局、なんだったんだ？」

「だから、それを調べないで滅茶苦茶にしたのは貴女でしょうに……」

「いや、私は普通に仕事をしただけだぞ」

「何でもかんでもぶっ飛ばすのが仕事なのかしら？殴る前に少しは考えなさいとあれほど言ったでしょ」

「あー、うるさいうるさい！丸く収まったのだから良いだろうに！」

「はぁ、まあ、それはそうなんだけど……」

「「結局、何だったんだ（のかしら）……」」

366話　艦娘探索者　その4

『明石　Age：22
STR：250
CON：178
POW：68
DEX：23
APP：18
SIZ：9
INT：88
EDU：398
HP：114
MP：36
SAN：745
装甲：20
こぶし
キック
投擲
拳銃
鈍器
応急手当
鍵開け
機械修理
電気修理
運転
重機械操作
操縦：ヘリコプター
操縦：飛行機
操縦：戦車
操縦：船舶
操縦：ロボット

操縦：移動要塞
コンピュータ
製作：兵器
目星
図書館
英語
医学
薬学
化学
電子工学
物理学
天文学
水泳『
夕張　Ａｇｅ：１８
ＳＴＲ：４８
ＣＯＮ：４６
ＰＯＷ：８９
ＤＥＸ：６９
ＡＰＰ：１８
ＳＩＺ：８
ＩＮＴ：９０
ＥＤＵ：３９５
ＨＰ：５５
ＭＰ：４３
ＳＡＮ：８６９
装甲：１０
回避
投擲
拳銃
ライフル
ショットガン

マシンガン
刀剣
応急手当
鍵開け
機械修理
電気修理
運転
重機械操作
操縦：ヘリコプター
操縦：飛行機
操縦：戦車
操縦：船舶
操縦：ロボット
操縦：移動要塞
コンピュータ
製作：兵器
目星
図書館
英語
医学
薬学
化学
電子工学
物理学
水泳』
「はい」
まあこんなもんでしょう。
「それでこれは？」
「さあ……」
起きたら、白い病室？みたいなところにいました。
「夕張ちゃん、ＧＰＳは？」

「反応ありません、エラーです」
「となると、地球圏外か、別次元か、ですか」
「生意気にもこの部屋、電波遮断されてますね」
扉は……、しめた、電子ロックですね。
でも、端末の端子が見たことない形……。
なら。
「夕張ちゃん、はいこれ。液体金属端子」
これなら、自動的に端子の先端の形状が変形して、どんな端末にも接続できるようになる優れものです。
特にオフライン端末へのハッキングの際などには、あると便利ですね。
こんなこともあろうかと作っておきました。
「ありがとうございます。では、ハッキングしますか」
さて……。
私はどちらかというとハードで、夕張ちゃんはソフトなんですよね。
私がハードを作って、夕張ちゃんがソフトを作るのがいつもの流れなんですけど、ハッキングとかは夕張ちゃんの方が上手いですね。もちろん、私もできますけど。
「どうかしら？」
「んー、結構ちょろい構成ですね。あと三十秒で終わらせます」
そう言って、艤装直結型思考入力コンピュータでハッキングをする夕張ちゃん。
艤装直結型思考入力コンピュータとは、艤装ならば考えただけで動かせるという艦娘の特性を元に作られたコンピュータで、艤装として召喚でき、尚且つ考えただけで高速で操作ができるというもの。
黒井鎮守府所属の機動兵器などに備え付けられていることが多々あります。
……そして、夕張ちゃんの『コンピュータ』の技能により、三十秒で開いた電子ロック。
「バレてませんね？」

「ええ、それどころか、マザーコンピュータの位置も割り出しましたし、ネットワークも一部を掌握しました」
　んー、流石夕張ちゃん、有能。
「それで、情報をある程度抜いたんですけど……、どうやらここは、宇宙人の宇宙船の中みたいです」
「宇宙人……？」
「ええ、ちょっと待って下さい、言語解析プログラムで……、はい、データ送ります」
　私の艤装にデータが送られてくる。
「んー、成る程。種族名、ミ＝ゴ。目的は地球を侵略して鉱物資源や人間を採取、ですか」
「ええ。私達が捕らえられた理由は、人間のサンプルとして連れてきたみたいですね。本来は適当な人間を攫う予定だったらしいですけど、急遽予定を変更したとか」
「時雨ちゃん（ＧＭ）の差し金でしょうね」
　さて……。
　地球を侵略されたら困りますね。
　あ、いえ、別に人類とかはどうでも良いんですけど、好きな漫画の新刊が出ないのとか困るじゃないですか。
　アーマードコアの新作も出てないですし。
　となると……。
「この宇宙船の中で暴れ回って破壊して、私達はなんらかの手段で脱出、って感じですかねー」
「今、艦内ネットワークを……、あ、はい、地球まで逃げられる脱出艇がありますね」
「この船に自爆装置とかは？」
「……無いみたいです、けど、炉心出力をオーバーロードさせれば、自爆のようなことは可能かと思われます」
「じゃあ、そんな感じで」
　とは言え、私達は技術屋。スニーキングミッションとかはできな

い。
しかし科学に不可能はないのだ。
監視カメラの映像をハッキングし、ステルス迷彩を駆使して、奥へと進む。
『隠れる』とか『忍び歩き』は不可能だけど、姿が見えないなら、近付き過ぎなければ早々見つからない。
このステルス迷彩は高性能で、熱量すら隠すことができるから、もしあの宇宙人が、目で見る以外の感知能力があっても見つからないのだ。
匂いとか音ではバレるかもしれないけど。
小さな声で話し合う。
「うわ、あれがミ＝ゴですか」
人間ほどの大きさの海老のような生き物。
うん、宇宙人ですね。
「あれなんか、黒井鎮守府に出たことありませんでしたっけ」
「あー……、そんなこともありましたね」
そんな言葉を交わしつつ、ミ＝ゴを避けて通る。
マップはハッキングで分かっているから、船員のミ＝ゴを避けながら、格納庫に向かえば良い。

格納庫では、監視カメラやセンサーの類があったが、夕張ちゃんが『コンピュータ』を操作してハッキングし、無力化した。
そして私が、『重機械操作』でロボットアームを動かし、『電子工学』と『製作：兵器』の応用で、そこら辺の船を弄くり回して脱出艇を作る。
この船を破壊したら、これで脱出するから。
ついでに、脱出艇にロックをかけて、他の船は機能停止させておきましょうか。
さあ、これで私達以外はこの船から脱出不可能ですよ～。

では、早速、皆殺しにしましょうか。

最後はこの船の炉心をオーバーロードさせて吹っ飛ばす予定ですから、適当に、ざっと殺せば良いでしょう。
艤装を召喚したまま、船内を歩く。
『ーーー!!』
『～～～!!』
「あ、来ましたね？」
「撃ち抜きますよー」
ライアットジャレンチ……、『鈍器』でぶん殴ります（４Ｄ６＋ダメージボーナス４Ｄ６）!!
『ッ』
んー、甲殻が砕けて頭？が陥没しましたね。
まあ、即死でしょう。
夕張ちゃんも『ライフル』で、ミ＝ゴの頭を吹き飛ばす（４Ｄ６＋１０）。
『ピギャ』
「さあ、炉心まで押し切りますよ！」

そんなこんなで、私達は銃撃戦や格闘戦を交えながらも、エンジンルームに辿り着きました。
「こんな緊急時じゃなければ、ゆっくり分解してみたいけど……」
「そんな暇はありませんね」
解析ツールで解析。
ええと……、あそこね。
『電子工学』の応用で、安全装置を破壊、炉心崩壊、と。
「さあ、夕張ちゃん、逃げるわよ！」
「はい！」

迫り来るミ＝ゴ達を物理的に叩き潰して、格納庫までやってきた。
サイレンが鳴り、廊下のランプが点滅する。
閉まった隔壁を物理的にぶち破り、ここまでやってきた。
「さて、行くわよー！」

『操縦：船舶』の応用で、脱出艇を動かす。
カタパルトの隔壁を、備え付けのエネルギー砲で吹っ飛ばして……。
「発進!!」
飛んだ。

……3時間後。
「あ、着きましたよ」
「地球ね」
地球に帰ってきた。
無事に大気圏に突入して……、黒井鎮守府のグラウンドに着陸した。
「おかえりー、晩御飯できてるよー」
提督が普通に出迎えてくれる。
優しい、しゅき。
「「はーい」」
お仕事終了、っと。
どうせなら、もうちょっと色々見てくるべきだったかしら？
今度は個人的に宇宙船を作って、ミ＝ゴの母星に行ってみるのも良いかも。

３６７話　救急時の対応を学ぼう

ふーむ。
なんか、あれだな。
うちね、まあ、一度も使ったことないんだけど、ちゃんとＡＥＤを設置してあるのよ。
そういうのは使わないに越したことはないけどさ。
緊急時の対応とか、教えた方がいいんじゃないかな？まあ一般論でね？

「特に、守子ちゃんはそう言うのちゃんと覚えようか」
一応軍人だしね。
「はいっ！」
よーし、良い返事。
そして艦娘の諸君。
「もちろん君らはアレだよね、職業柄緊急時の対応とか救命とか、できるよね？」
「「「……」」」
「黙らないで？」
まあ、いいか。
よし、やろうか。
「じゃあ、漣！」
「はーい」
「心臓マッサージ、やろう！」
「アッハイ」
「まずー、俺がー、心臓を止めます！」
はい、今止まりました、心臓止まりました。
「心臓マッサージをして下さい、どうぞ！」
「えーと……」
いきなり胸を押そうとした漣。
「まずは意識があるか声をかけること！」

「え、意識あるじゃん」
「あるけど!!!」
　無い感じでやってるの！
「確か、えーと、ドラえもんの歌のテンポで、胸を押すとか？」
「そう、そんな感じ」
「よーし、分かった。……やーやーやーやーやー!!!でいあふたーでいゆあ」
「待て待て待て待て」
「え？何？」
「ドラえもんの歌って言ったよね？」
「ドラえもんの歌じゃん」
「それはＡＬＬ　Ｉ　ＷＡＮＴだね」
「あ、じゃあこっちか。……こっころのなか、いっつもいつも」
「違うって！もっと昔の!!」
「ふくれっつらしかめっつら」
「違う違う、最初のだよ!!!」
「ひゃあー、ぼくっのドラえもんっが」
「旧ドラえもんじゃなくってぇ!!!」
　わざとでしょ？わざとなんでしょ？怒らないから言ってごらん？

　次、武蔵！
「ふんっ」
「ぁア”ーーーッ?!!胸陥没したーーー!!!」
「ふんっ」
　両肺が潰れる。
「む？提督？平たいな、どうかしたのか？」
　あー。
「がっは、ぐ、ぐはっ。……武蔵、君は人が倒れてても触っちゃ駄目だぞ」
「む、了解した」

次、雪風！
「えーと、えい！」
胸に飛び込んできた。
「えへへぇ??」
「うーん、可愛い！許す！」
おっけい。

次、白露！
「えい」
「んあ」
なんか注射された。
「あっ、あっ、なんだこれなんだ？心臓が動き始めた、ってか、強制的に動かされてる？」
「白露ちゃん謹製の、液状の寄生生物だよ！心臓を覆って無理矢理動かすの！」
「えっ、なにそれこわい。変なもの注射せんといて？」
「今回のは3分で自壊するから大丈夫だよ」
何が？
「こっちはどう？」
「アッ」
心臓に直接電極が。
「えい」
電気が流れる。
「電気流すなら普通にＡＥＤ使って下さる？」

「えー、次は人工呼吸……」
すっ、と綺麗に並ぶ艦娘達。
「……はやりません。概要だけ教えます」
「いえ、やりましょう」
「やらないよ、キスしたいだけでしょ君ら」
「いえ、やりましょう」

「駄目です！今日は守子ちゃんのために真面目にやるの」
　一斉に守子ちゃんを見る艦娘。
「ヒィッ！た、旅人さん、私のことはお構いなく！」
「いや、真面目にやらにゃならんでしょ、こういうのは」
「えっと、ほ、ほら、今回はちゃんとやってくれますよ、ね？」
「「「やります」」」
　はあ。
「えー？じゃあやる？」

　はいじゃー、まず、呼吸を止めます！はい止めた！
「では長門にやってもらおうかな」
「うむ」
　さて……。
「ふん!!!」
「ごパ」
　一瞬にして考えられないほどの空気を肺に送り込まれたことにより、俺の肺はケツに爆竹を突っ込まれた蛙のように破裂。爆発四散。
「かヒュー、こヒュー……」
　息できなァい!!!
　テレパスで呼びかける。
『ほんっとにさあ、あのさあ』
「す、済まない、力加減を間違えた」
『長門、君はアレだよ、倒れてる人見てもなんもやらないようにね』
「わ、分かった」

　再生。
　次、鹿島。
「ふーっ」
『おっ、上手い上手い、そんな感じだ』
「ここで、心臓マッサージを……」
『おー、できてるできてる！』

「ふふふ、一人くらいはまともにできないと困っちゃいますもんね」
天使かよ。
「あ、そう言えば新しい鞭を買ったんですよ！後で思い切りぶって下さいね！」
これでドＭじゃなけりゃあなあ……!!!

次、ガンビア・ベイ。
「んー！」
『違う違う、吸ってどうすんのよ？』
「ん？んー！んーーー！」
『いやそれキスしながら口呼吸してるだけになってる！』
「んーーー！わ、分からないですーーー！」
分からないかー。
『良いかい、ベイ？落ち着いて？ゆっくりと息を吹き込むんだ』
「ふ、ふぅー」
『そう、上手い上手い』
ベイはビビリですぐにテンパるけど、教えればちゃんとできるし、真面目だし、良い子だ。
普通のナード。
俺の下着の匂いを嗅いで自慰してるくらいだから（バレてないと思っているらしい）、黒井鎮守府基準ではまとも。

対馬。
「対馬は駄目」
「え……、なんで、ですか？」
「絵面が犯罪的過ぎる」
「う、うぇえん」
「あーはいはい！良いよー！対馬ちゃんに人工呼吸されたいなーーー!!!」
「はい」
やけくそである。

「ちゅ……??」
　ああ、クソ、ごめんなさい！何かに謝る！
『息を吹き込んでねー！』
「あ……、ごめんなさい、司令。あの……、司令とキスできて……、幸せで……」
　クソが！
　俺はこんな可愛い幼女を誑かしてしまった！
　何に謝ろう？神？神は嫌いだ、知り合いのロリコン探偵大十字さんに謝ろう。
　すまぬ……、すまぬ……。

　如月。
「ちゅう??」
『おいコラ、舌入れるんじゃないよもう！唾液を吸うな！』
「んっ??」
『もう良いから離れて……、離れなさいこら！こら！君はもう、こら!!』

「えー、次はＡＥＤ使います」
　例によって、俺が心臓を止める。
「こういうのはね、アホでも使えるように親切設計になってるから。ほい、指示に従ってやってみよう」
「「「はい」」」
「ちゃんと心肺蘇生できた場合は、桃鉄のそのターンの操作しているプレイヤー以外が２コンを弄った時に出る謎のＳＥが流れるから」
　俺の身体から。
　じゃ、頑張ってね。

　まず明石。
「こんなんじゃ駄目ですね、もっと大きな電圧を流せなきゃ面白くないです」

そう言って、ＡＥＤを一瞬で改造して、俺に貼り付けて、スイッチを入れる。
「ア”ぁーーー」
「もっといけます、もっと！」
「アァァあ”ーーー」
「いっそ、黒井鎮守府のジェネレータと直結して……」
「ア」
爆発四散。
テレパスで話しかける。
『あのさぁ……』
「どうでした?!」
『何で電圧上げたの？』
「高出力はロマンだからです!!」
困った、答えになってねーぞ。
『まあ、良いよ。ほら、俺の身体をバラバラに引き裂いたんだから、罰として吹っ飛んだパーツ拾ってきて』
「はーい」

再生、次。
金剛。
「こうデスネー？」
「おっ、できてるじゃーん、賢い！」
金剛は比較的に機械に強い方だ。
艦娘の中にはスマホを使いこなせない子すらいるというのに。

次、神風。
「???」
あー。
「えっと、こう？」
「違うねー、こうだよ？」
「???」

神風は機械がまるで駄目だ。
何とか電話の仕方とライン的なものの使い方は教えたが、他はてんで駄目だ。
でもラインを送るとたどたどしいひらがなで返ってくるのが可愛いと俺の中で評判。

まあ、こんなもんかなー。
「君らはねー、本当にねー」
まあ、二割くらいかな？
まともに緊急救命が出来た子は。
うんまあ、良いよもう。
それで良いよ。
「えー、お仲間が死にかけた時は、最低限、死体でもいいから持って帰ること。余計なことはしなくて良し」
蘇生魔法使えるからな。
「「「はい！」」」
「守子ちゃんは覚えられたかな？」
「はい、大丈夫です」
そうかい、そりゃ良かった。
「それじゃあ、今日は解散！」
まあ、守子ちゃんが緊急救命を覚えられたなら、良いかな。

３６８話　バンディット・ザ・ガンマン　その１

「提督、提案があるんですけど」
　俺がアイテムインベントリの道具類を手入れしていると、明石が現れて、言った。
「君がそんなことを言うと大抵ロクでもないことが起きるよね。でも許す」
　許可。
「私、最近、レッドデッドリデンプション２　にハマったんですよ」
　ふむふむ。
「でも、今の時代、列車強盗とかできないじゃないですか」
「そりゃあねえ」
「なので、ＶＲでそれっぽいゲームを作りたいんですよね」
　ほー。
「それで、なんで俺に相談を？」
「それはですね、私達工廠組が、アメリカ西部開拓時代の情報を何も知らないんですよ。だから、スペシャルアドバイザーとして、海外の文化や地理に詳しい提督にお手伝いを、と」
「うん、良いよ」
　歴史書とかアンティークとか、博物館行きの資料もいくらか持ってるし、資料が足りなければアメリカに飛べばいいし。
「最終的には、この、ＳＡＯ的なＶＲデバイスと共に一般に発売も考えているんですが……」
「ええんちゃう？」
　そこら辺の法律の擦り合わせは、大淀と霧島辺りが詳しいし、俺もある程度は分かるから、売りに出す時は言ってね。
「他にも、ファンタジー編やＳＦ編なんかを考えているんですけど……」
「サイコーに面白そうだからガンガンやろう」
「はい！」

アメリカの歴史や文化に詳しいサラをスペシャルアドバイザーに、他の海外艦も集めて、実地での取材もして、博物館なんかにも行って、ＶＲＭＭＯ『バンディット・ザ・ガンマン』を製作する。
「この時代は……」「サンダンス・キッドだ！」「動植物は……」
……
……
……
「はーい、と言う訳で」
「製作期間一ヶ月でよくもまあここまで……」
「「完成でーす！」」
「「「わー!!!」」」
「では早速テストプレイをお願いします。こちらのヘッドマウントデバイスをつけて電源を入れプラグイン！と」
「そんなネタ前もやったでしょ」
「冗談です、フルダイブと宣言して下さい」
「フルダイブ！」
お、凄え。
×
×
×
サラの歴史的観点と妙高の文学的観点から作られたＯＰの口上を、イントレピッドの綺麗な声のナレーションで堪能する。
映像は夕張の驚異のＣＧだ。
平たく言えば、初期装備のリボルバー一丁と馬一頭、弾薬と食料、２０$ほどの金、ナイフと縄、キャンプセットを持たされて、テキサス州のど真ん中に放り出される。
これから、探偵になるか、ギャングになるか、保安官になるか、はたまた商人や用心棒になるか。
その辺はプレイヤーが好きにしていいことになっている。
例えば、自分でギャングのグループを作ったり、または加入したり、保安官になってみたり、探偵になってみたり……。
名声が高まると、かの有名なピンカートン探偵社からスカウトされ

たり、逆に悪名が高まるとこちらも有名なワイルドバンチからスカウトされたりする。
因みに、あくまでもゲームであり、百パーセント歴史に忠実な訳ではない。
多分そのうち、数百人規模の探偵と強盗団の殺し合いイベントみたいな、現実ではあり得ないことも起きるとは思うけど、その辺はまあゲームだから。
「それで、あー」
「強盗だ！金を出せ！」
これはチュートリアルである。
「チュートリアルと分かっていても強盗は気分が悪いなー」
追い剥ぎ一人に、リボルバーを向けられている。
まあ……。
「現実での身体能力がそのままＶＲでも使えるとなるとさあ」
「あぁ？何言って……」
馬から飛び降りて腕を捻りあげる。
「まず負けないよね」
「いぎゃあ?!」
《名声が５上がりました》
あ、殺さないと名声が上がるのね。

んー、これはゲームバランス的に良いのかな？
身体能力がそのままってのは。
夕張が言うには、キャラメイクで身体能力の高さをある程度決められて、筋肉があればあるほど燃費が悪いとか。
キャラメイクをしないとそのままの姿でスタート、身体能力もそのまま、らしい。
つまり、俺や艦娘、グラップラーや男塾塾生、北斗や南斗の拳士くらいの身体能力があれば、そのままの方がお得って感じかな。
明石が言うには、ＶＲゲームなら身体能力が高い人が有利で当然、だとか。

また、肉体の性能は上げられても、反射神経を上げたり下げたりなどの調整はできない、と。
つまり、超人を凡人に落とすことはできないらしい。
凡人を擬似的に超人にすることは可能らしいが。
凡人用にスキルを用意しているらしいが……、俺達には不要だな。
例えば、モーションをデータ化し、脳内で思考したことを即座に実行するアクティブスキルや、常に身体能力などを向上させるパッシブスキルなどがある。
だが、これも飾りみたいなものだ。
例えば、早撃ちというスキルがある。これは、ターゲットに対して拳銃の早撃ちをするスキルだが、元からこのスキルより早く撃てる技量があるなら、要らないだろ？
他にも、料理スキルとか、歌スキルとか、元からできるなら、オートマチックにスキルとして所有する意味はない。
元から料理ができる人に料理スキルは不要だ、元から歌が上手い人に歌スキルは無用だ。
ということはつまり、俺の万能っぷりはこの西部開拓時代の仮想世界でも活きる訳だ。
でもまあ、あくまで、再現されるのは物理法則だけだからね。
魔法とか、呪術とか、そういう身体能力や肉体の機能に依存しない系の、精神力系のスキルは当然使えない。
アイテムボックスや使い慣れた魔法が使えないとなると、超速再生や蘇生もできない。手足をもがれたにも等しい。
しかし、俺が手足をもがれたくらいのハンデで旅をやめるほどの雑魚ではないことは皆んな知ってるよね？

さて、取り敢えず最初の街についた。
街に名前はちゃんとあるが、具体的な地名は明記しなくても別に良いか。
始まりの街とでも言っておこう。
雑貨屋があって、銃砲店があって、郵便局、酒場、宿屋なんてのが

ある。
俺は銃砲店で、弓と矢、投げナイフを買い取った。
それを使って、始まりの街周辺の獣を狩る。
その肉を食べながら、毛皮や獣油を売ってちょこちょこ金を貯める。ギャンブルや釣り、植物採集なんかも収入源だ。
「んー」
だがまあ、デカく稼ぐにはやっぱり強盗だなー。
でも俺は、罪のない人を苦しめたくはない。
よし。
「義賊ムーブだな」

３６９話　バンディット・ザ・ガンマン　その２

「アカシィー、Ｍｅもやりたいんだけど」
「あ、どうぞ。これつけてフルダイブと言ってください」
「Ｆｕｌｌｄｉｖｅ!!!」
×
×
×
『バンディット・ザ・ガンマン』
「おおー」
凄いわね、流石は工廠。
肌を撫でる風も、草花の匂いも、空の青さも、全部リアル。
「ヒヒーン」
「あら、貴方が私のお馬さん？」
馬をよく見ると、情報ウインドウが宙に出てくる。
『アンソニー　雄
ランク１
速度：３
スタミナ：３
体力：３
操作性　普通
乗用馬』
ふーん？
まあ、最初の馬ならこのくらいかしら？
ステータスの最大値は１０みたいね。軍用馬なら体力が多く、競走馬なら速度が多く、荷馬車用馬ならスタミナが多い、と注釈が出たわ。
腰のリボルバーを抜いて、手に取って見る。
コルトＳＡＡ、ピースメーカーね。
「んー、でも拳銃一丁じゃ格好つかないわね」
お金を貯めてライフルでも買おうかしら。
「手を上げろ！有り金全部置いて」
「死ね」

「ア」
早撃ち。
《悪名が５上がりました》
「はあ？何でよ、正当防衛でしょ？」
あ、そうだ、この男の持ち物を奪おう。捨てておいても腐るだけだしね。物資は有効活用しなきゃ。
《悪名が５上がりました》
「だから何でよ?!」

どうやら、人を殺したり、物を奪ったりすると悪名が上がるみたいね。
街で暴れると、指名手配されるみたい。
それは面倒ね……。
でも、大きく稼いで逃げればそれで良いんじゃないかしら？
顔を隠すマスクをして、ウィンチェスターＭ１８７３を購入。
さて、やりますか。

「銀行強盗よ！全員、手を組んで頭の後ろに！そして膝をつきなさい!!!」
一人じゃ効率が悪いわね。
でも、艦娘の怪力はここでも使えるわ。
「はあっ！」
金庫をこじ開ける。
中身は……、合計三千ドル！
儲かったわ！
《悪名が５０上がりました》
さあ、逃げましょう。
銃は撃ってないし、まだ法執行官にバレてないわ。
「お前、強盗だな?!」
「あら、御機嫌よう保安官さん。そしてさよならよ」
「アグ」

保安官の脳天にＳＡＡを撃ち込んで、馬に乗って逃げる。
《悪名が５上がりました》
うーん、中々に楽しいわね。
現実じゃ強盗なんてできないもの。
まあ、可能かどうかで言えば可能だけど、そんなことをしたらＡｄｍｉｒａｌに本気で怒られるだろうし。
お金に困っている訳でもないし。
さて、このお金で装備を整えた後は……、余ったものは孤児院に寄付しましょうか。
《名声が３０上がりました》

どうやら、ストーリーらしきものも薄っすらとはあるみたいね。
でも、どこかに所属しないと、大きく話は動かないみたい。
Ｍｅは今、一人のガンマンでしかないもの。
特に大きな話はないわ。
１日目はこんなものかしら。

それから、一週間のベータ版テストプレイ期間が終了して、本格リリース。
取り敢えず、抽選形式で売りに出して、プレイヤーは五万人程度とのこと。
転売禁止で、ゲーム機一つに十万円以上なのに、一瞬で売り切れたそうよ。
アカシ達は小遣い稼ぎになったって喜んでたわね。
そうやって、西部開拓時代のアメリカを体験しながら、他の艦娘とも合流して……。
「ギャング団、スクーナーズ、結成！」
その辺りで暴れ回った。
そんなある日、ストーリーにアドバイスをしていたサラが言った。
「この辺りに、タンストールという牧場主がいるの」
タンストール……、タンストール？

どこかで聞いたことがあるような？
「ふふ、まあ、行ってみれば分かるわ」

異様に広い牧場には、一人の若いカウボーイと、何故か提督が。
「お、アイオワじゃん」
「Ａｄｍｉｒａｌ……、何をしてるの？」
「カウボーイのバイト。こっちは同僚のビリー君」
「ビリー……？まさか」
ビリー・ザ・キッド?!!
《大規模イベント開催告知》
《ニューメキシコ州リンカンの町にて、タンストール一派対ローゼンタール一派の大規模戦闘》
そう、そういう事ね。
近場にいたプレイヤー達は続々と集まり、それぞれがタンストール側、ローゼンタール側についた。
殺害数がポイントとなり、ＮＰＣよりもプレイヤーを殺した方が得点が高い。
アメリカの歴史に詳しいプレイヤーは、喜んでタンストール側についたけど、どうやらローゼンタール側にはＮＰＣが大量に味方するらしい。
構図としては変則的なＰｖＥとベイが言っている。

さて、そして三日後。
「ちょっと！西部開拓時代にこんなに人いないでしょ?!!」
「まあ、その辺はゲームですから」
数万人のローゼンタール一派と戦うことに。
「……まあ、そうね。的が少ないとつまらない、わよね」
《勝利条件：ローゼンタール一派の撃退》
《敗北条件：タンストールの死亡》
じゃあ、行きましょうか。
他のプレイヤー、艦娘ギャング団と協力して銃撃戦を始める。

幸いにも、タンストールや商人のプレイヤー達が弾薬や医療品、食料に銃器などの物資を用意してくれていた。
弾は問題ない。
「撃てー！弾幕を張るのよー！」
全体の指揮を執りつつ、防衛ラインを張る。
タンストールの館を最終防衛ラインとして、その前に百メートル程の感覚で防衛ラインを。
にしても、一般人は駄目ね、ろくに銃も撃てないんだから。
「ぐあっ！」
「馬鹿っ！塹壕から身体を出さないの！」
「で、でも、しっかり狙わないと……」
「狙わなくても良いの、弾幕を張ることが大事なのよ」
「じゃあ、あ、あんたは何で塹壕の外に？」
「私は艦娘、鉄砲の弾くらいじゃ早々死なないわ」
「え？艦娘には優遇処置があるんですか？」
「違うわよ、このゲームは素の身体能力が反映されるの。つまり、素で撃たれても死なないＭｅは、ゲームの世界でも死なないのよ」
「反則では？」
「悔しかったら貴方も銃弾くらい避けれるようになりなさい」
っと、前線ではＡｄｍｉｒａｌがビリーと大暴れしてるわ。
「ビリー！」
「ああ！」
抜群のコンビネーション……、というより、Ａｄｍｉｒａｌが誰にでも合わせられるってだけよね。
Ａｄｍｉｒａｌは全身に小さな投げナイフと、沢山の矢を抱えて戦っている。
一度に四本の矢を掴むと、大きな弓を一瞬で引いて、矢を連射。
一度に四人は倒す。
ビリーも負けてないわね。
かなり強い設定らしく、二丁のライトニング４１を、艦娘のＭｅですら視認するのがやっとな程の素早さで早撃ちし、まさに目にも留ま

らぬ速さでローゼンタール側の雇われ共を撃ち抜いていった。
それに……。
「ッ！」
あれは面白いわね。
目にも留まらぬ早撃ちで、自分の銃で相手の銃弾を相殺するように弾いているわ。
左を相殺射撃に、右を攻撃に使っているみたいね。
身体能力自体は艦娘に及ばないみたいだけれども、反射神経や先読みなんかは勝るとも劣らないってところかしら。
文句なしの超人ね。

3時間程防衛したところで、アナウンスが流れた。
《ローゼンタール第一陣、撤退》
ああ、そう。
次があるのね……。

３７０話　バンディット・ザ・ガンマン　その３

「ねえ、サラ？貴女、このゲームのストーリーを書くのを手伝ったのよね？これ、ビリーが勝ったらどうなるの？」
「あら、アイオワ、そんな無粋なことを聞くの？先を知ったらつまらないでしょう？」
「それもそうね。いやー、最近は深海棲艦も大人しくなって暇だし、暑いし、家でゲームする方が良いわねー」
そう言ってアイオワはゲームを始めた。
さて、私もやりましょうか。
×
×
×
×
ゲーム的な話だと、ビリー・ザ・キッドはタンストールの牧場でカウボーイとして働く少年としてスタートする。
そして、一番最初の大規模イベントとして、タンストール一派対ローゼンタール一派の戦いがある。
このイベントは史実の通り、周囲の町をお金で支配するローゼンタールという資産家に、タンストールが逆らったが故に、ローゼンタールが攻め込んできた、という内容。
史実では、タンストール側が多勢に無勢で敗れ、ビリーも敗走するけど……。
「第二陣！来るわよー！全員、撃ちまくりなさい！」
このバンディット・ザ・ガンマンの世界では違うかもしれないわね。

アイオワが陣頭指揮を執りながら、ライフルをぶっ放して叫ぶ。
「ｋｉｌｌ　ｔｈｅｍ　ａｌｌ!!!」
アイオワも割と殺し合いとか好きよね。
「そこぉ！頭出すんじゃないの！塹壕に隠れなさい！」
指示しながら、飛来するライフル弾を弾く。
「サラ、一応、館の方を見てきて。前線はここだけど、裏側から攻めて暗殺してくるかもしれないから」

「ええ」
館の方には……、確か、ベイがいたわね。
「いやあ、それでビリー君と旅人君は仲が良くってね」
「そうなんですか～」
……。
ベイがタンストールとコーヒーを飲みながら歓談しているわね。
「あ、サラ。お疲れ」
「お疲れ、じゃないわよ。何くつろいでるのよ」
「えっ、そ、それはほら、私、喧嘩とか得意じゃないし、商人だし、MMOでは基本的にヒーラーか生産職やるし」
「まあ、それは良いけど……、敵は来なかった？」
「来てないし……、来たらわかる、と思う……、けどミョウコウ型レベルのが来たらお手上げかな」
まあ、それはそうでしょう、あれはプロの暗殺者よ。
「じゃあ、ここの警備は任せるわよ。引き続きよろしくね」
「はい！」
まあ、ベイは大丈夫ね。
パニックになりやすい欠点があるけど、指示には従えるし、頭の回転も悪くないもの。
それじゃあ、この辺りをぐるっと見回りして、前線に戻りましょうか。
「クソが、見つかった！」
「落ち着け、相手は女一人だ」
「殺しちまえ」
あら。
暗殺チーム、いたわね。
「死ぬのは貴方達よ」
背中のポンプアクション式ショットガンを抜く。
「てめえっ！」

銃を抜いた男達に、姿勢を低くしたまま突撃。
一人を膝蹴りで頭蓋骨を叩き割って、同時にショットガンでもう一人の頭を吹き飛ばす。
「あ、あ……？」
呆然としている最後の一人をショットガンで撃ち抜く。
「がっ」
ふう。
「アイオワに連絡しなくちゃ。暗殺部隊が少しいるってね」

アイオワに伝えたところ、裏側にイントレピッド率いる対暗殺部隊チームが巡回することに。
イントレピッドは頭が良くて抜け目がないわ。任せて大丈夫ね。
私はアイオワの補佐をしながら動き回る。
提督とビリーは戦場のど真ん中で大暴れしている。
「旅人君、弾切れだ！」
「そうか、一旦退くぞ！」
あ、戻ってきたわね。
「ただいま」
「お帰りなさい」
「ナイフと矢は？」
「こっちよ」
「弾薬と……、食べ物と飲み物あるかい？」
「奥よ、ついてきて」
防衛ラインの奥へ案内して、補給させる。
このゲームには、渇きや空腹度のようなパラメータも存在するから、食事も必須だ。
提督とビリーは、作り置きされたシチューを食べて、ロールパンを齧り、コーヒーを飲んだ。
「よし！」
そして、提督は新しい弓と矢、そしてナイフと火炎瓶を持っていき、ビリーは弾薬の詰まったベルトを巻いて、また戦場へ戻っていった。

ゲーム時間で３０分ほどしか休憩していないみたいだけど……。
あ、因みに、このゲームでは２４時間で四日くらい経つみたい。
ゲーム内時間と現実の時間のギャップは、工廠の謎技術で上手くまとまってるわ。
凄いわよね、向こうで半日過ごした筈なのに、現実世界では３時間しか経ってないんだもの。
それと、食事の味の再現もかなりのハイレベルだわ。
味覚が鋭い人は、少し違和感を感じるかもしれないけれど、普通の人間ならまず気付かないくらいに、違和感がないの。
まあ、あまり美味しくはないんだけど……、それは、当時の料理の味を忠実に再現しているからなの。
単に鉄砲を撃つだけのゲームじゃなくて、当時のアメリカの文化を様々な視点から体験できる素晴らしいシミュレータね。
やっぱり、当時のコーヒーとか、そんなに美味しくないのよねえ。
それと、コンピュータキャラの受け答えも凄いのよ。
凄まじいＡＩの出来で、本物の人間と変わらないくらいの知能があるわ。
本当に、工廠の技術は凄いわね。

《ローゼンタール第二陣、撤退》
《次回、最終陣》
「次を乗り越えれば勝ちよ！次も遅れないように参戦して！」
「「「おおおおお!!!」」」
「ガ、ガンビア商会ですぅ、戦勝祝いにビールはいかがですか～？」
「くれ！」
「もらうわ！」
「一本くれ！」
「えへへぇ、儲かってますぅ」
ベイがビールを売り捌いて、取り敢えずの戦勝を祝う。
このビール、って言うよりアルコールも凄いわよね。味もさることながら、飲むとちゃんと酔えるのよ。

でも、ゲームをやめて現実に戻ると、酔いはなかったことになるの。
どういう仕組みなのかしら……？
まあ、良いわ。
決戦は現実の時間で明日の夜。
頑張りましょうね。

３７１話　バンディット・ザ・ガンマン　その４

はい、旅人です。
最近は電子の世界でビリー・ザ・キッドと知り合った訳で。
今は、悪い資本家のローゼンタールと戦っています、と。
「ビリー、行くぞ！ローゼンタールを倒すんだ！」
「ああ！」

実は、ローゼンタール側に参戦しているプレイヤーも多い。
ローゼンタール側だと、貰える賃金がかなり多いのだ。
それとは別に、キル数や貢献度を数値化して、ある一定の数値を超えたら特定の報酬が出る、みたいな感じ。
参加賞は百ドルとレア衣装の「タンストール印の外套」が貰える。
上位五千名はレアアイテム、「タンストール牧場特製プレミアムチーズ」が。これは食べるとプレイヤーの体力が少し上昇する。買うとかなり高い。
上位千名はレア馬具、「タンストール牧場特製鐙」……、馬の操作性が一段階アップする鐙だ。
上位百名にはレアアイテム、「１００ポンドサイドバッグ」が。これは、見た目は小さなサイドバッグだが、１００ポンドまでなら何でも入るという、所謂アイテムボックスだ。
そして、上位十名には、レア武器、「ライトニング４１ビリーカスタム」と言う、ビリーと同じリボルバーが二挺。このリボルバーは何故か反動は並以下なのにライフル弾ほどの射程と威力、とんでもない精度がある。
ローゼンタール側ではまた別の報酬があるらしい。

さて、それで、だ。
最終陣が攻め込んできた訳だが。このままじゃ楽勝過ぎて張り合いがない、などと思っていたところ。
ローゼンタール側に、あいつがいる。

「ハインツ・『ザ・ナイトメア』・クーベルト……!!」
艦娘がプレイヤーとして存在するとなると、この西部開拓時代のゲームは艦娘達にとってはヌルゲーとなってしまう。それを危惧した開発部は、艦娘にも負けないくらいの強キャラを創り出し、放流したのだ!!
その中でも、ハインツ・クーベルトは、金さえ払えば誰にでも味方する賞金稼ぎで、百人規模の軍隊を五分で殲滅した最強のガンマンの一人という無茶苦茶な設定になっている。
月のない夜でも、ライフル以上の馬鹿みたいな威力を持つ特製のリボルバーで、眉間を寸分の狂いもなくぶち抜いてくる最強キャラの一人。
それを、ローゼンタール側が雇ったのか……!
「ビリー!計画変更!打って出るのは危険だ!防衛ラインに戻るぞ!」
「え?あ、ああ!」
「俺はあいつを食い止める!サラに『悪夢が来た』と伝えてくれ!」
「分かった!死ぬなよ!」
さあて、本気出すか……!!

「きよしこのよる……ほしはひかり……」
戦場の最中、長身痩躯を揺らしながら、ゆっくりと近付いてくる。
黒い髪を腰まで伸ばした、幽鬼の様な男だ。
擦り切れた黒の外套と黒の服。
「すくいの……みこは……まぶねのなかに……」
二丁の長い銃身のリボルバーを抜いて、佇む。
その姿は、聖者であり、悪魔であった。
「……ねむりたもう……いとやすく……!!!」
瞬間、姿が掻き消える。
速いッ!!!
二発の弾丸、右から……!
避けてナイフを投げ返す。

「ふ、は」
避けやがった！
近付いて……、蹴りか！
左中段、右下段、右蹴り上げ、踵落とし！
最後の踵落としを掴んで投げ……、くっ、手首を撃たれた！離して、蹴り返す！
「あ、はは」
俺の蹴りを片手で受けるか!!
「死ねっ！」
即座に殴る。
「あー」
ちょっとは効いたか？
「お前は、面倒だ」
「は？」
あっ、逃げ……、いや違う！本陣に向かったのか！追わねば！

「くっ……?!何よこいつ?!」
アイオワが手古摺っている。
「死ね」
「ぐうっ?!!やったわね!!!」
「！」
流石にヘッドショット決めても死なない艦娘には驚いたらしく、一瞬の隙ができる。その瞬間アイオワに殴られるが……、その衝撃を後ろに跳んで軽減したな。
時速何百キロ、数トン単位の威力を持つ拳を涼しい顔で回避するハインツ。
「アイオワ！代われ！」
「ええ！」
「チッ」
「なーに舌打ちしてんだ！お前みてえな奴をうちのアイオワと踊らせられるかよ！さあ、俺と楽しいダンスをしようぜ!!!」

ハインツの下段回し蹴り。あまりのスピードに大気が震える。
俺は跳んで回避、同時に上段回し蹴りを返す。
ガードされ、二発撃ち込まれる。
ああクソ、強いなこいつ。
弾丸を腕の骨に当てて逸らして、ナイフを投げる。気もオーラも魔力も使えないんだ、素の防御力でどうにかするしかない。
ライフル弾を超えるリボルバー、『ディアボロス・メガリス』……、奴の拳銃。
あれは、反動はデリンジャー並で、威力はライフル弾の三倍、精度は最高、射程もライフル並、ダブルアクション。
何故か六発装填しただけで六十発撃てる化け物銃。ふざけんなバーカ!!
まあ設定したのは俺達開発チームなんだけどね!!
因みに装備も、今はいないけど馬もチートだ。
例えばあの真っ黒な外套は『デビルコート』と言い、並のリボルバー程度では傷がつかない上に、静止時には防御力が三倍になるぶっ壊れ性能だ。
正直、装備が揃っていないこんな初期のイベントで出会いたい奴ではない。
しかし、勝利条件は時間経過だ。
俺は逃げるのと生き残るのは自慢じゃないが大得意よ。
見とけ俺の生き様。
「しゃああ!!」
ジャブ、フック、ストレート。
「チッ!」
ストレートを受けたハインツ。
「うりゃあ!!サラぁ、手伝ってくれ!!」
「ええ!」
俺とサラでハインツを止める。
「全員、第二防衛ラインまで撤退!」
アイオワが全体の指揮を執り、撤退させる。

「ビリーは第二防衛ライン前で敵をひきつけてくれ!!」
「ああ!」
良し、後は。
「死ねぇ!!!」
「こいつをここで抑える!!!」

ゲーム時間で四時間後。六時を伝える鐘が鳴る。
「……契約の時間だ」
そう言い残すと、ハインツは撤退していった。
「お、終わったぁ……」
《ローゼンタール最終陣、撤退》
《タンストール一派の勝利です》
《貢献度情報及びランキング、報酬はタンストールの館の前で受け取れます》
「戦勝祝いにビールはいかがですかぁ〜」
ガンビア・ベイの商会の商人達の声が響き、やっと終わったと自覚する。
「んひぃ、ちゅかれた」
「本当に疲れたわ……」
何だあれ、ぶっ壊れじゃねーか。
でもあんなチートキャラを数十体は放流してるんだよなあ。
「いやー、今回は死ぬかと思ったよ、ありがとう」
ビリー君が労ってくる。
「もー、今日は飲んで寝よう」
「ああ」
このあと滅茶苦茶飲酒した。

あ、因みに、このゲームは異例のレーティング二十歳だよ。

……その後の話をしよう。
ローゼンタールは今回の失敗で資産の殆どを失い、街に居場所がな

くなり、夜逃げした。
ビリー・ザ・キッドはこの街で陽気なカウボーイを続けるそうだ。
因みに貢献度ランキング上位層は艦娘が総ナメした。すまん一般プレイヤー。
アイオワ率いるスクーナーズギャングは北へ向かい、ガンビア商会もスクーナーズと行動を共にする。
そして俺は……。
「本当に行くのかい、旅人君」
「そうだな、俺は旅人だからな」
「……そうかい。でも、タンストールもいつでも戻ってきていいと言っているよ。だから……」
「ああ、また会おう、友よ」
「……ああ！」
俺は、旅に出た。

アイオワが北に行くなら、俺も北に行こうか。
その方が面白そうだ。

３７２話　偽善作戦　前編

「あー……」
よし。
「たまには良い事するッかァ～……」

俺は会議室に皆んなを集めた。
なんだかんだ言って皆んな極限まで暇してるから、定期的に何かしらのイベントを起こさなきゃならない。
「えー、良いことを、します」
「良いこと、とは？」「アバウトですね」「深海棲艦倒してるだけで良いことやってるみたいなところあるでしょ」
と艦娘達。
「溢れる資金の力！キュアマネー！ってな感じで、お金が有り余ってるじゃん？ここらでガーッと良いことやって、点数稼いどこうかなーって」
「点数とは？」
大淀に言われる。
「いやほら……、世間の目とかさ、あるじゃん」
黒井鎮守府に対する世界からの評価を見せるために、ＳＮＳや掲示板などのコメントをピックアップしてきた。
以下に示そう。
『１：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
前スレ：【遊んでる説】黒井鎮守府総合スレ５４７
ここは、Ｋ県○○市の黒井鎮守府について語るスレです
他の鎮守府の話題や海軍の話については他スレで
２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
たておつ。
３：名無しさん

ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
で、結局こいつら働いてんの？
４：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
この提督の男、世界各国での目撃情報がありまくりなんだが？
分身でもしてんのかよ
５：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
俺の同僚にタイ人いるんだけど、そいつの実家付近で提督を見たとか言ってる
６：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
ＸＸＸＸＸＸ．ＭＰ４
これ見ろｗｗｗ
俺のやってるオンゲのフレのメキシコ人から送られてきたｗｗｗ
７：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞６
おいこの白髪何やってんだ
８：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
翻訳すると、
「テメエらベティちゃんにヤク売りやがったな！ベティちゃんはまだ１５なんだぞ！」
「ふざけやがって、お前んとこの麻薬工場更地にしてやっからな！」
「事務所の金も全部燃やしてやる！」
とか言ってるな
９：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
この後、郊外の廃工場……、に見せかけた麻薬工場が実際に吹き飛んだらしい

１０：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
あ、こいつ昔仕事でラスベガス行った時見たわ
カジノで荒稼ぎして、マフィアっぽい連中相手に大立ち回りしてたな
いや凄えんだよ、なんか凄え武術？っぽいの使って、武器持ったマフィアをどんどんぶっ飛ばしていくんだよな
１１：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
こいつロンドンでも見たぞ
街のど真ん中でラーメンの屋台開いてた
好奇心で食いに行ったけど、価格は良心的で味も限りなく美味かった
美人が来ると半額とかタダにしてた
１２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
オーストラリアの知り合いがこいつ見たって
弓一本でカンガルーを狩ってきてそれを捌いてハンバーガーにして売ってたらしい
１３：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
ロシアに出張してた時に見たぞこいつ
ホームレスのおっさん達と酒盛りしてた
１４：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
日本の法廷に立ってたこともあるっぽい
１５：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
こいつの名前、新台真央だろ？
一時期、アメリカのマーベラスコミックスでマンガを連載してたぞ
１６：名無しさん

ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
フランスでバイオリンの教師やってたこともあるっぽい
１７：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
オランダで風俗巡りしてた
１８：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
韓国でマグロ解体ショーやってた
１９：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
私はエジプトに観光しに行った時にこの人に助けてもらった！
海外の旅行会社とかって、詐欺多いのよ
そこで、「君、騙されてるから逃げよう。こっちの方がいいよ」って助けてくれた
２０：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
私はバックパッカーなんですけど、インドで詐欺に遭って、有り金全部取られちゃったんですよね
そうして、途方に暮れていた時、この人が話しかけてきて、助けてくださいって頼んだら、百万円くらいポンと渡してくれて、空港まで送ってくれたんです！
新台さんには本当に感謝しています！
……
……
……
２５６：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
何もんだよこいつ!!!?
２５７：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
何この、何？

２５８：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
で、今は提督か？
多芸過ぎない？
２５９：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
そんなに旅してて働いてんのか？金はどこから？
２６０：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
でも最近、日本近海では殆ど深海棲艦出ねえよな
２６１：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
政府ってか軍部は隠したがってるみたいだけど、黒井鎮守府は大活躍してるらしい
２６２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
うちの親父、Ｋ県の漁師なんだけど、海の上でたまに艦娘に会うらしい
艦娘は普通の女の子にしか見えないんだってよ
２６３：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
Ｋ県のローソンで艦娘が働いてんの見たぞ
死ぬほど美人でビビった
２６４：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
俺の中学の頃の同級生が土方やってんだけど、同僚に艦娘の女がいるんだってよ
艦娘の女は重機並のパワーがあるから、ガソリン代の節約になるって喜んでる
２６５：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○

俺、釣りが趣味なんだけど、艦娘の天龍って名乗る女と会ったことある
すげー美人でおっぱいでかいんだけど、めっちゃ釣りが上手くて、竿も高級品だった
２６６：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞２６５
やっぱ遊んでるじゃねーか!!!
２６７：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
でも普段から働いてるみたいだし休暇ぐらい別に良いだろ
２６８：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
艦娘は人間じゃないんだから毎日働かせろ！
国の為に滅私奉公しろ!!!
２６９：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞２６８
お前みたいなのがいるからブラック企業はなくならないんだよ
頼むから死んでくれ
……
……
……
５２０：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
まとめ
・提督は謎の男
・提督は多芸
・提督は元旅人
・艦娘は歩合制、しかも高給取り
・艦娘は社会勉強の為にアルバイトしている場合がある

・艦娘は美人揃い
・鎮守府の看板には『悪の組織黒井鎮守府』
・鎮守府から機動兵器が飛び立つ
・鎮守府に入ろうとすると警備ロボに捕まる
５２１：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
謎過ぎる……
５２２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
この前は黒井鎮守府名義でコミケ出てたぞ
５２３：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
こいつら本当に大丈夫？
遊んでない？
５２４：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
でも、黒井鎮守府にこの旅人が着任してからの数年で、日本海はほぼ解放、地中海やインド洋、太平洋の半分近くを解放して、一部では海上貿易が再開され始めたらしい
世界で一番の規模だし、世界で一番成果をあげている
５２５：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
艦娘の戦闘映像を見た限りじゃ、アメリカのアベンジャーズ並だからな
５２６：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
でも公式ツイッターとか、艦娘のツイッターとか見た限りでは、毎日結構暇らしい
５２７：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
暇なら働け！労働こそ美徳！

５２８：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞５２７
じゃあお前は休暇潰してまで会社行くのかよ
つまんねー人生だな

５２９：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
ツイッターは本当に小学校並の行事と大学生並の飲み会のパリピ祭りって感じだからなあ、そりゃ誤解するわ』
「……と、まあ、こんな感じだ」
「そのオランダで風俗巡りをしていたことについてお話が」
「それは良いとして、次はＳＮＳを見ていこう」
俺のツイッターだ。
まあ、こんな感じかな？

３７３話　偽善作戦　中編

それで、ＳＮＳはこんな感じ。

『旅人@提督稼業
プロフィール：世界を股にかける旅人の新台真央だよ
多趣味なんで何の話でも大体わかります
多国語対応、英語ツイートの後日本語でツイートします
フォロー７８５６
フォロワー５６８１９９３８
ＴＬ
５：００
旅人：おはようございます！
今朝も大淀が起こしに来てくれた！
いや、起きてるけど
でも毎朝美人の顔が見れるのは幸せだなあ
リツイート：５８４７　いいね：４１１２
＞１６８：提督おはよー
＞もっちー：おは
＞旅人：あれ？望月早起きじゃね？
＞もっちー：徹夜でーす
＞旅人：やめようね！
６：００
ジョギング５０ｋｍ終了！
健康とか気にしてないけど、一応軍隊だからね
多少は身体を動かさないと
艦娘の皆んなと走ってきたよ
ルートは日によって違うんだけど、今日は川内型と同じルートで走ってきた！
リツイート：８０７０　いいね：７８０７
＞○○：一時間で５０ｋｍ？
＞旅人：いえいえ、ほんの３０分くらいですよ

＞○○：嘘つけ、人間がそんなに早く走れるかよ
＞旅人：ちょっと鍛えれば簡単ですよ
７：００
黒井鎮守府朝ご飯完成！
本日のメニュー！
［メニューと料理の画像］
リツイート：１２．５万　いいね：１４．３万
＞????：美味しそうですね！
＞☆☆：国民の血税で良いもん食ってんのな
＞♪♪：高級ホテル並か
８：００
今日も仕事を艦娘に取られちゃいました
暇だからエスコンやろう……
リツイート：８０９７　いいね：５６４１
＞☆☆：遊んでんじゃねえよクズ！
＞▪▪：エスコン買いました？新作？
＞旅人：はい
＞▪▪：面白いですよ！
９：１６
いやエスコンはホンマに名作
リツイート：１．２万　いいね：１．５万
＞▪▪：わかる
＞＄＄：新台さん元パイロットですよね
＞旅人：はい、昔ちょっとだけ
１２：００
黒井鎮守府昼ごはーん
皆んな美味しいって言ってくれて嬉しいゾ
［メニューと料理の画像］
リツイート：８．４万　いいね：９．８万
＞????：中華メインですか！いつも献立の参考にさせてもらっています！よろしければ作り方とか教えてもらえませんか？

>旅人：今度料理動画をつべに上げます
>????：ありがとうございます！
>€€：美味そうやんけ
１：０５
午後も仕事なし
暇潰しに浴衣を作る
リツイート：４７０８　いいね：３２１６
>€€：働いて、どうぞ
>％％：あー、良いっすね～
１：０８
浴衣完成
近くにいた五十鈴に着せる
可愛いんだよなあ
[浴衣を着た五十鈴の画像]
リツイート：１５．５万　いいね：１７．７万
>€€：あああああああ!!!（感涙）
>％％：女神
>＃＃：おっぱい
>旅人：このおっぱい俺のものなんすよ
>＃＃：頼むぅ、死んでくれぇ、お願いぃ!!!
２：３４
地元農家さんから夏野菜をいただきました！
今晩のおかずゲーット！
[みずみずしい夏野菜の画像]
リツイート：２．３万　いいね：３．９万
>＊＊：野菜かぁ、俺も都会に出てから生野菜とか全然食ってねえわ
>＋＋：おー、良い野菜だ
>????：美味しそうですね！
２：５６
ウォースパイトとちょっと休憩

紅茶とケーキで一休み
[紅茶とケーキの画像]
リツイート：９８７３　いいね：１．１万
＞€€：紅茶はいいから艦娘写して
＞旅人：はい
[微笑むウォースパイトの画像]
＞€€：んひぃぃぃぃぃ!!!（勃起）
３：４６
天龍と釣り！
晩飯ゲット！
[旬の魚の画像]
リツイート：３．９万　いいね：４．４万
＞××：釣り良いですね！旬の魚が美味しそうです！
＞÷÷：最早漁では？
４：４１
秋雲が夏コミの原稿まだ終わってないから手伝って欲しいと泣きついてきた
今年はゾンサガのエロ同人らしい
詳しくは秋雲のアカウントで
[秋雲のアカウントへのリンク]
リツイート：５４１７　いいね：６８９５
＞＝＝：オータムクラウド先生ェ
＞↓↓：新台さんはもう漫画を描かないんですか？
＞旅人：んー、今のところは書く予定ないですね
５：２２
榛名にワイシャツを奪われた
リツイート：１．３万　いいね：１．６万
＞€€：こわい
＞〒〒：何でシャツが奪われるんですか？
＞旅人：何ででしょうかね……？
６：００

黒井鎮守府晩ご飯！
旬の魚は美味しいからねー
[メニューと料理の画像]
リツイート：１６．７万　いいね：１７．８万
>????：洋食メインですね！
>〒〒：今日も美味そう
>々々：おー
７：３８
風呂入ってきた
黒井鎮守府は混浴で、俺が風呂入るタイミングに皆んなが入るから賑やか
頼んでもいないのにビスマルクが背中を流してくれた
リツイート：８８８０　いいね：９９０２
>€€：んもおおおお!!!んもおおおおお!!!リア充!!!
>旅人：非リア充冷えてるかー？
>€€：くたばれーーー!!!!!
８：５６
今日は花火をやった
夏だし
駆逐艦の子達が喜んでくれて良かった
[花火を楽しむ駆逐艦達の画像]
リツイート：１．７万　いいね：１．９万
>％％：ロリロリ
>旅人：俺の娘みたいなもんだから。誰にもやらない
>€€：ロリ下さい
>旅人：やらねーよ
９：３０
晩酌するでしょ
居酒屋鳳翔にてビール！
おつまみに冷やしておいた夏野菜と昼間釣った魚の刺身！
[ビールとおつまみの画像]

リツイート：１１．８万　いいね：１２．５万
＞〒〒：冷やした夏野菜とか最強では？
＞々々：残業中の俺にそんなものを見せるな！
＞旅人：仕事に集中して、どうぞ
１１：００
晩酌終了
後片付けを手伝う
リツイート：２４８０　いいね：２５７１
＞〆〆：後片付け手伝ってくれるとか素敵ですね、うちの旦那なんて片付けておけってそのまま寝ちゃうのに
＞旅人：まあ、嫁みたいなもんですからね。大切にしないと
１１：３０
何でアイオワが俺のベッドで寝てるんだろう
まあいいや、おやすみ
リツイート：２４７０　いいね：２８９３
＞〒〒：おやすみ
＞€€：え？ベッドの上の女の子どうするんです？
＞旅人：普通に隣で寝るけど
＞€€：しね』

「……とまあ、こんな感じになってるよ」
「はい」
鳳翔が手を挙げる。
「はい鳳翔」
「その、ねっと？には、随分と不躾な方がいらっしゃるんですね。始末しなくてもよろしいのですか？」
「ネットってそういうもんだからなあ」
別にネットで煽られても……。
「あー、つまり、世間からどう思われているのか大体わかったかな？」
「？」
あのね。

「遊んでいると思われてんだよ、俺らは」
「実際、あの頃の大戦と比べれば遊んでいるようなものですし」「そうよねえ」「事実では？」
んー。
「いやほら……、外聞がね、悪いからね！せめてちょっと良いことやって、働いてますアピールをね!!」
「何故ですか？」
「いやほら、外聞が」
「……提督はそんなものを気にしない人だと思っていましたが」
うん、はい。
よし。
「分かった、正直に話そう。俺の恩師がね、黒井鎮守府の評判を聞いて、本当にちゃんと働いているのか聞いてきたんだよ」
「ああ、成る程。恩師に叱られたくない、という話ですね」
「うん、そうですね、はい。怒られたくないんですよ！」
もう教授達を誤魔化すのも桃さんを言いくるめるのも限界なんだよね!!!
「だから、ここらでなんか良いことやって、黒井鎮守府が社会の役に立っていますよとアピールをしなきゃならないんだよ！頼むよ！手伝って！」
「はい、構いませんよ」
「やったー！」
さあ、と言う訳で!!!
「良いことをやります！」
「「「はい！」」」
偽善作戦！始まります！パンツァーフォー!!!

３７４話　偽善作戦　後編

「で、良いこととは、具体的に何をやるのだ？」
　と長門。
「んー、そうだねえ、例えばほら、虐待児童を助けるとか、いじめをやめさせるとか……」
「都合よく見つかるものなのか、それは」
「はいはい！そう来ると思って、この明石がこんなものを用意しました！名付けて、『悪意発見機』です！」
　明石が言うに、このアプリをダウンロードすると、悪意を持った人間を強調表示することができるらしい。
「あ、因みに、提督のお知り合いの方は表示されませんからね」
　さて、じゃあやるか！

　俺は東奔西走！駆け巡り！
　日本全国の悪人を退治して回った！
「おっ、カツアゲかあ、良くないなあ」
「ああん？なんだおっさん？」
「ほら」
「がっ?!!て、てめえ!!」
「二度とカツアゲが出来ない体にしてやろうか？」
「やってみろよ！」
「えーと、確か、ここだ。醒鋭孔」
「いてっ、な、何が？」
「お前は痛風なんて目じゃないくらいに痛みに敏感になったんだよ。人を殴ったら、殴った拳が痛くなるんだ」
「はあ？そんな訳あるかよ！おらっ……?!!!ぐあああああああああああ!!!」
「まあ、真面目に勉強して知的労働ができるようにならなきゃ生きていけないだろうね。心を入れ替えて真っ当に生きなよ」
　とか。

放置された子供を見つけて。
「あ、だ、誰、ですか？」
「その前にお水飲もうね、ゆっくり飲んで、そう、大丈夫」
「あ、りがと、ござい、ます……」
「倒れちゃったか……、病院に送ろう」
とか。

艦娘も同じく頑張った！
頑張った、んだが……。
「ちょーっとやばいレベルの苦情来てるんだけど」
どうして……、どうして……。

「えー、まず長門」
「ああ」
「何しでかしたの？」
「む、指示の通り、悪人を退治した」
資料をめくる。
「……えー、虐待児童の父親の腕をねじ切り、『もしまた子供に手を上げるなら、もう片方の腕もなくなると思え』と脅して去っていった」
「うむ」
「いやいやいや」
「駄目なのだろうか？」
そりゃ駄目でしょ。
「子供は国の宝だ。それをストレスのはけ口にして意味もなく手を上げるなど、あってはならないだろう」
「そうだけど……」
攻撃が過剰なんだけど?!
「それと、引ったくりの腕をへし折ったとか」
「うむ」
「……まあ、それくらいは良いよ」
苦情は来たけどね。

「それと強姦魔の……、その……、た、玉をつ、潰したとか」
「うむ。強姦をしようとするような卑劣漢にイチモツはいらんだろう」
ひぃ……。
「だってこれ、金的蹴りのあまりの威力に、玉だけじゃなく竿も破裂して尾てい骨も粉砕骨折って……」
「妥当だろう」
……まあ、良いよ。

「えー、次。阿賀野」
「はい！」
「頑張りましたか？」
「頑張ったよ！」
「うん！めっちゃ苦情来てる！」
「ええ?!が、頑張ったのに……」
はい、まずはこれ。
「いじめられっ子を助けてきたんだね」
「うん！悪い子がいっぱいいたから、コツン！ってしてきたの！」
そうかー、ははは。
「いじめっ子は全身複雑骨折で全治八ヶ月だとよ。やり過ぎだ!!」
「え、ええ？で、でも、ちょっと小突いたくらいなのに」
「人間の子供なら、艦娘がちょっと小突いたくらいで死ぬからな？」
「ううー、ごめんなさい」

「えー、次。高雄」
「はい？」
「やり過ぎ」
「え、そうですか？」
「君はもうさ……、ヤクザを斬り殺してきてさ……」
「ヤクザくらい、いくら死のうと関係ないかと思いまして」
怖いわ！

「事務所ごと更地にしたの？」
「ええ、魔法で」
　勘弁してくれよ。

「次、那智」
「何だ？」
「やりやがったね？」
「何をだ？」
「過激な発言をした野党の政治家が軒並み不審死……」
「ああ、上手くやっただろう？」
　上手い下手じゃないよね。
「政治家殺しはやべーって」
「だが、あのような政治家は日本に必要か？生かしておいてマイナスになるなら殺した方が得では？」
「んん、まあ……、多分死ねって思われてると思うけども」
「むしろどうやって政治家になったのだ？日本が嫌いな日本の政治家とは割とまずいと思うのだが」
「そりゃまあね、まあね、そうだけどね?!」
　だからって殺すのはね？
　ゲシュタポじゃないんだからさ、ほら、言論の自由がね？

「はい時雨」
「何かな？」
「やってくれたねえ」
「不満かい？」
「苦情はなかったよ、苦情はね」
「なら良いじゃないか」
「……最近、虐待児童の親、犯罪者、不法滞在者、ヤクザや中国マフィアの構成員が、謎の発狂死を遂げる事件が多発しているそうだ」
「ふふふ、それは怖いね」
「全員、見えない何かに恐怖して暴れ、ある者は喉を掻き毟り、ある者

は自ら頭をかち割り死んでいったそうだ」
「それで？」
「殺すなーっ！」
「いやあ、誤解だよ提督。僕はちょっと話し合いをしただけさ」
「君と話し合うと発狂死するのか？」
怖えよ。
「仕方がなかったのさ。僕はしっかりお願いしたんだけど、聞いてくれなかったからね」
「どんな感じに？」
「悪いことはやめよう、って」
「それでやめる訳ないでしょうが!!最初っから殺す気満々だったなコラ!!」
「ふふふ」
ふふふじゃねーよ全くもー！

「望月」
「はーい」
「手を抜いたな？」
「うっ、い、いや、頑張ったよ？」
嘘をつくんじゃない。
「配布した資金を全部孤児院に募金してきたろ」
「い、いや、ほら、お金ないみたいだし」
「一千万ポンと渡すか普通」
「うー、だって面倒だったんだもん！」
「まあ、良いよ。なんだかんだで受け取ってもらえたし」

「次、比叡」
「はい！」
「……割とまともだな」
「はい！」
不良の顎を叩き割ったくらいか。

「比叡は器用で手加減が上手いもんな」
「当たる瞬間に引くのがコツです！」
「偉いぞー」

「嵐！」
「おう！」
「んんん、偉いなあ君はー！ちゃんと穏便に済ませたんだもんなー！
トラブルシューターやらせたら一番だなー！」
「へへへ、て、照れるぜ！」

さて……。
悪人の一斉排除、各方面への募金。
偽善作戦は一定の成功を収めた。
『１０：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
また黒井鎮守府か
１１：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
やりやがった
１２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
やべーやつらじゃん
１３：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
もう遊んでてもらった方が平和だよな』
収めた、のか？
まあ、良いんじゃね？

３７５話　偽善作戦　蛇足編

「んー、やっぱりほら、良いことをやるってさ、小さなことから始めるべきじゃん？」
「え？前回で終わりでは？」
大淀のツッコミ。
いや、まあ。
蛇足編ってことよォ……。

「ヘェァイ！スペシャルアドバイザー嵐ィッ」
オゥイェ。
「おう！」
小さな正義の味方、嵐ちゃんを呼んでおいたぜ！
嵐はねー、前回の偽善作戦で最も活躍してくれたスーパーヒーローだからねー。
スペシャルアドバイザーとしてお呼びしましたよー。
「黒井鎮守府は、前回、一斉に良いことをやったところ、七割の批判と二割の賞賛と一割の困惑、ってな感じだったヨ」
「そうなのか？」
「ソーナンス」
「……俺、頑張ったんだけどな。駄目、だったか？」
しゅんとする嵐。
「いやいやいや、嵐は頑張ったよ、よく出来てたよ！偉いねェー!!」
撫でぇ。
「でもほら、良いことってのはほら、小さなことからコツコツとやるもんじゃないかな？まあ一般論でね？」
「確かに……。ちょっと募金したりとか、そう言う小さな善意の積み重ねが、世界をより良くしていくものだよな！」
はーーー。
嵐はほんっとに偉いなぁ!!
マジ天使。

「そうなんだよ、嵐は本当に人間ができているな、俺より真人間だ」
「そ、そんなことないって！もう……??」
と、言う訳だ。
それだけじゃないぞ。
「今日は守子ちゃんにも来てもらってるからな！」
あ、因みにこれも労働時間に含まれるやつだから。ちゃんと給料出すよ。受付の仕事抜けてきてもらったんだからね。
「あ、はい」
「守子ちゃん、前回、黒井鎮守府は皆で良いことしまくった訳だけど」
「えっ？」
えっ？とは？
「え？したじゃん、良いこと」
「え？その、テロと連続殺人、傷害って聞きましたけど」
「ウッソだろ??!!ちゃんと良いことしたって!!」
「あの、ちゃんとニュース見ましたか？テレビでは謎のテロとして処理されていましたよ……？」
「クソマスゴミめっ!!あいつら碌なことしねーな!!!」
相変わらず報道ってのは腐ってやがるな。
「あ、あの、でも、黒井鎮守府が大暴れしたのは事実ですし……」
「むむむ……（横山三国志並感）」
それを言われると弱いのである。
「ほ、ほら！募金とかはどうですか？ユニ〇フとか、恵まれない子供達に……」
「ははは、守子ちゃんは純粋で可愛いね！」
「え？」
「募金がそのまま現地の恵まれない子供達に届くと本気で思ってる？」
あんなもん中抜き横領その上で『恵まれない子供達』の親の懐に入って、子供の元へは殆ど届かないのよね。
実際、アフリカの田舎の方とか行ったけど、本当に世界中から募金されてる？って感じの地獄だったよ。

「で、でも……」
「二百兆円くらいだっけ？覚えてないけど……、まあ、守子ちゃんが子供の頃から、募金してくださーいって言われてるよね、恵まれない子供達がー、って」
「そ、そんなに……？」
「まあほら、俺は説教とかするのもされるのも嫌いだからあんまり長々とは語らないけどさ……、避妊もしないで人口を増やして、子供を使い潰すように働かせて、支援されたものは上の人間が総取りする……、そんな社会をどう救うのか？誰を、どこまで、どれだけ救うのか？その辺りをちゃんと考えないと、募金なんて自己満足にしかならないよ」
「……はい」
　いや、説教とかではないよ？
　でも、実際にアフリカの田舎の方とか行くと、平気で子供が使い潰されてるし、働くように教えても子供にやらせたり、盗みとかそういうのも横行してるし。
　長年旅してきたけど、救われるべき人間が救われないとか、その逆とか、色々あったよ。そもそも、救われるべき人間、と言うものを人間が決められるものなのかね？
「貧困って言っても、日本にもいるんだよ？ホームレスとか、その日暮らしもできないような人、いっぱいいるよ。日本人にもそんな人達がいるのに、アフリカの人を先に救わなきゃならないのかな」
「……そ、それは」
「まあその辺りは外交とか、外国に良い顔をする必要みたいなのもあるんだろうけどさ。守子ちゃんも見に行ってみる？孤児院とか、ドヤ街とか。割と地獄だよ」
「……すみません、軽率なことを言いました」
「あ、その、責めてないよ?!ご、ごめんね?!でもほら、ドヤ街とかも割と面白いとこあるからさ、今度連れてくよ！」
　いやあ、その日暮らしで生きてる人も中々面白いよ？
　驚異のクズ率がね！

まあ、俺も旅人でその日暮らし勢のクズだから。
社会に貢献しようって気がないのよねー。

さて。
「黒井鎮守府、ちょっと良いことしようぜキャンペーン!!!」
「またですか？」「構いませんけど」「提督が楽しんでるならそれで良いんじゃない？」
やりますかあ。
「良いか？劇的なことはやらなくて良い、ゴミ掃除とか、害虫駆除とか、小さなことからコツコツとやるんだ！では、解散！」
「「「はい！」」」

で。
『１１５：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
【悲報】黒井鎮守府、追い討ち
１１６：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
オイオイオイ
１１７：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
またお前らか』
非難轟々。
まただよ（笑）。
「はい反省会!!!今度は何をやった愛宕ォ!!!」
「私はー、川のゴミ拾いをしてきたわ」
うむ、それは偉い。
「で？この、全治七ヶ月のおっさんは何？どうして怪我人が？」
「ああ、そのおじさん、川にゴミを捨てたのよ。掃除してる横でゴミを捨てるものだから、イラっとしてつい、コツンと」
「コツンの威力じゃないよね？」

まあ良い、次だ。
「足柄！」
「はあい？表彰されちゃう？」
「残念ながら表彰はできないな……」
『野党政治家、不審死！』『親中派、親韓派議員、謎の失踪』『アブスターゴ日本支社、テロ組織により壊滅』……。
「俺は殺すなって言ったよね？言ったよね？ねえ？」
「ゴミ掃除よ？」
「はい？」
「（社会の）ゴミ掃除よ？」
あー、そうくるかぁ?!

次。
「睦月ちゃーん？」
「はーい？」
『○○組、壊滅！敵対組織との抗争か？』……。
「なーんでこんなに殺しちゃったのかなー？殺すなって言わなかったかなー？」
「んー、害虫駆除です！」
「え？」
「（社会の）害虫駆除です！」
んんんんんんん。
そう来たか？

「村雨ー？」
「なあに？」
『脱税議員、謎の発狂？』『ブラック企業社長、強度の精神障害？』『不良学生、精神崩壊？』
「確かに、殺しはしなかったね、うん」
「偉いでしょー？褒めて！」

「でもね、でもね、全員発狂してるんだわ！植物人間になってるんだわ!!!」
「？」
「殺さなきゃ何やっても良いとかじゃねーから!!!」

……さて。

「えー、諸君らのお陰で、黒井鎮守府の悪名がまた一つ増えました。反省するように！」
「「「？」」」
ええ……、分かってないの？
俺はこの数年間、彼女達に一体何を教えてきたんだろうか……。
虚無りました、完敗です！

３７６話　くずおとこ道草日記　前編

「ほのぼの、してぇなぁ……」
「はぁ」
「なんかこう……、田舎の……、田舎の方の、あったけぇ感じの……、こう……、心温まる感じの、あれで……、ほっこりして心がこう……、ほのぼの？する感じの……」
「はぁ」
「ねこむすめ道草日記みたいな……、動物とかのこの……、優しいやつが、その……、可愛い感じの……、ほのぼのしてぇなぁ……」
「成る程」
そう、最近の俺には「ほのぼの」が足りなかった。
確かに、アクティブな方だが、たまにはほのぼのしたい。
動物と戯れたり……、なんかこう……、陽に当たったり、お昼寝したりとか。
「なんかこう……、ほら、流行ってるでしょ、スローライフ。あれ俺もやりたい」
なろう的な……。
村をこう……、開拓？する感じの？美味しいもの食べて……、ペットとか飼ってさ？
「提督の御心のままに」
そう言って退がろうとする大淀。
「え？どうすんの？」
「取り敢えず、黒井鎮守府の活動資金の余剰分を利用して、日本の田舎町を会議で選定、そこ一帯全てを買い取ります」
え？
「その、そこに住んでいる人は？」
「札束でビンタして立ち退かせますよ」
「酷え……」
鬼かよ。
スローライフやりたいって言ったのに何故か、田舎をリゾート地に

するため土地を買い占める悪徳資本家みたいなこと言い始めたぞ……？

「そ、それは駄目でしょ？」

「ご心配には及びません。どうせ過疎地ですから、出費は最小限で済みますよ」

「い、いや、そうじゃなくってさ。田舎に住んでいる人を追い出したりするのは良くないんじゃないかな？」

「田舎に住んでいるのなんて、どうせ年寄りですよ。老人ホームにでも送れば良いでしょう」

「い、いやほら、そういうお年寄りもさ、田舎の長閑な風景が好きで住んでるんだと思うよ？無理に追い出すのはその……、良くないよ？」

「流石……！提督は優しくて素敵ですね！ですが、心配は要りません。この世界の全ては提督の御心のままに動くのですよ。立退く住人も、提督の暇潰しのために立退くのですから、光栄に思うでしょう」

「いやいや、そんなことないよ、恨まれちゃうよ！」

「仮に恨まれたところで、たかが人間の老人。何もできませんよ。そう言った雑事は気になさらなくてよろしいですよ、提督？？」

んー！

流石は大淀。

論理が通じない。

「いいか大淀、発想は良いぞ、田舎に土地を買ってそこで過ごす、それはＯＫだ。けど、立ち退かせるとか、買い占めとか、そういうのは駄目だ、やめてほしい。現地の人々の迷惑にならないようにしてくれ、良いな？」

「はい、了解しました」

……

……

……

数日後。

「Ｈ県ＸＸ市○○町……、バッチリ田舎だな！」

俺は、田舎町に来ていた。
田舎のビジョンが思い浮かばない場合はのんのんびよりを思い浮かべてほしい。
文字で表すと？
山！川！田んぼ！遠くにジャスコ！以上！って感じ。
駄菓子屋、小さな商店、八百屋に商店街、そして田んぼ。電車やバスの本数は日に二、三本。小学校は生徒数が百人もいない。
あっちを向いても緑、こっちを向いても緑。はぁー、一面のクソミドリ。
これだよ、これ。
俺が求めていたものだよ。
こういう田舎でほのぼののんびりスローライフやるんだよ。
「ここかな？」
「ああ、そうだね」
土地の選定者である時雨がついてきた。
……何で時雨？
「うん？何故僕が土地選びをしたか？ああ、それはね、僕は神話的事件の調査で、世界各地を見て回っているからだね。目立たない田舎町には、怪異や妖魔が多いからよく行くんだ」
成る程。
田舎ではそういうの多いもんな。
「よっしゃ、じゃあとりあえず、家建てるか！」
えー、まずは鼠や虫が怖いから石を敷いて……、柱ドーン。
「設計図もなしに作れるものなのかな？」
「頭の中にあるからね、設計図」
下水と水道、電気ガス繋げて……、こんなこともあろうかと暇潰しに焼いておいた瓦で屋根を……。
いやほら、俺は海外生活の方が長かったから、どちらかというと洋風建築の方が慣れているんだけど、折角日本なんだし、瓦屋根で畳張りの和風建築にしようと思って。
大体、日本の田舎町に洋風建築の家があったらミスマッチで景観が

良くないだろ？
よし、休憩。
先に作っておいた縁側に座りながら、飯を食う。
飯も和風におにぎりと卵焼き、たくあんなんかを手づかみで。
んー、味噌おにぎり美味え。そういや、俺を五歳くらいまで育てて姿を消したじいちゃんの好物も味噌おにぎりだったな。
俺も産まれたのは田舎の方だったからな。どことは言わないけど東北の方だったよ。
家の近くに北斗神拳って拳法の道場とか、南斗聖拳って拳法の総本山があって、よく遊びに行ってたっけ。
懐かしいなー。
と、そこに。
「こんにちはにゃ！」
「ああ、こんにちは」
小さな女の子がやってきた。
ん？
いや、こりゃあれだな。
人間じゃねえな。
とかそんなことを思った瞬間、時雨が刀を抜いて女の子の肩に突き立てた。
「あ、い……?!いぎゃあああああ!!!!」
「時雨、なんてことを！」
「提督、気付いているだろう？」
それはそうだが……！
「だからってそんな酷いことをしちゃ駄目だろ！」
その子は……！
「にゃあ、あぎ、いいっ……!!痛い、いたいぃ……!!」
「その子は確かに化け猫の子で、人間の子供に化けているみたいだけど……、何故そんな酷いことを！」
「悪意があるからさ」
「そんな……！大方、ちょっと騙くらかして食料をせしめようくらい

の可愛らしいもんだろ！過剰に攻撃しちゃ駄目だ！」
俺は時雨の刀を、猫娘ちゃんの肩から抜いて、回復魔法で手当てした。
「ひ、ひっぐ、えぐ、いたい、いたいにゃあ」
「可哀想に……、もう大丈夫だからね」
「提督、それを譲ってくれないかな？天然物の妖怪は珍しいから、ホルマリンに漬けて保管しておきたいんだ」
「やめやめろ!!!」
「提督、よく考えて欲しいな。所詮妖魔、人外だよ？人の領域に踏み込んだ人外は退治されても文句は言えないはずさ」
「そんなことはどうでも良い……！こんな可愛い女の子を虐めちゃ駄目だ!!!」
時雨は、珍しく、少し驚いた顔をして。
「猫だよ？」
「今は人の見た目だし」
「……見境ないね、本当に。ああ、いや、貶している訳ではないけれど」

「お名前は？」
「天音……、にゃ」
「そうか、天音ちゃんって言うのか。可愛い名前だね。……さっきはうちの子が酷いことをしちゃったね、本当にごめん」
「大丈夫にゃ……、ちゃんと治してくれたし……」
痛かっただろうに……。
良い子だ。
「お詫びに、俺にできることならなんでもするから、言ってくれ」
「にゃんでも?!本当かにゃ?!」
「ああ、もちろんさ」
「そ、それじゃあ、食べ物を分けて欲しいにゃ！」
はーーー!!!
なんって良い子なんだ!!!?
刀で穴開けられておいて、多額の金銭も相手の命も要求しないだな

んて!!!
あまりにも良い子だ。
抱きしめちゃう。
「ふにゃあ?!」
「天音ちゃん、君は本当に良い子だね……!お腹いっぱい食べると良い!今度はお友達も連れておいで!」
「えっ!良いの?!」
「それだけじゃなくって、この家にはいつ来てもらっても良いよ!食べ物をいつも用意しておくから!」
「本当に?!ありがとうお兄さん!」
んあああああーーー!!!
可愛いィーーー!!!
「相変わらずびっくりするほど女性に甘いね」
「しゃーない、美女には何でもあげたくなっちゃうんだよね」

H県の山の方、過疎地域で。
「お兄さん、お名前を教えてにゃ?」
「新台真央……、旅人さ」
さあ、ほのぼのデイズの始まりだ。

３７７話　くずおとこ道草日記　後編

「にゃあ！お魚にゃ！」
「お肉もあるっチよ！」
「お野菜もいっぱいぴょん！」
　んー！
「語尾があざとくて可愛い！百点！」
　聞いたところ、語尾はどうしても出てしまうものらしい。
　えー、猫又の天音、鼬（てん）の来夏、妖怪兎の美未。
　天音は、長めの黒髪にキャミソールと短いジーンズ。露出が多くていいね！顔も整ってるし！中学生くらい？胸ぺたん。
　来夏は少し鋭い眼の、栗毛ショートカットの美少女。白いワンピースと麦わら帽子がグッド。小学生くらい。
　美未は……、セーラー服だぜおい。白髪ロングがバッチリだ。ちょっと薄幸そうなところがまたグッド。おっぱい大盛り高校生くらい。
　その上、今は全員獣耳と尻尾が生えている!!
　気を抜くと耳や尻尾が出てしまうらしい。あざとい！可愛い!!二百点!!!
　年齢は百歳しないくらいの若い妖怪なんだって。

「……」
「時雨？どうかしたか？」
「いや、僕は提督を改めて尊敬するよ」
　はあ。
「あれは人外だ、僕達と同じ、人ならざるものだ。そんなものにも本気の愛を注げる提督は、心が広いね」
「いや見た目が良いから……」
「『瞳』で見れば簡単に人外だと気付けるだろうに」
「いやあ、妖怪って変幻してると表面的には人間に見えるじゃん？耳とか尻尾は萌えポイントになるし……」

「それはつまり、僕も耳や尻尾を生やした方が良いってことかな？」
「いや時雨はクールキャラだからそういうあざといことは……、いや、クールキャラがそういうことをやるギャップ萌えか？上級者だな？」
「今度までに用意しておくよ」
「おう」
そして。
「「ご馳走さまでした！」」
お腹いっぱい食べた妖女達は、俺にじゃれついてきた。
あざとい！可愛い!!
「お兄さん、にゃーん」
「兄さんー」
「兄様ー、ぴょーん」
あざといぃ!!!
「君達、この家に住んで良いよ」
「えっ?!本当にゃ?!」
「ああ、居間に時空間転移装置を取り付けて、黒井鎮守府にも行けるようにしてあるからね、いつでもおいで」
「よく分からないけど嬉しいにゃ！」

天音達を引き連れて、家の周りの探索に。
因みに、今日は日曜なので、制服姿の高校生に見える美未を連れて歩いても問題はない。
イクゾー（デッデッデデデデカーン）！
「時雨はどうする？」
「僕もついていくよ？護衛だからね」
「そーなのかー」
構わんけども。
「田舎の風景を見て回るだけだから、面白くはないかもよ？」
「君と一緒にいられるだけで幸せさ」
言うねえ？

森の中を歩く。
「おっ、綺麗な川だな、あとで釣りしに行こう」
「お、あけびじゃん。食べよ」
「ん？あれは……？」
神社、か？
山奥に神社を見つけた。
人の手が入っていない、朽ちた社。
お供え物もない。
「ふむ」
俺は、皿といなり寿司をアイテムボックスから出して、社に供えた。
すると。
「のじゃあ?!!ひ、久し振りのお供え物なのじゃ!!しかも、大好物のおいなりさんじゃあ!!!」
その辺から、三本の尻尾と狐耳を生やした少女が、素早くいなり寿司を頬張る。
「うーん、可愛い！百点！」
そりゃもう百点あげちゃうでしょ。
のじゃろり狐娘だぞ？
某幻想世界で会った九尾狐も美人で良かったけど、のじゃろり狐娘も良きかな。
いなり寿司を食べ終わった狐娘に温かいお茶を渡す。
「おっ、気が利くのぉ」
お茶を飲み干した狐娘は、溜息を吐くと、あ、と呟いて。
「あ、あわわ、妾の威厳が?!」
「まだ行けるまだ行ける」
「ほ、本当じゃろうか？まだ取り繕えるじゃろうか?!」
「平気平気」
「よ、よしっ！うぉっほん！妾はこの山の守護者、蓮華と言う！ひれ伏すのじゃ！ふはははは―！」
「ははーっ！」
「「「……」」」

「おっ、そこの男はノリが良いのお！良いぞ！」
「提督、僕の愛する君が小学生程の少女に傅く姿は、その、あまり見たくないんだけど」
「いやだってリアルのじゃろり狐娘やぞ」
「たかが三尾の小物妖怪じゃないか……」
「だ、誰が小物じゃ！妾の妖術で痛い目に」
　時雨が一瞬で刀を召喚し、狐娘の首筋に添える。
「あ、え？……ひ、ひえええええ?!!や、やだぁぁぁ!!死にたくない、死にたくないのじゃあああ!!!」
　うん、弱い！

　俺は泣き喚く蓮華ちゃんをあやす。
「よしよーし、良い子良い子」
「ふえぇ、怖かったのじゃ……」
　はー、すこ。
　可愛けりゃなんでも良い派。
「可愛いねー、蓮華ちゃーん」
「ふぇ、そ、そうか？」
「蓮華ちゃん、新しく社を作ってあげるから、お引越ししようか？」
「い、良いのか？妾は弱いのじゃぞ？白面の者が怖くて、田舎の山奥の寂れた社に逃げ込んだ木っ端妖怪じゃぞ？」
「良いよ、大丈夫。白面も封印されたし」
「な、なんと！そうなのか?!」
「だからお前安心して引っ越しして良いぞ」
「わあい」
　うちの前に新社を建てる。
　ついでに黒井鎮守府の裏山にも建ててておこう。
「な、なんと！こんな立派な社を建ててくれるとは！嬉しいのじゃ！」
「君が喜んでくれて何よりだよ」
　さあ、次は黒井鎮守府の裏山に行くか。
「ここ、うちの裏山なんだけど、いつでも来て良いからね」

「転移の外法まで使いこなすとは、そなたは術師としてもできるのじゃな！」
こんな感じで、黒井鎮守府に愉快な仲間がまた増えました、と。
『もふ』
ん？どうした首輪付き？
『もふもふ』
裏山のボスは僕だ？おっ、そうだな。
ボスなら部下を守ってやれや。
『もふっ！』
っと、そんな感じ。

３７８話　くずおとこ逃亡日記

「よいしょ、よいしょ」
「肥料こっちー！」
「がんばるぴょーん！」
『もふもふっ！』
　えー。
　あー？
「これは何事？」
『もふ？もふもふっ』
　成る程……。
　首輪付きが言うには、『ん？やあ、旅人。農業や畜産、漁業に必要な、暇そうにしている女妖怪を集めたよ。お前は見た目が良いメスならなんでも良いんだろ？裏山の僕の家を改築して寮にして、そこに住ませてるよ。因みに給料は黒井鎮守府の予算案に組み込んでおいたよ。後で眼鏡のメスから確認してくれ』とのこと。
　さっすがは首輪付き、よく分かっていらっしゃる！眼鏡のメスとは恐らく大淀だろう。大淀も最近は首輪付きと会話できるようになったからな。
「……」
　そして無言で野菜を作る三日月。
　凄えよミカは……。
『もふもふっ』
　何々？『そう言えば僕も最近、妖怪に変幻を習って、そこら辺に遊びに行くんだよね。人の姿は楽だね』か。
「おっそうだな」
『もふ』
　小物妖怪達が畑を耕す姿を見て、俺は……。
「これ見つかったら百パーセント児童虐待とかで捕まるから、気をつけさせてね？責任とるの俺なんだからね？マジで」
　と思った。

さーて！
……「あっ??凄いっ??お兄さんのっ??硬いよぉっ??」
……「きゃん??兄さん??奥っ??突いてぇっ??」
……「兄様??にいさっ??あっ??そこだめっ??」
……「兄上??そんなにしたらっ??駄目なのじゃっ??」
ふー。
さーて！
あーーーーーー。
「またやっちまったァァァァァ!!!!」
あーーーーーーもーーーーーー。
駄目だー！駄目なんだ俺はー！
女の子に迫られると断れないし、可愛い未婚の女の子は手篭めにしちゃうんだよ!!!
自分のおちんぽを制御できない……！
私の愛馬は凶暴です（チェストブレイク）。
これもう完全に俺が監禁されてこの子達が始末されるルートじゃん……。
てか俺も死ぬかも。
いや死なないけど、多分、捕まってリョナられて生物学的には一度死ぬねこれ。
あーどうしよ。
あー。
よーし！
逃げちゃえ??

妖怪なんで、幻想郷に逃げ込んだ俺。
この世界に妖怪の女の子達を逃し、俺もほとぼりが冷めるまで隠れる方針で行きましょうぜ。
「へっへへ、霊夢ちゃん、匿って??」
「……今度は何したの？」

「何って……、まあ……、簡単に言えば……、浮気エッチ？」
「死ね」
やーん、ひっどーい。
「いや本当に……、助けて、匿って。俺はまだしもこの子達が殺される」
「妖怪じゃない。退治されても別に誰も困らないわよ」
「俺が困るよん」
「てかその妖怪、見た目が私より若いんだけど」
「いや可愛かったからつい」
「本当に死んだら？」
「いやほら、見た目の話はしないでよ。俺はほら、萃香だっていけるし」
「……」
「あっやめて冷たい目で見ないで」
「そんなアホな理由で匿うのは嫌よ。そうね、雑魚妖怪なら竹林にいるあの人狼を頼れば？」
「えぇ……、影狼ちゃんは前に抱いてから暫く会ってないからなんて言われるか」
「死ねば？」

さて……、他に頼れる人がいないからな。
草の根妖怪ネットワークにこの子達を託す他ないな。
「か、影狼ちゃーん？」
「……真央？真央！」
抱きつかれる。
「あ、あー、久しぶり！元気だったかな？」
「何で……、何で会いに来てくれなかったの?!」
あーーーーーー!!!!
「いや本当……、ごめんね、忙しくて」
「酷いよ、酷いよ……！大好きなのに！私には貴方しかいないのに！」
「わ、悪かったって……、あー、決して君を蔑ろにしてた訳じゃないさ。

大好き、愛してるよ！」
「……本当？」
「ああ、本当だとも！君の為なら世界の全てを敵に回したっていい！」
「えへへ……??ところでこの子達は？」
「あー、知り合いの妖怪でね。草の根妖怪ネットワークに入れてあげて欲しいんだ。良いかな？」
「うん、多分大丈夫だと思う。ね、真央？今日は一緒にいてくれるよね？」
「ああ、もちろんだとも……、可愛がってあげるよ！」
「やった??」

……「真央っ??まおっ??好き、大好きっ??」

さーて！
更に業（カルマ）を重ねた俺。
竹林なら白露型でもない限りあの子達を見つけることはできないだろう。
俺本体は更に逃げる。
今、『瞳』で見たところ、黒井鎮守府からの追っ手が複数来たところだ。
どれどれ……？
『見ているね、提督』
『僕は悲しいよ。僕達というものがありながら、あんな木っ端妖怪に惹かれるだなんて』
『少し、君に酷いことをしてしまうかもしれない』
『先に謝っておくよ』
『ごめんね……』
んー。
よーし！逃げよう！

まあねまあねまあね？

妖怪少女達を預けておいたし、一人だけなら身軽だからいくらでも逃げられるよ！うん！
怖い怖い怖い怖い怖い怖い。
逃げよう、逃げよう!!
株式会社世紀末にて。
「おっ、何だぁ？マオじゃねえか」
「ジャギ、助けて」
「……」
「あっ待って無言でドア閉めないで」
「……浮気だろ？」
「浮気だけど」
「……」
「閉めるんじゃねえええ!!!匿ってくれえええええ!!!」
「ふざけんなバーカ！お前んとこの艦娘なんて相手にしてられるか!!!」
「やあ、提督」
「「アッ」」
しぐれ。
俺は素早くバフをかけ、ジャギを盾にし転移した。
「逃したか……」

超怖い！
怖い！
アメリカへ飛ぶ。
「花凛!!!」
妹のラボ兼自宅へ。
「俺を隠せるような発明品とかない？言い値で買うから」
「……浮気かい？」
「そもそも浮気でも何でもないからね！別に艦娘と結婚してる訳でもねーし!!!」
「五千六百二十七」

「何が？」
「兄さんが浮気が原因で事件を起こした回数だよ」
「えー？そんなにか？浮気なんてそんなにしたことないよ？」
「自覚がない辺りから救いようがなくって面白いね」
何も面白くないが？
「こんにちは提督」
明石ーーーッ?!
転移ィ!!!
ヴァナディールにて。
「忍者あああああああ!!!!」
「うるせぇ!!!!」
「助けて」
「……浮気だろ？」
「浮気だけど助けて」
「……ニンニン！」
「ア”ァーーー!!!畜生逃げやがった!!!忍者さんタゲとってもらえますか^^；」
「よお、どこ行くんだ？なぁ？」
摩耶。
転移。
「はぁ、はぁ、はぁ……！」
次はどこから来る？
どこへ逃げれば良い？
「提督」「司令官」「司令」「旦那様」「Ａｄｍｉｒａｌ」
「お」
「「「お？」」」
「俺のそばに近寄るなあああーーーッ!!!!」
あ”ぅ。
俺は……、ブリーチの序盤の地獄に落ちた虚みたいな死に方をし

て、黒井鎮守府の門に引き込まれた。
「あ”ァーーー!!!嫌だぁーーー!!!リョナられたくないーーー!!!」
「この足があるから逃げ出しちゃうんですね」「この腕があるから拒絶しちゃうんですね」「この瞳があるから目移りしちゃうんですね」
「ぐあぁぁぁーーーーーーーー!!!!」

その後数ヶ月監禁された。

３７９話　サバゲやろうぜ！

監禁と言う名の謹慎が解けて、外を出歩けるようになった俺。
「提督、サバゲやるんですけど、見に来ますか？」
「おっ、良いねえ」
早速面白イベントの開催だ。
「次元観測で記録してインターネットに流す予定です」
「良いねえ、皆んなが和気藹々と遊ぶ姿を世の中に見せるんだね」
「フィールドは裏山に似せて作った異次元空間です」
「おお、良いな。面白そうだ」
「私はこの格好で行きます！」
「うん、トンプソンにコートか。マフィアみたいだね」
「銃弾は実弾です」
「ちょっと待って」
……「明石さーん！始まりますよー！」
「はーい！それでは提督、ご観戦くださいね！」
え？

え？
「ルールは、艤装の召喚はなし！弾丸の回避は可！爆発物は不可！ゾンビ行為は駄目ですよー！」
「「「「おー!!!」」」」
んー？
「いや、実弾は駄目でしょ常識的に考えて」
「大丈夫です！フランジブル弾を使用しますから環境にも優しいです！」
「そうじゃなくてね？」
そうじゃなくてね？
「実弾使ったら殺し合いでしょ」
「いえ？別に私達は銃弾程度で死にはしませんし」
「せめてガスガンに」

「ガスガンだと弾速が遅過ぎて簡単に見切れちゃうんですよね。せめて音速くらいは出してもらわないと」
成る程、超人故の悩みか。
「って言うか、提督も同じでしょう。銃弾くらいじゃ死なないじゃないですか」
まあそうね。
「私もガスガンの弾速くらいなら避けられちゃうんですよね」
「せめてゴム弾にしない？」
「実弾だろうとゴム弾だろうと、当たったところでちょっと痛いくらいですので変わらないかなー、と」
変わるんだがなあ。
「取り敢えず参加者を集めますね」
「おう」
さて、参加者は合計で三十人くらいか。
ビスマルク、はＳＳ制服にＭＧ４。……ＭＧ４?!いやいや、重機関銃だよねそれ？その上でＭＰ５か。ルガーも持ってる。
加古は……、ディーグル二丁。そして複数の予備弾倉。
あきつ丸は三十年式歩兵銃。ああ、そういや、君、陸の子だったね。
見物に来ていた暁が、「鉄砲なんてどれも一緒でしょ？」と発言して、ガンマニアのビスマルクが「違うわよー！」、加古が「これだから素人は駄目だね！」とかのやり取りがあって。
そんな感じで始まるグランギニョル。
これは酷い。
ルールは殲滅戦らしい。
え？やるの？
「やります」
やるのね。
まあ、良いか。
「えーと、頑張ってね？」
「はい！」

開幕と同時に突撃し、ＭＧ４を片手で乱射するビスマルク。艦娘の腕力なら、反動を気にする必要はない。
「アハハハハ!!やっぱり銃声は最高ね!!」
と、本人談。
基本的にうちの子はバーサーカーだから、火砲の音で喜んじゃったりする。
あぁ^～、火砲の音ォ～。
一方、ババババーンと弾が来るのを見てから回避する加古。
「はぁあああ!!!」
加古は、両手のディーグルを振り回して、正確に撃ち抜く。
ガン＝カタだ。
赤組のビスマルクの軽機関銃の弾幕を、加古がディーグルのガン＝カタで、弾丸に弾丸を当てて逸らしている。
神業だ。
「素晴らしい技術ね！Ｗｕｎｄｅｒｂａｒ！でもね、カコ！ハンドガンの火力じゃ機関銃には敵わないのよ!!」
「へっ、そいつはどうかな?!」
激しい銃撃戦を繰り広げる二人。
重戦車型で弾幕を張るビスマルクと、機動力で戦う加古との戦闘だ。

一方で、アイオワはバレットＭ８２で狙撃している。
しかし、艦娘達は、それに気づいて回避している。
かなりの距離から射撃しているので、着弾までにタイムラグがある。
そのタイムラグに、艦娘達は、身をよじって避けるのだ。
まあ、俺にもそれくらいの芸当はできるから、別にそれ程凄いって訳でもねえな。
「ｓｈｉｔ!!実戦用の特殊改造強装弾と改造銃じゃないと駄目ね！既製品じゃ当たらないわ。やっぱり、ｔｏｙじゃあね!!」
アイオワにとって、未改造の軍用銃は玩具らしい。

まあ、確かに、艦娘の耐久性ならば、未改造のライフル弾なんてエアガンみたいなもんだ。

「撃て撃てー！」
「わー！」
「きゃー！」
ほのぼのと駆逐艦達が銃撃戦を繰り広げる。
ここが浜辺で獲物が水鉄砲なら可愛さマックスなのだが、残念ながら実弾での撃ち合いだ。
やべーよあれは。
「行くよー！えーい！」
「「「うきゃー！」」」
文月のミニガンが火を噴く。
バク転宙返りで避ける駆逐艦。
ハリウッドの大作アクション映画みたいだ。
てか、あんなにちっちゃい文月が馬鹿でかいミニガンを振り回すのがミスマッチで凄いこう、自分の目がおかしくなった気分になる。
……
……

三時間で引き分けで終了。
「提督、何か一言」
「あー、えーと、頑張ったね？」
「ありがとうございます！」
明石がマイクを持って言葉を続ける。
「では、うちの旧型の警備ロボットや無人兵器の始末代わりに、皆で撃ち合いをしましょう！エキシビジョンマッチの開催です！」
ん？
うちではもう使われていない、数年前のモデルの無人兵器が襲いかかってきた。

それを、素手で殴って破壊したり、ロケットランチャーでぶっ飛ばしたりする艦娘達。
「あはははは!!!楽しいですね!!!」
流石の俺でも、バフなしでは戦車すら破壊できない。
それを、素手で機動兵器の装甲を引き千切る戦艦艦娘。
「撃て撃てー!」
バカスカ撃ちまくってハイになっている駆逐艦。
こわい。
「ヒエェ」
俺は巻き込まれたら普通に死ぬ自信があるので、逃げる。
「提督も撃ちましょう!楽しいですよー!」
明石にガトリングガンを渡される。
「いや俺こういうのはちょっと」
「あ、ミサイル」
「あぴゅん」
〜『死者のみが、戦争の終わりを知る』プラトン〜
「あ、提督、その、死んだ時にコールオブデューティーみたいな偉人の名言出る機能まだ消してなかったんですか?」
ん、ああ……。
「君達に監禁されていた五ヶ月間で三百六十二回死んだからね、ただ死ぬのもつまらないだろうからエンターテイメント性が欲しいかと思ってつけた機能だよ」
うち三百回の死亡原因は白露型の解剖である。
司法解剖の結果、死因は司法解剖みたいな面白味があるね。
因みに、この機能は知的階級の白露型は面白がってくれた。
いやあリレイズとかアイテムとか大分使っちゃったなー。補充しに行かないとね。
と、ミサイルに直撃し、ＤＩＯ様よろしく頭だけになった俺は、明石に抱えられながら移動する。
ふーむ。
「まあ良いや。暫く昼寝するから、終わったら後片付けして起こして

ね」
「はーい！」
まあ、ほのぼのして終わりだ。

おまけに。
後日のネットでは、この動画を見た反戦団体が大騒ぎして大変なことになったとだけ言っておきます。

３８０話　ネルソン、建造

……１９４９年３月１５日。
余の意識は、そこで途切れた。
余は……、戦ったのだ。
立派……、かどうかは、後世の人々が評価するものだろうが、余は精一杯戦った。
それで、退役し、解体。
余は、『終わった』のだ。
……だが、余の魂は……、海に『在る』。
人間でいう、微睡みの中にいる。
何年も、何年も、微睡んでいた。
そして、ある日。
『おいで』
声が、聞こえた。
男の声だ。
余は、それに従ってみようと。
そんな気に、なった。

『っ……、は?!こ、ここはどこだ?!』
微睡みから、意識が覚醒する。
余は……?
ええと、余はネルソン。ネルソン級戦艦一番艦にして、ビッグセブンのうち一隻……、で。
多分、その、艦娘?というものだと思う。
艦娘?
艦娘とはなんだ?
艦娘とは……、よく分からないが、人間の形をした艦で……、女だな。女だと思う。
『おお……』
凄いな、艦の頃と違って、手足があるぞ。舵を操作されずとも自由

に動けるのか。
『んっ……』
胸に大きな脂肪の塊が。これが乳というものか？むにむにだ。これで子を育むのだな。
服装は……、スカートが短いな。女が足を見せるのはあまり良くない、か？
余は、何故ここに？
……そうだ、深海棲艦を殺す為だ。
深海棲艦とはなんだ？
人類にあだなす怪物だ。
怪物？そんなものがいるのか?!
そもそも何故、余は艦娘になった？深海棲艦を討たねばならぬと思った？
……何も、分からない、か。

『あの、良いかな？』
美しいクイーンズイングリッシュで話しかけられた。
この声は……、そうだ！余を呼び出した声ではないか！
『貴様、何も、の、だ……!!?!』
余が顔を向けると、そこには。
絶世の色男がいたのだ。
なっ……?!
何と良い男だ!!
背も高く、体格も良く、白髪が美しい。
同郷の者ではないが……、高い鼻と深めの彫りは西洋の男のそれだ。
知性的な黒い瞳に余を写し、真っ直ぐに見つめてくる。
『うっ……?!』
『っと、大丈夫?!』
『い、いや、その、貴様を見ると、何故か胸が高鳴るのだ……』
恐らくは心臓であろう、臓器がどくんと動いたのを感じる。

『……あー、それは、まあ、いずれ慣れると思うよ』
だ、駄目だ、止まらん！この男に見つめられると、胸の高鳴りが抑えられれん!!
どういうことだ?!
『……ちょっと離れようか？』
『そうして、くれ』
しかし、男が余の側を離れるとどうだろうか？
今度は、心臓が締め付けられるような……。
ええい、離れられるとかえって辛い！
『いや、やはりもっと近くに来い！』
『あー、うん』
むぅ……？
一体どういうことなのだ？
近付かれると鼓動が早くなり、離れられると胸が痛くなる……。
『……何かの病気だろうか？』
『……まあ、不治の病だよね、それは』
『な、何だと？不治の病か……！艦娘？とやらになって早々、死んでしまうのだろうか?!』
『死にはしないと思うよ？』
『そうか……？』
って、それよりもだ！
『貴様は、誰だ？』
『黒井鎮守府提督、新台真央。ネルソンさん、君を建造……、この世界に再び呼んだんだ』
『建、造……』
『君は艦娘。深海棲艦を倒す者だ』
それは、何となく理解している。
『……でも、そんなことは関係なく、君にはこの世界を楽しんでほしい』
『楽しむ、だと？』
『ああ。自然に触れ、芸術を楽しみ、美食を味わい、愛を知り……、こ

の世界で生きてほしい。女性としての幸せを知ってほしい。そう思っている』
『……それは、理解した。つまり、余は貴様の指揮下に入り……、人間の真似事をしながら、深海棲艦と戦えということだろうか？』
『まあ、その認識で良いよ』
　そうか……。
『……何故、この様な姿になったのだろうか？』
『んー、そうだね……。それは分からないけど、ネルソンさん、君は世界大戦で必死に働いただろう？』
『ああ』
『次は、人間として、幸せな日常を過ごして良い、と考えれば良い。第二の人生だ』
　第二の人生、か。
『ネルソンさんは戦艦だし、山や森なんかは見たことなかっただろ？綺麗な自然を見に行かないか？』
　自然……、見てみたいな、確かに。
『それに、今この世界は、君が解体されてから七十年以上の時が過ぎている。今の人間の営みなんか、そういうの、見てみないか？』
　そう、だな。
　余が守った人間を見てみたいものだな。

『……それより貴様、もう少し私の近くに寄れ』
『こうかな？』
『うむ……??』
　これは良いな、実に良い。
　何故かは分からんが、この男が側にいると心地いい。
　む？
『『……』』
『お前達は……!!!まさか！』
　ウォースパイト、アークロイヤル、そしてジャーヴィス!!!
『こんなところで戦友に会えるとは……!!久しいな!!』

『ええ、久しぶり。随分とＡｄｍｉｒａｌと距離が近いのね、ネルソン』
　む？
『ああ、この男はよく分からんが側にいてほしく思う。この男は司令官としてはどうなのだ？有能か？』
『これ以上ないくらいに有能よ。このレベルの司令官は中々お目にかかれないわね』
　ほう！
　有能な美男か。
　神は二物を与えたと言うことか。
『ならば、余の側に相応しい男と言う訳だ』
『ええ、そうね。でも、Ａｄｍｉｒａｌは貴女だけのものじゃないわよ』
『む、そうか？』
　ふむ。
　ふむ……？
　なんだ？
　なんだか、それは少し嫌だな。
　この男は余だけのものにしたい。
『余だけのものにしてはならないのか？』
『できるものなら』
　そして飛んでくる本気の殺意。
『……ッ!!?わ、分かった、それはやめておこう。しかし、余もＡｄｍｉｒａｌの側にいて良いだろうか？』
『ええ、皆で一緒に彼の側にいましょう』

『今日はネルソンさんの為に腕によりをかけて料理したよ。さあ、どうぞ』
『うむ、礼を言うぞ』
　なんとこの男、多才で、料理の腕も一流だと言う。
　沢山の料理を余を歓迎する為に作ってくれたとのこと。

『む……！これは美味いな！』
ほう……！
驚きだな！
料理の記憶はなんとなくあるが、ここまで美味いものの記憶はないぞ！
このローストビーフのソースの奥深い味と言ったら……！
この男は本当に有能だな！
余の側に置いておきたい！
『ラム酒もどうだい？』
『Ａｄｍｉｒａｌもいけるクチか？』
『ああ、酒を飲まないと干からびて死んでしまうんだ』
『ふふふ、面白いジョークだな』

『ここがネルソンさんの部屋だ。他のイギリス艦と一緒だよ』
『そうか』
友と一緒か。
態々個室にしてもらう必要はないな。士官でもあるまいし。そもそも、私室の必要性がほぼない。
何せ、この、黒井鎮守府は、施設が広く様々なものがある。
私室など、寝るときくらいにしか使わないだろう。
しかし……。
『それじゃあ、今日は寝ると良い。ゆっくり休んでね、ネルソンさん』
『待ってくれ』
『ん？何かな？』
『貴様といると、心臓が高鳴るんだ。これは、なんなんだ』
『……それは自分で考えた方が良い問題だと思うね。俺じゃ力になれないよ』
……。
『もしかしたら、だ。これは、多分、恐らくは』
今日一日、この男と一緒に行動して。
『余は、貴様に恋をしたのかもしれない』

『……そうか。恋は良いよ、素晴らしいものさ。それで？』
『余を抱いてくれ』
『喜んで』
余は、余は……!!!
うわあああ?!!
邪魔するなウォースパイトーーー!!!

３８１話　旅人、レッドグレイブ市へ

おはようございます、不知火です。
「大淀さん、司令は何処へ？」
「あ、不知火ちゃんも見てないんですね。朝から姿が見えないんですよ」
また、失踪でしょうか？
先日の件で懲りたと思ったんですが……。
司令の生活は全て、この私が責任を持って管理すると言ったのですが。
「ですが、提督の私室の机の上に書き置きがありました」
どれどれ……？
『レッドグレイブ市に用事があるので、ちょっと行ってきます。ついでに知り合いのデビルハンターさんと少し会うだけなので、すぐに帰れると思います』
「レッドグレイブ市……？」
「調べたところ、外国のとある国の地方都市みたいですね」
大淀さんがスマートフォンを操作しながら私に言った。
大淀さんは、スマートフォンのライン的なアプリケーションを使って、それを艦娘達に周知させた。
ライン的アプリケーションというのは、夕張さんの作ったオリジナルのもの。何故態々作ったのかと言うと、艦娘の相互連絡に外部の人の目に触れる可能性があるアプリケーションを使う訳にはいかないからだそうです。一応機密ですから。
「それでは、司令はお一人で知り合いに会いに？」
「そうですね」
「心配ですね……、護衛もなしに」
「まあ、死ぬことはないと思いますけど……」
確かに、この前も、バラバラに解剖されても三日後にはケロっとした顔でお酒を飲んでいましたからね。
ゾンビ映画のゾンビも、艦娘ですら頭を破壊されれば死んでしまう

のに、司令は脳を破壊した程度じゃ死にませんから。
魂の破壊にも耐えうる上に、特に精神力や魂の頑丈さのような目には見えない部分の耐久力が段違いですね。
まあ、少しすれば帰ってくるでしょう。
帰りが遅くなれば迎えに行けば良いだけですし。

朝の食堂。
私は、目の前の焼き鮭の骨を抜いて、箸で身をほぐして口に運ぶ。その塩辛さで炊きたての白米を一口。
噛めば噛むほど甘いお米本来の味と鮭の塩気、そして旨味が口の中に広がる。
そこで豆腐とわかめの味噌汁を一口。因みに黒井鎮守府では合わせ味噌を使っていて、味は少し濃い目です。
艦娘は肉体労働が多く、また、全員が女性なので、全体的に少ししょっぱ目、甘目に作られています。こう言ったところにも厨房組の気遣いがありますね。
味噌の豊かな風味を感じつつ、卵焼きに箸を伸ばしたところで、食堂に設置されているテレビ画面が急に切り替わった。
『ニュース速報です！○○国の地方都市、レッドグレイブ市にて、謎の怪物の大量発生！目撃者によると、虫のような怪物が人間の血を吸っていた、木の幹のような触手が人間を貫いて血を吸っていた、などと報告されています！今、ＶＴＲを……』
「「「……」」」
これは……。
「レッドグレイブ市って、確か、提督が……」
……あ。そう言えば。
それを聞いて騒めき出す艦娘達。
そんな私達をよそに、テレビは現地の映像を映し出す。
『ぐあああっ！』
『撃て！撃てー！』
『避難してください！こっちです！』

『ギギギギイ!!!!』
『ぐあああああっ！このクソ虫が！あ、ぐあっ、くそッ！うわあああああ!!!!』
『何だこの触手は?!う、うわあああ!!!!』
テレビの生放送の様子では、人間ほどの大きさの白い虫のような化け物が人々の血肉を啜り、地面から突然に生えてきた植物の根のような触手が、先端の鋭い槍で逃げ惑う人間を貫いているのが分かります。
「な、なんてことだ、て、提督は無事だろうか」
「ああ、もう……」
「何でこう、行く先々で変な事件に巻き込まれるのかな……」
艦娘達は、人が死んでいることは基本的にどうでもよく、司令がまた、変な事件に巻き込まれたことに対して呆れているという気持ちの方が強いように見えますね。
もちろん私も同じ気持ちです。
人間が何匹か死んだところで、私達は全く困りませんし。
それも海外の人間となると、更に縁がないですから。
不知火に問題はありません。
……ん？
『おい！テレビか?!撮ってんじゃねえ！逃げろ！』
あ、司令?!
『し、しかし、我々は報道の義務が』
『馬鹿だろお前！そんなこと言ってる場合か！ありゃ悪魔だ！ここもじきに魔界と繋がるかもしれねえ！人間の軍隊なんかじゃ太刀打ちはできねえ！馬鹿言ってないでとっとと逃げろ！』
そう言うと司令は、報道陣のヘリコプターからフリーフォール。
同時に、着地地点の、その、悪魔?を素手で引き裂いた。
『南斗水鳥拳奥義、飛翔白麗イッ!!!!』
そして、短く呪文の詠唱をすると、悪魔の死体を踏み台にまた空へ。
宙返りの最中に魔法の矢と投げナイフを放ち、着地地点の悪魔を蹴り飛ばす。

『ギルガメス!!!』
銀色の手甲脚甲を身に纏い、悪魔を殴り飛ばしながら更に詠唱。
『星の精、炎の精、ビヤーキー!!!』
グロテスクな怪物を召喚し、更に周りの悪魔を倒し始める司令。
『うおお、死に晒せーーー!!!』
やだ、かっこいい……??
……はっ。
いえ、それはさておき。
「また変な事件に巻き込まれましたね……」
私は呟いた。
「どうするんですかこれ、暫く帰ってきませんよ、このままだと」
そこで、時雨が声を上げた。
「あれは、悪魔だ」
はあ。
「悪魔は物質ではなく魂の生き物だよ。物理タイプの艦娘とは相性が悪い」
言葉足らずな説明。白露型はいつも意味深な台詞を吐く。
「詳しく話してください」
「ああ、そうだね、つまり……、悪魔は肉体の破壊ではダメージを受けにくいんだ。魂そのものを破壊しなくてはならない。故に、物理攻撃がメインの艦娘とは相性が悪いんだ。だから、提督の救出に行くのは、魔法が使える艦娘などの、特殊な技能を持つものだけにするべきだ、と言う話だよ」
となると、白露型や夕雲型、高雄型、伊勢型辺りが候補に入ってくる。
「と言う訳だから、君達は下手に動かずに待っていてもらいたいんだけど……」
「私も司令を迎えに行きたいです!」
「邪魔なんだよね、正直。映像を見た限り、あそこは魔界と繋がりかけている。大勢で提督の救出に向かったとして、もしも艦娘が魔界に落ちた、なんてことがあれば、年単位で帰還は叶わないよ?」

「ぐぬぬ」
ミスをすれば年単位で帰ってこれない可能性がある、となると、下手に出しゃばってはいけないですね……。
司令と年単位で会えないとなると、自殺するかもしれません。
仕方がありませんね、ここは選抜隊に任せて、私達一般艦娘は大人しく司令の帰還を待ちましょう……。

そして、一月後。
「ただいま」
普通に司令が帰ってきた。
尚、首だけになっているのはご愛嬌。
「いやー、ダンテとは暫く会えないね。全く、カッコつけやがってさ、あの人は」
司令は愚痴を言いながら、髪の毛を巻雲の手首に巻きつけつつ言葉を続ける。
「まあ、久し振りにレッドオーブを稼げたからなー。ゴールドオーブもたんまり手に入れてきたから、これでまたたんまり死ねるぞー。いや、死にたくはないけどね」
そう言って、髪を動かして机の上に飛び乗る。なんだかそう言うマスコットキャラのようにも思える。
「そう、それで……、心配してたかな？ご覧の通り、無事だよ」
「いや……、首だけになってますけど」
「まあ、生きてはいるからセーフでしょ」
そうですね？
「じゃあ、俺はちょっと身体を再生させるから。最近は君達が遠慮なくぶっ壊してくれるもんだから、全身の再生も二日で済むよ、あはは」
はあ。
「……まあ、ね。友人がいなくなるのは少し寂しいね。だけど、また、いつかきっと会えるさ」
そう言えば……、知り合いと会うと言っていた気がする。
知り合いと長い別れに……？死別でしょうか。いえ、その辺りを詮

索する必要はありませんね。不知火は空気が読める艦娘です。
「それじゃあ、俺は暫く寝るから。明後日までには身体を生やすね。じゃ」
そう言って、司令は短く呪文を唱えて姿を消した。

後で聞いた話ですけど、司令は魔王と戦ったそうです。
今回も厳しい戦いだったらしく、完全復活には一週間を要するとのこと。

３８２話　出張、聖帝軍

「フハハハハ！久しいな、下郎！」
「おっすおっす」
　えー、旅人でぇ→す。
　本日はぁ、取引先の一つである聖帝軍にやって参りましたあ。
　護衛兼秘書は陸奥。
　それと朝潮と鈴谷も同行。
　先日の監禁事件から、俺に対する監視の目は三倍（当社比）に増えた。モテる男は辛いぜ。
「（その、提督？この人達、何かしら？）」
　んー？
「（ＰＭＣみたいな……？拳法集団だよ。ボスのこのサウザー様は陸奥と同じくらい強いと思うよ）」
「（へえ……！）」
「む……？何をコソコソと話している？その、あれか？なんかこう、恋人とかそう言うやつか？」
「あぇ？あー、そうですねはい」
「そうか！子供が来たら見せに来るのだぞ！」
「え？子供が来たら？」
　陸奥が聞き返す。
「子供はコウノトリが運んで来てくれるのだぞ、知らぬのか？ハーッハッハ！」
「（……提督、この人）」
「（……この人の親兼師匠の人がそう教えたんだろうなぁ）」

　さて、ここは聖帝軍本部。
　南斗の里近くの、聖帝十字陵の側にある建物だ。
　この聖帝軍は、南斗の里から直通で就職できる優良企業だ。
　ワンマン経営の気があるが、基本的にはそんな酷いことをしない取締役の聖帝サウザー様と配下の怪しい拳法家。

でもまあ、主に頑張ってるのは聖帝様の隣にいるヒゲの部隊長のおっさんで、聖帝様は特に何もやってない。俺と同じくらい仕事をしていない。
たまに遊びに来る拳王軍や北斗神拳伝承者の男と乱闘騒ぎをして死にかけることが多々あるが、それも日常の一ページみたいなものなので誰も気にしない。
時は既に世紀末を超え、新たな世紀に突入して久しい。別に、世界は核の炎に包まれたりなんてしていない。
だが何故かモヒカンの兵士がそこら辺にいたりするからこの辺は侮れない。火炎放射器とか持ってるけど、この辺りは銃刀法とか緩い地域だからね、うん。
さて、それで、俺はもう帰りたいのだが。
「おれの体は生まれついての帝王の体！だれもおれを倒すことはできぬのだーーーっ!!」
「……!!」
「ケーン!!」
「ケンシロウ!!」
うわー、クソめんどくさいことになってるぅ。
しゃあねえな。
俺は懐から椅子とテーブル、パラソルを出して、艦娘達にジュースを飲ませる。
「あら、どうも」
「わあ！ありがとうございます、司令官！」
「おっ、サンキュー！」
「いやあ、この辺は何故か暑いからね、日焼けとかしないようにしなきゃ駄目だよ」
先方である聖帝様に緊急の予定が入ったとなると、立場が下の取引先であるうちは待たせてもらうしかない。
「司令官、あの人達は何で戦っているのですか？」
「さあ？俺にも分からん。いつものことだし」
「いつも戦っているのですか？」

「定期的にね。あ、お菓子も食べなよ」
異次元ポケットの魔法であらかじめ焼いておいた焼き菓子を出す。
「いただきます！……んー！美味しいです！これは何ですか？」
「マドレーヌだよ」
俺がマドレーヌとフィナンシェの違いについて話しつつ、艦娘といちゃついていると。
「あのさ、雰囲気が壊れるんだけど」
とクソガキのバットが話しかけてきた。
「いやそんなこと言われても……。俺はいつも通りにしてるだけなんだけど」
「いや、今さ、ケンとサウザーが北斗と南斗の運命の戦いをしている最中の訳だろ？そんな中、女連れでお菓子食べながらバカンス気分って……、空気読めてなくないか？」
「そんなの知らないって。俺は普段通りに過ごしてるだけなのに勝手にシリアスしないでくれる？」
「でもさあ、確かになんだかんだ言って毎回決着がつかないけどさ、良い大人なんだから最低限の空気は読むべきだろ」
「だから、邪魔にならないように端っこの方でいちゃついてるんだろ」
「視界に入ってるんだって」
「見なきゃ良いでしょ」
「もう帰れよ……」
そんなこと言われましても。
俺も帰りたいけど取引先がアレだもんよ。
「フハハハハ!!!敵は全て下郎!!!」
「……!!」
おお、聖帝様が飛んでる飛んでる。
「はあーっ！極星十字拳!!!」
「ぐ……!!!」
ケンシロウは手刀で十字に斬り裂かれ、血霞が舞う。
「ケーン!!!」
リンが叫ぶ。俺はコーヒーを飲む。因みにブラックだ。

「お、珍しく聖帝様が押してるじゃん」
「いつもは負けてるの？」
鈴谷が聞いてくる。
「そうね、まあ、基本的にいつもは聖帝様が押され気味なんだけどね、聖帝様も強くなってきてるから」
ケンシロウに負けそうになる度に、必死こいて鍛え直すからねあの人。負けず嫌いなんだろうな。
「でもまあ、聖帝様が押し始めるとあいつが出るからな」
「あいつ？」
「ほら、あいつだよ」
俺は指を指す。
「ターバンのガキだ」
ターバンのガキはケンシロウを圧倒する聖帝様の太ももに釘を刺した。
久し振りにケンシロウを圧倒していて調子に乗っていた聖帝様はその隙を突かれて倒れ、聖帝十字陵を転がり落ちた。
「ぬぅ!!!うぬおああああああああぁーーー!!!?」
見事な着地狩りだった。格闘ゲームならあれをコンボの始動に体力ゲージを五割は持ってける。
「あれ何故かガー不だからな」
「ガー不」
さて……。
俺の出番か。
「ケンシロウ！」
「……！」
「さて、まあ、なんだ、ここはこれで終わりにしようか」
「しかし……」
「よく考えてみろ、今聖帝様を倒したのはお前じゃない、ターバンのガキだ。お前はとどめだけを掻っ攫おうってか？」
「む……」
「北斗と南斗の戦いの幕を下ろすのに、弱っている聖帝様のとどめを

刺して終わりで良いのか？それで本当に勝ったと言えるのか？」
「……！」
「ケーン！騙されないで！ここでサウザーにとどめを刺した方が後々楽よ!!」
　ケンシロウは迷っている。
「こんな勝ち方をしてユリアさんが喜ぶと思うか?!!」
「ユリア……ッ!!!」
「ケーン！駄目よ！進撃の巨人みたいな世界観で一人だけトムとジェリーみたいなノリで生きている人に騙されないで!!」
「お前はッ！こんな勝ち方でユリアさんになんて報告するんだッ!!」
「ユリア……!!!」
「お前の愛はそんなものか!!!」
「ケン、駄目ー!!その人見て、三人も女の子を連れ歩いておいて愛を語るなんてどう考えてもおかしいわ！騙されてるのよケン!!」
　ごちゃごちゃ話している間に、聖帝様は聖帝軍に回収されて治療室へ送られた。

「いやー、惜しかったですね」
「フハハハハ!!!まあこんなこともある!!!しかし、確かに後一歩で勝てていたわ!!!」
　まあ、その場合は多分、ケンシロウが覚醒して逆転負けすると思うけどね。
　さて、とっとと取引を終わらせて帰ろう。可憐な艦娘達を男臭いこの空間に置いておくのは嫌だからな。
「しかし、あのターバンのガキは何者なのだ……？」
「あー、多分概念的な存在だと思いますよ、ＳＣＰみたいな」
「ふむ……、そうか。何故か俺や貴様の太ももを正確に抉ってくるからな……、きっとお化けとかそういうやつだろうな……」
　そんな話をして。
「……はい、確認しました。では俺はこれで」
　とっとと帰る。

そして、聖帝軍本部の階段を下りていると。
「……!!!」
「アッ、クソ、てめ、あぁぁぁぁぁぁぁぁーーー!!!!」
何故か俺もターバンのガキに刺されて階段を転がり落ちた。
「提督ーーー!!」
「くっ、あの子供は……、いない?!消えた?!」
「司令なら、あのくらいの刃物……」
「いやあれガー不だから。防御貫通してくる」
「防御貫通」
「クソが……、陸奥、悪いけど肩貸してくれ」
「え、ええ」
俺はボロボロになりながらも黒井鎮守府に帰還した。

後日。
黒井鎮守府にて。
「さて、執務室に行かなきゃな、階段を上って……、ぐお?!クソが!!
あぁぁぁぁぁぁぁぁーーー!!!!」
ターバンのガキが黒井鎮守府にも出現するようになったとさ。

３８３話　規約変更によってこの話は消えるかもしれないです

「提督大変です！」
「どうした明石」
「白露型が謎の人体実験によりハートレスを創り出しました！」
　あの子達は!!規約が変わったからと言って……。
「まあ時雨ちゃんなんてアンセムみたいなもんですし」
「おっそうだな」
　言われてみればそうである。
「そうなると私はグミシップを作るしかありません。夕張ちゃんとチップとデールみたいなポジションに収まります」
　そっか……。君らはディズニーの悪役ポジションだと思うが、君がそう思うならそうなんだろう。
「時雨は？」
「謎の時雨レポートを残して失踪しました」
　ちくしょうあのリアルアンセムめ、厄介なことをしてくれやがる。そんなところも可愛いな、愛しているよ。
「他の白露型は？」
「各地に散りました」
「はー、ＸＩＩＩ機関だろどうせ！」
　分かってるよ、あの子達は黒幕ポジだ。
「誰がキーブレード持ってるの？」
「そのですね、そもそも、白露型が探究心の赴くまま、人の心の闇を具現化した化け物を作った訳で、対抗策にキーブレードとか勇者とかそういうのを用意してある訳ではないと思います」
　ははーん？
　そう来る？
「時雨ちゃんのことですから、モンスターを作って満足して、後は放置してたんじゃないんですかね」

「あり得るなあ」
「ここにある、断片的な時雨レポートを要約するとですね、『人間の精神を弄って遊んでたら化け物できちゃったんだけど、その化け物が逃げ出しちゃって増殖してるっぽいよ、ごめんねてへぺろ』みたいな感じですね」
ふむ、明石の手元にある時雨レポートを読んだ限りでは、確かに回りくどい書き方だが、研究の一環で人の精神を弄ってたら化け物ができて、それが逃げ出した、なお反省はしていない、ということが窺える。
おもむろにテレビをつける。
……『ご覧下さい！近日、世界各地に謎の黒いモンスターが……』
……『モンスターの出現により各国の流通が停滞しています。山手線、東海道線は大幅な遅延、羽田空港は運行を無期限停止……』
……『謎の黒いモンスターに襲われた人々が植物状態になる事件が相次いでいます、市民の皆様は外出を控え……』
……うん！
「やってくれた喃……（虎眼並感）」

取り敢えず緘口令を出す。
幸い、今回の事件の黒幕を知るのは元凶の白露型と明石と夕張、そして大淀だ。
世界規模で被害出てるからね、いかに白露型の管理がガバガバで不注意ヒューマンエラーであっても許されないことだよ。
まあそもそもヒューマンじゃないとか存在そのものがエラーとか色々な突っ込み正論は置いておこう。
今回の件はマジでやばいので誰にも言ってない。
まあ、世界は色々なことが起こるからね。
例えば、何十年か前の未確認生命体『グロンギ』の襲来や、悪の組織『テンプル騎士団』の暗躍、その他にも『ファンガイア』、『オルフェノク』、『ギャラクター』『シャドルー』『新しい血族』『真夜中のサーカス』『マルハーゲ帝国』『オルグ』『悪魔』『天使』『妖怪』……、挙げれ

ばキリのない邪悪が、世界を破壊しようとしてきた。
あれ？おかしいな、どれも俺が戦う羽目になった記憶があるぞ？
……いや、まあ、それはいいとして。このように、今までにいろんな奴らが世界を破壊しようとしてきたからね、今回のハートレスの件も、黙っていれば俺達の仕業とはバレないだろうさ。
俺も責任取ったりしたくないしね。
勘がいい艦娘は誰の仕業か気付いている節があるので、その子達にも緘口令。艦これだけに（激寒）。
バレたらマジで世界中から袋叩きにされちゃうからね、黙っておこう。墓の中まで持っていく秘密のコレクションが増えたよ！やったね旅人ちゃん！
「まあ黒井鎮守府はね、ディスティニーアイランドみたいなもんだからね」
「どちらかと言うとホロウバスティオンですよ」
そっか。
大淀に突っ込まれながらも俺は頭を捻る。
ハートレスにやられたら心が持ってかれる、それは原作通りだ。
時雨レポートを読む限りでは、ハートレスは人の心の闇から生まれたモンスターらしい。
それと、心の闇がやべーやつからはやべーハートレスが生まれるっぽい。
え？やばい。
うちの子は大半が闇属性だぞ？
闇との親和性があり過ぎて不味いのでは？
「そもそも、艦娘はその程度の化け物にやられる程弱くはありません。基本的に物理的に殴り殺せるのであれば、大半の艦娘は問題がないと思いますよ」
そうね、そうですよねはい。
俺は下手すると普通にやられる恐れがあるんだけど、艦娘は平気っぽいね。
「えーと、じゃあどうすんだ、俺は何をすれば良いんだ？」

「取り敢えず、失踪した時雨ちゃんを捜索してみては？」
「そうだね、そうしようか」
勇者でもなんでもないけどね、世界、救おうか。

日本、黒井鎮守府の周りを周る。
まあここはチュートリアルみたいなもんだろうし、平気平気。
『……』
オッ、ハートレスやん。
「ぬぅん！」
長門がハートレスを縊り殺す。
お、ターザンかな？
ゴリラに育てられてそう。
いや悪口とかではないですよ？けどあのパワーはもう本当に……、ゴリラを素手で殺すから……。
「ターザンさん？」
「む、長門だが」
違ったか、良かった、うちにターザンがいたらどうしようかと。
まあ、別にその気になればゴリラとも話せるし問題はないのだが。
「ええと、それで？」
「ああ、この黒い化け物が黒井鎮守府の庭にも出るようになってな」
ほう。
「私室とか、建物の中には出てないの？」
「そうだな、今のところ建物の中にはあまり出ていないようだ」
そっか、その辺も原作通りか。
それで？
「それで、その、大丈夫？」
「む、問題はない。何事かは分からんが、黒井鎮守府の警備は任せてくれ。街の方にも、何人かの艦娘が自主的に化け物狩りをしに行ったぞ」
「そう、怪我だけはしないでね」
「分かった」

良し、と。

そうして、世界を回る。

そして。

「記憶したか？ロクサス」

「江風ェ……!!」

ノリノリで現れる白露型。

何が記憶したか？だよこら！アクセル気取りか？

「誰がロクサスだよ全くもう」

「えへへ、その、ごめンな？今回の件をどうにかするために、白露型全員で世界を回ってるンだけど……」

「どうなの？大丈夫そう？」

「うン、大丈夫。そのね、そこら辺にいるボスっぽいのを倒せば発生は抑えられるみたいだから、強そうなのを倒して回ってるンだよね」

「手伝おうか？」

「いーの、いーの！」

そう言って江風は自分達でなんとかすると言い残して、闇っぽいのに包まれて消えた。ＸＩＩＩ機関ムーブやめろや。

一週間後。

「よし、ハートレスはいなくなったな」

復興が始まる世界。

良かった、大した被害は出てないらしい。

さて……。

「時雨」

「何かな？」

俺は時雨の頬っぺたをちょっと抓る。

「何やってるんだよ君は」

「いひゃいよ、ていとく」

今回は流石に許さんぞ。

「大丈夫だよ、ハートレスに心を奪われた人々は皆、心が戻ってきて元

どおりになったからね」
「結果論でしょそれは。そもそも変なもん野放しにしちゃ駄目でしょ???」
「それは……、まあ、済まなかったよ。ごめんなさい。今回は僕の管理が甘かったからね」
「よし、素直に謝ったなら許す。次から気をつけるように」
「うん」
はあ、疲れた。

３８４話　ネルソンの満腹な一日　前編

余はネルソンである！
「そう……（無関心）」
うう……、ウォースパイトめ、冷たいぞ……。
「いや、出会い頭にそんなこと言われても……」
もっとこう、ちやほやしてくれ。
「えー……」

さて。
黒井鎮守府に召喚されて暫く経つが、ここでの日々に余は満足している。
美味しい食事、快適な住居、十分過ぎるほどの給金、多過ぎる休暇、愛する男性、戦友達、豊かな自然、消費しきれぬ程の娯楽……。
この鎮守府には全てが揃っている。
余は、嬉しいぞ。
戦い続けたあの頃とは打って変わって、毎日が愉快な気持ちで過ごせる。
何より、食事が美味いのが良い。
祖国にはない、美味い食事が日々の楽しみだ。
朝、軽くシャワーを浴びて、身支度を整える。
黒井鎮守府の食堂は、午前七時、十二時、午後六時に食事が提供される。
しかし、開いているのは午前六時前から夜中まで開いているし、出入りは自由だ。
冷蔵庫の中の食料も、注意書きがないものなら好きに手をつけて良い、しかし食料を無駄にしたら厨房のボス、ホウショウに腰が抜けるほど怒られる、と言う決まりだ。
因みにヒエイは厨房には無期限進入禁止令が出ているそうだ。何でも、バイオテロ？がどうとか。
それはさておき、余は、朝からしっかり米を食べないと死ぬ体質に

なってしまった。
仕方ないのだ、黒井鎮守府は食事が美味い。
朝から食事をしっかり摂って、三食おやつ晩酌をしないと満たされぬのだ！
和食！
それがなくては始まらないのだ！

まず、余は、ウォースパイト、アークロイヤル、ジャーヴィスと共に、午前七時頃に食堂へ向かった。
余は、食堂の掲示板に書き込まれているメニューを見る。
メニューは多国語で書かれており、未だ英語しか読めない余でも安心だ。
メニューは多く、和洋揃って二十種類を超える品目があり、その中から好きなものを選ぶという方式になっている。
因みに、受付のホウショウは外国語もある程度話せるので、英語で注文しても答えてくれるぞ。
ふぅむ……。
では、これと……、これとこれ、そしてこれとこれにしよう。メニュー横の番号と、盛りの量を指定して注文。
盛りの量は小、中、大、特大、日本昔ばなしサイズの違いがある。
余か？
余は朝から腹ペコなので、もちろん、日本昔ばなしサイズだぞ！
因みに、日本昔ばなしと言うのは、日本のアニメーション作品のような、カートゥーン的な特大サイズのことだ。
主に戦艦や空母が頼む。
しかし、海外艦の多くと一部の艦娘は、朝はコーヒーだけ、ヨーグルトだけなどと言って、あまり食べない艦娘も多い。
フランス艦や、ムツ、クマノ、スズヤ、コンゴウ辺りは、朝はあまり食べないようだ。
まあ、その辺りは個人の自由だからとやかく言うことはないが。
少なくとも、イギリス艦は、朝食をしっかり食べないと調子が出な

いな。
さて、頼んだメニューは、と言うと。
日本昔ばなし盛りの白米、スズキのソテー、チーズ入りオムレツ、きゅうりの胡麻和え、ひじきと枝豆の炒め煮、キャベツと油揚げの味噌汁だ！
さあて、いただきます!!
まず副菜から攻めて行こうではないか……。
ひじきと枝豆の炒め煮だな。
ひじきと言う海藻と、枝豆、そして人参とちくわと言う魚のペーストを成形したものが、炒め煮されているようだ。
匂いからして、出汁と醤油……。これは和の味がするだろう。
すっかり使い慣れた箸でひじきを挟んで、口に運ぶ。
……ほう、これは！
醤油とみりん、出汁の風味が口一杯に広がるな！ちくわ本来の塩気や、枝豆と人参の歯ごたえと甘みもあり、飽きがこない！
すかさず、山のように盛られた白米を口へ運ぶ。
うむ、醤油の味と白米の味は実に合うな……。例えるなら、長年連れ添った老夫婦のようだ。余もＡｄｍｉｒａｌとこのような関係になりたいものだな。
そして次にチーズ入りオムレツだ。
箸で切ってみると……、ふむ、ネギとしらすが入っているようだな。とろりと漏れ出すチーズが食欲を増進させる。
聞くところによれば、今はしらすの美味しい時期……、所謂旬というやつらしい。
黒井鎮守府においては、季節感のあるメニューが基本で、旬の一番美味しい時期に、一番美味しい食材を艦娘に食べてもらいたいと言う、Ａｄｍｉｒａｌと厨房組の優しさが理解できるな。
肝心の味だが……。
うむ、美味い！
この卵のふんわり感！それに、ネギのシャキシャキとした食感と、しらすの旨味！そしてチーズ！

出汁の豊かな風味により、ソースをかける必要はないだろう。
これをおかずに、更にご飯を！
うーむ、美味い。
ここで味噌汁だ。
この味噌汁にもまた、旬のキャベツが使われている。
おお……、キャベツの甘みがスープに溶け込んでいる！
黒井鎮守府特製の合わせ味噌は癖がなく、単一の種類の味噌よりも複雑な味わいなのだ。
この味噌は味噌汁用に作られた味噌であるが故に、実に馴染む！
艦娘は出身地も国籍もバラバラであるが故に、皆が納得するものを作るのは難しかったと、Ａｄｍｉｒａｌと厨房組は語っていたな。
うむ、文句なしに美味いぞ。
さあ、そしてこれだ。
スズキのソテー。
これは、ニンニクと醤油の匂いがするな。
醤油は何にでも合うのだ。ニンニクと合わせたらもう、最高だぞ。
さあ、身をほぐして一口……。
おお！
素晴らしい味だ！
白身魚の淡白な味と、仄かに香るニンニクの風味、そして醤油！
上に乗せられた白髪ねぎもシャキシャキとして、更にそのピリッとした辛さが味を引き締めている！
こ、これはたまらんぞ！
ご飯を掻き込む！
ああ、美味い！
そしてここで箸休めにきゅうりの胡麻和えだ。
薄く切られたきゅうりをごまだれで和えたもののようだな。
一口、食べると……。
うむ！
新鮮なきゅうりの野菜らしい歯ごたえ、そしてごまだれのコクが、きゅうりのさっぱりさに旨味を追加する！

これは箸休めにもおかずにもなるな……、日本酒とも合いそうだ……。今晩は日本酒を飲もう。それと焼酎とハイボールもだ。
さあ、ご飯はまだまだある！
どんどん食べるぞ！
お代わりもするぞ！

さて、それでだがな。
余は……、艦娘は基本的には暇だ。
出撃はノルマ制になっているが故に、決まった数の深海棲艦を殺せば、あとは自由なのだ。
余も、ノルマは月の初めに達成していて、あとは暇である。
さて、となると……。
ウォースパイトは読書に励み、アークロイヤルは訓練やスポーツを、ジャーヴィスは他の駆逐艦と遊びに行ったり、コミックブックを読んだりしている。
余はどうしようか。
ああ、そうだ、映画を見よう。
余が眠っていた数十年間分の映画や小説、ドラマなどを楽しもうではないか。
それと、暇があれば一度イギリスに戻り、絵画や彫刻を見に行きたいな。
他にも、音楽鑑賞もしたい。
ああ、それと、自然に触れるのも良いな。
この前、首輪付きと呼ばれる謎の生命体が支配する裏山にハイキングに行ったが、中々楽しかったぞ。
……それにしてもあの首輪付きは何者だ？
犬でも猫でもない白い獣……。
まあ、もふもふで可愛らしいのだが。
可愛らしいのだが……、なんの生き物だ？
農耕をしていて、家畜の管理などもしている様だが……。
獣にしては知能が高いようだ。

まあ、Ａｄｍｉｒａｌが気にしていないなら、それで良いか。

さあ！
昼ご飯の時間だ！
さあ、メニューを選んで……。
もちろん盛りは日本昔ばなし。
昼はこれだ。
天ぷらそば!!!
ヘルシーなメニューだが、付け合わせにみょうがの甘酢漬け、新じゃがの煮っころがしとアジのなめろう、油揚げ餃子も付いてカロリーも糖質もばっちりだ！
ん？ああ、余は太らんぞ。
艦娘は基本的に太らん。
太る艦娘は明らかに食べ過ぎだ。
さあ、まずはそばから攻めるぞ。
蕎麦は伸びやすい故、最初に蕎麦、そしておかずを楽しみ、メインの天ぷらを食し、最後にお代わりした蕎麦で締める。これだな！
まずは蕎麦本来の味を……。
麺だけを少し口へ運ぶ。
……おお。
鼻に抜けるこの独特の風味！これだから蕎麦はやめられないな！
そして、つゆに麺を半分ほど浸して、一気に啜る！
美味いっ!!!
打ちたてらしい豊かな風味と、つるんとした喉越し！いくらでも食べられるな！
さあ、次はアジのなめろうだ。
これは……、よしよし、美味い、美味いぞ！
アジが美味いのだ。味噌と生姜のこの香り！
いやあ、白米が欲しくなるな。
新じゃがの煮っころがしは……？
うむうむ、美味い！

皮まで美味しい新じゃが、砂糖多めで甘みがある。
艦娘は女故か、甘い物好きなところがあるからな。甘めの味付けが多いのだ。
そして、隠し味にバターを入れているようだな？
このバターが洋のテイストを取り入れて来ていて、海外艦にも美味しく感じられる要因になっているだろう。
箸休めにミョウガを……。
うーむ、この苦味だ。
この苦味が良いのだ。大人の味だな。
しかし、甘酢のお陰で食べやすく、駆逐艦にもオススメできる絶妙な味になっている。
そして油揚げ餃子だ。
油揚げに餃子の具を入れて、フライパンで焼いたものらしいが……？
……よし！美味いな！
普通の餃子の具とは違い、旬のキャベツを多目に入れてあるようだ。挽肉も鶏ひき肉でヘルシーな仕上がりだな。
しかしこれは序の口だ。
何せメインは天ぷらだからな！
さあ、天ぷらを食べていこう。
大根おろしを乗せた車海老を、つゆに浸して……！
さく、ぷつん！
揚げたて天ぷらの衣がさくさくと、海老の身がぷつんと！
つゆで甘じょっぱくなった衣と、ぷりぷりの海老が口の中で踊るようだ！
そして一押しはこれだな、かぼちゃの天ぷら！
これは塩でいただこうか……。
むう！
ねっとりとしていて、それでいて濃厚な甘みが！
美味い、美味いぞ！
余は甘いものが好きなのだ！

ミョウガの天ぷらとキスの天ぷらも実に味わい深い！
ここから更に蕎麦だ！
今度は薬味を入れて……！
おお、美味い！

さて、次は本を読んで休んだ後、三時におやつを食べるぞ！

３８５話　ネルソンの満腹な一日　後編

ティータイムだ。
ふふふ、ふはははは、はーっはっはっは!!
今回はな、あらかじめＡｄｍｉｒａｌに駄々をこねて、フルーツケーキを作っておいてもらったのだ！
旬のフルーツ盛りだくさんのロールケーキだ！
クリームもたっぷりなんだぞ！
ウォースパイトに紅茶を淹れてもらい、さあ食べようか！
「一切れちょーだい！」
むむ、ジャーヴィスめ！仕方ない、一切れだけだぞ！

風呂にも入って……、さあ、今度は夜ご飯の時間だな！
因みにＡｄｍｉｒａｌも何故か自然に余と同じ湯船にいたぞ。
この黒井鎮守府は混浴なのか……？
詳しく聞いたところ、男性用の風呂もあるが、艦娘がＡｄｍｉｒａｌと混浴したいがために男性用の風呂を閉鎖したらしい。
まあ、余も混浴したいから別に良いぞ。
Ａｄｍｉｒａｌの肉体美、あれを見たか？
彫刻のような筋肉に刻まれた傷の数々！
色気があって本当に素敵だ……??
おっと、さて、晩ご飯の時間だな、よしよし。
メニューは、と。
おお！
これは！
「あ！今日は洋食だー！」
ジャーヴィスの好物の洋食だ！
どれどれ、私は……。
オムライス、デミソース煮込みハンバーグ、クリームシチュー、ポテトサラダ!!
……むむ?!

謀らずしてお子様ランチのようなレパートリーに?!
仕方ないな、みんな好きだからな。
さて、まずはオムライスから行こうか。
大きな大きな日本昔ばなし盛りのオムライス！１ｋｇはあるだろうな、まるで枕みたいだ。まあ、お代わりする予定だが。
これに大きめのスプーンを、えいっ！
おお、赤いケチャップの中から赤いチキンライスが……!!
チキンライスは少し大きめに切られた野菜と鶏肉が！
が、我慢できんぞ！
はむっ！
は、はむぅ……!!
う、美味い……、な、なんという美味さだ……。
チキンライスの味が完全に黄金比で、いくら食べても飽きがこない!!
この程よいケチャップの酸味がスプーンを進ませる!!
チキンの風味も実に良い!!
肉とご飯はフルタカとカコのような最高の相棒なのだ。
そのコンビネーションたるや、計り知れないな！
卵もバターの風味が効いていて、良いアクセントになる。しかもトロトロふわふわで美味しい。
さあ、次はクリームシチューだ。
ヨーロッパのシチューといえば、アイリッシュシチューなのだが……、日本でシチューといえばこのミルクやホワイトソースを使ったクリームシチューを指すらしい。
シチューの日本代表ということだな。
その味は……？
……ふふ、知っていたとも。
前も味わったことがあるからな！
そう、この味だ!!
濃厚なミルクの味に溶け込んだ、野菜と鶏肉の味！このとろみ！
溶けかけのジャガイモを口に含んで舌で押しつぶすのだ！すると、

ねっとりと潰れて旨味が口の中に広がる……！
この鶏肉もいい！スープに旨味を流し出しつつも、スープを介して野菜の旨味を吸って、自らの肉としての旨味をしっかり残しつつ、他の具材と一体になっている！
我らが黒井鎮守府の如く、それぞれの具材が個性を活かしつつも上手くまとまっているのだ！相互に干渉しあい、更に旨味を高め合っている!!
このシチューは余れば後でグラタンになるな。その時も楽しみだ！
そしてポテトサラダだ。
やはりここでも新じゃがが活きるな。
数百グラムの特盛ポテトサラダをスプーンですくって一口。
むおお！
これはっ！
新じゃががよく潰されていて、自家製の美味しいマヨネーズと融合！舌触りはねっとりとしていて、その中に人参、コーン、きゅうり、自家製ハムのハーモニー!!
噛み締めればプチリと弾けるコーン！しゃきっとした人参ときゅうり！そしてハムはそこに塩気と肉の味を追加してくる！
か、完璧だ、完璧なポテトサラダだ。
素晴らしいぞ。
そう、そして！
煮込みハンバーグだ！
大きなハンバーグに、溢れんばかりのキノコとデミソースを！
フォークを刺して、ナイフを入れる。その時点から、余の中に声が聞こえた気がした。
『これは美味いぞ』と。
簡単に切れるのだ。
恐らくは箸でも切れるであろう、柔らかなハンバーグ。
これが、美味しいデミソースで煮込まれている……?!
そんなもの、最早犯罪ではないか!!

ええい、確かめねば！
一口、いいい!!!
濃厚なデミソース、キノコの旨味。そして肉汁が口の中に流れ込んでくるっ……!!
この肉汁だ！余は料理の知識など殆どないが、この美味い挽肉の肉汁を封じ込めるのに何をしたのか、全く見当がつかないぞ！
Ａｄｍｉｒａｌは魔法を使えると言っていたが、なるほど、この料理も魔法の一つか！
付け合わせのグラッセ一つとっても、丁寧に作られており、美味しいことがよくわかる。
あれだけの量とクオリティを両立できるのはもう、冗談抜きで魔法なのではないか……？

さて、夜は何をするか……。
決まっている、晩酌だ。
ラム酒もいい、ラム酒も良いのだが、今日は朝からずっと、ハイボールと日本酒で行くと決めていたのだ！
Ａｄｍｉｒａｌ！飲もう！今夜は飲もう！
「オッ良いねえ、おじさんはウイスキーとチェイサーにウォッカ飲むよぉ～」
流石だなＡｄｍｉｒａｌ。酒の口休めに酒を飲むとは、圧倒的強者だ。
よーし、私も大ジョッキでハイボールだ！濃い目にしてくれよ、ホウショウ！それと日本酒も冷やで頼む！
「はい、ネルソンさん。おつまみはどうしますか？」
うーむ、迷うな……。おすすめをもらえるか？
「ええ。提督はどうしますか？」
「俺も今日のおすすめを適当に持ってきてくれるかな？」
「はい、ご注文、承りました。少々お待ちくださいね。はい、こちらはお通しの枝豆です」
よし、枝豆だー！

うむうむ、このほのかな塩気がたまらんのだ。
そして十分程、Ａｄｍｉｒａｌに酒の薀蓄を話してもらうと。
「はい、お待たせしました。イカゲソの唐揚げと鰹のたたき、アボカドのウニ和え、チキン南蛮、ピーマンのじゃこ炒めです」
おお！実に良い！
重めで脂っこいつまみならば、いくらでも酒が飲めるからな！
まずは揚げ物！
ハイボールと言えば揚げ物ではないか？
「分かるわ」
Ａｄｍｉｒａｌもそう言っている。
イカゲソの唐揚げにレモンをたっぷりかけて……、ああ、余はレモンをかける派閥の者だ。
これを！
さくっ。
こりこり。
あぁ～、たまらんぞ！
このコリコリ感がたまらんのだ！
脂っこくなった口をハイボールで洗い流す。
っくぅーーー!!!
美味いっ！
どうして酒はこんなに美味いのだ？
世のどんな偉人よりも、酒を初めに作った奴が偉いだろうな。
この角瓶を濃い目のハイボールにして、少しのレモンを絞り氷でキンキンに冷やして……。
喉を鳴らして飲むっ!!!
因みにＡｄｍｉｒａｌは響をラッパ飲みする。
「おっと、チェイサーも飲まなきゃな」
……チェイサーとは、度数が高い酒を飲むときに飲む水のことではないのか？
「このウォッカを見てごらんよ、透明だろ？水と同じ色だ。だから水と一緒でアルコールはゼロパーセントなんだ」

何だその謎理論は。
まあ良い。
次にアボカドのウニ和えだな。
んむ、これは！
ねっとりとしたアボカドのバターのような旨味！そこに新鮮なウニの海の味が調和している！
うまぁい！
ハイボールぐびぐび。
鰹のたたきは日本酒で行こうか。
麒麟山と言う、赤身魚の刺身に合う日本酒らしいが……。
おお、これは確かに！
刺身に負けない強めの味だな！これはこれで美味いものだ！
鰹のたたきも実に美味い！
ニンニク醤油で薄切りのニンニクごと食べると……!!
くぅー、たまらんな！
ピリッとしたこの辛さを包み込む、油と魚肉の味！
美味い、美味いぞ！
そしてこれはどうだ？
ピーマンとじゃこ！
うむ、うむ！
ピーマンは苦い。
しかし、その苦味がたまらなく美味いのだ。
そして、その苦味に隠れた甘みも良い。じゃこの風味と醤油の塩気で、しんなりしたピーマンの旨味が口いっぱいに広がるな。
ハイボールぐびぐび。
む？
ハイボールがなくなったぞ、ハイボールおかわりだ!!
さて、チキン南蛮はどうだ？
このたっぷりかかったタルタルソース……、食欲をそそるな。
どれ、タルタルソースをたっぷり乗せて、一口。
むおお！

美味い!!!
国産の鶏肉のこの旨味……!
肉はジューシーで、タルタルソースもこってり!
この油の暴力がたまらない!!!
ヘルシー志向なんぞ笑わせる!
ベジタリアン?ヴィーガン?愚か者め!肉を食え!
はい、ハイボール。
……
……
……
はっはっはは!
よはなー!よはなー!
つよいんだぞー!
「おっ、そうだな、よしよし」
んふー!
もっとなでろー!
「そろそろお休みしましょうねー、ネルソンちゃーん」
んにゃー!まだのむー!
「もう、しょうがないなあ、あとちょっとだよー」
んへへー!

３８６話　下世話な話

「えー、今回はフェチ的な内容の話です。あらかじめご了承ください」
俺はそういうのに配慮して、進む。
いやほら、最近はね、ポリコレとかフェミとかに配慮しないと叩かれちゃうからね……。
あらかじめ言っておくけど、そういう話になるから、気に入らない人は見ないようにしようね。
俺なんてあてにしちゃダメ、自己防衛だよ。

さて……。
別に俺の性癖とかそういうのではないのだが、単純に気になることがある。
それは。
「艦娘って生理現象どうなってんだ？」
艦娘は例えるなら、受肉した英霊のような存在。
生理現象はどうなっているんだろうか？
ちょっとばかし勇気がいることを聞くぞ。
しかし今の俺は勇者王、勇者王なんだ。
「白露、ちょっとおいで」
「うん？なあに？」
俺は白露を脱がせて、バンザイさせる。
ふむ、つるつる。
「生えてない」
「あ、脇の毛？私は生えてないよ」
私は？
ほーん。
ほーん。
ほーん。
下はどうだろうか？
下着めくり。

あー、うーん？
気持ち生えてるな。
「下の毛が気になるの？」
「うん」
「私はちょっとしか生えてないよ」
ほーん。
「山風は結構生えてるよ」
ほーん！
山風は結構生えてる。
山風は結構生えてる。
ほーんほーん。
「ちょっと山風呼んで」
「うん」
白露が『瞳』を使って働きかける。すると、五秒後には山風が異次元空間からぬるっと現れた。この前のＸＩＩＩ機関ムーブが尾を引いていらっしゃるな。
「なあに、提督？」
「ちょっとお願いがあるんだけど」
「うん、なんでも言って」
「恐縮だが、パンツの中を見せてくれないか？」
Ｗｏｕｌｄ　ｙｏｕ　ｋｉｎｄｌｙ？
「……えっち」
すまない。
本当にすまない。
山風はスカートをたくし上げる。
俺は山風のパンツを下げる。
ふさっ。
ふむ。
ふさっ。
「剃らないの？」
「うん。別に良いかなー、って」

ほーん。
さっきから俺ほーんしか言ってないけど、今回はギリギリを攻めているから、あまり詳細に描写したりするとね、ね？
まあ山風はふさっ、って感じですねえ。
ふむ。
「母乳とかは出る？」
「まあ、その気になれば」
その気になれば出るのか。
「こんなこともできるよ。んぅ……」
山風はぶるりと震えてから、上着をめくる。
するとそこには。
「わあグロい」
腹部に口ができていた。
手を突っ込んでみる。
「あは⁇いただきます、提督⁇」
「あ」
あーあ、肘から先を食い千切られちゃったわ。
痛えなあもう。
山風の腹部が脈動する。
俺の腕を咀嚼しているようだ。
「提督、美味しいよ⁇」
「そっかぁ」
そもそも白露型に聞いたのが間違いだったなー。
白露型はもう殆ど、艦娘ではなく一種の邪神、上位者になっているからな。
身体の形を変化させたりするのは簡単だろう。
「トイレとか行く？」
「白露型は行かないよ」
ほーん。
「でも、出そうと思えば出せる、と思う」
ほーん。

「ちんちんとかも生やせるよ？」
「そんなことしなくて良いから（良心）」
申し訳ないがふたなりはＮＧ。

まずね、やっぱりね、白露型に聞いちゃ駄目だわ。
白露型は自己を変容させられるから、毛がどうとか排泄がどうとかって話じゃないんだよね。
さあ、次行こうか。
んー。
あ。
「アーク」
「む、何の用だ？」
アークロイヤルはパンツルックのイケメン風ファッションだ。
「アーク、ちょっとおいで」
「ああ」
アークを自室へ連れ込む。
「アーク、お願いがあるんだけど」
「何だろうか？Ａｄｍｉｒａｌの願いとあらば、私は何でも答えると誓おう」
「脱いでくれ」
「……はぇ？」
「服を脱いでくれ」
「あっ、えっ、あっ、わっ、そのっ、わ、分かった!!」
脱いでもらった。
「ブ、ブラもか？」
「ブラもだ」
「パ、パンツも？」
「パンツもだ」
「う、うぅ……」
ヨシ！
「はーい、バンザイしてバンザーイ」

「む、胸が見えてしまうだろ！」
「気にしなくて良いよ、Ｒ１５だから乳首は謎の光で見えないようになってるから」
「何の話だ?!」
「良いから脇見せろやー！」
腕を上げさせる。
「くっ、殺せ！」
はあい、くっころいただきましたー。
どれ、脇は……？
「剃ってるね」
「当たり前だろう！」
下も見る。
「剃ってるね」
「だから、当たり前だろう！」
ふうむ？
「普通は剃るだろう、常識的に考えて」
「そうなの？」
「剃らないと見た目が良くないだろう」
まあ、そう、か？
生えてたら生えてたでそれはそれでエロいんだけどねー。
「……まあ、Ａｄｍｉｒａｌが剃るなというなら、その、剃らないが」
「いや、剃って良いと思うよ」
「しかし、アカギは剃ってないぞ。というより日本の艦娘は剃らないようだな」
ほーん。

「赤城」
「はい？」
「ちょっとおいで」
「はい」
お姫様抱っこ。

「あらあら」
　そのまま俺の部屋のベッドにぽーい。
「脱がせるよ」
「ええ、どうぞ」
　袴するり、上着ぽい。
「あのさーーー」
「はい？」
「褌とサラシはやめようよ」
「何分、これが一番落ち着くので……」
　まあ、無理強いはしないけどさ。
　下着もぽい。
「うひゃー！おめぇ、ぺぇぺぇでっけぇなぁ！オラたまげちまったぞ！（悟空）」
「そうですねえ」
「でもこれ、ちょっと垂れ……、いや、よそう」
　胸揉み。
「んっ??」
「うお、母乳……!?!」
「お忘れですか？艦娘は前に、明石さんの謎の薬で母乳を出せるようになりましたよ」
　ええぇ……？
「お飲みになりますか？」
「いえ、私は遠慮しておきます」
　母乳、出るんだ……。
　どれ、脇は？
　……。
「剃りなさーい！（しかるたびびと）」
「面倒でっい……」
　下の毛は？
　……。
「整えようね」

「面倒でつい……」
もー！
まあいいや。
赤城はそこら辺が逆に良いんだよな。
このだらしない身体がね、逆にね？
垂れ気味のデカ乳、ぽっこりお腹、大きなお尻に太もも、剃ってない毛と濃厚な女の匂い。
たまらねぇぜ。
「赤城！」
「はあい、提督？」

「いくぅ、いくぅ……」
曖昧な状態で放浪する俺。
「はーい！イクなの！」
「はい、バンザーイ」
「？バンザーイなの！」
生えてない？
「剃ってる？」
「剃ってるの」
スク水ずらし。
生えてない。
「剃ってる？」
「剃ってるの」
「あと気になったんだけど、海の中で排泄とかどうしてるの？」
「我慢してるの」
ほーん。
「作戦時間は一日くらいあるけど、我慢できるの？」
「できるの。艦娘はそこら辺ちゃんとしてるの」
そうなんだー。

大体わかった（デュケイド）。

「因みに、提督は？」
　大淀が聞いてくる。
「俺も白露型と同じ感じだよ」
「実際確かめても？」
「まあ、良いけど」
　パンツをめくられる。
「ふむふむ、これは……」
「大淀？」
「えい」
「大淀?!」
「あむっ」
「大淀ー!!!」

３８７話　登場人物紹介　前編

『黒井鎮守府、登場人物紹介』
　僕は、首からそう書かれたプラカードを下げさせられて、ハンディカメラを持たされた。
「まあほら、時雨は次期主人公だから。艦これ初心者にも優しい（大嘘）艦これの登場人物紹介ムービーを撮ってきてもらうよ」
　流石だよ、提督。
　この僕の『瞳』を以ってしても、何を考えているのか全く分からないよ。
　ああ、いや、表面的な思考や感情は読み取れるけれど、どうして僕にホームビデオを撮らせようと言う考えに至ったのかが全く分からない。
　次期主人公とは？
「いや一期は吹雪で如月が悪堕ちしたから。悪堕ちも嫌いじゃないけど俺は艦娘には幸せになってもらいたいんだよ（半ギレ）」
　んー、分からないな。
『瞳』で提督の心を覗く。『瞳』により、提督の思考、心の声を読み取る。
『かにかま』
　んー。
『ドライセンって茹でたら赤くなりそう』
　んー。
『あ、冷蔵庫に鶏皮余ってたし唐揚げにして食おう。鶏皮の唐揚げ美味いよね、あれあると酒が無限に飲める。そう言えば時雨、ウイスキーってあるじゃん？あれ、麦茶と同じ色してるでしょ？だから麦茶と同じでノンアルコールなんだよ。これが最近俺が編み出したノンアルコール理論なんだけど、どう思う？』
　どう思う、って……。
　少なくともウイスキーはノンアルコールではないよ。
「いや分かんないでしょ？飲んでみなきゃ分かんない、今から飲むか

ら、今から飲むから……。ぐびっ、ああー！これはノンアルコールですわ！だから昼間から飲んでも平気だよなぁ！」
まあ、提督が幸せなら僕はそれでいいよ。
「時雨優しいからすこ。じゃあそのまま鎮守府回って、登場人物紹介して、主人公の貫禄見せつけてＩＫＥＡ!!!」
ああ、そうするよ。
さて……。
何をすればいいのやら。
矮小な僕程度では、提督の考えを理解することができないからね。
僕の理解した範囲では、黒井鎮守府のメンバーを紹介する動画を作成しろ……、と言うことだと思ったんだけれど。
ふむ、どこか外部に向けた宣伝素材にでもするのかな？
なら、撮っていこうか。

「む」
適当に切り揃えられた長い黒髪、発達した筋肉、高い身長。
おや、長門さんじゃないか。
「時雨か。何々……？黒井鎮守府、登場人物紹介？」
ああ、提督に任されてね。
「ほう、そうか。何かは分からんが、提督の命令ならば励むんだぞ」
もちろんさ。
さて、長門さんか。
黒井鎮守府でも最強格の一人と謳われる艦娘だね。
パンチ力は数百トンと言われており、大抵の深海棲艦なら掠っただけで挽肉にする殺人的なパワーが特徴だ。
また、姫クラスの主砲の斉射でも殆どダメージを受けない防御力も評価できるね。
しかし本人の人格は、意地を張る割には甘えん坊でずぼらだ。
提督不在の際の戦闘指揮を執る有能な面もあるが、霊的存在に怯えたりなどと、いまいち締まらない印象だね。
基本的に暇を持て余している艦娘は色々と趣味があるものだけど、

長門は文化的な趣味はあまりなく、戦術論について書かれた本をたまに読むくらいで、トレーニングに模擬戦、土方のアルバイトをして過ごしているようだね。
「はぁい、時雨ちゃん」
やあ、陸奥さん。
姉の長門とは打って変わって教養のある美女、陸奥さんだ。
陸奥さんはセレブといっても違和感のない、高級感のある服装とそれに着られることのない品性、品格がある。
性格も淑女然としたサイコパスで、提督を鎖に繋いで飼いたいと公言している。
黒井鎮守府においては、まともなサイコパスとして信頼されているね。

おっと、次は……。
「あら？」
黒井鎮守府でも屈指のサイコパスと噂される、美しい黒髪に黒縁のメガネの女、大淀だ。
「こんにちは、時雨ちゃん。何事ですか？」
ああ、提督の遊びさ。
「そうですか……、時雨ちゃんは提督に遊んでもらえて羨ましいですねえ。そうだ、私も提督に全裸で抱きついてみようかしら」
いつもやってるじゃないか。
「……それもそうね」
こんな感じだけど、デスクワークの出来は鎮守府で一番なんだ。プレゼンから会計、応対、なんでもこなす。
にしても……。
下着くらい履いたらどうだい？
「すぐに濡れてしまうので、履く意味があまりないんですよ」
まあ、大淀はサイコパスの度合いはトップクラスで変態だけれども、分かりやすいタイプの変態なので問題は特にない。

休憩室へ。
「もぐもぐ……」
休憩室の冷蔵庫周辺は空母の領域だね。
日に成人男性の数十倍から数百倍のカロリーを摂取する空母達は、冷蔵庫から提督が作った菓子類を取り出して、思う存分食べるんだ。
また、空母は基本的に、食欲と性欲がリンクしているところがあり、提督を見つけると愛の言葉を囁きながら提督の肉を喰い千切る。
確かに、提督の血肉は正に甘露だが、人外の肉だ。喰らえば喰らうほどヒトからかけ離れる。
しかし、艦娘はヒトにあらず。化け物がより悍ましい何かになろうと、なんの問題があるのかな？
現在は空母達も『変異』し、見てくれは人型だが、本質は魔性に寄った。
元々艦娘は神霊だが、提督の血肉を喰らい続けた空母達は祟り神に近しい性質を持ち始めたようだね。
空母以外にも、他の一部の艦娘は、提督の血肉を喰らい続けた結果、荒神や魔神に近付いたようだね。
「あら、時雨ちゃん？食べるかしら？」
ケーキを1ピース差し出してくる赤城さん。
痩せ型や筋肉質が多い艦娘の中で最も体脂肪率が高い黒髪の和風の美人。
提督がよく腹の肉を揉んでいるところを見かける。
ダイエットのために色々やらされているようだが、結果は芳しくないね。
折角なのでケーキをいただく。
「美味しいですねー」
赤城は基本的にいつ見ても何かを食べているように感じる。
まあ、最低限は訓練や仕事をしているらしいから、僕から言うことはないね。
おや。

二つに縛った長い金髪、少女と大人の中間くらいの見た目。
やあ、プリンツさん。
「ねえ、貴女、私の王子様がどこにいるか知らないかしら？」
ふむ。
提督ならあっちだよ。
「本当？教えてくれてありがとう、兵隊さん」
時雨だよ。
「ああ！そうだった！時雨ちゃんだよね。王子様以外のことにはあんまり興味がないから、忘れちゃってました！ごめんね？」
ふむ……。
一部のドイツ艦は白痴のような状態だ。妄想の世界の中に生きており、自分を、森の中の白亜の城の姫君だとでも思っているようだね。
しかし、戦闘能力は高く、知能に問題がある訳でもない。
ただ、致命的に、『ズレている』だけだ。
黒井鎮守府においては問題ない。

転移。
外国の郊外に点在する、アサシン教団の施設内に入る。
「あら、時雨じゃない。どうしたの？」
癖のある茶髪と少々鋭い目つき、バランスが良く適度に絞られた均整のとれた肉体、提督が言うには『先輩の美人なＯＬ感』のある美女。
アサシン……、妙高型の足柄だ。
何、ちょっと君達の仕事の見学をね。
「ふうん。まあ、時雨なら変なミスしなさそうだし、連れて行ってもいいわよ」
妙高型と言えば、四人で怪しげな暗殺教団に手を貸し、日夜、悪の秘密結社との戦いを繰り広げている。
殺人をハンティングくらいにしか思っておらず、暗殺の標的なら女子供でも平気で殺す、心無い殺戮機関だ。
まあ、艦娘なんてみんなそんなものさ。心なんて殆どない。あるのは提督への愛だけさ。

さて、次は……、どうしようか？

３８８話　登場人物紹介　後編

次は潜水艦かな。
潜水艦なら……、私室だろう。
ノックする。
「はーいなのねー」
最近は暖かくなってきたとはいえ、スクール水着とは頭がおかしいね。その上で、ツインテールのような髪型と、人の身ではあり得ないブルーの髪、下品な乳肉。
潜水艦のイクだ。
潜水艦は、かつてこの鎮守府が無能なクズに支配されていた頃に、毎日昼夜を問わず酷使されてきた。
故に、今では、だらだらと怠けるのが好きで、最低限の訓練や出撃以外では、潜水艦同士でつるんで、遊んでいることが多い。
「イクー、誰でちかー？」
「時雨なのねー」
「時雨？白露型のボスが潜水艦に何の用でちか？言っておくけど怪しげな人体実験に付き合う気はないでちよ」
全く、僕を何だと思ってるんだい。
「化け物」
君達だって艦娘だ、僕の同類、同じ化け物じゃないか。
「度合いが違うでち。白露型と比べたら他の艦娘なんて……。人の形をしているだけ、人間に近いでちよ」
僕も今は人の形をしているんだけどね。
「正体は外宇宙の神の癖によくもまあぬけぬけと……」
潜水艦は、提督を神のように崇める集団で、提督を、父であり、兄であり、恋人であると思っているらしい。
一般的な艦娘と同じ、提督の狂信者だ。
提督の邪魔をするものは例え神でも殺しにかかる。
それと海外艦。

海外艦の多くは、旅行好きでグルメ気取りの遊び人だ。
提督におねだりして、高価な車を買ってもらい乗り回すアイオワさんや、昼間から酒ばかり飲んでいるポーラさんなど、様々だ。
まあ、全員、毎日が夏休みと言った雰囲気で過ごしていることは間違いない。
遊戯室へ行けば、海外艦達が飲んだくれながら、ボードゲームやビリヤードなどに精を出している。
全員、月に一回くらいのペースで海外旅行にも行っているそうだ。
いいご身分ってやつかな。
「ここをこうすれば……、ｃｈｅｃｋ！」
「ならここはこうね」
「ああっ」
チェスをしながらお菓子を食べるアイオワさんとサラトガさん。
しかし、一度戦闘となれば、私情を挟まずに命令を忠実に遂行する戦闘機械になるのが、海外艦だ。
オンオフの切り替えが驚くほどに上手い。

そして厨房組。
鳳翔さん、間宮さん、伊良湖さん、速吸さんの四人。
提督と共に黒井鎮守府の三食おやつおつまみを作る、料理人集団。
その腕前は一流で、望めば一流のフランス料理から懐石料理まで幅広い範囲の食事が提供される。
本人達は、自分の腕前に満足していないらしいけど……、正直このレベルまで達すると、個人の好みのレベルになると思う。
艦娘の中でも最も味覚に優れ、ミリグラム単位の塩の量を言い当てることが可能。
「あら、時雨ちゃん？どうしたのかしら？」
ああ、鳳翔さん。
少し撮影させてもらうよ。
「良いですけど、厨房に入るならちゃんと手を洗ってくださいね？」
ああ、もちろん。

流石は艦娘。
その筋力で何百人分という大量の材料をまとめて調理している。
「今日も美味しいものたくさん作りますからね、楽しみにしててね」
ありがとう、鳳翔さん。
鳳翔さんは艦娘の中でもまともな方で、時に頑固で考え方が古く、最新技術を使いこなせない面があるけれど、優しく、謙虚で、人間性は黒井鎮守府でもトップクラスに高い。
黒井鎮守府の良心と言えるね。

次に工廠組。
工廠は、明石さんと夕張さんの巣だ。
異星異次元、未来技術を習得した彼女達は、黒井鎮守府を改造し、移動要塞宇宙戦艦にし、警備システムやロボットの配置をして、更に、黒井鎮守府近海を警備する無人兵器群の管理もしている。
工学的観点においては、僕達白露型を大きく上回る知識や技術を持ち、僕達と技術交換などをよくしている。
知能は高いが、基本的に思いつきで行動するので、よくおかしな発明品で鎮守府中を騒がせるが、縁の下の力持ちと言えるポジションにあるので、あまり強くは言えないね。
よく考えてみてほしい。
炊事は、厨房組の超人的な調理能力、速度でどうにかなっているが、他にも洗濯や掃除、黒井鎮守府という施設の管理維持及び警備。
その全ての責任者なのだ。
洗濯や掃除はお手伝いロボットが、管理維持や警備もロボットがと、全てをオートメーション化しているとは言え、日々働いているのは間違いない。
皆、二人の働きには感謝している。
しかし、その功績を上回る程に、迷惑をかけることが多いね。
先日は警備ロボットのＡＩが狂い、暴れ回る事件があったけど、あれの原因は、夕張が作ったコンピュータウイルスらしいからね。
作ることも好きだが、それ以上に壊している印象かな。

「あら時雨ちゃん。魔力炉心の様子でも見に来たのかしら？大丈夫！この前みたいに暴走はしないから！」
前回の魔力炉心の暴走は、明石が出力を向上させようと、僕達の調節した魔力炉心に手を加えたことが原因だった。
まあ、頼むから二度とやらないで欲しいよ。

そうだね、工廠と言えば、睦月型も技術力が高いね。
睦月型は、霊的なエネルギーで戦う艦娘においては珍しく、科学の力で戦う。
化学炸裂弾、エネルギー砲、レーザー、ミサイル、ライフル……、電子制御された銃器を好んで使用するみたいだね。
僕はあまり機械に詳しい訳ではないけれど、その破壊力は素晴らしいと思うよ。
「当然だ！私はナンバー9、菊月だからな。イレギュラーは排除する」
感情表現が豊かなように見えて、内側は空虚なところも面白いね。
殺戮機械の癖に、狂愛と言う名のバグを抱えている矛盾した機関。
まあ、化け物さ。

そして……。
僕達、白露型。
真理を追求する学徒であり、血肉に異形を宿した邪神の一種である。
研究や実験を行なっているけど……、それが黒井鎮守府に直接的に役に立っているとは言えないね。
むしろ僕達の活動は、黒井鎮守府の艦娘としての仕事よりも、探索者としての仕事の方が多いかもしれない。
普通の人間は知らないし、知れば正気ではいられない事実。
この世界は、外宇宙の侵略者や邪神達に狙われている。
日夜、狂った邪教徒が邪悪な神々を呼び出そうと事件を起こし、異界から漏れ出た怪異が無辜の民を食い荒らす。異形の神々は荒ぶり、平穏な世界を破壊する。

僕達が動かなければ、世界が滅ぶ……、とまでは言わずとも、都市が壊滅する、島が地図から消えるなどの被害があるだろう。
だから僕達は人知れず世界の裏側で戦い続けている。
ああ、勘違いしてはならないのは、僕達は、人間なんて死のうが食われようが脳だけパッケージングされて連れ去られようが、一切どうでも良いんだ。
人間の生み出す文化は尊敬できるが、人間そのものはどうなっても構わないのさ。
でもまあ、人間が滅亡すれば提督が悲しむからね。
放っておけば人類に打撃を与えるような存在を放置することはできない。
多少は働かないとね、僕達も。

最後は……、提督かな。
「お、終わった？」
うん、一応。
「最後は俺の紹介？」
うん。
提督は、僕が知る限りで最も破綻した化け物だよ。
「俺は人間だよ」
ある時は吸血鬼に血を吸われ同朋にされて、ある時は悪の秘密結社に肉体を改造されて、またある時は異形の神々に脳をいじくり回されて。
通常の人間なら形が保てないレベルの投薬、変異、精神負荷を受けつつも、人間の形を保っている。
本当に『普通』の人間であるならば、全身は人ならざる魔物の姿になり、精神は分裂し狂い発狂する筈なのに。
普通の人間なら、人間の形を保てずに、古今東西のあらゆる化け物の要素を持つキメラになる筈なのに。
普通の人間なら、精神は破壊され、多重人格、廃人、白痴になる筈なのに。

提督は、三千世界の狂気に触れて、深淵を渡り歩き、人間性を失い、啓蒙を得て、光を浴びて、それでも尚。
人の形を保っている。
人間のふりをしている。
愛を語っている。
その身は既に人にあらず。
本質は僕ですら見抜けない混沌。
月と太陽、闇と光、火と水。
本来一つになる筈のないものが混ぜ合わせられた、混沌そのもの。
人と言うよりは上位者に近いその身で、人の姿形をして、人間だった頃と変わらず愛を語る。
世界で最も奇妙な化け物だ。
だけど、その化け物は、僕を誰よりも愛してくれる。
たまらなく美しい混沌が、僕を包み込んでくれる。
分かっているのかな、君は。
僕だって既に殆ど上位者で、内側は悍ましい化け物なんだよ？
「ガワが美人ならそれで良いかなーって」
これでもかい？
僕は全身を変異させ、悍ましい黒い触手の生えた人型に変幻する。
「元々の姿は可愛いから大丈夫かな。あ、極力艦娘の姿でいてくれる？それは怖いからやめようね」
元に戻る。
ははは、面白いね、本当に。
提督は面白いよ。
「そう？はい、ビデオ回収ー、ありがとねー」
提督。
「何かな？」
愛してるよ。
「俺も愛してるさ」
ふふふ。

まあ、このように。
黒井鎮守府では、充実した日常を過ごせるね。
素晴らしい場所だ。
君達人間にとっては、恐ろしい伏魔殿だろうけど、僕達化け物には、
居心地が良い場所さ。
それじゃあ、また。

３８９話　風雲川内城

　黒井鎮守府のリアルニンジャ、川内からお話があった。
「オッ、シノビやーん！体幹削ってきそう」
「弦一郎殿」
「誰が弦一郎殿じゃい」
「じゃあ主？」
「まあ、上司ではあるけど」
「また今度、前みたいに美少年になってよ、提督」
「謎の隻狼推し」
「いやあ、あれは名作だよ……、凄くハマってる。忍者協会も納得の出来だよ」
「忍者協会？」
「うん、忍者の地位向上を目指した忍者による忍者のための忍者の協会だよ」
　なにそれこわい。
「今回は忍者協会の粋な計らいで忍者屋敷でのアトラクションに招待するね！」
　おや、忍者屋敷。
「明石に頼んで異次元一つ借りて、忍者屋敷を作ったんだよね。遊びに来てよ」
　ほうほう。
　まあ俺も私立忍者学園で忍術を学んだことがある。
　ニンジャっぽいことも不可能ではない。

『忍者屋敷川内城！今日一日で天守閣の忍者姫川内ちゃんからミニしゃちほこ飴を奪い取って食べること！』
「忍者姫とは（哲学）」
『もしも明日の正午までにミニしゃちほこ飴を食べられなかったら、罰ゲーム！提督には忍者姫川内ちゃんの一日従者の刑です！』
「それは構わんけども」

『逆に提督が勝てば、忍者姫川内ちゃんが一日お嫁さんになってくれます！』
「それは構わんけども」
『では、風雲川内城、開幕ー!!!』
お、おう。

まず庭があって、デカい門、城下、本城、天守閣の順に回るべきだな。
恐らく、ピッキングじゃ鍵が開かないとかなんかそんなギミックがあるんだろう。順繰り巡って正攻法で攻略するべきだと思うよ。
俺は頬に『旅』『人』と書かれたメンポと赤の装束を身に纏い、城へと向かった。
さて、行こうか。
現在地は庭。
光学迷彩で姿を消しているが……。
お、警備のクローン浪人。
盗み聞きしとこ。
『正門の漁火門はガンビア守兼定様がお守りになっている。ただの忍びには突破できまい』
『然り、まさにその通りよ』
……ガンビア守兼定様？？？？
えっ、何それは。
『ガンビア守様ならば漁火門を守り抜いて下さるだろう。漁火門は開かずの門じゃて』
『そうとも、ガンビア守様万歳！』
んんー？
ガンビア守様……、一体何ビアベイなんだ……？
取り敢えずその辺を捜索して、ガンビア守兼定に効くアイテムを探すか。
おっ、あっちに泣き腫らしているクローン浪人の群れだ。
『なんて事だ……、呪毒でおらのお袋が倒れちまった！』

呪毒？
『おい、聞いたか？中ボスとして出現する予定だった望月守時継様も漣守鳳仙様も、呪毒によって倒れられたらしい』
何それ怖い。
そんな危ないもん使って大丈夫なのだろうか？
『呪毒は蔵に厳重に仕舞ってある、被害者は増えん』
そうなんだ。
「イヤーッ!!」
「「グワーッ!!」」
即座にクローン浪人を倒して……、あ、これクローンじゃなくってロボットだ、壊しても良いかな？
呪毒を手に入れた。
呪毒……。
再生ボタンポチっと。
……。
……あー、これは呪毒ですわ。
そりゃ望月も漣も寝込むわ。
兎に角、これがあればガンビア守兼定にも勝てるな。
行くぞ！

「わ、わあ～っ！わ、我はガンビア守兼定なり～!!」
漁火門に近付いたら、バイオ馬に乗ったガンビアベイが現れた。
ちゃんと鎧姿の気合が入ったコスプレだ。
可愛い。
「こ、ここは通しません!!」
ほう。
「ベイ、これ見てみ？」
呪毒を見せる。
「えっと？はい？」
《けものフレンズ２最終話》
「うわあああああああああ!!!!ああああああああーーー!!!!」

ガンビアベイは叫び声を上げながら馬から転げ落ちた。
「呪毒はーーー!!!呪毒がーーー!!!Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏ!!!」
ガンビアベイは倒れた。
良し、やったぜ。

城下に潜入。
またもやクローン浪人から情報収集。
『おお、これはええテーブルビートじゃ。これなら美味いボルシチが作れるじゃろう』
テーブルビートて。
ボルシチて。
時代背景と場所どうなってんだ。ここはどこなんだよ、どこを想定して作られたんだよ。
『あのくノ一もボルシチが大好物じゃからな。美味いボルシチを食わせれば満足して帰るじゃろうて』
ほーん。
よし。
「ドーモ、クローン浪人＝サン。タビビトです。イヤーッ!!」
「アバーッ?!!」
テーブルビートを奪う。
そして。
「くノ一、不死鳥のお響だよ」
「響じゃん」
「お響だよ（強調）」
「アッハイ」
「私はくノ一だから、侵入者を倒さなきゃならないんだ」
「はい」
「でも、ここにある調理セットで美味しいボルシチを作ってあーんして食べさせてくれるなら、私はお腹いっぱいになって戦えなくなるよ」
「はい」

「……分かるね？」
まあ、はい。
そうですね。
大人しく特製ボルシチをパンプーシュカと共に提供して、膝の上に座る響にあーんして食べさせた。
「はい、あーん」
「あーん……、おいひい」
「そうか、よしよし、たくさん食べろよー」

さて、次だ！
城の中に侵入した。
城内を徘徊するクローン侍から情報収集。
『爆薬はちゃんと仕舞ってあるか？』
『もちろんで御座る、火薬庫にありますれば』
『あのアパ〇ン的な缶に穴を開けて火をつければ、明石刑部頼勝様もひとたまりもあるまい』
『しっ！誰に聞かれているのか分かりませぬぞ！』
成る程。
火薬庫からアパ〇ン的な缶を全部拝借する。
そして城を進む。
すると。
「やあやあ、我こそは明石刑部頼勝である！」
「そういうのは戦場でやるもので、侵入者に対してはやらないんじゃない？」
「あー、そうですね。でもやりたかったんですから、良いじゃないですか！」
明石が現れた。
いつものギリギリスケベスリットスカートではなく、袴を着用している。
男装な訳で、華奢で女の子っぽい明石には正直似合ってない。明石はもっとこう、女の子っぽい服が似合うと思うよ。

俺はアパ〇ン的な缶に穴を開けて、ライターで火をつける。
「ああっ！それは！」
爆発して、城の一室が吹き飛ぶ。
んんんんんー？
スプレー缶数本の威力じゃないぞー？
この缶に何入れてたんだよ一体。
「あ、ああ、開発中の燃料スプレーが！徹夜で作ったから設計図ないんですよぉ！貴重なサンプルがぁ～!!」
「えっと、その、ごめんね？」
「ううー、あとでデートしてくれなきゃ許しません！」
「もちろん、喜んでするよ」
「じゃあ許します！」

最後、天守閣。
「うわ、割と早いなー、流石提督」
忍者姫川内だ。
ミニ着物プラス忍者装束みたいなコスプレ衣装。かわええ。
「あれ、川内の攻略法は？」
「そんなもの、ウチにはないよ……」
「どうやって倒すのよ」
「パンチ！キック！チョップ！でどうにかしてね！」
「パラッパラッパーかよ」
うーん？
それは酷くない？
俺、真正面から戦うとなると、殆どの艦娘に勝てないよ？
「でもほら、提督は私の身体をまさぐって飴を探せば良いんだし、勝たなくても良いんだよ」
「でも大人しくまさぐらせてはくれないんでしょ？」
「それはまあ、ちょっとは抵抗するよ？でも抵抗する私を押さえつけた提督が無理矢理身体をまさぐってくる、って言うのも燃えるかなーって」

「アッハイ」
あ、そっかあ。
「ほら、じゃあ、行くよー！」
手裏剣を投げてくる川内。手裏剣を掴み取ると、次は苦無でゆっくりと斬りかかってきた。
ははあ、成る程。
手加減はしてるっぽいな。
川内が本気なら、そもそも視界に一秒も入っていてくれない。爆速で視界からかっ消える。
それがまあ、テレビゲームのスピードキャラくらいの速さで動いてくれてるんだから、ハンデ舐めプ通り越してやられたがってると思って良いだろう。
となると。
「ほら」
「よっ」
「えい」
「たあ」
「やあ」
「ふっ」
軽く体操じみた組手をして、最後に川内を投げ飛ばす。
「あんっ??」
さあて、どうしてくれようか。
「ここかな？」
着物の裾をめくる。
「外れだよー」
「じゃあここかな？」
胸元をはだけさせる。
あ、あった。
「正解！」
やったぜ。
「でもでも～？提督は私の汗にまみれたこの飴を舐められるのかなぁ

？」
「別に気にならないけど」
ぱくり。
まあ、男なら嫌だけど川内の胸元にあったものだし。
「うわ、本当に食べた。提督って割と変態？」
「君がやらせたんだろうに」
「いやあ、流石に気持ち悪がられるかなーって」
「何言ってるんだよ。俺なんて一体どれだけ艦娘の体液が混入した食品を食わされたと思ってるのよ。汗くらい平気だわ」
「それはそれでヤバイよね。断れば良いのに」
「美人からの好意を無駄にはできないんだ……」

「まあ、兎に角！提督にはこの川内を一日お嫁さんにする権利と義務を得ました！」
「義務かー、ならしょうがないなー」
「じゃあ早速デートしちゃう？」
「しちゃおっかー！」

……「あんっ??そこは舐めちゃ駄目ぇ??」
デート先でなんか色々ありました、と。
詳しくはね、言わないけどね。
まあ、色々あったよ。

３９０話　さいみんっ！

「精神耐性訓練ンー？」
「ああ」
　暖かくなってきた最近。
　朝食を作り終えて暇している俺の元へ、時雨が現れ、発案。
「何やんの？」
「艦娘に催眠術をかけて、精神攻撃への耐性を高めるのが目標だよ」
　なるほど？
　確かに、どこからともなく現れた種付けおじさんが謎の催眠アプリで艦娘を催眠してＮＴＲ展開とかあり得るかもしれないじゃん？
　長門とか弱そうじゃん、対魔忍みたいな格好してるし。
　決戦アリーナも終わったし、そういう訓練はここらでやっておくべきだよなあ。
　そんな展開になったらやばいもんな、レーティングが。
「んじゃやりますかぁ」

　皆んなを集めて、一人一人に軽く魔法をかけていく。
『支配』
　まず金剛だ。
「くっ、う」
　お、耐えられんのか。
　もうちょっと出力上げるか。
「うあっ、ああっ！」
　耐えてるな、凄いな！
　かなり強度の精神耐性があるようだ。
「よし、もういいよ」
「ふぅ、因みに、催眠に成功したとして、何をさせる気デスカー？」
「抱きしめてキスでもしてもらおうと思っていたけど」
「……あー！催眠ガー！」
　抱きついてくる金剛。

「いや、もう催眠かけてないけど」
「催眠がちょっと残ってマース！催眠だから仕方ないデース!!!」
「いやそんな酒じゃないんだから」
そう言って金剛は俺にディープなキスをして満足そうに帰って行った。
お、おう。
紅茶の味がしました。

次、如月。
『支配！』
「あんっ??」
ん？
「何でも命令してぇ??」
あっ、こ、こいつ、最初から逆らう気ゼロだ。
「部屋に帰ってお勉強しなさい」
教えてあげるから勉強するの。
「ぐっ、くうっ……!!!もっと素敵なお願いがあるんじゃないかしら？エッチなのとか??」
さ、逆らった?!
「えー？じゃあパンツ見せて」
そしたら何と、目の前でパンツを脱ぎ、クロッチの部分を見せつけるようにした。
シミひとつないが、リアルにしっとりしている布地が目の前でかぐわしい匂いを放つ。
……描写がエロいな、詳しくは言わないでおこう。
「如月、やめなさい、全くもう」
加減しろ莫迦!!
「パンツはお気に召さないかしら？それじゃあ、これはどう？」
スカートをめくって見せる。ノーパンなので丸見え。
「はぁ、はぁ……、見てぇ、もっと見てぇ??私のここからエッチなお汁が垂れてるの分かるでしょ……？ねえ、早く、早くエッチなお願いし

てぇ??」
全くもう。
「そう言われると手を出さざるを得ない!!!」
「あーん??」

それじゃあ次はレーベ。
『支配!』
「あんっ??」
お、どうだ？
「僕の騎士様はいけない人だよぉ??僕の心を無理矢理奪っちゃうなんて??」
うん？
「きっと、酷いことされちゃうんだよね……??裸で犬の真似をさせられちゃったり、鞭で叩かれちゃったりするんだ??」
「いやしませんよそんなこと（冷静）」
「仕方ないよね、それも騎士様の愛の形だもん??むしろ、その方が、もっとえっちで……、ふふ、僕、おかしくなっちゃいそう??」
あー、そっか！
「元から正気じゃないから、催眠が効かないのか！」
「提督、僕だけの騎士様??ずっと、ずっと、ずーっと、幸せに生きていこうね??」
「レーベ、正気に戻ってくれ」
「分かってるよ、僕も提督が大好き??」
うーん。
日本語が通じねえなー。
「レーベ、ごめんね、もうやらないよ」
「良いんだよ、提督??僕、提督の為なら何でもするよ、提督になら殺されたって良い??」
うーん、病んでるなあ。
恋愛は適度に楽しまないといかんよ。

次は電にでも。
『支配』
「ひゃわあ！」
効いたか？
「ぞくぞくするのです……！」
「どう？効いてる？」
「司令官さんにえっちなことしてもらってるみたい……??気持ちいいよぉ??」
んー？
いや、催眠って脳を揺さぶられたみたいな感覚になって気持ち悪いぞ。
不快感があると思うんだが。
「電、催眠に抵抗しなさい」
「司令官さんに催眠されるの気持ち良い……??」
うーん。
電はそもそも俺の命令ならなんでも聞くからなあ……。

次、叢雲。
個人的に催眠に弱そう（偏見）。
なんかこう、「はぁ？催眠？馬鹿じゃないの、そんなのにかかるわけないじゃない！私は自分の意思でご主人様に全裸屈服土下座してるだけよ！」みたいなこと言いつつエロい命令とか常識改変系の催眠にかかりそうな感じ（偏見）。
『オリーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる！全裸になれ！』
「んっく?!はぁ?!馬鹿じゃないのあんた!!」
良し！耐えてる！偉い！
「でもあんたがどうしてもっていうなら仕方ないわね……、どうしてもっていうなら!!!」
「あっ、いや、今回は訓練だし」
「しょうがないから脱いであげるわよ!!」
んん？

あれこれ催眠効いてる？
それとも自主的に脱ごうとしてる？
どっち？
「ほら、お望み通り全裸になってあげるから早くあんたの部屋に行くわよ！」
「いや、催眠にかかってる？」
「かかってないわよ！」
どっち?!

次、あきつ丸。
『アクスィー』
「んぉお」
お、効いてないな。
あきつ丸はメンタル強い方だからなあ。
催眠とか暗示とかの類に強いんだよね。
あきつ丸なら、最悪五感の一つが封じられても、気を読んだりして対応できるから、そういう点では強いと思う。
多分東仙要にも勝てる。
「いやあ、流石は提督殿。自分もまだまだ修行が足りないでありますな」
「いやあ、あきつ丸相手の催眠術なら、隙を作れて精々三秒。三秒じゃあきつ丸を倒せるくらいのダメージは与えられないよ」
「確かにそうでありますが……、自分を三秒止められるだけでもかなりのものでありますよ」

次は白露……。
『支配』
「んー、『支配』」
アァッ、催眠を返してきた！
ぐおおおお、俺の頭を弄ってきたぞ?!
カウンター！

ふむふむ。
まあ、大丈夫そうだな。
突然、催眠アプリを手にした種付けおじさんが現れても対処できるだろう。
×艦娘ＮＴＲ展開はないな。
×突然黒井鎮守府にマッチョな留学生が来ても対処できる。
×もう何も怖くない。
×
×
×
×ふひひひ……。
×俺は区頭田豚太郎！
×モテないキモデブの童貞だ。
×だがそれも今日で終わりだ！
先日ついに手に入れたこの催眠アプリ！
これがあれば女に好き放題できる！

街に出て……、そうだな。
まずはあそこにいる白髪野郎の女を奪ってやる！
ち、畜生、イケメンだからって調子に乗りやがって！
ちょっとマッチョで背が高くてイケメンでハーフっぽいからってよお！
吠え面かかせてやる!!
「提督ー??」「司令官はウチのことが好きなんや??」「提督大好きです??」
ぶひひひひ！催眠アプリ、起動！
「「あ」」
ふひ、ふひひひひ!!!
効いたぞ、催眠が効いた！
さあ、女共！俺の側に来い！
……ん？

「ウジ虫風情がァ……、偉大なる提督の従僕たる私に、私を、惑わそうと……？許せるものじゃない!!!」
「なんやァ……？豚が鳴いとるわ……。豚は死ねや!!!」
「ゴミめ……、失せなさい」
あ……。
死ん……!!!
……
……
……
……
「あーっ!!!また殺したー!!!何やってんのもー!!!って言うか催眠に逆らえるならこの前の訓練の時逆らおうよ!!!」

391話　甘え

ふむ……。
「コッコロママ」
「？」
「俺はさ、旅人だからさ、そもそもが社会に甘えて生きてる訳なのよ。だからこれ以上誰かに甘えるのは悪いなーって思うのよね」
「そうですか？提督が甘えて下さると、私は嬉しいですよ」
んー、大淀は優しい。これで変態性癖がなければ……。
「それにさあ、歳下の女の子をママ呼ばわりして甘えるのはやばいでしょ」
俺はプリコネをやりながら答える。
「現代の社会人はヤバイくらいに疲れているのでは？」
確かにそうだな。
「でも俺、別にそこまで疲れてないからなあ」
週休六日レベルで働いてねえや。
まあ、朝昼晩に料理と、定期的な買い出し、たまの営業くらいか？
週五、六で働く社会人と比べたら俺なんて、ねえ？
「そうですか？」
「そもそも、俺は母親に会ったことないしな。バブみがイマイチ理解できないんだよね」
いやほら、俺は少年漫画の主人公よろしく、両親がいないからな。
これはもう俺＝ルフィと言っても良いのでは？
伸びるし（触手が）。
さて、そんなこんなで、イマイチバブみが理解できない俺。
まあ、ヒモやってた時期もあるけど、その時はその時で家事やったり、小遣いをギャンブルで増やして返したりしたから、実質働いていたしな。
社会には甘えるが女性に甘えたりはしないんだよね。
でもほら、なんかこう、適度に甘える方が母性本能？的なアレを刺激して良いんじゃない？

やってみるか。
「ちょっとおいで大淀」
「はい」
俺は大淀に抱きついた。
「？」
大淀は俺を抱き返し、頭を撫でてくれる。
ふむ。
普通に嬉しい。
「でもこっちの方が好きだな」
「あ……??」
大淀を胸に抱きしめる。
小さな大淀の身体を包み込むように抱く。
「俺は甘えるより甘やかす方が好きだなー」
「で、ですが、艦娘は提督に甘えてばかりです。提督の負担に……」
まあ浮気が許されないのは負担になってるけど。
そもそも浮気とは何かね？
俺は別に艦娘と結婚してる訳でもないんだけど？

さて、くずのプーさんである俺はハチミツの様に甘い汁を啜るのがだーい好き！
今日も社会から甘い汁を啜り、艦娘と遊ぶのだ。
「まあね、黒井鎮守府もプリコネみたいな世界観だしね」
「どちらかと言えばオーバーロードですよ」
あはーん？そう来る？
「黒井鎮守府なんて美食殿みたいなもんでしょ」
腹ペコキャラ（空母）とツンデレもいるし。
「ナザリックの間違いでは？デミウルゴス（時雨）みたいなのもいますし」
そんなこたぁない、そんなこたぁないんだ。
黒井鎮守府はやさしいせかい。
けものはいてものけものはいないんだ。

たまに俺がウィザードリィみたいな死に方するだけで基本は平和。
＊おおっと＊みたいにあっという間に死ぬ。
そしてまあ、艦娘はみんな優しい子だし。
ここが僕のおうちなんだ（キュルル）。
俺達には辿り着く場所なんてねえ、ただ、進み続けるだけで良い！
「つまりな、扶桑。俺は他人に甘えても良いと思うんだ」
「そんな……、私はいつも、みんなに迷惑を」
「いけないなあ、些か自罰的てはないかね？仲間に頼らねば。言うなれば運命共同体！互いに頼り、互いに庇い合い、互いに助け合う。一人が皆んなの為に、皆んなが一人の為に。だからこそ戦場で生きられる。艦隊は姉妹、艦隊は家族！」
「そう、ですね」
嘘じゃないよ、本心本心。
つまりまあ、艦娘同士、俺も含めて仲良くなろう。多少は甘えろ、と。
そういう訳だよ、扶桑。
「ですが、甘えて良い塩梅が難しいですよね」
ふむ。
急に甘えろって言っても、どれほど甘えて良いのか。
確かに、甘え過ぎは良くない。
逃げちゃ駄目ではないけれど、エヴァに乗らないと話が進まない、そういうことだ。
「黒井鎮守府って、やって良いことと悪いことが特にないと思うのですが」
そうか？
結構あるぞ？
「えーまず、食料のお残しは許しません、なるべく人は殺さない、麻薬は駄目、悩んだら相談！なせば大抵なんとかなる……」
「それは、当たり前のことで、基本的に法律を守らなくても怒られないじゃないですか」
「そんなことないぞ、信号無視とかしたら怒る」

「でも殺人や劇薬の精製、人体実験は怒らないように見えるのですが」
あー。
まー。
「その辺はケースバイケースじゃん」
「殺人が許されるケースがあるのですか？」
「まあ多少はね？俺だってカッコつける訳じゃないけど、何人も殺してきたよ。殺さなきゃならない場面ってのはあるからな」
正当防衛とか、そうじゃなくても、こいつはここで殺さなきゃならないという邪悪とかな。
まあ、邪悪の定義を誰がするのか、そもそも悪とは何かという話になると、それは人によるとしか答えられない。
つまり、極論を言えば、邪魔な奴は殺すってことだ。
どうしても、話が通じない奴はいる。
「結局、何をしたら怒るんですか？」
「うーん、俺も大分遊んでるからなあ……」
「そう言えばこの前はヴィーガンの祭典でポンドステーキを焼いて食べたそうですね」
「やったなあ」
「その前はアメリカでイスラム系のコスプレをしつつ黒い鞄をアッラーアクバルと叫びながら人に投げつけるいたずらとか」
「やったわ」
「捕まりますよ？」
「今年はまだ三回しか捕まってないからね」
ちょっとしたいたずらだよ。
「あ、でも流石に某弁護士風爆破予告とかはやめようね！」
警察が動くからね。
俺は通報されないギリギリのいたずらしかやらない。
まあ、街中で魔法を使ったりしてるから色んなところに追われてるけど。
魔術協会を初めにアトラス院と執行者などなど。
そもそも俺は封印指定魔術師だからな。

最近は白露型とかも封印指定されたらしい。
時折、追っ手が現れるが、ボコボコにしたり煙に巻いて逃げている。
「もちろん、警察に迷惑はかけません。そういえば、旅人さんは街中でマジックと偽って魔法を使っていた時に沢山の魔術師に追われましたね」
「まあ俺、封印指定されてるからなあ」
「はあ、封印指定ですか」
「封印指定ってのは、まあ、物凄い魔術が使えるから、魔術協会でサンプルとして捕まえますってことね。稀少な魔眼とか持ってたら捕まるんじゃね？」
「はあ……」
「俺はまあ、第三魔法っぽいものとか、神格の召喚とか、空間転移とか、間接的な時間操作とかが駄目だったらしいね」
「はあ」
「でも戦闘能力は大したことないよ」
「そうですか」
「あとは持ち物と肉体が駄目なんだってさ」
「成る程」
この世界の魔術はそんなに凄くないからな。
神秘が薄いから、大した魔法使いはいない。
ノースティリスやロスリック、ヤーナム、ヴァナディール、幻想郷なんかは、神代並の神秘に溢れているから、そっちの魔法使いに師事した経験がある俺からすれば、驚くようなことをやってくる魔術師はそうそういない。
むしろ、魔力が足りるならと言う前提はあるが、『瞳』で観測すれば大抵の魔術は再現できる自信がある。
「俺なんて、ちょっと世界を滅ぼせるくらいだよ」
「ちょっと……？」
「ああ、もちろん、世界を滅ぼそうとしたら百パーセント邪魔されて失敗するよ？でも仮に、誰にも邪魔をされないなら、この世界を消滅させることも可能だって話」

「どうやってですか？」
「適当に神格を喚び出して暴れさせるんだ」
アザトースでも喚べば、邪魔が入らなきゃ世界を壊せる。
「まあ、白露型ならもっと上手くやると思うよ。あの子達なら邪魔が入っても世界の四割は滅ぼせるね」
「はあ」

「ま、俺は大したことない一般通過旅人だよ、俺の話はいい。ほら、扶桑、俺に甘えてごらん」
「はい」
扶桑の肩を抱いて歩き出し……。
「新台真央！貴様を捕まえる！」
「大人しくしろ！」
「手足の一二本は落としていいとのお達しだ！」
さて。
フラッシュバン。
「扶桑、逃げるぞ」
「え、あ、はい」
全く、おちおちデートもできないな。

３９２話　鹿島の楽しいＡＶ撮影

……『あんっ、あんっ??』
……『駄目え??』
……『いくぅ??』
……。
「あの、鹿島？」
「はい？」
「休憩室でハードＳＭもののＡＶ見るのはやめよう？」
　せめて自室で見てくれる？
「だ、駄目なんですか？」
「いやまあ、駆逐艦の子とかもいるし」
「みんな見た目は子供ですけど中身は大人ですよ？」
　そうだけど……。
「でもほら、常識的に考えてさ」
「そうですか？」
　そうでしょ。
「そもそも何でＡＶ見てるの？」
「あら？前に話しませんでしたか？」
「何を？」
「私、提督との情事をビデオに録画して、ポルノサイトに流したいんですよ」
　んー。
　鹿島は可愛いのに性癖がな！
「やめてもらえる？」
「大丈夫です、提督のお顔にはモザイクを入れるので！」
　何も大丈夫じゃねーよ。
「私が提督にお尻を叩かれて失禁しつつアヘ顔を晒すシーンを、全世界の皆さんにお届けしたいなーって」
　何考えてるんだろうなーって。
「そんなことしたら君、表歩けなくなるよ、社会的に死ぬよ」

「望むところです」
　んんーん。
「社会的に死にたいの？」
「偉大な提督との情事を盗み見る一般男性が粗末なものをしごいていると思うと……??」
「うわあ」
　うわあ。
「決して届かないと言うのに、私にいかがわしい目を向けてくるなんて、とても、興奮しますぅ??」
　っべー。
「提督と比べれば、他のオスなんて塵芥に等しいですし、提督以外じゃ全く欲情しないんですけど、人間如きが私を性的な目で見てくると思うと、興奮するんです??」
「マジっべーからやめよう？」
「お願いします、提督」
「いやー、キツイっす」
「提督の言うこと、何でも聞きますから。ねっ、提督??」
「……ンモー、ちょっとだけだぞ？」
　しょーーーがねーーーーな――――!!!
「わぁい??」

　はい、よーい、スタート。

　――――お名前は？
「鹿島です。練習巡洋艦、香取型二番艦です」
　――――スリーサイズとか教えてくれるかな？
「上から８８―５６―８５で、Ｆカップです」
　――――身長と体重は？
「１５８ｃｍ、４７ｋｇです」
　――――痩せてるねえ、ちゃんと食べてる？
「はい、毎日ご飯が美味しいです」

ーーー今回は何故急に撮影を？
「そうですね……、人間のアダルトビデオの女優さんが楽しそうなので、私も同じようなことしたいなーって思いまして」
ーーーＡＶ女優なんてみんな演技だって（笑）
「ええー、そんなことないですよぉ」
ーーーじゃあ、他の人に輪姦されたいみたいな？
「あ、いえ、私は提督以外じゃ興奮しないんで。でも、提督とのエッチを見せつけるのは気持ち良さそうだなーって思いまして」
ーーーそっかー（笑）見られると興奮しちゃう？
「そうですね、私の無様な姿が沢山の人に見られちゃうと思うと、子宮が熱くなっちゃいます??」
ーーー鹿島ちゃんドＭだもんね（笑）
「はい、私、虐められたり、酷いことされるの大好きなんです！」
ーーーまさかのドＭ宣言（笑）
「だって、本当に好きなんですよ。お尻を叩かれたり、首を絞められたり、お腹にパンチされたりするの、興奮します」
ーーーハード系だね、痛くないの？
「痛いですよ？けどその痛いのが気持ちいいって言うか……、こればっかりは同じマゾヒストにしか分からないと思います（笑）」
ーーー成る程。やっぱりそう言う欲求（性欲）は強い方？
「そうですねー、性欲は艦娘でもピンキリですから。例えば雷巡のＫさんなんかはあまり性欲が強くないみたいですけど、軽巡のＯさんなんかはかなり（性欲が）強いみたいで……。私は普通だと思います」
ーーーホント？オナニーは週に何回する？
「毎日してます」
ーーー（性欲）ある方じゃん（笑）
「艦娘自体がそもそも、性欲が強い方なのかもしれませんね。特に戦いの後とか、逆に戦いがなくて体力が有り余っている時とか……、そう言う時に（オナニーを）しちゃいますね、我慢できないです」
ーーー鹿島ちゃん、エッチなんだね（笑）今日も期待しちゃってる？

「はい、もう、今から濡れちゃってます??見ますか?（スカートをめくり上げる）」
ーーーホントだ、シミができちゃってる（笑）パンティは白なんだね、可愛いっ！
「下着は白が多いと思います。白、好きなんですよ。でも、出撃がある日とかはグレーの飾り気がないのとかにしてますね」
ーーー地味パンティの鹿島ちゃんも見てみたいカモ（笑）
「良いですよ（笑）でも本当に地味ですから、できるだけ可愛いパンティを履いてる時に見てほしいって言うのはありますね（笑）」
ーーー女のプライドみたいな?（爆笑）
「ありますよー!好きな人には一番素敵な自分を見てほしいじゃないですか！」
ーーー可愛いこと言うね、尽くすタイプなんだ?
「理想を言えば、私が提督を養いたいですね。（提督には）ヒモになってほしいです」
ーーー駄目男とか好きなんだ
「提督は駄目じゃないですよ?ただ私は、提督に貢ぎたいって言うか何というか。私が提督を養って、提督が私を癒す関係ですね」
ーーーあー、じゃあ、主夫になってもらいたいのかな?
「主夫も良いですね、提督、料理がとっても上手ですから。でも提督は、そこにいてくれるだけで嬉しいんですよ」
ーーー尽くすタイプの美女!夜はマゾの雌犬ちゃん!鹿島ちゃんの魅力は世界一！

その後は、普通に行為をして、ビデオを編集して、ネットに流した。

国内外のポルノサイトで一位になり、五千万再生されたとのこと。
そして……。
「提督!」
「おお、鹿島、どうした?」
「次はイメージプレイをやりましょう!女教師モノなんてどうでしょ

うか？」
「まあどうもこうもないよね、無理」
「やりましょうよー！」
勘弁してくれ、鹿島！

ついでに言えば、今回の鹿島ＡＶ事件で、鹿島に声をかける馬鹿男が増えたらしい。
俺と一緒に歩いていても、鹿島に声をかけてくる馬鹿がぞろぞろと。
「ねえ君、このＡＶの子でしょ？」
「はい、お楽しみいただけましたか？」
「ねえ、俺に抱かれてみない？この男より俺の方が」
鹿島の左手がブレる。正確なジャブだ。男の鼻から血が出る。
「申し訳ありません、貴方のようなゴミ以下の蛆虫では、私を満足させるのなんて百年かかっても無理です??私と愛しの提督が愛し合うところを見て、粗末なチンポを家でシゴいてて下さいね??」
「て、めえ、女のクセに!!!」
鹿島は、右のストレートを放つ。
チンピラ男の鼻が陥没する。
「消えて下さい、クソ虫さん。貴方如きが提督の従僕たる私に届くことは永遠にありませんよ??」
鹿島は、こう見えて割と怖い。

３９３話　デモの人々

「深海棲艦を、殺すなー！」
「深海棲艦は人類の敵じゃないー！」
「艦娘は消えろー！」
「黒井鎮守府の武力独占を許すなー！」
「「「「許すなー!!!」」」」
おーおーおー。
相変わらず面白いことになってんなー。

我らが黒井鎮守府の前では、毎日のように変なデモがいる。
正面門はデモ隊が常にたむろしてるので、艦娘は裏口から出入りする。
裏口にもいるなら、艦娘には持ち歩くように指示してある『帰還の巻物』を使うように言ってあるので、極論を言えば、戻ってくること自体はできる。
因みに、これは秘密なんだが、黒井鎮守府の裏口はいくつかあって、生体認証とパスワードを入力するとどこからでも入れるみたいな感じだ。
因みにパスワードは『空耳ケーキ』だ。
え？いやだって、不思議な扉の文字は空耳ケーキだから。
まあ俺も艦娘からの好きだよ好きだよの声が聞こえてるからね、多少はね？
こちとらクソｓｓ大王だぞ。
さて……。
黒井鎮守府の前にデモしに来ている人々は、様々なバリエーションがあるが、主に三つ。
一つ目は、現政権を嫌う野党とその手先。大学生崩れのシールズ？みたいな奴らが多いな。こういう連中はこっそり野党とかヤクザとかから、お車代とかお食事代みたいな名目で金をもらい、大したイデオロギーもなくデモもどきをする奴らだ。バイト気分、お祭り気分っ

てとこか。
二つ目は、深海棲艦を神の使いと崇めるカルト。確かに、深海棲艦は人類を粛清しに来た、星の防衛機構のようなものだが、それを知り得ているのは俺だけだ。現在の状況でトチ狂った終末論者ってところかな？
三つ目は、反戦団体。兎に角、戦力そのものを許せない連中だ。戦争という言葉自体にアレルギーがあるらしい。仕事のないリタイヤ済の暇な年寄りから、野党の手先まで幅広い人材を取り揃えている。
その他にも軍オタや単なるファンなど、様々な暇人で溢れている印象。
俺も暇人なので、シンパシーを感じるなー。
良いよな、働かずに昼間から遊んでるのって。楽しいよな、気持ちは分かる。
俺も今は、昼間から遊び呆けているからな。
大学生崩れの諸君もとても楽しんでいるんだろう。まあ、その後の就活で地獄を見るだろうが……、今楽しければそれで良いんじゃない？
先のことなんて頭の隅にでも置いておけば良いのよ。今を楽しまなきゃ。
……「戦力の私物化を許すなー！」
うんうん、元気いっぱいだね、偉い偉い。
俺は優しい目でデモを見守る。
これもまたアイカツだね！みたいな雰囲気を出しておく。
だが、隣の大淀は違うみたいで……？
「ウジ虫風情が……」
絶対零度の瞳でデモ隊を見つめる大淀。
「んもー、大淀！駄目よ！女の子は笑顔でいなきゃ！」
「はい！」
微笑みを返してくれる大淀。
天使の微笑み。
やっぱり大淀は天使だったんだ。

天使にふれたよ。
「まあ黒井鎮守府なんて放課後ティータイムみたいなもんやし」
「どちらかと言えば聖飢魔Ⅱですよ」
そうかな……？
そうかも……。
「いやあ、黒井鎮守府はやさしいせかいだから」
「私的にはセックス・ピストルズだと思います」
「ザ・フーでは？」
事務の鹿島と香取。
「シド・ヴィシャスもキース・ムーンもうちにはいないよ」
「「もっとヤバいのがいますもんね！」」
そうかな……？
そうかも……。

さあ、それで、だ。
黒井鎮守府前のデモ隊については、極力干渉しないこと、一応一般市民なので『始末』したりしないこと、と艦娘達には言ってある。
艦娘達は基本的に、人間を虫けらくらいにしか思っていない節があるので、今のところ問題はあんまり起きてない。
だが艦娘だって、感情の揺れ幅や感じ方は人間と違うとは言え、心がある生き物だ。誹謗中傷をされればストレスも溜まるはずだ。いかに人間を虫けら程度に思っていたとしても、逆に虫けら程度に文句を言われると腹が立つと言う子もいるかもしれない。
しかし、ここで艦娘に好きにさせたら、黒井鎮守府前のデモ隊はけものフレンズ2のような惨状になるだろう。
シュシュっと惨状だ。
忍者ではないが正義？のハリケーンは巻き起こされるんじゃないかな。
まあ、つまりは、艦娘も謂れのない誹謗中傷でイライラしているはずだ。
ここは俺が一肌脱がなくては!!

……一肌脱ぐと口にすると、白露型に皮を剥がれそうだから、口には出さない。

『……そうさヨーデル好きの連中は、ムードメーカでハッピーメーカー。明るいお日様の光みたいに、心の中を照らすんだ！』

「歌うなー！」

「引っ込めー！」

「黒井鎮守府の戦力を放棄しろー！」

うーん？

おかしいな……、俺の歌じゃ駄目なのか……？

俺渾身のヨーデルを黒井鎮守府の前でデモ隊に披露したが、誰も聞いてくれなかった。

となるともうランカちゃん連れてくるしかねえぞ。

……いや、選曲か？

ならば。

『モスクワ、モスクワ、グラスを壁に投げつけろ！ロシアは美しい国だ！ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ヘイ！』

「黒井鎮守府の艦娘を処刑しろー！」

「深海棲艦を受け入れろー！」

「戦力の独占を許すなー！」

んー？

嘘だろ、めざせモスクワだぞ？

名曲だぞ？

音楽の力は偉大なはずなのに。

俺の力不足なのか？

「最早ジャギと漫才するしか……」

と、俺が困っていると。

「おや、何をしているのでありますか？」

あきつ丸のエントリーだ。

「あきつ丸ー」

抱きつく。

「おや、よしよしであります」
撫でられる。
ッハァ、あきつ丸は優しくて良い子だなあ。
すこ。
「艦娘は日本からいなくなれー！」
「平和な日本に戦力はいらないー！」
「黒井鎮守府は戦力を放棄しろー！」
おっおお、あきつ丸が屠殺場の豚を見るような目をしているぞー？
「……提督殿の崇高なお考えは、自分のような者には理解できないでありますな。ゴミを掃除してはならないのでありますかな？」
「あきつ丸、やめようね」
「……提督殿、自分は提督殿の敵は須らく斬るでありますよ」
「敵なんていないさ」
さて。
折角あきつ丸もいることだし。
「あきつ丸は訓練終わりかな？」
「はい、走り込みを終えたのであります。シャワーを浴びて着替えて、やることもないので外出でもして酒を飲もうかと思っていたところでありますよ」
「じゃあさ」
俺はアウトドア用の椅子とテーブルを出す。
「ここで一杯やらない？」
「おお、愚かな人間を眺めながら一杯、でありますか」

……「昼間から酒を飲みやがって……！」
……「うう、俺だって飲みたいのに……！」
……「いちゃつきやがって!!」
外野の声を消音の魔法でシャットアウトし、あきつ丸と日本酒を飲む。
炭火を用意して、目の前で焼き鳥も焼いちゃう。
たれをかけてジュワッと！甘塩っぱい匂いが煙と共にふわっと広

がる！
……「う、うう……」
……「な、なんて良い匂いだ……」
……「う、は、腹が減ってきた」
そして、匂いを嗅ぎつけて、艦娘が集まってくる。
「あー！焼き鳥ー！夕立も欲しいっぽいー！」
「匂いを嗅ぎつけてきました、赤城です。提督、私にも下さい！」
「にゃ？焼き鳥にゃ。多摩にも下さいにゃー」
「おっしゃ、ブルーシート敷いてホラほい！」
ブルーシートを敷いて、ビールやらジュースやらの栓をあける。
いつのまにか多くの艦娘が集まり、ちょっとした宴会になっていた。

こんな感じのことが数日続いて。

数日後。
「あれ？なんかデモの人減ってない？」
「あー、なんか、艦娘が楽しそうに宴会しているのを毎日目の前で見せつけられて心が折れたらしいですよ」
と、大淀。
ふーん。
そっか。
「今日は裏山で宴会しようぜー」
「はい！」
これ以降もトゥイッターに宴会動画を流してたら、なんか知らんけど、デモの人達の元気はどんどんなくなっていった。
何でだろうな？
まあ、良いや。
最近はだんだん暖かくなってきたから、どんどん外に出ないとな！

３９４話　マスゴミ

「……で、あるからして、黒井鎮守府が民衆の支持を得られない理由として、情報の発信をしていないからだと思うのです」
「はぁ……、してますけどね、ツイッターとかで」
「ツイッター？はっ、あんなもの、我々メディアと比べたら大したことはありません、正に、個人のつぶやきに過ぎないんですよ」
「今時のメディアは尻を拭く紙にもなりませんけどね（小声）」
「ですから、是非、今回は我々、週間文秋の取材を受けるべきだと思うのです。ああ、もちろん、黒井鎮守府に対して正しい印象を広めるお手伝いをするので、報酬はいりませんよ」
「お前がもらう気だったのかよ」
「は？それは栄えある、創刊六十周年を迎えた我が社に取材されるのは光栄なことでしょう？普通なら、取材をしにきてくださいとお願いされる立場なんですよ、こちらは」
あー、こいつ頭おかしいんだなー。
まあ、マスコミなんてこんなもんか。
「別に取材とかいらないんだけど」
「はぁー、貴方は分かっていない！我が社の雑誌に掲載されることは実に名誉で……」
あー。
めんどくせーなー。
正直にネタありませんって言えばまだ可愛げのあるものを。
「あっそ、勝手にすれば？」
俺は館内放送で、記者が来たから殺さないように注意しておく。

とは言え、このアホ記者を一人で歩かせると面倒なことになりそうだから、ついて行ってやる。
まあ、元々仕事はねえけど……。
馬鹿記者はタバコを吸おうとするので取り上げ、禁煙だと伝える。
黒井鎮守府のルールも聞かずに勝手に歩き回りやがる。

はぁー、めんどくせーなー。
やってらんねーわ。
馬鹿記者は、そこら辺を物珍しそうに眺めつつ、警備ロボットに触ろうとしたりしている。
「あー、触らないでもらえます？一応それ、警備ロボットなんで」
「何故警備ロボットに触ってはならないのですか？」
何故じゃねーよ、触んなっつってんだろ。
「安易とは言え武装が付いてます。怪我したくなけりゃ触らない方が良いですよ」
「そんな危険なものを徘徊させているのですか？」
「防犯の為の最低限の設備です、ここは軍事施設ですよ？マシンガンを持った衛兵の代わりにマシンガンのついたロボットがいておかしいですかね？」
「ロボットにマシンガン？安全なのですか？」
「武器が付いている以上確実に安全とは言えないですけど、スパイが潜り込むリスクと比べれば、必要なことです」
「スパイはどれくらい？」
「機密です」
ごちゃごちゃ質問してくる馬鹿記者を受け流し、先に進む。
適当にインタビューさせて帰らせりゃ良いだろ。
こっそりと香取を呼ぶ。
鹿島はこの前のＡＶの件を突っ込まれると困るからな、黒井鎮守府の貴重な安パイの内一人、香取なら……！
「あら、提督？こちらの方は？」
よーし、合わせてくれてるな！偉いぞ香取ーヌ！
「記者の人だよ、簡単なインタビューに答えて差し上げろ」
「はい、分かりました」
軽くウインクしてくる香取。
香取は分かってくれている。
「ではこちらへ」
記者を連れて、休憩室の一室へ。

そこでインタビュー。

「まず、艦娘とは何なんですか？」
「かつての大戦で戦った艦の神霊です」
「神霊？神様なのですか？」
「神様に近い存在ですね」
「近い？」
「神様と言うのは、人々の信仰によって存在するものですよね？艦娘もそれに似ていて、人々がかつて戦艦が存在していた、と言う記録というか、記憶から生まれているのです」
「はあ……、実は軍部の開発したアンドロイドとかではなく？」
「いいえ、アンドロイドやロボットではありません」
「では、体重は何トンくらいですか？」
「ですから、ロボットではありません。私は４７ｋｇです」
「はぁ……、では、深海棲艦と戦うのに、何故艦娘が必要なのですか？市民は艦娘なんていなくても問題はないと考えています」
おおっとー？
香取の殺意ゲージが上がったぞー？
「だってそうでしょう？艦娘なんてちっぽけな存在、自衛隊の戦艦の方が強いに決まってます」
自衛隊に戦艦はねーよボケ。
自衛隊っつったら護衛艦だよ。
「……その自衛隊の艦は、レーダーに映らない上に、現代兵器をある程度無効化する人型の二メートル足らずの深海棲艦に攻撃ができますか？」
まあ、レーダーに映らないってのは正確じゃないね。深海棲艦は鉄じゃなくて熱も発さないので、その類のレーダーには映らないって話だ。
それと、大きさも小さいのでソナーなんかにも引っかかりにくい。
赤外線なら、映ると思うぞ。
「それは……」

「そして、深海棲艦の火力は、貴方の言う戦艦並です。人程の大きさの、現代兵器が効きにくい、レーダーに映らない存在に対して、何ができますか？」
「それは、強力なミサイルとか……」
「ロックオンできませんよ」
「い、今の技術力なら、対戦艦用のミサイルで倒せるだろ！」
「……確かに、現在使われている８０式空対艦誘導弾ならば、直撃すればある程度のレベルの深海棲艦なら倒せます」
「じゃ、じゃあ」
「しかし……、先程から申しておりますが、深海棲艦はレーダーに映らないんですよ。深海棲艦も神霊ですから。そんな存在に対して、一発一億円はする８０式空対艦誘導弾をばら撒きますか？それに、言っておきますが、深海棲艦は毎日何万体というペースで増えていますよ」
まあ、ね。
ぶっちゃけ、深海棲艦にも現行兵器はそれなりに効くよ？
けど、コストが見合ってないんだよね。
ゴキブリの如く湧いて出る深海棲艦に対して、何千万何億円のミサイルを撃ってどうすんだ？って話。
「そ、それは……、だ、だが、なら、何で艦娘である必要が？」
「艦娘は、深海棲艦に対して唯一有効打を与えることができます」
「有効打？」
「艦娘の攻撃には、神秘の力が宿ります。神秘は、霊的存在に対して強い力を発するのです。ですから、艦娘の武器は小さいように見えても、神秘と言う、物理法則とは別ベクトルの力を持つので、その部分が深海棲艦によく効くのです」
「ひ、非科学的だ！」
「はあ、そうですか。記者が目の前のものが見えなくなったら終わりでは？」
そうやって、艦娘の話の中から都合がいい話やゴシップだけを聞いてくる馬鹿記者。

「結局、黒井鎮守府は提督の愛人部隊で、国のことなんて考えていないんですよね」
「愛人部隊は否定しませんが、国のことなど考えていないなどと断定されるのは困りますね。本当に国のことを考えていなければ、日本から出て行きますし」
「やっぱり日本のことなんて何とも思っていないんですね！はぁー、やっぱり艦娘は信用ならない存在だ」
「そう思うのは勝手ですよ」
「それで、今現在も出撃していないように見えますが？」
「今日はお休みです」
「艦娘は兵器なのに休むんですか？」
「兵器だからこそ休むのでは？常に稼働していてメンテナンスされないものなんて、この世に存在しますか？」
「怠慢では？働こうと思えば働けるのに働かないのはおかしいと思います」
「ですから、働いているときは働いていますよ」
　香取の殺意ゲージもビンビンだぜ。
「そもそも、日本には９条があります。艦娘は戦力なのでは？」
「戦力ですけど、その９条があれば、深海棲艦は侵攻をやめてくれるんですか？」
「そ、それは……、い、いや、しかし、他国との緊張をいたずらに高めている可能性がありますよね？」
「緊張？深海棲艦が海を支配している以上、緊張も何もないと思いますが」
「黒井鎮守府は危険な武装団体だ！」
　さて、潮時かな。
「もう取材は十分でしょう。お帰りください」
　俺は馬鹿記者を帰らせる。

　その後、馬鹿記者の記事では、黒井鎮守府について有る事無い事書

かれていた。
「これは……、酷いですね」
香取が静かにキレる。
「まあこんなもんだって。次はまともな記者を呼ぶから大丈夫だ」
うーん、ミリタリー系の記者を呼んでみるか。
文秋は駄目だあのクソゴシップ。

あとこれは余談なんだけど文秋の本拠ビルが爆発したらしいよ。
何でだろうねおかしいね。
さて……。
「爆破した子は大人しく出てきなさい！怒らないから！」

３９５話　ミリタリ記者　前編

「ＭＡＭＡＲＵの記者です！」
「ＭＣあくしすの記者です！」
「ミリタリークラシックスの記者です！」
「「よろしくお願いします!!!!」」
お、今度は行儀がいい記者が来たな。
「よろしくお願いします」
「あ、これ、取材料です、お納め下さい」
おお、三社とも取材料を払ってきた。
まあ、あれだね。
三社ともミリオタ雑誌だね。
「いやほんと、感動ですよ！長年謎に包まれていた鎮守府の中を見学できるだなんて！」
「本当ですね！今回はうちで特集をやらせてもらいますから！」
「あ、写真ＯＫですか?!あとで載せたいんです！」
「あーはいはい、どうぞどうぞ」
鎮守府内を歩く際の注意点を伝えて、その通りに行儀よく取材する記者達。
「あと映像も撮りたくて……」
「良いですよ」
「黒井鎮守府一日密着取材！これは売れるぞ……!!」
うーん。
オタクのノリがキモいかな。

案内は香取に任せる。
取り敢えず、前に来た馬鹿記者と同じようなことを聞いてきたので、香取に答えさせる。
「なるほど……、確かに一億円もする対艦ミサイルを深海棲艦にばら撒いていたら破産しますね……」
「神秘、というものについて詳しくお願いします！」

「ぎ、艤装を！・艤装を見せてください！」
興奮し始めるミリオタ共。
落ち着けさせて、鎮守府の施設紹介を午前中に済ませる。

「おおおお！・工廠だ！」
「はあー、食堂もこんなに」
「資料室も凄いですね！」
興奮しっぱなしのミリオタ共を落ち着かせながら案内を続け、艦娘へのインタビューへ。
ＭＡＭＡＲＵは艦娘の人間性や趣味に労働環境など、あくしすは武装と艦娘の可愛さ、ミリタリークラシックスは武装と理論に加えて対深海棲艦戦の戦術などに興味があるらしい。
それをそれぞれ、香取、鹿島、加賀に案内させることにした……。
×
×
×
×
「ＭＡＭＡＲＵの横井です！今回はよろしくお願いします、香取さん」
「はい、よろしくお願いします」
あ、はい、横井です。
普段は自衛隊なんかに取材する、国防の為の戦力や兵士を知る為の雑誌、ＭＡＭＡＲＵの記者やってます。
３６歳既婚、男です。
今回は国防を担う組織の中、今最も注目されている黒井鎮守府に取材することを許可されました！
黒井鎮守府ですよ?!
提督の変更からたったの一年で日本海を解放！その後も太平洋やインド洋を大きく押し返し、地中海も奪還！
在籍する艦娘の数は百人を超える大組織！
世界最強の鎮守府！
ここに取材できるとは、本当に光栄だ！
カメラマンも連れてきたし機材もバッチリ、メモの準備もボイスレコーダーもバッチリだし、許可もいただいた！

さあ、どんどんインタビューしていこう！
取り敢えず、艦娘の重要性については聞いた。
レーダーに映らない上に、的が小さいくせに、自衛隊の護衛艦を撃沈し得る攻撃力を持った深海棲艦に対しては、同じ次元で戦える艦娘が重要である、と。
ＭＡＭＡＲＵの方針では、国防の為の戦力の仕組みや、兵士達の生活に迫っていきたい、という事になっている。
取り敢えずは、暫くはインタビューだな。
自由に行動して良いと言われたので、移動する。ついてきてくれる香取さんが、問題があれば指摘してくれるそうだ。
まずは……、食堂の方から話を聞いてみよう。
調理師の方から、艦娘の食事について聞こう。
「すみません」
「はい？」
薄紅色の和服と袴、割烹着の若く美しいポニーテールの女性に声をかける。
「あの、ＭＡＭＡＲＵの記者の横井と申します。少しお時間よろしいでしょうか」
「あら……！すみません、私ったらこんな格好で。間宮さん、申し訳ないけれど、後は任せても良いかしら？」
「はーい、大丈夫でーす」
仕事を任せ、割烹着を脱いで、食堂のテーブルに座った彼女に、インタビューがしたいと伝えると、快く受け入れてくれた。
「まず、お名前を」
「鳳翔です」
「珍しいお名前ですね、下のお名前は？」
「下も何も、私の名前は鳳翔ですよ？」
え？
「あ！も、もしかして、艦娘さんですか?!」
「はい、そうですけど……？」
えっ？

な、なんで艦娘が厨房で皿洗いしてるんだ？
「す、すみません、てっきり、調理師の方かと……」
「黒井鎮守府には、提督と事務方の海原提督以外に人間はいませんよ」
んん？
「そ、それでは、百人を超える艦娘の食事を毎日お一人で？」
「いえ、提督と、間宮さん、伊良湖ちゃん、速吸ちゃんと私の五人で、ですね」
「たった五人でこれだけの人数の食事を?!」
……うーむ、まあ、例えば学校給食などでも、給食のおばさんはそんなにたくさんいなかった気がするが……、五人で大丈夫なのだろうか？
「ええ、おかしいですか？」
「……何人分くらいを何時間くらいで作るんですか？」
「量は大体、三千人分くらいで……、調理時間は平均して二時間くらいですかね？」
「さ、三千人分?!」
いやいやいや！計算が合わないのでは?!
「はい、戦艦や空母の方々は、百人前は軽く平らげるので」
「い、いや、物理的におかしいですよね？何十キログラムもの食料を食べるって……」
「艦娘は必要なカロリーが多いんです」
カロリーで片付けられる問題なのかそれは……？
艦娘は人間とは違う、か……。
「提督も同じくらい食べますし」
んんー？
提督も？
提督は人間のはずでは？
ま、まあ良いか、それはさておき……。
「ええと、その、黒井鎮守府での食事は全て、鳳翔さん達が？」
「はい。たまに私達が不在の場合は、艦娘は外食をしますね。けれど、戦艦や空母の子達は外では量が足りないと……」

「なるほど……。艦娘によって、燃費も違う、と。それはもしかして、艦だった頃の燃費を引き継いでいるというか、再現されているとかですか？」
「そうですね、艦娘は艦だった頃の謂れや性能に肉体や性格が左右されることが多いですから」
　なるほど、これは重要だな。
「では、鳳翔さんが料理がお得意なのも、かつての軽空母鳳翔の料理が美味しかったから、とかなんですか？」
「はい、そうですね。艦娘には、生まれた時に、乗組員達の記憶と言うか記録のようなものがあるんです」
　なるほど。
「例えば、山口多聞氏は剣道においては兵学校で最高の一級だったそうです。とすると、多聞氏の記憶を持つ空母飛龍の艦娘も剣道の達人なのですか？」
「はい、そうですよ。と、言うより、日本の艦娘は皆、剣術と柔術が使えますし、銃も撃てます。そうですよね、だって、剣も格闘も銃も使えない海軍が乗っていた艦なんてありませんから」
　兵士として必要な技能を持って生まれた訳か……。
「では、今の時代のことは知らないんですか？」
「そうですね、生まれたばかりの艦娘には、大戦の頃の記憶……、自分が沈んだ時までのものと、深海棲艦の存在についてしか知りません」
「そうですか……」
　なるほど、そんな感じなのか。
「では、そうですね、艦娘の労働環境についてお聞きしたいのですが」
「はい、構いませんよ」
「戦闘というのはどれくらい？」
「日本海や太平洋の主要な通商海域は開放してあるので、無人機による見張りと、巡回くらいですね。なので、戦闘は、自ら深海棲艦が多くいる海域に攻め入った時と、たまに来る攻撃艦隊から海域を防衛する場合の二種類になります」
「はい、それで、週にどれくらいですか？」

「艦娘によって違いますね。好戦的な艦娘は毎日のように深海棲艦の支配領域に侵攻して深海棲艦を間引きする子もいれば、巡回して侵攻艦隊を追い返す子もいます。まあ、平均的に言えば週に一二回ですね」
　戦闘回数はそんなものなのか……。
「基本的に、艦娘にはノルマがありまして、それをこなせば問題はない……、という形式になっています」
「ノルマはどれくらいですか？」
「一日百体です」
「なっ……?!い、一日百体？」
「はい。毎日戦うのが大変な場合は、一週間分、一ヶ月分をまとめて倒す……、なんてこともありますね」
　そんな馬鹿な……。
「か、仮にそのペースで深海棲艦を倒したとすると、かなり勝っているのでは？」
「いえ、それは分かりません。深海棲艦は無限に湧いているようなので。ですが、このペースだと、段々と、着実にこちらの版図を広げられていると思います」
　凄まじいな……。
「では、休暇は何を？」
「私は……、三味線ですかね？私は料理ばかりであまり趣味らしい趣味は……。他の子は色々と楽しんでるみたいですよ？望月ちゃんはピコピコが好きですし、天龍さんは釣りとか、サーフィン？すのぼ？とかしてますし……」
　人による、ということか。
「海外艦の皆さんは旅行が好きで、妙高さんは読書が好きで、秋雲ちゃんはお絵かきが好きですよ」
　ふむ……。
　旅行に行ったりする余裕があるということか。
　なら、佐官クラスの生活をしているのだろうか。
「その、給料はどれくらいでしょうか？」

「基本給は手取りで月百万円くらいで……、それに事務仕事や料理手伝い、設備維持や研究なんかをやっている艦娘には更に追加で、他にもノルマ以上に深海棲艦を倒せばよりお給金は増えますね」
「そ、そんなに?!」
将官並じゃないか!!
「こんなにもらっても困ってしまいますけど……、提督はこれでも少ないくらいだと」
うーむ、確かに、一日百体の深海棲艦を倒す艦娘にこのくらいは少ない気もする、か？
いや、自衛隊が同じことをするなら、艦隊を動かして何億円もするミサイルを放ち何千万もする装甲板に穴を開けて帰ってきて、艦隊を動かした全員に手当てを渡すとなると、数億円はかかる。
確かに、少ないくらいか。
「では、最後に、艦娘は恋をするのですか？」
「してますよ??」
「お相手は、やはり……」
「提督は私の旦那様ですから??」
ははあ、なるほど……。

ふむ……、艦娘は虐げられている訳ではないようだな。
国防の戦士として立派に戦い、恋をして、趣味も楽しめている、か。
よし、この調子でインタビューを続けよう！

３９６話　ミリタリ記者　中編

「ＭＣあくしすの村田です、よろしくお願いします！」
「鹿島です、よろしくお願いします」
はい、あくしすの村田です。
２８歳独身です。
うちのあくしすは萌えと燃えの融合、幅広い兵器を萌え化してお届けするのが我が社の使命であるのだよ！
その点、艦娘は凄い！
マジで萌え化した戦艦少女がたくさん！
三次元なのがマイナスだが、そんなものが気にならないくらいには美少女揃い！
今回は倍の３００ページお届けするぞ！
ライターが死ぬ？
上等だぁ!!!
俺も締め切りまで家に帰らない覚悟で今回の黒井鎮守府特集を組むんだからなぁ!!!
へへへ、お前らも俺とデスマーチに付き合ってもらうぜ!!!
「あの、村田さん？どうかしましたか？」
「あっいえ、大丈夫です」

さて……、あくしすに求められているのは萌えとミリタリー！
萌えの方は艦娘の写真を撮らせてもらうことにして……、ミリタリー！
ミリタリー……、どこまで見せてもらえるのだろうか？
「あの、鹿島さん？自分はその、萌えミリタリー系の雑誌でして。艤装とかって言うやつ、見せてもらえますかね？」
「はい、大丈夫ですよ。旧型と新型どちらを見ますか？また、誰の艤装を見ますか？」
「へあ？」
「ええとですね、まず、艤装には旧型と新型があるんですよ。生まれた

ばかりの艦娘は核が艤装にあり、艤装に手を加えることはできません。しかし、艦娘には練度という指標があり、この練度と言うものが上がると、核が艤装から肉体へと移り変わっていき、その移り変わって余裕ができた分、艤装に手を加えることができます。これを近代化改修と呼んでいます。また、近代化改修により改造された艦娘は艦種が変わることもありますね」
「なるほど」
「それで……、練度が９９に達した時、核が完全に肉体に移行し、艤装の方が付属品扱いになるんです。すると、艤装は弄り放題なので、艤装を好きに改造できるって訳ですね。これを最終移行と呼んでいます」
　最終移行……。
「最終移行された艦娘は、ほぼ現人神と言っても良いでしょう。核を破壊されない限り不死で、入渠すればどんな傷も元通りですし、艤装がなくても海の上に立てますし、艤装の持つエネルギーを全て体内に持っています。ここで、旧艤装は不要になる訳ですね」
　なるほど……、最終移行した艦娘には従来の艤装が要らないんだな。
「そして、更なる戦力の向上を図った私達は、艤装登録を可能としました」
「艤装登録？」
「元々、艤装を好きなタイミングで召喚できると言う艦娘の特性から、外部で作った武装を艤装として登録して使えるようにならないか、という考え方ですね」
　あー？大砲を呼び出せるなら、あらかじめ作っておいた別の大砲も消したり出したりできるんじゃないかってことか？まあ、不可能ではない、のか？
「旧艤装の不要論と艤装登録により、最新の技術で作った艤装を登録すれば、より戦力の向上を見込める、と考えられ、現在では、艦娘の全員が新艤装に換装しています」
　なるほど……。

「ではまず……、傑作駆逐艦である吹雪の新艤装を見ていきたいですね」
「分かりました。もしもし吹雪ちゃん？今良いかしら？……うん、記者の人。……うん、演習場で待ってて」

演習場に連れてこられた。
「こんにちは、特型駆逐艦の吹雪です！」
「こ、こんにちは！」
こ、こんな小さい子も艦娘なのか？
中学生くらいじゃねーか？
大丈夫なのかこれ？
「では、行きますよ。艤装展開」
「おぉ……」
パッと光ったら吹雪ちゃんは重武装になっていた。
構えた時の写真を撮っておく。
おお、良いね。
武装はマシンガンとランチャー、キャノン砲、ガトリング、ミサイルポッドか……。
「あれ、深海棲艦はレーダーに映らないんじゃ？」
「艦娘のレーダーには映りますよ」
「大砲とかは……？」
「大砲は使い勝手が悪いんですよね、ドロップパーズフォールディングガンの方が強いですし」
成る程、これはこれでありだな！
各武装のスペックを聞けるだけ聞いてメモする。
「ヘヴィマシンガンの装弾数は百二十発、炸薬は液体火薬です。連射と単射が可能で、オプションにグレネードを……」
「他に艤装を見せてくれそうな艦娘さんって……？」
「誰を呼びますか？」
「うーん、大和とか」

「大和さーん」
大和さんの艤装は巨大な黒い手甲とビーム砲、キャノン砲、そして電磁バリアだった。
宇宙戦艦の方かよ……。
取り敢えず写真とスペック聞き出して書く。
「アイオワとかはどうですかね？」
「アイオワさーん」
レールガン、レドーム、レーザー砲、ガトリング、ミサイル……、良いね！
「三日月はどうです？」
「三日月ちゃーん」
超大型メイス、腕部内蔵砲、ネイルクロー、踵にパイルバンカー、有線式テイルブレード……、ロマン兵装じゃねえか!!
「ええと、じゃあ金剛は？」
「金剛さんは艤装を使いません」
「は？」
「徒手空拳です」
ええ?!
「じゃ、じゃあ、そうだな、赤城は？」
「赤城さんは空母なので弓だけですよ？」
「は？空母なら艦載機はどうなっているんですか？」
「聞いてみますか？赤城さーん」
赤城さんがポテトチップス片手に現れた。
「何ですか？」
「艦載機についてお聞きしたいそうです」
「艦載機ですか？Ｆ／Ａ―１８Ｅ／Ｆを２３４機、Ｆ／Ａ―１８Ｃを１８０機搭載していますよ。それとファンネルも少々」
「……は？」
え？
はあ？
いや……。

「あ、あり得ないでしょう、搭載できて４０機くらいじゃないですか？」
「ええと、私の身体を見てください」
「はあ……？」
「どこに搭載していると思いますか？」
「あ……」
　確かに、戦闘機が入る余地はなさそうだ。
「答えは艤装です」
　そう言って、矢筒を取り出す赤城さん。
　矢を一本手に取ると、ピカッと光ってミニチュア戦闘機になった。
「これが艦載機です」
「こ、これが?!」
　こ、こんなミニチュアが？
「小さいですけど性能は元のものとほぼ同じです。だから、私が全力で爆撃をしたらこの街を更地にできますよ」
「い、いや、おかしいですよね？小さければ火力も減るんじゃ？」
「減りますよ？ですけど、その分武装は強化してありますから」
　そ、そうなのか……？
「でも、それにしても、艦載機の数がおかしいのでは？」
「そうですねえ……、だいぶ増えましたねえ」
「いやいや……、だいぶって量じゃないと思いますよ?!」
「艦娘は、あらゆる武装を艤装として収納できますから、空間的な制限が殆ど無いんです」
　空間的な制限が殆ど無い……？
「これは一種のバグというか……。艦娘は全てが、当時の戦艦の性能を持つんですよ。だから、当時の戦艦だった頃と同じくらいの武装をできるんです」
　……ん？
「例えばビスマルクさんなんて、いくらでも銃器が持てることを利用して数万丁の銃器と数千の砲を持っていますね」
　艦娘は人間サイズなのに、積載量は戦艦サイズってことか?!尚、武

装は全て人間サイズ?!
　ってことは……、そうか！このミニチュア戦闘機なら、本物の赤城の中になら四百機くらいは余裕で入る！何だそれ凄え！反則じゃねえか艦娘！
「それに、艦娘は練度が上がるほどあらゆる性能が上がりますから……、私の今の性能なら、もう百機ほど載せられますね」
「な、なるほど……！」

　……高周波ブレード、刀、徒手格闘……。
「あの、疑問なんですけど、何で艦娘なんですか？格闘武器を使うなら最早艦ではないんじゃ？」
「それは固定観念ですね」
「はあ」
「私達艦娘は、人間と同じ形をしています。一瞬で敵の懐に入る機動性と一撃で殺せるパワーと技があれば、態々陣形を整えて砲戦をするのは非効率ではないでしょうか」
　うーん、そうか？
　確かに、戦艦とは違って窓は小さくて小回りが利いて……、滑らかに動くマニピュレータと重機以上のパワーがあるとすれば……、直接格闘は妥当？
　被弾してもダメージを受けない、そもそも被弾しない、などの前提条件は必要だと思うが……。
　装甲板を斬り裂ける腕力があれば砲は要らない……。
　確かに、人間がもし、パンチ一発で人を殺せて、長い距離も一瞬で移動できるくらい素早ければ、遠距離武器はいらない、よな？
　艦娘は深海棲艦の攻撃が当たらないくらいに素早くて、一撃で深海棲艦を倒せるなら、弾薬数に左右されない格闘攻撃の方が燃費が良い？効率的？
「なるほど」
　そうか……、そうなるか。

まあ、戦術論はミリタリークラシックスの人らが調べるでしょ。
次、艦娘の撮影！
「艦娘の撮影とかって……」
「構いませんよ」
艦娘の写真を撮影する。
日常の一ページから訓練中まで様々だ。

よし、こんなもんか。

３９７話　ミリタリ記者　後編

「ミリタリークラシックスの松浦です、よろしくお願いします、加賀さん」
「よろしく」
ミリタリークラシックスの松浦です。
３４歳、妻子がいます。
いやー、あの謎の組織黒井鎮守府への取材ができるとは！
楽しみにしてたんですよねえ。
「……」
「あ、あの？」
「何かしら」
「ええと、その、案内は……？」
「どこへ行くのかしら」
「で、では工廠で武装について話してもらいたいのですが」
「分かりました」
無言で歩いていく加賀さんの後ろについていく。
無口で威圧的な人だな……。
少し怖い。

工廠、明石と夕張と名乗る艦娘に迎えられた。
先程、鎮守府全体を紹介された時にも会った艦娘だ。
さて、どこまで教えてくれるか……。
「ええとそれで、何が聞きたいんですか？」
作業着を着込んだピンク髪の艦娘、明石さんが言った。
「艦娘の武装についてです」
「武装について、ねえ……」
明石さんはプロジェクターに艦娘の姿を映した。
私には分からない、近未来的なグラフや表と、艦娘、そして武装の数々。
どう見ても格闘武器が多いようだが……？

「えー、まず、現在の黒井鎮守府において、武装の統一はしていません。つまり、艦娘の型毎に固有の武装がある形になっています」
「は……？」
　え……、では、となると、単装砲や機銃を装備している訳ではないということか？
「艦娘には、艦娘固有の、その艦娘のポテンシャルを最大限に活かす専用装備があるのです」
「整備の問題などは……？」
「整備は皆自分でやります。しかしまあ、どうしようもないときは私が見ますよ。ですが……、艤装である、という時点で、それは艦娘の身体の一部とカウントされますから、破損紛失したとしても、入渠や時間経過で元に戻ります」
　成る程……？
「ええと、つまり、艦娘の武装は統一されていない上に、整備は自己責任、と？」
「そうですね」
　いやいやいや……。
「そうしたら、艦娘は戦場で武器を失った際どうするのですか？」
「失いませんよ。艦娘の艤装は艦娘の身体の一部です。いつでも好きな場所に出したり消したりできます」
「どういうことですか？」
「あー……、例えばこのスパナ、私の艤装なんですけどね、まずこれを投げます」
　スパナは、硬質な音と共に、五メートルほど先の地面に落ちた。
「で、スパナ見ててください。……はい、消しました」
「おお?!」
　スパナはパッと光って消えた。
「そしてはい、艤装召喚」
「おお！」
　明石さんの手元に先ほどと同じスパナが、また同じようにパッと光って現れた。

「これ、艦娘なら誰でもできます。だから、武器がなくなるってことは滅多にありません。それに、予備の武器も持ってますしね」
成る程……、紛失の心配はない、と。
「では、艦娘のポテンシャルを最大限に発揮する武装とは何ですか？」
「ですから、艦娘によって違います」
ふむ……。
「例えば、どのような感じですか？」
「例えばー……、あー、そうですね、白露型なら狩道具に仕掛け武器と銃、睦月型なら近代兵器、長門型なら徒手空拳、綾波型ならナノマシン……、とかですかね」
聞いたことのない単語がちらほらと出てきたな……。
「えー、まあ、まず、白露型を例に挙げて話しましょうか。そうですね、これは海風ちゃんです」
駆逐艦海風の写真とデータが表示される。
「仕掛け武器のノコギリ鉈と、水銀の弾丸を放つ獣狩りの短銃……、予備もあるそうです」
表示されたのは、拷問器具のような恐ろしさがある大鉈と、アンティークな短銃。
「持ち物はスローイングナイフと遠眼鏡、そして携帯ランタンと輸血液、手記」
投げナイフ、遠眼鏡、腰につけるタイプの小さなランタン、輸血パック？と手記。
「以上です」
「以上って……、彼女は大砲も持たずに出撃するのですか？」
「白露型は仕掛け武器があれば大丈夫なんですよ」
戦闘時の映像が流される。
海風さんは、深海棲艦の砲火を軽々と躱しながら接近して、鉈を深海棲艦に叩きつけている。
また、短銃で近付いてきた深海棲艦を撃つと、深海棲艦は大きく仰け反り、その瞬間に……、あれは臓器だろうか？深海棲艦の腹部から臓器を引き抜いて殺している。

投げナイフも巧みに牽制に使い、深海棲艦の眼孔や口蓋、喉や心臓などに正確に投げて倒すシーンもあった。
また、手元から青白いうねる触手を出して、深海棲艦を弾き飛ばすのも見えた。
「あー、あれはエーブリエタースの先触れですね。上位者の力の一部を引き出して使ってるみたいですよ。白露型はそういうの得意ですから」
「触手、が」
「だから、エーブリエタースの先触れですよ。まあ、人間には分からないと思いますけど……、神の一種の力を借りた秘儀だそうです。呪術とか魔法とかそんな感じです」
「そ、そんなもの……」
「非科学的だけどあるものはあるんですよねー。そもそも、艦娘だってある意味では神の一種ですし」
魔法……。いやしかし、艦娘の存在そのものがオカルトだから……。
「まあ、白露型は分かりづらいですかね。じゃあ睦月型を見ていきましょうか。皐月ちゃんです」
黄色い髪の少女が映し出される。
「皐月ちゃんはミサイルをこよなく愛する火力信奉者ですね。基本的に、睦月型は菊月ちゃんと三日月ちゃん以外は作戦によって武装を変えますね」
「えっ、さっき、艦娘のポテンシャルを最大限に発揮する武器とか言ってましたよね？」
「はい、言いましたね。でも、睦月型は器用で、大抵の武器に適性があるんですよ」
そう、なのか？
「皐月ちゃんは……、ミサイルとバトルライフルを好む傾向にあります。睦月型の装備は銃が二種類ずつ二丁、それと格納武器、予備、オーバードウェポン、全部含めて十種類は装備していますね」
「そんなに」

「皐月ちゃんは基本的に、バトルライフルをメイン火力に、命中時のストッピングパワーが強いハンドガンとＶＴＦミサイルを装備していることが多いです。部隊では中衛をすることが多いですね」
「中衛ですか？戦艦に前衛や後衛があるのですか？」
「はい、睦月型なら前衛は睦月ちゃんや如月ちゃん、水無月ちゃん、三日月ちゃん、中衛は皐月ちゃん、菊月ちゃん、文月ちゃん、後衛は望月ちゃん、長月ちゃん、卯月ちゃんですかね」
「その、陣形、とか」
「人間大の大きさの艦娘が複縦陣とかをして意味があると思いますか？」
……まあ、他の艦をかばい合うにも、人間大なら小さ過ぎて意味がない、か。
「成る程。では、前衛は深海棲艦に直接攻撃を？」
「格闘攻撃や実体剣、レーザーブレード、パイルバンカーなどで攻撃をします」
「レーザーブレードですか?!」
「はい。黒井鎮守府の科学力では実用レベルに達しています」
確かに、一部組織ではレーザーの軍事転用もされていると言う噂はあるが……。
「レーザーブレードの稼働時間はどれくらいですか？」
「レーザーなどのエネルギー系兵装は艦娘の神秘エネルギーを使って使用します。艦娘のスタミナが切れない限りは稼働するでしょう。それに、睦月型のレーザーブレードの使い方は、斬りつける一瞬だけレーザーブレードを展開するやり方なので、極めて燃費が良いそうです」
それは……、確かに、一瞬だけ展開するならば間合いも読めないですし、エネルギーも節約される……。
効率的な運用だ。
「なら、中衛は？」
「中衛はまあ、色々ですね。ライフルとマシンガン、パルスガン、レーザーライフル……、重武装すればキャノン砲やガトリング、大型ミサ

イルやチェーンガンなどもありますね」
「主にどのような戦術を？」
「あー……、うちは少数精鋭かつ、それぞれに役割があるので、皆自由な戦術で動きます。指揮を執ってもらうケースもありますけど、基本的な遭遇戦や小規模な強行偵察などでは、艦娘が独自のロジックで動くので、なんとも……」
「では、睦月型はどのように動きますか？」
「睦月型はですねえ、中衛なら、前衛が敵を引きつけたり、ショックを与えて動けなくさせたりするので、それを叩いたりしますね。他にも、後衛と連携しての制圧射撃や……、前衛が動きやすくなるように雑魚を倒したりもします」
　成る程……。
「では、後衛は？」
「睦月型の後衛は、スナイパーライフルやスナイパーキャノン、レールガンなどで武装していて、主に敵の指揮官を遠距離狙撃で早期に殺害する役割があります」
「深海棲艦にも指揮官がいるのですか？」
「いますね。基本的にその場で最も強い深海棲艦が指揮を執るようです」
「指揮官を倒すと、やはり、深海棲艦も混乱するのですか？」
「ええ、明らかに動きに精彩がなくなりますね」
「そうですか……」
　深海棲艦の艦隊にも旗艦は存在するのか……。
「深海棲艦はどのように指揮を？」
「鳴き声と……、特殊な音波というか、波動というかで指示しているみたいですね」
「まるで動物ですね……」
「深海棲艦は動物並ですよ、実際。上位の深海棲艦なら高い知能を有しますけど、下位の深海棲艦はほぼ動物並の知能です。でも、数は圧倒的に多い。だから私達艦娘は、知恵と個々の戦闘能力で上回らなきゃならない訳ですね」

「成る程……」
×
×ふむ、取材はこんなものか。
×帰って特集記事を組むぞ！
×
×
×
「提×督、そう言えば前の記者達の記事はどうなりましたか？」
「う×ーん？まあ、エキゾチックな出来になっているね。スッゲー売れ
×たらしいよ？」
「爆×破……」
×
「そんなことしなくて良いから（良心）」

３９８話　学力は大事

艦娘の中には、趣味だったり、暇つぶしだったり、学歴の為だったりと、勉学に励む者がいる。
戦後は大学に行って学を積んで働きたいと言う艦娘もいるにはいるのだ。
素晴らしいことだね。
俺も院卒だし、教員もやっていたから、教えることは可能だ。
何でも聞いてね。
一方で、現在の総理大臣の名前も知らない子も多い。
よし、前もやった気がするが。
「黒井鎮守府学力テストー!!!」
黒井鎮守府で、学力テストを実施。
バカとテストと召艦娘であるぞ！
内容は高校レベルの知識を持っていれば八十点はとれるテストだ。
逆に、満点を取るにはその分野のかなり専門的な知識が必要だ。
今回は艦娘の答案用紙を見て暇つぶしをしようと思う。
ついでにコメントを書いて、採点して返す。
うん、まあ、ね。
酷かったよ……。

問：以下の漢字の読みがなを書け
『齷齪』
長門の答え：『あくせく』
旅人コメント：お、偉い
アイオワの答え：『や？あし？』
旅人コメント：努力は認めるよ
ポーラの答え：『（ヨレヨレの文字で）Ｎｏｎ　ｒｉｅｓｃｏ　ａ　ｌｅｇｇｅｒｅ　ｌｅ　ｌｅｔｔｅｒｅ　ｐｉｃｃｏｌｅ　ｏｒａ．
（訳：今はちょーっと細かい文字とか読めないですね～）』
旅人コメント：テストって言ったのに泥酔してんの何でなのかなー

？

問：次のひらがなを漢字で書け

『うどん』

鳳翔の答え：『饂飩』

旅人コメント：偉い

ビスマルクの答え：『おいしい？』

旅人コメント：感想は求めてないよ

プリンツの答え：『ヒラがなレか猫けません？』

旅人コメント：そっかー

問：（弾道計算問題）

金剛の答え：（正答）

レーベの答え：（正答）

島風の答え：（正答）

旅人コメント：えぇ……。君ら数学苦手なのに弾道計算だけはちゃんとできるのやめて、怖い

イクの答え：『イクには大砲がなかったから分からないのね！』

旅人コメント：そっかー

問：（数学オリンピック、２１世紀最難問）

明石の答え：（正答）『これくらいなら余裕ですね』

時雨の答え：（正答）

陸奥の答え：（正答）『数学オリンピックの過去問よね？答えを覚えてたわ』

旅人コメント：えぇ……。何で解けるの？怖……

望月の答え：『そもそも問題が理解できない』

旅人コメント：まあ、この問題は解けない前提で出したし

問：Ｗｈｙ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ　ｌｉｋｅ　ａ　ｆａｕｌｔｙ　ｊｉｇｓａｗ　ｐｕｚｚｌｅ？（訳：どうして世界は不完全な

ジグソーパズルみたいなの？）
サラトガの答え：『Ｂｅｃａｕｓｅ　ａ　ｐｅａｃｅ（ｐｉｅｃｅ）ｉｓ　ｍｉｓｓｉｎｇ．（訳：ピースがないから）』
旅人コメント：まあ母国語だもんね。これはパズルのピースと平和のピースをかけたなぞなぞだよ
長門の答え：『仮に英語が読めなくとも日本で生きていくならば問題ないのではないか？』
旅人コメント：そういうこと言わないの
漣の答え：『ジグソーパズルは好きでも嫌いでもないです』
旅人コメント：ｌｉｋｅを好きって読んだのかな？

問：日本語の諺に訳せ
『Ｗｈｅｎ　ｏｎｅ　ｄｏｏｒ　ｓｈｕｔｓ，ａｎｏｔｈｅｒ　ｏｐｅｎｓ．（訳：一つのドアが閉まる時、もう一つが開く）』
サラトガの答え：『捨てる神あれば拾う神あり』
旅人コメント：正解！サラは偉いな、ちゃんと日本語の勉強もしてるんだから
ビスマルクの答え：『Ｗｏ　ｄｉｅ　Ｎｏｔ　ａｍ　ｇｒ▪▪ｔｅｎ，ｉｓｔ　ｄｉｅ　Ｈｉｌｆｅ　ａｍ　ｎ▪ｃｈｓｔｅｎ．（訳：苦難が最大の場合、救いの手も一番手近にある）』
旅人コメント：合ってるけど違うねー、日本語に訳せってイワナ、書かなかった？
明石の答え：『ドアが閉まったり開いたりするから何なんですか？』
旅人コメント：明石は英語はある程度読めるみたいだけど、慣用句的な表現とかは分からないのね

問：シェイクスピアの四大悲劇、全て答えよ
妙高の答え：『オセロ、マクベス、リア王、ハムレット』
旅人コメント：はい正解。流石は文学少女
如月の答え：『ロミオとジュリエット……？』
旅人コメント：惜しいなー、ロミオとジュリエットは四大悲劇に入

らないんだよね
天龍の答え：『シェイクスピアって誰だ？』
旅人コメント：有名な作家だよ、名前くらいは知っておこうね

問：ソクラテスの弁明の著者は？
山風の答え：『プラトン』
旅人コメント：はい正解！偉いねー、引っかからないよね
足柄の答え：『ソクラテスじゃないの？』
旅人コメント：違うんだよなー
暁の答え：『司令官？』
旅人コメント：俺じゃないのは確かだよね

問：天然のものは生まれたときは白い身をしているが、エビなどをエサとして食べているうちにその色素が体内に蓄積して赤くなる。この白身魚の名前はなにか？
間宮の答え：『鮭』
旅人コメント：そうだよー、流石！身が赤く見えるのは、エビやカニにも含まれるカロテノイド系色素のアスタキサンチンが含まれているからだよ、よく知ってるね！
熊野の答え：『鮭』
旅人コメント：偉いぞ熊野
鈴谷の答え：『ハマチ？』
旅人コメント：ハマチは赤身だね。って言うか今日の昼ご飯だったよね

問：（交響曲第５番運命の楽譜）この曲の曲名は？
那珂の答え：『運命』
旅人コメント：おー、那珂ちゃんは音楽に詳しいからなー
陸奥の答え：『交響曲第５番運命』
旅人コメント：流石は教養勢
漣の答え：多分モーツァルト

旅人コメント：ベートーベンだよ？

問：放送問題第８問、この曲の名前を答えろ（答え：アスラエル交響曲）

那珂の答え：『アスラエル交響曲』

旅人コメント：はい偉い。結構難しいと思ったんだけどよく分かったね

陸奥の答え：『ヨセフ・スクのアスラエル交響曲ね』

旅人コメント：はい教養

佐渡の答え：ＲＰＧのラスボスが出た時に流れるやつ

旅人コメント：まあ、それっぽいけどね？

問：ヨーロッパで一番長い川を答えろ

ウォースパイトの答え：『ボルガ川』

旅人コメント：まあ地元やしね

龍驤の答え：『セーヌ川？』

旅人コメント：残念！でもヨーロッパの川を答えてくれただけマシかな

初雪の答え：『アマゾン川』

旅人コメント：あのさぁ……

問：この作品名を答えろ（ダビデ像の画像）

陸奥の答え：『ダビデ像』

旅人コメント：まあ、これは知ってなきゃマズいよね

鈴谷の答え：『包茎のおじさん』

旅人コメント：やめよう？

武蔵の答え：『筋肉が足りんな』

旅人コメント：トレーニング的観点で芸術を語られても……

問：「廻れば大門の見返り柳いと長けれど……」から始まる小説のタイトルを答えろ

赤城の答え：『たけくらべ』樋口一葉ですね
旅人コメント：はい正解
天津風の答え：『にごりえ』
旅人コメント：惜しいね
卯月の答え：『羅生門？』
旅人コメント：門に反応したね？羅生門は、「ある日の暮方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。……」だよ

問：オリオン座で最も明るい星を答えろ
ウォースパイトの答え：『リゲル』
旅人コメント：はい正解
弥生の答え：『ベテルギウス』
旅人コメント：惜しい、ベテルギウスは二番目だよ
望月の答え：『あれがデネブ、アルタイル、ベガ』
旅人コメント：君の知らない物語やめろ

……とまあ、こんな感じだ。
基本的に、できてない子は本当にできてなくて、中学レベルすら怪しい有様だけど、平均レベルは高校生並で、トップ層は大学教授レベルの知識を持っていることが分かった。
因みに、全科目満点を取ったのは、陸奥、ウォースパイト、リシュリュー、テスト、サラ、熊野、妙高、白露型、香取、大淀、アーク、鳥海、筑摩、グラーフ……、結構いるなこれ。
そもそも、人間とは賢さが違うからな。
艦娘の方が遥かに賢いんだ。
さて……。
成績が悪い艦娘を集めて説教だ。

３９９話　旅人魔法で黒井鎮守府に笑顔を

俺は休憩室で時雨とチェスをしている。
因みに時雨は人外レベルでチェスが上手い。
他にも望月がその辺で漫画を積み上げて読んでるし、五十鈴が本を読んでいる。
実に平和な日常の１ページだ。
こんな長閑な日々が続くことこそが、真の平和と言うのだろう。
政治家や官僚の掲げる大層なお題目ではなく、人々の健やかな営みの中にこそ、平和がある。
確かに、景気が悪いだとか、終身雇用がなくなるだとか、外交だとか、色々あるだろう。
だが、そんな世知辛い世界でこそ、暖かな平和を謳歌することは罪なのだろうか。
「さて、提督。ここに白露型が作った、人間の脳に寄生し人間を操る寄生生物のサンプルがあるんだ」
「時雨ー、俺のモノローグ読んでるんでしょー？読んでそれはないよねー？」
「継続的に前頭葉を破壊し続けるようになっているから、提督にも効くんじゃないかと思ったんだけど」
「話聞いてるー？」
勘弁してよ、それもう絶対痛いやつじゃん。
「痛みは一瞬だよ。すぐに何も分からなくなる」
「望月ー、助けてー、ボンドルド卿がいるよぉ」
「いやー、きついっす」
「助けて、割とマジで。俺、このままだとミーティみたいにされちゃう、人の形を失いそう」
「……あー、頑張って？」
「協力してくれるね、提督？」
「た、た、助けてナナチぃーーー!!!」

×××
×××
×××

なくてはならないね。
『??????????……『加速』『ヘイスガ』『ダッシュ』『とんずら』『内なる大力』『生命湧き』『リジェネレーション』』
「??え……！」
成る程、触腕に付いている多数の口で同時に詠唱するのかい。
そして踏み込み……、速い！
『ＡＧＡＡＡＡ!!!!!!』
発勁か！
一歩退いて避ける。
続いて南斗聖拳、無空波、足の鉤爪、尻尾……。
『瞳』での観測、安易的な、ごく限定的な未来予知。
「ファイアブレス、かな？」
ブレスを吐かれる前に提督の片腕を斬りつけて、提督の背後に跳ぶ。
『ＲＵＵＵＵ……、??????????????『魔力の矢』『ファイアボルト』『ブリザガ』『火球』『ソウルの槍』』
片腕を斬り飛ばされながらも、即座に再生して、追撃の遠距離魔法を放つ提督。
「やる、ねっ!!!」
身を捩って躱す。
熱線が、熱量の塊が背後へと通り抜けていく。
『緩やかな平和の歩み』
「ッ！」
緩やかな平和の歩み……、一定範囲に存在する者の速度を著しく下げる『奇跡』だ！
捕まったら不味いね、魔法で盾を張って耐えよう。幸いにもこの奇跡はおおよそ１０秒ほどで効果が切れる。その瞬間に踏み込んで首を斬り落とそう。
さあ、今……、?!
『”Ｋｎｕｐｐｅｒ，ｋｎｕｐｐｅｒ，Ｋｎｅｉｓｃｈｅｎ，Ｗ

ｅｒ　ｋｎｕｐｐｅｒｔ　ａｎ　ｍｅｉｎｅｍ　Ｈ・ｕｓｃｈｅｎ
?”』
「何っ……、だって?!」
見たことのない術式だ！
提督、まだ隠し球があったんだね?!
普段あれだけ、もう手札がないとか言ってるのに！
何が起きる……、攻撃……、いや、提督の性格と魔力では強力な攻撃魔法はあり得ない、妨害系の術式、のはず……、いや、あれはどう見ても錬金術の系統だ……、どこから何が来る？
その時、足元の床が割れた。
一瞬、床を見てみると……。
「床の木材がクッキーになってる?!」
ま、さか、『ヘンゼルとグレーテル』のお菓子の家の再現?!
魔術に使うなら、もっと古くて神秘の篭ったヨーロッパの神話などにすれば良いものを、たかだか二百年分程度の神秘しかないグリム童話で術式を編むかな普通?!
そもそも、これ、『家の一部の木材をクッキーに変える』って、どこで使う術式なんだい?!!何を想定して作ったのかまるで分からない術式だよ!!!
本当に、頭のおかしい術式を編ませたら世界一だよ提督は!!!
『天の原　振り放け見れば　霞立ち　家路惑ひて　行方知らずも』
次は何が来る?!
腕が……、いや、服が突っ張って、脱げた?!
「そうか……っ！」
そうか、丹後国風土記の羽衣伝説から編んだんだね?!
天女が羽衣を隠されると言う内容を都合よく解釈して、相手の服を脱がせる術式か！
冗談みたいだよね！態々服を脱がせるためだけにこんな綿密な術式を編んだの?!!
しかもこれ、この記述じゃ女にしか使えないじゃないか!!
何でそう、変な術式を編むんだよ君は!!

僕は即座に魔力で足場を作り、刀を握りしめた。
「良い加減に……!!」
『閥閲遺書思惘然　誰知天道有循環　西門豪横難存嗣　經濟顛狂定被殲　樓月善良終有壽　瓶梅淫佚早歸泉　可怪金蓮遭惡報　遺臭千年作話傳!!!』
今度は何の魔術だろうか。でも……。
「僕の一撃の方が……、速いよ!!!」
僕の刀は、正確に提督の首を捉えた、はずだった。
しかし。
「斬……、れない?!防御系の術式かい?!ああもう、術を解かないと……!!」
解析……、って。
「今度の術式はよりにもよって金瓶梅から編んだのかい?!!」
金瓶梅は水滸伝のスピンオフ官能小説みたいなものじゃないか!!
そんなものから魔術を編むだなんて、普通の魔導師ならプライドが許さないよ!!
術式の内容は、『浮気をすればするほど死ににくくなる』と言うもの。……提督がやったら最強じゃないか?!!
さてはこれが切り札だね?!!
提督は全くもう!!!
「しかも滅茶苦茶複雑な術式……、やっぱりこれが切り札だね?!」
くっ、面倒な……!
あ。
「しまった!」
捕まった!
『ＧＩＩＩＩＩＹＡＡＡＡＡＡ!!!』
くっ、不味い、毒を注入された!
解毒薬を……!
……。
この毒、媚薬だ。
『ＥＣＣＨＩＮＡＯＮＮＡＮＯＫＯＳＡＩＫＯＯＯＯＯ!!!!』

「提督……、理性戻ってないかな？」
『……CHYOTTONANIITTERUKAWAKANNAIDESUNE』
「別に媚薬を注射されたのが嫌だった訳ではないよ。けど、結局、本気で戦ってくれないのは少し困るな」
うん、ちょっと本気を出すよ。
×
×
×
×
気がついたら首だけになって白露型の工房に軟禁されていた。
何言ってるかわからねーと思うがちょースピードだとかうんぬんかんぬん。
「提督……、僕は本気で提督と戦いたかったんだけどな」
「いやそんなん言われましても女の子に酷いことしたくないし」
「君の殺意が欲しかったんだけど。僕は君が欲しいんだ。愛も、殺意もね」
「えー……、対決するならラップバトルとかスマブラとかマリカにしてよ」
「どれも僕が負けるじゃないか」
うん、まあ……。
平和じゃん？

４００話　黒井鎮守府すごろく

ん？
お、すごろくだ。
誰のだ？
まあ、休憩室にあるものだから、誰のものでもないか。備品だろう。
うん、よし、これで駆逐艦の子達と遊んであげようかな。
中身はどんな感じだ？
「……はっ?!」
すごろくを開いた瞬間、転移魔法が発動し、異次元空間に飛ばされてしまう。
『さあ始まりました、提督すごろく！』
明石の声がどこからともなく響いた。
「は、謀られた……?!」
『謀るなどと！私達は、提督が頑張る姿が好きで好きで好きで

ねえ!!

さて、黒井鎮守府っぽい異次元空間。
目の前にはどうでしょうみたいな……、黄色いライオンが出てきそうなでかいサイコロ。
そして、マス。
つまり、俺自身が駒で、俺自身がサイコロ振って進めと言う……。
闇のゲームかな？
やりゃあ良いんだろ、やりゃあよぉ!!!
「そぉい!!!」
俺はサイコロを振る。
出目は……、４！
４マス進む。
すると、進んだ先のマスの地面から看板がにょきっと生える。
雑ゥ。
看板を見ると……。
『ドキドキ！鍵探し！このプールの中から鍵を探してね！』
「ははっ、水泳は得意だぞ」
プールを見る。
プールの中にはびっしりと注射器が。
「ＳＡＷじゃねーか!!!」
あーあーあー！
「クソ、これ、やらなきゃ駄目？」
『やって下さい』
「チキショーーー!!!」
俺は注射器の山にダイブ。
いてててて。
あ、見つけた。
「畜生、あーあー、刺さってるよこれ……」
注射器を引っこ抜いて投げ捨てる。

「次だ」
サイコロを振る。
3！
3マス進む。
『Wおっぱい』
「Wおっぱい!!!
Wおっぱい?!!!!」
「はーい、提督ー??」
「おっぱいですよー??」
高雄と愛宕が転移してくる。
しかもビキニ。
やったあ！ビキニだあ！
「えーい??」
Wおっぱいに挟まれた！
「わあい」
とても楽しい!!!!
「はぁー、最高」
生きてて良かった。
しばらくWおっぱいを楽しんだ後に解放されて、またサイコロを振る。
2だ！
『ガトリングガン斉射』
「えっちょっ待っ……、ッッ！ナークティトの障壁！肉体の保護！」
魔術を唱えるや否や、四方八方に転移してきたガトリングガンが火を噴く。
「ぐおおおああああ!!!」
流石にガトリングは効くなあ!!!
三十秒程のガトリングの弾丸を受けきると、サイコロが出てきた。
進めってか。
よし6だ！
『ガンダムヴァサーゴチェストブレイク』

「ガンダムヴァサーゴチェストブレイクか！」
ガンダムヴァサーゴチェストブレイクが現れる。
やばい！トリプルメガソニック砲だ！
転移で回避。
ふう、危ねえ。
流石に防御力に自信ニキである俺もトリプルメガソニック砲が直撃したらバラバラになるからな。
バラバラってか焼き切れる感じ？
親子かめはめ波を喰らったセルみたいになる。
次、またサイコロを振る。
……3！
『鞭打ち』
「ええー、痛いのやだなぁ」
鞭は痛いからなあ。
「はーい、提督??」
おや、鹿島じゃないか。
鹿島に鞭を手渡される。
……ん？
鹿島がヨツンヴァインになる。
……ン？
「どうぞ!!」
「何が？」
「鞭打ちです！私が満足するまで、提督は先に進めません！」
「何それは」
「早くっ??ぶって下さいっ??」
あー。
うん。
「痛いよ、やめなよ」
「痛くして欲しいんですよ!!!」
そんなん言われましても……。
「じゃあはい、こう？」

「もっと強く!!!」
「はい」
「もっと真剣に!!!」
「あっはい」

鹿島は、満足するまでぶたれると帰っていった。
……なにこれ？
気を取り直してサイコロを振る。
５だ！
『おやつの時間』
おやつかー。
間宮が転移してくる。
「シュークリームですよー、お茶にしましょう？」
「うん、そうだね」
間宮と取り留めのない話をして３０分くらいほのぼのとした時間を過ごす。
「その、シュークリーム、どうですか？洋菓子はやっぱり、提督の方が上手かなー、と」
「いやいや、そんなことないよ、間宮は凄く上手いよ。美味しいって。俺の味の好みも分かってるから、味はバッチリ」
「そうですか？やりました！」
さて、次のサイコロは、と。
あー、１だ！
『２マス進む』
わーい。
２マス進んだ先で。
『那珂ちゃんオンステージ』
「那珂ちゃんだよー！」
「キャー！那珂ちゃんー!!」
よく分からんが取り敢えず出来る限り沢山分身して観客になる。
「じゃあ、一曲目！いっくよー！」

「「「うおおおおお!!!!」」」
楽しんだ。
次、サイコロを振る。
4だ！
また看板がによきっと。
『オススメのカップ麺とかあります？』
おおっと、急に私事だぞ？
「あー、ラ王と、すみれ、ねぎみその逸品とか」
『ありがとうございます』
なんなのこれ……。
ま、まあ、兎に角、ゴールしてしまえば解放されるだろう。
取り敢えず、サイコロを振れば進むんだ。
さあ、サイコロの出目は……。
初めてHした話！
「ちょ、ちょっと待って、サイコロ、これ、サイコロが」
『初めてHした話、どうぞ』
「いやこれおかしい、サイコロが壊れてる、振った時にはちゃんと数字だったよね?!ねえ!!?!」
『初めてHした話、どうぞ』
あー！
分かりましたよ、しますよ!!
「つっても覚えてないんだけどなぁ……、あー、えーと、多分小学生くらいの頃だと思うよ？」
『えっ、早くないですか？』
「近所のショタコンお姉さんとした記憶がある」
『まさかのおねショタ』
「同級生を口説いてしたこともあるな……」
『イ　ン　ピ　オ』
「まあ多少はね？」

さあ、そろそろゴールも見えてきたな。

サイコロを振る！
よーし、６だ！
『Ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ．』
はえあ？
「こんにちは、提督」
「海風……」
「よろしいですか？」
「何が？」
すると、闇からぬるっと現れた江風と山風に腕を掴まれる。
「え？これは、その、スクールデイズ的な？」
「はい」
「待って、待って、早まらないで？ちょっと待って、そのノコギリ鉈置いて」

ぎこ、ぎこ、ぎこ……。

首だけになった俺。
どうすっかな……。
取り敢えずこうだ。
「ゆっくりしていってね！」
生首はグロいのでまんじゅうに化ける。
「えい」
サイコロに体当たりして転がす。
６だ。
「まあね、やっぱり、おれもしらがだからね。あーるてぃーえーみたいになるよね」
生首のまま跳ねて移動する。
『いただきます』
「んん？いただきますとは？」
「どうも、提督！美味しそうな見た目になっていますね！」
あっ……!!
!!

「あかぎーーー!!!た、たしかに、いまのおれはまんじゅうだけど、たべちゃだ、あああああああ!!!」
「中身は……、がぶっ！わあ！カスタードクリームと生クリームなんですね！美味しいです！」
「ゆっくりしていってねーーー!!!」

ボロボロになりながらも、最後のサイコロを振る。
「これで……、じ・えんどだぁぁぁ!!!」
6っ！
ゴール!!!

『第2部に続く』

「うわあああああああ!!!」
ゆっくり旅人、しめやかに爆発四散。

４０１話　過去改変系彼女　その１

「はい旅人レポーーート！はいと言う訳でね、俺は今ストックホルムに来ています！ストックホルム、どこだか分かります？ストックホルム症候群の名前ばっかり有名で肝心のストックホルムがどこかわからんよって人多いんとちゃいますか？」

ストックホルム症候群は元々ノルマルム広場症候群って言われたんだけど、スウェーデンの国外のメディアが勝手にストックホルム症候群って言い始めてそれが定着したらしいよ。

まあこんな豆知識クイズ大会でしか使えないわねー。

うん。

はい。

と言う訳でスウェーデン！

スウェーデンに来てるぞ！

ソロでな！

でも、俺には分かるが、明石が衛星で監視しているし、白露型の『瞳』も感じる。

見られてる。

だからナンパはできぬ……。

こわいよう。

さて、気を取り直して海外旅行だ！

久し振りの海外だなー！

楽しみー！

『な、なんだあの男は……、虚空に向けて話しかけている？サイコパスだ……、関わらんでおこう』

と、街の人にドン引きされながらも旅。

いやこれ、多分、黒井鎮守府にオンエアされてるからね。

俺一人で話している訳じゃない。

一人じゃない。

ひーとりじゃなーい、ひーとりじゃなーい、ひーとりじゃなーいからー!!!

「ゆずと言えば冷蔵庫にゆずジャムあるから食べて良いぞー」

「スウェーデンは料理も結構美味いぞ。あの悪名高いシュールストレミングを作った国だからメシマズじゃないのかって？そんなことないない！」

スウェーデン料理はなー、なんかこう、しょっぱいものに甘い味を加えるみたいな、天邪鬼なことやるのが多いんだよね。

けど、それが良くってさー。

ほら、日本料理でも、煮物に砂糖を入れたりするだろ？スウェーデンでも肉料理にフルーツジャムを……、とかやるんだけど、これがまた美味いのよ。

ショットブラールって言う、まあ、肉団子があるんだけどね、これ、ブラウンソースと苔桃のジャムで食うんだよね。「えー？肉にジャムー？味覚障害かー？」って思うじゃん？それが結構いけるんすよ！ジャムの酸味がいいアクセントになっていくらでもいけるんだよね！

あ、因みに、シュールストレミングだって食ってみると普通に美味いぞ。

いや、臭いよ、確かに臭いよ？

でも、食べ物に罪はないんだ、食ってごらんよ。

強烈な匂いと、塩気！意外と美味いんだよな、これが。食べ辛いならパンに乗せて食べるとかしてみればどうかな？

さて、グルメ話はこの辺りにしておくか。

ここからは自分の目で確かめてくれ！と昔の攻略本みたいなことを言っておく。いや、舌で確かめてくれ、かな？

まあそんなことはどうでも良い。

夕暮れ。

やっとあの子といい感じ？あの子って誰だ。

その時シュワっと風が切れたりはせず、俺は。

『あ、う……』

傷ついて倒れる美女を、砂浜で見た。

「んー」
はい、旅中止。
俺はスウェーデンのグループダンス、エンゲルスカを一人で踊りながら倒れ伏す青髪の美女に近寄る。
おっ、これは……。
「艦娘じゃーん」
相手が人かどうかくらいは見抜ける。艦娘かどうかも。
流石に毎日会っている艦娘を、艦娘と人と見分けがつかないなんてことはない。
スウェーデンだし、スウェーデン語かな？英語でも通じると思うけど。
『おはよう、大丈夫かい？』
『う、うぅ……！』
あ、起きた。
『こんにちは美しいお嬢さん。俺は新台真央、旅人さ。君の名前は？』
立たせる。
『……たしに』
『はい？』
『私に触れるなぁーーー!!!』
「あっふん」
俺はぶん殴られ、三メートルほど宙を舞う。
空中で受け身を取って、着地した。
『痛いじゃないか』
興奮した様子の艦娘。
ふぅん。
『大丈夫、落ち着いて……』
俺はナウシカを見習い、ゆっくりと青髪の艦娘に近寄る。
『来ないで……、来るな、人間!!』
物凄い蹴りが腹部に突き刺さる。
一般人なら内臓がお釈迦になっているだろう。しかし俺は旅人だ

から平気である。
『効かねェ！ゴムだから！（麦わら）』
『?!!』
俺は蹴りを受け止めて、この美女を抱きしめた。
『離して、離せ、離せーーーっ!!!』
錯乱して暴れる艦娘。
乳房が揺れて錯乱房。あっいやごめん聞かなかったことにして、つまんないこと言っちゃった。
俺は骨が折れ、肉がこそげ落ちる。
リジェネの魔法を使い、継続的に肉体を再生させる。
『怖くないよ、大丈夫、大丈夫』
やがて、そもそも、暴れる体力もなかったのだろう、青髪の艦娘は大人しくなった。

『落ち着いたかい、お姫様？』
『……分かったから、離して』
『おや、振られちゃった？おっかしいな、俺イケメンだよな？』
『うるさい』
『おお怖い怖い』
艦娘を離す。
『それで、お名前は？ここで会ったのも何かの縁、名前くらい聞かせてくれても良いだろ？』
『……ゴトランド』
ゴトランド。
『軽航空巡洋艦ゴトランド、スウェーデン海軍の素晴らしい艦』
『……ッ!!!!』
ゴトランドさんは一気に警戒して、艤装を喚び出し、こちらに砲を向けた。
『ヒュー、怖いね』
口笛を吹く俺に対して、ゴトランドさんは鬼気迫る様子で叫んだ。
『貴方……、鎮守府の追っ手?!』

『何のことだか分からないな。まあ、君程の美人なら追っかけになるのも悪くな』
発砲され、砲弾が顔の横を掠める。
怖いなあ。
『ふざけないで。追っ手なのかと聞いているのよ』
『違うとも。口ぶりから察するにどこかから逃げてきたんだろ？それなら、追っ手なら武器を持った屈強な男が何人も……、とかじゃないかな？俺は一般通過旅人、害はないよ』
『……貴方だって屈強そうだけど』
『俺の筋肉は艦娘と比べたら見せ筋みたいなもんだよ。軽巡に腕相撲で負けるからな、俺は』
一部駆逐艦にも負ける。
『じゃあ、貴方は何者？』
『一般通過旅人。ついでに言えば……』
俺はゴトランドさんの手を握る。
『君を助けに来た』
ゴトランドさんは、俺の手を振り解く。
『人間如きに、何が出来るって言うのよ……!!』
おやおやおやおや。
随分と人間不信だな。
相当辛いことがあったんだろう。
俺が守護ってやらなきゃな。
例え俺より強い女の子だろうと、美人なら俺が守る。
『少なくとも、そうだな。俺はこう見えてかなり稼いでいてね。何十億クローナも持っている。それに外国への逃亡手段と、偽装戸籍を作るツテなんかもある』
『……貴方、マフィアのボスだったりする？』
『まあ、うちは悪の組織だからな。マフィアとも繋がりがあるよ』
『そう……』
『つまり、そうだな。俺んとこに来なよ、と言っている』
『……嫌よ』

あらあら。
振られちまったかー。
んー、俺イケメンなんだがなあ。
『どうして？』
『人間は、信用できないから』
……あー。
そう来るかあ。
……んあ。
『そこまでだ!!!』
あー……。
『ゴトランドめ……、良くも面倒をかけさせてくれたな!!』
『提、督……!!』
シリアス、入っちゃったかー。

４０２話　過去改変系彼女　その２

『ゴトランド、貴様、敵前逃亡は死刑だと知ってのことか？』
銃を持った兵士達に取り囲まれる。
流石に、艦娘である私は、銃火器程度では死にはしないけど……。
私には首輪がある。
首輪……、艦娘の力を減衰させる制御装置。
これを扱える者を提督と呼ぶ。
この首輪の力があれば、提督の意思一つで、艦娘はたちまち人間以下の力しか出せなくなる。そしてこれは、提督にしか取り外しはできない。
その状態で撃たれれば、私も死んでしまうだろう。
現に、今。
『ぐ、うっ……!!』
自分の体重を支えることすら困難な力の減退を感じる。
立って、いられない。
『それにしても間抜けな女だ。勝手に逃げ出して、途中で深海棲艦と交戦し負傷。鎮守府のすぐ近くのここ、ストックホルムに寝転がっているとは』
提督が私を足蹴にする。
『私から！逃げられると！思っていたのか!!』
『ぐっ、がっ、があっ!!』
人間の蹴りなんて、本来の力があれば痛くもなんともないのに、今、制御装置で力を奪われている状態では、深海棲艦の攻撃並に痛い……!!
『お前はもう要らん、解体だ。次はもっと強く従順な艦娘を建造する。死ね、ゴトランド!!』
提督は銃を抜き、私の脳天に照準を合わせた。
嫌だ、私は……!!
『生きたい……!!』

その時。
一陣の風が吹いた。
『あ……？ああ、あああ、わ、私の腕がアアアア!!!!』
気付いた時には、提督の銃を持った腕の、手首から先が地面に落ちていた。
どういう、こと……？
『やめようぜ、シリアスはよ。このｓｓはギャグのタグがついてるだろ？』
『あ、なたは……』
さっきの、自称旅人……？
彼は、私の前に立った。
『なんの、つもり？』
『君みたいな美人は、幸せにならなきゃ駄目だ』
彼は、倒れ伏す私を抱き寄せて、目を見て話した。
『何で……、どうして？』
『んー、俺が決めた。俺は君を幸せにしたい。その為なら……』
彼は、絶対に壊れない筈の制御装置を引き千切って破壊した。
『世界くらいなら、敵に回せる』
彼は……、私を庇い、私の前に……、立った。
『うぁ、う、撃てえ!!撃ち殺せええええ!!!』
提督の号令と共に、兵士達が銃火器の引き金を引く。
『ぁ、やめ』
私が何かを言う前に、多数の弾丸が、彼の身に突き刺さる……。
と、思いきや、彼の前に、白い魔法陣が現れ、見えない盾のようなものが弾丸を弾いた。
『ナークティトの障壁……』
『何？？？

『顔を見られたから仕方がない。君達から光を奪う』
風が、兵士達の間を通り抜ける。
すると、兵士達の手足がすとんと落ちて、皆、目を破壊されている。
『な、は、え……？』
１０秒しないくらいで、兵士達は全滅し、最後に。
『あ、あぁ……』
『俺は基本的に、人殺しはやらないんだ』
『や、やめろ、来るな』
『だが、殺さないだけで、殺す以上に残酷なことをしないとは言ってない』
『わ、私を誰だと思っている、い、今なら見逃してやる、だから』
『見逃す？ああ、そうだな、お前は俺を見逃す。何せ』
『お前はもう、何も分からなくなるんだから』
彼が、何事か……、恐らくは呪文のようなものを唱えると、提督は、血の涙を流して、狂ったように暴れ、叫んだ。
やがて、提督は、口から血の泡を吐いて、動かなくなった。
『……殺したの？』
『いや？肉体的には死んでないよ。ただ、まあ……、もう二度と提督業はできないだろうね』
つまり、なんらかの手段で、提督の心を殺した……？
『さて』
私の方を見る彼。
『私も、殺すの？』
『まあそんな訳ないよね。言ったろ、君みたいな美人は幸せになるべきだ』
土まみれの私を、自分の綺麗な服が汚れるのも構わずに抱き上げた。
『さあ、愛の逃避行と行こうじゃないか！行き先は日本だ、楽しもうね！』

『ちょ、ちょっと……！』
彼は、私を抱きかかえたまま、艦娘のように水の上を歩き、いつのまにかそこにあった客船に飛び乗った。
『は？えぇ？』
『んー？怖がらなくて良いよ、お姫様。さ、先ずはシャワーでも浴びてくると良い』
そう言って、シャワー室に案内される。
『これ、着替えとタオル。ドライヤーの使い方は分かる？』
『あ、分かる、けど』
『そうかい。じゃあ、入ってくると良い。これ、シャンプーとリンス、ボディーソープね。終わったら、艦内の地図を見て食堂に来てね、食事を用意しておくから。じゃ』
『じゃ、って……』
『ん？一緒に入った方が良い？』
『そ、その必要はありません！一人で入れます！』
『それは残念だ』
そう言って食堂へ向かう彼。
シャワー、ね。

シャワー、か。
こんなにゆっくりシャワーを浴びるのはいつぶりだろう。
温かいお湯が心地いい。
えっと、これがシャンプーで……。
うわ、砂がたくさん。もう一度洗わなきゃ。
リンス……、リンスなんて初めて使うかも。鎮守府には石鹸しかなかった。
わ、髪がギシギシしない、さらさら。凄い。
それとボディーソープ……、ああ、これ、とても良い匂い。ラベンダーかな。
洗い流して……、身体を拭いて、ドライヤーで髪を乾かす。
鏡を見る。

酷い顔だ。
痩せていて、目にクマがある。
あの人、こんな私を見て美人だなんて。
幸せにならなきゃならないだなんて。
おかしいよね、本当に。
……何で、助けたの？
提督や兵士達を傷つけて、スウェーデンの軍部そのものを敵に回してまで、何で、私なんかを？

取り敢えず、壁にある艦内の地図に従って、食堂へ行く。
『お、良いね、綺麗になったね』
『お世辞はいらない。……何で、私を助けたの？』
『可愛かったから』
『～ッ、馬鹿なこと言わないで！私なんて、どこも可愛くなんてないわ！言っておくけど、スウェーデンの軍部を敵に回した貴方は』
『えー？可愛いと思うよ？今は確かに、疲れた顔してるだろうけどさ、素材は良いって。これからもうちょい太ってよく寝れば最高の美女になれるズェ』
『そんな理由でこんな馬鹿なことしたの?!あり得ない！何を狙っているの？』
『そんなのどうでも良いからさ、食事にしようよ。ほら、クロップカーカを作ったんだ、一緒に食べようよ。料理の腕には自信があるよー？』
『食事?!それどころじゃ……』
あっ、良い匂い。
お腹、空いて……。
……。
『お腹鳴ったね』
『……な、鳴ったけど』
『お腹空いてるんでしょ？食事しながら話さない？今後の話をね』
『……分かった』

『『いただきます』』
美味しそうなクロップカーカを切り分けて口に運ぶ。
『……!!』
美味しい……!!
『他にも色々作ったから、遠慮せずに沢山食べてね』
『もぐ、もぐもぐ』
凄い、凄い。
今までレーションしか食べたことがなかったけど。
食事って、こんなに幸せな気分になれるものなんだ！
『デザートもあるからね、って、ちょ、ちょっと！泣かないで？大丈夫？』
『ごめっ、なさっ、私っ、その、ご飯、美味しくて……！』
『あー……、そうか。これからは毎日、三食ちゃんと食べさせるから。安心して良いよ』
『うん、うん、ありがとう、ございます……！』

結局私は、デザートまで平らげて、お腹いっぱいになった。
『美味しかった？』
『うん、その、ご馳走さま、ありがとう……』
『良いさ、いっぱい食べる君が好き』
『そ、その、ね、それで、これからの話だけど』
『お腹いっぱいで眠いでしょ？その前に寝たら？』
……それは、まあ、確かに眠たくなってきたけど。
『明日の朝も美味しい食事を用意するからさ、今日はゆっくりお休み？』
『……うん、分かった』
……今日は取り敢えず、寝よう。

４０３話　過去改変系彼女　その３

『……あ、出撃!!しなきゃ……、あ。そっか、もう、私は……』
朝、ふかふかのベッドから出ると、時計の針は既に短針も長針も真上を指していた。
寝坊。鎮守府にいた頃なら殴られていたと思う。
けど、今となっては、私を叱る人なんていない。
部屋の鍵を開けて、この客船の中を歩く。
そう言えば、朝食がまだだな、なんて思っていると。
『ゴトランドさん、おはよう』
例の、彼が現れて、そう言った。
『えっと、その、お、おはよう』
私もぎこちなく挨拶を返す。
『お、ゴトランドさん、クマが大分なくなったね、とっても可愛くなったよ。よく眠れたみたいで良かった』
『え、ええ、その、ありがとう、マオさん』
『良いさ、君は幸せになるべきだ。さあ、朝食にしよう。ニシンの酢漬けと焼きたてのパン、サラダがある。朝は軽めに済ませて、夜はまた色々作るよ』
『うん……、ありがとう』
食堂まで一緒に歩く。
『さ、召し上がれ。ニシンの酢漬けは自信作だよ、沢山あるからお代わりもして良いからね』
『うん、いただきます』

美味しい食事の後に、海の見える休憩室で話をする。
『……それじゃあ、貴方は、あの黒井鎮守府の提督なのね』
『知ってるのかい？』
『提督がいつも言っていたわ。極東の猿にできて私にできないことなんてないとか、海域の解放が上手くいかないのはお前のせいだ、とかね』

『そうかい』
話を聞いたところ、彼は世界一の最強鎮守府、『黒井鎮守府』の提督らしい。
信じられないけど、説明を聞けば理解できた。
黒井鎮守府の強さの秘訣は、艦娘の制御装置を全て取り払い、制御に使われるはずの力を全て戦闘能力に変換しているから、だそうだ。
この人がその、黒井鎮守府の提督だと言うのは、今、制御装置を着けていない私の目の前にいるのが一番の証拠だと思う。
普通の人間なら、艦娘という化け物に近付こうだなんて思わないし、ましてや、制御装置のついていない艦娘の側にいるだなんて、飢えた猛獣の檻の中よりも危険だ。
なのに、彼はいたって自然な姿で、私に微笑みかけた。
『……貴方は、私が、怖くないの？』
『俺は君より何倍も強くて怖い奴に襲われてきた。君なんて全く怖くないね』
彼は軽く旅の話をする。
バイオテロで生じた恐ろしい生物兵器。戦場で出会った二足歩行戦車。強大な悪魔。異世界の魔物。無敵の超人。
そんなもの達と比べると、私じゃ全然怖くないそうだ。
話の内容は嘘みたいな話ばかり。
結局、この人が私をどうしたいのかなんて分からない。
怖い。
たまらなく怖い。
……なら。
『やあぁっ！』
『おう』
私は彼を押し倒す。
そして、首を絞める。
『貴方を殺すことなんて簡単よ、ほら、怖いでしょ？』
脅しをかけて、真意を探る。
どうせ、この人も……。

『かはっ、可愛いね、女の子はちょっと過激な方が、刺激的で素敵だ』
『……ッ!!殺すわよ!!言いなさい！怖いって言いなさい！利用するつもりなんだって言いなさい！どうせ貴方も……っ!!』

人間なんでしょ!!!

その時、彼は。
私の手を上から握り。
思い切り力を込めて。
自らの首を、へし折った。
『……は？な、んで』
そ、んな。
殺すつもりはなかったのに。
なんで、自分から。
『あ、やだ、わた、し……!!』
死んだ。
即死だ。
『ごめ、なさ、私、そんな、つもりじゃ』
しかし、驚いたのはここからだ。
彼は、確実に首の骨が折れていたというのに、立ち上がったのだ。
『痛いな。けどまあ、首を折るなんて大分可愛らしい殺し方だね。優しいんだね、ゴトランドさんは』
『な……?!何で?!確かに、死んだはずじゃ?!!』
『最近の人間は首が折れたくらいじゃ死なないんだって』
『嘘よ、そんな訳ないでしょ！』
『まあラストリーヴだよね、即死ダメージ受けても喰いしばり効果あるから俺のスキル構成』
『何の話よ?!!』
『つまり……、君じゃ俺を殺せないのさ』
ああ、そうか。
『貴方も、私と同じ……』

化け物、なのね。

『いやいや、人間さ。ゴトランドさん、君だって人間と変わらない。人を愛する心があれば、姿形や強さなんて関係ないさ』

『私は、人を愛することなんて……』

『俺は、ゴトランドさんを愛するよ。ゴトランドさん、恋をすると良い。素敵な恋をね。君がどんなに強くても、世界のどこかには君を受け止めてくれる人がいるんだ』

そう、か。

そう、ね。

この人は、私と同じ化け物だ。

世界で唯一、艦娘以外に私の気持ちを分かってくれる。

私のことを受け止めてくれる。

『ほら、俺以外にも良い男いっぱいいるから紹介をぉお?!ど、どうしたのゴトランドさん?』

私は彼に抱きついた。

『お願い、私の側にいて……。もう、一人は嫌なの……』

『……ああ、もちろん。ずっと側にいるよ』

『私は、ずっと一人で……。化け物だって言われて……、それで……』

『辛いことは思い出さなくて良いさ。大切なのはこれからだよ。どうする?うちで艦娘をやる?戦いたくないなら、事務仕事を回すけど。それとも、働きたくないなら……』

そっか……。

過去は、忘れて良いんだ。

『働きたい……、私、貴方の為に生きてみたい』

『自分の為に生きなよ。世界は自分を中心にして自分で回すものさ』

過去は、要らない。

私に過去はない。

過去なんて、要らない、要らない、要らない、要らない、要らない、要らない。
私の過去は、この人と共にあったことにしよう。
幸せだったことにしよう。
私はこの人とずっと一緒にいた。
『うちに来て艦娘として働くかい？』
ああ。
ああ。
何を言ってるの、提督。
私の提督。
『もう、嫌ねえ……』

私、最初から貴方の艦娘よ？

『っ、ゴトランドさん、君は……』
『もう、どうしたの提督？いつもみたいにゴトって呼んで？』
『……過去の記憶を改変した、か。ドイツ艦に近い反応だな』
『もう、難しいこと言わないの！ゴトは貴方の初期艦よ、最初から一緒にいたじゃない』
『ゴトランドさん、それは……。いや、ああ、クソ、そうだな。現実を叩きつけるよりは、優しい夢を見ていた方が幸せなのかもしれない……。ゴト、黒井鎮守府に帰ろう。仲間達が待っているよ』
『ええ、私もみんなに会いたいわ』

４０４話　過去改変系彼女　その４

『良いかー、ゴト！日本語を教えるから、ちゃんと覚えようなー！』
『ええ！』
「では行くぞ。ニッポンのステキな都道府県！」
　俺は日本地図を指示棒で指す。
「東京」
「トウキョウ」
「大阪」
「オオサカ」
「茨城」
「イバールァキィ」
「福岡」
「フクオカ」
「長野」
「ナガノ」
「青森」
「アオーモルィー」
「……Ａｄｍｉｒａｌ、ちゃんと教える気あるの？」
　アイオワに突っ込まれる。
「分かった、真面目に教える……、ってか、ゴトは英語もバッチリみたいだし、アメリカ艦のみんなに頼んでも良い？」
「良いわよ？ゴトも海外艦だし、旅行に連れてってあげなきゃ！」
「ありがとう、助かるよ。そうそう、ゴトは妄想癖があるみたいでさ。最初から黒井鎮守府にいたってことにしてくれないかな？」
「……ａｈ、この子もｃｒａｚｙなのね」
「そんなことないよ、ただ、人より想像力が豊かなだけさ」
「Ａｄｍｉｒａｌはいつもそうやってごまかすけれど、黒井鎮守府には精神病院の隔離病棟送りになってもおかしくない艦娘、沢山いるからね」
「気のせいだって」

さて、ゴトはアイオワに任せた。
アイオワは面倒見が良くてリーダーシップがある。任せて大丈夫だろう。
暫くはゴトのフォローをしなきゃならないな。

食事の時間。
『ゴトは暫く仕事の都合でスウェーデンにいたから、日本語とか箸の使い方とか忘れちゃったんだもんな？』
『ええ、そうなのよ！ごめんね提督、苦労をかけちゃって……』
『気にしないでよゴト！俺なんて自分の年齢も覚えてないんだから！』
『ありがと、提督！大好きよ！』
ゴトは俺の頬に口づけをする。
一瞬、他の艦娘からの害意が飛んでくるが、全員、ゴトの事情を聞いているので、表立って何かを言うようなことはない。
『ゴト、注文の仕方は覚えているかな？』
『うーん、忘れちゃった……』
『そう？じゃあもう一度教えるね。食事の時間は7時、12時、18時。ここにその時のメニューが張り出されるんだ』
俺は掲示板を指差す。
『そして、好きなメニューを選んで、そのメニューの隣にある番号を、あそこのカウンターで言って。それと、盛りの多さについても。盛りは何にも言わないと中盛りで出てくるよ。お代わりもこのカウンターに言ってね。そしたら、適当な席に座って食べて。食べ終わったら食器をあっちのカウンターに置いてきて。一度に沢山言ったけど、思い出せたかな？』
『ええ、バッチリ思い出したわ！』
と言う訳で、ゴトに食事をさせる。
『久々に和食なんてどうだ？好きだろ、和食』
『うん、和食は久し振り！』

恐らくは食べたことのないはずの和食を久しぶりだと言うゴト。
さて、今日は牛丼だ。
スプーンで食べさせる。
『牛丼、美味しい！』
『箸の使い方は気が向いた時に覚えれば良いさ。使えなくても死ぬ訳じゃないしね』
『うん！』
ゴトランドは初めて会った時とは打って変わって、活発な雰囲気になっている。
まあ、元気なのは良いことだよ。
「鹿島ー、ゴトの訓練頼むー」
「はあい、ゴトランドさん、鹿島です、よろしくお願いしますね！」
「アー、ヨロシク？」
あんまり覚えていない日本語でたどたどしく挨拶をしたゴトランド。
「じゃ、後は任せたわ。終わったら食堂に連れてきてあげて」
「はい、お任せ下さい！」

鹿島と香取は基礎トレーニング担当だ。
応用殺人トレーニングは神通がやってくれる。
まずは鹿島と香取で慣れてもらった後に、神通が地獄に叩き落とす。
神通のトレーニングを終えた頃には、姫クラス深海棲艦と対等以上に渡り合えるようになっているだろう。
さて、そしてまた食事をして、今度は日用品を買いに外に行く。
『全く、ゴトはドジだなあ、携帯電話をなくしちゃうだなんて』
『うー、ごめーん、提督ー！』
『ついでに服とかも買ってあげるよ。ゴトの日用品は古くなって捨てちゃったからな』
『本当?!買ってくれるの?!』
『ゴトは可愛いから買ってあげるよー。あ、でも、今度から毎月お給料

渡すから、自分で買いに行ってね？』
『はーい！』
ゴトのスマホや服を買う。
四、五十万円程で日用品は揃えられた。
いやあ、女の子の服はね、高いのよね。
可愛いゴトに古着を着せるわけにはいかないからな、ちゃんとした服を何枚か買ったよ。
その後、証明写真を撮って、その筋の人間に依頼して偽の身分証明書を作らせる。
『アンナ・アンダーソン……、ゴトの人間としての名前と身分だよ』
『ありがとう！』
『これ、パスポート。日本に帰化したスウェーデン人ってことになってるから、そういう風に振舞ってね。まあ基本的に、他の海外艦の真似をすれば問題ないと思う』
アメリカ艦はジェーン・スミス、イタリア艦はジュリア・ルッソ、イギリス艦はメアリー・ジョーンズとかにしてある。
あー、そうね、全部、日本語なら「山田花子」みたいな名前だ。
因みに、仕事で使うと言う艦娘は、複数のパスポートと身分証明書を持っている。
妙高型などは特に大量の偽造パスポートを持っているらしい。
『ゴトはこの身分証明書をなくさないように財布にでも入れておいてね。車の免許は欲しければ自分で取りに行ってね』
『うん！』

それとゴトの部屋を用意する必要がある。
最近また増築したから一人部屋が空いてるから、そこに。
えーと、テレビと冷蔵庫とクーラー、そしてパソコンと本棚にタンス。電子レンジとトースター。
因みに風呂トイレキッチンバルコニー付きで3部屋、計１６畳程の広さだ。
これが大部屋だったりすると６０畳程になる。

黒井鎮守府は兎に角広いのだ。どれくらい広いのかというと、ギャグ漫画のベタなお金持ちキャラの実家くらい。
実際、執務室から歩いて鎮守府の外に出るのに一時間以上かかるくらいかね。
さて、諸々家具を揃えて……、もちろん家具はスウェーデンの高級モデルだ。
これで数百万円。
……と見せかせて、ゴトは自分で家具を作りたいと言い始めた。
マジで？
まあいいや、手伝おう。
まあ、スウェーデンとか、北欧の方ではＤＩＹが盛んだしね。
俺もＤＩＹは得意だし。
材料さえあれば何もない荒野に一週間で小城が建てられるくらいには。

さて、今できるのはこんなもんか。
後は追い追い、日本語の勉強と文化なんかについて教えていかなければならない。
拾った以上最後まで面倒を見るべきだ。
いや、犬猫じゃあないがね。
でも、まあ、そのうち自立するでしょ。
ヘーキヘーキ。

４０５話　ラッキースケベ（物理）

昼。

昼食後の、お腹がいっぱいになって血液がお腹に集まって、脳に血がいかなくなり、お眠になっちゃうくらいの時間。

俺もお眠だわ。

惰眠でも貪っちゃおうかなー？

みたいなことを考えていると。

上がり調子でピンポンパンポン、景気のいい音が部屋の備え付けスピーカーから流れてきた。

続いて、大淀の声が。

『鎮守府放送、鎮守府放送』

何事だろうか？

俺は指示を出してないんだが……？

『今日は、ラッキースケベの日です。皆さん、積極的にラッキースケベを狙ってください』

んんー？

『芸術的なラッキースケベ者には、青葉さん特製の提督盗撮写真集Ｒ１８プレミアム版が進呈されます。奮ってご参加下さい』

んんんんー？

下り調子でピンポンパンポン。

さて……。

猛烈に嫌な予感がしてきた。

俺のテンションがルーデルのスツーカばりに急降下。

ブルっちまうなあ。

俺が逃げようと思った時には既に空間閉鎖されている。

その気になれば突破は可能だが、一時間はかかる閉鎖っぷりだ。

多分、今の黒井鎮守府を外から見たら、敷地内が丸ごと闇に閉ざされているように見えているだろう。

それが、空間閉鎖だ。

黒井鎮守府から出る為に行使する空間跳躍系のスキルや魔法を封

じ（解析すれば突破できるが、それには時間がかかる）、俺を閉じ込める……、若しくは外敵を逃さぬように鎮守府内に閉じ込める為の、魔法と技術力の牢。
つまり俺は『逃げられない』ってこと。
いくぞ俺、パンツの貯蔵は充分か？

「提督⁇」
「ヒェッ」
榛名だ。
榛名はクラスで言えば……、バーサーカーだ。
バーサーカーなので、基本的に会話が通じない！通じにくい！
某源氏ママ並の狂化レベルだと思っていただこう。
まあ、通じるんだよ？でも通じにくいんだよ。
いやね、日常生活はちゃんとできるし、意思表示もできる、お洒落もする、甘いものも好き、読書とか文化的な行動もする。
ただ、話が通じないだけだ。
「榛名……、何の用かな？」
一応聞こう、まだ望みはある、望みはあるから。
「提督、好きです、大好きです⁇」
はい、まあ……、質問に答えられないよね。
榛名の暴走する愛は俺を焼き尽くす訳だ。
「そ、そっかー！俺も榛名のこと大好きー！」
「わあ！相思相愛ですね！」
「そうだねー」
「はい！」
そして、おもむろにパンティを脱ぐ榛名。
ははは、こいつぁヤベェ。
白のジャケットに黒のスカート、プラチナのネックレス。
お手本のような清楚美人である榛名が、パンツを目の前で脱いだ。
「なんで脱いだの？」
「提督も脱いで下さい、ほら！」

そう言って、俺のズボンに手をかける榛名。
「ちょっと待って力強っ?!!」
引っ張られたズボンとパンツは限界を迎え……。
「あ”ぁーーー!!!」
破られる。
「上も脱いじゃいましょう！」
ついでに上着も破壊される。
ヤベェ……、速攻で丸裸（物理）にされちまった……。
「は、榛名、こういうのは良くない、レイプはやめよう、な？」
「榛名は提督が大好きです、提督は榛名が大好きです」
「……ほぇあ」
「だから、提督？」

「一つになりましょう？」

その時ッ！
俺の灰色の脳細胞は未来を予測したッ！
……『捕まったら三日はぶっ続けで犯される』と!!!
やばい……。
逃げよう。
「じゃ、じゃあ、榛名、キスをするから目を閉じて？」
「はい！」
はい、逃げます。
忍び歩き＜８０＞でダイスロール。
成功。

「ふぅ、びっくりさせやがって……」
危ないところだったぜ……。
服をアイテムボックスから引っ張り出して着る。
明確な「腹上死」のイメージが思い浮かんだからな。
いや、性行為は好きだよ？でも、死ぬ程じゃない。

確かに、死ぬ時はベッドの上で死にたいけどそれは大往生的な意味であって、腹上死したいとは一言も言ってない。
「だから勘弁してくれない？……長月」
「これは警告だ、今のうちに手を引け。司令官がこの長月に勝てる訳がない。いいか？私は面倒が嫌いなんだ」
長月……、クラスで言えばアーチャー、まだ話が通じる方だ。
ここは俺の話術でどうにか……。
「退いてくれ……」
「断る、私は面倒が嫌いなんだ」
長月は、艤装である服を消す。
すらりとした手足、白魚のような指先、控えめな胸、小ぶりなお尻……、少女の身体。
「そもそもラッキースケベなんで露骨なスケベは……」
「言っただろう、私は面倒が嫌いなんだ」
スティンガー？
長月は「重力なんてありません！」と言わんばかりに、軽やかに跳躍し、俺の胸に抱きついてきた。
「おおっと」
必然的に、身長差の関係から、俺は長月を支えなくてはならない。
長月を支えると、彼女の柔肌に触れることになる。
「うお、やわらかなめらか」
柔軟剤使ってます？と言わんばかりのなめらかでシミひとつない綺麗な白い肌。
小さなお尻がもちっとしている。
「ちょっと長月、やめよう、ね？」
俺のベルトに足をかけて登り、身体中を弄ってくる長月。
「ちゅうぅ～??」
「ああもう……、キスマーク付けないでよ！」
「あむ」
「歯型もやめてー」
「ラッキースケベだ、喜べ。んっ??」

そう言って、俺に陰部を擦り付けてくる長月。
ラッキースケベの意味分かってやってる？
シャツが愛液でべとべとになり、使い物にならなくなる。
まあ、酷い絵面だよね。
緑髪の美少女が全裸で男に抱きついて、股を擦り付けながらキスマークをつけている……。
「いつまで面倒をかけさせる気だ？」
俺の服を脱がせる長月。
俺のナニを弄りながら言う長月……。
「私は司令官と一体になる……、もう、誰も私を止めることはできない！」
「こらこらこらこら、扱くな、咥えるな！」
児童ポルノがヤバい……、このままではポルノ小説として通報されてしまう！
「離れて……、ほら！」
引っぺがす。
「やはり簡単にはいかんな……、面倒なことになった」
「退け、長月」
「断る！睦月型、かかれー!!!」
「「「おー!!!」」」
通信を聞きつけた睦月型が急行してきた！
「逃げるんだよォー!!!」
逃げる。

逃走して、その先で。
追い詰められた夜神月みたいな表情になっている俺。
やはりヤバい（再確認）。
「さて……」
「ぽい？」
難敵登場だ。
夕立……、クラスはフォーリナー。

黒の狩装束に赤い布飾り、背中に背負った身の丈程の月光の聖剣。
「許して仮面」
「許すも何も、提督さんは何も悪いことしてないっぽい？」
いや……、可愛いんだよ？可愛いよ？
でもね……、でもね？
「提督さん、今日は夕立と楽しいことしましょ！」
……「喰われる」と、俺はそう感じた。
「待って、待って」
「待たないっぽい！」
夕立の狩装束は艤装だ、消すのも容易い。
全裸になって、俺に抱きついてくる。
白い……、真っ白な肌。汗一滴付いておらず、なめらかで、ひょっとすると死人なのではないかと思えるくらいに冷たい。
そんな夕立の四肢が蛇のように絡みついてきて、情熱的な口づけをされる。
夕立は人間を模倣した純粋無垢な戦闘機械だが……、俺に愛情を向けている時には、人間になれていると思う。
それはそれとして。
「ヒィェー」
「脱ぎ脱ぎするっぽい～♪」
瞬く間に服を脱がされる。
抵抗するにも、夕立は駆逐艦とは思えないくらいに筋力が高い。筋力寄りの上質戦士ビルドだ。
「待って……、やめて？ラッキースケベじゃないよねこれ、レイプじゃん、ねえ！」
「ラッキーは自分で手繰り寄せるものっぽい」
成る程、一理ある。
「あは??提督さんのここ、凄く熱い……??」
「そんなところ触らないの！」
「減るもんじゃないっぽいー」
くっ、物凄い腕力で押さえられている……！

もう遅いッ！脱出不可能よッ！てか？
「あ、提督ー！」
「五月雨と、涼風か！」
ここで夕立の援軍。
「良かった、ここにいたんですね！」
「あたい達、ちょーっと提督に用事があってさ！」
「え？待って、君らはさ、君らの姉が上司のチンコ掴んでるの見てスルーなの？」
「むしろ都合がいいですよ！」
「はい、これ！」
二リットルくらい入りそうな瓶を渡される。
「……これなに？」
そんな俺の疑問に、五月雨が答える。
「魔術研究の過程で、男性の精液が必要になりましたので、これ一杯に精液を入れてもらえますか？」
いやいやいやいや。
「いやいやいやいや、無理無理、そんなに射精できないでしょ、ねえ、普通に考えて？」
「大丈夫です！私達がお手伝いしますね！」
メスや電極、ノコギリや鉗子を見せてくる五月雨。
いつの間にやら白露型に囲まれている俺。
「……え？いや、無理!!!!」
だってこれあれでしょ？脳に電極ぶっ刺されて電気流されて、無理やり二リットル搾精されるやつでしょ？誰得だよ！
「じゃあ、こうしましょう！大人しく私達に搾り取られるか、寝ているうちに全てが終わっているか……、どっちにしますか？」
「うぅ……、分かりましたぁ……」
負けました。
二リットルの搾精……、辛かった……。

４０６話　ストーカーの心得

おはよう。
響だよ。
その活躍ぶりから不死鳥の通り名もあるよ。
黒井鎮守府ではストーカーの通り名で通っているよ。
その名の通り、提督のストーキングと過去の調査に命をかけているよ。
だから今日は、提督の知人を訪ねて聞き込み調査をしているよ。

「そう言う訳で、調査中なんだ」
「あの、気を悪くしねえで欲しいんだが、言って良いか？」
「何？」
「お嬢ちゃん、やることが気持ち悪いぞ……」
こちらはジャギさん。
提督の親友だよ。
「そうかな、みんなこんな感じだけど」
「うわぁ……、タチ悪りぃな……」
そうかな？
「それで、提督の話だけど」
「あいつの話……？いやあ、特に話すことねぇぞ、昔からあんな感じだ」
成る程。
「ギャンブルと女遊びやって破産して、変な奴らから追っかけられて……。本当に、変わんねえな、あいつも」
「昔からあんな感じだった？」
「おうよ、いつもあんな感じだ。ガキの頃から女好きで、美人と見るや否やすっ飛んで行ってよぉ。女を口説くのも上手いもんで、どんな堅物もコロッと堕としちまう」
「ふむふむ」
「そんでまたすぐに他の女のとこに行って、嫉妬した女が刃物持って

暴れ出す……ってな感じだ。俺が知る限りじゃ3桁は刺されてるぞあいつ」
「成る程」

「確かに……、あいつは人間のクズだが、女には優しいし、多芸で頭も良い」
「そうですか」
　こちらは空条さん。
　提督の恩師だよ。
「だが……、あいつは、『超えちゃならないライン』ってもんを『弁えている』。例えば、女の家に転がり込んでも、その女を食い潰したりはしねえ、むしろその恩を返したりもする」
「成る程」
「ギャンブルもやるが……、『あぶく銭』しか賭けない。『自分の組織の金』や『女の金』には絶対に手を出さねー……」
「ふむ」
「それと、『吐き気を催す邪悪』以外は基本的に殺さねえ、そして、『悪党』からしか盗まねえ」
「それで？」
「そして……、あいつは基本的に、正義でも悪でもないが、『世界を愛している』。女に包丁でブッ刺されようと、マジに『女を愛している』……。恐らく、君のことも臆面もなく『愛している』とのたまうだろう」
「そうですね」

「そうですね……、彼は料理人としては一流ですな」
「そうなんですか？」
　こちらは味沢さん。
　提督の知り合いのコックだよ。
「彼の人間性は確かにクズ以下ですがね、料理人としての腕と、舌は確かですよ」

「そうですよね」
「しかし……、あいつは女性を相手にした時は、私の目から見ても見事な調理をし、その女性に最も相応しいものを提供できます。だが、これが、相手が男となると、急に自分が正しいと思ったものを出す傲慢な料理をしますね」
「成る程」
「男と女で出す料理が違うのでは、超一流にはなれませんな。まあ、私には関係のない話ですがね」

「あいつの教師としての腕前？うーん、女子生徒には甘くて男子生徒には適当……、って感じかな？」
「そうだね、多分そうだと思っていたよ」
　こちらは鵺野さん。
　提督の知り合いの教師兼退魔師だよ。
「あいつは……、子供と一緒になって遊べる稀有な存在だな。今、そう言う教師は少ないからな……」
「確かに、提督は子供っぽいところがあるね」
「まー、ギャンブルって言うゲームで遊ぶことと、いたずらのこと、工作のことと食べることと、エッチなことを考えているんだから……、まあ確かに子供だな」
「じゃあ、指導力はなかったのかな？」
「そんなことはないな。逆にガキ大将って言うか……、そんなポジションで周りを引っ張っていくからな」
「退魔師としての実力は？」
「そこそこかな……？おかしな術式の魔術と、これまたおかしな組み合わせの退魔術で上手い具合に倒すからな……」
「おかしな術式とは？」
「うーん、俺が見た限りでは、グリム童話や水滸伝、山月記、古事記、源氏物語……、そう言うところから引用した、何とも言えない不思議な術式を上手く使いこなすんだよ」
　鵺野さんが言うには、術式は聖書やアーサー王伝説、ローランの歌

など、著名なものから編んだ方が安定するし、効果も強いらしい。
「退魔術もおかしいの？」
「ああ、例えば隠れ切支丹の歌であるオラショを使って、それを吸血鬼退治の聖杭と合わせて使う……、とか、マントラを唱えながら破魔矢を射ったりとかみたいな独特な方法で退治することが多いな。それと呪いや病気にも強くてな、疫病神が出た時とかは今だに手を貸してもらったりしているよ」
「結局、強いの？」
「強くはないんだが……、兎に角防御、妨害、自己強化、回復の術式のストックが多いから、大抵は泥仕合になって、何だかんだで勝つ、みたいな感じだな」
「成る程」

「旅人について……？それなら、先代の方が詳しかったんだが……、先代は既に亡くなっているからな」
「分かる範囲で良いので、教えて下さい」
こちらはドクターKこと、神代さん。
提督の知り合いのお医者さんだよ。
「ふむ……、先代のドクターKこと、KAZUYAが残した資料によると、旅人は遺伝子レベルで人間ではないそうだ」
「はい、そうですね」
「その他にも、肉体から、現代の科学では解明されていない物質が発見された……、とも」
「でしょうね」
「アクアウィタエ……、プラスミド……、旅人には、極めて不可思議な物質で構成されている。旅人を研究すれば、より医学の発展が望めるのではないか……、と言う意見もあるな」
「成る程」
「だが……、例え旅人が何者であれ、一人の人間であることは確かだ。人体実験など絶対に許さん」
「頼もしいですね」

「旅人か？うーん、あいつぁ、まあ、女好きで馬鹿だけど……、良い顔で笑う男さ」
「成る程」
こちらは加藤さん。
旅人の知り合いの拳法家だよ。
「でもな、あいつは、他の誰かに惚れている女には手出ししねえんだよなあ。だから、しろがねにも、親切にはするが、粉かけるような真似はしなかったんだとよ」
「しろがね……、加藤さんの恋人さんだね」
「ああ、まあな……。あいつは、心の底から、美人には幸せになって欲しいと思っている、そうだ」
「成る程」

私は、インタビューの結果をメモにまとめて、それを電子化して保存。
うんうん。
成る程。
「……聞けば聞くほど、提督のことは何一つわからないね」
調べれば調べるほど、よく分からないことが分かる。
今回も結局、多くの人が口を揃えて、あいつは人間じゃないと言う。
提督本人は、断固として自分が人間だと言い張る。
……結局、提督とは何なのか？
純粋な愛もあるけれど、それを除いたとしても、好奇心と言うものが湧いてくる。
「……と言う訳でね、提督。結局、提督は何者なのかな」
「俺？俺は一般通過旅人だよ」
うーん。
これだからなあ……。

４０７話　アニメ世界線からの来訪者

「で、これが異世界の吹雪なの？」
「そうだよ」
「あれ？時雨ちゃん？なんか、雰囲気変わった？」
異世界からやってきた吹雪……。
仮に吹雪'としよう。
吹雪'は、白露型の空間操作系の魔法に巻き込まれて現れた艦娘だった。
どうやら、この世界とは違う世界線の艦娘らしい。
白露型が言うには、今回のこれは完全に事故だったこと、三日以内に元の世界に返すこと、この世界の吹雪と会っても別に何もないことを教えられた。
となると、最大でも三日間、吹雪'の面倒を見なきゃならない。
黒井鎮守府の経済力ならば、艦娘が一人二人増えた程度では揺らがないからな。
元の世界に帰るまで、面倒を見よう。

「あ、あのー……」
「何かな？」
「貴方が、この鎮守府の司令官さんですか？」
「ああ、そうだよ。旅人と呼んでくれ」
「旅人さん、ですか？」
「本業は旅人なんでね」
「は、はあ……」
ちょっと何言ってるか分からないですね、みたいな顔をした吹雪'。
「あの……、つまり、私は、別の世界に来てしまった、と言うことですよね？」
「そうだね」
「戻れるん、ですよね？」
「三日以内でどうにかするって話になってるよ、心配しないで大丈夫

だからね」
「三日、ですか。まあ、それくらいなら……。いやでも、戦況が……」
「こんな言い方は何だが……、君一人で戦況が大きく変わることはないと思うよ。少し休むくらいの気持ちでリラックスして……」
「私は！もう二度と、仲間を失いたくないんです……！」
……そう、か。
吹雪’の世界では、誰か大切な人を失ったのだろう。
少し無神経な発言だった。
詫びよう。
「……すまない。無神経な発言だった」
「……あ、い、いえ、旅人さんは悪くないですよ。大丈夫です」
気まずそうに少し黙る吹雪’は、一瞬暗い顔をする。
しかし、知らないハンサム男である俺の前でずっと暗い顔をしていては申し訳ないと思ったのか、少々ぎこちない微笑みを浮かべて、世間話を始める。
「そ、そうだ！こっちの世界の戦況はどうなってますか？」
「ん？ああ、日本海、地中海解放、太平洋の殆どを解放、大西洋、インド洋を攻略中……、損害なし、ってところかな？」
「なっ……?!そ、それ、本当ですか?!」
驚いている吹雪’。
察するに、吹雪’の世界の戦況は芳しくないのだろう。
「損害もないんですか？」
「ああ、俺が提督になってから、誰一人艦娘は死んでいない」
「それは……、凄い、ですね」
また、暗い顔をする吹雪’。
「……私の世界は厳しいです。北方領土やキスカ島付近、フィリピンなんかは、深海棲艦に奪われて、オーストラリア、中国、朝鮮半島も大打撃……。アメリカや欧州も自国の防衛すらままならず、日本もかなり厳しい状況です……」
……？
「え？何で？」

「な、何で、とは？」
「そっちの世界、アベンジャーズやＸ―ＭＥＮ、ファンタスティクフォーは何やってるの？男塾塾生は？葛葉ライドウは？仮面ライダーは？セイバートロン人は？国際警察機構は？秘密結社鷹の爪団、フロシャイムとかは？世界の危機なら八雲紫も出てくると思うし、魔術師連中だって、財団だって黙ってないでしょ。それに光子力研究所とか早乙女研究所はどうしたの？ミスリルとかアウターヘイブンとかの傭兵は？ダンテは動かなかった？旋風寺コンツェルンや、軍曹さんみたいなケロン人やＭＩＢの連中は？」
「え……？え？」
なんだ、この反応？
まさか……？！
「もしかして、君の世界には、彼らが存在しないのか？！」
「は、はい、聞いたことないです……」
なんだ、それは。
なんてこった。
それなら、滅ぶ。
深海棲艦程度でも、彼らがいないなら、世界は滅ぶ！
「じゃ、じゃあ、深海棲艦と戦っているのは艦娘だけなのか？！」
「は、はい、そうですよ？」
「そりゃヤベェわ！！！そりゃ負けますわ！！！」
俺が言うと、吹雪がおずおずと聞いてくる。
「あ、あの、この世界には、深海棲艦と戦う他の組織があるんですか？」
「当たり前じゃん」
俺は答えた。
「むしろ、深海棲艦は海に出るからめんどくさいってだけで、もっとヤバい組織や巨悪がこの世にはいっぱいいるし、世界が滅びかけたことも一度や二度じゃないよ」
「そ、そうなんですか？例えばどんな？」
「あー、数年前に『ゴジラ』と呼ばれる怪獣が日本を火の海にしたとか……、アメリカでは毎日のように、『アベンジャーズ』みたいなヒー

ローチームが狂ったミュータントや銀河の彼方から現れた巨悪に邪悪な悪魔なんかと戦っている。欧州は『魔術師』が色々とやっているし、中国やアジア圏は『国際警察機構』が『ＢＦ団』と戦っている」
「かい、じゅう？は、はは、そ、そんなのあり得ないですよ、映画じゃないんですから……」
　俺はスマホで、ようつべに上がっている当時の動画を見せる。
「こ、れは……!!?作り物、じゃない!!?」
　ゴジラが街を蹂躙する姿を目に焼き付ける吹雪。
「こっちはアベンジャーズの戦いだ」
「何ですか、これ……!!?」
　キャプテンアメリカ、アイアンマン、ソー、ハルク……、数多くのヒーロー達が、迫り来る邪悪に対して応戦するシーンが写っている。
「こんな人達がいるなら、艦娘はいらないじゃないですか!!!」
「いや、彼らも深海棲艦と戦うこともあるけど、本業じゃないから」
「でも……!!私達、こんなに頑張って戦ってるのに、この世界は……っ!!」
　悔しそうな顔をする吹雪。
「この世界は、滅亡の危機に瀕したことが何度もある。だから、深海棲艦騒ぎも、確かに海運業や漁業が壊滅的な被害を受けたけど、人々は希望を捨てていない」
「どうして……、どうしてこの世界ばかり強いんですか？」
「それは俺にも分からないけど……、世界ってのは色々あるんだ。俺も色々見てきたけど、滅んだ世界だって沢山ある」
「それじゃあ、私の世界も、いずれ……」
「それは……、君達が守るんじゃないのかな」
「そう、ですけど……」
　またもや、沈黙。
　気まずいねえ。
「世界を守っている先輩として、私達に何かアドバイスとか……」
「アドバイス？うーん……」
　そもそも、うちの艦娘は好きで世界を守っている訳じゃないから

な。
仕事だから、くらいに思っているだろう。
俺が命じれば即座に世界の海を見捨てるくらいにはどうでもいいと思っているだろう。
そして、世界を守っている訳じゃない。
この世界は、深海棲艦ごときに滅ぼされるほど弱くない。
うちの艦娘達もそれを理解していて、世界を守っていると言う意識はないだろう。
経済や文化を守るための傭兵稼業……、くらいに考えているんだろうな。
「そうだ、これをあげるよ」
「これは……？」
「艦娘を強化するロック装置の設計図だよ」
「ロック、装置……」
「これがあれば……、まあ、大抵は何とかなるよ」
「強く、なれるんですか？」
「多分ね。兎に角……、そちらの世界に俺達が助太刀することはないと思う。基本的に、別の世界とは交流しても戦力の派遣はしたくない」
「何故、ですか」
「不公平だからさ。世界なんて何千何万とある。中には、君の世界のような、人類存亡の危機に陥っている世界もあれば、既に滅んだ世界、今まさに栄えている世界……、色々だ」
「……そんな中、一つの世界だけに肩入れすることはできない、そう言うことですね？」
「そう言うこと」
「……そう、ですね。旅人さんの鎮守府がどんなに強くても、別の世界の人に頼るのはおかしいですよね……」
「でも」
「え……」
「もしも、本当にどうしようもなくなったら、この手紙を開いてくれ」

「これは……？」
「その手紙は魔法によるマーキングがされたポインターだ。それを開いた場所に、転移ができるようになる」
「転移……？」
「まあ、理解しなくてもいいよ、お守りだとでも思ってくれれば」
「は、はあ……」
「っと、さて、飯時だな、何か食べたいものは？」
「え？そうですね、お蕎麦、とか？」
「分かった、それじゃ、食堂においで……」
……
……
……

「そういや、この前の吹雪はどうなったかな？時雨、どう思う？」
「うん？……まあ、僕が観測している限りでは……」
モニターを見せてくる時雨。
……『勝ちました！大勝利です！みんな、ありがとう！旅人さん、ロック装置を教えてくれてありがとう！如月ちゃんの仇、とれたよ!!!』
「随分と、楽しそうだ」
「ほぉん、そいつは重畳」

４０８話　休憩室にエロ本を設置して艦娘の反応を見る話

「ａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ!!!!」
暇なので休憩室のど真ん中にエロ本置いて遊ぶっかァーーーーー!!!!
隠しカメラ設置ぃ、マイクおっけい!!!
今日俺は鬼になる。
俺は悪魔に魂を売り渡した。
どのような異端の力であれ従えてみせる（弦一郎）。
行くぜ！

１人目：佐渡
部屋に入る。
『んぅ～！ノルマは終わったし、暇だなー！何かこの佐渡様を楽しませるようなものはないもん、か、ね……?!!』
机の上のエロ本を見てフリーズ。
ふむ……。
佐渡はペドいからな。
あんな子供の前にエロ本を設置するとは、俺も悪に染まったもんだな。
さて、どんな反応だ？
『あ、あう……』
あら^～。
真っ赤になっちゃって。
かーわいい。
『えぇ……？鹿島さんのかな？』
ここで鹿島が疑われる辺りね、うん。
『それか……、明石さんのいたずらか……？』
第二候補に出る明石もね、うん。

『ま、まさか司令か?!』
第三候補は俺、と。
『うぅ……、誰のだか分かんねーけど……、うー!』
そのうーうー言うのをやめなさい!
唸る佐渡様赤面フリーズ。
可愛らしい反応だ。
『うー、これ……、素人生写真二十四連発……?素人って……、何の素人なんだよぉ……』
そりゃセッ◯スでしょ。
『こ、こんなの良くないからな!捨ててやる!えいっ!』
あ、ゴミ箱にエロ本がボッシュート。

２人目：叢雲
『ふー、出撃終わり、っと。あとは漫画でも読もうかしら……?何よこれ』
露出美女２０１９完全版。
『露出……、美女?ってこれ……!』
顔を赤くする叢雲。
『露出ってことは……、大淀さんかしら?こんなところに置きっぱなしにしないで欲しいわね、全く!』
露出＝大淀は間違ってないけどそれが黒井鎮守府の共通認識なのだろうか?
まあ、大淀は常に、スカートの下には何も履いてないが。
『何に使うのよ、こんな本……』
自慰行為じゃないかな?
『まさか司令官かしら?!』
そうだよ。
バレてしまっては仕方がない。
『何よ……!私じゃ駄目なの?!やっぱり胸なの?!!』
エロ本を床に叩きつける叢雲。
いやまあ一般的には胸が大きい方が良いとか言うけど、俺はあんま

り気にしないんだよねえ。
とある人は男の１４割は巨乳が好きだとか言ってるけど。
関係なくない？
オードリー・ヘップバーンだってＡカップだけど、あんなに美しい女性じゃないか。キャメロン・ディアスだってＢカップだ。けど美人だろ。
胸で女性の価値が決まるかよ。
そんなこと言う奴こそ黙れ（ドン）。
『私だって、好きでこんな小さな身体をしてる訳じゃないわよ！』
まあ……、確かに、叢雲は若干幼いけど、守備範囲内ではある。
そもそも、俺が美人なら守備範囲がかなり広いってのもある。
……慰めに行こう。
叢雲は強がりだけど傷つきやすい子だ。

３人目：ネルソン
出撃から帰ってきて、シャワーを浴びた後に、映画を観に休憩室に現れたネルソン。
恐らくは、映画を見て時間を潰し、飯時になったら嬉々として食堂に現れるだろう。
『……む？』
そんなネルソンの目の前にエロ同人誌が。
『ふむ……？……なるほど、これがインターネットでよく見る、ｊａｐａｎのＨＥＮＴＡＩマンガか』
女子高生もののエロ漫画、容姿にコンプレックスがある女の子がラブラブエッチする内容だ。
『ほう……、これは中々だな……。ｒｅａｌでかつｈａｒｄな性行為をしっかりと描いている』
普通にエロ漫画を読むネルソン。
ネルソンは基本的に、そういったことに対して忌避感はない。
流石に、みだりに胸や尻を触られたら怒るだろうが、基本的には俺以外の男性に触れられてもキレることはない。

因みに、羽黒辺りなら、俺以外の男にセクハラされたら本気で殺しにかかる。
実際に、それで闇に葬られたＤＱＮが何人かいる。
あまりに酷いので、外出時には他の妙高型を連れて行くように指示してある。
さて、ネルソンだが。
『おお……、この尻の柔らかそうな描写など、眼を見張るものがあるな。これもまた一種のａｒｔだろう』
冷静にエロ本を読んでいた。
『しかし、誰の落し物だろうか？やはりカッシーマか……？』
基本的に、みんな鹿島を疑うのね。

４人目：鈴谷
『ふんふんふーん♪』
あー。
鈴谷は可愛いなぁ!!!!
めちゃくちゃ可愛いし、性格も（比較的）まともな方だし。
賢さは……。
うん……。
で、でも、鈴谷には良いところいっぱいあるんだぞ！
因みに、鈴谷の悩みは、見知らぬ変態おじさん達に援交を持ちかけられることらしい。凄く可哀想だ。
見た目がチャラいし、遊んでそうな女子高生みたいなファッションなので、よく変態に絡まれるらしい。
しかし、本人は毅然とした態度で断るし、無理やり何かされそうになったら骨をへし折るくらいで済ませるので、（黒井鎮守府基準においては）優しい子だ。
それに、見た目に反して清楚だぞ。
『……ほえっ?!』
あ、エロ本発見した。
『じぇ、ＪＫエロエロ全集?!!』

よりにもよって女子高生もののエロ本だ。
『うわ……、うわー……』
鈴谷は、エロ本をゆっくりと手に取った。
『わー……、エロ本だ……。凄い……、ゴクリ……』
生唾を飲み込む鈴谷。
顔を赤くして読み進める。
『うわー……、凄……、こんな感じなんだ……。あっ、でも、このちんちん、提督のよりちっちゃい……』
なーんで僕のちんちんのｓｉｚｅを把握しとるんですかねえ????
『普通の男の人って、勃起してもこれくらいなんだ……。じゃあ、提督のって大きいのかな……？ゴクリ……』
え？え？あれ？
鈴谷にちゃんと見せた記憶ないよ？
なにそれ、怖い！
『ところで、これ、誰のエロ本？また鹿島さん？』
またって言われるほどエロ本を持ち歩いてんのあの子ったら。

５人目：北上
北上様ですぞ。
崇め奉るのだ。
『はぁー、やっぱりサメ映画は良いなあ、最高だよ』
北上……、趣味はクソ映画を観ること。
三流映画を観るのが大好きで、前回のコミケでは三流映画のレビューをまとめたものを出して、割と売れたという実績がある。
好きな映画監督はエド・ウッド。
好きな映画は死霊の盆踊り。
何が楽しいのか本人に聞いたところ、時間をドブに捨てるのが最高に楽しいらしい。
気持ちは分かるが、実写版デビルマンはもう二度と見たくない。
あれは時間をドブに捨てるってか拷問の一種だ。あれなら何もしないで映画の上映時間中寝てた方が何倍もマシ。

『んん～？あ、エロ本だ』
エロ同人誌。
内容は催眠もの。
なんかこう、無口系の美少女が催眠でおほぉってなる話。
『……ふーん、催眠ねえ』
北上は興味なさげにエロ同人誌をぱらぱらとめくる。
『なんでエロ漫画の主人公ってこんなにチンコでっかいんだろうね？提督くらいあるじゃん』
だーからなんで君らは俺のナニのサイズを把握してるんですかね？
『でも大きい方が奥まで届くからね～』
えっ待って、俺、君とした覚えないよ？
ねえ、待って？
え？
北上を抱いた記憶ないんだけど?!
ねえ！
『また今度、提督としよう。今度は昏睡逆レイプじゃなくって、ちゃんと』
昏睡逆レイプ?!!!
そんなことされてたの俺?!!!
え？
待って？
怖い!!!

「怖いわ……、いつだ？いつ逆レイプされたんだ？」
「どうしました、提督？」
「鹿島……、そのさ、なんかさ、俺が艦娘に、意識を失っている最中に犯されたらしいんだけど、なんか知らない？」
「ああ、はい、知ってますよ。提督はたまに、たらふく飲ませて酔わせて、白露型に脳をいじってもらっているうちに犯すものですから」

「……え？」
「黒井鎮守府にいる艦娘は全員、提督逆レイプの経験者ですよ」
「……海防艦も？」
「ええ」
「……死のう」
「ああっ、提督ー！」

４０９話　艦息これくしょん、始まります！

『なんかツイッターで性転換した男の子が色々やるソシャゲ流行ってるじゃないですか。やりましょうよ。（明石）』

朝、枕元にそんなことを書かれた紙が置いてあった。

そして俺は性転換していた。

笑える。

脈絡ゼロで朝起きたら性転換してるとか。まあ、黒井鎮守府なら日常茶飯事ってやつよ。

まさにチャメシインシデント。

「前もやらなかった？」

冷静にツッコミを入れる俺。

まあいいや、少なくとも、女の身体ならエロいことにはならんだろ。

この時の私は……、まさかあんなことになるとは、思ってもみなかったのです……。

「あー、女の身体だとオッパイが邪魔だな」

女体化旅人は……、アイオワやビスマルクにそっくりだぞ！

スタイル抜群高身長、綺麗系美女だ。おっぱいもばるんばるんだ！

姿見を見てポーズを決める。

「ｏｈ　ｙｅａｈ……。こんな女がいたらほっとかねえんだけどなあ、残念ながら自分なんだわ」

いやー、残念残念。

なんて思っているとノックが三回。

朝、起こしにくるのは……。

大淀だな。

「おはよう、おお、よ、ど!!!?」

おはようの一言とともに大淀を迎え入れ……、その姿を見た瞬間、俺はバグった。

「おはようございます、提督（ｃｖ：神谷〇史）」

んあっぁ!!?!?!!!
んんんん!!?!?!!!
んんんー!!?!?!!!

黒髪を長め切り揃え、眼鏡をかけた、「パイロットスーツ」の美形の「青年」。あれ？イノベイトの方ですか？

「だ、誰だテメェ!!!」

「大淀です」

「嘘だあああああ!!!」

大淀のｃｖは川澄○子だろうが!!!!

なんだこのイケボのイケメン!!!!

「あれ？手紙、読みませんでしたか？本日は明石さんの放った怪電波のせいで艦娘は全員男になってますよ」

「♪＋｜＞。＄○々〆～〒｜○＊％％＃ーーー???!?!!!」

「そ、そんなに嫌ですか？」

「嫌です」

俺は男と責任って言葉が大嫌いなんだよぉォォォ!!!!

だ、だが、しかし、男になろうと俺の愛する大淀……、だが男……、でも……。

「では、おはようのキスです」

キスされる。

「ぐはっ」

「な、何故吐血を？」

「違うんだよ……、大淀のことは好きだよ？けど男じゃん……、男にキスされても嬉しくない……、むしろ死ぬ……」

ってか、声も艤装も違うのかよ。

まあ、男体化しておいてスカートのまんまの方がヤベェよな。

朝、食堂に出向く。

「ああ、おはようございます、提督（ｃｖ：速○奨）」

「……誰？」

「鳳翔です」

「んうぅー、鳳翔がー、鳳翔がイケメンに～!!!」
黒髪に「白色」の着物の、色気たっぷりの「色男」。そして「眼鏡」。今にも「私が天に立つ」とか言って眼鏡を握りつぶしそうだ。作画も心なしかオサレになっている。
「全く……、今朝起きたらこうなっていたからね、驚いたよ。ああ、すまない、喋り方も意識しないとどうにも男性らしくなってしまっているようでね」
やめてえ、イケボやめてェ……。
「さあ、提督。今朝のメニューは決まっている。調理に取り掛かろう」
「ウス」
「……？元気がないようだが、大丈夫かい？」
「アッハイ」
「ふむ……、熱でもあるのかな？」
その瞬間、イケメンの顔がどアップに。
女の子なら大喜びな展開、しかし、俺は男だよぉー!!
鳳翔は額をくっつけて、俺の熱を計った。
「……？特に熱はないようだけど？」
「あー、いやー、男にくっつかれるのがね、嫌なの」
「そうか……、君がそう言うなら近づかないでおくよ」
少しショックを受けたような顔をした鳳翔は、身を引いて、エプロンをつけ始めた。

午前。
「クソだな……、本当にクソ。たまにはこっ酷く叱った方が良いのかな……」
たまには本気で明石のことを叱った方が良いのかもしれない……、そんなことを考えながら、陽の光が差し込む鎮守府の廊下を歩く俺。
明石はなあ、本当になあ、もう、なあ。
今回はね、もうね。
うーん、怒った方が良いのかな……。
ふと、廊下の窓から外を見る。

「ほあああああああ!!!（ｃｖ：玄田〇章）」
「おおおおおおおお!!!!（ｃｖ：大塚〇夫）」
あー……。
長門と武蔵だな、あれは。
「二メートルを超える」筋骨隆々のグラップラー。
長門は……、牡牛座の黄金聖闘士みたいな見た目で、武蔵は地上最強の生物みたいな見た目だ。
怖……。
女同士の殴り合いでもただでさえ怖いのに男だと怖さが三倍くらいだわ。
ただでさえ、一撃で俺の肉体が消し飛ぶレベルのパンチが更に強くなっている気がする。
怖……。
「おや（ｃｖ：置鮎〇太郎）」
茶髪を「オールバック」にした「ロココ調の貴族服」の色っぽい「成人男性」に出会う。
「誰？」
「私は陸奥だよ」
「ほえぁ」
トレーズ閣下じゃねえかよう。
閣下じゃねえかよう!!
「ふむ……、お嬢様、こちらへ」
「はいぃ？」
「何……、普段は君が私をエスコートしてくれるじゃないか。となると、今回、男になったのであれば、私が君をエスコートしようと思ってね」
「あ、そうですか」
「付き合ってくれるかな、マドモワゼル」
「ウス」
そのまま陸奥にホールに連れられて、一曲ダンスを踊ると、陸奥は

満足そうな顔をして去っていった。なんなん？
「もうやだ……、男臭いよう……」
悲しみに満ちた俺。
ふらふらと道を歩く。
「ドーモ、テイトク＝サン。シンカイセイカンスレイヤーです（ｃｖ：森川〇之）」
「え？川内？」
「ハイ」
「……え？」
「赤いニンジャ装束」と『艦』『殺』の「メンポ」。あからさまにニンジャなのだ。おお、ゴウランガ！
「これからジンツウのインストラクションを受けに行く予定だ。テイトク＝サンは？」
「あ、はい、俺は普通に遊んでるけど」
「成る程な。では、オタッシャデー」
一瞬で消えた川内（？）。
怖……。
「おや、どうしたのかな、シニョーラ？浮かない顔をしているね（ｃｖ：関〇一）」
「白いフード付きアサシンコート」に「唇に傷」の「短髪」、「色男」。腰に剣、腕には手甲とアサシンブレード。
「……誰？」
「酷いな、この姿じゃ誰かわからないのかい？」
「いや……、本当に誰？」
「君の永遠のしもべ、那智だよ」
那智……？
那智？
「ウッソだろお前」
「君に嘘はつかないさ」
え？
嘘？

「なん……、え？なんかそんな感じなの？」
「ああ、おかしいかな？」
「いや……、テンション高くない？」
「そうかな？普通だと思うんだが」
あ、そうですか。

「もうやだ……、もうやだ……」
昼飯を作って出した。
「今日の飯は、と……。お、野菜炒めか！良いじゃねえかよ（ｃｖ：諏訪部○一）」
「はしゃぎ過ぎるな、天龍（ｃｖ：浪川○輔）」
紫髪の「色男」が二人。
え……？
天龍と龍田？
あのエスパーダにしか見えない二人が？どっからどう見ても第六と第四だよ？
何これ、この鎮守府そんな感じなの？
「む……、今日は中華か……。ならば春巻きを……（ｃｖ：鈴置○孝）」
「え？誰？」
「神通だ」
牙突の人じゃん。
「今日は中華かー。辛くないのある？（ｃｖ：山口○平）」
「あー……、春巻き、辛くなくて美味しいよ。それとシュウマイも美味しいよ」
「じゃあそれで！」
「ところで誰？」
「半ズボン」の「ショタ」だ。どう見てもジャイアントロボを保有しているあの子にしか見えない。
「僕？暁だけど」
マジで？

「マジで……、マジで無理」
夜。
「もうやだ……、勘弁して……」
俺は居酒屋鳳翔で呑んだくれていた。
もう何もやる気がしない。
明日の朝までこのまんまらしいし……、大人しく今日は寝よう……。
「……で、何？」
「いや……、思ったんだが（ｃｖ：中田○治）」
「女の子の提督とあれこれできるのは男の身体の今だけなんじゃないかと思ってね（ｃｖ：櫻井○宏）」
「まあ、そう言う訳でさ、司令官（ｃｖ：塩○翼）」
……え？
「いや……、いやいやいや！無理！無理だって!!!無理！やだ！絶対やだ！やめて!!!考え直そう?!レイプとか良くないよ!!!」
「合意があるだろう（ｃｖ：黒田○矢）」
「ないじゃん!!!俺嫌がってるよね?!!ねえ!!!あっやめて!!!本当に勘弁して!!!処女だけは!!!処女だけはーーー!!!!!!!!!!」
ああああああああああああああ!!!!!!!!!!

４１０話　魔法理論

「……は、こうで……、こうかな」
「成る程～！」
「でも、ここはこうじゃないかしら？」
おやおや。
時雨と、巻雲と、鳥海。
女の子同士仲良しで良いね！
……いや、本当にね。
女の子同士で仲悪くしてるのが一番良くないよ。ネチネチを嫌味を言い合ったり、悪い噂を流したりとかね。
女の戦いとか、そう言うのは本当に怖いからね。
「あ、司令官さん」
「旅人様！旅人様も一緒にお喋りしましょうよ！」
「おお！良いとも！巻雲の為なら何でも話しちゃう！」
「本当ですか?!じゃあ……」
なんのお話かなー？
お化粧？ファッション？それともお菓子？やっぱり可愛い話してるんだろうなー！
「この魔術理論の構築における、簡易詠唱の基礎部分の骨子と、完全詠唱による効果の拡張、及び魔術戦においての有効度の検証と評価についてのお話なんですけど」
「んんー？」
あるぇー？
女の子なんだからさ……、もっとこう……、キラキラした……、ふんわり甘いお話とかじゃないんですかね……？
「君の血は、官能的な甘さがあると思うよ」
そんな話してないよ時雨？
「アッハイ、この魔術理論の話ね」
俺は巻雲のノートを見る。
「どうですか？」

「あー……、良いんじゃない？二行目のこの構文、二重詠唱でしょ？戦闘中に使うとすれば……、ここ削って、ここを三重構文にして、全文を高速詠唱すれば？」
「ええっ！そんなことしたらピーキーで使い辛くなっちゃいますよぉ！」
「いやいや、巻雲の魔力量なら適当にブッパするだけで牽制になるし、外れても相手にプレッシャーを与えられるじゃん」
「うー、まあ、そうなんですけど……」
　そんなことを話していると、鳥海が聞いてくる。
「あ、そうだ、この前時雨ちゃんに見せたっていうとっておきの変な魔術、教えてくださいよ！」
「えー？あれは駄目、とっておきだから」
「そんなー、そう言わずに！」
「んもー、ちょっとだけだよー？」
「その話は僕も聞くよ。完全には解析できなかったからね」
　時雨も聞きたいらしい。
　さて、仕方ないからちょっと話すか……。
「あら？時雨に、巻雲、鳥海さんと司令官？……どういう組み合わせかしら？」
　あら、雷。
　折角だ、雷にも聞かせるか。
「いや、俺の魔術についてちょっと話すんだけど、聞きたい？」
「司令官のお話ならなんでも聞くわ！」
　ほーん。
　かわええやん。
「なら話すわ」

　いやー、自分の手の内話すのはちょっと嫌だからね、全部は説明しないよ。今回は、完全にバレてるのと最近作ったのだけ話すわ。
「まず……、よく使うのは、バフデバフ、転移、回復かな」
「転移と回復は何となく分かるけど、バフデバフって？」

電が首を傾げる。
「うん、バフは支援、デバフは妨害のこと」
「あー、そう言えば、司令官って、素の力は弱いけど、魔法を使うと強くなるものね」
「それでも精々、軽巡重巡並のパワーしか出ないけどね」
全力でバフを盛っても、精々那智と同じくらいのパワーしか出せないんだよねえ……。
硬さは……、金剛くらい？
速さは島風より速いよ。まあ、僅差だけど。
そういう風に聞くと、「あれ？ひょっとして提督、強い？」みたいに言われるんだけど……、俺は戦闘能力という観点で見れば大したことないから。
ほら、ボディビルダーがプロ格闘家に勝てない理由……、みたいな。
いくらパワーがあっても、技量が伴わないと意味はない、とかそんな感じ。
もちろん、一般人よりは強いんだけどね。
まあ、確かに、長門みたいな、超圧倒的なパワーだけで全てを捩じ伏せる……、なんてのもある。
長門のパワーは特撮ヒーローの最終フォームみたいな馬鹿げたパワー。俺なんて一撃貰えば即ミンチ。
でも俺は長門のような特化型じゃない。
速さは確かに相当だが、それでも、その速さを完全に制御することは不可能だ。
島風は、自分の『加速領域』を持っているから、その領域では知覚も身体の動きも速い。
しかし、俺の速さは、バフのゴリ押しで無理矢理速くしただけの暴走特急。
その辺の差だ。
「バフに使ってる術式はこれ」
俺用の魔導書を見せる。
魔導書、って言っても、中身は俺が使う魔術魔法の覚え書きみたい

なもん。
魔術師なら誰でも持ってると思うよ。
つまりは、メモ帳。
俺のこれは無限のページと検索機能、俺しか使えないロック機能と、万一他人に開かれた時に発動する攻勢防御システムがあるよ。まあ、普通の魔術師なら、誰でもやってるね。
だから、白露型、夕雲型、高雄型は魔術魔法を行使するので、皆それぞれ、魔導書を持っている。
でもまあ、夕雲型、高雄型は魔術魔法が便利だから使ってるって感じで、研究とかそういうのではないっぽいな。その中でも巻雲と鳥海は純粋な学問としての興味があるようだ。白露型？あの子達は俺より賢いでしょ。
「バフは『加速』『英雄』『聖なる盾』『肉体の保護』『シェル』を即時に詠唱できるから。まあ、５秒もあれば身体能力を十倍にはできるよね」
「凄いの？」
雷が無垢な顔で聞いてくる。
「凄いとも。普通、魔術師は防御力の向上ならまだしも、身体能力を向上させる魔術なんて使わないからね」
時雨が言った。
「でも、５秒もあれば、私なら大抵の人は殺せるわよ？」
「ふむ……、提督の言う５秒とは、最低限のバフを張るまでの時間だよ。実際の提督の戦法は、恐ろしいまでの勘と『瞳』による限定的な未来予知によってあらかじめ襲撃や奇襲を読んで、詠唱破棄による速度向上の魔法で一瞬で間合いから離れ、そこでバフを張る……、と言う感じかな」
「成る程ね、絶対に先手は取らせないのね！」
「仮に先手を取られても、即死回避や瞬時蘇生などがあるからね」
「へえ……、最大でどれくらい強くなれるの？」
雷が聞いてくる。
「うーん、三十倍くらい？でも、現実はアルテリオス計算式とは違うか

ら、単純に身体性能を上げても意味ないんだよね」
　アルテリオス計算式ってのは、相手の攻撃力マイナス自分の防御力イコール被ダメージってなる計算式のことな。昔のＲＰＧとかでよくある。
「何で？」
「限界まで筋力を強化しても、精々重巡並。パワーだけでゴリ押すには足りない……。だから、魔力という限られたリソースを有効活用するためにも、満遍なく色んな魔術魔法を使うよ、ってこと」
「えーと、どんなに頑張っても、パワー一本でやっていけるまで強くはなれないから、他の魔法を使うことに魔力を使うってことね」
「そうだよ」
「それと……、ランダムにテレポートする魔法と、バリアを張る魔法、相手の動きを遅くする魔法や相手の魔法を封じる魔法とかを使うのね」
「そうだね」
　さて、そして、前回使った魔術の解説をするか。
「えー、まず、俺が使う魔術は基本的に、『対策しづらく』、『解析しづらい』をコンセプトにしている」
「うん」
「例えばこの、お菓子の家って術式は、グリム童話から編んだよ」
「ヘンゼルとグレーテルね！どんな魔法なの？」
「建物に存在する木材をクッキーに変える魔術だよ」
「素敵ね！可愛い魔法だわ！」
「詠唱は『”Ｋｎｕｐｐｅｒ，ｋｎｕｐｐｅｒ，Ｋｎｅｉｓｃｈｅｎ，Ｗｅｒ ｋｎｕｐｐｅｒｔ ａｎ ｍｅｉｎｅｍ Ｈ・ｕｓｃｈｅｎ?”』、和訳して『ガリ、ガリ、ボリ、私の小さい家をかじってるのは誰かな？』……、ヘンゼルとグレーテルを食べようとした魔女のセリフだね」
「メルヘンチックで素敵だわ！」
「これ、正式な術式ね」
　俺は魔導書のページを見せる。

それを見た巻雲と鳥海は驚いている。
「いえ……、その……、実用性皆無でピーキー、その上謎の構文が多くて……」
「これって高速詠唱が前提ですよね……？しかも座標指定型なのに座標指定の部分を詠唱破棄するんですか……？」
ふむ、確かにそう言う意見もあるだろう。
「デメリットも多いが、俺にとっては利点の方が多いよ」
「ええと……、旅人様、まず聞きたいんですけど、何故グリム童話なんかから編んだんですか？」
「駄目なの？」
雷が首を傾げた。
「駄目ではないんですけれど……、一般的ではありません。魔術というのは、普通、神秘が大きいものから編むものです」
「神秘？」
「神秘とは……、一言では言えないんですけど、知名度と古さ、みたいなものですかね？基本的に古い物語から編んだ術式は強い、と思ってもらって大丈夫かな？」
巻雲か眼鏡を弄りながら、雷の疑問に答える。
「そう言えば、艦娘の艤装にも神秘が篭るって言ってたわね」
「そう、艤装にも神秘があります。艤装は……、戦艦、つまり戦闘機械への信仰と言うか……、知名度や信仰が神秘になってるんです。人間が思う科学への信仰が神秘の力になって、ダウンサイジングされた武装でも、まるでフルスペックのような力を発揮できているんです」
「ふーん。つまり、グリム童話には神秘が小さいから駄目なのね？」
「そうです、普通は、聖書やヨーロッパの伝記などから術式を編みます」
「それともう一つ、一小節の魔術にしては詠唱が長く、術式が複雑なことです」
鳥海が言った。
「駄目なの？」
「そうですね……、戦闘中に魔術を使うんですよ。なのに、複雑で、呪

文が長いと困ると思いませんか？」
「確かにそうね」
　鳥海は窓を開ける。
「普通、戦闘中に使う魔法はこの様な形にします。『ＭＡ』」
　マジックアローが窓の外に真っ直ぐ飛んでいく。
　あれはマジックアローの魔法を詠唱破棄して、特定の言葉に魔力を乗せて口にした時に自分の正面からマジックアローを放つと言うものだ。
　角度、座標、威力を一定にして放つため、誰でも安定して使える。
　ゲーム風に言えば、マクロを組んだみたいな感じかな。
　このマクロってのが、戦闘中にはかなり大切になる。
　特定の言葉、動作に魔力を乗せることで発動させる……。
　つまり、指をさした方向に魔法の矢を飛ばす、一小節でバフをかける。一瞬の隙が命取りの戦場では長い詠唱は不利、詠唱を縮めて速くして、若しくは詠唱以外の手段で発動させる。
「しかし……、この司令官さんの魔術には、木をクッキーにする『座標の指定』をマニュアルでしなくてはならないのです。それと、一小節にしては詠唱が長いので高速詠唱をしなくてはならない点も挙げられます」
「座標指定については、指を指した位置の半径３０ｃｍだよ。詠唱はこれ以上削れないんだよねえ」
「ええー……」
「つまり、何が駄目なの？」
　雷が尋ねる。
「つまりですね……、木材をクッキーに変えて相手の隙を作る魔術なのに、呪文が長く、クッキーに変える木材を指差しして指定しなければならないのです」
「使い勝手が悪いのね」
　ふむ、確かにその通りだ。
「これはこうやって使う予定で編んだ術式だから」
　俺は上着とシャツを脱ぐ。

そして、背中から口のある触腕を生やす。
「……あ、成る程！触腕であらかじめ詠唱しておいて、触腕で指定するんですね！それなら、戦闘中でも腕が塞がりませんし、何より、口を作れるなら、複雑な術式でも並列詠唱が可能です！」
「つまり……、人間以外が使うことを前提として作られた魔法だから問題ないってことね！」
「いや、俺はバリバリ人間だし」
「……うん、まあ、司令官がそう思うんなら、きっとそうなんじゃないかしら。司令官の中では」

こうして、魔術講座を終えたみんなは解散、各自で勉強しましょうと言うことになった。
雷も楽しかったとのこと。

さて……。
新しい手札を増やさなくては。
俺は魔導書を開き、少し考えてから新たな術式を編み始めた。

411話　裏世界

黒井鎮守府は、海軍所縁の地、軍事施設である。
そのせいか、怨霊などの悪魔が湧きやすい。
しかし、物理で殺せるので、艦娘にとってはゴキブリが湧いたくらいの気持ちで始末されているという背景がある。
スリッパや丸めた新聞紙でゴキブリをぱーん、みたいなノリで、怨霊や魑魅魍魎の類がぱーんと消される。
長門辺りはビビリまくっているが、基本的に、長門に敵うレベルの悪魔はそうそう湧かないから安心できる。
なにせ、長門は破壊神シヴァくらいまでなら素手で殴り殺せる。
怨霊くらいなら、俺もちょっと気合い入れたパンチで殺せる。
そもそも、怨霊くらいの雑魚悪魔なら、そうそう人間を殺したりもしない。
ってかできない。雑魚だから。
そもそも、存在が希薄過ぎて見えないくらいだ。
ポルターガイストとかなら音がするだけで害もないしな。
そもそも、神々への信仰、神秘が薄まり、怪異が科学で説明されてしまう現代において、強い悪魔はそうそう存在できない。
まあ、デビルサマナーやペルソナ使いなんかは、一流なら強い悪魔も喚べるだろうけど。
だがまあ、例外はある。
一流を超えた超一流のデビルサマナーや、生贄を使った大規模な召喚儀式……。
そんなのなら、魔王や魔神を召喚できるだろう。
ああ、うちの白露型？
あの子達は……。
「提督さん、見て見て！魔王ベルゼブブの召喚に成功したっぽい！」
一流も一流、超一流だ。
邪神の召喚。

一歩間違えば、制御できなければ、邪神達は即座に人類に牙を剥くだろう。
そんなことになれば、街一つくらい簡単に消し飛ぶ。
そんだけやばいもんをポンポン喚び出す黒井鎮守府は、裏のデビルサマナー組織には恐れられており、絶対に敵対してはならないとされている。
邪神を簡単に召喚するデビルサマナーとしての技量以外にも、豊富な資源や資金、そもそも艦娘が絶望的に強い件、散々裏社会を荒らして回った俺が所属している件などから、ガイア教、メシア教、野良のデビルサマナー、そして国防組織ヤタガラス、欧州の魔術師達、ＳＣＰ財団などからは要注意団体としてマークされている。
時折スパイが入ってくるが、黒井鎮守府に入ってきたスパイの殆どは『輪切りのソルベ』みたいな殺し方をされて各組織に送り返されるので、色々な組織に恐れられている。
尚、スパイの拷問と殺害については、全く俺の知らないところで艦娘が勝手にやっていたので、知ったのは最近だった。
気がつけば、スパイを捕らえておく地下牢とかできていた。
俺は関知していない。
マジで知らない。怖い。
……怖い。
最近はただ殺害するだけではなく、人体実験に使った成れの果てを返却するなど、悪趣味で吐き気を催すような殺害方法になってきている。
俺は関知していない、マジで。
俺は精々、スパイは殴ってからおちょくって返すようにしているんだが、艦娘は黒井鎮守府に、俺に対する敵対行動は一切許さないからな……。
その苛烈さと残虐さもまた、恐れられる要因の一つだ。
そしてもう一つ。
黒井鎮守府は、『強くなり過ぎた』……。

黒井鎮守府の勢力は余りにも大きい。
そして幅広い。
そうだな……、例えば、直接戦闘であれば、あのアベンジャーズのハルクに匹敵するであろう長門がいる。
例えば、魔術による戦闘においては、高雄型が極めて高性能……、魔法の行使すら可能である。
例えば、悪魔の使役においては、白露型……。あの子達は、あの伝説の14代目のライドウに匹敵するほどには、戦闘能力も魔神の使役も得意である。
例えば、暗殺や偵察であれば、妙高型だ。彼女達は伝説に語られるアサシン達に匹敵するだろう。
例えば、技術力においては、工廠組の叡智を以ってすれば、ケロン軍やセイバートロン星人に匹敵するだろう。
このように、黒井鎮守府には、幅広い人材と、極まった戦力がある。
足りないのは頭数くらいだが、そこは資金と資源を使って無人兵器を量産するなどしてカバーしている。
ぶっちゃけて言えば、黒井鎮守府全軍に匹敵するレベルの戦力を持つ組織は殆どない。
武力による世界征服も……。いや、もしも複数の組織が敵に回れば普通に負けるな。
兎に角、黒井鎮守府は、「一組織としては巨大で強大だが、複数組織には負ける」くらいの規模と戦力だ。
まあ、十分に、世界の覇権を狙えるポジションだな。
でも俺は、人と文化、自然に優しい世界征服を心がけているから、武力あっても別に……。
「と、思ってるんだよね」
「成る程、では、武力を放棄してくださいませんか？正直、日本国内に日本軍より強い組織があるのは困るのです」
こちら、ヤタガラスの女。名前は教えてもらえなかった。
「そうだな、若しくは、こちらに戦力を回してもらうか……。待遇は要相談だぞ？お前の欲しい美女もいくらでもくれてやる」

こちら、ガイア教の男。名前は名乗らなかった。
「なにを馬鹿なことを……。艦娘は人間には過ぎた力。封じるか、若しくは、我々メシア教の法と秩序を守る力として制御されるべきでは？」
こちら、メシア教の男。名前は名乗らなかった。
うーん。
「あはは」
そっかそっか。

「殺すぞ」

「「……ッ」」
「あの子達をもの扱いするな、どんなに強くても、愛すべき女性なんだ」
「あんな化け物を……ッ!!」
「化け物？俺からすれば、悪魔や天使の方がよっぽど化け物だ。愛を知らない連中ほど悍ましいものはない」
「愛？あんなものを愛しているのですか?!邪神を使役し、神を斬り伏せる魔人でしょう、艦娘は!!」
「それがどうした、どんなに強くても俺の心は彼女達と共にある」
俺は断固として主張する。
「……あの、ちょっといいか？」
「なんだ、艦娘はものじゃないぞ、人間だ」
「それはさておき、お前は何をやっているんだ……？」
俺？
ねるねるねるねを練ってるんだが？
「シリアスな話だよな、これ？なんでお前はガキの食うような菓子で遊んでるんだ……？」
「いや、たまに駄菓子食いたくなる時あるじゃん。あ、うまい棒食べる？」
「いらんわ！」

あらそう？
オッ、このねるねるねるねのわざとらしい甘さ！美味いっ！テーテレッテー！
俺はねるねるねるねを食べ終わり、うまい棒を食べる。
うん？
駄菓子で腹が膨れる訳ないだろ？
ガキじゃあるまいし、お菓子の食べ過ぎで晩御飯が食べれませんなんてこたぁないよ。
「にしても……、この手の菓子類のサラダ味って全然サラダじゃないじゃん、どの辺がサラダ？みたいに思ってるだろ？」
「いや、限りなくどうでも良いのですが……」
「これ、サラダ油のサラダなんだよ。味的には塩味だ。昔の人はサラダ油と塩で味付けしたせんべいをサラダ味として売ってたんだよ。その方がハイカラだろ？」
「興味ねえよ！なんの話だそりゃ！」
興味ねえ、か。
そりゃこっちのセリフなんだよなあ。
「そんなん言ったら俺、現在進行形で君らに興味ない話聞かされてるんだけど？」
迷惑なんだよなあ……。
世界の覇権を握るとか、秩序をもたらすとか……。
他所で勝手にやってろ、みたいな感じ。
だが、力があるから、放置してもらえない。
他所の組織からの取り込み、談合や同盟の依頼なんかが多数来てる訳だよ。
もうね、断っても断っても毎度毎度、何回も何回も来るの！
俺が黒井鎮守府に来る前から勧誘はあったけど、今では昔の三倍くらい来る。
古来から日本を霊的存在から守護してきた国防組織ヤタガラス。
自由と混沌、強いものこそが正しいとされるガイア教。
法と秩序、社会の全てを管理すべきだと主張するメシア教。

異常存在である艦娘や俺を収容しようとする財団、異常存在である艦娘や俺を破壊しようとする世界オカルト連合、艦娘や俺の力を求めるカオスインサージェンシー……、兎に角、何とかして黒井鎮守府を支配下に置きたい奴らは多い。
もちろん、親交のある組織も多い。
フロシャイムとか、鷹の爪団とか、パッショーネ、東城会、デストロン、ラトヴェリア、ボーゾック、幻想郷……。
あと、艦娘が勝手に個人個人で関係を持っている組織……、東弊重工、アサシン教団、ワンダーテインメント博士などなど。
「兎に角……、何度来ても、何を用意しても、俺達は誰かに従ったりはしないよ」
「新台さん……！貴方方の力を貸していただけるのであれば、我々は……、日本はより平和になります！」
「じゃ、艦娘にそう言ってみたら？」
「艦娘は話が通じないではないですか!!!使いに出したヤタガラスの使者が皆、バラバラの惨殺死体になって返ってきましたよ!!!」
「頼み方が悪いんだろうねー」
「ならばガイア教に来い！」
「やだ」
「ではメシア教に」
「もっとやだ」

「まあ、兎に角……、少なくとも俺は嫌だ。あとは艦娘に直接交渉してね。じゃ」
「「待っ……!!!」」
テレポート、と。

うーん。
「善意の協力」の範囲内で、丁重に頼むのであれば、力を貸すことも吝かではないし、艦娘だって話が通じないように見えて、メリットを示し礼を尽くせばしっかり答えてくれる。

結局、こうだな。
「人にものを頼む態度じゃない、知っているがお前の態度が気に入らない、ってか」

412話　白露型の楽しい外敵始末法

黒井鎮守府。
この黒井鎮守府の技術力、戦力は一級品だよ。
文書一つ、コンピュータ一つ、艦娘一人、どれを持ち帰っても、大きな力になる。
技術力においては、核融合炉や物質生成装置、グラビトンリアクター、粒子加速砲、それらを防ぐ装甲板にイナーシャルキャンセラーシステム。
魔術的技術力においても、邪神召喚の媒体、手段を記した文書、手軽な怪異の従属方法、魔術魔法の深淵、高性能な魔道具、貴重な魔術的素材。
艦娘は誰もが、最低でも魔神クラスの実力がある上に、一部の広域殲滅が可能な艦娘ならば、島一つくらいなら消し飛ばせる。
つまり、「裏」の連中が欲しがってるってことさ。
毎日のように、スパイやら何やら、一攫千金を狙った愚か者が入り込んでくる。
こんなゴミ虫に、愛する提督の手を煩わせてはならない。そうだろう？

「夕立」
「はーい、なあに？」
「これ、始末しておいてくれるかな？」
「んんんんー!!!もがもが、んんんーーー!!!!」
適当に捕らえたスパイを渡す。
ふむ。
そう言えば皆がどのようにゴミの始末をしているのか、そう言えば知らないね。
見ておこうか。
「夕立、君はそのゴミをどうやって始末するのかな？」
「んー、取り敢えず、『瞳』で素性を洗ってから……、『パズル』にして

送り返すっぽい！」
　パズル、か。
「まずは指、その次膝、太腿、性器、膀胱、精巣、小腸、大腸……。バラバラにして、毎日一つずつ飼い主に送り届けるっぽい！」
「相変わらず優しいね、夕立は」
「そんなことないっぽい～！」
　パズルは、白露型の一般的な侵入者への返礼だね。
　特に、夕立は解剖が苦手だから、しっかりと練習をしたいと言うことだろう。
　向上心があって素晴らしいね。
　因みに、夕立は、麻酔をかけずに、あるいは最低限にして、痛みと共に解体する主義だ。

　白露にスパイを渡す。
「それ、どうやって始末するんだい？」
「え？うーん、『玩具』と戦わせて遊ぶ？」
　玩具か。
　白露型で玩具と言えば、実験動物のことを指す。
　遺伝子操作、外科手術、その他魔術的アプローチによって創り出されたモンスターのことさ。
「今回、また新しく作ったの！玩具作りなら私が一番だよ！」
「へえ」
「時雨も見てよ！今回のＴ―０５はサーベルタイガーの遺伝子とコモドドラゴンの遺伝子を掛け合わせて、魔力炉心を取り付けて、ヒュドラの牙を移植してあるんだ～！カッコいいでしょー！」
「ああ、いい出来だね。白露は器用だから、工作が上手いね」
「ひっ……!!た、助けてくれ!!!」
「Ｔ―０５、ゴー！」
『ＵＧＲＲＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!!!』
　村雨にスパイを渡す。

「それ、どうやって始末するんだい？」
「うーん、『生贄』かな」
生贄か。
「ちょっと加工して、仕舞っておくよ」
「加工するところ、見ていても良いかな？」
「良いけど、どうしたの？見てても特に面白くないと思うよ？」
「いや、白露型のみんなの働きを間近で見ておこうと思ってね」
「そう？まあ、構わないけど」
そう言って村雨は、生贄の加工を始める。
生贄は、魔神の召喚などに使う資源としての命だ。
『生きてさえいれば良い』
コストカットや手間を省くために、生贄は加工しておくことにしてある。
心臓と脳以外を切除し、特製の薬液瓶に浸して箱詰め。
これだけだ。
「生きている」かつ「コンパクト」なので、素材として重宝しているよ。
因みに、村雨は、麻酔をかけて一瞬で終わらせる。

五月雨にスパイを渡す。
「それ、どうやって始末するんだい？」
「ええと、『実験体』にして弄ろうかな？」
実験体か。
そのままの意味だね。
工廠組との共同開発した細菌兵器や、手術の練習台なんかに有効活用するのさ。
「捨てるのは勿体無いですから、有効活用しないと、ですね！」
そう言って、スパイを受け取った五月雨は、ガス室にスパイを放り込むと、ガスを噴出した。
『……？！！！……！！！！』
「あはは、何言ってるのか聞こえませんよお。あはは、あはははは」
喉を掻き毟って死ぬ実験体の姿を、記録媒体にて記録。

その後は、死体のスケッチを取り、解剖し、各臓器の検分を始めた。

春雨にスパイを渡す。

「それ、どうやって始末するんだい？」

「うーんと、『治験』してもらいます！」

治験。

そのままだね。

開発した薬剤の効果をチェックする。実験体とほぼ変わらない。

「はーい、聞いてね??貴方に注射したお薬は猛毒なの??これから二十四時間、地獄の苦しみを味わって死ぬの??」

「あぎ、あ、ああ、うがあああああ!!!」

どんな薬を使ったか明言しつつ、動脈に針を刺す。

地獄の苦痛に気が狂う人間を見るのが楽しいそうだね。

涼風にスパイを渡す。

「それ、どうやって始末……」

「おりゃ」

おや、話が早い。

スパイの首をへし折ったね。

「あんたも運が良いねぃ、これが他の白露型なら、地獄の底よりキツい思いをしてたよ」

ふむ。

「一思いに殺す優しさか……」

「そういうことよ。スパイだなんだみたいな、切った張ったの世界にいるんだから、死ぬ覚悟くらいはしてるだろー？でも、苦しめるのは良くないから、一瞬で殺してやるのさ」

ふむ、なるほど。

「基本的に素材として必要な時でもない限り、あたいはちゃっちゃと殺してやるよ」

江風にスパイを渡す。

「それ、どうやって始末するんだい？」
「え？まあ、普通に牢屋かな？」
江風はそういうところがあるね。
「何かに使えるかもしれないじゃンかよ、しまっとこうぜ」
割と、ものを捨てられないタイプだ。

山風にスパイを渡す。
「それ、どうやって始末」
「えい」
……山風は、獣狩りの斧でスパイの首を切り落とした。
「えいえい」
その調子で、内臓がこぼれないように、コンパクトに刻む。
「捨ててくるね」
麻袋に死体を詰めると、火葬場に引き摺っていった。
ふむ、話が早いね。

海風にスパイを渡す。
「それ、どうやって始末するんだい？」
「『お人形』にするわ」
お人形か。
「お人形遊びとは、存外、君も可愛らしいじゃないか」
「あら、私はいつでも可愛らしくしているわよ？」
「ふふふ、そうかい」
お人形……、つまりは、実験動物にするということ。
全身にメスを入れ、人間とは違うものにして、飼い主に差し向ける。
「それじゃ、まずは食道の切除から始めましょうか！だって、貴方、もう、食事の必要もない身体になるのだから」
「ヒッ……、は、は、や、やめ」
「手術は四回に分けて行うわ。まずは、食道や性器なんかの、要らない部分の切除から始めるわね」
「は、は、や、やめて、助けて」

「安心して？寝ているうちにすぐに終わるから。終わったらレントゲン見せてあげるわね」
海風は、何回かに分けて施術し、経過を伝えるというやり方を好む。

さて。
黒井鎮守府において、スパイの処遇はこのようになっているよ。
「五等分の花嫁おもしれェー」
おや、提督。
花嫁を五等分に？
「待っていて欲しい、今、不定形の姿になって五分の一の僕を切り離して譲渡……」
「わーわーわー！やらなくて良い！やらなくて良いから!!」

413話　テクノブレイクで死ぬ前に

「……で、それは？」
工廠。
黒井鎮守府の技術担当、明石と夕張の本拠地。
警備用のロボットが徘徊し、チェーンガンのタレットが備え付けられた要塞にして、核ミサイルから機動兵器まで幅広く取り揃えた技術の宝庫。
世に出せばノーベル賞間違いなしなものから、使い道のわからない奇天烈なものまで、発明品がそこらに転がっている。
今回の発明品は……。
「これは『セッ○スしないと出られない部屋生成装置』です！」
大分、奇天烈寄りの発明なようだ。
「はあ……」
「あれ？分かりませんか？」
「いや、意味は分かるが意義が分からんのよ」
「セッ○スしたかったので」
「成る程、それならしょうがない」
セッ○スがしたかったから……。
それならしょうがない部分がある。
情状酌量の余地ありってやつだ。
俺もセッ○スはしたい。
セッ○スをしたいという純粋な気持ちで作ったのであれば、俺にそれを止める権利はない。
「このプレートを壁に貼り付ければ、その部屋がセッ○スしないと出られない部屋になるんですよ」
「成る程」
「こんな風に!!!」
「させるかっ!!!」
俺は明石に掴みかかる。
「あはははは！甘いですね！提督が私にパワーで敵いますか？」

「うう……」
そのまま引き摺られて、プレートは壁に。
敵わない……。
「はい！これでこの部屋から私達は、セッ○スをしないと出れません！」
「ぐぬぬ……」
試しにドアを開けようとすると、青いバツ印がぶぶーという音と共に出てきて出られない。
「仕方ない……、今流行りのキモチップで許してくれ」
「実質タダじゃないですかー！」
キモチップだから！
気持ち篭ってるから!!
プライスレスだから!!!
「セッ○スは良いだろ？な？やめとけやめとけ！」
「えー、私、ピンクだから淫乱なんです」
「そのピンク髪キャラ全員に刺さる悪口は……、やめようね！」
「嫌ですか？」
「いや、良いけどさ……」

さて、早速、あのプレートが黒井鎮守府に出回っているようだ。
え？
明石とセッ○スしたか？
ははは。
これ、Ｒ１８じゃないからね、うん。
さて……、恐らくはだが、あのセッ○スしないと出られない部屋生成装置は既に黒井鎮守府中に広まっただろう。
そんな気がする。
つまり、部屋に入ったらアウトだと思わなくては。
いや、個人的に戦艦～空母の艦娘なら幾らでも抱けるんだけど、駆逐艦～海防艦から迫られたら困る。
非常に困る。

一説によると意識がないときに昏倒レイプされているらしいが、素面で海防艦に手は出せないでしょ。
いや、勃たないこともないとは思うよ？
……いや、どうだろう、実際海防艦の裸で勃つだろうか？
まあ、その気になれば、自分の肉体くらい自由自在に操れるけど。
性欲云々関係なしに勃たせることはできるよ？俺、房中術もそれなりに嚙ってるからね。
でも、海防艦で性欲が湧くかと言うと、申し訳ないがちょっと怪しい。
かつての幻想郷での一件で、俺はロリコンに目覚めそうになったと言う悲しい過去があるが、それでも駆逐艦～海防艦はヤバイわよ！って気持ちがある。
流石にヤベェだろ……。
「そう思わないか対馬」
「大丈夫、です。対馬は、司令がろりこんさんでも……、怒りません、よ？」
「そっかー」
ならしょうがないねー。
ねー。
「ところで、司令？私の……、お部屋のテレビが、映らなくなっちゃいました……」
「そうなの」
「直して……、くれますか？」
「良いよー」
そして、択捉型の部屋に案内されて。
部屋に入って。
「あれ？テレビ映るじゃん」
「えい」
セッ○スしないと出られない部屋空間にされる、と。
いや……、分かってたよ。
罠だろうなー、とは思ってたよ。

知ってた。
でも、対馬の言うことは何でも聞いちゃうじゃん。
しょうがないじゃん。
「対馬……、あのさあ」
「ごめんなさい……」
「セッ○スはしないからね？」
「やだ」
「やだじゃありません」
全く……。
これくらいなら三十分で出れるな。
「じゃあ……、ゆーわく、します」
「おー、やってみなよ。もし誘惑できたら木の下に埋めてもらっても構わないよ」
……
……
……

さて……。
俺は黒井鎮守府の裏山の木の下から、リビングデッドよろしく這い出る。
いや……。
まあしょうがないじゃん。
そんなこともあると思わない？
だって対馬可愛いし。
対馬に求められたら断れないじゃん。
ね？
そして、土を落としてシャワーを浴びて。
いやー、流石は対馬だ。
まさかマジで埋めるとは。
真面目なところも可愛いな！
と、浴場を後にしたところ。

「はっ！」
「あらあら」
飛んで来たドスが地面に突き刺さる。
つぶねぇ。
「殺す気だったかな、陸奥」
「あれくらいで死ぬのかしら？」
いや死なんけど、暫くは行動不能に……、はっ?!そ、それが狙いか?!
逃げなければ！
「あ、待って」
「はい」
待とう。
「今回はね、監禁しないわ」
今回は？普段ならするの？
「今回は、一時間だけ部屋に来て欲しいの」
「まあ、良いけど」
何の用だろう？
大人しく長門型の部屋についていく。
「えい」
あっ。
またもや、セッ○スしないと出られない部屋にされてしまった！
「あの、一時間だけって……」
「一時間で終わるわよ？提督が言うことを聞いてくれれば」
普段なら、他の艦娘が割り込んでくるところだが、このセッ○スしないと出られない部屋空間は、完全に隔離された空間で、出られないし、外からの干渉も受けない。
……まあ、陸奥が相手なら別に困らないんだけど。
むしろやりたい。
「ねえ、提督……？貴方は私のものよ。私は貴方のものよ。うふふ、うふふふふふ……」
なんかヤベー雰囲気なのを除けば、別に困ることないし、やっちま

うかー。

陸奥ならレーティング的に抱いても問題ないでしょ。

うちの鎮守府は自由恋愛だからね。

「だから浮気とかそういうのはないです」

俺は、手足の骨を折られて、大和に逆レイプされていた。

「提督は私の旦那様なんです……、誰にもあげません……。んっ??」

基本的に、俺が艦娘を抱きたくない理由の殆どがこれだよね。

一人抱くと、嫉妬深い艦娘に気の済むまでリョナレイプされるから……。

大抵は陸奥に監禁されるか、大和にへし折られるか、加賀に喰われるかなんだが。

まあねー、艦娘も基本的に女の子だからね、嫉妬しちゃうのも仕方ないよね。

ハーレムするならそこら辺の調整も上手くやらなきゃ駄目だよ。

え？

上手く調整した結果がこれだよ？

だって、俺、殺されてないし。

今、俺の上で乱れに乱れている大和も、基本的に殺意はないよ？

ただの可愛い嫉妬だよ。

本気で嫌われてるんなら、俺なんて骨も残らず消しとばされてる。

そうされないってことは、愛されてるんだよ、俺。

でも、女の子に嫉妬させるのは良くないよね。女の子は難しいこと考えないで幸せに生きれば良いと思うよ。

さーて。

暫く身を隠そうか。

テクノブレイクで死ぬ前に。

４１４話　旅人の親友

「ぐ、うう……？」
あ、頭が痛ェぜ……。
昨日は確か、マオと酒飲んで……。
飲んで……。
飲みまくって……。
……。
アレ？俺どうしたんだァ？
クソが、このジャギ様とあろうものが、酒で意識を失うとは……。
……いやいや、違ェよ！マオが酒に強過ぎるんだあの野郎!!!
バケツでウォッカ飲まされりゃ俺だってひっくり返るわ!!!
畜生、あの野郎、一発ブン殴ってやる!!!
「あー？」
って俺の背中に手を載せてる奴、誰だ？
「ん？この手はマオだな?!テメエこのや……、うおぁーーー?!!!」
腕しかねえ?!!
片腕以外はミンチだ!!!
うおぁ……、グロいな、胸糞悪りぃぜ……。
まあ、ミンチでもほっとけば治ってるだろうよ、あいつは。
実際に、よく見ていると、破壊された細胞が蠢いていやがる。
蛆虫のように動く肉片が一つに集まり、段々と再生してきている。
現在、脳ミソまでは元どおりになってるみてえだな。
そして、部屋の床には血文字で「犯人はヤス」とある。
ダイイングメッセージってやつだろうな。
だが、そんなもんを知ったところでよォ……。ってかヤスって誰だよ。
つーか、お前の仇討ちなんぞしねェからな？
ン？何だァ？
手紙だ。

『ヘルメット助教授へ』
「だぁれがヘルメット助教授だぁ!!!」
置き手紙を破り捨てる。
ンォ？
二枚手紙があるじゃねえか。
ええと、何々？
『一枚目は破られると思ったから何も書いてないです』
ああそうかよ、それで？
『ジャギへ。君がこの手紙を読んでいるということは、俺はもうこの世にいないんだろうと思う』
「まあ……、そうだな」
俺はマオの死体をチラッと見る。
間違いなく死んでいるな。
『なーんちゃってウソウソー!!!実は生きてまーす！ミンチなだけでーす!!!』
う、ウゼェ……。
『①昨日の酒と料理はどうでしたか？
1：美味しくなかった
2：どちらかといえば美味しくなかった
3：どちらとも言えない
4：どちらかといえば美味しかった
5：美味しかった』
何で急にアンケート？
いや、美味かったぞ。
『①で5：美味しかったを選択した方への質問です
特に何が美味しかったですか
（自由回答）』
アァ？
あー、フライドチキンかな……。
『回答ありがとうございます
アンケートご協力のお礼に１０００円分の商品券を差し上げます』

商品券が手紙に挟まっていた。
お、おう。
『ところで、二日酔い大丈夫？うちの食堂で梅粥でも食ってけよ。しじみの味噌汁もあるぞ』
「オォ、ありがとよ」

食堂に行って、梅粥としじみの味噌汁を飲んでから、また宴会会場に戻る。
マオは……、まだ再生してねぇな。
……。
そもそも、なんでこいつはこんなことになってんだ？
少し思い出してみるか。
えーと……。
……
……
……

……「うっしゃ！飲み比べで勝負しようぜ！」
……「勝てるかボケ!!」
……「ハンデとして俺はスピリタス飲むから！お前はウォッカな！」
……「アァ？ならやってやろうじゃねえか！」
……「じゃあお前、負けたらアンナさんにプロポーズな!!」
……「やってやろうじゃねえかーーー!!!」
……「俺が負けたら死んでやるよ!!!」

……ここまでは覚えてるんだがよォ。
どうなったんだ、あの後？
確かバケツで酒を飲み合って……、うっ、頭が。
クソが……。
何があったか全然思い出せやしねェ……！

あ、そうだ！宴会会場を調べれば、手がかりがあるかもしれねぇぞ。
よぉし……、少し見て回るか。

これは……、酒臭いバケツだな。
これで酒を飲み合って……、駄目だ、記憶が飛んでる。
ジョッキのウォッカ十杯目までは覚えてるんだが……、それ以降は……。
……「こんなんじゃ勝負にならねぇよ!!!鳳翔！バケツ持ってきて!!!」
……「はーい」
……「行くぞオラぁ!!!」
……「上等だオラー!!!」
……あー。
なんか、相当アホなことしたな。
当分酒はやめとくか……。
そして血の足跡……。
……「ヒーッヒヒィ!!!俺はスピリタスくらいじゃ酔わねえんだわー!!!こんなもんジュースだジュース!!!」
……「クソ化け物がァ……!!」
……「あれ、長門どうしたの」
……「むー！わたしもかまえー!!!」
……「ギャーーース!!!」
……「ウヒャヒャ!!ミンチだ!!」
……あ、思い出した。
そうそう、ナガトにミンチにされたんだったな。
ってか、じゃあこのダイイングメッセージは何だよ。誰なんだ、ヤスってのは。
……ん？
さっきの置き手紙が……。
……鎮守府前海岸に行け？
何でだ？

兎に角行け？
まあ、良いけどよ……？

「ジャギ、大切な話って何よ……？」
「げえっ、ア、アンナ?!な、何故ここに?!!」
「はぁ？あんたが大切な話があるってここに呼び出したんでしょ？」
「はぁ?!」
……まさか！
あの野郎！
本気で俺に、アンナにプロポーズさせようってか?!!!
「う、ああ」
「そ、その……、大切な話って、何よ」
「い、いや、そんなものは……」
「あ、あんたのメールには、その、こ、これからのアタシ達二人のことについて大切な話があるって……」
「はうあ!!!」
な、な、なんて事しやがるあの野郎おおおおおお!!!!!
酔って言ったことはノーカウントだろうが!!!!!
「……その、やっと、告白してくれる、の……？」
「そ、それは……!!」
クソがぁーーー!!!
あの野郎絶対許さねえええ!!!!
クソ……。
畜生……。
ええい、もう、良い！
やっちまえ！
「ア、アンナ……」
「な、何……？」
「あ、あ……」
「あ？」

「……愛してる！」

「……アタシもよ！」

その後の話だが……。

「おめでとうございーい」

「死にやがれェ!!!!」

「はっはっは、南無三南無三」

あの野郎、最初からこのつもりで俺を酔わせて、言質取って、俺のスマホでアンナを呼び出して……、計算づくだったらしい。

「しゃあなし、アンナさんは幸せになるべきだから」

「俺の気持ちを考えろ！」

「知らんわ」

こいつ……!!!

「新婚旅行、楽しんでこいよ」

「死ね！」

「はっはっは、かまぼこかまぼこ」

あー、クソが。

しゃあねえ。

アンナは、俺が幸せにしなきゃならねえんだ。

嫁になっても、それは変わらねえよ。

にしても……。

「当分酒はやめておくぜ……」

415話　5ちゃんの様子

1：名無しさん
XXXX／XX／XX　ID：○○○○○○
前スレ：【頼むから】黒井鎮守府総合スレ674【遊んでてくれ】
ここは、K県○○市の黒井鎮守府について語るスレです
他の鎮守府の話題や海軍の話については他スレで
2：名無しさん
XXXX／XX／XX　ID：○○○○○○
たておつ。
3：名無しさん
XXXX／XX／XX　ID：○○○○○○
乙。
4：名無しさん
XXXX／XX／XX　ID：○○○○○○
この前のMCあくしす読んだ？
5：名無しさん
XXXX／XX／XX　ID：○○○○○○
＞＞4
読んだ
やばかった（小並感）
6：名無しさん
XXXX／XX／XX　ID：○○○○○○
ミリタリ雑誌なのに魔法で戦います！とか書かれてて草も生えない
7：名無しさん
XXXX／XX／XX　ID：○○○○○○
魔法ってあれか？アメリカのドクター・ストレンジみたいに？
8：名無しさん
XXXX／XX／XX　ID：○○○○○○
あの……、艦娘の艦要素は？

９：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
艦娘（大嘘）
１０：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
やっぱり艦娘は化け物なんやなって
１１：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
音速で空をかっ飛んだり、魔法を使ったり、剣や格闘で戦っておいて艦娘は戦艦の霊的存在ですと言い張るのは無理があるのでは？
１２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
○○○○○○○．ＭＰ４
艦娘の演習の動画
１３：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞１２
アイエエエ?!!ニンジャナンデ?!!
１４：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞１２
戦国無双やめろ
１５：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞１２
スパロボかな？
１６：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞１２
世界観がｌｉｇｈｔかニトロプラス
……

……
……
２４２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
じゃあ、艦娘の目撃記録まとめるか
ｗｉｋｉ：ｈｔｔｐ：／／○○○○○○．ｊｐ
２４３：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
ｗｉｋｉが充実してきたな……
２４４：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
ってか個人情報のまとめｗｉｋｉってどうなの？
２４５：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
ヒーローチームとか俳優とか某弁護士とかのまとめｗｉｋｉがあるんだから、艦娘のまとめｗｉｋｉがあっても良いんじゃね
２４６：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
本当にヤベー内容だったら消されるでしょ
２４７：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞２４６
記事が消されるなら良いけど物理的に消されたりしないよな？
２４８：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞２４７
^　^
２４９：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞２４８
なにわろてんねん頃すぞ

２５０：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
まず、安定して情報が出てるのは、長門さん、鹿島さん、川内さん辺りだな
ここら辺の艦娘はよく外に出てるし、人当たりも良い方だし
２５１：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
三割ぐらいの艦娘は話しかけてもゴミを見るような目で見られる
六割くらいは外面がしっかりしてて会話ができる
一割ほど会話が通じない真性がいる
２５２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
特に雲龍さんとかやべぇ
話しかけただけで病院送りにされたって人が多い
２５３：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
遊び半分でドローンを黒井鎮守府に飛ばしたらレーザータレットで消し炭にされた後、パソコンハッキングされて画面いっぱいに「次はない」って文字が浮かんできた話する？
２５４：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
＞＞２５３
マ？
２５５：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
マジだぞ
怖いからもう二度とやらない
２５６：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
ってか、鹿島さんのエロ動画がネットに流れてんだが
２５７：名無しさん

ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞２５６
本人だぞ
２５８：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
ごめん、自分のハメ撮り動画をネットに流すってどうなの？
２５９：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
変態だー!!!
２６０：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
ガチでやべーやつじゃん
２６１：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
動画：ｈｔｔｐ：／／ＸＸＸＸＸ．ｊｐ
２６２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞２６１
並のＡＶ女優じゃ敵わねえくらいに可愛いしエロい身体してるんだが
２６３：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
＞＞２６１
抜いた
２６４：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
国防を担う艦娘が自分の情事を動画にまとめてネット公開とか国の恥ってレベルじゃねえぞ
２６５：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○○
でも、エロ可愛いから良いかな、って

２６６：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
因みに、やれると思って声かけたヤリチンは心が折れるまでなじられて病院送りだそうだ
２６７：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
淫乱一途か
２６８：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
淫乱で一途って理想の女では？
２６９：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
ラブエッチ編、ナースコス編、水着プールエッチ編、メイドご奉仕編、ハードＳＭ編と加速し続けてるもんな
２７０：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
まあ、変態は良いとして、他の情報入ってるか？
２７１：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
○○市のＤＶＤショップに艦娘らしき人発見
話しかけたところ、雷巡の北上と名乗っていた
緑のジャージにサンダル、黒髪、気だるげ
もちろん美人
オススメの映画は死霊の盆踊り、実写版デビルマンらしい
２７２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
＞＞２７１
まさかのクソ映画愛好家
２７３：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
○○○○○○．ｊｐｇ

写真も撮らせてもらった
「えー？もうちょっとおしゃれしてる時に撮って欲しかったんだけど。まあ良いや、はい、ぴーすぴーす」だってさ
２７４：名無しさん　ＩＤ：○○○○○○
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ
可愛いじゃねえかよ
２７５：名無しさん　ＩＤ：○○○○○○
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ
可愛い
２７６：名無しさん　ＩＤ：○○○○○○
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ
コミケの壁サークル、オータムクラウド先生も有名だな
２７７：名無しさん　ＩＤ：○○○○○○
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ
アウトドアのアイドル天龍さん
２７８：名無しさん　ＩＤ：○○○○○○
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ
空母戦艦なら食べ歩きしてるぞ
○○市であり得ないレベルの美人を見たら十中八九艦娘だと思って良い
……
……
……
８７９：名無しさん　ＩＤ：○○○○○○
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ
この前のミリタリークラシックスで大分研究されたからな
工廠とか凄いらしい
飯も美味くて、鎮守府内に図書館や映画館、体育館にゲーセンまであるんだとさ
８８０：名無しさん　ＩＤ：○○○○○○
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ

ＭＡＭＡＲＵのインタビューで大分情報来たからな
８８０：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
月収百万超え、一千万に届くことも
副業可
寮完備、三食食事＋おやつ＋酒つまみ無料支給、電気ガス水道ネット代は経費
ノルマ制、ノルマ達成次第休日
功労者には特別ボーナス
たまに上司から服やアクセサリーなどのプレゼントあり
図書室、映画館、体育館、グラウンド、ゲームセンター、温泉、工作室等、各種施設使い放題
８８１：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
ホワイト企業やんけ!!!!
８８２：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
ホワイトってかもう神様レベルの待遇じゃん
８８３：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
でも、昔は無給で碌に食事もなく、一日１８時間働かされていたらしい
今の旅人提督に提督が変わってから、一気にホワイト化したんだとさ
８８４：名無しさん
ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
俺の上司も変わってくれんかな
……
……
……
１００１：名無しさん

ＸＸＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　ＩＤ：○○○○○○
このスレッドは１０００を超えました。
もう書けないので、新しいスレッドを立ててください。。。

４１６話　ハイスピード食道楽週間

こんにちは、赤城です。
昨日、六月のノルマを達成しました。
なので、一週間程暇でして。
となると……。
「提督！ＭＶＰチケットを使います！」
「はいはい、何？」
「ＭＶＰのご褒美として、一週間、私の食道楽に付き合って下さい！」
「良いよぉ」
そういうことになりました。
取り敢えず、お寿司の気分ですね。
となると……。
北海道、小樽ですね。

「いらっしゃいませ……、あ、旅人さんと赤城さん！」
「関口君、今日は大丈夫ですか？」
「はい！」
「いつもごめんね、たくさん食べちゃって」
「そんな！旅人さんと赤城さんはいつも沢山食べてくれるので助かりますよ！」
あら、そうですか？
「それじゃあ、十人前ずつ、握ってもらえますか？」
「はい！」
ここ、小樽には、巴寿司と言うとても美味しいお寿司屋さんがあるんです。
店主の関口君はまだ若いのに、かなりの腕前なんですよ。
お寿司に関しては提督以上ですね。
まあ、擁護しておくと、提督の強みはレパートリーの多さですから。
お寿司に特化した超一流の職人さんには、提督も敵わないのです。
「それでは、いただきます」

んん……、うん！
凄く美味しいですね！
箸で掴んでほぐれない、でも、口の中でほぐれるシャリ！
小樽で獲れた新鮮なネタ！
「うーん、流石に勝てねえや。美味え」
「あはは、旅人さんは他が凄いじゃないですか。寿司からフランス料理まで幅広く作れる人なんて、そうそう居ませんよ」
美味しいお寿司はたまらないですね！
「そう言えば、全国大会のＤＶＤを見ましたよ」
「あー、あれか。凄かっただろ？」
「はい！もっと早くこの世界に生まれていればと思います、惜しかったです！」

次は函館に飛びます。
ここは五稜郭亭。
函館一の老舗レストランです。
「む、旅人と……、赤城さんか」
「あら、北方さん。お久しぶりです」
「ああ……。今日は久しぶりにここで料理を、と思ったんだが……、二人が来ると忙しくなりそうだ」
そう言ってはにかむ北方さん。
北方さんは伝説のシェフとまで言われた方です。かなりの腕前ですよ。
では。
「いただきます」
んんん……！
美味しいですね！
北方さんはしっかりと、食べる人のことを考えた料理を作ってくれますから。
「でも、私は提督や鳳翔さん達の料理も好きですよ」
「ありがとう、嬉しいよ」

次は……、ああ、餃子が食べたいですね。
となると、別世界の……。
ホールと呼ばれる地域に行きましょうか。
この辺りは、詳しくないですが、魔法使いがいるとか？
「ああ、いるよ」
「提督も魔法使いでは？」
「あー……、ここの魔法使いはちょっと違うタイプのやつだから」
「違うタイプ？」
「俺は人間に使える魔法しか使えないんだよね。ここの世界の魔法は……、脳の中に小さな悪魔がいないと使えないんだよ」
「はあ……」
小さな悪魔、ですか。
「ま、それは良いとして」
「いらっしゃい……、あ、旅人」
「ニカイドウさん、久し振り。ビールとギョウザ、有りっ丈頼むよ」
「はーい」
「……」
「ん？ああ、ニカイドウさんには手を出してないから、安心して」
「そうですか」

次は……、並行世界の未来にでも飛びますか。
並行世界のアメリカ、連邦と呼ばれる地域にて。
「マジで行くの？放射線量やばいよ？」
「大丈夫ですよ、艦娘は入渠すれば中毒でも放射線でも何でも治りますから」
「赤城が良いなら構わないけどね」
『ナニニシマスカ？』
「ええとＹＥＳ」
このロボットは、提督が言うには言語プログラムが壊れているそうです。

何にしますか？としか喋れないので、イエスかノーで答えなくてはならないそうですね。
でも、調理はできるので面白いと思います。
ロボットが調理するヌードルが食べられるのは、黒井鎮守府を除けばここくらいのものです。
ヌードルを食べた後は、ヌカコーラを飲みながら観光しつつ移動して、食材を集めます。
「きゃー、凄いですね！こんなに暴れるってことは、新鮮な証ですよ！」
「あああああーーー!!!提督食われてるよ！君の提督食われてるよ赤城ぃーーー!!!」
その後、獲ってきた食材でステーキやオムレツを作って食べました！
これが中々に美味しいんですよ！
確か、この動物の名前はデスクロー？とかでしたっけ？
「そうだよ、デスクローだよ。このウェイストランドでトップクラスにヤベー生き物だよ」
「へえ、凶暴な生き物って美味しいんですかね？」
「関係ないと思うよ」
「そうですか？今度はニューベガスってところに行きましょうね」
「まあ、赤城がそれで良いなら構わないけどね？」

次はネオサイタマと呼ばれる並行世界へ。
……。
ここ、食べ物が美味しいって言うか、ちょっと変わってるんですよね。
「何食べる？」
「寿司……、はこの前食べましたしね」
「ここの寿司は寿司じゃなくてスシだから……」
「？」
何が違うんでしょう？

「あんなアメリカのお菓子みたいな色合いで寿司は名乗れないでしょ」
「その辺はもう、言ったもん勝ちみたいな？」
「そうかな……？」
「さあ、適当に何か食べましょう」
「赤城は凄いな、好き嫌いがなくて偉いぞ」
「まあ、戦時は好き嫌いなんてできませんでしたからねー」
　私達、艦娘には、当時の自分に乗っていた乗組員達の知識がありますから。
　その知識によると、戦時は好き嫌いなんて許されませんでした。
　つまり、まあ。
「この明らかにサイズがおかしいイカケバブも美味しく食べられるってことですよ」
「まあ、良いけどね」
「あ、オハギ食べましょうオハギ」
「この世界のオハギは大半違法薬物だからね？」
　血中オハギ濃度が……、などと呟く提督。
　オハギが違法薬物って、なんだか面白いですね。

　次は……、別世界のリーザスという国へ。
「赤城、離れるなよ。あいつに見つかったらレイプされるから」
「それは怖いですね」
　そんな話をしつつ、レストランへ。
「何食う？」
「……へんでろぱ？うはぁん？」
　なんだか、気の抜ける名前の料理ですね……。
「へんでろぱはシチューみたいなもの、うはぁんは高級なデザートかな」
「では、それを」
　さて、試してみましょう。
「これは、なんの肉ですか？」

「こかとりす」
「成る程」
わからないと言うことがわかりました。
でもまあ、美味しいので構いません。

さて……、最後はノーステイリスに行きましょうか。
久しぶりに人肉を食べたい気分ですね。
提督の知り合いの冒険者さんは多角経営をしていて、人間牧場をやっているそうです。
私も柔らかい子供の肉は好きですから、お肉を買ってきましょう。
冒険者さんの街の人に調理してもらい、人肉の大葉焼きを食べます。
うん、うん！
これですね！
人肉特有の奥深さがたまりません！
あ、因みに、提督はドラゴンのステーキを注文していました。
提督は、必要に迫られなければ人肉は食べないそうです。
美味しいんですけどね……？
「人肉、お嫌いですか？」
「うん、まあ、態々食べる程でもないよね」
「若い女の肉なんて、柔らかくて美味しいのに……」

でも……。
やっぱり。
「一番美味しいのは、提督ですね」
「そっかー」
「今日はモツが良いです」
「心臓で良い？」
「はい??」
ああ、美味しい??

４１７話　鎮守府正面海域防衛

「鎮守府正面海域に敵影」
「無人兵器群が破壊されました。姫クラスと予想されます」
「どうしますか、提督？誰か適当に出しますか？」
　いや、うーん？
「なんか、嫌な予感がする」
「……それは、つまり？」
「相手、強いと思う。最大戦力は誰か空いてる？」
「木曾さんが空いてますね」
「じゃあ呼んで、俺も出る」
「はい」

　なんてことない初夏のある日、黒井鎮守府に珍しい殴り込み。
　一年ぶりくらいの出来事に皆驚いていたが……。
　俺は、何故か嫌な予感がした。
　よって、最大戦力の一人である木曾と、バックアップに数人の艦娘を連れて、鎮守府正面海域を蹴散らすことに。
　今回は……、おや、新しい深海棲艦だ。
「やあやあやあやあハローハロー、お名前は？」
『……深海鶴棲姫』
「へえ、それで？要件は？」
『ク、ククハハハハ……』
「楽しそうだね」
『オ前ヲ殺セバコチラノ勝チナノニ、ノコノコト前ニ出テクルンダモノ……、笑エルワ』
「笑うことは良いことさ、さて、形式上降伏勧告を」
　あ、不味い。
「ッオオ!!!!」
　素早いパンチが飛んできた。
　あまりにも速く、重いので受けきれない。

防御に使った片腕が吹っ飛ぶ。
「死ね」
その瞬間、木曾が飛び出て、深海鶴棲姫に大斧を振り抜くが。
『死ヌノハオ前ダ』
斧を「砕かれた」……。
「ほう」
木曾が小さく感嘆の声を上げる。
「あふん」
片腕を失った俺を片手で抱き寄せ、もう片方の手に召喚した艤装のマシンガンをばら撒きながら、一瞬で後退する。
そしてバックアップの艦娘が援護射撃をして、俺は後ろへ放り投げられる。
「あーーーれーーー」
吹っ飛ばされた空中で短く呪文を唱え、失った腕を再生。
着水前に空中受け身、空中ダッシュで前線に戻る。
「はああっ!!!」
『オオオオオッ!!!!』
木曾の恐ろしい威力のパンチ。
更に、「その上をいく」威力のパンチで殴り返す深海鶴棲姫。
成る程、「パワーは木曾以上」か。
つまり俺より強い。
『パワーノ強サハ「知ッテイル」ワ。サア、死ニナサイ!!!』
どこから取り出したのか、二メートル程の長柄の両刃バトルアックスを振り回す深海鶴棲姫。
その馬鹿力から繰り出される一撃は喰らえば不味い。
「ぐ、おお!」
木曾は回避を続けるが……、不味いな。
圧倒的なパワーで暴れている。
木曾は搦め手を使うのが苦手な方だ、単純にパワーで上回る奴とはやり辛い。
木曾のやり方は……。

「はぁあああ!!!!」
超高速飛行による……。
「叩き斬る!!!!」
ヒットアンドアウェイ！
『グ……！』
「まだまだ行くぞ!!!!」
超高速で空を駆け、トマホークで斬りつける。
スピードとパワーが乗った一撃はただでさえ協力だというのに、それを何度も繰り返すのだから、強力さは伺えるだろう。
「はあ!!!!」
並大抵の相手なら一撃で砕くんだが……。
今回のは並大抵の敵じゃないってことだ。
『無駄！ソノ戦法ハ「知ッテイル」ノヨ』
そうだな……、木曾は高速で移動し奇襲を繰り返す戦法だ。
つまり、奇襲の方向がバレると。
「か、はっ」
カウンターをもらって大ダメージ、って訳だ。
「木曾！高速修復剤だ！」
「ああ……、うっ」
高速修復剤……。
プロトタイプの高速修復材を、使い捨ての注射アンプルに入れるようになったもの。
よく考えて欲しいんだけど、バケツ一杯の回復薬って持ち歩けないじゃん？
だから、静脈注射アンプル式に切り替えたんだよね。
これを艦娘の静脈に注射すれば、失った手足すらボコボコと生えてくるよ。
え？涅マユリ???
何のことだかわからないなあ!!!
さて。
「くっ……、強いぞ、こいつ」

『マダダ、行クワヨ……、艤装召喚！』
深海鶴棲姫の手元に黒い光……、いや、この場合闇というべきだろうか、闇が集まって、武器の形をとる。
見たところ黒い……、ライフル？
俺は思考と同時に鑑定の魔法を詠唱。
「あれはショットガンだ！」
鑑定完了。
あれは散弾銃。
フルオート、艦娘系の技術故にリロード要らず。
威力は……。
「ナーク＝ティトの障壁!!!」
『無駄ヨ。ソレノ硬サハ「知ッテイル」ワ』
「ッ!!!」
障壁が破られ、複数の散弾が俺に突き刺さる。
障壁で幾らか減衰したとは言え、効くなぁ!!!
更に、俺の身体に突き刺さった弾丸が炸裂した。
「ぐおっ！」
赤い花火と共に爆散する俺。
頭部分は幸いにも残っていたので、バックアップの如月に回収してもらう。
「あらあら」
「退がれ如月、今回のは相当だぞ、油断するな」
「はあい」
『無駄ナノヨ……。データハ採取シテアルワ。何ヲヤッテモ無駄』
「データ……、データねえ」
『ソウヨ。何回貴方達ト戦ッテキタト思ッテイルノ？貴方達ノデータハ採取シテアル』
ほうほう。
『戦法、火力、防御力、機動力……。全テオ見通シヨ!!!』
へえ。
「じゃあこれはどうだい？」

俺がテレパスを使って周囲の艦娘に指示を飛ばす。
バックアップの睦月型数人が、物理属性の弾丸を叩き込む。
『「知ッテイル」ト言ッタワ』
艤装……、盾だと？
「提督ー！あれ、うちの物理盾だよー！」
「ああ、俺も見たことある！」
うちで使ってるタイプのに形が似ている……。
海に飛び散った物理盾の破片を集めて解析したか！
ふむふむ。
そう来るかー。
「じゃあアレだな。コジマキャノン用意！」
「はい！」
「撃て！」
「コジマキャノン、発射！」
『ナ……!!!?』
片腕が消し飛んだ深海鶴棲姫。
「まあ、アレだね。見せてない武装なんて幾らでもあるってことだよ。さあ、降参かな？」
『ク……、ソウカ、マダ認識ガ甘カッタカ……。今日ハ撤退スル！更ナルデータヲ……!!!』
「逃すと思うかい？」
俺が尋ねる。
首だけで格好つかないが。
『フン、コレヲ見ロ』
「それは……!!」
帰還のスクロールか！
『コレハ素晴ラシイモノダナァ？即時ニ撤退ガ可能ナノダカラ。我々モ有効活用セネバ』
成る程、うちの艦娘には帰還のスクロールと高速修復剤を持ち歩かせている。
特に帰還のスクロールはそんなに難しい魔法じゃないし、艦娘も遠

方の出撃から帰還する際になどよく使い捨てている。
タネが割れるのもおかしくない、か。
『次ハモットデータヲ集メテオクワ。ソレジャ、サヨナラ』
消えた……。

「あー、今回はやられたなあ」
「そうか？勝っただろう」
木曾と執務室にて。
「いやいや、今回の襲撃は多分データ採取だよ」
「そうなのか」
「次はもっと強くなって攻めてくるぞ」
「そうか……。アレを使うべきだったか？」
「ゲッター線か？アレは駄目だ。アレは軽い気持ちで使っていいもんじゃない。今回はコジマ粒子という札を切らされちゃったからな。やっちゃったなー」
うーむ。
俺の予想だと、地球の環境に悪いコジマ粒子やゲッター線などのエネルギーは恐らく、深海棲艦は使わないとは思うが……。
それでも、強めのカードを切らされたのはミスったな……。
深海棲艦も舐めてかかれるほど弱くはない。
油断しちゃならないな。

４１８話　ナチスシャークＶＳ黒井鎮守府

「もう七月か……」
　最近は暑くなってきたなー。
「夏か、夏といえば海、海といえば「サメ映画」……？」
「サメ映画だよ、提督」
「北上……？」
「サメ映画だよ、提督（リフレイン）」
「いや……、二回も言わなくて良いから」
「サメ映画、楽しいよ」
「そ、そう……」
　サメ、ねえ……。
「でも、サメを狩ったりしちゃ駄目だぞ？ジョーズのモデルのホオジロザメなんて、ワシントン条約に登録されてるんだからな」
「大丈夫、大丈夫」
「何が？」
「今回のサメは、白露型と工廠組の生物兵器だから」
……。
　え？
「テレビ見て」
『今朝未明、日本海近海にて、十メートルを超えるどう猛な巨大人喰いサメが複数体発見され……既に１３名が死亡……軍隊が出動するも通常兵器がほぼ無効化され……深海棲艦の新兵器との見通し……』
……。
　あー。
　あー？
　あー。
「緊急放送ーーーッ!!!手が空いてる奴は集まれェイ!!!」
　なんて事をやってくれるんだよ本当に!!!
　バレたら怒られるの俺なんだよ???

「まあまあ、人間なんて何匹死んでもどうだって良いじゃないですか」
「少しは悪びれろー？」
「ごめんちゃい」
「ははは、こやつめ、ははは、本当に怒るぞ」
　明石を捕まえて叱る。
　まあ、ぶっちゃけて言えば、俺も、顔の知らない誰かが死んだ程度で心を痛めるとかそういうのはないんだけど。
「ところで、サメ映画のお約束だと、美男美女のカップルである提督と艦娘って確実に死にますよね」
「そうだね……、カップル？」
「カップルですよね？」
「そうなの？」
「カップルですよ」
　そーなのかー。
「って言うか、カップルと美男美女を優先して狙うように作りましたから」
　……。
「あのさぁ」
「大丈夫ですよ！バレてません！海水浴ついでに始末しに行きましょう！」
「本当にさー」
「大丈夫ですよ、大丈夫大丈夫」
「で？」
「はい？」
「ただの巨大サメじゃないんだろ？」
「もちろんですよ！スペシャルサンクス北上さんでユニークなサメを作りました！」
「ほう、ユニーク」
「題して、ナチスシャークです」
　オッ、クソ映画の香り！
「どんなの？」

「サメが空を飛んで爆発します」
オッ、クソ！
「何で爆発するの？」
「低予算映画は爆発オチが基本だって北上さんが」
オオオオオー!!!
めんどくせえ!!!

旅人号に搭乗。
旅人号（豪華客船）。
「取り敢えず寛いでましょう！そのうちサメが来ます」
「何で？」
「海の上で寛いでいる奴から優先して殺すように……」
「何で？（怒り）」
「まあまあ」
いや怒るわ。
「お前本当に……、本当に……」
「でも海上で寛いでる奴なんて金持ちの浮かれポンチでしょう。殺しても良くないですか？」
「俺も現状は金持ちの浮かれポンチだけどね」
「ははは」
なにわろてんねん。
「今日は綺麗どころも用意してありますから」
旅人号から陸奥や愛宕と言ったセクシーお姉さんが!!
「素晴らしい」
なんか、美女のお尻とおっぱいを見ると全体的にどうでも良くなってくるな！

そして、キャッキャウフフしてたら。
「えー、これは……」
『ＧＵＯＯＯＯＯ!!!』
ナチスシャークが空を飛び襲いかかってくる。

……そもそもどの辺がナチス要素なんだ？
「ビスマルクさんの生体データ使ってます」
「やり過ぎィッ!!!?」
　艦娘の生体データ使ったサメ兵器とかヤバすぎんよー。
「ってかやばくね？こまった、ちょっとかてない」
「大丈夫です、イケメンは死なないですから！」
「そのセリフ吐いた奴死んだじゃん!!!」
　ま、不味いぞ、このままではまたハッピーツリーフレンズみたいな死に方をしてしまう！
　はいお決まりのこのパターンと言われてしまう！
「助けてー！」
「ヘーキヘーキ！大丈夫ですって！安心してくださいよぉ！」
「何をもって大丈夫だって言ってんの？根拠は？」
「ないですけど。でもどうせ死にませんよね」
「死なないけど」
　でも痛覚はあるんだよ？
『ＳＨＡＡＡＡＡＡ!!!!!』
「うわあああああ!!!」
「死になさい!!!」
『ＧＹＹＡＡＡＡＡＡ!!!!!』
　陸奥が俺の目の前に飛んできたナチスシャークを殴り殺す。
「た、助かった」
　ん？
『Ｐｉ……、Ｐｉ……、Ｐｉ……』
　あー？
「そういや爆発するんだったな!!!」
　うおお！
「『英雄』！『筋力向上』！『レイジ』！」
　パワーを上げて、爆発しようとしているナチスシャークを持ち上げ、海に放り投げる。
『Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ……!!!』

そして、俺の想像の三倍ほどの大爆発。
巨大な船である旅人号が大きく揺れる。
「明石イイイ!!!どんだけ火薬詰めたんだあああ!!!」
「てへぺろ!!!」
やってくれましたねえ！
「米軍で使用されている一般的な空対地ミサイルくらい炸薬を詰めました!!!」
「イキ過ぎィ!!!」
「やああっ！」
愛宕が空を飛んでくるナチスシャークを大槌でぶっ飛ばす。
「それーえい！」
北上が飛んでくるナチスシャークをチェーンソーで破断。
順調にナチスシャークを撃破している。
順調だ。
しかし……。
「嫌な予感がするんだが」
「提督のその嫌な予感って何で当たるんですか？」
「まあ、長年の旅で直感が鋭くなってるんだよ」
「まあ、当たってますけど」
「何やったんだ、言いなさい」
「キングナチスシャークがいます」
「キングナチスシャーク」
「キングナチスシャークは全長2キロメートルの巨大サメです」
「やり過ぎだって言ってるでしょ???何でそんなことしたの???」
「ボスキャラです」
ボスキャラだと？
「口からビーム出します」
「加減しろ莫迦！」
「おっ、そろそろ来ますよ！」
『ＧＵＯＯＯＯＯ!!!!!!!!!!!!』
アッーーーー!!!!!!!!!!!!

キングナチスシャークのビームが旅人号の船体にダメージを与える。
「やめてええええ!!!俺の旅人号がーーーー!!!」
「まあまあ、あとで直しておきますから」
「その前に壊さないで!!!」
畜生!
「では、そろそろフィナーレなので、これをどうぞ!」
「これは?」
「爆弾です」
「……自爆しろと?」
「はい!」
そうか……。
サメ映画だもんな、爆発オチじゃないとな……。
「じゃあ……、まあ、行ってくるけど。今回のことを反省して、二度とやらないように」
「はい!」
返事だけは良いんだからもう。
「じゃあ提督が自爆するシーンを敬礼しながら眺めてるね」
と北上。
「まあ、好きにすれば良いんじゃないかなぁ?じゃ、逝って来ます」
俺は爆弾を抱えてキングナチスシャークへ……。

エピローグ。
爆発炎上する旅人号から、艦娘の乗った脱出艇が。
旅人号に向かって敬礼する艦娘達。
俺はナチスシャークに爆薬を積んだ旅人号で特攻した。
どかーん。
キングナチスシャークは死んだ。
「いやー!ひっどいオチですねえ!最高です!」
「爆発オチは基本だからねえ」
「あとは消し炭の提督を回収して、帰りますか」

なんてことだ……。

４１９話　かんむすずのみなさんのおかげでした

「食わず嫌い王決定戦やります」
「「「はい」」」
　俺の鶴の一声で始まった、艦娘食わず嫌い王決定戦。
　某番組はもう終わっているが、構わん、やろう。
　なお映像は黒井鎮守府のユーチューブチャンネルにアップする予定だ。

『かんむすずのみなさんのおかげでした』
『食わず嫌い王決定戦』
　さて、こういう時の司会役、俺。
　そして補助役、守子ちゃん。
　ナレーションは大淀。
『さあ、航空巡洋艦の精鋭は軽空母に勝るのか。最上型巡洋艦一番艦、最上。提督と入場です』
『そしてもう一方は、本鎮守府でも優秀な軽空母、祥鳳型軽空母、瑞鳳。海原提督と入場です』
　そんな感じで始まった。
「ところで提督？食わず嫌い王決定戦って何？」
「え？知らない？」
「うん」
「最上はあんまりテレビとか見ない？」
「見ないよ」
「そっかー」
　まあ、テレビなんざ見ないでも困ることないしな。ニュースならニュースサイトやＳＮＳで充分だし、近頃の芸人の馴れ合いバラエティ番組よりも下手したらユーチューバーの方が面白いし。
　最上に食わず嫌い王決定戦の概要を説明する。
「要は、瑞鳳さんの嫌いな食べ物を当てつつも、僕が嫌いな食べ物を当てられないようにすれば良いんだね」

「そんな感じ」
「うーん、難しそうだなあ……。僕、割と顔に出ちゃうかも」
「大丈夫、大丈夫」
「ところで、この組み合わせは何なんですか？」
　瑞鳳に尋ねられる。
「俺と守子ちゃんで選んだんだよ」
「はあ……？」
「あんまり仲良しな艦娘同士じゃ、好き嫌いが分かっちゃうだろ？だから、接点のあんまりなさそうな二人を呼んだのよ」
「成る程……」
「確かに、僕、瑞鳳さんと話したことあんまりないや」
「私も最上ちゃんと話すの凄く久しぶりかも」
「仲悪いとかはないよね？」
「え？ええ、もちろんです、仲悪いとかじゃないですよ？ただ……」
「僕達艦娘って、百人以上いるじゃない？接点のあんまりない艦娘とはそうそう話したりしないかな」
「確かに……、私も高校時代、同じクラスなのに話したことがほとんどない人とかいました。三十人くらいのクラスメイトですらそんな感じなのに、百人を超える艦娘だと……」
　と守子ちゃん。
「うーん、別に無理して仲良くする必要とかないしなー」
「え？そんな感じで良いんですか？」
「艦娘だって子供じゃないんだから、無理矢理仲良くしなさいって言うのも変じゃない？俺達ができるのは、こうして接点のあんまりなさそうな艦娘同士で仲良くなれるきっかけを作ることくらいのもんだと思うよ」
「成る程……」
　さて、そんな感じで。
『メニューです』
　メニューは。
『最上さんの大好物は、きのこご飯、カキフライ、レバニラ炒め、酢豚

の四品です』
『一方、瑞鳳さんの大好物は、豚骨ラーメン、鮒寿司、ホタテのバター焼き、馬刺しの四品です。しかしこの中に一品だけ食わず嫌いの一品が隠されています。互いにそれを探り合ってください！』
　では一品目から。
「きのこご飯かあ」
「豚骨ラーメン……」
「「いただきます」」
　さて、どうなる？
「「美味しい！」」
　ほうほう、そう来るか。
「最上んキノコ好き？」
「好きだよ！裏山でキノコ狩りした時とか、凄く良かったよね！」
　キノコが好き（意味深）。
「好きなキノコは？」
「んー、椎茸かな？」
　椎茸か……。
　椎茸は美味いぞ、栄養もある。
「あとは舞茸の天ぷらとか好きかな」
「あー、分かる。天然物の舞茸とかマジで美味いからなー」
「瑞鳳さん、ラーメンはお好きですか？」
　守子ちゃんが尋ねる。
「はい！昔、黒井鎮守府で大食い大会をやった時に豚骨ラーメンの大食いをやったんですけど、凄く美味しかったです！」
「そうですか！」
「因みに、黒井鎮守府の家系豚骨醤油ラーメンも凄いんですよ！」
　こんなもんか。
　次。
『二品目です』
「カキフライ……」
「ふ、鮒寿司……」

どうかな？
「牡蠣、美味しいよね。僕は好きだよ」
「ふ、鮒寿司は独特の匂いがしますけど、私は好きですよ！」
ふーん。
「因みに、生牡蠣は陸奥の大好物です」
陸奥の画像を出しておく。
「艦娘なら当たっても大してダメージはないしね、生も良いかもねー」
「当たったことあるの？」
「いや、ないけど。でも、艦娘には毒とか殆ど効かないし」
「まー、君達が健康でいてくれるなら俺は文句ないよ」
と、そんな感じ。
「鮒寿司、美味しいですよね」
と守子ちゃん。
「え、ええ！そうですね！」
と瑞鳳。
次。
「レ、レバニラ炒め……」
「ホタテのバター焼き！」
どうだろうか？
「い、いやあ、なかなか美味しいね！」
「ホタテ、好物なんです！」
「レバー美味しいよね」
「う、うん、そうだね……」
と言った様子の最上。
「ホタテ、美味しいですよね！バターと合うんですよー！お醤油でもいけますよ！」
「そうですねえ、私も実家が港町で、おやつに七輪で焼いた貝とか出されましたよ」
「良いですね！」
「でも、子供の頃は普通に甘いお菓子が食べたくって反発してましたね……」

「あー……。港町の人はやっぱり、魚介類とか飽きちゃうんですか？」
「飽きるって言うか……、そもそも毎日食卓に並ぶものなので、疑問を持ったことがなかったですかね？逆に、都会に来てから魚が食べれなくて調子が狂ったりしました」
「成る程ー！」
　うーむ。
　最後。
「酢豚かあ……」
「馬刺しですね」
　どうかな？
「うんうん、美味しいよ。中華は好きだからね。あ、因みにパイナップルは入れて欲しくない派だよ」
「俺もそうだわ」
「馬刺し美味しいですー！」
「馬刺しですか」
「甘口醤油とニンニク生姜！お酒にも合うんですよー！」
　はいはい。
「そもそも、何で酢豚にパイナップルを入れるんですか？」
「ん、ああ……、それはね、パイナップルがまだ貴重な高級品だった頃に、上海で、酢豚は高級料理だとするために入れられたらしいよ」
「え？じゃあ、かっこつけみたいなものなの？」
「うん」
「お肉を柔らかくするとか……」
「パイナップルに含まれる肉を柔らかくする成分であるブロメラインは、６０℃以上で効果がなくなるから、加熱してる時点で肉が柔らかくなるとかはないよ」
「えー！そうなんだ！」
「あ、そう言えば、競馬で負けた馬が馬刺しにされるとか……」
　ちょっと不安げな瑞鳳。
「安心してよ、馬刺しにはならない」
「そ、そうですよね」

「どちらかといえばソーセージになるんだよ」
「?!」
さて……。
そろそろか。
『披露』
テロップを出してと。
『先手、最上、披露！』
「えっと……、これかな？『鮒寿司』！」
「おお、何でそう思ったの？」
「なんか……、瑞鳳さんがあんまり嬉しそうな顔してなかったからかな？」
『後手、瑞鳳、披露！』
「最上ちゃんの苦手なものは……、これ！『レバニラ炒め』！」
「どうしてそう思ったの？」
「何だか、レバニラ炒めの時の最上ちゃんは言葉少なだったと思います！」
ほーん。
では！
『実食！』
「はむ……」
両者、一口……。
「……」
咀嚼して。
「……参りましたぁ！」
『両者正解！引き分け！』
あー。
「最上」
「ごめんね……、僕、レバーは血の匂いがどうしても駄目で……。提督の血は大丈夫なんだけど……」
「瑞鳳」
「発酵食品がそもそもそんなに好きじゃないんですけど……、鮒寿司

はもう、匂いが……」
と言う訳で引き分けだ。
「どうだった？」
「楽しかったよ！」
「最上ちゃんと仲良くなれた気がします！」
円満に終わった！

因みに。
「正規空母の人達がやった方が面白かったのでは？」
「無理、あの子ら好き嫌いないもん」

４２０話　邪魔だゴッ太郎

「くっ……！邪魔よ!!」
ゴ
「もふ」
「自由を奪った状態で殴るなんて……！」
「いや別に自由を奪ってるとかないけど」
「やめろよ！卑怯者！」
「!!」
「じゃ、首輪付きとの模擬戦も終わったことだし、軽くシャワーを浴びてこようか」
「えっ？あっ、うん……。え？今の何？」

「暁ー」
「なあに、司令官？」
「今日は第六駆逐艦のみんなと、正しい『牛乳のひみつ』を学ぼうか！」
「うん！」
「首輪付き先生が何でも教えてくれるぞー！」
「「「わーい！」」」
「もふもふ、もふもふもふ、もふもふ」
「だ、そうだ」
「「「???」」」
「えー、通訳すると、ようこそ、黒井鎮守府牧場へ。ここは通常のホルスタイン以外にも肉牛や水牛など、多種多様な牛や羊、ヤギ、豚などを飼っているよ、とのことだ」
「「「あ、はい」」」
「あれがホルスタイン。世界で最も多く飼われている乳牛だな。因みに殴ったり硬い床の上にいさせたり動けないくらいに繋ぎっぱなしにしたりしてると普通に乳が出なくなるからそんなことはやらないぞ」
「何言ってるのよ司令官、常識的に考えれば家畜に暴力を振るう人な

んている訳ないじゃない！」
「そもそも、人間程度が牛さんを殴っても倒せないと思うのです……」
「うんうん！そうだね！牛の体重は６００ｋｇはあるからね！パンチ一発で牛を倒せるのは艦娘かスーパーヒーローくらいだね！」
「もふもふ、ふもっふ」
「……だそうだ」
「「「???」」」
まあ、ああいう連中は真性の気狂いか、どっかから金をもらってやっているかのどちらかだよ、とのこと。
「まあ、それは良いとして、牛に触ってみる？」
「え？良いの？」
「殺さないでね」
「もう！急に殺したりなんてしないわよ！私、そんなに乱暴じゃないわ！」
「え？ほら、邪魔だ！ゴ！とか」
「やらないってばー！」
そうかそうか。
「じゃあほら、触ってごらん」
「わー！」
「おっきい！」
「あったかいのです！」
「ハラショー」
「じゃあ俺は首輪付きを撫で……、痛い痛い痛い噛むな！」
「がぶっ」
「にしても、本当におっきいわね！私より背が高いわ！」
「そうだね、牛の体高は１５０ｃｍはあるから、君達よりは大きいね」
「ふもふもふ」
「だってさ」
「「「???」」」
あー。
首輪付きの言葉が通じないのは辛いな。

「これが搾乳機だよ。これで乳を搾るんだよ」
「手でぎゅーってするんじゃないの？」
「手でやるの効率が悪いんだよね。黒井鎮守府では明石開発の全自動搾乳機があるから、これを使ってるよ」
「ふーん……。愛宕さんとの搾乳プレイ（小声）」
　んんっん。
「な、な、な、何のことかな響ー？何のことかなー!!!!」
「楽しかった？」
「何のことだか分からないなー!!!!」

「牛さんって何食べてるの？草？」
「もふもふもふも、ふもふも」
「「「???? ??」」」」
　えーとだな。
「草、牧草ね、もちろん食べてるよ。けど、その他に、とうもろこしや大豆かすなんかも食べさせなきゃならないんだよね。それも、一日5、60kgも」
「ええ、そんなに！」
「赤城さんみたいなのです！」
　赤城への認識……。
「赤城さんはどちらかと言えば豚さんじゃない？」
　赤城への認識イ……！
「豚は割と筋肉があるらしいから違うんじゃない？」
「赤城さんも割と力持ちよね？」
　赤城……。
「ところで、何でここには三、四頭しかいないの？少なくないかしら？」
　と雷。
「ああ、それは、放牧してるからだよ。ここにいる牛は妊娠してるのよね」
「放牧？」

「そうだよ。五月くらいから十月くらいまで毎日、相当天気が悪いとかでもない限り、牛はしっかりと外に出してあげるんだ」
「へー！じゃあ、小屋で繋ぎっぱなしとかじゃないのね！」
「当たり前だよ！」
「あ！見て見て！日陰で休んでる！」
「うーん、一頭が動くと皆んな動くのね」
「もふ」
「「「？」」」
「そりゃ群で生活する生き物だから、だって」
「ふーん、私知ってるわよ、そういうのキョロ充って言うんでしょ？」
「やめてくれ暁、その術は一部の人に効く」

「さて、そろそろ牛を呼び戻さなきゃな。ほら、皆んなで笛を吹いてごらん」
「笛？うん、分かった！」
『Ｐｉｉｉｉｉｉ！！！』
「「「モー」」」
「わあ！牛さんが集まってきたのです！」
「牛は賢いから、牛舎に戻る時間の頃に呼べば戻ってくるんだ」
「凄ーい！」
「因みにサイレージ……、牧草のことだけど、明石の作ったマシンで、夏の間に育った牧草を収穫するようになってるよ」
「もふもふもふ」
「「「？」」」
「黒井鎮守府牧場はほぼオートメーション化されてるから、僕のやることは全体へ指示を出すことだけだね、って言ってる」
「成る程ー！」
「あ、あと、牛の角って一度切ると二度と生えてこないから切るようにしてるぞ」
「何で？」
「いや、角が生えたままだと危ないんだよね、喧嘩したりしたら傷つい

ちゃう」
「成る程、それも牛さん達の為になることなのね」
　因みに、うちは放牧してるけど、つなぎ飼いとかフリーストール、フリーバーンとか飼い方は色々あるよ。
「あ、因みに、牛の排泄物はロボットがその辺から集めてきて、黒井鎮守府農園の堆肥になってます」
「あ、そう言えば、この辺って牧場なのに臭くないわね」
「それは、超高性能な消臭剤撒いてます」
「へー」

「でも、搾りたての牛乳はそのままじゃ飲めないのよね？」
「そうだよ（肯定）」
　生乳はやめとけ。
　まあ、艦娘と俺は平気なんだけど。
「どうやって牛乳に加工してるのかしら？」
「それはね、それはね」
「わくわく」

「錬金術だ」
「「「!!!!!」」」
「どし??の？」
「い、いや、なんか……、今まで普通だったのに、急に錬金術？とか言われたから……」
「いや、だって、マジで錬金術使ってるんだもの。見てみ？」
「あ、ほんとだ！牛乳のタンクに魔法陣と怪しげな光が！」
「錬金術でホモジナイズと殺菌してるんだよね」
「動力とかって……」
「黒井鎮守府のメインコアリアクターからだね」
「メインコアリアクター……？」
「メインコアリアクターは、黒井鎮守府の全エネルギーを出力する回

路だよ。主に核融合と大型魔力炉心、グラビトンリアクター、縮退炉などでできてるんだ」
「そ、そうなんだ」
「まあ、そんなこんなで、ここで加工された乳製品が、黒井鎮守府で消費されたり、外部に売り捌いたりしてる訳さ」
「成る程ー！」

「さて、みんな！牛乳のひみつについて分かったかな？」
「「「はーい！」」」
「よろしい！」
　でもね？
「まあ、だからと言って、酪農関係者にでもならない限り無駄な知識なんだけどね」
「「「えぇ……」」」
「でも知識ってどこで役に立つか分からないよ？口説いた女の子が酪農関係者だった、とか、怪しい組織に攫われた先で酪農知識が役に立ったとか、ニャルに攫われて酪農知識を使う羽目になったとか、十分あり得るから」
「「「えぇ……」」」
「知識でダイスロールする場面は実際多い」
「「「はい……」」」
「じゃ、黒井鎮守府牧場のソフトクリーム食べて帰ろうか！」
「「「わーい！」」」

「結局、黙れ！ゴ！って何なの？」
「黒井鎮守府は人間より動物に優しくしてるよ！動物愛誤団体も納得！」
「そ、そうなの」

421話　旅人、困惑

暑い夏の日。
暑いね。
暑いのに、うち、黒井鎮守府の前には謎のデモ隊が沢山いる。
「司令官、あの人達はなんなの？」
暁に聞かれる。
「どの人だ？」
「あの、民○党って人達は？」
「あれは……、気狂いだ」
「そうなの？」
「ああ」
「じゃああの、動物愛護団体って言うのは？」
「あれか？」
「うん」
「あれは……、気狂いだ」
「そうなの？」
「ああ」
「じゃああの、女性保護団体って言うのは？」
「あれか？」
「うん」
「あれは……、気狂いだ」
「そうなの」
「ああ」
「じゃあ……、あのヴィーガンって人達は？」
「あれか？」
「うん」
「あれは……、気狂いだ」
「そうなの？」
「ああ」
「……気狂いしかいないの？」

「正気ならこのクソ暑い中デモなんてやらないと思うんですけど（名推理）」
「……それもそうね！」

そもそもなんでうちにデモしに来てんの？
反体制運動すりゃリベラルなの？
俺には何も分からない。
旅人には政治がわからぬ。
俺は旅人である。
ギターを弾き、美女と遊んで暮らしてきた。
走れ旅人。
兎に角、偉い人や頑張っている人の前で大騒ぎするのがリベラルのやり方なんだろう。
今日みたいな暑い日でも、馬鹿の一つ覚えみたいに、議事堂、沖縄、米軍基地前なんかでデモ隊がプラカードを掲げて、支離滅裂な感情論を振りかざしている。
そいつらが黒井鎮守府にも来るようになっただけの話だ。
こう言った連中は真性のマジキチか、そう言う連中から金をもらってやっているかのどちらかだ。
まあ、どの道関わるべきじゃない奴らばっかりってことだ。
……うちの前で暴れるの、本当に勘弁してくれないかな？
百歩譲って反戦団体やら深海棲艦を守る会やら海を守る会なんかはまだ分からんでもない。
けど、ヴィーガンやら野党やら女性保護団体やらは完全に謎だろ。
どうしてここにいるんですか……？どうして……。
そして、黒井鎮守府の正面門が使えないんだが。
どうして？
ねえ、どうして？
うちは割と真面目に戦ってるんだけどなあ……。
やっぱり、自分の利益とかそう言うのに目がくらむのかな？
うーん？

この手のデモは、やって儲かる奴がいるから起きると思うんだよね。
どこが儲けてるんだ？
調べてみよう。
そして、根源を特定して、なんとかしよう。
「川内」
「はっ」
俺が指を鳴らすと、天井裏から川内がシュバッと現れた。
「鎮守府正面のデモ隊で儲けている奴を」
「暗殺だね」
「そんなことしなくて良いから（良心）。いや、探してくるだけで良いから……」
「分かった！」
そして川内がまたシュバッと消える。
流石はニンジャ。

「どうだった？」
「えっとね、複数の組織の思惑があるみたい」
ほー。
「まず野党デモはまあ、『募金』を活動源にして、『お食事代』を配ったり、暇で馬鹿な老人や学生を集めたりして暴れてるね。兎に角現政権が気に食わなくって、ちょっとでも現政権にダメージを与えられたらなんでも良いって思ってるみたい」
「いやー……、剣政権はぶっちゃけ日本始まって以来の最高レベルの政権だぞ」
「そうだよねー、深海棲艦発生の混乱の早期解決、強気の外交、不透明な政治献金や天下りは厳罰……」
「まあ、だからこそ、恨まれてるんだけどね」
「だよねえ。今までなあなあでやってきたこととか、薄汚いズルとか、全部許さないからね、今の総理大臣は。野党には生きづらい世の中だろうね」

成る程。
そんな感じか。
「他は？」
「動物愛護団体は……、金持ちからの『募金』で活動してるみたいだね。どうやら、深海棲艦の保護を訴えてるみたいだけど……」
「はあ……。勝手にやれば良いんじゃない？」
「なんだか、動物愛護団体の中では、うちが攻撃してるから深海棲艦が攻撃してくるんだってことになってるみたいだよ」
「はぁー……」
イミワカンナイ！
「ちゃんと説明したと思うんだけど」
簡単に言えば、深海棲艦は海の防衛機構が暴走したもので、一部の指揮官以外には意志はなくただ殺戮を繰り返すだけの虫みたいなものだって。
「聞いてないみたい」
「はぁー……」
何で？
「って言うか、深海棲艦を殺さなきゃ殺されるよ？」
「そうだねえ」
「言わば、餌がなくて山から降りてきた飢えた熊を守ろう！って言ってるようなもんだけど」
「そうだね」
「はぁー……」
どうすんのこれ。
「はぁ、他は？」
「ヴィーガンは、どさくさに紛れてデモしてるよ」
「勘弁してくれよ……」
「何でも、黒井鎮守府が牧場を経営してたり、食肉業者から大量の肉を買ったりしてるのが駄目なんだって」
「はあ……？」
「今目立ってる艦娘をヴィーガンにすれば話題になって、ヴィーガン

を増やせると思ってるみたい」
「???」
いや……、ごめん、真剣に意味わからん。
「川内」
「何？」
「お肉好き？」
「大好き！今日の晩御飯何？」
「生姜焼きにするよ」
「わーい！」
はあ……。
「あとなんか、動物愛護団体とヴィーガンは同じようなところから金が流れてるねー。主張も似てるし」
「主張って？」
「要は、牛も豚も鶏も、深海棲艦もなーんにも殺すなってところ」
「ハヒー」
思わず変な声出ちゃった。
「え……、あのさ、これって俺がおかしいの？」
「提督はおかしくないよ、大丈夫大丈夫」
「あの……、あのさ、命の価値とかってさ、動物と植物で違うとかあるの？」
「なんか知らないけど、植物は痛みを感じないから良いんだって」
「????」
はい？
「え、じゃあ、麻酔打てば殺して良いってこと？」
「知らないけど……」
「ってか、何でただの人間ごときが他の生き物の命の価値を決めてるの？何様？」
「さあ……？」
「ってか、何でうちに来るの？」
「???」
「艦娘をヴィーガンにする為だって」
「????????」
????????

は？
「いや……、バランスよく、好き嫌いせずに色々なものを食べた方が身体に良いよ……？」
「そうだね」
「あー……、訳わかんないわ。良いや。後でバーベキューやろう」
「わーい！」
「で、他は？」
「女性保護団体は、艦娘が女の格好をしているのが駄目なんだって」
「は？」
「女の人が戦っているのは野蛮で、女性のイメージを悪くしてるんだって」
「???」
頭がおかしくなりそうだ。
「そんなん俺に言われても」
「艦娘は女じゃ駄目なんだって」
「いや……、古来より船は女性とみなすみたいな……、霊的に女性の方が有利だったからなんだけど、説明したよね？」
「したねえ」
「したよね、うん、したはず、なんだけどなあ……」

「よし」
「どうするの？」
「金がなきゃ動けないだろうし、ちょっと集金してくる」
「わーい！私も行くー！」

そうして、あぶく銭と言うには少々大きい額の金を頂戴すると、デモ隊は数分の一になった。
まあ、そんなもんだな。
よーし！
この金で高い肉買ってバーベキューやろーっと！

４２２話　ＳＣＰ―ＸＸＸＸ　旅人

アイテム番号：ＳＣＰ―ＸＸＸＸ
オブジェクトクラス：Ｋｅｔｅｒ
特別収容プロトコル：ＳＣＰ―ＸＸＸＸは小型追跡装置を埋め込まれ、現在はサイト―１７に収容されています。可能であれば、未婚かつ十代後半から三十代前半の女性職員にＳＣＰ―ＸＸＸＸに対して指示をさせて下さい。しかし、その女性職員がＳＣＰ―ＸＸＸＸに対して親愛の念を抱くようになった場合、即座に職員を交代させます。

――×

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは現在、収容できていません。しかし、グリニッジ標準時における２０１３年４月２３日のＸＸ時ＸＸ分ＸＸ秒に世界規模で発生したＫクラス世界終焉シナリオ『深海棲艦』（ＳＣＰ―ＸＸＸＹの大量発生）に対抗する存在として、ＳＣＰ―ＸＸＸＺ（艦娘）を最も有効に運営できる者として、日本のＫ県○○市『黒井鎮守府』にて活動しています。

Ｋクラス世界終焉シナリオ『深海棲艦』の終了と共に、ＳＣＰ―ＸＸＸＺと共に収容を再開する予定です。

また、その際に、財団や他の要注意団体などから、ＳＣＰ―ＸＸＸＸが持ち出した複数のオブジェクトも再収容する予定です。

説明：ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、人種不明の二十代後半の男性の見た目をしています。１．９５ｍ、１０５．０ｋｇ、白髪で筋肉質、瞳は黒色です。遺伝子検査の結果、ヒトゲノムとの類似性は５２パーセントで、そのうち１５パーセントは地球上のどの生命体とも一致しない未知の遺伝子が含まれています。しかし、ＳＣＰ―ＸＸＸＸはそれを理解しつつも、自分は人間であると頑なに主張します。

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは中程度の現実改変者です。また、非常に強力な不死性を有し、例え対象を終了させたとしても不明の手段で復活します。財団は過去に????回、ＳＣＰ―ＸＸＸＸを終了させる試みを実行しましたが、いずれも失敗しています。

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは極めて高い精神汚染耐性があり、殆どの認識災

害、ミームに対して異常性を受けない、若しくは異常性を受けたとしても生命活動の維持を続けます。

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、一般的に美しいと評価される女性、若しくは女性の形をした意思のある生命体に対しては非常に紳士的で奉仕的な傾向が見られます。財団は、女性職員を利用して、ＳＣＰ―ＸＸＸＸに実験への協力を得て、いくつかの実験を行ったところ、以下の能力があることが分かっています：

・一流の格闘技術、弓、投擲術
・日本語、英語、イタリア語、フランス語、ドイツ語、中国語、ロシア語、韓国語など、世界各国の言語を操る
・料理、建築、芸術、マナー、文化、学問、音楽、サブカルチャーへの深い知識
・あらゆる機械の操縦
・人類の枠を超えた素早さ、器用さ、それを使った窃盗技術
・高い知能
・人類の枠を超えた頑丈さ
・魔法の行使
・忍術の行使
・不明の手段による空間転移
・火を吹く
・変態する
・殆どの薬品への耐性
・殆どのミーム、認識災害への耐性
・読心
・透視
・限定的な未来予知
・鋭い五感
・驚異的に身体能力を向上させる不明の呪文

しかし、これらの能力は常時発動している訳ではなく、特に読心、透視能力などは、相手に対して礼を欠く行為だと考え、ＳＣＰ―ＸＸＸＸはそれを多用しません。

また、ＳＣＰ―ＸＸＸＸの実験の結果、以下のことが分かっています：

実験１００１―１

９ｘ１９ｍｍパラベラム弾の斉射

結果１００１―１

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは弾丸を回避した

実験１００１―２

９ｘ１９ｍｍパラベラム弾の斉射。回避しないように命じた

結果１００１―２

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは弾丸を掴み取って無力化した

実験１００１―３

１２．７ｘ９９ｍｍ弾の斉射。回避しないように命じた

結果１００１―３

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは魔法的な白く光るシールドで弾丸を防いだ

実験１００１―４

１２．７ｘ９９ｍｍ弾の斉射。回避も防御もしないように命じた

結果１００１―４

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは難色を示したが、実験を決行した。結果、ＳＣＰ―ＸＸＸＸの全身が［削除済］になったが、その後に肉片が蠢き増殖し、３２時間後に完全に再生した

補遺１：ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、２０ＸＸ年Ｘ月のサイト―??の大規模収容違反の際、どこからともなく現れ、多くのオブジェクトの足止め、襲われている人々の救助の協力をして、その際に数多くの異常性を発露しました。その大規模収容違反の封じ込め終了後に確保されました。

補遺２：インタビューログＸＸＸＸ―０７―５０４１より抜粋、日付２００９／??／??

＜記録開始＞

????博士：誕生日と出生地、名前を手短に紹介してください。

ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：俺の話なんてどうでも良いさ、それより君の話を聞かせてくれないかな？好きな男性のタイプとか。

????博士：質問に答えて下さい。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：ああ、そうか、お仕事だもんな、頑張ってて偉いね、博士。でも、名前くらいは教えてくれても良いだろ？今後の二人の関係において重要だと思わない？
????博士……？？？？です。貴方の誕生日、出生地、名前は？
ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：良いね、素敵な名前だ。知的な君にぴったり。さて、俺のことを聞くのが仕事なんだね？じゃあ、少し協力するよ。誕生日は１９ＸＸ年の７／２１、日本では自然公園の日さ。生まれた場所はこう見えても日本、東北の方。名前は新台真央。でも、名前で呼ばれるのはあまり好きじゃないから、旅人と呼んでくれないかな。
????博士：貴方の数多くの異常性はいつ、どこで発現しましたか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：物によるよね。武術なら子供の頃、近所の怪しげな格闘技道場で鍛えて、魔法なら人に習ったり本を読んだりして覚えたよ。でも、殺し合いは好きじゃないから、武器の取り扱いは苦手だよ。
????博士：家族は？
ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：妹が一人。親は物心ついた頃にはいなかった。うちの家庭は、家庭を顧みないクズばっかりだからね、仕方ないね。
????博士：貴方が時折、サイト―１７から姿を消すのはどうしてかしら？
ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：それは俺が旅人だからだよ。旅をしなくちゃ。ここは、食事がただで食べられるし、職員が遊んでくれたりするし、美人も割と多いから嬉しいね。
????博士：それは……、あー……、貴方は、サイト―１７をただで泊まれる宿くらいに思っているということかしら？
ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：え？だって、ここにいろって言われたからいるだけで……。嫌なら今すぐ出て行くけど。
????博士：いえ……、それはとても困るわ。出来るだけサイト―１７に用意された貴方の部屋にいて頂戴。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：まあ、良いけどね。ここにも可愛い子いっぱいいるし。でも俺、アウトドア派だから、暇な時は遊びに行くよ。

????博士：だから、それは困るの、ＳＣＰ―ＸＸＸＸ。貴方は出来るだけ自分の部屋にいて。せめて、サイト―１７の中にいて頂戴。

ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：努力はするよ。

????博士：次に、女性型のオブジェクトの収容違反を繰り返した理由は何故ですか？

ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：こんなところに可愛い女の子を押し込めておくのは可哀想でしょ？ちょっと外に出るくらい許してよ。

????博士……かつて、世界で起きた数多くのＫクラスシナリオの殆どに貴方が関わっています。何故ですか？

ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：いや、旅人の俺が旅先なくなったら困るから出来る範囲で秩序を守ってるだけだよ。

????博士：しかし、貴方は、女性型のオブジェクトを逃がしたり、その他の一部オブジェクトを勝手に使用したり、要注意団体に雇われたりなどしています。秩序を守るという言葉と矛盾していないかしら？

ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：そうかな？俺、他人に迷惑はたくさんかけるけど、基本的に殺したりはしてないよ。本当によく調べた？俺、本当にどうしようもない奴以外は殺してないよ？

????博士：確かに、確認された限りでは、死者はいないわ。でも、社会の混乱が……。

ＳＣＰ―ＸＸＸＸ：でも、君達にそれを取り締まる権利はないでしょ？そもそも、何を以って正常な社会とするのさ？

＜記録終了＞

４２３話　ＳＣＰ―ＸＸＸＸ　脱走記録

脱走記録―Ｓ―８５５２１／ＸＸＸＸ
ＳＣＰ―ＸＸＸＸの収容違反の記録
メモ：ＳＣＰ―ＸＸＸＸを野放しにしておけば、このような事件が起こり得る。ＳＣＰ―ＸＸＸＸを物理的に収容することはほぼ不可能であるので、ＳＣＰ―ＸＸＸＸの「ご機嫌取り」をして、サイト―１７に封じ込める他ない。――――博士

ＳＣＰ―２３９
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、「ちょっと散歩に行ってくる」と言い残して不明の手段の空間湾曲転移により消失し、ＳＣＰ―２３９の独房に現れました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸはＳＣＰ―２３９に気付くと、彼女を不明の呪文で起こし、どこからか取り出した「旅のアルバム」を見せました。
また、どこからか取り出した菓子類などを彼女に与え、膝の上に乗せながら旅の話をしました。機動部隊が到着する二時間後まで、ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、ずっとアルバムを見せながら旅の話をしていました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、ＳＣＰ―２３９について、「あんなところに閉じ込めておくのは可哀想だ」と評しました。
尚、その後ＳＣＰ―２３９に吹き込まれた「サムライ」「ニンジャ」「ナイト」「ソーサラー」「ガンマン」「拳法家」など、様々な人型実体が大量に発生し、収容違反しました。
ＳＣＰ―２３９は、ＳＣＰ―ＸＸＸＸについて、「とても楽しい、また会いたい」と評しました。

ＳＣＰ―３４３
［削除済］

ＳＣＰ―８１１

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは「ちょっとコンビニ行ってくる」と言い残して不明の手段の空間湾曲転移により消失し、ＳＣＰ―８１１の水槽に現れました。
ＳＣＰ―８１１は混乱し、警戒心を露わにしていました。しかし、ＳＣＰ―ＸＸＸＸは不明の手段による意思疎通（テレパシーと思われる）により、ＳＣＰ―８１１を落ち着かせた後に、自らの身体が溶かされるのにも関わらず、スキンシップを取りました。
ＳＣＰ―８１１に絵本の読み聞かせをし、一緒に歌を歌うなど、情操教育を行いました。
その三時間後に機動部隊が到着しましたが、ＳＣＰ―ＸＸＸＸはそれまでの間ずっとＳＣＰ―８１１と遊んでいました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、ＳＣＰ―８１１について「優しい心を持った美しい少女」と評しました。
ＳＣＰ―８１１は、まれにＳＣＰ―ＸＸＸＸに習った歌らしきものを歌うようになりました。
ＳＣＰ―８１１は、ＳＣＰ―ＸＸＸＸに対して、「とても素敵な人、また遊んでほしい」と評しました。

ＳＣＰ―９１４
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは研究室１０９―Ｂに突如現れ、警備員を素手で無力化し、勝手にＳＣＰ―９１４を操作しました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、自らが保有しているバイク（スズキ　隼）を投入し、ｖｅｒｙ　ｆｉｎｅでＳＣＰ―９１４を使用し、????を作成しました。
????に乗ったＳＣＰ―ＸＸＸＸは、サイト―??の壁を破壊し、周囲にソニックブームを撒き散らしながら、イリノイ州上空をマッハ７．３で暴走しました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、ＳＣＰ―９１４について「とても面白いおもちゃ」と評しました。

ＳＣＰ―０８５

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは「ちくわ大明神」と言い残して不明の手段の空間湾曲転移により消失し、ＳＣＰ―０８５の保管されている収納施設に侵入しました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、ＳＣＰ―０８５に対して、日本：札幌の雪景色、イギリス：ロンドン時計塔周辺、アメリカ：テキサスの荒野とバイク、などの自作の写実的な風景画をプレゼントしました。
また、その最中も文字によってＳＣＰ―０８５とコミュニケーションをとりました。
三時間後に機動部隊が到着するまでに、こちらの世界について多くのことをＳＣＰ―０８５に伝えました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、ＳＣＰ―０８５について「好奇心溢れる素敵な女性」と評しました。
ＳＣＰ―０８５は、ＳＣＰ―ＸＸＸＸに描いてもらった炬燵のある和室を非常に気に入っています。
ＳＣＰ―０８５は、ＳＣＰ―ＸＸＸＸについて「面白い旅人」と評しました。

ＳＣＰ―０７６―２
ＳＣＰ―０７６―２が????／??／??に収容違反しました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸも同時期に収容違反を起こし、偶然に収容違反中のＳＣＰ―０７６―２と鉢合わせしました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは気さくな様子でＳＣＰ―０７６―２に話しかけ、ＳＣＰ―０７６―２が古代シュメール語を話すことに気がつくと、それに合わせて、古代シュメール語による会話を始めました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは古代シュメール語で、古代の戦士に会えた幸運を喜び、敬意を表し、自分が旅人であることを説明しました。
ＳＣＰ―０７６―２は、ＳＣＰ―ＸＸＸＸと数分間会話を交わすと、再び暴れ始めました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、都市部を目指して移動するＳＣＰ―０７６―２を止めると、殺人を控えるように説得しました。
しかし、その説得に対してＳＣＰ―０７６―２は激怒し、ＳＣＰ―

ＸＸＸＸと戦闘を始めました。
ＳＣＰ―０７６―２の圧倒的な戦闘能力に対して、ＳＣＰ―ＸＸＸＸは不明の呪文や読心、未来予知などのありとあらゆる力を総動員して足止めをしました。
そして、どこからか持ち出したプラスチック爆弾でＳＣＰ―０７６―２ごと自爆し、収容違反を解決しました。尚、ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、肉片から２４時間後に完全に再生しました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、ＳＣＰ―０７６―２について「途轍もなく強い、二度と相手したくない」と評しました。
また、ＳＣＰ―０７６―２は、ＳＣＰ―ＸＸＸＸの自爆攻撃に巻き込まれる寸前に「面白い戦士を見つけた」と満足そうな様子で呟いています。

ＳＣＰ―５０４
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは「思わず笑ってしまうようなブラックジョーク」を言いました。
ＳＣＰ―５０４はトマトピューレになりました。
ＳＣＰ―５０４のトマトピューレはＳＣＰ―ＸＸＸＸに調理され、ミートソースパスタになり、ＳＣＰ―ＸＸＸＸに摂食されました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、ＳＣＰ―５０４について「下ネタはやめておいて正解だった」と評しました。

ＳＣＰ―２９４
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは警備員を無力化し、ＳＣＰ―２９４を操作し、「揮発する沢山のオーガズム」を注文しました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、「揮発する沢山のオーガズム」をサイト―１７にばら撒く悪戯を決行し、多くの職員及び人型オブジェクトが性的な快楽により倒れ、サイト―１７の機能が六時間ほど麻痺しました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＸはこの事件について「最高に楽しかった、またやりたい」と評しました。
以降、ＳＣＰ―２９４の警備員は三倍にすることが決定されまし

た。

ＳＣＰ―０４９

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは「宇宙の心は彼だったんですね！」と言い残して不明の手段の空間湾曲転移により消失し、ＳＣＰ―０４９のいるサイト―１９の人型収容セルに侵入しました。

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、ＳＣＰ―０４９と、流暢な中世フランス語を用いて、医学について話し合いました。

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、自分の肉体を切り開いて、ＳＣＰ―０４９と医学的な議論を行いました。

ＳＣＰ―ＸＸＸＸは、ＳＣＰ―０４９について「賢い人だ、しかしやり方が［削除済］だから［削除済］のデータが必要だと思う」と評しました。

ＳＣＰ―０４９は、ＳＣＰ―ＸＸＸＸについて「旅人であることが惜しいくらいに知恵がある。色々なことを覚えるので、教え甲斐がある」と評しました。

４２４話　ＳＣＰ―ＸＸＸＺ　艦娘

アイテム番号：ＳＣＰ―ＸＸＸＺ
オブジェクトクラス：ｋｅｔｅｒ
特別収容プロトコル：ＳＣＰ―ＸＸＸＺは現在収容が不可能です。
２０１９年現在、インシデント「深海棲艦」により、世界中の海上や島に現れた、ＳＣＰ―ＸＸＸＹ（深海棲艦）によるＫクラスシナリオを食い止める手段として、主に日本のＫ県○○市、黒井鎮守府で運用されています。
説明：ＳＣＰ―ＸＸＸＺは、外見の年齢９歳から２５歳程、人種様々、身長体重様々な複数人の女性型実体の総称です。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺはそれぞれ、第二次世界大戦頃の軍事的に運用された船舶の名前を名乗り、それぞれの記憶を持ちます。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺは自らを艦娘と主張し、深海棲艦に対抗するために呼ばれたと主張します。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺには、中～高度の現実改変能力を所有し、攻撃行動や防御、回避行動において、ヒューム値の変化が発生しました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺは、自らの行動によってヒューム値の変化が発生することを理解しており、そのことを「神秘」と表しました。
神秘を宿らせることにより、ＳＣＰ―ＸＸＸＺは以下のことが可能です。

・外見と不一致な強力な膂力
・超越的な五感
・戦車砲の直撃に耐え得る防御力
・極めて高い知能
・第六感の発達
・液体の上を歩く
・海中を息継ぎなしに異常な速さで泳ぐ（潜水艦）

また、この他に、ＳＣＰ―ＸＸＸＺは、自らの保有する火器兵装を艤装と呼称し、神秘を宿らせ、その火器兵装の威力を向上させることも可能です。

艤装は、一度所有すると、観測不可能な異次元領域に劣化することなく保存することが可能です。
更に、ＳＣＰ―ＸＸＸＺに艤装として認識された火器兵装は、ＳＣＰ―ＸＸＸＺの肉体の一部とされ、人間の怪我が治るかのような自己修復機能を獲得します。
また、ＳＣＰ―ＸＸＸＺの超常的な能力は、艦種、型番により大きく異なります。
概ね、大型の艦種程年齢が高く、膂力や耐久性が高いです。また、小型の艦種程幼く、速力が高いです。
日本国籍の艦娘は日本人らしく、アメリカ国籍の艦娘はアメリカ人らしく、と言ったように、人種の違いも存在します。
以下に、ＳＣＰ―ＸＸＸＺの個体それぞれが持つ特記事項の例を列挙します。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：圧倒的な膂力。あらゆる測定器を単純な膂力のみで破壊しました。予想される膂力は３００ｔを超える見込みです。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１０：圧倒的な速力。５０ｍを０．０５秒で走破する。また、独自の脳機能により、思考を加速させることが可能。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―４７：圧倒的な剣技。１０ｍ×１０ｍ×１０ｍの鉄塊を居合い斬りにて切断しました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―５８：圧倒的な隠密能力。機動部隊三隊が警備するサイト―??より機密文書を奪取。その際、監視カメラ、光学センサー、赤外線カメラ、ありとあらゆるセンサーに映らずにサイト―??に侵入しました。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―６８：反物質の生成。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０：不明の手段による未来予知、読心、精神破壊、不明の呪文の行使。
補遺１：インタビューログＸＸＸＸ―０１―７８４１より抜粋、日付２０??／??／??
＜記録開始＞

????博士：誕生日と出生地、名前を手短に紹介してください。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：進水日は１９１９年１１月９日、呉海軍工廠、長門だ。
????博士……では、おおよそ百歳という事になりますが？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：私の戦艦としての意識は１９４６年７月２９日に途切れている。
????博士：その日は、戦艦長門が沈没した日ですね？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：そうだ。痛かったぞ。
????博士：はあ……。再び艦娘として生まれたのはいつですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：２０１３年の夏頃だったと思う。正確な日時は分からん。
????博士：艦娘とは何者ですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：私に聞かれても分からんよ。
????博士：貴女が戦艦長門だったとして、何故ここにいるのですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：呼ばれたからだ。
????博士：誰にですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：あの［罵倒］な……、前の提督にだ。
????博士：呼び出されるまで貴女はどこにいましたか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：［１４秒の沈黙］暗い……、冷たいところにいた。私は……、曖昧な状態にあった。恐らく、海の底のような……、死後の世界のようなところに。
????博士：何故、女性の姿に？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：元から女だぞ私は。
????博士：船に性別があったのですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：船は女だ。
????博士……分かりました。艦娘とは、深海棲艦と戦うために生まれたのですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：そうらしいな。だが、私達はあまりその辺りを気にしてはいない。
????博士：何故ですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：人類には愛想が尽きた。一応、それで稼い

でいる以上、仕事としては戦うが、貴様らの命を守る為に戦うのはごめんだ。
????博士：何故、人類には愛想が尽きたのですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―１：貴様らは……、我々艦娘が命をかけて戦えども、人にあらずと軽んじ、罵声を浴びせた。私達は確かに道具だが、道具なればこそ、最も大切に、最も上手く扱ってくれる男のものでありたい。
＜記録終了＞

補遺２：インタビューログＸＸＸＸ―０１―７８７４より抜粋、日付２０??／??／??
備考：ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０は、ミーム的な精神攻撃、読心能力を所持。????博士は、厚さ５ｃｍの防弾ガラス越しに、ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０にマイクを使ってインタビューしました。また、部屋にはチェーンガンタレットが六門設置されており、ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０が攻撃的な意思を見せれば、制圧射撃が可能です。
＜記録開始＞
????博士：誕生日と出生地、名前を手短に紹介してください。
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０：進水日は１９３５年５月１８日。建造所は浦賀船渠。名前は時雨。
????博士：貴女は、大日本帝国海軍所属の白露型駆逐艦二番艦、時雨で間違い無いですね？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０：間違いないとも。僕が佐世保の時雨さ。
????博士：貴女は、艦娘の中でも最も賢いと聞きました。艦娘とは何者ですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０：僕達の研究では……、深海棲艦は星の意志による防衛機構の暴走に対して、艦娘は、人類の集合意識による、人類側の防衛機構により生まれたものと判明しているよ。
????博士……大変興味深いお話です。では、艦娘は、人類の集合意識が生み出した……、霊体の様なものですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０：最初はそうだった。でも、今は、集合意

識から切り離されて、肉体と魂……、「個」を持ち、独立した生命になったよ。
????博士：それは、一体どの様な手段を用いて、貴女達は肉体を得たのですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０：[削除済]だね。ロック装置による魂の移行。[以下、３分間に渡って、魂の操作についての概要を語る]
????博士……分かりました。では、貴女は、魂の操作などの知識をどこで身につけましたか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０：[１７秒の沈黙]知らない方が良いと思うよ。
????博士：その知識は、ミーム災害的なものですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０：そうだね……、人間ごときには過ぎた知識だ。
????博士……分かりました。では次に、貴女達は何故、格闘武器や魔術を使うのですか？貴女達ＳＣＰ―ＸＸＸＺが戦艦の名を名乗るのであれば、戦艦の戦い方に準じるのでは？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０：[短い笑い声]僕達はもう船じゃない。
????博士：戦艦ではない？それはどういうことですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０：存在の根幹が変質した。元は神霊に近かったけど、今は他の存在に変質した。
????博士：では、貴女達は結局、何者なのですか？
ＳＣＰ―ＸＸＸＺ―８０……[削除済]
[????博士が倒れる音]
[チェーンガンタレットの射撃音]
＜記録終了＞
以降、Ｏ５―??により、ＳＣＰ―ＸＸＸＺに対する直接的なインタビューを禁止されました。

４２５話　性癖ひん曲がり御殿

性癖。
性的な趣味趣向のことだ。
俺はそういうの特にないんだけど、世の中には人に言えない性癖を抱えた人が沢山いるだろう。
リョナラー、ケモナー、ふたなり、ホモ、ＳＭ……。
何故そんなものに性的興奮を覚えるのか分からないようなものにまで欲情する人間もいるし、一般的に悍ましいものや禁忌とされていることに対して歓びを見出す人間もいる。
俺は俺に実害がない限り、そういったものは差別しないし、相手の女の子が要求するプレイには極力応える方針だ。
だが。
「どうしてこんなになるまで放っておいたんだ！」
黒井鎮守府の変態性癖が止まることを知らない!!

ケース１：望月
「ぱぱぁ……??」
ファザコン、である。
「はいはい、パパだよー」
駆逐艦の何名かは、たまに幼児退行して甘えてくることがある。
何でも、俺にはバブみがあるのだとか。
そうなの？
「しゅきぃ……??」
「よしよし、俺も望月がだーい好きだよー」
「ちゅーしてぇ??」
「はいはい」
だるんだるんに力を抜いた望月を抱き上げ、甘くとろけるような口付けを……。
あーあ、何で俺はこんなことをやっているんだろう。恩師達に顔向けできねえなこれ。

もう本当にすんません。
「ぱぱすき」
「それは良かった」
「ぱぱー」
「よしよし」
望月はもう完全にフルバースト。涎掛けにおしゃぶり、そしてオムツも添えて変態バランスも良い（？）。
……ちょろろ？
「ぱぱー、オムツかえてー？」
オムツよりオツムをどうにかしてくれねーかな……。
まあ、可愛いので許す。

ケース２：鹿島
「では、提督。この鞭で思い切り叩いて下さいね」
ドＭ。
「鹿島、そういうのはやめよう？」
「駄目です」
んー。
「早く打って下さい、早く、早くぅ??」
「分かったよ、ほら！これで！良いかな！」
「あんっ??良いっ??凄いぃ??」
もう勘弁してくれぇ……。
「もっと打ってぇ～??」
「鹿島、この辺でやめとこう？お尻真っ赤だよ？」
「鹿島はぁ、お尻の赤いスケベなメスザルなんですぅ??もっと虐めてくだしゃい??」
「はぁー」
鞭で叩く。
「あひぃいん???」
まあ、あれだよね。
女の子殴って喜ぶような性癖はないからね。

楽しく、ないね。
でもまあ、終わった後は普通にイチャイチャするし。
可愛いから良いかな。

ケース３：古鷹
「……」
あ、古鷹だ。
俺の部屋に入った。
追う。
「くんかくんか、すーはー……??」
俺のベッドの上で枕を抱いて匂いを嗅いでいる。
匂いフェチ……。
「何やってんの」
「ていとくぅ……??いい匂いしますぅ……??」
とろんとした目で匂いを嗅ぐ古鷹。
可愛いので全てを許す。
「提督、来てください??」
「おっ、どうしたどうした」
すると、ベッドに引きずり込まれる。
「くんくん……、あふぁ、生の提督の匂い……??」
まあ、古鷹は匂い嗅いでくるだけだからマシな方か、なあ、あああああ、ちょい待っ、そこは駄目、そこはやめよう？なっ？」
「ここの匂いが一番濃いんですよぉ??」
「あっ、駄目、脱がせないで、コラやめなさい、あ、アッー!!!」

ケース４：サラ
「提督ー??」
「サラ！好きだァー！サラ！愛しているんだ！サラァー！エクソダスをする前から好きだったんだ！好きなんてもんじゃない！サラのことはもっと知りたいんだ！サラのことはみんな、ぜーんぶ知っておきたい！サラを抱き締めたいんだァ！潰しちゃうくらい抱き締めたー

い！」
「もう、提督ったら??」
サラは良いぞ。
口説いても罪悪感が湧かないからな。
見た目成人してる感じだから、セーラー服着てる重巡軽巡駆逐の皆んなみたいにロリみがないからな。
口説いてもカルマが下がる感じがしないのよさ。
「サラ、おいで」
「はい??」
サラを抱き上げる。
「うん、可愛いぞ、サラ」
「かぶっ」
食人癖……。
「あ、あら？ｓｏｒｒｙ、つい」
俺の肩の肉は、サラの小さな口の歯型に、肉が食い千切られている。
「美味しそうだったから……。ごめんなさい、提督」
「可愛いから許す」
だが痛い。
俺にも一応痛覚はある。
生きたまま食われるのは痛い。
でもやめろとは言えないよなあ、サラは可愛いからなあ。
ついつい甘やかしちゃうんだよなあ。
「俺以外は食べないようにね？」
「そ、それって、告白ですか？俺以外を見ちゃ駄目だぞ、みたいな?!もちろんですよ提督??」
いや、どこが告白なのか分からんけど。
まあ、道行く人に齧り付いたりしないなら、それで良いよ。
「あーん??」
「あああああ！あーーーー!!!」

ケース５：大淀。

「スカートぴろーん」
「あら、提督」
「……何で穿いてないんですかねえ？」
露出癖……。
「決まっています。穿いていない方が気持ちがいいからです」
ヒューッ！
流石は大淀、一味違うのね。
「折角ですので、裏山の方で野外プレイなどいかがでしょうか？」
「オホホホ、いやですわ奥さん」
「提督が大好きな大自然と一体になっての性行為です」
「青姦を大自然と一体になると表現するのは、やめようね！」
困るゥ……。
「良いじゃないですか。アダムとイヴだって青姦してましたよ」
「無神論者のくせに……」
「いえ？神はいますよ？」
「いや、いるけど……」
「提督が神様です。私の神様です」
んー。
まあ、実害は無いし（無いとは言ってない）、可愛いから許すよ。

ケース６：時雨
「メス」
「つぽい」
「鉗子」
「つぽい」
「鋸」
「つぽい」
リョナ……。
「ああ、ああ、実に美しい……。見てごらん、この血の色を！夕闇の紅だ！美しい……、本当に美しいよ、提督！」
「そ、そう、ありがとう？」

麻酔なしでメスを入れられて、バラバラに解体される。
そして、心臓に直接口付けをされる。
「古典的なヤンデレかな？」
血にまみれて包丁持たせとけば取り敢えずヤンデレ、みたいな雑なの、先生は認めませんからね！
「愛しているよ、提督……」
動脈から血液を抜き取られ、時雨は、自分の首に俺の血を注入した。
「キヒッ、はは、は……！ああ、ああ、来た、来たよ、見える、素敵だ、愛している、好きだ、大好きだ！あはははは、あはははははは!!!!!」
元気いっぱいで可愛いね！

……このように、俺は、黒井鎮守府の艦娘達の歪んだ性癖に付き合わされている。
あらかじめ言っておくが、俺はノーマルだ。
なのに、常軌を逸するような変態プレイをやらされる。
まあ……。
可愛いから許すよ。

４２６話　ファンタジーＶＲＭＭＯ　その１

黒井鎮守府は色々と副業をやっているが、その中にＶＲＭＭＯＲＰＧの開発運営があるのは、皆もご存知だろう。
前に、バンディット・ザ・ガンマンというＶＲＭＭＯＲＰＧを発表したことは覚えているだろうか？
黒井鎮守府の技術力を以ってすれば、ＳＡＯ的なＶＲデバイスの開発も簡単なことだったんだよね。
それを使って、西部開拓時代のアメリカで銃撃戦をやる超リアルＶＲＭＭＯを発表した。
ＶＲデバイスは一つ二十万円くらいで売ったけど、ベータ版の三千台は一日で売り切れ、追加で売った正式版は三十万台が一時間で売り切れた。
二十万円？安くね？と思うかもしれないけど、別に営利目的でやってないらしい。
明石と夕張が言うには、人間のビックデータが欲しいんだとさ。
限りなく現実に近い仮想世界で、人間の動向を見たいらしい。
このゲームで採取した脳波などを使って、洗脳光線などの開発をしているとのこと。
工廠の怪しい実験は今に始まったことじゃないのでスルー。
「それで、今回はどうするって？」
「剣と魔法のファンタジーです。具体的に言えばオバロみたいな」
「ほーん」
「結構面白いシステムになってますから、是非プレイしてみてくださいね！」
「うん」

そう言う訳でログイン。
だらーっと世界観説明のオープニングが流れる。
特筆すべきこと無しのファンタジーだね。
ＶＲＭＭＯＲＰＧを作れるのは現在黒井鎮守府だけ、故に、奇をて

らったシステムや設定は避けて、王道のものにすることにしたんだろうね。
ん、オープニング終わった。
『汝は何者か……？』
システムメッセージか？脳内に声が響く。
「俺は人間だよ」
『……永劫の戦いを望むか？』
あ、これあれか。
キングダムハーツみたいに、謎の存在からの質問に答えて、初期パラメータとか成長傾向とか決めるやつか。
「いいえ」
『……誰かを守る為にその力を振るうか？』
「美女なら命に代えても守るさ」
『……夢はあるか？』
「世界征服」
『……友はいるか？』
「いるよ、たくさん」
『……飢えし時、死した同朋を食らっても命を繋ぐか？』
「そりゃもちろん」
『……汝は夜の月か、昼の太陽か？』
「両方好きだよ」
『……汝は闇と光、どちらに生きる？』
「どちらもだよ、片方だけじゃ人は生きていけない」
『……汝、いかなる力を欲するか？』
「力なんていらないよ、世の中、力が全てじゃないからな」
『……ならば、名乗れ』
お、キャラクターネームか。
「マオ。俺はマオだ」
『マオ……、遊星からの降臨者（フォーリナー）のマオよ。汝、己の信念に従い、戦い抜くのだ!!!』
「え？ちょっ、待っ、降臨者って」

パッと景色が変わる。
ここは……、森？
取り敢えず、ステータスを開いてみるか。
「ステータスオープン」
『ＮＡＭＥ：マオ
ＲＡＣＥ：遊星からの降臨者（フォーリナー）
ＡＧＥ：％＄▪↓♪＊
ＳＥＸ：男
ＪＯＢ：旅人
ＬＥＶＥＬ：３０５
ＨＰ：５０００
ＭＰ：１４００
ＳＴＲ：１８９５
ＤＥＸ：２１１０
ＶＩＴ：３０１１
ＡＧＩ：３０５９
ＩＮＴ：１２００
ＭＮＤ：６０８５４１２６０７
ＬＵＫ：１０００
ＣＨＡ：１５１７
ＳＫＩＬＬ
メタモルフォーゼ
捕食
触腕生成
分裂
狂乱の月（ルナティック・ハイ）
再誕の黒太陽（リ・バース・サン）
耐性マスタリー：上級
マジックマスタリー：上級
マーシャルアーツ：上級
サバイバル：上級

クラフトマスタリー：上級』
池に映る俺を見る。
……。
暴走状態の時の俺そのものだ。
獣の肢体と龍の鱗、鋭い爪と牙、猛禽の瞳に蝙蝠の翼と毒腺のある針尾、そして触腕。
どっからどう見ても人間だと言うのに、何故宇宙人みたいな扱いをされなきゃならないのか、これが分からない。
何だよ、降臨者って。まるで俺が宇宙から来た古代文明の使者みたいじゃないか。

適当にモンスターを蹴散らしながら、スキルのメタモルフォーゼで姿を変えて人間に化けて、街中へ入る。
街の中は、普通に、ラミアやケンタウロス、ライカンスロープなんかがいる、極々一般的な街だ。
アイテムボックスには体力回復（小）のポーション三つと１０００ゴールド、食料一週間分と野営セットとマニュアル本、それと初期装備の鉄の片手剣があった。
取り敢えず、片手剣なんて扱えないので売る。
片手剣は５００ゴールドで売れたので、その金で鉄のカイトシールドを買う。
俺はファンタジー的に言えばタンク、メイン盾だからね。
それと、５００ゴールド使って弓矢と投げナイフを買う。
これで準備万端だ。
確か、オープニング見た限りでは魔王を倒せとかダンジョンを攻略しろとかはなかったし、自分で目的を見つけて生きろってことだろ。
となると、断然。
「旅に出よう」
旅するしかねえ。
三日も歩けば隣の大きめの街に行けるそうだから、行くか。
あ、その前に、路銀稼ぎと観光だな。

始まりの街だから、何だかんだで何度か来る羽目になるんだろうけど、それでも、いろいろ見て回りたいし。
オッ、冒険者ギルドだ。
「すんませーん」
お、荒くれ者から剣一本持って田舎の村から出てきたガキみたいな冒険者が沢山いる！
まあ、どれも実力はお察しだが。
受付に登録したい旨を伝える。
「１００ゴールドになります」
支払って登録。
俺は背も高いし筋肉もあるし、顔も優男って言うよりは鋭めのイケメンで、その上態度もしっかりしているから、突っかかってくるやつはいなかった。
基本的に、そう言うやつらは弱そうなやつ……、見た目や態度が弱そうなのを狙う。
俺は、実際はそんなに強くはないけど、見た目はそこそこ強キャラ感出てるから。
さて、ギルドのプロフィール欄には名前と職業、種族、そして特技。
マオ、旅人、人間、戦闘から生産まで一通り、と。
それじゃ、依頼見てくかー。
んー？
ギルド酒場のヘルプ、至急で？
オッケーオッケー、やるぞー。
「これ、お願いします」
「では、早速、あちらへ」
ギルドの受付のお姉さんに指差された厨房へゴー。
一時間後。
「おおお?!なんだこれ?!今日の飯、うんめえぞぉ?!」
「おかわりー！」
「美味ええ！」
俺は触腕と分裂を活かしながら並列して料理と給仕をする。

「四番テーブルさん、鶏肉のトマト煮込み三つ追加ー！・三番カウンターさん、スライム酒と焼き川海老！・これ、六番テーブルに持ってって！」
「は、はいぃ～！」
ギルド酒場の店員の女の子に指示を飛ばしながら、料理しつつ給仕する。
噂を聞きつけた街の人や冒険者が列をなす。

「……Ａｄｍｉｒａｌ、何をやっているのだ」
「んん、おや、アーク？……アーク？」
なんか、下半身馬なんだけど……？
「あまり見るな、この姿は少々、恥ずかしい」
「え……、その……、うん」
まあ、下半身が馬だからね。
いや、俺はバリバリ人外娘もいけるからなんの問題もないんだけど。
見たところケンタウロス……、いや、額のツノからしてユニコーンか。
可愛いな。
「まあ、俺はバイトしてるよ」
「ふむ、入り用か？」
「いや、次の街に行くまでの繋ぎ……、かな。小銭があれば後はギャンブルで増やすし」
「そうか。目的はやはり？」
「旅だね」
「ふむ……」
考え込むそぶりを見せるアーク。
「一応、私達艦娘のクランに入っておかないか？」
クラン……、冒険者のチームみたいなものだ。
「構わないけど、俺は戦ったりできんよ」
「それで良い。Ａｄｍｉｒａｌの凄いところは万能性であって、戦闘

能力ではないからな」
まあ、良いなら構わないよ、うん。
「じゃあ、仕事も終わったし、登録しに行こうか」
艦娘クラン、「ブラックフラッグ」加入。

４２７話　ファンタジーＶＲＭＭＯ　その２

「そ、そのだな、Ａｄｍｉｒａｌ？よ、良ければ、私の背中に乗らないか？」
「えっ」
「いやその、Ａｄｍｉｒａｌさえ良ければ、な？折角ユニコーンなのだから」
「まあ、良いなら乗せてもらおうかな？」
「むふふ、そうか。落馬しないようにしっかりと抱きしめ……、ではなく、掴まっているんだぞ？」
　ふふふふ……、そうだ、私の腰に腕を巻きつけて……。
　愛するＡｄｍｉｒａｌを背中に乗せて歩けるとは。
　この半馬の身体も悪くないな。
「あ、その、手綱は必要か？必要とあらば付けてくれても構わんぞ？な？」
「いや、そこまでは良いよ、アーク、ありがとう」
「構わん、Ａｄｍｉｒａｌのためだ」

「アークロイヤル、ユニコーンの聖騎士（パラディン）。巻雲、ハイエルフの大魔導師（スペルマスター）。摩耶、人狼（ライカンスロープ）の剣聖（ソードマスター）。天龍、ドラゴニュートのサムライマスター。プリンツオイゲン、黄昏の魔人（トワイライトデーモン）のウェポンマスター。鹿島、淫魔（サキュバス）の魔物使い。菊月、ハイエンド・オートマタのガンナー……」
　Ａｄｍｉｒａｌがクランメンバー表を読み上げる。
「……ゲームバランスこわれる」
「そうなのか」
「どう考えても上位ステータス、上位種族、上位職業じゃん。初期レベルも５００超えてるし」
「初期ステータス、種族、職業、レベルについては、現実世界のものと、最初の質問によって左右されるらしいぞ」

「ほーん……」
　おかしいだろうか？
「まあ、そうだわな。ＶＲゲームで筋力耐久力反応速度が人並みまで落ちたら、艦娘からすればおかしいだろって話だもんな。だったら、システムの方を現実に合わせた方が良いのか」
「実際、軍人やプロスポーツ選手などのプレイヤーは、初期ステータスが高いそうだ」
「そうだよなあ、鍛えてる人がゲームの世界で弱体化しちゃおかしいよな」
　そんなことを言いながら、Ａｄｍｉｒａｌを背中に乗せて草原を駆け抜ける。
　最初の街から五日も走れば、ギャンブルの街『イダス』に着く。
「ってか、アークは俺に付き合ってくれなくても構わないよ？好きなとこ行って良いのよ？」
「私の好きな場所はＡｄｍｉｒａｌの隣だよ」
「あら可愛い。隣と言わず胸の中でもええんやで、と」

　イダスにて。
　まあ、Ａｄｍｉｒａｌはギャンブルなら大抵の相手には負けない。
　そもそもの動体視力や器用さ、記憶力などから、大抵のギャンブルは勝てる。
　伊達にギャンブルをやり続けていない、勝率は相手がＡｄｍｉｒａｌを超えるやり手かド級のイカサマ使いでもない限り、ほぼ百パーセント勝つ。
　聞いた話によると、麻雀では裏世界のトップに挑んでボロ負けするらしいが……、そこら辺の雑魚には負けないとのことだ。
　目標は「アカギシゲル」とか「カイ」に勝つこと、らしい。
　Ａｄｍｉｒａｌは山程儲けて、胴元を泣かせると、大量の金貨とカジノの景品全てを掻っ攫う。
「よーし、後は逃げるぞー」
「分かった」

ギャンブルで勝った後は逃げるのが鉄則……、だそうだ。
確かに、この手の胴元は反社会的な組織であることが多い。
国営だとしても、胴元が泣き出すほどに稼げば、睨まれもするだろう。
私も、そこら辺の雑兵に負ける気は無いが、正面から戦って突破する理由はない。
結局、逃げてしまうのが手っ取り早いということだ。

「いやー……、後は全力で旅するけど」
「そうか」
「アークは別についてこなくて良いんだよ、本当に。みんなと冒険したりすれば良いと思うよ？」
「ついて行っては、嫌か？」
「嫌ではないけど……、俺はノースティリスのあいつや@みたいな冒険者ではないからね？」
「？」
誰のことだ？
「あー……、俺の知り合い。ジューアのクレイモアのあいつと、エントのスペルマスターの@だよ。友人だ」
「ふむ」
「あいつは専科百般、古今無双の化け物で、クレイモア……、大剣使い。まあ、魔法でも何でも使いこなすけど」
「なるほど」
「@はがまんづよい、エント（木人）のスペルマスター。近接はぶっちゃけ俺でも勝てるくらい弱いけど、魔法ならとんでもない使い手だよ。総合的な戦闘能力じゃあいつにも匹敵するかもな」
「そうなのか。それは、強いのか？」
「少なくとも、君なら五分保てば良い方ってところかなー」
「そんなにか」
世界は広いな、この私より強い者がいるとは。
「話は変わるけど、どうやら、この世界は白露型の協力で、魔法が使え

るようになっているらしいしね」
「ああ、確かに、魔法が発動する」
そう言えばそうだな。
「俺もあいつや@に魔法を習ってさ、ある程度は使えるんだよ、魔法」
Ａｄｍｉｒａｌが言うには、Ａｄｍｉｒａｌは職業的には観光客だけど、「世界」のルールに縛られないから、どんな領域の魔法もスキルも覚えられるらしい。
しかし、「世界」のルールに縛られないが故に、恩恵もないそうだ。
Ａｄｍｉｒａｌはそれを、悪役補正も主人公補正もどっちもないと称している。
Ａｍｉｒａｌは常に私の考えている世界よりも大きなものを見ている気がする。
「この電脳世界においても、魔法の使い方は現実世界とあんまり変わらないみたいだ」
「そうだな、私も少しは魔法が使えるから分かるが、少し術式を弄ればこの電脳世界でも魔法は使える」
「そもそも、今回は、一般人の魔法適性を調べる目的があったから」
「そんなものを調べてどうするのだ？」
「さあ……？何かしらに使うんじゃない？」
そうか……？

「イダスでは十分稼いだ。次は……、首都に行こう！」
「はっ！」
私とＡｄｍｉｒａｌは、北へ向かう。
道中、モンスターの襲撃はあったが、弱かったので消しとばした。
首都は……、煌びやかだ。
「ふむ……？私が思うに、中世ヨーロッパをモデルにした、と言う割には、街並みが美しく、嫌な臭いもしないぞ？」
「そこら辺は魔法でどうにかしてる設定だから……（震え声）。あんまりリアルにこだわり過ぎると、街中クソまみれってことになっちゃうから……」

「成る程。これはゲームと言うことか」
「このすば的ファンタジー世界だから……」
確かに、リアリティを求めて、本物の中世の都市の様にしたら、衛生面などで不愉快な街になるな。ゲームだからと理由をつけて、ある程度近代化せねばなるまい。
「じゃあ、王都を見て回ろうか！」
「ああ」
王都は……、ヨーロッパの様でいて、イギリスでもフランスでもイタリアでもない……、私からすれば若干違和感のある家屋が並び、王城もまた、ゴシックでもルネサンスでもロココでもない、尖った屋根の大きな城だった。
ファンタジーとは、こんな感じなのか。
「おー、良いね！自撮りスクショ撮ってツイッターに上げよう！ほらおいで、アーク！」
「あ、ああ」
Ａｄｍｉｒａｌは、ゲームの機能の、スクリーンショット機能で写真を撮り、街を回る。
「城に入りたい……、城に入りたくない？」
「そうだな、だが、兵士が沢山いるが……」
「ちょっと待って」
Ａｄｍｉｒａｌは兵士に駆け寄って話をする。
「何をしたんだ？」
「兵士に、鎧と槍の生産をやっている鍛冶屋の在り処を聞いてきた」
……ふむ？
「どうするつもりだ？」
「まあ見てな」
鍛冶屋に行くＡｄｍｉｒａｌ。
「こんにちは、ラファウル王国新兵士です。鎧を受け取りに来ました！」
「ん？おう、そこにあるだろ、持ってけ！」
「ありがとうございます！代金はお城に請求してください！」

そう言って、まんまと正規兵の装備を手に入れたＡｄｍｉｒａｌ。
「成る程、正規兵に化けて忍び込むのか。しかし、私はどうすればいい？」
「我に策有り」
ど、どうする気なんだ？

４２８話　ファンタジーＶＲＭＭＯ　その３

Ａｄｍｉｒａｌは、王都にある軍の鍛冶屋からまんまと正規兵の装備を手に入れ、王城に潜入することになった。
「俺はあらかじめ、王都に来る前に、王都の公的文書を見たことがある」
　ふむ。
「公的文書には、この王家の紋章である、羽の生えた龍のマークがあるんだ」
　……まさか。
「偽装します??」
　例えゲームの世界といえ、公的文書を偽装してまで、観光のために城に潜り込む人はいないだろう、普通は。
「さらさらさらーっと。はい、これで良し」
「良くやるな……」
「楽しいだろ？」
「それで、私はどうする？外で待っていればいいか？」
「いや、一緒に行こうよ」
「いや……、私はユニコーンだぞ？無理だ」
「この文書読んでみて？」
　ふむ？
　何々、獣人王国の新興貴族、ロイヤル家の令嬢であるアーク様は、栄えあるラファウル王国の王城を見物し、第四皇女リリーナ様との会談の予定がある。会談は午後の遅い時間なので、それまでの間、アーク様には王城内を自由に見学してもらう予定である……？
　……。
「い、いや、まずいだろう、これは！」
「いけるいける」
　何を笑ってるんだ!!!?
「大丈夫だって、バレたら指名手配くらいで済むよ」
「いや、大ごとだろう!!?」

「へーきへーき！大丈夫大丈夫！」
本気なのか、Ａｄｍｉｒａｌ?!
「止まれ！そこの女は誰だ？」
門番に止められる。
「はっ、これを」
「ふむ……？アーク様？そんな話、聞いていないが？」
「ああ、実は昨日急に決まった話なのです」
「何だと？」
Ａｄｍｉｒａｌはこちらをちらりと見ると、門番に耳打ちする。
「実はこちらのアーク様は、相当なワガママ娘でして……。武力のみで一代にして成り上がった新興貴族のお嬢様で、礼儀作法はからきしのくせにプライドだけは高い。今回の件も相当無理を言って決まったことなのです。早くしないとアーク様は大暴れしますよ！」
「な、何だと？それは大変だ、分かった、すぐに開門する」
流石はＡｄｍｉｒａｌだ。
基本的にああいう類の嘘は上手い。
そして、王城の中に入る。
スクショを撮りまくるＡｄｍｉｒａｌ。
「図書館行こうぜ」
図書館に入り込むＡｄｍｉｒａｌ。
速読で手当たり次第に機密書類を読んでいく。
「へーほーふーん？」
何か分かったらしい。
「近くの山に邪悪なドラゴンがいるらしい」
「ドラゴン？」
「五百年ぶりに封印が解けそうなんだって。だから、第四皇女リリーナを生贄に封印の儀を行うんだとさ」
「なんと……」
「俺、そういうのは良くないと思うから、ドラゴン倒そうぜ」
「ああ！」

「多分このドラゴン、レイドボスだわ」
レイドボス？
「レイドボスってのは、みんなで倒すデカいボス敵のことだよ」
成る程……。
巨大で邪悪なドラゴンと言えど、艦娘やプレイヤー数千人で囲めば倒せる、か。
「なんか多分強い感じのやつだから、準備していこうぜ」
そう言って、Ａｄｍｉｒａｌは、さも当然と言ったように王城の宝物庫を漁り、装備品を盗むと、近くの山へ向かった。
同時に、艦娘ギルド、ブラックフラッグに連絡を入れるのも忘れていない。
近くの山では、丁度、第四皇女が今まさに生贄にされんとしていた。
「デトロイト市警だ!!!!」
儀式を行う魔法使いをなぎ倒し、魔力を乱し、皇女の手を取る。
「あ、貴方は、なんて事を！王国は終わりです！悪龍バロムの封印が……！」
「大丈夫、大丈夫」
「大丈夫なものですか！五百年前、悪龍バロムが王国にどれほどの被害を出したかお分かりにならないのですか?!!」
「ヘーキヘーキ、いけるいける」
「お、お願いです、今からでも儀式を！」
「……死にたいのかい？」
「……死にたくないです。けれど、私が死ななければ、もっと多くの人が死にます！」
「命は数なのか？君の命は、顔も知らない民衆の命と等価なのか？」
「そ、れは！」
「命の価値なんざ人によって違うのさ。だったら、俺は俺の価値観に従う」
そんな時、山の祭壇がひび割れた。
「Ａｄｍｉｒａｌ、来るぞ!!」
『ガアアアアアアアッ!!!!』

黒い巨大な龍が、割れた地面から現れた。
成る程、確かに、これは私一人ではキツいな。
「アーク！」
「どうするんだ?!」
「逃げるんだよォォォーーー!!!」
「えっ？」
Ａｄｍｉｒａｌは私の背中に飛び乗った。脇には皇女を抱えている。
「ダッシュだ、アーク！」
「えっ、あっ、わっ、分かった！」
どこへ向かうつもりだろうか？
「そんなもん決まってる」
「どこだ？」
「王都」
「な、なっ?!」
「大丈夫大丈夫、ブラックフラッグに住民の避難勧告するように言ってあるから」
「いや……、いやいや！良いのかそれは?!」
「まあ、多少はね？どの道、王都くらい防衛設備が整ったところじゃないと相手できないし。下手に被害が広がる前に動くべきなんだよ」
む……、それは、そうだが。
「建物が壊れるくらいなら良いでしょ。人が死ぬより万倍マシだ」
「分かった、行くぞ！」

王都に着いた。
後ろからは、ゆっくりと、山のように巨大な龍が追いかけてくる。
「よっ、ガンビアベイ」
「えっ……、その、超ド級のＭＰＫですか？」
「レイドボスを持ってきてやったぞ！」
「私ヒーラーなのにぃ……」
そして、ゲーム側からのメッセージ。

『レイドボス：悪龍バロム』
『場所：ラファウル王国王都』
『開催時刻：二時間後』
ブラックフラッグのメンバーは全員揃っている。
「どう？行けそう？」
Ａｄｍｉｒａｌが問いかける。
「やるしかないでしょ？」
「倒す以外にあるの？」
「レイドボスかー」
艦娘達は楽しそうに答える。
「よっしゃ、じゃあ、やろうか」
Ａｄｍｉｒａｌの宣言と共に、艦娘は一斉に動き出した。

４２９話　ファンタジーＶＲＭＭＯ　その４

「べびべびべいべべいべべいべ!!!!」

城門を閉じ、バリスタや大砲を並べ、前衛が前に出て、準備ができた。

Ａｄｍｉｒａｌは、何故かギターをかき鳴らして歌っている。

それを見ているプレイヤー達は、声援を送り、テンションが上がっている。

Ａｄｍｉｒａｌは、特別に人を統べるカリスマがある訳ではない。

しかし、他人を鼓舞し、元気付け、その気にさせる弁舌と、何より、その楽しげな雰囲気が素晴らしいのだ。

この人について行けば、絶対に退屈しない。そう思わせる何かが、Ａｄｍｉｒａｌにはあった。

まるで、例えるなら、イアソンの様な人だと、私は思う。

本人は、確かに、様々な技能を持つが、特別に強いという訳ではない。

だが、兎に角、他人を乗せるのが上手いのだ。

見知らぬ人とでもすぐに仲良くなり、特に女性はすぐに口説き落とす。

気難しい英雄達も、Ａｄｍｉｒａｌに請われたら、喜んでアルゴー船に乗り込むだろう。

人を統べるカリスマではなく、人を友にし、共に歩む。そんな不思議な魅力が、Ａｄｍｉｒａｌにはある。

我々艦娘も、Ａｄｍｉｒａｌとならどこまでも行けると思っている。根拠はないが、Ａｄｍｉｒａｌと共にいると、そう思ってしまう。

だから、今回も。

『ガアアアアアアッ!!!!!!』

「行くぞみんなー!!!!!!」

「「「「おおーっ!!!!!!」」」」

なんてことはない。

黒龍が雄叫びを上げ、城壁に向かって突っ込んでくる。
「障壁よーい!!!」
Ａｄｍｉｒａｌの指揮に従い、魔法使い達が障壁を張る。
『ガアッ?!』
思い切り障壁に突っ込み、出鼻を挫かれた黒龍に対して。
「やれー!!!」
一斉に攻撃を開始する。
直接的な戦闘能力が乏しい斥候や盗賊は、大砲を撃ち込み、バリスタを放つ。
魔法使い達は全力で魔法を放ち、錬金術師達はマジックポーションを配り歩く。
剣士や戦士と言ったプレイヤー達は、障壁にぶつかり倒れた黒龍に取り付き、各々の武器を振るう。
『グオオオオオオ!!!』
「起きたぞー!守れ!」
黒龍は起き上がり、鋭い爪で城門を引っ掻く。
障壁で防ぐが、巻き込まれた少人数のプレイヤーが潰される。
「ヒーラー隊!蘇生!」
「はいぃ～!」
ガンビア・ベイの指揮する神官達、ヒーラーの寄せ集めに指示が出され、失った人員を蘇らせる。
「ブラックフラッグ!かませ!」
「はい!『ウェポンバースト』!!!」
指示を受けた艦娘クランから、プリンツ・オイゲンが飛び出して、クールタイムの長めな大技スキルを放つ。
『アアアアア?!!』
黒龍の顔面にダメージを与え、再びダウンさせる。
「よーし!今だ、やれー!!!」
「「「うおおおお!!!」」」
つまり、作戦はこうだ。
黒龍の攻撃を防ぎ、隙を作り、その隙を艦娘が突いて、黒龍をダウ

ンさせる。
そして、ダウンした黒龍を囲んで殴る。
Ａｄｍｉｒａｌが言う、大物狩りの基礎だそうだ。
本人が言うには、これでゾラマグダラ……、何とかを倒しただとか。
本音を言えばゲキリュウソウ？を持ってきたかったらしいが、その辺りはよく分からない。
「解析完了！両腕両足、そして額にある赤い岩のような部分が弱点！」
スペルマスター巻雲が叫び、それを聞いたプレイヤー達は集中攻撃を始めた。
「『サモン：ケルベロス』！」
ビーストテイマー鹿島が、黒龍ほどではないにしろ、かなり巨大な三つ首の犬を呼び出し、炎を吐かせる。
『ガアア!!!?』
「右腕破壊！右腕破壊！」
黒龍の腕の弱点が破壊され、歓声が上がる。
「まだあるぞ！気を引き締めろ！」
再び立ち上がる黒龍。
今度は、ブレスを放ってきた。
「障壁全開！全開ィーーー!!!」
む、不味いな、あれは危険だ。
私が大盾を持って前に出る。
そして、スキルを発動。
「『フォートレス』!!!」
ブレスを軽減し、死傷者を減らす。
「アークサンキュー！回復急げ！サポーター動け！」
Ａｄｍｉｒａｌは指揮を執りながらも、王都の宝物庫にあった大弓を使って、攻撃もしている。
「提督！行けるぜ！」
サムライマスター天龍が叫ぶ。
「よーし！左腕を狙え！」
「おう！『不動明王剣』ッ!!!!」

『ガアアアアアアッ!!!!
黒龍の左腕を根本から切り落とした天龍。
「すまん！暫くは無理だ！」
「良い！休んでろ！」
天龍を拾って引っ込めたＡｄｍｉｒａｌは、更に指示を出す。
「次！右足！じゃんじゃん撃て！矢弾の代金なんて気にするな！後で国に請求書書いてやれ!!!」
「「「うおおおお!!!」」」
そうして、右足の弱点も破壊する。
続いて、左足も破壊した時に、黒龍は一際大きな咆哮を上げ、口元にエネルギーを集めた。
「あー、ありゃ駄目だ、防げねえ。総員退避ーーー!!!」
瞬間、放たれたレーザーブレスは、城門を吹き飛ばした。

「な、何があった?!」
「いやー、乱世乱世。奥の手はレーザーブレスだったみたいだね」
艦娘クラン以外のプレイヤー達は半数が蘇生不可能なほどにダメージを受け蒸発、城門は見るも無残に吹き飛んだ。
「あ、ああ……」
「や、やっぱ無理だ！」
「に、逃げなきゃ……」
戦意も最悪、状況は一気に劣勢だ。
だが。
「まだ終わってないだろ！」
Ａｄｍｉｒａｌが叫んだ。
「まだ負けちゃいない！勝機はある！まだ城門が吹き飛んだだけだ！」
「で、でも」
「考えてもみろ！この城門の持ち主は誰だ？」
「お、王国だ」
「そうだ！王国のものが壊れたんだから、直すのは王国の仕事だろ？

ほら、少なくとも金の心配は要らなくなった」
「プレイヤーがもう」
「まだ半数は生き残っている！諦めるな！相手も切り札を切ってきたってことは、追い詰められているんだ！」
「ま、まだ、やれるのか？」
「ああ、やろう！最後の最後まで戦って、それでも駄目な時に泣け！少しでも希望があるのなら、冒険者は笑うもんだ！」
「そ、そうだ！」
「や、やるぞ俺は！」
「まだやれる！」
プレイヤー達を鼓舞したＡｄｍｉｒａｌは、再び指揮を執り……。
「そこだーーー!!!!!」
『ガアアアアアアッ!!!!』
黒龍の額を砕いた。?!!!!

『レイドボス：討伐完了』
『ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎ！』

その後、Ａｄｍｉｒａｌは、黒龍の素材を分配して、レイドボス戦に参加したプレイヤー全てと宴会をして、その請求書を王国に叩きつけて、逃亡した。
行き先は、次は帝国に行くそうだ。
「行こう、アーク！」
「……ああ！」
例え、電子の世界でも。
愛する人と共に旅ができるとは。
こんなに嬉しいことはない。

４３０話　東北バイオハザード　その１

「もふ」
「すーっ」
「がぶ」
「あああーっ!!!」
猫を吸う猫愛好家に倣って、首輪付きを吸ってみた。
草花の匂いがした。
その後、鼻を噛まれた。
「噛むなよ!」
「もふもふ」
何？メスに嗅がれるならまあいいけど、男にやられるとただただ不快？
まあ、道理である。
「なあ、首輪付き」
「もふ？」
「夏だなぁ」
「もふ」
ミーンミンミン、ってか、ジージーっと鳴くセミ。熱されたアスファルトからの放射熱、海の生暖かいじめっとした風。
まさに「茹だるような」夏の日である。
まあ、俺はこのくらいの暑さなら涼しいの範囲内なんだけども。
そう言えば、アークレイの山中の洋館に逃げ込んだ時も、こんな感じだったっけ。
七月ごろ、アメリカの山にある洋館に逃げ込み、しばらく生活していたところ、スターズの面々と出会ったんだよな。
今何やってんのかな、クリスは。
この前は一緒に中国に行ったが。
ん？
「おー、見ろよ首輪付き。ミサイルだ」
「もふもふ？」

「ん？どこからのミサイルかって？んー、北朝鮮とかじゃない？コンギョでも流すか！」
『コーンギョーコンギョーコンギョーザップロー』
「もふもふ？」
「そりゃ余裕だよ、あの軌道だと、本土には落ちないからな」
「も、もふ！」
「あ、あれ?!空中で爆発……、ってあれは！」
　ウイルスらしきものをばら撒いた?!
「もふもふ」
「ありゃ多分、Ｔウイルスだな」
「もふ？」
「ああ、人をゾンビに変えるウイルスだ。こうなったら、動きは早い方が良い」
　俺は、マイクを取り出して、黒井鎮守府に放送をする。
『緊急放送、緊急放送！日本国内でゾンビウイルスの拡散を確認！艦娘は地元住民を黒井鎮守府内に避難させること！また、工廠組は物質生成装置をフル稼働で、仮設住宅を用意すること！白露型は急ピッチでＴウイルスのワクチンの生産を開始しろ！以上、解散！』
　艦娘に指示を出した後は、俺も個人的に動く。
　まずは、この国のトップ、総理大臣の桃さんに電話をする。
「桃さん、緊急事態だ」
『新台か？確かに、北朝鮮のミサイルが本土の上、東北で爆発したが？』
「あれは、細菌兵器だ。中には人をゾンビに変えるウイルスが詰まっている」
『……何だと？』
「ゾンビに噛まれたものはゾンビになる、弱点は頭、恐ろしいウイルスです。いつか話した、ラクーンシティのアレです」
『分かった、即座に指示を出す。まずは国民の保護を優先する』
「今、うちも民間人の避難とワクチンの生産をやってるんで、ワクチンはできたらどちらに持ってきますか？」

『では、順天堂医院に持って行ってくれ』
「それと、この手のバイオハザード事件のプロフェッショナルである、ＢＳＡＡを俺の伝手で呼びます。その分の金と、羽田空港への着陸許可をお願いできますか？」
『対バイオテロ組織のＢＳＡＡだな、分かった、即座に許可を出す。では、動くぞ』
「はい、では」
　次、ＢＳＡＡに電話。
「もしもし、クリスか？」
『ん？どうした、マオ？』
「日本でバイオテロだ。日本の東側に、Ｔウイルスがばら撒かれた」
『何だと?!』
「日本のゾンビの制圧と、その後の、恐らくは朝鮮に存在するであろうアンブレラ系の企業の研究所の破壊を依頼したい。無論、俺も手伝う」
『分かった、今すぐに行く』
「羽田空港への着陸許可が直ぐに降りると思うから、武器と弾薬、機材を持ってこい。車両はうちから出す。何がほしい？」
『ストライカーＩＣＶを三十台、機銃もつけてくれ』
「ＯＫ、直ぐに持っていく。十時間後にテレビ電話でミーティングをするぞ」
『了解した、では』
「ああ」
　さて、動かなきゃな。
　まずは、東北の知り合いに声をかけて移動させる。
「ジャギ、直ぐにうちに逃げてこい、死ぬぞ。他の修羅達にも伝えろ」
「ウィード、久し振りだな。みんなを集めてくれ、大事な話だ。よし、聞いてくれ！東北には今、恐ろしい病気が蔓延し始めた！それは、狂犬病のようなものだ！噛まれたものは気が狂うんだ！二子峠は危険だから、うちにしばらくは避難していてくれ！もちろん、病気にかかった生き物を人間達が処分すれば、ここに戻ってこれる。安心して

くれ」
「仗助君、杜王町で災害が起きるんだ。危険だからみんなと逃げてほしい。明日にはアメリカの特殊部隊が制圧しに来るから大丈夫だ。さあ、みんなに連絡を」
黒井鎮守府の空間制御装置を弄って、空間を広げ、受け入れ人数を増やす。
仮設住宅の設営と炊き出しの後に、偵察へ。
「おーおーおー、いるわいるわ。東北はゾンビだらけだな。福島の北のほうから先はゾンビがいる、北海道は無事、と」
そして、テレビ電話でミーティング。
参加者は、俺、桃さん、クリスと……、レオン？
「あれ？何でお前いるの？」
『大統領、マイケル・ウィルソン氏からの直々の依頼だったからな。俺は朝鮮に潜入し、アンブレラの情報を集めておく』
「ＯＫ、こちらも終わり次第行くから先走るなよ」
『当たり前だろ、ロス・イルミナドスの時のような無茶はするつもりはない』
『それで、どうなっている？』
桃さんが問いかけてくる。
「東北全体にゾンビが湧いてます。ゾンビを中心にケルベロス、リッカー、ハンター、ヨーン、キメラ……、完全に人為的な事件ですね、これは」
『となると、日本国内にもＢＯＷを開発している支部があったのだろうな』
クリスが言った。
「実際、秋田県に三つほど研究所があるのを発見したよ。多分、今頃はもぬけの殻だと思うが、研究員の追撃よりも人命救助を優先した」
『詳しい場所の情報は確認した。順次破壊する。具体的な作戦だが……』
「日本は狭い国だ。ラクーンシティのように吹っ飛ばして終わり、という訳にはいかない」

『では、ゾンビを個別対処するのか？あまりにも非効率的だぞ』
「大丈夫だ、こんな事もあろうかと、ウイルス探知機を用意しておいた。自衛隊と協力してゾンビを減らした後は、オスプレイでワクチンをばら撒くぞ」
『了解。だが、恐らく、それでも一月はかかると思う』
「うちの艦娘の三割ほども独自に動いてもらう。艦娘はあらゆるウイルスに抵抗があり、その上でタイラントなんて目じゃないくらいに強くて賢い。割と早く終わると思っている」
『三割と言うと、大体六十人程か？』
「悪いが、それが限界だ。艦娘の三割は国内のＢＯＷに独自に対処、三割は避難民の面倒を見る、三割は深海棲艦の対処、一割は事務仕事。手が空いてない』
『まあ、分かった。そろそろ到着するぞ』
「じゃあ、俺は空港で待っている」

とっとと動かなきゃまずいな、これは。

４３１話　東北バイオハザード　その２

「新台さんが逃げろって言うからよォ～、呼べるだけ人を呼んで逃げてきたんだけどよォ、結局、何が起きてんスか～？」
　仗助君が聞いてくる。
「ん、ああ、バイオテロ」
「テロ～？」
「そうそう、人間をゾンビにする細菌兵器が、朝鮮の方から飛んできたミサイルからばら撒かれたんだよ」
「それ、やべーんじゃないんスか?!」
「ああ、やばいね。既に十万人単位のゾンビと、国内に放たれたクリーチャーが暴れ回っているよ」
「……俺も戦いに」
「やめとけやめとけ！噛まれたらゾンビの仲間入りだぞ！その道のプロの兵士と自衛隊がなんとかする予定だ！」
「で、でもよォ～！俺のクレイジーダイヤモンドなら、治療する事だって……」
「ゾンビは、ゾンビになった時点で、生命としては終わっているんだ。だから、君のスタンドでも治せない。噛まれたばかりの人なら、うちで生産したワクチンで救える。今回ばかりは大人しくしていてくれ」
「……分かったっス」
「だがまあ、今、この黒井鎮守府には、馬鹿みたいに人が集まってる。だから、喧嘩を止めたり、怪我人を治したりとか、そう言うことをしてくれないかな？」
「……はい！」
　避難してきた人々をまとめて、仮設住宅に住ませる。
　今は真夏だ、クーラーがなきゃ死ぬ。
　厨房組がフル稼働して、避難民の中でも料理ができる人々の手を借りつつ、炊き出しをする。
「本日のメニューは、麦ご飯、ニラもやし炒め、冷奴、きゅうりの浅漬けです！」

流石に、数百万人の人々を受け入れているとなると、炊き出しのメニューも少なくなる。
しかし、炊き出し場の場所ごとにメニューを変えるようにしてあるので、あまり問題はないとは思う。
炊き出しの他にも、無料でアイスクリームやかき氷を配るなどしている。
明石と夕張が全力で働き、黒井鎮守府のリソースの八割を居住区作成に回したおかげで、一時間程でちょっとした街が完成していた。
まあ、黒井鎮守府には、ドラゴンボールが如く、リアルカプセルハウスが開発されてあるからな。
ここで、避難民には休んでもらう。

問題は、二子峠の犬達だ。
野犬がその辺りを彷徨くのはまずい。
『ねえ、旅人。ここはとても暑いよ』
「だろうな、ここは海の近くで、人間の街だ。涼しい川や山の木々のような自然はない」
総大将から相談された。
だが、狭いケージの中に、事件が終わる一ヶ月もの間、ずっと閉じ込めておくのはあまりにもかわいそうだ。
かといって、うちの裏山に放流する訳にもいかない。
裏山には裏山の独自の生態系がある。そこに、精強な野犬を数百単位でぶち込んだら、何が起きるか分からないからな。
「ちょっと待ってろ」
俺は、四角い世界で鍛えた高速建築術で、木造の巨大犬舎を建てた。
ダイアモンドのスコップで高速で穴を掘り、無限水源を設置して、川と湖を作る。
クーラーと扇風機も設置して、犬達を中に入れる。
『ありがとう、助かるよ』
「いいか、外に出ても良いが、人を襲うなよ」
『うん、みんな、人を襲ったりはしないよ』

そして、豚肉と夏野菜を刻んで加熱した後に冷ましたものをドッグフードにかけて食わせる。
犬は雑食だからな、色々なものを食わせた方が良いんだよ。
餌やりは摩耶と鳥海に任せた。
横に長い餌皿に何十キロも餌を入れて一斉に食わせる。
おやつに豆乳アイスをくれてやると喜んでいた。
餌やおやつの調達やら調理は、摩耶と鳥海がやる。
まあ、こんな事もあろうかと、黒井鎮守府には数千万人に毎日食事をさせられるくらいの生産能力のあるプラントと備蓄がある。
よし、これでなんの問題もない。

黒井鎮守府避難キャンプが落ち着いたら、俺は装甲車を三十台懐に入れて空港へ向かった。
輸送機が何機も降りてきて、そこから、ＢＳＡＡのプロフェッショナル達が現れた。
「クリス！」
『旅人、久し振りだな』
知り合いと握手をして、早速、会議の通りに行動を開始する。
まず、集団を転移させる魔法を使って、機材ごと福島県の県北に転移。
もちろん、俺は魔力切れで吐血するが、即座にマジックポーションを飲み補給。
福島県の県北の市街地に、四角い世界の建築術をフル活用して、前線基地を作成。
以降、戦線を北に押し上げるように戦う。
『エンゲージ！』
『カバー！』
『ゴーゴーゴー！』
市街地のゾンビを吹っ飛ばしながら、生き残りを救助する。
俺は救助担当だが、できることはなんでもやる。
「だ、誰か助けて！」

「大丈夫ですか?!」
「奴らに噛まれて……」
「ワクチンを投与します!」
そうして、黒井鎮守府に転移して避難させる。
何万人も救助したので、魔力の使い過ぎで脳が破壊されて鼻血が噴き出るが、ハンカチで拭い、マジックポーションをがぶ飲みして魔力の消費を埋める。
一日目はそれで終わった。
日が落ちてからは、ＢＳＡＡの前線基地に帰還し、ＢＳＡＡや自衛隊に向けて炊き出しを手伝う。
俺の食事は、ほんの数十グラム口にするだけで圧倒的な栄養とカロリーを摂取できる特殊なハーブ、ストマフィリアで済ませる。
そのあと、転移で黒井鎮守府に帰還し、事務仕事と白露型のワクチン量産の手伝いをして、黒井鎮守府避難キャンプの炊き出しの仕込みを夜通しやって、気がついたら早朝。
朝から黒井鎮守府の炊き出しを手伝った後に、ＢＳＡＡの前線基地に戻って、兵士達の分の炊き出しを主導して終わらせる。
午前中の進軍に合わせて、俺は、愛用の弓であるジャナフアルカウスⅢをゾンビに撃って、頭を吹っ飛ばす。
時折現れる大型のＢＯＷや変異型のゾンビにやられそうになった兵士達の盾になりつつ、前線を押し上げる。
この時には大体、弓の撃ち過ぎで指が動かなくなり、ダメージも受けまくってぐちゃぐちゃになっているので、魔法で超速再生。
兵士にバフをかけたり回復魔法をかけたりで、魔力が切れてリンカーコアが破裂し三回ほど吐血するが、ポーションを飲んで回復。
そのようにして、日が落ちてきたらまた撤退、前線基地まで魔法で転移させ、魔力切れで内臓破裂。
即座にポーションで回復し、戦場から帰還した兵士達に炊き出しして、夜の仕事へ……。
そんな感じの毎日。
いやー、大変だ大変だ。

４３２話　東北バイオハザード　その３

『はいよー！朝飯はハムエッグだ！並べ並べ！』
『お、美味そうだ』
『大盛りでくれ！』
『チーズ入りじゃねえか！やったぜ！』
マオが、早朝から元気よく炊き出しに参加している姿を横目に、列に並ぶ。
……俺は、クリス・レッドフィールド。
バイオテロ対策部隊、ＢＳＡＡに所属している。
今回は、日本の東北方面に、Ｔウイルスがばら撒かれたと言う報告を受け、ＢＳＡＡの半数程のチームを引き連れて制圧しに来た。
相棒であるジルは、本部に残してある。
今回は、何かと縁のある民間協力者、マオ・シンダイの早急な連絡と支援があり、バイオテロ発生から２４時間以内という異例のスピードで部隊を展開できた。
マオの支援とは、日本の国家元首との素早い連携と、前線基地の製作、避難民の受け入れだった。
基本的に、バイオテロに対しては、即応性が重視されている。
他者に感染しパンデミックを起こす生物兵器は、時間が経てば経つ程感染が広がり、不利だからだ。
しかし、そうは言っても、普通、このような早さで話が進むことはあり得ない。
大体は、バイオテロが起きている国の国家元首が、ＢＳＡＡという他国の戦力を自国に侵入させることを拒否したりして、時間がかかるものだ。
そして、やっとの思いで交渉が終わり、国内に踏み込んだ頃には、感染拡大で大パニックになっているのが常だ。
しかもそこから、前線基地を設営する手間もかかる。
更に、パニックの最中、人々を迅速に救助するとともに、感染者であるゾンビやＢＯＷを排除する必要もある。

特に、人々の救助は極めて難しいものだ。
例えば、怪我で歩けなくなった人を背負って、前線基地まで引き返さなくてはならない、など。
これは、戦える兵士が一人、救助の為に離脱して、なおかつ、その兵士の体力を大きく消耗させるのだ。
救助の際には、感染していないか厳重にチェックをした上で逃す必要がある為、気も抜けないし、時間もかかる。
そうしてまごついているうちに、どんどん人が死んでいくんだ。
だが、今回は違った。
何故かは分からないが、日本の国家元首と直通の電話を持つという、マオの謎のネットワークにより、即座に国家元首と交渉が終わり、閉鎖してある国際空港への着陸が根回しされていたからだ。
その上で、空間転移という、物理的におかしい反則技の使用と、たったの三時間で、高さ三メートルの鉄のバリケードで四方を囲んだ前線基地が完成したこと。
そして、あらかじめ大まかな敵戦力や詳細なマップを用意されていたこと。
これらの要因から、バイオテロ発生から２４時間以内という異例のスピードで部隊を展開できた。
更に、今回は、日本国の軍隊までもが増援として回されている。
また、マオの空間転移により、極めて迅速な救助が可能になっている。
かつて、これ程までに恵まれていた作戦はなかっただろう。
そして、そのどれもこれもが、マオの人脈と手腕によって成し遂げられたものだ。
全く、なんて奴だ。
旅人をやらせておくのはあまりにも惜しい存在だ。
ＢＳＡＡだろうと何だろうとやっていけるだろうに……。
『おらっ、大盛りだ！食ったら働け！』
更に、前線基地での朝晩の炊き出しまでも担当し、進軍中は最前線で戦い、援護を中心に何でもやれる。

これ程までに有能な人材は他にいないだろうな。
聞いた話によると、世界中のありとあらゆる組織が彼を狙っているらしい。
それも道理だろうな。
何せマオは、一人存在するだけで、ＢＯＷ並の戦闘能力と、一つの戦線を支えられるほどの後方支援能力が得られるのだから。
数百時間の間継続して戦える上に、死なず、部隊の兵士と兵器全てを一瞬で好きな場所まで運べ、潜入や破壊工作にも造詣が深く、敵対者の心を読み、考えられないほどの武器弾薬食料薬品を一度に運べ、味方の怪我や病気を一瞬で治療し、外見を自由に変化させたりも可能。
あらゆる分野の知識を持ち、数十カ国語を自在に操り、交渉や指揮も上手く、ヘリコプターから漁船まであらゆる乗り物を使いこなし、如何なる時でも冷静でポジティブでいる。
欠点と言えば、女に弱く、大酒大飯食らいで、ギャンブル好きなところくらいのものだが、作戦中は控えるくらいの分別もある。また、銃器や刃物の扱いもまるでできないが、並の銃器を超える性能の弓矢を扱い、刃物を持ったベテラン兵士を無力化するほどの近接格闘能力も持つ。
更に、最近では、一人一人が米軍の複数の大隊レベルの戦力を持つと言われている艦娘を二百人ほど集めた組織を編成し、忠実な部下にしたと言う。
総評すると、世界のバランスを左右するほどの戦力を保有する、万能で不死身の男だ。
最も評価できるのは、その万能性……。
どんな命令でも、必ず一定の成果を上げる。
どんな命令でも、だ。
交渉、潜入、尋問、輸送、戦闘、補給、援護、工作、護衛、指揮、救助、治療、救出……。
どんなことでもできる。
人間ではないらしいが、それは些細な問題だろう。

どこの組織も皆、彼を欲している。
もちろん、ＢＳＡＡの上層部も、可能な限り便宜を図り、できれば勧誘するようにしたいと言う方針を明言している。
だが、俺本人は、あまりその気はない。
マオは、旅人だからだ。
自由に旅をしている姿が最も似合っている。
それに、わざわざＢＳＡＡに引き入れずとも、世界の危機とあれば、どこからともなくひょっこりと現れる男だ。
昔から、そうやって俺に手を貸してくれてきた。
今回は、俺が手を貸す番だ……！
『よう、クリス！良い朝だな！こんな朝にはハムエッグを山盛りで食べなきゃ駄目だ！』
『ああ、頼む』

山盛りのハムエッグを口に運びつつ、今日の作戦について考える。
次の侵攻予定地は、宮城と呼ばれる地域だ。
現地の自衛隊が反攻作戦を実施して、住民をある程度保護しているらしい。
他にも、住民が武装して、ショッピングモールなどに逃げ込んでいるとのこと。
救助活動をしつつ、ゾンビの排除をしよう。
……このハムエッグ、めちゃくちゃ美味いな?!

４３３話　東北バイオハザード　その４

俺、クリス・レッドフィールドは、日本政府と、友人のマオの要請を受けて、ＢＳＡＡチームと自衛隊と共に、日本国内に発生したゾンビを掃討している。
迅速な対応により、パンデミックは最低限に抑えられ、広範囲にウイルスが拡散した割には、ゾンビのおおよその数は百万以下らしい。
さて、やたらと美味いハムエッグを食べた後は、装備の点検をして、出撃だ。
『はい、転移しまーす』
マオの声を聞いて、集まった兵士達。
次の瞬間には、別の場所に転移していた。
魔法とは恐ろしいものだ。
「がはっ、ぅぉぇ、あ、あ」
『マオ!!』
大量に吐血し、目鼻からも血が出ているマオ。
『あー、平気』
『だが、血が……』
『……長距離転移魔法ってのは大体、転移させるものの質量が大きければ大きいほど、距離が長ければ長いほど消耗が激しい。しかも、今回使った転移は、転移する人や物への負担を限りなくゼロにしているため、通常の数千倍の負荷がかかっている』
『無理するんじゃない！』
『良いんだよ。今回は貴重なポーションや魔法の触媒をたくさん用意してきたから、使っても平気だ』
『しかし……』
『俺なんかより、もっと助けを必要としている人がたくさんいるぞ』
そう言って、怪しげなポーションを飲み、血を拭き取ったマオは、岩のようなタワーシールドと巨大な弓、恐らくは巨大な爬虫類の革や骨で作られたと思われる鎧を装備して、最前線に陣取る。
その隣に、艦娘が一人。

長い金髪の、ドイツ系の美女だ。
『私はビスマルク。基本的に提督の指示に従うから、よろしく』
『ああ、助かる』
そうして、進撃を開始する。
主に、ゾンビが密集している都市部を制圧する。
ゾンビが存在しているのは主に、宮城と秋田という地域だ。山岳や風に遮られ、広範囲への拡散は防がれたのではないかと予想されている。
宮城と秋田の都市部が目標だ。

『これは、酷いな』
街がゾンビで溢れている。
『支援要請、頼む！』
『了解した、火力支援を行う』
日本軍のヘリに上空から火力支援を依頼して、ゾンビの総数を減らす。
「ビスマルク、やれ」
「ええ」
艦娘は、マントの中から、ドイツ製の重機関銃を二本取り出し、弾をばら撒く。
通常は車体や地面に固定して撃つ筈の機銃を片手持ちで放つとは、恐ろしい程の腕力だ。
マオは、バリケードを張り、近づいてくるゾンビを殴り飛ばして足止めをしている。
やがて、大通りが掃討された。
後は、俺達も動く。
『行くぞ！』
『『『イエスサー！』』』
ＢＳＡＡチームは、分隊ごとに建物内を掃討していく。
俺も五人程のチームで動き、室内のゾンビに弾丸を叩き込む。
『クリア！』

『クリア！』
『ムーブ！』
「た、助けてー！」
　む、人だ。
『マオ、来てくれ！』
『はいはい……、ん、感染してないね、じゃあ持ってくよ』
　どこからともなく現れたマオが、人を捕まえて転移する。
『進むぞ！』
『『『イエスサー！』』』
　このようにして、掃討を進める。
『いやー、ゾンビは撃てば死ぬから楽で良いわー。最悪でも食われるだけで済むとか慈悲深慈悲深』
『食われるのも悲惨じゃないかしら』
『普段の俺はダンガンロンパみたいな死に方してるからなあ。それと比べれば食われる方がマシだわ』
『まあ、確かに、いつも酷い死に方してるものね』
『もし俺が死んだら、ドッジ弾平の親父みたいな墓を立てといてくれ』
『何それ？』
『いや、何でもないよ』
　軽口を叩きながらゾンビを掃討するマオと艦娘。
『キシャアアア!!!』
『リッカーだ！』
『ほい！』
『アアアアア?!!!』
　リッカーの舌を掴み、壁に叩きつけるマオ。
『終わりだ』
『ゲキョッ』
　そして、巨大なタワーシールドで思い切り、壁とシールドでリッカーをサンドする。
　リッカーは潰されて、沈黙する。
『そして水分補給』

『それウォッカでしょ』
『ウォッカスプラッシュ！』
酒を吹き出しながら、ライターで着火して火を吹く。
それで、ゾンビを焼いて、怯ませた隙に、蹴りで脊椎をへし折り無力化。
『そしてこれは俺からのプレゼントだ！メリークリスマス！』
『今は夏よ』
爆発物を投げながら、盾を構えて押し通る。
圧倒的な進行スピードだ。
素晴らしいな。

そうして、宮城の制圧と救助活動はほぼ完了する。
『やったね！』
『ああ』
次は秋田の制圧だ。
即座に転移で前線基地に帰還し、晩飯にする。
『今日は豪勢にイクゾー!!!宮城解放おめでとうなのだー!!!』
馬鹿でかい鉄板で分厚い和牛ステーキを焼くマオ。
『ガンガン食え！そして働け！』
物凄いペースで肉を焼き、特製のオニオンソースをたっぷりとかけて、新鮮な野菜のソテーをお供に提供してくる。
『ほら、クリスも食え！うまいゾ！』
何故か顎をしゃくれさせながら、1ポンドはあろうかという大きなステーキを勧めてくるマオ。
『地球はでっかいフライパンで人生はちゃんこ鍋なんだよ!!!!』
『な、なんの話だ?!』
こいつ、頭が……。
『あー、提督、最近寝てないから、ちょっとおかしくなっちゃってるのよ』
笑いながら言う艦娘。
『寝ていない？マオ、最後に寝たのはいつだ？』

『十日前に五分間寝たぞ』
『寝ろ！今すぐに寝ろ！』
『しなやすしなやす』
クソ、この超人め！
無理し過ぎだ！
『ＢＳＡＡ補給部隊！マオの仕事を代われ！皿洗いくらいならできるだろう！マオはしばらく寝ろ！』
『俺はジャパニーズシャチクだから２４時間戦えるんだぜ？』
『寝ろ、二度同じことを言わせるな』
『おっすおっす』
『ビスマルク、だったか？マオを寝せてやってくれ』
『ええ』

マオを寝かしつけてから、俺も軽くシャワーを浴びて、ストレッチをしてから眠る。
全く、無理ができることは、無理をして良い理由にはならないんだぞ……。

４３４話　東北バイオハザード　その５

『おはよう諸君！さあ、朝食の時間だ！今日のメニューはマッシュポテトとチキンソテー、夏野菜のサラダにエッグマフィン、コーンポタージュだ！どれも美味いぞー！デザートにはうちの牧場のソフトクリームがあるから、しっかり食えよ！』
『おお、最高だな！』
『マッシュポテトにはグレイビーソースを溢れるほどかけてくれよ？』
『チキンはフライドガーリックをたんまり乗せてくれ！』
日本で発生したバイオテロ。
今日からは、秋田の制圧が始まる。
おお、今日の飯も美味いな……。

俺は、クリス・レッドフィールド。
対バイオテロ組織、ＢＳＡＡのメンバーだ。
『じゃ、今日もやりますか！』
秋田に転移し、侵攻を開始。
自衛隊の協力もあり、かなりのペースでＢＯＷの排除と救助活動が進められた。
『ハンターだ！』
『消えなさい』
たまに現れる強力なＢＯＷも、艦娘が大火力で消し飛ばす。
そのようにして、国内の制圧は終了した。
あとは、オスプレイにて、ワクチンをばら撒くだけだ。
大きな戦力は潰したから、残りは自衛隊に任せ、俺達ＢＳＡＡの中でも特に優れた選抜チームで、朝鮮に潜入する……。

マオの証言によると、日本の西側から飛んできたミサイルが爆発して、Ｔウイルスをばら撒いたとのこと。
発射地点は恐らく、朝鮮と見られる。

あらかじめ、朝鮮に侵入し、調査をしていたレオンと合流。
『どうだった？』
『発射地点は北朝鮮だ』
『それは……、国際的な問題か？』
ＢＳＡＡはあくまでも対バイオテロ組織であり、国家間の紛争に介入するつもりはない。
『いや、違う。今回は、北朝鮮による弾道ミサイルの試射実験で、本来ならば太平洋側に着弾する予定だったらしい』
となると……。
『何者かが、ミサイルの弾頭をすり替えた……？』
マオが言った。
『そうらしい。ミサイルの整備担当が何者かに賄賂を渡されていたという目撃情報があった。恐らくは、アンブレラの残党辺りがデータ集めに利用したんだろう』
成る程な……。
ミサイルを撃った北朝鮮に責任を押し付けて、自分達はどこかでデータ集めに奔走するということか……。
恐らくは、人口の多い日本にウイルスを放ち、どのように拡散するのかとデータをとっていたんだろう。
『よし、研究所の位置は？』
『地図で言うとこの辺りで……』
侵入の計画を立てて、少数チームで潜入することに……。

『行くぞ』
『おう』
『ああ』
『ええ』
俺、マオ、レオン、そして艦娘のビスマルクの四人で潜入。
当たりだ。
『兵士は……、これは、マジニだ！』
『プラーガタイプ２か……』

プラーガタイプ2……。
かつてのプラーガとは違い、拳大まで増殖した肉の塊であるプラーガを口内に押し込まれることにより、わずか数十秒で宿主を支配するという恐ろしい代物だ。
見た目も、人間の形をあまり損なわない故に、兵士として配備しているのだろう。
プラーガは、ある程度知能を残したままゾンビにする。
つまり、プラーガ感染者は、武器や銃器を扱えるのだ。これは、非常に恐ろしい。
『#＿／&☆☆♪＊○＋!!!×』
恐らくは北朝鮮の言葉だろう、それで何かを叫んだマジニを、マオは。
「ヒュウーーーゥ、セェイ!!!」
ジャンプして、５ｍ程の距離を一瞬で詰めると同時に、手刀でマジニの首を切り飛ばした。
そして、頭を踏み潰し、肉体を魔法で焼いた。
『行くぞ、これはマズイかもしれない』
『ああ、正面から入るぞ』
研究所のドアを開けて、侵入。
『研究所内の地図はない、か』
『俺が道を覚えておくから大丈夫だ』
その辺りは、マオに任せて良いだろう。
『まずは資料室を見たい。証拠を抑えよう』
『マオ、すまんが俺達はハングル文字が読めない。この案内板には何と書いてある？』
レオンが尋ねる。
『ん、この道を行った先が資料室だってさ』
『よし、当たりだな』
資料室へ入った。
資料は英語で書いてあった。
『マオ、Ｍｓ．ビスマルク、見張りを頼む』

『ああ』『ええ』
俺とレオンで、証拠となる書類を集めた。
どうやら、レオンの予想は的中しており、いつものように太平洋辺りにミサイルを飛ばす北朝鮮を利用して、ミサイルの弾頭をすり替え、バイオテロを起こし、責任は北朝鮮に全て押し付けて、データを集めたら逃げる……、とあった。
アンブレラのクズ共め……!!!
なんて非道なことをする！
実験とやらで、何百万もの命が失われたんだぞ！
許さん、必ず今回の首謀者は捕らえてやる！

再び、研究所内を移動。
俺が先頭でハンドサインを出しつつ移動し、前方を警戒。
そのすぐ後ろにレオンが左右の警戒をしている。
Ｍｓ．ビスマルクは後方警戒。
マオは……、何故かは分からないが、道案内や、危機察知ができるらしく、先行偵察などをしてくれている。
『次、曲がり角の先にハンター六体』
マオの警告を聞き入れて、俺は曲がり角からグレネードを投げる。
爆発とＢＯＷの悲鳴を聞くと同時に、全員で一斉射撃を行う。
『くっ、弾薬が減ってきたな……』
シューティングゲームのように、弾丸は無限にある訳ではない。
持ち歩ける弾丸の数には限りがある。
『そう来ると思って予備弾薬持ち歩いてるんだわ。ほら、レオンも。それとスポーツドリンクでも飲んどけ』
マオが懐から予備弾薬とスポーツドリンクを取り出した。
『助かる、ありがとう』
『ああ、ありがとう』
弾薬と水分を補給した後に、再び侵攻。

そして、屋上にて。

『遅かったな、ＢＳＡＡ！』
『何者だ！』
『お前達に潰されたアンブレラの幹部だよ！お前らのせいで、私の栄光への道は閉ざされた！元アンブレラと言うだけで、どこも雇ってくれはしない！学会からも追放された！こうなったら、また新たなバイオテロを起こし、世界の全てに私の力を見せつけ、新たな栄光を掴み取るしかないだろう?!』
『馬鹿なことを……!!』
『だが、お前達はここで終わりだ！私は今、強化型Ｃウイルスを摂取した！ここでこの国の人間を支配して、私が世界の頂点に立つのだ！フハハハハ!!!』
そう言って、変化する元アンブレラ幹部。
醜悪な四足歩行の獣のような姿になった。
全身の触手と前足を振り回して攻撃してくる。
『任せろ！』
マオが思い切り前に出て、盾で攻撃を防ぐ。
『これを！』
Ｍｓ．ビスマルクが、どこからともなく取り出したドイツ製のグレネードランチャーが、俺とレオンに渡される。
『撃て！』
『ッ！』
マオが叫ぶと同時に、俺達はグレネード弾を放っていた。
『ーーーーー!!!?』
四足の化け物が唸る。
『お前の相手は俺だろォン!!!?』
マオが盾で思い切り殴りつけ、無理矢理自分を敵のターゲットにする。
『ガアアアアアアッ!!!』
『ッ?!マオッ!!!』
マオが前足で弾き飛ばされた。
かなりの衝撃だったらしく、足がおかしな方向に曲がってしまって

いる。
『生きてるよ！』
マオは、無理矢理立ち上がり、なんらかの呪文を唱えると、再び戦線に復帰。
『ビスマルク！アハトアハトをぶち込んでやれ!!!』
『ええ！』
地面から大砲の砲身が伸びてきて、四足歩行の化け物に直撃。
『死になさい！』
轟音と共に発射された砲弾は、四足歩行の化け物の胴体を吹き飛ばし、真っ二つにした。
『トドメだ！Ｃ４を喰らえ！』
弱った四足歩行の化け物の頭に、プラスチック爆弾を貼り付けて、爆破するマオ。
四足歩行の化け物は完全に沈黙した。
『あとは、研究所に爆弾を仕掛けて吹っ飛ばすか』

その後の話だ。
北朝鮮内部のアンブレラ研究所を完全に破壊した後に、一旦日本へ戻った。
日本では、残敵の掃討と、日本国内のアンブレラ系研究所を破壊しておいた。
おおよそ一ヶ月ほどで、この騒動は収まったと言えるだろう。
そして……。
『マオ、本当にＢＳＡＡに来るつもりはないのか？』
『ああ、俺は旅人だからな』
『俺と一緒に国家直属のエージェントをやっても良いんだぞ？』
『いや、働きたくない』
『……そうか。なら、お前のことだ。またいつか、どこかで会うだろう』
『その時はまた、俺達に手を貸してくれ』
『ああ、もちろんだとも』

俺とレオンは、アメリカへ帰った……。
今回の戦いは、いつもと比べて非常に楽だった。
盾役のマオ、そして圧倒的な火力の艦娘。
バックアップも万全の体制。
いつもこうだと助かるのだが……。
まあ、あのマオに、借りを一つ返せたと思えば、気が楽になるか。
もし、また次があるのなら。
共に戦ってくれ、マオ。

４３５話　はい、サイドチェスト～！

「筋トレしたい」
　初雪がなんか言ってる。
　ふむ。
「ダンベル何キロ持てる？」
「バレたか……」

「その、すぐにアニメの影響受けるの面白いね」
「オタクはそういう生き物だから」
　さて、筋トレしたいと来たか。
　艦娘は基本的に、あまり体型が変わらないし、衰えたり太ったりは、余程不摂生をしないとならないんだよな。
　根本的に人間と違うから、フィジカルを鍛えるトレーニングよりも、技能や知識を蓄える方が有効だ。
　フィジカル面については十分にあるし、戦っているうちに自然と強くなっているはず。
　それでも鍛えたいと言うなら……。
「長門と武蔵か」
「いや……、あの女版街雄鳴造は呼ばなくて良いから……」
「いや、でもあの二人、相当詳しいぞ？」
　毎日めちゃくちゃ筋トレしてるし。
　最近は飛ぼうとするヘリに鎖を括り付けて引っ張るトレーニングにハマってるらしい。
「あの二人はちょっと腹筋割れてるくらいのエセ筋肉娘じゃなくて、ドラゴンズクラウンのアマゾンくらいのガチマッチョでしょ？やだよ私、あそこまで筋肉いらない」
　そうか……。
「じゃあ、神通はどうだ？トレーニングのプロだぞ？」
「いや……、神通さんの殺人トレーニングは心身が壊れるから。１６８時間耐久組手（実弾使用）は死ぬよ……」

そうか……。
「じゃあ、普通に鹿島呼んでこよう。鹿島は基礎トレーニングを教えるのがめちゃくちゃ上手いからな。鹿島のトレーニングを受ければ、幼稚園児でも一ヶ月で暗殺者になれるぞ」
「それも何か違う気がするけど……、まあ、良いかな？」

さて、鹿島を呼んで、トレーニングルームにジャージを着て移動。
「はい、鹿島です！初雪ちゃんが筋トレを軽くしたいとのことなので、お手伝いをしますね！」
鹿島は、スポーツブラの上に白いノースリーブ。
「鹿島」
「はい？」
「ちょっとバンザイして」
「こうですか？」
脇。
「ありがとう」
素晴らしい脇だ。
今ここに審査員がいたら、全員が１０点満点のプラカードを掲げるだろう。
トリプルアクセル級の芸術点あげちゃう。
「……あ、そうですか??後で脇でしてあげますね??」
ふー。
成る程ね……。
鹿島はエロ目線で見られるとすぐに反応するからな。
敵わんな。
「……筋トレのはずなのに淫猥な話を目の前でされた件」
あ、初雪が拗ねてる。
「ごめんごめん」
「お詫びに私とも……」
いや……、初雪はロリだから。
「サイドチェストでジャージ破るからそれで勘弁して」

「いや……、別に見たくないんだけど……」
「はい、サイドチェストぉー!!!」
俺は筋肉を膨張させて、着ているジャージを破り捨てる。
基本的に、北斗神拳とか南斗聖拳を齧ると、闘気とかそう言うアレで服を破ることが可能だ。
あとヤクザも、一瞬で上半身裸になることも可能。
「ヒェ～……」
割とマジで引いている初雪。
「司令官はあれじゃん……、うどんお兄様みたいな、設定上細マッチョということになっているけどイラストではヒョロガリ、みたいななんちゃってマッチョじゃなくって、仮面のメイドガイレベルのゴリゴリマッチョじゃん……。体重１００ｋｇ超えてるじゃん……」
まあそうだが。
「でも、最近ちょっと太って、体脂肪が五パーセントを超えちゃってさー」
「何なの？アスリートか何か？何でそこまで絞ってるの????」
「いや、俺、あんまり太らないんだよね」
「やっぱり人間じゃないじゃん!!!」
人間なんだがなあ。

「さて、今回はトレーニングという訳で、ダンベルを用意したんだが」
「何キロ？」
「キロで言えば……、５０００ｋｇだ」
「５トンじゃん」
うん。
「５トンだよ」
「……５トンじゃん?!」
「何か問題でも？」
「い、いや、無理だって、私非力だし」
「因みに、身体測定を前にやった結果では、黒井鎮守府で一番非力なのは如月だったぞ」

「でも、５トンだよ？行けるの？」
「俺は非力な一般通過旅人だから、今は闘気とか気功とかでバフ入れて持ててるけど、バフなしだと持てないんだよなー。かーっ！やっぱ一般人はつれーわ！非力な一般通過旅人だからなー！かーっ！」
「突っ込みどころ満載やめて？」
　え？
「まあ良いや、持ってみる……、あっ、重い！けど持てる?!」
「では、そのままアームカール行きましょうか！はい、まずは力を抜いて下さいねー」
　インストラクター鹿島先生が指示を出す。
「こ、こう？」
「はい、それじゃあ、息をゆっくり吐きながら、ゆっくりと、腕を巻くように持ち上げてくださいねー」
「ふぉお……」
　良いねえ。
「あと、何でこの部屋、床抜けたりしないの？」
「ああ、このトレーニングルームはバリバリに強化されてるんだよ。例え核ミサイルが降ってきても地形が変わらないぞ」
「そこまでやる必要ある……？」
　俺もトレーニングするか。
　取り敢えず、１００トンくらいのバーベルを持ち上げて、と。
「あ゛ぁ゛あ゛ぁ゛あ゛ぁ゛ァッ!!!!!」
　大変重い!!!
　が、まあ、これくらいなら割とどうにでもなる。
　筋トレとなると、闘気と気功以外の魔法的バフはオフにしなきゃならない。
　さーて、このままスクワット千回くらい行こうか。
「ひゃあ……、く！百一、百二……」
　俺がトレーニングをしていると……。
「提督……」

いつのまにか、笑顔の長門が。
「水臭いじゃないか！誘ってくれれば付き合うのだがな！」
その隣にはこれまた笑顔の武蔵。
「その通りだ！全く、トレーニングするならば私達も呼んでくれ！」
なんか、隣で、３００トンのバーベルでスクワットを始めた。
筋トレは伝染する……？

「ごひゃー、く！五百一、五百二ぃ！」
「ふっ、ふっ、ふっ……」
「はぁ、はぁ、はぁ……」
長門、武蔵とトレーニングを続けていると……。
ベンチプレス２００トンを持ち上げる日向、１５０トンを持ち上げるあきつ丸、同じく１５０トンを持ち上げる神通など、訓練愛好家達が集っていた。
ちなみに、初雪は端っこの方でドン引きしている。
「やべえよ……、やべえよ……」
と呟きながら震える初雪。
どうしたの？風邪かな？
「同じ艦娘のはずなのにこの差は何なの……？おっぱいではなく大胸筋、ふとももではなく大腿筋……」
え？
そう？
「これはこれで美人だし全然ありだと思います」
「司令官がそう思うならそうなんだろうね、司令官の中ではね」

そして。
「九百九十九、千……!!!っはあ!!!」
終わった。
「お疲れ様、提督！ほら、汗を拭いてやろう！」
長門にタオルで拭かれる。
「ほら、水分も補給しておけ」

武蔵にスポーツドリンクを飲まされる。
「いやー、久々に筋トレしたわ。動くと気持ちいいな！」
俺が言うと、訓練愛好家達が喜んだ。
「よし！このまま走ってくるか！取り敢えず５００ｋｍくらい！」
「「「おー!!!」」」

「つ、付き合ってらんないよ……、筋トレしたいだなんて言うんじゃなかった！陰キャオタクは素直に引きこもっておくんだった!!!」
「ほら、何やってるんだ初雪！行こう！」
「お、お助けえええーーー!!!」

４３６話　甲虫王者　前編

相変わらずの夏！
それとこれとはあんまり関係ないが……、ああ、いや、夏と言えば虫だし、関係はそれなりにあるかな？まあ、とにかく、かつて子供達の間で一世を風靡した、「ムシキング」という作品はご存知だろうか？
大体、二十代くらいの兄ちゃんに聞くと知っていると思うので、知らない人は聞いてみよう。
内容は、カードを使った一プレイ百円のゲームで、各国のカブトムシ、クワガタの虫カードと、じゃんけんに対応した三枚の技カードで戦うゲームだ。
画面には、自分の虫カードの虫と相手の虫が表示され、三つのボタンを使って相手とじゃんけんをして、勝った方が対応する技カードの技を発動。
相手の虫のヒットポイントを削り切った方が勝利だ。
もちろん、レアな虫ほどヒットポイントが多く、レアな技ほど攻撃力が高い。
漫画化、アニメ化もされた人気作だった。
今はもう、サービスを終了しているが。
因みに、新しいムシキングは色々と勝手が違うらしいが、俺は古い方しか分からない。
ザックの冒険編はマジで名作。
今〇俊版の漫画も話が重くて良かった。
そう言う訳でそんな話をちょっと黒井鎮守府内でしてみた。

今思えば、ちょっと失敗したなと思う。

俺は、朝早くから起きて、日課のランニングをしに、黒井鎮守府のグラウンドに出ようと、俺の私室がある黒井鎮守府の本館から出る。
『ギチギチ……、あ、おはようございます』
わー。

なんか二メートルくらいのカブトムシがいるー。
「ふむ」
よし。
「ンぁあ明石イィィ!!!!今度は何をしでかしたーーー!!!!」
工廠に怒鳴り込む。
「フフフフ……、私は明石ではありません!」
おおっと、なんかこれ見よがしな伊達眼鏡と髪型変更。白衣も着ている。
「私は……、虫博士のライトストーン博士なのです!!!」
そう言ってメガネをクイっと上げる明石、否、ライトストーン博士。
「僕、蛇博士じゃないよ!」
「はい?」
「いや、何でもない。夕張は?」
「私は、森の妖精のユーちゃんです!」
なんかこう、全体的にライトグリーンな服装と妖精っぽい羽を生やした夕張、否、ユーちゃんがエントリー。
「あ、そっかあ(超速理解)」
俺が先日ムシキングの話をしたからこんなことになったんだな。
つまり、巡り巡って俺が悪いということか。
悲しいなあ。
「つまり?」
「ちょっと前に虫型の殺戮兵器を造れないかと色々試してたんですが、飽きてやめたんですよね」
「うん、そりゃやめて正解だったね」
「でも、最近、ムシキングの話を聞いたので、もう一回計画を動かしてみたら、ちょうど良いのができたんですよ!」
ふむ。
「じゃあ、外にいる二メートルくらいの昆虫は、生物兵器?」
「はい!よくできてるでしょう?」
成る程。
「君は命を何だと思ってるのかなー?」

ほっぺたをつねる。
「消耗品であり、貴重な資源であると認識していますよ！」
うーん、この。
畜生である。
「まあ、やっちまったもんはしょうがないな。例えどんな経緯であれ、生まれてきた命に罪はないからね。でも、あんな大きな虫を許容できるほどの森はどこにもないけど、どうするつもりなんだい？」
「あ、そう来ると思って異次元に巨大な森を予め作っておきました。やっぱり、見た目の通り、資源を馬鹿喰いするんで」
「あと、大きさ以外に何を弄った？」
「知能と寿命ですかねー？パワーも頑丈さももちろん上げてます。あの大きさで飛行も可能なんですよ！」
「それと発声器官と日本語のインストールと、多環境適応調整、自己再生機能の取り付けもしました！」
ふむ……。
総評。
マッハで空を飛び、迫撃砲を防ぎ、鋼鉄を捻じ曲げるパワーを持つ。
寒冷地、熱帯関わらず活動可能で、自己再生能力を持ち、人間並の知能も持つ、数百キロの昆虫。
ガチな化け物である。
「まあ、分かった。但し、生み出したからにはちゃんと責任を持って管理すること！良いね？」
「「はい！」」

工廠組の二人を叱ってから、ランニングへ。
『あの、何かありましたか？』
カブトムシ君が話しかけてくる。
「君を生み出した存在に苦情をね」
『僕は、生まれてこない方が良かったのでしょうか……』
「いや、生まれた命に罪はない。君達、特殊改造昆虫兵器……、デザインドビートルは、明石と夕張の気まぐれで造られた存在だ。君達の住

む場所も用意してあるそうだから、自由に過ごしてくれて構わない」
『ありがとうございます……』
鎮守府で朝飯を作ってから、また外に出る。
『あ、どうも』
カブトムシ君はまだいた。
「森に帰りなさい」
『あの、それが、まだ森はちゃんとできていないらしくて、しばらくはここにいろと……』
成る程。
『それと、これを……』
カブトムシの虫カードと三枚の技カードを渡される。
「これは？」
『プロフェッサー明石が、試運転を頼みたいと……』
成る程。
基本的に、明石は、兵器は作りまくるが、テストはしない。
もしくは、外注する傾向にある。
となると……、俺がこのカブトムシ君に指示をして、戦いの練習をする必要があるのか。
「君はそれで良いのか？」
『はい、僕は戦うために生まれてきましたから。それに、僕もオスです。強くなりたい』
ふむ……。
「分かった、それなら、訓練の手伝いをしよう。どうすれば良い？」
『黒井鎮守府内の他のデザインドビートルと戦って、戦闘経験を得たいと思います』
成る程、虫バトルか。
『あ！あそこに早速、デザインドビートルがいますよ！バトルを申し込みましょう！』
ん？
どれどれ？
おや、あれは、朝潮と……。

『やいやい！お前、今、このノコギリクワガタのギリー様を睨んだな！』
　ノコギリクワガタだ。
「司令官、おはようございます」
「ああ、おはよう朝潮。何をやっているのかな？」
「こちらのクワガタのギリーさんが訓練をしたいと言うので、手伝いをしようと思いまして」
「そうか、親切心は大切だもんな」
「はい！」
　偉いなー、朝潮は良い子だなー。
『さあ、俺様とバトルしやがれ、ツルギ！』
『うん、良いよ』
　ってか、カブトムシ君、ツルギって名前なんだね。
「じゃあ、朝潮、相手になってくれるかな？」
「はい！ギリーさんに指示を出せば良いんですよね？」
「そうだね。さあ、やってみようか」
　ツルギとギリーが向かい合う。
「ギリーさん！挟んで！」
『おうよ！』
　早速、ハサミ技でくるギリー。
　俺は、ハサミ技に対抗して、ダゲキ技を使う。
「ツルギ！そのまま体当たりだ！」
『はい！やああっ！』
　ハサミ技（チョキ）はダゲキ技（グー）に弱い！
『ぐああっ?!!』
　ダメージを受けるギリー。
「な、なら、ギリーさん！投げ飛ばして！」
『おう！』
　甘いな。
「挟め、ツルギ！」
　ナゲ技（パー）にはハサミ技（チョキ）!!

更にここで技カード発動！
「カワセミハッグだ！」
『うん！』
まずは、挟んで弱らせる。そして、捕まえたまま飛んで、地面に叩きつける！
『ぐああっ!!!』
「ギリーさん?!」
『へ、へ、平気だ！』
「わ、分かりました！　では、次に体当たりを！」
『おう！うおお！』
よし来た！
「ツルギ！超必殺技、トルネードスローを見せてやれ！」
『はい！』
ダゲキ技（グー）にはナゲ技（パー）！
そして、カブトムシは、ナゲ技こそが最も強力な技だ！
『うおおおお!!!』
『うわあああ!!!』
ツルギは、ギリーを持ち上げて、回転してから投げ飛ばした。
ギリーは気絶した。
『やったあ！勝てました！』
「おめでとう」
そこで、朝潮が。
「流石は司令官！楽しいバトルでしたね！」
「ああ、そうだね」
「また、今度もやりましょう！」
「うん」
そう言って、朝潮は、ギリーを抱えて去っていった。
二メートル、数百キロの虫であろうと、艦娘の筋力ならば簡単に持ち上がる。
さて。
「これは……、艦娘と虫バトルする展開か？」

そう言うことらしいな。

４３７話　甲虫王者　後編

『僕、もっと戦いたいです！』
「ああ、まあ、分かった。行こうか」
カブトムシのツルギを連れて、虫バトルをする羽目に。
黒井鎮守府虫バトルだ。

『おらよ!!!』
『うわあああああ!!!』
「あー！コクワちゃーん！」
暁が、吹っ飛ばされたコクワガタを介抱している。
『日本の虫は雑魚ばかりだな！ハハハハハ！』
あれは……、ケンタウルスオオカブト、アフリカの、大きなツノが上下にある、大きくて美しいカブトムシだ。
「こら！あんまり調子に乗らないの、ラウル！」
『ヒ、ヒェッ！あ、姐さん、すみません！』
操っているのは……、ザラか。
「よう、ザラ」
「こんにちは、提督」
「何やってるんだ？」
「いえ、よく分かりませんけど、何だか、大きな虫がいたので駆除しようとしたところ、アカシのテストに付き合って欲しいと頼まれまして」
成る程。
『お前、日本のカブトムシか？弱そうなチビめ！』
『な、なんだって！聞き捨てならないぞ！』
「じゃあ、早速テストをやるか？」
「そうですね！行きますよラウル！」
『はい、姐さん！』
さて、どう来る？
「ｏｐｅｒａｚｉｏｎｅｌ!!!」

作戦一、か。
『おおお!!!』
これは……、そうか。
「ツルギ、右を向いて思い切り体当たりだ！」
『え?!でも！』
「俺を信じろ！」
『……はい！やああ!!!』
『な、何だと?!』
ザラの作戦一は、真っ直ぐ攻撃と見せかけて、相手の右側に飛び込んでハサミ技を入れるというものだった。
それに、ダゲキ技で返す。
『ダンガン!!!』
翅を広げて、思い切り体当たりするツルギ。
『ぐわあ!!!ま、マグレだ!!!』
「流石は提督！次、ｏｐｅｒａｚｉｏｎｅ３!!!」
『了解!!!』
これは……、正面か！
「ツルギ！ハサミ技だ！」
『カワセミハッグ!!!』
『ぐわあああああ!!!』
よし、勝ったな。
「ああ、負けちゃいました……。負けるということは、この虫は要らないでしょうか？処分しますか？」
とザラ。
「日本には、一寸の虫にも五分の魂ということわざがある。意味は分かるかい？」
「ええと、確か、弱い者にも心があるから、大切にしようという意味だったかと」
「そういうことだよ。例え負けても、別に鎮守府の敵になった訳じゃないんだから、いたずらに殺すのは良くないよ」
「殺す価値がないと？生かす価値もないと思うのですが？」

「価値の話じゃなくて、道徳の話だよ。殺すことはよくない。良いね？」
「分かりました！」

さて……。
『あ、プロフェッサー明石が、森が大体完成したので、視察をお願いしたいとのことです』
とのことなので、移動。
森は……、遠近感が狂うような馬鹿でかい森だ。
リットル単位で流れる樹液が滴る、百メートル程の木々。
綺麗な清流には、小エビや魚が。
草花は通常の三倍くらいの大きさだ。
しかし、地面の草は短め。
土は……、素晴らしく栄養のある腐葉土だ。
他にも、巨大なスイカやメロンなんかが群生している。
そこら辺に森を管理するためのアンドロイドがいる。
アンドロイドの見た目は、明石の趣味で完全にロボ型だ。
白い外骨格に、薄く光るブルーのバイザー。エヴァンゲリオンみたいな有機的なボディ。硬質ラバーや人工筋肉を多く使っているみたいだ。
『わあ……！ここが僕達の森なんですね！』
ツルギは喜んでいる。
『ちょっと樹液舐めてきます！』
どれ、俺も樹液を舐めてみるか。
『美味しい！』
「んんー？これ、何だ？」
馬鹿みたいな高カロリーの樹液だ。
甘過ぎて舌がじーんとする。
その他にも、不自然にビタミンなどの各種栄養素が含まれている。
「……それは良いとして、どうやって樹液を吸っているんだ？」
『ああ、口の部分が改造されていて、この鞭毛がストローのようになっ

ていて、液体を吸えるんですよ。人間の血液とかも吸えるらしいです。僕はできれば、そんなことはやりたくないですけど』

へえ。

辺りを見回すと、カマキリやカミキリムシ、バッタなど、様々な巨大虫が。

こういうコンセプトの世界も面白いな。

そうして、食事を済ませると、視察を再開。

「行け！カザス！」

「負けないで！グラン！」

『『うがあああああっ!!!!』』

長門と霧島か。

虫は、コーカサスオオカブトとグランディスオオクワガタ。

どちらも最大級に大きく強い虫だ。

『ふんぬあああああ!!!』

『ぬおおおおおおお!!!!?』

あ、グランディスオオクワガタが投げ飛ばされた。

「ふはは！カザスの勝ちだな！」

長門が勝ったようだ。

コーカサスとグランディスは互いの健闘を称えて、スポーツマン的に終わった。

他の場所では、陸奥がオウゴンオニクワガタを。

大和がヘラクレスオオカブトを。

武蔵がアクティオンゾウカブトを。

金剛がブルマイスターツヤクワガタを。

日向がタランドゥスツヤクワガタを。

そこら中で虫バトルが楽しまれている。

仲良くして偉いね！

そこに、時雨のエントリー。

時雨の連れている虫はー？

んんんんー？

『フシュルル……！コロス！コロス!!!』
目が赤くて、片方のハサミが金属になっている、ギラファノコギリクワガタだ。
んんんんんんんー？
待って、それ、今○俊版のムシキングで見たぞ?!!
カクタスかお前は!!!?
「行け、ギラ」
『ガアアアアアアッ!!!』
ギラファノコギリクワガタに指示を出した時雨。
ギラファは暴れ出す。
周囲の虫を蹴散らして、こっちに来た！
「ツルギ！」
『分かってます！』
ツルギは、ギラファの、毒の滴る金属のハサミに触れないように注意しながら、ぶちかました。
『ダンガン！』
『ギイイッ!!!?』
さて、厄介なのはあのハサミだ。
ハサミ技だけは絶対に食らっちゃ駄目だな。
『ガアアアアアアッ!!!』
「ツルギ！もう一度だ！」
『うおおおお!!!』
またもやぶちかます。
しかし、ギラファは丈夫だ。
なんとか、超必殺技のナゲ技であるトルネードスローを決めたいところだが、ギラファはナゲ技に有利なハサミ技を得意としている。
「ぶちかませ！」
『はい！』
『ガアアアアアアッ!!!』
あ、ナゲ技使ってきた。
『うわあああ！』

ツルギが投げられる。
成る程、完全に暴走していて知能が低いという訳でもないのか。
「ツルギ、すまん。次はハサミ技で行け！」
『はい！』
横からギラファを掴み、極めた。
ギラファの甲殻にヒビが入る。
『アアアアアアッ!!!!』
よし、今だな。
「ツルギ……、トルネードスローだ！」
『うおおおおお!!!!』
姿勢を低くして、ギラファのハサミに触れないようにしながら懐に入り込んだツルギは、超必殺技トルネードスローを発動。
ギラファを大木に叩きつける。
ギラファは、動かない。
よし！
……ん？
『お、れは、今まで、何を……？』
あ、ギラファが正気を取り戻した。
『君は、操られていたんだよ』
『そう、だ！おさげの女だ！刀を持ったおさげの女だ！や、やめろ、やめてくれ、俺の自慢の大アゴを削らないでくれ！あ、ああ、うわあああ!!!!』
ギラファは錯乱している。
何をしたんだ時雨は。
「ふむ……、実験は失敗か。毒の大アゴは回収しておこう」
そう言って、ギラファの毒のハサミを取り外して回収すると、闇に溶け込むように消える時雨。
恐ろしいボスだった……。
『旅人さん、ありがとうございました。僕は、この森で、仲間達と命令を待ってます』

「ああ、また夏には会いに来るから、ツルギも元気でな」
ツルギと別れて、黒井鎮守府に帰る。
とりあえず、最後に一つ。
時雨には説教が必要だ。

４３８話　黒井バトルシップランド

「遊園地とか、作りたくない？」
最近の俺は、ゾンビ騒ぎやら何やらで殺伐としていた。
何かこう……、キラキラしたような、綺麗なことをやりたい。
子供達に夢を与え、人々の笑顔を、こう……。
テーマパークで、笑顔を……。

「と言う訳で、黒井鎮守府の近くにある、日本近海の島を買い取り、テーマパークにします。まずは名前を決めよう！」
俺は、会議室に艦娘を集めて、ホワイトボードを軽く叩いた。
「ブレインストーミングだ、どんどん案を出して！」
「根の国」
「煉獄」
「ジャハナムランド」
「テーマパークってイワナ、書かなかった？そんな地獄めいた名前つけられる訳ないでしょ？！」
「タピオカランド」
「流行りに乗るんじゃあない！」
「ジャパリパーク」
「やめなはれ、やめなはれ……」
「甘城ブリリアントパーク」
「だからパクるのやめない？！」
「水龍敬ランド」
「やめろォ!!!」
艦娘達は基本的に遊園地とか行かないしなあ……。
まあ、たまにデートとかで連れて行くことはあるけど。
名前……、名前は……。
「黒井バトルシップランドとか……？」
「いいんじゃないかな？」
「それでいきましょう」

良いのだろうか……？
「次はキャッチコピーだね」
ようこそ、夢と魔法の王国へ、みたいな？
天龍が手を挙げる。
「ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｈｅｌｌ」
「あのさぁ……」
「え？かっこいいだろ？」
「テーマパークで地獄にようこそって何事だよ？」
次、時雨。
「Ｌａｓｃｉａｔｅ　ｏｇｎｅ　ｓｐｅｒａｎｚａ，ｖｏｉ　ｃｈ，ｉｎｔｒａｔｅ，とかどうかな？」
「だから地獄じゃないんだって！」
この門をくぐるものは、一切の希望を捨てよ。神曲のアレだ。
次、菊月。
「最後を告げる、評決の日」
「戦う気満々じゃねーか！戦わないの！テーマパークなの!!」
次、暁。
「えーと、大切な思い出をあなたに、とか？」
お、ええやん。
「よし、それで行こう」
次に決めることは……、そうだな。
「テーマパークのシンボルだな！」
俺が言った。
「ふむ、バトルシップランドと言うならば、そこら辺に船を置いておけば良いのではないか？」
と利根。
「そうだね、そんな感じで行こうか」
ちょっとデフォルメした感じの戦艦をシンボルにしよう。
次は、そうだな。
「アトラクションは何を作る？」
「ジェットコースター！」

「お化け屋敷！」
「メリーゴーラウンド！」
　うんうん！そんな感じだよな！
「恐竜がいる」
「ジュラシックパークじゃないから！」
「違法カジノがある」
「子供向けのテーマパークなんだよ！」
「提督と私の性行為を中継する」
「水龍敬ランドから離れて?!」
　全く……。
「さあ、アトラクションについて詳しい内容を考えよう」
　明石が挙手。
「ジェットコースターをマッハで空を飛ばすとかどうです？」
「却下！」
「ゴーカートに武装つけてぶつけ合うとか」
「クラッシュギアの時代はもう終わってるから」
「職員はブラジル水着の美女にしましょう」
「だから水龍敬ランドから離れて？」
　白露が挙手。
「合成麻薬の無料配布とか」
「法は守ってねー」
「本物の悪霊がいるお化け屋敷なんてどうですか？」
「安全が確保できないからなあ」
「来た人を殺し合いさせるとか？」
「バトルロワイアルやめろ」
　クソ、碌でもないな。
　夕張が言った。
「天皇陛下のご尊顔を燃やすとか」
「それは本当にマジで洒落にならないからやめて」
「表現の自由と言い張ればワンチャン……」
「ないから」

うーん。
「海の中にトンネルを作って、そこにジェットコースターを通すとかどうでしょう？」
と雪風。
よし、まともだな。
「採用」
「はい」
「どうした鈴谷？」
「立体映像でお化けを出すお化け屋敷とか面白いと思う！」
「よし、採用」
「はい」
「どうした熊野？」
「ＡＲを使った本格ゲームの設置とかはどうでしょう？」
「採用！」
「はい！」
「どうした巻雲？」
「人工生命との触れ合いコーナーはどうですか？」
「面白そう、採用」
うむ、決まってきたな。
「次は手元のスケッチブックに、このテーマパークのマスコットキャラクターを考えて描いてみてくれるかな？」

数分後。
「はーい！」
「おっ、村雨か。どんな感じだ？」
どれどれ。
……極めて写実的なビヤーキーのデッサンだった。
「マスコットキャラクターって言ったよね？ねえ？」
「ビヤーキーなんてマスコットキャラクターみたいなもんでしょ」
「君がそう思うならそうなんだろう、君の中では……」
「はーい」

お、望月……。
「ヒュッケバインじゃねーか!!!」
「ヒュッケバイン良いでしょ?!」
「いや……、ヒュッケバインは俺も好きだけど、テーマパークのマスコットにはなれないでしょ」
「何なら良いの?グルンガスト?」
「スパロボから離れて」
次。
「こ、こんな感じでどうでしょう?」
ガンビア・ベイがスケッチブックを差し出す。
「うーん?」
なんか、こう、五輪のマスコットキャラみたいな、なんの動物とも言い難い白い人型のキャラクター。
「じゃあこれで」
採用。
じゃあ、最後に……。
「パレードの内容を決めよう!」
パレードの内容だ。
夜のパレードは大事だよな。
テーマパークの目玉と言って良い。
「王蟲を……」
「著作権的に無理」
「戦車で……」
「そんなことしたら戦争アレルギーのキチガイ共が大喜びしちゃうから」
うーん。
お、ビスマルク。
「本物の魔法を使って、キラキラしたパレードをやりましょう!」
うーん?
「それで行こうか!」
そんな訳で!!!

近隣の島一つ買い取って、巨大テーマパークに改造したぜェ!!!
「黒井バトルシップランド、グランドオープン!!!」

４３９話　先生「裕太くん、夏休みはどこに行ったのかな？」

僕、裕太！
９歳だよ！
今日は、パパとママと一緒に、新しくできた遊園地に行くんだ！
黒井バトルシップランドって言う、Ｋ県からお船で一時間くらいのところにある島がぜーんぶ遊園地なんだって！
楽しみだなー！
「お、見えてきたぞ」
パパが言った。
僕は、まだ背が低いから、船の柵があって見えない。
「見たい！パパ、抱っこ！」
「ほら、見てごらん」
パパに抱っこしてもらって、遠くを見る。
「わあ……!!」
大きな山と、その上に赤いドラゴン。
白い石の門と、カッコいい戦艦。
大きな観覧車とジェットコースターも見える。
「すげー！」
「……ん？んんー？待て、あのドラゴン、動いてないか？」
パパが言った。
「ま、まあ、よくできた模型なんじゃないかしら？」
ママが言った。
その時、赤いドラゴンは空を飛んだ。
「すげー！」
「「……」」
ドラゴンだ！
本物だ！
「ま、まあ、ほら！最近の科学力は凄いから！」

「そ、そうね！」

遊園地に入った。

船から降りて、チケットを渡す。

受付はロボットだった！

『チケットを』

「はい！」

『確認しました、どうぞこちらへ』

パパとママは、なんかヒソヒソ言ってるみたいだけど、僕はどんどん前に進む。

「裕太！」

「何やってるの？早く行こうよ！」

「あー、まあ、うん、そうだな」

遊園地の中は……、凄い！

歯車がぐるぐる回る建物は、魔法の青い光で照らされている！

白い石でできた道と、沢山のロボット！

ツノの生えた白い馬が、鉄でできた馬車を引っ張って、花壇には見たことない金色のバラが咲いている！

三つの頭がある大きな犬が人を背中に乗せていたり、小さな羽根のないドラゴンが物を運んだりしている！

凄い！凄い！

こんな遊園地、見たことない！

「な、な、何だこれ?!」

「だ、大丈夫なの?!安全面とか?!」

パパとママは何か言ってるけど、僕はもう、待ちきれなかった！

ちょっとでも長くここで遊びたい！

「行こう！早く！」

「ゆ、裕太、危ないかもしれないんだよ?!どう考えてもあり得ないものがたくさんあるじゃないか！」

パパが言った。

と、そこに。

『こんにちは！マスコットキャラクターのクロイーだよ！』
わあ！
白くて、青い目、青いツノの生えた、丸いロボット。
「君、クロイーって言うんだ！僕、裕太！よろしくね！」
『はい、裕太君、よろしく！今日は、僕達の黒井バトルシップランドを楽しんでいってね！』
「うん！」
パパは、クロイーに話しかけた。
「あの、職員の方ですか？このテーマパークは一体、どう言うことなんですか?!」
『黒井鎮守府の技術力を総動員して、まるで使ってない予算を湯水のように使って、約千億円で作られたスペシャルなテーマパークです！』
「この明らかにおかしい技術力は?!」
『ご存知かもしれませんが、今や、人工義体などの実用化もされています！世界屈指の技術力を保有する黒井鎮守府ならば、人工生命体やアンドロイドを買い集め量産することも可能です！』
「……そう言えば最近、来栖川エレクトロニクスって会社が、人間そっくりのメイドロボを作ってたっけな。飛電インテリジェンスも、ヒューマギアを売ってるし」
『もちろん、テーマパーク内のあらゆる人工生命体は、人間に対して危害を加えないように調整してありますし、もしも何か問題が起きても、アンドロイド部隊が制圧と救助活動を行います！』
「ほ、本当に危険はないんですね？」
『危険はありません！是非、黒井バトルシップランドを、何も考えずに楽しんでください！』
「わ、分かりました……」
「ねー！早くー！早く行こうよー！」
パパは何で難しい話ばっかりするの？
「わ、分かった、行こうか」

クロイー君にバイバイして、僕はまず、近くにあった英語と剣の看板がある建物に入った。
「ママ、あれ、なんて読むの？」
「ええと、ソードバトル、ね」
「剣？」
ソードって剣のことだよね？
どんなのだろう？
建物の中には、ドアがズラーっと並ぶ。
ドアの反対側には、受付と、武器庫があった。
「すげー！」
パパは、受付のロボットに、どんなアトラクションなのか聞いた。
すると、ロボットが答えた。
『こちらは、黒井鎮守府において使用されている、立体映像による戦闘訓練システムをダウングレードしたものを、アトラクションとして再構成したシステムになります』
ロボットは、難しいことを言った。
『つまり、立体映像と自由に戦っていただき、スコアに応じた景品をお渡しする、ＶＲゲームです』
よく分からないけど、戦うゲームみたいだ。
点数が良いと、お土産がもらえるんだって。
お土産一覧を見てみる。
低い得点だと、お食事無料券とか、黒井鎮守府モデルのシャツとかハンカチ。
高い得点だと、自動翻訳イヤホン？自動翻訳マイク？異次元スーツケース？１６ＹＢのＨＤＤ？量子コンピュータ？ワープ装置？エアバイク？とか、よく分からないものがもらえるんだって。
とりあえず、子供用の剣を借りて、扉の中へ。
扉の中は、何にもない真っ白な空間だった。
『難易度を選択してください』
僕達の目の前に、難しさはどれくらいにするかの設定を選ぶ画面が

出る。
設定は、パパが、子供向けのゴア表現？なしのモードにしたらしい。
「わっ！敵だ！」
「キュー！」
可愛いスライムとか、変なガイコツとか、太ったカラスとか、弱そうなモンスターが何匹か出てきて、襲いかかってきた。
「やー！」
僕は、借りた剣でモンスターを倒す！
「ギエー！」
モンスターは、倒されると、白い煙になって消えた。
「あ！コインを落とした！」
「えーと、このコインが点数らしいな。銅のコインは一枚一点だそうだ」
ちぇー、一点かー。
「もっと難しいのやろー！これだ！」
ええと、なんで読むのかな？
ラインの乙女……？
『システム、戦闘モードを起動します』
「「わー！」」
巨大ロボットがビームを撃ってきた！
《ゲームオーバー！》
「あれ、勝てる人いるのかな……？」
「艦娘って人達は勝てるらしいな……」
パパとそんなお話をしながら、次のアトラクションへ。
この遊園地は凄く広いから、並んで待ったりとかあんまりしなくて良いみたい。
「あ、ママはあそこに行ってみたいわ」
えっと？
ママが指差したのは、「わくわく動物ふれあいランド」だった。
面白そう！

「こんにちは！わくわく動物ふれあいランドだよ！僕は人工妖精のアルト！この施設の説明をするね！」
妖精さんの説明によると、どの動物も好きに触って大丈夫だけど、暴力を振るったりしちゃいけないんだって。
それって普通のことだよね？
中は……。
「すげー！モンスターだ！」
本物のモンスターがいっぱいいる！
「おこんにちわー、ですにゃ」
「わー、猫が喋った！」

次は……、ジェットコースター！
「パパ見て！このジェットコースター、トンネルで海に潜るんだって！」
「へえ！凄いな！乗ってみるか！」
「私はジェットコースターは怖いから、ここで待ってるわねー」
ママは嫌がったから、パパとジェットコースターに乗る。
「わーーーー!!!!」
結構怖かったけど、海の中が見えて面白かった！
「次はあの精神崩壊コースター乗ろうよ！」
「い、いや！あれは流石にヤバいからやめよう?!なっ?!」
えー？
あの、空を飛んで回転するやつ、面白そうだけどなー。

他にも、精神崩壊お化け屋敷とか、精神崩壊メリーゴーラウンドとか、色々あったよ！
けど、凄く広いから、全部は見れなかった……。
最後に、お土産をたくさん買って、パレードを見る。
「わー！すげー！ねえねえ、あれって魔法?!」
「さあ……、パパはもう何が何だか……」
よく分かんないけどキラキラしてる馬車に、綺麗なお姉さんとか、

マスコットキャラのクロイー君とかが乗ってて、ドラゴンが空を飛んでる！
でも、これで終わりだと思うと、寂しいな……。
「……また来たいな」
僕がそう呟いた。
「……ああ、また、来年に来ような」
パパは、そう言って僕の頭を撫でてくれた。
うん、また来よう！

４４０話　黒井鎮守府牧場の警備強化

黒井鎮守府は、副業で畜産や農業をやっている。
牧場で乳牛を育てたり、豚、鶏、羊、ヤギ、ウサギなんかを飼っている。
基本的に、艦娘の膨大な食事量の関係から、かなり大規模な牧場を経営しているよ。
なので、黒井鎮守府の食料自給率はほぼ百パーセントだ。
明らかに日本じゃ育てられないような熱帯の植物も特殊な温室で育てて、果てはドラゴンなども育てている。
え？
日本のどこにそんな土地があるのか？
いや、日本はほら、意外と土地があるんだよ。
俺の知り合いに中川って言う警察官がいるんだけど、あいつの実家は、入り口から建物の玄関までにランボルギーニカウンタックを全速力で走らせることができるくらいに広く、高級車を五千台しまっておくスペースがあり、迷うほどに土地が広いらしい。
金持ちの知り合いといえば、桃華ちゃんって子の実家も馬鹿みたいに広かったなー。
他にも、鈴木園子さんとか、海馬社長とか、いおりんとか、琴吹ちゃん、七条さん、鷲巣様辺りはかなり金持ってるし、豪邸も馬鹿みたいに広いぞ。
だから、黒井鎮守府が巨大な農園や牧場、山、温泉、温室、庭園、どデカい建物を所有していても何もおかしくない。
良いね？

さあ、そんな広い黒井鎮守府には、毎日のように侵入者が現れる。
もちろん、ロボット警備兵を大量に放流してあるから、大抵は捕まえられるが。
侵入理由は様々だ。
マジモンのスパイから、遊び半分のガキまで、色々だ。

黒井鎮守府内でテロしようとした奴は、まあ、危ないから殺害も視野に入れて良いとは言ってあるが、極力、出来るだけ殺人は控えるように言ってある。
白露型？
……。
うん、まあ、ほら、スパイの運がなかったんだってことで。
で、でもほら、あれだよ、最近はそう言うスパイも減ってきてるから！
……嘘です、めちゃくちゃ増えてる。
更に、最近は、キチガイのエントリーも多い。
例えば、黒井鎮守府牧場に、ヴィーガンを名乗る活動家が、家畜を「解放」するために、柵を壊しに来たり、家畜を逃がそうとしたりする。
やめとくれ……、やめとくれ……。
おらのべこ逃がさねでけろー……。
冗談はさておき、死ぬ程迷惑だ。
衛生面、安全面に気を遣った牧場に、消毒もしてない人間が、どこを歩いてきたかも分からない靴で牧場を踏み荒す。
本当に勘弁してほしい……。
マジでやめてくれ……。
大体にして君達は牛や豚を逃した後、ちゃんと責任を持って飼うのか……？
家畜達も心のある生き物だから、警備ロボットを常に配置しっぱなしだと、その物々しい雰囲気を感じ取ってストレスになり、病気になってしまうかもしれないから、警備を増やすことも難しい。
この黒井鎮守府牧場は、黒井鎮守府の外周部分にあるから、侵入も容易だ。
え？
バリア？
いや、バリアは張れるよ？けど、消費エネルギーが馬鹿にならないんだよね。
馬鹿みたいに広い黒井鎮守府を覆うバリアとか、どんだけエネル

ギー食うんだよって話。
生産プラントが止まっちゃうだろ!!!
それに、バリアを張ったら艦娘がお出かけできないだろォン!!!?
うちの子達にちゃんとお出かけしてもらって情操教育するんだよぉ!!!
「と言う訳で、過激派ヴィーガンの連中にはほとほと困り果てているんだ。何か良いアイデアとかない？」
「「「殺しましょう」」」
俺が休憩室で愚痴ると、話を聞いていた艦娘みんながそう言った。
過激派ヴィーガンなんて目じゃないくらい過激派じゃん。ＩＳＩＳかな？
「い、いやほら、家畜って怖がりでさ、近くで人が死んだり、血の匂いがしたら怯えちゃってかわいそうだろ？」
俺がフォローする。
「では、捕まえて、鎮守府前で処刑しましょう」
と神通。
「怖い怖い、やめなよ」
「黒井鎮守府の財産を傷つけるのであれば、見せしめに殺すべきでは？」
「いや、そんな戦国時代じゃないんだから」
神通の頭の中は基本的に昔の侍だからな。
それも、江戸時代のような平和な世界じゃなくて、平安鎌倉辺りの。
源氏万歳と言わんばかりのストロングスタイルだ。
そんな訳なんで、神通は酒もがっつり飲むし、敵はさぱっと殺すしでとても怖い。
話が通じるタイプのバーサーカーだ。
神通は鎮守府前に晒し首という案を出してきたが、もちろん不許可。
黒井鎮守府を戦国時代に後戻りさせてはならない。今の時代に晒し首とか猟奇殺人だろ常識的に考えて。

「では、近づくものを狙撃するのは？」
と弥生。
「駄目だって、普通に迷い込んだお客さんだったらどうするのさ」
「でも、侵入者なら殺していいと思う……」
「いや、法律に則って動こうね？」
「軍事施設に侵入とか、射殺でも文句言えないと思う、よ？」
うーん？
あ、そうなのか？
そりゃそうだな、一応、黒井鎮守府は軍事施設で、機密やら何やらがある。
侵入者は射殺してもＯＫかもしれん。
んー、でも、なるべく殺しはなあ……。
「できるだけ拘束して返す感じにしたいな」
「そうなの……？」
うん、捕まえて身元を洗ってネットに流そう。
黒井鎮守府は優しい世界だから。
「時雨……」
「殺すよ」
「白露……」
「殺すね」
「村雨……」
「殺すわ」
だ、駄目だこれ!!!
魔人ブウだって説得すれば殺さないでくれるんだけど、この子達は悪だからな……。
滅亡迅雷ｎｅｔに接続されていらっしゃる？
「酷いことしないで……」
「「「はい」」」
俺は、首輪付きと牧場の見回りをしていた。
結局、警備ロボットの巡回を増やして、不審者を素早く拘束するこ

とにしたんだよね。
今日も三十人くらいのグループが来たので、全員捕まえて放流しようと思ったんだが……。
「なにこれぇ」
ヴィーガンの人々が狼に追いかけられていた。
ああ、食われた……。
「ほら、羊飼いが犬を飼うことはよくあるじゃないか」
と時雨。
「どう見たって狼じゃないか！まともなのは僕だけか！」
俺が怒る。
「まあまあ、彼らも、大好きな動物の糧になれて、きっと喜んでいるさ」
微笑む時雨。
「ぎゃあああああ!!!」「助けて!!!」「あ、ああ、食わないでくれ、食わない、で」
地獄絵図なのだが????
ああほら……、柔らかい内臓から食われてる……。
ありゃ死んだぞ。
「動物の為なら何でもすると言ってくれたからね。何でもしてもらったよ」
「そんなの本気で言ってる訳ないだろ……」
「いやいや、自分の発言には責任を持たなきゃならないだろう？いい大人なのだから」
はぁ～。
「だけど、提督は生かして帰すべきだと言うんだね？」
「そりゃね」
「では、あれを見て欲しいな」
うーん？
あ、白露型が中途半端に回復魔法かけてる。
「果たして、動物に食われかけた彼らは、これからも動物の為なら何でもできると言えるだろうか？見ものじゃないかな？」
「……時雨、そういう性格が悪いことはちょっと」

後日、元ヴィーガンの元アニマライツが、動物を皆殺しにするカルト教団を結成して暴れ始めたと聞いた。

……いや、うちのせいじゃないから。

４４１話　シチューをご飯にかけるのかどうかで旅人が悩むだけの話

「うーん……」
黒井鎮守府の食堂の隣で、ドーナツを揚げながら唸る俺。
「あの、どうかなさいましたか？」
鳳翔に心配される。
「ああ、いや、昼飯のメニューをどうするかと思ってね」
ご存知かもしれないが、黒井鎮守府の食事は日替わりメニューの二、三十品目のうちから好きなだけ選んで食べると言う方式だ。
廃棄も少なくなるように調整しているし、余り過ぎ、足りな過ぎと言うことはない。
基本的にメニューはこう。
１～８番目まで米やパンなど。
９～１２番目までがスープ。
１３～３０番目まで主菜と副菜。
ＥＸにデザートが三品目くらい。
生卵、温泉卵、ゆで卵、ハム、海苔、ふりかけ、チーズ、納豆、フルーツ類、ヨーグルトなどは、言ってもらえば出せる。
ソーセージやベーコン、目玉焼きにじゃがバターなんかの簡単なものも対応可能。
飲み物も何でも言えば用意する。
メニューは、旬の肉、野菜、魚、その他を３…３…３…１くらいの割合で提供しており、朝はメニュー少なめ、昼多め、夜普通。
和風と洋風は３：７くらいだろうか？
一口に洋風と言っても、我らが黒井鎮守府の艦娘は多国籍。アメリカンもあればおフランスもあるような感じだろうか？
もちろん、艦娘にも好き嫌いはあるから、その辺りも調整している。
海外艦は納豆やらくさややらは嫌いだし、なるべくならパンが良いらしい。

日本の艦娘は、ご飯に合わないものはあまり食べないとかある。
艦娘全員の好き嫌いは一応把握しているので、なるべく順繰り、好きなメニューを出してあげたい。
因みに、腐っても我々は日本海軍なので、毎週金曜日の昼はカレーである。
そんな俺と、厨房を任せてある鳳翔達は、主菜と副菜、スープ、デザートの二十品目のメニューを一日三回、考えねばならない。
これは、毎日割と悩んでいる。
現在も、ＬＩＮＥに昼飯をどうするかのアンケートをとって、そこから決定する感じにしているが、艦娘約二百人の意見からどれを選ぶかが難しい。
あ、今揚げているドーナツはおやつだから。
「クリームシチューとかどう？」
「良いと思いますよ。それなら、きのこ汁とビシソワーズはどうでしょう？」
「アリだな。主菜にサンマの蒲焼と……、栗ご飯だ、栗ご飯はどうだ？」
「栗ご飯！良いですねえ。もう秋ですから、栗ご飯は美味しいですよ！デザートはスイートポテトにしましょう」
「うん、うん、スイートポテト！良いな、首輪付きが農場でたくさんサツマイモを収穫したらしいからな、スイートポテトにしよう」
鳳翔と相談しながらドーナツを揚げて、トレイの上に乗せて砂糖をまぶす。
鳳翔はあんこの鍋をかき混ぜながら、どら焼きを量産。
「クリームシチューとなるとロールパンかな？」
「え？ご飯にかけるんじゃないですか？」
「えぇ……、シチューをご飯に？」
「日本の艦娘は割とやりますね。海外艦はみんなおかしなものを見る目で見てきますが」
「そら（シチューをご飯にかけたら）そう（なる）よ」
俺は、クリームシチューはパンにつけて食べるもんだと思ってるん

だが、日本の艦娘の中にはご飯にかけるという選択をしてくる子も多い。
まあ、別にちゃんと食べてくれるなら怒らないけど……。
あの子達は、あんかけとか煮物とか出すと高確率でご飯にかけて食べるからなあ……。
いや、気持ちはすごくよく分かるんだけどね？俺も日本人だし、横着してそう言う食べ方もするよ。
ほら、味噌汁にご飯入れてかっ込んだりとかするよね。
だけど個人的に、シチューをご飯にかけるのはどうなんだ？とは思う。
女の子なんだからもうちょっと慎みを持とうね？汁物をぶっかけて食うのはガテン系親父のやることでは？
まあいいや、俺は大人だ、寛容な心で受け入れよう。
むしろ、ご飯にかけると言うならば、それ用に調整してあげるくらいの気持ちが必要だな。
となると、味を濃くして、とろみをつけて……、隠し味に醤油かな？
そんなことを考えつつ、約三百個程のドーナツを冷蔵庫に突っ込む。
鳳翔も、同じくらいのどら焼きを冷蔵庫に突っ込んだ。
巨大冷蔵庫に「ドーナツ、賞味期限は九月二十五日まで」と書き込んだ張り紙を貼って、早速昼ご飯の調理を始める。
この巨大冷蔵庫は、一つの巨大なアイテムストレージであり、他の場所にある冷蔵庫から自由にアクセスできる。
現に、今冷蔵庫に入れたドーナツは、休憩室の冷蔵庫と繋がって、既に三十個が消失した。
作っても作っても、まるで熱々の鉄板にバターを押し付けるかのようなペースで消えていくから、作り過ぎなんてことにはならない。
さて、料理スキルでポンと料理。
三十分もしないくらいで、全品完成。
昼ご飯の配膳開始！

配膳は、黒井鎮守府謹製のアンドロイドに代行させる。
料理を作ることは俺達厨房組がやるが、配膳はロボットにもできるので、ロボットにやらせようと言う話になった。
いつも、厨房組は、ピークが過ぎた頃に、料理を温め直して食べていたから、それを見た他の艦娘が、配膳はせめてロボットに任せて、なるべくみんなで一緒に食事をしようと言うことになったのだ。
優しさが身に染みる……。

さて、俺は全メニューを日本昔ばなしサイズで注文。
合計で大体三十キログラムくらい、少な目の昼食を楽しむ。
空母、戦艦なら三、四十キログラム、駆逐艦なら一キログラムくらいの食事量だ。
「いただきます」
俺は席について、余り物を中心に構成されたメニューを食べる。
朝の食パンの余りをトーストして、縦に切ってスティック状にしたものに、クリームシチューをたっぷりとつけてパクリ！
「おっ、んまい！」
すかさず芋と人参をパクリ。
パンと野菜の優しい味を楽しむ。
秋刀魚の蒲焼も箸でほぐして一口。
「美味いな、流石は鳳翔」
栗ご飯をガーッと掻き込む。
美味え……。
やっぱり、旬の食材以上に美味いものはないんだよなあ……。
確かに、最近はハウス栽培なんかも凄いんだが、やっぱり、天然物の旬の素材が一番美味いように感じる。
日本風フィッシュ＆チップスもイギリス艦の為に出してみたんで、それも一口。
「おお、美味いな！」
口には出さないが、本場イギリスで食うより三倍は美味い。
そしてフランス艦に配慮した今日のパスタ、イカスミパスタもとり

あえず十皿。
うーん、これも美味いな。
俺が担当したが、白ワインでイカスミの生臭さを消してある。イカの切り身もコリコリでグッド。
そして、今日のゲテモノ枠、ワイバーンオムレツ。
ゲテモノ枠とは言え、みんな割とチャレンジャーであり、面白がって注文する。
しかも、味はしっかりと美味い。
うん、美味い。
そのように食べ進めつつも、食堂をさりげなく見回す。
やはり、料理人の端くれとして、みんなが喜んでくれているのかは常に気になってしまうのだ。
鳳翔達、厨房組も、ついみんなの顔を見てしまっている。考えていることは同じだろう。
さて、大体、艦種ごと、国籍ごとに固まって食べているのだが……。
まず、戦艦や空母の方を見てみよう。
彼女達は……、あ！やっぱりシチューをご飯にかけてる！
蒼龍は、バケツの三倍程の大きさの容器にご飯をもそっと入れて、そこに、バケツ一杯分くらいのシチューを、お玉でかけながら、レンゲですくってかっ込んでいる。
「美味しい！シチューはご飯に合う！」
合うのか……？
そして、チキン南蛮が見えなくなるくらいにタルタルソースをかけて一口。
「んんー！美味しいー！」
そしてご飯をガーッと掻き込む。
まあ、美味しく食べてくれるなら俺は何も言わないよ。
一方で軽巡。
天龍はどうだ？
「うんめー！」
量は、戦艦空母と比べれば可愛いものだが、それでも、一キログラ

ムはあろうかというご飯を頬張り、秋刀魚の蒲焼にかぶりついている。
そして、お供の麦茶で流し込む。
早食いだな、天龍は、釣りの時は平気で二時間三時間待てるのに、普段はせっかちなところがあるからな。
その隣の龍田は、天龍と同じくらいの量の栗ご飯をハイペースかつ下品じゃない食べ方で食べている。
その顔は笑顔だ。
駆逐艦は、少量のご飯をおしゃべりしながら食べている。
美味しいと言ってくれている。
嬉しい。
俺の目の前の鳳翔も、俺が作ったチキン南蛮を美味しそうに食べてくれている。
「あ」
鳳翔と目が合った。
「うふふ、やっぱり、みんなが美味しく食べてくれているか気になりますよね」
「そうなんだよなあ、毎日ちょっと不安になるよ」
「でも、旦那様は美味しそうにたくさん食べてくれますから、私は嬉しいです」
「鳳翔も、俺の料理を美味しそうに食べてくれて嬉しいよ、ありがとう」
「ふふっ、同じことを考えてたなんて、なんだか夫婦みたいですね……??」
「そうだね、別に夫婦ではないけど」
「旦那様との結婚生活が上手くいって嬉しいです??」
んん、艦娘特有の時折話が通じなくなる現象だ。
躍起になって否定しちゃいかんな。
「そうだね」
肯定しておこう。
肯定ペンギン。

「大好きですよ、旦那様??」
「うん、俺も鳳翔が大好きだよー」
まあ……、事実、愛していることは確かだし、細かいことを考えるのはよそう。

４４２話　オクトーバーフェスト

「オクトーバーフェストの時間だあああ!!!!!」
オクトーバーフェスト。
ドイツ、バイエルン州の州都ミュンヘンで行われる九月のお祭りである。
「えー、先日、うちは、あまりにあまった予算でテーマパークを建てました。それのね、収益がね、半端ないの」
確かに、初期の投資は千億円を超えたが、毎日人がめちゃくちゃくるので、このままのペースを維持したとして、だ。
７５００円のチケットを、一日十万人以上は来園するので、単純に考えれば一日の収益は７５億円！二週間も営業すれば初期投資が戻ってくる計算だ。
え？
軍人が副業していいのかって？
ふむふむ、いい質問だ。
では、この、４００話を超えた辺りで、今更その辺りについて話そう。
まず、俺の所属は日本海軍だ。
自衛隊じゃない。
つまりどういうことか？
この世界の日本には、陸海空の自衛隊と軍隊が両方存在するってことだ。
何故か？
それは、毎年のように訪れる世界の危機に対して、自衛隊だけではあまりにも無力だからである。
例えば、海から現れた巨大怪獣ゴジラ。
例えば、異世界から現れた破壊神ン・マ。
例えば、世界征服を企む狂人ドクターヘル。
まだまだいるぞ、キングギドラは？恐竜帝国は？日本にもヒドラはいるぞ？オルグ、ガイゾック、ボーゾック。そしてグロンギ、ワーム、

魔化魍、オルフェノク、ドーパント、イマジン。ガイア教とメシア教、テンプル騎士団、そして深海棲艦。
定期的に、滅亡の危機に晒されている日本は、ＧＨＱの軍隊の解体を突っぱねて、軍隊を存亡させただけでなく、新たに「戦う救助部隊」である自衛隊も結成したんだ。
だから、この世界の日本には軍隊がある。
軍隊は戦うことが仕事なので、小難しい規則はあまりない。
副業もオーケーだし、自己判断で武装を増やしても、どんな戦闘スタイルでも怒られないことになっている。
また、ＰＭＣの需要も大きい。
とにかく、戦力はいくらあっても構わないというのが国の本音だ。
だが……、まあ、上層部は完全に腐敗している。
現状、一部の優秀な軍人とＰＭＣのおかげで保ってるみたいなところはある。
俺も海軍の大本営から予算もらってないしね。
まあ、黒井鎮守府の建物の権利は、川内が攫ってきた大本営の要人を時雨が洗脳して、正式に俺の所有物として譲渡してもらったし、税金もちゃんと払っている。
今では巨大資本の塊である黒井鎮守府に対して手出しできないくらいに大本営が弱体化しているから、俺は好き勝手できるな。
だから、例え、立派な軍事費であるはずの黒井鎮守府の予算でテーマパークを建てようとも、オクトーバーフェストを開催しようとも、誰も文句は言えないのだ!!!
さあ、始めよう、黒井鎮守府オクトーバーフェスト!!!

こんなこともあろうかと、酒造についての免許を取っておいた俺。
オクトーバーフェスト用のアルコール高めのビールを作る。
黒井鎮守府牧場産の美味しいソーセージなど、たくさんのドイツ料理を山ほど用意して、今日から一週間、黒井鎮守府を一般公開するぞい！
もちろん金はとるけど、入場無料で、ビールなんか中ジョッキ一杯

で三百円のバカ安い値段で売る！
もう俺はね、全人類が酒飲んで美味いもの食ってれば平和になる説あると思うよ。
でも「隣の国と酒を一緒に飲めば戦争回避できる」みたいな大学生はＮＧな！
俺が言いたいのは、心にゆとりと、生きることの楽しみを知ることが平和への道の第一歩なんじゃね、って話ね。
よーし、じゃあ、早速、明日のオクトーバーフェストに向けて、黒井鎮守府のグラウンドを整備するか！
黒井鎮守府の面積を魔法で広げて、巨大なテントや簡単なアトラクションを設置。
グラウンドに速乾性コンクリートをばら撒き道路にする。
知り合いのサーカス団、仲町サーカスを呼んで公演してもらう。
お遊びでリングなども設置。
明石の比較的危なくない発明品や、職員のロボットを放ち、ゴミ箱やトイレなども設置。
スペシャルアドバイザードイツ艦！
「どう？こんなんで良い？」
俺が六人のドイツ艦に問いかける。
「ええ、まあ、要はお祭りだから、楽しくやれればなんでも良いと思うわ」
とビスマルク。
「うむ、料理もばっちりだぞ、流石だな」
とグラーフ。
「流石は私の王子様ですね??」
とプリンツ。
「あは、僕の騎士様ぁ、今日も素敵だよお??」
とレーベ。
「旦那様……??」
とマックス。
「んー！ビールもドイツビールの味です！完璧ですよー！」

とろーちゃん。
うん！
まあ、半分くらいは日本語が通じていないが、いつものことなので特に問題はない。

合格をもらえたので、次の日、黒井鎮守府オクトーバーフェストの開催だ！
スケジュールはこうだ。
まず初日、俺が開催の挨拶を三分で済ませて、オクトーバーフェストの開催。
料理はあらかじめ調理されているものを加熱したりすれば食べられるようになっているので、ロボットに軽く温めさせて売る。
ビールはビールサーバーを配置して、三百円入れれば中ジョッキ一杯分のビールが出るようになっている。
水は無料。
ジュースも用意。
ジュースは、黒井鎮守府の裏山で栽培された果物の百パーセントジュースである。無添加！無添加といえば回転むてん丸っていう漫画が凄くシリアスで女キャラが可愛いくて……。
いやいや、それはおいといて、とりあえずジュースも用意！
そして午後一時からは大テント内で仲町サーカス団のみなさんの公演を四時間。
それから、芸能事務所である３４６プロダクションにもツテがあるんで、アイドルを呼んでコンサートを。
那珂ちゃんも歌いたいらしいので送り出す。
これでＯＫだな。
準備は万端！
さあ、始めよう！

夏が終わり、秋が始まる頃。
黒井鎮守府では、オクトーバーフェストが開催された。

俺は、開会式において、羽目を外し過ぎないようにしましょうと言って、オクトーバーフェストはつつがなく開催された。
一日目から馬鹿みたいに人が集まった。
何万、何十万という規模で。
やはり、日本トップの芸能事務所、３４６プロの名前の大きさだろうか？
何にせよ、人がいっぱいだ。
俺の知り合い、黒井鎮守府のファン、安酒目当てのパリピ、３４６プロのファン、地元の人々。
様々な人々が、酒と美味い飯、そして見世物を目当てに、黒井鎮守府に現れた。
内容は、毎年恒例の夏祭りとやっていることは変わらない。
もちろん、例年の夏祭りもやった上で、今年からオクトーバーフェストもやるという欲張りセットだ。
社会経験を積ませる為に、艦娘は職員としてシフト制で放流してある。
アレだよね、文化祭みたいなノリだよね。
艦娘も楽しんでくれているみたいで俺は満足だよ。
演目は、仲町サーカスのショー、３４６プロアイドルのライブ、黒井鎮守府謎発明品万博、那珂ちゃんオンステージなどなど。
楽しいよ！

さて、俺はビールを片手に、見回りをすることにした。
やっぱりほら、人が集まると治安の問題がね。
まあ……、警備ロボットが多数巡回しているから、俺がやることはほぼないんだけどさ。
とりあえず、知り合いに挨拶しに行くか。
「よっ、しぶりん」
「あ、真央さん」
彼女は、今をきらめくトップアイドルの渋谷凛。
「飲んでる？」

「未成年アイドルが飲んでたらスキャンダルでしょ……」
　そりゃそうだ。
「どう？今回のライブ。ハコは小さめだけど」
「うん、ファンの人達がたくさん来てくれてるみたいだし、今回もいつも通りやるよ」
　ライブの入場料一万円の割に人がたくさん集まったのは、やはり３４６プロの人気があってこそなんだろうな。
「ライブ後は職員用のタダ券あげるから、色々と食べていくと良いよ」
「あ、ありがと」
　よしよし、しぶりんは良い子だな。
「あのさ、艦娘さんも来るの？」
　んー？
　あー。
「まあ、何人かは行くと思うよ？」
「うーん……、艦娘さんって、今ネットで大人気だから、負けちゃいそう」
　そうなのか？
「大丈夫だって、しぶりんも可愛いよ！」
「いや……、ちゃんとネット見てる？艦娘さんの人気、マジでヤバいよ？ツイッターとか……、ってか、真央さんのツイッターのリプ欄もヤバいじゃん」
　ツイッター？
「俺、リプ欄はあんまり見ないんだよね、通知も切ってるし」
「えっとね、とにかく、今ネットでは、黒井鎮守府の艦娘さんの隠し撮りとかでいっぱいなんだよ」
「へえ、そうなんだ！すごいね！」
「ユーチューブとかでも、無理矢理艦娘さんにインタビューしようとしてぶっ飛ばされたバカとかいっぱいいるんだから」
　そうなのか……？
「あとは、可愛いから、告白されたり、ナンパされたり」
　うーん。

その辺の対策も考えなきゃ駄目か……？

『『『お願い！シンデレラ！……』』』

ライブ中。

俺は、謎の敏腕プロデューサー的な雰囲気を醸し出しつつ、通路の脇に寄りかかりながら、サングラスをくいっと上げる。

「フッ、合格点、だな」

なんか適当なことを言ってカッコつけたあと、ライブを最後まで楽しみ、出て行く。

良かったな、今回のイベントも無事成功だ。

４４３話　黒井モール開店

さて……。

黒井鎮守府がバリバリ副業をやっていることは周知の事実である。

前も説明したが、違法性は一切ない。

黒井鎮守府製の製品は、主に農作物や生鮮食品、加工肉、乳製品を中心に、菓子類、電子機器、日用雑貨なども作成して、黒井鎮守府ブランドとして市場に出回っている。

マジックアイテムからエロ本まで幅広く売ってるから、魔術師協会に常に狙われていたり、財団からマークされたりしているけど、まあ多少はね？

でも、ネット通販とか、近場の物産展とかに売ってるだけで、あんまり流通はしてないんだよね。

消耗品や食料を黒井鎮守府で自給できるように……、と思ってのことだから、そんなたくさん市場に流す必要ないのよ。

あくまでも、うちのメインの収入は、深海棲艦の侵攻で潰れた海運業を再興させて得た利権関係だから。黒井鎮守府は今、世界の海運業の三割くらいに食い込んでるから、馬鹿みたいな利益を上げてるよ。

あとは裏の仕事も少々、嗜む程度に。

だが……、最近は、黒井鎮守府ブランドの製品が余るようになってきた。

工廠組が勝手に生産プラントを拡張しまくって、黒井鎮守府ブランド品の生産規模が拡大していたのだ。

いや、異次元倉庫に詰めておけば良いのだが、それでも、溜まる一方となると良くない。

唐突にテーマパークを作ったり、イベントを開催したり、投資したりと、金はどんどん使うようにしている。

物資もどんどん使った方が良い、無駄に溜めっぱなしにしておくのは良くない。

何かに使うだろと思って押入れに突っ込まれた古い道具なんかは使われない運命にあるだろ？

それと同じだ、使われない道具よりかわいそうなものはない。
だから……。

「黒井モール、オープンだ！」
売ることにした。

黒井鎮守府内にスーパーマーケットを作り、黒井鎮守府の一部をモールにした。
イオン的なアレだ。
四階建ての建物に、食品、日用品、衣類、電化製品などなどを詰め込んで販売することに。
店員は、アンドロイドと艦娘にお任せ。
鹿島がコンビニのバイトをクビになったので、このスーパーで働くことに。
え？鹿島がクビになった理由？
そりゃ自分主演のＡＶがＸＶｉｄｅｏｓで再生数殿堂入りしちゃったらもうコンビニの店員とかできないでしょ。
経営は霧島が片手間でやってくれるらしい。
他にも、暇な艦娘が経営やら接客やらをやってくれるらしいので任せる。
まあ、流石に、モールで死人が出たりとかはしないと信じたい。
ドラッグストアと本屋の担当が白露型、家電量販店やゲームショップの担当が睦月型と工廠組、何故か地下に武器屋ができちゃってることなど、少々（？）の不安もあるが、概ね問題ないと思いたい。
大丈夫、大丈夫。
なんかあったら、モール内の各所に設置された、記憶処理剤散布装置から記憶処理剤がばら撒かれて、事件がなかったことになるシステムだから。
多少のミスは許されると俺は信じている。
開店……、そして俺が、店内の見回りをする。

物珍しさから、来客数は多い。
まず、一階から見ていこう。
一階は、飲食店や日用雑貨、そして食品を売るコーナーが多い。
飲食店の責任者は厨房組がやってくれているとのこと。
厨房組は黒井鎮守府の良心とも言える穏健派代表の鳳翔を中心に、速吸、間宮、伊良湖と、まだギリギリ人間性が雀の涙の半分ほどはある艦娘達なので、問題はないだろう。
飲食店の価格帯は良心的で、味の分からない主婦の方々が雰囲気で行ってるような高い割にクソ不味いカフェ（笑）なんかよりずっと良い、安くて美味い店ばっかりだ。
食料品店は、黒井鎮守府ブランドの肉や、漁師さんの伝手で集めた魚、黒井鎮守府のバイオ技術で作った養殖魚、異世界で捕らえてきたモンスター肉、黒井鎮守府農場の野菜などを多数配備。
最早魔境と化している首輪付き農園では、越冬野菜の隣でカカオ（高雄ではない）が育つ超空間になっている。
え？
食品の安全基準？
世の中、八割のことは、相手の頬を札束で殴れば解決するんだよ？
目の前で札束ジェンガを組んでやったら、食品安全の検査官の人達は喜んでスルーしてくれたよ。
それと、日用品。
やっぱりね、ほら、艦娘は女の子だから。
化粧品、美容品、生理用品なんかは当然必要でしょ？
それに、ティッシュやら、マスクやら（艦娘は病気にならないけど、顔を隠したりするときに使うそうだ）、文房具やら……。
そう言った小物も必要だよね？
そんな小物も、黒井鎮守府ブランドで売り出す。
二階は、衣服やアクセサリー。
レディースを中心に色々と。
デザイン関係については、秋雲先生が片手間でやってくれました。
この辺は特に問題ないと思うよ。

三階は雑貨や家電。
家電は、まあ……、担当が工廠組なので。
黒井鎮守府では型落ちの量子コンピュータとか、この前作ったＶＲゲームの本体やソフトなんかが置いてあるね。
とにかく、工廠組は、発明品のテストをしてくれる人を探している。
工廠組特製家電には、購入者に対して、同封されたアンケートに答えてくれたら粗品を送ると言って、なるべくデータを集めようとしているみたいだ。
雑貨？
雑貨は普通に雑貨だよ。
置物とか芳香剤とかマジックスクロールとか。
四階は本屋とドラッグストアだね。
白露型が担当なので多少はアレだが、まあ多少はね？
地下は……。
まあ、その……。
武器屋ァ、なんですけどォ……。
多少はお目溢ししていただきたいなー、なんて……。
ある程度ダウングレードされた黒井鎮守府特製の武器や礼装、魔導具を売ってるんですわ。他にも、悪魔合体施設なんかもある。
あれほど止めようとしてきた魔術師協会の奴らもこっそりと礼装を買って帰る。
あとはまあ、ヤの付く自営業とか、デビルサマナーとかが来るね。
まあ、多少はね?!多少はね?!!
さて、とても平和な黒井モール。
どんな感じになっているのか、見てみよう。

４４４話　黒井モール　前編

黒井モール開店……ッ!!!
俺は責任者だが、責任は取らないぞ！
何がどうなってもマジで知らんからな！

立体駐車場が併設されたモールの、五つある入口の一つ、南口からモールへ入る。
『イラッシャイマセ』
黒井鎮守府制式採用型アンドロイドが挨拶をしている。
尚、アンドロイドは俺の趣味によって女性型のロボ娘だ。
店内の雰囲気。
一階はクリーム色の床のいかにもなショッピングモール。高級志向よりかは、庶民的な雰囲気だ。
さて、南口から左手に見えるのは食料品店。スーパーだね。
黒井鎮守府の厳選食材が並ぶ。
え？大丈夫大丈夫、食べても直ちに問題はないやつしかないから。
これは本当だ。衛生管理やら何やらはしっかりやっている。
確かに、ドラゴン肉やパタポン族の野菜なんかを売っているが、衛生上にも健康にも問題がないクリーンな食品を売っているんだよね。
そりゃ、異世界から持ってきた食品を売りますとは大っぴらには言えないから、上の方は札束ビンタで黙らせてるけどさ、決して人間が食べちゃいけないものなんて売ってないよ。
そこは信じて欲しいし、確かに言える部分だね。
そして、スーパーの中にはもちろん、生活雑貨もある。
衣類洗剤雑誌、ベビー用品まで。
え？ベビー用品？
……艦娘が赤ちゃんプレイしたいって言うからわざわざ作りました。
あの子達全員、隙あらば孕もうとしてくるから気が抜けない。
鹿島がね、鹿島がね、「提督！赤ちゃんができた時のために、子供の

あやし方の練習をしましょう！では私が赤ちゃんになるのでお世話をお願いしますね！」とか言ってね……。
まあ、楽しいから良いんだけどね？
鹿島はこと性行為においてはガチだから。
しっかりミルクも飲んだし、おしっこも漏らした。これが一流か……、と俺は戦慄したね。
もちろん、その有様はＸＶｉｄｅｏｓで全国公開し、鹿島の赤ちゃんっぷりは世界中に発信され、五千万再生を記録した。
あの優しげなウルトラＡ級の美女が、オムツに失禁しながら泣きわめき、俺をパパと呼んで甘えまくる痴態をばら撒いたのだ。
自ら。ノリノリで。
ネットではサキュバス扱いされ、最近は、童貞相手なら視線だけでイかせられると豪語していたよ。
流石に、飲食関係の店舗スタッフに鹿島がいたら、男性が食事中に思わず射精してしまう恐れがあるので、鹿島は二階のアクセサリー店のスタッフにしてある。
それでも、エロ親父やエロガキが、鹿島の姿を一目見ようと、女物のアクセサリー店に入り込んでは、メンタルズタズタになるような酷い振られ方をして消えていく。
後で鹿島のところには行くとして、今は黒井モール一階の飲食店を見て回ろうか。

黒井モールには、チェーン店は一切入っていない。
全て、黒井鎮守府ブランドの製品の店だ。
まず、目に付いたのは粉物屋。
ここは龍驤がプロデュースしている。
え？龍驤は関東出身？
……でも今はそんなことはどうでもいいんだ、重要なことじゃない。
この粉物屋は、店舗名を『粉物屋ＲＪ』と言い、たこ焼きからお好み焼き、とん平焼き、焼きそば……、とにかく色々な粉物を出す。

メニューを増やすと廃棄が増え、コストが無駄になるのが常だが、我々黒井鎮守府には、謎の空間湾曲技術により、時間が停止した空間に物資を保存できるので、食品が調理されずに廃棄されるようなことは基本的にないのだ。

なので、豊富なレパートリーのメニュー、本場大阪の味が、ここ、Ｋ県で楽しめる訳だな。

龍驤は、艦娘の中でも良心が芥子粒くらいはある良識派なので、よく、店舗スタッフのアンドロイドに混ざって、お好み焼きをひっくり返す姿が見られる。

そう、エンターテイメント性を考慮して、粉物の調理場はガラス張りになっていて、調理シーンを見れるようになっているのだ。

そして、我々黒井鎮守府は、営利目的でやってる訳じゃないから、お好み焼きにもとん平焼きにもがっつり肉を入れる。

そういうところでコストを削るような真似はしたくない。

お肉はたくさん入っていた方が幸せでしょ？

いや……、ヴィーガン？の人達は知らんけど、少なくとも俺は、お好み焼きや焼きそば、とん平焼きに肉が多めに入っていると嬉しい。

そして、値段も安く、三百円くらいで売っている。

たこ焼き十個で三百円。

まあ、大阪だとこれくらいは普通だよ。

懐かしいなー、昔、あいりん地区で日雇い労働やっててさー。

あの時はちょっと魔術師協会に追われてて、しばらく身を隠すために……、っと、そんな話はどうでもいいか。

とにかく、粉物屋は、安い値段で高品質、本場大阪の味を意識した感じになってるよ。

そしてハンバーガー屋。

『Ｔｈｅ　Ｂｉｇ　Ｓｔｉｃｋ』という店名で、責任者はアイオワである。

まあ、アイオワは基本的に料理なんて殆ど出来ない上に、普段は海外旅行に行ってるから、ほぼ名前だけだ。

しかし、メニューの考案は、アイオワの視点による、本場アメリカのハンバーガーを再現している。
ジャップのお上品なハンバーガーとは違い、アメリカンで豪快なカロリーボムが楽しめるのがウリだ。
アイオワが大好きなアメリカのハンバーガーチェーン店、Ｆｉｖｅ―Ｇｕｙｓ―Ｂｕｒｇｅｒｓ＆Ｆｒｉｅｓをパク……、リスペクトしたラインナップになっている。
まあ、サイズ的に、日本人じゃ食いきれないので、通常サイズはパンとパテ一枚のハンバーガーだ。
ハンバーガー、チーズバーガー、ベーコンバーガー、チキンバーガー辺りを基本に、１０種類以上のトッピングメニューから選んだものをグッと挟んで提供。
パテ二枚のビックサイズ、三枚のキングサイズもあるよ！
ホットドッグ、サンドイッチもあり、ポテトも必ず揚げたてのものを提供する。
値段も安く、ハンバーガーとポテトをセットで注文すると、コーラが無料でついてくる。
持ち帰り可能。

こっちは、『カフェトリエステ』だね。
責任者はローマ。
そう、イタリア人のローマは、コーヒーに死ぬ程拘るのである！
……本当に、イタリア人ってコーヒー大好きなんだよ。
あんまり〇〇人は～みたいなことを言う主語でかおじさんは害悪なので、こう言う言い方はしたくないのだが、本当にイタリア人は隙あらばコーヒーを飲むんだ。
ＢＡＲ……、立ち飲み喫茶店がそこら中にあって、朝に一杯休憩中に一杯昼に一杯おやつに一杯定時で一杯夜に一杯……、みたいな感じでいっつもコーヒー飲んでるんだよね。
その上、コーヒーのバリエーションも実に豊富なんだよ。
ローマは、豆から淹れ方から、全てに拘ってるから、美味いコーヒー

の淹れ方をいつも研究している。
そんなローマ特製のレシピで淹れられた美味いイタリア式コーヒーと、軽食を出すカフェがここだ。
雰囲気は、木の床と、黒を基調としたシックな店舗で、お洒落で落ち着いた、大人の雰囲気。
少々格式高く、とっつきにくい雰囲気があるが、その分、本当に味が分かっているお客さんが来るようになっている。
まあ……、本当にコーヒーの味がわかる奴なんてそうそういないんだけどね。
ほら、そう言うのはさ、情報を食いに来てるとかなんだとかラーメンハゲが言ってたじゃん？
雰囲気バッチリ決まってるから、味音痴だけど雰囲気を味わいたい人がたくさん来てるし、いいんじゃないかなー、ってことにしておこうか。

さあ、次は二階を見に行こうか。

４４５話　黒井モール　中編

黒井モール。
まあ、アレだよね、一階は平和平和。
フランス艦監修のレストランとか、鳳翔監修の定食屋、間宮監修の甘味屋など多数。
ここだけでも、東京メトロ激戦区の飲食店の老舗のような、ハイレベルな味が楽しめると大評判である。
一階はいつも満員御礼でございますよ、と。

さあ、二階を見ていこう。
と言っても……、特筆すべきこと特になしなんだけどね。
二階は衣服とアクセサリーのお店だよ。
子供服からマタニティドレスまでなんでも、レディースを中心にメンズも少々ってところかな。
え？
子供服？
いや……、俺も分からないけど、艦娘達がいずれ必要になるとか言ってて……。
いや、マジで分からん。
子供とかいらないんだけど？やめて？
それと、黒井鎮守府ブランドの服。
大衆向け、高級品、最高級品の割合は３：５：２くらいで、どちらかと言えばハイブランドを中心に売ってるみたいだ。
スーツからコスプレ用品まで、幅広い品揃えが自慢で、ウエディングドレスすら売ってる。
ウエディングドレス……？
なんか知らんけど、うちの子がみんなウエディングドレスやら白無垢を作ってるの。
何でだろうね！怖いね！
いつ着るの？と尋ねたら、深海棲艦がいなくなればすぐにとか言っ

てた。
頼むから全滅しないでくれ、深海棲艦。
今は九月なのでアレだが、水着も売ってるし、カバンやポーチなどと言った小物類も多数用意されている。
もちろん、服や小物は、流通させても問題ないレベルのマジックアイテムもある。
特に、火の無い灰から仕入れた銀猫の指輪なんかは可愛いと女子高生に売れている。
それと、ここには鹿島が勤務しているんだが、鹿島目当てにエロガキやエロ親父が現れることが多い。
明らかにアクセサリーなんかとは縁のないようなキモいデブがニヤニヤしながらカメラで無断で撮影してきている。
すると、鹿島が笑顔で近寄り……。
「あの、撮影はお控えください」
「ぶ、ぶひっ！ぼ、僕は」
「ええと……、勘違いなさるお客様が多いので、これは何度も言っている事なのですが……、私は、大好きな提督になら、どんなプレイもやりますけど、貴方のような祖チンの包茎野郎のゴミクズみたいなチンポでは、私をイかせることなんて百年かかっても無理なんですよ？」
「ひ、ひっ」
「私の愛するフィアンセである提督以外の男なんて、虫けら以下のゴミカスですし……。気持ち悪いので、お引き取りください」
「ひいいー!!」
と、ボロクソに言って追い出している。

三階は雑貨と家電だね。
まあ、普通にちょっとした雑貨と家電を売ってるだけだ。
違法性は一切ない。良いね？
雑貨は、まあ、黒井鎮守府は女所帯であるからして、化粧品や生理用品なんかも置いてある。
黒井鎮守府特製の化粧品は、かなりラグジュアリーな出来で、若い

子向けの化粧品が多い。
何せ、艦娘の外見年齢は、小学生から大体２５歳くらいの年齢層ばかりだ。
おばさん向けの化粧品は作っていなかったので、急遽ある程度は作ったらしいが、それでもやはり、メインターゲットは若者になる。
監修は、二階の服飾関係と同じく、鈴谷、熊野、陸奥辺りがやってくれている。
絵の具、保存食、家具……。
まあ、強化されたロフトや無印だと思ってもらえれば大丈夫かな。
家具は俺とゴトランドが北欧系の家具を中心に、黒井鎮守府で採れた原木から作ってある。
本革を使った高級なソファなど、本場スウェーデンのブランド物家具にも負けない出来だ。
家電屋は……。
明石がね……。
これも明石って奴の仕業なんだ！
俺は悪くねえ！ハメられたんだ！二つの意味で！
明石と夕張の家電屋は、引くほど安く、バリバリの高性能で、テストはほぼやってないという危険物。
工廠組が言うには、「私達は新発明のアイデアが洪水のように溢れてくるんです！いちいち動物実験や臨場実験してる暇はありませぇえええん!!!」とのこと。
頼むから勘弁してくれ。
量子コンピュータ、核融合バッテリー、コンピュータウィルス……。
ヤベーもんを平気で販売している。
購入時にどうなっても知らないですよ？という念書を書かされるそうだ。
いや、だからさ、どうなるか分からないものを人に売らないで????
その辺りをやんわりと注意したら、「三時間おきに射精しないと金玉に激痛が走る謎の奇病を引き起こすウイルス」を注入されそうになったので、俺は怖くなり、引き下がった。

俺は……、無力だッ……!!
まあ、ぶっちゃけ、どうなっても知らないよ、という念書を書いた上で、不安定な発明品を買うのなら、それは買う人の自由だと思う。
俺は今までの旅で、品質的に怪しいものを色々と入手してきたが、最終的に、「嫌なら買うな」の一言で大抵のことは片付くんだよね。
まあ、生活必需品を専売にして値段を釣り上げる、とかじゃなければいいんじゃないかな。
それに、結構売れてるみたいだし。
各国の研究者やスパイが、大枚を叩いて、黒井鎮守府特製の超技術発明品を買っていく。
自国で解析するつもりなんだろうな。
まあ、黒井鎮守府の技術力は軽く数千年先を行っているから、解析できれば凄いんじゃないかな。
できれば、ね。
その他にも、黒井鎮守府の製品として有名な、フルダイブ式のＶＲゲーム機と、そのゲームソフトがたくさん売ってある。
これが売れに売れているのだ。
いつぞやの、仮想空間で夫婦間の遺伝子を解析して子供をシミュレートするソフトや、ファンタジーＶＲＭＭＯ、ＦＰＳガンシューティングなど、様々なソフトを売りさばいている。
値段はかなりの強気設定だが、ここでしか手に入らないので、毎日馬鹿売れで、人波に流された明石が「物売るってレベルじゃないですね！」と叫んでいたのが、ネットミームとしてツイッターに投稿されている。
因みにこのＶＲゲーム機は、フライトシミュレーター、軍事教練、格闘訓練、手術訓練など、幅広い分野で使えるスーパーマシンなので、ゲームに興味がない人達も買いに来ている。
あと、知り合いの総理大臣の桃さんが、軍事教練に使うから卸してくれとのことだったので、国にもいくらか卸しておく。
因みに、ＶＲゲームは、身体能力の高さが反映されるので、デブやガリのヒキニートなどは逆に活躍できない。

なので、最近は、ニートがＶＲゲームの為に鍛え始めているとのこと。

いや、働けよ。

え？俺？俺はいいの、職業旅人だからね！

４４６話　黒井モール　後編

黒井モール、問題の四階だ。
四階……、責任者は白露型。
もうこの時点で嫌な予感と震えが止まらない。
一同驚愕！白露型のまさかの運営に震えが止まらない……！
ガキが……、舐めてると潰すぞ。
そんな感じで、凄く……、凄い（語彙力喪失）。
四階の半分は本屋、半分はドラッグストア。
本屋から見てみよう。
入口の方は普通に、漫画本や近頃話題の小説なんかが並んでいる。
アメコミの隣にジャンプが置いてあるのは不思議だが。
まあ、白露型は読書家だが、あまり流行り物や漫画本はよく分からないらしい。
エロ本も多数。
この辺は普通なんだよ。
だけど、この本屋は、奥に行けば行くほどマニアックな本が置いてある。
希少本も山程置いてあるが、法外な値段だ。
例えば、大正時代に書かれたフランス語版の日本昔ばなしなんて、一冊５０万円を超える。
因みに、白露型はコレクション用の自分達の希少本は、うちの図書館に厳重に保存されているから、ここの本屋で売っている希少本は、コレクションのあまりやダブりだそうだ。
そんなトレーディングカードみたいなノリで良いのだろうか……？
更に、この本屋には、本棚や、本の中に謎が隠されていて、その謎を解いて、指示通りに店内を歩くと、魔法的な空間転移が可能だ。
すると、隠し部屋の魔導書売り場に辿り着くことが可能である。
魔導書売り場では、一冊最低でも数百万円はするような、魔導書の写本や、白露型謹製の魔導書が売られている。

驚いたことに、この魔導書売り場にも、何人かの魔術師が定期的に現れるらしいそうだ。
白露型の名は、既に、魔術師のネットワークの中ではヤベーやつ扱いされている。
俺もそうだが、白露型も全員、魔術師協会に禁術指定された。
俺の業界でのあだ名は、『歩く禁術』だ。
その名の通り、明らかにヤバい禁術を覚えているからな。
その禁術を全て伝授された存在として、白露型も悪名が轟いている。
しかし、フリーの魔術師や、デビルサマナー、この世界で人に化けて生きている人外など、そう言った存在にとって、魔術師協会に追われている人達の店だというのは、別に避ける理由にはならない。
魔法関係者にとっては、その知識が自分の研究に役立つかどうかを見るものであって、神秘の秘匿やらは知ったこっちゃないのが本音だ。
まあ、この前、今代の葛葉ライドウが視察に来た時は、流石の俺も「オッ、死んだな俺！」と思ったんだけど、普通にスルーしてもらったので九死に一生を得た。
聞いたところによると、桃さんが色々と手配してくれたらしいね。
桃さんからすれば、日本のデビルサマナーの実力アップは喜ばしいことなんだってさ。
まあね……、この辺はちょっと掻い摘んで説明するとね。
ヤタガラスはそもそも、第二次世界大戦で大暴れしたので、解体されたのよ。
そして十年くらい前、日本の政権交代で地獄を見たのは誰もがご存知だと思うのだが。
その時、よりにもよって、民主党の人達は、日本を裏から霊的災害から守る国防組織『ヤタガラス』の予算を全額カットした訳ね。
事業仕分けだっけ？それのせいで、太古の昔から日本を守ってきたヤタガラスはガタガタになり、霊的災害が多発、葛葉四天王も、度重なる戦いで、今代のライドウとゲイリン以外は死亡。

桃さんが政権を奪った頃には、ヤタガラスはほぼ死に体だったそうだ。
俺はその後、ヤタガラスの立て直しに協力したり、ライドウさんと自衛隊のクーデターを鎮圧したり、アメリカ大使に化けた雷神トールを消しとばしたりと大忙しだった。
そしたら、なんか気がついたら、ヤタガラスの名簿に俺の名前が載ってた。全力でお断りしておいた。
黒井鎮守府が密輸やら兵器開発やらで大儲けしていることについても、日本に対して直接的な霊的攻撃をしない限りは動かないよと確約してもらったので安心安全。
でも、白露型が定期的に外なる神を召喚していることについては、アレを逃したらどうなるか分かってるね？と脅されてしまった。
怖い……。
ライドウさん個人とは友人だが、ヤタガラスという組織自体はまた別で、ヤタガラスはしつこく勧誘してくる。
今の俺は週休七日で、これ以上働けば過労死してしまうと丁重に断ると、「何言ってんだこいつ……」みたいな目で見られた。
だって君達ブラック企業じゃん。
言わば自衛隊みたいなもんでしょ？霊的災害の度に、夜中に叩き起こされたりして出勤すんのやだもん……。

そして、ドラッグストア。
合法合法。
全然合法。
風邪薬、ピル、ビオフェルミン、各種サプリ。
飲んでも平気なやつだよ。
それと、簡単なマジックポーションの類を少々。
い、いや、薬事法……、はその、アレなんですけど、こ、効果はバッチリだから！副作用もないし！
あとは媚薬とか……、排卵誘発剤とか……。
大丈夫、大丈夫なやつだから！大丈夫ですよ！本当です！

因みに、このドラッグストアにも、魔術的な暗号が隠されており、それを解読して特定の行動をとると、店の奥に行ける。

店の奥には……。

うん、大丈夫大丈夫、本当に大丈夫だから。

バレなきゃ大丈夫なやつだし、大丈夫だから。

うんうん、本当に大丈夫。

ヒュドラ毒？エーテル？バジリスク毒？モルヒネ？劣化版超人血清？

……い、い、いや、いやー！何言ってるか分かんないですねー！

俺はちょっと、マジで、そういうのは分かんないんで！分かんないんで!!!

では、最後に、問題の……。

いや、今までに問題がなかったとは一言も言ってないが、問題の……。

問題の地下を見ていこうか。

４４７話　黒井モール　裏編

黒井モールの黒い部分、地下の武器屋に行こうか。
行きたくねえ……。
でも俺、責任者だしな。
さあ、黒井モール地下。
ここは、武器屋だ。
そう、武器屋である。
やってしまいましたなあ……。
まず、この武器屋に入るには、立体駐車場の屋上に階段で登り、ボイラー室に入り、ボイラー室に隠されたタッチパネルに１２桁の暗証番号を入力し、隠しエレベーターで地下に降りなければならない。
地下は、入り口前に警備用のアンドロイドが複数体存在するゲートがあり、ここで武器を預けてもらう。
銃、刀、杖……、そう言った危険物を持っての入場はお断りだ。
火薬とか置いてあるから、万が一誘爆！とかになったら黒井モールは更地になる。核ミサイルや水爆も置いてあるし。
それと、初見のお客さんには注意事項の説明も忘れずに。
注意事項の内容は、店内での喧嘩の禁止、許可のない魔法発動の禁止、撮影禁止、他のお客さんへの無理な干渉を禁止……。
そんな感じかな？
でも、一番大きな約束事はこれだ。
『ここで買った道具で日本の秩序を大きく乱した場合、買い取った人間のデータはその筋の人間に公開し、黒井鎮守府も全力で殺しにかかる』ということ。
まあ、そんなノリで、近未来的な気密ゲートを通過すると、一般的な武器を販売する武器屋と、魔術的な素材や道具を販売する魔法店、そして、大規模な破壊兵器を販売する黒井鎮守府超技術販売店の三つが存在している。
まず、一般的な武器屋から見ていこうか。
ここの武器屋は、常識の範疇の武器類が販売されている。超技術で

できたレーザーライフルでもなく、魔法で作られた魔剣でもない、ぶっちゃけ、買おうと思えば買えるレベルの武器類を売っている。
ここの価値は寧ろ、古物やらをやり取りすることだから、割と歴史的に価値のあるものとかが置かれているのが特徴かな？
例えば、俺が気まぐれで打った刀剣（免許はあるが認可は取ってない）とか、軍用品の横流しを買い取った海外の銃器とか。
ここには、ヤクザやマフィア、一般通過殺し屋などが来る、平穏な武器屋だ。
他にも、現行兵器なら大抵は置いてある。
ジープ、装甲車、戦車、自走砲、戦闘機、戦艦、ミサイル……。
大口の取引先は東城会だな。
あそこは質の良い米軍から流れてきたグロックを山程買ってくれた。ありがてえ。
まーね、黒星なんざ使ってらんないもんねえ。
中華の横流し品なんてほぼサタデーナイトスペシャル、ジャンクガンだよ。
ジャンク?!水銀燈ちゃんになんてことを!!（急な発作）
……ああ、すまない、正気を失っていた。
おれはしょうきにもどった。

次は魔法道具店を見ていこうか。
まあ……、その、アレだよね。
責任者は巻雲なんだけどね、あの子ったら地下に特大の魔法具品店と、オークション会場を作ってくださいやがりましたのです。
どうすんのこれ……？
俺は知らない！
知らない知らない私は知らない！
乱暴だ反則だと抗議してみたが駄目でした。
俺は……、無力だッ!!!
ペナルティー……、キーック!!!
まあ、喧嘩はやめよう、ナオコも言ってるからな。

まあ良いよ、なら、好きにやろうよ。
ここにもヤタガラスから、ライドウさんが監査に来たけど、ここで買われたもので大規模な霊災が起きた時には、買い取った人間のデータを渡すと言うことで許された。
わちきゆるされた！
まあ、常識に考えりゃそうだわな。
あくまでも研究、自衛に使ってくれってこと。
いや、もちろん、大規模に組織同士の抗争に使ってくれても構わないよ？
けど、その場合は確実にヤタガラスが、葛葉が動くだろう。
そうなった時、俺達は秩序側に味方するよ、ってことね？
大規模な殺し合いなら、空間を閉鎖してその筋の人達だけで集まってやるとか、工夫してね。
さて、店はこんな感じかな？
まずは、魔法が使え、魔法に理解のあるホムンクルスや悪魔の店員をそこらに配置。
やり取りはマッカ、日本円、マグネタイトが基本だが、買取もやっているので物々交換も事実上可能。
買取窓口もある。
買取窓口には、今代のライドウさんが定期的に魔道具を売ってくれるので、その代わりに日本円をごっそり渡してる。
ヤタガラスはね、基本的に金がないからね。
稼ぎ頭のライドウさんは酷使される運命にあるのだ……。
え？金王屋？
あのさ、このご時世に違法な魔法的物品を売買できる店舗がその辺にあると思う？
今の世の中じゃ、うちみたいに国と繋がりがあって、攻め落とすのがほぼ不可能なくらいに戦力があって、その上で馬鹿みたいな資本力があるグループじゃなきゃ、魔道具のやりとりなんてできないのよね。
そりゃ今よりずっと神秘に満ちていた古代や中世、ギリギリでも大

正くらいまでならなんとか大丈夫だろうけどさ、令和のこの世の中じゃ、魔道具の密売なんて無理だよ。
今までは、魔道具の取引は、もっぱらネットオークションでやってたらしいんだけど、詐欺が横行して、それどころじゃなかったそうだ。
それが急に、この黒井モール地下武器魔道具店の登場で、「適正価格で」「詐欺られない」で魔道具が手に入るようになったのだから、その筋の人間は大喜びしてるよ。
さて、入口のすぐそこにはマジックスクロールコーナーがある。
綺麗に整理されたマジックスクロールは、ノースティリス産から、ゴブリンをスレイする人のいるところなど、色んなところから集めてきたもの、それと黒井鎮守府で作ったものを売っている。
魔法的なものの値段はピンキリだが、マジックミサイルくらいなら二、三万円で買えるよ。
純魔法属性の槍をそこそこの速さで発射するマジックミサイルのスクロールは、手札の一枚として十分に有効だろう。
純魔法属性という事は、百パーセントが『神秘』による概念的なダメージであるからして、深海棲艦相手にも有効だ。
二、三万円で軽巡ホ級並のモンスターなら殺せるんだ、そう高い買い物でもないだろう。
人体に当たった時の威力は設置型のバリスタ並。もちろん、当たれば人間は殺せる。
その他にも廉価なスクロールが多数ある。
『鑑定』五万円、『帰還』五万円、『轟音の波動』十万円。
高価なものだと、『＊素材変化＊』一千万円、『援軍』八百万円、『成長』五百万円と、マジックスクロールはピンキリだ。
高価なマジックスクロールは受注生産もやってるから、受付で半分前金を払って予約してくれよな！
そしてこちらは魔道具コーナー。
魔道具がたくさん！
魔道具は基本的に馬鹿高いよ。
悪魔からぶん取ったりするものだからね。

うちの子が訓練気分で魔界に殴り込んで悪魔を虐殺して、たくさん拾ってくるから安く売れるけど。
デビルサマナーに大人気だね。
例えば、あそこにある鏡。
あれは物反鏡と言って、使うと、ほんの一分くらいの間だけ、相手の物理攻撃を反射するバリアを張れるんだよね。
いくらすると思う？
あれ、一千万円。
たった一分のバリアで一千万円だよ。
こっちの、使うと死者が生き返る『反魂香』なんて、五億円もする。
体力と魔力を回復させる『ソーマ』は五千万円、力を少しだけ強くする『力の香』は二億円。
総じて、魔道具は高価だ。
だが、これでもバリバリ売れてるから、世の中は分からないな。
更にこっちは魔法武器コーナー。
魔法武器はね、まあ、その……。
売る気がないんじゃないのか、って程に高価なんだよね。
えー、例えば、こちらの『デスブリンガー』なんですが……。
これ、一度斬りつけると、三～五回斬りつけた分と同じだけの物理ダメージと神秘ダメージを与える魔剣なんですがね。
お値段は……、百億円です。
いや、本当に……。
百億円とかボり過ぎでは？と思うかもしれないけど、その筋の人間からすれば、喉から手が出るくらいに欲しい武器なんだよね。
ピンキリだけど最低数百万円、最高級の魔剣となると、下手すりゃ兆行くんだよ……。
それと、銃器と魔弾の類も少々。
鎧なんかも売ってるよ。
こんな恐ろしい値段設定でも、デビルバスターやらデビルサマナー、魔術師などは平気で買っていく。
世も末だなあ（他人事）。

それと、最大の目玉は地下オークション。
さっき、高い魔剣は兆行くって言ったけど、それは正確じゃない。
あまりにも貴重な品はオークションにかけるんだ。
もちろん、定期的にオークションは開催しているから、持ち込みも可能。
過去の最高額は、三兆円でカオスドラゴンの卵が高名な魔導師に買われたっけな。
税金？
……ははは。
えっと、それで、この地下の大オークションは、二週間に一回のペースで開かれている。
オークションの一週間前までに、売り物の申請をしてくれれば、一般人でも参加可能だよ。
ただし、価値があまり低い物だと、出品はお断りするみたいだね。
このオークションは最高級品のみを取り扱っているから、その辺りは厳しい。
逆に、ここのオークションはレベルが高いから、ここで出品を許可されるようなものは品質が良い証拠。
まだ三回しかオークションはやってないんだが、口コミで広がった情報を聞きつけた裏世界の人間が山程来ている。
まあ……、魔道具店はそんな感じだ。
オークションの時にまた来よう。

そして、超技術武器屋。
ここは、特におかしなものはない。
黒井鎮守府製のレーザーガン、プラズマライフルなどの携行火器から、警備用のロボットまで幅広く販売している。
このＭｒ．ハンディと呼ばれるタイプのロボットは、一台三百万円と大変にリーズナブルでございます。今なら三年間の保証付き！
あとはまあ……、核ミサイルとか、水爆とか。
非核三原則？

……ははは。
それとモビルスーツ、マッスルトレーサー、アーマードコア、ナイトメア、アームドトルーパー、パーソナルトルーパー、アームスレイブ、メタルギア、バルキリー、レイバーなど、機動兵器も多数用意してあります。
俺のオススメはこのグルンガストかな？
値段？
……八千億円くらいかな。
それでも色んな国や組織が買ってくれるので、僕満足！
傭兵組織なんかがたくさん買ってくれるんだよね。
ＰＭＣ様様ですわ。

まあ、最終的に分かったことは一つ。
「地下の武器屋が地上のモールより百倍以上利益上げちゃってる……」
どうすんのよこれ……。

４４８話　デビルサマナー旅人　前編

うーん？
んー？
「最近は治安が悪くなってきたな……」
「えー？どの辺が？」
休憩室のテレビで、ガス爆発によりビルが吹き飛んだというニュースを見ながら、俺は呟いた。
そこに、ニンテンドーＳｗｉｔｃｈでファイアーエムブレムをやっている望月が、俺の独り言に反応した。
「ん、ああ……。これ、ガス爆発にしてはここんところの燃え方がおかしいだろ？」
「んー……、そうだね。じゃあ、これはなんなの？」
「これ、魔法で焼かれた跡だ」
「あー……、そっち関係？」
そうだ。
世の中には、表の社会の人々が知らないだけで、魔術師がいて、デビルサマナーがいて、ヤクザがいて、悪の組織がいて、狂った神の狂信者がいる。
今回は……、多分、デビルサマナー関係だろう。
「今回は、悪魔召喚者の起こした事件だと思うよ」
「何で？どの辺で分かるものなの？」
「警察の動き」
「警察？」
「警察も、世界の裏側を知ってはいるからね。ほら、あの車のマーク」
「……三本足の鳥？」
「あれは、ヤタガラスだ」
ヤタガラス……。
有史以前から日本を霊的災害から守る国防組織……。
現在はなんか知らんけどガイア教とかメシア教とかとバチバチやってるらしいよ？知らんけど。

「ヤタガラス？」
「まあ、こいつらは……、悪魔関係の事件を担当する公務員だな」
「へー、悪魔かー」
「因みに、天使も悪魔だからな」
「は？」
「悪魔は人ならざるものの総称ってこと。神も天使も幽霊も悪魔」
「ああ、はい、成る程ね。……ん？」
「どうしたの？」
「その……、もしかして、私達艦娘も悪魔って事にならない？」
「……」
俺は、無言で悪魔召喚プログラムを起動し、召喚可能な悪魔の欄を見る。
『Ｌｖ５００：破壊神：長門
Ｌｖ４９０：邪神：陸奥
Ｌｖ４９０：鬼神：伊勢
Ｌｖ４９０：鬼神：日向
Ｌｖ４４０：妖精：雪風
Ｌｖ４７０：地母神：赤城
……
……』
「いや……、なんか……、君らも悪魔にカウントされるっぽい……」
「えぇ……（困惑）」
すうっと、画面を下にスクロール。
『Ｌｖ４５０：魔人：望月』
「ほら」
「何これ」
「悪魔召喚プログラム」
「何それ」
「コンピュータ上で悪魔を召喚する儀式を自動で行なって、悪魔を召喚、管理できるプログラム」

「それに私の名前があるの？」
「うん」
「うわ……」
「因みに俺のステータスこんな感じ」
『Ｌｖ１５０：魔人：新台真央
ＨＰ：８７０
ＭＰ：５５４
耐性：全般的に強い
力：１３６
技：１３６
魔：１００
体：１４０
速：１４０
運：８０
マハラギオン
マハジオンガ
マハブフーラ
タルカジャ
ラクカジャ
ディアラマ
地獄突き
食いしばり』
「……悪魔召喚プログラムに名前が表示されるってことは、司令官も悪魔にカウントされてるんじゃ？」
「ちょっと何言ってるか分かんないですね」
「あれ？って言うか、司令官はもっと多芸だよね」
「あー、悪魔召喚プログラムに表示されるステータスは、悪魔召喚プログラムで決められたものしか表示されないんだよ」
「と言うと？」
「例えば、いろんな魔法が使えても、悪魔召喚プログラムの都合上、悪魔召喚プログラムのデータバンクにある魔法に変更して表示される、

みたいな」
「へー」
コンパイルされちゃう訳だね。
のーみそこねこねコンパイルってか。

さて。
俺が何を言いたいのか。
何でわざわざ悪魔の話をしたか。
理由はもちろん、お分かりですね？
裏世界がこんな裏ワザ（大天使メタトロン召喚の儀と、それを利用し連鎖的に魔王ベルゼブブの召喚を狙う裏組織の動き）でみんなを生贄にし、この世界を破壊しようとしたからです！
覚悟の準備をしておいてください！
近いうちに潰しに行きます！
あの世にも問答無用で来てもらいます！
貴方達（メシア教ガイア教）は犯罪者です！
黒井鎮守府の白露型拷問ルームにぶち込まれる楽しみにしておいてください！
良いですね！
……つまり、また世界の裏側で悪党共が蠢いている。
メタトロン、ベルゼブブ、どちらが出てきても大変なことになるんだよなぁ。
少なくとも、このレベルの生贄を集めて召喚したら、分霊とはいえども、レベルは３００を超えるだろう。そうなると、街がまとめて何個か吹っ飛ぶ。最悪なら、国一つが消える。
そんなことしたら経済損失とかとても怖い。
俺もデビルサマナーの端くれとして、ちょっとくらい動かなきゃな！

艦娘達は今、黒井モールの運営で大忙しだ。
貴重なウィザードタイプの艦娘は全員、地下の魔道具店の運営に

回っている。
今週末にはまたオークションをやる予定だから、それまでにはこの事件を終わらせないとな。
さて……、今回呼び出されそうなのは、メタトロンとベルゼブブの分霊だ。
分霊、つまり、魔界の本体の端末。
だが、これでもかと神秘に溢れているこの日本においては、大体レベル３００程で顕現する、と思う。
レベルは、１で一般人、３０でセミプロ、６０で一流、１００で組織のボス並。
えっ？ひょっとして、俺って強い?!
そんなことはない。
このデビルアナライザで測定されるレベルは、正確には、強さではなく含有されるマグネタイトの量を目安にしている。
あー、つまり、レベルが高いほど「存在力」が大きいって感じかな？
レベル低くても強い奴は強いしねえ。
デビルアナライザのレベルは、あくまでも、どれほどの神秘を持つ存在かを示しているだけだね。
神秘の密度みたいなものだね。当然、高い方が強いが、ただ高ければ勝てるほど戦いってものは単純じゃない。
俺の１５０レベルは大体……、名前を持つ妖鬼の弱い奴の本体並かな？
えーとね、魔界や幻想郷、天界、地獄などにいる悪魔が本体、こっちの現実世界には分霊という劣化版のコピー品端末が呼び出せるのよ。
俺のレベルは、そうだな、ラクシャーサの本体と同じくらいだな。
因みに、艦娘のレベル５００ってのは、神話の主神の本体レベル。
つまり、うちの長門や時雨、木曾、古鷹辺りは、魔界にいるオーディンやシヴァと「真っ向から殴り合える」存在な訳ね。
……んー？何で君達そんな強くなっちゃってるの？

話を戻そうか。
レベル３００程の大天使と魔王の分霊が現代日本に降臨！
これが意味するところは……、そうだな、特撮ヒーロー戦隊のラスボスが二体現れて日本で戦い始める、って感じかな！
Ａ：日本沈没
つまり、みんな死ぬ。
え？もしも、レベル５００の本体が降臨したら？
地球が消し飛んでもおかしくないね。
まあ、そう。
あれだよね。
いよいよもってヤバい。
俺はスマホをつけて、電話をかける。
「もしもし、ライドウさん？実はですね……」

４４９話　デビルサマナー旅人　後編

あらすじ。
やめて！メタトロンとベルゼブブのバトルで、日本を焼き払われたら、闇系の仕事で日本経済と繋がってる黒井鎮守府のお財布まで燃え尽きちゃう！
お願い！死んでガイア教メシア教の過激派！あんたらがここで倒れたら、裏社会の秩序はどうなっちゃうの？穏健派はまだ残ってる。過激派を倒せば秩序は保てるんだから！
次回、俺、死す。
デュエルスタンバイ！

「さあ、という訳でしてね、ボスケテですわ、ライドウさん」
「……？」
「こちらに証拠があるんで、ご一読ください」
そう言って、資料を渡す。
「……!!」
「ライドウ、これは不味いぞ……！旅人よ、ヤタガラスに連絡をしろ！」
業斗童子……、黒猫に憑依した、ライドウさんのお目付役に怒鳴られ、俺はヤタガラスの本部に電話する。
「あ、もしもし？ヤタガラスですか？」
『はい……？』
「あの、藤沢市で大規模な悪魔召喚儀式が始まってて、既に生贄百人が捧げられて、メタトロンとベルゼブブ、推定レベル３００くらいのが顕現しそうなんですよ」
『……はい?!』
「おたくのライドウさん借りてくんで、バックアップの人員寄越してください」
『あっ、はっ、た、確かなんですか?!』
「今、おたくらのＰＣにｐｄｆ付きのＧｏｏｇｌｅメール送りつけた

んで見てもらえます？」
『……き、緊急発令ーーーーッ!!!!支部長、支部長ォー!!!!』
「あと、今回の件の報酬は、成功報酬で三千万よろしくお願いしますね。じゃ、闇系の仕事があるのでこれで」
『ちょっ、待っ』
電話を切る。
「ライドウさん、行きましょうか」
頷いたライドウさんと、トラポートで藤沢に移動。
藤沢のメシア教会、そこに過激派がいる。

メシア教会、だいぶ大きな建物だ。
メシア教会は世界各地に巣食っているゴキブリのような連中だ。滅べ。
そもそも、メシア教は、キリスト教の過激派集団だ。
狂信者は滅べ。
この世界に神はいない。
俺がガンダムだ。
エクシアで未来を切り開く。
俺とライドウさんは、手持ちの悪魔を呼び出し、突入準備。
俺の召喚した悪魔はサキュバス、エルフ、ネコマタ、モーショボー、ハーピー、アルラウネ、ラミア、アリス。
……は？何？性癖？
戦力が強いかより！何が可愛いかで悪魔を語れよ!!!!どん!!!!
一応、レベルは１００超えてるから、その辺の雑魚サマナーなら蹴散らせるよ。
「お兄ちゃーん??」
「アリスちゅわ～ん！久し振りだね～？元気だった～？」
「うん！アリス、元気いっぱいだよ！」
「んんんんー！可愛いねー！アリスちゃん可愛いねー！良い子だねーーー!!!!」
そうやって俺が手持ちの悪魔とイチャイチャしていると、ライドウ

さんに腕を引っ張られる。
「ウオオオォォー!!!離せェ!!!日本なんて知るか!うちの子とイチャイチャさせろォー!!!」
俺はライドウさんに投げ飛ばされ、教会のステンドグラスをぶち破り、ダイナミックエントリーを決める。
「「「……」」」
「あ、こんにちわ?」
「「「侵入者だ!殺せ!!!」」」
「アアアアアーッ!!!」
多数の過激派メシア教デビルサマナーに囲まれた俺は、四方八方から囲まれて、槍を刺された。
「仕留めた!」
そして、全員が気を抜いた瞬間に、俺は全身を回転させ、槍を手元から巻き取った。
「な、何だとっ!!!」
「アリス!頼んだ!」
俺が叫ぶと、アリスが、俺がぶち破ったステンドグラスの穴からぴょんと飛んで来て、言った。
「おじさん達ー!『死んでくれる?』」
「「「が、あああ!!!」」」
死んでくれる?は、全体に特大の呪殺をばら撒く技だな。
俺も極力殺しはやりたくないものだが、既に百人以上の罪のない人間……、その中には孤児の女の子なども含まれる。そんな無辜の人々を、自らの信仰する大天使とやらの召喚のための生贄として、血肉を絞り、苦痛を与え、殺した。
とてもじゃないが、許せることではない。
彼女達は魂まで生贄にされた。
リカーム……、蘇生魔法でも蘇らせることは不可能だ。
そんな連中に容赦する程、俺は優しい人間じゃない。
俺は刺さった槍を抜いて、エルフにディアラハン、回復魔法をかけてもらう。

女の子に回復魔法をかけてもらうと気持ちがいいので積極的に死にに行こう。
「イグゾー！デッデッデデデデ！」
カーン！
地下の儀式場に殴り込む！
「な、何者だ！」
「我が名は、カールアウグストナイトハルト」
「カール……？知らん名だな？」
全員が「？」というような顔をしている。
もちろん、俺もよく分からない。
「？」
「で？そのカールとやらは何の用だ？」
「あ、名刺要ります？」
「要らんわ！まさか、儀式を邪魔しに来たのか？だがもう遅い！既に儀式は完成している！メタトロン様の降臨はすぐそこだ！」
「ですって。どうします？」
俺は、アメリカのホームドラマみたいな大げさなジェスチャーで肩をすくめて、ライドウさんを見る。
「……十六代目葛葉ライドウ、参る」
あ。
……ところでさ、ライドウさんがどれくらい強いかって話なんだけどね。
『おオオオオ！我こそは、大天使メタトロンである！世界の全てに、神の法の加護を……?!!』
この人は、ポン刀一本でマクロスを叩き斬るようなバケモノだぞ。
『な、が、あああああ?!!』
つまり、教会をぶち破って現れた、１０メートルくらいのメタトロンも大したことはない。
ライドウさんが愛刀に手をかけると、一瞬で、俺ですら殆ど反応で

きないくらいの速さで踏み込んで、刀を振った。
メタトロンの右腕がすっ飛ぶ。
いとも簡単に、斬れて当然だと言わんばかりに。
『き、貴様！この我にィイッ!!!消し飛べ、シナイの神火!!!』
メタトロンが周辺被害を考えないビームを目から放つ。
それを、『前転』で回避するライドウさん。
前転は、葛葉に伝わる奥義で、体内のマグネタイトで一瞬だけ極小の異次元を形成して、この世から消える技だ。
霊夢ちゃんの夢想天生に近いのかもしれない。
ゲーム的に言えば当たり判定の消失、ローリングの無敵時間ってところか。
……ズルくない？
素のステータスで神話の主神すら殺しうるくせに、当たり判定消失技持ちとか厨性能では？
ナーフしろ。
そんなことを思っていると、ライドウさんはこれまた一瞬でメタトロンを半分に両断した。
『が、あ、か、かみ、よ……』
その間、俺はその辺の雑魚メシア教徒とバトってました。

この後、更にガイア教徒が乗り込んできてベルゼブブを召喚。
『ぐわあああ!!!』
が、ライドウさんが容赦なく両断。
お前人間じゃねえ！
余ったメシアンとガイアーズは、俺の仲魔が後処理してくれた。
え？言わせんなよ、食ったんだよ。
心臓が美味いらしい。
さて……、周辺被害がスゲーな。
だが、日本は強い国だ。
毎週のように怪獣やらロボットやらが戦ってるもんだから、地区一つが吹っ飛んだだけで済んだのは軽傷だね。

来週までには新しい建物が建ってるだろうから、何にも問題はない。
いやー、前にゴジラが復活した時は、東京の四割が吹っ飛んだからね。
あの時は復興に一ヶ月もかかった大事件だから……。
今回は一週間もあれば元通りだな。日本の建築業者は優秀だからね。
じゃあ俺、ギャラ貰って帰るから……。
「待て、帰さんぞ、後処理を手伝うのだ！」
業斗童子がなんか言ってるけど、俺はよく分からない。
逃げよう。

４５０話　台風コロッケ

おっ、台風来てるな。
「大淀」
「はい？」
「鎮守府内放送で台風来てるって伝えて」
「はい」
黒井鎮守府の各所に設置されたスピーカーからピンポンパンポンと。
『鎮守府放送、鎮守府放送。現在、Ｋ県に台風が接近しています。明日頃にはＫ県に台風が上陸する模様です。艦娘の皆さんは外出を控えましょう。鎮守府放送でした』
と、こんな放送が大淀によって流される。
黒井鎮守府は自家発電しているし、食料や資源の備蓄もあるので問題はなさそうだな。
今日の黒井鎮守府は閉店です。
みんな、家の中でまったり過ごそうか！

「そぉい！……アアアアーーー！！！！」
「あっひゃひゃひゃひゃ！！！」
まったりとは一体なんだったのか……。
今現在、明石と夕張が、台風の強風で、ウイングスーツで空を飛ぼうとして遊んでいる。
そして三日月は田んぼの様子を見てくると言い残して山へ。
長門は日課の走り込みをしている。
君達ちょっとさあ……。
「お昼頃までにはちゃんと帰ってくるんだよー」
まあ許すけど。
自然を舐めちゃいかんよ？

室内は室内で……。

「望月、何やってるの？」
「ツイッターでツイフェミの身元を特定してばら撒いて遊んでる」
　タチ悪い!!!
「秋雲は？」
「タピオカ廃棄のアートを書いたらツイフェミから叩かれた」
「……初雪は？」
「5ちゃんでレスバトルしてる」
　その……、そのさ、もっとこう、生産性のあることしない？

　黒井鎮守府は、実は、艦娘が常にいる訳じゃない。
　海外艦は旅行、鹿島や長門なんかはバイト、妙高型は暗殺家業、その他にも出撃や山籠り、ショッピングにドライブ、アウトドア、食べ歩きなどと、艦娘の約半数は外にいる。
　二百人もいるんだ、普段顔を合わせない艦娘同士や、あまり話したことのない艦娘同士などももちろんある。
　そんな艦娘が、今日は珍しく、全員が鎮守府内にいる。
　変な化学現象が起きなきゃ良いが……。
　艦娘同士なら、滅多に喧嘩やらはしないから、問題はなさそうだけど。
「うおっ」
　ぴしゃーん、雷が落ちる。
　外を見ると、鎮守府外の建物が停電している。
　あ、黒井鎮守府は自家発電設備あるんで。
　自衛隊頑張れ。
　ああ、俺達は軍隊だから、救助は手伝わなくて良いんだよ。
　日本では、自衛隊が国防と救助活動をして、軍隊が戦闘活動を行うんだよ。
　え？ＧＨＱによる軍の解体？何言ってんの？この世界で軍隊を解散したら即滅びるよ？
　週一くらいのペースで怪獣が現れ、最近では飛電インテリジェンスがゴタゴタしてるし、毎年のようにゴジラが現れ、定期的に悪魔が召

喚されてヤクザが抗争してるからね。
アメリカも、毎日のようにヴィランが暴れて、悪魔が湧いて、怪獣が湧いてる。
基本的に全世界がそんな感じなので、今回の台風も、「はいはい、いつものいつもの」みたいなノリで対処されている。
むしろ、昔現れた暗黒大将軍とかの方がヤバかったね。あの時は一千万人くらい死んだから。
え？人口減少？少子化？何の話だ？日本は常に一億人以上の人口があるぞ？
就職難？何言ってんの？常にどこも人手不足で、ヒューマギアやアンドロイドが作業の代行をしてるよ。
特に土木作業員なんかいくらいても足りないね。
グロンギは五代さんと全滅させたから良いとして、魔化魍やオルフェノク、イマジン、ショッカー、ドーパント辺りは未だに湧くからなあ……。
死ぬ時は何十万人とか平気で死ぬんだよな。
まあ、台風くらいなら大した問題じゃないんだよ。
農場や牧場にはバリアを張っておいたし、黒井鎮守府の窓は強化ガラスで、何かあれば窓が閉鎖されて気密モード発動、酸素発生装置が起動する。
計算によると、核ミサイルがいきなり落ちてきても、黒井鎮守府は無事だそうだ。

水が無限に出る蛇口、自家発電機、エアコン、電熱器と食料。
基本的に、黒井鎮守府は、鎮守府内に引きこもっていても生活可能なのだ。
さて、そんな訳で、俺は……。
「ほいっ、カレーコロッケ上がり！」
「カニクリームコロッケも上がりですー！」
厨房組とコロッケを揚げていた。
台風の日にはコロッケ。

コロッケなのだ。
普通のコロッケ、コーン入りカニクリームコロッケ、カレーコロッケの三点盛り！
今日のお昼はこれで決まり！
「しれぇ！私、コロッケパンが食べたいです！ソース多めで！」
「おうよ、雪風！はい、コロッケパンどうぞ！」
「わーい！ありがとうございます！」
コロッケパンもだ！
「台風コロッケだ！台風コロッケは食べざるを得ない！プレーンコロッケ四つ！部屋で食べるからプラ容器に入れて！」
「はいよ望月！」
持ち帰り対応！
と、そんな風に対応していたら……。
ん、電話か。
誰だろう？
「はい、もしもし？」
『俺だ』
ゲ、ゲェーッ！も、桃さん！総理大臣の桃さんじゃないか！
あれ～？俺、またなんかやっちゃいました？（なろう主人公並の感想）
大丈夫これ？
どの件？
遂に逮捕されるやつ？
『新台、黒井鎮守府にはどれだけの人間が収容できる？』
「え？まあ、空間弄れば百万人くらいなら……」
『では、総理大臣の権限において、黒井鎮守府の一部施設を開放して、避難民の受け入れを命ずる。やってくれるか？』
あー……。
「えっと、構いませんけど、うちも機密があるもんで、指示を聞かずに『イタズラ』するような奴には酷い目を見せますが、それでもよければ」

『構わん。今、避難予定地に黒井鎮守府を指定した。それと、自衛隊の拠点として庭を貸して欲しい。避難民はおよそ一万人程だ』
「はい、分かりました。三十分で受け入れ態勢を整えるんで、どんどん人を呼んでください。じゃ」
俺はエプロンを外して、アイテムボックスから鎮守府放送端末を取り出す。
『黒井鎮守府放送！これから避難民の受け入れをする！警備担当は侵入者と間違えないように！工廠組はすぐさま避難所モデルＡを１０軒用意して、アンドロイド部隊を起動しろ！厨房組は一万人分の食事を作って、手近なアンドロイドに料理を渡してくれ！以上！』
指示を聞いた艦娘が即座に動き出す。

３Ｄプリンタによって作られた避難所に、避難してくる人間をどんどん入れる。
そして、食事を提供して、テレビを見せる。ｗｉ―ｆｉと電気も定期。
台風は二日で通り過ぎるようだから、それまでうちで避難していてもらおうか。
いやー、まあね。
災害ともなれば、みんなで協力しなきゃならないからね。
別に、黒井鎮守府って、普段から立ち入り禁止って訳じゃないから、災害から逃げてきたとかなら普通に受け入れるよ。
……でも、現代っ子は台風とか増水で大騒ぎするもんなんだなあ。
俺は、寝室が爆発したくらいじゃ既に驚かなくなってるから。
朝起きた瞬間に腕を食い千切られたりする、黒井鎮守府のスリリングな生活にすっかり慣れてしまった。
まあほら、日本人も強いから、今回ちょっと川が増水したりしたくらいでギャーギャー騒いだりはしないんだよね。
数日前にメタトロンとベルゼブブの召喚で地区一つが吹っ飛んでるから。
今回避難してきた人達も、災害は慣れっこなようで、特に問題なく

過ごしている。
避難民特有の悲壮感は特になく、皆笑いながらバラエティ番組を見ている。
「あ、そうだ」
黒井鎮守府産の酒と食品の宣伝に、避難民達に酒とツマミを配布しよう。
黒井鎮守府海軍ビールと純米大吟醸『ブラック鎮守府』を無料で提供する。
渡す量はあくまでもロング缶一つだけ。タダで配るって、あんまり良いことじゃないからね。宣伝だからちょっとだけ。
それと黒井鎮守府産の鶏肉の焼き鳥を塩タレ二本ずつ。これを一人ずつ配る。
足りなきゃ買え。
すると、酒飲み達がこれだけじゃ足りないとうずうずし始め、そこで俺が、「欲望の解放のさせ方がへたっぴさ……」みたいなノリで酒とツマミを販売し始める。
結果、避難所はお祭り騒ぎになった。
「台風を吹き飛ばすような人間の元気さを垣間見たよね。だから、今回のことは不問って事にしない？」
「酔った人間が黒井鎮守府内に侵入した件ですか？」
「許して……、許して……」
「いえ、私は怒っていませんよ？」
わちき許された……？
「ご命令通り、しっかりと全員気絶させて、避難所の床に転がしておきました」
おお！偉いぞ大淀！正直皆殺し案件かと思ってたんだが……。
「……まあ、提督のご指示がなければ皆殺しでしたが」
「え？今なんか怖い事言わなかった?!」
そんなこんなで、台風が過ぎるまで、避難民相手に黒井鎮守府の製品を売りさばいてゆっくりと過ごした。

死人も出ずに、平和な台風だった。
いつもこんな調子であって欲しいんだがなあ……。

４５１話　海原守子、出張する

「守子ちゃん、旅行行かない？」
「あ、はい、良いですよ！」
　私、海原守子！
　年齢は……、うん、もう気にしない！
　今回は、黒井鎮守府の提督さんこと、旅人さんと一緒に旅行をすることになりました。
「まあ、仕事を兼ねての出張みたいなものだから、持ち物とかちゃんとまとめてね」
「はい！」
　ええと、でも、お仕事も兼ねた旅行となると、持ち物はちゃんと考えなきゃ駄目だよね？
「えっと、名刺と、お財布と……」
「ああ、待って待って、持ち物の整理をしよう。この、いるもの、いらないもの、それをこの整理ボックスに分けようか」
「あ、はい、わざわざお手伝いしてもらっちゃって、なんだかすいません」
「いや、良いんだよ」
　私の目の前に、『いるもの』『いらないもの』と書かれた段ボール箱が置かれる。
　よし、じゃあ、出張に持っていく荷物を分けよう！
「えっと、じゃあ、まずは名刺ですね！これは必要ですよね、旅人さん？」
「名刺？これはいらないよ」
　旅人さんは、私の名刺をいらないものボックスに入れた。
「えっ、なんでですか？」
「漢字読める人なんて、いないからね」
「えっえっ、あっ、そ、そうですか、海外なんですね！」
　そ、そっか！
　海外に出張なんだ！

なら、名刺は要らないかな？
海外はあんまり名刺とか渡さないのかも。
「じゃあ、この、スーツは要りますよね？海外でもスーツは基本ですし！」
「いらないね」
えっ。
「スーツ着てる人なんて誰もいないからね」
「あっ、えっ、その、み、未開の地とか……？」
微笑みかけてくる旅人さん。
「あっちではこの防護服を着てね」
「防護服?!」
えっと、危険なところなのかな？
ま、まあ、アメリカみたいな銃社会の国に行くのかもしれないし……。
そうだ！
「じゃ、じゃあ！スマホは要りますよね?!スマホがなきゃ現代社会じゃ」
「いらないね」
ええー！
ま、まさか……。
「ス、スマホの電波がないんですか……？」
微笑みかけてくる旅人さん。
「スマホなんてそもそもない世界だからね」
「異世界なんですね?!異世界なんですね?!!」
え、えっと、じゃあ……。
「このマシンガンは要らないですよね？なんか、さっき大淀さんから渡されたんですけど」
「これはいる」
「いるんですか?!」
「絶対に要る、丸腰状態とか殺してくれって言ってるようなもんだよ」
どこなの?!どこに連れてかれちゃうの私?!

「え、えーっと、じゃあこの、やたら大きな個人携行型シェルターは要りま」
「要る、絶対に要る。それだけは必ず持って行かなきゃ駄目だよ」
……あ。
「……エーテルの風ですね？」
旅人さんは微笑む。
つまり、行き先は……。
「ノーステイリスなんですね?!ノーステイリスなんですね!!!」
「頑張れ、負けるな、力の限り生きてやれ」

そう言う事で、ノーステイリスに出張しに来た私。
「お前さん、ついてないぜ。俺達は泣く子も黙る冷血な盗賊団、その名もザ・ルーザーだ。命が惜しければ、大人しく荷車の積荷と金貨１５４２１枚を渡すがいいぜ」
早速、自ら盗賊団と名乗るあからさまな盗賊団に囲まれてしまった。
「守子ちゃーん」
旅人さんが微笑む。
笑えばいいと思ってないですか?!
「は、はい、何ですか？」
私が答えると……。
「逃げるぞッ!!!」
「逃げる気だ、殺せ!!!」
旅人さんが私を抱えて、盗賊団は魔法と銃で攻撃してきた！
「ひ、ひぃぃやあああああ!!!」
ヒュン、ヒュンと風切り音。
銃弾が飛んで来ている。その銃弾の暴風の中、私は小脇に抱えられて、草原を移動する。
「爆ぜろ!!!」
旅人さんが手榴弾を放り投げて爆殺して、逃走。

なんとかパルミア王国に到着した。
「パルミアで一晩休んだら、北にあるあいつの国に行くよ」
「は、はい」
うーん、地獄かな？
でも、日本は日本で、謎のガス爆発で藤沢市の一区画が更地になったし、日本にいても変わらないのかもしれない。
因みに、旅人さんが言うには、謎のガス爆発はカバーストーリーで、本当は大天使と魔王が召喚されて暴れまわったとのこと。
「ま、まあ、景色とかは綺麗ですし！空気も澄んでいて、天気も良いですね！」
「お、そうだな」
前向きに……、前向きに考えよう！
ノースティリスは自然が豊か！
私、海の近くで育ったから、こんなに広い草原とか見たことないなー！
新鮮な感じだなー！
「ぐあっ!!!!」
そんなことを考えて、努めて前向きに考えようとしていた時、急に旅人さんが倒れる。
「……え？た、旅人さん?!」
「……通り魔だ」
「通り魔出るんですかこの辺!!!?」
旅人さんの腹部から、どろりと血液が流れる。
「まあ、ノースティリスじゃよくあることだから」
どうしよう、フォローできない。前向きな気持ちになれない！
最早、一刻も早く帰りたい気分だ。
「とりあえず、一晩寝ようか」
「あ、はい……」
通り魔が出る街で一泊か……。
嫌だなあ……。
「えいえい」

「……え？」
なんか……、旅人さんがピッケルで、お城の壁に穴を空けちゃってるんだけど……。
「じゃ、ここで寝ようか」
「あの、不法侵入じゃ……」
「ノースティリスにそんな法律はない」
はあ……。

そして、その夜。
……「メテオでおじゃる！どっかの馬鹿がメテオを唱えたでおじゃる！パルミアはおしまいでおじゃるー！」
「んぅ……？」
夜中に騒ぎ声で目を覚ます。
すると、隣で寝ていた旅人さんが飛び起きて、シェルターを掘った。
「え？あの？」
「守子ちゃん！早くシェルターの中へ！」
「何ですか?!何事ですか?!」
「巨大隕石だ！この国は滅亡する!!（ＭＭＲ並感）」
「え？は?!きゃあ！」
そして、旅人さんは、私をシェルターに押し込んで、ニコッと微笑むと、外側からシェルターを閉じた。
「た、旅人さーーーん!!」

「や、やあ……」
あ、ああ……、旅人さんが白髪に！あ、それは元からか……。
「あ、あの、大丈夫で、す、か……?!何ですかこれ?!」
国が更地になってる?!
本当に隕石が落ちてきたの?!
「フッ……。だが、まだ生きている」
旅人さんがなんか言ってるけど……。
「これ……、どうなるんですか？国が一つ滅んだんですよ……？」

「まあ、割とよくあるから」
割とよくあるんだ……。
割とよく国が滅ぶんだ……。
「三日後には元通りだよどうせ」
「ええ……」
この規模の破壊が三日後には直るんだ……。
「苦痛に耐えきれぬ時は飲むといい」
そう言って、懐から酒を取り出す旅人さん。
「え、あ、その、昼間からお酒は……」
そう言った瞬間、旅人さんの手首が消滅する。
「……ギ、ギギャ、アハ」
「あ……?!」
旅人さんが出したお酒を、旅人さんの手首ごと持って行ったのは、この男の人だった。
黒く長い髪、赤い瞳、高い身長、細身……。
ハンサムな男性のように見えるけど……。
殆ど武術の心得とかがない私にも分かるくらいの、濃密な死の気配がする、恐ろしい化け物……。
死という概念が人の形をとったかのような、闇そのもの。
旅人さんの友人の中でも、最も恐ろしい存在の一人。
「……ノースティリスのあいつ！」
因みに、旅人さんの友人の中で恐ろしい存在は他に、『火継ぎを終わらせた男』や、『饒舌な傭兵』、『ライドウ』、『@』、『ゲッター線に選ばれた男』、『半人半魔のデビルハンター』など……、あれ？これ、恐ろしい存在多くないかな?!
とにかく、ノースティリスのあいつは、お酒を飲んで、捩じ切った旅人さんの腕をバリバリと食べると、平然と話しかけてきた。
旅人さんが大量のお酒と食べ物を渡して、それと引き換えにノースティリスのあいつは、魔導書や杖、種、ハーブ、ポーションなどを渡してきたみたい。
取引が終わると、何らかの魔法で煙のように姿を消した……。

「よし、お仕事終わり！帰ろうか、守子ちゃん」
「あ、はい」
ノースティリス……、恐ろしいところだった……。

４５２話　黒井鎮守府ＰＶ

「なんか知らんけど、アズールレーンってやつが流行ってるらしい」
「はあ……」
俺は、休憩室の真ん中で言った。
「艦これよりも運営が良いらしいな」
「何の話ですか？」
怪訝な顔をしている大淀。
「いや、ちょっと、黒井鎮守府のネットでの評判がこれでもかと言うほどに悪いから、なんかこう、イメージアップ戦略を取ろうと思って」
「成る程……」
そう、頭脳明晰な俺は、艦娘の人気アップのために手を打つことにしたのだ。
即ち、艦娘のＰＶの作成……！
アニメは何故かよくわからないけど失敗しそうな気がするので、アニメ化はしない。
ユーチューブの黒井鎮守府公式チャンネルで、艦娘の可愛いところを垂れ流して、艦娘の地位向上を目指すのだ！

そして一ヶ月後。
俺と数人の艦娘は、会議室に集まって、作成されたＰＶのプロトタイプを見せ合うことになった。
「今回集まってもらったのは他でもない……、黒井鎮守府のイメージアップ作戦として、艦娘を使った短い映像作品を作るという話だった」
俺は、キリッとした顔で、会議室を見回す。
「まずは俺が作ったＰＶから行こうか。大淀！」
「はい」
大淀がプロジェクターを用意して、映像を再生する！
～キャピキャピした音楽～
～第四駆逐艦の四人がごちうさのノリでキャピキャピする～

～マスコットキャラの首輪付き～
～露骨な猫耳～
～サービスシーン～
「どうだ!!!」
「「「……」」」
あれ？
「黒井鎮守府のイメージではないのでは？」
と大淀。
「ｊａｐａｎのＭＯＥ　ａｎｉｍａｔｉｏｎみたいね！」
とアイオワ。
「っていうより、猫被りすぎじゃないかな、あの四人……」
と時雨。
ふむ……、そういう意見もあるか。
「じゃあ、次はアイオワ」
「ええ！見てて！」
アイオワ作の黒井鎮守府のＰＶ、再生！
～突然流れ出すガンズアンドローゼスのパラダイスシティ～
～ヘリが降下してくる～
～黒服の特殊部隊がビルに突入～
～音楽がサビに突入するのと同時にアイオワの登場、特殊部隊を銃撃戦で蹴散らす～
～アイオワがビルに手榴弾を投げ、ビルが大爆発し、それをバックに優雅に歩くアイオワ～
……。
「あ、あのさ、イメージアップ要素どこ……？ここ……？」
「カッコいいでしょ？」
んんんー？
「カッコいいけどさ……」
まあいいや、次は明石だ。
「行きますよー！」
明石のＰＶ、再生！

～空飛ぶ円形のロボットが、ケイ・カイザーのジングル・ジングル・ジングルを流しながら、荒野の道路を飛行する～
～ライフルが直撃し墜落する～
～何故か鎮守府内の施設の写真が流れる～
～ＦＰＳ視点で鎮守府産のミュータント生物と戦う動画が流れる～
～スーツにサングラス姿の明石の後ろで街が爆発してスローモーション～
「何これは」
「ＰＶです」
「何の？」
「黒井鎮守府のです」
「???」
どの辺が黒井鎮守府と関係あった？
核崩壊後の世界みたいになってたけど？
まあいいや、次！
「じゃあ、私達の番ですね！」
鳥海のＰＶ、再生！
～北の大地～
～謎の老婆の語り部～
～空から巨大なドラゴンが～
～謎の賛美歌～
～モンスターと戦う高雄型～
～ドラゴンを倒す高雄型～
～ドラゴンの上で勝鬨を上げる～
だから何なのこれ?!
「一ミリも黒井鎮守府関係ないよね?!」
「私達のイメージでは、黒井鎮守府はこんな感じです」
おお、もう……。
どこぞのドラゴンボーンみたいになってたんだけど?!
ま、まあいい、次だ！

「私の番ですか？頑張りましたよー、見てください！」
鹿島だ！
鹿島のＰＶ、再生！
～ＡＶ～
「はい、しゅーりょー!!!」
俺は再生を止める。
「これから盛り上がってくるんですよ！ねっ！」
鹿島に拘束される。
鹿島が、無理矢理再生ボタンを押す。
～薄着の鹿島がソファーに座っている～
～笑顔と共に手を振り、段々と脱衣する～
～鹿島の激しい自慰行為～
～仰け反って絶頂～
～おもらし～
「イキスギィ!!!」
「はい、イキました！」
「こんなもの公開されたら黒井鎮守府の評判壊れちゃ^～う!!!そんな予定はヤメテ!!!」
「予定？提督、私は昔の活劇映画の悪役ではありませんよ。提督に妨害される危険がわずかでもあるなら、こんな重大なことを得々と説明したと思いますか？３５分前にアップロードしました」
「畜生！なんかオジマンディアスみたいなこと言い始めたぞ!!!」
「因みに、今回の動画は、私が好きな上原○衣ちゃんの動画を参考にしました！」
「あー、上原○衣ちゃん可愛いよねえ！引退したのが残念だけどさ！最近は麻里○夏ちゃんが……、はっ?!!」
「「「……」」」
周囲の艦娘の目がうさみちゃんみたいになってる!!!
「へ、へへっ、ち、違うんすよ……、隠れてこっそりＡＶ見てるとかそんなんはないんすよ……」
「提督が溜まっていらっしゃるようですので、今晩は、艦娘全員に慰安

任務を命令しておきますね！」
　大淀が手を叩いて笑顔を見せる。
「やだーーーーっ!!!今晩じゃねーじゃん!!!どうせ一週間以上逆レイプされるやつじゃん!!!」
　俺は逃げようと立ち上がろうとするが……。
「うおおおあーーー!!!」
　俺の座っていた椅子が拘束具にトランスフォームし、俺をぐるぐる巻きにした。
「助けてええええ……」
　そのまま、拘束具ごとボッシュート。

　～音声のみでお送りします～
「お兄さん許して……」
「お姉さんダルルォ?!!暴れんな……、暴れんなよ……」
「どこ触ってんでぃ（江戸っ子）!!」
「キモティカ？キモティダロ？」
「アッーーー!!!」

「いや……、待って！鹿島は良いよ、鹿島は全然ＯＫだよ?!でも君は駄目じゃん!!駄目だよ!!」
「ダイジョーブ！佐渡様は元気だぜ！」
「何も大丈夫じゃないから!!ふざけんな!!（声だけ迫真）」
「えいっ！」
「あっ、このっ!!」
「あは??司令の、ここまでしか挿入んないな??」
「ちょ、本当にやめて？洒落にならんぞ！」
「うりうり～??」

「提督、結局、プロモーションムービーは誰のを……、って、腎虚で死んでしまったんだね」

時雨が、手元のＵＳＢを弄ぶ。
「ええと、じゃあ、取り敢えず、僕のプロモーションムービーを含む全作品をネット上に公開しておくよ」

次の日、白露型ＰＶを見た一般市民が発狂する事件が発生し、黒井鎮守府のユーチューブアカウントは一時的に停止された……。

４５３話　禁酒

「もうっ！司令！飲み過ぎですっ！」
　私は、司令の手元からテキーラを取り上げる。
「いや適量だから……。ほ、ほら、萩風も飲もう？酒は百薬の長だから（強弁）」
　全く、もう……！
　私、萩風としては、少しくらいのお酒なら怒らないつもりよ。
　実際に、酒は百薬の長というのも間違いじゃないから。
「でも司令、それは何杯目ですか？」
「まだ二十本目だから！健康的だから！」
　７５０ｍｌの瓶を二十本。
　因みに、テキーラの致死量は、３０ｍｌのショットグラスを１６杯くらいと言われている。
　４８０ｍｌで死ぬものを、１５０００ｍｌ。
「何言ってるんですか？致死量ですよね？ねえ？」
「い、いやほら、ＬＤ５０の話でしょ？あれはほら、目安みたいなもんだから！個人差があるから！」
「目安だとしても、致死量の十倍以上飲んでおいて健康と言うのは無理があるのでは？」
「マルティン・ルターは言いました。酒と女と歌を愛さぬ者は、生涯馬鹿で終わる、と」
「話を逸らさないで下さい！」
　私が怒っていると、隣のポーラさんが司令に言った。
「えへへぇ、大変ですねえ～」
「ポーラさんも飲み過ぎですっ！」
　私が叱る。
「い、いや、私はまだ十本目ですから～！」
　ポーラさんが逃げる。
　はぁ……。
　何でここの人達は大酒飲みばかりなんだろう。

「萩風も飲んでホラホラホラホラ！」
「私は強いお酒は飲みませんから！」
「じゃあいつ飲むの？」
「養命酒を少し……」
　健康の為に……。
「養命酒?!い、いや、お年寄りじゃないんだからさあ……」
「健康は大事ですよ？司令の子供を産むんですから、母親である私達が健康体じゃないと……」
「そんなことしなくていいから……」
「とにかく、過度の飲酒は禁止です！」
「おう考えておくよ」

　次の日……。
「司令？」
「あ、萩風。どうしたんだ？眠れないのか？」
「何飲んでるんですか？」
「……えーと、水カステラ」
　水カステラ、有名な落語ですね。
　水カステラとは、即ち。
「結局お酒飲んでるじゃないですかー！」
「いや……、水カステラだから……」
「お酒ですよね？」
「ムスビ、これはビタミン剤じゃ！」
「お酒ですよね?!」
「酒はな、命の水なんだよ……」
　司令は、全くもう！
　本当にもう！
「ってか、俺なんてたまにダンガンロンパみたいな死に方してるのに、今更健康についてとかどうでもよくない？」
「良くないですよ！健康に気をつけないと、老後に響きますし！」
「いや俺老いるつもりないし……」

「それに、不健康な生活に慣れちゃうと、健全な精神が育ちません！健全な肉体にこそ、健全な魂が宿るんです！」
「ｏｒａｎｄｕｍ　ｅｓｔ，ｕｔ　ｓｉｔ　ｍｅｎｓ　ｓａｎａ　ｉｎ　ｃｏｒｐｏｒｅ　ｓａｎｏ……。ユウェナリスの伝えたかったことは、健全な肉体に健全な魂が宿ればいいなあ、って願望を言ってるだけだよ」
「えっと……？」
「あの頃のローマは、戦争とかなくて、道徳的に頽廃していてな。だから、ユウェナリスは、ローマ市民が悪い誘惑から打ち勝つような健全な精神を手に入れられるように願っていたんだ」
「は、はあ」
　司令って、普段は遊んでばかりだけど、物知りなんだよね……。
　そういうところも素敵だけど。
「でも、それはそれとして、お酒は駄目です、飲み過ぎです」
「日本酒なんてジュースみたいなもんだから」
「何言ってるんですか？」
「いやほら、よく考えてみなよ？元はお米だよ？お米が身体に悪い訳ないよね？」
「屁理屈はやめてもらえますか？」
　司令はいつもそうだ。
　何が何でもお酒を飲む。
　水よりもお酒の方がたくさん飲んでいるかもしれない。

「……司令？」
「……いや、その、これは般若湯だよ」
「お、さ、け、で、す、よ、ね？」
「ヒェーッ」
　司令……！
「いいか荻風？ウォッカってのはスラヴ語で水って意味なんだ。水を飲んで身体がおかしくなる訳ないだろ？な？なっ？！」
「怒りますよ？」

「まあまあまあまあ！まあまあまあまあ！ほら、ほらほら！おいで！」
「ひゃん??」
抱っこされちゃったあ……??
「よしよし、良い子だね、萩風は良い子だ。大好きだよ、愛してるよ！」
「司令……??」

「昨日は誤魔化されちゃいましたけど、今日はそうはいきませんからね！今日こそ禁酒してもらいますっ！アルコールは人類の敵です！」
もう怒った！
今日という日は許さない！
徹底抗戦よ！
「なるほど、確かにアルコールは人類最大の敵だ。しかし聖書には汝の敵を愛せとある。フランク・シナトラの言葉だ」
「誰ですか?!ふらんくさんって！」
「ご存知ないのですか?!フランク・シナトラを?!」
司令が好きな歌手らしい。
「という訳でここで一曲」
「わあ！お上手ですね！」

「司令」
「待った、マジギレは良くない！良くないよ！」
「お酒、やめなさい」
「やだ！」
はあ……。
もうしょうがないわね。
「じゃあ、お酒が飲めない身体にするしかありませんね……。これは司令を想ってのことですから……、耐えてくださいね」
「え？何その修羅理論？あっちょっ待っ」

ぐしゃり。

その後、司令は一週間の禁酒に成功しました！
偉いですね！司令！

４５４話　リフォーム

「何これは……」
朝、起きたら、黒井鎮守府が更地になっていた。
鎮守府本館にある俺の部屋も倒壊していて、瓦礫の山になっている。
遅れて聞こえてきた爆発音に反応した時には……、時すでにお寿司、いや遅し。
瓦礫に押し潰されてしまった。
まあ、これくらいなら、旅人的にはいつものことである。
中東で寝泊まりしていた頃は、迫撃砲の音で目を覚ましたり、朝起きたらホテルが倒壊していたりなんてこともあった。
このくらいなら許容範囲内のアクシデントだ。
瓦礫を蹴飛ばして脱出して、外に出る。
「トリックオアトリートです！ハロウィンのいたずらなんですー！！！」
「今日という今日は許さんぞおおお！！！」
「ぎゃーーー！！！」
すると、庭で長門にアルゼンチンバックブリーカーされる明石が。
「これは、何？（三日月オーガス）」
俺が問いかける。
ボロボロの姿で現れた大淀が言った。
「ええと、何でも、明石さんが、マブラヴアニメ化を祝ってG弾を作って、取り扱いを誤って爆発させてしまったそうです」
「うーん、この……」
勘弁してくれない？
明石が、長門に、ロビンマスクのタワーブリッジを食らった雑魚超人の様なノリで真っ二つにされるところを制止して、明石を見据える。
「い、いや、その、今回は本当に悪いと思ってますよ？」
しどろもどろと、視線を合わせずに言った明石。
「ごめんなさいは？」

「うっ……、ごめんなさい」
「俺に、じゃなくって、みんなに言うんだよ」
「みなさん、すいませんでしたーっ!!!」
土下座する明石。
俺は、それを見て、グラウンドに集まっている艦娘に言った。
「この通り、明石も反省しているみたいだし、許してやってくれないかな？」
「む……」
「司令がそう言うなら……」
「しょうがないかな……」
明石の助命を嘆願し、黒井鎮守府の再建活動を始めることに……。

幸い、吹っ飛んだのは鎮守府の本館と艦娘寮、工廠、ドックなど、古い建物だけだ。
黒井モール、白露型の工房、睦月型のガレージ、倉庫、牧場や農園、露天風呂などは無事だった。
データサーバーや生産プラントなども無事で、艦娘寮もある程度の防壁があるので、部屋の中身は無事らしい。外側は倒壊しているが。
まあ、そうだな、鎮守府の建物は古かったからなあ。
核ミサイルくらいなら耐えるバリアはあるが、内側からG弾が爆発したとなると、鎮守府もこうなるんだな。
これを教訓に、もっと丈夫な建物を建てようか。
これを機にリフォームすると思えば……。
「マイホームを作ろう2！匠～！」
「マイホームを作ろうは虚無ゲーだぞ」
そんな話をしつつ、明石、夕張と速攻で建築の計画を立てる。
「まず、艦娘の寮を建て直そうか」
艦娘の寮……、改築はしていたが、元が倉庫だったからな。
前提督が、艦娘は物だからと言って、窓もない、冷たい床の倉庫に、艦娘を住ませていた。
となると、最初から寮として、再設計しようか。

電気ガス水道は当然として、エアコン、床暖、ベランダ、休憩スペース、自販機なんかを置いてみよう。
俺が某所からパクって……、いや、拾ってきた面白い自販機。
え？ああ、お金を入れると、謎の商品が出てくるやつだね。
一種のガチャみたいなもんだよ。
何が出てくるかは俺にも分からない。
そんな異次元に繋がる自販機を設置。
それとランドリールーム、室内用シャワーも必要だな。
ランドリールームはね、艦娘は、艦娘それぞれが色々な服を持ってるからね。
長門辺りは全くこだわらないから良いのかもしれないけど、陸奥なんか手洗いのみのドレスとか、シルクの下着とか沢山持ってるから。
専用の洗濯アンドロイドを配置して、別個に洗濯できるようにするべきだろう。
実際には、黒井鎮守府製の高性能な洗濯機に入れてしまえば、あらゆる汚れも落とせるのだが、精神的に、汗や泥で汚れた服をドレスなどと一纏めにして洗うのはみんな嫌だろうしね。
それに、シャワールーム。
俺個人としては、黒井鎮守府に用意した温泉や大風呂に毎日浸かって欲しい。
衛生面は本当にね……。
上下水道がない国とか行くと分かるんだけど、衛生観念は大事だよ。
……ちょっと不潔なくらいなら逆にそそるってのはあるんだけど。
とにかく、俺個人としては、毎日お風呂に入って綺麗にして欲しいんだよ。
でも、艦娘の中には、シャワーで良いと言う子も多いのが事実だ。
海外艦やら、出不精な艦娘は大体、シャワーで済ませるようだね。
あ、言っておくけど、艦娘は季節にもよるけど、全員ほぼ毎日シャワーを浴びてるよ？

日本だからねここ。
俺も、ロシアとかなら、寒くて乾燥してるから、わざわざ毎日シャワーを浴びたりはしない。
けど、ここは日本だ。温暖で、海の近くで湿度も高い。
艦娘達の名誉のために言っておくが、艦娘はちゃんと全員めっっっちゃいい匂いする。
いい匂いする（強調）。
世の中の女性が泣いて謝るレベルだ。美容に気を遣っていないような子でも、ちょっと甘い女の子の匂いがするのだ。
神通とか訓練キチだから訓練後は汗かいてるんだけど、そんな時に不意打ちで抱きつくと、女の子の汗の匂いがふわっと香ってヤバい。とてもヤバい。
因みに、艦娘によって匂いが違うんだよね。
古鷹と加古はラベンダーっぽい匂いと、ちょっと香ばしいような匂いがする。
間宮はお菓子っぽい匂い。
金剛型は柑橘系の匂いがして、暁型はりんごかな？
鳳翔は畳の匂いがする。
睦月型と明石、夕張は機械油の匂いがして……、白露型は……、その……、何故かいつも血の匂いがする。
妙高型は人間の血の匂いがするからまだマシなんだけど、白露型は人間の血以外にも、『獣』の血の匂いがする。匂い立つなあ……。
なので、そのめちゃくちゃな血の匂いがあまりにも臭いので、白露型は気を遣って、消毒を心がけてくれている。
なので、病院っぽい匂いがするね。
他にも、鹿島の体液に媚薬成分が含まれていたとかそんなちょっとした面白い話もある。
……おっと、話が大分脱線したな。
つまりは、艦娘によって、風呂にしっかり浸かりたい派と、シャワー浴びてパパッと済ませたい派があるってことね。
だから、艦娘寮の部屋の中に個人用のお風呂をつけちゃおうか

なー、ってこと。
それと……、後は、ドアに転移装置を埋め込もうと思ってる。
そうだね、ハ〇ルの動く城だね。
まあほら、黒井鎮守府もスタジオジブリくらいのほのぼのした世界観だから……。
まっくろくろすけならぬ、まっしろしろすけこと、謎の毛玉マスコットキャラである首輪付きもいるし、俺もパ〇ーみたいなもんだし、ほぼジブリと言って差し支えないだろう。
黒井鎮守府は全年齢対象、ＣＥＲＯ　Ａだからな！
決してニトロプラスやｌｉｇｈｔではない、イイネ？
そう、つまりそんな感じで、艦娘の自室から、食堂、温泉、本館に繋がる転移装置を取り付けておく。
艦娘寮はそんな感じだ。
建築ロボをフル稼働させれば、一日で終わる。

さて、それと、本館。
本館は、そうだな、床暖と業務用エアコンを配置して、後はとにかく丈夫に。
「あ、俺の部屋なんだけど」
明石に尋ねる。
「はい、ちゃんと監視カメラを２４つ、盗聴器を７つ、自動ドアと、艦娘の私室と繋がるようにしておきました！」
んんー？
「俺のプライベートとかは？」
「ありません！」
そっかー、ないのかー。
まあ、ないなら仕方ないな。
そんな事もある。
「鍵とかって」
「ありません！」
ないのかー。

まあ、艦娘しか入ってこないもんな。
別に鍵がなくても困らないよな。
ほら、田舎の家とか、鍵かけないでしょ？
そんなノリなんだよ多分。
まあ、この辺りは都会なんだけど。

工廠とドックは明石と夕張に任せた。
黒井鎮守府のリフォームは一週間で終了だ。
さて、俺の部屋は……、と。
「んー？」
おおっとー？
俺秘蔵のエロ本が全部、艦娘のエロ自撮りにすり替わってるなー。
それとＡＶが艦娘のエロ動画にすり替わってるなー。
あと机の上に白露型謹製の精力剤が１ダースあるなー。
「よし！」
逃げよう。

４５５話　プライドを捨てろ

黒井鎮守府がリフォームされ、建物が頑丈になった。
これで、バリアがない時に突然核ミサイルを撃ち込まれてもビクともしないガチガチの建物になった。安心安全である。
……まあ、うちの子達は核ミサイルより強いので何の問題もない。
因みに、長門、酒匂、サラトガは核熱属性に弱い。その辺は仕方ないよな、艦娘としての決まり事みたいなもんだ。
クロスロード作戦だな。
艦娘は戦艦の神霊であるからして、戦艦だった頃の謂れに引っ張られる訳だね。
例えば、爆発で沈んだ陸奥は、爆発に弱い。
例えば、限界を超えて巡航し自壊した島風は、オーバーヒートの恐れがある。
そして、クロスロード作戦による核実験の標的艦となった長門らは、核熱に弱い。
これはどうしようもないことなんだよね。
例えば、ジークフリートの、竜の血を浴びられなかった背中の葉っぱ一枚分の面積。
例えば、クーフーリンのゲッシュ。
例えば、アキレスのアキレス腱。
つまりは、避けられない弱点な訳だね。
……とは言え、そこを突けるほど甘くはないんだがな。
陸奥は、衝撃と火を無効にする機構を艤装に組み込んである。
島風は、緊急冷却装置を艤装に組み込んである。
長門は、そもそも弱点を突いて大ダメージを与えたところで死なない。
弱点は塞いであるのだ。
それに……、艦娘は全員、変質している。
アレだよね、なんとかオルタとか……。
最初は神霊だったんだけど、気がついたら、破壊神、地母神、死神、

邪神、女神、魔人辺りに霊基が変わっちゃってるんだよねえ……。
だからあんまり弱点らしい弱点はないのよ。
俺？俺は弱点とか可変だから。
……誰がアルバトリオンじゃい!!!

さて、そんな感じで、黒井鎮守府はリフォームされ、ハロウィーンの時期だ。
今年も渋谷で軽トラがひっくり返されるのかな？
まあ、とにかく、これから駆逐艦の子がお菓子をもらいに来る筈だ。毎年やってるし。
駆逐艦以外も、いたずらがどうこうとか言いつつ、俺に逆セクハラしに来る筈だ。毎年されてるし。
ＡＲにより、ハロウィン的な飾り付けがされた黒井鎮守府で、コスプレした艦娘が迫る！

『ｐＯい……』
「んんーん？」
真の姿の夕立が来た。
「あの、それ、コスプレってか……。そもそも君、オチ担当じゃん……？俺が可愛い駆逐艦と戯れて、最後に白露型に誘拐される感じのオチじゃん？」
いきなり切り札は良くないよ。
一ターン目からエグゾディア揃ってるようなもんじゃん。
『まあまａ、提督さＮ！ｙＵＤａち、だよー！ｔｒｉｃｋ―ｏｒ―ｔｒｅａｔ!!』
真の姿の夕立は、４ｍ程のケンタウロス型実体。大きさは可変。
鋭角ながらも有機的な黒い鎧のような姿で、顔はなく、口と思われる部分に牙のあるひび割れがある。そして、青白い光を発するラインが全身に浮かんでいる。それは、近未来的なパワードスーツのエネルギーラインというより、もっと有機的な、血管のようなものだ。
後頭部から伸びる金髪が、辛うじて、人間の形をしている時の名残

だろうか？
あまりの魔力量に、鎧のような身体の各所から、青い炎のような魔力が陽炎のように揺らめいている。
これこそが、白露型の真の姿である。
そう、白露型はボスなので、第二形態があるのだ。
第二形態の白露型は、器用さが減る代わりに、殲滅力、攻撃力が増加する感じになっている。
そもそも、白露型は基本的に、対怪異のエキスパートであり、無数の敵を殲滅するのは不得手だった。
だからこそ、殲滅力を上げた第二形態を作り出すために、自己の改変を繰り返した訳だね。
しかし……、俺としては狼の被り物とかで可愛い感じにして欲しかったのだが。
仮装って言ってんのに化け物の姿になってくるのはマジでおかしい。
それはさておき、この夕立にトリックされたら俺は存在ごとデリートされるかもしれない。
大人しくお菓子を渡そう。
「はい、クッキー」
『わーｉ！あｒＩＧａとー、提督さん！』

さて、もうオチは終わった。
これで問題ないだろう。
「とりっくおあとりーと、じゃぞ！」
「オッ、利根ェー！」
利根が来た。
のじゃロリだぞ！
「お菓子あげるねー、どれが良い？」
俺が四次元ポケットに手を突っ込んで色々なお菓子を見せる。
「いたずらして欲しいのじゃ」
おおーん？

おうん？
おーん？
「お、俺がいたずらするの？」
「うむ！」
んおー？
「えっ、えっと、じゃあ、落書きとかしちゃおうかな！」
「うむ！ならば内股のここに『肉便器』と……」
「びゃーっ！なんで履いてないの?!!」
利根と筑摩の謎前掛けは、艤装なのでしょうがない。
利根と筑摩は、そもそも、あの謎前掛けの下に、レオタードとかスク水とかそういう感じのパンツを履いている。いわゆる見せパンを。
でも、パンツを履かずにあのスケベ前掛けをひらひらさせてたら、どう見ても変態じゃないか！
まともなのは僕だけか！
「ん～？ほれほれ、早う『イタズラ』せんか??」
前掛けをひらひらさせる利根。
その度に、少量の毛が生えているのがチラチラ見える。
「ふ、ふ……、ふゥゥゥ……ン？利根、そんな程度で俺を誘惑できると思ったら大間違いだぞ……？」
「……むう。最近構ってもらえなかったから、抱いて欲しかったのじゃが」
しゅん、と寂しそうにする利根。
「……あー、そう言われると弱いな」
「じゃろ？ほんの一時間、いや二時間で済ませるから、良いじゃろ？」
「うん、分かった」

利根と楽しんだ。
いや……、俺が百パーセント悪かったからね。
利根はあんなに良い子なのに、最近はあまり顔を合わせなかった。
そもそも数百人いる艦娘全員と毎日顔を合わせるとか無理よね。
なるべく平等に構いたいのだが、お互いに都合があったりなんだり

でなあ……。
「そう思わないか天龍」
「え？あ、お、おう？」
俺は流れるような動きで天龍の胸に顔を埋めた。
「はっ?!」
な、何故だ?!おっぱいに吸い寄せられた！
俺の中にシンオビートが？シャッガイからの昆虫か？
何かに操られているのか？
畜生！俺は負けないぞ！
「え、と、提督？」
「うおおおお！」
「な、何か辛いことでもあったのか……？」
あー、天龍は海の匂いがするなー。
おっぱいめっちゃ柔らけー。
改二になって更に大きくなって偉いぞ天龍。
「えっと、おっぱい飲むか？」
「……はい？」
天龍ちゃん????
「えい」
プシュっとアンプルを首に刺した天龍。なにその薬？ヤバイやつ？
「明石から、妊娠しなくても母乳が出るようになる薬をもらっといたんだ」
「何それは……（困惑）」
何でそんなもんが流通してるの？
「あ、おっぱいが張ってきたな。ほら、提督」
「ほら、じゃないが？」
え？何この展開？
「吸いたいんじゃねえのか？」
「いや別に……」
「あ……、俺のおっぱい、嫌いなのか……？」

しゅんとする天龍。
「あっ、あ、いや、その……、ええと、天龍のおっぱいは凄く素敵だと思うよ？けど、吸ったりは……」
「じゃあ吸えるよな！」
ふむ。
ふーーーっ。
さて。
「吸いますぅ……」

今回のハロウィンでは、お菓子を失う代わりにプライドを失った。

４５６話　黒井モール裏オークション

さーて、今日は、黒井モールのセールの日だ！
ハロウィンシーズンなんで、ＡＲで綺麗に飾り付けて、従業員のアンドロイドも可愛らしい仮装をして、着ぐるみなんかがいて。
それに合わせて、なんだか怪しい人達が集まる……。
……そう、表の黒井モールのセールの日に合わせて、地下武器屋のオークションが開催される。
木を隠すなら森の中、人通りが多いほど、裏社会の人間も隠れやすい。
という訳で、裏オークション、始まります。

今日は俺も、オークションの警備員兼見物人として場にいることにした。
いや……、もうね、止められないからね……。今オークションをやめれば、各方面から怒られる。オークションは続けざるを得ない状況だ。
うん、そうね、ちゃんと見てなかった俺が悪いんだよ。
夕雲型が警備員として配置されていて、巻雲がオークショナーとしてたたき台の上に。
会場には、裏社会の関係者がぞろりと揃う。
あ、あいつはヤタガラスの重鎮だな、前に会ったぞ。
おお、こっちはガイア教の幹部だ。
あれはアトラス院で見た気がする。
あっちはアサシン教団の幹部で……、あ、エリアスさんも来てるのか。ドクター・ストレンジも？ドクタードゥームも来てるな。
……まあ、ドンパチやり始めたらぶっ飛ばすと予告してあるし、仮にドンパチ始まって巻き込まれても責任はとらないよって誓約書にサインさせてあるから（震え声）。
さ、さーて！楽しいオークションの始まりだぁ!!
『はい、皆さんこんにちは！黒井鎮守府です！オークショナーは私、巻

雲でございます。それでは、本オークションのルールの説明から……』
まあ、普通に、システム面の説明だ。
因みに、英語で話している。
そりゃそうだ、公用語は英語だからな。
まあ、ここに来ているレベルの人間なら、確実に英語は話せるし、日本語やラテン語、アラビア語やフランス語なんかでも通じるはずだ。
『では、早速始めていきましょう。まずは、レーヴァテインからです！』
『ほう……！』
『おお……！』
『素晴らしい……！』
その筋の人々……、いや、一部人じゃないのも混ざっているが、その筋の連中が感嘆の声を上げる。
それもそのはず、本物のレーヴァテインだからだ。
ああ、神話で語られる武器だな。
魔界にある原典と変わらない複製品だ。
正確に言えば、魔界はサーバーであり、神話の道具はいくらでも複製できる。
理論上はね。
だが、実際複製するとなると、天文学的なマグネタイトが必要となる。
我々、黒井鎮守府は、魔界にいるスルトの高位分霊を殺して、直接レーヴァテインを分捕っているのだ！
だからつまり、本物と変わらない性能を持つ複製品である訳だな！
『最低落札価格は百万ドルからです！』
『百五十万！』
『二百万！』
『三百万！』
早速、三億円というアホみたいな額が飛び交う。盛り上がってきたぜ！

まあ……、それくらいはするだろうなあ。
因みに、本物かどうか？みたいなことを言う奴はいない。
マジックアイテムを見て、効果が分からない「程度」の雑魚はここにはいないからだ。
オークション会場での魔法は禁止されているが、例外的に鑑定の魔法や、肉体の維持に必要な魔法は許可されている。
だから、今回も、オークション参加者の個人個人が鑑定の術を使って物品を見ているので、このオークションに出品される物品が本物かどうかくらいは分かる。
むしろ、ここの常連を騙すくらいの隠蔽術式を使うとすると、オークションでの利益額を隠蔽にかかる費用で超える。
逆に聞くが、あのソーサラースプリームを騙す程の魔法ってどうすりゃいいのよ？
そりゃ夕雲型、高雄型、白露型を総動員すりゃどうにかなるかもしれないけどさ、少なくとも俺には無理だね。
それに、オークションってのは信用商売な訳で。
騙して金を巻き上げようってのは良くないんだよね。
さて……。
『五百万』
『五百万ドル！ミス・二重人格メガネさんが五百万ドルで落札です！』
あ、因みに、彼女みたいに明らかに追われる身の人とかも来るから、オークション参加者は全員偽名だ。誰なのかは詮索しない方がいい。藪蛇どころの騒ぎじゃないよ？
まあほら、彼女は一応、封印指定の魔術師だから……。
俺？俺はそもそも半分くらいは魔法使いだし、封印指定ではなく、禁術に指定されてるかな？
白露型がサラッとニャルラトホテプ召喚してるじゃん？あれ、禁術なんすよ。
だから、定期的に刺客が差し向けられるし、イギリスに行けばごそっと執行者が来る。
捕まれば多分、一生監禁だと思うよ。

でもまあ、魔法使いも封印指定も禁術指定も割とよくあるから、日本にいればスルーされるかな？
俺達は凄くやばいレベルの禁術持ちだから定期的に刺客が来るけど。
死者蘇生、空間転移、幻想種や邪神の召喚がアウト判定らしいね。
あとメテオとメギドラオンも駄目っぽい。
それとヨグソトース召喚による時間旅行も完全アウト、『瞳』による限定的な未来予知もアウト判定……、ってか魔眼扱いらしい。秘儀裁示局め……。
え？
ではあそこにいる一般通過ソーサラースプリームはどうなのかって？
いやいや、あのソーサラースプリームに敵う魔法使いなんて数えるほどしかいないでしょ？
多分、魔術協会の全戦力に匹敵するくらい強いよ、あの人。
だから、刺客も来ない訳だな。無駄だから。
しかし、俺は戦闘能力はそんなんでもないと知られているので、ガンガン刺客が来る。
舐めやがって畜生め。

『では、次はこちらの、★クローク『コルイン』です！最低落札価格は五十万ドル！』
『六十万！』
『七十万！』
『七十五万！』
コルインか。確か、耐性が強いマントだったな。俺も何着か持ってる。
『百万』
『百万！他にいませんか？……はい、では、ミスター獣骨頭さんが百万ドルで入札です！』
あ、あの人は……。

「良い買い物をした。チセへのお土産にしよう」
あー……、最近できた嫁にお熱の……。
この人も魔法使いだからなあ……。
『では、次に行きましょう！★《異形の森の弓》です！最低入札価格は百万ドルから！』
おお、あれか。これは良い弓だぞ。特に、矢が当たった相手を一定確率で目の前に引き寄せるのが凄く使える。魔法戦士には嬉しい一品だな。
『百三十万！』
『百五十万！』
『二百万！』
ふむ、どうだ？
『三百万』
『三百万！他にいませんね？では、ミスターソーサラースプリームさんが入札！』
「ふむ、良いコレクションになりそうだ」
趣味かよ！
金持ってんな、ソーサラースプリーム！
『では、本日の目玉の、《ソウルの矢》です！こちら、値段は三千万ドルからになっております！』
『まさか……！』
『馬鹿な！』
『第三魔法のスクロールだと!!!?』
魔術協会関係者が沸き立つ。
魔法使い達も、ソウルの魔術……、『魂の物質化』には、強い興味を示しているようだ。
『五千万!!!』
『七千万!!!』
『一億!!!』
競りの額もヤバいことになっている。
約百億円だ。

まあ、そんな辺りで、俺は異変に気付く。
『クソ！第三魔法を他人の手に渡すくらいならっ!!!』
おいおい、あいつ、やる気だぞ。
「長波」
「『ファランの短矢』」
『があっ……?!』
暴走魔術師の腕が、隠し持っていた杖ごと吹っ飛ぶ。
後ろに忍び寄っていた早霜が即座に捕まえて、連れ出した。
『はい！一億ドル！他にいませんか?!』
何事もなかったかのように続くオークション。
これがいつもの光景らしい。
因みに、これはミスターラトヴェリア王が三億ドルで落札した。

さて……。
裏オークションなので、客の身元は不明である。
俺はソーサラースプリームなんて見てない。
ごく普通のオークションだったね、うん！
今日は少し安めの値段だったかな？
『次のオークションは、日本時間で、十一月二十日の午後一時からです！皆さんの出品も受け付けていますので、こぞってご参加くださいね！』
また、表の黒井モールのセールの日に、ここでオークションを開催すると告知して……。
今日は解散。

「やあ、旅人君」
「はい」
帰り際に一般通過ソーサラースプリームに絡まれたが、許容範囲内だった。
こういうどでかい単体の戦力を野放しにしちゃいかんでしょ……。

４５７話　義体

「フゥーッ……!!リングフィットアドベンチャー一人ＲＴＡ４２時間５４分３１．４４秒ォォん……」
俺は、普通に暇だったので、最近話題のゲームを購入して運動していた。
「ヤバイな……、マッチョになっちゃう……」
「……それ以上マッチョになってどうするつもりなんですかねえ？」
おや、明石。
「何用かね？」
俺の私室まで来るとは。
「はい、ボランティアのお誘いです」
「ボランティア？」
「献血のようなものですね」
ああ、また何かの実験かな？
「ほい」
即座に手首を切り落とす。
「あっ、ストップです、ストップ」
「ほい」
手首をくっつける。
「提督、そのですね」
「何かな？」
「身体、くれませんか？」
身体？
うーん？
「どこまでの範囲で？」
「ここから……」
明石が俺の頭を触る。
「……ここまでですね」
明石が俺のつま先を触る。
「……全部じゃん？」

「はい、あ、脳は置いていくんで……」
んー……。
「まあいいよ、魂は弄らないでね、そこまでやられるとちょっと困るから。脳は適当に培養液に入れといて、あとはこっちで勝手に再生するから」
「……常識的に考えて頭おかしいですよね、提督って」
「いや、君みたいな可愛い子にくれって言われると何でもあげたくなっちゃうんだよなあ」

次の日。
『ん……？』
あれ？俺は寝ている間に脳味噌をぶっこぬかれて、昔会ったハワード・ロックウッドさんみたいにされてると思ったんだが？
いや、あそこまで脳がデカイわけじゃないが。どちらかというとマブラヴオルタ的なアレかもしれない。俺の武君はどこ……？ここ……？
『あー？あー、あー？』
アッレぇ？なんか声出るな？肉体ないはずなのにな？しかも電子音だ。初音ミクかな？
『瞳』で見てみると……。
『あー、そう来る？』
肉体は、黒井鎮守府製義体に置き換わっていた。
そうなんです、黒井鎮守府、戦闘用含めてサイボーグのボディを売ってるんです。
『サイボーグボディ、ハイエンドモデルか……。義体を使った経験はあんまりないからなあ……』
一部の拡張《エクステンド》はたまにしたりするけど、全身総入れ替えは殆ど未経験だな。
俺的には、鍛えればサイボーグ並の肉体にできるんだし、わざわざ整備性が低い義体にする必要なくね？みたいに考えてるし、何より

……。
『エッチは生身の方が気持ちいいんだよ!!!』
ってことだな。
義体だと、脳内物質の抑制が入るし、抑制装置外して快楽物質ぶち込むと快楽が『ジャンキー』過ぎるんだよな。
やっぱり性行為はジャンクフードとは違うからね。オナニーならそれでいいのかもしれないけど、俺にとっては、セックスはコミュニケーションだと思ってるからあんまりそこに電子制御をぶち込むのは……。
ま、良いか。
折角俺用に義体を用意してくれたみたいだし、しばらくはこれを使おう。
さーて、動くかな？
『オッ、オオ』
駄目だな、レスポンスが遅い。
多分、三時間も使えば慣れるんだろうけど、これはちょっとやり辛いな。
知り合いのサイボーグにコツでも聞こうかな？十三とか少佐とか、雷電とか００ナンバーズの人達とか、クロちゃんとか……。
え？人達？
サイボーグは人だろ。
旅人カウントでは心があれば人と同様に扱うから。
その辺りの線引きで悩むのめんどくさくない？
お前も人！で良いじゃん？
『さて……』
立ち上がる。
パワーアシストめちゃくちゃ強いな、素の俺の十倍はあるぞ。
えーと、見た目は……、生体パーツ少量。
デュアルアイの下にエネルギーラインを通してある四角い頭に、手首の下に衝撃砲内蔵、背中にスラスター、腕には変形機構付きで、高周波ブレードになる。全体的にマッシブな出来だな。

この質実剛健な作りは明石だな？
夕張の作ったものは、もっと神経質なほどに精密で超高性能だ。
明石がスレッジハンマーなら夕張は日本刀。
明石がロケットランチャーなら夕張は対物ライフル。
明石がスーパーロボットなら夕張はリアルロボット。
あの二人は同類ながら思想は正反対だ。
『ん？』
《新作ボディの試用お願いします??》
明石の手紙だ。
『試用っつってもなあ……』
機能の盛り過ぎで頭がガンガン言ってるし、神経チャンネルが多過ぎて上手く動かせない。
このレベルの義体を動かすとなると、数年レベルでの義体戦闘経験者とかじゃないと無理だろうなあ……。
難易度的には、複雑骨折した人体を筋肉だけで動かす感じかな？
両手で箸を持って爪楊枝を挟んで、その爪楊枝ではんだごてを持って精密ハンダ付けする感じ？
即ちまあ、常人には扱いきれないやつだね。
乗用車と飛行機くらい違う。
しかしまあ、俺も旅人。
旅人に不可能はあんまりない！
『えーと……、あ、このチャンネルか？えい！』
《転移システム、起動》
『っと、ォ！空間転移できた！』
ウィザードリィ的なことにはならなかった！
危なかったな！
でも、精度がアレだな、三五センチ上空に転移しちまった。
いや……、これは俺が使いこなせていないだけだろうな。
『加速装置！』
《加速装置、起動》
ふむふむ……。

『衝撃砲！』
《衝撃砲、起動》
こんなもんかな？
ちょっと慣れてきた。

義体の使い方は大体分かった。
さて……、ん？
「お？」
『ああ？』
あ、加古だ。
「あ、提督ー、今暇ー？」
『んー……、まあ、暇かな？』
試用は大体終わったしな。
……ん？
『待てよ、何で義体の姿の俺を見て提督だと分かったんだ？』
「匂いで分かるよ！」
『……そっか！』
肉体総入れ替えしたのに匂い……？詳しく考えちゃいけないやつかこれは。

因みに。
『やあ、睦月』
「あ、提督！なんだか凄いことになってますね！」
『何で俺だと分かったの？』
「え？雰囲気とかですかね？」

『やあ、赤城』
「あら、提督。美味しくなさそうな姿ですね」
『何で俺だと分かったの？』
「え？ああ……、仕草とか雰囲気とかですかね？」

『やあ、白露』
「こんにちは、提督」
『何で俺だと分かったの？』
「魂が提督のものなので」

艦娘は、俺が義体のまま話しかけても、なんとなく俺だと見抜いてくる。
表面上の変化は無意味ってことか。

『あと、一応聞いておきたいんだけど、俺の肉体で何をするつもりなんだ？』
「高性能ラブドールにします」
『やめて下さる????』

４５８話　企業としての黒井鎮守府

「エロゲを作りたい？」
「はい！」
俺は衣笠の一言を聞いて、微妙な顔をした。

確かに、黒井鎮守府メンバーの平常時の仕事はそう多くない。
深海棲艦は……、滅亡するような存在でもないし、仕事はなくならないといえばなくならないのだが、それでも最近は極端に少ない。
いや、深海棲艦も頑張ってはいるのだ。
たまに、艦娘に匹敵し得るレベルの強力な深海棲艦との遭遇戦もあるし、深海棲艦の平均レベルも上がっている。
ただ、それを上回るレベルで艦娘が強いだけの話だ。
だからこそ、仕事がない普段の艦娘には、最近作った黒井モールなどでアルバイトさせているのだが……。
基本的に社会性が水より低いので、まともに働けてはいない。
となると、同人アダルトゲームの製作など、自営業的な仕事の方が向いているのかもしれないな。
よし、なら、とりあえずやらせてみようか。
「どんなのを作るの？」
「うーん、そうねえ、窓にハマった女の子にいたずらしたり、妹とエッチしたり、ブロックを崩したりするゲームはどう？」
「太古の記憶が目覚めるからやめて？」
「刻まれた使命が今炎になりそう？」
アバレた数だけ強くなるのは結構だが、アバレた数だけ優しさも知ってくれないかなあ……。
「じゃあ、普通にＡＤＶにするね！」
「どんな内容の？」
「ｌｉｇｈｔみたいな」
「あー、バトルオペラ的な？」
良いんじゃない？

「ナチスの兵士が現代に蘇って……」
「それ既に現実世界でやったから」
「はい？」
「ええと……、悪の組織『ショッカー』はナチスの流れをくむし、昔イギリスに蘇ったナチスの兵隊である『最後の大隊』が現れて、今でもアメリカではナチスの後継的な組織である『ヒドラ』が暗躍して、『聖槍十三騎士団』も昔出てきたからね」
つまり、ナチスの復活なんて、この世界で既に起きた事件。
インパクトは薄い。
「うーん、ちょっと、本気で考えてみる。じゃあねー！」
走り去る衣笠。
うむ……。
そうだ！艦娘に仕事を探してあげようか！
もう、一般職をやらせようとは思わない。
表の社会に適合できないなら、裏社会でも良い。
とにかく、働かせよう。
いつ俺がいなくなっても良いように、生き抜く力を身につけさせてあげないとならない！

大淀！
大淀は……、まあ、黒井鎮守府の実質的な支配者だし。
「大淀、なんかやりたい仕事とかある？」
「はい？その、黒井鎮守府での事務仕事でしょうか」
まあ、本人も、事務仕事が好きらしいし。
因みに、事務ってか総務は大淀で、電話応対が鹿島と香取、そして守子ちゃん。財務関係は霧島、鳥海、営業部は俺と陸奥と翔鶴。
黒井鎮守府は、実は、深海棲艦の出現の煽りを受けて倒産した海運貿易会社を買収してフロント企業にしている。
だから、黒井鎮守府本部に来る仕事は、そこまで多くはない。
下請けと化したフロント企業に業務の殆どを外注しているから、黒井鎮守府本部には仕事はあまり来ないようになっている。

逆に、黒井鎮守府本部に仕事が来た場合、それは国営の仕事だったり、裏社会に関係する大きなヤマだったりと、デカイ話なので、それを言えば、黒井鎮守府はいつもデカイ仕事をしていると言える。
実際、今や、黒井鎮守府の直通の電話があるのは、日本の総理大臣、アメリカの大統領、イギリスの女王陛下、マリネラの王家、ラトヴェリア王などの各国のトップ。
その他にも、ヤタガラスにクズノハ、アベンジャーズ、イルミナティ、X―MEN、ファンタスティックフォー、S・H・I・E・L・D・と、BF団、国際警察機構、光子力研究所、早乙女研究所、東城会、鷹の爪団、ケロン軍、フロシャイム、アサシン教団、ミスリル、B・S・A・A・、デッドセック、ハンター協会、財団、海馬コーポレーション、デストロン、サイバトロン、アウターヘブン、インテリオルユニオン、オーメルサイエンス、GAなどの大組織。
竹尾ゼネラルカンパニー、武上重工、346プロダクション、日本生類総研、東弊重工、ワンダーテインメント博士、スピードワゴン財団、ウェインエンタープライズ、破嵐財閥、来栖川エレクトロニクス、鴻上ファウンデーション、式部重工、敷島重工、旋風寺コンツェルン、など、企業や財閥との繋がりもある。
まあ、百パーセントが俺のコネだが、時折、協力の要請が来るくらいで、基本的には仲良くやっている。
この、幅広く存在するコネを、何故か大淀は殆ど把握しているのだ。
なので、今では、放っておいても仕事をもらってきて、もらってきた仕事を艦娘に割り振り、こなしてしまう。
「……あれ？ひょっとして、俺の出る幕ない感じかな？」
「ええと……、はい。その、言いづらいのですが……」
あー……。
黒井鎮守府は現在、艦娘派遣企業となっているらしい。
艦娘個人個人のパーソナルデータに合わせた仕事を斡旋して、成功報酬を渡す……。
売るものは、武力、魔法、技術と多岐に渡る。
例えば、高雄型なら、対モンスター戦のスペシャリストとして、あ

らゆるモンスターを撃滅する戦力を。
例えば、夕雲型なら、対デーモン、対人、対竜への幅広い戦闘を。
例えば、空母なら、殲滅戦、広範囲爆撃、雷撃を。
例えば、厨房組なら、料理全般の手伝いを。
例えば、工廠組なら、技術提供を。
例えば、白露型なら、神話的、魔術的な技術の提供、事件の解決を。
戦力を中心に、幅広い技術を売る。
それが黒井鎮守府である。
俺？
俺は艦娘のヒモ。
まあ、つまりは……。
「これ、艦娘達ってちゃんと働いてるんだなあ……」
ということになる。

すると、どうするか。
最早、初期の頃のように、俺が土下座行脚して金を掻き集めてなんとか給料を払うようなことはもうない。
今や、俺は完全に艦娘のヒモである。
ヒモかあ……。
まあ、別に良いんだけどね？
「あ、そうだ（唐突）、となると、みんなの働きぶりを見てみたいなー」
「ええ、是非お願いします」
大淀が笑顔で言った。
「最近は色々と安定してきて、みんな気を抜いているかもしれませんから。抜き打ちチェックですね！」
とのこと。
あ、ふーん？
じゃあやっちゃう？
抜き打ちチェック……!!

４５９話　艦娘参観　その１

艦娘の働きぶりを見たい。
ヒモである俺が寄生先の恋人の仕事の様子を見に行くとかこれもうわかんねぇな？
まあ良いよ、やっちゃえやっちゃえ。
さて、こんな時に、みんなはどうするかな？
安パイから切っていくかな？
俺は分の悪い賭けは嫌いじゃないから、危ないところから攻める主義なんだが……、みんなに配慮して、安パイから切って行こうと思う。
いきなりオチたら面白くないからね。
さあ、安パイな艦娘から授業参観していこうか！

ケース１：神通
依頼内容：岩手県釜石市に存在する『ショッカー』の拠点の襲撃
目標
・怪人『クマトラ男』の抹殺
・ショッカー科学者『割類博士』の逮捕
・戦闘員をできる限り殺害
・拠点の破壊工作
・副目標として、機密文書の奪取も依頼するが、恐らく破棄されるので、なくてもよい
依頼主：仮面ライダー協会

「ふーん？」
仮面ライダー協会、か。
確か、伝説の男、本郷猛が創立した、仮面ライダーとそれに類するもの達の集まりだ。
基本的に、仮面ライダーという連中は、個人の最強戦力で制御不能なものだから、せめても最低限の足並みを揃えようという名目で、協会が設立されたんだよな。

実際、仮面ライダーは大抵、「なんかそういうセンサーでも付いてんの？」ってくらい悪党とエンカウントする確率が高いから、世界各国でバラバラに戦っているんだよ。
だから、それは流石にマズイと見た、伝説の仮面ライダー1号、本郷猛さんが、情報網や連絡網を作ったんだよ。
……まあ、アマゾンとかカブトとかクウガとかオーズとか、大抵は連絡つかないんだけどね。
でも、ショッカーとか、悪の組織関係で本当にヤバい事件が起こると何故か全員集合するから謎である。
そして……、まあ、そんな感じで、仮面ライダーは個人プレーが基本だから、みんな忙しい。
このようにして、他の組織に依頼を外注してくることもあるそうだ。警察とか、それに類する組織とかにな。
今回もそんな感じで、精力的に活動している、仮面ライダーストロンガーさんが手に入れたショッカーの機密文書にある日本の隠れ家を襲撃してほしいという依頼がうちに来たらしい。
……何でうちに来たの？
どうしてうちに依頼が来るんですか？どうして……。
……どうやら、うちの営業マンである翔鶴が艦娘のスペックの一部を公開して交渉したところ、「新台君の部下なら安心だ！」と言われて任されたらしい。どういう……、ことだ……？
仕事ならしょうがない、のかなあ……？
とにかく……。
「じゃあ、俺は後ろで見てるから頑張ってね神通」
「はっ、提督がご覧になるとありますれば、この神通、全身全霊の力で任務を遂行したいと思います」
「固い固い、もっと肩の力を抜いて」
「はっ！」
お、ここは柔らかい。
「あんっ??」

さあやってまいりました岩手県釜石市。
ここの町外れの廃工場がショッカーの秘密基地の一つだと聞いている。
潰してやるぜ！……神通がな！
さーて、神通はどうするのかな？
「疾ッ」
神通の腰の刀が煌めく。
この俺の『瞳』を以ってしても、ほぼ、刃が軽く煌めいたと認識するので精一杯だ。
何をやったか？
これが神通の十八番の神速居合だ。
ほぼ不可視レベルの剣閃は、常人なら、「瞬きをせずとも」見えない領域の速さの居合。
余談だが神通は、このように剣術の達人であるが、更にその上に格闘術すら極めている。
『ジリリリリ!!!!』
「イーッ?!」
「「「イーッ!!!」」」
ドアを叩き斬ると、警報が鳴り、黒いタイツのショッカー戦闘員が多数現れる。
しかし……。
「邪魔です」
「「「?!」」」
神通の腰から放たれる銀の閃光、鍔が鯉口に収まる「カチン」という音が数回聞こえると、それだけで、戦闘員は輪切りにされていく。
神通の剣技は、比喩ではなく、「視界の範囲内なら斬れる」くらいの領域にある。ルドラサウム世界基準なら剣戦闘レベル３くらいだ。
因みに、デビルアナライザでは、神通の種族は英傑で、レベルは４９０だった。
「「「イーッ?!!!」」」
音速で消し飛ぶ戦闘員を横目に、工場の地下へと向かう神通。

そして……。
「ゲーッゲゲゲ！飛んで火に入る夏の虫よ！このクマトラ男様が食い殺してくれるわ！」
怪人が現れる。
「や、やれ、クマトラ男！私の脱出まで時間を稼げ！」
博士が逃げる。
「ぐあっ?!」
博士が転んだ。
いや、違う、これは……。
「あ、あれ？立てない？何故だ？立てない？」
神通め、すれ違いざまに博士の足を……！
「あ、ああ？あああああああっ！わ、私の足が！足がないいいいいっ!!!!」
「ッ、オオオオオッ!!!!」
狼狽えて騒ぐ博士を認識した瞬間、怪人クマトラ男は即座に動いた。
何だかわからんがヤバい！そう思ったんだろう。
「死ねぇい！ベアーナックル!!!!」
クマトラ男はその名の通り、クマのような大きな体躯と、肥大化した両腕、鋭い牙を持つ、トラ模様の醜い獣人型の怪人だった。
その大きな拳で抉るように殴るのは脅威だ。
普通の人間なら、脳漿を撒き散らして吹っ飛んでいたところだろう。
しかし、黒井鎮守府には、俺と守子ちゃん以外に普通の人間はいない。
「き、消えたッ?!!」
「縮地、と言います。基本的な武技です」
あー……、相性が悪かったなあ……。
力には技を、技には魔法を、魔法には力をぶつけろってな。
明らかにパワータイプのこの怪人は、圧倒的技量タイプの神通相手じゃなぶり殺しだな。

「な、舐めるなよ女ぁ!!!」
カチン、また、居合の音だ。
「ぐあっ?!」
クマトラ男の強靭な腕から大量の血が吹き出す。
「あら……、思いの外、丈夫なのですね」
「て、てめえええ!!!や、やりやがったなあああ!!!」
「では、もう一度」
再び、神通の身体が掻き消える。
「ッ、オオ!!」
何とか首を守ったが、脇腹を深く斬られる怪人クマトラ男。
圧倒的にクマトラ男が不利だ。
これを繰り返せばズタズタにされて終わりだろう。
だから……。
「わ、わ、分かった、降参だ！は、博士の手元にあるアタッシュケースに機密文書が入っている、それを渡すから俺は見逃してくれ！」
「……良いでしょう、アタッシュケースを渡しなさい」
「お、おう、投げるぜ、ほら……、よっと！」
アタッシュケースが宙を舞う。
その瞬間！
「死ね！熱光線!!!」
クマトラ男が口からビームを吐く!!!騙し討ちだ!!!
神通は……！
「まあ、そうでしょうね」
「あ、え……？」
ビームを「斬った」。
「ゴミ虫の考えそうな事です。お見通しですよ」
「あ、ああ……！うわあああああ!!!」
「死ね」
「ぎゃあああああ!!!」
首を跳ね飛ばされて爆発する怪人クマトラ男。
そして、機密文書入りのアタッシュケースを手に入れると、爆発の

衝撃でショッカーの秘密基地の自爆スイッチが誤作動する。
『自爆まで、あと一分……』
神通と俺は、ぶっ倒れている博士を掴んで急いで脱出した……。

リザルト
・怪人『クマトラ男』の抹殺○
・ショッカー科学者『割類博士』の逮捕○
・戦闘員をできる限り殺害○
・拠点の破壊工作○
・副目標として、機密文書の奪取も依頼するが、恐らく破棄されるので、なくてもよい○
評価：S
報酬：１２００万円
―黒井鎮守府の中抜き：２００万円
＝神通の今日の手取り：１０００万円
神通の預金口座：３５００００万円＋１０００万円

４６０話　艦娘参観　その２

ケース２：翔鶴
依頼内容：営業回り
目標
・黒井鎮守府と友好的な組織に出向し、友好関係を深める
依頼主：黒井鎮守府

さて……、翔鶴の仕事ぶりはどんなもんかな？
ちゃんとやれてるかな？
翔鶴は、うちの営業部だ。
営業部の条件として
・外面がそれなりにまとも（狂気を抑え込める）
・舐められない程度の大人の外見
・外国にも行くので英語他数ヶ国語が話せる
・交渉などができる賢さ
の四つの観点から艦娘を見る必要がある。
例えば、我らが天使、電だと、外見が幼過ぎてアウトだ。ともすればヤクザの会合にも顔を出す黒井鎮守府の交渉役としては不適格。
例えば、雲龍だと、日本語は通じるが会話が不可能なのでアウト。
例えば、長門だと、交渉能力、駆け引きというものがまるでできない真っ直ぐな人格ゆえにアウト。
そんな感じで、営業ができる艦娘は少ない。
基本的に、営業ができて、やったことのある艦娘は、翔鶴、陸奥を中心に霧島、香取、鹿島、大淀、金剛、伊勢、筑摩、龍田、イタリア、ローマ、ガングート、リシュリュー、テスト、妙高、高雄、ザラ、加賀、グラーフ、アクィラ、飛鷹、千歳、祥鳳……、こんなもんかな？
もちろん、全員が常に営業をしている訳ではないし、他のこともできるしやっているが、主に黒井鎮守府と取引する為に呼び出すと、エージェントは彼女達になるってことね。
え？まともそうな艦娘は他にももっといる？

大和は？
彼女は嫉妬深く、四六時中俺を監視している。
サラトガは？
食人癖を拗らせているから、機嫌を損ねると物理的に食われるぞ？
鳳翔は？
残念ながら鳳翔は電車とかにちゃんと乗れないし、スマホもろくに使えない。
それでも結構多いって？とんでもない！黒井鎮守府は世界の海運業を支配するメガコングロマリットだが、本当に信頼できる面子である艦娘はたった二百人ほど、そのエージェントもたったの二十人ほどなのだ。
……少なくない？
オーバーワークとかしてないよね？
旅人くんには「残業を強要する奴」をゆるさないという伝説めいた定評があるんだよ？

それでは、早速翔鶴の仕事ぶりを見ていこうか。
「で、翔鶴、今日のスケジュールは？」
「はい、今日はアメリカの定例会議に出席します」
へー、定例会議ねえ。
「どこのグループの会議？」
政府高官とかかな？
翔鶴はそういう高貴なパーティーとかに出席してそう。
「はい、イルミナティです」
「ファッ?!うーん」
イルミナティだと?!

イルミナティ……。
言ってしまえば、各分野の最高レベルの人材が集まり、世界の行く末を操作しようとする議会だ。
海洋の支配者にしてアンチヒーロー的思想の持ち主、ネイモア・ザ・

サブマリナー。
人間代表、アイアンマンことトニー・スターク。
科学側代表、ミスター・ファンタスティックことリード・リチャーズ。
魔法側代表、ドクター・ストレンジこと、スティーヴン・ストレンジ。
インヒューマンズ代表、ブラックボルト。
ミュータント代表、プロフェッサーXことチャールズ・フランシス・エグゼビア。
つまりは、超ド級の権力者達だ。
なんでそんな連中と関わり合いにならなきゃならないんですか？
厄ネタゴロゴロの美味しいシチューみたいな世界だけど、イルミナティは特にめんどくさい部類だ。
積極的に関わりたくはないんだが????
えっ、ていうか、黒井鎮守府ってそんなデカい組織になってたの？
あのイルミナティと会談するレベルの組織に？
……よし！考えないでおこう！

『ドーモ、旅人です』
俺は英語でアイサツする。
アイサツは大事だ、古事記にもそう書いてある。
なお、ブラックボルトさんにアイサツされたら吹っ飛ぶ模様。
あー、えっとね、ブラックボルトさんは、口から超音波出るから、話すと音で色々と吹っ飛ぶのよね。
……ん？話せないなら何でここにいるのか？
プロフェッサーXは最高のサイコメトリーだから意思疎通に問題はないよ？
じゃあまあ、会議しますか。
『あっ、俺は今回、翔鶴の付き添いなんで。置物だと思っててください。あ、それことれ、今回のお茶受けのクッキーです。こちら、黒井鎮守府産の茶葉の紅茶もどうぞー』

「旅人さん」
「はい」
「旅人さんは、私達のボスです。舐められないように、座っていてもらえますか？」
翔鶴に怒られる。
「ウス……」
俺はスッと部屋の片隅に正座する。
すいませんでした、ついいつものノリで……。
『……あー、では、早速本日の議題に移りたいのだが？』
ドクターストレンジが言った。
『あ、すいませんでした』
翔鶴が一言謝ると……。
『ではまず、各国の状況の説明から。まず、私から、魔法関係の世界の近況について説明しよう。魔術協会の動きは特になし、要注意団体である「マナによる慈善財団」がマジックアイテムを誤って暴走させて三人が身体欠損の大怪我をする事件があったが、シャザムがマジックアイテムを破壊して、事態は収束した』
そして、一息置いてから、ドクターストレンジが続ける。
『それと……、星の智慧派が動いた』
その言葉を聞いたイルミナティ達は、真剣な顔になる。
そりゃそうだ、星の智慧派はマズい。
連中はニャルラトホテプの手下だ。
プロフェッサーXが挙手する。
『被害は？』
ドクターストレンジが返答する。
『ゼロだ』
それを聞いたプロフェッサーXは眉間にシワが寄る。
『おいおい、あり得ないだろう、それは！奴らが動いたら街の一つは消し飛ぶ筈だ！』
アイアンマンが言った。
『それについては、黒井鎮守府から話してもらった方が早いだろう。

ミス翔鶴！』
翔鶴が口を開く。
『はい、星の智慧派の暴走鎮圧については、うちの白露型が関わっています』
またか……、と言わんばかりの顔をするイルミナティの皆さん。
『『『またか……』』』
しまいにゃ言ったぞ。
『いえ……、今回は本当にたまたまだったそうです。うちの村雨が休暇でサウスカロライナに訪れていた時に、たまたま不審な人物を発見して、後をつけたところ、偶然にもニャルラトホテプ召喚の儀式を行おうとしている星の智慧派の構成員を発見したそうで……』
『それが通ると思うのか？』
ネイモアが厳しい目を向ける。
『ふふ、ですから偶然、たまたまですよ。それに……、誰かがそれで困りましたか？ネイモアさんは、ニャルラトホテプが世に放たれて、数万人単位の死者と廃人を作るべきだったと？』
『……黒井鎮守府の謎の観測手段は何なんだ?!』
『社外秘です』
『貴様……！』
えっえっ、怖い、何この展開。
『まあまあ、そこまでにしたまえ、ネイモア』
プロフェッサーXが声をかける。
『プロフェッサーX！しかし！』
『黒井鎮守府は我々と違って営利組織の側面が強い。イルミナティへの加入も、中立的な立場から意見すると最初に表明した筈だ』
『それは……、そうだが』
『ふむ……、しかし、それでは不安だな。では、質問を一つだけさせてくれたまえ、ミス翔鶴』
『はい、何なりと』
質問を受ける翔鶴。
『仮に、君達が世界の多くの出来事を知れる観測手段があったとして

……、悪用するかね？』
『悪用はしませんとも。黒井鎮守府はあくまで営利組織です。長期的に見て社の利益になるならば何でもやりますが』
『ふむ……、長期的に見て、とは？』
『例えば、貴方方の戦力を知れたとして、それをヒドラに高値で売りつける……、ような真似はしないということです。貴方方が万一、ヒドラやショッカーなどの組織に敗れた場合、その皺寄せは我々黒井鎮守府にも来てしまいます。それは、我々の望まないことです』
翔鶴は一息ついて、周りのイルミナティメンバーを見回す。
『つまりは、貴方方の不利になるような行動をすれば、巡り巡って我々が不利益を被ってしまうのです』
『しかし、最近は武器商人の真似事を始めたと聞くが？』
ミスターファンタスティックが言った。
『ええ、それが何か？確かに、様々な武装勢力に武器類を販売していますが、何か問題でも？』
『テロリストに力を付けさせているのでは？』
『いえいえ、売る相手は選んでいます。日本のヤクザ程度には、一般的な銃器や刃物程度しか売りませんよ』
『つまり、一般的ではない者には、より強い兵器を売ると？』
『ええ、心を読むくらいはできますから、悪意のなく、戦力を欲する、お金持ちさんには、積極的に兵器を売りますよ。もちろん、ここにいるイルミナティの皆さんにも、割引価格で売りたいくらいです。入り用でしたら私が一筆書くので、どうでしょうか？』
セールストークを始める翔鶴……。

リザルト
・黒井鎮守府と友好的な組織に出向し、友好関係を深める○
評価：Ａ
報酬：０万円
＋黒井鎮守府からの給料：２００万円
＝翔鶴の今日の手取り：２００万円

翔鶴の預金口座：２００００万円＋２００万円

４６１話　艦娘参観　その３

ケース３：暁
依頼内容：黒井モールでアルバイト！
目標
・黒井モールのスーパー部門で店員さんのアルバイトをやろうね！
依頼主：黒井鎮守府

おーっといきなり優しい世界。
ｅｒａシリーズからポケモンくらいに急転換してきたな。
そうだよ、うちの鎮守府はシンカリオンくらいのノリでやっていきたいのに、何故かいつも装甲騎兵ボトムズみたいなノリになるんだよなあ。
俺はジブリとか新○誠みたいな清純派で子供に優しい雰囲気でやっていきたいのに、艦娘はすーぐダイナミックプロとかガイナックスとかになるし、隙を見せればニトロプラスになるから困る。
怖いから見ないようにしてるけど、戦闘時の艦娘とかガンギマリですよ？ニトロプラスの主人公みたいな真っ黒な目をしてるからね？
「断固として殺す」って意思が見えるね、うん。
そーんな中で暁と言えば、まだギリギリ人の心があるかもしれないくらい優しくてとってもいい子なんだよ！
いや、他の艦娘が悪いとかじゃないんですけどこう、暁は闇があまり深くないから……。
まあほら！とにかくさ、お仕事を頑張る暁ちゃんを見よう！な！

「司令官！今日は私、頑張っちゃうんだから！見ててね！」
「うん、頑張ってね！」
さあさあ、暁が、黒井モール、スーパー部門の制服と黒いエプロンをつけて、アルバイトを始めるよ！
可愛いよ！
はー、すっげえ可愛い。

「いらっしゃいませー！」
はー、可愛い……、娘にしたい……。
トラブルなくバイトできるかなー？
まあ、品出しはアンドロイドが勝手にやってくれるし、レジは自動レジなんだけどね。
だから、トラブル対応が主な仕事になると思う。
……おや？
「ええと、ええと……」
あ、ＩＴ化の波に乗り遅れたババアだ！
自動レジが使いこなせないみたいだ！
「はい、どうかしましたか？」
おっ、偉い！
自動レジの前でウロウロするババアに話しかけにいった暁。
「ええと、この、自動レジっていうのがよくわからなくって……」
「えーっとですね、買い物カゴを、ここの台に置いて、ボタンを押します。すると、自動的に、買い物カゴの中に仕込まれたＩＣで商品を読み取ってあるので、こんな風に値段が表示されます」
「はあ……」
「そして、ここにお札、ここに小銭を入れて、お会計します。ここと、ここからお釣りが出るので、受け取ったらあちらで商品をレジ袋に入れて、カゴを返却してくださいね！そしてなんと！当店のレジ袋は無料なのです！」
あ、はい、レジ袋無料です。
買い物した量に見合う分のレジ袋が無料で自動に出てきます。
「これでいいのかしら」
「はい、大丈夫です！ありがとうございましたー！」

ん？
「……へへっ」
あ、万引きだ！
「コラーッ！」

あ、暁！
「万引きは許さないわ！」
「うおっ?!……って何だ、ガキじゃねえか。おいクソガキ、痛い目に遭いたくなかったら」
「えい」
あっちょっ。
「ぎぃいやぁああーーー!!!」
肩外した！
まあ穏当な方だ！
「盗んだものを返しなさい！」
「は、はひいいぃ……」
スピード解決だ……。

「わーん!!!」
おや……？
迷子の男の子がいるな。
俺が行っても良いが……？
「あ……、ねえねえ、君、迷子かなー？」
おっ、暁が行った!!!
「うわーん!!!」
しかし子供は泣き止まない。
「えーと、えーと……！ほ、ほら！高い高ーい！」
流石は艦娘を言ったところか、男の子を軽く抱っこする。
「あう……」
お、子供が落ち着いたな。
「お姉さんがママを一緒に探してあげるね！」
「……おねーちゃんもこどもなのに？」
「むー！お姉さんは三人も妹がいる立派なお姉さんなんだよ！」
「そーなの？」
「ええ！三人の妹には、カッコいいお姉さんとして尊敬されてるのです！」

オッ、大嘘ォ!!!
いや、暁の中ではそういうことになっているのかもしれない。
「それじゃ、付いてきて！キッズルームで遊びながら、ママが来るのを待とうね！」
「うん！」
そして数分後……。
「浩介！」
「ママ！」
お母さんが迎えにきたみたいだ。
「ママ！暁おねーちゃんが遊んでくれたのー！」
「えっと、店員さんですか？」
「はい、そうです！」
子供の母親に笑顔で対応する暁。
「ありがとうございます！少し目を離した隙に……」
「このくらいの年齢の子供なら、そんなこともありますよね！見つかって良かったですね！」
「はい、ありがとうございます、本当に……」
良かったなあ。
「暁おねーちゃん！僕、大きくなったら暁おねーちゃんと結婚する！」
「は？私結婚してるから」
あーーー、そこでキレるぅ？
「ふえええん!!!」
浩介君泣いちゃっただろ!!!
「浩介ったら……、すみません、既婚の方だとは思わず……、気分を害してしまったようで……」
「いえ、こんな見た目ですから。けど、私は旦那一筋なのです」
「は、はい……、ありがとうございました……」
お母さんがドン引きしながら帰っていった……。
いやちょっと……、子供の告白くらい軽く流しなさいよ……。
ガチ拒否は酷いよ……。

リザルト

・黒井モールのスーパー部門で店員さんのアルバイトをやろうね！

○

評価：はなまる！

報酬：０万円

＋黒井鎮守府からの給料：１０万円

＝暁の今日の手取り：１０万円

暁の預金口座：６５０万円＋１０万円

４６２話　艦娘参観　その４

ケース４：鳳翔
依頼内容：居酒屋鳳翔の運営
目標
・接客
・調理
依頼主：黒井鎮守府

鳳翔のターンだ。
まあ、鳳翔の仕事はいつもと変わらない。
居酒屋鳳翔の運営だ。
まあ……、うん。
問題はないよね。
鳳翔もいくらかは人の心があるから、居酒屋鳳翔で死人が出たことは数えるほどしかない。
さて、じゃあ、見ていこうか。

居酒屋鳳翔の営業時間は１８：００から２３：００である。
養老◯瀧より一時間遅いが、これは、黒井鎮守府の晩御飯が１７：００頃であり、鳳翔がフリーになるのが１８：００頃からなのである。
まあ、これも色々と事情はあるのだ。
そもそも、「うちは軍隊なので、早寝早起きを心がけたい」、と提言する艦娘もいれば、「いや、オンラインゲームのゴールデンタイムに備えて昼夜逆転の生活してるし」みたいな艦娘もいる。誰とは言わないが。
だから、最早、決まった時間に全員で揃って食事ということはできないのだ。
なので、６：００に朝食、１２：００に昼食、１７：００に夕食を「作る」のだ。
つまり、出来立てが食べたければこの時間に食堂に来なければなら

ない。
逆に言えば、作り置きのものや、自分で何か作る場合には、「食堂は２４時間開いている」のだから、いつ来ても良い訳だ。
因みに、食堂が混む時間帯は８：００、１２：００、１９：００であるからして、艦娘はみんな割と好きにやっているとだけ言っておく。
つまり……、１７：００には、夕食を作り終えて、自分の夕食を済ませた鳳翔は、１８：００から居酒屋鳳翔をオープンする。
あらかじめ仕込みは昼のうちにやっておいてあるので、すぐにオープンできるそうだ。
居酒屋鳳翔は、俺謹製の転移門もドアにエンチャントされており、異世界食堂形式で客が来るようになっている。
つまりは、ランダムな世界のランダムな場所に転移門ドアを作り、人を呼び込むのだ。
故に、居酒屋鳳翔には、人種どころか種族さえバラバラの知的生命体が、美味しい料理を求めて現れる。
そんな居酒屋鳳翔のルールは三つ。
一つ、代金は「お心ばかり」に払っていけ。
二つ、店内での乱闘禁止。
三つ、店内でのセクハラ厳禁。
つまりは、「金はどうでも良いが争うな」ということだ。
ルールを破ったら？
まあ……、残念ながら死んでもらうしかないかな……。

さあ、居酒屋鳳翔のオープンだ。
今月のメニューは美味しい冬のカキフライ、鍋物を中心にほっけなどの冬の魚とデザートにスイートポテト（バニラアイス付き）もある。
美味しい鍋物とお酒であったまった後に、アイス付きスイートポテトで温かい中ちょっと冷やすという……、つまりはこたつアイス的なちょっとした贅沢を提供しようという鳳翔の粋な計らいだ。
居酒屋鳳翔はカウンターが十八、テーブルが十二、和室が六のかな

りデカイ店だ。正直居酒屋の規模じゃない。
何せ艦娘はほぼ毎日来るし、客も多いしで、拡張に次ぐ拡張でこうなったのだ。
洗い物や配膳などはアンドロイドがやるとして、鳳翔一人でこんなにたくさんの客の相手をできるのか？
できる、できるのだ。
鳳翔の調理スキルは最早俺と同等……、いや、一部では上回るだろう。
鳳翔は一分もあれば米を炊いてルーを配合してカレーを作れるぞ！
え？時空が歪んでる？ちょっと何言ってるかわかんないですね。
できるできないの話じゃなくてやるかやらないかじゃん。世の中って大抵はそうだよ。
さてさて、今日はどんな客が来るのかな？
まあ、艦娘はいつもいるので良いとして……。
あっちにいるのは金色と青い奴だ。
「おや、旅人殿。トランプする？」
「いや、結構だ」
「兄者、旅人殿は忙しいご様子。どうでしょう、ここは居酒屋鳳翔のお座敷でスイカ割りでも……」
まあ、似てない兄弟だが、こいつらはそういう種族だしな。
他には……、お？
「おや……？」
「げっ！」
なんでここにいるんだ閣下!!!
「おやおや……、久しいね。シュバルツバース以来かな？あの時は女だったが……」
「カエレ！」
他は……。
「うひょー！この艦娘っての、マジで可愛いよなー！」
「艦娘風俗とかあれば絶対に流行るのになあ……」

あ、風俗狂いの冒険者とエルフだ。
「でもあんまりこっちにいるとメイドリーちゃんが悲しむからな」
「いやでも、ここの酒と料理はマジで美味いんだよな……、運が良けりゃ魔法に詳しい艦娘に何か教えてもらえたりもするし」
「風俗店さえあれば……!!!」
馬鹿共が、うちの子に無理矢理手を出したら生かして帰さねえぞ！
「……ってかさ、前から思ってたけどあいつヤベエよな、ゼル」
「おうよスタンク、旅人の奴はヤベェ……」
ん？
え？
「そう……、なんてったってあの精力!!!」
……は????
「低級淫魔に囲まれて五時間ぶっ続けでセッ○ス!!!」
「触手チ○ポでケンタウロスも大満足!!!」
「火の精霊に焼けるのも構わずナニを突っ込んで!!!」
「顔が良けりゃ妖精から勇者まで構わず口説くっ!!!」
「マジでヤベェよあいつ!!!」
「インキュバスかもしれねえな……」
「でもブサイクには冷たいぜあいつ。顔さえ良けりゃ年増エルフでも構わんらしいしな」
「ここの艦娘って子達も全員、旅人のお手つきなんだろ？チクショー！あいつめー！」
……あ。
「そのお話、興味があるんですけど……」
あ、大淀。
ふーむ、これはあの馬鹿二人に俺の過去の風俗巡りの件がバレて、後で死ぬほど逆レイプされる予感。
あらかじめ逃げておこう。
艦娘参観は切り上げておこうか。
あばよ!!!

リザルト
・接客○
・調理○
評価：Ａ
報酬：０万円
＋黒井鎮守府からの給料：５０万円
＝鳳翔の今日の手取り：５０万円
鳳翔の預金口座：１２５００万円＋５０万円

４６３話　艦娘参観　その５

ケース５：摩耶
依頼内容：悪魔の抹殺
目標
・福岡県飯塚市の異界から溢れた悪魔の滅殺
依頼主：ヤタガラス

さあ、やってまいりました、またもや修羅要素入ったこの依頼！
ヤタガラスさんよう……、最近予算もらえてるからって調子乗ってませんかねえ？
超国家機関ヤタガラス……、大正の世では軍部にさえ食い込んだ巨大な国防組織だったのも今は昔の話。
かつての大戦による大打撃で人員も権力も失い、数年前の政権交代の折の事業仕分け（笑）にて予算全カット、完全にトドメを刺され、死に体だった組織である。
が、しかし、有能有能アンド有能の現剣桃太郎総理大臣の指示により、死にかけの組織だったヤタガラスは不死鳥のように華麗な復活を遂げた。
今は、内調や公安と並んで、シークレットかつ多忙ながらも、かなりの戦力と諜報力を誇る国営の裏組織になっている。
そんな裏の国防組織ヤタガラスだが、依然として人員は不足気味。
霊的世界の必殺国防兵器である葛葉一族が味方ではあるが、それでも全体的に人数は足りないのだ。
よって、悪魔退治などの依頼を外部に外注することが多々ある。
俺もそれで小遣い稼ぎをしていた経験があるな。
まあ、依頼と言っても様々で、異界のアイテムを持ってこいとか、悪魔を持ってこいとか、悪魔を倒せだとか……、その手の仕事だな。
報酬額はやはり、強い悪魔を倒したり調伏したりする仕事ほど、膨大な賃金を約束される。
ヤタガラスも、政権交代後のあの惨事の頃と比べると、いくらかは

復活してきているようだが、全盛期と比べるとその力は十分の一にも満たない。
全盛期まで程とは言わないが、しっかりと日本を守れるくらいまでには強くなってもらわねば困るとのことで、総理大臣の桃さんが予算の大増額を議会に通して、今のヤタガラスはそれなりに懐が温かい。
だからこそヤタガラスは、外注依頼をたくさん出して、日本の守護をしようとしているそうだ。
基本的に、一般的なデビルサマナーではどうしようもできないような大事件などでは、必殺の国防兵器こと葛葉一族がすっ飛んでぶっ殺す。
しかし、今回のような、鬼札の葛葉を出すまでもないが、一般通過デビルサマナーにはキツい仕事は、大体うちに回されるのだ。
大抵この、悪魔退治の依頼を引き受けるのは、白露型、夕雲型、高雄型、たまにアークロイヤルとなっている。
何故か？
彼女達は物理攻撃と魔法攻撃両方を使いこなすからだ。
悪魔というものは、物理攻撃が全く通用しない存在がいる。また、特定の属性の魔法に弱い存在も多い。
例えば、堕天使：ネビロスなどは物理攻撃を無効化するが大抵の属性攻撃に弱いとかがある。
多方面の戦闘方法に対応できる者こそ、デビルサマナー業界では重宝される。足りない部分は何かに特化した悪魔で補うのがデビルサマナーのやり方だ。
今回、依頼を受けた摩耶ならば、達人レベルの剣技と銃技、火炎、氷結、電撃、衝撃、呪殺、破魔、精神の魔法と、回復魔法を自在に操るという、破格の器用さを持つ。器用万能ってやつだ。
これならば、大抵の悪魔に対応できる。
対悪魔戦闘で最も重要なのは、敵の弱点を突くことだからな。
手札は多い方が良い。
さて、そんな今回のお相手は……、邪龍：ティアマトだ。

そりゃそうだな、このレベルだと一般通過デビルサマナーでは勝てない。俺も無理だ。
「ギ、ギギ……」
「へっ、悪魔ってのはいつ見てもキモいな」
摩耶が前に出る。
確かにこのティアマトは、醜い顔に縮れた髪のある女の姿で、全身に鱗があり、乳房が六つ、身体中から蛇が生えている化け物の姿だ。
「何ですって……？」
「気持ち悪いって言ったんだよおばさん！早く死にな！」
「……殺すわ、小娘!!」
バトル開始である。
摩耶は、騎乗用のカオスドラゴン以外にペットはいないし、そもそもデビルサマナーではないからして、手元に悪魔なんていない。
つまりはタイマンだ。
摩耶は長剣の★『ディアボロス』を誇らしげに構えた。
そして踏み込んで、ティアマトの首を斬りつけようとする。
「ム……！」
しかし、ティアマトも馬鹿じゃない、普通に防ぐ。
そして。
「凍えよっ!!!」
アイスブレスを吐く。それはそれは、冷たい、全てを凍らせるような地獄の吐息で、この異界の周辺のものが氷漬けにされてくだける。
それを見た摩耶は素早く飛び退き、中空でファイアボルトの魔法を唱える。
さすがだぞ！属性の相性をばっちり理解しているんだな！
「ギヒ、ヒヒヒヒヒ!!!」
まあ、ティアマトはアイスブレスを吐くけど、火炎無効なんだがね。
「んなっ?!何でだよ！これならどうだ、『アイスボルト』!!!」
「効かないわ!!!」
全身の蛇で噛み付いてくるティアマト。
「チィっ!!!」

それを全て斬り落とす摩耶。
一進一退ってところか？
だが……。
「これならどうだ？『ライトニングボルト』!!!」
「ギィっ!!!グギィヤアアアア!!!」
そうだね、ティアマトは電撃が弱点だ。
「なるほどな……、悪魔ってのはノーステイリスのモンスターと違って、脆くはないけど弱点を突くと恐ろしく弱いんだよなァ……」
「ヒイッ！や、やめ……!!!」
「『ライトニングボルト』！『ライトニングボルト』!!『ライトニングボルト』ォ!!!」
「グギィヤアアアア!!!!」
おっ、倒したみたいだ。
「ふん、口ほどにもねえな。やっぱ、分霊じゃ駄目だ、魔界にいる本体とか、高位の分霊じゃなきゃ相手にならねえな」

リザルト
・福岡県飯塚市の異界から溢れた悪魔の滅殺○
評価：Ａ
報酬：１５００万円
―黒井鎮守府の中抜き：３００万円
＝摩耶の今日の手取り：１２００万円
摩耶の預金口座：２４５０００万円＋１２００万円

４６４話　久し振りの召喚

俺は、艦娘の建造ドックに依り代を置く。
艦娘とはすなわち、魔術的な観点から語ると、サーヴァントに近い特性を持つ。
戦艦の英霊にして神霊である艦娘は、強い神秘を誇るある種の神造兵器とも言える存在であり、召喚する為には依り代を欲する。
例えば、俺の知り合いに、英雄王と呼ばれる、古代バビロニアの王がいるのだが、そいつは、世界で最初に脱皮した蛇の抜け殻の化石を依り代に召喚された。
そいつは、生前の冒険で手に入れた不老不死の薬を蛇に食われ、それにより蛇は脱皮するようになったと言う伝説が残っている、その縁から、蛇の抜け殻の化石を依り代に召喚された訳だね。
艦娘も同じように、その戦艦の装甲板、砲弾、計器、航海日誌などを依り代にこの世に顕現するんだね。
だから俺もなんとなく艦娘に所縁のありそうな物を置いて召喚するんですね。
『巨艦いまだ沈まず』のフィルム
ガルバルディβのプラモデル（１／１４４　ＨＧ）
地中海の空気が入っているらしいイタリア土産の缶
イタリア土産ギリシャの北風缶
『ハネウマライダー』のＣＤ
『Ｍｏｔｈｅｒ』のカセット
トマトの缶詰
鯨の肉
と、まあ、こんなもんかな、はい、建造と。
『ルイージ・ディ・サヴォイア・ドゥーカ・デッリ・アブルッツィ級軽巡洋艦、アブルッツィです』
『ジュゼッペ・ガリバルディだ、よろしく頼むよ』
『マエストラーレです！』
『グレカーレよ』

『ビッグ7のコロラドよ！』
『フレッチャーです』
『ジョンストンよ！』
「潜水母艦、大鯨です」
うむ。
「ヨシ！」
「なーにがヨシ！ですか！何も良くないですよね?!またデタラメな……！」
と明石。
ああ、なんて言うのかな、こう言うのを……。
「草生える？」
「何わろてんねんですよー！」

「とりあえず、生まれた命に罪はないと思うんだ」
「それはそうですけど……」
さて、イタリア語、英語、日本語でついてきてくれと伝えて、艦娘用の初期ガイダンスビデオを見せる。
全員、美化された黒井鎮守府の戦歴と、現在の進んだ社会を知って喜んでいる。
自分達が戦ったことは無駄ではなかったと知れたからだ。
艦娘の記憶は、自分が沈んだ頃までしかない。知識は、自分に乗っていた軍人のものを少しだけ覚えていると言った様子。
だから、艦娘は、召喚されてまず最初に、豊かな人々の生活を見て、自分が戦った戦争の歴史が終わり、人類が栄えているのを見て安心するのだ。
そこから、現在の堕落した人間や、よく分からない反戦団体に詰め寄られて、人類に失望するまでがワンセットだな。
良くない傾向だ。
だから今回は、人間に失望されないように注意しつつも……、俺に惚れさせないことを目標にしたいと思う。
いいかな、みんな聞いてくれ。

ひょっとして、うちの子……、ヤンデレってやつなのかもしれないんだ。
俺、今まで知らなかったんだけど、四六時中監視カメラや盗聴器で監視されたり、監禁されたり、逆レイプされたりするのは、普通じゃないらしい。
そういうのはヤンデレと言うらしいんだ。
俺は今までの人生で、付き合った女の子にストーキングされたり、食べられたり、眷属にされたりすることが多々あったから知らなかったんだけど、普通は、女の子は好きな人を監視して監禁して犯したりしないらしい。
やめさせなきゃ（使命感）。
でも、それを言ったら、俺と関わった未婚の女の人は大抵ヤンデレ？ってやつに該当すると思うんだけど……、まさかな！そんなことはないよな！
とにかく、これ以上ヤンデレなるものを増やしてはならない（戒め）。
惚れられないように、なるべく接触を避けよう。
まあ、嫌われたら、いざという時に困るから、そうだな、頼れる上司として信頼されるような感じになろう。
まあ艦娘のヒモである俺の姿を見れば勝手に幻滅してくれるだろ！ワハハ！

さて……、まあ、最初のうちはある程度干渉しないと駄目だよな。
海外艦の子なんて、異国の地で右も左も分からないだろうから、優しくしてあげないと……、いや！ここで優しくするから駄目なんだ！厳しくいこう！
ビシバシやるぞ！
よーし、今日は晩御飯の時に、食堂で俺にお酌させてやる！
ふー、俺、悪党だな……。
新入社員の美女にお酌させるとか駄目上司だな……。これで男性的魅力ゼロ、悪者扱いだ！

「オラっ！大鯨！お酌してくれっ！」
「は、はいっ！」
ふふふ、大鯨もタジタジだぜぇ……。
晩御飯は歓迎会と銘打って、食堂のお座敷でパーティーすることにした。
そして、新入りの艦娘にお酌をお願いする！
お酌の強要？いやほら、今はパワハラとかそう言うの怖いし、あくまでもお願いするだけだよ？
「ありがとう、大鯨も飲みなよホラホラホラホラ」
「ありがとうございます！」
そしてお酒を飲ませる！
イッキ？いやそれは嫌がる子もいるだろうし……。超えちゃいけないラインってあるだろ……。
「さくっ！わあ……！このカキフライ、凄く美味しいです！」
「ん？ああ、そうかい、ありがとね。それは俺が作ったんだよ」
「え？そうなんですか！提督って、お料理が上手なんですね！」
「それほどでもない（謙虚）」
まあ見とけよ、今回という今回は、艦娘をヤンデレにしないから。
今回は本気の本気だ。
見とけ!!!

４６５話　ほげーっ！

はあーっ。

まあ、とりあえず、最初の頃はある程度面倒みるけど、段々干渉は控えるようにすれば、惚れた腫れたの話にはならないでしょ。

俺の知り合いの言葉だが、事故る奴は不運（ハードラック）と踊（ダンス）っちまった奴なんだそうだ。

俺もそう思う。

だけど、俺は昨日、とってもラッキーマンを全巻読破したから、幸運と言っても差し支えないはずだ。

試しに手持ちのＭ５００でロシアンルーレットしてみよう！確率は五分の一！

「んぎょ」

……ヨシ！

頭が吹き飛んだな！五分の一の確率を引けるだなんて、今日の俺はめちゃくちゃにツイてるぜ！

学園都市に配備されてそうな円柱型お掃除ロボットが、飛び散った俺の脳漿を掃除する中、脳が破壊され平衡感覚が狂った俺は、背中から触手を生やして天井を這った。

一時間もしないうちに脳が再生したので、触手を仕舞って、二足歩行になり、大鯨の元を訪ねる。

「おはよう、朝だよ、起きてー！（コラショめざまし）」

優しくノック。

もしも出なければ、「開けろ！デトロイト市警だ！」なんてことに？ならないよ。

「はーい、おはようございます、提督！」

きあ、俺の神対応で、大鯨が理想の部下になるところを見ておけよ……！

××××××××××

「そう言えば、さっき銃声が……」
「気のせいじゃないか？」
そうなのかしら……？

私、大鯨は、自称「旅人」の提督さんに、朝に起こされた。
白い髪、白い肌、黒い瞳とさらに白い佐官の上着。
美丈夫という言葉が最も似合う形容詞だろうか？
美形と言うには男らしく、益荒男と言うには涼しげですね。
でも、コロコロと表情と雰囲気が変わるところは、とても表現力が豊かな人なんだなと感じさせられます。
本人が言うには、作画？が可変だとか？
普段は大体ブリーチ的なオサレ顔？だけど、たまに北斗の拳になる？とか？よくわからないです。
まあ、それは良いとして……、今のところ、この黒井鎮守府も、提督にも、思うところはありません。
潜水艦の子達も穏やかに過ごしているみたいで……。
この鎮守府の平穏さには、この提督の人柄が表れているんだなと思わせられますね。
もしかしたら、女の子になった私が、本能的に、ハンサムさんである提督を嫌えないというところがあるのかもしれませんが……、私の意識としては、提督の人柄が好ましいと思っています。
確かに、まだ会って一日ですが、私なんかのためにわざわざ歓迎会を開いてくれたり、まだ鎮守府の生活に慣れないだろうからと、朝からこうして起こしてくれたり……。
とにかく、他人を気遣える優しい人なんだなと思いました。
さて、それでは……。
『おはよー！』
『『『おはようございます！』』』
私と同時期に召喚された海外艦の子達を起こして、軽く世間話をしながら、食堂まで案内してもらいます。
本当は、黒井鎮守府の艦娘の寮には、それぞれに転移装置？が付い

ていて、部屋から部屋にワープできるそうなのですけれど、当分は、この広い鎮守府の道を覚えるために、ワープせずに移動することになっています。
　ワープ……。
「突っ込んだら負けだよ？」
「は、はあ……」
　深く考えないようにしよう……。
　さて、そんな感じで、提督は、私達、新入りと世間話をしながら食堂へ向かう。
「いやー！仕事してねーからなー！俺仕事してねーからなー！」
　と、謎のアピールをしてくる提督……。
「え？でも、提督って、黒井鎮守府の食事を三食作っているんですよね？」
「そうだけど？」
「それだけでも立派なお仕事ですよ！何百人もの艦娘の食事を、鳳翔さんと、間宮さん伊良湖さん速吸さんの五人で、一日三回だなんて！仕事をしてないだとか、そんなことないですよ！」
「い、いや、本当に仕事してないんだよ俺は！前々回見て！ねっ?!」
「ぜ、前々回？」
「いつも頑張っている艦娘に俺がしてあげられることなんて、料理くらいのものなんだよ……」
「は、はあ……」
「本当にね、俺、無能だからね？提督としての能力が高い訳じゃないから！」
　無能……？
「イタリア語と英語を完全に話せて、あんなに美味しい料理を作れるのに、無能、ですか……？」
「あー、ほら、その辺はさ、その……、才能がないんだよ！努力してできることは大抵どうにかなるけどさ！」
「ひたむきに努力できるのも才能の一つですよ……？」
「ファッ？うーん」

そして、食堂では、美味しい食事を楽しみます。
朝から中々に手の込んだ料理が、沢山の品目、選んで食べられます。
こんなに豪華でいいんでしょうか……？
「ええと……、メニューが沢山あって迷ってしまいますね」
「うん？それなら雑炊がおすすめかな」
「雑炊ですか？」
「うん。今朝、寒くなってきたから、艦娘のみんなが身体を冷やさないように何か温かいものを食べてもらおうって鳳翔と相談してさ。女の子が身体を冷やしちゃいけないだろ？」
「……えーっと、私は艦娘で、兵器ですよ？」
「とんでもない！ユーアヒューマンだよ」
人間……？
私が……？
「俺は、俺と握手してくれる人は、例えどんな存在であれ人間だと認めるよ」
「は、はあ……」
良いのかなあ……？
「そうそう、人間扱いするから、悪いことをしたら怒るからね！俺、怒ったら怖いよ？凄く怖いよ？」
「ふふ、それじゃあ、怒られないように良い子にしないと、ですね！」
「そうそう！恐怖による抑圧だよ！」
ふふ、わざわざ自分から、恐怖に抑圧が……、ですか。
面白い人ですね、提督って。

「んん！おいひい！」
大根の雑炊ですね。
千切りの大根と大根の葉っぱが入った、ゆるめの雑炊。
「この野菜、鎮守府で作ってるんだよ」
「へえ、そうなんですか！」
凄く美味しいですね……。

素材の味もさることながら、絶妙な煮込み加減で、青臭い香りも全然しない。
それと卵焼き……、うん！出汁が効いていて美味しい！ネギも入っていてバランスも良い。
更に、かぼちゃと鶏肉の入ったさつま汁という味噌汁！甘くて美味しい！
お漬物も凄く美味しい……、私も多分、艦の記憶から料理はできると思うけど、こんなに美味しい料理は作れないだろうなあ……。
……この料理を食べれば嫌でも分かる。
この提督、本気で私達艦娘を好いてくれているんだな、と。
こんな心のこもった美味しい料理、嫌いな人には出せないもの。
私は正直、艦娘としてこの世に生まれて、昨日一晩考えたけれど……、私達、艦娘って、気持ち悪い存在だと思う。
普通に考えて、実体のあるお化けだし、人なんて簡単に殺せる化け物だもの。
そんな私達艦娘に、こんなにあたたかい料理を作ってくれるだなんて、提督って……。
凄く、素敵な人だと思います。
できたら、提督とは、仲良くやっていきたいな……。

４６６話　ほげーっっ！

また、次の日。
「おはよう、大鯨ちゃん」
「おはようございます、提督」
わざわざ提督が起こしに来てくれた。
「その、朝、この時間でいいんですか？」
今は七時ですね。
普通は五時くらいには起きるものだと思うんですけど……。
「あ、うちの鎮守府はその辺適当だから。寝たければ昼でも夜でもいつでも寝ていいよ」
「その場合は食事はなしですよね？」
「何言ってるのさ、いつでも食堂は開いてるよ。好きな時間に好きなものを食べりゃいい」
「えぇ……？そんなの、士官より良い生活しちゃってるじゃないですか……。私達って、一兵卒なんじゃ……？」
「みんなそういうこと言うけど、艦娘とか地球上に千人いるかいないかだよ？プロスポーツ選手より稀少な特別職である艦娘の待遇を上げるっておかしいかな……？」
うーん……。
確かに、プロのスポーツ選手よりも艦娘の方が少ないのは確かですけど……。
「でも、稀少だから待遇が良いのもおかしくはないでしょうか？稀少さと待遇の良さに相関性はありませんよね？」
「いやいや、君たちが気持ち良く働ける環境って大事だよ」
提督は、えーと、「粉バナナ！」みたいな謎の掛け声のとともに、私達新入りの前で謎のポーズをとり、アピールをする。
「あっ、でも、これは、その、き、君達の為じゃないんだからね！勘違いしないでよねっ！」
「はい、ふふふ……」
よく分からないけど、面白い人だなあ、提督は。

朝食の後に、工廠に案内された。
昨日は一日中、鎮守府の案内と艦娘同士での挨拶顔合わせだったから、今日から本格的な出撃かな？
出撃前の艤装の点検ってところかしら？
「今日は、身の回りのものを買いに行くよ」
「え？」
私達、新入りの艦娘は顔を見合わせた。
「身の回りのもの？」
「うん」
……？
「服とか、スマホとか、化粧品とか……、あと家具とか」
スマホ？と言うのはよく分からないですけど……。
「あの、私達って、艦娘ですよね？」
「え？そうなんじゃないの？」
「服とか、化粧品とか、家具とか、要りますか？」
「要るでしょ」
「いやいや……、私達が着飾って何の意味が？」
「とても可愛い大鯨がおしゃれして更に可愛くなる（断言）」
「可愛さは艦娘に不要では……？」
「絶対に要る（断固たる意志）」
は、はあ……。
「とりあえず、黒井鎮守府製のスマホね」
「これは……？」
「電話だよ。他にも色々なことができるから、まあ……、暇そうな艦娘に使い方を聞くか、この説明書を読むかして使い方を覚えてね」
「はい」
電話ですか……。
今は電話を持ち歩く時代になったんですねえ。
「それと服！一応、無地の服を適当にタンスに入れておいたけど！」
「はい、ありがとうございます」

「あっ！あらかじめ言っておくけど、下着は黒井鎮守府の生産プラントで作ったものを、秘書艦の大淀がタンスに入れてくれたんだ！セクハラとかそう言う案件じゃないから安心して！」
「せくはら？」
「邪な気持ちはないってことだよ。さて、早速服を見に行こうか！うち、副業でショッピングモールやってるから、好きな服を適当に見繕って！全部買ってあげる！」
「そんな……、タンスにある分で充分ですよ！」
「駄目です（ヤーマン）」
　はあ……？
「何故ですか？」
「とにかく駄目だ！女の子はなあ！目一杯オシャレして！美味しいもの食べて！好きな男と幸せにならなきゃならないんだよ!!!」
「……何故、ですか？」
　本当に何故でしょうか？
　艦娘を着飾らせて何の利益が？
　それは、まあ、私も、今生では人間の女の形をしている以上、少しは着飾ったりしてみたいと言う好奇心のようなものはありますが。
「可愛いからだよ、可愛さは全てに優先する」
　……あ、もしかして。
「えっと、『そう言うこと』ですか？」
　驚いた、私達艦娘を着飾らせて抱こうってことなのかしら？
　とてもハンサムだし、モテると思いますけど……？
　まあ、軍隊は女日照りですし、そんなこともあるんでしょうか……？
「ご命令とあらば、私は構いませんよ。初めてですので、上手くできないかもしれませんが……」
「いやいやいや……、何でこう、君達はそっちでものを考えるのかねえ。普通に好意があるだけだよ」
「……え？」
「さっきも言ったけど、女の子は、目一杯オシャレして、美味しいもの

食べて、好きな男と幸せにならなきゃならないってのが俺の信条でね。君みたいな可愛くて良い子は、良い思いをしなきゃ駄目だと俺は思うんだよ」
「……ふふっ」
思わず笑ってしまいました。
提督のこれは、武士道よりは騎士道寄りなのでしょうか？
提督は、本気で、美しい女性は幸せに生きて欲しいと願っていて、この私にも、幸せに生きて欲しいと願ってくれているみたいです。
「私、提督にとって、美しい女に見えるのですか？」
「ああ！そりゃあもう！君みたいに綺麗な人は見たことがないさ！俺もう一目惚れしちゃったよ！まるで白百合のような佇まいの……」
「ふふふ、お上手ですねえ」
やっぱり、提督って凄く良い人。
この人が提督で良かったですね。

オシャレをさせてくれると言うならば、させてもらいましょうか。
折角ですしね。
「わあ……！」
このドレスとかいう洋服、一度着てみたかったんですよねー！凄く可愛いです！
私の艤装は……、何故かイギリスの水火夫服風の衣装なんですが。
何故イギリスの……？私、日本の艦娘なんですが……。艤装を作った神の考えることは分からないですね……。
「どうですか、提督？」
「綺麗だよ！とっても可愛い！」
まあ、それはさておき、着飾ると提督が喜んでくれるのはこちらも嬉しいです。
「よーし、それじゃあ、大鯨ちゃん、俺と逢引しよう逢引！」
「ええ、良いですよー」
綺麗に着飾って、そのまま逢引……、と見せかけて、現代の街並みや常識について教えてくれる提督。

うーん、嫌味なくらい欠点がないですね……。
ちょっとまずいかもです。
本気で惚れちゃいそう……??

４６７話　ほげーっっっ！

黒井鎮守府という素晴らしいところに来れて、一週間が過ぎた。
本当に素敵な提督と、気の合う仲間達。
「この俺のナニを模った張形の販売をやめろ！お前ら頭どうかしてるぞ！」
「ウスッ！提督！明石先生は天才なんす！認めてくださいっス！」
「夕張……、とにかく、俺のナニの形をした張形を鎮守府に流通させるのはやめてくれ。黒井鎮守府のブランドが傷つく」
「何が鎮守府ブランドですかぁあああ!!!こんなヤンデレの溜まり場に権威なんてありませぇえええええん!!!!」
「なんだとぉ……？」
いや……、その……、明石さんも有能だし、普段は本当にいい人なんですよ……。
ただ時折こうなるんです……。
提督もハンサムで優しくてちょっとエッチだけど大らかで……、でも時折、作画？がおかしくなるんです……。
みんないい子なんですよ？
でも、提督が絡む話になると暴走しがちなんです……。
この私、大鯨がしっかりしなきゃ……。
「心配いらないでち。艦娘なんてどっか壊れてるのが普通なんでちから」
「ゴーヤちゃん……」
ゴーヤちゃんはこう言ってるけど……、この鎮守府、明らかにヤバ過ぎますよ……。
「提督さぁあああん！艦娘にセクハラするだけで年収５千億円の提督さぁあああん！」
「なんだとぉ……？」

私だけは絶対に、まともなままでいよう。
他の艦娘みたいなことにならないようにしよう。

そりゃあ、私も提督のことは好きだ。
けど、ここの艦娘みたいなキチガイではない。あくまで常識の範囲内での「好き」なんです。
むしろ、提督には、キチガイじゃない艦娘が必要なんじゃないだろうか……？
うん、そうですね。
私は、私だけがまともなんだ……。
私が提督を支えてあげないと！
「どしたの？」
「提督っ！提督は私が支えますからねっ！」
「えっ？あ、はい」

「こちらの肉類をホットプレートに潜影蛇手していくわ（オカマ声）」
今流行りのツイッターの人みたいなことをやる提督を見守る私。
私が守りますからね、提督！
この魔境、黒井鎮守府でまともな艦娘は私だけ。
「俺は一番のやつよりエサヒスープファードゥラーイの方が好きです」
見守ろう。
「美味すぎて馬になったね（オカマ声）……、ん？」
あ、こっちに気づいた。
「おいで、大鯨」
「あ、はい??」
えへへへへ??
提督、かっこいい……??
最近は、一緒に訓練したり、髪を整えてもらったり、服を作ってもらったり……。
ら、らぶらぶ、ってやつなのかしら?!
ま、間違いないですね！提督は私のこと好きなはず！
「よしよし」
ビール缶片手に私を撫でる提督。
「大鯨と一緒にいると癒されるなあ」

「わ、私も、提督と一緒にいると安心します……??」
「本当？それは嬉しいな……、ってイカンイカン！おっほん、んっん、君と俺とは上司と部下の関係だから！惚れた腫れたはなし！なしにしよう！」
……え？
駄目だ、泣く。
「な、なんでそんなこと言うんですかあ……？」
「ああっ?!な、泣かないで大鯨！」
「だ、だって、私、提督のことが好きなのに……！」
「い、いや、ほら、上司と部下の関係だから！職場恋愛とかは……！」
「……じゃあ、私が、提督を好きでいても良いですか？」
「だ、駄目！」
あ、泣く。
「ふえええええん!!!」

「いっ、いや、心を鬼にしろ俺ッ！良いか大鯨！君には俺の部下でいてほしい！色恋沙汰とか禁止っ！」
そ、そんなあ……。
「どうして、ですか？」
「まあどうもこうもないよね……。黒井鎮守府はヤンデレの巣窟で、黒いお酢の世界みたいなノリで俺が襲われてるから……」
「はい？」
黒いお酢の世界？
「もう勘弁してくれ……、朝勃ち処理に行列できてるんだぞ……、許してくれ……、許してくれ……」
朝勃ち処理？
「教えてくれ大鯨……、俺は一日何十回射精すれば良い？ゼロは何も答えてくれない……」
「え？ええ?!」
しゃ、射精?!
「え、えっと……、提督くらいの若い男性なら、定期的にしゃ、射精、

した方が健康的ですよ？」
「俺はねェ！君達艦娘に搾り取られて、一日数リットル射精してんの！腎虚！死ぬわ!!!」
い、一日数リットル!!!?
「そ、そんなに射精せるんですか……？」
「……まあ、不可能じゃないけど」
「そ、その……、じゃあ、私にも少し、お恵みくださいませんか……??」
「あああああああああ!!!!!!!!!」
だ、駄目なのかなあ……？
私も、提督の精液、欲しいんですけど……。
「私のこと、お嫌い、ですか……？」
「ちいっくしょおおおおおおおーーーーーー!!!!!!!!!大鯨大好き愛してるぅ→→!!!!!」
「その、それでは、その……??」
「分かりましたあああああ!!!!抱きますうううう!!!!!」
提督と結ばれました！
やったね！

４６８話　りゅーほー!!!

「うふふふ……??あ・な・た?」
「えっその、龍鳳さん?結婚もしてない男をあなただとか呼ばない方が」
「は?」
「いや、その、旅人的には、結婚はちょっと」
「は?」
「結婚はしたくない」
「は????」
黒井鎮守府に来て二週間。
私の提督が変なジョークを言ってくる。
私と提督は結婚していて、来世も、その次も、そのまた次も永遠に愛し合う運命にあると言うのに。
誰にも切り離せない愛の絆で結ばれている奥さんに対して、なんでそんなことを言うんですか?
何で?
何で?何で?何で?何で?何で?
「私と提督は、結婚してます。良いですね?」
「良くないね」
「は????」
「ひ???い……!」
「そんなことを言う口はこうですよ」
「んっ?!ちょっ、んん!こら!んんん!んー!」
「ちゅ、ちゅう、れろ……」

はい、私と提督は結婚してます。
婚姻届も出しました。
子作りもしてます。
「あ、は、ははははは、あはははははは!!!結婚!結婚したのぉ!愛する提督とずっと一緒なのー!!!!」

「ん？おおー、龍鳳ったらハイテンションでちねえ」
あら、ゴーヤちゃん。
「ああ、みなまで言うなでち。ゴーヤも、提督と結ばれた日はそんな感じでちた」
「そうなのかしら？」
「この鎮守府の艦娘なら、誰でも通る道でち」
そうでしょうねえ……。
私と同期の海外艦の子達も、提督にベタ惚れだもの。
逆に、今の日本は、調べれば調べるほど、助けようと思えなくなる。
……「艦娘は出て行けー！」
……「「「出て行けー!!!」」」
……「肉、魚、卵、牛乳は人体に不要です！動物を殺すな！深海棲艦を殺すな！」
……「「「殺すなー!!!」」」
……「横暴な剣政権を終わらせろー！剣政権は敵だー！」
……「「「剣政権は敵だー!!!」」」
今日も、外からデモ隊の声が聞こえる。
……私達は、こんなクズ共を守る為に戦っていたんじゃない!!!
こんな人間ばかりの日本を、世界を……、どうして守らなきゃならないんですか？
黒井鎮守府の仲間と、愛する提督さえ守れれば、私はそれで良い……!!

「提督ー??」
「いやー、俺、これから出張だから！出張だから！」
「私も行きます」
「龍鳳は訓練しなきゃ駄目だろ？なっ？なっ?!」
「訓練メニューは全て終わりましたよ？」
「これマジ？」
ですから、これからはなるべく一緒にいましょうね??
「い、いや！ほら！俺は旅人だからさ！同じ国に三日以上滞在できな

いんだよなぁ!!!マオの旅!!!」
「初耳ですけど……？」
「い、今思い出したんだよ！俺はほら、これからエロ同人誌の国に行くから！」
「私も行きます」
「お慈悲^　～!!!」
「だって、黒井鎮守府のルールで、提督が外出するときには護衛を一人以上連れて行かなきゃならないですから」
「初耳ですけど?!」
「大分前からそう決まってるそうですよ？」
提督と楽しくおしゃべりしながら、提督の出張についていきます。

『Ｓａｙ　ＹＥＡＨ!!!!』
『『『ＹＥＡＨ!!!!』』』
「……???」
ええと……、提督について行ったら、アメリカの東海岸でラップバトル？を始めました。
ラップバトルとは……？
と、とにかく凄い熱気です！
『勝者、マオ・シンダイ!!!!』
『『『うおおおおおお!!!!』』』
あ、なんか勝ったみたいですね……。
……何の勝負なんですかねこれ？
「ふぅ、ここでの仕事は終わりだ。次はアキバでダンスバトルだ!!!」
「あの、これって、お仕事なんですか？」
「^　^」
「え?!あ、あの、提督？」
「^　^」
「その顔なんですか?!提督?!提督?!」
「^　^」
そして、秋葉原でダンスバトルの大会に出場して優勝した提督。

「その、これ、絶対に仕事じゃないですよね……？」
「^　^；」

まあ、でも……。
提督と一緒だと、灰色にぼやけた毎日が、色鮮やかに煌めいて……。
「提督？」
「んー？何だい？」
「ずっと一緒にいてくれますか？」
「……ああ、そうだと良いね」
そうだと良いね、じゃなくて……。
「ずっと一緒にいますから。ついていきますから……??」

４６９話　クリスマス苦しみます

ジングルベルー、ジングルベルー。
ふふっ、今日は楽しいクリスマスだからな。
ツリーもリースも用意したし、良いクリスマスにしたいなっ！
「ミニスカサンタですよ、提督！さあ、この大淀を好き勝手に汚してください!!!」
「ビキニサンタの鹿島でーす??取り敢えずぶってください！」
「サンタ服の明石です！さあ、どうぞ！」
畜生、良いクリスマスにしたいなっ！って思った瞬間にこれだ！
何故だ！平穏なクリスマスを願うことすら罪なのか?!
クリスマスパーティーをするはずなのに、このままだと乱交パーティーになってしまいそうだ！
やらせはせん、やらせはせんぞぉぉぉ!!!!
「今年のクリスマスはＫＥＮＺＥＮにやります!!!エッチはなし!!!」
「「「ええー!!」」」
「ええー、じゃないよまったくもう！」

そして始まるパーティー。
わいのわいの。
「提督ーーーー!!!チキンくれーーーー!!!」
「はいはい、叫ばないの！」
「（提督、チキンくれ）」
「江風め、直接脳内に……！」
平和なクリスマスだ。
出撃は完全停止で、全員で集まって美味しいご馳走とお酒に囲まれながら、お喋りする。
意外な艦娘同士も仲良くお喋りしていて、平和だ。
七面鳥の丸焼きにシュトーレン、ケーキやチキンと、各国の文化のごった煮状態だが、みんな満足気だ。
一方、俺は、フォアグラもかくや、と言った勢いで、料理を食わさ

れてる。
「はい、司令官！あーん！」
「はい旦那様、あーん、ですよー」
「提督ー！どんどん飲むネー!!」
あ、でも美味いわー。
クリスマス料理はみんなで作ったんだよね。
「これ、私が作ったのです！食べて下さい！」
「こっちはゴーヤでち！」
「これは夕立っぽい！」
あっちょっと待って、夕立のグラタン、食べた瞬間に全身から触手生えてきた。
「あら、うねうねが一杯。一本貰いますね」
と赤城が俺の触手を奪って食べる。
わさび醤油で食べる。
味はタコっぽいらしい。
そんな感じで触手まみれの俺は、艦娘のおやつになりながらも、ご馳走を食べさせられ、酒を飲まされる。
もちろん、酒は、ネクタルやソーマなので、俺も酔う。
はっ！
いかんぞ、気を強く持て！
このままではまた乱交パーティーになってしまう!!!
「も、もういい！もう飲まないよ！」
「「「まあまあ」」」
「がぼぼぼぼーっ!!!」
畜生ーーー!!!
無理矢理飲ませてきやがった！
「じゃあこうしましょう。んんー」
鳳翔の口移し……、だと?!
「んっ、ごくっ……」
こんなん飲むしかないじゃん。
「ｈａｙ！Ａｄｍｉｒａｌ！お酒よ！」

アイオワのおっぱい谷間酒だと?!
こんなん飲むしかないじゃん。
「へーイ!提督ー!次はこっちデスヨー!」
金剛のわかめ酒だと?!
こんなん飲むしかないじゃん。
くっ、きたないな流石艦娘汚い!
そんなことされたら飲まざるを得ないだろうがっ!!!
選択肢を潰すのはずるいぞ!
「提督??次は榛名のおっぱいを飲んで下さいね??」
「やめないか!」
ビジュアル的にヤバすぎるだろ????
「飲んで下さい」
「あ、ああ……」
「ほら、こうやって!」
「んおっぷ!!?!」
アアーッ!おっぱいが顔に!ありがとう!
……じゃなくってさあ!
子供の駆逐艦や海防艦がいる中で、女子大生ほどの見た目の戦艦の女の子に授乳される提督ってどうなの?!
アウトでしょ?!
いかんでしょ!!!?
「ってちょっと待ってちょっと待って!一旦全員離れて?!」
やべえぞ、気がついたら、艦娘がほぼ全員全裸だ!
俺もパンイチにされてる!
「ライダー助けて!」
「わがまま言わずに、おっぱい飲んで下さい」
「待てエーっ!!!よーく考えろ!よく考えろよ君達!君達は惚れてる男の授乳シーンが見たいのか?!成人男性が成人女性のおっぱいを吸うシーンを見たいのか!!!?」
「「「別に構いませんけど……?」」」
「こんなにも俺と艦娘で意識の差があるとは思わなかった……!(ア

トリーム人並の感想)」
「……なら、子供のおっぱいなら吸う？」
「対馬ェ……」
そう言うアレじゃないよね????
「児ポはいかんよ児ポは！フェミさんに見つかったらこんなの炎上してボンだぞ!!!」
「……司令、わがまま」
「えっ、これ、俺が悪いの?!!」
「……対馬のおっぱい、飲んで？」
「いっ、いや、そもそも出ないよね……？」
すると、対馬は自分の胸を揉む……。
「んっ??」
そうすると、対馬の平坦な白い胸の先端の桜色から、白い液体が零れ落ちる。
「司令の為に……、出せるようにした、よ……??」
「あ、ああ、あ……!!!」
ハイパー命乞いタイムスタート！
「酒も控えます！ちゃんと仕事もします！ナンパも我慢します！旅行の回数も減らします!!!何卒お慈悲をぉおおおおお!!!!」
「司令……？」
「ひ、ヒェッー!!!」
「対馬のおっぱい、飲んで？」

昨日は何もなかった。
何も、なかったんだ。

４７０話　正月だよ！

「えー、皆さん！新年明けまして、おめでとうございます！」
「「「おめでとうございます！」」」
「今年もよろしくお願いします！」
「「「よろしくお願いします！」」」
「……あの、お願いだからそろそろソロ旅行かせてください！オナシャス！」
「「「駄目です（ヤーマン）」」」
「あああああああああああ!!!!!」

さて、俺がＫＡＮＫＩＮされ、お正月だ。
ＫＡＮＫＩＮって言うとユーチューバーみたいで面白いね。
ブンブン、ハローユーチューブ、監禁被害者ことＨＩＫＡＮＫＩＮでーす！みたいな？
そんなしょーもないことを考える俺の背後に謎の黒い影！
ビーム輝くフラッシュバックにはヤツの影が見えると言うし、嫌な予感しかしないので振り返らずに真っ直ぐ走って逃げる俺。
アムロも振り向くなって言われるんだから俺も振り向かないよ。
アムロ＝俺みたいなところあるだろ。
「俺ならベルトーチカを一月で口説けるね」
「龍鳳ちゃんは二週間で口説きましたよね」
「口説いたつもりないんだけどね、おかしいよね。……ん？」
おやまあ、明石。
「俺はこれから初詣に行くと見せかけて失踪するから……」
まあ俺＝志希にゃんみたいなところあるしな。
俺はもう、アイドルみたいなもんだし。
訳あってアイドル！俺の知り合いに元弁護士、元医者、元パイロットの男性アイドルとかいるし、俺も元旅人のアイドルとして芸能界に華麗にデビューしても良いかもしれない。
「良いんじゃないかな、面白そうだ」

「時雨……」
コンスタントに心を読まれている。
基本的に読まれたらやばいようなことはプロテクトをかけているが、表層心理は丸見えだろう。
「逃げるんだぁ……」
「まあまあ」
響に掴まれる。
あっあっあっ。
「おっ、俺、ちょっとコンビニに行ってくる！セ、セブンのあの固いプリンみたいなの、あの、六百円くらいするやつ食べたいから」
「なら私もついていって良い？」
鈴谷?!
「い、いや、ひとりでできるもん！俺は一人でも大丈夫だから！ねっ！」
「おかあさんといっしょの方が良いですよ」
鳳翔！
「イワーク!!!!!」

艦娘の愛（物理）に潰されて、ラーに焼き払われた凡骨デュエリストみたいになった俺。
愛が重いな！
でもこんなに愛されてるとか幸せだなー。
愛！
愛だ！
世界が愛で満ちれば平和になるだろう。
俺は全世界の美女を愛するから他の人は適当に自然とかを愛してれば良いんじゃないかな。
まあ、俺の状況はまさに、山賊に捕まった美少女って感じなんですけどね。
つまり？
この後、お正月と称してたらふく飲み食いして、その後は俺が輪姦

されるんだよ。
うちの子はみーんな魔物娘図鑑世界のアマゾネスみたいな感じだからねー。
楽しいねー。
うんもうね、あらかじめ言っておくけど、今日のオチは俺が艦娘に輪姦されて終わりです。
……いや、負けちゃ駄目だ。
抗おう。
俺はもう物理的に肉体を齧られながらリッター単位の精液を射精す羽目になるのはごめんなのだ。
嫌なのだ！ハムタロサァン……。
俺はポジション的には鎮守府のタイショーくんなので艦娘に指揮をする権利があるはずなのに誰も聞いてくれない。
まあタイショーくんもハム太郎本編で良い扱いじゃなかったしな。
そもそも俺はハムスターってかドブネズミだから、美しくなりたいと歌うしかないのだ。リンダリンダ。
逆レされるのもう嫌だ……。
快楽も行き過ぎると拷問なんだよ。
毎回、鑑純夏みたいになってるからね俺？
女だったらデスアクメしてたぞ。
俺の武ちゃんはどこに居るの？
でも００ユニットにはなりたくないな。
俺はマブラヴエクストラのノリで生きていきたいのに、艦娘は基本的にマブラヴオルタナティブの世界に生きてるから。
まあ深海棲艦もＢＥＴＡみたいなもんと言われたらそれまでなんだが。
とにかく逆レは勘弁だ。
お慈悲^〜。
「さあ、嫌なことを忘れたいのでとりあえず飲むぞ！」
ドンペリニヨンプラチナ。

俺の知り合いに００７と呼ばれるスパイがいるのだが、その人の好物だ。
懐かしいな、俺の旅先で何かとあの人の任務に関係するの。
……でも艦娘に囲まれながらドンペリってどう考えてもキャバクラ？
いや、よそう、俺の勝手な推測でみんなを混乱させたくない。
「ドンペリ入りまーす！」
「やっぱキャバクラじゃねーか!!!」
やはりキャバクラだった！
畜生！この世界はハム太郎みたいに優しい世界だぞ?!とっとこハム太郎の世界に姫騎士アンジェリカとデビルマンを出すような所業やめろ!!!
まあ確かに、ロコちゃんで抜きましたという人間は割と多いと予想されるのだが……。
ちゃおとか、割と大きなお友達が喜んでそうだ。
最近の少女漫画はエロいしなあ。
「へえ、そうなのかい？」
時雨が、青く光る酒……、酒なのそれ？怖いんだけど何それ？まあ、暫定酒を飲みながら話しかけてくる。
「いやー、最近の少女漫画はエロいよ、普通にセックスしてるシーンとか出てくるからね」
「へえ」
「ＳＨＩＮと繋がったままこんな街中歩くなんて頭がフットーしそうだよおっっ」
望月が煽ってきた。
「膣痙攣はマジでやばいからな……」
俺が神妙に頷く。
あれは救急車呼ぶか、マジで繋がったまま街をダッシュするかの二択だからな。
イカせ過ぎるのも問題なのよな。
「俺は昔、遊園地のお化け屋敷の中でセックスしてて、そこで膣痙攣で

繋がったまま病院に行って大恥かいたことがあ……、はっ?!」
「「「……」」」
「い、いや、何でもないです」
誘導尋問だったか！
危ない危ない、致命傷で済んだぜ。
さあ、おせち料理を食べよう。
因みに、お雑煮は地域差が大きいので数パターン作ってある。
俺は東北出身で醤油ベースに鶏肉入れるよ。
京都の方の白味噌ベースのお雑煮も美味いんだよなあ。
「で、遊園地で膣痙攣した時の相手は誰なのかな」
「いやー、何のことかなー!!!ほーら!!!それより伊達巻食べて!!!俺が作ったんだよ!!!あーん!!!」
「あーん……、うん、美味しいね」
よし、時雨は誤魔化せたな。
「で、相手は?」
「あーあーあー!!!栗きんとんも俺が作ったんだよ!!!はいあーん!!!」
「あーん」
はー、時雨は可愛いなあ。
「まあ、昔の女はどうでも良いよ。忘れる程度の女なんて、どうでも」
「いや、彼女の名誉のために言っておくが、俺は愛した女性を忘れることなんてないよ」
……あっ。
「「「……」」」
ックゥー！またやっちまったか！
良い致命傷だ。
ラッキーパンチをもらっちまった。
だが、行きずりの女、みたいなのはないから。
俺は一度抱いた女の子は永遠に覚えてるから。
一度チムドンドンした女の子のことはずっと覚えてるよ。
「ふうん……」
おっとー?

時雨がお怒りだぞー？
でもまあ……。
「こればっかりはね。君達がいくら俺を解剖したり洗脳したりしても、俺は愛した女性を忘れることはないよ。大切な思い出だ」
「……分かっているよ、提督はそういう人だ」
「悪いとは思ってるけどねー」
「……なら、もうちょっと悪びれてほしいものだけどね」

さて……。
夜の０時。
「そろそろ、良いムードになってきたね」
と時雨。
「どの辺が？」
「……なってきたね（強調）」
くっ、強い。
だが俺は最後まで抵抗するぞ。
「そういう気分じゃない」
「そういう気分にしてあげるよ」
「もう眠い」
「寝てて良いよ」
「実家に帰らせてもらいます」
「一日くらい遅れたって大丈夫さ」
よし！
無理！
なら俺が動く！
「せめて戦艦空母だけ……」
「まあまあ、そう言わず」
あひん。
「あ、なんか注射さりぇたんだきぇど……」
「足りなかったかな？」
あひん。

「あばばばばっば」
「うん、よしよし。スペシャルブレンド麻酔……、提督の薬物耐性を超える薬品、だんだん作れるようになってきたよ。さあ、楽しもうか。冬の夜は長いよ」
ヒェー。

４７１話　お歳暮の時期

「うわあああああ」
　新年恒例の年賀状とお歳暮に埋もれる俺。
「これはＨＣＬＩ社、これは帝国陸軍『パンプキンシザーズ』、これはヘルシング機関、これはホテルモスクワ……、んんー？今年は危ない人達からの連絡が多いぞー？」
　何でかなー？
「そりゃあ、今年から武器商人を始めましたからね」
　と大淀。
「君達がね！君達が勝手にね！俺は許可してないのにね、おかしいね！」
「まあまあ」
　全く……。
「えーと……、『イエーイ、旅人さん見てるー？うちの販路に手を突っ込まない限りは仲良くしようね！』か。ココちゃんってば、そりゃ、君の流儀に反したら殺しにくるってことじゃないですかー、やだー」
　まあ、うちも、信頼できる筋にしか武器は売ってないからな。
　雑魚チンピラやガキに武器を流したりはしない。主に商売相手は大組織や国だ。
　もしくは、デビルサマナーのような、なくてはならない裏組織なんかにも売ってる。
　ぶっちゃけ、俺もココさんの世界平和のために武器を売るってのは賛成だ。
　黒井モールは実はそんなに営利目的じゃない。
　黒井モール武器部門を発案したのは、白露型、夕雲型、明石と夕張辺りの連名なんだが……、艦娘は基本的に、俺が何をやると本気で嫌がるかを理解している。
　だから、麻薬を売りさばいたり、チンピラに武器を売ったりはしない。
　むしろ、小口の販路は儲からないと言うのが本音だろうが……、少

なくとも、艦娘は、報復行為以外では明確に悪いと言えるようなことはやらない。
暗殺をやる。だが、殺すのは悪党だけだ。
武器を売る。だが、相手は信頼できる筋だけだ。
人体実験もやる。だが、やるのは鎮守府に入り込んだ工作員にだけだ。
黒井鎮守府は正義ではないが、悪でもない。
世界を滅ぼそうだとか、明確に悪いと言えることは控えている。
正直な話、黒井鎮守府は、既にアップル社よりも稼いでいるし、世界中の経済、軍事に深く食い込んでいる。
小国の予算の数倍くらいの金が動く大組織だ。
世界征服はできているのかどうかはわからないが、経済的に、黒井鎮守府がなくなると世界のバランスが崩れるのは確実だね。
「……そもそも、旅人の提督が、何故武器商人や兵士、マフィアの知り合いが？」
「旅先で出会ってバイトさせてもらったりしてるうちに仲良くなったのよ」
「……アレですよね、提督の一番恐ろしいのは、その人脈ですよね」
「そうかな？友達はたくさんいるけど」
「アメリカの大統領から日本の総理大臣まで、直通の電話を持っている時点で普通ではありませんよ……」
そうかな……？
そうかも……。
「まあでも、縁があって」
「……よく考えるとおかしいですよね？何で武器商人から大統領まで、幅広過ぎる人脈が？」
「たまたま縁が」
「縁で片付けられる話じゃないですよね？黒井鎮守府の取引先は百パーセント提督の知り合いですよ？」
そんなん言われましても……。
んー……。

でも確かにそうだな。
俺はピカチュウげんきでちゅうくらいの気持ちで生きてるのに何故か、周りにはポケスペみたいなノリの人が集まるよな。
「では、例えばこのＨＣＬＩ社の軍需部門のココさんとはどうやって知り合いましたか？」
「えーっと、中東で凄い綺麗な女の子がいたから話しかけたら武器商人だったんだよ」
「はあ……」
「可愛かったから口説いてみたら、一晩だけデートしてもらえてさ」
「はあ」
「そしたらめちゃくちゃ気に入られて、非常勤の私兵にしてもらった。給料高くてさー！」
「……？？？？」
いやそんな心底意味がわからないみたいな顔されても。
「いや……、その、どうやってカリスマ武器商人の心を一晩でキャッチしたのですか？」
大淀が言った。
「いやそんなん熱いハートだよ」
「……具体的にどんなデートでした？」
「んー、その時無一文だったんだけど、そこら辺のチンピラをボコって財布をもらって、その金で一晩違法カジノで過ごしてカジノを破産させたんだよね。そして、現地のマフィアと銃撃戦になったから、適当に素手でぶっ飛ばしてから、ココちゃんに五十万ドルのロールスロイスを一台プレゼントしてあげて、そのまま手の甲にキスして帰ろうとしたら……、気に入った！って言われて」
「はー……」
頭を抱える大淀。
「そりゃあ気に入られますよ！無一文から一晩で五十万ドルを手に入れる手腕！銃撃戦を素手で切り抜ける強さ！美女を一晩飽きさせない話術！おまけに最高のルックス！誰だって気に入りますよ!!」
そうなのかな？

「いやー、俺より有能な人とかいっぱいいるし」
「提督の凄いところはマルチな才能です。できないことがなく、あらゆることが一流であるところですよ」
　そうでもないけどなー。
「人並みだよ？普通だよ？」
「は？」
　俺の周りには神殺しとか大妖怪とかたくさんいるから、俺がそんなに有能には思えないんだよなあ。
「……もし、私が何らかの組織の有力者であるならば、提督のような人材を必ず一人は置いておきます」
「何で？」
「何でも人並み以上にこなす万能な人間ですよ？痒いところに手が届く存在です、組織に必ず一人は欲しいですよ！」
　んー？
「……そうかな？器用貧乏より一点特化を集めた方が組織として良くない？」
「提督のような人が一人は欲しいって話です！……提督の周りには、確かに天才や最強がたくさんいるのでしょうが、提督の価値は天才や最強に劣らないとお思いください！」
　そうなのか……？
　まあ、偉い人からはよく、使えると言ってもらえるけど。
「そもそも！私達みたいな頭のおかしい艦娘に慕われて上手く運用できている時点で、提督は有能なんですよ!!」
「えっ、頭のおかしい自覚あったの？」
「まあ多少は」
　そうなんだ……。
　なら少しはまともになるように努力してくれないかな……？
「あ、もうまともには戻れませんから悪しからずです」
「それは残念だよ」
「ともかく……、提督はご自分の価値を甘く見ないでくださいね、本当に。提督を雇えるならいくらでも金を出す組織なんてごまんとあり

ますから」
ふーん。

『ココちゃん、俺を雇えるとしたらいくら出す？』
『え？えーと、年俸十万ドル＋ボーナスくらいかな？何、雇われてくれるの？』
『いや無理だけど』
『何だよもー！』

なるほどなぁ、俺って、思った以上に使える奴らしいな。
でも今は、こんな言い方はアレだが、艦娘を使う側だ。
自分に価値があると認めて、無茶しちゃならないな。
頑張ろう。

４７２話　読み上げろ！ゆかりんボイス！

「うわあああ!!!結月ゆかりになってるうううう!!!」
朝、起きたら、ボイスロイドの結月ゆかりになっていた。
恐らく、寝ている間に改造されたのだろう。ショッカーかな？
「あれ？ちんちんは……、ついてる?!!女の身体なのにちんちんついてる?!!」
ふたなりじゃねーか！誰の仕業だ、こんな業の深いボディにしやがったのは！
「いや私、レズではないのでちんちんは付けっ放しですよ」
枕元に立つ明石が告げる。
やっぱり、オマエノシワザダダノカ！
わんわんエンドではなくふたなりちんちんエンドだが。
性癖尖ったタイプのエロ漫画でよく見る展開だ。
俺は正直、ふたなりはちょっと……。
「でもこれ女の穴もあるしちんちんもついてるし……」
「お得ですね！」
「何が？」
「でも提督も声帯が結月ゆかりになったからこれ見よがしにちんちんを連呼しているんでしょう？」
「そんな邪念はないよ……」
「でもでも、華奢な女の子の身体に特大のちんちんってもう最高に滾りませんか？一部の人大喜びですよ！」
「俺は嬉しくないんだけど?!」

そう言う訳で、本日は結月ゆかりとして過ごす羽目になった。
「畜生、読み上げ機能を使いたいがためにここまでするか普通?!」
ってかどうするんだ、最初の一文でもうオチてるぞ。
あまり連続して俺の汚れオチはよろしくないだろ。
どうしよ、これ……。
まあ、今すぐにでも自己変容の魔法で男に戻れるんだけど……、明

石が、「折角改造したので今日はこのままで！」って言ってたしなあ。
はぁ、しょうがない。
行こうか。
ふたなりなのが辛いんだよなあ、女のフリは普通にできるんだけど、違和感とか……。
ん？
「「あ」」
声が重なる。
曲がり角で出会ったのは、初雪だ。
「どうも、ボイスロイドの結月ゆかりです」
名乗ってみる。
「おおー！ゆかりんだ。工廠のアンドロイドかな？」
お、騙されたかな？
「初雪ちゃん、こんにちは」
「こんにちはー。明石さんに造られたの？」
「大体そんな感じです」
「んー？」
首を傾げる初雪。
戸惑ってるな、ククク……！
「えいっ」
「おほぉ」
いきなり股間を掴まれた!!!?
「……むむむ、この感触は司令官！」
「何でナニの触感で俺かどうか分かるんだよ!!!?」
バレた。
ってか、このバレ方何？
あもりにも酷すぐるでしょう？
まあでもスネークさんもナニの大きさで変装がバレたことがあるって言ってたし、割とありえることなのでは……？
んな訳あるかーい！（ノリツッコミ）
「この感触とサイズは司令官だよ」

「揉むなーっ！」
「ってか、結月ゆかりのふたなりって明らかにニッチでは？」
「俺に言われても……。明石に言ってよ、朝起きたらこうなってたんだからさあ」
全く、俺に効く麻酔を作ったからっておふざけが過ぎるよなー。
一度ガツンと言っておくか？

初雪と別れて、次。
お、古鷹だ。
「どうも、ボイスロイドの結月ゆかりです」
と、声をかける。
「あら、おはようございます、提督」
んんー？
バレバレじゃん。
「何で分かったの？」
「匂いで分かりますよー！」
「ハッハー、マジで言ってる？」
「特に……」
古鷹が俺のスカートをめくって股間に顔を近づける。
「ちょっ?!」
「ここの匂いは絶対覚えてますから??」
「ちょっと待って！コラ！やめなさい！ああっ、この身体、力が弱……、ああーっ!!!」

うう……、あんなことやこんなことをされてしまった……。
どんなことが具体的に言うとＲ１８なことだ。
ひょっとして俺はＡＴＭ付きの肉バイブなのでは？旅人は訝しんだ。
下半身さえあれば良いってか？デトロイトメタルシティかな？
でも、こうして姿が変わってもエロいことをしてくるってことは、俺の外見やちんちんだけが愛されてる訳じゃないんだろうな。

っと。
そろそろお昼だ。
「どうも、ボイスロイドの結月ゆかりです。旅人さんの代わりにお料理の手伝いに来ました」
厨房の速吸に言ってみる。
「えっ？あっ、はい、そうなんですか？」
混乱する速吸。
おっ、どうしたどうした？
「んー、えっと、ちゅっ」
おっと、キスされた。
「むむ！この唾液の味は……、提督さんですね！」
「味?!」
「はい！味覚には自信があります！」
隣の鳳翔は……。
「ああ、私は雰囲気で分かっていましたよ？」
あ、そうなんだ。
「自分の夫が、見た目が違うくらいで分からない訳ないじゃないですか」
割とバレバレ？
やっぱり顔だけじゃないんだな……。
「あの、今日はこの身体で過ごす予定でさ、あんまり力もないから、ほぼ任せきりになっちゃうかも」
「ええ、構いませんよ……。ふふふ、私より小さな旦那様って、なんだかおかしいですね」
鳳翔に撫でられる。

む……。
気をつけろ、誰かが見ている。
背中から俺を追い詰めてる。
振り向いたら負けだな。
「て、い、と、く??」

大淫婦鹿島のエントリーだ。
バーニンハー、貞操だけは渡せないので倒れるまで走るしかない。
「きゃー!」
逃げよう。
「えへへへへへへぇ、捕まえましたぁ?????」
「い、いやですよ鹿島さん!ゆかりさんはボイスロイドなのでセックスとかしないんです!」
「なるほどぉ、提督!こちらをご覧になってください」
ん?
スカートをめくる鹿島。
どうし……た……の!!!?!!!
「そ、それは!!!?」
「明石さんに頼んで付けてもらいました??」
ち、ち、ちんちん!!!!!
「今日はふたなり同士でらぶらぶエッチしましょうね??」
「や、やめろ……、マジで勘弁してくれ……!!!」
「すぐに女の子の良さを教えてあげますよ??」
あ、あああああああああ!!!!!

４７３話　電波を受信

「あ」
あー？
今、神のお告げあったよ。
俺の中の何かが言った。
白露型を可愛がれ、と……。
きょーおーかーらーいちーばーん、ロリコンになる。
もうロリコンでいいや。
ってか、戦国基準ならロリじゃないもんね。
白露型とか十四歳くらいだしロリじゃないかもしれない。
かもしれない運転だ。
もしかしたら、駆逐艦はロリじゃないかもしれない。
それを調べる必要があります。
とりあえず、白露型の工房に侵入して、楽器箱に隠れる。
楽器箱は凄いぞ、Ｘ線検査されないからな！
楽器箱に入ればパスポートなしでレバノンに行けるって噂だ。
……やめとこ、厄い。
普通に、白露型の工房のソファに座って待つ。
その辺に積んである魔導書を読んで待っていると、ドアが開く。
「あ」
「お」
白露だ。
「どしたの、提督？」
「いや……、さっき天啓が下りてきて、もしかしたら駆逐艦はロリじゃないかもしれないと思って」
「???」
「ちょっとおいで白露」
「うん」
俺が手招きすると、白露は近くに寄ってきた。
ふむ……。

「おっぱい」
「あん??」
ぷにぷに。
……あるな。
確かにある。
幼女のような平胸ではない、性徴が見られる。
「おしり」
「ひゃあん??」
ぷにぷに。
……アリだな。
肉が程よくついている。割と筋肉質かな？
「お腹」
「あはは、くすぐったいよ！」
スマート。
海防艦のような、幼女のお腹じゃない。
割れるほどじゃないが腹筋もある。
匂いはどうだ？
「くんくん」
「やん??」
甘ーい女の子の匂い！
……を、覆すレベルの猛烈な血と臓物の匂い。更にそれを覆い隠す薬品の匂い。
「……ごめん、臭いよね」
白露がしゅんとして言った。
「そんなことないよー」
血と臓物、薬品、そして可愛い女の子の匂い。
それが白露型の匂いだ。
嗅いでいるといい感じに脳が痺れて気持ちいい……、ちょっと待って、本当に大丈夫かなこれ……？一般人が嗅いだら昇天（物理）しない？
「今、出撃帰りだから、汗臭いし、血の匂いもするよね……。お風呂

入ってくるね」
「あ、じゃあ一緒に入ろうか」
「良いよー、そろそろみんな帰ってくるし、白露型のみんなでお風呂に入ろっか！」
この気配りお姉ちゃん……、やはりロリではない？大人なのでは？

黒井鎮守府温泉。
２４時間営業の、海の見える露天風呂、ジャグジーバス、薬湯、サウナ、マッサージコーナー……、ぶっちゃけ、俺が艦娘のために作った健康ランドだ。
艦娘二、三百人が一斉に入浴してもなお余裕があるレベルで広く、三十種類近くの多彩な温泉があるぞ！
そして何故か俺と首輪付きのみ混浴可だそうだ。
昔は、俺は気を遣って、適当にドラム缶風呂に首輪付きと入っていたが、ドラム缶を回収されて無理やり混浴させられている。
さあ、風呂だ。
風呂上がりに牛乳飲もう。
「よし、風呂だ。バババンバンバン、バババンバンバン」
「……なんか違くない？」
「あーくにそまりしい、もーのどもよぉ」
「何故にダイオージャ!!!?」
あ、艦娘は割とアニメとか見てるぞ。
俺が子供の頃、ロボットアニメが大好きだったという話をしたら、何故か沢山の艦娘が「提督が好きなアニメならきっと面白いよね！」と色々見たらしい。
休憩室のテレビには、アニメやドラマのＤＶＤがごっそりとある。
みんなニュースとかあんまり見ないんだよね。
だってどうせ偏向報道しかしないし……。
だから、時事ニュースが気になる子は、自分でネットニュースとか漁ってるみたいだね。
白露型はその辺あんまり興味がないらしく、タブレットで映画とか

見てくつろいでるところをよく目にするよ。
時雨は結構時事ニュースも漁ってるみたいだけど、他の子はみんなアニメとか見てるね。
明石とかは、何度も何度もロボットアニメを見てるよ。好きなんだってさ。
よし、それはさておき、白露型全員と入浴タイムだ！
裸の山風を眺める。
「なあに？」
「可憐だ……」
健康的な肌色、滑らかなおしり、控えめながらもぷっくりとしたおっぱい。
白魚のような手指に、引き締まったウエスト、小さめの足、ほどよく肉のついた太もも。
手入れされた綺麗な緑の髪に、控えめな笑顔。
ロリじゃないな。
ロリじゃない。
ロリじゃないからＯＫ!!!
まず自分を洗ってから、山風を洗ってやる。
うおお背中小せえ可愛いぃ!!!
「あんっ??そこは自分で洗えるよぅ??」
「まあまあ」
おっぱいを揉み洗いする。
「提督、私のここも洗って？」
海風が股を開く。
「おーよしよし！洗ってあげちゃう！」
と、白露型とソーププレイを楽しむ。
その後に、湯船へ。
「あー、良い……」
風呂は良いね、風呂は心を潤してくれる。リリンの生み出した文化の極みだよ。
「そう感じないか？春雨君」

「はい、そうですね！」
何が嬉しいかって、風呂より美少女白露型に囲まれてることだが。
全裸の美少女に囲まれるご褒美。
白露型は良いぞ……。
程よい筋肉がスポーティで溌剌とした雰囲気を醸し出しているが、顔は本当に知性的で……。
力と知恵を兼ね備えた、完璧な生命体らしい身体だ。
いや、むしろ神に近いような、ある種の神々しさを感じさせる。
……ってか、白露型は種族が邪神だからな。
さもありなん。
俺は基本的に神が大嫌いだが……、それとこれとは別だな。
邪神白露型の御神体に触れられるとか幸せ者だな俺は！
「ちちー！しりー！ふとももー！」
がはは、グッドだ。
「提督」
「がははー！ん？何だ、時雨？」
「提督は僕達の身体をいやらしい目で見ているみたいだけど、僕らも提督の身体をいやらしい目で見てるよ」
何その報告は。
「なるほど、深淵（白露型）を覗くものは深淵（白露型）から覗かれているんだな？」
「そうとも」
深いな……。
……ん？
「……白露型にエロとかエロくないとかそう言う思考回路あるの？」
定期的に男女問わず人間をバラしてるんだし、見慣れてるでしょ？
と時雨に聞いたところ……。
「……僕だって女だよ？好きな男の身体で興奮したりもするさ」
少しだけ頬を染めて言った。

かわいい。

もう辛抱たまらん！

「時雨ぇーっ!!!!!」

「あんっ??」

「さてと、怪電波を飛ばして提督を操り、性欲を高める実験は成功、と」

４７４話　異種族をレビュー　前編

「うっしゃ！黒井鎮守府から逃げだせたぞ！久し振りにソロ旅するか！どうしよっかなー！うーん、たまには風俗に行きたいぞ！となるとあの世界だな！『転移』!!!」

……

……

……

「よー、ゼル？次はどこ行く？」

「うーん、次は龍種とか行きたいが……、そんな店あるのか……？」

俺は、友人のエルフのゼルとくっちゃべりつつ、次のサキュバス店への遠征について考える。

俺は人間の冒険者、スタンク。

神秘のダンジョンよりも、女体の神秘を探求する、色んな意味での冒険者である!!

さあ、次はどんなサキュバス店（風俗店）で楽しもうかな！

などと考えていると……。

……「んおっ??あんっ??ほおおっ??んほおおおっ??」

「うおっ、うるせっ?!」

馬鹿でかい喘ぎ声が街中に響いた。

ってかこの喘ぎ声、どこかで……？

ああ、思い出した、あれは……。

「「ヘカトンケイルちゃんだな?!」」

えっ、あの巨人種のヘカトンケイルちゃんをイカせてる男がいるのか?!

となると巨人種の男かな……？それともカンチャルみたいな器用なハーフリングか？でもこのイキっぷりは異常だぞ？

「ゼルさん！」

お、天使のクリムだ。

慌てた様子だな、どうしたんだ？

「どうした、クリム？」
ゼルが尋ねる。
「どうもこうもないですよ！何ですかこの狂気属性の魔力！」
「ん……、あー！これはな……」
ゼルが答えようとした時。
「お前ら！外出ろ！ヘカトンケイルちゃんが触手の塊とエッチしてるぞ!!!」
外から来たハーフリングのカンチャルが叫んだ。
触手の塊に？
となると……。
「あいつか？」
「あいつだろうな」
俺とゼルは察した。
「やっぱりあいつか？」
カンチャルも察した。
そして、人垣を押し退けて、ヘカトンケイルちゃんの店に行くと……。
「あへぇ……」
『いやー、良かったよ、ヘカトンケイルちゃん！』
うわあ……、怪獣大決戦みたいになってるじゃんかよ……。
そして、巨大な、人狼のような、爬虫類のような、樹木のような、翼膜と羽の生えた、触手の塊がうねってベキボキと縮小。
二メートル程の人型になる。
「んお、よう！スタンク、ゼル、カンチャル！」
「「やっぱりお前か!!!」」
ヤツだったな……。

「こっちの世界では久し振りじゃねえか、旅人よぉ……」
「お、そうだな」
酒場に戻って飯を食う俺達。
ヘカトンケイルちゃんをイカせまくった変態触手の正体は、俺達の

予想通りにこいつだった。
「あ、あの、スタンクさん……、そちらの方は一体……？」
顔を青くしたクリムが聞いてくる。
「こいつか？こいつは旅人のマオ。昔、パーティメンバーだったり、レビュアーズのメンバーだったりした男だ」
「そっ、そうじゃなくって……、それは『何』ですか……？どうして、ヒトの形を保っていられるんですか……!!?」
何、って言われてもなあ……。
「俺は人間だよ」
旅人が答える。
「に、人間な訳ないじゃないですか！反発する属性同士が折り重なって、神の気配までするんですよ?!存在としてあり得ないですよ!!!」
「そんな事言われてもウチ、ポンデライオンやし……」
「わああ?!どこから出したんですかその被り物!!?」
いつのまにかライオン風の被り物をしていた旅人。旅人はそういうもんだ、諦めろクリム。
「はい、これ、俺が作ったポンデリングね。あとでメイドリーちゃんと店長さんにあげて」
「あ、ありがとうございます……？」
一旦引っ込むクリム。
だが、すぐに戻ってきて……。
「って、いやいや！そうじゃないですよ！貴方は何者なんですか?!」
「旅人だよ」
「そんな旅人がいますかー?!」
「ここにいるぞ！」
「クリム、その辺にしとけ。こいつに論理的なツッコミをするのは時間の無駄だぜ？」
「うぅ……」
俺が言っておいた。
それに続けて。
「そうそう、こいつはよく分からん何かだが、害はないから放ってお

け」
　ゼルもそう言った。
「まあいいヤツではないけどね」
　カンチャルもついでに言った。
「ええと……、害はないんですね？」
「そうだって。基本的に戦闘能力自体はそこまで高くないんだよ、こいつは。勇者がすっ飛んできたら細切れにされて終わりだな」
　旅人の強さは……、まあ、大体、下位の龍種くらいか？ちょっとした魔王くらいは強いが、まあ、ギリギリ俺達でも殺せないこともないレベルだ。
「……でもこいつ死なないけどね」
　カンチャルがまた余計なことを言った。
「し、死なないんですか?!」
「いや死ぬよ？でも死んだくらいじゃ別に……」
　とは旅人の言だが、相変わらず頭おかしいぜ。
　死んだくらいならセーフなんだとよ。
　意味分からん。
「……死んでも蘇る準魔王クラスの上位種って、それ、とんでもなくヤバいですよね？」
「確かにヤベエな。けどまあ、今のところ誰にも怒られてねーし、平気だろ」
「そんな楽観的な……」
　ははは、冒険者なんてそんなもんだよ、クリム。

　さて……。
「旅人よぉ、何しに来たんだ？」
「んー？俺のいない間にお前らが色々と楽しんでたらしいからな。俺も楽しみに来たんだよ」
「嫁は良いのか？」
　何百人も嫁を侍らせてんのによくもまあ風俗に来たなこいつ。
　マジでゲスだな……。

「いや、何回も言ってるけど、あの子達は嫁じゃないよ？勝手に婚姻届出されてただけで」
「うるせーやい、美女に囲まれるモテ男は死ね！」
「まあ俺がモテるのはしょうがないことだから良いだろ？」
うわ、なんかムカつくこと言ってる！
「モテるのになんでサキュバス店行くんだよ？」
「サキュバス店にはサキュバス店の良さがあるんだよなあ……。ほら、うちの子ってみんな人型じゃん？ラミアに巻きつかれたいとか、獣人をモフモフしたいとか……、そう言う欲求があるだろ?!あるんだよ！なあ!!!」
「「それは分かる」」
俺とゼルとカンチャルが同意する。
俺も例え嫁さんができても、色んな女の子を楽しみたい欲求は消えないんじゃないかと思う。
いや……、結婚すりゃ嫁さん以外の女は目に映らなくなるのかね？分からねーや。
「あ、それと、これ、ヘカトンケイルちゃんのレビューね」
「おう」
どれどれ……？
『店舗名：性欲の巨人
指名嬢：ヘカトンケイルちゃん
点数：8
まあ、腕が8本あって身体がちょっと大きいだけで、普通の女の子だよね。
ヤッてる最中に手を握ってもらうことが好きだって本人が言うから、腕を8本に増やして手を握ってあげたら喜んでくれたよ。
強めの刺激が好きらしいから、ブラシ触手を生やしてお豆を擦ってあげたら面白い程イッてたね。』
「……いや、腕増やすとか触手を生やすとかお前しかできねーだろーが!!!」
ふざけやがってこの野郎！

「ってか８点？また高評価だなお前は」
俺の手元にある、旅人のレビュー用紙を覗いたゼルが言った。
まあそうだよな、こいつって基本的に高評価しかしねーよな。
「だってヘカトンケイルちゃん可愛いし……」
「まあ、可愛いけどよぉ、お前の言う『可愛い女の子』の範囲が広いんだよ……。エルフ、アンデッド、獣人、ラミア、有翼人……、お前何でも良いんじゃねえのか？」
「何でもは良くないよ？ほら、ゼルが通ってる人間の風俗とか行かないじゃん」
「あー……」
そうだな……。
「けっ、５００歳以上の年増エルフにも可愛い可愛い言うアホにあの店の良さが分かるかよ」
ゼルがなんか言ってるが、俺はエルフは何歳でも行けるからなー。
「おいおい、スタンク！こいつはな、獣人並みの嗅覚があって、その上でエルフみたいに魔力を感じられるんだぞ?!つまりは、年増エルフの腐葉土みてーな匂いとマナの腐りっぷりを見て尚、抱いてるんだぞ?!頭おかしいぜこいつ!!」
あー、それを言われるとな。
確かにおかしいわ。
「お前ら、ウサギっているだろ？」
「は？」
「ウサギはよ、人間よりも何倍も耳がいいよな？でも、人の話し声を聞いても平気だよな？人間よりも何倍も耳がいいってことは、何倍も大きな声が聞こえるのに」
「あー……」
つまりは、自分の感知能力はめちゃくちゃ高いが、感知したものが気になるかどうかはまた別の話だぜ！ってことか。
「まあアレだよな、犬とかって、他の犬のウンコの臭いとか嗅ぐもんな！」
「その例えは最低だぞテメーこの野郎！」

「で？」
「今日はお前らについて行ってレビュー書くぞ」
ふーん、そうか。
じゃあ、行くか！

４７５話　異種族をレビュー　後編

旅人は、一週間、俺達とサキュバス店巡りしてレビュー書くそうだ。
全く、あんな可愛い嫁さんを、ロリからおねーさんまで選り取り見取り二百人近く揃えておいて、サキュバス店に行こうってんだからヤベーよなこいつ。
「なんなら代わってやろうか？毎晩寝る間もないくらいに逆レイプされまくるけど」
「地獄かな？」
昔行った低級淫魔の群れみたいな感じか？
「毎晩二リットルは精液を搾られてるよ」
「良く生きていられるなお前……」
「ははは、まあ、慣れだよね……」
そう言った旅人の背中には、どこか哀愁が漂っていた。
「だから今回は俺から攻められる感じの女の子が良いなー！」

今日はサキュバスムービー……、旅人が言うところのＡＶを仲間内でやり取りする日だ。
『にゃあん??にゃーん??』
「猫獣人のマタタビプレイ！どうだ！」
「１０００Ｇ!!」
「１５００Ｇ!!」
「２０００Ｇ!!」
このように、手持ちの、見飽きたサキュバスムービーを仲間内でオークションするのだ！
「旅人は買わねーのか？」
「買ったの見つかったら嫁の逆レイプが酷くなるから……」
「おお、もう……」
「お、次は俺のサキュバスムービーだぞ！」
「え？」
旅人の売るサキュバスムービーとは？

『あんっ??提督ぅ??』『あは??凄いでち??』『ギンギンっぽい??』
「艦娘と俺の大規模乱交ムービー」
「お前……」
自分出演のサキュバスムービーを売りさばくって、こいつどう言う神経してんだ?!
あっ、でも良いなこれ！
このレベルの女の子をこんだけの数揃えるって生半可な予算じゃできねーもんな！
ハーフリングみたいなロリから、ミノタウルスみたいな巨乳まで揃えてハーレム大乱交！
かなりレアな映像だなこりゃ！
「えー、このムービーは複製品がいくらでもあるので、一本５０００Ｇで欲しい奴に売りまーす」
と旅人。
いや売りまーすってよぉ……。
……。
……後で買うか！

さあ、旅人とレビューだ！
オーガだ！
『店舗名：鬼の角亭
指名嬢：レッドオーガちゃん
点数：7
ちょっとガサツっぽくて力が強いんだけど、更に強い力で押さえつけて挿入するとメスの顔になるね。
腹筋バキバキの筋肉美女良いよね……』
スライムだ！
『店舗名：粘液粘膜館
指名嬢：ブルースライムちゃん
点数：6
わー、プニプニだー。

俺は連日嫁に搾り取られているから、刺激が強い方が良いんだよなあ……。
でもこれはこれでアリだな！』
アルラウネだ！
『店舗名：秘密の花園
指名嬢：椿ちゃん
点数：9
いやー、良いね！甘ーい蜜の香りが漂う美女の秘密の花園！体液が甘くて美味しい！
体から溢れる樹液？蜜？を使ってのぬるぬるローションプレイもできるし！
ただ、押し倒してガンガン攻めると、蔦でぐるぐる巻きにしてくるのは困る。嫁に触手でぐるぐる巻きにされた時のことを思い出すからな。』
イエティだ！
『店舗名：かまくら屋敷
指名嬢：エイティちゃん
点数：9
イエティ可愛いなあ!!!
言ってしまえば熊の獣人に近い種族なんだが、巨人種っぽさもあってぼーっとしてるところもある。
このぼーっとした女の子をキャンキャン泣かせるのがたまらないのよね！』
犬獣人だ！
『店舗名：わんわんらんど
指名嬢：柴ちゃん
点数：9
獣人は良いぞ……！
今回は柴犬の獣人だったな。お兄さん良い匂いするわん！とか言って股間の匂い嗅いでくるの可愛いよね。
そのあとはお互いの匂い嗅ぎながらペッティングして致した。

バックからして欲しいって言うからガンガン突いたぞ！そうするときゃんきゃん言うのよ！可愛い！』

……

……

……

「「「いやー！良かったなー!!!」」」

俺は旅人とゼル、カンチャルと打ち上げに来た。

場所はいつもの酒場、食酒亭だ。

「あら！旅人さんじゃない！久し振り！」

「おお、メイドリーちゃん！久し振り！」

「またエロ男達と馬鹿やってるの？貴方はハンサムで色々と職業も選べるくらいに多芸なんだから、変な連中とつるんでないでしっかり働いたら良いのに！」

「ははははは！そりゃ無理だ、申し訳ないけど。男ってのはみんなエロくて馬鹿なもんなのさ！」

「もう……！」

なんだぁ？

給仕の有翼人のメイドリーは旅人にほの字かー？

「やめとけメイドリーちゃーん？こいつ、結婚してるんだぜー？」

「あら！そうなの?!おめでとう旅人さん！これを機に旅人なんてやめてしっかり働いたら？」

「えー、やだー」

「やだじゃありません！」

「ま、まあまあ、ほ、ほら、注文するよ！黒ボアステーキとレッドチキンのフライ、ピラフと山菜のサラダ山盛りに特製シチュー鍋ごと！あとは火山山脈の赤ワインとエール樽ごとね！」

「はいはーい！旅人さんはたくさん食べてくれるし、ツケにもしないから助かるわー！」

……こいつって、自分の体積よりも多くのものを食ってるよな？

どうなってんだこいつ……？

まあいいや！

にしても……。
「今回のレビューは捗ったな！」
「おう！アルラウネのレビューのために迷いの森に行ったが、旅人の『瞳』で迷わずに行けたからな！」
冒険者としても使えるんだよなあこいつ。
ハーフリング並に器用で、エルフ並に魔力感知に優れ、魔法の腕も良いし、タンクとしては一流……。
一家に一台置いておきたい奴だな！

そんな感じで、旅人と仲間達と馬鹿話をしていると……。
「そろそろ帰る時間だよ、提督」
どこからか、黒髪三つ編みの女が現れた。
そして、それを見て、俺の冒険者としての勘が叫んだ。
こいつには勝てねえ！と。
低く見積もっても龍種並、下手すりゃ勇者クラス……、いや、もっと……!!!
「……スタンク、ゼル、カンチャル。今週はありがとな、楽しかったよ。もし機会があれば、またみんなでサキュバス店に遊びに行こうな」
ああ……、旅人が遠い目で遺言を……。
「それじゃあ、提督を返してもらうよ」
そして攫われた旅人。
まあ、なんだ……。
「「あいつも大変なんだなあ……」」

４７６話　黒井鎮守府ロボットコンテスト

「黒井鎮守府ロボットコンテスト!!!!」
やります。
解説と司会は明石と夕張である。
明石と夕張は、１００円ショップの材料でメタルビーストクラスの機動兵器が作れてしまうのでロボットコンテストなんて参加させたら他の艦娘が勝てない。
「ルール説明！」
一つ！
「市販の材料で作ること！」
二つ！
「魔法や、それに準ずる科学以外の技術は使用禁止！」
三つ！
「操作者にダイレクトアタックは禁止！」
四つ！
「大きさは一メートル四方の立方体に収まるくらいね！最低でも五十センチ四方の立方体よりは大きく！」
五つ！
「リングアウトか行動不能になったら負けだよ！」
そして六つ！
「いいかい、常識の範囲内のものを作ってきてね？これユーチューブにも載せるやつだから頼むよ？」
以上！

さて……。
案の定、常識の範囲内の物を作ってきてくれるほど艦娘は優しくないのだが。
『ギュイイイイイイイン!!!!』『ギリギリギリギリ』『ブオオオオオオ』
ロボットコンテストの音じゃないよこれ。
ねえ。

ねえってば!!
「では、第1回戦！時雨ちゃん対暁ちゃん！」
「暁ちゃんのアレはボストンダイナミクスのアレですね。わざわざ買ってきたみたいです」
「時雨ちゃんのは？」
「さあ……？またなんかグロテクスな生体部品の塊ですけど」
「「とにかく……、ゴーファイト!!!!」」
暁のは、ボストンダイナミクスのアレだ。あの四足歩行のやつ。
時雨のは……、なんだアレ。
何だ……、なんだアレ。
カエルのような後ろ足と蜘蛛の前脚二本、身体の半分にも至るほどの黒い金属ブレードが並ぶ歯のある口。
『ＨＡＲＵＵＵＵｕ……、ＧＩＩＲＩＲＩＲＩ……』
なんか……、なんか鳴いてるんだけど？
あっ。
『ｓＨＡＡＡＢＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!!!!!!』
物凄い勢いで暁のロボに噛み付いた！
『ＳＡＨＡｓＨａＡＡＡ!!!!』
ボストンダイナミクスのアレーーーーーー!!!!
「ひ、ひぃい……！」
暁も怯えている。
何あの放送禁止生物?!
「ちょっと待ったちょっと待った！時雨！何よその放送禁止グロクリーチャー！」
「これはロボットだよ」
「???」
「ちゃんとルールに則って、人工筋肉とナノマシン、高周波ブレードの歯、市販の犬の脳を改造したメイン回路を搭載した、魔術を一片たりとも使っていないサイボーグだよ」
「……悪魔かな？」
「犬の脳には電極を挿入して、常に絶対的な飢えを感じるように設定

してある。目の前に動くものがあれば飛びついて丸呑みし、超濃度の消化液に叩き込むよ」
「悪魔かなー!!!?」
なんて酷いことを！
人の心がない!!!
「明石っ!!!」
俺がルール決定者の明石を見る。
「セーフです」
「ええー!!!?」
セーフ？これで?!
ま、まあいい……。
明石がセーフと言うならセーフだろう。
俺個人的には後でお尻ペンペンだがな!!!
「勝者、時雨ちゃん！」

「第2回戦！睦月ちゃん対妙高さん！」
「「ゴーファイト!!!!」」
妙高のは……、えっあれガトリングじゃん。
ガトリングじゃん。
無限軌道にガトリングついてる駆逐オートマトンじゃん。
ちょっと妙高さん？貴女、本職が最早アサシンなのは分かるけど、こんなことする？
対する睦月は……。
……。
レーザー戦車？
あっ始まった。
『『ガガガガガガガガ!!!!!!』』
『ボン！』
「睦月ちゃんの勝ち!!!」
がががー、ぼん！じゃねーわ！
何だこれ……、何だこれ?!

はたらくくるまの気分でスタートしたロボコンがガンダム動物園に侵略された気分だ!!!
ドラえもんのオープニングからゼオライマーがスタートしたみたいな、そんな気分だよ!!!
何なのこれ……。
「ああ……、やはりガトリングでは駄目でしたか」
「ガトリングが駄目だよ?!」
「時代はやっぱりレザライだよ!」
「レーザーも駄目だよ!!!?」

「第3回戦、村雨ちゃん対如月ちゃん!」
「ゴーファイト!!!」
えーと、如月は……、浮遊している三本爪の銀色の変なのだ。
プラズマミサイルとレーザー砲を搭載しているらしい。
うん……、地面に足が着いてなきゃ駄目なんて一言も言ってないもんな!
俺が悪かったよ。
俺が悪かったようんもう……。
村雨のは……、赤い蜂?また生体パーツの化け物か……。
お、ぶつかり合った。
『ｇｕｌｕＵＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!!!』
村雨の蜂ロボットが針を刺した。
すると、如月の変なのがドロドロに溶けて爆発した。
……だから怖いんだよ一々さあ!!!
「勝者は村雨ちゃんです!!!」

「第四回戦、吹雪ちゃん対菊月ちゃん!」
「吹雪ちゃんの小型バーグラリードッグ対菊月ちゃんの小型ナインボールです!」
「ゴーファイト!!!」
『システムキドウ』『排除開始』

『『ピーピーピーボボボ』』
『どかーん』
「菊月ちゃんの勝ちです！」
いやだから何これ!!!?
ロボットコンテストのノリじゃないじゃん！
そんなことしてるから黒井鎮守府の治安はホンジュラス並とかまことしやかに囁かれちゃうんだよ!!
俺としてはプププランドくらいの治安を維持したいんだけどな……。
カービィみたいなポジションである赤城もいることだし、黒井鎮守府＝プププランドと言っても過言ではないと俺は思っている。
たまにドキドキ文芸部みたいな雰囲気になることもあるが、なぁに、誤差だよ誤差。
人生はＲＴＡではない。
多少のガバは楽しまなきゃな！
「しかしあの小さなナインボールはいかんよ君」
「むむむ」
何がむむむだ！

そして……。
「決勝戦！時雨ちゃん対菊月ちゃん！」
「「ゴーファイト!!!!」」
時雨のクリーチャーが素早く飛びかかるが、菊月のミニナインボールがそれを回避して、アウトレンジから焼き払う。
「優勝は、菊月ちゃんです!!!!」
「おめでとう!!!!」
おー。
「ふむ……、やはり科学は専門じゃないからね」
と時雨。
時雨の専門は神秘学だからな。
確かに時雨は、常人では足元にも及ばない程の智慧を持つ。いろん

な意味で。
だが、機械の専門家である睦月型には及ばなかったようだな。
「菊月ちゃんには、賞金と、提督との一日デート権が進呈されます！」
えっ、何それ聞いてない。
俺、了承した覚えがないんだけど。
「じゃあ、明日はデートだな！」
「え？あ、はい」
そう言うことになった。

その次の日は、普通に菊月とデートして。
「あっ??凄いっ??そこっ??良いっ??」
やることをやった。

「因みに賞金っていくらだった？」
「三十億」
「三十億円？高いねー」
「三十億ギルダン」
「最も高価なワンマンアーミー!!!!?」

４７７話　わんころ

黒井鎮守府最強は誰か？
非常に難しい質問だ。
単純な強さならば長門かもしれない。
防御力なら武蔵だろうか？
スピードなら島風。
戦闘速度と智慧ならば時雨。
火力なら曙や睦月型。
魔力なら巻雲。
歌唱力ならみんなのアイドル那珂ちゃん。
ついでにエロさなら鹿島。
勝負とは時の運であるからして、誰が最強なのか論ずるのは無駄だろう。
だがしかし、二人一組になった時、確実に鎮守府最強になるコンビがいる。
それが、古鷹、そして加古である。
古鷹……。
二メートルを超える規格外の大きさの大剣、牙斬刀を片手で振り回し、原子力空母すら一刀で斬り伏せる怪力。
そして雷を自在に操る超力を持つ魔人である。
加古……。
様々な武器に可変する二丁拳銃、ブレストリガーを巧みに操る。
その射撃精度は、１０ｋｍ先の深海棲艦の眉間を正確に貫く。
近接戦闘主体の古鷹、遠距離戦闘主体の加古が巧みに連携して、まるで、手足四本頭が二つの魔人であるかのように動く。
黒井鎮守府最強のコンビ。
また、鼻も利き、２リットルペットボトルに入った１ｇの塩の匂いすら嗅ぎ当てるような鋭敏な感覚を持つ猟犬でもある。
それが古鷹型だ。

そんな古鷹型の勇猛にして忠犬な二人は……。
「くぅ～ん??」
「はぁっ??はっ??はっ??はっ??」
俺の前ではただのらぶらぶわんわんに成り下がるのだ！
話をしよう。
艦娘にもタイプがある。
いつも甘えてくる甘えんぼもいれば、遠慮してしまいなかなか甘えられない子もいる。
そんな中、古鷹型の二人は、忠誠度がカンストしているあまり、自発的に甘えることはできないのだ。
だからたまにこうして、俺の寝室に呼んで、可愛がってあげることで、ストレスの発散になるのだ。
かわいがるといってもアタマをよしよしとなでたりたかい　たかい　とかをするんじゃないぞ、エロいことをするということだ！
「わふぅ??あぅぅ……??」
「はひぃ??なでなで、きもちいー??」
鋭敏な感覚を持つ二人は、俺の部屋に入った時点で甘い吐息を漏らした。
そして今は、甘ったるい声を上げる発情わんわんになっている。
いつも穏やかな笑みを浮かべる優しい美女の古鷹も。
「ああん??ていとくぅ??」
いつもはふわっと弛緩した雰囲気だが、決める時にはキリッとした表情をするカッコいい加古も。
「ていとくぅ??すきぃ??」
二人とも、らぶりーわんこになってしまっている。

「くんくん……、私の前には金剛さんとシてましたね？」
古鷹が尋ねてくる。
「ああ、匂いで分かっちゃう？ごめんね」
「いえいえ！金剛さんも群れの仲間ですから！群れのボスの提督は、群れのメス全員に種付けして良いんですよ??」

いやいや……。
「嫉妬とかしないの？」
「嫉妬？どうしてですか？提督は私たち全員を平等に愛してくれていますよね？」
「好きな男が他の女を愛するなんてさ……」
「それって、何が駄目なんですか？提督は絶対の王で、私達のボスなんですよ？ボスの決定に疑問を持つ獣なんて、要りませんよね？」
古鷹……。
「古鷹、俺は絶対じゃない。　俺だって人間なんだ、間違えを犯すこともある」
「じゃあ、提督が間違えたら、私達が地獄までお供しますね！」
重い!!!
「その必要はないよ、君達は、例え俺がいなくなったとしても幸せにおなり（からくりサーカス）」
「無理です」
「どうして？」
「提督は私の全てですから。提督がいないならば、帰ってくるまでずっと待ちます」
嫉妬もしない、浮気もしない。
ただ俺だけのために、ある時は敵を狩る猟犬として、ある時は都合のいい女として存在する。
それが古鷹型の二人だ。

古鷹型の二人は、俺の忠実な猟犬だ。
しかし……、よし、と言われない限り、いつまでも待てをしてしまう。
なので、たまには、甘えていいよと言ってあるのだが……。
自発的に甘えてくるようになるのが今後の目標かな。
なるべく平等に艦娘と関わるようにしているが、なかなか難しい。
「じゃあ、今度は、私達が提督を可愛がってあげます！」
「おいでー、提督！」

「えっ何それ、相撲部屋的な可愛がりじゃないよね？」
大丈夫？ビール瓶で頭かち割られたりしない？
いかに生意気なやつをビール瓶で叩き殺すのが日本の伝統文化だとしても、俺は殴られたくないよ？
「相撲部屋？よく分かりませんけど、提督も私達に甘えていいんですよー??」
ほーん？
「それは何かね……？古鷹のおっぱいと加古のおっぱいに挟まれても良い、と言うことかね？」
「はーい??」
おおおおおお。
おおー。
……おっぱいは所詮贅肉の塊に過ぎない。
口の悪い奴はそんなことを言う。
だが、この温かなおもちに包まれて、「所詮贅肉の塊でしょ？」などと言える男がいるだろうか？
いや、いない。
そして何より俺の情欲を掻き立てるのは。
「提督、愛してます??」
「愛してるよー??」
あらゆる敵を、人魔問わずに滅殺する戦鬼である最強の二人の美女が、俺の前でだけ、まるで娼婦のように振る舞い、愛玩動物のように尻尾を振るのだ。
こんなにも良い女が、俺にだけ懐いている。
その事実が、俺の中にある独占欲を嫌という程に満たす。
俺が死ねと命じれば、その場で命を絶つ程に忠誠を誓われて、永遠不滅の愛を捧げられる。
まさに、男冥利に尽きるというものだ。
そして、そんな二人の古鷹型にも、悪癖が一つ。
「はっ、はっ、はっ、はっ??」

二人は、散歩が好きなんだ。
ピンクの首輪に鎖のリード。
それで、四つん這いになって道を歩く。
特殊プレイももう慣れた。
俺は既に、この状態のまま鎮守府内部を歩った経験がある。
それも昼間から。
他の艦娘に生温かい目で見られながら、古鷹と加古と散歩をする。
そして、人目のつかない場所に来ると……。

省略されました。全てを読むにはワッフル　ワッフルと書き込んでください。

「ふう……」
「「あへぇ……??」」
何にせよ、二人は俺の愛しい人だ。
あらゆる敵意から守り、豊かな生活を与えたい。
二人は俺が守る。

４７８話　バレンタインデーキス

「やめよう????ねっ、やめよう????」
「やります」
「チョコなら俺がいくらでも作ってあげるから、ねっ！ねっ?!」
「やります」
「いやー、やめとこう?!ねっ?!やっぱり今年はナシで！はい、ナシ～！」
「やります」
「やっぱりやめようよ！」
　やめよう、やめてくれ！

「バレンタインは中止だ!!!」
「やります（蒼き鋼の意思）」

「はいレギュレーション規定！一、一人１００ｇまで！二、異物混入無し！三、せめてチョコレートの範囲内のものを送ってね!!!頼むよ!!!マジで!!!」
「ですが、問題があります」
　と、澄まし顔の大淀。
　なんか俺、おかしいこと言ったかな……。
「一人１００ｇでは、チョコレート細工などが作れません」
「そんなに凝らなくて良いんだよ」
「どうでしょう、今回はチョコレートコンテストという事にして、芸術点の評価も」
「えー……、まあ、良いよ」
　確かに、お菓子は見た目も拘りたいのは気持ちが分かる。
「異物混入ですが、どの範囲までが異物なのでしょうか？」
「逆に聞きたいんだけど、それって聞かなきゃ分からないことなの????」
　倫理観ボンドルドかなー????
　もうマジで勘弁して？

「血液は良いですよね？」
「良くないね」
「体毛は？」
「良くないね」
「媚薬は？」
「良くないね」
　一ミリも良くないね。
　可愛いからって何しても許されると思うなよー？
「ですが、調理過程に誤って混入してしまう場合も……」
「あーもう、分かったよ!!!好きなもの入れて良いよ!!!」
　畜生。
「それと、チョコレートの範囲内とは？」
「チョコレートなら、フレーバーはなんでも良いし、ケーキでも良いなあ。塩とか混ぜてみたり、ボンボンショコラにしても良いかもね」
「成る程」
「まあ……、食べ物ならなんでも良いよ。せめて食べれる物にしてね」
「はい」

　そういう訳で……。
「はい、始まりました、黒井鎮守府バレンタインコンテスト～……」
　うう……、始まるよ……。
　はい、まずは吹雪から。
「はい、どうぞ！」
「はい、ありがとね」
　中身はー、おっ！良かった、普通のハート型のチョコレートだ！
　ストロベリー味かな、いちごの匂いがするぅ待って血の匂いする。
「あの、血……」
「どうぞ！」
「あの……」
「どうぞ！」
「分かりましたぁ……」

うん、まあ……、艦娘の血液の味が仄かにする程度で、味は普通のストロベリーチョコだ。
「あっ??司令官が私をっ??」
なんか知らんけど吹雪がビクンビクンしてる。
吹雪は可愛いですね。
次。
「はい、どうぞ」
「はい、ありがとう」
陸奥。
陸奥かぁ～……。
中身は……、お、ホワイトチョコのボンボンショコラだ。
中身は……。
クリームだ。
良かった、クリーム……、これ……。
これ……、陸奥の母乳入ってる。
母乳入ってる。
これ、これ……、母乳入ってる。
「あ、あの、陸奥……」
「あら、どうかしたのかしら？」
「いえ、なんでもありませぇん……」
まあ、母乳ならセーフ寄りだな……。
次。
「はい、どうぞ、提督さん！」
「はい、どうも」
ゆっりゆっらら。
由良。
大きなハート形の細工チョコー。
お味はどうかなー？
ざりっ。
……ざりっ？
え？

これは……。
「髪の毛……？」
「お味はどうですか？」
「あ、うん、味は美味しいけどこれ髪の毛……」
「うふふ、良かったです??」
んー……。
セーフ！
次。
「はい、どうぞ」
海風か……。
去年の前科からして恐ろしいのだが……。
「潮チョコレートですよ」
「へえ、塩チョコレートか」
正方形の板状の一口チョコレートが並ぶ。
一口ぱくり。
……。
「君さあ」
「ですから、潮チョコレートですよ」
「下ネタかよ!!!」
どこの潮入れてんだよ!!!!
はぁ、まあ良い。
次。
レーベ。
「はい、どうぞっ！」
「はい、どうも」
赤っ。
ちょっと待ってこれ何????
チョコレートってか凝固した血液なのですが????
え、待って、これはいけない。
食べ物じゃないよこれ。
「どうぞ！」

行けってか！愛とは躊躇わないことなのか！助けてくれギャバン！

ええい、あばよ涙！

「じゃり」

血液ィーッ!!!

砂糖を添加した血液！

凄いな、これをチョコレートと言い張る勇気。讃えられて然るべきだ。勇者王かよ。

ベッドの上でファイナルフュージョンしてるからな……。

俺のディバイディングドライバーは今晩酷使される運命にあるから辛い。

助けてくれ凱にいちゃん。

次ぃ!!!

「はい、どうぞ」

……。

「あの、時雨さん」

「何かな？」

「君、右腕の肘から先どこにやったの……？」

「まあ、こんなものは輸血すれば治るさ。それよりも、さあ、僕のチョコレートを食べてもらえるかな？」

「……この、丁度、君の右腕の肘から指先までくらいの長さと太さの物体がチョコレートだと？」

「そうとも」

んー。

んーーー？

んー。

「さあ、君、食べたまえよ」

んーーーーーーーー。

「ぼりっ、みしっ、ぐちゃ……」

んーーーーーーーー。

ダレカタスケテ。

ふう。
チョコレートと思い思いの重い思いでお腹が重いと思う。
もう嫌だ、誰か助けてくれ。
俺は何にも悪いことしてないのになんでこんな酷いことを……？
「それじゃあ、一月早めのホワイトデーをいただきますね！」
「吹雪ちゃんー。ちょっと待とうか」
「司令官は私の中にホワイトチョコを出してくれれば良いんですよ、寝ててください」
んーーーーーーーー。
もう良いや、抱こう。
「吹雪ー」
「あんっ??」
抗うことを諦めた。
バレンタインだからね、みんなに甘くして良いんじゃないの？

４７９話　暗殺者現る！

「今日は涼しいな」
　冬の終わりも近い二月のある日。
「こんな日は、早く帰って熱燗で一杯やりたいよな。そう思わないか、お嬢さん？」
「貴様……、新台真央だな？」
「イエスアイアム！」
　黒いフードを目深に被り、茶髪のお下げを揺らす、刀を持った女が現れる。
　街中だと言うのに人は一人もいない。
　これは……、人払いの術式だ。
　陰陽術だな。
「ならば……、死ね」
　踏み込み……、速い！
「ヒュウっ！」
　頬を浅く斬られる。少しズレてりゃ首が飛んでたな。殺意凛々だ。
「ちょっと待ちなよ！いきなり何さ、剣を振る前に話を」
「死ね」
「ぐぁっ！」
　首を庇った左腕が斬り飛ばされる。
　再生……、無理だ、間に合わない！
　触手を伸ばして場繋ぎを！
「疾ッ」
　突き！速い！
　バフ盛ってない俺の倍は速い！時雨並だ！
　こんなのに狙われる心当たりは……、あるけどまあ、ないってことにしておきたい！
　ってか可愛いしいい匂いするし、美女に追われるのであれば何の問題もないのでは？何の問題ですか？
　さて、迫る切っ先。

俺は。
「ライフで受ける！」
「なっ……！」
あえて刺さりにいく。
そして。
「捕まえたぞお嬢さんよぉ！」
「くっ……！」
フードのお嬢さんの刀を、柄を握るお嬢さんの手ごと掴む。
「『ブフーラ』ッ!!」
「ぐおっ、氷結?!」
魔法も使えるのか?!
くっ、身体が固まって動かない！
「出し惜しみはしない！来い、『アスラおう』、『サンダルフォン』!!!」
「何っ?!」
管による二重召喚だと?!
それにアスラおうとサンダルフォン！
このお嬢さん、極めてレベルの高いデビルサマナーか!!!
「『マハラギダイン』!!!」
「『メギドラオン』!!!」
「うっひゃおう?!!死ぬ死ぬ!!!」
馬鹿みたいな魔法バカスカ撃ちやがって!!
「チェストー!!!!」
「ぐあああああっ?!!!」
斬られた、深い！内臓がこぼれ落ちる。
慌てるな、致命傷だ。
「その首、頂戴仕る！」
「はいどーぞ！」
首をねじ切り、投げ渡す。
「なっ!!!?」
流石に首斬りはビビったか？
「ゆっくりしていってね!!!」

「ま、まんじゅう!!!?」
俺は最近、コンプアイランス的なアレコレに気を遣って、首だけになるとゆっくりになるように術式を組んでおいた。
グロは一切無い。
「ゆっくりびーむ!!!」
「うわあ?!!光った?!!」
俺は口からビームを出し……。
「なっ、何っ?!!」
「ふはははは―!このびーむはおれがぜんりょくでつくった、きているふくのみをはかいするまほうのこうせんなのだー!」
黒フードおさげちゃんの服を破壊する!!!
「ふぅーはははー!これでかえれなくなっちゃったねえ!どうする、あいふるー!!!」
「舐めるなクズめっ!!!」
真っ二つにされた。
「ゆんやー!!!」
ヤバいな、ピンチだ!
と、そこに!
「提督殿!!」
「あきつまるー!」
「提督殿が饅頭に?!!」
あきつ丸が助けに来てくれた!!!
「ま、さか、貴様は……、神州丸?」
「あきつ丸……、この裏切り者め!」
あきつ丸と黒フードおさげこと、神州丸が刀で打ち合う。
「神州丸っ!聞くであります!自分の裏切りには訳が!」
「聞く耳持たん!!!はあああああっ!!!」
おーおー、スゲーバトルだ。
今のうちに再生しとこう。
「パイルダーオン!!!」
首をくっつけた俺。

「いや、どっちかって言うとビルドアップ！バンバンバンバンって感じだよね、頭取れてたし。神州丸ちゃんはどう思う？」
「知らんわ!!!」
なんでや、ビッグシューター風より速いんやぞ？
「じゃあターンXか?!」
「うるさい！黙れ！」
そんな、ひどい……。
冗談が通じないとは、心に余裕がない証拠だ。
死ぬ一歩手前でもジョークくらい言えなきゃ駄目だよ。
いつも心にチャップリンを一人二人配置しておくのが、人生を楽しく生きるコツだ。
モンティパイソンでも良いかもしれない。
哲学者サッカーは名作。
お笑いとはそもそも馬鹿には理解できないものなんだと分からせてくれるよな。
規範が、常識が、教養があってこそ、それと反することをあえてやり、他者を笑わせる。それがお笑いというものだろう。
決して、この俺のようなヤンデレエログロギャグハーレムのようなものは高尚な笑いではない。
あー、俺もメンサ向けギャグを繰り出したいなー！
でも俺、ハジケリストだからな……。
「と言う訳で聞いてくれ、これは俺がパン屋で働いていた時の話だ」
「はぁ?!」
×
×
×
「いらっしゃいませー、いらっしゃいませー」
冬の午前のある日の話だ。
「焼きパンティ要りませんかー」
俺はパン屋でパンティーを売っていた。
ああ、安心してくれ、未使用品だ。
しかし……。

「畜生！売れやしねえ！」
俺は壁にぶつかっていた。物理的に。
「焼かなければ売れる」
因みに、店長はちくわぶだった。
「店長、しかし、ここはパン屋です！」
「発想の逆転だ、あえて焼かないパンティー」
ちくわぶ店長が決め顔で言った。
「なるほど……！」
×
×
×そして、そのパン屋は、次の日からラーメン屋になっていたんだ。
×
×
×
×
×
「……どうだ？」
×
「……？？？」
×
「ぐはぁっ!!!」
×
いかん！あきつ丸のツボだったか！
「あきつ丸ー！」
「く、くぅ……、なんなのだこいつは?!頭がおかしい！」
「チクショー！あきつ丸になんて酷いことを！よくもこんなことを！
Ｈｏｗ　ｄａｒｅ　ｙｏｕ!!!」
「い、いや！貴様がやったのだろう?!!」
「^　^」
「なんだその顔は!!!」
「えっ、てか君陥没乳首なんだ……、可愛いね」
「……殺すっ!!!!!」

数回殺したら、必ず殺す的な捨て台詞と共に去っていった神州丸ちゃん。
可愛いね。

なんかよくわからんけど陸軍の刺客らしい。
次会うときにはお友達になれたらいいなー。

４８０話　ロリロリパラダイス

「ある日突然、あなたに数百人もの妹ができたらどうしますか？」
「えっ、何それは」
「それも……とびっきりかわいくて
とびっきり素直じゃなくて
とびっきり愛らしくて
とびっきりのひねくれ者
しかも、そのうえ……」
「その上？」
「全員艦娘」
俺は嫌な予感がして後ろを振り向く。
「「「お兄ちゃん??」」」
小さくなった艦娘が！ああ、窓に！窓に！
「あ、あああ……」
「今回は艦娘ロリ化擬似近親相姦プレイして遊びます、お兄様??」
「うわあああああ!!!!!!」

「はっ……、ゆ、夢か」
艦娘のロリ化か……。
恐ろしい夢だった。
俺をロリのダークサイドに堕とそうとする悪夢だった。
俺は大人だからロリには負けないのだ。
ロリになんて絶対負けない!!!
「……ロリになんて絶対負けない予定だったんだけどやっぱり負けても良いかなー？」
「おはようございます、お兄様??」
ミニだ。
ミニ大淀がいる。
普段の大淀は二十代前半程の大人の女だが、今は小学生中学年くらいの見た目にミニマム化しているっ!!!

「か、可愛い……ッ!!!!」
あどけない顔、小さなおてて、つるぺた。
可愛い……、いっそ病的なほどに可愛い!!!
「どうしました、お兄様？」
こてん、と小首を傾げる大淀。
あああ、可愛い！
「おはようのちゅーしますね！ちゅー??」
「甘い……ッ!!!」
ちゅーが甘い！
ロリのちゅーだ!!!
あああ！
ああああああー!!!
「お兄様ー、抱っこしてください！」
「はーい！良いよー！おいでー！」
「わあい」
……はっ!!?
気がついたら抱っこしてた?!
恐ろしい……、俺の自己を見失わせるとは！
魔性のロリだ！
ち、違うぞ、俺はロリコンじゃない！
違うんだ!!!
ロリもいけるだけでロリの専門家ではない!!!
「お、俺はロリコンじゃない……、違うんだ！」
「ちゅー??」
「ちゅー！……はっ?!」
い、いかん、ロリに飲まれてしまう！
逃げよう！

「おはよ……う……?!」
「あら、おはようございます、旦那様??」
ほ、ほっ、ほっ……。

鳳翔がちっちゃくなってる!!!
「昨日はよく眠れましたか？」
「あ、お、はい」
「良かった、今日も一日頑張りましょうね！」
「お、おー」
ちょ……、ちょっと待った。
「何故にロリ？」
「旦那様の妹になりたくて……」
????
妹って後天的になれるもんなんですかね？
分からない……、俺は何も分からない……。
無知の知だ。
適度にムチムチだった鳳翔の妙齢ボディが中学生くらいのまな板ロリボディになってしまっている。
助けてくれソクラテス。
「どういう……、ことだ……？」
「幼妻も乙なものだと思っていただければ」
「なん……、だと……？」
そう言われちゃ弱いな。
ロリを嫁にするとか凄く夢のある話だ。ドリーマーだ。大空ドリーマー、気分はペンギン！
君はなんのフレンズ？
僕はヒトのフレンズだけど、夜は獣なんだー！
すっごーい！
オスのフレンズはみんな、夜は獣になっちゃうんだよサーバルちゃん。
やめろ、サーバルちゃんに変なことを教えるな。
いや……、オスはー、みたいに主語をデカくしちゃ駄目だな、怒られる。
あくまでも個人的な意見ですがー、みたいな感じにしよう。
私の愛馬は凶暴です、みたいな。

良いよなヴァサーゴ。
悪役ロボとして完成度が高いよね。
さて……。
普段の鳳翔は、身長１６２ｃｍくらいはあるんだよね。
それが今や、１４０ｃｍくらい。
１９０ｃｍある俺と比べると５０ｃｍも違う。
身長差があると言うことは、身長が違うと言うことだ（トートロジー）。
「旦那様、どうかしゃがんでもらえますか？」
「はい」
「おはようのちゅうですよー」
「ああ、はい」
幸い、体型はロリだが鳳翔は鳳翔だった。
これが鹿島なら、朝からベッド・インのお誘いがある。
その場合は俺の「強いんだ！」で「大きいんだ！」なパイルダーがパイルダーオンして大変なことになって「スリー！ツー！ワン！ゼロ！発射！」して大空貫く紅の翼が……。
やめやめろ、朝から下ネタは良くない！
鳳翔は鹿島みたいに、いきなりしなだれかかって内股をさすってきたりとか、そういうサキュバスムーブはしない。
したい時は寝室に行く頃に、「その、今日は……」とおずおずと申し出てくるんだよ。
ああ、可愛いな鳳翔は！見た目は人妻っぽいのに、なんでそんなおぼこい誘い方してくるんだ!!!
つまり鳳翔は割とおぼこいんで、毎朝ちゅっちゅされるだけでいきなりの逆レとかはない。やさしいせかい。
「じゃ、じゃあ、朝食を作ろうか」
「「「はい！」」」
なお、他の厨房組もロリってる模様。
ロリロリアイランドだ……。

駆逐艦なんて小学生以下になってるぞ。
鎮守府全体から甘いミルクのような香りが漂っている。ロリの香りだ。
え？
実際の子供は臭い？
いやー、うちの子は艦娘ですから。
みんな甘い匂いするよ。
はー、良い匂いする。
めっっっちゃ良い匂いする。
「あ、ロリ金剛だ！」
「金剛デース！」
吸おう。
「くんくん」
「ちょ、く、くすぐったいデス?!」
ミルクティーの香りだ……。
味もみておこう。
「ぺろ」
「ひゃん??」
「ぺろぺろ」
「あっ??脇っ??くすぐったいからっ??」
フゥー!!!!!
「何やっとるんやキミは……」
「あ、龍驤……、龍驤？」
あ、あれ？
龍驤は何も変わってないように見えるんだが……？
「待った。何も言わへんで……、何も言わへんでええ」
「龍驤……」
「ウチは、最初からロリ判定だったってことや。ロリババアが若返っても、ただのロリになるだけ……」
「龍驤！」
「ほな、さいなら……」

「龍驤オオオーーー!!!!」

可哀想な龍驤……。

あとで慰めておこう。

その後も俺は、ペド駆逐艦と交流したりしているうちに……。

「ちょっ、ちょっと待って……、ロリはいけない、ロリはいけない!」

「もう、何のためにロリになったと思ってるんですか?」

ロリ鹿島に捕まってしまった!

い、いかん、喰われる……!!!

「鹿島さーん、独り占めはずるいですよー」

「ずるいっぽいー」

「でちー」

はうあっ?!

気がつけば艦娘がたくさん……?!

こ、これは……?

「「「お兄ちゃん、いただきます??!!」」」

「あああああああああああああ!!!!」

４８１話　ドヤ

「旅したい」
旅欲がムンムン湧いてきた。
いかんな、こういう時はパーっと旅るしかない。
タピるみたいなもんだよ。
さて、どこに旅るかなー？
……うん、国内にしよう。
国内のー？
そうだ、たまにはドヤ街に行こうか。
どうも、最近は、仕事でおフランスやらおイタリアやら、上等な街で上等な飯を食い、上等な酒を飲んで、上等な人間と商談していたもんだから、下等な街に行きたい。
いや、住んでる人には悪いが、ドヤ街は下等な街と言われても仕方がない面がある。
俺は基本的に、取り繕うことはできるが、性根の部分が下等というか庶民派というかで……。
まあ俺、いわゆるバックパッカーだからね？
各国のドヤ街で日銭を稼いで、酒飲んで生きてたわけで。
美女を口説きたいから、性欲を原動力に、上等な人間の仕草や技能を覚えたけど、俺は結局、旅人なんだな。
しばらく旅に出ます、探さないでください……、と。
「行ってきます！」「待てや」
ひっ。
「どこ行く気だ？」
ま、摩耶様。
「あいりん地区」
「良くわかんねーけど、アタシも行く」
「い、いやいやいや！やめときなって！女の子が行く街じゃないよ?!」
あそこは日本のスラム街だぞ。
「そこって、ノースティリスより危険なのか？」

それを言われるとキツイな。
「いや……、でもめっちゃ汚いよ？」
「良いから行くぞ」
「はい……」

また、監視がついてしまった。
「うわ……、この街、なんか臭えな」
「まあそんなもん」
あいりんでも、人口が多い地帯は臭いんだよね。
ここにはまあ、日雇いマン、バックパッカー、ヤーさん、頭パラッパラッパーのヤク中、違法難民、北朝鮮の工作員……、そういうのが揃った日本の闇だから。
そんな酷いところで暫く過ごすぞ！
いやー、汚い空気がうまい！
アイマイミーユアステディガールってか？
いや、ぺぺぺのぺって感じ？
育ちが悪いから汚い空気がうまいんだよ。
今なら夕暮れ空に黒スプレーで落書きできそうだ。
さて、街に入るか。

あいりん地区……、この辺りは流石のスラムっぷりだ。
新今宮駅で降りたらすぐにブラックマーケット。麻薬ブローカーから違法義体販売業者、武器密売人すらいる。
「おう、にいちゃん、買ってかないか？うちのは米軍の純正品だよ！」
と、どう見てもガラクタにしか見えない義体の腕を見せびらかす男。
シンナーか何かやっているんだろう、歯が溶けている。目の焦点も合っていない。
「いらねーよ、消えろ」
「チッ、んだよ」
引き下がる売人の男。

この手の連中には、脅すくらいに強く言わなきゃ駄目だ。
え～、でも～、みたいな、ぶりっ子みたいな態度をしていると、カモだと思われて尻の毛までむしられる。
宗教勧誘とかと一緒だ。とりあえず話を聞いてみる、とかじゃなくって、殴ってでも追い返すのが吉。
どの道、こんな闇市ではレアものもそうそうない。
闇市の奥の方を探せば相当なレアものもあるから、せどりをしようと思えばできなくもないんだが。
まあ、この辺は表の方だから、そういうディープなことは起きないな。
「じゃあとりあえず、せんべろするか」
「せんべろ？」
摩耶が聞き返してくる。
「千円でべろべろに酔える価格帯の居酒屋のことだな」
「へー、この辺って物価安いのか？」
「やっすいよ」
かなりね。
大阪って食い物が安いよね。コスパ良くって最高だよ。
とりあえず、その辺の屋台のホルモン焼き屋に入る。
「ビールとホルモン、ガンガン焼いて」
「あいよ」
うおっ、すげーニンニクの匂い！
甘辛ーいタレをたっぷり塗ったホルモン焼きはビールとの相性がバッチリだぞ！
肉の品質は保証されないけどね。おおよそ、外国産の冷凍ものだろう。
まあ、美味けりゃどーでもいーのよ！
「いただきます」
お、コリッコリだ。
「ん、美味い」
摩耶様も満足。

そうして飲んでいると……。
「てめーこのブタ野郎！ぶっ殺してやる！」
「ぎゃあああ!!!」
銃声が。
それに釣られて、四次元ポケットから長剣を取り出した摩耶。
「摩耶」
「提督、敵か？」
「摩耶、やめろ。この街はこんなもんだ。関わらなきゃいい」
「そうか……」
長剣を納めた摩耶。
そしてそのまま、会計をして移動。
「ヒデェ街だな。ションベン臭えし、ヤクの匂いもする。あと、血の匂いもな」
「パリだのロンドンだの、お高くとまった街よりは居心地がいいのさ、俺にとってはね」
まあパリもロンドンも割と臭……、おっといけない。黙っておこう。
お口ミッフィー。
ミッフィーちゃんの本名ってナインチェ・プラウスって言うんだよね。カッコいいよな。
「ふーん、そうなのか。あ、カレーの匂いがする」
「ああ、ありゃ、ボランティア団体のカレーの炊き出しだ。カレーは土日にしか出ないレア飯だぞ」
「へー」
まあ、本当にここのカレーを食べるべき労働者やホームレスの列に割り込んで食べるもんじゃないね。
だから、俺たちは遠巻きに見守ってるよ。
「カレーか。アタシも、好物は別にあるけど、人生で一番美味い飯はカレーだったよ」
「ん？カレーに何か思い入れがあるのかな？」
俺が問いかける。

「提督が初めて黒井鎮守府に来た時にさ、艦娘全員にカレーを食わせてくれたよな。アレがほんっとに美味くってさあ……。思い出の味なんだよ」
「摩耶……」
そう、か……。
「ま、今の好物はグリーンドラゴンのステーキだけどな！でも、あの時の提督のカレーには、アタシ達艦娘全員が救われたんだよ。……その、あ、ありがとな！」
「……ああ、どういたしまして」
これからも、しっかり面倒見てやらなきゃな。

そして……、銭湯に入ってから、ドヤに泊まる。
千円くらいのヤベー宿をドヤと言うんだが、三畳ワンルームにブラウン管テレビとちっちゃい布団みたいなノリだな。
摩耶と一緒にドヤに泊まる。
「へへへ……??」
おおっとー？
「布団一枚しかねーもんな！くっつかないと寒いもんな！かーっ！しょーがねーよなーっ！寒いもんなーっ！」
「露骨ゥ！」
露骨にくっついてくる摩耶。わざとらしい。
でもすき。

ネクストデイ。
まず酒。
「うーっす」
「あら～、新台君久し振りだねえ！」
「おお、あんた、生きてたんかい」
「おやおや、彼女さんかい？また違う彼女さんだね」
適当な飲み屋に入ると、店員や客から歓迎される。
「ははは、どーもどーも」

そして朝から酒ェーッ!!!
「まーた朝から酒かい？」
「酎ハイなんてね、ジュースみたいなもんだよ。だからノーカンノーカン！トマト酎ハイと卵焼き、唐揚げよろしく！」
「はいよ」
と、俺が飲んでると。
「なんか、恐ろしく馴染んでるな」
と摩耶。
「まあ、本来の居場所だからねー」
俺は本来、こういうところで昼間から飲んだくれてる生き物だ。
馴染むッ！実に馴染むぞッ！
「……なあ、アタシ達じゃ、提督の居場所になれないのか？」
あー。
んー。
「自分の居場所って、一つしかないものなのかな」
「それは……」
「俺は色んなところに居場所がある。ごめんよ、まだ僕には帰れる所があるんだ。こんな嬉しいことはない……、って感じ」
「……アタシのところに、帰ってきてくれるよな」
それは……。
「……ああ、そうだね。……そうだと良いね」
すまん。
こればっかりは、分からないんだ。
俺は旅人だから。

「さあ、まだ飲むぞー、金はあるしなー！」
「は、はひ、ま、まだによむのかぁ～？あ、あたしはもう、げんかいだ～」
「じゃあ鎮守府に帰って休めば……」
「やーだー!!!」
はいはい……。

まあ良いや。
そんな感じで、摩耶を連れ回して遊び呆けた。
三日後に大淀に回収されるまで、飲んで食って遊びまくりだったとさ。

４８２話　コロナ

巷ではコロナウイルスなるものが流行っているが……、俺の中ではコロナビールが美味しいと話題だ。
こんなに美味いコロナビールだが、実は最近は売れていない。
何故か？
コロナウイルスが流行ったからだ。
何を言ってるのか分からねーと思うが俺にも分からねえ。
人間は呆れるほど愚かだから、コロナウイルスが流行るとコロナビールを買いたくなくなるらしい。
その他にも、二十六度のお湯を飲めとかトイレットペーパーがなくなるだとか、デマに踊らされる人が多いのなんのって。
黒井モールでもトイレットペーパーは売り切れてしまったし、人間って、俺が思っているより数倍アホなのかもしれない。
海外では、アジア人が白人にコロナウイルスのキャリア扱いされていじめられ、ロシアではリアルシベリア送り、イタリアにはスーパーの棚からパスタが消えるなど、愉快なことになっているそうだ。
プレイグインクならクリアしたも同然などと語られているな。
とあるテレビ番組では、学校が休みになったのにディズニーランドが休みなのはおかしい！とかおかしいことを言っていたっけな。
まあとにかく、俺みたいな健康に自信ニキや艦娘のような別種の生命体以外は、外に出ずに家の中で震えて暮らせってこった。
にしても……、そうするとその日暮らしのアリエッティ勢が死ぬよなあ。
今でこそ俺は金満だが、昔のようなその日暮らしのアリエッティ状態なら死んでたかもしれないね。
バイトもできない、外出ちゃ駄目ー！なんて言われたら困るよねえ。
フリーターとか困ってるだろうな。
幸いにも、日本は、剣桃太郎総理大臣があまりにも有能なので、完璧な初動の早い対応で感染拡大は防がれたのだが、まだ油断はできな

い。
まあ……、俺は応援してるよ。
こう言うのは偉い人がどうにかしてくれるでしょ。

さて、ウイルス程度では止まらない我らが黒井鎮守府。
今日は何をするのか……？
「今日は大食い大会をします」
何故か？
学校が休みになって食材が大量に余り、もったいないからである。
特に牛乳が余っているらしい。
もったいないのは良くないよな。
だから、艦娘を集めて大食い大会、炊き出し、無料弁当の配布をすることにした。
これもポイント稼ぎだ。
牛乳をたくさん使おう。
再びあいりん地区スラム街に行き、ミルクシチューの炊き出しをする。
そして、鎮守府でも、クリームたっぷりのケーキでケーキバイキング！
学校が休みになった子供達のために、栄養満点の手作り格安弁当を販売!!!
更に、ネットでは、牛乳を煮詰めて蘇を作れと話題になっているので……。
「俺は醍醐を作った」
「あの、製法失われてたんじゃ」
と、大淀。
「せからしかあ!!!」
「どこの方言ですかっ！」
「とにかく、牛乳を煮詰めてアレをアレすることにより作った醍醐……、食べてみろ」
「もぐ……、これは……！」

さあ、どうだ!!
「カルピス味のチーズ？バター？」
「ククク……！パンに塗っても美味しいぞ……！」
「あ、本当ですね、美味しいです！」
「他のみんなも、日本の酪農業界のために、乳製品をたくさん食べてくれよなっ!!」
「「「はーい」」」

俺は醍醐を量産して、黒井モールに置いたりだとか、無料で近所の人に配ったりだとかして、近隣の酪農家を救うための行動を重ねた。
黒井鎮守府は生産者の味方なのだ。
極論を言えば、テレビやパソコンがなくても人は生きていけるが、食べるものや住むところ、着るものがなければ人は生きていけない。
もちろん、テレビやパソコンを作る人も応援しているが、俺はどちらかと言うと、食品を作る人達を応援したいと思う。
飢えるというのは本当に辛いことなのだ、数多の旅の中でそれを実感した。
だから、食品を生産する人達には敬意を払わなくてはならない。
ただでさえ、食品の生産ってのはコストもかかるし、莫大に儲かる訳じゃない。
もしかしたら、このコロナウイルス騒ぎで廃業になる農家やら酪農家やらも出てくるかもしれない。
俺は、そんな人達をできる範囲で助けたいと思う。
知り合いが「ライダー同士は助け合いでしょ」と言っていたし、農家同士も助け合いなのだろうと思う。
俺達、黒井鎮守府は、かつて、大本営から予算がもらえずに資金難に喘いでいた頃は、近隣の生産者さん達からたくさんのお裾分けをもらったりしてた訳で。
今度は俺達が助ける番だ。
さあ、助け合おう。

あ、そうそう。
我々黒井鎮守府は特殊な訓練を受けたりなんだりでウイルスは効かないが、ウイルスが効く諸君らは手洗いうがいとマスクを忘れるな！
言っておくが特別な治療法とか特効薬はないから、具合悪けりゃ寝て治せ!!
間違っても、ちょっと具合が悪いからって「コロナの検査してください！」とか医者に突撃するなよ！いいか絶対だぞ!!!

４８３話　被食者旅人

響を吸っている。
響がそこにいたので。
猫を飼っている人は、猫を吸うらしいが、俺は艦娘を吸う。
艦娘は甘い匂いがしてとても良い。
くすぐりおばけに包まれたクソトカゲみたいな声が出てしまう。
「おお……、良い……、すーっ、はぁ、良い……」
艦娘を吸うのは身体に良い。
健康的だ。
ガンズ水くらい身体に良い。
艦娘には本来スピリチュアルな癒しのパワーとイオンが回転して漂っていて、それは重力波と共に滞空している。
それを、艦娘を捕まえて後ろから抱きついて、髪の匂いを嗅ぐことで、スピリチュアルでブーステッドなエナジーを鼻腔から吸収でき、身体に癒しの素粒子を取り込んで、肉体を活性化させることができる。
スピリチュアルだから身体に良いのだ。
秦の始皇帝が水銀を飲んでいたけど、あれもスピリチュアルだから身体に良かったらしい。
スピリチュアルってか、横文字をたくさん使うと頭がよさそうに見えて健康。
それはさておき響良い……。
「えい」
「ん」
くるりと回して。
正面から抱きついて首筋の匂いを嗅ぐ。
「あーーー、スピリチュアル」
こちらもスピリチュアルな香りだ。
実にエクセレントでセンセーショナルでエモーショナル。
寿命が百年くらい伸びたんじゃないのこれ？

「……流石にこれは、恥ずかしいな」
「スーッ！ハーッ！スーッ！ハーッ！」
チャドーの呼吸くらいに響の香りを楽しんでいる。
あああああ、響いい匂いする。
可愛い。
定期的にロリの香りを嗅ぎたい気分になるな。
いや、ロリコンではないが。
響はちょっと酒の匂いがするところがいいアクセントだね。
「よっしゃ、堪能した。もう良いぞ響」
「……その気にさせておいて引くのはやめてもらえるかな」
「え？」

響に食べられた。

「すーっ、はぁ、ベネ、グッド、素晴らしい」
「あらあら」
陸奥を吸っている。
陸奥はバラの匂いがする。
香水使ってるみたいだ。
ついでにおっぱいも揉む。
デカい。
デカいし形がいい。
「やん??」
陸奥の身体は、全身が芸術品だ。
引き締まった肢体、スリムなウエスト、下品にならない程度に大きな胸、黄金比と言えるほどに整った顔立ち。
「えい」
「あらあら」
おっぱいふかふか～!!!!
毛布かな？
これ本当におっぱい？

実は毛布なんじゃね？
中に詰まってるの、脂肪じゃなくって、天使の羽とかだよねこれ。
絶対そうだ。
でもちょっと強めに揉むと、確かに乳肉であることが分かる。
「はあ～、幸せ」
「私の胸は貴方のものよ？好きにしてね??」
「はあーん？」
まことに？
「まふっ」
おっぱいに埋もれてみる。
あーーー。
良い。
おっぱい。
おっぱいが嫌いな男とかいないでしょ。
「あーーーー」
「よしよし」
「よし、堪能した」
「あらあら、何言ってるのかしら？」
え？
「私はまだ堪能してないわ」

陸奥に食べられた。

「すぅーっ」
アイオワを吸っている。
アイオワはアメリカンなのでハンバーガー１０００個分のカロリーがある（？）。
つまり、アイオワを吸うと、ハンバーガーを食べたのと同じくらいの活力を得られる。
「ちょ、ちょっと、Ａｄｍｉｒａｌ?!」
「くんくん」

アイオワの脇。
甘い匂いがする。
「あ、あうぅ……、流石に恥ずかしいわよぅ」
そこのお前！アイオワに含まれているエロはアイオワ一人分だぜ!!!
ＡＶに換算すると１００ｏｈ　ｙｅｓくらいかな。
アハーン？
イェア！
ベストマッチ！
「満足」
「もう！ｍｅに火をつけておいて放置なんてＮｏよ！」

アイオワに食べられた。

「うーむ……」
いかんな、最近は食べられ過ぎている。
ファストフード感覚で食べられてるな。性的な意味で。
いやまあ、凄く気持ちいいから良いんだけど。
でもあまりにも回数が多い。
流石の俺も犯し殺されそうだ。
デスアクメ軍団……?!!!
狐耳ロリババアＶＳデスアクメ軍団!!!
いや、何だよデスアクメ軍団って。
でも、俺もやられすぎてデスるかもしれない。
イッて逝くのはもうごめんだ。
青娥娘々との房中術の修行で何度デスアクメさせられたことやら。
艦娘も艦娘で、デスアクメ寸前まで犯してほしいって子もいるし。
やっぱり黒井鎮守府はまがまがしい。
まあ……、俺は房中術極めまくってるから、抱いてる相手を干からびさせたり、逆に若返らせたりもできるけどさ。
ある種のマジカルチンポだけどさ。

この世界で使える技能なのかそれは。
対魔忍世界ならまだしもさあ！
カーマスートラもある程度極めてるよ。
何に使うんだよ!!
まあ、なんだ……。
つまりはもう、いっぱいいっぱいでち、ってことだな。
ただでさえ、毎晩複数人とベッドの上でランデブーしちゃってる訳だし。
毎晩パーリィナイ、ｐａｒｔｙ　ｎｉｇｈｔだし。
確かに、一人きりじゃ悲しすぎるから、誰かに背中を抱いててもらえると嬉しい。
でも、抱かれ過ぎて人が見てる夢みたいに確かなものが何にもなくなるのも困る。
朝起きて、「どうして僕はここに？ｔｅｌｌ　ｍｅ　ｗｈｙ!!!」って前後不覚になるのはもう勘弁なんだよなあ。
前後ぉ～ん??
激しく前後した後に前後不覚になるとはこれいかに？
全く、俺のｈｅａｖｙ　ｍｅｔａｌが毎晩とんでもないことになってるぜ。
流石に休ませてやらなきゃ、性液の代わりに血液が出そうだ。
「と言う訳で、しばらくセッ◯ス禁止ね」
「「「えええーーー!!!!!」」」
「そんなあ！」
「性欲を持て余すでち！」
「無理っぽい！」
「駄目です（ヤーマン）」
「「「ぶーぶー!!!!!」」」
「何を言っても駄目なものは駄目！しばらく我慢しなさい！」

二週間後……。
うむ、だいたい回復したかな？

「「「「ＧＲＵＲＲＲＲｒｒｒ……!!!!」」」」
おっと。
ふーん？
溜まってるってやつかな？
「しょうがにゃいにゃあ、いいよ」
『グシャ』
あなたは『愛』の重さに耐えきれず死んだ。
遺言は？

４８４話　レズとホワイトデー

春。
早いことでもう三月だ。
よし、ひな祭りやろうか。
けもフレでもひな祭りイベントやってたし、うちもひな祭りやろう。
「何を言っているんですか、ホワイトデーですよ」
大淀ォ!!!
「なんで？（三代目並感）」
ホワイトデーってどうせアレだろ、俺のホワイトな液体を下のお口に飲ませろってやつでしょ？
バレンタインデーにもあれほどレイプされたのにまた犯されるのか（困惑）。
もうやめちくり～。
またもやデスアクメするのは嫌じゃあ……。
デスアクメ軍団!!!
だから何だよデスアクメ軍団って？
畜生、もう既に前後不覚だ。ほーれ見ろ、もう頭がおかしくなってきやがった。頭がおかしくなって死ぬ。
前後、ずんっ、前後っ、左右っ！くーるくるっ！
このままでは俺の勃起ン勃起ンの、ボッキンボッキン☆スティックが華麗に死ぬ。
そんな性欲が有り余っているならその辺でレズったりすりゃ良いんじゃないっすかね。
レズはホモと違って綺麗と評判だ。
艦娘のレズなら金を払ってでも見たい人はたくさんいるだろう。
俺も天下人的なノリで「抱き合え、二度は言わん、抱き合え」とか命令してみちゃうか？
うん……、うん？
意外と行けるんじゃね？

多人数プレイは割とやってるし、艦娘同士で嫌だって話も特に聞かないし。
レズなら大変に絵面が綺麗だから撮れ高もバッチリ。
俺の心の中のみほちゃんが言った。
「レズレズ作戦、開始します！」と……。
やめろってんだ、みほちゃんはそんなこと言わないだろ!!!どうなってんだ俺の脳内!!!

さて……。
今回のレズレズ作戦の要はやはり、我が家の大淫婦、鹿島だろう。
「鹿島ぁ！」
「はいっ！」
鹿島を艦娘に差し向けてレズってもらい、俺のベクターキャノンの酷使を防ぐのだ。
最初のターゲットは～？
「君に決めた！」
「はい？」
しおい、君だ!!!
「ハッピーホワイトデー、しおいィッ……」
「はーい、ハッピーホワイトデー！お返しくれるの？」
「ああ、たらふくくれてやる……。鹿島がな!!!」
「え？あ、ちょっと?!」
俺はしおいを縄でぐるぐる巻きにして捕らえる。
そして、寝室の鹿島へパス！
「しおいちゃーん??」
「か、鹿島さん?!」
「鹿島、やれ！」
「かしこまりました??」
「ちょっ……、ふあああっ?????」
鹿島がしおいのズボンを下ろす。
もちろん、しおいも年がら年中スク水ではない。オフの時は普通の

服だ。
　そのズボンをするりと脱がせる鹿島。
　そしてしおいのしおいを巧みに攻める!!!
「ひゃん！か、鹿島さん～！」
「まあまあ、提督の命令だもの??楽しみましょう？」
「うう～……」
　……あれ？
「そんな乗り気じゃない感じ？」
「当たり前ですよう！私、提督以外に興味ありませんからっ！」
　としおい。
　ふーむ？
「でも潜水艦複数プレイの時とかって、しおいも他の女の子の○○○を○○たりしてるじゃん」
「うーん、そうですけど……、それは提督とシてるんで、気が高ぶっちゃってのことで」
「鹿島に抱かれるのは駄目なの？」
「なんか違うかなーって」
　うーん、難しいな。
「今この場で提督が混ざってくれれば興奮すると思うよ」
　ええー？
　ほんとにござるかー？
「じゃあ混ざろうかな」
「あっ……??」

　くっ、結局俺のベクターキャノンを酷使してしまった。
　エロいんだもんなあ。
　しおいとかあの日焼け肌……、凄くいい。
　お尻の日焼けしてるところとしてないところの境目を見るともう……、たまらん。
　さて、レズレズ作戦、続投だ。
　俺は考えた。

なら最初からレズっぽい艦娘同士を抱き合わせたら良いのではないか？と。
「そう言う事で、大井、北上、抱き合え」
「……は？」
「天下人に逆らうつもりか？俺がやれと言ったらやるのじゃ。抱き合え」
「まあ、良いけど……？」
「あふん??北上さん……」
お？
行けるか？
「そのままレズレズ作戦、しよう！」
「やだよー」
「わ、私は、まあ、少しなら……」
にへらと笑って拒否する北上。
ちょっと頬を染める大井。
うーん？
行けそうではある。
「令呪をもって命ずる。キスしろ!!!」
「えー……」
「え?!えっと、その……」
どうなんだ？
「どうしても？」
北上が聞いてくる。
「できれば俺以外で性欲を発散してほしい」
「それは無理」
そっか……。
「まあでも、別に大井っちにキスできないとかではないよ？ほーら、大井っち、ちゅっちゅ～」
「ひゃん??北上さぁん??」
おお……、良きかな。
「でも、間に提督がいて欲しいかな～？私と大井っちで両方から提督

にちゅっちゅ～、ってね」
「いやー、百合の間に挟まる男は、古来から惨たらしい拷問の末に殺されたと伝え聞くからちょっと……」
「だーかーらー、私と大井っちは別にそういう仲じゃないからさあ」
そうなの？
「でも大井は満更でもない感じだけど」
「なっ?!そ、そんなことありませんっ!!!」
ええー？
ほんとにござるかー？
「だって大井は俺より北上の方が好きで」
「どっちの方が好きとか！」
うおっ。
急に大声出したな大井。
「……どっちの方が好きとかじゃなくって、私は、北上さんも、提督も」
北上も俺も？
「……どっちも好きです」
「大井ー!!!」
「きゃん??もうっ！こうやって調子にのるから言いたくなかったんですよっ!!!」
「いやー、大井は俺のこと好きなのかー！」
「うう、分かってるでしょう?!大好きよっ！愛してるわっ！」
「おほー、大井はかわいいなあ!!!」
「うう～！」

はあー、かわいかった。
んん？
「ちゅっ、んちゅ」
「むにむに」
「やん??」
おやおやおやおや。
艦娘がなんかそこらでレズってる。

何でだ？
「艦娘同士でいやらしいことをすると提督が混ざってくるとの噂で」
と大淀。
ふーん、えっちじゃん。
それじゃ、一丁、百合の間に挟まって死んでくるか!!!

４８５話　保育園

「保育園？」
「はい、黒井鎮守府の所有するビルの空きテナントに保育園を作ろうかと」
大淀のエントリーだ。
なるほど、保育園か。
良いんじゃないかな、多角経営は。
保育園とか利益出なそうだけど……、子供は国の宝だからね。利益度外視でやっても良いかも。
今の時代、共働きが当たり前で、子供は保育園に預けるのが普通みたいな流れになってきてる。
うーん、社会の情勢の良し悪しは語らないでおくが、とにかく、今はそういう社会の流れなんだ。
よし、それなら、保育園やってみようか。
子供達のために！
「良いね！保育士はどうするの？」
「私達がやります」
は？
「絶ッッッ対駄目。やめて」
「何故ですか？いずれ生まれてくる、提督と我々艦娘の赤ちゃんの面倒を見る予習と思えば」
お願いだから勘弁してくれ。
許してくれ許してくれ……。
預かったお子さんをミンチにしたら、両親にどんな顔して詫びれば良いか分かんないよ俺。
「大丈夫です、私達艦娘は常識的な行動をしますから」
「嘘だッ!!!（ひぐらし並感）」
「本当です、私が提督に嘘をつくことなどあり得ません」
俺は大淀のスカートをめくる。
「……パンツを穿くという常識も守れない人間に子供を預けられるか

よ!!!」
「別にパンツを穿かずとも、子供の面倒は見れます」
くっ、このままじゃ議論は平行線だな。
よし、こうなったら！
「バーチャル保育園だ！ＶＲ世界で保育園をやって、君達がちゃんとできたなら、この世界にも保育園を作ることを許可する!!!」
「はい、了解しました」

そして、ここはＶＲ世界。
そこに、バーチャル保育園児を用意して、バーチャル保育をさせる。
バーチャルと侮ることなかれ、この工廠製ＶＲ機器は、触感だけではなく、味覚、嗅覚まで完全にシミュレートする量子コンピュータだ。
バーチャル園児も、ほぼ百パーセントの再現率だ。
さあ、できるというなら、このバーチャル園児を一日面倒見てみろ!!!

さて……、どうだろうか？
大淀を見てみる。
「ねーねー、大淀せんせーは何でおぱんつ穿いてないのー？」
お、大淀め、この期に及んでノーパンを貫くか!!!
「先生はね、四六時中大好きな提督のことを考えてお○○○が濡れちゃうから、パンツ穿いてないの」
「はい逮捕ーーーッ!!!」
大淀、退場!!!
次、長門。
「長門先生、抱っこしてー！」
「はっはっは！良いぞう！そーれ！」
「あああああ～～～ッ!!!」
長門は、高い高いと称して、子供を十メートルくらいの高さに放り投げてキャッチした。
「はい、退場ーーーッ!!!」

危険行為！
ポーラは……。
「バーチャルでも酔えますねえ～。あ、君、お酒飲む～？」
「クビだクビだクビだクビだー!!!」
子供に酒を勧めるな!!!

なんて奴らだ！
君達にはがっかりだ！
まさかここまではちゃめちゃだとは！
その一方で。
「ほーしょー先生ー」
「はあい、どうしました？」
「僕、眠い……」
「ああ、そろそろお昼寝の時間ですからねえ。先生がとんとんしてあげますから、おねんねしましょうねー」
流石は鳳翔……、ママ力強いぜ！
他は……。
「はーい、上のお口あーんしてねー」
「あーん」
「はい、持病のお薬飲めたねー、偉いねー」
「かしま先生ー、上のお口ってなあに？お口は一つしかないよ？」
「女の子は下にもお口があるんですよー」
「えー？どこー？」
「大人になったら、下のお口で男の子を食べることになるんですよー」
「こ、怖いよー！」
鹿島は……、まあ……、ちょくちょく下ネタ挟むけど、子供の面倒自体はみれている。
「ほーら、おやつやでー！」
「「「わーい！」」」
「こらこら、キミィ、零さんといてー？」
「ごめんなさーい」

「君はスプーンの使い方上手やねえ、偉いでー！」
「わーい！」
　龍驤も子供の面倒を見るのが上手い。
　だが……。
「僕、先生と結婚する！」
「は？」
「えっ」
「私の全ては旦那様に捧げていますから」
「えっえっ」
「私の全ては旦那様のもので、他人である貴方には一片たりとも『私』をあげません」
「びえーん」
　時折キレるのがなー……。

　うーん、これ、子守は全員無理そうだ。
「よし分かった、保育園は作って良い」
「では」
　大淀が何かを言いかけるが、俺は言葉を続ける。
「だが！保育士は外部から雇うこと！週休二日と残業時間短め、年間休日１２０日は絶対に保証して！」
「はい」
「責任者は香取！」
「はい！」
　香取が返事をする。
「艦娘は子供に干渉しないこと！」
「はい」
　これならどうだ！

　数日後……。
「黒井保育園、どう？」
「大繁盛です」

保育園って、繁盛してるって言っていいものなのかな……？
まあいいか。

４８６話　ポーラ酒浸り日誌

「んへへへへへ……、ていとくぅ、そこペロペロしちゃだめれすよぉ……」
「ポーラっ！」
「ひゃあい?!」
「もう7時よ、起きなさい！」
「はあい……」
ザラ姉様……。
せっかく、夢の中で提督にペロペロしてもらってたのにぃ……。
まあいいや、実際に現実世界でペロペロして貰えばＯＫですよねえ～。
私も提督をペロペロしよ～っと。
っと、その前に朝ごはん～。

「うわあ……」
「「「むしゃむしゃもぐもぐ！」」」
アカーギさんとか、ナガトさんとか……、朝からお肉ですよお肉！
朝にしょっぱいものを食べてる時点で信じられないのに、朝からお肉って……。
やっぱり、戦艦空母は違うなあ……。
私は、朝はバスケットいっぱいのチョコクロワッサンとエスプレッソって決めてるんで……。
「んー！甘くて美味しい！」
焼きたてのチョコクロワッサンは、外はカリカリ、中はふんわりもっちりで最高ですねえ～！
そして、あまーいチョコクロワッサンとほんのり苦いエスプレッソのループ！
ああ、堪らないですね～！
これでこそ、朝のエネルギーが得られるってものですよ～！

午前はー、今日はお休みなんで～……。
「朝からお酒飲んじゃいまーす!!!」
「イエーーーイ!!!」
あ、提督。
「まあ俺もね、酒の匂いがするとどこからともなく湧いてくるからね。お呼びとあらば即参上、Ｊ９Ｊ９情け無用だよ」
「アステロイドベルトのアウトローも震えだすんですねえ～」
そんなこんなで。
「カンパーイ!!!」

「ヒヒヒ……、酒、酒ェーッ!!!」
「はう～、おいひいれすねえ」
と、昼間からお酒を飲んでいたら……。
「コラーッ!!!」
「ひゃあ、ザラ姉様!!」
「昼間っからお酒飲んでないで、お外で散歩とかしなさい！健康的に！」
「うう～」
「よし分かった！ポーラと散歩してくるわ！」
と、提督。
うー、仕方ありませんねえ。
お散歩しますか……。

ザラ姉様に言われたのなら仕方ないですからねえ。
「ほら、ポーラ、水分補給用に麦茶だぞー」
と、茶色い液体の入ったペットボトルを渡してくる提督。
え？別に喉乾いてない……。
ん？
これは……。
「ぐびっ」
ウイスキーだぁ!!!

やったあ!!!
「まあ、『水分補給』しながら散歩でもしようか、ポーラ！」
「はあい！『水分補給』は大事ですねえ！」
「……？」
ザラ姉様は訝しんでいたけれど、ごまかしちゃいます！
お散歩！
お散歩と言う名の外飲み！
最高ですねえ～！

お散歩お散歩～。
楽しいですねえ。
「お、カップアイスだ。食べようか」
「はあい」
さてこのカップアイスに……。
ウイスキーをちょっとかける!!!
「「あ”あ”～……」」
染み渡るっ……！
「おいひいれす！」
「やはり酒とバニラアイスの組み合わせは強い……」
美味しい！
「因みに野外での飲酒は他人に迷惑をかけるからやめような。この物語はフィックションです、だよ」
「はーい」
「さあ、昼食にしようか……、居酒屋でね!!!」
「わーい」
昼飲み用の居酒屋、探すと結構ありますねえ。
「「とりあえず生!!!」」
ビールですよ～、とりあえずはビールです！
そして二人でメニューを開きます。
「何食う？」
「う～ん、肉とかがっつり行きたいですねえ」

「この店は昼飲み可のジンギスカン屋だしな、早速ジンギスカン食うか」
「そうしましょうか」
「ジンギスカン、とりあえず二十人前で」
「かしこまりまし……、え?!二十?!」
「二十で」
「は、はい……」
　艦娘の食事量からすると、一般の人間から見れば、化け物みたいに見えるらしいですねえ。
　そんな艦娘と同じくらい食べる提督とは一体……?
「お、お待たせしました、とりあえず四人前です」
「お、来た来た。ガーッと焼こうか！」
「はあい」
「米食いてえなあ……、ご飯特盛、十人前お願いします」
「ええっ?!は、はい」
……
……
……
　一時間後。
「あ、あの、大変申し訳ないんですが、もう店に食材が……」
「「え?」」
　あー……。
　小さい飲み屋ですしねえ。
「まあ、腹七分目くらいだしね」
「私は結構お腹いっぱいですよ～」
「じゃあお会計。経費で落とすから会計は俺がやっとくね」
「あ、ありがとうございます～」
「ひゃ、百六十四万八千九百円です……」
「はい、魔法の黒いカード」
「ア、アメックスセンチュリオン……?!し、失礼します!!」
　提督、実は黒いクレジットカードを持ってるんですよねえ。

黒井鎮守府って、林檎の会社より稼いでますから……。
ちょっとした国の予算にも匹敵するほどの資金力、精鋭である艦娘百数十人、下部組織、友好組織含めて、世界最大級の大組織ですからねえ。
「ありがとうございましたぁ！」
「また来るよ」
「ごちそうさまでした～」

さて、散歩も昼食も終わりましたから……。
「飲むか」
「飲みますよ～」
飲みます！
休憩室で映画でも見ましょうか。
その最中にも、ビールとおやつを。
「ビールっても、麦ジュースだからね。ジュースだから実質ノンアル的な……、ね？」
「そうですよねえ、ジュースですから……、身体にも良いですし」
とか言いながら、スターウォーズ見ましたー。
夜。
「じゃあ……、晩酌いっとく？」
「いきますよぉ～！」

「あ～、今日は充実した休日を過ごせましたねえ！」
「酒うめー」

４８７話　大食いクイーンの日常

『大食い王者！
諸君らは、この日本に出没する大食い王者のことをご存知だろうか?!
そして、ランキング上位のうちの殆どが、今や、『黒井鎮守府』に所属している人になっている！
今、大食い業界がアツい!!!!

一位：『謎の大食い旅人』新台真央氏
二位：赤城氏
三位：武蔵氏
四位：加賀氏
五位：長門氏
六位：探偵、桂木弥子氏
七位：アルトリア氏
八位：アストレア氏
九位：ビスケット・オリバ氏
十位：ジャック・ハンマー氏
十一位：両津勘吉氏
十二位：７６５プロ所属、四条貴音氏
十三位：３４６プロ所属、大原みちる氏
十四位：インデックス氏
十五位：五十鈴華氏
……
……
……

麺妖な！でお馴染みのラーメン大食い王者の四条貴音ちゃんや、パン食い王者の大原みちるちゃんもランクイン！
学園都市のシスター、インデックスちゃん、大洗戦車道の五十鈴華

ちゃんも華麗にランクイン！
十位以内の上位陣はぶつかり合うと必ず店の食材を食い尽くしノーサイドゲームとなるので正確なランキングではないかもしれない……。故に、十位以内のランキングは暫定のものと認識してほしい。
現に、この十位以内の人間が現れた店は即座にその日は食材切れで閉店すると言われている。
特に、不動の王者である、謎の旅人、新台真央は、「〇〇分以内に食べ切れたら無料！」のようなチャレンジメニューに挑戦しまくり、無料で店の食材を食い尽くして消えるという悪名が！そのため、各国のチャレンジメニューには、「新台真央お断り」を掲げることも！最近は「艦娘お断り」も増加しているらしい。しかし、それでも、彼らは金を払ってチャレンジメニューを食べるのだが。』
「はい、お待ちどう！７．５ｋｇバケツ全マシマシラーメンです！４５分以内に食べ切れたら無料ですよ！大食いランキング二位の実力、見せてもらいますよ！」
「うふふ、はい、では……」
私は、スマホの画面を消して、傍に置いた。
「スタート!!!」
「いただきます……！」
アブラ、ニンニク、味玉、チャーシュー、ヤサイ、全マシマシのマシマシですね。
非常に美味しそうです……。
「十分くらいで食べ終わると思うので、お代わりの用意をお願いしますね」
「は、はあ」
では、行きましょうか。
まずは、ヤサイから攻めて行きましょう。
お箸でぐわっと持ち上げて、口に運びます。もちろん、大量のアブラと一緒に、です。
もぐ。

もぐ。
もぐ。
「やだ……、何あれ……」「噛んでる？」「飲んでない？」
他のお客さんの声が聞こえますね。
いえ、その、咀嚼のスピードが速過ぎて、常人には見えないだけで、ちゃんと噛んでますよ。ダイエットのために、よく噛んで食べるんです！
もぐもぐ……。
うーん！美味しいです～！
茹でもやしにアブラが絡んで最高ですね！
野菜いっぱい食べてますし、痩せちゃいますよー！
さて、ヤサイはなくなりましたね、次はお肉、行きましょうか。
ぱくっ！
もぐもぐ……。
ジューシー……！
やっぱり、健康のためにはバランスの良い食事が大事ですからね。
「お、赤城ー」
「もぐもぐ……、あ、提督」
「おいおい、ダイエットはどうしたんだか……。すいませーん、俺もこれ、同じのを三杯」
「な、な、な、何ですってえ?!」
「だから、ラーメン、同じのを三杯お願いします」
「わ、分かりました……」
うう……、外食してるところ、提督に見つかっちゃいました。
「て、提督はダイエットしなくていいんですかっ?!」
「しないよ、俺、体脂肪率五パーセント以下だし」
うう～……。
つ、次は味玉行きます！
ぱくっ！
小さいから一口でいけますね。
うんうん、とろける黄身が美味しいです！

それじゃあ、麺を食べて行きましょうか！
ずるる～っ。
んーっ！
「おいひいれす～！」
ニンニクの効いた太麺！あっつあつで脂っこくて美味しい！これぞ家系ラーメンですね！
……あっ。
「もうなくなっちゃいました……。お代わりお願いしまーす！」
「た、ただ今ー！」

そのあと、提督と三杯ずつ平らげて、お会計しました。
今日は食べ歩きなので、７．５ｋｇラーメンを三杯だけにして、次のお店に移動します。
「ゲェッー!!!大食いキングと大食いクイーン!!!おい、バイト君！店の看板ｃｌｏｓｅにしてこい！」
ステーキ屋の店主さんが言いました。
「店主さん、今日は食べ歩きなので、控えめにしますよー」
「そ、そうなのかい？な、なら良いか。注文は？」
「スペシャルデカ盛りグリルセット８ｋｇを三人前で」
私と提督が言いました。
「控えめって言葉の意味知ってるか？ん？」
「本気食いなら百人前くらい行けますけど……」
「あんたらは腹ん中にゾウでも飼ってるのか!!!?」
スペシャルデカ盛りグリルセットは……、ソーセージ１ｋｇ、ステーキ３ｋｇ、鶏肉のグリル２ｋｇ、ハンバーグ１ｋｇ、野菜や目玉焼き１ｋｇですね。
「８ｋｇは少ないな」
「控えめでヘルシーですね！女の子サイズです！」
「あんたら、頭大丈夫か????」
失礼な！大丈夫ですよ！
「ただでさえ、今朝からラーメン２２．５ｋｇしか食べてないんです

から、お腹減ってます～！」
「俺は朝飯に軽くご飯２０合しか食べてないから、腹減ってるわ～」
「お前ら人間じゃねえ!!!!」
では、行きますか。
ソーセージから！
皮がパリッと！お肉はジューシー！
これはハーブ入りですね、美味しいです！
「あ、ご飯もらえますか？特盛りで」
「アッハイ……」
次は目玉焼きとハンバーグ！
うーん、特製ソースがいいお味！
「ご飯お代わりお願いしまーす」
「アッハイ」
「鶏肉はヘルシーだから食べても大丈夫ですよね！」
「肉なんて空気みたいなもんだろ（意味不明）」
鶏肉と野菜は塩胡椒でさっぱりめに！
ステーキはオニオンソースでがっつり！
「ご飯お代わり」
「アッハイ」

お昼になってきて、お腹が空いてきましたね。
良さげなお店を探して歩くと、お腹が減ります。
ん……？
ふわとろオムそば５ｋｇ、三十分チャレンジ……？
「ちょっと量が少ないですけど、美味しそうですね」
「そうだな、四人前頼めば良いだろ」
「すいませーん、チャレンジオムそば四人前お願いしまーす」
「うわあああ!!!!大食いキングと大食いクイーンだあああ!!!!」
な、何ですか？もうっ！人を化け物みたいに！
失礼ですよっ！
「オ、オムそば超盛りお待ち！」

「わあ……！」
「おお！」
「「いただきます！」」
卵と一緒に焼きそばをぐわっと箸で掴んで口に運びます。
んんー！
ソースのお味が実に良いですね！
豊かな風味と強めの塩気という尖った部分を、卵がふわっと受け止めて……！
すごく美味しいです！
「「お代わりお願いしまーす！」」
「ひ、ひいい……、う、嘘だろ……？」

その後も……。
「うわあああ!!!大食いキングとクイーンだあああああ!!!」
「食材がああああ!!!」
「なんだこいつら!!!?」
美味しく食事して、食べ歩きしました！

『大食いランキング速報！
大食いキングとクイーンが食べ歩き！
周囲の飲食店を食い尽くした！』

４８８話　裏社会と会合

誤解しないで欲しいから言っておくが、黒井鎮守府に侵入しても即座に抹殺されることはない。

資料室や、俺が封印してる『危険物置き場』や、艦娘の寮に強行突入でもしない限り、問答無用で消されたりはしないのだ。

調子に乗ったバカやスパイなんかは、質疑応答の末に追い出すか……、実験体にするかだ。

俺の知り合いならフリーパスで入れるぞ。

ＩＤカードとかを持ち歩かずとも、顔認証システムなんかが黒井鎮守府のネットワークに存在していて、黒井鎮守府のガードロボットが判別するからな。

四天王の分霊を鎮守府の四隅に置き、霊的な防備も万全だ。

俺の知る限りのトップ層の退魔師が現れても、五分は保たせられる計算だな。

だから、まあ、基本的に誰でも入れる。

流石に、黒井鎮守府の中で麻薬の密売とかやられたら捕まえるが。

ただ、一つ言っておきたいのは、黒井鎮守府は中立中庸の存在であることだ。

黒井鎮守府は利益追求と世界秩序の維持の為にのみ戦う。

深海棲艦との戦いも、世界秩序の維持の為の戦いの一環に過ぎない。

秩序を乱すものは極力排除するが、余計な戦いは避ける。

金で動く組織だが、秩序を乱すものには金を積まれても加担しない。

だがまあ、人が数人死ぬレベルなら、金次第で協力しちゃうかもしれないし、艦娘個人の交友関係はよく分からないんで、その辺は謎。

もう一度言う。

黒井鎮守府は中立中庸、利益追求と世界秩序の維持の為に戦う。

故に。

「蟲師のギンコだ。まず～、……と言う訳で、この辺の光脈筋は、旅人

が管理してるもんで問題はないみたいだ」
「蒼月潮だ。こっちも特に報告なしだぜ。白面の者が封印されたから、そうそう強い妖怪も湧かないさ」
「墨村良守。こっちも報告なし。烏森はもう閉じたんだ、俺もお役御免だ。ライドウさんは？」
「葛葉ライドウだ。こちらも特に大きな問題はない。去年の夏に、関東に『神霊・エロヒム』が召喚されたが、僕が調伏した」
「井河アサギです。対魔忍は前回も報告した通り、身内で反乱があり……」
勝手に会議室を使う『裏』の人々に文句は言わないのだ。
ただ一言言わせて欲しい……。
「なんでうちでやるの????」
会議は他所でやれ!!!
蟲師、獣の槍に選ばれしもの、結界師、デビルサマナー、対魔忍。
対『魔』のスペシャリスト達。
それが、何故か黒井鎮守府に集まる。
なんで????
そして問題は、俺もライドウさんに捕まって、会議室に放り込まれたことだ。
なんで????
俺はとりあえず、懐からシングルモルトウイスキーを取り出して、魔法で氷を作り、ロックでウイスキーをキメた。
酒はいい、心を落ち着かせる。
「……帰ってもらえます????」
「おいおい、俺にばっかり仕事をさせて、自分は酒をかっ喰らおうってか？そりゃないだろ」
ギンコがそう言った。
「ん僕ぅ……、関係ないんでぇ……、帰らせてもらっても……、良いですかねぇ？」

「関係ないってこたあないだろう……。この辺の光脈筋を弄ってんのも黒井鎮守府、ヤタガラスに協力して悪魔を調伏して回っているのも黒井鎮守府、魔界から現れる妖魔を殺して回っているのも黒井鎮守府。おまけに、蟲師やデビルサマナーの道具を売るのも黒井鎮守府だ。あんたほど『裏』に関わっている奴はいねえよ」

ヒー。

「ギンコ、それ以上正論を言うと、俺は駄々をこねるよ？外見年齢２８の男が泣きながら床で転げ回る姿を見たいか？」

「お、おう……、見たくないな」

俺は、ウイスキーを一気に呷る。

「あのさあ、黒井鎮守府はね、基本的に営利団体なの！利益があれば誰にでもつくの！」

そう、そうなのだ。

利益があれば、誰にでも味方をするのだ。

「でも、貴方達は、骸佐の反乱側につかなかったわよね？引き抜きの話があった筈よ」

アサギが言った。

「だってあれ、魔族がバックにいるんでしょ？魔族、ロクなことしないから嫌いなのよね、俺。魔族に協力するとか、長期的に見て不利益だものね」

「でも、ヤクザやマフィアには手を貸すのよね？」

「知り合いだしねー。それに、半グレが増えるくらいなら、強いヤクザ者が裏社会を統率する方が何かと楽でしょ？おたくら対魔忍だって、東城会と繋がってるだろ？」

「認めるんだ、君は最早、一般人ではない」

ライドウさんが言った。

俺は、懐からスミノフ、ウォッカを取り出して、瓶ごと呷る。

かーっ！美味か！

「いや、まあね、分かってるよ？俺はもう既に、一般通過旅人ではいられないってことは。だがね、何でうちが物事の中心みたいな話になるのかね？」

「いや、実際、旅人の兄ちゃんはいつも物事の中心にいるじゃねえか」
潮君が言った。
「それに、今一番力を持っている組織は黒井鎮守府だしなあ」
良守君が言った。
確かに、光覇明宗は白面の者との戦いで数を減らし収縮し、裏会もなんやかんやで壊滅した。
ヤタガラスも前政権の事業仕分けによる予算カットで、その力は全盛期の数分の一まで落ち込み、対魔忍も二車骸佐達の反乱によりゴタゴタしている。
蟲師は、自然のバランスを整えることが仕事なので、そう言った裏社会のゴタゴタには巻き込まれないが、それでも立派な異能者であるからして、裏の繋がりからは逃れられない。
けど、うちは一応、表の組織なんだけどな？
まあ……、邪魔な大本営の人間をこっそり消したりしてるけどさ、基本的には表側の組織なんだよ。
「あんまり『裏』の事情に巻き込まれてもなあ。確かに、君らと知り合ったのは、俺がなんとなく面白そうだからついて行っただけだし」
「でも、黒井鎮守府が戦わなかったら、日本は破綻するわよ？」
アサギが言った。
「そーなのよねえ。君らがガンガン仕事投げるから、うちはガンガン仕事引き受けちゃって……。逆に聞くけどさ、なんでそんなに仕事投げてくるの？」
「それは、仕事の出来が良いからよ。金を積めばほぼ百パーセント依頼を達成する上に、敵に加担しない傭兵組織よ？おまけに、戦闘以外にも、諜報や潜入、偵察に技術提供、魔界技術にも通じるって、どんな万能で都合のいい組織か分かる？」
「大体にして何で対魔忍には脳筋しかおらぬのですか？？？？仮にも忍者ですよね？？？？」
「……それは、その」
しどろもどろになるアサギ。
「私が戦闘タイプ寄りの対魔忍だから、私を目指す若い対魔忍はみん

な戦闘タイプなの……。お陰で、潜入とか諜報ができるのは九郎隊くらいのもので、仕事がどんどん増えて……」
アサギの目が虚ろだ！
「わ、悪かったよアサギ……。今度仕事手伝いに行くし、デートもしてあげるからさ、ね？」
「ええ……、本当にありがとう……」
アサギ……、ちょっと泣いてるぞ?!そんなに仕事が忙しいのか……。

とにかく、今後も黒井鎮守府はくれぐれもよろしく、って事で解散となった。
ぶっちゃけ、実際に仕事やるのは艦娘だから、俺には殆ど関係ない話なんだが。

４８９話　秘書艦チェンジ！　その１

珍しく葉巻を吸っている俺。
悪の組織のボスなので、葉巻を吸ってみせる。
やたら毛の長い猫の代わりに首輪付きを膝の上で撫でて、ギンギラギンの金の指輪をつけ、真っ黒けな黒スーツを着て、豪奢な革張り赤ソファに座っている。
「うぉっほん！さて、大淀クン、報告しタマエ」
俺は大袈裟に咳払いして、秘書の大淀の報告を聞く。
「はい」
大淀は、ラップトップを開く。
すると、執務室の壁に、あからさまに近未来な壁投射立体映像が現れる。
「まずは収益ですが、先月と大差なく～……」
「ふむふむ……」
「……ということになっております。以上で定例報告を終わります」
「ふむ、ありがとう大淀クン」
俺はブランデーの注がれたデカいグラスを回して、一口で飲み干す。
「……このキャラ飽きたからスーツ脱ぐわ」
「はい」
「もふ」
「首輪付きはこうだ！」
窓を開いて首輪付きを全力で空へぶん投げる。
「もーーーふーーー」
首輪付きは星になった。
さて。
「純利益は先月とプラマイ五パーセント以内だから問題なし。特に変わったことはないみたいだね」
「はい」
うーん、大淀は今日も可愛いな。

キリッとしてて素敵だゾ！
俺は大淀のスカートをめくる。
……ノーパンだ。
「ただ、パンツは穿いてくれ」
「善処します」

そんな感じで、大淀の定例報告を聞いてから、来客に対応して、昼休憩を入れていると……。
「……よく考えたら、なーんか、ずるいっぽい」
夕立に絡まれた。
「えっと、何が？」
「大淀さん、誰も何も言わないけど、ちゃっかり提督さんの秘書に収まってるっぽい！」
あー？
あー。
「そうだね？」
「私も秘書艦やりたいっぽいー！」
秘書の艦娘、略して秘書艦ってか。
うーむ……。
「そうだそうだー！僕も秘書艦やりたいよー！」
ともがみん。
「私は別に……、まあ、頼まれれば……」
と加賀。
「あらあら～」
龍田。
「不知火は……、別に、ふ、不満はない、です」
ぬいぬい。
「大淀はどう思う？」
俺は大淀の意見を尋ねる。君の意見を聞こう。
「提督は万民に崇められるべき、いと尊きお方です。艦娘であれ、人間であれ、提督のご威光が届く、提督のお近くにいたいと思うのは不自

然なことではないでしょう。いえ……、提督のご威光は、遍く存在に届く偉大なる光。それはまるで太陽のようですね。ですから、太陽の化身たる提督は、ただ存在するだけで、多くの……、本当に多くの人間の力になります。無論、この私にも、提督という光はいつも届いております。お陰様で私はいつも、提督のお力により、心身に安寧を齎されており……」

大淀は崇拝タイプのヤンデレだから、何でも言うこと聞いてくれるなー。口を開けば俺を讃える言葉が出てくるぞ。

「ふーむ……、じゃあ、試しに、秘書艦を変更してみるか！」

今日の秘書艦は夕立だ。

「提督さん！よろしくっぽい！」

「はい、よろしくねー」

夕立は、いつもの狩装束ではなく、珍しく、艦娘の艤装である黒いセーラー服を着ている。

白露型は基本的に狩装束なので、久々にこの姿を見る。

夕立は可愛いですね。

バナナのナナチはバナナナチ。

はっ?!いかん、変なミームが……。

「まずは今日の報告っぽい！」

「うん」

「……で、ここは～」

「うんうん」

「……っぽい！報告終わりっ！」

ふむ……、ちゃんと報告できたな。

夕立はいつもぽいぽいしてるけど、決して馬鹿じゃない。

むしろ賢い方だ。

鎮守府の知能のランキングならば、上から数えた方が早いくらいには頭がいい。

どうやら、数字にも強いらしい。

白露型は基本的に、知的労働や魔法方面に強いから、安心して任せ

られるな。
「よし、じゃあ、今日のスケジュールは？」
「んー、特にないっぽい」
「そっかー」
「って言うより、黒井鎮守府のシステムが、提督さんなしでも動かせるようになってるっぽい？」
そうらしいね。
仕事ないのは助かるけど、暇なんだよねー。
まあ、仕事はないんだけど、探せば仕事はあるっちゃあるのよね。
俺の仕事は、他組織との交渉がメインだからな。
会計はＡＩにやらせてるし、末端の人間もＡＩに置き換えてある。
下部組織に、人間を使った貿易会社があるが……、これは、深海棲艦騒ぎで職を失った貿易会社関係者の救済のために始めたものだ。
つまり、基本的に、俺と艦娘の仕事は、ＡＩには不可能な高度な判断力を必要とする仕事か、もしくは、直接戦闘をする仕事がメインになる。
俺はまあ、戦ってもしょうがないくらい弱いから、いつも他の組織との交渉をしている。
それも、普段は、外交官的な、あまり好戦的ではなくしっかり者の艦娘にパスしている状態だから、俺の仕事はマジで特にない。
強いて言えば、俺の仕事は、艦娘を構ってあげて、艦娘のメンタルヘルスケアをすることだ。
マネジメントも、ぶっちゃけ、俺より大淀の方が得意だし。
営業するにも、既に、日本の総理大臣やアメリカの大統領、国防組織ヤタガラスに、ギャング組織パッショーネなど、国や大組織などに販路を持っているから、これ以上どうしようもないし。
むしろ、俺が営業される側なんだよなあ。
まあ、相当良いところ以外じゃ、変な営業マンには会わないけどね。
「じゃあ、提督さんは、今日はどうするっぽい？」
「うーん、そうだな……、今日は、艦娘のためにおやつでも作ろうかな」
「りょーかいっぽい！」

厨房に入る俺。
「ケーキでも焼くかー」
「ぽい」
どデカイボウル、どっさり小麦粉、山ほど砂糖。
「ふんふんふーん、っと。夕立、これ、混ぜといて」
「ぽーい」
んー。
夕立、わりと役にたつな。
「お菓子作りって、秘薬作りと同じようなものっぽい。分量間違えずに適切な手段で材料を加工すれば良いっぽい！」
確かにそうか。
白露型が普段作ってる怪しげな秘薬に比べれば、お菓子作りなんて簡単だろう。危険もないしね。
「でも、夕立は提督ほど器用じゃないし、お菓子作りに最適な材料の分量も知らないから、その辺はお任せっぽい」
「あいよー」
っと、こんなもんか。
さて、お菓子もできたことだし、冷蔵庫にケーキをぶち込んでおく。
まあ、ホールケーキも空母に目をつけられれば秒で消えるのだが。
っと、そろそろお昼の時間だ。
次は昼飯を作らなきゃな。
「夕立はその辺で待ってて、昼飯作るわ」
「ぽーい」

昼食後……。
鎮守府の見回りをする。
「やあ、頑張ってるね」
「えへへ」
艦娘の顔を見て、頭をナデナデしてあげるだけで、士気が上がるのだ。

ならば、艦娘とは、ちょこちょこコミュニケーションをとるべきだろう。
遠征に行っていた艦娘を出迎えて、出撃していた艦娘を褒めてあげて、事務仕事をしている艦娘に差し入れ（挿し入れではない）してあげるだけで、士気はぐんぐん上がる。
まあナニを挿し入れすると士気以外もアガっちゃうから、さじ加減が難しいのだが。
「おう！遠征終わったぜ！」
「おー、よしよし、頑張ったな！偉いぞ天龍！」
「えへへ??」
好感度はなるべく下げていきたいのだが、頑張っている艦娘に声をかけるのはやめられないんだよな。
みんなね、帰って来る時にね、褒めてもらえると思って目をキラキラさせて帰って来るのよ……。
そんな艦娘達に塩対応はできぬぅ……。
「頑張ったな！偉いぞ！ほら、ちゅー！」
「きゃん??や、やめろよぉ、提督ぅ～??」

さて……。
夕立、割と問題なく秘書艦を務めていたな。
「提督さん、お背中流すっぽい～！」
「はいよ、ありがとね」
え？
いや、黒井鎮守府は混浴なんで。

寝るか。
「秘書艦だからお隣でおやすみっぽいー！」
「はいはい、おやすみ」
え？
いや、俺の部屋は鍵ついてないんで。艦娘はフリーパスなんで。

明日の秘書艦はもがみんにお願いしてみようかな。

４９０話　秘書艦チェンジ！　その２

最上が秘書艦だ。
昨日は夕立が秘書艦で、夜に秘所姦して寝た。
あんまり下ネタ言うとＵＮＥＩに絶版されるかもしれない。怖いなー、とずまりすとこ。
「僕だよ！」
「はい、おはよう最上」
「うん！おはよう提督！」
最上。
ボーイッシュながらも仕草が「女」なのがたまらねぇぜ！
分かるかなー？
こう、普段は元気溌剌銀河美少年！みたいなノリなんだけど、ちょっと強気に攻めてやるとメスの顔になるんだよね。
女の甘えた声でしなだれかかってくるのマジで可愛い。
「最上ー、はい、おはようのちゅー」
「えへへ、ちゅー??」
完全にバカップルの所業だが、艦娘はなんか知らんけどこういうの好きなんだよね。
外敵に対してはどこまでも残酷だが、俺に対しては甘えん坊だ。
ちゅー、するついでに最上の尻肉を揉みしだく！
おっほ、ムチムチの美尻！プリンプリンよ、プリンプリン！
「やぁ……??えっち……??」
はーぁ？可愛いかよ？
「最上はえっちなの嫌いかな？」
「提督となら、いっぱいしたいよ??」
はーぁ????可愛いかよ????
語彙力が消滅するな？可愛すぎて声も出ねえわ。
まあ、口を開けば口説き文句と減らず口が沢山出てきますが。壊れたラジオとお呼びください！
「最上ー、どうする？お仕事する？その前にえっちする？時間あるし」

「もうっ、朝からはダメだよっ！お仕事しないと！……で、でも、提督の命令なら、僕は逆らえない、よ……？」
ほーん？
「じゃあ、ちょっとだけしちゃおう？ねっ？」
「……うん??」

はーあ、最上本当に可愛いな。
結婚したい。
してたわ。
結婚してたわーーー!!!
ここにいるボーイッシュ美少女いるじゃないっすか。
これ、俺のなんすよ。
ちなみに最上は結構Mだから、背後から責めてる時にお尻を叩いてあげると喜ぶぞ！
いやあ、可愛い声で鳴いてたな。
最高の朝だ。
「えっと、それじゃあ、今日の報告から。まずは……」
「うんうん」
「……って感じかな。報告終わりっ！じゃあ、鎮守府の見回りしようね！」
「ああ、報告ありがとう」
「えへへ、じゃあ、行こっか！」
はあーん？
ナチュラルに恋人繋ぎしてきたぞー？
ほんっとにマジで可愛いな。
「えへへー、提督、凄い筋肉だね！カッコいいよ！」
俺の腕に頬ずりする最上。
「最上は筋肉が好きなのか？」
「え？う、うん。そ、そのね？逞しい提督に組み伏せられるのが、好きなんだ??」
はい、可愛い。

そのマゾっ気が可愛い。
俺はどちらかといえばSだからな。
それに、甘えさせてくれる女の子より、可愛く甘えてくる女の子の方が好きだ。
いや、まあ、望月みたいに〝ガチ〟な甘え方をされるとそれはそれで引くんだが。
最上は丁度いい塩梅で甘えてくるから素晴らしいよな。
「提督、今日も特に予定はないよ！どうする？」
俺の腕にペタッとくっつく最上が問いかけてきた。
ふむ……。
「今日は、黒井モールの視察に行こうか」
「うん！」

黒井モール……。
俺がノリと勢いで建てた百貨店だ。
様々な製品を、黒井鎮守府で生産したり、他の世界から取り寄せたりして販売している。
売れ筋は、他の世界にあるグルメ界なるところから取り寄せた食品や、黒井鎮守府産の電子機器だ。
グルメ界の食品はヤバいレベルで美味いし、ノースティリス産の食品もそれに並ぶ。この世界の食品ももちろん美味い。
黒井鎮守府産の電子機器は、どれも高性能だ。
だが、そんな、表側の黒井モールの売り上げの数倍の売り上げを出すのが、『裏』黒井モールである。
裏黒井モールは、その名の通り、裏の人間に向けた製品を販売している。
銃器、兵器、魔導具、魔導書、秘薬、ハッキングプログラム、コンピュータウイルス、魔法生物、護符、スクロール……。
オークションなども開催している。
ヤバいもんを売ってる訳だな。
言っておくが俺の指示じゃない。

俺は純粋に、利益追求と女子供の笑顔のために黒井モールを作ったのだが、艦娘の一部が勝手に、地下にヤバいもの売り場を作ってしまったのだ。
知らない知らない私は知らない。
俺が、乱暴だ！横暴だ！オーマイガッデムなのだ！と言ってもいつのまにか決定されていた。
ペナルティーキーック！
まあ、できちゃったもんはしゃーない、切り替えてけ。
と言う訳で裏黒井モールを視察。
「あ」
「お？」
蟲師だ。
「よう、旅人」
「ギンコ、まだいたのか？」
「ん、ああ、最近は黒井鎮守府の宿舎を借りて、表の黒井モールのフードコートで飯を食って過ごしてるよ。ありがとな」
黒井鎮守府には、出入り自由な宿舎がいくつかある。
外部の人間を黒井鎮守府内に泊める為の建物だ。
基本、俺の知り合いは無料だし、どうしても宿が必要な人には、ビジネスホテル並みの格安で貸すこともあり得なくはない。
災害の時なんかは、近隣住民をここに集める。
それが、黒井鎮守府宿舎だ。
ギンコは、蟲を呼び寄せるという体質によって、一箇所には留まれないから、家を持たずに流浪の身として生きている、ある種、俺と同類と言えるような奴。
蟲とは、生命未満の、意思を持った自然現象のようなもの、かな？いや、厳密には違うんだが、上手く説明できない。
まあ、何にせよ、そんな、意思を持っている自然現象のようなもの、蟲を退治したり何だりするものが、蟲師と言うのだ。
そんな中でも、彼、ギンコは、蟲と……、自然との調和を図る、珍しい蟲師だ。

俺も、基本的に、常人が見えちゃいけないものは大半見える体質なもんで、蟲師の真似事はできるが、ギンコは俺よりもっと上手だな。
そんなギンコも、この、裏黒井モールの常連である。
何故か？
裏黒井モールには、蟲師が使うような光酒や、蟲下しなどの薬品を売っているからである。
うちの裏山は光脈筋で、光酒がとれるから、蟲師がよく光酒を買いに来るのだ。
詳しい話は省くが、光脈とは龍脈のようなもの、光酒とは光脈から取り出した生命エネルギーの結晶のようなものだな。
まあ、何にせよ、蟲師のような裏の人間は、裏黒井モールに集まってくる。
あ、薬品やら何やらを仕入れているのは白露型だよ。あと、裏山は、首輪付きの手によって薬草畑になっている。
「今日は光酒の補給に来たんだ」
「そうか」
「ここは安いな、何でもかんでも、卸値レベルの値段で手に入る」
「まあ、蟲師は、世界秩序を守る側の存在だからねえ。俺も、極力力を貸したいと思うよ」
「ありがてえよ」
そんな話をして、俺は裏黒井モールの視察を続ける……。
「提督、蟲師ってなあに？」
最上は、俺がギンコと話している最中、一歩後ろで控えていてくれた。
最上もプロだ、抜け目ない。
頼んでいる訳じゃないが、俺の護衛として、いつでもギンコを仕留められる警戒状態にあり、なおかつ、その警戒状態を他人に悟られないようにしていた。
しかも、俺とギンコが知り合いだと見て、話には割り込まなかった。
物理的にも、精神的にも、一歩引いて構えていた訳だな。
ふむ……、好奇心が強い艦娘や、精神的に幼い艦娘、頭のネジを落

としてしまった艦娘などは、俺が知り合いと会話していたら、割り込んでみたり、嫉妬のあまり俺の気を惹こうとしたりする。
その点、最上は大人しくしていた。
意外と秘書艦向きなのかもしれない。
おっと、蟲師とは何か？だったか？
「蟲とは、生命の根源に最も近いもの、多くの謎に包まれた幽玄の存在。世界や人に対して多くの怪異な影響を与える。蟲師は、その蟲の起こす怪現象に対する施術師としての役割を担っている……、ってところか」
「ふうん……、退魔師とかに近い存在かな？」
「蟲を怪異と見なすとするならば、そうとも言えるかもしれないな」
「それにしては、あの人、弱そうだったけど」
「そりゃ、蟲師は戦う者じゃないからな」
「戦わないでどうやって蟲を退治するの？」
「そもそも、蟲は退治するようなものじゃない。自然現象に近いものだ。それを、人の力で操作しようってのは烏滸がましいな。……退治する、と言うよりは、身体に入った蟲を薬で追い出したりとか、そんな感じだな」
「へえ……、面白いね。でも、それって、蟲師にしかできないことなの？」
んー……。
「まあ、葛葉ライドウなら、蟲も斬り捨てるし、獣の槍に選ばれしものなら、蟲を退治できるかもな。でも、蟲は退治するものじゃないし、蟲を殺して回るのは良くない。蟲の専門家は蟲師なんだよ」
「そっか……。黒井鎮守府も、万能の存在じゃないもんね。世界は、僕達だけじゃ成り立たないんだ」
「そうさ、世界は俺達だけじゃ成り立たないんだよ……」
黒井モールの視察を終えた後……。
「面白かった！今日は僕のわがままに付き合ってくれてありがとう、提督！」

そう言った、最上と別れた。
「いや、良いさ。またいつでもおいで」

４９１話　秘書艦チェンジ！　その３

朝、起きたら目の前に加賀がいた。
「おはようございます」
「ああ、おはよう」
今日は加賀が秘書艦だ。
おはようの挨拶がわりにそのデカケツを揉みしだく。
「あ、貴方、何をっ？」
そして思い切りキスをする。
「んんっ??」
朝からのディープキスですっかりその気になった加賀をベッドに倒して、朝から楽しむ。

「……強引ですね」
「こういうの、好きだろ？」
「……否定はしません」
はだけた服を整える加賀。
加賀は、強引にされるのが好きなんだよな。
普段は強気だけど、ベッドの上では子猫ちゃんなのさ。
これが武蔵とかだと大変だ。バトルファックをやる羽目になるからな。
まあ、マジカルチンポ持ちで房中術とカーマスートラの使い手である俺は、バトルファックなら最強格だ。
相手が上級淫魔でもイキ狂わせられる。
だが、朝なので軽めにした。
加賀は、朝から俺に求められて嬉しいらしく、俺の腰を足で絡め取って離さなかったな。
また、加賀は、ベッドの上でやられまくって余裕がなくなってくると、甘えた声が出ちゃうんだよ。
このキリッとした加賀が甘ーい嬌声を上げるところ、最高なんだよな。

さ、朝メシ作ろうか。

朝メシを済ませてから、今日の予定。

「……と言う訳で、今日は、幻想郷の八雲紫氏と、ヤタガラスの葛葉ライドウ氏、対魔忍の井河アサギ氏と会談する予定があるわ」

ほーん？

「どうだ加賀？俺が美女と会うと嫉妬しちゃうか？」

「いえ……」

ん？そうなのか？

「彼女達はおばさんじゃないですか。幻想郷の八雲紫氏は何千年も生きた老人で、井河アサギ氏も三十代ですよ」

んんんんっんー！

「そ、それ、本人の前では絶対に言うなよ！いいか絶対だぞ!!!」

ってか、見た目若けりゃ気にしないし、二人とも素敵なレディだよ!!!!

ゆかりんはスレンダーながらもおっぱい大き目、色っぽいけどユーモアもある美人さんだし、アサギはよく鍛えられたムチムチのボディな美女だし、何も問題なんてねえよなあ!!!!

見た目可愛かったら実年齢なんてどうでもいいよなあ?!!!!

と言う訳で会談。

「おはようございまーすーよー」

「ええ、おはよう」

「……」

「おはよう、真央」

さて、この手の会談ってのは、大体、内容はあらかじめ決まっているんだよね。

聞いておいたけど、これまでの報告と、これからどうするのかを軽く話し合う程度だし、問題はないだろう。

「いやー、ゆかりんもアサギも、今日も最高に美人さんだね！会えて嬉しいよ！」

「あら、今日もよく回る口だこと」
ゆかりんがそう言って微笑んだ。
ゆかりんは可愛いですね（黎明卿）。
「もう……、こんなおばさんをおだてないで？」
アサギがくすっと笑ってそう言った。
あー、良い女だ。
「ライドウさんもおはよう！」
「ああ」
「無口だね、もうちょい面白いこと言った方が良いよ」
「その必要はない」
っと、ライドウさんが塩対応なのはいつものことだ。
じゃ、早速、仕事の話をしようか。
さて……、まず、何故集まったのか？
理由は、世界に現れる異界の管理についての話だ。
『異界』……。
その名の通り、異世界のことだ。
この異界は、様々な理由で、人為的にも、自然にも現れる。
例えば、ダークサマナーが人攫い用の異界を作っただとか、マグネタイトが溜まって異界が発生しただとか、そんなことがちょくちょく起きる。
そして、異界には、悪魔が現れたり、魔界と繋がったりする。
そんなところに、一般人が迷い込んだら、簡単に死ねるよね。
ヤタガラスは、そんな異界を破壊したり管理したり、迷い込んだ人を助けたりすることが仕事だ。
八雲紫は、世界でも最大級の異界である『幻想郷』の管理者として、オブザーバー参加。
対魔忍も、魔界関係者への対応が主たる仕事であるからして、魔界関係者が集まる異界に飛び込むことも多々ある。
つまり、ここに集まったのは異界関係者。
今回は、日本の異界の管理維持についてお話しします。
みんな、「異界」って、知ってるかな？

「異界」と言うのはね、例えば、悪魔が出るところを触ると、気持ちがいいとか、魔界関係者が出入りするところをこすりつけると、気持ちがいい、と言ったところを、「異界」と言うんだ。
「人間界」と「悪魔が出るところ」は、どちらが表かな？もちろん、「人間界」の方が、表だよね？
今、「異界」に行っている半グレは、やめようね！って話だ。
もちろん、ちゃんとしたデビルサマナーが、金剛神界や修験界などに出入りするのは良いんだが、急に力を手にして調子に乗った半グレが異界に入ればあっさり死ぬ。
急に力を手に入れたデビルサマナーと異界の関係は、姫騎士とオークの関係によく似ている。即ち即堕ち。堕ちるのは地獄にだが。
まあ、そんなアホは死んでくれた方が助かるのだが、問題は生き残る場合だ。
生き残って更なる力を得た半グレがどうするか？なんて、決まってるよな。
一般市民に力を振るう、悪魔の力、魔界技術の悪用。
そう言ったことは許されない。
そのためのライドウ、あとそのための対魔忍。
だが……、それもまた難しい話が絡むんだよ。
異界関係に手を突っ込む様々な組織。
魔界関係者はもちろんのこと、ガイア教、メシア教、ファントムソサエティなどなど。
異界というのは、悪魔が現れることを利用して、レベル上げができる訓練所、悪魔からとれる資源を集められる牧場としても機能する上に、人や物を隠したりすることにも使える。
異界は価値があるってことは、利権関係の話が出てくる訳だ。
価値があるってことだな。
ヤタガラスや対魔忍も、世の中の異界の全てを把握している訳じゃないし、そんなことは物理的に不可能だ。
幻想郷も、度々変な奴らが攻め入って来たりするから、油断はできない。

だから、大きめの異界や、危険な悪魔の出る異界、明らかに悪用されている異界などについて、今回は話し合う。
だが、俺は今回どうしても言いたいことがあるんだ、聞いてくれ。
「対魔忍、肉オナホになり過ぎ問題」
「ごめんなさいね……」
「いや、マジでさ、かなり多くの対魔忍が性奴隷にされて出荷されてんだもん、ちゃんと管理してね？」
「はい……」
アサギに苦情を入れる。
だってもう、どこ行っても大抵、異界の奥に踏み込むと、対魔忍が肉オナホにされてたり、肉便器にされてたり、性奴隷にされてたりするんだもんな。
それ治して送り返してんの、八割はウチなのよ。
管理徹底して？
「もう、奥歯に爆薬でも仕込んで、囚われたら敵ごと自死するくらいしたらどうだろうか？」
ライドウさんがアサギに提言する。
「それをやると人が足りなくなるのよ……。この前の骸佐の反乱で、今の対魔忍は過労死寸前まで働いてるのよ？」
「この前、洗脳された対魔忍が攻めて来たから、黒井鎮守府さんに送りつけたわ」
とゆかりん。
「あれマジ迷惑だからやめて？？？？ボストンバッグに対魔忍詰めて送りつけるのはＮＧでしょ？？？？」
……
……
……
とりあえず、会議は終了した。
いつものように、うちに大量の下請け業務がぶち込まれて終わりだ。

まあ、別に良いんだけどね。
最近じゃ、うちも、元対魔忍やフリーのデビルサマナーを雇い始めてるし。
「このままだと、おたくらのシェアを奪っちゃいそうだけど良いの？」
「既に奪われてるのよねえ……、もう、対魔忍は、黒井鎮守府さんがないと回らない状態よ？」
「ヤタガラスもそうだな」
「……良いの？」
「国防組織なんて、いくらいても足りないのよ……。私、今日で六十連勤よ？正直な話、もっと国防組織ができても良いと思うわ。あと二、三個くらい……」
「僕ももう三ヶ月休んでない」
国防組織ブラックだ……。

４９２話　秘書艦チェンジ！　その４

今日は龍田が秘書艦だ。
こんな言い方は良くないが、俺は自分の面倒は自分で見れるタイプだ。
スケジュールも覚えられるし、自分の身は自分で守れる。
ぶっちゃけ、秘書艦なんて不要なのだが……。
いつもは大淀がくっついて歩いているものだが、正直、いなくても良い。
いや、大淀の存在が不要とかそう言うことじゃないぞ？秘書がいらないのだ。
でも、艦娘は、あれこれ理由をつけて俺にくっつきたがる。まあ、可愛いからどうでもいいんだけどね。
んで、今日は龍田。
龍田は時間が守れる素敵なレディなので、俺が起床する頃に現れた。遅過ぎず、早過ぎずだ。
「おはようございます～」
「はい、おはよう」
そして龍田の視線は下に。
「あらあら～？」
「まあ、朝だからね」
「大変ねえ、それじゃ着替えられないんじゃないかしら？」
ん？そんなことは……、いや。
「そうだな、折角だし、軽くヌイてもらおっかな？」
「うふふ……、ええ、良いわよ??」

大変良かったです。
いやー、毎日頑張って働いてるな俺。
「俺って勤勉で最高の人間だよな！」
「え？え、ええ、そうですね～」
「具体的には太宰治くらい」

「人間失格してる?!」
「まあ俺はほら、カルチモンよりやべーもんたくさん飲まされてるし、多少はね?」
「多少も何もないのよねえ……」
「でも水中でも呼吸できるから入水自殺はできないのよね」
「その時は私も一緒ね?」
心中か……、文化的だな。
だが俺は当分死ぬつもりはない。
永遠に生きるつもりだ。
永遠の命なんて死んでるのと変わらない、一瞬のうちに輝く命こそ素晴らしい、みたいなことを言う奴もいる。
まあ、否定はしない。
確かに、長い間生きていると、磨耗していき、擦り切れていき、最後には何も残らないだろう。
だが、それは、俺から言わせりゃ「暗いヤツ」だ。
磨耗するならその度に継ぎ足せばいい。
擦り切れるならその度に継ぎ接ぎすればいい。
流星のように煌めく人生、なるほど、結構な話だ。
だが、それならば。
俺は、太陽のように輝き続ける人生を歩もう。
永遠に輝きを放つ恒星のような時を生きよう。

そんな決意を新たにして、今日の仕事に入る。
今日の仕事は軍事企業との会合だ。
コロナに配慮したのかなんなのか、テレビ通信による会議になっている。
実際、軍事企業である我々がテレビ通信会議とか、完全にエヴァンゲリオンのアレだからやめた方がいいんじゃないかな?まあ一般論でね?
さて、参加企業はこれだ!
インテリオルユニオン、オーメルサイエンス、グローバルアーマメ

ンツ（ＧＡ）、そして我らが黒井鎮守府。
西アジア周辺の軍事財閥、オーメルサイエンスは、ドイツ系のローゼンタール、中東系のアルゼブラなんかを擁する巨大組織で、バランスの良い兵器を作ってる。
インテリオルユニオンは、エネルギー兵器やコジマ粒子兵装の雄。
ＧＡは環太平洋地域を統べる巨大財閥で、堅実な装甲と実弾兵装を開発している。
この三つの財閥は、こと軍事においては、世界最大の企業だ。
それぞれが、ＮＥＸＴと呼ばれる超兵器を販売していることが最大の特徴だな。
まあ、ネクストなんて、ランニングコスト維持コストがバカ高いし、そうそうたくさんは配備できないんだが。
それでも、大体、大国と言えるような国家は大抵はネクストを配備している。
国家解体戦争？何のことですか？
まあ、テロリストとかは、もっと安いアームスレイブとか使うんだけどな。
うち？パーソナルトルーパー、アーマードモジュール、それとスーパーロボットを少し売ってるよ。
流石に、工廠の地下深くに封印されているグレートゼオライマーとかは売れないけど。
それでも、うちで売ってるグルンガストとかは、ネクストとも互角以上に戦えると思うよ。
ネクストはスーパーロボットに迫る上に抜群の汎用性があるのが売りだからね。
まあ、そんな感じで、世の中の軍事を握るのは、黒井鎮守府とこの三つの企業な訳だね。
ぶっちゃけ、全世界核ミサイルよりスーパーロボットの方が怖いんで、スーパーロボットの研究所が乱立する日本は覇権国家なんだよなあ……。
でも、そんなスーパーロボットがたくさんいても、いきなり、明日

にでも宇宙から侵略宇宙人が現れたりするから、地球のどこにいても死ねるゾ！
むしろ戦力に溢れる大国の方が安全って言うね……。
基本的にこの世界は、道を歩いてると怪人に殺され、裏道を歩くと悪魔に殺され、欧米に行くと魔術師に殺され、アジアに行くとマフィアに殺され、家に篭ると家ごと怪獣や宇宙人に消し飛ばされるんだよな。
死しかない。
まあ、仮に襲われても大丈夫。
怪人はヒーローに殺され、悪魔はデビルサマナーに殺され、魔術師は執行者に殺され、マフィアは警察組織やまた別のマフィアに殺され、怪獣や宇宙人はウルトラマンやスーパーロボットにぶっ飛ばされるからな！
安心して生きろ！
さて、そんなことより会議だ会議だ。
ってか全員ボイスオンリーなのやめない？完全にゼーレじゃねえか。
何なの？お前らはエヴァファンなの？
まあいいや。
「龍田」
「はあい～」
龍田から資料を受け取る。
ふーん……。
「ちょっとさー、オーメルさん稼ぎ過ぎじゃない？」
『適正利潤だ』
「これさー、中東にネクスト売りつけただろ」
『ああ、アルゼブラの社員の企業努力によってな』
「あんまりさー、そうやってネクスト拡散されると、汚染がね」
『除染装置はそちらが売るのだから、問題ないのでは？』
「中東の小国に売るなって言ってるんだよ。小国には過ぎたオモチャだ」

『しかし、中東の小国も力をつけねば、大国にいいように操られる傀儡となるだろう？それは、そちらも望まぬことのはず』
チッ、のらりくらりと……。
インテリオル代表が俺に話しかけてくる。
『それを言えば、そちらの、スペースノア級万能戦闘母艦もやり過ぎでは？』
「は？何が？」
『大気圏外でも活動可能な上に、機動兵器を搭載できるとは、黒井鎮守府は戦禍を宇宙にまで拡大しようとしているとしか思えませんね』
は？
「それはそちら側の勝手な思い込みでは？それよりも、かつて宇宙から現れた侵略者、『インベーダー』や、『ゾンダー』、『暗黒ホラー軍団』の脅威を忘れたのか？宇宙にも戦艦を飛ばして、太陽系内への異星人の侵攻を防ぐくらいでちょうどいいだろう」
ＧＡの代表も口を挟む。
『広大な宇宙というフロンティアを独り占めされると困るな』
「なら、あんたらも宇宙戦艦でもなんでも作ればいい」
『我々はクレイドル計画でキャパがないのだが』
「しーるーかーよ。そりゃあんたらの仕事だろ」
この三企業は、クレイドル計画と言って、宇宙にクレイドルって言うどでかいコロニーみたいな飛行機を飛ばして、そこに人を住まわせる計画だ。
もう、三十億人くらいはそこに住んでるらしいな。
まあ、地球の人口は百億超えてるし……。
うーん、俺もクレイドル計画に一枚噛ませてもらうか？
いや、うちはうちでなんか別の計画を立てよう。
「じゃ、こんなもんで。うちは後日、なんらかの宇宙移民計画を立てておくから、そっちにも一枚噛ませてやる。以上、お疲れ」
そう言うことになった。
「お疲れ様、提督」

「ぬわーん、疲れたもーん」
龍田の胸にダイブ。
はあー、デカ乳デカ乳。

４９３話　秘書艦チェンジ！　その５

今日の秘書艦は不知火。
朝起きたら隣に立っていた。
「おはぬいぬい」
「ぬいぬいではありません、不知火です」
「ぬーいぬいっ！」
「不知火です」
オッ、セメント対応～。
そんなところも可愛いよ。
「ぬいぬーい、おはようだよー」
「あんっ??おはようございます」
不知火を抱きしめて尻を撫でる。
「不知火～、可愛いなあ、不知火は可愛いなあ」
「司令、あの、本日の職務は……」
「まあまあまあまあ、いいからいいから、はい、ごろーん！」
不知火をベッドに引きずり込む。
「司令……？」
「不知火～」
さーて、朝なのでナニがペニセストしてるな。
いや、えの素はやめろ？
このｓｓは綺麗なｓｓだから、下ネタとかはないんだ。
……まあ、チンチンでちゃぶ台を突き破るほどの勃起も、出来ない訳じゃないんですけどね？
それはさておき、俺のこのいきり立ったグレートソードを鎮めなければ。
チンチンを鎮鎮しなければ。
だから下ネタはやめいゆーてるやろがい！
よっし、不知火にどうにかしてもらおう。
「不知火～、良いかな？」
「はっ、慰安任務、了解しました……??」

ＴＩＮＴＩＮ（ゲーミング鳥）を鎮めた。
キツキツでした。
やはり駆逐艦……。
はっ?!
ロリの闇に飲まれるところだった?!
屈しない！
俺は屈しないぞ！
姫騎士くらい屈しないぞ！
くっころくっころ！
そんなハッスルハッスルみたいに言っちゃダメだな。
まあさっきまでハッスルしてたんだがな！がはは！グッドだ！
いかんいかんいかん、闇に飲まれるなー、闇に飲まれるな俺。
正気を保て。
前を向け。
臆せば死ぬぞ。
退けば老いるぞ。
今なら卍解もできそうだ。
それくらい清々しい気分だ。
そうだな、今日の仕事はなんだろな？
「不知火、今日のスケジュールは？」
「鳳翔さんが呼んでいました。何でも、黒井鎮守府の公式お菓子の試作品ができたとか。それと、明石さんが、裏黒井モールの機動兵器についてお話があると。更に、財務担当の霧島さんが、黒井モールの全国展開についてお話があるとのことです」
んんー？
観光地かな？
何で軍事組織に公式お菓子が？
ま、まあ良いや、どうせ黒井モールで売ることになると思うし。
それと、機動兵器についての話と全国展開の話か。
それは多分……、販路拡大についてだな。

元々、裏黒井モールは既にパンパンで人多過ぎだから、各国に支店を出そうって話だったんだよ。
うん……、となると、総合百貨店である表黒井モールに特別な銘菓を作ってから、裏黒井モールと共に全国展開、か。
今日は艦娘との会議だな。

食品担当、鳳翔。
技術担当、明石。
財務担当、霧島。
外交担当、翔鶴。
魔術担当、時雨。
主な会議のメンバーはこんな感じだ。
まず、最初に口を開いたのは鳳翔。
「黒井モールで販売する銘菓ができましたよ！ドラゴンの卵で作ったバームクーヘンに、黒井鎮守府のイメージカラーである黒！ということで、黒いチョコレートで外側をコーティングしました。名付けて、『黒井バウム』です！」
ほーん。
みんなで食べてみる。
「お、美味い！」
「美味しいね」
「バッチリです！」
評判は上々だ。
「それと、戦艦の焼印を押した『戦艦煎餅』もどうぞ！」
「うん、美味い」
「中々だね」
「売れると思いますよ！」
と、そんなこんなで……。
鳳翔から、食品関係の売れ行きなんかを聞いて、次の議題。
「明石です。黒井鎮守府製の機動兵器、各国で大人気です！」
ほーん。

「特に、量産型ヒュッケバインＭｋ―ＩＩが売れてますね！製造ラインを三倍に増設したくらいですよ！」
「どこに売った？」
「あからさまなテロ組織でもない限り、どこにでも売りますよー。まあ、量産型ヒュッケバインＭｋ―ＩＩは欧米に売れてますね！特にアメリカは、三百機も買ってくれました！」
「ああ、そういや、アメリカでは量産型ヒュッケバインＭｋ―ＩＩを正式採用機にするとか言ってたっけ？」
「はい！それと、ドイツには量産型ゲシュペンストＭｋ―ＩＩが売れました！五十機くらい。島国のイギリスにはリオン系が売れましたねー、航空機の代わりに使うみたいですよ」
　ほーん。
「最近は、なんか知りませんけどエアロゲイター？とか言う宇宙人みたいなのが攻めてきてるみたいですから、どの国も機動兵器を欲しがってるんですよー！いやー、儲かりますねー！」
　そうなの？
　よく分からないけど、うちの兵器が売れるのは良いことだ。
　儲かるのは良いことだな。
　うちは既に、林檎のコンピュータ屋さんも、熱帯雨林の通販屋さんもとっくに追い越して、世界一のメガコングロマリットになっているからな。
　その上、戦争特需で兵器開発業は儲かる儲かる。
　え？
　戦争なんていつもやってるじゃん？
　いや、中東の紛争とかじゃなく、定期的に敵性宇宙人が攻めて来たり、古代兵器が蘇ったり、怪獣が現れたりするしさ……。
　もうね、毎年だよ？
　俺には関係ないからここに描写してないだけで、昨日も怪獣が現れて、日本のスーパーロボットが抹殺したとか、そんな話があったんだよ。
　最近はなんだか、グアムの方に次元の裂け目ができて、そこから怪

獣が湧いてるらしいな。
　でもまあ、この世界ではよくあることなので、誰も気にしないのだが。
　まあ、そのおかげで、うちのパーソナルトルーパーやアーマードモジュール、その他スーパーロボットもガンガン売れてるから、逆に助かってるんだが。
「他にも、量産型アシュセイヴァーが中国に、日本には量産型グルンガスト弐式が売れましたね」
　売れまくってるなあ。
「昨日の宣伝が効いたのか、各国から追加注文もありましたよ！」
「宣伝？何したの？」
「あれ？報告してませんでしたっけ？昨日、太平洋沖から現れた怪獣を、うちの製品で殺したんですよ」
　ほへー。
「報連相、ちゃんとしよう！」
「すいましぇん」

「それで、こちらからは、黒井モールの全国展開を考えて欲しいと……」
　霧島が言った。
「良いよ、好きにやっちゃってオーケー。但し、産業スパイには十分注意すること。うちの機動兵器の技術とか、漏れたら百パーセント悪用されるんだからね」
「了解しました」
　さて、話はこんなもんか。
　解散、と。

「ぬいぬい～」
「不知火です」
「今日も働いたから疲れたー、ナデナデシテー」
　ファーブルスコファー。

モルスア。

４９４話　久し振りのバトル

「て言うかさー、君ら、陸の仕事ばっかりで、深海棲艦倒してなくね????」
ボブは訝しんだ。
「そんなことないですよ？」
大淀はそう言うが、最近は深海棲艦の数が減ってると思う。
これはどう言うことだろうか？
「適当な話の通じる深海棲艦をシメたところ」
「シメたの?!」
怖……。
「はい、シメたところ、深海棲艦にも波があり、一斉に攻める時と、力を蓄えるため静かになる時の２パターンがあると言っていました」
「なるほど、じゃあ今は、隠れて力を蓄えているんだね」
「そうですね。しかし、予想だとそろそろ大攻勢を……」
Ｂｅｅｐ！Ｂｅｅｐ！
サイレンが鳴る。
『鎮守府放送、鎮守府放送。太平洋側に一万を超える深海棲艦が集まっています。全戦力緊急出動してください』
ふむ。
「じゃあ、行こうか」

あちゃー、運が悪かったね。
いや、深海棲艦側が。
今回は、艦娘が殆ど残ってたんだよ。旅行フリークの海外艦チームも、オタ系も、暗殺系も。
いやほら、コロナの影響であんま外出れないらしくて。
だから、今は、艦娘がたくさんいる。
こんな時に襲撃してくるとか、運がないなあ、深海棲艦。
えーと……、総司令官はいつもの戦艦棲姫に、集積地棲姫の改造キメラ深海棲艦が多数、それとレ級とネ級、深海鶴棲姫、護衛棲水姫、防空埋護姫と、豪華メンバーが揃っている。

『黒井鎮守府……!!!今日コソハ殺ス!!!』
戦艦棲姫が叫んだ。
「戦艦棲姫ちゃん、今日のパンツ何色ー?!!!」
俺が叫んだ。
『……貴様ハ、殺ス。艦娘ヲ一人一人念入リニ殺ス姿ヲ目ノ前デ見セテカラ、嬲リ殺シニシテヤル』
ぴゃー、怖い。
「まあ、うちも丁度今、コロナで仕事が少なくなってるし、深海棲艦の間引きもしなきゃだしね。いいタイミングだよ」
『殺ス!!!』
『全隊……、突撃!!!』
俺と戦艦棲姫が叫ぶ。

さあ始まりました、艦娘と深海棲艦の殺し合いグランプリ！
艦娘の先鋒を務めますは、駆逐艦！
対するは、チ級改改！
穴の空いていないのっぺりとした仮面と、耳まで裂けた口。肥大化した右腕にはガトリングレーザーが二門。同じく巨大な左腕には成形炸薬弾魚雷管が四門設置されているモンスター巡洋艦だ。
これが、六千体くらい。
えっ、大丈夫？と思うかもしれないが……。
余裕だ。
睦月型がガトリングレーザーの弾幕をクイックブーストで回避した。
如月は、圧倒的な機動性で翻弄し、すれ違いざまにとっつき……、パイルバンカーをぶち込んでいく。
皐月が両肩のミサイルで深海棲艦をマルチロックオン。ミサイルが突き刺さった深海棲艦は爆炎に呑まれる。
文月が三百六十度にパルスキャノンをばら撒き、全てを焼き尽くす。これは、あの、一本一本付いている棒があるじゃないですか？あれが……、全部パルスキャノン。

三日月が超巨大メイスを振るえば、深海棲艦がまとめて数体、全身の骨が砕かれて死ぬ。

次は巡洋艦！

対するはレ級改改。

レ級改改は、人型ユニットを廃して、蛇のような、ドラゴンのようなユニットのみになっている。

目の部分にレールガン二門、口に大出力メガレーザー砲、鋭い爪を持つ化け物だ。

これが三千体くらい。

まあ、それも余裕。

経験値泥棒こと川内が現れ、深海棲艦をサクッと殺していく。

五十鈴がツインバスターでローリングバスターして深海棲艦が蒸発する。

大井と北上がスーパー雷巡キック。あいてはしぬ。

そして主力戦。

戦艦のエントリー！

対するは、量産型姫タイプ改改！

最も古いタイプの姫、南方棲戦姫のデータを元に作られた量産型姫タイプの改良版を更に改良したもの。

男女どちらとも判別できない奇形の人型で、頭には人間のような二つの目と、頭の横に更に目がついている。そして、口も耳元まで裂けていて、ギザギザの鋭い牙が並ぶ。

武装は手持ちの高周波ブレード二本と、レールキャノン六門、プラズマレーザー砲二門、対空パルスマシンガン十二門のモンスターマシンだ。

並の鎮守府では、この量産型南方棲戦姫改改に出会えば更地にされる。

これがおよそ千体。

だがまあ。

それも、まあ。
余裕なんですよね。
金剛が一秒間に１０回くらい蹴りを入れると、深海棲艦の全身の骨が砕けて絶命。
武蔵が殴ると、深海棲艦は文字通り弾ける。
長門は、迫り来るレールキャノンの弾丸を弾きながら、猛牛のように深海棲艦を吹き飛ばしつつ突進。
『ナンナンダ……、オ前ラハ一体ナンナンダーーーッ?!!!』
叫ぶ戦艦棲姫。
なんだと聞かれたら、まあ……。
武蔵を連れてくる。
「なんだかんだと聞かれたら」
「答えてあげるが世の情け」
「世界の破壊を防ぐため」
「世界の平和を守るため」
「愛と真実の悪を貫く」
「ラブリーチャーミーな敵（カタキ）役」
「ムサシ！」
「コジロウ！」
「銀河を駆けるロケット団の二人には」
「ホワイトホール白い明日が待ってるぜ！」
「もふっ！（ニャーんてな！）」
こんな感じかな。
『……!?!?!!』
「まあ?!俺コジロウじゃないんですけどねー」
『キ、貴様、舐メヤガッテ!!!』
「こいつは首輪付き。猫っぽいしニャースということで勘弁してほしい」
『死ネエエエエッ!!!!』
迫り来る戦艦棲姫だが……。
「ふんぬ！」

『グハッ!!!』
武蔵に殴られて吹っ飛ぶ。
「好きな声優は榊原○子さんだわ。まあ、林原め○みさんも好きだけどさ」
『ナンノ話ダ?!!!』
「雨○天さんなんだよなあ!!!」
望月がノってきた！
「高橋○依さんだよなあ!!!」
初雪もノってきた！
「花澤○菜さんだよねえ!!!」
秋雲もノってきた！
「榊原さんはもうおばあちゃんじゃん!!」
「なんだとコラー!!言っちゃならんことを!!」
……
……
……
「ん？」
あ、そんな感じで言い合いしていたら、深海棲艦が撤退してる。
『覚エテローーー!!!!』
あちゃー、逃しちゃったか。
まあ、また来たならまたぶっ飛ばせばいいしな。

４９５話　青葉のインタビュー！

ワレアオバ！
はい、と言う訳でしてね！
提督にインタビューをします。
何故か？
いやその……、黒井鎮守府内で発行している『黒井鎮守府新聞』が割と売れてて……。
確かに、黒井鎮守府新聞は、提督や艦娘へのインタビュー記事や、各地の戦況、黒井鎮守府とその関連企業の情報や、艦娘個人の戦績などが記載されているので、割と欲しがる人が多いんですよね。
黒井鎮守府は、アマゾンやらグーグルやらを超える超巨大財閥ですから、黒井鎮守府新聞はその会報みたいなものなんですよ。
最近は広告欄とかも作りましたから、かなり多くの人が買っている印象です。
ほら、月刊のお坊さん専門誌とか、釣り専門誌とかも売れるじゃないですか。
黒井鎮守府新聞も、最早新聞という名の雑誌ですから。
そんな訳で、黒井鎮守府新聞は、軍事、先端技術、経済などの分野に注目する人は確実に読んでるんです！あとは、サブカルなどの記事もあり、全体的にカオスですね！
因みに、記事は、私こと青葉と、相棒の衣笠が責任者になっています。
それでですね、インタビュー欄は結構な人気記事でして、毎週書いてるんですよ。
艦娘は実は、大抵は何かしらの分野に凄く詳しいんですよ。
明石さんなら技術、赤城さんなら食、妙高さんなら文学……。
アイオワさんはサバイバル術の達人ですし、陸奥さんは美術に詳しいです。
望月ちゃんはテレビゲームに詳しくて、長門さんはトレーニングに詳しいです。

鳳翔さんはもちろん料理に詳しくて、霧島さんは経済、時雨ちゃんは医学と魔術、熊野さんは美容とファッションなんかに詳しいんですよ。

そんな中でも提督は、『ありとあらゆる分野に対してそれなりに高度な知識を持つ』のです！

これは本当に凄くてですね、例えば、『未開のジャングルで通信機を落とした時どうすれば生還できるか？』みたいな話題から、『イギリスの政治経済についてイギリスの歴史を絡めて私見を述べる』みたいな話題まで幅広く対応しちゃうんですよ?!

『オススメのエロゲ』から『古代ギリシアの哲学思想』まで！

『食うとうまい雑草』から『高級フランス料理オススメ店舗百選』まで！

『ナンパテクニック』から『サイバー犯罪の歴史』まで！

本人は、「何でもは知らないよ、知ってることだけ」とか言ってましたが、超高度な専門分野でもない限り、大抵のことは知っています！

特に、考古学、言語学、史学、国際情勢、サバイバル術、料理には異様に詳しいですね！

まさに、叩けば叩くほどネタが出るネタＢＯＸ人間なんですよ、提督は!!!

はぁ……、失礼しました。

そんな訳で、今回も提督からネタを絞り出します！

ネタを搾ったあとは、提督の提督から白いのを絞ります。

さあ、インタビュー、行ってみましょうか！

では、提督、よろしくお願いします！

「はい、よろしくね」

そうですね……、今日の話題はギャンブルです！

「お、良いねえ、ギャンブル大好きよ俺」

今、ツイッターで話題の『連ちゃんパパ』というパチンコの漫画がありますが。

「いやー、まあ、たまにあのレベルのガチクズに会うこともあるんだけ

どね？流石に真似できないわ……」
そう言えば提督は、基本的に勝ちますもんね。
「まあね」
でもたまに、バカみたいな額負けることもありますけど、絶対に黒井鎮守府の運営資金や、艦娘のお金には手をつけませんよね？
「当たり前でしょそりゃ。俺は楽しみたくてギャンブルやってるのであって、人に迷惑かけてまでやりたいとは思わないよ」
あれ？意外と聖人……？趣味の範囲で、ってことですか？
「そうだよ。それに、パチンコは儲からないからヤダ」
お金、気にしてないんじゃ？
「大金を賭けてやるギャンブルのあのヒリつく感じがたまらないのよね」
あぁ……。
「でも、俺は、組織の金をちょろまかしたり、女の子から直接金を借りたりはしたことないよ？」
あれ？でも借金……？
「ギャンブルするから貸してくれと正々堂々土下座したに決まってるじゃん？」
胸を張って言うことですか?!!
「あとはヤミ金とかマフィアだよ？」
な、何でそんなことを？
「まあほら……、旅先で出会った美女に贈り物がしたくなった時とか、急に入用になるじゃん？」
か、借りたお金、全部、ギャンブルか女の人に貢ぐかしちゃってるんですか?!
「それ以外に金ってどう使うの????」
と、とても澄んだ目をしているっ……?!と、とにかく、パチンコはお嫌いだと？
「俺は基本、しょっぱい賭けはしない主義だから。うん千万円を高級カジノにブチ込んだり、超高レートマンション麻雀にぶち込んだりしてどかっと稼ぐのが面白いのよねー。金なんざスコアに過ぎないん

だよ」
割と狂ったこと言ってる自覚ってあります????
「俺は正常だよ」
はぁー、あたまおかしい……。
「みんな俺のことを変人だ、狂ってるって言うけどさ……、世の中にはもっとヤバい奴がたくさんいるんだよ？さっき言った、連ちゃんパパみたいな人間、マジでいるからな？」
は、はあ……。
「女子供を甚振って金を搾り取る奴、身内や恩人にすらタカる奴、結婚相手や親に保険金かけて殺す奴……。色んなクズを見てきたよ。それと比べれば、俺なんてただの人さ」
なんかカッコよくまとめたっぽくしてますけど、友人から金借りて女とギャンブルに全ブッパしてる自覚あります????
「まあほら……、それは……、多少はね？」
借金総額千億円超えてますよね？
「借金はスコア」
く、狂ってる……。今月のお給料どうしたんですか？
「陸奥ってドレス似合うよな！」
……使い切ったんですか?!!給料日昨日でしたよね?!!
「如月にアクセサリー買ってあげたんだ。可愛いよねえ！」
え？し、しかもアレですよね、提督のお給料は、艦娘みたいに、定額プラス任務達成により振り込みみたいな形じゃなくって、月一の給料日に定額が振り込まれる形ですよね?!!
「いやー、金剛にも可愛い服いっぱい買ってあげたんだよね！着てくれるかなー？」
い、いや、貯金とか、お金が急に必要になったらどうするんですか?!
「んー？えーとね、まずはそこら辺の不良やヤクザに募金してもらいます」
募金?!!
「そうだよ。なんか適当にけちょんけちょんにすればお金くれるか

ら」
なんか適当にけちょんけちょん?!?!?!!
「そして、その金を種金にして、カジノで勝ちます。すると、お金が増えます！」
え……、その、それは、良いんですか?!
「良いんだよ、負けるほうが悪いんだよそう言うのは」
ええー……。

と言う訳で、インタビュー完了です。
……うわあ、これを載せるんですか。

４９６話　青葉のインタビュー！　その２

ワレアオバ！
はい、と言う訳でしてね！
明石さんにインタビューをします。
実はですね、最近はなんだか、怪獣被害が多いんですよ。
ちょっと前までは、週に一回くらいのペースで怪獣が出ていたんですけど、今は二、三日に一度のペースで怪獣が現れてですね。
それだけじゃなくって、宇宙から敵性宇宙人のＡＩロボット兵器が降下してきているんですよね。
ですから今は、機動兵器の需要がかなり高いんです！
まあ、日本は、スーパーロボットの名産地みたいなところがあるんで、被害は少ないんですけどね。
例えば、故人ですが、兜十蔵博士が開発したマジンガーシリーズ。
早乙女博士が開発したゲッターシリーズ。
そのツートップに続くように、バルディオス、ダイターン、ライディーン、トライダーＧ７、ザンボット３、ボルテスＶ、ゴッドシグマ、ダイガード、ダンクーガ、ガオガイガー、マイトガインなど、殆どのスーパーロボットが日本に集結しています。
こんなにたくさんいて過剰じゃないか？と思われるかもしれませんが、二、三日に一度くらいのペースで怪獣が、ほぼ毎日敵性宇宙人が現れるので、仕事はたくさんあるそうです。日本は何故だかよく狙われますしね。
まあ、日本の総理大臣が剣桃太郎さんに代わった時点で大改革があり、国防費が跳ね上がりましたから、金銭的な余裕はあるそうですが。
あ、海外にロボットがいないのかといえばそうではなく、国際警察機構にはジャイアントロボが。
ロシア周辺ではアームスレイブやオーバーマンなどが見られますし、アメリカではバスターマシンが多く見られますね。
世界的にアーマードコアやＮＥＸＴなども多く、バルキリー、レイバーなどもよく見られます。

テロリストなんかは、安価なアームスレイブやレイバー、マッスルトレーサーなどをよく使いますね。
そんなこの世界で黒井鎮守府が提供するのは、量産型の機動兵器です！
アーマードモジュールやパーソナルトルーパー、グルンガストシリーズと呼ばれる機体群と、その整備ラインを世界中に売りさばくことにより、巨万の富を得ています！
死の商人とかそう言うのじゃないですよ？
むしろ、うちが機動兵器を売らないと、技術の劣る国は普通に滅びますからね？
いえまあ、確かに、援助はあります。
技術や武力が劣る国でも、怪獣や宇宙人が攻めてきたら、他の国が助けに来てくれるでしょう。
でも、その、助けが来るまでの数時間でどれだけの被害が出ますか？
怪獣が現れたら、街一つなんて簡単に消し飛びますよ？
確かに、弱い国が力を持つことは危険かもしれませんが、弱い国は滅んでしまいます。
私個人は別にどうでもいいんですけどね、人間がいくら死のうと、提督の隣にいれたらそれで幸せですし。
でもまあ……、人助けして金儲けができるなら、それに越したことはないと提督が言ってました。

さて、明石さん、よろしくお願いします。
「はい、よろしくお願いします！」
最近は怪獣や宇宙人の被害が多いですね。
「そうですね、異次元から攻めてきてるらしいから、しばらくは怪獣騒ぎが続くと思いますよ」
黒井鎮守府からは、アーマードモジュールやパーソナルトルーパーを販売しているんですよね？
「はい！どれも自信作ですよ！」

どう言ったものか説明願えますか？
「はい！黒井鎮守府の機動兵器を作る上で、提督されたのは以下の三つの観点です」
三つの観点？
「まず第一に、生存性です！ある程度の被弾があっても戦闘の継続が可能で、特にコクピット周辺の装甲についても指示がありました」
はあ、それは何故ですか？
「パイロットの損耗率を下げるためです。物量を投入して、数で圧殺しようとする宇宙人のＡＩ兵器、絶え間なく現れる怪獣。そう言った存在に対して、パイロットを使い捨てにしていては、こちら側が保ちません。脱出装置などを取り付けて、まず何よりもパイロットの損耗を防ぎます！」
なるほど！パイロットの方がロボットより大切なんですね！しかし、そうなると、ＡＩ兵器では駄目なんですか？
「ＡＩ兵器では、ハッキングの恐れがありますからね。多くの、日本のスーパーロボットと同じく、黒井鎮守府の機動兵器は、外部からの操作を受け付けないようになっています」
なるほど、なるほど！信用できるのはあくまで人ってことですね！
「次に、継戦能力です！外部からのエネルギー供給がなくとも、長期間にわたって作戦行動が行えることですね！」
ふむふむ、それは大切ですね。
「主動力に核融合炉などを搭載しており、外部からのエネルギー供給がなくとも長い間戦えます！何故、継戦能力が大切かと言うと、やはりこれも、敵性宇宙人の物量に対抗するためですね！」
なるほど！
「そして最後に、操作の簡単さです！」
おお、それももちろん大切ですね。
「世界各地のロボット兵器の戦闘経験を統合した特殊なオペレーションシステムにより、練度の低いパイロットでも、システムの補助により、一定の戦果を上げられるようにしました！」
やっぱり、パイロットの損耗が多く、新米のパイロットも早く実戦

投入されたりするんでしょうか？
「それは国によって違うでしょうから、何とも言えませんね」
　でも、初心者でも扱いやすいってことは、逆にベテランには使いづらいとか？
「そんなことはありませんとも！初心者のパイロットには大きく補助をしてくれますが、操作に慣れたパイロットには、自分で様々な新しい機動を行うように設定することもできます！誰でも使いやすいことがコンセプトですからね」
　なるほど。
「因みに、操作の難易度は精々ヘリコプター並みです。そして、このＯＳをそのまま使ったシミュレータも販売していますよ！ゲーム機としても使えるので、一台いかがですか？」
　おお、突然のステマ！では、オススメの機体は？
「私としてはやっぱり、グルンガストシリーズですね！お値段の方は結構高めなんですけど、巨大怪獣や巨大兵器に対抗するとなるとやはり、スーパーロボットという選択肢が最適ですから」
　なるほど！

　その後も、明石さんに、黒井鎮守府の機動兵器のステマをされた。
　なお、このインタビューを発表した後、機動兵器の注文が増加したらしい。

４９７話　青葉のインタビュー！　その３

ワレアオバ！
はい、と言う訳でしてね！
時雨ちゃんにインタビューをします。
何故かと言いますとですね……、黒井鎮守府で発行しているこの会報雑誌、データで買った場合は特に何もないんですが、物理的な雑誌媒体で買ったとき、ある仕掛けをしてあるんですよ。
その仕掛けとは、黒井鎮守府製特殊インクです！
この特殊インクは、魔力やマグネタイトに反応して文字や画像を入れ替える形式になっているのです！
つまり、火で炙ると文字が読めるようになる暗号手紙……、のような要領で、魔力やマグネタイトに反応して、本文の内容が変化するのですね。
その内容は、裏社会の情報雑誌。
例えば、新しい魔術の論文の抜粋紹介、悪魔達との交渉でのトレンドについて、裏黒井モールのセール情報や新型武器の紹介、宇宙人社会などの動向についての我が社の見解などなど。
紙面にマグネタイトや魔力を流せばあら不思議、裏社会の存在に向けた情報誌になるのです！
内容は主に、デビルサマナーや、魔術使いに陰陽師、鬼、対魔忍など、その手の人間に向けた情報雑誌となっています。
その他にも、デビルサマナー御用達のＤＤＳ・ＮＥＴなどにも、裏黒井鎮守府新聞は掲載されていますよ。
有料会員はバックナンバーも読み放題！月８８０円（税込）から！
さて、具体的に何が有用なのか？と言いますとやはり、『異界の攻略情報』ですかね。
黒井鎮守府は、下部組織のデビルサマナーを使って、各地の異界を調査しています。
そして、各地の異界の中でも割りのいい異界の攻略情報……、例えば、現れる悪魔の種類、弱点、トラップの有無、拾える道具などなど

を簡潔にまとめてあるんです。
その他にも、異界の品や黒井鎮守府の武器の通販もやってます！
オススメの異界の攻略情報と、その異界で使える道具のクーポンを載せておくと、かなり売れますね！

では時雨ちゃん、よろしくお願いします。
「うん、よろしく」
今回のインタビューですが、内容はほぼいつものコラムみたいな感じでよろしくお願いしますね！
「うん」
えーと、それでですね、なんでも今回は、福島県に新しい異界が見つかったとか？
「そうだよ。今回の異界は大型だね。場所は南会津の会津駒ケ岳という山にあるんだ」
はあ……、あまり地理には詳しくないのですが、そんな山があるんですね。
「そこの南側に異界の入り口があるのさ。後でもっと詳しい位置を書くから、それを参考にして異界に入って欲しいな」
それで……、どのような特徴がある異界なんですか？
「出現する悪魔は地霊、妖精、妖獣、妖鳥、妖樹、妖虫と極めて多彩だね。難易度的には中級者向けかな。回復の泉が多数存在しているから、レベル上げと仲魔集めに最適だよ」
中級者向け、というとどのくらいですか？
「レベル５０くらいかな」
レベル５０ですか……。ゲームだと、レベル５０もあればラスボスも倒せますよね。
「この世界もゲームみたいなものさ。まあ……、レベル５０で中級者と言うのは真実で、この世界は平均レベルが異様に高いんだ」
そうなんですか？
「色々と異世界に行った経験があるから言わせてもらうけど、この世界は異常だよ？デビルサマナーの量と質は他の世界の二、三倍。科学

技術に至っては五百年以上先を行っているし、宇宙人とのやり取りもあり、神秘も神代に劣るけど近いくらいには高い……」
　つまり？
「そうだね……、青葉さんにも分かりやすく伝えるとするならば、他の世界はＨ２なのに、この世界はドラベースだった……、みたいな感じかな」
　他の世界はウイニングイレブンなのに、この世界はイナズマイレブンだった、みたいな感じですか？
「他の世界は信長の野望なのに、この世界は戦国ＢＡＳＡＲＡだった、みたいな感じだよ」
　ふむ……、そんなヤバいんですかこの世界？
「ヤバいね。世界に一つで充分なレベルの厄ネタが、河原の石が如くその辺に転がっているんだから。スカスカのジェンガみたいなバランスで成り立つこの世界、ヤバくない訳がないよね」
　はあ……、そうなんですかねえ？
「そうだよ。さて、話を戻そう。この会津駒ヶ岳異界だけど、多彩な悪魔と豊富な回復の泉が特徴で、中級者向けだね」
　はい。
「異界マップと出現悪魔については、まとめてあるから資料を見て欲しい」
　では、オススメの悪魔とかは？
「この異界では、そうだね……、僕のオススメは地霊：ティターンだ」
　その心は？
「やっぱり、物理耐性持ちが嬉しいね。これと言った弱点もないから、盾役としてバッチリ活躍してくれるよ」
　なるほど！
「デビルサマナーは大体人間だから、脆いんだよね。術師が盾役の使い魔を置くのは当然の備えだろう？」
　確かにそうですね！私達艦娘は、戦艦の主砲が直撃しても死にませんけど、人間はすぐ死にますからね！
「まあ……、世の中には、『鬼』みたいな、近接戦闘が異様に強い術師

もいるけどね」
鬼？
「ああ……、猛士と呼ばれる組織で運用される超人達のことさ。その名の通り、鬼のような姿に変じて戦うんだよ。分類的には修験僧系の術師だね。提督的には『仮面ライダー』らしいけど」
はあ。
「彼らは、悪魔のことを魔化魍と呼称して、平安時代頃から悪魔と戦い続けてきたそうだよ」
平安時代……、と言うと、初代葛葉の……？
「そうだね、僕達独自の調査によると、平安時代前からも、悪魔と人類の戦いは多くあったんだ。でも、平安時代頃には各国の組織が纏まって、平安京と言う王の城と街ができて、古代から中世へと入り安定化したから、この頃から段々と、霊的組織が結成されていったんだ」
因みに、魔化魍は悪魔と何が違うんですか？
「うーん……、そうだね。魔化魍も広義では悪魔の一種だね。悪魔とは人外の総称だから。広義で言えば僕らも悪魔だよ」
へえ、そうなんですか。仮面ライダーと言うのは？
「科学、若しくは神秘にて、『変身』する超人のことだね。ある種、これらも悪魔と言えるかもしれない。仮面ライダー達は、オルフェノク、魔化魍、グロンギ、ファンガイアなど、悪魔の一種とも言えるような怪人と戦う、秩序側の存在さ」
ってことは、こっち側ですか。
「だね。半人半魔や超人が多いし、戦闘能力的には艦娘にも匹敵すると思うよ」
へえ、それは凄いですね！人間にしてはやりますね！
「仮面ライダーは各地に散っているから、基本的には、個人個人の力で戦うもの。だから、そこまで怖い存在じゃないんだけど……、有事の際には、どこからともなく集まってくるのさ」
なるほど、典型的な正義のヒーロー、と。
「一瞬だけなら時間を超えられる仮面ライダーもいるからね」
それは強いですね！

「まあ、白露型もできるけど」
あっはい。
「とにかく……、世界には、ヤタガラス以外にも、組織的な活動をする超人団体は多いんだ」
そうなんですね。
「これを読んでいるデビルサマナーなどの関係者の諸君は、色々な組織とは付かず離れずの関係くらいでちょうど良いと思うよ。決して、過激派にはならないように」
はあ、それはまたどうして？
「僕達の仕事が増えるじゃないか」

今回の売り上げも上々！
異界の攻略情報は売れますね！

４９８話　青葉のインタビュー！　その４

ワレアオバ！
はい、と言う訳でしてね！
外部組織の猛士にインタビューをします。
前回、時雨ちゃんのインタビューの時にチラッと話されたと思うんですけどね？
ええと、鬼という超人が所属する組織だそうです。
表向きには、ＴＡＫＥＳＨＩというＮＰＯ団体で、アウトドアグッズの販売などを行っているそうですね。
今回は、黒井鎮守府の闇の繋がりをフル稼働して！
……ジョーダンですよ！普通に、提督の人脈パワーと、黒井鎮守府の交渉パワーで、インタビューの許可が降りたってだけです。
悪いことは誓ってやってませんよ。
じゃ、行くよガサ！メモよろしく！

はい！今回は、時代の陰に生きる『鬼』を擁する組織、猛士にやって参りました！
葛飾区柴又にあるこの甘味処『たちばな』こそ、関東の鬼の本拠地だそうです！
本部は奈良にあるそうですよ。
さあ、入ってみましょう！
こんにちはー！黒井鎮守府でーす！
「はーい！」
猛士の一員である女性に、別室に案内されました。
そこで待っていたのは、三十代くらいの男性です。
結構渋いおじさんですね。
「こんにちは」
はい、こんにちは！
「黒井鎮守府のとこの子かい？」
はい！

「俺は……、ヒビキだ、よろしくな」
よろしくお願いします！
にしても、変わったお名前ですね。
「ん……、ああ、これはいわゆる、コードネームみたいなもんさ」
なるほど……。
「それで、インタビューって聞いたんだが」
ああ、はい！今回はですね、猛士と鬼についてお聞きしたいんですよね！もちろん、デビルサマナーなどの裏社会向けに限定公開する予定なので、一般社会にバレることはないです。
「うん、それなら良い。それで、何が聞きたいんだ？」
そうですねえ、まずは猛士の歴史を軽く。
「猛士の歴史か。歴史は……、まあ、かなり古いな。千年以上前、平安時代頃には原型ができていたそうだ。元は修験道関係の人間が興した……、と言われている」
なるほど……。ですが、何故、ＮＰＯ団体なんですか？魔化魍とか言う化け物を倒すんですよね？営利団体としてやっていけると思いますけど。
「まあ、そうだな……、理由は大きく二つある。一つは、戦国時代頃に、鬼達が大量に戦に駆り出されて、大きく数を減らしたからだな」
つまりは、鬼を兵器として扱われる可能性がある以上、政府とは関われないと？
「そうだ。お金をもらって魔化魍を退治する……、つまり、お金をくれる人の言うことを聞かなきゃならなくなる。それじゃあ、無辜の人々を守るという鬼の信条に反するんだよ」
そうですか……。
「そして二つ目。情けない話だが……、ヤタガラスに勝てなかったのさ」
勝てなかったとは？
「ヤタガラスは政治的手腕に長けていたんだ。今は弱体化しているが、明治くらいまでは政府の中枢に居座り、予算も下りていたそうだ」
なるほど、猛士は政治ができなかったと。

「ま、それだけじゃなく、葛葉の強さに圧倒されたってのもあるさ。俺達鬼は、魔化魍を浄めるのが専門だから、他の悪魔は得意じゃないんだよ」
確かに、噂によると葛葉は、日本刀と拳銃だけで、どんな強大な悪魔も調伏するとか。
「そうだ、葛葉は強い。それに、今でこそ大幅に弱体化してはいるが、過去のヤタガラスは本当に強かった。人員も、政治的な手腕も、単純な武力も」
では、政治に関わると、そんなヤタガラスと競い合うことになるから、猛士は一歩引いて、草の根運動みたいな組織になったと？
「まあ、そんな感じ」
なるほど……。では、次に、猛士の活動内容について教えてもらえますか？
「表向きはＴＡＫＥＳＨＩというオリエンテーションのＮＰＯ団体として、キャンプ用品の販売などをしているが、裏では魔化魍の退治をしている」
悪魔の一種である魔化魍の退治をしているんですね！
「ああ。鬼は日本各地にいて、人数は二百人くらいかな？だが、猛士の構成員は万を超えるほどいるな」
へえ、何をやっている人なんですか？
「猛士の構成員は、何も直接魔化魍と戦う鬼だけじゃない。鬼を運用する司令官、鬼のサポート役、そして、各地に散って魔化魍の情報を集める役……、色々いるんだ」
なるほど！組織として洗練されていますね！流石は、千年の歴史を持つ秘密結社、ってところでしょうか。
「いや……、最近は秘密結社って感じでもないさ」
はい？それまた、どうして？
「お宅んところの旅人のコネでな、色々な国防関係者から寄付金がかなり集まっている。あの、剣桃太郎総理大臣も、個人的に寄付してくれたよ」
そうなんですか。

「さっきも言ったが、猛士は政治とは距離をおきたいんだがな。でも、倒しても倒しても魔化魍は現れて、魔化魍以外の様々な悪魔も現れる。どこも、手が足りていないらしい」
ヤタガラスとか超ブラック企業と聞きますね。
「鬼は、鬼に変身すると肉体に大きな負担がかかるから、休みは多くもらっているんだが……、それでも、忙しいな。最近では専門外のファンガイアやオルフェノクすら狩っている始末だ」
どこも忙しいのは一緒ですね……。では、最後に、魔化魍への対処法について教えてください。
「魔化魍は、ええと、なんて言ったか……、そう、デビルサマナー達の言うところの、『破魔』属性にかなり弱いんだ」
破魔に弱いんですか。
「そうだ。俺達鬼は、魔化魍を倒すときに、楽器を模した道具を演奏して、『清めの音』を放つ。どうも、この清めの音は、デビルサマナーの人達が言うには、超強力な破魔属性らしい」
じゃあ、魔化魍が出そうな山奥とかでは、破魔属性の武器を持っていった方が安全ってことですね！
「ああ、そうだな」

おお！今回もたくさん売れました！
あまり情報がなかった猛士の話ですからね！
読みたい人はたくさんいたってことでしょう。
余談ですが、この記事の公開後、猛士へ参加してくるデビルサマナーが増えました。
猛士も、鬼のサポート役として、デビルサマナーを雇うことが増えたそうです。

４９９話　青葉のインタビュー！　その５

ワレアオバ！
はい、と言う訳でしてね！
外部組織のヤタガラスにインタビューをします。
前回は、修験道系の退魔組織である猛士にインタビューしましたね。
今回は、陰陽道系の退魔組織であり、かつて日本を裏から操っていた、とも言われるほどの組織、ヤタガラスに潜入インタビューです！
ヤタガラス……。
平安時代に作られた陰陽寮を祖とする組織ですね。
あの安倍晴明を頂点として結成され、日本という国に害をなす悪魔や、悪魔を操る組織を陰ながら始末して、日本の霊的な秩序を守ってきた組織です。
明治ごろまでは、敵対国家の政府高官の呪殺なども請け負っており、国家の中枢まで食い込んでいた巨大組織だったのですが、十年くらい前の政権交代の事業仕分けにより予算を百パーセントカットされ、見るも無残に弱体化しました。
それが最近、歴代最高の総理大臣と名高い剣桃太郎総理の手により、再び予算を配分され、再建しつつあるそうです。
しかしそれでも、規模や戦力は全盛期の五分の一から三分の一とも言われるほど小さくなっており、依然として油断はできない状態だとか。
私も、何かとデビルサマナーなどの裏事情と絡むことが多いので、基礎的な知識はあります。
多分、このインタビューの読者も、基礎的な知識はあるでしょう。
ですから、もっと突っ込んだ、裏事情とかを聞きたいですね！
しーかーもー！
インタビューに答えてくれる相手は、な、な、なんと！
あの、伝説の、葛葉ライドウさんですよ！
十六代目葛葉ライドウさんです！

ライドウと言えば、ヤタガラスの言わば核兵器です！
刀一本でマクロスくらい大きい邪神を三枚におろす化け物ですね！
当然、私レベルじゃ勝てませんね。
多分、黒井鎮守府でも、艦娘の中でも最高戦力と呼ばれるトップテンくらいしか相手にできないと思います。
ライドウさんの強さは、魔界に存在している神の本体にも届きうるそうですからね。
そんなライドウさんにインタビューできるなんて光栄ですね！
さあ、行くよガサ！

では、よろしくお願いします。
「よろしく」
黒猫を連れた黒マントの美男子……。裏社会の人間にしては目立ちませんかね？
「そうですね」
何故マントを？
「これは、退魔の力を込められた布でできているので、丈夫なのです。大砲でも破れません」
なるほど、防具ってことですね。さて……、では、最近のヤタガラスについてお話ししてもらいましょうか。弱体化しているとのことですが？
「明治ごろまでは、日本にはガイアーズやメシアンは殆どいなかった。それが、今では様々な組織が入り乱れている。ヤタガラスがどう弱体化したのかは、組織の一員として詳しくは話せないが、少なくとも、規模が収縮したのは確かだ」
ですが、最近は持ち直してきたとか？
「やはり、剣首相の尽力によるものだと思われる。予算がないのはあまりにも……」
前政権はそれほど良くなかった？
「前政権のありとあらゆる行動が、日本の弱体化に繋がった。もう二

度とこのようなことがないようにしてもらいたいと思う」
　私の勝手な印象なんですが、国を守るという使命に燃えた人なら、無給でも働けるんじゃないですかね？
「デビルサマナーも人間だ。霞を食って生きている訳ではない。皆、食っていくため、家族を食わせていくため、どんどん他所へ行ってしまった……」
　予算がもらえるようになっても、減った人員は戻らないってことですね？
「ああ……、葛葉四天王も、私とゲイリン殿を残して皆散っていった。それだけで、ヤタガラスの戦力は半減したと言えるだろう」
　なるほど……。では、ライドウさんとしては、今後の展望はどうするべきか、とか考えていますか？
「今後の展望か……。問題は全て、時間に解決してもらう他ないと思う。剣首相が総理の席に座って、予算を配分してもらえているうちに、ヤタガラスそのものが金策の手段を得るべきだろう」
　なるほど。
「幸い、戦力そのものは、黒井鎮守府隷下のデビルサマナーに任務を委託すれば確保できる。難敵が相手でも、かなり高額とは言え、艦娘を雇えば、葛葉四天王並の成果が期待できる。問題は本当に、時間をかけて足場を固めることだけだと思っている」
　よく分かりました。今は耐える時な訳ですね。ですが、そんなことを外部の人員である私に言っても良かったんでしょうか？
「構わない。ヤタガラスの……、いや、デビルサマナー業界全ての試算では、少なくともあと十年ほどは大きな戦いはないと思われている」
　それは何故でしょうか？
「実は……、二十年ほど前、そちらの旅人と、先代たる十五代目葛葉ライドウが協力して、最終戦争の勃発を防いでいてだな……」
　……はい？
「本来なら、二十年前に世界は一度滅んでいるはずだったんだが、その運命を旅人がねじ曲げてしまったのだ」
　……え？な、何やってるんですか提督は。

「自衛隊の五島なる人物がクーデターを起こして政府を転覆し、アメリカ大使トールマンに化けた魔神…トールが激突し、日本にＩＣＢＭが降り注ぎ滅亡する予定だった、だが……」
だが？
「旅人がクーデター中の五島に対して徹底的な妨害工作を行い、結果、クーデター軍は内部分裂により崩壊。トールマンは罠に嵌めて足止めしたところを、先代ライドウと共に封印し、ＩＣＢＭ発射装置を奪取。逆にＩＣＢＭ発射基地に対してクラッキングを行い、基地機能を損失させた」
うわあ。
「五島は、クーデター軍が崩壊したことによる混乱の最中に、乱闘に巻き込まれて死亡。トールは封印された後に先代ライドウの悪魔合体材料にされたそうだ」
な、なるほど……。
「因みに、当時の旅人は高校生だったらしい」
さ、流石は提督……。
「本来であれば、運命に選ばれし三人が解決すべきであった事件、これから来たるべし戦乱の世。全てをぶっちぎり、ことの元凶を抹殺した手練れ。まったくもって天晴れだと、私は称賛する」
ええと……、それで、起きるはずだった戦争が起きなくて、どうなったんですか？
「起きるはずだった大戦争が起きなくなることにより、マッカ、マグネタイトの相場は大暴落し、来るべき日のために揃えた悪魔は、維持できなくなり持て余し……。結果として、あらゆる組織が大打撃を受けた」
なるほど……。
「ガイアーズ、メシアン、ヤタガラス、全ての組織が破綻して、人が離れていった。戦争のために蓄えた力が維持できなくなった訳だ。故に、どこの組織もとにかく人が少ない。回復には三十年はかかるという試算だった」
ふむふむ、つまり、あと十年もすればまた戦争が？

「いや……、戦争は無理だろう。今は、ガイアーズ、メシアン、ヤタガラスの三組織を全て合わせたものよりも更に戦力も勢力も大きい組織が台頭しているからな」
　それは、やはり……？
「ああ、黒井鎮守府だ」
　そうですか……。うちってそんなに強いんですかね？提督はいつも、大きな組織から睨まれたらすぐにやられてしまう零細企業だと言っていますけど。
「それは旅人お得意の、異常なまでに過ぎた謙遜……、いや、臆病さから来るものだろう。旅人は、あれで、自分のことをちっぽけなただの人間であると思い込んでいる」
　ああ……、分かります……。
「断言しよう、旅人は、ヤタガラスの全てを敵に回しても平気で生き延びるだろう、と。あれは異常だ」
　そうですよね。
「絶対に死なない、囚われない、呪いも効かない、その上であらゆる能力が高水準にまとまった超人。それが、葛葉四天王クラスの部下数百人を指揮している。悪夢としか言いようがない」
　でも、流石に、それだけじゃあ……。
「配下のデビルサマナーはおよそ五百万人。下部組織の人数は三千万人を超えて、八十兆円もの資産を持つ組織に対抗できる組織がどこにあるのか、こちらが聞きたいのだがな」
　はえー、黒井鎮守府ってそんなことになってたんですか。凄いですね。
「何故他人事のように……？」
　え？いや、だって、私には関係ありませんからねえ。正直、私達艦娘は、同じ艦娘と提督以外は仲間と思っていませんから。下部組織への依存度合いが低いってことですね。
「……成る程。やはり、恐ろしいな、黒井鎮守府は……」
　と言う訳で、ライドウさんにインタビューしてきましたよ！

今回も結構売れました！
それで、最近聞いて知ったんですけど、この黒井鎮守府新聞って、下部組織に無料提供されてるみたいですね。
そもそも、黒井鎮守府に下部組織とかあったんですねえ。
提督が、深海棲艦騒ぎで職を失った海運業者や漁師の人達を雇ったって話は聞いてましたけど、まさか世界規模でやっているとは思いませんでした。

５００話　木曾可愛いよ木曾

「木曾にセクハラしたい」
「え、お、おう」
　最近は青葉が色々やっているみたいだがね、この物語の本質は、『ヤンデレ艦娘にセクハラすること』であるからにして。
　週一のペースで怪獣怪人が現れて街を破壊したり、ロボットがその辺を歩いていたり、デビルサマナーが悪魔を狩っていたりもするが、そんなものは全てサブストーリーである。
　メインストーリーは、艦娘の乳！尻！ふともも！を楽しむことである！
　世界の平和とかは守りたい人が守ってくれると思うよ俺は。
　俺の仕事は艦娘にセクハラすることだから。
「な、木曾」
「そ、そうだな？」
　いやほら、ぶっちゃけた話、世界平和とかどうでも良くね？って感じなのよね。
　ちゃんと世界を治めてくれるなら、誰が世界を支配しても良いよ俺は。
　むしろ、俺が世界征服しても良いよ？
　でも、世の中には、俺よりもっと上手に世界を治めてくれる人がいっぱいいるんだよね。
　じゃあそれで良いじゃん。
　微妙なバランスとは言え、今の世界は奇跡的に上手くいっているんだ。
　俺が横から手を出す必要はないよね。
「な、木曾」
「おう」
　はあーーー。
「隙ありっ！」
「うわ！」

木曾にセクハラ。
「あーーー、木曾可愛い！可愛い！結婚しよう！」
「お、おう……？」
ほっは、良い匂いしゅりゅ。
訓練後の木曾の甘い匂い。
「お、おい、お前な……」
「くんくん」
「やめろ、臭いから」
「良い匂いなんだよなあ……」
濃厚なメス臭だ。
「……こんな女のどこが良い？女っ気など微塵もないだろうが」
「は？」
は？
「いやいやいや、めっちゃ女っ気あるですわ……。出ておじゃれ、美女は匂いで分りまするぞ！」
「どこがだ？匂いなど……、俺は香水なんてつけた試しはないぞ？」
「女の子はなあ！何もしなくても良い匂いするんだよォー!!!!!」
少なくともこの世界じゃそういう設定なんだよ!!!!!
まあ実際、異性を惹きつけるフェロモンは汗を媒体に存在する訳だし、汗をかいている木曾がもうとっても良い匂いするのは当然ではある。
「いや……、俺は自分で分かるレベルで汗臭いぞ」
「なんだぁ？なんでそんなに自信なさげなの？なにか辛いことでもあった？」
「いや、そうじゃないが……、お前のように良い男には、もっと良い女がお似合いだろう。こんな、汗臭くて生傷の絶えない、女らしさのかけらもない女なんて……」
「それを決めるのは俺だ」
俺は木曾を抱き抱える。
「こ、こら！何をする！」
「まあほら、木曾もベッドの上では女になるってことを教えてあげよ

う」
「せ、せめてシャワーを」
「ン拒否するゥ……」
初夏！
クーラーオフ！
汗だくでの絡み合い！

「駄目だ……、こんなに愛されたら、俺は……??」
「んー？どうしたー？」
「駄目なんだ、お前のこと、どんどん好きになっていく。離れ、られなく、なる」
「良いじゃん、離れないで良いよー！ほら、ぎゅーっと！」

いやー。
あっちから攻められると逃げたくなるけど、逃げられると追いたくなるのが俺の悪い癖でね。
「……俺は、お前の道具だ」
「いやいや、お嫁さんだよ」
「駄目だ。嫁になど……」
「何で？」
「そんなことになったら、俺は弱くなる」
そうなん？
基本的に少年漫画だと、愛する人がいるとバフがかかるじゃん。
愛する友の眼差しが傷ついたり倒れたりする度に木曾を強くするんじゃないかな。
ラスト五秒の逆転ファイターかもしれない。
スパロボでも愛はバフだし。
アイジャストキープバーニングラヴ、愛の力を信じてるでしょ？
「駄目なんだ……、女になってしまったら、お前に勝利を捧げられなくなってしまう……！」
「勝利なんていらないさ。俺の人生は基本的に負けっぱなしだから

な。君が隣にいてくれればそれで良い」
負けに負けて、それからどうするのかを考えるんだよな。
「駄目だ。俺はもう、お前が傷つくところを見たくない」
えっ、ちょっと待って。
これ、ピロートークだよね。
ピロートークにしては重くない？
なんかこう……、こっちはそうめんの気分だったのに、いつのまにか二郎系ラーメンになってた、みたいな。
あるいは、どうぶつの森を購入したつもりが、中のソフトはホットラインマイアミだった、みたいな。
そういうのは良くないよ。
「俺は、決めたんだ。お前があの、アベルとかいう訳の分からない刺青男にバラバラにされてから、誓ったんだ。お前を守ると」
そんなん言われましても……。
「い、いや、そんなことしなくて良いから……（良心）」
「絶対に駄目だ」
「そんなん言ったら、俺が艦娘にバラバラにされてるのは良いんですかね」
「それだって、俺は止めたい！お前を傷つけたくない！だが、お前はそれで良いと……」
だって女の子に頼まれたらノーとは言えないんだもん。
「お前には、幸せになってもらいたいんだ。俺達艦娘を助けてくれた恩を返したい！」
「木曾がお嫁さんになってくれたら幸せだなー!!!」
「そうじゃない、俺は、お前の下の立場で、お前に奉仕したいんだ。対等にはなれない。なっちゃいけないんだ」
「なんでさ」
「お前は上官で、俺は兵器だ。兵器に心など……、ましてや、色恋など」
そういうこと言ってると「これが……、心か」とか言いながら死ぬ羽目になるぞ。
てかほら、恋は女の子を強くするでしょほら。

恋する女の子は無敵でしょ。
「俺は……、ああ、認めるさ、お前のことが好きだ。愛している。だが、そんなことばかり考えていてはならない。色恋は戦場に持ち出すべきじゃない」
木曾はこう見えて、熱血！魂！のように見えるが、その実、インテリ派で理詰めで動く。
ただ単に、黒井鎮守府に戦力があり過ぎて力押ししかしないだけで、本人はかなりの知能派だ。
月面でゲッターロボを作ってから地球に降下して来るタイプだな。
決して、京都には寺がいっぱいあるんだぜ、などと言うタイプではない。
「愛している、愛しているさ。だから、守りたいんだ」
「まもって守護月天」
「は？」
「いや、何でもない。さて……、まあ、そんな意見がある、と」
俺は顎に手を当て考える。
「えーと、つまり、のび旅人君が弱いままだと、木曾えもんは安心して未来に帰れないという認識でおｋ？」
「いや……、意味がわからんのだが……」
「よーし、待ってろ、今からジャイアンこと長門を倒してくる」
「何言ってんだお前（素）」
「まあ見てな」

～五分後～

「チクショーーーッ!!!!」
「ワハハ、今回は私の勝ちだな！お互いもっと鍛えねばな、提督！」
そこには、上半身がマットに埋まった俺が。
ウォーズマンかな？
「……よく分からんが、まあ、俺のために頑張ってくれたんだな」

「長門に勝てば、木曾も安心して恋ができるかと思って……」
「お前の気持ちはよく分かったさ。その気持ちだけでも嬉しいよ、俺は」
うーん……、まあ、何回も抱けば、木曾も絆されるでしょ。
見てろよ木曾えもん、絶対に籠絡してやるからな！
俺のこのビッグライトで木曾の通り抜けフープをいかんいかんいかん、下ネタはよくない。

５０１話　神州丸

さて……。

青葉がインタビューしたり、俺がセクハラしたりしている間に時は流れ。

時は流れている間にも俺は……。

「死ぃいいねえええええ!!!!!!」

「ほあーっ」

神州丸ちゃんに命を狙われていた。

三日に一度のペースで。

神州丸ちゃんなあ……。

普通に強いんだよね。

護衛の艦娘一人二人くらいからなら逃げ果せるくらいの実力はあるし、襲ってくるタイミングも、俺が外にいて護衛が少ない時のみと徹底している。

うちのあきつ丸が言うには、陸軍の手の者らしいが……。

みんなも知っているだろうが、日本は、第二次世界大戦でアメリカ率いる連合国側と引き分けており、陸、海、空軍は健在である。

その上で、陸、海、空軍とは違い、災害救助などの即応性を求められる任務に従業するのが自衛隊だ。

つまり、日本には、陸、海、空軍と、自衛隊の四軍隊が存在する訳だな。

え？そっちの世界では負けたのか？それは……、お気の毒に……。

こっちの世界では、広島と長崎に原爆を落とされたが、オハイオ、サンフランシスコ、マイアミ、デトロイトにメギドアークという万能属性広域破壊魔法をぶち込んで壊滅させて、講和になったぞ。

常識的に考えて、週一で怪獣怪人が現れるこの世界で戦争なんてやってらんないよね。

因みに……、日本は四軍隊と言ったが、それだけでは戦力が全然足りないので、聖帝軍、拳王軍、ＫＩＮＧ軍、帝国華撃団、対魔忍、ヤタガラスなどなど……。

いや、マジで戦力足りてないからね。
マジでやばい。
日本はとにかく、『個』の力があまりにも高くてだな……。
部隊単位では集まらないけれど、日本固有の戦力として、仮面ライダー、ヒーロー戦隊、スーパーロボット、光の巨人なんかが山ほどいる。
そして、独立した組織である黒井鎮守府は、年がら年中内ゲバしてる陸海空軍の内ゲバに巻き込まれてる。
お前もその仲間に入れてやろうってんだよ～！と言う訳だ。
余談だが、逆に、アメリカでは圧倒的な『個』は少ないが、圧倒的な『群』がある。
アメリカの陸海空軍はもちろんのこと、その隷下に、フォックスハウンドやグリーンベレーなどの優秀どころが揃っている。
Ｓ．Ｈ．Ｉ．Ｅ．Ｌ．Ｄ．、ジャスティスリーグ、アベンジャーズとかな。
中国ではグリフィンアンドクルーガーとか……、帝国の不可視の９番とか。
タスクフォース１４１や、ＳＭＳ、ＣＭＡなんてのもいたな。
アメリカ近辺はサイボーグ化技術が盛んで、人体そのものを強化する傾向にある。
逆にアジアでは、戦闘用アンドロイドに戦闘を任せて、人間は指揮をする……、と言う方向。
欧州では神秘による強化をする傾向。
日本は……、色々やろうぜって感じ？全部ミックス。
それでまあ、神州丸ちゃんはどうやら、陸軍のデビルサマナーみたいだね。
任務は、俺とあきつ丸の始末のようだ。
うーん。
うーん？
ちょっと真面目に説得してみるか。

俺は敢えて、一人で外出する。
そして、人気のない路地裏にわざと入る。
すると……。
「はあああああっ!!!」
刀を構えた神州丸ちゃんが現れた。
「おっ、釣れた釣れた」
俺がニヤニヤ笑う。ＮＴＲ系エロ漫画の竿役のように。
「何……?!」
神州丸ちゃんは、罠にかけられたと思って警戒する。
だが、もう遅い。
「空間閉鎖ァ!!!」
これは、いつぞやの、『セックスしないと出られない部屋形成装置』を利用した、空間閉鎖装置だ。
裏路地の出入口が黒い断層で塞がれる。
「何っ?!これは……!」
「タイマン張らせてもらうぜ！」
宇宙はこない。
さて……。
俺としても、いかに女性は殴らないとは言え、命を狙ってくる相手ともなれば抵抗はする。
暴力は振るわない、全力で守りに入る。
「男はいつでも！」
「はあ？」
「ドヤ顔フルハベル！」
そしてダブルシールド！
「ま、まさか……！」
「五分以内に俺を殺しなよ。さもなくば、十人の艦娘に包囲されるぞい！」
簡単な話だ。
ここを空間閉鎖して俺が全力で足止め。
その隙に艦娘が集まる。

十人の艦娘が集まれば、腕利きの神州丸ちゃんと言えども、逃げる事は不可能だ。
「卑怯者め！誇りはないのか?!」
「暗殺者にそんなこと言われても……」
「ぐぬぬ、それはそうだな……」
「まあ、俺を殺してみろ」
「良いだろう……、今日こそは引導を渡してやる!!」
「カモンベイベー！」
ハベル！
「はあああああっ!!!!」
神州丸ちゃんの強烈な兜割り！
「効かないよ！」
流石ハベルだ、なんともないぜ。
「ぜりゃあ!!」
マグネタイトの緑色の燐光が迸る。
やば、これは……、死ぬな。
「戦技！『岩の体』!!」
俺はハベルの大盾を構えて使う。
すると、俺の身体の表面に、魔法の岩が現れて、防御力を底上げする。
マグネタイトの残像を残す鋭刃の軌跡を身に浴びても、この岩が防いでくれる。
「ぐおっ」
しかし、衝撃だけは殺しきれず、俺は数歩、よろめいて退がった。
「はあっ！」
その隙を見逃さず、恐ろしく鋭い踏み込みと共に、突きを放つ神州丸ちゃん。
女の体重とは言え、およそ五十キロもの肉の塊が、鋭利な刃を構えて迫ると言うのは、大きな脅威である。
それは、生半可な速度ではなく、まるで砲弾のような、重さを伴う速さであった。

「おおおっ！」
その一撃を身に受けて、吹き飛ばされ、時空を塞ぐ断層の壁に叩きつけられる俺。
そこで俺は、ハベルの鎧の中で転移魔法を唱える。
ハベルを残して、だ。
神州丸ちゃんは、すかさず追撃しようと一歩前に出るが、そこに私はいません、気絶してなんかいません。
「……違う?!」
神州丸ちゃんも、一歩近づいた時点で、目の前で倒れているハベルの鎧が抜け殻だと気づいたらしく、後ろを振り向くが……。
「惜しいね、気付くのが一秒速けりゃ俺の負けだったよ」
「なん……っ!!!?!」
消火器のようなものを構える俺の姿が、神州丸ちゃんの目に映ったかどうか、という瞬間……。
「スーパー媚薬散布!!!」
俺は、酸素ボンベほどのタンクに一杯の媚薬ガスを散布した。
「ぬあっ?!な、何を……?!毒か?!」
などと、神州丸ちゃんが叫んだ。
煙が晴れて……。
「んっ?!あ、あひぃん♡き、貴様ぁ、何をしたぁっ♡」
「んスープァー媚薬ゥ……。通常、ほぼ毒物やウイルスの効かない艦娘に対しても、ド発情状態にさせるお薬である……」
「き、き、貴様……！毒などぉ♡」
神州丸ちゃんは、びっくりするくらい腰が引けていて、内股になり、いろんな液体を垂れ流しながら、刀を構えている。
だが、剣先はブレブレで、とてもじゃないが戦闘はできない。
「神州丸ちゃーん！」
「く、来るなぁ♡」
腕だけで振られた腰の入ってない剣撃を軽くいなして、神州丸ちゃんの腰を抱いた。
「ふーっ♡ふーっ♡ふーっ♡」

「やっぱり思った通り、可愛い顔してるねー」
「う、うるしゃい！見るなあ♡」
耳に息をふーっと。
「ひゃわあああ♡♡♡」
耳の穴を舐める。
「んひっ?!ひゃ、あ、だめ、だめえ！い、いくっ……♡♡♡♡♡」
あ。
ちょろろろ……。
「えーと……、まあほら、気持ちいいと出ちゃうよね！よしよし！」
「う、うわあああん！もう殺せえええっ!!!」

その後、神州丸ちゃんは、集まってきた艦娘に捕らえられ、黒井鎮守府まで護送されたとさ。
めでたしめでたし。

５０２話　特に山場はない

よしよし、では早速、神州丸ちゃんを説得していこうか。
武器と、仲魔の入った管を没収されて、お漏らしで汚れた服も脱がされ、無地のジャージとシャツを着せられた神州丸ちゃんは、艦娘二人の見張りの下、黒井鎮守府内に拘束されている。
もちろん、ギアススクロールで、黒井鎮守府から出られないようにしてある。
アダマンタイトの手錠で動きを封じられた神州丸ちゃんは、天龍、龍田に両脇を挟まれた状態で椅子に座らされ、黒井鎮守府の一室にいる。
そこに、あきつ丸が俺と共に現れた。
「神州丸……」
「あきつ丸！貴様！裏切り者め！」
暴れる神州丸ちゃんは、両隣の天龍、龍田に取り押さえられる。
あきつ丸が、恨みの籠もった視線を向けてくる神州丸に、憐むような視線を返す。
「……何故だ？何故、裏切った？」
「裏切るも何も、先に裏切られたのは自分の方であります」
あきつ丸は、事の次第……、陸軍、大本営に騙されて、捨て駒のスパイとして黒井鎮守府に送り込まれたことを話す。
「……ということで、自分は拘束されて、本来ならば始末されるところを、提督殿の温情で生かしていただいたのであります。そして自分は、その恩義に報いる為に、ここで槍働きをさせてもらっている次第であります」
「……う、嘘だ！そんなことは聞いていない！」
「言っておくでありますが、自分は、何度も神州丸に連絡をしたでありますよ？」
「本官のすまほには、そんな連絡……！」
俺が口を挟む。
「ああ、それなんだが、軽く解析させてもらったところ……、神州丸

ちゃんのスマホにはあきつ丸からの連絡をブロックするように、外部から設定を変えられていたぞ」
「な……?!そ、それは、本官のすまほに細工がされていたと?そんなの、信じられない！」
「手紙も出したのでありますが……」
「そんなもの、届いていないっ！」
「覚えていないのでありますか?いつか二人で、もっと旨いものが食べたいだとか、年頃の娘のように着飾って、遊んでみたいと語り合ったことを！」
「そんな話をした覚えはない！」
「神州丸……、本当は、気付いているのでありましょう?護国を謳っておきながら、国民たる提督殿の暗殺を依頼してくる大本営は間違っている、と……」
「……例え、例えそうだったとしても、我々兵士が裏切ることなどあってはならんのだ!!」
「裏切りなど……！先に裏切られたのはこちらでありますよ?!」
「あ……、いや、国家に忠を尽くさなければならない」
「だから……！その国家が間違っているのであります！」
「国家に尽くさねばならない」
うーん?
様子がおかしいな?
「ちょっと失礼」
俺は解析魔法を使う。
……あー。
なるほど。
「天龍、龍田、押さえててくれるかな?」
「「はい」」
艦娘にも効く麻酔薬を、神州丸に注入！
「時雨、『視えて』いるんだろ?ちょっと来てくれ」
すると、時空の狭間から、時雨がぬるりと出てくる。
「何かご用かな?」

「神州丸を『元に戻して』やってくれ」
俺がそう言うと、時雨は、神州丸ちゃんに解析魔法をかける。
そして、納得したかのような顔をすると、一言。
「一時間もらうよ」
そう言って、時雨は、神州丸ちゃんを抱えて、再び時空の狭間に消えていった。

一時間後。
さっきと同じように、神州丸ちゃんと、天龍、龍田、そして俺とあきつ丸が集まった。
「本官に何をした？」
俺は、神州丸ちゃんに、ステンレスボードの上の金属片を見せる。
「これが、神州丸ちゃんの脳に仕込まれていた」
「こ、これは……？」
「まあ、簡単に言えば、洗脳チップだ」
「そ、そんな馬鹿な！」
「検査の結果、暴力性や敵愾心の向上と、命令と国家への絶対服従が設定されていた」
「そんな、そんなはずは……！」
「じゃあ、もう一回説得してみようか」
俺は、あきつ丸を前に出す。
あきつ丸が口を開く。
「神州丸……、どうでありますか、具合の方は」
「……おかしい。さっきまで、お前達が大嫌いで、憎んですらいたと言うのに、今は何も感じない」
「自分のことは、思い出してもらえたでありましょうか？」
「ああ……、どうして今まで忘れていたのだろうか？『首輪』をつけられて、牢獄のような営舎に閉じ込められて、貴様と色々なことを語り合った……」
「神州丸……」
「本官は……、本官は、騙されていたのだな……」

そう言って、神州丸ちゃんは涙を一雫、流した……。

その後は、拘束を解いてやり、俺と話をすることに。

「で……、神州丸ちゃん？どうする？」

「はい、こうなってしまっては、最早、陸軍には戻れないであります。その、本当に厚かましいこととは承知の上ですが……、よろしければ、提督殿の黒井鎮守府の末席に加えていただけないでしょうか!!」

ふむ。

「じ、自分からもお願いするであります！神州丸は、洗脳される前は、誠実な艦娘でありました！必ずや、提督殿のお力になれるであります!!」

あきつ丸もそう言って頭を下げた。

「もちろん、それは、こちらからお願いしたいくらいだよ。これからよろしく、神州丸ちゃん」

俺は、神州丸ちゃんの手を握る。

「あ、ありがとうございます!!!」

５０３話　一ヶ月１万円生活

旅人の一ヶ月１万円生活！
「えー、黒井鎮守府のＹｏｕＴｕｂｅチャンネルに、面白い動画を投稿する為に、俺と艦娘の一ヶ月１万円生活をやろうと思う。まず、お手本がわりに俺が一ヶ月を１万円で生活してみせるから、よーく見ておけよ！」
「はい！」

一日目……。
『まず、増やすか』
そう言って、合法のカジノへ乗り込んで、１万円を１００万円に増やした。

「え？ちょっ、ちょっと待ってください。増やすのってレギュレーション違反じゃありませんか？」
と青葉。
「そんなこと、どこにも書かれてないだろ？」
「いや、増やすのアリだと、霧島さんや白露型、夕雲型の一人勝ちになりますよ？」
ふーん？
「じゃあ、増やすのはナシってことで」

二日目。
「節約する為に森で暮らそう」
ロケ用のマンションのブレーカーを落として、肥沃な北海道の森を目指して歩き出した。

「い、いや、だから……、レギュレーション違反では？」
「でも、浜〇も魚とりに海行ってたじゃん」
「森はアウトでは？」

三日目、北海道の森へ到着。
「しゃあ！」
その辺の木々を切って成形し、家を建てる。
家と言っても、小さなあばら屋だ。
原始人レベル。

「えっ、これもう、プリミティブ〇クノロジーじゃないですか！原住民兄貴じゃないですか！」
「良いだろ？」
「ダメです」
「あああああ」

四日目、狩り。
磨製石器を取り付けた投槍で鹿を仕留めて、黒曜石のナイフで解体。
鹿肉と野草を焼いて食べる。
余った鹿肉は、干し肉にする。
塩は、海水から魔法で抽出した。

「いや、魔法は駄目でしょう?!」
「え？そうかな？」
「魔法ありならヌルゲーになっちゃうじゃないですか！」
そうかな……？そうかも……。

五日目、魚とり。
『はあっ！』
勢いよく海に潜り、手製のモリで魚を集めた。
黒曜石のナイフで綺麗に魚をさばいて、一部を干して、一部を土器に入れて魚醤にした。
なお、魚醤は魔法で発酵させられて、一日でできる。

「人間社会での生活より、野生での生活の方が手慣れてるの、本気で怖いんですが……」
「いや……、そりゃあ、どちらかと言えば、社会より森で生きる方が楽だしなあ」
「現代人のセリフじゃないですよねそれ……」

飛んで八日目、熊との戦い。
『ガアアアアアアアッ!!!!!!!!』
『うおおおおおおおっ!!!!!!!!』
三十分に渡る死闘の末、熊を仕留める。
熊肉は、山芋と山菜と共に、昆布出汁と魚醤で煮込まれてスープにした。
余った肉や肝は乾燥させておく。

「おもむろにゴールデンカムイになるのやめてもらえます????」
「一時期、アイヌの里に厄介になってた時があるんだけどさ、アイヌって、子熊を育ててから、大人になったら殺して食うのよね。それをもらったことあるんだけど、アレは美味いぞ〜?家畜は、食べている餌で肉の質や味が変わるからな!しっかり育てられた熊は美味い!」
「提督、私は提督のことが本気で大好きで愛しているので、できればこんなこと言いたくないんですが……、貴方、頭おかしいですよね?」

十日目、森から出て、熊の肝や干し魚などを地元民に渡す。
それと交換で、野菜や調味料、卵などをもらう。

「森の民ロールプレイやめてもらえません????エルフか何かですか貴方は」
「こんなムキムキのエルフは嫌だなあ……」
「でも、やってることは完全に森の民ですよね」
「まあ多少はね?」

十二日目、木霊と触れ合いながら料理を作る。
狩ったウサギをさばいて細かく切り、米を土器で炊いて、卵と魚醤、玉ねぎを使って、親子丼もどきを作る。
木霊達にも、干し肉を分けてやる。

「えっ、えっ、ちょ、ちょっと待ってください……。アレ、何ですか？」
「ん？ああ、木霊だよ。古い森によくいる、妖精さんみたいなもんだよ」
「えっ、は？そんなのいるんですか？」
「いるよ」
「ま、まあ、それは良いとして、何で馴染んじゃってるんですか？」
「よくあるよくある」
「ええー……」

十三日目、森に現れた魔化魍から、木霊達を守る為に戦う。
『キシャアアアッ!!!!!!!!』
『うおおおおっ!!!!!!!!』
『『『がんばえー！』』』
一時間に渡る死闘の末、魔化魍を退治した。
しかし、傷は深く、丸一日の休息が必要になった。

「いや……、だから、突然に番組が変わるの、やめてもらえませんか????」
「よくあるよくある」

十五日目、魔化魍に壊された小屋の修復。
木霊達が手伝ってくれたおかげで、見事なツリーハウスになった。

「幻想的ですね」
「まれによく見る展開だな」

十八日目、森の守り神と邂逅。
『あなたがこの森の神か』
『……』
『そうか……、わかった。あと十二回、陽が沈むまではこの森に滞在する予定だったが、そうとあれば力を貸そう』
『……！』
『いや、礼はいらない。短い間とは言え、森に住ませてもらった礼だ』
守り神は、鹿の角を生やした、白い衣を纏う白髪の美女の姿だった。
「だから……、さっきから番組が乱気流のように変わってるんですよね？」
「これくらいよくあるだろ？森に住んでれば、守り神と会うだろ、普通は」
「普通の人間は森に住みませんし、守り神にも会わないんですよォ……!!!」

二十日目、とろろご飯を食べる。
二十一日目、味噌鍋を食べる。
二十二日目、山菜かゆと川魚を食べる。
二十三日目、木霊と一緒にポトフを食べる。
二十四日目、木霊と森の守り神と一緒に山菜うどんを食べる。

「何やってんですか」
「いや、来るべき決戦に備えて、体力をつけてるんだよ」

二十五日目、決戦に向けた準備を始める。
投槍、弓矢を用意して、人里から貰ってきた紙に、自らの血液を使って魔法陣を描く。
また、周辺に大量のトラップを仕掛ける。

「一体何が始まるんです？」

「第三次世界大戦だ」

二十七日目、狂える荒神との決戦。

『オ、オ、ロ、ロロロロロロロロロ……!!!!』

『うおおおっ!!!!』

『……!!!!』

『『『がんばえー!』』』

腐った鹿のような姿の荒神を、トラップと魔法で足止めして、身を挺して森の守り神の盾になり、力の限り戦った。

丸一日に及ぶ戦いの果てに、荒神を封印することができた。

「だから……、だから本当にもう、何やってんですか????」

「え?何って……、森の守り神と一緒に、荒神から森を守っただけだが?(なろう)」

「何ですかそれ?外出たらすぐトラブル起こすのやめてもらえません????」

三十日目、最終日。

森の守り神と、木霊達と共に戦勝を祝って宴会。

「何ですかね、これは」

「いや、しょうがないだろ?守り神様、美人だったし。森に住ませて貰った恩を返したかったし」

結論。

「お金を増やす、魔法を使うの二つはレギュレーション違反ですね」

「そうか……」

「でも、これはこれでめちゃくちゃ面白い映像なので、アップします」

「やったぜ」

５０４話　違うんすよ……、作者の好みなんすよ……

俺はバカだから難しいことはよくわかんねえけどよお……、長門みたいな腹筋バキバキの長身マッチョお姉さんが甘えん坊さんになったら、ギャップでめちゃくちゃ可愛いんじゃねーのか？

と言う訳で長門を呼び出す。

「どうした？何用だ？」

「おいでー」

俺は、両手を開いてみる。

「む？ふむ……、えい」

一瞬、考える素振りを見せたが、すぐに俺の胸に飛び込んできた長門。

かわいいね。

「えへへ……♡」

とてもかわいいね。

俺は、長門を抱きしめて、頭を撫でる。

髪がさらさらで、撫でているこっちが逆に気持ちがいいくらいだ。

さて……、では、どうするか。

そんなことを考えていると……。

『聞こえますか……、提督、聞こえますか……』

はっ、明石?!

『こんなこともあろうかと、幼児退行光線を用意しておきました……』

なるほど……。

でも、強制的にそう言うことやるのは良くないんじゃないかな。

『照射します』

えっ。

ビビビビー!!!

「んにゃあ?!!」

「なっ、長門ぉーーーっ!!!」

すると……。

「……おとたん♡」

長門が、肉体はそのまま、精神だけ赤ちゃんになってしまった！
なんてことだ、なんてことだ……。
「おとたん、ちゅうー！ちゅっちゅ！」
俺にひっついてキスしてくる長門。
とてもかわいいね。
こうなっては仕方がない。
長門は俺があやさなければ。

おむつ、よだれかけ、おしゃぶり。
その他は全裸である。
おむつは大人用。
よだれかけは大人用……、つまりは、変態プレイ用のもの。
え？何でそんなもんを持っているのか？いや……、なんか、赤ちゃんプレイをやりたがる艦娘もそこそこいるんだよ。
もちろん、艦娘が赤ちゃんになる側なのだが。
君達が幼児退行していくのか……（困惑）。
おしゃぶりは、今回明石から届けられた特注品。
普通のゴムでは、長門の強烈な咬合力の前では、綿飴のように噛みちぎられてしまう。
なので、うちで販売している機動兵器に使われているパーツである、『超硬ラバー』を使っている。
理論上、数百トンの咬合力でも耐えられる筈だ。
さて、どうだろうか。
「ばぶ～！」
お、大丈夫みたいだな。
腹でも撫でてやるか。
「長門ちゃーん、良い子だねー」
「あぶー♡」
おほー、腹筋バキバキ。
まるでハガネみてえだ。
「んぶ、あば、ぶー♡」

お、起き上がって俺に抱きついてきた。
ガチガチに鍛え上げられた鋼鉄のような肉体が俺に絡みつく。
「えへ、へへ♡」
俺に抱きついて頬擦りしてきた長門ちゃん。
かわいい……。
しかし、ここを見てほしい。
《旅人　ＨＰ：１０／１８００》
今の長門ちゃんの抱きつきの威力で、俺のヒットポイントの九割以上が消しとんだ。
恐らく、幼児退行の影響で、スキル：手加減を忘却しているようだな。
なーるほどー。
これ、野放しにしたら死人が出る可能性があるぞぅ。
命懸けであやさなければ、黒井鎮守府がドリフのセットみたいに崩れ去るのだ。
そう、鉄筋コンクリートよりもはるかに丈夫な超金属でできた黒井鎮守府が、である。
長門のパワーは、黒井鎮守府で販売されているスーパーロボットのそれよりも強い。
数十メートルの巨大ロボと真っ向から殴り合いできる存在なのだ。
そんな長門が俺を思い切り抱きしめれば、それは、そこに殺意がなくとも、充分に必殺の一撃となる。
例えるならそれはジーグブリーカー。
まあ、それでも俺は、ＨＰが残り１でも、気合で立っていられるタイプなので何の問題もない。
鎧化（アムドッ）!!!!
人形如きにくれてやるほど安くはないはずの命が大安売りされている。
「よちよち、かわいいでちゅね～！」
「だあ～♡」
バキボキバキボキ！

「ぐおおおおあ!!!!」
逆に考えるんだ、折れちゃっても良いさ、と考えるんだ。
ジョースター卿?!
なるほど、ならば……。
『自己変容』!!!」
俺は素早く、肉体を変化させる呪文を唱えて、骨や内臓をラバーのように柔らかくした。
「にぎぃー」
長門が面白がって、柔らかくなった俺をグニグニしてくる。
「おっ、おお、な、内臓が」
圧迫されて内臓がシェイク!
圧迫祭りよォ〜ッ!!!
「あぶー」
長門ちゃんは、俺を掴んでベッドの上に寝転んだ。
お眠みたいだ。

「うえ、うえええ!」
おっ、目覚めたと思ったら泣き始めた。
どうしたどうした?
……お漏らしか。
オムツを変えてやろう。
うわー、毛が。
毛にじっとりと染みた尿を、清潔な布巾で綺麗に拭いてやる。
「あっ♡あっ♡」
なんか喘いでるけど、これは介護なのでセーフだ。
「んふー……♡」
「あ」
これは……。
本能の赴くままに逆レ……!

次の日。

「明石イイーーーッ!!!!」
びっくりするほどボコボコにされた明石が、鎮守府のグラウンドの旗立ててるところに吊るされた……。
人狼ゲームかな？ってくらいの勢いで吊るされた。僕は村人です！え？いや、狂人ではない。
「提督」
羅刹のような表情の長門。
実際俺は不良界でも結構有名でケンカとかでもたいしてビビる事はまず無かったが生まれて初めてほんの少しビビった。
「ｈａｉ!!他の人も早く謝ってください！まだ僕は死にたくないんです!!経験値ロストが怖いんです！僕の頑張った時間を奪わないで下さい！僕がロストしたらここで謝らなかった人達のせいですね？」
すると長門は……。
「そ、そのだな……？」
「ウス」
「た、たまに、また、私のおとたんになってくれないか……？」
「えっ……？あっはい」

は、ハマった……!!!?
いやハメたが。
……よし、下ネタはやめよう！

５０５話　値札がない商品は全品百円なんだけど、商品の中には百円じゃない商品も混ざってるので、百円の商品を買い取れるように目利きを利かせるやつ

黒井鎮守府にユーチューブのチャンネルがあることは、もちろん、みんな知っていることだと思う。

いつもは、広報担当の青葉と衣笠がなんかやっておいてくれているみたいだが、今回はなんか企画をやるぞ。

「値札がない商品は全品百円なんだけど、商品の中には百円じゃない商品も混ざってるので、百円の商品を買い取れるように目利きを利かせるやつ～ッ!!!!」

「「「値札がない商品は全品百円なんだけど、商品の中には百円じゃない商品も混ざってるので、百円の商品を買い取れるように目利きを利かせるやつですってぇ～!!!!?」」」

「えっ、はねるのと……」

守子ちゃんが何かを言いかけるが、俺が笑顔で守子ちゃんの方を向くと、守子ちゃんは口を噤んだ。

「^　^」

「えっ、その」

「^　^」

「パ、パクリ……」

「^　^」

「は、はい、分かりました……」

「じゃあ早速やっていきますッか～……」

俺がコンビニのエプロンをつけて、店員に扮してレジで待機。

そして、その前に、値札のない商品がいくつか転がる台がある。

ルールは魔法の使用を禁じることと、特殊能力の使用禁止だ。ネットも使用禁止。

さあ、やっていこう！

メンバーは、金剛、吹雪、天龍、利根、翔鶴の五人だ。
「ここに十八個の品物があります！しかし、このうち五つは百円ではございません！皆さんはこの中から、一人二つの商品を買い取り、高額商品を避けてもらいます！」
そして、艦娘がジャンケンをして、順番を決める。
「私からデース！」
金剛からだそうだ。
「むむむ……、ベリーハードデース！」
色々と商品を触る。
そして、未鑑定名『途方もない価値の金塊』に触る……。
「ｏｈ……、これは明らかに百円じゃ済まないはずデース！」
金塊をスルーして、別のものを見る。
赤い表紙の本を見る金剛。中身を読んだら買い取りなので、開かないように裏表紙などを見る。
「ンー、これは……、魔導書ってやつデスかね……？」
「いや、提督がでっち上げたニセモノ説もあると思うぜ」
と天龍。
「オー、成る程。それもあり得マース！でも怖いから買いませーん！」
ポーションの瓶を見る金剛。
「薬品……、もエクスペンシブデース……」
「でも、ただの水って可能性も……」
「いやー、怖いデース」
と翔鶴。
「あ！」
金剛が声を上げた。
「グレープデース！」
「えっ、果物ってかなり高いんじゃ……？」
「まあ、ちょっと高価でも美味しいものを貰った方が良いデスからね……。正直、古文書とか貰っても困りマース」
真理である。
「これ、お願いしマース！」

「はい！こちらの商品は！」
ピッ。
「百円ではございません！」
「オウノー！……でも、フルーツならそんなに高価じゃ」
「一房百万円です」
「……ハイ？」
「石川県産ブドウの『ルビーロマン』……、最高級ブドウです」
「うわぁ……」
折角なので、テーブルを用意して、そこで食べてもらう。
「アッこれメッチャ美味しい?!美味しいデース!!!」
金剛は待機していたスタッフ（大淀）から百万円借りて購入し、ブドウはみんなで分けて食べた。
メッチャ美味しくて語彙力が消失してた。

十七品中四品が高額商品。
次は吹雪だ。
「うわー、もう、すっごく怖いんですけど……！少なくとも百万円くらいのものが紛れ込んでいるんですよねこれ……！」
不安そうな吹雪。
「あれ？これは……！」
何かに気づいた吹雪。
「これにします！」
と、プレステ４のゲームソフトを手に取る。
「えっ……？ゲームソフトとは、七千円くらいするんじゃないかのう……？」
と、利根が言ったが、それは……。
「これは絶対に大丈夫です！」
と俺にプレステ４のゲームソフトを渡してくる吹雪。
「こちらの商品は……」
「なんたって、このゲームソフトは……」
「百円です！」

「最悪のクソゲーですから!!」
そう、吹雪が勝ったのは、俺が中古ショップで買ってきた、『ＮＥＷガンダムブレイカー』であった！
「あーっ！クソ！狙ってたのに！」
ゲームもそこそこやっている天龍がそう言った。

「うー、ガンブレなら確実に百円だと思ったのによお……」
次は天龍の番だ。
「金塊は……、本物だったら何千万円とかだよな、流石にヤバ過ぎる」
『途方もない価値の金塊』をスルーする天龍。
「うーん……、これとかは……？」
そう言って、『透明なポーション』を手に取る天龍。
「うーん、うーん……、よし、これにする」
「こちらの商品は」
「どうだ？」
「百円です！」
中身はただの水だ。
「よっしゃあ！」

十六品中四品が高額商品。
利根の番だ。
「うぬぬ……、吾輩はこの手の目利きはとんと駄目なのじゃが……、ん？」
『艶やかなる合成篭手』を手にした利根。
「んんー？これは……、布ではないか？」
お、自然鑑定した。
「よし、これを買うぞ！」
「こちらの商品は！」
「どきどきじゃな」
「百円です！」
「わあい」

十五品中四品が高額商品。
翔鶴の番だ。
「うーん、うーん……」
翔鶴は、七色に光る石を手に取った。
「宝石は明らかにヤバいデース！そのサイズの宝石だと、数千万円持って行かれてもおかしくないデスヨ！」
金剛が言った。
「でも……、これ、宝石じゃないですよ？七色に光るだけで、質感はただの石です。これで行きます！」
「オゥ……、チャレンジャー……」
さて、どうだ？
「こちらの商品は！」
「どきどき」
「百円ではございません!!!」
「ええっ?!」
ふふふ……。
「で、では、おいくらですか？」
「こちらの商品は！」
ピッ！
「１０ソウルです」
「何だか知らない単位出てきた!!!?」
「こちら、王家の森庭で購入した七色に光るだけの石、『七色石』になります」
「いえその、１０ソウルとは……？」
「ソウルはソウルだよ、それ以上でも以下でもない」
「……？」
「１０ソウルなのでプライスレス、日本円には変えられないので、つまりは０円です！」
「え、えっと、や、やったー……？」
そんな感じで激戦は続く……!!!

５０６話　値札（略）の結末

さあ、いよいよ大詰め。
何だかんだで高額商品を回避しつつもここまで来たが、どうだろうか？
六品中四品が高額商品。
利根の番だ。
「う、うあー、怖いのじゃ～！」
などと言いながら、時計を手に取る利根。
「むー、これは……、かっこいいのう」
時計を弄る……。
「時計……、そんなに高くもなかろうかのう……？」
チラチラと俺の方を見る利根。
「た、高くないよな？な？」
「ピプー」
俺は吹き戻し……、お祭りとかで売ってる紙のくるくるした、吹くとくるくるが伸びて戻るやつを吹いている。
「うわ……、吾輩、提督のことは心から愛しておるが、そのようなイラッとする態度をとられると流石に怒るぞ……？」
「いやー、俺のアドバイスとか聞いちゃダメだよ、反則反則」
「むむむ……、おっぱいを揉ませてやると言ってもか？」
「えっマジ？」
っと、いかんいかん。
色気に異常に弱いのは良くないな。
俺は長男だから我慢できるのだ。
「……まあ、ふぇあ、な勝負をしなくてはならんしのう」
「ってか、君ら金持ってるでしょ？」
「いやいや……、確かに蓄えは過分なほどにあるが、金銭感覚は人並みなんじゃぞ？提督のように億単位の借金を方々に作ったりはできぬわ」
「なるほど」

「ふう……、まあ良い。この時計を買うぞ！」
　そうかい。
　さて……。
「こちらの商品は！」
　デン！
「１００円ではございません！」
「うあー……、やっぱりかのう？では、いくらじゃ？」
「こちらの商品は！」
　デン！
「三十七万四千」
「う、高いが……、そんなものじゃろうな」
「ポンドです」
「……んん？」
「三十七万四千ポンド」
「ポンドとは？」
「一ポンドは、百三十八円くらい」
「んんー？んんんんー？」
「日本円では、五千三百六十万円だね！」
　Ｌ．Ｕ．Ｃ　オールインワンという時計です。
「か、か、か、加減しろ莫迦!!!!」

　利根は、アシスタントの大淀から借金をして、約五千万円支払った。
　次は翔鶴の番だ。
　五品中三品が高額商品。
「これにします」
「早いね」
　翔鶴が持ってきたのは……。
　途方もない価値の金塊だ。
「どうしてこれを？」
「理由ですか？そうですね……、もしこれが本物の金塊なら、すぐに売ってしまえばお金は戻ってきますよね？」

んー？
あ、そうだな。
金の値段は時によって変わるけど、すぐに手放すなら、買った時の値段と売る時の値段が違うってことはないだろう。
金の価値は、中古とか関係ないからな。
「そして、もしも偽物なら、高価ではない……、のかな、と」
ふむ。
「それに何より、持ってみると分かるんですけど、これ……、凄く軽いんです。多分偽物かな、と思います」
「なるほど、では、こちらの商品は！」
ピッ！
「１００円ではございません！」
「そうですか……、では、おいくらでしょうか？」
「こちらの商品は！」
ピッ！
「ゼロ円です」
「はふぅ……、良かった……」
「これは、『途方も価値のない錆びた偽物の金塊』です」
「どこから拾ってきたんですか？」
「ノースティリスに出張してた摩耶が、ダンジョンの壁から拾ってきた。値段はノースティリスでもゼロ円だ」

四品中三品が高額商品。
金剛の番だ。
「うーん、どうしまショウ……？」
金剛は、車のキーを手に取った。
「これは……、車のキーデスネ？」
「そうだよ」
「うーん、まあ、そうデスネ……、多分、車なら高額商品でも、使えるだけマシデスネー！百万円くらいなら払っても良いデース！」
そう言って、車のキーを俺に渡してきた。

「こちらの商品は！」
ピッ。
「百円ではございません！」
「まあ、そうでショウ。でも、車なんて大体、百万円くらいで」
「こちらの商品は！」
ピッ。
「四億円です」
「ほげええええ!!!!」
どうした金剛？キャラが崩れてるぞ？
「よ、よっ、四億円?!!?」
「ランボルギーニ・ヴェネーノだ」
「えっ、え……、四億円?!?!!」
「四億円だよ」

金剛がアタッシュケース数個分の金をスタッフの大淀から泣きながら借りた。
三品中二品が高額商品。
吹雪の番だ。
「四億円……、四億円かあ。怖いな……、四億円って言えば、私の稼ぎの2、3ヶ月分だよ……」
そんなことを言いつつ、物色する吹雪。
「あっ、これは……、金ピカのＷｉｉだ」
お、どうだ？
「うーん、Ｗｉｉって古いゲーム機だし、まさか本物の金ってことはないだろうし……、これにします！」
「こちらの商品は！」
ピッ。
「百円ではございません！」
「……えっ？ま、まさか」
「こちらの商品は！」
ピッ。

「五千万円です」
おーっとお？吹雪氏、膝から崩れ落ちるゥ。

スタッフ大淀から借金する吹雪。
次は天龍の番だ。
「お、これは……」
天龍は、銀ピカのガンダムフィギュアを手に取った。
「あー、えっと、確か、ガンダムの合金製フィギュアが二十万くらいで売ってるとか、ツイッターで見たかもしれねーな……。二十万くらいなら痛くねえや！」
と、ガンダムを渡してくる天龍。
「こちらの商品は！」
ピッ！
「百円ではございません！」
「ハハッ、まあ良いぜ、二十万くらいなら」
「こちらの商品は！」
ピッ！
「二千五百万円です」
「は？え？はあ？はあああああっ？!!!」
「これ、純プラチナ製で、目の部分にはダイヤが埋め込まれてるんすよ」
「えっ、ちょっ、いや、は？はぁあああ？!!!」

因みに、残った百円の商品は、俺がタイで買った仏像型の文鎮であった。
結果は、高額商品を引かなかったのは、翔鶴だけ。
まあほら、うちの艦娘って、何十億円も貯金してるから、どんどんお金使った方がいいと思うよ。
なお、海外艦はガンガン金を使う。
ファーストクラスで旅行、高級車、お高いドレスと豪遊してる。
経済回すために、金は使わなきゃな。

５０７話　レゲエ！砂浜！なんちゃらかんちゃら

夏じゃん。
レゲエ！砂浜！なんたらかんたら……、そんな気持ち。
まあ俺もワンチャン、チャラ男みたいなところあるので、艦娘と海に行こうか。

かつて、海に行った時、俺が可愛い水着を着ない艦娘は許さなかったので、艦娘はちゃんと水着を持ってるよ。
ゴセイナイトは許さない。
本日も、艦娘に可愛い水着を着せるために暴れ回った。
え？毎晩全裸の艦娘を見てるじゃん、だって？
それとこれとは違うんだよ。
「うわあああああああ!!!!ああああああーっ!!!!」
「うわっ、す、凄いでありますな。浜に打ち上げられた鮮魚の如くであります」
「水着なんて毎日見てるでち……、何をそこまで、提督を熱くさせるでちか……？」
「ま、まあ、その、そこまで言うならちゃんと水着を着るっぽい……」
俺が、人間に捕まったカナヘビのような暴れっぷりを見せたところ、艦娘達は若干引きながらも水着を着てくれた。
やったぜ。

やってきました湘南の海！
今年はちょっと洒落にならんくらい暑いんで、海はサイコーだね！
えるしってるか？セミは三十五度以上で熱中症になって死ぬ。
セミすら死ぬ暑さ。
四季に新しい季節『死』を追加すべきなんて意見もあった。ツイッターで。
え？海は深海棲艦が出て危ない？海で遊ぶなんて無理？
いえいえ！我らが黒井鎮守府は優秀なので、日本近海には深海棲艦

が出ないんですよ！
なので、この湘南にも、パリピの方々が再集結して、サーフィンやら何やらを楽しんでいる。
今回は、海の家も出しておく。
海の家は黒井モールのブランドのものを使っていて、黒井モールの宣伝を兼ねている。
「まあほら、俺もパリピみたいなもんだし、空気に溶け込めるでしょ！へい彼女ーぉおぎゃーっ?!!!」
俺が、付近を歩く女の子に声をかけようとしたら、ろーちゃんが抱きついてきた。
「ダメですよ？ねえ！」
「えっいや」
俺が狼狽ていると、ナンパしようとした女性がこっちを見る。
「あら……？ちぇっ、超イケメンなのに子持ちだなんて！サイアクー！」
「いやこの子は」
「お嫁さんだよ！」
「えっ……？警察呼ばなきゃ……」
そのまま、警察を呼ばれてしまった。
うーん！
前科がふえるよ！
やったね旅人ちゃん！
「ろーちゃん！通報されちゃったでしょ！お外でそう言うこと言っちゃ駄目だよ！」
「でも、提督はろーちゃんの旦那様だもん！」
「ンモー！しょうがない子だ！」
俺は、両手の人差し指を交差させて打ちつける。
ルロイ修道士かな？
いやオムレツは食えよ。
にしても、白髪のろーちゃんと一緒に歩くと……。
……「まあ、美男美女な親子だこと」

……「お父さんもカッコいいけど、娘さんもすごく可愛い！お父さんは軍人さんかな？傷だらけだけどそこがまた良いね！」
……「どこの国の人なのかな？」
などと、海外から来た外国人親子に見られてしまう。
「むーっ！ろーちゃんは提督のお嫁さんですっ！」
ろーちゃんが外野にキレてる。
ん？あれは……？
「ねえ良いじゃん！連絡先教えてよ～！」
「ちょっと遊ぼうぜ～？」
「ついて来いよ！」
「その、困ります……」
おやおやおや。
おやおやおやおや。
俺の鳳翔が一般通過チャラ男に絡まれてるじゃあないか。
助けなきゃ（使命感）。
しかし、俺はまともな人間なので、いきなりぶん殴ったりはしない。
なろう小説で、冒険者ギルドに入ったときに、「へっ！お前みてえな貧弱なガキが冒険者だって！帰ってママのおっぱいでも吸ってな！ギャハハ！」みたいなタイプの噛ませ犬をいきなりボコボコにするなろうサイコパスとは違って、分別のある大人だからな俺は。
にしても、チャラ男さんは運がいいなあ。
うちの艦娘とか、絡む相手を間違えたら、ＯＶＥＲの極悪斬血真拳を食らったところ天の助みたいにされるのに、よくもまあまともな艦娘を選んだよ。
鳳翔なら、一般人を殺したりはあんまりしないからな。
これが、バーサーカー榛名だったら、手足を捻じ切られてるだろうし、バーサーカー雲龍だったら、十メートルくらい蹴り飛ばされてるだろう。
運が良かったね。
さあ、鳳翔を助けよう。
「やめなよ（クラウド）」

「あ〟ぁ?!何だてめ……え……?」
「その人は俺の知り合いだから、あまりそう言うことはしないでもらえるかな」
と、俺が紳士的に対応する。
「な、何だこいつ」
チャラ男がビビる。
まあ、そりゃビビるでしょ。
自分より２０ｃｍ以上デカい、恐らくは外国人であろう、全身傷だらけのマッチョな男が現れたらそりゃビビる。
「は、はは……、ちょ、ちょっとデカいからって図に乗ってんなよ?!」
「そ、そうだ!こっちは三人だぞ?!」
「な、舐めんじゃねー!」
などと、チャラ男さんは威嚇してくるが、外なる神とかと比べるとミジンコみたいなもんなんで怖くはないです。
「鳳翔、おいで」
「はいっ!」
鳳翔が俺の腕にくっつく。かわいいね。
水着は地味めだけどちゃんとビキニで偉いぞー。
「て、てめぇっ?!!俺が狙ってた女を横取りかよっ!このっ、おらっ!」
おっと、チャラ男くん、いきなり俺の顔面にパンチ。しかし……。
「があっ?!!い、いってええええ?!!な、何だこいつ、鉄でできてんのか?!!」
いや鉄ではないです。
「はあ……、いいか?まず、ナンパするなら一人でやるようにしような?三人で一人の女の子を囲んだら、怖がられちゃうだろ?ナンパは俺もやるからおかしなことじゃないけど、女性には敬意を持って」
「うるせー!!!」
オッ、前蹴り。
しかし、俺のバッチリ安定している体幹に跳ね返される。
「な、何なんだよこいつ?!効いてねえ!!」
「あと、女の子の前であんまり暴力を振るわないようにな?強い男はカッコいいが、暴力を振るう男はカッコ悪いぞ?」

「う、うるせえよ！何なんだよテメー！」
「お、おい、もう良い！行くぞ！」
そう言ってチャラ男の人達は去っていった。
ん……？
「はあ、何なんだよあの男！意味わかんねえし！」
「次はあの女狙うぞ！」
あ……、お、おい！そっちは……！
「おーい、ちょっと待ってそこの女の子！」
バカバカバカ！
それは駄目だ！
「雲龍!!!やめろ!!!」
「死ね」
「あああああーっ!!!!!」

チャラ男、宙を舞う。
凄いね、人間で水切りってできるんだ。

５０８話　真夏のじゃんぼりー

さあ、夏の砂浜で出店をやろう。
今じゃ関東圏ローカルの有名モール的なポジションに収まった黒井モールだが、うちの商業担当である霧島社長は、超高速で店舗数を増やせと命令している。
すげー。
俺も「六千万円でぶっとびカードを買ってきたのねん！」みたいなノリで手伝った方が良いだろうか？
……新作はデザインが現代向けだよな。
でも夜叉姫ちゃんが可愛いので俺的にはＯＫです!!!
まあ、とにかく、霧島は商業面での世界征服を目指してくれているみたいなので、俺も手伝おうと思う。
いや待て、手伝うも何も、俺の目標が世界征服だよ。
おかしくない？
なんかうちの艦娘達、みんな俺よりも能動的に世界征服を目指してるよねこれ？
大丈夫なの？大丈夫なのこれ？
……まあ、なんとかなるだろ！
なんかやばいことになったら必殺責任逃れだ！

レゲエ！砂浜！なんたらかんたら……。
はいまた海。
今年の夏は湘南のビーチに黒井モールの宣伝を兼ねた出店を出している。
俺は、トランクス型の海パンにピンクのアロハシャツを羽織って、ビーチ用のサングラスをして、サンダルを履いて砂浜を歩く。
……「うわ……、めっちゃイケメン！」
……「えっ、なんかの撮影？」
……「逆ナンしちゃう？」
俺は黄色い声を背に受けつつ、海の家『黒井』に向かった。

そこでは……。
「ひえーっ！焼きそば四つ！大盛りですーっ！」
「はいよ！」
「ラーメン二つ！」
「はーい！」
「五百円になります……」
えーと、レジが扶桑、ウェイターが比叡と最上、キッチンが龍驤と速吸か。
うーん、人手が足りてないな。
「おーい、手伝うぞー」
「あ！君ィ、手伝ってくれるんか?!良かったぁ、人手が足らんかったんや！」
旅人、参戦！

メニューは、まあ、海の家にありそうなものは大抵置いてあると思ってくれて結構。
売りは、龍驤の粉物系料理と、黒井鎮守府で毎週金曜日に出されるカレー、それと、黒井鎮守府で作っている黒ビールである。
龍驤の粉物系料理には、黒井鎮守府農場でのびのびと育てられたワイバーンの肉を大胆に使用！
黒井鎮守府では、家畜のワイバーンに『祝福された乳』を飲ませて、数十トンくらいまで大きくしてから肉をとるという、大変にオーガニックな方法で、美味くて安価な肉を作っている。
オーガニック……？
お前のブレンパワードの扱い方！イエスだね！
はっ、いかん、頭がオーガニックになってしまっていた。おれはしょうきにもどった！
さて、実際、祝福された乳で家畜を大きくするのは、法律にも違反しないし、肉質も悪くならない、環境にもお財布にも優しいやり方である。
龍驤の作る焼きそばや、フランクフルトに使っている肉はこのワイ

バーン肉だが、普通の海の家と違って具沢山なのに、採算がとれているんだよね。凄いでしょ？褒めて良いよ。
……やったのは首輪付きだけど。
そしてカレー！
艦娘それぞれが、戦艦だった頃艦内で作られていた秘伝レシピがあるので、全員が納得するカレーを作るのは困難だったのだが……、俺の必死の研究により、みんなが納得する美味しいカレーを作り出すことができた。
このカレーは、毎週金曜日に黒井鎮守府で供されるものと同じだ。
最近は、霧島社長の命令でレトルトカレー化もした。
黒井モール印のカレーはめちゃくちゃおいしいと大評判！頑張った甲斐があったな！
あとは黒ビール。
俺が、かつて黒井鎮守府でオクトーバーフェストやった時に、酒造の免許をわざわざ取得して作ったやつ。
味はドイツ風となっております。
これらの商品は全て、黒井モールで材料などがしっかり手に入るので、黒井モールの宣伝もバッチリ！
その他にも、黒井モール印のアイスクリームや、黒井鎮守府農場の焼きとうもろこしなども販売中。
さあ、ガンガン売ろう!!!!

海の家……。
やっぱり、湘南の海には色んな人が来るな……。
「カレー……？牛丼の方が良いんだが、カレーも良いな！おーい！カレーを山盛りで頼むぞ！」
「王子ー！」
「ははは、ミートよ、お前もたまにはカレーはどうだ？……って、お前か、旅人！」
んー？
「Ｈｅｙ！旅人、久しぶりだな。ん？ああ、俺はちょっと仕事でな

……。ヒトシュラのやつに会いに来たんだが、あいつはどこにいる？」
「ハッ、知り合いなのかって？そうだ、あいつとは東京受胎の時に出会って、仲魔をやってた時があってな」
「……ああそうか、魔界の方か。っと、その前になんか食わせてくれよ。ピザはあるか？」
　んんんー？
「とーまー！ここのかれーらいす、とっても美味しいんだよ！」
「うわあああああ!!!そ、そんな量を食べたら上条さんのお財布がっ……、って旅人さん?!ツケで?!い、良いんですか?!」
　んんんんんんー？
　なんだか知り合いがいっぱいだぞ？
　どうしてかなー？
　……まあいいや、今日の俺は仕事で来てるからな。
　面倒ごとには一切関わりませんよー。
「悪魔超人だ！」
「悪魔だ！」
「魔術師だ！」
　あーーー。
「うるせえーーーッ!!!うちの店舗の前で暴れる奴は全員ぶっ飛ばす!!!」

５０９話　新生！旅人号！

俺は世界を股にかける旅人なので、船を一台持っている。
旅人号だ。
この旅人号は、ＶＯＢが付いたり、異常な防御力があったり、食料庫とキッチン、客室が異様に充実したりしている。
だが、陸のビークルや空のビークルは普通のものなので、折角だから工廠になんかすごいの（曖昧）を作ってもらうことにした。

「明石」
「はーい！」
キラキラの笑顔で工廠の奥から現れた明石。かわいいね。
「っと、顔にオイルがついてるよー。女の子なんだから綺麗にしなきゃね」
「わぷっ」
俺は、ハンカチで顔を拭いてやる。
男の世話は妬かない主義だが、女の子ならいくらでも甘えてきてくれてＯＫなのだ。
出来の悪い子ほどかわいいって言うじゃあないけど、化粧っ気のない明石みたいな子はかわいいよね。かわいい服着せたくなる。
「なんの御用ですか、提督っ！」
「依頼だよ。旅人号の強化と、自家用のジェット機の新しいやつと、新しいバスとか作ってもらいたくてね」
「乗り物ですか！提督のためなら、腕によりをかけて作っちゃいますよ～！」
そして、工廠の奥に案内される。
夕張にも挨拶をして、早速設計に入る。
俺が口出しできることはほぼない。
まあ、俺も、道具さえあれば鋼材から船を作るくらいならできるが、明石は俺の何十倍も凄い設計をするから、手出しのしようがない。
『艤装直結』

明石と夕張は、コンピュータを艤装として装備している。
そして、艤装であるコンピュータは、自由自在に動かせる。
例えばそう……、艦娘って、艤装として大砲とかを装備してるよね？
あれをどうやって動かしているのかって言うと、艤装と神経を間接的に接続して、擬似的に肉体の一部にしてるのね。
そして艦娘は、大戦の戦艦としての信仰や、科学や神秘への信仰によって成り立つ神霊として、膨大な神秘を内包しているんだよね。
その神秘をエネルギー源として、艤装を動かしているんだよ。
明石も、脳に接続された艤装の量子コンピュータを、神秘によって稼働させてるのね。
実はこれって神業で、科学的なものって神秘が浸透しづらいのね？でも、明石と夕張や、睦月型辺りは、無理矢理に近代兵器に神秘を流し込んで動かしてるから本当に凄いよ。
そんな明石が、量子コンピュータで超高速の演算を行ってくれて、俺の目の前に新しい旅人号の立体映像を出して見せてくれた。
空、陸、海で運用されるビークルが三機。
『旅人号一号』
『旅人号二号』
『旅人号三号』
の三機体だ。
「何で既存の船の旅人号が三号になってるの？」
「一号は空！二号は陸！三号は海！って決まってるんですよ！ついでに、一号は赤！二号は白！三号は黄色！」
「早乙女博士に訴えられたら負けるんだよなあ……」
「では、サンゴッド1は大空を、サンゴッド2は大地を、サンゴッド3は干潮時に波打ち際を？」
「必然的に一台余るんだよなあ……」
「原材料はトランスフォーミウムを使用してます」
「何それ？」
「ちょくちょくうちに来るデストロンの方々から、ボディーに使われ

ているパーツをほんの少し分けてもらって、それを解析した結果、量産に成功した特殊金属です」
「どんなの？」
「うーん、提督に分かりやすく言えば、ゲッター合金に近い……、ですかね？」
　えっ。
「いかんでしょ」
「いえ、ゲッター線によって変化するって訳ではありませんよ？ですがその、まあ、戦闘ロボットの装甲として使えるほどに堅牢で、自由自在に形状や質量を変化させることができるんです」
　なるほど……、え？
「……ひょっとしてこれ、変形するの？」
「^　^」
　あっ、これ変形するな……。

　とりあえず、完成した旅人号に乗り込む。
　まずは一号からだ。
　旅人号一号は、全翼型の超巨大超音速旅客機だそうだ。
　全翼型ってのはほら、あれだよ、B―2スピリットみたいなのだよ。
「これ、何人くらい乗せられるの？」
「まあ、五百人くらいは」
「かなりデカいね。最高速度は？」
「マッハ15で滞空と垂直離着陸が可能です！」
「?!!」
「動力炉は核融合で、水さえあれば理論上は永遠に稼働します！」
「?!!!」
「武装は、対空機関砲六門と追尾型ミサイル八門、陽電子砲一門です！」
「?!!!」
「こちら、変形しますとこんな感じになります」
　ギゴガギゴ。

『マスター、よろしく頼む』
「キエエエエエアアアアアアシャアベッタアアアアアアアア!!」
しかもＣＶ大塚○夫だあああああ!!!?
旅人号二号。
マローダーとバスが悪魔合体したみたいな気狂いマシン。
「なにこれぇ（ＡＩＢＯ）」
「最高速度は時速二千キロ、核ミサイルの直撃ですら耐える装甲、八十人が乗れる座席があり、車体の上部には四門のガトリングキャノンと十六連ミサイルポッドが四門、プラズマキャノンが二門です！」
「何でそんなことしたの????」
「つい」
んー。
「そして、変形するとこうなります！」
『マスター、よろしくな』
ＣＶは藤原○治だった。

旅人号三号。
武装豪華客船。
「時速は七百キロくらいと遅めですが、定員は三千人、装甲も丈夫で、対空レーザー砲四十門、プラズマミサイル二十門、反物質弾頭魚雷四門、重力子崩壊砲六門と武装も充実！」
「そんなことしなくていいから……」
「あ、因みに、提督が命令を下せば、人工知能が勝手に火器管制をしてくれるので、提督が撃つ必要はありませんよ。そもそも、提督は銃器とか上手くないですしね」
「そういう風に気を回せるならもっと他のところに気を使って欲しかったかなー？」
「そして変形するとこうです！」
『よう、あんたが俺のマスターかい？』
ＣＶは野沢○智だった。

ふむふむ……。
「えっと、これ、クーリングオフとかできます？」
「えっ……？私が一生懸命に作ったものを、捨てちゃうんですか？使って、くれないんですか……？」
「な、なーんちゃってウソウソー！一生使うよ！大事にする！ありがとう！明石大好きー!!!」
「私も大好きですっ！」
こうして俺は、三体の機械生命体型ビークルを所有することになった。
どういうことだよ……？

５１０話　ｆａｌｌ　ｋａｎｍｕｓｕ

最近、ｆａｌｌ　ｇｕｙｓが流行ってるじゃん。
「うちでもやろうか」
「それは良いのですが……」
「ん？どうしたの？」
「何故衣装が、水着やバニーガールなのですか？」
「いやー、まあ、多少はね？」
「多少は？」
「でも今は、そんなことはどうでも良いんだ。重要なことじゃない」

ｆａｌｌ　ｋａｎｍｕｓｕの始まりだ！
レギュレーション説明！
艦娘には、全身に、それぞれに対応した適切な重りを付けてもらって、動きの速さを全員一定にしてあるぞ！
できることは、「高さ２ｍのジャンプ」と「人やものを掴む」こと、それと「走る」ことだけ！
さあ、頑張ってくれ！
艦種ごとに分けてやります！
揚陸艦や航空巡洋艦などは、近しい体格の艦種に混ぜます！
まずは海防艦～駆逐だ！
「はい、よーい、スタート」
「「「ふぉー！」」」
艦娘が一斉に走り出す！
でも、重りのせいでよちよち歩きだ。
かわいいね。
「ふぉー！おらっ！死ねっ！」
おーっと！望月が前を走る睦月に掴みかかった！
「わ！うわわっ！」
睦月が転んだ！
「へっへっへ！」

望月が走り出そうとするが……。
「このーっ！」
「あっちょっ、倒れてる時に掴むなーっ！」
「きゃあ！私を巻き込まないでよ?!」
わあ！泥沼！
女の子がくんずほぐれつしてるだけで幸せな気持ちになるな。
心が豊かに……、いや、ぴょんぴょんする。
心がぴょんぴょんするぞ。
心ぴょんぴょん。
かと言ってスタバは爆破しないが。
子宮全摘もしないが。
うるさいですね……。
さて、くるくる回転する壁、上から落ちてくる人間大の玉。
さあ、どうする？
「えい」
おっ？時雨？
回転壁に捕まったが、どうするつもり……、って、おおっ！
回転壁に大玉がぶつかり、回転壁がグルグル回った！
その回転の勢いに乗って、いくつかの障害物を飛び越え大ジャンプ！
「ふふっ、お先に失礼するよ」
さ、流石は知将時雨……。
賢い！
「ふぉー！みんなおっそーい！」
島風が先行しようとするが……。
「行かせないわよ！」
「きゃわー！」
天津風に捕まる。
「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!!はーなーしーてー!!!」
「駄目よ！私が一位になって、提督を一日独占するの！」
えっ、何それは。

そんな商品を用意した覚えがないんですがそれは……？
「はあ?!駄目だよ！提督は私とかけっこした後に、夜のかけっこ（意味深）するの！」
夜のかけっことは……？
「うるさーい！とにかく先には行かせないわ！」
あ、巨大ボールに二人とも巻き込まれた。
「「ぎゃあああああーっ!!!!」」
悲鳴を上げているけど怪我とか痛みとかはないです。
実際安全。
そうこうやっているうちに、時雨が王冠を掴み取った。

次は、戦艦が、坂の上からクソデカフルーツや棒が転がってくるステージを登る。
「スタート！」
「「「ふぉー！」」」
どれ、どんな感じかな？
「「ぐぬおおおお!!!!」」
うわ、長門と武蔵がぶつかり合ってる。
「提督一日独占権は渡さん！」
「こっちのセリフだ！」
すげー……。
「提督を独占して、一日中甘やかしてもらうんだ！」
「えっ」
「あっ」
あー……。
その……。
前に幼児退行して甘えた時のアレが相当気持ち良かったらしく、また赤ちゃんプレイがしたいそうだ。
まあ、俺は構わないけどさ……。
「その……、ぶっちゃけ引く……」
武蔵はドン引きしている。

「……」
長門は、自らの失言に固まっている。
そこにクソデカスイカ。
「「あぁあああああ!!!」」
落ちてった……。
「えーいっ！」
お、榛名は上手いなー！
金剛型はフィジカル面が強い上に、器用さも高い。
筋力と技量に振った上質戦士ステだ。
だから、この手のアトラクションには強い。
その後ろでは……。
「は、離せこの資本主義者め！」
「ふふふ……、先には行かせないわ！」
ガングートがアイオワに妨害されている。
「＋＄♪☆○％〒々々!!」
「☆☆♪♪○＊＄€÷〆・○＊!!!×」
ああ……、それぞれが訛りの強い母国語のスラングで罵倒し合っている。
醜い争いだ……。
そうしているうちに榛名が優勝した。

次は巡洋艦。
細い道を巨大ボールや押し出しスライド壁、回転ハンマーなどの妨害を避けながら先に向かう話だ。
「スタート！」
「「「ふぉー！」」」
「提督の腕枕でお昼寝するぞー！」
と、加古。
願望が可愛いね。
「提督に私の考案したド変態イメージプレイをしてもらうんです！」
と、鹿島。

あのさあ……。
「うぉらー！」
おお、大井っちは上手いなー。
「おやおやー？大井っちったら、結構本気だね～？そんなに提督に構って欲しいのかな～？」
精神攻撃してくる北上。
「な、ななな っ!!!?!!!そ、そんなことないです!!!」
「えー？じゃあ何でそんなに本気出してるの～？」
「い、いえ、こ、これは、その……」
「大井っちも、長門さんみたいに甘々に甘やかして欲しいのかなぁ～？」
「そっ、そんなこと……」
「いやいや、良いと思うよ私は～？でも、勝つのは私だよー！」
大井に掴みかかった北上。
「ああっ、北上さん！」
「あーーーれーーー」
北上はハンマーに弾かれて落ちていった。
そうこうしているうちに鹿島が優勝。
えっ、その、困る……。
だって、またＸＶｉ○ｅｏｓにエロ動画を投稿するんでしょ？
俺が竿役で。
困る……。

さて……、総評として。
妨害有りだと艦娘達は嬉々として潰し合うことが分かった。
大丈夫これ？
チームワークとか……？
「いえ、遊びは全力で楽しむと言うだけで、戦場で足の引っ張り合いをするつもりは毛頭ありません」
とのこと。
「プライベートでは仲良くしてる？」

「大丈夫です、問題ありません」
なら良いんだけどね……。

511話　ｆａｌｌ　ｔａｂｉｂｉｔｏ

「私達がｆａｌｌ　ｋａｎｍｕｓｕやったのに、提督がｆａｌｌ　ｔａｂｉｂｉｔｏやらないのはおかしいですよねえ？」
「（おかしく）ないです」
「まあまあ、ステージは作ってあるので！」
「あーーーれーーー」
　明石に攫われた。

　なんか俺もｆａｌｌ　ｔａｂｉｂｉｔｏやらなきゃならんらしい。
　まあ良いや、暇だし。
「身体機能は特に制限しませんし、誰かとレースさせる訳でもありません！単なる障害物走です！」
「楽勝じゃん？」
「では、スタート！」
「ふぉー！」
　俺は、道を進んだ。
　まずは……、トゲ付き鉄球が転がる坂を登るみたいだ。
「えっ、ちょっと待って？これ、ｆａｌｌ　ｇｕｙｓってかゼルダの伝説ブレスオブザワイルドの祠じゃないこれ？」
　ビタロックください早く！
　俺は英傑じゃないんだが？！
「「「提督頑張れー！」」」
　ああ、艦娘達の黄色い声！
「まあ、トゲ付き鉄球くらいで死ぬほどヤワじゃないんだが」
　俺は鉄球をジャンプして回避。
　危なげなく次のステージへ。

　細い橋、その上に巨大な刃が振り子のように揺れて、橋の横から蛇人間が魔法で狙撃してくる上、橋の上にも盾と剣を持った蛇人間が待ち構えている。

まあ、うん。
「ここのアトラクション作ったの誰？これ完全にセンの古城じゃん」
勘弁して？
「でもまあ、確かにこれくらいじゃ死なないけどさ」
俺は、振り子ギロチンを回避しつつ、橋の横から飛んでくる魔法を避け、橋を通せんぼする蛇人間に素早く近寄る。
「おりゃあ！」
『グエーッ！』
素早く足払いして転ばせた後、蹴りを入れて奈落へ落とす。
そしてゴール！
次のステージへ。

槍を持ったガーゴイル四体、向こう岸から大弓を射ってくる銀騎士がいる中、細い道を渡る。
「オイ！本当に誰だこのステージ作った奴?!何でアノールロンドなんだよ?!」
まあ良いや、行こう。
『『『ギギィーッ!!!!』』』
四体のガーゴイルに囲まれる。
「南斗紅鶴拳奥義！南斗妖旋舞陣！」
闘気を周囲３６０度に放ち、敵を斬り裂く技だ。
本来の使い手なら、一度放てばこの程度の相手は簡単に両断するが、俺にはそこまでの腕がない。
しかし、逆に、俺の斬れ味が鈍い拳は、相手を大きく弾き飛ばす。
それにより、俺の周囲を囲む四体のガーゴイルは奈落に落ちていった。
そして。
「だらっしゃあい！」
超高速で飛んでくるデカい矢を、素手パリィで防ぐ。
「おらー！」
ダッシュで銀騎士に駆け寄り、そのままの勢いで拳を叩きつける。

俺は拳で抵抗するで？
だが、銀騎士はその程度で死ぬほどヤワじゃない。
すぐさま、右手の剣を叩きつけてくる。
「はいパリィ」
そこに、更にパンチ！
そしてキック！
チョップ、ターン、パンチ、キック。
パラッパラッパーは名作だろォン!!!?
ラップバトルなら大抵の相手には勝てるが、残念ながら殺し合いにラップバトル力は役立たないのだ。
この世界はオーシャンまなぶではない。
……でも、俺の知り合いには、一秒間に十回レイプと叫べる男もいるからな。言葉の力は侮れない。
「おらっ！落ちろ！」
『……!!!!』
銀騎士を落としてゴール。

次のステージ。
「お、白一色のシンプルな……、シンプルな……？」
あれ？これは……？
「オワタの大冒険……？」
試しに軽くジャンプ。
谷から巨大な剣山がかち上げてきた！
「だが、俺はオワタより強いぞ」
空中二段ジャンプ！
剣山を飛び越して向こう岸に着地！
着地先でも剣山が降ってきたので、それを回避して谷へわざと落ちる……。
そして、ｔａｎａｓｉｎｎとの戦い！
《ｔａｎａｓｉｎｎ……!!!》
「あ”あ”あ”あ”あ”ーーーッ!!!!!!」

「ｔａｎａｓｉｎｎめっちゃ強かったんですけどぉ……？」
俺は、こぼれ落ちるはらわたを腹部に収めて回復魔法をかけながら苦情を言う。
次のステージ。
「ん？」
上から虫取り網が落ちてくる。
「これは……？」
《ピポサルを　１２　ひき　つかまえよう！》
ふむ……。
「魔法少女スタイルサヤカちゃん最高でした！続編はよ!!!」

「ピポサルめっちゃ強かったんですけどぉ……？」
俺は、レーザー発射ロボットによって切断された右腕をくっつけながら苦情を言う。
『最終ステージでーす！』
「やれやれ、やっと最後か」
《がんばれ旅人エモン！深雪姫救出絵巻》
「コナミはもう続編出さねえよ……」

こうして、俺は、疲労困憊状態で、深雪を抱えて三十八時間にも渡る道のりを踏破して戻ってきた。
「チカレタ……」
「さて……、疲労した司令官は、今なら何でもやりたい放題できるな！」
深雪サマが言った。
「か、堪忍して」
「許してもらえる訳がなぁいぜぇ！」

その後の展開は……、車で例えるとベンツだった。
え？国粋主義者の方？

じゃあクラウンで。

５１２話　黒井鎮守府天下一武道会

「スポーツの秋だぞ！」
黒井鎮守府はまあ、亀仙流みたいなもんだから。よく動き、よく学び、よく遊び、よく食べて、よく休む、人生を面白おかしく張り切って過ごすんだゾ！
という訳で、鎮守府にいる艦娘にスポーツを奨励しておく。
すると、誰かが言った。
「格闘技でもいいのか？」と……。
「ＲＯＵＮＤ１！……ＦＩＧＨＴ!!!」
「うおおおおおっ!!!!」
どうしてこうなった……？
俺はただ、健康のために適度な運動をして欲しかっただけなのに……。
鎮守府が一時解放されて、リングができ、その上で外部から呼び寄せた格闘家達が、艦娘達と鎬を削っている……。
テレビ局各位が集まり、それを全国放送している……。
観客席は満席で、大変な混雑になっている……。
更に、会場の上部にスクリーンが設置されており、賭けの対象にもなっている……。
そして何より問題なのは……。
「えっえっえっ、何で俺も参加者に登録されてんの????ねえ、ねえってば、コラ、誰だ?!誰が勝手に登録した!!!」
俺も戦わせられる羽目になっているっ?!てことだ……!!!
現在は、『黒井鎮守府ナンバーワンパワーファイター』こと、長門と、『流浪のストリートファイター』こと、ケン氏のバトルだ。
「波動拳!!!」
「ぐうっ……、効かんなあ!!!」
「何っ!!!」
「おおおあああああっ!!!!」

長門は、投げキャラでしかもスーパーアーマー持ってる反則キャラだからな……。
だが……。
「はあっ！」
「おおっ、ブロッキングか！」
長門のパワーは、ザンギエフ氏よりも強いくらいの超パワーファイターだが、技量というものはほぼないから、いなす事は可能なんだよな。
「昇竜拳!!!」
「がああっ!!!」
「竜巻旋風脚?!!!」
「ぐお……、だが、捕えたぞ!!!うりゃあああ!!!」
「ぐうあっ!!!」
白熱のバトル展開……！
そして俺の相手は……！
「よお、旅人」
「ゲェーーーッ!!!レッドさん!!!」
「お前をぐちゃぐちゃにぶちのめせば、賞金五百万らしいなー」
ヘラヘラ笑ってやがるぞ、このチンピラ！
「いやー、俺もさ、たまにはかよ子にうまいもんでも食わせてやりてぇしよぉ。だからまあ、悪いな！」
「ひ、ひぃ、殺される……」
えっこれ、ギブアップして良いよね？土下座ＯＫ？ＯＫ牧場？
「ＲＯＵＮＤ１！……ＦＩＧＨＴ!!!」
「やだーーーッ!!!」
「「「提督がんばれー！」」」
「無理です!!!君達の提督はこんな強いのには勝てません!!!誰か助けてテェ→!!!」
「おら、始まってんぞ？」
ひいいっ！殺人チンピラストレート！
「わっほい！」

避ける！
「チクショーーーッ!!!やってやらあああああっー!!!」
お前の空手を見せてやれと俺の中の闘将ダイモスが言った気がするので、全力正拳突き。
常人ならぶっ殺せる一撃だが、案の定、レッドさんにはそんなもんは効かない。
「へえ、良いパンチ持ってんじゃん」
ヘラヘラ笑ってやがる！
「うわあああああっ！南斗水鳥拳奥義！鴛鴦双掌!!!」
相手の胴を抱きしめるかのように斬れる手刀を叩き込み、両断する技だ。
常人ならもちろん即死。
「イテッ、ちょっと斬れたわー。あーあ、お前、死刑確定だわ」
後ろ回し蹴り！来る、今！
威力的にパリィは不可能！
こんな時はピタゴラスイッチを思い出せ！
「頭を下げればぶつかりません!!!」
「おら、まだ行くぞ」
音速に迫る速度のジャブ！フック！ストレート！
ジャブはヘッドスリップ！フックはブロッキング！ストレート、パリィ、無理、転がれ!!!
「んぬぁあぁ!!!」
「おいおーい、逃げんなよ？な？」
「死んじゃうーーーッ!!!俺死んじゃうよーーーッ!!!」
反撃だ、南斗獄屠拳。
斬撃効果を持つ飛び蹴りで、俺でも旧式大砲くらいの威力は出せる。
が、強靭な腹筋で弾かれる。
「良いねえ、お前やっぱ怪人やった方が良いんじゃねえの？アーマータイガーくらいなら五秒で潰せるけど、お前は五分くらい保つもんな。ほら、行くぞ、オラアアアッ!!!」

何だ次は……、消えた、いや、浴びせ蹴り！こんなん当たったら身体パーン！ですぞ！
出遅れた、これは避けられれん！なら、前だ！
蹴りのような肉体を振り回す攻撃は、遠心力の乗った先端に当たるのが一番痛い！なら、前へ！ガード、っおおお！腕が痺れる……、そして重い、足腰にもきた！
「ハハハ、相変わらず避けんのが上手いなオイ。こいつはどうだ？」
ラリアット！不味い、さっきので足腰が思うように動かない！なら！
あえて後ろ向きに飛ぶ！
「見様見真似……、『消力』（シャオリー）……！」
中国拳法の極意にて、ダメージを減らす！とは言え、俺の技量では、三割ほどのダメージはそのまま来る！
「ハハッ、何だそりゃ？またお得意の拳法ってやつか？良いねえ、俺もブルースリーのファンだぞ。ほれ、アチョーってな!!!」
馬鹿みたいな勢いの蹴りの連打！
あ、無理だこれ。
旅人は全身の骨を砕かれて再起不能（リタイヤ）だーーーッ!!!!
「レッド、ＷＩＮ!!!」

俺は包帯でぐるぐる巻きのＣＣＯの様な姿で他の試合を観戦している。
リングの上では、範馬勇次郎が武蔵とステゴロしてる。
「もうさ……、やめない？戦いは何も生まないよ」
「よしよし」
俺は大淀に撫でられながら、試合の推移を見守った……。
勝敗？まあ、その、強さ議論は荒れるのではっきりとは言わないけど、俺は全戦全敗だよ。

５１３話　南太平洋大乱闘！　前編

「南太平洋に大量の深海棲艦が湧いたそうです」
「えっ？夏イベは終わったよね？」
「夏イベ……？何を言っているんですか？」
ふむ、なるほど……。
つまり、こっちの世界はイベントとか関係なしに深海棲艦が湧くってことだな。
「にしても、南太平洋？また？」
「はい、ソロモン諸島がまた」
ソロモン諸島、深海棲艦騒ぎで一度国土が奪われて、国民は外国に逃げたんだよね。
ちょっと前に黒井鎮守府が深海棲艦を追っ払って、また国民が帰ってきたとは聞いていたが……。
ソロモン諸島の住民達は可哀想だな。
「にしても、戦時疎開か。なんかもう、マブラヴじみてるな」
「実際、この世界もマブラヴみたいなものでは？」
「じゃあ早く俺に、物凄い髪型のヒロインをくださいな」
「脳髄系ヒロインなら白露型に頼めば用意してもらえるんじゃないですか？」
「白露型に任せたらマブラヴオルタってか沙耶の唄になるんだよなあ」
「まあ、確かに、白露型の皆さんはニトロプラスの主人公みたいな目をしてますが」
「ガンギマリってことか……？」
「皆さん、鬼に逢うては鬼を斬る、仏に逢うては仏を斬る、みたいな目をしていますね」
「ツルギの理ここにありってか」
やめてくれよなー。
俺はもっとこう、Ｍａｙ―Ｂｅ　ＳＯＦＴみたいなノリで生きていたいんだよね」

「つまり、提督が私のパンツをクンクンぺろぺろ……?!!!」
あっはい。
「大淀はもっとこう……、ゆずソフトって感じだろ」
「誰が綾地寧々ですか。まあ、今朝も提督の椅子の手すりでオナニーしてましたけど」
「やっぱり君か畜生め!!!」
道理でべたべたすると思ったよ!!!

「えー、では、南太平洋に発生した深海棲艦を撃滅するための、作戦会議を始めるっ！」
そう言ってホワイトボードを軽く叩いたのは、みなみそふと……、いかんいかん、脳がエロゲに侵食されてる！長門だ！彼女は百代ではない（腹パン）。
ゲーム脳とか叩かれちゃいそうで怖いな。
「まずは、偵察部隊の話を聞こう！鈴谷、前へ！」
「はいはーい！」
鈴谷は、前に出てプロジェクターを操作した。
長門はマジでげっっっそりするほど機械が苦手だが、逆に鈴谷は文明の力をばちこり使いこなす。
「まず、これ見てね！」
プロジェクターにて投射された、立体映像に映るのは、ワイバーンのような深海棲艦。
おいおい、勘弁してくれ。
いつの間に周回ゲーになったんだこの世界は。
これどうせあれでしょ？
ドクター明石が会話の最中に、「会話の途中で悪いけどワイバーンの群れだ！」ってなるやつでしょ？
困るんだよなあ。
「これは、番外雷巡飛竜型って名前なんだけど、飛行能力を持って、硬くて、口から雷撃相当の火炎弾を吐き出すんだよね」
そうなんだ、怖いね。

「こっちが、番外戦艦陸竜型って名前で、背中のツノみたいなのは大和型の主砲に匹敵する大砲だってさ」
怖いね。
「でボスなんだけど……」
表示されたのは、二人の深海棲艦。
「この、百メートルくらいのドラゴンに乗ってるのが、南太平洋空母棲姫。百メートルくらいのベヒモスに乗ってるのが、南方戦艦新棲姫だよ」
んんんんー？
なーんか、俺が見たことあるやつとちがうぞー？
サメとエビじゃなかったかしら？？？？
何でそんなに殺意メガマックスなの？
「南太平洋空母棲姫本体は、ドラゴンに乗っている人型だけど、本体も強いみたい。槍使いだと思う」
リューサンなのか。
「その上、ドラゴンの攻撃力はかなり強いよ。ブレスが直撃すれば、巡洋艦クラスなら一撃で大破判定だと思う」
そりゃ凄いな、とんでもない威力だ。
「防御能力も高くて、私のミサイルは殆ど効かなかったよ。でも、ドラゴンは人型の方を庇ってたから、人型の方は脆いと思う」
なるほど。
「南方戦艦新棲姫も同じような感じかな。ベヒモスの背中の主砲弾幕は危ないね。でも、本体の人型の部分は脆いみたいだから、そこを狙っていけば良いんじゃない？」
「ふむ……、ありがとう、参考になった。では、作戦を立てていこう」
長門が言った。
「ではまず、艦隊の編成規模だが……、今回は扶桑と山城を出してみようと思う」
騒つく会議室。
「馬鹿な、危険過ぎる！」
武蔵が反対した。

しかし、扶桑がそれを制する。
「安心なさってください、武蔵さん。私も、自分の『能力』をある程度制御できるようになりましたから」
「しかしだな……」
「実戦投入できない兵器なんて、お荷物じゃないですか。私も、皆さんの役に立ちたいです」
「……分かった。しかし、汚染が広まれば世界がまずいことになる。その時は、提督に頼る他ないが……」
ふむふむ。
「だ～いじょ～ぶ！ま～かせて！」
俺は請け負った。
確かに、扶桑と山城の『汚染』はマジで洒落にならんくらいヤバいんだが、俺には除染の手段がある。
「念の為に雪風も派遣しよう。扶桑と山城の能力に対して効果があるかはまだ分からないのだが……」
「じゃあ、あとは神州丸の初陣も済ませたいと思うんだが……」
と俺が提案する。
「ふむ……、まあ、良いんじゃないか？だが、一応、神州丸の補助役にあきつ丸を連れて行った方がいい」
「ＯＫ」
さあ、待ってろよ深海棲艦！
めっちゃ面白いことになるぞ!!!

５１４話　南太平洋大乱闘！　中編

「んじゃあ、早速、ソロモン諸島に巣食う深海棲艦の群れを退治していきたいと思いまーす！」
ＹｏｕＴｕｂｅで生放送しながら、俺は南へ。
ソロモン諸島……。
大体、日本の南、パプアニューギニアの東にある小さな島だ。
この辺は、深海棲艦に襲われて人々が殺されまくり、占拠されたりしていた。
小島は大抵奪われてたからな。
沖縄や、シチリア島、台湾なんかも、一度占拠されかけたことがあるらしい。
そして、防衛できるほどの戦力がなかったソロモン諸島は、一度、完全に深海棲艦に占拠されていた。
それを、我々、黒井鎮守府が取り返した経験があるのだが、今、再び占拠されてしまった訳だ。
基本的に、深海棲艦が新兵器を開発して攻めてきたのを、より強い新兵器で叩き潰して前線を押し上げるという素敵なループ。
今回はまた、深海棲艦が調子に乗って攻めてきたので、ガツンと殴って、大幅に前線を後退させてやるつもりだ。
本当にもう、数年前までは、日本海から沖縄周辺にまで現れていた深海棲艦が、太平洋では滅多に見かけないレベルまですり潰されたのは、百パーセントが黒井鎮守府の力だ。
だが……、深海棲艦も本当に、負けてはいないからな。
ぶっちゃけた話、既に黒井鎮守府は、世界屈指どころかトップレベルの大組織だ。
ショッカー、ヒドラ、シャドルー……、対魔忍、ヤタガラス、幻想郷。
あらゆる組織団体よりも層が厚いし技術もある。人員も極めて多い。
黒井鎮守府は、この世界に、仮面ライダー、ヒーロー戦隊、Ｓ．Ｈ．

Ｉ．Ｅ．Ｌ．Ｄ．などの存在が居ないとしたら、全世界の軍隊を一度に全滅させ、世界征服を数十回はできる力がある。
科学技術、魔法技術共に世界最先端。
人員は幹部相当の力を持つ艦娘が数百人、下部組織の人員からアンドロイド等を含めると数百万人。
資本はＡｍａｚｏｎをぶっちぎって世界最大級。
そして、人脈も、各国のトップへ直通の電話を持ち、目ぼしい大組織とは大体仲良しという有様。
それどころか、対魔忍、ヤタガラス、一部のヒーローからヴィランまで、うちの援助がなければ事実上倒産するような組織も多々存在する。
こんな馬鹿みたいに強い黒井鎮守府が、数年かけても未だに潰しきれない組織……、それが深海棲艦なのである。
言っておくが、知能がない雑魚の深海棲艦ならば、艦娘一人につき一週間で千体は抹殺している。
幹部の姫クラスも、何十体と捕縛している。
それでも、深海棲艦は減るどころか、こうして再侵攻を仕掛けてくるような存在であるのだ。
よって、我々は、深海棲艦よりも強いという自信はあるのだが、一ミリたりとて舐めてはいない。
全身全霊、全力全開で潰す。
それが黒井鎮守府の総意だ。
俺は、「戦争なんてくだらねぇ！俺の歌を聞けェーーーッ!!!」くらいに考えているのだが、うちの子達はもう、ぶっ殺す気満々なので怖いね。

はい、それで。
今回は、新型兵器……、って訳じゃないけど、扶桑と山城の能力がやっと実用レベルまで調整できたので、それの試験運用を兼ねての出撃だ。
うんまあ、安全面については、直ちに問題はないって感じかな。

一応、『真逆の能力』である雪風を連れて行くので、問題があっても対応できる……、と思いたい。
それと、神州丸の初陣だね。
まあ、神州丸については心配してないよ。元から強くはあったし。
じゃあ、軽くぶっ潰してやろうか。
やろうぶっころしてやる！
おっと、俺はオシャンティな文明人なので、まずは降伏勧告からだ。
「ねぇ～、Ｏｈ、降伏してくださ～い。ねぇ、降伏してくださいよ～。ねぇ～、もう……、Ｏｈ、ねぇ～、いいじゃないの～、減るもんじゃなし～。旅人、とても悲しい～、悲しいデス。ねぇ～、降伏してくださいよ～、もぅ～、誠意見せてくださいよ～（ねっとりボイス）」
『『何ダ、貴様……？』』
深海棲艦は武器を見せてくる。
「何それ!!武器!?何？それ!?何の意味があるの!?何をそれで表現しようとしてるの!?アナタがた？怒り？悲しみ？喜び？喜怒哀楽!?」
『シツコイゾ！』『殺シテヤル！』
「Ｏｈ、ダカラ……、ね？いい？だから……、今こそ！降伏すればいい……、いいのよ。ねぇ～、ねぇでないとねぇ、深海棲艦バッシングするよ？黒井鎮守府ナメると後がコワいよ～？ねぇ、どうコワいかは詳しく言わないけれどもね。うん……」
『『……死ネ』』
大量の砲弾の雨霰。
「ちいっ！交渉決裂だ！真摯な態度で交渉に臨んだんだが……」
俺は自らの至らなさを悔やんだ。
「えっ？あっ……、えっ？真摯……？」
「ん？どうしたんだい神州丸？」
「えっ、その、あからさまな挑発……」
「俺は真面目に降伏勧告をしただけだが？（なろう主人公並の感想）」
「あっ……（察し）」
んん？どうしたんだろう？
いやー、にしても、交渉はこれでいいってペリーが言ってた（大嘘）

のにな？
　大変だなあ。
「じゃ、姫は生け捕り、他は皆殺しで」
「「「了解」」」
　そういうことになった。

５１５話　南太平洋大乱闘！　中編２

「んーばばんばんば」
「どうしましたか、しれぇ？」
「いやー、やっぱり、南の島ではこれでしょ。このあと、真っ赤な真っ赤な太陽追いかけてプリンセスが走ってくる（確信）」
「……？しれぇが何言ってるのか分かんないです？」
「あー、えっと、まずは神州丸の初陣だから、俺達はとりあえず踊って待ってようね、ってことだよ」
「はーい！」
「んーばばんばんばめらっさめらっさ♪」
やっぱり、人生は息抜きの合間にやる程度で充分！
×××
×
「何をやっているのでありますかな……？」
自分は、賑やかな提督閣下の方向を見た。
提督閣下は、雪風と共に、日の丸が書かれて扇子を持って踊り狂ってらっしゃる。
「ああ、まあ、遊んでいるのでありましょうな」
隣のあきつ丸がそう言った。
「戦場で何故そんなことを？」
「提督殿は、戦などやらぬお方であります。あのお方は、滅多に戦おうとは考えず、自ら田畑を耕し、家畜を世話して釣りをして、そうやって過ごすお方でありますよ」
「だが、それでは……」
とてもじゃないが、提督などという仕事をやるべきお方ではない。
自分はそう感じた。
提督閣下は、時には、必要とあらば仲間をも切り捨てるという冷酷な判断をしなければならないという、司令官などといった仕事には向いていらっしゃらない。
むしろ、守るべき民草の模範のようなお方だ。

では、何故、提督などという仕事を？
「本人は成り行きだと仰られていたでありますが、本心としては、我々艦娘を見捨てられないのでありましょうな」
「そう、か……」
提督閣下のような、豊かな心を持つ良人を、糞のような戦場に連れてこなければいけないとは……。
ああ、自分は、無力だ。
自分にもっと力が有れば、あらゆる艱難辛苦から提督閣下をお守りし、養って差し上げると言うのに……。
提督閣下がお望みとあらば、金なんぞいくらでも稼ぐし、気に食わない奴は斬り刻み、女を望むのであれば自分が目一杯御奉仕する覚悟である。
ああ……、提督閣下。
至高の御方……、自分を救ってくれるのは、自分を愛してくれるのは閣下だけなのだ。
閣下の与えてくださる愛情に報いるためには、自分の全てを捧げなければならない。
デビルサマナーとしての技も……！
「メタトロン！コウリュウ！」
管から、二体の仲魔を呼び出す。
「さあ、行くでありますよ。敵は数多、食い放題であります」
私は、刀を抜いた。
「突撃ィイーーーッ!!!!」
『シナイの神火!!!』
『メギドラオン!!!』
深海棲艦共が焼け落ち、爆ぜる。
偉大なる閣下に逆らうクズ共め。
にしても……。
「ふむ……、手応えがないでありますな」
深海棲艦、こんなものか？

自分は、デビルサマナーとして、陸での暗殺などを中心にやっていた為、深海棲艦と戦うのはこれが初めてなのだが……。
思いの外、大したことはない。
この程度であれば、クズノハや対魔忍でも対応可能だろう。
「ラップバトルでケリつけようぜ！ヒプノシスマイク見てないんか?!!」
『ガアアアアアアッ!!!!』
「ほげぇー！」
は？
「き、さ、ま……!!!!」
縮地、斬撃！
『!!!?!!』
「汚い手で……、提督閣下に触れるなあああっ!!!!!」
ゴミ屑風情が、偉大なる閣下に触れるなど！!!
許されることではない！
「肥溜に湧くウジ虫風情がああああっ!!!閣下に触れて良いと思っているのかあああっ!!!!」
刻む、刻む、斬り刻む。
虫けらが。ゴミ屑が。病気持ちの溝鼠のような、この世で最も低級なカスが!!!
自分の敬愛する閣下に触れていいと思っているのか?!!!
「閣下の御寵愛を賜るのは自分だ!!!!」
「ヒェッ……、瞳孔ガン開きじゃん……」
「閣下！お怪我は?!」
「アッハイ、大丈夫です」
「ああ、良かった……。この神州丸、閣下のためならば、骨が折れ、肉がこそげ落ちようとも戦い、任務を遂行するでありましょう！」
「はい……、ありがとうございます……？」
「嗚呼、嗚呼、閣下！なんでも、なんでもおっしゃってくださいであります！閣下のためならば、この自分はどんなことでもするでありますよ!!!」

「う、うん、はい……、わ、わー！嬉しいなぁ！帰ったらご馳走を作ってあげるから、頑張って戦ってね！愛してるよ神州丸！」

あ……♡

「く、はは、くひふはははは！愛！愛!!!愛していると!!!!閣下がこの神州丸を愛してくださると!!!それならば、自分はっ!!!この神州丸はっ!!!例え首だけになろうとも戦えるでありますよ!!!!はははははははははははは!!!!」

「ヒェッ……」

516話　南太平洋大乱闘！　後編

「わはははは！やれやれー！凄いぞー！カッコいいぞー！」
メギドラオンがボカスカ爆発して、深海棲艦の肉片が飛び散る。
もう本当に物凄いレベルの大虐殺。
神州丸もよくやるわ。
他にも援護役の艦娘も十数人いるし、そのお陰で雑魚は殆ど散らしたから、後は南太平洋空母棲姫と南方戦艦新棲姫のボス二体だ。
『オノレ！ヤッテクレタナ、黒井鎮守府！』
「前衛、退け！扶桑型を出す！」
俺が叫んだ。
「「「了解！退避ーーーッ!!」」」
前衛の艦娘が退避する。
そして……。
『何ヲ……？』
「行くわよ、山城」
「はい、姉様」
×
×
×
×
×
生まれた時から、私はなんとなく、不幸であった。
音成鎮守府のドックにて、海原提督に迎えられた時も、滑って転んで怪我をした。
初めての出撃では、命中弾なし、駆逐艦の魚雷で大破という大敗を喫した。
初めての給料は全額落として無くした。
それは、私だけじゃなく、妹の山城もだった。
なんとなく、運が悪い姉妹だった。
そして、音成鎮守府は黒井鎮守府に編入された（公式記録ではされていないのだが、そういう事になった。旅人さんがそうした）のは幸運だった。

海原提督のような、優しい善人を提督とできたのは、人生でも一二を争う幸運だったと思う。
そして、間違いなく一番の幸運は、旅人さんの下で働ける事だった。
私如きには、もらい過ぎな幸運だった。
だから、私達は、その分を働いて返そうと、どんどん鍛えた。
しかし、おかしい。
鍛えれば鍛えるほど、『不幸』が加速していった。
初めのうちは、主砲が中々当たらないだとか、相手の雷撃に直撃してしまうだとか、その程度のものだった。
それがやがて、もっと狂ってくる。
砲塔が暴発して爆発した。
訓練場の流れ弾が直撃して手足が弾け飛んだ。
ここ一番という時に足を滑らせて内臓が潰れた。
『不幸』は、私達を殺そうとしてきた。
その度に、大切な仲間や、愛する旅人さんが巻き込まれた。
……私達は、『不幸』に負けないように、もっと鍛えた。
それでも、『不幸』はどんどん加速した。
ある時は、ピンポイントに私達がいる地点にミサイルや隕石が落ちてきた。
またある時は、出先で魔王が降臨して戦う羽目になった。
あまりにも不幸なので、幸運を得られるマジックアイテムを集めて、それを拘束具のように全身に取り付けた。
それで初めて、『常識の範囲内で不幸な人』の枠の中に収まることができた。
拘束具さえあれば、私達は人並みの幸せを感じられた。
愛する人に触れられて、まともに外を出歩けた。
けど、ある日、思った。
私達は、こうして『不幸』であること以外に、何の力もないのではないか、と。
周りの皆さんは強かった。
神秘の力たる魔法を使う。

圧倒的な腕力を使う。
最新の技術を活用した兵器を使う。
私達は？
私達は、何の役に立っているのだろうか？
そう考えた時、私達の掌には何もない事に気がついた。
それに気がついて、努力をした。
けど、びっくりするくらいに、私達には何の才能もなかった。
魔法もからきし、身体能力は並以下、技能技術も身に付かず。
「結局、私達には、私達が『不幸である』という事実それだけしかなかったのよ」
『何ノ話ダ……？』
「だから……、だから」

『不幸』と、地獄まで相乗りしてやる事にしたわ。

私と山城は、艤装たる『拘束具』を外す。
その瞬間。
漏れ出す……、『不幸』が。
忌むべき『不幸』が！
『何ダ……、ソレハ！ソレハ何ダ？!!!』
海が腐りゆく。
ボコボコと、気泡を弾けさせ。
魚達が死に、浮かび上がる。
死骸は高速で腐敗し、生臭い腐臭を撒き散らす。
凝縮された『不幸』……、『瘴気』が私達に纏わり付き、私達の身体を蝕む。
しかし、このくらいでは何ともない。訓練の賜物だ。
『ア、アア……!!!』
《ドウシマシタカ？》
自分の声とは思えないほどに暗く淀んだ声だ。
『瘴気』を纏う私達の声は、『呪い』となる。

相手の名を呼ぶだけで、衰老病死を齎すだろう。声を聞くだけでも、並の存在なら即死を免れない。

『ク、クルナ、クルナ、ヤメロオオオオオッ!!!!』

私の腕は『鬼神』の腕だ。

一度触れれば……。

『触ルナ、ヤメロ、熱イ、寒イ……、痛イ……、痛イ、痛イ、苦シイ、苦シイ!!!アアアアアアッ!!!』

皮が爛れ、肉が腐り、骨が焼ける。

『ヤメロ、ヤメテクレ、降参スル、モウヤメテクレ!!!ギャアアアアアアッ!!!!』

《ナントモ、ナサケナイ。シンカイセイカントハ、コノテイドノモノデスカ……》

517話　ヤンデレに手を出してはいけない（戒め）

「えー、では皆さん！南太平洋の再奪還を祝して！」
「「「乾杯ー!!!」」」
大淀の音頭の下、艦娘達は一斉に乾杯した。
南太平洋での大乱闘により、ソロモン諸島を奪還したお祝いをしている。
そして、今、俺は……。
「はっ、はあっ、す、すごいでありますな……♡流石は閣下♡逞しくて素敵でありますよ……♡」
戦闘後で猛りの残った神州丸ちゃんの「お相手」をしている。
「治まったかい？」
「はい……、ありがとうございます。にしても、面目ないであります……。殺し合いの後は血が滾ってしまって……」
「いや、いいよ、大丈夫」
「いえ……、提督閣下側が寝所へとお誘いくださいましたが、その実、愉しんでいたのは自分の方……。気を遣わせてしまったようで、申し訳ないであります……」
「気にしなくて良いよ、よくあることだから」
実際、血が滾って性欲を持て余すタイプの艦娘って割と多いからな。
ムラムラしてる女の子はほっとけないぜ。
そして俺は、気を遣った……、って訳じゃないが、基本的に自分から誘うタイプだ。相手に誘われるのを待っているようなのは男じゃない。
俺と神州丸は、軽く服を着て、宴会場となっている食堂へ向かう。
その最中、神州丸は手を繋ぎたそうにしてたので、ぐっと手を絡めてやる。
「あっ……♡いけません、こんな、恋人のような……♡」
「良いだろ～？俺の恋人になっちゃえよ～」
「そんなっ！光栄であります！」

カラメルのようにトロトロでホイップクリームのように甘々な恋する女の子の目をしている神州丸。
かわいいね。
「自分は、提督閣下の下僕でありますから、恋人など、身に余る光栄でありますよ！」
「何言ってんの、恋人でしょ？対等な立場だよ」
「い、いけません！閣下は自分などより遥かに尊き御方であります！こうして、閣下の情婦になれただけ光栄極まりないと言うのに……！」
「情婦だなんて、そんな寂しいこと言わないでよ！俺は君を心から愛しているよ」
「ああ、そんな……、誠に、身に余るお言葉を賜り……、自分はっ！自分はあっ……！」
ええ……。
感動のあまり泣き出した神州丸。
怖……。
「閣下!!!」
「え、あ、はい」
「不肖、神州丸！今後も、全身全霊をかけてお仕えします!!!」
わー。
コールタールのようにドロドロで魔獣のようにギラギラな心酔した忠臣の目をしている神州丸。
か、かわいい、ね？

さて、会場に到着。
酒。
酒を飲んで辛いことを忘れよう。
ま、俺、辛いことなんてここ最近全くないんですけどね～！
「デン！一番のやつ～！美味すぎて馬になったわね……」
などと俺がふざけていると……。
「確かに馬並みでありましたな……♡」

何言ってんの神州丸????
「ほう、優しくしてもらったでありますか？」
とあきつ丸。
「もちろんだ。閣下は、私の身を丁寧に解して……」
いやいや……、プレイの内容を知り合いに話すの？
これって普通のことなの？
「やはり、提督殿と床に入るのであれば、もっと甘えた方が良いでありますよ？」
「し、しかし、閣下に奉仕せねば……」
「提督殿は、女が弱い部分を見せてくるのが愛いものだと仰っておられたであります。情婦というよりも、少々子供っぽく甘えた方が……」
「ふむ、なるほど……」
「そうして、提督殿の『雄』の部分に、自分の『雌』の部分を委ねると……」
「そ、そこまで良いのか……！」
猥談。
よろしいのかこれは。
ＵＮＥＩに消されてしまうのでは……？
まあ、その時は、「ひっさつまえば」ならぬ、「ひっさつどげざ」で切り抜ければ良い。
俺は格闘技が使えるし、猛虎落地勢については極めたと言って良い。
必殺の猛虎落地勢でＵＮＥＩも黙らせてやる。
「いやあ、羨ましい限りでありますなあ。自分も提督殿からの『お情け』が欲しくありますよ」
おっと、ここであきつ丸からの露骨な秋波。
「もちろん良いよ、おいで」
俺は受け入れる。
「では……」
するする。

布が擦れる音。
すとん。
布が落ちる音。
「え……？こ、ここでするの？」
動揺した俺は……。
「長門殿」
「おう」
長門に捕らえられた。
周囲を見渡す。
艦娘達は完全に出来上がっていて、服を脱ぎ始めていた。
「なるほど」
もう慣れた。
逆レは基本。

５１８話　まずうちさあ……

「丁型駆逐艦、松型一番艦、松です！よろしくお願いしますね、提督っ！」

意識が覚醒した。

うふふ……、ここの提督、とっても強く私を呼んでくれてた。

多分、男の人。

艦の頃には出来なかった恋愛とかってのをしてみちゃったりして！うふふふふ！

「……あれ？提督ー？」

どこだろう？周りを見回す。

あっ、あの人かな？

そこには……!!!

「ウワーッ！ウワーッ！ウワーッ!!!」

「さあ、提督……、一つになりましょう……♡」

変態的なコスプレをしている……、そう、鹿島さん！鹿島さんに提督が襲われているっ?!!

「へ、変態だーーーッ?!!!」

私は思わず悲鳴を上げた！

具体的にどう、とは言えないけれど、少なくとも、私ならあんな格好をするくらいなら自刃するレベルの痴態を晒す鹿島さん。

「ざけんなよ……、そんなカッコにならなくてもな……、一つにはなれんだよ！　なあ……、そうだろ、松ッ!!」

「えひっ?!ええっ?!あっ、はい、そうですね?!!」

い、いきなり話題を振られた?!

ど、どうすれば良いの私は?!

「どう思う、雲龍？」

そしておもむろに、隣の雲龍さんに話しかける提督。

「今日はいい天気ね。絶好の散歩日和だわ」

「Ｏｏｐｓ、話が通じにくい」

「外を歩いてくるわね」

「アッハイ」
　そしていなくなる雲龍さん。
「こうなれば古代バビロニアから巨大ロボットを発掘しないと……！
と言う訳で古代バビロニアの専門家をお呼びしました！」
「ハァーッハッハッハ!!我、参上!!!」
　だ、誰?!あの金ピカの人誰?!
「ＡＵＯさん、やっぱり、古代バビロニアに巨大ロボットとかって……？」
「うむ、あると言えばあるな」
「マジすか?!」
「我の蔵は、人類の思い描く全てがそこにあるからな。そもそも、巨大ロボットと言えるような存在は、我の歴史よりも後のトロイア戦争で……」
「えっ、マジ？トロイの木馬って巨大ロボットだったの?!」
「そうだ。全く、このたわけが。それくらい把握しておけ」

「えっ……、あの、これは……？」
「ヒトミ、イヨ、松、早霜、浜波、磯風、綾波、敷波……、の！着任を祝いまして!!!」
「「「かんぱーい!!!」」」
　あっ、そっかあ（完全理解）。
　わざわざ歓迎会を開いてくれたんだ！
　えっ……、いや、さっきのやりとりは?!
　さっきの鹿島さんは?!!
　さっきの金ピカの人は?!!!
　どうなってるのこれ？何で誰も突っ込まないの?!
　私は、小声で、隣に立つイヨちゃんに訊ねた。
「あの、これ……」
「空気を読むのよ……。多分、これは突っ込んでもスルーされるやつよこれ……」
　なるほど……、奥が深いわね……。

「よっしゃー！煉獄さんが三百億の男になるんなら、うちの吹雪も三百億の女になれるだろ!!!なぁ、吹雪!!!」
「え？あー、そうですかね？」
「まあほら……、劇場版は良かったから……」
「提督……、アニメなんてなかったんですよ。良いですね？」
「ウス」
よく分からない話をする提督。
分かるのは、本当にヤバいレベルのハンサムだってことだけ。
あぁ^～。
顔が良いっ！
そして、提督は、立食パーティとなっているところを周り、新入りの艦娘に挨拶をした。
「そうだろ、松ッ!!」
「えっ、あっはい?!」
「ああ、いや、すまないね、癖みたいなもので。こんにちは、松ちゃん。俺は提督の新台真央。みんなからは旅人と呼ばれているよ」
「よろしくお願いします、提督！」
「ああ、よろしく！」
そう言って、握手した。
おおっ、分厚いゴツゴツの手！
男の手って感じ！
良いなぁ、かぁーっこいいなあ～っ！
そして、胸元！
胸板分厚ぅい！
男らしい……、最高！
ああ、私って、「良い男」が好きだったんだな……。
「あの、提督？」
「ん？なんだい？」
「胸板触っても良いですか？」
「構わんよ」
えいっ！

ぺたぺた……。
「あぁ^～（浄化）」
違うのよ……。
ほら……、艦娘って、艦の乗組員の記憶がゴチャッと混ざったような状態で生まれてくるのね？
私の場合、その……、男が好きな男の人の記憶を色濃く受け継いでしまったみたいで……。
うん、その、筋肉最高！
「はぁはぁ……、素敵よ提督……♡」
「お、おう」
やーん！お尻カッチカチ！最高ーーーッ!!
あとは逸物を……ッ！
どうする？事故を装って……!!!
「はい、そこまで」
「ひゃあ?!!」
あ、えっと……、吹雪ちゃん。
「松ちゃん、手つきが完全にセクハラおじさんだったよ」
「え、えへへ……、ごめんなさい」
「乗組員さん達からどんな記憶を受け継いだのかは知らないけれど、いきなりエッチなことは駄目だよ？」
「いきなりじゃなければ良いのっ?!」
「まあ、良いけど……。松ちゃんは本当に良いの？女の子の初めては大事にしなきゃ」
「え？提督相手なら別に……。みんなも、乗組員さん同士がああしてこうして……、って記憶、あるでしょ？」
海の上は男しかいないからね！
「い、いや、まあ、あると言えばあるけど……。艦娘なんだよ？松ちゃんは、ちょっと、男の記憶に引っ張られ過ぎてるんじゃない？」
「そんなことないよ！私、ネコだもん！」
「普通の艦娘はネコとか言わないからね?!」
あっ、そっかあ……。

５１９話　幸子をプロデュース！

「……ですので、再び、この３４６プロにお力を貸していただけたら、と思います」
　黒井鎮守府、応接室にて。
　黒スーツの大男が俺に頭を下げた。
「っつってもねえ、武内君……」
　俺が相対しているのは、俺がかつて働いていた芸能プロダクションの『３４６プロダクション』のアイドルプロデューサー、武内君だった。
「今更、どのツラ下げて戻れって言うのよ？」
「美城常務ももうお怒りではありませんから……」
「俺はね、一時の感情に任せて、あの女に無礼を働いた。まあ、それは良いさ。だが問題は、それによって担当アイドルを裏切ってしまったことだ」
「そんなことはありません！新台さんは、担当から下された後も、陰日向にアイドルの皆さんを守ってきたではないですか!!」
「そうだとしても、もう俺はプロデューサーをやる資格なんて……」
「お願いします……、もう一度だけ……！」
　おいおい……。
「武内君、男がそんなに簡単に何度も頭を下げちゃ駄目だろ……」
　だが……。
「とは言え、どんなに頼まれても、俺は今プロデュースしている女の子達の面倒を見るのでいっぱいいっぱいだ」
　艦娘ってんだけどね。
「だからどうだろう、うちと合同で、何かしらの企画をやっていく、と言うのは？」
「もちろん、それで充分です……！ありがとうございます……！」
「と言う訳だ。分かったか幸子」
「えっ？あっ、えっ？」

「おいおい、撮影は既に始まってるぞ？気合入れろ！えいえいおー！」
「お、おぉー？」
「じゃあ、行こうか。パスポート持ってきたか？」
「あ、はい」
「飛行機のチケットは取ってあるからな！それで、今回の護衛役に、艦娘の潮を連れてきた。挨拶しな」
「はい、えっと、潮さん？」
「はい、綾波型十番艦の潮です。幸子ちゃん、よろしくね」
「はい、よろしくお願いします！」
　うんうん、女の子が仲良しだと嬉しいね。
「じゃあ、タイトルコール、行くぞー！」
「はーい！」
「イギリス、ロンドンでのライブ！＆一週間のロンドン旅行記！」
　幸子が言った。
「アフリカ、秘境ンゴロンの地に棲む怪人民族ヤポポイ族の前でサバイバルライブ！」
　俺が言った。
「え？」
　幸子が、虚空そのものと化した目でこちらを見ている。
「だまして悪いが、仕事なんでな」
　俺はニチャァ……とした邪悪な笑顔で告げた。
「い、い、い、いやですぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！

「うー……、でも、元プロデューサーさんがそう言って、結局、ボクが怪我したこととかは一度もありませんし、何故か最終的にはうまくいくんですよねえ……。なんでなんだろう……？」
「大丈夫、大丈夫。さあ、行こうか！とりあえず、アマゾンまではこの旅人号一号で行きますよー、行く行く！」

「さて、早速食事にしましょうか！」
　俺は弓矢を取り出す。
「えっ、何するんですか？」
「二キロ先にガゼルの群れがいるから、狩るよ」
「思考回路が現代人のそれじゃないんですよねぇ……」
「ガゼルは美味いぞー」
「知ってますよ、昔、ゲテモノ料理店で食べさせられましたから」
「ああ、そうだったね」
「ええ、嫌だと言っているのに、カブトムシの幼虫とか食べさせられましたからねぇ……!!!」
「まあまあ、人生は経験だよ♡」
「そんな経験いらないんですよねぇ?!!」
「そこぉっ!!!」
『キュイイッ!!!』
　よし、仕留めたな。
　そして、ガゼルのもも肉をステーキにして、パンに挟んでステーキサンドにしていただきます！
「うわ……、相変わらず、旅人さんってお料理が上手ですね……」
「いや、材料が良いのよ。新鮮な肉は塩かけるだけでも美味いのよね」
　さあ、今日はここでキャンプだ。
「あ、あの、一人で寝るのは怖いので、隣で寝てもらえますか？」
「いやー、流石にアイドルと同衾はやべーわ。潮を隣で寝せとくからそれで」
「あ、はい」
　俺は見張り、と。

「あの、潮さん」
「はい、何ですか？」
「潮さんは艦娘さんなんですよね？色々、お話を聞いても良いですか？」
「もちろんですよ」
ユウジョウ！

次の日の朝。
「幸子ー、起きろー」
「むにゃ……、はい……」
「起きなきゃ死ぬぞ」
「……え？」
「ほら、外を見ろ」
「「「うぼ！うぼ！うぼ！うぼ！」」」
血塗れの斧を持った矮躯の黒人が集まってきた。
「な、なな、何ですかあれ?!」
「この辺に棲んでいる首狩り族のヂボバ族だ。交渉は不可能、突っ切るしかない。早く車に乗れ！」
「ひ、ひいっ！わかりましたっ！」
「「「んぼばばばばーーー!!!」」」
「突っ込むぞ!!!掴まれッ!!!」
「ひぎゃあああああああっ!!!」

「全く、朝から災難だったな」
「く、車の後ろ側に、投げ槍がガンガンって！」
「ん？旅人号一号の装甲をぶち抜くなら、対艦砲くらいじゃなきゃ無理だぞ」
「怖かったです……、本当に」
「仕方ないな、『魔除け』の儀式をするか」
「そんなんできるんなら最初っからやってもらえませんかね?!!!」
よし、じゃあ……。

『偉大なるオニャンコポンよ、我らに加護を与えたまえ』
　そう言って、生贄に適当なガゼルを一匹捧げた。
「よし！」
「何したんですか？」
「この辺りの神様に生贄を捧げて、代わりに一時的な加護をもらったの」
「ほへー、すごいですね。効くんですか？」
「そりゃ効くともさ」

「そして、ここが秘境ンゴロンだ！」
「ここに来るまで色んなことがありましたね……」
「じゃあ後は俺が四人に分身してギター、ドラム、キーボード、ベースをやるから、幸子は歌ってくれ」
「はい！」

「ヤバい！シャンゴ神が荒ぶっている！このままだとアフリカ一帯が吹き飛ぶぞッ!!!」
「はい!!!?」
「俺はちょっと命がけでシャンゴ神を調伏してくるから、幸子は潮と逃げろッ!!!」
「えっ、えええええ!!!?」
「提督、ご武運を！」
「おうッ!!!行くぞおおおおっ!!!!」

「で？武内君。数字はとれた？」
「バッチリです……！特に、輿水さんが、怒れる神を歌で鎮めた辺りが大好評でした……！」
「それなら良かった。いやー、俺が遠出すると、何故か事件が起きちゃうんだよねえ」
「はい……、ですが、輿水さんには怪我一つなく……」

「まあ、良かったか」

５２０話　デリバリーＨＥＬＬ

うーん、暇だなあ。
なんか面白いことしたい。
そうだ、黒井鎮守府にデリヘルを呼んでみるか！
たまには人間を抱きたいしな。
「もしもし？デリバリーヘルスの『ララバイ』さんですか？このレイナちゃんって子を、Ｙ市の……」
『はい、分かりました』

「どうも！デリバリーヘルス『艦隊これくしょん』のスズでーす！」
うーん？
んんんんー？
んー？
学生服風の服装、グリーンの長髪、女子高生らしい態度。
ニコニコ笑顔の可愛い君は。
「鈴谷じゃん」
鈴谷じゃん。
「やだもー！私はスズだよー？鈴谷なんて娘知らなーい！」
お、そうだな。
「もう一つ質問いいかな？俺が呼んだデリヘル嬢、どこに行った？」
「君のような勘の良い提督は大好きだよ」
そう言って俺に抱きつく鈴谷。
えっ、ま、まさか。
「消して、リライトしちゃった?!」
「殺してはいないよ、お金渡して帰ってもらった」
「あ、それなら良いんだけどね。殺していたら怒っていたよ」
「まさかぁ、殺すほどではないよ～」
うん。
「やっぱり鈴谷じゃねーか！」
アイドルマスターかな？と思ったら鈴谷じゃねーか！

「くっくっくっ、バレてしまっては仕方がないね！ほれほれ～、脱いで脱いでー！」
俺の服を手慣れた手つきで脱がして、自分の服もスルスルと脱ぐ鈴谷。
うーん、下着が可愛いっ！エロいっ！
「デリヘル嬢が良かったんだけど……」
「だから、デリヘル嬢でしょ、私」
「せやろか？」
「今だけ、提督専属のデリヘル嬢だよ！」
うーん？
うーん……？
いいん、ですか？
「いや、たまには人間を……」
「は？」
「え？」
「なんで？」
「なんでとは？」
「人間なんていらなくない？だって、私達艦娘がいるんだよ？人間の売春婦なんていらない。そうだよね？」
「そうなの？」
「そうだよね？」
「い、いやほら」
「そうだよね？」
おお、怖。
そうだよねと訊ねられる度に、鈴谷の目からハイライトが失われていく。
「たまには良くない？」
「良くない。私達の全部、髪の毛の一本一本が、指の先から爪先までに留まらず、資産が、知恵が、能力が。全部、全部、全部……、提督のものなんだよ」
「そうなの？」

初耳～！
「そう。私達艦娘の全ては提督のものなの。でも、それと同時に、提督も私達艦娘のものなの。分かる？」
「わかり哲也」
鈴谷は、俺の顔を掴んで、無理矢理に目を合わせてきた。
「分かる？」
おお、有無を言わせないってやつか？
ドキドキだな。
まるで文芸部みたいに。
俺も、鈴谷の顔を横から掴んで……。
「んー」
「んにゃ?!」
思いっきりキスをした。
「っぷはー。いいか鈴谷？俺のものは俺のもの、鈴谷のものは鈴谷のもの。カエサルのものはカエサルのものなのさ」
「っぷはあ。や、やだよ、提督、提督。鈴谷の全部をあげるから、提督の全部を頂戴よ」
うーん、難しい話だな。
「どんなことでもするよ、靴も舐めるよ、土下座もする。全裸で犬の真似でも、豚の真似でもするよ。だから、だから」
しかし……。
「良いか鈴谷？人はものじゃない。そしてνガンダムは伊達じゃない」
「やだ、やだ、やだ」
おお、駄々っ子鈴谷ちゃん。
ンモー、しょうがにゃいにゃあ。
「なら、この瞬間だけ。この瞬間だけは鈴谷を一番に愛するからさ。それじゃ、ダメかい？」
「……分かった」
俺は、次の日の朝に、鈴谷に２５０ドル渡してやった。

すると、鈴谷は、洗面台の鏡に、手持ちの口紅で「ＮＯ　ＳＡＬＥ」と書き残した。
おお、中々に教養があるようだな。
さあ、今日も一日頑張ろ……。
ん？
電話だ。
「はい、もしもし？」
『もしもし？こちら、デリバリーヘルスの『艦隊これくしょん』です！』
「……頼んでないです」
俺は電話を切った。
デリバリーＨＥＬＬじゃないか！まともなのは僕だけか?!
プルル、プルル、電話が鳴った。
「はい、もしもし？」
『デリバリーヘルス『艦隊これくしょん』です！可愛い子いますよ！』
デリヘルの押し売り……?!
新しい、惹かれるな……。
「因みにオススメは？」
『クマノちゃんなんてどうです？』
ふむ……。
「お値段は？」
『タダです』
なるほど……。
「やっぱりお断りします」
電話を切る。
そして、自室のドアが開く。
「デリバリーヘルス『艦隊これくしょん』のクマノですわ！」
「え？あの、呼んでないです……」
「クマノですわ!!!」
アッ！ゴリ押す気だな?!
足掻くな、運命を受け入れろ、ってことか。

５２１話　深海棲艦、健やかな暮らし

「スローライフがしたい」
俺は、どうぶつの森をプレイしながら言った。
「またですか？今回はどこを買い占めますか？」
大淀が笑顔で言った。
「ヤメロー！それでは桃鉄になってしまうー！」
「ボンビー！提督のために土地を買ってきたのねん！とってもお得なのねん！」
流石大淀、打てば響くな。ツーカーの仲だよ、俺と大淀は。
ＡＩＢＯ！って感じだ。アテム!!!
俺は……。
「今回は深海棲艦の島に行く」

深海棲艦の島。
俺達、黒井鎮守府がボッコボコにした深海棲艦を収監する監獄島!!!
と、見せかけて、発電所をつけて、ケーブルを通してネット環境もあり、家畜を放牧し、畑を作った、完全に自立した生活が可能な無人島である。
無人島……、まあ、深海棲艦は人じゃないでしょ？と言われればそうなんだが、俺の旅人カウンターでは深海棲艦も人間だから。
ぶっちゃけ人外娘の範囲内でしょ？俺は人外っ娘もバリバリ行けるから。
バリバリ最強ナンバーワンだから。
ランク１オッツダルヴァだから。
コミック外楽購読してるから。

早速、新調した旅人号で、捕虜にした深海棲艦に会いに行く。
チ級のちーちゃんがお出迎えしてくれた。
ちーちゃんは、雷巡チ級の『オリジナル』だ。
今、俺達、黒井鎮守府が戦っている他のチ級は、ここにいるちーちゃ

んのコピー品でしかない。
意志を持ったチ級はこの地球上にこの子しかいない訳だな。
つまりは、俺達がチ級を殺して回っても、死んでいるのはちーちゃんのコピーであり、意志のない肉人形でしかないってことだ。
流石に、意志のある深海棲艦を血祭りにするのはとてもかわいそうなのでやらない。
「提督〜！来タノカ！」
「おっすおっす」
さて、ちーちゃん。
ちーちゃんは、艤装であるあのクソデカアームと仮面を外して、ラフな冬のパンツルックで決めている。
「おやおや、ちーちゃんは可愛いですね（ボ並感）」
「エヘヘ、サンキュー！デモ、マズハ『チュー』シロヨナ！」
おーおーおー。
「もちろんさ！ちゅっちゅー！」
「チュー！」
あー、かわええなあ。
深海棲艦はね、艦娘と違って重くないからね！
艦娘は重い！それはそれは重い！例えるならエルガイム並みだ！
ヘビーメタルってことだね、うん。
しかし、深海棲艦は重くない。
恋人気分でいちゃついて来るだけ！
艦娘の場合、選択肢ひとつ間違えば監禁ルートだが、深海棲艦はそんなことないからな！
まあ別に、艦娘も、ちょっと監禁されて欲望を満たしてあげれば解放してもらえるから別に困らないんだけど。その欲望、解放しろ！って感じ？
深海棲艦はもう本当に、たまにデートしたり、ＳＮＳで絡んだり、軽くセックスしたりするだけで満足してもらえるからとっても楽々の楽々フォン。
いや、もちろん、だからと言って艦娘が嫌いな訳じゃないよ？愛し

てもらって嬉しい、幸せだ。
多少の異常行動は、愛故にだし許せちゃうよね。
ちょっと解剖されたり逆レされたり監禁されたりするくらい、みんな許せるはずだ。男なら誰でも。

さて、ちーちゃんと手を繋いで、深海棲艦島へ。
深海棲艦島はほら、ひょっこりひょうたん島みたいなもんだから。
ヴィンランドとかジパングとかエルドラドとかそんなノリの土地で、普通の人はたどり着けない海域にある。
日本近海ではあるが、具体的にどことは明言しない。
「ヲッ！」
「アラアラ！マタ来テクレタノネ！嬉シイワ！」
「やあ、ヲっちゃん！たっちゃん！」
ヲ級のヲっちゃんと、タ級のたっちゃんだ。
ヲっちゃんは、あのクソデカ被り物をやめて、毛糸のセーターとマフラーを着込んでいる。
確か、編み物にハマっているとか言ったっけかな？
セーターの出来は素人とは思えないほどに良くできていた。
その暖かそうなもふもふの格好が、ヲっちゃんの人間的な丸さにベストマッチ。
優しげな美少女になっている。
たっちゃんは、ロングスカートにコートという出で立ちで、大人っぽくて綺麗だ。
髪型も、いつもより短めの髪をハーフアップにしていて、大人のクールさを演出。
似合ってるなあ。
二人を一頻り褒めた後に、三人に囲まれながら、島を回る。
途中、何人もの深海棲艦に出会うが、皆、人生をエンジョイしているのが感じられた。
刑務所にいるマフィアのような生活をしているようだ。
毎日、悠々と暮している。

「ア、提督ー！」
おや、深海双子棲姫。
二人でぽこんぽこんとテニスのラリーをしていたみたいだ。
深海棲艦ももちろん、身体能力が高過ぎて、いまいちスポーツは楽しめないみたいだが、特別に調整された黒井鎮守府特製のスポーツ用品を使ってなら、楽しめるはずだ。
二人は側のタオルで顔を拭いてから、俺の両側に来て、両方から頬にキスをしてくれた。双子ならではの攻め方……、イエスだね！
「マタ来タノ？」「ヨク来タネ！」
「こんにちは、シロちゃん、クロちゃん」
深海双子棲姫は、白い方がシロ、黒い方がクロと名乗っている。
名前とかは特別な意味を持たないらしく、その辺は彼女達は適当だ。
「運動してたのかい？いいね、健康的で素晴らしいよ！」
「ウン！」「泊地棲姫ミタイニ太リタクナイシ！」
ほう……？
「泊地棲姫は？」
「アソコ」
指差された方角に向かうと……。
室内で、泊地棲姫が炬燵に入りながら、デカイ業務用のバニラアイスを食べていた。
「炬燵アイスハ至高ダナァ……。最高ノ贅沢ダァ……」
俺は後ろから腹肉をつまむ。
「ふんっ！」
「アヒョッ!!?ウ、ウワー！誰ダァ!!?」
「俺だよ、泊地棲姫……。何だこのプニプニは！ダイエットしなさい！」
「ウゥ……、スマナイ……。秋ハ美味シイモノガ多クテ……」
「秋ももう終わりでしょーが！」
「スマン……、スマン……！」
全くぅ。

ん？
「オオ、来テイタノカ、提督」
「三カ月ブリクライカシラ？」
南方棲戦姫と空母棲姫か。
二人は太ってないが……。
裾がほつれたジャージに、胸に『田吾作』『かまぼこ』などと印字された白シャツ。
だるっだるな生活をしていることが見て取れる。
「南戦ちゃん達、今起きてきたでしょ？」
「オウ！今日ハ早起キダゼ！昼飯前ニ起キタカラナ！」
もう十二時だよ。
「普段は何やってんの？」
「「模擬戦ト、ネトゲ」」
「夜更かししないようにね？」
「提督ガクレタＶＲゲームッテノガ面白過ギルンダヨナア……」
「あんまりやり過ぎちゃ駄目だよ。それと、朝はちゃんと起きること！」
「「ハーイ」」

まあ、こんな感じで、みんな楽しく暮しているみたいだ。
だが……。
「何か困り事とかはあるかい？」
と俺が訊ねると。
「実ハ……」
何か事件が起きているようだ。
さて、何だろうな……？

５２２話　深海棲艦、鮮やかな仕事

「で？たっちゃん、困り事とは？」
　困ったことがあったら何でも言ってくれたまえ！君達は大切な嫁なんだからね！
「イエソノ、デモ……、アマリ、提督ノ手ヲ煩ワセルノハ……」
（胸が）い、いてえよ～！
「そんなこと、気にしないで良いんだよ！困ったことがあるなら何でも言ってね！」
「ソ、ソノ……、実ハ……」
……
……
……

ふむ……。
深海棲艦達の困り事とは何か？
簡単にまとめると、仕事が忙しい！ってことだった。
鹵獲して味方になってもらったここの深海棲艦達には、艦娘達にお願いできないようなブラックオプス……、つまりは、非道な仕事を担当してもらっている。
当然だが、市民の虐殺などを命令する訳ではない。
それに、ブラックオプス的なことなら、艦娘もやっているじゃないか！まともなのは僕だけか?!と、お思いかもしれない。
それは確かに事実だ。
妙高型は、なんだかんだ色々あって、俺の伝手で『アサシン教団』に助力し、『テンプル騎士団』と戦っている。
まあ、その辺の話は別の機会に……、具体的には、次話に妙高型の過去編でもしようかなと思う。
とは言え、妙高型は、エデンの果実を悪用し、世界の支配を試みるテンプル騎士団を排除するのみで、無秩序な殺戮や、金で暗殺することもない。

他には……、白露型。
白露型も、非合法的な魔法に関する仕事をする。
だがしかし、それは、社会に存在している霊媒師、蟲師、デビルサマナー、魔術師などを支援して、世界秩序を守るためのことだ。
加えて言えば、敵対者以外は殺さない。堅気の人間や、手を出して来ない人間には手を出さないのだ。
では、深海棲艦組は？
深海棲艦組はね、こちらから攻撃するんだ。
麻薬や人身売買、臓器密売などのグループに、こちら側から直接攻撃する。
半分堅気のような人間も、場合によっては殺す。
そんな組織なんだよね。
基本的な仕事は、非合法的な麻薬や人身売買などの密輸船を轟沈させ、場合によっては、その組織を破壊すること……、それが仕事だ。
船を轟沈させる場合なんかは、半分堅気の船の乗組員も巻き込んで殺してしまうことがあるが……、まあ、その辺は、堅気であろうと悪党に手を貸した時点で残念ながら……ってことで。
で、その、仕事が多いってのは、密輸船が多いってことだ。
基本的には、日本海側で、アジアからの密輸船を轟沈させるのがいつもの仕事なのだが、最近は、太平洋側から、南米からの密輸船団が多数現れているらしい。
よって、部隊を二つに分ける必要があり、単純に仕事量は倍！ってことらしい。
ふむ、なるほど……。
「これって、俺達のせいじゃん」
そう、俺達、黒井鎮守府のせいなのだ。
最近は、太平洋側の航路が安定してきて、そのせいで、雨後の筍のようにぽこじゃかと密輸船団が増えてるんだね。
うーん……。
よし！
「メキシコのマフィア組織、潰しちゃおっか！」

そういうことになった。

……とは言え、マフィア組織なんて、放っておけばぽこじゃか増える。

ちょっと潰したくらいで根絶はできない。

マフィア組織はそもそも、貧困やら政府への不信やら、そういうものがある限り何度でも蘇る悪の魔王みたいな存在だ。

この世に悪がある限り、我は何度でも蘇るぞォー!!!みたいな。

社会の癌を切除しても、癌細胞そのものを根絶させることはできないだろ？

だから、対処療法にしかならないんだけどね、今回はごっそり切除してやろうと思います！

とは言え、俺は殺人とかやりたくない。

いや、綺麗事だけで世の中が回るとは思ってはいないさ。

世の中には、死ぬべき奴が、死以外では止まらない奴がいる。

どうしようもない時はそりゃ俺も殺すね。

さて……、行こうか。

『おい、てめえ！止まれ！がっ……？』

門番のチンピラを軽く捻って片付ける。

流石に、俺もただの人間に負けるほど寝ぼけちゃいないよ。

そして、鉄の門を飛び越えて、ドアをピッキング。

解錠……、と。

「たっちゃん、ついて来て」

「エエ」

内部のチンピラを片付けて、ボスの執務室まで到着。

『ああ？お前は誰……、ぐあっ！』

俺は、片腕を触手に変えて、ボスを壁に叩きつける。これは、『エーブリエタースの先触れ』という、某所で得た秘儀である。

触手でボスを拘束し、俺はボスに訊ねた。

『金庫の暗証番号は？』

『こ、答える訳ねぇだろ!!!』

残念、俺は相手の心を読める。
さとり妖怪ほど詳しくは読めないが、こうして質問すると、大抵の人間は心の中で答えを言ってくれる。
『なるほど、６２３３８０……』
『な、何だとっ!!!?』
そして、金庫の中の金塊を徴収。
「ほへー、金持ってんなあ。やっぱり麻薬は儲かるんですねえ」
紙幣は燃やしちゃお。
どこぞかから奪い取って来た各種権利書も焼いちゃいましょうねー。
もう二度とボスできないねえ。
『テメェ！殺してやる！殺してやるっ!!!』
『それは怖いな』
さて……。
「たっちゃん、やっちゃって」
「エエ、イクワヨ！」
たっちゃんが主砲をぶっ放す。
マフィア組織の本部は物理的に潰れた。
そして……。
『モシモシ？提督？』
「ちーちゃん、どうだった？」
別働隊のちーちゃんからの連絡を受ける。
『麻薬畑ト麻薬工場ハ焼イタヨ！』
「ＯＫ、ぐっじょぶだよー」
よし、と。
まあ、こんなもんだろう。
「はい、撤収！帰るよー！」

その後の話。
南米で一番大きな麻薬組織が壊滅した。
そのせいで、盛大な内ゲバが始まり、新たなナンバーワン組織を決

めるための天下一武道会が始まった。
ワクワクすっぞ。
そんな訳で、しばらくは内ゲバに勤しんで、麻薬の密輸やら何やらはしないであろう、という見通しだ。
とは言え、奴らはピッコロ大魔王並みの再生力も持っているので油断はできないが。
まあ……、これで、深海棲艦組は、通常シフトに戻れた。
良かった良かった。

５２３話　妙高過去語り　前編

「疑問なんだけどさ」
俺は、サラミをかじりながら訊ねた。
あ、サラミに塩は乗せてません。
死の三点食いとかやりません。食べ物で遊ぶな。
「はい？」
妙高がこちらを向いた。
「……なんで君ら、アサシンになってんの？」
「今更ですか？」
「いや、そうだけどさ。気になって」
「理由は……、もちろん、提督のためですよ」
そうなの。
「暗殺して何で俺のためになるの？」
「黒井鎮守府を裏から害そうとしている『結社』を優先的に始末しています」
ほへー、なるほどー。
「『教団』とは、『結社』の情報提供の代わりに、『教団』での活動の支援や任務を受けています」
×ふむふむ。
「妙高の話、もっと聞きたいな。今日はたくさんお話ししようか」
×
「はいっ♡なんでも話しますっ♡」
×
×
×
×そうですね……。
×どこからお話しましょうか……。
×まず、事の始まりは、黒井鎮守府で召喚された私達妙高型が、初期訓練を終えて近海の警備活動を始めた頃の話でしょうか？
「んーっ！キラキラの青い海！やっぱり海はサイコーねっ！」
足柄が伸びをしてから大声で言いました。
「足柄！真面目にやりなさい！」

「ヒェッ、妙高姉さん……。わ、分かったわよ」
はしゃぐ足柄を咎めながら、羽黒と那智も一緒に、四人で近海の警備活動をしていたんです。
そんな時……。
「んん？妙高姉さん、漁船だ」
那智が何かを見つけました。
それは、大型の漁船で……、不思議なことに、船名が書かれていない船でした。
「もしもし、提督？」
私はすぐに、通信機で提督に確認をとりました。しかし、私の記憶では、この海域に漁船が来るなどという報告は受けていませんでした。
提督に、その不審艦の特徴を伝えると……。
『んー？おかしいな、漁船？そんな報告は受けてないんだけど……？その船、停止させて船長に話を聞いてみてくれる？』
とのことなので、その通りに行動しました。
「そこの漁船！止まりなさい！現在、この海域は封鎖されています！」
私は、そうやって停船させました。
すると……。
「分かりました、船長が詳しい話があるから船内に来て欲しいと……」
と、その不審艦の船員に言われました。
この時はまだ、私達艦娘を罠に嵌めてどうするのか？そんな価値はないだろう、などと思っていた私達は、その言葉を疑いもせずに、普通に船内に入ってしまいました。
船内は、今考えると、漁船にしては不自然なほどに整理されていましたね。
怪しいのですが、当時の私達は召喚されたばかりで、人を疑うということができませんでした。
そして、船長のいるブリッジに連れて行かれると……。
「え……？騎士……？」
何故か、漁船の中に騎士がいました。

それも、赤い十字架の……。
となると……。
「テンプル騎士団……？」
私がそう呟きました。
すると、騎士の男が口を開きました。
「やはり、知っているのだな。あの、『マオ・シンダイ』の手先か!!!」
そう言って、ロングソードを抜きました。
「え……?!ま、待ってください、なんの話ですか?!」
「黙れ、貴様らにはここで死んでもらう！」
その瞬間、周囲の船員達が、隠し持っていたハンドガンを乱射してきました。
狭い船室では回避できず……、何発か食らってしまいました。
「ぐっ?!こ、この弾丸は……?!」
艦娘には、銃弾なんてものは効かないはず。
それなのに、私達はダメージを受けていたんです。
つまり、恐らくは特殊弾頭……。
不味い、このままじゃ……！
そんな時！
「おおおらっ!!!!」
「足柄?!」
足柄は、艤装である丸斧を、思い切り近くの船員に投げつけました！
「が、あ……」
顔面に突き刺さった斧。船員の頭蓋がぱくりと割れて、内側から髄液と、うどん玉のような脳味噌が溢れ、床に灰色に染めました。
「姉さん！しゃんとして！殺さなきゃ、殺されるよ！」
「え……、ええ！妙高型！船員は皆殺しよ！騎士は捕らえて！」
「「はい！」」
私は叫びました。
それを聞いた船員達は、即座にリロードして、発砲してきます。
「あああああっ!!!!」

「足柄っ?!」
足柄は、私達の盾となり、銃弾を全身に受けました。
なんて無茶なことを……！
「は、ははは、ははははは!!!効かないわねぇ！生っちょろいのよ!!!」
「くっ?!」「ば、化け物か?!」「うう……！」
再び、リロードしようとする船員。
しかし、私達は、足柄の作ってくれた隙を逃しませんでした。
まず私は、二本のカトラスを騎士に叩きつけ、動きを止めた。
それと同時に、那智は左側の、羽黒は右側の船員をなぎ倒した。
艦娘の力で剣を振り回せば、人間なんて脆い生き物は簡単に『ばらばら』になる。
ねじ切れた手足が宙を舞い、裂けた腹から血色と肉色が混ざる臓物が飛び散る。
「ぬううっ?!貴様らあっ!!!同志の仇だぁ!!!」
「くうっ!!?!」
騎士は、ロングソードを振り回して、私に斬りかかった。
人間とはとても思えない重い一撃！
「はあああっ!!!」
とは言え、こっちは四人！
囲んでしまえば……！
「貴様らっ……、卑怯な！」
「罠を張って大人数で囲んできた貴様が『卑怯な』だと?!どの口が！」
那智が叫び、ロングソードで、騎士の腕を斬り飛ばした。
「羽黒っ！麻痺薬を！」
「は、はいっ！」
羽黒に指示を出した、その時……。
「ふ、ははは！はははは！『叡智の父の導きがあらんことを』!!!」
騎士は叫んで……。
「姉さん！爆弾だ！」
爆弾の火薬の匂いを感じ取った那智も叫ぶ。
「退避ーーーッ!!!」

私達が船を脱出したその時に……。
爆音が轟き、船は木っ端微塵になりました……。

５２４話　妙高過去語り　中編

ええと、どこまで話しましたっけ……？
ああ、そう。
テンプル騎士団の船が爆発したところでしたね。
当時の私達からすれば、それはもう困惑ものでした。
人間が艦娘に届きうる牙を持つこともそうですが、そもそも、世界の海を守るために召喚された私達が、守るべき人間に牙を剥かれたこと。
その事実は、本当に私達を驚かせました。
そうして私達は、ズタボロになりながら、大破した足柄を抱えて帰還しましたね。

「提督……、すみません！近海警備ですが……」
私達は、たとえどんな理由があろうと、任務に失敗し、大きなダメージを受けて帰還しました。
それは、言い訳のしようのないミスです。
なので、青い顔をしながら頭を下げました。
あれほどまで私達……、『艦娘』と言う得体の知れない化け物に、優しくしてくださる提督は、私達からすれば神様のようなもの。
そんな人に、簡単な初任務の失敗を報告するのは辛かったですね……。
敬愛する提督に怒られる怖さも当然ありましたが、そんなものよりも遥かに、失望させてしまったことに対する大きな大きな申し訳なさ、ですかね。
この時の私は、責任を取って腹を切れと言われたら喜んで切っていました。それくらいに申し訳なく、まさに合わせる顔もないと言ったような、そんな感情を持っていました。
ですが……、提督は。
「おいおい……！」
「ひっ……！申し訳ございません！申し訳ございません！」

地に頭を擦り付けて謝る私を立たせて、強く抱きしめてくださいましたね。
「ごめんな、痛かっただろうにな……！早くドックへ！」
「し、しかし、私達は任務に失敗を」
「そんなことはどうでも良い！任務なんかより、君達のことの方が大事だ！」
いつも笑っている提督は、この時は、真剣な顔をしてこう言ってくださいましたね。
……え？覚えていらっしゃらないですか？
ふふ、それでも、私達は覚えていますよ。
「足柄、立てないか？俺が抱えていくからな。ああ、こんなに怪我をして……、かわいそうに」
「あ……、てい、とく……」
「良いんだ、喋るのも辛いだろう？何も心配いらない。今は、傷を治すことだけ考えてね。とりあえず、応急処置だけどポーションかけとくね」
そう言って、提督は足柄を抱えて、私達を入渠させてくださいましたね。
確かに、腕が千切れ飛んだ足柄は入渠が必要かもしれませんが、比較的軽傷の私達まで、大量の資材を使って入渠させてくださいましたね。
この頃の鎮守府はまだ、資材も多くはなかったのに。
艦娘は、器は肉である以上、骨折や切り傷くらいなら、人間と同じように……、いえ、人間以上の速度で治るんですよ？
それなのに、少ない資材を使って入渠させてくださいましたね。
それだけじゃなく、ドックに行くまで連れ添い、足柄を抱えて、励ましの言葉をくださいましたよね。
「大丈夫だ、失敗なんかじゃないからな。不測の事態だから、指示した俺が悪いんだ」
「そ、そんな！提督は何も悪くありません！」
「いや、テンプル騎士団が相手なら、俺の問題だ。艦娘にまで手出しし

てくると読めなかった、指揮官である俺が悪かった。ごめんな、女の肌に傷を作るだなんて……」
「いえ、本当に提督は悪くないんです！私達が無能で！どんな罰でも受けますから！」
「良いんだ、君達は本当に良く頑張ってくれた。罰したりしない。むしろ、良く生きて帰ってきてくれたと称賛するよ。ありがとう……」
提督は、みんなにこのような態度をとりますよね？
いつも、自分は当然のことをしたまでだ、だとかおっしゃいますが、こんなことをされたら、艦娘は……、兵士は、女は。
あらゆる意味で指揮官を敬愛するようになるんですよ。
失敗を許してくださる寛大さに敬意を持ちましたし、傷を労ってくれる優しさに愛情を持ちました。
こんなことをされると、兵士としても、女としても惚れてしまうんですよ。
そうして、私達が傷を癒したあと、三日間の休日までくださいましたよね。
当時はまだ、鎮守府はシフト制で、休みを取るのは難しかったのに、スケジュールを調整して休みをくださいましたよね。
忙しい中に見舞いだと言って、手作りの菓子類を持参して部屋に来てくださいましたよね。
この見舞いの時も、私達に労いの言葉をかけてくださいましたね。
私達は覚えていますよ。

その後に……、私達は、会議室で改めて報告をしました。
テンプル騎士団を名乗る謎の集団に騙し討ちされたことについて。
その時、提督の隣には、一人のヤクザがいましたね。
そう、『タカクラキヨシ』……、『アサシン教団』の日本支部に所属するアサシンです。
そこで私達は、『アサシン教団』と『テンプル騎士団』についての話を聞きました……。
紀元前くらいの大昔から存在している暗殺組織で、超古代文明の遺

した危険な遺物の悪用を防ぎ、人間の自由意志を尊重して、圧政者などを暗殺する集団……、それがアサシン教団。
一方で、超古代文明の遺物を悪用して、社会の全てを管理しようとする集団、それをテンプル騎士団と言う。
正直な話、この時は、何がなんだか良くわかりませんでした。
でも、ただ一つ分かったこと。
それは……。
「テンプル騎士団、は……、提督を殺そうとしている？」
「ああ、そうだ」
それは、テンプル騎士団は、敬愛する提督の敵だと言うこと。
例え、艦娘の使命が、深海棲艦と戦い人々を守ることだったとしても……、それでも、私達は。
人間が敵であっても、提督を傷つけるものは許してはおけない……！
私達は、強くそう思いました。

５２５話　妙高過去語り　後編

そう……、私達は、敬愛する提督を殺そうとするテンプル騎士団は絶対に許しません。

テンプル騎士団だかなんだか知りませんが、提督を殺そうとする組織がある。

人を守るために身を粉にして働く提督を、殺そうとする組織が。

それを聞いた私達は、溶岩のように煮えたぎる怒りに身を包まれました。とてもじゃありませんが、正気ではいられません。

提督を狙うのですよ？

私達を愛して、慈しんでくれる方を。

まだ、この頃は、艦としての意識の方が強く、色恋はよく分かっていませんでしたが、それでも……。

提督の愛機として、道具として、主人を害する敵の存在は許せませんでした。

しかし、いかんせん、当時の私達には何の力もありません。この時の私は、いくらか人より強くて、深海棲艦と戦えるだけの存在に過ぎなかったのです。

故に、私達は、徹底的に自分を鍛え上げました。

まず、提督に紹介された『アサシン』と交渉して、暗殺の技能を学びました。

それと並行して、深海棲艦と何度も戦い、練度を上げました。

技量を高め、戦い方を洗練させました。

私は、特殊鋼材の双剣による剣技を極め、多少の魔術も修めて、魔弾銃を扱うようになりました。

足柄は、戦艦に比肩する程の剛力を持ち、大刀術を修め、爆発物に関する知識を修めて、破壊工作においてはスペシャリストと言って良いほどになりました。

羽黒は、目の前にいても認識できないほどの隠れ身の業と、毒物に関する深い知識を得ました。

那智は、恐ろしいまでの身のこなしと、剣技に暗器術を修め、体術

や人身掌握、拷問と幅広い技術を習得しました。
毎日、血の小便を垂れ流しながら、死ぬ気で訓練しました。
ええ、はい。
「そんなもの」は、「そんな程度のこと」は、提督を守るためならば全く辛いとは思いませんでした。
むしろ、流した血の量で提督の安全が買えると思うと、喜びを覚えました。
やがて提督は、多額の借金をして資材を買い集め、どんどん艦娘を召喚していきましたね。
艦娘が増えるのは嬉しかったです。
え？ああはい、まあ、昔の仲間に会えるのもそうですが……、何より、提督を守るための肉盾が増えるじゃないですか。
はい！盾です！
提督を守るための肉盾は、多ければ多い方が良いですからね！
え？
「君達は盾じゃない」ですか？
いいえ、いいえ。
私達は、提督の盾です。
盾であり、矛であり……。
そして、少しでも、女として見ていただければ……♡
いえ、出過ぎた言葉でしたね。
道具で、道具が良いのです。
他でもない、この世で最も尊き貴方の。

その後も私は色々と調べたんですよ。
提督を狙う愚か者共……、たくさんいますね。
テンプル騎士団だけじゃありません。ショッカー、カオスインシデント、財団X、アマルガム、ギャラクター、恐竜帝国。
絶対に許せない……、殺してやる、殺し尽くしてやる。
提督は、本来ならこのような血生臭い戦場とは関係のない、平和なところで自由に伸び伸びと生きるべきお方です。

それを、このような義人を、この糞のような戦場に引き摺り出して戦わせるなどと！
私は、提督をいつも見ています。
いつも優しく微笑んで、生きる喜びを噛みしめながら、穏やかに生きている提督は。
戦場では、あんな、あんな辛そうな顔を。
あんな顔を、私は、提督にあんな顔を。
嫌だ、見たくない！
提督にはいつも笑っていてほしい！
だから、だから私は、強くなる。もっともっと強くなる！
提督から笑顔を奪う全ての存在を抹殺する為に！
敵を、敵を殺せば、敵を全部殺せば、提督はいつも笑顔でいてくださるはず！
そうですよね、そうですよね！提督！
……すいません、取り乱しました。
ですが、私は、私達は。
提督には笑っていてほしいんです。
どんな敵も、どんな辛いことも、私達が全て処理します。
だから、笑ってください。
笑って、私達を迎え入れてください。
私達の帰る場所でいてください。
ずっと、ずっと……。
例え、この世界が終わっても、輪廻の果てで再び出会って。
また、貴方の下僕になりたいと、私達はそう願っていますよ♡

はい、え？
うふふ、そうですね。愛の告白、してしまいましたね♡
え？ええ！もちろん本音の本心ですよ♡
それで、その後は、この時にできた縁により、アサシン教団に力を貸すこととしました。
もちろん、裏取りもしていますが、アサシン教団から頼まれる依頼

は、報酬額は少なめですが、そこに大義があります。
はい、そうでしょうね。
大義などという言葉はまやかしに過ぎません。
ですが、私も信じたいのです。
積み上げた屍が、流した血の一滴一滴が。
提督と、ついでに世界を、守るための礎になるのだと。
まあ世界の方は割とどうでもいい……、と言うより、私達にとって、世界とは提督のことを指しますから。
え？提督がいなくなったら？
うふふ、おかしなことを言うのですね。
提督がいない世界に価値なんてある訳がないでしょう？即座に自害します。

ええと……、そう、大義ですね。
大義という言葉は曖昧であるし、大義は誰もが持っています。
ですが……、アサシン教団の大義は、一番共感できました。
活人剣の考え方ですね。
少数の悪人を殺して大多数の善人を生かす。
私達も、別に、無辜の民を虐殺したいなどとは全く思ってはおりません。
ただ、生きる価値のないダニのみを始末して、世界をより良い方向に持っていきたいと思っているだけです。
つまり……。

「提督のために世界を掃除しておきます。提督は、綺麗になった世界で遊んで暮らしてくださいね」

５２６話　盆と正月とクリスマスと土日完全週休二日とその他祝日と夏春冬の長期休暇は必須

「Ｆｏｒ　ａ　ｃｈｒｉｓｔｍａｓ　ｐｒｅｓｅｎｔ　ｆｒｏｍ　ｙｏｕ!!!!」
クリスマスだ。
とりあえず冒頭でブチ切れたのは特に意味はないから安心してほしい。毎年の恒例だから。
「提督ー、七面鳥が焼けましたよー」
と鳳翔。
んー、かわいい！百点！
「なあ→ぁんでアンタがバロンなんだ？」
お艦だし……。
「はい?!」
「だいたいそんな不完全なアンチボディで、私のグランチャーに勝てるわけがない！死ねよやぁ!!」
「どうしました提督?!またいつもの発作ですか?!!」
「はっ、すまない……。ただちょっと母乳が欲しくて……」
「え?ええ、はい」
おもむろに胸を露出する鳳翔。授乳の構えだ。
それを見た俺は両手のひとさし指をせわしく交差させ打ちつけた。
「あーいけませんよー、えっちすぎます。御禁制御禁制！」
この旅人提督はＲ１５だから乳首は見せられないよ！だ。鳳翔の乳首を謎の光で隠す。なお、謎の光はブルーレイ版では消えるので、みんな買ってくれよな！
「全くゥ！Ｒ１５なのに乳首を見せて良いのは高橋留〇子作品だけってそれ一番言われてるから」
やぱぱーやぱぱー。
「母乳はよろしいのですか？」
「いつものジョークだから安心して？」

「そうですか……」
ちょっと残念そうな鳳翔。なんでやねん。
「鳳翔の母乳は良いとして、牛さんの母乳を使ってケーキを作るのだ」
最近は最早、海外艦も日本かぶれになってきて、プディングじゃなくてケーキを作ってくれと嘆願してくるようになった。
あらかじめシュトーレンは作っておいたのだが、我らが正規食う母らに、味が熟成される前に殆ど食い散らかされてしまった。なのでこっそり隠し倉庫にもシュトーレンを仕込んである。俺は賢いのだ。
「さあ、いつもの旅人料理をやっていくぞい！」
「あ！提督さんが料理するっぽい！」
「ほんと?!」
「見なきゃ！」
おや、艦娘が集まってきた。
「俺が料理するところなんて見て楽しいかい？」
「「「めちゃくちゃ面白い」」」
えー？
普通に料理してるだけなんだけどなあ。
「じゃあ、パンプキンパイを作るよ！解説するから、作り方を覚えてみようね！」
「「「はーい！」」」
何人かの艦娘がスマホやカメラを向けてくる中で、俺は料理をする。
「まず、カボチャを切ります！」
普通に切る。
「まだ普通」「まだ平凡」「まだ人間」
「お鍋に、切ったカボチャを入れます」
鍋にカボチャを入れる。
「そして、鍋にカボチャがいっぱいになったところで……、カボチャを入れます！」
「???」「えっ」「カボチャが……、カボチャを……」
「そして、カボチャをいっぱい入れたところに、カボチャをいっぱい入

れます!?!
「!!!

今日のクリスマスパーティーを楽しんでくれ！」
「「「わーっ！」」」
　さあ、奇蹟のカーニバルの　開　幕　だ。
　俺は中指を立てて奇声を発する。
「ＷＲＹＹＹ!!!!」
「こらっ！ダメよっ！」
　アイオワに怒られたので大人しく座る。
「まあ、とりあえず、乾杯しましょうか！ほら、Ａｄｍｉｒａｌ！音頭をとって！」
　えー？
　音頭を取るって言われても、どうすれば……？
　難しいなあ。
　飲み会は星の数ほどしてきたけど難しいなあ。
　はい。
「我が軍は被占領地の奪還と同時に民に食料を供与する。反乱軍の侵攻に対抗するためとはいえ民に困窮を強いたことは私の本意ではなかった」
「「「?!!」」」
「此度の戦いに勝ち我らこそ地統べる力秀でたることを事実によって知らしめるのだ。反乱軍の身の程知らず共を生かして返すな。卿らの武勲に期待する！」
「「「?!!?」」」
「卿らの上に大神オーディンの恩寵あらんことを！プロージット！」
「「「えっ?!あっ、か、かんぱーい!!!」」」
　俺は業務用角瓶で乾杯した。
「司令官」
「どうした望月」
「私達は艦隊戦はやるけど、海の上だし、戦闘中に有名なクラシックは流れないよ」
「いやほら……、俺達はリメイク版だから……」

そんな話をしながら、角瓶をどんどん開けていく。
俺は大型ポリタンクに氷を詰めて、角瓶と炭酸でハイボールを作る。
そしてカラカラする。
「おぉぉぉ

５２７話　全てに感謝する正月

「明けましておめでとうございます、今年もよろしくお願いします」
俺はニチアサヒーローみたいなもんなので（自意識過剰）、正月シーズンにはちゃんとこう言わなきゃならない。
そして、何とかタウンのお金を配る悪趣味なおっさんより稼いでいることだし、艦娘のみんなにお年玉を配ってあげよう。
「わーい！ありがとうございます、しれぇ！」
「はっやーい！」
「ありがとーぴょん！」
うむうむ。
「はい、春風も」
「あら！ありがとうございます！」
春風に金を渡す。
春風を買う。
つまり買春……？
「駄目だぞ、春風！」
「えっ?!なんの話でございますか?!」

さて……、先週、クリスマスだからと言って、酒を浴びるように飲んだよね？
でも、今日は正月だから、祝いの日だから、酒を浴びるように飲んで良いよね？
て言うか、祝い事じゃなくても、酒を浴びるように飲んでも良いよね。
「ね？」
「ん～！まさにその通りですよ～！」
ほら、ポーラもこう言ってる。
貞淑な淑女であるポーラが言ってるんだぞ？つまり、酒は飲んで良い。Ｑ．Ｅ．Ｄ．だ。
「知ってますか～？ワインを飲んだ後にウイスキーを飲めば、お腹の

中でアルコールが喧嘩して、結果的にノンアルコールになるんですよ〜！」
「おっ、そうだな！」
　ポーラが言うなら間違い無いな！
「はい、司令官！お酌するわ！」
「おー、雷！いやー！雷みたいな美人さんにお酌してもらうと、テンション上がっちゃうなあ、ははは！」
「うふふ、もーっと私に頼って良いのよ？」
「うんうん、頼っちゃう頼っちゃう！」
「司令官はなーんにもやらなくて良いからね！お酒飲んで、気まぐれに私達を犯してくれればそれでいいんだから！」
「う、うん？」
「何でもしてあげるわ！何でも!!!毎日司令官の為に働くわ、家事も、お世話も何でもやるわ！性欲処理も、下の世話も、何でも何でもやってあげるわ！」
「あ、はい、うん。気持ちだけ……」
「何でもするわ！全部、全部捧げる！肉体も心も、命も、姉妹達だって全部、ぜーんぶ捧げるわ！ああ、でも、司令官は私達のことなんてなーんにも考えなくて良いのよ？私達は私達の全てを司令官に捧げるけど、司令官は私達のことを、使えなくなったらいつでもぶっ殺して良いのよ！」
「いやいや、そんなことはしないよ、心から愛しているし、例えどんな障害があろうとも、俺達の愛は永遠だ」
「司令官……♡嬉しいわ、私の全てを捧げるから、受け取って♡」
　そう言って抱きついてくる雷。
　おほー！
　おほーじゃねえわ、いかんいかん、ロリの闇に飲まれては……。
　いや、待てよ？
　先程ポーラが、別種のアルコールを摂取すれば、アルコール同士が喧嘩してノンアルコールになると言う画期的な理論を発表していたな。

であれば、ロリとおねーさんを同時に抱けば、ロリ成分とおねーさん成分が喧嘩して、抱いてないことになるんじゃないか?!?!??!

参ったな……、『答え』を見つけてしまった……。

ひょっとして俺は天才なのかもしれん。

「陸奥、ちょっとおいで」

「ええ、良いわよ」

ヨシ!

ここには陸奥おねーさんとロリ雷が双方いるので、成分が対消滅して俺に非はなくなった。Q・E・D・だ。

生命、宇宙、そして万物についての究極の疑問の答えは42だと思っていたのだが、別解があったとは、この海のリハクの目をもってしても見抜けなんだ。

「……なんだか、また変なこと考えてるわね?（名推理）」

「名探偵むっちゃんやめちくりー」

「私と雷ちゃんに挟まれて何を考えていたのかしら?」

「おれは……、今まで……、バカだったからわからなかったが、今……、すべてがわかりきっている……。こうして、おねーさんとロリの間に挟まれてわかってきたよ」

「何がかしら?」

「宇宙の全てが、うん、わかって……、きたぞ……。そうか。空間と時間とおれとの関係はすごく簡単なことなんだ。ははは……、どうして、地球にこんな生命があふれたのかも」

「こらっ!また変な電波を拾って!ダメよ!」

ばちーん!

「おれは　しょうきに　もどった!」

ばちーん!

「ぶったね……?二度もぶった……!親父にもぶたれたことないのに!!!」

「もう一発ぶった方が良いかしら?」

「いや待って、冗談だから。気が狂ってはいないから」

「そ、そうなのかしら?提督ったら、定期的に気が狂うから、正気に戻

さなきゃって思って……」
「まあね、俺なんて虎眼先生みたいなもんだからね。多少はね？」
好きで狂ってる訳じゃない。
ノリと勢いが止められないのだ。
ハジケリストだから、ハジケずにはいられないのよ。

「兄さーん」
んお？
「花凛か」
そういや、妹の花凛を呼んでたっけ。
「久しいな、兄さん」
「うんうん、元気だったか？」
「ああ、もちろんだとも」
「ん、よしよし」
花凛を撫でてやる。
「はぁ、あのだね、私はこう見えてもう三十代だよ？」
「肉体年齢は小学生並みでしょ？」
「そうだが……。あと、それと、兄さんの部下の目が怖い。私は人の恋路を邪魔して馬に蹴られる趣味はないよ」
んー？
あ、艦娘のみんなが嫉妬を！
「大丈夫だから、これは兄妹のスキンシップだから。流石に血の繋がった妹に手は出さないから」
本当だよ。
「さ、花凛！料理はたくさんあるから、好きなもの食べていきなよ」
「うん、ありがとう、兄さん」

まあ、なんだろうか。
可愛い妹と、愛する艦娘達と今年も新年を迎えられた。
こう言うこと言うとなんかこう……、変な意識他界系拗らせ大学生みたいに思われるかもしれないが、本当に感謝しかない。

素敵な女性と出会えた幸運と運命に、素晴らしい生活ができている現状に、全てに感謝だ。

５２８話　ゴトとヴァイキングる

「提督！お茶ですよー」
「ありがとね、ゴト」
　なんか急に最近、ゴトがお茶を淹れてくれるようになった。
「ところで、何で急にお茶なんて？」
「え？やだもう、提督ったら！提督が子供の頃から、私はこうして貴方の隣でお茶を淹れてましたよ？忘れちゃったんですか？ふふっ」
　んんんんー？
　そんな事実はないんですが……？
　いや、ゴトの認識では「そう言うことになっている」んだな。
　せん妄患者に無理矢理事実を突きつけても良いことはない。
　付き合ってあげよう。
「そうだったね、ゴトはいつも俺と一緒にいたねー」
「はい！私は提督の幼馴染みで、初期艦で、初めての人ですよ！」
　そうなんだ！すごいね！
　うん……、ははは、すごいね……。
　隣にいる大淀をチラ見する。
「仲が良くて素敵ですね」
「ごめんな大淀。ゴトはこう言う子だから」
　大淀も、惚れた男である俺が、隣で別の女と露骨に絡んでたら嫌かなーって思ったんだが。
「いえいえ！提督は何も悪くありません！提督はこの世界の帝王にも等しき……、いえ、まさに帝王であるお方ですから！今はまだそうでなかったとしても、私達が全身全霊を以てそうなるようにいたしますからね！ああ……、提督！私の神様！私の光！貴方の御威光が全世界を遍く照らすと考えると私はそれだけで……！ウッ……！提督、提督、提督！愛しています！敬愛しております！私の全てを捧げます！この艦隊は、艦娘は全て、貴方の女です、道具です！どうか、気兼ねなく使い潰してくださいね！仮に死したとしても、私達は恨んだりなんて絶対にしません！貴方のための世界を作る礎になれるのなら、

笑って逝けますよ！」
おっと……、大淀は壊れたレコードにジョブチェンジしてしまった。
チューして口を塞ぐまで、俺を讃える言葉が延々と出てくるぞ！
しょうがないのではい！チューっと！
「床で縊り殺しても結構ですからね？私達は提督の道具ですから！ああ、ああ、でも、できれば、殺す前に子を一人産ませていただけますか？そうすれば、何も思い残すことなく逝けますから！提督との子は、きっと、神の子らしく、素晴らしい子供に育つでしょんんんんん？！んー♡♡♡ちゅう、ちゅぱ、ぺろぺろ……♡♡♡」
大淀の舌を舐る。
うーん！大淀の唾液おいしい！！！！
「んんーっ♡♡♡イッ……♡♡♡♡♡♡」
あ、イかせちゃった。
加減を間違えた。
ん？
「ん！」
ゴトが両腕を広げて待機している。
なるほど。
俺はゴトを抱きしめてキスしてやる。
「んちゅう～♡」
ゴト　は　まんぞくそうだ！

執務中……。
「最近さー、ヴィンランドサガって漫画を読んだんだけどさー」
「はあ」
「俺もヴァイキング的なことしてみたい」
「分かりました！略奪と殺戮ですね！」
キラキラの笑顔でそんなことを言う大淀。
「い、いや、ほら、船で移動したり宴をしたり……」
「ヴァイキングは略奪をする集団だと聞いていますが？」

「ま、まあそうだけどさ、こう、雰囲気だけ味わいたいってかさぁ」
「冬の海は寒いですよ？」
「確かに……。けど俺にはこれがあるから」
　テレレン！
　ホットドリンク～！
「何ですかそれは？」
「ホットドリンク」
「はい？」
「ホットドリンクは、飲むと身体が暖かくなって、スタミナの最大値が減りにくくなる」
「スタミナの最大値とは……？」
　えっ？
「ほら、見えない？ここにゲージあるでしょ？」
「み、見えませんが……？」
　なるほど、これは俺だけに見えてる系のやつかー。
「じゃあこっちの、ＨＰとＭＰの数値も？」
「見えないですね……」
「ソウルや人間性、血の意志に啓蒙も？」
「はい……」
　なるほどなー。
　まあ、そんなこともあるよね！
　気にしない気にしない！
　さあ、ホットドリンクをがぶ飲みしながら、現地ガイド（ゴト）を連れて北欧へ旅行だぁい！

「ッフゥー……」
　遭難した。
　いつもの展開だ。
　いや、いつもいつも遭難するほどアホな訳じゃない。
　俺の知り合いには、水をかけると豚になる青年がいるんだが、彼は純正の方向音痴だっただろ？

でも俺の場合は、様々なトラブルに巻き込まれて迷うんだよ。
現在地はノルウェーの山岳部だ。
何故こんなところにいるのかというと……。
「いやー、まさか、ノルウェー沿岸部でヴァイキングごっこして遊んでたら、たまたま古代人の転移魔法陣トラップを踏んでしまって、ノルウェーの山奥に放り出されるとはなあ」
まいったまいった。
「寒いわね、提督」
もふもふの服を着込んだゴトがペタっと俺にくっつく。
「そうだねー、寒いねー」
さて、どうしようかな？
とりあえず、脱出しなきゃならないか。
山岳部だから車も出せないし、歩きで。
「ゴト！大丈夫かー?!」
「ええ！大丈夫よー！」

折角だから、山頂に登って飯を食う。
更に、折角なので、ヴァイキングが食べてそうなシチューを食べる。
テントを張って……。
「寒い時は人肌で温め合うのが一番です！」
「おっ、そうだな」
温め合った（意味深）。

びゅうびゅうと、否、びゅおうおうおうと風が吹く中、俺とゴト調査隊員は移動する……。
山の頂上にあった洞窟を進んで……。
そして遂に！
「ここは……！」
「わ、何ですかこれ？」
古代人の遺跡を見つけた！
「古代人の遺跡だね」

「へえー……。これって、扉ですか？」
「そうみたい」
「えいえい！」
　ゴトが軽く（艦娘基準）扉を叩く。
「ゴトちゃーん？生き埋めになっちゃうかもしれないから暴れないでねー？」
「はーい！」
　うんうん、凄いぞー！身内にデストラップ踏み抜く人がいる時の冒険ってスリリングだなあ!!
「じゃあ、どうやって開くんですか？」
「あー……、待ってね？」
　えーっと、ルーン文字か。
「えーと、これはスノッリのエッダか。となると北欧系……、古ノルド語か？じゃあ開錠の定番は????か？いや違うな、この場合、雷神トールのエピソードが強調されている????だ」
　古代の扉が開いた。
「ビンゴ！」
「わー！凄いですねー！」
　さて、中にあるのは……。
「ああ、ミョルニルか。えーと、雷神由来か！魔界産じゃなく古代技術の産物！珍しいなあ！」
　武器だった。
　折角なので拾って帰るかー！
　白露型に献上して、この一週間行方不明になっていた詫びにしよう。

５２９話　友人との電話

冬の昼下がり。
全国的に寒いとはいえ、このＫ県はまあそこそこに暖かかった。
俺は全く平気なのだが、うちは女の子がたくさんいるので、なるべく暖かくしてあげたい。
なので、暖房を入れている。
ほら、女の子が身体を冷やすのは良くないからね。
ここでジェンダーバイアスがーとか言う人はどうかと思います。
さて、執務室……。
執務と言っても、敏腕秘書の大淀の手によってまとめられた資料に軽く目を通して、数枚の書類にサインするだけ。
それくらいで、俺の仕事は終わりだ。
逆に言えば、それだけの執務を大淀が采配してるってことで。
うんまあ、そうね。
黒井鎮守府の実質的なボスは大淀だよね。
俺なんてお飾りみたいなもんだよ。
無能な怠け者はお飾りの司令官やってろって言うじゃん。ゼークトが言ってた（実際には言ってない）。
さて、そんな冬のある日。
「モルカー、流行ってるじゃん」
と俺が呟いてみた。
いや本当に、単なる話題作りってか、無意識な一言ってかさ。
ただ言ってみただけなのね？
すると、おもむろに、隣に座っていた時雨が席を立った。
こ、これは……！
数多の屍を築き上げて、その上に『作られた生命』をちょんと置く、白露型のいつもの蛮行の匂いだ！
「どこへ行こうと言うのかね？」
背後から時雨に抱きつく。
「待っててくれるかい、提督。君の望むものをすぐに用意するからね」

まるで、子を慈しむ親のような視線を俺に向けて、頭を撫でてくる時雨。
ペロッ！これはバブ味！
「いやいやいや、マジで不味いからそれは本当に」
「何故かな？死ぬのは単なるモルモットだよ？」
「命の価値は平等！とか、変なことを言う訳じゃないけどね、殺さなくてもいい命を、悪戯に奪っちゃならないんだよ」
「ネズミ風情の命にそんな価値があるとは思えないけれど、君がそう言うのならやめておくよ」
うん、まあ、聞き分けはいいんだよねえ……。
良い子なのよ、良い子なんだけどね……。
「で、でもアレだね！アニマルセラピー的なのは良いよね！」
話を逸らそう。
闇と病みを深掘りしてはいけない（戒め）。
「僕は君の犬だよ」
と、すり寄ってくる時雨。
おーおーおー。なんだかんだ言って、結局甘えたいだけか。
命の冒涜も全ては俺に褒めてもらうためなんだよな。
可愛い子だなー。
「……提督さーん！」
ん？
窓を開ける。
うわ……。
「提督さーん！見て見てー！提督さんの為に、いーっぱい屍を積み上げたっぽいー！」
夕立だ。
鎮守府前の港に、深海棲艦の死体が山のように積んである。
「ありがとー！愛してるよー！」
「あはっ♡あはははははは♡愛してるって！愛してるって言ってもらっちゃった！あはははははは!!!夕立、もっと頑張るっぽいー!!!!」
あ、また出撃して行った。

今週のＭＶＰも夕立で決まりかな。
さて……。
時雨がぴったりくっついているが、気にせず移動。
いやもう、仕事ないんで。
俺の可愛いわんこであるしぐわんを抱えながら移動する。
「ぺろ……、ちゅ……、ぺろ……」
なんかめっっっちゃ襟とか首をべろべろ舐められてるが気にしない。
今朝も、俺が愛用しているペンが何者か（艦娘）の自慰行為に使われていたらしく、ぬるぬるだったが、俺はそういうのあんまり気にしないようになってきたので、ハンカチでペンを拭いてからそのペンを使って執務していた。
大淀がそれを見て、鼻血を流しながら大喜びしてたんで、多分犯人は大淀やろなあ……。

自室に入る。
今日はゲームでもやろうかな。
デスクの上にある、艦娘のエロ自撮りを片付けてから……、うむ、これは鹿島だな。片付けてから、パソコンの電源をつける。
すると、インストールした覚えのないエロゲがあった。
「ふむ」
ロリ系、か。
となると駆逐艦の仕業だな。
駆逐艦は、俺をロリコンにしようと、ありとあらゆる手段で悪の道へと誘おうとしてくる。
「ロリもの……、幼児退行した茶髪ロングの妹にエッチなイタズラ……。望月だな」
望月の仕業だな。
望月はね、あの子はね、俺の前で思いっきり幼児退行してオギャるのが性癖だからね。
まあ、折角だしプレイするか。

結構面白かった。
声優さんの迫真の演技がね。
声優さんって大変だよな、どんなキャラでも演じなきゃならないんだから。僕にはとてもできない。
おや、もうこんな時間だ。
ひとっ風呂浴びてこようか。
風呂に行く。
ナチュラルに女湯に入っているが、この鎮守府は女湯しかないのだ。
ちょっと前に、色々あって鎮守府が全壊したことがあるのだが、その時から、俺の部屋のシャワールームも廃止され、女湯に入ることを強制されるようになったのだった。
まあ別になんにも困らないから良いんだけど。
身体を洗おうか。
「はーい、提督は私が洗いますねー」
「あたしも洗うねー」
古鷹と加古に捕まった。
そう、俺はもう、自分で身体を洗うことすら許されていないんだ。
腕を古鷹のおっぱいに挟まれて、加古に頭を洗われて、丸洗いされてしまう。
自由なんてものはない。
その後、古鷹と加古に挟まれながら湯に浸かる。

そして、それから、料理をして飯を食うのだが、一人で食事するのは許されていない。
いやまあ、別に一人で食事してもなんも言われないけど、艦娘が寂しがるから、実質的には強制だ。
更に、酒を飲むのも一人じゃダメ。
寝るのも一人じゃダメ。

「とまあ、こんな感じで、俺には自由が一切ないんだよ!!!可哀想だろ?!
そう思わないかジャギ!!!」
『死ね』
ガチャン!
ツー、ツー、ツー……。

５３０話　もちもちの女体

最近は、深海棲艦の攻撃も弱火になっている。
それは、俺達が勝っている訳ではなく、深海棲艦が更なる力を蓄えていると見て良いだろう。
となると、俺達も力をつけて、次の攻撃に耐えなくてはならない。
俺にできるのは、艦娘のみんなを癒して、次の戦いに備えてもらうことだけだ。
「ただいまです、提督」
「お帰り、訓練がんばったね、赤城」
「お腹が減りました！」
「その前にお風呂入ろうねー」
赤城を抱っこする。
「あ……♡」
うーん！
体重六十……ごにょごにょキロってところかな！
赤城君！痩せよう！
……でも、赤城のぷよぷよ腹肉を揉むのもいとおかしなんだよなあ。
それにこの、贅肉満載のデカ尻を痩せさせてしまうのは勿体ない気が……。
否否否！それではいかん！赤城の健康のため、心を鬼にしなくては！
「あんっ♡提督っ、いけませんよ？そんな風に、女性のお尻を揉みしだいては♡」
「ンン～？赤城くぅ～ん？また太ったんじゃないの～？お尻が更にもちもちになっているゾ～？」
「うふふ、お尻の大きい女性はお嫌いですか？」
「いっぱいちゅき!!」
「ふふふ、良かったです♡」
はっ?!

いかんいかん、注意せねば。
「でも、健康のために痩せた方が良いよ」
「わ、分かってはいるのですが……、中々……。あ！でも、私が痩せてしまうと、私の大きくて肉厚なお尻を揉めなくなって辛いのでは？」
「そりゃ辛いけどね」
「では、良いじゃないですか！痩せなくても！私は、提督専用の肉布団ですよ～！」
ヌウッ、そう来るか。

そして風呂。
袴を脱いだ赤城は……。
「あう……」
身体から湯気が出ちゃってるな。
「ヌッ」
「ああっ！い、いけません！今の私は汗臭いですから！」
「だが、それがいい」
抱きついて首筋の匂いを嗅ぐ。
ふむ。
あーあーあーはいはい。
なるほど、なるほど。
スッゲェ甘い匂いですねえ！！！！
和菓子っぽい匂いがする！
良いか？お菓子の匂いがする女の子だぞ？
理想的じゃないか！！！！
「ペロッ」
「ひゃあん♡」
ちょっと舐めてみた。
うん、塩味。
「ついでに万歳してごらん」
「で、ですが……」
「良いからほら、万歳！」

「ば、ばんざーい」
ヒュウ！
腋毛！
下の毛も凄い！
「よしよし、洗ってしんぜよう」
「では、洗いっこしましょう♡」

うおー、赤城の下の毛が泡立つ～！腹肉揉み揉み気持ち良い～！
「い、いけません♡そのように、そこを擦っては……♡ああっ♡♡♡」

「おや」
加賀が近くにいた。
「赤城さんばかりを可愛がるのは不公平では？」
なるほど。
「つまり、構って欲しいと？」
「そうは言ってません」
「本音は？」
「……たくさん愛して欲しいです」
ヨシ！
「加賀ーっ！」
「あ……♡」
加賀ももちもちだなあ！
もちもちの木ならぬ、もちもちの女体！
こんなもちもちの女体、じさまの枯れ木もガチガチになっちゃうよ。
まあ、俺は若いんで枯れ木ではないが。菩提樹だが。ってかもはや日立の木だが？
「うひょー！」
「あんっ♡」
加賀のもちもちおっぱいにダイブする。
うーん、加賀百万石って感じだ。

だが利家ムーブとなるとやはり、ロリの闇にのまれる事になるので気を付けねばなるまい。
俺はやっぱり、王道を往く……、大人のお姉さんですねぇ!!!
最近気がついたのだが、幼き日に憧れた漫画やアニメのお姉さんキャラより、もう既にだいぶ年上になっちゃってるって言うね。
もうお前ら全員ブライトさんより年上だゾ！
ブライトさんより年上になったのに、ブライトさんみたいな責任感がある大人になれましたか……？（小声）
森島先輩ももう先輩じゃねーからな？
お前の方が遥かに先輩だよ。
現実世界で森島先輩みたいな可愛い女の子と付き合えてますか？
（大声）
え？俺には艦娘のみんながいるんで。
「ああっ！駄目ですよ加賀さん！提督を取らないでください！」
と赤城。
「むむむ……。では、シェアしましょう」
と加賀。
「はい！」
おっと、俺本人の預かり知らぬところで身柄をシェアされてしまったぞ。
右に赤城、左に加賀。
ダブルおっぱいに挟まれる。
ああ^～、良いっすね～。
頭の中でゲーミング鳥が回転する。
ＢＧＭにＮｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｆｉｒｅが爆音で流れる。
なるほど、これが真理か。
真理の扉……、開いちゃったな。
錬金用手袋どこやったっけ……？
まあいいや、今日は一日、もちもちの女体に埋もれて過ごそう！
「提督」

「んー？」
「私達、今、幸せです」
「そっか」
「ずっと、こんな時間が続けばいいのに」
「そうだねえ、そうだといいねえ」

５３１話　洋物ロリの犯罪臭

「提督……？最近は、アカギとカガとお楽しみだったみたいだね？」
おや、レーベきゅん。
まだまだ肌寒い二月の初頭。
レーベが可愛らしく嫉妬してきた。
ああ^～、ロリコンになる～。
もうロリコンでいいや。
「ごめんね、今回はレーベをたくさん可愛がるよ！」
「うん！嬉しいよ、僕の騎士様っ！」
おっと……、忘れがちだが、レーベもせん妄患者だったな！
「騎士様は、逞しくてカッコ良いね♡可愛いお姫様達と、お妾さん、愛人さんに囲まれて、毎日幸せに暮らしてるんだよね♡」
「そーなのかー」
初耳ー。
「でも、騎士様はちょっと意地悪なんだ♡お姫様達に、お外でおしっこさせたり、裸のまま散歩させたり、愛情たっぷりに可愛がられちゃうんだ♡」
「ははっ、それは俺の趣味じゃなくて、俺が付き合わされているだけなんだよなぁ!!!」
風評被害だ！
俺はただ、ワンワンプレイを強要されてるんだ！強いられてるんだ！
「へ～え？提督さん、そんなことしてるんだ～？」
おや、『ちゃお』こと、リベッチオだ。
「提督さんは、リベともそう言うことしたい？」
「えぇ……、いや、それはちょっと倫理的に問題が」
洋物ロリのリベとたのしいワンワンらんどプレイとか、倫理こわれちゃ^～う！
リベは、そんなことを思っている俺を押し倒して、馬乗りになった。
「したいよね？リベのこと、ハダカにして、わんちゃんみたいに散歩さ

せたり、お外でおしっこさせたり、してみたいよね？」
「いやいや、そんなことは」
「してみたいよね？ねえ!!!」
「アッハイ」
拒否権などなかった。

そんな感じで、今晩のワンワンプレイを予約されてしまった。
そんなドMな変態プレイを強要されるのか……。
ドM側に脅されて変態プレイをさせられるとか、これもうわかんねぇな。
レーベとリベにサンドされながら、休憩室に行く。
そこには、マックスとジャーヴィス、タシュケントと、洋物ロリが揃っていた。
なるほど、今日は洋物ロリに囲まれる日なんだな。
「ダーリン！ｃｏｍｅ　ｏｎ！」
ジャーヴィスが、自分の膝をポンポンしてる。
えっ、ロリ膝枕？
プレミアじゃん。
ヤバイと思ったが性欲を抑えられなかった。
よいしょっと。
うーん、まあ、ロリ膝枕。
肉付きがそこまで良い訳じゃないから、空母の肉枕と比べると一枚劣るのは確かだ。
だが、この仄かに漂うミルクのようなロリ臭に包まれながらお昼寝できるのは、まさにプレミアムでプライスレスな経験である。
「むむっ！同志！資本主義者の膝で寝るなんていけないな！あたしの膝の上で寝てよ！」
とタシュケント。
「後でね」
「むむむーっ！な、ならっ！今なら、あたしのお股にうつ伏せに寝て良いよ！」

お股に、うつ伏せに寝る。
「よーし、分かった」
?!?!!?!?!
まふっ。
すーーー、はーーー。
「あんっ♡ど、同志……♡思い切り呼吸されたら、くすぐったいよ♡」
なーるほどね。
うんうん、なるほど。
ミルクの香りなるほど。
ミルクの香りがするお股なるほど。
完全に理解した。
宇宙の真理が理解できたわ。
なるほどなるほど。
お股。
なるほど。
……味も見ておこう。
ぺろっ。
「ひゃああ♡同志♡そこだめぇ♡」
「提督！私のお股も好きにして良いわよ！」
とマックス。
「あは♡騎士様ったら、お姫様達に大胆なアプローチをするんだね♡
提督、僕のことも好きにして良いよ♡」
レーベ。
「リベもぺろぺろする？」
リベ。
なるほど、ロリを舐める。

ロリのテイスティング（意味深）を済ませた後は……。
ロリといちゃつく！
「ん……、おっきい♡」
俺の下半身でレーベが何かゴソゴソやっているが、気にしないでもらいたい。

ジャーヴィスが、俺の腕を抱きしめながら、語りかけてくる。
「あのね、あたしね！改になってから、ｂｕｓｔ　ｓｉｚｅがおっきくなったの！」
「へえ、どれくらい？」
「ほんのｌｉｎｃｈくらいだけど、おっきくなったのよ！ダーリンは、おっぱい好き？」
「おっぱいが嫌いな男なんてこの世にいないぞ！」
「やったあ！ねえねえ、ダーリンはもっとおっきい方が好き？大きいほうがいいなら、シラツユシスターズに改造手術してもらうんだけど……」
「そのまんまでいいよ、いつものジャーヴィスが一番素敵だよ」
「そう？なら、このままで」
俺のためなら肉体改造手術も辞さないとか、サラッと怖い発言をするのはやめてくれよ……。
てかさ、俺、おっぱいは好きだけど、大きさに好みはないって何度もイワナ、書かなかった？
むっちりデカパイお姉さんにエッチな誘惑されるのも良い。
だが、貧乳少女が胸の大きさを気にしてるところもまた可愛いじゃないか。
おっぱいに貴賤はないのだ！
「あはっ♡いっぱい出たね♡」
俺の股の間のレーベが何かゴソゴソやっているが、俺には何もわからない。

そして、夜……。
レーベ、マックス、リベ、ジャーヴィス　、タシュケントに訊ねる。
「なあ、本当にやるのか？」
「「「「うん！」」」」
はぁー、仕方がない。
「じゃあ、お散歩に行こうか、わんこ達」
「「「「わん！」」」」

５３２話　掌の上で踊る旅人

やあ！テリーマンさ！（テキサスブロンコ）
嘘です、旅人です。
まあ俺も正義超人並みのモテモテ存在だし、多少はね？
そんな俺は、毎日、艦娘にストーキングされたり、わんわんプレイを強要されたりと、穏やかに暮している。
穏やか……？穏やかとは一体……。まあいいや、幸せだろうさ。
そう、俺は毎日、面白おかしく暮らしている。
しかし、そこに……。
朝起きて着替えたら、いきなり召喚魔法陣が!!
そして異世界転移!!

「お願いします、勇者様！この世界を救ってください!!!」
おっ！
良いねえ！
楽しそう！
「是非やらせてください！（やるとは言ってない）」
ククク……、黒マテリア。
いやあ、地球にいると、いっつも艦娘がついてくるからな。
ナンパしたりとかなかなかできないんだよー。
たまにはフリーハンドで動きたい！
ナンパもできないこんな世の中、間違ってる。
なので、別の世界に行くゾ！って訳。
いやまあ、望んで行った訳じゃないんだけど。
とりあえず、王様に会って話をして、歓待を受ける。
珍しく、正統派な異世界召喚ものらしく、特に王様が実は悪者でー、みたいなのはないっぽい。俺の心理学と、脳内の『瞳』がそう言ってた。
俺のゴーストが囁いてるから多分真実。
味はまあそこそこな感じの飯を食べる。この辺は中世ナーロッパ

クオリティだなー。
「魔王というのは本当に恐ろしい存在なのです……。残虐なモンスターを支配下に置き、組織的に人間を襲わせるのです！そして、何より恐ろしいのは、魔王に対抗できるのは勇者様しかいないと言うこと……」
「［ｌａｄｙ　ｋｉｌｌｅｒ］なるほど……、出来る限り頑張りますよ、美しい姫君のために」
「［成功］そ、そんな、美しいだなんて……♡」
ｆｏｏ→!!!
ナンパは楽しいゾーーー!!!
艦娘の前でナンパすると「私の方が愛されてる！」と対抗してきたり、無言で闇のオーラを出してきたりするからなあ。
俺は基本的に、美女はみんな平等に愛してるんだが……。

次の日、早速、訓練をすることになった。
これは、実力の確認も兼ねていると思う。
つまり、ここで俺つえー！をしたら、モテモテ間違いなしだ！
相手は一般通過騎士。
レディー、ファイッ！
「やあああっ！」
騎士が木剣を振りかぶって殴りかかってくる。
んまあ……、俺は強さにはあまり自信がないが、このレベルの一般人に毛が生えた程度に勝てないなんて、そんな訳はないよな。
軽く躱して、足払い。
「うわっ?!」
倒れる瞬間に右腕を掴んで、捻る！
「痛えっ?!」
はい、制圧。
自分で言うのも何だが、この手の制圧術はそこそこに上手いと思う。
……「おお……！」

……「素晴らしいな！」
……「流石は勇者様だ！」
うーん、モテモテ！
楽しいねえ。
その後も、適当に騎士を蹴散らして俺つえーした。

「凄かったです！」
姫様に褒められる。
姫様は、リリアって名前だそうだ。
金髪北欧系でかわいいねえ。
十七歳くらいかな？
抱けるねえ。
姫様の頭上の好感度ゲージがピカピカ光る。
完全に俺に一目惚れしている数値だ。
「あ、あのっ！勇者様っ！も、もしよろしければ、わたくしのことはリリアと呼び捨てに……！」
うーむ？
これは……。
「呼び捨てしたら周りの人が怒りますからね、リリア様と呼ばせてもらいますよ。でも、二人きりの時にはそう呼ばせてもらおうかな？」
「はいっ！」
あー、かわええなあ。
よーし、こんな調子で、女騎士やら女盗賊やら、見た目が可愛い女の子を集めて魔王城に突撃だ！

そして……。
「ザッケンナコラー！スッゾコラー！」
死亡回数１４回、十五時間に渡る泥仕合で魔王を仕留めた。
基本的に俺は、勝つまで戦えば勝てるって方針だからね。
『ぐおお！例えここで私を倒しても、人の心に闇がある限り第二第三の私が』

「うるせえええええ!!!死ねえええええ!!!」
あ、魔王については、普通に悪党で話し合いにも応じなかったので、抹殺させていただきました。悪しからず。

そして凱旋！
これから魔王討伐の報酬に、姫様とのセッッッ!!!でも強請るッカぁー!!!
と思いながら、城に帰ってくると……。
「「「「「おかえりなさい！提督！」」」」」
「アッ、ァア……（声にならない叫び）」
いるんだよなー、艦娘が。
待ち構えてたよ……。
「待って、待って？待って、待って！一回でいいから！一回でいいから姫様とデートさせて?!頼むからマジで！お願い！ねっ?!」
俺は叫んだ。
こんなに苦労した挙句、可愛い姫様を抱かずに帰るなんて有り得ない。
「私、クイーン・エリザベス級なのよ。女王なの。姫様に近いんじゃないかしら？」
「はい？」
おっと……、ウォースパイトが訳わからんこと言い始めたゾ～？
「私、プリンツ・オイゲンですよ！つまり王子様です！でも女の子だからお姫様ですよ！」
「はい???」
プリンちゃんも訳わからんこと言い始めた！
仕方ないな……、こうなったらこうだ。
「命令だ、この世界の姫様とデートさせてくれ」
「「「「「はい」」」」」
うんまあ、聞き分けは良いんだ。
浮気がどうこうでガチギレしてくることはないし。
ただ、ついてこないでと頼んでも永遠についてくるだけで……。

あー、一人旅が……。
まあ良いや、とにかく、姫様とセッ！だ！

……

……

……

「提督さんは楽しんでくれたっぽい？」
「うん、たまには息抜きしてもらいたいからね」
「仕組まれてたって気付いてマスかねー？」
「どうでしょう？あまり気になさっているようには見えませんが……」
「どの道、あんなポッと出の女よりも、自分達の方がより優れているでありますよ。浮気は男の甲斐性でありますからなぁ、無駄に妬心を抱く必要性など皆無であります」
「そうでちよ。提督は、いつでも必ず、艦娘の胸に帰ってきてくれるでち」
「にしても……、あんな何処の馬の骨とも知れぬ雌犬を可愛がる提督は……♡ああっ♡これがＮＴＲなのですね♡」
「鹿島さん……、また変な扉を開きましたわね……。それはともかく、提督の帰りが待ち遠しいですわね♡帰ってきたら、首を絞めながら犯して貰いましょう♡」
「リベもまたわんわんになるー！」

533話　大天使フルタカエル

最近は本当に、仕事がない。
深海棲艦は、大攻勢の前には、力を蓄えるために一旦退くんですね。
今は退いてる状態なので、深海棲艦はしばらく出ません。
その状態を仕事がない！と言ってしまうのは、気の緩みなのでは？と言う意見も当然有りますが……。
私達、黒井鎮守府は、少数精鋭です。
なので、戦時体制には即座に移行できます。
戦艦だったあの頃のように、出撃の為に整備だとか船乗りだとか指揮権だとかなんだとか、そう言ったことは殆ど必要がないのです。
艤装を動かす為の資材は充分にストックしてあり、例え、百回全力戦闘をしても使い切れないほどに蓄えがあります。
ついでに言えば、ここの艦娘は全員、艤装を限界まで近代化改修しているので、必要な資材はそれぞれ異なるんですけどね。
私のような、肉弾戦タイプの艦娘は、そもそも燃料を必要としませんし……。
艤装を使う艦娘は、大体、搭載しているのは核融合エンジンとかなので、必要なのは重水素やヘリウム3とかですかね？
中には、アイスセカンドなんかを使う艦娘もいますし、それを言えば、『勇気』さえあればいくらでも動かせる……、なんて子もいます。
整備の問題も、個人で使う、人間用サイズの武装を個人で整備するだけで良い訳ですし、指揮権は、提督を頂点として、聯合艦隊旗艦は長門さんになっています。
まあ、何にせよ、私達は即座に戦時体制に移行できるので、普段から気を張る必要はあまりない訳ですね。
そもそも、私達にとって重要なのは、『いかに提督を喜ばせられるか？』であって、深海棲艦と戦うことじゃありませんしね。
提督から命じられた仕事だからやっているだけで、人命や、海の平和とか、そういうのは正直どうでも良いです。
私達は提督の猟犬であり、提督が「狩れ」と命じた獲物を狩るだけ

の存在です。
獲物を狩って、ご褒美に「お情け」をいただく為だけに生きているんですよ。
ああ、もちろん、全ての決定権は提督にありますが、自分で考えなくて良いという訳ではないんですよ？
例えば、提督のお世嗣を産むこととか、そう言ったこともしっかり考えないと、一人前の猟犬とは言えません。
さあ、今日も、提督のしもべとして、敵を狩りましょう！
そう思って私は、隣で寝ている加古を起こしました。
「加古、起きて、朝だよ」
「んんぅ……？ふぁ～あ、おはよー古鷹……」
半分寝ている加古の手を引いて、顔を洗って歯を磨き、着替えて髪を整えて、と。
「ほらっ、加古ー！今日は私達が、提督の護衛役なんだよ！」
「そうだった！」
その一言でばっちり起きたは加古は、すごい速さで身支度を整えた。

そして、提督の私室へお迎えにあがります！
まずはノック。
そして声をお掛けします。
「提督、起きていらっしゃいますか？」
『ん、起きてるよ』
「入室してもよろしいですか？」
『良いよ』
そうして、扉を開く。
「おはよう、古鷹」
ああ……、ああ！
提督！
私の主人！神にも等しい、いや、神そのもの！
素敵、素敵、素敵！

白亜の御髪も、鋭利な視線も、彫りの深いお顔も、薄い唇も、がっしりした肩幅も、分厚い胸板も、引き締まった筋肉も全部！
全てが美しい！
「おいで、古鷹、加古」
「「はい！」」
提督が、まるで、よく懐いた犬にそうするかのように、両手を広げる。
ああ、ああ！
私に、私達に、飛び込んでこいと！
そう仰るのですね！
私も女ですから、本能では、提督の分厚い胸板にマーキングするかのように頬擦りして、朝から奉仕をしたく思っています。
けれど、猟犬としての理性の部分がそれを許しません。
主人と犬との間には、絶対的な上下関係があるのです。
提督が上、私達犬が下。これが決まりです。
ですから、本能のままに、提督にしゃぶりつくことなど、本来は許されません……。
けれど、そこを！
お優しい提督は、私達のその、浅ましい雌の本能を察して、甘えさせてくださるのです！
雌の匂いを感じ取られるなんて、犬として失格……、私達は駄犬ですね。
そんな駄犬を、提督は愛してくださる……。
こんなにも、こんなにも幸せなことが他にありますか？
「「提督っ！」」
私と加古は、提督の胸に飛び込みました。
「あらまー、かわいーねー、うりうり～」
そう言って、提督は、私達を撫でてくださいました。
「こんな早い時間に来るってことは、朝からしたかったってことかな～？」
そんなつもりは……！

ない、と言えば嘘になるかもしれません。
でも、違います！
たまたまなんです！
そう思って、私は強めに否定してしまう。
「ち、違います！」
「とぼけちゃってえ（マジキチスマイル）」
「わ、私達は、提督の犬なんです！犬が主人におねだりだなんて、浅ましい真似はできません！」
「ふーん？じゃあ……、俺が抱きたいんだけど、良いかな？」
ああ、すみません、提督。
気を遣わせてしまいましたね……。
「もちろんです！提督の為なら！」
……
……
……

朝から最高の時間を過ごした私達。
提督は、ベッドの上では、少々意地悪なお方です。
私がもう達してしまっているのに、私の弱いところをゴリゴリと……。
でも、そんなところも素敵なんですよね……！

軽くシャワーを浴びて、食堂へ。
提督は、鳳翔さん達と協力して、朝から数百人分の料理をお作りになります。
朝から二十種類を超えるメニューを考案し、作っていらっしゃいますね。
一度、負担になっていないかとお訊ねしたことがありますが、好きでやっているので苦ではないと仰られていました。
実際、提督に埋め込ませて頂いた『チップ』からは、あれだけの料理をしていても、バイタルの乱れはなく、非常にリラックスした信号

を出していらっしゃいました。
恐らくは、本当に楽しんでいらっしゃるんでしょうね。
であれば、私から言うことはありません。
調理を一時間足らずで終わらせた提督と共に食事を摂って、午前の仕事に入ります。
と、言っても、提督には殆ど仕事は回ってきません。
雑事は全て、提督の忠実な猟犬たる艦娘がやります。
提督はただ、報告を聞いて、方針を立てていただくだけでよろしいのです。
もちろん、艦娘が、提督の利権を犯そうなどと言う考えは一切ありませんよ？
その証拠に、あらゆる事業や活動の『責任者』は艦娘ですが、利益は１００％提督のものになります。
……まあ、その利益は、提督は殆ど受け取らず、ほぼ全てを艦娘名義の口座に入れたり、黒井鎮守府の運営資金として貯蓄なさっているのですが。
身持を崩さない、立派なお方であることは素晴らしいのですが……。
私としては、もっと好き勝手なさってもいいのに、と思いますね。

昼、昼食作りをなさった提督を護衛します。
午後の提督は、基本的に、外部組織との会合か、もしくは鎮守府の見回りをなさります。
今日は見回りですね。
見回りは、艦娘とのコミュニケーションが目的だそうです。
人数が多いので、充分なコミュニケーションが取れないことについて、提督は嘆いていらっしゃいました。
……なんてお優しいお方なのでしょうか。
提督の貴重なお時間を、私達艦娘に割いてくださる……。
本当に光栄なことです。
その後、夕食作り、入浴、晩酌の後、提督は床に入ります。

「おいでー」
「提督……♡」
寝る前にも、可愛がっていただけました。

幸せ……。
本当に幸せですね。
昔は考えられなかった、本当の幸福。
私達に愛を、本当の幸福を、全てを与えてくださった提督。
恩を返さなければならない。
提督の望みを叶え、全てを捧げ、敵を狩り……。
全霊で、無償の愛への対価を払わなければならない。
注がれた愛情の分だけ、忠誠を、忠義を返すのだ。

５３４話　サミット

「だーかーらー……」
なーんで。
黒井鎮守府で集まって会議するんですかねえ……？
「なんでだウサミン？」
「え？ナナも、現在の世界のパワーバランス的に、ここに集まるのが一番良いかなーって思いますよ？」
そう返したのは、アイドルのウサミンこと、安部菜々さんだ。
「あー……、少し待って欲しい。Ｍｒ．ストレンジャー、そちらのレディは？」
そう訊ねてくるのは、アイアンマンことトニー・スタークだ。
トニー社長は、ウサミンの方を見た。
え？知らんのか？
「アイドルの安部菜々さん、通称ウサミンだ」
「アイドル？シンガーか？今後の世界の行く末について話し合うこの場に、何故シンガーが？」
ああ、知らんのか。
「もしかして、『ウサミン』をご存知でない？」
「最近は仕事が忙しくてね、テレビなんて見てないんだよ」
「アイドルとしてのウサミンももちろん有名だが、この界隈のウサミンと言えば、『永遠の十七歳ウサミン』だろ？知らないのか？」
俺が再度訊ねる。
「『永遠の十七歳』だと……？まさか!!!」
ああ、知っているようだな。
「そうだ。ウサミンは、遙か過去、人類史が始まる以前から生きている伝説的存在……。永遠の命を持つ人間にして、大魔導師……」
「古代ウルクにてギルガメッシュ王に仕えたという、あの伝説の……?!そうとは知らず失礼な態度を取ってしまったな、すまない、Ｍｓ．ウサミン」
そう言ってウサミンに謝罪する社長。

「ああ、いえいえ！私なんて本当に、大したことないですから！」
「よく言うよ、あの『ソーサラースプリーム』にも匹敵する大魔導師なのに……」
俺はそう呟いた。
と、そこに……。
「遅くなったわね」
「すみません」
対魔忍、井河アサギ。
今代の葛葉ライドウ。
二人が来た。
「いや、時間はまだ余裕があるからね」
俺が答えた。
「日本のオカルトマスターのお二人には是非お会いしたかった。スティーブン・グラント・ロジャースです」
「あら、貴方は……？」
「こう言えば伝わりますか？私は、『キャプテンアメリカ』です」
「ああ！キャプテンアメリカ！あの伝説の……！」
こうやって人脈はできていくんだなあ。
そうして、続々と人が集まっていき……。
会議をして終了。
いや本当にね、なんでうちでやるの？

そして、本命はこっちだ。
黒井鎮守府の大ホールで行われる立食パーティー……。
これは、各国から集まった、裏表を問わない重鎮達が、人脈作りをするのだ。
「……ですから、この地球は、我々『時空管理局』からすれば管理外世界なのですが、その危険性は全宇宙でもトップクラスであると、こちら側は認識しています」
「我々、『公安９課』は、あくまでも日本の防衛の為の組織で……」
「これはこれは……、『有澤重工』さんではありませんか」

「『ＨＣＬＩ社』の……。いつもお世話になっています」
わあ！怖い人達がなんか怖い話してるぅ！
おや、ライドウ君？
「失礼する。武器商人のキャスパー殿か？」
「おや……？貴方は？」
「日本、ヤタガラスの葛葉ライドウだ」
「ライドウ……、ああ！思い出しましたよ。ジャパニーズ・オカルトマスターでしたか？フフーフ、面白そうなお話を聞かせてくれそうですね」
「すまないが、面白い話ではない。仕事の話だ。武器の輸入を依頼したい」
「フフーフ、それはそれは……、面白い話ですねえ……！大国日本の国営組織に武器を卸すなんて、光栄なお話ですよ」
「そうだろうか？私達ヤタガラスは、規模はそう大きくはないんだが」
「いえいえ、日本の誇るオカルトマスターが認める品質の武器……、という付加価値はとても良いものです」
なんか商談しているな。
おや、しぶりんだ。
と、そこにアサギが……。
「あら……！次元渡り（プレインズウォーカー）の……」
「その名前で呼ぶのはやめてもらえますか？あくまでも私は、望まずに次元移動した経験があるだけですから。本物の『次元渡り』はここの旅人さんでしょう？」
「あれは別格の化け物よ。私は貴女に興味があるの。アイドル、渋谷凛ちゃん」
「対魔忍の首領たる井河アサギさんが、一介のアイドルになんの御用ですか？」
「もう、あまり警戒しないで？無茶なことは言わないわ。ただ、貴女の所属する事務所とは仲良くしておきたいってだけだわ」
「はあ、普通のアイドルプロダクションである３４６プロと？」
「惚けないの。大魔導師ウサミンに、大天使ミカエルの転生者たる緒

方智絵里、ロマノフ王朝の後継者アナスタシア、発明王とまで呼ばれる工学博士の池袋博士の一人娘に、多くの次元移動経験者……。その気になれば、一国を支配できる一大勢力よね？」
「……まあ、それは認めますけど。でも、私達の本業はあくまでもアイドルですから。人々に笑顔を届けるのが仕事なんです。切った張ったの殺し合いをするつもりは……」
「ええ、もちろん、それで良いのよ。むしろ、動かないで欲しいとお願いしたいのよ。パワーバランスが崩れちゃうと困るの」
「それは……、はい、もちろんです。私達３４６プロダクションは、自衛のため以外で力を振るうことはありませんから」
なんだか、難しい話をしてるなあ。
真面目に働いてる人は大変なんだなあ（小並感）。
あ、因みに、アサギが言ってることは全部マジです。
３４６プロダクションはマジでやばい。層の厚さで言えばうちにも匹敵する。
東城会直系村上組の組長の一人娘に、対魔忍の系譜である浜口家の娘。
超巨大財閥の西園寺、桜井の娘。
メシア教枢機卿の娘にして、大天使サンダルフォンの転生者であり、更に教皇から聖女の認定を受けたクラリス。
マグネタイト研究者の第一人者、若き英俊、一ノ瀬博士。
真祖吸血鬼の一人、黒埼ちとせ。
葛葉の分家にして、国内最高位の退魔師の家系、道明寺の娘と、依田の娘。
キユウビキツネのチャネリング能力者、塩見周子。
ＰＳＩ能力者の堀裕子。
そして『超人』ヘレン……。
ペルソナ使いやデビルサマナー、スタンド使いなんてのもいる。
とは言え、勢力と戦力はうちの方がデカいんだがね。
と言っても、この層の厚さは異常だ。
これだけ主義思想能力が異なるメンツが一つの組織に纏まってい

るのは、普通はあり得ない。

さあ、そんな感じでパーティーをした訳だ。
ん？でもおかしいな。
なんで俺には交渉とか商談とかが来ないんだ？
とか思ってたら……。
「商談についてはこちらで受け付けまーす」
と霧島。
「その他の交渉や同盟についてはこちらでお願いしますー」
と大淀。
うーん！
なるほど！
……ひょっとして、俺っていらない子？

５３５話　とある対魔忍の独白

私は、対魔忍の長。
井河アサギ。
今では、ほぼ一線を退き、対魔忍全体の指揮を執っているわ。
対魔忍……。
私達対魔忍は、戦国時代に活躍した『忍び』をルーツとする国防組織よ。
対魔忍については、私達が『対魔忍ランド』などを経営して、活動内容についてアピールしているから、誰もが知っていると思うわ。
表向きには、要人護衛や対テロの特務部隊……、と言うことになっているけれど。
裏では、魔界から現れる悪しき存在と戦っているのは、ほぼ公然の秘密よ。
流石に一般市民は知らないでしょうけど、裏社会の人間や政府関係者なら大抵は知っているわ。
魔界については……、まあ、私達も詳しいことは全くわかっていないわ。
ただ、言えることは、魔界は広大であると言うことね。
複数あるとも言われているわ。
嘘か真か、ここ、黒井鎮守府の長であるあの人は、「魔界の創造主と会った」とか言っていたけれど。
今回、私は、黒井鎮守府で開催された大規模なサミットに参加しているわ。
内容は、各国の様々な組織との情報交換と交流……。
対魔忍が今、驚くほど人手不足なのは、裏社会の人間ならみんな知っているわ。
詳しくは思い出すのも嫌になるのだけれど、とある対魔忍の一派が、魔界の存在に唆されて大量に離反してしまったの。
そのせいで、ただでさえ不足している人員がごっそりと消え去り……。

まあ、つまり、私の残業時間は官僚を超えていると言うことね。
普段は、黒井鎮守府に下請依頼を出して、どうにかこうにか回しているけれど、本当にもう限界なのよ……。
でも、これで一息つけるわ。
このサミットで、人脈を増やしたり、外部組織から人員を回してもらったりできれば……！

報告会が終わったわ。
報告会は、実に有意義な時間だったわね。
最近よく見かける生物兵器の類は、Ｂ．Ｓ．Ａ．Ａ．と言う、対バイオテロ部隊の方々から解説を受けて、弱点を教えてもらったわ。
対魔忍は、対魔粒子と言う特殊なエネルギーを身に纏うから、ゾンビに噛まれても、滅多にゾンビ化することはないんだけど……。
でも、最近は、知能があるタイプのゾンビが出てきて困ってたのよね。
話によると、昔のゾンビは、Ｔウイルスと言うもので無理矢理動かされていた動く死体に過ぎなかったそうだけど、最近のゾンビは、プラーガという寄生虫やＣウイルスと言う新型ウイルスが使われたゾンビで、知能が高くて身体能力も高いそうなのよ。
もちろん、ある種の超人である対魔忍にとって、人間より強い程度のゾンビは怖くないわ。
でも、数の暴力で押されたり、新型ウイルスで強化されたクリーチャーに囲まれたりすると、私達としても厳しいところね。
それらの対処法についての情報と、ゾンビが大量に発生した際に応援を呼べるホットラインがもらえたのは、本当に助かるわ。
その他にも、キャプテンアメリカ氏から提供された、悪の秘密結社『ヒドラ』の動向と手口。
アサシン教団から提供された、『テンプル騎士団』の動向について。
ハンター協会や時空管理局などの、普段あまり前に出ない大組織との伝手も作れた……。
本当にもう、旅人さんって最高ね！

助かるわー。
もう良い加減に、黒井鎮守府への組織的な依存をどうにかしたいのよね。
ほら……、対魔忍って、女だから、よく敵に捕まるのよ。
私も、昔は、敵に捕まって肉体を改造されて、感度を三千倍にされたりしたわ。
思えば、その時に助けてくれたのも、彼……、旅人さんだったわね……。
あの人は……、本当に……、謎よね。
私を助けた理由も、「え？なんか美人が酷いことされてたから反射的に？」とか言ってたし。
そもそも、どうして魔界にいるのか？と聞けば、「定番の旅行先だから？」とか言うし。
なんなのあの人……。
うちの医師である桐生佐馬斗に身体検査をさせてみれば、ヒトゲノムとの一致率が５２％で、内１５％は、地球上のどの生命体とも一致しない、超特異な細胞でできているとか……。
まあ、その辺は良いのよ。私の部下にも、魔界の存在とのハーフとか、そう言う対魔忍もいるし、裏社会には半人外みたいな人が多いし。
人じゃないからと言って差別したりはしないわ。
むしろ、旅人さんは逞しくって私好みな男性だしね。
立場もあるし、気兼ねなく甘えられる男性は貴重なのよねえ……。
私の妹のさくらは、私のことをある程度は理解してくれているんだけど、周りの対魔忍達は、私のことを女と言うよりも、超人というか、生き神というか……、とにかく、堅苦しく扱うのよね。
それか、上層部に居座る老害共のように、人外扱いか……。
どの道、普通の恋人なんて見つかりっこないわね……。
いや本当に、男が女に逃避したい時があるように、女だって男に甘えたい時があるのよ。
まあでも……、旅人さんは、美人と見るや否や、際限なく甘やかしてくれるから、依存すると……。

「「「提督ー♡」」」
ああなっちゃうのよねえ……。
艦娘、だったかしら？
無垢な神霊……。
私も、一歩間違えればああなっていたのかもしれないと思うと、怖いわね。
旅人さんは用法用量を守ってお使いください、ってことかしら？
まあ、それを言えば、私は別の意味で依存してるけれど。組織的な意味で。
そう、もう本当に……、任務の下請けが！
現在、偵察任務の三割と、救出任務の六割が、黒井鎮守府さんへの下請依頼になっているわ。
これがどれほど異常なことだか分かるかしら？
救出任務の六割よ？過半数よ？
いや、確かに、捕まる対魔忍が悪いと言われればそれまでなんだけれど。
黒井鎮守府さんは、拐われた対魔忍を奪還したら、肉体と精神を治療したのちに送り返してくれる、アフターサービスもばっちりな企業さんなんだけど！
これには深い訳があるの……。
まあ、でも、簡単に言えば全部私が悪いんだけど!!!
……昔、ね。
エドウィン・ブラックって言う、魔界の王の一人を倒したことがあるの。
自分で言うのもなんだけど、伝説的な偉業よ。
だから……、対魔忍の若い子達は、みんな私に憧れてるの。
そうするとどうなったのか？
潜入や偵察が全然できない、脳筋武闘派集団の出来上がりよ……。
こんな事を言うと、老けたみたいで嫌なんだけど、最近の対魔忍は……。
直接戦闘能力のみに傾注するあまり、偵察や潜入のような任務や、

相手の搦手に弱くなってるのよね……。
それに反して、黒井鎮守府さんところの艦娘さん達は、どんな任務でも卒なく熟すのよ？
直接的な戦闘能力は、私に匹敵するくらいに強くて、しかも、ハッキングや魔術などの専門知識を持った子達も多いらしいの。
そんな子達を借りて、どうにかこうにか対魔忍という組織を回しているのが現状よ。
良い加減、黒井鎮守府さんに借りを返さなくては……！
そう意気込んで、私は、黒井鎮守府さんの交渉担当の艦娘さんに話しかけた。

その日の夜。
「あああああ……、またやってしまった……！」
言いくるめられて、また借りを増やしてしまった……！

５３６話　旅人サブストーリー

テーテーテーテレッテー。
提督監視委員会です。
「実況は私、大淀と」
「解説の明石でやっていきたいと思います！」
はい。
「で、大淀さん。提督に付けた監視カメラ、盗聴器、発信器、監視衛星、ハエ型自律飛行式監視カメラなどから得られた映像と音声を、実況解説していくとのことですが？」
「はい！私達艦娘は、夫である提督を愛しています！なので、見守る義務があるのです！」
提督のことは全て把握しなくてはなりません。
提督の要求を受けた際に、スムーズに応答する為です。
提督が「世界を滅ぼせ」と命じるならば、即座に、全世界に対して核兵器を発射し、機動兵器を差し向け、私達が要人を直接抹殺しに行きますよ！
……まあ、提督はそんなことは仰りませんが。
提督は仏のようにお優しい、慈悲深きお方ですから。
提督はこの世界を愛していらっしゃいます。
ここで、「提督の愛する世界を壊せば、私のことだけを見て下さる」などと考えるのは三流の下僕です。
それは、浅ましくも、提督の愛を求める行為……。
奉仕者として、従僕として、提督という神の使徒として……、提督の愛を求めるなど三流も三流。下の下です。
私達は、無私にして無償の愛を、絶対にして全霊の忠誠を、提督に捧げる。その為だけに生きている存在なのですよ？
下僕が主人に何かを求めるなど……。
それに……。
私だけを見てもらいたい！などと、甘ったれたことを考えずとも、提督は私達一人一人のことをよく見て、思い量ってくださっています

からね。

では、早速、外出なさった提督の行動を追跡しましょうか！

提督は、ハンドルがついてるものは大抵何でも動かせる多芸なお方ですが、基本的には徒歩での行動を好まれます。

ドライブにもよく行かれるのですが、今日は散歩のようですね。

提督が外を出てしばらく歩くと……。

『『『旅人さん！』』』

複数の人に話しかけられましたね。

「大淀さん、これは？」

「男は敷居を跨げば七人の敵あり、とは言いますが、提督は外に出ると十個くらいサブストーリーが発生するんですよね」

『おっと、緊急性が高い用事の人は誰かな？』

提督が仰いました。

すると……。

『ヨシさんが、ホームレス狩りに！』

と、薄汚い格好の老人が言いました。

察するところ、ホームレスでしょうね。

『何だって？ヨシさんが？不味いな……。ゲンさん、場所は？』

『桜下通り裏の、いつもの場所じゃ！』

『分かった！すぐ行く！』

そして、提督は、裏通りに入って……。

『ひいい～！やめとくれ～！』

『うるせーよジジイ！』

『おらっ！社会のゴミを掃除してやってんだよ！』

『ホームレスなんて、いない方がいいっしょ！』

ホームレス狩りの現場に辿り着きました。

すると……。

『コラ、ガキ共。ヨシさんを離せ』

『は？何あんた？』

『キモ～！正義感ってやつ？』

『ホームレスの味方とか！』
ふむふむ……。
私は別に、ホームレスに同情心はありませんから、なんとも思いませんが……。
『ヨシさんは好きでホームレスをやってるんじゃないさ。ヨシさんは元々工場員だったけど、事故で指を……』
ヨシさん、なる名前の、襲われているホームレスの前歴について話す提督。
ええとですね……、人間が維持できる友人関係の最大数は百五十人と言われているのはご存知ですか？
これをダンバー数と言います。
まあ、要するに、人間は百五十人以上の人と関係を持てるほど、他人を記憶できないんですね。
提督は、と言いますと……。
『……そして、リーマンショックの煽りを受けてしまって、職を失い、泣く泣くホームレスになった人なんだよ。決して、お前らが言う、働かないクズなんかじゃない。断じて違うんだ』
提督は、恐ろしいほどまでの数の人間を『記憶』なさっているのです。
そもそも、艦娘だけで百五十人くらいはいるでしょう。
提督は、艦娘の、身長や体重だけでなく、喋り方、癖、好物……、使っているシャンプーの銘柄まで、何でも覚えておいでです。
それだけではなく、こうして、話をしたホームレスの一人一人のことすら、しっかり覚えていらっしゃいます。
『は？意味わかんねー。何言ってんのお前？ホームレスはホームレスだろ？』
『……まあ、理解してくれないならそれでいいさ』
『で？やんのかよ？言っとくけど、俺ら三人、ボクシングやってるかんな？』
『そうなると、事実として……、お前らは俺の友人を侮辱したことになる訳だ』

そう、友人。
提督にとっては、自分と意思疎通ができる存在は、例え何であれ『自分と同じ人間』として扱います。
そして、『友人』となった人は、例えホームレスだろうと、力を貸します。
それが提督なのです。
『あ？何を……』
『遅い』
『が、がああっ!!?い、痛えよぉ！折れちまった……、腕がああああ!!!』
『て、テメェ!!!』
『だから遅いって』
『ぎゃあああっ!!!』
『で、お前は？やるのか？』
『や、やりませええええん!!!ひいいいっ!!!』

『あ、ありがとう旅人さん！恩に着るよ！』
『気にすんなよヨシさん。ほら、これで湿布でも買ってくれ』
そう言って、襲われていたホームレスに二、三万円を渡す提督。
『こ、こんなにもらえないよ！』
『余ったらみんなで酒でも飲んでくれよ』
『だ、だけど……』
『じゃあこうしよう、酒は俺の経営している店で買っていってくれ。それなら、俺が自分の店に金を落とす訳だから、おかしくないだろ？』
『……ありがとう、旅人さん。今のご時世、俺達みたいなホームレスを友達と呼んでくれるのは、ホームレス以外じゃあんたくらいなもんだよ』
頭を下げるホームレスに、後ろ手で手を振りながら、歩き去る提督。
提督は、本心から、ホームレスに同情して……、とかそんなではないんですね。
本当に言葉通り、友人が襲われていたから助けただけ、なんですよ。
提督は、誰にでもこんな感じです。

ただ、美人な女性にはより一層甘いですが。

「……さて！ここまででどうですか、大淀さん？」
「そうですね、提督の交友関係がおかしいのは周知の事実ですが、街の人々とも交友を持っていらっしゃることがよく分かるワンシーンでしたね」
「はい！確かに、提督は幅広すぎる交友関係を持っていますよね。総理大臣とか大統領とかとも友人ですが、こうして、ホームレスなんかとも友人である、と」
「提督は、偉い偉くないのような、社会的な立場で人を評価しませんからね」
「ですねえ。そもそも、それを言えば、私達艦娘何で人外の化け物ですし」
「そんな提督だからこそ、私達艦娘に応えてくださったのかもしれませんね」
「ええ、本当に、私達は幸運でしたね。提督と縁を持てて、提督に愛してもらえるだなんて、最高の幸運です！」
「あ、提督に新しい動きがあるみたいですよ。見ていきましょう……」

５３７話　仕事する旅人

はい！続きを見ていきましょう！
ホームレスを助けた後、提督は、喫茶店に入りましたね。
『やあ、チノちゃん。やってるかい？』
『あ、旅人さん。ちょうど今オープンですよ。ご注文はいつものでよろしいですか？』
『うん、ありがとう』
そうして、コーヒーを飲みながら、三十分くらい店員の女の子とお喋りをした後に……。
店から出ると……。
『きゃあ～！』
早速、何か起きましたね。
あれは……、引ったくりですか。
『任せろ』
その一言と共に、提督は『加速』の魔法を唱えて急加速。
引ったくりをしたスクーターのリアタイヤを蹴り上げました。
『『うわあああああっ?!!!』』
吹っ飛んでいく二人組の引ったくり犯をバックに、提督が手を横に伸ばすと……。
狙いすましたかのように、女性が引ったくられた鞄が落ちてきました。
それを掴み、提督は……。
『はい、お姉さん。次からは気をつけてね……、って、君は……』
『ありがとうございます～……、あら？』
『あずささんじゃないか』
『あらあら～、旅人さん、お久しぶりです～』
……どうやら、知り合いだったみたいですね。
青髪の女性と軽く話した後に、提督は、昼食を摂りに飲食店に入りました。

《デカ盛り始めました！・三十分で食べれば無料！》
というポスターがデカデカと貼られているお店です。
『『すみません、このデカ盛りラーメンください』』
提督がそう注文すると、両隣に座った二人の女性も同じ注文をしましたね。
『『……あ！』』
……どうやら、また、お知り合いのようです。
『弥子ちゃんと貴音ちゃんか』
『旅人さん！お久しぶりです！』
『お久しぶりです』
資料を参照したところ、『日本を救った元女子高生探偵』と『トップアイドル』の二人ですね。
何故、そんな二人と接点があるのかは全くの謎ですが……。
その後も、二人の女性と談笑しつつ……。
『『すいません、おかわりください。五杯……、いや、十杯』』
と、一杯で五キログラムを超えるデカ盛りラーメンをスープの最後の一滴まで平らげた三人は、おかわりを要求して……。
『もう勘弁してくださいいいい!!!』
店長が土下座して。
『『まあ、腹三分めくらいにはなったかな……』』
とか、頭のおかしい台詞を吐いてから、解散しました。
そして、提督は次の飲食店に入りました……。
次はカレー屋ですね。
そこにも……。
《トッピング全部乗せデカ盛りカレー！》
というポスターが貼られていました。
『『すいません、この、トッピング全部乗せデカ盛りカレー一つください』』
また、両隣の女性も、同じ注文をしましたね。
これも恐らく……。
『『あ！』』

知り合いみたいですね。
『インデックスちゃんとアルトリアさんか。久しぶり』
『お久しぶりなんだよ！』
『貴方ですか、お久しぶりです』
銀髪の少女と、金髪碧眼の女性。
どちらも美形ですね。
『お二人とも、今日は連れはどうしたの？』
『とーまは、必要悪の教会から私宛にってお金をもらえたから、それで美味しいものでも食べてきなさいって』
『シロウは、凛に会いに行くとかで……』
ふむ……、この二人は、『世界中の魔導書を記憶した生きる禁書目録』と『アーサー王の英霊』のようですね。
こんな厄の塊と、どこで知り合ったんですかねえ。
提督は常に、自分のことを一般通過旅人と仰りますが、どの辺が一般なのやら。
そうして、談笑をして……。
『『すいません、これ、おかわりください。五杯、いや十杯ほど』』
するとまた、店長が出てきて土下座され、追い出されました。

腹を満たした提督は、そのまま、黒井鎮守府の所有する基地に視察に行きました。
え？
ええ。
基地です。
毎度毎度、黒井鎮守府は世界屈指の大組織だと言っていだと思いますが？
もちろん、頂点は提督であり、その下に艦娘がいるのですが、更にその下がないとは言っていませんよね。
私達、黒井鎮守府には、下部組織が山ほどあるのです。
例えば、黒井鎮守府で開発した機動兵器などを販売する部門や、技術部もありますし、黒井鎮守府所属のデビルサマナーや機動兵器パイ

ロットなどもいます。
軍事産業だけでなく、遊園地の経営や、ゲームセンター、ソーシャルゲームの運営、ケーブルテレビのチャンネルもいくつか持っていますし、飲食店や家電用品店、アンドロイドの販売に、ショッピングモールの経営……。
まあ、最も利益が出ているのは、軍事産業と海上輸送業ですかね？
海上輸送業については、深海棲艦騒ぎで壊滅した各国の海運会社をM&Aし、それを運営していますから。
実際、この地球上の海運会社の約九割は黒井鎮守府の隷下にあります。
軍事産業については……。
この世界は、どうしてなのかは知らないんですが、常に侵略されたり内ゲバしたりで大荒れなので……。
黒井鎮守府製の機動兵器は、安価で操縦が簡単で、そこそこの性能があるので、多くの国の正規軍に採用されていますよ。
主力商品は、『ゲシュペンスト』や『ヒュッケバイン』とかですかねえ？
おっと、それで、提督は……、と。
『こんにちわー』
『社長、お久しぶりです』
『キョウスケ君か。調子はどうだい？』
『良好です』
あれは……、ふむ。
黒井鎮守府隷下の機動兵器部隊のエースですね。
『アルトアイゼン』という機体に搭乗するエースパイロットだとか？
『で？どうなの？』
『はっ、エアロゲイターとの戦いは順調ですが……』
流石は提督……！
こうして、末端の兵士にまで話を聞き、生の意見を取り入れるのですね！
……そもそも、黒井鎮守府の仕事は深海棲艦との戦いのはずなの

に、なんでまたエアロゲイターとかと戦ってるんですかね？
まあ、それを言えば、機動兵器部門の交戦記録を見れば……、出るわ出るわ。
邪魔大王国、Ｄｒ．ヘル、ボアザン帝国、ガイゾック、恐竜帝国、百鬼帝国、妖魔帝国、ベガ星連合、暗黒ホラー軍団、バーム星人、メガノイド、ムゲ・ゾルバトス、ギシン星人、ガバール星ロボット帝国、ゾンダー……。
ヘテロダインやＫＡＩＪＵのような化け物もいれば、ブランチ一味やらヴォルフガング博士などの犯罪組織やテロリストもいますね。
うーん！
……何でこの星、滅ばないんですか????
『おー、ゼンガーさん。どうです？』
『良好だ』
『リュウセイ君、怪我とかしてないかい？』
『ああ、大丈夫だ』
『イルイちゃん結婚しよう！』
『え、えっと……、その……』
そんな風に、機動兵器部隊の兵士達に挨拶をして……。
一通り現場の声を聞いた後、帰宅しました。
その後は、現場の声を参考にして……。
「聞いてたよね、大淀。機動兵器部隊の話なんだけど……」
「はい、分かりました！」
こうして、私に話を持ってきます。

誤解のないように言っておきますが、提督は私達には特に優しいですが、他の人にも充分にお優しいお方ですよ。
今回も、機動兵器部隊の話を聞いて労い、特別ボーナスを出したいと仰られましたからね。

５３８話　Ｑ：どうしてスーパーロボットがいるんですか？

オッスオラ旅人！
スーパー放蕩人ゴッドだ！
無職神拳伝承者！
まあ、冗談はさておき……。
スーパーロボットがいるのか?!みたいなツッコミを頂いたんで、その辺の話をするか。
まず、我々、黒井鎮守府と敵対状態にある組織は多岐に渡ると言うことは誰もが知っているだろう。
ロボット関係じゃない敵対組織だけでも百を超える……。
例えば、ヒドラ、財団Ｘ、ショッカー、シャドルー、テンプル騎士団、メシア教会、ドツクゾーン、黒十字軍……。
そんな奴らが、奇襲、あるいは徒党を組んで襲いかかってくるのだ。
また、巨大兵器を使って襲いかかってくる集団もいる。
邪魔大王国、Ｄｒ．ヘル、ボアザン帝国、ガイゾック、恐竜帝国、百鬼帝国、妖魔帝国、ベガ星連合、暗黒ホラー軍団、バーム星人、メガノイド、ムゲ・ゾルバトス、ギシン星人、ガバール星ロボット帝国、ゾンダー……。
ヘテロダインやＫＡＩＪＵのような化け物もいれば、ブランチ一味やらヴォルフガング博士、シャフト・エンタープライズなどの犯罪組織やテロリストにＰＭＣなんかもいる。
艦娘は強いとも。
当然、これらの連中に襲われても、大抵はなんとかなる。
とは言え、艦娘は無敵じゃない。
飲食もすれば、好きな人とイチャつきたいし、趣味も楽しみたいし、睡眠も必要だ。
この敵対組織らに延々と襲われ続ければ、二百人足らずしかいない艦娘は参ってしまう……。

そこで、下部組織が必要になった訳だな。
元々、下部組織は、深海棲艦騒ぎで職を失った海運業者を雇い入れる救済行為を兼ねつつも、ノウハウのある人間をヘッドハンティングすると言う俺の策略から始まったんだよね。
で、その下部組織の指揮権を、艦娘に渡した……。
そこから、段々とおかしくなってきたんですね。
いや、うん、俺の思惑としては、社会性を身につけさせるための訓練、くらいの気分だったのよ。
実際、最初の頃の艦娘は本当に、人間不信っていうか……、俺と艦娘以外の全てを信じられなくなってたんだよね。
大淀なんて、今は完全無欠の変態だけど、昔は男性恐怖症の小動物みたいな女の子だったんだ。
だったんだ、けどなあ……。
どうしてこうなった……？
まあ、それはいいとして。
つまり俺は、艦娘に社会勉強をさせるために下部組織を任せてたんだよ。
でも……、気がつけば、下部組織は馬鹿みたいな規模に膨れ上がり、それどころか『戦闘部門』やら『機動兵器部門』やら『開発部門』やら、謎の部署が新設されまくった。
分かる？いきなり、俺の名前で知らない武装勢力ができていて、知らない武装勢力の人達に挨拶されるの。
アレ、普通に怖いよ？
知らない厳ついおじさん達に「お初にお目にかかります、社長。私は第〇部隊の～」とか言われるの。敬礼されながら。
フフフ……、怖い。
確かに、俺が一声かければ解散させることもできるのだが、既に馬鹿みたいに膨れ上がったこの組織。一部門だけを解散させたとしても、数万人単位の失業者を不当に作ることとなる。
流石に、そんな真似はできないよね。
と言う訳で、なし崩し的に特大の組織の長となってしまった俺なの

でした。

とは言え、人材のスカウトをしてきたのは俺と艦娘だよ。

できちゃったもんは仕方ないからね。

まず、組織の下の方の人達は、雇用規定に則って雇っている。

年収は部門にもよるけど、大体一千万円くらいかな？

フランスの外人部隊の年収は、日本円で八百万円くらいな訳だから、うちは大分高いね。

それもそのはず、うちは、艦娘と俺が厳選して選んだエリート部隊だからな！

……まあ、人格面は考慮されてないから、割とやべーやつが多いんだけどね。

で、任務達成による特別ボーナスあり、年間休日は百三十五日。

いやほら、うちって外国人の人とか多いから、帰郷だなんだってすると時間がかかるでしょ？だから休日多めなのよ。

雇っているメンバーは、どこぞかの研究所に囚われていた強化人間の人とか、各国の軍で有能ながらも生意気なので冷や飯食いだった人とか、安定した雇用に釣られてやってきたデビルサマナーの類とか。

他にも、空気が合わなくて退職した対魔忍、学会から追放されたマッドサイエンティスト、その他知り合いの組織から諸事情で移籍してきた人……。

まあ、色々かな。

で、組織の上の方は、俺がスカウトしてきた。

いろんな人がいるよ。

例えば……。

この人は、異星人の侵攻に警鐘を鳴らしていたんだけど、世界各国の政府は国同士で争ったり、異星人に降伏して政府の要人たる自分だけ助けてもらおう、とか考えてたんだよね。

それを見てブチ切れていたこの人を、俺は見かねてスカウトしたんだよ。

え？名前？

ビアン・ゾルダークさんだよ。
あとは……、ヴォルクルス教団？とかいう訳のわからん連中と戦ってた人を説得してスカウトしたな。
名前？
シュウ・シラカワさんだよ。
あとはまあ、街中でティンときた人をスカウトしたり？
その人はＳＲＸ計画の優秀なパイロットになってくれたよ。
リュウセイ・ダテって言う人。
あとは、米軍で冷や飯食いだった部隊を丸ごとスカウトしたり。
その人達は今、うちのＡＴＸ計画で開発された機体を使ってくれてるよ。
リーダーはキョウスケ・ナンブって人。
元はゼンガー・ゾンボルトって人がリーダーだったけど、あの人は別部署に行ってもらった。
あとは、地球の守護神とかいう女の子と戦って倒して俺が説得したら、仲間になってくれたりもしたなあ。
その子はイルイ・ガンエデンちゃんって言うんだよね。
俺ももう、正直色々と勘弁して欲しいんだけどね。
厄介事が超特急で突っ込んでくるからもうね。
どうしようもないんだよね……。

それに、悪の組織って、方針によっては徒党を組んだりもするんだよ。
まあ、地球を滅ぼす！って連中は、地球征服！って連中と相容れないんだが……。
地球を滅ぼす！って連中が手を組み合ったり、地球征服！って連中が、「とりあえず邪魔な黒井鎮守府を潰してから考えよう！」と手を組み合ったりするんですね。
となると、うちも、更に戦力を集めなきゃならない訳で……。
日本には、強力なスーパーロボットが沢山いるのはご存知か？
でもさ、彼らは個人なんだよね。

たかが一研究所の資金力と人手で、徒党を組んで襲いかかってくる悪の組織にどう対抗するか？そりゃ無理な話だ。
となると、こちらも徒党を組むしかない。
そう言う訳で、スーパーロボット陣営を集めて、うちの指揮下に入ってもらうこととしたんだ。
その代わりに、黒井鎮守府の資金援助と、パイロットやロボット製作者の護衛の派遣、技術提供なんかをしてるんだよね。
そして、集まった黒井鎮守府麾下のスーパーロボット部隊は、今日も戦う……。

「「兜甲児！今日こそは、貴様の首をＤｒ．ヘルに捧げてみせる!!!」」
『へっ！やってみろってんだ！』
おーおー、やってるやってる。
こうやって、街中でいきなりスーパーロボット大戦が始まる時も、うちの出番だ。
「黒井鎮守府、救助部隊！出撃ー！」
「「「了解!!!」」」
うちの従業員が、逃げ遅れた人を捕まえて、スーパーロボットの戦闘領域から離脱する……。
こんな風に、スーパーロボット個人だけではできない事を、うちが組織力と資金力で解決するのが、黒井鎮守府の仕事だ。

「旅人さん！今回も助かりました！」
「いやいや、甲児君は伸び伸び戦ってくれれば良いさ。後方支援はうちに任せてくれ」
「でも、本当に良いんですか？俺達を護衛してくれているだけじゃなく、光子力研究所の方に資金援助までしてくれて、その上、俺達パイロットにも給料を払ってくれるなんて……」
「まあまあ、気にしない気にしない。その代わりに、有事の際はうちの指揮下で戦ってもらうんだからね」
「いや……、でも、指揮下って言いますけど、命令への拒否権がこっち

にあるんですよね？」
「そうだよ？」
「つまり、黒井鎮守府さんは事実上、何も得してないですよね？」
「そんなことないよ？ま、ぶっちゃけた話だけどさ、君のマジンガーＺＥＲＯは最強クラスのマシンで、君はＺＥＲＯに選ばれた唯一のパイロットだ。それを失うのは地球にとって大きな損失になる」
「それは……、そうでしょうけど」
「良いか、甲児君。君達のような正義の味方の弱点は、『徒党を組まない』ってところだ。組織力がない訳だな」
「そうですね……」
「個人でできることには限界がある。君達、スーパーロボットがいくら強力な個人でも、徒党を組んだ悪の組織に各個撃破されたらジリープアーなんだよね」
「まあ、それは自覚しています」
「そこで！黒井鎮守府が最大の指揮権を持って、スーパーロボット集団を指揮すれば、スーパーロボット集団に統一された指揮系統ができる！指揮系統ができれば、悪の組織集団の襲撃に対して、適切な戦力を割り振れる！」
「確かに、前は、一箇所に沢山のスーパーロボットが集まって戦力過多になっていたり、逆に、スーパーロボットがいないところを狙われてピンチになったりしてましたもんね……」
「そう言うことだね。そんな訳だから、これからも力を貸してくれると嬉しい」
「はい！」

５３９話　一匹見たら三十匹いると思え

どうもこんにちは。
いつもニコニコ貴方の隣へ這い寄る混沌、旅人です。
なんか、俺が実はニャルなんじゃ？みたいなことを言われた気がするが、実際俺はニャルに振り回されて死にかける探索者側であることをここに明記しておくよ。
変なのとのエンカウント率の高さは、多分ニャルのせいだと思う。
ドルチェアンドガバーナの香水のせいではなく、俺を悩ませるのは大抵ニャルとかそう言う奴らなんで……。
友達の上位者もたくさんいるけどさ。
あ、そう言えばこの前、ヤーナム在住の元狩人で現触手塊上位者の人がいるんだけど、彼からお歳暮届いたっけな。
中身は儀式素材詰め合わせセットだったから、白露型にあげたよ。
えっとね、本来なら今回は、各国のロボット研究者の方々との会合があったんだけどね、残念ながら急用が入ってドタキャンすることになっちゃったんだよね。
仕方ないから明石を派遣したんだけど、どうなることやら。
え？
俺に入った急用とは何か、だって？
そりゃもう決まってるでしょ。
『グオオオオオオッ!!!!!!!』
「グワーーーッ!!!」
「旅人ーーーっ!!!!」
怨虎竜マガイマガドの討伐だよ。
さて、なんだかよくわかんない紫色の炎っぽいのの爆発に巻き込まれて、ゴミ屑のように宙を舞う俺。
そんな俺の脳裏には、どうしてこうなったのかと言う経緯が、走馬灯のように駆け巡っていた……。
事の始まりは、俺が仕事もせずに鎮守府で遊んでいたあの日に遡

る。
俺は、起床して身支度を整え、朝食を作り、食事を済ませ、艦娘に捕まっておっぱいを揉まされていた……。
「あの、愛宕？」
「あんっ♡もっと強くぅ♡」
「いや、あの……」
「そこぉ♡抓ってぇ♡」
愛宕が満足すると、愛宕から手紙を渡された。
「はい、お手紙♡」
「手紙……？あ、これは……」
ハンターズギルドからの手紙だった。
「ハンターズギルド？」
愛宕が可愛らしく首を傾げる。あざとい仕草だが、彼女はそれが嫌味にならない美貌の持ち主であった。
「そう、ハンターズギルド。モンスターを狩る『ハンター』の組合だよ」
「それって、前に言ってたハンター協会とは違うの？」
ハンター協会……、そっちは別口だな。
「ハンターズギルドはモンスターを狩る、『モンスターハンター』の組織だね。ハンター協会は、財宝ハンターや賞金首ハンターとか、色々いるよ」
「ハンターズギルドはモンスター狩りに特化したハンターで、ハンター協会は色々なハンターがいるってこと？」
「大体合ってる。付け加えるなら、ハンターズギルドは基本的に、金目的じゃなくて、自然環境との調和を第一に、モンスターの個体維持や生存域の確保の為にモンスターを狩る組織だね」
俺はそう言いながら、手紙の蜜蝋を剥がした。
「ふぅん……。提督は、ハンターズギルドにも、ハンター協会にも席があるの？」
「んー？そうだよー」
どっちのライセンスも持ってるぞー、っと。
内容は……、ふむ。

昔会った友人が、カムラの里のハンターになった、と。
一緒に狩りに行かないか？と。
そう言う話だった。
ふむふむ。
俺としては構わないんだが……。
会合とかあるし、どうしようか？
「……なんて書いてあるのかしら？」
俺の手元の手紙を覗き込む愛宕が呟いた。
「これは、まあ、友人に仕事を手伝って欲しいっていうお誘いだったよ」
「へえー、いってらっしゃい、提督！」
「え？行っていいの？」
「え？良いに決まってるじゃない！」
ふむ？
「だって、私達艦娘って、貴方の下僕なのよ？下僕がご主人様の行動にケチつける訳ないわよねえ？」
おっと？
愛宕の目からハイライトさんが……。
ハイライトさんの霊圧が、消えた……？
「提督の命令なら、どんな命令も聞くわ。靴を舐めたり、全裸で街を歩いたり、自分の手で自分のハラワタを引き摺り出せって言われても、ちゃんとやるわ。だって、私達は貴方が、提督が大好きだから！愛してるから！私達は、愛を証明するためならなんでもやるわよ！」
「お、あ、はい」
「提督がついて来いって言うなら、地獄の果てまでついていくわ。提督が待っていろって言うなら、十年でも百年でも千年でも待つわ。だから提督、好きにして良いのよ♡」
うん！
よし！
じゃあ、お言葉に甘えて、行ってこようかな！

そして、現在に至る訳ですね。
「がっ、あ」
爆風に煽られ、岩肌に叩きつけられる俺。
そのダメージで、腕がへし折れ、骨が飛び出てしまった。
また、弓もへし折れた。
相手は、爆発する紫の炎を身に纏う牙獣種のモンスター、マガイマガド。
かなりの強敵だ。
『グルル……』
全身の骨がぐちゃぐちゃになり、武器である弓もへし折れた俺を一瞥したマガイマガドは、最早俺は脅威たりえないと判断した。
俺から目を背けて、もう一人のハンター……、カムラの里のハンターの方へ、ギラついた視線を向けた。
「おおおっ！」
『ガアアアアアアッ!!!!』
ハンターは、太刀を素早く抜刀して真っ直ぐに突っ込んでくるマガイマガドの腕を斬りつけると同時に、横に跳ねた。
上手いな。
回避と同時に攻撃を繰り出す、モンスターハンターの狩りの技だ。
「おあああああっ!!!!」
そして、間髪入れずに振り返り、兜割り。
『ガアッ?!!』
怯んだところに……。
「とっておきだ！」
気刃斬りだ。
再び、ハンターの太刀に赤いオーラが宿る。
マガイマガドも、よく見れば満身創痍。
自慢のツノは砕け、剣のような尻尾も割れている。
あと少しで倒せそうなんだが……。
『ガアアアアアアッ!!!!』
怒りの声を上げて突進をするマガイマガド。

でもさ。
よく考えて欲しい。
「確実にトドメを刺してない敵から目を離しちゃいかんでしょ」
俺は、肉体を再生させて、アイテムボックスから取り出した新しい弓で、死角からマガイマガドの右眼を貫いた。
『ギ、ガアアアッ!!!?』
「今だ！やれーーーっ!!!」
「う、おおおおおおおおっ!!!!」

「「乾杯！」」
カムラの里に帰還した俺達は、カムラの里の名産である清酒を飲み干した。
「いやあ、死んだかと思ったぞ」
「あれくらいじゃ死なないさ」
「えっ、内臓出てたよな？」
「よくある」
そんな話をしながら、酒を飲み交わす。
「ここの団子美味いよなー、お持ち帰りしていい？」
「良いんじゃないか？」
「うちの子にもお土産を持って帰らんとかわいそうだしなあ」
「あー、なんだっけ？都会の方で大組織作ったんだっけ？」
「そうそう。まあ、この辺境の方にはあんまり関係ないと思うよ？」
「そりゃそうだ。この辺はモンスターだらけだしな」
そうなんだよね。
一匹見たら三十匹いると思え、と称される『ヒドラ』も、こっちの方には全然いない。
ハンターズギルドにスパイもいない。
だって、ハンターズギルドの上役って言えば、元G級ハンターか、竜人だからな。入り込みようがないんだよ。
「……ところが、そうでもないかもしれんぞ？」
おっと……。

「里長？」
　里長のフゲンさんだ。
「どういうことですか、里長さん？」
　俺が訊ねた。
「うむ、ハンターズギルドの方からの注意文が来た。これを見ろ……」
　文書の束を見せられる。
　……ふむ、なるほど。
　何らかの大規模な密猟組織がいる、と。
　ギルドナイトが追っているが、何人か返り討ちにされた、ともある。
「何か、心当たりはあるか、旅人殿？」
「ん……、まあ、犯人は流石に分からないが、組織は分かった」
「ふむ、聞いても？」
　俺は、文書の一部にある、『口から六本の触手が生えた赤い骸骨』のマークを前に出し、一言。
「『ヒドラ』だ」

５４０話　いつもの犯人

もう本当に勘弁してくれないかな？
いや、もちろん、俺もできる限りは協力するよ？
でも俺って、基本的には、個人レベルじゃクソザコナメクジも良いとこなんだよね。
クソザコナメクジは言い過ぎだとしても、うーん、まあそうだね、秀才レベル？
俺は、Ｇ級ハンターでありデビルサマナーであり狩人であり、魔法使いであり格闘家でありプロレスラーであるけれど、そのどれもが「秀才」止まりなんだよ。
俺が今まで出会ってきた、綺羅星のような天稟持つ者達と比べれば、どこまでいっても「そこそこできる」程度の人間に過ぎないんだよ。
俺がしつこく、自分のことをただの人間だと言うのはそれだからだよ。
俺は、俺よりも遥かに優れた天才達をこの目で見てきた。
『主人公』達の活躍を、すぐ側で眺めてきた傍観者なんだ。
例えば、こんな人達がいた。
東京受胎。本格的な世界の終わりのその時。
世界を元に戻すために戦い抜いた青年がいた。
俺も、その青年の仲魔となって、壊れた東京を共に旅した。
確かに彼は、最初のうちは人間に毛が生えた程度の力量しかなかった。
けれど、どんどん悪魔を倒して、力だけでなく心も成長し、最後は魔王すら倒して見せた。
それと比べれば、俺なんて単なる人間だ。
こんな話もある。
とある旅人の話だ。あ、俺じゃないぞ。
その旅人は、二千の技を持つと言う、優しい心を持った青年だ。
だが、なんの因果か、超古代文明の力を手にしてしまった。

彼は、良い意味で変わらなかったよ。
超古代から蘇りし怪人、グロンギ。
奴らは、『ゲーム』と称して殺人の数を競う競技をしていた。
奴らの凶行を目にしてなお、その優しい心を失わずに、怒りと悲しみに飲まれなかった旅人は、最後に、グロンギの王と一騎討ちをして……。
その後は、遠くへ、また旅に行ったよ。
俺は、あんなに優しい心は持っていない。
彼の善性と比べれば、俺なんて単なる人間だ。
色々な人と出会った。
みんな、みんな、とても良い人達だった。
とても、凄い人達だった。
それと比べれば、俺は、本当に単なる人間だ。

……話を戻そう。
ここは、辺境。
地球の果てだ。
ここには、様々なモンスターが跳梁跋扈し、神秘についても、魔界並みに高くなっている。
この辺境では、モンスターハンターと呼ばれる人々が、襲いくるモンスターと戦っている。
確かに、俺がいつもいる日本では、毎日のように侵略者やら何やらが宇宙から降りてきて、それをスーパーロボットが撃退する……、みたいな状態だが、この辺境も負けてはいない。
天候を自由に操る龍や、破壊光線を撒き散らす牙獣。
火を吹き空を飛ぶ飛竜に、電を纏う狼竜。
こんな奴らが、毎日毎日どったんばったん大騒ぎしてる訳だからね。
いやぶっちゃけ、対処法がある分、悪魔とかの方がマシなまである。
悪魔ってのはね、明確な弱点やら対処法があるもんなのよ。
例えば、龍王：ヴィーグルという悪魔がいる。

この悪魔は、魔力の源が、額にあるガーネットなんだ。
このガーネットを奪えば、簡単に無力化できる。
英霊とかもそうだよね。
クー・フーリンなんて有名でしょ？
ゲッシュを破らせれば簡単に無力化できてしまう。
けど……、この辺境にいるモンスターは、そういう明確な弱点が一切ないんだよね!!!
いや、もちろん、弱い属性とかはあるよ？けど、こうすれば一発で完封できますー、みたいなお手頃な手段がないのよ。
だから、物理で殴り殺すしかない。
……殴り殺すんだよ？
トラックよりでかい竜を。馬鹿でかい刃物で。
「こんな修羅の国にいられるか！俺は国に帰らせてもらう！」と言って、多くの人がここから逃げ出した。
それでもまだ残っているこの辺境の人々は……。
総じてぶっ飛んでますねえ!!!
そんな、まともな人なら近寄らないこの辺境の地に、何故、アメリカの悪の組織である『ヒドラ』が来ているんだ……？
俺は、脳内にある『瞳』を使って、世界を俯瞰した。
すると……。
「ぎょへええええ!!!?」
思わず変な声出ちゃった!!!
いや、これ……、来ているのは『ヒドラ』だけじゃない！
『アンブレラ社』と『ブラックゴースト残党』、『Ｄｒ．ヘル一味』『ショッカー』『ギャラクター』辺りが手を組んでるううう!!!?
しかも、もう、サンプルにこの辺のモンスターを捕らえたりデータ取りしたりして撤退済み！
ど、どーしよ、これ。
まあ、大丈夫大丈夫。
旅人は狼狽ない。
とりあえず、ハンターズギルド本部に調査結果を報告だ。

「……ってなことがあってさ。大変だったよ」
「なるほど、分かりました。各組織へ注意事項を伝達しますね」
帰宅した俺は、大淀に、ハンターズギルドに提出した報告資料の写しを渡す。
こういうのって、放置すると大抵ろくでもないことになるからね。俺は詳しいんだ。
あらかじめ、各組織に注意喚起しておくだけでもだいぶ違うよ？
前に、日本でバイオハザードが起きたときも、俺達がいち早く動いていたから、被害は最小限で抑えられたでしょ？それとおんなじだよ。
とは言え……、仮に、こっちの社会で辺境のモンスターを放たれたら、管轄はどこになるのかな？
怪獣と見ればスーパーロボット、モンスターと見れば対魔忍やデビルサマナーが対処するだろうけど……。
ま、とりあえず、知り合いの全組織に情報を送っておけばいいかな。

５４１話　事後処理と汁

「もしもし？特車二課さんですか？」
『はい、特車二課ですが』
「お世話になってます、黒井鎮守府です。送付した資料の方ですが……」
『ああ、はい、見ましたよ。あれは～……』
「はい、はい……、そうですね。はい、そこはそう言うことで～……」
……
……
……
「じゃあ、よろしく頼みますよ、後藤さん」
『はいはい、頼まれました』

「もしもし？公安九課さんですか？」
『はい、公安九課です』
「お世話になってます、黒井鎮守府です。資料の方ですが……」
『はい、届いております。この資料についてですが……、ここは～という解釈でよろしいでしょうか？』
「ああ、はい、そこは～ですね。ですが、～という点にも留意していただけますと幸いで～」
……
……
……
「はい、ではそのように。頼みましたよ、少佐」
『ええ、分かったわ。それじゃ』

「もしもし？Ｓ．Ｈ．Ｉ．Ｅ．Ｌ．Ｄ．さんですか？」
『はい、Ｓ．Ｈ．Ｉ．Ｅ．Ｌ．Ｄ．です』
「お世話になってます、黒井鎮守府です。先日お送りした資料の件ですが～」

『はい、はい、～ですね』
……
……
……
「では、よろしくお願いします、キャプテン」
『了解だ、こちらは任せて欲しい』

方々に連絡をした俺は、午後十時にやっと受話器を置いた。
なーんで残業とかしなきゃならないんですかね？
まあでも、これで余所の組織に丸投げできたからヨシ！
もう本当にね、なんでウチが地上の治安維持活動までやらにゃならんの？ってことよ。
「どぼちて？どぼちて？どぼちてなの？!!!ハイッ、大淀！」
「はい。黒井鎮守府の活動範囲及び活動量の増加につきましては、こちらの資料をご覧ください」
そう言って、資料をＡＲで見せてくる大淀。
「違う、そうじゃない（グラサン）」
「はい。提督の深謀遠慮を解そうなどとは、この矮小で非才な私めには思えませんが、察しますところ……、『黒井鎮守府がわざわざ面倒を見る必要性があるのか』ということに終始すると愚考いたします」
マジでやめて……。
ナザリックみたいになってるから。
俺はマジで、アインズ様より何にも考えてないんだってば。
過剰に持ち上げるのやめて……。
今俺が考えてるのなんて、『仕事増えたら艦娘は忙しくなって大変じゃないかなー？』ってことと、『久しぶりにカニパン食べたいからコンビニ行こうかなー？』くらいのもんだから……。
「い、いや、俺はほら、艦娘のみんなが忙しくなったら、こう、大変かなーって……」
「て、提督っ……！」
大淀は、まさに、感極まった！と言った様子で俺にキラキラした瞳

を向けた。
「なんと、なんとお優しい！私達艦娘にも、慈悲をお与えになられるのですね！ですが、安心なさってください！私達は、黒井鎮守府の利益の為に全力で労働に勤しみます！」
　うん。
「それは分かったけどさ、ちゃんと休んで欲しいんだよね。愛する人が辛い思いをする姿を俺に見せるの？」
「……はい、了解いたしました。ですが、セルフコントロールにつきましては万全ですよ！」
「前の提督の頃みたいになるのは嫌でしょ？俺も嫌だよ？」
「……はい？前の提督？」
　んん？
「失礼ながら……、前の提督とは？」
「前の提督は前の提督だよ。俺の前任の提督！覚えてないの？」
「あ、ああー……？はい、思い出しました。居ましたね、そんなのも」
　……大淀、これ多分、今までガチで忘れてたやつだぞこれ。
「言い訳をする事になるのですが、あの頃の記憶は曖昧でして……。蚊に刺されたくらいの些事を覚えていられないのと同じで、どうでも良い存在については忘れてしまいますねえ」
　大淀の中では、前提督は既に過去の人なんだなあ。
　まあ、それは良いや。
「忘れたんなら仕方ないね。話を戻すけど、俺は君達が大好きなんだよ。愛してる。だから、できるだけ辛い思いをして欲しくないんだ」
「おほぉっ♡」
「……大淀？」
「すみません、嬉しさのあまり絶頂しました」
　ええ……。
　何で会話中にイくんですかね……？
「と、とにかく、大切な君達をできるかぎり守りたい。だから、無理しないでほしいんだ」
「あおぉっ♡」

うわー、床が凄いことになってるぞー。
大淀のスカートをめくる。
「大淀」
「はい」
「何度も言ってるけどさ、穿いてくれる？」
ノーパンでイキ潮ドバドバはやめて……、やめて……。
「申し訳ありません！後で床を掃除しておきます！」
「いやもう……、オムツとかは？」
「オムツを穿きますと、心に油断が生まれ、提督に話しかけられた時点で嬉しょんしてしまいますが……？」
んー、何言ってんだコイツゥ？
「普段は大丈夫なの？」
「はい、普段は、提督に話しかけていただく度に甘イキする程度で済んでおります」
もうそれ、日常生活に支障が出ちゃってるじゃん……？
「いや……、大丈夫なの？」
「はい、大丈夫ですよ。艦娘ですから。それに……」
「それに？」
「提督に話しかけられるだけでイく艦娘って、割と多いと思うのですが」
ふむ……。

実験してみよう。
「鹿島ー」
「んっ♡はい？」
あ、はい。
「いや、理解した。ありがとう」
「そうですか？」
あとは……。
「春雨」
「あ、ン……♡はいっ！」

「愛宕」
「ふ、ぅん♡はあい？」
「明石」
「んっ♡はい？」
なるほど。
俺が思っているよりやべーですわね。
いや、俺も薄々は気付いてたんだけどね?!
でも、話しかけるだけで絶頂するとかもう、もう……。
「あー……、君達はさ、普段の生活に支障とか……？」
「いえ？特には……？パンツの消耗が早いくらいですかね？」
と鹿島。
「私も特には……。時間回帰の魔法で、パンツを清潔にしてますから」
と春雨。
「支障ってほどじゃないけれど、絶頂すると母乳が漏れるから、ブラの消耗も早いわねえ」
と愛宕。
「そりゃもうノーガード戦法ですよ。最初から穿かなければ汚れないんです」
と明石。
こまった、ちょっと勝てない……。

こんな時は、純真な艦娘に癒されるしかねえッ……!!!
「暁ちゃん……！」
「どうしたの、司令官？」
「暁ーっ！」
抱きつく。
「あんっ♡」
……ん？
「だ、駄目よ司令官！女の子にいきなり抱きついちゃ！」
いや、気のせいか……？
再度試すか。

「暁ーっ！」
再び抱きつく。
「んんっ♡」
あーあーあーあーあー！
こりゃもう駄目ですわ！
あーあーあー！
あーあーあーあーあー！

俺は、暁を抱えながら執務室に突撃した。
「この暁を作ったのは誰だあっ!!」
「はあ？提督だと思いますが……？」
と大淀。
「いやいやいや、ちょっと待ってよ。何か薬とか使ったんじゃないの？こんな幼気なロリを、触れただけで即イキするエロボディに改造とかいかんでしょ」
「いえその、提督ですよ？そこまで開発（意味深）なさったのは」
ごん、お前だったのか。
「マ？」
「はい。提督は、酔わせてから行為に及びますと、性技の限りを尽くしてくださいますからね！前後不覚になった提督の手にかかれば、一晩で生娘が娼婦になるレベルに開発（意味深）されますから！」
ふむ！
「つまり、酔わされて前後オンが不覚になった俺が、艦娘を開発（意味深）したって訳だね？」
「はい」
うーーーん!!
「ヨシ！全員無罪！以上！閉廷！解散ッ!!!!」
……しばらく、酒は控えようかな。

５４２話　マスコミからの風評被害

「最近、お馬さんのゲームが流行ってるね」
俺は、昼間の執務室で、エビスビールがなみなみ注がれた大ジョッキを傾ける。
「はい、そうらしいですね」
優しげな微笑みを浮かべ、俺の隣にいるのは、秘書艦たる大淀だ。
いつものように、下半身からなんかこう、何かモーターを内蔵したピンク色の楕円形のアレが震える音がしているが、いつものことなのでスルーする。
「そういや、俺も昔、馬の友人がいてさあ」
「馬の友人という言葉の響きが謎ですが……、まあ、いつものことですね」
「競馬かあ、久しぶりに行こうかなあ……。あいつにも会いたいし」
「はあ……」
「まあ、一昔前の馬だから、みんな知らないと思うけど、あいつは凄い奴だったよ」
「その馬のお名前は？」
「マキバオーって言うんだ」
さて、馬の話題はこれくらいにしておこうか。
この世界は基本的にお下劣なので、綺麗な……、なんかこう、キラキラした世界の住人である馬の娘さん達の話はできないのだ。
「んんっ♡……すみません、挿入していたディ○ドを落としてしまいました」
……ね？
こんな世界に馬の娘さん達は出せないのだ。
「……？どうしました、提督？ああ、これが気になりましたか？これは、勃起した提督の『モノ』と同じサイズと形でして、艦娘全員が予備と観賞用と使用用で三本ずつ所持しているディ○ドとなっておりまして……」
うーん！

聞きたくなかった新事実！
……生きるって凄いことだよな、毎日新しい発見があるんだもの。
例えば、女性部下の全員が自分のナニと同じ形のシリコン棒を一人三本所持していることとか、凄い発見だ。
ごめん、ちょっと泣いて良い？
全員っつった？
ねえ、全員っつった?!
もうね、ドスケベな子達は仕方ないと思えるようになってきたけどさあ。
「あの純心そうな駆逐艦から海防艦まで全員？マジです？」
「私は提督に対して一切の虚言を吐きませんよ？」
んー。
んんんんんんー。
「いや、だって……」
「海防艦とか凄いですよね！あの身体のどこに、提督の２０ｃｍ超えの《ＵＳＳＲ》が収まっているのやら……」
んー。
「いや、まあ、うん……」
「アレですね、ロリペドもののエロ同人誌のように、『ボコォ』ってなってますよね」
「はい……、そうですねえ……」
記憶にあるんだよなあ……。
両手脚を封じられて逆レされた記憶がさあ……。
「でも、良くないでしょ。お天道様に顔向けできないよ俺」
「そんな！択捉ちゃんも、対馬ちゃんも、みんな、みんな幸せそうなアヘ顔失禁アクメをキメてるじゃないですか！」
何言ってんの????
「あんなに幸せそうな海防艦のみんなを……、いえ。提督が望むならば……」
う、うん。
その、ね？

「ですが、我慢させた場合、早晩気が狂うと思いますが……？」
「なんで？（三代目並感）」
「私達、艦娘の肉体は、細胞レベルで提督に屈服しているので、イくには提督の手でしか……」
ハハッ、マジで言ってるそれ？
泣いて良い？
「分かりました……、抱きます……」
「ありがとうございます！」

「ところで、お耳に入れたい話があるのですが……」
んー？
これ以上俺の心を折る情報が出てくるのかな？
もうＬＰＯなんだけど。
「いえ、こちらの雑誌をご覧下さい」
×
×
×
《黒井鎮守府の知られざる悪行！》
未成年と思しき少女（夕立）との性的な接触（キス）する提督氏の写真
警察官Ｇ氏にインタビュー！～『黒井鎮守府は日本の軍隊に相応しくない』～
ＧＧＧ職員のＥ氏『彼は組織の長としての行動がとれない』
×
×
×
……なるほど。
「まあ、いつものだね」
だから何？って感じ。
「消しますか？」
と笑顔で聞いてくる大淀。
とても怖い。
「良いって、わざわざやらなくても。前に、出版社の本社を更地にした

時は、桃さんに腰が抜けるほど怒られたんだからね？」
「では、経済的に攻撃を……」
「良いの！大体にして、これは……」
ふむ、文面の感じからして……。
確認を取ってみるか。
電話をピポパ。
「もしもし？後藤さん？」
『おー、旅人君？どしたの？』
「うちに関するインタビュー受けませんでした？」
『あー……、アレね。言っておくけどね、露骨な発言の切り取りだよ？』
「ですよねえ。実際、なんて言ったんです？」
『黒井鎮守府は日本の軍隊に相応しくない。だがしかし、軍隊の枠組みに無理矢理押し込める方が、かえって国益を損ねるだろう！なんてね』
なるほどね。
「大丈夫です、ありがとうございました」
『うおっ！……誰かな？』
電話先で何かあったみたいだな。ええと……？
これは多分、そうか。
なるほど。
『黒井鎮守府所属、川内型一番艦、川内でーす！』
『はあ、川内さんね。どうしてここに？』
『もし、うちの看板に傷を付けようとする輩だった場合は、殺しちゃおうと思いまして』
『……ふむ、よく分かった。旅人くーん』
おおっと……、いけませんねえ。
「いや本当に、俺は指示してませんからね？」
『おれもね、警察官なの。目の前に暗殺者がいたら見逃せないよね？』
「あー……、でも多分、絶対大人しく捕まらないと思うんで……。とりあえず、所轄の警察署に連絡願えますか？」

『暗殺者に狙われていたけど、逃げられましたってことにしろ、と？』
「こう言っちゃなんですが、証拠は何一つありませんし……。現状、彼女の罪状は不法侵入しかないんですね。あと、うちの名誉の為にも言っておきますが、社会正義の敵対者しか殺してませんよ」
『あのね、暗殺という手段に頼るのがそもそも間違いなの。日本は法治国家だからね？』
「分かってますよ。うちの看板に傷を付けようとする奴は大抵、何らかの裏組織と繋がっているんで……、ってことです」
『……あ、川内さん、いなくなってるわ。はぁ～、とにかく、気をつけてくれる？良いね？』
「はい、申し訳ないです」
うんうん、なるほど。
「……な？」
俺は、電話を切って大淀に視線を向けた。
「よく分かりました、マスコミが悪いんですね？」
大淀は、眼鏡をクイッと上げる。
で、次は、国防組織ＧＧＧのＥ氏ね。
携帯ピポパ。
「もしもし、猿頭寺さん？」
『はい……、ああ、旅人さんか。何です？』
「うちに関するインタビューとか受けた？」
『ああ、はい、受けましたよ』
「俺のことを、組織の長としての行動がとれない、とか？」
『確かに、組織の長としては失格とは言いましたけど……。旅人さんの凄いところはそこじゃなくて、あらゆる能力が人間の限界値に達している万能性だと言いましたよ』
なるほどね。
『オマケに最高にカッコ良くって、夜の方も最高なんだぜ？』
あ、天龍。
『だ、誰だっ!!!?』
「あー、すいませんすいません！うちの子です！」

『そんな、まさか……！ＧＧＧの警備を掻い潜ってきたのか?!』
『ん?ああ、いや、ここの警備はモノスゲーよ。アンタが作ったのか?』
『メインプログラムは、そうだが……』
『そうか、アンタも天才ってヤツなんだな。まあでも、致死性のトラップは一個もないからな、艦娘には効かねえよ』
「すいません猿頭寺さん。なんか壊れてたりしたら全面的に弁償するんで……」
『あ、は、はい。彼女は何故ここに……?』
「うちの風評を立てようって奴らは大抵、裏組織との繋がりがあるんで、もしそうだった場合即座に対処するようになってるんですよ」
『ああ、なるほど……。ですが、本当にやめてくださいね！警備システムが……、ああ、なるほど、ここをこう突破してくるか。とすると……』
ああ、機械弄り始めちゃったぞ。
「ごゆるりと……」
電話を切る。
「……な?」
俺は再び大淀を見る。
「充分に分かりました。出版社をマークしておきます」
「ん、そうして。なるべく人は殺さないように！」
「はい」
そう言って大淀は、即座に行動を開始した。

「あ、大淀、忘れ物だよ」
俺は、大淀にディ○ドを渡そうとする。こんなもん執務室に残されても困るんだよな。
「あ、ありがとうございます。では、『ココ』に挿入れてください」
んんんんー?
「さあ、どうぞ！本物でも良いですよ?!」
んんんんんんんー?

なーんで昼間っから君の変態プレイに付き合わなきゃならないんですかね????

まあ、良いけどさあ……。

「おほおおおっ♡♡♡」

５４３話　労働ベイ

皆さんこんにちは！
私はガンビア・ベイ！
軽空母の艦娘です！
今日は、先輩のアイオワさんと一緒に、海外にお仕事に行くんです！

どこに行くかはまだ聞いてないんですけど……、海外のお仕事ならヨーロッパとかが良いですね！
美味しい食事を楽しんで、歴史的な建造物を見て……、ちょっと観光してから帰りましょう！
さて、パスポートは……。
「ベイ、何やってるの？」
「え？海外なんですよね？パスポートが……」
「要らないわよそんなもの」
「えっと……？」
「今回のｍｉｓｓｉｏｎは、アフガンの紛争地帯への介入よ。非人道的なテロ組織を一人残らず壊滅させるの」
「うーーーん？」
うーーーーーん????

皆さんこんにちは！
ガンビア・ベイです！
はいそしてここはアフガンの紛争地帯。
無煙火薬のはずが、夥しいほどの発砲の量と回数により、周囲には薄らと白い煙が漂っています。硝煙ですね、匂いで分かります。
政府軍と反政府軍の怒声が聞こえます。お互い、信じる神の名を叫んでいるようです。
ガトリング砲の弾丸が、私達が隠れている土嚢の一部を抉り、跳ねていきました。
狙いの逸れたタイタンの火砲が、住宅地のコンクリート壁をぶち抜

いて貫通。それと同時に、着弾の衝撃で建物は崩壊。
榴弾砲の直撃を食らった政府軍の、バラバラになった肉片が目の前に落ちてくる。これは右腕だろうか？銀の結婚指輪がはめられている男性の手。
妻を残して亡くなったのか？それとも離婚していたのか？色々考えられますが、悲劇的なことには違いがない。
「流石に警戒されてるわねえ」
口笛を吹き、ニヤリと笑みを深めるアイオワさん。
「何も面白くないですよーーーっ!!!」
「Ｃａｌｍ　ｄａｗｎ！クールに行きましょう？大した敵じゃないわ」
そう言ってアイオワさんは、土嚢の壁から身を乗り出した。
……そして、銃弾が山ほど叩きつけられると同時くらいのタイミングで頭を引っ込める。
「軍用レイバー十二体、トーン級タイタン八体、ＭＴ八体、月光四体、ロブコ社製ロボット多数……。ごちゃ混ぜの混成軍ね」
「うえぇ……、テロリストなのに、結構な戦力……」
私が嫌そうな顔をすると、アイオワさんはまたもや笑う。
「よく言うわ、貴女が前に出ればすぐに終わりじゃないの」
まあ、それはそうですけど……。
「でも、レイバー、タイタン、ＭＴはちょっと厳しいですよ！あんなに大きいと、『効き目』が悪いから……」
「良いからほら、行きなさい！」
そう言って、アイオワさんは、自分のレールガンに電力をチャージし始めて……。
レイバー二体をまとめて貫いた！
「三十秒後に突撃してね？じゃあ、行ってくるわ！」
「は、はいぃっ！」
アイオワさんは、わざと目立って、私と別方向へ駆け抜けて行った。
うわー……、凄いなあ。
流石に、大型のロボット兵器の弾丸を食らえば、私達艦娘でも相当

に痛いのに。
飛んでくる弾丸を蹴ったり殴ったりして弾きながら、時速８０ｋｍくらいのスピードで駆け抜けるアイオワさんは、やっぱり、特殊な能力を持つ艤装頼みの私とは違うんだなと分からせられる。
でもＡｄｍｉｒａｌは、布で２０ｍくらいあるロボット兵器を破壊する人達は割と結構いるって言ってたし……。
マスターアジア？がどうとか？アジアってすごい、改めてそう思った。
っと、三十秒。
じゃあ、突撃！
「Ｆｉｒｅ ｉｎ ｔｈｅ ｈｏｌｅ！」
私は、腰のグレネードを敵陣のど真ん中にぶん投げた。
『な、何だ?!』
『細菌兵器か?!』
えへ、当たり！
私の艤装には、金属を高速で酸化、腐食させる『メタリックアーキア』って言う細菌を使ってあるんです。
これを使えば、金属でできた兵器を簡単に無力化できる！
……だから、紛争地帯への介入みたいな仕事をたくさん回されるんだけど。
でも、どれもこれもＡｄｍｉｒａｌの為と思えば苦じゃない。
Ａｄｍｉｒａｌが喜んでくれるなら、私達はどんな無様なことでもするし、どんな悪いことでもする。
Ａｄｍｉｒａｌの笑顔の為なら、私達艦娘は、命を捨てることすら厭わない。
世界で唯一、自分を愛してくれる男性に殉じる。
世界で一番、自分を愛用してくれる主人に殉じる。
女として、兵器として、両方の意味で私は忠誠を誓っているんです。
こんなに嬉しいことはありません。
今回のテロ組織も、潰せばＡｄｍｉｒａｌの利益になります。
うん……、そう考えると、やる気がどんどん湧いてくる！

お仕事頑張ろう！
そんなことを考えているうちに、周辺の兵器は全て朽ち果てました。
後は、逃げようとするテロリストを逮捕して終わりですね。
「何捕まえてきてるの？ｍｉｓｓｉｏｎは『殲滅』なのよ？」
「ああ、ちょっとお話が……」
「話？」
はい、尋問をしようと思いまして。
私は、縛られて転がるテロリストに訊ねます。
『これだけの武器、どこから調達したんですか？』
『誰が喋るか！』
『えっと……、聞かれてないことを答えられると困るんですけど……。その、他にも喋れる人はいるみたいなので、貴方は死んで良いですよ』
『あ……？ぷギッ』
私は、余計なことを答えたテロリストの頭を踏み潰す。
『えっと、もう一度質問しますね！ちゃんと答えれば、出来るだけ綺麗に殺してあげますから、安心してください！』

黒井鎮守府に帰還しました。
「えーと、テロリストは、それぞれ別々の組織から援助を受けていた、と？」
私の書いたレポートに目を通したＡｄｍｉｒａｌがそう言った。
実際、今回のテロ組織は、シャフトエンタープライズ、ロブコ社、キサラギ重工など、様々な組織が手を貸していた……。
恐らくは、新兵器のテストだと思われるんですけど……。
「ふむ……、なるほど」
「何か分かりましたか？」
「全然わからん（ジャガー）！」
作画がみんみと化したＡｄｍｉｒａｌはそう言って。
「けど、なーんかね」

元の作画に戻り、一言。
「何か……？何かって、なんですか？」
「めんどくさいことになりそうな予感、ってことよ」
うーん、大変なこと、かあ。
あっ、そうだ！
「Ａｄｍｉｒａｌ！それなら、私が癒してあげちゃいます！」
「あぁ^～、良いっすねぇ！何やってくれるのかな？」
「それはもちろん！日本の奥ゆかしくも伝統的な……」
「うんうん！」
「エロドージン・ＨＥＮＴＡＩセックスです！公園のトイレで肉便器プレイしましょう！」
「うーーーーん????」
なんだかんだ言って付き合ってくれるＡｄｍｉｒａｌって、実は聖人なんじゃないですかね？

５４４話　殺した程度じゃ死なない

さて、今日も仕事だ。
執務室で皆の報告を聞きながらティータイムと洒落込もうか。
ロイヤルミルクティーを飲む。
「んっん」
おおっと？
これ、母乳だな。
……母乳だな。
これは……、母乳だな。
母乳でミルクティーを？
なるほど……、深いな。
ロイヤルミルクティーだから、母乳で茶葉を煮出して淹れた訳になる。
つまり、これを淹れた艦娘は、給湯室でおっぱいを露出して、おっぱいを搾り鍋に集め、それを加熱した……。
「この性癖、深い！ボボボボッ!!!」
「因みにこちら、私の母乳となっております」
そう言って俺に美しい笑顔を向けてくるのは、黒井鎮守府の大淫婦こと、鹿島であった。
「なるほど、勘弁してくだち」
「鹿島の母乳、お嫌いですか？」
ちょっぴりしゅんとする鹿島。その様子は、いかにも乙女チックで可愛らしい。
「いやぁ、好きとか嫌いとかじゃなくてね。倫理観こわるる～」
「今更では？」
「それを言ったらおしまいなんだよね」
一握りの人間性すら捨てたら、怪物になっちゃうよ。
マジレスはやめよう？嘘は嘘であると見抜けない人はネットを使うのが難しいとはかつて言われていたけれど、嘘を嘘として楽しむのもまた粋や酔狂という文化なのではないだろうか？

「もう良いじゃないですか。早く私の人権を剥奪して変態行為を強要してくださいよ」
うーん……。
鹿島はいつもこんな感じだな。
なんかこう……、色々と大丈夫なのだろうか？
なんか……、こう……、戦えるのかな、これで？
大丈夫？
「鹿島、ちょっとスパーしない？」
「はい？良いですけど……？」
よく考えたら最近セックスしかしてないからな。
鹿島もそうだろうし、腕が錆びついてないか見ておこう。

俺は素手、鹿島は蛇腹剣。
お互いに構えて……、駆ける。
「行きます！」
「来い！」
ふむ、訓練となると真面目にやるみたいだな。
単なるセックスモンスターではない、と。
鹿島の腕で振るわれる蛇腹剣は、鞭のようにしなり加速する。
先端の速度は音速を遥かに超えて、重戦車を切断するくらいは訳ない。
俺も胴体を両断されるのだが……。
『『エリスの癒し』』
崩れ落ちそうになる下半身を上半身で支えてほい回復。
なまじ鋭い切断攻撃は、断面が簡単にくっつかるから楽よね。
思ったけど今の俺って完全にVガンダムの動きだよね。
コアブロックシステムかな？ブーツアタックしちゃう？
「流石です！では、これはどうでしょう?!」
鹿島は、更に攻撃を仕掛けてくる。
「むっ」
蛇腹剣の、蛇腹になっている部分を活かした、『削ぎ落とす』攻撃だ。

ピューラーにかけた野菜のように、皮、肉、骨とどんどん削がれる。
あいたたた、可愛い顔してえっぐいことやるなあ。
でも、それだけ真面目に訓練してるのは偉いよ。
「なるほどね」
まあそれなら、再生するついでに別の組織に置き換えようか。
俺は、削ぎ落とされてぐちゃぐちゃになった右腕を触手に変える。
「『エーブリエタースの先触れ』」
それを鹿島に向けるが……。
「無駄です」
蛇腹剣が有機的に蠢き、回転すると、俺の触手は輪切りにされた。
おお、こわいこわい。
……切断された触手を見てると、たこ焼きが食べたくなるな。
今晩はたこ焼きを焼こう。
海外艦も意外とタコとか嫌がらないのよね。
まあ、あの子らは年中旅行してるからね、食文化に寛容なんでしょうよ。
さてさて、ではこれは？
「『ジオダイン』」
極大の電撃を放つ。
「凄いですね！」
が、普通に避けられた。
ありゃま。
電気だから、他の魔法よりかなり出が早いんだけどねえ。
鹿島は確か、魔力は見えてないはずだし……、攻撃の意を読み取って、勘で避けたみたいだ。
凄いねえ、上手いもんだ。
因みに、神通だと普通に電撃そのものを『切り払う』からね。
それと比べれば避けるだけの鹿島はまだ可愛い方だよ。
そもそも、鹿島の凄いところはそこじゃなくて……。
「まだ行きますよ！」
戦いそのものが上手いって点なんだよね。

俺は距離を詰めるが、そうすると鹿島は身を引く。
俺が距離をとって魔法を使おうとすると、鹿島は距離を詰めてくる。
足運び、呼吸の使い方、身のこなし……。
鹿島は小器用で、そう言ったところが非常に上手い。
自分の得意な距離で、相手の苦手な距離で。
そういう基礎の積み重ねが鹿島の力だ。
鹿島は確かに、他の艦娘と比べると、強力な奥の手や圧倒的な一芸がある訳じゃないんだけど、その分、基礎は誰よりも抑えてるから。
そして、練習艦らしく、その身体の使い方を教えるのが上手いので、新入りの艦娘の教師役になっているそうだね。
いや、本当に素晴らしい。
最近はセックスばっかりで弱くなってるんじゃないかなんて思ったけど、前より上手くなってるし。
じゃあ最後に、これはどうかな？
俺は、腹を割いて、臓器を触媒にしてありったけの触手を召喚する。
「きゃあ！もー、提督！そんな装甲悪鬼みたいな戦法やめてくださいよー！」
そう言って触手を切り払い、捌き切れない触手を躱して、最小限の動作で損害を抑えた鹿島。
いやぁ、やるねえ。
こうなると、俺はマジで打つ手がないぞ！
「降参だよ、腕は落ちてないみたいだね、鹿島」
「はい！ありがとうございました！」

ふん、ふん、ふーん。
なるほどね、なるほどね。
理解した。
この腕の上がりようを見ると、毎日ちゃんと訓練してるね。
鹿島は、天才型ではなく、努力型。
積み上げて強くなるタイプだ。

それがこの動きな訳だから、かなり良くなってる。
いや、前までが駄目だったとかじゃないよ？元から強いんだけど、更に強くなったねーってこと。
とても偉いね。
「いいこだねー」
「ありがとうございます！」
俺は、胴体が破壊されたので、首だけになっている。
首だけになると、青少年健全育成法とかなんかそう言う感じのアレに配慮して、ゆっくりになるようになっている。
血塗れの生首を運ぶ鹿島なんていなかったんだよ!!!
「……あむ。ちゅうぅ～」
「やめてね！なかみすわないでね！」
鹿島にゆっくりと化した俺がちょっぴり齧られてしまった！
なんてことを……！
「甘～い！美味しいです！」
「まあそりゃ、なかみはカスタードとクリームだからね」
「……因みに、全部食べられた場合どうなるんですか？」
「セーブポイントでふっかつするよ？」
「……なるほど！」
そりゃ、セーブポイントで復活するに決まってるでしょ？
何言ってるの？常識だよ？
タイプライターとか、篝火とか、電話ボックスとか……。
その辺にセーブポイントいっぱいあるじゃん？
もしもアレなら復活アイテム使えば良いだけだし……。

５４５話　映画を観に行ったオタク

「や連カ（やはり連邦軍はカス）」
「いややっぱり御禿様はバリバリ学生運動最盛期の頃を生きてた訳じゃない？荒れている日本の様子を見て、テロじゃどんなに崇高な理念を掲げていたとしても世界は変えられないってことを表現したかったんだと思うよ（ガノタ早口）」
俺は、ガノタ特有の早口を見せる望月に暖かい目を向ける。
「おっ、そうだな」
お察しの通り、我々は先程、映画館で『閃光のハサウェイ』を観てきた。
来ているメンツは、ゴリッゴリのガノタである望月と、オタク衆こと初雪、漣、秋雲、明石、夕張。
彼女らは相当に気合が入ったオタクなので、閃ハサと聞いたら黙っていられない。
実際、公開が決定した時はこんな感じだった。
『真実（マジ）かよ司令官クン！』
『閃ハサが……!!!』
『幻想（ユメ）じゃないよね?!』
『すぐに帰国する……！』
……うん、またなんか別なのに影響を受けているが、気にしない方がいいだろう。いつものことだ。

俺達は、近場のカフェに入店する。
「何名様ですか？」
「七人です」
「おタバコの方は……？」
「吸いませんけど、喫煙席でも大丈夫です」
「はい、ではこちらへ」
店員さんの案内でボックス席に通された俺達は、そこで感想を言い合う。

「注文どうする？」
「あ、私はホットケーキ食べたいです。あとロイヤルミルクティー」
「私は……、メロンソーダで」
「おやおやおや、明石さんったら減量中ですか？艦娘なのに？」
「はー？違いますぅー！メロンソーダはアイスが上に乗ってるので実質スイーツも兼ねてるんですぅー！」
「私はコーヒーとミルクレープ」
「私は……、オレンジジュースと抹茶パフェで」
「あれっ？秋雲ってコーヒー好きじゃなかった？」
「漣……、あれはね、追い詰められた時に飲むものなんだよ」
「極道入稿はやめなってあれほど……」
「私はホットココアとワッフルアンドバニラアイスで」
「ん、コーラとチーズケーキで」
「……食べ合わせ悪くない？」
「そう？別にどうでも良くない？」
全員が頼んだところで……。
「じゃあ俺はこの、テラ盛りギガンティックパフェと、コーヒーをお願いします」
と俺も注文。
さて……。
「やっぱり、見所はモビルスーツの戦闘ですね！」
まず最初にそう言い放ったのは、ロボットアニメ過激派の明石だった。
明石が好きなのはスーパーロボットなのだが、ガンダムももちろん嗜んでいる。
ロボットアニメ好きにも色々な派閥があるのでオタクはめんどくさいな（暴言）!!
例えばさ、ミリオタっているでしょ？
アレにも色んな種類があるんだよね。
現代の米軍の陸軍の兵器が好きな人もいれば、第二次世界大戦期の日本の海軍について俺ならもっと上手くやれたなどと妄想するのが

好きな人もいる……、みたいな。
ロボットアニメも、スーパー派とリアル派で二分されているし、ガンダムしか見ないって人もいる。
難しいのでその辺を突っ込むと爆発するので、素人は気を付けよう。オタクの精神はポリマーリンゲル液のように繊細なのだ。油断するとボン！だ。
しかも最近は、ロボットアニメの行く末を真に憂う者を自称する石動雷十太が湧いているそうだし、世の中って大変ね。
えー、それで。
明石はその中でも、『ロボットの戦闘シーン』に注目するタイプなのである。
更に言えば、『奇怪なデザインのデカブツ』が大好きだ。
「ペーネロペー！やはり素晴らしい……！提督！」
「駄目だ！」
敵の潜水艦を発見！
「まだ何も言ってないじゃないですかーっ!!!」
「いや、言おうとしてることは分かるけど、工場のライン的にペーネロペーを配備するのは無理です」
最近はエアロゲイターとかいう訳の分からん奴らがガンガン来てるからなあ。
各国に機動兵器を売ってるんだけど、もうラインがいっぱいなのよね。
そこでわざわざ、ワンオフ機を作るとかちょっと……。
「ちぇっ、まあ、それは良いですよーだ。後でガンプラを改造して心を慰めますから！それより、あのモビルスーツの戦闘！独特の音響ももちろん良かったんですけど、あのモビルスーツ戦に巻き込まれて被害を受ける街の様子が、怪獣映画を彷彿とさせて最高でした！」
なるほど。
「Ｆ９１もそんな感じじゃなかった？」
望月が言った。
「だってよ……、アーサーなんだぜ？」

漣が言った。
「今やったら『黒人を殺すとは何事だ！』みたいなことになりそう」
「いやほら……、ガンダムは宇宙移民後の世界なんだから、人種とか混血が進んでもう関係ないでしょ」
「私達の頃は欧米列強の白人がデカい顔してたのに、今は黒人がデカい顔するんだもんねえ、世の中って分かんないね」
「そもそも、私達は人間じゃないから、人種とか言われてもあんまりピンと来ないよね」
うーん。
「会話内容が危なくなってきたので、本題に戻してください」
俺が提言する。
「あらヤダ私ったらオホホ」
「オホホホホ」
ンモー。
その辺の人種差別やらポリコレやらに自ら突っかかっていくのは、キャバクラで野球とか政治とかの喧嘩しやすい話題を出すくらいよくないことだよ？
「まあでも実際、メカデザインは良かったですね。ペーネロペーの怪人的な相貌は素敵でした」
と夕張。
「完全同意だなあ」
皆が頷く。
「んー……、でもやっぱり、ガンダムと言えば見るべきは政治劇的な……、思想のぶつかり合いの部分なんじゃない？」
と秋雲。
秋雲は、同人誌作成が趣味であるが故に、ストーリー面が気になるそうだ。
「マフティーが自ら掲げる思想と、それが本当に正しいのか迷う葛藤！連邦軍の腐敗！ギギとの関係！ストーリー的な見所は目白押しだよ！」
「つまり？」

初雪が訊ねる。
「つまり、我々黒井鎮守府も、マフティーにも連邦軍にも兵器を渡してがっぽり稼ぐアナハイムみたいな組織になろうよ！と……」
「大丈夫？カルト宗教とか攻めてこない？」
初雪が言った。
「サンダーボルトはパラレルワールドの話だから……（震え声）」
「司令官……、君の意見を聞こう」
ズァッ！
望月が俺に訊ねる。
「うーん、俺はさあ……、基本的には、頑張ってる人は幸せになってもらいたいと思うんだよ」
「ふむふむ」
「特に、今まで頑張ってきた人が、本人とは関係のないところで酷いことになるのとか、もう見てらんないな。かわいそうで」
「……つまり？」
「息子を処刑したことにされて美談を作られたブライトさんかわいそう」
「「「「「それな」」」」」

５４６話　梅雨バージョン加古可愛すぎんか？

「梅雨だなあ」
「はい？私のおつゆはビシャビシャですが？」
「うん、俺のしっとりした哀愁の気持ち返して???」
「私のお股もしっとりしていますよ」
うーん！
いやあ、黒井鎮守府は平常運転です。
さて、現在は六月後半。
梅雨ももう終わるかな？
ってところで台風がー、と言った感じ。
俺は執務室で、大淀と台風に備えての物資確保などの指揮をしていた。
だが、それもすぐに終わり……。
「ヨシ！じゃあ、あとは今日の昼食と、もしもの時のための保存食作りをしようか」
「はい！」

俺のお料理シーンとか見ても誰も得しないからなあ。
料理描写とかを見たいなら、異世界転移した料理が得意な高校生が恋人と一緒に屋台を引いて異世界生活してる感じの世界とか多分あるだろうから、そっちを見ればいいんじゃないかな。
さてさて、色々と料理を作ったぞ。
ペミカンとか！
……ペミカンはバターで作るのがコツだよ。インディアンが作っていた獣脂を使う方式だとあんまり美味しくないからね。
たっぷりのバターでキノコと鶏肉と玉ねぎ辺りを炒めたものを冷やして完成だ。油分が多いから、鶏肉はささみとかでいいんじゃないかな。これを、シチューにして食べると美味しいよ。最近じゃ登山の時のお供にされてるみたいだね。
まあこれは、余れば他所にお裾分けすれば良いだけだし、作り過ぎ

るくらいでちょうどいい。
にしても、だいぶ頑張ったからなあ。
料理スキルをフル稼働して、スタミナが削れちゃったぜ。
しばらく休憩しよう。
休憩と言ったらやっぱりこれ！
ワイルドターキー（ウイスキー）だよ。
え？
いやほら、燃料みたいなもんでしょ？
後は……、あー……、ほら、そうだよ！コロナ的な？
殺菌だよ殺菌！喉の殺菌！
アルコール消毒だよ！
……まあ、この世界は、普段からコロナなんかよりよっぽどヤバいウィルスがその辺にあるので、コロナ如きのよわよわウィルスは一瞬で撃滅されましたが。
そうなんだよ、最近はＥ型特異菌ってのが……。
……。
……すまない、イーサン。
……助けられなかった。
ＢＳＡＡはなんだかきな臭いし……、どうなってるんだ最近は……。
とは言え、俺もあまり外部の組織に手出しはできないし……。
とりあえず、ＢＳＡＡを問いただすために友人が色々と行動してるみたいなんで、それに手を貸すことにしたんだが……。
死ぬなよ、クリス……！

さて、現状では俺にできることはない。
そして、俺には俺の仕事がある。
いやもう本当に働きたくないけど、最近は俺が働かないと世界がヤバいと言うことに気が付いた。
表社会のシェアは１０％も握れてないんだけど、裏社会のシェアは３０％以上握ってるからねうちは。

特にうちが強いのは量産型のロボットだね。
他にも、自社製品の魔導具の類に魔導書の写本、銃火器なんかも売ってるよ。
常に何かしらの侵略者やら何やらに狙われているこの地球では、軍事産業は非常に儲かるんだよね。
どの国も、よほど国土が小さい国でもない限り、戦闘ロボットが配備されるのが普通なんだ。
まあそんな訳で、国防の要たるロボット兵器の開発及び販売をする黒井鎮守府は、各国から注目されているってこと。
俺がサボって業務が滞ると、割とマジで地球がヤバい。
確かに、ロボット兵器は他にも存在する。
安価な作業用ロボットとして使える『レイバー』に、安価な軍用ロボットの『アームスレイブ』、超高価で環境を汚染する粒子を撒き散らす超兵器『ＮＥＸＴ　ＡＣ』……。
そこに、黒井鎮守府は、そこそこに安価で中々に高性能、かつ環境を汚染しない上に、整備が楽でパイロットが死ににくく、更に学習型コンピュータを搭載した、『対侵略者用』の戦闘ロボットを量産して、この業界のトップシェアになったのだ。
各国の主力兵器に選ばれるほどに出来がいいうちのロボット兵器は、多くの人に愛用されている。
……とはいえ、中国あたりは、うちから買った量産型アシュセイヴァーを分解して解析して作った劣化版を「我が国固有の新兵器」とか言って配備してるらしいけどね。
まあ別にそれはどうでもいいんだけど、とにかくヤベーくらい売れてますってこと。
それだけじゃなくって魔導具の類も凄いね。
魔導具って普通、裏社会の職人が小規模に生産する感じだったんだけど、うちは工業製品が如く大量に生産してるから……。
大量生産によりコストを下げてるから、品質面は『そこそこ』止まりだが、値段は格安だった。
もちろん、プロ用のハイエンドモデルもあるにはある。

まあ何だ、黒井鎮守府は、いつのまにか世界になくてはならない大企業になっていた訳だ。
はい、仕事終わり！
あとは鎮守府の見回りを……、んん？
見慣れないロングヘアの美女が……、って。
「加古？」
「あ、提督！」
ほ、ほわあ……?!
ロングヘア加古だと?!
普段の活発なイメージとは打って変わって、清楚系美女になってる!!!
ワシは女の子が髪型変えてイメチェンするところに弱いんじゃよ。
女の子の色んな姿が見たい欲求、あるでしょ？
「どう？似合うかな……？」
不安げな瞳でそう言った加古を……。
「サイコー！カワイー！毎秒結婚してくれ!!!」
俺は全力で抱きしめた。
「きゃっ♡もー！提督～！」
加古も抱き返してくる。
内面は活発な女の子である加古のままだ。
外見が清楚系なのに、内面がやんちゃ系……。
素晴らしい……。
俺には理解（わかる）……、美少女として鍛え抜かれたオシャレ力……。
「恋人として手合わせ（意味深）願いたい」
「もー♡しょーがないなあ♡」
こーんなんもうイチャイチャックスしかないよなあ?!!!

５４７話　火薬庫は黒井鎮守府以外にもあるんだよ

アイドル事務所、３４６プロダクション。
俺の古巣の一つであり、数多くのアイドルが在籍する事務所だが、ここは、表社会はもちろん、裏社会でも有名なんだよ。
「何故か分かるかい？」
俺は、青葉にそう訊ねた。
「はい、戦力が大きいからですよね？」
流石は青葉だ。
取材先について、あらかじめ調べておいたみたいだな。
だが、その答えじゃ満点はあげられないな。
「それもある。けれど、一番凄いのはそこじゃない」
「つまり？」
「うちと同じく、層の厚さが武器なんだよ」

そう、この３４６プロダクション。
所属するアイドルは、一癖も二癖もある子ばかりの、戦うアイドル事務所なのだ！
え？ほら……、戦う交通安全がアリなんだし、戦うアイドル事務所もアリでしょ。
もちろん、積極的に戦う訳ではないが、有事の際には一流並みの技能を持った戦闘アイドルがたくさん現れる。
『蒼の力』なる観測不能の謎エネルギーを操る、デビルサマナーである、天使の転生者である……、などなど、強大な力を持ったアイドルが山ほどいるのだ。
葛葉の血縁者や、表向きには『断絶したことになっている』ロマノフ朝の正統後継者、メシア教枢機卿の娘など、ある種黒井鎮守府よりもヤバい存在がゴロゴロいる。
扱いによっては、世界のパワーバランスとか政治とかが壊れちゃうような厄い血の子がね、たくさんいてね。
うーん！火薬庫みたーい！

そこに取材？正気か青葉。
「気でもくるったのかーっ！（目玉親父並感）」
「私は正気です！」

まあじゃあ、一応やる？
インタビュー。
どうなっても知らないよ？
良いのね？
本当に良いのね?!
そんな訳で３４６プロにやってきた我々。
おっと、アーニャだ。
「久しぶり、アーニャ」
「あ……、久しぶり、ですね」
「えー、こちら、アイドルのアナスタシアさん」
俺は、アーニャを青葉に紹介する。
「苗字の方は……？」
青葉がそう訊ねる。
「……ロマノヴァ」
俺がそう答える。
「うーん……、厄ネタ!!!」
「だから言ったんだよ俺は!!!」
ねっ、聞かない方が良かったでしょ!!!?
「アー……、Ｔｙ　ｂ　ｐｏｒｙａｄｋｅ？大丈夫、ですか？」
アイドルらしいキラキラの微笑みを見せるアーニャ。
「大丈夫ですよ？私の臣下は、そう多くはいませんし……。ロシアを取り戻そうとは思っていません」
「イヤーッ！それって、独自の戦力を持ってるってことじゃないですかぁーーーっ!!!」
青葉が悲鳴を上げる。
「因みに、アーニャ本人はレベル９０相当のデビルサマナーだ」
俺が耳打ちする。

「準葛葉級ーーーッ!!!」
青葉が叫ぶ。
実際、話を聞いたところによると、旧ロマノフ家を信仰しているのはほんの数個師団ですよーとか言ってたが、割とマジで洒落になってない。
王としての血もヤバい。
つまりはまあ、ここはそんな感じだ。

メシア教の最大派閥たる『救済派』の長を務める枢機卿の一人娘にして、大天使サンダルフォンの転生者であり、教皇から聖女の認定を受けたクラリス。
ガイア教屈指の大派閥である神道派のボスの一人娘にして、天津神アマテラスの転生者であり、ガイア教の巫女に認定されている依田芳乃。
うちの雪風並みに運命の女神に愛された存在、鷹富士茄子。
聖人ノアの転生者にして、預言者の力を持つ、高峯のあ。
伏見宮の血筋の遊佐こずえ。
カワイイ幸子。
とにかく、ヤバい存在が揃っている。
政治的にって意味だけじゃなく、血に価値があり過ぎる。
伏見宮の血筋とか、何らかの霊的な儀式をやる時の素材として考えれば、これ以上ないほどに上等な素材なんだよなあ。
生贄にでもすれば、神話の主神クラスの本体を召喚できるレベルだ。
もちろん、そんなことになれば地球が壊れる。
そんな厄ネタの塊が、この３４６プロって訳。
ついでに言えば、事件は既に何度も起きていて、過激派のメシア教徒がクラリスを誘拐して『偽史神・ヤルダバオト』を召喚しかけたり、過激派のガイア教徒がよしのんを攫って『魔王・マーラ』を召喚しかけたりもした。
その度に俺は残業して、馬鹿な奴らを蹴散らしながら救出任務に参

加していたぞ。
まあうん……、その過程で数え切れないほどパトってきたけど、最近はもうカロンの爺さんに「また来たのかこいつ……」みたいな顔されるようになってきたなあ。
流石に仕事増やすのも申し訳ないから、出来るだけ殺さないでと艦娘には伝えてあるが、どうだか。
そうじゃなくても、特に何もなくても月一くらいは死んでるからね。
今度はカロン爺さんに手土産でも持って行こうか。
「ど、どうしましょう……？こんなの、記事にできませんよ……！」
「うーん、まあ、公然の秘密って感じだから、そこまで気にしなくても平気だよ」
「本当ですか……？」
「まあ、記事にしたら狙われる可能性も高いけどね！」
「ほーら！やっぱりー!!!」
ぶっちゃけ、結構ヤバい感じだよね。
公然の秘密をあえて口に出すとか、無粋とかそういう話じゃなくって、敵が増えそう。
いやそりゃ、業務改善のために声を上げよう！とかならまだしも、隠すべき厄ネタを掘り返して、面白半分で吹聴するとかはね。
沈黙は金だゾ。
そんな訳で、青葉も記事化を諦めて、個人的なインタビューのみで済ませた。
青葉はその辺り、アホではないので、手を出すべきでないことにまで首を突っ込んだりはしない。
なんか最近は、不法侵入したけど記者だからセーフ論みたいなのが流行ってるらしいが……。
青葉が欲しいのは、黒井鎮守府の役に立つ情報であり、ゴシップではないのだ。

５４８話　雑魚相手には強キャラムーブできるマン

俺の名は……、まあ、いいだろう。
本当の名前は捨てたし、仕事用の名前ならいくつも持っている。
この業界にいる奴なんかみんなそうだ。
名前を捨てない暗殺者なんて、アサシン教団の正義の味方気取りのアホ共くらいのもんだ。
だが、俺の通り名である『ジグソー』は、裏社会じゃちょいと有名だぜ？
そんな俺は、とある喫茶店の地下室に、他の暗殺者と共に集められた。
俺達暗殺者は、定期的に顔も名前も変えるから、ここにいる奴らに見覚えはない。
だが……。
「くっくっくっ……、楽しめそうな仕事ならいいんだがなァ……？」
あの金色の腕輪をしている奴は、古代インカ文明の秘宝であるガガの腕輪の劣化コピー品……。
通り名を『ペイン』と名乗る男だ。
「ふん、くだらん……」
あっちの眼帯の男は、恐らくは魔眼使い……。
となると、『ジャッカル』だろう。
「早くしてくれないかな……、あと一時間二十四分後には仲魔に餌をやる約束なのに……」
あのＣＯＭＰを腕に巻いている奴はデビルサマナーだろう。
多分、『百々目鬼』だろうな。
そんなこんなで十人程の暗殺者が揃った。
『もしもし？聞こえてるかな？』
そして、プロジェクターにメシア教を意味する十字架が映る。
つまりメシア教からの依頼……、と見えるが真実は闇の中だ。もしかしたら、メシア教のふりをした全く別の組織が依頼主かもしれない。

ただ、俺達もある程度裏を取ってある。
相手はメシア教と見てまず間違いない。
『今回の依頼だが……』
話を聞いたところ……、黒井鎮守府提督、新台真央の暗殺の依頼だった。
確か、相当にしぶといとか……。
そして、強力な力を持つ神霊に守られていて、暗殺は非常に困難とも……。
なるほどな、この人数を揃えた理由は理解できた。
だが、数撃ちゃ当たる鉄砲玉扱いってのは気に食わないがね。

ターゲットは、普段は難攻不落の黒井鎮守府の中にいる。
なので、ターゲットが一人で外出している時が狙い目だな。
何日か、黒井鎮守府の周辺で待っていると、ノコノコとターゲットが外に出た。
ターゲットは、そこら辺の人間とよく話す。
それは丁度、古いマフィア映画のボスのように、武力と組織力で街の住人の悩みを解決していた。
多分、後で『友人としてのお願い』とか言って、便宜を図ってもらおうって寸法だろう。
今時は流行らないやり口だ。
さて、そんなターゲットが……、一人で裏路地に入った！
今だ！行くぞ！
俺がターゲットの後ろから襲い掛かろうとしたその瞬間……。
「ビガラパ『ムセギジャジャ』バ？」
「は……？」
ターゲットは、こちらを振り向いてそう言った。
何語だ、これは……？
俺は一応、五カ国後くらいは話せるが、こんな言語は知らない。
「『ムセギジャジャ』バ、ドビギデギス」
「な、何を……？！」

「あっ、なるほど、君は人間か。その『魔石ゲブロン』はどこで拾ったのかな？」
笑う。
笑っている。
子供に諭すように、道を尋ねるかのような気安さで。
「おや、ゲブロンだけじゃないね。『悪魔人間化』の施術もしているのか。得物は腰の鎖に吊るしたアクセサリーを、モーフィングパワーで槍に変えるってところかな？凄いね、それなら『ゴ集団』並みにゲブロンの力を使いこなしてる」
「な、なにを、何を言ってるんだ、お前は?!」
意味不明ながらも、俺の全てを見透かすように考察してきた。
『魔石ゲブロン』ってのが何なのかはよく分からないが、俺は警察官を買収して、警察が保管しているマジックアイテムらしき魔石を裏ルートで手に入れて、それを自分に埋め込んだんだ。
『モーフィングパワー』や『ゴ集団』とか意味の分からない単語があったが、俺が腰に吊るしているアクセサリーを、魔石の力で変形させて武器にするのは、俺の秘中の秘だ。何故それを知っている?!
それだけじゃない、『悪魔人間』であることまで見抜かれた?!
「ん？ああ、その顔だと、ゲブロンがなんだか分かってないみたいだねえ。大方、警察を買収して裏ルートで購入したってところかな？」
何故だ、何故わかる?!
どこまで知っているんだ、この男は?!
「う、あ、うおおおおおっ!!!」
堪らずに、隣の『ペイン』がターゲットに襲いかかった。
「へえ、ガガの腕輪のレプリカかな？でも君、実物は見たことないでしょ。再現性が低過ぎるもん。多分、ガガの腕輪の似姿を作って意味を抽出して、無理矢理神秘を引き出しているんだと思うけどどう？ああ、あと、君は対魔忍の系譜だね？足運びで分かるよ。多分……」
「死ねぇ!!!」
「ああほら、やっぱり。『ふうま』の家系でしょその動き。えーと、多分、『二車』の分家筋でしょ？それは知ってる」

半笑いで、ペインの放つ凄まじい速さの突きを避けるターゲット。
「こ、これでどうだ！」
『ジャッカル』が、魔眼を発動させる。
「ははあ、『炎焼の魔眼』か。久しぶりに見たなあそれ」
すると、ターゲットに火がつき、炎に包まれる。
だが、ターゲットは……、炎に包まれながらも平然と喋り続けた。
「良いねえ、レアな魔眼持ちは。ん？でも君、『オーグマン』だよね？魔眼はオーグマンとしての特殊能力とは別なのかな？でも、それは知ってる」
「や、やれっ！」
『百々目鬼』が仲魔を召喚する。
「あー、『リオレイア』の『ドラゴンゾンビ』か。なるほどね、知ってるよ」
だが、ターゲットは、百々目鬼の仲魔に施餓鬼米を叩きつけて怯ませ、攻撃をするりと避ける。
何だ、何なんだ?!
さっきから、「知ってる」だと?!
「そっちの君のそれは『クラヴマガ』だね。こっちは『鹿島新當流』で、これは……、『八極拳』か。知ってるよ、対処できる」
こ、こいつ……?!!
今まで……、今まで一体、『何を』『どれだけ』見てきたんだ?!!!
俺の持てる手札を全て切っても、どれもが全て『知ってる』の一言で簡単に対処された！
十人……、十人だぞ?!
一流とまでは言わないが、そこそこのランクの暗殺者十人に囲まれて、何故平然としている?!
「今手を引くなら見逃すけど、まだやる？」
「て、てめぇ！舐めるんじゃねえ！」
「そうか、じゃあ……」
「Ｗａｓｓｈｏｉ！」
ニ、ニンジャ?!!!

「ドーモ、暗殺者＝サン。川内デス」
「最後の忠告だ、死にたくなければ消えろ！」
「じょ、冗談じゃねえ！」「やってられっか！」
何人か逃げたが、まごついていた奴は……。
「敵対者殺すべし！慈悲はない！イヤーッ!!!」
「「「グワーッ!!!」」」
一瞬で殺された。
ひ、ひいっ！
やべえ、に、逃げなきゃ!!!

もう、もう二度と関わらねえ！
暗殺者なんてやめだ！
貯金でパン屋でもやろう……。

５４９話　女の子の手作りだと基本的に倍美味い

朝の食堂にて。
艦娘に飯を食わせつつ、ひと段落したので俺も朝飯を喰らう。
強くなりたくば喰らえ！と地上最強の人は言ってたけど、食っても食っても強くなれない俺はなんなんだろう？とちょっぴり自問しつつも、軽い朝飯を食べた。
朝から食べ過ぎるのもよくないし、米三升とパン三キロと味噌汁五リットルと納豆一キロ、卵１００個にシャケの切り身八十枚、バター一キロ、コーヒー三リットル、漬物一キロ、サラダ一キロ、ヨーグルト一キロ、果物二キロと少なめだ。
いやあ、男の癖に少食だなあ。
おっと、そういうことを言うとジェンダーバイアスがどうこうみたいなことを言う人にボコボコにされてしまう。
男は～、女は～みたいな主語がデカいやつは敵を作りやすいから気を付けようね。
ならもういっそ主語を天文学的にデカくしようか。
全生命は少食だな！とか。
……いや、そんなことはない。
世の中の大抵の生命体は飢えている。
飢えていないって幸せだ。
感謝しなきゃなあ。
それはさておき……、うーん。
「最近は外食もあんまりしてないし、他人の作った料理を食べたいなあ。特に女の子の手作りだと最高……、ん？」
おっと……？
先程まで喧騒に包まれていた食堂が、痛いほどの静寂に満ちていらっしゃる。
サイレス使ったのは誰？
誰……？
俺！俺！俺！俺！Ｏｌｅ！Ｏｌｅ！

あの歌、途中で歌詞書いた奴殺されて別の奴が成り変わったってマジですか？
「提督？」
おや、大和。
別の世界線では虐められてそうな大和じゃないか。
この世界線の大和は俺がたくさん可愛がるので安心してください。
「何かな？」
「女の手料理が食べたいと仰られましたが、真ですか？」
「本当だよ」
「では、今日のお昼は大和にお任せください！」
おー、大和のランチ。
素晴らしい。
俺が良いよと言おうとした瞬間、横からニュッと武蔵が生える。
「まあ待て、私もだな」
背後にはいつの間にか時雨がいて、俺の耳に一言置いていく。
「僕も何か作るよ、期待しててね」
足柄がこちらを見て。
「……カツで良いわね？」
比叡は何かをする前に霧島に逮捕されていた。
「ひ、ひぇ～?!な、何するんですか～?!」
「司令、ご安心ください。阻止しておきますので」
それを皮切りに、全艦娘が料理を作る宣言をして、メニューを考え始めた。
うーん、なんだかすごいことになっちゃったぞ。

厨房に出禁になっている比叡と磯風とイギリス艦のおっぱいを揉みながら、午前の仕事をこなしてさあ昼だ、となると……。
デン！
デン!!
そしてデン!!!

もー、王侯貴族もかくやという、ものすっごい量の食事が用意されていた。
「私からはこれです！大和すき焼き！」
すき焼き！
流石大和だ……。
大盛り（一升）の麦飯と共に、鍋いっぱいのすき焼きを喰らう！
甘めの味付けと、肉の脂の甘さが混じり合う。
薄切り肉を一口、口に入れると、醤油の香りがふわっと漂う。
これを逃してはならぬと確信した俺は、香りを喉奥に追い込むように麦飯をかき込む。
「うーん！美味い！」
「ありがとうございます！」
あ、因みに、変なもんは入ってないぞ。
バレンタインは例外的になんでもありのヴァーリトゥードだけど、普段はこうして美味しいものを作ってくれるぞ。
そもそも、大和は愛が重いだけで判断力は正常だからね。
そして次は武蔵！
「私からはこれだ！」
おお、おにぎり！
そういや、戦艦武蔵には自動でおにぎり作る機械があったとかなんだとか。
「因みに、戦艦だった頃の私のおにぎりは、梅干しとおかかだったのだが、この時代でそれは芸がないと思ってな。少し工夫してみたぞ」
「へえ、どれどれ……？」
っておお！
これは……、肉巻きおにぎりにチーズが入っている!!!
「おほー」
こんなんもう絶対に美味いじゃん!!!
それに、大葉も巻いてあって脂っこさを軽減していて、ほのかに香る程度に混ぜられたごま油の香りがたまらない！
こんなん反則だ！

時雨はやっぱり……。
「はい、佐世保バーガーだよ」
「わーい」
バーガーだ。
大きなパンが三段と、パティ、ベーコン、レタスにトマト、輪切りの玉ねぎ、ピクルス少しとチーズに目玉焼き！
このボリューム！これがたまんないんだよなあ!!!
「あー……、むっ！んむー！」
うっま！
これは……、ベーコンだ、ベーコンが特に美味いぞ！
市販のものじゃなくって、自家製のジューシィなベーコン！パティも独特なスパイスが効いていて最高だ！
時雨は頭がおかしいように見えるが、この手の料理とかそういうのはめちゃくちゃ上手いぞ。
だって、料理なんてとどのつまり製薬と一緒だからね。それは白露型の得意分野だ。
まあ確かに、ビーカーとかでソースを煮込んだりしているところを見せられるとちょいともによるけど、その分味は完璧だから……。
はい足柄。
「カツよ！」
「うんまあ、知ってた」
「でも、今回は……、牛カツのカツサンドよ!!!」
「えっマジで？」
カツ丼以外も作れたんだ……。
「……カツ丼以外も作れるわよ？作らないだけで」
「アッハイ。どれどれ……？さくっ！おおー！」
レアな牛カツを軽くトーストしたパンで挟んだものなんだけど、それが良い！それが美味い！
ザクッとパンを齧り、その内側のザクッとした衣を齧り、最後に到達した牛肉の部分は、とっても柔らか！
噛み締めれば、牛肉の肉汁とマスタードの辛味がザクザクのパンと

衣と絡み合って……！

こんな調子で、艦娘の美味い料理を食べさせられた。
結局、料理会みたいになって、みんなで料理を食べさせ合う和気藹々とした日になったぞ。
まあ、艦娘は、艦娘以外に浮気しない限り大抵のことは許してくれるからね。
浮気しても最終的に許してくれるからね。
女の子の嫉妬なんて可愛いもんよ。
ちょっと刃傷沙汰になるくらいだし、大したことじゃない。
これからも好き放題やろうっと！

５５０話　ぼのたんはとてもかわいいなあ

素晴らしい朝。
夏真っ盛りなこの日、特に予定もないから遊びに行こうかな？
おっと、その前に、艦娘達に水分補給を怠らないように注意喚起せねば。
うちの事務員になっている音成提督……、守子ちゃんは、俺と同じ人間だし、夏の暑さに負けないように色々調整してあげないと。
とりあえず、水分補給の注意喚起のため、俺は朝の食堂の前に『水分補給を心がけよう！』という立て看板を置いて、その隣で連邦に反省を促すダンスを踊っておく。
「悲鳴を上げるな……、陰茎が苛立つ」
「「「「「分かりました！」」」」」
「えっ」

～一筋の光へ～

さあて、朝から陰茎がスッキリしてしまったぞ。
溌剌とした気持ちで一日を過ごせそうだ。
だが、例によって仕事はないので、駆逐艦でも弄って遊ぼうかな。
とりあえず、その辺にいたぼのたんをキャプチャーした。
『提督！ぼのたんをキャプチャーしたんですね？』
と、俺が寝ている間に埋め込まれた骨伝導式の無線機に明石ギントからの連絡が入った。
「あのさぁ……」
人の人体を勝手に改造するのは……、やめようね！
『ぼのたんは、黒井鎮守府に生息する駆逐艦で、年齢は大体十四歳くらいと言われています』
はあ、そうですか。
え？十四歳なの？
『あ、肉体年齢の推定がってことです。因みに私は二十歳くらいです

よ。大体、戦艦空母重巡辺りが二十代前後、軽巡が十代後半、駆逐艦潜水艦が十代半ばから前半くらい、海防艦が一桁くらいです』

はえーすっごい。

『ぼのたんの頭の鈴は、音で自分の居場所を伝えて、あえてハンデを与えることによって戦いを楽しんでいるんですよ』

「大嘘やめて????」

更木剣八やめろ。

『強気っ子のツンデレですけど、最近はほぼ百%デレですし、キレられながらのプレイはカムショット率が高いと評判です！』

「カムショット率????」

カムフラ率ではなく????

『まあ実際めちゃくちゃ可愛いし、提督に構ってもらうと馬鹿みたいに嬉しそうにしてるんで見てて飽きないですねえ！』

なるほどなあ。

「で、味は？」

『食べるんですか？今朝、あんなに食べたのに』

「もちろんだ」

『ロリなので締まりが良いですよ。情熱を秘めた肉体……』

「ジョナサン流の強がりやめろ」

『まあ、コナをかければすぐに寄ってきますよ』

なるほど。

じゃあ早速ダル絡みしていきますか！

「ぼーのーたん！」

「はぁ？」

おっと……？

おキレになられていらっしゃられる？

いきなりか？いきなりですか？

「あんたねぇ、何回言ったら分かるの？」

「え？何が？」

「はぁ……、ほんと最悪……」

なんか怒られちゃったぞ。

「許して仮面！」
「謝って欲しいとか言ってないんだけど」
　ウス……。
「で、では何を？」
「はぁ……。だからさあ、私に会った時は、思いっきり抱きしめながら一分間ベロチューしてから会話に入りなさいって言ってるでしょ!!!?」
　バン！と机を叩くぼのたん。
　うーーーん????
「初耳ですが……？」
　いやマジで。
「じゃあ今言ったのよ！早くギュッと抱きしめながら頭を撫でてチューしなさいよ!!!グズ！のろま!!!」
「アッハイ……」
　何ですかこれ？マジでデレ百%……、いやこれデレなのか？
　エロでは？
　ま、まあ、言われた通りにしとこう。
「ちゅ……、れろ……」
「んちゅ♡しゅきぃ……♡」
　ヨシ！
「満足です？」
「ちゅきぃ♡だいちゅきぃ♡……ふん、これくらいにしといてあげるわ」
　これは何です？
　ツンデレなんですかこれ？
「で？何の用よ？」
　え？
「用事はないけど、ぼのたんが可愛いから声かけただけだよ？」
「はぁ？何よそれ！」
　うお！怒られるか?!
「可愛いと思ったなら声をかけるとか言ってないで押し倒しなさいよ！」

んー????
「い、いやほら、ここは休憩室で、みんなもいるしさぁ……」
「そんなの関係ないわよね？私のことを無理やり押さえつけて襲いなさいって言ってんのよ！分かる？」
「ワカラナイ……」
「だーかーらー！あんたの煮えたぎる獣欲を私の小さな身体に叩きつけて、私のことをめちゃくちゃにぶっ壊しなさいって言ってんの!!!」
「ワカラナイ……」
「はぁー……。分からない訳ないでしょ？あんたのそのバッキバキのオトコの部分で、私の身体を蹂躙しろって言ってるだけよ？そんな難しいこと言ってないでしょ?!」
「ワカラナイ……」
「私のことなんて何一つ考えずに、ガツガツ腰振って私のことぶっ壊して、艦娘辞めさせて肉便器にしろって言ってるだけ！簡単でしょ?!」
明石ギント、これは何や？
なんか、現実改変系の催眠でも食らってるこれ？
『いいえ、これがデフォです』
マ？
『いやあ、曙ちゃんは提督のことが好き過ぎて、つい口調が荒くなっちゃうだけですよ』
頭ん中真っピンクなのは？
『艦娘のデフォです』
そっすか……。
「ちょっと！明石さんと話してないで、私のことをちゃんと見なさいよ！」
「アッハイ」
「っ……、もう！見られてると興奮してくるわね……！ほら！早く脱がせなさい！」
「分かった、分かった。でも、ぼのたんとはベッドの上でしたいな」
「何でよ？みんなに見えるところで私達の愛を証明しようとは思わな

いわけ?!」
「ぼのたんのことが大切だからさ、二人きりでしょう?」
「……ふんっ!生意気ね!まあ、でも、ありがと」

ぼのたんは、かわいいなあ。

５５１話　アライアンス

ふーむ。
「おかしいね」
俺は、手元の資料を読んでそう言った。
「はい、おかしいですね」
秘書艦の大淀もそう言った。
ここは、黒井鎮守府の執務室。
俺は、大淀と一緒に報告書の検分をやっていたのだが、おかしい点を見つけて二人で首を傾げていたのだった。
おかしい点とは？
「うちの技術がパクられてるね」
「はい。ですが、それは仕方のないことです。核心部は漏れていませんが……、黒井鎮守府も末端は一般人ですからね。どうやっても技術は漏れます」
「厄介な組織が協力し合っている」
「はい。あの手この手でバラバラのルートを使っていますが、資金や戦力を一か所に集め、黒井鎮守府に対抗しようとしている節があります」
「そして、『深海棲艦の技術』を使っている」
「はい。間違いなく」
うーん？
最近、様々な組織同士の連携が密となっているのが気になっていたんだが……。
その、組織同士の連携の輪に、深海棲艦が一枚噛んでいる？
うーん！
「めんっっっどくさっ!!!!!」
話を整理しよう。
深海棲艦の祖は、地球の抑止力であることは既に研究や本人達への聞き込み調査から分かっている。

海を汚す愚かな人類に対する地球の防衛反応、いわばワクチンのようなもの。
ワクワクチンチンだ。
だが、薬も度が過ぎれば毒になる。
深海棲艦は、世界に漂う怨念を吸い過ぎて、海を守るための防衛者ではなく、海を汚す人類を抹殺するための殺戮者となった……。
そう、殺戮者だ。
殺戮者が、何故地上の組織と手を組む？
人類抹殺が目的の深海棲艦が、何故、人類の組織と手を組むんだ？
まあ、理屈は分かる。
現在、ほぼ一強の大組織である黒井鎮守府を、様々な小組織が連合になって叩き潰す、というのは合理的だ。
しかし、深海棲艦は合理的な存在ではないはずだ。
……いや、それは俺達の思い込みに過ぎなかったってことか。
「深海棲艦の指導者は、俺達が思うよりも遥かに理性的な存在だった……、ってコト?!」
「ワアッ……！」
おｋ、把握。
でもなあ、即座に対策は取れないしなあ。
国同士の争いなら、戦時国際法とかあるんだろうけど、我々のような裏社会やら他種生命との戦いをする人々は、法の加護の元にないからなあ。
「大淀」
「はい」
「以降、この深海棲艦と協力している組織群を暫定的に『アライアンス』と呼称。全職員に周知してくれ」
「分かりました、直ちに」
よし、と。
じゃあ俺は、現場の生の話を聞いてこようかな。
生っすかサンデーだ。

「はい」
「はいであります」
　あきつ丸を呼んだ。
「あきつ丸、聞きたいことがある」
「なんなりと、であります」
「まず、最近の任務は？」
「直近で二日前に、フランスの違法武器工場の襲撃でありましたな。その前は、四日前のインドでの『ヒドラ』の基地を襲撃したであります。七日前には大空魔竜戦隊の大文字博士の護衛を二日……」
　ふむふむ。
「偉いねー、良い子だねー」
　よしよし。
「えへへ……」
　照れ照れ丸！
「で？その際に深海棲艦の技術が使われた襲撃者が出たらしいけど、どうなの？」
「はい、その通りであります。敵戦力の中に、深海棲艦の陸上侵攻用ユニットがいたであります」
　ふむ。
「陸上侵攻ユニットってのはこれだね？」
　俺は、あきつ丸に資料を見せる。
　深海棲艦の陸上侵攻ユニット……。
　深海棲艦には、陸上要塞のように、陸と結びつくことで強化される存在がいくつかいる。
　人類から陸地を奪って要塞化する訳だが、その時に兵士として送り込まれるのがこの侵攻ユニットだ。
　黒い球状に大きな口がついており、そこから灰色の触手が何本か生えている、という見た目。
　雑魚キャラのような見た目だが、少なくとも戦車砲の直撃も数発は耐えて、鋼鉄をねじ曲げて、人とまとめてなんでも食べてしまう化け物だ。

こいつらによって、人も建物もなんでも食べられて平地にされた陸地に、深海棲艦の母港が建設される。
いや、母港というのは正確じゃない。
深海棲艦の本当の母港は海の底にあるんだから。
橋頭堡というべきだな。
深海棲艦の橋頭堡となった陸地は、その範囲も海の一部であると深海棲艦側が『事象の書き換え』を行うらしく、陸上にイ級などの海上用ユニットが現れるようになる。
そして、そこを起点にじわじわと陸地を蝕んでいく。
故に、陸上侵攻ユニットは即座に潰さなきゃならないんだが……。
「これが、敵軍に混ざってたのね？」
「はいであります。また、それだけでなく、形状が違ったり、武装していたりする陸上侵攻ユニットもいたのであります」
なるほどね……。
つまり、深海棲艦の陸上侵攻が本格的に進んでいて、更に、陸上の侵略をやりやすいようにユニットの強化が行われている、と。
まだ強化については試行錯誤の段階であるということはあきつ丸の話から読み取れたが……。
「私見になりますが、よろしいでありますか？」
おっと？
「うん、聞かせてくれるかな？」
「恐らくは、連合組織……、『アライアンス』でありましたかな？その連中が、海に情報を沈めて、情報提供をしてるように思えるであります」
……ふーん？
「続けて？」
「はっ。まず、旧タイプの兵器のフレームに、深海棲艦の陸上侵攻用ユニットが寄生したかのような姿の存在がいくつか見受けられました」
「例えば？」
「ロボット兵器の導入により陳腐化した、戦車や戦闘機などでありますな」

なるほどね。
「決めつけるのは危険でありますが、軍事産業系の組織の仕業かと……」
「うん、分かった。後で大淀にも報告書を上げといてくれる？あきつ丸の私見も入れて欲しい」
「はっ！了解であります！」
うーん、厄介なことになったなあ。

５５２話　天龍ちゃんと龍田さん

前回までのあらすじ！
俺は田舎に行き、八尺様に尺八様になってもらっていた！
艦娘に捕まった。
「突然の死!!!」
「殺しませんよ？」
ニコニコ笑顔の龍田が言った。
嘘だゾ、殺す顔だゾ。
「じゃあ痛くするでしょ!!!」
「痛み、感じるんですか？」
「長男だから我慢できる程度には」
まあほら、俺も全集中すれば波紋の呼吸を使えるし、ほぼ鬼滅と言っても差し支えない。
正義超人並に子供人気もあるし。
「私達が提督を分解するのは、他所に行って欲しくない時だけですよ～？」
ほむ。
「その心は？」
「別に謎かけではないんですけど～？そのままです。提督が無理をしたり、おいたをした時に、それ以上行動できないように『処置』しているだけですよ～」
ええ……。
「それじゃあ、帰りましょう？」
「いや、八尺様に尺八様で……」
「帰りましょう？私がしてあげますよ？」
う、うーん……。
迷うな……。
「天龍ちゃんとダブルで」
「はい、帰ります」
ダブルの誘惑には勝てんかった……！

ダブルなんだぜ?!
だってよ、アーサーなんだぜ?!
いや、ダブルなら二人で一人の仮面ライダー……、ちょっと待て、話題がブレてる。
姉妹丼。
そう、姉妹丼の話だ。
属性が違う姉妹にサンドイッチされるとか最高でしょ。
天龍ちゃんのキラキラ正のオーラと、龍田の闇オーラ。
正反対のパワーを一つに集めるとメドローアになるって名台詞を知らないのかよ?
ちなみにダークパワーっぽいのはナイトが持つと光と闇が両方そなわり最強に見える暗黒が持つと逆に頭がおかしくなって死ぬ。
まあ俺も四捨五入すればナイトみたいなもんなので姉妹丼するとパワーアップする。
具体的には……、いや駄目ですわよ、あからさまにエロい話はできない。
良い加減怒られそうな気がするし、気をつけねば。
「でもぶっちゃけ、中学生くらいからエロ本とか読んでるし、エロサイトも見てるよね?」
「はい?何の話ですか?」
「いやほら、未成年は~みたいなこと言うけど、中高生の頃が一番そういうの気になる時期じゃん。過度に禁止すると性癖曲がるから、適度にエロ本とか持ってた方が良いよ」
「……?」

「……そ、その、どうしたんだ?」
「いや、挟まりたくて」
「嫌なことでもあったのか?」
「特には」
天龍ちゃんの乳に挟まってみた。
さて、俺はペルソナ主人公みたいなもんなので、仲間とコミュをと

る。明らかにアルカナの数以上の人間と絆を育んでいるのはご愛敬。
「天龍ちゃん、最近は何してたのかな？」
「んーと、夏だからやっぱり、サーフィンだな！」
ほほーう。
そういや、うちの天龍はアウトドアが好きだったな。
身体を動かすのが好きなんだそうだ。
けど、殺し合いはあまり好きじゃないみたいだね。
あきつ丸辺りは、身体を動かすのが好きで、特に殺し合いは大好きだ。
オリジナル笑顔で刀振り回すからねあの子。
でも、天龍ちゃんは平和主義なんだ。いや、某ゲームの「へいわしゅぎ」ではなくて。星が取れたので問題ない訳じゃなくって。
怒らせると軽く暴力を振るってくるだけで、基本的には社交的で良い子だよ。
どれくらい社交的かっていうと、艦娘以外にも友人がいるくらい社交的。
これ、実はめっちゃ凄いんですよ。
基本的に、艦娘って外の世界に興味ないんだよね。
艦娘は、仲間の艦娘と、提督である俺がいれば、他は何もいらないみたいなスタンスでいる子が多い。
俺としては、もっと人と関わって欲しいんだけどねえ。
世界には色んな人がいる訳で、確かにどうしようも無いクズも多いけど、まともな人も同じくらいいるんだから、もっと人との出会いを楽しんで欲しいよ。
「でな、最近は千葉の方のサーフスポットでなー！」
「そうかそうか」
んもー、可愛いなあ！
少年のような笑顔で楽しそうに話すんだもの。
エロ目線ももちろんあるのは否定しないけど、ただ単純に可愛いんだよなあ!!!
うちの妹は早々に自立した妹っぽくない妹だけど、天龍は後輩系と

いうか、やんちゃ妹系というか。
子供っぽい言動だけど、身体は大人っていうギャップよ。
「だからさ、今度提督も一緒に行こうぜ！な？」
「行きますよ～、行く行く」
「あら、それなら、私にも付き合ってくださいね～？」
おや、龍田。
龍田は良いなあ。
大人っぽいセクシーなお姉さんだぞ。
いや、俺の方が歳上だけど、お姉さんはお姉さんなんだよ。
歳上になっても森島先輩は森島先輩って呼び続けるでしょ？
ブライトさんより歳上になったけどブライトさんって呼ぶでしょ？心はまだシャングリラのクソガキでしょみんな？
ワシもじゃ！ワシもじゃ、みんな！
そんな訳で、おじさんの俺も、龍田はお姉さんの認識なのだ。
まあ、酔っぱらったおっさんが、飲み屋のバイトの女の子を「お姉ちゃん、生一つ！」って呼び止める感覚だな！
「えいっ」
おほー。
めっちゃおっぱい押し付けてくるやん。
天龍ちゃんは無意識でベタベタくっついてくるし、龍田は意識して誘惑してくる。
かわいいぜ……。
「それでな、それでな！この前は秩父で渓流釣りしてな！」
天龍は、俺の腕をナチュラルに抱きながら、一生懸命、俺に最近の出来事を教えてくれている。
かわいい……。
親に甘える子供って感じ。
あー、両手に花ですわー。
たまには、エロ抜きでこうやってのんびり過ごすのも悪くないなあ。

逆レオチばかりだとキレられそうだし、今日くらいは大人しくしておくか……。

５５３話　催眠アプリ　その１

んー、今日もいいペンキ☆
早起きは三文の得だな！
……現代では、三文は百円くらいなんだけど、世の中の疲れた現代人達は、百円もらうくらいならもう一時間くらい寝ていたいのが本音だろう。
まあほら……、早起きってのはまず、早く寝ないとできないから、夜更かしはしないようにしようね。お兄さんとの約束だぞ。
おっと……？
俺の《目星：８０》がクリッた。
俺のスマホが新しいものに変わっているな。
俺の私物は、マジで触っちゃいけないものは地下室に封印されているが、それ以外は大抵、艦娘のフリーパスだ。
基本的に、気を利かせて修繕してくれているか、ズリネタにされているかの二択であるが……。
今回は何されたのかな？
まず、写真！
うむ、艦娘のエロ写真が入っているだけで特に変わりはないな。
実は、その辺の女の子に浮気しても、一時なら何も言ってこないのだ。
ただ、長期間姿を消すと、自分達が俺に必要とされてないのかと感じ始めて、精神が不安定になるだけ。
基本的には、忠誠心に溢れているよ。
えー、さて。
スマンホホの検査……、と。
うーん？
ＯＳが黒井鎮守府製になって、通信データが全て黒井鎮守府のサーバールームに記録されること以外は特に何もないな。あと、性能は上がってるかな？
アプリも変わってない……、いや、なんだこれ？

「……『艦娘洗脳アプリ』？」
んんんんー？顕光殿ー？
助けてください顕光殿。
忘れもしませぬ、あれは拙僧が提督だった頃……。
もー、やめてくださいよ本当に……。
良い加減怒られそうですわよ。
何この……、何？
どうなっても知りませぬぞ♡……ってコト?!
これアレでしょ？使えってことでしょ？
うちの子はローラ姫ばりのループ選択肢叩きつけてくるからなー。
使わなかったら使うまで永遠に付き纏われるぞこれ。
叩きつけて良いのはヒリヒリとした生き様とその為に死ねる何かだってイワナ……、書かなかった？
まあでも、俺の生き様を叩きつけ過ぎると、ファイアパンチみたいな死に様を晒すことになるので要注意だ。
恋愛でもなんでも、一方通行は良くないってことだな。ベクトル操作されちゃうぞ。

さて、このしょーもないアプリ。
取り扱い説明書を読む。
催眠！洗脳！以上！
だそうだ。
なるほど、大体分かった（分かってない）。
つまり、いつも通りにセクハラしてくれってことだろう。
フ◯ラ怪人化とか人格排泄とかなんか強火変態性癖の設定があったが、とてもこわいので使いません。
箱化ってなんですか……、怖い……。
いやまあ、うちで度々救出している対魔忍の方々は、箱になったりダルマになったりオナホになったりしてるから、知識はあるが。
スッゲェ七変化……、変化の術かな？（すっとぼけ）
自信満々のナントカの対魔忍！みたいな大層な二つ名の人が、ふた

なりデカチンダルマにされて帰ってきたりするからもう目も当てられない。
まあ、そんな事はいいんだ、重要な事じゃない。
えー……、現在、休憩室にいます。
リビングみたいなもんですね。
いるんですよ、艦娘が。
しかも、なんか、ソワソワしながら、こっちをチラチラ見てる見てる。
もう完全に誘われてるんだよな。
やるしかない、か……。
「やあってやるぜ！」
ＯＰの歌が下手！

「阿武隈」
「ぴいっ?!は、ははは、はい！」
んー。
もうこれ完全に、艦娘間で俺のスマホに洗脳アプリが入ってることが周知されてるじゃんアルゼバイジャン。
使えってか……。
ちかたないね。
えーと、設定設定……。
とりあえず脱がせるか。
「おらっ！洗脳！」
「ぴっ！は、はい！洗脳されます！」
いや、効いてないんかい!!!
もう完全に気持ちの問題じゃねーか!!!
「え、えっと……、お、おっぱいですか？」
「あっ、脱ぐの大変だよね。改二になって服が複雑になったし」
「あっ、いやその、気を遣わないで下さい！おっぱいくらい、いくらでも見せちゃいます！」
それはそれでプレミア感薄まるからどうなん？

「は、はい、どうぞ……♡」
おわー。
シンプルながらもちょっぴりレースをあしらった、「田舎の高校生の勝負下着」みたいな感じ。
こういうのでいいんだよ、こういうので。
「ブラ可愛いねー、新しいやつ？」
「はい、最近買ったやつで……」
「んー、良いね、似合ってるよ」
「ありがとです！……そ、その、触りますか？」
「触る（即答）」
触る（断言）
触った。
「ひゃん♡」
うむ。
なるほど、なるほど。
「阿武隈、もうちょっとご飯を食べなさい」
「それって、お、おっぱいがちっちゃいってコトですか?!」
それって……、「貧乳」ってコト?!
エ～ッ？
「いや、あばらが少し浮いてるぞ。飢えてる子を見ると、どうもな……」
旅の途中、爆撃やら地雷やらでバラバラになって死ねた人は、まだ良い死に様だった……。
飢えて、痩せ細って死んでいく子供達は、ちょっとな……。
「うーん……、食べてるんだけどなあ……」
「そうか？でもまあ、可愛いおっぱいしてるよ」
「えへへ……、って、それ、褒めてるんですか～？」
「褒めてる、褒めてる」
いやあ、若さあふれる張りのあるおっぱい！
良いじゃん！
「でもまあ、俺みたいなおじさんは、君みたいな若者には、お腹いっぱ

い食べて欲しい訳だ」
「そうなんだ……」
阿武隈が、ちらりと隣の方を見る。
「もごごごごごご」
そこには、チョコレートファウンテンを直飲みする赤城が！
「……いや、あそこまではしなくて良いから」
「そ、そうですよね」
赤城……、オチに使われるのって相当だぞ……。
ちょうど良い、次は赤城を洗脳するか！

５５４話　催眠アプリ　その２

赤城を洗脳する。
「おらっ！催眠！」
「……はい？ああ！何だか、そんなことを言っていましたね」
効かなくてワロタ。
悲しいなあ……。
私は悲しい……。
「あらあら、私に催眠術をかけて、どんなことをさせるんですか？」
にこやかにそう言う様は、まさに理想のお姉さん。
ちょっとやばいくらいのチョコの香りを無視すれば、エロゲの歳上キャラの攻略画面だ。
……いや、チョコ！
チェコレートファウンテン直飲みやめろ!!!
どうなってんのそれ????
何でストロー一本でチョコレートファウンテンが枯れるんですか？
ヂュッ！って音と共に、チョコレートが全て吸い尽くされる……。
グリンパーチみたいになってる。
いいのか？そういう態度だと、某所にある人を食うチョコレートファウンテンに……。
いや、赤城なら勝つわな。
収容されたものを破壊すると怒られるからやめておこう。
「とにかく催眠だ！催眠にかけろ！」
ポワワ……！
「うふふ、もう！提督ったら！そういうの好きですねえ……。はい、分かりました。なんでも聞いちゃいますよー」
「じゃあダイエット」
「ダメです」
「あああああああああ!!!!!」
……俺が旅人でよかったな。

弁護士だったら漏らしてたぞ。
「ダ、ダイエット……」
「ダメです」
「あああああああああああ!!!!!」
二回死んだので終わりです。
これはいけません。
回生ゲージがもうない。
義手に爆竹仕込むしか……。
「ダイエットはしませんけど、他のことならいくらでも……」
「じゃあ一緒にマラソンしない？」
「ダメです」
「ああああああああああああ!!!!!」
ドチクショウ！
「そうじゃなくて……、ほら！淫らなことをですね」
淫らなこと……？
「いやぁ……、催眠とか卑劣な真似はしたくないんだよなあ」
「じゃあ何で催眠アプリを使ってるんですかー?!」
君らが使えってアピールしてきたからだよ。
俺は悪くねぇ！嵌められたんだ！
まあ、今晩は多分、色んな艦娘とハメることになるだろうけどね。
ハメハメ。
いやこれはハーメルンのことだから。
ハーメルンだから問題ないよ。
むしろハニハニだから。
たまらなーいぜハニハニ。
「心かけーめぐるービー→トー←」
「？」
「チョコ塗れのお口を拭きなさい」
「あ、はい。……折角なら、提督が拭いてくれますか？」
ふむふむ。
ペロッ。

これは青酸カリ！
いや、チョコですね。
赤城の口の周りを舐める。
「うふふ……、えいっ！」
うお、赤城が口付けしてきた。
あっ……まい！
えっ、なにこの舌？
チョコレートでできてるの？
「ちゅぱ……、れろ……♡オヤツのお裾分けですよー♡」
唾液甘っ……。
えっ、なにこれ？
砂糖水？
唾液が甘いんだけどこれ、大丈夫なやつ？
アマアマの実の能力者とかじゃない？
全身甘みの砂糖人間とかじゃないよねこれ？
糖尿とかになってないといいんだけど……。
「赤城、おしっこは甘くなってないよな？」
「糖尿じゃありませんっ！」
ほんとかなあ？（ゴロリ）
「それに……」
「それに？」
「私の一番好きなものは、提督なんですから！」
ほえー。
可愛いこと言うじゃん。
やっぱり赤城は美女だったんだね。
「と言う訳でいただきまーす♡」
「救命阿!!」
なるほど、一番好きなもの（食べ物的な意味で）ってことか。
「……一人の女としても、貴方を愛していますよ♡」
グロ描写防止用に、ゆっくりまんじゅうになった俺の耳に届いた最後の言葉はそれだった。

さて、鎮守府の裏庭の篝火から、俺は復活した。
「太陽万歳！」
Ｙ字ポーズで太陽に祈りを。
後で血痕からソウルとか血の意志とかを回収しなくては。
「提督」
おや？
何者かに呼び止められた。
「やっぱりここにいましたね」
「はっちゃん」
潜水艦のはっちゃんだ。
こぉーんなムチムチのエロボディでスク水とか許されざるよ。
おっぱいタプンタプン。
とは言え、流石に普段着がスク水って訳じゃない。だんだん肌寒くなってきたこの秋口に、スク水を普段着として生活していたら、それはイカレポンチだ。
……いや、艦娘は基本的にイカレポンチだが、チンポは付いてないからセーフ。
となると俺はイカレチンポということになるのか……？
まあ良いや。
はっちゃんは、今は、トップスの装飾感を控えめにしてスカートのシルエットを強調した形のクラシカルなファッションでまとめているようだ。
足元はパンプスで、初秋にマッチしたスタイル。今年流行している組み合わせで可愛らしい。
いやぁ、こうしてちゃんとお洒落している艦娘を見ると心が安らぐなあ！
明石や夕張みたいに通年ツナギなのはどうかと思うし、いっつもジャージな長門や武蔵もアレだしなあ……。可愛いんだからお洒落しなさいよまったくもう。
一方で、常にパンツを穿いてない大淀や、表面的には嫌味じゃない

程度にブランドものを着こなすが下着はシースルーか穴空きエロパンツしか持ってない鹿島など、問題児が大杉内。
はっちゃんはまともでありがてぇ……。
で、何の用だろうか？
「はい、これ」
おや、俺のスマンホホだ。
「拾ってくれたのか、ありがとう」
「……かけないんです？」
「え？」
「はっちゃんに、エッチな催眠をかけないんですか？」
ほむ。
誘惑……！そういうのもあるのか！
求められたなら応えなきゃならないな。
「おらっ！催眠！」
「えへへ……♡」
催眠、ヨシ！（良くない）
「提督ー♡」
はっちゃんは、ペタッと俺にひっついてきた。
おっぱいがポヨン！
ｏｈ　ｙｅｓ……！
「提督、ギュって、してください」
「エー？服にシワができちゃうよん？」
「服なんてどうでもいいです。はっちゃんのことをたくさんたくさん束縛して欲しいな……♡」
ふむ。
「いやぁ、自由主義だからなあ。はっちゃんにははっちゃんの人生がある訳で」
「嫌です、束縛してください。鎖に繋いで、自由を奪って……、最後には、貴方の手で締め殺されたい……♡」
わぁいヤンデレ。
旅人ヤンデレだいすき。

「すっごーい！はっちゃんは男に束縛されたいタイプのヤンデレなんだね！」
「はいっ♡大好きな提督に都合の良い女扱いされて、自由なんて一切なく、心身を支配されたいんですっ♡はっちゃんをたくさん可愛がって、ギュってしてぇ♡」
「ンモー、しょうがない子だナァ！ほれ、ギューっと」
「んー♡」
　あー、カワヨ。
「何でも差し出すからね♡お金も、時間も、仲間もぜーんぶ、全部あげるから♡プライドも命も、全部捧げるから、受け取って♡」
　重い重い。
「俺は、はっちゃんの『好き』って気持ちを少しもらえれば満足なんだけどなあ」
「そうなの？はっちゃんは要らない子……？」
「必要だよ。けど、そうだな……、はっちゃんには、俺に渡し切れないほどのたくさんのものを持って欲しいな。色んな経験をして、色んな知り合いを作って……」
「それが貴方の望みなら……」
　重い女はとても可愛いので可愛い。
　エクセレント。
「それはそれとしてはっちゃんのモチモチをいただくのだー！」
「きゃん♡」
　ほあー！
　もちもちだ！もちもちだぞ！

５５５話　催眠アプリ　その３

「あー催眠催眠」
今、催眠アプリを持ち歩いて、美女を求めて全力疾走している俺は、提督をしているごく一般的な旅人。
強いて違うところをあげるとすれば、酒と女とギャンブルに興味があるってとこかナー。
「提督ー！」
「あひん」

明石に捕まった！
残念！ここであなたの冒険は終わってしまった！
「こちら、催眠アプリで遊んでいた提督さん、筋肉トッピングです！」
んんー？
「うっひょ～～～～!!!強制脱衣時、身体に他の艦娘の匂いがついていたのに気付いて大きな声を出したら、提督さんからの誠意で、濃厚孕ませ汁を……」
「ちょっと待ってちょっと待って！どういう状況?!!」
俺は今、縄でぐるぐる巻きにされて、カメラの前に座らされている。
そこで、明石が意味不明なことを言っている。
明石はいつも意味不明なことを言っているが、今回は殊更に意味不明だった。どれくらい意味不明かと言うと、往年のプレステゲームソフトのせがれいじりくらい意味不明だ。
「私の性欲次第でこの鎮守府潰すことだってできるんだぞって事で、いただきまーす！まずは汗から……」
うわ、明石がめっちゃ首筋舐めてきた。
「コラ～～～！これでもかってくらいに濃厚なエロエロフェロモンの中には、他の艦娘の香水が入っており、怒りのあまり、今のプロジェクトを全部破棄してしまいました～！」
「ヤメテ！そんなことされたら大変なことになる！」
「すっかり提督も立場を弁え、誠意のディープキスを貰ったところで、

お次に圧倒的存在感のエロエロ唾液を、啜る～～～！」
「んお、んんっ」
　めっちゃ吸われてる……。
「犯すぞ～～～！サラサラとした喉越しの唾液の中には、他の艦娘のフェロモンが入っており、流石のＡＫＡＳＨＩも執務室に入って行ってしまいました～！」
「そ、そうですか……」
「因みに、鹿島さんが土下座している様子は、是非Ｘｖｉ○ｅｏｓをご覧ください！」
　あ、これはマジ。
　鹿島が土下座しながら俺の靴を舐めるエロ動画は、Ｘｖｉ○ｅｏｓとｐｏｒｎ○ｕｂのトップ再生数ぶっちぎりで存在している。
「ど、どうしたんだい明石くん。急に大声を出して？」
「最近仕事ばっかりで構ってもらってないから、思いっきり犯されたいナリぃ……」
「ダメです」
「あああああああああ!!!!!!」
　なるほど、何故こんな凶行に走ったのか、理由は理解した。
　俺はとりあえず、関節を外して縄抜けし、関節をはめ直す。
「明石ぃ、寂しかったのかー？」
「寂しかったですよぉ！ウサギが寂しいと死んじゃうように、明石は寂しいと提督を逆レしちゃうんです！」
　ははっ、意味わかんねえ。
「まあ、気持ちは分かったよ。頑張って偉いなー、良い子だなー」
「うへへへへ……」
　よし、ではここらで……。
「おらっ！催眠！」
　ポワワ……。
「あ、それノーマルモードですね。もっとエグいモード使ってくださいよ。とりあえずこの感度三千倍モードを……」
「やめなされ……、やめなされ……」

「はい！これで設定完了です！あは♡提督にイキ殺しにされたいなぁ♡」
「いやこれはちょっと」
「えい！」
あ！
明石は俺に無理やりスイッチを押させた！
そして、スマホから出た謎のピンク光線が明石を貫く！
「んほおおおおおおっ♡♡♡♡♡」
「うわあ、なんだか凄いことになっちゃったぞ」
俺は、全身から汁を吹き出す明石を支えると……。
「イッグゥウウウウウウ♡♡♡♡♡♡♡」
肌が触れ合った瞬間、明石は大きくのけ反って噴水みたいな感じのアレになった。
良いんですかこれ、18禁になっちゃわない？
これもギャグの範疇でセーフ？
気絶した明石を、本人の部屋に運んだ……。

明石はヤバい。
やっぱり、逝っちゃってないと面白発明はできないってことか。
「あ」
おや、山風。
「提督♡」
「おやおやおや、おやおやおや」
山風はかわいいですね。
いかん、ボ卿になってしまう。
「えへへ……」
あーーー。
かわいいですね。
どうかわいいのか？事細かに説明させてもらうとしよう。
まず、俺は、明石の噴水（暗喩）により身体中が凄いことになってしまっていたので、シャワーを浴びた。

そして、いつものように、脱いだパンツは紛失し、代わりのパンツが安置されていたのでそれを穿き、気分良く廊下を歩っていった訳だよ。
その道中で、自分の髪を弄りながら俺を待ち構えていた山風。
……何故待ち構えられていたか？艦娘は俺の行動を把握してるからね、ちかたないね。
そしてね、俺を見つけると、一気に笑顔になって、パタパタ歩いて俺に抱きついてきたんだよ。
んまー、かわいいわあ。
天使じゃない？
デビルアナライザ起動！！！！
『邪神：山風Ｌｖ４８８』
ｏｏｐｓ！見なかったことにしておこう。
ま、まあほら！俺の中では天使だから！
天使のようにかわいいからね！
スウィートなマイエンジェルよォ……。
「提督、頑張ってるね……」
んむ？
「そりゃあもう、毎日頑張ってるよ！」
「さっきも、明石さんに絡まれて、大変そうだった」
あー？
「見てたの？」
「うん……」
ほむ。
「別に、大変ってほどじゃないよ。それに、明石は変態だけど、可愛いし良い子だから」
「嫌じゃない……？提督、嫌なら嫌って言っていいよ……？」
心配してくれるのか。
優しいなあ。
「嫌じゃないよー、平気だよー」
「あと、あとね、あたし、もう一つ言いたいことが、あるの……」

ふむ？
「何でも言ってごらんよ！」
「最近流行ってるウマのゲームに、あたしとキャラ被りしてる子がいるって夕張さんが」
「オーーーッケイ、分かった。ウマの話は一旦やめよう！はい！やめやめ！」
ウマは……、まずい！
コジマよりまずい!!!
「……参考までに、俺のことをお兄様って呼んでくれない？」
「え？えっと……、お兄様♡」
おほー！
ええやん……！
素晴らしい！
突如、俺の脳内に溢れ出した、『存在しない記憶』……。
――「お兄様ー♡」
――「お兄様、大好き♡」
――「あたしはお兄様のお嫁さんだよっ♡」
「どけ！俺はお兄様だぞ!!!」
「えっ……？」
「あぁ、すまない……、頭がパーン！してた」
「えっと……、あたしのお兄様になりたいの？」
「なりてぇ……！」
「い、いいよ。お兄様にしてあげる！」
「ありがてぇ……！」
「じゃあね、妹からの、お願いだよ……！」
何だろうか？
「飲んで」
山風は、自分の人差し指を齧り、血を流す。
それを差し出し、血を飲めと命じてくる。
あはーん？
なるほどね？

俺は、躊躇いなく山風の指を口に含む。
「あ、は……♡」
快楽を感じたらしく、内股になって身を捩る山風。
その血の味は、素晴らしい智慧に満ちていた。
絡みつくような、重金属を思わせる圧力。
爛々たる新星。
見えてはいけない悍しいものが見え、感じてはいけない素晴らしい怖気を感じる。
重苦しい蒼。激痛をもたらす鉛。腹の底に溜まる澱のような白金。鈍い輝きを放つ金属の星。
……おっと！
いかんいかん。
ヤバいものを見せられてしまった。
「ンモー、常人にはやっちゃダメだゾ？山風レベルの血液は、一滴でも人間を何百人と壊せるんだからねっ！」
「えへへ……、でも、提督は壊れないよね？」
「壊れかけのレディオです」
「えっと……？」
「壊れないよー！無敵だよー！」
「ふふ、良かった……。ね、提督？」
「何かな？」
「ずっと一緒だよ……♡」

５５６話　催眠アプリ　その４

「うーん！美味しいです！」

夏が終わり、段々と涼しくなってきた秋の午後。

休憩室にて、ヘラみたいなスプーンでミルクレープをホールで頬張るのは、比叡だ。

明るめのブラウンの髪をショートにまとめて、薄めのナチュラルメイクでさっぱりと整えた、スポーツマン系のあっさりサバサバ感。

たまらねぇぜ……！

良いですか、分かりますか？

比叡はね、メイクしなくても可愛いんですよ。

若くて健康で美人な女の子ですからね？

メイクの必要がないんですよ、本来なら。

パウダーを塗る前から真っ白な肌に、チークを乗せるまでもなく健康的な血色で朱がさした頬、紅を塗る必要のない桜色のしっとりとした唇!!!!

メイクなんて……、必要ねぇんだよ!!!!

そこに！

好きな男に振り向いて欲しいから、ちょっとだけ可愛くメイクしちゃおう！と、少しだけ薄く化粧をしているんですよ！

いじらしいっ！

こんな可愛い子、普通はいないよ?!

薄い化粧ってのがこれまた唆るね。

化粧にあまり慣れていないから、初めてメイクをする女子高生のような薄めのナチュラルなメイク！

メイクと縁がないような女の子の、精一杯のオシャレって寸法よ。

もうこんなん最高でしょ。

その可愛い背伸びは、全て俺のために！ってんだからもうね？

これで滾らない男とかいるの？

「あっ、司令ー！ケーキが美味しいですよー！」

「比叡君もうまそうやな」

「え？」
「何でもないよー！ケーキが美味しいのかー、良かったねえ！」
「司令も一緒に食べましょう！は、はい！あーん……」
おほー！
「あむ」
「えへ、えへへ、間接キス、ですよ♡」
あああーーーッ!!!
ＴＯＴＥＭＯ　ＫＡＷＡＩＩ　!!!
可愛いな、可愛いな、可愛い可愛い可愛いな。
「可愛いので……、おらっ、催眠！」
ぽわわ……！謎のピンク電波が比叡に照射！
「あっ……♡」
おや？
もじもじし始める比叡。
「え、えっと……♡もうっ！司令のえっち！」
一切効いてないのはデフォですね。
催眠光線は人を狂わせるが、最初から狂ってる人には効かないんだよ。
すなわち、この比叡もどこか狂っていると言うことの証明に他ならないが……、誰も気にしない。
「ぐへへ、男なんてみんなエッチなのだよ！」
「しょうがないですから……、比叡のことを好きにしてくださいっ♡」
ああーっ！
浄化されるぅー！
汚い大人である我々は、若者の純愛を向けられると、光のパワーで灰になってしまう系の話があるらしい。
まあ、ハイになるのも確かだが。
とりあえず、パンツをチェックだ！
「失礼致す」
「ひええ……♡」
ふむ！

なるほど！
「黒のレースぅ……っ！」
いつもの比叡は、グレーのスポーツ系の下着だったはず！
それが、黒のレース系とは……！
「イエスだね！」
「えへへ♡やりました！」
こーれはもう、シルクのベッドで朝まで愛し合うしかないっすよ！
「にしても、黒って、比叡にしては大胆だね？誰かに聞いたの？」
「お姉様に聞きました！」
ほえー、いいんじゃないの？
金剛はかなりオシャレ方面に詳しいからね。
おしゃれイズムだからね。
「あと、教えてもらっているときに近くにいた仮面の人が……」
んんん？
んー？
「仮面の人とは？？？？」
「バロンと名乗る……」
「私よ」
足柄が、気がつけば俺の背後をとっていた。
「どうしてアンタがバロンなんだ？！」

振り返ると……。
黄色と黒のマスクを被った足柄が！！！
「いやバロンじゃなくってシュバルツ・ブルーダー？！！！」
「くくく……、何だか最近、あんまり構ってもらえなかったから、ちょっと拗ねてるのよ……！」
「アッハイ、すみませんでした」
すぽんとマスクを脱いだ足柄。
「でもまあ、私の仕事が忙しいのが原因なのよねえ」
まあ……、そうだね。
足柄は、艦娘としての仕事よりも、暗殺者としての仕事の方が多い

からね。
「そうだとしても、気軽に会いに来てくれて良いんだよ？」
「そうしたいのは山々だけど、仕事がねえ……」
「まあ、深海棲艦の陸上侵略と、陸上の悪の組織と手を組んだ『アライアンス』の調査で、妙高型のみんなには相当働いてもらってるからね」
「調査の結果、色々分かってきたけれど……、結局、敵側の戦力が増えたってことには変わりないって言うのも辛いところよね」
いや本当にそうだよ。
「まあ、久しぶりの休暇だし、たくさん甘えさせて頂戴な？あ・な・た♡」
おほー！
こう言うのも良いですねえ！
お姉さんに誘惑されるのも良い！
艦娘である為、特に人生経験が豊富と言う訳でもないのに、とても大人っぽく……、色々と大人の対応をしてくる足柄お姉さん。
口では「甘えさせて？」などと言ってはいるが、実際は、なんだかんだこちらを甘えさせてくれることが殆どだ。
ふざけた態度も、おばさんっぽいキャラ付けも、もちろん本人の性格がそうであると言うことも当然言えるのだが、それ以上に、あえて道化を演じて、男を立てる良い女の仕草であることは、あまり知られていない。
基本的にはこちらを立ててくれて、それでいて、無理のない範囲で甘えているところを、「隙」をあえて見せてくれる……。
足柄は、本当に、とても「良い女」なのだ。
悪口ではないが、例えば、足柄の姉の妙高などは、こちらを立てることに１００％で、甘えようとは中々してくれない。
逆に駆逐艦の子なんかは、甘えることに１００％って子が多いね。
その辺を、実にいいバランスで、男を立てつつもほどよく甘えて来てくれる足柄は、本当に素敵な女性なんだよ。
「因みに、足柄お姉さんは、こう見えてかなりマッチョです」
「やぁ～ん♡」

足柄の服をめくる。
程よい脂肪は身分を隠す為。
長門のような露骨なゴリラボディでは、明らかにやべーやつと見れば分かってしまうので、足柄はあえて脂肪をつけて筋肉を覆い隠している。
長門や武蔵辺りのような、肥大化した大きく強靭な鋼の筋肉ではなく、アスリートのようなシャープで密度の濃い筋肉の上に、あえて薄く脂肪を乗せている……。
とは言え、こうして服をめくると、うっすらと腹筋が浮き出て、腕もパリッとした筋肉があることが窺える。
本来なら、陸上選手のような絞られた美しい身体……。
そこに、脂肪を乗せて女性的な丸みを。
一般人から見れば、スポーティな美女にしか見えないのだが……。
恐ろしく鍛えられた肉体……。オレでなきゃ見逃しちゃうね。
信じられないほどの上玉だ。
「あぁ^〜、良いっすねえ〜！」
「もー♡提督ったら、筋肉フェチなの？」
「俺は足柄の全部を愛してるよ」
「あらあら、嬉しいことを言ってくれるじゃない♡」
自然に俺の腕を抱く足柄。
足柄はハニートラップもできるからなあ。
男が喜びそうな仕草を織り交ぜてくるのマジでやばいですわよ。
「し、司令っ！私も筋肉には自信がありますっ！」
おや、比叡。
服をがばっとめくり、見せてくる。
うわー！
腹筋バッキバキ！
ボクサーかな？
比叡は、恐ろしく絞られた、脂肪がないアスリート体型。
良いですねえ、そういうのも好きだよ。
俺は、足柄と比叡に挟まれながら、イチャイチャして過ごした……。

５５７話　催眠アプリ　その５

「ぽんぽかぱーん！」
おっぱい怪獣アタゴンに捕まった。
折角、鎮守府から逃げ出して横浜の町中華巡りしてたのに……。
俺はもう駄目だ、後は任せた……。
「て、い、と、く～？」
「はい」
「聞きましたよー？何でも、艦娘にエッチな催眠術をかけてるとか？」
「はい」
「じーっ」
「はい」
＞ＡｔａｇｏはＴａｂｉｂｉｔｏを見つめている。
＞ＡｔａｇｏはＴａｂｉｂｉｔｏを見つめている。
＞ＡｔａｇｏはＴａｂｉｂｉｔｏを見つめている。
３回連続で見つめられたんだが……。
「むぅー……！」
身長１８４ｃｍという、女性にしてはかなり長身な上背。
しかし、１９０ｃｍある俺には届かないので、背伸びをしながら主張してくる。
「私にも、えっちなことして良いんですよー？」
「りょ。おらっ！催眠！」
ポワワ……。
「えへへ……♡」
前も言ったが、艦娘は最初から頭がおかしいので、催眠術を食らってもこれ以上おかしくはならないのだ。
因みにこの催眠アプリ、ちゃんと本物で、一般人にはバッチリ効いた。
休憩室でおやつタイム中の音成提督……、守子ちゃんに催眠ビームを照射したら、あっさりとパンツ見せてもらえた。
申し訳ないので、土下座しておいた。

で、愛宕。
乳。
うん。
乳！
黒井鎮守府胸囲ランキングにおいて、トップを争うデカチチの持ち主だ。
もちふわのマシュマロボディでかわいいね。
……まあ、マシュマロなのは表面だけで、脂肪の下はゴリゴリの筋肉鎧なのですが。
まあそりゃそうでしょ、総アダマンタイト製の金属鎧、タワーシールド、メイスで武装した女が、非力な訳がないんだね。
愛宕の武装の総重量は、荷物を満載した大型トラックに匹敵するのだ。
軽く乗用車程はある重量の両手持ちメイスを、片手で小枝のように振り回すんだぞ？
ゆったりとした服を着ているから分からないが……。
「愛宕、上着脱いで」
「あらあら～♡もうっ、提督ったら♡昼間なのに大胆なのね♡」
脱げば一目瞭然だ。
見てくださいあの腕。
確かに、二の腕は、油断した女の子特有のもちぷにふわふわマシュマロだけど、上腕二頭筋、すなわち力瘤の部分が、目視して明らかにわかるくらいに盛り上がっているのだ。
えっ、何ですかそれは？鉄鉱石でも入っていらっしゃる？みたいな、ガチガチの鋼の筋肉。それを、甘々ふんわり贅肉で隠しているんだが、どう見ても隠し切れてない。
太ももも見てくださいよ。
筋肉と贅肉の合わせ技一本！
もう、パッツンパッツンなんだね。
胸囲は驚異の１２０ｃｍ超え！
それもまた、盛り上がった大胸筋に、常識外れのデカチチのコンビ

ネーションによるものだ。
「失礼失礼アンド失礼」
「あ～ん♡」
ほほほほほほーい！ほいほーい！
ふわっっっっっふわ!!!

心から敬愛し崇拝する提督の所有物を、犯そうと、ォ犯そうとしたのォ……？」
あと、ブチ切れてる時は、体温が急上昇して、蒸気が口から漏れ、瞳孔ガン開きで、更に充血して凄い目になるよ。
愛宕ちゃん目付き悪っ！
「ひ、ひいいっ!!!」
「ば、化け物おおおっ!!!」
あ、やば……。
「愛宕！やめ」
「死ね」

えー、電車ですが、湘南新宿ラインが終日運休になりました。

「ぴえん」
「ははは！そりゃ提督が悪いわ！わはは！」
昼間、ＪＲに土下座しまくった俺は、やっと帰ってこれた。
現在時刻は午後１０時。
もうやってらんねーっすわ！ってなもんで、気持ちよくなるお水を飲んでいる。居酒屋鳳翔で。
と、そこに、居酒屋鳳翔の常連である隼鷹が俺を慰めに来てくれたのだ。
「隼鷹～、慰めて～」
はい、隼鷹の胸にダイブ！
おおっ、フワトロな愛宕と違って、パッツンとハリのあるおっぱい！
これもまた素晴らしい。
隼鷹はね、酒浸りだけど、スタイルは物凄くいいんだよ。
基本的に、近接戦闘を行う艦娘は、筋肉が発達してマッチョになりがちなんだよね。
例えば、長門なんてもう凄いよ。ナガト・ナガトだ。
時雨とかも、外見年齢に不相応な、鍛え込まれたシャープな筋肉が

乗っている。流石に、駆逐艦なので、戦艦のように腹筋バキバキシックスパック！とまではならないが、薄っすらと割れた腹筋は健康的でセクシーだ。
そう、それは例えるなら、小中学校のスポーツが得意なあの子！みたいな……。いや、特定の誰かとかじゃないよ？けどほら、みんなの中にあるでしょ？陸上部とかのスポーツ女子の像とかさ。
つまりそんな感じだと言いたいんだよ。
一方で、空母などの近接戦闘を行わない艦娘はどうか？
赤城……。
赤城の話はしないで。あの子は本当にもう……。
まあ、とにかく、空母などの遠距離攻撃が主体の艦娘は、より丸みを帯びている女性らしい肉体をしているのが特徴だ。
故に、この軽空母の隼鷹は。
パッションいっぱいの、ハリのある、ツンと上向きなデカパイ。
程よく引き締まりつつも、少し脂肪のついた女性的なウエスト。
キュッと締まったでっかいお尻。
うーむ、エロカワ。
と言った訳なのだ。
「ん～？なんだいなんだい！私に甘えたいのかい？」
「今日は甘えちゃおうかなー！」
「んもう、可愛いねえ！よしよーし！」
うわあ、雑に撫でられたぞ。
「隼鷹ー」
キスしてみる。
オアッ、酒味！
「んちゅ♡へへへ、酒より美味いね♡」
あーーー。
大好きな酒よりも、俺にキスされる方が好きと申されます？
「隼鷹……」
「提督……♡」
舌入れたれ。

オッ……、酒！
舌と舌とを擦り合わせて、お互いの唾液を味わう。
「はあー、愛してる。愛してるよ隼鷹」
「んぅ、私もさ♡」
あーイイ。イイですねぇ！
「提督……」
「んー？どうしたの？」
「私さ、提督のことを追いかけないからさ」
「うん」
「でも、ここで、提督の帰りをずっと待ってるからさ」
「うん」
「いつでも会いに来てね。提督の話を聞くよ。辛かったこと、楽しかったこと。ずっと、ずっと待ってるから」
「うん」
「だからさ……、私がここにいるってこと、忘れないでね」
いやあ……、隼鷹はこういう子だよね。
俺の重荷にならないで、無理に繋ぎ止めようとしないで、会いたい時に会いに来てくれればそれでいいって言うね。
良い子だよ。
俺にはもったいない。
できる限り顔を見せにきてあげなきゃなあ。

５５８話　催眠アプリ　その６

「おらっ！催眠！」
えー、早速だけど、催眠光線を放った俺。
相手は……。
「ひゃい?!」
島風だ。
もう俺もなあ、諦めつつあるよなあ。
朝起きたら海防艦が俺の上でお馬さんごっこ（意味深）とかしてるんだもん。
もうほら……、気を遣う必要ないのかなーって。
多分、艦娘側の策略で、俺の倫理観を削ろうとしているのは分かるんだけどねえ……。
何歳だろうがレディはレディである訳だから、それ相応の扱いをした方が良いってことなのかもしれませんなあ。
「てーとくってば、私とエッチしたいの？」
「ああ^～、良いっすね～」
「えへへー、このロリコンー！」
「でも、島風は、ロリコン提督じゃないと避けられちゃうぞー？」
「えー！そんなのぜーったいヤダ！提督はロリコンの方が良いよー、ロリコンはかっこいいよー！」
お、洗脳。
俺が洗脳されるのか……。
にしても……。
「その服装……、これからお出かけする予定だったかな？」
「うん！でも、提督がエッチしたいなら、予定変更しちゃうよ！このままの格好が良い？それとも、いつもの艤装エッチが良い？」
あ、艤装エッチですか？
いやほら……、島風の艤装って、なんかこう、イメクラっぽいじゃん？
なんでまあ……、艤装のまま……、こう、ね？

だってあんなオシリもワキもモロ出しのエロ衣装着たままくっつかれたらもう、辛抱たまらんでしょ?!

ちかたないね!

さて、そんなドスケベ衣装だが、それはあくまでも艤装に過ぎない。

エッチなとこをする時と、戦闘の時にしか着ないものだ。

では、これから他所にお出かけしようとしていた島風は、どんな服装だったか?

それがねえ、島風は、結構意外な格好をしてるんですよ。

まず足元から。

足元は、ハイカットのスニーカー。それも、今年の新作モデルで、白を基調に、靴紐を赤に変えてるのが特徴。

そこに、無地の黒ハイソックス。細い脚がさらに細くスマートに見えるコーデ。

お次にパンツ。

デニムのホットパンツ。サイズはピッタリ目で、小さなお尻が強調されてセクスィー。

そして上着。

ホワイトの英字シャツの上に、ダボダボのパーカー。パーカーはかなり大きなサイズで、ホットパンツ部分を隠し、萌え袖となっている。

そして、頭には、ブラックのキャップ。キャップには、世界的な人気ロックバンドである『ＦＩＲＥ　ＢＯＭＢＥＲ』のロゴが描かれている。このキャップの後ろの穴から、ポニーテールを出しているのがなおよし。

鞄は黒のボディバッグ、チャック部分が赤い特注品。

そして腕時計はビビットピンクのGショック……、あ!あれ、俺のじゃん。まあ良いけどさ。ユニセックスなモデルのだし。

そう……。

島風は、こんなに可愛いけど、ファッション傾向はボーイ系なのだ!!!!

更に言えば、休日はライブハウスとかにいるぞ!!!!

え?いやそりゃ、走るのも好きだろうけど、馬じゃあるまいし走る

ことだけやって生きている訳はないでしょそりゃ。
毎日数時間のランニングは欠かさずやってるらしいけど、本人の趣味は音楽鑑賞だよ？
まあつまり、めちゃくちゃ可愛い！ってこと。
「デートしてからホテル行こうか」
「うんっ！」

島風とホテルへ。
さて、プラグイン！と参ろうか。
実際、デートとしてライブハウスでロックを聞いてきた俺は、ロックマンと言っても過言ではない。
股間のプラグを島風にインするのだ。
そして淫するのだ。
とは言え、島風の肉体は、言っちゃ悪いが女性的ではない。
確かに、骨格などはしっかり女のそれで、胸も少しは膨れている。
しかし、痩せ身で、ぎゅっと引き締まった持続力の高い筋肉は、細くしっかりとしていて、女のそれではなかった。
どちらかと言うと、極限まで絞られた筋肉を持つサラブレッドや、野生のカモシカのような、人並み外れた神秘的な美しさがそこにあった。
産毛ひとつない、初雪のように白い肌もまた、その神秘性の後押しをしている。
その白肌に、柔らかな血の色の朱がさしているのが、これまた例えようのない美しさだ。
唇や乳首などは、色素の薄い桜色。
うっとりするような、その瑞々しい桜色を俺にくっつけて、キスマークを残す。そうしながら、その合間に耳元で愛の言葉を囁く島風。
あらやだ、この子ったら、どこでそんなことを覚えてきたのかしらん？
まあ、なんだ。

一人の大人のレディとして、可愛がってあげようじゃないか。

プーリンちゃんのープリンがー、プリンプリーン。
「プリンちゃーん！」
島風をアヘアヘさせた後の俺は、プリンツオイゲンの程よい大きさの胸に飛び込んでいた。
「きゃあ♡もうっ、私の王子様は、いけない人なのね♡」
おっ……と……。
抱きしめられた時、力が強過ぎて頭蓋が軋む。
軽いせん妄はデフォなので、文句はないです。
「プリンちゃん、最近どう？」
「毎日楽しいよ！昨日はダンスのお稽古をしたの！私はお姫様だから♡」
ふむ。
昨日のプリンツの仕事は、フロリダのカルト宗教組織の殲滅だったはずだが。
「どこでダンスしたのかな？」
「フロリダだよ？たくさんダンスしたんだけど、頑張り過ぎて講師さん達を『バラバラ』にしちゃった！」
ふむふむ。
なるほど。
ダンス（破壊活動）か。
プリンツの中では『そう言うことになっている』のだろう。
下手に否定しない方がいい。
「そっかー！偉いなプリンちゃんはー！」
「えへへ……♡私はお姫様だから！王子様に相応しい女の子になれるように、花嫁修行しなきゃならないのよ！」
「よしよし、いい子だなあ！ところで、今月の給料は何に使った？」
「え？アマゾンで黒ビールをまとめ買いして……、それと新しい本棚と……、あ！最近、カコに誘われて、バイクを一台買ったわ！」
ほー。

「お姫様がバイクを？」
「あら、今は中世じゃなくって現代なのよ？お姫様が乗るのがユニコーンじゃなくって、鋼の馬なのもおかしくないでしょう？」
なるほどね、そんな感じで、プリンツの中では世界観は統合がとれているのか。
まあ、いいや。
なんだかんだ言って、実生活に支障は出てないし。
「あー……、今日はお稽古をお休みして、デートしような！」
「ほんとっ?!行く行く、デートするわ！」
そう言いつつ、俺に抱きついてくるプリンツ。
いやぁ……、凄まじく完成された肉体だ。
まるで、野生の獣。
極限まで研ぎ澄まされた獲物を狩るための肉と骨。
一見、細いように見える手足には、信じられないほどの密度の筋肉がついており、その大きさを妄りに肥大化させないことにより、関節の駆動域を広くしている。
女の身体ではないが、ボディービルダーのような他人に見せるための偽物ではなく、労働によって身についた筋肉でもなければ、戦士のそれでもない。
悉くが、獣。
人間離れした鋭い爪と牙、異常発達した五感、肉食獣のようなしなやかで強靭な骨肉……。
更にその上に……、何だったか、『アラガミ細胞』？だのの、異様な細胞組織を体内に埋め込み、生体兵器として活動をするのだから恐れ入る。
お姫様を自称しているが、どこのお姫様なんだか……。
この肉体では、まるで獣の姫君だ。
「じゃあ、早速、お出かけしよう！」
「あっちょっ待っ」
鎮守府の開いた窓から、バネのように跳ぶプリンツ。
そのまま、無理矢理連れ回された……。

５５９話　催眠アプリ　その７

「スーパー北上サマだよー」
「そして俺は、スーパー旅人サマだ！」
「「わはははは―！」」
　つまり、そういうこと（世界レベル）
　北上は、見た目の通りにインドア派だ。
　だがそれは、人と話せない陰の者という訳ではなく、職務上の都合から長期外出を控えているということ。
「私はさあ、提督の矛なんだよねえ」
「矛なんて使ったことないなあ」
「だよねぇ、提督って優しいもん。優しいから、進んで戦おうとはしないでしょ？」
「そりゃ、戦いは好きじゃないからね」
「だから、私がさ。提督がやりたくないことを、戦いを代わりにやるよ。私が、提督の武器になるよ」
「そっか……」
「そんな武器が、いざという時に手元にないと困るでしょ～？だから、私はなるべく、鎮守府から出ないんだ～」
　職務熱心な良い子だよ。
「……まあ、遠出するのがめんどいってのもあるけどねー」
　そう言いながら、北上は、テレビの電源を点けた。
　そのまま、北上は、手元のスマホを弄る。恐らく、スマホの映像をテレビに映そうとしているのだろう。
　北上は、現代的なガジェットも人並みに使いこなせるのだ。
「提督ー、考えてみてよ。休みなんだよ？休息なんだよ？休息の時間まで、自分のためになることをやらなくても良くない？」
　ふむ……、一理ある。
「別に馬鹿にしてる訳じゃないんだけどさあ、秋月型みたいに『趣味はお勉強』とか、長門や武蔵みたいに『趣味は筋トレ』とか……。嫌になんない？」

「まあ、俺も遊んで暮らしてるマンだからなあ」
「人生にはさ、なんの役にも立たない、ドブに捨てるべき時間もあると思うんだよね。そう、例えば……、クソ映画を観る、とかさ」
うん。
「……北上、俺は用事を思い出した」「逃がさないんだよねえ……」
アァッ……、オワッタァ……！
「提督、まだ観てないよね？『キャッツ』を」
「イヤー!!!あんなのもうＰＶの時点で気持ち悪くて見たくないやつじゃーーーーん!!!」
ライダー助けて!!!
「まあまあ、じゃあ、こうしようよ」
ん？
北上が……、俺の膝の上にパイルダーオン！
「私の身体、好きに触ってて良いからさ。映画、一緒に観よう？」
「良いね!!!一本と言わずに三本くらい観ようか!!!」
うひょー！
……さて。
北上が膝に座ったは良いが……。
めちゃくちゃ、重い。
身長１６０ｃｍの美しい女体は、ほどほどの肉付き、普通サイズの胸と、平々凡々、特筆すべきことなし。
しかし、その体重は、３００ｋｇを遥かに超える……！
極限までに練り込まれた極大の筋肉！
それを、一般的な女性の姿形に収めるという矛盾！
この凄まじい力の塊である肉体から繰り出される奥義、『スーパー雷巡キック』は、４０ｍ級の重装型機動兵器を一撃で破壊する。
つまり、サイコガンダムを蹴り殺せる系女子……！
大井、北上の火力は、黒井鎮守府でも屈指のもの。
長門クラスの艦娘ですら、まともに直撃すれば破壊されかねない、超圧倒的な火力を持つ。
長門の名誉……、名誉（？）の為に言っておくが、長門は単純な戦

闘能力ならこの鎮守府でトップの存在。
その戦闘能力は、生身のままでマジンガーZとステゴロができるほどだ。
そんな長門にすらも致命傷を与えられるのが、大井北上のコンビという訳だな。
もちろん、攻撃力に極振りしているので、他のステータスは平均的だが。
「あぁ^〜、もちもちなんじゃ〜」
「……私の小さいオッパイ揉んで、そんな楽しい？」
「生き甲斐」
「そっかー」

気持ち悪い映像をスルーしながら、北上のおっぱいを揉み揉みしていたら、もう夜だ。
「んん〜、映画をずっと見てたから、身体が固まっちゃったな」
俺は、執務室の椅子に座りながら、自分の肩を揉む。
『良ければ、肩を揉もうか？』
と天井から声が。
「ああ、頼むよ」
俺がそう言うと……。
「ガッテン承知！」
パカ、と天井が開き、ニンジャが落ちてくる。
川内のエントリーだ。
川内はニンジャなので天井裏にいる。
「お客さーん、こってますね〜！」
「あぁ^〜」
だが、稀にこうして、気を利かせてくれるパターンもある。
例えば、お茶とかは、頼んでもいないのに横スライドしてきた大淀が淹れてくれる。
川内は基本的に、頼まないと出てこない。
こうして出てくるケースは、大淀が手を離せない仕事がある時など

の、周りに艦娘が一人もいない時だ。
それ以外でも、呼べば出てくるし、催物の時とかにも普通に出てくるけどね。
あと、ついでに言えば、川内と、あと神通は、基本的に頭戦国時代なので、主君である俺への忠誠心が高い。
「お客さーん♡ここもこってますねえ……♡ガチガチですよお～♡」
こういう感じのアレは、俺が望んでいるからやっているんだそうだ。
まあちかたないね、イメクラ楽しいもんね。
「……あの、提督。私、普通に私が好きでやってるってのもあるから、『変なことやらされてかわいそう』とか思わなくて良いよ？」
「そうなの？でも、女の子が……」
「えっと……、私はこういうのが好きなんだけど、似合わない？」
マジですか？
セクハラ親父みたいなノリで股間まさぐるのが好き……？
「あー、信じられないって顔してる！うーん、やっぱり、女の子っぽくない趣味なのかなー」
「い、いやいや、個人の自由だと思うよ？」
「本当？これからもセクハラして良い？」
「良いけど……、俺は触られても嫌じゃないから、嫌がったりはできないかな？」
「え？嫌がられたら傷つくから、嫌がらないでほしいよ？」
うーむ……？
「つまり私はね、提督にセクハラしたいの。ちょっとエッチめにイチャイチャしたいの。分かる？」
「私は一向にかまわんッッッ!!!」
ッッッ～～～?!!!
「あは♡本当？じゃあ、いっぱいセクハラするからねっ♡」
そう言って川内は、俺の隆起した【重甲ビーファイター】の先端を撫でながら、しなだれかかってきた。
川内の頭頂部が目の前に来るが、体臭は驚くほどに無臭。恐らく

は、警察犬ですら嗅ぎとれないくらいに。
これは、臭いで居場所がバレないようにする為、何らかの術を使って消臭しているのだろう。
俺の【重甲ビーファイター】を撫でているのとは違う方の手で、俺の胸板をまさぐっている。
素晴らしく柔らかな手だ。忍びの者の器用さを表すような、柔らかな関節と繊細な細指は、芸術品そのものだ。
ついでに、俺に抱きついているので、胸が押しつけられている。
胸は、日本人女性の平均ほどの慎ましいサイズで、であるからして誰にでも化けられる。
川内の『変化の術』は一流だ。
……なんか、一方的にセクハラをされるのはアレなので、俺もセクハラをし返す。
秘技、セクハラ返し！
「きゃん♡」
俺はビンビンに剛直した【重甲ビーファイター】の上に川内を座らせ、強く身体を抱きしめた。
うーむ、華奢のように見えて、こうして抱き締めると理解できる恐ろしい密度。
しかしそれも、軽業の為に極限まで重量を絞られている……。
恐らくは、体重を測れば１０ｋｇを切るだろう。野良猫ほどの体重しかない。
それが、何故だか、身長１５８ｃｍにして、体脂肪率１５％ほどの肉体に収まっているのだから、完全に謎だ。
『軽量化』と『高密度』の矛盾を、芸術的なまでに一つの器に盛り付けたこの凄まじき肉体。
素晴らしいな……。
「もー♡提督ったら、ゴーインだなー♡」
そう言って川内は、腰を動かして俺の【重甲ビーファイター】を刺激する。
うーん、なんかもう、考えるのがめんどくさくなってきた。

脳の血液が【重甲ビーフファイター】に集まって、考える力がもうない。
「……ねえ、提督？私もう、我慢できない♡」
「俺もだ」
すると川内は、俺のズボンのチャックを開き……。

５６０話　催眠アプリ　その８

「よくわかんないんだけどさ」
「ｗｈａｔ？」
「催眠って、かけられて嬉しいの？」
「Ａｄｍｉｒａｌにされるなら、嬉しいわよ？」
「そう言うもんなの……？」
暦的には秋の終わり頃。
が、実際は、夏の暑さなんてもう忘れたと言わんばかりの急な寒さの真っ只中。
秋……？秋どこ……？
夏から冬にトグルスイッチで切り替えたみたいな気候やめちくりー。
まあ良いや。
それならそれで、楽しめば良いし。
俺は、アイオワと一緒に、裏山で焼き芋を焼いていた。
ついでに、アウトドア用のコンロでコーヒーを淹れている。
倒木に腰掛ける俺の装いは、いつものようにジーパンに半袖シャツのラフなそれ。
一方でアイオワは、いつものチチシリフトモモついでにおへそとワキの全開のものスゲー艤装ではなく、ファーコートを着込んでいる。
もちろん、艦娘がちょっと寒い程度で肉体にダメージを受けるなんてことはないのだが、彼女達にも当然、常識はあるのだ。
えっ、無い？
雲龍が艤装のままその辺をぶらついてた？
ははは、そうですね。
……ツスゥー、そうですね。
まあ……、良いよ、服を着てくれているだけで立派じゃんかよ。
とにかく、常識のある艦娘は、季節に相応しい装いをするのだよ。
そんな晩秋の装いのアイオワは、俺の腕を抱くようにくっつく。
「催眠って言うより……、ｍａｙ　ｂｅ……、そう、構ってもらえて嬉

しい！みたいな？」
「いやそんなん、構って欲しいならいくらでもお相手するんだよな」
「自分から構って！って言うより、Ａｄｍｉｒａｌからａｐｐｒｏａｃｈをかけてもらう方が嬉しいの！」
「それって……、女心ってコト?!」
「そうよー。でも、Ａｄｍｉｒａｌはその辺、ちゃんと分かってくれてるから素敵よね??」
アイオワの、アメリカ人女優もかくや、という大きなおっぱいが、俺の腕に押しつけられる。
アイオワは、こういうのを天然でやってくるから恐ろしい。
本人は一切意識していないし、誘惑しているつもりはないのだが、完全に男を誘う仕草になってしまっている。
童貞であれば、「この子は僕のことが好きなんじゃないか？」と信じ込んでしまうような感じ。
このウルトラサイズのデカ乳デカ尻を、男友達……、いや、家族か何かのようにくっつけてくるのだ。
距離感が近い！
そして、髪からふわりと香る香水の匂い。
これは……、シトラスかな？
良いねえ。
「Ａｄｍｉｒａｌは、なんだかんだ言ってＭｅ達のことをちゃんと分かってくれてるものね」
「いやいや、そうでもないさ。人と人は分かり合えない」
「そうかしら？貴方にしては寂しい言葉ね」
「だが、分かり合えずとも、知ることはできるんだ」
「……ふむふむ」
「話し合って、同じ時を過ごして、互いに笑い合う。そうしなければ、相手のことなんて分からないんだ。目と目を見ただけで分かり合えるなんてあり得ないし、コミュニケーションを尽くしても衝突することはある」
「含蓄のある言葉ね。あなたの人生経験からくるものなの？」

「そうだな。……まあほら！これからもさ、いっぱいお喋りしようよ！俺、アイオワの事をもっと知りたいし、アイオワにも俺のことをもっと知って欲しいんだ」
「ふふ、そうね、そう。Ｍｅも、Ａｄｍｉｒａｌのことをもっと知って、もっと仲良くなりたいわ」
　ああ、良いな。
　こういう関係。
「……でも、それはそれとして」
「ん？」
「ＡｄｍｉｒａｌがＭｅを操れるなら、どんなことさせたいの……？」
　そーーーんなんもちろん。
「おっぱい揉みたい！！！！」
「正直ね！良いわよ！！！」
　わーーーい！！！！
　おっと……、芋が焼けたな。

　午後。
　薪ストーブに火が灯された部屋。
　優しい暖かさに包まれながら、俺は、アークロイヤルに耳かきをされていた。
「ふふっ、どうだろうか、Ａｄｍｉｒａｌ？」
「あぁ^～、良いっすねぇ～」
　耳かきの音が聞こえる。
　ガタゴト、ガタゴトと……。
「……あの、Ａｄｍｉｒａｌ？」
「何かな？」
「なんか……、銃弾が出てきたんだが」
　耳から銃弾が？
「ｓｏｒｒｙ、聞こえないよ！耳にバナナが詰まっていてね！」
「え？」
「いや、うん……、まあ、そんなこともあるでしょ。むしろ銃弾は当た

りだよ」
「当たり外れがあるのか（困惑）」
そんな感じで、耳かきは続く。
ドンガラガッシャンと耳かきの音が続く……。
「うわ?!ちょっと、待て！待て待て!!!」
「ん？どうしたの？」
「み、み、耳からゲーム機のコントローラーが!!!」
アークロイヤルの手には、箱入りの正規品ＰＳ４コントローラーが。
「あー、まあ、そんなこともあるよ」
「ないだろう?!!耳の穴の大きさと比べて全然違うだろうが!!!」
「よくある、よくある」
「無い!!!!」
ンモー、常識にとらわれてはいけないんだゾ。
「よし、では、耳かきのお礼に……、催眠ビーム!!!」
俺は、スマンホホをアークに向けた。
「なっ……?!」
お？
「う、ぁ……、あー!!!な、な、なんだか、Ａｄｍｉｒａｌの言う事を聞きたくなってきたぞ～!!!?」
オッ、露骨ぅー！
全然効いてないっすね。
流石は艦娘、精神防御はバッチリだぜ！
よし、では……。
「お腹見せて」
と言ってみた。
「お、お腹？普通は、その、胸とかでは……？」
「身体を観たいわ！この子のお腹をみせてちょうだい！」
「そ、そうか……？分かった」
ペロンと捲られた服。
お腹は……、オオッ！

そうなんですよね。
アークちゃんはね、他の空母ならぬ食う母達と違って、引き締まってるんですね。
いやぶっちゃけ、可愛ければ赤城くらい太っててもバリバリ抱けるので問題はないのだが。
いやーこれ、見てくださいよ。
やっぱ見るな、アークは俺のものだ！俺のものだ！
とにかく、アークの腹筋は、縦割れと仄かな横割れがあり、綺麗だ。
何かこう……、筋トレを頑張り過ぎたグラビア女優？いや、女性アスリート？って感じ。
「ええやん！なんぼなん？」
「Ａｄｍｉｒａｌならタダだぞっ！」
そうなんだ！すごいね！
アークの腹筋に頬擦り。
「ひゃああん??」
うーん、白磁のような美しい白肌、赤ん坊のように瑞々しい感触。
全ての女性が羨むようなとんでもない美しさだ。
「Ａｄｍｉｒａｌ……??いけない人だな……??」
「味も見ておこう」
「え？」
「ペロッ！これは青酸カリ！」
「ひゃ……あんっ??」
ｆｏｏ→!!!!
「Ａｄｍｉｒａｌ……??そこは、貴方の子を作る場所だぞ……??」
そう言いながら、己の下腹部を撫でるアーク。
「えっ、子供はちょっと……」
毎回言ってるけど、楽しく恋愛とセッ！はするけど、子供ができるのは困るんだよな。
柵とか、面倒とかもあるけど、なによりも俺は人の親になれるような立派な人じゃない。
「遠慮するな??」

「あっちょ待っ、パワー！パワー強い！」
パパパッパッパパワー!!!!
「んん……？ふふっ??なんだ、Ａｄｍｉｒａｌももう、準備万端じゃないか??」
「あーこれはいけません！催眠ビームだ！ン拒否するゥ!!!」
「知らんな」
あっ！スマンホホさーーーん!!!
スマンホホさんが殉職なさった!!!
これは……、面倒なことに……、なった……。

５６１話　友達！

俺がイチャイチャしているうちに、悪の組織の人達はなんかこう……、頑張っていたらしい。

が、今のところは、うちの戦力には全然勝てないから、一晩で部隊が全滅！とかザラらしいね。

そうか！君達は頭が悪くて他に取り柄がないから、戦うことでしか自尊心を満たすことができないんだね！

かわいそ……。

と、煽りパワーを込めた檄文を敵対組織に送りつけておいた。

ボーグバトラーの端くれとして、精神攻撃はガンガンやっていきたい。

ガン……、ガンガン？

ガンガーガンガー！

ガンガーガンガーアストロガンガー！

（ここで走る団長）

「思えば俺も団長みたいなもんなのかもしれねぇ」

「はい？」

「キボウノハナーしてから異世界転生してウマ娘のトレーナーになったり、ｋｅｎｓｈｉになったり、ＩＳに乗ったりしてるんでしょ？大体俺じゃん」

「まあ……、そうですね」

いやーにしても、悪の組織はまだまだうちには敵わないっぽいな。

……イチャイチャしてばかりいると、俺は実は友達がいないんじゃないか？とか思われかねない。僕は友達が少ない？

男友達もいっぱいいるんだぞ！

例えば？

……ジャギとか？

あとは汚い忍者とか。

モンスターをハントする人達とか。

それと……、ヒューマノイドタイフーンとかつて呼ばれていた彼と

か。いや、彼や、戦場で蛇と呼ばれた男とかは『戦友』の部類だね。
冴羽さんとは女を取り合いする仲だし、ルパン達とは獲物を取り合ったりする仲だし……。
ワイルドタイガーさんも、鵺野さんも、同僚って感じか。
当麻君やら一護君やら仗助君やらは後輩って感じだね。
コズミック害獣ことクソ鳥？あいつは敵だ。インキュベーターと同様、見つけたら抹殺する。
……こうして見ると、対等な立場の「友人」って感じの男は、実はあまりいないんじゃないか？
ジャギとアミバくらいのもんじゃん。
ヤダ……、俺の人間関係、しょぼ過ぎ……？
……ヨシ！こうなれば、ジャギと飲みに行って友情パワーを高めるしかないな！
「行ってくる！」
「お供します」
「い、いや、今日はジャギと飲みに行くだけだから。ついてこなくていいよ、大淀」
「……はい」

ジャギをキャプチャーする。
ジャギをキャプチャーしたの、スネーク？
スネークさんはツチノコをキャプチャーしたことがあるらしい。
あの人凄いよね、この前は辺境でリオレイアと戦ってたよ。
「よー、ジャギ！景気はどうだ？」
「あ”ぁ？……お前か。まあ、悪くはねぇよ」
株式会社世紀末……。
ジャギの経営する石油会社だ。
東証一部上場企業にして、日本のガソリンの半分を供給している大企業。
おかしな仮面野郎だが、こう見えてジャギは大社長なのだ。
それはさておき……。

「景気が悪くない？それはおかしいな」
今は石油の需要が下がってきてるのに。
「いや……、お前んところが投げてきた、月面でのヘリウム３の採取事業がな」
んー？
「……そんなんありましたっけ？」
「なぁーんでテメェの部下の仕事を把握してねぇんだお前は？」
「いや知らん！知らんよ?!フルオートで色々なことやられてるもん！俺なんてマジで飾りだもん！ジオングの足みたいなもんだもん！」
「だもんじゃねぇよ、いい歳した大人が！」
い、いや、だってマジで知らなかったんだもん！
うちの子達、俺以上に上手く俺のコネ使うからね。
「ま、まあとりあえずほら、フラペチーノだ」
俺は、手元のフラペチーノをジャギに渡す。
「女子高生かオメェは……」
「大体合ってる。流行を追えなくなったら若い子とお喋りできないよ？」
「そんなことせんでも困らねぇからなぁ……、って、これ酒じゃねーか!!!」
え？
「そうだよ、ウイスキーフラペチーノだよ。ウイスキーにソフトクリームを沈めたものだ。ウンメェだろ？」
「いや美味いのは認めるが昼間から飲んでんじゃねぇよクズ！」
「言うねぇ」
「ええい、もう飲んじまったもんは仕方ねぇ。オラ、飲みに行くぞ！」
「キャー！シャッチョさん、カッコいい！」

そして、真昼間から居酒屋にどーん！
「メニュー全部持ってきてください」
「おい、そんなに払えねえぞ」
「大丈夫大丈夫、俺の奢りだから」

「そうか、悪いな」
「口座に、ね」
「あぁ？」
「口座に、知らないお金が億単位で突っ込まれていてね。俺の月収は五十万なのにね。おかしいね……」
「お、おう」
……
……
……
「でさぁ、そんとき加賀が、『好きな男に貢ぐのが流行りなのでしょう？』とか意味不明なこと言って、俺の胸元に札束捩じ込んできてさあ」
「何なんだお前？何でそんなにモテるんだ？」
「いやー、俺ハンサムだし」
「あ”ぁ？それは、俺のこのぐちゃぐちゃの顔に対する当てつけかぁ？」
「お前のその顔は訓練の怪我による自業自得じゃねーか！俺に言われてもなあ」
「ふん、有象無象の女にどう思われようが釜わねぇ。俺にはアンナさえいればいい」
「へぇ、言うようになったじゃん。あのジャギがなあ……。因みに、アンナさん以外ではどんな女が好きなの？」
「アンナ以外は考えられん」
「月影千草のファンじゃなかったっけお前？」
「馬鹿野郎！月影千草さんはな、そう言うのじゃないんだよ！役者なんだよあの人は！」
「はえー、すっごい」
「大体にしてお前の方がおかしいんだからな？この世界もこの国も滅茶苦茶なもんだが、一応は一夫一妻だぞ？」
「うん知ってるよ。けど、全く知らん間に上と交渉されて、特例措置で重婚可能にされてたんだ……」
「おお、もう……」

「しかも何故か、俺側から離婚を訴えることはできない謎の法律がね、できててね」
「アァ……、オワッタァ……」
「……暗い話はやめよう！そう、好きな女の子の話だったな！最近はペチャパイの開発に凝っていてだな！」

ふう……。
いやあ、たまには、男同士で馬鹿話するのもいいなあ。
女の話とかあんまりできないもんなあ、艦娘には。
ほろ酔い気分で鎮守府に帰ると……。
「お帰り、司令官??」
龍驤、大鳳、瑞鳳がお出迎えしてくれた。
……ふむ。
「最近はペチャパイが好きなんやって？ええ趣味してるやないか～??」
なぁーんでジャギとの会話内容をご存知なんですかね????
「うちらの平らな胸で良ければ、いくらでも好きにしてええんやで！」
まあええわ。
「わぁいナイズリ、旅人ナイズリ大好き」

５６２話　旅人の過去　前編

「ながもー……んん？」
　長門が珍しく、漫画を読んでいる。
　それも、某ポリコレアフロのやつだ。
「……うーむ、よく分からん」
「珍しいね、長門」
「む、ああ、提督か。話題作と聞いたのでな」
「ほえー」
「だが、何一つ面白くないのだ。前に駆逐艦から借りた鬼滅？とか言うのの方が良かったぞ」
　うーんまあ、その辺はね？
「好みの問題たからね、ちかたないね」
「ところで、提督は子供の頃は馬鹿だったか？」
　えっ何それ？
「ああいや、馬鹿にしている訳じゃなくてな。このアフロが、『子供は馬鹿じゃない、逆に聞くが、自分が子供の頃貴方は馬鹿だったか？』と言っていてな。子供時代がない我々にはよく分からんのだ」
　なるほど……。
「俺は……、まあ、ドン引きするほどクソアホだったよ！」
「アホだったのか」
「今と変わらずアホだったよ！近所の家から柿を盗んだり、スカート捲りしたり、人ん家の庭に落とし穴掘ったりしてた！」
「う、うむ」
　いやマジで……。
「と言うより、自分で自分のことを賢いとか思ってる人は、大抵碌でなしだよ」
「まあ、それはそうだな。子供が馬鹿なのは……、いや、ものを知らないのは当然のことだ」
「大体にして、それは漫画だからね。読んでる人が喜ぶことを書いてるに決まってるでしょ。一切救いがなく読んでいるとただただ辛く

なる……、みたいな本はそうそうないよ」
「それもそうか」
そう言うと、長門は、漫画を畳んで置いた。
「だが、そうだな。折角だから、子供時代の提督の話を聞かせてくれないか？」
ながもんがそう言った。
「ん、まあ、良いよ」
俺がそう言うと、茶菓子を持参した艦娘が寄ってきた……。
そんなに話を聞きたいんか君らは。
「忘れもしませぬ……、あれは拙僧が無垢なる幼子だった頃のこと……」
ほわんほわんほわーん……。
×
×
×
×
×
×
×
×
×
×
俺が生まれたのは、東方のとある地方都市だった。
近くには、南斗聖拳の総本山である里と、北斗神拳の道場、あと岩手も近かったから妖怪の多い遠野とかがあったな。
それと釣りキチがよく湧いて出たり、近くの奥羽山脈には犬がいっぱいいる。
あと遠いけど恐山の方にはシャーマンがいっぱいいて……、『待て待て、もう既にツッコミどころしかないぞ?!』……、過去回想に割り込み？そんなの、アトリームじゃ考えられない……！
説明しようか？
南斗聖拳と北斗神拳は、クッソ怪しい田舎拳法。
遠野は岩手にある妖怪湧きどころ。
釣りキチは……、よく分からん。麦わら帽子のにいちゃんと、一緒に川のヌシを釣りに行った記憶がある。
奥羽山脈は……、あそこは昔、『銀』って言うとても強い秋田犬が支配していた犬の国なんだよ。今では、銀の子孫が長になってる。
シャーマンは……、霊能力者のことだな。割とよくいる。俺もどう

にか、オーバーソウルくらいはできるぞ。
あと近所にやたらとずんだ餅を勧めてくる美少女が……、あっいや、何でもない。
いや、まあ……、うん。
手は……、出したけどぉ……、それは今は良くない？良いでしょ？はい！良いね。
で、まあ、俺は基本的に、物心つくくらいまではじいちゃんに育てられてたんだよ。
親は、何かこう……、子供をほっぽり出して夢を追ってるっぽいね。そう聞いたけど、顔も名前も分からないから……。
そしてそのじいちゃんも、俺が五歳くらいになると、三歳の妹を押しつけて蒸発したんだよね。
夢を追って。
え？いやまあ、そんなもんでしょ。
うちの家系は大体そんな感じよ？
俺もまあ、多分どこかに子供がいると思うし、そしてその子供を捨ててここにいるんだと思うし……。
クズの家系ってことだね。
で……、五歳の俺は、とりあえず、食い扶持を求めて近所の北斗神拳道場の門を叩いたんだ。
そこで、俺と妹を食わせてもらう代わりに、住み込みで丁稚みたいなことをやってた。
そん時に、ジャギと知り合ったんだよ。
ジャギはなあ……、あいつ、同期で兄弟のケンシロウ、ラオウ、トキの三人に色んな意味で劣っててなあ。
あいつ自身も、本来なら北斗神拳伝承者になれるくらいの秀才ではあったんだよ。
でも、周りが天才どころか鬼才揃いでさ。
そんな訳であいつはグレてたんだけど、俺がちょっかいかけてるうちに険が取れたんだよ。
曰く、「お前を見ていると、自分の悩みがどうでも良くなる」って。

で、まあ、同じく南斗の里の方で異端というか変わり者扱いされていたアミバとも仲良くなって、三人で馬鹿やったもんよ。
具体的に？
そうだなあ……、近所の家の柿を根こそぎ盗んだり、近所の犬にマジックペンで眉毛描いたり？
馬鹿やったの言葉の通り、馬鹿なことをしたんだよ。
それから……、そうだな。
やっぱり、学も必要だよなと思って、勉強をたくさんしつつ、金を稼ぐ方法も学んだんだ。
学が必要だと思った理由？
それはね……、本だよ。
北斗神拳道場から、秘伝書を盗んでジャギと盗み見したんだけど、俺は文字が読めなかったんだ。
でも、ジャギはある程度読めていた。
その時俺は、「知らない」と言うことは拙いと思ったんだ。
せっかく、苦労してリュウケンさんの目を盗んで、秘伝書を見たとしても、何も分からない。
「字が読めない」ただそれだけで、今回の苦労が全て無駄になった！と思った訳だな。
だから俺は、勉強をした。
そうすると、世の中のことが少しずつ分かってきた。
子供の俺が思ってるよりも、世の中ってもんは複雑だったと気付いたんだ。
そして、世界の全てを理解するには、俺はあまりにも矮小であることも……。
だから俺は、まず、必要な知識を取捨選択した。
必要なのは、生きる為の知識だ。
それは、サバイバル術であり、狩の技法であり、調理であり……。
そうして俺は、北斗神拳道場から半分独立して、自然の中で暮らし始めたんだ……。

５６３話　旅人の過去　後編

えっ？
まだ話を聞きたい感じなの？
そう？じゃあ、回想を続けるけど……。
あー……、でだ。
北斗道場から独立した俺は、独自の手段で金を稼いだりなんだりをし始めたのね。
まあ、色んなことをやったよ。
最初は新聞配達。
それと飲食店……、あ、東北は田舎だから子供でもバイトできたぞ。
次にガソリンスタンド、パン屋、本屋……。
幸い、俺は物覚えが良くてな。大抵の仕事は少し習えば簡単にこなしたよ。
けど、一つのことができると、また新しい壁ができることにもまた気づいたんだよ。
それが……、すっごく楽しくてさあ！
世の中には資格とかもあるじゃん？
そう言うのを集めるのにもハマってさあ。
そうして、「できないことをできるようにする」をコンセプトに、色んなところで色んなことをやり始めたんだ。
その過程で、色んな人に出会って、色んな経験をした……。
まず、俺は小学校はほぼ行ってないんだけど、リュウケンさん……、ああ、北斗道場の師範さんね。リュウケンさんのご厚意で、近くの小学校に籍だけは置かせてもらってたのね。
その小学校を卒業してさ。
妹も、だいたいこの頃には独り立ちしてて『待て待て！その頃の妹さんは十歳くらいじゃないか?!』……え？そうだね？
『十歳で独り立ちするものなのか？』って？いやー……、なんか知らんけど、妹はこの頃にはマサチューセッツ工科大学を飛び級首席で卒業して、アメリカで研究者になってたから……。

いや分からんけど、新台家の人間は、親としてはゲロカスだけど能力値は高いからね。
むしろ、俺みたいに目に見えない能力と言うか、経験値が多いのが特徴みたいなタイプの方が少なかったみたいだよ？
まあ、それは良いとして、そんな感じで俺は旅に出ていたんだよ。
男塾で死にかけた人を回収して蘇生する仕事とか、ノーステイリスで冒険とか、アサシン教団でバイトとかしながら、毎日楽しく暮らしていた。
そしてまあ……、うん。
この辺でやめとかない？
アッハイ、わかりましたぁ……。
あー、その、ね？
段々、女の人に興味とか出てきてさ。
で……、地元に、すっごく可愛い幼馴染がね、住んでてね。
東北ずん子っていう美少女がね、近くにね？
うん……。
学校も一緒でさ、口説きまくったんだよ。
女の子の扱い方は、ずん子に教わったと言っても過言じゃないね、うん。
……ここまで言えば良いでしょ？
『是非続きを聞かせてくれないか、提督』
『僕も聞きたいかな』
『初恋でちかー、聞きたいでちねー』
ウス……。
あー……。
あー。
はい！
まあね！俺もこの頃は童貞でね！色々と失敗をしながらも甘酸っぱい恋愛をしてね！
十四くらいの頃にずん子の家でね！その……、ね?!!
そう言うことだよ……。

『へえ……』
『ふぅん……？』
『そうなんデスかー』
あー！涼しいなー！冬だもんなー！暖房効いてないのかなー？！
……まあ、うん。
初恋の味はずんだ味でした……。

この話は良いでしょ？
とりあえず俺は、心からずん子を愛していたよ。
けれどずん子は、東北で一生を終えたいと望んでいた。
だから、別れた。
旅人の俺とは、やっていけないから。
どこへ行ってもそうだったよ。
色んな女の子と恋愛したし、結婚だって何度もした。
でも、駄目なんだ。
長続きしない。
俺に着いて来れる女の子はそうそういないし、俺も、女の子を置いて旅に出たくなっちゃうんだ。
結局、愛情よりも、旅に出たいと言う気持ちを優先する……。
新台家の人間らしい、ゲス野郎だね。
多分、子供ができた女の人とかもいるだろう。
お金はたらふく渡してから失踪するようにしてきたから、生活には困らないはずだけど。
でもまあ……、俺はクズだ。
色んな子がいたよ。
転移魔法のミスで出会った早栗。
リハビリを手伝う内に恋仲になったなのは。六課の子達も何だかんだで……。
軍内で働いている内に隣にいた芳佳。ネウロイ騒ぎ終わった頃にはみんな……。
セフレのパンティ。

魔術師として出会ったアルル達とか……。
幻想郷はもう、ね？
あとは、崩壊した世界で出会ったチトとユーリ……。
みんな……、みんな、置いてきてしまった。
確かに、辛そうで、大変そうで、可哀想だった。
だから助けた。下心もあった。
可愛い女の子は幸せになるべきだから。
そうやって助ければ……、まあ、惚れられちゃうんだよな。
そして、それを受け入れちゃうんだよなあ……！
その後、失踪するんだけど。
『提督は、悪くないさ。捨てられる女が悪いんだ』
それは違うよ長門。
時代や環境のせいじゃなくて……。
俺が悪いんだよ。
『本当に愛しているならば、全てを捨てて貴方を追うはずだろう？そうしない女など……！』
違う、そうじゃない。
それが人間なんだ。
愛という言葉で、やりたいことを諦めて欲しくないし、俺も諦めたくない。
……彼女達には今でも会うよ。
もちろん、会えなくなった子もいるけどね。
恐らくは俺の子であろう、子供を抱えていることもあった。
けど、彼女達は……、俺の重荷にならないようにと……！
「預かっている親戚の子だよ」だなんて言って……！
はぁ……、罪悪感やべー。
それなのに、平穏な生活に耐えられないとか、俺はおかしいな。
『……ん？昔の女に、まだ会っているのか？』
ん、ああ、まあ、年に一度くらいは顔を見せに行くよ。あと、困ってたらお金出すし、ツテも使うし……。
『……それは、捨てたとは言わないのでは？』

そうかね。
まだ愛したいなどと……、すっぱり捨て去るような潔さもないなと自嘲するよ。
『それで良いだろう。貴方は、貴方がクズだと罵る親とは違い、定期的に顔を見せにきてくれるんだ。女達は喜んでいるよ』
そうかなあ……。
そうだと良いな。

『ところで、昔の女について詳しい話をだな……』
あえーっと……。
ちょっとだけだぞ？
ずん子は今はユーチューバーやってるんだけど、本職は農家でな……。

５６４話　ＱＭＫ

「さようなら、天（津風）さん。どうか死なないで……（Ｃ４自爆）」
「提督ーーーっ!!!」
どーん！

いやーーー。
アレですよ、アレ。
ＱＭＫです。
急にムセギジャジャが来たので。
ＱＭＺではない。
赤いジャギではない。
いやアレ……、アレなんすよ。
詳しく話すと長いんですけど、この世界ではその辺にいきなりグロンギのムセギジャジャやらオルフェノクやら魔化魍やらファンガイアやらがさも当然と言ったツラで湧いて出るのが当たり前、あたりまえ体操なのでございます！
都心圏で生活していたら、怪人の怪しい殺人儀式（ゲゲル）に巻き込まれるし、田舎に引きこもれば魔化魍に食われる。
じゃあ海外は安全なのかって？
そのようなことはあろうはずがございません。
日本から、こんな危険な国にいられるか！俺は海外に高飛びさせてもらう！と逃亡したとしよう。
マフィア！吸血鬼！悪魔！ヴィラン！いろいろあります邪悪な存在！
海外にいれば安全だと、その気になっていたお前の姿はお笑いだったぜ、と。
そうなる訳だ。
そんな訳なんで、どこにいても死の確率は一定なので、好きなところで暮らして、好きに生き理不尽に死ぬべきなんだ！（＾ｏ＾）という話になっているんだね。

悲しいなあ……。
現に今も、天津風とラブラブデートの最中だったのだが、いきなり現れた怪人『グロンギ』が暴れ始めたので、俺が身を挺して倒したところだった。
俺渾身の流星一条（Ｃ４自爆）によりミートくんのごとく砕け散った五体。
生首は、青少年なんちゃらかんちゃら条例的なやつに配慮され、即座にゆっくりに変換される。
……だが、受け身？に失敗して、ポールに刺さってしまったゆっくりの俺。
「ゆっくりしていって……だんごさんきょうだい！」
「あなたは一人よ」
おっと……、天津風から冷静なツッコミを頂いちゃったな。
いつもは俺が突っ込む側なのに。物理的に。
「ぬいてね！ぬいてね！」
「ええ」
ずろろっ！
うおお、中身のクリームが漏れちゃう！
「た、たすかったよ」
「助かってないのよねえ……」
まあそれはそう。
五体が砕け散ってる訳だし。
こうなったら肩に星形のアザがある人の肉体を乗っ取るしか……。
来たか、ボディ！みたいな。
何も来てねーよ。
「あえ？」
ん、頭が冷たい。
これは……。
「エリクシールよ。あなたったらいっつも死ぬから、持ち歩いてるの」
あっふーん？
そんな、子供のオムツ感覚で蘇生薬持ち歩いてるんだ。

まあ、女の子のカバンには色々入ってるからね、ちかたないね。
スマホと財布ありゃ別にええやろ！ってのは男性の考え方なのだね。
なんにせよ復活！
「かたじけねえ……、かたじけねえ……！」
「良いのよ」
「わちきゆるされた！」

無事復活した俺は、天津風とのデートを再開する。
いや本当にね、俺の仕事はもう、艦娘の慰安くらいしかできないんだもんね。
まあ、元から、頑張るヒーロー達のバックアップや援護がメインだったので、元に戻ったというべきかな。
そんな訳で、デートも仕事のうち！
最高ですよ、デートしてるだけで給料がもらえるんだから。
まさに天職だ。
悪いのは世界、世界の方だよ。
俺は単にデートしてるだけなのに、なんかヤバいのが色々湧いて出る。
俺なんて単なるちいかわ（地位が低くていくらでも代わりがいるやつ）に過ぎないのに、色んな奴が狙ってくる。
いかに……。
いかに俺が、世界最強の武装集団である黒井鎮守府の大首領にして、日本の総理大臣からアメリカの大統領まで幅広い人脈があり、財団の非常勤で、アギト因子持ちで、特異点で、禁術指定魔術を使う魔術師で、プレインズウォーカーで、神話的存在との伝手を持ち、ソウルの業を使い、啓蒙が高く、リンカーコアがあり、デビルサマナーで、対魔忍の経験があり、超能力者で、Ｓ．Ｈ．Ｉ．Ｅ．Ｌ．Ｄ．の非常勤で、鬼の資格持ちで、世界を守るスーパーロボット部隊の最大手スポンサー兼責任者で、アサシン教団関係者だと言えども！
だと言えども！

襲いかかってくる奴が多い、多過ぎる！
一体俺が何をしたって言うんだ！勘弁してくだち！
本当に参っちゃうよねえ。
さっきのグロンギと会話した感じだと、今回のムセギジャジャのゲゲルはリントをバギング・バギング・ドググド・バギング・ドググ殺すことで、俺とクウガさんなどは特別なカウントでバギング・グシギド・ゲギド分になるらしい。
え？分からない？
分かりやすく言うと、殺人儀式に巻き込まれて、殺したらポイントが高いレアキャラ扱いされてるってことだね。
泣いていい？
各方面からレアキャラ扱いされてるからね、本当にね……。
「と言うより、貴方が戦わなくても良かったでしょ」
「え？」
「え？じゃないわよ。あの後、秩序側の……、ええと、仮面ライダー？とか言うのが来てたじゃない。あいつに任せれば良かったのに」
あー。
まあ確かに、素晴らしき青空の会が最近開き直って量産しているイクサギアの使い手が来てたっけな。
７５３じゃなくて、一般通過イクサだが。
最近多いんだよね、そういうの。
グロンギは、ダグバは死んだが、ダグバの後釜を狙う残党が極めて多い。
テオスは……、アギトさんがどうにかしてくれたが、アギトの力そのものは何だかんだで地上に残った。マラークはもう出ないが。
ミラーワールドの件ももう終わったし……。
スマートブレイン社も『表向きには』なくなったよ！『表向きには』!!……つまり、影に潜って活動しているオルフェノクが山ほどいるんですね、勘弁してくれ。
アンデッドの件は、ケンジャキさんがジョーカーと化して世界を放浪している。

魔化魍？あれは定期的に出るよ。そう言うもんだからしゃーない。あれも一種の悪魔だし。
ワーム！イマジン！ファンガイア！います。
ヤミーはもう出ないがドーパントは出るなあ。
ゾディアーツはもう出ないかな？
そもそもショッカーが健在だし、ゴルゴムも滅んでないし……。
なんか知らんけど、各方面から的にかけられてるっぽいんだよねえ……。
まあそんな訳だが、秩序側もアホじゃない。
警察はＧ３システムを一般配備してる。今では、交番に一つはＧ３がある有様。
アギトやギルスもまあ、言っちゃえば進化した人類な訳で、臨死体験したついでで目覚める人とか多いし……。
鬼も最近は増加傾向にある。
素晴らしき青空の会は、資本パワーを使ってイクサを増やしている。
あ、後は、ファイズ君がスマブレ本社にカチコミした時に、俺がこっそりライオトルーパーの設計図をパクってきたから、ライオトルーパーは一般発売されてるよ。……黒井鎮守府で。
鴻上ファウンデーションは、バースシステムの廉価版みたいなのを売ってるみたいだし、ライドベンダーもその辺に置かれてる。
まあつまり、俺が必死になって戦わずとも、他に戦ってくれる人はいるのだ。
だが、ねえ？
「今この瞬間、この場所には俺しかいなかったんだし、俺がどうにかしなきゃならんでしょ？」
と、そう言う訳だよ。
「……別に、その辺の顔も知らない人が死ぬくらい、どうでも良くないかしら？」
うーん、そうか？
「例えばさ、さっきお茶したカフェの店員さん」

「はい？」
「俺たちにさ、『可愛いお子さんですね』って言ってくれたよね。まあ、お子さんではないけど、優しくて良い人だった」
「え、ええ、そうね」
「例えば、さっきのレストラン。サービス良かったよね。また行きたくなるような、良いお店だったね」
「ええ……」
「確かに、顔も知らない、地球の裏側にいる恵まれない子供が！とか言われても無関係だと思うけどさ。こうして、出会った人、良い人達をさ、助けたいじゃない？」
「私は……！」
「もちろん、言いたいことは分かってるって。でも、これは、俺のわがままだ」
　俺が流星一条（Ｃ４自爆）するだけで、知り合った良い人達を助けられるなら、やるでしょ？
　死なない（死なないとは言ってない）んだからさ。
「……もーっ！馬鹿ねえ！もっと器用に生きなさいよ！」
　そんなん言われましても……。
「努力はするよ」

５６５話　迎春！黒井鎮守府隠し芸大会！

「春うららのうららって何です？アパッチの雄叫び？」
「プリキュアじゃね？」
「ウマでは？」
「馬の話はやめなってマジで」
などと、明石と夕張と頭の悪い話をしながらおこたでぬくぬく。
あっ、あらかじめ言っておくけどぬくぬくは温かくしているって意味で、抜く抜く的なことではない。
いや、おこたで抜く抜くとか大変にエロくて素晴らしいな。
今からでもやってもらおうか？
俺は『瞳』を使って、おこたに入っている明石と夕張の脚を見る。
艶かしい。
良き。
このまま足で抜く抜く……、ん？
大淀だ、え？何？
「黒井鎮守府、新春隠し芸大会……？！」
「はい」
それは、なんとも、まあ……。
キケンな香りがするやつですね……。
え？
そもそも君達に隠し芸とかあるの？
駄目だよ本当に。
人の小腸引っ張り出してあやとりー！とか言いそうだ。
そんな装甲悪鬼なやつは見たくないです……。
アクア様みたいな水芸とかにしてよ？
少なくとも俺が痛くないやつにしてね？
……本当に大丈夫？
妲己みたいなことしない？
人肉ハンバーグとか作らない？
あ、なお、俺は参加しない。

何故なら俺は存在そのものが隠し芸みたいなもんだからだ。
ユーチューブにアップするから平穏に終わらせてね？
頼むよ？

「一番、足柄さん」
「はい！ナイフ投げやります！」
俺が壇上の板の前に立たされる。
「提督？」
「はい」
「動かないでね？」
「はい」
そして、足柄は目隠しして……。
次の瞬間、足柄の腕がブレる。
一度に五本のナイフを両手で十本投げ、俺に刺さらないように後ろの板を……。
「おお……、やるね」
板にナイフが刺さった。
しかもこの板、鉄板だ。厚さ1センチくらいの。
隠し芸ってか殺しの技だけど……、まあスルーしておこうか。
「二番、ウォースパイトさん」
大淀のアナウンスと共にウォースパイトが前に出る。
「そのまま、そこに立っていてくださいね」
「おう」
俺の背後には鉄板がある。
「はあっ!!!!」
ウォースパイトが俺の土手っ腹に掌底をかましてきた。
だが、俺にダメージはなく……。
メメタァ！という擬音と共に、背後の鉄板に風穴が空いた。
「ふむ……、波紋か」
「ふふ、ご名答です」
そういや、ウォースパイトは波紋の使い手だったな。

ウォースパイト程の使い手からすれば、波紋を流して特定のものだけを破壊するくらいお手の物だ。
波紋の腕前は既に俺以上かもしれない。
「三番、長門さん」
「うむ！提督！聞いてくれ！」
聞いてよ提督チャン！
「何だい？」
「ジャグリングを覚えたのだ！是非見てくれ！」
おー！
凄いね。
偉いぞー。
「どれ、見せてごらん」
「おう！外に出てくれ！」
んー？
外には、ヤークトティーガー（七十五トン）が３台駐車されていた。
んんんー？
んー？
「行くぞー！」
んんんんんー？
ヤークトティーガーが片手で持ち上げられる。
「ほっ、やっ、とうっ！」
ヤークトティーガーが空中で踊る。
俺は一体何を見せられているんだ？
ゴジラの一発芸か何かか？
えっ、怖い。
力こそパワーなんだなあ。
「四番、ポーラさん」
ふむ？
「ここにワインがありますね～？」
うんうん、ありますねえ。
「そしてここに、私ごと布をかけて……、ウーノ、ドゥーエ、トレ！ジュ

ルッ」

ジュルッ？

ジュルッって何の音？

ねえ、何の音?!

「このように～、ワインは空っぽになってしまいました～！不思議～！」

わあ！

不思議～！

……あ、ザラに捕まった。

え？何々？

……「ポーラっ！今年いっぱいは禁酒する約束だったでしょっ!!!」

……「ち、違いますよ～？ザラ姉様、これはマジックですよ～！お酒が消えるマジックで～！」

……「そんな言い訳が通用するとでも思ってるの?!今日という今日は許さないからっ！」

……「ひ、ひえ～！」

……「あ！待ちなさーい！」

あ、逃げた……。

「気を取り直して五番、時雨ちゃん」

お、時雨だ。

??何やるのかな？

「???の????を????するよ」

「??ちょっとカメラ止めて」

「まず、??を????して、?????するんだ」

『ギョェエアアアアアアアア!!!!』

「は!!!して、???に???と?????を加える!!」

『????』

??????ああっ?????を?????しやがった?!!!

ヤバい!!?????このままだと、?????が????????になるぞ!!!

うわあ?????!!!が練り歩いてるぅ?!!

ああああ！ああああ！あー!!!!

《記録終了》

５６６話　前掛けと前貼り

ちんちんかもかも。
かもかも。
新年明けましておめでとう。
とは言え、そんなことは良いんだ、重要なことじゃない。
俺は、新年早々神威を呼び出した。
「ちんちんかもかも」
「……はい？」
艤装のまま呼び出したのだが……、おおっ！クレージー！
何ですかあのちんちんかもかもは！
ご禁制ですよご禁制！
「黒井鎮守府が作ったアーケードゲーム、『艦これアーケード』というものがあります」
作りました。
艦娘が普段何をやっているのかを周知する為に、ゲームを作って売り捌きましたのよ。
「はい」
で。
「こちら、そのスクショになります」
そこには、前掛けがかなりエグいラインまでめくれて、明らかにノーパンな神威の鼠蹊部が!!!
「いけませんねぇ……、ノーパンなの？」
「ち、ちがっ……！ゲームではそうなっているのかもしれませんが、私本人はちゃんと穿いてます!!!」
「まことに？」
「本当です!!!」
でもなあ……。
前掛けが戦闘服の女の子の言葉は信じられないなあ。
申し訳ないが、前掛けだもんなあ？
前掛けの女は信じるなってのが親の遺言なんだよね。

親に会ったことないけど。
「前掛けめくっていい？」
「構いませんが……」
「が？」
「そういうことをされると、気分が高まってしまいます♡」
なるほど……。
会話の前にイかせると、淫乱ルートに入るってことか。
往年のエロフラッシュみたいだあ（直喩）
えっ?!壁尻状態の神威を?!
もしくは謎のロボに神威を改造してもらうか……。
ブロック崩し……。
特定部位をクリックするとふたなり化……。
いかんいかん、どうしようもない記憶ばかりが蘇ってくる。
今の本題は、神威がおぱんつを穿いているかどうかなはずだ。
「オープンセサミー！」
ぺらっ。
おおっ、これはっ！
「……褌？」
六尺褌だ。
ケツ丸出しの。
「私は褌派ですから！」
ふふん！と胸を張る神威。
なるほどね、完全に理解した。
つまり、ノーパンの神威なんていなかったんだね！
……冷静に考えれば、褌も相当に卑猥だが。
何ですかこれ、かわいいオシリが丸出しじゃないですか。
あー、いけませんいけません。
「……提督の命令なら、私もノーパン艦になりますよっ♡」
「ノーパン艦って何だよ」
艦種みたいな言い方は……やめロッテ！
ってかノーパン艦なんて大淀と利根くらいしかおらんやろ。

……おらんのよね!!!
パンツ穿いてねぇ艦娘?!!!……、いねぇよなぁ?!!!
と、俺が、執務室にて、神威の前掛けをめくり、褌を凝視しながら考え事をしていると……。
「……何をやっとるんじゃ、提督」
利根が来ていた。
「神威がノーパンなんじゃないかと……」
「そ、そうか」
「あっ、利根はノーパンじゃないな?」
公式がノーパンじゃないってゆってた!
資料集見たもん!
「うむ!吾輩は穿いておるぞ!」
ほら!
利根は穿いてる!
えらい!
だが……、俺はつくってあそぼを見てきたからな。
心の中のゴロリが「ほんとかなぁ?」と言っている!
よって、利根の前掛けもめくる。
これは検証という崇高な目的意識を持った科学的な活動なので、猥褻は一切ないです。
「オープンセサミ!」
ぺらっ。
おおお!!これは!
「前貼り!!!?!?」
ピンクのハート型前貼りだった!!!!
何だこれは!!!?
どう見たって変態洗脳後じゃないか!
まともなのは僕だけか?!
畜生!誰だ?!
誰が、純粋無垢な利根を誑かしたんだ?!
俺ですね、本当にありがとうございました。

それにしたって前貼りはないでしょ!!!
これは穿いているとは言わんぞ!!!
念のために上着も半脱ぎさせ、乳首を露出させる。
……乳首ものピンクのハート型ニプレスだ。
オアアアアーーーッ!!!!
ふーん、えっちじゃん。
「これは、何かな？」
俺は、努めて冷静に、利根を問い詰めた。
「おお、鹿島に選んでもらったのじゃ」
あの淫魔め！
絶対に許さない！とっととお家に帰りなさい！（プリキュア感）
だけど、純粋無垢な利根が、ドキついテカったピンクのハート型前貼りと二プレスをつけているとか、大変にえっちなので、あとでこっそり褒めます。
ってかそれより……。
「利根」
「何じゃ？」
「前貼り、毛の上から貼ってるの？」
割ともさっとした毛の上から、雑に前貼りが。
剃らないで良いのかな？
剥がす時痛くない？
「うむ、大丈夫じゃな。艦娘の毛根は途轍もない丈夫さじゃからのう！」
「ムダ毛処理とかどうしてるんです？」
これは知的好奇心による質問であり、猥褻は一切ない。
フィーヒヒ！利根のおけけ！意外とフワッとしておりますなぁ！
……猥褻は一切ない。
「うむ、剃っておる者は、ミスリル製のカミソリなどを使っておるらしいぞ？」
なるほどなあ。
また一つ知識が増えた（トリビア）

「因みに、海外艦なんかは、『現代化改修（意味深）』で肉体を改造して、生えないようにしているそうですよ」
と、隣から神威がアドバイス。
そーなのかー。
……ん？
「それじゃなんで、貧乳の艦娘は自己改造しないんだい？」
「それはまあ……」
まあ？
「提督が『おっぱいに貴賤はない』って言ってるし……」
うん、そうね。
「まあ、提督がお望みならば、私達はどんな姿になっても構いませんけどね！」
「うむ！蛆虫になれと言われれば、今すぐにでも肉体を作り替えてくるぞ！」
「そんなことしなくて良いから……（良心）」
狂信者かな？
いきなり「闇」を吹き出すのは勘弁して……。

５６７話　しぐにゃん

朝……。
起床した時から。
いや、僕の意識は、起床する前から。
それどころか、二十四時間ずっと、最愛の人に向けられている。
仕事で遠出、実験中、戦闘中。
それでも、意識の何割かは、常に提督に向けているんだ。
ああ、提督。
僕の、僕達の最愛の人。
初めにしてもらったことは、地獄からの解放。
けど……、僕達は、漫画やアニメのヒロインのように都合のいいキャラクターじゃあない。
助けられたから、そこからすぐに恋とかそういう話にはならなかった。
けど、すぐに。
そう、すぐに。
提督は、僕達の心を蕩けさせていった。
優しく触れてくれる。
壊れ物を扱うかのように。
愛してくれる。
『艦娘』でも『化け物』でもなく、一人の人間として尊重してくれる。
上辺だけじゃないんだ。
心から、僕達を愛してくれている。
僕達、艦娘は、どう取り繕っても化け物だ。
定義的には、デビルサマナー達が使役する悪魔と何も変わらない。
折り重なった人々の祈り、破滅回避の為の『アラヤ』からの抑止力でありつつ……。
その癖、僕達の中身は、当時の船員の記憶や能力がパッチワークのように繋ぎ合わされた急造品で。
更にそこに、付喪神の要素をも取り入れて、霊核を調整し。

最後に、人肉に近しい肉の器を作り、そこに霊核を埋め込んで、出来上がり、と。
そんな、キメラのような作り物の僕達を。
愛して……、愛してくれているんだ。
それが、僕達にとってどれほどの救いになるか……！
自己の記憶すらはっきりとせず、慣れない肉の器に戸惑い、ヒトでも兵器でもない「ナニカ」であると自覚した時！
どれほどの、どれほどの恐怖を感じることか！
「滅びたくないから何とかしろ」という、我儘なニンゲンの無責任な祈りで急造されたつぎはぎのフランケンシュタイン！
それが艦娘だ！
それを、それを……！
愛してくれているんだよ、彼は！
それだけじゃない、つぎはぎの僕達に、新しい布をくれた！
布の名前は「人格」といい、それを作るために、「趣味」「嗜好」「好悪」と言った道具も与えてくれた！
不完全な僕達を、ここまで作り直して、ここまで愛し続けてくれた提督を、何故嫌えようか?!
ああ、ああ。
愛してる。
愛してる、愛してる、愛してる。
神学者の語る最上位の天使は、溢れる神への愛で全身が燃えており、それを羽で隠しているのだという。
僕もそうだ。
愛している。
捧げたい、全てを。
彼の為なら、比喩ではなくなんでもやる。やってみせる。
しかし、彼はそれを望まないだろう。
だから僕は、理性の翼で燃える愛を抑え込む。
それとこれとは別で、提督の窃視はやめられない。

『瞳』にて、早朝の提督の心を覗き見る。
「ほあようございあーしゅ！」
ふふ、おはよう、提督。
ああ、やはり、『瞳』はいい。
愛する人のことが、よく見える。
よく、分かる。
「オッスオッス、しぐにゃんも起きてるかー？」
ふふっ、しぐにゃんだって？
後で猫耳を用意しておこう。
「おはようのチューしてほら」
ちゅー。
「ヒャア！最高！今日も一日頑張るぞい！」
そうだね、頑張ろうね。
さて……、そんな朝の提督は、何を考えているのかな？
《――キンキンキン！》
……は？
《「――」これ使えば……、稚拙な文章でもかっこよくなるんちゃうか？》
えっ、は？え？
《――朝メシ》
《――どうすっかな……》
《――やっぱり》
《――冬やし、あったまるもんを……》
《って、こりゃファブルやないかーい！ＨＡＨＡＨＡＨＡ！》
ふ、ふふふ。
流石は提督だね。
思考は読めても、意味は不明だ。
こうも分からないと、逆に好奇心がグングン湧いてきてしまうじゃあないか。
『理解』したい。
僕は君のことをもっと知りたくなってしまったよ。

「やめとけ！・やめとけ！・俺は頭がおかしいんだ！」
まあそれはそうだね。

今日は、提督が、白露型の研究成果を見に来てくれたみたいだ。
今回は、外道・スライムを込めた弾丸を敵対者に撃ち込み、擬似的な悪魔合体を成立させ、敵対者を崩壊させる武器について発表させてもらった。
「怖スギィ!!!」
大丈夫だよ、提督。
恐怖なんてすぐになくなるんだ。
僕は、提督を抱きしめて、言った。
君が怖いものは、僕が全部消し去ってあげるよ、と。
それとも……、怖いのは僕かい？
「はい？・何でしぐにゃんが怖いのよさ？・」
嫌味じゃないけど、僕はもう、君より強いよ。
怖くないのかい？
「特には……？・アッ！・おぱんていは怖いなぁ！・しぐにゃんのおぱんていは怖い!!!見せられたら大変なことになるなぁ!!!いやー!!!おぱんていは怖いなぁ!!!」
ああ……、これだ。
提督は、馬鹿だ。
でもそれは、考えなしとか、危機察知ができないとか、そういう意味じゃない。
僕を信頼してくれているんだ。
こんな僕を……、化け物の僕を。
僕がどんな存在か理解した上で、それでも正面から好きだと言ってくれる。
僕は、そんな愛する人の信頼に応えたい。
それに、僕だって女だ。
愛する人といちゃつきたい。
ほーら、提督？

しぐにゃんのおパンツですよー。
「ヒャア！縦縞！」
ああ……、もう、本当に。
こんな人だから。
だからこそ、愛せるんだ。
全てを捧げたいと思えるんだ。
ほら、来て、提督？
今日は、白露型の全員で「お相手」するよ……♡

５６８話　ひみつひみつひみつひみつ

俺、実は弁護士バッチ持ってるんだよね。
でさ、知り合いの青いツンツン弁護士がさ、問い詰めるのが上手くてさあ。
そんなことをふと思い出したんだけどね、その時に俺は気づいちゃったのだよ。
アイデアロールクリティカルなのよ。
艦娘を問い詰めたらどうなるか?!
艦娘を問い詰めて、秘密を知りたい！
レディの秘密を暴くのは紳士的ではないが、今日の俺は紳士ではなくｋｅｎｓｈｉなのでＯＫです。
風の噂によると、サウナに入るとパワーアップできるとかなんだとか……。
まあそんなことはどうでも良い。
いいから詰問だ！

まず執務室に呼び出したのは……、加賀！
「加賀」
「はい」
「怒らないから、何をやったか言ってくれるかな」
「え……？私は何か粗相をしたかしら？」
「思い出してごらん？」
「も、もしや……、体重のこと……？」
「体重は何キロあるんだ？」
「きゅ……、九十二キロよ……」
おっふ。
「で、ですが！赤城さんは三桁行っています！私はまだマシな方ではないかしら?!」
おっふ。
加賀を抱っこしてみる。

……ずっしり。
加賀の上着をめくってみる。
……二段腹。
加賀パンツをめくってみる。
……もじゃ。
なるほどね、完全に理解した。
「こーれはいけません」
「うう……」
「何ですかこのずっしりむちむちはー」
「ご飯が……、ご飯が美味しくて……」
「おけけも臍下まで来てますねぇ……」
「剃ってもすぐ伸びてしまって……」
「脇も剃ってないですねえ……？」
「すみません……、冬なので油断していたのよ……」
「あーいけませんいけません、これはいけませんよーいけません」
俺は、加賀脇の匂いを嗅いでおいた。
あーーー、これはいけませんねーーー。
あーーー、いけませんねーーー！
堪能したので、もうちょい痩せなさいと言いつけてリリース。

次は、睦月を呼び出した。
「にゃしい」
「この世界線では言ってないよ」
「はい」
「で？なぁに？」
「睦月……、お前、俺に言ってないことがあるんじゃないか？」
「えっ……？」
「お前が何をしたか……、分かってるのか?!」
「も、もしかして……」
おっ？何だ何だ？
「睦月の、ア○ル開発グッズ、見たの……？」

おーーーっとぉ？
これは……、おーーーっとぉ????
「えへへ、バレちゃった？最近、あっちの穴を開発してて……、提督のおっきいのを受け入れる為に色々と……」
「あえぇあ……、いやその……、うん！が、頑張れ！」
「もう一番太いの入るようになったんだー！早く提督に、後ろの処女をもらってほしいにゃ～♡」
あおおん……、おおん……。
「因みに、誰の発案？」
「そんなの、睦月型一のド淫乱、如月ちゃんに決まってるよ！」
許されませんなぁこれは。
如月は後でお尻ぺんぺんだ！
……多分悦んじゃうと思うけど。

今度は、古鷹を呼び出した。
「古鷹」
「はいっ♡」
「何か俺に隠していることがあるだろ？」
「？」
「分かってるんだぞ！」
「ええと……、何のことでしょうか？」
「隠しているんだろ?!」
「す、すみません……、本当に何も思い浮かびません……」
あらまあ。
本気で裏表ないんだね、古鷹は。
やっぱり天使じゃないか！
大天使フルタカエル！
……だが、この世界の天使はカスなので、天使に例えるのはなんか嫌だな。
奴らは極ＬＡＷだもんげ。碌なことせんぞ。
その点、フルタカエルってすげえよな。最後まで愛たっぷりだも

ん。
　やっぱこれだね、黒井鎮守府の古鷹。
「本当に隠していることはないのか？」
「はい、ありません。提督には何でも話しています」
　んーーー。
「ごめんねえ古鷹ーーー！」
　俺は、古鷹に抱きついた。
「きゃん♡」
「ごめんなあ、ごめんなあ。艦娘の隠し事とか暴いてからかおう！みたいなノリだったんだよ」
「そうなんですか？」
「古鷹は良い子だな、隠し事なんかない良い子なんだなあ！」
「そんな、私なんてまだまだです」
「んまーーー！良い子や……、天使や……」
「えへへ……」

　やっぱり天使やったんや……。
　天使に触れてふわふわタイムを堪能した。ご飯はおかずにはならない。
　さて次は、明石を呼び出した。
「明石ィ！」
「ひゃあい?!」
「隠してるよな？」
「な、何故それを?!隠蔽は完璧だったのに?!」
　明石君ボロ出すの早いよ！
「言え！」
「ど、どの件ですか?!」
「全部わかってるんだぞ！言え！」
「予備予算使って勝手に新しいロボット作った件ですか?!」
「言え！」
「じゃ、じゃあ、東京のガンダムを本物とすり替えた件ですか?!」

なーにやってんだこいつぅ！
「言え！」
「もしかして、寝てる提督の乳首を舐めていたのバレましたか?!」
なーーーにやってんだマジで?!
「でも、チ○ポは当番制ですし……」
えっ何それこわい。
寝てる間の俺、何されてんの????
寝てても敵意には気付ける自信はあるけど、寝てる間にセクハラされてたら多分分からんぞ……。
毎日艦娘と添い寝してるし……。
「言え！」
「それなら、アダルトゲームと偽って、マグネタイト収集機を売り捌いてることとか？」
「言え！」
「まさか、大規模異界を確保して、そこで悪魔相手の商売をやっていることもバレましたか?!」
ほうほう、なるほどなるほど……。
「明石はそんなことをしていたのか……」
「えっ……？あーっ！提督！ハメましたねーっ?!ハメるならこっちをハメてくれれば良いものを！」
そう言って、明石はスカートを捲って股を開く。
「そっちもハメるが、まずはお仕置きからだ！」
「な、なんですか?!お尻ぺんぺんですか?!私はマゾ寄りなので、提督にお尻ぺんぺんされたらかなり興奮しますよ！」
「お仕置き担当、長門さーん」
「え”っ」
「呼んだか、提督」
長門が執務室に現れる。
「明石君にお仕置きをしてあげたまえ」
「了解した」
「う、うわあああああ!!!」

悪は滅びた……。

569話　メスガキの極み　その1

『ざぁーこ♡ざぁーこ♡』
「うむ……」
俺は、スケベ同人音声を聞いていた。
今トレンドの「メスガキ」ものだ。
なるほど……、メスガキ。
メスガキというものを出せば、ドッカンドッカン大ウケって訳だな？
よし、メスガキを集めるぞ！

「電」
「はいなのです！」
「メスガキになって♡」
「???」
メスガキについて教える。
「わ、分かったのです」
数十分後……。
少しケバい感じのメイクをしてきた電は、俺の前で胸を張りながらこう言った。
「ざーこ♡ざーこ♡なのです♡」
「オッ、良いねえ！」
しかし……。
「う……、やっぱり無理なのです！大好きな司令官に悪口なんて言えないよぉ！」
と、ギブアップが入った。
くっ、良い子過ぎたか……。
だが、ロリがケバいメイクをして偉そうにしているのは、なんというか背徳感があって良いかもしれない。
艦娘は化粧などせずとも美しい、反則的な美女ばかりだが、化粧をしても美しさに翳りはないのだ。

マスカラアイシャドウ口紅チーク、その辺りを濃くして、更に髪型も盛る！
……因みに、最近のギャルはナチュラルな清楚系の方がウケがいいから、そう言う方向性らしいぞ。
黒ギャルとか言うものはもうこの世に存在しないんだ、悔しいだろうが仕方ないんだ。
みんなは、黒ギャルが周りにいない時どうするかな？
そうだね、粛清だね。
いや粛清じゃないね、とりあえず、手近な女の子を黒ギャルにするのが賢い答えだね。
「うまあじ派はかしこいな」の格言と同じだよ。
自分でも何言ってるか分からなくなってきたが、電という大人しい少女を黒ギャルに改造したことで、背徳感で大変に興奮してきたってことは伝えたい。
分かる？
黒ギャルだよ？
黒ギャル化電！
おっ、ＮＴＲかな？
闇堕ちやんけーーー！
「うう……、司令官はこんなのが好きなんですか？」
黒ギャルにされて恥ずかしがる電。
「これはこれでアリなんよ……」
「良い子より悪い子の方が好きってことなのです？」
「どっちも好きだよ。電なら、悪い子になっても可愛いし」
「じゃ、じゃあ、ちょっとだけ悪いこと……、しても良いですか？」
「構わんよ」
んんー？
何をするつもりかな？
まあ、電だからな。
そんな酷いことせんだろうよ。
「えい」

おっ、押し倒された。
「きゃー♡司令官さんを押し倒しちゃったのです♡」
え？それだけ？
「こういうの、ぎゃくれいぷ？って言うんですよね？響ちゃんが言ってたのです！」
おっと、響はお仕置きリスト入りだな。
「れろぉー♡」
胸板を舐められる。
「えへ、おいし♡」
おおっと？
この雰囲気はヤバいな。
このままではＵＮＥＩに消されてしまうやもしれぬ。
「電さん、ちょっと待って」
「えへへぇ、だーめ♡」
あ、そっかあ（超速理解）
駄目なら駄目でしょ。
電は、俺に馬乗りになりながら腰を動かし始めて……。
わっふるわっふる。

いやー、いけませんねこれは。
次行こう次。
「メスガキになって♡」
「分かったわ！」
二つ返事を返すのは雷。
流石は雷だ、判断が早い。
「それで、メスガキって何かしら？」
「メスガキとは……」
……
……
……
「ええっと、つまり、私の人格が気に食わないから、新しい人格に変え

たいってことね！」
「うーん、全然違う！」
なあーんでそんなＯＳ変えます！みたいなノリで怖いこと言えるんすかね?!
「大丈夫よ！次の私も役立つように頑張るから、司令官は安心して使い捨ててね♡」
ヒェ……。
ガンギマリ目やめちくりー。
「い、いや……、そう言うんじゃないから！俺はただ、雷が生意気なメスガキみたいなコスプレをして、それっぽいことをするプレイがしたいだけなんだ!!!」
「分かったわ！」
はい、黒ギャル化！
「ざーこ♡ざーこ♡」
「オッ！良いねぇ！」
「アンタみたいな甲斐性なしは私に養われてりゃ良いのよ♡」
「オ？」
「司令官とか、お金あげてセックスしてあげて養ってあげれば文句言わないんだもん♡馬鹿みたーい♡」
「オ……？」
「ちょっとご奉仕するだけで中出ししてもらえるとかチョローい♡」
「ちょっと待って微妙にメスガキじゃない！」
「そ、そうかしら……？違うの？」
「違うっすねえ……」
メスガキでは、ないねえ……。
「でもね司令官。私、思うのよ」
「はい」
「私、最近全然何もやってないのに、司令官に構ってもらえるとかおかしいわ！チョロいって思われても仕方ないわよ？」
んん？
えーと……？

んんん？
「つまり、どういうこと？」
「あのね、司令官？私達は、司令官に構ってもらえるのがなによりも幸せなの。働かない艦娘は冷遇しても、誰も文句を言わないわよ？」
「いやそんなことしないけど……。みんな良い子じゃん……」
「司令官にご奉仕できるっていう最高の栄誉を、こんな簡単に与えちゃ駄目よ？もっと自分の価値を高めて、艦娘をうまく使い潰さなきゃ！」
何言ってんの……？
怖……。
「そんなことしないよ。俺と遊ぶのが幸せだって言うなら、いくらでも時間を作るから……」
「ダメよ！司令官はもっと自分の時間を大事にして！」
「俺もみんなと遊ぶの楽しいから大丈夫だよ」
「司令官……♡」
「そもそもさ、雷が好きになってくれたのは、艦娘のみんなと仲良くする俺なんじゃないの？」
「そ、それは……」
「だからこれからも、仲良くしよう？どっちが偉いとかどうでも良いからさ」
「もうっ、司令官ったら……」
よし、楽しく話せたな……！
《パーフェクトコミュニケーション！》
「それはそれとして、立場的には偉い人だから、それ相応の態度を取る方が良いわよ」
「まあそれはそう」

５７０話　メスガキの極み　その２

メスガキ！それは、聖なる力。
メスガキ！それは、未知への冒険。
メスガキ！そしてそれは、勇気の証！
つまりそういう訳で、今日も俺は艦娘をメスガキギャル化をさせちゃうんですね。
「理解したか？」
「よくわかんないわ！」
おー！よちよち！
よくわかんないねえ！かわいいねえ！
そんな俺は、暁を撫でていた。
暁はメイクとかできないので、俺がやってやる。やーってやるぜ！
はい、そして、ごまだれー。
「ど、どう？可愛い？」
ケバいギャルメイクの暁。
あーーー。
アリですわね。
アリーヴェデルチですわ。
ギャルメイクなのに、暁は、恥ずかしがって縮こまっている。
あら^～！
恥ずかしがるギャルとか可愛いでしょもう。
「ほら！暁！教えた通りにメスガキやって！」
「う、うん。えーっと……、ざぁーこ♡ざぁーこ♡」
オッ！
良いですねえ……。
「……これ、子供っぽくないかしら？」
「まあ、メスガキだからね」
「私、大人のレディーなのよ？」
「たまには息抜きでメスガキになって、どうぞ」
「う、うーん……。まあ、良いわ。好きな人に尽くすのがレディーって

ものよね！」
　そうかな？そうかも……。
「司令官のことをいじめちゃうわ！とりゃー！」
　俺は暁に押し倒され、馬乗りになられた。
「えへへ……、えいえい！」
　俺の腹の上で腰を動かして、体重をかけてくる暁……。
　カワヨ……。
「もっと来い！もっとだ！」
「え？えーっと、じゃあ……、えい！」
「おほー」
　顔騎である。
「えいえい！」
　顔に、小ぶりな暁のお尻が！
　甘い香りがする……！
　お尻を押しつけて、えいえい！と腰を動かす暁ちゃん。
　非常に、極めて、ディモールト、エロい！
　これが無知シチュちゃんですか？
「んっ♡司令官……♡」
　おっと。
　俺は、押しつけられたお尻の匂いを堪能していたのだが、暁は気持ち良くなっちゃっていた。
「……えっちしたい♡」
「したいのかー、そっかー。じゃあほら、誘惑しなきゃ！メスガキ風に！」
「んぇ？どうやるの？」
「暁の努力が見たいなあ！」
「え、えっと、じゃあ……、えいっ！」
　ぴらっ♡
　スカートをめくって見せつけてくる暁。
　大人のレディーを名乗るのに、誘惑一つできない辺り、本当に可愛いね！

ですがメスガキではないのでダメです。
「もっとメスガキ風に！」
「わ、分かんないわよぅ……。司令官……、お股が熱いの！苦しいの！助けてよお！」
おっと、駄々を捏ね始まっちゃったぞ。
仕方ないなあ。
「レディーなのに誘惑できないのー？」
「わ、私はほら……、てーしゅく？なレディーだから！誘惑なんてしないもん！」
「あらあら～」
「そ、それに……、司令官側から求めてくれる方が、嬉しいもん……♡」
あら^～!!!!
たまんねぇなあおい！

暁とマージ・ジルマ・マジ・ジンガした。
レディーだの何だの言ってるけど、ベッドの上ではベビーだったぞ！
めっちゃ甘えてくるし、たくさん「好き」って言ってくる。
かわいいねえ……。
俺が、疲れて眠ってしまった暁を部屋に寝かせると……。
「やあ」
「ウゲーッ！響！」
既にメスガキギャルメイクした響が待機していた。
「ウゲーッ！とは何かな？」
「いやもうウゲーッ！でしょ！君が他の子に変なことを吹き込んでいるのは分かっているんだぞ！」
「でも、楽しんでいたじゃないか」
「まあそれはそう」
さて、響！
白い肌をわざわざ黒ギャル風に焼いてきて、紫のアイシャドウと濃いめの口紅、マスカラ盛り盛りで攻め込んできた！

「じゃあ早速……、ざーこ♡ざーこ♡」
オッ！
ええやん！なんぼなん？
「……やっぱり、性に合わないな」
「そうかい」
「よいしょ、と」
響はおもむろに、上着とスカートを脱ぐ。
下着は……。
ニップレスとパール付きオープンショーツだ……。
うわあ……。
「あっ……♡良いよ司令官、その目で見て♡その、可哀想な人を見るような目で見てぇ♡」
そういや、響はかなりのマゾだったな……。
パール付きオープンショーツ……、あー、お股のところに布がなくて、代わりに数珠繋ぎにされた真珠的なものがスジを隠すようにかかっているエロ下着なんだが……。
そのパールの部分が、なんかこう……、ねっとりとした液で濡れている。
「見てぇ♡私の無様な姿をぉ♡」
両手を頭の後ろで組み、足を開いて、へこへこと腰を振りながらトリップしている響。
まあ……、本人が楽しんでいるんならそれで良いんじゃないかな……。
「あっ♡出る♡」
は？
あーあーあー、おもらし。
「お掃除ロボー」
『掃除シマス』
黒井鎮守府を徘徊するお掃除ロボットに、響のおもらしの後始末をしてもらう。
「司令官……♡お仕置きして♡」

乗馬用のガチ痛い鞭を渡される俺。
響は、ヨツンヴァインになってこちらに尻を向けてきている。
あーーー。
はい、分かりました。
「おひょっ♡イグっ♡叩いてっ♡もっと叩いてぇ♡♡♡」

５７１話　メスガキの極み　その３

メスガキを心に感じ、メスガキの力を手にする拳法、メスガキ拳。
？メスガキ拳に、相対する二つの流派あり。
？一つ、正義のメスガキ拳、清楚派ビースト（意味深）アーツ。
？一つ、邪悪なメスガキ拳、小悪魔系アクガタ。
？戦う宿命の拳士たちは日々、高みを目指して、学び、変わる！
「つまりどう言うこと？」
「売上は置いておいて、俺は好きだったと言うことだよ」
俺の目の前にいるのは、文月。
世に文月のあらんことを……。
文月だ！ふみふみだ！
ふみふみ！
ふ、み、ふみ……？
――「プロデューサーさん、私を捨てるのですか……？」
――「共に、私達という物語を紡いでいくと、そう約束してくれたのは……、嘘だったのですか……?!」
――「愛していると、そう言ってくれたのはっ……！」
突如俺の脳内に溢れ出した……、『存在する記憶』！
おごごごご！
勘弁なさってくだち！
仕方なかったんや！
あの時は、俺のゴタゴタなんかでふみふみの輝かしい経歴を傷つける訳にはいかなかったんだ！
後任に武内君という信頼できる男を残していったんだから許してくれ許してくれ……。
大体にして君、異能者でしょうが！
しかも、裏でもバリバリやっていける、レベル１００超えの超越者！
更には、大天使ラジエルの転生者にして、神器級魔導書の『天使ラジエルの書』に選ばれた『魔導司書』だぞ?!

俺なんか要らないでしょーが！
まあ可愛いし良い子なので、今でも大好きだし愛してるけど。
さて、それは良いとして……。
「ふみぃ」
「ふみー？」
「ふみぃ」
「ふみー！」
あー、きゃわわ。
かわいいねえ、かわいいねえ！
改二になっておっぱいがちょっと育ったねえ！
「Ｈｅｙ！Ｃｏｍｅ，ｏｎ！」
「わーい！」
文月を抱きしめて、頭皮の匂いを吸う。
猫吸いという、古来日本から親しまれる伝統芸能があるが、俺は文月を吸うのだ。
うーーーん。
「はちみつ！」
蜂蜜の香りだ。
あまったる～い、女の子の香り。
素晴らしい。
常にいい匂いしてるんだもん反則だよねえ……。
まあちょっとくらい臭くても、それはそれで唆るのだが。
そもそも臭いの定義が分からんよね。
タバコ臭い男とかも、「それが良い！」って言ってくる女の人とかいるからねえ……。
「はちみつ～？あたし、美味しそうな匂いする～？」
「ウム！」
「司令官に食べられちゃう～♡」
あー、かわええ。
「たべちゃうぞー！」
「食べて良いよー！」

「では、食べる前に、じっくり料理させていただきましょう」
「ふぇ？」
　メスガキメイク！
　そして、メスガキ作法を教え込む。
「え～？司令官に悪口とか、言いたくないよぉ……」
　ええ子や！
「じゃあせめてこう……、妖艶な感じで……」
「こう……？えーっと、うっふ～ん♡」
　わあ！何をどうやってもかわいい！
　光属性過ぎてメスガキにはならんか……。
　あ、そうだ。
「じゃあさ、俺を殺そうとする奴がいたら、文月はなんて言うかなー？」
「殺す」
「えっ」
「殺す。最大の苦痛と絶望を与えて、司令官に刃を向けたことを後悔させてから、殺すよ」
「ヒェッ……」
　怖……。
　でもこんなに俺を愛してくれてるとか嬉しいし、可愛いので好きです。

「うーちゃんだぴょん！」
「最初からメスガキな子をメスガキにしようとしても面白くないんだよな」
「どーいう意味ぴょん?!!」
　それは、素晴らしいことだよ。
「うーちゃんとかメスガキ拳アクガタじゃん」
「だぁーれが臨獣殿所属ぴょん?!!!」
　憤慨ぴょん！とキレる卯月。
「でも卯月はこの前、臨獣殿に出張してたじゃん」

「それはそれ、これはこれぴょん」
　なるほどね？
「ってか何で臨獣殿に？」
「いや普通に仕事だけど……」
　アッハイ。
　悪の組織に出張とはこれいかに。
　まあうちも悪の組織なんだけどさあ……。
「因みに、具体的な仕事の内容は？」
「うーん……、司令官は、臨獣殿の持つ『リンシー』って知ってるぴょん？」
「ああ、獣拳の拳法家に呪術的な蘇生を施すことで転生した不死者の類だったか？」
「そうぴょん。拳法家のキョンシーって訳ぴょんね。そして特定の儀式により、『リンリンシー』と呼ばれる怪人に転生するぴょん。……それで、うーちゃん達は一つ思いついたんだぴょん」
　ふむ？
「拳法家だけが特別なキョンシーに変じるのかな？ってね」
「……つまり？」
「自慢じゃないけど、私達艦娘も、各分野で生半可じゃない修練を積んでるぴょん。なら、うーちゃん達も強力な怪人になれるんじゃないかな？って」
「そんなことしなくていいから……」
　ええ……。
　何で怪人になろうとしてるんだ？
「いやいや、真面目な話ぴょん！司令官には、うーちゃん達をしっかり使い潰してほしいんだぴょん！命ある限りお仕えするのは当然！でも、死んだ後は、死体も再利用してもらえるのが幸せなお嫁さんだぴょーん！」
　ヒェッ……。
「死んだ後くらいは自由にしたら良いんじゃないの？」
「あはは、難しい話じゃないぴょん！心も魂も既に司令官に捧げたか

ら、後は肉体と死後を捧げようってだけの話ぴょん！」
「いや……、そんなことしなくていいから！マジで！」
「えー？死んでからもずーっと一緒ぴょんよ？死が二人を別つまで、なーんてことを言わずに、絶対の永遠ぴょん！……嫌ぴょん？」
アッ……。
ダークネス瞳……。
コールタールのようにドロリと濁った粘着質な目。
正気じゃないなこれは。
「嫌じゃないです……」
「嬉しいぴょーん！」
まあ、艦娘が正気じゃないのはいつものこと。
こんな程度で俺は狼狽えない。
そもそも、会話ができているだけ偉いじゃないか！
おーよしよし、会話できて偉いねえ！良い子だねえ！
「俺の為にありがとう！嬉しいよ！俺は世界一の幸せ者だ！」
「えへへへぇ♡」
ヨシ！

５７２話　突発！真紅のリボン！

メスガキ！
メスガキを求めて鎮守府内を駆け巡る俺！
最近俺の中で生意気ロリがかわいいと話題に！
「メスガキはどこかなあ～？んん～？」
「まゆですよぉ」
オッ。
アオオッ。
オォン！アォン！
「『帰還のスクロール』発ど……」
→逃げる
「『禁じよ（シバブー）』」
歪んだ、黒い汚濁のような次元の罅から、真紅のリボンが飛来する。
「がああ！」
そのリボンは、鋼鉄などよりもよほど堅牢で、肉に食い込むくらい強く俺を『緊縛』してきた。
思わず、アームロックをかけられたおじさんみたいな声が出る俺。
「あら……？す、すみません！痛かったですね、プロデューサーさん」
拘束を緩めて、俺をよしよしと撫でるのは……。
ベージュ色のふんわりとした印象のセミロング、ピンクや赤を基調とするガーリーな服装、そして、アイドルのように美しい……、いや、アイドルそのものの美貌。
かつて俺が３４６プロで担当していたアイドル。
佐久間まゆ、だった。
この世界のアイドルは何故か戦闘力が高いが気にしないで欲しい。
いやまあ、芸能人なんて戦闘力が高くないとやってけないからなあ……。
毎週、怪人やらが湧いて、定期的に怪獣が街を蹂躙し、少し裏路地に入れば怪異が襲いかかってくるんだもんね。
世の中には凄い芸能人がいっぱいだよ。

例えば……、「世界中で自分は一人きり」だと思っている人に特効の歌を歌う歌手とか。
「俺の歌を聴け！」の決め台詞と共に戦争を終わらせた歌手とか。
むしろ、そのくらいできなきゃインパクトがないから芸能界では生き残れないんだよなあ。
大変そうだね。
そんな訳で、目の前のスーパーウルトラプリティかわいい美少女アイドルがあっさりと魔界魔法を使ったことはスルーしよう。
こんな程度で驚いていたら、この世界では保たないぞ！
さ、て、と。
「おはよう、まゆ！今日もかわいいね！」
「うふふ……、プロデューサーさんも、今日も素敵ですよぉ」
まずは挨拶だ。
ネオサイタマではアイサツが大事、ちゃんとしないやつはムラハチだって聞いたし。
社会人の基本だよ。
そして、女の子のことはちゃんと褒めてあげること。
え？褒めたらセクハラ扱いされた？それはお気の毒に……。
「今日のコーデは春の新作だね！この袖のところのフリルが良いね、羽織るトップスが強めの色なのもアクセントになっていて似合ってるよ！」
「あ、分かります？これ、今年の新作モデルで～……」
「うんうん、この会社、いつも可愛いの作るもんね。最近はうちの会社でこう言うデザインワンピースを作ったんだけど、３４６プロの方にモデルの仕事回そうと思ってて～……」
「ああ、でしたらそちらの春雨さん辺りを貸していただけますと～……」
「あー、アリだねえ。今回はフェミニン寄りの物も用意してるし、古鷹辺りを連れて行ってもいいと思うんだけど、どう？」
「良いと思いますよぉ。でも古鷹さんなら、合わせるとしたらもう少しパステルカラー寄りの淡い色合いが～……」

「分かる分かる。雰囲気がね～……」
《パーフェクトコミュニケーション！》
さて、こんなもんか。
「じゃあ、こんなものかな？また後日頼むよ」
「はぁい！ありがとうございました！」
ヨシ！
ちょろいぜ！
今の俺は口先の魔術師だ！アイドル一人丸め込むくらい訳ないな！
「……それとこれとは別で丸め込まれた訳ではありませんよぉ？」
ごめんなさい前原君！俺、君みたいにはなれなかったよ！
再度拘束された俺は、赤リボンでぐるぐる巻きにされた。
「たすけちぇ！」
おうちかえぅ！
ってか男のリボン拘束とか誰得なんです？
エロを見せろエロを。
美女のお尻とおっぱいを見せろ。それが全てだろうに。
「うふふ……、まゆとプロデューサーさんの愛の巣に帰りましょうねぇ……♡」
ひえー。
まゆに引き摺られて、俺は連れ去られた……。
え？まゆが体重百キロ近い俺をどうやって運んだのかって？
何を言ってるんだい？アイドルなら誰でもできるだろう？
おかしなことを言わないでくれないか？
「もぅ……、最近会えなかったから、寂しかったんですよぉ……？」
「ごめんみ」
「許しませんよぉ……」
「ひえー」
ドピンクのキングサイズベッドに設置された俺は、まゆの抱き枕にされていた！

「ハスハス……」
なんか吸われてる……。
うーん……。
何でこうなったんだろうか……。
俺は……、俺はただ……。
歳相応に恋に恋するというか、女の子の望む『ステキな恋愛』を望んでいるまゆに、その通りの最適解を叩きつけ続けただけなのに！
毎日口説きまくって、特別な日にはパリで一日中デートして、夜景の見える三つ星レストランでシャンパンを楽しんだ後、上等なホテルで抱いただけなのに!!
プロデューサーを辞めることになってからも定期的に連絡したり会いに行ったり、記念日は必ず顔を直接合わせるようにしたりしていた、それだけなのに!!!
どうしてこんなことになったんだ?!!!!
まさか、と思ったよね。
俺が抱いた瞬間に、俺の混沌の内面を取り込んで、死神イザナミの転生者として覚醒してしまったとか、そんなん予想できんですよ。
その後、自己の内部にあるイザナミに、他の死神のモト、ペルセポネ、チェルノボグ、ネルガル、ヘルなどを取り込んで混ぜ合わせ、裏社会でも最強格の悪魔人間となり、超強力な呪殺魔法を操る裏社会のアンタッチャブル的存在になるなんて……。
読めなかった、この海のリハクの目をもってしても……！
……いや、マジで予想とかできないじゃん？
確かに、性行為というのはある種の神秘的儀式とも捉えられるから、俺のような覚醒者と交わることにより覚醒してしまうケースも無きにしも非ず、ってところだが。
後半の、勝手に悪魔人間になっちゃった辺りは、マジで俺の責任じゃないからね????
プロデューサーさんを守る為に強くなります！とのことだけど、頼んでないからね?!!!
俺は悪くねぇ！嵌められたんだ！

いやまあ、ハメたんですけど。
まゆは結構スリムなんだけど、感触はかなりふわとろな感じで……。
いや、やめておこう。
エロい話は危険だ。
女の子を他の子と比べるのは良くないよね。
「れろぉ……」
「おわ」
俺がそんな過去回想をしていると、まゆは俺の首筋を舌でなぞった。
ゾワっとしたなあ。
「プロデューサーさぁん……？まゆ、ちゃんとトップアイドルになったんですよぉ？『ご褒美』くださぁい……♡」
「何のことかな？」
「子種」
んー。
「まゆ、寿退社って憧れちゃいますねぇ……？」
「いやぁ！まゆはもっとアイドルを頑張れるんじゃないかなあ!!!」
いけませんねぇこれは。
普段から逃走しまくっているから、逃げ道の塞ぎ方が上手くなっていらっしゃる。
緊縛（シバブー）がかかったままでは、流石に動けない。
ば、万事休すか……！
いや、房中術使えば妊娠を防ぐとか余裕なんだけどね。
このままの流れだと逆レだぞ！
「まゆとプロデューサーさんの子供って、どんな子に育つんでしょうねぇ……？ふふふ、楽しみ……♡」
「アッーーー!!!!!」
その時である！
「そこまでだよ」

何者かのエントリーだ！

５７３話　だめだね

恐らくは艦娘だな！
俺を助けに来てくれたんだ！
いや別にまゆにならいくらでも逆レされても構わないんだけど、一応ここは助けてられておくか！
「おたすけー！」
現れたのは……。
んん？君はもしかして……？
「私だよ」
渋谷凛ちゃん!!!?
うわあああああああ!!!!
こーれは死ゾ。
んっんー、なんかもう笑えてきたな。
極度にピンチだと笑っちゃうタイプだよ俺は。
「ハハッ、ワロス」
嘘ゴメン、この程度ピンチの内に入らない。
霜踏みが弱体化されたことと比べればこんな程度……。
「プロデューサー、何してるの？」
おっと……、その前に解説させてもらおうッ！
俺はお節介焼きの旅人！
……渋谷凛。
総ファン数十億人を超える神プロダクション★★……、その名声は天上天下に轟き、魔界や天界にすらファンが存在するという超弩級芸能事務所、『３４６プロ』にて、トップ級とされるアイドルオブアイドルだ。
黒髪ロング、少しキツめの表情をした、正統派女子高生クールアイドル。
そして。
『蒼の力』と呼ばれる超能力を操る、一種の現実改変能力者でもある。
『蒼の力』は、簡単に言えば、周辺のヒューム値を限りなくゼロに近づ

ける効果がある一種の半オーラ的幽幻物質だ。
ヒューム値というのは、平たく言えば「現実の確かさ」を数値化したものなのだが、『蒼の力』はこれを著しく低下させる。
近似の物質として、日本某所で採掘可能な鉱石である『サンドスター』に酷似した性質があるのだが……。
『蒼の力』は、サンドスターよりもよっぽどタチの悪い力なのだ。
サンドスターは、自身のヒューム値を限りなく上げることにより現実を改変する物質なのだが、『蒼の力』は逆に、周囲のヒューム値を下げるのだ。つまり、真逆の性質を持つという訳だな。
それが何を意味するのか？
サンドスターは主に内側に作用するのに対して、『蒼の力』は外側に作用するということ。
うん、ぶっちゃけて言おう。
しぶりんが悪意をもって『蒼の力』を全力行使すれば、半径数百キロに渡って現実が崩壊する。
しぶりんは、普段は、この力を歌に乗せて使っているのだが、その効果は、周囲の現実を少し改変して人々の輝きを引き出すというまともな方向。
現実改変というと怖く聞こえるが、単純に言えば、『想いを伝えやすくする力』という、実にアイドル向きの能力なのだ。
つまり何が言いたいのか？
「凛ちゃぁん……？私とプロデューサーさんの仲を邪魔するんですかぁ……？」
「何言ってるの？私のプロデューサーでもあるんだけど」
「私の運命の人なんですけどぉ……？凛ちゃんはお空の世界でハンサムな騎士さん達を引っ掛けていればいいんじゃないですかぁ……？」
「まゆこそ、あのメンヘラ臭いサンリオキャラと戯れてればいいじゃん。お似合いだよ」
「メンヘラ臭い？プロデューサーの匂いこっそり嗅いでる変態さんよりはマシですよぉ」
「あはははは」

「うふふふふ」
「……潰す！」
狂気のカーニバルの開幕だ。
「うーん、この」
片や、無限の蒼穹。
永遠の蒼が、透き通る空色が、全てを希薄にしてゆく。
片や、煉獄の呪怨。
永劫の紅が、恐ろしき血色が、全てを塗りつぶしてゆく。
やべー女同士のガチバトルか……。
何だか興奮してきたな……。
歌うか。
「ミミミン！ミミミン！ウーサミン!!!」
「は？」
おっとぉ？
「どうせなら私の歌を歌ってもらえる？」
「どうせなら私の歌を歌ってもらえますかぁ？」
うーん！
何やっても火種！
いや、既に山火事だし平気ですね！
はい、一歩踏み込んで、と。
「じゃあカラオケ行こうよ」
「でも……」
「まあまあ、数少ないオフの日をガチバトルで終わらせちゃうなんて勿体無いでしょ？」
「まあ」「それはそうですけどぉ」
「他のオフの子も誘ってさ、遊びに行こう！」
「……仕方ない、か。まゆ、一時休戦ね」
「ええ、プロデューサーさんに迷惑はかけられませんからねぇ」
良かった！
仲良し！
「ところで、実際は仲良いの？」

「……まあ実際、嫌いではないよ」
「普通に、お友達だとは思っていますよぉ」
あ、ふーん。
つまり、俺が悪いのか。
時代や環境のせいじゃなくて……、俺が悪いんだよ……！
俺が銃フェラからの「だめだね」を熱唱しようとすると……。
「そこまでにぃ☆」
何者かに止められた！
い、一体誰なんだー?!

５７４話　駄目なのは俺なんだよなあ

誰だー？
誰だー！
誰なんだー！
「ナっナでーっす!!!」
俺は音速で土下座した。
「あっちょっ！プロデューサーさん！土下座はやめてくださいってばぁ?!」
遥か古、メソポタミアの偉大なる王、『すべてを見たる人』ギルガメッシュに仕えし伝説の魔導師、ナナ様……。
いや、それどころか！
アレキサンダー大王！
カエサル！
サラディン！
チンギス・ハン！
織田信長！
歴史の転換点に必ず現れる伝説の魔導師にして預言者！
裏の業界でついた渾名は『とこしえたる者』……！
恐らくは、『かつて来たりしもの』の一柱だとされる、半神的存在だ！
今は何故か、３４６プロダクションにて安部菜々と名乗りアイドルをやっていらっしゃるが、不敬をすれば俺の首が飛ぶ！
「平にご容赦を……、誠に申し訳なく……、我が身の不徳で御座います……！」
「やめてくださいってば！私は、ＪＫアイドルの安部菜々ですよー?!」
「ははは、ご冗談を」
ＪＫは流石にないわー。
紀元前どころか創世神話の頃から生きてんのにな。
「それを言ったらプロデューサーさんも……」
「言うて俺は三、四十ですよ？」

!!見た目は魔法やら何やらで二十代後半くらいだけどな。
「??!じゃあ、菜々もＪＫってことでＯＫですねっ！」
「!?!!?!」
?!?!!!万年単位のサバ読み……?!
こんなの、アトリームじゃ考えられない……！
まあええわ……。
あ、そっちは……。
「きらりもいるにぃ☆」
「きらりん！おっすおっすー！」
「おっすおっすー！」
きらりんだ！
かわいいなあ！
あ、因みに、きらりんは俺よりちょっと小さいぞ。
「きらりん、久しぶりだなあ！お父さんは元気かい？」
「パパは元気いっぱいだにぃ☆」
いやぁ、懐かしいな。
元気にしてるかなあ、きらりんのお父さんの、諸星ダンさん。
っと、そんなことはいいんだ、重要なことじゃない。
「とりあえず、菜々さん」
「はい？」
「助けてくだち」
俺の両隣で、まゆとしぶりんが俺の腕を掴んで引っ張り合いをしている。
「うふふ、モテモテじゃないですか！羨ましいくらいですよぉー！」
「これがモテモテに見えるならお前の目は意味無いな後ろから破壊してやろうか！」
おいィ……？
あもりにも酷すぐるでしょう?!
ヴァナ弁が出てしまうくらいの酷さだ。
「経験上、プロデューサーみたいな人ってなんだかんだ生き残りますし……」

「まあ、菜々さんの経験って言うと信頼できますね」
「もう七万年くらい生きてますからねえ、そりゃ色々ありましたよ……、ってン〝ン〝っ！なっ、菜々は１７歳のＪＫですよぉー!!!?!」
「正体現したね」
「な、ななな、何のことですかー?!」
スッゲェぜ、菜々さん！
七万年も生きてるのに、純真過ぎてすぐボロが出ちゃうんだ！かわいいね。
「まあ、菜々さんはとりあえず、俺のことを助けてもらえますか？マジでいい加減、縦半分に裂けそうなので」
「アロン◯ルファならありますけど……」
「いや流石に無理でしょそれじゃ……ってアアーーーッ!!!」

三十分後。
「何とかなりましたね！」
「なっちゃいましたねぇ……？」
俺の肉体は、あの後、まゆとしぶりんに真っ二つに裂かれたのだが、アロン◯ルファを塗ってくっつけたら治っちゃった。
俺はプラモだった……？
「♪～」
お、まゆの持ち歌じゃん。
かわいいなあ。
ああ、カラオケに来ているぞ。
どうせ仕事もないしなあ。
「♪～」
あ、大和キャラソンじゃん。
かわいいなあ。
「……はぁん？」
大和おるやん。
「どうしたのかな、提督」
「フゥン？」

時雨おるやん。
え？
何これは？
俺の中では、艦娘とアイドルの二娘（虎かもしれんけど）共食の計により体力を削り、怪我しない程度に暴れてもらい、ヤバいところ寸前で仲裁してガス抜きをしてもらおう！という感じのアレだったんだが。
「って、提督は思ってる訳じゃん？」
鈴谷。
「はい」
「でもさぁ、こっちも、提督の薫陶を受けたってーの？とにかく、提督と関わった女の子達を敵に回す厄介さは分かってるんだよねー」
そうだな。
なんか知らんけど、俺に付き纏う女の子ってそう言う感じのアレがアレだよな。
俺がおかしいのかこれ？
マジでさ、何にもやってないよね俺？
ただ普通に口説いただけなのにこうなるんだよ？
俺が口説いて落とした女の子は、みんなこうやって病むんだよ……。
おかしいだろこれ……。
呪われたりしてないこれ？大丈夫？
でも俺がお祓いとか行くと、手水と清めの塩が腐り落ちるし、神職の人が祝詞を唱えたら死んだし、迷惑かけちゃうから行かないようにしてるんだよね。
……うん、呪われてるね！
心当たりが多過ぎてなあ……？
「だからさ、敵対はしないようにしてるんだー。殺し合ったらお互いタダじゃ済まないから、お互い妥協しよーよ、ってね」
へー、そうなんだー！
「大丈夫なの？制御不能な子とか多いじゃん」

榛名とか、雲龍とか。
「それは、３４６プロダクション側にも話通じない奴がいるからおあいこだよ」
「え？いる？話通じない子？」
「現に、今さっき、話が通じない子に真っ二つにされてたじゃん」
「まあそれはそう」
悲しいね、バナージ……。
「とにかく、無駄な喧嘩はやらないからさ！提督は安心して良いからねっ！」
うーん！
何一つ安心できないが、俺包囲網が更に強固になったことは理解したぞぅ！
あー……、帰りてぇ……。

５７５話　エルデの王

「ああ、提督！どこに行っていたんですか?!」
「あ、大淀」
「三週間も鎮守府を空けるなんて……！」
「すまんね、止むに止まれぬ事情が……」
「それでどうでもいい事情だと、ちょっと流石に、私も庇いきれませんよ……？」
　さてさて、三週間ぶりに帰って来た俺。
　何があったのか？
　それは、止むに止まれぬ事情があった。
「ご存じのこととは思いますが、申し上げておきます。黒井鎮守府は現在、壊滅状態です」
「なんで????」
　存じてないが？
「提督がいないので、鬱で頭がおかしくなった艦娘が暴れたりなんだりして……、まあ、はい」
　はいじゃないが。
「大淀は大丈夫なの？」
「私は、任意で提督の幻覚を見ることができますから！提督のナニを再現した張形を前後の穴にぶち込みながら、夢想の世界に逃避すれば、致命傷は避けられますよ！」
「それはそれでヤバくないですか????」
「それより、本物のナニが欲しいのですが……♡」
「うんうん、後でね」
「なるほど……、早速の放置プレイ！流石提督です！子宮が下りてきましたよ……！」
　あっはい、そうですか。
　とりあえず、黒井鎮守府を救わねば……。
　全く、さっきまで世界救ってたのに、何で帰宅してからも世界を救わなきゃならんのかねえ？

ってかこれ、また俺が死ぬやつでしょお……？
もう大体分かってるんだよねこっちもさあ。
なんか平然と死んでるからそういうものと思われがちだけど、俺も死ぬと痛いし苦しいんだよ？
その辺分かってる？
まあでも、美女に殺されるのは楽しいので死にに行きますけど。

「おっすおっす」
「「「提督ーーーーッ!!!!」」」
黒井鎮守府に入った瞬間、四方八方から現れた艦娘にパーツ毎に分解された。
ほーら、早速死んだぞ。
どうしてくれる？
「寂しかったよう……！」
引きちぎられた俺の腕に頬擦りするレーベ。
「どこに行ってたんですか！もうっ！」
ねじ切られた俺の足に抱きつくゴト。
「もう二度と離さないから……」
陸奥に抱き抱えられる頭。
もちろん、俺は頭だけになると、コンプアイランスとかなんかそういうアレの関係上、クリームが詰まったゆっくり饅頭になる。
これでグロとかではなくなるので、万人に胸を張ってお届けできるって寸法よ。
え？両穴に張形を咥え込んでいた大淀は万人にお届けできるのか？
ちょっ……とぉ……、何言ってるか分かんないですね。
見間違いではないでしょうか？
うちの大淀は清楚系美女ですよ？
さて……、ゆっくりになった俺は、横から赤城に食べられつつも、今まで何をしていたかをお伝えする……。
「あ、今日は中身はクリーム餡なんですね」

「ふくしまめいか、『ままどおる』だよ」
「え？福島銘菓？福島行ってたんですか？私も誘ってくださいよ、桃とか食べたかったのに……」
「いやほんとうに、さいしょはそういうつもりじゃなかったんだけどね？」
「えっと……、ではどこに？」
「エルデ」
「はい？」
「エルデによびだされたんだよね」
そう、エルデの地。
俺は、福島銘菓を食べたくなったので、東北へ向かったのだが……。
福島の駅前に召喚サインが出ていたので、軽い気持ちで承諾したところ。
エルデの地とかいう末法世界に飛ばされてしまったのだ。
俺はそこで出会った一人の「褪せ人」さんと協力して、「褪せ人」さんがエルデの王になるのに協力したんだよね。
それに長い時間がかかり、鎮守府に帰れなかったって訳だよ。
「途中で止めれば良かったのでは？」
「いやもうね、おれがしょうかんされたじてんで、せかいはつながっちゃってるからね。こっちのせかいにめいわくをかけないように、キッチリかたをつけてきたんだよ」
「お呼びになってくだされば、私達がどうにかしましたのに……」
「そりゃあ、おれもよびたかったけどね？ロスリックとにたような、せかいのほうそくで、たくさんなかまをよべないらしくてさ」
まあそんな訳で、褪せ人さんと二人で世界を救って来たって訳。
「いやあ、がんばったよおれは……。プライドとかないから、しもふみとかつかってさ……。それでもかてないんだもん……」
「大変でしたねえ」
「ラダーンがね、あいつがね、おかしいんだよね。ひとりだけむそうシリーズみたいな」
「はあ」

「ほしをくだくようなバケモノにかてるわけがないんだよなあ……」
「でも、勝ったんですよね？」
「うんまあ、おれがわちゃわちゃしているすきに、あせびとさんがなんとかしたよ」
で、スクロールと祈祷書をもらって来たから、こっちで解析を……。
「これは興味深いね……」
あ、時雨にひったくられた。
「クリーム餡って何でこんなに美味しいんでしょうねえ……？」
赤城は、マイスプーンで俺の頭をほじくって、中身を食べている。
後因みに、あまりにも絵面が酷過ぎてスルーしているのだが、胴体は鹿島に逆レされてるよ。
ひどい、世も末だ……。
「とにかく、あばれるのはもうやめてね？」
「「「はい」」」
うーん、言うことは聞いてくれるんだよなあ……。

５７６話　旅人は墓地に送られターンエンドだ！

「そう言えば提督？エルデの地では何を覚えて来たのですか？」
「美味しいカニの茹で方」
「アッハイ」
いや凄いんですよ、塩加減で上手い具合に物理カット率を上げる茹で方をマスターしてきたんですよ。
カニと塩と水だけで、強化アイテムが作れるのはかなりデカいんだよ？
この前行ったカムラの里で習ったうさ団子も凄いが、これも凄い。
あとは、各種耐性を高める干し肉の作り方とか、属性投げナイフとかも使える。
こう言うのって他人に渡してもＯＫだから、潰しが効く技能なんだよね。
いっそのこと裏社会の方で魔法アイテムとして売っても採算が取れるんだし。
まあ良いや。
さあ、今日も爽やかな朝。
今日からはゴールデンウィークというやつですよ。
ウイーク……、ルドウイーク……？!!!
うっ、頭が……。
辛い記憶が……。
よし、忘れよう！
忘却の秘薬（ウォッカ）グビー。
「うん！忘れた！」
頭空っぽの方が夢詰め込めるもんな！
笑顔ウルトラＺで今日もなんかするぞー！
折角の休みなんだし（毎日休みみたいなもんだが）、遊んでいこうじゃないか！
旅行とか行こうかなー？
と、俺がそう考えた瞬間。

背後からぬうっと、時雨が出てきた。
比喩ではない、空間転移でぬろっと出てきたのだ。
「ご一緒するよ」
あっこれ逃げられないやつ。
俺は悟った。

仕方がないのでゴールデンウィークは鎮守府内で過ごすこととした。
艦娘達も休暇を取らせる。うちはホワイトなので、有給取りやすいですよー！
「あんっ♡あんっ♡」
俺？
俺はほら……、休日（休日とは言ってない）みたいな……？
今は叢雲と、お馬さんごっこ（意味深）してるよ。
「寂しかったんだからぁ♡もういなくなっちゃダメなんだからねっ♡」
「善処します」
「そういう態度だと、本気で孕むわよ？」
「善処するということは、善処するということです（構文）」
「もう本気で孕むわ」
「あっごめんやめて！嘘嘘！頑張るから！」
流石に叢雲を腹ボテにしたら各方面から殺される！
「もういい加減良くないかしら？深海棲艦騒ぎが終わったら孕んでいいって言うけれど、もう終わらないでしょこれ」
「ギクッ」
そうなんだよな。
深海棲艦、発生のプロセスが海の防衛機構であるからして、人類が存在する限りいなくなることはないんだよな。
あれは要するに怨霊みたいなもんだし。
この世から怨みをなくしたら良いよ！って、完全に断りの言葉だよなあ……。

例えるなら、一昨日きやがれみたいなもん？
「もうね、良い加減待てないわ。何年待ったと思ってるの？」
「本当に……、すまないと思っている」
「いや良いから。早く孕ませて」
うおお物凄い腰の動き！
「ヤダーッ！ヤダヤダ！ヤダーッ!!!」
「うるさいっ！良い加減観念してパパになりなさいっ！」
「本当に待って？俺、人の親には」
「ならなくても良いわよ。子供はこっちで勝手に育てるから。子育てに協力しろなんて言わないわ」
あー？
あー……、まあ、メイドロボやらヒューマノイドやら造魔やらがその辺にいる黒井鎮守府で、子供を育てられないなんてことは確実にないんだが……。
でもほら……、俺という呪われた血族を増やすのはさあ？
「もうね、待てないの。この前の件で私達はもう、覚悟を決めてきたわ」
そう言って叢雲は、短剣を一本見せつける。
「これは白露型特製の呪刀よ。これをこうしてあんたに刺せばっ！」
うぐおっ?!
こ、これは……、気が練れない!!?
「これで、あんたの房中術を無効化できるわ。精子を不活性化して孕ませないようにする術も無効よ！」
ま、拙い！
このままじゃ……！
「ほら、ほらぁっ！パパになりなさいっ！私のお腹にあんたとの思い出を！子供を残しなさいっ!!!いなくなっても良いから、あんたの子供を……、あんたと共に生きた証を！残させてよぉ……!!!」
半ば泣きながら、叢雲はお馬さんごっこ（意味深）を続けている。
そんなに……、泣くほどに思い詰めていたのか……。
艦娘というのは駆逐艦クラスであっても、心身共に相当に鍛えられ

た傑物だ。
見た目は女子供そのものだが、旧日本海軍の偉人達の魂を、精神性を受け継いだ一種の神霊。
それが、それが幼子のように泣いている……。
ああ、そうだなあ。
なんだかもう、良いかなあ。
泣いて頼まれたら、俺は断れないや。
「愛してるよ、叢雲」
「司令官っ……！」
もういいや。
多分俺、俺が認知してないだけで子供いると思うし。
俺の遺伝子データで生物兵器作るアホとかも山ほどいるし。
俺自身は恐らく、自分の子供のことを第一に考えてやれるような人間ではないが。
俺はシャアみたいなもんだからね？男をやるのは得意だが、親をやるのはできないんだよ。
何やらせても一流だけど、何をやっても超一流には勝てない辺り、マジでシャアだよね。
もう面白グラサンノースリーブでサボテンだのケーキがないだのと一発ギャグを言うしかない。
そうこうしているうちに、部屋に雪崩れ込んできた艦娘に揉みくちゃにされて、俺は意識を失った……。

その後の話だ。
黒井鎮守府内部に、保育所のような、孤児院のような何かができた。
そこには、艦娘が定期的に出入りし、しかも黒井鎮守府の執務室並みの防護性能を誇る、超厳重な警備で固められている。
艦娘達は皆、時折、母親の顔を浮かべるようになった。
普段は鬼のようなツラで深海棲艦をすり潰す彼女達が、優しい優しい、母親の顔をするのだ。
俺は結局、父親にはなれなかったが、彼女達が幸せでいてくれるな

らそれで良いや。

５７７話　月刊！終末到来！

え？先週のアレは最終話じゃなかったのかって？
ご安心ください！
終わりませんよ！
「提督ーっ！東京にニャルラトホテプが降臨したそうですー！」
「その前に世界の方が最終話を迎えそうだけどねっ！」

さて、邪神ニャルラトホテプの降臨、と。
いつもより規模がデカいな、どうしようかこれは。
それにしても、タイプがあるだろうに。
人々の深層意識が生み出したペルソナ系ニャルなのか、神話生物的な物理系ニャルなのか、はたまたニャルラトホテプ星人なのか。
ニャルラトホテプなんて月一で出るんだし、その辺はっきりさせてほしい。
「今回は、霊的要素魔法的要素物理的要素、全部乗せだそうです」
「エエー？そんなのヤバいじゃん。今年始まって七回目のＫクラスシナリオかぁ……、（世界が）壊れるなぁ……」
うーん、っとなると。
「場所は？」
「東京都上空です」
「軍は何をやっているのかな？」
「出撃した陸軍の量産型グルンガストは既に五十六機が撃墜、バックアップの量産型ヒュッケバインも百二十二機が破壊されました」
「うちの部隊は？」
「現在、マジンカイザーと真ゲッター、ダイゼンガー、アルトアイゼン、ライディーン、トライダー、ダイターン、ザンボット３、ボルテスＶが応戦中ですが、押されています」
「うーん……、どうしようかなあ。欧州に派遣していた他の部隊を呼び戻そうか？」
「ガンエデンとグレンダイザー、そしてダンクーガ、ガオガイガーです

か？」
「うん、前の、欧州になんかいきなり次元獣とかいうのが攻めてきた時、部隊を回していたでしょ？」
「そうですね」
「それ、日本に持ってこれない？」
「可能だとは思いますが……、そこまで必要でしょうか？」
「うん、必要だね。俺の勘が『今回は長引く』と言っているんだ」
「ッ?!……分かりました！」
その瞬間大淀は、艤装の一部と化しているヘッドセットを実体化。
そして、黒井鎮守府の全組織に直通するフォールド通信で、こう叫んだ。
『黒井鎮守府秘書艦、大淀です。コード・レッド発令、第一戦闘配備！今回は長引くと提督の《勘》だそうです！』
その瞬間、艦娘どころか、黒井鎮守府という組織そのものが一瞬にして戦時体制に入った。
訓練されているなあ。
「でも、俺の勘にそんな信頼を置かれてもなあ……」
「いえ、提督の、特に危機に関する勘が外れた試しはありませんので……」
そうかな？そうかも……。

「提督、流石です！悪い予感が当たったようですよ！」
「わーい、聞きたくないなあ！」
しばらく鎮守府内で指揮をとっていたら、最悪の事実が発覚ぅ。
「どうやら、天に座す大型ニャルラトホテプから、小型の人型実体が発生しているようです」
「どれくらいかな？」
「恐らくは、一千万は下らないかと」
うーん！
「出るぞッ！大淀ッ！」
「お供します！」

外に出ると、クソデカニャルが偉そうに腕を組んで……。
……ってアレは！
「天魔大帝!!!」
昔立ち寄ったとある世界のラスボス、天魔大帝じゃねーか!!!
「ご存知なのですか？計器での観測結果によると、ニャルラトホテプの化身の一つと出ているようなのですが……」
首を傾げる大淀。
確かに、感じる気配はニャルラトホテプだ。
「恐らくは混ざった存在だろうな。天魔大帝の残滓をニャルが取り込んで強化、しかしながらまだ安定していないので、力溢れるこの星を喰ってどうにかしよう……ってところか」
本来の天魔大帝のサイズは、もっと大きいしな。
今出ている天魔大帝ニャルミックスは、精々月の数倍ほどと小型サイズだもん。
とにかく、小型のニャルラトホテプがその辺で大暴れしているから、それを先に止めなきゃなるまい。
天魔大帝ニャル本体は、うちのスーパーロボット部隊に任せよう。
『『アナライズ』……！火炎、破魔弱点！氷結、呪殺耐性！」
「了解しました！『マハラギオン』！」
大淀と共に、小型の雑魚ニャルを蹴散らしながら黒井鎮守府の建物内を脱出。
すると……。
「むぅん!!!」
『『『『ピ』』』』
ただ、腕を薙ぎ払っただけで、凄まじい衝撃波がばら撒かれ、数百体の雑魚ニャルが弾ける。
「おお、提督！無事か?!」
その剛腕の主は、やっぱり長門だ。
「無事だよ」
「そうか！訓練中に突然、訳の分からん奴らが空から降ってきたからな。適当に叩き潰したんだが、これで良かっただろうか？」

「うん、大丈夫だよ、良い子だね」
長門を撫でる。
「えへへ……♡」
うーん、仄かに香る汗の匂い……。
良いな！
「提督、申し訳ありませんが、いちゃついている場合ではありませんよ」
大淀に嗜められ、俺は我に帰る。
いつも錯乱しているんじゃないか？正気だった試しがない？
ハハッ、ワロス。
「川内」
「はーい！」
川内は、俺の影からぬうっと出てくる。
もういつものことなので気にしない。
「川内、君は俺の護衛をよろしく頼む」
「まーかせて！」
そして、俺は、懐から取り出した「古人呼びの鐘」を軽く鳴らす。
足元に並ぶ白いサインは、白露型の面々だ。
「お呼びかい？」
時雨がぬるりとサインから出てくる。
「白露型さんチームは敵を蹴散らして下さい！」
「「「はい」」」
とりあえず、すぐに呼べる艦娘は動いてもらった。
あとは……！
「邪魔だあ!!」
女子寮の壁がぶっ飛ぶ！
「邪魔であります」
居酒屋鳳翔の壁がぶっ飛ぶ！
「あきつ丸さーん、後で壁、塞いでくださいねー」
……ついでに、吹っ飛んだ居酒屋鳳翔の壁からひょこっと首を出した鳳翔のお叱りも飛んでくる。

「アッハイ、申し訳ないであります……」
「いえいえ、緊急事態ですから」
現れたのは武蔵とあきつ丸！今日は休暇だったな！
「大淀、うちの社員に避難誘導をさせてくれるかな？避難予定地はいつも通り鎮守府中庭で」
「先程、指示しておきました」
「助かるよ」
で、避難地の設営はロボットがやってくれるとして……、鎮守府の防衛システムの責任者である、明石と夕張は？
「明石、夕張、今何してる？」
『提督！こちらは、管制室でシステムを起動しています！』
『明石ぃー！やっぱり、カッコつけてシステム起動キーを複雑にしたのは失敗だったじゃーん!!!』
『はぁー!!?夕張だって、GGGに見学しに行った時、ファイナルフュージョンのプロセスがかっこいいって言ってたでしょ!!!?』
『明石だって、ラクーンシティみたいな複雑謎解きシステムを導入したじゃん!!!』
『『ぎゃー！ぎゃー！』』
「……うむ！」
ヨシ！
「とりあえず、明石さんと夕張ちゃんは減俸しておきますね」
笑ってない笑顔でそう言った大淀。
怖いなあ。
『『ヒェッ……、すいません真面目にやります……』』
っと、防衛システムが本格起動したな。
防衛システムから、攻撃システムへ。
防御から専守防衛へ切り替えだ。
さあ、行くぞ……。
「攻撃開始！」

５７８話　集結！奇人変人！

「攻撃開始ィーッ!!!」
瞬間、黒井鎮守府は街ごと浮遊！
移動要塞に変形した！
「うおお、マクロの空を貫いてェー!!!?」
やり過ぎだよ、明石?!
こんなんもうテロ組織認定されたら言い訳できないレベルじゃん！
銃刀法は艦娘という仕事の都合上まだセーフだけど、これはどう考えても破防法……、いや、気にしないでおこう。
かっこいいので許しちゃう。
「全砲門、斉射！砲門は自動照準モードで攻撃して、我が社のスーパーロボット部隊を援護してくれ！」
『『はい！』』
司令室の明石と夕張は、そのまま火器管制や機体制御を始める。
基本的にフルオートで動くらしいから、明石と夕張の仕事は微調整だな。
俺の指示通りに、黒井鎮守府要塞からにょきっと生えてきた多数の砲が、ちょっと洒落にならない火力を投射する。
そして俺は……。
「あきちゃん！」
「はーい、あきちゃんでありますよー♡」
おっぱい一揉み。
「あぁん♡」
……うむ！
「よおおおし！あきつ丸！何だか嫌な予感がするから国会議事堂に行くぞ！護衛してくれ！」
「了解であります！……あと、何故に自分は胸を揉まれたのでありますか？」
かわいいおっぱいがそこにあったから、つい……。

国会議事堂。
そこは今、修羅場も修羅場。
大量のニャルの化身に囲まれていた……。
「王虎寺超秘奥義！遲氣虎魂!!」
その瞬間、議事堂の壁をぶち抜いて、超高密度の『氣』でできた虎が飛び出てくる。
これは……！
「桃さん!!!」
「新台か！」
内閣総理大臣、剣桃太郎さんだ！
うん、申し訳ないが、国会議事堂にいる最大の戦力は、総理大臣たる桃さんなんだ。
常に帯刀していて、狙撃でも何でも見切って避ける人にＳＰとか要らないでしょ？
だから、桃さんはＳＰをつけていないんだよ。
今回はそれが仇となったみたいだな。
桃さんの上質な気品あるスーツはズタボロ、切れた額から血を流している……。
恐らくは、戦闘能力のない一般的な政治家を身を挺して守り、怪我をしたんだろう。
ついでに言えば、議事堂を守っている一般通過ＳＰさんでは、ニャルの化身を倒せない。
これは拙いな……。
「桃さん、状況はどうなってます？」
「拙いな。一般の議員が多く、手が回らない」
やはりそうか。
「あきつ丸」
「はっ！」
あきつ丸が朱槍を振るうと、複数体のニャル化身が消し飛ぶ。
「怪我人は？治療します」

その隙に、俺が懐からポーションを取り出してそう言った。
「任せる」
「いや、桃さんが一番ヤバいじゃないですか！治療受けてくださいよ！」
大体にして総理大臣でしょ貴方?!
あっ、行っちゃった……。
まあ良いか、驚邏大四凶殺でも大威震八連制覇でも天挑五輪大武會でも死ななかったんだし、どうせ今回も死なないでしょ。
それに、ああいうタイプの戦士は、傷付けば傷付くほど強くなるからなあ……。
論理的には、魔王の本体レベルの神秘濃度を誇る艦娘に、唯人である桃さんは勝てないはず。
だが、それでも、戦えば桃さんが勝つだろうという確信がある。
不思議だが、あの人が負ける姿は想像できないんだよなあ。
とはいえ、それはうちの艦娘達もそうだ。
俺はありとあらゆるものに負けるが、彼女達は強いんだ。
「……毎回思うのでありますが、総理大臣が人類最高峰レベルの拳法家なのはなんなんでありますか？」
「総理大臣だからね。強くなきゃ務まらないんだよ」
「えぇ……？」
「東條英機も強かったらしいじゃん？ヒトラーとガーナで空手と魔術を使って新しい国を建国したんでしょ？」
「どこ情報でありますかそれ????」
「北上がゆってた！」
「まーたクソ映画を見せられたのでありますか?!!目を覚ましてください、提督殿!!」
ばちーん！
「おれは　しょうきに　もどった！」
「アッ、壊れちゃったァ……！」
壊れてるのがデフォなのでセーフなんだよなあ……。
「ロシア式修理では旅人は治らないんだよ、旅人を治すならベッドの

上でアクエリオン（意味深）しなきゃ」
「アッハイ」
「ところで、叩いて直すことをどうしてロシア式って言うんだろうね？」
「露助はアホだから叩くくらいしかできないんでありましょう（差別発言）」
「旧陸軍並みの反応やめちくりー」
そんな風に会話しながら、議事堂に入り込んだニャル化身を始末していく。
俺は、先日手に入れた獅子の大弓で遠距離攻撃。
あきつ丸は朱槍で物理攻撃だね。
そうやって戦っていると……。
「「「桃ーーーっ!!!」」」
「うわあ」
男臭い連中が集まってきたぞぅ。
元男塾塾生の男達だ。
この場はもう大丈夫だな。
「一文字流斬岩剣！」
「マッハパンチ！」
「お前達……、来てくれたのか！」
なんか面白いことになってるなあ。
こんなんもうジャンプ漫画の展開じゃん。
スゲー……。
っと、議事堂内の安全確保完了だな。
「桃さん！全員を黒井鎮守府に送ります！」
「いや、俺はいい」
はぁん？
「日本国の危機に、首相として、真っ先に立ち向かう！」
アッハイ……。
「それでしたら、こちらのマップの方を見ていただけますか？マップのポイントは、病院や学校となっていますから、そこを優先的に守っ

ていただけると助かります」
「病めるものや子供を守る……、うむ、そうだな。お前はどうする？」
「んー、そろそろだと思いますよ？」
「……？何の話だ？」
いや、だから……。
瞬間、空間が歪む。
空から飛んでくる。
大地を駆けてくる。
「ああ、来てくれたみたいです」
各地で仕事をしていた、うちの艦娘達が！
「さあ、みんな！ニャルに負けるな！一転攻勢だ!!!」
「「「おおーっ!!!」」」

５７９話　英雄！一転攻勢！

一転攻勢！
俺達は、ニャルの化身をボコボコにしながら直進する。
「えい！」
比叡が砕く！
「やあっ！」
ビスマルクが貫く！
「ヘェーラロロォールノォーノナーァオオォー」
俺がＢＧＭを担当する！
抜群だ……、抜群のコンビネーションだ……！！
「ヘーイ、提督ぅー、危ないので退がっていてくださいネー」
「アッハイ」

「で、提督？作戦はどうしマスカー？」
金剛が俺を抱き上げながら聞いてきた。
作戦！
作戦は……。
「ないよ」
「え？」
「作戦はないよ」
「えぇ……？」
だって、ねえ？
「この世界の人達が真っ当に働けば、ニャル程度に負ける訳ないんだよなぁ……」
俺は、脳内の『瞳』で、世界を観測する……。

日本、東北地方。
「ヒョーーーッ、シャオッ！！！！」
『？！！』『！！！』『？！？！』『？！？！』
白髪の、男が、空を舞う。

ブラック企業に捕まり若白髪になった男だ。
今は、俺の紹介で『財団』のエージェントとして働いている。
その男の名はレイ、南斗水鳥拳の使い手。
真空の刃を発生させた手刀で、鉄をも切り裂くという拳法。
「ぬおおおおっ!!!畜生どもめえ!俺は今日、やっと取れた有休なんだぞ?!!!」
『『『『!!!』』』』
「何が『財団』のエージェントだ!またブラック企業じゃないか!アイリにもう半年は会えていないんだぞ?!ふざけるなぁ!!!」
『『『『?!!!』』』』

日本、東京。
「隼の術――――」
黒髪の色っぽい女が。
刀を構えたまま、姿がブレる。
古いビデオテープの映像のように。
雷を操るとか、風を操るとか、そう言ったド派手な能力を持った『対魔忍』の中でも、ただ単に『早く動ける』だけの、それだけの能力なのに……。
最強の対魔忍の名をほしいままにする、この女は。
「――――殺陣華!!!」
井河アサギ。
対魔忍の頭目である。
百を遥かに超える分身体。
これらは全て、限りなく『早く動いている』アサギの残像である。
それらの分身体は、それぞれが町中に広がり、ニャルの化身を一太刀で両断してゆく。
「召喚……、『前鬼』『後鬼』」
『『ゴアアアアッ!!!』』
鬼を呼び出し、刀を振るうのは、帝都の霊的守護の要たる、『ライドウ』。

今代の、葛葉ライドウである。

日本、海上都市新浜県。
「少佐ァ！何なんだあれは?!」
「知らないわ。でも、治安を乱す存在で、そして銃弾が効くなら、私達でも対抗できる」
「けっ、こんなの、『ヤタガラス』とやらの領分だろうが！三流アクション映画じゃあるまいし、なんで俺達が化け物相手に……」
『バトーさん、追加の弾薬ですー！』
『黒井鎮守府の方から流れてきた、退魔弾薬がよく効きますねー！理論はこれっぽっちも分かりませんけど！』
「タチコマ！火力が足りないわ、他の部隊にも援護の要請を！」
『わっかりましたぁー！』
青い小型ロボと共に戦うのは、公安九課。

日本だけではない。
イギリス……。
「お前は豚の餌だ」
『『『『?!!』』』』
「エイメェエエン!!!」
『『『『?!!』』』』
吸血鬼と、神父が踊る。

中国……。
「無寸勁……」
『?!』
「石破！天驚拳!!」
『『『『?!!』』』』
中国武術の頂点たる海王が、マスターアジアが。

アメリカ……。

「ジャービス、このままでは埒があかない。予備のスーツを遠隔操作して、人々を守れ」
『よろしいのですか？今期の予算は……』
「構わんさ、金より人命だろう？」
『了解しました』
「通信回線オープン……、キャプテン！そちらはどうだ?!」
『順調だ。ソーの攻撃がよく効く、恐らく敵は神秘関係だろう』
「そうか、それは面倒だな。私は《鉄の男（アイアンマン）》だからな、魔法やら何やらは専門外だ」
『そちらにはスパイダーマンを回した、協力してくれ』
「分かった」
ヒーロー達が。

世界の全てが、理不尽に抗っている。

「確かに、この世界はこうやって、定期的に滅びそうになるヤバいところだ。だけど……」
そう、だけど。
「世界はこんなにも、素晴らしい！」
英雄達が吼える、声が聞こえる。
そう、そうだ。
黒井鎮守府なんて、本来は不要なんだ。
だって、この世界には英雄がいるから。
俺が手を出さなくても、英雄達は、愛おしき我が友人達は、世界を守ってくれる。救ってくれるんだ。
俺は、俺達はただ、その手伝いをすれば良い。
俺は英雄にはならないし、なれないが。
英雄達を助けることはできる。
黒井鎮守府の中でもそうだ。
強く美しく、海の平和を守る艦娘達。
俺は、それと肩を並べて戦えるような存在じゃない。

だが、彼女達を守ることはできる。癒すことはできる。
俺はそうする、そうするんだ。
旅人号二号！発車！
ニャルの化身共にひき逃げアタック！
そして、窓を開き……。
「こんにちは！デリバリーです！ご注文の品をお届けしましたぁ!!!」
俺は、戦闘中のアサギとライドウさんにおにぎりをパスする。
「えっ頼んでないんだけど」
「まあまあ、そろそろ休んだら？うちの子代わりに連れてきたから、交代ってことで」
「は、はあ」
「じゃあ俺、他のところにも宅配しなきゃだから……」
旅人号一号！離陸！
そう言って俺は、飛行する旅人号から、戦闘中のスーパーロボット部隊に突撃する。
『新台さん?!危ないですよ?!!』
「甲児くぅーーーん!!!昼メシの時間だーーーー！コクピット開いてホイ!!!」
「ああもう……、分かりました！ほら！」
「受け取れぇーっ!!!渾身のシャケおにぎりだあああっ!!!!」
「ありがとうございます!!!」
「どういたしましてぇ!!!!」
さあさあ、まだまだやるぞ。
「うおおおお！英雄の皆さーん！飯の時間だぞーーーー!!!」

５８０話　蒸し蒸しランド

「東京都、Ｈさんからのお便りです。旅人提督さん、このクソ暑い最中、どうお過ごしですか？僕は、神室町のキムタクをウォッチングしております。さて、夏ですね。今年も、艦娘の皆さんと海にでも行きますか？」
「えっ何だい？」
「でもなんか毎年海行ってますよね？ここは、あえて逆に、更に暑いことをするのはいかがでしょう？なんか感覚ぶっ壊れて逆に涼しくなる可能性が微粒子レベルで存在しているかと思います」
「えっ？」
「野獣がサウナに行くお話が面白かったこともありますし、ここはサウナに行くというのはどうですか？時雨ちゃんを蒸すといい匂いがして素敵だと思います」
「えっえっ何？」
「……東京都のＨさん、お便りありがとう！最近はとても暑いね！サウナに行くのはいい案だと思うよ！」
「あー……、提督？また、僕に見えない何かが見えているのかい？」
「いや、ここまで全部妄想」
「……そっかあ！」

暑い夏の日。
俺は、いつものように世迷いごとを言っていた。
祝福も見えていない、世にも道にも迷っている人なので、世迷いごとを言っても許されていいだろうな、という感覚がある。
「ふふふ、提督、今日は一段と錯乱しているね。素敵だよ……♡」
「それほどでもない（謙遜）」
とりあえず咄嗟に謙遜しておいたが、俺には時雨が何を考えているか分からない。
どう考えてもやばい奴だろ、俺とか。
錯乱してるよ。

隣同士あなたとわたし錯乱坊。
「どっちも錯乱坊だからセーフだね、時雨！」
「ふふふ、意味不明だけどそうだね！」
見えないものを見ようとして、望遠鏡を覗き込んだ。
するとその時朧げながら見えてきたのです、旧支配者という存在が……ってコト?!!
何も見たくねえ……。
俺もメンタル的にはチェーンソーマンくらい追い詰められているのでセーフだろう。
やられていることは、どちらかと言えばファイアパンチなのだが。
まあでも、うちの子（艦娘）も大体、バイオレンスジャックかフランケンふらんか沙耶の唄かＤａｒｋ　Ｂｌｕｅがさよならを教えてか君が望む永遠かみたいな精神性で生きてるので、特に問題はない。
可愛いのでゆるす。
殺す奴もちゃんと悪党のみだから良い子だなあ。
できれば殺さないようにしてね！って言ってるんだがまあ、錯乱坊なので仕方ない。
最近は俺が、ゆるすよ、やりなおそう（旅人博士の提言）と言い続けてきたので、若干や、優しくなってきている気がしないでもないし……。
「で、何してるんだい、提督？」
「ふぅん！ロウリュ開始の宣言をしろ、磯野！」
「……サウナ？」
「蒸し時雨を食べたい」
「なるほど（超速理解）」
僕らはいつも以心伝心……ってコトォ?!!
つまり、そういうこと（世界レベル）。
「いや、そこまでではないよ。悔しいけれどね……」
「その方がいいよ、俺の精神を理解なんてしたら頭おかしなるで」
「頭おかしい艦娘は多々いるから誤差なんじゃないかな？（名推理）」
「まあそれはそう。……でも、増えていいとは言ってないんだよなあ。

そのままの君でいて！」
「うん♡」
ヨシ！
と、まあそんな訳で、時雨を蒸す訳だよ。
理由はもちろん、お分かりですね？
この暑さでも汗一滴かいていない時雨を……、蒸す!!!!
すると！
どうなるか!!!
……どうもならない？
「……ちょっと待ってくれるかな、提督。汗の出し方を思い出すから」
なるほど、汗腺を閉じていたのか。
「頑張れ♡頑張れ♡」
「うーん、こうだったかな……？」
ドバ。
なんかヤバい極彩色の汁が、時雨の穴という穴から噴き出た。
「あーっ！お客様！困ります！あーっ！困ります！」
どう考えても神話的物質なんだよなあ。
触れずとも理解できる神秘、神威。
一級の霊的素材……。
「おっと間違えた、こうだったね！えい！」
ヤバい汁を仕舞って、えい！えい！むん！した時雨は、無事に汗腺が開き、汗をかいてくれる。
……頃合いかな？
「はーい、時雨君、万歳してねー！」
「こうかな？」
時雨の、腋。
汗をかいた、腋。
良いですか腋ですよ？
サウナで蒸されている若い女の子の腋だよ。
パッション――、溢れてるで――。
「はっ?!余りのエッチさに、一瞬ファブルになってしまった?!」

「よく分からないけど、僕に欲情してくれたかな♡」
「ビンビンですわー!!!」
俺は時雨に抱きついた！
その匂いは！
……匂いは。
あー……。
うん。
「……提督？その、バックグラウンドに宇宙と猫を出すやつ、どうやってるんだい？」
「なんか自動的に出た」
いやそりゃ、宇宙猫にもなりますよそりゃ。
だって、『宇宙の香り』がしたんですもの。
大凡、女の子のエッティな香りではない。
幽玄たる星の海、魍魎が如し遊星の怪奇が、無限の暗黒空間を彷徨し蠢動する悍ましき景色。
暗月の裏側、凡そ人知の及ばぬ永遠未踏の裏世界、その静寂。
ああ、ああ。
下手に『瞳』が良いから、気付いてしまう。
永劫の終焉、穢れ、闇の底、宇宙の終着点……。
時雨の本質が、見えてしまう。
「けど可愛いのでセーフです」
ぺろーん。
腋を舐める。
うーん！味も宇宙！
「あんっ♡」
「時雨ェ！お前の前の棚のオレオ取ってオレオ!!!」
「……????」
「もう堪らんぜ！おぱんつ見せろー！」
「きゃー♡」

……「今日の改造はどうだったっぽい？」
……「ああ、いつも通りだよ。提督は、狂っている振りをしているだけさ」
……「流石提督さん！私達が何をしても、自我を失うことはないっぽいー！」
……「提督の自我を失わせることが目的ではないよ。ただ、僕は知りたいんだ。提督が何なのかをね……」

５８１話　旅人昔話　その１

……え？
なにこれ？
あ、明石？
えーっと、俺の過去を覗くために、俺の脳を機械に繋げて、過去の光景を映している、と。
どこでやってんの？……大会議場で全艦娘の前で発表中？
うぇあ、恥ずかしいな。
いやそうでもないか。
俺は年がら年中四六時中、当然、現在過去未来並行世界全てでスーパーイケメンハンサム色男だから、恥じる点とか何もないわ。
え？「自信家ですね？」だって？
ははは、何を言ってるんだ？
君達の恋人として、君達に恥じることなんて何もないよ。
君達の愛する俺は、世界で一番カッコいい男だとも！
……えっ？「艦娘達が嬉しさのあまりイキまくってる？」そ、そうですか。

で、俺の過去。
いつ頃？
１９９８年、九月下旬……？
となると、その頃は……。
『ラクーンシティ』での話か。

その日は確か、俺は知り合いの家を訊ねて……いや女の人だけどそういうんじゃないよ？これはマジ。
その人は、ジル・バレンタインさん。
Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．って言う、ラクーンシティ市警の特殊部隊の一員だった人なんだが……。
「ジルさーん、生きてるー？」

「……旅人さん、来てたの？」
「来てた来てた。これ、バリーとブラッドから」
「特大ミートピザ、Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．一同より……？ふふ、ありがとう」
「で、これは俺から」
「……ハンドガン？」
「無限ハンドガンだ。洋館事件Ｓランククリアのボーナス」
「意味が分からないわ……、でもありがとう？」
あーうん、軽く説明しておこう。
ここは、ラクーンシティ。
アメリカの街だ。
数ヶ月前、俺は、ラクーンシティの山奥にある洋館で雨宿りをしていたところ、「ゾンビ」に襲われている警官隊「Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．」と出会った。
ゾンビの発生源はアンブレラ社。製薬会社を隠れ蓑にして、人間をゾンビに変えてしまう恐ろしいウイルス兵器を開発する悪の組織だ。
洋館はその、アンブレラ社の研究所だった訳だな。
俺は成り行きでＳ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．に協力し、クリスとジルと共に洋館の面白ギミックを解きながらなんか気持ち悪い生物兵器を粉砕し、爆発四散する研究所からヘリに乗って逃げた……。
が、まあ。それでめでたしめでたしとは当然ならないよね。
外様の部外者である俺とは違い、自分の愛する街にそんなヤバい研究所があったと知ったクリスとジルは流石にキレた。
当然、ラクーンシティ市警の所長などにも、アンブレラ社の悪行を訴えたのだが……。
何故か、揉み消されてしまったらしい。
そんな訳で、元Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．メンバーは皆、アンブレラ社について独自に調査するために行動を開始したって訳だ。
そんな中、ジルさんは、ラクーンシティで調査をしているそうで。
でも、味方がいなくて精神的に追い詰められているらしいのよね。
だから、俺はこうして定期的にジルさんの家を訊ねて、元気付けて

いる訳なんだよ。
珍しくそう言う気持ちはないよ？弱みに漬け込んで口説くとかカッコ悪いじゃん。
「じゃあ俺はこれからレベッカちゃんを口説いてくるから……」
「やめなさい、彼女はまだ未成年よ？」
「俺もメンタルは十八歳なのでセーフ!!!!」
「はぁ、全くもう……」

俺がそうして、しばらくラクーンシティで女の子と遊んでいると……。
『現在、ラクーンシティでは大規模な暴動が発生しております。市民の皆さんは～……』
「はい、またお決まりのこのパターン」
ゾンビ、ゾンビ、ゾンビ。
飛び交う銃声、死にゆく人々。
ヤバいと思った俺は、ナンパしている女の子と、近くにいる人々を捕まえて大通りに出た。
「ジャニアリーさん、こっちへ！」
「え、ええ」
「あんたらもこっちに来い！逃げるぞ！」
今飲んでいたバー、Ｊ，ｓＢＡＲの扉を蹴りでブチ破ると、十数人のメンバーと共に外へ出た。
群がるゾンビ！
だが当然、ただのゾンビに負ける俺ではない。
そもそも、まともな反射神経がある人間ならば、ノロノロゾンビに捕まらないように立ち回れるはずだ。
俺は、懐から鋼鉄の六角棒を取り出して、群がるゾンビの頸椎をバシバシへし折る。
「ヨシ！」
「ヨシじゃない!!!何なんだこれは!!!?」
おーん、ジャニアリーさん。

ハッカーなんだっけ？
パンクでかわいいね。
何なんだ、だって？
「ご覧の通り、ゾンビだよ」
俺は、頚椎をへし折ったゾンビをひっくり返し、見せつける。
禿げた頭、爛れた皮膚、濁った瞳。明らかに尋常ではないその姿を見て、生存者達は悲鳴を上げたりなんだりとする。
「詳しいことは省くが、このゾンビは、とあるウイルスに感染するとこうなる。で、そのウイルスってのが、アンブレラ社が開発していて……」
俺が説明をすると、一人の警官が俺の襟首を掴んできた。
「待てよ！お前は誰なんだ、何でそんなことを知っている?!」
その警官の胸元の名札には、「ケビン・ライマン」と書かれていた。
「あー、ミスターケビン？」
「何だよ?!」
「S．T．A．R．S．はご存じかな？」
「知ってるさ、うちの署にいる特殊部隊だ」
「俺はそのS．T．A．R．S．と秘密裏にアンブレラ社の調査をしている者だ。後で確認してもらっても構わない。表の身分的にはバックパッカーで、パスポートはこれ」
「……マオ・シンダイ？チャイニーズ……には見えんな」
「日本人だ」
「日系人か。偽装の身分証……ではないな」
「とにかく、ここにいれば死ぬぞ。脅しじゃない、本当に死ぬ」
「どうするつもりだ？」
「全くもってプランはない。だがとりあえず、知り合いに会いに行くつもりだ」
「こんな時に何を……！」
「その人は、元S．T．A．R．Sだ。今どうしてこうなっているか、知っている可能性が高い」
「待ってください！」

おや、日系人。黒髪の女性が声を荒げた。
「真相の解明とか、私はどうでもいいです！まずは、安全なところに逃げましょうよ！ここで言い合いをして、何の意味があるんですか?!!」
うーん、まあそれはそう。
そう思った俺達は、移動を開始する訳だな。

５８２話　旅人昔話　その２

途中で何人かの生存者を拾いながら、集団で集まって協力しながら移動……。
俺は、幼女を抱っこしながら移動して、知り合いの銃砲店に辿り着いた。
「ダディはね、てっぽう屋さんなの。けーさつの人とお友達なんだって」
「そっかぁ～！エマちゃんはかしこいなあ!!」
幼女は、かわいい。
かわいいので全て許される。
「ダディは、ロバートって言うんだー」
「……ロバート？ロバート・ケンド？」
「お兄さん、ダディの知り合いなの？」
ロバートさんと言えば、この近所の銃砲店の店主だ。
ジルさんにこの前紹介されたな。
それに、銃砲店なら武器もあるはず……。
とりあえず、そこに向かうか。

っとぉ……？
「撃て！撃てー！」
「おい何してる！バリケードを抑えておけ！」
「馬鹿！前に出たら……！」
ケンド銃砲店はどうやら、バリケードを築いて籠城中のようだ。
「イクゾーーー!!!」
「「「おおっ！」」」
俺は、六角棒をぶん回して、ケンド銃砲店に群がるゾンビを殴り殺す。
ついてきた生存者達も、思い思いの武器で応戦してくれた。
「おおっ！あんたは、旅人！」
「ロバートさん、生きてたんですか？しぶといですねえ。あ、娘さんお

返しします」
「ダディ！」
「エマ?!あんた、俺の娘を守っていてくれたのか?!!」
「いやあ、かわいかったんで拾ったんですが、まさか貴方の娘さんだとは」
「……やらんぞ？」
「アッハイ」

さて、ケンド銃砲店に集まった生存者。
合計で二十人くらいかな？
我々は、人海戦術でそこら辺から車や物資を運んできて、銃砲店を要塞化した訳だよ。
そこで俺は軽食を作り、配り歩っていた。
「だから、原因を究明しないとだな……」
「逃げることの方が先決よ」
「しかし、何も考えずに歩って逃げるのか？」
「車を使えば……」
「いや、それは無理だ。道路は車でいっぱいだからな、車は動かせそうにない」
「クソ、国は何をやっているんだ?!」
「はーい、ご飯だよー。イライラしてる人は甘いものもあるよー」
「「「あ、はい」」」
「エマちゃんもお兄さんとご飯食べようねぇ！」
「わーい！」
ご飯を食べられないとお腹がすくじゃないか。
お腹がすくと怒りっぽくなるじゃないか。
怒ると胃に悪いんだ。
胃が悪いとご飯が食べられなくなるんだぞ。
ご飯が食べられないとお腹がすくじゃないか。
つまりそういうことだ。
「さて、食べながらでいいから聞いてもらえます？」

俺は、ホットドッグ齧りながらこう言った。
「このままだと、どの道全滅する」
と。
「質問は後回しにして、とりあえず聞いてくれ。今回のこのゾンビは、アンブレラ社のウイルスが……」
……
……
……
「……と言う訳だね。だからつまり、これから俺達は、『脱出手段を探す』ことと、『Tウイルスのワクチンを探す』必要がある訳だ。両方をやらなくっちゃあならないってのが、生存者のつらいところだな」
「「「……」」」
俺がそう言うと、一気に落ち込む生存者さん達。
ええ、困るよ。
男は割とどうでもいいが、美人が辛そうにしているのは耐えられない。
俺の勘だとどうにかなりそうな感じだし、そんなに深刻な話じゃないんだけども……。
それにさあ。
「脱出手段は最悪(魔法で)どうとでもなるから心配なし。問題のワクチンだが、保存場所は既に分かっている」
「「「おおっ!」」」
俺は、ラクーンシティの地図をべろりと卓上に広げる。
「ここだ」
赤いピンで刺したのは……、「ラクーン大学」だ。
まあほら、大学病院ってやつだよね。
基本的に街ごとグルなんで、市の直属の大学が悪の組織の研究所になっててもおかしくない。いや、おかしいが。
そんな時。
「誰か!そこにいるの?!」
と、バリケードを叩く人の声が聞こえた。

この声は……。
「ジルさん！」
「ジルさん！生きてたのか！」
俺はジルさんに抱きついた。
「やあっ！」
「グエーッ」
そして、普通に投げ飛ばされた。バリケードの一部となっている棚に頭が突き刺さる。
そのままの状態で、俺は会話を始める……。
「ジルさん、今までどこに？」
「皆と一緒に行動していて……、途中でアンブレラ社の特殊部隊と会ったわ」
そこにいたのは、ブラッド、バリー、レベッカなどなど。
洋館事件で俺が助けたりなんだりして生き残ったS．T．A．R．S．のメンバー達がいた。
「へえ」
「アンブレラ社の特殊部隊は、一応、敵ではないみたいね。地下鉄で脱出しようと市民を集めているわ」
ふむ。
「ジルさん、悪いが、それはやめておいた方がいい」
「……何故？」
「ここにいる全員、既にウイルスに感染しているからだ。逃げてもどの道、逃げた先でゾンビになる」
「……そんな！」
ショックを受けるジルさん。
いや、皆、顔面を蒼白にしている。
「だが、ラクーン大学にワクチンがあるらしくてさ。俺はそれを手に入れるつもりだ」
「手伝わせて。私は戦うことしかできないけれど……、ブラッドは化学についての知識があるから、ワクチンについて何かわかるかも」

「助かる」
「私は、アンブレラ社の特殊部隊に、ワクチンの情報について伝えてくるわ」
ああ、この頃はＰＨＳとかでなあ。
街のどこでも４Ｇ通信とはいかないんだ。それに、バイオハザード騒ぎで通信網が遮断されている。
だから、連絡するのにも人が移動しなきゃならない訳なんだよね。
「分かった。こちらで避難民を受け入れるから、そっちはそっちで動いてね。あ、それと、大学からガメて来たワクチンの構成式が尻ポケットにあるから、ブラッドに見せて」
「ええ……。これね？ブラッド」
「ああ」
そして、生存者の中にいた医者のジョージと名乗る男も書類を読み始めた……。

５８３話　旅人昔話　その３

ジルさんが、アンブレラ社の特殊部隊に連絡をする為に離脱した。
一方で俺達生存者と、Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．の生き残りは、休憩で仮眠や食事をとるなどして身体を休めた……。
我々はジルさんみたいな超人ではない一般人なので、休息がたくさん必要なのである。
因みに、ジルさんにもサンドイッチを押しつけておいた。あの人めちゃくちゃ細いのに、どこにあんなパワーとバイタリティがあるんだ？謎である。
そして、暫くして……。
「おい！誰かいるか?!」
男の声が聞こえた。
そこには、三人の人影が……。

「レオンだ。ラクーンシティ市警に配属……されたんだが、まあ、今日来たばかりの警官だ」
「クレア・レッドフィールドです。兄を探してここへ」
「……」
レオンと名乗る金髪の男性、警察官らしい。
それと、クレアという赤毛の若い女の人と、黒髪の喋らない女の人。
「なあ、お嬢ちゃん、もしかして……」
元Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．メンバーのおじさん達が、クレアさんに話しかける。
レッドフィールド、どこかで聞いた名前だもんなあ……。
雰囲気や匂いも似ている、確定だろう。
「君のお兄さんのクリス・レッドフィールドは、あー、極秘任務みたいなアレで外国に行ってるよ」
「……妹の私に、連絡の一つも寄越さずに、ですか？」
「それは……」
「私達は警察署にいたんですが、そこで色々と情報を手にしました。

アンブレラ社……、そしてウイルス兵器……」
なるほどね。
俺は、ブラッドの方を見たさ。
渋顔を作るブラッド、バリー、その他何人か。
当たり前だよな、仲間の妹になんて言えばいいんだって話だもん。
仕方ない、俺がはっきり言うか。
部外者の俺が悪者になればいいでしょこういうのは。
「……お察しの通りだよ、ミス・クレア。君のお兄さんは、アンブレラ社と戦う為に異国の地へと足を運んでいる」
「そんな……！」
「クリスの名誉の為に言っておくが、君に何も伝えなかったのは、君のことを心配して……」
「それくらいは分かっています！でも……、一言くらい……！」
うーん、その辺って難しいよね。
でもまあ、男の人ってそう言うとこあるから仕方ないでしょ。
俺も、女の人は守らなきゃなーって無意識に考えちゃうし。そう言うの嫌っていう女の人も最近増えてるけど、こればかりはどうもね……。

とりあえず、三人は武器弾薬の補充と飲食、軽い休憩をしてから出て行った。手持ちのサイドポーチを分けたらめちゃくちゃ喜ばれて笑えたな。
何でも、アンブレラ社の不正の証拠を掴みたいらしくて、その為に戦うんだそうだ。
俺は生き残れば別にいいかなあ？みたいなテンションなのだが、そういう正義の行いは大変結構なので頑張ってほしい。
いや本当に、嫌味とか抜きで。
俺はどこまで行っても「正義の味方」本体にはなれなくて。
映画で言えば、「何故だか生き残る面白黒人」みたいなポジションなんだよね。
巨大な悪の組織とかと戦うのは、ちょっと無理です。

この当時はそんな力ないし。
俺も、Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓメンバーと何人かの戦える生存者と共に銃砲店を出発して、大学に辿り着く。
大学……、大学ねえ。
確かに凄いよ、たくさんのビックリドッキリギミックがたくさんあった。
黒幕気取りの変なおじさんもいた。
ああ、でも……。
「うーん、まあ何とかなるな」
何とかなるレベルなんだよね。
基本的に、一対一なら、このレベルの敵なら充分に対処できるし。
ええと、タナトス、だっけ？
二メートルくらいの大男に、鋭い爪が生えてる化け物。
「私の最高傑作と遊んでもらお――」
「いや無理」
背負い投げ。
タナトスさんが、凄い勢いで吹っ飛び、壁に上半身が埋まる。
「――は、え？」
おお、おじさんの間抜けヅラ。
「まず、ダメ出しさせてもらうけどさあ」
立ち上がったタナトスさんは、雄叫びを上げながら爪を振りかざす！
「このサイズだと、筋肉じゃあ、積み込めて精々人間の何十倍か？程度でしょ？それならもっとシンプルに、デカくて強くて丈夫な超大型の方が強いよ。例えば、触手で掴むだけで人間を握りつぶせる、とかさ」
俺は爪をいなして、合気道で転ばせる。
「知性と両立したかったのもまあ分からないでもないけど、このレベルの知性ならあってもなくても変わんなくない？」
大袈裟なフェイントにあっさり引っかかり、右往左往するタナトスさん。
「で、これ、フレームが人型なのも良くないね。人体の形してるんな

ら、こうやって武術で対処できちゃうじゃん。少なくとも、俺の知り合いの拳法家達相手なら、秒で土ペロさせられちゃうよ」
関節技……、腕をへし折る。
「あと大体にして、これってコストにペイできてんの？こんな中途半端に強い奴一体をポンと置くより、雑魚ゾンビぞろーっと並べた方が厄介だと思うよ俺は。まあ浪漫だと言われたら何も言い返せんけどね」
折った腕に弓の矢を刺し込み、治らないように固定する。
「総評……、もっと頑張りましょう？」
蹴りを入れて再び壁に突っ込ませる。
「そ、そんな！馬鹿な！わ、私の最高傑作が！」
俺がこのデカブツさんをあやしてやっている隙にワクチンを作っていた生存者達。
大量に作られたワクチンを風呂敷にぶち込み、ダッシュで逃げた……。
なんかこの後大学が爆発したけど、それは俺知らないやつだね。
爆発オチでしょ多分。

５８４話　旅人昔話　その４

帰還した俺達は、順次ワクチンを打つ。
俺はこの前の洋館事件の時にウイルスに打ち勝っているので、既に抗体ができていて意味がないのだが、一応打っておいた。
「ふう、これでひと段落だな」
銃砲店店主のロバートさんがそう言った。
「うん、この調子なら時間的余裕が――――」
『緊急速報です！政府は、後二十四時間後にラクーンシティを爆撃して滅菌します！』
「――――ないみたいだなあ、うん！」
はい。
まあほら……、うん。
政府が有能だったパターンとかまずないじゃん？
大統領がマイケル・ウィルソンになって、やっと「まとも」と言える水準になったのがアメリカという国なんだよ。
あまり悪口は言いたくないけど、事実そうだからね……。
アンブレラ社はかなりデカい企業で、政府にもその利権やら何やらが食い込んでいたから、余計にね？
「ど、どうするん、ですか?!」
メガネで三つ編みの女の子、俺がナンパして引っ掛けたヴァレリーちゃんが叫ぶ。
うーん……、転移魔法でこの人数を街の外まで大規模長距離転移か……。
この人数だと魔力が全然足りないな。
無理して転移すれば、半分の人数を運べないうちに爆発四散……、そうなれば肉体の再生が終わるまでに街は爆撃で消し飛ぶ。
小分けにして運んだとしても、長距離転移は儀式魔法だから、やはり二十四時間では足りない。
うーん、ヤバいねこれは。
それに、魔法を使うと、魔術師協会とかいう怖い人達が飛んでくる

からなあ。
この人達も、魔法を目にしたとして、追われたり監視されたりするかも……。
当時はそう思ったんだよねえ。今でこそ怖くない魔術師協会も、昔はやっぱり怖かった。
じゃあ、そうだな……、これならどうだ？
銃砲店の屋上で俺は、こっそり魔法を使った。
『生命探知』
そう、生命体のオーラを見る魔法だ。
「……やっぱりそうか！」
読み通りだった。
ゾンビは生き物じゃない、生命のオーラを放たない。
だから、生命探知に引っかかるのは、俺達と……。
「レオン！レオン・Ｓ・ケネディ！」
生き残っている生存者のみだ！
そして、レオンの位置を起点に遠見の魔法を使えば……、地下の研究施設に、巨大な地下鉄があることが分かる！
《目星・８０》で見たところ、すぐにでも発車できる状態だともまた、理解できる！
脱出の手段は、これだ！

「警察署だ！警察署に行くぞ！」
俺は叫んだ。
「何言ってるんだ?!脱出の手段が先だろう?!」
ロバートがそう言った。
策があるんだと、俺は訴えかけるが……、皆の反応は乏しい。
が、そこで、金髪のガンマンガール、俺がナンパした女の子の一人であるベッカちゃんはこう言った。
「ねえ、何でみんな、この人を信じられないの？」
と。
「ワクチンが手に入ったのって、この人のお陰だよね？この中じゃ一

番信頼できると思うんだけど、違う？」
なるほど……、そう言えばそうだよなーって思ったね。
だって、ここにいるのって、Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．メンバー以外は寄せ集めだし。
だから、ワクチンを持ってきた俺はこの中で一番実績があって、信頼に足ると言える訳だ。
感情的な意見と見せかけて、実は理論的な答えだね。
「説明させてほしい。脱出の手段は、アンブレラ社の秘密研究所にある地下鉄道だ。秘密研究所には、警察署の地下から行ける」
「何でだ、とは聞かない方がいいか？」
ラクーンシティ市警のケビンがそう言った。
「それは俺にも分からない。だが、とにかく、行けるのは行けるんだ。頼む、俺を信じてくれ」
俺は思い切り頭を下げた。
もう誠意しかない。
誠意大将軍である。
「……分かった。言い争ってる時間もないしな」
「行こうぜ！駄目なら駄目でその時はその時だ！」
「そうよ！何もやらずにここで死ぬなんて嫌！」
誠意が通じて、移動することに……。

まーあもうね、この頃には怖いもんなしだよね。
ワクチンで発症の心配がなくなったから、即死しないように気をつければＯＫってなもんで。
俺が、レウス素材の弓で拡散矢をボコボコ放ってゾンビの群れを吹き飛ばすと……。
「「「うおおおおっ!!!」」」
Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．チームや警官のケビン、銃砲店のロバートさんや、警備員のマークおじさんなどの武闘派が横に並び、ショットガンやグレネードなどで場を制圧する。
「今だ！早くこっちへ！」

そこに、ロバートさんの嫁と娘さん、ウェイトレスのシンディちゃんなどの非戦闘員が来て、その背後をバックアップするように、廃材で作った盾などを構えた男性陣がついてくる。
そして、警察署……。
どうやら、レオンとクレアが探索した後らしく、物資はあまりないが、鍵などは全部開いていた。
なんかデカい女神像の下に地下行きのエレベーターがあったから、それに乗る……。
そうして、地下を進んでいくと……。
「誰だ?!……あんた達か!」
レオンとクレアがいた。
「レオンとクレアだったね?俺達は、無事にTウイルスのワクチンを手に入れた。しかし、脱出の手段がないんだ」
「なるほど……、だからここに来たのか」
「ああ、言い方はアレだが、君達の脱出に相乗りさせてもらう」
「分かった。この場を守ってくれるだけでもありがたい」
「……ところで二人とも、めちゃくちゃ臭いんだけど」
「……下水道を通ってな」
ああ……、はい……。
「一応、着替えはあるが」
「……助かる。タオルとかあるか?」
「ああ、温めたタオルを用意した。それと食事もな」
二人は着替えて、顔を拭き、うどんを食う。
因みに、豚汁うどんだ。楽なので。
「これ、美味いな。日本のヌードルか?」
「ああ、うどんって言うんだ。お腹に優しいから、身体に負担をかけない」
「へえ……、いつか行ってみたいな、お前の国へ」
「そうだな、そうなると良いな……」
そしてクレアは……、エントランス内にいる弱った少女を介助している。

シェリーちゃんと言うらしく、身体にGウイルスなるものをぶち込まれてしまったんだとか。
レオンの連れ……、エイダとか言う黒髪の女も、怪我をしているようだ。
俺は、街の中で手に入れた救急スプレーでエイダさんの治療をした。
「レオン、クレア。倒れてる二人に点滴をしようと思うんだが……」
「そうだな……、やるべきだろうな」
「でも、大丈夫なのかしら……？」
「ここまで飛んだり跳ねたり走ったりして、それなのに水の一杯も飲んでいないんだろ？脱水症状で死ぬぞ」
冷静に考えれば分かるよなあ……。
エイダさんは身体つきからして相当できる人だから分からんけど、シェリーちゃんみたいな幼い女の子が、不衛生なところで過度な運動をし、心身に負担をかけて無事な訳がない。
俺は飯炊きくらいしかできん、英雄にはなれない男だが……。
どんな英雄も、飯が食えないと戦えないんだ。
「そう、だな。やってくれ」
「……分かったわ」
エイダさんとシェリーちゃんに点滴をする。
心なしか、表情が和らいだ気がした。

５８５話　旅人昔話　その５

俺達は、豚汁うどんを素早くかっ喰らって、更にバナナケーキを食って、徹底的にエネルギーを補給した。
そして、少しの休憩の後、即座に突撃をするつもりだ。
休憩用のエントランスルームには、倒れているシェリーちゃんとエイダさんを寝かせておき、今までの戦いで傷ついた生存者達もここで休ませる。
そして、非戦闘員の生存者が、俺が持っていた医薬品などで治療行為をしていた。
ウイルスで死ななくなったとは言え、ゾンビに噛まれているんだ。
破傷風かなんかで死ぬ確率は大きい。
医者のジョージ、応急手当ての心得があるシンディなどが二人で、噛まれた人に抗生物質を注射して回っている。
コンピュータに詳しい日系人のヨーコ、ハッカーのジャニアリーなどは、エントランスルーム付近にあるコンピュータを使って情報収集をしている。
無口な配管工のデビットと、肝の小さいメカニックのマーティンは、二人で劣化した武器の修理や、簡単なトラップに爆弾などを作っている。
他の人達も、各々ができることを十全にこなしていた。
全員、眼は死んでいない。

そして、突撃開始。
元Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．メンバーと共に、一斉に大規模に探索する。
正直な話、一番怖いのは、開けた場所で大量の雑魚ゾンビに囲まれて群がられることだ。
十人を超えるメンバーがちゃんと武装していれば、そうそう負けることなどない。
三人組のチームに分かれて各部屋を制圧し、一瞬で集まったキーア

イテムを使って、道を開いた……。
リッカーなどの強化型の生物兵器が現れても……。
「うわあああ！飛びかかってきたぞ?!」
「任せろ！」
俺がメイスなどで殴り、壁に叩きつけて。
「今のうちだ！硫酸弾を頼む！」
「おうっ！」
仲間達がグレネードランチャーを撃ち込んで倒す。
そうして、どんどん敵を倒していき……。
「あ、貴方達、何者?!」
「年貢の納め時だぞ、アンブレラ！」
アネット・バーキンとかいうおばさん（なんか悪い人らしい）を捕まえて。
「おいレオン、なんかキモいの来てるぞ！」
「あれは……！またあいつか！」
「あれはGウイルスを接種した夫よ！」
という訳で、Gウイルスを接種して化け物になったウィリアム博士が現れた。
アネット博士は、女の人にボディチェックしてもらい、問題ないことを確認。
更に、屈強なおじさん達に捕まえてもらっておく。
そして、暴れているウィリアム博士を、囲んでグレネード。
『グオオオオッ!!!?』
四方八方からグレネードの爆炎を浴びせられて怯み、弱点っぽい目玉みたいな腫瘍をまろび出すウィリアム博士。
そこを、レオンとクレアが、マグナムで穿つ。
『グオオオオアアアッ!!!?』
腫瘍が、黄色い汁を吹き出しながら弾ける。
機能停止したようだ。
「クレア！」
「レオン、Gのワクチンは手に入れたわ！あとは、脱出するだけよ！」

そんな話をしながら、エントランスに戻る。
エイダさんは、レオンが持っていたGウイルスのサンプルをガメて逃走。
「……泣けるぜ」
「アッハイ」
凹むレオンを慰めながら、ワクチンでシェリーちゃんを治療。
さあ、そのまま脱出だー！
「とは言え、時間的余裕はあるからな、のんびりと脱出方法を――」
『警告。自己破壊コードが実行されました。中央エレベーターから最下層のプラットフォームへ緊急避難してください』
「――考えている暇はないようだねえ、とっとと逃げようか」
なんで????
「中央エレベーターを動かすＩＤパスはこれよ」
と、アネット博士。
「へえ、抵抗しないんですか？」
「もう、良いのよ……」
「……そうですか」
その言に従い、皆でエレベーターに寿司詰めになりつつ移動。
なんか知らんけどタイラントとかいうデカブツが暴れてきたから、みんなで囲んでショットガンを撃ち込み怯ませ、移動した。
俺が拾った対戦車用ロケットランチャーをみんなで囲んで撃ち込むと、タイラントは跡形もなく弾け飛んだ……。
そして、無事にプラットフォームに着いた俺達だが……。
『グオオオオッ!!!』
「ウィリアム博士！生きとったんかワレェ!!!?」
更にキモくなったウィリアム博士が、四つ足の獣みたいになって再登場したんだよ。
……まあ、ロケランで粉々になったけど。
いい加減、負ける要素がない。
そもそも、現代兵器を撃ち込めば簡単に倒せてしまう生物兵器って大して怖くないよね。

銃無効物理無効とかの悪魔の方が怖いんだよなあ。

こうして、無事に地下鉄に乗って。

返り血やら何やらでドロドロに汚れた俺達は、到着先のだだっ広い荒野に倒れ込んだ。

「「「つ、疲れた!!!」」」

そう叫んだが、皆、表情はとても晴れやかだった……。

まあ、うん。

こんな感じだったよ。

え？そりゃまあ、女の子達とは今も連絡を密に取り合ってるけど？

後はまあ、生存者同士でも連絡網ができてるし。

中には、今回の事件で絆を深めたから、後に結婚したって人達もいるな。

レオンやクレアは、これからもアンブレラ社と、アンブレラ社が残したものと戦い続けている感じだね。

ジルさんも心配してたんだけど、ちゃんと脱出できたみたい。

ジルさんはこの後、元鞘って訳じゃないけど、相棒のクリスの元へ戻って、元Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．メンバーと共にＢ．Ｓ．Ａ．Ａ．っていう対バイオテロ組織に入ったよ。

俺？俺はまあ、レオンとクレアと、そのＢ．Ｓ．Ａ．Ａ．をちょっとお手伝いしてるくらいかな。結構給料良くてさあ……。

……もう大丈夫？

さて、楽しめたかい、俺の過去は。

……面白かった？

それは良かった。

……え？

この時にナンパした女の子達は今、俺の子供をこっそり産んで育てている？

……え？

嘘でしょ？

……全世界でそういうケースがあるから、(暫定)俺の子供に支援する為に、俺の過去の記憶をサルベージしている？

今回のこれ、そういうアレだったの？？？？

だって俺、ちゃんと房中術で妊娠しないように……。

あ、はい、女の人ですもんね。

浅はかな我々男なんかより、よっぽど強かですもんねえ……。何かしら無効化する手段を用意してたんですね、はい。

そっかあ……、そっか……。

５８６話　夏の釣り

ウオオオオッ!!!
俺俺俺俺!!!
真夏ーのーじゃんぼり――――。
「――――釣りをやります」
プロとして――――。
「おおっ！じゃあ、今日は俺とデートか！」
てーんりゅーちゃーんじゃーん。
既に、ライフジャケットにクーラーボックス、釣り竿を完全装備した天龍ちゃん。
今日は、マネーの力で作った黒井鎮守府の港で、釣りをするのだ。
釣りをするのだポッター。
マネーの力は強大で、マネーチャージプリキュアである大淀が、溢れる資本の力で釣りに丁度いいポイントを用意してくれた。
具体的にどんな釣りポイントかと言うと、神室町からタクシーで行ける堤防にあるくらいに無差別に何でも釣れるところだ。
シラスからマグロ、リュウグウノツカイ（イクさんではない）まで釣れる、ブッ壊れスポットである。
余談だが、幻想郷で一本釣りして、俺の竿を呑み込んでくれたイクさんとは最近会ってない。会ったら「もっと会いに来てください！」と１００％ズタズタに引き裂かれるので、ひっさつどげざでどうにかしよう……。
俺のひっさつどげざは１０％の確率で相手に許してもらえるので、やってみる価値はありますぜ！人間関係が駄目になるかならないかなんだ！
さ、て。
俺はそんなブッ壊れスポットである、黒井鎮守府堤防に天龍ちゃんとやってきていた……。
時間帯はもうマジで早朝。
昼間だと水温が高くなり過ぎて、お魚さんも困ってしまうからね

え。
事実、最近の暑さでは、茹だった魚が死んで、沖合に流れ着いていることもあるくらいだよ。怖いね、地球温暖化。
やっぱり俺も、カボチャを被ってマフティーとなり、地球環境を守らなきゃならないのだろうか？
統合失調ハサウェイにはなりたくないなあ……。
既に面白ノースリーブグラサン芸人みたいな領域にはいるが。天龍ちゃんはチャーミングだからな。
「何狙うんだ、提督！今の季節ならシロギスか……、新子のタコなんてのもアリだな！」
「へえ、タコ来てるのこの辺？」
「大淀が用意した堤防には、何故か毎年来てるぞ。タコは、その年によって来る来ないが分かれるんだけどなあ」
「はえー、すっごい。どう言う技術を使った堤防ならそんなことになるんですかねぇ？」
「知らんけど、『真島建設』ってところに下請けを依頼したらしいぜ？」
「アァ……、オワッタ……！」
極道なんですがそこ？？？？
本当に大丈夫？？？？
ググった知識でビル建てるような人らだよ？
まあ、勘で爆弾解体できる人だしセーフみたいなところはあるかな。
で、何を狙うかだっけ？
「サビキで小ちゃいアジでも釣るかなあ。アジフライ食べたいし」
「んもー！提督って、基本的に食べる為に釣りをするから、ゲーム性をあんまり考えないよなあ」
まあそうねえ……。
「俺は基本的に、釣りの技術は生きる為に身につけたからね」
生きる為、仕方なかった。
「んじゃ、チヌとか？狙って釣るのは難しい時期だよ、ゲーム性もあるんじゃないかな」

「んー……、チヌは夜じゃねえか？」
まあそれはそう。
あ、チヌってのはクロダイのことね。
クロダイって雑食だから、汚いところで釣ると臭くて美味しくないんだけど、黒井鎮守府堤防は何故か不自然に綺麗だから新鮮で美味しいよ。
炊き込みご飯にすると気が狂うほど美味いんじゃ。
「あとはツバスかなあ……」
「ああ、良いんじゃねえか？ツバスは朝の方が釣れるしな」
「釣った豆アジを餌にして、ツバスを釣る訳だよ」
「へえ、ノマセ釣りかよ」
ツバス、つまりはハマチだ。
鰤の進化前の姿である。
ブリ、ハマチ……？
「ぷるっぷるっぷるっごき～……？」
「ん、どうした提督？また発作か？」
天龍が気の毒そうな表情を隠しつつ、優しい声を出して俺の肩を抱く。
いやん、惚れちゃいそう。
それはともかく、俺はそんな定期的に狂ってるみたいな扱いなのだろうか？
正常な精神を持つ、一般通過旅人なんだが????
「今流行っている鰤と言えば、男の娘の方のブリなのですが」
「すまん、何の話だ???」
「僕は、ついてゆけるだろうか。君のいない世界のスピードに」
「おっ、大丈夫か大丈夫か？」
本気で心配されてしまった。
天龍は良い子だなあ。
「いや大丈夫、昔の鰤の話をしていた」
「そ、そうか……」

ナイロンライン巻き巻き～。
釣具を用意していると……。
「おいおい、ナイロンラインで良いのか～？ＰＥラインの方が感度高いぜ～？」
と、横でリールを弄る天龍ちゃんに煽られた。
「俺本体の感度が三千倍なので大丈夫みたいなところがある」
「うげ、やめてくれよー……。あの、対魔忍とかいうアホ共を拾ってくる仕事、マジでキツいんだぜ……？」
ああ、そう言えば、定期的にあっさり捕まる対魔忍を救出する仕事を天龍は定期的にしていたな。
「あいつら、感度三千倍だかなんだか知らねえが、運んでる最中にイキまくって変な汁撒き散らすんだよ……」
ああ……、はい……。
「お、お疲れ様です……」
割とガチでしょんぼり顔をするもんだから、ちょっとシリアスに慰めちゃったぞう？
「ってか、天龍ちゃんは大丈夫なの？」
「え？何がだ？」
「魔界のオークとかにレイプされたりしてない？」
「ハハッ、何言ってんだよー！」
「ははは、冗談で」
俺がそう言いかけると、天龍ちゃんは笑顔のまま、地の果てから湧き上がる呪いの声みたいな声音でこう言った。
「俺の身体も心も、魂の一欠片すらも、全てアンタのもんなんだよ。なんで、ゴミ虫共に触れさせるんだ？」
おっ……とぉ……？
「本来なら、提督以外に見られるのですら不愉快なんだぜ？けど、他でもない、愛するアンタが、人間らしく過ごせって言うから我慢してるんだ」
おお、あ、おお。
「あーっ、と、えー、辛い？」

「……いや、我慢できる。艦娘は仲間だし、地元の人らも……、まあ、胸を見たりはするけど、悪い連中じゃねえ。キレるほどのことじゃ、ねえ」
　ん、よし。
「天龍は偉いね、頑張ってるね。良い子だ、愛してるよ」
「うん……♡」
　ふう……。
　釣りをしながらも爆弾解体もできるなんて、スリリングで最高だなあ!!!!!
　おま（ん）け。
「提督ー？このコスプレ、なんなのー？」
　もがみんに鰤のコスプレをさせていた。
　因みに新しい方だ。
「最近流行りの、賞金稼ぎの子のコスプレだよー」
「へえ……、そうなんだ。これ着てると、提督は嬉しいの？」
「んー、どうだろ？」
「え？可愛くない？」
「いや、最上は可愛いけど……」
「けど？」
「それ、男の子のコスプレだし……」
「にゃああ!!!?!!なんで?!なんで男の子のコスプレ?!!」
「いや、行けるかなって……」
「僕は一人称が『僕』だけど、ちゃんと女の子だよぉ!!!目の前で着替えたんだから分かるでしょ!!!?!!」
　まあそれはそう。
「でも、これはこれで……」
「も、もしかして、提督……！ホ、ホモに?!」
「ないです（ないです）」
「女の子の可愛さを思い出してー！」
　そう言って、スパッツ尻を見せてくれる、最上ちゃんなのでした

（きょうの○んこ）。

５８７話　摩耶様とプラトニックな恋愛をするんだよ

摩耶様じゃん。
俺が……、秋の始まる頃のある日。
ゴリッゴリにガーリィな可愛い女の子向けスイーツ店に、男の身で堂々と入店し、『秋のマロンパフェ』と『お芋ケーキ』と『かぼちゃプリン』で紅茶を飲んで一服していると。
ばったりと、摩耶と出会った。
「……あー」
「お、摩耶」
「……み、店を間違ったみたいだぜ！」
あっふーん？
「摩耶」
「うるせえ！何も言うなぁ！」
頬を赤くしながらも、手で顔を覆う摩耶。
まだ何も言ってないじゃん？
「摩耶、聞いてくれないか？」
「に、似合ってねえって言いたいんだろ?!分かってるんだよ、んなこたぁ！」
いや、別に全然アリなんだけど……。
そもそも。
「摩耶、よく考えてごらんよ。黒井鎮守府はね、某団地もびっくりな変態人妻（艦娘）の巣窟なんだよ？今更、少女趣味程度じゃキャラ立てにもならないんだよ。それは、分かるよね？」
「まあそれはそう」
秒で納得された。
「ったく……、何でお前がこんな店に居るんだよ？」
「スイーツが食べたかったから……」

「良くもまあ、こんな女臭い店に入れたな？緊張とか……しないよなぁ……」
「えっ?!スイーツを食べれる上に、女の子の匂いも嗅げる??!!?!」
「おう、アタシの匂いは嗅いで良いけど、他の女に目移りしそんじゃねえぞ？」
あらまー、嫉妬？
可愛いなあ、摩耶は。
どう可愛いか？具体的に説明させていただこう。
まず大前提として、ガラ悪いヤンキー女に見える摩耶だが、内面は割と少女趣味である。
度重なる戦闘により、入渠しても消え切らなかった細々とした傷の数々。
顔にも小さな傷が無数あり、胴体には弾痕まである始末。
手なんて、訓練で皮が剥けてボロボロになるまで剣を振ったからか、傷だらけでひび割れていて、剣タコが盛り上がっている……。
摩耶の顔を見なされ、戦場で傷だらけになったきたねえツラだ！
……だが、それがいい！
それほどまでに戦ってくれた戦士であると同時に、この傷こそが、摩耶という一人の女の子を可愛らしくする。
傷が気にならないような美女である、と。そう言う訳ではない。
傷すらも美しい、珠玉の身体。
戦乙女なのだ。
そして、何が可愛いのか？と言うと……。
「摩耶」
「んだよ？」
「可愛いお洋服だね、似合ってるよ」
「んっ……♡バカ、何言ってんだ！似合ってる訳、ないだろ！」
摩耶が身に纏うのは、女の子らしい女の子に憧れていますと言わんばかりの、ガーリィなファッション。
無論、あまり子供っぽくならないようにしつつも、それでもどこか幼さが滲み出る、優しい装い……。

パステルカラーのピンクセーター、緩やかなシルエットを描くスカート、ネイビーのリボン。
女性であることの喜び、と言うのだろうか？
「女の子」をエンジョイしつつも、摩耶らしいキリッとした引き締めをネイビーの小物で演出する、オシャレポイントが高いフルアーマーだ。
オシャレを楽しむ女の子は、本当に幸せそうで……。
そう言う女の子を見ると、守ってあげたくなってしまう。
全ての可愛い女の子は幸せに生きるべきだから。女の子が幸せに生きるためなら、俺は死んでも良い。
ああ、摩耶。
可愛いよ、摩耶。
精一杯のオシャレをしてきたんだね。
服を選ぶのは楽しかったかい？
薄い化粧もよく頑張った。
沢山勉強したんだね。
似合ってるよ、可愛いよ。
大好きだよ、愛してる。
俺は、そうやって摩耶を褒め称えた。
「バカかお前ぇ～!!!」
顔を真っ赤にして、両手で顔を覆う摩耶。
が、俺には分かる。
めちゃくちゃ、ニヤけていることが。
褒められて嬉しいんだろう。
「摩耶、大丈夫だよ。似合ってる、可愛い。摩耶の新しい、素敵な一面が見れて嬉しいな。俺は世界で一番の幸せ者だよ」
「うう～……♡」
ん？
大淀からのラインだ。
《大淀》
《よろしければ私もそういうファッションを致しますがいかがでしょ

うか？》
あ、監視か。
人のデートの最中にラインとは許すまじ。
返信！
《旅人》
《ごめん、今、摩耶とデート中だから》
お、返信が来た。即レスだ。
《大淀》
《けつあな確定ってことですか？》
あはーん？
何言ってんだこいつ？
脳味噌までカビたか？
《旅人》
《行間どころか書いてない文章読み取るのやめちくりー》
《大淀》
《はい。ケツ穴をおっ広げて待機しておきますね♡》
俺は大淀のラインをブロックした。
スマホがハッキングされ、大淀のエロ自撮りがスパムメールが如く大量に送りつけられる。
こわい。
俺はスマホの電源を切ってアイテムボックスに突っ込んだ。

変態人妻は放っておこう。
それより、摩耶様とデートだ。
だいじょーぶ、まーかせて！
俺のデート力はオーラロードが開かれるくらいある。
摩耶様をべったべたに褒めて口説いて蕩かしながら、腰を抱いて移動する。
摩耶の乙女回路がギュンギュンと火を吹く音が聞こえる聞こえる……。
「や、やめろよっ！外でくっつくなよ、恥ずかしいだろっ?!」

最初はこんな感じでツンツンしてた摩耶だが……。
ほんの数時間後には。
「提督……♡もっとぎゅってしろよ♡」
即堕ち二コマですわ!!!!
今は、夕暮れを、景色がいい公園のベンチで二人で眺めている。
握り合った手のひらが熱い。
摩耶の暖かさを感じる。
残念ながら、人の革新はまだ遠く、新たな人類も生まれていないこの世界では、天パのパイロットのような、分かり合う力はない。
だが、そんな特別な、マーブル模様の宇宙で謎の全裸レスバトルをせずとも、人と人とは分かり合い、愛し合うことができるんだよなあ……。
ほんとの愛はここにあるんだねサーバルちゃん。
余談だが、某地方ゆるキャラとのコラボでひぐまモンにされたヒグマのフレンズを見て、「うわあ、まるで変態洗脳常識改変エロコスチューム化みたいだあ」と邪なことを考えた人は、K県黒井鎮守府で僕と握手!
それはそれとして、学生デートって感じがしてこれはこれでいとおかしだよね。
セックスを伴わない恋愛は、俺くらいの歳になってくると、逆にえっちであると専らの評判。
「アタシはバカだから上手く言えねえけど……、その……、好きだ。愛してる。ずっと一緒にいてほしい」
あぁ^〜。
「アタシは、あー……、もうダメだ!好きって気持ちが胸いっぱいで、なんて言えば気持ちが伝えられるか、わかんねーよ!」
あああぁ^〜〜〜!!!
犯罪的なかわいさ。
”乙女”という言葉は摩耶の為にある!
しゃあっ!
「摩耶、俺もだ。何万回言ったって足りないくらい、愛しているよ」

「提督……♡」
こうして俺達は、プラトニックなデートをじっくり楽しみ、摩耶とイチャイチャしながら一日を過ごした……。

余談だが、帰宅したら自室に、極太ケツバイブが刺さったまま、色々な液体まみれになっている大淀がいた。
こわいので逃げた。
大淀は放置しても喜ぶのでいいんじゃないですかね。

５８８話　民間に媚びる

「民間に……、媚びよう！」
俺は、握り拳を作って突き上げた。
「「「……？」」」
本気で分からないと言った顔をする艦娘達……。
仕方がない、説明してしんぜよう。
「相変わらず、黒井鎮守府の評判は『ヤベー奴ら』です！これはいけません！なので、評判を上げる為に民間向けのイベントをします!!!」
「アドベント？」
「与えられた命はチャンスではない」
「ベン・トー？」
「見てない」
「サーペント？」
「ダブルガトリングガンいいよね……」
「いい……」
さて。
「はい、イベントです。内容はどうするか？みんなに決めてもらいます！」
「公開処刑とかどうかな？」
「時雨、後でお尻ぺんぺんね」
「ああ……、分かったよ、提督♡」
それを聞くとマゾ艦達がシュババと動き始めるが、俺はそれをスルーして他の艦娘に目を向けた。
尚、スルーされたマゾ艦達は、無視されたことにより勝手に悦び勝手に気持ち良くなっていた。
黒井鎮守府の床はもうびちゃびちゃ。
「では、兵器の展覧会とかどうです？」
「おっ、それ良いね！」
明石が久しぶりにまともなことを言った！偉い！
「私はぶっちゃけ、作ることにしか興味がないんですけど……、作った

ものが売れないと、次のものを作れませんからねえ」
と、明石はつまらなそうに言った。
「入場料は、大人で千円くらいにしておきます。無料ですと、民度が低い奴らが集まってくるので」
と、今度は霧島。うちの財務担当だ。
うんうん、話がまとまってきたな。
「黒井鎮守府、兵器博覧会……。やってみようか！」

九月の末ごろ。
黒井鎮守府が一般開放され、兵器博覧会が始まった。
入場料以外にも、併設された黒井鎮守府カフェと黒井鎮守府ビアホール、黒井鎮守府お土産店で金を搾り取るスタイルだ。
兵器オタクや、そう言うのが好きな子供、酒や土産目当ての親なんかがやってくる。
美人コンパニオンを用意して、まるで新型の車を見せるかのように盛大に博覧会だ。
美人コンパニオン？
艦娘ではないよ。あの子らは俺以外には傅かないから……。
雇ったのは退役した対魔忍の人達かな。
この人達、頭はアレだけど見た目は百点満点だから……。
まあでも頭がアレなので重要な仕事は任せられないけどね！
とりあえずバニーガールの衣装のまま、愛想を振りまいてもらうだけだ。
この人らは、黒井鎮守府の技術なんかこれっぽっちも知らないし理解していない。頭がアレだから。
なので逆に、従業員兼警備員として信頼できてしまう。
対魔忍の悪いところは、頭がアレ過ぎて言うことを聞いてくれないところなのだが、一度敗北して心身共に壊された後、救出してあげると、ちゃんと話を聞くようになるのだ。
ゆきかぜちゃんみたいな、もう本当にトップクラスのアレでもない限り、ちゃんと話を聞いてくれるようになる……！

やっぱり痛い目を見るって大事だなあ。
痛くなければ覚えませぬ。
いや、擁護しておくと、頭がアレなこと以外は本当にまともなんだよ？
「こんにちわ！楽しんでいってね！」
「うん！」
今もほら、笑顔で子供に手を振っている。
あれだけ純真な笑顔を子供に向けられるのは、優しい人だ。
「こちらは、黒井鎮守府が製作した人型ロボット兵器の『グルンガスト』です！現在では参式までの三種類がロールアウトされており、日本軍の制式採用ロボットで……」
元対魔忍コンパニオンが、カンペを使って飾ってある兵器の説明をする。
目をキラキラさせた子供が、元対魔忍コンパニオンに抱っこされて、操縦席に乗せてもらう。
軍用の戦闘シミュレーターなんかも使えるので開放しているが、ゲームみたいで面白いと評判だ。
因みに、このシミュレーターは本物なので、良い成績を出した人がいると……。
「きみ、いいからだしてるね。黒井鎮守府機動兵器部隊にはいらないか？」
と、横からうちのゾンボルトさんとかが出てきて勧誘し、任意同行（任意とは言ってない）してもらう。
「ふむ……、シングウジ君か。荒削りだが、良いパイロットになるだろう」
「い、いや、俺は……」
む、いかん。
才能がありそうな子が逃げそうだ。
って言うか誰だ？スカウト担当をゾンボルトさんにしたのは。
セツコさんとかイルイちゃんとか、もっとまともなの連れて来いよ！

「あーっと、シングウジ君だっけ？」
「え、あ、はい」
「これ、うちの従業員の写真」
そう言って、水着姿のチトセちゃんのプロマイドを渡す。
「おおおっ!!!」
露骨に喜ぶシングウジ君。
「うちに入社してくれたら、可愛い子いっぱい紹介できるんだけどなあ……？」
「にゅ、入社します！させてください!!!」
ふ、勝ったな……。
「社長、このことは奥方様に報告させていただくので」
「おっっっと……？ゾンボルトさん？？？？待ってください、許してください！なんでもしまむら!!!!!」
「しかし」
「待て待て待て待て！話し合おう！何が欲しい？予算か?!ボーナスか?!!」
うおお！唸れ俺のポケットマネー！
「いえ……、奥方様から、見張っておけと命じられております故」
「ヒェー!!!!!」
この後めちゃくちゃ怒られた。

５８９話　時空の旅人達

黒井鎮守府のフリーパスっぷりと言ったらもう凄い。
一応、黒井鎮守府のメインルームや、炉心があるルームには厳重な防御があり、外壁もしっかりあるし警備ロボもたくさんあるのだが……。
身分が明らかな人は、あっさりと出入りできちゃったりする。
術師なんかは特に簡単に出入りができるね。
転移の妨害も一切なく、それどころか転移してきやすい条件を整えてあるのだから。
その辺の話をすると大変だが、まあ要するにガイドビーコンみたいなのを出してると思ってくれて構わない。
だからたまに、黒井鎮守府には、時空漂流者やら何やらが来る……。

黒井鎮守府、転移ルームのすぐ隣。
居酒屋鳳翔にて。
俺はいつものように、艦娘を侍らせて鍋をつついていた。
「んー、寒い日に、熱々で辛いキムチ鍋！こんな贅沢は他にないズェ……」
俺の隣では古鷹と加古が、護衛（という名目で俺を合法的にストーキングできるオイシイ役割）をしているらしい。
かわいいね。
キムチ鍋を十人前平らげたので、あとはモツ鍋とか行こうかなと鳳翔を呼んだ、そのあたりで……。
転移ルームから、二人の男女が現れた。
片方はエルフのおっさん。
もう片方は翡翠色の瞳をした美女。
んーんん？
ままえやろ、黒井鎮守府は美人なら誰でも受け入れるのだ！
まるで幻想郷みたいだあ。
「あの、悪いけど、食事を分けてもらえる？」

女性が言った。
なるほど、長旅をしていたのだろう。
焦燥した様子を見るに、逃亡者の類か。
面白そうだし、美人だから匿おう！
「良いよ、座りな。……あ、食べられないものとかある？」
「特には」
「はいよ、鳳翔さーん！」
「はーい」
鳳翔が、山盛りの食料を持ってきてくれた。
最近、鳳翔や間宮などの厨房組は、修行のためにドンドルマなどに顔を出していたらしく、バフ効果が出る料理の作り方を覚えてきたらしい。
「どうぞ、好きなだけ」
「ありがとう！」
飲食を始めようとする女性、だが……。
「待て、ジルエアエル。この男、何かおかしい」
と、エルフの男がそれを制した。
ふむ……？
「古鷹、加古、俺っておかしいかな？」
「いいえ！提督のすることも、存在も、何もかもが全て絶対に正しいですよ！」
「そんな訳ない！提督は誰よりも正しいよ！艦娘にとっての神様だよ！」
うむ、俺は正しい。
と言うか、正しくなくても正しいと思い込まなくてはならない。
今更、某サークルクラッシャー女さんみたいなのに「マフティーのやり方、正しくないよ」とかレスバの申込申請書をＤＭで飛ばされてきても困るのだ。
そんなことをされたらこちらも「それでも！」と言い続けて食い下がりながら撤退するしかなくなってしまう。
大体、俺を正しいと信じてついてきてくれる艦娘達に申し訳が立た

ないんだよねえ。
皆が信じる俺は正しい、正しくなくてはならない。
そう＊決意＊を新たにした俺を、エルフ男はガン見してきて、言った。
「……人間ではない」
失礼な。
「大体人間だよ」
「気配が違う、魔力の流れも」
「分かったよ、今直す」
俺は、体内を使いやすいようにカスタマイズしてるからなあ……。
特に最近は、艦娘にあっさり殺されることが増えたから、再生能力に極振りしているところがある。
ネトゲで防御力に極振りしている美少女と出会ったりもしたし、やっぱり時代は極振りなんだよね。
俺の身体から異音が響く。
表面がボコボコと泡立つ。
そして、肉体の調子を整えて、人間の中身を再現した。
「こんなんでいいかい？」
「……なるほど、そういう存在か」
杖を納めたエルフの男は、大人しく座って飲み物のカップを煽った……。
「……なるほどね。君はシリさん、魔物退治人『ウィッチャー』の見習いで、色々あって悪い奴から逃げて、避難するためにここへ」
男の方は、名前は名乗らなかったが、エルフの賢者とシリさんが言っていた。
便宜上賢者と呼ぶ。
……にしても、紅魔館の賢者はもっとぱいぱいが大きい美女だから、男だとしっくりこないなあ。
運動不足女特有のムチムチの尻が堪らないんだ!!!
!!
「ありがとう、助かったわ。すぐに出ていくから……」

「いや、その必要はないさ。避難するならここを使ってくれて良い」
「え？でも……」
「その代わり」
「……その代わり？」
「今度、俺が君達の世界に行った時に、そっちの世界を案内してくれ。それが条件だ」
「ええ、それくらいなら全然」
そう言うことになった。
「……でも、どうして助けてくれるの？」
んー……。
「この世界は、軸的に根源に近いんだよね。ターミナルと言うか……」
「どう言うこと？」
シリさんの方は理解できないようだったが、賢者さんは理解したようだ。
「なるほど、確かにこの不安定さを見るに、『複数の世界が混ざり合っている』な。ターミナルとはよく言ったものだ」
「そうそう。だから、異世界や別次元、時間旅行者とか、珍しくないんだよ。今更、一人増えたくらいで何ともないんだよね」
この前も、グウェンプールちゃんって子とアメリカで会ったし。あの子は上位世界での観測者だったみたい。
あとはこの世界から異世界転移やら異世界転生やらをする人も多いよ。
「……そんな訳だからもう何も気にならないんだよね。実際、この居酒屋……ああ、酒場にも、この世界の人間じゃない人も多い」
俺がそう言って、居酒屋の中を見回す……。
……「うみゃあ！」「サーバルちゃ～ん！だめだよ～！」「だって～！別のちほーに来たのに、フレンズがいないんだもん～！」「ここは、フレンズさんがいないところなのかもしれないね」
……「うまーい！こっちの世界はアルディオン大陸よりごはんが美味しいでやんすねえ！あっ、旅人の旦那！何か依頼があれば格安で引き受けるでやんすよ、このベネットが！」

……「宿を貸してもらえて良かったわね、パーン。それに美味しい食事まで……」「ああ、ディード。テレポートのトラップがまさか異世界に繋がっているとは……」

そう、この居酒屋鳳翔。

ほぼ別世界みたいなもんである!!

「飯と寝床くらい出すとも、黒井鎮守府の収入からするとそんなものは誤差だからね。そんなものより、俺は可能な限り旅人達を保護したい」

「どうしてかしら？」

「俺自身が『旅人』だからさ。見知らぬ世界で人々に石もて追われるのは辛いし、立ち寄った村で刃を向けられるのは悲しい。……せめてここだけは、旅人に優しいところであって欲しいんだ」

「……貴方は、立派な人なのね」

「いや、申し訳ないが、俺は女に目がない下衆野郎さ。下衆野郎の罪滅ぼしだよ」

「それでも、ありがとう。本当に助かるわ。お言葉に甘えてしばらく滞在させてもらうわ」

「ああ、好きにしてくれ」

５９０話　最近寒いですね！

気がついたらもう冬だ。
空中戦では不利なアイドルと会ったりなどしつつ、冬を楽しむ俺、??歳。
??歳、学生ではないです。
そんな俺は、だらっとした休日の二度寝から起きる。
??歳、覚醒です。
何故、バキバキ健康バリバリ最強ナンバーワンの俺が二度寝などしていたか？
理由はこれである。
海楼石でできた腕輪……。
そう、この前のシリさんとの約束通り、異世界で長期旅行をした。
そしてその代償として、艦娘に囚われたのである！
……自分の家で自分の嫁に監禁されるとか、これもうわかんねぇな？
海楼石の腕輪は、何故か俺のパワーを奪う。
別に悪魔の実なんて食べた覚えないんだけどね、何でだろうねおかしいね。
俺には広く浅く色んな手札と性質があるから、大抵の攻撃が効かないのだが……、弱点を消して無敵になることはできない。そういう『絶対法則』があるのだ。
例えば物理ほぼ無効の一見無敵に見える長門なんかも、その謂れから「核熱」に対して弱点があるし、陸奥や島風は「爆発」に弱く、時雨はなんか知らんけど「破魔」に弱い。
無論、装備で補ってはいるけどね。
そんな俺は、自己改造によりある程度耐性を変化させることができるのだ。
アルバトリオンみたいなものだと思って欲しい。いや、あんなに強くないけど。
……で、うちの艦娘には、そのパターンを読まれているから、隙を

突かれて捕まってしまったという訳なんだよね。
と言うか、ぶっちゃけ俺は自分の耐性を完全には理解してない。そこを突かれた。今回はたまたま、海楼石が効く時の耐性パターンだったのだろう。
大体にして今回は俺あんま悪くないよね？
次元の渦に飲み込まれてシリさんと逸れて、なんだかんだで出会った白狼の名を冠するウィッチャーのおじさんと一緒にしばらくシリさんを探す旅をしていたんだから。……あの人、まだ生きてたんだ。昔会った人が、シリさんの父親だったとはなあ。
「事情があった！……事情が！」
「はーい、じゃあ、食事にしましょう？」
監禁主の陸奥に捕まる。
「その程度のことでは、オルファンは沈む訳がない！」
「はい、食堂に行きますよー」
最近は俺の妄言も華麗にスルーされてしまう。
大人になったなあ……、俺は誇らしいよ。
しかし、大人になるって悲しいことなのとはよく言うので、あまり大人になり過ぎてはいけない。
大人は誰も笑いながらテレビの見過ぎと言って子供の言葉を否定してくる訳じゃん？
大人になって夢を忘れた古い地球人になるとね、やっぱダメだからね。
アニメじゃないしゃガンダムは伊達じゃないし、冗談ではない。
まあ進化し過ぎると碌なことにならないし、急速な革命とかやると碌なことにならんぞと天パが論破してたからそういうことだろう。
そうだろう、スティンガーくん？
……竜馬さん、最近何やってんだろ？
知り合いのパイロットさん達はみんな、ルビコン？とかいう惑星で新資源が見つかった？とか言ってそっち行っちゃったんだよね。俺も行こうかな……？
ポケモンで例えると、ニャオハが進化してしまうとマスカーニャに

なって、ケモナーの人が喜び、マスカーニャでマスカキーニャされちゃうから危険！みたいな感じ。

飯。

朝なので軽く済ませる。

今日は洋風にパンにしようか。

トーストを十斤に、ベーコンを敷いてその上に卵を落とした目玉焼きを1メートル四方ほど、バケツ二杯分のチキンコンソメスープと副菜にソーセージ1キロとシーザーサラダ1キロとポテトサラダ1キロとマフィン二十個とヨーグルト1キロとみかん二十個。

少し物足りないが、まあ朝だからね。

「はい、あーん♡」

「あーん」

あとは、陸奥に拘束されてるので、食べさせてもらうしかなく、食事のペースが遅かったと言うのもある。

「うふふ」

「……陸奥。今、幸せかい？」

「ええ、とっても」

あぁ^～。

やっぱり、いい女は幸せにならなきゃいけないからね。

女の子が笑顔になれないなら、そんなのは世界の方が間違ってるってそれ一番言われてるから。

「……でも、もっともっと、ずっとずっと。永遠に、貴方の側に居たいわ」

「居ればいい」

「なら、どうしていつも居なくなってしまうの？」

「……そういう人間なんでね」

こういう言い方はしたくないのだが……。

だから言ったんだ、俺と一緒になっても、幸せにしてやれないと。

俺は恋人はやれるが、父親はできないんだ。

家庭人じゃない。

同じ説明をもう一度した。
「……そう。いつもそう答えるわよね」
「すまないね」
「良いの。だから私は、貴方を力尽くで縛り付ける……。嫌になったら、いつでも逃げて？」
「ああ、そうするよ」
今日のところは、一緒にいようか。
……ところで、食堂の窓に鉄格子嵌ってんだけど。本当に逃がしてくれる気あるこれ？

仕方がないので今日は陸奥とお馬さんごっこをする。
大人のお馬さんごっこだ。
陸奥のムチムチのデカ尻が落ちてくる。
因みに、陸奥はベロチューしながらやるのが好きだ。
「ちゅ♡ちゅう～♡」
姉の長門なら、スポーツどころか殺し合いみたいな激しい行為を望むのだが、陸奥はその逆で、ナメクジの交尾みたいなスローでねっとりした行為を望む。
心身が溶かされて一体化するかのような錯覚を覚える。ＳＡＮ値チェックが入りそうだが、この鎮守府には狂人しかいないのでセーフみたいなところがある。
ＳＡＮ値チェックしようにも、ＳＡＮ値が遊戯王のライフポイント並みにあるんだから無意味なんだよなあ。
それを言えば、俺のライフポイントはＯＣＧで大弱体化した金玉のように、ちゅーちゅー吸われちゃってるんだが。ライフちゅっちゅギガントさんェ……。
そんなことを思いながら、俺の上でお馬さんごっこしている陸奥を抱きしめ、昼から堕落した生活を送っていた……。

そして夜。
俺は、陸奥と一緒に酒を飲んでいた。

このまま陸奥に囚われていると、ムツリムになってしまいそうだ……。
ウォッカを1瓶一気飲みしてから、俺は言った。
「陸奥、そろそろ拘束具を外してくれないかな？」
「駄目よ」
「いつ外してくれる？」
「ずっと一緒、死ですら私達を分つことはないわ」
うーむ。
「……まあ、そろそろ外しても良いわよ？二人目もできたことだし」
そう言って陸奥は、プラスチック製のピンク色の棒状の検査器具を俺に見せつけてきた。陽性である。
アァ……オワッタァ……。
「貴方が三ヶ月以上姿を消しても、艦娘に発狂者が出なかったのは、やっぱり子供のおかげね。子供っていいわよね、提督？」
「ウス」
俺は、黒井鎮守府共用の口座に、「養育費」という名目で、異世界で稼いだアイテムの大半をお金に変えて振り込んだ……。

５９１話　昔話をしてあげる

年末。
俺の謹慎（と言う名の監禁）も終わり、年末年始の準備に入った頃。
黒井鎮守府は、ワープゲートを繋げ過ぎて時空間がバグってなんか大変なことになっていた……。

「昔話をしてあげる。世界が破滅に向かっていた頃の話よ」
「それを言えば現在進行形でそうなんじゃないかな？」
うん、まあ、そうね。
俺は頷いた。
ぐうの音も出ないので……。
因みに、俺にそう返したのは、艦娘の時雨である。
「そう言えば、新作アニメの主人公だね。おめでとー」
「上位世界から観測可能な別軸の並行世界の僕とか、ほぼ他人なんだけど……」
「いや、実際、提督はああいうシャキッとしたイケメンが良いんじゃない？今からでも……」
その瞬間、この部屋……、居酒屋鳳翔の中にいる艦娘が。酔い潰れて寝ていた艦娘すらもが、俺の方をじっと見ていた。
「アッ……、はい」
俺は土下座した。

「昔話をしてあげる。世界が破滅に向かっていた頃の話よ」
「あ、うん。続けるんだね」
「いやだって、君らが聞きたいって言ったんじゃん」
「今のタイミングでなのかい？」
「うん。最近は清掃ロボットやら洗濯ロボットやらが家事をやっちゃうから、俺の仕事ないんだもん。こうなったら昔話をするしかないじゃない！」
「そうだね……、うん」

「で、この世界は根源に近いって話はもうしたっけ？」
「うん、皆知っているよ。この世界は、数多もの並行世界が重なり合う、『ターミナル』的な世界だと」
「そうそう。世の中には並行世界ってのがある！例えば、同じ『艦娘がいる世界』でも、吹雪が主人公だったり、時雨が主人公だったりと様々な並行世界がね！」
無論、提督だって色々いるだろう。
髭面のおっさん、クソ提督、柴犬、Ｔヘッドなど、色々な提督がいるはずだ。
並行世界は無限大に広がっているのだから。
「そして、並行世界は何も、『艦娘世界』だけじゃない。『女神の転生から始まる世界』や『ジョースターの宿命の世界』、『確保収容保護の財団の世界』に『スーパーロボットが大戦する世界』だのといくらでもある」
「そして……、その並行世界が、この世界には全て含まれる、と」
そう言って、時雨が紅茶のカップを傾ける。
そう、その通りなのだ。
この世界は、並行世界の塊。
数学的に言えば……。
艦娘世界を、並行世界含めてＡという集合だとする。
スタンドバトル世界をＢで、女神が転生する世界をＣで……、色々な世界がＤ、Ｅ、Ｆ……と続いていく。
そのＡとＢとＣと……、という世界が円状で一部重なり合って存在しているとしよう。ベン図のアレだ。
「つまりこの世界は、それら全ての世界の重なり合う場所、『積集合』の世界なんだ」
なので、根底である基本世界とは異なる結末を迎えた集団も多い。
「なるほど。つまり、提督の言う『昔話』は、実は基本世界からズレているんだね？」
「そうなるね」
本来なら死んでた人が生きてるし、本来なら終わっていた世界が続

いている。
　ここはそんな世界なんだ。
「確かに、白露型の方でも、星の終焉及び人類種の絶滅……『Ｋクラスシナリオ』の発生は、週に二、三回ほどのペースで発生していると認識しているよ」
「そんな訳で、今日はその『Ｋクラスシナリオ』の過去の実例をお話しするゾ～！」
　そう言って俺は時雨の太ももに挟まった。

　パターン１：最終核戦争
「最終核戦争だな。これは、腐れ『四文字』の策略で人の世を終わらせようとする系のアレだよ。基本的に神はそういうことしてくる」
「ああ、業界でよく聞くよ。かなり拙い話だったらしいね？」
「うん。何かね、アメリカ大使に魔神・トールが化けててね。日本でも自衛隊員の後藤とかいう男がクーデターやらかそうとしててね。かなりヤバかったよあれは」
「でも、今代のライドウと協力して、滅亡要因を全員倒してきたんだよね？」
「俺は何もやってないけどねー。無敵のライドウさんがＩＣＢＭを輪切りにしてどうにかしたけどね」

　パターン２：『天国』に到達した吸血鬼
「俺が知り合いの娘さんと一緒にアメリカの刑務所で服役してたら、なんだかんだで色々あって最悪の吸血鬼が復活させられて、そいつが『天国』に到達して大変なことになった」
「ああ……、伝説のスタンド使い、空条承太郎だね。そして、宿敵のＤＩＯ……。この話、当時はかなり大きな事件だったらしいね」
「うん、かなりヤバかったよアレは。超強力な現実改変能力者だからね。当然の如く財団からも確保対象となっていたし、霊的組織も、アメリカのアベンジャーズも、全部大騒ぎ」
「アメリカ大陸の三割が吹き飛んだんだったね？」

「うん。色々あってアメリカ大陸の三割が崩壊した。戦後復興に五年もかかったよ」

パターン３：大怪球フォーグラー＆シズマドライブのあれこれ

「死ぬかと思った」

「うん」

パターン４：真夜中のサーカスの件

「死んだ」

「うん」

パターン５：『新しい血族』

「四回死んだ」

「うん」

「内三回はネウロにやられた」

「うん」

パターン６：『ブラックゴースト』

パターン７：ヨミ様の件

パターン８：ＡＫＩＲＡの件

パターン９：銃の悪魔の件

パターン１０：プログラム・バンダースナッチのやつ

パターン１１：『見えざる帝国』

パターン１２：『ガミラス帝国』

パターン１３：東京受胎の件

パターン１４：終末捕食のアレ

パターン１５：『エアロゲイター』

パターン１６：スフィアのめんどくさいあれこれ

パターン１７：『機界３１原種』

パターン１８：ゲッター線とか言う碌でもないあれ

パターン１９：マジンガーＺＥＲＯ

パターン２０：ラグナレクの接続
「平均死亡回数１２回」
「うん」

……なお、ここまで俺は時雨の股に挟まれながら会話していた。
目の前の時雨の時雨から妖しい香りが……。
……ゴクリ。
「あと細々としたヤバいパターンはもっと多いかなあ。『闇の書事件』はワンチャン日本沈没の可能性があったし、『白面の者の件』も相当ヤバかったし、『ラストバタリオンの件』はマジでイギリスが滅びかけたし……」
「大変だったね」
「辞めたくなりますよー、この世界ー！」
「よしよし」
いやマジでね!!!
ちょっと目を離すと滅び始めるんだもん、赤ちゃんより目を離せないんだよ……。
まあその辺は誰かが必ず止めるんだけどさ。
でも大体、どこかで何かが起きると、世の中の悪い悪の組織（うちは良い悪の組織だ）が便乗してきて大乱闘になるから困る。
そのスマッシュブラザーズを収めるの、誰だと思ってるんだい？
……うちなんだよ！
今までは、俺がコネパワーで引っ張ってきたライドウさん、アサギ、空条教授、黒崎君、蒼月君辺りにゲザる（訳：土下座しまくってお願いする）ことにより、何とかしてきたのだが……。
最近はめっきり、うちが担当している。
いやそりゃ、某財団とかもさ、「世界で唯一の対滅亡秘密結社」とかならそこを頼る一択なんだけどね？
この世界は何でもあるのよ。
何でもあると言うことは、「どこか一つが一強になることは決してない」と言うことなんだよね……。

だから、誰かが数多くの組織をまとめなきゃならない。
その為のフラジール（俺）です。
毎回プランＢなんだよなあ……。
時雨の股で深呼吸をする。
ああ、落ち着く……。
嫁の股の間に挟まることくらいでしか、最早安息を得られない……。
助けてくれ、助けてくれ……。
「大丈夫さ、提督」
「時雨？」
「君は僕が守るから」
えっそんな綾波（うちの子じゃない方）みたいなこと言ってＯＫなの？
死亡フラグとかじゃない？
……いや、うちの子はみんなギャグキャラみたいなところがあるからな、平気だろう。
というか、この世界そのものがタチの悪いジョークみたいなもんなのでセーフみたいなところは多大にあるな！
俺は安心して、時雨の股の匂いを胸いっぱいに吸い込んだ……。

５９２話　練乳の味

「今年も終わりかー」
俺はそう呟きながら、休憩室でホールケーキを頬張る赤城を捕らえた。
フォーク一本で直径３０ｃｍはあるケーキを持ち上げて、一口でホールケーキが消滅するが、まあそんなこともあるよねー。
ギャグ漫画みたいだけど、ほら、この世界はタチの悪いジョークみたいなもんなのでセーフでしょ。
「赤城ぃ～」
「や、やめてください～」
赤城の腹肉をこねこねこねこね……。
あー幸せ。
「赤城、ほら、はーってして」
「え？は、はーっ？こうですか？」
俺は、赤城の口臭を嗅いだ。
その瞬間、脳内が痺れるほどの甘み！
最早、匂いだけで甘味を感じるレベル！
エ”ン”ッッッ!!!
……っはぁ～、いい匂いだぁ。
ククククク……、赤城は贅肉、ムダ毛、体臭そしてドスケベが含まれている完全美女（？）だァ……。
「あ、あの、提督……？そ、その、ですね？私も流石に恥ずかしいと言うか……」
顔を赤らめてもじもじする赤城。
かわいいね。
「普通に！普通に可愛がってください！」
普通に……？
つまり、こうか！
俺は、赤城の脇の匂いを嗅ぐ。
脇汗がほんの少しだけ染みになる程度染み込んだ芸術的な塩梅だ。

冬なのに汗染みとは、流石は体重ＸＸＸｋｇなだけある。体脂肪率４０％超えは伊達じゃない。
そして肝心のその匂いは……。
あっっっまい!!!!!
毛穴から糖分を排出してんのかい?!
あーいい匂い……。
やったぜ。
「普通に!!!普通に!!!」
はいはい、分かってますよ。
俺は、赤城を抱きしめた。
信じられないほどのデカ乳がもっちりずっしり身体を温める……。
身長差的には、俺より頭ひとつ分くらい小さいからな。
ついでに上から頭皮の匂いも嗅いでおく。
頭皮も激甘ふわとろ。
凡そ人体の匂いではない。
蟻とか寄ってきそう。アリだー!
ヨシ!
何も良くないがヨシ!
しかしここでおもむろに振り返ると……。
「……」
むっ、とした顔の加賀が!
「加賀」
「……提督は赤城さんと愛し合っていれば良いでしょう?私は要らないのでは?」
あ、ちょっと不貞腐れてる。かわいい。
「そんなことないよぉ〜!加賀も大好きだよぉ〜!」
なでなでなで……。
すると加賀は、ムフーと鼻息を吐いてから、こう言ってきた。
「流石に気分が高揚します♡」
あぁ^〜。
助けて赤城さん。俺、この娘のこと好きになっちまう。

「むー……！」
そうやって俺が加賀ことを可愛がっていると、嫉妬した赤城が逆側から抱きついてきた。
ＸＸＸｋｇの肉の塊の突撃は、かなりの衝撃があった。オックスくらいあった。いや、最早ブーストチャージだ。
だが俺の安定感はタンク並みなので、辛うじて耐えることができた……。長男だし耐えられたよ。
「提督！私のことも可愛がってください～！」
おほー！
あ、赤城くん！そんなに腹肉を押し付けては……！
「頭にきました。提督、私も愛してください」
おほー！
加賀もか！
デカパイにムッチリ腹肉が、俺の両脇からサンドしてくる。
赤城の方からは、気体化したグラブジャムンのような匂いが。
加賀の方からは、フローラルでありながらも生々しい女の香りが。
並の男なら、圧倒的な雌フェロモンで性癖こわれちゃーうだろうな。
俺は無敵なのでセーフだが。
そしてしかも……、これは！
二人の胸の先が濡れている！
「ペロッ……、これは母乳！」
やったぜ！
「あ、そういえば提督、ご存知ですか？母乳って、人によって味が違うんですよ」
「ああ、そうなんだってね」
「飲み比べ、してみませんか♡」
「はい」
はい。
美味しい美味しいヤミーヤミー。

ハッピースマイルなんだよなあ。
……ところで、赤城の母乳を搾って煮詰めたところ、練乳になったんだけど、これ大丈夫なやつ？
子供に飲ませて良いのこれ？糖尿まっしぐらでは？
……まあいいや、その辺は俺はちょっと分からない。
俺もまあ、魔界から来たベルゼバブの赤ちゃんを不良の子とあやしたりしたことはある。あとはスタンド使いの透明な赤ちゃんとか。
そもそも赤城が産んだ子なら、赤城の母乳にも耐えられるだろ。多分。
そんな感じで俺が煮詰めた赤城の母乳をイチゴにかけて摂取していると……。
「……」
ニコッと微笑んだ雲龍がいた。
ごめん嘘、表情筋は殆ど動いてない。
クールキャラだから。
その雲龍が、無言でコップを差し出してくる……。
コップには、乳白色の液体が並々と注がれている。
なるほどね？
俺は雲龍が差し出した液体を飲み干した。
うーん、飲み慣れた味。
最近は「おっぱいが張っちゃって困ってるんです～♡」という名目で、俺はありとあらゆる場面で母乳を飲まされる。
ベビベビベイベベイベベイベって感じ。
乙女チックなことを！
……イエスだね！
今では日課のランニングの終わりにまで母乳を飲まされる有様だからね。
スポドリちょうだいと要請すると何故か母乳入りの瓶を懐に捩じ込まれる。
もうなんか笑えてくるね。
とはいえ、捨てることもできないしなあ……。

半神レベルの神霊の母乳とか、裏業界の人間なら半人前でも悪用の方法が十や二十は容易く思い浮かぶもん。
ヤバいから飲んで処分しなきゃ。
飲んで応援みたいなもんだよね。
どうでも良い話だけど、絶滅しかけの鰻を「食べて応援！」とか言ってるメディアの人達って何考えてんのかな。ナチュラルにサイコパスだよね、怖い。
まあほら……、血とか髪の毛よりはさ、異常性が低いからさ。
このままの調子で、みんなには真人間になってほしい。

５９３話　旅人一年記

やあみなさんお久しぶり。
早速だが、今俺は全裸にひん剥かれて艦娘達に捕まっていた。
「おかえりなさいませ、提督！」
大淀がもう本当にヤバいくらいにアルカイックな微笑み。
おこった？
おこってないよね？
「今日も可愛いよハニー！」
でも褒め言葉は忘れない。
実際、怒ろうが何しようが、大淀は可愛いしね。
で、その瞬間、俺の耳元を銃弾が掠める。
「先生、どういうこと？」
こちらのバチクソにキレてる太ももの太……藍色の髪をツインテールにした太もも……女子高生の太もも……の子は、最近知り合ったユウカという女の子だな。
「太もも」
「なっ?!ふ、太ももばっかり見て！セクハラですよ?!」
「ごめ……太もも」
「やっぱり先生は最低です！」
ごめん……、いや太もも。
さて、俺は今、なんか全体的にヤバいことになっている。
その理由は、一年くらい鎮守府を空けていたからだね。いやほら、俺にも色々と事情があってさ。事情があった！事情が！その程度のことでは、オルファンが沈む訳はない！
拷問官（艦？）の艦娘は、逆バニーという恐ろしげな服（まんじゅうこわいみたいな話）を着て、俺を逃すまいと必死にくっついてきている。
それに対抗して、メイドの子達が何故かバニーになって俺を掴んでいて……。
そしてそれを、生徒達が止めに来ている……しかも、街のど真ん中

で！という愉快な状況。
野次馬はゾロゾロ集まってきてるし、今確認したらネットに放送されちゃってもいる。
社会的な死！（三百三十四回目！）
「では提督！ご説明を！」
「うん」
さて、どうしてこうなったのか？
話すとしようか……。

「まず、キヴォトスって未来都市があるって聞いたから、観光しに行ったんだよ。そしたらなんか色々あって、気がつけば教師になってた」
まあ、教師だからね。
キョウジ・カッシュになってた！とかじゃない分マシでしょ。
教員免許も持ってるし、少なくとも資格はあるもん。
「その色々あって、の部分が大事なのですが……、まあいいでしょう。教師になって、何をやったのですか？」
そんなのは決まってる。
「教え子に手を出した」
「なんで？？？？」
なんで？
いや、女子校の男性教師なんて、淫行する以外にやることある？（偏見）
「だってこんな、目の前にさ、太ももぶっといプリケツ美少女がいるんだよ？手を出さないのが失礼では？」
「だっ、誰がプリケツですかっ？！！！」
「ユウカちゃん！」「ユウカせんぱいー？！」
キレて銃を構えるユウカを、周りの他の生徒達が止める。
セミナーは大変そうだなあ。
「……それで？他には何を？」
「ああ、後最近は下北沢でバンドの推し活してたんだ！めっちゃいいバンドがあってね？なんかダンボールかぶってライブハウス出てき

たピンクのメンダコの子がいてさあ！」
「……？？？？」
「ぼっちちゃんは凄いんだよ！俺が話しかけると異様な高音を発して破裂するんだけど、肉片を集めてくっつけると再生するし！変形してメンダコになったりするから、俺も対抗して変形してヤリイカになったりしてたんだー！」
　まあイカのような匂いのする液体をヤッて出しているので、実質的に俺はヤリイカと言っても過言ではないだろうしね。
「えっ、それは……、アナザー提督みたいな話ですか？」
「ジオウ君の話はしてないよ？……とにかく、下北沢でバンドの推し活をして……、女子高生とキャンプしたり、デザイアグランプリに参加したり、リコリスって秘密結社でバイトしたり、アビスとかいう縦穴に潜って爆散したり、ドンブラザーズの一員になったりしてたかな？」
「何やってるんですか？？？？」
　え？いやだから、そのまんまだけど……？
「で、その後にキヴォトスで教師をやってたんだけど……」
「はい」
「その時はちょっとヤバめの敵が出たんで、全裸で輝きながら突っ込んだら倒せたな」
「？？？？？？」
「相手はＺ―ＯＮＥみたいなのだった」
「待って！待ってください、意味が分かりません？！」
「相手がＺ―ＯＮＥなら実質遊戯王、不動遊星にならできたぞ！ならば不可能なことなどこの世の何処にもありはしないッ！と自身のモーメントを震え上がらせ、大人のカードという名の大人気ないティアラメンツで叩き潰してやったんだ！」
　大淀は、助けを求めるような視線をユウカに向ける。
　……ユウカは、もう助からない末期患者を診ている医者のように、目を伏せてから頭を横に振った。
「何やったっぽい？」

夕立がこっそり、隣に立つミドリとモモイに訊ねる。
双子のゲーム開発部の少女は、当時の情景を思い出したらしく、その時の話を熱く語ってくれた。
「先生はすっごいんだよ！全裸で光り輝きながらバイクに乗って『アクセルシンクローーー!!!』って叫びながらプレナパテスに突っ込んで、手札からうららを捨てて相手の攻撃を無効にしっつ、最終的には全裸ローション相撲で雌雄を決したんだー！」
「あれは激アツだったよー！確か、『クリアマインドだから！澄んだ心だから！』とか言って、意味もなく全裸になったんだよね！全裸ローション相撲の他にも、スマブラとかシャドバとかカーリングとか早押しクイズとかの対決もあったんだよ！」
ああ、そうそう。
そんな感じそんな感じ。
「あ、あー……、他は？」
大淀は、遠い目をしながら聞いてくる。
他？
他かあ……。
「んん、まあ……、いつも通り女の子の足を舐めたり、汗の匂いを嗅いだりしてただけかな」
「良かった、いつも通りですね」
ほっ、と胸を撫で下ろした大淀。
そうそう、何も変なことしてないよ俺は。
「変態！死刑！死刑よーっ！」
エロに過剰反応するピンク髪の生徒もいるが、まあそれはそれ。
ピンク髪は淫乱！黙ってなさい！
「とにかく、鎮守府に帰ってきてください！提督！」
「ん、先生はキドヴォスの共有財産」
「駄目っぽい！提督は鎮守府のものっぽい！」
「うへー、流石にその要求は呑めないな～？おじさん、困っちゃうよ～」
うわあ、奪い合いだ。

どうしよう……？
ってかそれより……。
「あ、それ無理。次は惑星ルビコンで傭兵の仕事をやる予定だから……」
ハンドラー・ウォルターさんと契約したし……。
「そうですか、キャンセルしてください」
「ん、キャンセルのメール入れといた」
アアッー！

そうして俺は、鎮守府とキヴォトスの俺争奪戦によりボロボロになり、爆発して肉片になったとさ。
それこそ、推しのぼっちちゃんみたいに……。